

神宮司廳藏版

古事類苑

方技部

古事類苑刊行會


LIBRARY
MAR 23 1967
UNIVERSITY OF TORONTO

古事類苑

方技部目録

古事類苑

方技部一

陰陽道上

方技部二

陰陽道中

方技部三

陰陽道下

方技部四

天文道 宿曜道附入

方技部五

暦道上

方技部六

暦道下 漏刻 附圖

方技部七

易占

式占

九星 併入 軒廊御卜 附

方技部八

方技部九

仙術 幻術　奇術 併入

方技部十

醫術一

方技部十一

醫術二

方技部十二

醫術三

方技部十三

醫術四

方技部十四

藥方

方技部十五

疾病一

方技部十六

疾病二

方技部十七

疾病三

方技部十八

疾病四

古事類苑

方技部一

陰陽道上

陰陽道ハ、支那ヨリ三韓ヲ經テ傳來セシモノニシテ、朝廷ニハ夙ニ陰陽寮ヲ置キテ其法ヲ採用セリ、大寶ノ制、陰陽寮ニハ頭、助、允、屬ノ外ニ、陰陽師、陰陽博士等ノ職員ヲ置キテ、其業ヲ分掌セシメ、又大宰府及ビ諸國衙ニモ陰陽師ヲ置キテ、卜筮占星測等ノ事ヲ掌ラシメタリ、此術ハ當時ニ在リテハ極メテ必用ナルモノニシテ、賀茂保憲、安倍晴明ノ如キ、其他斯道ノ名人モ亦歷世乏シカラズ、中世以降、晴明ノ後裔土御門家ハ、代々斯道ノ長トシテ、陰陽頭ニ任ゼラレ、又陰陽博士トナリ、殆ド他氏ヲ交ヘズ、而シテ德川幕府ニ及ビテ、更ニ諸國ノ陰陽師ヲ管轄セシメ、之ヲ以テ業トスルモノハ、皆同家ノ免許ヲ受ケシメタリ、

凡ソ陰陽ノ道タル、陰陽五行ノ說ニ本ヅキ、日月支干ノ運ヲ考ヘ、相生相剋ノ理ヲ推シ、吉凶ヲ定メ、趨避ヲ辨ズルモノニシテ、方位ニ忌アリ、日時ニ忌アリ、一身ノ忌アリ、衆人ノ忌アリ、一事ノ忌アリ、諸事ノ忌アリ、鬼門、金神、歲德、天一ノ如キ、一トシテ拘忌ニアラザルハナク、冠婚喪祭ノ大ヨリ、沐髮剪爪ノ末ニ至ルマデ、皆之ニ由ランコトヲ要セシナリ、而シテ之ヲ祈リ之ヲ禳フニ、祭ヲ行フコトアリ、泰山府君祭、雷公祭、屬星祭ノ如キ是ナリ、又符呪アリ、之ヲ門ニ貼シ、之ヲ身ニ藏メテ、禍厄ニ備フ、又禁厭アリ、卽チマジナヒナリ、呪詛ハノロヒト云ヒ、ウケヒト云ヒテ、禁厭ヲ以テ人ヲ患苦ニ陷ラシムルモノナリ、反閉ノ如キモ、禁厭ノ一ニシ

ヲ、亦災害ヲ避クル法ナリ、多クハ之ヲ出行ノ際ニ用キタリ、而シテ身固ハ其略法ナリト云フ、

陰陽道ノ行フ所ハ廣シ、卜筮、天文、暦學、漏刻ノ如キモ、往時ハ之ニ屬シタレド、今ハ別ニ其篇ヲ立テ、ヽ之ヲ擧ゲタリ、又此道ハ神祇部ノ祓禊、宗教部ノ修法ト相混ズルモノアレバ、互ニ參看スベシ、而シテ陰陽道ニ非ザルモ、其ノ法ノ相似タルモノハ、便ヲ逐ヒテ此ニ收メタルモノ多シ、

陰陽寮名稱

〔倭名類聚抄五官名〕職員令云、○中略陰陽寮、於牟夜宇乃豆加佐

〔續日本紀二十一淳仁〕天平寶字二年八月甲子、是日、大保從二位兼中衛大將藤原惠美朝臣押勝、○中略等、奏、勅改易官號、○中略陰陽寮陰陽曆數國家所重、記此大事、故改爲大史局、

〔續日本紀二十五淳仁〕天平寶字八年九月丙辰、勅逆人仲麻呂執政、奏改官名、宜復舊焉、

〔職原抄上〕陰陽寮唐名司天臺、亦云大史局

初見

〔日本書紀二十九天武〕四年正月丙午朔、大學寮諸學生、陰陽寮、外藥寮、○中略等、捧藥及珍異等物進、

廳舍

〔中右記〕大治二年二月十四日甲戌、未時許、當西有燒亡所、申時火滅了、後陰陽頭家榮示送云、燒亡之興、火起齋司小屋、燒陰陽寮、勘解由使廳、宮内省、幷園韓神社、神祇官八神殿、郁芳門等了、陰陽寮鐘樓皆燒損、但於渾天圖漏刻等具者、令取出也、往代之器物此時滅亡、尤爲大歎者、抑陰陽寮鐘樓ハ、古人傳來云、昔桓武天皇遷都被作渡也、其後未逢火災、至今年三百三十七年、今日燒、爲天下爲大歎歟、

〔山槐記〕治承三年六月廿二日己酉、三井寺禪覺□儀法來之次、○中略申云、○中略陰陽寮鐘、鐘付十二神、子神在南、□如此所釣也、於彼由緖者不知事也者、今日、又權漏刻博士菅野季親來、問寮鐘十二神向方、答旨禪覺□之示、仍問由緖、申云、本說不知、又不承、但所申傳□、大神向水神、是厭術之心也云々、

寮神

〔增鏡七北野の雪〕又そのころ○文永四年大風ふきて、人々の家々そこなはれうずる事、かずしらぬ中に、

職員
職掌

略○中陰陽寮の守護神の社もまろびぬ、

〔令義解一職員〕陰陽寮

頭一人、掌、天文、暦数、風雲気色、謂天文者、日月五星廿八宿也、暦数者、計日月之度数、而造暦授時也、気色者、風雲之気色也、言以五雲之色、候其吉凶、候十二風気、知其妖祥、其天文博士職掌、唯言気色、不言風雲者、挙気色、則有風雲可知也、有異密封奏聞事、助一人、允一人、大属一人、少属一人、陰陽師六人、掌占筮相地、謂占者、極数知来之占也、筮者、撰蓍也、相地者、相宅也、陰陽博士一人、掌教陰陽生等、陰陽生十人、掌習陰陽、暦博士一人、掌造暦、及教暦生等、暦生十人、掌習暦、天文博士一人、掌候天文気色、有異密封、及教天文生等、天文生十人、掌習候天文気色、漏剋博士二人、掌率守辰丁、伺漏剋之節、守辰丁廿人、掌伺漏剋之節、以時撃鐘鼓、使部廿人、直丁二人、

〔令義解一職員〕中務省管職一寮六司三、

卿一人、掌侍従、献替、賛相礼儀、(中略)監修国史、謂、国史者、所修此書更并監也、案舊令、有徴祥災異、陰陽寮奏訖者、季別封送中務省、入国史是也、○中略事、

〔令義解一官位〕従五位階○下陰陽頭　従六位階○上陰陽助　正七位階○下陰陽博士、天文博士、従七位階○上陰陽允略○中陰陽師、暦博士、　従七位階○下漏剋博士　従八位階○下陰陽大属　大初位階○上陰陽少属

〔拾芥抄下官位〕陰陽頭司天監、大史令、

〔続日本紀二十八称徳〕神護景雲元年八月癸巳、陰陽員外助従五位下紀朝臣益麻呂叙正五位下、略○中員外允正六位上日下部連虫麻呂略○中並外従五位下、

〔延喜式十八式部〕凡諸司史生者、略○中陰陽寮各四人、

〔日本後紀十七平城〕大同四年三月己未、始置左右兵庫史生各二員、略○中加略○中陰陽寮二員、

〔延喜式十八式部〕凡諸司使部者、略○中陰陽寮、内匠寮各十人、

〔日本書紀二十九天武〕朱鳥元年正月甲寅、召諸才人、博士、陰陽師、醫師者、幷餘人、賜食及祿、 六月庚午、工匠、陰陽師、侍醫、大唐學生、及一二官人、幷三十四人授爵位、

〔令義解四考課〕訓導有方、生徒充業、(謂方者道也、充者滿也、依令、通中以上、是爲充業也、)爲博士之最、

占候、醫卜、(謂陰陽曰占、天文曰候、醫曰醫、灼龜曰卜也、)效驗多者、十得七爲多、爲方術之最、

〔令義解八雜〕凡取陰陽寮諸生者、並准醫生、(謂先取占氏、及世習者、後取庶人十三已上、十六已下聰令者爲之也、)其業成年限、及束脩禮、一同大學生、(謂其習業經書、及考課條數、幷技法等第、並皆依式處分也、)

〔政事要略九十五至要雜事〕學校事下(陰陽寮在典藥寮中)

〔通俗篇二十一技術〕陰陽生　元典章、元貞元年二月、中書省奏、定陰陽教授、令各路公選老成厚重藝術精明爲衆推服一名、于三元經書出題、移廉訪司體覆舉用、按、元設陰陽學、學中習業者、乃謂之陰陽生、所習書以周易爲首、而凡天文、地理、星命、占卜、及相宅、相墓、選日諸術、悉期精通、明以來學廢而陰陽生但依附道家、名實甚不稱矣、

〔延喜式十六陰陽〕學生卅人、(陰陽生十人、曆生十人、天文生十人、)其得業生、陰陽三人、曆二人、天文二人、並取生內人、

右得業生、選性識聰慧、令專精學、其名申官、給衣食、成業年限依令、未成業者不得遷入他色、若未終業、其師遷外官者從之終業、

〔延喜式十八式部〕凡陰陽寮諸生、典藥寮醫生預考、幷免徭役、

〔續日本紀二十淳仁〕天平寶字二年八月庚子朔、其大學生、(中略)陰陽生廿五已上授位一階、

〔延喜式十六陰陽〕凡來年御忌者、寮預令陰陽師等勘錄、十二月十日進內侍司、(中宮東宮准此)

〔延喜式十三中宮〕凡十二月十一日、陰陽寮啓來年御忌、

〔禁秘御抄中〕陰陽道

大略同醫道、(○中略)但普通不參御緣、是束帶參也、近代軒廊外內々御卜之時、於藏人所、或便宜所有之、但無

補任

拜事之時、不可有御卜、在寛平遺誡、行事反閇之外、時々有身固事、不可爲例、只給御衣可奉仕身固也、凡如陰陽寮道候藏人所也、且元三御藥之時、醫道奉藏人所、康保四、陰陽博士道光光宗召藏人所、天暦陰陽寮平野茂樹、又如此、藏人付簡、

〔官職秘抄 下〕陰陽寮

頭　當道中、位次第一任之、但不堪其器者、次人得之、

助（一人）　同位次第二三者任之

大允　撰人授之

少允　自屬轉之、不經屬陰陽師等任例、（[illegible]陽、家原平門、賀茂道言、）　自陰陽師任例、（惟宗孝親、父正邦、[illegible]中任之、）

屬（大少）　自陰陽師轉之、不經陰陽師任例、（[illegible]原公親）

陰陽師　以得業生中任之、

已上三箇職調之連奏、

陰陽博士（一人）　當道以之爲貫職、仍門生補之例太希也、皆以重代器量者任之、二度任例、（時親）

暦博士（一人）　又以重代重任之、兄弟相並例、（道榮、道言、）

天文博士（一人）　以其器者任之、兄弟相並例、（章親、章職、）

漏剋博士（一人）　雖門生、堪器者任之、依天文道奉任例、（中原[illegible]有）

右諸道官、雖可編諸司之中、爲類聚事、聊立別紙、

〔職原抄 上〕陰陽寮（唐名司天臺、或云大史局、）

掌天文暦數事、昔者一家兼兩道、而賀茂保憲以暦道傳其子光榮、以天文道傳弟子安部晴明、自此已後兩道相分、

頭一人、（[illegible]官、相當從五位下、唐名司天監、）當道極官也、　助（[illegible]助、相當從六位上、唐名司天少監、）同道輩、五位六位共任之也、　允（大少、唐名

司天丞、同道被官門生等任之也、屬（大少、唐名司天主簿）陰陽博士（相當正七位下、唐名大卜正、權、）同道五位已上任之也、陰陽師（相當從七位上、唐名大卜師、）近來强不任之歟、曆博士（相當從七位上、唐名司曆、權、）曆道任之、近代五位已上任之、天文博士（相當正七位下、唐名司天、）天文道任之、近代五位已上任之、漏剋博士（相當從七位下、唐名司辰、又挈壺司、）五位六位共任之也、

〔朝野群載 十五陰陽道〕陰陽寮

請特蒙天裁因准先例停止他人非巡望被拜任官人品官等狀

一正六位上行少屬淸科朝臣良兼　右良兼、爲屬上臈、仍以良兼申請少允闕、

一正六位上行少屬伴朝臣正信　右正信、夙夜之勤、未致懈怠、仍以正信申請少允闕、

一正六位上行陰陽師三善朝臣兼任　右兼任爲陰陽師上臈、仍以兼任申請少屬良兼轉任少允之替、

一正六位上行陰陽師菅野朝臣貞義　右貞義、任當職之後、勤節不懈、仍以貞義申請少屬正信轉任少允之替、

一前陰陽師得業生正六位上伴朝臣友仲　右從得業生拜任陰陽師者例也、件友仲、成業之後、寮底之勤頗超傍輩、仍以友仲申請陰陽師兼任轉任少屬之替、

一前天文得業生正六位上惟宗朝臣忠盛　右忠盛成業之後、勤勞久積、仍以忠盛申請陰陽師貞義轉任少屬之替、

以前、官人等任道理次第所申請也、望請天裁、停止他人非巡之望、如申請被拜任者、將致奉公之節矣、謹請處分、

康和二年正月廿一日　從五位上行助兼權曆博士丹波介賀茂朝臣家榮

從五位上行大炊頭兼權助曆博士阿波介賀茂朝臣光平

寮田

從五位上行陰陽頭兼陰陽博士賀茂朝臣成平

〔朝野群載十五陰陽道〕太政官符　中務省
應以學生正六位上菅原朝臣爲經補任陰陽得業生事
讀書
黄帝金匱經一部
周易一部
右得彼省去康和二年七月廿七日解狀偁、陰陽寮同月廿五日解狀偁、從五位上行陰陽頭兼陰陽博士賀茂朝臣成平等解狀云、件爲經、情操聰敏、勤學匪懈、望請補得業生、將令遂其業者、省依解狀申送者、從二位行權中納言藤原朝臣仲實宣、依請者、省宜承知依宣行之、符到奉行、
康和四年八月七日
權左中辨平朝臣　右少史中原朝臣

〔中右記〕嘉承二年十二月廿一日壬寅、今夜秋除目初也、　廿二日、晚頭參內、除目終也、
裏書
除目任人、皆以道理也、但以道言朝臣任陰陽博士條如何、本陰陽頭光平者道言子也、子爲本寮頭、父爲陰陽博士事、頗不甘心、陰陽博士依爲陰陽寮所攝之官也、

〔延喜式十六陰陽〕勸學田十町河內國五町攝津國五町　右件田依當土估賃租、以充諸生等食料、

〔類聚三代格十五〕勅、安上治民、莫善於禮、移風易俗、莫善於樂、禮樂所興、惟在二寮、門徒所苦、但在衣食、亦是天文陰陽曆筭醫針等學、國家所要、並置公廨之田、應用諸生供給、其大學寮卅町、雅樂寮十町、陰陽寮十町、內藥司八町、典藥寮十町、所司宜准件施行、
天平寶字元年八月廿三日○又見續日本紀

〔類聚三代格十五〕太政官符

陰陽師

應定博士職田事

合博士卅人、應給職田七十三町、（内五十二町、外廿一町、○中略）

陰。陽。博。士。職。田。四町

河内國一町（若江郡）

山背國二町（相樂郡）

近江國一町（野洲郡）

右位田米年可收、而依宣旨改置陰陽博士職田、（○中略）

延暦十年二月十八日

〔類聚三代格 十五〕太政官符

應給官田七十八町六段三百卌九歩事

山城國十九町三段二百九十九歩

河内國廿七町九段二百九十六歩

攝津國十町二百六十歩

右陰陽寮官人以下、諸生已上、并廿八人月料、（○中略）以前得中務宮内兩省解偁、彼兩寮解偁、件月料粮等米停給京庫、以官田所請如件者、謹請官裁者、左大臣宣、奉勅依請、

仁和四年十二月廿五日

〔類聚國史 百七 職官〕天長三年九月甲申、河内國若江澀河兩郡地二十町充陰陽寮、

〔三代實錄 七 淸和〕貞觀五年四月七日己亥、河内國若江郡空閑地四町賜陰陽寮、

〔下學集 上 人倫〕陰陽師（オンヤウシ）

〔倭訓栞 中編 三十〕おんやうし　陰陽師也、略 中 假名は和名抄に見えたり、よみくせはおみやうし。
也、
〔物類稱呼 一 人倫〕をんミやうじなんやうじと喚ふ、然ども なんみやうじとよし也、
〔漢書 三十 藝文志〕道三十七家、九百九十三篇、
道家者流、蓋出於史官、歷記成敗存亡禍福古今之道、然後知秉要執本、淸虛以自守、卑弱以自持、此君人南面之術也、略 中
陰陽二十一家、三百六十九篇、
陰陽家者流、蓋出於羲和之官、敬順昊天、歷象日月星辰、敬授民時、此其所長也、及拘者爲之、則牽於禁忌、泥於小數、舍人事而任鬼神、
〔史記 百二十七 日者列傳〕褚先生曰、略 中 臣爲郎時、與太卜待詔爲郎者同署、言曰、孝武帝時、聚會占家問之、某日可取婦乎、五行家曰可、堪輿家曰不可、建除家曰不吉、叢辰家曰大凶、歷家曰小凶、天人家曰小吉、太一家曰大吉、辯訟不決、以狀聞、制曰、避諸死忌、以五行爲主、人取於五行者也、
〔風俗見聞錄 二〕陰陽道の事、吉凶損益を告て、人を損し己を益さん事をはかるもの也、又家相、人相、方位、的殺、地祭、身固め、家固等の事あり、これまた人身を惑し、未前を僞するもの也、陰陽道は、天下國家の事に御用ひあるは、格別の御事なれども、以下に廣く行はるべきものに非ず、すでに易の辭は賊也と云り、世をぬすみ人を犯す也、此道朝廷の御用ひあさからずして、中古大に謗て、土御門家の食祿、備前大井庄井肥前内を領し、凡拾有餘萬石の家祿也と云、然るに豐臣殿下の世に欠所せられ、殊に文祿の頃、秀次卿騷動の時、土御門家の加りし事有し故、尾張國へ配流せられ、陰陽道は是國家を犯道也、治平の世には不益の物也と、兼て思ひ來れりと有て、陰陽道悉闕職せられしときく、其のち御當家の御世に成て、御赦免を蒙り、聊食祿を給はり、土御門家再び職祿を起せ

し由、併配流の内に晴明已來の家の傳書を失ひし由、今世に用る所の□□ハ僞書也と云、當時土御門家に入寮せし門人、及配下の者ども、皆周易を用て□□用事を志らず、いかにも元來の源法は取失しとみゆ、或邊土の者、密に以前の本法を傳へて秘藏せしと云もありし故、是が申旨を取り、試みに未前を問しに、よく符合せし事有、然らば右の本書の法は、不測の玄旨成ものと見ゆ、扨當時土御門家の配下なる陰陽師共、三ケ津は勿論の事、國々に散在し、その數萬人成べし、是等土御門家の門人配下抔唱れども、彼家へ出入し事もなく、別而傳受を請し事なく、彼家より所々へ取締る所を立置所江、年々運上を出し、配符を得て渡世する也、依て彼家の法式を志らず、面々思思に、或は周易を用ひ、或は暦法を用ひ、又は神道の祓をなし、又は密に佛道の加持祈禱の法を行ひ、或は狐狸など遣て、奇怪の事を告て人を誑し、金錢を奪ふ也、土御門家、又は白川家、吉田家の神祇職に於ても、或は門人配下と唱えて、國々在々迄配符をわたし置けれども、其者の顔も知らず、素生の善惡も志らず、今又何樣の法を用も知らず、只年々の貢をとるのみの事也、雙方利欲同志の渡世也、尤當世は富者多く、貧者多く、優長人多く、病苦人多、又強欲惡逆盜難、其外の凶難多ありて、彼是惑犯事どもおほき世の中、古陰陽卜筮の事大に行れて、繁多に成し故、門人配下の名多く出來て、年々の收納以前倍增せしといふ、扨陰陽道卜筮の事、先辻抔へ出るは錢廿四銅より起りて、以上だん〳〵ありて、其事に寄、其相手に寄て、何程も分限なく誑し取事也、此道元來國家を犯もの成り、當時の如く、利欲に拘りては、猶更人に害難を授るのみ也、殊に此業を成者は、或は浪人、或は僧徒の墮落、或は儒醫、其外我業體に掛て渡世に困りし者、都て放蕩無賴のもの丶なす事にして、猥に利口の方便を遣ひて、欺取事を是とする也、斯の如く欲情を以て伺ふ卜筮に、天命の降る事や有べき、尤往古聖德の極給ふ法式を以伺ふ事故、差當の吉凶は顯はる丶事も有へけれ、ども、誠に永久不朽の天命は、降り給ふまじき也、勿論卜筮のみにも限らず、神道の祓も、佛道の祈禱

諸國陰陽師

も、跨線謝義に對して行ふ修法は、神佛も感應は有まじく、殊に天道は請給ふまじき也、譬へば貴女の子をなさゞるが如し、欲情の交りし修法は、天命も佛神も、聖に成し給ふ也、如此當世は、聖教の道も、佛神の道も地に落て、利欲に汚れて奇瑞なく、不測の天命更に降り給はざる也、

○按ズルニ、陰陽寮ノ陰陽師ノ事ハ、上文陰陽寮職員條ニ收メタリ、

〔令義解 一職員〕大宰府（管國中略）

陰陽師一人（掌占筮相地）

〔類聚三代格 五〕太政官符

應置鎭守府陰陽師事

右得陸奥國解偁、鎭守府牒偁、軍團之用、卜筮尤要、漏剋之調亦在其人、而自昔此府無陰陽師、毎有恠異、向國令占、往還十日、僅決吉凶、若有機急、何知物變、請被言上、解置件職者、國加覆審、事誠可然、望請始置其員、令備占決、謹請官裁者、大納言正三位兼行民部卿藤原朝臣冬緒宣、奉勅依請、

元慶六年九月廿九日

太政官符

應改權史生爲陰陽師事

右得中務省解偁、陰陽寮解偁、武藏權史生屋代直行數狀偁、謹檢案内、出羽武藏等國、元來無陰陽師、而依國解狀、以陰陽生始置件職、出羽號陰陽師、武藏稱權史生、靜尋事意、理不可然、望請准出羽國、號陰陽師者、寮依數狀中送者、省依解狀、謹請官裁者、從三位守大納言兼左近衞大將行陸奥出羽按察使藤原朝臣基經宣、奉勅依請、

貞觀十四年五月二日

太政官符

陰陽家

應減史生一員置陰陽師事

右得下總國解偁、此國接近邊要、安不忘危、不虞之戒、非占難決、望請、減史生員置陰陽師、謹請官裁者、

右大臣宣、奉勅依請、

貞觀十八年七月廿一日

〔諸家家業記〕陰陽道　土御門

陰陽道ハ、古來、賀茂、安倍、兩家之職掌ニ候、賀茂家ハ幸德井と稱し、地下之者ニ候、安倍家ハ、元祖安倍晴明ニ而、當時之土御門家、則右晴明之末孫ニ候、中古より、堂上ニ被相成候、乍去、陰陽道之事、今以賀安兩家之職掌ニ相成居候、尤堂上地下之差別有之、依而土御門家ハ陰陽頭ニ任ジ、幸德井ハ陰陽助ニ被任候、近例、年暦をば幸德井より調進有之候、乍去幸德井ニ而ハ、暦之中段之文を相定メ書加候迄ニ而、一體之暦ハ、當時御改暦以來、關東ニ而出來候由、土御門家ニ而も、暦之儀關係無之と申ニ而も無之、既ニ、已前寶暦御改暦之砌ハ、土御門家ニ而出來候事候得共、當時ニ而者、暦之事ハ、強而關係不被致候由、尤關東之天文方等ハ、都而彼家之門人ニ相成候先規之由、彼家、當時陰陽道を主として、天變地妖等有之節ハ、勘文を奉り、古凶を密奏有之、禁中ニ而、御大禮被執行候砌ハ、御日取時取之儀、猶彼家江被仰出、勘文を奉らしむ、且身固、反閉、其外御撫物、御祈等之事、時々被仰出、關東江も、御大禮之節ハ、御身固之事被勤、其餘年々巳之日祓、名越祓等獻上有之、幷年筮と稱し、其年之吉凶、冬至之日卜定、公武之家々江被指出候事なども有之候由、安倍之新家倉橋ハ、陰陽道之沙汰無之候、

〔嘉永七年雲上明覽下〕安倍氏　土御門　倉橋

土御門有條卿男

久脩——泰重
　　└倉橋 泰吉

百七十七石 土御門陰陽頭晴雄朝臣 廿八 從四位上右兵衞佐

家司 若杉陰陽少允 星合右兵衞

同

〈御會印 御寺 梅林寺

〔諸家譜 四〕土御門は、陰陽博士家也、因て改暦の奏を掌る、其家製作する所の、測量の器等あれども、古代のものにして、西洋の精密なるにしかざるゆへ、今時は關東に測量所を置れ御沙汰あれば、空名を持するのみ也、

〔平城坊目考 二〕陰陽町 當町南京陰陽師等住居、故名々號す、○中略

當所、南都四家陰陽家住所、其一なり、古老曰、當所陰陽師は、加茂氏吉備大臣眞備公之裔、而古へ吉備塚邊に住す、其後離散して、今の地に移ると云々、○中略 今按に、四箇陰陽師は、山上、吉備塚、幸町、梨子原、陰陽町四箇所乎、

〔基量卿記〕元祿十二年六月三十日丁卯、水無月祓如例、陰陽師獻麻、

〔京都御役所向大槪覺書 一〕陰陽師之事

支配 土御門兵部少輔

洛中洛外

陰陽師

一塔之段毘沙門北半町 大黒刑部

一寺町佛陀寺前町 若杉金大夫

一不明門通五條上ル町 小野主馬

一北野境内馬喰町 松村河內

一北野右近馬場通下立賣上ル七軒町 吉田平九郞

尾張殿御城附

〔寺社法則下〕天明七未七ノ廿一

一陰陽師之儀、往古ハ、町奉行衆支配ニ候處、中古相改、諸國陰陽師共之義、土御門家江管領被仰付以後ハ、寺社奉行衆御支配ニ相成候由、付而ハ、陰陽師共、其職ヲ不取放、叱押込或ハ過料等之輕キ御咎品御申渡候節も、必寺社奉行衆前へ御召出御申渡候義ニ候哉、左候ハヾ、白洲江被召出御申渡候哉、或ハ板縁落間等へ被召出候事ニも候哉、

一總而社人と陰陽師と之御取扱方、此方致候へバ、輕キ社家ゟも陰陽師ハ相劣候御取扱ニ候哉、又ハ大旨輕キ社家同樣之格ニ御取扱有之事ニも候哉、

御書面、咎品申渡候節、奉行所ニ而ハ、都而咎之無差別、直ニ申渡候、且許狀所持之ものハ、許席下通り江差出、許狀無之ものハ、板縁へ差出候、

〔天保集成絲綸錄八十〕寬政三亥年四月

大目付江

陰陽道、職業いたし候輩は、土御門家支配たるべき儀勿論候處、近年甚亂雜に相成、陰陽道猥ニ執行候族も有之樣ニ相聞候、以來右體之心得違無之樣、土御門家より免許を請、支配下知堅相守可取行候、

右之趣、不洩樣可被相觸候、

四月

右之通可被相觸候

〔德川禁令考四十九文武藝術〕寬政七卯年十一月

板倉周防守江　松平備前守より

寺院山伏ニ而易道致し候儀ニ付問合

易業職道ニ而、不礙寺院山伏等、物之善悪、或ハ失物等、奇異候樣相願候得ハ、書物等ニ而差遣し、禮物等ハ不請候得ハ、土御門家免許無之候而も不苦候哉、

書面、社家寺院山伏之類、祈禱いたし候節、善悪邪正考遣候儀、禮物不申請候上ハ、土御門家免許無之ものにても不苦筋ニ候得共、表向大體ニ申成、内實ハ禮錢等を申請、職業同樣致し候もの相有之哉ニ付、容易ニ御聞届難相成筋と存候、

文化二丑年五月

陰陽道之儀ニ付、觸頭より差出候書付、

乍恐以書付申上候

一陰陽道諸占考職業仕度者共、當役所江職札相願候節、當家配下之内ニ而師匠相立、身分之儀ハ、身元引受人有之、連印を以、職札相願候ニ付、職業勤方之儀夫々相糺、任願職札相渡候先例御座候之處、御府内之儀ハ、就中數多配下之儀、混雜ニも御座候之間、一派爲取締、以來支配入願出候者有之節ハ、其所之町役人江故障無之哉之旨掛合、故障無之旨申越候ハヽ、職札相渡候樣可仕候、左候ハヽ、一派取締ニも相成可申と奉存候間、御聞濟被成下候樣仕度、此段申上置候、以上、

文化二乙丑年五月　　關東陰陽家觸頭　藪兵庫印

寺社御奉行所

〔公事吟味留〕五巳〇文化六年十二月二十六日濟口承屆、但相手方町役人答有之、

安藝守殿懸り

一陰陽家觸頭藪兵庫相手、靈巖島靈町久右衛門店賣卜職玄春事、水村伊勢難澁出入、

差上申濟口證文之事

關東陰陽家觸頭藪兵庫煩に付、代黑田貞之允より、靈巖島鹽町家主久右衛門店水村玄春相手取候難澀出入、去辰十一月中、當御奉行所江奉出訴候處、御裏書奉頂戴相附、相手方よりも返答書を以、夫々御答申上、雙方被召出、數度御吟味之上、御理解被仰聞、難有仕合奉存候、然處此節取扱人立入、雙方都而懸合之熟談內濟仕候趣意、左に奉申上候、

一右出入一件、水村玄春儀、寛政八辰年より、土御門家配下入之儀願出、職札相渡、渡世仕來候處、去辰七月、吉田家より、呼名和泉と御許狀頂戴仕候に付、土御門家法令に相背、配下取締り方差支候付、職札差戻候樣申聞候得共、難澀仕、職札相歸不申候に付、不得止事奉出訴候處、此節玄春儀、天社神道職札幷呼名許狀、土御門家よりも申受、以來陰陽道職業、前々之通仕度段、取扱人を以相詫候上は、土御門家役所規定も相立、差支無御座、尤吉田家に而も、差支無御座候間、雙方納得之上、內濟熟談仕、偏御威光と難有仕合奉存候、然上ハ、右一件に付、重而御願ケ間敷儀、毛頭無御座候、爲後證連印濟口證文差上申所、仍如件、

關東陰陽家觸頭藪兵庫煩に付代
訴訟人　黑田貞之允
靈巖島鹽町家主久右衛門店
相手　水村伊勢

文化六巳年十二月

寺社御奉行所

〔觸留　七〕巳八月廿一日、寺社奉行より申上書附御下ケ、評議致し申上候、○中略

南北小口年番
名主共

關東陰陽師觸頭藪兵庫、幷同人方に同居罷在候吉村織部儀、是迄芝田町四丁目家主善次郎店裏屋當分之內借受住居罷在、右は去ル寅年、町道場之儀に付、被仰出之趣を以、元より表店住居ハ不相成身分に候處、兵庫は觸頭相勤、其上年々土御門家より獻上之使者旅宿に相成、右御品をも相仕立、殊に數人之配下呼出、御觸幷敎諭筋等申聞候儀も、裏家住居に而ハ行居がたく、織部ハ、御由

儀を以、年來兩丸江御守札等獻上致し、是又裏家に而ハ、仕立方其外差支候由を以、追々寺社奉行江及歎願、事實無餘儀筋に付、陰陽師之内、右兩人幷同職に而、兩丸御釜入御用相勤候齋田宮大夫儀ハ、追而同家相續人取極候上、右之もの共に限り、武家地之外、市中何れ之場所に而も、表店借受、勝手次第住居致シ、尤莊嚴向等取飾候儀、其外等ハ、兼而御觸之趣相守候樣、寺社奉行所に而、今般申渡候間、右之趣、町役人共相心得居候樣、早々可申通候、

但月行事持之場所は、最寄名主共より可申通、

弘化二巳年八月廿一日

〔撰要集二十五上〕安永六酉年三月〇中略

堀江六軒町喜兵衛店
仁兵衛

右仁兵衛申候者、前書之飛田長兵衛と申もの、去ル午年、土御門殿樣御免、十。二。支。七。ツ。目。守。鏡。、大坂表に而賣弘申候、然處仁兵衛義、去ル申六月中、用事に而、大坂表江罷登候節、仁兵衛義、長兵衛と所緣有之候に付、右守鏡、御當地に而も賣弘呉候樣、長兵衛相賴候而、土御門殿御內、岡部圖書と申者方より、御當地神田土御門殿御役所、吉村權頭と申もの方江之添狀壹通、長兵衛相渡候に付、右添狀、去ル申十二月中、權頭方江、仁兵衛持參仕相賴、御當地に而も、仁兵衛取次に而、右守鏡賣弘申度段、權頭江相願置候處、當二月四日、權頭方より、仁兵衛呼に參候間、則罷越候得ば、右守鏡、勝手次第賣弘候樣にと申渡候に付、右賣弘申度段、當御役所江御訴申上候處、追而御呼出可被遊段被仰渡候旨申之、尤右十二支守鏡之義は、長兵衛樣御免候儀にて、仁兵衛儀は、取次而巳之儀に御座候間、守鏡之譯は一向存不申、勿論右守鏡、角。鏡。丸。鏡。兩樣共、長兵衛方より差下シ申候由に而、賣買直段幷看板仕方、賣弘候場所等之儀申候に付、左に申上候、〇中略

右一通相尋候處、前書之通御座候、則被遊御渡候訴書寫、幷守鏡貳枚返上仕候、以上、

傳習名人

酉二月　喜多村彦右衛門

〔日本書紀 二十二 推古〕十年十月、百濟僧觀勒來之、仍貢曆本及天文地理書、幷遁甲方術之書也、是時選書生三四人、以俾學習於觀勒矣、陽胡史祖玉陳習曆法、大友村主高聰學天文遁甲、山背臣日並立學方術、皆學以爲業、

〔日本書紀 二十七 天智〕十年正月、是月以小山上授(中略)角福牟(閑於陰陽)以小山下授餘達率等五十餘人也、

〔日本書紀 三十 持統〕六年二月丁未、詔諸官曰、當以三月三日將幸伊勢、宜知此意備諸衣物、陰陽博士沙門法藏道基、銀人廿兩、

〔釋日本紀 十五 述義〕陰陽博士沙門法藏道基

私記曰、師說、身爲法師、任陰陽博士之職也、

〔藤原家傳 下 武智麻呂〕六月(神龜元年)遷大納言、公爲人溫雅、備於諸事、既爲喉舌、贊揚帝猷、出則奉乘輿、入則掌樞機、至有朝議、持平合和、朝庭上下安靜、國無怨讟、當此時、(中略)陰陽有津守連通、余眞人王仲文、津連首谷、那康受等、

〔續日本紀 十 聖武〕天平二年三月辛亥、太政官奏偁、大學生徒既經歲月、習業庸淺、猶難博達、實是家道困窮、無物資給、雖有好學、不堪遂志、望請、選性識聰惠、藝業優長者十人以下五人以上、專精學問、以加善誘、仍賜夏冬服幷食料、又陰陽、醫術及七曜頒曆等類、國家之要道、不得廢闕、但見諸博士、年齒衰老、若不敎授、恐致絕業、望仰吉田連宜、大津連首、御立連清道、難波連吉成、山口忌寸田主、私部首石村、志斐連三田次等七人、各取弟子、將令習業、其時服食料、亦准大學生、其生徒陰陽醫術各三人、曜曆各二人、

〔續日本紀 三十三 桓武〕寶龜六年五月己酉、從四位上陰陽頭兼安藝守大津連大浦卒、大浦者、世習陰陽、仲滿甚信之、問以事之吉凶、大浦知其指意涉於逆謀、恐禍及己、密告其事、居未幾、仲滿果反、其年授從四位上、賜姓宿禰、拜兵部大輔兼美作守、神護元年以黨和氣王、除宿禰姓、左遷日向守、尋解見任、即留彼

圓寶龜初、原與入京、任陰陽頭、假稱安藝守、卒於官、

〔續日本後紀 七仁明〕承和八年正月甲午、遣唐陰陽師兼陰陽請益正八位上春苑宿禰玉成、在唐間得難義一卷、令陰陽寮諸生傳學、

〔文德實錄 五〕仁壽三年五月壬寅、是日、並藤卒、並藤、參議從三位刑部卿大宰員外帥勳四等濱成之曾孫、中判事正六位上豐繼之孫、豐前介正六位上石雄之子也、並藤脩陰陽推步之學、明曉天文風星、○中略天長二年爲陰陽助、○中略九年二月爲陰陽頭、○中略嘉祥三年正月叙從五位上、今日加正五位下、優其才學少倫、年齒衰暮也、時年六十二、

〔今昔物語 二十四〕滋岳川人被追地神語第十三

今昔、文德天皇ノ失セ給ヘリケルニ、御陵ヲ點セムガ爲ニ、大納言安倍安仁ト云ケル人承ハリテ、其事ヲ行ヒケリ、□ヲ引具シテ、御陵ノ所ニ行ク、其時ニ滋岳ノ川人ト云陰陽師有ケリ、道ニ付テ、古ニモ不恥、世ニ並无キ者也、其ヲ以テ、御陵ノ所ヲ點シテ事畢ヌレバ、皆返リケルニ、深草ノ北ノ程ヲ行クニ、川人大納言ノ許ニ近ク馬ヲ打寄セテ、物云ハムト思タル氣ヲ見ヌ、大納言耳ニ聞ケバ、川人ガ云ク、年來墓々シクハ非トモ、此道ニ携テ仕リ、私ヲ顧ツルニ、未ダ誤ツ事无カリツ、而ルニ此ノ度大キニ錯ニケリ、此ニ地神追テ來ニタル也、其ハ貴殿ト川人トコソ、此罪ヲバ負ツラメ、是ハ何カ爲サセ給ハムト爲ル、難遁キ事ニコソ侍ヌレト、極ク騒タル氣色ニテ云ヲ聞クニ、大納言總テ物不思エ成ヌ、只我レハ此モ彼モ不思エ、助ケテヨト云フ、川人ガ云ク、然リトテ可有キ事ニモ非ズ、試ニ隱シ可給キ事ヲ構ヘムト云テ、後ニ後レヌル人、皆前ニ行ケト勧メテ遣リツ、而ル間、日暮ヌレバ、暗キ交ニ大納言モ川人モ、馬ヨリ下テ、馬ヲバ前ヘ遣テ、只二人田ノ中ニ留テ、大納言ヲ居ヱテ、其上ニ田ニ刈置タル稲ヲ取積テ、川人其ノ廻ヲ密ニ物ヲ讀給ツヽ、返シ廻リテ後、川人モ稲ノ中ヲ引開テ、這入テ、大納言ト語ヒ居ヌ、大納言川人ガ氣色極テ騒ギワナヽキ給フ

ヲ見ルニ、牛ハ死ヌル心地ス、此テ音モ不レ爲シテ居タル程ニ、暫許有テ、千萬ノ人ノ足音シテ過グ、旣ニ過テ行ヌト聞ツル者共、卽チ返來テ物云ヒ騷グナルヲ聞ケバ、人ノ音ニ似タリト云ヘドモ、口ニ人ニハ非ヌ音ヲ以テ云ク、此者ハ此程ニコソ馬ノ足音ハ輕ク成ツレ、然レバ此ノ邊ヲ集フ隙无ク、土一二尺ガ程ヲ堀テ口可レ求キ也、然リトモ否遁レ不レ畢ジ、川人ハ古ノ陰陽師ニ劣ヌ奴ナレバ、□ニテ否不レ見樣ニ構ヘタル、然リトモ、奴ヲバ失テムヤ、吉ク□ト喤ル也、然レドモ敢テ不レ候ヌ由ヲ口々ニ云騷ケバ、主人ト思シキ人、然リトモ否隱レ不レ畢ジ、今日コソ隱ルトモ、遂ニハ其ノ奴原ニ不レ會樣ハ有ナムヤ、今來ラム、十二月晦ノ夜半ニ一天下ノ下ハ土ノ下、上ハ空、目ノ懸ラムヲ際トシテ求メヨ、其奴原何ニカ隱レム、然レバ其夜可レ集キ也、然テ□出サムト云テ去ヌ、其後大納言川人走上テ出ヌ、我ニモ非ズシテ、大納言ノ云ク、此レヲ何カセムトスト、云ツル樣ニ求メバ、我等ハ可レ遁キ樣无シ、川人ガ云ク、此ク聞ツレバ、其夜露人ニ不レ被レ知シテ、只二人極ク隱レ可レ給キ也、其時近ク成テ委クハ申シ侍ラムト云テ、川原ニ有ケル馬ノ許ニ歩ヨリ行テ、各家ニ返ヌ、其後既ニ晦日ニ成ヌレバ、川人、大納言ノ許ニ來テ云ク、露人知ル事无クテ、只一人二條ト西ノ大宮トノ辻ニ暗ク成ラム程ニ、御座會ヘト、大納言此ヲ聞テ、暮方ニ成ル程ニ、世中ノ人モ騷シク行キ逢フ交ニ、只獨リ二條ト西大宮トノ辻ニ行ヌ、川人兼テ其ニ待立ケレバ、二人打具シテ、嵯峨寺ヘ行ヌ、堂ノ天井ノ上ニ搔上テ、川人ハ呪ヲ誦シ、大納言ハ三滿ヲ唱ヘテ居タリ、然ル間、夜半許ニ成ル程ニ、氣色惡クテ、異ル香有ル風ノ温カナル吹テ渡ル、其程地震ノ振ル樣ニ、少許動テ過ヌレバ、怖シト思テ過ヌレバ、鷄鳴ヌレバ、搔下テ未ダ不レ明ル程ニ、各家ニ返ヌ、別ル時ニ、川人大納言ニ云ク、今ハ恐レ不レ可レ給、然ハ有レドモ川人ナレバ、此ハ構テ遁レヌルゾカシト云テ去ニケリ、大納言、川人ヲ拜シテゾ家ニ返ニケル、此レヲ思フニ、尙川人止事无キ陰陽師ナリトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔今昔物語二十四〕賀茂忠行道傳子保憲語第十五

今昔、賀茂忠行ト云陰陽師有ケリ、道ニ付テ古ニモ不恥ヂ、當時モ肩ヲ並ブ者无シ、然レバ公私ニ此ヲ止事无キ者ニ被用ケル、然ルニ人有テ此ノ忠行ニ祓ヲ爲サセケレバ、忠行祓ノ所ニ行カムトテ出立ケルニ、其忠行ガ子保憲、其時ニ十歳許ノ童ニテ有ケルニ、父忠行ガ出ケルヲ、強ニ戀ケレバ、其ノ見ヲ車ニ乘セテ、具シテ將行ニケル、祓殿ニ行テ、忠行ハ祓ヲ爲ルニ、見ハ其傍ニ居タリ、祓畢ヌレバ、祓ヲ爲ル人モ返ヌ、忠行モ此見ヲ具シテ返ルニ、車ニテ見ノ祖ニ云樣、父古會ト呼ベバ、忠行何ゾト云ヘバ、見ノ云タ、祓ノ所ニテ、我ガ見ツル氣色怖氣ナル體シタル者共ノ、人ニモ非ヌガ□ニ、亦人ノ形ノ樣ニシテ、二三十人許出來テ、並居テ居エタル物共ヲ取食テ、其造置タル船車馬ナドニ乘テコソ、散々ニ返ツレ、其レハ何ゾ父ヨト問ヘバ、忠行此ヲ聞テ思フ樣、我レコソ此道ニ取テ、世ニ勝タル者ナレ、然レドモ幼童ノ時ニハ、此ク鬼神ヲ見ル事ハ无カリキ、物習テコソ漸ク目ニハ見シカ、其レニ此レハ此ク幼キ目ニ、此鬼神ヲ見ルハ、極ヲ止事无キ者ニ可成キ者ニコソ有ヌレ、世モ神ノ御代ノ者ニモ不劣ト思テ返ケルマヽニ、我ガ道ニ知ト知タリケル事ノ限ヲバ、露殘ス事无ク心ヲ至シテ教ヘケリ、然レバ祖ノ思ケルニ不違ハ、保憲ハ止事无キ者ニテ、公私ニ仕ヘテ、聊モ弊キ事无クテゾ有ケル、然レバ其ノ子孫于今榮エテ、陰陽ノ道ニ並无シ、亦暦ヲ作ル事モ、是ノ流ヲ離テハ、乾テ知ル人无シ、然レバ今止事无シトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔加茂氏系圖〕吉備麻呂（八國麿ト云）右大臣 ― 小黒麻呂（一名虫丸）大納言
比賣（淡海公室）
諸雄（正五下、參木、少納言）
田守
廣敷
人麻呂（從五下、左少將）― 江人（丹波守）…… 忠行（從五位下、丹波守）
諸魚（中宮亮）
保憲（一作乃、主計頭、陰陽博士、天文博士）― 光榮（從四上、大炊介、曆博士、右京大夫）

〔續古事談五諸道〕晴明、大舍人ニテ、笠ヲキテ、勢田橋ヲユクニ、玆光コレヲミテ、一道ノ達者ナラムズル事ヲシリテ、ソノヨシヲイヒケレバ、晴明、陰陽師具曠ガモトニユキタルニ、モチイズ、又保憲ガリユキタルニ、ソノ相ヲミテ、モテナシケリ、晴明ハ術法ノ物ナリ、才覺ハ優長ナラズトゾ、晴明光榮論ジケル、保憲ガトキ、光榮ヲバ前ニイタスコトナシト、晴明申ケレバ、愛弟トニクマンコトナヲヒトシカラズトゾ光榮申ケル、晴明ガ云ク、百家集我ニツタフ、光榮ニハツタヘズ、コレソノ證ナリト云ケレバ、光榮、百家集我ガ許ニアリ、又曆道ツタフトゾ云ヒケル、

〔今昔物語二十四〕安倍晴明隨忠行習道語第十六

今昔、天文博士安倍晴明ト云陰陽師有ケリ、古ニモ不恥ヂ止事無リケル者ナリ、幼ノ時、加茂忠行ト云ケル陰陽師ニ隨テ、晝夜ニ是ノ道ヲ習ケルニ、聊モ心モト无キ事无リケル、而ルニ晴明若カリケル時、師ノ忠行ガ、下渡ニ夜行ニ行ケルニ、供ニ歩ニシテ、車ノ後ニ行ケル、忠行車ノ内ニシテ、吉ク寢入リニケルニ、晴明見ケルニ、艶ヌ怖キ鬼共、車ノ前ニ向テ來ニケリ、晴明是ヲ見テ、驚テ車ノ後ニ走リ寄テ、忠行ヲ起シテ告ケレバ、其時ニゾ、忠行驚テ覺テ、鬼ノ來ルヲ見テ、術法ヲ以テ忽ニ我ガ身ヲモ恐レ无ク、供ノ者共ヲモ隱シ、平カニ過ニケル、其後忠行、晴明ヲ難去リ思テ、是ノ道ヲ敎フル事、瓶ノ水ヲ寫スガ如シ、

〔古今著聞集七術道〕御堂關白殿御物忌に、解脫寺僧正觀修、陰陽師晴明、醫師忠明、武士義家朝臣參籠して侍けるに、五月一日南都より早瓜を奉たりけるに、御物忌の中に取入られん事いかゞあるべきとて、晴明にうらなはせられければ、晴明うらなひて、一つの瓜に毒氣さふらふよしを申て、一をとり出したり、加持せられば毒氣顯れ侍べしと申ければ、僧正に仰て加持せらるゝに、しばし念誦の間に、そのうちはたらきうごきけり、其時忠明に毒氣治すべきよし仰られば、瓜を取まはしはし〳〵見て、二所に針を立てけり、其後瓜はたらかず成にけり、義家に仰て、瓜をわらせられけ

れば、腰刀をぬきてわりたれば、中に小蛇わだかまりて有けり、針は蛇の左右の眼に立たりけり、義家何となく中をわると見へつれ共、蛇の頭を切たりけり、名をえたる人々のふるまひかくのごとし、ゆゝしかりける事也、この事いづれの日記にみえたりといふ事をしらね共、昔く申傳へて侍り、陰陽師吉平晴明子醫師雅忠と酒をのみけるに、雅忠盃をとりてうけてしばしもたれけるを、吉平みて御酒とくまいり給へ、只今ないのふり候はんずるぞといひけり、其ことばたがはず、やがてふりければ、酒がふときてこぼれにけり、ゆゝしくぞかねていひける也、

〔類聚雜例〕長元三年三月廿二日乙亥、近曾守道卒去、陰陽道已斷盡之中、暦道全無其人、方々有此災、可歎可恐々々、

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年十一月癸未、勅曰、如聞、頃年諸國博士醫師、多非其才、託請得選、非唯損政、亦无益民、自今已後、不得更然、其須講、略〇中陰陽生者、周易、新撰陰陽書、黄帝金匱、五行大義、略〇中並應任用、被任之後、所給公廨一年之分、必應令送本受業師、如此則有尊師之道終行、教資之業永繼、國家良政、莫要於茲、宣告所司、早令施行、

〔續日本紀考證七孝謙〕新撰陰陽書、唐志、王粲新撰陰陽書三十卷、現在書目錄、大唐陰陽書五十一卷、新撰陰陽書五十卷、呂才撰、元融按、依唐志、呂才陰陽書五十卷、與所撰新撰陰陽書自別、現在書目錄、以新撰陰陽書、爲呂才所撰、又卷數、恐誤、黄帝金匱、唐志、曹士蔿黄帝金匱經三卷、現在書目錄五行家、黄帝注金匱經十卷、黄帝金匱經四卷、陳氏撰、按三代實錄、貞觀十六年五月、陰陽頭兼陰陽博士滋岳朝臣川人傳云、川人作金匱新注二卷、本朝書籍目錄、亦載金匱新注二卷、滋岳川人撰、蓋與此所云金匱同書也、五行大義、現在書目錄、又之、符各氏曰、靈感有集、消五行記、然先說、林述齋先生佚存叢書第一帙、收五行大義、卷精說先明符靈外集五行大義據此云、隋唐志均未著錄、蓋以其書名少異、偶失檢索歟、

〔日本後紀八桓武〕延暦十八年二月乙未、贈正三位行民部卿兼造宮大夫美作備前國造和氣朝臣清麻呂薨、略〇中長子廣世、略〇中大學會諸儒、講論陰陽書、新撰藥經、大素等、

〔本朝書籍目錄〕陰陽

世要動靜經三卷、滋岳川人撰　　六甲六帖、同撰、

指掌宿曜經、一卷、同撰　新術遁甲書、二卷、同撰
金匱新經、三卷、同撰　樞機經、同、陰陽家從八位下曆志悉達猪養撰
宅肝經、一卷、滋岳川人撰　占事略決、同、晴明朝臣撰
曆林、十卷、賀家抄　新書、一卷、家榮朝臣撰

〔大日本史方技列傳二百二十六〕安倍晴明、右大臣御主人之後也、父益材、大膳大夫、尊卑分脈○中略所著有金烏玉兎集、又名簠簋袖裏傳、據本書

五行相生相剋

〔拾芥抄下末五行部〕木生火　火生土　土生金　金生水　水生木謂之相生　火剋金　金剋木　木剋土　土剋水　水剋火謂之相剋

〔五行大義二〕第四論、相生就此分爲三段、一者論相生、

經云、天生一、始於北方水、地生二、始於南方火、人生三、始於東方木、時生四、始於西方金、五行生五、始於中央土、又曰、天始生一者、因一而生天、非天生一也、故云、一生二、二生三、三生萬物、地生二者、亦因二而生地、因三生人、因四生時、五行皆由一而生、數至於五、土最在後、得五而生五行也、五行同出而異時者、出離其親、有所配偶、譬如人生、亦因元氣而生、各出一家、配爲夫妻、化生子息、故五行皆相須而成也、五行同胎而異居、有先後耳、夫五行皆資陰陽氣而生、故云、濡氣生水、溫氣生火、强氣生木、剛氣生金、和氣生土、故知五行同時而起、託義相生、傳曰、五行並起、各以名別、然五行既以名別、而更互用事、輪轉休王、故相生也、顧容云、凡五行相生謂異類相化、如男女異姓能至繁殖、若以水濟水、不生嘉味、河間獻王問溫城董君曰、孝者天之經、地之義也、何謂也、對曰、天有五行、木火土金水是也、木生火、火生土、土生金、金生水、水生木、木爲春、春主生、夏主長養、秋主收、冬主藏、藏者冬之所成也、是故、父之所生、其子長之、父之所長、其子養之、父之所養、其子成之、不敢不致如父之意、盡爲人之道也、○中略

第十論相剋

五行雖爲君臣父子、生王不同、速忌相剋、剋者制罰爲義、以其力强能制弱、故木剋土、土剋水、水剋火、火剋金、金剋木、白虎通云、木剋土者專勝散、土剋水者實勝虛、水剋火者衆勝寡、火剋金者精勝堅、金剋木者剛勝柔、春秋繁露云、木者農也、農人不順如叛、司徒誅其率正矣、故金勝木、火者本朝有讒邪熒惑其君、法則誅之、故水勝火、土者君大奢侈過度失禮、民叛之窮、故木勝土、金者司徒弱不能使衆、則司馬誅之、故火勝金、水者執法阿黨不平、則司寇誅之、故土勝水、勝者爲君爲夫爲官爲吏爲鬼、負者爲臣爲妻爲財、君以威嚴尊高、夫以德義隆重、官以能有賞伐、吏以刑法裁斷、鬼以剋殺病爽、並爲勝者也、臣以畏伏其上、妻以敬從其夫、財以休養制用、並爲負者、凡上剋下爲順、下剋上爲逆、喩如君有刑臣之法、臣無犯君之義、父有訓子之道、子之無敎父之方、所以上之剋下、順理而行、下之剋上、乖理而剋、故白虎通云、陽爲君、陰爲臣、水以太陰之氣、剋太陽之火、金以少陰之氣、剋少陽之木、喩如失道之君、君殷湯放桀、周武伐紂、此皆誅有罪也、凡卜筮得其所剋者凶、得所受制者吉、五行之道、子能救父之難、故金往剋木、火復其讎、火既消金、水雪其恥、然當衰氣者反爲王者所制、如鼎鑊中水爲火所煎、

〔太宰古册傳三〕尚書洪範に、五行一曰水、二曰火、三曰木、四曰金、五曰土、禮記月令に、水數六、火數七、木數八、金數九、土數十、洪範には五行の生數に云ひ、月令には五行の成數を言へるなり、五行大義に、天以一生水於北方、易氣微動於黃泉之下、始動無二、故水數一也、陽易生出、始於午、故火數二也、易左長於東方、長則數增、故木數三也、金右轉而居於西方、在易之後、故金數四也、土總括四行、包則彌多、故土數五也、此並生數、未能爲用、五行傳、及白虎通皆云、木非土不生、水非土不乗、金非土不成、水非土不停、以上は、繁露雜體の文をみな略して引きたり、本書と合せ見て知るべし、北方亥子水也、生數一、丑土也、生數五、一與五相得爲六、故水成數六也、水は北方の正行なり、亥子は北方に位する故に、隷して其に水配を得たるなり、東方寅卯木也、生數三、辰土也、生數五、三與五相得爲八、故木成數八也、木は東方の正行なり、寅卯東方に位する故に、從ひて其に木配を得たるなり、南方巳午火也、生數二、未土也、生數五、二與五相得爲七、故火成數七也、火に

南方の正行なり、巳午南方に位する故に、隷して共に火德を貢たるなり、西方申酉金也、生數四、戌土也、生數五、四與五相得爲九、故金成數九也、金は西方の正行なり、申酉西方に位する故に、從ひて共に金德を得たるなり、中央、戊己土也、生數五、兩五相得爲十、故土成數十也、土は中央の正行なり、そを金島に分けて戊己と爲たることと、既に云るが如し、また同書に、凡五行有生數壯數老數三種、木生數三、壯數八、老數九、火生數二、壯數七、老數三、土生數五、壯數十、老數一、金生數四、壯數九、老數七、水生數一、壯數六、老數五、夫万物皆稟五常之氣、化合而生物、生之後必至成壯、成壯之後必有衰老、故有三種義也、五行の數こと僞種々の說等有れど、此餘は都て取ず、そは方法とも聞えればなり、

〔本朝世紀〕久安五年八月三日壬子、內府（○藤原賴長）同成通、右府（○藤原實行）被申云、美福門者南方門也、后是陰位也、陰是水也、南是火也、水火相剋、定爲違亂之基歟、加之伉儷之間、人有不和事歟、仍於美福門者、一切不可被用也、八條殿尤優歟、

〔台記〕保延二年十月十二日丙午、此間、伊通談云、著座人識官外記廳鬪之時、思秋東二字之事、大外記信俊疑難云、秋自西來也、而東字相剋歟、不得心之由申也、

〔明德記上〕軍ハ廿七日（○明德二年十二月）ト定タリトイヘドモ、河內國ノ守護代遊佐河內守國長、十七所ニ城墎ヲ構ヘ、國々和泉紀伊國ノ軍勢通路難儀ニシテ、八幡ノ勢ゾロヘハサカリケレバ、合戰巳ニ延引シテ、正月二日ト定メタリシ事ナレバ、其用意アリケル處ニ、峯ノ堂八幡ノ勢共、ヌケ〳〵ニ落、夜々ニ勢スクト沙汰セシカバ、年內ト明春ト、イヅレカ合戰ニ利潤有べキトテ、召具セラレタリケル陰陽ノ博士ニ占ナハセラレケルニ、博士占形ヲ開キ、心靜ニ合戰ノ吉凶ヲ勘テ云、奧州ハ（○山名氏清）水性、當氣ハ則冬也、去レバ水ハ王ニシテ、年內御合戰アラバ、治定ノ御勝トゾ勘申ケル、奧州、此事ヲ聞給、誠ニ快ゲニテ、サラバ諸方ノ責口ヘ、晦日ノ合戰ト相觸ヨトテ定ラレタリケルニ、此陰陽ノ博士、小林ニ向ヒ、內々侘事申ケルハ、合戰ノ吉凶ノ事仰下サレ候ニ依リ、勘文ノ趣ヲバ、大概ニ申上ツレドモ、夫占ト者、推條ヲ以本意トセリ、奧州、水性ニテ御渡リ候間、冬ハ王ニシテ、御

合戰利有ベキ事ハナル事ニテ侍レドモ、十二月ハ冬ノシユノ位ニテ、季ハ春ニ近シ、又水ハ北ヨリ南ヘ流ル、ハ、陽ノ道ニテ順也、南ヨリ北ヘ流ル、ハ、陰ノ道ニテ逆也、サレバ御本意ヲ遂セラレン事堅カルベシ、且此邊ニ御陣ヲ召レテ、敵ノ下向ヲ御待候ヘカシトゾ存候ヘ、此旨ヲ申上度候ヘドモ、先盟文ニ任申上候ツル也、是ハ推儀ノ了簡ニテ侍ル上ハ、是程ニ思召立タル事ヲ、兎角申ナバ、定テ御氣ヲ損ゼラルベキ間、斟酌仕リテ候由ヲ語リケレバ、小林ヲ始テ、心有人々ハ、本ヨリ此惡逆思立、軍ニ勝ベキ事、千ニ一モ有ベカラズ、人ノ滅ビントテ思立惡事ナレバ、占モ文モ入ルベキニアラズト口說ヲ、更ニ勇メル氣色ハ無リケリ、

〔比古婆衣　一〕附、干支唱考、

干支はもと、もろこしの國にて、暦を造る法にて、はた年月日を定むる料に設たる名目なるを、やがて日次を稱ぶ目にも用ひ、但し、命歷序に、辛壬癸甲云云とあるを、殷日也と注せり、書、日次なし、十干に〔…〕びたりときこゆ、殷の世三十代の王の名の下に、かならず十干を一字つゝ書る例とせりと見えたるは、おの〳〵生日の干を取れるにやありけむ、又いと上古には、干ばかりを用ひて、支は後に作り加へて、用ふることゝせしにはあらざるかとも、おしふ態あれど、いはまだ書きだめされたればなり、後に、年に係ても稱ふことゝなりたるなるべし、かの國の古書どもの記年に、干支をかけて呼べる例の、なき〳〵きこえざる事、本書にいへるがごとし、暦には、月次にも干支をかけてものすれど、平常に、某の干支月といはざる、はたおもひ合さるゝなり、さて干支の義のもとは、皇極内篇に、十爲干、十二爲支、十干者五行有陰陽也、十二支者六氣有剛柔也といへるほどのことなるべし、其を皇國言にうつして、十干の甲乙などを、キノエ、キノトなど唱ふは、木ノ兄、木ノ弟の義なりと、はやくよりいひきたれるは、さることゝきこゆるを、十干のよみの、古くものに見あたりたるに、中納言兼輔集の歌にみえたり、きのえなどの假字に當てよみ給へり、さて此よみのさだまれるは、十二支とともに、はやくよりさだめられたりけむ、それの十二支のよみのことは、下に論ふべし、十二支の子丑寅卯などを、ネ、ウシ、トラ、ウなどよみて、鼠牛虎兎などに當て稱び用ふるは、古言に國字をひよみのとりと云ひなれたるに、みにものいひざまのかたへ違れるなり、猶〔…〕の簾中抄に、日よみのうま、顯昭法師の袖中抄に、日よみのさるなどみえ、それより後の書どもにも、然る定にいへる例あり、みな准へ知るべし、〇中略皇國にて鼠牛など

の義にかなへて、よみを定め用ふる事となれりしは、いつの頃よりか始りけむ、万葉集、天平寶字二年正月三日子戊の肆宴の時、詔を奉てよめる、大伴家持卿の歌に、始春乃波都禰とみえたるは、初子なり、また同集に、卯字を字の借字に用たるも、支のよみによれるなり、又申をマシの借字に用ひたり、そのかみ、支のよみに、マシと唱びけるを、後にサルと唱ふこと丶なりぬるにや、但しもとよりサルとよみたりけるを、わざと轉じてマシに當て丶書くまじきにもあらざれば、さだめては論ひがたけれど、申を猴に當たるよみなることは著し、然れば初子の歌よめる天平寶字のころ、十二支のよみは、はやく定まりて、(此歌よみ給へる天平寶字二年は、唐肅宗が世の二年に當れり、)世に書き唱とはなりたりし事明なり、(そのかみ十二支のよみをそなへて、ものに見えたるは、中納言兼輔卿集に、四隅を物名歌に、ひつじさる、いぬゐ、うしとら、たつみとよみたまへり、うま、とりは、次第にて推して知られたり、)さてその十二類の中に、鼠をネ、兎をウ、蛇をミとよむは、なべてはいはざる言のごとくなれど、和名抄に、鼠、禰須美とよめるに、また鼷鼩小鼠也、乃良禰などみえ、(野鼠なり、)又兎を字佐木とよめるに、兎字を、古事記その外の古書どもに、字の借字に用ひたれば、玄か單言にもいへりしなるべし、蛇をミといへる例は、いまだみあたらざれど、和名抄などに、蛇倍美とよめるに准へておもへば、さもいひけむ、(雞は、古事記の歌詞に、爾波都登理とみえたれど、又爾波登理とも、たゞ登利ともいふは、古も今もつれなり、)但し、玄か單言なるかたを、ことさらに選びて用ひたりげにきこゆるは、十二支の名を、連唱ふる音便のよからむために、定めたりしにやあらむ、かくておもへば、干支をとり用ひ始給へるはじめつかたの御世には、鼠牛などいへる說によれるよみをば、用ひ給ふべくもあらざるめれば、干支ともに、字音にて唱ふる例なりけるを、後に皇國言もて唱ふべく、そのよみを定めて、世に行はしめ給ひたりしにぞあるべき、

〔太皞古曆傳三〕支干の起原は、五行大義に、支干者因五行而立之、昔軒轅之時、大撓之所制也、蔡邕月令章句云、大撓採五行之情、占斗機所建、始作甲乙、謂之幹、作子丑、謂之支、支干者枝幹也、相配成六旬、

如樹木之有枝故謂幹、其爲樹體也と有り、（こは文を略して引たるなり、中に六旬の二字は、本に用字なれど、事物紀原に引たるに據りて改めつ、支干にな）（は蔡說を載せたに、其說に取らず、劉恕が外紀に、黃帝命大撓探五行之情、占斗綱所建、始作甲子、甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、謂之幹、子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥、謂之枝、枝幹相配以名日、とも云るは、是月令章句に謂れるにや、）然れど大撓は黃帝の調暦を治むる時に補助をこそ爲つれ、干支あに此人の始作ならむや、因より太昊氏の制作なること、其暦を甲暦と云るにて、別に論ひ勿き事なり、（但し此は詳くし暦部）（が路史太昊氏の傳に、遣甲子以命日月、紀天甲幹、歷爲枝と記し、羅泌前紀太昊紀に、干支相配爲六甲、離天運周與と記し、其に闕書を引きて證せれば、今更に委くは云す、然れど路史會編に、伏羲長樂亮に命じて、暦を作ると云ふ事も有り、また史記の律書に、十母十二子とも、天干地支とも云へり、其は十二支は、十干を母として、生れたる方位なればなり、）斯て其制作の由來を索ぬるに、抱朴子對俗篇に、八卦生鷹隼之所被、六甲出靈龜之所負、と所見たる八卦の事は、既に古史傳に論へれば措きて、六甲を靈龜の所負に出たりと有るは、此書の究覺せる玄奥の古傳說なること疑ひなし、（葛稚川は、自然にも、如何の浮說を唱ふる人に非ざること、其子書を熟讀玩味し、かつ予が別に著せる此仙論の傳に就て、能く其人品を知らむ人は、疑ひ有まじくこそ、）抑六甲とは、六十干支の中に、甲子、甲戌、甲申、甲午、甲辰、甲寅の六は、各一旬の首に在りて、九干支を率るが故に、六十干支の事を謂ふに、六甲と稱へは、即て其事なる太古よりの法言なり、

○（中略）

十干十二支を輪轉相配して、甲子に始まり、癸亥に終れる樣、左に視せる如きを、今は六十花甲と稱すれど、古くは六甲と云へり、其は甲子、甲戌、甲申、甲午、甲辰、甲寅、各々九干支を綜て其首たればなり、五行大義に、便以甲配子、盡干至癸酉、餘支有戌亥、（是甲子旬なり）又起甲配戌、盡干至癸未、餘支有申酉、（是甲戌旬なり）又起甲配申、盡干至癸巳、餘支有午未、（是甲申旬なり）又起甲配辰、盡干至癸丑、餘支有寅卯、（是甲辰旬なり）又起甲配寅、盡干至癸亥、（是甲寅旬なり）干支周畢、還從甲子起、故六甲輪轉止六十、と有にて知べし、偖かく六甲の位の定まるに就て、自然に孤虛と云ふ事いで來たり、此も同書に十日一旬之內、二支無配干者爲之孤、所對衝者爲之虛也、と見えたり、甲子旬には戌亥を孤となし、其相對ふ辰巳を虛となす、（また別ては戌を陽孤と云ひ、亥を陰孤と云ふ、）甲戌旬には、申酉を孤となし、其相對ふ寅卯を虛となす、（別ては申を陽孤と云ひ、酉を陰孤）

と云ふ、甲申旬には、午未を孤となし、其相對ふ子丑を虛となす、別ては午を易孤と云ひ、未を金孤と云ふ、甲午旬には、辰巳を孤となし、其相對ふ戌亥を虛となす、別ては辰を易孤と云ひ、巳を金孤と云ふ、甲辰旬には寅卯を孤となし、申酉を虛となす、別ては寅を易孤と云ひ、卯を金孤と云ふ、甲寅旬には子丑を孤となし、午未を虛となす、別ては子を易孤と云ひ、丑を金孤と云ふ、各圖に依りて其趣を知べし、斯て虛を吉とし、孤を凶とする古例なり、或は虛を空と稱し、孤を凶と稱するなど、種々の說等聞ゆれども、其は都て取ず、

〔倭訓栞前編二十二〕ね　十二支の子をよむは、十二生肖の鼠にあたれば略していへり、丑をうし、寅をとらとよむも皆同じく、十二の禽獸よりよべる名也、

〔論衡三〕物勢篇○中略

且五行之氣相賊害、含血之蟲相勝服、其驗何在、曰、寅木也、其禽虎也、戌土也、其禽犬也、丑未亦土也、丑禽牛、未禽羊也、木勝土、故犬與牛羊爲虎所服也、亥水也、其禽豕也、巳火也、其禽蛇也、子亦水也、其禽鼠也、午亦火也、其禽馬也、水勝火、故豕食蛇、火爲水所害、故馬食鼠屎而腹脹、曰、審如論者之言、含血之蟲、亦有不相勝之効、午馬也、子鼠也、酉雞也、卯兎也、水勝火、鼠何不逐馬、金勝木、雞何不啄兎、亥豕也、未羊也、丑牛也、土勝水、牛羊何不殺豕、巳蛇也、申猴也、火勝金、蛇何不食獼猴、獼猴者畏鼠也、嚙獼猴者、犬也、鼠水、獼猴金也、水不勝金、獼猴何故畏鼠也、戌土也、申猴也、土不勝金、猴何故畏犬、東方木也、其星蒼龍也、西方金也、其星白虎也、南方火也、其星朱鳥也、北方水也、其星玄武也、天有四星之精、降生四獸之體、含血之蟲、以四獸爲長、四獸含五行之氣最較著、案龍虎交不相賊、鳥龜會不相害、以四獸驗之、以十二辰之禽效之、五行之蟲、以氣性相刻、則尤不相應、凡萬物相刻賊、含血之蟲則相服、至於相噉食者、自以齒牙頓利、筋力優劣、動作巧便、氣勢勇桀、若人之在世、勢不與適、力不均等、自相勝服、以力相服、則以刃相賊矣、夫人以刃相賊、猶物以齒角爪牙相觸刺也、力強角利、勢烈牙長則能勝、氣微爪短誅、膽小距頓則服畏也、人有勇怯、故戰有勝負、勝者未必受金氣、負者未必得木精也、

孔子畏陽虎、卻行流汗、陽虎未必色白、孔子未必面青也、

〔大方等大集經卷二十三虛空目分中淨目品第五〕佛言、如是如是、善男子、如汝所說、又此世界、諸菩薩等、或作天像、調伏衆生、或作龍像、或作鬼像、或阿修羅像、或迦樓羅像、或緊那羅像、或摩睺羅像、或夜叉像、或拘辦茶像、或舍闍像、薜荔陀像、人像畜生像、鳥獸之像、遊閻浮提、教化如是種類衆生、善男子、若爲人天、調伏衆生、是不爲難、若爲畜生、調伏衆生、是乃爲難、善男子、閻浮提外、南方海中、有琉璃山、名之爲潮、高二十由旬、具種種寶、其山有窟、名種種色、是昔菩薩所住之處、縱廣一由旬、高六由旬、有一毒蛇、在中而住、修聲聞慈、復有一窟、名曰無死、縱廣高下亦復如是、亦是菩薩昔所住處、中有一馬、修聲聞慈、復有一窟、名曰善住、縱廣高下亦復如是、亦是菩薩昔所住處、中有一羊、修聲聞慈、其山樹神、名曰無勝、有羅剎女名曰善行、各有五百眷屬圍遶、是二女人、常共供養如是三獸、善男子、閻浮提外、西方海中、有頗梨山、高二十由旬、其山有窟、名曰上色、縱廣高下亦復如是、亦是菩薩昔所住處、有一獼猴、修聲聞慈、復有一窟、名曰誓願、縱廣高下亦復如是、亦是菩薩昔所住處、中有一雞、修聲聞慈、復有一窟、名曰法牀、縱廣高下亦復如是、亦是菩薩昔所住處、中有一犬、修聲聞慈、中有火神、有羅剎女、名曰眼見、各有五百眷屬圍繞、是二女人、常共供養是三鳥獸、善男子、閻浮提外、北方海中、有一銀山、名菩提月、高二十由旬、中有一窟、名曰金剛、縱廣高下亦復如是、亦是菩薩昔所住處、中有一豬、修聲聞慈、復有一窟、名香功德、縱廣高下亦復如是、亦是菩薩昔所住處、中有一鼠、修聲聞慈、復有一窟、名高功德、縱廣高下亦復如是、亦是菩薩本所住處、中有一牛、修聲聞慈、山有風神、名曰動風、有羅剎女、名曰天護、各有五百眷屬圍繞、是二女人、常共供養如是三獸、善男子、閻浮提外、東方海中、有一金山、名功德相、高二十由旬、中有一窟、名曰明星、縱廣高下亦復如是、亦是菩薩昔所住處、有一師子、修聲聞慈、復有一窟、名曰淨道、縱廣高下亦復如是、亦是菩薩昔所住處、中有一兔、修聲聞慈、復有一窟、名曰喜樂、縱廣高下亦復如是、亦是菩薩昔所住處、中有一龍、修聲聞慈、山有水神、名曰水天、有羅剎女、名修

慙愧、各有五百眷屬圍遶、是二女人、常共供養、如是三獸、是十二獸、晝夜常行閻浮提內、天人恭敬、功德成就、已於諸佛所發深重願、一日一夜、常令一獸遊行敎化、餘十一獸、安住修慈、周而復始、七月一日、鼠初遊行、以聲聞乘敎化一切鼠身衆生、令離惡業、勸修善事、如是次第至十三日、鼠復還行、如是乃至晝、十二月、至十二歲、亦復如是、常爲調伏諸衆生故、善男子、是故此土多有功德、乃至畜生亦能敎化、

〔拾遺和歌集　七物名〕ね、うし、とら、う、たつ、み、　よみ人しらず

一夜ねてうしとらこそは思けめうき名たつみぞわびしかりける

むま、ひつじ、さる、とり、いぬ、ゐ、

むまれよりひつじつくれは山にさるひとりいぬるに人ゐでいませ

〔桃花蘂葉〕陰陽家祭ハ漢朝事也、仍不忌觸穢、祓ハ起我朝、仍忌穢、

〔簾中抄　下神事〕陰陽師のする祭ども

屬星　天地災變　玄宮北極　泰山府君　三萬六千神　地震　太一　百怪　夢　火災　代厄

招魂　呪咀　宅鎭　土公　鬼氣　已上次第不同

〔撮壤集　上新篇〕外典陰陽

五帝四海神祭　北極玄宮祭　地震祭　屬星祭　三萬六千神祭　天地災變祭　雷公祭　風伯祭　海若祭　五龍祭　大土公祭　小土公祭　天曹地府君祭　泰山府君祭　大鎭祭　井靈祭

防解火災祭　西獄眞人祭　大將軍祭　王相祭　代厄祭　鬼氣祭　河臨祭　靈氣祭　呪詛

反却祭　九曜祭　百怪祭　招魂祭　惡夢祭　荒神祭

〔侍中群要　七〕御祭等事

大一式　大陰　熒惑　御屬星儀　地震儀、未戒、　太山府君有告文、　代厄　天地災變　玄宮北極

(者、略、)　西嶽眞人　七十二星　三萬六千神(霊)　鎮星(白馬)　雷公　四角四堺(四角使所來、四界使還口、)仰上卿行之、(中略)

御祭

大属星御祭(五箇日齋、)　属星御祭(三日齋、…)　天地災變御祭(三日齋、…二夜祭之、)　三萬六千神御祭(三日齋、…祭之、…)　自餘御祭不齋

(類秘御抄)御祈(中略)

陰陽師御祭、謂属星、玄宮北極、太一、或三萬六千神、老人星等不可勝計、或遣御衣、或御鏡、精進魚味皆依祭、藏人多爲勅使、或殿上人有例、齋籠ナドニ女房向其所、爲代官例也、四堺御祭所來瀧口各四人爲使、入人也、

(吾妻鏡脱漏)嘉祿三年(安貞元年)四月廿九日丁丑、依御不例之事、御祈等被始行、周防前司親實爲奉行、

佛眼護摩　莊嚴房律師　鎮星王護摩　信濃僧都　藥師護摩　大進僧都　北斗護摩　若宮別當僧都　金剛童子護摩　丹波律師　正觀音法　山口法眼　千手法　宰相律師　不空羂索法　常陸律師　延命供　越中阿闍梨　大威德法　遠月房律師　已上内典

三萬六千神祭　前大膳亮泰貞　属星　陰陽大允親職　天地災變祭　陸奧權守國繼　泰山府君　左京亮重宗　呪詛祭　陰陽少允晴幸　靈氣　散位晴賢　疫神祭　散位道繼　竈神　國富晴職　土公祭　散位宣賢　已上外典

(吉記)治承五年(養和元年)六月廿九日甲戌、自今夜、公家御祈、被行玄宮北極祭、(泰親朝臣、大膳大夫、)維事重衡卿沙汰、天地災變祭等(事、自仏國司、御祈御沙汰、)藏人大舍人助經奉以一身齋籠兩祭、依藏人辨行隆與奪也、藏人祭人數之故歟、但兼行之條未知先例、後日右中辨云、於陰陽師住宅被行、殿重御祭非例也、藏人齋籠無詮、專可被止、自高倉院御宇出來事歟云々、

屬星祭

〔伊呂波字類抄太諸社〕大屬星祭（五日忌、以御夜祭之、御精進、三）

〔今昔物語二十四〕天文博士弓削是雄占夢語第十四

今昔□ト云フ者有ケリ、穀藏院ノ使トシテ、其封戸ヲ徴ラムガ故ニ、東國ノ方ニ行テ、日來ヲ經テ返上ル間、近江國ノ勢多ノ驛ニ宿ヌ、其時ニ、其國ノ司□ト云フ人、館ニ在テ、陰陽師天文博士弓削是雄ト云フ者ヲ請ジ下シテ、大屬星ヲ令祭ムトスル間、〇下略

〔吾妻鏡十六〕建久十年〇正治元年三月六日戊戌、自今月每月可行中將家御當年星祭之由、被仰主計頭安倍資元朝臣、

〔吾妻鏡十九〕承元五年〇建暦元年六月二日壬午、申刻將軍家俄御不例、頗有御火急之氣、仍戌刻於御所南庭被行屬星祭、泰貞奉仕之、武州帶御撫物、幷御衣、令向其所給、

〔心日宸記〕延慶四年正月廿一日、自今日三ケ夜、屬星御祭、在所行之、藏人橘以爲申出御撫物、（御鏡一、納弘蓋、不蓋打事也、）祭料本所沙汰、女房御代官精進、御祭文草勘解由長官在兼卿、不令清書、乍草也、

維、日本國、延慶三年歲次庚戌正月甲戌朔廿二日甲午、吉日良辰、　仙院齋戒沐浴

謹遣有司、馳誠靑天、望星宮、奉設淸壇香花禮奠、謹請天皇太帝曜魄寶、

謹請北斗七星魁罡府君第一貪狼星字希神子、主室壁奎婁、其數常直建、

謹請第二巨門星字貞文子、主胃昴畢觜、其數常直除閉、

謹請第三祿存星字祿存子、主參井鬼柳、其數常直滿開、

謹請第四文曲星字微惠子、主星張翼軫、其數常直平收、

謹請第五廉貞星字衞不隣子、主角亢氐房、其數常直定成、

謹請第六武曲星字大東子、主心尾箕斗、其數常直執危、

謹請第七破軍星字持大景子、主牛女虛危、其數常直破、

伏願、星神廻光、就衆不分明、鑒所獻貢饗、再拜

南無天皇太帝曜魄寶　南無貪狼星字希神子
南無巨門星字貞文子　南無祿存星字祿存子
南無文曲星字徹惠子　南無廉貞星字衛不隣子
南無武曲星字大東子　南無破軍星字大景子

謹啓、北斗七星者、七政之樞機、萬物之精命也、以神道之智準、世之事爲、以自在之威定、人之壽平、若致欽敬心、施慇懃、伏惟初從后宮之正位、今遷仙院之徽號、零耳愁詠、顯謝周雅之詞、齊體承恩、忝備秦嬴之禮、然間昨盛星吉地之瑞、此春當厄運之期、安全之謀、不如致敬、懇祈之道、無鉄爲善、是以迎萬期年之初節、設三ヶ夜之清宴、百和之供香也、丞以梅花開意之匂、五彩之陳寶幣也、交以松雪寒閑之色、願施哀納、立致靈答、然則玉體無恙、慎西母爲鑑之方、殊昭共全、仲東萊全母之算、而仙洞成壽木之林、廟柳府增家華之榮、外成內平、上治下安、謹啓、

南無天皇太帝曜魄寶　南無貪狼星字希神子
南無巨門星字貞文子　南無祿存星字祿存子
南無文曲星字徹惠子　南無廉貞星字衛不隣子
南無武曲星字大東子　南無破軍星字大景子

謹重啓、　神者人之所仰也、人者神之所仕也、禮有五經、莫重於祭、祭有十倫、莫最於禮、方今專恕發露、敬莫尊星、廿八宿之先、恒時加謹、卅六禽之候、理世爲鎮、天孽不侵、地妖忽休、謹啓、

南無天皇太帝曜魄寶　南無貪狼星字希神子
南無巨門星字貞文字　南無祿存星字祿存子
南無文曲星字徹惠子　南無廉貞星字衛不隣子

南無武曲星字大東子　　南無破軍星字大景子

謹重啓、降臨諸神等、清酌三獻、絫漏五更、禮徹座久、不敢口留、乞廻星駕、各還天宮、今日以後、遐年無彊、門口耀光彩、國家馮休明、謹啓、

〔知信朝臣記〕天承二年（〇長承元年）九月十九日、自明曉三ケ日、被行辰星御祭、須夜陰被行也、而御精進三ケ日不豫之間、有其煩、仍毎曉被行之、且是陰陽師保榮所定申也、差侍一人、遣御鏡於保榮私宅勤行之、別納所送祭物、象召支度、任其乞注之、　凡恒例臨時御祭祓等事、併爲別納所沙汰也、

本命祭

〔伊呂波字類抄〕（保諸社）本命祭（ホンメヤ）

〔延喜式〕（十六陰陽）御本命祭

神座廿五前

名香廿五兩、紙七百五十張、（作錢形二万五千文、絹形二百五十疋、馬形五十疋料、）筆一管、墨一廷、小刀一柄、布一端、（敷布料）脯廿五胸、酒醴各三斗、米三斗、蓮七枚、食薦十三枚、坏二百四盤五十口、折櫃八合、桶二口、杓五柄、中取二脚、松明卌把、炭五斗、缶二口、瓫二口、錢二貫文、淨衣六具、巾二條、（中宮准此）

右料物、前祭請内藏寮、毎年六度祭之、其中取年中一度請木工寮通用、

太一式祭

〔伊呂波字類抄〕（太諸社）太一式祭（タイチシキ、三日忌穢、以御鏡祭之、御精進、）

〔吾妻鏡〕（三十五）寛元二年五月卅日己巳、若君御前御祈等重被行之、〇中略是今年令當太一定分厄給、可被行厄御祈之由、助法印珍譽勸申也、

太陽祭

〔伊呂波字類抄〕（太諸社）大陽祭（一名日曜祭、以御鏡祭之、御精進、）

〔吾妻鏡〕（二十六）貞應三年（〇元仁元年）六月六日、炎旱渉旬、仍今日爲祈雨被行靈所七瀨御祓、〇中略日曜祭、

親職

太陰祭

〔伊呂波字類抄〕（太諸社）大陰祭（一名月曜祭）

〔左經記〕長元元年九月廿二日癸丑、廿七日行啓以前、於左衛門督家、可行土公御祭幷大散供之由、召仰守道朝臣、又仰可行月曜御祭之由、申云、月曜御祭廿四日可行也、土公幷大散供、廿七日行啓以前可行也者、則分給物等、紫又作龍等可打御在所之由仰守道了、

熒惑星祭

〔伊呂波字類抄 計 祭祀〕熒惑星祭 一名大曜祭、以御衣祭之、御精進、

〔吾妻鏡 二十六〕貞應三年〇元仁元年三月二十一日、依怪異等事、被行御祈、屬星、月曜、熒惑、百怪、玉宣泰山府君、七座、等御祭也、

太白星祭

〔吾妻鏡 三十二〕嘉禎四年〇暦仁元年十一月廿九日庚子、今晩太白星祭以下被行御祈等、

〔倭名類聚抄 二 神靈〕太白神 新撰陰陽書云、太白神、和名、比比止比未久利、

歳星祭

〔吾妻鏡 三十五〕寛元二年六月三日壬申、被行天變御祈等、前大納言家御分、〇中略歳星祭、文元、

水曜祭

〔吾妻鏡 二十六〕貞應三年〇元仁元年五月十八日、炎旱御祈、可被修何祭哉否事、於奥州方重有其沙汰、可爲五龍祭歟之由、隱岐入道行西雖申之、於此境未無勤行之例、上、天地災變、屬星、水曜等御祭可宜之旨、衆儀云云、

老人星祭

〔伊呂波字類抄 ラ 祭祀〕老人星祭 ラウジンシヤウ、以御衣祭之、御精進、三日忌、

〔扶桑略記 二十三 醍醐〕昌泰三年、是歳老人星見、武藏國強盜蜂起、

〔月令廣義 十五 八月〕秋分〇中略 祀老人星 漢舊儀、仲秋祀老人星于國南郊、

〔通俗編 十九 神鬼〕壽星 爾雅、壽星角亢也、注云、數起角亢、列宿之長、故云壽星、史記封禪書、杜亳有壽星祠、索隱云、壽星蓋南極老人星也、祠之以祈福壽、

計都星祭

〔吾妻鏡 二十九〕文暦二年〇嘉禎元年十二月廿七日

下體藥師像一尺六寸　羅睺星 忿怒形相像之靑牛、左右手持日月、　計都星 忿怒相像、以左手持日、右手持月、　御本命星藥師像

入夜被修計都星祭、文元朝臣奉仕之、

七十二星祭　〔吾妻鏡脫漏〕元仁二年〇嘉祿元年十二月十八日甲辰、宅鎭祭親職、石鎭晴茂、七十二星兩條國道、　厩鎭晴職等奉仕之、周防前司親實爲奉行云云、

西岳眞人祭　〔吾妻鏡三十一〕嘉禎二年八月三日丁亥、戌刻於新御所被行鎭御祈、〇中略西岳眞人鎭忠尚朝臣、

三萬六千神祭　〔猪隈關白記〕承元二年三月廿三日壬辰、依明年三合、余〇藤原家實祈之、明後日以陰陽頭宣平朝臣可有三萬六千神祭、自今日齋籠、今日送鏡於陰陽師許、職事仲國爲使、件仲國齋籠也、今明日物忌也、

〔吾妻鏡二十六〕貞應三年〇元仁元年七月十一日、爲國土安全、二品令行三萬六千神祭給、依連夜天變也、泰貞奉仕之、大膳亮廣仲爲御使、

〔壒嚢鈔二十一〕帛尸黎蜜多が譯せし佛說大灌頂神呪經を見侍りしが、鬼神の事をのみくだ〳〵しくいへり、是皆道士が餘風なりと覺へ侍る、其中一の聖を震旦へ遣す等の言、皆もろこしの人の言にして、天竺の說と僞る事也、我朝陰陽師の祭る三萬六千の神といふは、此經の說と見へたり、又金毗羅神五頭神等の名も見へ〇下略

〔康富記〕文安元年七月十二日己丑、武家彗星御祈事、是夜於從三位前宮內卿安倍有重卿私宅、三萬六千神祭在之、是去月廿三日以來、彗星出現之故也、室町殿御祈禱分也、天文博士有季朝臣、當時陰陽頭也、相共致其沙汰者哉、尙委可尋注之、

天地災變祭　〔吾妻鏡二十一〕建曆二年四月六日壬午、戌刻將軍家御病惱、而小御所東面於杜根花開、仍可行天地災變鬼氣等祭之由、相州令申給之、

〔吾妻鏡二十六〕貞應三年〇元仁元年六月十二日、辰刻前奧州義時病惱、日者御心神雖令違亂、又無殊事、而今度已及危急、仍招請陰陽師國道、知輔、親職、忠業、泰貞等也、有卜筮、不可有大事、戌刻可令屬減氣給之由、一同占申、然而始行御祈禱、天地災變祭二座、國道、忠業、三萬六千神祭、知輔、屬星祭國道、如法泰山府君祭、親職、此祭具物等、殊刷如法儀之上、十二種重寶、五種身代、馬牛男女裝束等也、悉有其沙汰、此外泰山府

者、天曹地府祭等歟、庶也、是任懇志之人、面々所令修也、但隨移時、彌危急云云、

〔吾妻鏡三十六〕寛元三年二月一日丙寅、客星見牽牛度、行度、二夜二丈也云云、今日有天變御祈沙汰、天地災變祭、泰貞、三萬六千神祭、晴賢、屬星祭、晴宣、等也、　七日壬申、大殿(賴經○藤原)幷將軍家(賴嗣○子)御參鶴岡宮、給御車也、今日變異御祈等被行之、(中略)此御祈等、各於里第修之、但天地災變祭者、奉爲大殿、自去五日、於御所被行、泰貞奉仕之、今夜於南庭納願云云、御使能登右近大夫仲時、奉行攝津守師員朝臣云云、

〔吾妻鏡五十〕文應二年(弘長元年)二月二日甲午、今年辛酉也、仍將軍家被行御祈等、天地災變宜賢朝臣、天曹地府宣俊朝臣、七座泰山府君晴秀、屬星晴茂、以下泰親、文元、靈所七瀨祭職宗、茂氏、重氏、晴向、親員、晴行、維行、和泉前司行方奉行之、

地震祭

〔吾妻鏡二十六〕貞應三年(元仁元年)六月六日、炎旱渉旬、仍今日爲祈雨、被行靈所七瀨御祓、(中略)此外地震祭、國道、

雷公祭

〔政事要略二十六年中行事〕新嘗大嘗名異實同事之由緣、(中略)又云、(寛平御遺誡)新嘗會、神今食、幷九月伊勢御幣使日、必可奉八省中院以行、其儀雷公祭、年來有穢、不關之、

〔禁秘御抄下〕祈雨(中略)雷公祭雖有驗、頗絶畢、能俊行請雨經法之時、咸儀師能算以咒意趣、招邊放赤雲云々、世人爲珍奇、

〔吾妻鏡二十九〕文曆二年(嘉禎元年)十二月廿二日、被行御祈等、(中略)雷神祭、相模權守俊定等奉仕之、

風伯祭

〔吾妻鏡二十八〕寛喜三年六月十五日戊戌、於由比浦鳥居前、被行風伯祭、前大膳亮泰貞朝臣奉仕之、祭文者法橋圓全奉仰草之、是於關東無其例、自去月中旬比南風頻吹、日夜不休止、爲被御祈、武州令申行給之、

〔吾妻鏡四十六〕建長八年〈○康元元年〉七月廿六日甲寅、度々變異等事、可被行御祈禱旨可計之由、爲和泉前司行方、清左衛門尉滿定等奉行、被仰諸道、仍陰陽師等群參、前陰陽權大允晴茂朝臣、可被行雷公祭由申之、天文博士爲親朝臣申云、此條、公家之外不聞被行之例、去寛喜三年、依前武州〈○北條泰時〉禪室之仰、亡父泰貞行風伯祭、翌日風休止、任其例可被行、此祭歟云云、晴茂朝臣重申云、如諸國受領行之例、進覽親職自筆狀、行方披露之處、難被決踈之間、被問右京權大夫茂範朝臣、參河守教隆等、茂範朝臣申云、去寛喜三年被與行彼祭之時、被尋安賀兩家之處、安家者不覺悟之由申之、陰陽頭賀茂在親朝臣以後、晴憲朝臣勤仕之例奉仕之、其外例不存知之云云、教隆異人申云、凡人勤仕之例、更以無所見云云、依之不可被行之由被定之云云、

北斗祭

〔吾妻鏡四十四〕建長六年四月四日丙午、亥剋依殊御願被行天地災變祭、爲親朝臣奉仕之、御使安藝右近大夫重親、文章前大内記茂範朝臣、清書殿慧法印也、甚雨日被行祭事不可然之由、雖有令申之輩、當院御在位之時、寛元三年三月、北遊御祭良光朝臣奉仕之日、雖甚雨有沙汰被遂行之云云、

四角四境祭

〔吾妻鏡二十九〕文暦二年〈○嘉禎元年〉十二月廿日、爲御不例御祈、〈○中略〉及黄昏被行四角四境祭、御所艮角、〈陰陽大允晴茂〉巽角、〈圖書助晴秀〉坤角、〈左京權亮經昌〉乾角、〈雅樂助淸貞〉小袋坂〈雅樂大夫泰房〉小壺、〈近江大夫親貞〉六浦、〈陰陽小允以平〉固瀨河、〈縫殿助久方〉

〔公事根源六月〕道饗祭　同日〈○三十日〉

是は疫神の祭なり、毎年に必行はるべき事也、近頃は絶て侍にや、是も卜部の人、京城の四角の路にて、鬼魅の他方よりきたるを京路に入ざらしめん爲に、路上に供物をそなへてまつる也、儀火、道饗の祭をば、四角四境の祭とも申也、

〔吾妻鏡三十五〕寛元二年五月廿六日乙丑、乙若君御前御不例事、未及御減、仍爲參河前司教隆奉行召陰陽師等、可有護身否被尋問之、〈○中略〉入夜爲被御祈被行鬼氣祭、七座、並四方四角等祭、於郭外被行之云云、

五龍祭

〔時信朝臣記〕大治五年七月、被行五龍祭、臨期俞云、庚午八年六月十五日、被行請雨經法、〈成就御願〉同十九日被行五龍祭、道平朝臣奉仕之、〈中略〉神泉苑五龍祭祭文支度等進上先了、其外假屋二宇、〈幄、東〉五間一宇、〈舞、西〉三間一宇、〈雜舍〉修理職造之、鋪設裝束諸司勤之、尉如例、

土公祭

〔伊呂波字類抄〕〈太土〉大土公祭

〔運歩色葉集〕土公〈春三月在竈、夏三月在門、秋三月在井、冬三月在庭、〉

〔吾妻鏡二十〕建暦二年四月十八日癸卯、爲將軍家御願、大倉鄕卜一勝地、令經始一寺給、〈中略〉於此所被行水神、井、七座、土公祭、播三處人奉行之、

〔吾妻鏡二十六〕貞應二年三月三日、勝長壽院奧地、今日被行土公祭、是爲二品御願、可被立御堂之故也、

〔吾妻鏡四十七〕康元二年〈○正嘉元年〉九月十八日己巳、勝長壽院造營事始、〈中略〉戌刻於勝長壽院、行大土公祭、〈御使、引付、一〉晴茂朝臣奉行之、

天曹地府祭

〔伊呂波字類抄〕〈天雜社〉天曹地府祭〈一名六道冥官祭、御一代一度并御慎之、以上〉

〔吾妻鏡一〕治承四年八月十六日丙申、爲明日合戰無爲、被始行御祈禱、住吉小大夫昌長奉仕天曹地府祭、武衛〈○源賴朝〉自取御鏡、授昌長給云云、

〔玉海〕建久二年十月十五日庚寅、此日於大原野一日讀大般若經、導師信運已講、天曹地府祭、〈陰陽博士〉〈野字〉此日不空羂索御讀經結願也、

〔吾妻鏡四十六〕建長八年〈○康元元年〉九月三日庚寅、又有御祈禱御祈等、松殿法印良基、左大臣法印嚴惠、各修藥師護摩七座泰山府君、宜賢爲親、晴長、廣資以平、晴憲、晴宗、此外被行七座靈所祓、天曹地府、御當年星、呪咀等祭、

〔看聞日記〕永享八年十二月十九日、歲末御祈、天曹地府御祭、自十五日勤仕之由申、御撫物〈鏡〉遣公方、

泰山府君祭

御意不快之間、雖不許容、御祈押而申間、密々仰祭料等遣了、

〔台記〕久壽二年四月四日庚辰、入夜高陽院〈○藤原泰子〉藏人通定來曰、依御惱今夜被修冥道供、可令可然之儒者作獻祭文者、申可取御願趣之由、被仰曰、今年重厄、〈○泰子嘉保二年生、今年當六十一歲、〉而不食及七十日、非無所畏、所願者增長壽命、久修善根者、卽仰大內記遠明令作獻之、

〔伊呂波字類抄 太 諸社〕泰山府君祭〈一名七獻上章祭內〉

〔下學集 上 天地〕太山府君〈タイサンフクン 本地地藏菩薩也、在天云輔星、在地曰太山府君、〉

〔貞丈雜記 十六 神佛〕一泰山府君は、陰陽師の方にて祭る神也、〈日本ノ神ニハアラズ〉

〔梅花無盡藏 四〕福祿壽贊

在彼蒼則稱太山府君、出厚地則名福祿壽星、趙宋聖明之時現形、命畫工圖其體矣、吁偉哉、以二十八言賦之云、

一星千百億分身　弧樸頭長髮帶春　壽命經脩杜羅是　倘添福祿祝塵々

〔朝野群載 三 文筆〕謹上　泰山府君

日本國從四位上行右中辨兼備中介藤原朝臣顯隆〈年四十五〉

本命庚戌　行年庚戌

右某謹啓泰山府君冥道諸神等、夫信至高者、天神憐之、愼至深者、地祇護之、某官帶右司郞中、位昇大中大夫、是則跼天蹐地、仰神敬祇之故也、重祈冥應、更備淸奠、聊薦黍稷之味、以望明德之馨、伏乞加級如思、昇進任意、踏蘭臺而舉秋月、步槐路而棲靑雲、彼趙氏之延算、誠是天應、此魯性之祈思、盍成地望、息災延命、一家有福、謹啓、

永久二年〈○甲午〉十一月廿三日　從四位上行右中辨藤原朝臣

〔本朝續文粹 十一 都狀〕謹上泰山府君都狀

南閻浮洲正二位行權大納言兼陸奧出羽按察使藤原朝臣實行
獻上冥道諸神一十二座　銀錢一百四十貫文　白絹一百二十疋　鞍馬一十二疋　勇奴三十
六人
右實行伏惟丞相者、寅亮天地、燮理陰陽、誠是賢能之所任、敢非愚庸之可居、本朝異域之例、戚里外家之人、超上臈所拜任也、就中内大臣職者、鎌足大織冠〈○藤原鎌足〉遐深圖而全邦國、運上策而安社稷、初授此職、永貽其例、自爾以後、贈太政大臣高藤公、昌泰三年任内大臣、依爲帝之外祖父也、次忠義公〈○兼通〉天祿三年不經大納言、自中納言任内大臣、次關白道隆公、永延三年任内大臣、次關白道兼公、正暦二年任内大臣、此三人者帝之外舅后之連枝也、次先祖仁義公〈○公季〉長德三年任内大臣、又是帝之外戚也、其後任此職之者、受渭陽之餘流、超數輩之上臈、其中故太政大臣雅實公、超任公位階上臈大納言師忠卿、任内大臣、偏是外戚之故也、愛〈マヽ〉才行兼疎、勤實懸闕、今上陛下〈○崇德〉之外舅、太上天皇〈○鳥羽〉之觀感國母〈○待賢門院藤原璋子〉仙院舍兄、於天下不驗者歟、況驚禁鐘而請鳳闕、咫尺天顏、聞衞鼓而趁鸞臺、鎭承朝務、幾姑射之春華、唯資龍樓之及家國、愛母門之秋月、更仰慈光之照戶牖、方今有右大臣、有其闕、者有轉任事者、可任内大臣也、既謂左戚之老、勞當内相之仁、縱云愚昧、偏憑神明、又祖父贈太政大臣〈○實季〉只以觀舅之寄、多超宿老之人、任中納言、轉大納言、優其舊規、盍浴新化、夫泰山府君者、冠五嶽之首、觀三公之職、知壽命之脩短、掌祿位之通塞、是以虔貢金幣銀錢花酒奴馬、莫敬獻天子五道泰山府君命祿之神、伏乞尊神、必垂歆享、東方之長也、宜追東閭之玄蹤、天帝之孫也、盍闚天官之淸撰、重請益算延年、轉禍爲福、尙饗、

日本國保延四年三月日正二位權大納言兼陸奧出羽按察使藤原朝臣實行謹狀

○按ズルニ、藤原賴長ノ泰山府君祭都狀ハ、易占篇數習條ニ收ムル所ノ台記ニモ見エタリ、

〔古事談〕〈二臣節〉勘解由長官有國、當初父輔道豐前守之時、相具テ下向之間、又俄病惱、忽逝去、于時有國、

泰山府君祭ヲ如説勤行、輔道經數剋蘇生語云、予雖參炎魔廳、依備美麗之饗膳、可被返遣之由有其定、爰或冥官一人申云、雖被返遣輔道、於有國者早可被召也、其故者、非其道者勤行祭、非無罪科云々、又在座之人申云、有國不可有罪科、無道人遠國之境ニテ、不耐孝養之情、勤行之輩更不可處罪科云云、仍冥官併同之、依之無爲所被返遣也云々、○又見續世繼

〔今昔物語十九〕代師入太山府君祭都狀僧語第廿四

今昔□ト云フ人有ケリ、□ノ僧也、止事无キ人ニテ有ツレバ、公ケ私ニ被貴テ有ケル間、身ニ重キ病ヲ受テ悩ミ煩ケルニ、已員積テ病重ク成ヌレバ、止事无キ弟子共有テ、歎キ悲テ、旁々祈禱スト云ヘドモ、更ニ其驗无シ、而ル間、安倍晴明ト云フ陰陽師有ケリ、道ニ付テハ止事无カリケル者也、然レバ公ケ私此ヲ用タリケル、而ルニ其ノ晴明ヲ呼テ、太山府君ノ祭ト云フ事ヲ令、此ノ病ヲ助テ、命ヲ存ムト爲ルニ、晴明來テ云フ、此病ヲ占フニ、極テ重クシテ、譬ヒ太山府君ニ祈禱スト云ヘドモ、難叶カリナム、但シ此ノ病者ノ御代ニ、一人ノ僧ヲ出シ給ヘ、然バ其ノ人ノ名ヲ、祭ノ都狀ニ註シテ、申代ヘ試ミム、不然バ更ニ力不及ヌ事也ト、弟子共モ此レヲ聞テ、我師ニ代テ、忽ニ命ヲ棄ムト思フ者一人モ无シ、只命ヲ全クシテ師ノ命ヲ助ケムトコソ思ヘ、亦師失ナバ房ヲモ取リ、財ヲモ得、法文ヲモ傳ムトコソ思、代ラムト思フ心ノ露无カラムモ理ハリナレバ、互ニ顔ヲ守テ、云フ事モ无クシテ、居並タルニ、年來其ノ事トモ无クテ、相ヒ副ル弟子有リ、師モ此レヲ懃ニモ不思ネバ、身貧クシテ壺屋ニ住テ有ル者有リケリ、此ノ事ヲ聞テ云ク、己レ年既ニ半バニ過ヌ、生タラム事、今幾ニ非ズ、亦身貧クシテ、此ヨリ後善根ヲ修セムニ不堪ズ、然レバ同ク死タラム事ヲ、今師ニ替テ死ナムト思フ也、速ニ己ヲ彼ノ祭ノ都狀ニ注セト、他ノ弟子共此ヲ聞テ、難有キ者ノ心也ト思テ、我身コソ代ラムト不云ネドモ、彼ガ代ラムト云コソ聞ハ哀ナリケレ、泣ク者モ多カリ、晴明此レヲ聞テ、祭ノ都狀ニ其ノ僧ノ名ヲ注シテ、丁寧ニ此レヲ祭ル、師モ此ヲ聞テ、此ノ僧

ノ心此計可有シトハ、年來不思ザリツト云テ泣ク、既ニ祭畢テ後、師ノ病頗ル減氣有テ、祭ノ驗有ニ似タリ、然レバ代ノ僧ハ必ズ死トスレバ、可棄キ所ナド沙汰シ取セタリケレバ、僧聊ナル物具ナムド結タル、可云キ事ナド云ヒ置テ、死ナムズル所ニ行テ、獨リ居テ念佛唱ヘテ居タリ、終夜傍ノ人聞クドモ、怠ニ死ヌトモ不聞ヌニ、既ニ夜曉ヌ、僧ハ死ヌラムト思フニ、僧未ダ不死、師ハ既ニ病愈ヌレバ、僧今日ナド死ナムズルニヤト思ヒ合スル程ニ、朝ニ晴明來テ云ク、師今ハ恐レ不可給ズ、亦代ラムト云シ僧モ不可恐ズ、共ニ命ヲ存スル事ヲ得タリト云テ返ヌ、師モ弟子モ、此ヲ聞キ喜ダ泣タル事无限シ、此ヲ思フニ、僧ノ師ニ代ラムト爲ルヲ、冥道モ哀ミ給テ、共ニ命ヲ存シヌル也ケリ、貴人此事ヲ聞テ、僧ヲナム讃メ貴ビケリ、其後師此僧ヲ哀テ事ニ觸テ、止事无キ弟子共ヨリモ重クシテ有ケル、現ニ理也、實ニ難有キ弟子ノ心也、

〔源平盛衰記二〕清盛息女ノ事

抑此成範卿トハ、故少納言入道信西三男也、櫻町中納言ト申事ハ、優ニ情深キ人ニテ、吉野山ヲ思出シテ櫻ヲ愛シ給ヒケリ、室ノ八嶋ヨリ歸上後、町ノ四方ニ吉野ノ櫻ヲ移植、其中ニ屋ヲ立テ住給ケレバ、見人此町ヲバ樋口町ノ櫻町ト申ケリ、又ハ此ノ中納言、櫻ノ名殘ヲ惜テ、立行春ヲ悲ミ、又コン春ヲ待ワビ給シカバ、異名ニ櫻町中納言トモイヘリ、殊ニ執シ思ハレケル櫻アリ、七日ニ咲散ル事ヲ歎テ、春ゴトニ、花ノ命ヲ惜テ、泰山府君ヲ祭ラレケル上ヘ、天照大神ニ祈申サセ給ケレバ、三七日ノ齡ヲ延タリケリ、サレバ角ゾ思ツヾケ給ヒケル、

千早振現人神ノカミタレバ花モ齡ハノビニケルカナ

ト人ノ所實アリケレバ、神ノ靈驗アラタニシテ、七日中ニ咲散花ナレ共、三七日マデ遺アリ、君モ御感有テ、花ノ本ニハ此ノ人ヲゾスベキトテ、勅書ニ櫻町ノ中納言トゾ仰ケル、

〔吾妻鏡二十三〕建保五年八月廿五日庚午、山城廷尉自京都歸參、院〇後鳥羽御惱事、自七月十日連日御

瘧病也、有智高僧面々雖勵修驗、無御減之儀、而同廿五日、前陰陽博士道昌於赤山修泰山府君祭、

十一月八日壬午、陸奥守廣元朝臣不例、目所勞、腫物等計會、今日行七座如法泰山府君祭云云、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿二年十一月廿六日丁丑、自今月次泰山府君祭可被行云云、　三年〇安貞元年十一月廿三日戊戌、將軍家赤班〇瘡下恐脫瘡字出現給、仍今日、重而無爲之御祈等被行也、神馬被奉鶴岡宮、又於御所七座泰山府君祭被行之、晴賢、泰貞、重宗、文元、宣賢、親貞、道繼等奉仕之、凡自去月下旬之頃、赤班瘡流布、貴賤不免、上下皆令煩之、京都同前云云、今月八日主上有御惱云云、

〔花園院御記〕正和三年四月二十四日丁未、今日在弘朝臣始修百日泰山府君祭、

〔薩戒記〕應永卅二年七月廿六日癸亥、第二度奏聞云、

大山府君、招魂祭、共以可被行也、陰陽師可隨勘定之由、入道殿申、又御修法阿闍梨事、彼准后爲御加持、只今可參內、相待候處參入候也者、

仰云、陰陽師於大山府君者、可仰在方三位、於招魂祭者、可仰陰陽頭有重朝臣者、

又仰云、爲御惱御祈、可被獻願書於宗廟神之由、有禪門命、仍可有其沙汰、雖可被仰職事、且引勘先例可被申者、

次奏曰、陰陽師可仰兩人之由畏承了、又御願書事、可勘申先例之由謹承了、可令存知、但御願書事如何、只可爲宣命歟、又早々可被仰定職事歟、

〔看聞日記〕嘉吉元年四月廿二日、入江殿御祈、小泰山府君祭事、土御門三位有重卿ニ相尋、則參委細申、如法ハ大儀也、小泰山府君ハ法令不定、千疋五百疋三百疋にても、七ヶ日行也、公方參千疋にて四季ニ被行云々、可隨御意之由申、伍百疋之分にて可行之由令申領狀、御撫物小袖御主御服可給之由申、自明日可執行云々、委細事重可注進之由申入江殿、　廿三日、自今夕泰山府君始行、祭料五百疋、御撫物鏡御服一被出、又小手箱一蒔繪御服一爲祭被出、

〔康富記〕嘉吉二年十月十九日丙午、昨日(十八日)於賀茂在方卿私宅被祭、泰山府君、御不豫御祈禱也、供料三千疋被下云々、

〔成氏年中行事(五月)〕一同月中被撰吉日、泰山府君祭有之、御代官御一家中、陰陽頭出仕之時、御代官ハ立烏帽子淨衣ニテ被參御所、奉行子息參御劍、御服物ト、御弓征矢、御具足、鏡、御硯、文臺、金銅被出之、陰陽頭被官人御中門縁ニテ事請取、御秘藏ノ御馬御鞍置被出之、同列副合二匹、

〔大乘院寺社雜事記〕寬正四年七月二十六日、大上様御違例之間、東北院僧正上洛了、　二十八日、於高倉殿、泰山府君祭在之、陰陽師方下行百貫文云々、其外重寶濟々被出之、御違例不可有殊儀歟云々、

拜謝祭　大鎮祭

〔吾妻鏡(三十)〕文暦二年(○嘉禎元年)六月廿八日己丑、今夜於新造精舍、被行拜謝祭等、大鎮、(親職朝臣)

井靈祭

〔親長卿記〕文明十一年七月十八日、予今朝申云、先井靈御祭可然歟、其謂此間此亭井、凡人用之、可被淸歟、然者井靈祭可然、可仰陰陽頭歟、火災怪異御祭可然歟、其□可被合有宣三位之由申入了、次仰云、風呂事、先夜火事之時、壹一條家門云々、若無置所者、渡土御門殿可置紫宸殿內歟、予申云、還幸事有其沙汰、傳奏治定候者、御修理事最前可有沙汰、然者先不可被移他所歟、

〔吾妻鏡(脫漏)〕元仁二年(○嘉祿元年)十二月十七日癸卯、入夜於新御所御祭被爲行、所謂大歲八神祭、晴賢(○中略)井靈、信賢、(○下略)

水神祭

〔吾妻鏡(二十)〕建曆二年四月十八日癸卯、爲將軍家御願、大倉鄕ト一勝地、令經始一寺給、(○中略)於此所被行水神并七座土公祭、橘三歲人奉行之、

火災祭

〔公事根源(正月)〕火災御祭

これも月ごとの事也、陰陽師是を申おこなふ、火事をふせて、功能あるよし、董仲舒が祭書といふ物に見えたり、

〔吾妻鏡(脫漏)〕元仁二年(○嘉祿元年)十二月十七日癸卯、入夜於新御所御祭被爲行、所謂(○中略)防解火災、泰

王相祭

代厄祭
代病身祭

大藏八神祭
大將軍祭

鬼氣祭

貞云云、

〔伊呂波字類抄 和 諸社〕王相祭

〔玉海〕治承五年〇養和元年十月二十一日甲子、今曉有吉夢、今夜新御所御祈、陰陽助濟憲朝臣、令修王相祭、依吉日也、〇中略 但女房今日滅了、

〔吾妻鏡 三十〕文暦二年〇嘉禎元年六月廿八日己丑、今夜於新造精舍被行拜謝祭等、〇中略 王相、廣賴

〔實久卿記〕天保十年十月十九日辛巳、巳剋參院、今日止止齋、御建物場所王相ニ相當、依之今日王相祭、陰陽權助保源勤修了、申剋退出、

〔伊呂波字類抄 太 諸社〕代厄祭タイヤク、以御衣祭之、　代病身祭タイヒヤウシムノマツリ

〔公事根源 正月〕代厄御祭

是も月ごとにおこなはる、または厭母の法とも申にや、これもおなじき〇董仲舒祭書にのせたり、

〔知信朝臣記〕天承二年〇長承元年七月廿九日、晦御祓招魂御祭、秋季代厄御祭等被行之、

〔吾妻鏡 三十五〕寬元二年五月卅日己巳、若君御前御祈等重被行之、廣資奉仕代厄祭、

〔吾妻鏡脱漏〕元仁二年〇嘉祿元年十二月十七日癸卯、入夜於新御所御祭被爲行、所謂大藏八神祭晴賢、謝土公有道、井靈信賢、大將軍晴幸、王相文元、防解火災泰貞云云、

〔朝野群載 十五 陰陽道〕陰陽寮

進供奉宮城四角巽方鬼氣御祭勅使已下歷名事

勅使粟田憲景　祝頭賀茂朝臣成平　奉禮少屬伴知宗　祭郎陰陽師大中臣爲兼　陰陽得業生清原親光　陰陽生高階季保

右今日戊時、供祭歷名注進如件、

長治二年二月廿二日　祝　從五位上行頭兼陰陽博士賀茂朝臣成平

勅使　正六位上粟田朝臣憲景

〔玉海〕治承五年二月七日甲申、午刻典藥頭和氣定成參上、依召也、令見姫君御病身、聊赤小瘡出故也、所勞之體疔氣相交、但不及殊大事歟云々、今夜漏刻博士憲成修土公、鬼氣祭、

〔吾妻鏡二十〕建暦二年四月六日壬午、將軍家御病惱、而小御所東面於杜若花開、仍可行天地災變、鬼氣等祭之由、相州令申給之、

〔吾妻鏡四十二〕建長四年八月六日戊午、被行御出之處、御惱之間延引、仍被行御祈禱、泰山府君晴茂、鬼氣爲親、靈所七瀨晴元、文元、晴長、晴秀、以平、國高、重氏、土公、晴秀等云云、

靈氣道斷祭

〔吾妻鏡二十九〕文暦二年嘉禎元年十二月廿二日、被行御祈等、○中略靈氣道斷祭、陰陽助忠尚、

〔續史愚抄後桃園〕安永八年十月二十八日戊寅、御惱危急、陰陽頭泰榮、奉仕靈氣道斷祭於私館、今夜有諒闇哭尊、崩御

解逐呪詛祭

〔伊呂波字類抄計諸社〕解逐呪詛祭以上御祭之、

〔枕草子三〕心ゆくもの○中略

ものよくいふをんやうじして、河原に出て、すそのはらへしたる、

〔枕草子春曙抄三〕すそのはらへ　呪詛の祓にや、人に職神をよせられて、のろはれたる事の、災難なきやうにと、解除するも、中臣祓を呪詛惡散疾病消除の祓と、卜部の家に用る類なるべし、

〔小右記〕萬壽四年十二月二日戊辰、聊有夢想、見咀呪氣、仍以恒盛令解除、

〔吾妻鏡三十三〕暦仁二年延應元年○十月十七日癸丑、爲二棟御方御產平安御祈、被行七座呪咀祭、維範、親職、資宣、晴貞、晴平、廣資、範定等奉仕之、

百怪祭

〔吾妻鏡三十六〕寛元三年二月廿一日丙戌、重御祈、泰貞奉仕呪咀祭云云、

〔伊呂波字類抄比諸社〕百怪祭已上見延喜式、

〔玉海〕治承四年五月四日乙卯、同剋〈〇亥剋〉陰陽大允安倍泰茂來、行百怪祭、〈於南庭行之〉此次去二十九日飄風事持占文、依爲希代事、續加之、兵有敗之占、尤有恐事歟、

〔吾妻鏡二十一〕建暦三年〈〇建保元年〉八月廿八日丙申、去廿二日鶴岳奇異事、爲兵革兆之由、依有申入之輩、被行御占之處、可有御愼之旨、勘申之間、於八幡宮被行百怪祭、〈奉行遠江守親廣〉

〔親長卿記〕文明九年九月廿日、自今日被行百怪祭、有宣三位勤行、元長奉行也、御撫物直可申出之由仰了、

招魂續魄祭

〔吾妻鏡二十一〕建暦三年〈〇建保元年〉八月十八日丙戌、子剋將軍家出御南面、于時燈消人定、悄然無音、只月色蛬思傷心計也、〈〇中略〉及丑剋、如夢而青女一人奔融前庭、頻雖令問之給、遂以不名謁、漸至門外之程、俄有光物、頗如松明、以宿直者召陰陽少允親職、〈親職〉倒衣奔參、直被仰事次第、仍勘申云、非殊變云云、然而南庭被行招魂祭、

〔吾妻鏡二十七〕安貞二年六月廿三日、將軍家百日招魂祭、御撫物鼠食損之云云、

〔續史愚抄後桃園〕安永八年十月十八日戊辰、爲御惱御祈、自今日七箇日、陰陽頭泰榮、奉仕招魂續魄祭於私館、〈異神〉

宅鎭祭　厭鎭祭　石鎭祭

〔伊呂波字類抄太諸社〕宅鎭(タクチン)祭〈加西嶽眞人率二星鎭〉

〔相宅要說〕起居工匠魘鎭解法

臞仙曰、凡梓人造房、瓦人覆瓦、石人甃砌、五墨繪彩、皆有魘鎭呪詛、其建造之初、必先祭吉方隅土木等神、其祭文曰、玆者建造屋宇、其木泥石繪畫之人、所有魘鎭呪詛、不出百日、乃使自受其殃、預先盟於群靈、則災禍無于於我、使彼自受、而我家宅事矣、造船者亦如此例、梓人最忌倒用木植、必取生氣根下而稍上、其魘者倒用之、使人家不能長進、作事顚倒解法、以斧頭擊其木曰、倒好倒好、住此宅內、世々温飽、

〔三代實錄 清和 三十〕元慶元年二月廿九日辛未、是日申時、天皇遷自東宮御仁壽殿、童女四人、一人秉燎火、一人齎壹斝、二人牽黃牛二頭、在御輿前、用陰陽家鎭新居之法也、

〔玉海〕建久二年二月十七日丙申、今日於淸涼殿幷藤壺可修仁王講之由仰之、又可行宅鎭祭之由同仰之、是大內靈狐亂入之由有夢告之故也、然而於鎭宅祭者、臨行幸之期可行之由仰之、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿元年十二月九日乙未、武州(泰時北條)令參新御所給、御移徙以前、可有御祭等哉否、及御沙汰、大監物光行、入道殿內左衞門尉景房、幷陰陽道朝臣、親職依召參上、監光行、入道景房、件祭之事、强不及被行之由、內々依申入、爲被決也、則武州直令問子細於陰陽道給、被朝臣申云、件兩人者有職也、宮遷事、各別也、不可知、且細賦、自皇居至臣下家、移徙之時、行祭之條定例也、且華山院往昔以來、無同議御者、被祭行故也、近衞京極殿御移徙之時被行云云、親職申云、故左府御移徙之時被行訖、故右府將軍(實朝二品)御時、賦鎭之外悉被行之云云、仍可被行之由云云、　十八日甲辰、宅鎭祭親職、石鎭晴茂、七十二星祭國道、賦鎭晴職等奉仕之、周防前司親實爲奉行云云、

〔實久卿記〕天保十年十月二十日壬午、巳終刻參院、今日止止齋御建物場所地鎭祭也、陰陽權助保源勤修了、申刻退出、

白鷺祭

〔吾妻鏡 二十七〕寬喜二年六月五日、巳刻幕府小御所之上白鷺集云云、　七日、今夜被行鷺祭、晴賢奉仕之、

〔吾妻鏡 五十一〕弘長三年五月十七日丙申、鷺集于左典厩御亭、頃之指永福寺山飛去、被卜筮之處、文元、晴茂、晴宗、泰房、賴房等、爲口舌兆之由占申、爰武田七郎次郎、追彼鷺射殺之持參、入夜依鷺怪被行泰山府君、百怪、白鷺等祭云云、

七瀨祓

〔公事根源 正月〕七瀨御祓

是は每月の事也、七瀨とは、川合一條、土御門、近衞、中御門、大炊御門、二條のする、これを七瀨とは申

也、陰陽師人形を奉る、主上御いきをかけ、御身をなでゝ返し給へば、殿上の侍臣、この所々の河原にむかふ、かへりまゐれば主上御撫物をめすまねせらる、その外さしたる事なし、後冷泉院の御時は、隔月に霊所七瀬の御祓をおこなはる、その所々は、耳敏川、河合、東瀧、松崎、石影、西瀧、大井川などゝ也、

〔吾妻鏡二十六〕貞應三年元仁元年六月六日、炎旱渉旬、仍今日爲祈雨被行霊所七瀬御祓、由比濱國道朝臣、金洗澤池知輔朝臣、固瀬河親職、六連忠業、柚河泰貞、杜戸有道、江嶋龍穴信賢、此御祓關東今度始也、

河臨祓

〔吾妻鏡三十一〕嘉禎二年八月五日己丑、匠作武州被參於新造評定所、有評議始、其衆皆參、但出羽前司家長依所勞不參、先被定之、御勤仕之輩云云、仍有御祈始、曆博士定昌奉仕河臨祓、御移徙之後、三箇日被始御祈之條、先例不覺悟之由、内々雖有傾申之族、無御許容、

○按ズルニ、七瀬祓、河臨祓等ノ如キ、此他尚ホ陰陽師ノ修スルモノ甚ダ多シ、神祇部雜祭篇、及ビ祓禊篇等ニモ散見セレバ、宜シク參看スベシ、

呪禁

〔伊呂波字類抄止人事〕呪咀トコフ　〔同能人事〕詛ノロフ 呪也、

〔尚書註疏十六無逸〕民否則厥心違怨、否則厥口詛祝、傳、以君變亂正法、故民否則其心違怨、否則其口詛祝、言皆患其上、詛側助反、祝之又反、疏（中略）正義曰、（中略）以言告神謂之祝、請神加殃謂之詛、

〔源氏物語七紅葉の賀〕二月の十日あまりの程に、おとこみこ生れ給ぬれば、名殘なく、内にも宮人もよろこび聞え給、命ながくもとおもほすは、心うけれど、弘徽殿などの、うけはしげにの給ふときしを、むなしくきゝなし給はましかば、人わらはれにやと覺しつよりてなん、やう〳〵すこしづゝさはやい給ひける、

〔河海抄四紅葉賀〕うけはしげにのたまふ　呪咀

〔律疏 名例〕八虐 ○中略

七曰不孝、謂告言詛詈祖父母父母、本條直云、詛詈祖父母父母、此注兼云告言、文雖不同、其義一也、詛猶呪也、詈罵也、依本條、祖父母父母、欲令死及疾苦者、皆以謀殺論、自當惡逆、[illegible]入此條、依賊盗律、子孫於祖父母父母、求愛媚、而厭呪者、徒二年、然厭呪雖同、文理乃別、[illegible]凡人、則入不道、若呪詛者、不入八虐、例云、其應入惡逆者、則從[illegible]、以明[illegible]呪詛是輕、當入不睦、亦入此條、[illegible]

〔律疏 賊盗〕凡造畜蠱毒、謂造合成蠱、堪害人者、及教令者絞、造謂自造、畜謂[illegible]、堪以毒害於人、及教令人造合、被[illegible]、若[illegible]造畜者同居家口、雖不知情者遠流、謂所造及畜者、同居家口、不限籍之同異、雖不知情、皆從遠流、若里長坊令坊長亦同、知而不糺者徒三年、[illegible]造畜者雖會赦、幷同居家口及教令人亦遠流、[illegible]八十以上、十歲以下、及篤疾、無家口同流者放免、[illegible]即以蠱毒毒同居者、被毒之人、[illegible]人父母妻妾子孫、不知造蠱情者不坐、[illegible]

凡有所憎惡、而造厭魅、及造符書呪詛、欲以殺人者、各以謀殺論減二等、謂有所憎惡、前人而造厭魅、[illegible]以故致死者、各依本殺法、[illegible]欲以疾苦人者、又減二等、[illegible]即於祖父母父母及主、直求愛媚、而厭呪者徒二年、[illegible]若涉乘輿者皆絞、[illegible]

〔續日本紀 十 聖武〕天平元年四月癸亥、勅、內外文武百官、及天下百姓、有學習異端、蓄積幻術、厭魅呪咀、害

僞百物者、首斬從流、如有停住山林、詐道佛法、自作敎他、傳習授業、封印書符、合藥造毒、萬方作恠、違犯勅禁者、罪亦如此、其妖訛書者、勅出以後五十日內首訖、若有限內不首、後被糺告者、不問首從、皆咸配流、其糺告人賞絹三十疋、便徵罪家、

〔日本書紀二十一用明〕二年四月丙子、中臣勝海連於家集衆、隨助大連、遂作太子彥人皇子像與竹田皇子像厭之、俄而知事難濟、歸附彥人皇子水派宮、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲三年五月丙申、縣犬養姉女等坐巫蠱配流、詔曰、現神止大八州國所知倭根子天皇大命乎、親王王臣百官人等天下公民衆聞食止宣久、犬部姉女乎波內都奴止爲氐、冠位擧給比、根可婆禰改給比治給伎、然流物乎、反天逆心乎抱藏氐、己爲首氐、忍坂女王、石田女王等乎率氐、掛畏先朝乃依過氐棄給之氐、厨眞人厨女許爾、竊往作岐多奈久惡奴止母止相結氐謀家良久、傾奉朝庭、亂國家氐、岐良比給之氐水上鹽燒我兒志計志麻呂乎、天日嗣止爲牟止謀氐、掛畏天皇大御髮乎盜給波利氐、岐多奈伎佐保川乃髑髏爾入氐、大宮內爾持參入來氐厭魅爲流止己三度世利、然母盧舍那如來最勝王經觀世音菩薩護法善神梵王帝釋四天王乃、不可思議威神力、桂畏開闢已來御宇天皇御靈、天地乃神多知乃護助奉都流力爾依氐、其等我穢久謀氐爲留厭魅事、皆悉發覺奴、是以檢法爾、皆當死刑罪、由之氐、理波法末爾末爾岐良比給倍久在利、然止毛慈賜比爲氐、一等降氐、其等我根可婆禰替氐、遠流罪爾治賜止布宣布、天皇大命乎衆聞食止宣、

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜三年三月癸未、皇后井上內親王坐巫蠱廢、　四年十月辛酉、初井上內親王坐巫蠱廢、後復厭魅難波內親王、是日詔幽內親王及他戶王于大和國宇智郡沒官之宅、

〔續日本紀三十七桓武〕延曆元年三月戊申、從四位下三方王、正五位下山上朝臣船主、正五位上弓削女王等三人、坐同謀厭魅乘輿、詔減死一等、三方弓削並配日向國、弓削三方之妻也船主配隱岐國、自餘與黨亦據法處之、

〔扶桑略記 二十七 裏書〕永觀二年六月二十九日戊申、安樂寺託宣、辰時以禰宜藤原長子託宣曰、〇中略昔依讒言放我之日、大臣時平卿、光卿、納言定國卿、菅根朝臣等、僞稱勅宣、召陰陽寮官人、充給種々珍寶、令呪咀我并子孫永絶、不可相續之由、祭祀多途、日月、星辰、八方占山野、厭術埋置雜寶、然而我不可絶之術、隨分相構、被指姓名之人、皆以短命、又次々孫々不高官位、家貧才乏、是依厭術也、朝家之政豈可然乎、故高視淳茂朝臣等切々祈念云、子々孫々家業不斷云々、

〔古事談 六 亭宅諸道〕京極大殿〇藤原師實御時、被大内春宮町令造給伊豫守藤原仲實朝臣造之之後、于今不燒之處也、寢殿上長押有七星之錦云々、又吉平朝臣符之故云々、故左府之時修理之間、自天井上被取出種々厭物多分小人形也、被見吉平朝臣等之處、此物皆等總中不習傳之由云々、仍如本被納置云々、

〔百錬抄 五 白河〕嘉保元年八月十七日、源仲宗、并男參河守惟清已下、配流國々、依奉呪咀太上天皇〇白河也、

〔百錬抄 七 崇德〕康治元年正月十九日、散位源盛行、并妻津守嶋子、配流土佐國、奉待賢門院仰、依奉呪咀國母皇后宮〇得子也、郎等名所亦流罪也、件夫婦祇候彼院者也、

〔台記〕久壽二年八月廿七日壬寅、親隆朝臣來語曰、所以法皇惡禪閤〇藤原忠實及殿下〇忠實子忠通余〇忠實子賴長者、先帝崩後人寄帝巫口、巫曰、先年人爲詛朕、打釘於愛宕護山天公像目、故朕目不明、遂以即世、法皇聞食其事、使人見件像、既有其釘、即召愛宕護山住僧問之、僧申云、五六年之前、有夜中□□美福門院及關白疑入道及左大臣所爲、□法皇惡之、雖取信、天下道俗所申如此、先日成隆朝臣略□此事、今聞俗人説□殺不少、但禪閤及余唯知愛宕護山天公飛行、未知愛宕護山有天公像、何況祈請乎、蒼天在上、白日照□怖々、〇下略

〔愚管抄 四〕さる程に、主上近衞院十七にて、久壽二年七月にうせ給ひにけるは、ひとへに、此左府〇藤原賴長が呪咀なりと人いひけり、

〔百練抄二七條〕應保二年六月廿三日、資賢卿、通家朝臣、時忠、範忠之配流、不勘罪名人傾之、是奉呪咀主上於賀茂社之由露顯之故也、

〔玉海〕嘉應元年四月十日、晩頭陰陽助安倍泰親來、相逢曰、問所勞事、未同酉刻占云、土公呪咀成祟、不増不減而可經程、但六月八日爲減氣之都〇都恐期誤云々、但六月殊爲其期云々、又問發心地事、占云、去六日申刻呪咀靈氣祟、甲辰庚申日爲減氣、故又一同日酉刻令占之、其占云、土公靈氣増減之日同前、但若胸所勞自發動歟云々、其不及大事云々、

〔康富記〕應永廿七年九月十日丙子、今朝室町殿醫師高天被禁獄、父子弟等三人也云々、此間仕狐之沙汰風聞、然而昨日於御臺御方、仰驗者被加持之處、二匹自御所逃出、則被縛件狐之後被打殺、依此事、高天ガ狐ヲ奉詛付之條露顯云々、仍今朝被召取云々、晝程又被召取陰陽助定棟朝臣、是モ仕狐之由有虛說云々、末代之作法淺敷々々、

〔看聞日記〕應永三十二年八月二十三日癸丑、源宰相〇足利義量以狀馳申云、二十日禁裏へ、庭中申物あり、今度御惱〇稱光自伏見殿〇後崇光被呪咀申之由申、さもありぬべきよし被仰遣、以永藤卿室町殿へ被仰之間、事樣不審也、何樣にも申口可召捕之由御返事被申、則所司代召捕尋之間、内侍所刀自三條と云物、彼官人也、彼刀自カ夫洞院諸大夫民部少輔重季、幷庭中申男〇六條中將侍金澤ト云其外女尼兩三人召捕被糺明之處、非伏見殿御事、大覺寺殿をこそ申て候へと申披之間、此御所之虛名ハ晴畢、御幸運珍重之由告申之間、迷惑仰天、先以無爲之條、併神慮之至喜悅也、則三條永基ニ尋遣返事云、大覺寺殿御事也、是之御事ハ無爲落居之由申、安堵畢、

〔橘窻自語上〕陰陽師大黑民部の家に、水合といふ事を、土用にすることあり、禁裏仙洞御所々々にて井にむかひ、呪術をせり、此事のわけは、丹後國與謝郡天眞井の水を合せし故有しと、大黑の物語なれども、不甘心の事にて、風水家の呪術におこるなるべし、

〔日本書紀二神代〕一書曰、略〇中時天神見其矢曰、此昔我賜天稚彦之矢也、今何故來、乃取矢而呪之曰、若以惡心射者、則天稚彦必當遭害、若以平心射者、則當無恙、因還投之、卽其矢落下中于天稚彦之高胸、因以立死、

〔日本書紀二神代〕一書曰、略〇中時皇孫謂姉爲醜不御而罷、妹有國色引而幸之、則一夜有身、故磐長姫大慙而詛之曰、假使天孫不斥妾而御者、生兒永壽有如磐石之常存、今旣不然、唯弟獨見御、故其生兒必如木華之移落、一云、磐長姫恥恨而唾泣之曰、顯見蒼生者、如木華之俄遷轉當衰去矣、此世人短折之緣也、

〔日本書紀二神代〕一云、略〇中乃以授彦火火出見尊、因敎之曰、以鉤與汝兄時、則可詛言貧窮之本、飢饉之始、困苦之根、而後與之、又汝兄涉海時、吾必起迅風洪濤、令其沒溺辛苦矣、

〔日本書紀三神武〕戊午年九月戊辰、天皇惡之、是夜自祈而寢、夢有天神訓之曰、宜取天香山社中土、香山、此云介遇夜摩、以造天平瓮八十枚、平瓮、此云毘邏介、幷造嚴瓮、而敬祭天神地祇、嚴瓮、此云怡途背、亦爲嚴呪詛、如此則虜自平伏、嚴呪詛、此云怡途能伽辭離、略〇中是時虜兵滿路、難以往還、時椎根津彦乃祈之曰、我皇當能定此國者、行路自通、如不能者賊必防禦、言訖徑去、時群虜見二人大咲之曰、大醜乎、大醜、此云鞅奈瀰爾句、老父老嫗、則相與闢道使行、二人得至其山、取土來歸、於是天皇甚悅、乃以此埴造作八十平瓮、天手抉八十枚、手抉、此云多衢餌離、嚴瓮、而陟于丹生川上、用祭天神地祇、則於彼菟田川之朝原、譬如水沫而有所呪著也、天皇又因祈之、

〔日本書紀九神功〕四十七年四月、百濟王使久氐、彌州流、莫古令朝貢、時新羅國調使、與久氐共詣、略〇中便問久氐等曰、百濟貢物不及新羅奈之何、對曰、臣等失道至沙比新羅、則新羅人捕臣等禁囹圄、經三月而欲殺、時久氐等向天而呪詛之、新羅人怖其呪詛而不殺、則奪我貢物、因以爲己國之貢物、以新羅賤物相易、爲臣國之貢物、

〔日本書紀十四雄略〕三年、略〇中十月、是月、御馬皇子、以曾善三輪君身狹、故思欲遣慮而往、不意道逢邀軍於

僧侶呪詛

三輪磐井側、逆戰不久被捉、臨刑指井而詛曰、此水者、百姓唯得飮焉、王者獨不能飮矣、

〔日本書紀十六武烈〕十一年（賢○仁）十一月戊子、於是大伴大連率兵自將、圍大臣宅、縱火燔之、所撝雲靡、眞鳥大臣恨事不濟、知身難免、計窮望絕、廣指鹽詛、遂被殺戮、及其子弟、詛時唯忘角鹿海鹽、不以爲詛、由是角鹿之鹽爲天皇所食、餘海之鹽爲天皇所忌、

〔日本書紀十九欽明〕二十三年六月、是月、或有譖馬飼首歌依曰、歌依之妻逢臣讃岐、鞍韉有異、既而熟視皇后御鞍也、卽收廷尉、鞫問極切、馬飼首歌依乃揚言誓曰、虛也非實、若是實者必被天災、遂因苦問、伏地而死、死未經時、急災於殿、廷尉收縛其子守石與中瀨氷、（守石名、瀨氷皆名也、）將投火中、（投火爲刑、蓋古之制也、）呪曰、非吾手投、呪訖欲投火、守石之母祈請曰、投兒火裏、天災果臻、請付祝人、使作神奴、乃依母請、許沒神奴、

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶六年十一月甲申、藥師寺僧行信、與八幡神宮主神大神多麻呂等、同意厭魅、下所司推勘、罪合遠流、於是遣中納言多治比眞人廣足、就藥師寺、宣詔、以行信配下野藥師寺、

〔續日本後紀十二仁明〕承和九年七月乙卯、是日詔曰、○中略春宮坊乃帶刀舍人伴健岑伊、隙仁乘天、與橘逸勢合力天、逆謀乎構成天、國家乎傾亡无止須、此事乎波、皇太子波不知毛在世止、不善人仁依天相累事波、自古利言來留物奈利、又先々仁毛、令法師等天呪咀。。止云人多安利、而止毛隱疵乎撥求女无事乎不欲之天奈毛抑忍太留、

〔百練抄四一條〕寬弘六年二月四日、捕呪咀中宮幷第二皇子左大臣等法師圓能、勘問承伏已了、造意者伊豫守公行朝臣妻高階光子、民部大輔方理、幷同妻源子、其父前越後守爲文朝臣等被勘罪名、

〔政事要略七十糺彈雜事〕勘申散位源朝臣爲文、民部大輔同方理、伊豫守佐伯朝臣公行妻、及方理朝臣妻、

僧圓能等罪名事

右主稅頭粂大外記播磨權介滋野朝臣善言仰偁、大納言粂皇太子傅藤原朝臣道綱宣、奉勅、散位源朝臣爲文、民部大輔源朝臣方理、伊豫守佐伯朝臣公行妻、及方理朝臣妻等、奉令僧圓能呪咀皇后（○藤原彰子）幷厭魅敦成親王（○後一條）左大臣（○藤原道長）也、件等人所當罪名、宜令明法博士勘申者、今年二月五日

勘問僧圓能等日記云、問圓能云、作厭式奉呪咀中宮若宮幷左大臣之由、依實辨申如何、圓能申云、依伊豫守公行朝臣妻宣旨云、人語奉呪咀之由、昨日被勘問之次、依實辨申先了止申、(中略)復問云、此事相語之人、宣旨只一人歟、重辨申如何、圓能申云、先者民部大輔源朝臣方理奈本相語侍之、去年十二月中旬頃也、宣旨者閏月下旬奈本語侍之、厭符者二枚也、一枚者度宣旨侍支、一枚者爲度方理朝臣持向彼宅而方理朝臣他行、妻民依知其事天預侍之、祿者紅花染褂一領奈本令得天侍之、宣旨祿者給者絹一疋也止申、復問云、圓能如外、相知此事之陰陽師、幾侍之、又有驗之寺社及可然之所々、底此厭法乎、實辨申如何、圓能申云、寺社所々更不成件事、但宣旨宅侍藤原吉道奈本案內者知天侍、彼宅出納春正者爲使、罷來圓能許、案內者不知也侍、元來僧道滿奈本年來召仕彼宅之陰陽師天侍己止、春正申侍、厭符之事者相語也天侍止申、復問云、方理朝臣宣旨同比件事相語止辨申被二人共相議件事天、令爲歟、又僧源心止圓能止、常相語件事之由、圓能弟子妙延所指申也、又前越後守源朝臣爲文親昵召仕圓能之間、有其緣天受方理朝臣夫妻之語也止、昨辨申、若爲文も知此事歟、一々僞辨申如何、圓能申云、方理宣旨住所各異侍、所々天受此語侍支、相議也天所厭符事令爲侍、不知侍、亦圓能も互不令知、又源心者本自不隔事之間、雖有親昵之語、非知此厭符之事、又爲文朝臣者雖語雜事、件厭符事者不示圓能依能通彼宅天、方理朝臣者招取天相語此厭符之事侍之也止申、問妙延云、師僧圓能依方理朝臣夫妻幷宣旨等語天、奉呪咀中宮若宮幷左大臣之由、及厭符等乎、埋置所々、辨申如何、妙延申云、師弟子間侍止不知何事、去年冬童子物部糸丸絹一疋令持天來天侍之見侍支、又圓能源心相語事者見侍支、不知何事止申、問糸丸云、師僧圓能作厭符天奉呪咀中宮若宮幷左大臣之由、汝爲彼童子天可知件事、依實辨申如何、糸丸申云、厭符事者又不知給、申祿綿天、從宣旨宅絹一疋者持來侍支、又紅花染衣女持來天持見侍支、不知何所之物、但去年十二月閏也止申者、先是同四日內間日記依事情同、更不注載、(中略)

畧今件爲文朝臣、方理朝臣、幷公行朝臣妻等、起厭呪謀在殺害、或擬奉危皇后、或似可害皇親、兼含惡心思損議貴、此等罪戾之中、以涉乘輿爲重、即從二罪之例、入八虐之條、不論男女、不辨首從、須各除名皆處絞刑、至于圓能尤是加功之者也、依无差別之法、又同上件之輩、更令還俗、全以可坐、就日記撿案內、爲文不知之由、圓能辨申已耳、而被下宣旨之旨、猶加犯人之列也、條綸可有其由、結斷何可任其意、依法條所指勘申如件、

寬弘六年二月八日　　從五位上守大判事兼明法博士美麻那朝臣直節

從五位上行勘解由次官兼明法博士令宗朝臣元正

〔公卿補任一條〕寬弘六年己酉 前大宰權帥從二位藤伊周、正月日叙正二位、二月廿日宣旨、不可令朝參、依呪咀事也、六月十九日宣旨更聽朝參、

〔宇治拾遺物語十四〕今はむかし、御堂關白殿道長〇藤原法成寺を建立し給てのちは、日ごとに御堂へまいらせ給けるに、しろき犬を愛してなん、飼せ給ければ、いつも御身をはなれず、御ともしけり、ある日、例の如く御ともしけるが、門をいらんとし給へば、このいぬ、御さきにふたがるやうに吠まはりて、内へいれたてまつらじとしければ、何條とて、車よりおりて、いらんとし給へば、御衣のすそをくひて、引とゞめ申さんとしければ、いかさまやうあることならんとて、榻をめしよせて、御尻をかけて、晴明にきとまいれとめしにつかはしたりければ、晴明則まいりたり、かゝることのあるは、いかゞとたづね給ければ、晴明しばしうらなひて申けるは、これは君を呪詛し奉りて候物を、道にうづみて候、御越あらましかば、あしく候べき、犬は通力のものにて、つげ申て候なりと申せば、さてそれはいづくにかうづみたる、あらはせとの給へば、やすく候と申て、しばしうらなひて、こゝにて候と申所をほらせてみ給に、土五尺ばかりほりたりければ、あんのごとく物ありけり、土器を二うちあはせて、黄なる紙捻にて、十文字にからげたり、ひらひてみれば、中にはものもなし、朱砂にて一文字をかはらけの底にかきたるばかりなり、晴明がほかには、しりたるも

の候はず、もし道摩法師やつかまつりたるらん、尋じて見候んとて、懐より紙をとり出し、鳥のすがたに引むすびて、呪を誦じかけて、空へなげあげたれば、たちまちに白さぎになりて、南をさしてとび行けり、この鳥のおちつかん所をみてまいれとて、下部をはしらするに、六條坊門萬里小路邊に、ふりたる家の、もろおり戸の中へ落入にけり、則家主老法師にてありける、からめとりてまいりたり、呪詛のゆへを問るゝに、堀川左大臣顯光公の語をえて仕たりとぞ申けるこのうへは流罪すべけれども、道摩がとがにはあらずとて、向後かゝるわざすべからずとて、本國はりまへをひ下されにけり、この顯光公は、死後に怨靈と成て、御堂殿邊へは、たゝりをなされけり、惡靈左府となづく云々、犬はいよ〳〵不便にせさせ給ひけるとなん、

〔百練抄五白河〕承暦二年十月十六日、以檢非違使、獄召威儀師恩紹幷賜信季、依呪詛事也、前遠江守資成下女依呪詛事、於使廳勘問之間、申念熊野權現、繩切杖折、不加拷問、爲奇異、

〔百練抄六崇德〕大治元年十一月七日、阿闍梨承玄、幷僧妙心還俗配流、依有事呪詛女院之聞也、去四日被追捕之、

〔有徳院殿御實紀附錄十五〕享保の初、江戸の寺院にて、諸宗の僧侶、おもひ〳〵に法義を講論する事行はれ、參詣して聽聞する貴賤群集せり、其中に、牛込圓福寺といへる法華宗の寺僧、講談するとて、あくまで淨土宗を謗りけるに、聽衆の中に、淨土宗の僧ありて、大に憤り、雙方爭論に及びしことあり、かれら圓福寺をうらむるまゝに、なしけるにや、府内十四五ケ所に、牛込圓福寺にて、公を呪詛するよしを、紙にかきて棄置たり、其所より、町奉行所にうたへ出れば、奉行も捨置べきこととならねば、かくと聞え上しに、笑はせ玉ひ、かゝる事とりあぐべきにあらず、もしまことに呪詛するものあらば、心まかせに呪詛させよ、少しも患ふべきにあらず、此後かゝる事あり共、訴へ出るに及ばず、速にすてしむべしと仰あり、

〔皇國名醫傳後編下〕山田圖南

山田正珍、字宗俊、以字稱、世幕府醫官、父正朝、(號麟嶼、即菅麟嶼、姓菅原、劉用曰菅、)有神童之稱、○中略秋田侯有疾、服正珍藥、會有一巫、以法伏疾、稱多靈驗、夤緣勢貴、亦至侯邸、將行法、謂侍臣曰、藥劑且停、不則法驗不著、正珍聞之、告侍臣曰、聞有巫止藥、侯病太丞、黽勉進藥、尙恐弗及、况止之乎、正珍願見其巫、侍臣唯唯退告巫、巫不可、正珍强見之謂曰、聞汝以法生人、亦必能以法死人、汝試詛我、我與汝藥、汝法驗乎、我藥効乎、吾且觀之、乃取紫圓迫而服之、巫振鐸誦呪、頃之腹痛遶悶、下利如傾、大懼且泣、固乞罷去、

〔溫故要略二〕嫉妬女呪詛シテ神木等ニ釘打事

和朝於今有此事、親見悲哉、

〔梅墩詩鈔初編二〕和島子玉丑時咀

玉樓瘦、銀海澀、行拂女蘿與露泣、廟扉巳腐椎無聲、古佛吹氣歛惟濕、大樹槎枒老藤垂、落月懸枝魘纎眉、冬冬釘樹深恨徹、此恨狂夫知不知、秋幔有人曉夢惡、提劍起問何其、

〔安齋隨筆後編二〕一嚔のマジナヒ　嚔(ハナヒル)(クサメの事也、俗にはクシヤミと云、)ハ凶事也とて、マジナヒをする事あり、徒然草に、クサメクサメと云てマジナフ事見えたり、クサメと云ハ、ハナヒル事にはあらず、ハナヒル時のマジナヒの詞也、又下賤の人ハ、ハナヒル時、マジナヒ也とて、クソクラヘト云、拾芥抄に、嚔ル時の頌に、休息萬命、急々如律令ト見えたり、休息萬命を、クソクマンミヤウとよむを誤り傳へて、クソクラヘト覺えたがへたるものなるべし、

〔拾芥抄上本諸頌〕嚔時頌クサメノトキノ事

休息萬命　急々如律令、クサメト云ハ是也、

〔漢書三十藝文〕嚔耳鳴雜占十六卷(師古曰、嚔音丁計反、○中略)

右雜占十八家、三百一十三卷、

〔通俗編十雜俗〕噴嚏　法苑珠林、世尊嚔、諸比丘呪願言長壽、時有居士嚔、佛令比丘亦呪言長壽、按今俗婦嚔輒相承襲、

〔徒然草上〕或人淸水へ參りけるに、老たる尼の行つれたりけるが、道すがら、くさめ〳〵といひもてゆきければ、尼御前何事をかくはの給ぞととひけれどもいらへもせず、猶いひやまざりけるを、度々とはれて、うち腹だちて、や、はなひたる時、かくまじなはねば死ぬるなりと申せば、やしなひ君のひえの山に兒にておはしますが、たゞ今もや、はなひ給はんと思へば、かく申ぞかしといひけり、有がたきこゝろざしなりけんかし、

〔徒然草文段抄二〕はなひたる時といふより、尼が答の詞也、是は乳母がたのならはしに、其兒のはなひたる時、かたはらの人、はなを合すとて、又くさめと云也、もしはなをあはせざれば、其はなひたる兒に害ありといひならはせり、其故に、今も守刀などに、鼻の糸とて、靑き糸をつけて、兒のはなひたる時、彼はなを合す代に、其糸をむすぶ也、此まじなひの心にて、此段を見侍るべき也、かの尼が詞に、はなひたる時、かくまじなはねば、死ぬるなりと申せばといへる、すなはち是也、其はなをあはせんとて、くさめ〳〵といひし也、

〔嬉遊笑覽八方術〕嚏の禁〇中略萬葉集十一眉根搔、鼻火紐解、待八方、何時毛將見跡、戀來吾乎、集中、はなひる事をよめる歌、この外にもあり、詩鄴風に、寤言不寐、願言則嚏といへるとおなじくて、人におもはるれば、はなひるとなり、後には、其意うつりてわがうへを、かげにて後言する者あれば、嚏るとて、わろき事とす、又天竺には、もとよりこれをよからぬ事とするにや、四分律に、世尊嚏、諸比丘呪願言長壽、といへること見えたり、古今集、雜出て行ん人をとゞめんよしなきにとなりのかたにはなもひぬかな、袖中抄に、はなひる事、いかにもよからぬ事なり、年の始に、鼻ひりつれば、祝ひごとをいひて祝ふなり、され

ば、人の所へゆかんずる初めに、隣の人嘲らむを聞ても、くせ〳〵しからん人は、立どまるべきなり、枕草子、にくきもの、はなひて誦文する人云々、

〔北條五代記　六〕北條氏康和歌の事

或夕つかた、高樓にのぼり、すゞみ給ひける時に、其近邊へ狐來て鳴つるを、御前に候する人々、あやしみけれ共、兎角いふ人なし、梅窓軒と云者申けるは、むかし賴朝公、信州淺間見はら野の御狩に、狐鳴て北をさして飛さりぬ、人々是をとゞめんとて、矢筈を取てをつ、かけしかどもにげ過ぬ、賴朝公御覽じ、秋の野の狐とこそいへ、夏野に狐鳴事不審なり、誰か有歌よみ候へと仰下されければ、工藤祐經承りて、誠に昨日の御狩にをいて、梶原源太景季が歌には、鳴神もめで丶雨はれ候ひぬ、是にも歌あらばくるしかるまじ、誰々もと申けれ共、よむ人なかりしに、武藏の國の住人愛甲三郎季隆、ゐだけだかになりうかべるいろ見えしが、やがて、夜ならばこう〳〵とこそ鳴べきにあさまにはしるひる狐かな、と申ければ、君聞召て、神妙に申たり、○中略愚老、和歌の道を學びとくをよばぬまでも案じて見候べきをと申、氏康きこしめし、夏狐鳴事珍事なり、皆々歌を案じ、出來次第に一首仕るべしと仰有ければ、各々案ずる體見えけれ共詠人なし、やがて氏康公、夏はきつねになく蟬のから衣をのれ〳〵が身の上にきよ、とよみ給ひしに、夜明て見れば、其狐の鳴つる所に死て有けり、皆人奇妙不思議也と感じあへり、○中略氏康いはく、我數度の合戰に、勝利を得る事、武力のいたす所に非ずたゞしかしながら天運全して、神明佛陀の應護にかゝるが故也と神佛を信敬し、諸寺諸社を建立せり、

〔台德院殿御實紀　二十七〕慶長十九年七月廿一日、この日大御所、板倉內膳正重昌ならびに金地院崇傳をめして、今度京大佛新鑄鐘銘、關東へ對し、大不敬の文辭あり、そのうへ上棟の日吉日にあらざるよし聞ゆ、早く鐘銘幷に棟札の草案を進呈すべき旨、京へ申つかはすべしと御諚あり、〔中略〕

反閇

曾に傳ふる所は、この鎮法は、雷鳴鎮がつくる所にして、その文に國家°安寧°、因緣施化、萬歳傳方、君臣豐暢、又衆惡除滅、日月將軍、鎮鎮などいへる句あり、御諱を稱すのみならず、臣家のために、宮家を呪詛するに似たりといふ事を、天祿一人御閑窟へ召されたりしとき、密々告奉りしといふ、この事いぶかしけれども、またなしとし一定めがたし、いまは後考の爲、爰にしるす、塙上道日記、

〔下學集 下態藝〕返閇（ヘンバイ） 天子出御之時、陰陽家所行也、又謂之禹°歩°也、

〔白石紳書 十〕一反閇ハ、ヘンバイとよむ也、禹歩也、故にヘンバイをフムといふ也、陰陽家にあり、

〔倭訓栞 中編二十三〕へんばい　反閇の字、十節錄に見えたり、五字の反閇とは、天武傅亡烈なりと、三議一統にみえたり、軍家に遍唄といふも、是を誤るにや、

〔貞丈雜記 十六神佛〕一反閇（ヘンバイ）と云は、神拜の時する事也、陰陽師の法也、三足の反閇、五足のへんばい、九足の反閇など、てあり、陰陽師に尋學ぶべし、又閉坏とも書也、古代貴人出御の前に、必陰陽師をして反閇を行はしむ事舊記に見えたり、略○中 されば閉坏も反閇も同事なるべきか、閉坏八座と云は惡き方角と見えたり、其惡き方角をふみ破る呪禁の方術を行ふ事を、反閇をふむと云なるべきか、將軍家など出行の前には、必反閇を行ふ事は惡き方角をふみ破る呪禁なるべきにや、

〔荀子增注 三非相篇〕禹跳湯偏 尸子曰、禹之勞十年、不窺其家、手不爪、脛不生毛、偏枯之病、步不相過、人曰禹°步°、

〔新猿樂記〕西京有右衞門尉者、一家相挙來集、所謂妻三人、娘十六人、略○中 十君夫陰陽先生賀茂道世、略○中 凡觀覽反閇（ヘンバイ）究術、祭禮解除致驗、

〔壒嚢抄 六〕毬打（ギツチヤウ）ト云テ、正月ニ用ハ何之因緣ゾ、世ニ流布ノ說、蚩尤ガ頭ヲ、毬杖之玉トヲ打ト云リ、是ハ漢土ノ義ヲ學侍リ、 十節錄曰、黃帝與蚩尤合戰于坂泉之野、蚩尤有銅身、黃帝ノ箭不中、黃帝仰天祈之、于時玉女降自天反°閇°ス°、蚩尤ガ身如湯解テ被殺畢、仍テ取蚩尤頭、毬之取眼射之ト云々、

〔令集解 十九喪葬〕推步盈虛 〔中略〕曆書大傳曰、步推也、盈虛謂日月五星之度數也、跡云、推步也、穴云、盈虛謂月之大謂之盈、小謂之虛、古記云、周推步、者、曆書大傳、大禹°步°于上帝、鄭玄曰、步推、禹推天道、觀致得失、盈虛謂日月五星之度數、二者以成也、

〔隋書經籍三十四〕玉女反閉局法三卷

〔武備志百八十一占〕釋玉女返閉局法

經曰、返閉局者、在室中六尺、庭中六歩、野外六十歩、量人多少地之宜、表皆以六爲數、先定數訖、便以左手執六算、各長一尺二寸、隨以口吸旺氣、叩齒十二通、默呪心下所謀事、然後回身背旺氣神啓請曰、維某年某月某日某時、啓天地、父母、六甲、六旬、十二時神、青龍、蓬星、明堂、天上玉女、六戊、藏形之神、某好樂長生之術、行不擇日、出不擇時、今欲游行某處、爲某事、欲利大神、謹按天文書、地數局、出天門、入地戸、閉金關、乘玉女、謹請、玉女、青龍、朱雀、白虎、玄武、勾陳、六合、六甲、六神、十二時辰、乘我而行、到某處爲某事、左右近防隨行隨止、隨臥隨起、辟除盜賊、鬼魅消亡、君子見之喜樂倍常、小人見我歡喜皇皇、男兒見我共持酒漿、百惡鬼賊當我者亡、今日禹歩上應天罡、玉女侍傍下應不祥、萬精厭伏所向無殃、所値病痊、所攻者達、所擊者破、所權者傾、所求者得、所願者成、帝王、大臣、二千石、長吏、見我者愛如赤子、今日召請玉女六神隨我而進、

凡一切出行、用事、無吉方吉時、可用此法、

〔小右記〕寛弘二年三月八日丙辰、今日中宮○彰子參給大原野社、權中納言隆家來、同車、卯剋參入後宮、同剋寄御輿、晴明奉仕反閉、乘輿出西門、

〔左經記〕長元元年八月四日丙寅、參關白殿、○藤原頼通中承事之間、右衛門尉直方朝臣令爲祐朝臣申云、明日寅剋欲進發、主計頭守道稱母忌日不返閉、爲之如何者、仰云、稱忌日強不可云、唯如文高可令行也、

〔中右記〕大治四年十一月七日癸亥、今日有行幸大原野、早旦先御覽神寶等、辰剋出御南殿、陰陽頭家榮候反閉、

〔吾妻鏡二十三〕建保六年六月二十七日丁卯、將軍家○源實朝任大將御之間、爲御拜賀參鶴岳宮給畢、○中

身固

略先出御南面、文章博士仲章朝臣束帶上御簾、陰陽少允親職束帶參、車寄問候、反閉、陰陽權助忠尚束帶入、
就根妻戸、參御鎰、
〔吾妻鏡　二十六〕貞應二年七月廿六日、二位家新造御亭號御堂御所御移徙也、被略水火、陰陽大允親職候反閉云云、
〔勘仲記〕弘安七年六月十三日己未、行幸儲御所事、右中辨爲方朝臣奉行、〇中略出御、〇中略寢儀令立南殿御後給、〇中略次反閉、陰陽頭國高朝臣參進、禹步退出納言如例次寢儀令立御帳前給、
〔遷幸反閉次第〕行幸反閉作法圖土御門家古記錄抄出
一反閉　散供
火御出御前　水入丞　米入土器五升、以下同斯
一日入折敷以下同　大豆同
胡麻同　粟同　麥同
酒五升入瓶子　生牛乳五升、入土器、以明酒代
右兼高机入足　齋郎三人舁之
一里內裏
永承六年七月十一日己丑、遷御大膳職、〇中略主税頭時親勤仕反閉、出中門內、成咒術、至南殿階前、讀咒章、畢退出、
〔東山殿年中行事　十二月〕晦日　將軍家〇御社參同上、廿九日上出御于御對面所、御供衆申次、御禮如例、當番申次、出于國際、御身固ト言上之シテ後有在宣陰陽頭一人寬出而三拜シテ勤反閉、畢而申次、又傳奏ト披露シテ退對從禁裏所被進之御單幷從諸寺社獻上之卷數各錄臺持參之、御頂戴之後被持退之、
〔貞丈雜記　十六　祝儀〕一御身固と云は、御身の堅固なる樣にする加持也、陰陽師のする事也、古將軍家の

符呪

御身固は、賀茂安倍の兩家つとめられし也、舊記に見えたり、

〔禁秘御抄階梯中〕陰陽道○中略

按、反閉稱六甲術、其作法、安賀兩家所習傳有異同歟、於反閉者有禹步、史記夏本紀、禹身爲度、注、王肅曰、以身爲法度、索隱曰、按今巫猶稱禹步、身固者反閉之略法也、身固者本朝之名目也云々、

〔吾妻鏡五十〕文應二年弘長元年○八月十日庚子、御身固、陰陽師、此間九人也、今日被縮六番、晴茂晴宗等、重服之間、職宗茂氏等、爲父名代勤仕之、而募彼勞効、相并又共被召加、以其例爲親朝臣子息仲光、又被召加之處、○下略

〔羅山文集六十二雜著〕符呪

夫兵之有符也、不可不察焉、無忌奪晉鄙符以救趙、漢祖取淮陰印而制楚、千萬之衆隨一符之所在、則其爲用也亦大矣、若夫太公所謂陰符者、又深密哉、兵法謂之鈐決之符、且夫呪者與祝字相通、而雖爲祭主贊祝之詞、然又爲軍中之密語、則非無所由也、所謂申叔展之麥麴、有山氏之庚癸、張良陳平之耳語、曹瞞之雞肋之屬、皆廋隱之詞、譬如世俗之謎子歟、蓋其機不密則事不成、豈可洩乎、今夫符之於呪一也、所信爲符、所唱爲呪、方術家謂之越方、又號禁架、其符謂之丹書、所以使令鬼神厭殺人物也、東漢張道陵始受老君之正一盟威秘錄、三清衆經符圖、自是傳其術者、召徵鬼神之書、其字似古篆不可解也、謂之符籙、於是攘邪祟、除疾病、或書符以呪之、或用符水而飮之、然其惑人亦多矣、本朝自浮屠氏之來而後、人々皆信之、故役小角泰澄之輩、雖以呪術稱于世、然本是仙風道骨遊於方外者也、而浮屠氏推以爲我徒、爾來彼秘密家與陰陽家者流共混同、各以其所說誘國俗、往々書佛菩薩鬼神之文以爲靈符、又唱其稱號以爲陀羅尼神呪、其說云、用此符者降伏妖怪、化爲吉祥、急々如律令、又云、呪是鬼神王名號、稱其王名則部落敬之、故能降諸鬼魅、或云、呪如軍中密號、唱號相應、無所訶問、又呪者願也、佛菩薩願衆生皆如我成佛、故能誦呪則所願無不然也、彼復擧一菩薩之名云、梵語摩利支、此翻陽炎、此

天候行日月之前、不可見不可從、火不能燒、水不能濡、如陽炎也、雖諸怖畏、能令人於水火盜賊怨仇軍陣皆可隱身、其呪曰、唵摩里支娑婆賀、若此之類甚多、今舉崖略、以徵被蠱厲、有意于此者可不察乎、雖然河圖曰、玄女出兵符授黃帝、以救蚩尤、王翼之中有術士、主爲譎詐、依託鬼神、以惑衆心、則又是一術也歟、吁兵者不祥之器、而符呪亦不祥之具也、不得已而用之、亦何快於心哉、於是思之、本朝之遠古天照太神取天眞鹿兒矢、而呪之曰、天稚彥其有黑心耶、斯矢如破、若其有赤心耶、必不中焉、遂投之、其矢隕自天而中天稚彥之胸、乃死、然則呪之所由來久矣、

〔百草露十六〕夫仙家には、種々の符呪あり、是を神符とも、靈符とも、寶符とも稱す、仙家の符書、五百餘卷あれども、日本へいまだ悉く渡らず、仙書に、神呪を祝とも、祝由とも、呪詛とも、呪由ともいへり、呪ふ(ノロ)と訓む、素問云、古の病を治するものは、唯其精を移し、氣を變じ、由を祝ふて已すと、

〔眞俗佛事編一〕護符(眞言ノ文字ヲ加持シテ、符シムレバ病患、其本ヲ同、書曰、三種悉地軌云、五部眞言覺字略、是一切如無比甘露之妙藥、能調伏性之妙藥、一字入於五[illegible]風病不生、成日月加持之、亦如是、四十二ヲ說ク、[illegible]金剛法門百[illegible]經ヲ寄フルニ、金[illegible]力士、自ノ呪ヲ說テ、此ヲ神變ノ符四十二ヲ說ク、其符[illegible]水火ノ災ニハ[illegible]之、其災[illegible]氣レ、成ヘ各ニ、風病ヲ治シ、[illegible]等ノ種々ノ符アリ、[illegible]符之字義ナ同、書[illegible]經曰、[illegible]金剛說此符已、大衆同聲讚言、[illegible]大力士法說是大妙之法、爾時金剛白大衆言、知敎於此法說行之法[illegible]事大天宮、如此行法之人成就ト云ヘリ、[illegible]言請子事ヲ稱クル神符ヘ、其[illegible]ノ如神[illegible]所ナレバ、亦名[illegible]符[illegible]タル道家ノ文字ヲ假用ルカ、凡ソ[illegible]家ノ[illegible]法ニ、[illegible]ノ符ニ似タル[illegible]ト云ヘ、[illegible]家ノ[illegible]用ル[illegible]ノ多シ、陀羅尼ヲ呪ト云類ノ如シ、今ノ類[illegible]ノ符ニ似タルヲ以テ、其名ヲ操レリ、[illegible]テ云、符出於老君、皆天文也、老君能通於神明、符皆神明所授、今人用之少驗者、由於出來歷久、傳寫之多誤故也、又信心不篤、雖用之亦不行、)

〔抱朴子內篇四〕登涉〔第十七〕(○中略)

欲入水、以雄者帶左、以雌者帶右、但乘船不身涉水者、其陽日帶雄、陰日帶雌、又天文大字有北帝書、寫帛而帶之、亦辟風波蛟龍水虫也、或問曰、辟山川廟堂(一作)百鬼之法、抱朴子曰、道士常帶天水符、及上皇竹使符、老子左契、及守眞一、思三部將軍者、鬼不敢近人也、其次則論百鬼錄、知天下鬼之名字、及白澤圖、九鼎記、則衆鬼自却、其次服鶉子赤石丸、及曾靑夜光散、及葱實烏根丸、及吞白石英祗

母散、皆令人見鬼、卽鬼畏之矣、抱朴子曰、有老君黃庭中胎四十九眞秘符、入山林、以甲寅日、丹書白素、夜置案中、向北斗祭之、以酒脯各少々自說姓名、再拜受取、內衣領中、辟山川百鬼、萬精、虎狼、虫毒也、何必道士亂世避難入山林、亦宜知此法也、○符圖略

抱朴子曰、上五符、皆老君入山符也、以丹書桃板上、大書其文字、令彌滿板上、以著門戶上及四方四隅及所道側要處、去所住處五十步內、辟山精鬼魅、戶內梁柱皆可施安、凡人居山林、及暫入山、皆可用、卽衆物不敢害也、三符以相連著一板上、意謂爾非葛氏、

〔老學庵筆記九〕政和後道士有賜玉方符者、其次則金方符、長七寸、濶四寸、面爲符、背鑄御書曰、賜某人奉以行教、有違天律罪不汝貸、結於當心、每齋醮則服之、會稽天寧萬壽觀有老道士盧浩眞者、嘗被金符之賜、予少時親見之、

〔琅邪代醉編十〕詛楚文

秦詛楚文跋尾曰、右秦巫咸碑在鳳翔府學、又一本告亞駝神者在今洛陽劉忱家、書辭皆同、惟偏傍數處小異、

〔下學集上神祇〕急急如律令神符上所書之文也、言一切之惡鬼魔事、行邪道者敕誡之、曰急急如律令、可歸正道也、律令法度也、又事文類聚曰、律令者雷邊捷鬼也、愚謂、事文類聚意、言一切惡事不正、速去、可如律令鬼疾去、

〔谷響集一〕急々如律令

客問、急々如律令語、　答、是巫者之呪語也、演密二云、且如此方言音、亦有願言、亦有呪語、如急々如律令等語、呪火不燒、呪瘡令停、蓋作呪用、不同願言、　又事文類聚云、符祝之類、末句急々如律令者、人以爲如飮酒之律令、速去不得滯也、一說漢朝每行下之書、皆云如律令、言當亦如律令、故符祝有如律令之言、律令是雷邊捷鬼、此鬼善走、與雷相疾速、故云如此鬼之疾走也、資暇

〔吾妻鏡二十八〕寬喜三年五月四日、去月之比、或僧稱祇園示現注夢記、披露洛中、仍自殿下被送進于

將軍家假令人別、先讀五文若三文、可讀誦心經、於卯巽方、可修鬼氣祭、然者今年世上云疾疫、云飢死、可被除也、疫癘事、五月以後六月十八日以前、可録起也云云、

仍可獻此封、

謹請王母崑山柘急々如律令

崑崙山柘急々如律令

令信此事者、可爲人民安穩天下泰平之由也、

〔吾妻鏡四十三〕建長五年五月四日辛巳、今年端午良辰、當于壬午、必依可有御謹愼、御勘文〈故諸陵頭賀茂晴定〉一通、幷三種神符御護等、自仙洞密々被進、是則黄帝秘術也云云、去夜、到來于女房中、今朝内々進覽云云、

勘文云

五月五日丙午壬午ニ當ル年、端午ノ神符ヲ作リテカタレバ、命百年ヲタモツ事、

右本文云、五月五日丙午壬午ニ當ル年、赤紙ヲモチテ、神符ヲ作リテカタレバ、壽百歳也、件神符ト云ハ、三種也、一ニハ辟兵符、此符ヲカクレバ、鋒矢ノ難ヲノガレ、敵人ヲ亡シ、我身ニ向フモノハ、ヲノヅカラホロブ、二ニハ破敵符、此符ヲカケヌレバ、敵人アヘテヲコラズ、タトヒ弓箭刀兵、我身ニ向フトイヘドモ、害ヲナス事ナシ、皆悉クダケヲル、三ニハ三台護身符、此符ヲカクレバ、三災九厄ノ病難ヲノゾク、三災トハ、盗賊、疾病、飢饉也、此三難ニアヘドモ、一切恐ナシ、皆悉消除ス、九厄トハ、諸ノ厄難ヲノゾク事也、凡此三種ノ神符ヲ造テカクレバ、短命ノ者ハ命ヲ百年ノベ、敵人有ルモノハ敵人ヲ亡シテ、我身ハツヽガナク、諸ノ厄難ニ逢タラン人ハ、厄難ヲ消除シ、禍殃ヲノゾク事、此神符ノ力ニハシカジ、故ニ先例皆此日ニ當ルゴトニ、此等ノ符ヲ書テ、御マモリニ用ヒラル、今年五月五日、既壬午ニ當ル、仍先例ニマカセテ、公家ヲコナハル、、誠尤此符ヲカケサセ給テ、百年

ノ御壽命ヲタモタセ給候ベク候、仍注進如件、

四月日

〔吾妻鏡四十四〕建長六年閏五月五日丙午、三種神符御護事、去年五月五日、當于壬午、令懸彼御護給訖、今月五日又爲丙午、重可有其沙汰之由、去比被仰遣京都之處、閏月事不可准恒節之由云云、

〔壒嚢抄十〕慈惠大師ノ影像ヲ、所々ノ民屋ニ押スハ何故ゾ、

是彼ノ僧正ノ誓也ト云々、良源ハ日天子ノ垂跡也、或時鏡ヲ以テ容ヲ寫シ、誓テ云、我ガ影像ヲ置カン所ニハ、必ズ邪魅災難ヲ拂ハント云々、又殊ニ疫病ヲ防グ事ヲ誓ヒ給、或夜疫神參テ申テ云ク、師將ニ其厄ニ當リ給ヘリ、乍恐尊體ヲ侵シ奉ント、僧正、唯圓敎故、逆卽是順トノ給テ、試ニ左ノ小指ニ移シ給ニ、忽ニ苦痛遍身ニ滿ツ、其時圓融ノ三諦ヲ觀テ、彈指シ玉ニ、鬼病速ニ去テ苦惱忽ニ止ム、僧正ノ給ク、大苦ノ病也、一指猶如此、何ニ況ヤ全身ヲヤ、是ヨリ特ニ彼病ヲ拂ハント誓願シ給、サレバ橫川ノ法華堂衆、敢テ此病ヲ不病、若シ此病ヲ受ルハ、則御廟ノ御罰ナリ、仍テ必ズ死ス、曾テ助カル者ナシト云々、此等ノ故ニ、印摸ヲ成テ、爭ソヒ粘スト云々、

〔和漢三才圖會七十二末山城〕惠日山東福寺略〇中

〇。劳札。　每二月方寸許紙書劳字、出於當寺內同聚庵授與之、門前八町人家門楣悉貼之、相傳曰、有一鬼神逢國師、略〇中作禮曰、以後能令無火災疫病、爲書一萬文字奉呈、蓋畫一萬家數也、于時國師密添堅一畫爲十萬而已、或云、劳則土力也、此生土人以有守護力令勿殃難也、其彫印于今存、

〔撈海一得上〕今やく病よけの守リトテ、聻ノ字ヲ門戶ニ貼ハ、漢舊儀曰、儺立滄耳、註卽漸耳也、又通典ニ、司刀鬼ノ名ハ聻、一名滄耳、五音集韻ニ、聻子役切、音積、人死作鬼、鬼死作聻、篆書此貼門、則離鬼祟千里、又酉陽代醉ナド委シ、

〔月令廣義五正月〕日次略〇中　漸耳陰司鬼名、元日門上書聻、可息癘、又裴漸書曰、當今制鬼無如漸耳、

〔貞丈雜記 十六 神佛〕一九字と云事、臨兵闘者皆陣列在前と唱へながら、▦如此なる形を空中に書く也、是を九字を切ると云也、一字に一ッ宛印相あり、九字を切る時も、劍印とて、印を結て九字を切る也、是皆眞言宗の習事也、眞言宗の出家より傳を受けざれば用にたゝずと云也、此九字、本は道家の法也、道家といふは、仙術とて、仙人の方を行ふ者なり、斷穀などをもする也、其道家の書に、抱朴子といふ書あり、其書に九字あり、臨兵闘者皆陣列在前行とあり、是眞言宗に借り用ふる成べし、武家にて九字を用る事もある故記之、又云、陰陽師は道家の方也、一十字と云も、道家の法成べし、手の中に、指の先にて文字を書て、握りてゆけば、わざはひを除き、さいはひ有りと云、

天（大名高位ノ人ニ向フ時、此字ヲ書ク、）龍（海川舟渡ル時書之）虎（曠野深山ニ向フ時書之）王（弓箭兵杖軍陣山賊夜行ノ時用之）命（心ニトナキ食物ニ向フ時書之、又喰ノ字ヲ書、）勝（出陣又勝負ノ時書之）是（病人之家ニ入時用之）鬼（靈所ヘ行時用之）水（身不淨ノ氣ヲハラフ時書之）大（異說言喜ノ時書之）

右大秘事也とて、みだりに傳えずと云也、是も眞言宗の出家の習事也、出家より傳を受ざれば用立ずと云也、たとへ出家より傳を受たり共、何のしるしもなく用に立ぬ事也、

〔覺醒紀談 三〕符字

世に、捺拾捺指の四字を書して、怪我除の護符とす、その驗あること、人のしるところなり、さて此符字の傳へ、一樣ならず、或記に、寛永二年三月晦日に、將軍家狩したまふに、御鷹大なる鵰を捕りけり、その鵰の胸に、四の字あり、その文字は、拾稔稔稗と、かくの如くなり、實に不思議なることなりと見えたり、又にまた寛文八年に、紀州に住める鐵砲師吉川源五兵衛といふ人、江戸に居ける日、大宮鷹場の中、吉野村といふところにて、白き雉子を覘すまして打たれども中らず、さればやうやう、横檻にて捕へ得たり、その雉子の背に、捺拾捺指の文字あり、思ふに此文字こそ、定めて怪我除けの符ならんかとて、角にこの字をしるして、打試みるに、幾度打ども中らず、（大久保西山隨筆記）とい

撫物

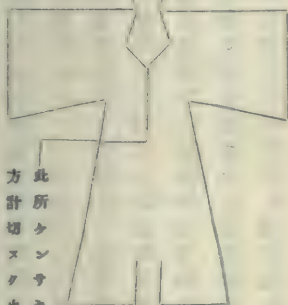
へることあり、又天明二年の春、新見某、九段坂を馬にて通りけるに、落馬して、數十丈の深き牛が淵にまろび墜たれども、人も馬もいさゝか傷ことなし、されば衣服を改るまでにて、事故なかりき、此事を聞人、いとも不思議なることゝて、尊き護符にても持たれしやと尋ね問ければ、さればよ、或年吾領知にて、雉子を一羽射とめんとしけるに、その矢それて中らず、再び射れども中らず、かゝればさま〴〵思ひを廻らし、術を以て捕え得て見るに、翼に四の文字あり、今その字を記して懷中せり、その驗しにてもあるべしと云(耳囊)とあり、何れも正しき記錄なれば、信するに足れり、

〔閑窻自語 一〕靈元院疫癘和歌事

享保八年、病はやりて、人民多くうせぬ、靈元院の御うたあり、　風ふかば本來雲のそらにふけ人にあたりて何の疫癘　此御製を、都鄙聞つたへて、かきしるし、守りとせしに、やめるものははやく治し、やまざるものは大かたのがれけるとぞ、

〔貞丈雜記 十六 神佛〕なで物と云は、是も陰陽師に祈禱を賴む時、陰陽師の方より、紙にて人形を作りて遣すを取て、身をなでゝ、陰陽師の方へ送れば、其人形を以て、祈禱する事有、扨後に川へ流す也、○中略

かたしろの圖



ひな形といふも此事也、紙二枚重ねて、二つに折て、折目を上にして如此きる也、大小不定、

〔成氏年中行事三月〕一、同月晦日夜、御撫物、陰陽頭方へ被遣、御使ハ前ニ如書、巳日ノ御祓ヲモ、陰陽頭調進也、次ニ御誕生日ハ、五山十刹以下ノ寺々ヨリ、御祈禱之鉢、維那持參アリ、御名乘被遊有御出ノ後、寺々維那ニ御對面、

〔倭名類聚抄二鬼魅〕鬼　四聲字苑云、鬼居偉反、和名於爾、或說云、隱字音於爾訛也、鬼物隱而不欲顯形、故俗呼曰隱也、人死魂神也、一云、吳人曰鬼、越人曰𧴎、音蟻、又析反、

〔倭名類聚抄二神靈〕人神　周易云、人神曰鬼、居偉反、和名於爾、或說云、於爾者隱音之訛也、鬼物隱而不欲顯形、故以稱也、唐韻曰、吳人曰鬼、越人曰𧴎、音蟻、又音祈、四聲字苑曰、鬼人死神魂也、

〔箋注倭名類聚抄一神靈〕按、人神曰鬼、出尸子、見爾雅注、及五行大義、又出呂氏春秋順民篇注、淮南子時則訓注、精神訓注、論衡論死篇、鄭玄注禮運、（中略）於邇乃加多、見後撰集貞平親王女一條歌小序、按、於爾是牛角虎牙啖人者、梵籍所謂夜叉羅刹之類、非亡者之精鬼、故欽明紀鬼魅魑鬼並讀於爾、（中略）按、於爾是牛角虎牙啖人者、梵籍所謂夜叉羅刹之類、非亡者之精鬼、故欽明紀鬼魅魑鬼並讀於邇、齊明紀宮中見鬼、又於朝倉山有鬼者亦是耳、源君所引人神曰鬼、吳人曰鬼、人死神魂者、皆今俗所謂幽靈、古云美太万、下條讀靈字是也、則不得讀於邇、其鬼字可讀於邇者、論衡訂鬼篇云、鬼者老物之精者近之、

〔類聚名義抄十鬼〕鬼　鬼鬼（俗今正、オニ）　䰟（古）　䰠（通二正、スダマ）　見魑（俗）　䰢（通二正、オニ）　𩲗（鬼名、オニ）

〔伊呂波字類抄於人倫〕鬼（居偉反、俗鬼）鬼　𧴎（音蟻、又音祈、吳人曰鬼、越人曰𧴎、鬼俗也）　魔（同巳上）

〔字鏡集十鬼〕鬼（ヲニ、同、カクレ、ヲニ）𧴎（ヲニ）

〔日本靈異記上〕得雷之憙令生子強力子緣第三

昔敏達天皇（是磐余譯語田宮御宇渟名倉太玉敷命也）御世、尾張國阿育知郡片蕝里、有一農夫、作田引水之時、小細雨降、故隱木本、捉金杖而立、時雷鳴、即恐驚擎金杖而立、即雷墮於彼人前、雷成小子而隨伏、汝何報、雷答言也、寄於汝令胎子而報、故我作楠船、入水泛竹葉而賜、即如雷言作備而與、時雷言莫近依令避、即靉霧登

天、然後所産兒之頭纏蛇二遶、首尾垂後而生、長大年十有餘頃、聞之朝庭有力人念試之、〈中略〉然後小子作於元興僧之童子、時其寺鐘堂童子夜別死、彼童子見白衆僧言、我捉此鬼殺、謹止此死災、衆僧聽許、童子鐘堂之四角燈儲、四人言敎我捉鬼時、俱開燈蓋覆、然於鐘堂戸童之鬼居、大鬼半夜所來、佇童子而見之退、鬼亦後夜時來入、即捉鬼頭髮而引、鬼者外引、童子者內引、彼儲四人慌來、燈蓋不得開、童子四角鬼引、而依開燈蓋、至于晨朝時、鬼之頭髮所引剝而逃、明日尋彼鬼之血而求往、至於其寺惡奴埋立衢、即知彼惡奴之靈鬼也、彼鬼頭髮者、今收元興寺為財也、

〔江談抄〈三雜事〉〕吉備入唐間事

吉備大臣〈○眞備〉入唐習道之間、諸道藝能、博達聰慧也、唐土人頗有恥氣、密相議云、我等不安事也、不可劣先普通事、日本國使到來、令登樓〈氏〉令居此事委不可令聞、又件樓宿人多是難存、然只先登樓可試之、偏殺〈左〉ハ不忠也、歸ハ又無由、留〈天〉居ハ為我等頗有耻ナント議〈天〉、令居樓之間、及深更風吹雨降、鬼物伺來、吉備作隱身之封、不見鬼〈天〉、吉備云、何物乎、我是日本國王使也、王事靡盬、鬼何伺ヤト云ニ鬼云、尤為悅、我モ日本國遣唐使也、欲言談承ト云ニ、吉備云樣、然バ早入レ、然バ停鬼形相可來也ト云ニ隨〈天〉、鬼歸入〈天〉著衣冠出來相謁、鬼先云、我是遣唐使也、我子孫安倍氏侍ヤ、此事欲聞、于今不叶也、我ハ大臣ニテ來テ侍シニ、被登此樓テ、不與食物シテ餓死也、其後鬼物ト成ル、登此樓人〈中略〉無害心イヘドモ、自然ニ得害如此、相逢欲問本朝事、不答シテ死也、逢申貴下所悅也、我子孫官位侍リヤ、吉備答、某人々々官位次第、子孫之樣、七八許令語聞、大感云、成悅聞此事尤極也、此恩ニ貴下ニ、此國事皆悉語申サント思也、吉備大感悅、尤大切也云々、天明鬼歸畢、〈中略〉然又鬼來云、今度有議事、爰高名智德行密法僧寶志〈和尚〉令課テ、鬼物若靈告人トテ令結界テ、文ヲ作テ貴下ニ讀セント云事アリ、力モ不及ト云ニ、吉備術盡テ居之間、如案下樓、於帝王前令讀其文、吉備目暗テ凡見此書字不見、向本朝方暫祈申本朝佛神〈神者住吉大明神、佛者長谷寺觀音〉也、目頗明ニシテ文字許見ニ、無可讀連樣ニ、蛛一俄落來

于文上天、イヲヒキワヽクルワミク讀了、〇中略我朝高名只在吉備大臣、文選圍碁、野馬臺、此大臣德
也、〇中略

野篁幷高藤卿遇百鬼夜行事

又云、野篁幷高藤卿、中納言中將之時、於朱雀門前遇百鬼夜行之時、高藤下自車、夜行鬼神等見高藤稱尊勝陀羅尼云々、高藤不知其夜中乳母縫尊勝陀羅尼之故也、野篁其時寧爲高藤致芳意、令遇鬼神云々、

〔大鏡 四右大臣師輔〕この九條殿〇中略は、百鬼夜行にもあはせ給へるは、何のほど云事はえうけ給はらず、いみじう夜更て、內より出させ給ふに、大宮よりみなみざまへおはしますに、あはの、つじのほどにて、御車のすだれうちたれさせ給ひて、御車うしもかきおろせ〳〵といそぎおほせらるれば、あやしとおもへどかきおろしつ、御隨身御前どもゝ、いかなる事のおはしますぞと、御車のもとにちかくまいりたれば、御したすだれうるはしくひきたれて、御さくとりてうつぶさせ給へるけしき、いみじき御人にかしこまり申させ給へる御さまにておはします、御車はしぢにかくな、たゞすゐまんどもは、ながえの左右にくびきのもとに、いとちかく候てさきをたかくをへ、ざうしきども、こえせさすな、御前どもゝ、ちかくあれとおほせられて、尊勝陀羅尼をいみじうよみたてまつらせ給ふ、うしをば御車のかくれのかたにひきたてさせ給へり、さて時中ばかりありてぞ、御すだれあげさせ給ひて、今は御うしかけてやれとおほせられけれど、つゆ御ともの人々は心もえざりけり、のち〳〵のしか〴〵のことのありしなど、さるべき人々にこそは、しのびてかたり申させ給ひけめど、さるめづらしき事はおのづからちり侍りけることにこそ、

〔宇治拾遺物語一〕いまはむかし、修行者のありけるが、津の國までいきたりけるに、日くれてりうせん寺とて、大なる寺のふりたるが、人もなきありけり、これは人やどらぬ所といへども、そのあ

たりに、またやどるべき所なかりければ、いかゞせんと思て、負うちおろして内に入てけり、不動の呪をとなへてゐたるに、夜中ばかりにや成ぬらんとおもふほどに、人々のこゑあまたしてくるをとすなり、みれば手ごとに火をともして、人百人ばかりこの堂のうちにきつどひたり、ちかくてみれば、目一つきたりなどさま〴〵なり、人にもあらず、あさましき物どもなりけり、あるひは角おひたり、頭もゑもいはず、おそろしげなる物どもなり、おそろしと思へども、すべきやうもなくてゐたれば、おの〳〵みなゐぬ、ひとりぞまた所もなくてゑゐずして、火をうちふりて、われをつら〳〵とみていふやう、我ゐるべき座にあたらしき不動尊こそゐ給たれ、こよひばかりは外におはせとて、片手してわれを引さげて、堂のえんの下にすへつ、さるほどに、あかつきに成ぬとて、この人々のゝしりてかへりぬ、まことにあさましくおそろしかりける所かな、とく夜のあけよかし、いなんとおもふに、からうじて夜あけたり、うちみまはしたれば、ありし寺もなし、はるばるとある野の來しかたも見えず、人のふみ分たる道も見えず、行べきかたもなければ、あさましと思てゐたるほどに、まれ〳〵馬にのりたる人どもの、人あまたぐして出來たり、いとうれしくてこゝはいづくとか申候ととへば、などかくはとひ給ぞ、肥前國ぞかしといへば、あさましきわざかなとおもひて、事のやうくはしくいへば、この馬なる人もいとけうの事かな、肥前國にとりてもこれはおくの郡なり、これはみたちへまゐるなりといへば、修行者よろこびて道もしり候はぬに、さらば道までもまゐらんといひていきければ、これより京へ行べきみちなどをしへければ、舟たづねて京へのぼりにけり、さて人どもにかゝるあさましきことこそありしか、つの國のりうせんじといふ寺にやどりたりしを、鬼どものき所せばしとて、あたらしき不動尊しばし雨だりにおはしませといひて、かきいだきて雨だりについすゆとおもひしに、ひぜんの國のおくの郡にこそゐたりしか、かゝるあさましき事にこそあひたりしかとて、京にきて語けると

生靈死靈

ぞ、

〔今昔物語三十一〕兄弟二人殖萱草紫苑語第二十七

今昔[　]ノ國[　]ノ郡ニ住ム人有ケリ、男子二人有ケルガ、其ノ父失ニケレバ、其二人ノ子共戀ヒ悲ブ事、年ヲ經レドモ忘ルヽ事无カリケリ、○中略此樣ニ年月ヲ經テ行ケル程ニ、墓ノ内ニ音有テ云ク、我レハ汝ガ祖ノ骸ヲ守ル鬼也、汝ヂ怖ルヽ事无カレ、我レ亦汝ヲ守ラムト思フト、弟此ノ音ヲ聞クニ、極テ怖シト思ヒ乍ラ答ヘモ不爲テ聞居タルニ、鬼亦云ク、汝ヂ祖ヲ戀ル事、年月ヲ送ルト云ヘドモ替ル事无シ、兄ハ同ク戀ヒ悲テ見エシカドモ、思ヒ忘ルヽ草ヲ殖テ、其レヲ見テ、既ニ其ノ驗ヲ得タリ、汝ハ亦紫苑ヲ殖テ亦其レヲ見テ其驗ヲ得タリ、然レバ我レ祖ヲ戀フル志ノ難ナル事ヲ哀ブ、我レ鬼ノ身ヲ得タリト云ヘドモ、慈悲有ルニ依テ物ヲ哀ブ心深シ、○下略

〔今昔物語二十四〕安倍晴明隨忠行習道語第十六

今昔、天文博士安倍晴明ト云陰陽師有ケリ、古ニモ不恥ヂ止事无リケル者也、幼ノ時、賀茂忠行ト云ケル陰陽師ニ隨テ、晝夜ニ此道ヲ習ケルニ、聊モ心モト无キ事无カリケル、而ルニ晴明若カリケル時、師ノ忠行ガ下渡ニ夜行ニ行ケル共ニ歩ニシテ車ノ後ニ行ケル、忠行車ノ内ニシテ吉ク寢入ニケルニ、晴明見ケルニ、艶ズ怖キ鬼共車ノ前ニ向テ來ケリ、晴明此ヲ見テ驚テ、車ノ後ニ走リ寄テ、忠行ヲ起シテ告ケレバ、其時ニゾ忠行驚キ覺テ鬼ノ來ルヲ見テ、術法ヲ以テ、忽ニ我ガ身ヲモ恐レ无ク、共ノ者共ヲモ隱シ平カニ過ニケル、○下略

〔伊呂波字類抄伊人倫〕窮鬼イキスダマ　生靈同

〔倭訓栞前編三伊〕いきすだま　遊仙窟に窮鬼をよめり、不終天年死者を窮鬼といふ、いきは生也、すだまは魑魅の訓也、されば怨靈なるべし、

〔源氏物語九葵〕この御かへりをみづから聞えさせぬなどあり、大殿には、御もの丶けいたくをこり

て、いみじうわづらひ給、この御いきすだま、こちゝおとゞの御靈などいふ物ありと聞給につけて、おぼしつゞくれば、身ひとつのうきなげきよりほかに、人をあしかれなど思ふ心もなけれど、物思ふにあくがるなるたましゐは、さもやあらんとおぼしゑらるゝこともあり、

〔謠曲葵上〕大臣詞是は朱雀院につかへ奉る臣下也、扨も左大臣の御息女葵上の御物のけ、以外に御座候程に、貴僧高僧を請じ申され、大法秘法醫療樣々の御事にて候へ共、更に其驗なし、ここに照日の神子とて、隱なき梓の上手の候を召て、生靈死靈の間を、あづさにかけさせ申せとの御事にて候程に、此由申付ばやと存候、やがてあづさに御かけ候へ、

〔闇の曙上〕或人、生靈死靈の說を問ふ、予〇新井白蛾答ふ、是もいろ〳〵有、口を糊せんが爲に、虛妄なる、誑惑をいふて、金錢を貪りかすむる者も有、又生得愚鈍不才にて、正理をゑらず、をしへを聞ても、心底に通せず、己れが心より招き求めて、煩ふもあり、又は文盲白痴ゆゑ、狐狸につまゝるゝも有て、一樣ならず、理明らかなる人は、はやく其趣を知べき事也、爰に物語り有、謠のやうなれども、語て聞せ申候べし、或豪家へ出入する山伏の樣なる事をいふもの有、此者好て生靈死靈をいふて、愚人女子の心を惑はす、此等は人道を失ふて、妖怪の奴となりたるもの也、扨右豪家の主人、妾宅を作る、本妻聞て、妬情甚しとなん、田舍の門人何某、ゑか〳〵の事を語る、予が曰、今の世に生れて、いにしへのごとく、夜半にや君が獨り行らんなどと吟じて居る人はなき筈の事なれば、さも有べし、

〔續日本紀十六聖武〕天平十八年六月己亥、僧玄昉死、〇中略世相傳云、爲藤原廣嗣靈所害、

〔今昔物語十一〕玄昉僧正亘唐傳法相語第六

廣繼、惡靈ト成テ、且公ヲ恨ミ奉リ、且ハ玄昉ガ怨ヲ報セムト爲ルニ、彼ノ玄昉ノ前ニ、惡靈現ジタリ、〇中略天皇極ク恐サセ給テ、吉備大臣ハ、廣繼ガ師也、速ニ彼ノ墓ニ行テ、誘へ可挘キ也ト仰セ給

ケレバ、吉備宜旨ヲ奉、西ニ行テ、廣繼ガ墓ニシテ誘ヘ陳ジケルニ、其ノ靈シテ、吉備殆シク可被領カリケルヲ、吉備、陰陽ノ道ニ極タリケル人ニテ、陰陽ノ術ヲ以テ、我ガ身ヲ怖レ无ク固メテ、懃ニ慨誘ケレバ、其靈止マリニケリ、

〔續日本後紀 九 仁明〕承和七年五月辛巳、後太上天皇〈淳和〉顧命皇太子曰、〈中略〉重命曰、予聞人没精魂歸天、而空存冢墓、鬼物憑焉、終乃爲祟、長貽後累、今宜碎骨爲粉散之山中、

〔古事談 二 臣節〕一條攝政〈伊尹〉與朝成卿共競望參議之時、〈天曆〉多陳伊尹不中用之由、其後朝成、參一條攝政第、爲望中大納言闕也、丞相良久不相逢、數剋之後適以面謁、朝成立申任大納言條々之理、丞相無所答、而云、率公之道尤可謂有興、昔競望閑官時、多嚴被訴訟、今度大納言事可在予心云々、朝成懷恥成怒退出、乘車之時、先投入笏、其笏自中央破裂、其後攝政受病遂薨逝、是朝成生靈云々、

〔榮花物語 十二 玉村菊〕大將殿〈賴通〉日頃御心ちなやましくおぼさる、御風などにやとて、御ゆゆでさせ給はをきこしめし、御讀經の僧ども、番かゝずつかうまつるべくの給はせ、明算阿闍梨、夜ごとによゐつかふまつりなどするに、さらに御心ちおこたらせ給さまならず、いとゞおもらせ給、みつよし、よしひらなどめして、物とはせ給、御物のけや、かしこき神のけや、人の呪詛など、さまざまに申せば、神のけとあらば、御修法などあるべきにあらず、又御物のけとあるも、まかせたらんもおそろしなど、かた〳〵おぼしみだるゝに、たゞ御まつり祓しきり也、〈中略〉僧達、皆しめりて候、大將殿には、御ゆなどまいらせ給て、うへのおまへ、たゞちごのやうにいだきたてまつらせたまへり、いみじうおぼしめしたる事かぎりなし、御ものゝけ、とのちかくよらせ給へと申せば、よらせ給へれば、をのれは、よに侍しに、いとしれたりなどは、人おぼえずなん侍し、又あは〳〵しく人中に出きてきこゆるに、いとめづらしくあることなれど、此かなしさは、おとゞもしりたまへればなむ、この大將を、そのが世に侍しおり、心ざしありて、いかでなど思ひ給へしかど、いのちたえ

て、かくてはべるにこそあれど、あまがけりても、このわたりを、片時さりはべらず、いとつみふかからぬ身に侍れば、なにごとも、みな見きゝてなんはべるを、此大將を、やむ事なきあたりにめしいれられぬべくおぼしかまふめるを、ひごろやすからぬ事と思ひ侍れど、さはれ、たゞまかせきこえて見んとおもひ侍に、いとやすからぬことにおぼえて、みづから聞えんとばかり思ひしに、いとをしく、此君のかくおどろ〳〵しくものしたまへば、いと心ぐるしくてなむ、かくきこゆるとの給はするは、故中務宮〇具平親王の御けはひなりけりと、心えさせ給つ、との〇頼通父道長かしこまり申させ給て、すべて返々ことはりに侍れば、かしこまり申侍、されどこれは、このおのこのおこたりにも侍らず、又みづからのする事にも侍らず、そのづから侍こと也と申させ給へば、いかに、さはこはかなしくおぼすやと、せめてたび〳〵申させ給、この事を、ながくおぼしたらねどなるべし、殿の御まへに御覽せよ、げにさる事侍らばと、ことはりのよし、たび〳〵申させたまへば、さは今は心やすくまかりなん、さりとも、そらごとはおとゞし給はじとなむおもひ侍、もしさらば、うらみ申ばかりとて、さりぬべき法文のあはれなる處うち誦しなどし給、まことに、たがふ處なくて、しばしうちねてさめぬ、名ごりもなく、御心ちさはやかにならせ給ぬれば、〇下略

〔愚管抄〕六後京極殿〇藤原良經は、〇中略三月〇元久三年七日、やうもなりぬ死にせられたり、〇中略このをうふしにさし合せ、怨靈も力をえけんとおぼゆるになん、その御修法はこゝに叡感有て、勸賞などおこなはれにけり、〇中略猶法性寺殿〇藤原忠通のするにかゝりける事の人のいでくるを、知足院殿〇忠通父忠實の惡靈のしつるぞとこそは人は思へりけれ、

讖緯 革令 革命 革運

古事類苑

方技部二

陰陽道中

〔和漢名數續編曆日〕三革 甲子年爲革令、 戊辰年爲革運、 辛酉年爲革命、(易緯)

〔革命勘文〕詩緯、以十周三百六十年爲大變、易緯以四六二六爲大變、二說雖異、年數亦同、今依緯說勘合倭漢舊記、神倭磐余彥天皇、從筑紫日向宮、親帥船師東征、誅滅諸賊、初營帝宅於畝火山東南地橿原宮、辛酉春正月即位、是爲元年、(於周僖王三年、齊桓公始霸、王會諸侯於鄄、事見史記矣、) 四年甲子春二月詔曰、諸虜已平、海內無事、可以郊祀、即立靈畤於鳥見山中、其處號田上小野榛原下小野榛原云、(是年周惠王即位元年、齊桓公帥諸侯侵蔡、蔡潰、遂伐楚、于召陵、責包茅之貢、是則伯者第一之會也、)

議按日本紀、神武天皇此本朝人皇之首也、然則此辛酉可爲革命之首、又本朝立時下詔之初、又在同天皇四年甲子之年、宜爲革令之證也、

四六(自神武天皇辛酉、至孝昭天皇五十六年辛酉、二百四十一年也、)

孝昭天皇五十六年辛酉、日本紀闕、(當周公元)革運辛酉革命甲子、革政注云、天道三十六歲而周也、十周名曰王命、大節、一冬一夏凡三百六十歲而一畢、無有餘節、三推終則復、始更定綱紀、必有聖人改世統理者、如此十周名曰大剛、則乃三基會聚、乃至神明、神明乃聖人、改世者也、周文王戊午年決虞芮訟、辛酉年青龍銜圖出河、甲子年赤雀銜丹書、而聖武伐紂、戊午日軍渡孟津、辛酉日作泰誓、甲子日入商郊、

謹按、易緯以辛酉爲蔀首、詩緯以戊午爲蔀首、依主上以戊午年爲昌泰元年、其年又有朔旦冬至、故論者或以爲應以戊午爲受命之年、然而本朝自神武天皇以來、皆以辛酉爲一蔀大變之首、此事在未出之前、天道自然符契、然則雖有兩說、猶可易緯也、又、

延喜元年 辛酉 革命沙汰始於此時、

文章博士清行朝臣奏狀三通內、二通請改元狀 同人奉菅丞相狀一通、

〔易緯乾鑿度下〕歷以三百六十五日四分度之一爲一歲、易以三百六十析當期之日、此律歷數也、五歲再閏、故再扐而後卦、以應律歷之數、略○註 故乾坤氣合戊亥、音受二子之節陽、生秀白之州、載鍾名太乙之精也、其帝一世、紀錄事明期、推移不奪而消焉、略○註 元歷無名、推先紀曰甲寅、略○註 求卦主歲術曰、常以太歲紀歲、七十六爲一紀、二十紀爲一部首、卽積置部首歲數、加所入紀歲數、以三十二除之、餘不足者、以乾坤始數二卦而得一歲末算、卽主歲之卦、部或作蔀(中略)卽置一歲積日法二十九日與八十一分日四十二除之、得一命日、月得積月十二與十九分月之七、一歲、略○註 以七十六乘之、得積月九百四十、積日二萬七千七百五十九、此一紀也、以二十乘之、得積歲千五百二十、積月萬八千八百、積日五十五萬五千一百八十、此一部首、此法、三部首而一元、一元而太歲復於甲寅、 更置一紀、以六十四乘之、得積日百七十七萬六千五百七十六、略○註 又以六十乘之、得積部首百九十二、得積紀三千八百四十紀、略○註 得積歲二十九萬一千八百四十、以三十二除之、得九千一百二十周、此謂卦、當歲者得積月三百六十萬九千六百月、其十萬七千五百二十月者閏也、卽三百八十四爻除之、得九千四百日之二十周、此謂爻、當月者、得積日萬六百五十九萬四千五百六十八萬一千五百二十析、除之得九千二百五十三周、此謂析、當日者而易一大周律歷相得焉、略○註 今入天元二百七十五萬九千二百八十歲、昌以西伯受命受洛書命爲天子也入戊午部、二十九年伐崇侯、作靈臺、改正朔、布王號於天下、受錄應河圖、

〔本朝文粹七書〕奉菅右相府書　善相公

清行頓首謹言、交淺語深者妄也、居今語來者聖也、妄聖之責、誠所甘心、伏冀尊閤特降寬容、某昔遊學之次、偸習術數、天道革命之運、君臣剋賊之期、緯候之家、創論於前、開元之經、詳說於下、推其年紀、猶如指掌、既乃尊閤所照、愚儒何言、但離朱之明、不能覩睫上之塵、仲尼之智、不能知篋中之物、聊以管穴、伏[illegible]、伏見明年辛酉、運當變革、二月建卯、將動干戈、遭凶衝禍、雖未知誰、是引弩射市、亦當中薄命、天數由微、縱[illegible]推察、人間云爲、誠足知亮、伏惟尊閤挺自翰林、超昇槐位、朝之寵榮、道之光花、吉備公外無復與美、伏冀知其止足、察其榮分、擅風情於煙霞、藏山智於丘壑、後生仰視不亦美乎、努力努力、勿忽鄙言、某頓首謹言、

昌泰三年十月十一日　　文章博士三善朝臣清行

(日本新國史十二[illegible])[illegible]○[illegible]昌泰三年庚申七月、彗星當七星之柄、文章博士三善清行密覽天妖彗星、當星柄者、知有賢臣之災、案之明歲辛酉之支幹、而天道革命之運也、清行與菅大臣○道眞爲良友同志之契、故投簡云、彗星當斗柄近革命之運、鴻宰知之否、可知不知之、臨運之基也、菅家登庸之例、以鴻宰爲最、宜表去、天文密學之幸、爲良友之益、於今知之、終有延喜之時左遷之災、

(本朝世紀)康治二年九月廿六日己卯、左大臣○源有仁召權少外記清原重憲、仰曰、明年甲子當革命否、宜仰明經紀傳算曆等道、可令勘申者、

(革曆勘文三)勘申　明年辛酉當革命否事

易說曰、辛酉爲革命、甲子爲革令、鄭玄曰、天道不遠、三五變六甲、爲一元、四六二六交相乘、七元有三變、三七相乘、二十一之爲一蔀、合千三百二十年云々、

就此說案其意、參議清行朝臣、延喜元年勘文、以本朝神武天皇元年辛酉爲一蔀、孝昭天皇六年庚申爲一蔀、終合千三百二十年、以此次年同天皇七年辛酉爲第二蔀首、次以延喜元年辛酉爲第二蔀初之四六、中間二百四十年、此間有菅丞相事、以前徵應皆見彼勘文、仍不重註進、仰彼清行朝臣

勘文、或以一六為二六、或以三六為四六、亦以三六為二六、亦以二六為四六、是則協卦體進退年數之故也、此後應和元年辛酉當第二蔀內第一之二六、中間六十年也、此歲有內裏火事、疫病猶繁、彗星見天、次永治元年辛酉當第三蔀內第三之四六、中間百八十年也、此歲崇德上皇遜位事、此後今年辛酉歷百有二十年、當第二蔀內第四之二六、粗見先哲勘狀多、次黃帝十九年辛酉、為革命之元始、其後四六者皆用二百四十年、二六者悉計二十年紀、又或用王肇說、或口靈寶曆、清行朝臣勘奏、有難者可遮其難、有義者可端其義、依不覺先儒之意、猥似背先儒之說、彼朝臣躬奉聖廟之訓說、而告聖廟之咎徵、符應指掌殆似通神、何況應和元年辛酉沙汰之時、四六之後、中間年雖非二六之年數、革命之由被載聖詔乎、三十三裕不可不從、而建仁元年辛酉群議之時、良業勘文不遮年記長短、猥稱通清行秘說之由、有其難、倩覦彼良業之勘文、全摸萬壽元年明經道勘文、彼勘文云、述而不作、信而好古、前賢所立既協卦體云々、而後協卦體之義、無是非之辭、有張稱之責、因茲良業陳狀云、不遮年記長短、未曉口候玄妙云々、知而不申歟、誠亦不知歟、古人之心末愚叵測、〇中略但猶於易說者、以清行朝臣說仰可信歟、仍今年辛酉可曰當革命大變矣、〇中略

右去年十二月十七日宣旨偁、左大臣宣奉勅、明年辛酉當革命否、宜仰明經道令勘申者、仰守綸綍之旨、使考經緯之義、〇中略方今皇帝陛下〇龜山得一繼明兮幾許年、革故之理冥於自然、通三撫運兮未積曆、鼎新之義比焉、合應不導、誰之順乎天而馭世、口口不導、誰之應乎人而乘時、須建卯之日改元號、猶以易蒼生之聽、施新令以應玄象之心、然則與物更新、於世革故者歟、仍勘申如件、

文應二年二月二日、正五位下行直講清原眞人敎隆

〔革命勘文三〕中納言藤原朝臣忠高　左大辨藤原朝臣等定申云、自黃帝不當、自神武相當之由、諸道各勘申之、今按革命令之源、出自詩易、曆紀革之說緯起、從隆家、何背彼年紀、雖須計異朝之歷變革之當否、昌泰以來、以清行之勘文、為本朝之濫觴、是又用來尚矣、凡就隆家之上元者、雖不當大變之運、依神

武之初首者、已當革命之期歟、歟改換之義、早改號令、可施德政、此上事任外記勘申、可被計行、

〔禁秘御抄 下〕御新○中略

辛。酉。年。金門鳥敏、五大道宮識也

〔革命 六〕記傳 辨申

今年辛酉當革命。否勘申內二箇條事○中略

一岡宜實偶偏以庚戌之歲、可論變厄之運歟、

革命與革卦相配、同異容易難決申也、古來以戊午革運、辛酉革命、甲子革政之說、勘申巡年之當否歟、但革卦之時變誠君子所慎也、今度試件將紀經說、爲祝將數之無驗、旁勘奏巡年之不當革卦焉、豈及沙汰弗遑筆墨、彼卦所慎者、金火合體、上下剋賊、金及辛酉皆西方之應位也、宜就辛酉論變革之當否、仍革象雖可疑、庚戌之配當不可及運厄之論歟、楊萬里曰、易者變易也、不易也、簡易也、依之思之、四正卦配六十年、其餘雜卦亦配六十年、古來周環無端、是不易也、抑亦天元甲寅、伏羲命起以來、距今年辛酉積二百七十六万一千八百八年、其間合四時、卦五等、雜卦總六十四卦、以之次第配當六十年者、威可行辛酉、而革卦之合年是亦反易也、易則易知、簡則易從、不用智而生物者乾也、不勞力而成物者坤也、不專術數緯候而察變知時者聖人之德也、可謂簡易焉、大凡三數經書、曆、卜、算、曆、多有師說秘訣、其中或就本經、雖推原文證、幽奧難覈、或隱諱祕而不說、或口傳之後自勘例證、或全不知來處、或示後晃自解等事、傍例非一、易經特有家々口傳歟、卽此帝王運數命期算術、古來推究本經、以繫辭原始反終、故知死生之說之文、爲本據歟、算術之支證猶是彷彿微妙也、占行之術數雖似狂誕、雖究本據、近來朱文公異贊云、上無所傳、下無所授、然則無傳而已、傳雖無據授、其道不可泯歟、唯無其人而已、何況已有師說哉、所條必非秘說、且可在鄭焦兩家之書林歟、所謂緯四部不言之蘊、爲千古不傳之秘便、曰一卦各具六十四卦、凡四千九十六卦、與焦贛易林合、然其條理精審、則有先儒所未發者歟、先々勘文、度

庚申年

度奏言、睽未盡若斯之煩辭、以便于革卦、不記今年之勤事、何勞(勢カ)師記於故革、爲銘帝祚於新鼎者也、
右二箇條宣旨、辨申如件、
永德元年四月廿三日、從四位上行少納言兼侍從文章博士菅原朝臣淳嗣、
正四位下行大學頭兼少納言侍從文章博士菅原朝臣秀長
〔元長卿記〕明應十年(〇文龜元年)二月二十一日、今日四六二六之術數得一義、可悅々々、蔀首了、蔀ニ付テ可覺悟事也、陽爻陰爻不可遁於蔀之所有子細、年數之樣、愚案之趣、詣前左府亭可校合者也、廿二日、先是時元宿禰在此亭習此術數歟、
〔公卿補任(光格)〕寛政十二年十一月廿七日、明年辛酉革命、諸道勘文外記勘例等奏聞、上卿左大臣(〇九條治孝)於里亭被行之、奉行賴壽朝臣、
〔紫芝園漫筆(八)〕余生延寶八年庚申、明年辛酉改元天和、其四年甲子改元貞享、貞享之後五改元、曰元祿、寶永、正德、享保、元文也、元文之六年辛酉、又改元寛保、其四年甲子又改元延享、聞之曰、日本博士家謂辛酉年爲革命、甲子年爲革令、皆必改元、自前世如是、
〔續日本紀(八元正)〕養老五年二月甲午、詔曰、世諺云、歲在申年、常有事故、此如所言、去庚申年、咎徵屢見、水旱並臻、平民流沒、秋稼不登、國家騷然、萬姓苦勞、遂則朝庭儀表、藤原大臣奄焉薨逝、朕心哀慟、今亦去年災異之餘、延及今歲、亦猶風雲氣色有違于常、朕心恐懼、日夜不休、然聞之舊典、王者政令不便事、天地譴責、以示咎徵、或有不善、則致之異、于今臣等位高任大、豈得不罄忠情乎、故有政令不便事、悉陳无諱、直言盡意、无有所隱、朕將親覽、於是公卿等奉勅詔、退各仰屬司、令言意見、
〔革暦勘文(四)〕革暦類(〇中略)
治安元年例
寛仁四年(前年)十月十三日庚寅、令大法師仁統勘申明年辛酉革命當否、十一月十一日戊午被立當

三合尾

佐使（伸例使也）宜命辭別云、今明年（者）公家重（久）可愼給（支）內（仁）、世跡（仁）庚申、辛酉（乃）年（波）、天下不靜（止須）、從古傳來（留）、因故（天）、愼御座（須）間（仁）、種々（仁）其徵有（利）、如此之事（乎）懷退（介牟）事（波）、大菩薩廣御惠厚御助（乃）可依（今時止）、（云云）、同五年（辛酉）正月、仰紀傳明經陰陽曆道等、令勘申今年辛酉當革命否之由、二月二日丁未、左大臣以下諸卿參著仗座、被定申諸道勘申今年辛酉當革命否事、又被定改元事、奏年號字之次奏聞云、諸書先々雖當革命之由、而此度諸道或申當之由、或申不當之由、爲之如何、仰云、年號字可用治安、又諸道所申各異也、辛酉事依可愼有改元之由可載詔書也、又依應和元年例可有免者、於革命者不可載者、則改寛仁五年爲治安元年、詔文云、歲當辛酉、古來之風可愼云々、令賑給同應和例、

〔續日本紀 二十一 淳仁〕天平寶字二年八月丁巳、勅、大史奏云、案九宮經、來年己亥、當會三合、其經云、三合之歲、有水旱疾疫之災、如聞、摩訶般若波羅蜜多者、是諸佛之母也、四句偈等受持讀誦、得福德聚不可思量、是以天子念則兵革災害不入國裏、庶人念則疾疫癘鬼不入家中、斷惡獲祥莫過於此、宜告天下諸國、莫論男女老少、起坐行步口閑、皆盡念誦摩訶般若波羅蜜、其文武百官人等向朝赴司、道路之上每日常念、勿空往來、庶使風雨隨時、咸無水旱之厄、寒溫調氣、悉免疾疫之災、普告遐邇、知朕意焉、

〔通俗編 二十一 國制〕三合 齋東野語、淳熙中、孝宗、及皇太子朝上皇于德壽宮、周益公詩、一丁扶火德、三合鞏皇基、蓋高宗生于丁亥、孝宗生丁未、光宗生于丁卯故也、陰陽家以亥卯未爲三合、用事可謂切當、月令廣義、如子月逢子年或申辰年、皆爲一氣、宜配申子辰日、謂之三合年月日、

〔三代實錄 二十三 淸和〕貞觀十五年（癸巳）二月廿三日戊午、陰陽寮言、今玆天行應愼、稼穡不登、以歲當三合也、詔五畿內七道諸國、班幣境內名神、幷於國分及諸定額寺、限以三日、晝則轉經、夜則禮懺、熏修之間、禁斷殺生、國司諸師齋潔、至誠祈佛神之冥助、消災疫於未然焉、

〔三代實錄 二十七 淸和〕貞觀十七年十一月十五日甲午、陰陽寮言、黃帝九宮經蕭吉九宮篇云、承天之道、因人之情、上占三元、下用五行、三神相合、名曰三合、所謂三神者、大歲、害氣、太陰是也、今自上元己亥、至本

朝貞觀十八年丙申、積年四千九百一十八年也、以三元百八十除之、今中元之末、河元之內也、三合之運、當在明年、經曰、毒氣流行、水旱接、並苗稼傷殘、災火爲殃、寇盜大起、兵喪疾疫競並起、實是雖當五行之理運、而彌災之術既在祈禱、夫禍福之應、譬猶影響、吉凶之變、愼與不愼也、當此時、人君修德、施行仁自然銷災致福、去天平寶字三年己亥歲、當三合理運、是則三元大終、而五德復始之年矣、上元之三合、初在斯歲、由是有司上奏、詔頒下天下、令讀般若心經、既免其災、卽是本朝之殷鑒也、 十二月十三日壬戌、勅令五畿七道諸國奉幣境內名神、及國分二寺諸定額寺、屈僧七口、限以三日、晝轉金剛般若經、夜念藥師觀音號、明年當三合、豫攘除水旱疾疫兵喪火災、

〔後二條關白記〕寬治六年〇壬申二月廿四日丁丑、召石淸水使給之如常、上達部一々給了、外記參申云、祇園使稱穢所勞、候待賢門下、給宣命出一々給之、一町許程上卿退出、於兩儀忌部中臣等立所可尋云々、

宣命記裏書〇中略
辭別天申給久波、今年波、公家可有御愼加上仁、曆運之所推呂、已當三合天、種々乃厄難可發由乎、有司上奏せり、其乃咎徵不輕須と聞食天、畏懼大坐之天、殊凝叡誠給天、令致祈請給布、大神此旨乎聞食天、件等乃不祥厄會乎、未兆之前仁、早仁拂退給天、玉體安穩仁、黔首歡樂仁、護幸給へと、恐美恐美毛申給と波久申、

寬治六年二月廿四日、作者大內記在良、

〔吉記〕治承五年〇養和元年五月十九日甲午、今日被立廿二社奉幣使、蓋是明年〇壬寅三合御祈歟、兵亂事同被申云々、

〔玉海〕建久二年〇辛亥正月十五日甲子、以賴定奏條々事、親經申役夫工米辭退事、〇註略三合御祈事、

〔吾妻鏡十一〕建久二年五月三日庚戌、被付奏書於高三位、泰經卿善信草之、俊兼淸書也、申剋雜色成重

歸之上洛、其狀云、○中略

捧一通奏狀、令達天聽者、有理非哉、許何拘乎、委細之旨不遑筆端、就中今年相當三合之曆運、可愼

懷哭祈請之處、以小成大、與心事、乖御自吾山致騷動之條、若是僧徒小德行、將又因果之所致歟、凡

可謂逆徒矣、○中略

建久二年五月三日　　頼朝

進上　高三位殿

〔吾妻鏡脱漏〕嘉祿三年○安貞元年丁亥二月八日戊子、今年相當中終三合之上、日來天地變異重疊云云、依

爲年始、而天文道各不申子細、今日云彼云是捧勘文、後藤左衛門尉基綱傳達之、進士判官代隆邦於

御前讀申云云、

〔梅園日記二〕當梁年

結毦錄云、百練抄ニ梁年ノ字アリ、何ナルコト知レ難シ、某人道公隋書ヲ閲シ玉フニ、梁年ハ酉年

ナリト有ル由、或人云、東方蒼龍箕星、一名梁星ト云、本邦ノ故事ニ、歲酉ニアレバ、宮室ヲ營造セズ

トナリ、○中略按するに、正史の隋書中に、梁年は酉なるよしをいはず、隋の書といふことにや、隋人

蕭吉が五行大義に、右白虎大梁之文とあり、右白虎は西方にて酉なり、但百練抄の文を、梁年に當

るとよみしは非也、當梁年とよむべし、さて當梁年は、なべての酉にはあらず、己酉也、百練抄なるもみな己酉

なり、又己酉のみにもあらず、戊子、己卯、戊午も當梁なり、其事は日法雜書云、犯土、造作凶事、戊子、己卯、

戊午、己酉名當梁、餘子、午、卯、酉、無忌、凡天地梁柱及當梁年、忌正堂正寢上梁竪柱、餘屋舍無忌、出新撰陰陽書とある

にて明らか也、

〔百練抄五後三條〕延久元年○己酉二月十日、依當梁年、今年不可作内裏之由被定之、諸道勘申、

〔左經記〕長元元年○戊辰七月十九日壬子、大外記頼隆眞人、令余○源經頼申關白殿○藤原頼通云、近來高陽院

殿寢殿東妻二間可令續給之由云々、若實者早可申留也、小南殿寢殿去六月被立之由云々、同留作造可被行解謝法之由可申也、其故者、今年當梁年也、子午爲地梁、河魁天罡爲天梁、功曹爲大歲之元、使以功曹加大歲、河魁天罡臨地、子午是爲天梁、加地梁、名曰當梁之歲、代位天門地戸、庚屬子、戊辰戊戌名天梁之歲、庚辰庚戌爲地梁之歲、凡當梁歲、正寢正堂上梁竪柱、不利家長、多凶少福、財賄耗散、家□□官云々、元慶二年戊戌之歲四月廿五日竪大極殿柱、(不見上棟之由)今案、此殿元慶三年十月造畢、(元年造始)云々、此年淳和太后崩、同四月清和太上皇崩、帝又諒闇也、元慶帝遂不臨幸、同八年讓位於小松帝、(不立皇太子、陽成帝運盡於今日、是不利家長也、)其後寛平年中、陽成母后被廢、(家□官歟、)□案、大極殿體非寢非堂、所謂厝作也、(諸寺金堂皆厝作也、所課人於塔厝云々、或書云、厝之言貌也、)寛弘七年庚戌二月廿七日始作一條院、同八年六月有事、(不注子細)云々、後召主計頭守道陰陽頭文高等被問此旨等、共申云、當梁年不可立寢屋之由、雖出曆林、陰陽家不忌□多立寢屋云々、仰云、可申不忌例者、則申云、元慶二年戊戌年立大極殿者、仰云、大極殿如頼隆申者非寢屋、可申臣下作寢屋之例者、追令申可勘申之由云々、頼隆又申云、今年鎭星直月六月也、而以南殿寢殿六月造立云々、鎭星直月犯之作造者、爲雷被死云々、是又重忌也云々、後日有定、被停小南殿幷高陽院殿寢殿等作事已畢云々、

〔本朝世紀〕久安四年閏六月十五日辛未、先是權天文博士安倍晴道奏曰、撿群忌隆集文云、戊辰年名地梁、又新撰陰陽書曰、凡天地梁柱及當梁年、忌正堂正寢上梁竪柱云々、仍去九日下宣旨諸道、令勘此事、紀傳(文章博士藤原永範朝臣、)明經、(主計頭中原師安朝臣、)陰陽道(頭賀茂守憲朝臣、權助同憲榮朝臣、權天文博士、安倍晴道朝臣、)勘申旨區分、又内々被問永範朝臣幷師安云、以土御門皇居可謂正堂正寢哉如何、師安勘申云、以大極殿可爲正堂、以小安殿可爲正寢、内大臣(○藤原頼長)難云、以大極殿不可稱正堂云々、攝政(○藤原忠通)被定申云、當梁年可忌之由多見書籍、何强可有造宮事哉、至于堂寢者重可被尋歟、又八々被申云、於攝政東三條第可有御元服、當時洛中其外無可然舍屋云々、　十八日甲戌、是日、藏人木工頭平範家、依攝政仰、以書狀問人々云、當梁年造宮之例、幷以土御門内裏可爲正堂哉如何、文章博士永範朝臣、同茂明朝臣、助教清原眞

月宮四

人定安、入道少納言藤原朝臣通憲等、依仰勘申子細、抑通憲非儒士、又非公卿、今關朝議、依稽古之力歟、但百官五位以上有上封事例、可相准歟、　二十九日乙酉、又造宮事、依當梁年、無其沙汰、法皇(鳥〇羽)仰云、治暦五年依當梁年、令諸道勘申、不被上大極殿棟云々、見後三條院御記、仍一向無其沙汰、可謂明鏡歟、

〔百練抄十六後深草〕建長元年〇己酉三月十九日辛卯、當梁年、內裏造宮事被問諸道云々、　八月四日壬寅、諸道勘申、當梁年、造內裏事定也、諸卿參被行云々、

〔小右記〕長和三年三月六日辛卯、今日卯時、重寢屋檜皮、光榮朝臣勘之、大歲在寅、二月鎮星直月、三月八日天一天上、四月北辰直月、五月忌之、六月熒惑星直月、七月九日天一天上、八月鎮星直月、九月忌之、十月大白星直月、十一月十一日天一天上、十二月歲星直月、(二月三日勘文、仍不注正事歟、)今案、五星所在、日月起正、重屋重所忌避也、又天一天上之間重屋、同所忌也、然則今年被重寢殿、迫日有件等忌也、三月六日辛卯時卯被初重、

〔山槐記〕治承四年二月十五日丁酉

禁忌月壞門立門事

右二八月、本文云、刑德陰陽俱合門戶、故凶、三月節以後、伏龍在門、百日犯之凶、夏三月之間、土公在門、犯之凶、仍件月壞門立門例不覺悟候也、爲之如何、抑見參之時、如令申候、長元年中四月、修補陽明門、延暦弘仁貞觀被修補諸門云々、保安四年癸卯卽位之時、被修補陽明待賢門了、不被准據壞門立門之例候歟、近則法勝寺諸門、三月貴殿打金物云々、又保元年中、白河千體阿彌陀堂四足四月造立之、雖然於佛事者、不可准人門之由沙汰切了、又堀川院北門、二條殿東門、正月立柱、三月以後被造之、禁忌沙汰出來、其卽被壞棄了云々、不經數日、因之案、三月以後壞門立門之事、一切不可候之由、所令存候也、加之、先達皆可憚之由所勘申也、言上如件、

二月十二日　　陰陽頭賀茂在憲

禁忌月被立門例

村上天皇　應和元年二月十六日庚辰、立內裏殿舍幷諸門、

一條院　長保二年三月廿六日癸卯、立內裏殿舍幷諸門、　寬弘三年三月十日壬子、立內裏殿舍幷諸門、

後一條院　寬仁元年二月廿二日庚寅、立內裏殿舍幷諸門、

後朱雀院　長久二年二月十一日庚寅、立內裏殿舍幷諸門、

後冷泉院　天喜二年四月十一日甲辰、立內裏殿舍幷諸門、

後三條院　延久三年三月五日庚寅、立內裏殿舍幷諸門、

堀川院　承德二年四月十日戊子、內裏殿舍門廊立柱上棟、行事民部卿俊明卿、參議季仲卿已下參著、

右宮城十二門也、外被立內裏諸門事、雖禁忌月不憚之、先例如此、仍注進之狀如件、

二月十二日　　大膳權大夫安倍泰親

日吉內

〔九條殿遺誡〕次見曆書可知日之吉凶、年中行事略注付件曆、每日視之、次先知其事、兼以用意、又昨日公事、若私不得心事等、爲備忽忘、又聊可注付件曆、

〔羅山文集雜著六十二〕時日

孫子之論兵也、有五焉、其二曰、夫天者陰陽寒暑時制也、言用兵者必順乎天時也、寒暑者冬夏之時也、時制者陰陽四時之制、所謂時日、支干、孤虛、王相之說、起自風后之孤虛書、及范蠡之占歲、此其所流傳、未可知也、則豈又可悉廢哉、本朝之古、能學天文陰陽推步風角曆數者、雖見于國史、姑舍是、天曆康保之間、陰陽頭平野茂樹、陰陽博士道光、最名于世、又吉備丸七世之後賀茂保憲傳陰陽于其子光榮、授

天文於其弟子安倍晴明、皆善精其術、吁近代何其無人哉、今若欲問時日、猶如與瞽者論日喩歟、今姑以不避陰陽拘忌者牧舉之、夫往亡之日、兵家之所忌、宋武帝曰、我往彼亡、吉孰大焉、遂平慕容氏、甲子者紂所亡、兵家忌之、後魏武帝曰、紂以甲子亡、武王以甲子勝、遂破賀驎、鄧禹以六甲窮日、理兵以敗劉均、劉裕不避折竿沈幡之凶兆、以擊盧循而走之、皆是太公折蓍毀龜之遺意也耶、沈顔曰、古者國家將有事乎戎祀、必先擇時日、以定其期、是用備物於有司、習儀於禮寺、俾齋其慮、而戒其誠、非所以定吉凶決勝負也、後之惑者不詳其故、推考時日、拘忌益深、且吉凶由人、焉繫時日、然惑者不知其在人也、○中略

嗚呼時日用捨、存於其人矣、○中略

元和五年孟秋二十五日

〔安齋隨筆前編十三〕一吉日凶日　日に吉凶ハなき事也、吉日にも惡事をすれバ刑罰免れがたし、凶日にも善事を行へバ褒賞せらる、吉凶ハ己が身より招くもの也、又婚姻の願など、主君に申上るに、主君より暦の如く申付らるゝに、凶日に云渡さるゝ事、其日凶日也とて、申渡をうけまじきとて、辭する事はならざる也、是にて考べし、暦に日の吉凶を記すハ、吉凶もなき日に、強て吉凶を付たる也、吉凶に拘る事勿れ、予が相知りたる人の所にて、小兒病ありしに、今日は朔日なれば、藥を呑しむる事イマハシとて、醫師を招かざりしに、病急になりて、其日に小兒死しけり、早ク療治せバ、死すまじきものを、物イマイして、却て如此の不幸にあへり、

〔月令廣義歲令二十三〕陰陽○中略

黃道吉日正七月子上起、二八月寅上起、三九月辰上起、四十月午上起、五十一月申上起、六十二月戌上起、訣云、道遠幾時通達、□□何日還鄉、只此臨道去、行走遠爲黃道、餘爲黑道、

〔宿曜經序上日名善惡品〕凡七日、二十二日、名爲朋友日、北斗天下宜結交慶喜安定和藥、王者初服、及造旌旛帷帳、並吉、唯不宜遠行、

〔春記〕長曆三年十二月九日乙丑、祭主事有可早定申之仰事、而日次連々不宜、十七日廿日是吉日也、

〔知信朝臣記〕大治五年五月五日丙午、陰陽頭家榮朝臣申云、今日相當丙午、希代嘉辰也、依本文進赤符可令持御者、五月五日相當丙午者寛弘八年、

〔禁秘御抄上〕恒例每日次第○中略

每日御拜、年始擇吉日一說也、或記云、嘉保二年正月五日、今日依吉日始有每日御拜、又六日、依吉日始御念誦畢、於御念誦者擇吉日、於御拜者只不謂善惡日、自一日被始爲吉歟、四方拜時有御手水、只跪思食遣神宮方也、

〔義貞記〕可討敵月日時幷方角事

春ハ庚辛日、夏ハ壬癸日、秋ハ丙丁日、冬ハ戊己日、土用ハ甲乙日也、但三日、五日、九日、十一日、十五日、十七日、廿一日、廿三日、廿七日、廿九日ヲ可除、殊ニ小月ノ晦日敵討事ナカレ、出テ歸事ナシ、次朔日、二日、七日、八日、十三日、十四日、十九日、廿日、廿五日、廿六日、是ヲ上吉トス、亦日ニ二時、夜ニ二時、人死スル時アリ、知此時可寄、此時ニアラズバ討敵亡ス事難シ、此ヲ兵法ノ占トモ、知死期ノ占トモ云也、用心ヲスルニモ、此時ヲ知テ、稠ク警固スベシ、亦敵ヲバ玉女方ニ向テ討テ、開神方可引、開神指神斗加神ノ方ニ向テ敵ヲ討事努々有ベカラズ、大將軍幷天一遊行ノ方ヲモ愼ミ、空忘神殊ニ大節也、

〔中右記〕大治四年四月廿三日、辛未、凶會、欠日、沒日、惡日、相合也、天晴、

〔禁秘御抄下〕廢朝○中略

第四日可止御簾、而當惡日、無御沙汰、及數日、第四日上御簾例有之歟、但不可爲例事也、寛治八年陽明門院御事、二月十日奏遺令、廢朝固關、依上東門院例、三ケ日也、而十二日御衰日復日也、十三日凶會復日也、仍十四日朝被上御簾、又同年顯房公薨、五日薨、八日奏、自此日止音奏警蹕、帝外祖而十日十一日共復日也、仍十二日雖爲凶會日、强不忌、則上御簾畢、近正治刑部卿三位卒時、被用彼例、自餘或

十干日　十二支日

不然、殊御衰日重日復日忌因會九坎日不忌、如此事在時議也、彼顯房公時、八日警固、十四日解陣也、雖可爲三ヶ日依避日次十二日急上御簾、爲因會日及數ヶ日有憚之故也、於警固者雖及數日依吉日及十四日、或記如斯、

〔國師日記〕寛永六年三月九日、水戸殿より新御屋敷御拜領、作事始之吉日之儀申來、如例書付清兵衞に持せ上なり、

御吉日　三月十一日丙申定木翼　右白虎脇日。
閏月十二日丁酉收金軫　右三鏡相應日。
土用之間日　閏月十八日癸卯閉木尾　右白虎頭日。
以上

〔二中歷五忌〕十干吉凶
甲日不治舍　乙日不納金錢　丙日不捐灰　丁日不剃頭　戊日不到田又不詞訟　己日不問病
庚日不經絡　辛日不上醬　壬日不奏書　癸日不浣衣

〔拾芥抄下末諸事吉凶日〕行吉事吉日
甲子春忌　乙丑　丙寅　丁卯　己巳　辛未　癸酉　甲戌　乙亥成事夏忌　丁丑　庚辰　壬午　戊子　己丑　庚寅　辛卯　癸巳　甲午　丁酉　戊戌　己亥　庚子秋忌　壬寅　癸卯　甲辰　乙巳　丙午　丁未　己酉　辛亥　壬子冬忌　乙卯　丙辰　丁巳　戊午　己未　辛酉
隨事可用之厭對、厭、往亡、歸忌、道虚、滅門、因會、九坎、復、滅、□、八龍、七鳥、九虎、六蛇等日可避、
雖事吉日、雖五墓日、伐日、無日次之時所用習也、但酉日依爲五離日、如嫁娶雜事、聊所避也、重日復日者、國事可忌、實、
或云、天下亡滅日不行吉事、正五九丑、二六十卯、三七十一午、四八十二酉、師檀日不行吉事トイ、ヒツジのメクミナ、ウメクミニ、ウシキウシコソ、師旦日ナレ、此十二

月可當者也、○中略

療。病。吉。日。及病後沐浴、服藥針灸

甲子午辰戌　乙巳亥　丙子午辰戌　丁丑巳　戊子午　己卯丑亥　庚午卯　辛丑亥　壬子午戌　癸丑卯

同。凶。日。此內三年、扁鵲、書婆、死日外、等常不忌之、但黃帝昇遐、公家御療忌之、

甲子黃帝死日三年死日　乙卯三年　丙寅三年　丁亥神農　戊無憚日　己同上　庚辰三年　辛未、書婆、卯師曠、巳三年、又天醫、又竺醫、

壬無憚日　癸未扁鵲

〔拾芥抄下末諸事吉凶日〕出。行。吉。日。

甲子　丙寅　丁卯　己巳　辛未　甲戌　庚辰　壬午　戊午　戊子　庚寅　甲午
戊戌　庚子　壬寅　癸卯　甲辰　丙午　丁未　庚戌　甲寅　丙辰　己未

今案、遠行、往亡、歸忌、道虛、晦、伐日、厭、厭對、五墓、八龍、七鳥、六蛇等、並申酉日忌之、

〔曆書〕雜。事。吉。日。

甲子、春忌　乙丑、丙寅、丁卯、己巳、甲戌、乙亥、夏忌　丁丑、庚辰、壬午、戊子、辛卯、甲午、己亥、庚子、秋忌　壬寅、癸卯、甲辰、乙巳、丙午、壬子、冬忌　甲寅、乙卯、丙辰、戊午、四季忌

右日々可行雜吉事等、但可避凶會、九坎、滅沒日、蝕、厭、厭對、道虛、申日、伐日等也、又春甲子乙亥、八龍日　夏丙子丁亥、七鳥日　秋庚子辛亥、九虎日　冬壬子癸亥六蛇日

件日等吉凶事、皆忌之、但凶事者不可忌厭厭對道虛申日等也、

〔小右記〕長和三年甲寅○五月五日庚寅、今日、天下貴賤、擧首參廣隆寺云々、五月五日庚。寅。日。云々、引見梵曆、遷都之後、寅年五月五日既無庚日、寬平六年甲寅五月五日丙寅、天曆八年五月五日戊寅、已違世說、又說不謂寅年、只五月五日庚寅日、奉開眼云々、見梵曆、延喜廿一年辛巳五月五日庚寅、若此日歟、見流記帳乎、可問彼寺僧、今日天下之人、殊奉歸依之日云々、仍奉御明、修諷誦、御明二万燈、一万燈小兒奉之、別御明口諷誦信濃布五端云々、

〔橘庵漫筆一〕京大坂の俗風に、婚禮の日を撰ぶに、寅の日を忌み除けり、

〔七山抄十二二月〕同日(○十三日)點奉幣使參議已上事(○中略)應和元年、擇申十九日廿日、令仰云、延喜十七年例、避復日被定、而件兩日、共爲復日、宜改勘申、陰陽寮擇申十七日、仰云、彼日、中宮東宮遷內裏、昌子內親王始拜、廿一日依有忌不勘申歟、令申云、先日不擇申戌日、忌祠祀也、仰云、延喜十七年、陰陽頭房滿申云、十五日往亡忌祠祀者、而猶避復日、被用十五日、依其例可用廿一日、

〔永昌記〕長治三年(○嘉承元年)四月十五日丙子、今日吉田祭、(○中略)藤宰相顯實卿爲以參著(初度依爲氏社申請行之、而爲七鳥虛戌日被止、雖不憚歟、)

〔山槐記〕治承三年正月三日壬戌、春宮大進光長談曰、今日東宮(○安德)有御戴餅事、元日申日、二日御衰日、今日戌日、不可有憚之由、陰陽頭在憲朝臣所申也、長治元年元日二日有御戴餅、三日依爲申有沙汰、件日被止之、五日七日共爲吉日、可被用何日哉之由有議、七日爲戌日、可被用五日之由有沙汰、仍猶戌日不快歟之由有疑、而三ヶ日以後例不分明、附在憲朝臣申狀、雖戌日今日被行之、何事之有哉之由有殿下(○藤原基房)仰、

〔吉記〕治承五年(○養和元年)六月十五日庚申、今日申日也、雖非造立供養、已不異草創、尤可被憚歟之由、大外記頼業申之、

〔吾妻鏡脫漏〕元仁二年(○嘉祿元年)六月十六日乙巳、辰剋二品(○政子)御絶入、諸人成群、然共則令御復本、遂日御增氣之間、昨十五日、新御所可令移之由被仰之處、申辰日憚有之、來廿一日可然之由、陰陽師勸申、仍延引畢、　廿一日庚戌、二品渡御新御所之事、兼今日被點訖、然戌日有憚之由、醫師行蓮依被申、而隱岐入道爲奉行、召國道朝臣以下陰陽師六人而被尋仰之處、戌日有憚之條、無本說之由令申之間、召行蓮可決之旨、行西依仰國道朝臣問云、戌日渡御可憚事何文哉、行蓮答云、無所見、士女說也、國

十二客

道云、士女說有皆由緖、何由緖哉、行蓮閉口而座立畢、隱岐入道此旨令披露、聞人咲之、次及晚猶御絕入之間、於路次定有事歟之由、相州被計申之間、彼六人重而擇申云云、

〔黑日圖說〕原夫曆書有十二客、配十二支、所謂建除滿平定執破危成收開閉是也、三才圖會天運星煞直日之圖、逐日列五子等十二支、而正月五子開、五丑閉、五寅建、五卯除、五辰滿、五巳平、五午定、五未執、五申破、五酉危、五戌成、五亥收、二月五子收、乃至五亥成、三月五子成、乃至五亥危、已下例之、而每甲子、擧吉凶集成、中略

其局逐月節之擧日、重于節之始日、按三台通書、有十二星斷曰、

建宜出行收嫁娶　定宜冠帶滿修倉　破除瘀病執宜捕　危本安床閉葬良　成開所作成而吉
平乃作事總平常

〔簠簋內傳二〕第三妻女號福采女、然而產生白帝白龍王、領秋七十二日、妻愛色姓女、生十二人王子、所謂建除滿平定執破危成納開閉等也、
木木土火火土金金土水水土

寅建者、世界造立日也、萬物起始形也、故一切發起建立尤吉、厥外凶也、

卯除者、一切解除日也、故掃除、瘀病、炭抓、煤掃、精進、沐浴等吉、自除凶、

辰滿者、一切充滿日也、故五穀修納、求財、藏立、宇賀祭、萬福成就日也、

巳平者、一切平安日也、屋敷堅、家造、移徙、柱立、一切萬事大吉日也、

午定者、一切必定日也、故入部、知行、定役、公事、諸奉行人等、總而一切定掟吉日也、

未執者、一切執持日也、故此日自他人方取寶物吉日也、總而萬物取始吉也、

申破者、一切破烈日也、故城逼、合戰、山海獵師、一切惡行、破屋等大吉、餘凶、

酉危者、一切嶮厄日也、故萬事不用、若成一切事業、則萬物爲恙不得成就也、

戌成者、萬物成就日也、故五穀種子、始中終共吉、或立願、大行等必得成就、願始、行甫吉、

七曜直日

納者、萬寶納藏日也、故五穀取納、萬財物買取、納家內日也、故萬事大吉、

開者、法藏開戶日也、故萬善事業一面無不成就、故門立、藏開、酒開穩海吉、

閉者、法藏閉籠日也、故此日佛法修行等萬善不成就日也、故不用諸事、

〔和漢名數三篇天文〕十二月建〈以斗綱所指之、初昏者戌時也、以正月為寅月、二月為卯月、餘倣之、斗綱者、北斗所謂破軍星是也、每月遞轉不息、謂十二時、是也、〉

正月寅　二月卯　三月辰　四月巳　五月午　六月未　七月申　八月酉　九月戌　十月亥

十一月子　十二月丑〈蓋依日出時、知破軍星所向方之法有二、一曰正五九一、其法以九月為初一、十月戌時小星向亥、亥時向子、從自當時數之、至第二位為小星之向方、十一月三、十二月四、正月五、餘轉計之、如此、餘皆倣之、春入月自十二支數至第二位、故自九月數如為一、又一法為四去加月數、蓋如正月戌時自戌數至四、則為丑、又加之以正月之數一、則為寅、是戌時小星之向方也、餘倣之、〉

〔三才圖會時令三〕天運星殺直日之圖

正月

五子開●○中　五丑閉●○中　五寅建●○中　五卯除●○中　五辰滿●○中　五巳平●○中　五午

定●○中　五未執●○中　五申破●○中　五酉危●○中　五戌成●○中　五亥收

二月

五子收●○中　五丑開●○中　五寅閉●○中　五卯建●○中　五辰除●○中　五巳滿●○中　五午

平●○中　五未定●○中　五申執●○中　五酉破●○中　五戌危●○中　五亥成●○下

〔二中曆五〕七曜直日

明星〈金星アカボシ〉　長庚〈太白星ユフヅヽ〉、牽牛〈一名河鼓、ヒコボシ、又イヌカヒボシ、〉　織女〈タナバタ、牽牛是也、〉

日曜　拜官、習戰、持呪、行獵、遠行、設齋、祈神、合藥、內食、入學、見大人、洗頭、割甲、作宅、種樹、所求皆遂、但市買、作齋、行姦凶、

月曜　修善、作藥、裁衣、造家、安床、穿渠、修井、賣買、內財、洗頭、割甲、著新衣並吉、但嫁娶、入宅、結交、私情

六曜日
赤舌日

出行不宜、

火曜　決罪、取賊、作欺、買金牛、動兵、修戎具、打賊、諍訟、合藥、種田樹、成誓、畋獵、調馬、療病吉、但營財、徵責、著新衣、洗頭、割甲、入宅、結交、火下、出財凶、

水曜　入學、事師長、作工伎、舉債、出行、伏讎、割甲、剃頭吉、但造宅舍、戰鬪、妄語、卜問、作誓凶、

木曜　命王侯、求善知識、入學、禮拜、修福、布施、請謁、結交、入宅、著新衣、沐髮、種藥木、調象馬、買奴婢、嫁娶、修倉、內財、一切善事吉、但作誓、作賊、妄語、爭競女凶、

金曜　見大人官長、沐浴、冠帶、結交、置膳、著新衣、友會宜、但入宅、畋獵幷戰、不吉、

土曜　修園圃、買賣田宅、合藥、伏怨、放火、立寺、作竈、入宅、舉哀、鞍馬、內倉吉、但結婚、冠帶、出行、服藥、著新衣凶、

〔安政雜書萬曆大成〕孔明六曜日操

◐先勝日　正月七月
⊖友引日　二月八月
◑先負日　三月九月
●物滅日　四月十月
○大安日　五月十一月
◐赤口日　六月十二月

右六曜のくりやうは、何月と有ル其月の星を朔日とし、二日三日と左へ順にくる也、たとへば正月十一日の吉凶を志るには、正月は◐先勝に當れば、此星を朔日とし、次へ二日三日とかぞへ、赤口より、又先勝へもどりかぞふれば、十一日は○大安にあたる也、餘はなぞらへて志るべし、

◐先勝　万事、あさよりひるまでにすればさはりなし、ひるすぎより日ぐれまではわるし、

⊖友引　友びきとて午よし、馬のときわろし、此日そうれいいだすべからず、大にいむべし、

◑先負　万事あさよりひる迄はわろし、ひるすぎより日ぐれまではさはりなし、

●物滅　大あく日なり、よろづもちゆべからず、

○大安　大吉日なり、なにごともよろづよし、

●赤口（赤日しあく日也、よろづいむべし、但しうまのとき一ときまはりなし、）

（宗建卿記）享保十七年八月廿七日、殿下（近衛家久）被仰云、昨日一品宮被申談云、明後日廿九日舊院（○靈元）御葬送、然處或人云（[illegible]）廿九日未也、泉涌寺自院中巽方也、未日葬巽方是友引也、最重寶（晴明作也）之由、件事六條局大乳母人等被聞之、甚不可然、可有御延引歟之旨、強而被申二一品宮、仍被申談之由也、殿下御答云、友引之事、古來無其沙汰、重復日等者被避之、且今度既日時賀家勘進之、於朝廷不用陰陽道說而何被用妄說乎、雖然女房信此說、御延引、強而被申之儀無據候歟、

（全國民事慣例類集陸前）死者アル家ニハ、其組合集會萬事ノ世話ヲ爲シ、翌日葬埋スルヲ例トス、丑寅ノ日、或ハ友引ノ日ヲ忌テ、延縮スルコトアリ、（中略）（上野國群馬郡）

正月（一四日十二日二十日二十八日ナリ、閏九日目ーーート如之、）

（重寶內傳二）赤口日　四三二一八七六五四三二一

赤舌日　正（[illegible]ハ七日目ーーーナリ）三二一六五四三二一六五四

右今二箇日取、太歲神東西番神、爰赤口神者、爲太歲東門番神、順以八大鬼令守護之、所謂其八大鬼者、詳註之、一兜羅羅神、二魔醯首羅神、三閻獄受神、四八獄卒神、五嫗魔大神、六閻羅刹神、七雷電光神、八實目明神等也、自正月一日追番々、以今所進八大鬼爲上首、百億鬼神各令圍繞、爰第四番八獄卒神者、八面八臂、叛神通惑亂閻浮提一切衆生、故以彼主領日云赤口日、娑婆衆生專令嫌捨之、

次赤舌神者、爲太歲西門番神、順以六大鬼令守護之、所謂六大鬼者、一明堂神、二地荒神、三羅刹神、四大罰神、五白道神、六牢獄受神等也、自正月朔日、以今所明六大鬼番々守護之、百億鬼神尤附屬之、爰第三番羅刹神、極惡忿怒、令惱亂閻浮提衆生、故號赤舌日、專禁之、

（頭書長暦上）赤舌日トハ、卽チ赤舌神ノ主ル日ノコト也、右赤口日ト同前ニ嫌フベシ、暦ニモ正月三日ヲ最初トシテ、赤ト註スルハ此日也、

沒日滅日

〔徒然草上〕赤舌日といふ事、陰陽道にはさたなき事なり、昔の人、是をいまず、此頃何もののいひ出ていみはじめけるにか、此日ある事、末とをらずといひて、其日いひたりし事、したりし事かなはず、えたりし物はうしなひ、企たりし事ならずといふ、おろかなり、吉日をえらびて、なしたるわざの、末とをらぬをかぞへて見んも、又ひとしかるべし、其ゆへは、無常變易のさかひありと見るものも存せず、始ある事も終なし、志はとげず、望はたゆず、人の心不定なり、物皆幻化也、何事かしばらくも住する、此理をしらざるなり、吉日に惡をなすに必凶なり、惡日に善をおこなふにかならず吉也と云り、吉凶は人によりて日によらず、

〔曆林問答集下〕釋沒滅第三十

或問、沒滅者何也、　答云、曆例云、滅沒者、是曆數餘分、陰陽不足、非正日、故堯不以此日下堂、舜不以此日通四方也、又沒者天與日會、而日不及於天餘分也、是曰氣盈、又曰沒、又滅者、日與月會、而月不及於日餘分也、是名朔虛、又曰滅也、皆以非正日、故聖人愼而不用也、百事勿用之、大凶焉、

〔簠簋內傳二〕沒日　此日曆註日月相違時候隱沒故云爾、七十日及七十一日廻歸也、

滅日　此日曆註日月相違時候隱沒故云爾、六十三日四日廻歸、

〔頭書長曆上〕沒日ハ、天ト與日會シテ、日ガ于天及バザルノ餘分、年中ニハ五日廿四刻有奇也、是ヲ氣盈ト名付テ、正日ニアラズ、一切ノ事業ニ惡日也、

〔寬永板大雜書〕ほろぶ日の事

正、二月、たつ、とり、い、三、四月、ひつじ　五月、いぬ　六、七、八、九月、とら　十月、うし、むま、十一月、み　十二月、うし

〔頭書長曆上〕滅日ハ、日ト與月會シテ、月ガ于日及バザルノ餘分、年中ニハ五日六十二刻有奇也、是レヲ朔虛ト名付テ、陰陽不和ノ惡日也、故ニ上古ノ聖人モ、沒滅ヲバ愼給フ也、サテ一箇年中ノ沒滅合セテ十日八十七刻有奇也、但シ三年ニ及ンデ二十九日五十三刻餘ヲ積ム時ハ、即チ閏月ヲ

置、依之三歲一閏、五歲再閏トハ云也、未練ニシテ志アル人ハ、曆家ニ入テ可勤之、

〔中右記〕大治四年八月廿四日、仰云、九月十日巳當五十日、〇若宮御五十日也、件日吉日也、先々於五十日者、或滿日開食、或過日數開食、又十六日吉日也、兩日之間如何、人々申云、早召陰陽師被問、兩日勝劣可候也、則召家榮朝臣被問之處、申云、十日劣也、就中例幣之前齋也、又難滿五十日、先々被除沒日被用、歟不被除也、十六日勝也、以此旨奏聞之處、可用十六日之由被仰下了、

〔吾妻鏡四十二〕建長四年九月七日戊子、午剋御惱御平減之後、有御沐浴之儀、而今日沒日也、凡無日次之由、陰陽道頻雖傾申、去一日令洗御手足御之間、不可有其憚之間、醫家忠茂朝臣計申之、

〔吾妻鏡五十二〕弘長三年十二月廿四日庚午、今日評定衆等參相州〇北條時宗亭、御產所幷御方違等事有其沙汰、召陰陽師等被尋、面々異見、爰渡御御產所日可爲來廿四日之由、兼被定之、而今晴茂朝臣申云、彼日沒日也、可有憚云云、　業昌申云、建長六年四月廿四日丙寅沒日也、大宮院入御御產所無憚云云、且勘申件例之間、相論無爲落居、

〔北條九代記九〕時宗執權附御息所御產所儀

同〇弘長三年十二月、將軍家ノ御息所、御產ノコト近付給ヘバ、宮內權大輔時秀ガ家ヲ、御產所ニサダメラルヽ所ニ、十七日戊ノ刻ニ、荏柄ノ社ノ前ヨリ、失火アリテ、塔ノ辻マデ燒來リ、時秀ガ家モ回祿セシカバ、俄ニ武藏守義政ノ亭ニ、入奉ルベキ評定一決シ、同二十四日、御方違ノ沙汰ヲモツテ陰陽師ラヲメシツ、異見ヲタヅネラル、二十四日〇甲午ハ沒日ナリ、御憚リアルベキカト、晴茂朝臣勘ガヘ申ス、業昌朝臣申ケルハ、建長六年四月二十四日ハ、丙寅沒日ニテ候ラヒシニ、大宮院御產所ニ入タマフ、憚リナカリキ、コノ度モ、ソノ例ニ任セラルベシ、次ニ御方違ノコト、二十九日〇己亥ヲ用ヒラルベキカト、業昌又申テイハク、其日ハ往亡日ナリ、但シ御產ノコトニハ、憚リイカヾト申タリケルヲ、晴茂ハ苦シカルベカラズト問答シケレドモ、將軍家ニハ、憚ルベキノ義ヲ御許容

アリ、一日引越テ、同ク二十八日ニ、左近大夫將監公時朝臣ノ、名越ノ亭ニ入レ奉リ、御產所ト定メテ、若宮ノ僧正御祈リノ師トシテ、加持シ奉ラル、次ノ日、名越ヨリ御息所ハ還御シタマフ、

〔薩戒記四十九所引建内記錄抄出〕永享十年三月十四日、於御所有重朝臣云、依召所參入也、來廿七日亥〇辛相當北野御參籠御歸參日、而爲滅日、何不申子細哉、向後不申、如此御事者、可有御責勘、隨而自廿四日至三十日、御參籠如何、又廿四日卅日兩日之間、八幡御社參可爲何樣哉、可注申由被仰下之、凡今度御參籠日事、可被尋仰旨、廿七日爲滅日相當、御歸參日不可然之由改存之、不能申子細之條尤爲越度、北野御參籠日、廿四日戊申、八幡御社參日、廿四日、廿日甲寅注進之者、御社參日兩日之間未定云々、

天恩日

〔運歩色葉集天〕天恩日、正丑　二子　三卯　四辰　五巳　六午　七未　八申　九酉　十戌　十一亥　十二子大吉日

〔曆林問答集下〕釋天恩第三十二

或問、天恩者何也、　答曰、曆例云、天恩者、天之位有四禁之道、常開一也、其自甲子至癸亥六十日也、四分一是十五日也、其甲配子、己配于卯酉、甲在十干之始、子在十二支之始、故自甲子至戊辰五日之間爲天恩之日、又己爲十干之主、卯酉爲天地之緯、故自己卯至癸未五日之間爲天恩日、又自己酉至癸丑五日之間爲天恩日、合十五日、皆爲天恩日、如此支干偶助而成育万物、故名天恩日、尤好日也、

〔假名曆略註〕天おん　漢字天恩

天恩日とは、大抵官位に昇り、嫁娶結婚、其外吉慶の事に用ひて大に吉日なり、凶事には用ゆべからず、

天赦日

〔曆林問答集下〕釋天赦第三十三

或問、天赦日者何也、　答曰、通鑑云、天赦者、天之生養万物、宥其罪日也、故曰天赦、百神上天之日也、無所禁忌、春戊寅、夏甲午、秋戊申、冬甲子、此皆天赦日也、夫甲戊者爲陽干之位、子午者爲天地經、寅申者爲陰陽之主、是以戊寅甲午戊申甲子者、於四時而名天赦日、擧百事吉也、

(安政雜書萬暦大成)暦の下段、日の吉凶、(中略)吉日、●惡日、○中よし、

天赦日、此日は大吉日にて、何事をなしても萬よし、春は戊寅日、夏は甲午日、秋は戊申日、冬は甲子日也、

(暦林問答集下)釋歸忌第三十五

或問、歸忌者何也、答曰、暦例云、歸忌者天棓星之精也、此星上衝紫宮、下防門閾、凡有四名、一曰歸忌、二曰歸化、三曰天小女、四曰歸來主、丑寅子日自天降地而來、居人家門、防無歸家所、故遠行、歸家、移徙、嫁娶、加冠、入國、皆不吉也、

(後漢書四十六郭躬傳)鎭字桓鍾、(中略)桓帝時、汝南有陳伯敬者、行必矩步、坐必端膝、呵叱狗馬、終不言死、目有所見、不食其肉、行路聞凶、便解駕留止、還觸歸忌、則寄宿鄕亭、(陰陽書歷法曰、歸忌日、四孟在丑、四仲在寅、四季在子、其日不可遠行歸家及徙也、)

(拾芥抄下末諸事吉凶日)歸忌日　四孟(正、四、七、十、)在丑　四仲(二、五、八、十一、)在寅　四季(三、六、九、十二、)在子　(其日不可遠行、歸家及移徙、)(下略)

(簠簋內傳二)歸亡日　(正月)丑寅子丑寅子丑寅子丑寅子

(類書長暦上)歸亡ハ、暦ニ歸忌ト註ス、天棓星ノ精、下界ニ降テ、人家ノ門戸ヲ塞グ日也、故ニ旅行、歸宅、入部、出軍、屋移、嫁娶等ニ凶之、尤モ暦例ニ詳ナリ、

(左經記)長元八年二月廿日乙亥、卯剋右衞門督、侍從中納言相共參宇治、(中略)晚更入京、依爲歸忌、可他宿給云々、

(山槐記)永曆元年八月廿一日丙寅、今日還御鳥羽殿云々、依歸忌日也、上皇去夕御見物後還御云々、

(帝王編年記二十二高倉)永萬元年十二月廿五日庚子、(歸忌日、)親王宣下、(年五)

(明月記)天福二年(○文曆元年)七月一日戊戌、秉燭之程、宿北邊本所、來四日秋節、三四兩日依歸忌、今夜歸

往亡日

宿、

〔花園院御記〕正中二年十二月廿五日辛丑、今日歸忌日也、仍巳剋許、上皇、廣義門院、朕等令乘御幸中園殿、又以此車、永陽門院被引出門外也、

〔曆林問答集下〕釋往亡第四十二

或問、往亡者何也、　答曰、新撰陰陽書云、往亡者、天之殺鬼也、曆例云、往者去也、亡者無也、有三名、一曰往亡、二曰天門、三曰天從、行十二節、而一歲有十有二日、今按、自立春七日、自驚蟄十四日、自淸明二十一日、合四十二日、春往亡也、自立夏八日、自芒種十六日、自小暑二十四日、合四十八日、夏往亡也、自立秋九日、自白露十八日、自寒露二十七日、合五十四日、秋往亡也、自立冬十日、自大雪二十日、自小寒三十日、合六十日、冬往亡也、四時合二百有四日也、是丁歲之數不足故、失陰陽之數、仍云窮日、其日不可遠行、又出軍憂死不還、尤凶也、

〔假名曆略註〕わうまう日　漢字往亡

此日專ら出行に忌日也、殊に入學、元服、嫁娶、屋作、移徙、出門、船乘、又は財寶を納め、醫師を招、病を治し、結婚等に用ふべからず、大に惡し、

〔陸奥話記〕同〈○康平五年八月〉十六日定諸陣、〈○中略〉將軍命武則曰、明日之議俄乖、當時之戰已發、但兵待機發、不必撰日時、故宋武帝不避往亡而功、好見兵機可隨早晚矣、

〔吉記〕治承四年四月一日癸未、被示云、來十二日、公家御衰日、往亡日、道虛日、忌夜行日也、

〔吾妻鏡五十一〕弘長三年十二月廿四日庚午、今日評定衆等、參相州亭、御產所幷御方違等事有其沙汰、〈○中略〉次御產所、宮內權大輔家燒失之間、被點公時義政兩大夫將監亭之處、晴茂申云、當閉坏八座方有其憚云云、爰三河前司敎隆難申云、凡大臣家以下古勘文不入此事云云、次御方違被用廿九日、而業昌申云、往亡日也、可有其憚云云、業昌又申云、非常途御方違、爲產所之條如何云云、仍三州令問

答晴茂朝臣之處、雖申不可有憚之由、相州猶無許容、可憚之由見給云云、

〇按ズルニ、往亡日ノ事ハ、兵事部戰鬪上篇擇日時條ニモアリ、

〔運歩色葉集〕血忌日 馬 春三月寅午戌日、夏三月巳酉丑日、秋三月申子辰、冬三月亥卯未日、春土用中日、夏土用戌日、秋土用寅日、冬土用巳日、

〔拾芥抄〕下諸事吉凶日〕血忌日

正丑 二未 三寅 四申 五卯 六酉 七辰 八戌 九巳 十亥 十一午 十二子

件等日月、不可針灸、

〔醫林問答集〕下〕釋血忌第三十六

或問、血忌者何也、答曰、都震塢輿經云、血忌者天精也云、彼河之精也、有三名、一曰殺忌、二曰日忌、三曰血忌、從丑始至于子終、來往十二辰、運而復始、主殺伐、故刑獄及針灸出血等犯用之凶也、

〔通俗編〕二十一數術〕血忌月殺 論衡譏日篇、祭祀之歷、以血忌月殺之日為凶、又辨祟篇、血忌不殺牲、而屠肆不多減、按以上俱漢以前日者之言、沿傳至今、最為久遠、

〔簠簋内傳〕三〕血忌日 十二月 丑未寅申卯酉辰戌巳亥午子

右今血忌日、專自人馬身不取血、九坎日總而不去、肉身垢、故漸洗灌凶、從不犯針灸日也、

〔玉海〕建久三年正月五日戊寅、定長語云、昨日、諸醫相論之間、無御灸、今日、卒爾有御灸云々、余〇藤原兼實問云、昨日最上吉日也、雖為血忌日、於灸點者不可憚、仍昨日招驗、于今日令灸給宜歟、凡人之所用也、人君御事、今一重可用心、然而事已急事也、隨又去年、最初御灸如此云々、然者於此條者、不可有巨難也、而空過吉日、今日旁最忌日、招論卿令灸給之條、未得其意、寅日者非當入吉日、已出禁忌之日、加之戊寅者四絶日、於針灸者、其忌惟深、今日御灸、太為奇、但於急事者、血忌、人神所在之外不避之云々、為其議者勿論也、若然者、彌又昨日可被招灸點也、前後相違、首尾錯亂、次第尤不審、定長云、昨日依血忌日灸點、猶有憚之由、知康法師強執、他醫咏無申、灸點止了云々、此事未曾聞也、血忌人神所在者、全非

厭日
厭對日

日之吉凶也、是各別事也、諸道之人滅亡我道、如師子之中虫喰、末代之事可悲々々、雖無益事、存旨粗含定長、定長服膺歟、

〔明月記〕貞永二年二月廿七日、貞幸朝臣來、雖血忌日、令加灸點、(顱二目料)左手五所、(年來中風)

〔曆林問答集下〕釋厭厭對第三十七

或問、厭厭對者何也、　答曰、曆例云、厭者有三名、一曰遊殺、二曰陰建、三曰厭殺、李氏注云、厭是天上將軍、主征伐之事日也、故主殺、其辰在奎婁兩宿、從正月戌日左行十二辰、二月酉日也、餘月倣之、厭對者、厭在戌、對在辰、只相對也、又云、厭者天帝車、王者用之吉、諸侯以下至庶人用之皆凶也、

〔延喜式五十雜〕凡諸國鎭害氣者、於國郡鄕邑、每年正月上厭日作坑方深三尺、取東流水沙三斛置坑内、以醇酒三斗灌沙、〇中略呪曰、害氣消除、人無疾病、五穀成熟、

〔簠簋内傳二〕厭日　正月切、戌酉申未午巳辰卯寅丑子亥、

厭對日　正月節、辰卯寅丑子亥戌酉申未午巳、

右今二箇日取、出行出仕對面降參等凶、同嫁娶結婚等甚厭之、

〔北山抄六備忘略記〕奉幣諸社事〇中略

同〇天慶五年五月、惟香勘申厭對日吉事、忌祭祀婚姻也、祭祀與奉幣頗異、仍不可忌者、茂樹武象等申、可忌避由、仍改定畢、

〔定家朝臣記〕天喜六年〇康平元年二月三日、爲殿御使參右府、令問云、明日中納言可著座、而來八日〇己酉始參政如何、彼日當厭日、厭日俗所忌也、但貞信公〇藤原忠平延喜八年二月五日丙午著座、同八日己酉、始被參政、偏可隨彼例歟、如何者、令聞給云、貞信公彼時爲參議著座、公卿與參議其儀相異、左右難進退者、

〔長秋記〕大治四年八月十六日辛卯、以消息問家榮、今日雖厭日可憚、自明日凶之日也、仍酉剋參院、

〔梅園日記〕二厭日〈○中略〉

成人問曰、右の二記〈○宣胤卿記、長秋記、〉に據るに、八日十六日を厭日といへるにや、答曰、あらず、千金方に、月厭〈正二三四五六七八九十十一十二戌酉申未午巳辰卯寅丑子亥〉と見えたる是なり、〈按に、黄帝龍首經にも載たり、〉さて天喜六年は、八月二十九日に、康平と改元あり、いま日本長曆に據に、康平元年二月は、壬寅の朔なれば、八日は己酉にて厭日なり、〈延喜八年二月も、亦己酉にて厭日なり、〉長秋記の八月辛卯亦厭日なり、按に、觀古雜帖に、天平勝寶八歲具注曆の零本を載て、三月三十日癸未、〈立夏四月節〉天恩九坎厭、四月六日己丑、歸忌厭對とあり、四月は未厭日也、されば、ふるくより有し也、〈○中略〉

厭對〈○中略〉

周禮占夢疏に、張逸問占夢注云々、答曰、日月在辰尾、夏之九月、辰在戌、〈○註略〉未有尾星、建戌厭寅、寅與申對云々、問曰、何知有此厭對之義乎、答曰、按堪輿黃帝問天老事云、四月陽建於巳、破於亥、陰建於未、破於癸云々、按ずるに、九月建戌厭寅とは、九月戌に建す月にて、寅を厭日とす、寅與申對とは、九月の厭對は申なり、又四月陽建於巳、陰建於未とは、四月巳に建す月にて、未を厭日とするをいへり、厭對とは厭に對する衝にて、毎月の厭日の七ツめに當る十二支なり、

〔台記〕久安三年三月廿七日庚寅、余及宰相中將經定朝臣、辨少納言、參外記、于時執松明、是一上後初著也、先日問吉日於雅樂頭泰親、申曰、廿八日可也、〈天子寅日〉不成節文、不擇吉時、因之欲行之、而今日日暮、明日可奏御賀幣饗、故今夕行之、今朝問今日吉不於泰親、申曰、厭對有憚者、尋例、延喜十年二月七日、〈○丁卯〉貞信公著座、〈見御記〉件日厭對、依彼例今日著之、著座猶不憚、何況一上後初行政、不可強求吉日之故也、

〔台記別記〕久安四年十一月廿六日庚戌、使親隆問始御書使、後朝使、供餅藏頭等日於陰陽師、陰陽師書折紙獻、〈不載勘文〉

坎日

始御書日　正月十四日丁酉　後朝使日　正月廿日癸卯厭對

厭對日例陽明門院後朝使、始有御返事、○下略

〔吾妻鏡三十六〕寛元二年九月十九日丁巳、大殿○藤原頼經明春御上洛事、爲但馬前司定員奉行、有御沙汰等、日次事、○中略二月九日吉日也、以件日可爲御入洛之期歟、一日御進發、有十六日御入洛者、厭對日也、出行可憚之、旁可被用九日云云、

〔明月記〕嘉祿元年十二月廿三日、及未時、大允通重來、拜賀可忩申、日時強雖非上吉、以早速可爲先之由示之、答云、今日上吉日也、當國忌廢朝日、是勿論事也、明日道虛明後日厭對日被忩者吉例多云々、

〔運歩色葉集加〕坎日事、正辰二丑三戌四未五卯六子七午八酉九寅十亥十一申十二巳

歌云、辰ヤ丑、戌未卯ニ子午酉、寅亥申巳ハ、皆坎日也、

〔拾芥抄下末諸事吉凶日〕坎日自節中計之辰正丑二戌三未四卯五子六酉七午八寅九亥十申十一巳十二

〔簠簋內傳二〕九坎日　正月切、辰丑戌未卯子酉午寅亥申巳、

〔曆林問答集下〕釋九坎第三十九

或問、九坎者何也、　答曰、尙書曆云、九坎者、九星之精也、又云、名天之河伯、其虛危兩宿之下有九星、是云九坎星、又云、天管鑰也、名鉤鈴、其精氣屬北方、水星也、故主河伯、擧百事凶也、此九星ハ二十八宿之外有之也、

〔江次第抄正月一〕四方拜

代初忌坎日　雜書曰、正月辰日是爲九坎日、虛危之下九星氣也、一名九焦、一名九空、一名九窮、凡不可擧百事、令人貧窮大凶也、

〔袋草紙四〕知坎日歌

かん日はたつにはじめてとをにとをひとつたらぬはさつきながつき

重日
復日

〔小右記〕長和五年四月廿三日丙申、臨河頭解除、依重日不参由也、番黑貫平来云、今日御覽御馬、被定女騎、須昨日御覽而依坎日、及今日、非天下之物依坎事、坎日御覽有、寛識重式日、重中日覽者、仍今日御覽、一日余所相忘也、申摂政所行云々、

〔紫式部日記〕正月六〇寛弘年一日、かん日なりければ、わか宮の御いたゞきもちゐのこと、とまりぬ、

〔源氏物語三十九夕霧〕やがていでたちたまはんとする〇夕霧をこゝろやすくたいめもあらざらんものから、二〇女宮ひともかくの給、いかならん、かん日にもありけるを、もしたまさかにおもひゆるし給はゞあしからん、なをよからんことをこそと、うるはしき心に覺して、まづこの御返を聞え給ふ、

〔左經記〕長元八年二月十日乙丑、左少辨參園韓神祭云々、愛國之後未行公事、蓋可忌坎日、依爲分配所參入云々、

〔源平盛衰記二十八〕頼朝義仲中惡事

木曾ト十郎藏人ト一ニ成テ、義仲平家ニ娵ミテ、頼朝ヲソムカバ、由々敷大事、人ニ上手セラレヌ前ニ、木曾ヲ討ントテ、十萬餘騎ニテ打立給フ、今日ハ坎日也、如何ン有ベキカト評定アリ、佐殿〇頼朝宣ヒケルハ、昔頼義朝臣、奥州ノ貞任ガ小松館ヲ責給ケル時、今日往亡日也、明日可遂合戰カト被定ケルヲ、武則、先例ヲ勘テ云、周武王合戰ニ勝事往亡日ヲ不避、勇士ハ以得敵爲吉日申テ、小松館ヘ押寄テ、既ニ貞任ヲ誅シテ、勝事ヲエタリキ、况ヤ坎日ヲヤ、先規ヲ思フニ吉例也ト宣ヒケレバ、可然トテ十萬餘騎、上野ト信濃トノ境ナル臼井坂ヲゾ越給フ、

〔假名暦略註〕ぢう日、ぶく日、　漢字重日、復日、

重日は復日の理に通ずる日也、吉事をば用ひ凶事をば捨べき也、嫁娶の事尤いとふべし、重るといふことを嫌ふゆへ也、復日は善事に用る時は幸あり、凶事に用る時は禍あり、もし吉事たりといふとも、嫁娶結婚等にはいとふべき也、

〔曆林問答集下〕釋重第四十

或問、重者何也、　答曰、曆例云、檢已當純乾、檢亥當純坤、陰陽是重也、又云、巳亥天地之本也、今按、巳四月建主乾卦重陽也、亥十月建主坤卦重陰也、以重陽重陰故爲重日、擧百事必重疊也、更不可爲凶事、又擧吉事隨事可用之矣、

釋復日第四十一

或問、復日者何也、　答曰、曆例云、復者、寅卯月者木王故、正月甲日復日、又相對庚日復日也、二月乙日復日、又相對辛日復日、三月土王故、戊己日復日、土者依無相對之位連日復日也、巳午月者火王故、四月丙日復日也、又相對壬日復日也、五月丁日復日也、又相對癸日復日也、六月土王故、戊己日連日復日也、申酉月者金王故、七月庚日復日、又相對甲日復日也、八月辛日復日、又相對乙日復日也、九月土王故、戊己日連日復日也、亥子月者水王故、十月壬日復日、又相對丙日復日也、十一月癸日復日、又相對丁日復日也、十二月土王故、戊己日連日復日也、其木與木、火與火、土與土、金與金、水與水相重故、名復日也、吉凶皆同重日也、

〔日本後紀十三桓武〕大同元年三月甲申、有司言上、生年及重復日、並依故事停擧哀、不許、

〔左經記〕長元八年八月八日己未、早旦向德大寺、予宰相中將幷武衞等也、夾聞之、一夜重日、令他處給、並從西門出給如何、武衞答、皆是亡者遺言也者、頃之歸京、大將軍並在四王相方也、

〔春記〕長久元年九月二十四日丙子、復日、

〔中右記〕大治五年四月廿日辛卯、頭辨送書云、來〇中略廿八日北野行幸被行如何、件廿八日重日也、依御風延引、可被忌重日歟、〇中略予〇宗忠藤原申云、北野行幸强不可被忌重日歟、

〔台記別記〕久安四年十一月廿六日庚戌、使親隆問始御書使、後朝使、供餅、露顯等日於陰陽師、陰陽師書折紙獻、不成勘文、〇中略

供饌日、〇中略 陽明門院、重日供之、然者至于重日者不可忌、但當節四夜有俗忌、先例不見、
(明月記)天福元年九月廿七日戊辰、金吾來、密々示合在朝朝臣、日次事、來月九日庚辰中吉十一日壬午上吉復。
。日、此事自身衰日之外不憚他衰日、又不憚重復日、是依爲吉事、如此云々、
〇按ズルニ、右ハ後堀河上皇他殿ニ移御ノ日次ナリ、
(日中行事)毎月一日は、藏人殿上の簡のはなち紙をしかへて、ふるきはなち紙のするおり返したるをのべて、人々の上日の數をかく、〇中略 大かたついたちならびに重日には、あしき事を奏せず、式に見えたり、

日遊

(暦林問答集)釋日遊第四十三
或問、日遊者何也、答曰、訪諸文日遊之説多矣、日遊所在尤有忌諱、夫日遊者天一火神也、日之精氣下、主宮舍内外、而遊八方、主日精之故、名日遊也、自癸巳日至己酉日十七日在屋内、又戊巳日居屋舍内、餘日皆運轉八方、今暦所載者、只有屋舍内耳、八方遊行者皆略之、此日勿掃屋舍内、又婦人産期之時、避母屋移庇間無咎也、
(頒書長暦上)天一神遊行ノ方ハ、万事ニ凶ベシ、就中此ノ方ニ向テ、具ヲ立テ、敵ヲ追、對決、臨産、殺生等ニキラフナリ、本文ニ産婦遷家臨産ノ時、常宅ヲノガレテ産屋へ入ル折節、天一遊行ノ方ニ向テ行座スルコトヲ凶義ナリ、サテ天一天上シ玉フハ、癸巳ヨリ戊申マデ十六日ノアイダナリ、此ノ内ニハ、方角ノ祟リハナケレドモ、天一ノ臣下、日遊神、婁壞ニ下リテ、人家ヲ塞グ故へ、家内ニ於テ、其所座ノ方ヲバ不可汚、總而不淨騷動ノ義ニ凶也、
日遊神、民家ニ於テ所座ノ方、
癸巳ヨリ五日ノ間ハ家内ノ北方
戊戌ヨリ二日ノ間ハ間　中央

庚子ヨリ三日ノ間ハ同　南方
癸卯一日ハ　同　西方
甲辰ヨリ四日ノ間ハ同　東方
戊申一日ハ　同　中央
以上十六日ノ間ハ、天一天上也、

〔枕草子十二〕ことに人にしられぬもの〇中略くゑにち

〔枕草子春曙抄十二〕くゑにち〇中略凶會日は曆に沙汰しするといへど、血忌日、天火地火などやうに、世人さして忌憚らねば、ことに人にしられぬ物といふなるべし、

〔曆林問答集下〕釋凶會第四十四
或問、無大歲二字者何也、答曰、陰陽書云、無大歲二字、皆云凶會、或二字、或四字、今按、純陽者陰氣伏藏、純陰者陽氣微弱也、純陽純陰者變化始終也、或陰或陽相向致衝破、或孤陽或孤陰而失德、故無大歲二字、是日尤凶、百事勿用之、

〔假名曆略註〕くゑ日　漢字凶會
凶會日は倭曆に註する所の惡日也、華本にいまだ其名目を考へず、然ども大抵吉事に用べからず、簠簋に異說を載といへども、信用するに足らざる也、

〔拾芥抄下末諸事吉凶日〕凶會日
正月庚戌甲寅　辛卯　二月己卯辛酉　乙卯　三月甲子甲申　乙丑丙申　丙寅甲辰　丁卯戊申　戊辰庚申　壬申癸亥　庚辰　四月戊辰丙申　己巳丁未　乙未丁巳　辛未戊午　癸未癸亥　己亥　五月丙午戊午　壬子　六月己巳丁丑　丙午戊午　丁未己未　癸丑
七月乙酉庚申　甲辰　八月己酉辛酉　乙卯　九月丙寅甲午　甲戌乙未　戊寅丙申　辛卯丁酉　壬辰戊戌　癸巳　十月乙丑

己巳丁丑　丁丑壬子　戊子癸丑　己丑丁巳　戊戌癸巳　己亥癸亥　辛丑　十一月戊子壬子　丙午　十二月戊子子　癸丑丁未　癸亥壬

〔宣明內傳三〕十二月凶會日事

正月　辛卯三陰　庚戌陰錯　甲寅陰錯

二月　己卯陰陽衝破　乙卯陰錯　辛酉陰錯

三月　甲子乙丑丙寅丁卯絶陰　戊辰單陰　壬申孤辰　庚辰陰位　甲申行狠　丙申了戾　甲辰陰錯　戊申孤辰　庚申陰錯　癸亥絶陰

四月　戊辰絶陰　己巳陰錯絶陽　辛未孤辰　癸未孤辰　乙未行狠　己亥陰陽衝破　丙申歲博　丁巳陰錯　戊午歲博　己未陰錯孤辰　丁未陰錯了戾　癸亥陰陽交破

五月　丙午陰陽俱錯　壬子陰陽衝擊　戊午陰陽俱錯

六月　己巳陰陽俱錯　丁未陽錯　癸丑陰陽衝破　丁巳陰錯　戊午歲薄　己未陽錯　丙午逐陣

七月　乙酉三陰　甲辰陰錯　庚申陽錯

八月　己酉陰陽錯　乙卯陰錯　辛酉陽錯

九月　丙寅孤辰　甲辰陰位　戊寅孤辰　庚寅行狠　辛卯絶陰　壬辰癸巳甲午乙未丙申丁酉絶陽　戊戌單陽　壬寅了戾　庚戌陽錯

十月　乙丑孤辰　己巳陰陽衝擊　丁丑孤辰　戊戌絶陽　丁巳陰陽交破　己丑孤辰　己亥絶陽　辛丑行狠　壬子歲博　癸丑陰陽交破

霜月　戊子陰陽俱錯　丙午陰陽衝擊　壬子陰陽俱錯

雪月　戊子逐陣　丁未陰陽衝破　癸丑陽錯　壬子逐陣　癸亥陰錯

右此二十四稍凶會者，雙牘曰，冥途境有廣量山河，山名曰死出，河名號三津，此山與川間有高大鐵樹，具足二十四稍，成是刀劒林也，今此凶會者，二十四稍名字也，彼鐵樹花開時，下向此刀劒林下，太

歲神部類眷屬等各集會給、勤太歲會時、天上天下諸神祇等、三途八難冥官冥衆、皆悉順附彼林下、閻浮提國一切衆生令停止一切幸祐祝言等時、名曰凶會日、甚深々々專可禁止之、若不用此法輩、必會災禍、乍覆身斷命、有何疑乎、

三陰裁衣則有患　陰錯弔死人附身　陽錯不可問病人　陰道不可致帯治　衝陽不可勤公事
絕陰不可結嫁娶　絕陽不可成結婚　單陰不可食新米　單陽不可出財寶　陰位不可主病家
孤辰不可行不淨　歲博不可祈佛神　了戾不可作解除　逐陣不可拜佛神　行狠不可蒔種子
陰陽交破嫁娶凶　陽陰衝擊不可打人畜　陰陽俱錯出行深凶　陰陽衝破不可求奴婢　陰錯了戾佛法甚凶　陰錯絕陽造作凶　孤辰了戾佛法甚凶　陽破陰衝不打生類　陰錯孤辰不可致訴訟

右今案者、深於灌頂壇可授與之、任此文段新可撰定之、敢以不可有如在者哉、

〔頭書長曆中〕凶會日ハ、大歲ノ前後對位ニハヅレテ、孤陰孤陽ノ日ナリトテ、世俗物每ニ禁忌スレドモ、就中廿四稱ノ掟ニ不背ヲ宗トスベシ、其ノ二十四稱トハ、今マ本文ニ註加スル所ノ三陰、陰錯等也、併ナガラ、ホキニ出ル二十四稱ノ內、孤辰了戾ノ一稱ハ、終ニ凶會日ノ註ニ不出也、尙考ヘ知ルベシ、且又古板ノ本文ハ、往往脫シ、難用故ヘ、先ヅ據舊纂正之、其餘ハ通書大全ニ出ル陰錯陽錯ノ內ニ於テ補之、所以如何トナレバ、新曆註ニ、欲一理也、

通書大全ニ出ル陰錯日

但シホキノ凶會日ノ註ニハ、弔死人附身云云、

正　庚戌　ホキニ出
二　辛酉　右同
三　庚申　右同

四　丁未　ホキニ陰錯丁戾ト云フ
五　丙午　ホキニ陰陽俱錯ト云フ
六　丁巳　ホキニ出
七　甲辰　右同
八　乙卯　右同
九　甲寅　ホキニ不出　但新曆ニ用ル注也
十　癸丑　ホキニ陰陽交破ト云フ
十一　壬子　ホキニ陰陽俱錯ト云フ
十二　癸亥　ホキニ出

通書大全ニ出ル陽錯日
但重寶凶會日註ニ不可問病人云云、

正　甲寅　ホキニ陰錯ト云フ
二　乙卯　右同
三　甲辰　右同
四　丁巳　右同
五　丙午　ホキニ陰陽俱錯ト云フ
六　丁未　ホキニ出
七　庚申　右同
八　辛酉　右同
九　庚戌　右同

十　　癸亥　ホキニ不出但新暦ニハ用之
十一　壬子　ホキニ陰陽倶錯ト云フ
十二　癸丑　ホキニ出
右陰錯ト陽錯ノ二箇ハ、鑑篁ニ出ル凶會日ノ内也、蓋シ貞享暦ニ、乙丑ノ十一月七日癸亥ニ凶會日ト註セリ、是ハホキニ不出シテ、通書ニ出ル十月ノ陽錯ニ當テ、尤節切ノ日取也、今論ズル所ノ凶會日、暦十一月ノ七日ナレドモ、其ノ十一月ノ節未來故ニ、十月分ニ取ルト云フ義也、但シ十一月ノ入節ハ、同ジ十日ノ亥刻也、

〔北山抄六備忘略記〕奉幣諸社事〇中略新雨例〇中略應和三年七月六日、令勘可被行祈雨事之日、陰陽寮申云、連日凶會、近無吉日、重被仰云、擇吉日遠延引者、彌致損害歟、雖凶會近可擇申者、勘申九日乙未、始自彼日、於東大寺可被行仁王經讀經、以右少將清遠爲使、又於僧正可修請雨經法云々、十五日奉幣廿七社、

〔春記〕長久元年九月十四日丙寅凶會、九坎、

〔殿暦〕康和四年正月七日癸亥、行幸、是希有例也、凶會日行幸、又以希有例歟、戌剋許爲隆來、行幸還御、來十日曉云々、行幸此間極滋也、是依御方違歟、雖然凶會日、何樣に可候事哉、

〔本朝世紀〕康和五年六月十一日戊午、天皇行幸中院、依神今食也、大納言家忠卿以下參入、今日凶會日也、不被忌避、依式日歟、

〔中右記〕大治三年九月三日、〇甲申從今日及來十一日長凶會也、　五年三月廿一日、〇癸亥凶會、　廿二日凶會、外記俊弘來覽御禊前驅差文、

〔玉海〕治承四年三月廿九日辛巳、午剋藏人左衞門權佐光長來、傳攝政〇藤原基通命云、來月二日平野祭可被立殿上使、〇註略而彼日凶會日也、代始惡日之例被問外記之處、天仁仁安初度被立殿上使之日、

伐日

御凶會日也、仍被逐彼例之處、未著御御束帶凶會日初著御不可然之上、御不豫之後未有御浴殿、〇中略爲之如何、〇中略中云、〇中略凶會日始著御御束帶及御樂之後、翌日御浴殿若不可候、仍准他時之例被立殿上使、無御代何事之有哉者、

(山槐記)治承四年四月十三日乙未、今日雖可有警固召仰、依凶會坎日、明日可被行云々、代始、日次不宜之時延引例歟、

(運歩色葉集)代日 甲申、丙子、戊寅、庚午、壬辰、壬戌、乙酉、丁亥、己卯、辛巳、癸未、癸丑、

(簠簋內傳)五實日 沙汰事、〇中略伐日者、自下上、相尅日也、故曰下逆日、臣下如殺君子日也、故自上下、被忠賞、或給官祿、或企謀叛、向他敵國諍、臣下以反逆得以失勝利而已、爰有八伐日、自丙子始也、

(曆林問答集)釋伐第四十七

或問、伐者何也、答曰、伐者支尅干日也、謂之下尅上日、又謂子尅母日、但輕凶也、隨事用之無咎、

(寬永版大雜書)ばつ日、起請誓文せず、かねをうけざる日の事、

きのえさる、きのとゝり、ひのえね、ひのとゐ、つちのえとら、つちのとひつじ、かのえむま、かのとみ、みづのえたつ、みづのとうし、此日よく〳〵いむべし、

(永左記)承保四年承曆元年十一月廿七日甲戌、或人語云、此日申剋許、召陰陽師有行道言道榮等於藏人所、右少辨伊家仰云、稻荷幷祇園行幸日時以前日、有行道榮等、相共擇申來廿九日丙子已了、而件丙子伐日幷晦日也、行幸不快、十二月一日丁丑吉由、道言所申也者、有行申云、六月十二月一日、御體御卜日也、行幸可有憚也、至于伐日晦日先例多有、仍廿九日丙子有何難乎、〇中略道榮申云、〇中略今日避重復日、可擇申者、〇中略伊家重仰云、復日幷伐日等行幸例、各可注進者、道言注進復日例了、爰有行至乎伐日例者、陪歸里第、可注進由申云々、然間各退出云々、

忌遠行日

〔簠簋內傳〕二忌遠行日 正節切 酉巳丑酉巳丑酉巳丑酉巳丑

〔曆林問答集〕下釋忌遠行第四十八

或問、忌遠行者何也、答曰、堪輿經云、忌遠行名天殺日、今按、遠行歸家移徙嫁娶冠帶大凶也、

忌夜行日

〔簠簋內傳〕二忌夜行日 正節切 子子午午巳巳戌戌未未辰辰

右今二箇日取○忌遠行日、忌夜行日、總而出行等凶之、敢以不企步行儀日也、

〔曆林問答集〕下釋忌夜行第四十九

或問、忌夜行者何也、答曰、曆圖云、忌夜行者名百鬼夜行日、但忌時不忌日、今按、子時忌之、是子陰陽之始終、故此時不可出行、遠近皆死亡、

〔拾芥抄〕下末諸事吉凶日 百鬼夜行日 不可夜行

正子　二午　三巳　四戌　五未　六辰

〔吉記〕治承四年四月一日癸未、今日賀茂初齋院禊、中略予進、上卿披見勘文、被示云、來十二日公家御衰日、往亡日、道虛日、忌夜行日也、有如此難、可何樣哉、中略予申云、不顧日次、式日入御度々吉例也、中略以此旨申上卿之處、猶雖有不甘心氣、被留勘文了、

〔寬元御讓位記〕寬元四年正月二十二日壬子、今夕行幸大炊御門第、中略今日忌夜行日也、

下食日

〔拾芥抄〕下末諸事吉凶日 下食日 自節中計之、又毎月戊日定下食也、

未正　戌二　辰三　寅午子申　巳亥丑卯

〔拾芥抄〕上本諸頌 下食日沐浴誦

妙善王　金著女　追杖鬼　參尾王　波羅羅鬼

〔曆林問答集〕下釋歲下食第五十一

或問、歲下食者何也、答曰、尙書曆云、歲下食者有天狗星其精也、是以云天狗出食日、又號深惡神日、

大禍日
狼藉日
滅門日

六十日一出食、一歳六食也、但輕凶也、支干吉並者用之無咎也、

〔頭書長暦 上〕歳下食日ハ、天狗星ノ精、毎年六七度ヅヽ、地ニ降ッテ、食ノ物ヲ求ムト云ヘリ、故ニ種子蒔刈初、食物等、一切凶、之委ハ前書暦ニ見ユ、

〔九條殿遺誡〕遺誡幷日中行事 略○中

次擇日沐浴、(中略)凡日不可浴、其惡日、寅辰午戌下○食○日○等也、

〔江家次第 正月一〕四方拜事 一日寅一刻○中略

追儺後、主殿寮供御湯、今案、晦當歳下○食○膳、供前朝、後三膳御也、

〔江次第抄 正月一〕四方拜 略○中

歳下食　其日注曆下食者鬼神之名、此日沐浴、則鬼舐頭而髪落、故憚之、

〔倭名類聚抄 三形體〕鬼舐頭　病源論云、鬼舐頭、略○注 人頭或如錢大、或如指大、髪不生也、

〔梅園日記 四〕鬼舐頭

夜光珠といふ書に、故なくして頭のまるく禿るを、俗に蛐蟮の舐りたる痕といふは誤れり、これ皮膚に風熱のあつまりたる病にて、其名を鬼舐頭禿と云とあり、按するに、此説是なり、たゞし、此げじ〳〵ハ下食時の誤りなり、(中略)下食時に一時々悪み、歳下食は一日を悪り、

〔禁秘御抄 中〕神事次第 略○中

歳下食沐浴不忌、是白河院仰、不憚云々、

〔運歩色葉集 多〕大禍日 正寅 二午 三丑 四申 五卯 六戌 七巳 八子 九未 十寅 十一酉 十二辰　〔同 羅〕狼藉日 正五九子日　二六十卯日　三七十一午日　四八十二酉日、天火亦同、大凶日、　〔同 免〕滅門日 正巳 二子 三未 四寅 五酉 六辰 七亥 八午 九丑 十申 十一卯 十二戌

〔假名暦略註〕大くわ　らうしやく　めつもん 漢字大禍狼藉滅門

大禍日は大悪日也、大禍、狼藉、滅門、これを三箇の悪日といふ、殊に大禍日は、手斧始、修造、門戸を建、

或は船路に行、又は葬送等に大に惡し、かならず用べからず、

狼藉日は、通書に是を天獄日といふ、天火日と同日にして、三箇の惡日の一つ也、若是を犯し用ゆれば、百事皆散失す、故に萬事に用ゆべからず、

滅門日は三箇の惡日の一つにして、萬事に用ざるの日なり、若是を犯し用ゆる時は、必其家門を滅するの禍有、愼べし、以上暦中三箇の惡日といふ、

四不出日

〔拾芥抄 下末諸事吉凶日〕四不出日 壬子 辛酉 戊午 乙卯 件日出行必死

〔吾妻鏡 三十六〕寛元二年九月十九日丁巳、大殿〇藤原頼經明春御上洛事、爲但馬前司定員奉行有御沙汰等、日次事、二月一日可有御進發之由、被思召之處、爲四不出日之旨、依有其說、可憚否、被召問維範晴賢等朝臣、各定申云、四不出日勿論也、但賀家不憚之歟、保憲暦林擇入丙寅丙午、不可有禁忌、二月九日吉日也、以件日可爲御入洛之期歟、一日御進發有十六日御入洛者、厭對日也、出行可憚之、旁可被用九日云云、

〔吾妻鏡脫漏〕元仁二年〇嘉祿元年六月廿六日乙卯、今日渡御可宜之由、一同擇申之、武州〇北條泰時被仰云、乙卯四不出日可有其憚歟云云、彼輩申云、四不出日者出行忌之、今御移徙之也、不可有憚云云、仍治定畢、

道虚日

〔運歩色葉集 多〕道虚日 六日、十二日、十八日、廿四日、卅日、

〔簠簋内傳 二〕道虚日之事　一日、六日、十二日、十八日、廿四日、晦日、

右者出行深凶也

〔拾芥抄 下末諸事吉凶日〕道虚(タウコニチ)日 出行 嫁娶 神事 移徙 加冠 着袴忌之

六日　十二日　十八日　二十四日　□日

〔台記別記〕久安四年十一月廿六日庚戌、使親隆問始御書使、後朝使、供餠露顯等日於陰陽師、陰陽師

書折紙獻、(不成勘文、中略)　供餅日　正月廿四日丁未道虛

〔玉海〕建久元年十一月六日丙辰、賴朝卿今日入洛、而依道虛日延引、明日云々、

〔吾妻鏡二十八〕寛喜四年(貞永元年)正月廿三日甲辰、去十二日、朝覲行幸無爲被遂之由、自京都被申之、自閑院幸持明院殿云云、武州(泰時、北條、)被仰云、十二日欲向山內之處、成人道虛日有憚之由申間延引、而彼遂朝覲之由、今有其聞、定是被揃先規歟、以此日被用吉事之例尤不審云云、玄蕃允康連、齋藤兵衞入道淨圓、法橋圓全等、祗候御前、淨圓圓全等申云、彼例未承及、只古今之際、貴賤忌來之日計存之云云、康連有所見之由申之、武州重被尋仰之間、起座、即持參一紙、進覽之、武州殊御自愛、被入御文書之中云云、　被記云

道虛日被用吉事例

長和五年二月卅日、左大臣(御堂)給兵仗事、(年月廿四日、渡御六條內裏、以後、)　延久年月日、宇治殿被行御賀事、　寛和元年四月十二日、大殿賜隨身後申慶給事、　天喜五年十二月廿四日、但馬守補五位藏人後被申慶云云、　承保元年十月卅日甲午、被行大嘗會御禊事、(白河院)　永保三年十一月十二日癸丑、宇治泉殿舍屋等被造加後、殿下(京極殿)渡御事、　寛治元年六月廿四日甲辰、攝政初度御上表事、(京極殿先例也)　同二年二月十八日乙未、被行除目事、少將殿(忠)被申慶、　康和元年十月六日甲辰、大將殿被渡朱器事、(宇治入道殿)　同十二日庚戌、前齋院(令子)始渡御大殿事、　同五年四月六日甲寅、阿闍梨寛信申慶事、

〔勘仲記〕弘安九年正月十二日己卯、參院、奏聞行幸條々事、(中略)予奏聞云、廿日爲行幸者、還御廿一日、當歸忌日、如何樣可候乎、然者可爲廿四日道虛日、神社行幸例相尋可申、小時退出、國高朝臣重注進云々、

三月廿日丁亥(丁亥日、建久二年北野行幸例、)　廿四日辛卯(道虛日、延長四年北野行幸例、)

道虛日神社行幸例、於延長者非神社、野遊行幸、今度難被摸此例、道虛日例、康保二年五月廿七日、朱

五墓日

雀院行幸、承暦元年十二月十四日、法勝寺供養行幸、如此云々、神社行幸無例、

〔運歩色葉集 古〕五墓日、依人之性忌之、土性人戊辰 火性人丙戌 木性人乙未 金性人辛丑 水性人壬辰 一性不用日也、

〔假名暦略註〕五むし日　漢字五墓

五墓日は五行の墓なり、凡墳墓は人の死骸を埋む所なるが故に、生氣なきを以て、此日は百事に用べからず、大に惡し、

〔簠簋內傳 三〕五墓日沙汰事

胎、養、長、沐、官、臨、帝、衰、病、死、墓、絕、

木臨	正	酉戌亥子丑寅卯辰巳午未申	乙
火長	正	子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥	丙
土病	正	午未申酉戌亥子丑寅卯辰巳	戊
金絕	正	卯辰巳午未申酉戌亥子丑寅	辛
水病	正	午未申酉戌亥子丑寅卯辰巳	壬

右五墓日者、五帝龍王生住異滅十二因緣道理也、爰十二運中專墓一字以深厭之、所以奈何、墓死骸埋塚也、人間父母肉身破壞處者、尤凶之、

戊辰 土性人墓日也　壬辰 水性人墓日也　丙戌 火性人墓日也　辛丑 金性人墓日也　乙未 木性人墓日也

〔暦林問答集 下〕釋五墓第四十六

或問、五墓者何也、　答曰、五行大義云、五墓者、木生於亥、死於午、墓於未、火生於寅、死於酉、墓於戌、金生於巳、死於子、墓於丑、水生於申、死於卯、墓於辰、土生於卯、死於戌、墓於辰、今按、五行皆有生死、故入于墓、乙未日爲木之五墓、丙戌日爲火之五墓、戊辰之日爲土之五墓、壬辰之日爲水之五墓、五言五行之總

四廢日

小空亡日

名、丑未辰戌土之位也、故爲五行之墓、万物皆歸於土、故配丑未辰戌、是日尤忌百事莫用之、

(長秋記)長承三年十月十六日辛卯、上皇、女院、於仁和寺、令始熊野御精進給、(上皇田中殿、女院此院、共二品親王御房也、)例年於鳥羽殿有此事、而於今度、彼殿依方角忌、秋節間無其儀、已廻參院、先是左武衛別當祗候、別當相語云、來廿日御進發也、件日雖五墓日、前例多存由、宗憲所勘申也云々、

(台記別記)久安四年十月五日己未、資家來、復命曰、正月於東三條、天子加冠、十九日出自同宮、朝法皇、還東洞院宮、其夜可迎女以西方屋三字、爲女御之廬、御同可遷、擬彼廬之日於晴道、(天文博士)對曰、十四日可、但五墓、後問周憲(陰陽博士)在憲、對曰、五墓非無、其忌、二十四日可矣、(三人不成勘文)

(本朝世紀)久安三年三月八日辛未、權大納言藤宗輔卿參仗座、欲行軒廊御卜、官寮參仕、爰權天文博士安倍晴道申云、今日四廢日也、御卜可有憚、陰陽頭賀茂守憲朝臣申云、四廢日御卜例、康和四年二月六日辛卯也、晴道申云、凡卜筮多、禁日、子日、及四廢日尤可忌之、至于急事者別事也、上卿此旨被申攝政、仍延引了、　四年四月三日庚寅、内大臣(藤原頼長)參仗座、定中齋王禊前駈事、參議藤忠雅卿、書定文、附藏人右少辨藤光房、被内覽、次被行軒廊御卜、是祇園寶殿燒失事也、權天文博士安倍晴道申云、今日四廢日也、御卜雖可有憚歟、雖然粗有先例之上、急速事不可默止之由、上卿被仰陰陽頭守憲、權助憲榮等、申有先例之由、

(簠簋内傳三)小空亡日

一晝　四夜　八晝　十一夜　十五晝　十八夜　二十二夜　二十五夜　二十九晝

右今小空亡日者、太歲南門番神也、爰有七人、所謂諸惡鬼、諸災鬼、諸患鬼、諸惱鬼、諸苦鬼、諸病鬼、諸疾鬼等也、第一諸惡鬼者惡鬼也、兩角尖如夜叉、有人家墻壁下、致萬事障礙、故尤厭之魔王者也、

同空亡時事

甲子旬日間至酉　十干足、然戌亥二遁干、故名曰空亡時、
甲戌旬日間至未　十干足、然申酉二遁干、故名曰空亡時、
甲申旬日間至巳　十干足、然午未二遁干、故名曰空亡時、
甲午旬日間至卯　十干足、然辰巳二遁干、故名曰空亡時、
甲辰旬日間至丑　十干足、然寅卯二遁干、故名曰空亡時、
甲寅旬日間至亥　十干足、然子丑二遁干、故名曰空亡時、

〔頭書長暦上〕空亡日、簠簋ニハ小空亡日ト云フ也、即チ朔日、八日、十五、廿二、廿九ハ自卯至午晝四時ヲ凶、四日、十一、十八、廿五ハ自酉至子、夜四時ヲ凶也、

〔通俗編二十一藝術〕空亡　晁氏讀書志、空亡之説、本于史記孤虚、劉禹錫題破屏詩、晝時應値空亡日、賣處難逢識別人、

〔五雜組二天〕余〇謝肇淛嘗以破日娶妻矣、不逾年而得雄、嘗以月忌上官矣、不數載而遷、嘗以天賦日解水衡錢萬緡矣、而卒無恙、嘗以空亡日出行遊任矣、而諸事盡遂、其餘小事不可勝紀、故謂陰陽曆日可盡廢也、

〔史記百二十八龜策列傳〕褚先生曰、〇中略孔子聞之曰、神龜知吉凶、而骨直空枯、〇中略註日爲德而君於天下、辱於三足之烏、月爲刑而相佐、見食於蝦蟇、蝟辱於鵲、〇中略註騰蛇之神、而殆於卽且、〇中略註竹外有節理、中直空虛、松柏爲百木長、而守門閭、日辰不全、故有孤虛、〇甲乙謂之日、子丑謂之辰、六甲孤虛法、甲子旬中無戌亥、戌亥卽爲孤、辰巳卽爲虛、甲戌旬中無申酉、申酉爲孤、寅卯爲虛、甲申旬中無午未、午未爲孤、子丑卽爲虛、甲午旬中無辰巳、辰巳爲孤、戌亥卽爲虛、甲辰旬中無寅卯、寅卯爲孤、申酉卽爲虛、甲寅旬中無子丑、子丑爲孤、午未卽爲虛、劉歆七略有風后孤虛二十卷、正義曰、按歲日月時孤虛、竝得上法也、

〔五行大義二〕第五論配支幹〇中略所以用甲子相配、爲六旬之始、干既有十、支有十二、輪轉相配、終於癸亥、故有六十日、十日一旬、故有

八龍日
七鳥日
九虎日
六蛇日

六旬、一旬盡、一甲癸、便以甲配子、盡干至癸酉、便盡干、餘支有戌亥、又起甲配戌、盡干至癸未、餘支有申酉、又起甲配申、盡干至癸巳、餘支有午未、又起甲配午、盡干至癸卯、餘支有辰巳、又起甲配辰、盡干至癸丑、餘支有寅卯、又起甲配寅、盡干至癸亥、十干有十二支有、配周畢、還從甲子起、故六甲輪轉、止六十日、十日一旬、一旬之內二支無配偶者爲之孤、所對衝者爲之虛、卜筮所云、空亡、以支孤無干、故名爲空、云亡者无也、无干故亡、所對者全虛、故云空也、

〔十駕齋養新錄十七〕孤虛

史記曰、辰不全、故有孤虛、〔龜策傳〕裴駰云、甲乙謂之日、子丑謂之辰、六甲孤虛法、甲子旬中無戌亥、戌亥卽爲孤、辰巳卽爲虛、甲戌旬中無申酉、申酉爲孤、寅卯爲虛、甲申旬中無午未、午未爲孤、子丑爲虛、甲午旬中無辰巳、辰巳爲孤、戌亥爲虛、甲辰旬中無寅卯、寅卯爲孤、申酉爲虛、甲寅旬中無子丑、子丑爲孤、午未爲虛、劉歆七略、有風后孤虛二十卷、吳越春秋計硯曰、孤虛謂天門地戶也、與裴說似異、

〔曆林問答集下〕釋八龍七鳥九虎六蛇第四十五

或問、春八龍、夏七鳥、秋九虎、冬六蛇者何也、　答曰、群忌隆集云、春甲子乙亥爲八龍日、夏丙子丁亥爲七鳥日、秋庚子辛亥爲九虎日、冬壬子癸亥爲六蛇日、今按、春木王、甲乙木也、子者十二支之首、亥者十二支之終、故甲子乙亥春八龍日也、八木數也、龍東方青龍之故也、夏火王、丙丁火也、子亥如前、故丙子丁亥夏七鳥日也、七火數也、鳥南方朱雀之故也、秋金王、庚辛金也、子亥如前、故庚子辛亥秋九虎日也、九金數也、虎西方白虎之故也、冬水王、壬癸水也、子亥如前、故壬子癸亥冬六蛇日也、六水之數也、蛇北方玄武之故也、蛇配於龜、龜玄武故也、其四季皆凶也、百事莫用之、

〔簠簋內傳二〕四季凶日

春甲子乙亥八龍日八龍者八龍頭也　夏丙子丁亥七鳥日七鳥者七鳥頭也　秋庚子辛亥九虎日九虎同上

冬壬子癸亥六蛇日六蛇同上

十惡日

右今所明四季惡日、算經所述八難七陽九厄六害等也、

〔具註曆〕四个惡日　春八龍甲子乙亥　夏七鳥丙子丁亥　秋九虎庚子辛亥　冬六蛇壬子癸亥

〔永昌記〕長治三年〇嘉承元年四月十五日丙子、今日吉田祭、〇中略藤宰相顯實卿兼以參著、初度依爲氏社申請行之、而爲七鳥戊日、依爲氏社不憚歟、

〔百練抄〕七二條平治元年八月十六日〇丁卯寅剋、上皇仙居〇崇德高松殿炎上、

或記云、件御所、去月十九日加修理、有御移徙、九虎日、御渡、人傾申之、果有此災、本件御所鳥羽院仰長門守師行造立之、

〔山槐記〕治承三年正月六日乙丑、今日、東宮〇安德御五十日也、去年十一月十二日降誕、今年正月一日當五十日、其間無浸日、依以滿日、可有此事也、而元日申日、二日御衰日、三日四日五日(甲子)八龍日次之間、及今日也、當五十四日、是又當承曆日數、自然叶佳例、

〔吾妻鏡〕三十二嘉禎四年〇曆仁元年正月十八日乙丑、將軍家御上洛事有評議、〇中略亦爲師員奉行、召陰陽師被問之、來廿日御出門、廿八日〇乙亥可有御進發、而件日八龍也、御出門之後者不可憚事歟、但同擇宜日、可有御進發之由有申行之人、可爲何樣哉可計者、晴實朝臣申云、御出門之後、強不及擇日次、其故者、暫有御座于御出門之所者、可准路次逗留之間也、然而以吉日御進發又可宜哉、來月二日三日可然日也、

〔吾妻鏡要目集成〕は一八龍日

八龍日ハ、三輪寶〇三輪寶、長曆作三鄰亡、也、亥寅午ノ日ヲ三輪寶ト云、俗此日イホヲ結ブト火災アリト云、

〔鴉鷺合戰物語〕第六住吉願書　後見烏惡日發向敎訓　城用害事

九月三日、眞玄が方には軍の評定これあり、明日四日と定めしを、赤口日とて延べにけり、さらば五日にもなさずして、六日にぞ定りける、九月六日はみづのえむま、天一神戊亥にあり、後見の烏いはく、殿は四十一歳木性酉の御年なり、壬午は御爲には一生不用日也、又道虚日也、しかも中鴨

大敗日

八專土用

は乾にあたりて、天一神の方なり、餘の悪日は皆おきぬ、天一神の方にむきて、是非弓ひかぬ事也、山城守も四十三とやらむ申さば、土性の酉にて、御同性に參られ候間、彼がためにも悪くは候へども、敵にとりかけられては、悪日かへつて利をうる物なり、其上六日より土用に入ば、土王木囚して、王相御身に當ては以の外わろし、冬の節に入ては、木相土囚にして、相剋相生思ふやう成べし、いかに憂しめすとも、土用の間を御まち候べし、總じて道虚、往亡、歸亡、伐日、六蛇、七鳥、八龍、九虎、十。。十悪日、此は万に凶なり、又大禍、滅門、狼藉、復日は四ケの悪日、四不出日、五墓、十死、赤口日、此等は事によるべきかなれども、多分は好からざる日也、指神斗賀神日塞、これ又きらふべき方なり、明日の御合戰は、大きに然るべからずと、鳴つ口說ついさむれども、目の前なる敵をさしおいて、吉日悪日とて歸せざらんは、近比のくせ事、短慮未練の正體なし、敎訓に拘らず、今迄もあればこそ有しに、往亡日といひ、十悪日といひ、天一神の方といひ、取集めたる悪災日口日の九月六日に、合戰を定めける事こそ返々も淺猿けれ、

(運歩色葉集多)大敗日甲辰、乙巳、庚辰、辛巳、壬申、丙申、癸亥、丁亥、戊戌、己丑、大凶日也、歌云、キ々ハ辰巳、カ子ハ辰巳ノ、木火申、木火イノシヽ、土ハ戌丑、

(多聞院日記)永正三年八月廿四日、筒井出頭、去十六日十悪、大敗日也、向後合戰ニ可忌事也、

(運歩色葉集八)六八專日數合七十二日也、四土用之日數、亦七十二日也、

(簠簋内傳二)八專之事

壬子日入、癸亥日迄十二日也

八專之間日之事

丑辰戌午之四日也

(壒嚢抄九)八專日トハ如何ナル日ゾ、三寶ニ忌因緣幷十二日アルヲ八專ト云事、旁難心得者也、八專日トナ、三寶ニ忌日八箇日也、但壬子ヨリ癸亥ニ至間、總數卽十二日ト云歟、所謂壬子日炎魔

天會、甲寅日地天歡喜會、乙卯日水天般若會、丁巳日火天諸天會、己未日羅刹天不動會、庚申日風天歡喜會、辛酉日吉祥天豐樂會、癸亥日毘沙門天成佛會、　右八箇日宿曜經稱二八專一也、上件日冥衆悉上レ天、下界御座ヌガ故ニ、雖レ成二佛事一无二冥衆之影嚮一ト云々、仍大唐顯德四年丁巳歲ヨリ、三寶類皆以所レ忌來也ト云々、然共又彼岸ニ合時ハ、彼岸吉ニ依テ、八專凶ヲ捨テ可レ成二善根一也云々、

〔和漢名數節序〕八專　壬子爲レ始、癸亥爲レ終、凡十二日、但丑辰午戌非二專日一、故除レ之、和俗謂二之間日一、其餘只得二八日一、故名二八專一、凡八專者、干與レ支五行之運同而其氣專也、

〔假名曆略註〕どよう　漢字土用

土用とは土の氣始て事を主どるの日也、凡一歲の內、五行の氣互に循環して以て四時をわかち、もつて歲序をなす也、春は木氣事を主り、夏は火氣事を主り、冬は水氣事を主どる、每氣七十三日有奇を主どる也、唯土は中央に有て、四季に應じて各十八日有奇を主どる也、其始の事を主どる日を土用の入とす、都て土用の中は、造作、修造、柱立、礎、或土を動かし、井を掘、壁ぬり等、一切土を犯すに大に惡し、一說に土用の間日あれども信用するに足らず、

八せん　漢字八專

八專日は、元來兵家の撰日なり、凡軍勢を出し、陣所に出張し、軍營を造る等に忌む日なれば、俗家に於ては、無用の日也、但針灸に此日を忌のみ、間日を考用ゆべき也、

〔吾妻鏡二十六〕貞應二年六月十二日、伊豆國走湯山常行堂造營事、於二柱者一已立訖、來十九日可二上棟一之由、自二寺家一行事所言上、於二二品亭一、爲二武藏目代二郎兵衞尉雅忠奉行一、有二其沙汰一、而被レ問二陰陽道一之處、上棟事、土。用。中可レ有二其憚一之由親職申之、七月十一日壬子、十二月二日庚子、可レ宜之由請賢申之、而十一日子者八專也、立二堂舍一之先例有レ之哉之由、行西依レ仰申、被レ尋二下晴賢一、又申云、以前已立レ柱畢、其上八專日、或立二佛閣一、或遂二供養一、其例繁多也、仍日時風記仰治定被二召置一之云云、

○按ズルニ、土用ノ事ハ、歳時部時節篇雜節條ニ在リ、

〔簠簋内傳　三〕神上吉日

乙丑、法身大日垂迹和光出羽國大梵字川水上、五味鏡湯淵靈居、湯殿權現顯給日也、

己巳、辰狐王三女子、此國飛來、天女嚴島、赤女竹生島、黑女江島、三洲垂迹給日也、

壬申、二柱神自高天原天逆鉾差下、自凝島造得筑波山高下、顯男體女體、現鹿島香取兩大明神日也、

癸酉、素盞烏尊行李出雲國、退治八岐大蛇日也、然娶奇稻田姫、產得大己汝尊日也、

壬午、鹿島大明神爲阿久留王退治、下東海汀、向北方構陣社、塞東北方鬼門關日也、

甲申、天照大神開天岩戸、和光秋津洲葦原國一天、垂迹伊勢國二見浦、內宮外宮現日也、

甲午、熊野三所權現自震旦國來、我朝紀伊國牟婁郡音無川源屏風岡玉寶殿建立給日也、

神中吉日

庚午、神功皇后筑紫豐前國宇佐郡蓮臺寺邊始搆、玉幣帛執、金奴衫、七日七夜祭禮天神地祇日也、

乙酉、大和武尊受大神宮勅、退治東國夷、自爾以來改叢雲劍、草薙劍號之日也、

甲辰、伊勢國御神殿爾來日同收寶幣日也、

乙巳、二所三島若宮八幡造立日也、同富士權現自震旦國來、此國垂迹日也、

戊申、藤原太政大臣春日宮造營、子孫繁昌、兩國大王賀取日也、

神下吉日

丁丑、菅丞相自筑紫太宰府上洛給日也、

丙午、吉田大明神初賜關白官成、日本神主領日也、

戊午、鎌足大臣多武峯建立、天上大神宮日也、

右三寶神吉兩儘深意於灌頂壇明之、穴賢々々、

三寶吉日

〔曆書〕神吉日

乙丑、己巳、壬申、丁丑、己卯、壬午、甲申、乙酉、辛卯、甲午、丙申、己亥、庚子、辛丑、癸卯、乙巳、丙午、丁未、己酉、戊午、己未、丁酉、庚申、上吉　庚午、丁卯、癸酉、戊申、辛亥、壬子、癸丑、乙卯、辛酉、下吉

右不謂上下、皆所用也、偏依曆注可用之、不注有忌日也、但當厭及厭對往亡可忌之、又忌寅戌日、又衰日依事可忌之、

〔假名曆略註〕神よし　漢字神吉

神よし日とは、徒曆に註する所の吉日也、此日は大抵神事、祭禮、遷宮、祈禱、立願、造社等に用て、大に吉也、但都て神事にのみ用る日と心得べし、

〔簠簋內傳三〕三寶上吉日事

丙寅日、舍利弗誕生日也、終入佛室、稟智慧第一、十四歲辰降叔火長爪梵士、然而望佛場矣、

壬午、佛祇園精舍造立日也、故堂塔建立吉、此寺三千第一佛室也、法藏建立用之、

庚寅、釋迦入壇特山日也、故入學剃髮登山授戒願始行甫弟子取初等專可用之、

甲午、釋迦雪月八日寅一天成等正覺日也、故坐禪入定佛法傳授等專可用之、

丁酉、大迦葉授法日也、於今世法流更不斷也、

己酉、目連尊者始入佛室、振神通第一名譽日也、故入學授戒勤行始等尤大吉日也、

三寶中吉日略○中

三寶下吉日略○下

〔曆書〕吉事吉日略○中

三寶吉日

壬午、庚寅、甲午、丁酉、己酉、以上上吉　辛未、癸酉、庚子、秋忌之　壬寅、甲辰、中吉　丙寅、俗云郎死、玉云人死、戊寅、俗云家破　庚辰、俗云女死得財、

玉云大凶、癸未（曆云大凶、玉云凶、）乙酉（曆云人死、）癸卯（曆云大凶、玉云凶、）癸巳（曆云得財、玉云大凶、）辛亥（曆云大凶、玉云凶、）丙午（曆云女死、玉云凶、）以上吉、丁卯（曆云大凶、玉云凶死、）庚午（曆云子孫死、玉云大凶、）丁丑（曆云女死、玉云凶、）辛丑（曆云大凶、玉云凶、）丁未（曆云子死、玉云凶、）戊申（曆云大凶、玉云吉、）癸丑（曆云入寡、玉云大凶、）甲寅（曆云大人死亡、玉云死、）乙卯（曆云入寡、玉云凶、）辛酉（曆云入寡、玉云吉、）丙午（曆云女死、玉云凶、）

右巳上、依大臣（〇吉備）說、吉注暦、然而他家說、重凶之故不用之、有急事之時斟酌可用歟、凡三寶吉日、有吉備大臣撰暦門僧正、春苑玉成等之說、暦家用大臣說、仍注暦、然而他家重凶之故不用之、若有急事之時斟酌或用之歟、下略云々、忌凶會、九坎、厭對、滅沒等凶神、及身、衰厄、日避之、又大禍、滅門、狼藉、八專、羅刹等也、雖上吉、不用之、

又雖下吉、遇甘露、金剛峯等吉、又至斬新、羅漢日、尤可用之、故要注進、（以下略）

慶安元年十一月廿日　泰重上

〔中右記〕天永二年四月六日、今日殿下御祈、被始大般若御讀經、戊日頗雖□陰陽助家榮申云、今日巳當月曜日也、是三寶吉曜也者、仍所被始也、

〔玉葉〕承安三年四月八日庚午、陰陽頭在憲朝臣來、爲同姓者書補日次也、申云、來十五日丁丑、時午、件日爲被可參仕之由召仰了、此次相尋在憲事等、（中略）〇

一三寶吉日事

中吉之中辛未、下吉之中庚午、□不用之、又雖下吉、戊寅丙寅爲大上吉用之、曾暦中吉云々、又申日、雖爲佛事、戊申日入吉日、用捨在時議、但多分强不用之、又白河院御時、壬申日不入吉日之、申日被供養御經、是希有事也者、

〔國師日記〕寛永二年八月八日、昌首座衆佛諸吉日。書付遣ス、案左ニ有之、

衆佛諸吉日

八月二十七日（癸卯破日）　還宴

九月二十一日（丁未柳）收　大祈禱

十月十日乙酉開日畫　句出　同月十八日癸巳破月鬼　中新嘗

同月二十四日己亥建日角　習初　十一月朔日丙午危日亢　著衣

同月十一日丙辰定水畢　登座　同月十五日庚申成日鬼　小新嘗

大明日

〔運歩色葉集多〕大明日、甲辰申乙未丑丙辰午丁卯未戊辰己卯酉庚戌辛未、酉、亥、壬午申癸巳酉諸事大吉日也、

〔假名曆略註〕大みやう日　漢字大明

大明日とは、唐の大明曆に載る所の大吉日なり、是天地開通して、太陽の照す所の日辰也、故に大明日といふ也、凡一切の善事に用ひて大に吉也、是則天地の氣開き通じて、滯る事なきがゆへなり、

〔頭書長曆上〕大明日ハ、通書大全ニモ、大明曆ニノスル所ノ大吉也ト云ヘリ、尤屋作リ、ワタマシ、出行、物タチ、祝言等、此ノ外百事ニ吉日也、併ラ惡日ニ當ラバ可厭之、或草子ニ、一切ノ惡日ニ當ルトモ遣フベシトアルハ、曆家ニ不用說ナリ、サテ大明ノ日數、此ノ本文ニハ、二十二箇日、簠簋ノ抄ニハ、廿三ケ日、或草子ニハ、卅餘日ニシテ、支干トモニ往往不符合、依之通書大全ノ正說廿一ケ日ヲ爰ニ記ス、卽チ今ノ曆ニ註セルモ勿論、予ガ校曆傳ニ載セタルモ此法ナリ、

辛未、壬申、癸酉、丁丑、己卯、壬午、甲申、丁亥、壬辰、乙未、壬寅、甲辰、乙巳、丙午、己酉、庚戌、辛亥、丙辰、己未、庚申、辛酉、

〔月令廣義三每月〕陰陽○中略

大明吉日辛未、壬申、癸酉、丁丑、己卯、壬午、甲申、丁亥、壬辰、乙未、壬寅、甲辰、乙巳、丙午、三節切己酉、庚戌、辛亥、丙辰、己未、庚申、辛酉、百事吉、

天老日

〔簠簋內傳二〕天牢神　巳午寅子辰寅卯未酉寅卯卯

右今ノ天牢神者、爲帝釋右給官領、故奉行人諸役等相定甚大吉也、

〔長曆上〕

天赦日	母倉日	天老日
節切	同	同
春	子亥正	酉巳
戊	子亥二	午
寅	午巳三	子
夏	卯寅四	巳
甲	卯寅五	卯寅
午	午巳六	卯寅
秋	辰丑戌未七	卯亥
戊	辰丑戌未八	未
申	午巳九	亥酉
冬	酉申十	寅
甲	酉申十一	卯
子	午巳十二	亥申
萬吉	同	同

十死一生日

〔源平盛衰記一〕平家繁昌幷徳長壽院導師事
崇徳院御宇、長承元年壬子二月十六日ニ、鳥羽ノ御供養有ベシト、公卿僉議有テ、同二十一日ノ午。ノ。一。點ト被定タリケルニ、其時刻ニ及テ、大雨大風共ニ夥カリケレバ延引ス、同廿五日ニ、又有僉議、廿九日ハ天。老。日。也、鳥羽ノ御供養宜シカルベシトテ可被遂ケルニ、氷ノ雨大降、牛馬人畜打損ズル計ナリケレバ、上下不及出行、又延引ス、

〔運歩色葉集〕十。死。日。正〇八、二〇九、三〇十、四〇十一、五〇十二、六〇、七九、不種植、

〔宣賢卿記二〕十。死。一。生。日。正月節酉巳丑酉巳丑酉巳丑酉巳丑

〔拾芥抄下諸事吉凶日〕十死一生日（忌出軍之遠行、二中計之、）酉正巳二丑三

〔假名曆略註〕十し日　本名天。殺。日。

十死日は大惡日なり、一切の大小事に用べからず、殊更嫁娶、或は葬送等に此日を用ゆれば、大に災害有、愼べし、

〔北條九代記五〕大炊渡軍附御所燒太刀
東海道ノ先陣、相摸守時房ハ、六月承久三〇年五日ノ辰ノ剋ニ、尾張國一ノ宮ニ著陣シテ、軍ノ手分ヲセラレケリ、東山道ヨリ押上ル大將ハ、武田五郎父子八人ヲ初トシテ、ソノ勢五萬餘騎、イヅレモ聞ユル勇士ドモナリ、武田スデニ本國ヲ出ル日ハ、十。死。一。生。ト。テ。極。メ。タ。ル。惡。日。ナリ、イカヾアル

べキ、只明日、軍立シ給ヘカシト申スモノオホカリケル、

〔全國民事慣例類集葬〕死去ノ後、早キハ二十四時、遲キハ三日、又ハ四日ヲ經テ埋葬ス、寅日、五墓日、十死日ハ葬埋セズ、若シ此日ニ當レバ一日ヲ延シ、或ハ縮ム、羽前國置賜郡

○按ズルニ、十死一生日ノ事ハ、兵事部戰鬪上篇擇方位條ニモアリ、

萬死一生日

〔運歩色葉集〕萬死一生日　正二三四五六七八九十十一十二　亥戌酉申未午巳辰卯寅子丑　大凶日也、

十方暗

〔和漢名數續編時〕十方暗　甲申爲ㇾ始、癸巳爲ㇾ終、凡十日、未ㇾ知二出處一、知二天一天上者、通書大全所ㇾ謂鶴神遊方、毎日各有二遊忌一、但癸巳日到二戊申日一鶴神在ㇾ天、無二遊忌一者是也、

〔假名暦略註〕十方くれ　十方暮、俗語也、

十方暮は、甲申の日より入て、癸巳の日に終るなり、以上十日の間は、天地の氣相互に相對して不和なるの日也、故に天色常に昏昧にして清明ならず、是を十方暮といふ、此日は婚姻和合出行等に惡し、

不成就日

〔運歩色葉集不〕不就日　四夜晝、十一夜、十五日晝、十八夜、廿二晝、廿五夜、廿九日皆ㇾ不ㇾ成、

〔簠簋内傳二〕一切不成就日事

正七者	三日	十一日	十九日	廿七日
二八者	二日	十日	十八日	廿六日
三九者	一日	九日	十七日	廿五日
四十者	四日	十二日	廿日	廿八日
五霜者	五日	十三日	廿一日	廿九日
六雪者	六日	十四日	廿二日	晦日

九ツ目——ト知ベシ

右件日、萬事不成就日也、若用則三時内災難來事甚也、

〔北條五代實記 十〕成田松田陰謀露顯之事

サテ又、松田尾張守入道ガ内通シテ、六月〈天正十八年〉十五日、彼ガ持口ヨリ人衆ヲ可引入由議定ス、同十四日ノ晩、一味ノ輩笠原新六郎、二男松田左馬助、三男彈三郎、内藤左近、太田肥後守ヲフルマイ、尾張守新六郎此事ヲ語リ、面々其用意ヲセヨ、明日長岡越中守、池田三左衛門、堀久太郎ガ人衆ヲ、我ラガ役所ヘ引入ベキ由シ申ス、二男左馬助大ニ驚キ、コハソモ何事ニカヤウニ淺間敷事被仰候哉、普代相傳ノ主ヲ傾ケ、何程ノ榮花ヲカ可開、只思召シ留リ玉ヘト、ニガ〳〵シク申ス、新六郎ヲ始メ、父入道大ニイカリ、カヤウニ思立モ、汝等ヲ世ニアラセント思ニ有リ、不孝ノ申シヤウカナト、以テノ外ニ腹立ス、左馬助、迚モ此事ヲトマルマジト思ヒクレバ、先ヅ申シノベント思ヒ、シカラバ御同心申スベシ、サリナガラ十五日ハ不成就日ナリ、十六日ノ夜ニ被成可然ト申ス、當座ノ人々可然トテ延ニケリ、

〔南畝莠言 上〕世俗に、正月より六月まで、三二一、七月より十二月迄を、四五六と繰て、九日め九日めを不成就日といふ事は、いつの比よりいひそめしにや、寛文板の大雜書といふものに、

ふ玄やうじゆ日とて、わろきときをしる事、

四日、十一日、十八日、廿五日、とりの時より子の時までわろし、

八日、十五日、廿二日、廿九日、うの時よりむまの時までわろし、

此日、ものをはじむるにも、人にものいひかけても、ふ玄やうじゆせず、いづれにもつかはず、又似我蜂物語〈[illegible]十五年版山[illegible]撰とあれども、それよりふるく見ゆ、〉にも、不成就日の事、

四夜、八朝、十一夜、十五日、日晝、十八夜、廿二日晝、廿五日夜、廿九日は皆不定、

〔閑の聞 下〕近年、不成就日と云事をいひ流行、中には殊外に忌嫌ふ懦夫多し、先年、長崎に何某といふ人有、彼地にて、おとなといふ役を勤む、京都の宿老といふに同じ、されども京の町々の宿老と

逢ひ、長崎のおとなは、公儀より役料被下、日々に御奉行所へ出勤する也、此人、不成就日を忌事甚し、然れ共役中なれば、毎日御奉行所へ出勤闕ことならず、式日など不成就日にあたれば、至て難儀におもひ愁ひ、衣服も此日に著初たるはまた二度著用せず、門を出で、喪禮又は僧尼に逢ば、私宅へ歸りて出直しけり、予○新井白蛾六年以前、長崎へ遊行の時、此人訪ひ來り、己が身、云か〳〵の事をかたりて曰、自身も心ぐるしく侍れば、是迄諸先生の教訓にもあづかり、もつともとは存ながら、何分心底安魂する事なし、猶又烏鳴のあしきも心がゝりなり、今度稀の御下向に侍れば、をしへを垂よと乞ふ、予が曰、心は一身の主なり、其主たるもの、さほどに凝りかたまりておもふ事ならば、此上は、猶も彌忌給ふべし、云かし人の品位を以ていはゞ、御自分より年寄衆は上たるべし、年寄より御奉行は又上たるべし、それより段々御老中迄は、一段々々に高貴なり、扨高貴の極りに付て申さば、予が若き比なり、今其年はわすれぬ、伊勢の御遷宮十一月廿一日不成就日也、又近世御卽位四月廿八日、又延享の御世讓り、御本丸西の御丸とあらたまり移ります、九月廿五日、みな愚俗のいふ不成就日也、我朝に於て、此上や有、それさへもかくのごとし、足下の身柄は、何ほど貴く何ほど大切なれば、さほどに日を撰侍るや、扨また予が若き時、老人の噺に、むかし禁裏炎燒の前日より、南殿清涼殿より、南門唐門の上まで、一面に烏群り啼て、眞黑に見えしとかたりき、いか樣、一天の君の大宮作りの燒變なれば、天威前表を示し給はんもことわり也、其外諸侯は、其地其地の守なれば、是も又前表も有なむ歟、何ぞ卑々下々の鄙人、數にもたらぬ斗筲の人に、烏を鳴せて凶事を示し給はむには、天道も御世話つゞき申まじ、且又鳶も雀も備て鳴せずば、烏ばかりにては行き屆申まじと戲れければ、右の人、甚だ感服解悟して退きしが、其日より、妄惑の念一時にはれて、世上一樣の人と成り、予が逗留中、度々訪ひ來り、此ごろは、扨々氣樂になりぬとて大に悅べり、

〔運歩色葉集〕黑日（コヒ）（正戌日、二辰、三亥、四巳、五子、六午、七丑、八未、九寅、十申、十一卯、十二酉、　歟二、戌十、辰、亥巳子ノ午二、丑未、寅申卯酉、皆七日、）

〔假名暦略註〕黑日也、受死日といふ、

受死日は、年暦に、●如此黑點を記す日にして、俗にいふ黑日也、大惡日なるがゆへに、百事に用べからず、唯葬送に此日を用ひて妨なしと心得べし、

〔言繼卿記〕元龜二年十一月二日庚申、平野社務兼興來、社領悉爲武家被落候、〇中略禁裏へ披露之事賴候由申間、則長橋局へ參申候處、今日黑日之間、明朝可被露之由被申候間、其分申聞返了、

〔杜陽筆記六十〕暦に黑日多き年は豐稔、黑日少き年は凶作、

或人の說に、暦に黑日多き年は必豐稔にて、米價卑し、黑日少き年は凶作にて、必米價貴し、黑日は民間耕作に由ある日にや、御代官を叙せらるゝ日は必黑日也といへり、さもあることにや、文政十一子年暦の黑日少くして凶作、米價甚貴く、同十二丑年は黑日多くして、米穀豐なりき、

〔拾芥抄下末諸事吉凶日〕五離日（申酉日、諸事憚之、）五合日（寅卯日、吉事用之、）之、

〔簠簋內傳三〕五離日

春　甲申乙酉日　天地離別日（天遠地離人靈和合凶）　耕作凶

夏　丙申丁酉日　日月離別日（日時月時星辰變等凶）　耕作凶

土用　戊申己酉日　國家離別日（君臣父子家業積滯凶）　國調凶

秋　庚申辛酉日　山河離別日（嶽山崩埋海河渡等凶）　船乘凶

多　壬申癸酉日　人民離別日（嫁娶結婚師弟相合養子凶）　和合凶

（以上五日）太可嫌

〔五行大義二〕第八論合〇中略

凡陰陽相配、善惡理均、凶不全凶、吉不獨吉、吉終則凶、凶終則吉、故合不專合、復有離義、就支干配日

陽將日
陰將日

辰、乃有五合五離、五合者、河圖云、甲寅乙卯天地合、丙寅丁卯日月合、戊寅己卯人民合、庚寅辛卯金石合、壬寅癸卯江河合、五離者、甲申乙酉天地離、丙申丁酉日月離、戊申己酉人民離、庚申辛酉金石離、壬申癸酉江河離、寅卯陽之所昇、能生萬物、日常出之、月滿又出、東方少陽生長之處、物所欣會、故以爲合、申酉陰之所湊、肅殺之方、日月皆沒於其所、西方少陰衰老之處、物之所惡、故以爲離、甲乙曰干之首、卦屬乾坤、故比天地、丙丁陽光之盛、故方日月、戊己居中、能成萬物、故類人民、庚辛體自金石、壬癸居然江河、凡爲萬事吉、則從合、凶則從離、遇合則休、值離則否、選日定時、卜筮之用、彌所用也、

〔月令廣義三每月〕陰陽〈中略〉
五離日（甲申乙酉、天地離忌、開市賣易、丙申丁酉、日月離忌、爐冶會客、戊申己酉、人民離忌、出行嫁娶、庚申辛酉、金石離忌、鑄鍊、壬申癸酉、江河離忌、乘船裝載、）

〔吾妻鏡四十二〕建長四年四月四日丁巳、於相州親王家御濱出、幷御弓始以下日次等事有其定、大歲少輔泰房申云、十四日、廿日云云、陰陽大允晴茂申云、十四日爲吉日、廿日頗不宜、自戊辰忌遠行、五離日也、就中被用兵仗可有憚云云、泰房亦申、御的始先々被用此日云云、

〔台記別記〕久安四年七月三日戊子、此日密々始行女子（多子）入內事、〈中略〉次書月日、出立所、新事、次問吉日於陰陽師、（在憲、泰親、陳參御、）申曰、正月十九日可也、但爲陽將日、勘例、中宮安子（冷泉圓融二代母后）配村上、（親王時、天慶三年四月十九日甲寅、）中宮賢子（堀川院母后、延久三年三月九日甲午、）配白河院、（太子時、）爲陽將日、鷹司殿配御堂、（永延元年十二月十六日甲辰、）爲陽將日、君臣已有吉例者、出立所、頃者所居大炊（北高倉東）第、不當禁忌方、（東三條若小六條、若四條東洞院爲皇居云々、）五年八月三十日己卯、先日憲榮、在憲、泰親等、擇申入內日、注一紙進宇治、
正月十日戊子、陽將日、
廿八日丙午、陰將日、
已上、憲榮、在憲、泰親等擇申、

陽將日例

羅刹日　天綱四張日　甘露日　惡辰繰會日　布灑日　庚申日

天元元年八月四日丙辰、東三條院御入内、
永延元年十一月十六日丙辰、御堂渡御鷹司殿、
延久三年三月九日甲午、中宮入太子宮、

陰陽日例

已上例、豈祭雜申、

〔拾芥抄下末 諸事吉凶日〕嫁娶吉日
甲子丙寅丁卯庚辰壬午、戊子庚寅辛卯甲午、庚子壬寅癸卯甲辰丙午、壬子甲寅乙卯丙辰
又以陰陽不將日爲上吉、
正月（丙寅、丁卯、）二（庚子、）四（甲子、戊子、）七（壬午、）十（庚辰、辛卯、癸卯、）十一（庚辰、壬寅、）十二（丙寅、丁卯、庚辰、庚寅、）
三五六八九月雖有不將、各在惡歲中、五九月最不注之、

〔運歩色葉集 羅〕羅刹日（日月火水木金土、胃鬼翼參氐奎柳、）大凶日

〔運歩色葉集 天〕天綱四張日、正（丑）二（卯）三（申）四（酉）五（丑）六（卯）七（申）八（酉）九（丑）十（卯）十一（申）十二（酉）、大凶也、

〔運歩色葉集 寅〕甘露日、正（己亥、辛未、）二（丙午）三（甲戌）四（丙辰）五（甲子）六（丁未）七（乙巳）八（戊寅）九（己酉、己亥、）十（丙寅）十一（癸未）十二（丙午、癸亥、）
（日月火水木金土、軫畢尾柳鬼房星、）此日四天降甘露日也、大吉日也、

〔運歩色葉集 寅〕惡辰繰會日（日月火水木金土、午申卯巳未寅辰、）

〔類聚名物考 時令 一〕布灑星合日。
白河家傳書に、布灑日とは、宣明暦の行はれたる頃の暦に、鬼宿と注したる日の事にて、月に一日の大吉日なり、配宿にてみれば、正月十一日と、二月九日なり、布灑、宣明鬼宿、配宿、何れも星の名也、
又布灑は北方をつかさどる星なり、宣明に相並ぶ星とぞ、

〔伊呂波字類抄 加 疊字〕庚申

〔下學集 上 時節〕庚申 此夜盜賊行事有利、故諸人不眠而守夜也、或說云、此夜夫婦行婬、則其所姙之子必作盜、故夫婦所愼夜也、思之、

〔拾遺和歌集 七 物名〕かのえさる

かのえさる舟まてしばしこととはんおきのしら浪またたゝぬまに

〔簠簋內傳 二〕庚辛金神、本地彌陀、大威德夜叉、西方妙觀察智精魂、肺臟、大腸腑魂魄、迹成金銀銅鐵輪、故此日不求六畜、不買眷屬、不買刀、不求兵具、不作經緯、不裁衣裳、不造酒、不合藥、不致針灸、不出濕、不出行、不出陣、不求養子、不成折檻、總而五穀取初、屋立、厩造等凶、雖爾城逼合戰、鵜飼、鷹匠、川獵、山獵、海士漁捕等吉、

〔筆のすさび 下〕甲子と庚申とは、病人に中るといひ、病重るといふは、甲子は支干の首にて、氣の酷しき日なり、庚申は、支干ともに金氣にて、肅殺の氣の、發生の氣を剋し、害をなす氣の旺する故といふ理を以てなり、いはれなきにしもあらず、

〔醫心方 二十六〕去三尸方第八

大清經曰、三尸、其形頗似人、長三寸許、上尸名彭倨、黑色、居頭、令人好車馬衣服、中尸名彭質、青色、居背、令人好食五味、下尸曰彭矯、白色、居腹、令人好色淫佚、是以眞人先去三尸、恬惔無欲、精神淸明、然後藥乃有效、故庚申日、夜半之後、向正南再拜呪曰、彭侯子、彭常子、命兒子、悉入窈冥之中、去離我身、三度言、每至庚申日、勿寢、而呼其名、三尸卽永絕去、當用六甲窮日、者庚申日也、六甲六十日至庚申日、旦適勿寢、皆再拜而呼其字、至雞鳴乃去、一尸一虫、後庚申日亦用前法、三過止、三虫伏尸、卽永絕去矣、試之皆驗、心恒呼此三尸字、卽去離我身、三日取桃葉、熱燒石、令熱、以葉著上、坐去三尸、

〔瑯邪代醉編 五〕姓名隱僻○中略

左傳襄公夢、周公祖而遺之、人身中有三尸、上尸淸姑、中尸白姑、下尸血姑、每月庚申甲子日、言人過于上帝、一日三尸、謂之三彭、上尸彭踞、中尸彭躓、下尸彭蹻、

〔柳文十八〕罵尸蟲文并序

有道士言、人皆有尸蟲三處腹中、伺人隱微失誤、輒籍記、日庚申幸其人之昏睡、出讒于帝以求饗、以是人多謫過疾癘夭死、柳子特不信曰、吾聞聰明正直者爲神、帝神之尤者、其爲聰明正直宜大也、安有下比陰穢小蟲、縱其狙詭、延其變詐、以害于物、而又悅之以饗、其爲不宜也殊甚、吾意斯蟲若果爲是、則帝必將怒而戮之、投于下土、以殄其類、俾夫人咸得安其性命、而苛慝不作、然後爲帝也、余既處卑、不得質之于帝、而嫉斯蟲之說、爲文而罵之、

〔壒嚢九〕庚申の事、佛經になし、但妙見儀軌に、庚申の夜、妙見菩薩司命司錄等を率ひて、天曹に上るといふ事、是も亦道家の說を、浮屠氏附會せしと見へ侍る、妙見は北辰の事也、我國むかし是を祭る事を禁せられし事、日本後紀にみへたり、後世大内氏、家の祀典とせし、今は所々に是を祭り侍るにや、

〔谷響集九〕守庚申

客問、當世僧俗翕然以守庚申、爲滿衆願之要法、行之造猿形、爲神、圖青面金剛像、爲本尊、正法中有如是事無、　答、守庚申者、本出道家、以避三尸、爲其要術、釋氏所不應也、古於中華已有此事、贊寧公遺誡、僧史略云、近聞周鄭之地、邑社多結守庚申會、初集鳴鐃鈸、唱佛歌讚、衆人念佛行道、或動絲竹、一夕不睡、以避三彭奏上帝、免注罪奪算也、然此實道家之法、往々有無知釋子、入會圖謀小利、會不尋其根本、誤行邪法、深可痛哉、

〔僧史略下結社法集〕近聞、周鄭之地、邑社多結守庚申會、初集鳴鐃鈸、唱佛歌讚、衆人念佛行道、或動絲竹、一夕不睡、以避三彭奏上帝、免注罪奪算也、然此實道家之法、往々有無知釋子、入會圖謀小利、會不尋其根本、誤行邪法、深可痛哉、

〔神道名目類聚抄五祭祀〕○○庚申待　庚申ノ日、晝ノ申ノ刻七ツヨリ始テ、夜ノ寅ノ刻七ツニ至ル、七刻

ノ間ヲ待テ、猿田彥大神ヲ祭、供物七種ヲ備進ス、　或云、庚申祭ハ、本朝ノ儀ニアラズ、道家ニ此事アリ、太上感應篇、修眞捷經ナドニ見ユ、庚申ノ夜寢レバ、三尸虫、人命ヲ短クスルトテ、道家ニ夜ヲ守コトアリ、又佛家ニ、靑面金剛ヲ庚申ニ祭、倶ニ本朝ノ儀ニアラズト云リ、按ニ、我朝庚申ノ日、猿田彥神ヲ祭コト古ク傳來レリ、卜部先哲ノ秘記ニ、庚申ノ日、猿田彥大神祭事、神秘ノ子細アリ云云、此神御像、猿ノ如クマシマスト云ヲ以、庚申ノ神ナリト附會スルニアラズ、此日此神ヲ祭事、良ユヘアリト云リ、私ニ神慮ヲハカル事ナカレ、道家佛家ノ儀ト、其意雲泥ナリ、

〔一話一言三十八〕庚申（中略）

本朝庚申、元祭猿田彥神、相傳之秘訣也、朝詠之歌、伊勢御師口傳有之、（裏頭云、近來嗜儒子者、俗說辨、載庚申之事、不知我國神道之秘訣、而妄論之、無稽之說也、凡信儒不學神道而謂我國之事、故其說多、是謂格物致知之故也、）

〔塵袋二〕一庚申ニハ夜ルネブラズト云フ、何ノ心ゾ、　人ノムマル丶ヨリ三尸ト云フ物アリテ、身ヲハナレズ、人ヲ害セントス、庚申ノ夜、人ノ罪過ヲ天ニ告グ、上尸ハ人ノ頭ニ居シ眼ヲクラクシ、面ノシハヲタ丶ミ、髮ノイロヲ白クナサシム、中尸ハ腸中ニ居テ五臟ヲ損シ、惡夢ヲナシ、飮食ヲコノマシム、下尸ハ足ニキテ命ヲウバヒ精ヲナヤマス、庚申ノ夜ネブラズシテ、三尸ノ名ヲヨベバ、禍ヲノゾキ福ヲキタス、老子三尸經ニ見エタリ、夜半ノ後チ南ニ向テ再拜シテ曰、上尸又彭倨靑色、中尸白色、下尸又彭嬌赤色、彭侯子、彭常子、命兒子、悉入窈冥之中、去離我身、ト三反トナフベシ、古語云、三守庚申三尸伏、七守庚申三尸滅云々、是ニヨリテ七庚申ヲマホルトナル歟、

〔守庚申法〕制三尸日

凡甲寅庚申之日、是三尸鬼競亂精神之日也、不可與夫妻同室寢食、可愼之、甲寅日可剗指甲、甲午日可剗脚甲、此是三尸遊處、故以制除以制尸魄也、

除三尸七魄要訣

以春乙卯日、夏丙午日、秋庚申日、冬壬子日、其日臥時、先搗朱砂雄黃雌黃三分等、細羅之綿裹、如棗大、以塞鼻中、此謂消三尸鍊七魄之道秘法、勿令有知者、明日日中時、以東流水浴畢、更整飾床席、三尸服新衣、洗除鼻中綿裹、及掃洒寢席床下、通令所止一室潔淨、便安枕臥、閉氣握固、良久微呪曰、○○

天道有常　改故易新　上帝吉日　沐浴爲眞　三氣消尸　朱黃合魂　寶鍊七魄　元與我親

呪畢、此道是消鍊尸穢之上法、改貝新形之要訣、四時唯各取一日爲吉、

〔口遊[illegible]〕彭侯子、彭常子、命兒子、悉入窈冥之中、去離我身、謂之庚申呪、

今案、每庚申、勿寢而呼其名、三尸永去、萬福自來、

〔簾中抄下[illegible]〕庚申夜の歌　彭侯子　彭常子　命兒子　離我身

夜もすがら、いねずして、これをとなふれば、三尸さり、萬福きたる、

〔絶三尸符呪〕太上曰、三尸九蟲能爲萬病、病人夜夢戰鬪、皆此蟲也、可用桃板爲符書三道、埋於門闕下、即止矣、每以庚申日書帶之、庚子日呑之、三尸自去矣、常以六庚日書姓名、安元命錄中、三尸不敢爲患也、

符式如左

書符之法、須閉神存思、念光自空中圓燭者火取來、吹入筆中、書符、無不靈驗、○符略

〔袋草紙四〕庚申せずヌル論文

夜やむしは、いねやさりねや、わかとこを、ねたれどねぬぞ、ねゝどねたるぞ、

〔武德編年集成十一〕元龜元年十二月十六日、信長佐和山ノ城邊磯野郷ニ至リ、丹羽長秀、水野信元ニ對顏ス、今度ノ和睦ハ、庚申ノ夜ノ俗歌ト思フベシト宜フ、是ハ和睦シタ、セヌガ如キト云フ心也、

〔新儀式臨時四〕御庚申事

若有御庚申事、藏人奉仰裝束東孫廂南五間、東頭立御屏風、其內鋪疊爲王卿侍臣之座、內藏寮辨備酒饌賜之侍臣、又進碁手、(先獻御料物、分男女房、)王卿依召候御前、御厨子所供菓子干物御酒、終夜之間有打攤之事、或有賦詩獻歌之事、及于曉更令侍臣奏絃管、遲明給祿有差、

〔西宮記三月〕一御庚申

出御、(御座前置中疊一枚、其邊立小燈臺、又以大盤幷筒置中疊、可依召、)王卿依召參候、(候孫廂、)置御料錢供御菓子、有仰有集攤、(打高臺者候御前、最後打高目者取錢、打破時又始打也、)或有作文歌遊倭歌事、(無定)

〔侍中群要入〕御庚申

式凡御庚申之儀、裝束孫廂、(用掃部寮御屏風疊等、)內藏寮辨備酒饌、賜之侍臣、同寮進碁手料錢十二貫、(御料二貫、其遺給侍臣及女房、)王卿依召候御前、御厨子所供菓子干物御酒、終夜之間有擲采戲、及于曉更有勅、侍臣令奏管絃、祿亦給祿、

〔日次紀事正月一〕凡一年中、〇中略六庚申夜亦被供酒菓於青面金剛、入夜賜飮食於殿中男女、則被催御遊、諸家亦多有斯儀、俗間亦獻七種菓、供雙瓶酒而祭之、相傳庚申青面金剛之緣日也、故如此、朋友相聚、多喫赤小豆粥宴遊、到鷄鳴而止、是謂庚申待、此日詣粟田口三猿堂、及八坂庚申堂、庚申堂、天王寺所有爲本、凡一年中六庚申日、始終雨度、特參詣多、

〔年中重寶記雜五〕一年六たび庚申をまつり、その夜はねぶらずといふは、人むまれて腹中に三尸蟲ありて、身をはなれず人をがいせんとす、此蟲庚申の夜、人の罪とがを天につぐ、上尸は人の頭にゐて眼をくらくし、面に皺をたゝみ、髮の色をしろくなさしむ、中尸は腸の中の五臟を損じ、惡夢をなし、飮食をこのむ、下尸は足にゐて命をうばひ、精をなやます、庚申の日、ねむらずして、三尸の名をよべば、わざはひをのぞき、福をきたすと老子三尸經に見へたり、夜半ののち、南にむかつて

再拜して曰、上尸又彭俗靑色、中尸白色、下尸又彭𤢖赤色、彭侯子、彭常子、命兒子、悉入窈冥之中、去離我身、と三反となふべし、されば三たび庚申を守れば三尸伏す、七たび庚申をまもれば三尸滅すといひつたへたり、これによつて七庚申を守るといへり、

〔民間年中故事要言七〕庚申待

閭俗ニ庚申ノ日ニ當レバ、庚申待トナスル事ナリ、是ヲ庚申ヲ守ト云ベシ、サレバ庚申ノ事諸書ニ載タリ、先太上感應篇ニ曰ク、三尸ノ神トテ、人身ノ中ニ有、人ノ善惡ヲヨク考テ、庚申ノ日ニナレバ、天ノ三台ノ星ノマシマス所ノ天曹ノ宮ニ上リテ、此人ハコレ〴〵ノ惡ヲ作リタリト具ニ告、其人ノ過大ナレバ十二年ノ命ヲ奪、マタ小ケレバ六十日ノ命ヲ奪フ、故ニ長生ヲ願モノハ、庚申ノ日ハ、謹テ是ヲ辟ヨトイヘリ、又酉陽雜組ニ云ク、凡庚申ノ日、三尸人ノ過ヲイフ、七度庚申ヲ守レバ、三尸滅、三度庚申ヲ守ンバ三尸伏スト、マタ太平廣記ニ云ク、彭ハ三尸ノ姓、常ニ人ノ身ノ中ニイテ、其者ノ罪ヲウカヾヒテ、庚申ノ日ニ至レバ、其罪ヲ上帝ニ訴、コノ故ニ仙術ヲ學ブ者ハ、先三尸ヲ絶ベシ、カクノ如クナレバ神仙ヲ得ベシト云々、マタ抱朴子ニ云ク、身中ニ三尸アリ、三尸ノ物タル形ナシトイヘドモ、實ニ魂靈鬼神ノ屬ナリ、人ヲ早死セシメンコトヲ欲ス、此尸マサニ鬼トナルコトヲ得ベシ、自ラ遊行シテ人ノ祭ヲ饗、是ヲ以テ庚申ノ日ニ至ル每ニ、スナハチ天ニ上テ司命ニ白シ、人ノナストコロノ罪ヲイフト、マタ脩眞捷徑ニ云ク、三尸ハ神ノ名、一ニハ彭踞ハ車馬衣服ヲ好ム、二ニ彭質ハ飲食ヲ好ム、三ニ彭𤢖ハ色慾ヲ好ム、人ノ生ル丶時同ク生ジテ、三業ヲ興シテ、人ノ速ニ亡ンコトヲ欲ス、又曰、甲子庚申ノ日ニ當レバ、夫妻共ニ寢コトヲ忌、食物清淨ナレバ三尸自カラ滅スト、又ノ說ニ、人ノ身ニアル三尸ハ、上尸ハ淸姑、中尸ハ白姑、下尸ハ血姑ナリ、庚申甲子ノ日ハ、人ノ過ヲ上帝ニ言ト、或ハ云、三尸トテ禍ヲナス虫アリテ、人ノ身ニ入テ療疾ヲ病シム、コノ故ニ庚申ノ夜ハ、不寐シテ旦ヲ待ナリ、大淸經ニ云ク、彭侯子、常遊子、命兒子、ト

イフ文ヲ庚申ノ日唱レバ、其鬼ヨロコビテ難ヲ蔽、福ヲ與トイヘリ、マタ爲惷ノ口遊トイヘルモノニハ、彭蟜子、彭常子、命兒子、悉入幽冥之中、去離我身、ト云文ヲ庚申ノ夜唱ベシト云々、遵生八牋ニ、庚申ヲ守ル法ヲ一卷載タリ、此ニ略ス、可往見、如上諸書ニ載テ侍レドモ、是皆仙人ノ脩行ノ法ニシテ、佛法ニハ沙汰モナキ事ナリ、故ニ事苑ニ曰ク、守庚申事出道家、非佛經所出、乃當知非佛法ト云々、又備史略ニモ、庚申會ハ道士ノ邪法ニシテ、釋氏ハ不可行ト見エタリ、亦神道ニモ非ズ、○中略或人云ク、人ノ軀ノ裏ニ一箇ノ心性アッテ、手足百骸ノ主宰タリ、ナンゾ三尸ノ神アッテ、身ノ上ニ居テ、人ノ邪惡ヲ察センヤ、是仙術ヲナラフ者ノ妄説ナリ、日本ニ於テモ、人民庚申ヲ守リ、堂ヲ建、庚申ノ神ヲ造、其形三面四臂ニシテ、弓矢ヲ握、戈ヲ操、其像奇怪ナリ、庚申ノ日ハ齋戒沐浴シテ、酒果ヲ設、燭ヲ立テコレヲ守テ雞ノ鳴ニ至ル、其説ニ曰ク、大寶元年庚申ニ、此神天ヨリ攝州四天王寺ニ降レリ、爾來敬之、守之者災ヲ除、福ヲ受ルコト無量ナリト云々、日本續紀ヲ按ズルニ、文武天皇大寶元年ハ辛丑ノ歲ニテ庚申ニ非ズ、マタ神天ヨリ降ノ事ナシ、蓋日本紀ニハ一草一木ノ異トイヘドモ必ズコレヲ筆ス、若庚申ノ神ノ事アラバ、何ゾ不載ヤ、マタ按ズルニ、元亨釋書寺像志ニ、四天王寺ノ事ヲ載ス、シカルニ一言モ庚申ノ事ヲ不言、イヨ〱庚申ノ事、不根事ト見エタリト云々、シカレドモ庚申ノ神ヲ信ジ、庚申ノ日ヲ守、災厄ヲ除キ、福壽ヲ得ト深ク信ゼバ、信力ヨリ其利益ヲ得道理アラン歟、○中略或説ニ庚申ハ、猿田彥大神ノ司タマフ日ニテ、彼大神ヲ祭ト謂、マタハ庚ハ五行ノナカニ金ナリ、申モマタ金ニ當レバ、金ト金ト剋スル日ナレバ、ツヽシムベキ日ナリ、此故ニ中ニ土ヲ入テ、相生ノ祭ヲスルト云リ、是等ノ説ミナ附會ノ論鑿説ナリト云々、

〔東都歲事記 正月一〕庚申日 年中 庚申參○○○　高輪常照寺　愛宕下眞福寺　入谷喜寶院　八丁堀松屋橋東詰今日俗家にも青面金剛をまつり、又庚申待の酒宴を催す、或は炒豆など食し、女子縫針の業をとゞめ、鐵醬をつけず、

〔本朝文粹 序十一〕冬夜守庚申同賦修竹冬青應教　藤篤茂

夫守庚申者、玄元聖祖之微言、世揚其餘波、人傳其遺跡、或至此夜不眠達明、於是開紅爐命緑醑、左挂管右詩篇、嘗吟風唱之昔、過夜半而更盛、嘲風哢月之思、對曉燈而猶高、

〔菅家文草三詩〕同諸小兒旅館庚申夜賦靜室寒燈明之詩十韻

旅人每夜守三尸、況對寒燈不臥時、强動微心釁未死、頻收落淚自爲悲、含低應道星穿壁、山近猶疑雪照帷、四五更來無一事、唤看兒輩學吟詩、

〔菅家文草四詩〕庚申夜述所懷、

故人詩友苦相思、霜月臨窗獨詠時、已酉年終冬日少、庚申夜半曉光遲、燈前反覆家消息、酒後平商世險夷、爲客以來不安寢、眼開豈只守三尸、

〔江吏部集天上〕暮秋左相府道長以東三條第守庚申同賦池水浮明月詩〇詩略

七言歲暮於藤少侯書齋守庚申同賦明月照積雪各分一字應教一首探得庭字、幷序

夫去三尸學九皆者、彼大聖之玄風也、貪花下翫月前者、我少侯之素意也、是故惜景物於流年、命篇詠於良夜、風閣鸞臺之客、鵷羽鷺羽以影從、打鉢刻燭之家、蓋壁華以響應、彼伯禽之居周也、幾得商子而問饑飽、猶禹之在漢也、未知守庚申而言詩、今之挽古、不敢而成者也、〇中略

七言秋夜陪右親衛員外亞相亭子守庚申同賦秋情月露深詩一首幷序

右親衛藤亞相幕下、禮義爲爪牙、德行爲羽翼、退佞進賢、致君於堯舜、輕財重士、比跡於伊周、花朝雪夜、命籌酌以勸風吟、素論玄談、唯德道以通時政、于時秋加餘閏、夜當庚申、惜節物而遺懷、課陪侍而遊志、不期以自會、左顧右眄、莫非賓能、如響之應聲、文云武云、皆俟採用、〇中略

仲春庚申夜陪員外藤納言隆家〇以文亭同賦夜坐聽松風一首幷序〇中略

冬夜守庚申同賦看山有小雪〇以上詩略

〔江吏部集四上〕七言夏夜守庚申侍清涼殿同賦避暑對水石應製一首幷序、以下略

夫人情者、聖王之田也、世治則學稼自茂、樂曲者明時之玩也、政調則德音遍聞、我后〈○一條〉一莅民以來、學官逢時、樂署得所、日愼一日、盡傳延喜之舊儀、風聽三風、已期長保之寶曆、於是守庚申而不寢、延齡之術、賞佳辰而不忘樂善之心、〈○中略〉

七。夕。守。庚。申。同賦織女理容色應製〈○中略〉

七言夏夜陪左相府池亭守庚申同賦池淸知雨晴應敎一首〈幷序、以深爲韻〉

左相府尊閑者、希代榮貴之器也、〈○中略〉相府之仕朝焉、亦爲一佛乘也、是以每年展三十講之梵席、歷日卯八萬歲之疑關、以珍貨供養、以詩篇讃揚、今夜之庚申、蓋在斯而已、〈○下略〉

〔大鏡〕〈四右大臣師輔〉元方民部卿のむまご、まうけの君〈○廣平親王〉にておはするころ、みかどの御庚申せさせ給ふに、この民部卿まいり給へるさらなり、九條殿〈○藤原師輔〉さぶらはせ給ひて、人々あまたさぶらひて、どうたせ給ふついでに、冷泉院のはらまれおはしましたるほどにて、さらぬだによひといかゞとおもひ申たるに、九條殿こよひのすぐろくつかうまつらんとおほせらるゝまゝに、このはらまれ給へるみこ、をとこにおはすべくは、でう六いでことてうたせ給ひけるに、たゞ一どにいでくるものか、ありとある人、めを見かはしてかんじもてはやし給ひ、わが御みづからもいみじとおぼしたりけるに、〈○下略〉

〔親信卿記〕天延元年三月六日庚申、今日有御庚申事、其儀、上西廂南渡殿南御簾、其內敷滿侍小疊六枚、爲應召絃管侍臣座、南臺西欄板鋪小板鋪長疊爲同座、儲饌於侍所、隨召衙重兩三前居渡殿座、通宵御遊、臨曉更給祿、〈四位白絹一疋、五位六位童等各疋絹、〉內府〈○藤原賴忠〉獻鶩見十綴、〈四逹女房、六逹男房、〉事了各退出、

〔源順集〕初の冬、〈○貞元元年〉かのえさるの夜、伊勢のいつきの宮にさぶらひて、松のこゑよるのことにいるといふ題にて奉る歌の序、

いせのいつきの宮〈○村上皇女規子〉秋野の宮にわたり給ひて後、冬の山風さむくなりての初、はつ

か七日の夜、庚申にあたれり、なが〳〵しき夜をつく〴〵とやはあかすべきとおもほして、みすのうちにさぶらふおもと人、みはしのもとにまいれるまうちぎみたちに、歌よませあそびせさせ給ふ、歌の題にいはく、松の風よるのことにいる、これにつけてきけば、あし引の山おろしにひゞくなるまつのふかみどりも、うば玉の夜はにきこゆることのおもしろさも、ひとへにみなみだれあひゆき通ひて、むべもむかしの人、松風に入といふことの詩句をつくりおきそめけんとなむおもほえける、順がかしらのかみ夏も冬もわかぬ雪かとあやまたれ、心のやみはからにも大和にもすべてつきなく、おまへのやり水にうかべるのこりの菊に思ひあはすれば、いづみばかりにしづめる身はづかしく、なにたかききぬがさをかに、てるもみぢばを見わたせば、かゝるまとゐにさぶらふことさへまばゆけれど、さもあらばあれ、人こそきゝてそしりわらはめ、かけまくもかしこきおほんかみは、哀ともめぐみさいはい給ひてん、今いにしへをみるがごとく、こよひの事を後の人もみよとて、書しるして奉るは仰ごとにしたがふ也、

夜をさむみことにしもいる松風は君にひかれて千代やそふらん

貞元元年初、齋宮侍従のくりやに御坐する間に、八月廿八日庚申の夜、人々あそびいはひの心をよむ、

神代より色もかはらで竹川のよゝをば君ぞかぞへわたらん

〔源氏物語五十東屋〕なを〳〵しきあたりともいはず、いきをひにひかされて、よきわか人どもつどひ、さうぞく有さまは、えならずとゝのへつゝ、こしおれたるうたあはせ、物がたり、かうしんをし、まばゆく、みぐるしく、あそびがちにこのめるを、このけさうのきみだち、らう〳〵しくこそあるべけれ、

〔古事談六亭宅諸道〕大入道殿姫君、〇超子庚申夜、臨息ニ寄懸テ令ㇾ死給畢、仍彼御一門ニハ、女。房。之。庚。申。永。被。ㇾ止云々、

〔榮花物語二花山〕正月〇天元五年に庚申いできたれば、東三條殿の、院の女御〇藤原超子の御かたにも、むめつぼ、の女御〇藤原詮子の御かたにも、わかき人々、としのはじめの庚申なり、せさせ給へと申せば、さはとて御方々みなせさせ給、おとこ君たち、この女御たちの御はらから三所ぞおはします、いとけうある事なり、いとよし、こなたかなたとまいらん程に、よもあけなんなどの給て、さま〱の事どもして、御覽ぜさせ給に、うたやなにやと、心ばへおかしき御かた〲のありさまよりはじめ、女房達、ご、すぐろくの程のいどみも、いとおかしくて、この君たちのおはせざらましかば、こよひのねぶりさまし、はなからましなど、きこえおもひて、たび〱鳥もなきぬ、院の女御、あか月がたに、御けうそくにをしかゝりて、おはしますまゝに、やがて、御とのごもりいりにけり、いまさらになど、人々きこえさすれど、からすもなきぬれば、いまはさばれなおどろかしきこえさせそなど、人々聞えさするに、はかなきうたども、聞えさせ給はんとて、このおとこ君たち、やゝものけたまはる、いまさらに、なにか御とのごもる、おきさせ給はんと聞えさするに、すべて御いらへもなく、おどろかせ給はねば、よりて、やゝときこえさせ給に、ことのほかに見えさせ給へれば、ひきおどろかしたてまつり給に、やがてひえさせ給へれば、あさましうて、御となぶらとりよせて、見たてまつらせたまへば、うせさせ給へるなりけり、

〔枕草子五〕ある比、かうしんせさせ給て、内大臣殿〇藤原伊周いみじう心まうけせさせ給へり、夜うち更るほどに、題出して、女ばうに歌よませ給へば、みなけしきだち、ゆるがし出すに、宮の御まへ〇一條皇后定子に近くさぶらひて、〇清少納言物けいしなど、こと事をのみいふを、おとゞ御らんじて、などか歌はよまではなれゐたる、題とれとの給ふを、さる事承りて、うたよむまじくなりて侍れば、思ひ

がけ侍らず、ことやうなる事、まことにさる事やは侍る、などかはゆるさせ給、いとあるまじき事也、よしこと時はさらず、こよひはよめなどせめさせ給へど、けぎようきゝもいれでさぶらふに、こと人どもよみ出して、よしあしなどさだめらるゝほどに、いさゝかなる御文をかきてたまはせたり、あけて見れば、

もとすけが後といはるゝきみしもやこよひのうたにはづれてはをる

とあるを見るに、をかしき事ぞたぐひなきや、いみじく笑へば、何事ぞ〳〵と、おとゞもの給ふ、

その人の後といはれぬ身なりせばこよひのうたはまづぞよまゝし

つゝむ事さぶらはずば、千歌なりとも是よりぞ出まうでこましとけいしつ、

〔台記〕天養二年正月十四日庚申、守三尸、懸老子影、講老子經、講師友業、問者實長、(三上臈)孝能、(三下臈)嫌庚申經、夜半已後、余(○藤原頼長)及客皆向正南再拜呪曰、彭侯子彭常子、命見子、悉入窈冥之中、去離我身、(三度)唱之、雞鳴後就寢、

〔玉蘂〕建暦二年三月七日、又人々議奏内裏可有庚申之由風聞、如此事、大嘗會以後可宜歟、被仰尤可然候由云々、

〔吾妻鏡二十一〕建暦三年(○建保元年)三月十九日庚申、今夜御所守庚申、有御會、而及半夜、甲冑壯兵五十餘輩群參于和田左衞門尉義盛宿館邊、是横山右馬允時兼依來彼金吾之許也、御用心之間被停御會、

〔吾妻鏡三十〕嘉禎三年三月九日庚申、甚雨如拔、終日不休、止亥刻洪水、今夜新御所始有和歌御會、被守庚申也、題梅花盛久、花亭祝言、(左兵衞督教定朝臣獻之)左京兆、足利左典厩、相摸三郎入道、快雅僧正、式部大夫入道、源式部大夫、佐渡守、城太郎、波多野次郎朝定等候其座、

〔花園院御記〕文保三年(○元應元年)正月四日庚申、入夜、於親王方聊有盃酌事、七歳人當七庚申年守庚申、

世俗之說云々、仍今夜、於此方守庚申也、爲覺親王之眠、隆有、兼高等卿、終夜學種々事、或學兒女等、近日於門下立松施雜藝才學五節及亂舞、權大納言藤原朝臣（兼季）又候此座、兩女院（○章義門院譽子、伏見二女、廣義門院寧子、後伏見后、花園准母、）又有渡御、同令守庚申給、及曉更酩酊、男等皆成亂舞、退出、院（○後伏見）還御、朕及侍臣等候御共、又於院御方有盃酌、朕依所勞、今夜不飮一盞、獨醒同屈原、及天明分散、

〔看聞日記〕應永廿三年正月廿七日、今夜庚申也、於新御所（○足利義量）御方守之、新御所予（○貞成親王）乾藏主綾小路三位重有朝臣、長資朝臣等候、回茶以下雙六等有之、

〔親長卿記〕文明十年九月一日己未、及晚有召參內、仰云、明夜庚申也、褒貶歌合有御沙汰、至于今無御沙汰、可爲如何哉、予申云、御沙汰有何子細哉、爲初度事之間、先堅固內々御沙汰可然歟、然者可被定御題云々、卽被下勅題江月紅葉秋祝、予書立御人數分左右了、明日各可相觸之由有仰、御祝之後退出、

〔二水記〕永正十四年八月十七日、庚申也、於禁裏有御連歌、予祗候、

〔多聞院日記〕天文十二年七月十七日、庚申待沙汰了、發心院ニテ談義在之、

〔槐記〕丙午（○享保十一年）正月廿八日參候、（○中略）昔シ獅子吼院殿ハ、物ズキノ達人ニテ、物ゴトニ面白キコト多シ、（○中略）ソノ後、庚申ノ夜、イツモ無上方院ノ御方ニテ御遊アリ、日外ノ獅子吼院ノ御物ズキ面白サ、今宵ニ遊バセカシト仰ニテ、公ノ御繪ニテ、ソレ鹽ヨ青ノリトアハテフタメキテ拵ヘ、出來シマヽニ、サラバ遊バセトテ、盃出シテ、コノ枝ハ今少シ長クシテ、コノ松ノ盞ヲ、一カサ大ニシテ、今一ツモ苦シカルマジ、身木ハ少シフトキガ相應ナリ、カレ枝モ面白カルベシナド云テ、出來タリ、サテコソ見ゴトナル物ヨ、サラバ酒一ツツギテ飮カシ、我ヨ人ヨト推イタヾキテ風味モヨカルベシトアリシニ、鹽モ山椒モ辛ク鹹クテ、一口モタベカネタリトテ大笑シタリ、

〔傍廂（前篇）〕庚申狂歌

時吉凶

千蔭翁〇加藤大人の別莊にて、庚申祭の夜、季鷹大人を招かれて、千蔭翁のよめる歌、
食物も女も好ける季鷹の得さる物こそ酒にしありけれ
とあるに、季鷹翁のかへしに、
耳はいとちかげに見ゆれど鷹若の江去舟とや遠ざかるらん、とよまれたり、

〔松屋筆記九十二〕庚申の日鏡磨を書事を忌
俗に庚申の日、鏡磨を焼事を忌といふは誤也、庚辛の干に當れる日に忌也、

〔三養雜記四〕庚申　心猿　西遊記
庚申塚とて、見ざる、聞ざる、言ざるの三猿を、石もて彫たるを、道の傍に立たり、その圖幾のかたちは、もと天台大師の三大部の中止觀の空假中の三諦を、不見、不聞、不言に比したまふことあり、それを猿に表して、傳教大師、三の猿に刻たまへりとかや、

〔二中歷五乾象〕十干吉凶時〇中
凡時撰　甲乙日　寅卯立　巳午舍　丑未辰戌罰　申酉刻　亥子德　丙丁日　寅卯德　巳午立　丑未辰戌舍　申酉罰　亥子刻　戊己日　寅卯刻　巳午德　丑未辰戌立　申酉舍　亥子罰　庚辛日　寅卯罰　巳午刻　丑未辰戌德　申酉立　亥子舍　壬癸日　寅卯舍　巳午罰　丑未辰戌刻　申酉德　亥子立

〔運歩色葉集古〕五墓時、甲乙日、未時、丙丁日、戌時、戊己日、辰時、庚辛日、丑時、壬癸日、辰時也、

〔曆林問答集下〕釋下食時第五十二
或問、下食時者何也、答曰、尙書曆云、下食時者避、其時、不忌、其日、沐髮種、蒔木、忌、其時、假令子時忌、其一時、餘無咎、

〔三代實錄十九清和〕貞觀十三年二月八日甲申、自去正月、公卿未聽、太政官尋常政、是日始聽之、時改、巳一

剋用辰四剋、避河魁、厭、滅、門、也、

〔朝野群載十五陰陽道〕陰陽寮略〇中

擇可被赴向任國雜事日時、

出門日時　今月廿七日甲午　時戌　辰方角

件日時出行者、以甲乙日不可入境、又忌諸日申酉時、略〇中

天仁三年六月七日　陰陽助賀茂家榮

〔北條五代記五〕下總高野臺合戰の事

聞しはむかし、さがみ北條氏康と、安房里見義ひろた丶かひあり、然に太田みの丶守、武州岩村に有て、謀叛をくはだて、義弘と一味するによつて、義弘義高父子、下總の國へ發向し、高野臺近邊に陣をはる、略〇中氏康、諸老を召あつめていはく、遠山富永をうたせ、無念やん事なし、時日をうつさず、一戰をとぐべしと評諚とり〳〵也、略〇中氏康かさねていはく、今朝辰の剋のた丶かひをかんがふるに、敵は東方に陣し、出る日の光をかゞやかす所に、みかた西より向て劒光をあらそふ事、是孤虛のわきまへあらざるがゆへ、遠山富永勝利うしなひたるなり、然に今はや未の剋も過、東敵は入日にして、みかたの後陣に影きへぬ、時のうらなひ吉事を得たり、其上當年は甲子なり、甲子は殷の紂がほろぼされ、武王は勝る年也、義弘は紂に同意し、氏康は武王に比して、かれを討ん、ましかのみならず、先祖の吉例多し、略〇中あまつさへ孤虛支干相應する事、われに天のくみする所なり、時刻うつすべからず、無二に一戰に治定す、略〇中比は永祿七年甲子正月八日申の剋に至て、氏政軍兵、近々とをしよせ、鯨波をどつとあぐる、

〔月令廣義二十四時令〕陰陽略〇中

黃道時子午日、子丑卯午申酉時、丑未日、寅卯巳申戌亥時、寅申日、子丑辰巳未戌時、卯酉日、子寅卯午未酉時、辰戌日、寅辰巳申酉亥時、巳亥日、丑辰午未戌亥時、黃道時吉、餘皆黑道、

〔學山錄 三 行事〕不擇日

邵伯溫聞見錄載、康節出行不擇日、或告之以不利則不行、並曰、人未言則不知、既言則有知而必行、鬼神知也、按、皇極經世書曰、凡人之善惡形于言、發于行、人始得而知之、但萌諸心、發于慮、鬼神已得而知之矣、又曰、思慮一萌、鬼神得而知之矣、亦是此意也、朱子亦稱康節語云、思慮未起、鬼神莫知、不由乎我、更由乎誰、妙哉見鬼神之情也、又王充論衡云、凡人在世、不能不作事、作事之後、不能不有吉凶、見吉則指以爲前時擇日之福、見凶則刺以爲往者觸忌之禍、多或擇日而得禍、觸忌而獲福、聖人舉事、先定於義、義已定、立決以卜筮、示不專己、明與鬼神同意共指、亦說得的確矣、

〔通俗編 二十一 術數〕擇日 論衡辨祟篇、起功移徙、祭祀喪葬、行作入官、嫁娶、不擇吉日、不避歲月、觸鬼逢神、則發病生禍、又譏日篇引沐書及裁衣書語云、沐與洗足盥手浴去身垢等也、洗盥浴不擇日、而沐獨有日何也、在身之物、莫重于冠、造冠無禁、裁衣有忌何也、按、起功以下七事、日者之大凡具矣、沐則今俗書猶載、裁衣之外、今更有冠帶日、其因王氏之譏而遂增之歟、

〔日本書紀 一 神代〕一書曰、〇中略 時天神以太占而卜合之、乃教曰、婦人之辭、其已先揚乎、宜更還去、乃卜定時日而降之、

〔日本書紀 九 神功〕九年〇仲哀 三月壬申朔、皇后選吉日、入齋宮、親爲神主、 九月己卯、令卜吉日、而臨發有日、

〔日本書紀 十二 履中〕八十七年〇仁德 正月、皇太子自諒闇出之、未卽尊位之間、以羽田矢代宿禰之女黑媛、欲爲妃、納采既訖、遣住吉仲皇子、而告吉日、

〔日本書紀 十三 允恭〕六〇六、一本作五、年〇反正 正月、瑞齒別天皇崩、爰群卿議之曰、方今大鷦鷯天皇之子、雄朝津間稚子宿禰皇子、與大草香皇子、然雄朝津間稚子宿禰皇子、長之仁孝、卽選吉日、跪上天皇之璽、

〔日本書紀 十九 欽明〕三十二年三月、是月高麗獻物幷表、未得呈奏、經歷數旬、占待良日、

〔延喜式祝詞八〕出雲國造神賀詞
八十日日波止在毛、今日能生日能足日爾、出雲國國造姓名恐美恐美毛申賜久、

〔日本紀略一條六〕貞元元年五月十四日庚辰、召陰陽寮令勘申造宮幷遷宮日時、上卿仰辨令造時杌幷案、

〔榮花物語浦々の別五〕そのころよき日して、きたのかたのはかおがみに帥殿〇藤原伊周中納言どの〇藤原隆家もろともに櫻もとに參らせ給、

〔源氏物語葵九〕惟光、〇中略げにあいぎやうのはじめは、日えりしてきこしめすべきことにこそ、

〔類聚符宣抄三〕太政官符大宰府
雜事弐箇條
一應立八幡宇佐宮御殿日時事
十月廿六日甲子
立柱時巳未　上棟時未申
右得彼府去五月廿日解狀偁、得彼宮今月二日牒狀偁、件御殿等任被定下之日時、立柱上棟之後、爲去四月廿二日大風、或以顚倒、或亦傾寄、仍言上如件者、依牒狀撿案內、件宮卅年一度之造作、任官符旨、去年十一月七日始木作、今年二月十一日立柱上棟、而件御殿等彼日暴風忽至、或顚倒、或傾寄、是在當府之定、不經申請、可令直立、然而本已公定之神事、非當府之進退、寔雖不作畢、豈可然乎、非蒙裁定、何得自由、望請官裁、早被裁下、將遂其功者、抑件御殿須守日時如法造立、而如云々者、管內諸國不成其勤、結構之間、料材木不具、假立柱石、慭上棟梁、如此作事之不法、自爲神事之違例、因之暗示、咎徴忽表神異、則知諸國致懈怠、府官不催行之故也、左大臣宣、奉勅、宜下知彼府、以件日時造立、殊致謹厚、將以勤行、又諸國司致懈怠之輩、早錄名言上者、〇中略

以前條事如件、府宜承知依宜行之、符到奉行、

參議從三位行右大辨兼近江權守源朝臣　　從五位下行左大史惟宗朝臣

長元五年七月廿日

〔朝野群載 十五 陰陽道〕陰陽寮、○中略

擇可被赴向任國雜事日時、

件日時出行者、以甲乙日不可入境、又爲請日申酉時、

出門日時、今月廿七日甲午　時戌　辰方角

進發日時　七月一日戊戌　時卯辰

入境日時　五日壬寅　時巳午

着館日時 以件日時受領印鎰、　同日壬寅　時未酉

初道神寶日時　六日癸卯　時巳午

奉幣諸神日時　廿一日戊午　時辰巳　廿六日癸亥　時巳午

初行國務日時 以此日時行署雜事、　廿二日己未　時巳午未　廿七日甲子　時巳未

初開兵庫日時　八月二日戊戌　時巳午

初參國分寺日時　八月甲辰　時巳未

天仁三年六月七日　　陰陽助賀茂家榮

〔台記別記〕久安四年十一月廿六日庚戌、今夕定入内雜事、○中略使親隆問始御書使、後朝使、供餅、露顯等日於陰陽師、陰陽師書折紙獻、不讀之、難文、

始御書日　正月十四日丁酉　　後朝使日　正月廿日癸卯 服對

服對日例 陽明門院使者、使始有御返事、

供餅日　正月廿四日丁未（道虛）

第三夜供之禮也、而廿一日公家御衰日、（吉例不見）廿二日乙巳、陽明門院重日供之、然者至于重日者不可忌、但當第四夜有俗忌、（先例不見）廿三日丙午女御衰日、（吉例不見）待賢門院露顯日供之、

一露顯日　同上

道虛例（細川院母后）

使憲親請權中納言忠雅卿曰、明年正月十九日入內食餅可調賜、貴下夫婦無凶、仍所達也者、歸來傳報命曰、可調獻、但不知食餅樣者、大將曰、宿廬新圖於愚心未為可、請任心改定、余許之、及晩歸六條宅、

古事類苑

方技部三

陰陽道下

方位吉凶

〔家相秘傳集下〕凶方多しと雖も、就中歳破、月破、年月暗劔殺、五黄殺、本命方、的殺方等、是を六凶の大殺と稱し、彼天道月德陰陽貴人などの大吉神にても、救防難き强烈の大凶方たり、凡方位を撰は、此六凶を避ん爲にて、他を顧に及ばずとおもふべし、

〔通俗編二十一數術〕方位　朱子語錄、堪輿以方位言、如俗言某方利、某方不利之類、按、史記、日辰不全、故有孤虛、注、以六甲旬中所無二辰爲孤、中二辰爲虛、與方位之說不相屬、時憲書所云方位、則以干支配戊己、并列四正、以乾坤巽艮四卦列四維、地理家所用羅盤亦然、水經注中、屢有其說、穀水注云、晉水合北川二水、自乾亞巽、汝水注云、青陂側碑言、陂在縣坤地、淸水注云、張伯雅墓引水入塋域爲沼、沼在丑地、沔水注云、丙穴穴口向丙、蓋六朝時已大行其法矣、

〔本阿彌行狀記上〕本朝の暦に、塞りと申事ありて、三年五年普請等も待ていたすことは、全體唐より渡り候には無之事也、日本小國故、木生立候に、上宮太子の思召にて、此塞りと申事を、暦にあらはし候よし、

鬼門

〔運歩色葉集佐〕塞時向方、正方南　二西　三北　四北　五北　六東　七北　八東　九南　十東　十一南　十二西、江州石塔傳之、

〔假名暦略註〕きもん　漢字鬼門

凡方位の四隅に四門有、乾を天門とし、巽を地門とし、又地戸とす、坤を人門とし、艮を鬼門とす、鬼

門とは陰惡の氣の聚る所にして、百鬼出入する門戸なり、故に此方を犯す時は、百鬼よく世人を殺害す、故に天帝二神に命じて是を守らしむ、一を神荼といふ、一を鬱壘といふ、二神ともに、百鬼を守りて、猥に人を損じ害する事を成さしめず、然といへども、若人有て此方を犯す時は、二神も守る事能はずして、百鬼の爲に損害せらる、愼ずんばあるべからず、按ずるに丑寅の方は陽神來り、陰氣往くの地なり、節氣に於ては、除夜の所たり、是即冬陰の殺氣退て、春陽の生氣來るの日也、故に和俗、此夜は、家毎に陽神の福を迎へ、陰神の毒を追ふもの、其所以宜なるかな、

〔簠簋內傳 一〕天王〈○牛頭〉欲歸北天、或時命八王子曰、我爲北天主、往昔南海趣時、中間有國、曰廣遠國、彼國主名巨旦大王、咸是魑魅魍魎類也、已望彼鬼門、欲求一宿、巨旦悲怒令我彈呵、我已賓故恐然退去、

〔谷響集 一〕鬼門

有客問、俗間東北隅名鬼門、有本說耶、　答、未考本說、海外經云、東海中有山焉、名度索、上有大桃樹、東瘣枝名曰鬼門、萬鬼所聚、瘣呼罪切、臃傍出也、又木病無枝也、又俗間相傳、東北名鬼門、東南名人門、西南稱地門、西北稱天門、又法苑珠林十云、依神異經曰、東北方有鬼星石室、屋三百戸、而其所石傍題曰、鬼門、門晝日不閉、至暮則有人語、有火青色、

〔輪池叢書 四十〕家相圖說〈○中略〉

陰陽家尤忌鬼門、世俗亦極忌之、其故何也、山海經曰、東海度朔山有大桃樹、蟠屈三千里、其卑枝向東北曰鬼門、萬鬼出入也、有二神、一曰神荼、一曰鬱壘、簡閱萬鬼之無道之者、縛以葦索、執以飼虎、若無其兄弟簡閱萬鬼、則忌鬼門可也、今縛以葦索、執以飼虎、則不可忌之、岐伯不言乎、開鬼門潔淨府、〈鬼門青淨府府膀胱也、〉世俗忌彼鬼門而遺我鬼門何也、則辟遠忌我鬼門無所逃避、然則不可嘗忌彼鬼門也、易曰、坎九三云、高宗伐鬼方、三年克之、夫坎者水也、正北方之卦也、由是觀之、可總指北方曰鬼門、其忌東北隅何、東北隅卽寅丑也、其對之者西南之未申也、申之爲言伸也、言陰氣用事伸賊萬物也、未之爲言昧也、言

五味木老於枝葉也、寅之言髕也、言陽氣動去黃泉欲上出、陰氣尚强也、丑之言紐也、言陽氣在上未降、萬物紐屈未敢出也、夫寅丑位東北隅、主出萬物也、然爲未申所伸賊、故忌其二隅也、然則不忌東南隅何、東南隅卯辰巳也、其對之者西北之戌亥也、亥者該也、言陽氣成藏於下也、戌者滅也、言陽氣微萬物畢成、陽氣下入地也、辰者震也、言陽氣動雷電震、民農時而物皆生也、巳者起也、言陽氣已藏萬物成文章也、夫辰巳位東南隅、長育萬物、而收藏西北、故不忌其二隅也、噫世俗未知爲何義而忌之、嗟猶王鳳羞於設言也、王商在於斯矣、

〔簠簋鈔一〕海外經曰、東海中有山焉、名曰度索、上有大桃樹、屈蟠三千里、東北有門、名曰鬼門、萬鬼所聚也、天帝使神人守之、此固怪說非可信也、然據此說亦其山東北門名曰鬼門耳、非凡稱東北方以爲鬼門也、

〔書言故事七鬼貴〕鬼門關、交趾有鬼門關、其南多瘴癘、瘴癘、山嵐毒惡之氣也、去者罕得生還、諺曰、諺俗語、鬼門關、容州北流縣南、兩石相對、號鬼門關、十人去、九不還、唐李德裕貶崖州、經此賦詩云、一去一萬里、千之千不還、崖州在何處、生還鬼門關、

〔風俗通義祀典第三〕桃梗　葦茭　畫虎

謹按黃帝書、上古之時、有荼與鬱壘昆弟二人、性能執鬼、度朔山上章桃樹下、簡閱百鬼、無道理妄爲人禍害、荼與鬱壘縛以葦索、執以食虎、於是縣官常以臘除夕、飾桃人、垂葦茭、畫虎於門、皆追效於前事、冀以禦凶也、桃梗梗者更也、歲終更始受介祉也、

〔鬼門考〕古の大内裏の圖に、東北の隅かゝれしとも見えず、但梨木の地は、内裏の東北の外にあり、彼地空閑の地のよし記したれば、これもし塞がれざるの心にや、今の内裏は光明院のみかど御即位の時、もとの内裏の悉く燒しかば、陽德門院の土御門の御所のやけのこりしを用ひられて、假の内裏となされしなり、○中略これ等東北の隅かゝれしとは見えず、近くは神祖○家康の御時、外

城門をたてられしに、東北の方にあたり侍るよしを申人ありしに、さらばとて、名を筋違橋の門と名づけさせ給ひしのみ、鬼門とは改めさせ給はざりき、德祖〇忠秀の御時、御殿つくられしに、東北の方をばかくべきよしを申せしに、笑はせ給ひて、天下は猶一家のごとし、我家の鬼門は蝦夷地にあたるべき、その外の地は禁忌に拘はるに不可及と仰られしよし、つねに御側にありし人の物語りせしと承りぬ、

〔吾妻鏡〕三十文暦二年〇嘉禎元年正月廿一日乙卯、御願五大堂建立事、相州武州度々遂撿、被撰鎌倉中之勝地、去年冬被定城太郎廿繩之地、猶不相叶、頗思食煩之處、相當于幕府鬼門方、有此地、毛利藏人大夫入道西阿領也、依爲御祈禱相應之所被點之、即被引地訖、仍今日先總門計被建之、相州、武州、大膳權大夫以下數輩被相談、伊賀式部入道光西、清判官季氏等奉行之、

〔吾妻鏡〕三十八寛元五年〇寶治元年五月廿八日庚辰、凡當于關東鬼門方角、被建立五大明王院、賞翫有驗知法高僧及陰陽道之類、

〔叡岳要記〕上初度總持院供養〇註略

東塔緣起云、〇中略桓武聖主、廢長岡京遷平安城之時、雲峯峙帝都之丑寅、嵐徑成鬼門之凶害、當于時大師自開伽藍之基趾、聖主深恃叡山之護持、自爾以降、以當山爲皇帝本命道場、

〔看聞日記〕永享五年七月廿四日、抑山門牒狀一覽記之、　永享五年七月十九日、根本中堂閉籠衆議曰、可早爲管領御沙汰被申入公方事、　右山王者、帝都衞護之靈神、威風久扇九重、而皇基倍固矣、吾山者、鬼門安鎭之道場、惠燈普耀萬國、而百寮彌儼矣、

〔大猷院殿御實紀〕五寛永二年十一月、この月、〇中略大僧正天海が願により、忍岡の地を賜はりて、伽藍を創建せしめらる、その旨趣は、むかし桓武天皇、平安城に定鼎のとき、傳敎大師、皇城の鬼門叡山の靈地をいとなみ、帝都の鎭護として、千有餘年、皇祚長久を祈り奉る事、いまにおゐて怠らず、

八將神方

いまこれに準擬するに、忍岡は江城の鬼門たり、○中略愛に七堂伽藍を經營し、國家安全、武運繁榮を祈らんとぞ聞えける、

〔幕朝故事談〕筑波山は、御城の鬼門に當候方を、御祈願所に可被遊思召にて、筑波山を被仰付候なり、此は叡山の王城の鬼門に當るに准ず、

〔簠簋內傳一〕八將神方

	年											
大歲神方	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
大將軍方	酉	酉	子	子	子	卯	卯	卯	午	午	午	酉
大陰神方	戌	亥	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉
歲刑神方	卯	戌	巳	子	辰	申	午	丑	寅	酉	未	亥
歲破神方	午	未	申	酉	戌	亥	子	丑	寅	卯	辰	巳
歲殺神方	未	辰	丑	戌	未	辰	丑	戌	未	辰	丑	戌
黃幡神方	辰	丑	戌	未	辰	丑	戌	未	辰	丑	戌	未
豹尾神方	戌	未	辰	丑	戌	未	辰	丑	戌	未	辰	丑

右八將神者、牛頭天皇王子、而春夏秋冬四氣土用行疫神也、大歲神方者、厥歲其方也、以此一神方、諸餘七神方可知之者也、

第一太歲神總光天王　本地藥師如來　向此方造作大吉、敢不伐木、

第二大將軍魔王天子　本地佗化自在天　向此方萬事凶、故世人號三年塞、

第三大陰神倶摩羅天王　本地聖觀自在尊　向此方萬事凶、殊嫁娶結婚等凶、

第四歲刑神得達神天王　本地堅牢地神　向此方犯土凶、藏兵具收大吉、

第五歲破神良侍天王　本地河伯大水神　向此方不渡海河、造作則牛馬死、

第六歳殺神侍神相天王　本地大威德　向此方、不取弓箭、嫁娶結婚等凶、
第七黃旛神宅神相天王　本地摩利支天王　向此方、開軍旛吉、收財寶尤凶、
第八豹尾神蛇毒氣神　本地三寶大荒神　向此方、大小便凶、宜不收六畜、

〔運步色葉集　多〕○大歳方（ダイサイノ）子歳在子方、丑歳在丑方、寅歳在寅方、卯歳在卯方、辰歳在辰方、巳年在巳方、午歳在午方、未歳在未方、申歳在申方、酉歳在酉方、戌歳在戌方、亥歳在亥方、

〔曆林問答集　上〕釋大歳第六
或問、大歳者何也、　答曰、曆例云、大歳者歳星之精、降天地之間、觀察萬物、臨見八方、故名歳之君、愼之者保、逆之者亡、巡行於十二支也、子歳在正北、丑歳在丑、餘方皆爾、十有二年運終而復始、其方主歳、故爲一年之君、有福最吉方也、更不可犯、向凶事、殊出軍討敵向之大凶、若向此方擧凶事、疫病起也、

〔周禮註疏　二十六　春官〕馮相氏掌十有二歲、十有二月、十有二辰、十日、二十有八星之位、辨其敘事、以會天位、略○注疏　馮相至天位、釋曰、云十有二歲者、歲謂太歲左行於地、行於十二辰一歲移一辰者也、云十有二月者、謂斗柄月建一辰十二月而周、故云十有二月、云十有二辰者、謂子丑寅卯之等、十有二辰也、十日者謂甲乙丙丁之等也、云二十八星者東方角、亢、氐、房、心、尾、箕、北方斗牛之等、爲二十八星也、○下略

〔荀子　四儒效篇〕武王之誅紂也、行之日以兵忌、東面而迎太歲、至汜而汎、至懷而壞、

〔假名曆略註〕大さい　漢字太歲也、曆例に曰、歲星の精木星成故金なを忌、
大さい神とは、本年の太歲にして、年中諸事の善惡を司どる神なるゆへに、歲の君といふ、此方に向て木竹を伐らず、并家作、修造、土を動かし、家移、其外百事に是を犯し用ゆべからず、

〔運步色葉集　多〕○大將軍（タイシヤウグン）三年塞也、巳午未年在東、申酉戌歳在南、亥子丑歳在西、寅卯辰歳在北、此號大塞、　大將軍遊行方　自甲子日遊東、己巳日歸、自丙子日遊南、辛巳日歸、自戊子日遊內、癸巳日歸、自庚子日遊西、乙巳日歸、自壬子日遊北、

〔十駕齋養新錄　十七〕大將軍
隋李康淸德頌、後題歲在辛亥、大將軍在酉、歐陽公謂、大將軍之說出於陰陽家、前史不載、而此碑見之、吳仁傑以爲卽張晏所謂歲後二辰爲太陰者、抱朴書、有諸皐太陰將軍之稱、碑用其說、見兩漢刊誤補遺

予〇錢大昕謂、仁傑強作解事、於方術本末究心、其言絕無根據、蓋堪輿家大將軍居子卯午酉四正方、三年一徙、十二年而一周、亥子丑歳在酉、寅卯辰歳在子、巳午未歳在卯、申酉戌歳在午、與太陰之順行十二辰者絕不相合、唯寅申巳亥四年、偶與大陰相値、吳氏欲以附會太陰將軍之名、甚不然矣、周公謹亦太陰將軍之說與吳仁傑同、

〔拾芥抄下末方角〕方角禁忌事軍營制云、丑寅方ト曆ニ付タルハ、艮方也、仍丑寅方不可塞、餘角々准之、

凡大將軍方可忌二千三支、　假令二千者東方之甲乙方也、三支者寅卯辰之方也、餘三方以之可知之、遊行之時可忌正方一辰也、假令在東方一辰、不忌甲乙寅辰也、一寸相違當正方更不可忌之、

〔翠林問答集上〕釋大將軍第八

或問、大將軍者何也、　答曰、新撰陰陽書云、大將軍者、太。白。之。精、天之上客、太一紫微宮方伯之神也、不居四孟常行四仲、以正四方、三歳一移、百事不可犯云々、其太白、西方星金精也、降地而三歳之間爲方伯之神、十有二年運四方、終而復始矣、金者禁也、主殺斷、故犯之者必受殃、其居礎、立柱、上棟、修造、移徙、嫁娶、修竈、掘井、修填、出軍、葬埋、起土、百事犯用之太凶、於是大將軍常行四仲、以正四方、三歳一移云々、以此文在東方者只卯方可忌之、寅甲乙辰之四神者無忌之、昔者雖有其說、先喆之所不用也、紫微宮方伯之神也、伯長也、正也、書云、千里之外設方伯云々、在卯者寅甲乙辰四神相衆可忌之、餘之方皆爾也、今爲決後生之疑、引書籍聊記之耳、非愚所謂也、

〔假名曆略註〕大しやうぐん　漢字大將軍新撰陰陽書曰、太白の精也、太白は金星也、是元と西方の星にして、金の精なるがゆへに、萬物を殺伐する事を主どる、則俗家に所謂三。年。塞。是也、若し此方を犯し用ゆれば、三年の内に死を受るの災ありといふ、殊に百間の内を大に愼べし、但事によりて、方違して宥め用ゆる事も有、又輕き造作修理等の事は、遊行の内にしてくるしからず、

〔寛永板大雜書〕三年ふさがりの方をえる事

み、むま、ひつじのとしより、　東三年ふさがり

さる、とり、いぬのとしより、　南に三年ふさがり

い、ね、うしのとしより、　西に三年ふさがり

とら、う、たつのとしより、　北に三年ふさがり

〔簠簋内傳一〕日之塞方之事

一東(朔日卯)(十一日廿一日)　二巽(二日)(十二日廿二日)　三南(三日午)(十三日廿三日)　四坤(四日)(十四日廿四日)　五西(五日酉)(十五日廿五日)　六乾(六日)(十六日廿六日)　七北(七日子)(十七日廿七日)　八艮(八日)(十八日廿八日)　九天(九日)(十九日廿九日)　十地(十日)(廿日卅日)

右此方者日之大將軍也、深凶之、

時之塞方之事

子之時者子之方、何其時其方可覺也、

〔江次第抄一正月〕四方拜〇中略

次大將軍　一方三年、二千三辰、假令寅卯辰年在北方、次東、次南、次西也、

〔朝野群載十五陰陽道〕勘申木工寮屋舍爲大風所顚倒欲令造立可忌哉否事

右自内裏指彼寮當丙方也、丙方是大將軍在地之内也、仍須待遊行日造立無妨、但新造舍屋可有其忌、仍以勘申、

天祿四年五月廿六日　主計頭賀茂朝臣保憲

〔朝野群載十五陰陽道〕勘申自鳥羽南殿至于興福寺方角事

南行二百八十六町二十五丈四尺八寸(以四十丈爲町)

東行六十四町九丈

件丈尺、官使所撿注也、

右撿件丈尺、計之當丙方、今依宣旨、勘申如件、

康和三年十一月廿八日　主計頭賀茂朝臣道言

件方角事、依康和三年十月廿八日宣旨、撿非違使左衛門府生清原忠重、官使左史生安倍良成、左大史紀盛言等撿注也、

〔小右記〕寛仁三年十二月四日丙戌、吉平來、談雜事、於行願寺、令造小塔、其功未了、明年可奉迎念誦堂、自行願寺可當南方、自明春南方者大將軍方也、若奉安置可忌乎否、吉平云、從我住所可忌大將軍方、奉移塔之方、更不可忌也、只自我居可忌南方者、又云、入道殿奉造丈六阿彌陀佛九體、皆安置小南、明年三月可被安置新造堂、從小南寅卯間、是王相方也、然而不可被忌之由申了、但御自身者、今月晦日比渡給一條殿、以新造御堂尤吉方、依無御忌、只今可有我忌之故者、

〔左經記〕長元八年八月九日庚申、今夜武衛尊堂葬送云々、件葬所當大將軍方歟、德大寺丑寅方一町許者、令藤生所被點也、仍不避其忌云々、

〔後二條關白記〕寛治六年三月十六日己亥、陰陽師道時朝臣奉曆下答也、南方大將軍方也、奉安置大般若經、爲之如何、畫像者不可以憚、但木像者有憚云々、於御經者不可以忌之由所申也、

〔爲房卿記〕寛治六年正月十九日壬寅、博陸殿下〇藤原師實被供養興福寺北圓堂、永承治曆御堂、承曆御塔、皆公家被供養、長元御塔、宇治殿下被供養、皆被見御願々、今度依當大將軍方、公家不被供養、殿下者、十二月節分有御方違、令供養給也、但憚有方忌、依有御願、可准御齋會之由、去十七日被宣下、又三箇日可禁殺生之由、國被下知了、

〔中右記〕大治二年三月六日、頭中將忠宗依院宣送書云、齋院卜定所、自御本所、相當大將軍方、可被避忌哉否事、右延久、天仁、保安、齋宮卜定所、自各本所、相當王相方、已有先例、就被例、不可被忌歟、但彼時不必被忌避歟、今度沙汰出來、猶可被憚歟、宣令量申給者、予進返事云、不被忌由、已有度々例、仍不可

忌也、如此事、只可被用先例也、就中神事強不避大將軍、王相方忌歟、早此旨可令奏達給者、後聞、付民部卿申、猶可被忌云々、

〔源平盛衰記十六〕遷都附將軍塚幷司天臺事

就中福原ト云ハ、平安城ノ西也、今年大將軍在酉、方角既ニ塞レリ、イカヾ有ベキト申人アリケレバ、陰陽博士安倍季弘ニ仰テ、勘文ヲ被召ケル、勘狀ニ云、本條云、大將軍王相不論遠近、同可忌避諸事、然而至于遷都者、先例不避之歟、桓武天皇延暦十三年十月廿一日ニ、自長岡京遷都於葛野京、今年大將軍酉、爲北之分、當王相方、然者就延暦之佳例案之、雖爲大將軍之方、何可有其憚哉トゾ申タル、聞之人々舌ヲ振テ申ケルハ、延暦ノ遷都ニ御方違アリキ、但永此城ヲ捨ラレンニハ、強ニ方角ノ禁忌ノ不可及沙汰、勘文ヲ召ル丶ナラバ、何樣ニモ可有御方違者ゾ、季弘ガ勘狀矯飾ノ申狀歟、○中略去バ季弘モ、入道○平清盛ノ無道ノ政ニ恐ツ丶、方角ノ禁忌ヲモ不申ケルニヤトゾ、人唇ヲ返ケル、

〔運歩色葉集多〕大陰方子歳在戌方、丑歳在亥方、寅歳在子方、卯歳在丑方、辰歳在寅方、巳歳在卯方、午歳在辰方、未歳在巳、申歳在午、酉歳在未、戌歳在申、亥歳在酉方、

〔暦林問答集上〕釋大陰第九

或問、大陰者何也、　答曰、暦例云、大陰鎭星之精、歳星之皇后也、常居歳後之二辰、故子歳者大陰在戌、丑歳者在亥、餘例皆爾、大歳皇后移居之方也、故忌婦人事也、妊者移其方、産期犯向凶、○中略

釋歳刑第十

或問、歳刑者何也、　答曰、金匱經云、刑凡有三、第一衰謝之刑有五、謂金木水火土之刑、第二制御之刑有十、謂十干之刑、第三不遜之刑有三、謂十二支之刑也、今之暦所載之歳刑者、謂衰謝之刑、制御不遜之兩刑者暦不載、故略之、第一云衰謝刑者、金剛也、刑自在西方、火猛也、刑自在南方、木落歸根、刑在北方、水流歸末而不歸、刑在東方、土王於四季、故天能刑之、今按、巳酉丑金之位也、金以剛强之故、陽氣入而挫之、故巳酉丑之刑自在西方申酉戌之位也、寅午戌火之位也、火以强猛故、陰氣來而挫之、故寅午

戌之歲刑自在南方巳午未之位也亥卯未木之位也木雖特柔弱陰氣來而殺之故亥卯未歲刑在北方亥子丑之位也申子辰水之位也水雖特陰淨之智陽氣往而刑之故申子辰之歲刑在東方寅卯辰之位也土五行之王也天能刑之未丑辰戌土之位也各相刑之未刑丑也戌刑未也辰之刑辰也丑之刑戌也於是金雖剛火炷之火雖猛水掩之木雖柔弱陰氣殺之水雖特智陽刑之金木水火各雖有剛猛柔智之德莫不刑之也土五行之王天刑之尚書暦云歲刑者天之陰精水曜精也一名法曹司馬以殺罰爲名是五位各一方刑之也夫寒暑推移應時而動不失其節者獨雖無受刑者治不可不刑也呂氏春秋云刑罰不可伏於國鞭笞不可廢於家其歲刑者一歲之中受刑殺方也故多禍少福百事不可犯之大公兵書云專事者則天罰之以德暴則天惡之以刑也

釋歲破第十一

或問歲破者何也　答曰暦例云歲破土曜之精大歲之所對衝方也一歲之中爲大歲見衝破故云破子歲破者在午丑歲破者在未餘例皆爾於是破有輕重故寅申巳亥方破者四孟爲五行生也子午卯酉方破者四仲爲五行盛壯也丑未辰戌方破者四季爲五行衰老也故歲破在寅申巳亥者無咎在子午卯酉者輕凶在丑未辰戌者在衰老無生氣重凶也起土移徙不可犯向之又馬牛之類不可於其方求不吉也

釋歲殺第十二

或問歲殺者何也　答曰暦例云歲殺陰氣尤毒害方隅之殺金曜之精也專主殺氣萬物滅方也故丑未辰戌方運轉而不居於餘方不吉方也

釋黃幡第十三

或問黃幡何也　答曰暦例云黃幡羅睺星之精大歲之墓也萬物皆有生死故有墓其萬物皆歸於土常運轉於丑未辰戌方不行餘方主於土色故名黃又幡者旗也其形如樹幡故云幡又五行墓皆以丑

王相方

未辰戌日、爲五墓日、是主土之故也、向其方立門取土不吉、餘無咎也、

釋豹尾第十四

或問、豹尾者何也、　答曰、暦例云、豹尾計都星之精、黄幡對向之方也、故幡在辰方、尾在戌方相對、餘歳亦爾、其幡尾之指靡形變動而速疾、似豹尾之動、又豹以有君子之喩、故象之、馬牛犬之有尾類、不可於其方來也、餘無妨、

〔簾中抄下方違附土忌〕王相方　三月めぐりといふ

春三月、東ふたがる、　立春正月節　艮王震相　春分二月中　震王巽相
夏三月、南ふたがる、　立夏四月節　巽王離相　夏至五月中　離王坤相
秋三月、西ふたがる、　立秋七月節　坤王兌相　秋分八月中　兌王乾相
冬三月、北ふたがる、　立冬十月節　乾王坎相　冬至十一月中　坎王艮相

これも大將軍の方のいみのごとし、方違は、人の家にて、十五日をたがふべし、我家の本所には、一夜もとゞまらず、

〔簠簋內傳一〕月塞之方事

正五九 丑子亥　在北 丑子亥
二六十 辰卯寅　在東 辰卯寅
三七霜 未午巳　在南 未午巳
四八雪 戌酉申　在西 戌酉申

〔頭書長暦中〕王相神トハ、ホキニ云フ月塞リト也、本文ニ、正五九ハ北塞リトアレドモ、正當ノ方ハ毎月變ル物也、

〔小右記〕長和五年六月廿日壬辰、般若寺大佛、欲奉移禪林寺、有二疑、仍問吉平朝臣、勘云、土用間可忌觸土之事、至于被奉度安置板敷上佛者有何事、但王相方可有憚、奉動度、乃至冬節之後、左右無妨矣、

〔後二條關白記〕寬治七年三月廿八日乙巳、戌剋東造作之間、違方事問道時朝臣泰長、口説々所申也、各申旨大略問之、傳家道々相分學習、陰陽家文書等可引勘之云々、

太白方

裏、奉長朝臣、(五位也、)王相二神也、至于夏節有違方、其憚如何、相神遷南方、王神遷巽角、有造作事、見於舊說、以此趣問道時許、申曰、件說之由、傳家所不學習也、

〔山槐記〕永曆元年九月廿九日甲辰、大將遊行間、北屋有可修造事、仍爲違王相、自今夜宿北對東妻、

〔玉海〕承安五年五月廿日庚子、當居所南方有可修造事、而當王相方、(今當時、又無其家、乃是謂本所也、)仍召主稅助時晴問曰、新他所爲本所經一宿者、其忌可移歟如何、又塞方(南王相、東大將軍、)占其所始渡之條可憚歟否如何、申曰、今新召他人家爲御領、被定本所者、全經十五日可移之由忌也、雖宿一夜、不可移其忌、又塞方移、被占本所之條可有憚、但本爲有御宿宿所者、一夜移忌否可滿十五日之宿歟、申曰、安家(○安倍)所明日如御定、而賀家(○賀茂)曾可滿十五日之由所申也、仍公家被用之、今依爲世々所行所申也、仰旨雖可然者、遠問在憲朝臣之許所申曰、一夜移忌不可及十五日者、遣于時晴申狀了、

〔玉海〕建久二年二月十七日丙申、此日欲臨幸大内(中宮御之、)而甚雨、無便宜之上、非指日事、又陰陽師等有申留、仍今日延引、來廿日可有行幸於中宮之由、廿一日可令退出里第給、其故何忌、於大内滿十五ヶ日之一氣、去王相之忌、可留大内也、閑院已當實、(今東相方也、夏節王方也、)因茲於閑院雖滿十五ヶ日之宿、至于五月中分、十五日一度可有御方違行幸歟、此條太有事煩、又貴女連日之御行、曾無先蹤、加之於里亭有可修御所等之事、仍暫可有御退出也、臨時祭之期可有入内、其後不滿十五日以前、可有遷幸閑院亭、其後閑可渡給閑院也、此等自仰長房了、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿三年(○安貞元年)六月十七日甲子、御所乾角可被立納殿之由、有其沙汰、然奉行人周防前司申云、自明日西王相方也、可有御方違歟云云、但不當西方歟之由有仰、仍陰陽道被尋問之處、各積丈數申云、自夜御所西行廿二丈八尺五寸、北行十六丈八尺、入戌方事一丈五尺六寸八分、然西鰭板際、六丈相去而於被立者、雖無御方違不可憚云云、

〔運步色葉集〕太白遊行方(朔日東、二日巽、三日南、四日坤、五日西、六日乾、七日北、八日艮、九日天、十日地、中旬下旬同、是塞之方也、一東、二角、三南、四角、五西、六角、七北、八角、九天)

十地可レ考、

〔倭名類聚抄二神靈〕太白神　新撰陰陽書云、太白神、和名、比○止○比○米○久○利、

〔拾芥抄下末方角〕天一太白方事

件方可レ忌二正方一、一辰也、假令十丈者、以二一丈五尺六寸六分一爲二正方一、此外非二忌限一、大將軍王相、諸禁忌方角皆同之、

天一太白自二大將軍、王相、八卦忌方一、重可レ忌二避一、是件大將軍方等、日數久之故也、見二保憲勘文一之由、宗明朝臣所レ談也、保憲說云、隣里犯土、大將軍、王相方忌、四十五歩内、八卦方忌、三百歩内四丁餘也、但自身犯土造作者、不レ論二遠近一猶可レ忌レ之、

土氣法土公文云者、還二本所一也、春竈、夏門、秋井、冬庭殿也、

郭邑之内可レ忌二四十五歩、二十七丈一郭邑之外、可レ忌二二十五歩、十五丈一隔二阡河洞及人家一無レ忌、光榮云、郭邑或謂二城郭一、或謂二村邑一、京都之由、謂二其都邑一以二一保四町一可レ定歟云々、

〔簾中抄下方違附土忌〕太白一○夜○め○ぐ○り○といふ　一日、十一日、二十一日、この日は卯にあり、その後しだいに八方にめぐる、九日、十日は天地にありといへり、これも大將軍のいみのごとし、そなたに行てとゞまらざるなり、たゞし正方をいむなり、正方とは、東にあれば東六町に、北南ひろさ一町づゝをいふなり、六町より遠くならば、次第にその程はからふべし、いまのくりかたもかくのごとし、

〔大和物語上〕監の命婦のもとに、中務宮おはしましかよひけるを、方のふたがれば、こよひはえなむまうでぬとのたまへりければ、その御かへしごとに、

逢ことのかたはさのみぞふたがらん一夜めぐりのきみとなれゝば、とありければ、方ふたがりたりけれど、おはしましてなんおほとのごもりにける、○下略

〔中右記〕嘉保三年○永長元年正月十日、從二殿下一有レ召、則馳參、明日行幸御出方角沙汰也、明日太○伯○神○在レ東、

然者可被用西陣歟、件路幾可見者、則參內、先見西陣、取御輿丈尺、見其程、西陣方油小路甚狹少之上、右衞門陣屋已滿小路、僅無有幾路頗以見苦、見東陣門處、甚南ニ依、從夜大殿不當太伯神方、歸參殿下、申此旨處、仰云、然者不當正方可用東門者、

〔本朝世紀〕仁平元年六月七日丙子、今夜、皇后宮（近衞皇后藤原多子）自大炊御門御所行幸東三條、依太白方忌也、

〔玉海〕承安五年六月十二日辛酉、明日可犯土、仍明旦可向顯輔朝臣南家、而十三日有太白方否疑、仍令打之處、南北六十一丈、東西四十三丈云々者、全不當、仍明日可渡也、

〔簾中抄下方違附土忌〕天一（五日づゝふたがる）　乙卯の日より、五日は卯のかたにあり、卯といふは東なり、そのちしだいにめぐる、こよみにつきたり、そなたにとゞまらず、大かたいむことも、大將軍の方のごとし、

〔倭名類聚抄二神靈〕天一神　百鬼經云、天一神（和名、奈加加美）天女化身也、

〔曆林問答集下〕釋天一第五十三

或問、天一者何也、　答曰、春秋命曆云、天一者地星之靈也、太一者人星之靈也、尤爲尊星、倶在天上紫微宮門外、左曰天一、右曰太一、天一主戰鬪、知吉凶、太一主風雨水旱兵革飢疫災害、而遊行九宮、陰陽書云、天一者、己酉日從天來、居東北維六日、化人頭蛇身、乙卯移居正東五日、化人頭魚身、庚申日移居東南維六日、化人頭鹿身、丙寅日移居正南五日、化人頭雞身、辛未日移居西南維六日、化人頭牛身、丁丑日移居正西五日、化人頭馬身、壬午日移居西北維六日、化人頭龍身、戊子日移居正北五日、化人頭龜身、從癸巳日上天、十六日間、招搖大微星大紫房等宮遊行、而從己酉日降地、運行八方而角六日方五、都四十四日運終焉、其天一遊行方角、百事犯向之大凶、戰鬪向之弩弓折、產乳向之死傷、尤大凶、東北維艮方、正東卯方也、餘倣之、

〔假名曆略註〕天一天上

天一神常に八方に運行て祟をなす、殊に產婦此方にむかひて大凶也、此日より十六日の間は天に上る故に、天一神の祟なき也、

〔江次第抄一正月〕四方拜○中略

天一　己酉至甲寅六日在艮方、乙卯至己未五日在卯方、庚申至乙丑六日在巽方、丙寅至寅午五日在午方、辛未至丙子六日在坤方、丁丑至辛巳五日在酉方、壬午至丁亥六日在乾方、戊子至壬辰五日在子方、癸巳至戊申十六日在天上、天一在天上之時、向乾拜之、爲秘事也、人車記云、仁安二年正月一日庚子、天一自舊年廿四日至今月九日、在天上、其間拜方依不審尋問在憲朝臣之處、天上之間、元日庚子可奉拜午方由令申、仍注于記、

〔北山抄二六月〕同日○十一日神今食事○中略

雖有方忌出御例天慶三年十一月、天一在酉、子三刻還御、天曆九年十一月、天一在卯、子時以前可還御者、同十年十一月、丑二刻還御、天德三年十一月、丑二刻還御、

〔小右記〕長和三年三月六日辛卯、今日卯時蓋寢殿檜皮、光榮朝臣勘之、○中略又天一天上之間、蓋屋同所忌也、然則今年被蓋寢殿、追日有件等忌也、三月六日辛卯、時卯被初蓋、

〔經信卿記〕承曆四年六月二十九日庚申、巳剋參殿、○藤原師實右中辨若狹守參會、次新中納言宰相中將被參、□知之後、召參遣戶口、被仰云、可問有行、先是依召候藏人所、來月五日可渡基家朝臣宅、而處狹屋□云々、然則欲渡但馬守宅日次如何、又不可有方忌乎、主上○白河近令渡給後、如板敷處之、可立直、土用間可有其憚、仍先渡敦家朝臣六條亭、土用了、但馬守宅修理後渡、其可乎、申云、五日者天一在南、來月十日可令渡給歟、王相者十二日可坐坤、仍日數非幾、至于大將軍忌者、忌之內令他所給可宜者、又仰云、此去夜女房夢云、白髮尼□出來云、今月內可他所者、可占吉凶者、占申云、如來向時者指事不候、日次給歟、其等卽令申、

〔台記〕久安六年十二月二十八日庚午、自冷泉參東三條、○中略是夜須留宿、而依天一方歸冷泉、

歳德方

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿三年〈○安貞元年〉十二月廿八日癸酉、於武州〈泰時○北條〉御亭、將軍家明年御行始之事、有其沙汰、可爲正月八日歟、十四日之由、陰陽道申之、八日者可爲延引、十四日可宜之旨被仰、御行始方角、北方吉之由、晴賢申之、北方天一方也、

〔下學集上時節〕歳德〈トシトク陰陽家〉

〔暦林問答集上〕釋歳德第七

或問、歳德者何也、　答曰、五行書云、凡陰陽用事、遇德爲壽、故歳德方一年間有德方也、皆十干德也、但五爲陽德、〈甲丙戊庚壬〉五爲陰德、〈乙丁己辛癸〉其甲歳德者在東宮甲方、丙歳德者在南宮丙方、戊歳德者在中宮戊方、〈中宮者戊己兩方〉庚歳德者在西宮庚方、壬歳德者有北宮壬方、此五干歳德各爲陽德、故在其方、次乙歳德者在西宮庚方、丁歳德者在北宮壬方、己歳德者在東宮甲方、辛歳德者在南宮丙方、癸歳德者在中宮戊方、其乙丁己辛癸者爲陰干、故自無德、配合陽干而成德、是以己爲甲妻相合、故己歳德在甲、辛爲丙妻相合、故辛歳德在丙、乙爲庚妻相合、故乙歳德在庚、癸爲戊妻相合、故癸歳德在戊、孔子曰、稟氣於陽、定形於陰云々、

〔假名暦略註〕としとく　漢字歳德〈五行書曰、又年十干德也、〉

歳德神とは、陰陽の氣交還して臨御するの方位なり、故に、嫁娶結婚、造作、移徙、入宅、修造、其外一切の善事に用て大に吉也、年暦に万吉と註するは此方のみ也、

〔越絶書四〕計倪內經第五〈○中略〉

越王曰、善、請問其方、計倪對曰、從寅至未陽也、太陰在陽、歳德在陰、歳美在是、聖人動而應之、制其收發、常以太陰在陰而發、陰且盡之歳、亟賣六畜貨財、以益收五穀、以應陽之至也、陽且盡之歳、亟發糴以收田宅牛馬、積斂貨財、聚棺木以應陰之至也、此皆十倍者也、

〔閑田耕筆一〕暦に、兄方〈エハウ〉といふことを、此に惠方と書は、惠をうくる方と心得たるにや、然らず、甲丙

庚壬等の方にあたれば、兄弟の兄也、甲乙をもて、兄弟とする也、此くりやうは、

甲己歳は甲方　寅卯間

乙庚歳は庚方　申酉間

丙辛歳は丙方　巳午間

丁壬歳は壬方　亥子間

戊癸歳は丙方　以上は、故人小西梁山話也、

〔鹽尻 三十〕歳德の方を俗にゑ方と云、吉方とかくなり、伊勢守記、寛正六年八月、今出川殿の夫人產の所にみへたり、吉をゑとよむ事、住吉をすみのゑと讀むと同じ、

〔玉襷 八〕斯て、毎年に、上より分布し給ふ、假名曆に、歳德明方、ことしは何方ぞと御教まして、萬よしと載させ給ふ事なるが、此は唐土の曆法を用ひ給ふより、始れる事にて、曆法の書どもに、向此方萬事有大幸とも、歳德方一年間有德方也とも見えたり、此を俗に歳德神と稱して、元より實神とし、或は簠簋內傳により、此は南海の實靈女、婆利采女、亦名は稻田姬と申し、素盞嗚尊、亦名は牛頭天王の后神なるが、謂ゆる八將神の母神なりなど云ふは、吉備の眞備公の、始めて須佐之男命に、牛頭天王といふ名を負せて、暦神とせし時に、作れる妄誕なれば、取るに足らず、此由は、予別に牛頭天王暦神辨と云ふを著して、其に委く辨へたり、是を以て、此正朔を奉ずる限りの人は、貴賤貧富を云ず、誰しの家にも、正月には、其謂ゆる明方に、歳德棚と云を設けて、注連を引亘し、いみ清めて、種々の物を獻りて、當年の穀物の生就は更なり、幸福をも祈り白す事なるが、其祭る意ばへは、唐土の曆書の旨とは異にして、專ら御年の皇神たちを祭る意なるを思ふに、此はいと古昔より、上件の由緒によりて、戸ごとに、年の始には、祭り來にけむを、分ち賜はる曆の、歳德明方の御教令に從ひ奉り、其をうち混じての祭禮と見えて、實に然も有べき事とこそ思はるれ、然るは、歳德と稱ふるは、謂ゆる湯桶讀なるが、正しくはサイトクと云べきにて、唐土の曆書どもに、歳德の方を、年の始めに皇國にて、今祭る如く、家々にて祭るべき由を記せる書の無をもて、かくは云なり、然ればば、古事せむ人などは、此意ばへを、殊に慥に思ひ定めて、大年神、御年神、若年神を迎へて祭る心を

以て、御錢御酒をも供ふべきなり、

○按ズルニ、歳德棚ノ事ハ、神祇部神棚篇ニ在リ、

〔家相秘傳集 上〕節分の夜に、年越詣と稱し、翌年の歳德方へ參詣するは理に當らず、其如何となれば、先節分といへるは、立春節に入の前日にて、乃當年の終なり、故に節分の夜は、當年無事に終りたるを喜悦、禮謝の爲、其年の歳德方へ詣るなれば最も理なり、翌年の歳德方へ參るは、恐らく節分の夜にはあるまじ、是立春節に入の翌朝、正しく新年となるを俟て、其新年の歳德方へ詣り、當年安全守護の禮拜をなす、歳德詣と云是なり、

〔假名附暦註〕金神　正說なし、或說に、庚申の神是を金神といふ、七殺とは、西方純金の氣を主どる方位也、金は殺伐を事とす、其數は七つ也、故に七殺といふ、此方より土を取或造作し、又は土藏を作る等に大に忌し、尤愼すんばあるべからず、凡金神に、天金神有、地金神有、天金神は陽なるがゆへに其禍輕し、地金神は陰なるが故に其災大に重しといへり、但輕き造作修理等のことは、遊行の內にして苦しからず、雜書に間日を書は誤なり、

〔簠簋內傳 一〕金神七殺之方

甲己歳、午未申酉方、　丙辛歳、子丑寅卯方、　戊癸歳、子丑申酉方、　庚乙歳、辰巳戌亥方、
壬丁歳、寅卯戌亥方、

右此金神者、巨旦大王精魂也、七魄遊行而殺戮南閻浮提諸衆生、故尤可厭者也、

金神七殺異說之事　此說暦出

甲己歳、午未申酉、　乙庚歳、寅卯辰巳、　丙辛歳、子丑午未、　丁壬歳、寅卯戌亥、　戊癸歳、申酉子丑、

金神遊行事

甲寅ノ日ヨリ五日間在南方　丙寅　五日間在西方
戊寅　五日間在中央　庚寅　五日間在北方
壬寅　五日間在東方

金神四季遊行事

春乙卯ノ日ヨリ五日在東　夏丙午　五日在南
秋辛酉　五日在西　冬壬子　五日在北

金神四季間日事

春丑日　夏申日　秋未日　冬酉日

〔寛永大雜書〕金神七せつの方大にわろき事

きのえつちのとの年は　むま、ひつじ、さる、とりの方也
きのとかのえの年は　たつ、いぬの方なり、
ひのえかのとの年は　とら、う、むま、ひつじの方也、
ひのとみづのえの年は　とら、う、いぬ、ゐの方なり、
つちのえみづのとの年は　さる、とり、子、丑の方也、

右此方へこえて在所をたて、家を作り、又は堂作り候へば、七人ゑすべし、此方をよく／＼つゝしむべし、

〔後二條關白記〕寛治七年四月五日辛亥、太政官被造作三條殿云々、僧文貫定俊眞人也、大外記也、金神七殺方、北方當否相論事、不付兩說、被付左大辨說造作候之由所聞也者、今年者北方吉也、其故陰陽魁罰報應篇云、夫天岡河魁是大殺神、能制一切凶神、如或造作凶方不避大禁、將軍官符飛廉一切惡神、幷宅長年命歲月等神是凶方、若天岡河魁克臨者、當年月方位臨卦卽吉、轉禍爲祥、必至進時物入人

口、伯相殿公卿等信此說、造作亦加宮造營、至五月十一月、必人入口時物、如小之便同亦去、見於百忌暦、

〔中右記〕永久二年四月十二日、又被仰云、今年金神方在南、仍作春日塔之間、爲違正方四十五日、一度行向久我邊也、而來十五日已偏四十五日、此間可出行、仍尋陰陽家之處、光平申云、故道言朝臣說云、違四十五日方忌之間、思忘天過了時、其間止犯土造作、又違四十五日方忌之後、企犯土造作者、以之思之、金神已准大將軍方、有四十五日方違也、一度許雖不令違給過、此間又令違給之後、可被作御塔者、予申云、尤賢事也、就中入其節違、依有王相忌、已止造作了、自然夏之後及秋時、可有造作也、早遂御四十九日程、又有御方違、後入秋被造候可宜歟、但夏間於木津邊、少々木作許可候也者、

〔中右記〕永久二年八月五日丁未、早旦從殿下給御隨身云、只今可參院御所、聊有可被沙汰事者、則馳參直衣、是源中納言領大炊御門南方万利小路東亭也、從一夜上皇白地御此家也、殿下大藏卿、又召大炊頭光平、御此間事等被問仰也、早欲有障定、昨日欠日、今日御衰日也、仍明日可有障定、但內々此間事等大略被慮定、先內府上御門亭、與六條殿間可還御事如何、光平申云、於六條殿者金神方也、於土御門殿者御遊年方也、有小犯土造作者、旁可有其忌也、於金神忌者、陰陽道雖不知、近代依被忌所中也、還御之後過四十五日、後可有犯土造作歟、又可被作新皇居事如何、予申云、今年內宮遷宮也、明後年外宮正遷宮年也、明年被急作可宜歟如何、仰云、然者被作本大炊殿可宜歟、件地本凶所之由不聞之故也、予申云、被所可被作者、土御門六條殿之間、新所を定吉方還御可宜歟、仍被問光平之處、遷御六條殿、明年被作可宜歟、此間事明日可有定者、

〔中右記〕嘉承二年六月七日壬戌、今夕依御方違可有行幸內裏也、是尊勝寺修理之間、依違御金神方也云々、

〔台記別記〕久安四年十月廿九日癸未、招範家見女御處改易圖、範家曰、今明兩年金神在西、於壞壁定

有其忌、但百若當三白九紫、雖當金神、銷其凶、無敢所忌、然則問當三白九紫否、於直講信憲〈陰陽道不知之〉若當將以圖覽殿下、

〔百練抄 七後白河〕保元二年十二月二十三日、諸卿定申諸道勘申金神方忌可被棄哉否事、件方角、永長定後、眞人依申出、三四代所忌來也、仁安二四廿三、爲御方違、行幸鳥羽殿、修理大膳職之間、爲避金神方云々、

〔玉海〕承安三年正月十三日丙午、此次、余〈○藤原兼實〉問曰、金神七殺方可憚哉否、如何、申云、更不可忌避、但百忌曆文云、犯一神殺七人云々、因玆賴隆眞人已下、彼家之輩、申可有忌之由、然而陰陽道所不用也、當道之習、以新撰陰陽書爲規模、而金神方忌事、不載彼書、又想如此之諸忌、不可勝計、悉忌避者、何方可造作哉、度々雖有沙汰、遂以被弃了、就中上古、保憲、晴明之時、全無此沙汰云々、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿三年〈○安貞元年〉九月二日戊寅、金火遁犯之由、天文道等屬周防前司親實、捧連署勘文云云、

〔閑の暇 上〕愚人を欺き誑かす道具には、金神の祟り尤世に多し、此金神にも、六方金神など、いふ化もの有、其說に曰、劍先向三ッ後三ッにて、六方づゝは、毎年の金神にて、又曆にしるす金神有、扨年のめぐり合にて、惠方の眞中へ劍先キのあたる年あり、彼輩がいふ、此事をしらす、惠方とて、宿がへすれば、大に祟り有とて、衆愚を欺き威しかける也、三十年ばかり以前、大坂高麗橋壹丁目邊に、金神醫者と異名せる醫者有し、〈或は山伏醫者ともいふて人々笑けり〉病家へ行と、十に五ッは、此病人は金神の祟りあり、藥にては治しがたし、祈禱すべしとすゝむ、さなきだに、病家は迷はしく、心ぐるしくおもふ所へ、たゝりをいふておどしかけるほどに、忽ちまどひ恐れて、祈禱を賴むもの多し、金神除の祈禱は、京都に大驗者有、引合せ申べしとて、差圖する山伏、京四條近所に有しとなむ、此事を知ル人は、あれは相棒なりと謗り賤しめり、此醫者少し文字をならべる事もせし故、予〈○新井白蛾〉が下坂

土公方

の時などは、文章の事など尋ねに來りし、今は死して其跡も斷絶せしと聞ぬ、然れども、高麗橋邊に四十年も住人は覺有べし、尋ぬ問へばかたるべし、

〔倭名類聚抄 二 神靈〕土公 董仲舒書云、土公鼇空二反、春三月在竈、夏三月在門、秋三月在井、冬三月在庭、

〔曆林問答集 下〕釋土公遊行土府所在第五十五

或問、土公土府者何也、 答曰、群忌隆集云、土公土府者地神也、今按、土公者、從甲子日至己巳日六日出遊子方、自庚午日至丁丑日還、而八日入地中、從戊寅日至癸未日六日出遊卯方、自甲申日至癸巳日十日又入地中、自甲午日至己亥日六日出遊午方、從庚子日至丁未日又八日入地中、從戊申日至癸丑日六日出遊酉方、從甲寅日至癸亥日又十日入地中、如此運轉而復始、尙書曆曰、土公土府所在不可犯、犯之時、明可避之、又土公、春者在竈、夏者在門、秋者在井、冬者在庭、四時所在不可犯之、但庭者犯土无咎、又云、土府者、正月丑取丑方土、殺家長、二月巳取巳方土、三月酉取酉方土、皆同上、四月寅取寅方土、殺少子、五月午取午方土、又殺家長、六月戌取戌方土、七月卯取卯方土、八月未取未方土、九月亥取亥方土、又同上、十月辰取辰方土、害六畜、十一月申取申方土、大凶、十二月子取子方土、害子孫、土府土公之所在明可避之也、

〔簠簋內傳 三〕土公出入伎居處大土小土事

春 戊寅日 至東宮青帝青龍王宮殿六日 小土吉日 然而甲申日歸本宮十日 大土墓日

夏 甲午日 至南宮赤帝赤龍王宮殿六日 大土吉日 然而庚子日歸本宮八日 小土墓日

秋 戊申日 至西宮白帝白龍王宮殿六日 小土吉日 然而甲寅日歸本宮十日 大土墓日

冬 甲子日 至北宮黑帝黑龍王宮殿六日 大土吉日 然而庚午日歸本宮八日 小土墓日

右本宮居座間、以不可犯土殺生、縱雖爲土用之內、土公遊行日尤可用之、愛世人改有大土小土

生氣方　死氣方

之日云事、專可任口傳者也、

〔頭書長暦中〕土ニ入ル次第、先ヅ小土ヲ以テ吉日トスル子細ハ、四季共ニ天赦日ヨリ入リ初ルノ謂ナリ、雖然小土ノ内ニハ、臨産ノ時、其遊行ノ方ヘ向フ事ヲ凶ナリ、尤犯土ニモ、遊行ノ方ヲバ可愼之、次ニ、大土トハ、土公神、本宮ノ地中ニ在故、勿論犯土ニ深クキラフ也、但シ此時節ヲ産生ニ不宜ト云フモ、中央ノ土ニ比シタル胎內ヲ騷動スルニ依テ也、若シ生月ニ至テ無據時ハ、土ニ入ル前日ヨリ、産湯ノ水ヲ汲置テ、産生ノ時可遣之、扨其穢水ヲバ土ノ終ル迄、器ニ貯置テ土ノ内ニハ地中ニ不溢ヲ習トス、次ニ又簠簋及古板ノ本文ニ夏冬ノ大土小土バ大小ノ文字、傳寫ノ誤ニテ、反覆シタルヲ、今マ改之、此ノ義ハ、月ニ大小ノアル如ク、日數ノ多分ナルヲ以テ大土トシ、其少分ナルヲ以テ少土ト知ルコト、是分明ノ説ナリ、尙ヲ又異説ノ次第モ以下ニ斷之、

〔假名暦略註〕土公(春はかま、夏はかど、秋は井、冬はには)

土公は地神、卽土神也、新しく造るは忌なし、ふるきを修理する事を忌也、

〔拾芥抄下末諸事吉凶日〕生氣(一切療治可向方也)正子、二丑、三寅、四卯、五辰、六巳、七午、八未、九申、十酉、十一戌、十二亥

死氣(同可忌方也)　正月午　二月未　已下以生氣准據可推知之、

〔和漢名數續編時識〕生氣方　正月子　二月丑　三月寅　順輪至十二月亥　座臥向此方佳、(月令廣義)

〔風俗通義祀典第三〕殺狗磔邑四門

俗說、狗別賓主善守禦、故著四門以辟盜賊也、　謹按月令、九門磔禳以畢春氣、蓋天子之城十有二門、東方三門生氣之門也、不欲使死物見於生門、故獨於九門殺犬磔禳、犬者金畜、禳者却也、抑金使不害春之時所生、令萬物遂成其性、火當受而長之、故曰以畢春氣、功成而退、木行終也、

〔相宅要說〕古杭高濂

毎年逐月、有生氣死氣之位、修生氣者福德來集、言月生炁與天道月德合其吉路也、犯死氣之方者

立見禍殃、

〔方鑑秘傳集上〕生氣方の說

三白寶海に曰、生氣は卽父等印授星なり、五行相生して萬物を育すと、此生氣は彼三元九星の中、各其本命を生ずる所のものをいふ、卽我を生育する護身恩惠の星なり、この所在の方修造移徙動土嫁娶出入すべて百事上吉とす、中略

殺氣方の說

三白寶海に曰、殺氣は造化常を失ひ、陰陽反逆して、相刑剋伐し、害をなすと、是又三元九星の中、我本命を剋する所のものをいふなり、其輪り泊る所必祟咎あり、

月殺方

〔萬安方五十八雜人神法〕月殺方

正五九月東北　二六十月北西　三七十一月西南　四八十二月南東

右向、此方不可服藥治病因、

暗劍殺方

〔方鑑頭書附錄〕暗劍殺大凶方之說

陽明按索に曰、暗劍殺は、乃値月星の本位に得る所の星是なり、一白値月の如きは、一白中に入輪て六白坎に至るを見る、一白の本位是暗劍殺なり、臣、君の位を犯が如しと、夫暗劍殺は、威烈勇猛の凶殺にして、造化の德を傷ひ、生育の理を損ず、常に殺伐毒害の氣實なり、犯せば祟咎立所に至り、宅主死亡の災害に罹る、類延害ありて、種々に祟をなし、產業次第に衰へ、終には家門滅亡に及ぶといへり、凡此暗劍殺を犯せし者、其祟死亡に至らずとも、先盜賊の難免る事なし、予積年數多見及ぶ所なり、

友引方

〔寬永九大雜書〕ともびきの方の事

ね、むまう、とりの日は、　卯の方にあり

方忌

うし、ひつじ、たつ、いぬの日は、　辰の方にあり
とら、さる、み、ゐの日は、　みの方にあり

〔北山抄二六月〕同日〔○十一日〕神今食事〔○中略〕依有方忌不出御例〔延喜十三年六月、左大臣申云、前代不忌、貞觀以來有此事、法皇御時、忽進晩饌、以遲忌供神饌、時剋則存式、而早速云々、未爲得、今所司供奉、有其例、此度不御、有何事云々、天慶二年六月九條記云、中宮御云、延喜御代、雖方塞不被忌、未及寅剋遷御云々、參殿執申、御云、或不被忌、或付所司案之、雖不出御、可无難、雖者不出御、由仰外記畢云々、〕

〔拾芥抄上本諸頌〕方塞夜誦〔天一神五龍之誦〕　角六方
　大威德功德自在通王佛〔天一神方塞夜、禮拜、誦二十反、都無咎、〕
又内典華嚴經文云、件誦云、　迷故三界常　悟故十方空　本來無東西　奈所有南北〔已上謂之天塞頌〕
一神頌〔今謂、諸經中無此文、〕　一明心者　二明福者　萬明福者　千萬福者　急々如律令　謂之太白神方

〔榮花物語二十六楚王の夢〕よしひら〔○吉平〕も涙にむせび、なに事もすが〳〵しうも申さで、かくてためらひ申、けふこそは先おさめたてまつらせ給べき日〔○萬壽二年八月二日尚侍嬉子葬送〕にてさぶらふめれ、さてもかくておはしますべきにあらねば、いづかたにかゐて奉るべきとはせ給へば、法興院はよきかたに候めり、こよひはこ院におはしますべう申す、

〔左經記〕長元九年四月十九日丁卯
一可奉遷〇後一條之所事〇中略
又被命云、自清涼殿以吉。方。可定御葬所歟、將自遷座之所可取吉方歟、其事一定之後可定奉遷之所歟、右衞門督申云、應和四年中宮崩於主殿寮之後、奉遷東院、而道光偏自東院以吉方爲御葬所、其後保憲遷座所及御葬所等、自主殿寮可取吉方之由奉勘文云々、卽披覽彼年邑上御記、道光有不覺行之文、然者問陰陽師之後可被定其所云々、頃之資業朝臣等歸參、申云、北對頗雖宜、東西北

又廟等不全、可無便濟御者、

(長秋記)天永四年(○永久元年)七月十四日、右馬頭經忠相談云、今夜行啓未定也、故何者、今日未申方可塞、由南北三町、東西二町餘也、仍不可塞、次泰長所令申也、而光尹尚可塞之由沙汰、未一決間、已及深更、爲之如何、此間攝政殿下(○藤原忠實)左大臣(○源俊房)令參給、有儀定、尚有行啓、依爲還御無用、權大夫、大宮權大夫外可令參、上達部忠宗、下官外無參、

(今昔物語二十)下毛野敦行從我門出死人語第四十四

今昔、右近將監下毛野敦行ト云フ近衞舍人有リ、(○中略)漸ク年積テ老ニ臨ル時ニ、法師ニ成テ、西ノ京ノ家ニ住ム間、家ノ隣ニ有ケル人俄ニ死ニタリケレバ、此敦行入道此ヲ訪ハムガ爲ニ、彼ノ家ノ門ニ行タ、其ノ死人ノ子ニ値テ、祖ノ死ノ間ノ事共ヲ訪ヒ云ヒケルニ、其ノ子ノ云ク、此死人ヲ將出サムト爲ルニ、此ノ家ノ門ノ極テ惡キ方ニ當テ侍レドモ、然リトテ何カハ可爲キトテ、方惡タトモ、此ノ門ヨリ可出ニ侍ルト語ルニ、(○中略)入道ノ云ク、其達避事ナ宣ヒソ、只己ガ門ヨリ出遣リ給ヘト云テ返ヌ、家ニ行テ子供ヲ呼デ云ク、隣ノ主ノ死給タルガ哀レニ糸惜ケレバ、訪ハム爲ニ行タリケレバ、其子共ノ主達ノ云フル樣ハ、死人ヲ可將出門ノ、忌ノ方ニテ有ドモ、門ハ一有レバ、其ヨリコソ將出サントト云フレバ、我レ極メテ糸惜ク思ツルニ依テ、我ガ中墻ヲ壞テ、我ガ方ヨリ將出セトナム云タ來ヌルゾト云、妻子共聞テ希有ノ事ヲモ宣ヒケル人カナ、極テ殺ヲ斷テ世ヲ捨ケル聖人也トモ、此ル事云ツ人ヤ有ル、人ヲ哀ミ身ヲ不思ズト云ヒ乍ラ、我家ノ門ヨリ、隣ノ人ノ死人車出ス人ヤ有ケル、糸奇異キ事也ト、口々ニ居並テ云ヒ合ヘリ、其ノ時ニ、入道ガ云ク、汝達等、僻事ナ云ヒ合ヒソ、只我ガセムニ任セテ有レ、汝達等ガ賢キ思ニ我レ世ニ不劣ジ、然レバ、童无キ祖ニハ隨フコソ吉キ事ナレ、只爲ム樣ヲ見ヨ、物ヲ忌ミ□キ者命短ク、子孫无シ、物忌ヲ不爲ヌ物ハ、吉ク命ヲ持テ、子孫榮エ、只々人ハ恩ヲ思ヒ知テ、身不顧ズ、恩ヲ報ズルヲゾ人トハ云

方違

フ、天道モ夫レヲ哀ビ給フラム、彼ノ死人生タリシ時ノ、事ニ觸テ我ニ情ケ有キ、何ニシテカ、其恩ヲ不報ザラム、由无キ事ナ不云ソト云テ、従者共ヲ呼テ、中ノ檜桓ヲ、只壞ニ令壞テ、其ヨリナム死人車令出ケル、其後、此事世ニ聞テ、可然キ人モ、下姓ノ人モ、入道ヲ讃メ貴ケリ、實ニ此レヲ思フニ、難有ク慈悲廣大也ケル心也、天道此ヲ哀ミ給ケルニヤ、彼ノ入道ノ身ニ恙ガ无クテ、九十許ニテナム死ニケリ、其ノ子孫皆命長ガク福有テ、于今其下毛野ノ氏、舍人ノ中ニ繁昌セリ、然レバ此ヲ見聞ク人、此ヲ知テ、人ノ爲ニ情可有キ也トナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔明月記〕天福二年（○文暦元年）八月九日乙亥、御入棺、（○後堀河）明日歟、（○中略）山作所方角皆塞、北一方無憚、仍被召能貴（不知其字）僧都（長嚴僧正弟子也）觀音寺邊所領、御佛事此御所、依賀茂社領可憚之由、貞應同申、猶不審之由、

〔貞丈雜記（十六神佛）〕一方違と云、たとへば明日東の方へ行かんとおもふに、東の方其年の金神に當ル歟、又は臨時に天一神、太白神などに當り、其方へ行ば凶しと云時は、前日の宵に出て、人の方へ行て、一夜とまりて、明日其所より行けば、方角凶しからず、物忌たる方へ行也、方角を引たがへて行く故、方違と云也、（物いまひにてする事也）

〔簾中抄（下方違附土忌）〕大將軍方（三年ふたがり也、おほふたがりと云、）
寅卯辰年は（北ふたがる）　亥子丑方をいむべし
巳午未年は（東ふたがる）　寅卯辰方をいむべし
申酉戌年は（南ふたがる）　巳午未方をいむべし
亥子丑年は（西ふたがる）　申酉戌方をいむべし

このふたがり方には、ちをほり、屋をつくり、家わたり、むことり、こうみ、佛供養、はかをつくことなど、みないむべし、たゞし方違つれば、いまず、又遊行のあいだは、ふるきあとをたがへず、修理をせばするなり、遊行の程は、こよみにつけたり、方違のことは節分のまへの夜より、我家に、一夜もとゞまらず、又人の家もしは我家なれど、本所にあらざるところにては、四十五日に、一夜

がふべきなり、

〔拾芥抄下末方角〕方角

五方　東木位　西金位　南火位　北水位　中央土位

八方　震東　巽辰巳　離南　坤未申　兌西、乾戌亥　坎北　艮丑寅　方違所過亥時畢可還、不得至天明云、光平說、一夜方違、次日歸本所之時不忌歸忌、

七日幷十三日、歸本所忌、宇治殿御時議定、宇左記仁平四三廿、見天暦四四一土御門記云々、○中略

凡以四角爲戊巳方、起自實、所謂以中爲戊巳是也、又戊巳方可在南方、以丙丁方爲戊巳方云云、是可忌戊巳方之時、可忌丙丁方也、戊巳無方位云々、

〔方角禁忌〕一、閉方違方事　與功忌土也　住本所之人、毎日夜違之、

今案、本所者自領之宅地、假令大將軍移東之年、立春之前夜違方後、毎夜可違之、若雖一夜宿本所者、其忌可留本宅矣、

別說云、毎夜違方云事明可知也、違云者謂不犯其方也、是不滿一氣日數之間者、雖當其方、只可宿他人之家也、五十五日事也

〔在盛卿記〕長祿二年閏正月廿九日戊午

一御方違時刻之事

經々雖有多說、家傳之習、以丑寅二刻爲昨今之境、仍御方違事、不御待明寅一時者不可爲御方違之分、然者子丑時分渡御、卯初刻還御、尤可然候哉、今時日出卯二刻也、以此分可有計御用歟、

閏正月廿九日　刑部卿

〔枕草子二〕すさまじき物

かたたがへにゆきたるに、あるじせぬ所、ましてせちぶんはすさまじ、

〔源氏物語宿木二〕えのび〳〵の御かたゞがへ、ところはあまたありぬべけれど、ひさしくほどへて、わたり給へるにかたふたげてひきたがへ、ほかざまへとおぼさんは、いとおしきなるべし、

〔源氏物語空蟬三〕われともえらせじとおもほせど、いかにしてかゝることぞと、のちに思ひめぐらさんも、わがためにはことにもあらねど、あのつらき人の、あながちによをつゝむも、さすがにいとおしければ、たび〳〵の御かたゞがへにことづけたまひしさまを、いとよういひなし給、

〔源氏物語松風十八〕殿上人四五人ばかりつれてまいれり、うへにさぶらひけるを、御あそびありけるついでに、けふは六日の御ものいみあく日にて、かならず參り給べきをいかなればとおほせられければ、こゝにかうとまらせ給にけるよしきこしめして、御せうそこあるなりけり、

〔河海抄松風八〕けふは六日の御物いみあく日にて　勘文云、六日物忌事、長神物忌也、長神方違は、五日六日連續する也云々、

〔古事談王道后宮一〕白川院、爲御方違渡御家保卿家之時、紫檀ノ甲琵琶日者所聞食之琵琶傍ニ銀琵琶一面ヲ立並テアリケルヲ御覽ジテ、有不受之御氣色、還御云々、

〔爲房卿記〕康和六年長治元年二月十二日丙辰、方違四十五日忌宿、九條乘船著南廊、大將軍在南、仍以大炊御門宅、奉馬頭女房、以九條兩本所違所件忌也、

〔殿暦〕嘉承二年九月廿七日庚戌、候内、以顯隆、左府、○源俊房并内府、○源雅實民部卿、江中納言等許ニ、主上○堀河御方違事等示遣、事趣大略、大會ニ可御小安殿、而件小安殿、當大將軍方、是如何、又依件忌、西六條を修理シテ、主上於御本所、件所令忌御如何、但件六條、已及大破、可爲大犯土、而幼主大犯土之所ニ、纔兩三日之内令渡給如何、此兩事何忌、重委可被申、但雖當大將軍方、依大嘗會、三ヶ夜宿給例、寛德度、御豐樂殿、是從昭陽舍當大將軍方、堀河院御時、依大嘗會、渡御大膳職、而件職、自堀河院當大將軍幷王相方者、不可忌歟、但能量可申者、是先日院○白河御命也、須於宿所定也、而件人々、此間不被出

仕、仍以職事示送也、去夜有使亡下渡歟、

〔中右記〕天永二年六月十二日、早旦従院有召、則馳參、被仰云、早行向攝政許可傳也、大炊殿皇居之間度下人頗滅、仍主上渡御他所了、然而猶又古經營所、昨日遣家保朝臣處、下人又頓死、彌怖畏思食、然者西六條如何、思量可申子細者、但今日依御物忌、入従北小門、於北面方者、大伊與守基隆朝臣所被傳仰也、參殿下申院宣、御返事云、承候了、於大炊殿者全不可候、但於西六條者、前日當忌方之由仰事候如何、又參院申件旨之處、仰云、打丈尺之處、寢殿一字不當也、又歸參殿下申此旨、御返事云、一町家中寢殿一字不當禁忌方、其外雖當先例、如此事候哉如何、能々可被尋問者、又參院奏之處、遣召光平泰長可問者、則遣召了、皆以參入、被尋問之處、件二人申云、如此吉所、只先以寢殿宛吉方、他所不沙汰者、六條殿寢殿従中納言中將居所當吉方之上、従姫君御所又無禁忌、尤宜之由所申也、仍一定以六條爲其處、御渡丈五、今日始沙汰之由可傳攝政者、又參賀陽院申仰旨、御返事云、當吉方者六條殿尤吉候者、參院奏件旨、午時許退出了、

元永三年保安元年七月四日壬寅、今夜秋節分也、爲違方忌、宿觀音堂北僧房、

大治二年三月十八日夏節分也、仍爲方違行向鳥羽宿世利阿堂、

〔台記別記〕久安四年七月七日壬辰、召在憲泰親問曰、後小野記曰、長保元年十月廿五日、今夜左府女子渡大藏錄連雅宅、西京依入内之吉方云々、既言吉方、疑非唯避禁忌方、亦有吉方歟、各對曰、先達所傳及中古以來之例、唯避禁忌之方、此外更無求吉方、彼記稱吉方者、無禁忌、則是吉也、故以無忌之方曰吉方歟、余〇頼長曰、吾子所告既存其理、長保元年亥歳也、大將軍在西、入内十一月、王相在北、天子居大内、非西京、何所避彼禁忌之方、故知西京歟、在憲復疑曰、禁忌方據節分夜所在忌之、若節分夜在忌方者、雖臨入内期、如他所有何益乎、若節分夜避禁忌方者、雖入内日在忌方、無其憚、十一月一日入内、十月廿五日如西京、未知其故矣、余曰、所疑可然、不知所以對焉、在憲勘申新還陰陽書如此、

女本命吉道法

新撰陰陽書云

亥子丑女、宜從庚向甲、當令女家在庚夫家在甲大吉、

寅卯辰女、宜從壬向丙、當令女家在壬夫家在丙大吉、

巳午未女、宜從甲向庚、當令女家在甲夫家在庚大吉、

申酉戌女、宜從丙向壬、當令女家在丙夫家在壬大吉、

就之案之、長保元年己亥、御年十二也、仍子御年歟、渡御西京、若從大內相當庚方之御所歟、申云、若用此說、如西京以大內當甲方歟、但用此說未嘗聞、余曰、唯言西京不斥其所、何以定知內裏當甲乎、後日以此事問晴明、仰曰、唯避忌方、未知求吉方矣、

〔參考保元物語〕二白河殿攻落ス事

京師本、杉原本並云、〇中略下野守〔源義朝〕宜ケルハ、兼テヨリ、八郎〔源爲朝〕ハ勢强キ者ト思ヒ、心膽シテゾ、左樣ニハ覺ツラン、如何樣、八郎ニ於テハ、義朝一當アテヽ見ンニ、何程ノ事カ有ベキトテ出ラレケルガ、抑今日ハ十一日寅刻也、東ハ日塞ノ方ナリ、其上朝日ニ向テ弓引ン事便ナカルベシ、疾方違セントテ、京極ヲ下リニ、三條マデナガリ、河原ヲ東ヘ打渡シテ、北殿ヲバ北ニ見ナシ、東堤ヲ上リニ、北ヲ差テゾ向ケル、

〔玉海〕安元元年十二月十七日甲午、今夕向賴輔亭違方、〇分節是明日依立春也

〔山槐記〕治承四年十月十三日壬辰、今夜依御方違、行幸前右大將〔宗盛〕家、〇中略抑此御方違者、自舊都被違大將軍方〔福原當申方〕也、被用秦親朝臣說也、遷御大將軍方之後四十五日、一度雖同方、令宿他所御、可令深忌御之由所申也、是爲先例云々、

〔玉海〕文治五年十月十三日己亥、今日藏人左京權大夫光綱來申云、御方違行幸十七日之由、有其沙

汰、而相當御物忌、仍可延引歟、十六七八九四箇日御物忌也、二十日可有行幸之處、復日也、御悩之後可有憚之由陰陽道所申也、爲之如何、仰云、二十三日可宜歟、復日之條若有如此之例哉、然者何事之有哉、可尋問歟、

〔吾妻鏡二十六〕貞應二年三月廿八日、二位家御方違、入御民部大夫行盛山庄、爲御造作也、

〔吾妻鏡二十七〕寛喜二年閏正月廿九日、將軍家四十五日御方違也、入御相州御亭、竹御所入御駿河入道家、

〔吾妻鏡三十七〕寛元四年正月十二日壬申、大殿幷將軍家、自毛利入道西阿第還御、是爲立春御方違、十一日夜、東爲太白方之間、一昨日御出、昨日御逗留云云、

〔吾妻鏡四十二〕建長四年五月五日庚子、於相州御方、(北條時頼)爲出羽前司行義奉行、御所造營、將軍家御方違事、有其沙汰、陰陽道六人參入、被仰尋之、當時可被借御本所於何方哉云云、爲親申云、四十五日御逗留所無之、然者西乾方共以無憚、亦曰、四十五日以後、秋節一度可有御方違者、借御本所於北可宜、且御下向之後、于今無御行始之儀、五月中聊有憚云云、廣資以平同之、晴賢晴茂申云、雖四十五日以後、借御本所於遊年方事無憚云云、文元申云、近代、一夜方違定事也、西乾共以無憚云云者、秋節可被借御本所於北方之由評定畢、亦龜谷方角若向見定之、可申之由被仰下之間、行義行方、景頼等、令引率彼六人、登寢堂後山上、御歸參、當乾方之由一同申之云云、　十七日庚子、奧州、相州幷前典厩、前尾州以下參會評定所、將軍御方違事被經評議、以奧州亭可被用御本所云云、而自當御所、相州當西方大將軍方、可有憚由、晴賢晴茂爲親廣資晴憲以平晴宗等一同申之、仍被定出羽前司長村車大路亭云云、自當御所正方南也、　十九日壬寅、御本所事、長村宿所聊依有其煩、亦被問陰陽道之處、晴賢以下申云、龜谷泉谷右兵衞督教定朝臣亭、自當時御所北方也、被用御本所之條可宜云云、仍治定云云、

〔吾妻鏡 四十七〕康元二年〇正嘉元年十月十六日丁酉、此間築地修理無方忌之沙汰、何樣次第哉之由、將軍家直被尋仰、御身固當番陰陽師爲親、而先々無如然御沙汰之旨申之、又仰云、不可依先例、於京都有此沙汰、早可注進、丈數爲廿七丈之内者、雖郗内御所可移御云云、仍爲親南面者無憚、東方廿七丈之内、可移御西對之由勘申之云云、

〔光嚴院御記〕元弘二年二月十六日丙辰、今日後嵯峨院御□無御幸、如何云々、及晩小雨、入夜尤甚、今日爲違卌五日方忌、御幸北山、行幸同之、申終出御、御狩衣也、朕同之、

〔園太暦〕康永四年〇貞和元年七月十九日、六條殿行幸、兩夜御逗留事、寺院行幸御逗留、雖爲一夜可被准據之處、如官外記勘例者、兩三夜御逗留有其例之上者、被准據之條有何事哉、　御方違行幸事、被定六條殿於御本所候者、大將軍王相方御犯出者、不可有苦候、但可爲三ヶ夜御方違候、先一夜被幸、次夜必可被渡御給候也、八卦御忌方已下事、且爲散御不審、一紙令注進候、得此御意可有申御沙汰候哉、恐惶謹言、

七月十日　在實　狀略

一八卦御忌方事

自春宮御方鬼間、東北正方坤方者、雖有御方違、今年中御犯土可被闕候乎、

〔園太暦〕貞和三年十二月廿八日、今日無御方違行幸、上皇又御吉方被立御車云々、近年例也、

〔看聞日記〕永享五年十二月十八日、今夜節分也、祝著之儀如例、南御方へ方違ニ行、自明年北塞也、仍局へ行、有一獻、

〔親元日記〕寛正六年正月朔日節分己酉、雖爲節分春日亭御方違御成無之、但於御進物者、來四日可有御進上云々、　四日壬子、去朔日節分雖無御成、於御進物者御帽恩、十重楊原、如佳例色々也、今朝送御進上也、蜷川式部丞殿中迄持參之、打大豆、粟、麥飯等雖有用意、不及御進上也、

土忌

(晴豐記)天正十年正月四日、節分方違ニ子ノ方吉方なり、則北ニ井上ト申者あり、あけち者、彼者所へ余方違也、

(簾中抄下方違附土忌)土をいむこと　我家のかきのうちは、四十五歩をいむ、となりは廿歩五歩をいむ、八卦御忌方は三百歩をいむ、三百歩は四町あまりなり、たゞしつちを三尺すぎてほるをいむなり、

(類聚符宣抄一)御體御卜

太政官符神祇官外印

應行御卜祟參箇條事○中略

一自御在所南西方諸司所犯土祟可致謝事

中務　民部　主税　内匠　造酒　内膳　右兵衞　左馬　右馬等省寮司府所犯

右得彼官今月十日解偁、依例供奉御體御卜、所祟奏聞既訖、仍錄祟狀申送如件者、官宜承知依件行之、符到奉行、

位左少弁　　位左大史

天暦六年十二月十日

(朝野群載陰陽道十五)犯土禁忌

請申隣里犯土禁忌步數事

陰陽書云、居郭邑內者、土氣去宅卅五步、各爲一區、過之外土氣不害人、掘地起土、深過三尺、爲害、不滿三尺、無害、本命法云、禍害絕命鬼吏五墓之鄉、去舍三百步內、雖身不往、害人作病云々、

今案、隣里犯土、大將軍、王相等方忌卅五步內、御忌方三百步內、三百步者四町餘也、但自身犯土造作者、不論遠近、猶可忌之、仍以勘申、

天延二年九月七日　主計頭賀茂朝臣保憲

〔小右記〕寛仁三年九月七日庚申、權辨持來陰陽寮勘申可修補郁芳門以南、談天門以南、并皇嘉門南面大垣日時文、（十月十四日丁酉、時巳、若午、十七日庚子、時卯、若辰、垣廿一日甲辰不可犯土、）余（○藤原實資）問云、廿一日甲辰不勘申修補日、別注不可犯土之由、不得其意、仰事由可削去歟、卽返給、示可覽攝政之由、辨云、明日可令捺印官符之事、攝政被仰大外記文義朝臣了、日時若可載官符歟者、答云、見前官符不載日時、作官符以後宣旨載可修補之日時宜歟、辨朝臣記、　八日辛酉、吉平朝臣云、十月廿一日御厄日、不可犯土、仍昨日注申不可犯土由、又云、談天門以南一町當御忌方、今年不可犯土者、此由等今朝示遣權辨朝臣所了者、

〔左經記〕長元八年五月二日乙酉、午剋參殿、后町井依不穿、東宮行啓延引云々、（午來御時昭陽舍、仍后町井當大將軍方、有忌之中、覽可遷上東門院之由有御志、（中略）因之今日可出御之由被有定也、）又鎭星月日不可起土、并不忌起土之由、可令賴隆時親等進勘文之由、被仰頭辨、

〔玉海〕承安三年四月八日庚午、今日、（○中略）依先日召陰陽頭在憲朝臣來、（○中略）此次相尋在憲事等、

一有妊者憚犯土造作哉否事

在憲申云、本文云、門戶井屍憚之、於自餘犯土作事者更不可憚、但近代、或以今案忌之云々、未知可否者、

一假令人有家二、以甲家爲本所、（一夜留忌、）以乙家爲旅所、（四十五日留忌、）而於乙家、空過四十五日了、仍已留其忌、然者、自件在所、大將軍、王相方、犯土造作可憚、爲之如何、

在憲申云、犯土之所爲、他人之領者、爲他人之沙汰行之無妨、又旅所、縱雖付四十五日之忌、其後又一夜モ宿本所者、件忌卽可付所、不可有二忌也、於旅所空過四十五日、未此後不宿本所之間、其忌在旅所、而更宿本所、件忌早移其所也、定置本所此故也、若不持本所之人ハ、一所ニ留四十五日之忌ハ、又他所同ク宿四十五日ヲ、移彼忌也、權定本所之人者、他所之忌、極易移也云々者、

一星吉凶
曜星

〔吾妻鏡脫漏〕元仁二年嘉祿元年十一月廿日丁丑、於武州御亭、御所造營事、連日犯土、天一、太白方有憚否、被經沙汰、於連日先例無憚之由、彈正忠季氏申之、可急避之旨、民部大夫康俊申之、是其說有之云云、雖被決之間、重而召陰陽師等、後藤左衞門尉爲奉行、爲連日犯土之間、日來天一太白方無御方違過畢、然自今日西天一遊行方也、可爲何樣乎、可計申之旨被仰下、然廿三日居礎堀井立門有憚之由、國道朝臣以下六人申之、大膳亮泰貞申云、連日御犯土乎、今無退轉、寢殿之外不可過當時之御犯土、然不可有憚云々、就之各行向、可糺正方之由被仰下、仍差親職陰陽師等相共行向、而正大畫處、自當時御寢所、至被御地面乾維東西二百五十六丈五尺、南北六十一丈也、正方西、幷乾方不相當、雖竿勘庚方分歟、不當酉方之由、各令歸參申之、仍相論無其詮、神妙之旨蒙居、及衆儒之期評議訖、人々令退出云云、

〔園太曆〕康永四年貞和元年十一月七日、慈嚴僧正入來、心閑謁之、造作事幷前庭假山事等談之、坤方不可築山之旨、先達口傳也、不可然之旨示之、

〔二中歷五曆〕當年星又謂曜日土水金火計羅日月木曜三皆吉、

羅睺星凶一十十九廿八卅七四十六五十五六十四七十三八十二九十一百　土曜凶二十一廿廿九卅八四十七五十六六十五七十四八十三九十二百一　水曜凶三十二廿一卅卅九四十八五十七六十六七十五八十四九十三百二　金曜凶四十三廿二卅一四十四十九五十八六十七七十六八十五九十四百三　日曜吉五十四廿三卅二四十一五十五十九六十八七十七八十六九十五百四　火曜凶六十五廿四卅三四十二五十一六十六十九七十八八十七九十六百五　計都凶七十六廿五卅四四十三五十二六十一七十七十九八十八九十七百六　月曜吉八十七廿六卅五四十四五十三六十二七十一八十八十九九十八百七　木曜吉九十八廿七卅六四十五五十四六十三七十二八十一九十九十九百八

說云、日月木三吉、餘六皆不善、

本命星曜云

貪巨祿文廉武破初子後午中五逆

子丑寅卯辰巳午亥戌酉申未

產經曰、子屬貪狼星、

其人貪財靈旗、宜爲吏、富貴、秩二千石、無憂患、壽百歲、

丑亥屬巨門星

其人勇悍靈燥、爲衆人師、宜爲吏、秩六百石、無憂患、多智辯聖、壽八十八歲、

寅戌屬祿存星

其人多讒、殺人不死、傷人不論、人欲殊之運、受其殃、秩二千石、壽七十七歲、

卯酉屬文曲星

其人好文墨、便習事、小心勤愼、宜爲吏、秩六百石、勞憂、壽六十六歲、

辰申屬廉貞星

其人小心、有誠信、不貪士、宜爲吏、害貴少實財、壽七十七歲、

巳未屬武曲星

其人强猛自用、有武力、宜爲吏生業、秩千石、無憂患、壽八十八歲、

午屬破軍星

其人有威、將衆人之主、爲人師、衆人歸之、富貴、秩万石、無憂患、壽九十九歲、

〔壒囊抄九〕人本命星幷緣木緣穀事

生年當星不替、故ニ本命星ト云也、略頌云、貪巨祿文廉武破

貪狼星、子年人、命木桐、命穀黍、　巨門星、丑未年人、槐、粟、　祿存星、寅申年人、楡、稻、　文曲星、卯酉年人、桑、麥、

廉貞星、辰戌年人、棗、麻、　武曲星、巳亥年人、李、大豆、　破軍星、午年人、杏、小豆、

〔拾芥抄〕下末　本命屬星

子年人　貪狼星　丑亥年人　巨門星　寅戌年人　祿存星

卯酉年人　文曲星　辰申年人　廉貞星　巳未年人　武曲星

午年人　破軍星

今案、貪狼星子年人、桐木枕伏持、同上又大陰、但同星、巨門星、丑亥年人、槐木枕伏持、同上水曜、辰星、祿存星、寅戌年人、檜木枕伏持、同上金曜太白、戌、文曲星卯酉年人、桑木枕伏持、同上土曜鎭星、廉貞星、辰申年人、桑木枕伏持、同上木曜、歳星、辰年男女、武曲星、巳未年人、李木枕伏持、其驗同上、火曜、熒惑、巳未年男女、破軍星、午年人、杏木枕伏持、月求、長七尺二寸、枕高二寸、長四寸、件伏持人、雖老若白髮反黑、又曰、日曜大陽、午年男女、

宿曜　本命日二說、或以中一年爲本命、或以生日爲本命、先支干相配可爲本命、[illegible]

九曜　○見大曜圖、○下略

〔江家次第〕正月　四方拜事　正月一日寅一刻〇中略

一所拜屬星座、圓座、廉前机燒香、散華、燃灯、件灯机上置、又置二杯數、高杯、其上居之、〇中略

次乘上於拜屬星座、端笏北向稱御屬星名字、七遍、是北斗七星也、

子年貪狼星　字司命神子　丑亥年巨門星　字貞文子　寅戌年祿存星　字祿會子

卯酉年文曲星　字微惠子　辰申年廉貞星　字衞不隣子　巳未年武曲星　字賓大惠子

午年破軍星　字持大景子

〔五行大義 四〕第十六論七政〇中略

合誠圖云、北斗有七星、天子有七政、斗者居陰布陽、故稱北斗、其七星各有四名、合誠圖云、斗第一星名樞、二名璇、三名璣、四名權、五名衡、六名開陽、七名標光、黄帝斗圖云、一名貪狼、子生人所屬、二名巨門、丑亥生人所屬、三名祿存、寅戌生人所屬、四名文曲、卯酉生人所屬、五名廉貞、辰申生人所屬、六名武曲、巳未生人所屬、七名破軍、午生人所屬、

〔口遊 時節〕歲旦拜天地四方諸神等誦

今案、寅二剋起、先向生氣、次天道、（向四方拜）盥洗、訖卽向玉女拜也、次華蓋、（凡欲拜諸神、先拜華蓋、在□故亦拜也、）訖向地鼓天鼓三誦、訖三呼屬星名、三合掌當額呪曰云々、訖卽可再拜七星、（所屬之星七遍）次亦北向北辰、次西南向拜地、更拜四方、（起東□拜各□）次拜太歲、次大將軍、次歲德、次天道、次天德、次月德、次天一、次大白、次遊年、次生氣、次竈神、次內外氏神、次父母、若廟、

〔拾芥抄 上本 歲時〕拜四方事〇中略

庶人儀、卯時前庭敷座、北面拜屬星、向乾拜天、向坤拜地、次四方、（自子終酉）次大將軍、天一、太白、（已上再拜）次氏神、（兩段再拜）座前立机、置燒香花燈、次先塋先師、（兩段再拜）墳墓、（兩拜）

九條記云、卯剋庶人者拜四方、後可加大將軍、天一、太白、（以上再拜）氏神、（兩段再拜）竈神、先塋、先師、（以上再拜）

〔後撰和歌集 二十 賀〕年。星。をこなふとて、女檀越のもとよりずゞをかりて侍ければ、くはへてつかはしける、

ゆいせい法師〇惟濟

百とせにやそとせそへていのりける玉のしるしを君みざらめや

〔中右記〕永久二年正月十四日、臨亥剋天已晴、定知有皆旣蝕、上皇〇白河今年御年六十二、御當。年。星。也、而雲膚重掩、月蝕不見、衆御祈之所致也、

〔大友興廢記 二十一〕大將心持の事并星を祈事

祿命

去程に島津義久公、天正十四年の冬、諸勢を豐後の地に發向すべきために、まづ休叱を薩州豐州の運の程をはかり見よと申付らる、休叱曰、運をはかる迄も御座なく候、豐後府大將の星は、それがし存知の事なれば、大友宗麟子息義統の星をいのり申べく候、星の奇瑞次第になされよろしからんと申、義久公尤と同せらる、休叱則私宅にかへり、檀上の儀式次第をかざり、秘術をつくしぬ、彼宗麟公は祿存星、義統は破軍星にあたり玉ふ、されば休叱豐後府大將祿存星破軍星を先んとして、あたる星辰を祈りしかば、忽然として奇特みゆ、此行にては運の甲は乙となり、利をうしなふ事あらじと、喜悅の眉をひらく、

〔壒嚢抄 一〕五月ニ生ルヽ子ハ、二親不利也ト云ハ實歟、全無其證、還テ吉例多シ、晉書ニ云、孟嘗君五月ニ生レタリ、福貴無比、〇中略　上宮太子、癸巳ノ年正月一日甲子ノ日生レタマフ、欽明天皇三十二年也、

〔唐六典 十四 太常寺〕凡祿命之義六

一曰祿、二曰命、三曰驛馬、四曰納音、五曰湴河、六曰月之宿也、

〔二中歷 十三 一能歷〕祿命師

上人 日延　扶値　良祚　能算　忠濟　慶增

〔新唐書 百七 呂才傳〕博州淸平人、〇中略　擢累太常博士、帝〇中略　太宗病陰陽家所傳書多謬僞淺惡、世益拘畏、命才與宿學老師刪落煩訛、掇可用者、爲五十三篇、合舊書四十七、凡百篇、詔頒天下、才於持議、儒而不俚、以經誼推處、其驗術、諸家共訶短之、又擧世相惑以禍福、終莫悟云、才之言不甚文、要欲敎俗失、切時事、俾易曉也、故刪其三篇、〇中略　祿命篇曰、漢宋忠賈誼譏司馬季主曰、卜筮者、高人祿命、以悅人心、矯言禍福、以規人財、王充曰、見骨體、知命祿、見命祿、知骨體、此則言祿命尙矣、推索本原、固不其然、積善之家必有餘慶、豈建祿而後吉乎、積惡之家必有餘殃、豈劫殺而後災乎、皇天無親、常與善人、天人之

亥如影響、有夏多罪、天命勦絕、宋景修德、妖星退舍、學也祿在其中、不生當建學、文王憂勤損壽、非初値空亡、長平坑降卒、非俱犯三刑、南陽多近親、非俱當六合、曆陽成湖、不共河魁、蜀郡炎火、不盡災厄、世有同建與祿而貴賤殊域、共命若胎而天壽異科、魯桓公六年七月、子同生、是爲莊公、按曆歲在乙亥、月建甲則然、値祿空亡、據法應窮賤、又觸句絞六害、偝驛馬、身剋驛馬、三刑法無官、命火也、生當病、鄕法曰、爲人尫弱矬陋、而詩言莊公曰、猗嗟昌兮、頎而長兮、美目揚兮、巧趨蹌兮、唯向命一物、法當壽而公薨、止四十五、一不驗、秦莊襄王四十八年始皇帝生、以正月故名政、是歲壬寅正月、命偝祿、於法無官、假得祿奴婢應少、又破驛馬三刑、身剋驛馬、法望官不到、命金也、正月爲絕、無始有終、老而吉、又建命生法當壽、帝崩時不過五十、二不驗、漢武帝以乙酉歲七月七日平旦生、當祿空亡、於法無官、雖向驛馬、乃隔四辰、法少無官、老而吉、武帝卽位年十六、末年戶口減耗、三不驗、後魏高祖孝文皇帝生皇興元年八月、是歲丁未爲偝祿命與驛馬三刑、身剋驛馬、於法無官、又生父死中、法不見父、而孝文受其父顯祖之禪、禮、君未踰年、不得正位、故天子無父、事三老也、孝文率天下以事其親、而法不合識父、四不驗、宋高祖癸亥三月生、祿與命皆空亡、於法無官、又生子墓中、法宜嫡子、雖有次子當早卒、而高祖長子先被殺、次子義隆享國、又生祖祿下、法得嫡孫財祿、其孫劭濬皆篡逆、幾失宗祧、五不驗、

〔下學集下節要〕五月子不養言五月子必害父母、云孟嘗君也、雖五月生位至高大、其母得將公而長生矣、由是觀之、則五月子非不祥也、見史記、

〔大鏡序〕たゞ我は子うむわざもえらざりしに、えうの御つかひにいちへまかりしに、又わたくしにも、せに十貫を持て侍りけるに、にくげもなきちごをいだきたる女の、これ人にはなたんとなんおもふ、子を十人までうみて、これは四十たりの子にて、いとゞ五月にさへむまれてむつかしきなりといひ侍りければ、此もちたるせにかぞへてきにしなりと、

〔論衡六〕福虛篇○中略

齊孟嘗君田文、以五月五日生、其父田嬰誡其母曰、何故舉之、曰君所以不舉五月子何也、嬰曰、五月

子長與戶同、殺其父母、曰、人命在天乎、在戶乎、如在天、君何憂也、如在戶、則宜高其戶耳、誰而及之者、後文長與一戶同、而嬰不死、是則五月舉子之忌無效驗也、

〔五雜組 二 天〕五月五日子、俗以爲忌之、今不聞也、考之載籍、齊則田文、漢則王鳳、胡廣、晉則紀邁、王鎭惡、北齊則高緯、唐則崔信明、張嘉、宋則道君皇帝、金則田特秀、然而覆宗亡國者、高緯道君二人耳、然一以不軌殿天刑、一以盤荒取禍、即不五日生能免乎、田特秀、大定間進士也、所居里名半十、行第五、以五月五日生、小名五兒、年二十五舉於鄉、鄉試府試省試殿試皆第五、年五十五、以五月五日卒、世間有如此異事、可笑、

〔蠶石雜志 一〕丙午十二歲附

五雜組に、吹劍錄を引て云、丙午丁未年、中國遇之必有災、然亦有不盡然者、則百六陽九亦如是耳、出亭子云、我俗、丁未をいはず丙午庚申の年を恐る、、こと尤甚し、或はいふ、女子丙午の年に生る、、ものは、必その良人を食ふ、或いふ、もし庚申の日に孕むことあれば、その子必盜賊となる、故に凡庚申の日子ある月に、子を生むものは、その子に名づくるに、金をもてす、この事絕て本說なし、宋より以降、人の命運を談ずるものは、かならず八字を唱ふ、只その年をのみ忌、その日をのみ忌といふよしを聞かず、年を忌ば月を忌べし、月を忌ば日を忌べし、日を忌ば時を忌べし、子丑寅卯の十二支を禽獸に當たるは、後漢のころより旣にいへり、事は下に辨ずべし、丙讀爲火之兄、丙者、言陽道著明、故曰丙、正字通云、篆作丙、亦作炳、陽火也、從火、光天之下、盛大發揚也云々、午も亦陽火也、四方に配するときは南方たり、四時に配するときは炎夏たり、月に配するときは五月たり、時に配するときは日中たり、故に丙午の年必火災ありといふ歟、もし俗說に從て、丙午の年火災ありとせば、壬子の年も亦水厄ありとせん、壬讀爲水之兄、壬之爲言任也、言陽氣任養于下也、子は陰に屬す、四方に配するときは北方たり、四時に配するときは玄冬たり、月に配するときは十一月たり、

有卦無卦

時に配するときは夜半たり、世俗只丙午の年に火災ありといふのみ、壬子の年に水厄ありといはざるときは、丙午の說も信ずるに足らず、縱そのよしありといふとも、偶然たるのみ、

〔孝經樓漫筆一〕有暇　無暇

北山云、閑田耕筆に、うけ、むけといふ事は、大般若經の貧窮無暇入有暇といふ事なりと云々、餘に物えらぬなり、うけは有氣とかくべし、むけは無氣とかく事なり、その義つまびらかに左にえるす、

	胎	養	長生	沐浴	冠帶	臨官	帝旺	衰	病	死	墓	絶
木性	酉	戌	亥	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申
火性	子	丑	寅	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥
土水性	午	未	申	酉	戌	亥	子	丑	寅	卯	辰	巳
金性	卯	辰	巳	午	未	申	酉	戌	亥	子	丑	寅

胎、養、長、沐、冠、臨、帝の七を有氣とし、衰、病、死、墓、絶の五を無氣とす、木性の人は酉年酉月八月なり酉日酉時より七年有氣、入辰年辰月三月なり辰日辰時より、酉年七月申の日まで無氣なり、

〔五行大義二〕第四論相生就此分爲三段、○中略二者論生死所、

五行體別、生死之處不同、遍有十二月十二辰而出沒、木受氣於申、胎於酉、養於戌、生於亥、沐浴於子、冠帶於丑、臨官於寅、王於卯、衰於辰、病於巳、死於午、葬於未、火受氣於亥、胎於子、養於丑、生於寅、沐浴於卯、冠帶於辰、臨官於巳、王於午、衰於未、病於申、死於酉、葬於戌、金受氣於寅、胎於卯、養於辰、生於巳、沐浴於午、冠帶於未、臨官於申、王於酉、衰於戌、病於亥、死於子、葬於丑、水受氣於巳、胎於午、養於未、生於申、沐浴於酉、冠帶於戌、臨官於亥、王於子、衰於丑、病於寅、死於卯、葬於辰、土受氣於亥、胎於子、養於丑、寄行於寅、生於卯、沐浴於辰、冠帶於巳、臨官於午、王於未、衰病於申、死於酉、葬於戌、

〔古今要覽稿曆占〕うけ、むけ、

うけ、むけは、元五行家の說にして、たとへば木は申に受氣し、酉に胎し、戌に養し、亥に生し、子に沐浴し、丑に冠帶し、寅に臨官し、卯に王し、辰に衰へ、巳に病ひし、午に死し、未に葬る、胎より王まで七氣を、王相の氣として、これを有氣といひ、衰病以下を死沒の氣として、これを無氣といふなり、五行大義これによれば、この事隋より前に、はや傳ふる所ありしならん、たゞしこれは一年十二月の際の事なれば、今いふごとく、七年、五年とつゞくにはあらざるなり、然るを土木は申酉戌亥子年月を有氣とし、金は巳午未申酉を有氣とし、火は寅卯辰巳午を有氣とすと三才圖會いふは、生より沐浴冠帶臨官王の五氣のみをとれるなり、たゞしその事、一行禪師に出たりと同上いへば、唐よりはや五年七年といふことになりしならん、さてこの事、隋唐に露顯せしことなれば、皇朝にもふるく傳はりしなるべし、されども、假名曆に書載ることは、貞享よりなりといへり、貞享曆法圖、書、儀環曆、然れば有卦無卦とかき、あるひは有暇無暇と書べし、岡田納筆などいふは誤なり、また、うけ發錄とて、今世俗にすることも、大かた寛永以前より有しことゝ見ゆれども、そのはじめさだかならず、又うけに入人は、名物のかしらに、ふ文字のつきたる七種を、そなふるなどいふこと、そのはじめいかなる故にや詳ならず、佛說に七部卽生といふことあれば、有氣七年の數に合せし說事にても有べきにや、

〔古今要覽稿同〕うけ、むけ、

うけ、むけは、元陰陽家の說にて、曆法にあづからざる事なり、然れども世俗專ら稱することとなれば、貞享の頃より、假名曆に書載ること、はなりぬるとぞ、さてうけとは有氣と書て、己が性の年に旺するをいふ、たとへば木性の人は、酉年八月酉日酉上刻有氣に入て、七年の間は有氣なり、むけとは、無氣と書て、木性の人は、辰年三月辰日辰上刻無氣に入て、五年の間はむけとて虛耗に屬するなり、餘は下にみえたり、貞享曆法通書、及儀環曆、但し昔より如ㇾ斯通用すといへども、根元は十二運の盛衰を以、五性に配せるものゆ

厄年

ゐに、一性の運、兩年相續のことはあれども、五七年續くべきことは有まじきよし、簠簋曆にみえたり、然るを有卦無卦と書は假借なり、

〔頭書長暦中〕有卦、無卦ハ十二運ヲ以テ吉凶ヲ分ツナリ、卽有卦ハ胎ノ運ヨリ入テ、帝ノ運迄、此ノ七ケ年ノ間ハ、萬事ニヨシ、又無卦ハ衰ノ運ニ入テ、絕ノ運迄也、此ノ五ケ年ノ間ハ、萬事ニ不吉也、或書ニ始終ノ異說ヲ沙汰ストイヘドモ吾師ノ不用ニ任セテ、于レ爰不レ能レ辨レ之、

〔百一錄〕元祿三年五月四日、主上〇東山本院御所〇明正御有氣入、當年〇庚午水土兩性入ニ有氣一也、

〔宗建卿記〕享保十五年八月廿六日、今日主上被レ爲レ入ニ有卦一、有ニ御祝一、雖レ爲ニ來月八日一、爲ニ御神事中一、昨日入ニ九月節一、仍今日有ニ此儀一、

〔續百一錄〕延享五年三月十一日、口上覺、來八日御有卦入御祝儀、禁裏樣へ、御一統樣方より可レ被レ献ニ御色紙、文匣三ツ代拾八匁、臺壹ツ代六匁、合貳拾四匁ニ而御座候、右十方樣ニ割、御一方樣分貳匁四分宛ニ而御座候、明日明後日兩日之內、西大路家へ御持可レ被レ下候、此段爲レ可ニ申入一、如レ此御座候、以上、

三月十一日

〔實久卿記〕文化十年八月十六日庚戌、今日、內裏御有卦、御祝儀有レ之、諸家獻物有レ之、又舞御覽有レ之、

〔拾芥抄下末八卦〕厄年十三　二十五　三十七　四十九　六十一　八十五　九十九

〔塩尻十二〕一我國厄年の說ありて、尊卑皆おそる、異邦にも亦年忌の說ありて、甚だ拘れり、我國男四十二、女三十三、異邦七歳、十六歳、二十五歳、三十四歳、五十二歳、四十三歳、六十一歳、忌年不同也、されば男は忌レ雙、女は忌レ隻と云ふこと、陣纖儒が群碎錄に見へて、北齊の李渾が弟繪、六歳にして入學を願ひしに、家人等、偶年の俗忌を以て許さゞりし事あれば、其來る事も久しと見ゆ、冠笄の吉禮にも、男は偶年を忌、女は奇年を忌とす、すべて禍福命あり、俗忌にえたがひて、おろかにこれを信せんや、嗚呼惑へる哉世の人、

〔燕石雜志一〕丙午〇中略

俗說に、大約男子は二十五と四十二を厄年とし、女子は十九と三十三を厄年とすといへり、或はいふ、二は陰の數、五は陽の數なり、陰上にありて陽下にあり、故に男子その年二十五に至るものはこれをおそる、又四十二は、その數みな陰に屬して陽なし、且四二を讀で死とし、男子最これを懼る、亦十九は、十は陰の數、九は陽の數なり、その陰上にあり、陽却て下にあり、故に女子これを懼る、三十三はその數陽を重、且事の敗績するを、俚語に散々といふ、三三と散々とその訓おなじきをもて、最これをおそるといふ、是皆憑て謂なし、

〔安齋隨筆後編二〕一厄年〈○中略〉我朝にては、厄年と唱る也、水鏡に、三十三を遁がたくとあるは、三十四歳の前年なる故也、俚俗四十二をいめるも、四十三歳の前年なる故也とぞ、又世俗六十一歳を、本卦がへりといひて祝ふものあり、如此の事は、書をよみ理をわきまへ、死生有命といふことをさとせるものは、信用すべからざる也、

〔華實年浪草十二十二月〕厄拂、厄祭〈重厄同、凡一年總下上人、大總當加七歳、十六歳、三十四歳、四十三歳、五十二歳、六十一歳、皆人之大厄也、不可不自愼也、感則病行、失則憂、實、宮ニ此時一鷄鳥之事、是謂年總、六分賞鰻姓、此言年總七歳、以至六十一歳、皆加九年者、重以七爲賜之少、九爲賜之老、賜數於九、爲參賢、故自七歳以後、凡過九年、皆爲年總、若遭此數、四十二歳、免年總白鷹也、紀事曰、四十二歳、男子自爾慶養、是爲不保利於豐志、是亦厳之事也、今夜〈十二月晦日〉乙人以鰻作、[illegible]、是謂厄年、男子二十五、四十二歳、女子十九、三十三歳、是謂厄年、〉

〔官中秘策二十二〕御厄年之事

一御祈禱、諸大名執ニ行之一、於ニ山王神前一、或ハ護持院、護國寺等、前年正月、御厄年之御祈禱、前々又ハ其所ニ以ニ使者一頼ニ之、重而以ニ使者一御祈禱料遣ニ之、御祈禱發願結願の日限案内有ニ之、結願之日參詣、太刀目錄に銀子持參、〈のしめ中に〉御當厄年は正月御祈禱如ニ前、御祈禱執行之内、爲ニ御見舞一以ニ使者一音物遣ニ之、結願之日參詣、右同斷、御厄明之御祈禱、翌年正月勤ニ之、同前厄之時に、御當厄之年、於ニ伊勢兩宮一御祈禱執行之名代使者遣ニ之、尤御祈禱料遣ニ之、御祓御札、何れも其所ニ願置候、御當厄御前厄

之御祈禱、於二何方一執行候旨、年寄御老中之取次迄、爲レ知候並も有レ之、被二申上一給候樣申遣候事、

〔寺社法則上〕寛政十一未三ノ三　秋鹿幸藏ヨリ達

大納言樣〇德川家慶御厄除之儀御先例御札之事

上野執當より差出候書面如レ左

此度大納言樣御厄除之御札被レ進候、此後大納言樣御年齢被レ爲レ成候迄之間、御雙歲々々ニ而御厄除之御札被レ進候哉、御先例可レ有レ之候間、委細御承知被レ成度と之御事、

此後ハ、御貳十五、御四十貳、兩度ニ而御座候、尤右兩度ハ、三山其外御祈願所ニ而ハ一統御厄除御祈禱修行仕事ニ御座候、此度御七歲御厄除と申は、日光山計ニ而御修行之御事と奉レ存候、尙彼山へ相糺、前文之趣相違之儀も御座候ハヾ、尙又可二申上一候、御尋ニ付此段申上候、

執當兩名

〇按ズルニ、德川家慶、寛政五年ニ生レ、今年方ニ七歲ナリ、

〔吾妻鏡脱漏〕元仁二年〇嘉祿元年十月廿七日甲寅、國道朝臣參二武州御亭一申云、今曉、大白入レ氐、御愼文分明歟、隨而日來天變連々出現迄、御所營作事、可レ被二延引一歟云々、仍被レ行二御占一、可レ有二何年御沙汰一哉之趣也、可レ爲二今年一之由各占申、重宗、今明年共不レ可、然之由申之、晴賢申云、造內裏以下作事、天變不レ憚之上、明年若君御年九、不レ可レ有二御造作一之御年也、早可レ被レ始二成風之功一云云、

〇按ズルニ、藤原頼經、建保六年ニ生レ、明年方ニ九歲ナリ、

〔源平盛衰記十一〕丹波少將上洛ノ事

治承三年二月廿二日、宗盛卿、大納言並大將ヲ上表アリ、今年卅三ニ成給ケレバ、重厄ノ愼トゾ聞エシ、

〔源氏物語十九薄雲〕くちおしう、いぶせくてすき侍ぬること、いとよはげに聞え給、卅七にぞおはし

ましける、されどいとわかく、さかりにおはしますさまを、おしくかなしとみ奉らせ給、つゝしませ給ふべき御としなるに、はれ〴〵しからで、月頃過させ給ことだに、なげきわたり侍つるに、御つゝしみなどをも、つねよりも、ことにせさせ給はざりけることゝ、いみじうおぼしめしたり、

〔源氏物語十九薄雲〕ことしは、卅七にぞ成給ふ、〇中略み奉り給ひし年月のことなども、哀におぼしいでたるついでに、さるべき御いのりなど、つねよりとりわきて、ことしはつゝしみ給へ、ものさはがしくのみありて、思ひいたらぬことしもあらんを、なをおぼしめぐらして、おほきなることゞもし給はゞ、をのづからせさせてん、

〔橘庵漫筆四〕世俗、四十貳歳は疫年なりとて、假に鬼神に媚て、奸巫貪覡の爲に財を費して、福を祈り、邪祟なからんことをねがふ、何の據か有て、斯四十二歳を恐るゝや、疫年の說おこがましく記したる書許多あれども、汪洋たる杜撰、男子の見る物にあらずと、書名さへ覺へざりき、按るに、男子は大陽にして、其竭れるとし重陰なり、四と二と合て老陰六の數となり、不足すべき陰は、却而有餘の四上に有て、陽を剩する故、恐るゝなり、又女子の純陰なるに、大陽の數三三と並び過る年故、慎なるべし、その疫を、假に恐るゝこと、水の溢れ來り、火の疾くうつるがごとし、何んぞ四十二歳に至れば、火災水難の假に來るがごとく凶事の起らんや、何故これを神に媚、佛に歎きて、幸を求るや、殊に國により、二の正月とて、年替をするなど、親族朋友を招き、大に宴し、美酒佳肴をつらね、發意著書こと、冠婚の禮の大なるよりも、甚しくこれを祝へり、其愚の甚しきや、慎べきを却而祝し、大宴を設くるにいたる、是恐るまじきを驚き、慎べきを祝す、これ何事ぞや、己つゝしみて罪を天に得れば遁るに所なし、〇中略

或云、四十二は、死と云訓にて、三十三は、散々と云音なり、故に疫年として忌めりと云へり、何れより出し說かしらず、何んぞ四十二、三十三にかぎるべけんや、一生涯を常疫とし、平素其竭を

愼まば、鬼神巫覡を賴むにまさらん歟、

〔滿濟准后日記〕永享七年乙卯正月廿三日、將軍〇足利義教御重厄御祈、自分愛染護摩、准胝供、如意輪供、聖師供、不動供、以上五壇分、寶池院藥師護摩、炎魔天供、宗親僧正太元供、房仲僧正延命供、

〇按ズルニ、足利義教、應永元年ニ生レテ、永享七年ハ四十二歳ナリ、

〔親長卿記傳奏本書寫〕當年御重厄、殊來月御謹愼候、御新事、一社一同別可抽丹誠之由、可被下知賀茂上下社給之由被仰下候也、謹言、

四月三十日〇文明十五年癸卯　親長

藏人辨殿

〇按ズルニ、後土御門天皇、嘉吉二年ニ降誕アリテ、文明十五年ハ四十二歳ナリ、

〔鵞峯文集七十八哀悼〕西風淚露中〇中略

我人謂余曰、諺稱、四十二歳以爲厄年、是世俗所偏言也、足下其年幸免其厄也、又諺曰、四十四歳而有吉事、則四十九歳亦應之、其有凶事亦相應焉、足下四十四歳而失令弟、今茲四十九歳失令嗣、且應下士林與足下同齡者二人、共失嫡子、然則俗語之讖亦不可廢乎、余答曰、四海蒼生幾億萬人、其內同歳者、或吉或凶、何必一一擇同異哉、昔冊尊誓曰、日日可殺千人、諾尊誓曰、日日可生千五百頭云々、此是神道秘奧、輙不可言之、然要之陽長陰消之義乎、死生果是命也、今茲失子者、何必限四十九歳之父哉、余雖不堪悲、何迷俗說哉、

〔朝野群載三文筆〕北斗御修法祭文

維康和三年歳次辛巳正月朔壬戌廿一日壬午、吉日良辰、南瞻部洲大日本國太上法皇〇白河敬白、十方三世、一切諸佛、八万法藏、十二部經、地前地上、諸大菩薩、聲聞緣覺、一切賢聖衆、別白本尊界會、北斗、七星、七曜、九執、廿八宿、王者眷屬、四大天王、司命都尉、天曹都尉、冥官冥道、鎭護國家、諸大明神、乃至盡

密法界、護法天等、殊發一大願、圖北斗曼陀羅七箇、飾七箇之壇場、修百日之密法、其故何者、今年重厄。可愼、運命多衰、雖通修累、凡人佛道觀念不明、戒律難全、于朝于暮、以罪以催、仍爲懺悔罪障、永保全壽命、專抽精誠、恭敬供養、側聞、北斗七星者、普括七曜、照臨八方、上耀於天神、下亘于人間、以司善惡、以分禍福、群星之所朝宗、万靈之所俯仰、若有人作曼陀羅、如法供養禮拜、北斗歡喜、方致擁護、佛陀在上、玄鑒豈疑乎、仰願、北斗七星、還念愚懇、成熟所願、依百日之薰修、彌增百年之壽算、答一心之懇篤、永致一天之安寧、皆々之光耀旁朗、消天變於無形、照々之明鑒遠施、除不祥於未兆、國家安穩、人庶康和、明德惟馨、星宿尙饗、

○按ズルニ、白河法皇天喜元年ノ降誕ニシテ、康和三年ハ方ニ四十九歲ナリ、

〔大友興廢記　十四〕日州江御出陣仰出さるゝ事

天正六年戊寅九月下旬に、大友宗麟公、老中田原紹忍、田北鎮周、朽網宗歷、吉岡鑑加、志賀道輝、并に軍配者石宗を召して仰出さるゝは、面々存のごとく、我勇力を以て、九州を多分退治し、日州表も、縣見、日知賞、門河、此三ヶ城、又山毛田代の武士も皆相隨ふといへ共、大隅薩摩いまだ其儀なし、此兩國を退治するにおゐては、九州の主とならん、急度思ひ立御出馬をとげられ、先日州高城を攻べし、佐伯惟教入道宗天と、田北相模守鎮周に、先陣仰付られんとの御諚也、○中略其時、軍配者石宗申上るは、御諚尤に存候、○中略殊以、當年は御年四十九の御厄に相あたり、弓箭にきらひ所多く御座候、今日仰出さるゝ御弓箭發端の御詞を以て考へ申にも、不吉也、御年により、弓箭に凶月御座候、十月は午の年の大將の大禍の月、十一月は滅門の月なり、究竟軍御座候はん月、御年に不相應に御座候、今迄の御弓箭は、時日も皆吉事に相當り申候、此度はきらひ道多御座候、明年は合戰御座なくして勝利を得給ふ御年に相當り申候、戰はず利を得るを良將と、昔より申候と申上らるるにも、御同心もなく、御座をたゝせらるゝ、

厄月

〔水鏡序〕此尼、○中略ことし七十三になんなり侍、三十三をすぎがたく、さう人なども申あひたりしかば、をかでらは、やくをてんじ給とうけたまはりて、まうでそめしより、つゝしみのとしごとに、きさらぎのはつ午の日まいりつるしるしにこそ、いままで世に侍れば、ことしつゝしむべきとしにて參りつる身ながらも、○下略

〔台記〕久安六年十二月二十四日丙寅、戌剋禪閤○藤原忠實令已講玄緣供養法相曼荼羅、其曼荼羅、今日圖繪、於其前令轉讀唯識論、依明年御重厄有此事、

○按ズルニ、藤原忠實、承暦二年ニ生レ、本年七十三歳ナリ、

〔吾妻鏡二十八〕寛喜三年十二月廿六日、又爲明年太一定分御厄御祈被始之、長日勤行、

〔宗長手記〕廿五日○大永六年十二月、中略京には役おとしとて、年の數錢をつゝみて、乞食の夜行におとしてとらする事をおもひやりて、

かぞふれば我八十の雜事錢やくとていかゞおとしやるべき

〔小右記〕寛仁三年八月五日己丑、春日行幸、來月伊勢遷宮之後、若十月可遂行、十月御厄月、若可令忌給乎、吉平申云、厄日可愼給、厄月不可忌給者、被仰可尋前例由了者、　十一日乙未、其間、大進賴國祇候、○中略事次問、申春日行幸明後日可有定、有彼是可參之氣色、十月御厄月、若可有乎否之由、内々問吉平、申云、厄日南方不行者爲朙、件日大厄日、其日南方不可向者、可無厄月、只可令愼厄日給、十月廿日非御厄日者、余○藤原實資申云、年厄、月厄、日厄、時厄、若可待歟、但雖大厄月、月中無不向其方、只厄其口口也、攝政○藤原賴通命云、然事也、抑御厄月幸違如何、尋勘前例、小衰月有行幸違所之例、是吉平所勘申也者、　九月五日戊午、吉平朝臣云、廿九日御受戒、來月廿日、先日被定春日行幸之日、而依御厄日停止、十一月無吉日者、來月廿日、從月建計之當御厄日、計月節分、當廿一日、但來月御厄月不可南行、仍停止歟、

〔運歩色葉集衰〕衰日衰日事、忌厭ヲ日數爲之謂也、

〔拾芥抄下諸事吉凶日〕生年衰日

子午生丑未　丑未生子午　寅申生巳亥　卯酉生辰戌　辰戌生卯酉　巳亥生寅申

假令、子年子時誕生人、子日子時、針灸忌之可推知、又和氣嗣成朝臣云、子午生人、以丑未爲衰日之說所用也、異書說不用也

〔拾芥抄下八卦〕太一定分三　九　十五　二十一　二十七　三十三　三十九　四十五　五十一　五十七　六十三　六十九　七十五　八十一　八十七　九十三　九十九　百九

八卦行年、男自丙寅順計之、女自壬申逆計之、假令有五歳男、自丙寅順計、當年庚午、爲行年、有七歳女、至申逆計、丙寅爲行年、依數之、衰日二類、生年衰日、行年衰日、今世不用生年衰日、

〔古今要覽稿時令占〕衰日、德日　生年衰日、行年衰日、

衰日は、もと五行家の說なり、皇朝にて用ひられし始、いまだ詳ならず、その衰日といふ義は、たとへば子年に生れし人ならば、子を得て王し、丑にいたりて衰ふ、故に丑を衰日とす、○中略されば今上天皇、文政九年寶算廿七におはします年は、辰戌を御德日とし、仙洞寶算五十六におはします年は、寅申を御德日とす、大宮御年四十八、女御御年十六、みな寅申を以て御德日とす、今上は寛政庚申に降誕まします、庚申は甲寅旬の內なれば、丙辰を以一とし、順に數へて、廿七を見れば、壬午にして、乾卦にあたる、乾卦は辰戌を以て衰ふ、故に辰戌を御德日とす、仙洞は明和八年辛卯に降誕ましく〳〵き、辛卯は甲申旬の內なり、卽丙戌より數へ、五十六は辛巳にして、離卦にあたらせ給ふ、大宮は、安永九年庚子なり、庚子は甲午旬の內なり、女は壬寅より數ふ、四十八は己丑にして、離卦なり、女御は文政八年乙酉なり、乙酉は甲申旬の內なり、女は壬辰より數ふ、十六は丁未にして離卦なり、卽ち仙洞、大宮、女御三所共に、離卦にあたらせ給ふが故に、寅申を以て德日となさせ給ふなり、その明年廿八にならせ給ふ年は、丑未を以て德日となさせ給ふなれば、行年衰日は、年々

にかはりて一定せず、生年衰日は一定して、その人生涯かはることなし、故に行年衰日の嚴なるに及ばざるを以て、遂にとゞめられしなるべし、是を德日と稱することゝ、またいつよりといふことを詳にせず、けだし凶事を吉事といひ、病痾を歡樂といへる例なるべし、

〔年中行事秘抄 正月〕廿五日　始外記政事

御齋會終日、外記令撰吉日、申殿下之後披露之、十六七日間歟、避御衰日幷執柄衰日歟、撿非違使廳政同日行之、

〔本朝世紀〕天慶二年十二月二十二日戊午、除目延引、太政大臣依聊所惱不被參入、立春之後、主上御衰日之故也、

〔小右記〕長和二年二月廿六日戊子、源中將朝臣雅通、使將監保信令申云、有無止之事、罷下於國、來月十餘日可上手結間、不可能會、可被仰他將等可著行之由、唯手結、來月三日被行宜歟者、答云、來月三日廢務日、可無便、十一日射禮、彼日以前、撰吉日可行也、引見曆、四日宜、而六日行眞手結、當衰日改月之後衰日、初給饗祿如何、五日凶會、六日衰日、七日坎日、八日宜、而重日、改月被行之、最初月重復日、可无便歟、九日吉日、彼日可宜歟、眞手結十日行之、有何事乎、雖連日、於無吉日可無傍難歟、至後年五日荒手結、七日眞手結行之可宜、但至日事、可問陰陽師之由且仰之、只大略所仰也、

〔左經記〕長元元年七月十一日甲辰、關白殿(〇藤原賴通)仰云、盆事、依天曆八年村上先帝令供給例可供也、但十四日衰日也、仍十五日可供也、仍十五日可供者、熟食可調備也、但不當御衰日、院宮所々者雖不熟食、唯任例十四日被送寺有何事乎、

〔續古事談 一王道后宮〕堀川院御時ノ逍遙ニ、序代カクベキ人ナカリケリ、大業藏人國賓無才ノ者ニテ人ユルサズ、五位藏人時範カキテケリ、其日、主上殿上ニテ、人々ニ連句イハセ給ケルニ、國賓ニ、末句イヘト被仰ケレバ、今日ワタクシノ衰日也、ハヾカリアリト申ケレバ、主上殿上ノ曆ヲ召テ

御覽ズルニ、巳日也、巳日衰日イマダナキ事也、君ヲアザムキ申、連句イハヌホドノモノ、イカデカ博士ニナルベキト被仰ケル、今モ昔モ無才ノ博士ハアルモノナリケリ、

〔中右記〕大治五年十二月廿四日、以頼弁被仰云、來廿六日初可渡御三條西御所也、而晦日節分御方違必可有也、其前初御幸日次不見如何、廿七日未日御衰日、廿八日申日、廿九日往亡、卅日沒日也、此等中可用何日哉可定申、人々多御衰日吉事例多、可被用廿七日也、予申云、往亡沒日ハ全不可候、衰日與申日之間、重被問陰陽師、隨申可有出御歟、藤大納言殿下被問、又以頼弁被仰云、廿七日御衰日、人々多申有先例之由、然者廿七日初御幸可有者、　廿七日乙未、今日院(鳥羽)女院並御衰日、依有僉議、初御幸東殿云々、

〔江談抄一〕八十島祭日可避主上御衰日事

又云、八十島祭者、多以酉日爲使立幷行祭日、若日次不宜之時雖不行之、使立幷行祭日之間一日用酉日、而延喜聖主十四歲之時、被立件使、酉日御衰日也、主上廿二歲、仍以酉日爲御衰日、依然又避之、同祭日、猶被避儲君御衰日例、

又曰延久之時、雖不當主上御衰日、以當儲君御衰日又避之、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿三年(安貞元年)四月廿二日庚午、武州(北條泰時)渡御大倉御堂、於此所召陰陽道之輩、被問新造堂供養之事、可爲六月十九日之旨、自京都雖擇申、其以前難終土木之功、七月十一日正日以前、日次可計申、五日壬午可爲何樣哉者、晴幸、文元申云、午日將軍御衰日也、尤可有憚云云、泰貞申云、將軍家御衰日、二位家第三年御佛事非可被憚歟、但十一日戊子無難日也、可被遂之歟云云、親職、宣賢申云、戊子不入吉之上、丈六供養無先規、五日宜云云、各申狀既不一揆之間、如駿河前司之衆被議云、將軍家御衰日、無可憚之儀、附三寶吉日可爲五日之由被定畢、淸和天皇御宇貞觀三年辛巳三月十四日戊子、東大寺供養也、

本命日

〔葉黄記〕寛元五年〇寶治元年正月五日己未、叙位儀、雖爲公家之御衰日、明日依爲申日滅日、今日被行之、殿下於里亭有申文内覽、勾勘參仕了、

〔滿濟准后日記〕永享二年八月七日、參自室町殿、以赤松上總介被仰樣、今夜以外御窮屈也、明日ハ例日、九日ハ御衰日候、來十日御連歌可在候、

〔康富記〕文安元年七月廿九日丙午、室町殿御衰日子午也、仍昨日大略近習方輩、八朔之御禮被進納云々、

〔拾芥記〕永正七年正月九日、室町殿毎度十日雖御參内、去年冬之負御手、御平愈以後、初御參之條、十日就禁裏御衰日、今日御參内也、

〔御湯殿の上の日記〕永祿五年四月十一日、わか君御たん正にて、ぶけへ御むま御たち、あすは御とく日とて、けふ、くわんじゆ寺一位をながはしへめしていださるゝ、

〔堯恕法親王記〕寛文七年七月七日、但十二日は主上御衰日可有遠慮事也、

〔和漢名數續編識時〕知生年本命之十幹圖訣　其年數滿十則除之、只用其奇而數之、二十歲、三十歲、至九十歲、百歲亦然、自當、〇圖略年之干、逆數而至其奇之盡處、爲生年之干、假如、今年丙歲十五歲人、先除其十、自丙逆數而至五、則知其生年是壬歲、如十歲或二十歲三十歲之類、無奇數者、認今年之次年、爲生年之干、假如、今年丙年三十歲之人、以翌年丁歲、爲生年之干、除倣之、是爲信廬說也

〔禁秘御抄中〕佛事次第〇中略御本命日、必可有御精進、他所善事等又同、不可有懈怠、

〔續日本後紀十三仁明〕承和十年七月辛丑、修嵯峨太上天皇周忌齋會、先是有司奏言、周忌齋日的在七月十五日壬寅、伏按朝章、至行凶事、三宮本命之日猶且忌避、而況重于太皇太后及聖上御本命乎、伏請

當會之期、却取十四日辛丑也、有司所奏、僉以爲宜、太皇太后亦許之、而中納言源朝臣信、參議源朝臣弘等執奏言、臣等奉遵顧命、期不違失、今如斯議、乖遺詔、何者遺詔曰、勿拘俗事、然則何須拘忌、又曰、送葬勿過三日、緩當彼時、三日之内有寅者避之耶、又後年周忌、或有寅日、亦猶避之耶、上因發熱、不能面議、勅令大納言藤原良房朝臣與諸公卿議定、奏曰、本命之日不擧凶事、曩古之蹤、非無所據、謹案遺詔、勿拘俗事、蓋謂喪由所忌碎事、非指朝家行來舊章、又當彼時、三日之内如有可避則避之、無疑失、周忌之會、臣子纔來、凡厥擧動、總是不群、是以忌之耳、後年闕忌、豈可與同乎、偏守一隅、不是通論、源朝臣等無復駁議、仍停壬寅、一取辛丑焉、

〔玉海〕治承二年十一月十日己巳、本命日、泰山府君祭、恒例事也、

建久二年十一月廿四日己巳、此日本命日、泰山府君祭也、

〇按ズルニ、此ニ據レバ藤原兼實ノ生年久安五年己巳ナリ、而シテ其薨去ハ承元元年ナレバ、年五十九ナルヲ、大日本史ニ六十歳ニ作ルハ誤ナリ、

〔玉海〕建久八年四月二日乙巳、今日巳時、有北斗本拜事、依宿曜師慶算申也、假令巳年生人、巳年巳月巳日巳時、向巳方拜本命星也、十三年一度廻遇云々、其儀、著衣冠、〈清淨新衣也、〉持念誦拜之間、敷淨薦、立白木臺、花瓶一口、〈盛時花、〉火盞一口、〈燈名油、〉小幣帛九本、〈七星外加二星計料、鎮御拜時如此云々、〉鳥羽南庭儲座、刻限降居其座、先拜本命星武曲星十二反、次更拜七星各一反、〈但武曲星如今一拜、爲輪星也、又七星外、羅計爲一反拜之、〉次歸昇、中宮巳御歳也、中將又同、仍各有此拜、今日先洗頭也、

〔後鳥羽院宸記〕建保二年四月六日庚子、未一點出馬場、如例、依爲本命日、令精進、

〇按ズルニ、後鳥羽天皇ハ、治承四年庚子ニ降誕アリ、

〔本命的殺精義〈上凡例〉〕一本命といふは、兩般也、所謂〈本命星、干支命、〉共に本命精神也、借此精神年月日時四課に旋る、此方を稽首し祭祀すれば幸福を發す、又これに反して、轉居修造動土伐木等にて破り犯

物忌

せば、精神敗壞す、玆におゐて、本命的殺といふべし、○中略

一當時行れる本命的殺は、誕生の年の干支の飛宮にして、干支の的殺、原本大明の郭氏元經に創て開く法なり、惜むべし、干支の旋りを誤たり、嗚呼哀哉、千慮の一失乎、

本邦此弊を承用して、爾來大に行れ、屢生命を害す、小子、一日粲然として、干支本命飛宮の正義を得たり、玆におゐて、三元三六一百八十人を一面の圖に擒する盤を布て、干支本命的殺の精義に備ふ、尤星の的殺とは異なり、必ず混ずることなかれ、蓋方位の撰擇、本命兩的殺を以て緊要とす、若し齟齬するときは、吉凶一も用に不足、殆ど杜撰の妄說なり、

〔日本後紀十二桓武〕延曆二十三年八月壬子、暴雨大風、中院西樓倒、打死牛、又墮壞神泉苑左右閣、京中廬舍、諸國多壞、其害、天皇、生年在丑、歎曰、朕不利歟、未幾不豫、遂棄天下、

○按ズルニ、桓武天皇ハ、天平九年丁丑ノ降誕ナリ、

〔叡岳要記上〕初度總持院供養○中略

桓武聖主廢長岡京、遷平安城之時、雲峯峙帝都之丑寅、嵐徑成鬼門之凶害、當于時、大師澄○最自開伽藍之基趾、聖主深恃叡山之護持、自爾以降、以當山、爲皇帝本命道場、

〔慈覺大師傳〕三年○嘉祥春三月、皇帝○仁明崩、太子○文德卽位、○中略奏曰、除災致福、熾盛光佛頂、是爲最勝、是故唐朝道場之中、恒修此法、鎭護國基、街西街東諸內供奉持念僧等、互相爲番、奉新寶祚、又街東靑龍寺裏、建立皇帝本命道場、勤修眞言秘法、今須建立持念道場護摩壇、奉爲陛下修此法、唯建立處、先師昔點定矣、書奏、降詔曰、朕特發心願、於彼峯建立總持院、興隆佛法、

〔貞丈雜記十六神佛〕一物忌と云事は、夢見惡きか、又は何ぞ怪き事有て、氣に懸る事有時、陰陽師に占はすれば、是は大事の事也、幾日が間つゝしみ給へといふ時、其日數、他所へもゆかず、家內に引こもり居て、人にも逢はず、謹みて居る也、其間は、柳の木を三分計りに削りて、物忌と書附て、糸を附て、

しのぶと云草のくきにゆひ附て、冠にもさし、簾にもさし置也、白き紙を小く裁て、物忌と書く事もあり、しのぶ草の一名を、ことなし草とも云故、用るなるべし、

〔拾芥抄上本物忌〕運既墨衛圖中有桃林、其下有一大鬼王、號物忌、其鬼王遮他鬼神不寄、爰大鬼神王誓願、利益六趣有情、實吾名覽者、若人宅物怪屢現、惡夢頻示、可憂諸凶害之時、臨其日書吾名立門、其故他鬼神不令來入、書吾名令持人、人如影可令守護、[illegible]

〔江次第抄一正月〕四方拜〇中略御物忌　物忌、鬼神王之名、依其人年有可愼之日、件日禁一家人之出入也、

〔江家次第三正月〕御齋會始　御物忌儀（紙東同記文、御屏風云々、先例不如、行成大納言說、唯屏風勘當云々、）

〔侍中群要九〕御物忌

（家）四衛府　御厨子所　上下御厩宿所　進物所　造酒內侍　藥殿　贄殿　內膳　日次所　主水內侍　內侍所　瀧口　殿上　女房

（家）御物忌、當御讀經時、御物忌者附母屋御簾、爲上廂也、（又或云獨廂云々、）東御障子以北不附、

（家）御物忌數多、抄出書二紙、明年節中侍御厨出來書、取其日間以讒書云々、外宿人及子時不昇殿、

（家）前日給之後不入、但以面對讒立之、

御物忌

（式）御物忌（御簾事、若其事、）

其月其日々々々令書出納押殿上北壁西第二、於階腦々々々々々々

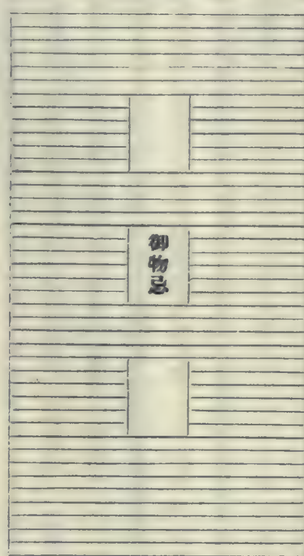
明年其月其日節、階腦番下、

每有恠事有仰召遣候處、陰陽師於所座令卜申吉凶之由、御奏其文、有仰下給御卜方文、給出納令書注所黏押也、

至于大事、只仰諸陣、所々可令重忌給、有仰外宿之人參之、

出納書御物忌給、所々御厨子所、諸陣等、御物忌之日、早旦出納若小舍人書之、小舍人持參御物忌差北壁、

附體



附御簾帽額際、

藏人取之附夾御簾、昆明池御障子南七箇間、朝餉三間、大盤所二間、幷鬼間上(太宮)御簾、(格子違下間ニハ不附)渡殿(成時、件西北御簾無之、)御裝物所等也、(附時、藏人以香爐身、)御物忌時、不取御座覆、上下小蔀、有説々、近代鎮上懸召奏文、書人先候年中行事御障子邊、入第一間御簾南方候石灰壇上、

御物忌出御南殿事

(家)侍臣雖參不昇殿上、若行幸之時、雖供奉御共不壇上云々、

御物忌召上卿事

(家)上卿於陣令候案内、隨召參上矣、若庭中役者奉仕、不昇殿上云々、(大納言雅信被候陣矣、左兵衛督濟時直以候此説兩端也、)

〔禁祕御抄下〕御物忌

御物忌之時、總不出御他殿舍中、諸事於簾中有之、或出御廣廂、不固之時例也、凡如四方拜者、雖御物忌或出御東庭、於小朝拜不出御、是匡房中依敬神明天道也、然者如御釼多出御廣廂也、同記、元三御物忌、如女官後取等參籠、他人外宿候殿上、不參御前也、寬治七年小朝拜、出御外宿人列立、節會無出御、不得心云々、同記、御物忌時、初參籠人、丑時可參之、或記曰、佛名之時、丑後公卿追參、加名謁、此儀同之、又不重被破常事也、御物忌數日相續不快例也、少々依輕可被破事也、八卦幷祿命等同、只時、但延久元年三月、八幡行幸還幸日、〈十六日〉當八卦幷祿命御物忌、如此例少々有之歟、同御物忌或不固也、見新撰陰陽書、京極關白〈師實〉曰、宇治殿〈賴通〉於祿命御物忌或固或不固、多有御行、只任意云々、依月建計之、或依節計之、兩說也、匡房記、師房不鎖門、宇治京極或鎖或不鎖、禁中御物忌時諸衞、近代公卿參籠極難叶、仍多不重破之、近代万事如此、物忌不加御字、以柳造簡、〈三分許〉指御冠纓上御、放本鳥時、附左御袖、〈書紙、白紙也〉丑杭以後參入人不候、以前可參歟、大內儀、諸司皆各別也、郭內猶不參、在清少納言記、職曹司候人不參內、里內之間、陣中家居人、准大內大垣內參、尤不知子細也、御物忌、諸陣立札、御殿之御簾毎間付物忌、〈書二紙屢紙〉外宿人不參御前、凡依物忌淺深、堅固時殊重也、主上努々不出御簾外、每日御拜時、不上御簾、二間仁王講僧、雖外宿或參上直參籠歟、二間不附物忌、切簾ニモ不附、人出入間不附也、外、供御不進之、但御持僧加持率或供之、可在時議、殿上大臣小大盤不立、大臣參籠不普通之故也、不撤倚子、櫃不上小蔀、裏返簡、御燈幷臨時祭等御拜如例、出御常事也、附御物忌也、又於簾中有之、或卷御簾一間、或不卷、先例不同、御拜伊勢幣多石灰壇也、其時御笏自鬼間供之、御燈ナンドハ於晝御座間有之、寬治四年三月御燈、當御物忌、皆撤晝御座、其間供御座、上廂御簾垂、母屋御簾附御物忌、宮主在東庭砌下、御簾卷不卷兩說也、官奏、御裝束、卷御座間庇御簾、〈不附物忌〉垂額間御簾、〈附物忌〉母屋御簾皆垂、附物忌、但額間廂リニハ不附物忌、〈依爲出入之間也〉不立母屋几帳、掌燈除當間供南北間、大臣進退有便之故也、是永久二、大治五、以延久之嘉例被定、匡房執申、可爲指南、諸儀皆大內別司各儀也、不引禁

中、禁中穢又不引諸司、有穢ニモ仰諸陣令立札、

〔世俗淺深秘抄上〕一物忌日神社ヘ不參、此事破物忌有行幸、幷私物詣等雖有其例、又行幸供奉人依物忌不參社頭例有之、於其理不分明、然而所見及註之、如知足院入道〇藤原忠實憚之歟、京極關白〇藤原師實不憚之也、猶憚條無其謂歟、

〔江談抄二雜事〕行成大納言、雖爲堅固物忌、依召參內事、

又云、行成大納言爲藏人頭之時、依堅固物忌籠居里亭之間、自禁中稱大切事有召、令參上時、於殿上俄心神失度、乍恐參清涼殿、主上先議其氣色、揚音タソアレハト被仰、卽應御音稱朝成、留御簾限、行成入御前免此難云々、是則行成祖父小一條大將濟時與朝成大納言依爲敵人欲陵云々、

〔枕草子七〕ゑんゆうゐんの御はての年、みな人、御服ぬぎなどして、あはれなる事を、おほやけよりはじめて、院の人も、花の衣になどいひけむ世の御事など思ひ出るに、雨いたうふる日、藤三位のつぼねに、みのむしのやうなるわらはの、おほきなる木のしろきに、たて文をつけて、これ奉らんといひければ、いづこよりぞ、けふあす御物いみなれば、御しとみもまいらぬぞとて、しもはたてたるしとみのかみよりとりいれて、さなんとはきかせたてまつらず、物いみなれば、え見ずとて、かみについさしてをきたるを、つとめて、手あらひて、其卷數とこひて、ふしおがみてあけたれば、くるみいろといふしきしのあつごえたるを、あやしと見てあけもてゆけば、老ほうしのいみじげなる手にて、

これをだにかたみとおもふに都には葉がへやしつるしゐしばの袖

とかきたり、

〔小右記〕寬仁三年六月七日壬辰、今明物忌、又今日厄日、修諷誦淸水寺、又令打金鼓、只閉西門、十二月三十日壬子、今明物忌、依歲暮日不能閉門、

〔左經記〕長元元年七月八日辛丑、有召參關白殿、〇藤原賴通依御物忌、於門外令申事由、仰云、炎旱日久、農民有愁之由云々、

〔今昔物語二十四〕以陰陽術殺人語第十八

今昔、主計頭ニテ小槻ノ糸平ト云者有ケリ、其子ニ算ノ先生ナル者有ケリ、名ヲバ茂助字〇茂助二字原缺、今據一本補、下同トナム云ケル、主計頭忠臣ガ父淡路守大夫ノ史奉親ガ祖父也、其茂助ガ未ダ若カリケル程ニ、身ノ才極テ賢クシテ、世ニ並无カリケレバ、命有ラバ、人ニ勝レテ、止事ナク成ヌベキ者也ケレバ、同ジ程ナル者共、何デ此无クテモ有レカシ、此レガ出立ナバ、主計主税ノ頭助ニモ大夫ノ史ニモ、異人ハ更ニ可競キ樣无ナメリ成リ、傳ヘ來ル孫ナルニ合セテ、此ク才賢タ心バヘ直シケレバ、只六位乍ラ世ニ聞エ有テ思エ高ク成リ持行ケバ、尤クテモ有カシト思フ人ニハ有ニヤ有ラム、而ル間、彼ノ茂助ガ家ニ怪ヲ爲シタリケレバ、其時ノ止事无キ陰陽師ニ物ヲ問ニ、極テ重ク可愼キ由ヲ占ヒタリ、其ノ可愼キ日共ヲ書出シテ取セタリケレバ、其ノ日ハ門ヲ強ク差シテ、物忌シテ居タリケルニ、彼ノ敵ニ思ヒケル者ハ、驗シ有ケル隱レ陰陽師ヲ吉ク語ヒテ、彼ガ必ズ可死キ態共ヲ爲サセケル、此事爲ル陰陽師ノ云ク、彼ノ人ノ物忌ヲシテ居タルハ、可愼キ日ニコソ有ナレ、然レバ其日詛ヒ合セバゾ驗ハ可有キ也、其レニ己レヲ具シテ其ノ家ニ御シテ呼ビ給ヘ、門ハ物忌ナレバヨモ不開、只音ヲダニ聞テバ必ズ詛フ驗ハ有ナムト、然レバ其人、其陰陽師ヲ具シテ、カレガ家ニ行テ門ヲ愕タヽシク叩ケレバ、下衆出來テ、誰ガ是ノ御門ヲバ叩ゾト問ヘバ、某ガ大切ニ可申キ事有テ參タル也、極ク固キ物忌也ト云フトモ、門ヲ細目ニ開テ入レ給ヘ、極タル大切也ト令云レバ、是ノ下衆返入テ此ナムト云ヘバ、糸破无キ事カナ、世ニ有ル人ノ身思ヌヤハ有ル、然レバ否開テ入レ不奉マジ、更ニ不用也、疾ク返リ給ヒネト令云タレバ、亦云ヒ令入ル樣、然ラバ門ヲバ不開給ハトモ、其遣戸ヨリ顏ヲ差出給ヘ、自ラ聞エント、其時ニ、天道ノ許シ有テ、可

死キ宿世ヤ有ケム、何事ゾト云テ、遣戸ヨリ顔ヲ差出タレバ、陰陽師、其音ヲ聞キ、顔ヲ見テ、可死態ヲ可爲キ限リ詛ヒツ、此具シテ會ハムト云フ人ハ、極キ大事云ハムト云ツレドモ、可云キ事モ不思エリケレバ、只今田舍ヘ態其由申サムト思テ申シツル也、然バ入給ヒネト云ケレバ、茂助大事ニモ非リケル事ニ依テ、物忌ニ此ク人ヲ呼ビ出テ、物モ不思エ主カナト云テ入ニケリ、其夜ヨリ頭痛ク成テ、煩ミテ三日ト云ニ死ニケリ、是ヲ思フニ、物忌ニハ音ヲ高クシテ、人ニ不可令聞カ、亦外ヨリ來ラム人ニハ、努々不可會、此ノ様ノ態爲ル人ノ爲ニハ、其ニ付テ詛フ事ナレバ、極テ怖キ也、宿報トハ云乍ラ、吉ク可愼シトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔爲房卿記〕應德二年十月十四日乙亥、祿命易筮之物忌、旁依相遇、今日閉蓬戸籠居、入夜參殿、依指召也、(有陪生事)

〔中右記〕永長二年(○承德元年)四月廿六日己酉、午時許參內、今日有行幸感神院、(○御物忌乙日也、但兼日有御卜、吉祥之由所卜申也)是前一條院春日行幸御物忌、近則去三月春日行幸還御八卦御物忌也、復推所告、依無事皆被遂也、

〔台記〕保延二年十月三十日甲子、今日又大殿(○藤原忠實)灸治也、予雖堅固物忌參也、大殿被仰曰、物忌條如何、予答曰、去二十八日、雖被催陣定、依御灸治不參、而今日私物忌日、不參御灸治ハ、輕公事重私事、尤有恐事也、雖物忌爲父破居家去忌ニハマサリナム、大殿被仰曰、此事有其理、雖然小强御灸治了、參宮、次退出、

〔宇治拾遺物語〕五 これもむかし、大膳亮大夫橘以長といふ藏人の五位ありけり、宇治左大臣殿(○藤原頼長)より召ありけるに、今明日は、かたき物忌をつかまつる事候と申たりければ、こはいかに世にあるもの、物忌といふことやはある、たしかにまいられよとめしきびしかりければ、恐ながらまいりにけり、さるほどに、十日ばかりありて、左大臣殿に、よにゐらぬかたき物忌いできにけり、御かどのはさまにかいたてなどして、仁王講おこなはるゝ、僧も、高陽院のかたの土戸より、章

子などもいれずして、僧ばかりぞまいりける、御物忌ありと、この以長聞て、いそぎまいりて、土戸よりまいらんとするに、舍人二人居て、ひとないれそと候とて、たちむかひたりければ、やうれ、おれらよ、めされてまいるぞといひければ、これらも、さすがに職事にてつねにみれば、力及ばでいれつ、まいりて藏人所に居て、なにとなく聲だかにものいひゐたりけるを、左府きかせ給ひて、このものいふはたれぞととはせ給ければ、盛兼申やう、以長に候と申ければ、いかにかばかりかたき物忌には、夜べよりまいりこもりたるかと、尋よと仰ければ、行ておはせの旨をいふに、藏人所は、御所よりちかゝりけるに、くは〳〵と大聲して、憚からず申やう、過候ぬる比、わたくしに物忌仕て候しに、めされ候き、物忌のよしを申候しを、物忌にいふ事やはある、たしかにまいるべきよし仰候しかば、まいり候にき、されば物忌といふ事は候はぬと、しりて候也と申ければ、きかせ給て、うちうなづきて、物もおほせられでやみにけりとぞ、

〔台記〕保延二年十月十日甲辰、今明予〈[illegible]〉重物忌、明日依著座、今日モ不立物忌簡、簾ニモ不著物忌〈[illegible]〉、不出行、

〔玉海〕治承五年五月十八日癸巳、權漏剋博士菅野季親、相具其子季長來所、召問五兆占事也、此日易物忌也、

〔吾妻鏡三十二〕嘉禎四年〈○暦仁元年〉正月廿日丁卯、御弓始也、今年依可爲御物忌、不可有此儀之由、窮冬議定、故被遂之、

〔今昔物語二十七〕播磨國鬼來人家被射語第廿三

今昔、播磨ノ國□ノ郡ニ住ケル人ノ死ニタリケルニ、其後ノ拈ナド爲サセムトテ、陰陽師ヲ呼寵タリケルニ、其ノ陰陽師ノ云ク、今某日、此ノ家ニ鬼來ラムトス、努々可愼給シト、家ノ者共此ノ事ヲ聞テ、極ク恐ヂ怖レテ、陰陽師ニ、其レヲバ何カヾ可爲ト云ヘバ、陰陽師、其ノ日物忌ヲ吉ク可

八卦忌

爲也ト云フニ、既ニ其日ニ成ヌレバ、極ク物忌ヲ固クシテ、其ノ鬼ハ、何ヨリ何ナル體ニテ可來ナリト、陰陽師ニ問ケレバ、陰陽師、門ヨリ人ノ體ニテ可來シ、然樣ノ鬼神ハ、横樣ノ非道ノ道ヲバ不行ヌ也、只直シキ道理ノ道ヲ行ク也ト云ヘバ、門ニ物忌ノ札ヲ立テ、桃ノ木ヲ切塞ギテ、口法ヲシタリ、而ル間、其ノ可來シト云フ時ヲ待テ、門ヲ強ク閉テ、物ノ迫ヨリ臨(ノゾケ)バ、藍摺ノ水干袴著タル男ノ、笠ヲ頸ニ懸タル、門ノ外ニ立テ臨ク、陰陽師有テ、彼ゾ鬼ト云ヘバ、家ノ内ノ者共、恐ヂ迷フ事无限シ、此ノ鬼ノ男、暫ク臨キ立テ、何ニシテ入ルトモ不見エテ入ヌ、然テ家ノ内ニ入來テ、竈戸ノ前ニ居タリ、更ニ見知タル者ニ非ズ、然レバ家ノ内ノ者共、今ハ此ニコソハ有ケレ、何樣ナル事カ有ラムト、スラムト、肝心モ失テ思ヒ合タル程ニ、其ノ家主ノ子ニ、若キ男ノ有ケルガ、思フ樣、今ハ何ニストモ、此ノ鬼ニ被噉ナムトス、同死ニテ後ニ、人モ聞ケカシ、此ノ鬼射ムト思テ、物ノ隱ヨリ、大ナル口鴈箭ヲ弓ニ番テ鬼ニ指宛テヽ、強ク引テ射タリケレバ、鬼ノ最中ニ當ニケリ、鬼ハ被射ケルマヽニ、立走テ出ヅト思フ程ニ、掻消ツ樣ニ失ニケリ、箭ハ不立ズシテ、踊返ニケリ、家ノ者皆此レヲ見テ、奇異キ態シツル主カナナド云ケレバ、男同ジ死ニテ後ニ、人ノ聞カム事モ有リト思テ、試ツル也ト云ケレバ、陰陽師モ、奇異ノ氣色シテナム有ケル、其ノ後其ノ家ニ、別ノ事无カリケリ、然レバ陰陽師ノ構タル事ニヤ有ラムト可思キニ、門ヨリ入ケム有樣ヨリ始メテ、箭ノ踊返テ不立ザリケム事ヲ思フニ、只物ニハ非ザリケリト思ユル也、鬼ノ現ハニ此ク人ト現ジテ見ユル事ハ、難有ク怖シキ事也カシトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔拾芥抄 下末 八卦〕八卦忌事

謂、遊年、禍害、絶命方等、件三方不可犯土造作云々、但強不可造作云々、又遊年未申之年、不可犯土造作、坤皆斷年也、例、圓融院御宇、永觀元年八月二十七日、內裏棟上、凡八卦之忌、自四十五日留置宿所可忌、不可謂自他領云々、公家、遊年、禍害、絶命、鬼吏等方、令忌避給、凡人遊年外不忌歟、

普通之習、從立春節居住所忌避也、一說云、今所渡住之全過四十五日之後、自件所可忌避、凡領地之內、雖當禁忌方、他人犯土造作不可忌避云々、雖郭邑之內不可忌、但可忌土氣法云々、是宗明朝臣之說也、假令大將軍王相在南方之時、不論遠近領地、可在南件地奴婢之類、可致犯土之時事也、近邊之時可忌土氣之法也、

〔五行大義五〕第二十三論諸人就此分爲二段、○中略第二者論人遊年年立、

遊年凡有三名、而爲二別、三名者、一遊年、二行年、三年立、遊年之名、皆以運動不住爲義、以其隨歲行遊不定一所也、年立即是行年、立者是住立爲義、以其今年立於此辰也、就人而論、常行不息、故謂曰行、就歲而論、今之一歲年住於此、故謂之立、二別者遊年從八卦而數、年立從六甲而行、六甲者、男從丙寅左行、女從壬申右轉、並至其年數而止、即是行年所至立於其處也、若欲算知之者、男以實年加二算而左數、女以實年加一算而右數、並從甲子句始盡其算、即是立處也、所以男從丙寅、數何者日生於寅、日爲陽精、男從陽、故取日丙爲大陽、故取丙以配寅、女從壬申數、何者月生於申、月爲陰精、女從陰、故取月壬爲大陰、故取壬以配申、陽故左行、陰故右轉、

〔二中歷五入〕傍通○中略

遊年	離	坤	兌	乾	坎	艮	震	巽
禍害	艮	震	坎	巽	兌	離	坤	乾
絕命	乾	坎	震	離	坤	巽	兌	艮
鬼吏	坎	震	離	巽	坤	離	乾	兌
生氣	震	艮	乾	兌	巽	坤	離	坎
養者	坤	離	艮	坎	乾	兌	坎	離
天醫	兌	巽	離	震	艮	坎	乾	坤

福德　巽　兌　坤　艮　震　乾　坎　離

衰日　寅申　卯酉　子午　辰戌　丑未　丑未　卯酉　辰戌

謂、遊年禍害絶命鬼吏所在、當避之、其王相時愼勿往、衣服石藥勿用其方色、一云、其郷隨其物類、去命三百歩內、雖身不往、害人作病、今案、動土造作遠行市買逃亡遷病嫁娶移徙等百事凶、其遊年下仕佛神大吉、生氣一云續命求利療病遷移皆百倍、又著其方衣、離朱、坤黃、兌白、乾紫、坎黑、艮紅、震靑、巽綠、養者福德宮百年吉慶天醫方避病迎師吉、衰日庶事忌之、但修善出行宜云々、

〔拾芥抄下末八卦〕遊年、離午禍害艮、丑寅絶命乾、戌亥鬼吏子、北坎生氣卯、東震養者坤、未申天醫酉兌、酉福德巽、辰巳衰日、申寅

小衰正五十二月、五十二日、二十八日、大厄十月、二日、九日、十七日、二十五日、不可北行、觀音經、○中略

遊年坤、未申禍害震、東卯絶命坎、北子鬼吏、東卯生氣艮、丑寅養者離、南午天醫巽、辰巳福德兌、西酉衰日、卯酉　小衰六十二月、十三日、二十九日、大厄二七月、三日、八日、十日、不可北行、仁王經、○中略

遊年兌、西酉禍害坎、北子絶命震、東卯鬼吏離、南午生氣乾、戌亥養者艮、丑寅天醫、南午福德坤、未申衰日、子午　小衰七月、十日、十四日、二十三日、大厄正五十一月、一日、五日、不可東行、金剛經、○中略

遊年乾、戌亥禍害巽、辰巳絶命離、南午鬼吏巽、辰巳生氣兌、西酉養者坎、北子天醫震、東卯福德艮、丑寅衰日、辰戌　小衰五月十五、二十三、大厄二三四九月、六日、十三日、十四、二十九日、不可南行、理趣經、○中略

遊年坎、北子禍害兌、西酉絶命坤、未申鬼吏坤、未申生氣巽、辰巳養者乾、戌亥天醫艮、丑寅福德震、東卯衰日、丑未　小衰正六七月、十六日二十日大厄三十十二月、七日、十日、二十日、不可西南行、金剛經、○中略

遊年艮、丑寅禍害離、南午絶命巽、辰巳鬼吏離、南午生氣坤、未申養者兌、西酉天醫坎、北子福德乾、戌亥衰日、丑未　小衰、三四九十月、二日、九日、二十五日、大厄、四五十一十二月、五日、十五日、二十五日、不可南行、佛名經、○中略

遊年震、東卯禍害坤、申未絶命兌、西酉鬼吏乾、戌亥生氣離、南午養者坎、北子天醫乾、戌亥福德坎、北子衰日、卯酉　小衰三十月、二日、十八日、二十六日、大厄二五八十一、八日、十六日、二十日、不可西南行、藥師經、○中略

遊年巽辰巳、禍害乾戌亥、絶命艮丑寅、鬼吏兌西酉、生氣坎北子、養者離南午、天醫坤未申、福德離南午、衰日辰戌、小衰四十一月、四日、十一日、十七日、大厄三六九月、十日、二十五日、不可東南行、法華經、

〔朝野群載 十五 陰陽道〕陰陽寮

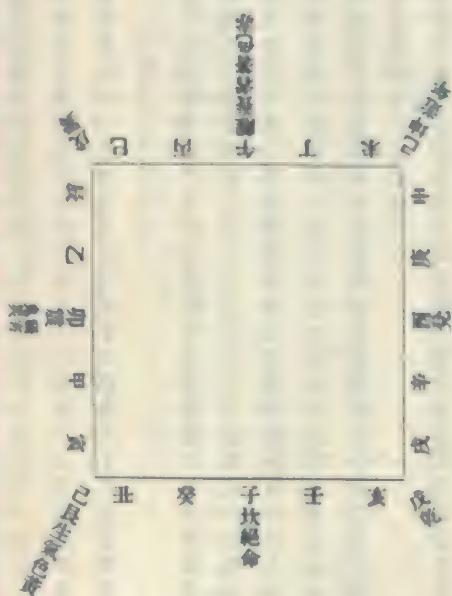
治暦二年歳次丙午 御忌

御年三十三

遊年在坤、禍害在震、絶命在坎、鬼吏在震、生氣在艮、色黄 養者在離、色赤 行年在戌

小衰、六月十九日、七月六日、十二月廿五日、次丁未年正月十二日 大厄、二月六日、十一月七日、十日十五日、十七日、不可北行、 衰日卯酉

衰時卯酉



右明年正月三日立春正月節、然則從彼日可用件御忌日、又小衰大厄月日數、隨節氣勘申如件、

治曆元年十二月十日　陰陽師安倍光基（○以下十四人姓名略）

〔小右記〕治安四年（○萬壽元年）正月廿五日甲寅、今日相當八卦、一說大厄日、仍不參除目、召大外記賴隆仰雜事、

〔中右記〕永長二年（○承德元年）四月廿六日己酉、午時許參內、今日有行幸咸神院、（御物忌乙日也、但兼日有御卜、吉祥之由所卜申也、）是前一條院春日行幸御物忌、近則去三月春日行幸、還御八卦御物忌也、復推所告、依無事、皆被遂也、

〔中右記〕嘉承二年十一月二十五日丙子、會昌門如形修理、凡今年大將軍方之上、又當八卦御忌方、仍八省不及犯土造作、只如形所々修理許也、至朱雀門者、御忌方之外也、被加修理也、

〔玉海〕文治四年三月二十八日甲子、此夜於普成佛院違遊年丑方、　六月三十日甲午、今夜於普成佛院邊、違遊年方（丑方也、四十五日）一度也、

〔台記〕久安三年正月二日丙寅、今日天子（○近衞）朝于法皇、（○鳥羽）午剋詣四條第、依患瘡不能供奉行幸、未剋乘輿至于西門、入御、及御拜等之儀如常、年來法皇出御于御坐之時、余執三衣筥、是故進簾外待召、無其召退歸、問其故於顯遠、（法皇近臣）對曰、昨日拜禮無威儀、亦不待侍臣立了拜、上有不說之容、若因之無召歟、不能候座歸宅、閉門畏王命、扶疾參入、以疾侵故既忘威儀、於法律何罪矣、然猶上心不說、寔以小人居大位之所致也、昨日誤向禍害方、見餅鏡、今有此事、俗忌必可違事歟、今日見孝經依吉日也、

〔運步色葉集〕（歸）福德方　☴（辰巳）　☱（西）　☷（未申）　☶（丑寅）　☳（東）　☰（戌亥）　☵（北）　☲（南）（其歲當此卦人如此）

〔拾芥抄〕（下末八卦）生氣　養者　福德、此方萬事皆吉、

〔西宮記〕（正月上）供御藥事（○中略）

主上起晝御座、入自夜御殿南戶、當東戶令立給、（從籠東方戶內也、但向御生氣方、）

〔江家次第〕（一正月）供御藥（○中略）

反支

御生氣御衣〈近例只御直衣一領也、只御引物、背ニ倒御直衣上給ニ〉
女房以下不必著淨衣〈也近〉陰陽女房必著之、舊例未節分之時、藥子衣用舊年御生氣方色、
二三日間節分時例
長久二年正月二日有節分、依陰陽寮勘文、藥子衣有二色、元日者用舊年御生氣方色、二日以後用今年方色、
長曆抄、二三日間雖有節分、猶引元日所用之舊年御生氣、更不可用新年御生氣云々、此事不可然、

〔江家次第二正月〕卯杖事〈中略〉
案二脚之上、置小盤、其上置州濱、其上作奇岩怪石嘉樹芳草白砂綠水、其中作御生氣方獸形、令含御杖、生氣在離作馬、生氣在坤作羊、不作猴、生氣在兌作鷄、生氣在乾作猪、不作犬、生氣在坎、不作鼠、尊養者方作馬、生氣在艮作牛、不作虎、生氣在震作兎、生氣在巽作龍、不作蛇、行事藏人以下舁之、自仙華門舁上、立晝御座廣庇、案等返給造物所、

〔台記〕仁平四年〈○久壽元年〉正月四日丁巳、今日余〈○藤原賴長〉奉吉方灯明、〈行顯奉之〉

〔拾芥抄下諸事吉凶日〕反支
年立子在申　七月忌　年立丑在酉　八月忌〈自餘可准知〉
反支〈今暦注之、數ニ午戌〉
子丑朔六日　寅卯朔五日　辰巳朔四日　午未朔三日　甲酉朔二日　戌亥朔一日

〔醫心方二十三〕產婦反支月忌法第二
產經云、反支者、周來害人名曰反支、若產乳婦人犯者十死、不可不愼、若產乳值反支月者、當在牛皮上、若灰上勿令汚水血惡物著地、著地則殺人、又浣濯皆以器盛之、過此忌月乃止、

〔婦人壽草中〕姙娠產圖并禁祝の說

反支月、陰陽家の說に、正七、二八、三九、四十、五十一、六十二、かくのごとく二ヶ月をひとつにして、十三歲を初として、四十九歲までをかぞへて、反支月をしる也、たとへば正七をはじめに立、また十三歲をはじめに立て數へ出す也、故に十三歲の姙婦は、正月七月を反支月としるべし、十四歲は二月八月に相當り、十五歲は三月九月に相當る也、かく十三歲をはじめとしてかぞへ至れば、十八歲にして六月十二月に當りて一周する也、又十九歲より正七に始り、廿四歲までにて一周する也、又廿五歲より正七に始り、三十歲迄にて一周する也、又三十一歲より正七に始り、三十六歲迄にて一周する也、又三十七歲より正七に始り、四十二歲迄にて一周する也、又四十三歲より正七に始り、四十八歲迄にて一周する也、又四十九歲より正七に始る也、婦人良法には、十三歲より四十九歲迄を委くもり附てしるしおく也、諸の醫書に、反支月を、死殺月、胎殺月とのせたり、陰陽家の說に、前子後母といふあり、反支月に相當る事とかく、二ヶ月なれば、正月を、害其子にありとしり、七月を、害其母にありとしるべしと云へり、

〔後漢書三十九王符傳〕王符、字節信、安定臨涇人也、〇中略志意蘊憤、乃隱居、著書三十餘篇、以譏當時失、〇中略足以觀見當時風政、著其五篇云爾、〇中略愛日篇曰、國之所以爲國者以有民也、〇中略聖人深知力者民之本、國之基也、故務省徭役、使之愛日、是以堯勅義和、欽若昊天、敬授民時、明帝時、公車以反支日不受章奏、凡反支日、用月朔爲正、戌亥朔一日反支、申酉朔二日反支、午未朔三日反支、辰巳朔四日反支、寅卯朔五日反支、子丑朔六日反支、見陰陽書也、帝聞怪曰、民廢農桑、遠來詣闕、而復拘以禁忌、豈爲政之意乎、於是遂蠲其制、

〔水鏡下桓武〕八月〇延暦四年にならの京へ行幸侍りき、こぞ、宮古ながをかにうつりにしかども、齋宮は猶ならにおはしましゝかば、伊勢へくだらせ給ふべき程ちかくなりて、行幸ありしなり、長岡の京には、中納言種繼留守にて候しを、みかどの御をとゝの早良の親王、東宮とておはせしが、人をつかはして、いころさしめ給ひてき、〇中略みかど、ならよりかへり給ひにき、丙戌日行幸はありて、

けふはみづのえたつの日なれば、七日といひしにかへり給へりとぞおぼえ侍る、此ごろはいむなど申とかや、

〔台記〕久安二年三月廿五日甲午、具今丸参近衞殿、依吉日也、入夜歸宅、今丸來此亭之後、當七日、有俗忌、但自他不可忌由尼御前御命、

〔台記別記〕仁平元年二月十六日丁巳、是日今麻呂加元服、(中略)曹司装束、廿二日撤之、大夫歸對東廂、元服之前在此廂、而元服後當七日、仍不渡本所寢他所、依避俗忌也、

〔平戸記〕仁治三年四月八日庚申、今夕可有還宮獻之由、有沙汰之處、猶以延引云々、明日相當七日之間、今夜之儀假出來也、一昨日有沙汰、殿下令問予、經七ヶ日還家公私忌之、世俗之法、古今之例也、可被憚之由申了、

〔塵添壒囊鈔〕東部王候ノ第宅ニテ辰祭トテ、正月初ノ辰ノ日辰ノ刻ニ、辰ノ年ノ人ヲシテ、晝室ノ屋根ニ水ヲ濃サレムレバ、失火ノ災ナキノ厭勝ナリトテ行フ、治它篇ニ、按ニ、天官暦ノ暦日ノ中ニ、治水辰、數乃自元日之後逢辰爲支節ト、此事ニ據ナルベシ、

〔梅園日記〕二移徙忌赤衣

今川大草紙云、移徙の時、祝言の初獻は、出仕の人々も、又役人以下も、赤き衣をきず、疊も白へり也、らつそく(蠟燭)盃等までも、白きを本とする也、宗五一冊云、わたましの時は、公私ともに、蠟燭は朱をかけず候、又衣裝も男女ともに白し、增鏡(老い波の巻)云、六條殿の長講堂も燒にしを作られて、其ころ御わたまし爲給ふ、卯月のはじめつかた也、院のうへひさしの御車にて、上達部殿上人御隨身、えもいはずきよら也、女院の御車に、姬宮もたてまつる、出車あまた、皆白きあはせの五ぎぬ、こき袴、同じひとへにて、三日過てぞ、色々の衣ども、藤つゝじなでしこなど、きかへられける、など見えたり、然るに世俗淺深秘抄云、移徙夜、女房用紅袴打衣等、不憚之、而中古以來憚之、知足院入道鳥羽院御

室御所御渡夜、調進御裝束幷女房裝束、皆不憚赤色、然而近代不用之、古今之作法異也、可依時儀事也とあれば、ふるくは忌ざりし也、されば落窪物語に、人のいとよき所えさせたるを、この十九日にわたらん、人々のさうぞくし給へ、こゝもすり(修理)せさせん、とくわたりなん、いそぎ給へとて、くれなゐのきぬ(絹)、あかね(茜)そめ(染)くさ(草)どもいだし給へれば云々、此物語つくりし頃も、家うつりに、いまだ赤色をいまざりしなり、

〔丙丁炯戒錄〕序我公〇水野忠邦佐大政之暇、常以觀書史為樂、頃讀宋柴望丙丁龜鑑、而有感焉、命臣世弘、倣其體、輯本朝事蹟、為一書以進、臣謹取舊史、斷自用明帝至後奈良帝、因事立論、一倣柴氏之書、以為此編、抑五行之說盛興于漢、迨宋儒排之、而其傳衰矣、丙丁之為厄、柴氏只謂自古而然、而不著其說、至元人續錄、敍載陰陽家之言云、丙丁屬火、遇午未而盛、故陽極必戰、亢而有悔也、則亦五行說之類耳、達者不必言也、顧龜鑑之所以作、意欲令世主鑑往跡而做今日、修人事以奉天意焉、而公之所取、蓋亦在于此也、臣才劣學薄、綴緝蕪陋、論斷失當、不能仰副盛意、然編中所載上下殆乎千年、有天變、有地妖、有人害、凡可備君相之畏戒者略具、讀者設身處地、省諸己推諸當世之務、則於新德修政之際、或庶幾乎有微益云、

歲次戊戌天保九年夏五月　臣鹽谷世弘謹書

古事類苑

方技部四

天文道 宿曜道附入

天文道ハ、天文氣色ヲ候ヒ、日月星辰ノ躔度ヲ測リ、變異ヲ察シ、氣節ヲ知ルノ術ニシテ、推古天皇ノ十年、百濟ノ僧觀勒ガ、暦本地理遁甲等ノ書ト共ニ、天文ノ書ヲ貢獻セシヲ以テ、傳來ノ初トス、大寶令ニハ陰陽寮ノ内ニ天文博士、天文生等ヲ置キテ之ヲ掌ラシム、而シテ、往時ニ在リテハ、特ニ天象ノ變ヲ察シ、吉凶ヲ判ズルヲ以テ重シト爲シタリ、故ニ天文密奏ノ事アリ、天文密奏トハ、天變アルトキ其由ヲ勘錄シ、之ヲ密封シテ奏聞スルヲ謂フ、

往時ノ天文學ハ、皆隋唐ノ古法ニ依リシモノニテ、久シク因襲シテ改メザリシニ由リ、德川氏ノ中世ニ及ビテ、日月ノ蝕モ推測ノ法ト違フ事多カリキ、是ニ於テ改暦ノ議大ニ起リ、遂ニ新學ノ進歩ヲ致セリ、當時、此學荒廢シ、天文臺ノ設モ之レ無キニ由リ、江戸大坂等ノ地ニ測量所ヲ設ケ、尋デ天明以降天文臺ヲ新設シ、西洋ノ法ヲ參取シテ觀測推歩ノ詳密ヲ極ムルニ至リ、古來ノ面目一新シテ、觀測器ノ如キモ、亦往々我邦ニテ發明セシモノアリ、尙ホ暦ニ關スル事ハ暦道篇ヲ、日蝕月蝕彗星等ノ事ハ天部日月星各篇ヲ參看スベシ、

宿曜道ハ僧侶ノ專ラ學ブ所ノ天文道ニシテ、中世甚ダ盛ニ行ハレタリ、然レドモ亦吉凶ヲ判ズルヲ以テ主トス、

名稱

〔伊呂波字類抄 天疊字〕天文

〔漢書天文二十六〕凡天文在圖籍昭昭可知者、經星常宿、中外官凡百一十八名、積數七百八十三星、皆有州國官宮物類之象、其伏見早晚、邪正存亡、虛實闊陿、（孟康曰、伏見早晚、謂五星也、日月五星下道爲邪、存謂列宿不斷也、亡謂恒星不見、虛實若天牢星、實則囚多、虛則開出之屬也、闊陿若三台星相去遠近也、）及五星所行合散犯守、陵歷鬭食、（孟康曰、合同舍也、散五星有變則其精散爲祆星也、犯七寸以內光芒相及也、陵相冒過也、食星月相陵不見者則所蝕也、韋昭曰、自下往觸之曰犯、居其宿曰守、經之爲歷、突掩爲陵、星相擊爲鬭也、）彗孛飛流、日月薄食、（孟康曰、彗所以除舊布新也、孛氣似彗、飛流謂飛星流星也、孟康曰、飛絕迹而去也、流光迹相連也、日月無光曰薄、京房易傳曰、日月赤黃爲薄、或曰、不交而食曰薄、韋昭曰、氣往迫之爲薄、虧毀曰食、）暈適背穴、抱珥蝱蜺、（孟康曰、皆日旁氣也、適日之將食先有黑之變也、背形如背字也、穴多作鐍、其形如玉鐍也、抱氣向日也、珥形點黑也、如淳曰、暈讀曰運、蝱或作虹、蜺讀曰齧、蝃蝀謂之蝱、表云、雄爲蝱、雌爲蜺、凡氣在日上爲冠、爲戴、在旁直對爲珥、在旁如半環向日爲抱、向外爲背、有氣刺日爲鐍、鐍抉傷也、）迅雷風祆、怪雲變氣、此皆陰陽之精、其本在地而上發于天者也、政失於此、則變見於彼、猶景之象形、鄉之應聲、（師古曰、鄉讀曰響、）是以明君覩之而寤、飭身正事、思其咎謝、則禍除而福至、自然之符也、

〔晉書天文十一〕天體　古言天者有三家、一曰蓋天、二曰宣夜、三曰渾天、漢靈帝時、蔡邕于朔方上書言、宣夜之學絕無師法、周髀術數具存、考驗天狀多所違失、惟渾天近得其情、今史官候臺所用銅儀、則其法也、立八尺員體、而具天地之形、以正黃道、占察發斂、以行日月、以步五緯、精微深妙、百代不易之道也、官有其器、而無本書、前志亦闕、蔡邕所謂周髀者、卽蓋天之說也、其本庖犧氏立周天歷度、其所傳則周公受於殷商、周人志之、故曰周髀、髀股也、股者表也、其言天似蓋笠、地法覆槃、天地各中高外下、北極之下爲天地之中、其地最高、而滂沲四隤、三光隱映、以爲晝夜、天中高於外衡、冬至日之所在六萬里、北極下地高於外衡下地亦六萬里、外衡高於北極下地二萬里、天地隆高相從、日去地恒八萬里、日麗天而平轉、分冬夏之間日前行道爲七衡六間、每衡周經里數、各依算術、用句股重差、推晷影極游、以爲遠近之數、皆得於表股者也、故曰周髀、又周髀家云、天員如張蓋、地方如棊局、天旁轉如推磨而左行、日月右行隨天左轉、故日月實東行而天牽之以西沒、譬之於蟻行磨石之上、磨左旋而蟻右去、磨疾而蟻遲、故不得不隨磨以左迴焉、天形南高而北下、日出高故見、日入下故不見、天之居如

倚蓋、故極在人北、是其證也、極在天之中、而今在人北、所以知天之形如倚蓋也、日朝出陽中、暮入陰中、陰氣暗冥、故沒不見也、夏時陽氣多陰氣少、陽氣光明與日同暉、故日出即見無蔽之者、故夏日長也、冬天陰氣多陽氣少、陰氣暗冥、掩日之光、雖出猶隱不見、故冬日短也、宣夜之書云、惟漢秘書郎郗萌記先師相傳云、天了無質、仰而瞻之、高遠無極、眼瞀精絕、故蒼々然也、譬之旁望遠道之黃山、而皆青、俯察千仞之深谷而窈黑、夫青非眞色、而黑非有體也、日月衆星自然浮生虛空之中、其行其止皆須氣焉、是以七曜或逝或住、或順或逆、伏見無常、進退不同、由乎無所根繫、故各異也、故辰極常居其所、而北斗不與衆星西沒也、攝提塡星皆東行、日行一度、月行十三度、遲疾任情、其無所繫著可知矣、若綴附天體不得爾也、成帝咸康中、會稽虞喜因宣夜之說、作安天論、以爲天高窮於無窮、地深測於不測、天確乎在上、有常安之形、地魄焉在下、有居靜之體、當相覆冒、方則俱方、員則俱員、無方員不同之義也、其光曜布列、各自運行、猶江海之有潮汐、萬品之有行藏也、葛洪聞而譏之曰、苟辰宿不麗於天、天爲無用、便可言無、何必復云有之而不動乎、由此而談、稚川可謂知言之選也、虞喜族祖河間相虞聳、又立穹天論云、天形穹隆如鷄子幕、其際周接四海之表、浮于元氣之上、譬如覆奩以抑水、而不沒者氣充其中故也、日繞辰極、沒西而還東、不出入地中、天之有極、猶蓋之有斗也、

〔三才圖會天文一〕總敍

古之言天者凡八家、一曰渾天、即今所載張衡靈憲經是也、二曰宣夜、絕無師學、三曰蓋天、周髀所載、四曰軒天、姚信所說、五曰穹天、虞聳所擬、六曰安天、虞喜所述、七曰方天、王充所論、八曰四天、祆胡寓言、獨渾天一家最爲近理、故李淳風獨取靈憲編敍之、

〔兩儀集說外記〕或問、天學ト云ハ何等ノ道理ヲ學ビ、如何ナル業ヲ務メ、何ノ用ト成ル事ゾヤ、答曰、天ト云ニ二義アリ、命理ノ天ト形氣ノ天ト也、命理ノ天ハ聲色ニ非ズ、近ク人身ニ在ト云トモ、是ヲ窮知コト難シトス、僅モ差フ時ハ邪路ニ入去ル、形氣ノ天ハ蒼々トシテ人ノ頭上ニ

職司

天文博士

在リ、仰デ七曜衆星ノ、易易運行スルヲ觀ル、是ヲ測リ是ヲ驗ムル時ハ、遠シト云ヘドモ近ク識安キ事アリ、夫此兩天ノ位ヲ論ズル時ハ、命理ハ上ニシテ形氣ハ下トス、然レドモ元相離ルヽ事ナク、先後高下無シ、須臾モ其形氣ヲ離ルヽトキハ、其命理モ亦掛搭スル所無シ、命理常住ナルガ故ニ、形氣モ亦常住也、此二ツノ天ヲ學ブハ、同ク是ヲ天學ト可レ言、人ハ天ノ靈也、其道ハ天ノ道也、其學天學ト不レ云事ヲ得ン乎、七曜衆星、高下左右、進退乾々トシテ止事ナキハ、是天ノ至道ナラン、伏義氏、仰テ形氣ノ天ヲ觀察シ玉ヒ、始テ卦ヲ畫シテ命理至妙之天ヲ示シ、人道ヲ立玉ヒ、黃帝顓項、天文ヲ明、始テ暦ヲ製シテ民用ヲ修メシメ玉ヒ、唐虞ノ始、昊天ニ順ヒ、暦象ヲ製シ、璿璣玉衡ヲ察カニシテ、七曜ノ運行ヲ測リ齊ヘ、氣節ヲ正シクシテ萬民ニ時ヲ授ケ玉ヘリ、是帝王ノ重事、治敎ノ始メ、人倫日用ノ要領、天學ノ原始ナリ、私ニ按ズルニ、天文ハ暦易ノ形體ニシテ、易ハ天文ノ理、暦ハ天文ノ用也、是則致知格物ノ主本、學者是ヲ忽ニスベケン哉、

〔令義解職一員〕陰陽寮

頭一人〈掌二天文、暦數、風雲氣色、謂、天文者、日月五星廿八宿也、(中略)氣色者、風雲之氣色也、言以二五雲之色一、視二其吉凶一、候二十二風氣一、知二其妖祥一、其天文博士職掌、唯言二氣色一、不レ言二風雲一者、擧二氣色一則有二風雲一可レ知也、有レ異密封奏聞事、〉

〔延喜式十六陰陽〕凡天文博士、常守觀候、毎レ有二變異一、日記進レ寮、寮頭即共勘知、密封奏聞、其日記者、加二署封一送二中務省一、令レ附二內記一、

〔三代實錄清和一〕天安二年八月廿九日丁巳、陰陽寮奏言、〈○中略〉凡天文風雲氣色有レ異、陰陽頭及天文博士密封奏聞、修國史局召二陰陽寮一索二其案文一、記二載史書一、他皆効レ此、

〔令義解職一員〕陰陽寮

天文博士一人〈掌下候二天文氣色一、有レ異密封、及敎中天文生等上、〉

〔職原抄上〕陰陽寮〈○中略〉

天文博士（唐名、司天臺博士、相當正七位下、）天文道任之、近代五位以上任之、

〔類聚三代格十五〕太政官符
應定博士職田事
合博士廿人、應給職田七十三町、（内五十二町、外廿一町、）（中略）
天文博士職田四町
攝津國一町（豐島郡）
山背國二町（綴喜郡）
近江國一町（野洲郡）
右令改置天文博士職田、（中略）
延曆十年二月十八日

〔令義解一職員〕陰陽寮
天文生十人（掌習候天文氣色）

〔令集解三職員〕朱云、習與候二事也、先云、一事、此生不得考也、凡令通例有師生者、不得考、只免徭役耳、
穴云、天文生得考否、

〔令義解十雜〕凡（中略）觀生不得讀占書、（謂、案職員令、有天文生、觀生、職掌各別、此令无觀生、而言觀生者、此天文生之別稱也、占書者、謂凡以天文占吉凶之書、凡觀生唯得仰觀天文、不得以圖書占其災祥也、）其仰觀所見不得漏泄、若有徵祥災異、（謂、吉氣為徵祥、凶氣為災異也、）陰陽寮奏、（謂、先經中務、後聚奏聞也、）訖者、季別封送中務省、入國史、（所送者、不得載占言、謂假如熒惑犯心、其占云々之類也、）

〔延喜式十六陰陽〕學生卅人（陰陽生十人、曆生十人、天文生十人、）其得業生、陰陽三人、曆二人、天文二人、並取生内人、
右得業生、選性識聰慧、令專精學、其名申官給衣食、成業年限依令、未成業者不得轉入他色、若未終業、其師遷外官者從之終業、

〔延喜式陰陽十六〕凡觀天文生一人不立年限、其衣服食米、准諸得業生給之、

〔唐六典祕書省十〕天文觀生五十人

隋氏置、掌晝夜在靈臺伺候天文氣色、皇朝所置、從天文生轉補八考入流也、〇中略

天文生六十人

隋氏置、皇朝因之、年深者轉補天文觀生、

〔唐律疏議名例三〕諸工樂雜戶、及太常音聲人、〇疏略犯流者、〇中略若習業已成、能專其事、及習天文、并給使散使、各加杖二百、

〔續日本紀淳仁二十一〕天平寶字二年八月庚子朔、其大學生〇中略天文生〇中略廿五已上授位一階、

〔朝野群載天文道十五〕從五位上行主計權助兼權天文博士安藝介安倍朝臣親宗誠惶誠恐謹言、

請殊蒙天恩因准先例以天文得業生正六位上惟宗朝臣忠盛拜任件博士闕狀

自得業生依擧狀被拜任博士例

惟宗是邦天延元年□月任　賀茂光國同二年六月任　安倍章親寬仁三年十月任　巨勢孝秀長久二年二月任　安倍奉親同八年十月任　安

倍親宗康平三年十月任　同國隨治曆元年十二月任

右親宗謹撿案內、天文博士有闕之時、得業生中、以堪其器之輩、被抽任者例也、爰件忠盛早補得業生、又學天文道、見其體、日之勤、尤足司天之奏、況乎忠盛執來之業已及三代、鑽仰之勤、偶過四旬、推薦之處、旁當其任、望請天恩因准先例、以件忠盛、被拜任博士闕、將俾竭奉公之節、親宗誠惶誠恐謹言、

嘉保二年正月廿二日　　從五位上――――

〔譚海十四〕江戶天文生は、京土御門殿に屬するなり、曆面は、關東にてとゝのへ、下段の文を土御門殿にて記さるゝなり、

〔明良帶錄世職〕天文方百俵五人扶持、測量御用相勤者へ七人扶持、其外五人扶持、地誌御用相勤者へ御金二十兩、若支

傳習名人

吉田、澁川等は、天學測量、分野宿星の順環、日月交會盈縮の事を、渾象玉機を以て是を測るを業とし、世々子孫に傳へて世職とす、今は天學暦作等も精微となり、天文屋敷にて出役も多く、其理を談す、蘭人の說等を以て、宿星の伏中を察し、清朝より渡る處の、暦象大成抔を以て、其理を說き、仰觀俯察して測量す、是を以て天學は彌備れり、當時は吹上御庭、中觀の御茶屋前に、新天文臺を御修營有りて、奥向の集掛りあり、東御輪見處御學文處出來たり、〇中略

天文方改方 御役料拾貳俵　同下役 御褒美銀五枚　同出役 三人扶持

何れも天文屋敷へ勤て、吉田澁川兩家の手附として、天文暦作の測量、分野を以て業とす、何れも在勤有之、

〔元治元年武鑑〕天文方 淺草鳥越へ 山路金之丞　天文臺はら 足立左内　九段坂上 澁川孫太郎　父金之丞見習 山路一郞

〔續留三十八〕中〇嘉永元年略 閏三月廿一日、紀伊守殿御渡、向方より寫差越、

町奉行江

覺

天文、暦算、世界繪圖等板行相願候者は、天文方之内江、草稿差出、蘭書飜譯、蘭方醫書等之儀は、天文方山路彌左衛門方江草稿差出、任差圖候樣、弘化二巳年相觸候處、蕃書調所御取立相成候付而は、向後天文暦算は是迄之通、天文方江草稿差出、世界繪圖、蘭書飜譯、蘭方醫書等は、蕃書調所江草稿差出、任差圖、彫刻出來之上、一部宛改受候所江相納候樣、向々江可被相觸候事、

閏三月

〔日本書紀二十二推古〕十年十月、百濟僧觀勒來之、仍貢暦本及天文地理書幷遁甲方術之書也、是時選書生三四人、以俾學習於觀勒矣、〇中略 大友村主高聰學天文遁甲、〇中略 皆學以成業、

〔日本書紀（天武二十八）〕天渟中（渟中、此云農難、）原瀛眞人天皇、天命開別天皇同母弟也、幼曰大海人皇子、生而有岐
嶷之姿、及壯雄拔神武、能天文遁甲、

〔類聚國史（七十七音樂）〕天長五年二月癸丑、從三位藤原朝臣繼彥薨云々、性聰敏、有識度、尤精星曆、

〔文德實錄（五）〕仁壽三年五月壬寅、是日並藤卒、並藤（○藤原朝臣）參議從三位刑部卿大宰員外帥勳四等濱
成之曾孫、中判事正六位上臣繼之孫、豐前介正六位上石雄之子也、並藤善陰陽推步之學、明曉天文
風星、（○中略）今日加正五位下、優其才學少倫年齒衰落也、時年六十二、

〔日本紀略（二朱雀）〕承平元年二月七日乙未、仰藤原時柄令學天文道、

〔本朝世紀〕天慶八年七月十九日癸丑、今日又可明經得業生十市部以忠、習天文宣旨、辨官奉之、是主
計頭兼助教左京權亮良佐宿禰息子也、良佐宿禰、依去延長八年七月十四日宣旨、進天文奏者也、仍
奉申文、薦擧以忠、今日大納言召大外記三統宿禰公忠問云、令習天文宣旨、外記奉敕、將辨官奉敕、公
忠宿禰申云、藤原三仁、同義柄、同時柄等、可習天文宣旨、辨官所承也云々、仍今日以件申文給辨官、書
下宣旨、此申文從殿上令藏人頭左近中將藤原師尹朝臣給大納言、其宣旨云、左大辨藤原朝臣在衡
傳宣、大納言藤原朝臣師輔宣、以明經得業生十市部以忠、宜令學天文道者、天慶八年七月十九日、大
史□□□□高奉、

〔類聚符宣抄（九）〕天文得業生事
太政官符（式部省外諸道得業生）
　應補天文得業生從八位上安倍朝臣吉昌事
　　書
　三家薄讚壹部　　晉書志壹卷　　觀星貳拾捌宿
右得中務省去八月十九日解偁、陰陽寮解偁、正五位下行主計頭兼天文博士加茂朝臣保憲牒狀偁、

件吉昌、情操聰敏、勤學匪懈、望請補得業生竹野親當滿九年替、令遂其業者、寮依解狀申送者、省依解狀申送如件者、從二位行大納言兼皇太子傅侍從源朝臣兼明宣、依請者、省宜承知依宣行之、符到奉行、

左中弁　　　　左小史

天祿元年十一月八日

〔江談抄 三雜事〕熒惑星妖備前守致忠事

被命(〇大江匡房)云、備後守致忠天曆御時爲藏人、召天文博士保憲、有召仰事、致忠爲御使往反之時、粗知天文事、後於關向人相陳天文之事、忽有射之者、矢中柱、致忠驚云、尤理也、於關談天文、故熒惑星妖吾也、今年有木星之助、故中柱云々、

〔帝王編年記 十七冷泉〕永延元年安倍晴明是時人也、掌天文曆數事、昔者一家兼兩道、而賀茂保憲以曆道傳其子光榮、以天文道傳弟子晴明、自此已後兩道相分、

〔官位訓 三〕天文曆道の事

天文曆道の事を不合の沙汰する人有、其はじめをしらずと見へたり、陰陽道昔は一家として兩道を兼たり、しかるに加茂保憲といふ名人、天文道を以て安倍晴明に授け、曆道を息子光榮に讓る、是より兩道にわかるゝなり、それ天文といふは、天地變災雲氣非常の怪みある時、其樣子を見て是は吉瑞、是は凶兆と明らむ役也、されば此見立は凡人の及ぶべきにあらず、又曆道は年々の曆を沙汰する、是は算數を以て致す所也、加茂保憲名譽の達人なれば、我子の光榮に天文をさづけたくは思ふらめど、器量及ばざるがゆへに、曆道ばかりをさづけ、弟子の晴明に大事の天文道をあたへられ侍るは、晴明が器量拔群すぐれたるがゆへなり、まことに保憲我子の愛にをはれて、天文を光榮に讓らば、天下國家の爲ならず、家の瑕といひ、誹りを後代に殘

すべきに、正道のはからい、後世に恥ずとかや、去程に晴明は古今無頭の神人にて、其子孫泰親などいふも希代の博士にてありし也、此泰親は加茂の社に詣てける折ふし、雷落かゝりたれども何の障りもなし、平家物がたりにもしるしたるごとく、奇妙を顯はしたり、其外人の見る諸書に書のせたれば、爰にのぶるに及ず、しかるに元祖保憲が眼力は明哲なるものなり、暦道は光榮のながれにて、今にあれどもさだかに人しらず、安倍の家筋をば土御門と號して、今に天文道を掌り給ひて、風雲氣色を奏聞あるとかや、晴明より十七代の後有脩卿より、土御門と申す稱號をこり、從三位に叙し、はじめて昇殿ありて、今泰連朝臣にいたつて七代なり、二位にも成給ふ御家とかや、

〔小右記〕寛仁三年六月四日己丑、午時月星共見、月在巳、星在月坤、相去七八尺所三光一時變異、希有惟也、若太白星歟、從源大納言四條大納言許有消息、源大納言乞送舊奏案、附使送、只今無上天文之人、博士吉昌卒、權博士久部住伊與國云々、公家無被咎、司天臺只有其號、有何益乎、當時無公事、嗟乎嗟乎、

〔宇槐記抄〕久安四年九月廿九日、信西語曰、法皇羽〇鳥能知天文、

〔平家物語三〕法印もんだうの事

同じき三〇治承年十一月七日の夜の戌のこくばかり、大地おびたゞしうういて、やゝ久し、をんやうの頭あべの泰親、いそぎだいりへはせ參り、今度のぢしん、せんもんのさす所、其つゝしみかろからず候、當道三經の中に、こんぎ經の説を見候に、年をえては年を出ず、日をえては日を出ず、もつての外に火急に候とて、涙をはら〳〵となかしければ、てんそうの人も色を失ひ、君もゑいりよをおどろかさせおはします、わかき公卿殿上人は、けしからぬやすちかゝ泣やうかな、只今何事の有べきかとて、一度にどつとぞわらひあはれける、され共、此やすちかは、晴明五代のびやう

ゑいをうけて、天文はえんげんをきはめ、ずいてうたな心をさすがごとし、一事もたがはざりければ、さすのみことぞ申ける、いかづちのおちかゝりたりしか共、雷火のために、かり衣の袖はやけながら、其身はつゝがもなかりけり、上代にも、まつ代にも、有がたかりしやすちか也、同じき十四日、入道相國〇平清盛いかゞは思ひなられたりけん、すせんきの軍兵をたな引て、都へかへり入給ふよし聞えしかば、京中何と聞わけたる事はなけれども、上下さわぎあへり、

〔明徳記 上〕抑十月〇明徳二年十五日午ノ刻ニ、大地振オビタヾシクシテ、路次往反ノ輩モ歩事ヲエズ、家内安堵ノ人々モ肝魂モ消計也、爰ニ陰陽頭土御門ノ三位有世、御所へ馳參テ申ケルコソ怖シケレ、今日ノ大地振ハ、金翅鳥動ニシテ、慎ミ以外也、天門道ノ登ヌ處ハ、世ニ逆臣出テ、國務ヲ望ニ依テ、七十五日ノ内ノ大兵亂タルベシ、但一日ノ内ノ慕居ナルベシ、一旦ハ御難儀有トモ、始終ハ御吉事トゾ勘へ申ケル、御所様ヲ始進セテ、諸大名近習ノ人々マデモ、何事ニテカ有ラムズラム、慕居ハ御吉事ナリトモ、難儀ノ合戰出來リナバ、誰身ノ大事ト成、何ナル不思儀カ有ランズラント、罪ヲ慎ミ、身ヲ細ク、怯ミ思ハヌ人ハナカリケリ、

〔先民傳 上〕小林義信、字謙貞、父久兵、信幼有穎質、喜讀書、久兵使學于鄉之林先生、呼吉左林精通天文地理星宿暦法之學、因係國禁無所容身、久兵恐禁之於家、以爲信師、日夜孜々問難決疑、以究其指、頃之禁解、先生講授于鄉、弟子稱多、寛永己卯、井上筑後守、監崎鞫天主教之徒、生名列黨籍、正保三年林生獄刑、官按黨籍、信名在第一、逮坐下獄、時年四十六、幸遇恩赦、〇中略天和三年癸亥冬、暦謬月食、是歳春、信與盧莊書曰、今茲十一月暦記月食、以予推之非也、既而十一月壬午無食、果如信言、其年十二月二十四日卒、〇中略

關莊三郎、從長老之遊阿媽港呂宋者、傳西善天文學、雖未嘗讀書、然於理無所不通、弟子相從肆業者、命之坐側使讀書、默而識之、讀未畢、直言其是非、卒未嘗輕授受、故游其門者僅二三人已、關既專精天

文、當斯時也、謙貞名顯於時、爾因執贄見之、始以爲謙貞不如己、初相見問窺星尺、謙貞曰、此須自用工夫、何問人爲、相語及圖輿、於是始知其學過己也、遂趨承請業、恨相從之晩、

〔天文瓊統　一〕古、地形方而未知圓、慶長年中、蠻人往來于茲以後、正知人在地表裏全體圓、始聞者皆驚矣、

〔蘭學事始　上〕一和蘭は、醫術並びに諸々の技藝にも精しき事と、世にも漸く知り、人氣何となく化せられ來れり、此頃よりも、專ら官醫の志ある方々は、年々對話といふ事を願て、彼客屋へゆき、療術方藥の事を問給ひ、又天文家の人も、同じく其家業の事を問ひ給へり、

〔春海先生實記〕先生、諱都翁、字春海、號土守靈社、小名六藏、假名助左衞門、姓源、稱澀川氏、其先九郎滿安、後賢滿貞、陸奧守義家十代之後胤也、　領河州澀川郡、因以爲氏、事將軍足利義滿、而爲執事、頗有恩寵、其孫隱岐守光重、領播州安井鄕、因又稱安井氏、其子重顯還舊領、又稱澀川氏、是以安井澀川兩氏爲家稱、自此子孫世住於河州、以澀川郡爲己有、重顯弟曰光永、光永五世之孫曰次吉、名算哲、稱安井氏、是先生之父也、〇中略　先生〇中略　天文曆術之學、欲愈極其微蘊、曾懷、我國中古此道廢、而無知者、雖偶有漢土所來之天文律曆書、亦覩而靡詳考察之、則以志所載星占等之斷卜、爲天文者家流之事、而學乃以爲足、然不驗于天、不察于理、立數設術而不知有天道不齊之運、隨歷年而不能無其差也、我國始用唐李淳風唐人所造之儀鳳曆、行七十二年、自持統帝六年壬辰、至天平寶字七年癸卯、自神武帝元年辛酉、至持統帝五年辛卯、凡一千三百五十一年、其間所行曆書不傳、而與天不合、故用唐僧一行所造之大衍曆、行九十八年、自天平寶字八年甲辰、至淸和帝貞觀三年辛巳、而亦漸差、於是頒行唐徐昂唐人所造之宣明曆、既及八百二十三年、自貞觀四年壬子、至靈元帝貞享元年甲子、行八百二十三年、今猶然、是亦豈無差耶、後年曆必有大餖歸于天焉、然作器制圖、日夜考驗天象、頻既推步之術、茲有岡野井玄貞者、素以醫業達台聽、又精天文曆術之學、我朝元亨以來、舊例云、正朔奏七曜御曆、中星曆者、八十二年一度造進、故迄後醍醐帝元亨年中、驗七政紀其躔度、而其術今亡矣、　曾莫考七政日月五星謂之七政、又謂七曜、四餘羅睺、計都、紫氣、月孛、謂之四餘、之人、寬永二十年癸未、將軍家綱公　朝鮮客螺山者來、玄貞相見討問七

故四餘(井七政四餘爲十一曜)之運行、而略得其秘奧、惟恨緣山在東武、纔一旬而歸國、依玄貞起志勵氣自勤學、是術有年、先生聞之、謁見請而爲師、隨而學之、又有松田順承者、以委天文聞于世、先生亦訪之、日々論辨、以得星學等之精理、其頃陰陽頭安倍泰福(土御門)亦達天文、先生往而講習、日就月將、深窮其秘說、(先生師事於泰福、篤信神學、泰福嘉其志、授於許、且贊歸於泰、乃皇家傳之秘訣悉授之。)此數員之達士、以先生之材器超人而不凡也、發微述蘊、相與強學、而爲先生各無不用其力矣、故天文學涉獵和漢之書史、而无不研究其深理、暦術學推算諸家之立法、而无不逐知其術理、殊至元郭守敬之授時暦法、則沈潜反復最深也、(中略)先生夙志既遂、功成而與亦可他國於斯、告暇赴於東武、(貞享元年十一月)二十八日登武城、獻所刊之新暦、上重感稱其功、多十二月朔壬辰、有台命、移其所、轉爲司天官、止舊祿、賜新祿百苞、於戲功勞顯然乎一時、而名光遍彌乎四海、天威誠喜可不若是、先生拜稽受其任、益不怠學業也、(中略)正德元年辛卯、先生年七十三、老懶而事不滿意、殊中風憚右方片身、言語亦不辨、依申事狀乞骸骨、使命(將軍家宣公)許之、

〔千年能松 二〕算知ガ子算哲義、家業ノ儀ハ隨分致候ヘドモ、少キ時ヨリ、天文暦術ニ志有之候ニ付、家業ヲ怠緒ニ致候トナ、算知苦勞仕候ロシ聞コシ召サレ、世上暦算ノ術疎ク、本朝久シク宣明暦御用ヒ候處、推歩ノ術オロソカナル事ニ候、幸ニ精ヲ入、稽古致サセ候ハヾ、世ノ爲ニモ可相成候、碁ノ上手ハ外ニモアルベク候間、其志ヲ折キ不申樣出精可爲致由、御意ナサレ候ニ付、算哲彌精ヲ出シ、其術ヲ研究シ、後ニハ稻葉美濃守殿ヘ、算哲事改暦吟味仰セ付ケラレ可然旨、御送言アリシトナリ、天和三年ノ暦ニ、霜月十六日、月蝕ノ由コレアルヲ、算哲蝕ナキ之由ヲ申候處、果シテ月蝕コレナク候、算哲義元郭守敬授時暦ニヨリテ、暦書ヲ作リ、公儀ヘ獻上仕、貞享改暦ノ一擧ニ相成候ハ、偏ニ中將樣(保科正之)御言葉カヽリ候故ニ有之、後ニ算哲天文方ニ仰セ付ケラル、今ノ澁川家ニ候、依テ算哲義見稱山ノ神庫ヘ、暦書ヲ奉納仕、今ニ有之候、

〔先哲叢談後編 三〕榊原篁洲(中略)

觀候

篁洲資性敏捷、博綜衆技、尤精天官家言、日月薄蝕、星辰躔度、推測無遺毫髮、澀河春海名都、字三哲、稱助左衛門、以星暦學聞、篁洲屢往來之、研尋疑義、反覆辨論、春海長於篁洲十七歲、常歎服其技、稱爲我邦未嘗有之人物焉、

〔續近世叢語七術解〕川谷貞六、一日仰見天象、俄會族人曰、後日曉自公召余問天學、事畢余出城、必死于某所矣、請各來待于此、乃命酒爲訣、至期天未明、侯召貞六、貞六卯牌入見、未牌半刻罷、乘轎出城可十町即死、皆如其言、川谷貞六、仕土佐侯、精研天文之學、旁攻我邦神道云、

〔文會雜記三下〕一戸部氏ノ門人細川半藏、名賴直、字方卿、號丘陵、戸部氏ト同行シテ予ガ弊舍ニ來ル、此人天學ニ精キ人ナリシカバ、天學ノ書ノ事ヲ筆談セシニ、西洋ノ暦數ハ、甚聖人ノ道ニ背キタル事也、併天經或問ノ附錄、天學名目抄等ニ記セシ如ク、紅毛ノ道ハ不可取、暦數ハ可取トアル如ク、西洋ニ及タル所、四十二國中ニナキ事也、依テ西洋流ヲ學デハ、全國ノ算數ハ取ニタラズ、天經或問ハ、スペナ天學ノ大理ヲ解キシ書也シカバ、暦術ノ詮議ハアラヌ也、

〔大史公律暦天官三書管窺序〕漢司馬遷修史、以律暦天官置八書之首、班固之志倣之、遂爲歷代史家之法、〇中略後世學者漸失古意、舍實趨虛、講經者略於三千三百、讀史者略於八書十志、〇中略獨我敬所豬飼先生名彥博〇中略不然、尤研覃禮樂制度、以至星暦之術、無所不通、嘗慨大史公律暦天官三書多闕誤、讀者不知是正、往々掩卷而過、使其說益不明、於是親執鉛槧校正之、附以其所見、章句粲然始可讀也、〇中略

弘化二年歲在乙巳五月望　　津藩督學齋藤正謙撰

〔令義解一職員〕陰陽寮〇中略

天文博士一人掌候天文氣色、有異密封、及敎天文生等、天文生十人掌習候天文氣色

〔怪異辨斷一凡例〕變異妖怪トモニ古來專ラ吉凶禍福ヲ占候ス、如此ノ變異ハ如此ノ吉如此ノ凶

ト、各合應ヲ決ス、自戰國之時、漢晉ノ世ニ至テ最モ甚シ、其書不可勝計、雖然後來ニ至テ其候驗無合應者多有之、故ニ宋朝ニ至テ歐陽脩唐書ヲ撰スルニ、其占候ノ事應ヲ削ツテ不記之、(中略)上古ノ史官災異ヲ記セシ者ハ、人君ノ德ヲ修メ國家ヲ愼シメントト也、然レドモ戰國以來陰陽家ノ等ラ數出テ、變異アル每ニ專ラ事應ヲ說テ、吉凶禍福ヲ定ル事甚多シ、是故ニ怪異一ビ現ズル時ハ、則人君害ニ德ヲ愼ミ給ヒテ、其怪平靜ナラント欲ストト云トモ、國人怪ミ惑ヒ、且懼レ騷ンデ、民心動亂スルトキハ、國土ノ神氣モ又動亂ス、是ヲ以天地ハ災禍ヲ與フルニ無心ト云トモ、人氣ノ倡フ處ニ從フテ、竟ニ災禍ト成事アリ、是皆強テ吉凶禍福ヲ定ルノ弊也、況ヤ日本ハ、君ハ神裔也、人ハ神民也、國家ノ吉凶專異國ノ法ニ據テ不可定之、愚蒙ヲ曉シ奕亂ノ心ヲ莫ラシムル事アラバ、神忠ノ一端ナランカ、

〔怪異辨斷 天一〕古今天異ト號スル者甚多シ、其中有禍有祥、蓋按ニ天氣人氣本二ニ非ズ、上下ニ貫通ス、故ニ正和ノ人氣上ニ發揚シテ、景星慶雲ヲ現シ、亂世暴邪ノ人氣上ニ發揚シテ、妖星凶氣ヲ現ズト云リ、然ドモ今世ニ至テハ、其中妖祥ト不爲類ノ者多シ、廣大遙遠ナル蒼天、一邦ノ私スベキニ非ズ、何ゾ萬國一同ニ見ル處ノ天異ヲ、一國ニ與リ取テ禍祥ヲ論ジ、吉凶ヲ可定ノ理アランヤ、但分野ノ說雖有之、今代ニ至テハ難用事ナリ、若其一國ニ而已出現シテ、他ノ國ヨリ見ル事無ノ天變ナラバ、其國ノ妖祥トシテ吉凶ヲ定メ、可愼事ハ、最モ其理有ン歟、

〔紫芝園漫筆 八〕元文丁巳(二年)正月初四日、大白貫月、初八日、畢大星亦貫月、是夕彗星見于西方、直長庚之下、連見二十餘日、都人爲之匈々、言天者却靜、余竊長大息、松崎子默曰、仲舒劉向大拘、余曰然、漢天子畏天、遭日食地震時有之事、莫不恐懼修省、況於希有之變乎、此猶有古之遺風也、仲舒劉向因唱洪範五行之說、必欲以人事徵災異、誠所謂牽強傅會可笑者也、近世言天者、皆理學之徒、唯推步是務、視天如死物、見變不以爲變、曾不知懼、愚謂此二者皆失之矣、

觀天變

〔大鏡一花山〕つぎのみかど花山院天皇と申き、○中略永觀二年甲申八月廿八日位につかせ給ふ、御歳十七、寬和二年丙戌六月廿三日の夜、あさましく候し事は、人にもしられさせ給はで、みそかに花山寺におはしまして、御出家入道せさせ給へりしとぞ、御とし十九、よをたもたせたまふ事二年、其後廿二年はおはしましき、あはれなる事はおりおはしましけるよは、ふぢつぼのうへの御つぼねの小どよりいでさせ給ひけるに、有明の月のいみじうあかゝりければ、見證にこそありけれ、如何あるべからんとおほせられけるを、さりとてとまらせ給ふべきやう侍らず、○中略さて、つちみかどよりひんがしさまにおはしますに、晴明がいへのまへをわたらせ給へば、みづからのこゑにて、手をおびたゞしくはた〳〵とうつなり、みかどおりさせ給ふと見ゆる天變ありつるが、すでになりにけりと見ゆるかな、まいりて奏せん、車にさうぞくとらせよといふこゑきかせ給ひけんは、さりともあはれにはおぼしめしけんかし、かつ〳〵しき神一人、だいりにまいれと申ければ、めにはみえぬものゝ、とをしあけていづ、御うしろをや見まいらせけん、たゞいまこれよりすぎさせおはしますといらへけりとかや、其家は、つちみかどまちぐちなれば、御みちなりけり、

〔日本新國史十二〕花山院御宇寬和元年乙酉八九月之間、辰星伏二客星之旁一、其客星之餘如二鬼火之移一、陰陽寮及神祇官等、以二所司一數度雖レ經二密奏一、敢無二勅謹之事一、同二年丙戌六月二十二日、天皇及二夜半一自二貞觀殿之掖門一密幸二於花山寺一、隨奉之臣唯藏人藤原通兼、法臣嚴久而已、帝壽纔十九歲、未曾有之御法樂也、其夜天文博士安倍晴明、同時雷不レ盡二其術一云々、

〔日本紀略十一一條〕寬弘三年五月十日辛亥、右少辨藤原廣業、於二內裏一、爲二藏人式部丞藤原定佐一打二損面一了、十一日壬子、近日天文道依二變異頻一、奏二近臣內亂之由一、蓋其徵歟、

〔小右記〕長和四年十二月八日甲申、資平從レ內示送云、有二御惱氣一、○中略申時、歲星經レ天、十日上二二ケ變異

賽云々、但歳星經天不聞之變云々天文云、宋書志云、晉安帝隆安元年六月歳星經天、占曰、國受殃、其月有兵爲亂、晉書志云、晉惠帝永寧元年正月、歳星經天、占曰、歳星晝見更王、其年更王、

(中右記)永久二年九月十七日、晩頭參一條殿、〇中略在一條殿之間、天文博士宗明密談云、去七月之比有天變、是天子自賊者、予問云、自賊何事哉、答曰、我君自行亂政、時變也者、此事莫言、近日禁中頗雲客近習之遊相亂云々、

(平治物語一)信西出家由來幷南都落事附最後事

信西、九日午剋ニ、白虹日ヲ貫クト云天變ヲ見テ、今夜御所ヘ夜討可入トハ知タリケルニヤ、此樣中入ントテ院御所ヘ參タレバ、折節御遊ニテ、子共皆御前ニ伺候シタリシカバ、其興ヲサマシ進ラセンモ無骨ナレバ、有女房ニ子細ヲ申置テ罷出ニケリ、宿所ニ歸リ、紀伊二位ニ懸ル事アリ、子共ニモシラセ給ヘ、信西ハ思旨有テ、奈良ノ方ヘ行也ト云ケレバ、尼公モ同道ニト歎カルレ共、ヤウヤウニコシラヘ留テ、侍四人相具シ、秘藏セラレタル月毛ノ馬ニ打乘テ、舍人成澤ヲ召具シ、南都ノ方ヘ被落ケルガ、宇治路ヘ懸リ、田原ガ奧大道寺ト云所領ニゾ行ニケル、石堂山ノ後、シガラキノ峯ヲ過、遙分入ニ又天變アリ、木星寄命宮ニアリ、太伯經奧ニ、侵時ハ志臣君ニ代率ルト云天變也、信西大ニ驚キ、本ヨリ天文淵源ヲ究タリケレバ、自是ヲ考ルニ、強者弱弱者強シト云文也、是君奢時ハ臣弱ク、臣奢時ハ君弱クナルト云ヘリ、今臣奢テ君弱クナラセ給フベシ、忠臣君ニ替ルト云ハ、恐ラクハ我ナルベシト思テ、明十日ノ朝、右衞門尉成景ト云侍ヲ召テ、都ノ方ニ何事カアル、見テ歸レトテ差使ス、成景馬ニ打乘テ、馳行程ニ小幡峠ニテ、入道ノ舍人武澤ト云者、御所ニ火懸テ後、衞門奈良ヘト聞シカバ、此事申サントテ走リケルニ行逢、然々ノ由ヲ語リ、姉小路ノ御宿所モ燒拂ハレ候ヌ、是ハ右衞門督殿、左馬頭殿ノカタラヒ、入道殿ノ御一門ヲ滅シ給ハントノ謀トコソ承候ヘ、

〔安倍泰親朝臣記〕同日己巳(○永萬二年四月二十六日)曉寅時、歲星、熒惑、鎭星、三星合在斗度、
謹撿天地瑞祥志云、三星合、是謂驚位絕行、宋天文志、有兵喪、故曰驚位、改立王、故曰絕行、天官書曰、三星合、其地國內外有兵與喪、改立公主、
帝王秘錄云、海中占曰、三星合、其國外內有兵喪、人民數起、改立侯王、漢書天文志云、孝成帝河平□□□月上旬、歲星、熒惑、鎭星合、占曰、三星若合、是謂驚位、是謂絕行、外內有兵與喪、改立王公、其十一月□□夜郎王歆大逆不道、牂柯大守立捕殺歆、(○中略)
以前變異勘錄如件、去月以來、變異荐呈、占文所指、咎徵非一、就中彗星者、希代之變也、不可不愼、重撿天文書云、彗星者、仍熒惑逆變也、不敎則下謀上、故脩經術、改惡爲善、則國安社稷寧矣、以之謂之、□□修德變凶爲吉歟、仍勘占文、謹以申聞、謹奏、

永萬二年四月十三日

從五位上行天文博士安倍朝臣業俊

從四位上行大舍人頭兼陰陽助安倍朝臣泰親

十三日丙戌、進此奏、先參殿下、(○藤原基實)獻之、次參院、(○今御所、下野御所)下野守藤原光能取進之、
今年七月廿六日辰時計、攝政殿(○藤原基實)薨給、(春秋二十四、癸亥御年、)自去十九日午時、令煩赤痢病御之上、御邪氣相加御云々、抑一昨日、自院遣驗者少將僧都房覺云々、而御物氣不渡、遂以□□仍房覺忽修行、
今日左大臣殿基房、令蒙內覽幷藤氏長者宣旨給、是三星合徵歟、

〔安倍泰親朝臣記〕可有火災變異等(○仁安元年歲次丙戌)
一十月廿二日壬辰昏戌時、歲星與鎭星相犯、　天文要錄云、宗廟燒亡、　又云、火災起、宮殿飛流、期一年、　又云、社稷危亡、期一年
一十一月十四日甲寅曉時、太白入氐中、　天文要錄云、后宮所燒亡、
一同月十八日戊午夜亥時、月掩食軒轅夫人星、　天文要錄云、火災起、

一同月廿七日丁卯、曉寅時、太○白○乘○犯房第一星、　天文要錄云、火災多、

一同月廿八日戊辰、曉寅時、月○掩○食天江第一星、　天文要錄云、宮中有火、

一同日同時、太○白○犯○鍵閉星、　天文要錄云、致○火災、

仁安元年十一月三十日、爲○傳○後鑒○注○進之、

一今就十二月朔日未時火起、自○北小路萬里小路、至○于出雲地大原辻川原、都十許町、片時爲○灰燼、其

中鴨權禰宜祐季、幷川合社禰宜長平、故權禰宜宅[illegible]中　出雲權守有保宅、美作阿闍梨行顯宅故左京

亮賀茂保家宅、幷堂燒亡了、　凡今日大小之舍宅千餘宇燒失云々、

一同月十日亥剋、勘解由小路以南、萬里小路以東角、織人勘解由次官藤原房宅、拂地燒亡、件宅、本是

平宰相實親卿之宅云々、但火不○延○蔓○滅了、

一同月廿二日午時、北小路以北町東燒亡、其中大外記中原師高宅幷堂塔燒失、傳聞、大炊寮御稻少

少燒餘云々、又右衞門大夫大江永重宅燒了、

一同日、天台有○火災○、堂五宇、房四宇燒亡云々、

五佛院　實相院　五大堂　丈六堂　定尋院

已上住古堂等云々

圓融房　極樂房　大養房　桂乘房　又金剛壽院大門燒亡云々

今年十月以後可○有○火災○之由、天變頻示、而或洛中、或城外、火災鬪起、堂塔舍宅、多以燒失了、天之譴

告答徵、必然者歟、宮中火災后宮燒亡之文、猶以有○恐哉、爲○後鑒○聊記之、

同月廿三日、川尻小都嶋在家多燒亡云々、

(百練抄八高倉)承安二年六月十六日、或記云、今日申剋、兩○日○出○現之由、有○閭巷說○、但司天之輩不○見之由

申之、

〔玉海〕承安三年十月十五日甲戌、時晴來、密々令見天文奏案、　一今月四日癸亥酉時、月犯建星、相去五寸所　天子大臣女主等愼、又大將愼、又可有大水、　一歲星順行、去月下旬入自太微右掖門、今月十一日庚午曉寅時犯右執法星、相去寸所　入兵革、大臣愼重、近期一年、中三年、遠五年、又人主御愼、

〔源平盛衰記〕入歲星出現事

同元年〇治承十二月二十四日、歲星東方ニ出テ、二十八日ニ光ヲ增、蚩尤旗トモ申、赤氣トモ云リ、何事ノ有ベキニカト、上下恐ヲナス、天文勸シテ申ク、五行ノ氣五星ト變ズル內ニ、歲星ハ是大亂大兵ノ瑞相也ト奏ス、何樣ニモオダシカルマジトゾ歎アヒケル、五行者、木火土金水、五星者、歲星、熒惑星、鎭星、太白星、辰星ナリ、

〔玉海〕治承二年十二月七日丙申、入夜主稅助時晴來、申天變之間事等、

一去十一月十三日壬申、昏戌時、月掩犯畢大星、賢臣死、女后執政、宮室有火、大將死、天下有變、令兵起、

一同十五日甲戌、昏戌時、月與鎭星同度、相去二尺七寸所　兵起、女主惡之、臣强君弱、天子惡之、天下有畏、

一同十六日乙亥、酉時太白犯哭星、相去七寸所　天子有哭泣事、恭帝元熙元年七月己卯、太白犯哭星、同二年七月、劉裕害宋王、是年六月、帝遜位於宋、

一同十八日丁丑、夜子時、月掩犯軒轅右氐角星、大臣貴女有憂、有逆臣、有火災、女主有憂、有亂臣、不出二年、

一同廿一日庚辰、曉寅時、月犯太微右執法星、相去七寸所　宮中亂、君政不行、大臣愼之、天下大亂、

一同廿九日戊子、曉寅時、熒惑入犯亢星、五穀以水傷敗、期九十日、天子有祠廟之事、亂臣在朝、忠臣不可以進、天下不平、多疾疫、

一從去閏六月上旬、塡星入東井中留守、去十一月中旬以後、逆行、今月三日壬辰昏戌時、犯卿伴星、相去一寸所　天子有喪、蠻夷來侵、天下大驚走、多有大喪、明年春有大切事、民多死、

四年十月廿日己亥、今日申剋、大藏大輔泰茂來、召前問天變及新都作事之間事、申云、此間天變少々所見也、就中去九日流星殊重云々、但不見給候、藤原之司天等所見也云々、　五年〈元年○養和〉三月七日癸未、參女院御方、早旦天文博士廣元來、火星留舍南斗及十餘日、大將軍愼也云々、又云、道之秘事、在太白經天、只以晝見事奏事不可然事也、不當午而當午、以之爲經、其有可得心之樣也、不知口傳之知奏觀、只以晝見稱之、尤詭之也云々、此外語道之秘事等、不遑具注、　八月十日甲寅、酉剋大膳權大夫泰親朝臣來、示天變事、其中、辰星與太白相犯、先太白犯辰星〈辰星者水星也〉、次辰星犯太白、此變希代也、占文可恐、我朝有もやしけん、近不覺悟云々、被見奏案之處、占文之體、凡可謂指掌、實嚴重不可說事也、仍爲後鑒注付之、

謹奏

今月三日丁未曉寅時、太白與辰星同度相犯、〈相去二尺所〉　同九日癸丑曉寅時、殊追犯、〈相去九寸所〉

謹檢天文要錄云、太白與辰星鬪、大臣爲變謀、天子、又曰、太白與辰星合、天下爲變謀、有外兵、內大亂、又曰、太白與辰星鬪、不出一年、其國將軍失地、天子失位、又曰、太白與辰星鬪、必有大戰、四夷勝、主人負、武官之將軍死、不出一年、一云、其國軍破將死、又云、辰星與太白相近、將軍大戰流血、又曰、辰星犯太白、急約戰、又曰、辰星與太白相鬪、其國大戰、客勝主人死、又曰、辰星守太白、其邦主人愼之、又曰、辰星與太白合、東方天兵大戰、天地瑞祥志曰、握鏡曰、太白與辰星俱出東、東方有兵、若欲戰、東方勝、西方敗、又曰、辰星守太白、將死、

右變異謹申聞謹奏

養和元年八月九日

從四位下行大舍人頭兼天文博士安部□□盛俊

從四位下行掃部頭兼陰陽博士安部朝臣季弘

從四位下行大膳大夫安部朝臣泰親

以異變之占文、見當時之天下、滅亡只在今兩三月之内歟、天猶不弃我朝、尤有憑、然而君臣皆不思社稷、然者何因披災難哉、悲哉、

元暦元年八月六日壬戌、泰茂來問天變事、法皇御愼殊重、所謂白衣會必可有□□、奎星與歳星相犯云々、又語占之間事、其才尤高可貴、

文治元年十月六日乙卯、早旦主税助安倍晴光參來申天變事、從去月二十三日癸卯、塡星守犯太微東番上相星、又從同二十八日戊申、歳星守犯同右執法星(相去各八寸所)、是大臣大將等愼也、就中塡星變大將愼尤重云々、　又文云、天下有悦喜、人主改政云々、　又云、有立王事云々、

〔愚管抄六〕この春(○元久三年)三星合とて、大事なる天變の有ける、司天の輩、大におぢ申けるに、その間、慈圓僧正、五辻と云て、しばしありける御所にて、取つくろひたる藥師の御修法をはじめられたりける修中に、この變は有けり、太白木星火星となり、西の方に、宵々にすでに犯分に、三合の寄あひたりけるに、雨ふりて消にけり、又晴てみえけるに、みえてはやがて雨ふりてきえ／＼、四五日してしばし晴ざりければ、めでたき事かなとて在ける程に、その雨はれて、なほ犯分のかぬ程にて、現じたりけるを、さて第二日に、又くもりて、朝より夜に入るまで、雨を惜みて有けり、いかばかり、僧正も祈念しけんに、夜に入て、雨しめ／＼とめでたく降て、つとめて消ゑ候ぬと奏してけり、さて其雨はれて後は、犯分とほくさりて、この大事變つひに消にけり、さてほどなく、この殿(○藤原良經)の頓死せられにけるをば、晴光と云天文博士は、一定この三星合は、君の御大事にて候つるが、つひにからかひて、消候にしが、殿下にとりかへまいらせられにけるにとこそ、たしかに申けれ、このをりふしにさし合せ、怨靈も力をえけんとおぼゆるになん、その御修法は、ことに叡感有て、勸賞などおこなはれにけり、

〔吾妻鏡十九〕承元五年(○建暦元年)十一月一日己酉、寅剋太白凌犯房上將星(相去六寸許)之由、司天等申之、

〔吾妻鏡二十二〕建保三年十二月十六日庚子、終日風烈、連々天變等事、司天捧勘文、將軍家殊可有御謹愼之變也云々、大夫屬入道善信執申之、相州〇北條義時大官令〇大江廣元藤民部大夫等被興善政、可被廻住運長久術之由申沙汰、

〔吾妻鏡脫漏〕元仁二年〇嘉祿元年三月廿四日乙酉、日來太白經天、爲變異之由、司天等依申之、今日被行御祈、民部大夫行盛爲奉行云云、

嘉祿二年正月廿五日辛巳、今曉歲星、鎮星、太白星犯舍云云、有御愼文之由、司天申之、及勘文云云、

〔吾妻鏡三十一〕嘉禎三年四月廿二日癸卯、天晴、申刻日色赤如蝕、　廿三日甲辰、今日自午刻二點至酉刻三點、如日色蝕、將軍家〇藤原賴經大被驚思食、召司天之輩、出御寢御所車御透直有御尋、泰貞、晴賢、廣資、晴貞、資俊等朝臣申云、雖非普通、雲霧引掩去時、傾西山日之色赤如此、強不可爲變異、但旱魃兆歟云云、宣賢申云、何年無春、何春無霞、若被映霞者年々可有此變歟、則建久被定薄蝕之間、被載仁王會呪願文云云、同夜丑刻月光黃色也云云、　廿四日乙巳、昨日日光事、親職朝臣、令奉薄蝕勘文、非天變之由申霍多之、　五月十九日己巳、定員自京都歸參、去月廿二三四日間、日色事、洛中怪之、　廿三日、日色赤、依有石清水行幸、無其沙汰、翌日天文道〇季尙、國文、業俊、天變之旨、令奏聞之由、於御前申、　廿九日己卯、去月廿三日、日月共赤黃事、陰陽頭惟範朝臣、薄蝕之由、自京都申之、宣賢申狀符合之、仍爲主計頭師員朝臣奉行、可勤仕日曜祭之由被仰、此外無御祈、將又季尙朝臣申云、被映霞日色赤黃定習也、且建久、貞元、晴光等雖申薄蝕之由、季弘朝臣、更非變之旨申之、

〔吾妻鏡三十二〕嘉禎四年〇曆仁元年五月五日己卯、戌刻太白犯軒轅大星、希代變異也、見于延喜天曆二代御記云云、

〔吾妻鏡三十三〕曆仁二年〇延應元年三月五日乙亥、京都去月十一日巳刻、有日暈變、密奏之輩申狀不同之間、兩度召勘文之上、菅大藏卿爲長、淸大外記賴尙等及勘狀、其狀等今日到來、於御前師員朝臣讀

申之、天文道忠尙、良元、季尙等朝臣申重暈之由、家氏申交暈之旨、晴継申白虹貫日之由云云、大藏卿引後漢書文、假郎顗之詞、暈卽虹也、大略白虹旨委細勘之、大外記者暈虹先例、本文勘進許也、　十五日乙酉、司天輩依召皆參、二月十一日天變事、被下京都勘文、各可申存知旨之由被仰出、維範、泰貞、晴賢等一同申重暈之由、師員朝臣申云、晴継朝臣勘文、載白虹之旨尤甘心、本文分明也云云、　十月廿日丙辰、午刻陰陽師廣經參御所、今日巳刻、日有兩珥之由申之、作進繪圖、兵庫頭爲申次持參御前云云、　廿一日丁巳、昨日廣經注進變異事、被問司天輩、維範朝臣申云、暈虹若日月蝕之時、於今出現者、以其次可勘申也、以珥斗及奏聞事、於京都未覺悟之云云、

〔吾妻鏡 四十二〕建長四年十二月十六日丙寅、辰刻日南北西有珥、六尺去之皆在西、色青赤白之由、司天等申之云云、

〔園太曆〕貞和五年閏六月五日、傳聞、此間有三星合云々、可尋、

天變密奏案文相尋、寮頭親宣朝臣續之、去六月廿六日丙戌曉寅時、太白歲星辰星三星相犯、（太白與歲星相距二尺四寸所、太白與辰星相去一尺五寸所、歲星與辰星相去二尺七寸所、）

二十八日、曉月、太白、歲星、辰星、四曜相合、在井度、

天文要錄云、歲星與太白合飢、爲疾內亂、又云、太白與歲星合于一舍、其國失地、又云、太白與歲星相犯、其國有兵、又云、太白犯歲星、天下盜賊多、又云、太白犯歲星、有女主病、又云、辰星與太白合、天下兵大戰、又云、辰星與太白相犯其國有擾、又云、太白與辰星合、其國將軍失地、其天下失位、又云、太白與辰星鬪必有大戰、又云、辰星守太白、其邦主人愼之、又云、歲星與辰星〇（此下恐有脫字）其國內亂、貴人死、又云、歲星犯辰星、其國君失位、又云、辰星與歲星合、逆臣不順誅逐、又云、辰星與歲星合、其國戰將軍愼、又云、太白與月相合宿、其國立太子、女主愼、又云太白犯月、天子有愼、又云、歲星與月同宿、其國君有愼、又云、月犯歲星、人民多死、王侯謀其君、又云、月犯辰星、其國有擾兵起、又云、月與辰星合、其國亡地、貴女死、又云、月犯

辰星、天下大戰、天地瑞祥志云、三星合、是謂驚位絶行、(宋均曰、有兵喪、故曰驚位、改立王、故曰絶行、) 乙巳占云、三星巳上聚合、皆爲改革政令、三星若合、是謂驚位改立侯王、帝王秘錄云、三星合、其國外內有兵喪、天官書云、三星合、其國內外有兵喪、喪改立公王、

貞和五年閏六月六日　權陰陽博士安倍家清

陰陽頭安倍朝臣親宣

〔太平記二十七〕天下妖怪事附淸水寺炎上事

同(○貞和五年)六月三日、八幡ノ御殿、辰刻ヨリ酉時マデ鳴動ス、神鏑聲ヲ添テ、王城ヲ差テ鳴テ行、又六月十日ヨリ、太白、辰星、歲星ノ三星合テ打續キシカバ、不經月日、大亂出來シテ、天子失位、大臣受兵、子殺父、臣殺君、飢饉疫癘兵革相續、餓莩滿巷ベシト、天文博士注進ス、又閏六月五日戌刻ニ、巽方ト乾方ヨリ電光輝キ出デ、兩方ノ光寄合テ、如戰シテ碎ケ散テハ寄合テ、風ノ猛火ヲ吹上ルガ如ク、餘光天地ニ滿テ光ル中ニ、異類異形ノ者見ヘテ、乾ノ光退キ行、巽ノ光進ミ行テ、互ノ光消失ス、此天怪、如何樣天下穩ナラジト申合ニケリ、

〔親長卿記〕文明五年五月十九日、今度變異占文、 今月二日戌時、太白犯輿鬼、(相去一寸所) 天文要錄云、太白犯輿鬼、大臣有病疾憂、 又云、太白犯鬼、萬姓勞、兵革大動、 又云、五星入鬼、天下有喪、 又云、五星入鬼、女主憂、

同十日戌時、歲星犯房鉤鈐星、(相去五寸所) 郗萌曰、木星去房四表五寸、留不行五十日、天子失勢、大臣內亂、逆臣見誅、期四十日、 韓楊曰、歲星居舍房、經七十日不動、傷寒熱病多、水旱卒死不出二年、 韓楊曰、五星犯房鉤鈐、王者有憂、后皇胎懷病期半同、

文明五年五月十一日　正三位賀茂朝臣在盛

〔親長卿記〕文明六年二月十一日晴、有變異、二星合云々、在盛卿注進之、今月八日戊時、熒惑犯輿鬼第二布帛星、相去六寸許、天文要錄云、熒惑守輿鬼、東北萬民多死、又云、守輿鬼、有兵水交、萬物五穀不登、大將軍愼、馬牛貴、其君有憂、期三年、又云、大臣不忠有兩心、又云、熒惑至輿鬼、三日、大人病、爲十日、諸國主爲病、乙巳占曰、火犯輿鬼、后失勢、執法誅、

文明六年二月十一日　正三位賀茂朝臣在盛

望氣

〔羅山文集六十二雜著〕望氣

夫望氣者、蓋保章氏之餘流歟、周禮春官保章氏、以星觀妖祥、以雲辯吉凶、以風命乖別、故星見大辰、則梓愼知宋之將火、歲紀玄枵、則裨竈知楚子之將死、梓愼望雲而知宋鄭之多喪、師曠歌風而知楚師之無功、且夫伯夙見楚氛甚惡、則楚人衷甲將襲晉、周太史聞雲如衆赤烏夾日以飛、則知其當楚王身、曹劌望氣之竭而敗齊軍、李陵見氣之衰而斬軍中之女、始皇厭東南天子氣、而不能禍沛公、蘇伯阿望見春陵而嗜佳氣之鬱葱、果光武出矣、此誡於軍旅之事、望氣亦不可廢也、及李唐袁天綱、李淳風、僧一行之輩、世不乏人矣、本朝之仲滿趣唐留學、改名朝衡、世所謂安倍仲麻呂是也、昌泰之際、三善淸行及子淨藏、精於天文術數諸道、仲滿之裔晴明、亦鳴于圓融華山之時、其後世道么麽、此道遂衰、豈不悼哉、

〔武備志一百六十一占〕占雲氣

茅子曰、周禮天官氏掌雲氣之占、秦漢間、望氣者之言益驗、故其說甚著、我參次其功于兵者、曰、氣之地、氣之候、氣之風雨、氣之災瑞、氣之天子、氣之猛將、氣之戰陣、氣之軍勝、氣之軍敗、氣之暴兵、氣之伏兵、氣之攻守、氣之陰謀、

〔天文義論下〕問、雲氣ノ變、種々有之、是ヲ望ミ見テ、其吉凶ヲ定ムル事アリ、是ヲ望氣ノ學ト云、是ヲ學ブ人多シ、上古ヨリノ事ニヤ、中華ノ學者是ヲ主トスル者多シ、最モ軍者專ラ是ヲ敬、是又天學家ニモ主ルベキ義歟、

曰、望氣ノ學ハ、陰陽家、兵家ノ所學ニシテ、天學ノ專務ニハ非ズ、素問ニ、五天ノ氣ヲ論ジ、周禮ニ十煇ノ說アリ、是望氣家ノ由緒ナラン、夫レ雲氣望氣ハ地ヨリ生ズル處ニシテ、甚卑キ者也、天上ニ現ズルニハ非ズ、然レ共地面以上皆是天也ト云ノ義ニ從テ、是ヲ天氣ト云ンモ亦可也、

〔怪異辨斷 天異二〕望氣ノ占候古書ニ出タル者、不可枚擧、皆吉凶瑞妖ノ差別有テ、取分兵家ニ專トスル處也、右ニ出ス處ノ周禮十煇ノ法ハ、雲氣ヲ窺ガヒ變態ヲ見テ、天氣ヲ占ヒ人事ヲ愼タルナラン、末代ノ望氣者ハ是ヲ本トシテ、種々ニ予細ヲ附會シタル也、變占吉凶ハ多ク言ハ數々中ルノ理也、凡占訣ノ法時ニ見聞スル物ヲ取テ、卦ヲ起シ吉凶ヲ定ム、是ヲ從應ノ占ト云テ、能中ル事アリ、假令バ一花一葉ノ開落ヲ見テモ、則取テ卦ヲ起シ吉凶ヲ辨ズ、是其人ノ爲ニ花葉ノ開落セシニハ非ズ、時ニ臨テ神機自然ニ發動スル處ノ物ヲ取テ占フ也、一家一人ノ占ニハ凡近ク少キナル物ヲ取テ占フ、國朝萬民、家ノ豐凶ヲ占ニハ、凡天變ノ大ナルヲ以テ可占ノ理也、況ヤ軍戰ハ國家ノ大事、萬民ノ存亡ナレバ、時雲天變ノ形狀ヲ採テ、吉凶ヲ占ハン事又不可疑、蓋按ニ雲氣ハ本地中温熱ノ氣、蒸升シテ中部ノ空際ニ至リ、變テ漫々トナリ、風氣ニ因テ或ハ散ジ、或ハ聚テ種々ノ形狀ヲナシ、日光ニ照サレテハ、映ジテ種々ノ色ヲ現ズ、大體雲氣觀ル處高遠ナルガ如シト云ドモ、地ヲ去事五十町ニ不可過、常ノ浮雲ハ又甚ダ近ク、一二町ヲ不過モノ多シ、霧霞ノ類モ皆地上温熱薰蒸ノ氣也、雲煙霧霞何レモ風氣ニ微動シ、或ハ散亂シ、或聚會スル時ハ、種々奇怪ノ形象ニ見ユル事多シ、一灶ノ香煙風絕テ無時ハ、其煙唯一直線ヲ繰出スガ如ク、微風ニ因テ動搖スル時ハ、會聚散消スルノ狀チ、或ハ如蛇如魚如浪如木枝、或ハ如葉如花如輪環如佛像ノ類ヒ、千變萬態終ニ不一、是何ノ吉凶ゾヤ、

〔諸道勘文 四十五〕彗星客氣論事〇天喜四年〇中略

勘申東方所見客氣非彗星事〇中略

乙巳占云、凡候雲氣之法、初出若雲非雲、若霧非霧、凡遊兵之氣无根本、或如疋布、或兩頭銳見云々、如此之類不可勝計、今件氣色白、合此等說、若可謂客氣歟、彗孛雲各以體異、何爲彗星哉、

右件客氣、始自去朔日庚戌曉所見也、仍勘古文奏聞先了、而師任朝臣申彗星天變、惟星雲相違、重可辨申者、謹以勘申如件、

天喜四年八月二十六日　陰陽頭安部朝臣章親

〔甲陽軍鑑二 品第八〕判兵庫星占之事附長坂長閑無面目仕合之事○中略

此兵庫を、毘沙門堂のくり迄召よせられ、武藤三河守、下曾禰兩人を問者にて、右の客星吉凶を、兵庫に占せて見給ふに、謹占則書以言上す、抑此星と申は、天下怪異の客星也、雖然今時に當て、何の大名に惡事の可有之あらず、末代にゐひて、吾朝の古高家次第にめつして、終に悉くなく成給ひ、武道國中の武家の作法を取失ひ、きのふ下人かと見れば、今日は主となり、女が男の出立を仕り、新家のだちて、たとへば舞樂に至る迄、異なることを不見知して、嘲成事を用る故、本侍迄一世の間に、二度三度づゝ作名字をなさるゝ世に成候べし、侍にかぎらず、佛法世法と有之時は、寺方も、久しき正法の宗旨は、次第に衰微して、新き宗旨などゝ云て繁昌すべし、百姓商人貧人迄も、如此と書て、右の武藤殿下曾禰殿へ渡之、然ば數ならぬ我等體も代々判を占來候へ共、此星の上は、判占も我等迄に仕り、子孫をばゑらうとにいたさん、され共嫡子は廿に餘候間、是は時々卜致す共、孫には全く占とめさせ候、幸某に、大僧正信玄公大慈大悲の御惠をもつて、信濃國にて所領下され、年來畜候物を讓跡をゑらうとに仕立、甲府にあり付申べく候、嫡子も孫にかゝり、是も甲府に罷有とて、柳小路に屋敷を申請、子と孫とをば商人に仕付、おのれは知行をさし上、近江國に罷歸、五年めに死去と也、

〔武將感狀記五〕一信玄氣ヲ見ルノ法ヲ學デコレニ通ズ、然レドモ書テコレニ拘攣シタマハズ、一

日、信濃ノ帥トタヽカフ時、惡氣アリ、信玄スコシモ憂ナク、備ヲ固シ、列ヲ整テコレヲ待、敵ノ虚ヲウカガヒ討テ、勝利ヲ得タリ、歸テ馬場美濃ヲ召テ、氣ヲ見ルノ法ハ信ズベカラズ、今日カクト語ラレケルニ、美濃、其惡氣ハ敵ノ爲カ、味方ノ爲カ、辨ガタカルベク候ト申ス、信玄、師傳ノ經ハ身方ノ爲ナリ、美濃、御方ノ爲ノ惡氣ト思召ニ由テ、合戰常ヨリモ戒愼ヲクワヘ玉フ、是ヲ以テ危カラズシテ全勝ヲ得ナセラレタルニ候、軍旅ハ唯シマリアルヲ第一トスト、感テ御意ナテレシハ、此ニテ候ゾト申ケル、信玄又信濃ニ發向ノ時、鳩一ツ庭前ノ樹上ニ來ル、衆見テ口々ニ私語テ喜ブ色アリ、信玄ソノコヘヲ聞レケレバ、鳩此樹上ニ來ルトキ、合戰大勝ニアラザル事ナシ、御吉例ニ候ト應フ、信玄、鐵炮ヲ以テ、忽其鳩ヲ打落レテ、衆ノ惑ヲ解タマフ、鳩モシ來ラザル時ハ、衆疑沮スル心アリテ、戰ヒ危カラン事ヲ慮リタマフナリ、

〔大友興廢記十四〕石宗討死之事

此石宗と聞へしは、軍配においては、諸家の傳を知て功者たる故に、去九月〇天正六年に、本卦當卦、其外のかんがへをもつて、當年日州の方へ大事を催さる、事不相應なるよし申上らるゝにも、宗麟公御同心なし、又當陣においても、掛引の利をいはるゝに、鎮周用ひられず、候是以て勝利なし、去程に、十一日の晩、味方の陣の東の手先より氣立て、敵城の内へなびき入、石宗、野心の氣とかんがへらるゝ、さてこそ其氣の下より筑後の星野讃岐を先として、二心出來たり、また十一日のあかつき卯の剋の終り辰の始、南に血河の氣と云雲氣立て、味方の上にたなびき來る、石宗見て、此氣味方にむかひきたるは、河にて亡べき雲氣とかんがへ、鎮周方へ、使者をもつて申さるゝは、昨日より、萬事の評定にこそ御同心なくとも、雲氣立申候、是はきらい所有儀にて候、せめて此氣の替り迄ひかへられ可然ぞんずる由申されければ、其返答に、此鎮周元來下男の生れにて候へば、雲の上の軍は仕まじく候、雲はともあれかくもあれとて、無思付返事なり、其外今度は、一ツとし

て吉事の相はなく、惡事の告のみ也、とかく天道より味方の利を罰し給ふと見へたり、かくのごとくたがひの運の勝劣果報のさかんなること、末ごの時節にやあらん、先陣一軍の大將鎭周、我差圖をそむき、軍法を破る事、是不忠のいたりなり、殊に大守の御差圖の御目利むなしくなる事、不忠の上の逆心なり、諸軍の心得も鎭周に同意や否、かく物の喰違ひする事、皆是天運也、此度の軍に利をうしなひなば、我ながらへて詮なき事と思ひ入、秘傳の數卷を燒捨、平人に成かわり、討死す、

〔武家砕玉話脫漏〕一源君〈○家康〉秀賴卿を、二條城にて發せらるべしと詢ありしに、母公淀殿危怖て、其時の軍配者白井龍伯は、占候に長じたる者ゆへ、龍伯吉凶を考しむ、龍伯七日潔齋して、香を燒て、其煙氣を見ること三度ながら大凶に當る、其趣を書て、片桐東市正に示す、市正、私宅に呼、故を問、龍伯、大凶なり、往ば必害にあはんと云、且元、煙氣は吾曾て知らざる所なり、然共秀賴往ずば兵起らん、往ば難なからじ、是を以見る時は、勘文を書かへて、吉也とせよといふ、龍伯きかず、去ゐて、其咎は吾あづからむといへば、止事を得ずして、吉也と書かへて、不慮あらばいかゞせんと憂るを、市正笑て、秀賴公害に逢はせ給はゞ、吾も共に死せん、誰あつて罪を刺せんやと云、市正、龍伯が勘文を奉りければ、淀殿大に喜んで、秀賴卿を二條に往しめらる、無事に歸城ありければ、淀殿龍伯を賞して、白銀百枚を給ふ、其外これかれより金銀多く贈り、龍伯、市正の宅に行、今鄙生金銀を得たるは、貴公の故なりとて拜謝す、夫より氣を見る術を止て閑居せり、或人云、軍者の諸家日取法繁も集て見るに、一月の中、其中の吉を取れば、悉く吉日と成、凶をとれば、悉く凶と成、依之元來吉凶なしといへば、物を破るの誤を生ず、又是吉凶有といへば、事に惑ふ患深し、故に見る者をして獨さとらしむ、

〔續近世叢語〈七術解〉〕小瀨甫菴、授易江都、會水道新成、水道者引玉川北行二里餘、東注伏渠、所在分之爲

井也、明暦三年正月朔、甫菴語、其友曰、歳氣有火災、起于西北、散于四方、含生之類殆無存者、夫天一生水、地六成之、地二生火、天七成之、蓋天生水以潤地、地生火以報天也、今地以人力通水、而増地之陰、天將假人力作火、而増天之陽、氣陰陽之紀乎、生成之理、其祥難成、不出于此月、事家歸鄕、未二旬、火果起、人馬死十餘萬、（小瀬甫菴、名道喜、上野人、初事堀尾氏于出雲、堀尾氏絶、去投松江藩、自號甫菴子、著信長記、太閤記、爲加賀侯儒士、）

〔諸道勘文　四十五〕坤中坤方長星事　○中略

乙巳占圖云、孛者彗之類、偏指曰彗、四指曰孛云々、

今按、孛彗之儀、其體相異歟、

天官書曰、孟康曰、五星之精散爲六十四、變記不盡、

天地瑞祥志云、晉志曰、彗星所謂掃星也、本類星、末類彗云々、小者數寸、長或竟天云々、彗體无光、傳日而爲光、故夕見則東指、晨見則西指、在南北、皆隨日光而指也、

蒋讚經云、荊州占云、彗星者所謂掃星也、五星逆錯變氣之所生也、若芒氣四出曰孛、皆本類星、末類彗也、

甘氏曰、遍出、彗本類、彗末類、彗云々、

今按、件星去四日昏見坤方、長十許丈、色白、其本有星、芒氣指東、又五星之中、辰星已伏、孛見之處、既叶本儀歟、愚意之所及、尤可謂彗星歟、

右彗星形象、大略勘申如件、

長治三年正月　日　　大外記中原○中略

彗星事（信俊長治三年）

彗星昏見事

一彗孛之體幷字意事

漢書志云、歲星贏而東南(孟康曰、五星東行、天西轉、歲星晨見東方、行疾則不見、不見則變爲祅、星石氏□□)、見彗星、甘氏曰、不出三月迺生彗、本類星、末類彗、又云、凡五星早出爲贏、贏爲客、晚出爲縮、縮爲主人、又云、超舍而前爲贏、退舍爲縮云云、又云、大白出晚爲彗星、將發于亡道之國、又云、辰星出晚爲彗星、天地瑞祥志云、彗星者天地之旗也、(守曰、五星精發爲妖星也、)晉書志、史臣案、彗體無光、傅日而爲光、故夕見則東指、晨見則西指、在日南北、皆隨日光而指、又曰、偏指曰彗、芒氣四出曰孛、孛者孛々然、非常惡氣之所生也、內不有大亂、則外有大兵、天下合謀、闇蔽不明、有所傷害、晏子曰、君若不正、孛星將出、彗星何懼、由是言之災甚於彗、公羊傳曰、孛者何、彗星也、何休云、狀如彗也、又云、彗者邪亂之氣、掃故置新之象也、又云、孛者邪亂之氣也、後漢書志云、孛星者、惡氣所生爲兵亂、其所以孛德、孛德者亂之象、不明之表、或謂之彗星、又云、韓楊占云、其象若彗竹彗樹木條、東宮切韻云、孛者、郭知玄云、祅星氣孛々然、麻果云、星文也、祝尙丘云、星佐氣飛似彗、穀梁傳、孛者弟也、劉非云、弟々氣起貌、漢書志又云、彗孛者陰陽之精、其本在於地、而上發於天者也、董仲舒以爲、孛者惡氣之所出也、謂之孛者、言其孛々有所妨蔽、闇亂不明之貌也、劉向以爲、君臣亂於朝、政令虧於外、則上濁三光之精、五星贏縮、變色逆行、甚則爲孛、

今按、彗星者五星之變、非常惡氣之所生也、抑彗孛者邪亂之氣、掃故置新之象、又隕錯失其次、又闇亂不明之貌也、

光芒長短見現日數

天地瑞祥志云、甘氏曰、彗短爲饑亂、長爲兵、見三日爲一旬、見一旬爲一歲、京房曰、彗長一丈爲十月、二丈爲二年、五丈爲五年也、漢書志云、其出久者爲其事大也、後漢書志劉昭注云、長短无常、其長大見久災深、短小見不久災狹、晉書志云、其芒或長或短、光芒所及則爲災、又云、孛彗所當之國是受其殃云々、

今按、隨光芒長短、依見現日數、定咎徵之輕重、指厄會之遠近歟、(中略)○

右管見依ㇾ厚、覆錄如ㇾ件、抑竊撿ㇾ傍例、延喜五年四月、彗星見ㇾ乾、光芒指ㇾ巽、長卅餘丈、見及二旬、然而彼時聖上運ㇾ文、群下樂ㇾ余、百姓悅ㇾ其惠、來世歌ㇾ其治、易占所ㇾ謂有道之君、雖ㇾ遇ㇾ變異、卽免ㇾ其災、得ㇾ乘ㇾ運數、是既叶ㇾ其識ㇾ者也、然則擬ㇾ彼延喜例ㇾ者、何謂ㇾ有ㇾ其憚ㇾ哉、仍勘申、

長治三年正月卅日

主稅助兼直講清原眞人信俊勘申

〔續泰平年表 十〕天保十四年二月四日五日頃より、申酉の方に白氣現ス事、同十八日勘文、白氣出現之事、當月上旬以來、昏白氣出[illegible]

候日蝕

家謂之彗星、或曰、彗星在日下、其光芒所射也、○前漢書天文志、蚩尤旗類彗星、而後曲象旗、長廣如一匹布著天、此星見則兵起、孟康曰、熒惑之精也、晉灼曰、呂氏春秋、其色黄上白下也、宋理宗景定元年、白氣亘天、如疋練、以上默菴記、

〔令義解儀制六〕凡太陽虧、有司預奏、謂太陽者日也、虧者謂蝕也、有司者陰陽寮也、皇帝不視事、百官各守本司、不理務、過時乃罷、謂不視事者、不聞政事、過時乃罷者、假令日蝕在申者、酉時得罷、是爲過時罷也、

〔令集解儀制二十八〕跡云、預奏、計日度數、預知可日蝕之日也、朱云、太陽虧、謂日蝕也、不云月虧也、有司預奏者、陰陽寮直奏也、不可經中務及太政官者何、穴云、有司預奏、官亦預須告諸司、或云、師云、不申中務太政官、而經寮奏耳、穴在

〔怪異辨斷天異一〕日食ハ、日輪上ニ有テ、下月ノ爲ニ遮ラレテ光映ヲ失フ者也、歴代古今ノ日食不可枚擧、○中略今代ハ和漢トモニ食算大成ス、其暦梓ニ鋟メテ遍ク萬民ニ施セリ、此故ニ童蒙女子ト云トモ、毎年日月ノ食アル故ニ、常トシテ災異トセズ、○中略左傳昭公二十一年秋七月、日食ニ言ル、冬至夏至春分秋分ニ日食アリト云トモ、災トセザルヨシ見ヘタリ、然レドモ其道理心得ガタシ、道理ヲ以テ云パ、二至ハ日輪南北ノ極道、陽氣進退ノ始ナリ、二分ハ日輪天ノ中道ヲ行ノ時ニテ、日夜等分、陰陽温和ノ節ナリ、如此ノ時ニ當テ、日輪蔽蝕スル事アラバ、他月ノ蝕ヨリハ猶災禍トスベキ理ナルニ、二至二分ノ時ニハ却テ災トセザルノ義、其理不審ナリ、往古日蝕寡シト云モノハ、算法未ダ不委シテ、動スレバ定朔ノ算數ヲ錯リシ故ナリ、

〔新考日食三法一〕日食三法附言　日食法、支那ニ正法ナシ、其コレアルハ歐羅巴ノ暦入テヨリシテ始ル、而シテ歐羅巴之法、亦古粗今密ニシテ、漸ヲ以テ精ヲ盡シ、暦象考成後編ニ至テ精巧極ル、其法、條理貫通シテ論ズベキモノナシ、然ドモ人其布算ノ繁難ニ苦シム、是ニ於テ予○高橋至時考索シテ、日食法數條ヲ設ケ得タリ、今其稿ヲ脱スルモノ白道新法、及ビ赤道法ノ二條ヲ繕寫シテ、予

ニ求ムル二三子ニ授ク、二法ノ趣キ異ナリト雖モ、理ハ一ナリ、其東西南北ノ二視差ヲ求ムルニ、舊法ハ、黃道高弧交角、及白道高弧交角太陰高弧ヲ求メ、(是曆象考成上下編之法)或ハ赤經高弧交角、及白經高弧交角太陽距天頂ヲ求メテ(是曆象考成後編之法)以テ二視差ニ求メ至ル、今一切ニ削リ去テ、東西南北ノ原數法數ニ立テ、以テ遂チニ二視差ヲ得ル、舊法ニ比スルニ、工力ヲ省クコト數倍ナリ、簡捷トス、○中略

支那往古ノ日月食ヲ推スガ爲ニ、消長法ト俱ニ簡法ヲ設ク、前二法ヲ併セテ三法トス、歷史載ル所、多ク食甚ノ分、及時刻而已、且ツ其數亦未ダ必密ナラジ、故ニ易簡ヲ要シテ、初復ノ法ヲ略ス、二視差ヲ求ル法、又舊法ヲ取ル、コレ食甚一條ヲ求ムルニ至テハ、前ノ二法ヲ用ルモ、簡迂甚異ナラザルニヨル、但赤經高弧交角ヲ求ル別法ヲ設テ之ヲ記ス、若夫レ曆史中初復ノ測數備ハルモノハ、宜シク前法ヲ撰ミ用ユベシ、

○按ズルニ、日食ヲ候スル事ハ、天部日蝕日蝕條ニ詳ナリ、宜シク參看スベシ、

〔怪異辨斷一天一〕月食ハ、月光地影ニ遮ラレテ失ス其明ヲ者也、○中略蓋按ニ、月體ハ本無シ光、日ノ光ヲ受テ光映ヲナセリ、望ニハ日月正對シ、日光ヲ月體ニ全ク裏ク、故ニ圓光也、朔ニハ太陽ノ氣盛ニ、望ニハ太陰ノ氣盛也、故ニ朔望ニハ萬物ノ氣盛實ニシテ、潮汐ノ往來モ甚大也、然ルニ月食ハ日月黃道ノ一線ニ在テ正對スル時、中間ノ地ノ蔭月體ヲ射テ月光ヲ隱蔽ス、此時ヲ月食トス、每望ニ日月正對スト云トモ、黃道ノ正線ニ在テ不正對トキハ、望ト云トモ無シ月食者也、是其大概也、月食ノ時刻ハ、太陰ノ本體晴晦セル時ナレバ、萬物ノ氣モ昏晦ノ時也、常數有ト云トモ、是ヲ不祥ノ時トシテ人事ヲ愼ムモ亦可ナラン歟、○中略

往古日食ハ變災トシテ、月食ヲバ變ト爲ザル事ハ、日食ノ算法ハ、近代ノ曆算ノ如クニ細密ニ委シカラザレバ、能合ガタシ、ソレナヘ歲差等ノ子細有ニ依テ、數年ヲ經ル時ハ差フ事アリ、古ノ算

測定暦度

法ハ甚粗カリシ故ニ、日食勵スレバ差テ、日食ノ分量有無不定シテ知ガタシ、此故ニ變異ト思ヒタリ、月食ノ算法ハ、日食ノ算ヨリハ易クシテ、差ヒ有事稀也、上古ノ粗キ算法ニテモ、大分ノ差ヒハ無リシモノナレバ、月食ハ定リタル事ニテ變災ニテハナシト思ヘル者ナリ、畢竟算術ノ未ダ委シカラザル故ナリト可知、

〔本朝世紀〕天慶元年十二月十五日戊子、今夜亥刻月蝕也、先是權暦博士外從五位下葛城宿禰茂經、進勘文云、今年十二月十五日戊子夜、月可蝕五分之四強半、虧初亥一分、蝕甚亥一刻三分、復本亥二刻四分、蝕所起月在陽暦、初起東北、甚於正北、復於西北、但十五分之四者、僅及三分之一、其蝕甚少、所謂天道雖玄遠、而經術之妙、不差毫釐者也云々、爰時之好事者、依件勘文、通夜効驗之、毫釐無差、悉叶勘文、當時以件茂經宿禰、爲賢有識之者、

○按ズルニ、月蝕ヲ候スル事ハ、天部月篇月蝕條ニ詳ナリ、參看スベシ、

〔江府日景〕享保十七壬子正月十六日ヨリ每日表影記

於高輪谷山御下屋敷御路地、伺日之出入、測北極之所定南北、而造高四尺之表、添以八寸之小表及イスタラヒヤヲ、記日日午中之尺寸如左、下段者貞享暦書所測也、

有徳院大君御測驗

享保十七壬子年 正月			日體等ト日出違候ヘバ午中晷六分半ノ差アル也 貞享二年
十六日	四尺七寸三分		正月元日立春
十七日	四尺六寸六分半	小表 九寸三分九リン	元年 十二月十六日 五尺六寸七五
十八日	四尺六寸一分半	九寸二分九リン	二年 正月九日 四尺四寸九五 節ヨリ九日後
十九日	四尺五寸六分二リン	九寸一分八リン	同三年

二十日	四尺五寸二分		九寸九リン	正月十二日立春
廿一日	雨			同十三日　四尺八寸九分○下略

〔仙臺實測志下〕右仙臺二十四氣、及測量諸數、自享保十有六年辛亥、到于今年丁酉、取數十年實測諸數、以折中致定而所得也、

安永六年丁酉秋八月朔日

多々良保佑測驗○下略

〔寛政暦書三十四諸暦合考〕新測交食段

寛政丁巳九年○改憲以降、至于方今、於江戸及大坂、實測日月食諸數、纂輯而依本編交食步法、推算各其本日測時諸數、以並列其推測兩數、便於比校觀覽、如左、○下略

〔天文瓊統三〕紫微宮總論○中略

沈括曰、天中不動處、遠極星三度有餘、而後測者歷代多言極星去天中、纔一度半、元明所測去不動處三度、蠻人亦云三度也、

貞享年中所測凡爲三度、予○保井自壯年前既及六十、精思于茲三十餘年、於武江測北辰、冬至昏後極星出地高三十八度半、夜半三十六度、晨三十三度半、是以極星去不動處二度半也、因此觀之、於西域歷代所測未詳、程朱說亦疎、

〔太皡古暦傳一天象篇〕是北極に對する南極と云ふ所あり、其は天經或問に、南北極者、天體永久不動之兩點、周天倚爲環轉之樞者也、故名爲極、極如軸之轂、如臍之臍、非星也、云云、極星者、重指其近極之星而名耳、而居中有不轉之所、以爲之心、故南北有不轉之極、以爲之樞、太虛空洞、固有不轉之神化、以爲之主、而後此天得以循行万古而不忒也と云るが如し、國川正休云、二極は南北極なり、九天之極軸たる所を云ふ、極には無星にして、論すべき者なし、故に極の側に三度を去りて星あり、此を測極星と號す、此星を以て北極の目的として、測器にて是を窺測して、國に隨ひて北極の高低ある事を察し、遠度なる事を知て、其國の寒熱氣候を察す、測極星は赤道を距て南方の地よりは見えず、南方の諸國にては、南極星を測見し、各其他の赤道を去る度を知りて、國の氣候寒熱を考ふ、北極の度に測知すれば、南方の地上と共に推て察するに分明也と知べしと云るも然る事なり、さて

今世幕府の士に、朝野北水と云ふ人あり、此人の北極星の旋を考へたる説に、此星の動ある事を知ずては、諸國にて出地を測量すること能はざる者なり、其は譬へば北極出地三十度の國にて測るとき、剋により三十六度にも見え、或は三十三度餘にも見ゆる事あり、三十六度と爲れる時に見たる者は、其國を三十六度の國と定め、三十四度と爲れる時に見たる者は、三十四度として各々見たる所を以て測量し得たりと思ふ故に其説區なり、是北辰と北極星とを一ッに思ふが故にて、昔の書にも北辰と北極星の差別なし、篤胤云、昔の書に北辰と北極星の別なしと云へるは誤なり、其は今の本文に、極星與天俱游而天樞不移とは有る天樞、やがて北辰なるにて知るべし、然るを天官書天文志より次て後の天文書に、此議麁略になり來て、よく其差別を説著せる書なき故に、かく云へるなるべし、斯て天經或問に至りて始めて其差別を説出せること上文の如し、辰とは都て星なき所を云ふ、北辰は總天の北極なり、極は少も動かねど、北極星は其側に在りて小旋する故に、微動といふ、然れども天經或問に、上下に三度づゝ旋ると云へり、上下三度宛は六度なれば、微動と云べからず、余積年研究して其微動の極を得たり、篤胤云、以上の説を前文と云て、門に入ざる人に其傳を傳ふる事なし、甚秘すべき事なりと て、筆を止めたるが、次に是より以下の文を出せり、是謂ゆる秘説なり、其まづ北極の第一星と第六星と第七星とを能見定めて、第一星の上にても下にても、第六星、第七星○—○斯の如く見ゆるは、北辰と相並びて東西するなれど高下なし、是出地測量の剋限なり、また第一星より東の上にて○—○斯の如く見ゆるは第一星高しと知べし、また○／○かくの如くなり、或は○＼○かくの如くに見ゆるとも、右に准じて測るときは、第一星三十六度に見ゆるとも、實は三十五度の國なりと知べしと云り、是は實測に叶へる説なり用ふべし、此北水と云ふ人の説は、天象話説と題せる傳書なるを、我が門人稲垣正雄が、早く其門に入りて其傳を受たると、安藤直彦が藏たる本とを合せ見て記せり、

〔仙臺實測志下〕此二十八宿度數、則數十年來之測驗也、與古之測數不同、而有廣狹於其宿者、假令如謂東海道北陸道自此所之宿到于彼所之宿有何里何町也、是以非二十八宿、則不能測驗七政之行、衆星之度矣、故二十八宿卽天之準繩也、

〔天文瓊統 五〕北方七宿七十六座三百九十二星

北方七宿、爲亥子丑三宮、於分野、則斗牛爲、飛州、加州、能州、越中州、越後州、佐州、女虚危爲、若州、越前州、丹州、室壁爲、渡州、但州、因州、

〔天文瓊統 三〕十二宮分野

子　丹波　若狹　越前
丑　飛驒　加賀　能登　越中後　佐渡
寅　上野　下野　出羽　陸奥
卯　美濃　信濃　武藏　甲斐　相模　常陸　上總　下總　安房
辰　尾張　參河　遠江　駿河　伊豆
巳　伊賀　伊勢　志摩
午　和泉　紀伊
未　淡路　四國
申　九州
酉　播磨　備前中後　安藝　周防　長門　壹岐　對馬
戌　美作　伯耆　出雲　隱岐　石見
亥　丹後　但馬　因幡
紫微垣　山城　大和　河内　攝津　近江

〔天文瓊統 三〕太微垣辨論

儒人云、張翼者日本之分野也、然則張翼北太微宮中象星在、我國之上、狹少異大微垣中全當、日本之分野、則翼軫也、我國自開闢、不、爲異域侵奪、此是有垣者堅固而不、能毀也、以方位考之、當巳宮、巳者物

成始之時而未亘勢擴、是以說道亦淡淸簡默而傳神聖之口訣言少、唯在受用而已矣、

〔寬政曆書二日躔曆理〕北極高度

北極天之樞紐、卽赤道之北極也、萬古定在一處而莫移動矣、其出地有高下者、因人所居之地有南北不同也、是故寒暑有進退、晝夜有永短、各循其高下而異也、蓋古來曆法、以太陽出入於赤道南北之度、定諸節氣是爲常、而北極出地之度、卽與赤道距天頂之度相同也、如推測不精細、而其高度差一分半、則交宮時刻春秋分必差四刻許、而冬夏至差三四日許、（尙詳後測春秋分、以求歲周篇、）日躔既差、則月離五星之經緯度皆無不謬矣、故測定北極出地之高下、最宜盡精密、苟不可忽也、測得京師北極出地、保井春海爲三十五度半強、佐々木長秀爲三十五度六十二分半、通之周天三百六十度、得三十五度一十一分二十二秒、吉田秀升等爲三十五度零一分、次後伊能忠敬測定亦同矣、其測之之法、於冬至前後用象限儀、測少衛東增八方中出地高度、昏時此星在北極上、候其漸轉而高、至不復高而止、是爲最高度、晨時此星在北極下、候其漸轉而低、至不復低而止、是爲最低度、（少衛東增八、今在赤道經度二宮二十三度餘、赤道緯度北七十六度半餘、冬至前後半月以內晨昏可以開見、故專取此星測之、）乃以其所測得之最高及最低度、算得淸蒙氣差、（求之法、詳後淸蒙氣差篇、）減其高低度餘數折中取之、卽北極出地度也、（中略）○用此兩法參互考驗、則當盡精微也、取於各處、依是二法、高橋至時、麻田妥彰伊能忠敬、及間重富等測定者、而揭于左、以便考算、

江戶、三十五度六十九分一十七秒、（高橋至時測定、）　大坂、三十四度六十六分六十七秒、（高橋至時測定、麻田妥彰、伊能忠敬、間重富所測亦同、）　長崎、三十二度七十五分、（伊能忠敬測定、間重富及西土所測三十二度七十七分五十六秒、）　松前、四十一度四十七分五十秒、（伊能忠敬測定、下同、）　鹿兒島、三十一度六十分、　對馬府中、三十四度二十分、

〔天文瓊統一〕北極出地度數

奧州津輕四十二度（冬至晝三十七刻、夜六十三刻、夏至晝六十三刻、夜三十七刻、）

南部四十度

野州日光三十七度強

武江三十六度夏至晷一尺六寸五分、冬至晷一丈三尺二寸、

能州七尾三十九度

三州岡崎三十五度

紀州熊野三十四度弱

皇都三十五度半強夏至晷一尺六寸、冬至晷一丈三尺

土州高知三十三度半

雲州松江三十六度半

藝州廣島三十五度

肥州長崎三十二度半冬至晝四十一刻、夜五十九刻、夏至晝五十九刻、夜四十一刻、

薩州鹿兒島三十一度

對州三十六度半

朝鮮三十八度少

琉球二十七度

西土北京四十二度強

南京三十四度太

神代口訣說天地之形、忌部正通之發明越千古也、

〔寛政暦書二日躔暦理〕日躔總論

欽若授時暦法、首務日躔暦法綱領、蓋日出而爲晝、入而爲夜、與月會而爲朔、行天一周而爲歲、歲月日皆以是紀定、故堯典以寅餞永短立成治暦大綱、萬世能莫之易也、然其推步之法、自今不能考之、蓋前

漢諸士、皆以日行一度爲率、而爲三百六十五日四分日之一、而一周天、晉姜岌始以月食衝宿度爲日宿度、劉宋何承天始悟、景極長爲冬至、景極短爲夏至、而定氣序必依測景、隨劉焯始覺日行有盈縮、更因四時消息於日行度、宋姚舜輔於晨前及昏後、以認太白與太陽之相距遠近、而驗定星度、仍得日躔宿度、元郭守敬採摭晉劉宋及隋唐以來諸士之最精造授時曆、較於前代爲稍細密、然未說日天有高卑之理也、本朝持統天皇以降、至貞享所行之元嘉儀鳳大衍五紀宣明諸曆、皆襲用漢士之法數、未算里差、如本邦撰造之貞享寶曆甲戌元曆等、倶因循郭守敬之法、故亦不能出於授時之模範、清曆象考成始依西土之法、其上下編刪定明崇禎曆書者、次後復專採西土刻白爾、噶西尼等之創法述後編、其法稍精密矣、今驗此於天、莫不脗合者、仍用其法、並釋其義云、

〔寛政曆書五月離曆理〕月。離。總論

懸象著明莫大乎日月、蓋太陽以定春夏秋冬成歲、太陰以定晦朔弦望成月、先聖所以並稱日月也、周禮冬夏致日、春秋致月、以辨四時之敘、蓋冬夏致日測黃道也、春秋致月測白道也、至太陰之行、則古者爲一日行十三度十九分度之七、前漢劉向謂、月有九行、東漢賈逵始悟月行有遲疾、劉洪造乾象曆、列遲疾差、宋何承天爲月道出入黃道、不逾六度、北齊張子信悟月行交道有表裏、唐李淳風造麟德曆、新立進朔之法、爾後諸曆循此以避晦晨月見、至僧一行、考九道委蛇曲折之數、得月行疾徐之理、元郭守敬測算太陰行度五十一事、析月行遲疾之限、爲三百六十六限、以爲其遲疾之度數逐時不同、明大統曆依此、我貞享曆亦同矣、是漢曆月離沿革之大概也、其用西曆者、唐有九執曆、元有萬年曆、此二曆不傳、明初有回々曆、步太陰列第一第二加減差定黃白大距、爲五度零二分三十秒、李之藻亦取西洋法論太陰小輪、及明季西士相繼而來、譯述崇禎曆書西說大備、清曆象考成、亦悉襲用西法、今通考之、漢以來雖多考索太陰之理者、驗諸今測皆不堪用、而稽諸西史西法、亦古粗今密、○下略

〔曆法新書八〕五。星。○中略

天文密奏

本朝天武天皇以來、舊文所載、近歲所驗、星躔碎密共舉之焉、又天平八年十月、太白入月、星有光、貞享三年四月庚辰晨、太白入月魄之中、星有光、則月上而星下可知、他星入月不見、則星高於月可知、是知異方人謂九重天者不詳矣、

〔曆法新書入〕里差〇中略武江與南部南北行程相距一百三十里、北極出地差四度、置相距里數以差度除之、約三十許里、而北極出地之差一度也、武江與津輕南北行程相距一百八十里、北極出地差六度、此亦約三十里、爲北極出地差度、用乘三百六十五奇、則知地一周凡一萬一千里、地厚凡三千五百里、用商尺六尺五寸爲間、六十間爲町、三十六町爲里也、異國六尺一步、三百步一里、約二百五十里、北極出地高下一度、地一週九萬餘里、地厚三萬里、南北相距毎千里、日食差一分、

〔寛政曆書三十諸曆合考〕江戸實測月離校

寛政改憲前後、用簡天儀、黄赤全儀、子午線儀、象限儀、實測太陰諸數、共集輯而依本編推月離法、推步各其本日測時諸數、以並列其推測兩數、便於比校觀覽、如左、〇下略

〔寛政曆書三十一諸曆合考〕各所實測躔離校

採用寛文以降至當今實測日月食諸數、依高橋至時新考法、詳後各求日食食甚用時、及月食食甚時刻、以加減食甚距時、及時差總、依用推步所得之數而反加減、乃實測不在京師者、又匪加減兩地里差時分、得實測望實時、名曰朔望考、並天保九年戊戌十月更革、測量之、會又重壬寅六月、新營測量所於九段坂、纂輯其太陰實測、名曰朔望外考、乃用各其時分、依本編推日躔月離法、校算各其黄赤經緯度、以併揭于此、〇下略

〔令義解一職員〕陰陽寮

頭一人掌、〇中略有異密封奏聞事、

〔延喜式十六陰陽〕凡密奏料紙筆墨等、臨時申省、

〔新儀式四臨時〕天文密奏事

若有天文變異、其道博士、幷蒙宣旨獻密奏者、具勘錄其變異、先觸第一大臣、加封返與博士、博士以之參藏人所、付藏人奏之、（若其奏文有可重愼、或依眞言教而令祈請佛天、或仰陰陽道而令祭禱星辰、）

〔西宮記臨時二〕進天文密奏人事（上卿奉勅可仰下歟）

〔西宮記臨時二〕依天變上密奏事

非蒙宣旨而輙視望天文事　罪載在法條、

天文道被宣旨之者注奏事、密封奉覽第一上卿、上卿見畢、如本加封返給、卽至藏人所進奏、（一大臣必兼陰陽寮別當、仍加封之、天文道有勘事之時奏事、大臣傳取付藏人奏之、）

〔侍中群要七〕天文密奏事

博士參陣腋、藏人出對、取奏書還上、插殿上文剌奏之、件書早可備御覽之故、追御所奏之、雖御物忌猶奏之、御覽了留御所、抑追御所之事、可有用心歟、又博士早旦參著、藏人不堪束帶、乍布袴取文剌奏之、如朝候之次也、

天文密奏、御馬走奏、諸御贄解文等之類、不必可束帶、雖布袴可奏也、或朝候之次奏之、凡早可備叡覽之故也、御贄等有可供朝膳之物、隨仰左右云々、

〔禁秘御抄下〕天文密奏

天文正權博士幷密奏者、每有天變奉奏書、司天先參內覽人許、執柄覽之加封返、則司天給之、持參內裏、於殿上口申事之由、藏人取之付內侍、天子覽之、執柄加封者、深恐外見之故也、封上書執柄片名、假令家實書家字、良經書良字也、日月蝕翌日奏又同、殊大事變出現之時不能進奏、倒衣馳參、夏始著冬裝束、冬始著夏裝束有例、

〔三代實錄一淸和〕天安二年八月廿九日丁巳、陰陽寮奏言、夜有星入紫微宮、赤如炎火、長十餘丈、

〔三代實錄清和十〕貞觀七年正月四日丙戌、去年陰陽寮奏、明年可有兵疫之與、近日天文博士奏、應警兵事、

〔類聚符宣抄九〕左大弁藤原朝臣邦基傳宣、左大臣宣、奉勅、以助教從五位下十市部良佐、宜令進天文奏者、

延長八年七月廿四日　　左大史錦部宿禰春蔭奉

〔親信卿記〕天祿三年十二月六日、天文博士安倍晴明於右兵衛陣外、令奏天文奏、依御物忌也、奏文云、去月廿日歲星犯進賢云々、今月四日月與太白同度云々、又令奏云、從去春比、有疫癘變、今臨冬季、其事不空、可被行四角祭云々、又天文博士以忠宿禰令奏密奏、其變只載月與太白同度文、件二人奏、晴明加左大臣封、以忠宿禰加自封、尋問故實、有仰可加云々、　十一日、以忠宿禰差美濃掾固以信令奏密奏、即令申云、所煩侍所令奉也、但先例如此之間、差習學者進上已例也、件以信蒙宣旨云々、其變去九月、月犯畢云々、又晴明同令奏云々、　十四日、以信進以忠朝臣〇朝臣、依上文當作宿禰、密奏、去十一日月犯井西反星、天延元年正月九日、天文博士晴明奏變異、其奏云、二日白虹匝日、五日白氣亘艮坤、七日鎭星犯東井第五星、　四月十九日、天文博士晴明進密奏云、去十八日丑時、月犯斗建星云々、　六月廿六日、主稅頭以忠朝臣奏天文密奏、月犯畢云々、

〔朝野群載十五陰陽道〕謹奏

今月〇康平三年十二月十四日己巳夜丑時、月蝕鬼宿十五分之五

謹檢天文要錄云、月者大陰之精、女主之象也、京房曰、月蝕、水多兵起、五役多死、帝覽曰、月蝕從傍、謂失令相當之、又云、月蝕女主憤之、又云、月多蝕、其國有女喪、天文錄云、月蝕、其國君王有病、不出三年、三府司馬云、月蝕爲將相相當之、又云、天子惡之、天地瑞祥志云、月從傍蝕、相國惡之、又天下兵起、人民飢亡、乙巳占、月十四日蝕、天下兵、河圖曰、月蝕望日天火燒萬物、女君有口、占云、小寒月無々々乃

光、女宮有憂、

右占云、月蝕雖蝕、而正現者有災、仍謹以申聞、

康平三年十二月十六日　　正六位上行權天文博士安倍朝臣親宗

從五位上行陰陽頭兼天文博士同權介安倍朝臣章親

〔玉海〕建久二年十二月五日己卯、入夜定類申條々事、天文博士廣元持來密奏、召前問五箇變事、申不知之由、此次申云、辰星早沒、夜初長ト云詩アリテ、辰星ハ角宿二星云々也、東方第一星也、是秘事也、故泰親朝臣謂、心太星太、嗚呼不傳口傳之所致也云々、

〔新蘆面命〕天文密奏ノ事、去頃公武ヨリ仰付ラレ候ニヨリ、先生被仰上候ハ此義ハ近代ト申、中古ト申シ、イロ〳〵天文ノ書出候テハ、際限モナキ細密ナル義ニ候マヽ、不思議ニ中リ候モ有之候、又ハアタラヌノミニテ候、安部晴明ナド奏聞申サレ候ハ、史記前漢ノ法ヲ用ラレ候テ、晉書已下ノ天文占ハ不被申上候、近頃ノ雜占マデヲ用候樣ニト思召レ候テハ、中々愚臣ノ及ブ所ニアラズ候、只晴明古法ノ如ク、史漢バカリニテ大綱ヲ申上候樣ニト被仰付候ハヾ、奉畏候旨申上ラレ候ヘバ、其旨御詮議有之、然ラバ史漢ノ法バカリニテ、密奏申上候樣ニト被仰付候、依之コマカナル事ハミナ不用也、

天文書

〔日本書紀二十九天武〕四年正月庚戌、始興占星臺、

〔教令類纂二集七十七〕寶曆七丁丑年九月

天文方
西川豊松

御手大工
前川平右衛門

右之者共、佐久間町測量所御長屋ニ罷在候所、此度測量所取拂相成候付、濱御用屋敷之內御長屋拜借被仰付候間、其段向々江可被達候、尤濱御用屋敷明御長屋之內相渡候樣可被致候、

小普請組太田美濃守組
西原彥右衛門

九月

天明二壬寅年五月　　御勘定奉行江

浅草竹町裏通明地、測量御用屋敷ニ相成、役所向御役宅長屋等、吉田叙負ヨリ差出候、御入用積金高千七十四兩二分ニ而、叙負一式引請仕様通相違無之様、入念可申付旨相達候間、得其意、叙負可被譲候、

五月

〔寛政暦書(二十二 儀象考)〕測量臺

五經要義曰、天子三臺、靈臺以觀天文、月令疏曰、積土爲之、所以觀望也、謹考本朝古未有靈臺之設、迄志賀之朝(天智)始有新臺占星臺之名、蓋測驗之術未行、而唯充占候之用耳、漢土則周有測景臺、漢有靈臺、劉宋有候臺、唐有仰觀臺、元有司天臺、明有觀象臺、清亦設觀象臺、置新製六儀、皆爲窺天象而設也、本朝元祿中、賜保井春海築臺之地、測量諸曜、寶暦中有修暦之儀、又起露臺列儀器、以測諸曜、是皆我築高臺以測驗天象、蓋是爲始也、于時西川正休、佐々木長秀等建白、測驗七政之躔次、皆築臺于江戸、遺址皆存矣、今之測量臺、則天明二年所築成也、臺高三丈、上置簡天儀、象限儀、其午酉之二面有磴道、各五十級、其左傍設欄楯、方各二歩、起基於臺坡上、平衡於臺面、凡若日月帶食、有事于地際、則於此測焉、

〔明良帯録(世職)〕暦正御礼方

深川木場へ御役地被下、俗に新天文屋敷といふ、是は近頃會津の藩臣暦術推歩の精微なるによりて、天文方次席に被召出、御目見被仰付たり、姓名は山中大和之助と云、聖堂塾中の人也、此場に手附出役多し、陪臣も出る、

〔御府内備考(十三 浅草)〕頒暦調所(つゝみち 又測量所と云)

天文器

猿屋町の東の方、新堀と三味線堀との間に在り、里俗天文臺と呼べり、元は牛込藁店と云所今某跡松野八郎兵衛が屋敷に賜へりに置れしが、天明二年六月朔日當所へ移さると云、

〔令義解 十雜〕凡秘書、玄象器物、天文圖書、不得輙出、謂秘書者、遁甲太一式之類也、玄象器物者、銅渾儀之類也、天文圖書者、星官簿讃之類也、

〔律疏 職制〕凡玄象器物、天文圖書、讖書、兵書、七曜暦、中略○私家不得有、違者徒一年、私習亦同、其緯候及論語讖不在禁限、謂玄象者玄天也、謂象天爲器具、以經星之文及日月所行之道、轉之以觀時變、天文者謂日月五星廿八宿等、圖書者河出圖、洛出書是、讖書者先代聖賢所記未來徵祥之書、兵書謂大公六韜、黃石公三略之類、七曜暦謂日月五星之暦、(中略)緯候及讖者、五經緯書中候論語讖、並不在禁限、

〔晉書 十一天文〕儀象　虞書曰、在璇璣玉衡、以齊七政、考靈曜云、分寸之晷、代天氣生、以制方員、方員以爲、參以規矩、昏明主時、乃命中星、觀玉儀之游、鄭玄謂、以玉爲渾儀也、春秋文曜鉤云、唐堯郎位、羲和立渾儀、此則儀象之設、其來遠矣、綿代相傳、史官禁密、學者不覩、故宜蓋沸騰、暨漢太初、洛下閎鮮于妄人耿壽昌等、造員儀以考暦度、後至和帝時、賈逵繫作、又加黃道、至順帝時、張衡又制渾象、具內外規、南北極、黃赤道、列二十四氣、二十八宿、中外星官、及日月五緯、以漏水轉之於殿上室內、星中出沒、與天相應、因其關戾、又轉瑞輪蓂莢於堦下、隨月虛盈、依歷開落、其後陸績亦造渾象、至吳時、中常侍廬江王蕃善數術、傳劉洪乾象歷、依其法而制渾儀、立論考度曰、前儒舊說、天地之體、狀如鳥卵、天包地外、猶殼之裹黃也、周旋無端、其形渾渾然、故曰渾天也、

〔舊唐書 三十五天文〕武德年中、薛頤、庾儉等、相次爲太史令、雖各善於占候、而無所發明、貞觀初、將仕郎直太史李淳風、始上言靈臺候儀、是儀、魏遺範、法制疎略、難爲占步、太宗因令淳風改造渾儀、鑄銅爲之、至七年造成、淳風因撰法象志七卷、以論前代渾儀得失之差、語在淳風傳、其所造渾儀、太宗令置於凝暉閣、以用測候、既在宮中、尋而失其所在、玄宗開元九年、太史頻奏、日蝕不効、詔沙門一行、改造新曆、一行奏云、今欲創曆立元、須知黃道進退、請太史令測候星度、有司云、承前唯依赤道推步、官無黃道游儀、無由測候、時率府兵曹梁令瓚待制於麗正書院、因起游儀木樣、甚爲精密、一行乃上言曰、黃

道遊儀、古有其術、而無其器、以黃道隨天運動、難用常儀格之、故昔人潛思皆不能得、今梁令瓚創造此圖、日道月交、莫不自然契合、既於推步尤要、望就書院、更以銅鐵爲之、庶得考驗星度、無有差舛、從之、至十三年造成、又上疏曰、按舜典云、在璿璣玉衡、以齊七政、說者以爲取其轉運者爲璣、持正者爲衡、皆以玉爲之、用齊七政之變、知其盈縮進退、得失政之所在、即古太史渾天儀也、自周室衰微、疇人喪職、其制度遺象、莫有傳者、漢興、丞相張蒼、首創律曆之學、至武帝、詔司馬遷等、更造漢曆、乃定東西、立晷儀、下漏刻、以追二十八宿相距星度、與古不同、故唐都分天部、洛下閎運算轉曆、今赤道曆星度、則其遺法也、〇中略又詔一行與梁令瓚及諸術士、更造渾天儀、鑄銅爲圓天之象、上具列宿赤道及周天度數、注水激輪、令其自轉、一日一夜、天轉一周、又別置二輪、絡在天外、綴以日月、令得運行、每天西轉一帀、日東行一度、月行十三度十九分度之七、凡二十九轉有餘、而日月會、三百六十五轉而日行帀、仍置木櫃、以爲地平、令儀半在地下、晦明朔望、遲速有準、又立二木人於地平之上、前置鐘鼓、以候辰刻、每一刻自然擊鼓、每辰則自然撞鐘、皆於櫃中、各施輪軸、鉤鍵交錯、關鎖相持、既與天道合同、當時共稱其妙、鑄成、命之曰水運渾天俯視圖、置於武成殿前、以示百寮、

（續日本紀十二聖武）天平七年四月辛亥、入唐留學生從八位下下道〇下道原作上道、據一本改朝臣眞備、獻唐禮一百三十卷、大衍曆經一卷、大衍曆立成十二卷、測影鐵尺一枚、

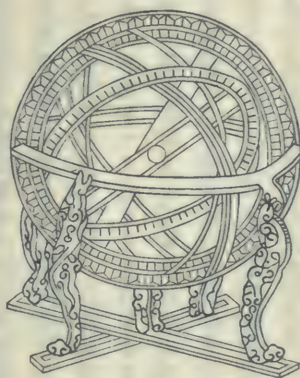
（中右記）大治二年二月十四日甲戌、未時許、當西有燒亡所、申時火滅了、後陰陽頭家榮示送云、燒亡之與、火起從司小屋、燒陰陽寮幷解由使廳、宮內省、幷園韓神社、神祇官八神殿、郁芳門等了、陰陽寮鐘樓皆燒損、但於渾天圖漏剋等具者、今取出也、往代之器物此時滅亡、尤爲大歎者、

（春海先生實紀）同〇寬文十年庚戌、先生年三十二、欲修渾天儀、而驗天象、然蔡氏渾儀、環輪繁多、乃難于制造、依用工夫新制圖儀、名新制渾天儀、其器只有經緯四遊之三重環、而測天象孔備易、日月星度、無能脫其機竅、遠優乎舊圖者遠哉、凡天運有差而星宿度亦與古不同、故先生以當時所自測候而定之星度改之、且

一一管規所略著于人目之小星、而細識去北極離宿次之度、然自新名之以本朝百寮官名、及以類名者、共六十一座、總計三百單八星、而各以青點記之、與古漢土所名列舍衆星、幷圖畫之於一機球、號曰天球、又著本朝天文分野之圓圖井方圖、夜々以較見星宿于天、不差一點、其便乎星學也甚矣、蓋西土量度數定星名者、只魏石申以赤點記者、百三十八座八百十星ナリ、商巫咸以黃點記者、四十四座百四十四星ナリ、齊甘德以黑點記者、百十八座五百十一星ナリ、而已、其後名天文者、未聞有窺他微星而能名者、雖元郭守敬亦所未能、而先生獨能之、豈非能人所難哉、跡部氏良顯嘗稱、吾每問星宿列象於世之星學者、頻指教而吾未得的見其星、一夜問先生、先生所指示、倏明知覺某星、曷入乎神至乎妙之如斯其甚也、又以歐邏巴利瑪竇所著之坤輿萬國橫圖乃畫屛六幅縮畫一圓球、縱橫象天度及里方、號曰地球、是亦便于學地理、且制我國之地圖、合天度而定方位、別爲深秘之一圖、

〔和漢三才圖會十五藝器〕璿璣玉衡　渾天儀

按、今世所用渾天儀、乃據葛衡之制矣、其本出於舜之璿璣玉衡而甚備易也、造法以二篾其篾用銅或木作之相交以爲南北天之四經赤色、又用一篾橫具中以爲天之中緯、謂之赤道赤色、又用二篾橫列於赤道之南北、其一去北極六十七度強、其一去北極百十五度強也、是乃夏至冬至日行之限、挾赤道各二十四度、謂之黃道黃色、又用一篾爲青赤白黑之四色春夏秋冬日行道也斜懸之、以赤處中於北黃道、以黑處中於南黃道、書四時二十四氣之字、三百六十日每日穿小孔、欲試時以日象插其日孔、又用天河篾斜繫之、天河之象詳天文部每篾記三百六十五度象目、安二十八宿及諸星之珠、使地球居於中、以機轉之也、余造之不借巧機手而成、但五星運行、遲速留滯無定範、



〔仙臺實測志上〕享保十六年辛亥十一月十五日夜、月食五分、　太概驗之、從五時前至四時過也、食甚、

宿次在巽末乾初、此時尙未在渾天儀、故目力所及如此而已、

〔仙臺實測志上〕同年〈享保十七年〉十月十四日夜、七半時初虧、至十五日晨而食、既而在乾方山上、圓象黑赤色、日出而月入、自是以後、仙臺始置渾天儀、

〔仙臺實測志下〕定地平方角、

此圖、卽地平之形、向于北極見之、則同赤道之形也、蓋仙臺渾儀製作之法、則周天三百六十五度二十五分七十五秒分之爲三百八十四分、又定方位以十二支八千四維分之、故支干之間爲各一十六分、而測驗北極及斗建等方角者、蓋用此分數者也、

〔仙臺實測志上〕延享二年乙丑三月朔日、日食五分、〈○中略〉　凡記食之方角者、以玉衡測之、惟以人目所見不安書之、　此食自貞享曆法遲九刻許、學者所當用力也、

〔仙臺實測志上〕寶曆五年乙亥八月十五日、月食、〈○中略〉　京都渾天儀之製、〈雖多測器、製作未精緻也、〉　京渾天儀之制、貞享年中、春海先生之所製、至于今用之、以此儀所測午酉午東之度、必有一度半之加減也、乃爲東順西逆順減逆加、而得測數也、又測去極之度者、常加一度三分爲測數也、〈其理未明〉

〔寬政曆書二十五儀象〕璿璣玉衡幷渾天儀

璿衡渾天、共其儀制之傳既尙矣、明和中置測量所也、二儀亦備而陳之、蓋皆國初之物、故制粗形小、雖不中用焉、亦足以見古器之遺典、與測天之原始也、

〔寬政曆書二十二儀象〕諸儀總論〈○中略〉

雖然、上古樸質、蓋未有儀象之製、迄天智天皇十六年、置漏刻於新臺、寶龜五年、始置漏刻于東西兩府、爾後往々奇巧之製出焉、他若測景鐵尺晷度、其名雖存、其詳不可得而知也、貞享治曆之初、保井春海窺天運於渾儀、測日行於表景、造天球以紀懸象、元文中、使西川正休造儀器儀象、當寶曆甲戌改憲之時、所用之儀器、無慮若干種、較在時曆測驗之術、於斯漸善、寬政中、有修曆之儀、因大修造儀器、或廣求

儀象於西洋書、于時麻田妥彰專攻此術、故當時之儀器多資焉、於是乎黄赤之經緯交食之淺深至水陸行測之諸儀、莫有所闕者、然後往聖欽若齊政之典、遠西窮理致密之術、大備於我、今日謹按儀象者、間衆曜旋轉之微、而數理之所由立也、然測度之密、非得合法之儀則不能也、〇下略

〔寛政暦書 二十二 儀象誌〕簡天儀。

元文中、西川正休請所創造也、制僅二重、只結六合四遊之二環、所以有簡易之稱也、寛政中、有修暦之議、復修補之、置之於測量臺、謹考其制之所由、蓋出於漢土之渾儀、而渾儀則原璿璣玉衡云、是必古有其法、遭秦火而滅矣、至漢洛下閎、始有渾天儀之制、唐李淳風亦新鑄銅造之、其法原璣衡云、是時始有六合三辰四游之環、趙宋渾儀之式頗倣其制、按書蔡沈注曰、宋錢樂之鑄銅作渾天儀、衡長八尺、孔徑一寸、璣徑八尺、圓周二丈五尺強、轉而望之、以知日月星辰之所在、卽璿璣玉衡之遺法也、歷代以來、其法漸密、本朝因之爲儀三重、其在外者曰六合儀、〇中略次其内曰三辰儀、〇中略其最在内者曰四遊儀、〇下略

〔有德院殿御實紀附錄 十五〕公、御位のはじめには、御納戸に窺天の器あまたありしかど、みな巧をつくせし玩物のみにて、實用にそなふべきはなかりしかば、御みづから御考索ありて、器物多くつくらせたまひしが、小姓土岐左兵衛佐朝直、浦上彌五左衛門直方等奉りて、紀州の良工加藤金右衛門をめし、さて成島道筑信遍に、書經璿璣玉衡の章を講説し、または假名に譯して授しめらる、かくて金右衛門、暦象の大意をほゞ明らめし上に、御みづから御敎諭ありて、渾天儀を造らしめらる、その製、高さ八尺にして、革を漆にてかためしかば、晝夜ともに露臺の上におき、雨露にあたりてもやぶるゝ事なし、此渾天儀の中に入て、天を仰ぎのぞむ時は、日月星の分度さだかに見るべしといへり、ある時、河合久圓成盈 同朋頭格 に、暮の極星と曉の星と相むかひ、角のかたにあるべし、みて參るべしと仰られければ、久圓かの器の中にはひ入て、仰ぎみしに、はたして仰のごと

くなりしとぞ、かくありし後、いよ〳〵改暦の事を思召立せ玉ひ、ふたゝび器用あまた製し玉ひけるが、中にも彼渾天儀の製を變じ、日月星を一つらに測量せん爲に、繁碎をはぶき、簡易にせらるべしと、年頃御考ありしが、延享元年にいたり、思召のまゝに其器をつくられしかば、簡天儀と名づけ玉ひけり、今にいたり、司天臺用ゆる所のもの則これなり、のち律暦淵源といへる書を、長崎より進らせしに、その中に、乾隆九年淸王の英略もて、新に造られし撫辰儀といふものをしるしたるが、まさしくこの簡天儀の製に少しもたがはず、しかも我延享元年甲子は、かれの乾隆九年にあたれり、年といひ、事といひ、かく暗合せることゝ、ひとへに英明の主は、和漢ともにひとし御事なりと、今さらに感仰し奉る所なり、

〔渾圖文集六星首〕平天儀說題辭

平天儀者、本予昔年所創、然甚粗略不備、嚴生素壽造窺天儀、篤留意於天學、乃因予舊模增加數物、天地日月星辰四時潮汐盈虛無不具備、而其說又古人未發之奇者甚多矣、出藍之靑其斯之謂乎、

〔渾圖文集六〕平天儀圖標題

此儀圖設四輪、大小凡五重、內地毬、外天輪、而地具萬國之形勢、海潮之消長、天備月之盈虛、日之出沒、四時之氣候、二十八宿之度數、且夕中星斗輪運轉十二支方維、晝夜分刻、覽者按暦定時日、運輪合應度、璇璣秘蘊瞭見目睫、且以紙製之、故可巻而懷、測候多倒、此爲尤便、

〔本朝天文一〕三天儀之圖

古來、渾天儀アリト雖ドモ、日ノ運行ノミニシテ、日月相交リ、朔望年歲盈缺兩食ヲ見セシムル圖古今無之、予〇渾寬政工夫之思惟之シテ、數ノ鐵輪ヲ以テ三光ノ度數ヲ刻、鉛ノ重ヲ以テ運之、日珠ニハ燈火ヲ入、算法ニ不違日食月食シ、月ノ盈缺、幷ニ一歲事々不殘見セシメ、三天儀ト號ス、此圖寬永年間ニ成就ス、今再ビ紙ニ畫シ、次ニ其暦算ヲ記シテ、全部九卷トナシ、異國ト間相違ノ儀アル

ヲ以テ、本朝天文ト名ヅク、○圖略

〔寛政暦書 二十二 儀象誌〕圭表儀

夫修暦者、必履端于冬至、其確定冬至、莫密於圭表、亦莫備於圭表、圭表之制致精微、而眞冬至可得、而後應用諸數可以定矣、昔者周公旦立表於陽城、以測日晷、是乃治暦之根柢、而推歩之所由生也、故西漢造暦、必先定東西而立晷儀、唐詔太史測天下之晷、凡十三處、趙宋測景于俊儀之岳臺、元人置測景臺二十七所、測景之法、舊用八尺表、而夏至之景乃尺有五寸、千里而差一寸、唐一行已嘗駁議之、蓋八尺之表、表卑而景促、古今相承、未或革焉、元郭守敬造五倍大表、圭面長一百二十八尺、表高四十尺、然表太高而日景漸淡、難得確實、於是別製景符以促縮其景、始得實景矣、制作之大、巧思之精、可謂卓越于古今也、本朝之古未聞有圭表之制、貞享中保井春海用八寸表以測二至、識冬至之後于天矣、建白新造八尺之表、遂定改暦之儀、夫八尺之制非不善、而自今觀之、猶有所未備焉、如郭守敬之制、盛則盛矣、亦未無遺憾也、今測量所所置之圭表、雖依元式、多出于高橋至時等意匠、其神契於實理、可謂無復可尚焉耳、蓋柱之直立、露曝風日、不論良材金石、不得不生微歪、故設垂線、毎測查其偏欹、又施量水、豫算圭面之高低、今目之曰圭加、曰表加、曰水準、圭加以救表柱之不正、表加以補正表高、水準以救圭面之不平、於此乎測數歸于正而無遺憾矣、可謂不易之良法也、○中略

小表儀

圭表之制、古者八尺尚患景之淡、元郭守敬有景符之作、其表高四十尺、亦能得其眞影、本邦今又加柱以垂線、設圭加表加之數、制作測量之密、實無可加焉、然則如小表不作而可乎、蓋測量之爲術、不在器之大、而在製之精、製精技熟、正得確數、存乎其人、貞享暦議曰、寛文中、立數丈之表、以測日景、然表長景淡、難得實景、其後於小舍立八寸表、累歳測量、是保井春海之確定冬至、所以立改憲之基本也、今測量所所現存一尺表、表原有二器、享保年間、令以其一測諸州日晷云、近加以景促、景益鮮明、宜充大儀及測

午表之參考也、

〔曆法新書 一〕土圭

土圭之制舊矣、植八尺表以測日景、蓋周公之遺法也、至元時、太史郭守敬始制四大表、而論曰、表短則促、尺寸之下、所謂分秒太半少之數、未易分別、表長則分寸稍長、所不便者景虛而淡、難得實景、春海亦曰、寛文已來立數丈之表於武江、復立八寸表於小舍以測日景、表長則景淡、難得實景、表短則晷促、亦未易分別、粤貞享甲子、植八尺之表於皇都、及乙丑丙寅三載之間、實測午景矣、於此定更元氣應歲實等之數者也、臣謂、古今制儀象者、或大或小、或圓或方、任意巧造、皆無不有理、然聖人之法、實萬世不可易之也、假令信八寸小表者、嘗笑四丈表之迂、信四丈高表者、嘗譏八寸表之簡、嗚呼八尺之無大過不及、孰固然之乎、故今令八尺表爲宗衆器而已、其制以木爲圭、長一丈八尺、廣三寸九分、厚如廣、旁設水渠、其南北兩端爲池、圓徑二寸三分五釐、深一寸、中爲水渠、兩池水共流于水渠、相灌通以取平也、圭之南端植表、以石爲跗、廣徑二尺四寸、厚九寸、入地四寸五分、出地四寸五分、四邊設水渠、亦以取平、又以銅鐵爲表、長十尺、入跗下二尺、出跗上八尺、以其餘爲一橫梁、圓徑四寸、長尺有五寸、高二尺、舉之於表顚、自梁中心下至圭面、共十尺、表上設輪環規、圓徑二寸、中空而表貫之、其環之外邊、別副鑄一輪環、能迴旋、又其兩邊有小環、懸繩施錘以取正矣、蓋土圭之術、太陽中于天、則表影亦中於圭、爲之午正、以景符攷之、而取表端及橫梁上下邊之景、其釐毫因人目所見以定之耳、

小表

小表之用專備具、而卽土圭十分之一也、凡測日月星辰儀象、人以其大爲足、故四丈大表大簡儀等之制興矣、臣試論之、蓋天地至大不可測、而貴以合于密、則方寸器亦當足爲徵焉、假令建千丈圭表、置百尺渾儀、而六合之無窮、豈能可盡乎、〇下略

〔文會雜記 三下〕一方師云、寫天儀ト名ヲ付シ器、京師遊學中ニ工夫シ、一ツハ土佐侯ヘ獻ジ、今一ツ

ハ柳原大納言殿好マセ玉ヒシカバ獻ゼシト也、又寫天儀記四卷ヲ著ス、寫天儀大サハ、高七尺、見附横四尺、幅二尺二寸アリ、コレハ圖ヲ著シテ大儀ヲ見セシムベシトナリ、圖ナケレバ詳ニ知レガタシトナリ、方卿工夫セシ日晷。二品アリ、一品ハ磁石ヲ用ヒズシテ、其日晷ニヨリ、南北モ時刻モ知ル也、其製ハ、何ノ事モナク、天ヲ逆ニシタルモノニテ、其中ニ北極モ黄道赤道モ天ノマヽニ備レリ、其時刻ヲ見ルニハ、一ケ所日影ノ通ジケル所アリテ、黄道赤道ナドノ筋ニアタリケルヲ、二十四氣ニヨツテ東西南北時刻等分リツルト也、

一方卿ノ師ナリシ片岡氏工夫ノ日晷四品アリ、其中一ツ、晝夜共用ル日晷アリ、夜ハ星ヲ以テ時刻ヲ知ル也、其星ニ別ノ習モナシ、二三星ヲ知リテ後、其星ヲ目當ニ測リケル故、天文ヲ知ラザル人モ用ラルヽト也、

〔寛政暦書 儀象誌 二十二〕測午表儀。。。

享保中、以儀象之制未備、有令創造新儀之盛意、因令求其人、于時長崎玉工森某者、承内旨、創意本儀、先造小樣進呈以稱旨、遂造成焉、其爲用法、測諸曜南中經緯度、又於横圭上取正切線、兼具圭表儀之用、當時未有子午線儀、象限儀等之作、又無以遠鏡加儀器之制、此擧也、蓋本朝製儀器附遠鏡、是爲嚆矢也、然自今而論之、則測經度之確、不若子午線儀、測緯度之便而密、不及象限儀、取正切線之巧、却遜圭表儀、然克兼衆技、稱爲簡便、唯其便故不精、爲可惜矣、

〔寛政暦書 儀象誌 二十三〕子午線儀。。。

子午線儀者、測諸曜經度之用、測量家之所由以爲軌則也、蓋測候之要、在定南北眞線、南北一定、而七政之錯綜可得而齊、諸曜之經緯可得而定矣、是古渾儀之所以有子午環也、然銅環之側立也、一低一昂不能無微差、而此儀則引細線、以當至直之規、取準於恒星、以定南北眞線、於是始可能免人爲而對天之正南北也、天明中、麻田妥彰創製此儀、尋造垂搖球儀、是皆測量儀器中之冠冕也、〇中略

星鏡子午線儀

星鏡子午線儀者、足立信順所創製也、初麻田妥彰製子午線儀、其測太陽用遮眩鏡、月星則目鏡而已、門人高橋至時、間重富等、憾目窺之不及小星、或用小遠鏡、須有意於製新儀、信順乃繼其意、而大成焉、其本末考驗之由、載在儀說略、曰子午線儀之製、因難精確也、其測之也用目窺、故難及微細之星象、昴宿二十六纏觀七星、是目力有涯、非可尤也、嘗聞西洋刊星表、悉載微星而無遺、而表數盡審矣、豈宇內人目之設鏡如此異乎哉、蓋精巧之所致、必資遠鏡之力乎、從而涉獵西書、委心考究、蓋有年矣、僅得定線之法、而未得備象之製、夫定南北一線、既難矣、今欲代以遠鏡而定、其寫心亦一難事也、因思、縱定得南北之低昂之不免無偏差也、于茲文政戊寅之秋、攜地平經儀、測量恆星、此器附小鏡、忽然謂用之子午線儀如何、乃架之子午三種線下、使小鏡準正於三線、觸照上線、從闇中窺之、則上下黑白之線、互相映、細線之黑線歷然現白線中、於是積年之惑頓解、測得準正、雖然測量之爲業也、定明徹而貽永遠、豈難斷而可乎哉、因講究其所以然、果有然者、明年春使工假製焉、於是晨昏測量勾陳最高低、其他木星之衛星及備納全康之類、皆微芒不遺、七年甲申四月十五日晨、初見新緯星由刺奴斯、繼而每歲連測、唯測太陽未也、舊法依線影求中心、既盡善矣、然適在實開、亦未免避眩鏡窺之、因又精思有年、天保年間、初發一工夫、先鏡中設十字線、別造如便面者、最抹之、名試線版、臨測少時、掩線上以擬夜天、而令鏡中線與上線參直而後試測之、其密不異星測、因漸加巧云、九年戊戌儀成、遂呈乃請置之測量所、又請併用子午線儀、名以星鏡子午線儀、皆如所請、於是子午線儀之測法大臻精緻、○下略

〔寬政曆書二十三儀象〕○中略地平經緯儀

本例寬曆改憲之日、嘗造地平經緯儀、然其制簡小、不得審數、後得和蘭所貢之地平經緯儀、置諸測量所、其制大超前式、時頒西曆書制蘭迭中所設者、刻逵蘭度者、而巧緻蓋又過之、遊表之背有銘曰、亞謨斯得爾單尹缺列蔓、又定分儀表盤有銘曰、亞謨斯得爾單搖飛由數鐸缺鳥攏、蓋成于和蘭府匠二人

之手者歟、後文化甲子歲、吉田秀賢建白、補添俯仰螺條、而其運益靈也、又寛政丁巳歲、吉田秀升、山路德風、高橋至時等、在京師造象限立運儀二座、與地平經緯儀、俱供改曆之試測焉、後山路諸考亦請造象限立運儀、雖制式有大小、皆用立運者、蓋以便于測候也、

〔寛政曆書二十三 儀象誌〕象限儀

寛政改憲之初、於京師造本儀及子午線儀、垂搖球儀、以備試測之用、事畢移之江戶測量所、本儀之制、多倣立運儀焉、象限盤面訂取重心、貼綴立軸、軸之上下有鋼樞、梁腹礎背共以鋼窠受軸樞、盤之規心綴定鏡版、版面附著遠鏡、版端釘銅環、環結麻索、引及儀肩、儀肩設滑車、索乃繞車而下垂、其端有錘、以平衡鏡之斤量、如其用法同蠻製地平經緯儀、故不復述焉、

〔寛政曆書二十五 儀象誌〕蠻製八分儀

八分儀者蠻名、以全圓八分之之義、卽半象限之謂、故名半象限儀亦可也、

此儀、近來西洋航海家之所創製、而專便舶中之測量、先是舟中之測器星尺之類、蓋數種、臨用皆爲風波所動搖、遂未能避其妨云、當我寛延中、西士骨爾業斯者、始廣此器之用、取其平也、以海面之水、其測物也、以鏡中之影、且因移鏡返照之理、以四十五度之弧、可象九十度之數、其用甚便、其數甚密、不患風波動搖、於是舟中之測、始爲無所憾、故近來航海家多用之、顧其爲器、不啻洋中之用、至陸地之測、裨益不少、然儀體狹小、不可得微數、故今唯充之行測云、

〔寛政曆書二十四 儀象誌〕蠻製觀星鏡〇中略

本邦、古所傳唯隆窪二鏡之製而已、寶曆改憲之試測用之、其後用四枚或五六枚者、往々舶來、而我玉工亦漸擬製之、先是享保中、長崎有玉工森某者、長此技、其所製稍亞蠻製、後寛政中、岩橋某、麻田直等、皆精此技、其所造今列于測量所、是爲本邦製遠鏡中之巨擘、惜乎其人不壽、且無著論其法、不傳于世矣、

〔續史愚抄 桃園〕寶暦十年四月二十二日丙申、日吉祭違、陰陽頭泰邦暫自關東借請天眼鏡、一名號萬里鏡、此器爲太政大臣實雲所尋求于異國也、窺天文知機事云々、

〔嚴有院殿御實紀附錄 上〕御承統のはじめ、天守に上り玉ひしに、御側のものら、遠眼鏡を持來り、御覽あるべしと、三度まで申上しに、聞せたまはぬ御さまにて、はてに仰られしは、われ幼しといへども、當職の身なり、もし世人等、今の將軍こそ、日毎に天守に登り、遠鏡もて四方を見下すなどいひはやしなば、ゆゝしき大事なり、承統の前は、ともかくもあれ、今はさる輕々しきわざはなすまじとのたまひしとぞ、そのかみ、紀伊大納言賴宣卿、いとけなくおはしける頃、城の天守にのぼり、千里鏡をもて四方を遠見し、大によろこび玉ひ、近習等も興ある事にもてはやしければ、卿いよいよおもしろき事と思し玉ひ、日々天守にて千里鏡をもてあそばされける、或時、安藤帶刀直次が、其所へ推參し、某にも御見せたまはるべしといひながら、その鏡をとりて、直に天守より投おとし、散々に打くだきて後、國主、日々樓にのぼり、遠鏡をもて、往來の人を見玉ふとありては、下々ことの外難困するもの多し、よりて某打くだきて候、御秘藏の千里鏡を打くだきし事、思召にかなはざらんには、某を御成敗あるべしと直諫しければ、卿大に恥おもひ玉ひ、この後は、かゝる事絕てなし玉ざはりしといふことを傳へしが、公には、此事聞召し置れたるにはあらざるべけれど、みづから天品の卓越し玉ひしゆゑ、かゝる仰もありしなるべし、閑窻憤話

〔閑田次筆 一〕紀實
寬政年間、和泉國貝塚の人、岩橋善兵衞、新に望遠鏡を製す、その形八稜筒、周圍大抵八九寸、長はこれに十倍す、政府の司天臺に蠻製のものを藏めらるゝといへども、其他にきくことなく、善兵衞が製する所はじめなりとぞ、五年丑秋七月廿日、橘南谿の宅に人々つどひて、これをもて諸曜を窺ふに、能肉眼の視ことあたはざる所をわきまふ、もとより蠻人のいふ所に符へり、○中略又此後

同じき七卯のとし十月、善兵衞再びきたり、前の製せしよりも更に大にして、星をみるも亦明なるものを携へて覩せしむ、歳星をみるに、星面に三帶ありて、三ッ引の紋のごとし、鎭星を見るに、一ッの輪ありて、本星を斜に經へり、其輪左のかたは本星の上にかゝり、右のかたは本星の下に入る、其輪本星の上下に出るゆゑに、長く米粒ごとく見えしなり、後又明年辰の春同じくこれを見す、時に太白星をみるに、すこし虧て十二日の月を見るがごとし、銀河の中の最白きを見れば、細小の星數十百千聚て、紗嚢に螢を盛ごとし、鬼宿中の白尸氣をみるに、小星廿八聚りたるなり、以上は橘南谿漢文に記されしを和してこゝに擧ぐ、予は天學のこと露ばかりも窺はざれば、一言をいるゝに由なし、彼岩橋善兵衞が奇工、實に希代のことゝすべし、京師にも又七なるものゝ自鳴鐘に奇工を盡し、蠻製の器物などたがはず摸せるたぐひ、すべて人の才は他より計るべからざるものなり、

〔寛政暦書 二十四 儀象誌〕蠻製寒。暖。儀。幷蠻製驗。氣。儀。〇中略
寒暖儀之制、本邦既精良矣、然驗氣儀、理及其制未ㇾ盡ㇾ善、故二儀共就二蠻製一述二其式一、〇下略

〔蘭學事始 上〕故の相良侯、當路執政の頃にて、世の中甚だ華美繁花の最中なりしにより、彼舶より、ウエールガラス、天氣驗器テルモメートル、寒暖驗器ドンドルガラス、晴雨驗器ホクトメートル、水液輕重清濁驗器ドンクルカームル、暗室寫眞鏡トーフルランターレン、現妖鏡ゾンガラス、觀日玉ルーブル、呼遠筒といへる類ひ、種々の器物を、年々持越シ、其餘諸種の時計、千里鏡、ならびに硝子細工物の類、あげて數へがたかりし、〇下略

〔天文義論 上〕問、近代ニ至テ、戎蠻ノ天學、唐土ニ入テヨリ、中華ノ天學廢レテ、戎蠻ノ天學隆ンニ行ハルト云人アリ、然ラバ戎蠻ノ天學ハ、璿璣渾天ノ説ニモ勝レル者乎、如何、
曰、大明萬曆ノ比、戎蠻ノ天文説、中華ニ入テ、測量圖器ヲ傳ヘタリト云ヲ、其比、日本筑紫ニモ、蠻

舶往來セシ事有テ、天文ノ圖器ヲ傳フ、日尺、晷尺、羅經地圖、土圭類、今世ニ販ベリ、近來ハ、日本ノ名工モ、是ヲ摸シテ製造ス、天文、地理、行舟ノ學徒、是ヲ求メ貯フ、其餘ノ圖器、渾天儀ノ類ニ至テハ、唐土往古ノ製造ニ同クシテ、不爲珍、今ノ天學者、中華素ヨリ是等ノ精造アルコトヲ不知、近世戎蠻ヨリ渡レル類ヲ見テ、大ニ珍シトシ、唐土未ダ不知之ト思ヘルハ、博ク唐土ノ書籍ヲ不見人ナレバ也、戎蠻ノ天學、豈璣衡渾天ノ說ニ異ナル事有ン哉、唐土ノ圖器、璣衡以下、歷代家々製作ノ圖儀甚多シ、其中、後漢ノ張衡ガ渾天儀、極テ精密ニシテ、其周旋、天行ト符節ヲ合スト云リ、此外、元朝ニ至テ、測量ノ器尤多シ、簡平儀、仰儀、璣玲儀、經緯儀、立運儀、證理儀、日月食儀、懸正儀、景符仰規ノ類、是皆天文測量ノ圖器ニシテ、唐土自古既ニ有之トイヘドモ、其圖儀皆禁裏官家ノ藏ムル所ニシテ、民家ニ無キ物ナルヲ以テ、庶俗ノ輩、終ニ見ル事ナシ、是ヲ以、唐土ノ人モ、運タ知コト無ウシテ、偶、近世、蠻夷商舶ヨリ持渡ル處ノ圖器ヲ見テ、大ニ驚嘆シテ、中華古ヨリ無之類也トス、是ニ因テ、今來、唐土製法ノ渾儀ヲ見ル事アリト云ドモ、是皆蠻國ヨリ傳ヘ習ヒタル者ナリトス、寔ニ可笑而已、

〔明史天文二十五〕分野〇中略

七年〇嘉靖、始立四丈木表、以測晷影、定氣朔、由是欽天監之立運儀正方案、懸晷偏晷、盤晷諸式、具備於觀象臺、一以元法爲斷、萬曆中、西洋人利瑪竇、製渾儀天球地球等器、仁和李之藻撰渾天儀說、發明製造施用之法、文多不載、其製不外於六合三辰四游之法、

〔續日本紀孝謙二十〕天平寶字元年十一月癸未、勅曰、如聞、頃年諸國博士醫師多非其才、託請得選、非唯損政、亦无益民、自今已後、不得更然、其須講〇中略天文生者、天官書、漢晉天文志、三色薄讚、韓楊要集、〇中略並應任用、被任之後、所給公廨一年之分、必應令送本受業師、如此則有尊師之道終行、教資之業永繼、國家良政、莫要於茲、宜告所司、早令施行、

〔續日本紀考證孝謙七〕天官書史記有二天官書一漢晉天文志漢書晉書、並有二天文志一、按三代格作二漢書天文志一、下同、恐非レ是、三色薄讃、薄即簿字、三代格作二韓楊要集、
三家簿讃一、類聚符宣抄天祿元年十一月八日官符同、唐志天文家類、有二石氏星經簿讃一卷、按現在書目錄、簿讃三卷、上卷魏石甲、□卷甘文爾、下卷晉石成、所レ謂三色簿讃是也、
唐志韓楊天文要集四十卷、按藤原通憲藏書目錄、有二天文要錄一、疑亦此、
〔續日本紀稱德二十八〕神護景雲元年九月癸亥、日向員外介從四位上大津連大浦解任、其隨身天文陰陽等書、沒爲二官書一、

〔日本國見在書目錄〕天文家四百六十一卷私略之

天文錄石氏中宮占三卷上中下　天文要錄十陳卓撰　天文錄一部卅祖恒撰　天文錄圖一
天文要會六律林注　天文略集決一　天文要集一　天文要卅三卷　天文災異雜占一
天文要集一　天文要會一高氏撰　天文要會二　日月暈食占妻一　日月雜災異圖廿
七　日月要錄五十　日月要錄私記一　日月分野法一東興撰　日月占書四　日月要
決一　日月記一　日月書一　天文要記一　天文私記一陳晉抄　天文私要一　天
文要錄月災圖一　天文要錄日々占一　天文雜占一卷　天地瑞祥志廿　要決淸類廿
鴻範本論十　乙巳占十　天官星占六陳卓撰　荊洲占廿二卷　荊洲要略占一
占候要略經一　犯昴星書一　薄讃二陳卓撰　薄讃三上卷魏石、中卷耳文爾、下卷晉石成、　薄讃三晉史石申造
三星贊一　石氏星經薄讃二　屬七星一卷　屬星符一　北斗人屬星占一　星躔一
怪星圖一　流星占一　彗星占二　日月五星占圖一　日月客星瑞相圖一　五
星廿八宿占一　五星告度一　日月虹珥圖一　乾家論二上下　彗孛占一　蓋天玄象
經一　撰集流星客氣占一　神光占二　天地人圖象經十　廿八宿五星占三　鍾律
星卦分野圖五卷　十二律分野圖一　客星占一卷　雜星占一　日暈占一　日暈占
圖一　月暈占圖一　薫家占一　甍家占圖一　廿八宿圖三　彗星圖一　日月災

異圖　春秋經中災異一　雲氣道圖一　陳古圖列讀一　帝王秘錄十(又在二兵家一)　日月讖圖一　周髀三(趙爽注)　定天論三　星經流占二(石氏撰)　唐七曜符天曆一　七曜巡行一

七曜星辰別行法一卷

〔乾坤辨說序〕此篇者、南蠻不留都我留國之人忠菴所編述也、忠菴者、南蠻浮屠耶蘇之僧、其學精天文、○中略寬永廿年癸未、筑之前州大島之海上、卒然怪船漂蕩、大島戍長、忽視執之、以狀聞焉、其人十有餘人、皆蠻僧破天連鬼利支丹之徒也、筑前之太守源忠之公、令士檢從寄之長崎奉行所、以達江武井上筑後守某字公、某字公下之於獄、不敢殺、皆自悔非謝罪、改鬼利支丹而爲我民俗、破天連長老有精天文者、乃以天文書達上井上筑後守某字公、二三年之後、某字公令忠菴譯之、譯功漸成、進上其書、即此篇也、蓋南蠻學家天文地理之說、悉載此書、其草稿猶在忠菴家、終篇譯以倭語、言以蠻字、吾人雖博學之士、不能讀之、唯通辭西吉兵衞能讀蠻字、長崎奉行所藏此書於西吉兵衞家、不敢許人之見、其命嚴矣、明曆丙申之冬、長崎奉行甲斐庄喜右衞門尉正述公、命僕及西氏、倭書之、吉兵衞乃讀字、僕以倭字寫之、重命僕考辨此書、夫蠻學之爲術、未曾知理氣陰陽感五行之說、是故其教不道窮理盡性之問學、徒執形器之上以論之而已、是以天地之形體、日月之大小、運行之度數、晝夜之際限雖稍詳、而形而上之義則略盲不明、否塞不通、遂執形器之說以爲至矣、所以其爲異端邪說者、職此之由也、孰云蠻學能解天文地理耶、今悉考辨以附各條文後、或其不誤者存而稱之、非敢爲臆說以詰之、皆有所由也、凡所加考辨圖、蠻學之非而已、至於乾坤正說、原自一家、不敢附於此云、吾人專學之士、更加討論條飾、以救後人無蠻學之惑、不亦善矣、翻忠菴蠻稿雖既脫稿、未題而騰、今號曰乾坤辨說、

時明曆己亥九月望日　　肥陽長崎向井玄松序

〔鎔造化育論中〕此圖者、略圖刻白爾𩿪思、祖述古人臆廸我剌私之地動說、且加自己之工夫而所製也、乃日輪者在大圓之正中、而大地、及五星、皆各率其小星、以旋回其外圍也、又彗星其行環極楕圓偏長、

一方起于日輪與水星行環之間、或起于水星與金星之間者亦有之、而其一方逸出于衆星所羅列之外、而不可見焉、此圖甚得天地之正理矣、然而剏白爾者、唯能推究天地萬星、右旋運動之數理、而未知其運動之所以由起也、況於日輪自轉以起元運、大地自旋以起私運之神理乎、若使斯人生皇國、則其所發明、豈其盡乎斯哉、可惜矣、故從事于窮理學者、不可不熟讀皇國之古典也、

〔俗簡焚餘 二〕己丑（〇文政十二年）正月岩村異學之禁

去年中、家相見、天文者等、御領內へ入込、妄說申唱候處、御家中士分之內にも、相談致し候輩有之由相聞へ候、一體星曆之學ハ、其職業之外ハ、心掛候に及ばず儀、況て身元不慥之者、右樣之事ニ寄せ、人を迷はし候儀不少事ニ候、去々年以來、文武稽古事、厚く御世話も有之候へば、御家中之面々、御趣意を守り、相勵ミ、其他ニ及び候暇有之間敷筈ニ候、就中老分之輩、稽古世話被仰付置候ものゝ內にも、相談いたし候者有之哉ニ候、左候而ハ、年若之者ども、心得違も出來候間、向後不束之儀無之樣、一統心掛可申候、右之趣、御家中面々へ、不洩樣可被申達候、以上、

月日　　連名

大御目付中

去年（〇文政十一年）中怪敷家相觀、天文者等、御領分江入込申候ニ付、向後左之通、

賣卜者、觀相者、祈禱者、怪敷天文者之類、此後御領內へ參リ候ハヾ、猥に爲致止宿間敷候、尤伊勢熱田兩御師、其外古く參り來候神職僧侶等ハ格別ニ而候、若又身元慥なるもの歟、又は內緣等有之、止宿爲致度存候ものは、其筋へ相斷、可任指圖候、

右之通、御領分中、不洩樣可被相觸候、以上、

月日　　連名

御勝手御用人中

郡事行中

○

〔源氏物語十四澪標〕すくえうに、みこ三人、みかど〇冷泉きさき〇明石中宮かならずならびて生れ給べし、中のをとり〇夕霧は、太政大臣にて、くらゐをきはむべしとかんがへ申たりし、

〔鶴岡放生會職人歌合〕左　宿曜師

くもりなく星のやどりは見しかども月の命も捨がたきかな

うき人のむまれの月日聞きけんけふあひがたき事やみゆると

〔寶篋内傳五〕文殊曜宿經事

夫以、曜者過去七佛全體也、故所謂七曜者、不欲上界樂、不染下界塵、不垢不淨而天眞獨朗之相也、不掛生死、不住涅槃、色心已究竟、厭相更同滅、周遍法界、三世明了、〇中略問曰、七曜巳行度二十八宿、何謂乎、答曰、過去七佛、法華二十八品、開題番々修行道理也、爰知、一切衆生、咸是過去七佛所成也、然二十八宿配當一年三百六十日、以生日宿可顯一期吉凶者也、爰有命業胎三宿、此經肝文也、達明師傳之問曰、以何宿爲命業胎耶、答曰、以生日宿爲命宿、自命宿當十爲業宿、自業宿當十爲胎宿、然二十八宿内、除牛宿勘之、若人爲生宿因擁、惡宿生合、則依愛染明王法、退七曜凌逼難者也、日光顯現諸星陰沒之道理也、

〔宿曜經〕宿曜經序三九秘宿品第三

一九之法　命榮衰安危成壞友親

二九之法　業榮衰安危成壞友親

三九之法　胎榮衰安危成壞友親

此法、皆以所生日直宿爲命、即以命宿爲第一、以次榮宿、又次衰宿、及安危成壞友親、如是九宿爲一

九之法、其次以業爲首、以下准前、爲二九之法、其次又以胎宿爲首、以下亦准前、三九之法、二十七宿最爲秘要、

假令、如有人以二月五日生、屬畢宿、卽以畢爲命宿、則以次觜爲榮宿、參爲衰宿、井爲安宿、鬼爲危宿、柳爲成宿、星爲壞宿、張爲友宿、翼爲親宿、軫爲業宿、至女爲胎宿、是爲三九之法、准此推之可知也、○中略

凡欲知日月五星所在宿分者、據天竺曆術、推之可知也、今有迦葉氏、瞿曇氏、倶摩羅等三本梵曆、並掌在司天、然則今之行用瞿曇氏曆本、

宿曜經秘密雜要品第五○中略

凡七曜犯著人六害宿者、有災厄、此須推曆看當時七曜行天在何宿處、六害者、一者命宿、二者事宿、三者意宿、四者聚宿、五者同宿、六者克宿、從本命宿數、第十爲事宿、第四爲意宿、第十六爲聚宿、第二十爲同宿、第十三爲克宿、假如有人、屬婁宿、婁爲命宿、第四得畢、爲意宿、第十得星宿、則星爲事宿、他准此推尋可知也、○中略

凡人有厄之時、可以修福持眞言以禳之、吉、

若人不記得本命宿者、但不得生日、則此人不知命宿、當用此法也、看其人初來問我時、手所觸著處斷之、先觸頭昴宿、額畢宿、眉觜宿、眼參宿、兩頰及耳井宿、牙叉骨鬼宿、齒柳宿、頂星宿、右肩張宿、左肩翼宿、手軫宿、頦頤角宿、缺盆骨及項下胸上亢宿、胸臆氐宿、右臂房宿、左臂心宿、脾骨尾宿、左脇箕宿、右脇斗宿、臍牛宿、腹肚女宿、腹下虛々宿、膀腿及後分危宿、右邊腿脾室宿、左邊腿脾壁宿、膝珂奎宿、脚脛婁宿、脚胃宿、右察其所觸著處、則是其宿也、依此宿斷之、

〔宿曜經〕新刊古本宿曜經叙

宿曜經者、大聖文殊師利菩薩所說也、唐時、三藏大廣智阿闍梨傳之東夏、疏爲漢本、譯場筆受、瑞景二公、更加注釋、從爾而來、累世傳密諸師、指誨温習、以爲秘要、○中略其傳本朝有四家、予所秘凡五本、

文字異同、不能均一、又校之大明高麗藏本、增有出沒、蓋本國相傳者、不過展轉書寫之謬、至大明高麗兩本、則恐是臆斷濫竄、鑿蒜、易置圖位、大乖聖旨、不亦然乎、如月宿傍通曆推步之捷法、占候之急務、而一宿失位、則諸宿皆差、其正月朔、本是室、今以虛配朔、毎月三十日、遇小盡之時、次第而直、若大盡、則一宿宿直兩日、今皆一齊以次配屬、其差不止一二宿、是以推占之人、臨卷罔然、既不通於推占、則不得不棄之歟、他曆逐使此書爲不用之具、豈不可惜哉、夫味其事、讀其書、書非不是、而讀者自迷此、與趙括讀父書何異、況讀其書不知其非、致迷滋甚、予歎之尙矣、去秋捜閲南山無量壽院經藏秘籍、捜得此一本、剞劂字樣、殊不類當時流行之本、以甲子推之、殆五百年而上物也、比之諸本、爲最古矣、竊疑、斯是晉傳、寫吾大師請來之本者也、慶幸何過之哉、遂乃梓行、傳之永世、庶古眞本之流不湮滅云爾、時享保二十一年仲春日、沙門覺勝、寓於和州榮水山吉祥寺書、

〔曆法新書 八〕宿曜

宿曜之說、其來久矣、臣竊、本邦長保寬弘以降、專有此術、又異邦大統曆載其術、曆算全書亦有其說、以爲演禽之用、占家之一種也、如此舊傳、論之蓋雖無關曆法大義、而未可得廢也、今以甲戌爲元之天正、多至前丙辰日正値虛宿、故逐以通積取之、卽得値宿曜、凡其用數宿積二十八萬、宿周二十八、紀法二十八年、宿應二十二、日宿應二十六萬六千三十八分、置所求距算加年宿應、滿宿周去之、不盡命虛宿算外、卽所求年宿、置所求距算、以十二乘之、滿宿周去之、不盡命虛宿算外、卽天正十一月宿、又術置年宿策（置紀法、乘其策數）以十二乘之、加十六、滿宿周去之、不盡命如本術、置其年之中積、加日宿應、減閏餘、滿宿積去之、不盡爲天正經朔宿、餘以加減之差加減之、如日周而一爲日策、不盡命虛宿算外、卽所求天正十一月定朔日宿、（求次者、其月大、則加二、小則加一、爲日宿命如前、）

〔禁秘御抄 中〕凡僧

公請不強子細、又御修法伴僧之外、宿裝束總不入禁中、如宿曜師、對面女房時、參局邊、妻戸緣候ナド

スルハ別事也、御所不レ參事也、

御持僧外、御祈奉仕人過レ法多、中々無レ詮、宿曜師等無二何房々引一レ軒注連、還見苦事歟、

〔禁秘御抄　下〕御祈

〔二中歷　十三一能〕宿曜師

法藏僧都　利源闍梨　仁宗五師　仁祚法藏弟子　仁統五師　扶宣祿命　忠元仁祚弟子　良堪扶宣子、祿命、　增命仁統姪子　證昭仁統弟子　彥祚仁統弟子　能算仁統弟子　清昭法橋、成忠子、　恒舜僧都　圓空同　尊源法眼、增命弟子、　賢暹法印　慶增大僧都　良祐闍梨、賢暹弟子、　明算能算子　除算能算弟子　日覺良祐弟子

〔三代實錄　二十五清和〕貞觀十六年五月廿七日甲寅、從五位上行陰陽頭兼陰陽博士安藝權介滋岳朝臣川人卒云々、川人作二世要動靜經三卷、指掌宿曜經一卷一、

〔古事談　三僧行〕大御室者、御壽命以二十八一可レ爲レ限之由有二宿曜勘文一云々、依レ之十八歲春修二尊勝法一、令二祈請一給之間、或人夢想、炎魔王宮ニ火付テ、已令レ燒之間、王宮騷動甚、便御壽命限二十八一之由、札文已明白也、然而依二炎上難治一、鉤二八字一了云々、果八十御歲九月二十七日御入滅、

〔續古事談　五諸道〕登昭トイフ宿曜師、大殿〇藤原師實ヲサナクオハシマシケル時、宿曜ノ勘文ニ、十九ニテ大臣ニナリ給ベシト勘タリケルニ、ハタシテソノマヽ十九ニテ大臣ニナリ給ニケリ、宇治殿〇藤原賴通感ジ給ケリ、

〔宿曜運命勘錄〕大永三年壬辰十二月廿五日戊申、時丑誕生男、

大寒初

算勘

自二上元庚申歲一距二今日一、所レ積日數十六萬五千四百二十八日、

紀法八當二己酉一

秘法四〇本曜直中略

人會受生、尊卑貴富、高下壽夭、業因之所酬、禍福榮衰、猶是宿曜之所掌也、生日行年、誰無好惡、生好宮好曜者、自有福祐、屬惡宮惡曜者、自招禍殃、然而凡人無識、識爲要害、有幸者偏謂自然之榮、不運者唯致薄命之嘆、仍爲顯其理、任算勘之旨、依先德之章、今本命屬天永三年十二月廿五日丑時誕生男、尾宿人馬宮勞立偏勢諸運、奚所謂、天性強柔、榮祿尊卑、福祐厚薄、壽命長短、諸運吉凶、行年倚伏而已、

〔百練抄五鳥羽〕永久三年二〇本作二、一月十四日、寅刻月蝕正現、宿曜與曆道所申相違、上皇〇白河又有勸賞、

〔百練抄七二條〕長寬二年五月十五日寅、月蝕、曆道宿曜道相論、曆道云、明曉寅刻、宿曜道云、十六日寅月蝕、十七日曉云々、

〔玉海〕承安四年十月二十五日己卯、宿曜師珍賀法橋、清水寺邊、建立一堂、名〇北〇斗〇降〇臨〇院〇云々額字、先日切々依申請、今日書遣之、〇中略明日供養云々、

〔吾妻鏡脫漏〕元仁二年〇嘉祿元年二月一日壬辰、今日可有日蝕之由、宿曜道助法眼珍譽雖勘申之、日輪無虧云云、　八月一日己丑、酉刻可有日蝕之由、宿曜師與曆道日來相論、雖然依雨降而現否難決云云、

〔業資王記〕寬元五年〇寶治元年正月廿六日庚辰、未刻參院、今日評定式日也、〇中略

一賢算律師、算明法橋申宿曜道事、

宿曜秘法、嚴算法印相承之、嚴算傳二人之弟子、宣算、算明良算傳珍算、珍算之於旅館頓滅、今賢算宣算弟子算明等致此相論、又良算實子幼童陀羅尼丸帶父讓、珍算實子幼童有王丸讓賢算之扶持、又望申之也、算明已傳受秘法了、嚴算法眼又子細也、然者爲器量之仁、可奉仰斷歟、後可傳陀羅尼丸歟之由、予發語、人々被同之、又可被召覽文書正文云々、條々大概如此、不見本文書者、後見難心得歟、然而篇目許也、早破也、

五月十三日乙丑、參院、月蝕事有相論、先曆道之中猶不同、在尚、在直申十六日之由、在淸、在盛申十五日之由、爲成俊奉行、召此輩、予〇業資定嗣原可尋決之由有仰、出北面問之、在淸十六日寅刻之由、以兩道之

意申之、在尙十七日寅剋之由、且就先例申之、在尙申狀頗無所據歟、算道申十六日之由、宿曜道又不同云々、　十六日戊辰、參院、此曉雖天陰、寅剋自雲間月蝕顯云々、司天維範朝臣忠俊申此由、自餘申不見之由、然而須臾顯現歟、頻申勸賞、

〔吾妻鏡〕五十　〔一〕弘長三年十一月十六日癸巳、午剋御息所御著帶、御驗者大納言僧正、〇註略、醫師玄番頭丹波長世朝臣、布衣、御〇御下、恐有誤脫、陰陽權助政茂朝臣、束帶、宿曜師大夫法眼晴尊等也、

古事類苑

方技部五

暦道上

暦道ハ、古ハ天文道ト共ニ陰陽寮ノ掌ル所ニシテ、日月行度ノ盈縮ヲ推シ、時序節候ノ進退ヲ計リ、以テ暦ヲ造リテ、時ヲ授ケ日ヲ知ラシムルヲ要トセリ、暦ノ我史上ニ見エタルハ、欽明天皇ノ朝、百濟ヨリ暦本幷ニ暦博士ヲ貢シ、尋デ推古天皇ノ朝ニ至リ、書生ヲシテ造暦ノ法ヲ學習セシメシヲ以テ初トス、蓋シ當時三韓ノ暦法ハ支那ヨリ傳ヘシモノニテ、其術東漸シテ我ニ及ビシナリ、持統天皇ノ時ニ至リ、劉宋ノ何承天ノ元嘉暦、李唐ノ李淳風ノ儀鳳暦ヲ併用ス、其後天平寶字中、唐ノ大衍暦ヲ用ヰル、大衍暦ハ唐ノ僧一行ノ作ル所ナリ、貞觀年中、改メテ長慶宣明暦ヲ用ヰル、宣明暦ハ唐ノ徐昂ノ作ナリ、此間唐ハ更ニ郭獻之ノ作ル所ノ五紀暦等ヲ用ヰシト雖モ、我ハ終ニ改ムルニ及バザリキ、蓋シ支那ニ在リテハ、是ヨリ後、歴代頻リニ改暦ヲ行フ、元ニハ郭守敬ノ授時暦アリ、明ニハ回々暦ニ本ヅキタル大統暦アリ、其法ノ精密ナルコト往時ノ比ニアラズ、然ルニ我國ニテハ、貞觀以降久シク改暦ノ舉ナク、暦法大ニ差錯ヲ致シヽヲ以テ、貞享元年德川綱吉ノ時、澁川春海表ヲ上リテ改暦ヲ請フ、是年朝議アリテ明ノ大統暦ヲ用ヰントス、春海復タ上表シテ、大統暦ノ缺點ヲ指摘シ、自作ノ新暦ヲ進ム、之ヲ貞享暦ト云フ、貞享暦ハ即チ郭守敬ノ授時暦ニ據リ、里差ヲ加ヘテ法ヲ立テシモノナリ、其後延享中ニ至リ、德川吉宗、我暦法ノ未ダ精確ナラザルモノアルヲ察

シ、明ノ崇禎暦書ヲ考覈シテ補暦セシメントシ、其薨去ニヨリテ果サズ、寶暦四年ニ至リ、前暦ヲ修正シ、漸ク改暦ノ典ヲ擧グ、之ヲ寶暦甲戌暦ト稱ス、司天ノ官益〻意ヲ驗測ニ留メ、寛政九年、暦象考成後編ニ據リテ、更ニ改暦ノ擧アリ、之ヲ寛政暦ト稱ス、暦象考成ハ崇禎暦書ニ基キテ成ル所ニシテ、其後編ハ洋法ヲ參用シテ、校訂ヲ加ヘタルモノナリ、而シテ天保十三年ニ至リテ、再ビ寛政暦ヲ改刪シ、復タ改暦ノ擧ニ及ベリ、是ヲ天保暦ト爲ス、爾來復タ改暦ノ事ナク、明治五年ニ至リ、太陽暦ニ改メラレタリ、

古來暦面ハ、上中下三段ニ分チテ、日ノ吉凶、氣節ノ變等ヲ注記ス、之ヲ具注暦ト云フ、又七曜暦ト云フモノアリ、共ニ陰陽寮ノ造クル所ニシテ、毎年之ヲ奏上ス、之ヲ御暦奏ト稱ス、又中星暦ト云フモノアリテ、八十二年一度造進スト云フ、而シテ官暦ハ皆眞字ヲ以テ書スルガ故ニ、民間ノ使用ニ便ナラズ、是ニ於テ後ニハ假名ヲ以テ寫シ、之ヲカナゴヨミト稱セリ、又伊勢ノ神宮、伊豆ノ三島、武藏ノ大宮、及ビ薩摩等ヨリモ、各〻暦日ヲ製作シテ頒行セリ、而シテ陸奥南部ヨリハ盲暦ト云フヲ出セリ、

暦本ノ製造ハ、古代ハ都ヲ陰陽寮ニテ掌リシガ、德川時代ニ在リテハ、江戸天文方ニテ之ヲ作リ、京都ニ送リテ、土御門家ニテ中段下段ノ注ヲ記入シ、更ニ江戸ニ廻付シ、然ル後始テ寫本ヲ以テ諸國ノ暦師ニ頒チ、暦師ハ又各〻之ヲ印刷シテ頒布スル例ナリトス、而シテ伊勢頒暦ノ由來ハ、戰國ノ比、祭主藤波家ノ奏請ニ由リテ、土御門家ヨリ暦本ノ印刷頒布ヲ允シタルニ由レルナラント云フ、

名稱

〔倭名類聚抄 十三文書具〕暦　漢書律暦志云、黄帝造レ暦、音歴、和名古與美、

〔箋注倭名類聚抄 五文書具〕所レ引文、原書正文不レ載、應劭注有レ之、源君蓋引二應注一也、又續漢書律歴志正文、有二所レ引文一、此或脱二續字一、亦未レ可レ知也、下總本、黄帝下有二臣容成三字一、按、續漢書、漢書注、並無二是字一、蓋

後人依他書所增、非蔵君之舊、廣韻引續漢書律歴志云、黄帝造歴、世本云、容成造歴、續漢書注引博物記云、容成氏造歴、黄帝臣也、背可以見容成造歴、不出續漢書及漢書注、按説文無暦字、古只用歴字、説文、歴過也、傳也、轉明時月過歴之書謂之歴、後俗從日以別經歴字也、昌平本、下總本、有和名二字、本居氏曰、古與美、日數之義、時日之日調加、蓋來經之急呼爲計、轉爲加也、謂數爲讀、

〔日本釋名下文具〕暦　こまかにかきたるをよむなり

〔東雅七器用〕暦コヨミ　吾國の暦、いづれの頃に始れるといふ事さだかならず、またコヨミといふ義も不詳、○中略

古語にコ。と云ひしには詳細の義あり、ヨ。ミとは數をかぞふる事をいひけり、歳月日時を細かにかぞへしるせしものをいふに似たり、

〔倭訓栞前編九古〕こよみ　暦日をいふ、日讀の義、二日三日とかぞへて、其事を考へ見るものなれば、名とせるなり、欽明天皇の時に來る、暦本をこよみのためしとよめり、

〔暦林問答集下〕昔者、河圖書八卦、洛書叙九疇、由此而天數地卦爲用休、則子午卯酉爲四仲、乾坤艮巽爲四維、而陰陽定而禍福驗矣、是故聖人暦數在躬、齊七政於星躔、愼萬機於月令、則與天地合其德、與日月爭其明也、因玆釋顯密超佛之宗、無不用暦家之法、矧乎輔國養民之理、豈非作暦之功、於是自吾鼻祖以降、四百餘載、子々相續、綿々不絶、念玆心神竭、筋力屈、推步之術、惟予勤也、然今所具註者、三墳五典之大道也、始自天地之根元、終至宿曜之吉凶、粗舉八々開、故備一問答所輯錄者、皆諸文之說也、其本則乎周易卦爲六十四段、分上下二卷者象乎二儀、上二十四段者、節氣之定法、下四十段者、五行之成數也、情見陰陽之窮達、五行之妙用、吉非吉、凶非凶、圓轉無窮、如環無端、但近代末葉、皆假名於道、覓利於術之流、寫此暦、以暦爲渉世之資而已、緊豈可以國家重器、類商賈之輕物耶、大概所詮者、雖述而不作、家之口傳、或道之樞要也、烏焉之誤、須招後見之嘲、愼勿出深室、是幸焉、

〔和漢運氣指南後編〕大意

國家人民ノ要用ハ運氣ナリ、運氣ノ業事ハ暦ニ在リ、暦ノ本體ハ天文ナリ、此故ニ運氣ヲ知ラムト欲セバ、先暦象ヲ察スベシ、暦象ト運氣ト無相離、是ヲ天文ト云フ、劉温舒四時氣候ヲ論ズルヲ先トスルコト、是又素問ノ意ナリ、蓋暦ハ黄帝ヨリ興リ、堯舜ニ備ハレリ、夫ヨリ以來歷代ノ造暦甚多シ、往古ノ暦ハ寒暑水旱ノ時ヲ示シ、歳氣ノ陰陽大過不及ノ運ヲ知ラシメ、種耕蠶織採藥ノ時ヲ過ツコトナキガ爲ニス、後世戰國以來、人皆知阿謀計ヲ事トシ、世事紛冗ニシテ、僥倖ノ富榮ヲ求メ、疑惑盛ンナリ、折節陰陽術數ノ徒頻ニ出テ、日月星辰ノ吉凶ヲ語リ、禍福ノ事應ヲ說テ俗ヲ勸シ、事々物々ノ吉凶ヲ撰ムコト專ラナル世ノ慣ヒト成リシナリ、○中略惡日ニ作タル事ノ未遂ザルヲ數ヘテ見ンモ難カルベシト、古人ノ言葉實ニ然リ、人一生ノ間、日ノ吉凶ヲ考驗スト云フ共、一二甲子ノ間ヲ過ルコトナシ、天地開ケシヨリ此カタ、幾千萬甲子ナラン、其中ノ一二甲子ノ考驗ヲ例トシテ、前後千萬甲子ノ吉凶ヲ定メムコト尤不審、然ドモ暦ハ朝廷ノ故實ニシテ、其恆例ニ從ヒ、暦家日ノ吉凶ヲ記ス、禍福ノ應不應ハ不可知トイヘ共、事ニ臨ムデハ暦ヲ開キテ人情ノ疑ヒヲ決定スル世ノ通義ナレバ、日ヲ撰ブコトナキコトアタハズ、雖然和漢ノ暦本ヲ集メテ較考フルニ、日ノ吉凶其用事全ク同キ者寡シ、蓋天地ニハ日ノ吉凶ナク、人ニ憑テ吉凶アリ、此故ニ水土隔タリ、俗同ジカラザル時ハ、其吉凶又同ジカラズ、然ル時ハ此國ノ人ハ此國ノ暦ニ隨ヒ、此吉凶ヲ撰ブベキニヤ、古昔ハ世質ニシテ、暦ノ印判ナキ故ニ、庶民ノ家ニハ暦本モ不有、偶村長ノ家ニ寫暦アレバ、往テ節氣ヲ尋テ、吉凶ヲ問ヒ、或ハ假借シテ書寫セリ、今也世治リ國安ク、土民茅屋ニ至ルマデ、判暦不有ト云處ナシ、誠ニ公恩日々ニ用ヒテ不知、皇澤ノ忝ニアラズヤ、親家ノ童蒙强テ日ヲ撰ブニ、若ハ事ニ害アランコトヲ恐ル、仍テ書シテ暦ノ主

龍集甲午孟春日○應永二十一年　在方○賀茂誌

職司

宜ク知ラシメントナリ、

〔令義解 一 職員〕陰陽寮

頭一人 掌、(中略)暦數、(中略)謂、暦數者、計日月之度數、而造暦授時也、

〔日本風土記 二〕九流 ○中略

無欽天監、造暦日、係陰陽換里由吉、春夏秋冬四季、十二月建、六十甲子、歲月相同、月大月小、間有差訛、是以大隅并前後豐州、薩摩州、與琉球連界、每年得大明暦日、擇選吉凶用事、歲漸通行、遷來大小月分可得正矣、暦日名曰果搭害、命士名曰法盛手、

〔令義解 四 考課〕推歩盈虚、謂、推歩、猶推歩也、推歩位置時期、以爲暦是也、盈虚者、日月行度之盈縮、及晦朔節候之遲速也、窮理精密、爲暦師之最、

暦博士

〔令義解 一 職員〕陰陽寮 ○中略

暦博士一人 掌造暦及教暦生等、

〔職原抄 上〕陰陽寮 ○中略

暦博士、相當從七位上、唐名司暦、或司暦正、暦道任之、近代五位已上任之、

〔日本書紀 十九 欽明〕十四年六月、遣內臣闕名使於百濟、○中略別勅醫博士易博士暦博士等、宜依番上下、今上件色人、正當相代年月、宜付還使相代、　十五年二月、百濟遣下部杆率將軍三貴、上部奈率物部烏等、乞救兵、○中略別奉勅貢、○中略暦博士固德王保孫、

〔將門記〕且成可建王城議、其記文云、王城可建下總國之亭南、兼以㮣橋○㮣橋、今作津橋、號爲京山崎、以相馬郡大井津號爲京大津、便左右大臣、納言、參議、文武百官、六辨、八史、皆以點定、內印、外印、可鑄寸法、古文正字定了、但孤疑者、暦日博士而已、

〔權記〕長保二年九月廿六日庚午、又申、陰陽頭正邦宿禰、今朝所來示、御暦造送之期已過、是彼道中博士未任之由、不進之間、奏進之期漸以近々、若依彼道之懈怠、更蒙其責歟、仍豫所申也、命云、早歸參令

奏此旨、暦博士除目之次可任、然而依日次不宜、于今未被行京官召、今日以後無吉日、仰參入上卿可被任、即參入、令則隆奏、還告云、以此由可仰民部卿藤原朝臣(忠〇[illegible])者、(〇中略)即到陣仰民部卿、民部卿於壁後有召被示、宰相不候、辨官雖非參議候座執筆例也、可候其役、申可被奏行之由、即上卿令則隆奏、暦博士除目、依宰相不候、以右大辨行成朝臣令奉仕、(是先例也、)仰云、依例可行、即上卿就南座、余被召就座、外記奉硯除目書折堺、上卿納之筥(隨召外記令獻筥)給外記、參御所被奏、予猶在座、上卿復座之後揖、起座而退、

〔小右記〕長和四年七月八日乙卯、暦博士守道申請仁統法師相倶可作進暦之由、是故仁宗法師例者、(仁宗與父光榮相倶作進之例也)　九日丙辰、頭中將資平來云、暦博士守道申請文、昨日覽左相府、命云、復任後可申者、

〔新蘆面命〕元祿甲申(〇十七年、即寳永元年、)三月十三日、勘ケ由小路在富卿ハ、信長ヨリ前ノ人也、此人マデニテ、暦博士ハ絕申候、其子孫ハ、備中國ヘ沈落、家無之ニ付、土御門有修ヘ暦被仰付候ナリ、加茂友親モ、モハヤ五代暦被切候、　右ハ土御門殿御狀ニ有之ナリ

〔類聚三代格十五〕太政官符

應定博士職田事

合博士廿人、應給職田七十三町、(内五十二町、外廿一町、〇中略)

暦。博。士。職。田三町

山背國二町(久世郡)

右圖籍注暦博士職田

近江國壹町(野洲郡元位田)

右今改置暦博士職田(〇中略)

暦生

延暦十年二月十八日

〔令義解 職員一〕陰陽寮〇中略

暦生十人 掌習暦

〔延喜式 陰陽 十六〕學生卅人、陰陽生十人、暦生十人、天文生十人、其得業生陰陽三人、暦二人、天文二人、並取生内人、

右得業生、通性聰慧、令專精學、其名申官給衣食、成業年限依令、未成業者不得越入他色、若未終業、其師選外官者、從之終業、

〔令集解 職員 三〕陰陽寮〇中略直丁三人、天平二年三月廿七日、奏陰陽得業生三人、暦得業生二人、並准大學生、

〔續日本紀 聖武 十〕天平二年三月辛亥、太政官奏偁、〇中略陰陽、醫術、及七曜、頒暦等類、國家要道、不得廢闕、但見諸博士、年齒衰老、若不教授、恐致絶業、望仰吉田連宜、大津連首、御立連清道、難波連吉成、山口忌寸田主、私部首石村、志斐連三田次等七人、各取弟子將令習業、其時服食料亦准大學生、其生徒陰陽、醫術各三人、曜暦各二人、〇中略詔並許之、

〔續日本紀 淳仁 二十一〕天平寶字二年八月庚子朔、其大學生〇中略暦算生〇中略廿五已上授位一階、

暦師

〔朝野群載 陰陽道 十五〕請補得業生事

學生正六位上某姓朝臣某名

讀書　長慶宣明暦壹部　開元大衍暦壹部

牒、件某、情操聰敏、勤學匪懈、望請補得業生某姓某名年限之替、將令遂其業、以牒、

保安一年　月　日　暦博士二人連署

〔京都御役所向大概覺書 六〕暦師之事

大經師内匠書付指出候趣左ニ記之

一幸德井宮内大輔者、陰陽助に而暦を考、毎年霜月に暦獻上いたし、勤文其外御用承之候、暦之料

紙者、悉大經師役に而揃遣候、

一宮内住宅南都、御用有之節者、出京いたし候、塔之壇幸神町に屋敷致所持候、知行者三十石被下候由、

一澁川右門は天文者に而、七曜暦考寫本、毎年指出候、寺社奉行衆より、所司代江被遣、宮内内匠江被仰付、板行大經師方に而致候、

一大經師内匠者、暦之寫本、宮内方より請取、板行仕、六月に、江戸、奥州會津、伊豆三島、勢州山田、南都、右五個所暦師江板行之寫、本暦二十一卷、所司代江差上申候、所司代より、寺社奉行衆江被指越候、所司代在府中者、兩奉行所より指下し申候、於江戸、澁川右門江暦爲改、其已後寺社奉行衆より右五所之奉行所江被指越候暦師共江、相渡致板行候、

一大經師板行之暦、毎年霜月に、禁裏、院御所、關東江、致獻上候、御所方下部迄、暦遣申候、且又御所方御殿之障子張替役、年中相務申候、

一内匠知行高、十壹石二斗餘被下置、諸役御免許、前々者、綸旨頂戴、所司代下知狀相渡り候得共、親内匠より不相渡候由、

〔府内備考 十三 淺草〕頒暦調所 又測量所と云○中略

諸國暦師及賣暦人左のごとし 日本國中暦板行五十種あり

伊勢内宮暦師 大板小板壹面宛所持、　佐藤伊織

同外宮暦師　飛鳥帶刀

外宮拾四人、各小板壹面宛、大板は三面之板名字入替相用、内一統折暦、右校合暦三十卷、山田奉行より來、不殘賦暦にて、賣暦にては是なし、○以下十三人姓名略

伊勢丹生 折暦一面、校合暦、紀州御城町より、　暦師　賀茂杉大夫

三島〈暦一冊、校合暦、宮人出府差出、〉　暦師　河合龍節

會津諏訪宮大祝部　近江守従五位下神人方親

同　佐久祝　上總介従五位下神人方廣

同　祝　笠原幸之丞勝滿

右綴暦一面宛各賦暦

尾張方板　賣暦　菊地庄左衛門

右校合暦四冬、會津留守居持參、

會津に限り、寫本暦も留守居呼出相渡、

南都行暦　陰陽師　中尾主膳

三面綴暦ニ面賦暦　山村左門

藤木左門

小板賣暦壹面宛　中尾主膳

山村左門

右五冬校合暦、奈良奉行より來、外異暦壹通、

京都大經師〈巻暦、大小綴貳冊、賣暦六通、〉　蜂屋内匠

同院經師〈賣暦大綴二冊、小板壹面、賣暦、〉　菊澤藤藏

右校合暦五冬、京都町奉行より來、

江戸暦問屋拾壹軒　鶴屋喜右衛門

江戸暦問屋共折暦壹面、綴暦大小二面所持、名前入レ賣暦す、尤賣出之事は、天文方に而申渡有之、〇〈以下十人姓名略〉

暦本傳來

右校合暦、都合四拾九卷、

〔日本書紀 十九欽明〕十四年六月、遣内臣闕名使於百濟、〇中略卜書暦本種々藥物可付送、

〔日本書紀 二十二推古〕十年十月、百濟僧觀勒來之、仍貢暦本及天文地理書、并遁甲方術之書也、

〔濫觴抄 上〕天文地理

推古天皇十年壬戌十月、百濟國僧觀勒來貢暦本、天文、地理遁甲、方術之書、或曰庚申年云々、具在上、年記相違可勘之、

始用暦日

〔伊呂波字類抄 古雜物〕暦 本朝事始云、推古天皇十二年甲子正月戊戌〇戊戌、原作戊申、據日本書紀改朔、用暦日、

〔政事要略 二十五年中行事〕同日〇十一月一日中務省奏御暦事〇中略

儒傳云、以小治田朝〇推古十二年歲次甲子正月戊戌〇戊戌、原作戊申、據日本書紀改、朔、始用暦日、右官史記云、太上天皇持統元年正月、頒暦諸司、

〔日本長暦 序〕我國神代伊弉諾尊、測日之三天、雖考春秋定歲時、其詳不可得而聞矣、神武天皇建正、始用三陽之月、序歲時月日、崇神天皇以遠荒之人猶不受正朔、遣將軍平之、王者之重正朔也可以見焉、推古天皇之時、雖曰百濟國貢暦本、不知何書也、持統天皇四年、有勅始用元嘉儀鳳二暦也、

〔暦法新書 十五〕倭漢古今歷代暦譜 上

古暦之法不可不知焉、歷代取捨豈可不考乎、新舊互有得失、倭漢素有里差、測量之實、推步之權、共無逸於此矣、謹案、太昊伏羲氏以木德王於天下、作甲暦定歲時、暦法自是起矣、本邦太古有三大暦法、其法、表象三儞以測日之三天、考春秋定歲月、神武天皇建正用人統、崇神天皇有夷狄不受正朔者、遣將軍征之、推古天皇時、百濟國貢暦書、由是觀之、本邦自古有暦法、以重正朔既顯然、然其書不傳、其術無可考矣、〇中略

〔暦法新書十五〕三天暦

國史曰、陽神左旋、陰神右旋、分巡國柱、同會一面、〇土御門泰邦臣謹案、國柱者卽地也、太陽常左旋、大陰常右行會一面、則合朔之理可知也、又曰、表筒男命、中筒男命、底筒男命、臣謹案、表上也、夏至之日道、中平分也、春秋二分之日道、底下也、冬至之日道、故先儒謂之日道三天也、筒者圓々之義、男者盛陽之稱也、暦家之法、據二至二分、則其餘從而自正矣、關之則三天三道、約之則一天一日、包羅六合、照映萬物、夫萬世之暦法、無不本於愛而已、

〔眞暦考〕そも〳〵上の件のごと、事のはじめなども、きはやかにはあらず、月次も日次もなく、又かの天の月による月は有しかども、別事にてありつるなど、すべて事たらはぬに似たれ共、然思ふは、よろづこまやかにこちたきをよきにする、後の世の心にこそあれ、上つ代は、人の心も何もたゞひろく大らかになむ有ければ、さて事はたり、〇註略またかの空なる月による月と、年の來經とをまひてひとつに合すわざなどもなくて、たゞ天地のあるがまゝにてなむ有ける、此二方を、暦に一つに合せたるは、いと宜しきに似たれども、まことは天地のありかたにはあらず、もしまか一つなるべきことわりなりせば、もとよりおのづからひとつなるべきに、さはあらで、おくれさきだち行たがふは、必別事にて有ぬべきことわりあることなるべし、〇中略

これぞこの天地のはじめの時に、皇祖神の造らして、萬の國に授けおき給へる天地のおのづからの暦にして、もろこしの國などのごと、人の巧みて作れるにあらざれば、八百萬千萬年を經ゆけども、いさゝかもたがふふしなく、あらたむるいたづきもなき、たふときめでたき眞の暦には有ける、

〔比古婆衣一〕日本紀年暦考

異曆考に、○中略もろこしの國のこよみの皇國に渡り來つるは、まづ師木島宮の御世欽明の十四年に、曆博士また曆本をたてまつれと百濟國に勅ありて、同十五年に、曆博士固德王保孫といへる人まうで來つる事見えたり、これや始なりけむ、されどいまだ世には行はれざりしを、又小治田宮推古の御世の十年に、百濟の僧觀勒といふがまうで來て曆本を獻りしを、陽胡史の祖玉陳といふ人、この僧に曆法をならひて、事なれりとは見えたれども、此時もまさしくこれを用ひて、世におこなひはじめ給へりし事は見えず、政事要略に、此御世の十二年正月朔より始て、曆日を用ひ給ひしよし見えたり、さもあるべしといはれたり、これにつきてなほ考ふるに、件の欽明紀十四年の度には、六月遣內臣使於百濟云々、別勅醫博士、易博士、曆博士等宜依番上下、今上件色人正當相代、年月宜付還使相代、又卜書、曆本、種々藥物可上送とみえたるをよくおもふに、はやく神功皇后の韓國を征給ひ、其國の御政せさせ給ふにあはせては、かの國にて用ふる文字をも朝廷にて知食し、彼が奉れる書どもを讀しめ給ひ、またこなたよりも詔詞書せて賜ふべく、又上古よりありこしまゝにて、神ながらなるおほらかなる御政のみにては、新しく臣服來れるこちたき韓國人を治め給ふ御政には、備はらぬかたもありぬべきを、さらに其韓人の情を知召して治め給はむには、便よきかたもあるべく、又かの國より奏せる事などをも記しおかしめ給ふべく、そのほかよろづに便よかるべければ、その文字の義をもこなたにて知召し、なべて便よからむかたには、こなたの事にかけても、かつ〲用ひさせ給ひたるべく、この文字の皇國にうつり來り、其を普く世に用ふる事となり、つひにもろこし籍を召上げて、其國風の事を學びとらせ給ひつる趣の本末の考は、中外經緯傳に論へり、またかの國にて用ひ來れる年月日次の定を知召さずては、八十艘の調貢船の往還などを正さるべき便よろしかるまじく、はたこなたにてもさる定あらむに、かれとこなたとしるしあはするに便よきわざなれば、かた〲かの國にて用ふる曆の、一年一月の日數の定などを、年々に召

上て用ひ給ひたりしなるべし、（もろこしにて外の国々を服けなどして、おのが国の暦を授け用ひさせて、其を正朔を授くなどいひて、わが臣国なりと誇ひて、われたけく誇りなるとは、いたくしな継にて、そのかみ皇国にしては、ことに暦といふべき事なしたゞめて用ひ給へることはあらず、おのづから其定ありて、よろづにたゞひたりつれど、から国を治め給ふとして、かの国にて用ひ居れる正朔を数らしめて、取用ひ給ひたりしことわりなり、）さてその欽明天皇の御世におよびては、その暦をまたく用ひ給はむとして、其道の博士を召上て、常に交替仕奉るべく詔ひつけ給ひ、暦法の書をも奉らしめ、其趣を聞召し、臣たちの中をゑらびてかつ〴〵學ばせ給ひたりしなるべし、かくて（敏達天皇、用明天皇、崇峻天皇の御世を歴て、）推古天皇の御世におよびて、紀に、十年冬十月、百濟僧觀勒來之、仍貢暦本及天文地理書云云、書生、是時云云、陽胡史祖玉陳習暦法、大友村主高聰學天文遁甲、云云、皆學以成業とみえたり、かくて同十二年より其暦を用ひ給ひ、始て天下に頒行はせ給ひたりしなり、其は政事要略廿五巻に、儒傳云、以小治田朝十二年歳次甲子正月戊戌朔、始用暦日、（伊呂波字類抄に引載たる本朝事始にも如此いへり、）とみえたる是なり、書紀には、是日に始賜冠位於諸臣各有差と見えて、始用暦日の事みえず、かゝる重事を記洩さるべきにはあらざめるを、既く寫脱せる本の、今の世に傳はれるものなるべし、（さて又今も法隆寺に在る釋迦佛光背銘文に、法興元世一年、歳次辛巳十二月云云、明年二月廿一日癸酉云云、とある辛巳年は、推古天皇二十九年に當り、また下文に癸未年三月中、如願敬造釋迦尊像、と記せる癸未年は、同三十一年に當りて、此像を造りて、すなはち顯したる文なり、かの始て暦日を用ひ給へる十二年より、二十年の後に當れり、そのかみ既に暦日を用ひ給ひ、年にも日にも干支を書て行ひ給ひたりし證とすべし、又伊豫風土記に載たる大分遠見湯の碑文に、法興六年歳在丙辰とみえたるは、同天皇の四年に當れば、此は暦日を用始め給へる十二年より十二年前なれど、此は後に定めたまへる暦日を用せて作るものとすべし、さていはゆる法興は年號ながら、後の御世のとは異數同じからず、すべて上古の年號年立の事は、長朝山鳳の朝始年號論の中にいへり、互に書合すべし、）其のち持統天皇の御世におよびて、（政事要略に、昔官史記云、太上天皇（持統）元年正月頒暦、略同、とみえたるは、前の頒暦の例の外に、別に暦年ごとに暦を頒ち賜ふ事を始給へる由なるべし、この事書紀には見えず、さて此官史記は、持統天皇の御世の事を、太上天皇元年と記せるをおもへば、文武天皇の御世の事を、大史の記せるなるべし、）紀に、四年（庚寅）十一月甲申、勅始行元嘉暦與儀鳳暦とみえたり、（中根元圭の皇和通暦に、持統の御暦を推算して、この御世の四年より、元嘉暦を用ひ給ひ、文武天皇元年より、儀鳳暦を用ひ給ひしものなりといへり、此元圭といへるは、暦道に熟れて精しき人ときこゆれば、さだめて驗ることなりしなるべし、）かくて皇和通暦に、持統天皇遡至神武天皇、

歳月支干、昭然可見、而推諸異邦諸暦、率多牴牾、伏稽、崇神天皇時、遠荒不奉正朔、遣六師討之、載有明文、則知吾邦神聖開基、自有若天授民之敎焉、世多憾歴古杳邈湮滅不傳也、今特因史籍支干朔望之所在、推而求之、則其法具存矣、蓋千三百有餘年間三更斗憲、神武天皇東征甲寅以至仁德天皇十年壬午、凡九百八十九年、一法今號曰上古暦、同十一年癸未以至皇極天皇元年壬寅、凡三百二十年、一法今號曰中古暦、同二年癸卯以至持統天皇五年辛卯、凡四十九年、一法今號曰晩古暦といひて、持統天皇以前不知用何暦、則又不知用何建といへり、此考説の中に、晩古暦を至持統天皇五年辛卯といへるは意得がたし、さるは四年庚寅の十一月に、甫始行云云暦とみえたるは、改暦せさせ給ふ詔にて、翌る五年正月より其暦を頒行ひ給ひたりしなるべければ、至四年庚寅、凡四十八年と書べきを、ふと書誤りたりとみゆ、又いはゆる上古、中古、晩古の三暦を、神聖開基若天授民之敎といへるは、そのかみの國史を熟く讀て、世のさまを稽へわきまへざりつるが故に、暦法の異なるに惑ひ、書紀の崇神天皇の御世に、遠荒不奉正朔、と記されたる、此紀の例の漢文の潤飾の正朔の語に泥めるにて、かたはらいたき説なり、さてこの推算暦法によりて、今おのれが考に當て推考ふるに、おほよそ神功皇后の御世のころより、そのかみ韓國にては、やくよりもろこしざまの暦を用ひたりとは決く聞ゆれど、その國にてさらに作れるにか、又もろこしより得て用ひたるにか、神功皇后の御世のはじめつかたは、もろこしは後漢の獻帝が世のころにて、はやく夏の定めの如く、今の正月を正月として在こしなり、仁德天皇の十年壬午まで、百濟の暦日を用ひ給ひ、そのほど其國人などに命せて、其暦法によりて上世に遡て年紀を製らしめ置て、さて韓國御征のはじめより、御政にむづかることゞもをもはら記さしめ給ひ、又上古より語繼來れる古事をもかつがつ記さしめ給ひたりしなるべし、これまでいはゆる上古暦の間なり、かくて仁德十一年癸未よりは、もろこしは、西晉の明帝が世に當れり、かの國にて改たりけむ暦日を用ひ給へるほど、上にも論へる如く、欽明天皇の御世におよびて、百濟より暦博士をめさせて、其趣をきこしめし、その暦法を習はし試みて、こなたにて暦本作らしめ給んとせさせ給ひたりけんが、業ならでやみたりしに、推古天皇の御世の十年に、さらに玉陳に命せて、百濟僧觀勒に暦法を習はしめ給ひ、業成てければ、始てその暦本を作らしめ給ひ、十二年甲子より天下に頒行し給ひ、いはゆる中古暦なり、是年もろこしは、隋の文帝が世仁壽四年にて元嘉暦を用ひ

改暦

たりけむを、元まが考に、其暦法ならずといへて、そのかみ百済の改法なりしなるべし、又皇極天皇二年癸卯より暦法を改め給ひ、いはゆる晩古暦なり、但しこれも又百済改暦の法なりしか、又はこなたにて改めさせ給へるか、考ふべき由なし、もろこしには唐の太宗が世の貞観十七年にて、なほ元嘉暦を用ひたりけむ、持統天皇五年より元嘉暦を用ひ給ひ、元嘉は劉宋の文帝が世の年號なり、允恭天皇の御世に當れり、文武天皇元年より儀鳳暦を用ひたりしなり、儀鳳は唐の高宗が世の年號にて、天武天皇の御世に當れり、さて此後の改暦の事もくはしく暦に記したれど、こゝにはいたづらなれば云はず、

〔天朝無窮暦〕二此卷闕策、自前卷神武天皇東征甲寅歳、至此卷末孝安天皇四十一年十月、三百十六年間、先天暦也、是以後、用後天之闕策、

神武天皇元辛酉年				
正小　壬寅　庚辰　寅三	雨水　丙戌　申初　七日	朱書　正月庚辰朔	七小　戊申　丁丑　辰五	處暑　己丑　卯初　十三日
二大　癸卯　己酉　申六	春分　丁巳　丑三　九日		八大　己酉　丙午　戌八	秋分　庚申　申七　十五日
三小　甲辰　己卯　卯初	穀雨　丁亥　午五　九日		九小　庚戌　丙子　巳二	霜降　庚寅　寅初　十五日
四大　乙巳　戊申　酉四	小滿　戊午　亥七　十一日		十大　辛亥　乙巳　亥五	小雪　辛酉　未三　十七日
五小　丙午　戊寅　卯七	夏至　戊子　巳初　十一日		十一小　壬子　乙亥　巳八	冬至　辛卯　子五　十七日
六大　丁未　丁未　戌二	大暑　己未　戌三　十三日		十二大　癸丑　甲辰　子三	大寒　辛酉　巳七　十八日

〔自娯集七〕授時暦贊解序 中略○

本朝天武帝以前、未知用何暦、持統帝四年、始用元嘉暦、後用儀鳳暦、廢帝仁〇淳改儀鳳暦、而用大衍暦、文徳帝用五紀暦、清和帝貞觀三年、停大衍暦、而用宣明暦、宣明暦之行於本邦、因循久矣、迄乎貞享元年、既歷八百二十三年、其差忒寖甚矣、幸今逢憲明之時、奮有詔改暦、順大統暦之法、而微損益之、造貞

亨暦、以立一代之法、天下家誦戸行、豈非盛事乎、

〔舊唐書三十二暦一〕高祖受隋禪、傅仁均首陳七事、言戊寅歳時正得上元之首、宜定新暦以符禪代、繇是造戊寅暦、祖孝孫李淳風立理駁之、仁均條答甚詳、故法行於貞觀之世、高宗時、太史奏舊暦加時寖差、宜有改定、乃詔李淳風造麟德暦、初隋末劉焯造皇極暦、其道不行、淳風約之爲法、時稱精密、天后時、瞿曇羅造光宅暦、中宗時、南宮説造景龍暦、皆舊法之所棄者、復取用之、徒云革易、寧造深微、尋亦不行、開元中、僧一行精諸家暦法、言麟德暦行用既久、晷緯漸差、宰相張説言之、玄宗召見、令造新暦、遂與星官梁令瓚先造黄道游儀圖、考校七曜行度、準周易大衍之數、別成一法、行用垂五十年、肅宗時、韓穎造至德暦、代宗時、郭獻之造五紀暦、德宗時、徐承嗣造正元暦、憲宗時、徐昂造觀象暦、其法今存、而无計蔀章之數、或異前經、而察斂啓閉之期、何殊舊法、至論徵驗、罕及研精、綿代流行、示存經法耳、前史取傅仁均李淳風南宮説一行四家暦經、爲暦志四卷、近代精數者、皆以淳風一行之法、歴千古而無差、後人更之、要立異耳、無踰其精密也、

〔和漢運氣指南後編〕本朝用暦付改暦事

日本往古何レノ暦法ナリシコト未詳、唐土モ漢朝以前ノ暦ハ不詳、漢太初暦法、粗史記漢書ニ志セルヨリ聯綿トシテ不絶、本朝應神帝ノ御宇、儒書初メテ朝ニ入テ漢字ニ通ゼリ、此ノ時既ニ用暦ナクンバアルベカラズ、按ズルニ漢暦ヲ用ヒラレシナランカ、四十一代持統天皇ノ御時、南宋ノ元嘉暦ヲ用ヒラレタリ、聖武天皇ノ御時唐ノ儀鳳暦行レ、廢帝天皇ノ御時、唐ノ一行禪師ノ大衍暦用ラレ、清和天皇ノ御代、唐ノ徐昂ガ造レル宣明暦ヲ用ヒ給ヒシヨリ以來、貞享元年甲子ニ至ツテ、皇家六十七世ヲ經テ、八百貳拾五年ニ及ブマデ、終ニ改暦ノ事ナカリシ、唐土ニ於テハ宣明暦ノ後崇玄、欽天、應天ノ數暦、其外改暦代トシテ無之ハナシ、皆其暦久シキ時ハ、天ト暦ト差フ事アリテナリ、蓋造暦當時ノ天度ニ密合ストイヘ共、天行不盡ノ差アルニ依テ、年ヲ積コト久シ

キトキハ、遁曆差ナキコト不能、此故ニ宣明曆今時ノ天度ニ後ル丶コト、當曆ニ較ルニ氣節二日餘後レ、合朔或ハ一日ノ違ヒアリシ、是ニ依テカ朝廷曆家ニ勅アリテ、貞享二年宣明曆ヲ止メテ今曆ヲ行ハル、貞享曆ト號ス、今清朝ノ時憲曆ニ較ベ考フルニ、朔望ハ凡違ヒナシトイヘ共、清曆ノ氣節、冬至後ハ和曆ニ先ダツコト一日、或ハ二日、夏至後ハ和曆ニ後ル丶コト一日、又ハ二日ナリ、此故ニ閏月又一二月ノ先後アリ、此兩曆孰カ正法ナルコト未知、曆世ノ後ニ於テ天度ニ差フコト少キヲ以テ善曆トスベシ、豫メ是非ヲ論ズルニ詮ナシ、

〔蒼梧隨筆六〕本朝曆法沿革之事

抑本朝曆法の起原は、推古天皇の御時、百濟國僧觀勒始貢曆術云こと、三代實錄に見へたり、日本紀不見又政事要略曰、以小墾田朝十三年歲次甲子正月戊申朔始用曆日云々、

按、此時百濟國僧觀勒曆日のことを貢せしと云のみにて、測量曆法の事、且本朝にてその曆法を習學せし人〻のこと不詳、以來文武天皇の朝に至まで、曆日のこと所見なし、されば唯曆日をもちひら。たることのみとみへたり、

四十一代持統天皇四年十二月甲申、奉勅始行元嘉曆與儀鳳曆云々、

是時より至廢帝天皇天平寶字七年、其年間凡七十二ケ年の間、此二曆の法を用ひられたるなり、元嘉曆は、宋文帝元嘉年中、何承天作適之、儀鳳曆は、諸史傳に曆名不詳、若しくは唐高宗儀鳳年中に、唐朝より傳來するものか、朝にては二法ならべ用ひらるゝなり、

廢帝天皇天平寶字七年八月、停元嘉曆與儀鳳曆、而用開元大衍曆、

是時より至清和天皇貞觀二年、其年間凡九十八ケ年なり、大衍曆は唐玄宗開元年中、詔僧一行令作之、本朝にては、

文德天皇齊衡三年、有五紀曆之法、而與大衍曆併行也、

是時より至清和天皇貞觀二年、其年間凡六ヶ年なり、五紀暦は唐代宗詔郭獻之等令作之、本朝にては、寶龜十一年に、遣唐使錄事故從五位下行内藥正羽栗臣翼貢寶應五紀暦と云へり、

清和天皇貞觀三年六月十六日、停大衍暦及五紀暦、用長慶宣明暦矣、

是時より至靈元天皇貞享元年、其年間凡八百有二十四年なり、二十四年、一本二十三年とす、宣明暦は、唐穆宗の長慶年中詔徐昻令作之、本朝にては、貞觀元年、渤海國大使馬孝愼新貢長慶宣明暦、大春日朝臣眞野麻呂試加覆勘、理當固然、仍以新暦比校、大衍暦五紀暦等兩經、且察天文、且參時候、兩經術漸以麤疏、令朔節氣候既有差云々、此奏によりて暦法改まりたるなり、

百十三代靈元天皇貞享元年、停長慶宣明暦、而用貞享暦、

是時より至桃園天皇寶暦四年、其年間凡七十一ヶ年なり、貞享暦は元の授時暦法と、明の大統暦法合せ考へて、本朝の算學者保井算哲作進之、元の授時暦本朝へ間の仇ありて渡來、故ありて明到來なしと云へり、大統暦は明の高帝洪武年中詔元統造之、

桃園天皇寶暦四年十一月、停貞享暦而用寶暦甲戌元暦矣、

是時より至今年寛政九年十一月、其年間凡四十四年なり、甲戌元暦者、靈元天皇の詔を蒙て、土御門陰陽頭安部泰邦卿、算學士等を會し集て作進あり、實本朝測量の術法なり、

百廿代今上天皇格○光寛政九年十一月、停寶暦甲戌元暦、而明年正月より新暦法の改暦頒行るゝの事公命あり、

今年より以往萬々年

改暦法のこと、元嘉暦儀鳳暦に起て、及今年凡六ヶ度なり、其暦法の名義は凡八ヶ數なり、今是を提見せしめん爲に、左に其名目を注す、

持統天皇の朝、四年十一月より、

元嘉暦
儀鳳暦　二法兼用らる
廢帝天皇の朝、天平寶字七年八月より、
大衍暦
文德天皇の朝、齊衡三年、
五紀暦　併せ用ひらる、但五紀暦の法は小に六ヶ年なり、
清和天皇の朝、貞觀三年六月より、
長慶宣命暦
貞享暦
靈元天皇の朝、貞享元年、
桃園天皇の朝、寶暦四年十一月より
寶暦甲戌元暦
今上、寛政九年十一月より、
新暦法

以上

寛政九年十一月廿一日　橘嘉樹

〔府內備考十三淺草〕頒暦調所又測量所と云

按に、本朝にて暦を造らしめられしは、古代よりの事なれど、古くは皆唐國の暦法を用られしなり、本朝の暦法行はれしは、安井算哲今の澁川助左衛門が先祖なり、元は碁所にて安井算哲といひしが、後暦學に依て登庸せられ、祿三百俵を賜はり、その後氏名を改めて澁川助左衛門と稱す、が撰びし貞享暦を始とす、其後六十餘年を歷て、佐々木文次郎と云者、今の吉田勇太

元嘉暦儀鳳暦

耶が先祖なり、後年氏を吉田と改む、暦法に達せるを以て、召出されて改暦をなすもの寶暦暦也、その後又四十四年にして、改暦ありしより、其術最密を極めて、天度の違なきに至るといへり、寛政改暦の時は、高橋作左衞門今の作左衞門の父なりを登庸ありて、是を司らしめらるといへり、

〔日本書紀三十持統〕四年十一月甲申、奉勅始行元嘉暦與儀鳳暦、

〔暦法新書十五〕元嘉儀鳳暦○中略

臣謹按、○中略蓋元嘉暦者、劉宋元嘉二十年何承天所造、而日法七百五十二、其術與古暦大率無異矣、儀鳳暦者、唐高宗時、太史李淳風所造、而日法一千三百四十、其術大異於古暦、而不用蔀章元紀之數、定四大三小之法、與元嘉暦懸隔、又一起氣於雨水、一求數於冬至、彼有朔元之弊、此無歲差之法、如斯兩暦之術已齟齬、况二暦相去二百三十餘年者乎、何便可兼用焉、由是推之、則二暦不同行必矣、疑四年行元嘉、六年行儀鳳者歟、

〔天朝無窮暦六〕神武天皇東征七箇年の紀年を初として、次々二三四五の卷々を經て、是六卷持統天皇十一年といふ丁酉歲まで、一千三百六十四年にて、日本書紀に載させ給へる紀年暦日、みな擧げ盡せるに就て、こゝに論ひ結むべき事なむ有る、そは右天皇四年庚寅歲の紀文に、十一月甲戌朔甲申、奉勅始行元嘉暦與儀鳳暦と有るは、元嘉にまれ、儀鳳にまれ、一暦を純用せず、二暦を相兼ねて用ふる由なり、下に出す淸和天皇紀なる大春日朝臣眞野麻呂の上言に、齊衡三年に大衍暦と五紀暦とを相兼用ひて、偏用せざれと詔ひ出たるよし見えたるは、此を先例となし給へるにぞ有るべき、さて紀文に、斯の如く四年の十一月より、右の二暦を行ふとは有れど、こは實には然らず、其は上第三十一葉の表、天武天皇十一年の所に、標記せる如く、是年の六月壬戌朔より、子初刻に起る策を用給へるが、持統天皇六年といふ壬辰歲の十月まで、百二十九月の間なる朔、御紀に百二十出たると、盡に符合せり、また此百二十九月の中に、四閏月あるに、是また一ツも違はざれば、氣朔もまた符合せるなり、然て此次第に推下れば、此天皇六年といふ年の十一月は小にて、壬辰朔なるに、

御紀に、九月癸巳朔、十月壬戌朔、十一月辛卯朔とあれば、九月十月は朔の干支こそ古暦と合へ、連小の月なるは、後暦の法にて、古暦に都て無き事なれば、紀文の四年は、六年の誤かとも思はるれば、此は姑くさし措て、其十二月より同十一年丁酉歳の閏十二月まで、六十三月を比校するに、御紀に、此朔五十七出たる中に、十年丙申歳の十二月と、十一年丁酉歳の四月と、たゞ二朔合ざる耳にて、其餘五十五朔みな符合せり、故其五十七朔を元嘉暦と比校するに、六年の十一月、十年の十二月、十一年の四月、八月と、凡て四朔合はず、儀鳳暦と比校すれば、六年の三月、五月、九月、七年の十二月、八年の五月、九年の七月、八月、十年の三月、五月、十月、十一年の二月、六月と、都て十二朔合はず、此元嘉儀鳳二暦の比校は、既く中根璋が皇和通暦に比校せるに依て云なり、故考ふるに、御紀に、四年十一月より始行ふと有れど、此は澁川氏の長暦に、其六年の所に、右の紀文を引きて、五年之支干、皆據古暦、是歳九月、十月、比月小始于此と云る如く、四年十一月にまか罷ひ出ては有つれど、五年を經て、六年九月までは、其二暦を用ひず、仍古暦を用ひしことゝ論ひなし、然るを皇和通暦に、右御紀の全文を引つゝ、其四年と五年とをおきて、六年壬辰歳より以下を論じたるは、麁略なる事なり、斯て此六年と云ふ壬辰歳に至りて、實に始めて二暦の法を用ひて、九月の朔より小なるに、十月をも小と爲して、比月の小を始め、十一月は小壬辰朔なるを、大辛卯に改め給へり、然れど其はたゞ是十一月のみこそ有れ、其十二月大辛酉朔よりして、復元の古暦の儘にて、十年と云ふ丙申歳の十一月小己亥朔まで四十九月、連大の所在も、何も古暦なれば、此四年の間も、かの二暦法を用ひられざること炳焉なり、澁川翁の長暦に、自六年用儀鳳暦と云へるを、通暦に論ひて、源春海以爲、壬辰以下天平寶字七年癸卯、凡七十二年、用儀鳳暦とて、其說を斥せるは、然る事なれど、三代實錄なる、眞野麻呂の言に、始用元嘉暦、次用儀鳳暦とあるに據りて、此六年の閒、元嘉暦を用ひ給へりと爲たるに、攷究なほ委からず、其は次に云ふを見て知べし、然て此丙申歳の十二月は、大戊辰朔なるを、小己巳朔となし、丁酉歳の正月小戊戌朔と比べて、連小となし、二月三月は連大なるを、大小と爲して、四月小丁卯朔なるを、大丙寅朔となし、八月乙丑朔は古暦と合へど、此は書紀こそ有れ、續紀に

大衍曆

は八月甲子朔とあり、然れば七月八月また連小なり、かく打合せて攷ふれば、其十年といふ丙申歳の十一月より、古曆を廢して、再更にかの二曆をかね用ひ給へるなり、故是を以て、此丁酉歳ごろの御紀なる曆日は、元嘉にても、儀鳳にても、全くは合ひ難くぞ有ける、然るを皇和通曆に、按此丁酉如從二元嘉一、則四月八月十二月之朔不レ合、且閏在二十月一、從二儀鳳一、則唯二月六月之朔不レ合耳、故今斷以二丁酉一、爲レ用二儀鳳曆一之始上、其國史之有レ所レ不レ與二曆法一相合上者、蓋緣二當時司曆失算一焉耳と云へるは、信がたし、其は此比校にても、元嘉にて合ざるが、儀鳳に合ひ、儀鳳にて合ざるが、元嘉に合ふを以ても、兼用せること著明なり、唯そが中に、儀鳳を專と取りて、元嘉を次に爲たらむと思はるゝ事ども多かり、斯て此より年經て、いつと無く、元嘉曆を兼用ふる事を停めて、儀鳳曆のみ純用ひられし故に、天平寶字七年の紀文に、廢二儀鳳曆一とのみ見えて、元嘉曆の事は無きなり、扨是より後は、皇朝固有の古曆をば、一向に廢果まして、次々に異邦の諸曆を用ひ給ふ事と成ぬ、

〔續日本紀淳仁二十四〕天平寶字七年八月戊子、廢二儀鳳曆一用二大。衍。曆。一、

〔年中行事秘抄十一月〕一日

奏二御曆一事〇中略

天平寶字七年、眞野麿祖父船主造二進四種曆一以降、交蝕合レ度、時候不レ忒、國家須用、于レ今相續、

〔曆法新書十五〕大衍曆

唐玄宗開元十六年、僧。一。行。造。之、推二大衍數一立レ術以應レ之、較二經史所レ書、氣朔日名宿度可レ考者皆合、十五年草成、而一行卒、詔二特進張說一與二曆官陳玄景等一、次爲二曆術七篇、略例一篇、曆議十篇一、玄宗顧二訪者一則稱二制旨一、明年說表上レ之、越十七年頒二于有司一、時善算瞿曇譔者、怨レ不レ得レ預二改曆事一、二十一年與二玄景一奏二大衍曆、九執曆一、其術未レ盡、太子右司衛、率南宮說亦非レ之、詔二侍御史李麟太史令桓執圭、較二靈臺候簿一、大衍十得二七八一、麟德纔三四、九執一二焉、乃罪二說等一而是否決、自二太初一至二麟德一、曆有二二十三家一、與レ天雖レ近而未レ密也、至二一。行。一。密矣、其倚數立法固無二以易一也、後世雖レ有二改作者一依倣而已、故詳錄レ之、略例所以明二述作本旨一也、曆議所二以考二古今得失一也、其說皆足二以爲二將來折衷一、先レ是雖レ有二麟德經緯曆一、則天聖

暦、光宅暦、神龍乙巳暦、而皆不行、又玄宗開元六年、以西域九執暦、令太史監瞿曇悉達翻譯之、故有大衍參九執之說、開元大衍暦演紀上元閼逢困敦之歲、距開元十二年甲子、積九千六百九十六萬一千七百四十、算一日步中朔術通法三千四十、策實百一十一萬三百四十三、揲法八萬九千七百七十三、減法九萬一千二百、策餘萬五千九百四十三、用差萬七千一百二十四、卦限八萬七千一十八三、元之策十五餘六百六十四秒七四、象之策二十九餘千六百二十三、中盈分千三百二十八秒十四、朔虛分千四百二十七、象統二十四行、三十四年而先於五紀暦十二刻也、

〔唐書百九十一方伎列傳〕僧一行、姓張氏、先名遂、魏州昌樂人、襄州都督郯國公公謹之孫也、父擅武功令、一行少聰敏、博覽經史、尤精暦象陰陽五行之學、時道士尹崇、博學先達、素多墳籍、一行詣崇借揚雄太玄經、將歸讀之、數日復詣崇還其書、崇曰、此書意指稍深、吾尋之積年、尚不能曉、吾子試更研求、何遽見還也、一行曰、究其義矣、因出所撰大衍玄圖及義決一卷以示崇、崇大驚、因與一行談其奧賾、甚嗟伏之、謂人曰、此後生顏子也、一行由是大知名、武三思慕其學行、就請與結交、一行逃匿以避之、尋出家爲僧、隱於嵩山、師事沙門普寂、睿宗卽位、勅東都留守韋安石以禮徵、一行固辭以疾不應命、後步往荊州當陽山、依沙門悟眞以習梵律、○中略一行尤明著述、○中略時麟德暦經推步漸疏、勅一行考前代諸家暦法、改造新暦、又令率府長史梁令瓚等與工人創造黃道游儀、以考七曜行度、互相證明、於是一行推周易大衍之數、立衍以應之、故撰開元大衍暦經、至十五年○開元卒、年四十五、

〔文德實錄八〕天安元年四年[illegible]正月丙辰、十七日○先是暦博士大春日朝臣眞野麻呂上請以開元大衍暦經、造暦年久、而今檢大唐開成四年大中三年兩年暦、注月大小頗有相發、覆審其由、依五紀暦經造之、望請依件經術將造進、今日仍許之、眞野麻呂暦術獨步、能襲祖業、相傳此道、于今五世也、

〔暦法新書十五〕五紀暦

三代實錄眞野麻呂奏言曰、寶龜十一年遣唐使錄事故從五位下行內藥正羽栗臣翼貢寶應五紀

暦經云、大唐今停大衍暦、唯用此經、天應元年有勅、令據彼經造暦日、無人習學、不得傳業、猶用大衍暦經、已及百年、眞野麻呂去齊衡三年申請、用彼五紀暦、朝廷議云、國家據大衍經造暦日尚矣、去聖已遠、義貴兩存、宜暫相兼、不得偏用、由是撿之、五紀在須行列可知也、臣○土御門泰邦按、自上元甲子距今年積年二十七萬九百七十、日法一千三百四十、自文德天皇齊衡三年丙子至貞觀四年壬午、與大衍暦兼行七年也、

〔暦法新書十五〕五紀暦

唐肅宗寶應元年壬寅、司天臺官屬郭獻造之、○中略臣按、唐書暦志曰、唐終始二百九十餘年而暦八改、初曰戊寅元暦、曰麟德甲子元暦、曰開元大衍暦、曰寶應五紀暦、曰建中正元暦、曰元和觀象暦、曰長慶宣明暦、曰景福崇玄暦而止矣、

〔享祿本類聚三代格十七〕太政官符

應用長慶宣明暦經事

右陰陽頭從五位下兼行暦博士大春日朝臣眞野麻呂解狀偁、謹撿古記、豐御食炊屋姬天皇○推古十年壬戌冬十月、百濟僧觀勒來貢暦術、而未行於世、高天原廣野姬天皇○持統四年庚寅冬十二月、有勅始用元嘉暦、次用儀鳳暦、高野姬天皇○孝謙天平寶字七年八月、停儀鳳暦、用開元大衍暦、厥後寶龜十一年、遣唐錄事內藥正從五位下羽栗臣翼貢寶應五紀暦經、申云、大唐今停大衍暦、唯用件經者、天應元年、有勅令據件經造暦、無人習學、不得講成、猶據大衍暦經、勘造暦日、已及百年、眞野麻呂去齊衡三年、申請可以五紀暦作暦之狀、而太政官四年正月十七日符偁、國家據大衍經作暦尚矣、去聖已遠、義貴兩存、宜暫相副令作進者、依件符旨、大衍五紀相副作進二箇年也、去貞觀元年、渤海大使馬孝愼新貢長慶宣明暦經、言是大唐新用經也、眞野麻呂試加覆勘、理當固然、仍以件新經比校大衍五紀等兩經、且察天文、且參時候、兩經之術漸似麤疎、合朔節氣既有相差、又勘大唐開成四年大中十二年等暦、

不復與彼新曆相違、曆議曰、陰陽之運、隨動而差、差而不已、遂與曆錯者、方今大唐開元以來三改曆術、而我國家天平以降猶用一曆、靜言事理、實不可然、望請停舊用新、欽若天步、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、

貞觀三年六月十六日（〇又見三代實錄）

〔曆法新書 十五〕宣明曆

清和天皇貞觀三年辛巳、眞野麻呂用之、（〇中略）臣（〇土御門泰邦）以爲、眞野麻呂者、本朝曆法鼻祖也、故春海長曆序曰、千載下、數千載上、則恐不能無差也、將來若大春日眞野麻呂、安倍清明者出、有以正之、則善明云爾、臣今讀此奏言、達歳差之法、精陰陽之理、但疑大唐開成四年、即唐文宗己未年、値本朝仁明天皇承和六年、此時本邦用大衍曆、唐已用宣明曆、又天平十二年者、聖武天皇治世庚辰年、即値唐玄宗開元二十八年、溯回於天平十二年、凡九十九年、此時唐用大衍曆、本邦用元嘉儀鳳曆、而未用五紀大衍也、若爲此天平之號於異邦、則東魏孝靜帝元年甲寅號、而上去數百年也、固未聞有五紀大衍之論也、又疑奏言前曰以彼新曆比校大衍五紀、兩經之術麤疎、節氣有差、後曰、勘開成天平之曆、不復與彼新曆相違、是文辭前後不相首尾、恐不字衍歟、積年七百七萬一千七十、日法八千四百、自貞觀四年至貞享元年、行八百二十三年、後於天二日有奇也、

〔曆法新書 十五〕宣明曆

唐穆宗長慶二年壬寅、司天徐昂造之、上元七曜起赤道虛九度、其氣朔發斂日躔月離、皆因大衍舊術、晷漏交會、則稍增損之、更立新數、以步五星、後世日蝕之精微、無不據于此、

〔好古日錄 本〕曆日異同（〇中略）

古曆書曰、（〇上略）建仁年中、大外記賴業、以命誅遣唐使渡曆書、號宋開禧曆本、吾朝用宣明曆、而以此開禧曆、欲破宣明曆、於是曆博士等失色之處、開禧有一日相違、仍被捨之、

大統暦

〔貞享暦一〕請革暦表

臣保井算哲、誠惶誠恐、頓首再拜言、治暦明時、人皇以來立日官、而平暦數、頒諸四海、以授人時、其爲德也大矣哉、欽惟、方今矜育黎庶、制法設度、復無不足、可謂海內治平道義之秋也、而暦學獨不顯、暗昧無聽、妄以傳妄、謬以承謬尚矣、實昭代之一缺事也、臣聞、暦數一差、寒暑過候、耕種失時、農桑無利者矣、是以、唐堯正暦象、周公測日景、前聖之所重焉、本朝五改暦矣、臣曾受星學於岡野井玄貞、而後累年立表測晷、正知所頒行之宣明暦、後於天二日矣○○○○○○、今精于天文、則陰陽頭安倍泰福踰千古矣、有松田順承者、審於暦數矣、伏技、與達天文暦學者議之、正暦象、節氣朔望無差、則風雨時、天人和、澤被天下、永施後世乎、臣逢聖明之時、得列于厩馬之後、實大幸也、竊恐、一日犬馬齒盡、塡國恩之萬一、亦不可得、獻芹之私志、眷々不已、越位上言、敢陳區々、垂仁採納焉、抗表、實惶誠恐頓首々々、

天和三年十一月冬至日、臣保井算哲源春海謹奉、

〔泰平年表常憲公〕貞享元年四月廿九日、新○暦○頒行被仰出、

〔貞享暦一〕貞享暦引

權右中辨藤原朝臣韶光傳宣、左大臣宣奉勅、貞觀以降所被用暦、及數百年、依天推步差、停宣明暦、可用大統暦○○○、仰陰陽暦道等博士者、

貞享元年三月三日修理東大寺大佛長官主殿頭兼左大史算博士小槻宿禰判奉

改暦陣儀次第

上卿著仗座、次職事來軾仰、仰詞、其詞、貞觀以降所被用暦、及數百年、依天推步差、停宣明暦、可用大統暦、仰陰陽暦道等博士、次上卿召辨、仰仰詞、事如職事、次職事來軾仰詔書事、退、其詞、貞觀以降所被用暦、及數百年、依天推步差、停宣明暦、可用大統暦、令作詔書、次上卿召大內記、進詔書事、仰詞如職事、次內記進詔書草、次上卿招職事、奏聞詔書草、歸出、仰可令清書由、次上卿奏詔書清書、奏聞畢返給、次上卿召中務、仰施行事、次上卿退出、

上卿近衛左大臣、(基熙)職事淸閑寺大納言、(熙定)詔書唐橋、(在廉)

〔曆法新書十六〕大統曆

明太祖洪武十七年甲子、漏刻博士元統造之、不用消長之法、洪武甲子爲元歲、實三百六十五萬二千四百二十五分、氣應五十五萬零三百七十五、日周一萬、行二百六十年、至順治三年丙戌、先於時憲曆十二刻也、(臣○土御門泰福)謂、元統原非知曆之態也、夫此曆假若出於授時之前、而未得免其譏、況出于郭氏之後乎、當時雖有李德芳之器、而不逢得其志、一朝因循、徒元統所謂借聽于聾、求道于盲、堪可笑矣、

〔泰平年表(常憲公)〕貞享元年十一月廿八日、貞享新曆を定めらる、(是迄元の授時曆に據て作られし也)

〔貞享曆一〕貞享曆引

左中辨兼中宮大進藤原朝臣俊方傳宣、右大臣宜奉勅、依改曆、去春可被用大統曆由雖被宣下、止大統曆、用新曆、可號貞享曆、仰陰陽曆道博士者、

貞享元年十月二十九日　修理東大寺大佛長官主殿頭兼左大史算博士小槻宿禰判(奉)

〔一話一言十三〕貞享曆(寶曆曆)

貞享曆ノ末ニ、貞觀以降、用宣明曆、既及數百年、推步與天差、方今停舊曆、頒新曆於天下、因改正而刊行焉、

貞享元年きのえね十二月大三十日せつぶん

右瀨名氏にて寫之

〔春海先生實記〕貞享元年甲子、先生(年四十六)春三月三日己巳、遂有改曆之宣下、上卿近衛左大臣(藤基熙公)別宣旨有之、詔行大統曆、先生於斯復上表曰、大統曆、西土之所用、而殊無百年消長一之法則、將來可以有差也、夫曆依地而起法、立術而合天、今日出日沒、異域則不能無里差、爰足以用之哉、其言確實切誠、

孔有理、自此帝城之西南梅小路立八尺鐵表、而與泰福共測晷影、又造星臺、以渾天儀窺七政之運行、先生所造之新術、與天密合、無毫差、貞享曆書曰、貞享元年改曆之後、三年之間、與泰福共窺天運、測日行云々、泰福詳奏其術踰千古、是時先生已言泰福于北辰三天九道之秘、及三種之活體等、泰福甚善之、奇之、乃以此秘訣密達天聽、天意感賞、勅不人皇以來之一人哉、且陰詔賜都々茂利之號於春海先生云、於是同冬十月廿九日辛酉、有宣下、靈元帝遂用先生所修之新曆、則勅賜名、曰貞享曆、有書區之勅許、止日本書紀與貞享曆也、上卿鷹司右大臣、藤兼熙公別宣旨有之、先生欣躍甚、叩頭拜謝勅宣之辱、則欲以翌二年乙丑頒新曆、便令院經師蜂屋內匠急刊之、剞成、○下略

〔新廬面命〕元祿甲申〇十七年三月十一日、先年中村的齋ヲ訪フ、的齋授時ノ私考ヲ出シ、我ニ授ケテ曰、我授時ニ志アルコト年久シ、然レドモトクト成就セズ、君宜シク成就シ王フベシ、サテ此授時モイマダトクト不合、消長一分トアルモ、二分ニテヨシトイヘリ、我其時ハ何トテ二分ト云事ヲシラズ、其後、會津中將殿思召ニ、兎角宣明ニテハナシ、授時可然ト仰ラレ、御家來安藤市兵衛、島田覺左衛門ト申兩數者ニ命ジ、數年授時曆ノ工夫イタシ候ヘト仰ラレ、年ヲ歷テ其功ナル、サテ改曆ニ御志有之、右兩人ニ算サセ、拙者ト山崎翁兩人ニ承リ候樣ニト有之、毎日立會見申候、尤授時ノ通ニ別儀ナク候、然ドモ至元十八年ヲ元ニ立候事、元ハ日本ヲ侵シ候敵國ニ候ヘバ、如何ト申事ニ有之、サラバ當年ヲ元ニシテ作リ直シ可然ト仰ラレ、ソレニナリ候、夫ヨリ至元十八年ノ歲實ヲ畫、四分消シテ歲實トイタシ、誠ニ難ナク見ヘ候、此消申候歲實ニテ立カヘリ、至元十八ノ冬至ヲ求メ候ニ不合候故、イロイロト致シ見候ヘ共不合申、ソコデ我等フト合點イタシ、四百年以後ヲ以テ至元ニイタシ申候時、四分消ザルハアタリマヘナリ、又四分消シ、合テ八分消シテ、コレヲ立元ノ歲實ト定メ置テ、サテ立返リ、至元十八冬至ヲ求ベケレバ、四分長シテ求レバ、授時ノ冬至合ヒ、上下齊々妙不可言事也、如此發明ス、先生及安藤氏モ皆々心服シテ、中將殿ヘ申上候、然所中將殿、御死期一兩日前ニ、交食有之候處、宣明ハ合ハズ、授時ハ合候ニヨリ、辱クモ中將殿、稻葉美

濃守殿へ御遺言ナサレ、改暦ノ事、算哲（保井）へ被仰付候樣ニト有之候、依之雅樂頭（酒井）殿へ被仰合候處、又其比五月ノ食ヲ授時ニハ食ナシト申上候處ニ、三分計リ有之候、宣明ハ合候ニヨリ、雅樂殿、何トモ算哲ガ申分トモ不被存候ト仰ラレ、改暦ノ沙汰ハヤミ申候、ソレヨリ累年優劣ヲ考申候所、授時ニテモ十分不合、ソロ〳〵ト只今ノ法ニナリ候、誠ニ雅樂殿御イソギ不被成候故ニ、如此ニナリ申候、　貞享暦ト申名ハ、一條關白殿御物數奇ナサレ勅許ナリ、○中略　十三日、延寶三年乙卯五月戊子朔日、日食一分、申五刻甚シク、此食ニ付テ、授時ヲ行フ事ヤミ申候故、肥後守殿（保科）御遺言ニテ、改暦可有之候處、此食授時立分不叶候、授時暦ニハ食無之ト雅樂殿へ申上候處、思之外宣明之通ニ食有之候故、雅樂殿仰ラレ候ハ、算哲ガ申分、合モアリ、不合モアリ、先改暦ノ事ハ無用ト有之、其後イロ〳〵工夫イタシ、今ノ暦ニ成候、此食授時ノ算違ヒ候ハ、此時夏至ノ時分故、縮減ニ授時ナリ申候後ニ、貞享ニ成テ、又盈差三十ホド有之、加へ申候故、食一分四十秒ニナリ候、ケ樣ノ所ヨリ、盈縮ヲ改申候哉、○中略　貞享二年乙丑五月甲戌望、丑ノ初刻ニ虧初ム、コレ改暦ヨリ初テノ食也、此時水戸殿（徳川綱條）ノ天文學者川勝六右衞門ト云者難ジテ曰、此食授時暦ニ初虧子ノ四刻ナリ、然ルニ新暦ニハ丑ノ一刻初虧ト付タリ、扨々オカシキコトカナ、我等算哲ニ問候ヘバ、里差ヲ加ヘ申候ハヾ、此後十一月十五日ノ食、授時ト刻限合候ハイカヾ、（十一月望ノ食、授時ノ刻ト貞享ト同ク、故ニシカイヘリ、）其實ハ、算哲事、授時カラガ得トユカヌト見ベ候ナドト、甚ダ惡口申候、其夜中山大納言篤親卿ノ所ニテ、新暦有之、出雲路玄仙ト、彼川勝、其外大勢參リ候、川勝、衆中ニ向ヒテ申候ハ、今夜ノ食ニテ、新暦ノ合候哉御覽候ヘ、授時ノ食ハ子刻也ト申ス、サテ九ツノ鐘打候ヘバ、イヅレモ庭上へ御出ナサレ候ヘトテ、出デヽ窺ヒ見候ヘドモ、不食、九ツ半マデハ子ノ刻ナレバ、御覽候ヘト申候ヘドモ、中々不食候故、アマリニ笑止ニナリテ、一人ハヅシ、二人ハヅシ、ニゲ申候、其後漸々八ツ打申候時、初虧申候、コレヲ無念ニ存ジ、六右衞門ハ、其後老病ト號シ、暦算ヲ止メ申候、

〔寛政曆書 二 日躔曆理〕日躔總論〇中略
如本邦撰造之貞享寶曆甲戌元曆等、倶因循郭守敬之法、故亦不能出於授時之模範、
〔大江俊光記〕天和四年〇貞享元年十二月十九日、今度安井算哲奉表テ改曆アリ、〇中略
新曆 授時曆加里差、元ノ世祖ニアタル歟、今改テ貞享曆ト云、
〔紫芝園漫筆 二〕古之爲曆者、不特其法、臨時測驗、以求其合、後之爲曆者、恃法而略於測驗、恃法故務精之間或有差、則以法未精、愈益攻之、自晉何承天、唐僧一行、孰謂不盡精微乎、至於元郭守敬、集諸家之説大成焉、精而又精也、授時曆之作、殆無遺法、所謂千歳之日至、可坐而致者、其在斯哉、然法者一定不易者也、
〔元史 曆五 十二〕十三年〇至元平宋、遂詔前中書左丞許衡、太子贊善王恂、都水少監郭守敬、改治新曆、衡等以爲、金雖改曆、止以宋紀元曆微加增益、實未嘗測驗於天、乃與南北日官陳鼎臣、鄧元麟、毛鵬翼、劉巨淵、王素、岳鉉、高敬等、參攷累代曆法、復測候日月星辰消息運行之變、參別同異、酌取中數、以爲曆本、十七年冬至曆成、詔賜名曰授時曆、十八年頒行天下、二十年詔太子諭德李謙爲曆議、發明新曆順天求合之微、攷證前代人爲附會之失、誠可以貽之永久、自古及今、其推驗之精、蓋未有出於此者也、今衡恂守敬等所撰曆經、及謙曆議故存、皆可攷據、是用具著于篇、惟萬年曆不復傳、而庚午元曆雖未嘗頒用、其爲書猶在、
〔元史 百六十四 郭守敬傳〕郭守敬、字若思、順德邢臺人、生有異操、不爲嬉戲事、大父榮、通五經、精於算數水利、時劉秉忠、張文謙、張易、王恂、同學於州西紫金山、榮使守敬從秉忠學、中統三年、文謙薦守敬習水利、巧思絶人、〇中略十三年、〇至元江左既平、帝〇世祖思用其言、遂以守敬與王恂率南北日官、分掌測驗推步於下、而命文謙與樞密張易爲之主領、裁奏於上、左丞許衡參預其事、守敬首言、曆之本在於測驗、而測驗之器莫先儀表、今司天渾儀、宋皇祐中汴京所造、不與此處天度相符、比量南北二極、約差四度、

表石年深、亦復欹側、守敬乃盡考其失而移置之、既又別圖高爽地、以木爲重棚、創作簡儀高表、用相比覆、中略建設監候官一十四員、分道而出、東至高麗、西極滇池、南踰朱崖、北盡鐵勒、四海測驗、凡二十七所、十七年新曆告成、中略七年大德詔、內外官年及七十、並聽致仕、獨守敬不許其請、自是翰林太史司天官不致仕、定著爲令、延祐三年卒、年八十六、

〔泰平年表有德公〕延享二年十月十四日、貞享曆違ひ有之に依て、補曆の事、西川忠次郎江被仰付、公邸より既に其意を天文曆算に用ひさせられ、御世の始、曆學建部彥次郎へ親問せられ、又京の銀座中根丈右衛門へも下問ありし、紀州貢工加藤某へ大渾天儀を作らしめらる、享保三年、御製作の測午表を吹上御庭へ設けられ、同年西川如見を長崎より召て其著述を呈進せしめ、延享元年、簡天儀を御覽測あり、是年神田佐久間町へ天文臺を設け、簡天儀を置る、又此補曆寬延二年に到て事なり、土御門泰邦へ校合せしめらる、有德公薨御、其事中絶に近く、神田天文臺廢し、寶曆七年に成りたり、

〔有德院殿御實紀附錄十五〕やがて曆法をあらため玉はんの御心なりしに、顧問に備ふべき建部彥次郎賢弘、不幸にしてうせければ、しばらくその人を求めさせ玉ひしに、そのころ長崎にて、天文の學を講じたる西川如見忠英が子に、忠次郎正休といへるあり、よく家學をつぎて、其術は精微に至りしが、家產おとろへ、たづきなかりしかば、江戶に來り、天經或問を講じ、口を糊して有しを聞召及ばれ、浦上彌五左衞門直方をして、御糺しありしに、其術衆にすぐれしかば、吹上の園にめされて測量せしめ玉ひしに、忠次郎が申す所、盛慮に暗合せしかば、天文方になされ、神田佐久間町に司天の所を設けて、測量の器度どものこりなくかしこにうつさる、故の天文方澁川助左衞門春海が子六藏則休、後圖書忠次郎と共に、主管して測量しけるに、改曆の事大かたとゝのひしがば、二人仰を承りて、京にのぼり、土御門三位泰邦卿に、改曆の事をはかりしに、泰邦卿申けるは、このこと容易ならねば、京にて再三試たるうへならでは定めがたしといふ、さらばとて、梅小路に測量所を設け、その費用は、年每に金千二百兩、米九百俵を賜りぬ、しかるに櫻町院崩せられしかば、しばし改曆の事をのべられ、翌年〇寶曆元年仰出さるべしと定られしに、公〇德川吉宗また大漸に

いたり玉ひしかば、此事遂に盛意のごとく行はれずしてやみぬるは、まことにをしむべく、なげくべきのかぎりなりけり、

〔教令類纂二集七十七〕寛延三庚午年十二月　御勘定奉行江　澀川圖書
右暦補之御用相勤候內、如父時加扶持七人扶持被下候間、被得其意可被相渡候、

十月

〔教令類纂二集七十七〕寶暦二壬申年十一月　御勘定奉行江
暦測量ニ付、改暦相濟候迄、土御門家江年々現米千石宛、石壹両之積りを以、御金に而被下候、當年分は、先達而米に而相渡候間、右賣渡候直段に而、石壹兩之積りを以、差引不足之分、御金に而相渡候間、可被得其意候、

十一月

〔寛政暦書　欽〕撰述暦理本末
爲暦學者不明於數理、不精於候測、而能有至焉者不也、雖有明理精測之力、又不得儀器之整齊、不能窮其精、故暦家必先整齊儀器、而後撿多年積候、以定其精焉、是爲造暦基本、造暦之事豈易言焉哉、自持統天皇用漢暦、至貞享一千二百年、改憲僅四、皆承用漢法而已、有德大君〇德川吉宗夙察漢法之未精、延享之末、下內旨於先臣則休〇西川正休、據崇禎暦書及時憲書、令議改憲、無幾遭有不諱、而遂不果、

〔崇禎暦　暦引〕欽命山東布政使司右參政李天經督修　遠西　會士羅雅谷譔〇中略
暦學改革〇第十五章中略
中華自漢迄元、雖造暦者至七十餘輩、然立法不過十有三家、且皆各有乖違、歷代互自改憲、所謂天緯幽玄、豈其一家一測遽得歟、西國于此學、門牖而曹習、其所以人自爲家者、則又指不勝僂也、然究厥靑逾藍、而寒逾氷、爲後學首所推重、則有四門、曰多祿某、曰亞而封所、曰歌自泥、曰第谷、此四家著

遠既繁、測驗愈密、立法致用、愈不精詳、至今言天者、皆不出其範圍、其相師法之。略○中 跡、其大端、猶不過損益分數、異名目耳、要使僅合一時、詎得施行久遠、後惟授時曆庶乎稱善、然亦本于大明、今大統則悉以授時為本、而移歲差及四應數耳、又若回回曆者、乃其本方所用、雖緣奉命翻譯、以備稽參、但其曆元為西域所定、以故非大統曆先推太陽躔度至春分之日、則亦復茫然、無據以得支干以合于中國所用歲月矣、今新法成取太西治曆名家諸紀、採其精詳、究其沈奧、審今測以廣證古測、稽年代必互攷中西、其名例牢仍大統之舊、台與歸同、會通成書、務求明簡、或亦可以質諸來禩、顧何敢斤斤自翊然、敢是彰昭代事書之盛云耳、

曆元○第十六章 中略

新法以崇禎元年戊辰前太陽過天正冬至後第一子正為曆元、其日干則己卯也、

〔曆象考成後編首〕雍正八年六月二十八日、欽天監監正臣明圖謹奏、竊惟日月行度、積久漸差、法須隨時修改、始能密合天行、臣等欽遵御製曆象考成、推算時憲七政、頒行天下、茲據臣監監正戴進賢監副徐懋德、推測校勘、覺有微差、蓋曆象考成原按新法曆書纂定、而新法曆書用之已久、是以日月行度、差之微芒、漸成分秒、若不修理、恐愈久愈差、臣明圖昧未經考驗、不敢遽奏、今於雍正八年六月初一日日食、臣等公同在臺、敬謹觀候、實測之與推算分數、不合、伏念曆法關係緊要、臣監職所專司、不敢壅於上聞、謹據實具奏、伏乞皇上睿鑒、勅下戴進賢徐懋德、挑選熟練人員、詳加校定、修理細數、繕寫條目、進呈御覽、為此謹奏請旨、奉旨准其重修、欽此、○中略

乾隆二年四月十八日、協辦吏部尚書事臣顧琮謹奏、竊查七政時憲書、本用前明徐光啓所譯西洋之法所為新法曆書者、其書非出於一人之筆、故圖與表不合、而解多隱晦難曉、欽惟聖祖仁皇帝、特命諸臣、詳攷古法、研精闡微、俾圖與數表脗合無間、賜名曆象考成、世祖憲皇帝御極、纘志述事、刊刻頒行、實屬盡善、但新法曆書之表、出自西洋、積年既多、表漸不準、推算交食分數、間有不合、是以又允

寶曆曆

監臣之請、纂修日躔月離二表、以推日月交食、幷交宮過度、晦朔弦望、晝夜永短、以及凌犯、共三十九員、續于曆象考成諸表之末、但此表並無解說、亦無推算之法、査作此表者、係監正加禮部侍郎銜西洋人戴進賢、能用此表者、惟監副西洋人徐懋德與食員外郎俸五官正明安圖、此三人外、別無解者、若不增修明白、何以垂示將來、則後人無可推尋究、與未經修纂無異、可否、令戴進賢爲總裁、以徐懋德明安圖爲副總裁、令其盡心攷驗、增補圖說、務期可垂永久、如曆象考成內、倘有酌改之處、亦令其悉心改正、至推算較對繕寫之人、於欽天監人員內、酌量選用、其修書紙張、公費、仍照曆書處之例支給、凡一應事宜、及告成刊刻、均令禮部彙理、速爲告竣、則製法愈密、推算愈精、我朝敬授人時、可以垂諸萬年矣、伏乞皇上睿鑒、謹奏、奉旨、即著顧琮專管、欽此、

〔寬政曆書二日躔曆理〕日躔總論○中略
清曆象考成、始依西土之法、其上下編删定明崇禎曆書者、次後復專採西土刻白爾噶西尼等之創法、述後編、其法稍精密矣、

〔泰平年表惇信公〕寶曆三年十一月八日冬至、京都土御門三位安倍泰邦、梅小路館に於て立表測景推步規式を行はる、江戶より天文方澀川圖書、西川忠次郎如見男上京、澀川家遠祖は安井算哲と申基方相勤罷在候所、天文曆算功者に仕候段、達御聞、貞享元年十二月朔日、基方被成御免、天文方被仰付、貞享曆法選述被仰付、始而御頒行に相成候、西川如見は長崎へ歸府被仰付候、
寶曆四年十一月新曆頒行、

〔大日本數學史中〕十三年○寶曆九月朔、日食スルコト五分、頒曆之ヲ注サズ、改曆アリテ、却テ此大事ヲ闕クハ何故ゾヤ、○中略
去年冬十二月、土州ノ算士川谷貞六、明年九月朔日食スルヲ推算シ、乃チ官曆ヲ難シ、上言シテ曰、來年九月朔日食スルコト五分半トス、又薩州ノ算士磯永孫四郎推算シテ四分トス、京師ノ算士西村遠里、亦測テ四分半トス、遠里之ヲ所司代阿部伊豫守ニ告グ、○中略日食辰刻ヨ

寛政曆

リ虧ケ始メテ巳刻ニ至テ終リヌ、食甚五分ヲ見ル、朝野愕然、衆口囂々タリ、京師ノ曆門公議シテ之ヲ關東ニ問フ、正休圖書等答辭甚ダ澁濁ニシテ遁辭多シ、其文左ノ如シ、

御改曆被仰出、於京都江戶測量相勤、書數相改候內、蝕之算法未決定、右之譯は、七八分之蝕、兩三度實測、且皆既之日蝕一度測量無之候ては、蝕之算法難決、然るに御改曆被仰出以後、五分以上之食一度も無之、依之御改曆難相濟候處、此七八分之食、皆既之食を快測候事、此上年數相懸り候故、土御門三位殿存念を以て、先御改曆御規式被行、此上日月食之測量全備之上、御曆書相占め可申上旨、關東へ被伺候處、被任其意、去る甲戌年より、新曆頒行之事、右之趣故、測量全備之上、日蝕算法相定り候迄、澁川圖書、山路彌左衞門宅にて、每日晷測星測、幷日月蝕測量相勤候樣、堀田相模守殿より被仰渡候事、但日月食算法相定候迄も、三分以下之食は、不注曆事、公儀之上決定也、右之趣御座候處、當朔日食は、五分程虧申候、推算之表は、二分六十秒故、不曆註、然るに實測二分半程虧蝕之事は、此巳後共、曆法全備之上迄は、勿論之事御座候、當年薩州曆には、九月朔日食四分と出させ、差て推步を失し候譯にては無御座候、以上、

未寶曆十三年九月　曆職連名

〔泰平年表大御所〕寛政九年十一月十八日、改曆宣下の旨被仰出、〈寶曆甲戌曆差謬有之に付、未午年の新曆頒行、本朝改曆凡の〉

〔文恭公實錄上〕寛政九年十月十九日、天皇〈格光〉詔改曆、先是公〈家齊德川〉〈曆三大曆、儀鳳曆、大衍曆、[illegible]宣明曆[illegible]〉〈[illegible]貞享曆、寶曆曆[illegible]寛政曆[illegible]〉憂時曆踈駁、聞大阪人高橋至時長推步、擢爲曆吏、與源秀升、平德風、間重富等、開局校訂參致、撰新曆獻之、命頒行天下、賜八丈絹十純于老中松平信明、五純于若年寄堀田正敦、並賞總裁之功也、

〔半日閑話二十一〕一同年〈寛政九年〉十一月十八日

兵部少輔殿御渡

寶暦甲戌暦差錯有レ之付而、今度於二京都一改暦宣下有レ之、來午年ヨリ新暦頒行之事、

右之通可レ被二相觸一候

伊勢御師、例年頒配ニ間ニ合不レ申候斷ニ及、月迫漸々出來、配り出す、

〔暦象考成上編圖字解序〕靈元帝時、保井春海新造二暦法一獻レ之、是爲二貞享暦一、暦學至レ此大明、後七十年頒二行寶暦甲戌元暦一、予祖秀長以二推步一蒙二辟職一司暦、校二訂甲戌元暦一、予父秀升克承二祖業一、嘗獲レ覽二秘府所レ藏律暦淵源一、其中暦象考成上下編、上説二其理一、下錄二其法一、是書也、改二正崇禎暦法一、而其術精要、又有二考成後編一者、於二前下編中一、訂レ舊增レ新、更構二一色一、再考二彼邦暦術一、無レ有下能出二於其右一者上、於レ是請下援二據其法一而再有二改暦之擧一、乃蒙二官准一、遂與二同僚一謝爲二一法一獻レ之、賜二名寛政暦一、即今時所レ用者是也、

〔府内備考續編十三〕頒暦調所又測量所と云〇中略

又いにしへ、七政暦あり、中古より此法廢れたりしを、新にかうがへて七曜暦を作りて奉りければ、是より永式とはなりける、暦博士幸德井友親よく學暦の吉凶を考へけるも、此頃友親東へ下り、算哲に其術を學びたりしより、かならず算哲が校合を得て頒行せらるべき由命ありけるとぞ、其後六十餘年を歷て、〇寶暦年中又違ひ有けれども、こたびは改暦の事も聞へず、此時佐々木文次郎といふ人、所緣の家、小日向赤城明神の傍に寓居したりけるが、此人天文暦數に委しければ、ひそかに憂ひ、執政某の邸へ至りて、此事を啓し、且いふ、我言葉を疑ひおぼさば、今年某月朔日蝕すべくして、頒行の暦に日蝕のことを載せず、此日を待てわがことばの妄ならざる事を驗みたまへと、果してその日蝕するをもて登庸せられ、改暦の事に預る、是寶暦甲戌暦なり、後四十四年にして、〇寛政年中又改暦有て、暦數の術本朝の隆盛を極めて、天度の違なき、此時より過るはあらじ、

〔續泰平年表〕天保十三年三月十九日、改暦之儀被二仰出一、貞享暦、寶暦甲戌之暦と各編者之自序有レ之、寛政暦は暦文無レ之、趣旨有レ之候、右は體裁不

寛政思召候間、新暦序文之義、此度土御門家之儀被仰付、則致書寫候旨可申達候、十月六日新暦頒行、寛政暦差障有之ニ付、今度於京都改暦宣下遂行、新暦號天保壬寅元暦と被達、

〔憲法類集續編 七 新板書物〕天保十三寅年十月十日

寛政暦差錯有之付而、今度於京都改暦宣下、暦號定陣儀被遂行、新暦號天保壬寅元暦旨被定候、依之來々辰年ゟ新暦頒行之事に候、

右之通、向々江可被相觸候、

〔天保十五年甲辰暦序〕伊勢度會郡山田　瀬川舍人

今まで頒ち行れし寛政暦は違へる事のあるをもて、更に改暦の命あり、遂に天保十三年新暦成に及び、詔して名を天保壬寅元暦と賜ふ、

抑元文五年庚申、寶暦五年乙亥の暦にことわる如く、一晝夜を云は、今曉九時を始とし、今夜九時を終とす、然れども是まで頒ち行れし暦には、毎月節氣、中氣、土用、日月食の時刻をいふもの、皆晝夜を平等して記すが故、其時刻、時の鐘とまゝ遲速の違あり、今改る所は、四時日夜の長短に隨ひ、其時を量り記し、世俗に違ふ事なからしむ、今より後此例に從ふ、

〔市中取締類集 九ノ七十八〕卯〇天保十四年九月廿日來ル、即日ヒレ付いたし差出ス、

書面、改暦序文之儀は、元文寶暦寛政度之振合にも有之候義に付、彫刻之義被御聞置可然哉に奉存候、

卯九月　北市中取締掛

來辰暦〇天保十五年御前文書入之儀申出候趣申上候書付、

館市右衛門

來辰暦板行被仰付候拾壹人總代

小兵衞
外壹人

伊兵衞

小網町名主

書物掛

右申立候ハ、今般御下被成下候來辰御寫本暦之儀、御改暦御前文有之、右ハ元文、寶暦、寛政度、何れも御前文共板刻仕候ニ付、此度も右例ニ隨ひ、御前文入、開板仕候心得ニ有之、則古暦三通相添、來辰暦雛形奉入御覽置候段申出候、

但雛形、綴暦ニ有之、猶折本は格好見計可書入旨、

右則差出候

一元文五申年綴暦壹冊　一寶暦六子年暦折本一冊　一寛政十午年綴暦壹冊

幷今般草稿且爲御見合、平年板行當卯暦折本、綴暦、大形、小形とも壹通宛、差上申候、

右之通御座候、先例有之上は、右申立之趣、御聞置被成下可然哉と奉存候、依之此段申上候、以上、

卯九月　館市右衞門

ヒレ付
書面、向方元締掛ゟ申上候通ニ而可然哉ニ奉存候、

卯九月廿日　南市中取締掛

〔憲法類編二十一暦法〕太陰暦ヲ太陽暦ニ改ラルノ事

壬申十一月九日、第三百三十七號御布告、

今般改暦ノ儀、別紙詔書ノ通被仰出候條、此旨相達候事、

詔書

朕惟フニ、我邦通行ノ暦タル、太陰ノ朔望ヲ以テ月ヲ立テ、太陽ノ躔度ニ合ス、故ニ二三年間必

ズ閏月ヲ置カザルヲ得ズ、置閏ノ前後、時ニ季候ノ早晩アリ、終ニ推歩ノ差ヲ生ズルニ至ル、殊ニ中下段ニ掲ル所ノ如キハ、率子妄誕無稽ニ屬シ、人知ノ開達ヲ妨ルモノ少シトセズ、蓋シ太陽暦ハ太陽ノ躔度ニ從テ月ヲ立ツ、日子多少ノ異アリト雖モ、季候早晩ノ變ナク、四歳毎ニ一日ノ閏ヲ置キ、七千年ノ後僅ニ一日ノ差ヲ生ズルニ過ギズ、之ヲ太陰暦ニ比スレバ最モ精密ニシテ、其便不便モ固リ論ヲ俟タザルナリ、依テ自今舊暦ヲ廢シ、太陽暦ヲ用ヒ、天下永世之ヲ遵行セシメン、百官有司其レ斯旨ヲ體セヨ、

一今般太陰暦ヲ廢シ、太陽暦御頒行相成候ニ付、來ル十二月三日ヲ以テ、明治六年一月一日ト被定候事、

但新暦鏤板出來次第頒布候事

一一ケ年三百六十五日、十二ケ月ニ分チ、四年毎ニ一日ノ閏ヲ置候事、○中略

一諸祭典等、舊暦月日ヲ新暦月日ニ相當シ施行可致事、

太陽暦　一年三百六十五日　閏年三百六十六日（四年毎ニ置之）

一月大	三十一日	其一日	即舊暦壬申	十二月三日
二月小	二十八日（閏年二十九日）	其一日	同　癸酉	正月四日
三月大	三十一日	其一日	同	二月三日
四月小	三十日	其一日	同	三月五日
五月大	三十一日	其一日	同	四月五日
六月小	三十日	其一日	同	五月七日
七月大	三十一日	其一日	同	六月七日
八月大	三十一日	其一日	同	閏六月九日

暦法

九月小　三十日　其一日　同　七月十日
十月大　三十一日　其一日　同　八月十日
十一月小三十日　其一日　同　九月十二日
十二月大三十一日　其一日　同　十月十二日

大小毎年替ルコトナシ

〔日本長暦序〕故迄元亨年中、驗七政、紀其躔度、而其術今亡矣、所傳僅宣明之氣朔交食、而其陰。暦。陽。暦。則無知之者、故其所起方位不得稽之、

〔暦法新書六〕起原○中略

吾邦、神武建正以降、至貞享元年甲子、凡七改暦、雖然其元嘉、儀鳳、大衍、五紀、宣明、共異域之法、而未識有索里差。況於宣明距八百年用一暦者乎、故異野麻呂云、靜言事理、實不可然、春海云、暦學獨不顯、暗昧無聽、妄以傳妄、謬以承謬尙矣、實昭代之一闕事也、臣○土御門泰邦曰、貞觀無異野麻呂、則兆民不當辨春秋、貞享春海不出、則百姓距得聊業哉、嗚呼天運不虚、造化素嚴也、至元貞享新降此奇才、共遡往代泊當時、其術如神、或不取演紀迂元、因實測以求易、又不用畸零臆算、擧萬分以得簡、或逐年施消長、又求暦應妙率、可謂滑疑之曜於是明矣、夫一行、淳風徐昂忠輔交治而有所未盡者、郭氏發之、郭氏有所未終者、春海致之、各明理精數、能研覈百氏、彙清古今矣、後世適有元統者、猥廢歲實消長之法、既至將昏弊天理、時李德芳上疏爭之云、今元統改作洪武甲子暦、不用消長之法、以考魯獻公十五年戊寅歲、距至元辛巳二千一百六十三年、以辛巳爲暦元、推得天正冬至、在甲寅日夜子初三刻、與當時實測數相合、若以洪武甲子爲元、上距獻公戊寅年二千二百六十六年、推得天正冬至、在己未日午正三刻、比之差四日六時五刻、今當復用辛巳爲元及消長之法、時元統辨大祖以驗七政交會行度無差之言可閱、此時君臣共眷暦法、無一箇可匡之、而黯然遂蠱焉、本邦天和貞享交蝕數不驗、氣候甚錯、於是朝議欲

改之用大統曆、時泰福春海等不肯之、上疏云、雖大統曆因授時立法、而不用歲實消長之法、是猶射行失的鵠、夫無消長者、將來必差多矣、遂修新曆以聞、賜名曰貞享曆也、當時如常範、如正意、庸學之徒頻出、以沮春海、而或編圖解、或撰私曆、皆剽竊畫虎之類也、又享保中、璋元圭編曆術數卷、以抑常範、其說猶不過以五十步笑百步耳、又有春海日本長曆、上起神武甲寅歲、下至貞享丙寅歲、各以時曆法推求之、其得失疎密、據國史及家々實錄悉訂之、其全篇大作一小作一、便覽最簡易也、其書藏于春海及臣之家、而秘不出焉、名家纔適有之、亦各秘而珍奇矣、璋元圭竊寫得之、改號曰皇和通曆、竟僞爲己之作、梓行于世、以欺衆庶、又有慶安者、造三天儀、其制地北低南高、而自曰、一天下南方熱、北方寒、日輪在北則高、在南則低、北極之星辰、人悉見之、南極之星辰、人無見之、是皆以地勢北低南高故也、古人未通曉此理、而以爲北高南低者非也、仍今制此儀象、遂其說、名曰本朝天文、又有長部者、編日東通曆、其說云、貞享曆其所編推步術數科目繁夥、初學之徒不能無惑、臣一日閱那書、呵呵大笑不止也、夫有律曆以降、迄時憲曆、歷代之志莫簡易於授時貞享者、若以此二曆爲繁夥、則術皆可闕而不筭之歟、大抵志于曆術之士、世有不熟讀玩味之者乎、今若長部以未入食限者、印書食甚、合朔辰刻强求大小、竊謄曆前人之圖說、以重出之類、初學之徒亦無如之何矣、如此謬譯妄傳、紛々擾々、鏤行于民間者不可勝計矣、曾有無賴西川正休者、出自肥州長崎、而浪泊于武江、嘗其父如見在崎陽、常會於蠻夷之來船、至竟與紅毛相親、而讀以天文之事矣、紅毛素通萬國、窮滄海以交易、故日行星度風雲氣象無不搜索之也、如見樂之、學天文、果以爲名、時寬保中、東議有將賾索隱之方、因求四方天學之士、一召如見、如見辭稱耄、薦以正休、而公聽之、即擢擧以進士、使之與天文生則休同職也、臣聞之、竊謂、如見本學於紅毛、紅毛之所精、只方度變象耳、何足知曆數耶、嘗寬保革命歲、築觀臺於東府、專修曆攷之事、令正休管之、起延享丁卯八月乙亥、至寬延庚午正月壬申、正休告公云、測量考驗粗成矣、於是營中有議評、而命臣校正之、遣天文生則休、西川正休、及屬役等於京師、以附于安門、此時朝廷有事故止之、衆皆東歸、既而終期月、

明年辛未二月、東議再營之、遣天文生等、居于安家、猶前年也、臣蒙東命、新開私第東南隅地方十丈、而爲測量之所、其東築露臺、其西植土圭、經營三月而成、因整儀象、備法律、揆躔離、候星辰、實測一年、至寶曆壬申春分、比校正推測之術、漸定時知正休之往年所測日景星辰皆無實、不足照應、況於推考乎、蓋正休之所編新曆書、或以巧臆猥改舊率之精數、或無明據、徒更諸應之名目、唯誑衆惑俗、譎詐姦謀耳、適用意者、概出於賢弘之授時和譯、於是人始愕然矣、臣頻詰之曰、汝之曆書所載、京師北極出地三十五度四十三分、是因何擧此數耶、抑汝往年所測者、唯東地耳、京師測量未聞有之也、自前年辛未二月、至今年壬申二月、愚所測者大抵三十五度半强、復據表影所求三十五度六十三分半、由此撿之、則汝所謂三十五度四十三分、不合今之實測、又據表影無驗焉、其曆書載虛數必矣、況於不載武江之測量者乎、蓋不用往來消長、是承大統曆之謬妄歟、抑未察古今歲實强弱之微妙歟、凡無消長者、上推往古不能辨斗分、下驗將來無合實測之數、假如神武天皇元年辛酉距寶曆二年壬申、二千四百十一年、不用消長推之、則天正冬至在庚寅日酉初一刻、後於天五日八十一刻也、又用消長推之、則冬至在於甲申日亥初三刻、合于實測之數、兩術相較果無消長可乎、又汝曆書、以寶曆二年壬申爲元、而其所載諸應皆以辛未歲數、是據元則錯數、據數則失元、堪可笑也、又廢四餘、却用卦法、是何意耶、夫四餘者見變象一徵、卦法者探變數一端、共吉凶悔否之占、而五日一候亦然矣、若信之則宜兩存焉、若巫之則宜共廢焉、擧之無害、捨之無弊、今汝所撰皆可否殽駁、又諸數中、其誤甚者不可勝論矣、噫日躔不原盈縮、月離不要遲望、曆法何以立、夫曆者百王不易之典、導民更俗、上不悖日月之明、下不失山川之精、喘耎肖翹無不由此感、而今汝撰紊舊律、煽惑良民、胡得無辜耶、是蓋非譴責汝也、冀上翼君之仁政、下濟民之荒蕪、臣之微忠也、汝若有分敎則謹陳之、復若無明辨則白其狀、慈以勿優矣、時正休目睜口呆、敢罔所答、唯偷眼飾辭欲讓罪於左右、託過於眊瞀耳、臣謂、正休如此蚩々悾々、不辨菽麥、豈足關改曆事乎、仍沮其事於東營、東營具瞻保衡商議糺明、遂止正休之職、廢其曆法、果命臣新掌測量及改曆之事務、臣

承其命、自寶曆壬申夏至、至明甲戌夏至、凡三年、更度日月星辰、整推步立成、以制作此曆、皆氣應歲實等數者、皆宜因後年之査照以訂之、

〔寛政曆書 三十二 諸曆合考〕古測交食校上

貞享以降、每有修曆之議、依時曆與新編法、算試國史所載及各改憲前後所實驗日月食、徵其疎密、是爲恆例、今亦循例、依寶曆甲戌元曆續錄與本編交食步法、推校貞享以來曆書所纂輯國史之食、及各改憲前後實驗者、且其諸曆所遺而適獲於諸書者、逐年次補入之、或素所現存者而別有測之者、則取爲之補註、唯依本編法推算之、以並列其實驗與推得之兩數、便於比校觀覽如左、

推古天皇三十六年戊子歲三月戊申二日、有蝕盡之、日本書紀

續錄　三月戊申、日食七分一十六秒、食甚辰三刻、

寛政曆　三月戊申、日食九分五十秒、食甚巳三刻、下略○

〔曆法新書 六〕曆元。

夫曆必立元以爲治日法、天度自是格致、古今皆然矣、至元郭守敬、始不用積年日法、臣按曆法、以起算之端、是謂曆元也、舊法遠溯大古、取演紀上元、延以及今、其術區々有異同、自漢大初曆至今重修大明曆、皆所用積年是也、授時曆遷其聰說、巧算去其迂遠虛率、而直以至元辛巳歲爲元矣、本朝貞享曆專信此法、而以貞享元年甲子爲元也、梅文鼎所謂截算之元是也、

〔曆學疑問 一〕論曆元

問、造曆者必先立元、元正然後定日法、法立然後度周天、古曆數十家皆同、此術至授時獨不用積年日法、何與、曰、造曆者必有起算之端、是謂曆元、然曆元之法有二、其一遠溯初古、爲七曜齊元之元、自漢大初至金重修大明曆、各所用之積年是也、其一爲截算之元、自元授時不用積年日法、直以至元辛巳爲元、而今西法亦以崇禎戊辰爲元是也、二者不同、然以是爲起算之端一而已矣、然則二者無

優劣乎、曰、授時優、夫所謂七曜齊元者、謂上古之時、歲月日時、皆會甲子、而又日月如合璧、五星如連珠、故取以爲造曆之根數也、使其果然、雖萬世遵用可矣、乃今廿一史中所載、諸家曆元無一同者、是其積年之久近、皆非有所受之於前、直以巧算取之而已、然謂其一無所據而出于胸臆、則又非也、當其立法之初、亦皆有所驗于近事、然後本其時之所實測、以旁證於書傳之所傳、約其合者、既有數端、遂揆之以立術、于是溯而上之、至于數千萬年之遠、庶幾各率可以齊同、積年之法所由立也、然既欲其上合曆元、又欲其不違近測、畸零分秒之數、必不能齊、勢不能不稍爲整頓以求巧合、其始也據近測以求積年、其既也且將因積年而改近測矣、又安得以爲定法乎、授時曆知其然、故一以實測爲憑、而不用積年虛率上考下求、卽以至元十八年辛巳歲前天正冬至爲元、其見卓矣、

〔大略天學名目鈔〕氣盈朔虛幷閏月

日天一周三百六十五日二十五刻、是ヲ一歲ト云、曆書ノ歲實ト云ハ是也、此ノ歲實ヲ二十四氣ニ分テ、一氣ヲ十五日二十一刻八十七分半トス、全日十五日ヲ去ルトキハ、餘分二十一刻有奇ヲ一氣ノ盈トス、此ノ盈ヲ二十四積ムトキハ、五日二十五刻也、是則チ一歲ノ氣盈也、又月ノ一年ノ日數、三百五十四日三十七刻ヲ十二月ニ分レバ、一月ノ日數二十九日五十三刻有奇也、一月ノ常數三十日ニタラザルコト、四十六刻九十四分有奇也、是一月ノ虛分ニテ、十二月ヲ積デ、五日六十三刻有奇、是卽チ一年ノ朔虛也、此朔虛ト右ノ氣盈トヲ合スレバ、十日八十八刻餘ル也、是ヲ一年ノ閏餘ト云、此閏餘三歲ヲ重テ、一月ノ日數ニ餘ル也、故ニ三年ニ一閏月ヲ置テ、其年ハ十三月トス、此ノ如クニ、三年或ハ五年目ニ、二閏月ヲ置テ、段々凡十九年ニ七閏月ヲ置ノ間、或ハ餘リ、或ハ不足有リト雖ドモ、十九年七閏ニ至テ、過不及ノ差分盡テ平々トナル、是ヲ曆ノ一章ト號ス、一章終テ又始ル、是唐土日本ノ曆法也、外國ノ曆法ハ是異ナリ、

〔兩儀集說外記〕問、蠻曆モ、華曆モ、古曆モ、今曆モ、皆日月五星ノ行度ヲ考ヘ測テ立タル者ニ非ズヤ、

華戎古今共ニ一天地一日月ナリ、差ヒ精粗何レノ處ヨリ生ズルヤ、

曰、七曜行度ノ天暦ハ、世界古今無差トイヘドモ、其寄測ノ製法ニ依テ、人暦不同アリ、況ヤ華戎蠻、水土風俗、好惡別ナル事有テ、暦法律度各有異者也、暦ハ人事ノ用ニ備ヘンガ爲ナリ、四時ノ氣候、萬物ノ氣質、各方土ニ從テ有差別、是ヲ以暦各其國ニ從フ者也、況ヤ又古今ノ異有テ、造暦粗精ノ不同アリ、古暦ハ粗ニシテ今暦ハ精シ、中華ト云ドモ古暦ハ粗ニシテ、天度歳實皆三百六十五度四分ノ一ヲ用テ、日輪盈縮ノ差ヲ不立、月行ノ遲疾ヲ不算、只平行分ヲ以算之、故ニ經朔經望ノ法而已有テ、定朔定望ヲ不立、故ニ多ク月朔ヲ誤リテ日食ヲ失シ、望ヲ誤リテ月食ヲ失ス、是皆暦術ノ未ダ簡略ナリシ故也、自夫已來數千歳ヲ經タル故、漸ク暦法精密ニ成テ、今暦ノ度分三百六十五日二十四刻二十五分ヲ用ヒ、歳差ノ法ヲ立テ、盈縮遲疾ヲ詳ニシ、定朔ヲ求メ定ム、是ヲ以日月ノ兩食誤ル事無シ、是暦法ノ大成也、何ゾ古法ノ簡略ニ復ランヤ、況ヤ戎蠻疎略ノ暦術ヲヤ、大明ノ初メ、回回國ノ暦法中華ニ入テ、大統暦ト並ビ試ラレシカドモ、其法不密、故ニ終ニ用ラレズト云リ、回回暦ハ中華ノ暦法ニ近シト云リ、此等無用、況ヤ蠻暦ヲヤ、

〔太峰古暦傳四〕好尙云、またの稿に、日月星辰復始甲寅元とは、歳月を甲寅に起せる耳に非ず、日時の元をも甲寅より始めしことを更に論ひ無き物にて、謂ゆる作暦の元年は、甲寅歳の甲寅月の朔旦立春やがて甲寅日にて、其晨寅時をやがて甲寅に定めしこと疑無くなむ、(其は日月星辰と有る星は、即歳星を云ひ、辰は卽時をいひ、月とは孟春正月に云ひ、日とは其朔旦立春を云る歸なるを以て知べし、皆然らずとしては、日月星辰復始甲寅元と云こと、總て意なき辭とぞ成るめる、)日行一度而歳有奇四分之一は、既に上に說たるが如し、故四歳而云々とは、四歳の日數すべて千四百六十日と、故八分づゝ、四を合すれは、四八三十二分にて一日なる故に、千四百六十一日にて餘分なし、之を復合とは云り、故會八十歳而復故とは、まづ八十歳は四歳を二十合せたるにて、會とは歳星の會りを云ひ、八十會して八十歳を爲すが故にかく云り、此日數凡二萬九千二百日と、かの八分

づ、の餘分六百四十分あり、此をまた日に直せば、二十日にて餘分なし、此を復故とは云り、然れば一紀七十六歳と定めしは、是八十歳の四歳を減じたる數なるが、即四歳づ、十九を積みて定たるにて、是ぞ古暦法の大要なりける、此に就て按ふに、既く見たりし天地二球用法記、また近頃見たる遠西觀象圖說など云ふ物は、共に西洋の天文書を譯せる物なるが、其書等に據るに、彼國邊に用ふる暦法二種あり、其古なるは、我が崇神天皇の五十三年丙子歳に當りて、耶摩國に由利安と云へる者の在しが立たる法にて、一年を三百六十五日と餘分六時とせり、其六時と云ふは、彼國にては、一日を二十四時に立たれば、一晝夜の四分一にて、晝夜を十二時と立たる諸越の暦法に四分日之一と稱する八分に當れり、斯て其法三百六十五日六時のうち六時を除きて、全日三百六十五日を一歳として之を平年と云ひ、其餘數の六時を積ること四年にして一日と成るを、第四年の日數に加へて三百六十六日となし、其年を閏年と云ふ、是を以て第四年に必ず閏年あり、故は由利安が始めし暦法なる故に、由利安年と稱して、千六百餘年がほど行はれき、是古法なり、然に我が天正十一年癸未歳に當りて、宜禮暮利と云ふ者ありて、其暦法を改めて新法を立たり、其は詳に天度を測り、年月を推歩するに、太陽の躔度、暦面の簡銀に先だつこと千六百年餘の間に、十餘日の差を生ぜり、是に因りて太陽の躔度に巨細に測れば、三百六十五日六時四十九分あり、六時四十九分の六時は、既に云ふ如く、諸越の暦法に謂ゆる四分日之一にて、八分なり、四十九分は、西洋の一日を二十四にせる一時を六十分とせる四十九分なれば、諸越また坐鐘の一時の半時に足ずなり、然るに其三百六十五日を平年としては、其餘數を積ること四字にして一日に満ざる故に、千六百年餘を經る間に十餘日の不足を生たり、是に依て、四年一閏の法を止めて、四百年めに一日になほ半時餘り足ざる時刻を強ひて一日に立て閏年と爲たり、此法に據ときは七千二百年にして一日の不足を生ずれども、由利安の暦法に一千六百年にして十餘日の不足をなすに比すれば、歳實を失ふこと少し、於闌陀にては、此暦法を用ひて、宜禮暮利年と稱する由見えたり、此由利安が暦法をいと能く今の古暦に似たるは、其もと聞く、太古に神眞の傳へし古法なるべし、此に比べては、宜禮暮利が暦法は精に似て卻りて迂なり、蘭學をまた無き物に好まむ人など、此等の言を聞むには、決めて謗しみ思ふべけれど、我には猶深く思ひ得たる定說有れば、如此は云ふなり、

〔佛國暦象編一原暦〕論梵暦漸入支那大較

暦學疑問補一云、隋以前西暦未入中國、此義已前批其見於史者、在唐爲九執暦、在元爲萬年暦、在明爲回回暦、在本朝爲西洋暦、

〔明史暦三十一〕後世法勝於古、而屢改益密者、惟暦爲最著、〇中略崇禎中、議用西洋新法、命閣臣徐光啓光祿卿李天經、先後董其事、成暦書一百三十餘卷、多發古人所未發、時布衣魏文魁上疏排之、詔立兩局推驗、累年校測、新法獨密、然亦未及頒行、由是觀之、暦固未有行之久而不差者、烏可不隨時修

改、以求合天哉、今采各家論說有裨曆法者、著於篇端、而大統曆則遂立法之原、以補元志之未備、回回曆始終緣於欽天監、與大統參用、亦附錄焉、

〔曆學疑問 一〕論中西之異

問、今純用西法矣、若子(○梅文鼎)之言、但兼用其長耳、豈西法亦有大異于吾而不可全用、抑吾之用之者、猶有未盡與、曰、西法亦有必不可用者、則正朔是也、中法以夏正爲歲首、是萬世通行、而無弊者也、西之正朔則以太陽會恒星爲歲、其正月一日定于太陽躔斗四度之日、而恒星既東行、以生歲差、則其正月一日、亦屢遷無定、故在今時之正月一日、定于冬至後十一日、溯而上之、可七百年、則其正月一日在冬至日矣、又溯而上之七百年、又在冬至前十日矣、由今日順推、至後七百年、則又在冬至後二十日矣、如是不定、安可以通行乎、此徐文定公造曆書之時、棄之不用、而亦略不言及也、然則自正朔外、其餘盡同乎、曰、正朔其大者也、餘不同者尙多、試略舉之、中法步月離始于朔、而西法始于望、一也、中法論日始子半、而西法始午中、二也、中法立閏月、而西法不立閏月、惟立閏日、三也、黃道十二象與二十八舍不同、四也、餘星四十八象與中法星名無一同者、五也、中法紀日以甲子六十日而周、西法紀日以七曜、凡七日而周、六也、中法紀歲以甲子六十年而周、西法紀年以總積六千餘年爲數、七也、中法節氣起冬至、而西法起春分、八也、以上數端、皆今曆所未用、徐文定公所謂鎔西算以入大統之型模、蓋謂此也、(按、中曆閏日、用之於恒歲積數、而不關閏月、雖兼用也、其曆積之年、曆指中偶一舉之、而不以紀歲、)

〔通雅 十一 天文〕西法行陽曆、以太陽爲歲、自今歲冬至、至明歲冬至、三百六十五日、分十二月、三十日或三十一日爲一月也、所餘四分度之一日爲三時、積四年而爲一日、故每四年閏一日、有閏日之月、無閏月之年、中國以太陰爲曆、故有閏歲、以月爲主、而太陽節氣、反分注于月之下、太陽曆則以節氣爲主、而朔望分紀于節氣下矣、

〔天文義論 上〕問フ、中華戎蠻共ニ天文ヲ精ク攻ムル事ハ、其曆ヲ正クシ、天下ノ時ヲ明カニ爲ルノ

用ニ非ズ哉、然ルニ中華、日本ノ曆ハ、氣盈朔虛閏餘ノ算法、甚ダ煩勞ニシテ、動モスレバ天ニ後レ、天ニ先テ差生ズ、差生ズレバ、曆法ノ算數ヲ改ム、自古至今、改曆不可勝計、甚紛冗ナリ、然ルニ戎蠻紅毛等ノ曆ヲ尋ルニ、簡易ニシテ永世不改ノ曆法也、其法日ヲ表トシ、月ヲ裏トス、日ヲ表トスト云ハ、日輪南至ノ時ヲ以テ歲ノ首メトシ、其一日其二日其三日ト次第シテ、一月三十一日ノ月アリ、三十日ノ月アリ、二十八日ノ月アリテ、共ニ十二月ヲ立テ一年トス、十二箇月ノ內、二十八日ノ月ヲ以テ、四年ニ一度、是ヲ二十九日ノ月ト爲テ、其年ヲ閏ノ年トス、四年ニ一日ノ閏ノ外ハ、別ニ閏月ヲ置ク事ナシ、其氣節ハ某月ノ某日ト、每ニ入節氣ノ定日アル如ク、二月ノ日數ヲ立テタリ、是レ日ヲ表トシタル也、月ノ盈虛朔望弦晦ハ、各其月ノ裏ニ附記ス、某日ハ朔、某日ハ望、某日ニ初月見ハルトシテ、無定日、是レ月ヲ裏トシタル者也、此法甚ダ簡易ニシテ、民用足レリ、恐クハ中華ノ曆法ニ勝レル者歟、如何、

曰フ、○中略 戎蠻ノ曆ハ、周曆ニ似タリト云ヘドモ、日ヲ表トシテ閏法無ク、二十八日ノ月ヲ立テ、四年ニ一日ヲ盈シテ、定月トシ、氣節定日有テ、分秒ヲ不竭、粗ニシテ精キ法ニハ非ズ、最モ彼國ニテハ可ナラン、唐土、日本、數千歲以來、朔望ノ法ヲ表トシ、節氣ヲ其中ニ附タルノ曆ニテ、人用正ク、時ヲ失フ事ナシ、況ヤ朔望ハ日月交合正對ノ時ニテ、陰陽ノ氣壯ンナル事、氣節ノ交替ヨリモ強ク、日月ノ行モ、朔望ハ進ム、況ヤ月行疾速ニシテ、潮水ノ往來盈涸、盛ニ萬物ノ氣強キ時也、疾病ノ療養、草木ノ種植、皆朔望弦晦ノ氣ヲ專ラニ考ヘズンバ有ルベカラズ、何ゾ唯氣節ノミヲ先トセンヤ、然ラバ月ヲ表トスルノ曆又最ナラズヤ、

〔鎔造化育論〕中略 皇國上古未聞有審天文曆數之術者也、然神代以來以能勸農政之國俗、無有誤人時之失云、及至中古、傳漢土曆法、而有曆博士、天文博士等官、以各掌其事、所謂漢土曆者、史記曆書、及曆代史書、律曆志所載者、而元郭守敬所著授時曆、最其選者也、近及西洋人利瑪竇、芥儒略、湯若望等、來

傳西洋暦法、漬土暦法益加精密、後光明天皇御宇、清人作時憲暦、卽用西洋暦而所改正也、此暦法亦傳皇國、靈元天皇元年改正暦法、作新暦、號貞享暦、是爲皇國暦書之始也、其後西洋天文暦數之書入貢者頗多、而暦數推算極精矣、後桃園天皇寬政十年、改正暦法、作寬政暦、始用大地轉回之說、總以西洋暦術之精微也、嘗考桂審西洋諸國天文暦術精微之基原、其學發端於陀日多國、所謂陀日多國者亞弗利加洲中、東北境之一大邦、而此國太古以來、絕無有雲霧雨雪等、而每日天氣清朗也、是以天文星暦之學究其精密云、其古說曰、日輪者在大國之中央、而無有移動、大地及星月、皆常旋回其外圍者也、是地動說之濫觴也、又歐邏巴洲天文暦術者、其說與漬土同、而以大地爲在六合正中、而日月星辰皆旋回大地之法也、然我邦孝安天皇御宇、歐邏巴洲厄勒祭亞國、沙莫斯人、魔廸我剌私者、游于陀日多國七年、學得地動之暦法而歸、弘之於厄勒祭亞國、于時厄勒祭亞國大家亞利斯多的列思者、惡其反畏古傳、切勉排斥焉、所謂此亞利斯多的列思者、以西洋總主亞歷吉山德兒帝之大師也、歐邏巴洲中、無信地動說者、徒其異說之道耳矣、或云、開化天皇三十八年、池中海欒得斯島人、必巴兒古斯者、精究天學、講明衆術、撰衆生距度宿運者二三星或五七星或數十星、像于活物器械等之形狀、而爲一隊、始定恒星一千零二十二度之星象也、且分黃道三百六十度爲十二宮、每一宮各三十度、以紀日輪行環之經度、所謂十二宮名號卽如上說、白羊、金牛、雙兒、巨蟹、獅子、室女、天秤、天蠍、人馬、磨羯、寶瓶、雙魚是也、乃以白羊宮初度爲春分之日躔也、卽是西洋暦法之起元、而西洋諸國至今用此法也、而彼稱白羊星者、卽此稱婁宿者也、由是觀之、則當時春分日躔、當在婁初度也、然而至今時、則春分日躔遙東移悉入于他宮、而及距婁明星三十餘度、因而以衆星每一年五十一秒東移之法推算之、則距今二千一百餘年前也、然則蠻一書云、十二宮名號成于開化天皇三十八年、而尙一百四十餘年以前之事、而當孝靈天皇御宇也、且又此十二宮名出于不空三藏宿曜經、因按天竺諸國亦當用此必巴兒古斯之暦法也、

梵暦法

〈外交志稿二十四 學術宗教〉六年政○寛甲寅十一月、大槻玄澤始テ新元會ヲ開キ、同學諸子ヲ會シテ、陽暦元朝ヲ祝ス、世人之ヲ和蘭正月ト稱ス、以後毎歳以テ例トス、

〈佛國暦象編〉是編何爲而著也、厥故蓋有三焉、欲顯揚聖說之天地而破諸邪說以護正法、一也、欲示諸邦暦術因循梵暦而得其法始備、二也、欲補以梵暦不傳吾邦、爲瑜珈者之闕典、三也、○中略

維時文化七龍集上章敦牂大呂日、圓通書于平安東森積善敎院、

〈佛國暦象編一 暦原〉論支那暦術資印度法而後始周備

要之梵暦之法、先曉二曜有高卑之行、其義後當出以日爲日、以月爲月、七曜暦、九執暦等卽是、唐巳前日月並紀平行度、用平朔、至李淳風法異于此、蓋取之於印度故也、何以知之、淳風出瞿曇謙甲子元辰暦之後而依倣其法、已見于上註及與瞿曇羅同時、總爲太史令、是時朝廷專徵暦士於印度、則淳風蓋多與之交、其承梵暦者可推而知也、淳風之後嵩陽大衍暦出、而支那暦道始大備焉、故唐書暦志十七上云、自漢太初至麟德暦有二十三家、與天雖近而不密也、至一行密矣、後世雖有改作者、皆依倣而已、

〈隨意錄六〉聞、近日有一僧、講釋佛國暦、其說以佛所謂須彌四州爲主、以駁漢以降之天文家、且以謂天地之形不圓、予謂、凡物自內見之而不可知其外形何如、○下略

〈本朝梵暦師資系譜〉本朝梵暦ノ起源ヲ勘ルニ、文化以前ハ之レヲ云フ者ナカリキ、或ハ之レヲ云フモ、一箇ノ私見ヲ以テスルノミニシテ、吾佛ノ須彌說ニヨリテ、之レガ確論ヲ立テザルユエニ、別ニ一家ヲナスモノナシト、然ルニ文化年間ニ至リ、普門律師ナルモノアリ、西洋天文地理ノ說ノ、後來佛敎ニ巨害ヲナサンコトヲ測リ、大藏ヲ閱スルコト殆ンド卅年、是ニ於テ日月横旋、四洲異四時ノ論ヲ立テ、數書ヲ著ハセリ、暦象編、實驗須彌界說、須彌山儀銘、及和解須彌界暦書等ハ、皆師ガ述作ニ係ル、其大意ハ下ニ至リテ略論スベシ、師ハ寶暦四年ニ生ル、因幡國ノ士族山田某ノ子ナリ、七歲ニシテ出家シ、戒ヲ豪潮阿闍棃ニ受ケ、諱ハ圓通、字ハ珂月、無外子ト

曆習名人

歿ス、歳年ノ後、洛東積善院ニ住シ、晩ニ東都ニ至リ、三縁山内ノ惠照院ニ住ス、天保五年九月四日寂ス、時ニ年八十一ナリ、師ガ所立ハ、大藏中ヨリ、阿毘曇論日月行品ヲ選出シ、須彌四洲異四時ノ說ヲ立テ、日月橫旋ノ義、并ニ縮象展象ノ理ヲ說ズ、其展象ニ於テハ、日月橫旋ニシテ、須彌ハ中央ニ卓立シ、日月ソノ半腹ヲ繞ルトイヘドモ、是レハ天眼ノ所見ニシテ、肉眼ニ應ゼズ、肉眼ノ所見ハ、縮象ニシテ、日月地下ニ出入ノ象ヲ見ル、故ニ數ハ展象ニ原クトイヘドモ、眼見ニ相應セシメンガ爲メニ、種々ノ表ヲ設ケ、遂ニ須彌曆等ヲ述作セリ、具サニハ其書ニ就テ見ルベシ、蓋スルニ事創業ニ係ルヲ以テ、爲メニ數理モ甚ダ詳カナラズト雖モ、無數ノ艱苦ヲ歷テ、文政四年、遂ニ官許ヲ經テ、佛曆授與自由ノ權ヲ得ルニ至レリ、

〔山城全州墓碑銘集大成(僧及四五)〕故司天門下都講小島君墓表(在二縄手三條雙林寺一)　貫名苞撰

君、名好謙、字牧卿、稱典膳、號濤山、阿波德島人、○中略最精象緯曆數學、司天安公擢爲都講、僧珂月傳國曆象編之出、勿論緇徒、雖儒士修曆學者、往々眩惑、至謂官曆爲邪法、免顧、君慨然爲著疾妄非斥之、庚寅秋、地大震、洛中洶々、至或遷地、君爲著地震致以定衆心、

〔日本書紀(推古二十二)〕十年十月、百濟僧觀勒來之、仍貢曆本及天文地理書、幷遁甲方術之書也、是時選書生三四人、以俾學習於觀勒矣、陽胡史祖玉陳習曆法、○中略皆學以成業、

〔續日本紀(文武三)〕大寶三年十月甲戌、僧隆觀還俗、本姓金、名財、沙門幸甚子也、頗涉藝術、兼知算曆、

〔藤原家傳(下武智麿)〕公爲人溫雅、備於諸事、○中略當此時、○中略曆筭有山口忌寸田主、志紀連大道、私石村、志斐連三田次等、

〔江談抄(三雜事)〕吉備入唐間事

吉備大臣入唐習道之間、諸道藝能博達聰慧也、唐土人頗有恥氣、○中略鬼云、令聞得哉、如何、吉備云、聞畢、若舊曆十餘卷被求與乎ト云ニ、鬼受約、與曆十卷、即持來、吉備得之、文選上帙一卷ヲ、端端三四枚

ヅ、令書天持ルニ、歷一兩日天覗ヲ皆悉成ス、持夫シテ、食物荷セテ、文選ヲ令送樓、

〔續日本後紀二仁明〕天長十年十二月甲子、陰陽寮進御曆幷頒曆也、恒例在十一月朔、而曆博士外從五位下刀伎直淨濱卒後、忽无相繼之人、遣召〇遣召、原作造、據一本改、識曆術者遠江介正六位上大春日良棟、乃令造之、所以于今延引、

〔續日本後紀三仁明〕承和元年二月辛未、是日授正六位上大春日朝臣良棟從五位下、褒造曆之才也、

〔帝王編年記十七一條〕永延元年、安倍晴明是時人也、掌天文曆數事、昔者一家兼兩道、而賀茂保憲以曆道傳其子光榮、以天文道傳弟子晴明、自此已後兩道相分、

〔權記〕長保二年七月九日甲申、依勅召大炊頭光榮、仰可令前內藏允光國習傳曆道之事、申云、當道事者、以光榮子息可令習繼、但光國者、尤可被採用、陰曆助若博士有闕之時可被拜任歟、

〔曆引圖編敍〕持統天皇六年以來、襲用異域之曆殆一千年、而曆日後天三日、纖月見晦朔矣、方此時、吾祖新蘆翁、〇澁川春海草思斯道、頗究蘊奧、於是創造新法以聞、遂編頒行、子孫繼緒既已九世、余承職以來、恆冀斯道之隆、〇中略

弘化四年丁未冬日　　司天官　澁川景祐誌

〔春海先生實記〕是年〇元祿十四年春三月、幸德井友親來於東武、至於先生之邸、滯留別室、傳受曆術、學貞享曆法、頗得而冬十一月歸京、於高家之官僚、來於關東學習也、近代所不曾有、正是豐原時秋以來之事歟、人無不驚稱之矣、蓋友親賀茂姓胤、世以曆博士爲任官、古今所記之草曆之吉凶日等、是幸德井家之傳文、而每歲遣自考之曆稿於東武、受先生之校正、由此始也、先生之家曆、每二月以交食節氣之曆草與七曜曆稿、委于官所、贈賀家、幸德井據其曆草而撰草曆、錄家傳之卜例等、與先生之七曜曆併令之彫刻、大經師蜂屋內匠刊之、刊成、而夏六月呈東武之官所、頒行如前說、今專用此例也、

〔賀茂家文書〕日外預御狀過分至ニ候、如仰未得御意候、今度者御子息杉大夫殿、久々在京に而、曆

學傳授中候、新暦未御本濟書相濟不申候間半傳授申候、授時大統兩部は皆相傳申候、如何樣以

祈可得御意候、恐々謹言、

猶書

猶々貞享暦秘傳甚御座候、安家には神文書被指上候、其樣子杉大夫殿御物語申候條、不能詳、

以上、

八月七日　保井算哲

春海花押

賀茂豐前樣

〔泰山集 四十八 祭文〕祭澁川先生文 乙未十月六日 卒七十九歲

嗚呼哀哉、先生之於天兮、我國開闢以來其一人歟、何其制符離合日月、指掌低昂星辰也邪、神代伊奘諾尊立春秋、以分表中底之天、人世神武天皇興暦法、乃成十二月之年、神聖之道蔑乎淵矣、爾來千歲、斯道莫傳、異野盛名乎暦術兮、左祖徐昂、知其學之疎、晴明也妙乎天象兮、推步之策則不免闕如、夫星宿之在天、如娥色之列地、有古存而今亡者、有古隱而今示者、先生皆能識別而字之、日月之會同在天有定期、淳風處進徒爲參差、郭氏乘除猶未明備、先生創行差之術、兩曜正合乎天矣、日行之盈縮限以冬夏至、入氣之式、先生始試兩斗之初、東井之四、古今交食、豪釐不貳、歲且癸七曜暦、至元亨無廢絕、干戈侵尋、推步滅裂、貞和三星之變、當時有惟而記之、降而至于近世、莫識其光芒之勞竊、先生之明、毫分縷別、張子信積候、郭守敬細行、游刃於肯綮、五緯得其列、偉哉貞享朔儀復式、其他日月地之近遠、陰陽暦之強弱、前乎千歲之古暦、後乎千歲之改暦、言之析乎絲髮、莫不爬梳抉剔、著書數千言、一一合符契、蓋自非星辰降而化人、何以如此之明白也哉、嗚呼哀哉、吾神道之統遠出乎天、伊奘諾尊以是傳之天照大神、天照大神以是傳之瓊々杵尊、列聖相承未嘗失隕、兒屋、太玉、猿田彥、內外相守如一身、中古以

來其道分崩、卜部伊勢各自立家、雜佛混儒、伐異黨同、如此凡數百載、學者無所折衷、近時垂加社出障百川而東之、風水風葉之作、似續藤森之功、然而一時門人亦未有升其堂、懿哉先生、圯上取履、到底根究、旁及百氏、蚤見乎天柱國柱之卓、晩登乎神籬磐境之巓、蓋先生之於垂加門墻也、實青於藍、而寒於水者矣、嗚呼哀哉、重遠事先生二十歲于茲、於先生家學庶乎不惛然、晩以禁錮廢講問、日日馳想東海天、天曆妙籌、神道秘奧、北斗仰望、胤子之賢、惟天難諶、胤子先逝、先生老病、悲淚懸泉、未滿七月、先生亦沒、既無底孽、亦無孫、遺傳忽雲散、東傃前後煙、不知何世有楊子雲、嗚呼哀哉、重遠錄天名壬癸、傳神號靈土、師說萬一以謀不廣、奈何天南海北猶未及乞郢斧、畢一世莫可質訂、此恨縣縣徹千古、嗚呼哀哉、噫先生之魂、豈與醯鷄甕裏者同乎哉、將沿東海兮、浮遊八極乎、抑攀富山兮、御氣排空也、必其爲列星爲明神、後天後地、以欲觀造物人鬼之所窮焉、願彼塵世之利名羈羈兮、野馬杯水曾何足掛齒牙也、然則重遠等區々奉盡、忝嗟悲泣兮、事莫爲先生所嘲侮也耶、嗚呼哀哉、尙饗、

〔文會雜記 三下〕土州ニテ、曆學ヲ始テセシハ、谷丹三郎（重遠）新重面會ヲカキシ男ナリ也、コレハ東都ノ天文生澀川氏ニ學ブト也、谷氏ノ門人ニ川谷貞六ト云人アリ、此人、南海曆談、授時改旋曆書等ヲ著シ、又起元演段ト云筭書ヲ著ス、其門人片岡武次郎、則細川生ノ師也、武次郎、傍通曆、五緯曆、天元筭法等ヲ著ス、又私習曆書ヲ著ス、凡五十卷、未業ヲ卒ヘズ、今四十卷ハ出來セシト也、

〔有德院殿御實紀附錄 十五〕數學は、寄合建部彥次郎賢弘とて、名譽の算學者ありしを、小納戸浦上彌五左衞門直方薦め申ければ、しば〳〵御垂問あり、ほどなく精微をきはめ玉ひ、さらに聖慮をくはへ玉ひしこともありしかば、誠に神明の御方略、凡慮の及ぶ所にあらずと、彥次郎賢弘もふかく感服し、後にはかへりて御教諭を蒙りしとなり、しかるに天文曆術は、民に時を授るの要務なればとて、これにも專ら御心を用ひ玉ひ、和漢の曆書はさらなり、阿蘭の說までもひろく御穿鑿有けるが、當時用ひらるゝ貞享の曆法は、疎脫多く、誤も又少からざるにやと、天文方澀川助

左衛門春海が弟子、猪飼文次郎某に御尋ありしに、文次郎其わざにいたりふかゝらざれば、答へ奉る事あたはず、かさねて彥次郎賢弘にとはせ玉ひしに、彥次郎賢弘、京の銀工中根條右衛門玄圭といふを推擧せり、よりて條右衛門玄圭を府に召れ、御質問どもありしに、かれが申所ことごとく明白なりければ、大に御旨にかなひ、そのころ唐船に、曆算全書といへる書をもたらし來りしを、條右衛門玄圭に譯すべしと命せられしに、やがて譯本一通を進らせける、左かるにこの書は、別に全書ありし其中より抄錄したるものなれば、其全書をみざらんには、本意は明辨しがたしと玄圭申しければ、やがて其全書をもち來るべきよし、長崎の奉行萩原伯耆守美雅もて唐商に命せらる、はたして曆算全書は、西洋曆經のうちより抄錄せしものなりしかば、西洋曆經の書本をもて參りぬ、これをも條右衛門玄圭にみることをゆるされしに、これにたよりて、律數曆〈一名白山曆〉をつくりて奉れり、その頃條右衛門玄圭、凡曆術は唐土の法みな疎漏にして用ひがたく、明の時に、西洋の曆學はじめて唐土に入し後、明らかになりし事少からず、本邦には耶蘇宗を嚴しく禁じ玉ふにより、天主または李瑪竇などの文字ある書は、ことく〲く長崎にて燒捨るおきてなれば、曆學のたよりとする書甚だ乏し、本邦の曆學を精微にいたらしめんとの御旨ならば、まづこの嚴禁をゆるべ玉ふべしと、建議せしといへり、

〔外交志稿 二十四學術宗敎〕是歲、〈正德六年〉建部賢弘ニ命ジテ、曆算全書ヲ校セシム、賢弘譯語ヲ撰ス、〈通航一覽〉

〔愛日樓文 二〕亡友關大業碑銘叙〈○中略〉

君諱重富、關氏、號長涯、晚自號耕雲主人、大業其字、關氏之祖出於淡海蒲生氏、元和中、有遷津國西成郡豐島莊者、寬永之初、來家浪速、業典舖、迨君凡六世、襲稱十一屋五郎兵衛、考諱重光、妣中野氏、有七男一女、君其第六子、兄弟皆夭、君嗣、君幼容止凝重、嶷如成人、年甫十二、見渾天圖、反覆翫之、後數日手自揉輪竹木、造一儀器、不少差、人皆驚、頃十七八、學算法、既弱冠始志星象之學、遍求古今曆書讀之、夙

夜草思研鑽、至寢食俱廢者數年、後知洋曆之爲精不可易也、乃耑攻之、自洋曆之入於漢土、而依其法成書者、明崇禎已還有若干種、不如清乾隆所定曆象考成後編之爲最精、君得之益有所發、時有豐後人麻田剛立者、居浪速、以曆學聞、因執贄往見、剛立嘗有疑於緯星周天之數、後雖得其術、而未究其所以然、君乃闡天行方數諸曜歸一之理、錄以示之、剛立宿疑忽釋、嘆曰、窮理入微、海內惟有一間氏而已、蓋方數之說、既著在洋書、而其書當時猶未舶載、本邦固所未言、漢土亦無及此者、然剛立始能得其術、而其理則待君而發之云、君嘗掛遠鏡加衡視心差之法、又其所製儀器不下十數、而尤其有用者曰垂搖球儀、曰測食定分儀、曰測食定方儀、常食工人於家、凡有所作、必面喩指畫使無差謬、君於算數亦著算法弧矢索隱一編、又考宋尺度、辨其古今同異、皆出於曆學之緒餘、至寬政中、官有改曆之擧、七年乙卯、君見徵赴江都、留在曆局、與其事焉、曆成蒙優賞、賜白金及稟食宅地、許稱姓氏及旅次非常時佩刀、留府凡三年、賜休暇、仍令在鄉測候、享和二年四月、奉旨赴長崎、查驗食限、且測量邊海里程、至文化紀元正月日、官高橋君東岡歿、因復召君、東岡嘗奉命譯述西洋新法曆書、未成、嗣子觀巢續成之、而君亦與焉、留府六年、乞假暫歸、無幾而罹病在苒經年、遂歿於家、實文化丙子三月二十四日也、

〔淇園文集三〕混天新語序

聖人明天道察民故、而禮樂作焉、其要歸於順天而民可以得久安耳、曆家驗天象會衆智而法術變焉、其要歸於合天而時可以得永明耳、是故苟順天而安乎民、則舊愆不可不替焉、苟合天而明乎時、則新術不可不興焉、新術可興、則夷夏又奚擇、蓋夫曆法自漢大統迄元授時而大備焉、而西法入彼者、亦自唐至明有九執萬年回々數書、而明崇禎之間、又有西人鄭谷之說、西術是爲大備者、而後有其弟子刻白爾、及利酌理嚼西尼等、益加精密、近亦傳入本邦、而往々爲識者所採取矣、河野通禮字子典、精通曆算、而以授其徒、而若西說之書、每費指畫、頃乃著混天新語二卷、〇中略加以圖象、請余序、〇中略於是乎題、

文化紀元甲子孟冬、

曆議
朔旦冬至之議

〔三代實錄清和四〕貞觀二年閏十月廿三日己巳、勅從四位下行文章博士兼播磨權守菅原朝臣是善、正五位下守權左中辨兼行式部少輔大枝朝臣音人、正五位下守右中辨藤原朝臣冬緖、從五位上行大學博士大春日朝臣雄繼、從五位下守主計頭兼行木工助算博士有宗宿禰益門等曰、今年一章十九年、准據先例、當有朔旦冬至、而暦博士眞野麻呂等所上暦日、冬至在十一月二日、若於經史有可進退之理乎、宜議而奏之、是善等議曰、謹案眞野麻呂所執、以爲依日分小餘不足、不得合朔、論之暦術、理若當然、但案暦經注云、月行遲疾、暦則有六大六小、以日行盈縮增損之云々、當察加時早晩、隨其所近而進退之、使不過六大六小、其正月朔、若有交加時正見者、消息前後一兩月、以定大小、令蝕在晦者、以此言之、既有進退之理、而今當年暦八月大、九月小、十月大、閏十月小、然則以一小月爲大、自得朔旦冬至、夫朔旦冬至者、暦數之所始、帝王之休祥、既云避凶而在晦、何不遷吉以退朔、昔唐太宗貞觀十四年有閏十月、即得朔旦冬至、太史令傅仁均以癸亥爲朔旦冬至、而宜義郎李淳風案古暦分日、以爲甲子宜在朔旦、詔下公卿及諸有識、於是國子祭酒孔穎達等十有四人、尙書八座請從淳風議、有詔可之、雖然至於後年、不見暦議之疑、爰知一日進退未足爲妨、又尙書百釋云、頻大消之、案其意義、毎至章蔀之歳、必欲令得朔旦冬至、故須置大月、至於三四、夫六大六小者、暦術之常法、況今唯置七〔○七、類聚國史作二、〕大、既得合朔乎、又勅從五位下行暦博士兼備後介大春日朝臣眞野麻呂、外從五位下行陰陽助兼權陰陽博士笠朝臣名高等曰、今諸有識等僉議云、今年可置朔旦冬至、若依此說、遷吉置朔者、於使年暦得節氣不錯經緯、眞野麻呂等奏言、謹撿術法、無依吉進退之文、仍今年不置朔旦冬至、但依群臣議、置之可無弦望晦〔○晦、原作明、據政事要略改、〕之差、於是詔從是善等之議焉、　廿五日辛未、宜詔百官及五畿七道諸國云、今年當有朔旦冬至、而暦家偏依日分不足、置於二日、今稽之故實、既有改定之理、宜改閏十月爲大、即以十一月二日丁丑爲朔旦冬至、

〔扶桑略記二十三裏書醍醐〕延喜十七年二月廿日己亥、兵書志多治有行、與暦博士等論、可无朔旦冬至之由、

〔百錬抄 七後白河〕保元元年十月十八日、諸卿定申朔旦暦論事、件事暦道造進暦、而算博士行康難申、仍被下勘諸道也、　廿六日、以十月卅日戊辰爲十一月朔、以冬至置二日、兼又除十二月卅日丁卯、以廿九日丙寅可爲晦日宣下事、

〔建内記〕嘉吉元年十月廿九日壬戌、今月御暦之面大月也、朔旦冬至臨時出來、而先日及改暦宣下、今月廿九日晦日也、以卅日爲十一月一日、以十二月爲大也、　十一月一日癸亥、黄鐘初律幸甚、今日御暦所載、十月卅日癸亥也、明日十一月一日甲子朔旦冬至也、然依臨時朔旦冬至可改暦之由被宣下、以十月爲小、以今日爲十一月朔、以冬至爲十一月二日、仍今日朔日也、此事去月十六日有陣定、群卿及議奏、予〇藤原時房幷隆遠卿申可被用朔旦冬至之由、其外内大臣〇藤原公名已下申可被改暦之由、被從衆議歟、紀傳明經勘文皆存改暦之義也、但愚存委見定文申詞也、非無所存者歟、

〔親長卿記〕文明十一年十月廿九日、抑來月一日爲冬至、就旬之儀依難被行、可有改暦宣旨哉否事、先日被仰付頭中將、實興朝臣仰詞其趣尋之副官外記勘例、

朔旦冬至事、旬之儀、如平座、猶以難被行、可有改暦宣下否事可計申云々、

禪閤　二條前關白　關白等尋申

禪閤申詞

今年天正冬至事、任推歩之術、置中氣於朔旦歟、雖然不當章蔀之期、爭被行賀瑞之禮哉、依是有改暦之宜下、可謂保元元延慶元等例也、但去應仁二年雖丁一章之運、依天下擾亂、不及其沙汰者無力次第也、當年已有中間之朔旦、任先規被改御暦之條何事有哉、然則以今月卅日壬午爲十一月朔、被退冬至日二日、以十一月廿九日辛亥、可爲晦日之由被宣下者、不可違先例者哉、

二條前關白不載申詞、改暦可然云々、

關白

朔旦冬至事、去應仁二年相當章歲歟、然者今年爲臨時朔旦間、任保元以來之舊蹤、改暦事可被宜下哉、此上事宜在時宜矣、

官外記勘例但外記不得所見、無文書也、

朔旦冬至、當時如平座、猶以難被行、雖爲幽玄儀、可有改暦宜下哉、一向不及御沙汰條如何事、

一延暦三年、爲本朝朔旦冬至始被行之、其以後數十箇度也、近者寬德元年被行旬儀、應仁二年同相當朔旦冬至、依亂無被行之儀、

一臨時朔旦冬至事

文永七年庚午、相當此節、經奏聞之處、算術之所至勘申之趣、尤雖有其謂、保元有沙汰、已被略了、任先例可被停止之由被仰下之間、以十月大爲小、以十二月小爲大、令造進御暦訖、

延慶元年戊申、相當此節、宜旨云、今年十一月朔丙戌當冬至、而算博士三善遠衡朝臣勘申非章蔀期、無中間會、由是任保元元年十一月退朔例、以今月卅日乙酉爲十一月朔、以冬至可置二日、以十二月卅日甲申可爲晦、宜下知百官者、

朔旦冬至者、一章十九年間、必有此節、於臨時朔旦冬至者、不待章蔀歲、相當十一月一日、去應仁二年爲章歲、然者當年爲臨時朔旦歟、暦道重令勘奏哉、改暦之條先規也、

右注進如件、

文明十一年十月廿九日　左大史小槻雅久上

今度宜下之樣、頭中將相尋之間、如注左仰之、

文明十一年十月廿四日宜旨

今年十一月朔癸未、當冬至、而非章蔀期、無中間會、由是任保元延慶例、以今月卅日壬午爲十一月朔、退冬至於二日、以十一月廿九日辛亥可爲晦日、宜下知五畿七道并百官者、

月大小之論

藏人頭右近衞權中將藤原實興本

此趣歟、但可尋申禪閤之由仰之、

仰云、宜下知五畿七道百官、且仰曆博士等令進御曆者、如此可然之由有仰云々、予所存已可下知百官之由仰之上者、何別仰曆博士哉、不審也、

〔續日本後紀 五仁明〕承和三年七月戊辰朔、是月元據頒曆爲小月、而更據七曜曆改爲大月、又八月大改爲小月、九月小改爲大、十月大改爲小、時有曆博士二人、其執見不同也、議者討論以七曜之說爲得、故改從之、

〔百練抄 六崇德〕大治四年六月二日、於仙院曆道算道相論月大小、有議定、

〔中右記〕大治四年六月二日、頭辨(宗忠○藤原)被下文書、一々披見之、大法師源算進申文云、今年閏七月小、八月大、曆道誤也、算勘之所至、八月大、閏八月小也、仍被問曆道之處、家榮朝臣、宗憲保榮等、陳狀已及二ヶ度、其趣雖多、大切所被尋二ヶ條、八月朔丙子、日月之行合度事、延曆以後、朔旦冬至之後四年、閏月廿六七日也、未及八月條注申事也、以家榮朝臣申旨、以頭辨先被問源算之處、八月朔丙子非合度之由所申也、今合度之由申條、此事不知給、只算術以所及申上許也、又朔旦以後四年內、閏月不及八月條、尤可然、於今年者可及八月由所存也、又被問家榮處、申云、八月合度之事、所傳之秘說口傳也、不可披申也、大略注申了、朔旦以後四年內、閏月每六七月也、今年何可及八月哉、以此旨先被奏兩院、(家榮源算各召合侯下侍邊也)人々可定申者、源宰相(師頼○源)發語云、兩人申旨大略如承者、各立意趣、但宿耀之事可被用源算也、造曆之事可被用家榮說也、右衞門督(實行○藤原)定申云、月々大小度々如此論出來時、多被用曆道之說也、然者可被用曆道之說歟、但算術之不審殘者、召算博士爲康一旦可被問歟、予(宗忠○藤原)定申云、件事依爲不知子細道、忽難申左右、但諸道雖有本書、必有秘說口傳、曆道累葉家定有秘說歟、就中家榮已申有秘說之由、仍可被用曆道說歟、度々如此論出來之時、依他家之申不被改御曆也、內大臣

曆相違之論

○源有仁殿下大略同此定、以類辨被申兩院、仰云、然者召算博士可被問歟、可隨攝政令申給也、殿下又被問合、一同申云、可被問算博士者、可被問明經記傳歟、各有天文星宿之本書故也、但縱諸道注申可被背曆道之說甚難有事也、仍只雖不被尋他道、被用曆道說可宜歟、此旨重被奏之處、仰云、令申旨最可然者、如本可用曆道說之由可被仰下者、午時許退出、

〔長秋記〕大治四年六月二日己酉、源算大法師與曆博士等相論今年御曆相違事、於新院殿上有公卿僉議、御曆閏七月小、源算申閏七月大、閏八月小云々、各進勘文二度三度、內大臣仰官被問曆道、次度源算內奏、(既)別當奉行不奏者、直問陰陽頭家榮朝臣、以件後勘文當座被下、於本勘文內大臣相具被參、清撰有限、應召人五人、攝政內大臣、權大納言宗忠、別當實行、參議師賴卿等也、各著直衣、源算被召候、藏人所陰陽頭家榮朝臣勘宗憲等候新院北面、以曆道陳狀被問源算、(頗紛雜家朝臣同之、)申旨不詳、唯號有奏狀、又問家榮、陳源算逐口傳之由、諸卿見申文不讀舉、又不被書定文、源相公(○師賴)發語云、須問算道也、然而依是被陳之旨大略其理盡了、但於御曆付曆家說可被用於宿曜事、宜被用源算說歟、千羊皮不若一狐腋、源算申旨雖其說多、不可及家榮一言歟、諸卿同之、上皇又如此、仍被仰下其由云々、後聞源算博士爲康同意上奏、問博士大夫史正重宿曜師珍也同意、又助教信俊同曆家云々、是承新院仰大略記者也、後問源算重申文、家榮重陳狀、別當於座奉攝政、於本解內大臣自懷中取出奉攝政給云云、　三日庚戌、大夫史政重來、召問曆論事、答云、源算申旨雖一端理、似不知口傳、曆博士等申旨相合先跡、但傍儒爲康立申源算理之由、若被尋仰ましかば、算道勘文定意趣相違歟、

〔日本紀略二朱雀〕承平六年十月十一日、權曆博士葛木茂經申請被給官符毀曆博士大春日弘範造進來承平七年曆事、　七年十月二日辛巳、右大臣(○恆佐)著左仗、召曆博士二人、勘問所論來年曆事所申不同由、

〔春記〕長曆二年十一月廿七日己未、巳時許參關白殿、(○藤原賴通、中略、)被仰云、曆博士道平所作進之曆、月大

小幷雜注等與證照暦多有相違、至證照雖蒙造暦之宣旨、依僧不加署名、年來道平相共所作進也、證照道平已以違背、仍與證照共不作云々、今證照所作出之暦也、相違也、事尤不便事也、早可召問道平之由奏事由、可仰右大臣〇藤原實資者、十二月一日癸亥、巳時許參右府、命云、暦博士道平申云、件暦、年來證照法師相共所作進也、而彼法師依慮外事向背、仍不見證照暦、見給彼暦之後、有相違者、可進勘文者、此由可奏聞者、予參督殿、卽參關白殿令申此由、命云、道平幷證照暦相共校合、有相違者、各可進勘文之由奏事由、可仰右大臣者、〇中略十五日丁丑、未時許、參關白殿、於門外令申云、右大臣被申云、暦博士道平申云、不能進勘文者、若可令進其由申文歟如何、可隨處分者、被仰云、不進勘文事太奇恠事也、猶可進之由可仰、遂不進者可被用證照暦歟者、予卽退出、參御堂、相遇師房卿、仰繁貞免除由畢、卽參內、奏道平事、早可仰下者、

〔百練抄四後朱雀〕長暦三年五月廿三日、諸卿定申暦博士道平與僧證昭暦論事、可用道平暦之由被宣下之、

〔春記〕長暦三年十月一日戊午、今晩月耀不出見之由万人所見、今日是證昭晦日也、太有興、　二日己未、今日巳陰、不見月出否、但一昨日月見、昨日不見、證昭晦是仍不見歟、　三日庚申、日景沒了、只暫之、微月在西天、遊山頂二丈許、相於鈎、已非三日月、今日似初出云々、今日證昭二日也、彼說相叶歟、尤有興事也、

〔碧山日錄〕應仁二年正月十二日癸酉、天文博士所制之新暦、以十月爲閏、遠邦所出之暦、以十二月爲閏、不議何善、正其眞以爲數也、余以順九道五之數校焉、則十月爲宜、　閏十月一日丁巳、南京暦〇奈良眞幸井錯失律數、以十二月爲閏、不可取焉、

古事類苑

方技部六

暦道下　漏刻附

暦本

〔病間長語　三〕古暦はみな楷字を以て書せしに、いつの比よりこの様くづの如きものにはなりつらん、徂來子も、古暦を觀れば、古は民間にても、楷字を讀しと見ゆるに、今は眞の倭奴となれりと歎れたり、

〔榮花物語　二十七　衣珠〕女はすにも成ぬれば、こよみの軸もと、ちかうなりぬるを哀にもおもふほどに、

○下略

〔夫木和歌抄　十八　歳暮〕家集歳暮　　源仲正

行としをこよみのぢくにまきよせておひはてにける身をなげく哉

〔市中取締類集　九ノ七十八〕上　　出雲寺金吾

覺

一御川納之分折暦　此度相改代八分

一同並　賣捌直段相改代四十八文

一御川納之分柱暦　此度相改代壹分

一同並　賣捌直段相改代六文

一(大形/小形)綴暦。　代廿四文
一同。　代廿四文
一懐中暦。　代六文
一柱暦。　代四文
右之通、直段相改賣捌仕度奉ᵥ存候、尤開板仕候品數六色ニ而御座候、此段奉ᵥ申上候、以上、
寅四月　御書物師　出雲寺金吾印
壹「此分、是迄八十四文卸ニ而、百文ニ賣捌仕候處、此度相改、四十二文卸ニ而、四十八文ニ賣捌仕度候、」
貳「此分、是迄六文ニ卸、十二文ニ賣捌候處、此度相改、三文卸ニ而、六文ニ賣捌仕度候、」
〔市中取締類集九ノ九十〕來巳年〇弘化二年暦直段書
一奉。書。摺。折。暦。　壹冊ニ付代百四十八文、但卸直段百三拾二文、
一八。寸。摺。折。暦。　壹冊ニ付代八拾四文、但卸直段七拾貳文、
一大。字。綴。暦。　壹冊ニ付代四拾文、但卸直段三拾貳文、
一小。形。綴。暦。　壹冊ニ付代三拾六文、但卸直段貳拾八文、
一懐。中。暦。　壹冊ニ付代六文、但卸直段四文、
一同。奉。書。摺。　壹冊ニ付代拾四文、但卸直段九文六分、
一大。柱。暦。　壹枚ニ付代八文、但卸直段四文八分、
一同。奉。書。摺。　壹枚ニ付代拾壹文
一小。形。柱。暦。　壹枚ニ付代四文、但卸直段貳文三分、
一同。西。之。内。摺。　壹枚ニ付代六文、但卸直段四文、

右之通賣買仕度旨申出候間、去卯年書上直段見競候處、相替儀無御座候、右取調、此段申上候、以上、

書物掛

小網町

名主伊兵衛

辰十月五日

〔滄海一得上〕今長崎ヨリ東都ヘ獻ズル清暦ヲミレバ、二京、十四省、朝鮮、蒙古、凡正朔ヲ奉ズル國ノ二十四節、日ノ出入ノ遲速ヲ、其處々ニ割付ケテ、暦日ドモニハ、紙カズ三十張バカリアリテ、官ノ大印ヲ捺テ、翻刻スル者ハ刑三族ニ及ト記、總裁以下ノ官人ノ連署アリテ、官ヨリ頒行ナリ物ニテ、賣人ノ製ル物ニ非ズ、書山ノ賣人ノ日用ノ暦ハ、小册子ニシテ、東都ヘ獻ルトハ別板ナリト、長崎ノ人ノ話ナリ、官人ト庶人トハ、頒ツニ大小本ノ別暦アリテ、于鱗王百穀ナド、田里ニ歸テ潜居スルトキハ、民間ノ小暦ノミニテ、大册暦ヲ見ザル故、二京官ヲ勤ル友人ヨリ、官暦ヲ贈ルトミヘタリ、

〔碧山日錄〕應仁二年正月四日乙丑、是日節分、陰陽家、去歳爲兵卒家、其書、不得校勘年月日、故無新暦、延歎。閏月小寒日、以知此節、

〔駒井日記〕文祿二年十二月十五日

一大閤様〇豊臣秀吉 爲陰陽師有昌御暦上、民法〇民部卿法印玄以 披申上、

〔續修東大寺正倉院文書十四〕具注暦斷簡按、不詳蓋紙背有勝寶二年紀、當年以前可以證也、

十四日丙申火執　歳前小歳對、祭祀、葬吉、

十五日丁酉火破　歳對、療病、厭、解除、葬吉

十六日戊戌木危蜜　歳前小歳後　書入 大富参向、豊島巳乾、

十七日亥木成　歳前倶倉、加冠、結婚、入學、移徙、修宅、起土、作竈吉、

十八日庚子土收　歲前母倉、祭祀、加冠、結婚、起土、修宅、種蒔、斬草吉、
十九日辛丑土開　歲前九坎
廿日壬寅金閉　歲前歸忌、拜官、結婚、修宅、塞穴吉、　書入 掌疏所任巳訖
廿一日癸卯金建　歲前厭對、往亡、
廿二日甲辰火除　歲前療病吉
廿三日乙巳火除 春分三日下弦　歲前加冠、拜官吉、
廿四日午水平　歲後小歲位、祭祀、加冠、拜官、納婦吉、
廿五日丁未水定　歲後小歲位、血忌、
廿六日戊申土執 社　歲後小歲位、祭祀、解除吉、

艮

廿七日己酉土破　歲後天恩、厭、療病、解除、葬吉、
廿八日庚戌金危　歲後天恩、嫁娶吉、
廿九日辛亥金成　歲後天恩、母倉、加冠、入學、移徙、起土、修宅、治井、竈吉、
卅日壬子木收　歲前天恩、母倉、祭祀、加冠、結婚、移徙、修宅、井竈、種蒔、斬草吉、
三月小 天氣北行 月德在壬　天道丙壬 人道甲庚　月殺在未 月破在戌　土府在酉 取壬土吉　時乙辛丁癸　方丙壬乙辛丁癸
一日癸丑木開　歲前天恩九坎
二日甲寅水閉　歲前歸忌、塞穴、葬吉、

震

三日乙卯水建　陽錯厭
四日丙辰土除　歲前療病、解除吉、
五日丁巳土滿　歲前小歲後、祭祀、加冠、拜官、移徙、修宅、治井、竈吉、　書入 官召十二人
六日戊午火平　歲後祭祀、加冠、移徙、納婦吉、

七日己未火定　歲後移徙、血忌、　書入進二白鶴一、尾張王授二五位一、又天下六位以下賜位以上加二一級一、及種々有レ贈、

兌

八日庚申木定讀明三月上玄　陰錯厭

九日辛酉木執　歲後解除、葬吉、

十日壬戌水破　歲後九坎、療病吉、　書入官召十三人、又宣二敍位一八位以下、无位以上、叙位今二朝叙一、

十一日癸亥水危　絶陰　書入宮書始　又女宮買得　又聽書始

十二日甲子金成　絶陰歸忌

十三日乙丑金收　絶陰

離

十四日丙寅火開　絶陰、厭對、血忌、

十五日丁卯火閉望　絶陽　書入天下仁王經大講會、但金鏡寺者、淨御原天皇御時、九丈灌頂十二丈幢立爲大會、

十六日戊辰木建　單陰　書入官召十人　又天下大赦

十七日己巳木除　歲位、拜官、治竈、經洛、療病、解除吉、

十八日庚午土滿　歲位、加冠、治確、斬草、葬吉、

十九日辛未土平　歲位

廿日壬申金定　歲位、厭、沐浴、解除、葬吉、

廿一日癸酉金執　歲位、祭祀、解除、葬吉、

廿二日甲戌火破下弦　大小歲對九坎

廿三日乙亥火危驚蟄三月中　大小歲對、歸忌、祭祀、拜官、治確磑、葬吉

廿四日丙子水成没 大小歳對、歸忌、祭祀、拜官、治確、葬吉、

兌

廿五日丁丑水收 大小歳對、嫁娶、結婚吉、

廿六日戊寅土開 大小歳、天赦、血忌、厭對、療病吉、

廿七日己卯土閉 歳對、天恩、祭祀、官拜、結婚、作竈、塞穴吉、

廿八日庚辰金建

廿九日辛巳金除 歳位天恩、母倉、拜官、治竈吉、

○按ズルニ、右ハ天平十八年ノ具注暦ノ斷簡ナラン、

〔續修東大寺正倉院文書十四〕具注暦斷簡 天平勝寶八歳

天平勝寶八歳暦日 凡三百五十五日

正月大 二月小 三月大 四月大 五月小 六月大

七月小 八月小 九月小 十月大 十一月小 十二月大

大將在丙申 大陰在午 大將軍在午 歳刑在寅

歳破在寅 歳殺在未 黄幡在辰 豹尾在戌

右件太歳已下、其地不可穿鑿、動土、因有崩壞事、須營者、日與上吉并者、修營無妨、

歳德在南宮丙 天道在乙辛 人道在丁癸

右件歳德已下、其方造擧百事往來乘之大吉、月下亦同、

歳德 月德 天恩 天赦

右件上吉、庶事皆用之吉、其修宮室坏城郭、修堤坊、井竈、門戸、起土、修宅、及碓磑、厠等、雖非正造之月、因有崩壞事、須營者、並用此日、亦

吉、

歲位　歲前　歲對　歲後　母倉　滿平　定成　收開

右件大吉亦所用之、與凶及凶會幷不可用、其歲位、乘輿用之、公侯已下不可用、歲前公侯已上用之、歲對歲後庶人已上通用之吉、

廿四氣　朔望　弦晦　建除　執破　危閉

右件輕凶亦不可用、與上吉幷用之無妨、其晦日唯利用除服解除吉、

行佷了戾　陰錯陽錯　陽破陰衝　陰陽交破　陰陽衝擊　陰陽衝破　陰道衝陽　孤陽絕陰　絕陽單陰　三陰々位　歲博逐陰　純陰純陽　陰陽俱錯　孤辰

右件凶會不可用、事雖與上吉幷、亦不可用、

血忌日　其日不可針刺出血、

歸忌日　其日不可遠行、歸家、移徙、呼女、娶婦、

往亡日　其日不可遠行、拜官、移徙、呼女、娶婦、歸家、

修宅日　其日蓋屋、修門戶、碓磑、破屋壞垣、竪柱、上梁、並與修宅同、望前用小歲、望後用大歲、

葬日　啓殯、發故、殯埋同用、

斬草日　其葬日亦斬草吉、非其葬日、得斬草啓殯、

九坎日　其日不可葬、起土、種蒔、蓋屋、凶、

厭及厭對　其日祀害家長、講兵遷娶婦人、官種蒔凶、

日遊　其所在、產婦不可居之坐、及掃舍亦忌、

人神　其所在、不可針刺灸、

正月大天氣南行、月德在丙、天道乙辛、人道丁癸、月殺在丑、月破在申、土府在日、取丙土吉、時甲庚丙壬、方乾巽艮坤乙辛、人神

日遊震

一日乙卯水除　歳前祭祀、拜官、結婚、移徙、修宅、解除吉、
二日丙辰土滿　歳前九坎厭對
三日丁巳土平　歳後小歳前、祭祀、拜官、移徙吉、
四日戊午火定　歳後祭祀、往亡、修宅吉、
五日己未火執　歳後

巽

六日庚申木破　歳後瘵病、壞垣、葬吉、
七日辛酉木危　歳後葬吉
八日壬戌水成　歳後厭
九日癸亥水收上弦　大小歳位、母倉、作井吉、
十日甲子金開　大小歳位、天恩、母倉、加冠、修宅、起土、瘵病、治戸井竈吉、

離

十一日乙丑金閉　〻〻〻〻〻〻歸忌、血忌、塞穴吉、
十二日丙寅火建　〻〻〻〻〻〻加冠、拜官、移徙、嫁娶吉、
十三日丁卯火除啓蟄正月中　〻〻〻〻〻〻結婚、嫁娶、移徙、起土、修宅、瘵病、解除、斬草吉、
十四日戊辰木滿　歳位小歳前、天恩九坎厭對、
十五日乙巳木平　歳位雜祭祀、加冠、拜官、移徙、納奴婢吉、

坤

十六日庚午土定望　歳位祭祀、加冠、拜官吉、
十七日辛未土執　歳位
十八日壬申金破　歳位、瘵病、解除、斬草、葬吉、

十九日癸酉金危　歲位、解除、啓殯、斬草、葬吉、
廿日甲戌火成　大小歲對厭
廿一日乙亥火收　〻〻〻〻母倉
廿二日丙子水開　〻〻〻母倉、加冠、拜官、結婚、嫁娶、移徙、入學、起土、修宅、療病、治井竈戶、種蒔、斬草、葬吉、
兌　廿三日丁丑水閉下弦　大小歲對、歸忌、血忌、塞穴吉、
廿四日戊寅土建　〻〻〻〻天赦、加冠、拜官、移徙、修宅吉、
廿五日己卯土除　歲對、天恩、加冠、拜官、結婚、嫁娶、移徙、療病、治竈、解除吉、
廿六日庚辰金滿　歲位、天恩、九坎、厭對、

（觀古雜帖一）天平勝寶八歲具注暦抄寫事、此暦ニ書セルモノ、此年九月十月寫經生等食口ノ記實也、其備用ノ迅速ナル、當世ノ風觀ヲ見ルベシ、

乾			
廿八日辛巳金除		歲位、天恩、母倉、拜官、療病、治竈吉、	除
廿九日壬午木滿		歲位、天恩、母倉、斬草、葬吉、	[illegible]
卅日癸未木滿	立夏四月節	歲後、天恩、九坎、厭、	足跌
四月大　天氣西行		天道丁癸、月殺在辰、土府在寅、　時方　甲庚　乾巽艮	
日德在庚		人道乙辛、月破在亥、取庚土吉、　丙壬　坤癸丁	
一日甲申水平		歲後宜、忌治竈、解除吉、	

坎		
二日乙酉水定		歳前小歳對、結婚、治竈、○下略
三日丙戌土執		歳前小○下略
四日丁亥土破		歳前小歳、療病、拜官、祭祀、解除服吉、○下略
五日戊子火危		歳前祭祀、結婚吉、
六日己丑火成		歳前歸忌、厭對、
七日庚寅木收		歳前母倉、往亡、治竈、種蒔吉、○中略

本暦斷簡、三月四日ヨリ、四月十八日ニ至テ盡タレドモ、五月朔甲寅ナルコトハ、四月大ニテ推知ベキ也、此暦ト、天平十八年ト、廿一年ト、三暦各斷簡、東大寺正倉院文書中ニアリ、按、是官須ノ暦ニ非ズ、寫經所ノ書生校生等、私用傳寫ノモノ歟、製作疎略、白紙ニ竹刀痕(ヘラスア)ノ白界也、今假ニ墨界トスルハ、見ヤスキガ爲ノミ、破傷ハ鼠咬也、界上ニ八卦中宮ヲ配シタルヨリ、中下段ノ趣ハ、三暦相同ジ、下界際ニ、身體手足等ノ肉瞤ヲ配記セルハ、此暦ノミ也、暦語ノ讀解已下、古暦通考一篇ヲ作テ、史學ノ一助ニ供ヘントシテ、稿粗成タレドモ、長文此ニ載スベカラズ、

〔具註暦本殘闕摸寫〕永仁四年暦本

虚宿水曜	丑		月德在庚合在乙　月空在甲　三鏡甲庚乙辛丁癸
	一日乙未金危	五墓	大歳對小歳後口殺　壞口　日遊在内

危 木	二日丙申火成	沐浴	侯丑内	大歳對小歳後歳德母倉九坎　祠祀吉　日遊在内
太禍 室 金	三日丁酉火收　三吉天恩還下食	沐浴 解除吉		大歳對小歳後母倉月德合復　移徙吉　日遊在内
壁 土	四日戊戌木開　不視病			大歳對小歳□　出行吉　日遊在内
奎 蜜日	五日己亥木閉　不問病	小寒十二月節　沐浴 臨北…	侯丑外	日出辰初二分晝四十一刻 日入申三刻五分夜五十九刻　大歳對重復厭　日遊在内
婁 月	六日庚子土閉　三吉以上大將軍還西土公入	沐浴 解除 除手足甲		大歳對月德歸忌血忌無翹　嫁娶大吉　日遊在内
胃 火	七日辛丑土建　三吉忌遠行	解除 吉 除手甲	五墓	大歳對歳德合　嫁娶吉　日遊在内
昴 水	八日壬寅金除　金對 三吉以上 吉	上位 除手足甲	大夫	大歳對 略○中
室 木	廿日甲子金閉　大將軍遊東土公遊北	沐浴 除…		大小歳前□□□忌血忌無翹

永仁三年十一月一日

従五位上行主計權助兼尾張權介賀茂博士在氏

従五位上行權曆博士賀茂朝臣在豐

散位正五位下賀茂朝臣在千

□□位下行權曆博士賀茂朝臣定清

従四位下權陰陽博士兼但馬權介賀茂朝臣在直

従四位下行曆博士兼能登權介賀茂朝臣在多

〔具註曆本殘闕模寫〕延慶二年曆本

延慶二年具注暦日　凡三百五十五日

大歳在己酉（歳○此下損）　大將軍在午　大陰在未

歳德在東宮甲（合在己甲及□□取土宜修造）　歳刑在酉　歳破在卯

歳殺在辰　黄幡在丑　豹尾在未

己酉歳（干土支金納音是土）

右件大歳己丁、其地不可穿鑿、動治因有頽壊事、須修營者、其日與歳德、月德、歳位合、月德合、天恩、天赦、毋倉并者、修營无妨、

歳次大梁

右件歳次所其向有福、不可將兵抵向、

正月大　二月小　三月大　四月小　五月小　六月小
七月大　八月大　九月小　十月大　十一月大　十二月大

正月大建

丙　天道南行、天德在丁、月殺在丑、用時（甲丙庚丑）

寅（土府在丑）　月德在丙（五公在）合在　月空在壬　三鏡（乙年乾坤巽艮）

一日乙酉水危（三寶吉、忌遠行、）

沐浴神吉

大歳對小歳後、（從立春伏龍在内庭、去堂六尺六十日）加冠、拜官吉、

室宿火曜

昴日 宣	胃土	婁金 狼藉	奎木 大禍	壁水
六日庚寅木建 三吉	五日己丑火閉 不問典	四日戊子火開 大將軍遊内天一子 滅	三日丁亥土收 天恩	二日丙戌土成 歳下食
除手足甲	除手甲	忌夜行、不眠病	雨水正月中 沐浴吉 祭典	
			么斷	五墓
大歳對復 拜官 結婚	大歳對歳徳合歸忌血忌月殺 塞穴吉 日遊在内	日出卯三刻二分 晝四十六刻 大歳對母倉 日入酉初五分 夜五十四刻 日遊在内	大歳對小歳後母倉无翹重 嫁娶、裁衣、	大歳對小歳後月徳厭 入學、起土、

七曜暦

〔律疏職制〕凡玄象器物、天文圖書、讖書、兵書、七。曜。暦。太一雷公式、私家不得有、違者徒一年、私習亦同、其緯候及論語讖、不在禁限、(中略)七曜暦謂、日月五星之暦、

〔隋書經籍三十四志〕七曜本起三卷後魏甄叔遵撰　七曜小甲子元暦一卷　七曜暦術一卷梁七曜暦法四卷　七曜要術一卷　七曜暦法一卷　推七曜暦法一卷　五星暦術一卷　天圖暦術一卷　陳永定七曜暦四卷　陳天嘉七曜暦七卷　陳天康二年七曜暦一卷　陳光大元年七曜暦二卷　陳光大二年七曜暦一卷　陳太建年七曜暦十三卷　陳至徳年七曜暦二卷　陳禎明年七曜暦二卷　開皇七曜年暦一卷　仁壽二年七曜暦一卷　七曜暦經四卷張賓撰

〔三代實錄四十三〕元慶七年正月戊辰朔、天皇不受朝賀、雨也、七。曜。暦。藏氷様、腹赤魚等、所司付内侍奏、

〔日本紀略冷泉〕安和元年正月一日乙酉、左大臣源○高明奏侍從已上祿法等下給、幷七。曜。暦。腹赤、氷様等、

〔春海先生實記〕今年貞享二年冬十一月朔日癸亥、暦博士幸徳井氏友親宮内少輔上頒暦、是則爲恒例、蓋往古有七政暦、謂七曜暦也、中世其術廢、只用草暦、謂具註暦、俗云假名暦也、依先生以歷年所算考之五星與四餘之術、配日月之宿度記之、別爲七曜暦以刊之、蓋貞享暦七曜推歩之術者、我澁川家之所傳、而其術由本於活天地道、臨時測天而定之、實爲世不易之術云、

翌年春正月朔日、友親書寫之、上禁裏院中、（因延喜式進暦之式、御暦二巻、其上巻十一月一日、下巻六月一日、七曜御暦正月一日奏進、頒暦者、六月頒行諸方、）有七曜暦拜之儀式、亦於今爲恒例、爾來暦日得其正、而晦朔弦望不失日時、交食節氣不錯刻分、而人民各受正朔、農桑無時候之差、後代萬々永蒙聖朝至治之澤、嗟夫隆哉大哉、

〔七曜暦〕寶暦十四年歳次甲申（干木支金、納音是水）　寶暦甲戌元暦

太歳在甲申（名涒灘之年、爲一年之君、）　歳次實沈　奎宿木曜値年

右件歳次所在、其國有福、不可將兵抵向、

歳德在東宮甲（寅卯同）　歳德合在己

右件太歳已下、其地不可穿鑿、動治因有損壞事、須修營者、其日與天德、歳德、月德、天德合、歳德合、月德合、天恩、天赦、母倉并者、修營無妨、

正月大　建丙寅

合朔巳時九刻　巳下總晝夜百二十刻制

			日	月	木	火	土	金	水
一日	癸丑	天恩	女六	昴女十	畢一	氐四	婁四	危十一	虚七
二日	甲寅		七	危三		五		十二	夕退伏
三日	乙卯	天月德合	八	十六				十三	
四日	丙辰	立春未八刻　月德	九	室十二		六		十五	六
五日	丁巳	天德	十	壁六		七		十六	
六日	戊午		十一	奎九				室一	五
七日	己未		虚一	婁三		八		二	四
八日	庚申		二	胃三				三	

九日	辛酉	上弦巳四刻　月德合	三	十五		九		五	三定合退伏
十日	壬戌	天德合	四	畢一				六	二
十一日	癸亥	母倉	五	十四	夕遲初	十		七	一
十二日	甲子	天恩母倉	六	井一				八	初合退伏
十三日	乙丑	天恩	七	十三		十一	夕次速	十	女十
十四日	丙寅	月德天恩	八	廿六				十一	九
十五日	丁卯	天德天恩	九	柳七		十二	五	十二	八
十六日	戊辰	望夜子四刻　天恩	危一	張一				十三	七
十七日	己巳		二	[illegible]八		十三晨遲初		十五	
十八日	庚午		三	翼四				十六	六
十九日	辛未	雨水戌四刻　月德合	四	十八		十四		十七	五
二十日	壬申	天德合	五	軫十二				十八	
廿一日	癸酉		六	角八		十五		壁一	四晨見
廿二日	甲戌		七	氐初				二	
廿三日	乙亥	下弦戌初刻　母倉	八	十五		十六		三	三晨遲
廿四日	丙子	月德母倉	九	尾一	二	房初		五	四
廿五日	丁丑	天德	十	十五		一	六	六	定見
廿六日	戊寅	天赦	十一	斗三				七	五
廿七日	己卯	天恩	十二	十六		二		八	

廿八日	庚辰	天恩	十三	女初				奎初	六
廿九日	辛巳	月德合天恩	十四	虛二		三		一	七
三十日	壬午	天德合　天恩	十五	危五				三	

炁　一日　廿日　胃　三　四

孛　一日　九日　十七日　廿六日　奎　十七　婁　初　一　二

羅　一日　八日　廿七日　軫　五　四

計　一日　十二日　三十日　壁　六五四

中星暦

〔延喜式 陰陽 十六〕凡中星暦者、八十二年一度造進、其用途者、博士臨事勘錄進寮、寮申省請充、

〔宋史 天文 四十八〕中星

中星、四時中時、見於堯典、蓋聖人南面而治天下、卽日行而定四時、虛鳥火昴之度在天夷隩析、因之候在人、故書首載之、以見授時爲政之大也、而後世考驗、冬至之日、堯時躔虛、至於三代、則躔于女、春秋時在牛、至後漢永元已在斗矣、大略六十餘年、輒差一度、開禧占測已在箕宿、校之堯時、幾退四十餘度、蓋自漢太初至今已差一氣有餘、而太陰之躔十二次、大約中氣前後乃得本月宮次、蓋太陽日行一度、近歲紀元暦定歲差約退一分四十餘秒、蓋太陽日行一度而微遲緩、一年周天而微差、積累分秒而躔度見焉、暦家考之、萬五千年之後、所差半周天、寒暑將易位、世未有知其說者焉、

〔廣書暦象俗解 上〕此圖〇中星十二宮方位窺觀之圖、幷歷世日宿圖略、ハ、堯典中星ノ便ナラシム、後來ノ中星ハ、各歲差ノ義ニ由テ、四時ノ日宿改リ移テ、中星皆各不同、今此圖ニ倣テ、時ニ隨テ制造シテ可察之、都テ日宿ヲ窺測スルニハ、必ズ先ヅ中星ヲ驗シテ是ヲ推步シ、日景ヲ測量シテ、其日躔ノ宿度ヲ得ル者也、中星ニハ、昏、晨、夜半ノ不同アリ、何モ觀窺シテ精密ナルベシ、今堯典ニ見ハス中星ハ、只昏ベノ中星ノミヲ云リ、昏ノ中星ヲ擧テ、晨旦、夜半ノ中星ヲ省略ス、此圖ヲ察シテ、一方ニ倣フトキハ、他ハ推テ可識之、又堯典ハ、只四時ノ仲氣、二至、二分ノ四節ヲ擧テ、一歲ヲ見メス者也、實ニ造暦ノ時ニ臨ンデハ、十二月二十四氣ノ中星日宿ヲ窮メ驗スヲ以テ、暦者ノ重事トス、

〔天朝無窮暦 六〕さて皇朝にて、中星暦といふを造らしめて、八十二年に一度奏進せしめ給へる事は、何なる暦と云ことと詳に記せる物は見ざれど、赤縣州の歴代の暦志を見るに、晉の虞喜といふ者、始めて天を以て天と爲し、歳をもて歳と爲し、差を立て、其變を追ひ、五十年に一度を差ふと致へしを、宋の何承天は、百年にして一度を差ふと定め、（何承天は、かの元嘉暦の撰者なり、歳差の說は斯の如くなれど、其代の暦志に、何承天日、漢代以昏明中星課日所在、日之所在雖不可見、月盈則蝕、必當其衝、以月推日、則知、捨易而役心於難、臣所不解也、堯典云日永星火以正仲夏、今季夏則火中、又宵中星虛以殷仲秋、今季秋則虛中、爾來二千七百餘年、以中星檢之、所差二十七八度、則堯時冬至日在須女十度左右也、と有るを思へば、此人も虞喜の中星には信けざりけり、）然て隋の劉焯、その二家の中數を取りて、七十五年に一度を差ふと定めたりしを、唐の一行が大衍暦に至りて、八十三年に一度を差ふと定めたる由なり、（猶是らの外に、其暦家どもに、一度を差ふ年數を、或は四十五年と云ひ、或は六十一餘年といひ、或は六十六年、或は六十七年、或は六十八年、或は七十八年、或は四十年、或は百八十六年など云ひて、互に相是非しつゝ、紛々諸說、すべて論じに堪ざる迂說等なる中に、暦家自北齊張子信始知歳差、以古暦推之、凡八十餘年差一度、月令日在東井、比堯時則已差矣云々と云ひ、日右轉、星左轉、約八十年差一度云々と云へる說あり、一行が八十三年といふ說は、是を折衷して得たる測量なるべし、）然れば皇朝の中星暦は、此方の博士の、そを再折衷して、八十二年に一度の差と測量して、歳月の暦とは別に、是暦を奏進せるにぞ有べき、然れども是なほ未その中分を測量し得ざる物なり、太昊古暦傳に出せる、近世の測量を見て知るべし、

〔玉勝間 八〕かなごよみ

同○宇治拾遺物語に、かな暦といふことあり、むかしは眞名と假字との暦有しにや、さて又暦に、神佛によしといふ日あり、今の暦本に、神よしと志るせるは是なるべし、又かん日、くゑ日など、日のよきあしきを志るせることも見えたり、

〔宇治拾遺物語 五〕これも今はむかし、ある人のもとになま女房のありけるが、人に紙こひて、そこなりけるわかき僧に、かな暦かきてたべといひければ、僧やすき事といひてかきたりけり、はじめつかたはうるはしく、かみほとけによし、かん日、くゑ日などかきたりけるが、やう〳〵するざ

〔好古日錄本〕貞應二年癸未假名曆日

六月大　あり

片假名曆日　延寶四年長曆十月小

十月大　トラウミワミアリ

まに成て、成物くわぬ日なとかき、又これぞあれはよく〳〵ふ日などかきたり、此女房やうかはるこよみかなとはおもへども、いとかうほどには思ひよらず、さることにこそと思ひて、そのまゝにたがへず、またある日、はこすべからずとかきたれば、いかにとはおもへども、さこそあらめとて念じて過す程に、ながくゑ日のやうにはこすべからず〳〵とつゞけかきたれば、二日三日まではねんじゐたるほどに、大かたたゆべきやうもなければ、左右の手にてゑりをか丶へていかにせん〳〵とよぢりすぢりするほどに、ものもおぼえずしてありけるとか、

〔好古日錄本〕古曆本片假名國字曆字

諸家ニ古曆ノ傳ル者、皆具注曆也、國字曆ハ貞應二年癸未曆日アリ、長曆ヲ以考ルニ、月ノ奇偶異同アリ、其體、中段ハ今ト同ジ、下段遠くゆかず、かみほとけよし、ゆめかたらずノ類、今ト同ジカラズ、但げふく元服はせん八專ノ類、當時古調ノ存スルコトヲミルベシ、

貞應二年癸未假名曆日

六月大		あり
一日みずのえさる	のぞく	かみよし ゆあぶるもよし
二日みづのとのとり	みつ	めち日
三日きのえいぬ	たいら	ほとけよしむこどりわたましありきよし しげふくよしざうさくかまぬるもよし
四日きのとのゐ	さだむ	ゆあぶるもよし ゐんたい日ちこ日
五日ひのえね	とる	かん日
六日ひのとうし	どように入 やぶる	かみほとけよし、ゆめかたらず、 しのたつよしあしのつめよし
七日つちのえとら	あやぶむ	ほとけよしふく日 やまひみす

八日つちのとのう　なる　かみよし　ばち日
やまひみず　ふく日

九日かのえたつ　六月中をさん　ものたつよし　きく井よし
わたましざうさく、ありきよし、

十日かのとのみ　ひらく　ほとけよし　ゑんたい日
ものたつよし　ちこ日

十一日みづのえむま　とづ　かみほとけよし
ありき、わたましもよし、　きゝ日

十二日みづのとのひつじ　たつ　ほとけよし

〔延慶三年曆〕延慶三年かのえいぬのとしのこよみ

すべて三百五十三日

大將軍みなみにあり

としとくかのえにあり　にしのすみ　ひつじさるによし

正月小、二月大、三月小、四月大、五月小、六月小、七月小、八月大、九月小、十月大、十一月大、十二月大、

正月小　こくうかまにあり

一日かのへたつ　金みつ　はるたつ日よりふくりうちの［　］六十日あり
かへるひんたつか

二日かのとみ　金たいら　けふくはるまきたからなさめ、あるき、くら
びらき、ひめはじめによし、ひらく、

三日みづのへむま　木さたん　ちうはじめてうごく　神中　佛下　けふくはるまきかみうき門たて
こかくひによし

四日みづのとひつじ　木とる　さう事　きぬたち　わたまし
田かへすによし

五日きのへさる　水やぶる　神上、あるき、やたて、ゆめみよし、

六日きのととり　水あやふ　日出卯三り五分　旦卅五り
きぬたち、はみうつによし、
日入酉初三分半　夕五十五り

七日ひのへいぬ　土なる　上げん五む　かくもん木きるよしひへる

八日ひのとみ土なさん　伐りなこほりにのぼる　たからをさめ、きのたち、ゆあみてよし、むきしかみし、

右古曆一紙、借請官醫多紀氏而模寫之、丸板行也、南求子誌、

〔貞享二年曆〕

貞觀以降用宣明曆既及數百年、推步與天差、方今停舊曆頒新曆於天下、因改正而刊行焉、

貞享元年きのえね十二月大三十日せつぶん

何所〇書来　　某〇書来

貞享二年きのとのうしの曆凡三百五十四箇日

大さいうしの方此方にむかひて万よし但木をきらず

大しやうぐんとりの方三年ふさがりさとしまで

大おんいの方此方にむかひてまんなせず



としとくあきの方まるとりの間万よし

金神とらうたつみ

さいけうゐぬの方むかひてたねまかず

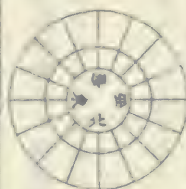
さいはひつじの方むかひてわたましせずふれのりはじめす

さいせつたつの方此方よりよめとらず

わうはんうしの方むかひて弓はじめよし

へうびひつじの方むかひて大小べんせずちくるいなもとめず

土公春はかま、夏はかど、秋は井、冬はには、



正月小	二月大	三月小
四月大	五月大	六月小
七月大	八月小	九月大
十月小	十一月大	十二月小

正月小建　戊寅　星宿値月、星日曜値朔日、

一日みづのえいぬ、なる、　水　立春　正月せつひつじの三刻に入

二日みづのとのい、おさむ、　吉書始　はがため、くらびらき、ひめはじめ、弓はじめ、ふれのりはじめ、万よし、

伊勢暦

三日きのえね、ひらく、	金	すきそめ	あきなひはじめ、かへもんはじめ、万よし、
四日きのとのうし、とづ、		神よし	ちいみ、きこ、ものたちよし、
五日ひのえとら、たつ、	火		こしのりはじめ、ありき、井ほりよし、
六日ひのとのう、のぞく、		神よし	げんぷく、ものたちよし、

〔俗神道大意 二〕伊勢暦ノ出處ハ、毎年祭主藤浪家ヨリ、朝廷ヘ御奏達アッテ、土御門家ノ暦ヲ、寫本デ申ウケ、夫ヲ伊勢デ板行ニ致ス事デ、右暦師ハ宇治ニ居テ、佐藤伊織ト申スガ實ハ町人デ、紙屋茂兵衞ト申シテ、コレハ藤浪家ノ御家來分デ、御由緒モアル家柄ダト申ス事デ、外宮ニハ暦屋五軒モアル、尤モ古來ノ暦ハ、口ノ所ヘ繪ノ圖ナドヲカキ、頭書ニ、傳暦抄ナド丶書タルモ有テ、實ハ埒モナイモノデアッタ事ヂヤ、

〔賀茂家文書〕杉大夫事、爲御博士、他國陰陽師於御領中出入之時、無其届面々者、爲杉大夫計申懸之旨御存知候、被任先例之由可被申聞候也、謹言、

天文十四九月十三日　花押

大宮大どのへ

從先御代、當國〇伊勢暦之儀、爲御恩、杉大夫出置候段御存知候、然上者、自他國暦御停止候、至有商賣仕面々者、雖爲何之族、堅可被申付候、此旨杉大夫ニ可被申聞候由所候也、恐々謹言、

天正元十二月五日　□□花押

朴木下野守殿

〔師友雜錄〕天和四子年、桑山下野守〇貞政殿替岡部覺左衞門殿〇貞享二任駿河守達

一改暦之儀未相極候故、從四方御公儀〇江御訴訟申上候、然處頃日何方より近日無名之暦作出し候を買取、旦那廻りの土産に用候師職有之樣に風聞候、若必定に於ては、不心得千萬に候、自然及

三島暦

御僉議事にて、暦師儀は不レ及レ申、賀候師職代官に至迄可レ爲二越度一候、いつまで成とも御公儀改暦露顯無レ之内者、土產に用候儀無用に候、此趣師職中江急度可レ被二申渡一候、尤油斷有間敷候、以上、

九月五日　三方

〔師友雜錄〕一當地〈○伊勢〉において、新暦板行之儀、今度陰陽師箕曲甚大夫、同與一大夫、保利田大夫、此二人於二京都一改暦相傳致來候故、開板世上へ出し申候、今日申渡候、其外四人之暦師板行之儀は、兼而三方中より御公儀へ御願ひ申上置候條、覺左衛門殿〈○岡部勝重〉御左右次第に追付可二申渡一事、

十月〈○天和四年〉二十二日　三方

○按ズルニ、神宮秘傳問答ニ據レバ、三方ハ、須原方、坂方、岩淵方ノ三方ヲ云フ、

〔師友雜錄〕貞享二丑年達

一當地にて、暦板行之儀、陰陽師之外、誰にても望次第仕來候趣、覺左衛門殿迄は願ひ申上候處、御公儀之被レ爲レ得二御意一、前々之如く開板仕、諸國旦方への土產を賦り候樣にと被レ爲二仰出一候旨、覺左衛門殿より御書を以被二仰出一候、先以當地之願相叶、神領之外聞實儀大慶此事に候、尤忝可レ被レ存事、

一急度申入候、當地暦板行之儀、京都暦出來次第、早速駿河守樣〈○岡部勝重〉より寫本御差越可レ被レ下との御事に候間、それより以前者、愛本之暦板行不レ仕樣に可二相觸一候、若違背のもの有レ之候はゞ、暦賦者も可レ爲二越度一、實駿河守樣別しての入御念候、此旨脇之者迄堅可レ被二申渡一候、暦師共へは念合より急度申付候、以上、

卯月廿三日　三方

〔譚海十四〕三島ごよみは、伊豆相模の二ケ國に商ふ事免許なり、暦師河合龍節といふ者、每年歲暮に、江戶へ罷出、公儀と御三家へ、こよみを奉り、目錄を拜領して、歸國する事、定りたる事也、

〔爲政錄〈御書〉一〕一三島暦は、先年勢州ゟ出入有レ之、夫ゟ以來三島暦は、伊豆相模計ニ可レ限事、

〔俗神道大意二〕扨マタ、往古ヨリ致シテ、伊豆國ニハ、暦ノ博士ガ居ッテ、三島明神ノ下社家川合龍節ト申ス暦師ガ配リ、公儀ヘモ暦ヲ獻上イタシ來レル事故、伊豆一ケ國ハ、伊勢暦ヲ停止被(二)仰付(一)タト申ス事ヂヤ、

〔增訂豆州志稿七土產〕三島暦　三島驛、河合氏製ス、目下豆相兩國ニ行ハル、其家傳ニ云、光仁天皇寶龜中、三島宮神領內、暦門(こよみかど)埋橋ニ、六百坪ノ宅地ヲ構ヘ住ス、宣明暦迄暦算ヲ爲シ、之ヲ天朝ニ獻ズ、又奕世將軍家ニ獻ズルコト今ニ至ルト、現今ハ公儀ヨリ寫本下附アリテ、之ヲ板本トナス、宅地內ニ暦宮アリテ、社宮司明神ト云、〇中略增、三島暦、明治革新ノ際廢セラル、

〔空華日工集〕三月四日、〇本書前文缺失、年號不詳、好古日錄引(二)用本文(一)、作(二)應安七年(一)、浴(二)于伊豆熱海(一)、蓋三。島。暦。以(二)是日(一)爲(二)上巳節(一)、故作(レ)詩記、

〔好古日錄不〕暦日異同　〇中略

按、古昔暦法精シカラズシテ、此間ト異邦ト奇偶一日ノ相違ノ類間アリ、日工集載ル所ノ如キハ、京暦ト三島暦トノ異同ナリ、長暦ニ據ニ、應安七年正月二月共ニ大ナリ、當年ノ三島暦同ク正二月トモニ大トミユ、京暦正二兩月ノ間小アリテ、三島暦ノ三日、京暦ノ四日ナリシナラム、

〔類聚名物考時令三〕三島暦

今の世にも假名文などの甚だ細かなるを三島暦のやうなるなど云り、昔は伊豆の三島より暦を出せしとかや、今伊勢より多く出すが如し、薩摩陸奥にもあれども、それは人もいはぬ事となれり、近年久しく絶しを興して、また三島にても暦を出すなり、竹齋物語、上頭巾は三條唐物や甚吉殿のおかたより、赤き綿を百日ばかりのその內に、心を盡し縫立て、播磨杉原七枚つぎ、三。島。暦。に大般若、春の日通牛の尾に、三間綱を結付て、長文そへてやられける、

〔實隆公記〕文龜三年六月廿七日壬戌、則大外記來謝(レ)之、午後在通卿來、携(二)一腰金(一)、出頭事珍重由命(レ)之、予以(二)

大宮曆

書狀、付勾當内侍申入了、昨年甲子、曆道勘文等不ㇾ可ㇾ御事闕、又七月御曆、則可ㇾ調進上之、彼是爲朝家珍重事也、如此事、小量之意見難ㇾ不ㇾ可、然只存報國忠而已、

先年召文案一通寫之

三島摺曆事、六條經師良精掠領之云々、所詮任去文明十七年九月八日奉書之旨、被ㇾ仰付大經師愛竹井兵部卿良椿訖、宜被存知之由被仰出也、仍執達如件、

元行判

明應九十月十三日

爲親判

勸解由小路三位殿

同廿日、同廿九日、以上三度、召文嚴密也、

（集古文書四十施行狀）天正十一年施行狀

大經師三島曆職、幷居住地子錢諸公事家役等事、任綸旨御下知之旨、彌不ㇾ可ㇾ有相違之狀如件、

天正十一

十二月廿日

常結法眼　御房

（胸算用　一）伊勢海老は春の紅葉

每年大夫殿から御祓箱に鰹節一連、はらや一箱、折本の曆、正眞の靑苔五把、彼是こまかに直段附けて、二匁八分が物申請けて、銀三匁御初穗上ぐれば、高で二分餘りて、お伊勢樣も損の行かぬ樣に、○下略

（新篇武藏風土記稿足立郡五十三）高鼻村

氷川神社○中略

昔ハ當社ヨリ頒暦アリテ、ソノ頃推歩ノコトヲ司リシモノハ、北原村ノ名主喜兵衛ガ先祖齋藤氏ナリシトイヘド、其顛末ヲ詳ニセズ、世ニ傳フ、一年豆州三島暦ト、武州大宮暦ト、閏月ノ違ヒアリテ、北條氏政ヨリ、安藤豐前守ニ命ジテ、糺明セラレシガ、三島暦ノ方正キニ極リ、ソレヨリ武藏ノ暦ヲ停止セラルト、コレニ據レバ、天正ノ頃マデヘ、猶暦ヲ出シタルコト知ラル、

薩摩暦

〔府内備考十三淺草〕一薩州に限り頼朝公より、遠國の事故暦役差添被下由にて、今に至て、暦役之者、暦法傳授請候上にて、彼地にて、暦面仕立板行す、尤領主及び重役の者計國暦を用ひ、國中一統は、伊勢よりの賦暦を用ゆるよし、

右薩州暦を加へて、都合五十種なり、

盲暦

〔東遊記後編一〕盲暦〇中略南部の邊鄙にては、いろはをだに志らずして、盲暦といふものありとぞ、余が通行せし街道にはあらねども聞しまゝを志るす、又般若心經などをも、めくら暦の法にて誦すると云、

〔笈埃隨筆四〕伊呂波〇中略狹布の里は、今南部領なり、其府を離れし山陰の村民、文字を志らぬ故に、年々の暦日、農の爲に、村長より暦を繪に圖して作る事を志らしむ、月朔の十二支には、子は鼠、亥は猪を圖し、八專、入梅、二至、三伏の、其たとへたるは、宛も謎の如し、其内、一二をいはん、八十八夜は、重箱に矢の立たるなり、種蒔は春を書き、田刈吉は鎌なり、節句は鬼の泣圖あり、絕倒ノ限り、たゞ且佛事祈禱には必ず般若心經を讀誦す、是又盲暦に類して、一段おかしく頤を解にいたる者なり、

暦注

〔運歩色葉集地〕中段〇〇暦、滿、平、定、執、破、危、成、收、開、閉、建、除、

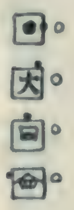
〔唐六典十四太常寺〕凡暦注之用六

一曰、大會、二曰小會、三曰雜會、四曰歲會、五曰除建、六曰人神、

〔和漢運氣指南後編〕十二直〇〇之事

十二直ハ、和漢共ニ暦ニ記ス、尤舊シキ例ナリト見エタリ、毎日支干ノ下ニ記スガ故ニ、和俗暦ノ

〔東遊記後編〕盲暦

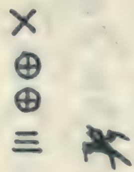











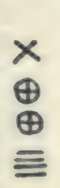










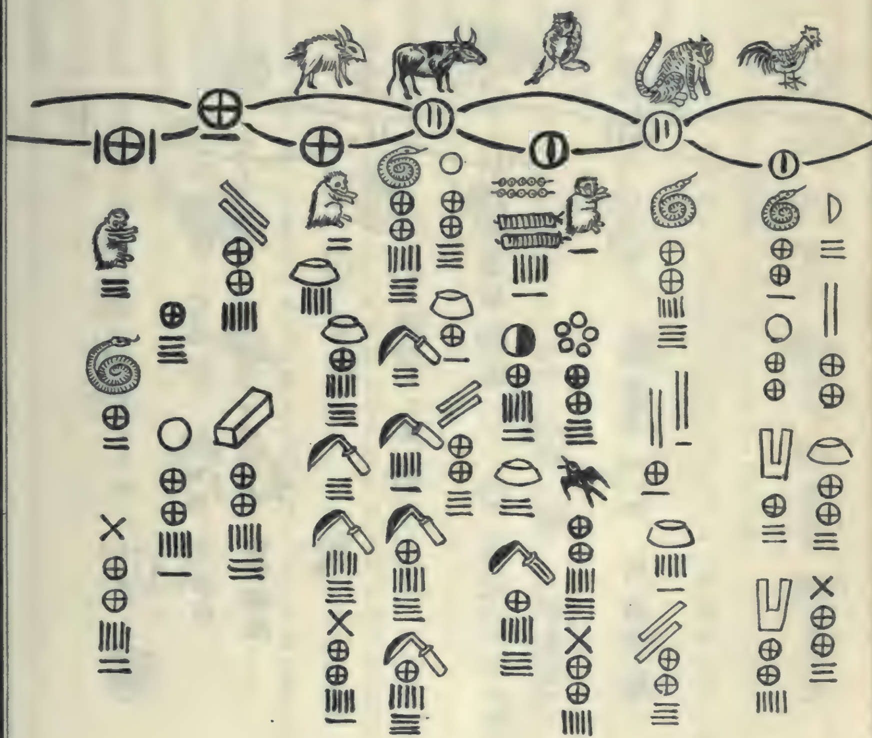










中段ト號セリ、其名ノ次第左ノ如シ、

建、除、滿、平、定、執、破、危、成、納、開、閉

已上十二毎日ニ配之、吉凶ヲ定ム、其初メ丙寅ヲ以テ建トシテ、段々十二ヲ配當ス、建ノ日譬ハ正月節寅ノ日建、二月ハ卯ノ日建、三月ハ辰ノ日建、十二月共ニ此ノ如クニ當レリ、月支破軍ノ建ス故ナリ、但シ十二ケ月ノ初節毎ニハ、前日ノ中段ヲ付テ、同名二ツ重ナル故ニ、六十日ニハ回リ來ルコトナク、ヒタト逢ヒテ凡七年目ニ丙寅ノ日ニ建回リ當ル者ナリ、其日ノ支干吉ニシテ、中段モ吉ナル日ヲ上トス、備此十二直ノ次第、名ノ義理、如何ナル子細トイフコト、イマダ精ク不知之、其能知レル人ニ尋ヌベシ、

イブレモ唐土陰陽家ヨリ始レリ、今ノ天學暦學家ノ要務ニハアラズ、

〔假名暦略註〕十二直

北斗の尾さすによりて、其方に表して十二直を制したるもの也、其說文繁く故に略之、雖書に男女を別て吉凶をいふは誤也、

たつ　漢字建

入學、元服、柱立、出門、奴婢抱等に吉、

のぞく　漢字除

神事、祭禮、藥調合、媒媾、針灸等に吉、

みつ　漢字滿

嫁娶、屋作、移徙、裁衣、竈塗、出門等に吉、

たいら　漢字平

屋作、移徙、嫁娶、裁衣等に吉、

さたん　漢字定

神事、祭禮、屋作、移徙、嫁娶、裁衣、奴婢抱、牛馬を飼等に吉、

とる　漢字執〈作レ取非也〉

諸事不吉、禽獸、魚鼈を狩捕等に吉、

やぶる　漢字破

諸事不吉、邪氣を拂ひ、祟を祈等に吉、

あやふ　漢字危

諸事不吉、殊に高き所へ上るべからず、竹木を伐等に吉、

なる　漢字成

神事、祭禮、屋作、移徙、元服、嫁娶、出門、裁衣、酒醬油造等に吉、

おさん　漢字收〈作レ納非也〉

屋作、移徙、元服、嫁娶、種蒔、竹木を植、禽獸を捕等に吉、

ひらく　漢字開

入學、元服、嫁娶、屋作、移徙、出門、藥調合等に吉、

とづ　漢字閉

諸事不吉、但水防を建、堤を築、穴を塞ぐ等に吉、

右十二直の吉凶、大概かくのごとし、併畢竟は下段の吉凶に因べし、此外十干、十二支、二十八宿、七曜等にも各吉凶あり、配合て暦の下段に吉凶を書ゆへにこゝに略す、

〔類聚名物考〈時令一〉〕暦中段、建除十二辰、　容齋隨筆、〈二筆〉建除十二辰、史漢暦書皆不載、日者列傳、但有建除家、惟淮南子天文訓篇云、寅爲建、卯爲除、辰爲滿、巳爲平、主生、午爲定、未爲執、主陷、申爲破、主衡、

酉爲ㇾ危、主ㇾ杓、戌爲ㇾ成、主ㇾ少德、亥爲ㇾ收、主ㇾ大德、子爲ㇾ開、主ㇾ大歲、丑爲ㇾ閉、主ㇾ大陰、今の曆に用る所、中段といふもの是也、今圖を作りて見るに便す、　寅建（タツ）　卯除（ノゾク）　辰滿（ミツ）　巳平（タヒラ）　午定（サダム）　未執（トル）　申破（ヤブル）　酉危（アヤウシ）　戌成（ナル）　亥收（ヲサム）　子開（ヒラク）　丑閉（トヅ）

〔關田次筆一〕今の曆の上段に、開閉など記せることを、中段といひならはすは、貞享以前の曆には、支干日並の上にありしゆゑ、今の上段が中段になりしなりと、予が若きときに、老人の話なりし、

〔日本後紀二十嵯峨〕弘仁元年九月乙丑、公卿奏言、謹案大同二年九月廿八日詔書偁、日者虛傳、千妨福渙、占人妄告、爲忌森羅、又大會小會之言、歲對歲位之說、天恩發於五辰、將軍行於四仲、斯等並出、塔興雜志、非雅正之典、宜據賢聖格言、一除曆注者、臣等商量、曆注之興、歷代行用、男女嘉會、人倫之大也、農夫稼穡、國家之基也、伏望因順物情、依舊具注、

〔佛國曆象編曆注三〕論皇國曆首三鏡及八將神等本梵曆

皇國曆首、揭歲德八將神等者、原本印度、故梵天火羅九曜及七曜攘災決、並羅睺名黃幡、計都名豹尾、安倍晴明撰述簠簋內傳、專述天竺傳來之興起、外標三鏡於曆首、以顯吾顯密之深致、可謂深信大士、簠簋五卷、章々讚羅佛乘、包括支那陰陽運氣、羅貫織神道亡、論今詳國曆、用梵曆過半、

〔玉襷八〕天皇の天の下治め給ふと撰びて、定しめ給へる曆神の、幸災ある事などに於ては、決めて其驗ある事なり、此によき因なれば、少か其由を云むに、謂ゆる八將神の第一に、大さい某方、此方にむかひて萬よし、但木をきらずと出し給ふ大さいは、大歲にて、其年の君位に立る方なり、抑曆法の事は、我が神世より、謂ゆる眞曆の外に、皇國固有の御曆法ある事は、已詳かに考へ定たる說あれど、此處に盡し難ければ、此は暫く措て、（別に委く記せる書あり、就て見るべし、）今は唐土の曆書等の說に依りて考ふるに、歲星またの名は、木星の精氣の建し宿る方位なるが、（此方に向ひて、木を伐らずと云ことは、大歲星やがて木星なればなり、）衆殺の王たる方とて、何事も此方に向ひては行ふべからぬ凶方の第一と立て、其祟いと嚴な

る事と聞ゆるを、皇朝の曆說、もと唐土により給ひては有れど、右の如く此方位に向ひて、萬事を行ひて、吉と定められたる事は、いにしへ皇朝にて、彼曆說を用ひ始め給ふ時しも、年中の君位たる方の、然る凶方なるが、宜からぬ事なる故に、諱にまれ其事に預れる人の、天皇に白せるより、皇國には然る凶事をな行ひそと、吉方に祭り替給ふ事と見えたり、然らでは、始より唐土により給へる曆說の、彼に異なるべき由無ればなり、近來難波に、松浦東鷄といふ日者ありて、聖武天皇の天平年中に、吉備公の然は祭り替たる由云へり、其は曆博士加茂家などの傳と聞えたり、此を吉備公のわざと云ことは、其證なきに非ず、其は牛頭天王曆神辨に委く云ふを見べし、○中略斯て其現人神の授け給ふ、曆說の謂ゆる天道、天德、歲德、月德、金神、八將神などの曆神はも、其元は唐土より說起せる事にも有れ、また其原由を探ぬれば、我が皇神たちの、最古く彼國の古に傳へ置給へる事なるを、此由は、赤縣太古傳に委く考へ記せれば、今更に云はず、當時はじめて唐土の曆法を用ひ給ふ時しも、其原の由來をば知食してや有けむ、知看さでや有けむ、其は今知べからねど、幸災の事實に徵して、慥しき驗ある事のみを擇びて、彼よりは甚く易簡に、曆神の方位を立られ、其が中に、大凶方なる大歲を、大吉方に定め給へる抔を思ふに、總て凶をば解(ナゴ)め祭りて、彼よりは薄からしめ、今世までに曆に記して、分布し授け賜ふにぞ有ける、彼國の曆法よりは、甚く凶方位の數を減じて、吉方位を多く取給へること、今行はるゝ唐土の曆書会易書の類ひの、各々某々にて、凶方位の多かるを皆集めて、年月日時に配し見ゝ、一年にわづかに數日ならでは、用ふべき日は有まじく、其に比べては、皇朝より授け給ふ御曆法の、易簡にして吉方位の多きを思ふべし、其は今の清國にて授くる時憲曆と、皇朝の曆とを引合せ見ても知なむ物ぞ、因に云ふ、桃園天皇の寶曆五年乙亥、新曆を天下に頒布し給ふ、其曆本の首に、記させ賜へる事三个條あり、其第一に、曆面にいむ日は多しといへども、吉日は天しや、大みやうの二のみにて、世俗の日取足がたかるべし、仍て今天恩、母倉、月德、三の吉日を記して知しむるものなりとあり、外二條はこゝに用なければ記し出ず、同六年の頒曆に、去年新曆面に記出す所の三ケ條、自今永く用て異る事なし、重て斷り示に及ばずとも宣へり、こはいと近き事なるが、彼これ思ひ合せて、吉曆ともに、天皇の御定めによる事なる由を悟るべし、然れば其御正朔を奉ずる國民としては、己が私のさかしらを用ふること無く、一向に每年の曆に載し授け給ふ、吉方、凶方、吉日、凶日の御諭しを受賜はりて、厚く信じ用ひて、後に渡れる漢籍どもに載し傳ふる吉凶の、曆法にわたる說どもは、聞起(タツ)まじき事にこそ、然るを今の俗に、家相方位を講ずる徒など、漫に、かの新渡する

曆書會昌書どもに依りて、陰陽雜なる吉凶方位、年月日時の説を和解し弘めて世を惑はすは、元より朝廷に御心ありて、用ひ給はぬ事なし、私に世に出すにて、賊盗律に、凡造妖書及妖言遠流、傳用以惑衆者亦如之とあるに、當れる罪科なりとは知らずやし、

〔台記別記〕久安四年九月二十日乙巳、詣東大寺、上、云々、敎輪安重盧大佛、奉燈明、〇中略、戌刻入洛、披曆、今日無三吉注矣、

〔憲教類典〕四ノ九書物 享保十三戊申年

一來酉の年の板行暦の終に、年の節と中とは、暦中第一の要所にて、耕作種蒔、或草木鳥獣にいたるまで、節季を違ふべからず、然るに暦の下段の内江、入交りて見へわかちがたし、廿四季の名、并時刻を別段に擧しるし、暦を開くに早速見へ安からしむ、また晝夜の數は、右の暦に記せりといへども、中半より斷絶せり、是又民間にしらしめんため、舊例にしたがひ、書入る丶者也、

中八月

澁川六藏源則休

猪飼又次郎源久一

謹推歩考定

來年之新暦之終の紙の書付之文言に、澁川六藏、猪飼又次郎、兩人之書面之通、加入板行可致候、若暦之終り詰り、加入難仕候はゞ、暦之袖に、兩人とも書記板行仕候樣被仰付候、

右加入之文言は、來己酉の暦計、右寺社奉行御達名にて、京都所司代牧野河内守殿江被仰遣候由、

〔談齋雜記〕丁未録記五 頒行暦前文〇中略

寶暦五年乙亥暦

貞享以降、距數十年、用一暦、其推步與天違矣、今立表測景、定氣朔而治新暦、以頒之天下、

一暦面にいむ日は多しといへども、吉日は、天しや、大みやうの二ツのみにて、世俗の最足がたか

るべし、仍て今天恩、母倉、月德三ッの吉日を記して、知しむるものなり、

一彼岸の中日は、晝夜等分にして、天地の氣均しき時なり、前暦の注する所是に違へり、故に今より其誤を糺し、是を附出す、依て前暦の彼岸と春は進之、秋は三日すゝむものなり、

一晝夜を分つこと世俗の時取惑多し、仍て一たび曌の字を附出すといへども、なほ其惑解がたし、故に夜半より前を今夜と記し、夜半より後を今曉と記すものなり、

土御門　從三位陰陽安部泰邦

門人澁川圖書

天文生源光洪

明和四年丁亥

今まで須給ふ所の暦、日月食三分以下は記し來らず、此たび命ありて、淺食といへども、ことごとく記さしむ、去かれども新暦しらべいまだをはらず、よりて今までの數にならふのみ、

〔春湊浪話上〕雲珠を年號に畫

暦のとしの上に、雲珠を畫くことは、是を尊みてかふむらしむるなり、推古紀に、皇子諸王諸臣悉以金髻華著頭とありて、釋日本紀に、字須は玉冠と注して、昔の冠なり、其形今も賀茂祭の飾馬に殘れり、使の次將是に乘給ふ時は、雲珠を放ちて、手振の放免に雲珠をば持しめらるゝも、冠に擬したる故に、憚給ふ也、

〔鹽尻三十五〕一暦家、春秋の彼岸會を書する事久し、昔は春分秋分の日を、中日にあたるやうにせし事、安倍家の暦本に見ゆ、近世は春秋二分より三日目をその初にし、六日目を中日とす、九日目を終りとす、古へは彼岸に入る日、沒日に値れば、一日を延て、次の日を入りとせし故實なり、貞享暦、沒日を用ひず、いつとても二分一日を隔て、彼岸の初とす、

〔草茅危言 一〕暦日之事

一暦ハ土御門家ノ司職ナレバ、外人ノ與リ知テ妄ニ議スベキニハ非ザレドモ、華城ノ暦ヲ傳ヘ見ルニ、サシテ替リタルコトモナシ、必竟我邦ノ暦ハ、華暦ヲ受テ作リタルモノユヱ、今ソノ本ニツイテ議スベシ、總ジテ暦ノ肝要ハ、月ノ大小ヲタテ、干支ヲワリツケ、二十四氣ヲ配分シ、日食月食ヲシルシ、土用ノ入、八十八夜、二百十日ヲシルスナドノ數項ニ過ズ、其外ハ一切無用ニ屬ス、八將軍ナド、イツノ時ヨリ書出セルコトニヤ、暦法ニカワテアヅカルモノナシ、多分道士ノ方ノ名目ニテモアランカ、一向無稽ノ妄誕ナリ、世ニ中段ト稱スル建除ノ名ハ、暦法ニ古ク見エタルコトナレドモ、是又甚ダノ曲説ニテ、其外下段ト稱スル吉日凶日、ミナ言ニ足ラザルコトヾモトス、又方角ノ開塞ヲ云コト大ニ世間ノ害ヲナス、妄誕ナリ、サナキダニ天下愚昧ノ民、惑ヤスクシテ曉シガタキニ、暦書ニシカト書アラハシ示スユヱ、マス〱惑ノ深クシテ、一向ニ曉サレヌコトニナリユキケリ、嘆ズルニ餘リアルコトナリ、先王ノ四誅ノ一ツニ、鬼神時日ヲ假テ以テ衆ヲ疑ガハスハ殺ストアリ、今ノ暦書ノ八將軍金神ハ、鬼神ヲカリ、中段下段ハ時日ヲカリ、皆以テ衆人ヲ疑惑セシムルノ尤ナレバ、マサシク先王ノ誅ヲ犯シタルモノナリ、實ニ深ク制禁ヲ加ヘ、大ニ暦書ヲ改メタキモノナリ、○中略

一正朔ハ、先王ノ制ニテ、唐虞ノ際、羲和ノ暦象ヨリコノカタ、王政ノ一重事タリ、周室ニ、暦ヲ諸侯ニ頒チ、國々ニテ告朔ノ禮アルコトナド、民事ヲ重ンズルノ至要タリ、我邦古代ノコトハ、クダクダシク云ニモ及バズ、今日ニ至リ土御門家ヲ以テ、コレヲ統ラレ、關東ニテ司暦ノ御設ケモ、土御門ノ門人トシテ、事ヲ行ハセラルレバ、コレ以テ天下御代官ノ御心ニテ、元ヨリ間然ナカルベキ御事ナルベシ、但シ伊勢暦、三島暦ナド云類、ヤハリ關東司暦ノ命ヲ受テ作ルコトナレドモ、其地ニテ各自ニ造リ出シテ、天下ニ布事ユヱ、モシ愚ノ所謂淨潔暦ノ行ナハル丶時節モ至ラバ、他ヨ

リ出ル曆ヲ、一切ニ堅ク制シテ、舊ヲ舍テ新ニ就シムベシ、官曆イカ程淨潔ニナリテモ、他曆ニ舊態存スレバ、世間ニテハ、却テ官曆ヲ疎略トシ、他曆ヲ詳密ト思ヒテ、宿惑ツヒニ解ベカラズ、何トゾ蜻蛉洲中ニ、日ノ吉凶、方ノ開塞、此方木ヲキラズ、ヨメ取ラズナドノ妄説、地ヲ拂ヒテ絕果ルヤウニアリタシ、薩摩ハ昔ヨリ別ニ推步シテ、一國ニ用ル曆ヲ造ラルヽ由ナリ、是ハ極西南ノ地ニテ、北極出地度、晝夜ノ刻限、日食ノ數ナド、少々ノ差異モアルユヱノコトナリ、尤コレモ土御門ノ徒弟トシテ、別ニ門戶ヲ立ルニテモナケレドモ、侯國ニテ造曆アルコトハ、イカヾシキコトナリ、ソノ上サキニ、薩曆ヲ閱セシニ、晝夜刻限ノ外ハ、何モ官曆ト替リタルコトナシ、是マヅ空疎ナルコトナリ、サテ日ノ吉凶ノ名目同ジカラズシテ、ソノ數モ甚多キヤウニ覺エタリ、是ハ又拘滯ノ甚シキモノニテ、人ノ惑ヲ生ズルモ更ニ多ク、別シテ無用ノ長物ナルベシ、尤モ一國ギリニテ外ヘ傳播ハナキ曆ノコトニテハアレドモ、同ジク土御門ヨリ受タル法ニ、異同アルベキヤウナシ、何トゾ是ヲ以テ禁切ノ方アルベキモノニヤ、

〔憲法類編二十一暦法一〕壬申明治五年十一月廿四日第三百六十一號御布告

今般太陽曆御頒行ニ付、來明治六年限、各地方ニ於テ略曆板刻被差許候條、出板販賣致度者ハ、草稿ヲ以テ其管轄廳ヘ願出許可ヲ可受事、

但略曆ハ御頒行太陽曆ヲ標準ト可致、舊曆中歲德金神日ノ善惡ヲ始メ、中下段中掲載候不稽ノ說等增補致候儀、一切不相成候、尤世上辨利ノ爲メ、時刻表等加入候儀ハ不苦候事、

〔憲法類編二十一暦法一〕曆上年日トモ干支記載ノ事

六年五月廿九日文部省ヘ御達

太陽曆御頒行ノ節、干支ヲ除キ候處、既往ノ年日推步候ニハ、干支相用候方便利ニ付、自今曆上ニ年日トモ干支記載可致事、

〔朝野群載 十五陰陽道〕暦道

請殊蒙天裁因准先例以従五位上行陰陽頭兼陰陽博士賀茂朝臣成平依造進御暦并頭博士等勞被叙一階状

一成平朝臣身勞

叙勞三十八年　陰陽頭勞十七年　同助勞九年　陰陽博士勞三十四年　造進御暦勞三十一年　陰陽寮造作功勞五間三面板葺屋一字、十一間板屋一字、

一博士外蒙造暦宣旨輩、朔旦冬至預勸賞例、

保憲朝臣、天延二年十一月叙従四位下、　道平朝臣、延久元年十一月叙従四位下、　道言朝臣、寛治二年十一月叙従四位下、○中略

右去寛治二年朔旦冬至、當道儒者、殊被賞之中、成平一人已漏其恩澤、漏朔旦冬至賞之者、追蒙勸賞者例也、近則權博士大中臣榮親是也、而丹心徒竭、恩渙未覃、今浴加級之恩、誰謂非據之例、○中略

長治二年二月廿一日　従五位上行陰陽助兼權暦博士丹波權介賀茂朝臣家榮

従五位上行大炊頭兼暦博士丹波介賀茂朝臣光平

従五位上行陰陽頭兼陰陽博士賀茂朝臣□□

従四位下行主計頭兼備後介賀茂朝臣道言

〔中右記〕長承二年六月六日庚寅、今朝藏人兵部大輔來仰云、應介陰陽頭賀茂朝臣家榮、暦博士相共造進御暦者、任舊例仰下左中辨實親朝臣了、件家榮先日辭暦博士了、然而先例有此宣旨也、

〔玉海〕建久二年十一月十九日甲子、晩頭右兵衞督兼光來、○中略此間式部大夫基業顯業子、俊經弟也、儒士也、參上、以宗頼問造暦之間事、今年十二月有閏、而件基業可置明年二月之由所申也、仍奏事之由、可尋唐暦之由被仰都督○藤原光隆了、其上基業注進子細、仍參上可申上之由、依召仰所參入也、基業申云、任百注

造暦用途

經之說、明年二月可有閏之由所申也、加之今年三合之災年也、凶年之習以有閏爲重、而幸閏在明春、尤可被改置歟、凡漢家之法、六十年一度有差分之法、我朝不知之、仍有如此之違亂、造暦有十二ヶ條之說、（信西之說也云々）而我朝博士只知其十一、未知第十二之秘說、所謂改作更注之說也、依不知此說有過云々（雖多子細、委不能記錄）余仰云、伺他道申此事尤可感、且是可謂在忠歟、但以此等申狀被問暦道、可有沙汰之由仰了、卽奏事之由、可問暦道之由仰宗頼了、

〔譚海　一〕暦は、江戸にて出來る也、天文役所にて出來、封じて官へ奉る、段々執政へ達し、夫より封のまゝにて、土御門家へ遣され、土御門にて開封有、中段下段へ、陰陽家の吉凶を加筆し、板行せられ、其板本を、土御門より官へ奉り、夫より町奉行所へ下り、夫より町年寄年番のものへ給り、夫より暦問屋十一人のものへ給り、淸書開板、官のしらべをへて、さらに商賣免許の旨を得、あきなふ事也、

寫本暦と申は、貞享元年以來、江戸天文方に而推歩し、年々大小節氣日蝕月食、其外暦法にて考し分相認、京都幸德井陰陽助方へ遣し、上中下段吉凶附を加へ、暦面之通に書寫し、江戸へ指下す、天文方に而改之上、又々幸德井方へ遣、相違無之間、大經師へ寫本暦彫刻被申付候樣申達候、出來之上、幸德井方にて、一應校合、相違も無之候得ば、其段申渡、寫本暦摺立、下役包紙面添封し候て、彼地町奉行所へ差出す、則宿次にて、奉行手帖添、御城へ到來す、御目付衆より差越さるゝなり、

但寶暦甲戌元暦御用ひの間は、土御門家著述故、寫本暦彫刻の事も、土御門家のはからひなりしよし、

〔延喜式　十六陰陽〕凡造暦用度者、御暦三卷（二卷具注、一卷七曜、）料上紙一百卅張、（請圖書寮、暦七張具○注○暦○料、廿三張七○曜○暦○料、五十張破損料、雖有閏月、不加其料、）麻紙四張、（紙料、請內藏寮、）上墨大半廷、（請圖書寮）上朱沙三兩、（請藏人所）兎毛筆十二管、（請圖書寮）膠一兩、（請大藏省）花軸三枚、（請木工寮）白綺三條、（別長一尺六寸、請內侍所、）中宮東宮各二卷、其料亦准此、（破損料五十張在內、）頒暦一百六十六卷、料紙

二千六百五十六張、（卷別十六張、有閏月一年、卷別加二張）、澡紙料紙五十六張、（以一枚充三卷）草案料一百廿九張、（暦草廿四張、日度草十五張、月度草十五張、交蝕草五張、五星度草五十張、五星行草廿張、）暦本三卷料九十張、（暦七張、具注本料、廿四張、七曜本料、十九張、頒暦本料、）墨十二廷半、（頒暦并草本料、以一廷充二百卅張、）鹿毛筆九十八管、（已上紙筆墨、並請圖書寮、）糊料大豆三升三合、（請大炊寮）檜軸一百六十六枚、（請木工寮）竹十六枚、（山城國所進）切續紙料机二前、（長四尺、廣一尺八寸、厚三寸、高七寸、[illegible]請受木工寮、）座料長疊四枚、（請掃部寮）砥一顆、（請大藏省）裝潢手單卅五人、寫御暦手單五十五人、（並圖書寮人）食米人別日一升六合、鹽一勺六撮、醬滓二合、雜魚二合、寫頒暦手卅一人、（諸司史生廿三人、内豎四人、大舍人四人、並不在給食之限、）

右並具勘錄、五月一日申省請受、

黑漆函三合（長各一尺二寸、廣三寸八分、深二寸四分、）

黑漆机二脚

別足一脚（長三尺、廣一尺三寸七分、高三尺、）

榻足一脚（長三尺、廣一尺三寸、高三尺、）

已上納御暦

納頒暦赤漆韓櫃一合（長二尺三寸、廣一尺二寸、深一尺三寸、居黑漆篋形加杌、）

布綱三條（一條長一丈二尺、廣二寸四分、二條各長四尺六寸、廣一寸二分、）

右漆函等收寮庫、至奏日出用之、若有破損、申省修造、

〔本朝世紀〕天慶四年十一月一日丁巳、中務省率陰陽寮暦博士等、依例候御暦頒暦、而今日天皇（朱雀）不御南殿、仍上卿仰外記、御暦即付内侍令奏、又頒暦進於局了、件頒暦、皆先例其數只十一卷也、彼寮申云、所司稱無紙、未行料紙、仍且隨有所書進也、相次又々可催進云々、

〔朝野群載〕（十五陰陽道）陰陽寮解　申請寫來年料暦用物事

合暦百七十九卷　料紙三千三百卌九張

奏曆

麻紙十枚　御曆標紙料

御曆十三卷料、紙屋紙三百六十張、御七曜一、院太皇太后宮、皇太后宮、中宮、東宮、各一所上頒曆百六十六卷料調上紙二千九百卌一張各一卷廿七枚　筆百卌○冊、一本作廿、二管　兎毛筆卌四管御曆料

鹿毛筆九十八卷頒曆料　墨十五廷　上三挺御曆料　中十二挺頒曆料　軸百八十一枚

花軸十九枚御曆料　檜軸百六十六枚頒曆料　上朱砂十一兩　綺一○一、一本作二、丈五尺五寸御曆料

上絹三丈大豆蒸料　阿膠三兩　礪一面　長疊四枚　箬○箬、一本作笶、十七棟

白米六石七斗七升五合五石造案御曆博士、并生徒書手等同食料、一石七斗七升五合、圖書書手裝潢等單九十六人

大豆五升紙纏料　鹽一石二斗四合一石造案御曆博士并生徒書手等料、二斗一四合圖書書手裝潢等單九十六人料　腊魚一斗九升二合　同書手裝潢裝束等料　滓醬一斗九升二合　同書手裝潢等料

寫頒曆書手廿九人、大舍人四人、各一卷　內豎二人、各十卷　諸司大士○士、一本作工、廿二人、各四卷

已上目錄

麻紙十枚下中務　紙屋紙三百六十張　調上紙二千九百卌一張　兎毛筆廿四管　鹿毛筆九十八管　上墨三廷　中墨十二廷　花軸十九枚左辨官下木工寮　檜軸百六十六枚　上朱沙十一兩官下中務內藏　綺二丈五尺五寸、上絹三丈下大藏　阿膠三兩　礪一面　長疊四枚左辨官下宮內　山城國箬拾漆棟　白米六石七斗七升五合下宮內　大豆五升、鹽一石二斗四合、下宮內　腊魚一斗九升二合　滓醬一斗九升二合、寫頒曆書手廿九人、官下宮內

右寫來万壽三年曆料、用度雜用料、依例陰陽寮所請如件、

万壽二年七月四日　左少史小野朝臣奉政

左大臣宣旨宛之　右少辨藤原朝臣

〔公事根源十一月〕御曆奏　一日

中務省より明年の暦を奉るを、むかしは主上南殿に出御なりて是を御覽あり、出御なき時は內侍所につく、白虎通に、周の世には十一月を正月とす、是を暦家に天正月といふ、殷の代には十二月を正月とす、地正月といふ、夏の世には今の正月を正月とす、人正月といへり、十一月は一陽はじめて生る月なれば、一年の暦數をかんがへて、今日天子に奉るなるべし、我朝に暦のはじまりし事は、欽明天皇十四年、百濟の博士が奉りけるとかや、

〔天朝無窮暦 六〕暦朝の御紀に、每年十一月朔日の下に、進御暦よし載されたるは、卽是なり、但し此は具注暦なるが、彼七曜暦は、正月元日朝賀の後に進らる、例にて、御紀に中務省奏七曜暦とある是なり、(其儀も內裏式に見えて、大抵右の十一月一日の式に同じ、また延喜の中務省式にも出たり、)さて十一月は、建子の月にて、其中氣、冬至に入る日は、來年の歳首にして、謂ゆる一陽來復の時なる故に、此一日に具注御暦を進奉せしめ、正月一日よりして、新年なれば、其年の七曜の所在を知食さむとて、七曜暦を進らしめ給ふなり、(政事要略に、私云、以十一月朔為奏御暦期、若有故乎、答、雖無所見、但暦家說、白虎通云とて、例の三統の說あれど信ひがたし、然て具注は、既に云へる如く、種々の日者說を具注せる暦なる故に、具注といひ、七曜暦は、日月五暦の行度所在を記せる暦なる故に、かく名けたるが、七曜、具注、共に月行を經とし、節氣を緯として、日次に月次に配する法なる故に、大○○○陰暦といふ、其は月を主とせる義なり、然はあれど、中氣なきを以て、閏月に立るは、自然に日行は主の如く、月行は客の如き道理なれば見るいことの能はざるなり、)

〔令義解 十雜〕凡陰陽寮、每年預造來年暦、十一月一日、申送中務、中○務○奏○聞○、(謂不經太政官、中務直奏聞也、)內外諸司各給一本、(謂被管寮司、及郡司者、省國別寫給、)並令年前至所在、

〔延喜式 十一太政官〕凡陰陽寮造新暦畢、中務省十一月一日奏進、其頒暦者、付少納言、令給大臣、大臣轉付辨官、令頒下內外諸司、

〔延喜式 十六陰陽〕凡進暦者、具注御暦二卷、(六月以前為上卷、七月以後為下卷、)納漆函、安漆案、頒暦一百六十六卷、納漆櫃著臺、十一月一日至延政門外、(中宮東宮御暦供進准此、)其七曜御暦、正月一日候承明門外、(其儀見儀式、○中略)

凡暦本進寮、具○注○御○暦○八月一日、七○曜○御○暦○十二月十一日、頒暦六月廿一日、並為期限、

〔內裏式上正月〕元正受群臣朝賀式○中略
兩門開訖、闈司二人出自青綺門、分坐逢春門南北、大舍人詣門外叫門曰、御暦進牟止、中務省官姓名等
謂輔以上候門止申○註略闈司就位奏、他皆倣此勅曰、令申、闈司復座傳宣云、姓名等乎令申與、大舍人稱唯、他皆倣此
中務省率陰陽寮、舁置暦之机、入自逢春門、他皆倣此立庭中退出、輔已上一人留奏進、其詞曰、中務ノ奏久、
陰陽寮乃供奉禮留其年七曜御暦進禮業久乎、恐美毛申賜止奏、○註略奏事者出、闈司共進舁机升殿東階、安南
榮、即降立階下西、內侍持函奉覽訖、返置机上、暦留御所、闈司升、却机安本所、還就戶內位、

〔儀式十〕十一月一日進御暦儀
當日平旦、中務率陰陽寮、候延政門外、大舍人叫門、如常、闈司就版奏云、御暦進止、中務省輔姓名叫門
故爾申、勅曰、令奏與、闈司傳宣云、令申姓名、輔丞各一人、寮頭助各一人、舁御暦案、寮允屬各一人、舁頒
暦櫃、若允屬不足者、大舍人代之、共進入自日華門、置於庭中簀上、御暦在北、頒暦在南、相去一丈許、退出、輔便留就版奏云、中務省
申久、陰陽寮供奉禮留其年乃御暦、又人給暦進良久乎申給波久止申、無勅答訖即退出、闈司二人入自左掖門
舁御暦机安簀子敷上、即內侍持函奉覽、闈司便候南階西下、奉覽訖、闈司却机安本處退出、即少納言
率內豎六人入自日華門、舁机退出、大臣即以頒暦賜太政官、轉付辨官、令頒下內外諸司、

〔北山抄九羽林要抄〕十一月朔日奏御暦、其儀度下器後、番奏之前、中務省奏進、同元日儀、但闈司退出後、
少納言率內豎六人參入自日花門、先舁案退出、次少納言令舁櫃退出、二孟之外無厨家御贄、奏樂、唱
見參等事、但撤御膳及臣下饌、其儀、三獻了、安御箸、釆女撤御膳之比、出居次將召內豎二聲、內豎稱唯、
即仰曰、數多參來、內豎等參上、撤臣下饌、乍大盤撤之、事未畢還御者无此儀、訖親王以下退下、天皇還御、出居次將留稱
警蹕、

〔三代實錄一清和〕天安二年十一月戊午朔、是日陰陽寮所進明年暦付內侍奏、

〔三代實錄三清和〕貞觀元年十一月壬子朔、陰陽寮奉進明年御暦、並頒暦、帝不御前殿、付內侍奏、

(本朝世紀)天慶元年十一月廿五日戊辰、酉四刻、大納言平伊望卿參入、今日御物忌也、仍上卿令外記仰諸司、以御暦付内侍司、即退去、件御暦須以十一月朔日奏之、而諸司懈怠間奏事由云、正權暦博士二人各有諍論、仍可被一定之由言上於官、十月十九日可用權暦博士茂經本之宣旨下所司、其後雖令催寫、不遂早書畢云々、公家重勘云、十九日以後有十箇日許、其程可寫畢、若又不可出來者、注其由可聽裁下、而徒然所怠不可然云々、即作一官令進過狀、奏聞了、仍公家令大外記三統公忠勘申御暦可奏之日、勘申云、檢國史、去天長十年十二月癸未朔甲申、今按、國史誠作甲子、是誤也、何者已卯癸未朔、此月内不有甲子、可謂甲申、是二日也陰陽寮進御暦幷頒暦也、恒例在十一月朔、而暦博士外從五位下刀伎直淨濱卒後、忽無相繼之人、遣召識暦術者遠江介正六位上大春日良棟、乃令造之、所以于今延引者、依件勘文相定、以今日令奏件御暦、但陰陽寮怠未被免許、只令此間供奉許也、令法家勘申其所當之罪、隨其勘狀趣可被定行云々、

(吉記)元暦元年十一月一日、黃昏參内、今日依可有御暦奏也、欲著陣之處、召使來云、外記未參、重遣召了云々、仍暫候殿上方、頃之召使來云、外記參入了、次予向陣座、外記長衡參進小庭、申御暦奏候之由、仰曰、暫令候■、外記稱唯退入、次召官人、二音官人參小庭、可召藏人之由仰之、官人經□下向殿上方、次藏人式部丞高階泰能經軒廊欲來、幼少之間不辨之歟、予令退入了、次經宣仁門出來、予奏曰、御暦奏、藏人歸來、仰云、無出御、付内侍所■、次予以官人召外記、如初參進小庭、予仰云、御暦令付内侍所■、外記稱唯退入、次予退出、

(玉海)壽永二年十一月一日辛卯、此日朔旦冬至也、依爲即位已前、不出御南殿、只奏賀表、付御。暦。於内侍所、

(康富記)文安元年十一月一日丙子、御暦奏被付内侍所、博士頭在盛朝臣一人加署、權博士在成朝臣爲重服故也云々、

(看聞日記)應永廿四年十二月十九日、新暦二卷八卦等、在弘進之、

頒曆

〔宗建卿記〕享保十五年五月廿八日、予申云、來月一日日蝕也、件日古來宣下之事有之哉、殿仰云、朔旦冬至日蝕有之、於平座被行之、於賀表者後日上之、又御曆奏依日蝕二日奏之、於然者、於當時も宣下之事不可然之由也、

〔延喜式十八式部〕凡陰陽寮寫曆書手者、簡取諸司史生充、其頒諸國曆者、省令朝集雜掌寫之、

〔俗神道大意二〕マタ御師ヨリ、諸國ヘクバル御祓箱ニ添テ、土產トシテ、ノシアハビナドヽ、新曆ヲ配ル事モ、戰國ノミギリハ、遠國ナドデハ京都ヘ遠イニ依テ、曆ヲ求メル事容易ニハ出來ヌ、ソコデ右ノ代官共ヘ、外ノ品ヲ土產ニ持參致スヨリハ、何卒京都ヨリ曆ヲ求メクレヨト、所々カラ賴マレル、ソコデ求メテ送リ〳〵致シタル所ガ、イットナク伊勢カラ曆ヲ配ル事ニ成タモノト申ス事デヤ、

〔憲法類編二十一法圖〕弘曆者ノ外曆取扱ヲ禁ズルノ事

庚午四月廿二日御布告

頒曆授時之儀ハ、至重之典章ニ候處、近來種々之類曆、世上ニ流布候趣、無謂事ニ候、自今弘曆者之外取扱候儀、一切嚴禁被仰出候事、

〔憲法類編第二十一法圖〕頒行曆ヲ仕立替、或ハ飜刻等不相成ノ事、

明治六年一月十八日、第二十號府縣ヘ御布告、

刊曆

壬申第三百六十一號、第三百六十二號布告、略曆板刻ノ儀ハ、從來柱曆ト唱ヘ、一枚摺ノ品ニ有之候處、頒行曆ヲ其儘小本ニ仕立、又ハ飜刻致シ候類ヲモ略曆ト相心得、地方官ニ於テ出板差許候向モ有之、不都合ノ事ニ付、以來右等ノ儀無之樣可致候、此段爲心得相達候事、

〔好古小錄下〕曆日ヲ印行スルコト、何ノ時ニ始ルニヤ、天正中ノ印行曆日稀ニ存ス、又活板國字曆アリ、天正已前ノ者ト云、印板ノ片假名曆アリ、余〇藤原貞幹缺本ヲ藏ス、首尾破裂シテ、年號考フベカ

ラズ、

〔好書故事餘錄二〕摺本

伊豆國加茂郡松崎村ニ、俊乘院ト云フ禪刹アリ、往歳、寺僧古キ屛風ヲ剝テ、建久九年戊午ノ印行古暦ヲ得タリ、或人云、此暦、其時年紀歳月ト合ハズト、追考スベシ、編次シテ完全ス、守重ガ知友村上某、伊豆ニ往テ摹傳シ、予ニ一冊ヲ送レリ、其暦首ニ、いせごよみト題シテ、六十州ノ圖アリ、上頭ニ傳暦抄狂歌アリ、守重ガ知ル所内藤某、嘗テ慶長年間、鏤治セル古屛風ヲ剝シテ、古暦ヲ得タリ、上段ニ時候ノ歌アリ、古製ナルベシ、其上中下段、大概今暦ノ體裁ノ如シ、是現存板暦ノ最古ナルモノナルベシ、

〔享保集成絲綸錄三十五〕享保三戊年九月

一來亥之暦、板行之儀、板木屋拾壹人江寫本相渡、暦類板行商賣申付候、依之右拾壹人より外、脇々に而暦類板行一切仕間敷候、若相背板行仕候者有之候はゞ、急度可申付候也、

九月

〔牧令類纂二集七十七〕寶暦二壬申年十二月　御勘定奉行江

諸方暦板師共、例年板行出來之上、爲校合摺立之暦本、土御門家幷天文方江差出來候、然處三島暦師より、校合暦不差出候由に候間、校合暦、土御門家江差出候樣可被申渡候、

〔市中取締類集九ノ七十八〕寅四月十八日南御役所取締方江差上申候

暦之儀取計勘辨仕申上候書付

町年寄

諸問屋組合御差止ニ付、以來暦取計之儀勘辨仕可申上旨被仰渡候、

此段、暦之儀者、別紙申上候通、年々元本、上ヶ御下ゲ、是迄は暦問屋拾壹人江相渡、右之者共、板行仕候品々、天文方江差出し、校合相濟、夫ゟ兩御役所江御披見暦差上、町觸等も仕候に付、外品と

暦書

違、更に勝手次第に罷成候節は、元本渡方、其外取締に拘り候間、以來左之通可被仰付候哉、

一暦元本、大概年々八月御下ゲ相成候に付、當年ゟ、右前月七月中、書物掛名主江申渡、來年之暦板行仕度相願候者は、名前書、右名主方江可差出旨觸達爲仕、尤名前差出候而も、一向是迄板木に不携もの、又は御寫本も相渡候ニ付、其日稼之類は相除、人數多少は、其年之振合に任、一紙請證文取之、御寫本暦相渡、是迄之通、板行出來之刻、天文方江差出改濟、御披見暦可差出旨申渡、其年書上之人數之者江商賣被仰付、其旨町觸可被仰渡候哉、

右之通、年々商賣人取調、暦板行被仰付候はゞ、其時々之人數ニ罷成可然候哉、猶御賢慮被成下候樣仕度奉存候、依之此段申上候、以上、

寅四月　　　　館市右衞門

　　　　　　　樽藤右衞門

〔府內備考續編十三〕頒暦調所（又測量所と云○中略）

右板下寫本暦、大經師彫刻摺立差出、役所に而吟味之上進達し、所々奉行領主江御渡之上、銘々板行出來次第、九月晦日迄校合暦差出、役所に而讀合校合之上、不宜所は爲相直候上、早々賦暦賣暦被申渡候樣、奉行相達、右暦師共へ、直し之箇所書付、校合濟之押切書付、下役添簡を以申進ス、

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年十一月癸未、勅曰、如聞、頃年諸國博士醫師多非其才、託請得選、非唯損政、亦无益民、自今已後、不得更然、其須講○中略曆算生者、漢晋律曆議、九章、六章、周髀、定天論、並應任用、被任之後、所給公廨一年之分、必應令送本受業師、如此則有尊師之道終行、敎資之業永繼、國家良政莫要於茲、宜告諸司早令施行、

〔續日本紀考證七孝謙〕漢晋律暦（暦下當依永正本、金澤本、堀本、及三代格増志字、按、漢晋書並有律暦志是也、）議（當依永正本、金澤本、堀本、及三代格作大衍暦議四字、唐志留一行大衍暦一巻、暦議十巻、即此、○中略）周髀（見天平三年三月攷證）定天論（隋志定天論三巻、現在書目錄亦載之、按、唐志有虞喜安天論一巻、疑亦此、）

〔享祿本類聚三代格十七〕太政官符

應加行曆書廿七卷事

大衍曆經一卷　曆議十卷　立成十二卷　略例奏草一卷　曆例一卷　曆注二卷

右得中務省解偁、陰陽寮解偁、頭從五位下兼行曆博士家原朝臣鄕好牒狀云、謹撿案內、依去天平寶字元年十一月九日勅書、以大衍曆經勅造曆日既尙矣、而貞觀三年六月十六日格偁、停大衍舊曆用宣明新經者、據此新經造進御曆、漸經年序、今撿件宣明經目錄、唯有勘經術之書、無相副曆議之書、望請依前後格相副大衍宣明兩經、爲道業經、但勘造曆日用宣明經者、寮露牒狀所陳有道、仍申送者、省依解狀謹請官裁者、大納言正三位兼行左近衞大將陸奧出羽按察使源朝臣多宣、奉勅依請、

元慶元年七月二十二日

〔日本國見在書目錄〕曆數家百六十七卷如本　曆術海嶋　九章算　漏剋

章程纂要三　玄鏡宿曜一　漏剋經三朱史撰　漏剋銘一　曆疏一　長曆四　立成曆一　六甲一　周曆一　廿四氣用篇曆一卷　御書曆一　正曆術四　三等數曆一　大衍曆術一　大衍立成十二　元嘉曆一　麟德曆八　儀鳳曆三　九章九卷劉徽注　九章九卷甄中注　九章九卷徐氏撰　九章術義九甄中注　九章十一義一　九章圖一　九章乘除私記九　九章妙言七　九章私記九　九法算術一　六章六卷高氏撰　六章圖一　六章私記四　九司五卷　九司算術一　三開三卷　三開圖一　海島二　海島一徐氏注　海島二甄仲注　海島圖一　綴術六　夏侯陽算經三　新集算例一　五經算二　張丘建三　元嘉算術一　孫子算經三　五曹算經五甄鸞撰　要用算例一　中星曆三　曆例一　注疏一　曆注二　婆羅門陰陽算曆一　記遺一　五行算二

〔病間長語 三〕蠹簠内傳は、宿曜經などより僞作したるものと見えたり、今の暦家はこれより出ることも多からんと思はる、

〔暦林問答集 序〕貞觀之初、大春日眞野麻呂、又天德之末、吾祖司暦博士賀茂保憲、博考大成而所獻之暦、天數不違、所傳莫不規模、然歲々時々、愚師野巫之僻說多起、正理錯亂矣、故今剪截傾津之雜、採機要之說、號曰暦林問答集、來喆、補其闕焉、

應永甲午孟春日　　正儀大夫司暦博士賀茂在方書

〔日本長暦 序〕持統天皇以來、所行之暦、未有致之者、舊記所載之支干亦不知其當否、往々以誤傳誤而已、於是上古則從日本紀立古暦之法、中古以下則據世々所行之暦以推算之、名曰日本長暦、〇中略

貞享二年歲次乙丑長至日　　司天生保井算哲源春海謹序

〔自娛集 七〕授時暦翼解序

吾同邑人和田三立、夙好推步之術、從學於星野氏、于此有年矣、業暇之暇、覃思研精、幾至忘寢食、依據于暦志、推明發揮作授時暦翼解十卷、吾披閱其書、精覈詳明如指掌、可以爲暦學之龜鑑、初吾思、古今人不相及、今吾於斯人乎改是、書既成求序於予、予嘉其術之明于世、故書以贈之、元祿庚午仲冬幾望、

〔仰高錄〕暦術の義、宣明暦、授時暦此外阿蘭陀暦、李瑪竇の暦法などゝ申ごとき、彼是も暦法共被遊御訂御考、或御尋問等、數度の事也、尤其筋御書籍の事は、一々不及記、其御書物之内にても、天經或問、算法統宗、算學啓蒙、綴術算經、竿頭算法、兩儀集說、天文義論、右旋辨論、麻書暦象略解などゝいへる御書は、平日御傍にみえたり、尤此中、末の三部は、西川如見著候歟と覺候、此外御文庫よりは、數數御用に出、算學全書、西洋暦經、或割圓八線の表、同八線互求法、同勾股八線の表などゝ申御書、暫奧に留り有之而、先覺居候、

〔暦法新書 叙〕我神州六改暦、自貞享甲子距算七十年、而今聖明在上、五雲開、三秀瑧、黃閣列下、六符輝、

五才高、邇育黎庶、遠察轉蓋、於是命臣改修暦法、臣慨愾偏愚陋之質、雖未足果事、而復無宜固辭之力、只因循于先儒衆説、及梅氏春海等之遺教、以訂考暦數而已、但如故從四位下安倍朝臣泰兄、從七位上陰陽大屬源有彜、天文生源光洪、平主住、源周英、多々良保祐、源氏之、源直德等門人弟子及從者、交助而致觀象晷測推歩寫暦之事、自寶暦元年辛未十月丁酉小雪日、至今月十六日辛酉、授午景三百九十八日、候星月一千三百七十時、推數率凡三年、晝不節食、夜不安寢、既而定知前暦後於天六刻七十八分有奇、其術集而大成、爲其書也、儀象二卷、表景一卷、北極測量一卷、月星測量一卷、暦法正篇三卷、古今交食考一卷、古今五緯考一卷、乾坤表一卷、陰陽表一卷、五星立成一卷、四餘立成及紀法諸暦合考一卷、古今暦譜二卷、都一帙十六卷、今日奏進之、恐是天道至微、而人爲有私、管窺蠡測之弊亦無以所逃矣、冀俟後來年々之測量、相査照以補其逸焉、

寶暦四年甲戌冬十月十六日

陰陽頭臣安倍朝臣泰邦謹序

〔樺川筆話　三〕古暦通暦

日東通暦之作者は、杉村甚四郎也、大和大福新屋と云所の農なるよし、其邊にては、此暦を用ゆるよし也、古暦便覽は、中根元圭なり、いづれも疎術と見えたり、今にいたりては、食などは殊外違へり、中根が暦書に、荻生惣右衛門跋をして、特に稱美せし、不知而作す者堪て笑ふべし、杉村は少しまされる歟、

〔寛政暦書　叙〕撰述暦理本末○中略

寛政中有官令、臣吉田秀升山路德風高橋至時及草莽臣間重富等修正暦法、乃寛政丁巳爲元、據暦象考成後編及消長法、編暦法新書八卷、於是乎、延享之内旨始得完矣、嗣令秀升等撰述暦理、蓋後編者節略西人噶西尼之法表、而演解數理者、故間不免於臆度、所以不能無憾也、今躔離交食之理、多據後編、就加刪訂、取丁巳以降新測校訂之、爲暦理十五卷、消長法者、唯有步法而不詳其起源、因探索其

本原、爲消長法原理三卷、改憲之日、創造之儀器、及前後所發、下洋製測器著之圖象、爲儀象圖三卷、記其製作測法、爲儀象誌四卷、校算古今實測、爲諸曆合考十卷、總三十五卷、名曰寛政曆書、又後編不載五星法、然其奏議中、既言五星本天橢圓、日躔表擧太陽距地心線對數、蓋逸其法耳、故改憲之日、五星法姑用曆象考成下編、天保戊戌九年冬、更修五星法換之、今删補其圖說及五星考、爲寛政曆書續錄五卷、初秀升等自奉撰述之命、至今四十有餘年、皆漸就木、秀升男秀賢、孫秀萬德風、男諧老王時、男景保各繼其業而掌之、文化初又徵重富從事、天保乙未六年冬、更命臣足立信頭繼王時景保之緒而掌之、己亥夏、新命景佑督修此事、嗚呼追念遷延四十餘年之久、徒增惶汗而已、今茲景佑竭驥尾而竣功、竊謂得補有德大君遺志之萬一、因叙其本末云爾、

〔曆象考成上編國字解序〕凡欲通考成後編之義者、須先考下編之法、不然則無由而致明晰也、篠原善富弱冠從先人而受業焉、其爲人警敏善數術、先人啓佐局務、及予承父職、善富故在予局、恪勤職事、不捨晝夜、官務之暇、博涉諸家曆法、研精覃思、亡慮四十年、爲後生譯曆象考成上編曆理部、作國字解十六卷、乞予校正、予閲其書、於原書中省迂正謬、語雖從俗、確實詳密、窮鄕後進熟讀此書、則可不待求師於遠、而領其大旨、然曆之爲學廣矣大矣、豈此一書所能窮其奧也哉、夫曆象考成之爲書、彼邦多士積年之所成、宜無差謬者、而善富既已較算擧謬、況斯國字解、以一人之手官私之暇而竣業、予亦助而雖加訂正、恐未能無可議者也、○中略善富每夜半爲期、對燈草書、其用心可謂勤矣、是爲序、時文化十三年丙子秋七月、司曆吉田秀賢誌、

〔天保集成絲綸錄百三〕寛政十一未年三月

町奉行江

近來寛政增續古曆便覽、懷寶長曆便覽と申書物、於京都開曆いたし、世上江賣り弘候由、右之內、紛敷曆號を記し、又は去ル寅年より十年之新曆をも致加入、紛敷事共に候間、絕板申付候、此以後も

右に似寄候新板之書籍は、當地江同之上開板承屆候樣、彼地町奉行江相達候間、於當地も、右之通に可被心得候、此段大坂町奉行江も、銘もより可有通達候、

〔町觸四〕御向樣御差圖、戊〇天保九年六月廿三日申渡仕候、

申渡

書物問屋行事

一暦法新書 寛政暦

一同續錄

一暦法新書 寶暦甲戌元暦

右兩暦書、近年何方ゟ洩出候哉、偶々書物問屋手江も相渡り候趣相聞候、御當地書物問屋共、右暦書持居候はゞ、早々懸り町年寄共江可差出候、若秘置、後日相知レ候はゞ、急度可申付候、

一自今以後、貞享暦幷右兩暦書之儀は、假令端本たりとも、萬一心得違之者有之、賣物に出候はゞ、買取置、是又早々可差出候、勿論右買取候代料相下ゲ可遣間、自今急度相心得、不念無之樣可致候、

右之通、從町御奉行所被仰渡候間、急度相心得、書物問屋一統不洩樣可申繼候、

戊六月

外國暦

〔日本紀略二朱雀〕承平七年十月十三日壬辰、同日仰太宰府、應寫進大唐今年來年暦本、

〔春記〕長暦三年閏十二月廿八日甲寅、關白命云、唐暦一日持來、新羅國以唐暦用之云々、仍去夏密々遣示師許、今日所持來也、摺本也、而件暦具相叶道平暦也、月大小一分無相違、希有之又希有也、件事只以諸道多同推被定仰也、然而難知眞僞、于今鬱々、而件暦已以相叶、是太有興事也、古今無此類、可賞歎可賞歎、證昭至于今無益、可嘲可嘲者、諸卿嗟歎、又尤可然事也、明日可被奏此唐暦云々、後聞以經成被奏畢云々、

〔扶桑略記二十九後冷泉〕永承三年五月二日己亥、自太宰府進新羅暦、與本朝无相違、但十二月大小不同、

〔年中行事秘抄十一月〕一日

雜載

暦給諸司事

永承三年五月二日、太宰府進新羅暦、日本無違、但十二月大小不同、

〔扶桑略記 二十九 後冷泉〕永承三年十一月十六日、自太宰府進大宋暦、與本朝暦符合、

〔百練抄 四 後冷泉〕永承五年九月廿八日、諸卿定申暦博士道平大法師證照算博士爲長等勘申朔旦論事、先是增命申云、今年閏在十一月、道平造暦可謂謬、然間大宋暦持來、閏在十一月、仍仰道平證照爲長令進勘文、道平申云、延暦以後一章不誤、至于承平六年者暦家之失也、先例雖有和漢暦之相違、公家更不用異朝説云々、仍被定朔旦畢、

〔新蘆面命〕元祿甲申十七年三月十三日、唐ノ暦ト日本ノ暦ト、節氣朔望一樣ニ合候事、往古ヨリ無之、只宣明暦ノ内、三百年バカリ合候事有之也、

〔壒嚢抄 五〕猫ヲ乙ト云ハ何ノ故ゾ〇中略サテモ虎ヲバ猛虎トテ、タケキ獸トス、サレバ暦ノ註ニ、十一月ノ節ニ入テ、武始交ト書ケルヲバ、トラハジメテツルムトヨム、武ハ虎、交ハ合ト尺セリ、武ト云字ヲ則トラトヨムニテ、ツルム其心ヲ可知ル、是レ暦道ノ口傳ニテ、頗ル難讀事ニ申メリ、

〔壒嚢抄 九〕廿八宿ト云共、暦面廿七宿也、并其吉凶、以牛宿每日ノ午時當ル故ニ、日次宿直廿七也、

〔隨意錄 一〕奥州南部之俗、舊來有稱私大者、十二月小月、則以明年元日爲晦、足焉爲大月、以卒一歲計、而以二日爲元日、推而至十九日、乃初復以爲二十日、稱之爲私大云、其州之士、有以正月元日亡妹者、而私大之歲、以其所謂晦日爲忌日、與以所謂元日爲忌日、與有疑惑于茲焉、乃因門人宮文獻以問之予、予答之曰、所謂私大者、以其方俗之私爲事之便耳、日月之行非爲此盈縮也、然則不以其私易其死日而可也矣、

〔閑田次筆二〕夜間曆を見ることを、あるひはいむ人あり、中古、物いまひ多かりし代にも、この說はなかりしが、榮花物語に、東三條兼家公、一條天皇の東宮にたゝせ給ふにつきて、圓融帝の內勅にて、曆などせさせ給ふ所に、女御殿にものさゝめき申させ給ひて、おほんとなぶらめしよせて、こよみ御覽じて、所々におほんいのりい更どもたちさわぐとあり、

附漏刻 砂漏 時計 併入 香刻 晷刻

漏刻ハ支那傳來ノ器ニシテ、水ヲ器ニ貯ヘ、箭ヲ樹テヽ刻記シ、其漏洩ノ水量ヲ驗測シ、以テ時刻ノ推移ヲ知ルナリ、支那ニ在リテハ、其來レルコト既ニ久シク、我國ニ在リテモ、天智天皇ノ皇太子タリシ時、親ラ之ヲ製シ、踐祚ノ後ニハ、之ヲ朝廷ニ備ヘテ、百官ヲシテ時刻ヲ知ラシメ給ヘリ、爾來陰陽寮ニハ漏刻博士、守辰丁等アリテ、專ラ此ニ從事シ、行幸ノ時ト雖モ、亦必ズ之ヲ從フルヲ例ト爲シタリ、サレド此器ハ之ヲ用ヰルコトモ易カラズ、許多ノ費用ヲ要スルコトナレバ、諸國ノ國衙ニ在リテモ、之ヲ備ヘタルモノハ甚ダ尠ク、朝廷ニテモ中世廢絕セシコトアリ、

當時時刻ノ計算ハ、亦之ヲ支那ノ法ニ採リテ、一日ヲ十二時ニ分チ、又其一時ヲ數刻ニ分チ、一刻ヲ分チテ十分トス、而シテ十二時ハ之ヲ十二支ニ配シテ、日中ヲ午ト爲シ、夜半ヲ子ト爲シ、子ヲ一日ノ首ト爲ス、而シテ鼓ヲ擊チテ時ヲ報ジ、子午ニハ九下シ、丑未ニハ八下シ、申寅ニハ七下シ、酉卯ニハ六下シ、戌辰ニハ五下シ、亥巳ニハ四下セシヲ以テ、後ニハ直ニ子午ヲ九ツト云ヒ、丑未ヲ八ツ等ト云ヘリ、當時又子一ツ、丑二ツナド云フアリ、又子一點、丑二點（點或ハ天ニ作ル、國音相近ノ字ヲ用ヰルナリトス、）ト云フ、卽チ子ノ一刻、丑ノ二刻ニシテ、一時ヲ分チテ四刻ト爲シ、晝夜ヲ通ジテ四十八刻ト爲シタルナリ、而シテ刻ト云フハ漏箭ノ刻ヨリ起リ、點ト云フハ鐘ノ點數ヨリ起ル、又卯酉ヲ晝夜ノ界ト爲シ、之ヲ六分シタレバ、晝夜ノ長短ニ從ヒテ、時ニ

長短アリ、是ニ於テ一日ヲ分チテ百刻トスル法アリ、是ハ一晝夜ノ刻數ヲ平均シタルモノニテ、春秋二分ハ晝夜各〻五十刻ト爲シ、夏至ハ晝六十刻、夜四十刻ト爲シ、冬至ハ晝四十刻、夜六十刻トス、後世ニハ又一日ヲ九十六刻ト爲シ、晝夜ハ長短ノ差ヲ問ハズ、各四十八刻ト爲シ、一時ヲ分チテ上刻下刻ト爲シ、上刻ヲ初一、初二、初三、初四ノ四刻ト爲シ、下刻ヲ正一、正二、正三、正四ノ四刻ト爲シ、子ノ五刻以下ヲ明日ニ屬ス、

時刻ヲ報ズルニハ、古來時ニハ鐘ヲ用ヰ、刻ニハ鼓ヲ用ヰ、守辰丁其任ニ當レリ、將軍德川家ニ在リテハ、時計役太鼓坊主ナドノ設アリテ、報時ヲ司レリ、江戸、大坂、長崎等ニハ、時ノ鐘アリテ、一般人民ニ時ヲ報ジ、其他諸藩ニ在リテモ、皆鐘鼓ニ由リテ時ヲ報ズルノ設アリキ、又寺院ニ在リテハ、往時ハ螺ヲ吹ク事アリシガ、後世ハ專ラ鐘鼓ノミト爲レリ、

漏刻ノ類ニ砂漏アリ、砂漏ハ器ノ小穴ヨリ砂ノ漏泄スルニ依リテ、時刻ヲ知ル法ニシテ、冬時モ水ノ氷結スルコトナク、漏刻ノ如ク時ヲ失スルコトナカリシト云フ、又香刻、晷刻ナド稱スルモノアリ、香刻ハ香ノ燃燒スルニ依リテ、晷刻ハ日影ノ推移ニ依リテ、時刻ヲ知ルモノナリ、時計ハ土圭トモ書シ、又自鳴鐘トモ稱シテ、西洋ヨリ傳來セシモノナリ、樓時計、釣時計、懷中時計等ノ別アリテ、其精巧便利、往時ノ漏刻ノ比ニアラズ、支那ニ在リテハ、明ノ時既ニ之ヲ輸入セラレ、我國ニ在リテモ、足利氏ノ末造ニハ、又既ニ之アリシモノヽ如シ、德川幕府ニテハ、天文臺ハ勿論、諸侯士庶人モ、亦往々此器ヲ備ヘ、時計師、時計屋等モ亦江戸長崎等ニ多ク住居セリ、

名稱

〔伊呂波字類抄 呂疊字〕漏尅ロコク　〔同 留雜物〕漏刻ルコク 以銅受水、刻節、晝夜百刻、

〔書言字考節用集 七器財〕漏尅ロウコク　漏尅トキノキザミ

○按ズルニ、刻ハ讀書通ニ刻通作尅トアリテ、正字通ニ尅同剋トアリ、

〔倭訓栞前編十八登〕ときのきざみ　日本紀に漏剋を訓せり、漏刻を伺ふて鐘鼓をうつ也、貞觀式に、凡知時以鼓、示剋以鐘とみゆ、是は唐書に、更以擊鼓爲節、點以擊鐘爲節、といふによれり、更は時也、點は剋也、一說に寅の一點などいふは、一時を五ッに分ていふ也といへり、

〔松屋筆記七十〕漏剋、土圭、

輿淸曰、今俗、登計伊をもて、時を量る器の總名とす、こはもと、漢土に、黃帝漏水器を製て、時剋を知事を敎へしより、漢晉以來、其工巧を極む、梁の惠遠法師が蓮花漏は、また一きは工夫をそへたる也、燈漏あり、沙漏あり、通雅卷十一に、燈漏の製傳はらず、沙漏は甁に沙を貯るよしいへり、

〔隋書三十四經籍〕漏刻經一卷、何承天撰、梁有後漢待詔太史霍融、何承天、楊偉等撰三卷、亡、漏刻經一卷、祖暅撰、漏刻經一卷、梁中書舍人朱史撰、漏刻經一卷、梁代撰、梁有天監五年修漏刻事一卷、亡、漏刻經一卷、陳太史令宋景撰、雜漏刻法十一卷、皇甫洪澤撰、暑漏刻經一卷、

發見

〔日本書紀二十六齊明〕六年五月、皇太子(中大兄)初造漏剋、使民知時、

〔日本書紀二十七天智〕十年四月辛卯、置漏剋於新臺、始打候時、動鐘鼓、始用漏剋、此漏剋者、天皇爲皇太子時、始親所製造也云々、

製作

〔朝野群載一文筆〕十二時漏刻銘并序　藤敦光

余台嶺訪道、法水問津、早爲鑽仰之餘閑、粗學律況之幽致、況復尋窮通於爻象之書、辨臧否於曜宿之術、仰察九野之度分、俯稽三光之盈縮、總其大較、用在日時、而每至雲霧晦暝、河漢陰霾、晝則陽景難測、夜亦星躔無觀、披月令於夏曆、待旦之分易迷、窺景緯於燕家、甲乙之更何決、慨然以歎、徒送居諸、於是去嘉保二年孟陬之月、夢中案術、覺後施巧、其器圓也、象圓蓋之運轉、其基方也、類方輿之不搖、天盤則縱橫三尺、表三才也、地盤則方各四尺、辨四序也、南中央有一孔穴、竪二寸、法二儀、橫四寸、分四點也、禽獸居中、隨十二時而形現、童子立上、向方角位而指點、一動行一剋、八動成一時、每有動轉、必有音韻、不登臺以睹天文、不出戶以知時剋、唯此寶器、深以秘藏、然而出處行藏、隨時應機、更過忘言之友、忽勵起

予之心、新加潤色、享箒自珍、不敢慕崐玉之褒、亦思免海棗之嗤、昔梁朝天監六年大歲丁亥、陸佐公作漏刻銘傳於世、今聖曆永久四年大歲丙申、一沙門亦作漏刻銘以繼之、其銘曰、

漏刻之器、神造之彰、起自軒后、及于夏商、衞宏著述、陸機宣揚、各垂規矩、更載縑緗、銅渾天度、尋其濫觴、沙門日覺、舉其顏綱、夢中案術、意端思量、制作斯器、牽由舊章、春夏分至、晝夜短長、錙銖無爽、主撮是詳、指南童子、立其中央、司辰神將、現其正陽、四支守位、十干辨方、時分四點、晷移三光、如運計柄、似轉星芒、藴奇孕怪、昏旦在傍、

永久四年五月十一日

〔曆法新書 一〕漏刻

今制更漏高三尺五寸、經三尺二寸五分、四匱在于上、各異其位、如階而列矣、一海在于下、受湛萬水矣、匱之形、內外共方、而外黑漆、內函銅、每壺納水七兩、則至海凡二斤八兩也、水海之形、內圓外方、而外用黑漆、內用流金、深淺一等也、壺前各聯銀溝、斜渡疆而傳漏水焉、溝砌悉鏤銀、而象菊花浮水形、溝頭各有白菊未開形、以指札之、則水漲出去塵垢矣、常塞之不通也、其半腹有一孔、至微漏一滴、漸々下于金海、金海之內置策的、的之至中植一針、而箭常射之、穿一竅於海覆、而箭常貫之、如此相係、而水落則的浮、的浮則箭昇刻、是以報焉、嘗有玉童孤立于金海之蓋上、而把箭指刻、雖冬夏風雨雲陰月黑、亦無差矣、水已滿溢、則開海底之水閘而去之、其水沼々流入于方舟、以長溝引之、以桿碓搖之、水自運轉昇漏上、漏上有一金龍、臨上壺而口吐水、水直入于夜天地也、最上一壺、始注水、是夜半子刻、故名曰夜天地也、水轉至第二壺、是明旦卯時、故名曰日天地也、水轉至第三壺、是日中午刻、平分晝夜、故名曰平壺也、水轉至第四壺、是黃昏酉時、上三壺各乾、只當壺滿、故名曰萬分壺、萬猶滿也、四壺之水、既集入于水海、海者納萬水之名也、四壺一海、皆鏤金書其名焉、玉壺必有雲臺、金海亦有閣、閣上彫授時之字也、四匱曰玉壺者、因舊名也、一壺名金海者、亦如舊也、水溝古用銅、今改用銀、因號銀溝、浮器無舊名、今呼曰策

的也、臣奉勅日、至進奏之日、纔六十日、雖其形象、偏效古法、未竭微力、而至其減漏水之分量、是始加工夫、方圓之術、傚之凡七日也、一旦量得之、水定二片八兩、嘗命工制匱、凡十有三日、匱未當、故改制之、復十日而漸備矣、於是試施水繫渫、晝乃看其所漏與表晷所移、夜則聞其水海之響與箭辰天賦之動、而相讐校、凡三日三夜、絶不著眠、素食不退其傍、第四箇日、始識水溝之古法未密、仍命工、更造銀溝箇々、雖然猶未精、故再命編此環溝、以得意矣、別經三日、復讐校一日一夜、猶未合、復讐校一日一夜、於是始識浮器之古法未密、仍命工數造浮桂、或如破鏡、或如彈丸、一以薄、一以輕、皆欲其易浮者也、如此如意精思、歷一候而猶未固、臣既神氣勞倦、木儡發疝、匍匐登露臺、于時見圓月昇峯頭、喟然知物理不可窮、而卽以象之、其器內空含氣、外實鎖風、飄々能浮、如瓢漂淵、於是始建銀箭測之、紀晝夜識刻分、更歷一候成矣、連全體求大略、十日而果過當進奏日數之限、故雖未測定永久無差之術而獻之、臣以爲鍛工之冶鐵輪子、豫有制法、而常造百千、是猶未敢至密、嗟乎漏刻之制、雖古人宿哲竭百年之勉、而未曾精微、況於臣之今一甲策乎、不可無失錯也、恐懼雖言而已、○中略

右漏刻說一篇者、往寬保二年壬戌夏五月、臣奉詔撰緝一卷以進、今拔于文中而載之也、

〔三才圖會器用二〕刻漏制度

黃帝創漏水制器以分晝夜、成周挈壺氏、以百刻分晝夜、冬至、晝漏四十刻、夜六十刻、夏至、晝漏六十刻、夜四十刻、春秋二分、晝夜各五十刻、漢哀帝改爲百二十刻、梁武帝大同十年、又改用一百八十刻、或增或減、頗皆疎謬、至唐晝夜百刻、一遵古制、而其法有四匱、一夜天池、二日天池、三平壺、四萬分壺、又有水海、水中浮箭、四匱注水、始自夜天池、以入于日天池、自日天池以入于平壺、以次相沿、入于水海、浮箭而上以爲刻分、宋朝所用之制、亦如於唐、而其法、以晝夜百刻分十二時、每時有八刻二十分、每刻六十分計、水二斤八兩、箭四十八、二箭當一氣、歲統二百一十六萬分、悉刻于箭上、銅烏別水而下注遶心、浮箭以上登、其二十四氣、大凡每氣差二分半、冬至日極短、春分日均平、冬至後行盈、夏至

後行縮、乃陰陽升降之期也、

〔漏刻說〕天之杳冥、無由推測、神智挺生判兩儀、建五行、干支彰而六甲成、運氣分而四時定、此則六六九九、所以正天之度氣之數也、書云、天工人其代之、乃象于地四、參于天一、以方以圓、照時之載、實乎尙矣、漏刻之作、肇於軒轅之世、宣乎夏商之代、夫日常於晝夜行天之一度、則晝夜十二時、當均分於一日、故漏水分百刻以度之、本邦邃古、漏刻之法、以一時爲四分、由是有子一丑三等語、粤稽天智天皇、乃命博士暨守辰、欽若天象曆日、察金壺玉箭、以正漏刻、爰景爰中、靡豐弗爽、分一時於司辰、擊鐘鼓於新臺、其數也布在延喜式、乃緣天地之至數、總算十二支、數極於九、自九逆退推之、故子午九、丑未八、寅申七、卯酉六、辰戌五、巳亥四、蓋夜子時始於一九、而巳時終六九焉、晝午時亦始於一九、而亥時終於六九焉、各得其數、而以十除之、以餘而定刻數、其法子一九爲九、丑二九十八爲八、寅三九二十七爲七、餘支亦猶是、夫陽生於子、而極於巳、陰生於午、而極於亥、陽進則陰退、陽退則陰進、一往一來、紛々紛々、終而復始、一晝一夜、水下百刻而盡矣、而子時前四刻屬今日、後四刻屬明日、是俱爲日時之氣、始終皆在於子半也、二支配合共得數、其故何哉、地支布方隅、各有定位、此對待之標本、而六氣各司於二支也、支干得數、則天地自然之至數、而五行納音之定法也、不數一二及三者、陰陽之用、變化之道也、抑亦奇偶相唧、陰陽互藏之謂歟、或曰、一便含九、二便含八、三便含七、四便含六、蓋因一二三四、便見九八七六、而五居乎中、是陽九之數也、配合之餘數、雖與此不盡合、然其爲理則一而已、若能得至數之機、則自將不待推排、而有以識其脗合矣、而又不數十何居、天五生土、土王中宮、而統乎四維、五爲數中、故曰、天地之至數、始於一終於九焉、此所以土不待十而後成也、凡易爻、止用六與九、洪範第之、以至乎九焉、天眞之氣終於六、黃鐘之數起於九、此亦六六九九、所以正天之度氣之數也、於戲我天皇之神造、其至矣、郁乎、渙乎、上配天地、與陰陽合契、授時於四方、垂規於萬世、可謂勳軼於軒轅、業冠於夏商矣、而近世有自鳴鐘、俗名時計、中設機關、每遇一時、輙自鳴焉、今也有安井氏寺島氏、制渾天、造時計、列日月星辰、以機關轉之、與

天相應、無成差忒、奇矣神矣、苟由是而求造化之運算、則分天之度數、可座而致也、

享保壬子孟夏　筑後柳川　櫻井養仙著

〔宋史四十八天文〕儀象

若六合儀三辰儀、與渾儀並列爲三重、三重者唐李淳風所作、而黄道儀者一行所增也、如張衡祖洛下閎、耿壽昌之法、別爲渾象、置諸密室、以漏水轉之、以合璿璣所加星度、則渾象本別爲一器、唐李淳風梁令瓚祖之、始與渾儀並用、太平興國四年正月、巴中人張思訓創作、以獻太宗、召工造於禁中、踰年而成、詔置於文明殿東鼓樓下、其制起樓高丈餘、機隱於內、規天矩地、下設地輪、地足人爲橫輪、側輪斜輪定身關中關、天柱、天柱七直神、左搖鈴、右扣鐘、中擊鼓、以定刻數、每一晝夜、周而復始、又以木爲十二神、各直一時、至其時、則自執辰牌、循環而出、隨刻數以定晝夜短長、上有天頂天牙天關天指天抱天束天條、布三百六十五度、爲日月五星紫微宮、別宿斗建黄赤道、以日行度定寒暑進退、開元遺法、運轉以水、冬至中凝凍遲澀、遂爲疎略、寒暑無準、今以水銀代之、則無差失、冬至之日、日在黄道表、去北極最遠、爲小寒、晝短夜長、夏至之日、日在赤道裏、去北極最近、爲小暑、晝長夜短、春秋二分、日在兩交、春和秋涼、晝夜平分、寒暑進退、皆由於此、幷著日月象、皆取仰視、按舊法、日月晝夜行度、皆人所運行、新制成於自然、尤爲精妙、以思訓爲司天渾儀丞、銅候儀司天多官正韓顯符所造、其要本淳風及僧一行之遺法、顯符自著經十卷、上之書府、

時刻

〔伊呂波字類抄志疊字〕時尅

〔倭訓栞前編十八〕とき　晝夜十二時の剋は、日の運りをくるりと取まはしたる寸より出づ、日出の所を本として、混撥子にてはこび見れば、十二に分るゝ也、日出は寅也、何ほど北へよる時も、寅の方よりはよらず、亥まで十二寸也といへり、阿蘭陀の法は、晝夜を廿四時に分つといふ、

〔塵添壒囊抄六〕十二時異名如何、

平旦寅時　日出卯時　食時辰時　禺中巳時　日南午時　日昃未時　晡時申時　日入酉時
黃昏戌時　人定亥時　夜半子時　雞鳴丑

〔陔餘叢考三十四〕一日十二時始於漢

古時本無一日十二時之分、左傳卜楚邱曰、日之數十、故有十時、是言一日只十時也、其見於史傳者、記日之早晚、則曰平旦、曰日中、曰日之夕、又如史記天官書、旦至食、食至日昳之類、記夜之早晚、則曰夜半、曰夜未央、曰夜向晨、又如漢書廣陵王胥傳、雞唱時、昌邑王傳、夜漏未盡一刻之類、無所謂子丑寅卯之十二時也、況古人尙以甲乙丙丁戊、分夜之五更、謂之五夜、若其時已有甲子乙丑紀時、又何得以甲乙紀夜乎、又淮南子、日出暘谷、爲晨明、登扶桑、爲朏明、至曲阿、爲旦明、至曾泉、爲蚤食、至桑野爲晏食、至衡陽、爲隅中、至昆吾、爲正中、至鳥次、爲小還、至悲谷、爲餔時、至女紀、爲大還、至虞淵、爲高舂、至連石、爲下舂、至悲泉、爲懸車、至虞淵、爲黃昏、至蒙谷、爲定昏、是古時、一日夜尙分十五時、且其所分之候、晝多而夜少、其以一日分十二時、而以干支爲紀、蓋自太初改正朔之後、曆家之術益精、故定此法、如五行志日加辰巳之類、皆漢法也、杜預註左傳卜楚邱十時之語、則曰夜半、曰雞鳴、曰平旦、曰日出、曰食時、曰隅中、曰日中、曰日昳、曰晡時、曰日入、曰黃昏、曰人定、是雖不立十二支之目、亦已分十二時而非十時矣、蓋曆家記載、已用十二支、而民俗猶以夜半雞鳴等爲候也、

〔和漢名數續編時鐘〕本邦時鼓數　篤信按、日本紀天智天皇十年、置漏刻於新臺、始打候時、動鐘鼓、始用漏刻、延喜式陰陽寮、諸時擊鼓、子午各九下、丑未八下、寅申七下、卯酉六下、辰戌五下、巳亥四下、幷平聲、鐘依刻數、右日本紀、延喜式所載如此、然則本朝十二時、晝夜各自九至四之數、其由來也尙矣、此數中華曆書亦往々有之、○中略

用九說　子九、一九九、　丑八、二九十八、除十、　寅七、三九二十七、除二十、　卯六、四九三十六、除三十、　辰五、五九四十五、除四十、　巳四、六九五十四、除五十、　午九、一九九、　未八、二九十八、除十、　申七、三九二十七、除二十、　酉六、四九三十六、除三十、　戌五、五九四十五、除四十、　亥四、六九五十四、除五十、

一說、從申逆行至子、則其數得九、故以子爲九、其次從申至丑、其數得八、故以丑爲八、及至巳得四、餘皆倣之、從寅逆行至午、則其數得九、故以午爲九、其次從寅至未、其數得八、故以未爲八、及至亥得四、皆倣之、蓋從寅至未爲晝、從申至丑爲夜、寅申者日出沒之時也、故晝從寅數之、夜從申數之、用之爲始、此說雖出穿鑿、姑載之以備參考而已、

〔類聚名物考時令二〕五更　一夜を五更に分つ事、西土の制にして、顏子家訓にも見えたり、五更と打まかせて云時は、夜明前の時にして、是を曉更ともいへり、初更は初夜なり、前漢書上九十六西域傳、罽賓國斥候士百餘人、五分夜擊刁斗自守、注師古曰、夜有五更、故分而持之也、學山錄卷六藤原明遠漢以來有一夜五更之說、按顏氏家訓云、一夜何故五更、更何所訓、答曰、漢魏以來、謂爲甲夜、乙夜、丙夜、丁夜、戊夜、又云、鼓、一鼓、二鼓、三鼓、四鼓、五鼓、亦云、一更、二更、三更、四更、五更、皆以五爲節、西都賦亦云、衛以嚴更之署、所以爾者、假令正月建寅、斗柄夕則指寅、曉則午矣、自寅至午凡歷五辰、冬夏之月、雖復長短參差、然辰間遼闊、盈不至六、縮不至四、進退常在五者之間、更歷也、經也、故曰五行爾、

〔掌中時辰儀示蒙〕盤面の形容器によりて、通例圖の如し、內圍の數字、一より十二に至るものは時なり、外圍の數字、五に起て六十に止るものは分數なり、凡西洋時刻の法は、午正より子正に至るを十二時とし、子正より午正に至るを十二時として、時を唱へて、子正後の幾時、午正後の幾時といふ、晝夜都て二十四時なり、一時を六十分とし、一分を六十秒とす、下の表は秒數を用ひず、三針を用ひざればなり、又刻數は、晝夜九十六刻、一時は四刻なり、卽一刻は十五分に當る、晝夜の分數千四百四十分、秒數八萬六千四百秒なり、本邦晝夜平分の時に比すれば、彼一時は我半時、彼二時は我一時に當る、これ立春後立冬前各十一二日の頃のみ、直に彼時を用ゆべし、東都の數を以て論ず其他は晝夜長短あり、左の表を參して知るべし、但常に變せざるものは、晝夜の九子午正にて、彼十二時なり、是に因て、此器の一周を正すは、必日中を用ゆべし、日中を測るの略器、圖の如し、○中略

長短兩針のもの、短針は時を指して一晝夜二周長針は分を指して、晝夜二十四周なり、卽長針一周して短針一時を指す、三針の器、其運最も速き針は、秒を指して晝夜千四百四十周なり、卽此針一周して指分針一分を移す、分長短兩針を用て俗時を測るの法、假令ば、四月の節、晝短針四時の後に在り、長針十五分にあれば、表面四月節の段、四時十五分の下に當る時を檢するに、八ッ七分一釐なり、卽四月節四時十五分の俗時なり、長針十五分ごとの間に在ものは、表面、西洋の一刻、卽十五分每の數なる故、其間に在ものは此酌量を用ゆべし、假令ば、二月の節、晝短針三時の後にあり、長針四十分にあれば、表面二月節の段三時三十分と四時五十分との間にして、三分之二に當れり、三十分は八ッ六分六釐、四十五分は八ッ七分八釐なり、其差一分二釐の三分の二は八釐に當る、これをもて八ッ六分六釐に加へて、八ッ七分四釐を得、卽二月節三時四十分の俗時なり、餘はこれに倣へ、

〔觸留三十一〕戌○文久二年四月七日、向方より、

町奉行衆　外國奉行

明八日、對馬守殿御宅江、佛國ミニストル、西洋第八字時參上いたし候旨、昨六日及御達候處、西洋第一字時、御宅江參上いたし候旨申立候間、此段御達におよび候、

四月七日

〔憲法類編二十一國法〕太陰暦ヲ太陽暦ニ改ラルヽ事

今般太陰暦ヲ廢シ、太陽暦御頒行相成候ニ付、來ル十二月三日ヲ以テ、明治六年一月一日ト被定候事、○中略

一時刻之儀、是迄晝夜長短ニ隨ヒ、十二時ニ相分チ候處、今後改テ時辰儀時刻晝夜平分二十四時ニ定メ、子刻ヨリ午刻迄ヲ十二時ニ分チ、午前幾時ト稱シ、午刻ヨリ子刻迄ヲ十二時ニ分チ、午後幾時ト稱候事、

一時鐘之儀、來ル一月一日ヨリ右時刻ニ可改事、
但是迄、時辰儀時刻ヲ、何字ト唱來候處、以後何時ト可稱事、

時刻表

午前

零時（即午後十二時） 子刻	一時 子半刻	二時 丑刻	三時 丑半刻
四時 寅刻	五時 寅半刻	六時 卯刻	七時 卯半刻
八時 辰刻	九時 辰半刻	十時 巳刻	十一時 巳半刻
十二時 午刻			

午後

一時 午半刻	二時 未刻	三時 未半刻	四時 申刻
五時 申半刻	六時 酉刻	七時 酉半刻	八時 戌刻
九時 戌半刻	十時 亥刻	十一時 亥半刻	十二時 子刻

右之通被定候事

〔倭訓栞前編十八〕ときのをはり　日本紀に四剋をよめり、我邦漏剋の製、一時を四に分てるをもて也、晝夜四十八剋、蓮華漏に同じ、

〔令集解公式三十五〕凡内外百官、司別量事閑繁、各於本司分番宿直、（中略）問、律云、在官應直不直、應宿不宿、者、各笞廿者、是知宿直是二也、未知日夜各分番、得日夜四十八刻内同人歟、或云、日夜是同人也、

〔延喜式陰陽十六〕諸門鼓、
起大雪十三日、至冬至十五日、日出辰一刻三分、日入申四刻六分、卯四刻六分開諸門鼓、辰二刻七分開大門鼓、午一刻六分退朝鼓、酉一刻二分閉門鼓、
起小寒一日、至十二日、日出辰一刻一分、日入申四刻七分、卯四刻五分開諸門鼓、辰二刻六分開大門鼓、午一刻五分退朝鼓、酉一刻三分閉門鼓、

〔和漢名數續編歳時〕一時上下刻、月令廣義、時分爲八刻、　上四刻初一、初二、初三、初四、　下四刻正一、正二、正三、正四、

〔假名暦略註〕節中土用總而暦面刻限の事

都て暦面の刻附は、一。晝。一。夜。を。百。刻。晝夜の長短に拘はらず、十二時平均の割合なれば、時の鐘、又自鳴鐘等刻限には不合故に、獻上の御暦には、蝕の刻附、別に時の鐘附を記す也、夜半子の時は、半時宛今夜と明日の日取にまたがるゆへ、子の四刻までは今夜と記し、子の五刻より後、八刻までは今曉として、翌日の下に記す也、平均の一時は八刻三三有奇にして、一刻の寸にむらなし、時の鐘の一時は、晝夜共其時節にしたがひて、一刻の寸に長短有也、

〔燕石雜志一〕更鐘○中略

亦云、刻はきざみといふことにて、漏水の箭に百の刻を施して、その箭の刻一ッうかぶときは一刻、二ッうかぶときは二刻と唱ふ、故に子の一刻、所謂子一ッ丑の三刻所謂丑三ッといふなり、しかれどももしその箭に十二の刻を施して、これを用せば、卯の刻、辰の刻といはんも理なきにはあらず、漢哀帝は、一晝夜を百。二。十。刻。とし、梁の武帝は百。八。十。刻。とし、廬山の惠遠は四。十。八。刻。とし、淸の時憲暦は九。十。六。刻。とする類、皆その好に從ふのみ、亦更點は夜分に局る名なり、その夜の長短に隨て、均く五ッに分て、一更、二更、三更、四更、五更と唱ふ、その更を均しく五段として、一點、二點、三點、四點、五點といふ也、冬至の時節は夜長ければ、更點も長し、夏至の時節は夜短ければ、更點も短し、點或は唱といふ、又籌といふ、世俗寅の一點、辰の一點といふ、その訛最甚し、以上中根彦圭の說なり、

〔類聚名物考時令二〕春秋分晝夜分　童子問木下菊所　春分秋分之日、多夜如何、朱翼曰、日以百刻爲度、晝長則夜短、夜長則晝短、地中論云々、又曰、日未出地二刻半、而地上已明、日已入地二刻半、而地明晝、故常多夜五刻、子初々刻、初二刻、初三刻、初四刻爲夜子時、屬本日管、子正一刻、正二刻、正三刻、正四刻爲日子時、屬次日管、愚按、是以一時爲八刻、以半時分之、人之死生之日期、亦以之可論定也、瑯琊

代醉編云、余嘗謂、子丑二時、俱屬今日之夜、寅時乃屬明日之旦、引穀梁傳注、疏云々、子丑二時、豈不當屬前日乎、按、朱翼之說、今之亥半時以後爲子時、然爲夜子時、屬本日暫也、自今之子時半時、爲日子時、屬次日暫、則與今所定之晝夜、恰相同也、張鼎思說難從、鼎思引劉世節說、以今夜之子時、即爲來日之初也、百刻六千分也、按、春分秋分日多夜五刻也、廣義云、每時八刻二十分、按、一刻六十分、一時五百分、中華日時者自今之亥半時爲子刻也、小學紺珠(朱王應麟)百度百刻、學記云、百度得數而有常、正義晝夜百刻、十二時每時八刻二十分、每刻六十分、(周禮疏義)今案に、此等の說に依て見れば、今の定めは夜九時を打しより、即子の初として、明日の初とす、九打ぬ前をば今日の內とするなり、又西土の定めは、夜の四半時よりは、もはや明日の分として、是を子の初とするなり、此方にても、昔の貞享曆の定めと、今とは異なり、

〔類聚名物考(時令二)〕夜半爲朔　夏以平旦爲朔、殷以鷄鳴爲朔、周以夜半爲朔と見えたり、今本邦の曆は周制によりて、夜半子時より翌日の分とす、

〔十駕齋養新錄(十七)〕夜子時
宋紹熙二年正月三日壬子、其夜子時立春、洪文敏以劉子曰廟堂云、日辰自古以子時爲首、今既子時立春、則當是四日癸丑、謂太史之誤、(見實退錄)宋史曆志、不載其事、是文敏有此議、而廟堂未之行也、頃見寶祐四年會天曆、是歲立夏四月三日甲子、其夜子初二刻、則子初系前一日、終宋世未嘗改易、元明至今猶承其舊、洪氏於推步本非專門、輒譏太史爲誤、非也、

〔日本紀略(花山入)〕寬和二年六月二十三日庚申、今曉丑剋許、天皇密々出禁中、向東山花山寺落飾、

〔大鏡(花山一)〕つぎのみかど花山院天皇と申き、〇中略寬和二年丙戌六月二十三日の夜、あさましく候し事は、人にもしられさせ給はで、みそかに花山寺におはしまして、御出家入道せさせ給へりしとぞ、

〔扶桑略記二十七 華山〕寬和二年六月二十二日庚申、夜半、天皇生年十九出鳳闕宮、向花山寺、落飾入道、

○按ズルニ、花山天皇出家ノ日時、右ノ外諸書或ハ二十二日ニ作リ、或ハ二十三日ニ作ル、之ヲ要スルニ、二十二日丑剋ノ事ニシテ、未明以前ヲ以テ前日ニ屬スルト、子剋以後ヲ以テ當日ニ屬スルトニ由リテ、此異說アルヲ致スノミ、而シテ扶桑略記ニ二十二日ノ下庚申トアルハ、己未ノ誤ナルベシ、

〔元文五年曆〕子丑寅卯の四箇時剋は、次の日の處分故、以後は此四箇時剋には翌の字を加ふ、

〔誠齋雜記丁未雜記五〕頒行曆前文〇中略

元文五年庚申曆

世俗一晝夜を云は、明ヶ六ッ時を一日の初とし、次の明ヶ六時迄を終とす、月食を記す事も俗習にしたがひ、右之通り用來れり、然ども元より子丑寅卯の四時は次の日の處分なる故、今より後、此四時には、翌の字を附て、これを知らしむ、幷二十四節土用も皆右の如し、自今以後此例にしたがふなり、重而改るにをよばず、

澀川六藏源則休　謹誌
猪飼豐次郎源久一

〔青標紙〕時刻取方的例

一寬政十二申年閏四月廿日、時刻取方之儀、時と刻と取方區々に而難相辨、既に兩山に而御法事揃刻限兩樣之樣に承り及、心不決候間奉伺候、譬者、午之上刻は、四ッ半時を取候哉、右に准候得者、中刻は九ッ時之頃に而、下刻は九ッ半時江移り候少し前、其餘右に准候、如何に候へば、子ノ上刻は夜の四ッ半時に而候間、御届等に今夜子ノ上刻と認候而宜候哉、夜の九ッ時之頃を子ノ中刻と定、今曉子ノ中刻と認候而宜候哉、晩の七ッ半時を、今夜酉ノ上刻と認候而宜候哉、曉

の七ッ半時を、今朝卯の上刻と認候而宜御座候哉、右時刻取方、一時兩樣ニ而、其時之頭を上刻と取、其餘右に准じ取方も有之候哉ニ奉存候、御規定之所、何れに御座候哉、

附、書面時刻取方之儀、時之初を上刻、中央を中刻、末を下刻、餘は是に准じ候事、　爲見合左之書面記之、寛政六寅年正月十七日、大目付江問合、認而刻限之儀、何之上刻中刻下刻と唱候儀、區々相心得、相違仕候儀御座候、假令四ッ半時を午ノ上刻、九ッ時を中刻、九ッ半時を下刻と相唱へ候義ニ御座候哉、公儀ニ而、御取扱被成候御規定之儀、相心得罷在度奉伺候、　附、書面之通ニ而候、

一寛政十二年、上野宿坊現龍院役僧玄定坊江問合之所、返書如此、然ば當山御法會抔之節、刻限之儀に付、或は辰之上刻と申は、明六ッ半時に候哉、又は五ッ時を上刻と取候哉、御入用之儀に付、御內々御問合之趣致承知候、右之義は、每々當山ニ而も、色々異說多、各據一義に無之、件之通、譬ば辰之上刻と申候、曉六ッ半時、正五ッ時と、各取方御座候而、一順に致不申、依之當山御法會抔之節は、譬ば寅之刻壹番鐘八ッ半時、二番鐘七ッ半時、辰ノ刻一番鐘六ッ半時、二番鐘五ッ時、右之振合御座候、依之被仰下候、何之上刻何之中刻抔申儀は、多分取用不申候、○中略

一暦之節替之所、左之通、今夜子ノ上刻に入、今夜子ノ四刻に入、今夜子ノ初刻に入、今曉子ノ六刻に入と有之、寛政五巳年八月二日、八月中今曉子ノ四刻、日ノ出ゟ日ノ入迄、晝五十刻、夜五十刻、

寛政元酉年十一月、天文方吉田靱負方江細川越中守ゟ問合左之通、　附、曉子丑寅、朝卯辰、晝巳午、晩未申、夜酉、戌亥、如此之御定に而御座候、以上、

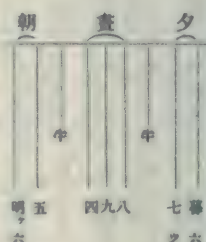
寛政十二申年、阿部伊勢守公用方江問合之返書、御手前ニ而一刻之內、上中下差別之義、中刻下刻は何之中刻、何之下刻と相認、上刻は何之刻と計認御屆等仕、是迄相濟申候、先年も御用番樣ニ而、御尋御座候節、前々ゟ手前に而は、上刻之儀に限り候段申達相濟申候、何も御家格と申儀

には無之、前々ゟ之仕來に御座候、左樣御承知可被下候、

一御觸面、何之上刻と出候時も、何之刻と出候時も有之、一晝夜百刻を十二時に割付、一時は八刻三分三釐三毛、三三三、一時は十歩也、但子ノ刻夜ノ分四刻一分六釐六毛六六六迄也、一子ノ四刻一歩七釐ゟ曉と成申候、　上野時之鐘は、前の時の半を、次の時の上刻と取申候、　芝は其時の頭を、上刻と取申候、

一今曉之唱方、寛政六寅年九月十一日、戸田釆女正殿、御目付衆江御尋之處、松平田宮上ケ候書附、子之中刻ハ今曉とは唱候哉、昨夜と唱候哉、但何刻ゟ今曉と申候哉之事、　答、子ノ中刻は、九ツ半時より今曉と唱申候、但亥ノ下刻迄を、昨夜と唱申候、

一時刻取方伺之事　文化五辰年、同六巳年、松平中務少輔家來ゟ問合之趣、摠而刻限之義、是迄心得方、兎角區々御座候、假令ば一日之內、曉朝晝晩夜分と唱候義、委細承知いたし度、則心得方、左之通、　今曉子丑寅、今朝卯辰、今晝巳午、今晚未申、今夜酉戌亥、右之通可相心得哉、或は今曉と申候は、丑之上刻ゟを唱申候樣にも承知仕候、右丑上刻と申候は、夜九ッ半時に候哉、左候得ば、九ッ半時前は、昨夜子ノ下刻にも當り可申哉、依之公儀に而御取扱被成候御時刻御取方之儀、一日之內、何之上刻中刻下刻、幷昨夜今曉と唱申候差別、委細承知仕度、兼而相心得罷在度候、　附書面、曉朝晝夜差別之義、夜九ッを打、明六ッ時迄を曉と唱、明六ッ時ゟ五ッ半時を朝と唱、四ッ時前ゟ八ッ半時迄を晝と唱、七ッ時前ゟ暮六ッ時迄を夕と唱、暮六ッ時ゟ九ッ時迄を夜と唱可然候、且上中下刻之義、其時を打候所を上刻と唱、半時を中刻、次之時を打候前を下刻と唱候事に候、　夜明候而日出候迄を晨と申、日入候而、日暮候迄を昏と申、則晝は屬之申候、日暮候而、明日夜明候迄之內、則夜に而御座候、晝七ッ時ゟ、暮六ッ時迄を晝と認來り候に付、明ヶ六ッ時ゟ五ッ時迄を朝と申、四ッ時ゟ八ッ時迄を晝と申可然と奉存候、



たとへば、明六ッ時ゟ五ッ時迄之間、朝に而御座候、但五ッ半過は、朝半時過と申候而も宜、又四ッ時前と申候而も可然奉存候、七ッ時ゟ、暮六ッ時迄之内、夕に而御座候、但八ッ半時過は、晝八ッ半時過と申候而も宜、又夕七ッ時前と申候而も可然奉存候、但暦ニ朝曉と申事、是又誤候義無御座候、　暮六ッ時ゟ九ッを打不申前を今夜と申、九ッを打候後、明六時迄を今曉と申候、刻限に而夜曉朝と申候得ば、日々違候事御座候、

〔家のむかし物語〕遺言之事

我等(本居宣長)相果候はゞ、必其日を以て忌日と定むべし、勝手に任せ日取を違候事有之間敷候、扨時刻は前夜之九ッ時過より、其日之夜之九ッ迄を其日と定むべし、譬へば晦日之夜之九ッ過よりは來月朔日にて、朔日之夜九ッ迄朔日なり、右之刻を以て定め候べし、

〔自娛集四〕可以寅時爲日始說

古人之說義理也、有兩義而俱有理者、蓋各發明一理而極其趣也、不可遽以私意臆度、執一而是非矣、取捨之間信可愼也、然而雖兩說俱有理、苟有短長于其間、則捨其短取其長者、固其所也、古人定今日之始有兩說、以子時爲始者、本乎天開於子之說、以順天氣之始也、以寅時爲始者、本乎人生於寅之說、以起人事之始也、是誠各有理而存焉、嗚呼以天時人事、定時日之始、是豈許大之事、吾曹粗糲之資、固陋之學、不可僭率爲取捨而決古今紛々之嫌疑也、然嘗竊論之、昭代設若以建子之月爲歲首、則以子時爲今日之始、誠可謂從宜也、然古來以建寅月爲正也尙矣、然則以寅時爲今日之始、意者是當然之理、豈曰不宜哉、昔夫子告顏子爲邦之道曰、行夏之時、朱子曰、時以作事、則歲月自當以人爲紀、蓋取其時之正與其令之善、是以自漢以來從之、而以寅月爲正、雖歷代變革之事屢多、不能改之、至本朝亦然、

既以寅月爲正、而時以作事、則日時亦當以寅時爲日之首、是日出之時、人事之始、宜乎以此時爲日之首也、然歳月既行夏之時、以寅月爲歳首、唯日時背之、行周之時、而以子時爲日始、則爲可乎、爲不可乎、夫夫子告顏子、以爲邦之說、此百王不易之大法、古來一定之則、宜循之而不可背戻、此理甚昭晰、豈可爲疑惑乎、然先正之說、亦有以子時爲始者、吾於此不能無惑焉、然不可以己意自是、横爲主張、姑書所疑、以俟識者之折衷而已矣、

職司

〔令義解職員一〕陰陽寮〈○中略〉

漏剋博士二人、〈○註略〉守辰丁廿人、

〔延喜式陰陽十六〕凡行幸、陪從屬以上二人、率陰陽師二人、漏剋博士一人、守辰丁十二人、直丁一人、供奉、立於右兵衞陣後、右衞門陣前、其守辰丁裝束、紺布衫十三領、〈別一丈九尺〉調布袴十三腰、〈別八尺〉調布帶十三條、〈別長九尺、廣一尺二寸、〉並隨損請換、

漏剋博士

〔下學集官位上〕漏剋(ロウコク)博士〈挈壺正〉

〔職原抄上〕陰陽寮〈○中略〉漏剋博士、〈相當從七位下、唐名司辰、又挈壺司、〉五位六位共任之也、

〔唐六典太子率更寺二十七〕率更令之職、掌宗族次序、禮樂刑罰、及漏刻之政令、〈○中略〉凡漏刻、令博士以敎之、掌漏以典之、漏童司刻分時以唱之、晝夜之刻百、冬至則晝四十、夜六十、夏至則晝六十、夜四十、春秋分則晝夜五十、〈○中略〉

凡宗族不序、禮義不節、音律不諧、漏刻不審、刑名不法、皆擧而正之、若所司決囚、與其丞同監之、

守辰丁

〔倭訓栞中編登十六〕ときもり　萬葉集によめり、時守也、令に守辰丁といへる是也、

〔延喜式民部二十二〕凡太宰及陸奧國漏剋守辰丁各六人、課役倶免、毎年相替、

〔續日本後紀七仁明〕承和五年七月戊辰、以仕町地長廿四丈廣四丈、爲陰陽寮守辰丁廿二人廬一居、

御土圭間肝煎御坊主

〔元治元年武鑑〕御土圭間肝煎御坊主　〈下谷いづみばし通〉吉田正覺　〈牛込矢來下〉木村清勝　〈下谷くぼ丁〉小林了碩　〈下谷坂本〉

御時計役御坊主　御土圭間御坊主

二丁メ　湯川久甫ゆしまよこ丁　大前田了圓四谷仲どの丁　大竹三悦牛込御さいく丁　津田玄哲あざぶ狸穴丁　澀谷李三下谷車坂下　永井清覺本所かめ澤丁　芥川俊盛

御時計役御坊主四谷左門丁　森谷勇齋○中略

御土圭間御坊主下谷三枚ばし　村尾榮碩○下略

御太鼓坊主

〔明良帶錄世職〕御太鼓坊主○中略

何れも世職の場なれば、事に馴れたるもの同寮を歷昇す、その働を第一として、用の辨ずるを肝要とす、

時鐘役

〔撰要集起立之部〕本石町時鐘役起立

一本石町三丁目時御鐘役直次郎先祖達宗と申者、南都興福寺之喝食ニ而、權現樣三州ニ被為遊御座候刻、御謠初之御島臺作り花奉獻上候處、御感之上、御當地ニ而相應成役儀可奉願旨、大久保相模守樣被仰渡候、依之時之太鼓役奉願、明ヶ六ッ、暮六ッ、兩時相勤申候處、台德院樣御代、鐘ニ而十二時被為仰出、新規鐘被為仰付、右御鐘役相勤申候、其後度々類燒等之節は、御鑄直被為仰付候、鐘役錢之儀は、御武家方よりは受取不申、町方計ニ而、壹軒役に付、壹ヶ月永樂錢壹文宛被仰付、西は飯田町より、麴町十三丁目迄、東は淺草三吉町迄、南は芝濱松町四丁目迄、北は本鄕六丁目迄、新吉原五丁分、總町數三百町より、鐘役錢受取來候處、右町々之間に、追々新規町屋出來致候に付、元祿十三辰年二月廿九日、右新町屋より、役錢受取度段奉願候處、同十六未年三月中、願之通被仰付、新町屋百拾町相增、都合四百拾町より、鐘役錢受取來申候、鐘樓堂之儀は、古來より、本石町三丁目直次郎先祖調屋敷之内に、御普請有之候處、同人屋敷裏に、貳拾間四方之會所明地御座候故、右會所地中に鐘樓土藏造に被成下候樣、元祿十三辰年七月中奉願上、御普請被仰付候處、寶永三戌年、右町内北側地尻新道御明ヶ被為遊候、同年四月中、右鐘樓地、表間口田

舍間拾貳間貳尺餘、裏行拾九間三尺之所、直次郎先祖源七江御預ケ被仰付候、且又同人儀、寛保三亥年正月中、肩衣御免被成下置候樣奉願上、御調之上、同二月廿日、願之通肩衣御免被仰付、今以相續、時御鐘役相勤罷在候、

右起立御尋に付、此段申上候、以上、

時御鐘役

文化十二亥年十一月　直次郎印

御番所樣

覺

〔公事餘錄三〕一享保十巳年六月、本所時鐘受負甚右衛門長右衛門書上之寫、

一本所時之鐘、往古より有來り候場所は、横川邊に中之橋向に、時之鐘樓立初、万民の御重寶に罷成候、凡五十年程以前、本所御拂に相成候節、鐘中絶仕候、其節之請負人、地之ものに御座候、依而其節之委細書記私共方に無御座候、私共親之代より承り傳罷在、其後本所御取立に付、時之鐘無御座、不自由に付、私共親代々御願申上、御請負之儀被爲仰付候事、

一私共時之鐘御請負之儀、三十八年以前、元祿元年辰、本所御取立に付、御武家方樣、并寺社方、町方其外万民之爲御重寶、時之鐘を御願申上、其節町御奉行北條安房守樣、甲斐庄飛驒守樣聞召、御評定所江被召出、願之通被仰付候、依之時之鐘相勤候役人、爲御扶持方、切米鐘樓錢、御武家樣方、寺社方、町方江御相對を以申受候處、不被下御方も御座候而、難義仕候に付、兩御奉行所江奉願候處、元祿五申年九月、御證文御帳面被仰付、御武家方は御高割、釐毛之御割符、段々十九通り、寺社方町方は、小間壹間に付三錢ヅヽ之御割符御證文、於御評定所、總御奉行樣御證文之御連名之御印形被成下、難有奉存候、鐘樓錢、一ケ年一度ヅヽ申請、永々無懈怠相勤可申段被仰付、御證

時奏

文頂戴仕罷在候事、

一鐘樓鐘申請候場所、西は兩國橋川通り、北は牛島源兵衛橋川通り、東は龜井戸天神裏門川通り、六ッ目通り迄、南は深川元御番所より深川河岸南向六ッ目迄、此內御武家方幷町方共、寺社方迄、鐘樓鐘一ヶ年ニ壹度ヅヽ、年々申請、晝夜無懈怠相勤候事、

一時之鐘堂屋敷、本所三之橋横川通り迄拜領仕候、則表口町幷京間八間、裏行町並に貳拾間拜領仕候、鐘樓鐘立成就仕、右者何程も私共入用金を以て仕立申候事、

右之段相違無御座候、以上、

享保十巳年六月　　本所時鐘請負

甚右衛門

長右衛門

〔侍中群要 二〕日中行事

寅一剋、內豎奏宿簡事、(付出、貴闕人之事、)

時奏、內豎伺剋奏之、身直蹤終無次人、爰奏之、闕者每剋除先勞五日、[illegible]者別有異賞、但奉伊勢幣帛、並葛野、廣瀨、龍田之祭、及國忌、齋前後日審奏、若誤奏者、上殿者封當番二日、除先勞五日、不殿上人亦同之、

又寬平七年十月廿八日別當宣云、時奏內豎、有一剋之闕怠者、奪先勞五日之例、載在所式、而不守式例、直致闕怠、自今以後、闕一剋者、卽停日給、令候十日、闕二剋者、除時奏、闕三剋者、削上殿之名、闕一時者、永從解却、若有不奏當剋、後奏剋外者、奪先勞十日、立爲恒例云々、今案、先奏中務省、奏宮內省之間後奏本所簡、

〔禁秘御抄 上〕奏時事

上古隨陰陽寮漏刻奏之、近代指計藏人仰之、丑杭以後爲明日分、

〔大和物語下〕ふかくさのみかど〈○仁明〉と申ける御時、良少將〈○宗貞、即遍昭〉といふ人いみじき時にてありけり、いと色ごのみになんありける、しのびて時々あひける女、おなじ内に在けり、こよひかならずあはんとちぎりたる夜ありけり、女いたうけさうしてまつに、をともせず、めをさまして、夜やふけぬらんと思ふ程に、とき申をとのしければ、きくに、うしみつと申けるをきゝて、おとこのもとに、ふといひやりける、

ひとごゝろう。し。み。つ。いまはたのまじよ、といひやりたりけるに、おどろきて、

夢にみゆやとね。ぞすぎにける、とぞつけてやりける、しばしとおもひて、うちやすみけるほどに、ねすぎにたるになんありける、

〔枕草子十一〕時そうするいみじうおかし、〈○中略〉夜なかばかりなどに、〈○中略〉時う。し。み。つ。ね。よ。つ。など、あてはかなるこゑにいひて、ときのくゐさすをとなど、いみじうおかし、ね。九。つ。う。し。八。つ。などこそ、さとびたる人はいへ、すべて何も〳〵よつのみぞくゐはさしける、

〔枕草子春曙抄十一〕愚按、禁中に夜時を奏する事あり、昔は陰陽寮の屬官に漏剋博士有て、十二時の一時を四剋にわりて漏剋を置て、守辰丁とて、其漏剋を守る者有て、其時々に鐘鼓をうつ也、夜に入て、亥の一剋より、左近衞夜行するに、官人亥の一剋のよし時を奏せし也、丑の一剋より、右近衞夜行す、桐壺卷に、右近のつかさのとのゐ申しの聲きこゆるは、うしになりぬるなるべしといへるも是也、然るに近代順德院の御時のころは、藏人さしはからひて時を奏せしと也、漏剋とは、銅壺に水を入て、箭をたてゝ、其箭に四十八剋をつけて、彼銅壺の水のしたゝりて、一つのきざをあらはせば、是一剋也、二つあらはせば二剋也、かくて四つあらはせば一時也、其故に、子一ッ二ッ三四、丑一二三四などいふ也、此漏剋の箭のきざの數、或は百剋にせし事もあ

報時

れど、此草紙などの比は四十八刻にや、すべて何も〱、四つのみぞくゐはさしけるといへり、伊勢物語に、子一つより丑三つまでといふも是也、源氏、大和物語等にも如此也、ね九つ、うし八つなどぞ、是よのつねの時をうつ數、子は九、丑は八時なれば、里人はさやうにいへど、禁中に時を奏し、時の杭をさすは、漏剋にしたがひて、何時も四づゝばかり也と、清少まさしく后宮にみやづかへして、見きゝたりし所をいへる詞也、里びたるとは里めきたる也、平人をさとびたる人といふ也、

○按ズルニ、和漢共ニ漏剋ハ百剋ニ分チテ、時剋ハ十二時、四十八剋ニ分ツノ制ナリ、今春曙抄ニ之ヲ混同シタルハ誤ナリ、

銅鼓

〔延喜式陰陽十六〕諸時擊鼓　子午各九下、丑未八下、寅申七下、卯酉六下、辰戌五下、巳亥四下、並平聲、鐘依

〔源氏物語一桐壺〕右近のつかさの、とのゐ申のこゑ聞ゆるは、うしになりぬる成べし、

用大鼓

〔類聚名物考時令二〕鐘

鐘をつくことは、昔は時の鼓と共に、朝夕その時々に打しを、いつしかさる事も、今は釋氏の預ることゝなりて、寺にのみそのことも有に似たり、

〔松の落葉四〕時もり、鐘鼓をうつこと、

今の世、時をつげてうつに、鼓をうつあり、又鐘をうつもありて、ひとやうならず、いにしへは、時を鼓、剋を鐘と、しらせうつもの、かはりてありつるに、剋をしらせうつことのやみぬるより、おやまりて、時のかたに鐘をもうつにて、これは鼓ぞ正しかりける、

〔萬葉集十一寄物陳思〕時守之、打鳴鼓、數見者、辰爾波成、不相毛怪、

〔青標紙〕時刻取方的例

用鐘

西丸御太鼓刻限改、日々四ツ時、西丸御太鼓之義、以來は御本丸四ツ時御時計江附人仕、其上西丸御太鼓爲打候樣、西丸御小納戸頭取三宅隱岐守ゟ掛合有之、右ニ付御本丸四ツ時御土圭江西丸表六尺日々附人仕、是は仕來通、西丸御時計承り、西丸御時計日差番寸等見競、曲尺を以、四ツ時御太鼓爲打候樣、且又五節句式日ニ、御本丸五ツ時御時計江附人仕、前條同樣の曲尺合ニ而御太鼓爲打候樣、是又奧向掛合相濟候間、其段御同朋頭江申達候、

〔燕石雜志〕一更鐘（更は漏刻の名なり、開元遺事、宮漏有六更、君王得晏起、）

時の鐘鼓をうつこと、和漢いづれの時よりといふよしを詳にせず、事物紀原云、更點起於易繫九事重門擊柝之說、自黃帝時也、といへり、按ずるに、易繫辭下傳云、重門擊柝、以待暴客、蓋取諸豫、と見えたり、柝は拍子木也、これは都城の門子暴客の來るを見て、拍子木を擊ことゝ聞ゆ、更點には異なからん歟、六更の事、宋の洪邁が俗考に見えたり、左に抄錄す、

俗考云、漢書候士百餘人、五分夜擊刁斗（解按、正字通刁字下云、李廣傳刁斗刁註、古者軍有刁斗、彼此矛盾刁斗之、刁音貂、並改刀爲刁、不知史傳有刀斗、無刁斗、不必讀刁也、）自守、師古曰、夜有五更、故分而持之、唐六典大史門典鐘二百八十人、掌鐘漏、五五相遞凡二十五、面及州縣更漏、皆去五更後二點、又幷初更去其二點、首尾止二十一點、至今仍之、故曰一更三點禁人行、五行三點放人行、宋大祖以鼓多驚衆、遂易以鐵磬、此更鼓之變也、或謂之鉦、卽今之雲板也、衞公兵法曰、鼓三百三十三槌爲一通、角吹十二聲爲一疊、鼓止角動也、司馬法曰、昏鼓四通爲大鼜、（鼜疑鼜僞）夜半三通爲晨戒、旦明三通爲發昫、今早晚各止三通、其鐘聲則一百八撞、以應十二月、二十四氣、七十二候之數、この說によれば、更點は秦漢以前既にこれあり、或は鼓をもてし、或は鐘をもてし、或は鉦をもてす、衞公の鼓は三百三十三槌、宋朝の鐘聲一百零八、天朝の鐘聲七十二、その十二時に各三（俗にすて鐘といふ）を加え、合して一百八となるときは、その數宋の鐘の聲に同じ、（いづれのおん時より志かるや、尋ぬべし、）時の鐘の事、大玄經に見えたりと南留帑志にいへり、亦無門關の注に、僅阿含經を引て、時の鐘の事を

載たれど、此には證がたし、舒明紀に、天皇八年己丑朔、大派王謂豐浦大臣、群卿及百寮、朝參已懈、自今以後卯始朝之、巳後退之、因以鐘爲節、然大臣不從、といふ事見えたり、しかれどもこのおん時にはいまだ行れず、天智天皇十年に、黄書本實水泉を獻、同年の夏四月はじめて漏剋を用ひ、鐘鼓を動し、候時を打せらるゝよし日本紀に見えたり、時の鐘うつ事は、天智の御宇よりはじまれり、(日本紀の文は末巻に抄出す)更鼓の事、くはしくは延喜式に見えたり、亦夜行翁のこと、本朝文粹に見ゆ、拍子木は火危木なりと、奈留邊志にいへり、夜行翁は、今の夜巡といふものにおなじ、また中葉にいたりては、晝は貝を吹けるにや、○中略

近曾夜話に、一友人とこの事に及びしに、今の時の鐘の數に、卯と酉を六ッとして、五ッ四ッ九ッ八ッ七ッに至り、亦六ッにかへる、この數は、何に據れるにやと問れき、こは揚子雲が大玄經に本づきて律呂の數なり、又おのづから九々にもかよへる歟、九は數の止なり、されば古人も、數は一に生じて九に成るといへり、且九は陽の數なり、よりてこれを日中午に配す、午も火にして陽なればなり、さて亭午と夜半の二六時中の正中に當て、九をもて左右にわり出すに、九々の數によれるならんと答きかゝる事を說んは、いと〳〵をさなき所爲なれど、雜書などいふものにも記せるを見ざれば、童蒙の爲に左に註す、(亦舊聞錄にも說あり、これも暗合の事なり、追考の條下にいふべし、)ふるき草紙物語に、子二ッ、子四ッなどいふ事見え、今俗も丑三ッなどいふは、子の二剋、丑の三剋なり、しかるを世俗は、只子の剋、丑の剋などやうに唱へて、一時の事にこゝろ得たるは誤なり、三正俗解に、正初更點の辨あり、正とはその時の正中なり、世俗の九ッ時、八ッ時といふが如し、初とは、前の時と、その時との中間なり、○圖略世俗の九ッ半時と唱るは、即八ッ時の初なり、その初より正に至る間は半時にして、彼百の剋四箇と六分之一にあたれり、正より次の初に至る間も、またかくのごとしといへり、事長ければこゝに略す、

〔燕石雜志五下〕鐘聲追考、おのれこの書の巻の端に、候鐘の數を辨じて、子午の九つより九々數を逐ひ、左右へ薹出せしもの也といひしは、童子に諭やすからせん爲のみ、當初の博士鐘聲を定めしときは、楊雄が大玄經に根きたるならん、彼の九八七六五四は律呂の數なり、九々は自然に稱る歟、かさねてこゝに辨證す、

太玄經云、子午之數九、子爲十一月、午爲五月、所以數但九者、黃鐘起子、也、子午之數但九、乾始於初九、午爲子、故俱九也、丑未八、丑爲十二月、未爲六月、亦其衝也、故俱八也、寅申七、寅正月也、申爲七月、卯酉六、卯爲二月、酉爲八月、辰戌六、辰爲三月、戌爲九月、巳亥四、巳四月、亥爲十月、皆以對而數之也、故律四十二、呂三十六、諸陽皆屬律、九七五而倍之、故四十二也、諸陰皆屬呂、八六四而倍之、故三十六、并律呂之數、或還或否、并律呂而數之、得七十八也、八則丑未、所謂還得呂而不得律、故或還或否也、凡七十有八、律呂之數者也、黃鐘之數立焉、通其大數立於此也、其以爲度也、皆生黃鐘、亦云甲己之數九、乙庚八、丙辛七、丁壬六、戊癸五、聲生於日、律生於辰、聲以情質、律以和聲、聲律相協而八音生、見于卷之八第十一張、亦淮南子卷三、天文訓、輟耕卷五、授時暦法、同書卷二十、納音解等考ふべし、亦近世浮屠氏の作に、鐘鳴錄といふもの、律呂を辨じて精細也と稱す、その說を聞けば、すべて佛教に据といふ、今これを取らず、

結毦錄に云く、晝夜十二時の數は、寅と申を主として、互に陰より陽を呼び、陽より陰を呼ぶ也、寅は陽なり、申は陰なり、夜半子の時一陽生ず、子より申を呼べば、その數九なり、故に子を九とす、丑より申を呼べば、その數八なり、故に丑を八とす、寅より申を呼べば、その數七、故に申の時を七とす、卯より申を呼べば、その數六也、故に卯を六とす、辰より申を呼べば、その數五なり、故に辰を五とす、巳より申を呼べば、その數四なり、故に巳を四とす、これ陽より陰を呼ぶ也、日中午の時一陰生ず、午より寅を呼べば、その數九なり、故に午を九とす、未より寅を呼べば、その數八也、故に未を八とす、申より寅を呼べば、その數七也、故に申を七とす、酉より寅を呼べば、その數六也、故に酉を六とす、戌より寅を呼べば、その數五なり、故に戌を五とす、亥より寅を呼べば、その數四也、故に亥を四とす、これ陰より陽を呼ぶなり、かくのごとく循環して晝夜止む事なき也といへり、この事何

の書に出たるを志らず、俗にその本命を七、目とて數るもこれに似たり、疑らくはこの說も、予が九々によりて、九よりこれを數ふといふに等しく、童蒙の解易からん爲には理あるに似たれど、古書を引くにあらざれば、君子は取るべからず、且くこゝに錄してもて博識の客を俟、

〔萬葉集 四相聞〕笠女郎贈大伴宿禰家持歌廿四首 中略

皆人乎、宿與殿金者打禮杼、君乎之念者寢不勝鴨、

〔年山紀聞 六〕ねよとの鐘

御釋云、宿與殿金は亥の時の鐘なり、日本紀 天武紀 云、十三年冬十月己卯朔壬辰、逮于人定大地震、これ同じ日本紀に、日沒を酉の時とし、昏時を戌の時とよめるごとく、亥の時に人寢て定まれば、かくは義訓せり、

〔枕草子 八〕故殿の御ぶくのころ、六月卅日の御はらへといふ事に出させ給ふべきを、志きの御ざうしは方あしとて、官のつかさのあいたん所にわたらせ給へり、其夜はさばかりあつく、わりなきやみにて、何事もせばふかはらぶきにてさまこと也、中略 時づかさなどは、たゞかたはらにて、かねの音もれいには似ずきこゆるをゆかしがりて、わかき人々二十餘人ばかり、そなたにゆきてはしりより、たかきやにのぼりたるを、これより見あぐれば、うすにびのもからぎぬ、おなじ色のひとへがさね、紅の袴どもをきてのぼり立たるは、いと天人などこそえいふまじけれど、そらよりおりたるにやとぞ見ゆる、おなじわかさなれど、をしあげられたる人は、えまじらで、うらやましげに見あげたるもおかし、

〔中右記〕嘉保元年十一月十一日、早旦參結政、外記門前、外記廣忠、史盛忠、宣行、三人出向云、陰陽寮鐘頻報、定知刻限移、仍退出也者、

〔今昔物語 三十一〕愛宕寺鑄鐘語第十九

今昔、小野ノ篁ト云ケル人、愛宕寺ヲ造テ、其ノ寺ノ料ニ、鑄師ヲ以テ鐘ヲ鑄サセタリケルニ、鑄師ガ云ク、此ノ鐘ヲバ、搥ク人モ无クテ、十二時ニ鳴サムト爲ル也、其レヲ此ク鑄テ後、土ニ掘埋テ三年可レ令レ有キナリ、今日ヨリ始メテ三年ニ滿テラン日ノ、其ノ明ム日可二掘出一キ也、其レヲ或ハ日ヲ不レ令レ足ズ、或ハ日ヲ餘テ掘開タラムニハ、然カ搥ク人モ無クテ、十二時ニ鳴ル事ハ不レ可レ有ズ、而ル構ヘヲシタル也ト云テ、鑄師ハ返リ去ニケリ、然テ土ニ掘埋テケルニ、其ノ後別當ニテ有ケル法師、二年ヲ過テ、三年ト云フニ未ダ其ノ日ニモ不レ至ザリケルニ、否不二待得一ズシテ、心モトナカリケルマヽニ、云フ甲斐無ク掘開テケリ、然レバ搥ク人モ無クテ、十二時ニ鳴ル事ハ無テ、只有ル鐘ニテ有ル也ケリ、鑄師ノ云ケム樣ニ、其ノ日掘出シタラマシカバ、搥ク人モ無クテ、十二時ニ鳴リナマシ、然鳴マシカバ、鐘ノ音ノ聞及バム所ニハ、時ヲモ慥ニ知リ、微妙カラマシ、極ク口惜シキ事シタル別當也トナム、其ノ時ノ人云ヒ謗リケル、然レバ騷シク物念ジ不レ爲ザラム人ハ、必ズ此ク弊キ也、心愚ニテ不信ナルガ至ス所也、世ノ人此ヲ聞テ、努々不信ナラム事ヲバ可レ止シトナム、語リ傳ヘタルトヤ、

〔唐六典二十七 太子家令寺〕太子率更寺令一人從四品上〇中略

北齊、詹事率更令、有丞功曹主簿、領中盾署、令丞各一人、掌周衛禁防漏刻鐘鼓、隋、率更寺令一人、皇朝因レ之、龍朔二年改爲司更大夫、咸亨元年復レ舊、

〔燕石雜志五下〕鐘聲追考〇中略

中葉より佛説を甘じて、人々洪鐘を鑄て、これを寺門に懸もて、祖先の冥福を祈ること多かり、よりて世俗は、候鐘を僧坊にて執行する事とのみ思ふめり、凡都會の地、今江戶なる芝石町、本所、市谷にて撞く鐘の如く、これを都城の四方に置て、候を遠近に志らし給ふ事は、天朝の古記錄にいまだ見もかよはず、これも又有がたき事なるべし、

〔京都御役所向大概覺書 五〕京六角堂前鐘之事

一六角堂前つき鐘之儀、下京町中より鐘つき候者之給銀出之候外に、京都町之内に時之鐘つき候場所無之、

但鐘之銘には、慶長年中、六角堂之鐘之樣に相見へ候由、寛永五子年、鐘撞堂致類燒候、其後正德六申年、鐘撞堂再興相願、右同年六月廿四日より鐘爲撞申候、

〔見た京物語〕時の鐘は、夜計五つを初夜、九つを後夜とて撞く、捨鐘二ツヽなり、

〔大坂諸一覽之寫〕町中時之鐘

一釣鐘　釣鐘上之町に有之、御城より八丁西手、

〔大坂町中承傳記〕御釣鐘經營之事

一鐘鑄之場所は、今堀詰高村尾邊り、野原之川端ニ而、運送宜敷、　此所ニ鑄立候由

一右被下御銀、鐘樓普請之入用ニ仕候由、無勿體御事と、總年寄相談之上、鐘之湯中ニ奉鑄籠候由、

其時之衆評、一同之人情、誠ニ可感御事ニ候、依之中興迄、公儀之御鐘と唱候由、

鐘樓之場所者、地子銀御赦免之節出御之御矢倉筋之高地、今之釣鐘屋鋪、表口七間、裏行は拾三間半、代銀四十三匁、干肴五拾枚、酒壹升相添遣、被求候之由、

○按ズルニ、本文中右被下御銀トアルハ、寛永十一年、家光上洛ノ時、大坂市中ニ賜ヒシ銀ヲ謂フナリ、

〔江戸砂子 一〕時の鐘　石町三丁目北側の新道にあり、此鐘は御城内よりくだりたると云、數度の回祿にて、鐘の聲あしく成しかば、その後椎名伊豫これを鑄直せり、黄涉調にて長久の音と云、

〔寺社法則 下〕文化八未四月　堀内藏頭

書面御領分信州綿內村近邊は時之鐘無之、多分山中ノ村故、一體に刻限相分兼、差支候に付、正滿

寺に有來候撞鐘に而、時之鐘撞候義、願之通御聞屆不苦筋と存候、

〔長崎志三〕時之鐘鑄造之事

一寛文五乙巳年、時之鐘鑄造有之、島原町內ニ鐘撞所を建らる、七月十日成就し、同八月十二日、掛置る所、翌年撞破るニ付、同年六月十八日鑄直さしむ、

鐘高三尺五寸　口指渡二尺五寸五分　重サ九百斤

吹螺

〔經國集十〕同〔○和〕惟逸人春道秋日臥疾華嚴山寺精舍之作一首　滋善永〔○中略〕

吹螺山寺曉、鳴磬谷風餘、〔○下略〕

〔權記〕寛弘五年九月二十五日壬午、此夕女人有惱氣、疑在產事、〔○中略〕子時螺吹後、僧都〔○慶圓〕被出、同載歸、

〔枕草子六〕法師の坊に、おのこ共わらはべなどゆきて、つれ〴〵なるに、たゞかたはらに、かひをいとたかく俄にふき出したるこそをどろかるれ、

〔枕草子春曙抄六〕かひをいとたかく　昔は十二時に貝を吹し也

〔台記〕久安三年六月十八日庚戌、詣中堂、〔○延暦寺〕先之上皇〔○崇德〕參御、〔○中略〕次御修法初夜了、南院〔○鳥羽、崇德、〕見夏衆酌水還御、余〔○藤原頼長〕丑螺後歸休廬、

〔千載和歌集十八雜〕山寺にまふでたりける時、貝吹けるを聞てよめる、　赤染衞門

けふも又午の貝こそふきつなれ未のあゆみ近付ぬらん

〔吉野詣の記〕やどいでゝ、五のかひをふくからにこゝは六田のかすむ青柳〔○事係天文二十年三月五日〕

〔多聞院日記〕弘治元年十二月十二日、高田城へ何方ヨリトモナク、廿餘人辰貝ノ過ニ、朝日ミニ打入、家城悉放火、入衆十三人討死了、

官司置漏剋

〔文德實錄九〕天安元年十月戊子、陰陽寮持行漏刻鼓、自鳴三度、十一月乙未、持行漏刻鼓、又自鳴三

行幸具漏剋

度、與去月戊子佐同、

〔三代實錄 一清和〕天安二年十月八日乙未、是日陰陽寮漏剋盛水銅器自鳴一聲、

〔三代實錄 十二清和〕貞觀八年四月廿六日庚子、勅修理漏尅之間、賜兵庫大鼓一面於陰陽寮、

〔百練抄 七後白河〕保元二年十一月十三日、酉剋被直漏剋器、年來斷絶事也、

〔文德實錄 十〕天安二年五月癸亥、陰陽寮率漏剋博士等於侍從殿、始置漏水、乱院外漏剋之誤、但無金鼓、　辛未、侍從殿漏剋從停止、

〔雪玉集 秋三〕七夕御事

宮のうちにもる玉水も昔すみてふくる夜をしき星合のかげ

〔續日本紀 三十三光仁〕寶龜五年十一月乙巳、陸奥國言、大宰、陸奥(○鎭守府)同警不虞、飛驛之奏、當記時剋、而大宰既有漏剋、此國獨無其器者、遣使置之、

〔類聚三代格 五〕太政官符

應置鎭守府陰陽師事

右得陸奥國解係、鎭守府牒係、軍團之用、卜筮尤要、漏剋之調、亦在其人、(中略)

元慶六年九月廿九日

〔朝野群載 十五陰陽道〕陰陽寮

請申石清水御行幸用途事

麻布二端　荷漏剋器綱料　手作布陸段　守辰丁六人當色料　鼓臺壹具(中損)　漏剋所壹字(中損)　荷木二枚

右依例所請申如件

永久五年　　別馬件

〔長秋記〕大治四年四月廿五日癸酉、賀茂祭也、○中略出御、東面叢御車、先叢院御車、○中略次叢女院御車、○中略次長官有賢朝臣、○中略次漏刻、次御輿、蔥花、駕丁黄色、蓋障子純色、帷裳目結、次女嬬取物、次腰輿、次騎馬藏人童女、童女結總角次院司、

〔三長記〕建久九年正月十一日己酉、大嘗後天恩今日有御讓位事、○中略今日渡御殿下御所、及晩陰、渡御于閑院殿、前駈殿上人四人、○註略御車、○註略次神璽、次御劍、○註略左右近衞次將相分供奉、次攝政殿、○註略次太刀、次契、次鈴印等、次少納言監物鈴鎰等、左右相並次漏刻器、次時簡札、相並次陰陽寮、次版位、

〔唐律疏議三十斷獄〕諸死罪囚、不待覆奏報下而決者、○中略疏義曰、○中略在外既無漏刻、但取日周晬時為限、

漏刻用途

〔延喜式十六陰陽〕凡撞漏刻鐘料、松木一枝、本周三尺、長一丈六尺、隨損令左右衞門府卒採送、其綱料熟麻卅斤、隨損申省請大藏省、

〔延喜式十六陰陽〕凡漏刻燈油、隨月大小、請受所司、從三月至八月、夜別四合、從九月至二月、夜別五合、年料所請、帛三丈六尺拭漏刻器巾料、月別三尺、絁曝布各三丈六尺、並水盛料、月別三尺、調布三丈六尺、燈心料、月別三尺、油坏二口、盤二口、麻笥二口、杓四柄、炭十二石、溫解龍口凍料、起十月迄正月、日別一斗、十二月廿日勘錄申省、

雜載

〔延喜式三十大藏〕凡懸陰陽寮漏刻臺料、舊幔二條、隨破損即充行、

〔延喜式三十六主殿〕陰陽寮油一斛五斗九升三合漏刻所料、自三月迄八月六箇月、夜別四合、自九月迄二月六箇月、夜別五合、

〔文會雜記三下〕叔卿ノ師ナリシ片岡氏工夫ノ日晷四品アリ、其中一ツ晝夜トモ用ル日晷アリ、夜ハ星ヲ以テ時刻ヲ知ルナリ、其星ニ別ノ習モナシ、二三星ヲシリテ後、其星ヲ目當ニ測リタル故、天文ヲ知ラザル人モ用ラル丶トナリ、

〔寛政暦書十五〕中星時刻

暦法最重中星、知中星可以求時刻、知時刻亦可以求中星、中星與時刻相符、而列宿之經度可稽、太陽

之時次可驗、於是乎、大陰五星皆取微焉、乃知中星求時刻者、以中星赤道經度、卽本時正午赤道經度與本日午正太陽赤道經度相減餘數變時分、爲中星汎時、又以日周爲一率、本日太陽赤道經度、與次日太陽赤道經度相減餘爲二率、中星汎時爲三率、求得四率、爲加分變時分得數、以減中星汎時、加半日周爲中星時分、滿日周去之、爲次日子正後時刻又知時刻求中星、則以本時太陽赤道經度、與本時太陽距午後赤道經度、日周爲一率、周天爲二率、所知之時刻、過中日周則減中日周、不及中日周則加中日周爲三率、求得四率、爲太陽距午後赤道經度、相加、滿十二宮去之卽得本時正午赤道經度、乃視本年赤道宿鈐內某宿、赤道經度與本時正午赤道經度相合、卽爲某宿方中、如某宿赤道經度小於本時正午赤道經度、卽爲某宿偏西、大於本時正午赤道經度、卽爲某宿偏東、乃設圖說於左、

〔今昔物語十二〕山階寺燒更建立間語第廿一

今昔、大織冠子孫ノ爲ニ山階寺ヲ造リ給フ、〇中略永承元年ト云フ年ノ十二月廿四日ノ夜始テ燒ヌ、而ルニ當時氏ノ長者殿〇藤原賴通關白左大臣トシテ本ノ如クニ造ラセ給ヘル也、〇中略堂舍皆成ヌレバ、同三年ト云フ年三月二日供養有リ、〇中略而ルニ其ノ供養ノ日、寅時ニ佛渡シ給フニ、雨氣有テ空陰テ、暗クシテ星見ネバ、時ヲ知ル事不能ズ、陰陽師安倍ノ時親ト云フ者有レドモ、空陰テ星不見ネバ、何ヲ注シニテカ時ヲ量ラム、可爲キ方无シト云フ程ニ、風モ不吹ヌ空ニ、御堂ノ上ニ當テ、雲方四五丈許ノ程晴レテ、七星明カニ見エ給フ、此レヲ以テ時ヲ見ルニ、寅二ツニ成ケリ、乍喜ラ佛渡リ給ヌ、

〔壺漏說〕丁酉ノ仲秋、安家時晴觀ニ江戶ノ客館ニ見ルコトヲ得テ、偶漏刻ノ說ニ及ビテ、我曾祖父泰榮嘗テ漏刻ヲ製シテ、禁中ヘ獻ゼシト言ヘリ、今茲戊戌初春、其圖幷ニ寸法ヲ記シテ示サル、寶曆甲戌、原曆漏刻ノ篇ト、併觀スルニ、其寸法符セズ、按ニ此二器ハ、親ク試ル者ニアラザルベシ、未依據スルニ至ラズ、

沙漏

〔一宮巡詣記 上〕夫より富士の山へ登らんと志し、吉田町にて用意などして、山路に趣き侍る、大日す丶原を通り、御室の大山積の社へ參り、夫より中宮へまふで、かま岩の茶屋にとゞまる、本より草木もなき山の岩屋なれば、かたしく袖の夜半の嵐に、目もあはで堪がたかりし、明れば廿日、此にて日の出を拜みけるに、心もすみていとたうとし、安座巡行を勤、(安座とは儒者の正座の如く、安座して心中を神道に練る)なり、巡行とは安座久しければ、却て心身を苦しむるゆへに、時々立て左めぐりに廻り、又安座するなり、されば土計とて板に小き穴をあけ、その上へに砂を盛り、その板の下に鉢を置て、漏るゝ砂をうくるなり、その砂、板の上より脱し盡くるを度とす、砂の多少は我好むところに在、三喜(橋)は能く安座を修し得たりとなり、鼻の先に木綿をのりにてちよとつけて、息のあらくに成るを慎みて練氣なり、

〔文藝類纂 六 學志〕時辰儀

按するに、又沙漏(スナドケイ)あり、其制亦西洋に出づといへども、是亦支那創制の者あり、○中略 我國にも近古までありしと見えて、享保年間刻稗子中に、(卷首斷て、書名を詳にせず、纔際に只助六と題す、)猫兒跳て沙漏を翻し、時を誤るの文ありて、其圖、今の櫓時計の如く、中邊より砂の翻れたるを畫けり、

〔明史 二十五 天文〕分野

明年(○嘉靖八年)天經又請造沙漏、明初、詹希元以水漏至嚴寒水凍、輒不能行、故以沙代水、然沙行太疾、未協天運、乃以斗輪之外復加四輪、輪皆三十六齒、厥後周述學病其竅太小而沙易堙、乃更制爲六輪、其五輪悉三十齒、而微裕其竅、運行始與晷協、天經所請、殆其遺意歟、夫制器尙象、乃天文家之首務、然其精其術者、可以因心而作、故西洋人測天之器、其名未易悉數、内渾蓋簡平二儀、其最精者也、其說具見全書、茲不載、

〔中山傳信錄 一〕更(定更法)

海中船行里數、皆以更計、或云、百里爲一更、或云六十里爲一更、或云分晝夜爲十更、今問海舶夥長、皆云六十里之說爲近、

舊錄云、以木柹從船頭投海中、人疾趨至梢、人柹同至、謂之合更、人行先於柹、爲不及更、人行後於柹、爲過更、今西洋船用玻璃漏定更、簡而易曉、細口大腹玻璃瓶兩枚、一枚盛沙滿之、兩口上下對合、通一線以過沙、懸針盤上、沙過盡爲一漏、即倒轉懸之、計一晝一夜約二十四漏、每更船六十里、約二漏半有零、人行先木柹、爲不及更者、風慢船行緩、雖及漏刻、尙無六十里、爲不及更也、人行後於柹、爲過更者、風疾船行速、當及漏刻已踰六十里、爲過更也、

〔梅園日記 四〕焚香知時

今も常香を焚ものゝ、時をはかる事あり、さてこれも、唐土の製にならへるなり、疑耀に、昔張忠定公叙領郡事、其寢室中、必張燈炷香、通夕宴座、郡樓更鼓、必令分明、倘一刻差誤、必詰之、また香乘に、熙寧癸丑歲、時待次梅溪、始作百刻香印、以準昏曉、又增置五夜香刻とあり、

〔龍鳴抄〕香の火もみず、かいのこゑもきかず、ほしのくらゐをもたづねず、月のたくるをもさたせず、人にたゞいまいくときといふに、もしは子とも丑ともいふ、○下略

〔新編鎌倉志 三〕常樂寺○中略

寺寶

定規　貳篇、共ニ板ニ刻シテアリ、○中略其文如左、

光陰有限、六七十歲、便在目前、苟若虛過一生、灼然難得復本、既挂佛衣之後、入此門來、莫分彼此之居、各當行斯道、僧以衆船上殿爲名、晝夜恣情、於戲非但與俗無殊、亦乃於汝何益、今後本寺主者、既爲衆僧之首、當依建長矩式而行、晝則誦經之外、可還僧房中客前坐禪、初後夜之時、以香爲定式、領衆坐禪、二更三點可擊鼓、房主歸、衆方休息、四更一點、仍復坐禪、至開靜時方入寮、夜中不可高聲談論、粥飯二時、並須齊赴、不可先後、今立此爲定規、不可故犯、若有恣意不從之者、申其名來、可與重罰、

住山道隆、

晷刻

〔文會雜記 三下〕叔卿工夫セシ日晷二品アリ、一品ハ口石ヲ用ズシテ其日晷ニ依リ、南北モ時刻ヲ知ルナリ、其制ハ何ノコトモナク、天ヲ逆ニシタル物ニテ、其中ニ北極モ黃道赤道モ天ノマヽニ備レリ、其時剋ヲ見ルニハ、一ケ所日影ノ通リシケル所アリテ、黃道赤道時剋ナドノ筋ヘアタリケルヲ、二十四氣ニヨッテ、東西南北時刻等分リケルトナリ、

叔卿ノ師ナリシ片岡氏工夫ノ日晷四品アリ、其中一ツ晝夜トモニ用ル日晷アリ、下略

〔漏刻說〕漏刻說附錄

按、四方各因赤道之遠近、土地之高下、而知日月之早晏、晝夜之長短、然日南郡人、應北向看日、出塞七千里、便可南視北斗矣、東海有初、煮羊脾、方熟而天明之國、西域朔夕月見、而南交州、生明之夕、月已中天、磅礴山去扶桑五万里、日之所不及、其地夏多冱寒、晝常昏也、大約目所未及、語多矛盾、訛以傳訛、未可以夏蟲之見論也、吾國在東方、爲日本、日月運行、寒暑氣候、與中國差無大異、昔者吾友嘗登富士山、觀日出、下至石室、夜未鄕晨、又發平戶、日將夕、風帆如飛、及至五島、日光睞々、海天如晝、關東鎭西、相距數千里、晷刻豈能盡齊、固不能少差、乃以地球九萬里、除十二時、其大概也、以此推之、則大日本國卯初刻、恐當紅夷國丑正刻、今測晷刻以考之、

〔慕齋文集 三〕復日本國大內殿書

承書憑審、雅履裕勝、欣慰殊深、所獻禮物、足見誠欵、轉啓收了、前送五經暨寺額、因蒙遠索、聊申綏好之禮、何用煩謝、中略 更漏之器、亦係欽天授時之具、有土者之所不可闕、足下又以爲請、益見雅尙之得其要矣、貴國之人、必有通於候曆之術者、其制象之器、應亦致精矣、今所求蓋欲參校晷刻、益究其精耳、其意不亦嘉哉、本國漏器、規制不一、取其中簡易能致遠者一具、幷以奉寄、惟希領納、餘冀益加、珍重不宣、

○按ズルニ、異稱日本傳ニ、大內氏好學、求五經新註、幷漏刻器于朝鮮、其志可嘉尙矣云々、此大內

時計

氏、蓋左京大夫兼周防介義隆云々トアリ、

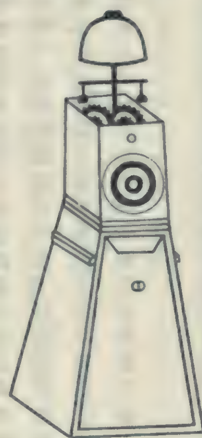
〔東雅 七器用〕漏刻

慶長年中に、西洋人トケイといふものをまいらせし事あり、其制に倣製れるもの、今は盛に世に行はれぬ、トケイといふ事、華語にはあらず、其時の事志るせし日記には、斗鷄と志るしたりけり、これは明の人して、華語を譯せしにて、まいらせし所也、其器の制、北斗の象のごとくなるものありて、其指す所に隨ひて、其時を志り、鳴りて時を報ずる事、鷄のごとくなれば、かくは名づけし也、其器の妙をかたどりいひし事、たゞ二字に盡ぬ、今は其字をば用ひざるにや、

〔和漢三才圖會 十五藝器〕自鳴鐘（俗云時計）中略

土圭（一名圭尺）以八尺板爲表、竪之以測晷知時刻、定夏至冬至之差、暦家者流必用之重器也、

漏刻盛水於桶、量所漏水、漏知時刻、其巧甚精矣、天智帝十年、始作漏刻、擣時辰之鐘鼓、然近頃有自鳴鐘、以來無知之者、而俗名時計、有櫓時計（有臺、形如櫓、上安鐘、）自鳴鐘、自旋鳴、有懐中時計（形甚小、可入懐中、阿蘭陀人始將來、）有釣時計（掛家柱、有二錘、一錘垂下、一錘自昇、）皆中機如車輪者、刻齒多相接、機轉運旋、用鐵作之、名世牟末伊、是乃旋機之根也、



〔雍州府志 六土産〕土圭　自鳴鐘、倭俗謂土圭、元自阿蘭陀國來、今本朝人、倣彼所製、而處々造之、其内御幸町二條北所造爲宜、又砂土圭、漏刻、亦今造之、

〔周禮 十〕以土圭之法、測土深、正日景、以求地中、（中略）日至之景、尺有五寸、謂之地中、

〔掌中時辰儀示蒙〕俗に根付時計と稱する物、爰に掌中時辰儀と名く、近歳舶來漸く多く、世專奇玩とす、其製年々奇巧を極め、種々の新製あれども、畢竟玩物にして、日々天行時刻に密合する物に

はあらず、如何にとなれば、星官用る所の垂樣球儀は、球の往來、晝夜或は六七萬行、南北線をもて、日中に測るに、其日の寒暖乾濕によりて、或三四行、或ハ五七行の小差を免れず、况や此小物にして、發條及び毫鐵の寒暖に感じ易きものをや、近來、舶來の氣候儀に毫鐵をもて寒暖を驗するものあり、謂すべし、但西洋の船師、航海測量に船中垂揺球儀を置くこと能ざるによりて、三針の時辰儀を俗にいふ秒指を用ゆ、其製最も精妙にして、測量の用に充るに足る、然ども敢て天行一周の密合を要せず、其要する所、測量家の識る所なれば略す、況や自餘の玩物をや、世俗其情を解せずして、往々盤面の表を本邦に改造するものあり、合て論ぜず、

〔漂客見聞錄上〕無人島江漂流仕候後アメリカ船江被助上候土佐國之者三人口書○中略

一万次郎義、外國逗留中、稼溜候銀錢を以、所々ニ而調物致し候は、全く不自由無之爲に御座候得共、懷砲鹽硝のヒストン貳。袖時。計。買取候次第御尋請、○中略袂。時。計。の義は、日本江歸國の念相發、私日本土州出生之處抔には、所持致し候者覺不申、珍敷品に付、持歸り爲見度、且又船中辨利之品に有之、ヌペツトホヲル抔ニ而者、子供迄も所持致候間、私オアホに同船致シ乘合之内商ひ船方之宿より買取候義ニ御座候、

〔五雜組天二〕西僧利瑪竇有自鳴鐘、中設機關、毎遇一時輒鳴、如此經歲、無頃刻差訛也、亦神矣、今占候家、時多不正、至於選擇吉時、作事臨期、但以臆斷耳、烈日中尚有圭表可測、陰夜之時所憑者漏也、而漏已不正矣、況於山村中無漏可考哉、故知興作及推祿命者、十九不得其眞也、余於辛亥春得一子、夜半大風雪中、禁漏無聲、行人斷絕、安能定其爲何時、余○中略固不信祿命者、付之而已、

〔大内義隆記〕都督在世ノ間ヨリ、石見ノ國大田ノ郡ニハ、銀山ノ出來ツヽ、寶ノ山トナリケレバ、異朝ヨリハ、是ヲ聞、唐土、天竺、高麗ノ船ヲ數々渡シツヽ、天竺仁ノ送物、樣々ノ其中ニ、十二時ヲ司ルニ、夜ル晝ノ長短ヲチガヘズ、響鐘ノ聲ト十三ノ琴ノ絲、ヒカザルニ五調子十二調子ヲ吟ズルト、老眼ノアザヤカニミユル鏡ノカゲナレバ、程遠ケレドモ、クモリナキ鏡モ二面候ヘバ、カヽル不

思儀ノ重寶ヲ、五サマ送リケルトカヤ、

〔日本西教史上〕第一章

偖テ傳師ハ、中略葡萄牙人ノ言ニ從ヒ、印度ノ總督、及ビ臥亞ノ教正ヨリ、皇帝ト將軍トヘノ進物トシテ送寄セシ贈物ヲ、山口王大内義隆中略ニ獻納スベキコトヲ決意セリ、其贈物ハ、自鳴鐘、樂器、各一個、其他日本ニ於テ見ザル歐洲ノ製造物等ナリ、

〔耶蘇征伐記三〕大友由來附佐伯事

人王百六代後奈良院ノ御在位天文二十年秋九月ノ頃、南蠻ヨリ耶蘇宗來リ、平安ニ寺ヲ建立シ、本尊ヲ天帝丸ト號シ、念珠ヲコンタツト云ヒ、時計ヲ仕懸、自ラ時ヲ知ラセ、種々邪法ヲ以テ被惑、人民ヲ欺惑シ、邪法ヲ說テ一百衆盲ヲ引ク、

〔采覽異言五北亞未利加〕新伊斯把爾亞今屬墨是可地稍廣大、其北連山、餘皆際海、其南則馬金色、暨是可等地也、中略蓋歐邏巴諸國、各併此地、亦惟其所開一百年後之事耳、明人、以爲嘉靖壬寅、剏埠實今西人所謂一百年前者、我弘治之末、我文龜永正間也、定是十五年、新伊斯把爾亞舶、過風、漂至我東地、鑄鐘臺砲、官命講治、乃給資糧、而還、十七年夏、其國遣使來聘、且謝、且贈物、有自鳴鐘。一日、我有此制、實自是始焉、時我舶商、亦從使俱去、明年偕還、

〔白石詩草〕自鳴鐘

鬼氏爲鐘日、軒皇製漏成、授時欽曆象、齊政在璣衡、圓蓋天形小、方輿地體平、上懸圓鐘、下設方函、宸宮瞻紫極、儒關望滄瀛、制有二式、可懸可置、兩旁圓門、內設機輪、銘名空中樓閣、海上蜃闕、辰宿分經緯、陰陽自運行、磨旋玄蟻轉、隙過白駒征、兩中側輪、或左或右旋轉不息、層柱西崑峙、魁杓北斗橫、兩中有大小數柱、當面側立銅版上、畫十二辰名、中心指針、隨時轉指、毫釐不爽、十輪重華月滿、繩直絳河明、長闕二錘、上懸二鍮、下繫銅丸、大小各二、燃炭懸檣市、浮灰動管輕、兩上置衡、衡端懸鐘、又兩中有如谷者、宵閒金杵倚、雲表玉杯擎、高擎柱、空擎鐘、鐘下倚杵、應時自擊、鐘之或如承露金掌、隕石銅丸下、奢雷鐵軸縈、應時機發、銅丸急走、激二鐵軸、而下、杵自撞鐘、山崩遙應響、霜降暗飛聲、龍夜盆中躍、鼉晨枕底鳴、柝傳通道郭、鼓答徹高城、紅線量長短、黃鐘定濁清、却如聽廣樂、不是夢瑤京、

〔有德院殿御實紀附錄十五〕元文のころ、長崎の工人太郎左衞門といへる者に、大なる自鳴鐘をつくらせらる、其製はなはだ巨大にして、一年に一度と、のふる時は、終年たがふる事なしといへり、いとめづらかなるものと人みな稱讃せり、ある日河合久圓成盈に、汝かの自鳴の價はしれりやと仰ありしかば、いまだしり侍らずと申けるに、かれは金一萬兩を費したり、何の詮もなく、邪魔なるものかとてわらはせ玉ひしとぞ、いかなる盛慮にや、久圓にはうかゞひしられざりしとかたりき、

〔寬政曆書二十三〕垂搖球儀

昔黃帝創觀漏水、製器取則、以分晝夜、是用儀器測時刻之始也、於周則挈壺氏司之、自是以來、世々相沿、迄于宋元、其制頗廣大、若蓮華漏、燈漏之類、不可勝數也、夫辨時刻者、測象家之先務也、必不愼於此、則不能辨諸曜之運動、然而漏水甚難得其矣、何則水情隨寒暑有遲疾、因清濁有慓鷙、作者往々困焉、是以有浮漏、下漏、輪漏、權衡之制、巧作雖萬方、而遂不能免水差云、至于明季、西人始傳自鳴鐘者、與漏刻並行、至于淸、用西法之垂線球儀、儀象志曰、釘隱一銅軸於梁上、要至平、其半繫垂線球、其球隨本橫軸而往來、其用法、手握垂球、不急不緩、任意離之于頂線、乃釋手放之、則其球自往來、其往來之圈線、短小如將盡、卽又提球而放之、令往來、一日相繼、以定時刻分秒之準則焉、但初放之時、其圈弧不可大過、大略四十五度之內、其提放之度、各有定規、使學者習而熟之、此法一出、而凡時刻之秒餘、天行之微差、無不可悉矣、謹考天智天皇十年夏四月丁卯朔辛卯、置漏刻於新臺、始打候時動鐘鼓、始用漏刻、此漏刻者、天皇爲皇太子時、始親所製造也、永祿慶長之際、洋船齎貢自鳴鐘、我之有自鳴鐘、實始于茲、及其制漸盛也、以俗間不用平時、故工人更加巧、以報晝夜之長短、是以測量家不敢用、其無鐘者曰授時簡、實曆之試測、取以象用於漏刻、尋而長秀、省自鳴之巧、平諸輪之行、專主實用、名萬分規、於是測數漸得密、明和以降、測家往々熟於垂線球之法、用之交食凌犯、寬政初、麻田妥彰、發明垂搖球儀、而創製之、但

由諸輪之力、而垂球之往來、相繼而不止、於是實測之用、遂莫所礙碍矣、丁巳改憲之日、令工精造之、掛諸測量所、蓋與清儀象志所載名同而制則異、今遂其制式如左、〇下略

〔寛政曆書二十三〕大輪垂搖球儀

文政中、間重新所發明也、製成進呈、尋令掛之於測量所、舊式齒輪三、爪輪二、軸帶齒者三、此儀齒輪僅二、蓋多輪則不能無小疵、且其送重力、必以强大、輪與軸減省其數爲可、是此儀之所以作也、

〔愛日樓文三〕記洋製測時器

余嘗藏洋製測時器一儀、漢土名之曰時辰表、凡泰西諸國所出器玩、率無不精巧、而獨以此儀爲最、今略狀之、形圓、用白金爲殼、盤面銅質金鍍、徑一寸二分强、厚七分弱、邊鑿池周之、函銀牌十二、以識時辰、子午二牌、釘牢不動、其餘皆活、可案候前卻、以定晝夜長短、周圍外鐫百刻、內鐫十二時、以便牌之移動、此式經本邦改造者、如舊式則銅質白磁、外紀六十分數、內紀二十四小時、皆用洋字漆書之是也、〇中略暴旁酉位、橫鐫洋字、譯爲龍動亞而子、龍動、卽暗厄利亞國都名、亞而子、其工人名云、測法、先檢曆本、知晝夜長短度數、乃就盤面、整排牌子、各當其處、次用子午線測午景、卽就盤面、整鍼尖、正指午位、以鑰納底孔、運螺頂鐵軸、以收縄、縄既移繞螺旋、則諸輪皆活、遲速各隨其法、試以十二時算之、大輪凡六周、二輪凡二十四周、頂輪凡二百十六周、側輪凡一千七百二十八周、爪輪凡一萬三千八百二十四周、而圜擺往來、凡二十萬七千三百六十動、既閱十二時、則鐵縄漸盡、諸輪歸於一寂、再以鑰收縄、活動如前、此其測法也、蓋此器、正側俯仰、未嘗錯亂、或放之案上、或搭之壁間、或袖之、或佩之、皆無不可、徐而聽之、輪擺卽戛、響如蠶嚙、就而觀之、兩鍼遲速、移如蝸步、及劃其殼而觀其昭、則一切機關、順逆轉捩、如明堂牖位、森然羅列、脈絡貫通、其巧思精妙、殆乎不易名狀、今麤記之、以貽好事者欣賞焉、〇又見時器雜記

〔淇園文集五〕送細井生還秋田序〇中略

請更以今世人所有自鳴鐘者喩之、夫自鳴鐘之爲物也、其中有大小數十輪、其最大者、懸之以大小錘、

以令其自運轉、而其輪邊有刻齒、以撥其次輪、如是相承、以及於其至小者、此小者之轉、乃所以令其鐘者出聲以報其時者也、此其輪々相承之間、或有著一微垢於其齒際、則必以害其之運轉、蓋雖其一齒之滯、因以礙其餘輪、其報時、乃必有愆失焉、矧其大小之輪、皆有垢滓者乎、此殆將皆不可運轉矣、

〔硝子時器雜記〕書長短表後四則○中略

硝子時器、稱謂、各國不同、清國呼做時辰表、稱其用也、遠西呼做斛兒落如、謂織工也、此邦呼做硝子時器、取形似也、此器製於拂郎察國把理斯、諳厄利亞國龍動者爲精巧、其餘出於清國及諸蕃者、率屬濫品、此邦人又目其製作、分鐘叩、擬鳴、船用等之稱、硝子、其統名也、鐘叩時器、機輪藏在鐘內、自鳴十二時、晝夜凡二十四鳴、擬鳴時器、則每一時分鳴四刻、十二時、四十八鳴、晝夜凡九十六鳴、有鐘鳴者、有線鳴者、必緊擬而後發鳴、聲有暫目者、而聽其鳴數、可以知時刻、此二器船來已久矣、近又有船用時器者、製殊爲新巧、有發條、無鐵繩、發條極長、軸頂旁設鐵鉤、節止收放、令條不盡其首尾、故不至於太快太慢、舊製時器、必有鐵繩而收繩之際、諸輪逗住、此器直就發條收之、則輪不逗住、聞遠西人周行地球、到南北極下、經過夜國、不辨日夜、所賴獨在時器、而時器有鐵繩者、有逗住之差、積之久、遂錯數時、唯此器不然、又打平爪輪側輪、全形極薄、則佩携亦爲便、故專用之航海云、傳說如此、未知其果然否、天保庚子歲三月穀雨前一日漫書、

追錄二十四條○補三條中略

有稱晝夜時器者、盤面折半、白質黑字爲晝、黑質白字爲夜、時辰晝夜一周、與餅式相類、又有稱半月秒針時器者、盤面時分、兩針伍在下、秒針位在上、狀成半規、鏤六十分、針用半規忽轉復初分、此二種舶載少、

〔天保十三寅年鐘撞堂修復書留〕一壹尺之時計　壹掛

但右は此度請負代金拾八兩

右は文政十三寅年中、鐘撞堂修復之砌は、其節迄用來候時計下に遣し、時計補理候間、代金も下直に相上り候得共、此度は類燒に付、不殘新規に相成候に付、代金も右修復之節よりは相增候儀に御座候、

右之通奉申上候、以上、

本所時鐘屋敷請負人

寅七月　勘右衞門

長右衞門

〔長崎夜話草〕五長崎土產物○中略

土圭細工　唐人は自鳴鐘と書、日本にては土圭と書ても可ならんか、時計と書は字義にかなはず、大小數品あり、

枕土圭　根付土圭のたぐひ、皆元來南蠻國より傳へて、其家傳今なを不絕、

〔翁草〕八關新助算術之事

關新助は、元甲府御家來也、文昭院殿○德川家宣御治世に至り、御旗本の士となる、○中略又先年唐より渡りし人形時計有り、下は臺にて、上に釣鐘を掛け、唐子の人形、鐘木を持て、時々の數ヲ打、半時をも打也、然れ共年を經て、ぜんまい損じ又は錆朽て、人形働かず、仍時計師を呼被仰付けるに、誰有て直さんと云者無し、新助是を聞及で、拜見仕度由願ひ、疾と見て、何卒直し可差上と、彼時計を奉預、四五十日程の內に、元の如く直し指上しと也、

〔燈前漫筆〕近年時計世に流行して、諸侯方居間に、二三十、少くして十ばかりもありといふ、いかなる心にて、翫び給ふぞや、其心は知らず、おもふに只何の心あるにはあらず、時の流行と云ふに雷同して、多きをむさぼるの心ならむか、此器の用は、時を計る物なれば、一つにても足りぬべし、遲

時計師

違の見合せのためぞとならば、二ッまでは可なるべし、二三十乃至四五十に至ては、何の用なる事を知らず、工人は產業の折を得たりと思ひ、形をいろ〳〵にかへて作り出すを、是もめづらし、かれも面白しと、限りなく求めらるゝ故に、終に三四十にも及ぶなるべし、又時めく役人などは、諸侯の方をはじめ、手入とやらんに、何をがなと、賄賂を爭ひ贈る時節なれば、其人の好む品又は時にはやる物といへば、我おとらじと贈るほどに、終に其數あまたになるにも有べし、

〔雲萍雜志一〕ある人、時刻を知らん爲にとて、自鳴鐘を求めんとするを、その妻是をとゞめていひけるは、明くれにかくる世話のみにあらず、くるひたる折からには、その隙を費し、自鳴鐘のために、かへりて時を失ふこと多からん、やめ給へといへば、さあらば庭鳥を飼ふべしといふに、その妻、又とゞめて云けるは、時刻は人のうへにあり、汐の滿干もこれとおなじかるべし、自鳴鐘、雞を便りとするは、勤めに怠るものゝいたすことなりと、夫を諫め、つひに雞をも飼ずなりにき、

〔榁子時器雜記〕洋曆、以九十六刻平分晝夜、此邦曆本、因舊法百刻定晝夜、今欲用此器、權倍六十分、以擬百二十刻、比量算勘、以進退其數、則晝夜分數、大抵不見差錯、○中略

文政紀元秋仲月上澣撰

〔元治元年武鑑〕御時計師　五十俵弓丁　廣田利右衞門

〔人倫訓蒙圖彙五〕時計師　出所いまだ考へず、唐書に所謂時鳴鐘是也、京御幸町八番町上ル町平山武藏、堀川通中立賣上ル町元佐、其外所々にあり、江戸弓町理右衞門、鍛冶橋元信、乘物町正次、

〔大成令三十六〕享保十八丑年七月

五人扶持　長崎御時計師

銀拾貫目　幸野吉郎左衞門

阿蘭陀時計久々損じ有之、時打候義令相違、當地時計師共、直し候事難叶候處、吉郎左衞門宜仕立、

其上日本時計之通、日夜之長短も合候様仕上候に付、爲御褒美五人扶持幷長崎配分銀之内を以、

役料銀拾貫目宛年々被下之、

但御扶持方は、吉郎左衛門一生の内計被下之、

右之通、細井因幡守被申渡候間、可被得其意候、

七月

〔京都御役所向大概覺書 六〕諸職人之事 ○中略

時計屋

一禁裏御城御用承候　堀川一條下ル町　幸田近江

一四條柳馬場西江入ル町　荒木大和

一二條麩屋町西江入ル町　村上半平

古事類苑

方技部七

易占

易占ハ、支那ヨリ傳來セシモノニシテ、易ニ本ヅキテ占筮スルヲ云フ、此占法ハ、我國ニ在リテハ、中世以來漸次ニ衰替シテ、陰陽寮ノ占卜ノ如キモ、多クハ式占ヲノミ用キタリ、然ルニ德川幕府ノ時ニ及ビ、儒學ノ興隆ト共ニ、易學ノ研究復タ勃興シ、易占ノ名人陸續輩出スルニ至レリ、中ニ就キテ新井白蛾最モ名アリ、而シテ當時無祿隱逸ノ士ヨリ、神職山伏等ニ至ルマデ、此術ヲ賣リテ口ヲ糊スルモノ多ク、都會ノ如キハ街巷至ル所ニ、筮肆ヲ展シテ賣トスルモノアリキ、

名稱

〔運歩色葉集〕保 卜筮(ボクゼイ)

〔易林本節用集〕言辭 卜筮(ウラナフ)

〔訓蒙圖彙〕四人物 卜 うらなひ

○按ズルニ、卜ノ義ハ、神祇部龜卜篇ニ、說文解字等ヲ引キテ之ヲ詳ニセリ、

〔本朝續文粹〕一賦 詩 西府作　江大府卿 ○中略

短檠訪詹尹、三五問商瞿、

〔楚辭〕六卜居 屈原既放三年、不得復見、○中略 往見太卜鄭詹尹、曰余有所疑、願因先生決之、詹尹乃端策拂龜曰、○中略 乃釋策而謝曰、夫尺有所短、寸有所長、物有所不足、智有所不明、數有所不逮、神有所不

通、用君之心、行君之意、龜策誠不能知此事、

〔史記 六十七 仲尼弟子列傳〕商瞿魯人、字子木、少孔子二十九歲、孔子傳易於瞿、

〔續日本紀 八 元正〕養老五年六月戊戌、詔曰、沙門行善、負笈遊學、既經七代、備嘗難行、解三五術、方歸本鄉、矜賞良深、如有修行天下諸寺、恭敬供養、一同僧綱之例、

○按ズルニ、行善ノ三五術ハ、果シテ易道ナリヤ否ヤヲ詳ニセズト雖モ、姑ク此ニ附記ス、

〔羅山文集 六十九 隨筆〕日本古來、紀傳明經等博士、讀周易唯見王弼孔穎達之註疏、不知伊川易傳、朱子本義之有微旨深趣、近世浮屠瑞仙之徒、且謂易之奥義、程朱能知之、漢唐儒者不及也、且揲筮、本卦、命期、此三者以爲傳授、是何爲者哉、朱子有筮儀、可見以知之、本卦、命期之說、聖人未嘗言之、註疏未有之、程朱不言之、蓋里巷野人之漫說乎、日本博士、粗有意者、知其爲非、

〔鶖峯文集 四十九 解〕講易解 壬寅孟春九日

大哉易之爲書也、其卦伏羲所畫、文王繫卦辭謂之彖、周公繫爻辭謂之象、自乾坤至坎離爲上經、自咸恆至既未濟爲下經、孔子演文王彖作傳、所謂彖上傳彖下傳是也、又就每卦下上贊之、號大象、就每爻釋周公辭、號小象、併大小象、就經文分上下、謂之上象下象、而乾坤二卦有文言、併上下繫辭說卦序卦雜卦總十篇、共孔子所作、號十翼、所謂易大傳是也、自漢以前、文王周公經與孔子傳、各爲別卷、乃是古易也、漢初傳易者數家、其授受載在儒林傳、就中費直初附彖傳象傳於經之各卦之次、所謂彖曰象曰是也、鄭玄據直本作註、至王弼附文言於乾坤、附彖傳及大象於卦辭下、附小象傳於各爻下、而繫辭說卦序卦雜卦如舊、乃是今易也、由是古易廢而不行、玄專說象占、弼專主理、以老莊旨解之、鄭註行於北朝、王註行於南朝、凡漢魏南北朝之際、註易者數十家、逮孔穎達作正義、以王弼爲宗、而鄭學及諸家註皆廢、李鼎祚纂其僅存者作集解、然自唐以後至宋朝、無貴賤所用、唯弼註孔疏而已、諸儒各自作註者、亦各據今易、無說古易者、伊川傳歷僩諸家、道理初明也、然其次第、是弼本也、且自繫辭以下不解之、當

此時、邵子專說象數、程子唯說理、各任其所見也、崧山晁說之有所考、初編古易八篇、然猶非無失、呂東萊改正之、以爲經二篇傳十篇、初復孔子之舊、朱子據呂氏所定作本義、以易爲卜筮之書、故專說象占、蓋補程子之所不言也、然其論程傳之趣、考語錄可以知之、且本邵子之意作啓蒙、以明數學、可謂易道之大成也、爾來程傳本義竝行、諸儒附益、解釋甚多、及永樂諸儒纂大全、以程傳爲主、附本義於其後、繫辭以下以本義爲主、於是古易今易混雜、程傳朱義會同、以難識別、而本義元本斷絕不行、故今所傳來之本義、亦是今易之次序也、蔡虛齋蒙引、徐師曾演義、雖輔翼本義、亦是今易也、二人皆以不見本義舊本爲遺恨、彼等非不知古易、然以私不新作者也、其餘末書、不必主本義者、不及論古今之不同、楊時喬周易全書、雖舉今古兩本、然非無妄作附會、唯胡雲峯易通、今偶罕有之、其次序分經傳爲各卷、想其是本義舊本、而呂氏所敍古易也、然見其序跋、則雲峯元本不傳、而其子孫等收拾斷簡、以大全所引合考、以成其書者也、諸本既如此、則古易不可行、而本義舊本不可見焉、熟按、古昔春秋經獨行、左公穀三傳各別相行、而杜何范註亦別行、而三部疏亦各別本也、是其舊本也、今所行之本、則以傳附經、而註疏各小書於其下、而甚易見也、然則匪啻易而已、諸經今古之異同、可推知之、若如古本、則經傳註疏、區別各各而可難見乎、由是觀之、則苟知古易之次序、則今易亦有益於易見乎、大全者勅撰而公道者也、講易者舍是何以爲主哉、然程傳朱義、其趣不同、逐段一時合講、則初學者恐惑取捨難理會乎、故今雖據大全本、而先講朱義、姑閣程傳、若幸終全部功、則據程傳可再講焉、朱子曰、看易先看某本義、了却看程傳、以相參考、如未看他易、先看某說、却也易看、蓋不爲他說所汨故也、此一件說話、豈可不守之哉、今日初開講、聊述鄙懷以示諭之、陪坐群輩、知我乎、罪我乎、

〔徂徠先生答問書下〕占と申事、唐人の書にも有之候得共、御信用被成がたく候由被仰下候、是は理學の習氣にて、小量に御入候故にて御座候、何事も理窟にて濟候事と思召候故、占は不入事に罷成候、まづ卜筮は稽疑之道の由相見え候、稽疑とは、うたがひをさだむると申事にて御座候、今時

卜人

世間にて、女子わらはべの好み候占は、只行先の吉凶、仕合不仕合を知り可申爲にて、たとひ明日死候事を今日慥に存知候共、何の益も無之事に候、古之卜筮は、左にては無御座候、たとへば岐路御座候半に、左へ行て吉候半哉、右へ行て能候半哉と申事、道理見え不申、了簡つき不申候時に、卜筮を以て鬼神に問ひ候事に候、是により何事もなき時に先達而、今年の吉凶を知ると申樣なる事は、曾て無之事に候、是を稽疑と申候、

〔先哲叢談後編 七〕片岡如圭

有一儒生、以易爲義理書、深賤如圭以易爲占筮書、指爲追秦皇之言者、問曰、天生神物、謂蓍與龜、今龜卜失其傳、蓍草不生既久矣、後世何由筮爲也哉、如圭對曰、昔者季札以樂卜、趙孟以詩卜、襄仲歸父以言卜、子遊子貢以威儀卜、沈尹氏以政卜、孔成子以禮卜、其應如響、若夫夷狄則有虎卜、馬卜、紫姑卜、牛蹄卜、鷄骨卜等、亦能決大事有占驗、蓋精誠既極、鬼神從而感應、古不謂乎、至誠之道可以前知、何必蓍龜哉、儒生無言而止、

〔玉勝間 十四〕卜筮

もろこしの國とても、いと上代には、後世のごこく萬の事、己がおしはかりの理を以て定むる事は、さしもあらざりしこと、卜筮といふ物あるをもて志るべし、卜筮は己が心にさだめがたき事を、神にこひてその教をうけて定むるわざなり、卜筮にいづるは神のをしへなり、然るを後世のごとく、己が心をもて、物の理をはかりてさだむることは、大かた周公旦といふさかしら人より、盛にその風になれるなり、

〔訓蒙圖彙 四人物〕卜（中略）卜人 卜者也

〔書言字考節用集 四人倫〕日者（今云占算指南卜候ノ人ヲ日二日者）　卜人（同）（文選註、日者掌日月暦數之任、者、卜祝主卜筮祭祝之辭也、）

〔史記 百二十七日者列傳〕日者列傳第六十七

晏子曰、晏子北之齊、遇日者、日者曰、帝以今日殺黑龍於北方、而先生色黑、不可以北、晏子不聽、遂北至淄水、晏子不遂而反焉、日者曰、我謂先生不可以北、然則古人占候卜筮、通謂之日者、晏子亦云、非但史記也、索隱曰、案、名卜筮曰日者、以墨所以卜筮占候時日、通名日者、故也、

司馬季主者、楚人也、索隱曰、按云楚人、而太史公不序其系、蓋相司馬子期子反後姓也、季主見列仙傳、卜於長安東市、宋忠爲中大夫、賈誼爲博士、同日俱出洗沐、正義曰、漢官、五日一假洗沐也、相從論議、誦易先王聖人之道術、究偏人情、相視而歎、賈誼曰、吾聞古之聖人、不居朝廷、必在卜醫之中、今吾已見三公九卿朝士大夫、皆可知矣、試之卜數中以觀采、索隱曰、卜數猶術數也、音所具反、劉氏云、具數謂之命運、數必以易、易用大衍之數也、二人即同輿而之市、游於卜肆中、天新雨、道少人、司馬季主閒坐、弟子三四人侍、方辯天地之道、日月之運、陰陽吉凶之本、二大夫再拜謁、司馬季主視其狀貌、如類有知者、即禮之、使弟子延之坐、坐定、司馬季主復理前語、分別天地之終始、日月星辰之紀差、次仁義之際、列吉凶之符、語數千言、莫不順理、宋忠賈誼瞿然而悟、獵纓正襟危坐、〇中略司馬季主捧腹大笑曰、〇中略今夫卜者、必法天地、象四時、順於仁義、分策定卦、旋式正棊、徐廣曰、式音栻、索隱曰、按式即栻也、旋轉也、栻之形上圓象天、下方法地、用之則轉天綱加地之辰、故云旋式、棊者筮之狀、正棊蓋謂卜以作卦也、然後言天地之利害、事之成敗、昔先王之定國家、必先龜策日月、而後乃敢代正時日、乃後入家產子、必先占吉凶、後乃有之、索隱曰、謂皆卜之不祥、則或不敢也、卜吉而後有、故云有之、自伏羲作八卦、周文王演三百八十四爻、而天下治、越王勾踐倣文王八卦以破敵國、覇天下、由是言之、卜筮有何負哉、且夫卜筮者、掃除設坐、正其冠帶、然後乃言事、此有禮也、言而鬼神或以饗、忠臣以事其上、孝子以養其親、慈父以畜其子、此有德者也、而以義置數十百錢、病者或以愈、且死或以生、患或以免、事或以成、嫁子娶婦、或以養生、此之爲德、豈直數十百錢哉、此夫老子所謂、上德不德、是以有德、今夫卜筮者、利大而謝少、老子之云、豈異於是乎、莊子曰、君子內無飢寒之患、外無劫奪之憂、居上而敬、居下不爲害、君子之道也、今夫卜筮者之爲業也、積之無委聚、藏之不用府庫、徙之不用輜車、負裝之不重、止而用之、無盡索之時、持不盡索之物、遊於無窮之世、雖莊氏之行、未能增於是也、子何故而云不可卜哉、〇下略

賣卜者

〔續昆陽漫錄 七〕曆林問答

曆林問答ノ寫本ヲ藏ムル人アレドモ、序ナシ、近ゴロ板本ノ曆林問答ヲ見レバ、作者在方ノ序アリテ、應永甲午孟春日、正議大夫司曆賀茂在方書ストアリ、在方占ヒノ名人ユヱ、今モ占者ヲ、アリマサト云トカヤ、享保中四言雜字ノ我國ニテ刻メル本ヲ得テ官へ上ル、是等ニテ見レバ、國初ノ板本絕エシモノ多シトミユ、

〔嬉遊笑覽 八方術〕ありまさ、昆陽漫錄云、〇中略思ふに、ありは明の義にて、世にありくといふ是なり、まさは正しくをいへり、故事にも及ぶべからず、

〔三十二番職人歌合〕六番　左　　算をき

をくさんのさうさやうしたる花の時風をばいれぬ五形なりけり〇右歌略

算道の指南、五形の相尅相生を本體にて、一切の吉凶を判定する事なれば、花のときの相生に風をばいれぬ五形と勸あけぬる、いと興あり、

〔日本風土記 二〕九流

朝有陰陽生、名曰挨里由吉、朝用占卜士、名曰挨里木師、風水士名曰三和吉、〇中略有座家出帖者、有等手執算盤、帶從者偕行、口呼胡來也算、後從則云釋迦厚留士、乃誇十分高妙之言、人知諸人推算、亦依年月日時、以斷吉凶、師巫之術甚少、戲要之法頗多、

〔本朝文粹 九詩序〕白箸翁　　紀納言〇長谷略

貞觀之末、有一老父、〇中略人如問年、常自言七十、時市樓下、有賣卜者、年可八十、

〔本朝無題詩 七〕於室積泊卽事　　釋蓮禪〇中略

煙郊寺裡轉經侶、野寺有僧誦法華經文云、水市社前賣卜巫、此泊有古社、稱八幡、別當止住、老巫卽鼓賣卜、往反之舟問安否、偽與權、故云、

〔塵塚談 下〕江戸自慢の異同

占卜者、人相、家相、劍相、墨色見等、猶類多し、諸所に居住し、渡世とする者數百人あるべし、中にも高名なるものは、立派にくらすなり、又辻々往來へ出て活計とする者、一町毎に一人ヅヽは極めて居れり、千を以てかぞふべし、

〔江戸繁昌記　初篇〕賣卜先生

人庶而事繁、事繁而惑滋、滋肆之數、不得不從滋也、大槩案上、展一卷人相圖本、芸々說起、曰日角如斯而惡、曰人中如斯而善、是凶是吉、懸河瀉水、行人止而環焉、毎有乞者、輒合目數策、例曰、假爾泰筮有常、或雜唱以土保加美依身多女、或併稱以念佛題目、二分四揲、遇觀之否、更乘天眼鏡照手理、察面部、目注其容貌衣服、心判其爲人與所以、又逐又例曰、君過年運祿未盛、今歲比至某月、福自此多、一言一面、其所占、多取之於乞者之色、猶與庸醫鉤取證於病人之口、略似矣、或太息曰、君身如視大厄、且吉凶禍福有所宜細告、二十四銅不滿、其報也、三尺之㡓、五十之筮、遂卒使其倒囊、又有卜而巫者、與設神位、莊嚴煥發、使人敬而近之、此都繁昌、亦可以卜焉、

〔月令廣義　二十二　晝夜〕古事○中略

君平賣下人　最君平賣卜成都、日閲數人、得百錢、則閉肆下簾、讀老子、

〔俳諧百畫贊　上〕嫡やそろ〳〵仕廻ふ八封店○中略

〔嬉遊笑覧　八方術〕卜者をうらやさんといふは、うらへさんか、占はすを、うらへといふ活用の語なれ共、體語とす、さんは算なるべし、卅二番職人歌合に、算おき有、鶴岡職人歌合にも有、其歌、こしほどのかり屋の内に身をおけるさん所のもの、慎めしの世や、判云、算おきの述懐、與ほどのかりやの内、さこそとおしはかられ侍り、がうなの貝のかたつぶりの家も、みなおのが身にあはせては不足なきにや、五尺の身三尺のかりやにて、ひねもすとふ人を待居たる一生涯の果報をも、自身にかんがへぬらん、さん所といひ、さん所のものゝとつゞけぬる、いとよくいひくさりぬるにやと有、その

傳來敎習

繪にかける、げに與ばかりのかり屋のうちに、文臺居て算おける人をかきけり、今街に出たる賣卜の古きさまなり、人倫訓蒙圖彙に、俗語に、手占見通しなどゝて信仰するなり、伊勢近江讚岐などに此ながれ有て、諸國に出る中にも、かるゆきなるは、道のかたはら、門のすみにうづくまりゐて、下輩の男女を相するなり、判の占、五音調子の占、品々あるとかや、其繪のさまは、樹の下に席しきて、法師の黑衣に輪袈裟をかけ、數珠と扇持て居、旁にとふ人どもをかきたり、筮を用ひざりしと見えて、其かたをかゝず、貞享元祿ごろ此さまにて、後は有髮も出來しが、修驗者の體なり、貞享十五年榮花咄に、山伏姿と成て、月待日待御一代の吉事御判はんじけるなど見えたり、されど大かた法師の姿なりしは、寶曆ごろ迄も其定なり、俗形の賣卜者はいと近と見えたり、西土にはこれを課命とも起課ともいへり、

〔日本書紀十九欽明〕十四年六月、遣內臣(闕名)使於百濟、〇中略別勅、醫博士、易博士、曆博士等、宜依番上下、今上件色人、正當相代年月、宜付還使相代、又卜書曆本種々藥物可付送、

〔江談抄六〕長句事

寬平法皇受周易於愛成事

被命云、周易被見哉如何、答云、少々所一見也、周易、上古人、以誰說被用哉、被命云、善淵愛成能讀之云々、永貞弟也、寬平法皇者、受讀周易於愛成給云々、竟宴之日敍位云々、

〔神皇正統記五後宇多〕寬平は、ことにひろくまなばせたまひければにや、周易のふかき道をも、愛成といふ博士にうけさせたまひき、

〔百練抄十一土御門〕承元四年二月廿三日、長衆記云、季長易塵相傳系圖、善相公授舍弟日藏僧都、日藏授仁海僧正、僧正授茂範僧都、僧都授仁寬阿闍梨、阿闍梨授心也、(誠辨君)心也授少納言入道信西、信西授季親、季親授季長也、又一流、善相公、淨藏、橘安、〇橘安、二中歷作攝安、忠允、彥殆、〇彥殆、二中歷作彥祚、文替〇文替、二中歷作文贊、尋

實少納言入道、入道之闕人說也

〔台記〕康治二年十二月七日己丑、吾〇藤原賴長欲學周易、即是所以可與明年甲子革命之議也、而俗人傳云、學此書者有凶云々、又云、五十後可學云々、余案之、此事更無所見、如論語皇侃疏者、少年可學之由所見也、然而猶恐俗語、因之使泰親祭代山府君、去三日欲祭、依雨延引、今日又天陰雪、秉燭後束帶向川原、乘車、入車之儀、于時雪頻降、乍車立川原、請府君曰、學易極天地之理者、是正道也、鬼殆也者邪心也、邪勝正者、非天之心、豈雖鬼殆之、學易者可被其凶乎、雖不祈請、天可降災、何況祈請哉、頃之天快晴、月星見天、與善謂哉、此言善、謂學易一邊、非謂我是善人也、雪猶少下、然而余下車就座、泰親祭之、不經程雪止、祭了歸宅、召泰親賜衣、依天晴也、改著淨衣拜星、依恒例也、都狀成佐作之、載左、

謹上泰山府君都狀

南贍部州日本國內大臣正二位藤原朝臣〇賴長

某年

本命

行年

獻上冥道諸神一十二座

右某謹啓泰山府君冥道諸神等、夫府君者、十二冥道之督長也、〇中略又在新與不新、若致精誠、立垂感應者歟、某忝在弱冠之齡、早忝輔扆之職、器量疎分備台鼎、鹽梅之味無調、材幹短分居星階、柱石之用雖協、縱受餘慶於累祖之蹤、爭銷積毀於衆人之口、夫忠孝之道、被典籍以乃見焉、禮讓之儀、待文章以從順矣、古典云、君子若欲化民成俗、其必由學乎、玉不琢不成器、人不學不知道、蓋此謂也、是以爲收曠官之責、爲勵本公之誠、專志於九經、竭力於六藝、性縱愚鈍、學古思齊而已、俗諺云、易多忌諱、學者之仁可畏也、又云、五十以後可學此書、而明年甲子當革命否、雖爲頑才之身、可關群議之席、革命之起出、自

周易、不窺此書者、難以陳其趣、若又披此書者、恐不免其徵、然而俗人之謗、未識所由、好學以事君父、則天須與善、嗜道以辨禮儀、亦神盡幸謙、從幼學之齒、縱讀此書、到知命之年、將究其理、何必待五旬之算、徒可擲一經之勤、新知人凶、誠非書凶、但唯云陰陽之言也、易迷者、顯徵之境也、不知蒙冥道之加被、破厲陷於未然、加之明年之曆、相當重厄、彌致謹愼、將拂禍患、是故敬專如在之禮、聊設惟馨之奠、易有明信、神其捨諸、縱有妖怪之可來、翻爲福祐、縱有運命之可致、便壽算、伏乞玄鑒、必答丹祈、謹啓、

日本國康治二年十二月七日　內大臣正二位藤原朝臣某謹啓

三年二月十一日壬辰、今日依日次宜、招少納言通憲、習易筮成卦作法、今日伐日有憚否問之、通憲曰、無憚、因習之、寢殿西北廊設座、通憲西面、余東面、是武王受丹書於太公望之禮也、註學記正義云、（昔六）王庭之位、若尋常師從之敎、則師東面、弟子西面、與此異也、今案、成卦者重事也、可異尋常敎學之儀、因准丹書之儀也、（通憲幷余座皆高麗）自一昨日精進、（但魚食不忌、唯忌月水、亦不犯女、又淨衣許也、）戊刻通憲來、布衣、余相逢、（烏帽子直衣）習之、通憲先成卦、次余成卦、（不同吉凶）及子刻欲歸、命予云、勿多言、勿多言、余對曰、唯、通憲與帖子錢蓍、余以列見考定抄二帖、（大第一帖、雜例一帖）通憲曰、勿他見、書寫可返與、此書先年大臣著座時、百日之間、忘寢食所抄書也、

〔花園院御記〕正中二年六月十七日乙未、此間徒然之間、讀易疏、是知命十○（五歲）之後可見此書之由、有古人口傳、而寬平御讀之由見御記、是卅許御年歟、未勘之、又漢朝人多以幼年學之、予心中竊疑之、而去年有夢想事、旁以符合之間讀之也、

（裏書）
宇治左府記、讀易年齡事、委記之、子細有理、但不吉之人也、仍後人不爲證歟、王侃說云、和漢之例、强不可憚、何況踐天子之位、豈不知天命哉、是故後宇多院、幷今上（○後醍醐）有御讀、予雖不肖、讀可讀之書等、已經天子之位、讀天命之書、豈背理哉、而伺去年夢想、更不爲知天命、只爲道義也、更不可有苦歟、讀此書之時、洗手不散帶、又不放烏帽、聖人之作、天命之書、有恐之故也、是宇治左府所爲也、叶理之間用之、夢想之事見去年記、仍不記之、夢涉於虛實、不可偏信、而事理相叶、仍用之也、

〔晃陽漫錄三〕上書

金剛峯寺の衆徒、文觀が長者を停めんと請ふ狀、太平記に見えず、參考太平記にもみえず、寶鏡抄にあり、其文左の如し、其頃は、高野の衆徒、とかく法外にやかましきものとみえたり、

金剛峯寺衆徒等、誠惶誠恐謹言、請被特蒙天裁停止東寺勸進聖文觀法師、猥補長者、忝掌宗務狀、

右謹考舊貫、巨唐長安城之左街有伽藍、隋文帝勅願號之大興善寺矣、本朝平安城之東京有精舍、桓武帝主叡願、名之敎王護國寺焉、○中略然間、元弘元年、幸當寺、拜當王護國之尊容、建武又幸此砌、遂願塔供養之勅願、叙信超他寺、朝賞靡餘宗、自門光花偏于此時也、爰有相似茲莪、其名云文觀、本是西大寺末寺播磨國北條寺之律僧也、兼學算道、好卜筮、專習呪術、立修驗、貪欲心切、憍慢思甚、入洛陽伺朝廷、掠賜證道上人之職、遂爲東寺文勸進之聖、苟以墨染黑衣之身、濫列綱維崇班之席、外號智識聖人、内釋殿(?)醍醐座主、偏被繋名利之欲、曾無慚愧之心、未改蝙蝠似鳥之質、忽成鷹鳩變眼之思、剩補一長者、忝掌正法務、未曾有之珍事、不可說之次第也、○中略望請天裁被早停止文觀東寺之一長者、并當山座主職者、佛家繁榮、遂添龍花樹之春色、王化照明、遙續星宿刧之曉光矣、不耐懇欵之至、衆徒等誠惶誠恐謹言、

建武二年五月　日　金剛峯寺衆徒等上

〔先哲叢談後編七〕片岡如圭○中略

如圭謂人曰、我東方自天兒屋命、始以太古卜事、中世揚火灼龜、能決疑義、兆效極多矣、後世其儀沒而不傳、唯星卜歌兆之小義偶存、亦得巫覡之手、卑陋猥雜、不足以取焉、近世山崎嘉、馬場信武等著易說、皆先修之糟粕耳、意匠心織之人、不知活機在於占筮、以不正之規矩、擒自然之方圓、所以易術之不復古也、

〔甲陽軍鑑二品第八〕判兵庫星占之事附長坂長閑無面目仕合之事

易博士

甲州西郡十日市場と云所に、德嚴と云半俗有、此者甲州市川の文珠へこもり、夢想に八卦を相傳仕りたりとて、在所にて占をよく致す、長坂長閑今の德嚴を崇敬して、右判の兵庫が知行を、德嚴に申てとらせんと約諾す、〇中略長坂長閑右の德嚴が事を披露申す、信玄聞召、占は足利にて傳授か、と尋させ給ふ、長閑承り、八卦にて候が、市川の文珠へこもり、夢想相傳とて、種々上手の奇特有、證據を半時ばかり申上る、信玄公聞召、長閑能承れとて宣は、八卦と云本は、吾終に見たこともなけれども、推量に云、其本に眞に出たる文字すくなくとも、二三百もなきことは有まじ、物をよむにも、眞はむつかしき物ぞ、又夢は定なき者也、僞相なるたとへに、人に逢ても早く別たるは、夢ほど逢たと云者ぞ、然ばむつかしき學問を、めにもみえぬ文殊の夢に相傳は、皆僞の至也、僞を云盗人に、將たる者は對面せぬ者也、其ごとくなる者は、心きたなき故、當座奇特有とても、貪慾心深く、金銀を惠まば、惡をも吉といひ、引出物あたへねば、吉をも惡と云者也、神變奇特もさぞあるらん、さなくば愚人も何ぞ用ること有まじ、放下と云者は、矢の箆を二丈も三丈もつぎ、第一の上に茶椀を置、己がはなのさきにのせ、くる〳〵とまはせども、其茶椀落ざるやうにする、是奇特なれども、本意に違せねば何の用にも立ぬをもつて、放下とは名付たり、文珠に夢想相傳の八卦など、云、皆是放下の一類なり、面々可存、但吾朝菅丞相、唐の無準へ參得は、是聖人の勢なり、聖人は過去現在未來三世に通ずる、それを名付て佛と申、又盗賊は現在計に屈託して邪欲有故、天道の惡みをうくる、人間六十二年の身をたもちかね、さまをかへ色をかへ心をぬくは盗人也、邪智深して術をなし、口にも虛言を實のやうにいひ、見ておもしろふ、聞てきゝごとに取なす盗人を放下と名付、一として實の用に不立、再如此者の事、誰にても我前にていはんは、曲事たるべしとのたまへば、長閑赤面して無面目仕合也、

(日本書紀十九欽明)十四年六月、遣內臣名闕使於百濟、〇中略別勅醫博士、易博士、曆博士等、宜依番上下、

〔十訓抄三〕權識（？）則博士季親といふもの有けり、周易博士にて、其道よにおぼえありけれど、風月の方ことなる聞えなかりけり、或文亭の聯句の座に望みたりけるに、沈淪ゑたりけるを、其中に宗との儒者有けるが、是をあなづりたりけるにや、閉口後來客と上句を云たりければ、季親、含除先達儒とぞ付たりける、にがりて云事なかりけり、

〔諸家家業記〕卜筮之事、伏原家に而、累代被取扱候、彼家は、明經道之儒に而易道にも被達候事故、其筋能被相心得候事に候、毎年諸家より、年筮之類、多至之日卜筮有之、其考を被贈候事など有之候由、

〔二中歷十一 能〕易筮

一行（禪師）　珍曇（和尚）　弘法（大師）　貞觀（僧都）　巨見（修理大夫）　權　善家（相公）　日藏（善家弟）　仁海（僧正）　成尊（僧都）　善

範（僧都）　淨藏（善家八男）　賢安　仁祚　忠允　慶祚　文贊（慶祚子）　扶律（文贊子字西山公）　尊實（僧都弟子）　惠海（扶律）

（子）　日覺（日）　善相公　善文江　善茂明　善雅頼　善爲長　善爲康

說云、善相公傳于二家、舍弟日藏者陰陽說也、一男文江者菅家說也、

〔泰山集甲乙録四〕堊加翁妙達於易、自言、吾得太占之傳、易乃明矣、

〔譚海十二〕寶曆の頃平澤左内と云人有、易に通じたる事妙を得て、物をおほひ、うらなはするに、其内の物をさして中る事神の如し、林大學頭殿へも度々謁して、林家より天府の像を給はりて安置せし也、

〔當世武野俗談〕平澤左内

平澤左内と云卜者あり、其以前は柳原和泉殿橋向新道通りに、かすかなるくらしゝて、辻などへ出て、手の筋を見、かた〳〵其日細き烟りを立たるが、享保元文の頃より不計はやり出して、今占の一流平澤流と云は、片腹いたきいやきな奴なり、○中略或時去る

歴々來へ招かれ、左内へ其御方ののたもふは、此箱の中へ入たるもの有、占て見給へと有ければ、左内占て申けるは、箱の内に有とも、正敷生類なり、何の役にも立物にてなし、國土のつひへ取るに足らぬものなりと、子細らしく申けり、其御方大に感じ笑せ給ひ、是はよく當りたり、何の役にもたらぬ取に足らざる馬鹿者、名を書て入置きたり、是見られよと、箱を明給へば、紙に平澤左内と書て入給ふ、是は一生平澤左内が占の大あたりなり、

〔先哲叢談後編八〕新井白蛾

或曰、我邦儒流、皆不究易學、大抵從朱子啓蒙等之書、無有異議、至於近世、河田東岡、(名孝成、字子行、號東岡、因州人、)水谷雄琴、(名君緜、字起雲、號雄琴、備中人、)眞勢中州、(名達富、字發貢、號中州、尾張人、)松井羅州、(名暉星、字季黄、號羅州、浪華人、)片岡如圭、(名基成、字平甫、號如圭、京師人、)土肥鹿鳴、(名貫雅、字秀太、號鹿鳴、江戸人、)皆以易學名於世、其筮儀大同小異、各構一家說、然折衷衆義、述已所得、宜以白蛾之說而爲之巨擘、

〔續近世叢語七術解〕新井白蛾、名祐登、字謙吉、江都人、父祐勝、加賀人、西遊京師、從淺見絅齋學、後遷居江都、白蛾年十三、學於家庭、又奉父命、師事菅野兼山、講究洛閩之學、兼山名彥、字直養、三宅尙齋門人也、白蛾有雋才、年二十二、始聚徒教授、然當時物門之徒、以漢魏古學、李王古文辭、風靡一時、白蛾自知不可與抗、去遊關左諸國、後來京師、研究易義、專倡象數占筮之說、以建門戶、著易書十餘種、以占筮恒有奇中、其業振一世、婦人小童莫不知其名者、世稱曰古易中興、晚應加賀聘、徙於金澤、寬政四年歿、年六十八、

〔先哲叢談後編八〕新井白蛾

名祐登、字謙吉、號白蛾、黄州、龍山、古易館、皆別號、通稱織部、後以白蛾爲通稱、江戸人、仕于加賀侯、〇中略

白蛾既唱易說於平安、以建門戶、生徒輻湊、而當時儒流、皆以占筮家目之、賤其所爲、嘗詣芥丹邱、相與

論易、丹邱雖以名望並成一家、固不精易學、奉王弼韓康伯程頤朱熹等之數家說、與之論談、白蛾商摧歷代百三十有餘家、指摘其說醇疵、悍然曰、魏晉之人、淆亂虛玄、宋元之儒、拘束性理、咸是迂遠于易義也、丹邱然焉、後序所著古易對問云、白蛾氏於易學、頗微闡幽、悉削後儒陋見、別立一家之旨、自丹邱出此言、儒流皆知白蛾精于易、不世占筮者之類矣、○中略白蛾著易書數種、多主於占筮、各行於坊間、街衢賣筮者、自稱白蛾之門人、集擲錢易天機、焦氏易林等之諸書、爲俗書而不顧、故又不爲擲錢、星命、飛伏、納甲、雜占、專主卦象、古易中興之稱、於是乎立、白蛾易術、婦人小童、無不知者、至乃謂探策占物、同符管郭、與世之附會生剋、牽强災緯者異、白蛾自稱、謂東方出一部康節先生、而象數明於世、則可矣、自負其技、常亦如斯、

〔兩留別志 二〕今の陰陽師などのする八卦のうらかたは、京房が法より出たり、

〔易占要略〕凡用易爲占者、必須揲蓍以求卦、其法如朱氏筮儀、既筮得卦、然後視其變否、詳其象數、兼取互體、考其納甲、世應飛伏、六親六神動靜、干支合衝、六甲孤虛、五行生剋王相、有氣無氣、以占其事吉凶、斷以卦爻之辭、然以卦爻之辭爲斷者、六爻皆不變、則取本卦彖辭、一爻變、則取本卦變爻、五爻變、則取之卦不變之爻、六爻皆變則乾坤取二用、其餘取之卦彖辭、所取止此四者而已、朱氏於二三四爻變者、亦取卦爻之辭、尤爲無謂、故不可從也、其義詳見于下繫辭云、易者象也、夫象不一而足、其類多矣、辭則有所局、人事之變無窮、何可以有局之辭、占無窮之變、故筮者不如以納甲爲占也、

〔禮記 曲禮上〕一外事以剛日、內事以柔日、凡卜筮日、旬之外曰遠某日、旬之內曰近某日、喪事先遠日、吉事先近日、曰爲日假爾泰龜有常、假爾泰筮有常、卜筮不過三、卜筮不相襲、龜爲卜、筴爲筮、卜筮者、先聖王之所以使民信時日、敬鬼神、畏法令也、所以使民決嫌疑、定猶與也、故曰疑而筮之、則弗非也、日而行事、則必踐之、

〔唐六典 十四 太卜署〕凡易之策四十有九

用四十九算、分而揲之、其變有四、一曰單爻、二曰拆爻、三曰交爻、四曰重爻、凡十八變而成卦、又視卦之八氣、王相、囚死、胎沒、休廢、及飛伏、世應而使焉、凡八純之卦、十六變而復、初爲一變、次曰二變、三曰三變、四曰四變、五曰五變、六爲遊魂、七爲外戒、八爲內戒、九爲歸魂、十爲絕命、十一爲血脈、十二爲肌肉、十三爲體骨、十四爲棺槨、十五爲冢墓、凡內卦爲貞、朝占用之、外卦爲悔、暮占用之、

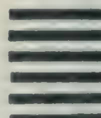
〔琅耶代醉編十四〕勾陳螣蛇

楊用修曰、今之易卜、以甲乙起青龍、丙丁起朱雀、戊起勾陳、己起螣蛇、庚申起白虎、壬癸起玄武、蓋不通理者、遷就之歟、戊己同爲土、豈可分爲二、螣蛇爲北方水獸、何以移之中央乎、今定其次、戊己共起勾陳、而壬起螣蛇、癸起玄武、得其當矣、何也、北方之次、於卦爲艮、有終萬物始萬物之意、於方爲北、又爲翺、於人身爲腎、有左右、於器爲權衡、於物爲龜蛇、於色爲玄黑、於官爲修熙、於四德爲貞正、而固亦兩事也、於太玄、罔冡直皆冥、以配四時、而冬象皆冥、且壬爲陽水、以螣蛇之雄配、癸爲陰水、以玄武之雌配、不易之道也、此誤千餘年矣、卜之不驗、豈不由此、

〔卜筮樞要上〕筮法

凡ソ事有テ筮セント思フ時、先盥ヒ嗽ギ、机上ニ向ヒ、雜念ヲ拂ヒ、天辰ヲ祈念ス、筮竹五十莖ヲ一手ニ握リ、今占フ所ノ條々ヲ、一々人ニ說ガ如ク口中ニ唱ヘ、五十本ノ內一本ヲ取テ、槓中ニ立、是ヲ大極ト云扐殘リ四十九本ヲ、無念無心ニテ中分ヨリ分ル、是ヲ兩儀ト云右ノ手ニアルヲ机上ニ置キテ不用、其內ノ一本ヲ取テ、小指ノ間ニハサム、是ヲ掛扐ト云扐左ノ手ニ持タル零ノ蓍ヲ、四本ヅヽ二度々々ト算ヘル、但シ卦扐モ數ニ入ルヽナリ餘リ一本アレバ乾☰二本アレバ兌☱三本アレバ離☲四本アレバ震☳五本アレバ巽☴六本アレバ坎☵七本アレバ艮☶八本アレバ坤☷ノ卦ト知ルベシ、是ヲ上卦トス、口傳、サテ始ノ如ク、筮竹五十本ヲ殘ラズ手ニ持チ、太極ヲ除キ、前ノ如クカゾヘル、殘リタル數ヲ下卦トス、サテ變爻ノ取ヤウハ、二度目ノ左ノ手ニ持タル蓍ヲ、其マヽ三本ヅヽ、二度々々トカゾ

へル、一本アマレバ本卦ノ初爻ヘツク、二本アマレバ二爻ノ變ト知ルベシ、則チ左ノ圖ニ委シ、



總ジテ⚋陰爻ハ⚊陽爻ニ變ジ、⚊陽爻ハ⚋陰爻ニ變ズルナリ、初ヨリ上爻ニ通ジテ皆同ジ、

右本卦變卦ヲ對照シテ判斷スベシ、猶口傳アリ、

〔三易由來記 上〕或人問ふ、四十有九策、十有八變の筮法は、古來よりの法にて、人により聊の異儀こそ有れ、總て僞法なりと捨たる人は有こと無し、然るを前に、此は絶て筮し得まじき筮法なりと云へるは、何等の說有りて言へる事ぞ、答ふ、其謂ゆる古法は、眞の古法に非ず、姬昌が新法なること、四十九策を用ふるにて、更に論ひ無き事なり、其は既に引たる、通志玉海などに載せる古說に、歸藏用四十五策、周易用四十九策と有にて知るべし、斯て其古說中に、以象三などの字を攙入し、再扐而後卦と云ふは、重卦法を示せる語なるを、左右兩策を揲へし、奇を指間に挾める後に、挂る義に翻案して掛に作り、一爻三變のいと勞煩しき擬筮法を作り、且下文に十有八變而成卦ちふ僞文をさへに攙入せり、この僞筮法の撰著する儀に、漢儒以來の註釋どもに僭れく出て、互に少かの異同はあれど、皆人の知れる事なれば委くは云はず、然るに其筮法はも、四十九策を以て其法の如く行ふに、過不及の數出來て、眞筮を得がたき物なり、其は此筮法に從事せる人ながら、眞勢達富と云る人の說に、夫蓍を揲へて得る所の策、四を奇とし八を偶とす、然るに四十九策にては、初變に左手の策を揲へて一を得れば、必ず右の策より三を得て、掛一の策と三合して、五策の奇數と成る、これ奇數を得るの一なり、今云挂一の策とは、かの僞文の掛一以象三と有るに依りて、右手の一策を、小指間に挾めるを云へり、下これに傚ふべし、或は二を得れば、必ず右の策より二を得て、掛一の策と三合して五策の奇と成る、これ奇數を得るの二なり、或は三を得れば、必ず右の策

より一を得て掛一の策と三合して、五策の奇數と成る、これ奇數を得るの三なり、さて四を得れば、必ず右の策より四を得て、掛一の策と三合して、始めて九策の偶數と成る、今云上には四を奇とし、八を偶とすと云つゝ、此には五策を奇と云ひ、九策を偶と云ることは、舊く四十九策を用ひて、其奇偶を斷わる說等の中に、朱熹が說に、一變所餘之策、左一則右必三、左二則右亦二、左三則右必一、左四則右亦四、通掛一之策、不五則九、五以一其四而爲奇、九以兩其四而爲偶、奇者三、偶者一也、と有るに當りて云る說なり、是奇數と成るものの三、偶數と成るものの一、此は奇偶三增倍の偏倚なり、豈これを公正の立法と云むやと言るにて知べし、そは信に此說の如く、偏倚なるが故に、試みに蓍を執りて、四象の過不及を驗するに、奇數の出ること甚多く、偶數の出ること十中の三に在りて、三奇の者陽、二奇一偶の少陰おの〳〵二十反出る中に、二偶一奇の少陽の出ること十三反に過ず、三偶の者陰出ること僅に一二反なり、是を以て乾卦の出ること常に多く、坤卦の出ること甚希なり、然れば其所屬の卦々の出るにも、過不及あること、推て知るべし、古今の易學者流、この議なきは、論ふに足らず、四十九策と定めし姬昌は更なり、此を傳へたる孔丘氏も、此に心著さざりしは何ちふ事ぞも、然るに此人、四十九策の非を辨へたる說は宜なれど、又別に、九は八の誤字なりと言ふ說を立て、其言に、四十八策の用數にては、初變に、左策を揲へて一を得れば、必ず右の策より二を得て、掛一の策と三合して、四策の奇數と成る、これ奇數を得るの一なり、或は二を得れば、必ず右の策より一を得て、掛一の策と三合して、四策の奇數と成る、これ奇數を得るの二なり、或三を得れば、必ず右の策より四を得て、掛一の策と三合して、八策の偶數と成る、これ偶數を得るの一なり、或は四を得れば、右の策より三を得て、掛一の策と三合して、八策の偶數となる、これ偶數を得るの二なり、是奇數と成るものの二、偶數と成るものの二なれば、奇偶等分にして、十有八變中に隻半の冗策なく、毫髮の支吾なく、眞に至正の筮法なりと云り、これは前說と共に、其門人松井暉星と云ふ人の著せる、象變辭占と云ふ物に見えたり、此は古今の易學者流の說等の中には卓越たる說なれど、仍十有八變の先入、その固疾と成りて、彼四字の揲入は更なり、掛字は卦字の僞字なる事をも辨へず、別にかく臆說を工夫して、本の煩勞なる筮法に從つゝ、無證にこの新說をなも立たりける、其は此本書に、四十八策の本據を云る說に、古傳云とて、夏には三十八策を用ひ、殷には四十八策を用ふと、四十八策は勿論なり、三十六策にても筮すべし、四十九策にては斷然として筮すべからずと言へり、然れど四十八策の事は、古書にも絕て證文有ことなし、然れば此は上に引たる通玄及玉海などに、四十五策と有る由を、途にきゝて聞誤れるか、或は杜撰かの二つを出ず、然ればこそ古傳云とて、書名をば擧ざりけれ、其道に取りては、然上の重き事なるに、然る

讖斷をなしも爲べき事かは、僞しか新說を立つゝも、其筮法の勞煩しく、かつ迂遠にして、急卒の事に施用し難き事をば自知せるが故に、十八變の筮を立る長き間には、自然に神氣一致せず、惑亂妄想の發する事あれば、其代りに用ふる由にて、圖子とて、表裡に初二三四五上の字を刻み、朱と藍とを刻たるを十八箇作り、そを擲て、本卦及び之卦を索むる事をしも、吾も用ひ、門人らにも傳へてぞ有ける、此は必かの擲錢、また靈棋などの法よりや思ひ著けむ、其圖子と云ものゝ、或人その傳を受たるを、實に見たる事あり、然して彼擲錢法の靈をば、甚く斥けて、大切至極の天命を請ひ、鬼神を驚かし率る事に、兒戲玩具に等しき所爲にて、不敬傲慢の至なり、不敬無禮なる時は、鬼神感格せず、感格せざれば、其卦驗ぜず、何の用をか爲む、聖人是が爲にこそ、蓍筮の法を立給へれ、其他種々の擲卦法あり、と言へども、都て取るに足すと、門人その違說を記せるは、何なる事にか、予を以て是を讀れば、圖子は更なり、十有八變の筮法し、見識に尊くこそ學はるれ、然れども此達富、及び其門人卑屈ばかり、易理を具し、繁雜例議の法なし、辨へ知たる人はまた無くなむ、また是に就て按ふに、近く實曆の世頃に、平澤常矩と云る人あり、此人の言に、繫辭傳なる十八變の筮法を、孔子の言と爲れど、看來るに、變營數次にして、假頭辨じ難く、急卒の際いと便利ならず、且駐路錯亂して、聖人の全文に非ず、疑はしき者なり、次に擲錢法、心易法、また取捨なくは有べからず、今や年來これを試みて、其一定據るに足ざる事を悟る故に、古法を斟酌して、自己の發明を加へ、別に一家の法を立つ、惟易の活法に契ひ、應驗の過なきに賴る、世の易學者、或は予を扣きて蜂起すとも、是に答ふるに詞を以てせず、直に蓍を立て、其應驗を示さむと言へり、此は其著せる卜筮經驗と云ふ論に見えたり、十有八變の筮法を看破せる見識の高きこと、古今に類なく、是また易學者流中の一傑人にぞ有ける、斯て其筮法に、五十蓍を執り、其一策を取て、格の中刻に置て、虛一に象どり、四十九策を、手に信せて中分して二と爲し、右の一分を、格の右の大刻に置き、其中の一策を取りて、左の小指間に掛け、左手の一分を、右手を以て、四々四々と揲へ、八除して其奇策一を乾とし、二を兌とし、餘は之に效ひて、是を上卦とし、再總數を合せて、前式の如く、其奇策を見て下卦とし、其變爻を取るには、復綜合して、三々三々と揲へ、六除して奇策の數を以て、初より上爻までの六位に當て、一爻變を作れり、是世に謂ゆる略筮法なり、此は其著はせる卜筮業師と云ものに出せり、然して其卜筮經驗には、初

錢卜

二三のみな變すと返す返す論へり、松井暉星が此筮法を蔽れる說に、是變爻の法にては、一生涯に幾千万筮を爲すと雖ども、一卦として不變の卦に遇ふこと無く、かつ固より易道は變化を尚む事なる故に、二爻變もあり、又は三爻四爻五爻もあり、六爻皆變の卦もありて、是易の變易爻易たる所以なり、然るに此略筮にては、卦ごとに必ず一爻變に局れる法なるを以て、不變の卦と二爻以上の變と云ふ者は、絕て有ことなし、按ふに此筮は、邦にて、感動象數易法の取援ひは、一爻變の法なりけるを論りては、擲錢法に轉じ、其を我邦に傳へしを、著筮に移し轉じて、擲八除の法と爲たるなり、然ればこそ上卦より卦を起せり、是感動易の道法なれば、なり、尋でまだ一人有りて、其法に據りて、下卦より先に卦を設くる法に爲たるが、卽今の俗筮式なりと言るは、實に然る事の論ひなかりし、抑是徒の然る筮法どもよ、凡て觀易の眼高からず、姬昌が偶文に欺かれて、其を批正參考する事を知らず、强ひて努めて苟ひ出せる曆法等にて、太昇神聖の古面目には都て契はぬ事なれば、一切に掃除して、行ひ用ふる事なかれ。

〔天保十五年版本朝年代記〕當用八卦錢占ひ

先吉凶を占ふとき、信心して元亨利貞を何べんもとなへながら、せに三錢を手に持ち、手のうちにて上下ませ合せ、そのまゝ一せんづゝ、たてにならべて、せにのうらおもてを見わけ、上の圖に合せて下の斷りをみるべし、

卦ごと末へ願望、待人、失物、方角、病事等の斷をしるす、

◎◎⊛離　南　目△　火　赤　中女

此卦の離は易にはなるとあれば、したしき中か、住所かにはなるゝほどのくらうあるべし、又あきらかといふ心もあれば、万事たゞしくするときは、天のめぐみをうけて仕合よかるべし、何ごともつゝしみてよし、　願望かなふべし　待人きたる　失物うせずかくさず　方角にしきた　病事よし

⊛⊛⊛坤　西南　腹□　土　黃　母

此卦の坤は陰の卦なるゆゑに、陽にしたがふなり、万事人にしたがひてよし、尤人の世話事くらうあるべし、平生おごるか、目上の人に万事ふそくの心有ば、あしく口せつごと有べし、正く愼て

よし　願望さはりありてわろし　待人きたる　失物ひとかくす　方角みなみきた　病事ながびく

⊕◎◎兌西口舌金少女白

此卦の兌は羽の金をつかさどるゆゑ、ものごとつるぎをいだくごとく、心づかひ争ひごとくらう有べし、また目高き人にまじはる心あらば、立身する事有べし、つゝしみ万事人に従ひてよかるべし、願望かなへどもおそし　待人きたらず　失物人とりかくす　方角ひがしきた　病事たいじ

◎◎◎乾〇西北首金父白

此卦は乾にして天なり、物ごと正しくすれば、天のめぐみありて、望み事もかなふべし、身もちおごりがましく正しからざれば、天ばつをかうぶる、大きにあしく、万事何事もつゝしみてよし、願望さはりあればおそし　待人おそし　失物かくす　方角にしひがし　病事よし

⊕◎⊖坎〇北耳水中男黒

此卦の坎は北の水を司どり、水下へくだりやすく、上へわたりがたし、其ごとくばんじひかへめにして、すゝむによろしからず、苦労おほし、もつとも心正しくすれば、水のおのれと澄て、天へつうづるごとく望も叶べし、願望なにごともまちてよし　待人きたる　失物うせず尋ねてよし　方角きたにし　病事おそし

◎⊕⊕艮△東北手土少男黄

此卦の艮は、易に万物のおはりはじまるとあれば、ばんじくらう多し、身上その外ものごとあらためてよき心有、男は衣服、女はまゆをおろしてよし、又はゑんだん事は彌よし、おやきやうだいのくせつ、何事もつゝしみてよし、　願望さはりありてとゝのはず　待人きたらず　失物人と

り又人にわたす　方角みなみにし　病事だん〳〵よし

⊕⊕◎震〈東足〉木長女〈青〉

此卦の震は雷なりとあれば、万事こゝろたゞしくつとむるときは、何ごともさいわひきたり、世に名をひゞかす心あり、身もち正しからざれば、人をおどろかすほどの災事起るなり、万事つゝしみてよし、　願望何事もかなふべし　待人きたる　失物うせずかくさず　方角きたみなみ

病事おそし

◎◎⊕巽〈東南股〉木長女〈青〉

此卦の巽は易に順なりとあれば、惣じて目上の人にしたがひ、下をいたはり、親るいむつまじくすれば、天のめぐみふかく、何事もよきなり、つゝしまざれば天利にたがひ、思ひよらず、わざはひあるべし、　願望すこしはかなふべし　待人おそし　失物うせずかくさず　方角にしきた

病事すこしづゝよし

〔一話一言二十〕一、村云、錢卜者、以三錢卜之、則二錢向陽者吉也、

〔唐賢絕句三體詩法一〕江南意　于鵠

闘向江邊採白蘋、還隨女伴賽江神、衆中不敢分明語、暗擲金錢卜遠人、

〔三體詩絕句鈔三〕江南意略〇中

賽、略〇中 事文類聚前集卅八、卜易爻卦、以錢擲、以甲子起卦、村云、以三錢卜之、二錢向陽者吉也、

〔琅耶代醉編十四〕卜錢

擲卦以錢、起於嚴君平、唐詩、岸無纖女支磯石、井有君平擲卦錢、略〇中

筮易以蓍、古法也、近世以錢擲爻、欲其簡便、要不能盡卜筮之道、自昔以錢之有字者爲陰、無字者爲陽、故兩背爲折、二畫也、兩字爲單、一畫也、朱文公以爲、錢之有字者爲面、無字者爲背、凡物面皆屬陽、

占例

背皆爲陰、反舊法而用之、故建安之諸學者悉主其說、或謂古者鑄金爲貝、曰刀曰泉、其陰或紀國號、知錢陰之有款識也、一以爲陰、一以爲陽、未知孰是、〈註錢說論〉

〔玄同放言 三中〕第三十六人事　狄青が錢卜

小說に載す、桶挾間之役、信長夜謁熱田神祠、禱之曰、敵兵百萬、旣陷數城、勢呑中國、士卒戰栗、不知謀所出、自非假神威以逆擊之、豈可得克大敵乎哉、因顧軍士曰、孤欲以錢卜試雌雄焉、今所投數錢皆形、〈俗謂錢面爲形〉孤必大捷、若無、〈俗謂錢背爲無〉則請和焉耳、此明神之心也、祝了、手自擲數錢於幣壇、使左右抗火視之、乃其錢皆皆面、時神宮中忽聞鳴鏑、士卒感激、勇氣百倍、信長亦大喜、明日進兵、大戰于桶挾間、一擧獲敵將義元首級、蓋信長好詭計、竊用兩面錢獎士卒、又以鳴鏑誘衆心而已、是謂兩面錢卜云、〈許筆談、無錢卜鳴鏑事、蓋其事出於小說也、〉この小說は、宋の仁宗の時の名將狄青が事と相類せり、

〔逸史 七〕夏四月〈○文祿元年〉延議、遣嚴島祠、〈○豐臣秀吉〉駐師禱之、令左右取錢一緡、祝曰、投而多面、必得志矣、揮手一擲、每錢皆紅、師衆相傳歡呼、大閤大喜、隨納錢于神庫、蓋預粘合二錢、作兩字云、

逸史氏曰、豐公假襲狄青故智、然公之不學、豈知史冊上有是事哉、蓋英雄一時機鋒、偶然有暗合焉爾、亦可以爲一奇矣、

〔類聚國史 三十六 帝王十六〕延曆廿五年三月辛巳、天皇〈○桓武〉崩、癸未、以山城國葛野郡宇太野爲山陵地、西北兩山有火自焚、丁亥、日赤无光、大井、比叡、小野、栗栖野等山共燒、煙火四滿、京中晝昏、上以爲所定山陵地、近賀茂神、疑是神社致災火乎、卽決卜筮、果有其祟、上曰、初卜山陵、筮從龜不從也、今災異頻來、可不愼歟、卽自聽所、火災立滅、

〔宇治拾遺物語 一〕旅人のやどもとめけるに、大きやかなる家のあばれたるがありけるによりて、こゝにやどし給てんやといへば、女ごゑにて、よきこと、やどり給へといへば、みなおりゐにけり、やおほきなれども、人のありげもなし、たゞ女一人ぞあるけはひしける、かくて夜あけにければ、

物くひしたゝめていで、ゆくを、此家にある女いできて、えいでおはせじ、とゞまり給へといふ、こはいかにととへば、をのれが金千両をひ給へり、そのわきまへしてこそ出給はめといへば、この旅人ずんざどもわらひて、あらじや、さんなめりといへば、このたび人、志ばしといひて、又おりゐて皮子をこひよせて、幕引めぐらして、志ばしばかりありて、此女をよびければ、出きにけり、旅人とふやうは、この親は、もし易。の。占。といふことやせられしととへば、いざさや侍けん、その志給ふやうなる事は志給きといへば、さるなるといひて、さてもなに事にて、千両金をひたる、そのわきまへせよとはいふぞととへば、をのれがおやのうせ侍しおりに、世中にあるべきほどの物などえさせおきて申しやう、いまなん十年ありて其月に、こゝに旅人来てやどらんとす、その人は我金を千両をひたる人なり、それにその金をこひて、たへがたからんおりは、うりてすぎよと申しかば、今までは親のえさせて侍し物を、すこしづゝもうりつかひて、ことしとなりてはうるべき物も侍らぬまゝに、いつしか我親のいひし月日のとくこかしと待侍つるに、けふにあたりて、おはしてやどり給へれば、金をひ給へる人なりと思て申なりといへば、金の事はまことなり、さることあるらんとて、女をかたすみに引てゆきて、人にもしらせで、はしらをたゝかすれば、うつぼなるこゑのする所をくはこれが中にのたまふ金はあるぞ、あけてすこしづゝとりいでゝつかび給へとをしへて出ていにけり、この女のおやの易。の。占。の。上。手。にて、此女のありさまをかんがへけるに、いま十年ありてまづしくならんとす、その月日、易の占する男きてやどらんずるとかんがへて、かゝる金あるとつげては、まだしきにとりいでゝ、つかひうしなひては、まづしくならんほどに、つかう物なくてまどひなんと思ひて、しかいひをしへ死ける後にも、この家をもうりうしなはずして、けふをまちつけて、この人をかくせめければ、これもゑきの占する物にて、こころをえてうらなひいだして、をしへいでゝいにけるなりけり、ゑきのトは行すゑを掌のやう

にさしてえる事にてありけるなり、

〔殿暦〕嘉承二年二月八日乙丑、今夜有夢想、仍陰陽師泰長を召天令占之處、病事口舌也、仍閉門、雖然外人來、件夢女房見也、

〔台記〕天養元年五月九日己未、召阿闍梨隆賢、爲念少納言通憲疾、令修千手供、於本房修之、是且爲易筮師、且爲當世才士、余深傷之故也、但不可令人知之、不可告通憲之由、仰含阿闍梨了、余又滿千手陀羅尼二十一返、通憲自熊野路受此病、此阿闍梨年來熊野人功、仍殊所仰也、陰陽師安倍泰親來曰、通憲疾病、余問曰、筮吉否、對曰、遇兌☱☱之坤☷☷、余占曰、不死、病必愈矣、非唯病之愈而已、又逢君之恩、而勿憂已、今所勤四爻、仍以兌坤兩卦大意占之、就中逢君之恩、偏據坤卦之意、

久壽二年五月十七日癸亥、召源數、披泄林雜占病部、問其不審、差賴業送源數筮於信西、爲復讎也、

廿日丙寅、晩頭賴業歸來曰、信西申曰、御推條有二失、是坤六三入墓事、同爻幷小殺事也、

〔太平記十一〕諸將被遣早馬於船上事

都ニハ、五月(〇正慶二年)十二日、千種頭中將忠顯朝臣、足利治部大輔高氏、赤松入道圓心等、追々早馬ヲ立テ、六波羅已ニ令沒落之由、船上へ奏聞ス、依之諸卿僉議アリテ、則還幸可成否ノ意見ヲ被獻、時ニ勘解由次官光守諫言ヲ以テ被申ケルハ、兩六波羅已ニ雖沒落、千葉屋發向ノ朝敵等、猶畿内ニ滿チテ勢ヒ京洛ヲ呑メリ、又賤キ諺ニ、東八箇國ノ勢ヲ以テ日本國ノ勢ニ對シ、鎌倉中ノ勢ヲ以テ東八箇國ノ勢ニ對ストイヘリ、サレバ承久ノ合戰ニ、伊賀判官光季ヲ被追落シ事ハ輒カリシカ共、坂東勢重テ上洛セシ時、官軍戰ヒニ負テ、天下久ク武家ノ權威ニ落ヌ、今一戰ノ雌雄ヲ測ルニ、御方ハ纔ニ十ニシテ其一二ヲ得タリ、君子不近刑人ト申事候ヘバ、暫ク只皇居ヲ被移候ハデ、諸國へ綸旨ヲ被成下、東國ノ變違ヲ可被御覽ヤ候ラント被申ケレバ、當座ノ諸卿悉ク此議ニゾ被同ケル、而レドモ主上猶時宜定メ難ク被思召ケレバ、自ラ周易ヲ披カセ給テ、還幸ノ吉凶ヲ著

筮ニ就テゾ被御覽ケル、御占師ノ卦ニ出テ云、師貞、丈人吉無咎、上六、大君有命、開國承家、小人勿用、王弼注云、處師之極、師之終也、大君之命、不失功也、開國承家、以寧邦也、小人勿用、非其道也、ト注セリ、御占已ニ如此、此上ハ何ヲカ可疑トテ、同二十三日、伯耆ノ舟上ヲ御立有テ、腰輿ヲ山陰ノ東ニゾ被催ケル、

〔南畝莠言上〕足利學校易の事

足利學校にある所の歸藏抄は、易の王弼注を、片假名にて講義を書しものなり、首に周易要事記といふ書あり、諸式を細に誌し、和漢易學傳來の事など委載たり、尾卷の末に、文明丁酉十月二十一日始之、十一月二十一日終之、滴翠亭子と志るし、莽萬と云篆印あり、其講義の中に、間々當時の事を說し所あり、需の上六の條に云、鎌倉ニ易ヲ聞時、我師ヲバ喜禪ト云タゾ、其師ヲバ義臺ト云タゾ、其喜禪ノ語ラレタハ、我易ヲ傳ル時ニ、鎌倉持氏ノ亂ニワウゾ、其時揲蓍、天下ノ亂ヲ占フ時、コノ需ノ上六ニワウゾ、有不速客三人來云々、自爾以來、不見其可否ゾ、後ニ鎌倉ノナリヲ御ランゼヨト云ハレタリ、又其後、重氏出頭ノ時、足利ニヲイテ易ヲ講ズル時、持氏ノ時ノ筮ノコトヲナタスルニ、其占符節ヲ合セタルガ如シ、其故ハ、重氏出頭、兄弟三人不速來テ重氏ヲ扶タリ、弟ハ美濃ノ土岐ニ養セラレテ、雪ノ下殿ト云タ一人也、聖道デアッタゾ、又ノ弟ハ、僧ガ一人アッタゾ、又重氏ノ一ノ兄ガ美濃ニアッタゾ、其ハ俗人ゾ、以上三人來テ、重氏ヲ扶タゾ、重氏ツヽシミテ居ラレタニヨッテ貞吉也、今マデ無爲ナルハ奇特也、易ヲ信ジテ蓍ヲトラバ、違フコトハアルマイゾとあり、此のたぐひなりと新樂閑叟の話なり、

〔土佐物語七〕蓮池戸波落城之事

土居治部、其頃蓮池の城下妙蓮寺といふ寺に行、住僧にむかひ、某が當卦の吉凶を考賜り候へと云ければ、住僧頓て蓍をとり出し、掛扐過揲の後、治部に申さるゝは、風雷益の卦を得て候、必功

名成立あるべし、夫益の卦たる、震巽之二卦相合し、風雷の勢変々相助け、日々に進て止ざるの心あり、大川を渉り、往所有に利ありと、辭にみえ候、されども其中、善に遷り過を改は、益事の大なるものにて候、御覺悟有べしとぞ申されける、治部、急度心づき、熱度川は、當國一之大河なり、此川を越行て、立身の方便あるべし、熱當時之變を案するに、一條殿〇一條康政行跡人法に違ひ、威勢日に隨ひて衰へ、長宗我部は、月を逐て繁昌すれば、終には一國の主となるらん器量也、既其積德而不寬玉潤者、不知覆龍之所歸也とかや、當家を去て秦家〇秦元親につかへば、善に遷、過を改るの理ならんと案じすまし、便宜を窺ふ所に、左京進より使來りければ、大きによろこび、彌藤次新十郎を伴ひて、吉良の城へぞ立越ける、

〔總見記七〕新公方〇足利義昭濃州御動座事

公方ハ、信長ノ御請奔走ノ次第、不斜御悦喜ニ思シメサレ、早々濃州御動座有ルベケレドモ、猶戰國ノ時節、人ノ心イブカシケレバ、安否大切ノ義ト被思召、御思案決定ノ爲ニ、清信ニ被仰付、一栢老人ノ門弟大華ト云易者ヲメシテ、卜筮ヲ執ラシメ、吉凶ヲ御覽有ケルニ、臨ノ節ニ行ニ當テ、五爻ノ兆ヲ得タリケル、大華辭文ヲ引テ申上ケルハ、六五ハ知テ臨大君ノ宜也、吉也、象ニ曰、大君ノ宜ハ、行中也ト云々、卜筮吉兆ヲ得タマフ上ハ、御利運疑有ベカラズ、但シ御身ニ大君ノ知アラズ、中行ノ德ナクンバ、其慶アリガタカルベシトゾ申シ上ケル、新公方、御大慶ニテ、彌御思案ヲ定メラレヌ、

〔毛利文書百十三〕裏書 三小吉

謹筮　輝元公、ハギニ城ヲ可取立申吉凶之占、

遇  臨　之  比

彖曰、臨剛、浸而長、說而順、剛中而應、大亨以正、天之道也、至于八月有凶、消不久也、

象曰、澤上有地臨、君子以敎思無窮、容保民無疆、

彖曰、比吉也、輔也、下順從、原筮元永貞无咎、以剛中也、不寧方來上下應也、後夫凶其道窮也、

象曰、地上有水比、先王以建萬國、親諸侯、

慶長九年甲辰正月吉辰　　前南禪前學校閑室叟勘之 囲囲

雙卜筮

本命癸丑歲、某欲居於萩城、始終吉凶之卜、

宗廟　路　大門　宅中門　宅　宅基

奴婢　子孫　妻財　兄弟　宅母　宅長

地　井竈　門　爲門　人　宅

玄武　白虎　螣蛇　勾陳　朱雀　青龍

丙寅木　丙子水　丙戌土　丁丑土　丁卯木　丁巳火

飛丁丑土



損

伏丙申金

官鬼　妻財　兄弟　兄弟　官鬼　父母

九二利貞、征凶、弗損益之、　象曰、九二利貞、中以爲志也、

上九弗損益之、无咎貞吉、利有攸往、得臣无家、　象曰、弗損益之、大得志也、

慶長九年甲辰三月十三日甲子　　　筠溪翁書

損卦納甲

鑑云、堅石見玉之課、堀土爲山之象、

解云、損者減省也、澤下山上損、兌澤而益、艮山、損下益上、占者遇之、在前見損、向後有益、多占春吉、春占夏吉、夏占多吉、而損益相因也、

彖曰、山高卽聽、木大則折、損在於己、益他爲悅、去懲忿怒、窒除私慾、損之又損、斯乃爲應、

象曰、山澤損時須損己、益時返是益他人、盤桓度日長如醉、有惡來求且莫親、六甲子旬本宮旺吉、

日六神斷甲鬼合靑龍勾陳世、

十干詩斷　望斷浮雲事轉虛、相逢陌上意皆殊、當時許我平生事、及到終時不似初、

九二平、勿益方无損、交情戒妄求、居貞元自吉、躁進反生憂、

上九大吉、惠而无所費、的損得其宜、人樂來歸己、安然福祿隨、

一日辰子逢世爻、土之克無補、雖然生身木應木吉、上九爲用爻、

一日辰子與世爻、丑天地合、　戌卯同卦中是之

一子日丑爻動、持世皆吉、

一靑龍吉宅也　六爻、土多則財物正、

一爻上第三爻爲正宅、勾陳臨則田園損、

一內生外吉

一勾陳持世如羅城、左挾右提、田心平地中住、四畔有山岡、正面前三上如狗伏、又主回塘邊住、

損は、我身をばそんをして、人のために德つく樣にするなり、我身のためならば、少もよき樣にせず、只人の爲をよくする卦なり、然共上九のあたり處は、我身のそんもゆかぬ樣にして、人の德のつくごとくするなり、其はたとへば、海邊にすみつきたる者を、山の奧へやり、薪などとりつけたる者を海邊へやりなどすれば、何もその便をゑず、薪とりをば山中へやり、漁人をば海邊へやり、それ〴〵のたよりをうるごとくにすれば、目かけにはなり、あながちに物をはやらぬ共、其人の

德はつくなり、是は惠而不費と孔子も被申候、如此之御心もちありて、彼處に御居住候はゞ、人民富貴あるべし、又陽剛のつよきむねを御もちあれば、いよ／＼人付きたがひて、他國の者までも可來候、得臣無家と申事は、遠近內外共に人歸服する事を申なり、九二のあたり處も吉なり、是は奧意なり、自然は如何體事出來候共、我分際を能まほりてみだりにすゝまざれば吉なり、

〔先哲叢談後編七〕片岡如圭〇中略

明和甲申〇元年之春、如圭東遊江戶、寓于馬喰街旅舍、隣街有賣紅舖、曰芳村屋、其家頗富贍、時人呼稱江戶芳村紅、自宮中姬嬪、至市井妓婦、凝粧樣者、無人所不買、其價亦貴矣、聲馳傳於四方、極一時繁鬧、如圭嘗欲贈之京師所親、至其肆買之、獨立店頭、自識其家豪富盛昌不足以賴矣、後應旅舍主人請、至於芳村屋、屢筮疑事、其家甚信之、先是擧子皆夭、僅存一兒、名定吉、時三歲、請筮之命修短、乃筮之斷曰、剝命蹇跛、不越七歲必死於難、且告其產業不可以長、遠慮後事、父母遑然自失、如圭曰、有無長短皆命也、所貴唯先識耳、而還後其家使善相者觀考之、相者賀曰、貴兒容貌、鶴目龜鼻、不足以爲憂、是必華顚而耆壽也、父母大悅、其管奴僮、爲之傾聳曰、吉凶由人、不足泥拘於筮者言、後兒七歲、與群兒戲、競走水涯、蹶倒而死、父母抑鬱而爲病、續沒矣、其家散亡、不留影跡、自是如圭之名、益傳播於世云、

〔續近世叢語七術解〕某侯欲聘新井白蛾、意未決、親書新井白蛾四字、納之于匣中、使白蛾筮之、白蛾曰、是天下英物、然器大、不中用、於是議格、

〔維新史料碑文〕故側用人兼學校奉行藤田君〇東湖墓碑

安政二年十月二日、我水戶側用人兼學校奉行藤田君、歿於江戶藩邸、兩公悼惜、命歸葬鄉里、明年景山公親題其碑、曰表誠、命臣延光〇青山爲之文、〇中略哀公病篤、繼嗣未定、當路頗有異論、物議沸騰、一國寒心、君憤激將赴江戶、筮之不吉、〇〇〇投策曰、臣子赴難、何問吉凶、遂與諸同志馳至江戶、謁支藩守山侯、論

繼嗣事、言甚切至、侯許諾、數日公薨、有遺命、傳國景山公、君聞之、卽時上途、還江戶、

〔三代實錄 十三 清和〕貞觀八年九月二十二日甲子、夏井天性聰敏、臨事不滯、恩寵優渥、任用轉重、內外機務、多所輔益、○中略 又善射覆、文德天皇與宮人爲藏鉤之戲、一鉤藏在百手之中、密令夏井筮之、探著布卦、曰、有少女著靑衣、以白花插首者、鉤在其左手中、帝乃探得大悅焉、

〔倭名類聚抄 四 術藝〕藏鉤 三秦記云、昭帝母鉤弋夫人、手拳而國色、先帝寵之、世人爲藏鉤之法、是也、

〔隋書 三十四 經籍〕易射覆二卷、易射覆一卷、

〔漢書 六十五〕東方朔、字曼倩、○注略 平原厭次人也、○中略 上○武帝 嘗使諸數家射覆、師古曰、數家術數之家也、於覆器之下而置諸物、令闇射之、故云射覆、數音所具反、覆音芳目反、 置守宮盂下、射之、皆不能中、○注略 朔自贊曰、臣嘗受易、請射之、○注略 迺別蓍布卦而對曰、○注略 臣以爲龍又無角、謂之爲蛇又有足、跂々脈々善緣壁、是非守宮、卽蜥蜴、○注略 上曰、善、賜帛十匹、復使射他物、連中、輒賜帛、

〔朝野群載 十五 陰陽道〕賀茂忠行奉勅試占、以水精念珠、

占、二月七日壬午、時加午、小吉臨卯爲用、將朱雀、中徵明、天空、終大衝、大陰、卦遇曲直、

推之、火色有中、不能連燒、水石有飾、不能衣濕、方圓其母唯一、總圓其兒餘百、宛如雁列連々、懸手鋼身、桑林吐絲、若串玉系、空胎露原漆底歟、大分是三寶物秘密眞言具、定知、水精誦珠、貫朱系、入八角匣歟、

天德三年二月七日 勘申賀茂忠行

〔今昔物語 二十四〕保憲晴明共占覆物語第十七 ○文略

〔長秋記〕大治四年五月廿日丁酉、新院○鳥羽御方有覆物御占、覆以將棊馬、其數十二也、新院如指令占御、依前生戒力、受人主位給、依是諸事如此歟、主典代通景進占書一帖、號靈棊經、以管占之、唐人自筆也、兄通國朝臣於鎭西傳學云々、 六月九日丙辰、申刻參院、新中納言、宰相中將別當候御前、有覆物

卜、先々新中納言申碁子桶符合云々、次覆物卜、下官以珠爲飾、金銀相交、其中空、其色黑、是又有數木也、若是御念珠歟、又符合、

〔明月記〕正治二年九月八日、參上、參南殿、晴光參語云、昨日院〈○後鳥羽〉忽有覆物、御分已以高名云々、入夜隆信朝臣被來、談和歌事也云々、猶以珠有御感云々、可謂面目、

射覆物

占、今日庚申、時加申、河魁臨卯爲用、將六人、中太一、大裳、終神后、螣蛇、卦遇聯茄三光、推之、以糸帛爲緒、非印鑑、有光色、水器、次其像、類龜甲、虫三百六十、靈龜爲之長、在北方、終得神后、是也、

正治二年九月七日　　　　權陰陽權博士安倍晴光

霖雨御占沙汰之間、院御所、〈春日〉召殿公口間之事畢、爲右中辨〈長房朝臣〉奉行、被出覆物、御硯龜入檀紙宮〈金貝摺文字木、松鶴蒔繪也〉八組被結上、而在宣以下、覆物御占久絕了、末代者、難占得之間申止了、而猶可被申之旨有仰之間占之、在宣朝臣、資元朝臣云々、金玉之類也、泰忠以土金和合成、入水物也、色黃云々、家元金玉口也、其員六若三、有貞念誦云々、次云、在宣、資元、神妙占寄之、晴光、泰忠、感思食云々、擧之眉目、道之冥加、何事如之哉、退傳承也、次云、件御手宮、以錦九折立、仍糸帛類見歟、

覆推

〔小右記〕長和二年九月一日庚寅、今朝可禁外行之物忌、而依可解除、令覆推輕重、光榮朝臣占云、輕者、

〔經信卿記〕承曆四年五月八日庚午、先是春宮大夫著陣、被行軒廊御卜、〈伊勢大神宮燒亡之次、納酒殿御體燒失、是不知何用、仍可被新造歟否由被卜也云々〉、神祇官卜申可被新造、陰陽寮占申被新造不快、春宮大夫被奏御卜、仰云、如此官寮御卜相違之時、被覆推乎、上卿被問之、大外記定俊申云、齋宮卜定時、或被覆推之例所候也、又左傳求告三度卜之者、上卿被奏此由、仰云、可覆推否之由、可令定申者、此間民部卿〈奥座〉春宮大夫〈端座〉左衞門督、大將、新中納言宗俊、相公宰相中將、別當參入、各申云、被覆推例候者、何事候乎、戶部被申云、件事尤

書籍

大事也、使神祇官被祈申後、可被覆推歟、上卿被奏此旨仰云、然者先使神祇官祈申者、上卿召神祇官、被仰其由、次官寮罷出了、

〔殿暦〕嘉承元年正月廿六日己未、依主上〇堀河不快、被行易御占、内山君快尊占之、以件御占給江中納言匡房、令覆推、申云宗廟祟云々、

〔玉海〕建久四年十二月七日庚子、秉燭参内、宿侍、依明日除目也、昨今公家御物忌、然而覆推之處無咎云々、加之乙日夕也、仍可有除目、然而朝間外宿、猶可憚歟、仍所参入也、

〔日本國見在書目錄〕易家百七十七如本

歸藏四巻晋太尉参軍薛貞注　周易十巻後漢鄭玄注

右隋書經籍志所載十三巻、

周易十巻漢魏郡太守京房章句　周易十巻魏尚書郎王弼注六十四卦六巻、韓康伯注繋辭以下三巻、王弼又撰易略例一巻　周易十二巻東晋秘書郎張璠集廿二家解　周易八巻陸績經注　周易三巻冷泉院　周易副象二巻馬叔撰注　周易六十四卦巻賛一巻　周易講疏十巻陳諮議参軍張譏撰　周易講疏十二巻國子祭酒何妥撰　周易異義十巻弘農劉道字修禮撰　周易通義十巻　周易正義十四巻唐國子祭酒孔穎達撰　周易私記十四巻元名先生撰　周易私記一巻古豐師撰　周易論二巻晋潯陽大守阮渾撰、冷泉院　周易流演一巻　周易義記九巻孫氏撰　周易新論十巻蜀郡博士正議大夫武陵陸弘道撰　周易略例一巻武守節注　周易許氏扶抑一巻徐鄭孔時解　周易略例一巻唐邢璹注　周易通問一巻京元處　周易難問一巻　周易譔論一巻冷泉院　周易複疑決一巻冷泉院　周易譯名十二巻冷泉院　周易音一巻徐仙氏撰　周易判卦略例一巻冷泉院　周易贊一巻　周易精微賦一巻劉道撰　周易集音一巻冷泉院〇中略

五行家九百十九巻私略之呪禁　符印　五行　六壬　雷公　太一　易　遁甲　式　相　仙術　〇中略

周易命期一巻釋氏美撰　易髄三　周易要決一巻雷居　霊易一巻[illegible]方　易林十八巻右衛京兆郡璋等七人雑

筮具

撰　周易林二植氏　周易新林占三郭璞撰　周易莖四　周易亭氏占九　顏氏易占三

〔通憲入道藏書目錄〕一合第一櫃

周易一部十卷九箇卷缺　同注疏經一部十卷　周易副象二卷上下　周易集注二卷四五

易通統卦驗玄圖一卷　周易略例二卷　周易音義一卷

〔幸庵夜話〕一蓍。は日本にては、常州筑波山に生ず、土凝て龜の甲の形也、目口手足も龜の形也、此甲に蓍十三本宛生ず、高サ三尺計、キセルのラウ程のふとさ也、葉は野菊の葉の樣也、此根は芹などの根の樣にして、かの甲に生ずるを、龜ともに掘て取也、龜は瓦抔の燒たる同じ事に、急度龜の形也、尤幾所にも生ず、唐にても蓍の生樣如此、日本にては筑波山也、

〔和漢三才圖會十五技藝〕筮(めど)蓍(メドハギ)　詳山草類

按、筮者、用蓍草之莖五十、作易爻以占吉凶、一根五十莖者佳

〔和訓栞前編女三十二〕めど　新撰字鏡、和名抄に、蓍を訓せり、今めどはぎといふ是也、されどめどはぎは、酉陽雜俎にいふ合歡草にして、蓍にあらずといへり、又齊頭蒿をも筮に用るをもて、めどぎともいふ也、筑波山のめど木を用ゐる事もふるし、めどを妻夫の義とし、陰陽の名なるをもて、筑波山の產を用ゐる成べし、〇中略飛鳥井家の說に、蓍は秋花しろくうす紫に咲り、かはらたでとてまり草ともよめり、俗にやはぎ草ともいふと見えしは、めどはぎを指る也、

〔古算器考〕大易揲蓍、亦以一蓍當一數、則其來遠矣、蓍策所以決疑、非常用之物、故特隆重其制而加長、長則不可以橫、故皆縱列、惟分二象兩之後、掛一策以別之、使無淩雜、皆縱列也、又其數只四十九、故四揲以積其實數、共用專、專則誠也、

〔慶長日件錄〕慶長八年四月廿一日、周易御傳授之御道具、可申付之由被仰出、則御細工之大工召寄、寸法以下申付畢、　廿九日、易御道具共出來之由、大工告來之間、則勾當局へ參、道具共出來之由申

聞音

入、今度新調之物共、筮机一脚、長五尺、横三尺、高一尺七寸、（板ノ厚入分）供物机一脚、長五尺、横一尺、高二尺、小机二脚、（長二尺、横一尺、高一尺六寸、此小机ハ、硯紙板等可置用也、）黃漆紙板（横一尺五寸、竪一尺、）格、長五尺、高一尺、此尺いづれも周世の尺を用、周尺は今金の八寸也、（○繪圖略之）廿日、高尾ヨリ傳內來、作物所の細工人（三衞門）來、筮龜之樣子示之、五月廿六日、筮之御道具共、机大小四脚、格等也、以朱可致書付由被仰出、仍如左書付者也、

慶長八年癸卯夏、依今上皇帝周易御傳授、考舊規令新造之、

六月十二日、從禁中筮之御道具出來之由被仰下、蓍横格等被見下、

〔梅花心易掌中指南〕三聞聲聞音占例

凡聲ヲ聞、音ヲ聞テ占ニハ、聞タル聲イクツトカゾヘテ、八拂ニシテ上卦ヲツクリ、占フ時ノカズヲ加ヘテ、八拂ニシテ下卦ヲツクリ、總數ヲ合テ、六拂ニシテ動爻ヲトルナリ、或ハ風ニテ物ヲ吹タフシ、又ハ何物ニテモ上ヨリ落ル音、又ハ波ノ聲、風ノ音、又ハ人ノ噂サケブ聲ヲ聞、或ハ人來テ門戶ヲ擊敲ノ聲ヲ聞テモ、皆起卦可占吉凶者也、

〔梅花心易掌中指南〕三字ヲ占例（自一字至百餘字）

凡ソ字ヲ占フニ、字ノ數ヲ算テ占ナリ、如シ字數均トキハ、平半ニ分テ、半分ヲ上卦トシ、又半分ヲ下卦トス、如シ字數均カラザルトキハ、一字少キ方ヲ上卦トシ、一字多キヲ下卦トス、蓋天ハ輕ク清、地ハ重ク濁ルノ義ニトルナリ、

〔日本書紀〕二十七天智元年四月、鼠產於馬尾、釋道顯占曰、北國之人、將附南國、蓋高麗破而屬日本乎、

○按ズルニ、本書以下、其易占ナリヤ否ヤヲ、詳ニセザルモノ多シト雖モ、今便ヲ以テ此ニ收載ス、

〔續日本紀〕六元明和銅七年閏二月（○當作三月）丁酉、沙門義法還俗、姓大津連、名意毗登、授從五位下、爲用占術也、

〔日本紀略桓武〕延暦十六年七月乙酉、賜陰陽允大津海成絁五匹布十端、以占卜有驗也、

〔古事談六亭宅諸道〕花山院在位御時、令病頭風給、有雨氣之時ハ殊發動、爲方ヲ不知給種々醫療、更無驗云々、爰晴明朝臣申云、前生ハ无止行者ニテ御坐ケリ、於大峯某宿入滅、答前生之行德雖生天子之身、前生之髑髏、巖介ニ落ハサマリテ候カ、雨氣ニハ巖フトル物ニテ、ツメ候之間、今生如此令痛給也、仍於御療治者不可叶、御首ヲ取出テ被置廣所者、定令平愈給歟トテ、シカ〳〵ノ谷底ニトラシヘテ、遣人被見之處、申狀無相違、被取出首後、御頭風永平愈給云々、

〔台記〕久安四年七月十九日甲辰、感神院火災、時密令泰親占吉凶、占云、六月壬癸日、可有內裏燒亡者、此六月廿六日壬子、果有內裏火事、可謂希有事、凡泰親占、勝其兄父者也、又仰云、陰陽書云、占十而中七爲神、泰親之占、十之七八中、又其中不似他人、不恥上古事也、

〔續古事談五諸道〕祇園ノ社燒失ノ御時、四年久安ウラヲコナハルヽニ、陰陽師泰親ウラナヒ中テ云ク、六月壬癸日內裏燒亡アルベシ、六月廿六日壬子、土御門內裏ヤケニケリ、希有ノ事ト人イヒケリ、本文ニ云ク、ウラハ十ニシテ七アタルヲ神トス、泰親ガウラハ七アタル、上古ニハヂズトゾ鳥羽院仰ラレケル、

〔古今著聞集七術道〕後鳥羽院御熊野詣有けるに、陰陽頭在繼を召供せられけるに、每日御所作に千手經を被遊ける、件の御經を御經箱に入られたりけるを、取出されけるに、その御經見へず、いかにもとむれ共なかりければ、在繼をめしてうらなはせられけるに、いかにもうせざるよしを申て、猶よく〳〵もとめらるべし、あやまりていまだ箱の內に候ものをと申けり、其後又もとめられければ、御經箱のふたに軸つまりてつきたりけるを、え見ざりけり、叡感ありて御衣を給はせけるとなん、

〔源平盛衰記四〕盲卜事

大炊御門堀川ニ、盲ノ占スル入道アリ、占云言時日ヲ違ヘズ、人皆サスノミコト思ヘリ、燒亡ト聞ケレバ、此盲目何ク候ゾト問、火本ハ樋口富小路トコソ聞ト云、盲シバシ打案ジテ、嗚呼一定此火ハ是樣ヘ可來燒亡也、ユヽシキ大燒亡カナ、在地ノ人々モ、家々壞儲物共シタヽメ置ベキゾト云、聞者皆ヲカシト思テ、樋口ハ遙ノ下、富少路ハ東ノ端、ナシモヤハ有ベキ、イカニト意得テ、カクハ云ゾト問ケレバ、占ハ推條。口占。トテ、火口トイヘバ、燃廣ガラン、富少路トイヘバ、鳶ハ天狗ノ乘物也、少路ハ歩道也、天狗ハ愛宕山ニ住バ、天狗ノシハザニテ、巽ノ樋口ヨリ、乾ノ愛宕ヲ指テ、筋違ザマニ燒ヌト覺トテ、妻子引具シ、貲財取運テ遠ニケリ、人嗚呼ガマシク思ケレ共、燒テ後ニゾ思合ケル、

〔源平盛衰記二十六〕馬尾鼠巢例幷福原怪異事

此入道〈○平清盛〉ノ世ノ末ニ成テ、家ニ樣々ノサトシ有キ、坪ノ内ニ秘藏シテ、立飼レケル馬ノ尾ニ、鼠ノ巢ヲ食テ子ヲ生ミタリケルゾ不思議ナル、舍人數多付テ、朝夕ニ撫搆ケル馬ニ、一夜ノ中ニ巢ヲ食、子ヲ生ケルモ難有、入道相國大ニ驚キ給フニ、陰陽頭安部泰親被尋問ケレバ、占文ノサス處、重キ愼トバカリ申テ、其故ヲバ不申ケリ、內々人ニ語ケルハ、平家滅亡ノ瑞相既ニ顯レタリ、近クハ入道ノ薨去、遠クハ平家都ニ安堵スベカラズ、如何ニト云ニ、子ハ北ノ方也、馬ハ南ノ方也、鼠上ルマジキ上ニ昇ル、馬僕ルマジキ鼠ニ巢ヲ作ラセ子ヲ生セタリ、既ニ下剋上セリ、サレバ子ノ北ノ方ヨリ、夷競上リテ、馬ノ南ノ方ニオハスル、平家ノ卿上ヲ、都ノ外ニ追落スベキ瑞相トコソ申ケレ、サレ共入道ノ威ニ恐テ、只重キ御愼ト計申タリケレバ、マヅ陰陽師七人マデ樣々祓セラレケリ、又諸寺諸山ニシテ御祈共始行アリ、件馬ハ相模國住人大場三郎景親ガ、東八箇國第一ノ馬トテ進タリ、黑キ馬ノ太逞ガ額月ノ大サ白カリケレバ、名ヲバ望月トゾ申ケル、秘藏セラレタリケレ共、重キ愼ト云恐シサニ、此馬ヲバ泰親ニゾ給ヒケル、昔天智天皇元年壬戌四月ニ、寮ノ御馬

ノ尾ニ、鼠巣ヲ造リ、子ヲ生ケリ、御占アリ、重キ愼ト申ケリ、サレバニヤ世ノ騒モ不ㇾ斜、御門モ程ナク隱サセ給ヒニケリ、日本紀ニ見エタリ、

式占　九星併入　軒廓御卜附

名稱

式占トハ、六壬、太乙、雷公、遁甲ノ四種ノ占卜ノ總稱ニシテ、皆式盤ヲ用キルニ由リテ名ヅクル所ナリ、六壬占ハ、年月日時、及ビ行年方位ノ支干ヲ推シ、四課、十二將、十二神ヲ辯ジテ占フモノナリ、中古以來、太占既ニ絶エ、易占漸ク衰フルヤ、陰陽寮ハ神祇官ノ龜卜ト相並ビテ、專ラ此占法ヲ用キタリ、太乙式雷公式ハ、朝廷ニノミ用キテ、私家ノ私用ヲ禁ジ、犯スモノハ律ニ當テヽ處分スルノ例ナリ、而シテ太乙、雷公ハ、共ニ神ノ名ナリトス、遁甲ハ、一ニ奇門ト云フ、此法ニハ、占術ト隱形ノ術トノ二種アリ、占術ハ、日時ノ干支、八卦、天文等ノ關係ヲ推シテ、式盤上ニ現ハレシ所ノ卦ニ由リテ、其吉凶ヲ知ルモノナリ、隱形ノ術ハ、日時ノ吉凶ヲ占ヒ、呪文、符籙等ノ力ヲ藉リ、禹歩ノ術ヲ行フ時ハ、魑魅魍魎見ルコト能ハズシテ、害ヲ加ヘ能ハザル法ナリト云フ、式神ハ、一ニ識神ニ作ル、式占ヲ掌ル神ニシテ、占者ノ頤使ニ從フモノナリ、

九星ハ、九星ノ順行ヲ考ヘテ、人ノ吉凶ヲ占スル法ニシテ、亦式占ノ類ナルベシ、

〔政事要略 九十五 至要雜事〕弓削是雄式占有徵驗事 ○下略

〔二占要略 下〕二占吉凶符合の例幷論

○。○。○。○。

凡奇門、大乙、六壬の諸占、之を精ふせば其驗なきにあらず、故を以て唐山に於ても、古昔深く之を信じて、兵占の宗とせしなり、凡此にかぎらず、巫祝の言ふ所、亦まゝ其驗あるものあり、然共其偶

驗あるに淫して、專ら之に依て行ふ時は、却て大なる惑となる者なり、棄べく棄べからざるの間、人よく之を戒むべし、

〔唐六典十四大卜署〕凡式占辨三式之同異、
一曰雷公式、二曰太乙式、並禁私家畜、三曰六壬式、士庶通用之、

凡用式之法
周禮、太史抱天時與太師同車、鄭司農云、抱式以知天時也、今其局、以楓木爲天、棗心爲地、刻十二辰、下布十二辰、以加占爲常、以月將加卜時、視日辰陰陽、以立四課、一曰日之陽、二曰日之陰、三曰辰之陽、四曰辰之陰、四課之中、察其五行、取相尅者、三傳爲用、又辨十二將、十二月神十二將、以天一爲首、前一曰騰蛇、二朱雀、三六合、四勾陳、五青龍、後一曰天后、二太陰、三玄武、四太常、五白虎、六天空、前盡於五、後盡於六、天一立中、爲十二將、又有十二月之神、正月登明、二月天魁、三月從魁、四月傳送、五月小吉、六月勝先、七月太卜、八月天罡、九月太衝、十月功曹、十一月大吉、十二月神后、凡陰陽雜占吉凶悔吝、其類有九、決萬民之猶豫、一曰嫁娶、二曰生產、三曰曆注、四曰屋宅、五曰祿命、六曰拜官、七曰祠祭、八曰發病、九曰殯葬、○中略皆辨其象數、通其消息、所以定吉凶焉、

〔武備志百六十九占〕太乙
茅子曰、術家之言紛然也、六經所不道也、而祖之者、必曰先秦、先秦之時、六經之道發而爲百家、各以其術迎之、迎之合于道、則其言驗、言驗則傳、傳而最著者三家、曰太乙、曰六壬、曰奇門、太乙奇門、皆謂出于齊之先公留之始侯、然無所考、至六壬則范少伯之書詳哉言之、以今之法逆而衡其斷、不爽也、然則謂非先秦之言不可也、太乙者、其理該合于釋家之說、故言三家者、又必以太乙爲統、然太乙之言九、即洛書之九也、其曰主客大將參將始擊之類、皆因兵而命名、然借兵以喩五行、非借五行以喩、

兵也、以其言兵者切、故因而著之、簡而明、無若廟算、詳而核、無若遁局圖斷、故載之以言兵者思過半矣、至其推而布陣、要之于理、亦不外也、說者謂、其言鑿、鑿者言之過也、非理之罪也、見陣制中、茲不再、若符籙祭禱者、亦六經所不道也、六經曰、假之卜筮、告之神明、則其發而爲符籙禱者、亦勢所必至也、故載其約略、不詳示訓也、

太乙式

〔太乙秘書〕太乙陽遁起一宮、順行至九宮、陰遁起九宮、逆行至一宮、因所求局、未備二十四、與二十四除之、不盡者皆以一宮三數除之、即知太乙所在、歲計萬曆戊子陽遁一宮、理天、陰遁九宮、

太乙者、天帝之尊神、在北辰前、正當勾陣口中、天乙、紫微垣宮門、右星南主使十六神、而知風雨水旱、兵革饑饉、疾病災害、國主興亡、曆數修短、遊行九宮、而歷八卦、自太始初分、始從其一、一生二、二生三、三即天地人也、日月星也、乙丙丁也、上中下也、以三乘三爲九、以三乘九爲二十七、故太乙行宮、每位住三年、一年治天、整五星失度、日月薄蝕、妖彗光怪之變、二年治地、整山崩、地陷、水缺、河翻、蝗蟲、土工之變、三年治人、整君臣父子、口舌、妖言、疾病、饑饉、生靈、流亡之變、蓋三年一宮、二十七年一周天、但不遊中宮、寄在七宮、故二十四年一周天耳、

〔二占要略上〕太乙星占

太乙星は、其本位北天に在て八方に遊行し、兵亂禍災生死を掌る、靈妙不可思議の一星なり、此八方遊行の位を求て吉凶を占ふ、之を太乙占の法といふ、其之を占ふに、計神、主目、文昌、客目、始擊、定計等の法を以て、主客、大將、參將の處在を求め、八門轉移の法を以て吉凶を照合す、是太乙占法の名目の大概にて、歲計、月計、日計、時計の異り、陽遁陰遁の取樣あり、下に之を詳にす、武備志曰、太乙之言九、即洛書之九也、其曰主客、大將、參將、始擊之類、皆因兵而命名、然借兵以喩五行、非借五行以喩兵也、

〔太乙秘書〕宋王佐所著有三式書、謂太乙、六壬、奇門、而三式之中、獨尊太乙、蓋陰陽占候家之言也、太

乙占十二辰宮、如有災祥禍福主客勝負、乃詳見各宮、歷々如指諸掌、先看太乙諸星、若主客大將、主客參主客、算及文昌、始擊、四神、五福之類、諸局中參看多寡幷掩擊格迫、審其輕重、察其淺深、而預備之、可以偃息干戈、而坐致太平矣、

〔太乙秘書〕十六宮間之神

子地主　丑陽德　艮和德　寅呂申　卯高叢　辰太陽　巽太靈　巳大神

午大威　未天道　坤大武　申武德　酉大簇　戌陰主　乾陰德　亥大義

太乙諸星

文昌　主大將　主參將　始擊　客大將　客參將　計神　定計將　計參將

〔唐書二百四方技傳〕桑道茂者、塞人、失其系望、善太一遁甲術、乾元初、官軍圍安慶緒於相州、勢危甚、道茂在圍中、密語人曰、三月壬申西師潰、至期九節度兵皆敗、

〔貞信公記〕天慶二年五月十六日、太一式於八省院修式兼、

〔二占要略上〕余向讀五雜俎、曰六壬有四課三傳法、若精之、則天下無不可測之物、於是始知龜蓍之外、又有占法、後就武備志讀之、又讀太乙占法、其文佶屈魯魚亦半、不得終了解之、頃者花魁先生授業之暇、譯此二占、以便于蒙學、其說詳悉、於是乎、向不得解者、一目瞭然、如得神通眼、然不亦愉快乎、蓋先生之學、淵源于道牛小幡翁、翁甲州遺士、勇敢智謀膾炙人口、今不復贅矣、翁傳之升安植木先生、先生名悅、一名長春、其學深入閫奧、獨有驗逸名、著書若干、古隊秘法、職原大全、刊行於世、寬文中以其學應聘于吾藩、爾後五傳至先生、年甫十四、能升堂、及長發揮道鬼子之道、修明信玄氏之制、嘗注古傳、著鈐秘鈔若干卷、可以壓倒乾近杜撰之學、長喙三尺之徒、然以嗾秘不敢輕示之人云、若夫占卜與器製、則其支流餘波耳、

文化乙亥星鳥　　竹外中井昌元撰

〔二占要略上〕吉凶占法大略

凡太乙の占法は、其國に止り守る者を主とし、外國より來る者を客とす、假令ば客南方に在ば、之に向て南蠻を攻るに利あり、或主北方にあつて、敵も北方なる時は、主に向て國を守り、戰に利あるが如し、唯其變易擧て盡し難きのみ、假令は兵を原野に陳ねて、旗鼓相望む時は、先に動くを客とし、後に應ずるを主とす、又安居の時は、先に起は主、後に應ずるは客となるが如く、主客先後一槪に論ずべからず、之に關囚迫掩擊の占あり、主客大小將關なく、文昌囚迫なく、始擊掩擊なきは將發とす、吉なり、若大小將關文昌囚迫に遇ひ、始擊掩擊に遇は將不發とす、凶なり、主大將不發、客大將發は客たるに利あり、之に反するは主たるに利あり、若主客大將不發は、同く參將の發不發を見て、主客の利を考ふべし、扮關とは主客の算數と、太乙及天目、或は大小將と宮を同ふして、勢ひ兩立せず、互に相關防するの義なり、これ主客大小將共算長く(多きをいふ)及和する者は勝、算短く、(少きをいふ、十餘に不ㇾ及ものは單といふなり)不和ものは敗なり、又算等きも凶なり、掩とは始擊と太乙、および主の大小將と宮を同し、(算和不和有二詳災一)陰盛にして陽蝕せらるゝの義なり、囚とは太乙と文昌主客大小將と同宮相侵を云、拘繫執止の義にして、喪亡奔敗の禍ひあり、迫とは太乙の左右の宮辰、文昌、主客、大小將に遇をいふ、侵逼脅持の義にして、卽上下相凌ぎ、左右迫り挾むの象なり、前は外迫といふ、藩臣外國の類とす、後は內迫といふ、后妃宗族の類とす、宮に在れば急とし、辰に在れば緩とす、また始擊の迫を擊と云なり、又太歲太乙の後に在るは、陽年は災淺く、陰年は災深し、前に在るは之に反するなり、又主客大小將相挾るゝも凶なり、又二目大小將太乙と相對するを格といふ、凶なり、又太乙一八三四の宮に在は主を助くとし、九二六七の宮に在は客を助とす、又主客の算一八を得るは、水に屬して曲陣皂旗に利あり、三を得るは、木に屬して直陣靑旗に利あり、四九を得るは、火に屬して銳陣赤旗に利あり、二五を得るは、土に屬て圓陣黃旗に利あり、六七を得るは金に屬

して方陣白旗に利有、雲氣は主客とも算を得る方より來るを順とし、吉とす、賊を聞ときは、客は始擊の方、主は文昌の方に備ふべし、奇兵亦此方を用ゆ、伏兵は太乙處在の時〔按に方といふに同じ〕を用るなり、又算和不和と云は、太乙八三四九の陽宮に在て、一三五七九の奇數を得るは重陽不和なり、太乙一二六七の陰宮に在て、算二四六八十の耦數を得るは重陰不和なり、太乙陽宮に在て耦を得、陰宮に在て奇を得るは陰陽和なり、又三九の宮を純陽とし、四八の宮を雜陽とし、二六の宮を純陰とし、一七の宮を雜陰とす、太乙天目陰宮に在といへども、算して純陽を得、陽宮に在といへとも算して純陰を得る者吉ならずとす、又算して十四、十八、二十三を得るを上和とす、大吉なり、又三十二、〔武備志二十三に作るは誤りなり〕三十六、二十九を得るを次和とす、又十二、十六、二十七、三十四、三十八を得るを下和とす、〔按ニ此上中下三和は、一十三十の奇數の餘算は耦數を取、二十は耦數故、餘算奇數を取て、陰陽和の算とするなり、〕又算を得て十に滿ざるを〔一より九までをいふ〕無天とし、五將不發算不和なれば天變とす、又算を得て十の餘算五に滿ざるを〔十一、十二、十三、十四、二十一、二十二、二十三、二十四の類、〕無地とし、不發不和なれば地妖とす、又算を從て十に滿るを〔十、二十、三十、四十の類、〕無人とし、不發不和なれば人禍とす、又算を得て十の餘算五以上なるを〔十六、十七、十八、十九、二十六、二十七、二十八、二十九、卅六、卅七、卅八、卅九の類、〕三才俱足の算とす、凡如此の類擧て盡すべからず、因て大略を載す、詳に武備志に見えたり、見て知るべし、殊に兵占の如きは、時計便覽の圖と云て、陽遁陰遁七十二局の圖を出し、各吉凶を委く載たり、故に心を用ひずして一見よく知らるゝなり、扨此時計便覽の圖は、五子元〔甲子、丙子、戊子、庚子、壬子の元、各々七十二局づゝ〕合して三百六十局なれども、各元皆同例なるが故に、五元を一圖に合して、只七十二局を圖して、圖上に五元の干支何れに合といふ事を知らしめんために、其五干支を載て、三百六十より下の餘算を擧たり、因て其圖を求るには、若干の時數を三百六十の數〔六紀甲子五子〕〔元周〕一にて除き、數に滿ざるは甲子元七十二局を除き、尙餘算多き時は、丙子戊子庚子壬子の各元を次第に七十二局づゝ除て、七十二數に不滿餘算を見て、元に人事を知るに、一算ならば第一局、

二算は二局、三算は三局と、是又次第に七十二局までの圖に引合す時は、別に煩しく數法を說にも及ばず、太乙行宮を初め、主客大小將の處在、幷各々吉凶まで詳に知る、樣に之るせり、但冬至後は陽遁の圖、夏至後は陰遁の圖に引合せて見るべし、又歲日月の三計も、此圖(三計には陰遁なし、陽遁のみなり、)に因て求る時は難き事なし、唯吉凶の考兵占のみを擧たれば、三計に於ては用なき事多し、(假令ば日計は庶人の占に、主は土を守る官、家人は使臣商旅と見やう異るが如し、)且吉凶方角等は誤り記したる事少しとせず、心得て見るべし、

太乙式盤

〔左經記〕長元元年四月五日庚午、參關白殿、(○藤原賴通)令御覽故滋岡川人奉持、太一式盤二枚、(陰一枚陽一枚)件盤前年陰陽頭文高語次云、故川人太一式盤故道光宿禰傳領、常奉安置家中、是靈驗物也、尙在或法師許之由云々、其處不慥聞、公家尋取可被持者也者、有事次、前日以此由申關白殿、仰云、早可令尋召者也者、仍月來令尋問之處、或者傳云、二條與猪熊之邊、小宅在件盤者、仍尋其主、故人道光孫內舍人明任所預置云々、仍召明任、仰公家被尋之由、申云、預置實也、隨召可令進者、仍今日令御覽也、則召文高被仰云、件盤奉安置文高宅、若有損失者、隨形可奉作加歟、無止之靈物也、相定追可左右者、又時々可奉供歟者、文高給預退出、

雷公式

〔律疏職制〕凡(○中略)太一、雷公式、私家不得有、違者徒一年、(私習亦同、)(中略)太一、雷公式者、並是式名、以占吉凶者、私家皆不得有、違者徒一年、若將傳用、言涉不順者、自從造妖言之法、

六壬占

〔二占要略下〕大六壬占

夫六壬の占法は、天盤の十二神(月將)と、地盤の十二支と合するに、四課三傳の法を立て、五行の生克を考へ、兵戰及萬事の吉凶を占ふ事なり、直義按に、此法六甲六十圖の生克を以て判斷するなれば、六甲占と云べき所を、さは名けずして、六壬と云ゆえんの者は、蓋し天一の水を始とし、月將貴神ともに、壬水亥より逆行順行に數を取て占ふ故に、之かいへるならん、

成說に行年干支を求るに六丙、六壬より數を起す事あるに因てなりといへるはいかにぞやおぼゆ、直義此書を草して、松石をして校せしむ、松石祛疑說を引て之を證す、曰、此法自壬而起、壬水數、故起法悉本於一、運於三、而成於五、合三五一之數以爲用、此所謂身壬之法也と、これに因て之を觀る時は、予が說當れりと云、於是予が心安し、

〔通俗編 二十一 術數〕六神〇中略

六壬課　晁氏讀書志六壬課鈐一卷、未詳何人所纂、以六十甲子加十二時、成七百二十、三課三傳、入以占吉凶、隋書載六壬之書兩種、金鑾密記、及五代史記、頗言其驗、今世鑑筮道息、而此術獨行、

〔武備志 一百八十二 占〕六壬

茅子曰、六壬之說、其書更繁於太乙奇門、然得其要則可數言盡也、其法詳於六壬直指、故載之、兵占則有軍帳賦、兵帳鈎玄、遊都魯都占法、然於斯而可以盡兵事矣、太乙則盡載其局、奇門六壬則否者、以太乙之局、必按圖而索之、故不可以簡、二家之課局、得於訣而足、故不可以煩、二者均是也、

〔六壬大占〕王鳴鶴曰、六壬之法、有宗門九課、曰重審、曰元首、曰遙克、曰昴星、曰別貴、曰返吟、曰復吟、曰八專、曰井欄、先看月將、加本日正時、以定陰陽四課、四課之中、以初中末三傳、然後定吉凶、要在神將調和、不相克戰、斯爲大利、如用兵則備于軍帳賦二十四占、總看游都魯都、以審敵情之緩急成敗、次看四課三傳中神將吉凶、以爲戰守之備、而神將以用神爲主、參酌五行旺相休囚、卽百戰百勝、何疑之有哉、

〔儀度六壬選日要訣 七首〕十二神將發用盤式說

二十四山向、所用之課、祿馬在何方、貴人在何位、必須式盤中、逐一排出、眼實見之、心的方能明白、況盤內十二宮、各人生命上、十二神加來、有相生相尅之分、如寅命子神加上、亥命酉神加上、則爲相生而吉、如午命亥神加上、卯命申神加上、則爲相尅而凶、如此之類不可不辨、是當取其生、不取其克可

知巳、然而生不盡生、克不盡克也、又當觀十二將加來神上者若何、如寅命子神吉巳、忽而勾陣將來、則水被土制、又不全吉、如午命亥神凶巳、忽而六合將來、則洩水生火、又不全凶、而且有寅木克辰土、辰命似受害、殊辰飛入午宮、將逢蛇雀、則辰得生而强、寅克不動、而且有巳火生戌土、戌命似得生、殊巳宮子水入、將見虎陰、則巳遭克而弱、生戌不能、此一則死中不死、一則生處不生也、未也、而且有生而加生者、如卯命子水來既生巳、忽而虎將飛入、是爲水生木、又得金生水、恩上加恩、發福最厚、而且有克而加克者、如子命戌土來既克巳、忽而龍將乘之、是爲土克水、轉得木克土、難星受難、禍遂減輕、未也、而且有木一丑命也、入午宮、土得火生、發大財巳、而丑爲金局命、却又生災、而且有同一太陰也、入戌向金、得土生又發財巳、而太陰爲女宿、必先生女、未也、其間又有宮克神、神克將者、如申見卯、卯見常、是也、申得卯爲財、申得常爲印、詎非名利兼收、其間又有宮生神、神生將者、如午見辰、辰見虎、是也、午得辰爲洩、午得虎爲財、是又耗中見利、未也、其間又有神生宮、將生神者、如辰見巳、巳見龍、爲恩上加恩、福又添福也、其間又有將生神、神克宮者、如虎加子、子加巳、爲難上生難、禍又生禍也、總之爲神爲將、生々克々、不可執一、而其大旨、人口衆多之家、總以宅主祭主爲重、喜生惡克、不可游移、其餘有疵、勢所必然、萬毋以一人而棄合家之大吉、斯善于選擇巳、如曰喜忌在所必拘、止觀其名、不究其實、則四丙申課式中、丑宮克亥神、亥神克雀將、名朱雀內戰、六壬畢法賦不取、爲文章必不華麗也、而塋地、係甲卯龍、甲山穴、丑貴加甲、丑命人善作文、甲年中探花、官學士者何哉、則以亥爲丙申日貴人、丑爲甲龍甲山貴人、今丑命人、既爲甲山貴人、加在甲山上、而又得丙日亥貴、加在丑命上、天將朱雀又來亥上、以生丑土、是本位出位、皆作貴人、此丑命所以大富大貴也、占卜忌朱雀內戰、選日、其吉如此、

〔儀度六壬選日要訣仁首〕神將加臨盤說

選日之法、有互祿互貴、聚祿聚貴、以及夾拱祿貴、皆大美課、皆以本山本向爲之主、發出三傳爲妙、然除本山本向二支辰外、其餘十箇支辰、悉屬生人本命、十二神與十二將、交相加臨、未免有生有尅、不

可不察、假如一子命也、酉神加來子上、太常將又加酉上、是爲土生金、金生水、從上生下、子命豈不大利、若未神加子上、而將爲螣蛇、加來未上、是火生土、土尅水、子命受尅、又安能吉、若又非螣蛇而青龍木來、則未尅子水、得青龍來尅未土、未土不敢肆毒子水、是爲半吉半凶、是皆爲生人命中休戚相關之處、不可不詳求者、爰是取十二神與十二將加臨之盤、逐一輪出于後、以便人觀覽云、

儀度六壬選日祿馬貴人十二神十二將開後

十天干祿元

甲祿倒寅　乙祿倒卯　丙戊祿干巳　丁己祿干午

庚祿居申　辛祿倒酉　壬祿在亥　癸祿居子

十二地支驛馬

甲子辰　馬居寅　寅午戌　馬居申

亥卯未　馬在巳　巳酉丑　馬在亥

十二干貴人

甲戊庚牛羊　甲貴未陽丑陰　戊庚貴丑陽未陰

乙己鼠猴鄉　乙貴申陽子陰　己貴子陽申陰

丙丁猪雞位　丙貴酉陽亥陰　丁貴亥陽酉陰

壬癸兎蛇藏　壬貴卯陽巳陰　癸貴巳陽卯陰

六辛逢馬虎　辛貴寅陽午陰

此是貴人方

天盤十二神名

神后　子水　大吉　丑土　功曹　寅木

太冲（卯木）　天罡（辰土）　太乙（巳火）
勝光（午火）　小吉（未土）　傳送（申金）
從魁（酉金）　河魁（戌土）　登明（亥水）

天盤十二將名

貴人（己丑土）　螣蛇（丁巳火）　朱雀（丙午火）
六合（乙卯木）　勾陣（戊辰土）　青龍（甲寅木）
天空（戊戌土）　白虎（庚申金）　太常（己未土）
玄武（癸亥水）　太陰（辛酉金）　天后（壬子水）

天盤十二神者、卽十二地支、隨月將加時、遞臨十二地盤上者是也、十二將、則加臨天盤十二神上、序云、貴螣朱六勾青空白常元陰后、十二字、作三句讀、貴人在亥至辰、屬乾坎艮震四男卦、爲陽、貴人在此六位、順數、貴人在巳至戌、屬巽離坤兌四女卦、爲陰、貴人在此六位逆數、

自卯時至申六時爲晝　用陽貴起
自酉時至寅六時爲夜　用陰貴

〔十駕齋養新錄十七〕六壬

案、六壬式、以月將加所得時、視干支所加神、以決休咎、十月月將在寅、（日躔之次、謂之月將、十月建亥、日躔析木、爲寅位也、）寅爲功曹、夜半爲子時、以寅加子、故以寅子決賊之衆寡、於占例、甲己子午數九、乙庚丑未數八、丙辛寅申數七、丁壬卯酉數六、戊癸辰戌數五、巳亥數四、故云寅數七、子數九、（隋書庾季才傳、甲數九、子數又九、）十干寄位於支、未爲丁寄、酉爲從魁、加於丁、丁火剋酉金、故云下剋上、甲申旬空午未、（丁亥在甲申旬中、）丁在未位、故云有空亡之事也、古法有日辰四課、而無三傳、史但云洋善風角、亦不稱六壬、

天乙酉丁　戊天后　亥太陰　子玄武　丑太常

太陰亥酉　酉天乙　寅白虎
太常丑亥　申騰蛇　卯天空
天空卯丑　未朱雀　午六合　巳勾陳　辰青龍

〔武備志占一百八十二〕釋遙克

所謂遙克者、四課之中、既無上克下、又無下克上、乃先取神遙克日、神卽子丑寅之類、如無神遙克日、卽取日遙克神、

假令、正月甲戌日寅時、亥將占、以寅時起亥、卯上坐子、次第排至丑上、坐戌爲止、甲戌日、甲課在寅、寅上見亥、取亥甲爲日之陽神第一課、亥本位上見甲、取甲亥爲日之陰神第二課、支辰戌上見未、未戌爲辰之陽神第三課、未之本位見辰、辰未爲辰之陰神第四課、然四課之中、上下俱無克、但看日課上、亥字被日支上戌上神來遙克、乃以亥上申爲初傳、申之本位見巳、巳爲中傳、巳之本位見寅、寅爲末傳、此爲神遙克日、名蒿矢卦、

假令、正月庚戌日申時、亥將占、庚課在申、以申爲日干、申時又在此、起亥將、酉上坐子、排至未上止、庚上見亥、取亥申爲一課、亥上見寅、取寅亥爲二課、支辰戌上見丑、取丑戌爲三課、丑上見辰、取辰丑爲四課、然四課、上下並無克、又無神遙克日、故取日上庚金日、遙克日神上寅木、爲初傳、寅之本位上見巳、巳爲中傳、巳之本位上見申、申爲末傳、此爲彈射卦、

〔六壬大占〕行年小運法

男一歲、起順行、至十一、却逆行、女一歲、起逆行、至十一、却順行、如男、是甲子旬生人、一歲起丙寅、十一到本旬爲丙子、二十一爲丙戌、三十一到申爲丙申、四十一丙午、五十一丙辰、六十一丙寅、逆行、如女命、甲子旬一歲起壬申、十一壬戌、二十一到本旬爲壬子、三十一壬寅、四十一壬辰、五十一壬午、六十一壬申、順行、

六甲旬行運捷徑、男以本旬順前三位上起、一歲逆到本旬、乃十一隔位而行至戌、乃二十一爲丙戌、三十一到申爲丙申、若三十二却返廻順行、到酉爲丁酉、此一定之決法也、女皆以當生本旬後五日位上起、一歲爲壬申順行、十一壬戌、二十一到本旬爲壬子、三十一壬寅、若三十二、却轉廻逆行、到丑爲辛丑、三十三爲庚子、甲戌旬男、一歲丙子、十一到本旬爲丙戌、女一歲起壬午、十一壬申、二十一到本旬爲壬戌、　甲申旬男、一歲起丙戌、十一到本旬爲丙申、女一歲起壬辰、十一壬午、二十一到本旬爲壬申、甲午旬男、一歲起丙申、十一到本旬爲丙午、女一歲起壬寅、十一壬辰、二十一到本旬爲壬午、甲辰旬男、一歲起丙午、十一到本旬爲丙辰、女一歲起壬子、十一壬寅、二十一到本旬爲壬辰、甲寅旬男、一歲起丙辰、十一到本旬爲丙寅、女一歲、起壬戌、十一壬子、二十〇十下恐脫一字到本旬爲壬寅、

〔六壬大占〕二比用

所謂、比用者、陽日以陽神爲比、陰日以陰神爲比、何謂陽日、甲丙戊庚壬是也、何謂陽神、子寅辰午申戌是也、餘五干六支爲陰、與日爲比者用之、或有三下克上、二下克上、或四下克上、皆以比爲用、上克下亦然、　假令、四月辛酉日、卯時、申將占、以地盤卯上起、申將辰上坐酉、排至寅上、坐未爲止、辛酉日、辛課在戌、戌上見卯、以戌辛爲日陽神第一課、卯到本位上見申、以申卯爲日之陰神第二課、支辰是酉、酉上見寅、以寅酉爲辰之陽神第三課、寅到本位上見未、以未寅爲辰之陰神第四課、於內取三傳、以涉害爲用、蓋三下克上、以涉害論、然卯見辛、辛克卯、到本位又受二克、寅見酉、酉克寅、至本位路上、見戌爲辛、亦受二克、未見寅、寅克未、到本位路上、又遇卯爲二克、辰上又遇乙木爲三克、乃未受克爲多取、爲初傳、未上見子爲中傳、子上見巳爲末傳、

〔六壬類聚一〕甲課寅　乙課辰　丙戊課在巳　丁己課在未　庚課申　辛課戌　壬課亥　癸課丑

月將中氣過宮　正月亥　二月戌　三月酉　四月申　五月未　六月午　七月巳　八月辰

九月卯　十月寅　十一月丑　十二月子（冬至、大寒、雨水、春分之類、每月有二節氣、爲中氣、）　月將加時、子加子、　丑加丑之類

順寫天盤

先看地盤本日干課上得何辰、爲第一課、　再看第二課上得何辰、爲二課、　又看本日支神上得何辰、爲第三課、　再看第三課上得何辰、爲第四課、　如甲子日、先看甲課寅上、爲一課、寅上之上爲二課、　又看日支子上、爲三課、子上之上爲四課是也、　四課既定、卽取發用之辰、爲初傳、有下克、上克、遙克、昴星、別責、八專、反吟、伏吟八樣、

下克者、下辰克上辰也、四課中、有下克上者、卽以此上辰爲初傳、以初傳地盤上之辰爲中傳、以中傳地盤上之辰、爲末傳、

土克水　水克火　火克金　金克木　木克土

甲乙木　丙丁火　戊己土　庚辛金　壬癸水

亥子水　寅卯木　巳午火　申酉金　辰戌丑　未土

上克者、上辰克下辰也、四課中、若無下克上、卽以上克下者爲初傳、亦以初傳之上爲中傳、中傳之上爲末傳、

若四課中、有兩三箇下克上、有兩三箇上克下、則取日干陰陽相比和者爲初傳、如甲丙戊庚壬陽干、取子寅辰午申戌六陽相克者爲用、乙丁己辛癸陰干、取丑卯巳未酉亥六陰相克者爲用、名曰比和、○中略

遙克者、他遙克我、我遙克他也、四課中、若無下克上、又無上克下、則取二課三課四課內、有克干者爲用、名嚆矢、謂他遙克我、若無二三四課克干、則取干克二三四課者爲用、名彈射、謂我遙克他、亦以用神之上爲中傳、中傳之上爲末傳、○中略

昴星者、四課中、若無上克下克遙克、則陽日取地盤酉上之辰爲用、陰日取天盤酉下之辰爲用、酉宮有昴宿肅殺之氣、故陽從酉仰視、陰從酉俯視也、陽日取支上辰爲中傳、干上辰爲末傳、陰日取干上辰爲中傳、支上辰爲末傳、〇中略

別責者、四課中、有一課相重複、只算三課、如第二課與支上同、或第四課與干上同、皆棄之不用、名爲不備、只看三課中、有克則用、克若無下克上克遙克、卻不用、〇中略

八專者、干支同課、只算兩課、如甲寅日干支同寅、庚申日干支同申、癸丑日干支同丑、丁未己未日干支同未、此四者干支同心專一、故名八專、〇中略

反吟者、子午相加、丑未相加、寅申相加、卯酉相加、辰戌相加、巳亥相加、乃六冲之課、上下相冲、主事有反覆、故名反吟、〇中略

伏吟者、子加子、丑加丑、寅加寅之類、伏于本位不動、故名伏吟、〇中略

貴人十二神　貴人　螣蛇　朱雀　六合　勾陳　青龍　天空　白虎　太常　元武　太陰　天后

起貴人法　甲戊庚牛羊、乙己鼠猴鄕、丙丁猪雞位、壬癸蛇兎藏、六辛逢馬虎、顚倒貴人方、如甲日則以羊爲日貴、牛爲夜貴、戊庚日則以牛爲日貴、羊爲夜貴、皆互相顚倒用之、卯時後用日貴、酉時後用夜貴、貴人既定又分十二神、順逆布法、如貴人在地盤亥子丑寅卯辰六位、則從貴人順布十二辰、如貴人在地盤巳午未申酉戌六位、則從貴人逆布十二神、

子屬鼠　丑屬牛　寅屬虎　卯屬兎　辰屬龍　巳屬蛇　午屬馬　未屬羊　申屬猴　酉屬鷄　戌屬犬　亥屬猪（辰戌二位、貴人不到、故無龍犬、）

〔六壬類聚　二〕論三傳

傳者、傳課之隱微、發課之發蘗也、故課爲體、傳爲用、傳吉課凶、事終吉、傳凶課吉、事小成、縱成亦無終

始、　凡事之始末、係於三傳、以初中末爲次第、假令、初鬼、中印、末財、便是先阻、中助、末得也、若初凶末吉、初雖艱難、終則有成、初吉末凶、初雖好終不濟、初末凶而中吉、事雖中合而無益、　初傳爲發端門、乃心之所主、事之所向、順要神將比和、上下相生、爲吉、若逢德祿、事事稱心、事危有救、　中傳爲移易門、乃事體中間一段、初凶中吉、則移凶爲吉、初吉中凶、則移吉爲凶、母傳子則順、子傳母則逆、鬼主事壞、墓主事止、害爲折腰、事多阻隔、破主中輟無成、逢空斷橋折腰、主事體不成　末傳爲歸計門、乃事之結果、發用在初、決事在末、最爲緊切、若初傳受下克賊、而末傳能制其克賊、終可反凶爲吉、末克初爲終來克始、逢行萬里、入水不溺、入火不燒、病愈災止、若加破害、則有阻、吉凶皆不成、逢空亡、則事無結果、　初傳爲日之長生、末傳爲日之墓庫、則有始無終、初傳爲日之墓庫、末傳爲日之長生、則先難後易、　初傳凶、中末吉、能解之、初中凶而末吉、能解之、三傳行年吉、能解之、若三傳行年俱凶、不能解也、　三傳神將、若將克神、爲外戰、憂輕、雖凶可解、神克將爲內戰、憂重、雖吉有咎、　三傳皆空、占事了無一實、如兩傳空一傳實、卻見天空、亦係三傳空之象、如初中空以末傳爲主、中末空以初傳爲主、三傳自干上發用傳歸支上者、名朝支格、主我去求人幹事、自支上發用傳歸干上者、名朝日格、主人來託我幹事、朝日格若神吉傳吉、則事易成、合不求自至、若神凶傳凶、則禍起不測、諺云、閉門屋裡坐、禍从天上來、占病產憂訟行人、皆忌之、如丙寅日干上午、三傳辰巳午、壬寅日干上戌、三傳子亥戌、是也、朝支格僻耽於人、不得自由、如甲午日干上辰、三傳辰午申、甲木傳於死地、行人不來、病者死、丁亥日干上酉、三傳酉亥丑、財被貴人引入絕地不利、與貴人交易、反主有厄、庚寅日干上午、三傳午辰寅、此乃支助日鬼、反害尊長、　三傳不離干支、求物得、謀事遂、行人回、賊不出鄉、逃不脫、　三傳不離四課、號曰、如珠走盤、謀事成、吉則吉、凶則凶、忌占病訟憂產、如辛亥日干上酉三傳戌酉申、戊子日干上子、三傳子未寅、外庚申甲申庚寅甲寅癸酉癸未反吟間、　三傳離日遠、凡事難成、惟占避難及訟、災可退、　三傳日辰互換、三合遞相牽連、占事翻來覆去不易了當、外有三傳三合爲日干、全脫全生全

鬼全兄弟者、俱視天將吉凶、及五行制化何如、假如全鬼爲凶兆、若年命日辰四處、有子孫爻則制鬼
矣、故脫氣要見父母、全生不可見財、 三傳與日辰上下皆合緊、則不得妄動、要尋日月冲破方可動
也、然又要看三傳吉凶何如、若吉則宜合、不宜冲破、若凶而遇冲破則凶散矣、卻不以凶論、 三傳生
日百事吉、占訟輕、雖無理之訟、亦不至於大凶、 三傳克日者至凶、惟被冲則凶、破如癸亥日辰加癸、
三傳辰未戌、初蛇中句末虎、是戌冲辰、虎冲蛇、以凶制凶、若行年更在戌上則凶可散、或行年在辰、則
戌一辰二、冲不能破、而辰爲癸之墓、便主全凶、 三傳入盜氣、只宜退散、宜防失物、更加於蛇虎空亡
之鄉、主託人不得力、官事反覆、 三傳遞生干、或遞克干、吉凶詳課體中、內有干克初、初克中、中克末
者、求財大獲、此法最驗、 三傳日辰全、逢下賊上者、全無和氣、訟必刑、病必死、占事必家法不正、自惹
其害、或醜事出於堂上、以致爭競、 三傳有被日辰夾定居中者、若乘凶將凶、不可逃、 乘吉將吉、乃
可從、惟宜成合諸事、若占病訟憂產行人、皆不利、外有透出支干外者、只先緊後慢、更看所夾如何、若
是夾財則利、求財不利、病訟夾官、利於求官、亦不利病訟、夾脫氣利憂病、不利求財、利占孕、不利占產、
夾生氣、利占用事、不利占產、夾兄弟百事不利、夾空亡事多虛詐、枉用其心、卒無實效、如乙丑日干上
巳、三傳寅卯辰、甲午日干上卯、三傳辰巳午、是也、 三傳有被日辰夾定、而日辰上乘空亡、謂之遇夾
不夾、始困終亨、有名無實、過後失時、失於機密、反成差錯、雖凶不至深危、有吉不成大喜、 三傳有雖
在日辰中間、而前欠一位、或後欠一位、謂之夾定虛一格、主有小節不完、更看所虛如何、若是日財、則
因財不足、不能成事、若是官鬼、則因官事外生、若是同類、則因手足兄弟不足、或朋友不足、若是子孫、
則因卑下不足、若是父母、則長上不足、或文字不圓、更看天將之吉凶決之、假如丁卯日干上申、三傳
辰巳午、欠一未字、未乃今日之脫氣、爲日之子孫爻、夜將朱雀、主卑下口舌、文字不足、晝將勾陣、主子
孫舊事、牽連未了、若年命塡實、不在此限、 三傳有透出日辰之外、名透關格、乃當時不時、過後失時、
凡事主失時或心力不逮、致使已成之事、被人破壞、如甲子日子加丑、三傳子亥戌、是也、看所透者是

鬼爻、反吉成凶、主破財、若是退茹透出者、因退之慢、而有所不及、進茹透出者、因進之過、反成不及、若是干透出支、不利外事、主有回還意、先動後靜、支透出干、不利內事、惟宜外動、

〔北山抄六〕軒廊御卜事

若當子日、或停神祇官、先令陰陽寮奉仕云々、依子日不卜也、其六。壬。卜。尙又不快、非急事者、改日共令奉仕可宜、

〔江家次第十八〕軒廊御卜

六壬卜忌日

子日

〔江談抄二雜事〕六壬占、天番二十八宿可在天、而在地番不審事、

被命云、陰陽家事心被得如何、答云、於書籍者、大略隨分雖歷覽、不能委學、此間逢陰陽博士宗憲、占事少々所請候也云々、被命云、占事尤可被知事也、但番事能被學哉、番不審事在之也、天番可在廿八宿在地番、地番可在十二神在天番、如何、此事可被學也云々、

〔二占要略下〕吉凶占法

四課の法にて日と辰と處を二つにす、三傳を并て五處、年命を加て六處、但年命は二處にかゝる故七處となる、各類神を見て生克旺相をとりて占を決斷すべし、又行年を略して不用、唯天上の時(天盤の占時の支)正時(地盤の占時の支)大歲月建來人の方等を取て占ふ類、種々の說あり、

占法判斷の例二三を擧て之を示す、假令ば敵國より使來るに、未其善惡虛實を審にせざる時占之て、辰上の神日の上の神を制する時、其言信ずべし、是客畏主なり、之に反して日上の神、辰上の神を克する時は奸心を主る、其言信ずべからず、又日上の神將朱雀天空を見れば來情變あり、其言虛詐なり、信ずべからず、 賊兵至ると聞時、玄武白虎臨む所の神、日を克すれば賊强なり、宜く

急に備ふべし、若我彼に臨めば必ず利を得るなり、主將の行年本命若白虎臨處の神を克すれば師有功、之に反すれば敗あり、又年命の支勾陳のぞむ處の神を克するも吉なり、覓水求糧の占には、月將を正時にかへて、天盤の未の加ふる處三百歩にして井泉あり、卯の加ふる處三百歩にして水道あり、丑の加ふる處三百歩にして糧草あり、河を渉り水を渡る占に、天盤の辰未卯子、地盤の辰未卯子に加ふる時は、天河覆井と名付て、河を渡る、二沈溺を主る、又天罡加ふる處水道とす、罡孟に在れば前行凶、仲に在れば中行凶、季に在れば後行凶なり、又日干を陸路とす、日支を水路とす、故に支克を受ざれば宜く水路に行べし吉なり、山路に迷ふ時は天罡孟に加れば左行、仲は直行、季は右行、各五十歩にして路を求むべし、子孫父の爲めに仇を報ずる時、出門に甲乙日は火命の人南門、巳午の時丙丁の日は土命の人辰戌未の三方といふが如き、假令ば金命の人金の時申酉は凶なり、又月建の方を見て背之を吉とす、日支を日干の克するは、客たるに利あり、日干を日支の克するは主たるに利あり、來人の善惡を知るには神后落る處孟は良人、仲は商客、季は奸惡細作なゝと知る、伏兵或は惡をさぐるには、天盤の子丑卯酉落る處にあり、陽年には大吉を大歲に加へ、陰年には小吉を大歲に加へて、天盤の寅巳未申（卽甲庚丙丁の寄宮）の方を尋ねて、軍を出せば吉なり、圍を出るには、天罡の下に向ふて出れば吉なり、遊都曾都の占といふ事あり、卽武備志に此是先覽異妙の訣千金莫與世人傳と云て、天盤遊都の上の貴神を其時の貴神とし、其處の地盤の神を天盤に見て、其下の支にて干を求め、扨遊都の對冲を曾都とする、所謂曾都臨處逢白虎とは、天乙若遊都に遇とき、曾都は天空落方に在り、故に順行逆行ともに白虎落る方に臨をいふなり、扨地方（遊都の本位）を賊居とし、其上に加る神將を寇とし、曾都を以て賊の遊兵とし、貴神（貴神の生克は同く臨む處の地の神の生克をとるなり、）を我將とし、干を我軍とす、此四課（貴神干賊居冦將）の上の生克を見るに、我より他を克する時は戰ふべし、他來て我を克する時は攻べからず、貴神干を克する時は軍宜く使ふべし、

干貴神を克する時は軍使ふべからず、地方居賊其上の將時遊を克する時は、賊寨を守て動かず、將地方を刑すれば、賊移動すると知べし、此餘種々吉凶の判斷あり、凡この遊都會都のを精ふする時は、六韜の文を誦ずして賊寇を擒にすと見えたり、此遊都といふは甲己の日丑、乙庚の日子、丙申辛の日寅、丁壬の日己、戊癸の日申を遊都と名つけ、遊都日辰に在れば、賊立處に在るといへり、或は遊都辰に臨めば賊少、日に臨めば賊多しなど、なを種々の占法あり、あぐるにいとまあらず、右擧る處は武備志引ところの軍帳賦兵帳鈎玄等に載する處を拔書して、以て占法の大略をしるすのみ、且占法の事に付ては、種々いはまほしき事もあれども、元是門生のために其大概を示さんとて、かりそめに著したるなれば、四課三傳の法を略說するまでにて、占法の委曲は武備志に讓りてのせず、勿論三傳を得て後の吉凶判斷に至ては、別に口傳にも不及、只生克旺相を以て考るとき、自ら分明にして何の難事かこれあらん、人宜く三隅を反ふして可なり、

〔日本書紀推古二十二〕十年十月、百濟僧觀勒來之、仍貢○中略遁甲方術之書也、是時選書生三四人、以俾學習於觀勒矣、○中略大友村主高聰學天文遁甲、山背臣日並立學方術、皆學以成業、

〔日本書紀天武二十八〕天渟中渟中此云農難原瀛眞人天皇、天命開別天皇同母弟也、幼曰大海人皇子、生而有岐嶷之姿、及壯雄拔神武、能天文遁甲、

〔武備志一百七十七〕釋義第一

遁甲者何、天干凡十、甲爲之首、統領諸干、至尊至貴、其所畏者、獨庚金耳、故須遁匿其甲、勿使受尅於庚、然乙爲中妹、可以配之、使其情有所牽、丙丁爲甲男女、可以制之、使其勢不得肆、故以乙丙丁爲三奇、又十干中、戊己庚辛壬癸乙丙丁、皆專制用事、而甲無專位、與六干同處、甲子同六戊、甲戌同六己、甲申同六庚、甲午同六辛、甲辰同六壬、甲寅同六癸、又以六十花甲子布於九宮、起宮爲甲子、遁一位爲甲戌、又遁一位爲甲申之類、皆有遁甲之義、獨餘乙丙丁無與同者、亦三奇之義也、八門者、休、生、傷、杜、景、死、驚、開也、九星者、天蓬、天芮、天衝、天輔、天禽、寄坤宮天心、天柱、天任、天英也、九星八門在地盤原有

定位、如休門天蓬屬坎之類、此一定不易者、其在天盤、則隨直符使所指、與地盤參錯、相値而吉凶生焉、乙爲日奇、丙爲月奇、丁爲星奇、三奇若遇休開生三門、謂之奇與門合、休一在坎、屬水、開六在乾、屬金、生八在艮、屬土、即曆家所謂三白也、又八詐門者、直符、螣蛇、太陰、六合、勾陣、朱雀、九地、九天、是也、此直符隨九星直符所指、陽則順旋、陰則逆轉、其中九天、九地、六合、太陰爲吉、若得奇得門、而又直此四位、是爲全吉、然又有反吟、伏吟、休囚、旺相、擊刑迫制之類、不可不察、神而明之、變而通之、存乎其人耳、

〔日本書紀二十八天武〕元年六月甲申、及夜半到隱郡、焚隱驛家、因唱邑中曰、天皇入東國、故人夫諸參赴、然一人不肯來矣、將及橫河、有黑雲、廣十餘丈經天、時天皇異之、則擧燭親秉式、占曰、天下兩分之祥也、然朕遂得天下歟、即急行到伊賀郡、焚伊賀驛家、逮于伊賀中山、

○按ズルニ、秉式占トハ、其遁甲式ナルヤ否ヤ明ナラズト雖モ、上文引ク日本書紀ニ、天皇天文遁甲ヲ能ストアレバ、姑ク此ニ揭グ、

〔十駕齋養新錄十七〕奇門

奇門之式、古人謂之遁甲、即易八卦方位、加以中央、與乾鑿度太一下行九宮之法相合、史記龜策傳載、宋元王召博士衛平、語所夢、衛平乃援式而起、仰天而視月之光、觀斗所指、定日處鄉、規矩爲輔、副以權衡、四維已定、八卦相望、視其吉凶、介蟲先見、乃對元王曰、今昔壬子、宿在牽牛云々、此遁甲式也、日在牽牛、冬至之候、蓋冬至後壬子日庚子時、子爲夜半、陽遁第一局、甲午爲旬首、在巽宮、杜門爲直使、時加子、子爲玄武、故云介蟲先見也、規矩權衡、謂坎離震兌四正之位、漢書魏相傳、東方之神執規司春、南方之神執衡司夏、西方之神執矩司秋、北方之神執權司冬、是其義也、加以四維、故云八卦相望也、

〔奇門遁甲元機〕遁甲法

昔大撓造甲子、推天地之數、風后演遁甲、究鬼神之奧、極天幽隱遁之謂歟、以六甲儀、以直符、以二十四氣爲式局、六代貴神攸處、凡王師討伐、料敵制勝、不雜掌握之內、參合天人之理、則虧衄者鮮矣、因

擇其指要、別加編次、庶開卷而易曉也、○中略 凡五日六十時週而復始、 甲己之日、夜半生甲子、乙庚之日、夜半生丙子、丙寅之日、夜半生戊子、丁壬之日、夜半生庚子、戊癸之日、夜半生壬子、若後天地人遁之時、出軍最吉、 生門、令月奇臨六丁、爲天遁、華蓋日精所蔽、 開門、令日奇加六己、爲天地遁、紫微華蓋所蔽、 休門、與星奇合太陰、爲人遁、後太陰所蔽、○中略

六甲六丁營法

三元經曰、大將兵四出、統衆屯營、必取其法、則其法以六甲爲首、十時十日一移、 員卓曰、以歲旬而爲狀、或依歲月、或取六甲旬首而排布之、大將居青龍、六甲爲青龍、旗鼓居蓬星、六乙爲蓬星、士卒居明堂、六丙爲明堂、伏兵居太陰、六丁爲太陰、軍門居天門、六戊爲天門、小將居地戶、斬罰居天獄、六庚爲天獄、判斷居天庭、六辛爲天庭、囚繫糧儲居天牢、六壬爲天牢、府庫甲仗居天藏、六癸爲天藏、倣此、

假令、甲己之日、青龍在子、大將居之、蓬星在丑、旗鼓居之、明堂在寅、士卒居之、太陰在卯、伏兵居之、天門在辰、軍門居之、地伏在巳、小將居之、天獄在午、斬罰居之、餘倣此、以上出武經總要、○中略

十二將

用起天乙、以將兵大捷、一作橋 鬪地千里、敵畏服、用起六合、以將兵、主得子女玉帛、用起青龍、以將兵大勝、得敵之邦國府庫、用起太陰、以將兵、士卒怯怖、用起天后、以將兵、不戰自敗、用起太常、以將兵、無功、用起螣蛇、以將兵、士卒驚駭、上下相賊多傷、用起朱雀、以將兵、士卒驚恐、或妄作口舌、用起勾陣、以將兵、士卒敗、車馬折傷、用起玄武、以將兵、軍多亡遁、戰不利、用起白虎、以將兵、師敗無救援、用起天空、以將兵、士卒死亡、爲敵所欺詐、說曰、天一者人皇之靈也、上吞精而爲星、在紫微宮下、遊十二次、則居己丑、畢魔賀事、治大吉小吉、臨甲乙寅卯、假令天一治大吉小吉、而臨甲乙寅卯也、餘皆例此、凶神將螣蛇者、飄風之精也、居太陽之丁巳、雷公六律曰、天一奉車都尉、凶神也、一作面 大小殺並主憂驚、朱雀者一作星 月之精也、居太陰之丙午、雷公六律曰、天一羽林下爲辟靡凶將也、主刑戮口舌兵、六合者太陰之

精也、居少陽之乙卯、吉將也、雷公六律曰、天一光祿大夫、主和合吉事、勾陳者雷電之精也、居太陽戊辰、雷公六律曰、天一大將軍也、凶將也、主戰鬪、多傷敗、靑龍者太陽之精也、居少陽之甲寅、雷公六律曰、天一左丞相、吉將也、主喜慶事、天后者水之精也、居太陽之癸亥、雷公六律曰、天一綵女也、吉將也、主蔽匿事、太陰者金之精也、居少陽之辛酉、雷公六律曰、天一御史中丞、吉將也、主陰私事也、玄武者北方七星之精也、居少陰之壬子、雷公六律曰、天一之後將也、凶將也、主逃亡、離別、盜賊、若與風伯雨師二神幷、必有盜賊、太常者土之精也、居少陰之己未、雷公六律曰、天一太常卿、吉將也、主財帛、白虎者西方七星之精也、居少陰之庚申、雷公六律曰、天一逆尉也、凶將也、主囚禁骸骨、天空者斗魁之精也、居少陰之戊戌、雷公六律曰、天一宜師日一作直、凶將也、主欺詐事、

〔武備志占二百七十七〕奇門

茅子曰、奇門之說、昭然于天下也、而精之者寡、非學之者不衆也、蓋其故有三、飛宮之法、合于洛書、然其離合變化、雖至熟者而或淆、其難一、超神接氣、奇門之本也、而置閏之法、曆家專門之所難、而欲定于倉卒、其難二、分局定盤、說亦瑣矣、約之者、欲以十八局而盡一千八十局之變、廣之者、雖以千八十局、而不足以究十八局之微、其難三、象之推明其吉凶、則首趨避、首趨避則事符呪、事符呪而尅應步罡、諸說集與、其言驗而不可以訓也、其言不驗、而不可以傳也、于是而精者寡矣、有得我同然者、著玄覽、其衡子以定宮、至簡也、酌法以置閏、至明也、因盤以布局、至約也、明乎三者而思過半矣、景祐遁甲符應經者、宋景祐時人所著也、博而析、卓哉莫之過也、删其起例同于玄覽者、而爲之纂、于是乎言奇門而不精、非叙之罪也、六甲者貴神也、六丁者尤貴者也、乘造化之精靈、而幹運陰陽之際、得其竅可以漸之、其專門之學、有煉器、煉形、祭禱、符籙、要之皆奇門之緒也、有其約略而不詳、所以訓所以傳也、

○中略

右四圖、乃張子房所遺之一十八局、至今用之、第每一局爲一圖、共十八圖、既拘泥而不能相通、且推

布傾瑣、故殫心精研、爲日既久、豁然在悟、乃新製此圖、規木爲圖、大小凡四、其下大者爲地盤、內列九星八門原定之位、又以己意增入刑制追墓等忌、其上差小爲九星、又其上差小爲八門、又其上最小爲八詐門、皆推遷無定、故取天盤之義、而以六儀三奇、製爲奇子二副、用則按節氣布之、其三奇與八門之休、開、生、及八詐門之六合、太陰、九地、九天、皆以朱書之、以別其爲吉、奇子之六甲、一面書朱、一面書墨、遇直符則用朱面以別之、誠一披圖、而不假推算、不煩查覈、了然在目、視舊所傳、誠精而簡、明而盡矣、

新製奇子體式

甲子 戊　甲戌 己　甲申 庚　甲午 辛　甲辰 壬　甲寅 癸　乙　丙　丁

用象牙或嘉木、製一樣二副、置一於地盤、置一於天盤、隨應起之宮、依順逆布排、

〔漢書九十九〕王莽字巨君、孝元皇后之弟子也、○中略地皇三年十月二日己酉、城中少年朱弟張魚等、恐見鹵掠、趨讙並和、○中略燒作室門、斧敬法闥、謼曰反虜王莽、何不出降、○中略時莽紺袀服、帶璽韍、持虞帝匕首、天文郞按栻於前、〈師古曰、栻所以占時日、天文郞今之用栻者也〉日時加某、莽旋席隨斗柄而坐曰、天生德於予、漢兵其如予何、

〔抱朴子內篇十七〕登涉卷第十七

按玉鈐經云、欲入名山、不可不知遁甲之祕術、而不爲人委曲說其事也、而靈寶經云、入山當以保日及義日、若專日者大吉、以制日伐日必死、又不一一道之也、余少有入山之志、由此乃行學遁甲書、乃有六十餘卷、事不可卒精、故鈔集其要、以爲囊中立成、然不中以筆傳、今論其較略、想好事者欲入山、行當訪索知之者、亦終不乏於世也、遁甲中經曰、欲求道、以天內日、天內時、劾鬼魅、施符書、以天禽日、天禽時、入名山、欲令百邪虎狼毒蟲盜賊不敢近人者、出天藏、入地戶、凡六癸爲天藏、六己爲地戶也、又曰、避亂世、絕跡於名山、令無憂患者、以上元丁卯日、名曰陰德之時、一名天心、可以隱淪、所謂白日

陸沈、日月無光、人鬼不能見也、又曰、求仙道入名山者、以六癸之日、六癸之時、一名天公日、必得度世也、又曰、往山林中、當以左手取青龍上草、折半置逢星下、歷明堂入太陰中、禹步而行、三呪曰、諸臯太陰將軍、獨閒、〈〇閒當作開〉曾孫王甲、勿開外人、使人見甲者、以爲束薪、不見甲者、以爲非人、則折所持之草置地上、左手取土、以傅鼻人中、右手持草自蔽、左手著前、禹步而行到癸下、閉氣而住、人鬼不能見也、凡六甲爲青龍、六乙爲逢星、六丙爲明堂、六丁爲陰中也、☵☲比成既濟卦、初一初二跡不任九跡數然相因、仍一步七尺、又云、一尺合二丈一尺、〈一作一丈一步尺〉顧視九跡、又禹步法、正立右足在前、左足在後、次復前右足、以左足從右足、併是一步也、次復前右足、次前左足、以右足從左足、併是一步也、次復前右足、以左足從右足、併是三步也、如此禹步之道畢矣、凡作天下百術、皆宜知禹步、不獨此事、抱朴子曰、靈寶經曰、所謂寶日者、謂支干上生下之日也、若用甲午乙巳之日是也、甲者木也、午者火也、乙亦木也、巳亦火也、火生於木故也、又謂義日者、支干下生上之日也、若壬申癸酉之日是也、壬者水也、申者金也、癸者水也、酉者金也、水生於金故也、所謂制日者、支干上克下之日也、若戊子己亥之日是也、戊者土也、子者水也、己亦土也、亥亦水也、五行之義、土克水也、所謂伐日者、支干下克上之日、若甲申乙酉之日是也、甲者木也、申者金也、乙亦木也、酉亦金也、金克木故也、他皆倣此、引而長之、皆可知之也、

〔後漢書〕〈八十二方術列傳〉又有風角、遁甲、七政、元氣、六日七分、逢占、日者、挺專、須臾、孤虛之術、〈風角六日七分解、並見郎顗傳、〇遁甲、推六角之陰、而隱遁也、今書七志、有遁甲經、〉

一〔序例抄〕六甲ト云ハ、甲子、甲戌、甲申、甲午、甲辰、甲寅也、十日々々ニマハル也、此日一年ニ各六度ヅツアルゾ、甲子ヨリ癸酉ニテ、十日ノ間ハ、陰中ハ癸酉ノ方ニアリ、此方ニ藥ヲカワカセバ、陰乾ゾ、甲乙丙丁戊己庚辛壬癸トカズヘテ、六番メゾ、己ニアタル處ヲ處ト云、十番メノ癸ニ當ル處ヲ陰中ト云也、甲戌ヨリ癸未マデノ十日ノ間ハ、陰中ハ癸未ノ方ニアリ、甲申ヨリ癸巳マデハ、十日ノ間ハ、陰中癸巳ニアリ、甲午ヨリ癸卯マデ十日ノ間ハ、陰中癸卯ニアリ、甲辰ヨリ癸丑マ

デノ十日ノ間ハ、陰中ハ癸丑アリ、甲寅ヨリ癸亥マデ十日ノ間ハ、陰中癸亥ノ方ニアルゾ、十干ノ終ル處ノ支ヲ以テ、陰地トスルゾ、○中略

又依遁甲　後漢書太子賢ガ註ニ云、遁甲、推六甲之陰而隱遁也、今書、七志有遁甲經ト云々、遁甲法ト云ハ、方ニトレバ、此六甲ノ陰中ト同ジ心也、時ニトルベクハ、土運甲ト己トノ日ハ、夜半ヲ甲子トアテヽ、其次ハ乙丑、其次ハ丙寅、其次ハ丁卯、其次ハ戊辰、其次ハ己巳、其次ハ庚午、其次ハ辛未、其次ハ壬申、其次ハ癸酉トカズヘテ、壬申癸酉ヲ終ヘテ、甲戌乙亥ニアタル時ヲ遁甲ト取ル、金運、乙ト庚トノ日ハ、夜半ヲ丙子トアテヽ、其次ハ丁丑ト、如此次第ニカズヘテ、壬午癸未ヲ終テ、甲申乙酉ニアタル時ヲ遁甲ト取ル、水運、丙ト辛トノ日ハ、夜半ヲ戊子トアテヽ、其ヨリ次第ニ數テ、壬辰癸巳ニ終テ、甲午乙未ニアタル時ヲ遁甲ト取ル、木運、丁ト壬トノ日ハ、夜半ヲ庚子トアテヽ、其ヨリ次第ニ數ヘテ、壬寅癸卯ヲ終ヘテ、甲辰乙巳ニアタル時ヲ遁甲ト取ル、○下略

〔五行大義〕二論配支幹

支干之義、多所配合、今略論方位及配所、幹不獨立、支不虛設、要須配合以定歲月日時、而用、如君臣夫婦、必配合以相成、總而言之、從甲至癸、爲陽爲干爲日、從寅至丑、爲陰爲支爲辰、別而言之、干則甲丙戊庚壬爲陽、乙丁己辛癸爲陰、支則寅辰午申戌子爲陽、卯巳未酉亥丑爲陰、陽則爲剛、爲君、爲夫、爲上、爲外、爲表、爲動、爲進、爲起、爲仰、爲前、爲左、爲德、爲施、爲開、陰則爲柔、爲臣、爲妻、爲妾、爲財、爲下、爲內、爲裏、爲止、爲退、爲伏、爲位、爲後、爲右、爲刑、爲虛、爲閉、陰陽所擬例多、且略大綱如此、甲乙寅卯木也、位在東方、丙丁巳午火也、位在南方、戊己辰戌丑未土也、位在中央、分王四季、寄治丙丁、庚辛申酉金也、位在西方、壬癸亥子水也、位在北方、甲爲干首、子爲支初、相配者、太陽之氣、動於黃泉之下、在建子之月、黃鐘之律、爲氣之源、在子、故以子爲先、萬物湊出於建寅之月、皆以見形、甲屬此月、故以甲爲先而配子、見者爲陽、故從干、未見者爲陰、故從支、干支所以用甲子相配、爲六旬之始、干既有支、有十二

輪轉、相配終於癸亥、故有六十日、十日一旬、故有六旬、一旬盡一甲癸、便以甲配子、盡干至癸酉、便盡干、餘支有戌亥、又起甲配戌、盡干至癸未、餘支有申酉、又起甲配申、盡至干、癸巳餘支有午未、又起甲配午、盡干至癸卯、餘支有辰巳、起甲配辰、盡干至癸丑、餘支有寅卯、又起甲配寅、盡干至癸亥、十干有十二支、有配周畢、還從甲子起、故六甲輪轉、止六十日、十日一旬、一旬之內、二支無配偶者、為之孤、所對鍾者為之虛、卜筮所云空亡、以支孤無、故干名為空亡、亡者无也、无干故亡、所對者全虛、故云空也、算法、横下十二支位於四方、縱下八干位於四方、下戊己位於中央、若甲子旬取甲干以配子支、如此次第相配至戊辰位、在中央土為四行主、不可移、故取辰支巳支入中央配戊己、餘悉以干就支、至戊亥、无干配之、單故為孤、辰巳之位支干並无、故名為虛、其空亡之辰、從五行言之、如甲子旬、无戌亥、水土牢空亡、以戌是土亥是水也、不全無亥子、故云牢也、甲戌旬無申酉、為金全空亡、以金二支並无也、甲申旬無午未、為火土牢空亡、以巳午不全无也、甲午旬無辰巳、亦然、甲辰旬無寅卯、亦云木金空亡、甲寅旬無子丑、亦水土牢空亡、並以二支不俱無也、兵書云、陽生甲子、不足戌亥、仍為天門、陰生甲午、不足辰巳、仍為地戶、陽界甲寅不足子丑、仍為鬼門、陰界甲申不足午未、仍為人門、陽盛甲辰、卯為之隔、陰與甲戌、酉為之隔、此並是六甲之空支也、春秋元命苞云、地不足東南、右動、終而入虛門、此明甲子孤在戌亥、虛在辰巳也、一干一支為一日者、以周天三百六十五度四分度之一、日行一度、故正用一干一支以主一日也、三旬為一月者、月日行十三度四分度之一、三旬而周天也、十二月為一歲者、四時時有三月、生殺之功、備遍十二支也、一歲合三百六十日者、六六三十六、六甲之數也、六甲間、兩月之日者、以陰陽奇偶備也、陽者為奇、陰者為偶、萬物庶類吉凶之理、以此彰矣、其支干相配、歲月日時並然、立歲之元、起於上元甲子、立月之元、起甲己之歲十一月甲子、立日之元、六旬起自甲子、立時之元、冬夏二至後、得甲己之日夜半起甲子、四事皆以甲子為首也、其上配九星、下配九州者、黃帝兵決云、甲子從北斗魁第一星起、順數至庚午、在第七罡星、至辛未還從第六星逆數至丙子、又從第

占例

一旱頗歡盡六甲、

〔政事要略 九十五 至要雜事〕弓削是雄式占有徵驗事 善家異記

内豎伴宿禰世繼、貞觀六年、爲穀倉院交易使、歸來之次、宿近江國介藤原有蔭館、時有蔭招陰陽師弓削是雄、令祭屬星、與世繼同宿館中、其夜世繼頻有惡夢、令是雄占夢吉凶、是雄轉式、大驚曰、君若歸家、即日當爲鬼殺戮、愼勿入家、可免此殃、世繼辭家在旅、度歷二年、顧念妻子、促駕入洛、假聞此占、中心歎慨、更亦同云、我必可歸家、而今有此占、若有防護之法乎、是雄亦轉式語曰、君家寢室艮隅、有殺君之鬼、君須帶刀劔、持弓矢、直入寢室、引弓攝矢、瞋目向艮方語云、汝若不出、我當射殺汝身、若能如此、當脫此厄、於是世繼到家、周旋每事、如是雄之語、時有一沙門、手持匕首、出長跪再拜自首云、某无狀、與君婦通淫、近日聞君來、將待其寢寐、欲行其殺害、而今君有先覺、將射殺某身、是以歸誠自首、世繼立逐其妻、捕其沙門繫獄拷掠、即録狀上聞、天下皆云、是雄占驗、管郭之儔也、

〔權記〕寬弘八年五月十九日壬午、文室爲義來云、一昨子剋、一宮御方天井上、有投多瓦礫之聲、甚奇怪也、承女房仰、即書占方、問遣大炊頭許、占云、五月七日庚辰、時加子、見怪日時 勝光臨亥爲用、將天后、中大吉、天空、終傳送臘蛇、御行年寅上從魁朱雀、卦遇傍茹絕紀、推之、國家可愼御歟、期怪日以後卅日之内、及來六月十月節中、並丙丁日也、何以言之、曰、下剋上、註曰、絕紀亡、其先人、必有孤子、章曰、臣事君、子事父、今皆下賊上、爲絕紀、臣害其君、子害其父、男妨父、女妨母、故曰亡、其先人、是謂孤子之故也、至期愼御、豫被行攘災法、無其咎乎、端書、此占文不可及他見、怪體如何、早欲奏耳、陰陽頭文高推之、若聞召驚口舌之事歟、主計頭吉平占卦遇傍茹、推之無咎、自然所爲哉、今案、主上御惱、廿三日丙申發動、遂有大故、光。榮之占如指掌、可謂神也、後日之公案也

〔類聚符宣抄 三〕陰陽寮

一占八幡宇佐宮西門南外版御幣殿東方柞木俄枯怪 三月十三日申時

三月十三日庚寅、時加申、天剛臨卯爲用、將六合、中太一、將勾陣、終勝光、將青龍、卦遇聯茹、推之、怪所宮司中非有寅子年人鬪亂之事、丑未年人憂病患之事哉、期怪日以後三十日內、及來八月節中丙丁日也、何以言之、用起王氣之所勝、辰上及傳見朱雀勾陣、以之主鬪亂、又以天剛主有病患之故、件怪所至期愼之、無其咎乎、

一占鵄一雙集南樓上恠、三月十七日辰時

三月十七日甲午、時加辰、神后臨未爲用、將螣蛇、中太一、將大裳、終河魁、將六合、卦遇聯茹、推之天下非有疾疫之事、坤艮國有兵革之事哉、期恠日以後二十日內、及六月七月十一月節中庚辛日也、何以言之、用起死氣之所勝、以之主疾病、將得螣蛇、傳得太一、以之皆主兵事之故也、至期愼之、無其災哉、

萬壽三年五月九日　少属大中臣

頭惟宗朝臣

主計頭安部朝臣

〔類聚符宣抄　三〕陰陽寮

占太宰府言上八幡宇佐宮寳殿去四月廿二日顚倒怪異

今月廿日己丑、時加酉、太一臨酉爲用、將青龍、中大吉、將螣蛇、終從魁、將玄武、卦遇從革、推之、從申酉丑寅方、奏兵革事歟、期今日以後三十五日內、及明年四月七月節中幷甲乙日也、何以謂之、用起金神、卦遇從革、又大歲上臨一凶神、將帝勾陣、皆是主兵革事之故也、至期被誡、無其咎乎、

長元五年七月廿日　允中原

助兼陰陽博士巨勢朝臣

頭兼漏刻博士大中臣朝臣

〔朝野群載 十五 陰陽道〕陰陽寮

占吉田社司言上怪異吉凶（十一月十九日申時御祭、本殿御戸鎖舌被損、不被開、）

十一月十九日丙申、時加申、大衝臨戊爲用、將玄、中傳送、將六合、終大吉、將大陰、卦遇元首、

推之、依神事不淨不信所致歟、公家可愼御藥事歟、期怪日以後廿日內、及明年二月九日節中壬癸日

也、何以言之、辰上及終將太陰、御年上見天空、主不淨不信、又大歲及日上帶河魁臨蛇、是以主御藥事

之故也、至期愼御、無其咎歟、

永久元年十二月十八日

陰陽博士兼因幡權介賀茂朝臣宗憲

助兼主計助權曆博士賀茂朝臣家榮

〔諸道勘文〕八幡御體可被改造否御占相論事

勘申陰陽寮占、今月一日八幡宮外殿御體可被改造新像哉、將可奉渡護國寺御體否、御卜託宣事、

可被造由占申事

今日甲戌時加酉（本宜皆日、時四月節）神后臨丑爲用、將天后、中微明、將大陰、終河魁、將玄武、卦遇狡童佚女天吏、

推之、被改造吉歟、以何言之、用傳幷日辰、上皆見吉將、是主吉之故也、

今案件推條、旁有紕謬、具載狀左、

用起神后、中得微明大陰云々、微明大陰主穢氣不淨、（一四也）終見河魁玄武云々、河魁玄武主不淨不信、

（二四也）御歲上國之、（三四也）大歲上得小吉天空云々、小吉天空主欺殆不信、（四四也○中略）

右就用傳案之、第一御占、用雖起吉神良將、傳終得凶神凶將、尤不快也、第二御占尤吉也、三傳雖帶惡

將、無內外戰之上、已得始也者、以護國寺御體被安置於正殿、有何難哉、況長元御占、尤可被准據歟、抑

御體事、國家之疑議也、當道之大事也、愚管所覃、不可不申、仍所勘申如件、

保延六年五月七日

主計助安部朝臣泰親

五月八日、持參鳥羽殿、以相摸守範宗進之、叶叡慮之由被仰下、自院可令奏大內御之由被仰下云云、

辨申去一日御占有紕謬之由事

今月十日宣旨偁、左大史小槻宿禰政重仰偁、左少辨源朝臣雅綱傳宣、左大臣宣奉勅、主計助安部朝臣泰親、勘申八幡宮外殿御體可被改造新像哉、將可奉渡護國寺御體否、御占紕謬事、宜令陰陽助賀茂朝臣在憲、天文博士安部朝臣廣賢等辨申子細者、

可被造由占申事

今日甲戌、時加酉、(奉宣旨日時、四月節)神后臨丑爲用、將天后、中徵明、將大陰、終河魁、將玄武、卦遇狡童佚女天吏、推之、被改造吉歟、以何言之、用傳幷日辰、上皆見吉將、是主吉之故也、今案件推條、傍有紕謬、具載狀左者、

用起神后、中得徵明大陰云々、徵明大陰、主穢氣不淨、(一凶也)終見河魁玄武云々、河魁玄武、主不淨不信、(二凶也)御年上同之、(三凶也)大歲上得小吉天空云々、小吉天空主欺殆不信、(四凶也)金匱經云、始吉終凶、先吉後凶云々、據件等文、可被改造之由、推申之條、未知其理、今度御占、始吉終凶之故也、又本條云、一凶二吉爲吉、一吉二凶爲凶、而今如占申者、一吉四凶也、就中可被奉改造御體御占、主不淨不信之神、尤可恐其咎者也、何況去長元元年十一月、石淸水御殿修造間、御體可被奉移假殿之由、吉凶有其沙汰、被行軒廊御卜之時、主計頭賀茂朝臣守道、陰陽頭惟宗朝臣文高等占申云、十一月二日壬辰、時加未、(十月節)勝先臨壬爲用、將天后、中大吉、句陳、終傳送、玄武、卦遇聯茹狡童佚女、推申云、奉移不快也、何以言之、三傳終玄武、辰上見徵明天空、皆是主不淨不信之故也、以彼謂此、今度御占、與彼長元御占、頗同趣歟、依三傳終玄武、申不吉之由、今度御占、終河魁玄武、是同趣也、又彼御占、辰上見徵明天空、仍申不淨不信之由、今度又大歲上得小吉天空、是又主不淨不信、大略同前也者、推申可被改造之由、尤不當事歟、

○中略

右一々之難、事々不當也、卜筮之道、以將只辨其吉凶、依傳不決其勝劣、是奉經奥旨、先儒嘉篆、更非今案、皆卽舊例也、就中勿論之事、何及陳謝、然而綸言有限、不可默止、仍或操書籍之文、或課相傳之說、聊注大略、言上如件、

保延六年五月十六日　圖書頭兼天文博士安部朝臣廣賢

勘申主計助泰親勘申、今月一日酉時、占申八幡宮外殿御體可被改造哉、將可奉渡護國寺像歟、所條吉凶子細事、

可被奉改造御體事

用起神后、中得微明大陰云々、微明大陰、主穢氣不淨也、凶一　終見河魁玄武、主不淨不信也、凶二　御年上同之也、凶三　大歳上得小吉天空、主欺殆不信也、凶四　者、

件勘申之旨、本所存知也、仍雖不載御占形、殊慎穢氣不淨不信、可被奉改造之由、於軒廊之座所申上聊也、何處紕繆乎、抑微明大陰、主穢氣不淨云々、然而斯金匱及大橈經云、微明主天社、吉一　同經云、大陰者請求神道、錢財相通、吉二　又太玄經云、北右大陰也、陰者鬼神之府也、玄性爲災、災於鬼神必以盡敬齊也、吉三　然則微明大陰、吉多凶少、河魁玄武、主不淨不信云々、然而河魁者有氣也、神之所喜也、吉四　又主守親、論語云、苞氏云、犬之□□守禦云々、河魁是犬也、然則大菩薩、殊有防禦敵國、守護國家之誓願、仍河魁爲守護之神、在終幷御年上、可謂吉兆也、吉五　玄武者水長也、御體者木主也、五運之道、從水生木者、玄武之水、可出生木主、豈非改作之兆哉、吉六　御年上又同之、吉七　小吉天空、主欺殆不信云々、然而小吉者爲吉神也、吉八　又有氣也、吉九　天空者上也、同有氣也、吉十　已上帶十吉、何稱一吉四凶哉、未知其理、被立御體、更不可有凶也、立占之術、依事施推、陰陽之法、遇境垂化者也、何守一隅、猥致偏執哉、

一以長元元年八幡宮御體動否御占、不可引申證據事、

件御占者、推動否之一條、今御占者、涉作渡之兩方、然則一事之占、依神將之吉凶、兩方之推判、彼是之勝劣、專不叶准據者也、〇中略

一二籌御占、依爲不吉、不可被奉渡護國寺御體事、

發用帶騰蛇、凶將也、傳得太一、凶將也、將帶勾陣、凶將也、終帶白虎、凶將也、大歲上又帶白虎、凶將也、日上帶騰蛇、凶將也、卦遇伏吟、凶卦也者、

今檢經說等云、新撰陰陽書云、騰蛇臨人年日辰、憂驚恐失精魂、又神樞靈轄云、在床上主疾病、又神樞秘要云、騰蛇者、廻徨曲宜、違車呻吟、同神樞秘要云、騰蛇有氣無氣之時常爲凶者也、隨又有在床上、加之在日上爲用、然則被奉渡御體、深可成恐歟、又新金匱及大橈經云、太一主火災、勾陣主留連、又神樞靈轄云勾陣主稽留、據件等文、縱雖欲奉渡護國寺御體、稽廻徨難遂心事歟、又新金匱及大橈經云、白虎主瞋怒、似可成凶、縱雖欲奉渡護國寺御體、稽留中途、不遂心事歟、伏吟者、凶卦也、具見上文、抑如秦親之勘申、以穢氣不淨等、可爲凶者、用帶騰蛇、主穢氣、凶　一日上同之、凶　二終傳送白虎、共爲金神、爲死氣、主穢氣不淨也、凶　三大歲上同之、凶　四辰上河魁玄武、主不淨不信、凶　五御年上徽明大陰、主穢氣不淨違例、凶　六卦遇玄胎四牝、主不淨、凶　七就之案之、第一御占、有四箇之不淨不信、用起神將吉多凶少、第二御占、有七箇之穢氣、不淨不信違例、用起神將凶多吉少、兩條之是非、一決而可知、秦親之所引申、長元御占、雖有得禮、不銷不淨、今二籌已有得禮、又不可銷不淨歟、且任神慮、且仰聖斷而已、

右兩方推條、依宣旨勘申如件、

保延六年五月十二日　　陰陽助兼陰陽博士因幡權介賀茂朝臣在憲

〔兵範記〕仁安二年十月九日癸卯、殿下〇藤原基房今朝令入宇治給、明日還御後可內覽、仍隨身御卜形歸、

陰陽寮

占、去九月二十七日子時、五條皇居燒亡、若有咎祟所致歟、

去九月二十七日辛、時加子、(十月節)太一臨卯爲用、將六合、中小吉、將青龍、終河魁、將白虎、卦遇嚆矢、

龍戰天吏□□

推之、依自然所致歟、

〔玉海〕治承五年(○養和元年)二月十三日庚寅、未剋藏人左少辨行隆來、呼簾前問子細、先日所被尋之行幸之間沙汰也、就余(○藤原兼實)申狀、御藥幷御所事、被問官(依觸中召陣外、內々問之、)寮(召藏人所問之、)等之處、申旨各別、就何可被行哉、須用官卜申旨也、然而至今度不可必然、事體猶有行幸者可宜歟云々者、　申云、先日被尋問之處、有殊急事者、不可及議定、早可有行幸、依御藥之一事者、御所之凶、有無之條、可被行御占之由令申了、就之被問官寮申狀、各別之時、被用官申狀者例也、今可被棄其狀之由難定申、此上事、只可在御意也、愚慮難定申者、行隆內々語云、若有行幸者、來廿日可宜之由所擇申也云々、行隆所持來之卜形等如此、(○中略)

寮

御所吉凶

占、今日己丑、時加申、(依正月節)徵明臨巳爲用、將螣蛇、中小吉、將青龍、終大吉、將天空、御行年巳上徵明、螣蛇卦遇反吟、

推之、被用皇居有御藥事不吉、以何言之、月幷御年上帶螣蛇、是主御藥事、又三傳爲無氣、卦遇反吟、是主御所不吉之故也、

資元　廣元　業俊　季弘　泰親　在憲(○中略)

凡此行幸之沙汰、狂亂也、何強被訪諸人哉、只任叡慮可被行事也、

〔宣胤卿記 渡方〕明應七年三月廿二日、有宗朝臣持來、

怪異吉凶 去正月一日戊刻、多武峯寺大織冠大明神御面令破裂給事、

右去正月一日戊戌、時加戌、神后臨戌爲用、將白虎、中功曹靑龍、終天罡靑龍、御年上大吉天空、

卦遇聯茹

推之、怪所之依神事穢氣、不淨不信所致之上、可有御愼病事火災等歟、幷從震艮方可奏口舌兵革之事哉、期怪日以後三十五日之內、及十月十二月、明年正月節中、幷甲乙日也、兼被祈請者無其咎乎、

明應七年三月廿二日　陰陽頭有宗

多武峯の占文、かやうにて候、やがて返下され候て、寺家へつかはし可被下候、このよし御心得候て、御披露可被下候、かしく、

のぶ胤

勾當内侍どのへ御返事

先規雖不申入禁裏、占文可入見參之由、在昨日之御返事、

神體令破裂事、注進之旨被驚思食候、仍御占文如此、早々被致祈謝、〇下略

〔晉書 九十五 戴洋傳〕戴洋、字國流、吳興長城人也、〇中略咸康三年、〇中略洋曰、十月丁亥、夜半時、得賊問、干爲君、支爲臣、丁爲征西府、亥爲邾城、功曹爲賊、神加子、時十月、水王木相、王相氣合、賊必來、寅數七、子數九、賊高可九千人、下可七千人、從魁爲貴人、加丁、下剋上、有空亡之事、不敢進武昌也、賊果陷邾城而去、亮問洋曰、故當不失石城否、洋曰、賊從安陸向石城、逆太白、當伐身、無所慮、亮曰、天何以利胡而病我、洋曰、天符有吉凶、土地有盛衰、今年害氣三合己亥、己爲天下、亥爲戎、胡季龍亦當受死、今乃不憂賊、但憂公病耳、

書籍

〔新撰六旬集〕斯依滋岳川人、貞觀十三年奉勅撰進六甲撰進之、
甲子一勝先臨酉爲用、將青龍卯(朱勾)子(居白)卦(四時三交、春、亦三光、正月七月高蓋驅馬、)占怪夢(四時狀婦女財物及宅內有姦人、若正月七月乾宮有慶、若乾孕動、)
(行期時日、及五八月壬癸日年四子孫、)占病(春夏賞神鬼、秋冬立王時遣路鬼祟、解謝有慶也、蓐將勝地卦三交也、卦四時三交、)

〔三代實錄 清和二十五〕貞觀十六年五月廿七日甲寅、從五位上行陰陽頭兼陰陽博士安藝權介滋岳朝臣川人卒云々、川人作世要動靜經三卷、指掌宿曜經一卷、滋。川。新。術。遁。甲。書。二。卷。金櫃新注三卷、

〔日本國見在書目錄〕五行家(九百十九卷、私略之、呪禁、符印、五行、六壬、雷公、太一、易、遁甲、式、相、仙術○中略)
六壬雜占一　六壬釋二　六壬式樞機經二　釋六壬式六十四卦法四卷　六壬式一切法一　六壬式雜占書一　六甲右左上符一　六甲圖一　大道老君六甲秘符一　八史圖一　六甲神符二　九宮式經一　九宮經四(鄭司農經)　九宮經一　九宮飢積曆一　交異九宮經三　太一經二(宋氏撰)　太一經一(周氏撰)　秘要三(第三四五)　秘要立成一　秘要口決一　秘要立成十二(張氏撰)　秘要鑒度一　秘要四神曆基三　秘要決幷雜陰陽十秘要式二　秘要日計立成圖(周撰○中略)　遁甲六　遁甲二(宣宏等撰)　遁甲一(信都等撰)　門元太一　門元經六　門元秘要一(葛洪撰)　門元經要抄一(抱朴子撰)　三元九宮三元三三元立成六　三元經序一(陶隱居撰)　三元用決(張頁撰、四略)　式經一　式經尺卅六　用決一(朱先生撰)　式(庄子撰)　式占十二　將決一　式家用印字決一　雜祭曆一(賈耽撰)　黃帝式龍首經一　黃帝式用常年經一　八公靈纂經一　八公靈纂卜經二　宇宙經一　京房占六　情百鳥鳴一　京房雜占一　乙巳占十

〔漢書 藝文志三十〕泰一陰陽二十三卷(○中略)天一六卷、泰一二十九卷(○中略)風鼓六甲二十四卷、風后孤虛二十卷、六合隨曲二十五卷、轉位十二神二十五卷、羨門式法二十卷、羨門式二十卷、文解六甲十八卷、(○中略)

式神

右五行三十一家、六百五十二卷、

〔隋書 經籍 三十四〕六壬式經雜占九卷 梁有二六壬式經三卷一亡、 六壬釋兆六卷

〔十駕齋養新錄 十七〕六壬

隋書經籍志、五行類有二六壬式經雜占九卷 梁有二六壬式經三卷一亡、 六壬釋兆六卷、六。壬。之。名。始。見。於。此。

〔唐書 藝文 五十九〕孫僧化六甲開天曆二卷、翼奉風角要候一卷、王琛風角六情訣一卷、○中略 祿命書二卷、遁甲開山圖一卷、劉孝恭風角鳥情二卷、文祿命書二十卷、鳥情占一卷、風角十卷、○中略 太一大游曆二卷、大游太一曆一卷、曜靈經一卷、七政曆一卷、六壬曆一卷、六壬擇非經六卷、○中略 太一曆一卷、曹氏黃帝式經三十六用一卷、玄女式經要訣一卷、董氏大龍首式經一卷、桓公式經一卷、宋琨式經一卷、六壬式經雜占九卷、雷公式經一卷、太一式經二卷、太一式經雜占十卷、○中略 太一飛鳥曆一卷、太一九宮雜占十卷、九宮經三卷、堪輿曆注二卷、殷紹黃帝四序堪輿一卷、地節堪輿二卷、伍子胥遁甲文一卷、信都芳遁甲經二卷、葛洪三元遁甲圖三卷、許昉三元遁甲六卷、杜仲三元遁甲一卷、榮氏遁甲開山圖二卷、遁甲經十卷、遁甲囊中經一卷、遁甲推要一卷、遁甲秘要一卷、遁甲九星曆一卷、遁甲萬一訣三卷、三元遁甲立成圖二卷、遁甲立成法三卷、遁甲九宮八門圖一卷、遁甲三奇三卷、陽遁甲九卷、陰遁甲九卷、遁甲三元九甲立成一卷、○中略 王琛新撰陰陽書三十卷、○中略 僧一行天一太一經一卷、又遁甲十八局一卷、太一局遁甲經一卷、

〔倭訓栞 前編 十一〕しきがみ　歌書に見ゆ、しきの神ともいふ、新猿樂記陰陽道の條に、仕二式神一と書り、式伏といふ事もあり、實は人形の識神にて、巫蠱の妖術なりといへり、撰集抄に物の識になんか丶りてと見え、宇治拾遺にしきにうてけると見え、古記に式に厭著などいふも身代の人形より起るともいへり、

〔續古事談 臣節 二〕神泉ノ競馬ノ時、陰陽識神ヲ呪シテウヅメルヲ、今ニ解除セズ、其靈アリトナンイ

ヒツタヘタル、今モスグベカラズトゾ、アリユキトイフ陰陽師ハ申ケル、〇下略

〔枕草子九宮〇皇后定子〕にはじめてまいりたる比、物のはづかしき事かずしらず、〇中略物など仰られて、我をばおもふやととはせ給ふ、御いらへに、いかにかはとけいするにあはせて、だいばん所のかたに、はなを高くひたれば、あな心う、そらごとするなりけり、よし〳〵とていらせ給ひぬ、いかでかそらごとにはあらん、よろしうだにおもひきこえさすべき事かは、はなこそはそらごとしけれとおぼゆ、〇中略猶こればかりはけいしなをさせ給へ、しきの神も、をのづからいとかしこしとてまいらせてのちも、うたて折しもなどてさはたありけん、いとおかし、

〔大鏡一花山〕さてつちみかどよりひんがしざまにおはしますに、晴明がいへのまへをわたらせ給へば、みづからのうへにて、手をおびたゞしくはた〳〵とうつなり、みかどおりさせ給ふと見ゆる、天變ありつるが、すでになりにけりと見ゆるかな、まいりて奏せん、車にさうぞくとらせよといふこゑきかせ給ひけんは、さりともあはれにはおぼしめしけんかし、かつ〳〵、しき神一人だいりにまいれと申ければ、めには見えぬもの丶、とをしあけていづ、御うしろをや見まいらせけん、たゞいまこれよりすぎさせおはしますと、いらへけりとかや、〇下略

〔今昔物語二十四〕安倍晴明隨忠行習道語第十六

亦此晴明、廣澤ノ寛朝僧正ト申ケル人ノ御房ニ參テ、物申シ承ハリケル間、若キ君達僧共有テ、晴明ニ物語ナドシテ云ク、其識神ヲ仕ヒ給フナルハ、忽ニ人ヲバ殺シ給フラムヤト、晴明道ノ大事ヲ此ク現ニモ問ヒ給フカナト云テ、安クハ否不殺ジ、少シ力ダニ入テ候ヘバ、必ズ殺シテム、虫ナドヲバ塵許ノ事セムニ、必ズ殺シツベキニ、生ク樣ヲ不知バ、罪ヲ得ヌベケレバ由无キ也ナド云フ程ニ、庭ヨリ蝦蟇ノ五ツ六ツ許踊ツヽ、池ノ邊樣ニ行ケルヲ、君達然バ彼レ一ツ殺シ給ヘ、試ムト云ケレバ、晴明罪造リ給フ君カナ、然ルニテモ試ミ給ハムト有レバトテ、草ノ葉ヲ摘切テ、物ヲ

讀樣ニシテ、蝦蟇ノ方ヘ投遣タリケレバ、其ノ草ノ葉、蝦蟇ノ上ニ懸ルト見ケル程ニ、蝦蟇ハ眞平ニヒシゲテ死タリケル、僧共是ヲ見テ、色ヲ失テナム恐ヂ怖レケル、此晴明ハ家ノ内ニ人无キ時ハ、識神ヲ仕ケルニヤ有ケム、人モ无キニ蔀上ゲ下ス事ナム有ケル、亦門モ差ス人モ无カリケルニ、被差ナムトナム有ケル、此樣ニ希有ノ事共多カリトナム語リ傳フル、其孫于今公ニ仕テ、止事无クテ有リ、其土御門ノ家モ、傳ハリノ所ニテ有リ、其孫近ク成マデ、識神ノ音ナドハ聞ケリ、然レバ晴明倘只者ニハ非リケリトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔宇治拾遺物語 二〕昔晴明陣にまいりたりけるに、さきはなやかにをはせて、殿上人のまいりけるをみれば、藏人の少將とて、まだわかく花やかなる人の、見めまことにきよげにて、車よりおりて内にまいりたりけるほどに、この少將のうへに烏のとびてとをりけるが、しどをしかけゝるを、晴明きとみて、あはれ世にもあひ、年などもわかくて、見めもよき人にこそあんめれ、しきにうてけるにか、このからすは、しき神にこそありけれと思ふに、しかるべくて、此少將のいくべき報や有けん、いとおしう晴明が覺て、少將のそばへあゆみよりて、御前へまいらせ給か、さかしく申やうなれど、なにかまいらせ給ふ、殿は今夜えすぐさせ給はじと見奉るぞ、しかるべくて、をのれにはみえさせ給へるなり、いざさせ給へ、物心みんとて、このひとつの車にのりければ、少將わなゝきて、あさましき事かな、さらばたすけ給へとて、ひとつ車にのりて、少將の里へいでぬ、申の時計のことにてありければ、かくいでなどしつるほどに、日もくれぬ、晴明少將をつといだきて、身がためをし、又なに事にか、つぶ／＼と夜一よいもねず、こゑもたえもせず讀きかせ、かぢしけり、秋のよのながきに、よく／＼したりければ、あかつきがたに、戸をはた／＼とたゝけるに、あれ人出してきかせ給へとて、きかせければ、この少將のあひ聟にて、藏人の五位のありけるも、おなじ家にあなたこなたにすへたりけるが、此少將をば、よき聟とてかしづき、今ひとりをばことの外に

思おとしたりければ、ねたがりて陰陽師をかたらひて、しきをふせたりけるなり、さてその少將は死なんとしけるを、晴明が見つけて、夜一よいのりたりければ、そのふせける陰陽師のもとより人の來て、たかやかに、心のまどひけるまゝに、よしなくまもりつよかりける人の御ために、仰をそむかじとて、しきをふせて、すでにしき神かへりて、をのれたゞいましきにうて、死侍ぬ、すまじかりける事をしてといひけるを、晴明、これきかせたまへ、夜部みつけまいらせざらましかば、かやうにこそ候はましといひて、その使に人をそへてやりてきゝければ、陰陽師はやがて死にけりとぞいひける、しきふせさせける聟をば、しうとやがてをひすてけるとぞよろこびける、たれとはおぼえず、大納言までなり給けるとぞ、

〔今昔物語〕二十四播磨國陰陽師智德法師語第十九

今昔、播磨國□□ノ郡ニ、陰陽師ヲ爲ル法師有ケリ、名ヲバ智德ト云ケリ、年來其ノ國ニ住テ、此道ヲシテ有ケルニ、其ノ法師ハ、糸只者ニモ非ヌ奴也ケリ、〇中略此僞ニ智德ガ陰陽ノ術ヲ以テ、海賊ヲ謀リ寄セタルナリ、而レバ智德極テ怖シキ奴ニテ有ケルニ、晴明ニ會テゾ識。神。ヲ被隱タリケル、然レドモ其ハ其法ヲ不知バ不隱、此ル者播磨國ニ有ケリトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔源平盛衰記〕十中宮御產事

治承二年十一月十二日寅時ヨリ、中宮〇平德子御產ノ氣御座スト聞ケリ、去月廿七日ヨリ、時々其御氣御座ケレ共、取立タル御事ハナカリツルニ、今ハ隙ナク取頻ラセ給ヘドモ、御座ナラズ、二位殿心苦ク思給テ、一條堀川戻橋ニテ、橋ヨリ東ノ爪ニ車ヲ立サセ給テ、橋占ヲゾ問給フ、〇中略一條戻橋ト云ハ、昔安部晴明ガ、天文ノ淵源ヲ極テ十二神將ヲ仕ニケルガ、其妻職。神。ノ貌ニ畏ケレバ、彼十二神ヲ橋ノ下ニ呪シ置テ、用事ノ時ハ召仕ケリ、

〇

〔九星圖說日要精義大成乾〕日家九星の起例を詳に解記す

天の元氣は萬物の精にして、亦吉凶を發する事最も明なり、抑吉神凶殺と稱するもの、其原天地の氣質にして、則万物の元氣たる陰陽の兩儀なり、分つて年月日時の四課に起り、吉凶のよつて生ずる事、固より靈ある所以なれば、動靜小事と雖も、能陰陽の理を擇し、趨避忽にする事勿れ、凡方位の吉凶に隨ひ、祟害幸德の生ずる期を未前に察知する事は、偏に洛書の九星に倚ものなり、就中日時九星の顯然たるや、恰も明鏡に物の形の映が如く、禍福の起源を探索するの主要なれば、信用せずんば有べからず、尤古來より漢土の諸書に屢起例を載と雖ども、陰陽の差異を立るが故、近世の有職、其順逆の起元においては、審に學得したる輩稀なり、予〇松浦琴鶴是を探索する事累年にして、遂に其的適する所の配當を得て、万般の吉凶を考ふるに、禍福掌中に有がごとし、今其眞法を著はし、以て世俗に益す、所謂陰陽二遁といふは、凡天に三陰三陽の氣あつて、是を客氣と稱し、地に三陰三陽の有て、これを主氣と稱す、都て六陰六陽の氣、一歲十二ヶ月に應じ、天地に顯遁して移り替ること、暫も止るときなし、已に夏至に至つては、六陽殘らず天に顯はれ、六陰はみな地中に遁る、故に夏至を以て陰遁の初とす、反て冬至の節に至れば、六陰殘らず天に顯はれ、六陽みな地中に遁る、故に冬至を以て陽遁の初とするなり、都て陰陽は天地の理にして、艸木花葉と雖も、冬至夏至に隨つて、左へ芽ざし、右へまとひて、自然順逆の差別をなす、況んや星辰の循環に於てをや、故に冬至雨水穀雨三氣の九星は、陽遁なるを以て順に行き、夏至處暑霜降三氣の九星は、陰遁なるをもつて逆に行なり、而して順逆ともに、上中下の三元に涉り、彼陰陽二遁、すべて六元を一周とし、六六三百六十日にして一歲終るなり、其六元といふは、則冬至甲子を陽遁の上元として、坎の一白星、中宮に起り、雨水甲子を陽遁の中元として、兌の七赤星中宮に起り、穀雨甲子を陽遁の下元として、巽の四綠星、中宮に起り、夏至甲子を陰遁の上元として、離の九紫星、中

宮に起り、處暑甲子を陰遁の中元として、震の三碧星中宮に起り、霜降甲子を陰遁の下元として、乾の六白星中宮に起なり、是陰陽二遁の三元、日家九星の起例なり、

〔方鑒秘傳集上〕三元九星之說

通德類情に曰、河洛は天地の秘を洩す、而して義文は畫卦に因るを以てし、禹箕は演疇に因るを以てす、其理至て精しく、其用至て博くして區々たり、撰擇は特に其中の一端耳と、今方鑒家者流の論各異同ありて、或は紫白吉星を採、又天月二德を喜み、乃至陰陽貴人を信ずる抔、皆得たる所の術を以て、互に權を張り我を募りて、撰擇區々なりと雖も、其原を推ときは、すべて河洛より起る者ゆえ、唯大同にして小異ある耳、然を彼家にて褒善するものを、是家にては貶惡するの類ひ屢ありて、俗是が爲に迷惑する者少からず、かく吉凶相反するは、只其神殺の名稱而已に泥み、進退盛衰の理を察めずして、猥に善惡を示すが致す所なり、謂つべし、易は六十四卦にして、兩筮同卦を得ること稀なり、然れども事物一なるときは、判斷符節を合すと、入神の徒の考察此のごとし、故に曰、筮に吉凶なし、事に吉凶ありと、易の繫辭傳に見えたり、今此方鑒の術も又他ならず、其習道を異にする耳、止る所は一定なり、依て玄術を得れば、兩考更に互迭なきことと理の自然なり、學士つとめて惑ることなかれ、抑方鑒の起例を論するに、三元家九星を以て原とす、玆に天月德及び陰陽貴人等は、乃九星の生旺に乘じて以て其德益あるの趣、既に五要奇書に述るが如し、又紫白吉星と號るは、遁甲奇門の名稱にして、三元家九星に備はれる吉凶の稱なし、唯其生剋を以て吉凶を辨ず、三台便覽及び三白寶海等に、五性命の人須く白中の剋殺を忌べしといへる卽是なり、蓋すべて吉凶の眞理は、偏に生剋を以て原とす、通德類情に曰、今協紀辨方一書を閱て始て知る、吉凶神殺は悉く五行の生剋製化を本として、之を爲ことを、而して爰に其本を考ふれば、自から河洛に始まると、所謂河洛は渾然轉運の氣機卽體用の二なり、彼の三元家九星は河洛の星

名にして、一に始り九に至り、各五行の一氣備はりたるは、卽生剋必用の原にして、卽方鑒の體なり、而して其星年月日時に循還し、禍を爲し福を顯すは、卽吉凶妙要の理にして、卽方鑒の用なり、今九星の體位及び屬性を示して、活用妙旨の便とす、夫一白は水星にして、此方を本宮とし、二黑は土星にして、西南を本宮とす、三碧は木星にして、東方を本宮とし、四綠又木星にして、東南を本宮とす、五黃土星にして、中央を本宮とし、六白は金星にして、西北を本宮とす、七赤又金星にして、西方を本宮とし、八白は土星にして、東北を本宮とす、九紫は火星にして、南方を本宮とし、九星各九宮に位を定むる者なり、則左に圖を出す、

三元九星定位圖



右に設ところの圖は、則洛書の圖に據因て、更に九星の名目を施し、以て九局に配當せしものなり、是殊に方鑒備用の根本、三元分別の規矩たるものにして、一切星神の主位弔宮ともに、此局を用ゐずといふ事なし、蓋又九星の名目たるや、其化用最も廣く、彼本命星といへるも、卽此九星の

關所にして、顯る人事の禍福を顯し、時運の吉凶を主どる明星なり、又茲に三元といふは、万物を生ずる自然の數にして、造化窮なきの稱たり、易に曰、一二を生、二三を生じ、三万物を生ずと、夫太極已に判れ、清るは升て天となり、濁るはくだりて地となる、天地巳に開けて以て人道立、是を三才といふ、彼一二を生じ、二三を生ずといふもの即是なり、凡三の數は元より木氣の生數にして、東方震に位す、木は乃仁を主として太歳に配す、太歳は是木星の精にして、仁を專とし、万物を觀察すといふ、見つべし、九星中の三碧震に位するも、亦万物を生ずる自然の數なる事を、夫万般の吉凶すべて三元に隨つて、種々變化あるものなれば、今清朝に年々頒行はるゝ時憲書にも、年首月首に循環九星の圖を載記し、年月とも其配星によつて、三元の差別ある事を記して、方位に過迭なからん事を示す、呼嗚方學主要の深事たることを得て知べきなり、

本命星操格之辨

時用通書に曰、上元甲子生のごときは、坎局を以て本命官とすと、此本命官といふは、即其年中宮に起りたる星の本宮なり、故に其本宮の星を取て本。命。星。とす、抑本命星といふは、彼三元九星、年年交々中宮に巡り入ものにして、是即一歳中の主星たり、能時令を行ひ、其年の吉凶を主どるなり、されば此主星を取て、其年出產人々の本命星とはする事にて、男女の命に別あること更になし、三才運用棟金通書に曰、生成各其性一にして、男女各其極一なりと、彼乾道男を成、坤道女を成と云るは、剛弱別あるの理とし、唯其物にして、其剛弱備はるをいふ、易に曰、天道立陰陽と云、又地道立柔剛と云、又人道立仁義と云、みな其物にして、其理備はるなり、凡君臣父子の大倫、夫婦朋友の奇偶も必此本命星の管る所にして、吉凶の應驗甚だ明なるものと知べし、

附軒廊御卜

軒廊御卜ハ、天變地災、神社佛寺ノ怪異アル毎ニ、朝廷ニテ、特ニ紫宸殿ノ軒廊ニ於テトハシ

名稱 儀式

ムルヲ云フ、コハ神祇官、陰陽寮、共ニ伺候シテ、官ノ龜卜ト寮ノ式占トヲ以テ占スル例ナリ、
而シテ内々ノ事ハ、藏人所ニ於テ行ハル、

〔北山抄 六〕軒廊御卜事（卜部直氏卜之、中臣氏相具、但至件氏有不具例、六位者依姓次著座云々、）上卿奉仰、仰外記令召神祇官陰陽寮、各率僚下參入、應召入自日華門、著軒廊座、（東第三間以東、神祇官候、西上、第一間以西、陰陽寮候、東上、掃部寮預敷座、主殿寮主水司設水火、大膳職奉坏云々、）上卿召神祇官第一人名、（四位召官、如常、）稱唯、進就膝著、仰其事吉凶可卜申之由、（若有文書下給之、即令傳見陰陽寮、）還復本座、後召仰陰陽寮如前、各成勘文、置筥蓋等進之、上卿見畢、召外記筥盛之、付傳仰人令奏、重無仰者、官寮退出、（御卜返給者、下給外記、）

若當子日、或停神祇官、先令陰陽寮奉仕云々、依子日不卜也、其六壬卜尚又不快、非急事者、改日共令奉仕可宜、禁中有穢者、書出事旨、令外記傳給於本官卜之、陰陽寮於陣掖令奉仕云々、可尋之、諸司諸國言上怪異解文、不必在官奏、仍上卿早令別奏、隨官寮勘申旨、被行攘災之法、至于瑞物、隨其方色、可爲先令、譬猶東國連理青色物、西國白鹿等也、（件方色无所見、）

〔名目抄 禁中所々名〕軒廊（コンラウ）

〔江家次第 十八〕軒廊御卜

上卿奉仰、率參議著陣、如恒仰辨令敷座、仰外記令召神祇官陰陽寮、或有令史召例、（非也、）

各率僚下參入、應召入自日華門、著軒廊座、

東第三間以西、神祇官候、（西上、）第一間以西、陰陽寮候、（東上、）以上掃部寮豫敷座、主水設水、主殿設火、大膳奉坏、

上卿召神祇官第一人名、（四位召官朝臣、五位召名朝臣、但至伊勢事、不依位階、可召中臣名云々、）稱唯進就膝突、仰其事吉凶可卜申之由、（若有文書下給之、即令傳見陰陽寮、小野宮大臣、齋王卜定時、召外記筥入文下給、依辨少納言等外以手不可給歟、）還復本座、次召仰陰陽寮、如前各盛勘文、置筥蓋等進、（陰陽寮借用神祇官筥蓋、）上卿見畢、召外記筥盛之、付傳仰人令奏、若有可成官符宣旨事者、本解御卜下

官、無重仰者、官寮退出、（御卜返給下給外記）文書留中者、不給空宮、

〔禁秘御抄下〕御卜

諸社寺幷所々奇怪珍事出來、先有軒廊御卜、上卿行之、神祇官陰陽寮卜申、上卿以職事申子細被問軽重子細、上卿兼日問官寮、申之、可有御物忌、職事下知之、又不及軒廊御卜、内々之事召陰陽師於藏人所被問、進占文、皆連署、或三人若七人、神祇官卜於弓場勤、如藏人令卜、非强事、御卜不可行之由在寛平誡調、官寮不同之時用官也、又内々密々以女房書被問陰陽師家、常事也、

〔日本紀略三村上〕天暦三年六月廿一日癸巳、召神祇官陰陽寮官人於軒廊、有旱魃御卜、令占申艮巽坤乾神社山陵成祟之由、即可實檢深草栢原等陵之由、召仰檢非違使、

〔江家次第十八〕軒廊御卜

天德四年五月十三日、召陰陽寮於陣頭云々、占不雨由、神祇官於左衞門陣外、令外記傳仰之、上卿在衞府、承平元年閏五月七日、大納言令卜霖雨、依内裏穢、各令本司卜之、同六年八月十五日、召陰陽寮於軒廊、令占霖雨事、（貞公、若子日歟、）天暦四年、重服上卿行之、○中略

天慶八年六月十七日九記云、公卿座在左近陣之時者、件諸司座以中爲上、今公卿座在宜陽殿西庇、仍計便宜而從天慶年中所改敷也、

件日神祇官西上、陰陽寮東上、並北面、

同年七月二日、依旱魃被行神祇官卜方二枚、

一枚（有祟歟）　坐（巽坤方大神成祟）

一枚（巽方大神者、伊勢大神宮、幷豊受大神宮歟、攝之、依神居不宜有此旱、）

坤方大神者、八幡宮歟、有怨氣、依神舍破損歟、又住吉神祟歟、依神社破損、

無中臣行例

萬壽四年十一月三日、按察使大納言成行被申行軒廊御卜、官人等不候、仍無官人被行例、被問神祇少副、卜部兼忠申云、多有其例、又被問外記、外記申云、天曆六年三月十九日、左大臣小野宮尋前例、無中臣官人被行御卜、

依無中臣官人、用他司官人例、

寛治七年五月八日、卜尾張臥木忽起臥、

少監物經元

嘉保三年五月十九日卜去九日雷、上帥江中納言、

玄蕃允惟俊

御即位以前行軒廊御卜例、

治曆四年六月廿日、卜祭主事、

嘉承二年十月十八日、石淸水怪、北野木倒怪、

諒闇年卜神社怪異不爲吉例、

嘉承二年十月十八日、里內無軒廊時、於陣座前卜之、

若雨降者、於陣座角檻外卜之、

甚雨時、或於角檻內卜之、

齋王卜定時、御卜留御所、

長元四年

馨子齋王卜定時、藏人頭經任返下卜方於上卿、非例云々、

〔左經記〕寛仁元年七月一日丁酉、有召參攝政殿、被仰云、天下有霖雨愁云々、早仰上卿、召神祇官陰陽寮等、令卜霖雨祟、○中略頭之中、神祇官陰陽寮等參由、次掃部軒廊敷疊二枚、一枚神祇官料東、一枚陰陽寮料西、主殿火

口東座前、主水水盛五器居其傍、次有召、神祇官著座、（少副守隆朝臣率卜部亀卜事者之、東北面、置身小辛櫃入卜具等也云々、）次陰陽寮著、（吉平文隆等也、西上北面、隔身置、）各座定、大納言召云、守隆朝臣、朝臣称唯、進著膝突、上卿仰云、霖雨祟可卜申者、称唯帰、吉平朝臣称唯進膝突、奉仰帰座、口口祟平神祇大副守隆卜文入櫃蓋進奉上卿、取寫帰座、次上卿目之、官寮次第退出、（官寮撤并硯等、本官寮下部官人等取之退退云々、官人令取置之、）次上卿召余、余進候膝突、仰云、随御卜趣、近京諸社差遣検非違使等、可令実検者、（神祇卜云、艮巽方神祟歟、先實度上下、井伊勢大神宮者、陰陽卜云、理運之上、巽坤方神社、神事違例歟、并西北方神社邊、置死骸祟者、）御以使官人等、令方角社々近邊可実検之由、仰史明義已畢、次参摂政殿、奉勘文等、被仰云、召中臣官人放口口中之由可仰、兼又令方角召社々司口口事違例之由、兼可仰能可祈申之由者、

長元四年八月四日己卯、次侍従中納言移著南座、召史仰云、依宇佐宮怪異、可有軒。廊。御。卜。也、仰諸司令敷座、并儲水令生火者、史令諸司、如例令勤仕、次召頭辨、仰可召神祇陰陽之由、暫少副卜部兼忠、率祐大中臣惟盛伊岐則政卜部等、経宜陽殿壇上著。廊。座。（西面北上、）次頭實光、率博士時親助則秀等、自同道著座、（東上北面、）主殿官人明隆生火、主水官人土器盛水居之、次上召云、兼忠宿禰、宿禰唯経小庭、（此時小雨、）居膝突、以府解経元、仰可卜申吉凶之由、兼忠唯帰座、令見下、次上召云、實光朝臣、實光朝臣唯経同庭、居膝突、仰云、太宰府申宇佐宮在怪奇之由、可卜申吉凶之由者、實光唯帰座云々、仰旨仰下神祇官書所府解、以正文渡陰陽寮、同寫留、以正文返官、各筮卜了、兼忠以筮文入櫃蓋奉上卿、上卿披見了、被仰云、文然有諱忌、書可奉者、兼忠帰座、令改書奉之、次實光以卜文入寫奉上、（件寫須寮頭身参入也、不具、仍忽借外記云々、）上卿開見了、召外記、仰可奉寫之由、外記奉寫入卜方等、令頭辨奏、仰云、依神祇筮、可慎火事疾疫之由、報符可賜太宰云々、上卿辨退出、余又退出、傳聞、自去五月二日至于晦比、宇佐神殿上、雀群集、或作栖云々、仍有此御卜云々、官申云、本所火事疾疫云々、寮申云、天下疾病若御薬云々、

〔春記〕長暦四年八月十日壬辰、有軒廊御卜事、（内大臣〈藤原教通〉行之、）（中略）神祇官卜物怪事、

問、伊勢豊受大神宮、去七月廿六日子時許、正殿并東西寶殿、為大風顛倒、怪歟、

推之、天下有疫癘若兵革事歟、（卜合）灼乎、

長曆四年八月十日

齋院宮主直

宮主少祐伊岐宿禰則政

權大副大中臣朝臣輔宣

七月廿六日己卯、時加子、（八月節）等。。去臨卯爲用、將天后、中徵明、將六合、終大衝、將白虎、起遇龍戰、類曲直、

推之、奉爲公家無咎、天下有疫疾兵革事歟、期、怪日以後四十五日內、及來九月、明年五月、六月節中、並甲乙日也、何以言之、日上得吉將、卦遇類、以是奉爲公家無咎、用起老氣、終帶白虎、以是主有天下之疾疫、大歲上見金神、卦遇龍戰、皆是主兵革事之故也、且於怪所被致祈禱、兼且至期被愼、災禍自銷、天下無爲哉

長曆四年八月十日

少屬大中臣貞良

允中原恒盛

助兼丹波介大中臣爲俊

權助兼主稅助安部時親

〔中右記〕天永二年四月廿七日己未、今夕從內裏可遷御內大臣土御門亭也、是明春依可被造一條院、爲違方忌有御臨幸也、（明年從清涼殿當大將軍幷金神方之由所勘申也）入夜陰參內、著仗座、內大臣參仕被申云、今夕可行軒廊御卜也、遷御之後三ヶ日中、如此事不可被行之故也、行幸以前被行軒廊御卜事有先例由、大外記所申者、內大臣移著端座、以官人令敷膝突、召頭辨仰可敷座之由、所司敷座於軒廊、（東三間、以東）置水火、召外記、仰官寮可召之由、（猶神祇官陰陽寮可被仰也、官寮二字省略之故也）大中臣輔清、卜部兼俊、（官）宗明、（寮）參入著座、內府召之、輔清（雖五位加朝臣二字也、名許召如何、）給解狀可卜申、（去九日豐受宮舊垣御門、依風顚倒事、）次召宗明、被仰此趣、此間宗憲參加座、（兼申事由）

參也加各進卜形、召外記宮入文書、付頭辨奏聞、召殿下官寮退出、

裏書云、御卜趣、官寮共、御藥天下疾疫者、順件御卜體重者、可有御愼歟、

永久六年五月二十四日、予移著端座、召官人令下陸実於次門前、本在第二間是爲行軒廊御卜也、召藏人辨令敷座、則置水火後、召外記問神祇官陰陽寮參否、申皆參之由、可召之旨仰下、入候日花門、著軒廊座、公長象俊宗憲參入、公長下解狀、仰吉凶可卜申之由、是大和國大和社、去二月九日戊刻、俄有大寶殿三字、并御正體燒亡也、又召宗憲仰件趣、吉凶可卜申者、公長持來御卜形、披見之處、神事不淨之上、可有天下疾疫口舌者、

又宗憲占形持來、神事不淨之上、可有平所病事、指物忌日也、召外記宮入本解并御卜形等、付頭辨、欲奏之處、頭辨不參、仍以外記送頭辨許了、是近代之作法也、件御卜頗重之由、官寮共所申也、依御物忌、書宿紙也、已過夜半事了歸家、

大治二年正月二十四日甲寅、申時許、相具右少辨參內、行軒廊御卜、是祭主公長言上、大神宮去年十一月日、假殿遷宮之間、柱卷布被喰損事、神祇官少副象俊、陰陽寮頭家榮朝臣、助宗憲參來官卜申云、神事不信不淨者、寮占申云、神事不信不淨、公家御示、怪日以後三十日內、四月十一月甲乙日者、本解御卜形等欲付頭辨之處、只今不被參、仍乍入宮、以外記送頭辨許了、本奉行職事不被參、頗以奇怪也、近代度々如斯、行御卜之由、雖告示不被參、何爲哉、入夜退出、　三月六日、頭中將忠宗、依院宣送書云、齋院卜定所、自御本所相當大將軍方、可被避忌哉否事、右延久天仁保安、齋宮卜定所、自各本所相當王方、已有先例、就彼例不可被忌歟、但彼時不必被忌避歟、今度沙汰出來、猶可被憚歟、宜令量申給者、予進返事云、不被忌由、已有度々例、仍不可忌也、如此事只可被用先例也、就中神事強、不避大將軍王相方忌歟、早此旨可令奏達給者、後聞、付民部卿申、猶可被忌云々、　八月五日、早旦頭中將仰下云、近日霖雨者、廿四日有止雨奉幣、而其後猶以連々降雨、仍今夕可被行軒廊卜也、可奉也、他上卿多以故

障、縁事所司内々且催了、右中辨左少辨可催者、申承了由、且又召新史俊重仰下了、申時許參内、先著陣奥座、尋頭中將幷官寮、頭中將未參也、暫相待之處、臨秉燭頭中將來、御卜之趣、可書給由示之、則書紙屋紙一枚下之、近日雲膚難晴、雨脚頻下、依何咎徵所致哉、宜令官寮卜申者、予移著端座、令敷膝突、以官人召辨、右中辨師俊來、仰可敷座之由、掃部寮敷座於軒廊、主殿寮主水司居水火、予召外記、官寮候哉ト問、申候之由、又仰云召〻、神祇官大副兼政、陰陽寮頭家榮朝臣以下四人、入從日華門參座、予召云、兼政朝臣來膝突、下給仰詞云、可卜申者、歸座之後、又召云陰陽頭朝臣(依爲四位不召名也)來膝突、以詞仰、其詞云、可卜申、歸座各卜占了、持來卜形見了返給筥蓋、又占形持來、共披見處、官寮相合口有恐、理運之上、乾巽方大神、依神事不信不淨違例口祟也、召外記筥入之、付頭中將、予申云、明後日可有奉幣歟、然者暫候陣、可定申使如何、期日近々也、明後日外、日次忽不見故也、頭中將申云、及深更院御寢已成了歟、明旦參院、取御氣色可申左右、明日依重日定許何事有哉、次召外記、仰官寮可令退出之由、則起座歸家了、中臣官人有障不參也、非伊勢事、總事御卜時、中臣氏人不來例、間有之、仍所行也、　五年正月廿四日、軒廊御卜、陰陽寮占云、公家御藥重、神祇官卜云、天下病事怪所同前者、今度御卜之間、民部卿以官寮頭中可爲上臈座之由被張行云々、此事古儀歟、近代只以東西端爲上臈座也、如此公事以常事可行也、强異說不可用歟、

〔台記〕久安三年七月三日乙丑、召陰陽頭守憲朝臣、問軒廊御卜日、申曰、九日可也、召外記、仰其日幷可催神祇官陰陽寮參議之由、近例、仰辨令催官寮、失也、仍任正禮、仰外記令催之、隨又仰外記可令催之由、見治曆四年六月廿日御曆、

〔愚昧記〕仁安四年二月廿七日、酉剋許參内、(經仲憲成爲前駈)直著外座、令置軾、令官人召寄文書也、(前駈所持也)次召右中辨長方、問官寮參否、申皆參之由、予(○藤原實房)問云、官上臈誰人哉、示云、兼康候、神祇官人依不見知所問也、仰云、座令敷、辨唯稱退去、(○中略)以掃部寮敷座於柱外、主殿寮掌燈、(官寮座右二所)幷居火於神官

座、主水司盛水、居官寮座、次召外記、仰云、官寮召〻、外記唯退去、即官寮著座、（官四、寮東、）予召云、神祇官權大副朝臣、兼康稱唯經座末著軾、予給本解、（外記勘例、取副卷籠、本解三通於續紙、）仰云、吉凶占申〻、兼康退去、次又召云、陰陽頭朝臣在憲著軾、（經座上、）予仰云、今月九日鴨御祖社賀茂別雷社等神館舍顚倒、幷同十日別雷社寶殿蚯蚓出來事、吉凶可占申、在憲稱唯復座、神官令見本解於寮、在憲見之申云、官續文被行御卜之由、不令勘申、何樣可候哉、予答云、雖無先例、可令行御占之由被仰下了、不及左右、況先例或行之、或不行也、又申云、本解不註申時、以何時可占申哉、予云、以奉宣旨之日時可占申歟、在憲云、先々如此候者、各卜了後、兼康持來卜文、（入覽筥、本解者以占文據合也、）予取之、披見之、次在憲又持參之、（借官覽筥入之、）予同披見了、相具外記卷之、召外記寫入之、招兼光授之云、二ヶ條事、神官載一紙也、須書二枚歟、然而申先例之由、其上書改者、可及深更歟、仍隨宜也、

〔玉海〕治承元年十一月七日壬寅、入夜大夫隆職來、召簾前問近日公事等、申云、今月有軒廊御卜、上卿左兵衛督云々、是則去月廿七日地震之時、東大寺大佛螺髮少々落云々、又大鐘落了、官廳艮角壞了由進奏狀、被下件事也、又有地震之御卜云々、　廿八日癸亥、大夫史隆職註送大地震卜形、昨日被下云々、去七月御卜、昨被下、以外懈怠歟、

神祇官卜怪異事

問、去十月廿七日地震、東大寺大佛螺髮二口落、幷大鐘鈞切落地、及官廳艮角頹口落事者、是依何咎等祟所致乎、

推之、公家可愼給之上、怪所可有動搖事歟、

治承元年十一月七日　　從五位下行權少祐大中臣朝臣範隆

宮主從五位下行權少祐卜部宿禰兼衡

陰陽寮

占東大寺言上怪異吉凶、十月廿七日地震間、大佛螺髮二口落、或項上螺髮拔上、又大鐘釣切落地、拜官藏丑寅角頽落、
今日壬寅、時加酉、十月節、奉宣旨同時、神后臨未為用、將白虎、中太一、將天一、終河魁、將青龍、卦遇聯茄類、
推之怪所有口舌病事歟、期今日以後廿日內、及今月十二月、明年六月節中、並戊己日也、何以言之、
用并日上大歲上皆為比、御年上見白刑神、辰上得朱雀、用帶白虎、卦遇類、是主怪所口舌病事之故
也、早被祈請無其咎乎、
治承元年十一月七日
權漏剋博士菅原朝臣秀親
權曆博士兼伯耆權守賀茂朝臣憲定
掃部頭兼陰陽博士安部朝臣秀弘
主稅助安部朝臣時晴
主計頭兼頭土左介賀茂朝臣在憲

建久二年十一月十三日戊申、被行軒廊御卜、上卿同人○藤原賴經也、神宮上卿藤大納言所勞不參之替
也、件御卜、去比自御杣出筏四鼻、其中第三筏之師、入河水溺死、其筏雖不穢筏在上人流下、仍筏不穢、所乘之人已
沒亡、以彼材木被用正殿○伊勢大神之條、依有事疑、被勘先例、寬治以後、度々有如此事、且依先例被卜用
捨之處、不可被用之由、官寮占申之、又被卜其祟之處公家御愼、又所愼之由占申之、深更自宗賴之許
內々所進也、早奏事之由、註御卜趣、不可用第三筏材木之由、可宜下之旨仰了、

〔伏見院御記〕正應元年正月十一日丁酉、依去年神宮怪異、行軒廊御占、右大臣○藤原忠敎行之、神祇官卜
申云、間豐受大神宮禰宜等言上、去年十二月廿一日注文偁、去十月十一日見付心御柱卷繩、寸々切
落、卷布等切破、黏付御柱、所奉飾御榊、一向損失、兼又今日見付件御柱為虫令損事者、是依何咎祟所
致哉、

推之、依神事不信不淨所致之上、可有公家御愼、及天下動搖病事歟、
問同宮禰宜等言上、同年同月廿六日注文偁、昨日子剋、依深雪、當宮以西松木、倒懸西寶殿御殿合破損給間、累代本樣神寶以下破損上、東寶殿幷瑞垣御門千木等折損事者、是何咎祟所致哉、
推之、依神事違例不信不淨所致之上、怪所幷天下可有動搖病事歟、

弘安十一年正月十一日

從四位下行權大副大中臣朝臣高宣
從四位下行權大副兼山城守卜部宿禰兼方
從四位上行權大副卜部宿禰兼益
正四位下權大副卜部宿禰兼秀

陰陽寮

心御柱朽損事

去年十月十一日戊辰、時加巳、功曹臨戊爲用、將騰蛇、中徵明、將太陰、終傳送、將白虎、卦遇玄胎四牝、
推之、依神事違例、穢氣不淨所致之上、公家可愼御藥事歟、期彼日以後卅日內、及今月、又來四月節中、並甲乙日也、以何言之、傳有徵明太陰、卦遇玄胎四牝、是主違例穢氣不淨、又用終日大歲上見騰蛇白虎、是皆主御藥事之故也、兼致祈禱、至期愼、其咎自銷乎、

松木倒懸西寶殿事

同年十二月廿五日辛巳、時加子、太一臨巳爲用、將六合、中傳送、將天空、終功曹、天一、卦遇伏吟玄胎四牝、
推之依神事違例不信不淨所致之上、禁裏可被誡火事給、又從巽離方、奏口舌鬪諍事歟、期彼日以後廿五日內、及來四月七月節中、並丙丁日也、何以言之、用幷辰上、帶太一六合、傳有金神天空、終見句天

火神、卦遇伏吟玄胎四牝、是皆主違例不信不淨、及火事口舌鬪諍之故也、兼祈謝、至期被誡愼、無其咎乎、

心御柱虫損事

今日丁酉、時加戌、（奉宣旨日時）徵明臨戌爲用、將太陰、中神后、將玄武、終大吉、將大裳、卦遇聯茹、推之、依神事違例不信、所致之上、公家非愼御御藥事、怪所有病事歟、期今日以後卅日內、及來九月十月節中、並壬癸日也、何以言之、用起日鬼、爲徵明太陰、傳帶玄武、辰上幷御年上、有螣蛇白虎、卦遇聯茹、是主違例不信御藥事、怪所病事之故也、至期愼御、其咎銷乎、少允安部朝臣良康、主計頭賀茂朝臣在言、

〔園太曆〕貞和二年八月十九日

同月（○正慶三年八月）十五日、被御軒廊御卜、（依御留事也）

神祇官卜云、神事違例、不淨所致之上、怪所可有口舌病事者、

陰陽寮占曰、神事違例、穢氣所致之上、公家御藥事、天下有疾病之憂、又自巽離方可奏口舌兵革事、

〔康富記〕嘉吉二年十二月廿四日辛亥、今夜被行軒廊御卜、伊勢豐受大神宮正殿盜人奏昇事也、又吉田社第三神殿神服紛失、同社四御殿神服鼠喰損事等被付行者也、入夜上卿權大納言藤原資廣卿、（神宮傳奏也）權右中辨同俊秀、（藏人方、兼行神宮職事、）官務左大史晨照宿禰、權少外記予、（今月御卜分配）右大史高橋員職、神祇官權大副大中臣清國朝臣、同卜部兼名朝臣、陰陽寮頭賀茂在盛、天文博士安部有季等參陣之、局務師世朝臣、依目所勞、辭申顯職之時分、被仰清大外史、今夜御卜事、淸史被進勘文者也、神官幷吉田社解、今日自上卿被下外記局、及夜陰進勘文、上卿無沙汰之至歟、俱於吉田社事モ、自去夜俄被仰下之由職事所被語也、及夜予參陣、陣官人遲參、兼日自文殿雖催促、愁訴未達之由、申子細之間、爲奉行之外記被宥仰畢、半更被始行之、其儀、上卿著仗座、（奥、）以職事（俊秀）被奏可行御卜之由、職事歸出、仰被

聞食之由、次上卿移端座、令數賦、以陣官召雜色所持之文書、(神宮吉田之社解、幷勘文等也、)次召辨仰座事、辨主水司事也、可被存知云々、予申云、縱雖爲主水司之所役、如此事者、寮官年預沙汰來歟、長官尚以不可存知也、所詮非外記方之催之間、難存知之由申了、官務云、於火者主殿寮之所役也、既申付云々、當座加下知之間、主殿寮炭火爐等假尋出如形置之、於水者尙不可置之處、予不可存知之由申切之間、官務又內々以卜部加下知、令置水、(件水納土器、)卜部座下程也、此事、後日尋申清史之處、無所見云々、如次第者、水火事、上卿下知之樣不注之云々、或本主水司獻水掃部寮置火云々、然者今夜爲主殿寮役、官務加下知、令置火之條、又不得其意者哉、

〔建內記〕文安四年二月廿九日辛酉、吉田社第一御殿□□□□□在之、鳥食損、已穢神殿之上者、被行御卜、可被造替之由、預彙名朝臣注進、軒廊御卜事、假雖周備歟、內々以御卜可被祈謝之條、如何之由、爲頭中將親通朝臣奉行、今日被尋下大外記、仍其人申云、雖可被行軒廊御卜事、以內々御卜被祈謝事、非無先例、當社事依無絲甲、內々御卜有近例歟、今已有甲歟、其上可被造替神殿之由、社家已申請、及大儀也、猶任本儀、被行軒廊御卜者、爲後記殊可然歟云々、

〔禁祕御抄〕下御卜

諸社寺幷所々奇怪珍事出來、先有軒廊御卜、〇中略又不及軒廊御卜內々事、召陰陽師於藏人所被問、進占文、皆連署、或三人、若七人、

〔日本紀略〕(十三後一條)寬仁元年十月十六日辛巳、召主計頭吉平於藏人所、被占鹿入內裏之事、占申御藥火事、

〔左經記〕長元元年十一月二日壬辰、召守道文高於藏人所、石清水御殿修造之間、被問可奉遷御體於他所哉否之由、其卜云、奉遷御體頗不快云々、頭中將(顯基)以卜方授予云、令覽關白殿、幷奏事之由了、

〔玉海〕安元三年(〇治承元年)十一月廿五日庚申、或人云、牙御笏昨日出來了、其由來者、三臈出納所從(號戶屋乘)

云々妻女嫉妬餘、爲損失盜取件御笏、打入實定卿燒失之跡、木守男取置之、件事自然露顯、被尋出云々、此次第頗非無不審、彼出納、始搦不誤之者、自問落、其事已無實、加之今彼僕從有此犯、以之言之、出納之身、罪科難遁、而都無其沙汰、適心所鬱陶也、抑此事、紛失之時、於藏人所有御卜、(在憲、泰親、季弘、)各占申云、必件笏、出來自西巽等方之由云々、又泰親申云、件御笏可有疵、既而果以有疵、仍自讃云々、(但其疵微少不見分之程)云々又邦綱同未出來之旨也、晩頭大外記賴業參、召簾前問難事、此次申云、牙御笏紛失事、先規未見得云、

〔山槐記〕治承四年二月七日己丑、戌剋內侍所鈴破落云々、天承有此事、故殿(○中山忠親父忠宗)爲藏人頭、令奉行給、贈左大臣(時信)爲藏人同致沙汰云々、後聞、頭辨經房朝臣、召陰陽師於藏人所、令行御卜、(其日可發)藏人通業許、著藏人所、御卜趣御藥殊重云々、　三月十九日辛未、於藏人所有御卜云々、(受禪之後、未被軒廊幷藏人所御卜、今度始也、)去十四日辰時還御、晝御座劒持出被咋損事也、藏人左衛門權佐光長奉行之、光長不著所、陰陽頭在憲朝臣、陰陽博士濟憲朝臣、天文博士業俊朝臣等參著、藏人占申、公家御藥可聞食、口舌鬪諍事、御卜趣殊重云々、

古事類苑

方技部八

觀相

地相　墓相　家相　劍相　夢占
字占　墨色　判占〔拼入〕

人ノ身體、骨格、面貌、手足等ヲ觀テ、其人ノ禍福ヲトスルヲ觀相ト云ヒ、此ニ從事スルモノヲ相工又ハ相人、相者ナドトモ云ヘリ、支那ニ在リテハ、戰國ヨリ秦漢ヲ經テ有名ノ人輩出シ、我國ニ在リテモ、上古ヨリ既ニ其法アリシガ如シ、

地相ノ說モ、亦夙ニ支那ヨリ傳來シテ、陰陽寮ノ陰陽師ハ、占筮、卜相ト共ニ斯ニ從事シタリ、墓相ハ墓地ノ吉凶ヲ相スルモノニテ、子孫ノ富貴榮達ヲ圖ルニ外ナラズ、家相ハ家屋ノ位置、及ビ其周圍ノ形狀、幷ニ移轉ノ方角ヲ相シテ、其吉凶ヲトスル法ナリ、此法後世特ニ盛ニ行ハレタリ、劍相ハ刀劍ノ吉凶ヲ判ジテ、其人ノ禍福ヲ占スル法ニシテ、德川氏ノ中世、一時大ニ行ハレシト云フ、夢占ハ、ユメアハセナリ、古ク夢解（ユメトキ）トモ稱シ、後世ハ夢判（ユメハンジ）ナドモ云ヘリ、夢ヲ占ヒテ、其事ノ吉凶ヲ判ズルヲ云フ、字占ハ一ニ相字トモ拆字トモ云フ、文字ノ偏傍ヲ分拆シテ、以テ吉凶ヲ判スルヲ云フ、墨色ハ其人ノ寫ス所ノ字畫ノ墨色ニ就テ、其濃淡妍醜ヲ相シテ、人ノ禍ヲ知ル法ナリ、又花押、印判等ノ字畫ニ依リテ、其人ノ吉凶ヲ判ズル法アリ、是亦字占墨色ノ類ナリ、

名稱

〔倭名類聚抄 二人倫〕相工。 史記云、長安中、有相工田文者、相工俗云相人、相音去聲、丙丞相、韋丞相、魏丞相微賤時、會於客、字田文曰、此君皆丞相也、其後三人竟爲丞相也、

〔伊呂波字類抄 左人倫〕相工サウコウ 相人也

〔闇の曙 上〕世間に愚俗を惑はす道具、あらまし左のごとし、

家相　人相　墨色　字畫の占　金神及び佛神の祟　劍相　日取星轉　附物　呪禁　不成就日　辻占　死靈生靈、

〔退閑雜記 四〕相學てふものは、いにしへよりもある事にて、もと五行生尅よりして、ことわりつめたるものなり、かの水中のおもては水上の人、鏡中の人は鏡外の人にて、おのづからなる道理なり、すこし文字まなぶものは、ことにそしるぞかし、世の中にあるとある事、みな道理いちじるしき事はなきなり、かまへてその理を窮めんとすれば、無益の事にて勞するなり、只吉凶の相あらはるゝとも、敬怠の二字にけつすべし、

〔荀子 三非相篇〕相、古之人無有也、學者不道也、古者有姑布子卿、今之世梁有唐擧、相人之形狀顏色、而知其吉凶妖祥、世俗稱之、古之人無有也、學者不道也、故相形不如論心、論心不如擇術、形不勝心、心不勝術、術正而心順、則形相雖惡、而心術善、無害爲君子也、形相雖善、而心術惡、而無害爲小人也、君子之謂吉、小人之謂凶、故長短小大善惡形相、非吉凶也、古之人無有也、學者不道也、蓋帝堯長、帝舜短、文王長、周公短、仲尼長、子弓短、昔者衞靈公有臣、曰公孫呂、身長七尺、面長三尺焉、廣三寸、鼻目耳具而名動天下、楚之孫叔敖、期思之鄙人也、突禿長左、軒較之下、而以楚霸、葉公子高、微小短瘠、行若將不勝其衣、然白公之亂也、令尹子西、司馬子期皆死焉、葉公子高入據楚、誅白公、定楚國、如反手耳、仁義功名善於後世、故士不揣長、不揳大、不權輕重、亦將志乎心耳、長短小大美惡形相豈論也哉、且徐偃王之狀、目可瞻馬、仲尼之狀、面如蒙倛、周公之狀、身如斷菑、皐陶之狀、色如削瓜、閎夭之狀、面無見膚、傅說之狀、身如植鰭、伊尹之狀、面無須麋、禹跳、湯偏、堯舜參牟子、從者將論志意、比類文學邪、直將差長短、辨善惡、而相欺傲邪、

相法

〔日本靈異記 中〕閻羅王使鬼得所召人之賂以免緣第廿四
楢磐島者、諾樂左京六條五坊人也、居住于大安寺之西里、聖武天皇世、借其大安寺修多羅分錢卅貫、以往於越前之都魯鹿津、而交易、以之運超、載船將來家之時、忽然得病、思留船單獨來家、借馬乘來、至于近江高島郡磯鹿辛前、而睠之者、三人追來、後程一町許、至于山代宇治椅之時、近追附、共副往、磐島問之、何往人耶、答言曰、閻羅王闕召楢磐島之往使也、○中略三鬼之中一鬼議言、汝何年耶、磐島答云、我年戊寅也、鬼云、吾聞率川社許相八卦讀、與汝同有戊寅年之人、宜汝替者、召將彼人、

〔隨意錄 五〕相人操古有焉、今世猶傳其法者、相人之面目骨相、以言其吉凶殃祥、有中有不中、然無益乎學者、但唐一行書錄、人曰、吾得古人相法、相人之法、以洪範五福六極爲主、觀其所由、察其所安、可得大槩、若其人忠孝仁義、所作所爲、言行相應、顚沛造次、必歸於善者、吉人也、若不忠不孝、不仁不義、言行不相應、顚沛造次、必歸於惡者、凶人也、吉人必獲五福之報、凶人必獲六極之刑、不于其身、必于其子孫、若但於風骨氣色中、料其前程休咎、豈能悉中也、宋錢世昭錢氏私誌載、予謂此一行之言、可謂相法之至矣、苟卿非相、王充骨相、皆偏而不切也、

〔南嶺子 二〕世に相者といふ者あり、其傳一派ならず、○中略今の相者、或は人の面を三十六禽になぞらへ、虎に似たるは虎の性を以一生を說、鼠に似たるは鼠の陰なる性を一代へあて、、說類、牛猫牛鼠とて、額に猫に見たて、往事を猫にて說、向後の事を鼠にて說など、又は福壽貧夭の四十二相を圖せしものありて、是にて考ふるもあり、

〔南北相法 一〕相人之用
先人を相する時は、安座して、其體の天地人を正敷備へて、七息、又心を氣海に居して、六根を遠ざけ、而して後、心六根をゆるして以て相を辨す、○中略
先人を相する時は、第一行住座臥の間におゐて、其こゝろを相して後、神氣の強きよわきを相し、

次に忠孝のこゝろざしあるか無きかを相し、次に陰德の志を相し、次に意動き不動を相し、次に始末のなるならざることを相し、又視聽言動の間に相して後、骨格血色流年によつて、ことごとく善惡を相する事、專一にして可也、

〔神相全編正義上〕相說

大凡觀人之相貌、先觀骨格、次觀五行、量三停之長短、察面部之盈虧、觀眉目之清秀、看神氣之榮枯、取手足之厚薄、觀鬚髮之疎濁、量身材之長短、取五官之有成、看六府之有就、取五岳之歸朝、看倉庫之豐滿、觀陰陽之盛衰、看威儀之有無、辨形容之敦厚、觀氣色之喜滯、看體膚之細膩、觀頭之方圓、頂之平塌、骨之貴賤、肉之粗流、氣之短促、聲之響喨、心田之好歹、俱依部位流年而判、推骨格形局而斷、不可順時趨奉、有玷家傳、但於富貴貧賤壽夭窮通榮枯得失星宿流年休咎、備皆週密、所相於人萬無一失、學者亦宜參詳推求眞妙、不可忽諸、

名人

〔二中歷十三一能〕相人

許負　康擧　蔡澤　京房　管輅　左慈　圭孟　董興　朱平　胡媼　樊英　李南　陶隱(已上唐十)

(三家)　滿洞　皐通　淸河　觀容　笠景　容登　盧平　洞昭(一云洞昭)　容聖　義舜　日暗　忠壽

敎光　淨藏　磐上　重恒

說云、唐人張滿洞、々々傳周皐通、皐通傳淸河大臣、大臣傳觀容律師、律師傳容公、容公傳義舜、自餘隨舜公幷目暗者、洞昭之後也、敎光(橘高明大臣)　淨藏(善相公第八男)　磐上別當、

〔源平盛衰記十五〕相形事

抑相者、洽浩五天之雲洪、携九州之風、五行結氣、成膚成形、四相稟運、保壽保神、依之月氏映光、敎主釋尊、屢應其言、日域傳景、太子上宮、剩顯其證、一行禪師者、漢家三密之犬祖、圓輪滿月床傍、審一百卄之篇章、延昌僧正者、我朝一宗之先賢、界如三千之窻內、省七十餘家之施設、內外共厲此術、凡聖同弘斯

業、ナジカハ違ベキ、サレバ昔登乘ト申相人アリキ、帥内大臣伊周ヲバ、流罪相御坐ト相タリケルガ、彼伊周公ノ類ナク通給ケル女房ノ許ヘ、寛平法皇ノ忍テ御幸成ケルヲ驚シ進セントテ、墓目ヲ以テ射奉リタリケレバ、被流罪給ヘリ、又太政大臣賴通、宇治殿、太政大臣教通、大二條殿、二所ナガラ御命八十、共ニ三代ノ關白ト相シ奉タリケルモ、少モ不違ケリ、又聖德太子ハ御叔父崇峻天皇ヲ横死ニ合給ベキ御相御座ト仰ケルニ、馬子ノ大臣ニ被殺給ケリ、又太政大臣兼家、東三條殿四男ニ、粟田關白道兼ノ不例ノ事オハシケルニ、小野宮ノ太政大臣實賴御訪ニ御座タリケレバ、御簾越ニ見參シ給テ、久世ヲ治給ベキ由被仰ケルニ、風ノ御簾ヲ吹揚タリケル間ヨリ奉見給テ、只今失給ベキ人ト被仰タリケルモ不違ケリ、又御堂馬頭顯信ヲ民部卿齊信ノ聟ニトリ給ヘト人申ケレバ、此人近ク出家ノ相アリ、爲我爲人イカヾハト被申タリケルガ、終ニ十九ノ御年出家アリテ、比叡山ニ籠ラセ給ニケリ、又六條右大臣ハ、白川院ヲ見進テ、御命ハ長ク渡ラセ給ベキガ、頓死御相御坐ト申タリケルモ違ハザリケリ、サモ然ベキ人々ハ必相人トシモナケレ共、皆カク眼カシコクゾ御座ケル、況ヤ此少納言惟長モ、目出キ相人ニテ、露見損ズル事ナシ、サレバ異名ニ、相少納言トコソイハレケルニ、高倉宮ヲバ何ト見進タリケルヤラン、位ニ卽給ベシト申タリケルガ、今角ナラセ給ヌルコソ、然ベキ事ト申ナガラ、相少納言誤ニケリト申ケリ、

〔神相全編正義上〕自序略〇中

夏。殷之。間不。分醫相、周大玉相脉呂、史逸相證難、叔服得識鑑之譽、皆震旦觀察之權輿也、阿私陀仙相釋迦文、耆婆醫携藥王樹、又月氏相人之元始也、上宮太子相崇峻天皇、鈴鹿老翁相天武帝、是日域風鑒之明證也、鎌足、清行、廉平、維長等、亦本朝水鏡之達人也、扶桑與梵漢、雖數踰千祀、地隔萬里、其言不異、如合符節、略〇中宗朝麻衣老祖、蚤研究百家、廣發揮相法、然知妙道不可授凡庶、終隱於華山石室、能盡其學者、陳希夷先生而已、觀察精妙、超于許郭、道學之卓見、高於老莊、眞相家之中興也、明初、袁氏父

子出、復潤ニ色斯術、神相全編至ニ于茲大成、其爲ㇾ書、玄機明透、更無ニ餘蘊ニ矣、○中略乃命ニ家童ニ正ㇾ之、授ニ剞劂ニ公ㇾ之、○中略

時文化二乙丑年五月端之天　　東都雲臺觀石龍子法眼藤原相明謹撰

〔近世崎人傳三〕相者龍袋

龍袋は、赤塚氏なれども、幼より他家を繼で、中村を稱す、名重治、通名孫兵衛といへども、號をもてしらる、爲ㇾ人世務に疎く、家の有無を心とせず、相道に長じ、門人も亦多し、相者は多く既往を知て、將來に昧きに、此人つねに門人に會して、其血色を見て曰く、子明日は花見に遊ばんとするや、また一人にはいふ、暮なば青樓に登らんとおもへるやなど、其言一つもたがはず、あるとき一人を制して出入をとゞむ、いかなる故ともしらざりしに、後に或る家婦に姦せり、其しれるもの、翁に問て、もし此ことにや、然れども其時はさることなかりしにはいぶかしといふ、翁云、血道既に動たり、それも諫てとゞむべきなれば、事に先だちてとゞむべし、諫の及ざるを決するゆゑに、交を斷りと、又博奕にふけりしものも、かくのごとくなりしなど、其門人話せり、凡人を相するに、必心術を說て曰く、相善なりといへども、志不善なれば益なし、相の不善も亦能志行をもて勝べしと、又曰、相を見る人は世に多し、相を行ふ人は稀なり、吾は孤相なり、孤なれば必ず貧なり、孤に居て貧を安ずべしと、其家を然るべき人に讓り、一子新次郎といへるも、他の嗣とす、妻ははやく失ひたれば、獨身にて、食あれば喰ひ、盡る時は不食、後また知己門人等に別を告て曰、我餓死の相あり、徒に生て他の施を費べからずと、是より門戶を閉、出入を禁じて不食、數日の後逝せり、齡五十有七也、

〔賤のをだ卷〕相學者に、神谷登とて、京都より下りて、殊の外江府に鳴たり、卜筮者に平澤左內と云もの出で、是も世擧てもてはやしたり、今も市中の筮者の看板に平澤が號を出せるあり、

〔聖德太子傳曆上〕崇峻天皇元年三月、天皇密召太子曰、人言汝有神通之意、復能相人、汝相朕之體、勿有形跡、太子奏曰、陛下玉體、實有仁君之相、然恐非命忽至、伏請能守左右、勿容姦人、天皇問之、何以知之、太子曰、赤文貫眸子、爲傷害之相、天皇引鏡而視之大驚、太子謂左右曰、陛下之相、不可相博、是過去之因也、若崇三寶、遊魂般若者、万分之一、庶幾免矣、卽命群臣左右、能衞護陛下、近習之間、宿衞相易、○又見扶桑略記。

〔懷風藻〕淡海朝大友皇子二首

皇太子者、淡海帝之長子也、魁岸奇偉、風範弘深、眼中精耀、顧盻煒燁、唐使劉德高見而異曰、此皇子、風骨不似世間人、實非此國之分、○中略

大津皇子四首

皇子者、淨御原帝之長子也、狀貌魁梧、器宇峻遠、幼年好學、博覽而能屬文、及壯愛武、多力而能擊劍、性頗放蕩、不拘法度、降節禮士、由是人多附託、時有新羅僧行心、解天文卜筮、詔皇子曰、太子骨法、不是人臣之相、以此久在下位、恐不全身、因進逆謀、迷此詿誤、遂圖不軌、嗚呼惜哉、

〔水鏡下淳仁〕その大臣○惠美のむすめおはしき、色かたちめでたく、世にならぶ人なかりき、鑒眞和尚の、此人千人のおとこにあひ給ふ相おはすとのたまはせしを、たゞうちあるほどの人にもおはせず、一二人のほどだにも、いかでかと思ひしに、ちゝの大臣うちとられし日、みかたのいくさ千人、ことごとくにこの人をおかしてき、相はおそろしき事にぞはべる、

〔文德實錄一〕嘉祥三年五月辛巳、嵯峨太皇太后崩、○中略太皇太后姓橘氏、諱嘉智子、父清友少而沈厚、涉獵書記、身長六尺二寸、眉目如畫、擧止甚都、寶龜八年、高麗國遣使修聘、清友年在弱冠、以家良子姿儀魁偉、接對遣客、高麗大使獻可、大夫史都蒙見之而器之、問通事舍人山於野山云、彼一少年爲何人乎、野山對、是京洛一白面耳、都蒙明於相法、語野上云、此人毛骨非常、子孫大貴、野上云、請問命之長短、

都蒙云、三十二有厄、過此無恙、其後清友娶田口氏女生后、延暦五年爲内舍人、八年病終於家、時年卅二、驗之果如都蒙之言、后爲人寛和、風容絶異、手過於膝、髮委於地、觀者皆驚、○中略初法華寺有苦行尼、名曰禪雲、見后未笄、就把其臂云、君後當爲天子及皇后之母、戸竊記之、遂生仁明天皇及淳和太皇太后、后追想尼言、訪其所在、尼時既亡、

〔三代實錄 十五清和〕貞觀十年二月十八日壬午、參議正四位下行右衞門督兼太皇太后宮大夫藤原朝臣良縄卒、良縄字朝台、左大臣内麻呂朝臣孫而正五位下備前守大津之子也、良縄風容閑雅、擧止詳審、興福寺僧圓壹好相人、見良縄狀貌云、必登卿相、榮寵无比、退語同志云、嗟呼於命獨有可惜矣、

〔三代實錄 四十五光孝〕天皇諱時康、仁明天皇第三之皇子也、○中略嘉祥二年、渤海國入覲、大使王文矩、望見天皇在諸親王中拜起之儀、謂所親曰、此公子有至貴之相、其登天位必矣、復有善相者藤原仲直、其弟宗直侍奉藩宮、仲直戒之曰、君王骨法、當爲天子、汝勉事君王焉、

〔大鏡 八〕さても〳〵しげきが年かぞへさせたまへ、たゞなるよりは、としをしり侍らぬがくちおしきにといへば、さふらひで〳〵とて、十三にておほき大殿にまいりきとのたまへば、とをばかりにて、陽成院おりさせ給ふ年はいますかりけるにこそ、これにてをし思ふに、あのよつぎの主は、今十餘年がおとゝにこそあめれば、百七十にはすこしあまり、八十にもをよばれにたるべしなど、手をおりかぞへて、いとかばかりのみとしどもは、相人などに相せられやせしと、とへば、させる人にも見え侍らざりき、たゞこまうど○高麗人のもとに二人つれてまかりたりしかば、二人長命と申しかど、いとかばかりまで候べしとはおもひがけ候べきことか、ことゝ〳〵とはんとおもひたまへしほどに、昭宣公の君達三人おはしましにしかば、え申さずなりにき、それぞかし、時平のおとゞをば御かたちすぐれ、心たましゐかしこく、日本のかためともちゐんにあまらせ給へりと申、びはどの仲平をばあまり御心うるはしくすなほにて、へつらひかざりたる日本の小

國にはおはせぬ相なりと申、貞信公をばあはれ日本のかためやな、かくよをつぎかどをひらく事、たゞこのとのと申たれば、われをあるが中にさえなくてんごくなりとかくいふ、はづかしきこと、おほせられけるは、されどその儀にたがはず、かどをひろげ榮花をひらかせ給へば、なをいみじかりけりと思ひ侍りて、又まかりたりしに、小野宮殿おはしまし、かば、え申さずなりにき、ことさらにあやしき姿をつくりて、下﨟のなかに遠くゐさせ給へりしを、おほかりし人のうへよりのびあがり見奉りて、およびをさして物を申しかば、なに事ならんと思ひ給へしを、のちにうけたまはりしかば、貴臣よと申けるなり、さるはいとわかくおはします程なりかしな、

〔源氏物語一桐壺〕そのころ、こまうどのまいれるがなかに、かしこきさうにんありけるを、きこしめして、宮のうちにめさんことは、うだのみかどの御いましめあれば、いみじうしのびて、このみこ(源氏)を、鴻臚館につかはしたり、御うしろみだちてつかうまつる、右大辨のこのやうにおもはせて、ゐてたてまつる、相人おどろきて、あまたゝびかたぶきあやしぶ、くにのおやと成て、帝王のかみなきくらゐにのぼるべき相おはします人の、そなたにてみれば、みだれうれふることやあらん、おほやけのかためとなりて、天下をたすくるかたにてみれば、またその相たがふべしといふ、〇中略みかどかしこき御心に、やまとさうをおほせて、おぼしよりにけるすぢなれば、いまゝでこのきみを、みこにもなさせ給はざりけるを、相人はまことにかしこかりけりと覺しあはせて、無品親王の外戚のよせなきにてはたゞよはさじ、わが御世もいとさだめなきを、たゞ人にておほやけの御うしろみをするなん、行さきもたのもしげなること、おぼしさだめて、いよ／＼みちみちのざえをならはさせ給ふ、

〔花鳥餘情一桐壺〕やまとさう　藤原仲直が光孝天皇を相したてまつり、廉平が、高明公を相せしは、みなやまとさう也、

〔古事談 六亭宅諸道〕延喜御時、狛人相者參來、天皇御于簾中、奉聞御聲云、此人爲國主歟、多上少下之聲也、叶國體云々、天皇耻給、不出給云々、次先坊 保明太子 左大臣 時平 右大臣 菅家道眞 ○三人列座、依勅命相、云第一人 先坊 容貌過國、第二 時平 賢慮過國、第三 菅家 才能過國、各不叶此國、不可久歟云々、爰貞信公 ○藤原忠平 爲淺臈公卿、遙離列候給、相者遙申云、彼候人、才能心操形容、旁叶國定、久奉公歟、寬平法皇聞食此事、被仰云、三人事不及於貞信公、向後必可善之由所見也云々、因之以第一女王、於朱雀院西對、有嫁娶之儀、于時貞信公大辨參議云々、法皇同御於東對云々、又貞信公云、吾賢慮之條、雖兄不可劣申左大臣、於他事者更不可及、今相者所見尤所爲耻也云々、

〔續古事談 二臣節〕貞信公、太政大臣ニ成給テノ給ヒケル、我カタジケナク人臣ノ位ヲキハム、コノカミ時平大臣ヲ太政大臣ニナサルベキヨシ、前皇オホセラレケルニ、カノオトヾ奏シテ申サク、弟忠平必此官ニイタルベシ、一門ニ二人キルベカラズトテ、勅命ヲウケズトイヒキ、コレヒガ事ナリ、タヾシ三善文君ガ宮內卿靈託宣シテ云ク、冥途宮中ニ、金籍ノ銘ニ太政大臣從一位トシルセリト云テ其時此事ヲウタガヒキ、今ムナシカラズ、又故大江玉淵朝臣、我ヲ相シテ官位ヲキハムベシト云キ、ハタシテ相カナヘリトゾノ給ヒケル、○中略

西宮左大臣 ○源高明 日クレテ、內ヨリマカリ出給ケルニ、二條大宮ノ辻ヲスグルニ、神泉苑ノ丑寅ノ角、冷泉院ノ未申ノ角ノツイヂノ內ニ、ムネツイヂノ覆ニアタルホドニ、タケタカキモノ三人タチテ、大臣サキオフ聲ヲキヽテハ、ウツブシ、オハヌ時ハ、サシ出ケリ、大臣其心ヲ得テ、シキリニサキヲヽハシム、ツイヂヲスグルホドニ、大臣ノ名ヲヨブ、其後ホドナク大事出キテ、左遷セラレケリ、神泉ノ競馬ノ時、陰陽識神ヲ喝シテウヅメルヲ、今ニ解除セズ、其靈アリトナンイヒツタヘタル、今モスグベカラズトゾ、アリユキトイフ陰陽師ハ申ケル、コノオトヾ行幸ニツカマツラレタリケルヲ、伴別當廉平ト云相人見テ、イマダカヽル人ミズトホメケルガ、スギ給テ後、ウシロヲミ

テ、背ニ吉相ナカリケリ、オソラクハ還補ノ事アラムト云ケル、ハタシテ其詞ノ如シ、

〔古事談 六亭宅諸道〕一條院御時、伴別當ト云相人アリケリ、帥内大臣〇藤原伊周遠行ヲモ兼テ相申タリケリ、件者物ヘ行ケル道ニ、橘馬允頼經ト云武者、騎馬シテ下人七八人許具シテ逢タリケルヲ、此相人見テ、往過後喚返云、是ハ某ト申相人ニ侍リ、如此事令申ハ有憚事侍レド、又爲冥加不可不申、今夜中及御命可令愼、中矢給御相令顯現給也、早令歸給、可令祈禱云々、爰頼經驚云、何樣ノ祈禱ヲシテカ、可免其難哉、相者云、取其身雖去大事ニ令思給者ヲ不論妻子殺ナンドシテゾ、若令轉給事モ可侍云々、頼經忽打歸テ、踏スガラ案樣、大葦毛トテ持タル馬コソ妻子ニモ過テ惜物ナレ、ソレヲ殺ト思ケリ、歸ヤオソキト、寢居ノ前ニ一疋別ニ立飼ケレバ、カリマタヲハゲテ、馬ニ向テツル引タルニ覆ウチタヒテ立タルガ、主ヲ見テ何心ナタイナヽキタリケルニ、射殺之心地モセデ、美麗ナル妻ノ不思氣色ニテ、大ナル皮籠ニ寄懸テ、苧ト云物ウミテ居タル方ヘ、引タル弓ヲヒネリムケテ射之、中ヲ射串テ皮籠ニ射立畢、妻ハ矢ニ付テ死畢、而此皮籠ノ内ヨリ血流出、皮籠動ケレバ成奇、開見之處、法師ノ腰刀拔テ持タルガ、尻ニ矢ヲ被射立テ死ナントテ動ナリケリ、頼經付寢之後コロサセントテ、密夫ノ法師ヲ皮籠ノ内ニ隱置タリケル也、件相人非直之人歟、

〔古今著聞集 八好色〕中關白〇藤原道隆高内侍に忍てかよひ給ひけるを、父成忠卿うけぬ事に思ひけるに、或時出給ひけるをうかゞひみて、かならず大臣にいたるべき人なりと相して、その後ゆるし奉てけり、

〔大鏡 七道長〕故女院〇藤原詮子、東三條院の御修法して、飯室權僧正のおはしまし候はん僧にて、相人の候しを、女房どものよびて相せられけるついでに、内の大炊殿〇道隆はいかゞおはするととふに、いとかしこうおはします、中宮大夫殿〇道長こそいみじくおはしませといふ、又あはた殿〇道兼をとひたてまつれば、それもいとかしこうおはします、大臣の相おはします、又あはれ中宮大夫殿にこ

そいみじうおはしませといふ、また權大納言殿〇伊周をとひ奉れば、それもいとやむごとなくおはします、いかづちの相おはしますと申ければ、いかづちはいかなるぞととふに、ひときは、いとたかくなれど、のちどものなきなり、されば御すゑいかゞおはしまさんと見えたり、中宮大夫殿こそ、かぎりなくきはなくはおはしませとこそ、人をとひたてまつるたびには、此入道殿をかならずひきそへ奉りてほめ申、いかにおはすれば、かくたびごとにはきこえ給ふぞといへば、第一の相には、虎子如渡深山峯なりと申たるに、いさゝかもたがはせ給はねば、かく申侍るなり、このたとひは、とらの子のけはしき山のみねをわたるがごとしと申なり、御かたちようて、いはゞ毘沙門のいきほひ見たてまつるがやうにおはします、御さうかくのごとしといへば、たれよりもすぐれ給へりとこそ申けれ、いみじかりける上ずかな、あてたがはせ給へる事やはおはしますめる、帥のおとゞは大臣まですがやかになり給へりしを、はじめよしとはいひけるなめり、いかづちはおちぬれど又もあがる物を、ほしのおちていしとなるにぞたとふべきにや、それこそかへりあがることとなけれ、

〔大鏡〕七道長今の衛門のかみ〇實成ぞ、とくよりこの君〇右馬頭顯信は出家の相こそおはすれとの給ひて、中宮大夫殿〇能信のうへに御せうそこきこえさせ給ひけれど、さるさうある人をばいかでかとて、後に此大夫殿をばとりたてまつり給へるなり、正月にうちよりいで給ひて、この衛門督馬頭の物よりさしいでたりつるこそ、むげに出家の相ちかくなりて見えつれ、いくつぞよとのたまひければ、頭中將〇能信十九にこそなり給ふらめと申給ひければ、さてはことしぞし給はんとありけるに、かくときゝてこそ、さればよとのたまひけれ、相人ならねどよき人はものを見給ふなり、

〔續古事談〕二臣節土御門右大臣〇源師房具平親王子ムマレテ二歲ノトキ、後中書王〇具平親王ノ給ケル、コノチ

ゴ將軍ノ相アリ、カナラズ大將ニナルベシ、入道〇藤原道長コノ事ヲキヽ給ヒケリ、ハタシテカナヘリ、

〔江談抄二雜事〕平中納言時望相一條左大臣事

故右大辨時範談云、一條左大臣〇源雅信年少之時、故平中納言時望、到其父式部卿敦實親王、召出雅信、令時望相之、時望相云、必至從一位左大臣歟、下官子孫若有申觸事者、可有必舉用之也、歡剩感歎云云、時望卒後、一條左大臣感彼知己之言、惟仲肥後之公文間、殊施芳心、惟仲者、是時望孫、珍材男云々、是故平宰相〇親信之說也、彼家傳語之由、時範所談也、

〔古事談六亭宅諸道〕珍材朝臣從美作上道之路、寄宿備後國上治郡、召郡司女令打腰之間懷孕畢、後其見〇平惟仲至七歲之時、郡司相具前立之、參珍材之許、述子細、珍材思出件事涕泣、珍材者極相人也、仍見此兒可至二位中納言之相アリト云テ養育、果如父相云々、

〔江談抄二雜事〕又平家自往昔累代傳相人之事、又惟仲中納言其母讃岐國人也、珍材爲讃岐介之時、所生子也、而去任之後尋來、珍材召入相之云、汝必至大納言歟、但依貪心頗有其妨、可愼之也云々、後果至中納言大宰帥、件時宇佐宮第三寶殿付封之、依件事被停任之、是往年先親所傳語也云々、

〔江談抄三雜事〕大納言道明到市買物事

被命云、往代人多到市自買物、道明與妻同車到市買物、市中有一婦、見大納言妻曰、君必爲大納言妻、次見道明曰、此人之力歟云々、

〔古事談六亭宅諸道〕江帥者極相人也、清隆卿因幡守之時、爲院御使到江帥之許、入持佛堂念誦之間也、仍御使ヲ緣ニ居エテ、隔明障子謁之、清隆卿御使也、奇怪事哉ト乍思、數剋問答事畢、歸參之時、障子ヲ細目ニアケテ喚返テ云、ソコハ官ハ正二位中納言、命ハ六十六ゾヨト云々、果如言、

〔今昔物語二十四〕備登照相僧、朱雀門語第二十一

今昔、登照ト云僧有ケリ、諸ノ形ヲ見、音ヲ聞キ、翔ヲ知テ、命ノ長短ヲ相シ、身ノ貧富ヲ敎ヘ、官位ノ高下ヲ令知ム、如此相スルニ、敢テ違フ事无カリケレバ、京中ノ道俗男女、此登照ガ房ニ集ル事无限リ、而ルニ登照物ヘ行ケルニ、朱雀門ノ前ヲ渡ケリ、其門ノ下ニ男女ノ老少ノ人、多ク居テ休ケルヲ、登照見ルニ、此門ノ下ニ有ル者共、皆只今可死キ相有リ、此ハ何ナル事ゾト思テ、立留テ吉ク見ルニ、尙其相現也、登照此ヲ思ヒ廻スニ、○中略若シ此門ノ只今倒レナムズルカ、然ラバゾ被打壓テ忽皆可死キト思ヒ得テ、門ノ下ニ並居タル者共ニ向テ、其レ見ヨ其ノ門倒レヌルニ、被打壓テ皆死ナムトス、疾出ヨト音ヲ高ク擧テ云ケレバ、居タル者共此ヲ聞テ、迷テハラ〳〵ト出タリ、登照モ遠ク去テ立リケルニ、風モ不吹、地震モ不振ハ、塵許門喎ユガミタル事モ无キニ、俄ニ門只傾キニ傾キ倒レヌ、然レバ急ギ走リ出タル者共ハ命ヲ存シヌ、其中ニ頑強クテ、遲ク出ケル者共ハ、少々被打壓テ死ニケリ、其後登照人ニ會テ、此事ヲ語ケレバ、此ヲ聞ク人、尙登照ガ相奇異也トゾ讃メ感ジケル、

〔古事談〕六亭宅諸道 洞昭側見俊賢卿云、良目ヤアレヲモテ相セサセバヤト云々、件卿ナル者ニハ見エヌヨシトテ年來不被見云々、

西方院座主院源向洞昭云、弟子良因ハ何月日可補阿闍梨哉、答、全無其相之由、座主ワラヒテ云、御房ノ相ニコノコトコソヲカシケレ、一々毛孔ニモ成ヌベキ闍梨也、如何々々、洞昭出房之後、對他人云、命アラバコソ、有職ニモ僧綱ニモ成ト云々、而果如所言、卽卒去畢、生年廿五云々、極拔萃之人也、

〔續古事談〕五諸道 丹波守貞嗣、北山ニ詣、百寺ノ金鼓ウチケルニ、洞照トイフ相人イフヤウ、君ノ顏色アシヽ、ヲソラクハ鬼神ノ爲ニヲカサレタル歟、貞嗣、心地タガフコトナシ、ツネノゴトシト云フ、洞照トクカヘルベキヨシヲ云ホドニ、貞嗣俄ニタヽ入テ、ヨミガヘリテ家ニカヘリテ、モノヽ氣

アラハレテ云ク、別ノ事ナシ、ワレラ遊ツル前ヲトヲリツレバ、胸ヲフミタルナリトソ云ケル、天狗ノシワザナリ、サテ三日アリテ死ニケリ、洞照ガ相、神ノ如シ、

〔古事談六亭宅諸道〕洞照參入道殿(御堂○藤原道長)御前、乍臥令謁給、于時宇治殿(內大臣○道長子頼通)令參給、暫アリテ入、母上御方給之後、洞昭申云、此君本自無止御坐而重、可貴之御相已ニ顯給云々、入道殿忽驚起給ヒ被仰云、可讓攝籙之由、只今心中所案也云々、

〔續世繼うたゝね七〕此兄弟(○源俊房、顯房、)のおほいどの少將におはしけるとき、隆俊治部卿、御むこにとり申さんと思ひて、其時めしひたる相人有けるに、かの二人、いかゞさうし奉たると問れければ、ともによくおはします、みな大臣にいたり給べき人也と云けるを、いづれか世にはあひ給ふべきとゝはれけるに、弟は末ひろく、みかど一の人も出き給ふべきさうおはすと申ければ、六條殿(○顯房)をとり申たるとぞきゝ侍し、其かひ有て、みかど關白も其御末より出き給へり、

〔續古事談二臣節〕堀川左大臣(○源俊房)始テ舞人セラレケル時、閑院春宮大夫能信、父ノ大納言ニツゲラレケル、コノ人ヤムゴトナキ相アリ、必大臣ニイタルベシトゾ、フルキ人々云トコロ、ミナムナシカラヌ事也、

〔古今著聞集七術道〕野々宮左府(○藤原公繼)おさなくおはしける時、母儀(○上西門院女房備後)さまをやつして、ぐし奉りて、播磨の相人とて、めいよの者ありけるに行て、相を見せさせられけり、相人よく〳〵見申て、必一にいたり給べきよしを申けり、母儀あらがひて、是はさ程の位にいたるべき人にあらず、さぶらひ程の者の子にて侍なりとの給ひければ、相人申けるは、まことに侍にておはしまさば、檢非違使などに成給べきにや、いかにも大臣の相おはします物をと申けり、後德大寺左大臣(○藤原實定)の末の子にておはしけるが、このかみ、みなうせ給て、家をつぎて、大將をへて、左右大臣一位にいたりて、天下の權をとり給ける、ゆゝしく相し申たりける也、此事をおとゞ聞たもち給て、

相をならひて、目出たくし給ひけるとぞ、わが壽限などをも、かゞみを見て相して、かねてしり給たりけるとぞ、

〔古事談六亭宅諸道〕六條右大臣殿〇源顕房ハ相人也、奉相白川院曰、御壽命可令至八十給、但頓死相難遁御歟云々、院令及暮年給後被仰云、右府相相叶已及八十、頓死事彌有其憚云々、

又大外記信俊生年八歳之時、相具兄囚獄正家俊参被殿次ニ、自屏風之上御覽之、又令申北方給云、此童可繼家業者也、北方被仰云、兄家俊容體太優、何不繼家哉、大臣不被仰左右云々、

又令参故中宮賢子給退出之時、令申北方給云、イミジキ態哉、心憂目ヲ見ムズルハ、此宮今一兩年ノ内之人也云々、北方被仰云、マガマガシク、爭如此被申哉、全無衰邁氣御座スル物ヲ、大臣被仰云、不可依美麗也、無生氣成給タル物ヲ、不可過今明年入也云々、果然云々、

正家朝臣又相人也、息男右少辨左衛門權佐俊信ヲ相云、爲辨靱負佐官位已至、然而無可著正家服之相、口惜態哉云々、其言果不違、又奉相白川院、可令及八旬之由稱之、仍件日久我太政大臣無執奏云々、

〇中略

宗通卿子息兩人兄伊通公、弟季通朝臣、童稚之時、参一條殿御許、御母准后人也忽被居折敷饌、各食了退出之後、尼上〇藤原忠實母云、此兄兒者可至大臣之人也、弟者凡卑也、不至卿相也云々、果如彼言、

〔古今著聞集七術道〕九條大相國〇藤原伊通淺位の時、なにとなく后町の井を立よりて、底をのぞき給ける程に、丞相の相見へける、うれしくおぼして、歸りて鏡をとりて見給ければその相なし、いかなることにかとおぼつかなくて、又大内にまいりて、彼井をのぞき給ふに、さきのごとく此相見へけり、其後しづかにあんじ給に、かゞみにてちかくみるにはその相なし、井にて遠くみるには其相あり、此事大臣にならんずる事とほかるべし、つゐにむなしからんと思ひ給けり、はたしてはるかに程へて成給にけり、此おとゞはゆゝしき相人にておはしましけり、宇治のおとゞもわざ

と相せられさせ給けるとかや、

〔續古事談〕五諸道 遍救僧都、慶命座主ノ童ナリケルヲエテ、母ニイフヤウ、今日大僧都ヲナムエタル、母火ヲトモシテミテ云、大僧正ナリ、ハタシテ大僧正ニイタル、母ノ相、遍救ニマサレリケリ、

〔台記〕久安六年七月二十日甲午、早旦禪閤〇藤原忠實召相者盛正、令相余、〇頼長曰、壽及七十、福不可言、職主執政、二ケ年之內、必有大慶、又二十二三五有慶矣、

〔平治物語〕一 信西出家由來幷南都落附最後事

去程ニ、通憲入道ヲ被尋ケレ共、行衛ヲ更ニ不知ケリ、彼信西ト申ハ、南家博士長門守高階經俊ガ猶子也、大業モ不遂、儒官ニモ不被入、重代ニアラザル也トテ、辨官ニモナラズ、日向守通憲トテ、何トナク御前ニテ被召仕ケルガ、出家シケル故ハ、御所ヘ參ラントテ鬢ヲカキケルニ、鏡水ニ面像ヲ見レバ、寸ノ首劒ノ前ニ懸テ空シクナルト云面相アリ、驚キ思ケル比、宿願有ニ依テ熊野ヘ參リケリ、切目王子ノ御前ニテ、相人ニ行逢タリ、通憲ヲ見テ相シテ曰、御邊ハ諸道ノ才人哉、但寸首劒ノ先ニ懸テ露命ヲ草上ニサラスト云相ノ有ハ如何ニト云テ、一々ニ相シケルガ、行末ハ不知、コシカタハ何事モ不違ケレバ、通憲モ左思ゾトテ歎ケルガ、ソレヲバ如何ニシテ可遁ト云ニ、イザ出家シテヤ遁レンズラン、ソレモ七旬ニ餘ラバ如何アラントゾ云、扨コソ下向シテ御前ヘ參、出家ノ志候ガ、日向入道トヨバレンハ、無下ニウタテシウ覺候、少納言ヲ御許シ蒙リ候ハヾヤト申ケレバ、少納言ハ一ノ人モ成ナドシテ、無左右トリ下サヌ官也、如何アラント被仰ケルヲ、ヤウヤウニ申テ御許サレヲ蒙リ、軈出家シテ少納言入道信西トゾ云ケル、

〔源平盛衰記〕三十四 明雲八條宮人々被討附信西相明雲事

天台座主明雲大僧正ハ、馬ニメサントシ給ヒケルヲ、楯六郎親忠能引テ放矢ニ、御腰ノ骨ヲ射サセテ、眞逆ニ落給ヒ、立モアガリ給ハザリケルヲ、親忠ガ郎等落重ナッテ、御頭ヲトル、〇中略 後白河

院御登山ノ時、少納言入道信西、御伴ニ候ケリ、前唐院ノ重寶、衆徒存知ナカリケレ共、信西才覺吐ナドシタリケリ、其次ニ、明雲僧正我ニイカナル相カ有ト御尋アリ、信西三千ノ貫首、一天ノ明匠ニ御座ス上ハ、子細不及申ト答、重タル仰ニ、我ニ兵定ノ相アリヤト尋給ケレバ、世俗ノ家ヲ出テ、慈悲ノ室ニ入御坐ス、災天何ノ恐カ有ベキナレ共、兵定ノ相アリヤノ御詞怪ク侍テ、是卽兵死ノ御相ナラント申タリケルガ、ハタシテ角成給ヒケルコソ哀ナレ、或陰陽師ノ申ケルハ、一山ノ貫長、顯密ノ法燈ニ御座ス上ハ、僧家ノ棟梁イミジケレ共、御名コソ誤付セ給ヒタリケレバ、日月ノ文字ヲ並ベテ、下ニ雲ヲ覆ヘリ、日月ハ明ニ照スベキヲ、雲ニサヘラルヽ難アリ、カヽレバコノ災ニモアヒ給フニヤ、

〔玉海〕元暦元年二月廿五日甲申、召範源阿闍梨（山法師相者）令見大將（〇通具）中將（〇經具）等、各申有高運相之由、官祿共富、壽命又長遠也云々、

〔徒然草下〕明雲座主、相者にあひ給ひて、をのれもし兵仗の難や有と尋給ひければ、相人まことに其相おはしますと申、いかなる相ぞと尋給ひければ、傷害のおそれおはしますまじき御身にて、かりにもかくおぼしよりてたづね給ふ、是すでに其あやぶみのきざしなりと申けり、はたして矢にあたりてうせ給ひにけり、

〔徒然草下〕御隨身秦重躬、北面の下野入道信願を、落馬の相ある人なり、能々つゝしみ給へといひけるを、いとまことしからず思ひけるに、信願馬よりおちて死にゝけり、道に長じぬる一言、神のごとしと人思へり、さていかなる相ぞと、人のとひければ、きはめて桃じりにして、沛艾の馬をこのみしかば、此相をおほせ侍りき、いつかは申あやまりたるとぞいひける、

〔翰林胡蘆集一〕散說（〇中略）初月潭、（〇赤松則村）微時、與寶覺禪師邂逅途中、禪師好相人、見月潭狀貌謂之曰、必貴、月潭乃謝而曰、誠如

師言、不敢忘德、及其貴、不知禪師處、是時禪師年尙壯、懷南遊求法之志、附海舶入太宋留者二十年矣、月潭慕禪師德、以待其東歸、然而年久、不可記其面、故路費且過堂、問僧往來、果得禪師、於是紛法雲寺、敎請禪師、爲開山始祖、其後自天建法林寺、追崇禪師、復爲之開山祖、

〔明良洪範三〕內膳(氏家)事、初メテ秀頼公ノ御近習トナル時、祿一萬石ト成リ、京極修理亮、朽木兵部少輔ナド、官祿モ同ジカリシ時、相州小田原進發ノ時、京極、氏家、朽木、三人同道ニテ關東ヘ下リケルニ、江州草津ノ驛ニテ、宿ノ者ヲ呼ンデ、酒ヲ吞セテ戲ムレテ、此三人ノ內何レガ殿下ノ御意ニ叶ヒ立身スベキヤト、其方目利シテ盃ヲサスベシト云シニ、亭主初メハ辭退シケルニ、三人頻リニ望ミシカバ、其時內膳ガ前ニ盃ヲ出シテ申ケルハ、近キ內ニ貴公樣、御主人ノ御氣ニ叶ヒ、必桑名ノ御城主ニ成リ給フベシトテ盃ヲナシケル、案ノ如ク小田原陣中ニテ、大閤ヨリ桑名ノ城ヲ內膳ニ給ハリ、五萬石ヲ御加恩セラレシト也、

〔白石紳書六〕盧一官といふ唐人の子、長崎町人にて年行事也、是がいひしは、父の所へ唐人共の來りし時、天草の四郎が十二三にて、唐人の供に雇はれ來りしを、唐人の中にて相をつくぐと見て、名を問ひ父を問ふ、濱の町といふ所の者の子也、通事不審に思ひて尋しに、彼唐人云、日本は心得ぬ所也、あの如くなる者、あのごとくなる賤役を執てある也、彼子は天下に望のある者也、されど運はやき程に、望は成就すまじき歟といふ、程なく有馬の戰の事おこりたる也と、

〔先哲叢談三〕熊澤伯繼(中略)

嘗至某侯、及入見、一士人威儀特秀骨體非常、相與張目注視良久、遂不交一言、見侯曰、余今見一士、不知仕臣乎、將處士耶、侯曰、渠爲吾講兵書、處士由井民部助者也、(名正雪)蕃山正色曰、余熟視其貌、以察其意、君勿復近、如彼士、他日正雪亦來見侯曰、前日比退朝、見某衣其形人、未知其爲誰、侯曰、渠說吾以經書、岡山臣熊澤次郎八者也、正雪正色曰、余熟視其貌、以察其意、君勿復近、如彼士、

〔雲萍雜志 二〕洛の七條に淨味七郎兵衞といふ釜師あり、家富さかえて、多くの人を仕ひけるころ、伏見に人相をよくするものありて、ある時、淨味を見ていひけるは、御身今は何ひとつ不足なけれども、五十歳を超えて後には、かならず乞食ともなるべきほどのあしき相あり、つゝしみ給へといふによりて、淨味予(○柳澤里恭)に問けるは、人相はしかとしたる書にも出侍ることにやといへるに、予答ていふ、人相の書くさ〴〵ありて、その理かならずあることなり、(○中略)されば御もとも、人相をみせられしところ、則乞食の相をまうけ出したるなれば、果したまへといふに、淨味は頭をふりて、身の持やうによるべし、相を果すなどゝは、その意を得ざることなりとて歸りぬ、それより淨味は、四十五六のとしよりして、おひ〳〵よからぬことゞもありて、そのみつひに零落におよび、八年がほど過て、淸水坂に乞食となりゐたるを見し人ありとかたりぬ、淨味七郎兵衞は、阿彌陀堂といふ釜をはじめて摸せし釜師の上手なりき、

〔春雨樓叢書 十一〕相學奇談

ある人語りけるは、淺草邊の町家に居ける人、甚相術に妙を得たり、予友人も、其相を見せけるに、不思議に未前を云當けるが、爰に麴町邊に有德なる町家にて、幼年より召仕手代にて、取立、店の事も呑込、實體に勤ける故、相應に元手金をも渡し、不遠別株に致させんと心掛しに、或日彼手代、相人の方へ來りて相を見せけるに、相人の云く、御身は生涯の善惡を見る沙汰にあらず、氣の毒なる事には、來年の六月の頃にて、果て死んと云ければ、彼もの大に驚き、猶又右相人委細見屆、兎角死相ありと申ければ、強て實事共思はねど、禮謝して歸けるが、兎角に心にかゝりて、鬱々としてたのしまず、律義なる心より、一途に來年は死んものと觀じて、親方へいとまを願ひける、親方大におどろき、いか成譯有てと尋ければ、さしたる譯も無れど、只出家の心あれば、平に暇を給るべしと望し故、しからば心懸置し金子も可遣と云ければ、元より世を捨る心なれば、若入用あら

ば可願とて、一錢も不請、貯置し衣類など賣拂ひ、小家をもとめ、或は托鉢し、又は神社佛閣に詣、誠に其日限の身と、明暮命終を待くらしける、或日兩國橋朝とく渡りけるに、年頃貳拾歲計なる女、身を沈んと、欄干に上り、手を合居しに、彼手代見付引下し、いか成譯にて、死を極めしやと尋ければ、我身は越後國高田在の百姓の娘にて、親も相應にくらしけるが、近きあたりの者と密通し、在所を立退、江戸表へ出、五六年も夫婦暮しけるが、右男よからぬ生れにて、身上も持崩し、かつ〳〵の暮しの上、夫なるもの煩て身まかりぬ、然るに店賃其外借用多く、つくのふべき手段なければ、我が親元は相應なると聞て、家賃其外借金たまり、日々責られ、若氣にて一旦國元を立退たれば、今更親元へ顏も向難く、死を極めし也、ゆるして給へと、泣々語りければ、右新道心も、かゝる哀を聞すてんも不便也、右借財の譯も細かに聞けるに、わづかの金子故、立歸り親方へかく〳〵の事也、兼て可給金子の内、我身入用有之事故、かし給へと歎ければ、親方も哀に思ひ、右金子の内五兩かし遣しければ、右の金にて諸拂致し、店を仕廻はせ、近所の者に頼みて、親元へ委細の譯を認、書狀添送らせければ、右親元越後なる百姓は、身元厚く近郷にて長ともいへるもの故、娘の再度歸り來りし事を歡び、勸當をゆるし、送りし人をもあつく禮謝し、右新道心の元へも禮狀等厚くなしけると也、是は拙者、來る年の春も過、夏も六月に至り、水無月祓も濟けれど、新道心の身に聊煩はしき事もなく、中々死期の可來とも思はれねば、さては相人の口に欺れける口惜さよと、親方へも始終有の儘に咄しければ、親方も大におどろき、汝が律義にて、欺れしは是非もなし、彼相人の害をなせる憎さよと、我彼ものゝ所へ行、責ては恥辱を與へ、以來外々の見こらしにせんとて、道心を連て相人のもとへ至り、右道心をば門口格子の先に殘し、さあらぬ體にて案内を乞、相人に對面し、相を見て貰んため來りしと申ければ、相人得と其相を見て、御身の相、何もかはる事なし、されど御身は相を見せに來り給ふにあらず、外に子細有て來り給ふなるべしと、席を立て

表の方を見、右新道心の格子の元に居しを見て、さて〱不思議なる事哉、此方へ入給へと、右同心の様子を微細に見て、御身は去年の冬、我等相を見けるが、當夏までにはかならず死し給はんと云し人也、命めでたく來り給ふ事、我が相學の違ならんか、內へ入給へと座敷へ伴ひ、天眼鏡にうつし、得と考、去年見しにさして違ふことなきが、御身は人の命か、又ものゝ命を助け給へる事有べし、具に語り給へと云ければ、主從大に驚き、兩國にて女を助しこと、夫よりの始終、くわしく語ければ、全右の慈心が相を改候也、此上命恙なしと、横手を打て感心しける、主人も大によろこび、右手代還俗させ、越後へ送りし女をもらひ、夫婦となし、今まのあたり榮へ暮しけると也、

〔中右記〕元永元年八月七日、今夕前雜色源實俊來云々、此次予問云、明年五□□宿曜、勘文云、壽限也、如何、實俊答云、聞言談盤已六十四五以後也、明年强不可有歟、又欲見手足者、令見左右手左足之處、答云、先□此官□厥終事、全不可候、今又可昇進也、以之推之、及六十四五後、可有命恐、□□聞此事、可悅思也、件實俊自本相人也、天下衆人、皆信受云々、予又問云、關白殿今明年御愼重者如何、答云、自本年來候彼殿、能々奉見之處、貴相第一也、御壽命餘六十給之後、可有恐歟、同此事心中所欣悅也、件二ケ條、依爲大事、所問尋也、

〔神相全編正義下〕論手

夫手者、其用所以執持、其情所以取捨也、故纖長者、性慈而好施、短厚者、性鄙而好取、手垂過膝者、蓋世英賢、手不過腰者、一生貧賤、身小而手大者福祿、身大而手小者淸貧、手薄削者貧、手端厚者富、手粗硬者下賤、手軟細者淸貴、手香煖者榮華、手臭汚者獨下、指纖而長者聰儁、指短而窄者愚賤、指柔而密者蓄積、指硬而疎者破財、指如春筍者淸貴、指如鼓槌者愚頑、指圓如剝葱者食祿、指粗如竹節者貧賤、手薄硬而如雞足者無智而貧、手掘强如猪蹄者愚鹵而賤、手軟滑如錦囊者至富、手皮連如鵞足者至貴、掌長而厚者貴、掌短而薄者賤、掌硬而圓者愚、掌軟而方者福、四畔豐起而中窪者富有、

觀相書

四畔肉薄而中平者財散、掌潤澤者富貴、掌乾枯者貧窮、掌紅如𠰥血者榮貴、掌黃如拂土者卑賤、靑色者貧苦、白色者寒賤、掌中當心生黑子者智而富、掌中四畔有橫理者愚而貧、多縱理者慧性、無紋理者愚劣、五指內要立理、五指背要橫紋、俱主福壽、是相掌之大要也、

〔隨意錄　六〕手理有稱弓箭理、世俗傳言、有弓箭理者、不得其死然、水戶義公、幼而有所謂弓箭理、傅姆侍女、皆悲之曰、斷之可也、公曰、武將之子、手有弓箭、固所願也、是天之賜也、豈可失之乎、

〔日本國見在書目錄〕五行家九百十九卷私略之　呪禁太一　符印易　五行遁甲式　六壬相　雷公仙術

仙相經一卷　　新撰相人經一　　相書七　　許眉相男女經三

〔漢書　藝文志　三十〕山海經十三篇、國朝七卷、宮宅地形二十卷、相人二十四卷、相寶劍刀二十卷、相六畜三十八卷、

右形法六家百二十二卷

〔通俗編　藝術　二十一〕相書　晉書東皙傳、汲冢有瑣語十一篇、諸國卜夢妖怪相書也、按、漢書藝文志、有相人二十四卷、相寶劍刀二十卷、相六畜二十八卷、總得謂之相書、今相畜者寥々、相器物則成絕響矣、

觀聲

〔今昔物語　二十四〕僧登照相倒朱雀門語第廿一

今昔、登照ト云僧有ケリ、〇中略　登照ガ房ハ一條ノ邊ニ有ケレバ、春比雨靜ニ降ケル夜、其房ノ前ノ大路ヲ笛ヲ吹テ渡ル者有ケリ、登照此ヲ聞テ、弟子ノ僧ヲ呼テ云ク、此笛吹テ通ル者ハ誰トハ不知ドモ、命極テ殘リ无キ音コソ聞ユレ、彼レニ告ゲバヤト云ケレドモ、雨ハ痛ク降ルニ、笛吹ク者只過ニ過タレバ、不云シテ止ヌ、明ル日ハ雨止ヌ、其ノ夕暮ニ、夜前ノ笛吹キ、亦笛ヲ吹テ返ケルヲ、登照聞テ、此ノ笛ヲ吹テ通ル者ハ、夜前ノ者ニコソ有ヌレ、其ガ奇異ナル事ノ有也ト云ケレバ、弟子然ニコソ侍ヌレ、何事ノ侍ルゾト問、登照彼ノ笛吹ク者呼テ來ト云ケレバ、弟子走行テ呼テ將來タリ、見レバ若キ男也、侍ナメリト見ユ、登照前ニ呼ビ居エテ云ク、其ヲ呼ビ聞エツル事ハ、夜前

笛ヲ吹テ過ギ給ヒシニ、命今明ニ終ナムズル相、其笛ノ音ニ聞エシカバ、其事告申サムト思ヒシニ、雨ノ痛ク降シニ、只過ギニ過ギ給ヒニシカバ、否不告申テ、極テ糸惜ト思ヒ聞エシニ、今夜其笛ノ音ヲ聞ケバ、遙ニ命延給ヒニケリ、今夜何ナル勤カ有ツルト、侍ノ云ク、己今夜指ル勤メ不候ハ、只此東ニ川崎ト申ス所ニ、人ノ普賢講行ヒ候ツル伽陀ニ付テ、笛ヲゾ終夜吹キ候ツルト、登照此ヲ聞クニ、定メテ普賢講ノ笛ヲ吹テ、其ノ結緣ノ功德ニ依テ、忽ニ罪ヲ滅シテ、命延ニケリト思フニ、哀レニ悲クテ、泣々ナム男ヲ禮ケル、侍モ喜ビ貴ビテ返ニケリ、此近キ事也、此ル新タニ微妙キ相人ナム有ケルトナム、語リ傳ヘタルトヤ、

〔梧窻漫筆三編上〕就中、山三郎名古屋ハ容色モ殊絶シ、勇氣モ勝レ、十三歲ノ時ニ武功アリ、十七歲ノ時ニ氏鄕卒シ、浪人トナリ、父ノ許ニ歸リ、京洛ニ在リテ衣服刀劍ニ、珠璣錦繢ヲ施シ、華靡侈麗ヲ窮極シテ寺觀ニ游跋セシガ、高貴ノ婦人ニ眷戀セラレ、屢姦亂ヲナス、其臭聲世ニ布タレバ、勇名ハ有ナガラ、聘シテ臣トスル公侯モナク、久シク沈淪セシガ、森忠政ニ仕ヘテ三左衞門ト改メ、三千石ノ祿ヲ食メリ、頃之シテ井戸理兵衞ト云者ノ打手ニ向テ、反擊ニ遭テ無名ノ死ヲ爲セリ、相家ノ說ニ、多ク婦女ヲ犯セルモノハ、姦淫ナラザルモ命終ナシト云ヘリ、謂レアル事ナラン、

〔本阿彌行狀記下〕人相に、當世ホクロの論、相者の中、やかましきといへども、唐より傳來の相書になし、

地相

○

〔令義解一職員〕陰陽寮（中略）陰陽師六人、掌占筮相地、（中略）相者視也

〔日本書紀敏達二十〕四年、是歲命卜者、占海部王家地與絲井王家地、卜便襲吉、遂營宮於譯語田、是謂幸玉宮、

〔日本書紀 天武二十九〕十三年二月庚辰、遣淨廣肆廣瀨王、小錦中大伴連安麻呂、及判官、錄事、陰陽師、工匠等於畿內、令視占應都之地、

〔續日本紀 元明四〕和銅元年二月戊寅、詔曰、中略往古已降、至于近代、揆日瞻星、起宮室之基、卜世相土、建帝皇之邑、中略方今平城之地、四禽叶圖、三山作鎭、龜筮並從、宜建都邑、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿元年十月十九日丙午、於武州北條泰時御亭、相州北條時房已下、有御所御地定、小路宇津宮辻東西間、何方可被用哉之事、人々意見區々、爰地相人淨法師申云、右大將家法華堂下御所地、四神相應、最上地也、何可被移他所哉、然彼御所西方之地被廣、可有御造作也者、兩國司直令問答給、依之彌御不審出來之間、未治定、御占可被行云々、

〔塵添壒囊抄 四〕四神相應地事

地相ニ四神具足ト云フハ、四神體ナニモノゾ、北斗ノ曼荼羅貪狼星ヲ圖スルニハ、四方ニ四神ヲ書ケリ、朱雀ニハ赤キ雀ヲ書キナラハセリ、其名ヲ思フニハ、スヾメ相違ナシ、但書中ニ四神ヲ明スニハ、朱鳥ハ鳳也ト釋セリ、雀ノ字ヲバ鳥ノ惣名ト釋シタル事アリ、又雀ヲ鳳也ト云ヘル事モアリ、銅雀ト書ルハ、アカヾネノ鳳凰也、サレバ今ノ朱雀モ、實ニハ朱鳳ニテアルベキニヤ、朱雀錦ト云フニシキモ鳳錦也、鳳凰ヲ紋ニヲリツケタル物也、雀ヲ鳳トスル事其例一ニアラズ、朱雀一ノ名ハ長離也、離ハ南ナレバ南ニ長ジタル神ト云心ニテ、長離トハ云フニコソ、前朱雀ト云ハ、前ハ南ナリ、南ハ火方ナレバ陽ノ鳥ニアタル、鳳ハ火ノ精ナル故ニ、南方ノ神也、雀ハ卑劣ノ小鳥ニナ火ノ方ノ神トスルニタラザル歟、雀ヲ圖スル事ハ道理覺束無シ、後玄武ト云ハ、後ハ北方也、又玄冥ト云フ黑色也、玄武神ハ龜也、但シ龜ト蛇ト交ヲ玄武トストモイヘリ、左青龍ト云ハ、東方ノ青キ色也、又青潤ト名ク、青色ノ龍也、右ヲバ白虎トス、西ハ白色也、一名ハ索威、索ト云ハ白也、威ト云ハ猛虎ノ威也、四方ハ四季ニカタドレリ、四季ニ各一德アリテ萬物ヲ長ズ、春ノ德ハ雨也、草木

等ヲ生ズル源ナリ、龍ハ雨ヲ司ドル故也、夏ノ德ハ暑也、アツキニヨリテ萬物滋長ス、陽長是ヲ司ドルベシ、秋ノ德ハ風也、風ハ物ヲ堅スル力アリ、虎ハ又風ノ主也、虎嘯テ風起ルト云フ本文アキラカナリ、冬ノ德ハ寒也、寒ニヨリテ其地味ヲ増、北方ハ陰ニシテ寒ヲイタス、玄武ノ龜水方ニ居シテ、能ク陰ヲツカサドル、沍陰ノ長也、是ヲ合セテ四神ノ德トス、

〔玉兎集造屋篇四〕先地判形之事

東低西高靑龍地、文、　此屋敷木性屋敷可心得

南低北高赤龍地、文、　此屋敷火性屋敷可心得

北低南高黑龍地、文、　此屋敷水性屋敷可心得

西低東高白龍地、文、　此屋敷金性屋敷可心得

中低方高黃龍地、文、　此屋敷土性屋敷可心得

方低中高四龍地、文、　此四龍地ヲバ無主之地共云

靑龍地者木性貧、此直木木相加故凶也、　火性人富者、木性火ト相生ズル故ニ富貴也、　土性人病ト者、木剋土剋スル故ニ惡ナリ、　金性人災ト者、金剋土ト剋スル故ニ云、爾也、　火性人榮ト者、水性木ト相生ズル故ニ大吉也、以下推之可知也、

〔太子傳玉林抄十一〕傳云、吉相此地圖之秀、文

陰陽書曰、左靑龍者、從東水南ヘ流也、前朱雀者、南池溝在之也、右白虎者、西大道有也、後玄武者、後山岳在之、凡東下南下西北高大吉也、此云四神具足地也云々、

〔和漢名數續編地理〕四神相應地　左靑龍、東　右白虎、西　前朱雀、南　後玄武、北、朱子曰、玄武謂龜蛇也、位在北方、故曰玄、身有鱗甲、故曰武、居家必用曰、宅欲左有流水、謂之靑龍、右有長道、謂之白虎、前有汙池、謂之朱雀、後有丘陵、謂之玄武、爲最貴地、

〔閑の曙上〕或人問て曰、近き比さる所に、藏をこぼちて座敷を建ければ、愚盲なる陰陽者の樣なる

ものヽいふには、竈は土を主とし、家は木を主とす、去かれは木剋土の剋にあたりて、主人に祟りてあしきといふ、此義いかにや、予〇新井白蛾答て曰、それは能々文盲なる人こそ聞受申べし、少しにても學問せし人などは、齒にかけていふ事も耻づべし、一向に取に不足事ながら、一寸辯じて見れば、先づ相剋する所と、其人のいふ所と相違す、木は盛勢にて、土は剋を受て衰ふ時、建たる家は、ます〳〵盛にして、竈は剋にあたりてこぼたれたるは、相應の事ならずや、家を毀て竈を建てたらば、木剋土の剋にてあしきともいふべし、是は取にたらぬ中の又取に足らぬ事の辯なり、右底の事をいふても聞にあふべきは、田舍などの地面も廣く空地も有所にて、愚盲なるぢゝばゝの悅ぶべき事なり、三ヶ津などの繁昌至極の大都會にては、間にあはぬ事なり、都にては、家を毀て竈を建、または竈を除きて家を建て、住居勝手の好やうにして住が善なり、或人又問ふて曰、居宅より、戌亥の方に隱居家を建るは甚だあしゝ、且又主人に祟るなり、それも本宅ならば宜しといふ、是又如何、予答ふ、これも又大痴癡なり、夫先天の方位、乾の父は西南に位し、坤の母は東北に位す、代を讓りて隱居するに、乾の位に離を置、坤の位には坎を移し置て、父の乾は西北の間戌亥に隱居し、母の坤は南西の間未申に退く、是後天の易位なり、卽ち乾をいぬゐと訓するに非ずや、是も戲れにいはゞ、本家を建るはあしけれども、隱居には善といふべしと笑ぬ、

〔東牖子 二〕家相大に流行し、都鄙貿易これに著する人多し、按るに、劉熙が釋名に宅托也、人之倚處也とて必竟人の入物、或は外箱などゝおなじく、又刀劍の鞘柄のごとく、何程外飾見事に金銀を鏤たりとも、身鈍刀ならば、何の用にか立んや、〇中略爰に予〇田宮宜遊歷中に、おかしき話有、和州龍田なる一商買、家相を改んと、態々浪花より家相者を招き、差圖を請て宅を造作し、十分の吉相となして、兩三ヶ年の間、福今や來らんと待うちに、身上不如意になり、剝逐轉し、家断絶に及びぬ、又予が寓せし隣村に、同く家相者に指圖を受て、門を建變、土竈を挽きて、相者の意に任せ、吉相滿りと

悅びしに、翌年の春、全家温疫を病み、其上相續とすべき盛仁の嫡子を失ひ、普請に散財し、先祖傳來の住居を變じたり、其大不幸何によつてか避ることなきや、然共其惑いよ〳〵解ず、益家相を淫し、人にも勸む、其男は予が知れる百姓にて、村長をも勤め伶俐なる男なり、

〔閑窻瑣談〕第一　金神家相の論

近世、家宅の相を撰事行れて、萬家多くは此所爲に泥、其道に通達せる徒に付て、一向に居家の安全を秤、然ば貴賤と雅俗を不論、宅相の吉凶に依て、身上に祥と不祥を現然に得ると云徒不少、於是方位家相をトするの徒、禍福當祟を囂く云募、八方金神の祟、本命的殺の論嘖々たり、既に家相の禁忌なくとも、暦道に二十四方位の方角なんど、無量吉凶、日取の善惡多くして、撰除事不容易、是乍併、我朝古代の風にはあらず、昔唐土にて、道士等が祭初たる事にして、青龍、白虎、朱雀、玄武の稱を弘む、是なん世に知る四神の名目、東西南北に配當なせる方色にて、青白赤黑の形を表するのみ、

〔兎園小説五〕家相談

近年我邦も、亦家相の學行はれて、病難を救ひ、火難を免かれ、其術に心服する者少からず、衆人の歸する所、其功驗なきにしも非ず、余是をある人に聞けるに、曰、嘗て松永宗因、藥研堀にて、家宅を買ひ求めて移らんとす、其日濱町會田七郎宅にて、金蘭に邂逅して、家相の談に及び、其言に服し其判斷を請ふ、金蘭一見して、家に死骨有り、此に住む者必ず病死之由申す、宗因畏愼て其家に移らず、直に人に讓りけり、女隱居の其家を買ひて移りたる者、一月餘にして病死せり、其後醫生有り、其家を買ひて此に住みけり、程なく是も亦病死せり、金蘭又久松町河岸へ行きて、其長家の病氣長屋の由を申し、聞直すべき由申す、然處其言にも從はずして、後果して如之、〇中略

乙酉〇文政八年五月朔　中井乾齋誌

〔梅花心易掌中指南四〕墳墓ノ占

凡ソ人死テ墳墓ヲ占ニ、體卦ヲ主トシ、用卦ヲ墳墓トスルナリ、體ヨリ用ヲ剋スレバ葬ルニヨロシ、用ヨリ體ヲ剋スレバ必ズ葬リテ凶シ、體ヨリ用ヲ生ズレバ葬ルニ凶シ、強テ葬レバ後人ヲ損ズル事アリ、用ヨリ體ヲ生ズレバ葬リテ吉ナリ、家ヲ興シ、進デ後ノ世嗣ニ利益アリ、體用比和スレバ、是ヲ吉地トス、葬リテ大ニ吉昌ナリ、

〔附書三十四經籍志〕五姓墓圖一卷梁有冢書黄帝葬山圖各四卷、五音相墓書五卷、五音圖墓書九十一卷、五姓圖山龍、及科墓葬不傳各一卷、雜相墓書四十五卷亡、

〔唐書百七呂才傳〕呂才、博州淸平人、〈略〉〇中 帝〇太宗 病陰陽家所傳書、多謬僞淺惡、世益拘畏、命才與宿學老師、翦落煩訛、撮可用者、爲五十三篇、合舊書四十七、凡百篇、詔頒天下、才於特議、儒而不俚、以經誼推處其驗術、諸家共詞短之、又擧世相惑以禍福、終莫悟云、才之言不甚文、要欲救俗失、切時事、俾易曉也、故删其三篇、〈略〉〇中 葬篇曰、易稱、古之葬者、衣之以薪、不封不樹、喪期無數、後世聖人、易之以棺槨、蓋取諸大過、經曰、葬者藏也、欲人之弗得見也、又曰、卜其宅兆、而安厝之、以是爲䘏墓之所也、魂神之宅也、朝市貿遷不可知、石泉顏留不可常、是其謀及卜筮、庶無後艱、斯則備於愼終之禮也、後代葬說、出于巫史、一物有失、便謂災及死生、多爲妨禁、以售其術、附妄憑妖、至其書乃有百二十家、春秋、王者七日而殯、七月而葬、諸侯五日而殯、五月而葬、大夫三月、士庶人逾月而已、貴賤不同、禮亦異數、此直爲赴弔、遠近之期、量事制法、故先期而葬、謂之不懷也、後期不葬、謂之殆禮也、此則葬有定期、不擇年與月一也、又曰、丁巳葬定公、雨不克葬、至于戊午襄事、君子善之、禮卜先遠日者、自未而進、避不懷也、今法、己亥日用葬最凶、春秋、是日葬者二十餘族、此葬不擇日二也、禮、周尙赤、大事用日中、夏尙黑、大事用昏、大事者何、喪禮也、此直取當代所尙、而不擇時早晩也、鄭卿子產、及子太叔葬僖公、於是司墓大夫室、當柩路、若壞其室、卽平旦而堋、不壞其室、卽日中而堋、子產不欲壞室、欲待日中、子太叔曰、若日中而堋、恐久勞諸侯大夫來會葬者、然子產太叔、不問時之得失、惟論人事可否、而

已、曾子曰、葬逢日蝕、舍於路左、待明而行、所以備非常也、按法、葬家多取乾艮二時、乃近夜半、文與禮乖、此葬不擇時三也、經曰、立身行道、揚名於後世、以顯父母、易謂聖人之大寶曰位、何以守位、曰仁、而法曰、官爵富貴、葬可致也、年壽脩促、子姓蕃衍、葬可招也、夫日愼一日、澤及無疆、德則不建、而祚乃無永、臧孫有後於魯、不聞于魯、不聞葬得吉也、若敖絕嗣於荊、不聞葬得凶也、此葬有吉凶不可信四也、今法皆據五姓爲之、古之葬並在國都之北、趙氏之葬在九原、漢家山陵、或散處諸域、又何上利下利、大墓小墓爲哉、然劉之子孫、本支不絕、趙後與六國等王、此則葬用五姓不可信五也、且人有初賤而後貴、始泰而終否者、子文爲令尹、三仕三已、展禽三黜於士師、彼冢墓已定而不改、此名位不常何也、故知榮辱升降事、關諸人而不由於葬六也、世之人爲葬、巫所欺、忘擗踴荼毒、以期徼幸、由是相塋隴、希官爵、擇日時規財利、謂辰日不哭、欣然而受弔、謂同屬不得臨壙、吉服避送其親、詭斁禮俗、不可以法七也、

〔新刊地理五經圖解 一〕葬經中略○百年幻化、離形歸眞、精神入門、骨骸反根、吉炁感應、鬼福及人、東山吐焰、西山起雲、穴吉而溫、富貴綿延、其或反是、子孫孤貧、

此原葬法之蔭注也、蓋人生百年歸幻化、幻化之道、離其形體、歸乎本眞、魂升于天、魄降于地、此葬理之義所由起、而擇地以藏之者、其理爲不謬也、若葬得其法、而能乘乎地中之生炁、則亡者神魂得安、自然以一炁之故、感發乎生人、而生人必以昌盛應之矣、人以亡靈之炁、感而昌盛、則昌盛之福、非人之自福、鬼福之所及也、蓋父祖子孫、本一炁之相關者、故有如是之感應也、觀其東山吐焰、西山起雲、此感彼應、而人鬼之迹可知矣、故穴得其吉、而人棺爲之溫和、則子孫受蔭、而富貴爲之不替、其或反是、而穴不得吉、則主子孫孤而且貧矣、此自然之應也、

〔琅耶代醉編 十四〕宅兆

唐子西曰、古人建都邑、立室家、未有不擇地者、如書達觀新邑、營卜瀍澗之東西、詩升虛望楚、降觀于桑、度其隰原、觀其流泉、蓋自三代時已然矣、今凡通都會府、山水固皆翕聚、至於百家之邑、十室之市、亦必倚山帶溪、氣象回合、若風氣虧疎、山水飛走則必無人煙起聚、是誠不可不擇也、乃若葬者藏也、藏者欲人之不得見也、古人之所謂卜其宅兆者、乃孝子慈孫之心、謹重親之遺體、使他日不為城邑道路溝渠耳、借曰精擇、亦不過欲其山水回合、草木茂盛、使親之遺體得安耳、豈藉此以求福利乎、郭璞謂本體乘氣、遺體受蔭、夫銅山西崩、靈鐘東應、木花於山、栗牙於室、此皆生氣相感也、若死者豈能與生者相感以致禍福耶、世人惑其說、有十數年不葬親者、有既葬而掘之、至三至四者、有因地致訟、棺未入土、而家已蕭條者、有骨肉化為仇讐者、皆璞之書為之也、且人生貧富貴賤天壽謂之天命、不可改也、如璞之說、上帝之命、反制於一杯之土矣、楊誠齋嘗言、璞宜妙選吉地、以福其身、利其子孫、乃身不免刑戮、而子孫卒以衰微、則是其說已不驗於其身、而後世方且誦其遺書、而尊信之、不亦惑乎、今之術者言、墳墓若在鹿幘山、子孫必為侍從官、蓋以侍從重戴故也、然唐時席帽、乃舉子所戴、故有席帽何時得離身之句、本朝都大梁、地勢平曠、每風起則塵砂撲面、故侍從跨馬、許重戴以障塵、夫自有宇宙、則有此山、何賤於唐而貴於今耶、近時京丞相仲遠、豫章人也、掘起寒微、祖父皆火化無墳墓、每寒食則野祭而已、是豈因風水而貴哉、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿元年十月廿日丁未、相州〈〇北條時房〉武州〈〇北條泰時〉等令參會給、御所地事、重有御沙汰、可決卜筮之由云々、仍國道朝臣以下七人被召、陰陽師以法華堂下為初一、以若宮大路為第二、而兩所之間、可被用何地哉之由、可占申之旨、被仰含之處、國道朝臣申云、可被引移御所於他方之由、當道勸申畢、然於一二御占、若可付第一之趣有占文者、申狀既似有兩樣歟、難及一二之御占云云、珍譽法眼申云、法華堂前御地、不可然之處也、西方岳上、安右幕下御廟、其親墓高而居下、子孫無之由、見本文、幕〇下御子孫不御座、忽令符合歟、若宮大路者、四神相應勝地也、西大道南行、東有河、北有鶴岳、南湛海水、

可レ准二池沼一云云、依二此地可一レ被レ用之旨、治定畢、但東西之事被レ聞二食御占一、西方最可レ爲レ吉之由、面々申レ之、信賢一人、不レ同申之、東西共不吉也云云、

〔しりうごと〕祐天大僧正小山田與清を呵す

先年墓相の說を主張して、支那の陰陽五行家の書より抄錄して、門人どもに墓相小言を作らせ、また東脩已上の門人には、別に口訣をさづくるよし、口訣もさだめて闇墓書などの說を書きぬきにして、人に示すならんが、唐土の墓相家說に、しかく〳〵の相の墓は、子孫かならず公卿を出だし封侯を出だすなど、あれども、吾朝の人にそのまゝ示す事は、禁を犯すにちかしといふべし、それは太平二百餘年の今、公卿は公卿の分、封侯二千石は封侯二千石の分あることにて、おのが子孫をして、公卿封侯たらしめんとおもふは、士庶の分をしらざる亂賊の人なる故、たとへいかなる美相ありとも、大聲にはいはれぬことなり、その方も官途の事をしらざる者ならねば、かの口傳の卷物にも、さだめし明々地には書かざるならん、然れども住居より北の方の墓がよしなど、小言にいひしはいかなることぞ、わが本山などは、芝から品川あたりの者ならでは、北方にあたらず、されども格別南西の旦方のあしきといふ說を聞きたることもなし、これらはなはだ禁忌に拘はることとなるをしらずや、しかるにその方が說にまどはされて、改葬せしもの少からず、大きに難澀したるものもありしよし、これらはなはだ天下の害なり、當時寺院おほく、旦方おほきによりて、金一升の土地、墓相のよき樣に、好みだてをすることは、列侯貴人か、田舍ならでは出來ぬことにて、たとひその方が口訣を得ても、わづかに田樂石の一本も立つるばかりの庶人は、改葬せんにも地面はせまし、さりとて打すておく時に、家に不祥のことあるか、病人夭折、火災盜難あるときは、さればこそ墓相のよからぬ故なれと氣にかけて、彌々衰亡するもおほし、全體ちかごろは、堪輿家相の說はやりて、勝手のわるき所へ窓をあけたり、戸をふさぎたり、不勝手に

することをよしと心得るものおほく、つひには家作に氣をもむために、身上も不勝手となる者ことに多し、これらさへ歎息のかぎりなるを、又候その方がために、墓地にまでまごつきて、住持に難儀さするものまゝあるよし、わが末徒ども、迷惑することとなり、それほど墓相にくはしきその方、何しに子を先立つるやうの逆ありしぞ、もとより穢土に住する如夢幻泡影の身として、吾子の夭折することさへしらず、たゞ書面の墓相説をあげて、口傳など、のぶること、人はみな書をよまぬものにしたる自許の所爲、はなはだすまぬことなり、ことにこれは、太田錦城が世上の家相方位の説をなすもの、流行をうらやみ、種々の家相書を著述して、愚人をたぶらかしたる術計をぬすんで、利を射んと欲せるにて、その方すこぶる黄金家にてありながら、尙卑劣なる金まうけしたがる癖あるは、つひに死して有財餓鬼とならんことうたがひなし、

〔隨意錄〕近世有家相工者、相人之屋室戸牖、以言吉凶妖祥、世俗或惑乎其言、而改造牖戸、更作井竈者、亦不鮮也、不祥有五、東益不與焉、聖人之論如是矣、而俗人不知焉故也、昔日伊奈大夫、大信相工之言、而其第宅廐庫、悉改造之、後不一年、而患害起於蕭牆中、終亡數世家祿矣、又予所知之人、私有此惑、以變更其牖戸庖廚、工成之日、乃遭祝融之災、災後特受相工之數、而築作之法、專隨其指揮焉、落成未幾、又復罹災、盡爲灰塵矣、於是其人初寤焉、

〔隋書 三十四 經籍〕地形志八十卷、張學才撰○中略宅吉凶論三卷、相宅圖八卷、

〔龍背發秘 序〕錦城先生、經ヲ窮ルノ暇、カタハラ家相ノ術ニ通ジ、其書許多卷アリ、文政辛巳ノ年、先生京師ヨリ歸リ、病ノタメニ經ヲ廢ルノ暇、悉ク其書ヲ我ニ傳フ、一日余ニ告曰、夫東張南張ハ、色慾持前ナリ、北張巽張ニモ、色情ノ禍ヲ云、北欠西欠ニモ、色情破敗アリ、西張乾張ニハ、二金ノ間ニ離火ヲ生ジテ、二金ノ體ヲ燒キ亡スノ形アリ、離火ハ酒色ナリ、花麗ナリ、汰侈淫佚ノ本ナリ、酒色華美ノ奢侈ヲ以テ、金銀ヲ費耗スルハ、離火ノ二金ヲ燒キ亡スノ形ナリ、登リ龍ノ降リ龍ト變ズ

ルモ、必定此禍ニアリ、唐ノ玄宗ノ事ヲ見テモ知ルベシ、サレバ家相ニテ極上吉祥ノ瑞相ト言モノモ、色情花美ヲ嚴制セザレバ、其効驗ノナキノミニハ非ズシテ、瑞相ノ內ヨリ凶相ヲ發シテ、必ズ禍殃ヲ蒙ラザルハナシ、所謂諸吉相ト言モノ、色情花美ヲ帶ビザルハナク、又色情花美ニ破ラレザルハナシ先哲ノ巽張ノ條ニ、色情ノ氣立ツト言タルハ、一隅ヲ擧テ三隅ヲ反スルノ法ナリ、家相ヲ改正セントスルモノハ、先ヅ心相ヲ改正シテ、色情花美汰侈淫佚ヲ嚴制スルヲ始トス、家相ノ學ハ、君子脩身ノ要術ナリ、東張南張木生火ノ吉相ヲ知ルベシ、是ハ最上ノ吉相ナリ、サレドモ色情汰侈淫佚ヲ愼マザレバ、國家ヲ敗亡スルマデモナク、我性命ヲ失ナフベシ、木ハ火ヲ生ジテ其勢盛ナレドモ、幾程モナク薪盡テ火滅ス、木火共ニ灰ニナルノミ、腎虛火動シテ性命ヲ空シクスル、是レ此象ナリ、先哲三五續ノ條ニ、大凶眼前ニアリト云タルハ、一旦ノ發達升進榮華隆昌ノ福ヨリ、身家ノ敗亡ヲ生ズルヲ云、サレバ家相ノ吉祥ヲ得ントニハ、恭儉謙讓降挹退托ノ人ニシテ、周易ノ愼メバ無害也ノ一語ヲ挙々服膺セザレバ、其吉祥ヲ承當スル事不能モノナリ、故ニ東南巽乾ノ張モ、家作地面十分ノ一モ、張レルヲ吉相トス、大ニ張リ滿タルハ、災殃ヲ招クノ相ナリ、吉相方ニ張レルハ、少シク張レ、欠クハ少シク欠ケト言二語ハ、家相極傳ノ秘密藏ナリ、余嘗ヲ傾テ賛嘆ス、今ナヲ其言耳ニ在リ、家相ヲ改正セント欲ル者ハ、ヨク此意ヲ解了スベシ、今茲丙戌ノ春、書肆玉巖堂、予ニ師說ヲ錄センヿヲ請フ、因テ疊數判斷一部ヲ著ス、此書也、其源流ハ天地ノ秘ヲ洩テ、羲文ヨツテ以テ卦ヲ畫シ、禹箕因テモツテ演疇スルヲ本トス、其理ハ至精、其用ハ至博ナリ、區々タル理數ノ書ニ異ナルガ故ニ、龍背發秘ト號シ、其請ニ應ジ、亦先生ノ妙說ヲ書テ、以テ此書ノ序トナス、

文政九丙戌九月晴湖荒井繇行堯民識

〔淇園文集 三〕家相全書序

大坂長岡生、善相宅之術、自言、其源出自魏石申、嘗自著其術之所由、以爲一書、名曰家相全書、癸亥冬、特來京請瑞、而乞序其書、余本不喜諸相術、況序其書乎、然生請甚殷、因姑書余所嘗論焉、蓋凡物有形則有數、有數有常、故有相之之術出焉、是以人物牛馬豕羊家宅器用、自古皆有言相之之道、而相有吉凶、乃又有言祈禳轉易之術者興焉、雖然五行家之所可、堪輿家不可、建除家不吉、叢辰家大凶、曆家小凶、天人家小吉、太一家大吉、漢武以爲人取於五行者也、以五行爲主、則所謂吉凶亦因家異說、本無有可定耳、雖然物已有形有數、則槪之曰無吉凶則不可、然則吉凶孰由、蓋天地之道據、故則定、而民者信乎其故者也、有疑則不可以定物、唯信可以決其疑、則凡相之術、要之唯有本乎故者爲近是矣、長岡生之果原自魏石申、則是亦其術本乎故者也、其或足信乎、

〔閑の暇上〕家相の事は、俗本の占ひ書に、八卦蓬莱抄といふものに始て述たり、是を種として文盲なる者ども、様々妄說を僞作して、衆俗を誑らかし惑はす事也、家相はむつかしき事なし、住居勝手好、氣のぬけ過ぬ様に、又闇く陰の過ぬやうに造りて足ることなり、今家相者といふものに溺化誘る、事なかれ、家相を信じ、家を建直して後、間もなく賣家に出したる人も多し、

〔塵添壒囊抄十〕凶宅事

居所ニ惡所ト云事アルハ實證ナキニ非ズ、サルコト一無ト云說如何、　惡所ト名ルニ二ノ別アリ、一ニハ鬼神等其ノ家ニ住シテ、人ヲ損シ種々ノ形ヲ現ズルニ依テ是ヲスツ、善相公ノ鬼殿ニ行テ異形ノ者共ヲ見ケルガ如シ、是ハ實證目ニ顯ル、上ハ勿論也、二ニハサルコトハ無シテ、住スル人、物惡ク衰ヘヤミナドスルヲ打續スレバ、是ヲ家ノタヽリト思テ、惡所ト名テ人不居、是ニ不實ノ疑有ルベキ也、樂天ノ詩ニ作リテヲロカナル事ニノ玉ヘル、此篇ニ付テ僻心得ノ有ル故也、居ル主ノ打續キ其身ニ災アリ、物惡カルベキ運ノアラムハ、全ク家ノ所爲、所ノ咎ニハ非ザルヲ押付テ、推シテ思ナシニ是ヲ居所ノトガト云ナシテ、人運ノ衰ヘ物ノ惡アルベキ故ノ自然ニ相

劍相

積スル道理ヲバ、思入レヌ事ヲ愚也トハ云也、彼ノ凶宅ノ詩ニハ、人疑不敢買、日毀土木功、嗟々俗人心、甚矣其愚蒙、但懼災將至、不思禍所從、我今題此詩、欲寤迷者胸、云ヘリ、綜ノ詞ニハ、寄言家與國人、凶非宅凶、ト仰ラレタリ、江相公對策ニモ、安無吉凶トコソ書タレ、同ジ心ニヤ、

〔尙書 召誥 十五〕惟二月既望越六日乙未、王朝步自周、則至于豐、惟太保先周公相宅、越若來三月、惟丙午朏、越三日戊申、太保朝至于洛、卜宅、厥既得卜則經營、

〔通俗編 藝術 二十一〕八宅　論衡詰術篇引圖宅術曰、宅有八術、以六甲之名數而第之、第定名立、宮商殊別、宅有五音、姓有五聲、宅不宜其姓、姓與宅相賊、則犯罪遇禍、按、今相陽宅所云八宅、卽八術也、其衆五聲五姓之說、久置不談、

〔閑窻自語 四〕劍相家相事

ちかき比、劍相といふこと、世にはやり、人のもたる刀をみて、貴賤貧富吉凶などの事をいふ、またそのうち家相とて、家のつくりかたをみて、同じく吉凶をのぶ、大かたにいひあつることもあれども、さのみたしかならず、ふるき書に劍を相すとあるは、劍の利鈍をみることなり、いまより劍のめきゝすといふにあたれり、家相のことは、異國にて三才圖會、本朝にては吉日考秘傳などに、敷地のかたちにつき吉凶あり、あるは山にむかひ、水により、淵にのぞむのたぐひ、いはれあり、いまいふ家相にはことかはれり、いかゞや、又馬うしを相することは、ふるく沙汰あるやうなり、

〔梅園雜話 坤〕醫官某劍相幷七ツ目の支象を難ず

いつの頃にや、相劍の法行はれ、諸侯大夫も、その相者を近けて、帶劍の吉凶を相せしめ給ひ、列士庶人に至るまで、緣を需て腰刀の禍福を試むるに、善惡悔吝、憂喜進退を告る事、略驗あるもの少からざれば、武家の要道と、日每に其門に群をなすに及べり、

〔闇の曙 上〕近年劍相とて、刀の燒刃を見て、是は吉劍、是は凶劍と名付て、俗人をまどはす奸巧妄曲

の徒所々に多し、其劍相をいふは、後天の八卦を鋼より順にわり付け、八卦の當る所、疵にても地あれにてもあれば、凶といひ、無疵なれば吉とす、譬ば、坎の所に疵あれば住所の障り、震の所に疵有ば宗領に祟る、兌は妻の不緣といふ也、扨此輩、もとより刀の目利しるにもあらず、右のごときもの故、まなひ疵などは夢にもしらず、只燒出しよく、地あれもなければ、大切有て、一向益にたゝぬ刀にても、右の吉劍の合紋さへ宜しければ、拳立て高直に賣付る惡徒有、尤道具屋と相組て賣付るとなん、

〔閑窻自語 四〕兵部卿邦頼親王相劍事

兵部卿邦頼親王〈伏見宮〉は、ことに劍をこのまれ、よく利鈍および銘の眞僞をわかち、無名の劍のうちてを探せらる、又いまの世にはやる劍相をもならひ得てのべらるとぞ、廣橋前大納言伊光卿も、ちか比兩方ともこのみて見らるゝ、よし、吉凶なども、あたるよしきゝ侍りし、

〔二中歷 十三 能歷〕夢解

世見　世下成　院嚴　德々　横頸

〔倭訓栞 前編 三十 由〕ゆめあはせ　日本紀に相夢をよめり、漢に原夢又圖夢と見えたり、山谷詩に茶夢小僧圓と是也、異名伊勢物語に合すと書り、拾遺集に、夢よりぞ戀しき人を見そめつる今はあはする人もあらなん、

〔嬉遊笑覽 八 方伎〕夢合、周禮に占夢の官ありて、六夢の吉凶を占ふ、〈六夢は、一に正夢、二に噩夢、三に思夢、四に寤夢、五に喜夢、六に懼夢なり、〉王逵が蠡海に、夢者非自外致也、日之所爲也、日之所爲有善惡、夜之所夢有吉凶云々、然則夢者所以驗吾善惡之進退者乎、こゝにも日本紀には、ゆめあはせを相夢とあり、夢解といふもの有て吉凶を占へり、源氏〈若紫〉夢見給ひて、いとよくあはする物めして合せ給ひける、枕草子、うれしき物、夢をみておそろしとむねつぶるゝに、ことにもあらずあはせなどしたる、古事談、伴善男の條に、汝

高相の夢みてけり、然れどもよしなき人に語りてけり、(わろく合すれば吉夢もよからずといひならへりとみゆ、)江談に兼家公いまだ納言たりし時、夢に逢坂の關路に雪のふりたる處をみて云々、夢解を召て合せらるゝ、(小注に)此夢解盲人也、名は月となり、取かへばや、吉野の宮をいふ處、世の人の去とすることかたかたのさゑ、おんみやう、天文、いめときさう人などいふことまで、道きはめたるさゑどもなり、

〔松屋筆記 五十一〕占夢

占夢は、いにしへ夢解といひ、近來夢判といへり、占夢の事、夢經万寶全書など、諸書おほかれど、明人陣士元が夢占逸旨八卷、藝海珠塵子部、五行家類の中に收て、大成の書なり、

〔隋書 經籍志三十四〕占夢書三卷、(京房撰)占夢書一卷、(崔元撰)竭伽仙人占夢書一卷、占夢書一卷、(周宣撰)新撰占夢書十七卷、(幷目錄○中略)雜占夢書一卷、(梁有師曠占五卷、東方朔占七卷、)

〔陔餘叢考 三十四〕圓夢

黃帝夢大風而得風后、夢人執弩驅羊而得力牧、此夢兆之徵於人事者、其後遂有占夢之術、周禮大卜、掌三夢之法、一曰致夢、二曰觭夢、三曰咸陟、鄭氏以爲致夢夏后氏所作、觭夢商人所作、咸陟者言夢之皆得、周人作焉、而占夢專爲一官、以日月星辰占六夢之吉凶、曰正、曰靈、曰思、曰寤、曰喜、曰懼、季冬聘王夢、獻吉夢於王、王拜而受之、乃舍萌(釋菜)於四方、以贈惡夢、毛詩亦有訊之占夢之語、左傳城濮之戰、晉侯夢與楚子搏、楚子伏己而盬其腦、子犯曰、吉、我得天、楚伏其罪、我且柔之矣、鄢陵之戰、呂錡夢射月中之、退入於泥、占之曰、姬姓日也、異姓月也、必楚王也、射而中之、退入於泥、亦必死矣、果射楚共王中目、錡亦爲養由基射死、此占夢之最驗者也、漢藝文志、七略雜占十八家、以黃帝長柳占夢十一卷、甘德長柳占夢二十卷爲首、其說曰、雜占者、記百家之象、候善惡之徵、衆占非一、而占夢爲大、可見古人以夢爲重、後漢書梁王暢傳、王數有惡夢、從官十忌、善占夢、王數使卜筮、是東漢時、尚有占夢之人、乃後世無復以此爲業者、郎瑛謂自樂廣因想之說興、而夢之理明矣、其理明則不必占也、○中略

略又有梅溪子者、姓宇文氏、精于太乙數、且善圓夢、以術授樂平人汪經、近世圓夢之術、蓋本諸此、

〔通俗編〕二十一藝術圓夢　洁然齋視聽鈔、圓夢出南唐近事、瀏價舉進士時、有徐文幼、能圓其夢、按占夢事最古、漢藝文士有黃帝長柳占夢十一卷、周禮司寤掌王六夢、蓋其大略也、其謂之圓夢、亦非始于南唐、李德裕獻明皇十七事云、或毀黃幡綽在賊中、與大逆圓夢、皆順其情、而忘陛下積年之恩寵、已見此圓字矣、

〔日本書紀〕崇神五年四十八年正月戊子、天皇勅豐城命、活目尊曰、汝等二子、慈愛共齊、不知曷爲嗣、各宜夢、朕以夢占之、二皇子於是被命、淨沐而祈寐、各得夢也、會明兄豐城命、以夢辭奏于天皇曰、自登御諸山、向東而八廻弄槍、八廻撃刀、弟活目尊、以夢辭奏言、自登御諸山之嶺、繩絙四方、逐食粟雀、則天皇相夢、謂二子曰、兄則一片向東、當治東國、弟是悉臨四方、宜繼朕位、

〔伊勢物語〕下むかし、世心つける女、いかで心なさけあらん男に、あひみてしがなと思へど、いひ出んもたよりなきに、誠ならぬ夢がたりをす、子三人をよびて、かたりけり、ふたりの子は、なさけなくいらへてやみぬ、さぶらうなりける子なん、よき御男ぞいでこんとあはするに、此女けしきいとよし、こと人はいとなさけなし、いかでこの在五中將にあはせてしがなと思ふ心有、かりしありけるに、いきあひて、道にて馬の口を取て、かう〳〵なん思ふといひければ、哀がりて、きてねにけり、

〔江談抄〕一公事大入道殿夢想事

大入道殿兼家爲納言之時、夢ニ通ニ合坂關、雪降關路悉白ト令見給天、大令驚天、雪ハ凶夢也ト思天、召夢解欲令謝タ、令語給ニ、夢解申云、此御夢想極吉夢也、僞以不可有恐、其故ハ、人必可令進斑牛、卽人令進斑牛、夢解預纏頭也、大江匡衡令參、此由有御物語、匡衡大驚タ、纏頭可召返、合坂關者、關白之關字也、雪者白字也、必可令到關白、大令感給、其明年正曆元年令蒙關白宣旨給也、

〔江談抄 雜事 三〕伴大納言本緣事

被談云、伴大納言者、先祖被知乎、答云、伴氏文大略見候哉、被談云、氏文ニハ違事ヲ傳聞侍也、伴大納言者、本佐渡國百姓也、彼國郡司ニ從テゾ侍ケル、其後國ニテ、善男夢ニ見樣、西大寺ト東大寺トニ跨テ立タリト見テ、妻女ニ語此由、妻云、ミル所ノ夢ハ、跨ヲサカレヌト合ル、善男驚テ無由事ヲ語リヌト恐思テ、主ノ郡司ノ宅ニ行向フニ、件ノ郡司、極タル相人ニテゾアリケルガ、年來ハサナキニ、俄ニ夢ノ後朝行タルニ、取圓座テ出向テ、事ノ外ニ饗應シテ、召昇セケレバ、善男成怪テ、又恐樣、我ヲ賺シテ後、此女ノ云ツルヤウニ、無由事ニ付、跨サカムズルニヤト、思程ニ、郡司談云、汝ハ高名ノ夢想見テケリ、然ヲ無由人ニ語ケレバ、必大位ニ至ルトモ、定其徵故ニ、不慮ノ外事出來テ、坐スル事歟ト云ケリ、然間善男付緣テ、京上シテアリケル程ニ、七年ト云ニ、大納言ニ至ケル程ニ、彼夢合タル徵ニテ、配流伊豆國云々、此事祖父所被傳語也、又其後實、廣俊、父ノ俊貞モ、彼國ノ住人語ヒシナリトテ、語リキト云々、

〔台記〕天養元年七月九日戊午、去七日寅剋夢、吉凶問占夢者、下女人也、俗呼鳴夢說、曰大吉也、

〔今昔物語 二十四〕天文博士弓削是雄占夢語第十四

今昔□□ト云フ者有ケリ、穀藏院ノ使トシテ、其封戶ヲ徵ラムガ故ニ東國ノ方ニ行テ、日來ヲ經テ返上ル間、近江國ノ勢多ノ驛ニ宿ス、其時ニ其國ノ司□□ト云フ人、館ニ有テ、陰陽師天文博士弓削是雄ト云フ者ヲ請ジ下シテ、大屬星ヲ令敬ムト爲ル間、是雄彼ノ□□ト同宿シヌ、是雄□□ニ問テ云ク、汝何レノ所ヨリ來ルゾト、□□答テ云ク、我レ穀藏院ノ封戶ヲ徵ラムガ爲ニ、東國ニ下テ今返上レル也ト、如此互ニ談ズル間、夜ニ臨テ皆寢入ヌ、而ルニ忽ニ惡相ヲ見テ、覺テ後□□是雄ニ云ク、我レ今夜惡相ヲ見ツ、而ルニ我レ幸ニ君ト同宿セリ、此夢ノ吉凶ヲ占ヒ可給シト、是雄占テ云ク、汝ヂ明日家ニ返ル事无カレ、汝ヲ害セムト爲ル者、汝ガ家ニ有リト、□□ガ云ク、我レ

日來東國ニ在テ、疾ク家ニ返ラム事ヲ願フニ、今此ニ來テ、又此ニテ徒ニ亦數日ヲ可過キニ非ズ、又數ノ公物私物其員アリ、何カ此ニ留ラムヤ、但シ何ニシテカ彼ノ難ヲバ可遁キト、是雄ガ云ク、汝ヂ尙强ニ明日家ニ返ラムト思ハヾ、汝ヲ殺害セムト爲ル者ハ、家ノ丑寅ノ角ナル所ニ隱レ居タル也、然レバ汝ヂ先ヅ家ニ行キ着テ、物共ヲバ皆取置セテ後、汝ヂ一人弓ニ箭ヲ番テ、丑寅ノ角ニ然樣ノ者ノ隱居ヌベカラム所ニ向テ、弓ヲ引テ押宛テ云ハム樣ハ、己レ我ガ東國ヨリ返上ルヲ待テ、今日我ヲ殺害セムト爲ル事ヲ兼テ知レリ、早ク罷リ出ヨ、不出バ遠ニ射殺シテムト云ヘ、然ラバ法術ヲ以テ不顯ト云フトモ、自然ラ事顯レナムト敎ヘツ、□□其敎ヘヲ得テ、明ル日京ニ急返ヌ、家ニ行着タレバ、家ノ人御坐タリト云テ、騒ギ喤ル事无限リ、□□一人ハ不入シテ、物共ヲバ皆取置セテ、□□ハ弓ニ箭ヲ番テ、丑寅ノ角ノ方ヲ廻テ見ルニ、一間ナル所ニ薦ヲ懸タリ、此ナメリト思テ、弓ヲ引テ矢ヲ差宛テ云ク、己レ我ガ上ルヲ待テ、今日我ヲ殺害セムトス、其由ヲ兼テ知タリ、早ク罷出ヨ、不出バ射殺シテムト云フ、其時ニ薦ノ中ヨリ法師一人出タリ、即從者ヲ呼テ、此ヲ搦テ問ニ、法師暫クハ此彼云テ、不□□强ニ問ケレバ、遂ニ落テ云ク、隱シ可申キ事ニモ非ズ、己ガ主ノ御房ノ、年來此殿ノ上ニ棲奉リ給ツルニ、今日上給フ由ヲ聞キ給テ、其ヲ待テ必ズ殺シ奉レト、此殿ノ上ノ被仰ツレバ、隱レテ候ツルニ、兼テ知ラセ給ヒニケレバト□□此ヲ聞キテ、我宿報賢タシテ、彼是雄ト同宿シテ、命ヲ存スル事ヲ喜ブ、亦是雄ガ此ク占ヘハ實ナル事ヲ感ジテ、先ヅ是雄ガ方ニ向テ拜シケリ、其後法師ヲバ檢非違使ニ取セテケリ、妻ヲバ永ク不棲成ニケリ、此ヲ思フニ、年來ノ妻也ト云ドモ、心ハ不可緩、女ノ心ハ此ル者モ有ル也、亦是雄ガ占不可思議也、昔ハ此ク新タナル陰陽師ノ有ケル也トナム、語リ傳ヘタルトヤ、

〔宇治拾遺物語十三〕むかし、備中國に郡司ありけり、それが子に、ひきのまき人といふ有けり、わかき男にてありけるとき、夢をみたりければ、あはせさせんとて、夢。とき。の。女のもとに行て、夢あは

せてのち、物語してゐたるほどに、人々あまたこゑしてくなり、國守の御子の太郎君のおはするなりけり、年は十七八ばかりの男にておはしけり、心ばへはしらず、かたちはきよげなり、人四五人ばかりぐしたり、これや夢ときの女のもとゝとへば、御ともの侍、これにて候といひてくれば、まき人は、上の方の内に入て、部屋のあるに入て、あなよりのぞきみれば、この君入行て夢をしかしか見つるなり、いかなるぞとてかたりきかす、女きゝて、よにいみじき夢なり、かならず大臣までなりあがり給べきなり、返々めでたく御覽じて候、あなかしこ〳〵、人にかたり給なと申ければ、この君うれしげにて、衣をぬぎて、女にとらせてかへりぬ、そのをり、まき人、部屋より出て、女にいふやう、夢はとるといふ事のあるなり、この君の御夢、われらにとらせたまへ、國守は四年過ぬれば、かへりのぼりぬ、われはくに人なれば、いつもながらへてあらんずるうへに、郡司の子にてあれば、我をこそ大事に思はめといへば、女のたまはんまゝに侍べし、さらばおはしつる君のごとくにして、入給て、そのかたられつる夢を、つゆもたがはずかたりたまへといへば、まき人よろこびて、かの君のありつるやうにいりきて、夢がたりをしたれば、女おなじやうにいふ、まき人いとうれしく思て、衣をぬぎてとらせてさりぬ、そのゝち文をならひよみたれば、たゞとほりにとほりて、才ある人になりぬ、大やけきこしめして、心みらるゝに、まことに才ふかくありければ、もろこしへ物よく〳〵ならへとてつかはして、久しくもろこしにありて、さま〳〵の事どもならひつたへて歸りたりければ、御門かしこきものにおぼしめして、次第になしあげ給て、大臣までになされにけり、されば夢とることは、げにかしこき事なり、かの夢とられたりし備中守の子は、司もなきものにてやみにけり、夢をとられざらましかば、大臣までも成なまし、されば夢を人にきかすまじきなりと、いひつたへけり、

〔曾我物語 二〕ときまさがむすめの事

またかのときまさにむすめ三人あり、ひとりはせんばらにて二十一なり、二三はたうばらにて十九十七にぞなりにける、なかにもせんばら二十一は、びじんのきこえあり、ことにちゝふびんに思ひければ、いもうと二人よりは、すぐれてぞおもひける、さる程に、そのころ十九のきみ、ふしぎのゆめをぞ見たりける、たとへばいづくともなくたかきみねに上り、月日をさうのたもとにおさめ、たち花の三つなりたるえだをかざすと見ておもひけるは、おのこゝの身なりとも、みづからが月日をとらん事あるまじ、ましてや女の身として、思ひもよらず、まことにふしぎのゆめなり、あねごはしらせ給ふべし、とひたてまつらんとぞ、いそぎあさ日ごぜんのかたにうつり、こまごまとかたりたまふ、

たちばなの事

さてもこの二十一のきみ、女しやうながら、さいかく人にすぐれしかば、○中略このゆめをいひおどして、かいとらばやとおもひければ、このゆめかへすがへすおそろしきゆめなり、よきゆめをみては、三とせは、かたらずし、あしきゆめをみては、七日のうちにかたりぬれば、おほきなるつゝしみあり、いかゞすべきとぞおとしける、十九の君は、いつはりとは思ひもよらで、さてはいかゞせん、よきにはからひてたびてんやと、大きにおそれけり、されぱかやうにあしきゆめをば、てんじかへて、なんをのがるゝとこそ、きゝてさふらへ、てんするとは、なにとする事ぞや、みづからこゝろへがたしはからひたまへとありければ、さらばうりかふといへば、のがるゝなり、うり給へといふ、かうもの、ありてこそうられ候へ、めにもみえず、手にもとられぬゆめのあと、うつゝにたれかかうべしと思ひわづらふいろみえぬ、さらばこのゆめをば、わらはかひとりて、御身のなんをのぞきたてまつらんといふ、みづからがもとよりぬしあしくともうらみなし、御ためあしくば、いかゞといひければ、さればこそうりかふといへば、てんするにて、ぬしも、みづからも、くる

字占

しかるまじと、まことしやかにこしらへければ、さらばとよろこびて、うりわたしける、そのゝちに、くやしくはおぼえけろ、このことばにつきて二十一のきみ、なにゝてか、かひたてまつらん、もとよりしよまうのものなればとて、ほうでうのいへにつたはる、からのかゞみをとりいだし、からあやのこそで一かさねそへわたされけり、十九のきみ、なのめならずによろこびて、わがかたにかへり、日ごろのしよまうかなひぬ、此かゞみのぬしになりぬと、よろこびけるぞおろかなる、

〔鹽尻二十五〕異邦、拆字を以て吉凶を說を相字と云、瑞桂堂暇錄、及び高文虎蓼花洲間錄等の小說に見えたり、我國、今花押を相して吉凶を云は、もと相字より起れり、貫按、是今世墨色考といふものなり、

〔隨意錄四〕聞、我方京師、昔有字占翁者、使人隨意書一字、相之以善占其吉凶禍福、予〇篆田虎伯兄兵馬、嘗善其字占、屢能善中其人事、頃讀宋高文虎蓼花洲間錄云、謝石成都人、宣和間至京師、以相字言人禍福、求相者隨意書一字、卽就其字、離拆而言、無不奇中者、名聞九重、上皇因書一朝字、令中貴人持往試之、石見字、卽端視中貴人曰、此非觀察所書也、然謝石賤術、今日遭遇、卽因此字、黠配遠行、亦此字也、但未敢遽言之耳、中貴人愕然、且謂之曰、但有所據、盡言無懼也、石以手加額曰、朝字離之、爲十月十日字、非此月此日所生之天人、當誰書也、一座盡驚、中貴馳奏、翌日召至後苑、令左右及宮嬪書字示之、皆據字論說禍福、俱有精理云々、

〔闇の曙上〕字畫の占といふは、百家名書といふ書の中に、謝氏が相字法と云書有、其占ひ樣は、占を乞來る人に、何といふ字にても、向ふの人のおもひ出の字をかゝせ、其字の偏傍又は踏冠を或は增或は減じ、種々活を用て、それ〳〵に判斷するなり、占ひし例は、書に詳に見へたり、

按ずるに、此事も、ふるく我朝に傳へ翫びしにや、雜々拾遺などにも見へたる雜占なり、

〔難波江七下〕墨色拆字 測字 破字 相字 相印 相手板 相笏

相字破字の疑は、もと陰陽五行家のいひいでたることにて、西土より傳播したることは、いふも

さらなり、明崔紫虛の相字心經（百家名書、格致叢書などにも入、）胡文煥の錢塘副墨など、そのすぢをかけるものなり、欽定四庫全書總目に、神機相字法（術數存目）一卷あり、撰人未詳といへり、舶來有りやいまだしらず、錢遵王讀書敏求記卷三、相法の條に、相字心易一卷をのせたり、是も撰者しれず、錢大昕が恒言錄卷六に、拆字、隋書經籍志、有破字要訣一卷、顏氏家訓書證篇云、拭卜破字經、及鮑照謎字、皆取會流俗、蓋呂忌云、破字卽今之拆字也、と有るにて、拆字破字おなじことなるをさとるべし、又程省以三（時代未詳）の測字秘牒といふものあり、此書破字卜法を詳にしるす、（談薈四種ノ一ナリ、淸道光甲申程芝雲ノ序アリ、コノ人ノ同宗カ、猶ヨク考フベシ、）隋志（五行）相手板經六卷、（梁ノ相手板經、受版圖、韋氏ノ相板印法指略鈔、魏征東將軍程申伯ノ相印法各一卷、亡、）とみえ、魏志卷九注に、魏氏春秋を載せて、允善相印、將拜、以印不善、使更刻之、如此者三、允曰、印雖始成、而已被辱、問送印者、果懷之而墜於廁、相印書曰、相印法、本出陳長文、以語韋仲將、印工楊利從仲將受法、以語許士宗、利、以法術占吉凶、十中八九、仲將問長文從誰得法、長文曰本出漢世、有相印相笏經、云々、とあるなどをみれば、漢の比よりはやくいひいでたることゝおもはる、

雜々拾遺卷一（此書、元祿八乙亥刊本、六卷也、其後古今拾遺著聞集と題號を改め、弘化三年再版行、定自序あり、）

（安倍有宗入うらなひ、付明の大宗の事、）安倍晴明十五代の後胤從三位有宗入道は、天文博士にて、兼好が友人なり、ことに判形を見て吉凶をいふに、ひとつもあやまらず、人みな歸依しけり、もろこしにも此ためしあり、異國の書には、字を分つ者とあり、みな判うらなひの事也、明朝の大祖いまだ只人の時、行末の安否きかまほしくて、字をわかつ人の方へゆき、案内して庭に立ながら、しかじかの事をたづねらるゝに、あるじ立出て、何にても文字をかきてみせ給へといふ、大祖持たる杖にて土上に一文をかき給ふ、あるじおどろきて、さてもめでたき御事なりと拜伏す、とてものついでに今一字をみ侍らむといふ、大祖何ごゝろなく、又間の字を書きてみせらる、いよいようたがふ所なく天子の御器量あり、土のうへに一文字を加ふれば、王の字なり、後の間の字をわ

かつ時は、左につけても、右に付ても、君の字なり、たのもしくおぼしめさるべし云々、大明の史傳に書きのせたり、

〔谷響續集一〕拆字說吉凶

客曰、中華拆字說吉凶、其說如何、答紹興中、張九萬以拆字說吉凶、秦檜一日獨坐書閣、召九萬至、以扇柄就地畫一字、問曰如何、九萬賀曰、相公當加官爵、檜曰、我位爲丞相、爵爲國公、復何所加、九萬曰、土上一畫非王而何、當享眞王之貴、其後竟封郡王、又封申王、〈瑞桂堂暇錄〉

〔通俗編二十一藝術〕拆字　二老堂雜志、謝石善拆字、徽宗特補承信郎、按通志藝文略、有相字書、卽拆字也、其術不始于謝、而謝名爲最著、

〔本朝文粹一〕字訓詩〈天暦九年秋〉　淸原眞友

禾失曾知秩、中心豈忘忠、里魚穿浪鯉、江鳥度秋鴻、火盡仍爲燼、山高自作嵩、色絲辭不絕、凡虫泣寒風、

字訓詩　源順

周禾致瑞穐、人壽與仙僊、加馬馳高駕、求衣擁善裘、夏香蓮綻馥、秋木葉落楸、官舍飽門館、三刀夢九州、

〔古事談一王道后宮〕上東門院〈○藤原彰子〉被生後一條院御産之時、事外有煩ケレバ、入道殿〈○藤原道長〉サワガセ給テ、自御所令走出給テ、御産事外令澁給、コハイカヾスベキ、御誦經ナドカサネテ可行ヤト被仰之間、御言未了ニ、有國申云、御産ハ已成候ヌル也、不可及重御誦經ト申程ニ、女房走參テ、御産已成候ヌト申ケリ、事落居之後、有國ヲ召テ、イカニシテ御産成ヌトハ知ツルゾト御尋アリケレバ、御障子ヲ引アケテ出給ツレバ、障子ハ子ヲ障ト書テ候ニ、廣アキ候ヌレハ、御産成ヌト存候ツル也ト申ケリ、

〔江談抄二雜事〕上東門院御帳門犬出來事
上東門院爲二一條院女御一之時、帳中ニ犬子不慮之外ニ入天有遣見付給、大ニ奇恐被レ申二入道殿一道長入
道殿召匡衡テ密々令レ語二此事一給ニ、匡衡申云、極御慶賀也土申仁、入道殿何故哉土被レ仰仁、匡衡申云、
皇子可レ令二出來一給之徵也、犬ノ字ハ是點ヲ大ノ字ノ下ニ付バ太ノ字也、上ニ付レバ天ノ字也、以レ之
謂レ之、皇子可二出來一給、サテ立二太子一、次ニ至二天子一給歟、入道殿大令二感悅一給之間、有二御懷姙一、令レ奉レ産二後朱雀
院天皇一也、此事秘事也、退席之後、匡衡私令勘二作字一天令レ傳レ家云々、

〔小右記〕寛弘九年長和元年五月十一日戊寅、乘レ月式部大輔匡衡來、談二雜事一、次云、一日應レ召早參、行二立后
事幷除目事一、極所二感思一、所レ賞太多、不レ可二敢記一、其次語二除書間蜈蚣事一、會二釋蜈蚣一云、吳字者天敬口、公字者
三公也、出レ自二天口一可レ爲二三公一歟、吳者期、十二月可レ無レ疑、彼日甲子物始、被レ行二除目一、可レ謂二事始一也、亦初行二皇
后宮除目一、皇者御門也、后者きさき、帝后相兼、除目有レ事、相二示大夫一、名二名隆家一、訓讀云、伊部乎佐加也加
寸、尤有レ興事也、又云、周公幷吳公也、彼家周公也、予家吳公也、左右思慮、幷二三公一可レ有二近者一、識者言爲二後
鑒一、聊所二記置一、件匡衡月來不レ食有レ惱、而臨レ夜所レ來也者、

〔太平記三〕主上御夢事附楠事
元弘元年八月廿七日、主上後醍醐○笠置へ臨幸成テ、本堂ヲ皇居トナサル、○中略少シ御マドロミ有ケ
ル御夢ニ、所ハ紫宸殿ノ庭前ト覺タル地ニ大ナル常盤木アリ、緑ノ陰茂テ南へ指タル枝殊ニ榮
へ蔓レリ、其下ニ三公百官位ニ依テ列座ス、南へ向タル上座ニ、御座ノ疊ヲ高ク敷、未ダ座シタル
人ハナシ、主上御夢心地ニ、誰ヲ設ケン爲ノ座席ヤラント、怪シク思食テ立セ給タル處ニ、童結タ
ル童子二人忽然トシテ來テ、主上ノ御前ニ跪キ、涙ヲ袖ニ掛テ、一天下ノ間ニ、暫モ御身ヲ可レ被レ隱
所ナシ、但アノ樹ノ陰ニ南へ向ヘル座席アリ、是御爲ニ設タル玉扆ニテ候へバ、暫ク此ニ御座候
ヘト申テ、童子ハ遙ノ天ニ上リ去ヌト御覽ジテ、御夢ハヤガテ覺ニケリ、主上是ハ天ノ朕ニ告玉

ヘル所ノ夢也ト思食テ、文字ニ付テ御料簡アルニ、木ニ南ト書タルハ楠ト云字也、其陰ニ南ニ向テ坐セヨト、二人ノ童子ノ敎ツルハ、朕再ビ南面ノ德ヲ治テ、天下ノ士ヲ朝セシメンズル處ヲ、日光月光ノ被示ケルヨト、自ラ御夢ヲ被合テ、憑敷コソ被思食ケレ、夜明ケレバ當寺ノ衆徒成就房律師ヲ被召、若此邊ニ楠ト被云武士ヤ有ト御尋有ケレバ、近キ傍ニ左樣ノ名字付タル者アリトモ未承及候、河内國金剛山ノ西ニコソ、楠多門兵衞正成トテ、弓矢取テ名ヲ得タル者ハ候ナレ、○中略稚名ヲ多門トハ申候也トゾ答申ケル、主上サテハ今夜ノ夢ノ告是也ト思食テ、頓テ是ヲ召セト被仰下ケレバ、藤房卿勅ヲ奉テ、急ギ楠正成ヲゾ被召ケル、

〔逸史　一〕天文二年○中略公○德川家康父親氏嘗夢有文、在其掌、曰是、旦而咨衆、無能解者、浮屠横外、以拆字占之曰、是字爲日下人、日下一人而握之、大柄在手也、吉莫大焉、然握而未啓、不在其身、或在後胤也、公大悦、爲創龍海禪寺、

墨色

〔闇の曙　上〕墨色、是も雜占なり、聖賢の法はなし、只墨の清み濁る所を以て、それに因て吉凶をいふ、一文字をかゝせて見るも有、或は圓をかゝせて吉凶を述る也、其法八卦を割付て、それに因て斷るなり、又圓にても、一にても、筆の始あしければ、病氣なれば首の病ひといひ、筆の止りあしければ、痔の病ひ有といふ、童蒙の取扱ふ重寶記などにも、墨色の事有、學者の取あぐる事にもあらず、花押の墨色も、大概同樣の事也、

判占

〔甲陽軍鑑　品第二八〕判兵庫星占之事附長坂長閑無面目仕合之事

永祿十二年己巳の歲より、翌年午七月まで、天に煙の出る星出たり、信玄公三十一歲の御時より召置るゝ江州石山寺の博士、むかしの晴明が流れにて易者也、中にも判を能占に依て、判の兵庫と號す、占をも正法に仕、内典ともにたづさはり、邪氣聊もなければ、信州水内郡においひて百貫の知行、永代宛行るゝ朱印、彼兵庫に被成下、

〔幸庵夜話〕一予判を占ひ、名乘字の善惡を考、其外家の住居々々の恰合により吉凶、大戸口の建樣等、品々土御門兵部少輔家來に、花形六左衞門と申候てあり、昔予近付に成申候比、六十歳計に相みへ申候、此六左衞門、右陰陽道に妙を得たるものにて候、若輩より勤仕して、よく習得たり、此六左衞門に傳授いたし候、然ども終に考ふる事もなく打過候、先年於護國寺、住持の判をすへ爲見被申候處に、追付位進可被申候、但し先を折判形に候間、末は宜かる間敷候條、御愼可有之候と申候處に、護持院の住持職に被仰付、大僧正に被仰付候、夫より隱居、其上にも結構成樣子に候處に、當御代(家宣公)に成て、公儀表惡敷、逼塞一命を御助け置被遊迄之首尾に成候、亦護國寺の役者の內、普門院右住持大僧正に成申を見て、予を信仰にて判をして見せ申候、殊之外能判にて、寺領有之寺(江)居り可申と判申候へば、國は何方にて可有之と、狂言に尋申候故、則江戸の地にて候、此墨薄き點が當地と察申候、さあらば土地は一方に山、一方に海道を請て、片さがりなる土地にて候、前には流有て、後は地つまり可申候、青龍白虎朱雀玄武の理に叶ひ、四神相應の寺地に居り可被申と判じ候へば、普門院喜悅之處、總出家中、先祝をいたし候へとて、吸物酒など、普門院に出させ、予も打まじり、なぐさみ申候、然處無程一位樣(桂昌院、綱吉生母、)の御寺、日下窪の藥王寺後住に被仰付候、寺領武州六鄕にて百石御寄附、予が判じ申如く、土地の體相違無之候、後はつまり候へども、門前百間有之候、何かに福有の寺にて候、右兩樣の判よく考合申候故、護國寺護持院の出家中は、予を信仰にて候、

〔古今要覽稿(姓氏)〕草名吉凶

講習餘筆に花押のことを說て、さて其畫閒の空穴の數にて、吉凶を云、其生の性に叶へりの叶はざるのと云る附會の說共をなせり、これらは陰陽占卜家のする所にて從べからず、

方技部九

仙術 幻術 奇術 併入

仙術ハ、不老不死ヲ求メ、又ハ飛行自在等ヲ得ルノ術ナリ、其方タル、俗塵ヲ離レ、煩累ヲ絶チ、專ラ心身ヲ修煉スルニ在ルヲ以テ、此術ヲ學ブノ徒ハ、自ラ長生ヲ得テ、身體亦輕快ナルコト、大ニ常人ニ過グルモノアリシナラン、而シテ我邦人ニシテ、古來此方術ヲ得タリト稱スルモノ、往々之レアリシト雖モ、多クハ無稽ニ屬セリ、

幻術ハマボロシト云フ、奇術モ亦幻術ノ類ニシテ、刀ヲ呑ミ、火ヲ吐キ、沓ヲ狗ト化シ、朽木ヲ猪ト變ズルガ如キ事ヲ爲セリ、

名稱

〔類聚名義抄 一人〕僊ヒジリ　神仙イキボトケ

〔伊呂波字類抄 世人倫〕仙人亦作僊

〔平他字類抄 人倫平聲〕仙セン ヒジリ、

〔八雲御抄 三下異名〕仙　山人ともいふ

〔藻鹽草 十四人部〕仙

やま人山人のおる袖にほふ菊とよめり、又仙人とす、よまでいく代の石の床蘿に花は霜にほひつゝ、

〔拾遺和歌集 十神樂歌〕あふさかをけさこえくれば山人のちと世つけとてきれるつえ也

〔新古今和歌集 七賀〕文治六年、女御入内屏風歌、　皇太后宮大夫俊成

仙人

やま人の折袖にほふ菊の露うちはらふにも千世はへぬべし

〔夫木和歌抄 三十 仙家〕承久元年内裏　前中納言定家卿

仙人もすまでいく代の石のゆかかすみに花はなをにほひつゝ

〔倭訓栞 前編 三十四 也〕やまびと　佛書に仙人といふは、翻譯の人、仙の名を借て譯せり、胎藏曼陀羅の中に、婆蘇仙、瞿曇仙、就仙の類多し、天部の中形と行とに依て、呼者一二に非ず、道士の所謂とは異なれど其趣は近し、

〔大日本史 二百二十六 方技〕國朝僊術不傳、鍊形養丹之法、無所師受、久米、陽勝之徒、僅雜出于僧史、而浦島子、白箸翁之流、髣髴見其一二、蓋有之、無裨於國家、無之不損乎治體、則不若無之之爲愈也、役小角役使鬼神、呪禁厭禱、其法頗近於道流、後世文以釋氏之道、遂盛行焉、

〔走湯山緣起 一〕當山者、人王十六代應神天皇二年辛卯四月、東夷相模國唐濱礒部海、漕現一圓鏡、三尺有餘、無有表裏、順濤浮沈、〇中略凡無識其事如何、然爾送三箇歲、同御宇四年癸巳九月中旬、有一仙童、其年三十有餘、不知何里人誰姓族、唯爲其體、布帽冠首、薜衲纏身、手提拉杖、腰佩劒刀、足著蘘履、口絕穀藥、只服松葉與茯苓、〇時人號松葉仙專欽神鏡、深設禮奠、遂而點嶺渚、構社屋、祝禱靈神、禮供之人不絕、願滿族惟多、〇中略爰仙童挑神威致禮奠、凡歷九十九年、同〇仁德御宇己巳三月四日、仙童入定于日金之巖頭、

〔日本書紀 十四 雄略〕二十二年七月、丹波國餘社郡、管川人、水江浦島子、乘舟而釣、遂得大龜、便化爲女、於是浦島子、感以爲婦、相逐入海、到蓬萊山、歷覩仙衆、語在別卷、

〔釋日本紀 十二 述義〕丹後國風土記曰、與謝郡日置里、此里有筒川村、此人夫日下部首等先祖、名云筒川嶼子、爲人姿容秀美、風流無類、斯所謂水江浦嶼子者也、是舊宰伊預部馬養連所記無相乖、故略陳所由之旨、長谷朝倉宮御宇天皇〇雄略御世、嶼子獨乘小船、汎出海中、爲釣經三日三夜、不得一魚、乃得五色龜、心思奇異、置于船中、卽寐、忽爲婦人、其容美麗、更不可比、嶼子問曰、人宅遙遠、海底人乏、詎人忽來、女

娘微笑對曰、風流之士、獨汎蒼海、不勝近談、就風雲來、嶼子復問曰、風雲何處來、女娘答曰、天上仙家之人也、請君勿疑、垂相談之愛、愛嶼子知神女、愼懼疑心、女娘語曰、賤妾之意、共天地畢、俱日月極、但君奈何、早先許不之意、嶼子答曰、更無所言何解乎、女娘曰、君宜廻棹赴于蓬山、嶼子從往、女娘敎令眠目、即不意之間、至海中博大之島、其地如敷玉、闕臺晻映、樓堂玲瓏、目所不見、耳所不聞、携手徐行、到一大宅之門、女娘曰、君且立此處、開門入內、即七豎子來、相語曰、是龜比賣之夫也、亦八豎子來、相語曰、是龜比賣之夫也、茲知女娘之名龜比賣、乃女娘出來、嶼子語豎子等事、女娘曰、其七豎子者昴星也、其八豎子者畢星也、君莫怪焉、即立前引導、進入于內、女娘父母、共相迎揖而定坐、于斯稱說人間仙都之別、談議人神偶會之嘉、乃薦百品芳味、兄弟姉妹等、擧杯獻酬、隣里幼女等、紅顏戲接、仙歌寥亮、神儛逶迤、其爲歡宴、萬倍人間、於茲不知日暮、但黃昏之時、群仙侶等、漸々退散、即女娘獨留、雙眉接袖、成夫婦之理、于時嶼子、遺舊俗遊仙都、既經三歲、忽起懷土之心、獨戀二親、故吟哀繁發、嗟歎日益、女娘問曰、比來觀君夫之貌、異於常時、願聞其志、嶼子對曰、古人言、少人懷土、死狐首丘、僕以虛談、今斯信然也、女娘問曰、君欲歸乎、嶼子答曰、僕近離親故之俗、遠入神仙之堺、不忍戀眷、輙申輕慮、所望暫還本俗、奉拜二親、女娘拭淚歎曰、意等金石、共期萬歲、何眷鄉里、棄遺一時、即相携徘徊、相談慟哀、遂接袂退去、就于岐路、於是女娘父母親族、但悲別送之、女娘取玉匣授嶼子、謂曰、君終不遺賤妾、有眷尋者、堅握匣、愼莫開見、即相分乘船、仍敎令眠目、忽到本土筒川鄉、即瞻眺村邑、人物遷易、更無所由、爰問鄉人曰、水江浦嶼子之家人今在何處、鄉人答曰、君何處人、問舊遠人乎、吾聞古老等相傳曰、先世有水江浦嶼子、獨遊蒼海、復不還來、今經三百餘歲者、何忽問此乎、即銜棄心、雖廻鄉里、不會一親、既送旬日、乃撫玉匣、而感思神女、於是嶼子、忘前日期、忽開玉匣、即未瞻之間、芳蘭之體、率于風雲、翩飛蒼天、嶼子即乖違期要、還知復難會、廻首踟蹰、咽淚徘徊、于斯拭淚歌曰、等許余蔽爾、久母多智和多留、美頭能睿能、宇良志麻能古賀、許等母知和多留、又神女遙飛芳音歌曰、夜麻等弊爾、加是布企阿義天、久母婆奈禮、所企遠理等母、與和遠

和須良須奈、嶼子更不勝戀望、歌曰、古良爾古非、阿佐刀遠比良企、和我遠禮波、等許與能波麻能、奈美能遠等企許由、後時人追加歌曰、美頭能睿能、宇良志麻能古我、多麻久志義、阿氣受阿理世波、麻多母阿波麻志遠、等許與幣爾、久母多知和多留、多由女久女波都賀末等○多由以下恐有誤脫 和禮曾加奈志企、

〔扶桑略記 雄略二〕二十二年戊午七月、丹後國余社郡人、水江浦島子、乘舟而釣、遂得大龜、眠間示曰、有感來悟、後見龜化爲女、㒵髭如薄雲之蔽月、鬢鬆若流風之廻雪、蛾黛亘額、丹脣耀臉、其形甚艶、非可馴懐、島子失度迷、神云、何人到此而亂我懐、神女對曰、春秋易過、披霧難遇、請君破疑、欲得近席、妾有劣計、願近於君、可乎以不、島子對曰、僕有所恐疑、具欲由來、神女曰、妾蓬萊金臺女也、父兄弟皆在堂也、玄都之人、與天長生、與地久徂、飡以石流、飲以玉醴、翺遼川之鶴、逍遙於雲路、乘棄縣之鴨、偃息於瑰室、是名常世國也、君欲取常世之壽、廻舟可赴蓬山、浦島子許諾、將於蓬萊長生、神女曰、君暫可眠、島子隨而眠、聞屆于海中大島、神女與浦島子、携手下舟、遊行數里、到一大宅、神女排門入內、島子佇立門外、七少子過而語島子曰、吾是龜娘之流仇乎、暫待、亦八少子到曰、是龜娘之仇也、然後神女出來曰、七少子是昴星、八少子亦畢星、君得昇天、宜无其疑、卽引內庭、到于賓館、昇鏡臺、宴於翡翠之帳、而止宿矣、琴瑟吹歌、異於下界也、神女父母、抱腕相俱、於是命于厨宰、薦玉液磬髓之美餚、進雲飛石流之芳菜、朝從瑤池、戲毛羽之靈客、夕入瑰室、接神女之襟袖、島子忘其歡娛、只思父母、神女見其憂色、具問由緒、島子對曰、島有南枝之思、馬有北風之悲、況離土人乎、暫還故鄉、以慰此思、神女含情未吐、流淚如雨、臨別抱腕徘徊、授以玉匣、誡曰、勿開見之、島子約諾、遂歸舊里、已上

〔浦島子傳〕當雄略天皇二十二年、丹後國水江浦島子、獨乘船釣靈龜、島子歷浮浪上、須眠船中、其之間靈龜變爲仙女、玉鈿映海上、花貌耀船中、廻雪之袖上、迅雲之鬢間、容貌美麗而失魂、芳顏薰體克調、不異楊妃西施、眉如初月出娥眉山、靨似落星流天漢水、島子問神女曰、以何因緣故、來吾扁舟中哉、又汝棲何所、神女答曰、妾是蓬山女金闕主也、不死之金庭、長生之玉殿妾居所也、父母兄弟在彼仙房、妾在

世結夫婦之儀、而我成天仙、樂蓬萊宮中、子作地仙、遊澄江浪上、今感宿昔之因、隨俗境之緣、子宜向蓬萊宮、將遂曩時之志願、令爲羽客之上仙、島子唯諾、隨仙女語、須臾向蓬山、於此神女與島子、携到蓬萊仙宮、而令島子立門外、神女先入金闕、告於父母、而後共入仙宮、神女並如秋星達天、衣香馥々、似春風之送百花香、珮聲鏘々、如秋調之韻萬籟響、島子已爲漁父、亦爲釣翁、然而志成高尙、凌雲彌新、心雖存强嗣得仙自健、其宮爲體、金精玉英敷丹墀之內、瑪珠瑪瑙滿玄圃之表、淸池之波心、芙蓉開唇而發笑、玄泉之涯頭、蘭菊含咲不稠、島子與神女共入玉房、薰風吹寶衣而羅添香、紅嵐卷翡翠容帷動玉、金窗斜素月射幌、珠簾動松風調琴、朝服金丹石髓、暮飲玉酒瓊漿、千葉芝蘭、駐老之方、百節菖蒲、延齡之術、委漸見島子之容顏、累年枯槁、逐日骨立、定知外雖成仙宮之遊宴、而內催故鄉之戀慕、宜還舊里、尋訪本境、島子答云、暫侍仙洞之瑤筵、常嘗靈藥之露液、非是我幸乎、久遊蓬壺之蘭臺、忝甘羽客之玉盃、非是我樂哉、抑神女施姉範島、叛夫害遙迷在左右、豈有達旨乎、雖然夢常不結、眠久欲覺、魂浮故鄉、涙浸新房、願吾暫歸舊里、卽又欲來仙室、神女宜然哉、與送玉匣、裏以五綵、緘以万端之金玉、誡島子曰、若欲見再逢之期、莫開玉匣之緘、言了約成、分手辭去、島子乘船、如眠自歸去、忽以至故鄉澄江浦、尋不値七世之孫、求只茂万歲之松、島子齡于時二八歲許也、至不堪披玉匣見底、紫煙昇天無其賜、島子忽然頂天山之雪、乘合鶴之霜矣、

〔續浦島子傳記〕承平二年壬辰四月廿二日甲戌、於摘解由曹局注之、坂上家高明耳、

浦島子者、不知何許人、蓋上古仙人也、齡過三百歲、形容如童子、爲人好山、學異秘術也、服氣乘雲、出於天處之間、陸沈水行、閑於地戶之扉、以天爲蓋、遊身於六合之表、以地爲席、遺懷於八埏之裏、一天之蒼生爲父母、四海之赤子爲兄弟、形似可咲、而志無窮者也、獨乘釣魚舟、常遊澄(スミノエ)江浦、伴查郞而凌銀漢、近見牽牛織女之星、逐漁父而過汨羅、親逢吟澤憔悴客、於是釣魚之處、忽得靈龜也、島子心神恍忽不寤寐、浮於波上、眠於舟中、暫然之間、靈龜變化、忽作美女、絕世之美麗、希代尤物也、○中略 南威障袂而失魂、

素質之閑、西施掩面而無色、（中略）既而嬋娟形體、狎之千媚、而卒難叙繆綾、婉巒腰支、眤之百嬌、而忽不中繾綣、未知蓬嶺之仙娘、變靈龜與麗人、還疑巫山之神女、化朝雲與暮雨、然而遂島子問曰、神女有何因縁、而變化來哉、何處爲居、誰人爲祖、神女曰、妾是蓬山女也、（中略）妾在昔之世、結夫婦之義、而我成天仙、生蓬萊之宮中、子作地仙、遊澄江之波上、今感宿昔之因、來隨俗境之縁也、宜向蓬萊宮、將遂曩時之志、願令眼眠、島子唯諾、隨神女語、而須臾之間、向於蓬萊山、（中略）於是神女與島子、提携到蓬萊宮、而令島子立於門外、神女先入告於父母、而後與島子共入仙宮、（中略）島子與神女共入於玉房、坐綺席、廻鷹傷肝、撫心定氣、薫風吹寶帳、而羅帷添香、蘭燈照銀床、而錦筵加彩、翡翠簾褰、而翠嵐卷筵、芙蓉帳開、而素月射帳、不欲對玉顏以同臨鸞鏡、只願此素質、以共入鴛衾、撫玉體勤纖腰、述燕婉盡綢繆、魚比目之興、鸞同心之遊、舒卷之形、偃伏之勢、普會於二儀之理、倶合於五行之數、無勞萱草、是可忘憂、不服仙藥、忽應驗齡也、（中略）神女與島子相談曰、不可極樂、不可盡嘉、閑思合離之道、稍覺榮衰之理、況至于彼愛水之浮千河、毒涙之焚十山、而愛別之變難盡、生死之運無窮也、我依宿昔之因、盡當時之縁也、妾漸見島子容顏、累年枯槁、遂日骨立、定知雖外成仙宮之遊宴、而内生舊郷之戀慕、宜還故郷、尋訪舊里、島子答曰、久侍仙洞之筵、常嘗靈藥之味、目視花麗、耳聞雅樂、何非樂哉、亦不幸哉、抑神女爲天仙、余爲地仙、隨命進退、豈得逆旨哉、神女曰、吾聞君子贈人以言、小人贈人以財、雖我非君子、而適得仙骨也、將贈子以言、島子曰諾、神女送詞於島子、而告言、若還故郷、莫好青色、勿損眞性、五聲八音、損聽之聲也、鮮藻艶彩、傷命之色也、淸醪芳醴、亂性之毒也、紅花素質、伐命之斧也、島子若守此言、永持誡者、終萬歲之契、遂再會之志、亦以紬衣被島子、而送玉匣、裹以五綵之錦繡、緘以万端之金玉、而誡島子、若欲見再逢之期、莫開玉匣之緘、言畢約成、而分手辭去、（中略）島子乘舟自（白一作眼日）歸去、忽到故郷澄江浦、而廻見舊里、草田變改、而家園爲河濱也、水陸推遷、而山岳成江海也、故郷荒蕪、閭邑絶煙、舊塘寂寞、道路無跡、依倚於山脚、而翠嵐驚心、彷徨於谿腹、而薜蘿侵頂、僅過於洗衣老嫗、而問舊里故人、嫗曰、我年百有七歲、未聞

島子之名、唯從我祖父之世、古老口傳、而經數百歳、傳來語曰、昔有水江浦島子者、而好釣乘舟、久遊江浦、遂不歸來、蓋人海中也、唯未知經幾數百歳、誰人再來、更稱島子哉、從祖父以往、聞名僅傳也、況玄孫之末世、自非老嫗誰聞名、豈易知而哉、於是島子知仙洞之裏、遊覽之間、時代遷謝、人事沿革、而悲歎舊鄕之遼隔、想像仙遊之未央、戀慕之情、胸臆似存、悲哀之志、心府如剖、不堪悲戀、而忽開玉匣、于時紫雲出於玉匣、指蓬山飛去也、島子玉匣開之後、紫雲飛去之處、老大忽來、精神恍惚、而歎息曰、嗟呼哉、嗚悲哉、逢神女一諾之約、而失仙遊再會之期、紅淚千行濕白髮、丹誠万緒亂絳宮、其後鳴金梁而飲玉液、冶紫霞而服青衫、延頸鶴立、遙望龍海之蓬嶺、驥神鳳跱、遠廳仙洞之芳談、飛遊銀河、而隱淪海浦也、遂不知所終、後代覽地仙也、

〔古事談 一王道后宮〕淳和天皇御宇天長二年乙巳、丹後國余佐郡人水江浦島子、此年乘於船到故鄕、爰問邑沒落、物皆不昔日、山川相遷、人君成間、于時浦島子、走四方訪三族、無敢知者、但有一老嫗、浦島子問云、汝何鄕人乎、又知吾根元哉、老嫗答云、吾生此鄕而百有七年、不敢知君事、唯吾祖父口傳云、昔水江浦島子好釣遊海水不還、其後不知幾百年云々、浦島子聞此語、即難欲還神女處、敢無然、于時慕神女、開被所與之玉匣、紫雲出從匣起上、指西飛去云々、但島子辭鄕之後、經三百年還故鄕、其容顏如幼童云々、

〔水鏡 淳和下〕天長二年、中略ことしうらしまの子はかへれりしなり、もたりしたまのはこをあけたりしかば、むらさきの雲にしざまへまかりてのち、いとけなかりけるかたち、たちまちにおきなとなりて、はかばかしくあゆみをだにもせぬほどになりにき、雄略天皇のみよにうせて、ことし三百四十七年といひしにかへりたりしなり、

〔元亨釋書 十八尼女〕如意尼者、天長帝 淳和之次妃也、丹州余佐鄕人、中略○妃嘗著一篋、人不得見裏面、中略○妃之同閭、有水江浦島子者、先妃數百年、久棲仙鄕、所謂蓬萊者也、天長二年、還故里、浦島子門妃

所ㇾ持筐曰二紫雲筐一、

〔無名秘抄〕一丹後國よさの郡に、あさもがはの明神と申かみいます、國の守の神拜とかやいふ事にも、みてぐらなどえたまひて、まつらるゝほどの神にてぞおはすなる、是は昔、浦島のおきなの、神になれるとなむいひ傳へたる、いとけう有ことなり、物さはがしくはこを明し心に神と跡をとめ給へるは、さるべき權者などにやありけん、

〔萬葉集 雜歌 九〕詠二水江浦島子一一首 并短歌

春日之霞時爾、墨吉之岸爾出居而、釣船之得乎良布見者、古之事曾所念、水江之浦島兒之、堅魚釣鯛釣矜、及七日家爾毛不來而、海界乎過而榜行爾、海若神之女爾、邂爾伊許藝趍、相誂良比、言成之賀婆、加吉結常代爾至、海若神之宮乃内隔之、細有殿爾、携二人入居而、老目不爲死不爲而、永世爾有家留物乎、世間之愚人之、吾妹兒爾告而語久、須臾者家歸而、父母爾事毛告良比、如明日吾者來南登、言家禮婆、妹之答久、常世邊爾復變來而、如今將相跡奈良婆、此篋開勿勤常、曾己良久爾、堅目師事乎、墨吉爾還來而、家見跡、宅毛見金手、里見跡、里毛見金手、恠常所許爾念久、從家出而、三歳之間爾、墻毛無家滅目八跡、此筥乎開而見手歯、如本來家者將有登、玉篋小披爾、白雲之自箱出而、常世邊棚引去者、立走、叫袖振、反側、足受利四管、頓情消失奴、若有之皮毛皺奴、黑有之髪毛白斑奴、由奈由奈波氣左倍絶而、後遂壽死祁流、水江之浦島子之家地見、

反歌

常世邊、可住物乎、劍刀、己之心柄、於曾也是君、

〔日本紀竟宴和歌〕得二浦島子一　　少納言兼侍從從五位下大江朝臣朝望

宇羅志麻能、許々呂兒加奈布、都摩遠衣天、加米野世波比遠、東裳兒曾部氣留、

〔元亨釋書 十八 神仙〕法道仙人者、天竺人也、〇中略　一時乘二紫雲一出二仙苑一、經二支那一過二百濟一、入二吾日域一、下二播州印南

郡法華山、〈中略〉道得千手寶鉢法、天龍鬼神來往奉事、常飛鉢受供、州人稱空鉢仙人、生石大神請、置鉢于石上奉供、其地今尙號空鉢塚、在神祠西南、大化元年秋八月、船師藤井數官租而過、道飛鉢乞供、藤井曰、御厨精粳、不遑私情、鉢便飛去、於是乎、舡中群米隨鉢飛連、猶如鴈陣入山中、藤井大驚、奔到庵所、慚謝乞憐、道笑而諾、言已、米石如舊飛歸、其米千石、無有遺失、只其一俵、落南河上、自茲此地富人多、俗號米墮村、又曰米田、藤井入都奏事、孝德帝大加感歎、

〔續日本紀 一文武〕三年五月丁丑、役君小角流于伊豆島、初小角住於葛木山、以呪術稱、外從五位下韓國連廣足師焉、後害其能、讒以妖惑、故配遠處、世相傳云、小角能役使鬼神、汲水採薪、若不用命、卽以呪縛之、

〔文德實錄 一〕嘉祥三年五月壬午、故老相傳、伊豫國神野郡昔有高僧、名灼然、稱爲聖人、有弟子、名上仙、住止山頂、精進練行、過於灼然、諸鬼神等皆隨顧指、

〔日本靈異記 上〕修持孔雀王呪法得異驗力以現作仙飛天緣第廿八

役優婆塞者、賀茂役公氏、今高賀茂朝臣者也、大和國葛木上郡茅原村人也、自性生知、博學得一、仰信三寶、以之爲業、每夜挂五色之雲、飛冲虛之外、携仙賓遊億載之庭、臥伏蘂蓋之苑、吸噉於養性之氣、所以年心三十有餘、更居巖窟、被葛餌松、沐淸水之泉、濯欲界之垢、修行孔雀之呪法、證得奇異之驗術、駈使鬼神得之自在、唱諸鬼神催之曰、大倭國金峯與葛木峯度一椅而通、於是神等皆愁、藤原宮御宇天皇〈文武〉之世、葛木峯一語主大神讒之曰、役優婆塞謀時傾天皇、勅遣使捉之、猶因驗力輙不可所捕、所捉其母、優婆塞令免母故、出來見捕、卽流之伊圖之島、于時身浮海上、走如履陸、體踞萬丈、飛如翥鳳、晝隨皇命居嶋而行、夜往駿河富氐嶺而修、然庶宥斧鉞之誅、近天朝之邊、故伏殺劒之刃、上富氐之表、見斯而憂吟之間、至于三年矣、於是垂慈之音、以大寶元年歲次辛丑正月、近天朝之邊、遂作仙飛天也、吾聖朝之人、道照法師、勅求法性於大唐、法師受五百虎請、至於新羅、有其山中講法花經、其時虎衆之中

有人、以倭語擧問也、法師問誰、答、役優婆塞、法師思之、我國聖人、自高座下求之无之、彼一語主大神者、役行者前呪縛、至于今世不解脱、其示奇表、多數而繁、故略耳、知佛法驗術廣大者、歸依之人、必證得之矣、〇又見元亨釋書

〇按ズルニ、元亨釋書小角傳ノ贊ニ、本文道昭ノ事ヲ載テ、此事年代少乖、故我不系本章、トアリ、

〔袖中抄六〕くめぢのはし〇中略

行者〇役小角夜鬼神をめしつかひて、水をくみ薪をひろはしむ、えたがはぬものなし、あまたの鬼神をめして、葛木の山と金の御峯とに橋をつくりわたせ、我かよふ道にせんといふ、神どもうれへなげゝ共まぬかれず、せめおほすれば、わびて大なる石八を運てつくりとゝのへてわたしはじむ、ひるはかたち見にくし、夜かくれてつくりわたさんといひてよるいそぎつくる、行者かつらぎの一言主の神をめしとりていはく、なにの耻あればか形をかくすべき、おほそはなつくりそといかりて、呪をもて神を縛て、谷の底にをきつ、〇中略

續日本紀、靈異記、居士野仲廉撰日本國名僧傳等に見たり、

〔本朝文粹九詩序〕白箸翁　紀納言〇長谷雄

貞觀之末、有一老父、不知何人、亦不得姓名、常遊市中、以賣白箸爲業、時人號曰白箸翁、人皆相厭、不買其箸、翁自知之、不以爲憂、寒暑之服、皂色不變、枯木其形、浮雲其跡、鬢髮如雪、冠履不全、人如問年、常自言七十、時市樓下、有賣卜者、年可八十、密語人曰、吾嘗爲兒童之時、見此翁於路中、衣服容貌、與今無異、聞者恠之疑其百餘歲人、然持性寛仁、未嘗見喜怒之色、放誕愼謹、隨時不定、人或勸酒、不言多少、以醉飽爲期、或渉日不食、亦無飢色、滿市之人、不得量知其涯涘、後頓病、終市門之側、市人哀其久時相見、移尸令埋於東河之東、後及二十餘年、有一老僧、謂人云、去年夏中、頭陀南山、忽見昔翁居石室之中、終日焚香、誦法華經、近相謁曰、居士無恙、翁笑不答去、亦相尋、遂失在所、余轉聽此言、猶疑虚誕、然而梅生不

死、松子猶生、古既有之、雖可全眞、亦恐消沒、不傳於世、故記所聞、貽於來葉、云爾、

〔政事要略九十五至要雜事〕東宮學士大藏善行、蓋是國子進士也、○中略常服鐘乳丸、一日一丸、年滿九十、猶有壯容、耳目聰明、行步輕健、家書多婦、不斷房室、年八十七、生一男兒、○中略天下莫不歎異、皆謂之地仙哉、

〔明匠略傳〕明達律師

明達律師者、俗姓土師氏、攝津國住吉縣人也、十二歲、隨藥師寺僧靜實大德出家、名號眞仁、○中略寬平九年二十一、願發彌陀心、河內國高安縣東山、登絕頂、臨深谷、草庵中有優婆塞、色似黃栗、頭戴白帽、身着白衣、覩之曰、生馬仙、羞以胡苽五六顆、此是此地之所產、可以止渴、仙語眞仁云、汝攝津住吉縣人也、入山以來、四十餘年、未曾見山腳、只求菩提耳、

〔扶桑略記二十三醍醐〕昌泰四年延喜元年○中略八月、○中略古老相傳、本朝往年、有三人仙、飛龍門寺、所謂大伴仙、安曇仙、久米仙也、大伴仙草庵、有基無舍、餘兩仙室、于今猶存、但久米仙、飛復更落、其造精舍、在大和國高市郡、寺鑄丈六金銅藥師佛像、并日光月光像、堂宇皆亡、佛像猶坐曠野之中、久米寺是也、

〔今昔物語十一〕久米仙人始造久米寺語第二十四

今昔、大和國吉野ノ郡龍門寺ト云寺有リ、寺ニ二ノ人籠リ居テ、仙ノ法ヲ行ヒケリ、其仙人ノ名ヲバ一人ヲバアヅミト云フ、一人ヲバ久米ト云フ、然ルニアヅミハ前ニ行ヒ得テ、既ニ仙ニ成テ、飛テ空ニ昇ニケリ、後ニ久米モ既ニ仙ニ成テ、空ニ昇テ飛テ渡ル間、吉野河ノ邊ニ、若キ女、衣ヲ洗テ立テリ、衣ヲ洗フトテ、女ノ脛マデ衣ヲ掻上タルニ、脛ノ白カリケルヲ見テ、久米心穢レテ、其女ノ前ニ落ヌ、其後其女ヲ妻トシテ有リ、其仙ノ行ヒタル形チ、今龍門寺ニ其形ヲ扉ニ、北野ノ御文ニ作テ書シ給ヘリ、其レ不消シテ于今有リ、其久米ノ仙、只人ニ成ニケルニ、馬ヲ賣ケル渡シ文ニ、前ノ仙久米トゾ書テ渡シケル、然ル間久米ノ仙、其女ト夫妻トシテ有ル間、天皇其國ノ高市ノ郡ニ

都ヲ造リ給フニ、國ノ内ニ夫ヲ催シテ其役トス、然ルニ久米其夫ニ被催出ヌ、餘ノ夫共、久米ヲ仙人仙人ト呼ブ、行事官ノ輩有テ、是ヲ聞テ問テ云ク、汝等何ニ依テ彼レヲ仙人ト呼ブゾト、夫共答テ云ク、彼ノ久米ハ、先年龍門寺ニ籠テ仙ノ法ヲ行テ、既ニ仙ニ成テ、空ニ昇飛渡ル間、吉□□□□□□□□□□□□□女、衣ヲ洗ヒテ立テリケリ、其女ノ褰ケタル脛白カリケルヲ見下シケルニ、□□□□□□□□□□前ニ落テ即チ其女ヲ妻トシテ侍ル也、然レバ其レニ依テ仙人トハ呼ブ也、行事官等是ヲ聞テ、然テ止事无カリケル者ニコソ有ナレ、本仙ノ法ヲ行テ既ニ仙人ニ成ニケル者也、其行ノ德定テ不失給、然レバ此ノ材木多ク自ラ持運バムヨリハ、仙ノ力ヲ以テ空ヨリ令飛メヨカシト戯レノ言ニ云ヒ合ヘルヲ、久米聞テ云ク、我レ仙ノ法ヲ忘レテ年來ニ成ヌ、今ハ只人ニテ侍ル身也、然計ノ靈驗ヲ不可施ト云テ、心ノ内ニ思ハク、我レ仙ノ法ヲ行ヒ得タリキト云ヘドモ、凡夫ノ愛欲ニ依テ女人ニ心ヲ穢シテ、仙人ニ成ル事コソ无カラメ、年來行ヒタル法也、本尊何カ助ケ給フ事无カラムト思テ、行事官等ニ向テ云ク、然ラバ若ヤト祈リ試ムト、行事官是ヲ聞テ、嗚呼ノ事ヲモ云フ奴カナト作思、極テ貴カリナムト答フ、其後久米一ノ靜ナル道場ニ籠リ居テ、身心清淨ニシテ食ヲ斷テ、七日七夜不斷ニ禮拜恭敬シテ、心ヲ至シテ此事ヲ祈ル、而ル間七日既ニ過ヌ、行事官等久米ガ不見ル事ヲ且ハ咲ヒ且ハ疑フ、然ルニ八日ト云フ朝ニ、俄ニ空陰リ暗夜ノ如ク也、雷鳴リ雨降テ露物不見エ、是ヲ怪ビ思フ間、暫計有テ雷止ミ空晴ヌ、其時ニ見レバ、大中小ノ若干ノ材木、併テ南ノ山邊ナル杣ヨリ、空ヲ飛テ都ヲ被造ル所ニ來ニケリ、其時ニ多ノ行事官ノ輩、敬テ貴ビテ久米ヲ拜ス、其後此事ヲ天皇ニ奏ス、天皇モ是ヲ聞キ給テ貴ビ敬ヒテ、忽ニ免田三十町ヲ以テ久米ニ施シ給セツ、久米喜テ此ノ田ヲ以テ其郡ニ一ノ伽藍ヲ建タリ、久米寺ト云フ是也、其後高野ノ大師、其寺ニ丈六ノ藥師ノ三尊ヲ銅ヲ以テ鑄居エ奉リ給ヘリ、大師其寺ニシテ大日經ヲ見付テ、其レヲ本トシテ速疾ニ佛ニ可成キ敎也トテ、唐ヘ眞言習ヒニ渡リ給

ケル也、然レバ止事无キ寺也トナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔徒然草上〕世の人の心まどはす事、色欲にはしかず、人の心はおろかなるものかな、匂ひなどはかりの物なるに、しばらく衣裳にたきものすとしりながら、えならぬ匂ひには、必心ときめきする物なり、久米の仙人の、物あらふ女のはぎのしろきを見て、通をうしなひけんは、誠に手あしはだへなどのきよらに、肥あぶらづきたらんは、外の色ならねばさもあらんかし、

〔日本紀略醍醐一〕延喜元年八月十五日、陽勝仙人飛行、

〔扶桑略記醍醐二十三〕昌泰四年(○延喜元年)八月、天台山沙門陽勝、於大和國吉野郡堂原寺邊、飛行空中、元是能登國人、其父僧善洗、俗姓紀氏也、母亦同夢呑日光、即有娠胎、生年十一、而辭母家、登天台山、從律師玄日、勤學、一聞亦不再問、晝學夜修、送年之間、背不着席、舌不嘗鹽、或自書法華經、鎮以讀誦、或兼寫、途御數、常以持念、登金峯山之次、尋古仙草庵、猶存幽居之志、到吉野郡牟田寺、三年苦行、初絶粒食、菜、次止菜蔬食、後毎日服粟一粒、夏上金峯山、多下牟田寺、無倦勤修、終到同郡堂原寺、乃以止住、不食无氣、無衣如鹿、如此送年、遂以飛去、吉野山久住禪衆云、陽勝上人早既成仙、或逢龍門寺邊、忽以遠去、或遇熊野社下、飛行空中、其疾如鳳、其輕同雲、昔日同行法侶之輩、至于舊居草堂、廻皆觀樹、古破法衣懸、其枝末、驚怪遂觀、是即陽勝昔時所着袈裟也、其法衣端有留結處、乃披見之、裏飯手跡、其狀偈、以此袈裟可送堂原寺延命禪人者、見付之人取彼法衣、授于延命上人、云々、(已上傳)

〔法華驗記中〕叡山西塔寶幢院陽勝仙人

陽勝仙人、俗姓紀氏、能登國人也、勝蓮華院空日律師弟子、元慶三年始登叡山、年十一歳矣、情神聰明、一聞經教、再不問之、暗誦法花、習學止觀、厭世頑嚚、好修禪定、心意平等、爾無不勤、喜怒不改、勇猛精進、更不睡眠、亦不臥息、慈悲甚深、慚愧一切、見裸形人、脱衣與之、見飢羸輩、分口食施、蟣虱蚊虻、餧身令噉、手自書寫妙法華經、常讀誦、登金峯山、尋仙舊室、籠住南京牟田寺、習仙方法、最初斷穀、菜蔬爲食、次離

菜蔬、菓蓏爲食、漸留飮食、服粟一粒、身著藤蘿、口離飡食、衣食二種、永離悕望、發大道心、期三菩提、延喜元年秋、陽勝永去、烟霞無跡、所著袈裟、懸置松枝、讓與經與寺延命禪師、禪師得袈裟了、悲泣無限、尋求山谷、更不知所居、吉野山棲行僧恩眞等云、陽勝已成仙人、身中無血肉、有異骨奇毛、兩翼生身、飛行虛空、如麒麟鳳凰、龍門寺北峯、適會見、又熊野松本峯、過本山同法、不審清談、又籠笙石室、有行安居僧、數日不食、誦法華經、靑衣童持白飯授僧、僧取之食、其味尤甘、僧問來緣、童子答曰、我比叡山千光院延濟和尙之童子也、修行年積、得成仙人、近來大師陽勝仙人也、此食物是彼仙人之志也、語已退去、延喜二十三年、於金峯山、陽勝仙語東大寺僧云、余住此山、五十餘歲、生年八十有餘、我得仙道、飛行自在、昇天入地、無有障导、依法華經力、見佛聞法、心得自在、齋化世間、利樂有情、一切任意、仙人祖沈病、万死一生、歎言、我有多子、陽勝仙人我愛子也、若知我心者、願來可見我、陽勝以通知此事、已飛至祖舍上、誦法華經、人出見之、雖聞其音、不見其形、時仙人白祖、我離火宅、不來人間、爲孝養故、强來誦經、又與語耳、又白祖言、月十八日、燒香散華、應相待我、我尋香烟而來下此、誦經說法、可報恩德矣、故老傳言、陽勝仙人、每年八月末、至叡山、聞不斷念佛、拜大師遺跡、異時不來、尋其所由、信施氣分、炎火充塞、諸僧身香、腥膻難耐焉、

〔今昔物語十三〕陽勝修苦行成仙人語第三

今昔、○中略西塔ノ千光○光、宇治拾遺物語作手、院ニ、淨觀僧正ト云フ人有ケリ、常ノ勤トシテ夜ル尊勝陀羅尼ヲ終夜誦ス、年來ノ薰修入テ、聞ク人皆不貴ズト云フ事无シ、而ル間、陽勝仙人不斷ノ念佛ニ參ルニ、空ヲ飛テ渡ル間ダ、此ノ房ノ上ヲ過グルニ、僧正音ヲ擧テ尊勝陀羅尼ヲ誦スルヲ聞テ、貴ビ悲テ房ノ前ノ椙ノ木ニ居テ聞クニ、彌ヨ貴クシテ、木ヨリ下テ房ノ高欄ノ上ニ居ヌ、其ノ時ニ僧正、其ノ氣色ヲ恠ムデ問テ云ク、彼レハ誰ゾト、答テ云ク、陽勝ニ候フ、空ヲ飛テ過ル間、尊勝陀羅尼ヲ誦シ給ヘル音ヲ聞テ參リ來ル也ト、其ノ時ニ僧正妻戸ヲ開テ呼ビ入ル、仙人鳥ノ飛ビ入ルガ如

タニ入テ前ニ居ヌ、年來ノ事ヲ終夜談ジテ、曉ニ成テ仙人返リナムト云テ立ツニ、人氣ニ身重ク成テ、立ツ事ヲ不得ズ、然レバ仙人ノ云タ、香ノ烟ヲ近ク寄セ給ヘト、僧正然レバ香爐ヲ近ク指シ寄モツ、其ノ時ニ仙人、其ノ烟ニ乘テゾ空ニ昇ニケル、此ノ僧正ハ、世ヲ經テ香爐ニ火ヲ燒テ烟ヲ不斷ズシテゾ有ケル、此ノ仙人ハ西塔ニ住ケル時、此ノ僧正ノ弟子ニテナム有ケル、然レバ仙人返テ後、僧正極テ戀シタ悲ビケリトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔古事談三僧行〕定頼卿自禁裏退出、不入内方、先誦法花經第八卷之時、四月月影朦朧、樹陰繁茂、小透長尺許物飛シタル樹上、不見何正體、成怖思止讀了、又小透アリツルヨリモサガリテ、庭樹ノ枝中ニ如初讀誦之後、卽高樹之上有如影之者、異香薫室、作恐問云、彼ハ何、答曰、仙人陽勝ニ侍、自本山天台嶽、住金峯山、讀誦之間、竊聞御音、所參向也、不可令怖畏給云々、只恨不聞經云々、納言依此重誦經、陽勝隨喜給云々、相互承諾畢、受納言有可示置事トテ入内方、其時仙人心キタナクイマシケリトテ歸去畢云々、

〔元亨釋書十八神仙〕釋窺仙、所據未詳、居宇治山、持密呪、兼求長生、辟穀服餌、一旦乘雲而去、

〔古今和歌集目錄下〕基泉者、山背國乙訓郡人云々、宇治山記、作窺詮仙人也、醍醐御時桑門、是也、或人云、彼住所宇治山奥深入有山、名淸尾、下人伏謂之山云々、近日堀出火埦云々、

〔無名抄上〕喜撰が跡の事

又みむろどのおくに、二十餘町ばかり山中へ入て、うぢ山のきせんがすみけるあとあり、いへはなけれど、堂のいしずゑなど、さだかにあり、これらかならずたづねてみるべき事也、

〔金洞山緣記〕長淸道士は、もと相州北條家の臣にて、其父も名ある勇士なりしが、關中擾亂の時、賊兵某の爲に殺されたり、道士其讐を復する事を得ず、遂に上野國金洞山に隱れ、人跡絶たる巖窟

を栖所となし、黄精或は木葉の類を食し、日々苦身焦思して、兵法擊劍の術を學ぶこと數年なれども、世の人更に知者なし、○中略道士退きて劍をなげすて愴然として歎じて曰、以武犯禁、豈登德之事乎、我將爲吾所欲、嗚呼又何求とて、遂に再び金洞山に隱れ、仙道を脩し、浩氣を養ひ、恒に鐵屐を履み、鐵杖を執て、風に御し、雲に乘て行こと實地を踏が如し、人これを見て驚嘆せざるはなし、或時一匹の犢牛、何國より來りけん、石室の邊を去らず、道士其心を知り、牛も亦道士の意をしりて、馴つかふる事奴僕の如し、毎に求る事あれば、書を竹筒に入れて牛の角に掛け、松枝驛に到らしむ、市人これを見て、仙人の牛來れりと、筒中の書を披見て、則其求る所の物を牛の背に載せ、又角に掛けなどすれば、牛卽足にまかせて山に歸る、其路甚けはしくして、牛馬の通ふ所にあらざれども、其行こと平地の如し、是に依て衆人道士を景慕せざるはなし、尋入て敎を請ふ者あれば、唯諸惡莫作、衆善奉行と云ひ、目を閉て開く事なし、病者行て治を請ふ者あれば、是に善道を說示して、藥を與ふるもあり、呪文を授くるもあり、皆治せざるはなし、○中略或時麓の里に病者ありて、其家に行き呪を授け終りて忽云、今山にも來りて呪を乞ふ者ありとて、ふと立出、庭中の柿の木に登れり、家人ども柿の御好ならば、取らせ申さんとて跡より登るに、道士は其梢より虛空をふむ事坦途の如く、倏然として飛去れり、人々大に驚き、山に行て窺ふに、呪文もはや半過しとかや、是より後、皆人其飛行自在を知らざるはなし、○中略されば衆人の是を敬する事鬼神の如く、是に事ふること主君の如し、狼熊の類と雖、よく馴近づけり、或夜烈風暴雨にはかに至り、丘壑鳴動し、山鬼號哭する事、百雷の頭を壓するが如し、道士色を正うして是を叱るに、忽然としてやみぬ、をりふし其所に往合せ居たる人ありて、其狀景を恠しみ、是を問ふに、道士の曰、我眷屬に法を犯す者あり、今是を責るなりと、其道術かくの如く奇なり、道士容貌奇偉、膽力不測、平生面色桃花の如くにて、五十許の齡と見えけるとなん、慕ふ者の群來るを厭ふにてもやありけん、延寶癸丑の年、

享年百四十八歳にて、石窟にこもり、鍵局を掩て入定せり、牛も亦隨て死す、道士石像、及木像、並鐵杖、鐵瓶、牛頭より出し白玉、又其遺骨數片、今猶存せり、

〔西遊記四〕仙人

おほよその人、皆才德の事に限らず、もし長生を得んと欲せば、深山に入り飲食を斷ち、思慮をやめ、淫事を斷し、衣服を除きて、性命を養ふ時は、下凡の人といへども、二三百歳の壽を保つべし、當時霧島山に獨りの仙人有り、其名を雲居官藏といふ、もとは武士にて、平瀬甚兵衛といひしが、聊不平の事ありて、官祿を捨て世をのがれ、此山奥に隱れて人にまみえず、其後數十年へて、霧島山に住りといふを、麑府の方へも聞へ、鄕の得能武左衛門といふ人、はる〳〵と霧島山に尋入り、數日尋求めてやう〳〵にめぐり逢たり、其形木の葉の衣に、髮鬚おのづからに生ひ茂り、人のごとくには見へず、されど武左衛門も厚く心にかけて尋入りたる事なれば、言葉をかけて近付寄り、今一たび世に返り、人の交りもあれかしと、理をせめていひしかど、更にうけがふ色無く、はや世を遁れて幾年かへぬ、近き頃は仙術もやゝ成就して、姓名も雲居官藏と改めたり、よそながらにも世の人に相見る事、我道の妨げなり、まして再び世に出ん事思ひもよらず、此後はいかなる事ありとも、尋來る事なかれとて走り去れり、武左衛門も是非なく別れ歸りぬ、其後は山深く住居て、ほのかにも人にまみゆる事を嫌へり、まして言葉をかはす事などはさらに無し、山に入りて後も、今まで既に百何十年といふ上に成れり、されど行歩健にて、老たるとも若きとも知れず、彼邊にては人皆仙人なりと敬ひ、飛行自在、其外種々の奇妙多しといへども、其事は知らず、〇中略又肥後國球磨郡の、人吉の城下より十里ばかり奥に、たら木といふ所あり、此所に吉村專兵衛といふ百姓あり、年六十計の時、家業不如意にて世の中うとましく、ふと仙術に志して、此たら木の山奥に入れり、城下だに深山の奧にて、他所より見れば仙境のごとき地なるに、又それより十里も

女仙

おく、誠に人倫も稀なる地なるを、猶遯れて深山に入れり、飲食は木の實などを食せし、只寒氣には堪へがたかりしにや、冬に至れば里に出て、綿入を一ッづゝもらへり、春になり暖氣を得れば脫捨て裸體に成り、一年に一度づゝ衣類の爲に里に出しが、近き頃に到りては、仙術も追々に成就せしにや、衣類もなくて住けり、山に入りて後、予が球磨に遊びし年まで、凡四十年餘といへり、是も近來は不思議の仙術多く、殊に百歲に餘れるも、行步健にて飛ぶが如し、九州に此二仙人有り、中國邊にてはたへて無き事なり、京都白川の山中には、白幽先生ありしが、今は若州の山中に移れりといふ、仙術の事もろこしのみに限らず、廣き天下には種々の異人も多かりき、

〔續日本後紀 仁明十九〕嘉祥二年三月庚辰、興福寺大法師等、爲奉賀天皇寶算滿于四十、○中略作天人不拾芥、天女羅拂石、翻攀御藥、俱來祗候、及浦島子暫昇雲漢而得長生、吉野女眇通上天而來且去等像、副之長歌奉獻、其長歌詞曰、○中略故事爾、云語來留、澄江能、潤爾○潤恐淵誤釣世志、皇之民、浦島子加、天女、釣○原鈎禮、一作比、來天、紫、雲泛引天、片時爾、將天飛往天、是曾此乃、常世之國度、語良比天、七日經志加、無限久、命有志、此島爾許曾有介良、三吉野爾、有志熊志禰、天女、來通天、其後波、蒙譴天、毗禮衣、著天飛度爾支云、是亦、此之島根乃人爾許曾、有伎度云那禮○下略

〔萬葉集 三雜歌〕仙柘枝歌三首

霰零、吉志美我高嶺乎、險跡、草取可奈和、妹手乎取、

右一首、或云、吉野人味稻與柘枝仙媛歌也、但見柘枝傳、無有此歌、

此暮、柘之左枝乃、流來者、梁者不打而、不取香聞將有、

右一首、此下無詞、諸本同、

古爾、梁打人乃、無有世伐、此間毛有益、柘之枝羽裳、

右一首、若宮年魚麻呂作、

〔懷風藻〕五言遊吉野二首〇藤原史
飛文山水地、命爵薜蘿中、漆姫控鶴擧、柘媛接莫通、

〔今昔物語二十〕女人依心風流得感應成仙語第四十二
今昔、大和國宇陀ノ郡ニ住ム女人有ケリ、本ヨリ心風流ニシテ、永ク凶害ヲ離レタリ、七人ノ子生セリ、家貧クシテ食物无シ、然レバ子供ヲ養フ便无シ、而ルニ此女日々ニ沐浴シ、身ヲ淨メ綴ヲ著テ、常ニ野ニ行テ菜ヲ採テ業トス、又家ニ居タル時ハ家ヲ淨ムルヲ以テ役トス、又菜ヲバ調ヘ盛テ咲ヲ含テ人ニ此ヲ令食ム、此ヲ以テ常ノ事トシテ有ケル間ニ、其女遂ニ心直ナル故ニ、神仙此レヲ哀ビテ神仙ニ仕フ、遂ニ自然ラ其ノ感應有テ、春ノ野ニ出テ菜ヲ採テ食スル程ニ、自然ラ仙草ヲ食シテ、天ヲ飛ブ事ヲ得タリ、心風流ナル者ハ佛法ヲ不修行ト云ヘドモ、仙藥ヲ食シテ此ク仙ト成ケリ、此レヲ服仙藥ト云フナルベシ、心直クシテ仙藥ヲ食シツレバ、女也ト云ヘドモ仙ニ成テ空ヲ飛ブ事如此シ、然レバ人猶心ヲ風流ニシテ、凶害ヲバ可離也ト、ナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔見聞小說十〕濃州仙女　輪池〇屋代弘賢
大垣領にや、北美濃越前境にもや、根尾野村山中に、仙女住居申候、初には齋藤道三の女子なりと申傳へ候所、さにはあらで、越前の朝倉が臣の妻、懷妊の身にて、朝倉沒落の時、山中へのがれ、女子を出產せし、其女子幽谷中にて成長し、今年は二百六十歲計、顏色は四十歲の人と相見え申候、髮はシユロの毛の如しと申候、寫眞も不遠來り可申存候、詳なる事は未だ所々水災にて、識もく途中の決口を恐れ、得往觀不申候也、奇なる事に候、
九月〇文政八年四日
右尾張公倫官秦鼎手簡なり

〔類聚國史六十六人〕弘仁十三年八月癸酉、相摸守從四位下藤原朝臣友人卒、右大臣贈從一位是公之

男、從三位乙麻呂之孫、爲人硜々、不護禮度、雖好仙道、控地不登、大同之初、緣坐伊豫親王事、左降下野國守、弘仁年中、有恩入京、授從四位下、假任相摸守、病發卒官、年五十六、

〔十訓抄七〕河內國金剛寺とかや云山寺に侍りける僧の、松の葉を食ふ人は、五穀をくはね共、くるしみなし、よく食おほせつれば、仙人ともなりて、飛びありくと云人有けるを聞て、松の葉を好くふ、誠にくひおほせたりけん、五穀のたぐひくひのきて、やう〳〵兩三年に成にけるに、げにも身も輕く成こゝちしければ、弟子どもにも、我は仙人に成なんとするなりと常は云て、今にとて內內にて、身を飛ならひなどしけり、既に飛て上りなんと云て、坊も何も弟子どもに分ち讓て、上りなば仙衣をきるべしとて、如形腰に物をひとへ卷て出立に、我身には是より外は入べき物なしとて、年比秘藏して持たりける、水瓶ばかりを腰に付て巳に出にけり、弟子同朋名殘惜悲び、聞及人遠近市の如くに集て、仙に登る人見んとてつどひたりけるに、此僧片山のそばにさし出たる巖の上に登ぬ、一度に空へ登りなんと思へども、近く先遊て事の樣人々に見せ奉らんとて、彼巖の上より下に生たりける松の枝にゐて遊んと云て、谷より生上りたる松の上、四五丈ばかり有けるをさけさまた飛、人々目をすまし哀をうかべたるに、いかゞしつらん、心や臆したりけん、飛て思ひしよりも身重く、力うき〳〵としてよはりにければ、飛はづして谷へ落入ぬ、人々あさましく見れども、是程の事なればやうあらん、定て飛あがらんずらんと見るほどに、谷の底の巖にあたりて、水瓶もわれ、我身も散々に打損じて、只死にしぬれば、弟子眷屬さはぎ寄て、いかにと問へどいらへもせず、僅に息の通ふばかりなりけれど、とかくして坊へかき入つ、こゝに集れる人笑ひのゝしりて歸りけり、さて此僧有にもあらぬやうにて痛臥り、とかくいふばかりなくて、弟子も恥かしながらあつかふ間、松の葉ばかりにては命生べくもみえねば、年比いみじくくひのきつる五穀をもて、さま〴〵いたはり養へば、命ばかりはいけれども、足手腰もうち折て、起居も

えせず、今は松の葉くふにも及ばず、本のごとく五穀むさぼり食て、弟子共にゆゝしく讓りたりし坊も寶も取返してかゞまり居たり、仙道に到る人たやすからぬ事なり、

〔日本書紀垂仁六〕九十九年、○中略明年三月壬午、田道間守至自常世國、○中略是常世國、則神仙秘區、俗非所臻、是以往來之間、自經十年、

〔釋日本紀十二述義〕天書第八曰、廿二年、○中略秋七月、丹波人水江浦島子、入海。。。龍宮、得神仙、

〔下學集上人倫〕姑射山（稱仙洞也、姑射山、仙人之所居也、或以謂院所居也、）

〔八雲御抄三居所下〕はこやの山（山名にてあれども、これ仙洞といふ、）

〔藻鹽草十四雜部〕仙

よわうの里（無何有里也、是は仙人の栖也と云々、又云、むしある所えもいはぬ事を云とも云り、）

〔萬葉集十六雜歌〕心乎之、無何有乃、鄕爾置而有者、藐孤射能、山乎見末久知香谿務、

〔奥儀抄中ノ下〕むかうは、莊子文之、無何有之鄕也、はこやは、藐姑射山也、或物云、其仙人住所也、

〔千載和歌集十賀〕百首の歌讀給ける時の祝の歌　式子内親王

うごきなき猶萬世ぞ憑むべきはこやの山の峯の松風

〔新後撰和歌集二十賀〕千五百番歌合に　寂蓮法師

浪の上に藥もとめし人もあらばはこやの山に道しるべせよ

〔藻鹽草十四雜部〕仙

おいすしなすの藥（樂府集云、中有三神山、上多生不死藥、三神山は蓬萊、方丈、瀛州也、）

〔古今和歌集十九雜體〕ふるうたにくはへてたてまつれるながうた　壬生忠岑

くれ竹の、よゝのふることゝ、なかりせば、いかほのぬまの、いかにして、おもふ心を、のばへまし、○中略をとはの瀧の、音にきく、おいすしなすの、くすりもが、君がやちよを、わかえつゝ、見ん、

〔奥儀抄中ノ下〕文集云、中有二三神山一、山上多生二不死藥一、又云、蓬萊古今但聞レ名、この心也、

〔拾遺和歌集別六〕みちのくにのかみこれともがまかりくだりけるに、彈正のみこ〇花山皇子清仁親王のかうやくつかはしけるに、

かめ山にいくくすりのみありければとゞむるかたもなきわかれかな　戒秀法師

〔奥儀抄中ノ上〕かめ山とよめるは蓬萊也、かめの背にある山なればなり、

〔八代集抄十六〕いくくすりは不死藥なり、白氏文集に、山上多生二不死藥一云々、生藥を往と云にそへて、とゞむるかたもなしとよめり、

〔竹取物語〕中將人々引ぐして歸りまいりて、かぐや姫を、えたゝかひとゞめずなりぬることを、こまごまとそうす、藥のつぼに御ふみそへてまいらす、ひろげて御覽じて、いといたくあはれがらせたまひて、ものもきこしめさず、御あそびなどもなかりけり、大じむかんたちめをめして、いづれの山か、てんにちかきとゝはせ給ふに、ある人そうす、するがの國にあるなるやまなん、此みやこもちかく、天もちかくはむべるとそうす、これをきかせ給ひて、

逢事もなみだにうかぶわが身にはしなぬくすりもなにゝかはせむ、かのたてまつるふしの藥に、またつぼぐして御つかひにたまはす、ちよくしには、月のいはかさといふ人をめして、するがの國にあなる山のいたゞきにもてつくべきよしおほせ給ふ、峯にてすべきやうをしへさせ給ふ、御ふみ、ふしのくすりのつぼならべて、火をつけてもやすべきよしおほせ給ふ、そのよしうけたまはりて、つはものどもあまたぐして、山へのぼりけるよりなむ、そのやまをふしのやまとなづけける、そのけぶりいまだ雲の中へたちのぼるとぞいひつたへたる、

〔今昔物語二十〕女人依二心風流一得二感應一成レ仙語第四十二

今昔、大和國宇陀ノ郡ニ住ム女人有ケリ、〇中略其女遂ニ心直ナル故ニ、神仙此レヲ哀ビテ神仙ニ

仕フ、遂ニ自然ラ其ノ感應有テ、春ノ野ニ出テ、菜ヲ採テ食スル程ニ、自然ラ仙草ヲ食シテ、天ヲ飛ブ事ヲ得タリ、心風流ナル者ハ、佛法ヲ不修行ト云ヘドモ、仙藥ヲ食シテ、此ク仙ト成ケリ、此レヲ服仙藥ト云フナルベシ、心直クシテ仙藥ヲ食シツレバ、女也ト云ヘドモ、仙ニ成テ空ヲ飛ブ事如此シ、〇下略

〔西海雜誌〕霧島が嶽は、日向大隅薩摩の三箇國に跨り、〇中略其大隅の方なるは西霧島と云て、頗大社にして、何時の世より太敷ますとは知らざれども、空海一度錫を入られし後は、華林寺聞錫杖灌院と號て、今は密宗の精舍となりにけり、予天保七申歳、登山して歸るさ、此寺に宿りしに、方丈五峯和尚予が遠方より來遊を愛て、いと叮嚀に饗し、相見を免されしに、頗道德堅固の僧にして、げに如此靈地に掛錫なしたまふことわりと覺えき、〇中略種々山中の奇を譚聞せたまふ、其中にも實に奇なるは、當寺に年久しく仕ける下僕五助と云るものあり、日々山中に入て樵けるに、時として一の桃林に到る事ありけり、さして寺より遠くとも思はず、又近しとも決し難きが、此林に到れるに、二八ばかりよりまだ三十歳に足らぬ、みめよき女子ども、種々のうつくしき衣服にて遊び戯れたまひけるが、其年長と見えて、別て衣服もうつくしく、異樣なる婦人、五助を呼て、世の中の事どもを尋聞つゝ、桃を與へて云らく、此桃を食する時は、不老長生にして、我等が如く何時迄も、歡樂に月日を送る身となるべし、然し必此林より外へ持出る事なかれ、若我が言を犯す時は、其詮なしとぞ深く戒め與へき、五助も始の程は其敎を守りしに、後にふと過て其事を人に譚しかば、朋輩どもなどの云には、それこそ狐狸の爲に、馬糞など與へられしならめなど嘲られしかば、其くちをしさに、後には仙女の戒を犯して、時々寺に桃を持歸て、朋輩又は沙彌隨從等へも勸めしかば、皆の者も漸に五助の言を信じ、我も伴れ行ん、誰も見んと五助の後に附て入るに、終日桃林に至る事を得ずして、空しく歸りぬれども、時ならざるに桃を持歸るにて、其言の虛談

雜載

ならざる事を感じ、我も壽やせん、仙にならましなど云ひ暮て、後には乞たりけるに、大さ尋常の桃より太く、又味も一しほ美なりとぞ、其五助と云るは此者なりとて、予に引合されしに、至極質朴の者にして、其年を問ふに、六十餘歳の由答けれども、顔色頗若く見え、未だ知命にもと思はれける、予其仙女の事を問しに、始には又もや仙女に叱られやせんとて答へざりしが、强て問しかば、漸にはなし出しけるに、桃を僕に賜り申せしは、いつも笠を被り申、鏡のやうなる物を首に掛て、種々の事を僕に云聞せ賜り申せしが、此桃林の旦那にてあり申か、其うしろに桃を多く盆に入て持ち、又瓢を持ち、琴にても有申か、袋に入し物を抱き申せしもあり、其傍に遊べる女子等も、皆々首に守袋のやうなる物を掛申、何れも往昔の女子達にて有申せしか、其旦那の云聞せ賜申せしは、汝一人にて來らば、何時にても迎へん、必人に話すべからず、又遣す此桃も爰にて賜申て、外へは持行なと、堅く戒申されしを、ふと僕人々より嘲らるゝをくちをしと思ひ、數度持歸り申て、人にも賜させ申せしなり、此桃を一顆賜り申置ば、持病の痛にて、屢々床にも著き申せしが、今は無病になり申、藥を賜り申事もなく、桃を賜させ申せし人々にも、誰一人其後病申せし人なしと、さすがに彼が國言の餝もなく譚するに、始は予も一槪に信せざりしかども、其庫裏に在ける僧俗達の、我も賜申せしよ、彼も賜申されしと聞けるに、予も信まして、つら〳〵思ひけるに、往古琳聖太子、此山に登仙せし事、種々の文にも見え、今も樵夫等の深山に入るに、時々は異樣なる老翁に出逢ひ、又太子の乘馬と云る地に、垂るばかりなる振髮のもの等、見し事も有と聞ける靈山なれば、其不思議なきにしもあらずと思ふ時から、此五助が奇事を薩壽の某(闕名)祐助、(廣闕)は、(○中略)一卷の書となし置たまひしと聞ば、其槪略をのみ誌し置ものなり、

〔拾芥抄 下本 諸教誡〕吉備大臣私教類聚目錄

第三　仙道不用事

〔八雲御抄 三 名所〕仙　九のかすみ　その、えのくつる所　山ちのきく是等仙

〔藻鹽草 十四 郷〕仙

山ちの菊(これ皆仙也)　九のかすみ　たちぬはぬ(これ仙也、又たちぬはぬ衣の袖しふれければ、三千とせふべきうら〈うら當作こゝ〉となりけり、)

わしたづにのりてかよへる(又のりて行つるの羽かぜに雲はれて月もさやけくすむ山邊かな)　おの、えのくちし所(これは晉王質と云)

(人、斧をこりに山へ入たるに、仙人の碁をうつ所へ行て一番をみける程に、土につかへたるおのゝえのくちたりけるといふ事也、晉書にも、遶者仙人、莫晉碁といへり、)

〔萬葉集 九 雜歌〕獻忍壁皇子歌一首(詠仙人形)

常之陪聞、夏冬往哉、裘扇不放、山住人、

〔古今和歌集 五 秋〕仙宮に菊をわけて人のいたれるかたをよめる　素性法師

ぬれてほす山路の菊の露のまにいつか千年を我はへにけん

〔奥儀抄 下ノ上〕是は人の仙宮にいりて、ときのほどと思ひけるに、千とせをへたることのあるをよめる也、仙宮には、きくのおほかればかくよめり、

〔拾遺和歌集 三 秋〕三條のきさいの宮(〇冷泉后昌子)の、もぎ侍ける屛風に、九月九日の所、　もとすけ

我やどのきくのしら露けふごとにいくよつもりて淵となるらん

〔奥儀抄 中ノ上〕仙宮の菊の露は、つもりて淵となるといふことのあるなり、

〔古今和歌集 十七 雜上〕龍門にまうで、、たきのもとにてよめる、　伊勢

たちぬはぬきぬきし人もなき物をなに山姫の布さらすらん

〔奥儀抄 下ノ上〕是は龍門寺の仙洞を見てよめる歌也

〔夫木和歌抄 三十 雜十二〕仙家　俊頼朝臣

〔拾遺和歌集 五 賀〕亭子院歌合に　みつね

たちぬはぬ衣の袖しふれければみちとせふべきも、となりけり

三ちとせになるてふもゝのことしより花さく春にあひにけるかな

〔奥儀抄 中ノ上〕漢武帝は仙の法を習ひて、とけざりし人なり、七月夜漏に、西王母といふ仙人、紫雲にのりて武帝の承花殿にいたる、時に東方朔といふもの、御前にありし時、かくれて屏風のうしろにをる、みかど不死の藥をこふ、王母いまだいたすべからずといひて、桃七枚をとりて、手づから二枚をばくひつ、御門のたまはく、このもゝかうばしくむまし、うへんとおもふ、王母わらひていはく、これは三千年に一度なるもゝなり、下土にうゝべきものにあらず、この屏風のうしろに侍る童ぞ、三度ぬすみてたべたるものといふ、東方朔も仙人なり、かの仙宮の桃をよめり、

〔千載和歌集 雜十六〕龍門寺にまうでゝ、仙室に書付侍ける、　能因法師

あしたづにのりてかよへる宿なれば跡だに人は見えぬなりけり

〔永久四年百首〕仙宮　源朝臣兼昌

乘て行鶴のはかせに雲晴て月もさやけくすむ山べかな

〔古今和歌集 雜十八〕つくしに侍りける時に、まかりかよひつゝ碁うちける人のもとに、京にかへりまうできてつかはしける、　紀友則

故郷は見しごともあらずおのゝえのくちし所ぞ戀しかりける

〔八代集抄 十七〕斧の柄の朽しとは、晉の王質といふもの、薪をこりに山に行たれば、仙人の碁をうつを見て、半日と思ひて立ぬれば、斧の柄くちたり、舊里に歸りぬれば、七世の孫にあひたり、此心を碁をうちたるによりて、思ひよそへたり、

○按ズルニ、王質ノ故事ハ、述異記及ビ弈問等ニ見ユ、並ニ遊戲部圍碁篇雜載條ニ收メタレバ、宜シク參看スベシ、

〔古今和歌六帖二山〕をの、え

をの、えはくちなばまたもすげかへんうき世の中にかへらずもがな

〔枕草子三〕けさう人にてきたるはいふべきにもあらず、たゞうちかたらひ、又さしもあらねど、をのづからきなどする人の、すのうちにてあまた人々ゐて物などいふに、いりてとみに歸りげもなきを、ともなるおのこ、わらはなど、をの、えもくちぬべきなめりと、むつかしければ、○下略

○

〔倭訓栞前編二十九〕ま。ぼ。ろ。し。　幻をよめり、目亡の義也といへり、假そめに目に見るかとすれど、實はもと無物なれば、やがてきえうせぬるをいふ、夢幻のさまも、幻術のふりもまか也、よて方士をさして、まぼろしといひしも侍るなり、

〔源氏物語一桐壺〕みやす所(桐壺更衣)はかなきこゝちにわづらひて、○中略夜なかうちすぐるほどになん、たえはて給ぬる、○中略かのおくりもの御らんせさす、○長恨歌なき人のすみかたづねいでたりけん、しるしのかんざしならましかばとおもほすもいとかひなし、

尋ね行まぼろしもがなつてにても玉のありかをそことしるべく

〔河海抄一桐壺〕方士楊貴妃(玄宗妃)を尋て、金のかむざしのなかばをもちてきたりし事也、まぼろし、方士事なり、幻術士の名なり、玉のありかは魂在所なり、

〔源氏物語四十一幻〕神無月は、大かたもしぐれがちなる比、いとゞながめ給ひて、夕暮の空の氣色なども、えもいはぬこゝろぼそさに、ふりしかど、ひとりごちおはす、雲ゐをわたる雁のつばさも、うらやましくまもられ給ふ、

大空をかよふまぼろし夢にだに見えこぬ玉(上○魂)の行衛たづねよ、なにごとにつけても、まぎれずのみ月日にそへておぼさる、

〔源氏物語湖月抄四十一幻〕愚按、此歌は、源氏君雁の空とぶをみて、かの玄宗皇帝の使にて、道士幻術をもちて、楊貴妃の魂魄を求めし事を思ひてよみ給へる也、幻は説文、相詐惑也、增韻、妖術也、即今呑刀吐火、植瓜種木之術、皆是云々、

〔金葉和歌集六別離〕對馬守にて、小槻のあきみちがくだりける時つかはしける、　爲政朝臣妻

おきつしま雲井のきしを行かへりふみかよはさむまぼろしもがな

〔八代集抄二十九〕まぼろしとは、方士が幻術をいへり、彼長恨歌に、玄宗の使の方士が、蓬萊に行て、楊貴妃が信を傳へし事なり、此對馬へも、かやうの使を得て、文通はさまほしき心なり、

〔日本書紀十四雄略〕十三年八月、播磨國御井隈人文石小麻呂、有力强心、肆行暴虐、路中抄刧、不使通行、又斷商客艖䑧、悉以奪取、兼違國法、不輸租賦、於是天皇遣春日小野臣大樹、領敢死士一百、並持火炬、圍宅而燒、時自火炎中、白狗暴出、逐大樹臣、其大如馬、大樹臣神色不變、拔刀斬之、即化爲文石小麻呂、

〔日本書紀二十四皇極〕四年四月戊戌朔、高麗學問僧等言、同學鞍作得志、以虎爲友、學取其術、或使枯山變爲青山、或使黃地變爲白水、種々奇術、不可殫究、又虎授其針曰、愼矣愼矣、勿令人知、以此治之、病無不愈、果如所言、治無不差、得志恒以其針隱置柱中、於後虎折其柱、取針走去、高麗國、知得志欲歸之意、與毒殺之、

〔萬葉集二〕一書曰、天皇〈天武〉崩之時、太上天皇〈持統〉御製歌、

燃火物、取而裹而、福路庭、入澄〈〇澄恐登誤〉不言八面、智曰〈〇智恐知、曰二字誤〉男雲、

〔萬葉集略解二〕是は後世火をくひ、火を踏わざを爲なれば、其御時在し役小角が輩の、火を袋に包みなどする恠き術する事の有けむ、さてさる怪きわざをだにするに、崩給ひし君に逢奉らん術を知といはぬがかひなしとにや、

〔今昔物語二十〕陽成院御代滝口金使行語第十

今昔、陽成院ノ天皇ノ御代ニ、滝口ヲ以テ金ノ使ニ陸奥ノ國ニ遣ケルニ、道範ト云フ滝口、宣旨ヲ奉テ下ケル間ニ、信濃國□□ト云所ニ宿シテ、其郡ノ司ノ家ニ宿タレバ、郡ノ司待チ受テ労ノル事无限シ、食物ナドノ事皆畢ヌレバ、主ノ郡ノ司、郎等ナド相具シテ家ヲ出テ去ヌ、道範旅宿ニシテ不被寝ザリケレバ、和ラ起テ見行ニ、妻ノ有ル方ヲ臨ケバ、○中略年二十餘計ノ女、○中略微妙クテ臥タリ、道範此ヲ見ルニ、○中略思難忍クテ寄臥ケリ、○中略道範我ガ衣ヲバ脱棄テ女ノ懐ニ入ニ、暫ハ引塞グ様ニ為レドモ、氣悪クモ辭フ事无ケレバ懐ニ入ヌ、去程ニ男ノ閇ヲ痒ガル様ニスレバ、捜タルニ、毛計有テ閇失ヒタリ、驚キ怪クテ強ニ捜ト云ヘドモ、惣テ頭ノ髪ヲ捜ルガ如ニテ露跡ダニ无シ、○中略和ラ起テ本ノ寢所ニ返テ又探ルニ尚无シ、奇異ク思ユレバ、親ク仕フ郎等ヲ呼テ、然ニトハ不言シテ、彼ニ微妙キ女ナム有ル、我モ行タリツルヲ何事カ有ラム、汝モ行ト云ヘバ、郎等喜ビ乍又行ヌ、暫許有テ此郎等返来タリ、極ク奇異キ氣色シタレバ、此モ然ク有ナメリト思テ、亦□□□□□□態ノ郎等ヲ呼テ勧メテ遣タルニ、其モ又返来テ、空ヲ仰テ極ク不心得ヌ氣色、如此シテ七八人ノ郎等ヲ遣タルニ、皆返リツヽ、其氣色只同様ニ見ユ、返々奇異ク思フ程ニ、○中略夜曙ルマヽニ、急テ立ヌ、七八町許行タル程ニ、後ニ呼ブ者有リ、見レバ馬ヲ馳テ来ル者有リ、馳付タルヲ見レバ、有ツル所ニ物取テ食セツル郎等也ケリ、白キ紙ニ裹ミタル物ヲ捧テ来タリ、道範馬ヲ引ヘテ、其ハ何ゾト問ヘバ、郎等ノ云ク、此ハ郡司ノ奉ト候ヒツル物ナリ、此ル物ヲバ何デ棄テハ御マシヌルゾ、形ノ如ク今朝ノ御儲ナド營テ候ツレドモ、急ガセ給ケル程ニ、此フサヘ落サセ給テケリ、然レバ拾ヒ集テ奉ルナリト云テ取スレバ、何ゾト思テ開テ見レバ、松茸ヲ裹集タル如ニシテ男ノ閇九ツ有リ、奇異ク思テ郎等共ヲ呼ビ集テ此ヲ見スレバ、八人ノ郎等皆人毎ニ怪ク思テ、寄テ見ルニ九ノ閇有リ、即チ一度ニ皆失ヌ、使ハ此ヲ渡シテ即チ馳返ヌ、其時ニナム郎等共

我モ然ル事有ツト云出テ、皆捜ルニ、削本ノ如ク有テ、其ヨリ陸奥國ニ行テ金請取テ返ルニ、此ノ信濃ノ郡司ノ家ニ行テ宿ヌ、郡ノ司ニ馬絹ナド樣々ニ多取スレバ、郡司極ク喜テ云ク、此ハ何ト思テ此クハ給フゾト、道範近ク居寄テ郡司ニ云ク、極ク傍痛キ事ニテハ侍レドモ、初メ此ニ侍シニ、極テ恠シキ事ノ侍レバ、何ナル事ゾ、極テ不審シケレバ問ヒ奉ル也ト、郡ノ司物ヲ多ク得テケレバ、隱ス事无クシテ、有ノマヽニ云ク、其レハ若ク侍シ時ニ、此國ノ奧ノ郡ニ侍シ郡司ノ年老タリシガ、妻ノ若ク侍シガ許ニ忍テ罷寄タリシニ、閛ヲ失ヒテ侍シニ恠ミヲ成シテ、其ノ郡ノ司ニ強テ志ヲ運テ習テ侍ル也、其ヲ習ハムノ本意在ナバ、此度ハ公物多ク具シ給ヘリ、速ニ上リ給テ、態下リ給テ、心靜ニ習ヒ給ヘト云ヘバ、道範其契ヲ成シテ、京ニ上テ金ナド奉テ暇ヲ申シテ下ヌ、可然キ物共持下テ郡ノ司ニ與ヘタレバ、郡ノ司喜テ、手ノ限リ敎ヘント思テ云ク、此ハ輙ク習フ事ニモ非ズ、七日堅固ニ精進ヲシテ、毎日ニ水ヲ浴テ、極ク淨マハリテ習フ事ナレバ、明日ヨリ精進ヲ始メ給ヘト、然レバ道範精進ヲ始テ、毎日水ヲ浴テ淨マハル、七日ニ滿ツ日、後夜ニ郡司ト道範、亦人モ不具シテ深山ニ入ヌ、大ナル河ノ流レタル邊ニ行ヌ、永ク三寶ヲ不信ト云フ願ヲ發シテ、樣々ノ事共ヲシテ、艶ス罪深キ誓言ヲナム立ケリ、其後郡司ノ云ク、己ハ水ノ上へ入ナムトス、其ノ水ノ上ヨリ來ラム物ヲ、鬼ニアレ神ニアレ、寄テ懷ケト云置テ、郡ノ司ハ水ノ上ニ入ヌ、暫許有レバ、水ノ上ノ方空陰テ、神鳴リ風吹キ雨降テ河水增ス、暫許見レバ河ノ上ヨリ、頭ハ一抱許有ル蛇ノ、目ノ鋺ヲ入タル如クニ、頸ノ下ハ紅ノ色ニシテ、上ハ紺青綠青ヲ塗タルガ如クニツヤメキテ見ユ、前ニ下ラム者ヲ抱ケトハ敎ヘツレドモ、此ヲ見ルニ極メテ怖シクテ草ノ中ニ隱レ臥ヌ、暫許有テ郡ノ司出來テ、何ゾ抱キ得給ヘリヤト問ヘバ、極メテ怖シク思エツレバ不抱ツハト答フレバ、郡ノ司極ク口惜ク侍ル事カナ、然ラバ此事習ヒ難得シ、然ルニテモ今一度試ムト云テ又入ヌ、暫許見バ長ハ四尺計有猪ノ牙ヲ食出シタルガ、石ヲハラ〳〵ト食バ、火ヒラ〳〵ト出テ、

毛ヲ怒ラカシテ走リ懸テ食フ、極テ怖シク思ヘドモ、今ハ限リゾト思テ寄テ抱タレバ、三尺許ナル朽木ヲ抱キタリ、其時ニ妬ク悔シキ事无限シ、初モ此ル者ニテコソハ有ツラメ、何トテ不抱リツラムト思フ程ニ、郡ノ司出來テ何ゾト問ヘバ、然々抱タリツト答フレバ、郡ノ司前ノ開失フ事ハ習ヒ不得給ハ成ヌ、奇无キ物ニ成シナド爲ル事ハ習ヒ給ヒツメリ、然レバ其ヲ敎ヘ申サムト云テ、其事ヲナム習テ返ニケル、開失フ事ヲ習ヒ不得ヲ口惜ク思ヒケリ、京ニ歸上テ、内ニ參テ瀧口ノ陣ニシテ、瀧口共ノ履置タル沓共ヲ諍ヒ事ヲシテ、皆犬ノ子ニ成シテ這セケリ、亦古藁沓ヲ三尺許ノ鯉ニ成シテ、大盤ノ上ニシテ生ナガラ踊セナド爲ル事ヲナムシケル、而ル間、天皇此由ヲ聞食シテ、道範黒殿ノ方ニ召テ、此事ヲ習ハセ給ヒケリ、其後御几帳ノ手ノ上ヨリ、賀茂ノ祭ノ供奉ヲ渡ス事ナドヲ爲サセ給ヒケリ、

〔今昔物語二十八〕以外術被盜食瓜語第四十

今昔、七月許ニ、大和ノ國ヨリ、多ノ馬共瓜ヲ負セ列テ、下衆共多ク京ヘ上ケルニ、宇治ノ北ニ、不成ヌ柹ノ木ト云フ木有リ、其ノ木ノ下ノ木影ニ、此ノ下衆共皆留リ居テ、瓜ノ籠共ヲモ皆馬ヨリ下シナドシテ、息居テ冷ケル程ニ、私ニ此ノ下衆共ノ具シタリケル瓜共ノ有ケルヲ、少々取出テ切リ食ナドシケルニ、其ノ邊ニ有リケル者ニヤ有ラム、年極ク老タル翁ノ、帷ニ中ヲ結ビテ、平足駄ヲ履テ、杖ヲ突テ出來テ、此ノ瓜食フ下衆共ノ傍ニ居テ、力弱氣ニ扇ヲ仕ヒテ、此ノ瓜食フヲマモラヒ居タリ、暫許護テ翁ノ云ク、其ノ瓜一ツ我レニ食ハセ給ヘ、喉乾テ術无シト、瓜ノ下衆共ノ云ク、此ノ瓜ハ皆己等ガ私物ニハ非ズ、糸惜サニ一ツヲモ可進ケレドモ、人ノ京ニ遣ス物ナレバ、否不食マジキ也ト、翁ノ云ク、情不坐ザリケル主達カナ、年老タル者ヲバ、哀レト云フコソ、吉キコトナレ、然ハレ何ニ得サセ給フ、然ラバ翁瓜ヲ作テ食ハムト云ヘバ、此ノ下衆共、戲言ヲ云ナメリト、可咲ト思テ咲ヒ合タルニ、翁傍ニ木ノ端ノ有ルヲ取テ、居タル傍ノ地ヲ掘ツヽ、畠ノ樣ニ成シツ、

其ノ後ニ此ノ下衆共、何態ヲ此レハ爲ルゾト見レバ、此ノ食ヒ散シタル瓜ノ核共ヲ取リ集メテ、是ノ習シタル地ニ植ツ、其ノ後チ程モ无ク、其種瓜ニテ二葉ニテ生出タリ、此ノ下衆共此レヲ見テ、奇異ト思テ見ル程、其ノ二葉ノ瓜、只生ヒニ生テ這蔓ヌ、只繁リニ繁テ花榮テ瓜成ヌ、其ノ瓜只大キニ成テ、皆微妙キ瓜ニ熟シヌ、其ノ時ニ此ノ下衆共此レヲ見テ、此ハ神ナドニヤ有ラムト恐テ思フ程ニ、翁此ノ瓜ヲ取テ食ヒテ、此ノ下衆共ニ云ク、主達ノ不食ザリツル瓜ハ、此ク瓜作リ出シテ食ト云テ、下衆共ニモ皆食ハス、瓜多カリケレバ、道行ク者共ヲモ呼ツヽ食ハスレバ、喜テ食ヒケリ、食畢ツレバ、翁今ハ罷ナムト云テ立テ去ヌ、行方ヲ不知ラズ、其ノ後下衆共、馬ニ瓜ヲ負セテ行カムトテ見ルニ、籠ハ有テ其ノ内ノ瓜一ツモ无シ、其ノ時ニ下衆共、手ヲ打テ奇異ガルコト无限シ、早ウ翁ノ籠ノ瓜ヲ取リ出シケルヲ、吾等ガ目ヲ暗マシテ不見セケル也ケリト知テ、嫉ガリケレドモ、翁行ケム方ヲ不知ズシテ、更ニ甲斐无クテ、皆大和ニ返リテケリ、道行ケル者共此ヲ見テ、且ハ奇ミ、且ハ咲ヒケリ、下衆共瓜ヲ不惜ズシテ、二ツ三ツニテモ、翁ニ食セタラマシカバ、皆ハ不被取ザラマシ、惜ミケルヲ翁モ憾テ、此モシタルナメリ、亦變化ノ者ナドニテモヤ有ケム、其ノ後チ其ノ翁ヲ、遂ニ誰人ト不知テ止ニケリトナム語リ傳ヘタルト也、

〔撰集抄　四〕高野參事附骨にて人を造る事

同比(〇治承二年九月)高野の奥に住て、月の夜比には、或友達の聖ともろともに、橋の上に行合侍て、ながめながめし侍しに、此聖京になすべき態の侍とて、情なくふり捨てのぼりしかば、何となくおなじくうき世をいとひ、花月の情をもわきまへらん、友も戀しく覺しかば、おもはざる外に、鬼の人の骨を取集て、人に作なす樣、可信人のおろ〳〵語侍しかば、其まゝにして、廣野に出て、骨をあみ連ねて、造て侍れば、人の姿には似侍しかども、色もあしく、すべて心もなく侍き、聲は有ども、絃管の聲のごとし、げにも人は心がありてこそは、聲はとにもかくにもつかはるれ、たゞ聲の出べき

はかりごとばかりをしたれば、ふきそんじたる笛のごとし、大かたは是程に侍るもふしさなり、さても是をば何とかすべき、破らんとすれば殺業にやならん、心のなければ只草木とおなじかるべし、おもへば人の姿なり、しかじやぶれざらんにはとおもひて、高野の奥に、人もかよはぬ所におきぬ、もしをのづから人のみるよし侍らば、ばけものなりとやおぢおそれん、さても此事不思議に覺て、花洛にいでゝかへりし時、をしへさせ給へりし德大寺へまいり侍しかば、御參内の折ふしにて侍しかば、むなしくまかり歸りて、伏見前中納言師仲卿の御もとに參りて、此事を問奉りしかば、何としけるぞと仰られし時、其事に侍、廣野に出て、人もみぬ所にて、死人の骨を取集て、頭より手足の骨をたがへずつゞけ置て、ひざらと云藥を骨にぬり、いちごとはこべとの葉をもみ合て後、藤の若葉の糸などにて、骨をからげて、水にて度々洗侍て、頭とて髮の生べき所には、西海枝の葉と、むくげの葉とを、はいにやきて付侍て、土の上にたゝみをしきて、彼骨をふせて置て、風もすかずしたゝめて、二七日をきて後に、其所に行て、沈と香とをたきて、反魂の秘術をおこなひ侍きと申侍しかば、大方はしかなり、反魂の術猶日淺侍にこそ、我は思ざるに、四條大納言の流を受て、人を作侍き、今卿相にて侍と、其とあかしぬれば、作たる物も、作られたる物も、とけうせければ、口より外には出さぬなり、其程まで知られたらんには、教申さん、香をばたかぬなり、其故は香は魔緣をさけて、聖衆を集る德侍り、然かるに聖衆、生死を深くいみ給ふ程に、心の出くる事かたし、沈と乳とをたくべきにや侍らん、又反魂の秘術を行人も、七日物をばくうまじきなり、しかうして造り給へ、すこしもあひたがはじとぞ仰られ侍し、しかあれども由なしと思歸して、其後は造らぬなり、又中にも土御門の右大臣の造給へるに、夢におきな來て、我身は一切の死人を領せる物に侍り、主にものゝ給あはせで、何此骨をば取給にかとて、うらめる氣色見えければ、若此日記を置物にあらば、我子孫造て靈に取られなん、いとゞ由なしとて、やがてやかせ給にけ

り、聞も無益のわざと覺侍、よく〳〵心得べき事にや侍らん、

〔奇異雜談集三〕丹波の奧の郡に人を馬になして賣し事

はるかのむかし、たんばの國おくのこほりの事なるに、山ぎはに大なる家一軒あり、隣もなし、人數十人あまり、渡世心やすくみえたり、農作をもせず、職をもせず、あきなひをもせず、心やすき事人みなふしんす、馬をかひにゆくとも見えぬに、よき馬をうれり、一月に二疋三疋うるゆへに、これまた人ふしむするなり、かいどうなるゆへに、旅人一宿する事あり、ない〳〵人の申は、亭主大事の秘術をつたへて、人を馬になしてうるといへり、一定をばしらざるなり、あるとき旅人六人いきたり、五人は俗人、一人は會下僧なり、亭主うちへ請じいれて、枕を六つ出して、御くたびれなるべし、先御やすみあれといふ、俗人みな臥たり、客僧は丹後にて、粗きくことあるゆへに、ようじんする也、ざしきのおくにゐてふさず、垣のひまより內をのぞけば、いそがはしくみえたり、小がたなにて、かきのひまをすこしくりあけてよくみれば、盤の臺ほどなるものに土一盃あり、そのうへに物のたねをまきて、上に薦をきせたり、釜には飯をたき、汁をたき、鍋に湯をたけり、茶四五ふくのむほどして、もはやよかるべしとて、こもを取れば、あを〳〵としたる草二三寸にをひしげりたり、葉は蕎麥に似たり、それをとつて湯に煮て、そばのごとくにあへて、大なる椀にもりて、さいにして飯を出したり、俗人おきて皆食す、めづらしきそばかなといふて賞翫す、僧は食するよしゝて、すみのすのこの下へすてたり、饌をあげてのち、風呂をたきてたちて候、一風呂御いりあれといへば、もつともしかるべしとて皆いれり、僧はいるよしゝて、わきへはづして、東司のうちにかくれゐてよくみれば、亭主きり、かなづち、かなくぎをもちきたりて、風呂の戸をうちつけたり、客僧こゝにゐて、人にみつけられては曲なしとて、くらまぎれに出て、風呂のすのこの下へいりて、しづまりゐて、みれば、良ありて亭主、もはやよきぞ戸をあけよといひて、釘ぬきにて戸を

あくれば、馬一疋出ていなゝひてはしりてゆく、後にて門をさすゆへに、庭にをどりまはる、又一疋いで、又一疋出、五疋出たり、今一疋出しとてまてども出ず、火をあかしてみれば何もなし、今一人はいづかたへ行たるぞとたづぬる間に、すいこの下より出て、うしろの山にのぼりて遠く行なり、翌日關白しゆご所にゆきて、上くだんのやうをつぶさにかたれば、しゆごのいはく、曲事なり、關をよごし事さてはまことなりとて、人數をそつして彼に發向し、人をみなうちころしてはたすなり、

〔醍醐隨筆〕松永彈正久秀、多門在城の時、果心居士とて幻術の者有、閑暇の時は譚りなぐさむ、ある夜彈正、われ戰場において白刃を交るに至ても、終に恐懼の心を動かす事なし、汝試に幻術を行て、われを恐懼せしめよと云、果心さらば近習の人を遠ざけて、寸刃をも持たまはず、燈も消したまへなどいへば、各立のきける、刀劍のたぐひををくべからずといましめ、火うちけちて彈正一人箕踞して居れり、果心つゐたちて廣縁をあゆみ、前栽の間へ行とぞ見えし、俄に月くらく雨そぼふりて、風蕭瑟たり、蓬窓の裏にして瀟湘にたゞよひ、荻花の下にして潯陽にさまよふらんも、かくやと思ふばかり、ものがなしくあぢきなし、氣よはく心ほそくして、たへがたくなむ、いかにしてかく成ぬるやと、はるかに外を見やりたるに、廣縁にたゝずむ人あり、雲すきに見出しぬれば、ほそくやせたる女の髮長くゆりさげたるが、闇近くあゆみよりて、彈正にむかひて坐せり、何人ぞとゝへば、大息つゐて苦しげなる聲して、今夜はいとつれ〴〵にやおはすらん、人さへなくてといふをきけば、うたがふべくもあらぬ去年巳前病死して、おかぬわかれをかなしみぬる妻女なりけり、彈正たへがたくすさまじければ、果心居士やめよ〳〵とよばゝるに、件の女たちまち居士が聲となりて、これに侍るなりといふを見れば果心なり、いかゞして、これ程まで人の心をきよはすらんと、彈正もあきれてけり、もとより雨もふらず、月もはれわたりてくもらざりけ

り、此居士が術は、奈良邊の老人まのあたり見たりといふもの、山八三〇柳四九が童稚の比語りぬる、元興寺の塔へ、いづくよりかのぼりけん、九輪の頂上に立居て、衣服ぬぎてふるひ、又うちきて帶しめて、頂上に腰かけて、世上を眺望して下りたるとぞ、種々の神變共多かれど、怪事はしゐて語るべからず、今代も放下といひて、幻術目を驚かす事のみ多かり、これにつゐて思ふに、仙家に奇妙をふるまひて、古今を惑はすたぐひ、論ずるにたるなし、

古事類苑

方技部十

醫術一

醫術ハ、疾病ヲ除キ生命ヲ保全スル所以ノ方ニシテ、神代ノ時、大己貴、少彦名ノ二神、蒼生及ビ畜產ノ爲ニ、療病禁厭ノ方法ヲ定メシニ起リ、三韓支那ノ法ヲ傳フルニ至リ、其法益、精シク、近世西洋ノ醫術ヲ傳フルニ及ビ、其術大ニ進メリ、

古者朝廷醫藥ノ府ヲ置キ典藥寮ト云フ、宮內省ニ隷シ、頭以下ノ職員アリ、而シテ醫師、針師、按摩師、呪禁師、藥園師幷ニ各科ノ博士、生徒之ニ屬セリ、又中務省ニ內藥司アリ、寬平八年典藥寮ニ合セラル、又諸官衙及ビ國衙ニモ醫師醫生アリテ、專ラ醫療ノ事ニ從ヘリ、德川幕府亦醫療ノタメニ、若干ノ職員ヲ置キ、奧醫師、御番醫師等ノ名アリキ、

施藥院ハ、聖武皇后藤原氏ノ創立ニシテ、其職封幷ニ故贈太政大臣從一位藤原不比等ノ封戶等ニ依リテ費用ヲ辨ゼシガ、後自ラ朝廷ノ官衙ト爲リ、長官ハ必ズ藤原氏ノ人之ニ任ジ、判官、主典、醫師等其下ニ在リテ、療病ニ從ヘリ、是ヨリ前廐戶皇子、施藥院、療病院等ヲ設ケテ病者ヲ救ヒシコトアリシト云ヘド、年代邈トシテ其實ヲ知ルニ由ナシ、又養老中藤原氏ノ氏寺ナル興福寺ニ施藥院悲田院ヲ設ケ、中古北條時宗極樂寺ノ僧忍性ノ說ニ從ヒ、鎌倉ニ療病舍ヲ開キシコトアリ、德川幕府ニ至リ、小川笙船ノ建議ニ由リテ、小石川ニ養生所ヲ開ケリ、是レ實ニ享保中ノ事ニシテ、初ハ官醫交番シテ、此ニ在勤セシガ、後町醫ヲ以テ之ニ代

ラシメタリ、此他私人ノ施藥ヲ爲シヽモノモ亦之シカラザリキ、

醫術ノ學校ハ、往時典藥寮ノ内ニ在リ、各科ノ博士其敎授ニ任ズ、諸生ハ皆一定ノ試驗ヲ經テ成業ニ至レバ、又考課ヲ重ネテ漸次ニ昇進スル例ナリ、德川幕府時代ニハ享保年中、幕府特ニ古林見宜ニ命ジ、之ヲシテ書院ヲ開カシメ、都下ノ醫生ヲシテ聽講セシム、其後明和年中ニ至リ、多紀安元又請ヒテ醫術講究ノ場ヲ開ク、是レ即チ所謂醫學館ニシテ、終ニ幕府ノ公設ト爲ル、幕府ニテハ其末年ニ及ビ、又江戸及ビ長崎ニ洋方ノ醫學校ヲ建テタリ、當時又諸藩ニ在リテモ、往々醫學校ノ設アリシト雖モ、醫塾ハ甚ダ寥々トシテ隆盛ナルモノ少カリキ、

我國中古ニ至リ、丹波和氣ノ二氏、世々醫道ノ事ニ從ヒ、多ク名手ヲ出ス、故ヲ以テ此二流ヲ本道ト稱シ、醫術ノ名家トス、後世ハ治療ノ方法ニ據リ、其傳統ニ、和方家、古方家、後世家、西洋家、折衷家ノ流派アリ、而シテ疾病又ハ治方ニ由リテ科ヲ分チ、敎習治療セシコトモ古クヨリ之アリ、大寶令ニハ、體療、創腫、少小、耳目口齒、針按摩、呪禁等ノ諸科アリ、體療創腫ハ即チ後世ノ内科、外科ニシテ、少小ハ今ノ小兒科ナリ、又同令ニ女醫アリ、養老中ニ女醫博士ヲモ置キタレバ、當時既ニ産科婦人科等ノ設ケアリシコトヲ察ルベシ、

産科ハ德川幕府時代ニ至リテ、大ニ發達シ、分娩ニ諸種ノ器械ヲ使用スルニ至ル、當時賀川子玄最モ名アリ、其流ヲ賀川流ト云フ、又痘疹ニ關シテ、當時別ニ一科ヲ立ツルモノアリ、即チ池田瑞仙等ノ名手アリテ、功ヲ奏セシコト少カラズ、種痘ハ數百年前ヨリ安房ノ一村落ニ行ハルヽ所ナリシガ、延享中、支那人長崎ニ來リテ、種痘ノ法ヲ傳ヘタリ、其法ハ並ニ天然痘ノ痂ヲ採テ、之ヲ種ウルモノナリシガ、尋デ西洋ノ種痘法傳來スルニ及ビテ專ラ牛痘ヲ用キルニ至レリ、然レドモ其始ニ在リテハ、種痘往々其法ヲ誤リ、爲メニ世醫ノ嗷々タルモ

名稱

ノ多ク、一般人民ノ如キハ、多クハ之ヲ忌避シテ種痘スルモノハ甚ダ少カリキ、サレド其末造ニ及ビテハ、諸藩主ノ中ニモ其効ヲ知リテ牛痘ノ種子ヲ徴スルモノアリ、幕府モ亦種痘所ノ設立ヲ許シ、遂ニ種痘醫ヲ蝦夷ニ遣スガ如キ狀ナリシヲ以テ、此法幾クナラズシテ、全國ニ普及スルニ至レリ、

疾病ノ原因ニ就キテハ、古來種々ノ說アリテ、或ハ神ノ心ニ出ヅト云ヒ、或ハ前世ノ惡業ニ出ヅルモノモアリト云ヒ、或ハ外來ノ毒物ニ原因スト云ヒ、或ハ人心ノ鬱滯ニ基ヅクト云ヒ、或ハ飲食ヨリ來ルト云ヒ、或ハ腹中ノ臟腑ヨリ起ルト云ヒテ、其說一ナラザレドモ、要スルニ多クハ醫術ノ未ダ精シカラザル時代ノ臆說ニシテ、信ズルニ足ルモノ鮮シ、

解剖ハ、寶曆中山脇東洋京都ニテ行ヒシヲ始トスベシ、前野良澤、杉田玄白等ニ至リテ發明スル所多ク、遂ニ解體新書ノ著アルニ至ル、蓋シ人體內部ノ機關ヲ知ルハ、醫術上極メテ必要ナリト雖モ、支那ノ道德ニ在リテハ之ヲ不仁ノ術ト認メ、和漢共ニ久シク此擧ニ出ヅルモノナカリキ、サレド鍼灸ノ爲メニハ、明堂圖、銅人式等ノ設アリテ、人體經絡ヲ知ルニ便ナラシメシガ、解剖ノ開クルヤ、星野某、各務某等相尋デ木骨ヲ作リ、大ニ斯學ヲ資ケタリ、

醫療ハ通常藥餌ニ依ルト雖モ、或ハ鍼、灸、按摩、湯治等ニ依ルコトアリ、或ハ腫物ノ膿血ヲ去ルニ水蛭ヲ用キル等ノ法モアリ、而シテ又禁厭ハマジナヒト云ヒテ、呪禁ノ方ヲ以テ疾病ヲ退クルコト、神代ヨリ之レアリ、此法ハ往時ニ在リテハ呪禁博士、呪禁師等ノ職員アリテ之ニ從事シ、醫術ノ諸科ト相對シタリキ、

疾病ヲ豫防スルヲ養生ト云ヒテ、又醫方ノ掌ル所ナリ、病者ヲ看護スル方法ハ、上古多ク聞エズト雖モ、亦醫術ノ管スル所ナレバ、後世之ヲ論ジタルモアリキ、

〔伊呂波字類抄〕〔伊疊字〕醫方 醫師 醫家 醫療 醫術

〔運步色葉集 伊〕醫學(カク)　醫術(シユツ)

〔伊呂波字類抄 禮疊字〕療治 療病

〔通俗編 藝術二十一〕醫者意也　子華子北宮意問篇、醫者理也、理者意也、意其所未然、意其所將然、而謹訓于理、夫是以謂醫、後漢書方術傳、郭玉對和帝曰、醫之爲言意也、腠理至微、隨意用巧、事文前集、唐胤宗善醫、或勸其著書、答曰、醫者意也、思慮精則得之、口不能宣也、

〔古史傳 十八〕抑後世の藥師ども、禁厭法をば、都に用ひぬ事と成ぬれども、我が古は、上件の由緒あれば、更にも云はず、赤縣州にても、古は禁厭を專と用たりけり、其は彼國の醫術は、もと巫祝の徒より初りしかばなり、そは山海經と云書に、巫抵、巫陽、巫履、巫凡、巫相など云ありて、注に皆神醫なりとあり、此は呪禁、祓除、呪詛などを行ふ者ながら、其術をもて、病を愈す故に、そを醫とも云りと通ゆ、其は内經賊風篇に、先巫知百病之勝、先知其病所從生者、可祝而已也と云るをも思ふべく、また古今醫統に、巫咸は鴻術を以て堯の醫となる、祝して人の福を延べ、病を愈し、樹を祝すれば樹枯、鳥を祝すれば鳥墜などもあり、さて其呪禁を行ひて、病を治たる趣は、說苑と云書に、上古之醫、苗父之爲醫也、以菅爲席、以芻爲狗、北面而發十言耳、請扶而來、輿而來者、皆平復如故、と有を以て知べし、發十言とは、呪文を唱へたる事と通え、菅席芻狗など、古意に叶ひて聞ゆるは、下に云如く、大名牟遲小名牟遲神は、外國々に往來ます神なれば、彼神たちの傳へ給へるが遺れる法と通えたり、さて此術を行ふ者を巫醫といふ、論語に、人而無恒不可以作巫醫とある是なり、此を巫と醫と二ツに見たる說は非なり、其は汲冢周書と云物に、鄕立巫醫、具百藥、以備疾災、畜五味、以備百草、と云るをもて、巫と醫と二ツならぬ事を知べし、さて漸々に呪術をば次になして、藥を服しむる事を專と爲る者も出來し故に、周と云し代になりて、官を立るに、巫と醫を別にせり、其は周禮を見るに、巫の外に醫師と云官ありて、掌醫之政令、聚毒藥以共醫事と云ひ、また疾醫と云有て、掌養万民之疾病と見えたり、かく別に立たる故に、前の如く、巫彭、巫咸など稱ふこと止みて、春秋左氏傳などを見るに、醫を業とする者をば醫緩、醫和など云ふ事とはなりしなり、

〔漢書 藝文三十〕○○凡方技三十六家、百六十八卷、

方技者、皆生々之具、王官之一守也、大古有岐伯兪拊、中世有扁鵲秦和、師古曰、和秦醫名也、蓋論病以及國、原

醫術概見

診以知政、(師古曰、診視驗、謂視其脈及色候也、診音軫、又音丈刃反、)漢興有倉公、今其技術晻昧、故論其書、以序方技爲四種、○醫經、經方、房中、神僊、大凡書六略三十八種、五百九十六家、萬三千二百六十九卷、(入三家五十篇、省兵十家、)

〔藤原家傳 下 武智麻呂〕藤原左大臣、諱武智麻呂、略○中 神龜元年、略○中 六月遷大納言、略○中 方士有吉田連宜、御立連呉明、城上連眞立、張福子等、

〔日本書紀 二十二 推古〕十年十月、百濟僧觀勒來之、仍貢曆本及天文地理書幷遁甲方術之書也、是時選書生三四人、以俾學習於觀勒矣、陽胡史祖玉陳習曆法、大友村主高聰學天文遁甲、山背臣日並立學方術、皆學以成業、

〔續日本紀 八 元正〕養老五年正月甲戌、又詔曰、文人武士國家所重、醫卜方術古今斯崇、宜擢於百僚之內、優遊學業、堪爲師範者、特加賞賜、勸勵後生、

〔日本書紀 一 神代〕一書曰、大國主神、亦名大物主神、亦號國作大己貴命、略○中 夫大己貴命與少彥名命、戮力一心、經營天下、復爲顯見蒼生及畜產、則定其療病之方、又爲攘鳥獸昆虫之災異、則定其禁厭之法、是以百姓至今咸蒙恩賴、

〔釋日本紀 十四 述義〕伊豫國風土記曰、湯郡、大穴持命、見悔恥而宿奈毗古那命欲活、而大分速見湯自下樋持度來、以宿奈毗古奈命而浴漬者、蹔間有活起居、然詠曰、眞蹔寢哉、踐健跡處、今在湯中石上也、凡湯之貴奇不神世時耳、於今世染疹痾、萬生爲除病存身要藥也、略○下

〔古事記 上〕其八十神各有欲婚稻羽之八上比賣之心、共行稻羽時、於大穴牟遲神負帒、爲從者率往、於是到氣多之前時、裸兔伏也、爾八十神謂其兔云、汝將爲者、浴此海鹽、當風吹而、伏高山尾上、故其兔從八十神之敎而伏、爾其鹽隨乾、其身皮悉風見吹拆、故痛苦泣伏者、略○中 於是大穴牟遲神敎告其兔、今急往此水門、以水洗汝身、卽取其水門之蒲黃、敷散而、輾轉其上者、汝身如本膚必差、故爲如敎、其身如本也、此稻羽之素兔者也、略○中 故爾八十神怒欲殺大穴牟遲神、共議而至伯伎國之手間山本云、赤猪

傳所職不暇枚擧、典藥寮〈卽隋唐大醫署〉有典藥頭、〈秦漢以來太醫令之職〉有助、有允、有屬、有醫博士、女醫博士、鍼博士、侍醫、權侍醫、醫師、〈醫疾令曰、醫師十人、掌療諸疾病及診候、五位以上疾患者、遣醫師療之、〉醫師得業生、施藥院使、及主典、史生等職、〈詳見職原鈔〉天平寶字二年、詔使醫生講太素甲乙脈經本草、鍼生講素問鍼經明堂脈訣、〈見類聚國史〉延喜式曰、講醫經、太素經限四百六十日、新修本草三百十日、小品三百十日、明堂二百日、八十一難經六十日、凡太素經准大經、新修本草准中經、小品明堂八十一難經准小經、〈○註略〉天曆元年六月、詔課試醫道學生、〈見扶桑略記〉中世海內麻沸聲名文物、壞亂極矣、不特醫政之弗復古也、東山氏已還、醫者無官名、咸剪落著直裰、〈○註略〉敍法印法眼法橋等位、〈○註略〉其實倡員、而不隷倡綱、其所起未詳自何時、蓋在正慶建武之間乎、〈○註略〉迄近世、間有不剃髮稱爲儒者者、然而不剪落、則不得爲官醫也、

〔奇魂 一〕醫藥名義〈幷醫風變化附本道辨〉

さて此道に精しかりし人は、いと古くは詳ならず、藤原平城宮の比には、吉田連宜、御立連呉明、城上連眞立、尾張禰子、呪禁には韓國連廣足、今京となりては、出雲の宿禰廣貞、阿部朝臣眞直、紀宿禰禰吉、紀朝臣夏井、物部朝臣廣泉、大神朝臣庸主、菅原朝臣峯嗣、當麻眞人鴨繼、和氣朝臣廣世、丹波宿禰康賴主等、此他にも多かりとおぼしきを、後衰へて、近昔は僅に梶原性全、細川勝元等のみ聞えたり、其中に廣世朝臣、康賴宿禰主は、諸經に博く、殊に此道に秀られて、其著されたる書多かりて、其名世に高く、其子孫各其道を世々にせられたれば、をりには他家よりも出る事も有しかど、後世は最稀にて、大方和氣丹波家に極れるが如く成にたり、令の制は五位の官なれど、重く用玉ふに依て、四位にも三位にも叙られて、今世に至まで猶然ぞ有ける、かゝれば其家に時々勝れて、精き人も多かる中に、丹波雅忠主勝れたれば、世に倭扁鵲と稱へたりしを、外國まで聞傳けん、高麗國の后病たるに、其王大宰府まで請におこせしかども、其狀の禮なかりければ御許なくて、返牒に、牒得彼省牒偁云々、抑牒狀之詞、頗睽故事、改處分而曰聖旨、非蕃王可稱、宅遐陬而跨上邦、誠彝倫

攸敎、況亦託商人之旅艇、寄殊俗之單書、執圭之使不至、封函之禮既虧、雙魚猶難達、鳳池之月、扁鵲何得入雞林之雲、凡厥方物皆從却還云々（雞林は朝鮮の一名也）と仰玉ひし事抔、尤名高くして、今猶人も口實り、さて和氣氏系圖に、明重、昇殿、甲斐守正四下、施藥院使、典藥頭云々、實者丹波重長子、豫醫術達才、養爲子、自是和氏兼丹家之醫道、とあれば、故有て古より、各術は異なりけらし、〇中略皇國に、支那の醫法の初て傳しは、欽明天皇の御世に、智聰と云人の、遣唐使大伴佐手彥に隨て參渡り、百濟より、醫博士有棱陀を奉り、推古天皇御世、難波藥師惠日の唐へ行し抔にて、後も互に往來多かりしは、誰も知が如し、近くは或傳に、竹田定加、法名光英云々、應安二歲己酉、入大明云々、洪武間大明皇后、難產近死、以一針得活、而誕皇子、帝嘉其功、賜安國公封、（云々黑川道祐の醫考に竹田昌慶の傳とす）和氣氏系圖に、明親改、眞長法名澄玄、自稱蘭軒、後賜春字、號春蘭軒、又菊花紋賜、永正年中、渡唐見明皇帝、獻藥、在唐之間、與梅崖友善、歸朝後度々有書信云、道祐の醫考（吉田家社傳）に、宗桂稱意安、以醫術大有聞、號日華、宋開寶年中、撰諸家本草、能分寒溫、辨性味、宗桂亦能辨知倭藥、故世人以日華子稱之云々、天文八年、伴入明使僧天龍寺策彥而赴大明、明人以宗桂之診治有神察、呼稱意安、蓋取醫者意也之義也云々、同十六年與僧策彥再遊大明、于時獻藥於大明皇帝、著醫名於異域、と有ば、傚ふに元より其道に秀たる人々なめれど、醫此術の彼に勝たるが、其家に存を行へばこそ、其國王の其藥を請しか、

〔志都の石室上〕抑皇國ノ古ヘ、神代ハ申スニ及バズ、其後モ人心大ラカデ、物思ヒモ无ク、惡キ病ナドハ无キ故ニ、醫藥方術モ事少クテ、足ハヌコトモ无ツタル處ガ、仁德天皇ノ大御代頃ヨリ初メテ、次々ニ漢人ドモ多ク參來リ、書籍ドモ貢奉リ、又此方ヨリモ、彼國ノ物學ビニ大御使ヲ遣ハサレナド有テ、種々ノコト、醫藥方術、及ビ其書ドモ、傳ハリ來テ、人々其ヲ珍ラシタ思フニ付テハ、イツトナク皇國ノ方ハ粗略ニナリ、本ヨリ神學モテ書キタルモ有レド、漢字モテ記セルガ多ク、彼此ト和漢紛ラハシク、人々次第ニ漢意ニ移リ行テ、終ニハ皇國ノ醫藥方術ヲバ、重ンゼザルコ

トヽ成タルハ、甚以テ慨ク憤ロシキコトデゴザル、然ルニ近頃、ワガ古學ノ興リタルヨリ、此道モ開ケ初テ、漢方ニ依ラズ、醫療ヲ爲ス者モ、カツ〴〵出來タルハ、然スガニ神ノ御國ノ印ニテ、イトモ愛タキコトデゴザル、

サテ外國ヨリ渡來タル物ノ中ニ、醫藥ノ道ナドハ、本ヨリ我大神等ノ、彼處ニ敏ク、御傳ヘ置ナサレタルモ有ト見エテ、殊ニ用ヲ爲ス故ニ、又イツトナク御國ノ物ト成テ、昔ク用フル上ハ、本ヨリ外國ノ方ジヤトテモ、強テ嫌フベキコトデハ无イ、其ト云モ、漢國ハ國ガラ惡キ故ニ、病症モムツカシク、尤モ藥品モ風土ニ依テ、ヒヨコビタル物多ク、療法モ其ニ應ズルコト故ニ、自然ト委クモ成來タル物デゴザル、然ルニ御國モ、中古ヨリ以來ハ、儒佛ノ道モ弘マリ、彼コレト物ゴト煩ハシク、人心ワルク賢シク、物思フコトノ多クナルニ付テハ、古ニ无キ難病ドモヽ出來タニ依テ、ソコデカノ漢方ガ丁ドヨク相應スルヤウニ成テ、行ハレタ物デゴザル、譬ヘバ盜人多キ國々ニテハ、險シキ法度ヲ立ルト同ジ理デ、ムツカシキ病ガ出ルト、又隨テ此道ニ賢シキ人ガ出來ル、醫者多キ地ニハ、難病モ多イ物デ、如此ク段々委シクモ煩ハシクモ成來タモノデゴザル、

サテ又近ゴロ、西ノ極ナル阿蘭陀ト云國ヨリシテ、一種ノ學風オコリテ、今世ニ蘭學者ト稱スル者、即チソレデゴザル、元來、ソノ國柄ト見エテ、物ノ理ヲ考ヘ究ムルコト甚ダ賢ク、仍テハ發明ノ說モ少カラズ、天文地理ノ學ハ云ニ及バズ、器械ノ巧ナルコト、人目ヲ驚カシ、醫藥製煉ノ道コトニ委ク、其書ドモヽ次々ニ渡リ來テ、世ニ弘マリ初タルハ、即チ神ノ御心デアラウデゴザル、然ルニ其渡リ來ル藥品ドモノ中ニハ、効能ノ勝レタルモ有リ、又ハ製煉ヲ盡シテ、至テ猛烈ナル類モ有テ、良醫コレヲ用ヒテ病症ニ應ズレバ、灼然キ効驗ヲ奏スモ有レド、本ソノ藥性ヲ知ラズ、又ハ其藥性ハ知テモ、庸醫ラハ其用フベキ處ヲ知ラズ、若ソノ病症ニ應ゼザレバ、大害ヲ生ジテ、忽チ人命ヲ亡フニ至ル、此ハ譬ヘバ猿ニ利刀ヲ持セ、馬鹿ニ鐵砲ヲ放タ令ルヤウナ物デ、信ニ危イコ

典藥寮名稱

沿革

廳舍

トノ甚シイデゴザル、

〔倭名類聚抄 五官名〕職員令云、○中略典藥寮〈久須里乃豆加佐〉

〔朝野群載 六太政官〕諸司綱詞　典藥寮〈クスリノ〉

〔職原抄 上〕典藥寮 唐名大醫署　又云尙藥局、

〔日本書紀 二十九天武〕四年正月丙午朔、大學寮諸學生、陰陽寮外藥寮、○中略等捧藥及珍異等物進、

〔書紀集解 二十九天武〕按、中務省所管有內藥司、對內藥外也、此時猶闕典藥寮、爲外藥寮可知也、

〔拾芥抄 中本宮城〕典藥寮 宮城內、郁芳門北、左馬寮東、

〔大內裏圖考證 二十六宮內省〕據諸圖書所考定典藥寮等占地圖



〔日本紀略 三村上〕天曆元年七月四日丁亥、今夜大風猛烈、○中略典藥寮東檜皮葺屋等顚倒、○又見扶桑略記

〔百練抄二十七條〕長寛元年十二月十三日、左馬寮典藥寮中院等燒亡、

〔延喜式典藥三十七〕凡諸國所送授業師料物者、勘納寮庫、

〔令義解一職員〕典藥寮

頭一人、掌諸藥物、療疾病、謂依醫疾令、五位以上疾患者、並奏聞、遣醫師爲療、是也、及藥園事、助一人、允一人、大屬一人、少屬一人、醫師十人、掌療諸疾病、及診候、醫博士一人、掌諸藥方脈經、教授醫生等、醫生卅人、掌學諸醫療、針師五人、掌療諸瘡病、及補寫、謂虛者補之、實者寫之、針博士一人、掌教針生等、針生廿人、掌學針、按摩師二人、掌療諸傷折、按摩博士一人、掌教按摩生等、按摩生十人、掌學按摩、療傷折、呪禁師二人、掌呪禁、呪禁博士一人、掌教呪禁生、呪禁生六人、掌學呪禁、藥園師二人、掌知藥性色目、謂寒温爲性、形狀爲色、名稱爲目也、種採藥園諸草、及教藥園生、藥園生六人、掌學識諸藥、使部廿人、直丁二人、藥戸、乳戸、

〔令義解一官位〕從五位階○下　典藥頭　正六位階○上　內藥正　正六位階○下　內藥侍醫　從六位階○上　典藥助　正七位階○下　醫博士　從七位階○上　典藥允、略○中　呪禁博士、從七位階○下　內藥佑、略○中　醫師、略○中　針博士、正八位階○上　呪禁師、針師、藥園師、正八位階○下　按摩博士　從八位階○上　按摩師　從八位階○下　典藥大屬　大初位階○上　典藥少屬、略○中　內藥令史、

〔官職秘抄下〕典藥寮

頭　當道上臈任之、但依名譽、

助權　往古以如公卿給被任之、近代一向以當道者被任之、

允大少　當道者任之、多自屬轉之、元者如他諸司、院宮給等任之、而雅忠朝臣爲寮頭之時、屬等非當道之輩不可任之由申請畢、其後爲連奏、

屬大少　自醫師轉任之、

醫師　自得業生補之

已上尤屬醫師等爲連奏、

醫博士（𩛰）　殊選其人器任之、如門生者不任之、但惟宗俊通拜除之、兄弟相並例（忠康、重康、）

針博士（𩛰）　撰其器授之、自得業生任之例、（忠明）

侍醫（𩛰）　又撰其人其器門生任例、（𩛰）父子相並例、（康頼、雅忠、長德二年重康、忠康、長治元年忠康、雅康、）

女醫博士（令外官、有二𩛰官、）　撰其器、或以道學任之、

諸衛醫師　以道學任之

〔職原抄　上〕典藥寮（唐名大醫署、又云尚藥局、）　頭一人（相當從五位下、唐名大醫令、又尚藥奉御、）　醫道極官也、他人不任之、　助一人（相當正六位下、唐名大醫丞、）　同道五位六位共任之也、　允（大少、大醫監、）　同當門徒可任之歟、他人強不任之也、　屬（大少、唐名大醫史、）

醫博士（相當正七位下、唐名大醫博士、）　女醫博士（相當同上、唐名同上、）　針博士（相當從七位上、唐名主針、）同上、

侍醫（相當正六位下、唐名侍御醫、）　當道重之歟、侍醫其職此云、宰㝵殿常候禁中、故稱侍醫也、主上出御殿上之時、侍醫參小板敷奉見龍顏、故云宰㝵殿云々、近代四位五位任之、　權侍醫　同道五位六位任之歟

醫師（相當從七位下、唐名醫師、）

〔政事要略　九十五至要雜事〕醫疾令云、醫博士取醫人（謂、十醫師也、下條、患家請醫人姓名是也、即不必取注當醫長者、故下條云、醫師不第、量堪療疾者、補醫師也、）

內法術優長者（謂、法者所學之術也、術者所習之驗也、）爲之、

〔周禮注疏　一天官冢宰〕醫師、上士二人、下士四人、府二人、史二人、徒二十人、（注、醫師衆醫之長、　醫師在此者、案其職云、掌醫之政令、聚毒藥以共醫事、諸醫皆屬焉、食醫亦在此者、案其職云、掌和王之六食六飲、故在飲食之間也、○中略）　疾醫、中士八人、（疏曰、案其職云、掌養萬民之疾病、故連醫在此、）

〔唐六典　十四太常寺〕太醫署○中略

醫師二十人、醫工一百人、

周禮有醫師上士下士、漢有醫工長、第五倫補爲淮陽王醫工長是也、隋太醫有師二百人、皇朝置二十人、醫工一百人、○中略

醫生四十人典學(新唐志、典學作典藥、)二人

後周醫正、有醫生三百人、隋太醫有生一百二十人、皇朝置四十人、貞觀後置典學二人、○中略

凡醫師、醫正、醫工、療人疾病、以其痊多少書之、以爲考課、

毎歲常合傷寒時氣瘧痢傷中金瘡之藥、以備人之疾病者、○中略

醫博士一人、正八品上、助教一人、從九品上、(新唐志作從九品下、)

晉代以上手醫子弟代習者、令助教部教之、宋元嘉二十年太醫令秦承祖奏置醫學、以廣教授、至三十年省、後魏有太醫博士助教、隋太醫有博士二人、(隋志有助教二人、)掌醫、皇朝武德中、博士一人、助教二人、貞觀中減置一人、又置醫師醫工佐之、掌教醫生、○中略

〔令集解五職員〕典藥寮(天平二年三月廿七日、官奏、○醫○得○業○生○三○人、○准大學生也、見大學寮條釋也、弘仁五年三月十二日官符云、置得業生四人事、右太政官今月十一日下中務省符偁、得被省解偁、內藥司解偁、醫針之道、國家大要、其業衰絕無人可師、望請永置件生、教傳醫業者、被右大臣宣偁、奉勅依請、)

〔朝野群載二十五醫道〕太政官符　式部省

應補醫得業生壹人事

醫生正六位上行田朝臣文信　左京人

得業生大中臣致忠奉試及第替

從五位下權醫博士兼丹波介清原眞人爲時弟子

讀書

新修本草經一部　黃帝明堂經一部　小品方一部

右得宮內省去年月日解偁云々者、(某)宜依請者、省宜承知依宜行之、符到奉行、

辨　史

年月日

〔續日本紀 九元正〕養老六年十一月甲戌、始置女醫博士、

〔享祿本類聚三代格 四〕太政官符

侍醫四人　女醫博士一人　藥生十人

右依太政官去八月廿九日論奏、内藥司併典藥寮旣訖、遣唐大使中納言從三位兼行民部卿左大辨春宮權大夫侍從菅原朝臣道眞宣、奉勅、件等侍醫女醫博士藥生等、宜隷□□

寛平八年十月五日

〔玉海〕承安五年〇安元元年四月十三日甲子、召女醫博士丹波經基子基康於前、可製勒散合、合之爲見習也、

〔吾妻鏡 三十三〕仁治二年〇延應元年十一月廿日乙酉、巳剋二棟御方大宮殿有御產氣、自大倉移于施藥院使良基朝臣藥師堂宅給、可爲御產所云云、御驗者助僧正嚴海以下皆以參集彼所、鳴弦役人參進、爲兵庫頭定員奉行、御祈等事、有其沙汰云云、　廿一日丙戌、辰剋御平產也、若君先御驗者三人、民部卿僧都、宰相僧都、大夫僧都賜祿、被引御馬、重一 次醫道女醫博士賴行給祿、三重衣

〔三代實錄 四十一〕元慶六年正月七日庚戌、授〇中略侍醫兼針博士長門權介葛城宿禰高宗等並從五位上、

〔唐六典 十四太常寺〕太醫署〇中略

鍼博士掌敎鍼生以經脈孔穴、使識浮沈澁滑之候、又以九鍼爲補瀉之法、〇中略

凡鍼生習業者、敎之如醫生之法、

鍼生習素問、黃帝鍼經、明堂脈訣、兼習流注偃側等圖、赤烏神鍼等經、業成者試素問四條、黃帝鍼經明堂脈訣各二條、

〔唐六典太常寺十四〕太醫署○中略

太醫令掌諸醫療之法、丞爲之貳、其屬有四、曰醫師、鍼師、按摩師、呪禁師、皆有博士以敎之、其考試登用、如國子監之法、

〔三代實錄光孝四十九〕仁和二年正月七日丁亥、授○中略侍醫兼針博士阿比古氏雄並外從五位下、

〔三代實錄光孝五十〕仁和三年二月二日丙午、從四位下行中務大輔十世王爲加賀權守、○中略從五位上內藥正兼侍醫針博士深根宿禰宗繼爲介、

〔玉海〕建久二年七月十一日丁巳、針博士和氣定親、故奥藥頭定成末子、顔得道之骨云々、來於前、令合麝香丸、以今案加麝香丸今一也、分、卽令進中宮了、

〔三代實錄淸和二十六〕貞觀十六年八月九日乙丑、外從五位下行權針博士下道朝臣門繼卒云云、門繼有至性、篤信佛敎、常著袈裟、誦佛經、行路遇僧必下馬、揖而過之、久病臨命剃髮爲僧、

〔政事要略雜事九十五至要〕又醫疾令云、醫針生、按摩呪禁生、專令習業、不得雜使、謂旬假及田假、授衣假等、並准大學生、

〔政事要略雜事九十五至要〕醫疾令云、醫博士取醫人○中略註、內法術優長○略註者爲之、按摩、呪禁博士亦准此、○註略

又云、醫生按摩生呪禁生○中略取藥部及世習、○中略

又醫疾令云、按摩生、學按摩、傷折方、及刺縛之法、謂、按摩者、令他人乘擧揚抑、或摩使筋骨調暢、邪氣散洩也、傷折者、折跌也、刺縛者、以鍼刺決折傷之瘀血、是爲刺也、腕傷之重者繫縛、按摩導引令其氣復、是爲縛也、○中略皆限三年成其業、成之日、並申送太政官、謂、考試法式并等第高下、並待式處分、

〔唐六典太常寺十四〕太醫署○中略

按摩博士一人、從九品下、

崔實政論云、熊經鳥伸延年之術、故華他有五禽之戲、魏文有五槌之鍛、仙經云、戶樞不朽、流水不腐、謂欲使骨節調利、血脈宣通、卽其事也、○中略

按摩師四人、按摩工十六人、

隋太醫有按摩師一百二十人、無按摩工、皇朝置之、

按摩生十五人

隋太醫有按摩生一百人、皇朝武德中置三十人、貞觀中減置十五人也、

按摩博士掌教按摩生、以消息導引之法、以除人八疾、一曰風、二曰寒、三曰暑、四曰濕、五曰飢、六曰飽、七曰勞、八曰逸、凡人支節府藏積而疾生、導而宣之、使內疾不留、外邪不入、若損傷折跌者、以法正之、

〔日本書紀二十敏達〕六年十一月庚午朔、百濟國王付還使大別王等、獻(略)○中呪禁師、造佛工、造寺工六人、遂安置難波大別王寺、

〔日本書紀三十持統〕五年十二月己亥、賜醫博士務大參德自珍、呪禁博士木素丁武、沙宅萬首、銀人二十兩、

〔政事要略九十五至要雜事〕又醫疾令云、呪禁生、學呪禁解忤持禁之法、(謂、持禁者、持杖刀讀呪文、作法禁氣、爲猛獸虎狼毒虫精魅賊盜五兵、不被侵害、又以呪禁固身體、不傷湯火刀刃、故曰持禁也、解忤者、以呪禁法解衆邪驚忤、故曰解忤也、)皆限三年成其業、成之日、並申送太政官、(謂、考試法式并等第高下、並依式處分、)

〔唐六典十四太常寺〕太醫署(略)○中

呪禁博士掌教呪禁生、以呪禁拔除邪魅之爲厲者、

有道禁、出於山居方術之士、有禁呪、出於釋氏、以五法神之、一曰存思、二曰禹步、三曰營目、四曰掌決、五曰手印、皆先禁食葷血、齋戒於壇場、以受焉、

〔唐六典十一殿中省〕呪禁師四人

皇朝初置

〔藤原家傳下武智麻呂〕藤原左大臣武智麻呂(略)○中神龜元年(略)○中六月、遷大納言、(略)○中當此時、呪禁有余仁軍、韓國連廣足等、

補任

〔續日本紀稱德二十八〕神護景雲元年八月癸巳、陰陽員外助從五位下紀朝臣益麻呂敍正五位下、〇中略呪禁師末使主望足、並外從五位下、

〔續日本紀聖武十五〕天平十五年六月丁酉、外從五位上倭武助爲典藥頭、

〔續日本紀淳仁二十二〕天平寶字三年五月壬午、外從五位下馬史夷麻呂爲典藥頭、

〔續日本紀光仁三十一〕寶龜二年九月己亥、從五位下田部宿禰男足、爲典藥員外助、

〔日本後紀桓武五〕延曆十五年十月壬戌、始置典藥寮史生四人、

〔延喜式式部十八〕凡諸司史生者、〇中略典藥寮四人、

〔三代實錄淸和六〕貞觀四年十二月七日辛丑、典藥寮始置寮掌一員、

〔延喜式式部十八〕凡諸司使部者、〇中略典藥寮掃部寮各十人、

〔延喜式式部十八〕凡大學諸博士六位已下、兼任諸國權博士、但先奏後補、典藥醫針博士准之、兼任權醫師、

〔三代實錄淸和十四〕貞觀九年二月十一日辛巳、外從五位下行針博士深根宿禰宗繼爲醫博士、

〔中右記〕永久二年十二月十五日、今夕有下名、治部卿、左大辨、藏人辨、少納言宗兼參候云々、此次、醫博士雅康、兼針博士、又馬允一人被成口、〇中略十六日、〇中略裏書云、後日大外記之說、道博士之中兼兩博士、未曾有事也、雅康口留希代之例也、

〔續古事談五諸道〕典藥頭滋秀ガ申ケルハ、典藥別當ノ公卿ハカナラズ大臣ニナルナリ、六條左大臣〇源重信小野宮右大臣〇藤原實資コレナリトゾ、自然ノコトニヤ、又ユヘアルニヤ、オボツカナシ、タシカニ考フベシ、

寮田用途

〔類聚三代格十五〕勅、〇中略天文、陰陽、曆、算、醫、針等學、國家所要、並置公廨之田、應用諸生供給、〇中略內藥司八町、典藥寮十町、所司宜准件施行、

天平寶字元年八月廿三日〇又見續日本紀

〔類聚三代格十五〕太政官符

應定醫博士職田事

合博士廿人應給職田七十三町 内五十二町、外廿一町、○中略

醫博士職田四町

攝津國一町 豐島郡

山背國二町 相樂郡

近江國一町 高島郡、並元位田、

右今改置醫博士職田、

針博士職田三町 元四町、今減二一町、

山背國二町 紀伊郡

右圖書註針博士職田、

近江國一町 高島郡、元位田、

右今改置針博士職田

以前被右大臣宣偁、奉勅、今聞、所行職田、彼此相貫無有定處、或以博士田給助教、或以助教田給直講、正名之理不可如此、○中略 針博士承前之例、所給四町今減一町、定三町、自餘諸博士依前例給之、仍擇取中品以上色別定給、勿令相貫、自今以後永為恒例、

延暦十年二月十八日

〔類聚三代格十五〕太政官符○中略

一充二寮○典藥、主馬、田十三町 節田、勸學田、

典藥寮勸學田八町 大和國四町、近江國四町、(中略)

右更加置之、

以前被右大臣宣偁、奉勅如右、

延暦十七年九月八日

〔延喜式　典藥三十七〕勸學田十八町

十三町（大和國九町、近江國四町、）

右以其地子加月料、共充醫鍼生食、

五町（大和國）

右以其地子充藥生等食、

〔類聚國史　百七職官〕天長三年九月丙寅、河内國澀河郡荒廢閑地二十町充典藥寮、七年正月戊戌、近江國荒廢田三十七町八段、空閑地二十町五段、賜典藥寮、

〔續日本後紀　六仁明〕承和四年七月庚寅、是日勅、以宮城北園池司地卅二町内荒廢地二町、永充典藥寮、

〔類聚三代格　十五〕太政官符

應給官田九十二町三段百卌八步事

山城國卅二町五段廿七步

和泉國七町

攝津國五十二町八段十一步

右得宮内省解偁、典藥寮解偁、月粮米停給京庫、以官田所請、如件者、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、

仁和二年十月十九日（○又見三代實錄）

〔類聚三代格　十五〕太政官符

應以官田充諸司要劇并番上料事（○中略）

典藥寮雜載

攝津國十一町五段二百三十六步

右典藥寮侍醫等要劇料○中略

以前遣唐大使中納言從三位兼行民部卿左大辨春宮權大夫侍從菅原朝臣宣、奉勅、件要劇番上等料、宜停給京庫、以官田給之、

寛平九年二月十七日

善相公（清行）○中略

〔本朝文粹二意見封事〕意見十二箇條

一請加給大學生徒食料事○中略

又有勅、分山城國久世郡田卅町、爲四分、其三分給典藥左右馬三寮、纔留其一分、充學生料、

〔三代實錄十六清和〕貞觀十一年十二月二日乙酉、制加增典藥寮五位官人一員馬料、立爲恒例、

〔延喜式三十六主殿〕典藥寮胡麻油四升一合、（雜供御地黃料）諸膏二百十三斤十五兩、（造供御幷中宮春宮坊御藥及人給料）

〔延喜式三十七典藥〕年料雜物

紙二百張、鐵臼一口、鍋子一口、白銅一合、刀子四枚、（各長七寸）鍬廿五口、（廿口藥園、五口寮家）砥一顆、缶叩盆椀各四口、

右依前件、其鍬砥三年一充、（藥園上件）臼鍋子宮隨破請換、

〔延喜式三十七典藥〕凡諸書廉料、折薦簀二枚、（醫生料博士料）長疊三枚、（生料）並隔三年、申省請受、

〔延喜式十八式部〕凡典藥寮、不參興福寺國忌、

內藥司

〔令義解一職員〕內藥司

正一人、（掌供奉御藥、和合御藥事、）佑一人、令史一人、侍醫四人、（掌供奉診候醫藥事、謂、診驗也、候望也、言診驗血脈、候望顏色也、此診驗者、與醫疾令所謂診候醫藥、其意少異也、）藥生（謂、此生部侍者之人、以自親供事故、）十人、（掌擣篩諸藥、）使部十人、直丁一人、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

侍醫四　女醫博士一人　藥生十人

右依太政官去八月廿九日論奏、內藥司併典藥寮既訖、遣唐大使中納言從三位兼行民部卿左大辨
春宮權大夫侍從菅原朝□□□宣、奉勅、件等侍醫、女醫博士、藥生等、宜隷□□

寬平八年十月五日

〔續日本紀文武一〕三年正月癸未、詔授內藥官桑原加都直廣肆、賜姓連、賞勤公也、

〔續日本紀光仁三十一〕寶龜二年閏三月戊子朔、外從五位下吉田連斐太麻呂爲內藥正、

〔文德實錄二〕嘉祥三年十一月己卯、從四位下治部大輔興世朝臣書主卒、書主右京人也、本性吉田連、其先出自百濟、祖正五位上圖書頭兼內藥正相模介吉田連宜、父內藥正正五位下右麻呂並爲侍醫、累代供奉、宜等兼長儒道、門徒有錄、書主爲人恭謹、容止可觀、○下略

〔三代實錄淸和四〕貞觀二年十二月廿九日甲戌、從五位下行內藥正大神朝臣虎主卒、虎主者右京人也、○中略幼而俊辨、受學醫道、針藥之術殆究其奧、承和二年爲左近衞醫師、遷侍醫、

〔續日本紀淳仁二十二〕天平寶字三年七月丁丑、內藥佐從七位下栗田臣道麻呂賜姓朝臣、

〔續日本紀稱德二十九〕神護景雲二年閏六月乙巳、內藥佐外從五位下雀部直兄子爲兼參河員外介、

〔名目抄人體〕侍醫(ヲモトクスシ)元三御藥參勤

〔延喜式十一太政官〕凡左右辨、外記、史、內記、侍醫等、○中略雖非侍從臨時宴會得預見參、

〔禁秘御抄中〕醫道
侍醫常近龍顏者也、召小板敷、於殿上倚子、奉拜天顏、又召便宜所候簾中、取御脈例也、後冷泉院御時、俊通雅忠頻聽雜袍、著紅梅直衣、近代無子細參御橡者也、但不臨殿上方、藏人所如此者重也、然而藏人所程遠之間近參也、時成動居渡殿末、與侍臣物語、是過分儀也、元三之外著衣冠參者也、典藥頭侍醫之外、名譽者別被召、無何末門生等不可參云々、

〔日本書紀天武二十九〕朱鳥元年四月丁丑、侍醫桑村主訶都授直廣肆、因以賜姓曰連、　五月戊申、是日侍

醫百濟人億仁病之臨死、則授勤大壹位、仍封一百戸、

〔續日本紀 三十五 光仁〕寶龜九年八月癸巳、從五位下淨岡連廣島爲典藥頭、侍醫如故、

〔吾妻鏡 四十六〕建長八年(康元元年)九月十九日丙午、中務卿將軍家御沐浴、陰陽少允晴宗候御身固、陰陽師、權侍醫長世開鍼、

藥司

〔伊呂波字類抄 久 官職〕藥司(クスリノツカサ)

〔令義解 一 後宮職員〕藥司

尚藥一人、(掌供奉醫藥之事、)典藥二人、(掌同尚藥、)女孺四人、

〔名目抄 人體〕尚藥(シヤウヤク、元三御藥陪膳號之人、)

〔續日本後紀 十六 仁明〕承和十三年五月丁卯、從五位下登野王爲尚藥、

〔延喜式 十二 中務〕藥司

九月九日藥司典藥料、緋帛一疋、緋絲二絇、(皇后宮亦同)年料破廿疊、細布一端、庸布一段、柳筥二合、明櫃二合、麻笥二口、杓二柄、由加一口、陶盤廿合、手洗二口、著臺二口、堝坏卅口、盤坏廿口、瓶二口、椀廿口、叩瓮二口、(已上年料)油絁一丈、兩面一丈八尺、絁一丈八尺、緋帛四丈、緋絲一兩、細布一丈六尺、調布二丈四尺、(藥囊料、蜜藥并御藥雜藥料、破壞闕損、隨狀請備、)

藥殿

〔拾芥抄 中 宮城〕所々

藥殿(在安福殿内、侍醫醫生等候、有熱食、)

〔永昌記〕長治三年(○嘉承元年)四月七日戊辰、今日御物忌、御藥令被給、重康並親等候于藥殿、人々多以參籠、

〔續古事談 一 王道后宮〕後冷泉院御時、主殿寮ヤケヽル時、(中略)クスリ殿ノ御クウシハ、ヤブレ損ジタリケルヲ、雅忠典藥頭ノ時、アタラシキ銀ヲフルキニマセテ、ウチカヘテ、供御ニソナヘケリ、

施藥院名稱　所在　沿革　職員補任

〔伊呂波字類抄世官職〕施藥院使主典判官

〔倭訓栞中編二十七〕やくゐん　施藥院のよみくせなり、拾芥抄に、施藥院は養病人所也と見ゆ、今の施藥院は丹波家の裔なり、

〔拾芥抄中末宮城〕諸院

施藥院藥院唐橋南、室町西云々、施藥院同所也、東五條、藤氏先祖、中納諸國藥種、養病人所也、有使、以辨別當、主典及外記爲別當、

〔聖德太子傳曆上〕推古天皇元年本願緣起云、(中略)四箇院建立意趣何以蓋乎、施藥院是令植一切芝草藥物之類、順方合藥、隨各所樂、普以施與、療病院是令寄宿一切男女無緣病者、日々養育如師長父母、於病比丘相順療治、藥物蒜肉任所願樂、令服差愈、但限日期祈三寶、令于無病、莫違戒律、努力、(中略)其養料攝津國河內國、每國官稻各三千束、以是供用、(中略)四箇院建立緣起大概如斯、

〔日本書紀天武二十九〕白鳳八年十月、勅曰、凡諸僧尼者、常住寺內、以護三寶、然或及老、或患病、其永臥陜房、久苦老病者、進止不便、淨地亦穢、是以自今以後、各就親族及篤信者、而立一二舍屋于間處、老者養身、病者服藥、

〔扶桑略記元正六〕同七年〇養老年、興福寺內、建施藥院、悲田院、施入封戶五十烟伊與國水田百町、越前國稻十三萬束、

〔續日本紀聖武十〕天平二年四月辛未、始置皇后宮職施藥院、令諸國以職封并大臣家封戶庸物價買取草藥、每年進之、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

置施藥院使員事

使一人　判官一人　主典一人　醫師一人

右被左大臣宣偁、奉勅、承前院預名爲別當、今改置如件、仍須遷替之日令進解由、其宛補之人、官定下之、但不賜俸料、唯給考而已、帶官之徒不在此限、

天長二年十一月二日○又見二類聚國史一

〔伊呂波字類抄官職也〕施藥院使宇多天皇御宇、寛平二年庚戌、

〔職原抄下〕施藥院使　使同職令　醫道四位以下任レ之、爲二彼道重職一也、

〔官職秘抄下〕施藥院司令外官

使有判官主典、　名譽醫師補レ之、元諸大夫幷一道輩任レ之、而雅忠任レ之後、一向爲二當道職一、

〔知信朝臣記〕大治五年二月一日甲戌、有二下名一、其次任官等、侍醫丹波重忠補二施藥院使一、氏大臣被二宣下一、仍被レ仰二右大臣一、重基任二典藥頭一替歟、殿下○藤原忠通召二重忠一被レ仰了、

〔吾妻鏡二十五〕承久三年七月十三日乙未、上皇鳥羽行宮、遷二御隱岐國一、甲冑勇士圍二御輿前後一、御共女房兩三輩、内藏頭清範入道也、但彼入道、自レ路俄被二召返一之間、施藥院使長成入道、左衞門尉能茂入道等追令レ參上云云、

〔寛永系譜三百九十一〕丹波姓施藥院○中略

全宗十○一事蹟醫術二

施藥院法印　生國近江○下略　昇殿

はじめは山門の僧なり、醫となり、のち還俗して、翠竹院道三にしたがひ醫術を學ぶ、秀吉一統のとき、全宗つねに帷中に侍して、恩遇他に異なり、いふところかならず聽れ、のぞむ所かならず達す、　天正年中、秀吉特に朝に達して、施藥院使に任ず、時に門戸をひらき、天下疾病の者をまねき集め、藥餌をほどこす事一百日にして、施藥院の實を示す、そのゝちも、又此事をなすこと一百日、全宗は、もと丹波氏なり、醫術にをひて其傳あり、子孫施藥院をもつて稱號とす、

これ官をもつて氏とする例か、

〔延喜式十一太政官〕凡施藥院別當、用二藤原氏一人外記一人一、其遷替之時、不レ責二解由一、

〔西宮記臨時二〕施藥院崇親院等別當勾。當。事

藤原氏第一上卿宣

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應加置施藥院主。典。一人事

右得彼院解偁、撿案內、依太政官去天長二年十二月〈○十二月當作十一月〉二日符、應置使判官主典各一人、而雜務繁劇官人少員、望請更加件主典、辨濟庶政者、從二位行大納言兼皇太子傅藤原朝臣三守宣、奉勅依請、

承和元年十一月十五日〈○又見類聚國史〉

〔延喜式十八式部〕凡諸司史。生。者〈○中略〉施藥院使四人、〈○中略〉施藥院等使司史生待從官下名、簡不試直補之、

秩限

〔類聚三代格五〕太政官符

立施藥院使歷限事

右被右大臣宣偁、奉勅、夫歷限任終身、人偷成功、今件使等未立歷秩之限、恐有懈怠之心、宜以四年爲限、

嘉祥三年七月廿六日

用度

〔延喜式三十大藏〕凡綿一百五十屯、古弊幄四宇、每年冬季充施藥院、均分給彼院及東西悲田病者孤子等、

〔延喜式十一太政官〕凡施藥院藥分稻、諸國雖申請減省雜稻、不得減省、

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

應賻物料商布停收施藥院進穀倉院事

右太政官去天長元年六月廿日下民部省符偁、諸司主典已上卒死之日、例給賻物料、事有恆例、而至給物實避忌經日、喪家之費率難支給、今被右大臣宣偁、奉勅、宜件料特令交易充殯斂者、須仰所出國

始自今年、毎年交易、附貢調使、運施藥院、其直幷運賃料同用正稅者、今得施藥院解偁、院中雜事闕、頗
繁多、而所行購物、不堪支擬者、正三位行中納言兼右近衛大將春宮大夫良岑朝臣安世宣、奉勅、宜始
自來年令收穀倉院、

天長四年六月五日◯中略又見穀倉院

〔續日本後紀 五仁明〕承和三年五月甲子、左大臣正二位藤原朝臣緒嗣◯中略等上表言、◯中略故左大臣贈
正一位藤原朝臣冬嗣、情深慈惠、義貴能施、遂乃折割食封千戸、貯收施藥勸學兩院、藤原氏諸親絕乏
者、同氏子弟勸學之輩、量班與之、

〔政事要略 七十糺彈雜事〕出棄病人及小兒事◯中略
延喜格云、應令左右看督近衛等、毎旬巡檢施藥院幷東西悲田病者孤子多少有無安否等事、右施藥
院奏狀偁、院幷東西悲田三所收養病者孤子、其數不少、病者差宛預及雜使等、令勞治、孤子亦差宛預
及雜使乳母養母等、令視養、院司常加巡檢、然預以下人等未必其人、雖加勸戒、猶多懈怠、恐徒費永食
存活者寡、望請令看督近衛等毎旬分番巡檢三所、察其多少、問其安否、預以下之人若有闕怠、直令勘
當、其巡檢之日、錄病者孤子數、付院司令知之、亦其寒溫不適、衣食無給者、令責院司、謹請處分者、右大
臣宣、奉勅、依請、事須看督近衛等巡檢京中之日、有見路邊病者、隨便令取送院幷東西悲田、又大藏宮
內兩省所宛綿及古幣帖疊等、施藥院司請納之後、與彼院司共相知頒給三所病者孤子等、莫致疎略、

寬平八年閏正月十七日

延命院

〔三代實錄 二淸和〕貞觀元年二月十一日丁酉、右大臣從二位兼行左近衛大將藤原朝臣良相奏請、以私
第一區、建崇親院、安置藤原氏無居宅者、使隷施藥院、厥所須、付物令施藥院司掌之、又建延命院、便隷
勸學院、安置藤原氏有病患者、詔從之、

私人施藥

〔本朝僧考 中〕藥師寺圓俊高定和尙

高定和尚、曾於南都般若寺慈心和尚塔下剃染、就西大寺之寶塔院受具足戒、又入寶生護國院受灌頂、每以密爲專攻、內行佛數、外施醫術、無貴無賤普施藥、以救濟之、査考其族譜、竹田快翁之子、而定怡之弟、月海之兄也、宜哉有醫術之妙也、一入釋門、雖不繼家系、醫名彰聞、依之後土御門院弗豫日、應勅獻藥、時有大驗、特賜帝觴以賞之、又後柏原院御宇、常令侍御榻之畔、治療有効、寵眷之餘、辱賜寶劒、年及七十餘、養艮平安、是又依自養之術乎、弟子圓盛定本預製壽像、請贊於東山月舟、載在幻雲稾、

〔近世叢語一醫行〕伊藤茂臣業醫、有孝子病者、垂涙藥敎之、又見其貧、厚施與焉、常謂子弟曰、醫之治人、豈問貴否親疎、然其於吉人最當盡心、

〔先哲叢談後編二〕長齋〇田曰、有窮乏者來買其所製之藥者、則不見錢之多少而多與之曰、若此藥効於爾病、雖無錢時、必須再求焉、我畜之尤多矣、有壯年者、富强者來求之、則問曰、藥不中病反加其害、宜與醫生相謀審其當服乎否、而後來求也、我盡賣之、雖然我不欲妄賣之以助人之淫心、

〔享保集成絲綸錄三十九〕享保十三申年十二月

元誓願寺前小川町　木村春德

一江戶町中末々ニ至迄、當十二月より來酉十二月迄、春德宅ニ而、病人投藥致候、重病ニ而難參者方江ハ、春德罷越、樣子見可申候間、右之段町中江可申聞候、

十二月

藥劑舍

〔本朝高僧傳淨律六十一〕相州極樂寺沙門忍性傳

釋忍性字良觀、父伴貞行、母榎氏、以建保五年生於和州磯城島、〇中略有時疫則招集病者、藥劑撫活、初副元帥平時宗作療病舍於桑谷、附土州大忍莊待其求、平帥薨後、性募補財、日往看病、二十年間、養五萬七千二百五十人、時人呼稱醫王如來、

養生所

〔江戶名所圖會十三〕療病院　同所〇小石川御藥園の西に並ぶ、養生所と號けらる、則古の療病院に比せ

られ、鰥寡孤獨、貧窮無頼の病人を救はせ給はむがため、享保年間、官府より是を建させられ、〇下略

〔明良帯録 世職〕小石川養生所

此場は、醫道修業之ため、此所に至り、病人に藥を與ふ、是は小普請醫師の歴職なり、

〔醫事沿錄 二編〕小石川養生所一件之事〇中略

小川笙船書上の寫

施藥院被仰付候はゞ、難有仕合可奉存候、町々極貧之病氣を奉伺候に、不便千萬之仕合共御座候、武家方よりも、本公人大病に付、請人方江返し候處に、請人も、親類にても無御座候者は、散々に看病仕候不道人も多く御座候、其外、無緣の者、或は妻子等無御座候貧窮人の煩候には、見殺しに仕候事共おほく御座候、院料之儀は、御當地町々之名主御停止に被仰付候はゞ、名主料金を以て、町町より被召上、院料に被仰付候はゞ、御足金少々之儀にて相濟可申哉と奉存察候、左候はゞ、施藥院御普請料計の儀に而、可相濟と奉存候、此儀も、少々は御物入に、足金愚意に存當り御座候、名主諸役之儀は、町々家持どもへ、廻り名主と申事に被仰付候へば、御公用辨申儀、只今まで之通、相時儀御座ある間數と奉察候、町人共は、名主料を御公儀樣へ差上候而も、其外之名主へ、壹ケ年中に遣し申金子多御座候を、省申が過分に而御座候間、悅可申と奉存候、名主共の儀は、御政道をたすけ候を、當時の名主共は、欲心おごりのみにて、却て御政道之妨に相成候事共も仕出し申候、此儀御尋に御座候はゞ、町御奉行所江口上にて可申上候、

此ケ條之儀は、江戸中に、施藥院壹ケ所御建、便なき病人入置、御扶持人、醫者衆之内、代々療治致し、右病人は、老衰致し、便なき男女可有之候間、其者共を、施藥院江入置申候はゞ可然旨申聞候、名主共の儀、相尋候處、外に變り候儀も無御座候、支配之者江、名主料之外、入目を掛候に付、町々の物入多候の由、笙船申候、然ば只今急に名主役相止候ては、難儀可有御座哉、家持共へ、廻り名

主可申付儀も、如何可有之哉に奉存候、笙船、兎角名主相止可然旨申聞候、

寅〇享保七年正月廿一日

〔七十冊物類聚 四十八 養生所〕由緒書

養生所肝煎　小川鎌次郎養子　小川良意

高貳拾人扶持　本國近江　生國武藏

拜領町屋鋪下谷長者町〇中略

一初代　小川笙船

有德院樣御代、享保六丑年、御政務之儀ニ付、存付候十九ヶ條、書付ヲ以奉申上候處、大岡越前守於御役宅、中山出雲守立合、從御前御下ゲ札被爲附候條、被御尋之上、施藥院之儀は、兼而御上ニも被爲附思召候處江申上候間、仕形繪圖等目論見可奉差上之旨、越前守申渡候、依之施藥院仕形繪圖并御入用役人等之儀、委細奉書上候、同七寅年五月廿八日、大岡越前守、中山出雲守立合、施藥院彌御建被遊候、院之名は、思召有之、養生所と御附被遊候、發起之儀は、其方ニ候間、向後諸事肝煎候樣被仰付、同年十二月、爲御褒美銀貳拾枚被下置候、其節、越前守ヲ以、猶又可被遊御召仕被爲思召候得共、隱者之旨被爲聞召候間、御奉公可相勤哉相尋候樣、上意之旨、越前守申渡候、然ル處、病身ニ而難相勤御座候ニ付、御斷奉申上、養生所御用向計相勤申候、〇中略

笙船死、總領、小川隆好

一二代

有德院樣御代、享保七寅年十一月十八日、笙船奉願候通、養生所諸事肝煎被仰付、養生所之內江住居御建被下、常詰相勤申候、〇中略

小石川養生所肝煎　小川良意花押

安政六未年八月

〔公事餘錄 二〕一小石川御藥園養生所之儀、享保七寅年正月、糀町十二丁目三郎兵衛店、町醫師小川笙船目論見書上之寫、

養生所覺書

一御藥園御養生所へ參り候病人之儀、何れも下々之儀ニ候得共、危き療治無之樣、隨分念入療治可被成候事、

一病氣之樣子にも寄候得共、人參多く用ニ無之樣ニ可被成候、萬一多く遣ひ不申候而難成病氣ニ候はゞ、養生所役人小川笙船等相談之上、用ひ候樣可被成候、

一長病人或は難敷病症ニ、退屈無之樣に可被成候、然ども危き病人ニ相極候はゞ、無油斷役人小川笙船相談之上、他之療治に替候樣ニ可被成候事、

一病症ニ寄り、小川笙船ニ藥方之儀相尋候はゞ、書付御渡可被成候、其外之病人江御用ひ候藥も、入念候而、前廣ニ書付笙船へ渡置候儀は勝手次第ニ候事、

月日〇享保七年

同年〇享保七年六月廿日、若年寄有馬兵庫頭殿へ差出候書付、

覺

一施藥院へ相詰候醫師之内、小普請醫師之内一人被仰付、毎日見廻り、病用之爲罷越、病用相達候積り、且又小川笙船義、晝計見廻り、病人之介抱藥吟味可仕候、但見廻之義は、隔日又御用有之節は、毎日罷越、御用無之節は二日間にも見廻候樣可仕候、

一同所へ町奉行與力二人附置、毎日壹人ニ而相詰、施藥院一式之差圖仕、病人出入相改、總賄入用等、病人へ用ひ候人參之吟味迄世話仕候積り、

一町奉行同心拾人

內貳人年寄同心、是又賄方總元〆諸色拂吟味役、內八人平同心、是は藥煎じ所并病人見廻り役、

右晝夜隔番ニ勤申候積リ、

一下男八人、此下男抱ニ仕、賄所働き、門番人、其外病人看病火事之節は、足弱之病人ニ付添罷在可然奉存候事、

一女三人、是は女房人看病、又は洗濯物等之爲召抱可申候、但當分は貳人抱、病人夥多ニ相成候はば三人ニも可仕候、

下ゲ札

一食焚當分壹人　一汁焚野菜拵之もの貳人　一水汲當分壹人　一小遣壹人　一病人藥煎當分貳人

一門番壹人　都合八人

〔公事餘錄 二〕一施藥院は、小石川御藥園之內ニ而、御普請被仰付候積り、則施藥院住居之繪圖差上候、

一施藥院總御入用之積り

金貳百拾兩三歩、銀拾貳匁餘、

但是は、施藥院こけら葺ニ仕、總御普請入用之見込、

右者、町方闕所金之內を以、御普請仕候、但入札を以て、吟味候はゞ、增減可有御座候得ば、大概右金高程之御入用之積ニ御座候、

一金貳百八拾兩、銀拾貳匁壹分八厘、

但是は、施藥院御扶持方諸色賄、下男女給金、其外買立候御入用、

右は、常俊上り屋敷地代金を以、當年は賄可申候、來年は町方上り屋敷、幷常俊之代金を以、賄可申候、則助成屋敷別紙書付差上申候、

下ゲ札

此兩樣之上り屋敷、當分明地代、當時貳百六拾七兩納り可申候得共、段々貸積り候而、四百七拾兩程納り申候積ニ御座候、併病人數多く相成候はゞ、此地代金計りに而は賄金不足可仕候間、其節御藏より受取候樣可仕候、

一御扶持方は、御藏より請取、味噌鹽薪炭等御買上ニ仕候而は、藏物置等も無御座候而は難成候間、一貳入札爲致、町人請負ニ可申付候、

〔公事餘筆二〕一施藥院ニ而致死去候はゞ、無緣之者は回向院下屋敷へ差遣可申候、此入用病死人壹人ニ付四百文程づゝニ而は相濟可申候、右二ヶ條御入用高、先達而は難積り御座候、是は奥力共江少々ヅヽ金子渡置勘定仕候樣ニ致可然奉存候、

右は差當候儀計り、先奉伺候、此外洩候義も御座候はゞ、追て相伺可申上候、以上、

寅七月　中山出雲守

大岡越前守

〔天明撰要類集二十三養生所〕寛政元酉年十月三日、京極備前守殿江御直ニ上ル、

小石川養生所附御醫師用候藥種之儀ニ付、相調申上候書付、

初鹿野河内守

小石川養生所附御醫師用候藥種、御入用ニ而被下置候哉、御役料之内ニ而辨じ候哉、相糺可申上旨被仰渡候ニ付、相調候處、左之通ニ御座候、

一小石川養生所附御醫師、前々は、藥種料、本道壹人ニ付金五拾兩、外科眼科壹人ニ付金廿兩宛被下置、本道四人、外科四人、眼科壹人ニ而相勤候處、享保十八丑年より、本道貳人、外科貳人、眼科壹人ニ被仰付、藥種料被下候儀相止ミ、爲御役料、本道壹人ニ百俵宛、外科眼科壹人ニ六拾俵宛被下置候、其以後、增御役料相願候得共、取上不申、然共右之通、御醫師人數も減少仕、取續兼可申候

ニ付、伺之上、爲御褒美、本道壹人ニ付銀拾枚宛、外科眼科壹人に付銀七枚宛、元文元辰年迄は、每年被下置候得共、左候而は、例格之樣ニ相成、如何ニ御座候間、當時は、每年は不申上候、然共其年年之樣子ニ寄、每年申上候儀も有之、又は隔年ニも申上、其節々被下置候儀ニ御座候、右ニ付、藥種料御入用ニ而被下置候儀ニは無御座、御役料之內ニ而辨じ申候儀ニ御座候、

右之通御座候、依之先達而御下ゲ被遊候御書取壹通奉返上候、以上、

酉十月　　初鹿野河內守

〔養生所書留　三〕巳〇弘化二年十月十六日、山中仲兵衛を以御渡、

養生所病人共江助力錢申立候もの之儀ニ付、相伺候書付、　　養生所見廻

小傳馬町三丁目淸助店　茂兵衛

右之もの儀、弘うせ藥商賣仕候ニ付、爲冥加、先年申立候上、右賣藥を、病人共江爲施藥、每年十月より三月迄、月々百貳拾貝ヅヽ、養生所江差出、爲相用來候處、猶又當年は右之外ニ、病人壹人ニ付、錢貳百文ヅヽ、助力差遣度由、右茂兵衛より、此節申立候、依之取調候處、是迄右之振合ニ而、半紙貳帖ヅヽ差遣度由申立候ニ付、私共猥リニ受置候儀も御座候得共、此度は、錢貳百文ヅヽ差遣度と申立候儀ニ而候得ば、私共猥りニも難承置、評議仕候處、右體助力差遣候迚も、取縮に拘り申候儀も無之、且爲冥加差遣度と申立候儀、奇特之儀ニも御座候得ば、申立候通、聞濟置候樣可仕候哉、依之此段奉伺候、以上、

巳十月　　松浦彌右衛門

村井專右衛門〇中略

書面病人一人ニ付、錢二百文ヅヽ、助力として差遣度由、〔中略〕御聞濟被成候段、養生所見廻江被仰渡候而可然哉ニ奉存候、

巳十月

松浦作十郎

加藤又左衞門

〔嘉永撰要類集養生所二十三〕天保十四卯年三月八日、阿部遠江守を頼、向山誠大夫を以、水野越前守殿江上ル、同十五日、御書取添、竟井浜之丞を以御下、銘付致、翌十六日返上、ヒレ付末ニ有之

越前守殿

小石川養生所附御醫師御引替之儀ニ付、取調候趣申上候書付、

〔鳥居甲斐守〕
町奉行

小石川養生所附之儀、向後御醫師より出役は御差止、右明跡は、町醫師之内、療治宜仕候者を、早々吟味いたし可相伺旨、被仰渡候ニ付、取調左に申上候、

此段養生所御醫師、本道本勤貳人、外科同貳人、眼科同壹人、都合五人、本勤定人數ニ有之、藥種料之義、享保十八丑年より、御役料ニ相成、本道壹人百俵、外科眼科同六拾俵宛被下置、同所見習之御醫師は、五人限に被仰付、右は御役料無之、自力を以療治引受候得共、是迄は寄合又は小普請御醫師より相勤、右出役中には、勤仕並に相成、小普請金御免、月並御禮ニも罷出候ニ付、御役料ニ不拘、多分之藥剤差出、相勤來候處、此度は、御宛行無之ものゝ江被仰付候儀ニ付、右例は難引當候間、舊記をも取調候處、享保十八丑年養生所肝煎小川笙船忰同苗丹治儀、藥壹帖ニ付、銀貳分ヅヽ之藥種料被下候處、一ヶ年金百兩餘ニも相成、御入用相嵩候ニ付、貼數ニ不拘、年々金五拾兩

ヅヽ被下置可然旨、其頃先役共より相伺候處、伺之通被仰渡候旨、書留有之候間、猶勘辨仕候處、藥劑之貼數は、年々增減も御座候處、右に不拘、藥種料被下置候儀は、時勢ニ相當仕間敷、自然貼數多分ニ差出候儀を厭ひ候場合有之間敷とも難申候間、前書之見合を以、煎藥煉藥目藥共、壹貼或は壹貝ニ付、銀貳分ヅヽ之割合を以、貼數增減ニ寄、藥種料被下置候はヾ可然哉に奉存候、○中略

卯三月　鳥居甲斐守
阿部遠江守

ヒレ付
書面養生所附町醫師之儀、向後本道貳人、外科貳人、眼科壹人、都合五人を定人數ニ致し、何も勤候內、拾五人扶持ヅヽ被下置、藥種料其外之儀は、都而伺之通相心得、場所取締は勿論、病人手當專一ニ可申渡旨被仰渡、奉承知候、

卯三月十五日　鳥居甲斐守○中略

天保十四卯年三月廿日、用人永江彈右衞門を以差出ス、

養生所江、町醫師之內出役被仰付候ニ付、取計方之儀奉伺候書付、

書面醫師番割之儀、先戌年以前之振合ニ相心得、其外は、都而伺之通取計可申旨被仰渡、奉承知候、

卯三月廿日　養生所見廻○中略

一御醫師勤方之儀は、本道外科は隔日、眼科は三番に罷出、晝四時より、夕七時頃迄相詰罷在候處、六ヶ年以前戌年、朝夕交代勤被仰付候ニ付、朝出之者は、晝四時より九時半迄、夕出之者は、晝九時より、夕七時迄相詰申候、尤是迄は、見習共打込候故、朝出夕出共、本道壹人宛差加り相勤來候得共、此度本道貳人限りニ而、是迄之通、朝夕交代仕候而は、朝出夕出之內、一方外科相詰候割合

ニ相成候間、戌年以前之通、晝四時より夕七時頃迄相詰罷在候樣可申渡哉、又は戌年被仰渡之通、朝出夕出と交代いたし相勤候樣可申渡候哉、肝煎小川良意儀は、私共同樣、晝四時より、夕七時頃迄相詰罷在候ニ付、交代勤被仰付候而も、差支候儀聊無御座候、交代勤之方ニ被仰渡候はゞ、良意病氣差合等之節は、朝夕共本道壹人ヅヽ相詰可申旨申渡候樣可仕候、右兩樣之內、御下知御座候樣仕度奉存候、(中略)

右之通奉伺候、以上、

卯三月

〔追加市中取締類集九ノ四十六〕

養生出役御醫師之儀ニ付、申上候書付、

年番

養生所病人療治方之儀ニ付、多紀安良より申上候書面、同所見廻與力江御渡、勘辨申上候書面共御下取調可申上旨被仰渡候ニ付、評議仕候趣左ニ申上候、

此儀、享保度、同所御取立之節は、壽醫、町醫共も出役被仰付候趣ニ御座候處、其後は、寄合小普請御醫師之內より、出役被仰付、舊來相勤來候處、兼々醫學館ニ而、養生所を進退之目論見有之由、去ル丑年、小川龍仙院、外四人より、若年寄衆江申上候書面ニ、同所は、町方進退故、醫術之工拙ニ不拘、出役申上候間、御醫師不精之もの、寓直ニ相成居候旨、都而療治方之儀其外共、品々危濫之趣を以、以來醫學館之振合ニ取扱、同所世話役、同手傳之もの罷越、世話可仕、何事によらず、龍仙院、其外ニ而、御醫師相談向引請、其上藥服之儀、醫學館ニ而調合仕、貯藥服藥も、同所より製法仕、相廻可申、御藥料、醫學館江御下有之候樣仕度、尤龍仙院、樂眞院も見廻可申旨、其外養生所舊來御極被置候御仕法等ニも議論を加江申上候書類、御下ゲ相成候間、其節養生所御醫師、幷同所

見廻與力より、箇條逸々取調、醫學館見込違之廉々等も申上、其趣意被仰上候間、同所より申上候筋貫キ不申、願之趣難被及御沙汰旨被仰渡候事之由ニ候得共、兎角夫迄之振合ニ而は、居り合兼候儀と相見、翌々卯年、御醫師出役は御免、町醫師共、鳥居甲斐守殿阿部遠江守殿御撰之上被仰上、出役被仰付、當時相勤居候儀ニ御座候、然ル處、今度多紀安良より相願候は、養生所之病人は、醫學館江願出候ものとは、證候各異候間、醫學館ニ而修業仕、猶又養生所病人療治仕候はば、確ニ御用立候もの多分出來候は勿論、勤候場所も相增、一統之勵ニも罷成候旨之書面ニ候得共、左候而は、養生所を、醫學館同樣、御醫師之稽古所ニ相用候樣相聞、元來重御仁備之御主意ニ齟齬可仕哉ニ奉存候、○中略依之御下被成候書類返上、此段申上候、以上、

酉○嘉永二年十一月　　村井團右衛門
仁杉八右衛門

養生所出役御醫師之儀ニ付、申上候書付、
市中取締懸

養生所病人療治方の儀ニ付、多紀安良申上候書面、同所見廻幷年番方江御下、夫々勘辨仕候趣、尙私共評議仕可申上旨被仰渡候ニ付、書類一覽仕候處、一體醫學館ニ而、養生所を進退可致目論見有之、先年も小川龍仙院等より申上候次第も御座候得共、不被及御沙汰候や、近來町醫御撰之上被仰付、出精相勤罷在、病人全快も數多御座候由之處、無故醫學館より御醫師出役仕候樣相改候はヽ、町醫ども氣請ニも拘り、左候迚、養生所見廻申上候通、御目見等可被仰付筋ニは有御座間鋪、尙又去卯年以前之振合ニ復候義、別段之御主意有之、追而被仰出候義は格別、今度安良申上候積を以、御醫師之治療ニ復候義は、失體ニも相當可申哉ニ付、安良願之趣は、新規之儀ニ付、不被及御沙汰、養生所之方は、是迄之通御居被置候積被仰上可然哉ニ奉存候、

右評議仕候趣、書面之通御座候、御下之書類返上、此段申上候、以上、

酉嘉永二年十二月

東條八大夫
中村次郎八
中田新太郎
東條八太郎

年番
名主

〔市中取締類集四十七養生所〕南北小口

小石川養生所之儀、貧窮之病人共、願出次第、逗留療治被仰付候處、此度町醫師之内、療治功者之聞有之もの、御撰之上、出役被仰付、御扶持方、幷藥種料をも被下置、藥品は勿論、藥煎方等迄致吟味、爲相用候儀ニ候、尤逗留中は、朝夕之食物被下置、其上夏冬之夜具衣類等迄、不自由無之樣御貸物相渡候ニ付、聊入用等相掛り候筋無之候間、鰥寡孤獨之病者不及申、縱令看病人有之候共、極貧ニ而藥給兼候者は、勝手次第逗留之儀可願出候、奉行所江は、別段ニ不及訴出、名主又は名主無之町々は、月行事加判之訴狀を以、病者或は家主成共、相店之もの成共、壹人ニ而、直ニ養生所江可願出候、病人呼出し、幷相歸り候節は、町役人差添ニ不及、右同樣壹人呼出し、都而手重之儀無之樣致遣候間、壹町限り取調、極貧ニ而、藥給兼候病人有之ば、當人不心付候共、名主家主共致世話、養生所逗留之儀爲相願可申候、且其日暮之もの、病難等之節は、同店之もの共、相互ニ教合候儀と相心得、步行難相成、駕籠人足等相雇候手當も無之ものは、相店之もの共世話致し、養生所江召連、聊ニ而も入用不相掛樣取計可遣候、若又逗留之儀相願候もの有之候而も、町役人共等閑ニ致し置候歟、又者無謂入用等掛り候段相聞え候ニおゐては、其品ニ寄、急度咎可申付候間、其旨相心得、窮民御救之御

趣意行屆候樣、精々可心掛、

右之通、天保十四卯年申渡置處、近來は願出候もの少く、右は全町役人共手重之取扱方ニ成行候儀と相聞え、御仁惠之御趣意を失ひ候ニ當り、以之外之事ニ候、殊ニ今度地震ニ而困窮之町人共之内、住所ニ離候病人抔も可有之ニ付、右類之者逗留療治相願候ハヾ、諸事前條之手續ニ相心得、早々可申出、

右之通、町中名主支配限り、月行事持之場所は、組合之名主より、家主小前之者共迄も、不洩樣可申通旨、被仰渡奉畏候、爲後日仍而如件、

安政二卯年十二月十日

南方小口年番　箔屋町名主　延吉郎印

北方同　小網町名主　伊十郎印

〔天明撰要類集二十三養生所〕天明八申年二月十九日、牧野備後守殿、本多彈正少弼殿江、專阿彌を以上ル、

但御側衆江上候分、加納遠江守殿、小笠原若狹守殿江封候而、淸嘉を以上、

天明六午年より同未年迄

小石川養生所病人數之儀申上候書付

柳生主膳正

町奉行

天明六午年十二月朔日より、同七未年十一月廿九日迄、養生所江來候病人數、

一三百三人

內

百五拾五人　全快之者

三拾五人　難治ニ付相歸候者

八拾六人　願ニ付相歸候者
貳拾人　致病死候者
五人　致欠落候者
貳人　不揃ニ付相歸候者
右之通御座候、以上、
中二月
山村信濃守
柳生主膳正

〔七十番物類集四十六養生所〕養生所御入用并病人人數書

嘉永四亥年
一金貳百八拾四兩貳朱　銀壹匁壹分三厘　玄米百四拾三石壹斗七合七勺八才
嘉永三戌年
一金貳百七拾六兩貳分　銀拾四匁三分壹厘四毛　玄米百三拾四石三斗四升六合
右亥年ニ見合　金七兩壹分、銀九匁參分壹厘六毛相增、
嘉永四亥年
一金三兩貳分　銀四匁六分六厘六毛　右玄米車力代
嘉永三戌年
金三兩壹分　銀六匁五分貳厘　右玄米車力代
右亥年ニ見合　銀拾三匁壹分四厘六毛相增
嘉永四亥年
一金五百八拾九兩壹分　銀拾四匁四分三厘二毛　總諸色代

嘉永三戌年
一金五百五拾八兩壹分　銀三匁壹分四厘五毛　總諸色代
右亥年ニ見合　金三拾壹兩、銀拾壹匁貳分八厘七毛相增、
三口〆戌年亥年見合　金三拾八兩三分　銀三匁七分四厘九毛相增申候
去亥年中
一逗留病人人數八百四拾六人
去々戌年
一逗留病人人數七百五拾七人
右亥年ニ見合　人數八拾九人相增申候
右之通御座候、以上、
子二月
〔海軍歷史二十五　賣藥及雜項〕今般御取建相成候濱御殿內養生所入可相成病人之者共凡百二十人分、壹ヶ年賄方食用幷諸道具受負、其外看病人小使之者、人々等迄御入用之儀、御場所附御用達共江入札申渡候處、河野屋左一直安ニ付、落札相成候間、右引受方同人江申渡候樣可仕存候、依之受證文取之、此段相伺申候、
卯八月

醫學校

〔政事要略九十五　至要雜事〕學校事下　醫局典藥寮病在典藥中
〔醫賸上〕醫學
晉以上、無醫學之設、及劉宋元嘉二十年、太醫令秦承祖奏置醫學、以廣敎授、及魏及隋有太醫博士助敎、唐貞觀三年九月、諸州置醫學、開元元年、諸州置助敎、十一年、諸州置醫學博士、宋醫學隷大常、

寺。神宗時始置提舉判局官及教授一人，學生三百人。政和五年正月，州縣置醫學。元世祖中統二年夏五月，太醫院使王猷言：醫學久廢，後進無所師授，竊恐朝廷一時取人學非其傳，為害甚大。乃遣副使王安仁授以金牌，往諸路設立醫學。

〔政事要略 卷九十五 至要雜事〕又醫疾令云：醫生、按摩生、咒禁生、藥園生，先取藥部及世習。（謂藥部者，姓稱藥師者，即蜂田藥師、奈良藥師類也。世習者，三世習醫業，相承為名家者也。）次取庶人年十三已上十六已下（謂庶人八位已上子亦聽。此法准學令，五位已上及東西史部子，皆限年十三已上十六已下。取一藝學生，若頗說醫經，其文云：取庶人者，八位已上子情願者亦聽取。四色生，即）聰令者為之。

又云：醫針生各分經受業。醫生習甲乙、脈經、本草，兼習小品、集驗等方。（謂甲乙經十二卷，脈經二卷，新修本草廿卷，小品十二卷，集驗十二卷。）針生習素問、黃帝針經、明堂、脈決，兼習流注、偃側等圖，赤烏神針等經。（謂素問三卷，黃帝針經三卷，明堂三卷，脈決二卷，流注經一卷，偃側圖一卷，赤烏神針經一卷。文云：赤烏神針等經，今有三經，即知有餘經，故更稱等。習之書，試各二條，不可試二條，下條中略。）

醫疾令云：醫針生初入學者，先讀本草、脈決、明堂。讀本草者，即令識藥形藥性；讀明堂者，即令驗圖識其孔穴；讀脈決者，令遞相診候（謂甲乙二人，令甲診乙，乙診甲，是為遞相診候也。）使知四時浮沈澀滑之狀。（謂澀者，難也；滑者，利也。夏脈浮，冬脈沈。）次讀素問、黃帝針經、甲乙脈經，皆使精熟。（謂習讀經之文，如所習經文，生先讀經文通熟，然後講義，即學令其義也。）其兼習之業，各令通利。

又云：醫生既讀諸經，乃分業教習。（謂先讀文，然後乃分其業也。）率廿人（謂使醫生令廿人為率，分廿四人。）以十二人學體療，（謂身體療病也，創腫、少小、耳目等，皆此外之療也。）三人學創腫，（謂創與腫也。）三人學少小，（謂六歲以下為小，十八以上為少也。）二人學耳目口齒，各專其業。

又云：醫針生各從所習，鈔古方誦之。（謂鈔者，不全取也。古方者，上條所習之外，諸古醫方。律云：古今醫方，有所不堪，故抄取其尤要者誦之。）其上手醫有療疾之處，令其隨從，習知合針灸之法。（中略）

又云：學體療者限七年成，學少小及創腫者各五年成，學耳目口齒者四年成，針生七年成。（謂此皆習業及講義之年限。其讀文之二年，皆亦講義之以。故上條云：在學九年，無成者退從本色，此為七年成者，唯學一色，即其餘年…）業成之日，令與藥寮業

術優長者、就宮內省、對丞以上、精加校練、（謂、此不必判官以上、皆悉相待、然後校試、若有輔以上一人及判官一人者、亦得對試也、依學令、欲出仕者、試問大義十條、得八以上擧送、即於此條、亦准學生也、）具述行業、（謂、方正清慎爲行、事學療治爲業、）申送太政官、（中略）

又云、醫針生初入學、皆行束脩禮、一准大學生、其按摩呪禁生減半、

又云、教習本草、素問、黃帝針經、甲乙、博士皆案文講說、（謂、案文、猶云依文、其餘經者、准量須知、）如講五經之法、（中略）

又云、醫針生、按摩呪禁生、專令習業、不得雜使、（謂、旬假、及田假、授衣假等、并准大學生、）

〔續日本紀十聖武〕天平二年三月辛亥、太政官奏偁、（中略）又陰陽醫術及七曜頒曆等類、國家要道、不得廢闕、但見諸博士、年齒衰老、若不教授、恐致絕業、望仰吉田連宜、大津連首、御立連清道、難波連吉成、山口忌寸田主、私部首石村、志斐連三田次等七人、各取弟子、將令習業、其時服食料亦准大學生、其生徒陰陽醫術各三人、

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符（中略）

一可改定受業師料數事

右造式所起請云、案太政官承和五年六月十五日符云、天平寶字元年十一月廿二日勅書云、諸學生等被任之後、所給公廨、一年之分可令送本受業師者、今被右大臣宣云、奉勅、徒設章程、頗而不行、論乎治道、理不可然、但全取一年俸、物情難和、分析之事宜有節級、須大國二百束、上國百五十束、中國百束、下國五十束、每年拘留、隨國所出、交易輕物、附貢調使、博士料送大學寮、醫師料送典藥寮、縱雖非業醫師、除大學諸博士及醫師等兼任之外、不論在國兼任、亦復准此、永以爲例、若有未進者拘留使返抄者、今按件格、依國大少立其率法、而今一分所給公廨、或國不足百束、或國有餘千束、全守大少之法、事乖平均之旨、伏望計所給數、割十分一、將令送納者、從三位守大納言兼左近衛大將行陸奧出羽按察使藤原朝臣基經宣、奉勅依請、

貞觀十二年十月廿五日（○又見三代實錄）

〔延喜式十八式部〕凡陰陽寮諸生典藥寮醫生預考并免徭役、

〔延喜式十八式部〕凡雜色之輩、願補醫生、下典藥寮、令學醫術、其學生准大學生例、聽補醫生、

〔杏林雜話〕享保中、見宜(姓古林、大阪人、)有時奉官特命、開書院於神田橋門外、講醫經於其中、使都下醫生聽之、後移之於高倉地、云(高倉、即今昌平黌地、)

〔憲敎類典(四ノ十醫學館)〕明和二乙酉年十二月七日

松平右近將監殿御渡

醫學館神田佐久間町　奥醫師　多紀安元

右安元義、此度相願、右之場所江、醫道致講習、御醫師之子弟、并陪臣醫師、町醫師、總而醫道ニ志之輩、右學館江罷越候儀、勝手次第之事、

右之趣、寄々可被相達候、

〔日本敎育史資料(十九醫學)〕時還讀我書讀錄拔抄

醫ノ學校ハ、中古兵燹ヨリ、其設廢替シテ建築已來モ、此事特リ缺典ニ屬セシ故、玉池府君(○多紀元孝)深クコヽニ慨シ、志ヲ發シテ、コレヲ草創シ、藍溪府君(○多紀元悳子安元)ヨク其業ヲ紹構シテ、遂ニハ官庠トナレ玉ヒテ、洋々乎トシテ其盛ナルヲ極ルニ至ル、星霜稍移リ、耆宿凋落シテ、今ハ兩府君經營ノ短壙ト、其功勞トヲ知ルモノ少シ、仍テ之ヲ家牒ニ抜ジ、マタ之ヲ叔父山崎齊園君ニ質シテ、玆ニ其概ヲ擧ナ、子弟ヲシテ欽仰セシム、抑々其綿蕝ハ明和二年乙酉ノ歳ニテ、官ヨリ神田佐久間町二丁目司天臺ノ舊地ヲ借セラレ、始テ醫學館ヲ造リ、(文化三年丙寅ノ大火後ヨリ今ノ新橋ニ移サレ、此地ハ秋田侯邸ノ醫館トナレリ、今ハ轉ロテ諸下ノ士ノ邸トナレリ、)躋壽館ト名ヲ命ズ、其結構ハ表門アリ、(外來ノ者此ヨリ出入ス、和泉橋東ノ河岸ヨリ北ヘ入ル、小路ノ行々アタリナリ、)裏門アリ、(館中常住スル者是ヨリ出入ス、都合ゴ家ノ門ナリ、津侯ノ表門ト町家ナ隔テ相對セリ、)中門アリ、(コレヨリ生徒往來、)擬泮水并橋アリ、講堂アリ、(内ニ神位アリ、朝夕此ニ拜ス、祭祀此所ニテ行ノ、)客廳アリ、(諸生ハ法令ヲ揭告シ、又ハ官醫等賓客遇接所ナリ、)食

堂アリ、諸生コヽニ飲食ス、書庫アリ、醫書ニ限ラズ群書ヲ藏ク、藥園アリ、時節ヲ以テ草木ヲ培養ス、學舍アリ、常住ノ諸生ヲ居ラシム、遊息軒アリ、外來ノ生徒コヽニ於テ講習ノ間覆審ス、上ノ間ハ官醫、中ノ間ハ列國醫員、下ノ間ハ市井醫員ト定ム、都講學舍アリ、教授學舍アリ、都講教授ノ總フトコロナリ、教授ハ句讀ヲ授ク、此外總理等ノ居宅アリ、館主ハ裏門ノ內ニ住ス、教導ノ方ハ、本草經、素問、靈樞、難經、傷寒論、金匱ノ六部ヲ、毎日輪講ナサシメ、都講コレヲ折衷シ、其他ノ書ヲモ輪講シ、更ニ經絡、鍼灸、診法、藥物、醫案、疑問六條ノ會ヲ設ケ、各々ノ都講コレヲ教導ス、醫案疑問ハ文辭ニ預リ、其餘ハ皆事ニ就テ之ヲ傳フ、診法ハ、鄙賤ノ治ヲ請フ者ヲ、都講先診シテ、其後諸生ニ診セシメ、習熟セシム、其講例ハ、諸書皆原文ヲ用ユ、解說ハ一家ノ註ヲ定メテコレヲ取リ、講師己ノ所見ヲ說クトキハ、據トコロノ解說了テ後、之ヲ及ボスナリ、其人ニハ總理アリ、學生一切ヲ掌ル、儒士井上圖臺ナドヲコレニ充テラレシコトアリトゾ、都講アリ、講會ノコトヲ日々司ル、教授、毎朝句讀ヲ授ク、藥園監アリ、書記アリ、學舍諸生ハ三等ニ分テリ、治學兼備ヲ上事トシ、治足リテ學不足ヲ中事トシ、學足リデ治不足ヲ下事トス、辨事アリ、館中一切藥物書籍什器ノ計ヲ掌ル、童子アリ、雜役ニ使フ、各其任ヲ守ル、其規條ハ講堂、都講學舍、諸生學舍、食堂、文庫、各其壁ニ揭示セリ、其藏書ハ、古今醫書ヨリ、經史子集ニ至ル迄コレヲ藏蓄シ、總理之ヲ司リ、生徒ノ借覽ニ備フ、其祭祀ハ、春秋二仲ヲ用ユ、此皆曾祖考ノ定メラレシ所ナリ、金峨井先生ト商量アリシト、墓表ニ見ユ、○中略講例ハ舊式ニ進ヒ、六部書ヲ定トシ、先教諭ハ素問ヲ講ジ玉ヒ、山田圖南、桃井陶庵ハ傷寒論ヲ講ジ、圖南ノ門人笠原雲仙、中林後庵代講ス、陶庵ハ田沼侯ノ醫ナリ、目黑道琢ハ內經難經等藍溪公是ナリ、其門人曾根惟中、西村玄周代講ス、服部玄廣ハ靈樞清水公ノ醫ナリ、加藤俊丈ハ難經、市醫ナリ、田村元雄、太田長元ハ本草曾根昌啓等代講、小坂元祐、岡田道民ハ經絡ヲ講ゼリ、道民ハ井伊侯ノ醫ナリ、儒家ニハ金峨先生、吉田篁墩、龜田鵬齋、繼デ錦城先生皆講アリ、大抵百日中一部ノ書ヲ卒業セリ、日々三人宛講授セリ、內外ノ諸生總テ二三百人ニ及ベリ、皆互ニ研究シテ辨難セシトゾ、

〔憲教類典 四ノ十 醫學館〕安永二癸巳年五月七日

酒井石見守殿御渡

御目付江

寄合醫師多紀安元儀、醫學館類燒ニ付、再建致し、醫道講釋、是迄之通取立度候得共、自力に及兼候ニ付而、江戸中醫師より、寄附銀有之候樣ニ致度旨相願、尤當時學館江出席不致面々も子孫に至り、出席も可致ニ付、何れとも年々壹貳匁づゝ、寄附有之候樣相願候ニ付て、願之通申渡候、

右寄附銀員數、御醫師之分は存寄次第、其外御醫師之弟子、幷陪臣醫師、町醫師、總而江戸中醫師よりは、貳匁を限り、年々寄附銀差遣候樣可致候、

右之通向々江可被相達候、尤西丸御目付江も可有通達候、

五月

〔日本教育史資料十九醫學〕舊幕府醫學館ノ設立、及同館ノ形狀等ヲ概記センニ、該館ハ幕府四百有餘家ノ醫官、醫學ヲ講ズル爲ニ設ル所ニシテ、初ハ皆此館ニ在ツテ勉學セザル醫官ハナシト云、近世文化以來、素食遊惰ノ者多ク、此館ニ入テ勉學スル者減ジタリ、然レドモ係ル行迹ノ者ハ、人之ニ齒スルヲ厭ヒ、有志者ノミ此館ニ入ルコト、ナレリ、○中略醫學生徒ハ、寄宿寮ト云ヘル一舍アリ、常ニ三十名ヨリ五十名ノ生徒アリ、生徒ハ官醫ノ子弟ニ限ル、

〔半日閑話十二〕安永二年癸巳九月廿四日

申渡之覺

半井出雲守

今大路安之助

名代　川口又十郎

醫術之儀は、人之命ニ掛り候事ニ而、壹人も用立候者出來候義、諸人の爲にて、醫を業と致候者は、別而心掛候義ニ候、安元醫學館取立候ニ付而は、彌相繼候樣、醫道心懸候者俱に、寄附銀等いたし、

廣行はれ候樣可レ取計所、兩人義、醫術修行之場所出來候義、不得心之趣相聞、不埒之心得ニ候、尤學文醫道之義ニ付、何流に限り可レ弘と、安元申候ハヾ、其段ハ決而相成間敷事ニ候、兩家共子供之內にも世上江敎させ、可レ然厚學之者も候はヾ申談、學館江も差出し、講師之內江も差加候程ニも可レ致義ニ候處、却而醫學館江弟子共差出間敷と申儀は口合候間醫廣く相學候義無用と存候所存と相聞、與藥頭家におゐて、別而不埒之心底ニ有レ之段可二申聞一旨、御沙汰ニ候、
右之趣、酒井石見守殿於二御宅一、昨夜御同人被二仰渡一候、御目付村上三十郎相越、

九月廿四日

〔憲敎類典四ノ十醫學館〕天明六丙午年正月十二日

安藤對馬守殿

多紀安元、醫學館再建有增出來ニ付、以來每年二月中旬より、五月中旬迄、百日之內、諸醫師之子弟、幷醫道に志有レ之候者は、醫學館之內學舍之中ニ爲レ致二止宿一、醫學敎育致し候間、望之者は、可レ罷越レ候、仕方は左之通候條、其旨を致二承知一、猶又前廣ニ、學館之役人被二懸合一、委細之儀納得之上、敎育可レ請レ之候事、

一當午年二月中旬より、五月中旬迄、百日之內敎育興行ニ付、諸醫家若年之輩出席、或は致二止宿一敎育受度輩は、陪臣は其家之役人、町方は名主町役人差添、正月晦日迄、醫學館江罷越、學館役人江懸合、請人を立、書付差出候上にて、敎育可レ受候事、

一銘々之居宅より、通ひに而出席致度輩は、正月晦日迄、親兄弟又は身寄之もの差添、學館役人江掛合置、出席可レ有レ之候、尤百日之內無二懈怠一致二出席一、講釋稽古事等遂二承可一申旨、證人より書付取レ之候迄に而、出席致させ候事、

一宅より通ひ、致二出席一候輩は、每日學館へ出入之刻限を相改め、帳面に留置候事、

但若年之輩、學館出席之體ニ申なし、遊山等有之候而は相濟不申候、万一左樣之儀相聞へ候はゞ、相糺候上、其段掛人江相達、學館出入之儀を差留候事、

一百日之内醫學館におゐて、講釈會讀ニ致候書物之儀ハ、本草、靈樞、素問、難經、傷寒論、金匱要略にて候、右六部之書は、醫書之中之古書に而、何れの流義たりとも、醫學之基ニ候間、醫家子弟講說を逐承不申候而は、相濟不申事ニ付、致日割置、百日之内何れも全部承逐させ候樣ニ規則を立置候事、

一經絡穴處取り等のわざを以、相傳候類は、是又右日割之内別會を立置、百日之内相濟候樣ニ規則を立置候事、

但本草、靈樞、素問三部は、卷數多候間、常體講釈會讀等致候てハ、兩三年も掛り候ニ付、承候若手之輩など長候間退屈致し、一部の始終は逐承不申者も相見へ候、依之右之趣規則を立置候、尤傷寒論、金匱要略、難經之三部、卷數少候ニ付、日限之内半頃には、講釈相濟申候ニ付、其後は甲乙、千金、外臺病源等、或は格致滓濁之類承り候もの、望に任せ、會讀又は講釈など可致候事、本草別而卷數多候間、每朝會讀ニ致し、靈樞、素問は、隔日講釈ニいたし、間日下見復り見も相成候樣ニ、日取を立置候事、

一學館之内、學舍ニ致止宿教育を請候輩は、右日限之内は、醫學館門外へ、決而出し不申候、尤役人を附置、晝夜相廻り嚴敷禁制致し候事、

一飲酒賭勝負、其外遊藝は勿論、總而醫學之勤ニ不成儀は、詩歌たりとも堅禁制之事、

但餘念雜慮有之候ては、志一圖に成不申候故、學業を逐不申候間、是又役人を付置、嚴敷禁制致し候事、

一右日限之内、學館内學舍之中、止宿致候輩、相應之身上ニ候はゞ、自分賄ニ致可申候、尤勝手道具

等は、不自由無之樣ニ、學館ニ而取計候事、

一醫學殊之外執心候得共、貧窮ニ而、其志を遂不申輩、又は師匠父祖ニ離、致世話遣候者無之、習業成り兼候ものは、名主村役人より申立、證人請人を立候へば、承糺候上、朝夕之食事等も、學館より賄遣、書物又は夜具等迄も、日限之內貸遣致教育候事、

一學館舍中致止宿候輩、若立置候禁例を破候もの、第一不致出精者は、役人吟味之上、證人請人等を呼寄、其段相達し、學舍中ニ差置不申候事、

但右體之輩、學舍中ニ有之候而は、致出精候輩迄、其風おしうつり候間、早速證人江引渡、詫候とも決而免不申候事、

一總而於醫學館中、講釋幷會讀致し候輩へは、醫學館に而、夫々手當有之候間、教導を請候輩より、聊之禮式たりとも、請之不申候事、

右は多紀安元申立候ニ付相觸候、此外之義は、學館江罷越、役人江掛合可承候、勿論以來每年右之通りに候事、

正月

右之通可被相觸候

天明六丙午年正月廿一日

安藤對馬守殿御渡

御目付江

醫學館諸醫師より、寄附物相集高之義、安永二巳年被仰出被下置候、初年は相應ニ集候處、追々減少仕候、當時教育仕候手當之儀は、三四年來之集高を以相考、仕方相立候義ニ御座候、然ル處若此以後、猶又減少仕候而は、甚迷惑仕候、一體是迄之樣子相考候處、町方抔別而手廣之事に付、取締無

御座候故、浚絋者も多有之儀と奉存候、依之可相成儀に御座候はゞ以御威光取締出來仕、以來此上寄附物減少不仕候樣ニ、御聲掛り被成下候樣仕度奉願候、以上、

巳十一月　　多紀安元

寛政三辛亥年十月

醫術家業之者、出精いたし候樣、近來度々御世話も有之故、無油斷修業可仕候事候得共、其內々は、相應之師も無之、又はひろく療治等可致存候而も、病家數少く、或は施藥等之費行屆兼候類ニ而有之候而も、不得止事、修行成就不致者も有之儀候、依之此度醫學館おゐて、夫々世話致し候もの被仰付候間、出席之面々より、醫學治療相談致し可被申候、品々寄施藥等之儀も出來候之樣、手當被成下候、寄合小普請之御醫師中を始め、子弟之類、且當時御奉公等勤候ものも、篤志之輩は一同出席可有之、總而醫職之分至而重き事に付、精々厚く鍛煉有之度儀候、乍然流儀見識等一國ニは無之事ニ候間、入學之外、出席之面々は、聞見を廣め、治療之相談等致し候譯ニ付、心得たがひ無之、彼我を存せず、相互に學業治術研究いたし、其道精熟候之樣可被心得候、尤諸科同前たるべき事、

奥醫師幷奥勤之面々、法印法眼之御醫師之分は罷出候ニ不及候、乍然巳達之上ニ而聞見を廣め候之儀は、第一事に候得ば、出席可仕と存候ものは、勝手次第之事候、其餘出席致し難き面々は、其頭支配中江可被書出候事、

右之通、總御醫師中江可被相觸候、

寛政三辛亥年十月廿七日

松平越中守殿御渡

大目付江

多紀廣壽院、醫學館、毎年百日之間、諸生教育之義、當分相止候、以來日々講書等有之候間、陪臣町醫等も、勝手次第罷出、可致聽聞候、尤も委細之儀は、醫學館江可承合候、且又是まで年々醫學館江寄附銀致し來り候向々も、以來差出ニ不及候、

右之通、可被相觸候、

〔明良帶錄世職〕醫學館留守居役

同御門番

三十俵二人扶持被下、六人相詰る、内四人他よりつとめ、内二人持ニて居付つとめ、

御目附支配無役より出で、三十俵一人半扶持、御役扶持添、

同襖附

御門番と同じ役にして、御役料有之、但七人程、

同留下役

諸向より出役、醫學館御祭禮八月十二月にて日不定、但冬至ニは御祝有之、來醫出仕有之、

〔醫學館附地所一件〕天保二年卯三月廿日、半八郎を以、善右衛門殿へ御下ゲ、

年番與力江

醫學館附町屋敷小石川片町、深川平野町地面貳ヶ所共、上り地相成、右爲代龍閑町火除土手築立殘地之内、上納地より壹ヶ年金六拾兩宛永續爲御手當被下候段、肥後守殿被仰渡候、依之右金高年々正月七月兩度ニ、町年寄共方へ取立、御役所より相納候筈ニ候間、受取醫學館へ可被相渡候、

卯三月

〔元治二年武鑑〕西洋醫學所。。。。　池田多仲

〔文部省第一年報〕東京醫學校

學校位置　本校ハ、第一大學區東京第五大區三小區神田和泉町一番地津藩邸舊址ニアリ、

沿革　明治元年六月、舊幕府建設ノ醫學所ヲ以テ醫學校トナシ、前田信輔ヲシテ其事務ヲ理セシメ、舊幕府ノ醫學教授職坪井爲春、島村鼎、石井信義等ヲ擧テ助教トナシ、以テ生徒ヲ教育セシム、(中略)八月舊幕府ノ醫學館ヲ種痘所トナス、尋デ小石川養生所、及白山、九段、番町、駒場等ノ藥園モ、亦醫學校ノ所管トナル、

○按ズルニ、江戸ノ種痘所、後ニ西洋醫學所ト稱ス、現今醫科大學ノ濫觴ナリ、事ハ種痘ノ條ニ詳ニセリ、

〔皇國醫事沿革小史後編第六期〕安政四年(紀元二千五百十七年)幕府松本良順ヲ長崎ニ遣リ、和蘭海軍軍醫ドクトルポムペヲ聘シ、就テ醫學ヲ傳習セシム、良順、當時ノ俊傑ヲ率キテ之ニ學ブ、佐藤尚中、岩佐純、司馬凌海、佐々木東洋等、皆ナ其教ヲ受ク、万延元年、(紀元二千五百二十年)良順幕府ニ請フテ、彼國ノ病院ノ制ヲ諮詢シタ、新ニ病院ヲ設ケ、養生所ト名ケ、專ラ治療ノ事ヲ務メ、傍ラ醫學ヲ講習ス、文久元年(紀元二千五百二十一年)ニ至リ、更ニ和蘭陸軍軍醫ドクトルボードインヲ聘シ、名ヲ精得館ト改メ、内校舍ヲ設ケ、大ニ生徒ヲ集メ、良順、外國教師ヲ輔ケテ之ヲ教授ス、科目整然秩序アリ、世始テ醫學ニ理化、解剖、生理、病理、藥劑及ビ内科外科等ノ順序階級アルヲ知ルト云フ、是ヲ我邦歐洲ニ倣フテ醫學科目ヲ定メ、又病院ヲ設立スル嚆矢トス、而シテ外國ノ醫學教師ヲ聘スルハ、實ニ之ヲ始トス、明年幕府精得館ノ學生伊東玄伯(玄朴ノ嗣、後方成ト改ム)林研海(洞海ノ男、後紀)ニ命ジテ、和蘭國ニ留學セシム、之ヲ歐洲ヘ醫學留學生ヲ派遣スルノ權輿トス、今日醫學ノ隆盛ヲ視ル、實ニ爰ニ淵源スト云フベシ、

〔文部省第一年報〕長崎醫學校

學校位置　本校ハ、第五大學區長崎縣下第一大區二ノ小區長崎村小島郷ニ在リ、(校内編員二千八百十二坪八合四勺)

沿革　文久元年九月、長崎奉行岡部駿河守、及醫官松本良順等、和蘭醫官ポンペニ諮詢シ、彼ノミリタイレホスピタール（軍事病院）及ヒユルヘルホスピタール（都人士病院）ノ制ヲ斟酌シテ、設立スル所ノ病院ナリ、始メ養生所ト稱シ、傍ラ醫學ノ本科ヲ講肄ス、後チ精得館ト改稱シ、蘭人ボードキエンヲ教師トス、後同國人マンスヘールドヲ以テ之ニ代ラシム、慶應元年十月、物理化學ノ教場ヲ增築シ、蘭人ハラタマヲ以テ、其學科ヲ教授セシム、明治元年維新ノ際、長與專齋ヲ以テ學頭トス、其費用出納ノ如キハ、姑ク舊ニ依テ、長崎府廳ノ處分タリ、

〔日本教育史資料 四 舊福井藩〕福井醫學所

沿革　福井醫學所ノ基始タルヤ、文化元年十月、國守ノ侍醫淺野道有ナル者、東都ニ於テ、國守隨行ノ執法官、思構書壹冊ヲ呈シ、醫學所設立ノ須要ナルヲ獻議ス、　文化二年二月、侍醫一統ヨリ、更ニ醫學所設立ヲ請願シ、同三月設立ノ命アリ、醫學所及ビ藥園ヲ設ケ、侍醫一統ヲシテ之ニ與ラシメ、醫學所ノ名稱茲ニ至テ始テ定ル、則福井鍛冶町淺野道有ノ宅ニ於テ、醫學所ヲ假設シ、開筵セリ、淺野道有妻木榮補ヲ以テ擔任者トシ、醫員一統幷ニ侍醫ノ子弟ヲシテ醫術ヲ研究セシム、　同年六月、醫學所開筵式執行アリ、侍醫及ビ醫員一統、十德著用出席シ、神農扁鵲仲景ノ畫像ニ神酒ヲ供シ、祭文ヲ誦讀シ、學監總管等臨場シテ祝酒ヲ賜フ、而シテ國守ノ示言ヲ以テ、醫學所ヲ濟世館ト稱ス、　文化六年十月、土居ノ內海福勘助拜地ノ內區劃下賜アリ、新ニ濟世館ヲ建築シテ、醫學所ヲ移シ開筵ス、其維持ハ醫員一統ノ賦課法ヲ以テシ、國守ヨリ亦其幾分ヲ補助ス、天保十四年三月失火アリ、寺社町役所ヲ延燒スルヲ以テ、假ニ濟世館內ヲ該役所トス、由テ同年四月、櫻馬場學文所ヘ醫學所ヲ移轉シ、同年九月、町役所建築落成スルヲ以テ、濟世館ニ復ス、　安政二年一月、醫學所ニ除痘館ヲ附屬合併スルノ命アリテ、濟世館ヲ增築修繕シ、藥園地ヲ沒スルニ由リ、更ニ泉邸內ニ於テ、藥園地ヲ貸與セラル、　安政四年二月、濟世館ノ教則ヲ改正シ、半井仲庵、

藤澤一順ヲ教授トシ、東都坪井信良ヲ聘シテ講師トシ、其他教師數名ヲ置キ、醫師ノ子弟十三歲以上ノ者、七十餘名ヲ入學セシム、安政五年、製造人體ヲ歐洲ヨリ購求シ、益々教授法ヲ盛大ニス、
〔日本教育史資料六山口藩〕嘉永三年戌六月廿九日達
醫學所濟生堂ト唱被仰付來候處、今度御詮議ノ趣有之、向後左之通唱被仰付候事、
好生館　右ノ通被仰付候事
〔日本教育史資料六山口藩〕嘉永二年酉正月十八日達　　能美洞菴
右唯今ノ御役ヨリ、醫學館頭取役被仰付、御用繁ノ節ハ當番ヲモ被差除、醫學一途引受ニシテ詮議被仰付、
右役中各別之御心入ヲ以、御役人並ニ准シ、長柄傘被差許候事、
同　　赤川玄悦
右只今ノ御役ヨリ、醫學館會頭役被仰付候事、
嘉永二年酉八月欠日達　　荘原芳庵
右只今ノ御役ヨリ、醫學館頭取役被仰付候事、
同年同月欠日達
醫學館頭取役御詮議ノ趣有之、向後醫學教諭役ト唱候樣被仰付候事、
嘉永二年十月晦日伺　　青木周弼
此度醫學館御造立ニ付、他國生入塾ノ儀ハ、不被仰付段、先達テ御伺書中ニ御別紙相成居候處、是迄南苑醫學所ニ置テハ、師家入塾ノ分ハ、師家ヨリノ依願、會業ノ節同處ヘ罷出候儀被差免候、節角個樣結構ニ御造立被仰付候事故、諸國ニモ承及、追々爲研究尋來リ可申候、十里外罷越候上、失望仕候樣ニ御座候テハ、自然ト御事業不繁昌ノ基ニ可相成候、何卒御心入ヲ

以二師家入塾一、又ハ手寄來候節ハ、師家ヨリ度々御願可二申上一候間、醫學館ヘ罷出候丈ケハ、御許容被レ下候樣奉レ願候事、

本書願ノ通被二仰付一候事

〔日本教育史資料七舊和歌山〕校名　醫。學。館。

校舍所在地　始メ和歌山本町三丁目(名草郡ニ屬ス)ニ在リ、後和歌山湊雜賀屋町(海部郡ニ屬ス)ニ移轉ス、

沿革要略　寬政四年(學習館讓ノ翌年)藩主德川治寶、侍醫竹田慶安、近藤健安等ノ言ヲ納レ、命ジテ本町三丁目ニ於テ、醫學館ヲ設置シ、學頭助講授讀等ノ敎官ヲ置キ、藩內市鄕醫師ノ子弟、及其門生ヲ敎授セシム、其後學館ヲ湊雜賀屋町ニ移轉シ、文化年間更ニ館舍ヲ增築シ、天保年間館內ニ施藥局ヲ設ケ、當直醫及藥劑醫ヲ置キ、貧民ニ施藥セシム、爾來其規模ヲ變ゼズ、之ヲ保續セシガ、明治二年三月、藩政改革ノ際之ヲ廢止ス、○中略

規條

一學レ醫者、當下先修二四書六經一、以明中聖人之道上也、不レ明二聖人之道一、而昧二孝弟忠信彝倫常行之道一、雖二吾醫經一、不レ能レ探二其蘊奧一也、然此等書在二學習館一、日々講讀、則在二此館一、不レ設二其局一、宜レ就レ彼而學焉、

一欲レ學レ醫、先學レ儒、既學レ儒、則能讀レ書知二字音一、然吾邦之俗、古來讀二醫書一、用二漢呉二音一、與二儒之專用一レ漢音一不レ同也、故每日自レ辰至レ午刻、授讀士爲二初學一讀二授醫經一、

一諸子弟來請二授業一、則執事告二之醫學師及局學士一、出二授業錄一、記二其姓名產地及年月時日一、以藏レ之、

一此館以二德高學篤者一爲レ貴、故雖二人有二貴賤之異一、而席無二上下之別一、遊二此館一者、賤無レ凌レ貴、貴無レ辱レ賤、只宜二謙遜一、

一素問、靈樞八十一難者、醫之大經大法在焉、十局之學、皆以二此三經一爲レ本、故每日醫學師講レ之、周年而終、終而復始、學者當二講究一也、

一每日講會、日中至黃昏而止、午未間會業、局學士莅之、未申間講經、醫學士任之、申酉間局學士附講、或使子弟有志者講之、
一講習之業、正月十八日始、十二月十四日終、朔望佳節、幷四月十六日、十七日兩日、九月十七日、七月十一日至十六日、皆缺業、
一會讀之式、局學士着席、執事廉其傍、使諸生讀書問答、其法立三科目、曰訓讀、曰疑問、曰答辨、日日執事出牌使諸生各探取一牌、得牌背記科目者、當著其席也、訓讀者讀一章訖、疑問者發問、答辨者辨之、問者答者不勝其任、則執事退之、辭謝退則聽之、選於衆使之代焉、問者答者能勝其任、而諸生有餘疑、則就問者難之、或別發明新義、則就答者議之、答者能辨而問者不服、爭論不止、則學士辨正其義、凡義之難解者、皆當正之學士也、
一產物會、春秋二時預卜一日而會焉、諸子各齎藥物難解者、或土產珍物來、互辨名實、正眞僞、番其氣味主能、當日缺他學業、
一校穴會、常時用木偶人、引經點穴、夏時使諸子各脫衣裳露肌體、直就其身上定經取穴也、脈流骨格、人各不同、徒守寸法、而不通其變、所謂按圖求驥而已、木偶引經、雖非無其益、而不知直取身上之便且得其當也、
一醫案會、每月二次、出案題論題、以試諸子之學力、諸子書對論藥案以呈焉、學士略加批評、各著甲乙、編成一冊子、大凡議論正確、發明經義、審辨脈證、處劑有法、且文辭可觀者、此爲狀元、賞以冊子、每歲終則致其篤學勤行及得冊子之數、進席褒賞、

學局

一診候局　審望聞聲、問切按腹、察舌等診法、其書則脈經脈學之類、
一經絡局　明經絡流注、兪穴寸法、兼主鍼灸導引按蹻等科、其書則甲乙資生之類、

一本草局　辨和華蠻產之異同眞僞、以明藥性之氣味主能、其書則本經綱目之類、

一運氣局　察五運六氣勝復之變、兼通天文曆算之學、其書則運氣論、天經或問之類、

一外傷局　辨外感六氣之病、其書則傷寒論溫疫論之類、

一內傷局　辨內傷五臟虛損之病、其書則脾胃論、辨惑論之類、

一婦人局　明婦人胎產經月之病、其書則良方濟陰綱目之類、

一小兒局　明小兒驚疳痘痲之病、其書則直訣活幼之類、

一瘡瘍局　別諸家之異同、明紅毛之藥術、兼主眼目咽喉口齒金鏃折傷等科、其書則正宗精要之類、

一醫案局　出醫論藥案譯文等題、以試諸子之學力、兼主文辭之學、其書則扁倉傳、薛案孫案之類、

右十局者、醫學之科目、學通十局、明素靈八十一難之旨者、爲業既成矣、

〔醫道二千年眼目編〕一〕自序〇中略

余十八ノ年、今醫氏ノ術ニ疑アリ、二十二三ノ年、醫斷ヲ得テコレヲ讀ム、〇中略コレヲ藩內ノ先醫ニ問ヘドモ、醫タルモノ、一タビコレヲ聞ケバ、目ヲ張リ、唇ヲ反サヾルモノナシ、余一日趨庭ノ餘、コレヲ先子〇村井椿壽ニ質、先子論シテ曰、小子大ヒニ疑フコトアラバ、又ソノ大ヒニ疑ヲ以テコレヲ讀ムベシ、〇中略謹ンデ其命ヲ奉ズ、コレ寶曆丁丑〇七年ノ年ナリ、我藩〇熊本掫テ醫學ヲ與ス、再春館ト云、大ヒニ藩內ノ醫人ヲ造ル、先子ヲシテ醫學教授タラシム、學ヲ受ケ業ニ肄フノ徒、凡ソ三千有餘人、靡然トシテソノ風ニ嚮ハザルモノナシ、盛事ト謂ハザルベケンヤ、先子老ヒ且ツ病アリ、ソノ職ヲ辭ス、次ヒデ又世ヲ去ル、辛巳余年二十有九、府命ヲ奉ジテ醫館ノ事ヲ掌ル、醫生ヲ造ルノ任タリ、此時ニ當ツテ、醫斷ノ言半ハ信ジ、半ハ疑フ、素問九靈ノ旨モ、亦或ハ取リ、或ハ取ラズ、

醫生ノ道マザルモ、亦余ガ講ズル所純一ナラザレバナリ、遂ニソノ職ヲ辭ス、コレヨリサキ、余年二十又七、嘗テ京師ノ醫官東洋山脇先生ニ奉ジテ、眞醫ノ道ヲ問フ、疑ノ大ナルモノヲ決セント欲シテナリ、余ガ書ニ曰、我ガ藩有三千醫人、而無一人醫人也、非無醫人也、無眞醫也、先生又余ヲ賞シテ、書問往來、明年ソノ高足弟子、永富鳳介ヲ遣シテ、余ガ醫事ヲ試ミシム、ソノ年先生モ亦逝矣、コヽニ於ヒテ、千里獨行、笈ヲ負フテ、東ノ方京師ニ遊ブ、攝州友人合田求吾ヲ紹介トシテ、東洞先師ニ謁ヲ請フ、先師コレヲ許ス、コレヨリ日々先師ノ膝下ニ拜趨シテ、初メテ古疾醫ノ道ヲ聞クコトヲ得タリ、コヽニ於ヒテ、十數年ノ一大疑城、釋然トシテ氷ノ日ヲ得テ解ルガ如シ、此年方極、類聚方ノ二書彫印出シ賣ル、余コレヲ請フテ、マサニ西ニ歸ントス、別ヲ先師ニ告グ、先師時ニ小子棯ニ諭シテ曰、我ガ古疾醫ノ道亡ブルコト業ニ既ニ二千年ニ垂ントス、コレ一人二人一代二代ノ力ヲ以テ、コレヲ復スルコト難シ、子モシ鎭西ニ歸ラバ、翁ガ言ヲ以テ、コレヲ醫人ニ傳ヘヨ、子ガ知ラザル所ハ、翁已ニコレヲ知ル、翁ガ足ラザル所ノモノアラバ、子勉メテコレヲ補ヘ、先師涙シテ余ヲ送ル、東洞先師、猷長三好龍輔、及ビ余ガ徒、赤星見淳二人、側ニ在リテコレヲ聞ク、小子棯謹ンデ先師ノ命ヲ奉ジテ、泣ヒテソノ膝下ヲ辭ス、コレヨリ孜々汲々トシテ、日夜弗懈、古疾醫ノ道ヲ、我ガ藩ニ唱フ、藩內翕然トシテ風ニ靡フ、（中略）

都井棯識

〔救議四〕御醫者ノ子供夥タ有テ、二代目ヨリノ大形御用ニ立ズ、費成者也、銘々ハ療治ニ隙ガ無ケレバ、子供ヲ教可立樣ナシ、小身ナレバ、學文ニ往スルニハ、供人ノ入ニ困リ、彼是トシテ無學ニ成、人頭マネバ療治ヲ仕習フベキ樣無、偶療治ヲ能スル人モ、無學成故、肝心ノ時ハ仕損ズル物也、總ジテ人ノ性質學文ハヨクレドモ、療治ノ不得手成モ有、左樣ノ人ヲ師範ニ被仰付、學寮ヲ立テ何レモ子供ヲ遣シテ學文サセ、大體ノコトヲモ覺タル時、田舍ヘ遣シ、療治ヲ仕習ハスル樣ニアラバ、何レモ大抵御用ニ立程ニハ可成也、是等モ上ノ御世話ナクテハ、自ラ御用ニタ

醫塾

タヌ者多カルベキ也、

〔療治茶談五〕總論

諸國ニ於テ、講堂ノ經營アルヲ見聞スルニ、皆悉ク儒學校ノミニテ、醫塾ナシ、サテ今ノ時勢ヲ以テ、其損益ノ處ヲ考フルニ、醫塾ヲ設テ、醫學ヲ精勤サスル、國益多キニハシカズ、

〔先哲叢談續編二〕向井靈蘭○中略

加賀上卿奧村氏、暨公族大夫前田氏、嘗嬰重病、厚聘請其治療、無幾全愈、加賀侯大悅、將每月給百口糧而遇以賓禮矣、特賜金千兩、以爲造營家塾之資、靈蘭以衰老辭其廩俸、侯强贈金、不得峻拒而受之云、我土崇重醫生、遠過儒生、優待之厚、常出格外、雖然未嘗聞以千金而謝其勞者、靈蘭逢絕無希有之際、實可謂千歲之奇遇矣、○中略

靈蘭嘗聞、先是藤惺窩於都城外、將創起學舍教授諸生、竊與京尹板倉勝重相議區畫、遂上疏、官許其請、相地擇處、會有浪華之役、其事不果、寬文中將再建議、或有推轂其事者、遂上疏言所施爲、官將肯其所請、會有阻格者、不成而罷、

〔東洞先生行狀〕先生諱爲則、字公言、安藝人也、○中略寶曆壬午歲、○十二年先生年六十一、夏五月、是其生辰也、親戚門人上壽、先生舉觴而謂衆曰、吾年六十一、胤子幼弱、未視弟子達其道者、若大開家塾、教育生徒、傑者出其中、雖然吾之貲財不足給之、自今以往、我將貨殖、於是嗇儉其身、效陶朱公之法、貨殖數歲、家累千金、乃求便利之地、營宅於皇城西門外、未迄開家塾也、○下略

〔拙堂文集一〕順正書院記

平安新宮凉庭翁、以唱蘭醫法雷鳴海內、而篤信聖人、耽讀墳典、嘗歎曰、京師首善之地、而學校久廢、豈非大缺典歟、乃出私財營書院於洛東瑞龍山下、建祠祀宣聖及醫祖、講堂生舍以下悉具、多貯漢蘭書籍於其中、以待生徒之乏資者、京尹間部侯嘉之、親書扁曰順正書院、林祭酒又書名敎樂地四大字贈

之、并竭其精誠之志也、翁本山陰人、學醫徒於京師、其業大行、稍入山積、而惡衣菲食、自奉甚儉、積而能散、賙急救困者不可勝計、今叹有此擧、殆費萬金、拮据未已、謀廣置學田、傳之久遠、非篤學之篤信道之深、安能如是哉、

〔政事要略九十五至要雜事〕又醫疾令云、醫針生博士一月一試、（謂、略除禁呪禁生者、蓋文須知也、）典藥頭助一季一試、宮內卿輔年終總試、其考試法式、一准大學生例、（謂、考試、云試也、謂學及旬試、并歲量決罰等類、准大學生例、其有三下者、亦准學生解退也、）若業術灼然、過於見任官者、卽聽補替、（謂、是未及業成年限、而至年終試、知業術過見任者、退其人、以補新生也、案下條、闕不第量退、擬補者闕、其業術灼然者、謂未出身、亦得用、）其在學九年無成者、退從本色、（中略）

又云、有私自學習、解醫療者、投名典藥、（謂、有人自學習、欲以出身者、卽送典藥寮、願自請試之類也、）試驗堪者、聽准醫針生例考試、（謂、依上條、典藥試驗、申宮內省覆試、錄中太政官、是爲准醫針生例、）〇中略

又云、醫針師、典藥量其所能、有病之處、遣爲救療、（謂、此條五條以上、及六條以下也、）每年、宮內省試驗其識解優劣、（謂、唯驗其醫術、不合試經也、）差病多少、以定考第、（謂、於典藥所定考第、宮內覆押校、非是宮內省定其考第也、）

又云、醫針生、業成送官者、式部覆試、（謂、宮內中官、下式部、此宮內先已校試、故云覆試也、）各十二條、醫生試甲乙四條、本草脈經各三條、針生試素問四條、黃帝針經、明堂、脈決各二條、其兼習之業、醫針各二條、問答法式、並准大學生例、（謂、考試令、帖文及問、其答者、皆須辨明義理、然後爲通、是其略也、不全通、不可爲通之類也、）醫生全通、從八位下敍、通八以上、大初位上敍、其針生降醫生一等、不第者退還本學、（謂、此條未及業成年限、故云退還本學也、）經雖不第、而明於諸方、量堪療病者、仍聽補醫師、（謂、雖不及進入之科、而知療病合補醫師之類、故亦不得仍補醫師、）〇中略

又云、醫針師等巡患之家、所療損與不損、患家錄醫人姓名、（謂、上條量其所能、有病之處、遣爲救療是也、）申宮內省、（謂、省下典藥寮、令附考狀、）據爲考課、諸國醫師亦准此、

〔令集解六職員〕凡國博士、醫師、國別各一人、（中略）又釋（醫疾令）云、凡國醫生、每月醫師試、年終國司對試、并明案優劣、試有不通者、闕狀科罰、若不專師教、數有譬犯、及課業不充、給假孔違者、退學解闕、卽立替人者、是以知可爲教授、并每月試等例、

〔令集解六職員〕攝津職帶津國、(中略)醫疾令云、凡國醫生業術優長、情願入仕者、本國具述藝能、申送太政官、

〔延喜式十九式部〕試貢人及雜色生、(中略)其及第者申奏敍位如前、試諸國博士醫師、亦准此儀、但不申官、

〔延喜式十八式部〕凡試白讀諸生者、除大學典藥寮之外、非奉勅宣、不得奉行、

〔類聚符宣抄九〕醫生試 試博士附出

醫生日下部朝臣有行

右中納言從三位藤原朝臣山陰宣、奉勅、件人宜仰式部省令准針生課試之者、

仁和三年二月十日　少外記紀有世奉

仰少錄時原利行

左近衞醫師時原興宗

左大臣宣、件人宜令爲試彼道學生之博士者、

延喜五年七月五日　少外記紀延年奉

右兵衞醫師菅原茂滋

右左大臣宣、宜以件茂滋爲試醫道學生等博士者、

延長八年六月二十六日　大外記伴宿禰久永奉

請令依先例蒙宣旨、以左衞門醫師正六位上菅原朝臣爲名爲試博士、課試生徒狀、

右謹撿先例、道分兩門、課試生徒、爰忠來之門徒有道維材、并試博士侍醫和氣時雨等四人、故權針博士菅原茂滋門徒、侍醫菅原行仁一人爲試博士、而茂滋卒去之後、彼門徒無博士、難課試生徒、生徒之歎、莫不日新、加以撿年來之例、兩門之博士難備、其員、諸衞醫師出身成業者之中、簡定其人、殊申下宣旨、爲試博士、其來尚矣、方今爲名、才用超等絕倫、尤堪爲博士、望請依例蒙宣旨、以件爲名爲試博士、令

醫師

課試生徒、仍錄事狀、議請處分、

天暦元年五月四日

従五位下侍醫兼權醫博士尾張介時原朝臣維材
従五位下典藥頭兼針博士能登權介伴宿禰有道
従五位上醫博士兼備後介宮宿禰忠來

〔續古事談五諸道〕富家殿灸治シ給ケルニ、重康申サク、日神モ、ニアリ、ヤキ給ベカラズ、コノカミ忠康申サク、内モ、外モ、コトナリ、〈中略〉兄弟中アシクシテ、ツチユカヽル事アリケリ、忠康ハ雅忠ガ實子ニハアラズ、上野守良基ガ子也、雅忠オサナクヨリ子ニシテ、道ヲツタヘタルナリ、醫道ノ課試忠康マデシタリ、其後スルヒトナシ、

〔憲教類典四ノ十醫學館〕寛政三辛亥年
於醫學館以來一ヶ年春秋兩度醫業考試被仰付候典藥頭幷奥向之面々、法印法眼之御醫師等は相除、其餘年齢廿位にも相成候にはゝ、不殘可罷出候、尤春に至り日限等は多紀廣壽院より可相達候事、

右御醫師四十歳にも及候分は、考試に不及、出席而已不被致候、勿論難問詩講等致し候類之事は、一個有之間敷筋候間、隔意なる心得たがい無樣可致候、尤醫學館へ、常々修業として罷出候ものの考試は無之儀にて候事、

右之通、總御醫師中江可被相觸候、

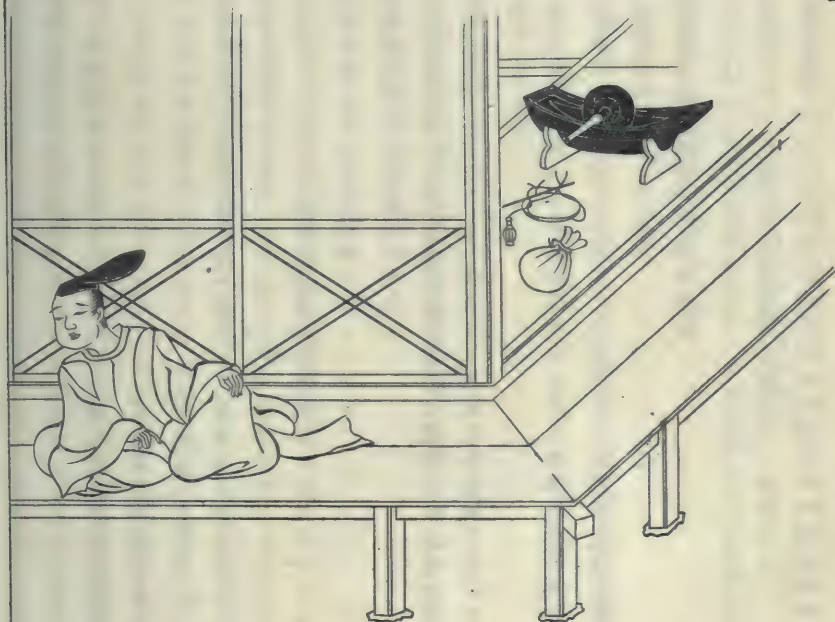
十月

〔倭名類聚抄二工商〕醫　說文云、醫〈伊反、作醫、和名久須之〉治病工也、

〔說文解字十四下〕醫〈治病工也、殹惡姿也、醫之性然、得酒而使、从酉、王育說、一曰、殹病聲、酒所以治病也、周禮有醫酒、古者巫彭初作醫、於其切〉

〔伊呂波字類抄久人倫〕醫師〈クスシ〉

〔福富草紙〕





〔源氏物語若菜三十四〕く。す。し。などやうのさまして、いとさかりすぎ給へりやなど、なまかたはらいたく思ひ給へり、

〔訓蒙圖彙人物四〕醫くすし、醫同、醫者醫工也、

〔七十一番歌合中〕卅四番　醫師

殿下より、續命湯、獨活散をめされ候聞、たゞ今あはせ候、

〔善隣國寶別記〕七醫解

夫醫之名有幾、有福醫、有世醫、有隱醫、有德醫、有儒醫、有高醫、有明醫、不讀書窮理、以命通運達欺世誤人、是之謂福醫、或曰時醫、曰庸醫、曰凡醫、曰下醫、其本一也、家世相承、以是道爲貴重、是之謂世醫、徐家父子、顏氏昆弟、祝橘泉許進之是也、不居朝庭、隱於醫苑、徇徉林藪、而以養志、是之謂隱醫、董君異、葛稚川貞匀先生飛霞道人是也、有善行而好嘉言、但以救人利物爲心、是之謂德醫、楊登父、吳德信、沙杏軒、沈壽祥是也、出入六經、涉獵百氏、遊聖賢之門、登道德之域、經書既通、醫方亦明、所謂世實者也、是之謂儒醫、麻□巴呂滄洲、黄子厚、朱義烏是也、天有四時五行、和爲雨、怒爲風、疑爲霜雪、張□虹霓、天常數也、人有四肢五臟、流爲榮衞、彰爲氣色、發爲音聲、人常數也、失則蒸生熱、否生寒、天地亦然、寒暑不時蒸否也、導之以藥石、救之以砭劑、是之謂高醫、華元化、孫眞人是也、博通經方、彙諳群書、明性命、定吉凶、針藥應手、據効如響、是之謂明醫、秦越人、張長沙是也、庸醫之道豈易々哉、天地以生物爲心、聖人以愛物爲心、醫之道所關大、而果非仁術耶、惜哉後世陷蠱術、且不精其說、而害人多矣、儒亦有七、潛溪宋氏辨之、遂作七醫解、以自警云、

壬午〇寛永十九年巨月日　　靜軒氏書

〔鹽尻七〕一天台止觀七ニ云、如野巫唯解一術方救一人獲一哺飯、何須學神農本草云々、倭俗、無學の醫を、や。ぶ。く。す。し。と云は、元台家の諺か、

（享祿本類聚三代格四）太政官符

應省史生一員置醫師事

右得鑄錢司解偁，撿案內，此司在岡田之日，典藥醫師一人別置司家，今醫師停置，療治無方，望請省史生置醫師，謹請官裁者，中納言兼左近衞大將從三位行民部卿清原眞人夏野宣，奉勅依請，

天長四年七月三日

太政官符

應六衞府醫師預奏任事

右得醫師等解狀偁，謹撿官位令，典藥寮醫師從七位，針師從八位，諸衞府醫師正八位，太宰府醫師正八位，又延曆十五年十月廿八日格偁，陸奧國醫師准少目者，今典藥寮醫師針師，幷太宰府陸奧國醫師等，皆是奏任，而至諸衞府醫師，獨在判補，伏案物意，可謂相違，望請官裁被預奏任者，中納言從三位兼行左衞門督源朝臣能有宣，奉勅依請，

仁和元年十二月廿九日

（三代實錄清和七）貞觀五年九月十五日甲辰，木工醫師正六位上民首廣宅等，賜姓眞野臣，

（三代實錄清和十五）貞觀十年正月八日癸卯，略中左近衞醫師紀宿禰春生，並授外從五位下，

（續日本後紀仁明五）承和三年四月丁酉，賜入唐使節刀，略中被遣唐醫師山城國葛野郡人朝原宿禰岡野，改本居貫附左京四條三坊，

（令義解職員一）凡國博士醫師，國別各一人，

（令集解職員六）朱云，問國博士醫師，何不云職掌，答，並不稱職掌，則其下並學生，明知教授學生無疑者，私案，考課令云，國博士立三等考第，居官不怠，教導有方爲上，教授不倦，生徒充業爲中，不勤其職，教訓有闕爲下，其醫師准效驗多少，十得七以上爲上，得五以上爲中，得四以上爲下者，是以爲驗也，而

於醫師、以敎授不定考第者、可求考課令也、○中略 又醫疾令云、凡國醫師敎授醫方、及生徒課業年限、幷准典藥寮敎習法、其餘雜治行用有効者、亦兼習之者、

〔續日本紀 二十七稱德〕天平神護二年五月乙丑、太政官奏曰、准令諸國史生、博士、醫師、國無大小一立定數、但據神龜五年八月九日格、史生之員隨國大小、各有等差、其博士者、總三四國一人、醫師者每國一人、今經術之道、成業者寡、空設職員、擢取之人、繕寫之才、堪任者衆、人多官少、莫能遍用、朝議平章、博士總國一依前格、醫師兼任、更建新例、職田、事力、公廨之類、並給正國、不給兼處、有料之國名爲正任、無料之國名爲兼任、其史生者、博士醫師兼任之國、國別格外加置二人、庶令經術之士、周遍宣揚、功勞之人、普蒙霑潤、奏可、

〔類聚三代格 五〕勅、如聞頃年諸國博士醫師多非其才、託請得選、非唯損政、亦無益民、自今以後不得更然、其須讀經生者三經、傳生者三史、醫生者太素、甲乙脈經、本草、針生者素問、針經、明堂、脈決、○中略 並應令任用、迭被任之後、所給公廨一年之分、必應令送本受業師、如此則有尊師之道終行、敎資之業永繼、國家良政莫要於茲、宜告所司早令施行、

天平寶字元年十一月九日 ○又見續日本紀

〔續日本後紀 十仁明〕承和八年二月乙卯、式部省言、式云、諸國博士醫師解任之後、各還本司、令熟本業、若望更任者聽之、不勞復試、其被試及第、既任遭喪者、服闋之後、復任滿歷、但不經試者不在此限、省依式文、喪解之所、不補他人、服闋之後、令遂其歷、因茲敎授醫療一年曠職、謹案式云、官省判補雜色之輩、遭喪解任、若有才用者聽奪情、望請、不待服闋、特從復任者許之、可其先得試復更任者、亦同此例、

〔類聚三代格 五〕太政官符

應大學典藥諸生者苦住學舍幷鴻儒名醫子孫依薦擧任諸國博士醫師事

右大納言正三位源朝臣能有宣、奉勅、如聞年來諸國博士醫師、從事之間、或非其人、今須內藥生年勞

二人之外、及大學典藥諸生不經課試者不得輒任之、唯若任學舍頗堪採用者、雖非得試、聞以奉補、勿令遂作空歸之恨、又鴻儒名醫子孫、去親不遠、尋實無疑之輩、假令不得傳習祖業、特修擧狀奏補權任、然則教授療治之職、無有非業、碩儒名士之後、靡墜餘慶、

寬平七年二月一日

（延喜式十八式部）凡諸道學生、才學頗長、其道博士共擧爲諸國博士醫師者、雖非奉試及第、皆爲受業、自餘爲非業、

（續日本紀三十五光仁）寶龜十年閏五月丙申、太政官奏曰、謹檢令條、國無大小、每國置史生三人、博士醫師各一人、（中略）其博士醫師兼國者、學生勞於齎粮、病人困於救療、望請每國各置一人、並以六考遷替、自今以後、立爲恒式、謹錄奏聞、伏聽天裁者、奏可之、

（類聚三代格五）太政官符

應鎭守府醫師秩六年爲限事

右先例、以五年爲限、今被右大臣宣偁、奉勅、宜改舊例六年爲限、

貞觀八年十二月五日

（三代實錄十八）貞觀十二年十二月廿五日壬寅、諸國非授業博士醫師、以四年爲秩限、但出羽及太宰管內諸國五年爲限、（中略）又諸國博士醫師受業師料割所請公廨十分一、送納本寮、

（延喜式十八式部）凡諸國非業博士醫師、以四年爲秩限、但出羽太宰管內諸國五年爲限、

（延喜式十一太政官）凡諸國受業博士醫師補任解文、幷籤符名下註各本業、

（延喜式十八式部）凡諸國博士醫師補任解文幷補任帳姓名之下、受業者註各本業、

（延喜式十一太政官）凡諸國權史生博士醫師遷任、幷依讓相代之輩、其籤符註所讓歷、（中略）

凡諸國史生博士醫師籤符、外記勘會補任帳、明知其補由、然後請印、

〔延喜式十八式部〕凡大學諸博士六位已下、兼任諸國權博士、但先奏後補、典藥醫針博士准之、兼任權醫師、

凡諸國博士、醫師解任之後、既進解由者、各還本司、令熟本業、各註上日、毎年申省與考、若望更任者聽之、不勞復試、其被試及第、既任遭喪者不待服闋復任、藥生兼侍醫學、任者亦准此、其秩滿任解之後更任者亦同此例、但先不經課試者不在此限、

凡諸國非業權任博士醫師秩滿、年終申太政官、

〔類聚三代格五〕太政官符

准陸奧國博士醫師官位事

右被大納言正三位紀朝臣古佐美宣偁、奉勅、上件二司、自今以後、宜准少目、

延暦十五年十月廿八日○日本後紀係己卯、己卯二十二日也、

〔類聚三代格五〕太政官符

應省史生二人置博士醫師各一人事

右得大和國解偁、撿案内、承前之例、博士醫師並被補任、而依太政官去延暦十六年四月六日符、倶從停止、自爾以後、學道久廢、救疾無醫、望請、省史生二員、依舊永置博士醫師者、右大臣宣、奉勅依請、五畿内諸國准之、

弘仁十二年十二月二日

太政官符

應補五畿内幷志摩伊豆飛驒佐渡隱岐淡路等國博士醫師事

右被左近衞大將從三位兼守大納言行民部卿清原眞人夏野宣偁、奉勅、大學典藥生等、年卌一以上不耐遂業者、自今以後、課試白讀補上件十一箇國博士醫師、庶激垂帷之操、慰穿壁之勞、但卌歳以下不在此限、

天長七年十一月十五日

〔類聚三代格五〕太政官符

應補筑後肥前肥後豐前豐後五箇國醫師事

右得大宰府解偁、謹案、去神龜五年八月九日格云、博士者總三四國一人、醫師者每國一人者、又寶龜十年六月七日格云、太政官去閏五月廿七日奏偁、博士醫師兼國者、學生勞於覊旅、病人困於救療、望請每國各一人、並以六考遷替、並聞已訖者、夫醫師無兼國之任者、爲有救療之急也、今件五箇國、去府之程、二日以上七日以下、庶民之中、頗得病患、於著府下、勞受醫藥、命在呼吸、旦不及夕、對治之途、豈可如此乎、望請、國別減史生一人、置醫師一人、謹請官裁者、左大臣宣、奉勅、宜停減史生、以典藥寮學生及第者補之、

承和十二年七月十七日〔○又見續日本後紀〕

〔延喜式十八式部〕凡日向、大隅、薩摩、壹岐、對馬等國島博士醫師者、大宰准大學典藥生試、才補任、副勘籍狀、申上、省載季帳申官、待考滿叙內位、其遷替皆以六年爲限、其六國學生醫生、皆集府下、分業敎習、

〔文德實錄九〕天安元年十一月戊戌、右京大夫兼加賀守正四位下藤原朝臣衞卒、衞贈左大臣從一位內麻呂第十之子也、〔○中略〕九年〔○承和〕春正月、遷爲大宰大貳、〔○中略〕乃遂赴任、先是、所管九國三島醫師博士、總府所自任也、名實不副、天俸有費、因上奏云、博士執經授業之職、醫師合藥療治之最也、雖道自有優劣、然事非無緩急、何者一夕之命、得方則在其生理、百年之身、失術則墜其天算、彼飛鳥之黃草、流香之反魂、言於世路是甚急者、而今府所任置醫師等、未必其人、假名居位、三藥非其知、十療無一驗、遂使病門失望、豈是皇慶本意乎、請至件一色、殊依朝選奮奏、時議容之、自此始擢典藥生受業練道者、以爲彼管內醫師、

〔三代實錄七淸和〕貞觀五年九月十五日甲辰、右京人大宰醫師正七位上民首方宗〔○中略〕等、賜姓與野臣、

國醫生

〔三代實錄九清和〕貞觀六年八月八日壬戌、播磨國飾磨郡人播磨權醫師正八位上和邇部臣宅貞、式部少錄從八位上和邇部臣宅守等、賜姓邇宗宿禰、

〔三代實錄三十六陽成〕元慶三年六月廿六日乙酉、正五位下守右中辨兼行出羽守藤原朝臣保則、飛驛奏言、○中略下野國前權少掾從七位上雀部朝臣茂世、權醫師大初位下下毛野朝臣御安等、各押領國兵來從軍旅、今還向訖、○下略

〔令義解一職員〕凡國博士醫師、國別各一人、其學生大國五十人、上國卌人、中國卅人、下國廿人、醫生各減五分之四、

〔令集解六職員〕釋云、學令云、凡大學生取五位以上子孫及東西史部子爲之、又條云、國學生取郡司子弟爲之云々、○中略釋云、醫疾令云、凡醫生先取藥部及世習、次取庶人年十三以上十六以下、總令者爲之者、然則國醫生取庶人耳、

〔類聚三代格十五〕太政官符
　合二條○中略
一請置學校料田事
右府學校六國學生醫生竿生有二百餘人、雖免徭役、無賞勸人、請每國置田四町、二町以賜明經秀才者、二町以賜醫竿優長者、
以前得大宰府解偁、管內諸國乘田多數、望請、置上件田、賞以勸人者、右大臣宣、奉勅、宜依請、
　天應元年三月八日

幕府醫師

〔總御醫師分限帳〕典藥頭○中略　代々法印○中略　奥醫師○中略　西丸奥醫師○中略　法眼寄合醫師○中略　奥詰醫師○中略　代々寄合醫師○中略　寄合醫師○中略　御番醫師○中略　御番外科○中略
小普請醫師○中略　甲州勝手小普請醫師

〔職掌錄〕醫師

當職定員なし、奧表、本道雜科の差別あり、何も若年寄支配、　奧醫師御番料二百表、但外科雜科ハ同百表、部屋住より見習勤の者ハ御切米二百表被下、御番料なし、　御番醫師持に而、二百表已下の者は、御番料百表部屋住より見習勤の者は、二十人扶持賜ふ、　法印、法眼之醫師は、御連歌之間、北御椽頰ニ相詰、御目見之節は、御白書院にて獨禮也、其外之醫師は、御白書院に並居、一同之御禮也、　寄合醫師ハ御禮日計ニ出仕、奧醫師、奧詰醫師は、日々登城御機嫌を伺ひ、晝計伺候、其內御用次第御廣敷御守殿御住居等江も伺公す、　御番醫師は兩丸打込にて、一人づゝ勤番す、席は桔梗間、　半井、今大路兩氏は典藥頭に任じ、從五位下に叙す、此兩氏より隔年に、正月の屠蘇白散を禁裏へ調進の事を司る、家老爲名代上京し、緩諸大夫に任ずるよし、

〔憲教類典〕四ノ十 醫事館 元祿元戊辰年九月十三日

覺

一御醫師衆、向後家業江入情可被相勤事、

一無故方江方々藥致俳佪事、不入儀候事、

一病者之面々は、病氣之樣子具可致言上事、

附病氣に而、其身鈍氣家業勤中儀成兼中程之者は、是又具言上可仕事、

右は稻垣安藝守宅江、半井驢庵、今大路式部、吉田方盛院、岡本壽仙、岡了庵、淸水龜庵、村田安栖、久志本式部、松井省庵、生野道壽招之、秋元但馬守列座演達之、

〔有德院殿御實紀附錄〕十五 元祿正德のころには、醫員のものも、俸祿を世々にし、奢侈にのみふけり、治療にうときもの少からざりしかば、それをあらためさせ玉はむとの盛旨にて、勤をすゝめ、志をいましめ、その志あるものには、御府の方書をも借あたへられてはげまし玉ひしかば、享保の中

頃にいたりては、數原通玄尙白、河野仙壽院通休、橘宗仙院元孝、村田長庵昌和、多紀安元元孝、林良適完熙、丹羽正伯貞機、望月三英君彥など云る國手ども多く出來れり、是ひとへに世の人材を養ひ玉ふ事のよくいたらせ玉ふによれるなるべし、其中にも、通玄尙白は、わきて御氣色にかなひ御藥の事を專らうけ玉はりしとなり、

〔天明記七〕己酉〈○天明九年〉二月、御醫師中〈江〉越中守殿御渡被ㇾ成候御書付寫、此節何も出精之趣には候得共、猶又爲二心得一申達候、

一總而醫業を以て、世祿結構被二成下一候に付、家業之儀は格別出精可ㇾ致義に有ㇾ之候、殊に御撰擇を以、奧醫師被二仰付一、祿位も被二相加一、別而之事に候、出精心掛も格別に無ㇾ之候而は不ㇾ叶事に候、奧醫師之調藥諸家に而も相願候儀は、畢竟醫學醫業等格別之儀ニ付、取用ひ候事に候處、近來は、右之義仕來同樣に相成候哉にも相聞候、左候へば、此上彌々風儀不ㇾ宜に至候而は、醫術之貴賤を不ㇾ撰義も取失ひ、客來之取持も同樣に相成間敷にも無ㇾ之、調藥之儀も、名目のみに成行、隱に他醫之療治を請候樣有ㇾ之候而は、一己之身上不束成計に而、御外聞も不ㇾ宜候義に候、殊更勤め向無二此上一御大切之儀に相拘り候事に候條、能々相心得、出精可ㇾ被ㇾ致候、平常御側近も被ㇾ出、大奧〈江〉も相廻候身分之義に候得ば、身持等之儀は別而相愼み可ㇾ被ㇾ申候、

〔元治二年武鑑〕兩典藥頭〈御同〉　乘輿白無垢著

半井刑部大輔廣明〈略○註〉　今大路兵部大輔□〈略○下〉

〔德川禁令考十七官醫長〕官醫長〈元和年間、京都ヨリ今大路、半井ノ兩醫ヲ召シテ典藥頭ニ爲ストノ傳說アレドモ、確書ヲ得ズ、然ルニ元寬日記ノ、元和二年正月五日ノ條ニ、日ク、秀忠公白書院ヘ御着座、僧侶獨禮、井今大路民部卿、中里等總禮トアルヲ見レバ、此前ニ既ニ幕下ニアルモノ疑ナシ、此職世襲シテ近世ニ至ル、累代武鑑、不ㇾ載ㇾ之、柳營秘鑑、官中秘策ニ其禮ノ班席ヲ掲ゲ、〈叙爵人武鑑列寄〉日、兩典藥頭半井出雲守千五百石、今大路右近〈元中務大〉千二百石、按ニ此兩家ハ、本官醫ト同ジク、若年寄ノ支配タリト雖モ、官醫ノ眞ル藥劑能否ヲ論セズ、其職自ラ一官ノ長タリ、〉

〔明良帯録世職〕奥医師
医業ニ達したる人を、奥医に撰挙す、法印に叙す、七十以上は紅裏を着用す、正月ハ家法の御薬を差上る、当時は医学館にて医道を修し、薬生は本草家望江長伯にて糺す、日々伺公して御脈を診す、医は仁の術なれば、奥医といへとも、軽きものに薬を与ふ、古橘の先祖は仕切場の物に薬を与ふ、御殿にて人々噂せり、橘聞て、仁術なれば不害と答へられしを、享保の君○徳川吉宗聞し召給ひて、尤と上意有よし、

〔元治二年武鑑〕奥御医師　二百俵高　御役料二百俵
坪井信良□　岡田昌碩法眼　多紀永春院法印　戸塚静春院法印　大膳亮弘玄院法印　津軽良春院法印　遠田澄庵法眼　松本良順□　服部了元法眼　篠崎三伯法眼○下略

〔御番医師勤方事蹟撰類録〕新規御入人之節之事○中略
一召人於御右筆部屋椽頬、御老中御列座、若年寄中御侍座御用番之御老中方被仰渡候、左之通り、
御番医師被仰付
但シ二百俵以下之者へハ左之通り
御番医師被仰付、御番料百俵以下
右被仰渡相済候而、小普請支配より、御目付中へ引渡、御目付より此方へ相達候、又時宜に寄、小普請支配より直に此方へ相送り候事も有之候、右番之者罷出、部屋へ同道致候、

〔御番医師勤方事蹟撰類録〕初御番二度目三度目心得之事○中略
一御夜詰は、夜五ッ時に罷出候、中之口にて、五ッ打候段呼候節、少し見合候て、両御番申合、焚火之間へ罷出、桔梗之間之方へ御復際に、新御番組頭、本道外科と並居て、五ッ半之御時計打候節、御目付衆咳拂被致候、急速に一同桔梗之間に入御□之方初め之御柱を後ロに当て、著座す、本

道者御柱より一人分上ミに著座す、但俗に外科柱と稱候也、御側衆御出座御夜詰引候樣に、當御番之御目付衆へ被申渡候、其後新御番頭より以下、此方共迄、御側衆目禮被致候節致平伏候、
其後一人之御目付衆、時宜被致候、直に部屋へ引取申候、

〔明良帶錄世職〕寄合醫師

何も家業の術を以て奉仕す、正月ハ家傳の藥を差上る、家督後、幼年のもの、此場にて修業して醫道を博くまなびて、藥性を辨別したる人を選ばる、

〔明良帶錄世職〕御番醫師

是は家々の醫術を以て、宿衞をなす、殿中不時の病人、非常の怪我人等あるとき、藥を與ふ、大奥向病人あるとき、御定の外醫師呼寄の節、御留守居衆より申越節、御廣敷迄罷越、御廣敷番之頭同道にて部屋へ參り、容體を診す、何れも法眼なり、

〔德川禁令考官醫十七長〕寛政元己酉年四月闕日

寄合醫師へ達

代々醫業致相續候者、職業之儀、別而致出精、御用ニ相立候樣心掛候儀、御爲之事、且銘々先祖へ對し候而も可爲本意儀ニ候、殊醫業者大切之職業、人命を預候儀を怠り可申樣無之儀ニ候、以來其身一代出精無甲斐、其倅醫業等閑ニ而、幷人柄等之儀相愼候事、薄き輩者祿之多少之差別ニよらす、其時宜ニ隨ひ、家督等之節ニ至り候而も、減祿被仰付儀も有之間敷儀にも無之候、乍然其者取來候祿は、成丈先規不省樣有之度儀ニ付、其身追々修業を遂、致出精候ハヾ、連々又御加增有之、總ニ者先規之祿ニ可被復候、右御趣意ニ付而者、寄合小普請不勤之輩ニ而も、出精次第舊祿ニ被復、御加增も可有之儀ニ候、心得之ため相達候間、何も厚く出精可被致候、
四月

〔明良帶錄 世職〕御目見醫師

醫師は職業なれば、其術に堪へたる、町醫師、陪臣醫師、新規御目見被仰付らる、是より御番醫に昇るもあり、いづれも學術修業次第也、

〔天明記 二〕一近年不學麁術之醫師共、賄賂金差出し願ひ候へば容易に御目見被仰付候事、是等之儀は、重々不屆に候、第一司命之職に候へば、能々御撰可有之筈之處、其所へ心付不申、甚以不實之至候、就中其方及噺許候事、是等は上之御格祿を、任權威奉候に當り候事

〔明良帶錄 世職〕小○○○○○普請醫師

是も醫術修業之道にして、小普請組之支配也、屋敷幷町方の病人有時、藥を與ふれば、療治帳とて、病人之名何之誰、家來何之誰何病、主方何方、町方なれば、何町家主誰店何之誰と認め、支配江出す、此帳面支配へ出す格也、此場修業中減祿被仰付、醫術上達之上にて、選擧之節元高に被成下、寛政御改正の節被仰出、

〔浚明院殿御實紀附錄 三〕朝ごとに上直の侍醫御脈をうかゞふ時には世の中流行の病もなしや、なにぞあやしき病などにて、人のくるしむことはなしや、又は大名旗本等のうち、大病のものあらずやと、御尋あることゝつねのことなり、もし世上流行の病あり、又は大病旗本のうちに大病人ありなど、聞えあぐれば、御容を改め玉ひ、愁玉ふ御氣色あらはれ玉ひ、醫療のことゞも御たづねあり、又おだやかにして、流行病もなく、衆人平和なるよし申上れば、御機嫌いとよくおはしましけるとぞ、

〔京都御役所向大概覺書 六〕醫師儒者之事、附鷹峯御藥園幷御藥種獻上之事、○中略

京都ニ屋敷有之御醫師

一五百石　烏丸通一條下ル町　在京　施藥院

一三拾人扶持　堀川通丸太町上ル町　在京　山脇道立

一千三百石　三條通兩替町東江入ル町　當江戸　竹田法印

一文○闕　新町通中立賣下ル町　今大路道三

扶持人醫師

一集要より三拾人扶持　一條通新町西江入ル町　浦野保生院　略○下

〔七十冊物類集外六十一〕

蝦夷地御雇醫師可被仰付者、差支有無相糺申上候書付、　椅藤左衛門

本草家町醫師　阿部將翁

右之者蝦夷地御雇醫師江申上候面も、御差支無之哉、及御掛合候、

右箱館奉行衆より之御掛合書、被成御渡、取調可申上旨被仰渡候、

本石町壹町目藤三郎地借　本草家町醫師　阿部將翁　辰五十二才

右之もの申立候は、此度蝦夷地御雇醫師御用被仰付候とも、御差支無之樣可仕心得ニ御座候、然ル處去ル子年中、御勘定奉行石河土佐守殿江、硝石御用之儀奉願、數度御調有之、其後水野筑後守殿江御引渡ニ相成、先達而被召出、御調之上、御請書差上候ニ付、近々納方可被仰付哉之由ニ付、夫夫手當仕居候間、右御用被仰付次第、悴米象江申委候上、門人共召連、蝦夷地江罷越、藥草金石を探索仕、五果菜蔬竹林等相仕立、土人之取捨候魚腸を以造り硝石相製、地利見計、鹽濱等も取立申度存罷在候間、右硝石御用御下知濟之上、彼地江發足仕度、此段奉願候段申立之候、且同人身元取調候處、去々寅年中より、右町に罷在間口貳間半、奥行四間之平家、自分建ニ住居仕、其身妻悴壹人、召

仕男壹人、都合四人暮ニ而、此度蝦夷地御雇醫師御用被仰付候而も、於町内聊差障筋無御座候段、
右町役人共申立之候、
右相糺候處、前書之通御座候、則被成御渡候御掛合書返上仕、此段申上候、以上、

辰〇安政三年五月　樽藤左衛門

〔觸留 四十四〕子〇元治元年十二月十六日

牧野備前守殿御渡候御書付寫
町奉行江

右大炮附御雇醫師可被申渡候、御雇中御手當扶持拾五人扶持被下候、尤大炮組之頭可被談候、

町醫師　松島玄英

〔海軍歴史 二十五〕軍艦附御雇醫師名前之儀申上候書付

海軍奉行並
軍艦奉行

細田相模守家來醫師　栗田浩然
寄合松野八郎兵衛家來同　守屋修道
御代官江川太郎左衛門家來同　隈川宗悦

右之者軍艦附御雇醫師之儀、先般申上候處、書面之趣者、軍艦附御雇醫師と申付、爲御手當御扶持方拾五人扶持被下、且乘組御用而已ニ無之、平常軍艦所病用をも爲相勤、是迄軍艦所病用相勤候御雇醫師之儀者、差免候心得を以、人數等取調、猶相伺候樣可致旨、去寅五月中被仰渡候義ニ御座候、然ル處其節者、御船々大坂幷西海筋江御廻し相成居、富士山御船のみに而、同御船之義も、出

町醫師

帆差迫居、人撰等何分間ニ合兼先其儘出帆爲ㇾ致候處、追々御船々歸帆相成候ニ付而者、御船々之大小幷軍艦運送船等之差別に隨ひ、人數取調候へば、當時之御船數丈ケニ配當仕候ニも、多分之人數ニ無ㇾ之候而者差支、素より不ㇾ可ㇾ欠義ニ御座候間、先般醫學所頭取江相懸合、人撰中ニ付、取調出來次第、追々申上候積ニ御座候處、名前之者は、以前同所之人撰ニ而、御船々乘組、航海御用度々相勤、醫業巧者、療養行屆、御船中折合方宜敷、至極御用立候者共ニ而、差向右三人之もの共、人撰出來候旨、醫學所頭取より申越候ニ付、兼而被ㇾ仰渡ㇾ之通、御扶持方拾五人扶持宛被ㇾ下置、軍艦附御雇醫師被ㇾ仰付候樣仕度、尤醫學所頭取より、主人々々へ懸合候處、差支も無ㇾ之旨申聞、且富士山御船等御修復皆出來相成、急速攝海江御廻しにも相成候間、早々願之通被ㇾ仰付候樣仕度、其餘御船々江配當仕候分者、人撰相濟次第尙可ㇾ申上候得共、差向前書三人之者共、急速願之通被ㇾ仰付候樣仕度、此段奉ㇾ願候、以上、

卯（〇慶應三年）四月

〔聞傳叢書　六〕醫師の養子、其業ニ寄、町醫師之悴に而も被ㇾ仰付ㇾ候事、

一醫師之類は、家業有ㇾ之ものに付、家業宜、早速之御用に立候ものを願候はゞ、御目見以下、幷町醫師之悴に而も可ㇾ被ㇾ仰付ㇾ候、

右之通、家業之譯を以て、養子被ㇾ仰付ㇾ候事に候得共、家業宜と計に而は難ㇾ相成、家業專に仕、早速之御用に立候者を、隨分吟味致し可ㇾ相願ㇾ候、猶又相糺し候上、被ㇾ仰付ㇾ候に而可ㇾ有ㇾ之候、

右之趣、組支配有ㇾ之面々江寄々可ㇾ被ㇾ相達ㇾ候、

五月（〇安永四年）

〔德川禁令考　十七官醫長〕文久二壬戌年閏八月十六日

醫師推擧ノ儀ニ付達

覺

總醫師共家業心懸候儀者勿論ニ候得共、生得之才不才も有之、生質より何程出精仕候而も、勝れ候ものは容易に出來難致、依之前々より世上手廣療治致し、醫業勝れ候ものは、町醫師又は陪臣より、其時々被召出候、然ル處其ものは拔群に候而も、其子は未熟之者多被召出、間も無之病死等に而、未熟之忰家督被下候而も、往々御用立候ものは稀之儀ニ有之候間、此以後被召出候者は、一代切ニ御宛行被下候、其者一代御奉公筋も格別ニ候はゞ、其品ニ寄、忰江御扶持方被下、若被召出候而、間も無之病死之節は、直に御宛行上り候間、右之趣相心得、向後醫師推擧致候節は、左之通可被心得候、

一町醫師又は陪臣ニ而も、療治宜仕候醫師有之節、先御目見之儀相願、御目見被仰付候以後、御扶持方被下、奧御用被仰付候事、

　但若年寄支配ニ候事

右之通被仰付候上ニ而、御番をも被仰付候ニ付、奧醫師並之通、御切米貳百俵一生之内被下置、尤御番料も可被下候事品ニより被召出候もの、様子次第、御扶持方被下、小普請入も可被仰付候事、

右之通被仰出候間、被得其意、心得違無之樣可被取計候、

八月

〔嘉永撰要類集〕三十八〔醫師二〕未（弘化四年）五月十五日、阿部伊勢守殿より御直上ル、

伊勢守殿

信州表、醫者無數、藥種拂底之儀ニ付奉伺候書付、

遠山左衛門尉

今度、信州表、大地震之上、出火に而、怪我致し、疵付又は野宿致し候ニ付、雨露之爲メニ、病發致し候

僧醫

もの多有之候處、醫者無數、藥種類拂底ニ而、致難儀候もの不少候由、右ニ付、御府内住居之醫者共之内、彼地江罷越、療治致し候ものも可有之哉、藥種類も差立候樣ニは相成間敷哉、勘辨仕、可申上樣被仰渡候ニ付、取調候處、○中略松門町五郎右衞門店町醫大寺正庵外七人は、兼々醫業相勵居候ニ付、修行之爲メ、於彼地療治致し度旨、支配名主共迄申聞候得共、知音も無之、右樣顚倒致し候跡江參り候而も、却而其身利德を見込、似藥等賣步行候不埒之旅商人之樣疑ひ受候而は迚も致信用、療治相賴候ものも有之間敷、且彼地江著致し候節、止宿食物にも差支可申哉と掛念致し候由、藥種類も、元藥種問屋共之内、本町四町目半助地借倘屋善右衞門外貳拾壹人儀も、彼地江藥種類相廻し、賣捌致し候存念ニ候得共、是以、先方ニ引受方無之候而は、往返運賃ニ相掛候而已不成、多分之損毛致し候儀と危踏居、○中略右八人之醫者共、○中略江戶表より參り候迚、取用之程も難計、體裁を失候樣成儀有之候而も、如何ニ候間、相糺候處、假成ニは、業體も出來候由、名主共申立候、乍去遠路之儀、必定行屆可申儀は、何分難計奉存候得共、厚キ御沙汰之趣も御座候間、此段奉伺候、以上、

未五月　遠山左衞門尉

下ケ札

本文、正庵外七人儀、手薄之ものニ而、旅用ニ差支候趣及承、麴町平河町壹町目家持賣藥屋喜六、芝西應寺町家持町醫中世昌三郞、四谷鹽町壹丁目家持同千葉玄昌より、旅用手當致し遣度旨、支配名主共より申聞候、

〔本朝醫談〕醫師の僧綱になる事は、醫學に長じ脈經に明なる上、摩訶止觀の病患境は、病根を世間出世に論決したる敎なれば、醫師たるもの、叡山にのぼりて、止觀の幽致を知て、法脈をゆるされたるよりなりと聞り、只止觀のミならす道の玄妙は、正法眼藏にあるなれば、其徹底を座主より印可されしなるべし、鑑眞失明の後、藥物の眞僞を嗅て別ちたりと、正法眼藏を得にあらざれば、

儒醫

此域にいたるべからず、

〔釋氏要覽下〕瞻病制〈僧祇律云、有比丘久病、佛因按行見、與阿難爲洗身及衣、臥具既、又爲說法、佛問、汝曾看病否、答不曾、佛言、汝既不看、誰當看汝、乃制戒、自今後聽看病、比丘若病、[illegible]〉

〔續日本紀二文武〕大寶三年九月癸丑、施僧法蓮豐前國野四十町、褒醫術也、

〔續日本紀八元正〕養老五年六月戊寅、詔曰、沙門法蓮心住禪枝、行居法梁、尤精醫術、濟治民苦、善哉若人、何不褒賞、其僧三等以上親賜宇佐君姓、

〔續日本紀二十四淳仁〕天平寶字七年五月戊申、大和上鑒眞物化、和上者揚州龍興寺之大德也、〈○中略〉及皇太后〈○聖武皇后光明子〉不悆、所進醫藥有驗、授位大僧正、俄以綱務煩雜、改授大和上之號、施以備前國水田一百町、

〔玉海〕安元三年六月十日戊寅、午剋源中納言被來、相具筑紫醫僧、〈字大[illegible]〉是爲令灸予〈○藤原兼實〉疾也、

〔滿濟准后日記〕永享三年六月十八日、自山口方醫師僧威德庵來、妙法院所勞事相尋處、唯積聚也、曾非傳死骨燒失伏連等病氣由、以醫書申了、所詮療治以外遲引、セメテ廿日以前ニモ見申候者、輙可療治申入由、放言申者也、於積聚者誠勿論歟、

〔園太曆〕延文四年十月十二日、仁木左京大夫頼章法師、今朝卒去、累日煩熱、昨日歟僧醫通仙立針、今晩卒云々、歎之、武家政道如何、

〔古學先生文集三〕儒醫辨
甚哉人之竊名而欺俗也、物已定而文飾之、以求衒于人、道已定而粧點之、以求售于世、其價不可增、而譏笑隨之、豈非惑乎、世俗有儒醫之稱、蓋醫而寓儒者、自恥其爲小道、且與巫覡賤工伍、而竊欲列于儒以表見其名、其事固卑陋最小、無足深辨者矣、然世之貪汚卑屈、懷欲無厭、廉恥不節、抑鬱迷昧、不能以自立者、多逃儒而歸之、則固不可不爲世道之害焉、斯吾之所患也、〈中略〉寛文四年甲辰六月初二日

〔先哲叢談〕六井河亮、字簡亮、私謚天民、平安人、○中略仁齋、以儒而爲醫爲不是、其說見儒醫辨、天民異於此、曰、此邦儒無恒祿者、宜兼岐黃、偏以儒居、則產難支、終或不能固其志也、因是門人往々有儒而兼醫者云、

〔閑散餘錄〕下並河勘介ガ曰、日本ノ儒者ハ醫ヲ兼ヌベシ、然ラザレバ衣食ニ乏シクシテ、困窮ニ至ルトゾ、ソレ故門人ニ渡邊新藏、松原才次、清水源吾、藤田左大夫、イヅレモ儒ニシテ醫ヲ善クセリ、ソノ子モ亦然リ、

〔日本醫道沿革考〕亮村○今按ズルニ、○中略我邦古昔儒ヲ以テ醫ヲ兼ヌル者無キニ非ズ、延曆大同ノ間ニ菅原清公アリ、承和嘉祥ノ間ニ紀夏井等アリ、是我邦儒ニシテ醫ヲ兼ル者ノ始ニシテ、其後戰亂ノ世ニ及テ、文獻共ニ衰廢シ、永ク復タ此ノ如キ者アルヲ見ズ、元和寬永ノ際ニ至リ、堀杏庵、江村專齋、板坂宗憺、森雲竹等ノ諸賢出テ、復タ皆儒ヲ以テ醫ヲ兼ネ、醫ヲ以テ儒ヲ兼ネ、當時皆世ニ顯ル丶者ナリ、又其後物茂卿ノ如キハ純儒ニシテ醫書ノ注釋諺解等ヲ作リ、叨リニ醫域ニ闖入シ、其害ヲ後生ニ與ル者少カラズ、然レドモ其功亦無キニ非ザルナリ、

〔先哲叢談後編〕五東洋○山脇後於山脇氏時、不以醫爲專門、猶講經史、教授子弟、左祖漢魏傳注、辨駁宋儒心性說、門人頗衆、世呼之儒醫、當時若後藤艮山、名達、字有成、江戶人、香川秀庵、名修德、字太冲、播州人、香月牛山、名則眞、字啓益、筑前人、稻若水、名宣義、字彰信、江戶人、等、皆唱業於輦轂下、稱之儒醫、東洋與之交、相與討論、發己所見、諸家爲之皆吐舌、稱其不可及、

〔日本文鈔〕下答木村希醫　太宰純 ○中略

純嘗謂、醫道難明、醫書難讀、宜乎世乏良醫、雖然明道在善學、苟能專心學之、則無古今、良醫豈不可企乎、今之人惟不善學、是以其道不明、其技不及古人已、何謂善學、善讀書之謂也、夫醫書固難讀、非老於儒者、不能達其辭義、且況自本草以下至素靈難經、皆先秦古文也、故雖有聰明之人、非多讀古書、以參

耆之、未有能得其旨者也。。。此醫之所以必本乎儒也、惟今之爲醫者、多不讀書、執局方以待人需、此則所謂膠柱調瑟之徒、不足道者也、其有能讀書者、但讀儒書、不好醫書、總其與人尙論、則儒也、觀其所事則醫也、問醫道焉則不知也、如此者世俗命之曰儒醫、予甚惡之、嘗著儒醫論以示同志、今足下乞予文、因以是爲贈、足下其反覆之、夫蟲有蝙蝠、人有儒醫、蝙蝠猶可、儒醫則不可、

〔政事要略九十五至要雜事〕又醫疾令云、女醫取官戶婢年十五以上、廿五以下、性識慧了者卅人、別所安置、謂、內藥司、謂達別段安置也、敎以安胎、產難、及創腫、傷折、針灸之法、皆案文口授、謂、女醫不讀方經、唯習手治、故博士於其所、習、案方經以口授也、案唐令、博士敎之、今於此令、雖文不言、而博士敎授、但按摩針灸等、其實各異、須當色博士各敎授、即試亦令當色試、每月醫博士試、年終內藥司試、限七年成、

〔市中取締類集九ノ四十五〕天保十三寅年六月墮胎御禁止一件

女醫師之儀ニ付申上候書付

加賀町
名主　平四郎〇女醫師姓名略

右女醫師之儀は、都而療用賴候者、身柄善惡ニ寄、不同有之候由、

一出療治と唱、懷妊之婦人宅江罷越候分、　金壹步位より貳步位迄

一宅預りと唱、懷妊之婦人、女醫師共宅江預り候分、壹廻り七日之見積ニ而四日位ニ仕立候由、

療治代幷飯料を付、屆人足賃共、金壹兩貳步、

右は多分一廻り壹兩貳步之極メ直段ニ有之候處、其婦人之身元善惡、賴入之樣子ニ寄、差向見計ひ事重等ニ申成、過分之療治代請取候分も有之、又は格別貧人と見請、又婦人賴手共難澁等申相歎候分は、金壹兩位に而も療治致遣候分も有之、區々之趣ニ相聞申候、

一懷妊之月數不重指藥と唱候分　金壹步貳匁位之由

一煎藥之分　錢三百八拾八文位之由

銘々其家風ニ寄、療治代高下有之由ニ而、神田平永町代地忠七店中山玉木南傳馬町二丁目半四

穩婆

郎店中山よし江、新兩替町三丁目庄藏店酒井東人、元數寄屋町壹丁目忠治店吉田千代見、此四人之分、重ニ町々明地板圍表裏幷便所等江引札張紙いたし、手廣ニ渡世仕候趣ニ御座候、但宅預り婦人之分、出產之水子貳百目、又は其次第ニ寄、金壹朱位相添、重ニ本所回向院江葬候由ニ御座候、

右女醫師共名前荒增申上候、重立候分、小前之分も有之、都而療治代請取高之儀は、元不筋不儀より害事之療用請引候儀故、其賴人之次第貧福ニ寄、不正之療治代等受取候義ニ而、非分之業體ニ有之、其日稼之貧人ニ而家族も多、此上出生等有之、醫方も無覺束暮兼候者共は、夫婦相對之上、右療用賴候者も可有之候得共、稀之儀ニ而、其餘右體之療治致し候者も有之故、自然心驕不儀ニ及、密會候者も可有之、世上ニ無之候共、差支候向も有之間敷哉ニ奉存候、前書廉々、內密承探、此段申上候、以上、

寅六月　　加賀町名主　平四郎

〔德川禁令考四十九文武藝術〕天保十三寅年十一月晦日

女醫師之儀ニ付御觸

市中女醫師と唱候者、血道之療治正敷致候は不苦候處、其中ニは、妊娠之者を賴ニ應じ預り置、墮胎致させ候類も有之哉に相聞、不屆之至候、向後右樣之儀於相聞は、賴人迄も逐一遂穿鑿、急度咎可申付候間、兼而此旨可存候、

〔安齋隨筆前編十二〕一穩婆、とりあげばゞ也、國史、三鏡類、世繼類等、古代の實錄に、とりあげばゞの事なし、產になれたる常の老女、此事をせしなるべし、今の世のとりあげばゞといふ物は、近世の事也、是は老女などめしつかふ事もなきいやしき者、あたり隣の產になれたる人を賴み、其賴まれし人を、坊者也といひふれて、所々よりたのみしが、後には家業の樣になりて、とりあげばゞと

云者出來しなるべし、孕婦の腹に障り、腹を動かせば難產になる也、とりあげばゞの不心得なるは、度々來て腹をなでさするあり、必難產になる也、功者なる婆は、少も手を付ざる也、產前より產に臨む時迄、天然にまかせて、少も人作を用ざれば、必安產也、人作を交れば、必難產也、孕婦病もなきに安產のためとて、服藥するも人作にて惡し、病あらば服藥もよし、產は病にあらず、人も畜生も、天よりのさづけなれば、天道にまかせ置べし、私を用べからず、

〔醫事漫錄二篇〕按、呉越之間、謂之穩婆、江淮間謂之收生婆、徽事間謂之接生婆、按、收接二字之義、因其年老慣熟、令之接見、落地收見上床耳、原非要他動手動脚也、達生編上

〔明良帶錄世篇〕和州婆々

御中臈格にて、五人扶持下され、四谷鹽町町宅住、後見和州源左衞門といふ、御產御臨月より、大奧詰切同斷

〔明良帶錄世篇〕薩摩婆々

御中臈格にて、四谷坂町にて拜借地出る、看房人左膳といふは、渡邊城之進家來之由、御產御目付、御臨月御產移之節より大奧詰切り、

〔有德院殿御實紀附錄四〕後宮の女房懷妊せし時、京より名ある穩婆をめされ、府内の市中に在けるが、さばかり名高き者の事なれば、貴賤の限りもなく、就草ある家々より呼むかへしかば、其穩婆一日も家にある事を得ざる由を聞き、町奉行中山出雲守時春、麾に召よせて、汝は公用にて府に參りながら、日ごとに家にあらずと聞し、御用あらん時、いづかたにあらんもはかりがたければ、今よりは、たとへ權貴の家々より呼むかふとも、奉行所にことはりてのちまゐるべしと令したるよし聞しめし、出雲守が申所、其理なきにあらざれども、奧の女房、いまだ分娩の期月にもあらざれば、よぶ事も有まじ、世の人の爲たよりよき事ならば、期月まではは、はゞからず人の招に應

醫師待遇

すべし、期月にいたらば、かまへて家にありて、他にゆくべからずと命ずべきよし、仰下されければ、傳へ聞人、おしなべて、おほやけなる御心をかしこみけるとなり、〔兼山麗澤秘策〕

〔奇魂二〕醫藥名義

さて方士の大宮にて仕し狀は、禁秘抄に、侍醫常近龍顏者也、召小板敷、於殿上倚子、奉拜天顏、又召便宜所、候簾中、取御脈例也、後冷泉院御時、俊通雅忠類、聽雜袍、著紅梅直衣、近代無子細、參御緣邊者也、とみえたり、武家にての禮は、永正の比記し、上杉問答と云書（諸大名陪臣、道醫陰陽道輩書札事と有）に、典藥陰陽二寮頭者、五位官也、依之以往者爲五位禮乎、雖然近來就被重此道、敍四位、或擧上階哉、於大名中、陪臣等之書札者、准神官可知之、抑自武家執政務權之以來、爲公家甚被重之、然間雖同官同位、公家武家相對之禮、用捨事異乎と云り、近世までも位外に重く用ひられて、今如はあらざりき、又方士も今如はあらざりけれど、いつとなく療法も醫風も共に變つゝ、終にかくは衰たるにこそ、

〔橘窻自語中〕醫師のともがら、散位の僧綱になれることゝ、ふるくきこえたれども、そのおこりは、まことの持戒の僧の、醫藥を施せしともがら、御藥の事ありて驗しある時、僧綱に敍せられしがおほかり、近代にいたりては、醫業のみにて、法橋已上に敍せらるゝともがらのおほくなれり、

〔岩淵夜話上〕一權現樣御代、御醫者衆へ、知行を被下候に、五百石より上の大身と申義は無御座候也、其子細は、大閤秀吉卿被爲相煩候節、快氣あるまじき由、諸醫の申口有之候處に、竹田法印の藥にて快被成候、本復之祝儀として、知行一萬石可給と在之節、左樣ニ高知を被下置候ては、此以後大體のものは療治に預り候義も罷成間敷候、然ば世上の重寶に罷成べき名醫を壹人、御捨被成道理のやうに被存候旨、奉行之面々申達候を、大閤にも尤と有之、知行五百石之上に、金千枚、銀千枚、藥代として給り候と也、是によつて、權現樣にも、療治をよく仕り候と有之町醫抔被召出候節は、貳百ヅヽ被下置、御不例ニ付、其醫師の御藥抔被召上候時節、官位等被仰付、三百石宛の御加增

を被下、都合五百石の高ニ被成下候と也、大猷院樣御不例御大切の砌、岡本玄冶御藥を被召上、御快氣被遊候ニ付、玄冶義、夫までは五拾人扶持被下置候を、千石の知行高ニ可被仰付との上意に有之候處に、右權現樣御代の義を御老中方より被申上候ニ付、關東ニ而五百石、上方に於て五百石と、間もなく兩度ニ千石の知行高ニ被仰付候と也、

〔明良洪範四〕尾張大納言義直卿ハ○中略元和ノ式目ヲ定メラレシ時、御家門方ヘ、一通リ御見セ有テ、各存寄モ有バ、仰上ラルベシトノ御沙汰ナリシ時、義直卿十六歳ナリシガ、式目ノ中、乘物御免ノ條ニ、儒醫ノ兩道ト有ヲ難ジ給ヒテ、當世武家ニ召仕ハルヽ儒生ハ、皆法體ニテ、儒者トハ申難シ、陰陽師ノ類ニ均シケレバ、醫陰ト致候テハ如何ニヤト宣ヘバ、御尤ノ事ニ思召レ、其通リ書改メサセラレケリ、

〔基量卿記〕貞享二年五月十八日、産後醫師良安叙法印、職事基勝朝臣ヘ申渡了、抑産後醫師法印事、先例雖無之、良安義、年來中宮御療治、殊ニ去々年歟、御不例以外、諸醫難治之由申之處、良安御藥進上、御快然之間、此度自中宮内々被仰入之間、今日勅許也、自兩傳武家ヘ申合、是又無子細云々、

〔基長卿記〕享保元年四月七日、林丘寺宮御痘ニ候、此度御疱瘡御療治御全快ニ付、石川仲安、法印之事被仰付候樣ニ御願候、先例、宮方御療治之賞ニ、女一宮御疱瘡御療治仕、御全快後、山科理安法印ニ被成下候、又先大聖寺宮御疱瘡御療治仕、御全快後、村上友詮法印ニ被成下候、兩人とも、同時分候、此例も御座候間、有御沙汰度思召候、又上田養安も、當春明宮八十宮御疱瘡御仕廻被成候間、是も法印に被成下度御内慮ニ候、尙又和泉守迄、兩武、内々尋試、無子細由被申上候はゞ、以傳奏可被仰出候、先和泉守内意、兩武可尋問由仰也、則兩武ヘ申達、奉、退候、明日ハ佛參日之間、明後九日罷向申談候而可申上由也、其旨兩人申上候、　九日、梅小路、予、參院、謁兩武、被談云、此間被仰出候仲安、養安法印之事、御内意之通、先例等承知仕候、御内意ニ候故、愚存之通申上候、先此義ハ御見合可然哉

と奉レ存候、其上にも、是非ニと思召候はゞ、可レ爲二思召次第一奉レ存候、先御待被レ遊候而可レ然奉レ存候由、泉州申旨也、則兩人以二書付一言上了、被二聞召一之由被二仰出一候、

〔新益柳營秘鑑八〕享保四年亥十二月〇中略

下乘より內、召れ候人數の覺、〇中略

一醫師ハ侍一人、草履取、挾箱持、藥箱持一人、雨天之節は傘持一人、

〔寶曆集成綸綠錄十七〕寛延三午年八月〇中略

一町醫者も、右同前、駕籠之者異體に無レ之、がさつニ無レ之樣可レ致候、〇中略

八月

〔德川禁令考四十九文武藝術〕醫師附地方醫師

寛政十午年十月

醫師苗字帶刀之儀甲斐庄武助江問合

領分在町ニ罷在候醫師之儀、百姓同樣之儀ニハ候得共、俗醫ハ格別、總髮剃髮等ニ而醫師之形ニ成候得ば、苗字名乘來候而不レ苦儀ニ御座候哉、

下ケ札 御書面總髮剃髮等ニ而、醫師致候者、御領分在町ニ而も苗字名乘不レ苦儀と奉レ存候、

一右名字名乘來候而も、帶刀ハ不レ爲レ致心得御座候、他領等江罷越候節、致二帶刀一候ハゞ、差留候筋ニ可レ有二御座一候哉、

下ケ札 御書面之通御心得可レ然、他領中江參候節、致二帶刀一候ハゞ、御差留被レ成候儀と存候、

右之通、御問合申度奉レ存候、以上、

二月

右之通、先年御問合申心得罷在候、然處總髮剃髮之醫師著服之儀、十德ニ極り候儀と奉レ存候、若又

上下著仕候共不苦事ニ御座候哉、
（下ゲ札）御書面之通、總髮之醫師、十德ハ苦間敷候得共、上下者不相應之儀に可有之候、

一俗醫ニ候得バ、苗字等名乘候筋無之、著服ハ上下十德之類著不苦候哉、
（下ゲ札）御書面私ニ苗字を名乘候ハ、强而差構も無之、御領主御役所ニ而取扱ハ、苗字を御認無之方ニ可有之候、上下著候儀も、醫業に付、私ニ著し步行苦間敷、御領主役所江罷出候節ハ、羽織袴熨、或ハ白衣杯之御取扱ニ而可然哉に御座候、

一右醫師之類ハ、百姓同樣之者、法名ニ院號居士號を付候事、往昔より譯有之候ハ格別、無左候ハバ差押不苦事ニ御座候哉、其寺之住持心得ニ而、院居士號之法名付不苦哉、左樣之類ハ、縱令鄕臣外之事ニ而も不及差留事ニ御座候哉、
（下ゲ札）御書面都而醫師之類ニ而も、百姓同樣之身分之者ニ、院居士號ハ可致遠慮事ニ候得共、菩提寺等之存寄ニ而、外百姓共ニ障無之院居士號付候共、取求御差留被成候程之儀も有之間敷、然共鄕例ニ違候ハヾ、御差留不被成候而ハ、出入起り可申、其時宜ニ寄、御見計御差留可被成儀ニ可有之候、以上、

午十月

右之趣、心得ニ奉伺候、以上、

十月
鳥居丹波守內
伊藤安右衞門

〔文久紀事　六〕同日〈文久二年十月九日〉御同人〈和泉守〉御渡
大目付　御目付江
御醫師著服十德之儀、向後、法印はひだ入十德、紫打紐、法眼は同斷、白打紐、無官之者はひだ無之十德、くけ紐相用候樣可被致候、

右之趣、奥醫師奥詰醫師江相達候間、寄合醫師、御番醫師之面々江可被達候、尤其餘相達可然面々江は可被達置候事、

十月

〔德川禁令考 四十九 文武藝術〕年月闕

百姓より醫師ニ相成候者、苗字其外之儀ニ付、阿部播磨守より問合、

播磨守領分在町百姓共之內、病身等ニ而、無據醫師ニ相成度旨願出候得ハ、糺之上、相違も無之候得ハ申付來候、右之者剃髮等に相成、自苗字相名乘、十德著用致候而も差留候ニも不及候哉、

但名主宿所ニ而吟味有之候節ハ、苗字相除取扱候筋ニ御座候哉、

下ケ札 書面、本文并但書共、御書面之通ニ而可然存候、○中略

一前條之者共、苗字名乘候而も、帶刀ハ不及致心得ニ御座候、他領等江罷越候節、若帶刀致候はゞ、差留候而宜敷御座候哉、

但手醫師之門弟ニ相成候共、俗醫ニ而罷在候得ハ、苗字ハ不爲名乘候心得ニ而宜敷御座候哉、

下ケ札 書面、在町之醫師、帶刀ハ不相成筋有之候、俗醫之分、苗字ハ吟味等之節ニ無之候共、爲相名乘不申方と存候、

一往古より、醫師ニ而、郷中ニ罷在、苗字相名乘、帶刀致來候者、いつ頃より右之趣差免候儀と申儀も不相分候得共、仕來之儀ニ付、其儘ニ而差置候而も苦ケ間敷哉、併帶刀致候儀ハ差留候筋ニ御座候哉、

下ケ札 書面、仕來ニ候共、郷中ニ居候醫師帶刀ハ、御差留候方と存候、

一町在抱ニ相成居候醫師共、出入等有之、領主役所江呼出、致吟味候節ハ、百姓同樣ニ取扱候而も不苦筋ニ御座候哉、

但宗旨改等請候節、一己ニ而證文差出候醫師も、本文同樣ニ心得候而宜敷御座候哉、

下ケ札 御書面并但書共、御書面之通ニ而振候儀相見不申候、

〔明良帶錄新書〕減祿

醫師の家督後、幼年の醫術修行中は、減祿被仰付、醫術成熟の上被召出節、元高に被成下、修行中減祿ニて相勤可申旨、備前守殿御書付、輕き者養子の儀、由緒の品により被仰付來候處、元來延寶以前被仰出候、御四代目の內に被召抱候者の二半場と唱候向へ、役替小普請入等も相濟候者は、右御代官被召抱之故、向後養子可被仰付事、

〔白河候傳心錄〕一醫者之義、御先代は、親々取來候知行、不相替家督被仰付趣に候得共、我等存候には、醫者と申ものに、先祖の武功も無之、業ニ而取たる充行に候得ば、其業の善惡ニ而充行も增減すべき事、理の當然に候、親が功者ニ而、子が不功者成も候、功者不功者をゑらみて、知行を可遣候、依之以後は、家督の時、知行をへし可申候、是却而醫者共の勵みに相成候、なまじい親の知行にて暮に足候得ば、術に精を不出候、暮に手支ひ候得へば、在町をかけ廻り、廣く療治を致し候而、骨を折申候、位牌知行取候醫者は、勞をせざる故いつ迄も下手に而候、官醫はとかく身を高ぶり、輕きもの丶療治を等閑に致と被存候、こわき役人の所へは毎日も見舞、輕き者の所へは見舞も遠く、藥も上向の分、或は家老共の家內の分は、手づから調合し、其餘は弟子にまかせ、配劑帳にて、投やりに調合致遣抔申事有之と承候、醫は仁の術に候へば、左樣ニ、上下親疎の隔を可致事ニ而ハ無之、却而輕き者をいつくしみ、藥を遣候上に、食類をも心を付、是をも捨て給させ、力付候樣に致而、藥を遣すより、功驗も有之事に候、小身ニ而は、人參等之不廻りにて、補遣す事、不行屆も有り、左樣の時は、役人と申談候而、無手支補養屆候樣、實義を事と可致事ニ候、又わるく心得候而ハ、主人の機嫌を取り、奧向へ出入候而は、奧方始女中共の心に應じ、咄を致かけ抔する事、伽の者に似より

候行跡之醫者も見立候、急度たしなみ、醫道專に可ㇾ致事に候、主人の身の上、不養生の事あらば、早速申聞、たとへ主人の氣に障り候ても、養生體を進め可ㇾ申事、持前ニ而候、外科は、手負抔扱、金瘡の療治により候へば、猶更眞實を盡し、柔弱に無ㇾ之候樣可ㇾ相心懸ㇾ候、諸醫共、順番に會講致し、醫學專に可ㇾ致、餘之事ニかゝり合申間敷候、道中供致候醫者、猶更此器量をゑらみ、主人の煩は不ㇾ申ㇾ及、傍輩末々に至迄、大切成事に候得ば、等閑の醫者候而は間ニ合不ㇾ申候、且手醫者、何れも不巧者ニ而、取扱無ㇾ覺束ㇾ候はゞ、他所より高知にて召抱可ㇾ申候、左樣ニ而は、數代之醫師共之恥辱にては無ㇾ之哉、如ㇾ斯所を考へ、出精可ㇾ致候、安く寐甘く物のくはるゝ事に而は有間敷、寢食をわすれて、工夫すべき事に候、

〔和事始一人倫〕醫者剃髮七十四

醫者の髮を剃る事、其始をゑらず、薩戒記に、永享五年九月廿日、法皇御悩危急、醫師員能法眼祗候すとあり、これを以て見れば、此時すでに剃髮して、僧位に進む事ありし也、

〔公餘涉筆初編二〕醫者の剃髮

醫者の剃髮するよしは、薩戒記に見へたり、此書は、應仁〇應仁恐應永誤年中の日記なり、典藥頭和氣某、薙髮して准ㇾ武家醫ㇾとあり、是は、亂世の僧徒は、閑暇なる故、醫療を業として、人のたすけとなりし、終に、是にならひて、髮を剃事とはなれりと、東海の考也、

〔難波江六下〕醫者剃髮

和事始卷一人倫貝原氏著、人倫門、薩戒記荷田氏家記所纂考にいはく、中山大納言定親卿の薩戒記は、後小松御宇より後花園にいたる、に、永享五年九月廿日、法皇御悩危急、醫師員能法眼祗候すとあり、是を以てみれば、此時すでに剃髮して僧位にすゝむ事有りしなり、和氣雅忠剃髮して武家の醫に准すと和氣系圖にあり、これによりて考へみるに、昔は武家の醫師多くは僧のなせしを、雅忠始めて武家の醫に准て剃髮し、僧位に進みければ

是醫者の僧位にすゝむ始ならん、(雅忠は、足利家の末世の人ならん、)續不問談(篠崎氏著)醫者剃髮、蔭戒記にみえたり、此書應仁年中(應仁は應永の誤なるべし)の日記也、典藥頭和氣某薙髮して准武家醫とあり、是は亂世の僧徒は閑暇故醫療を業として、終に是に倣て髮を剃る事也、梅窓筆記上(梅宮橘氏著)官法師の醫の御療治にて勸賞ありし事、後愚昧記(霄田氏の家記所撃考に、後押小路内大臣公忠公の後愚昧記に、御光嚴御宇の事を記す由みえたり、)永和三年正月二日(取要)主上喉痹御惱之時、醫道之輩篤直卿、繁成朝臣、典藥頭等、被召之、不能其驗、令及難儀給、仍爲沙汰外者、士佛法師被召之間、以針治令屬御減給了、新院文和年中、御腫物之時、小松房悲阿彌と號法師參御療治、御平愈了、被度被行勸賞、被叙法印了、蘆苑日渉卷一(村瀬氏著)竹田昌慶者、正慶中剃髮攻醫術、慶安中西遊明國、永龢四年歸、孫善慶、應永中叙法眼、進法印、又正四位典藥頭龢氣明重、後剃髮號宗鑑、特旨不黜僧綱、著直綴白袴、龢氏之剃髮、蓋始于宗鑑、耳袋(根岸肥前守著)後小松院の御宇、半井盧庵事、和朝の醫師僧侶官始の由、右は最勝王經天女品に、聊沐浴するの藥劑有之、其比は右の經文比叡山の佛庫に封じあるを、閲見の望ありて奏聞ありし故、叡山へ勅命ありしに、俗體の者拜見を禁じければ、半井盧庵法體して僧官を給はり、右最勝王經を一覽いたしけるとや、往古はかゝることもありしなり、最勝王經の藥法利益あるものにもあらずとおもふよし、さる老醫の物語なりし、

孝云、貝原氏の引かれたる蔭戒記の永享年間よりは、橘氏の引かれたる後愚昧記の永和は、凡四五十年もふるかるべし、源氏物語若菜の上の卷(湖月抄十三)に、おのづからほころびのひまもあらむに、くすしなどやうのさましてとあるは、明石の姫君の見つけ給はん事をこゝろぐるしくおもふ處なり、こは剃髮の醫者に似たるなりけり、宿木の卷に、くすしなどのつらにて、みすのうちに云々とあり、この文は剃髮とたしかには去られねど、常人のすがたとかはりあることゝはしられたり、

〔奇魂一〕醫藥名義

醫の僧の姿と成しは、同書〇和氣氏系圖に、長成、從四位上、典藥助、承久三年出家、法名舜佛、號日仙院、爲御供參隱岐、後歸京、と有ぞ初也ける、こは皇帝の故有て幸ます時なれば、形をかへつゝも仕奉しは、忠實なる士の所爲にて異なるを、讒に僧形と成はいかにぞや、こは鎌倉の武家抔にて、戰場に使ふに事無らしめんが料に然なしけむが、其風自ら京の官醫にも移けむ、同書に、明重云々、始准武家醫爲法師體、法名宗鑑、と有ぞ實に始也けらし、其原は古僧輩に呪禁は更也、藥方もて人を療ることを許されて、法蓮醫に精しとて、其親族に宇佐君姓を賜り、空海も表を奉て、太素、本草、病原抔を論て、人患を除んと奏し、抔、史に有類にて、亂世の比は、まして打任たる業の如成けるを、醫も又僧の姿となれる習なるからに、醫と僧と混しき事もありけん、然れども古は醫官正ければ、僧と紛しからざりしかど、猶僧は不祥りきとみえて、續紀養老元年に、詔曰云々、僧尼依佛道以持神呪救病徒、施湯藥而療痼病、於令聽之、方今尼僧、輙向病人之家、詐禱幻恠之情、戻執巫術、逆占吉凶、恐脅耄稚、稍致有求、道俗無別、終生姦亂云々と有、此弊今は殊に甚し、

〔百草露十六〕京都將軍の醫師をば上池院といふ、年中恒例記に見えたり、はや其頃は剃髮したると見えたり、

〔年中恒例記〕正月一日

御對面次第　御對面所へ御出座之時、御供衆、御部屋衆、申次衆懸御目也、然ば近年は御用心に付て詰衆在之、出仕之時は申次之次に懸御目也、上池院以下節朔之醫者也、

〔本朝醫考中〕和氣氏

明重　尙成子也、〇中略後剃髮號宗鑑、〇中略宗鑑不歷僧綱被聽著直裰白袴、〈僧法官僧綱著之、不歷綱位以著之爲榮、〉蓋和氏之剃髮始于宗鑑、

醫家醫者

〔和氣氏系圖〕明重(昇殿、甲斐守、正四下、施藥院使、典藥頭、始准武家醫爲法師、法名宗鑑、實者丹波重長遺子、正五卒、)利長(從五上、刑部少輔、法名道三、實明重弟子也、中略)永正四

〔天文日記〕天文五年正月廿二日、從小早川安藝守、上野方へ申事には、藥師候が、賀州罷下度之由申候條、(中略)如此申候、其醫師いかなる者にて候ぞと尋候へば、不出家、在家候、然共髮をそり候由申候なり、

〔先哲叢談續編 二〕向井靈蘭　名元升、字以順、號靈蘭、一號觀水、通稱玄升、肥前人、(中略)蚤向知命、從家君見遊于平安、寓居京極通、以醫爲業、先是嘗詣伊勢神廟、有所祈禱、誓將蓄髮、自製深衣、常服之、我土未嘗有創之者、儒流醫生喜效之者衆矣、其製作之原、質證於明儒黃道周深衣考、與雅而不違禮、給便而不襲服、

〔近世叢語 一 行〕後藤艮山、名達、字有成、一號養庵、江都人、(中略)自奮勤勉、以醫爲業、遂爲古醫道之開祖矣、二十年間、術盛行、名聲籍甚、請診求治者甚多、弟子受業者凡二百餘人、先是醫流槩皆剃髮著僧衣、拜僧官、艮山深惡之、不拜僧官、幡然束髮、改稱左一郞、而後門人之外、世之有志者、多慕風儀、漸向正俗、

〔鳳山文集 五十六 雜著〕醫者

客有問醫於京師者、對曰、醫而食祿定脈價者十數家、行則輕輿健丁、從者走前、長刀持後、居則高門厚壁、華筵設左、玉几寘右、皆累世系而位法印、今其何醫之問哉、客曰、名者實之賓也、請就而問其實、於是問寸口而不知也、問病名而不知也、問藥氣而不知也、問針處而不知也、問灸穴而不知也、問經絡而不知也、問募原而不知也、問氣運而不知也、問南北政而不知也、去而至佗醫而問醫書、而不知其名也、問句讀而不知也、之一醫而又問之、遂至於不知一字也、譬魚外魚內爛、不亦臭乎、飲此等之服藥而不死幸哉、然三世之醫、禮之所載、而又吾邦世官世祿、雖忠厚之至、而父子之賢愚亦所不免也、袁參坡所謂朱與均豈庸流哉、爲賢人之子孫、雖爲庸人之子孫、易是也、吾想學而不加富貴、不學而不減富貴、與其

學而勞、不若逸而遊、此今醫之意也、若今爲人上者、下法曰、醫而不學廢其家業者削官沒祿、乃必有負笈懷書之人也、不然則其不知一字、固其所也、

〔風俗見聞錄 二〕醫業の事　今の醫師は、醫道の本意を失ひ、猥りに驕奢にほこり、欲情のつよき事言語同斷なり、醫は元仁術にして、人を助くるを元とし、其病源を探り得て、其病苦を救ふを專務とするもの也、韓退之が曰、宰相となつて天下を醫せんや、醫師となつて人の危急をすくはんやといへり、聊も欲情ありては、其妙術を施す事不能也、蜀の關羽腕に矢疵を得し時、醫華陀に療せしむ、日ならずして愈る、關羽喜びて謝禮して、黃金百鎰を與ふ、華陀が曰く、予は病を療するもの也、かならず黃金を好むものに非ずと、辭して不請と云、醫道は元來聖敎の道にて、佛道の慈悲と相對する程のこと也、既に耆婆扁鵲は、佛菩薩の化身などいへり、我邦にても、和氣丹波の頭は勿論の事、近來金守道三、甲斐德本など始、其外とても、驕奢安逸の心なく、別て欲情は絕てなし、一途に仁術を施したる者なり、然るに當世の玄師は、御代の結構過ぐるに任せて、醫術の修業怠りて、奢侈に募り、衣服美麗を盡し、住所も玄關書院其外結構、家從等迄も權式を張り、家內賑やかに暮し、不行狀を盡し、飮食の樂を常とし、醫道の玄妙至らざる故、深切の情更になき故、表向を飾つて左も藥醫の體を見せて、人を誑すなり、又世間の人々も、右體立派なれば、療治も其如く上手成ると心得て、尊ぶなり、雙方心に實儀なき故、眼くらみて是非を見分くる事不能、又業體に對して、欲情の深事言語同斷の事にて、或は有議の家、又は卑賤たり共富貴なる病人へは、丁寧に療治をなし、貧窮のものへは疎略になし、殊に官醫、又大小名の醫師などは、別て權高く、病家へ見廻るにも駕に乘り、若黨陸尺、其外の供廻り、武士の如く、又醫者の供廻とて、一卜風替りて、當世の流行醫故病用の閙敷體に見せなすとて、道を急ぎ走りて、却て武士の往來よりも騷敷、行違に人を惱まし、或は喧嘩を仕かけ、若又藥箱などに當りしものあれば、忽ち打擲をいたし、彼道にて、藥箱は大切

の道具なりとて、別て威勢を取るものなり、是又謂なき事也、武士の鎗長刀ならば、身命を極る時の要害の道具なれは、人手にかけまじき筈のもの、若差支る者あらば、彼是申べき事にも有べきに、藥箱を夫等と同じ樣に心得るは、間違なり、鎗長刀は、人を殺害する道具なり、藥箱は人を助くる品を入しものなり、人を助くる品を以て、人を痛る事や有べき、殊に仁術法體の身分にして、甚不相當の振廻なり、惜又右の供廻りの者共、病家へ參りし時、辨當代と號して金錢をねだり取る事通例なり、其價或は金五十疋、百疋、乃至二百疋、三百疋など遣す事なり、是米半俵、又壹俵、二俵の價なり、供廻り纔かに、四五人八九人などの辨當には、餘る程の過ぎたる事なり、其辨當代を幾軒となく、病家さきにてとる也、依て當時貧なる家には大醫は呼かね、容易に療治も賴み兼る事也、又醫師の元へ參りても、病家より先に貧富の脈を診して、貧相成見體なれば、心を用ひて療治を致し呉ぬ也、さて右體醫者に誇り、權威を張、仁業を失ひて、欲情に拘る故、療治を賴む病者少く、病者少ければ其身の修業も出來ず、全體貴人又は富有の病は、多くは色欲の傷敗、飲食の濫より起りたる病にて、療治の功ならず、卑賤又貧窮人の病は、種々の難病、及び病根の淺深命根剛柔等、診察の出入多くあるは悉く修業になるべきなり、然るに卑賤と貧窮を嫌ふ故、療治の修業出來ざるなり、又醫師の大小を帶し、武士の如く權式を張る事、近來の事なりと云、國初頃は、法體にて、十德を著、小脇差を帶し、駕に乘ることもなく、供廻りも連れず、町人並の家に住ひ、苗字も名のらずありしと云ふ、○下略

〔技養錄二〕醫有十四不可

今之爲醫者有十四不可、恃學而疎術、一不可也、主意而昧法、二不可也、年少而蔑思、三不可也、年老而離事、四不可也、護身而違危、五不可也、見利而忘仁、六不可也、輕生而寡惻、七不可也、畏死而多遺、八不可也、厚富而薄貧、九不可也、慢賤而惲貴、十不可也、拘例而失權、十一不可也、趨變而忘常、十二不可

也、巧言而衒技十三不可也、標己而伐他、十四不可也、若妙去所不可、其可也乃將自至、忽之無省、其不可也乃將長不除、爲醫如是、其害于人也不尠、何其惠民濟生之云哉、

〔漫遊雜記上〕我邦三都之俗、假巧習於俯仰、覗四方人以爲素樸可笑、百虛一實左右賣人、延及醫流、醜態百端、盛輿徒、美衣服、佞給還就、苟且求售、曾不爲極思於藥石經脈之事、四方之子弟、負笈遊學者、不知不識化其俗、以爲粧點、不如此則難爲醫、及其歸家、自爲油滑佞諛之人、於是乎、不良不美之俗、靡然布于海內矣、吾技之衰可勝歎哉、

〔志都の石室上〕序ジヤニ依テ、俗ノ醫者坊ドモノ有樣ヲアラ〳〵申サウガ、其ハマヅ醫ヲ爲ス者ハ、孫眞人モ申タル通リ、其容貌ヲ嚴カニイタシテ病家ニ信ゼラレ、病ノ邪氣ニハ、怖レラルヽヤウニ致シタイモノジヤガ、今時ノ醫者ノ仕ザマハ、甚シイデゴザル、其ハタヾ名利名聞ノコトニノミカケ走テ、眞實カラ出テ致スコトトテハ无ニ依テ、其容貌ヲカザリ、大門戶ヲ張ルノモ、拙者ノ只今申ス處トハ見込ガ違ッテ、オノガ潤屋ノ計ニノミ致スコトデ、云ハヾ體ノヨイ賣藥師デゴザル、ソノ奸曲ワル工ヲシテ人ヲ欺キ、物取ノテダテノ巧者ナルコト、醫術ノ方ヨリハ、百陪モマシテ居ル、此方モ屋鋪ニ居タルミギリハ、ソンナ委キ訣モ知ランデ居タガ、カヤウニ外宅イタシテ、始メハシツカリ、此道ヲ賣ウト存ジテ、弘ク醫者ニモ交ッテ見タル處ガ、醫者ガ誠ニタント有テ、風來ガ天狗シヤリカウベニ、今時ノ醫者ト云ハ、武士ノ子ナレバ惰弱モノ、百姓ナレバ疎懶モノ、町人ナレバ商ヲ爲得ズ、職人ナレバ不器用モノニテ、口過ヲシカネル者ガ醫者ニデモナラウト云、ソレヲ號ケテ、デモ醫者トテ、アタマクルリノ長羽織、見エト座形バカリニテ、露路モ長屋モ、蹈モスベルモ、ソコラコヽラガ、犬ノ糞ダラケ、醫者ダラケ、病家モメクラ、醫者モメクラ、メクラ千人ノ浮世ナレバ、コレヲ呑ムモノ、往生ノ素懷ヲトゲナガラ、恨ミモセネバ氣ノ毒ナトモ思ハズ、アヽ悲シイカナ、文盲ナルカナ、ト云タル如ク、イヤ誠ニ、アイソモコソモ盡果タ者ドモバカリ

デ、其業ノコトハ、人ノ命ニアヅカル大切ノコト故、相應ニ學ンデモ居ヤウシ、是シキノコトハ知ツテモ居ヤウト思フ處ガ、一向ナモノデ、今ノ古方家トナノル輩ハ、ヤウ〳〵吉益周助ガ、傷寒論ト金匱要略ノ中カラ、オノガ氣ニ入タル方ヲ拾ヒ出シタ揃ヘタ、類聚方ト云物ヲ、ナマ〳〵ニ心得タグラキノコト、又後世家ト云輩ハ、方彙グラキ、モチツト働タ處デハ、津田玄仙ガ療治茶談、加藤玄順ガ醫療手引草、ヤウノ物ヲ見カヂツタ、夫デモサスガニ、今時ハ人ガ利口ニ成テ居ルカラ、人ノ侮リヲ禦グ爲ト見エテ、古キ醫書ノ名目バカリハ能ク覺エ、ソノ内一ヒラ半ヒラバカリノ處ヲ記臆ナンドモシタ、夫デ素人ヲオドシ、甚ダシキハ夫モ知ラズ、彼川柳點ニ、カゴヘハ無點、カナ付ハ内デ讀ミ、ト云ヒ、マタ唐本ハ駕エノル時バカリ入レト、云タル如ク、ヅブヨメンデ、讀メル面ヲシテ居ルモ多ク有ルガ、ヨメル奴モ讀メヌヤツモ、大抵ハタヾ人ヲソラサヌトカ云、修行バカリニ身ヲ入レタ、世間ノ人氣ヲハカリ、女ヤ愚人ノ心ニ合フヤウ〳〵、トスルコトバカリヲ勉メテ致シ、少シモ爲ニナリサウナ病家ヘハ、何デモ无イ病ニモ、日ニ二度モ三度モ見舞テ、物ノ哀レヲ知顔ニモテナシ、大小便モナメンバカリニ世話ヲヤキ、年始暑寒ノ見舞ハ云ニ及バズ、フルンモ伺候シテキゲンヲ取リ、適々オノガ出入ノ家ヘ他ノ醫者デモ呼デ藥ヲ貰フト、其ヲソコイデワルク邪魔ヲ入レ、ツヽキ出シ、其ハ但シ自分モ出入處ユエ、マヅ夫トモ思フケレドモ、人ノ行先ノ病家ヲモ手ヲ入レ足ヲ廻シテ覗ヒ取リ、又或ハ組合ト云ガ有テ、五人カ七人ノ醫者ガ申合セテ、其奸曲ノ爲ヤウナドガ、誠ニカホドマデニモ心ノ行屆ク物カト、甘心スルコトバカリガ多イデゴザル、〈○下略〉

〔塵塚談　上〕官醫の衣服の事、我等〈○小川顯道〉二十歳比迄は、御城の外他行の節は、脇差計、御紋服は各別、自紋は、殿中にて坊主に給る、とて、決して着せず、無紋の衣類を着したり、自紋の衣服は、絶て持ざりし事也、故に皆人官醫に定役はなき事と思ひしなり、寛政年間迄は、脇差のみにて歩行し人

もありけり、家内にては、旦那樣と稱しけるに、近歲に至、自紋の服刀は離さず、其上に殿樣と稱し、若黨は定袴にて召仕ひ、全く武家の樣體になりしなり、御番衆の省略とあちらこちらにて、ぎやうぎやうしく見ゆ、心有らん人はいかゞ思ふにや、

〔德川禁令考十七官醫長〕天保十二辛丑年十一月十四日、醫師供方ノ儀ニ付達、

近來醫師之供方、風儀一體ニ惡敷相成、病家江罷越候度每、酒料或者辨當代と唱、金銀を乞受候由ニ相聞候、病體ニより候而者、時刻幷風雨等之無差別相招療治受候事有之候ニ付、病家之心得を以、供方之者共江、手當致し候を受納候者、格別ニ候得共、供方之者共より、ねだりケ間敷儀申出候ハ、有之間敷筋ニ而、小身又者身上不如意等之ものは、療治請候儀難成、右者畢竟家來江之申付方不行屆故ニ候、以來右樣之儀無之樣、嚴敷可被申付置候、

十一月

〔觸留六ノ二百一〕申渡

神田明神下御臺所町銀藏店
人宿　文七
外拾貳人

御醫師供方之もの共、風儀不宜候ニ付、去ル丑年觸置候趣も有之候處、近來又候心得違致し、病家先ニ而、酒代等不差出向江は、ねだりケ間敷儀申掛候もの有之哉ニ相聞、其方共、專ら御醫師方供方人入致し候趣相聞、右體不埒もの有之候段、平日申付方等閑故之儀ニ付、吟味之上、急度も可申付處、此度は宥免を以、吟味之不及沙汰、此上不埒之筋於相聞は、供先ニ而も無用捨召捕、其方共江も嚴敷可及沙汰間、以來右體之儀無之樣、精々入念、寄子共等江申付置候樣可致、

十二月〇弘化二年九日

〔靑囊瑣探上〕陶器醫

外國醫師

東都本街傳馬街者、巨賈所居也、近坊醫家、有賴此兩街而爲生活者數人焉、毎朝醫者往其商家、診値僕之病者、同家調劑、乃達竈煎煮數人藥、入陶器、以小箋記患者姓名、糊黏其上、乃肩負以致各家、必不勞病家咸獲也、雖無患者之時、醫日往問寒暄、猶仕主家、世俗呼之曰陶器醫、都下雖廣大、未聞他處有此風也、蓋此類醫之所搦、遂爲習耳、說此於他邦人、未爲信焉、

〔奇魂 一〕醫藥名義

外國の人に、病を治させ給しは、新羅より使に奉し金波鎭漢紀武と云が、允恭天皇に藥を奉しぞ始也ける、されど後には宇多天皇の、京に唐人を入ることを禁たまひ、小松大臣の、漢醫に病を治させざりし類も有き、其比は珍しとにもあらねど、二荒山の御神〇德川家康の三河國に在し、頃、難を患給しに、當時支那より、醫の來居たるに治させむと臣等の申し、かども、御國の耻なりとて、痛く否て容易は許まさゞりしこそ尊けれ、

〔古事記 下允恭〕天皇、初爲將所知天津日繼之時、天皇辭而詔之、我者有一長病、不得所知日繼、然大后始而諸卿等、因堅奏而乃治天下、此時新良國主、貢進御調八十一艘、爾御調之大使、名云金波鎭漢紀武、此人深知藥方、故治差帝皇之御病、

〔日本書紀 十三允恭〕三年正月辛酉朔、遣使求良醫於新羅、秋八月醫至自新羅、則令治天皇病、未經幾時病已差也、天皇歡之、厚賞醫以歸于國、

〔日本書紀 十九欽明〕十四年六月、遣內臣闕名使於百濟、〇中略勅云、所請軍者隨王所須、別勅、醫博士、易博士、曆博士等、宜依番上下、今上件色人、正當相代年月、宜付還使相代、　十五年二月、百濟〇中略貢〇中略醫博士奈率王有㥄陀、

〔小右記〕長和三年六月廿五日己卯、入夜清賢師從鎭西來談雜事、持來治小兒病中生虫之藥、予〇藤原實資乞遣來自大宋國之醫僧許、〇中略清賢師者、爲按察納言使、令貢砂金十兩、遣彼醫師所、令交易治眼

之藥、送二種者、件清大德仰高田牧司歳規朝臣、以隼船令勞送也、又仰宗像大宮司妙忠、聊令加勞、

〔平家物語三〕醫師もんだうの事

同じき〇治承三年夏の比、小松の大臣〇平重盛は、〇中略其比くまの參詣の事有けり、〇中略其後大臣下向の時、いくばくの日數をへずして、病つき給ひぬ、ごんげんすでに御なうじゆ有にこそとて、りやうぢをもし給はず、ましてきたうをもいたされず、其比そうてうよりすぐれたる名いわたつて、本朝にやすらふ事有けり、折ふし入道相國〇重盛父清盛は、ふくはらの別げうにおはしけるが、越中のせんじ盛俊をししやにて、小松殿への給ひつかはされけるは、しよらういよ〳〵大事なるよし、其聞え有、かねては又そうてうより、すぐれたる名いわたれり、折ふし是を悦びとす、よつてかれを召しやうじて、いりやうをくはへしめ給へと、の給ひつかはされたりければ、大臣たすけおこされ、もりとしを御前へめしてたい面有、先いりやうの事畏て承はり候ひぬと申べし、たゞしなんぢもよく承はれ、えんぎの御門は、さばかりの賢王にて渡らせ給ひしかども、いこくのさう人を都の中へ入られたりし事を、末代までも、けんわうの御あやまり、本朝のはぢとこそ見えたれ、いはんや重盛程のぼん人が、いこくのいしを王城へ入ん事、まつたく國のはぢにあらずや、〇中略たとひ重盛命はばうずといふ共、いかでか國のはぢを思ふ心を存せざらん、此よしを申せとこその給ひけれ、

〔滿濟准后日記〕永享六年六月九日、日野中納言、唐人醫師參上ニテ、令祗候、御脈樣可申入、歸參時、可被披露云々、仍猶逗留了、

管領來入、唐人醫師召具云々、仍對面了、先管領ニ對謁、次醫師幷通士一人管領引導了、予對謁、唐醫、單衣體也、唐醫暫休息、無左右不取脈、乘馬之間如此云々、次取脈、卓ノ上ニヤハラカナル物ヲ可敷云々、仍可然用意、其後左手ヲヤハラカナル物ノ上ニ居テ、醫師、手ヲバ卓ノ上ニ居テ、

取之了、右同前、申渡、唐醫ニ仰テ、令書付了、

看診得、左手脈微緩、帶洪數、偏肝部盛、主病原因怒氣起後、至痰氣虛熱、

右手三部脈俱微弱無力、主脚氣欠濟、脾胃弱、飲食少味、

當用加味六君子湯、

唐醫加此注之、則良藥調合事頻申、雖然重可申遣之由返答了、冷麪干飯等於閑處勸之了、

〔長崎志　二〕長崎渡來儒士醫師等之事

浙江金華府人　醫師　陳明德

右者、寬永四年渡來リ、長崎に居住を願ひ、姓名を改て、頴川入德と名付、醫業を勤む、今に至りても、子孫長崎町醫と成る、〇中略

浙江杭州府人　醫師　陸文齋

右者、元祿十六年八月四日渡來、十一月廿四日歸唐、

江南蘇州府人　醫師　吳載南

右者、享保四年三月十六日渡來、同六月十二日病死、

〔杏林叢話〕享保三年戊戌、命徵西醫、是歲杭州陸文齋、蘇州吳載南、朱來章、趙松陽、汀州周岐來等、應命而至、九年甲辰、又命奏求醫書、吳舶因齎醫書數種來、後文化元年甲子、徵蘇州胡振字先新於崎barr、使小川汝菴、千賀道隆、吉田長禎三醫士就學、蓋此例云、

〔近世名醫傳　四〕來舶洋醫

施物兒篤

施物兒篤者、普魯士國巴威里貴族也、生而穎異、氣宇兼人、長遊學諸邦、後移籍和蘭、以我文政六年癸未、隨貢使、始來長崎蘭館、學問洽博、最長醫術、兼精植學、先是有國禁、蘭醫來寓本港者、不得濫施治於

館外病者、長崎奉行聞施之醫名、至是稟准特許之、又借與廢地若干步、以闢藥物園、當此時、施名聲震爆四方、四方學者、麕至其門、乃設校舍於鳴瀧村、開醫學及植學敎授、若高良齋、戶塚靜海、伊東玄樸、高野長英等、最爲其入室弟子焉、九年丙戌八月、施來江都、入謁幕府、名聲益熾、時書物奉行兼天文掛高橋作左衞門、覩其所携和蘭屬國地圖、求之不得、因密贈日本地圖、得以換之、而人未之知也、十一年戊子九月、施將還和蘭、船既發長崎、將入支那海、會海風大作、船幾覆、再漂著長崎、例凡外船之出港者、官不問之、入港者每必點檢其所齎載、施之再著崎港也、吏照例點檢之、見中有日本地圖、走告長崎幕吏、曰、施或有異志、吏黨白之奉行、卽捕施幽于出島、收其所藏刀劍書籍類、又捕作左衞門父子下獄、明年己丑正月、坐下獄者三十八人、施自撤室內璃窓、不蔽風日、不擁氈被、人諫之、則曰、使吾弟子罹此苦厄、吾豈忍安居乎、此歲九月、幕府赦施、放逐于其國、禁其再來航、而作左衞門以下、處刑各有差、後歷三十餘年、施再來航長崎、幕府不復問舊罪、命伊藤圭介等受植物學、施亦盡力敎誘、無幾歸國、於彼一千八百六十六年病歿於門占府、卽我慶應二年也、○中略

門尼幾

門尼幾者、和蘭陸軍醫官也、我嘉永元年戊申六月廿日、始來長崎、爲當時在崎甲丹館附屬書記官、始門自齎牛痘苗種、○中略世稱門爲我邦種痘術之鼻祖者爲之也、○中略

朋百

朋百者、和蘭貴族也、夙長醫術、在國任陸軍軍醫、我安政三年八月、奉國命來于長崎、松本良順奉幕府內命、以醫學傳習頭取、往受其敎、萬延元年、良順與朋胥謀、創立病院於長崎、倣和蘭法、名之養生所、於是幕府更聘朋、以爲其敎師、定學科課程、是爲置外國敎師及定醫學敎則之始焉、○中略

抱獨英

抱獨英者、爲和蘭陸軍一等軍醫、我文久初、應幕府之聘來、爲長崎精得館敎師、精得館者、係養生所之

問醫方於外人

改稱、○中略

烏利士

烏利士者、英吉利國人也、我慶應初、隨其國公使來朝、戊辰伏水之役、官軍多負傷者、乃假設軍陣病院於京師、烏時在黌下、官因廉聘之、托醫治、既而官軍四征討未歸順者、士卒負傷者陸續輿載而還、官又設軍陣病院於橫濱、召烏爲之長、○中略又奉命遞觀北陸諸邦軍病院、當時銃創治療未闡、概襲用舊方、及觀烏所爲、廓然師法之、頓一變其術矣、時官設大病院於東京、烏遷而任其院長、尋更稱大病院爲大學東校、以養成醫學生徒、烏又任其教師、○下略

(辨醫斷附錄下)與朝鮮國大國手嘉菴李先生及南丹崖成尙菴二醫宗啓、

伏以萬里跋涉、草償多端、曷勝欣懽、僕乃筑蕃米府一醫員也、雖以本業食祿公廩、才庸術劣、恒貽尸官之誚、學陋識狹、徒抱面牆之嘆、茲者使槎之來、幸而獲聆屬師之逸韻、邦法攸禁、奈莫躬敍蘇生之負笈執贄之願虛矣、擔簦之叩孰焉、雖曾千載奇遇、豈易獲得、因述一二夙疑、遞此錄往、儻或不吝韞秘、詳賜啓迪、亡論不佞享大惠、寔亦吾鄕永賴乎、是區々之所望也、

癸未季春　　堀江道元頓首

鄙問凡六條

一僕在長崎、觀唐山人治病、多臨時處藥、希用成方、貴邦治法亦若是耶、

一病有不得不用吐法者、但吾邦從來憚吐法而不甚喜用、故莫得而徵其方爲孰勝矣、貴邦吐法亦用瓜蔕三聖之類乎、抑有經驗奇方耶、

一風癲病、世多有之、而於其藥劾且證、雖有五癲之別、病機所發、似不在多意者、或有必驗之神方乎、如有靈秘、請惟勿惜、

一吾邦近來瘋狗咬傷證甚多、在初傷時、用法去其惡血、多灸以拔其毒者、乃能得活、否則爲毒所攻、身

作狗狀、狗吠即死矣、如不即發、必淹歲歷月無不毒發而致死焉、方書雖有斑蝥燒骨等解毒之法、僕所未試也、貴邦亦有此患耶、於其治法若何耶、

一盧山近來有種痘法盛行、御製醫宗金鑑等書、亦詳載其法、稱謂去逆爲順、化險爲平之良法矣、先有唐醫種痘科李仁山者、就商舶而來崎焉、鎮臺命僕等二三生受其種法、僕既得之、乃試其法于彼地童齓者幾二十人、因其形之强弱、毒之淺深輕重稀稠則有矣、未見其或一誤者、於是乎始信其法爲妙矣、貴邦亦傳此法耶、抑已傳而盛行耶、

一我米府中外、夏月、小兒有異疾、俗名疫痢、而實非疫痢、其證初得如熱痢、赤白相雜、頻併無度、身熱如焼、悶亂煩渴、俄而神昏氣憊、搐搦眼竄劇證並出、或一日、半日、或二三日、雖有遲速、均必死矣、僕仕此邦來、乃歷視此證、多在日中頑耍壓犯暑熱且內、或飽停食者、輙有之、故於初得急投黄連解毒三黄石膏等湯、則十或救其二三、晩則雖與罔及矣、但此證惟在小兒、不在于大人、惟行我邑、不行于他邦、爲可異耳、貴地或有是證耶、病抑何以爲名耶、儻有良法、幸併勿吝、

答

一吾邦業醫者亦多、有不遵成方之習、而未免臨大病、模糊之弊、然醫者意也、若固泥古方、不知活變者、眞庸工也、

一古有可吐之症、亦有不可吐之禁、吾邦西北、風土高燥、人氣猛剛、間有可吐之症、而必用瓜蒂三聖散等藥、東南則居地卑濕、民性柔脆、當吐之症十無其一矣、

一風癇之症、吾邦之人間有之、而始起氣實者或有效於滌痰之劑、苦邪纏正虛、則多成不治之症、

一狗咬之症、吾邦亦多有之、而治法毋過去惡血、多艾灸以拔其毒、其不即發、而或發於二三歳後者、症甚危惡、間有效於斑蝥者、所見亦至數人矣、

一種痘法、則吾邦之醫間有行之者、而傳之者不多、余亦粗見其法、而未曾歷試矣、

一暑月小兒毒痢之症、吾邦之嶺南尤多有之、甚者至於熱悶神昏搐掣目竄等症、此乃三氣交蒸之時、小兒氣稟嫩弱之致也、大人氣虛者、間中是症、惟不至於搐掣目竄之境、治法急灌清冽之泉、以救將燎之原、黃連解毒三黃石膏等湯必用之方、而若失速進之力、則勺水不能救輿薪之火耶、若遇是症、則晝一日十服藥可也、歲甲申臘月晦、朝鮮愚泉書、

古事類苑

方技部十一

醫術二

〔政事要略九十五至要雜事〕又醫疾令云、醫生、按摩生、呪禁生、藥園生、先取藥部及世習、(謂、藥部者、姓稱藥師者、卽蜂田藥師、奈良藥師類也、世習者、三世習醫業、相承爲名家者也、)

〔續紀曲禮下〕醫不三世、不服其藥、

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字二年四月己巳、(己巳、原作三月、今改、)內藥司佑兼出雲國員外掾正六位上難波藥師奈良等一十一人言、奈良等遠祖德來、本高麗人、歸百濟國、昔泊瀨朝倉朝廷(雄略)詔百濟國、訪求才人、爰以德來貢進聖朝、德來五世孫惠日、小治田朝廷御世(推古)、被遣大唐、學得醫術、因號藥師、遂以爲姓、今愚闇子孫、不論男女、共蒙藥師之姓、竊恐名實錯亂、伏願改藥師字、蒙難波連、許之、

〔續日本後紀六仁明〕承和四年六月己未、右京人左京亮從五位上吉田宿禰書主、越中介從五位下同姓高世等、賜姓興世朝臣、始祖鹽乘津大倭人也、後順國命、往居三巳汶地、其地遂隸百濟、鹽乘津八世孫達率吉大尙、其弟少尙等、有懷土心、相尋來朝、世傳醫術、兼通文藝、子孫家奈良京田村里、仍元賜姓吉田連、

〔文德實錄二〕嘉祥三年十一月己卯、從四位下治部大輔興世朝臣書主卒、書主右京人也、本姓吉田連、其先出自百濟、祖正五位上圖書頭兼內藥正相摸介吉田連宜、父內藥正正五位下右麻呂、並爲侍醫、累代供奉、

〔尺素往來〕和丹兩流之醫師等、雖爲末代、其術新播効驗候哉、仍隨分秘藏之藥種共所現在者、

〔本朝醫考中〕和氣氏　出自垂仁帝

廣世　淸丸長子也、起家補文章生、延曆四年坐事被禁錮、特降恩詔、授從五位下、爲式部少輔、便爲大學別當、墾田二十町入寮爲勸學料、請裁闡明經四科之第、大學會諸儒、講論陰陽書、新撰藥經、大素等、見字佐神記及和家傳、○下略

〔和氣氏系圖〕垂仁帝〔○此間十四代略〕

淸麻呂〔○註略〕

廣世〔○此下略〕

眞綱〔○註略〕

眞典〔○註略〕

時盛〔天安字佐使、侍醫、隱岐守、〕

時雨〔針博士、延長天曆字佐使、左兵衞、典藥頭、母典藥頭官利名女、〕

正業〔康保字佐使、針醫博士、〕

致顯〔和安永親字佐使、典藥頭、攝津守、〕

正世〔寬和寬弘字佐使、醫博士、典藥頭、〕

相法〔長和字佐使、針博士、〕

章親〔治曆延久字佐使、典藥頭、從五下、○此間十二代略〕

尙成〔改時尙、侍醫、〕

明重〔昇殿、甲斐守、正四下、施藥院使、典藥頭、始准武家醫、爲法師體、法名宗鑑、實者丹波重長適子、讓醫術逵才、養爲子、自是和氏兼丹家之醫道、雖僧位、聽著直綴白袴、列諸醫之座上、〕

利長〔從五上、刑部少甫、法名道三、實明重弟子也、以醫術之精發、雖有子爲養子、醫書之諸抄等多出、永正四正五卒、〕

明親〔改眞長、法名澄玄、自稱蘭軒、後賜春字、號春蘭軒、又菊花紋賜、永正年中渡唐、見明朝皇帝、獻藥、在唐之間、與梅崖友善、歸朝後、度々有音信云、〕

瑞策〔曰通仙軒、又號蘆庵、正親町院字、號通仙院、勅曰、雖可被叙僧位、於家者子細異于他、先著素絹、又賜家傳醫心方三十卷、平信長公、豐臣秀吉公、寵遇異他、○中略〕

瑞桂號庵、本ノ撰法橋法眼法印之階級、陞ニ背叙網一、又依ニ勅命一以ニ號庵之號一、傳ニ代々之遺孫一云、――利親從五下、典藥頭、右衞門佐、法名瑞玄、慶長八七十卒廿五、

瑞壽號庵、寬永七、依ニ將軍家御執奏一陞ニ背叙網一、同八年元日登城、先ニ諸醫一奉ニ拜台顏一、同九年於ニ相模國一增ニ本領五百石一、賜ニ又一千石之領地一、

瑞堅號庵、寬永十六年依ニ拜謁大猷院殿一、賜ニ瑞壽遺跡千五百石一、慶安四年賜ニ依將軍家鈞命一陞ニ背叙網一、子時廿九、同五年元日登城、先ニ諸醫一奉ニ拜謁一、同年參内、

〔本朝醫考 中〕丹波氏　出ニ自後漢靈帝一

康賴　元領ニ丹波州矢田郡一、始賜ニ丹波宿禰姓一、叙ニ從五位上一、歷ニ鍼博士一、醫術通ニ神妙一、褒譽溢ニ宇宙一、永觀二年十一月廿八日、以ニ醫心方三十卷一獻納、○中略

愚案、古和丹兩家多任ニ典藥頭一、近世學ニ醫者悉剃髮以著ニ僧衣一、或叙ニ法眼一、或轉ニ法印一、故不レ聞レ有ニ典藥之名一也、近頃半井家道三家之嫡子、少年日始結髮以交爲ニ典藥頭一、

〔丹波氏系圖〕後漢靈帝――正王――石秋王――阿智王應神帝廿年日本來朝、住ニ大和國一、――高貴王○註略

志孥直○註略――駒子――弓束――首名――孝子――大國――康賴始賜ニ丹波宿禰姓一、丹羽矢田郡人、針博士、左衞門佐、從五位上、永觀二十一廿八、以ニ醫心方三十卷一獻ニ公家一、――重明典藥頭、侍從、侍醫、丹波守、――忠明同、從四下、――雅忠正四下、右衞門佐、典藥頭、施藥院、

重康從四下、醫博士、――重賴醫博士、從五下、早世、――基康典藥頭、從四下、――賴基典藥頭、正四下、侍從、――賴季正四下、典藥頭、

光基典藥頭――篤基侍從、正四下、典藥頭、――篤直實長直子、從三、右兵衞佐、典藥使、――重直治部卿、典藥頭、――賴直正三、同同

同、――篤忠正三、同、右京大、――定基同、正三、右馬頭、――秀直典藥頭、正四下、大膳大夫、――盛直從四下、典藥頭、

〔諸家家業記〕附錄○中略

近來錦小路家、醫道之家のごとくに相成候、右ハ元來錦小路、小森、兩家共、丹波康賴之末孫ニ而、康賴ハ、和氣丹波と並稱し候醫術之名家ニ候、右ニ付錦小路、小森共、世々典藥頭ニ被任、六位藏人ニ被補候事ニ候、然ル處錦小路家、近代極﨟より昇殿を聽り、堂上ニ被相列候、其已來典藥頭は、小森ニ而被任候事候得共、其家堂上たる上、其祖康賴卿と申人醫道之達人ニ而、其傳有之事故、當時之

錦小路家、修理大夫頼理卿追々門人をも被取、彼家江附候得ば、地下之醫者共、官位申候事相叶候事ニ相成候、右之振合ニ而、當時は全く家業のごとく相成候、

〔皇國醫系〕長官〇中略　從三位典藥頭頼量卿ニ至リ、越前國小森ヲ賜フ、此地名ニ因テ、後年姓ヲ小森ト改ム、又播磨國大嶋莊攝津國中條等各コレヲ領ス、其裔典藥頭頼季ノ養子頼庸、六位藏人ニ補セラレ、元祿十二年卯十二月、始テ別家ス、今ノ錦小路家ノ祖是ナリ、小森家、元錦小路ト稱ス、寬文四年五月二日、法皇ノ院宣ニ由テ、錦小路ヲ改テ小森ト賜フ、故ニ其舊號ヲ以テ別家ノ號トス、小森家ハ、遠祖阿直王ヨリ、當代ニ至リ、一百數代ノ帝ニ奉仕ス、其家微々タリトイヘドモ、今ニ至テ、毎歲首ニ屠蘇白散ヲ調修シテ朝廷ニ呈シ、以テ歲首ノ吉瑞ヲ賀ス、又正月元旦ニ、天杯天酌ノ禮アリテ、今猶廢セズ、家衰ヘ技拙ニシテ、天下ノ醫生ヲ指揮スル事能ハズトイヘドモ、實ニ皇國ノ名家タリ、後人或ハ今ノ錦小路家ヲ以テ、方術ノ長官トスル者アリ、甚ダ謬レリ、錦小路家ハ、方術ニ關ルノ家ニ非ズ、ナレドモ本主ノ緣アルヲ以テ、補翼救援ノ道ルベキニモ非ザレドモ、其此事ニ及バザルモノハ、余イマダ其故ヲ知ラズ、又江都ニ多紀家ナルアリテ、其本丹家ニ出デ、其家モ豪ニ、其人モ勇ナリト聞ケリ、然ラバ長官ノ不任ヲモ責ムベシ、又其任ニ代ルモ佳ナル可キニ、其此ニ及バザル、是レマタ何ノ故ナル事ヲ知ラズ、何ニシテモ、方術ノ治源トモ、祖宗トモ尊信スベキハ、タヾ丹家ニ在リ、然ルニ今小森錦小路、多紀ト、各ソノ名ヲ異ニシ、其家ヲ別ニストイヘドモ、其本一ナルトキハ、天下ノ醫級ヲ辨正シ、天下ノ醫弊ヲ矯揉スルハ、二家ノ免ルベキニ非ラズ、凡ソ天下ノ醫生タラン者ハ、長官ノ試課ヲ經ルニ非レバ、匙ヲ執ルコトヲ許サヾルヲ以テ常規トモスベキハズノ事ナルニ、近來ハ長官ノ不任ニ因テ、醫式モ醫級モ頽壞シテ、試課モマタ廢セリ、洛醫ノ衰敗モ亦察スルニ足レリ、

〔本朝醫考中〕安栖

丹波康賴者、志擧直五世之孫、始賜丹波宿禰、丹家醫流之祖、始被聽昇殿、其子成雅、其次仲政、其次道廣、此間家系斷絕、世々住丹波、後到京師住千本、到長元世俗號千本典藥、其子長淸、其次宗圓、其子長久、其次長慶、其子長以、其次宗仙、曾應北條早雲之招、始赴關東、其子長榮、其次長傳始仕家康公、其子正玉、其次號安栖、又稱養岳、叙法印、一說其家系出自坂上田村丸之後、故氏稱田村云々、子孫到于今、

〔明良帶錄世職〕典藥頭

從五位下諸大夫なり、御三代之頃は、半井驢庵、今大路道三、何れも醫術に達したり、〇中略此家は、京都より來りたる家にて、幼年なれば寄合醫師の列に入りて、家業を習熟す、

〔本朝醫考中〕和氣氏〇中略

明英　明親之子也、叙正三位、任宮内少輔、兼修理大夫、敍施藥院内昇殿、剃髮號壽林、自號閑嘯軒、且半井之稱始于明英、

〔牛日閑話六〕京烏丸北正親町北、今の施藥院の地に、半井宅有、大なる井有、半を製藥の料に用ひ、半を雜用に充ふ、因て半井と稱す、

〔醫者談義四〕至賤中有殊常功談義

昔元和年中、當上の御歷々、御產の御難產にて澀滯せさせたまひけるに、曲直瀨何がし伏龍肝を進じて、立所に御產平らか成しかば、此實によりて、曲直瀨を改て、別に家名をたまはりしとなり、當上の御歷々にてましませば、關東よりは、道三家、玄朔玄鑑父子、半井家、久志本家、其外名ある御醫者、〇中略會合の中に、曲直瀨衆醫を抽でゝ、父玄朔にも憚ず、伏龍肝と申上けるは、まことに獨歩の才、醫中の傑とも云べし、

〔本朝醫考中〕上池院

其先出自源賴光五世之孫充角、充角號坂三郎、產于和州、其後家系斷絕、而後有九佛圓琵、

九佛

九佛、和州人也、始遷洛陽、專施醫術、

十佛

十佛者、九佛之子也、博學多聞、而療養蒼生、光明帝使任民部卿法印、又以倭歌鳴于世、等持院仁山相公、恩遇特渥、曾爲相公講萬葉集、平日侍左右、診脈獻藥、

士佛

士佛者、十佛之子也、諱慧勇、號健叟、醫術通神妙、後光嚴院、後圓融院、後小松院三朝相續賜聖詔、被號上池院、且扁其居、又叙民部卿法印、曾侍寶篋院〇足利義詮 鹿苑院〇足利義滿 勝定院〇足利義持 三相公、特爲鹿苑相公所寵遇、相公呼彼稱士佛、以士字從十從一、而亞十佛之謂也、

〔滿濟准后記〕永享七年二月九日、醫師板坂、自公方召給了、脈無殊儀、瘧痢血出事ハ不可然云々、

〔羅山文集五十三題跋〕鍼灸資生經跋

本朝官醫蓋有數家、板坂氏其一也、曾自洛赴甲陽、其箕裘卜齋如春叟、久爲東照大神君侍醫、大神君施仁政于邦家、躋黎民於壽域之暇、據和劑局方而製良藥、其炮炙㕮咀之法、卜齋每預修治焉、故其視庸醫猶如大官厨之視賣餅家也歟、

〔本朝醫考中〕竹田

相傳、九條右丞相師輔公之子、閑院太政大臣公季、號仁義公、公季八世之裔公經、號一條相國、被聽牛車兵仗、其子竹田清水谷中納言公定、十四代之孫昌慶稱山城守、始學醫術、

〔延壽類要序〕蓋延壽類要、卽官醫法印、今之竹田公豊十一世之祖、清水谷黃門侍郎公定卿六世之孫、前山城守安國公昌慶之孫、善慶之子、所謂昭慶法印者、所著書也、昭慶後避大樹慶雲院〇足利義勝之諱、而改名定盛、博聞强記而有才藝、應仁二年戊子、左相府義政公疾篤、衆醫奏不治、乃命劑於昭慶、不日

而安、相公袁聞其術於帝也、便賜以法印、昭慶之後定祐、定珪、定加、季廉、定宜、定勝、定快、公美、公道、而今之公豐、承公道而相繼、皆血脈綿續、世々任法印云、公豐字謙豫、醫學明辨也、爰天明丙午之秋、校訂其延壽類要、始而卒業、於其翌歲彊圉協洽之仲春、顧者其於醫道豈不大勳勞哉、○中略

天明七年丁未之歲春三月

賜任從五位下大和守典藥頭和氣朝臣成美君人撰書于卿雲之傳館

〔竹田雄譽光英法印畫像贊幷序〕夫竹田定加、法名光英、別號曰雄譽、其先攝家九條右丞相公季裔流、清水谷竹田中納言公定稱譽弟明室淨嚴法印者、公鼻祖、而志醫未解其疑團、以故應安二歲在己酉入大明、謁金翁道士、學醫道、士感激不遠萬里之志、而醫家之群書妙訣、牛黃圓[illegible]之秘方、皆以教之、加之道士有一女子、嫁焉得二子、洪武間、大明皇后難產近死、以一針得活、而誕皇子、帝樹其功、賜安國公封、永和第四戊午、棹一葉扁舟、載得大唐醫家之秘訣、歸吾朝矣、其令孫禱于北野菅神、誕一子、乃快翁宗俊是也、學涉諸藝、名列十科、累代醫術連綿相承、故乃父了光法印、臨末後手自書曰、定加亦當其器、矣、鍼灸劑藥、雜病諸說、一々無殘於秘奧傳之、良有以公一顧於衆病、則衆病如湯雪而莫不治、可謂不墜父祖遺緒者也、○中略

慶長三歲在己戊八月如意珠日

前禪興北川正五

〔本朝醫考中〕久志本

其祖出自天兒屋命、是天孫降侍之神也、其八世曰乙若子命、爲伊勢太神主、累世掌其職、末裔石部季光、長德年中敘從五位上、後一條院寵遇特渥、寬仁元年勅賜度會姓、以改石部、其曾孫常任以除禁忌之藥、爲神宮之醫、始號久志本、以度會郡有久志本也、子孫相續爲神職、被敘位、且事醫術、

〔皇國名醫傳前編下〕吉田氏

吉田德春、號仁庵、本姓佐々木、曾祖嚴秀、食邑於吉田、因爲氏、德春以醫仕室町幕府、敘法印、晚年致仕居、

名人

嵯峨角倉、故子孫或氏。角倉。子宗林襲職、叙宮內卿法印、子宗忠(號濟舟)子宗桂(號意齋)最能辨藥性、世人稱曰日華子、天文中與僧策彥遊于明者再、治明主世宗病、及歸世宗賜以顏輝扁鵲圖、聖濟總錄、及藥笥等、明人欽其術、曾號曰意庵、取諸醫意之義云、故後又通稱意庵、叙宮內卿法印、子宗恂(號又玄子)嗜學、與藤原肅友善、仕豐臣秀次、叙法印、後陽成帝弗豫、上藥奏效、因勅改稱意安、進民部卿法印、後謁神祖、賜祿五百石、〇中略又命製紫雪、於是恩遇異于他、每歲賜藥石及金銀衣服不貲、子宗達後改吉皓、襲稱意安、叙法眼、亦精藥性、台廟時數療篤疾、輙有成蹟、

〔二中歷十三能〕醫師
家繼(深根、侍醫、)　高宗(葛城、侍醫、)　善綱(菅原、侍醫、)　行貞(菅原善綱子)　利名(宮頭)　道救(菅原善綱弟子)　忠末(宮利名弟子)　輔仁(深根宗繼二男)　行仁(菅原)　有道(頭伴)
爲名(菅原道救子)　滋秀(茨田茂綱弟子)　康賴(丹波忠末弟子)　三光(菅原)　重雅(丹波康賴三子)　正世(和氣爲名弟子)　清雅(丹波、侍醫、)　相法(和氣正世男)　忠明(丹波重雅男)　相成(和氣正世男)
典雅(菅原)　爲茂(丹波)　雅忠(丹波)　俊通(惟宗)　相秀(和氣相法男)　爲清(丹波)　重康(同頭)　時雨(和氣)　雅康(丹波忠䜭子、大小心不審也、)

〔古事談六亭宅諸道〕典藥頭紀國守。〇中納言長谷雄卿祖父　春宮御腹病之時、令合芒消黑丸、奏申云、此御藥服御後可令悩亂給、然而遂可有其驗云々、聞食之後令悶絕給、依之被下國守身於帶刀陣、帶刀等拔劍、宮崩給ハ可指殺國守之身云々、次宮平安、御腹病永愈云々、後日國守謂云、宮若御命終者、國守不可存歟トテ止醫道畢、於子孫永不傳其道云々、

〔續日本後紀十一仁明〕承和九年三月癸卯、右京人侍醫外從五位下紀臣國守、弟從八位上同姓衆守等三人、改臣字賜朝臣、

〔續日本後紀二十仁明〕嘉祥三年三月己亥、帝崩於清涼殿、〇中略癸卯、奉葬天皇於山城國紀伊郡深草山陵、〇中略帝叡哲聰明、苞綜衆藝、〇中略留意醫術、盡諳方經、當時名醫不敢抗論、帝嘗縱容謂侍臣曰、朕年甫七齡、得腹結病也、八歲得臍下絞痛之病、尋患頭風、加元服後、三年得胸病、其病之爲體也、初似心痛、稍如錐刺、終以增長、如刀割、於是服七氣丸紫苑生薑等湯、初如有功、而後雖重劑不曾効驗、冷泉聖皇

憂之、勅曰、予昔亦得此病、衆方不効、欲服金液丹并白石英、衆醫禁之不許、予猶強服、遂得疾愈、今聞所患、非草藥之可治、可服金液丹、若詢諸俗醫等、必駮論不肯、宜喚海淡海子細論問、隨其言說服之、度事勅旨、服鼓丹藥、果得効驗、兼爲救解、古發設自治之法、世絕良醫、倉卒之變可畏故也、今至晩節熱發、多變救解有煩、世人未知朕躬之本病、上皇之勅實、必謂妄服丹藥兼絕自治而敗焉、宜記由來令免此謗焉、遂詔旨記而載之、帝從少小聖體尫羸、然而寶歷之年既登十八、仙齡之算亦踰四十、求諸中古、應无甄德、蓋由修善行仁、服食補養之力者歟、

〔文德實錄 五〕仁壽三年六月辛酉、侍醫外從五位下菅原朝臣梶成卒、梶成右京人也、業練醫術、最解處療、承和元年從聘唐使渡海、朝廷以梶成明達醫經、令其請問疑義、五年春解纜著於唐岸、六年夏歸本朝、路遭狂飆、漂蕩南海、風浪緊急、鼓舶艫俄而雷電霹靂、桅子摧破、天晝黑暗、失路東西、須臾寄著、不知何島、島有賊類、傷害數人、梶成殊祈願佛神、僅得全濟、與判官良岑長松等合力、即採集破船材木、造一船、共載、當時便風引、船得著此岸、朝廷褒其誠節、十年爲鍼博士、次爲侍醫、卒於官、

〔三代實錄 四清和〕貞觀二年十月三日己卯、正五位下行典藥正兼侍醫參河權守物部朝臣廣泉卒、廣泉者左京人也、本伊豫國風早郡人、姓物部首、後隸京兆、賜姓朝臣、廣泉少學醫術、多見方書、天長四年爲醫博士兼典藥允、遷爲侍醫、〔中略〕廣泉藥石之道當時獨步、齡至老境、鬢眉皎白、皮膚悅澤、體氣猶強、卒時七十六、撰攝養要決廿卷、行於世矣、　十二月廿九日甲戌、從五位下行內藥正大神朝臣虎主卒、虎主者右京人也、自言大三輪大田々根子之後、虎主本姓神直、成名之後賜姓大神朝臣、幼而俊辨、受學醫道、針藥之術殆究其奧、承和二年爲左近衛醫師、遷侍醫、十五年授外從五位下、兼參河掾、後遷兼備後掾、三年授從五位下、貞觀二年拜內藥正、卒時六十三、虎主性好戲謔、最爲滑稽、與人言談、必以對事、嘗出自禁中、向作地黃煎之處、途逢友人、問云、向何處去、虎主答云、奉天皇命、向地黃處、此其類也、然處治多効、人皆要引、療病之工、廣泉沒後、虎主獨處、太收聲價焉、

〔三代實錄十三清和〕貞觀八年九月廿二日甲子、從五位上行肥後守紀朝臣夏井配土佐國、○中略夏井者左京人、美濃守從四位下善岑之第三子也、○中略閑醫藥之道、配土佐之後、自往山澤採藥合鍊、以施民、民多得其驗、嘗有一人、中風被髮狂走、夏井與一匕散藥、以令服之、此人立瘉、皆此之類也、

〔三代實錄十七清和〕貞觀十二年三月卅日壬午、散位從五位上菅原朝臣峯嗣卒、峯嗣者左京人也、父出雲朝臣廣貞、長於醫師、官爲正五位下信濃權守、淳和太上天皇龍潛之日、令峯嗣侍春宮藩邸、峯嗣自申請欲繼家業、仍補醫得業生、自此而始、峯嗣奉試及第、弘仁十三年叙左兵衞醫師、十四年遷醫博士、天長四年兼內藥佐、七年兼侍醫、八年兼攝津大目、是年讓醫博士於物部廣泉、十年爲春宮坊主膳正、內藥佐侍醫攝津大目並如故、承和二年授從五位下、淳和太上天皇思在藩之舊、以峯嗣爲侍者、寵遇優渥、頻超傍人、四年爲尾張權介、六年遷爲美濃權介、不之官、嘉祥二年爲越後守、峯嗣侍淳和院、奉太后御藥湯方之事、由是遷爲播磨介、以近都亦優其身也、仁壽元年加從五位上、天安二年爲典藥頭、貞觀五年自謝老、出爲攝津權守、退居豐島郡山莊、灌藥養性、不交流俗、十年改出雲姓爲菅原、以土師出雲同祖也、卒時年七十八、峯嗣不壁處治、必効、嘗奉勅、與諸名醫共撰定金蘭方、又針艾之所加多方注之外、後進之備至今稱妙焉、

〔續本朝往生傳〕一條天皇者、圓融院之子也、○中略時之得人也、於斯爲盛、○中略醫方則丹波重雅、和氣正世、○中略皆是天下之一物也、

〔古今著聞集七術道〕御堂關白殿御物忌に、解脫寺僧正觀修、陰陽師晴明、醫師忠明、武士義家朝臣參籠して侍けるに、五月一日南都より早瓜を奉たりけるに、御物忌の中に取入られん事いかゞあるべきとて、晴明にうらなはせられければ、晴明うらなひて、一つの瓜に毒氣さぶらふよしを申て、一をとり出したり、○中略忠明に毒氣治すべきよし仰られければ、瓜を取まはし〳〵見て、二所に針を立てけり、義家に仰て瓜をわらせられければ、腰刀をぬきてわりたれば、中に小蛇わだかまりて

有けり、針は蛇の左右の眼に立たりけり、〇中略名をえたる人々のふるまひかくのごとし、ゆゝしかりける事也、

〔皇國名醫傳前編中〕惟宗氏〇中略

惟宗氏、本姓秦、始皇十二世孫、功滿王之後也、有公直者、賜姓惟宗朝臣、子孫因以爲族、歎世曰、俊雅、從丹波忠明學醫、爲近江掾、子俊通有才學、深造醫理、擢侍醫醫博士、博士之職、和丹二氏遞掌之、他人弗獲與焉、而俊通特任之、蓋異數云、

〔古今著聞集七能書〕宇佐大宮司なにがしとかや、癩病をうけたる由聞へ有て、一門の者共、改補せらるべきよし訴へ申ければ、大宮司はせのぼりて、醫師にみせられて、實否をさだめらるべきよし奏し侍ければ、和氣丹波のむねとあるともがらに御尋有けり、中原貞説も、おなじく召に應じて、御尋に預りけり、各白らいといふ病のよしを奏しけり、療治すべきよしの勘文奉るべきよし仰下されければ、めん〳〵に罷出で、しるして參らすべき由申けるに、貞説申けるは、非重代の身にて、一卷の文書のたくはへなし、知りて侍る程の事は、當座にて考申べしとて、則しるし申けり、もろもろの醫書共、皆悉く引のせて、ゆゝしく注申たりければ、叡感有て、申うくるに隨て、和氣の姓を給はせける、後には諸陵正に成て、子孫いまにたへず、

〔吾妻鏡十六〕建久七年〇正治元年三月十二日甲辰、姫君追日憔悴御、依之爲奉加療治、被召針博士丹波時長之處、頻固辭、敢不應仰、件時長當世有名醫學之間、重有沙汰、今日被差上專使、猶以令申際者、可奏達子細於仙洞之旨、被仰在京御家人等云云、

〔三長記〕建仁元年七月十八日丙寅、今日典藥頭賴基朝臣死去、當世之扁鵲也、於業病者法藥猶無驗、況乎醫病歟、可惜々々、

〔下學集上人名〕扁鵲周末戰國時名醫也、史記云、扁鵲、姓秦、名越人、桑君以禁方傳之云々、

○按ズルニ、扁鵲ノ傳ハ、診脈條ニ引ク史記ニ詳ナリ、

〔本朝醫考 中〕竹田○中略

昌慶　昌慶始稱山城守、天性勇武、賦有重瞳、後光嚴院時、有故配于關東、然後學儒讀書、剃髮自號實乘僧都、又嗜醫術、應安二年己酉卅二歲而入大明、見金翁道士、受醫家群書及牛黃圓等之秘法妙訣、改昌慶號明室、且道士有一女、妻之、遂產二子、明朝洪武年、大明皇后難產殆死、于時昌慶應勅、獻藥一劑、而皇子降誕矣、帝賞其功、封稱安國公、本朝永和四年戊午、齎得大明醫家秘訣、及銅人形等、歸本朝、○中略

昭慶　昭慶者昌慶之季子也、自號快翁、長祿二年治大聖院之病惱、依此敍法眼、應仁二年療慈政院義政公之恙、依之敍法印、文明十九年避御諱字、改慶字名定盛、博學多聞長諸藝、世稱十能人、有七男三女、釋横川京華集載昭慶壽像贊、其略曰、昔爾祖封千戶萬戶侯、游於中華、親見明朝天子、今吾公襲四品五爵、出於扶桑、特奉日本國王、華胄傳藤原姓、采邑食竹田莊云云、又曰、法印竹田家藏鄒尾硯、乞其銘於横川、銘曰、在倭在漢、一瓦千年、與硯同壽、太醫竹田云云、

愚按、竹田昭慶、長祿應仁年中之人、而與横川同時、然則鄒瓦硯藏主法印竹田、亦是恐謂昭慶乎、

〔本朝醫考 中〕和氣氏○中略

明親　利長之子也、又名眞長、剃髮號澄玄、自號蘭軒、足利家賜春字、稱春蘭軒、永正年中入大明、見皇帝而獻藥、又與明人梅崖親締交、明親歸本朝、梅崖慕其爲人、憑海船之便、以時時通書信云云、

〔德本翁遺方 例言〕一杭州錢唐縣ノ人、僧ノ月湖、歸化シテ、命ニ依テ鎌倉ノ圓覺寺ニ住ス、丹溪流ノ聖醫也、弟子明監寺、其傳ヲ受テ、其弟子江春庵助書記ニ傳フ、江春庵、又其弟子玉鼎ニ傳フ、玉鼎、其長子頤主軒、及ビ二男三喜、及ビ德本ニ傳フ、然レドモ德本、其初メ出羽國殘夢ノ弟子トナル、故ニ別ニ仙方神術多シト云、

〔千重之比登邊〕中世醫師

古河三喜　道導、諱三喜、範翁ト號シ、又支山人ト號ス、寛正六年武藏河越ニ產ス、中年ニ及デ、大明ニ入、留居十二年、東垣丹溪ノ術ヲ學ビ、遂ニ醫方書ヲ携テ本朝ニ歸リ、蒼生ヲ救療ス、然ルニ享祿四年曲直瀨道三來テ、方書ヲ寛ヒ、醫術ヲ傳フト云、著處ノ書、三喜直指篇三卷、天文醫案アリ、

〔本朝醫考中〕導道

導道、諱三喜、自號範翁、又稱支山人、寛正六年四月八日產於武州河越、及中年入于大明、留居十有二年、學東垣丹溪之術、携醫家之方書歸于本朝、救療蒼生、其全活之功不爲不多矣、天文六年二月十九日、七十三歲而卒、

〔皇國名醫傳前編下〕三喜 月湖

僧三喜稱導道、(號支山人、又範翁、)河越人、姓田代、父兼綱、冠者信綱之後也、初入妙心寺參禪、又就足利校主利陽學醫、後入明、受李東垣朱震亨之術於月湖及恒德孫、留學十二年、業成而反、居鎌倉江春庵、又居下總古河、世稱古河三喜、子孫傳其業、號稱田代、江春、月湖、(稱明監寺、又號潤德齋、)不知何人、求法入明、寓于錢塘、以醫行、明景泰三年、著全九集、六年又著濟陰方、

〔千賀之比登遍〕中世醫士

吉田宗桂 天文中人　稱意安、天文中大明ニ遊ビ、大明主ニ藥ヲ進メ、醫名ヲ異域ニ著ス、歸朝後、令名彌彰レ、自ラ一家ヲナシ、子孫世々意安ヲ以テ號トス、

〔本朝醫考中〕吉田〇中略

宗桂

宗桂　宗桂稱意安、以醫術大有聞、陳日華宋開寶中撰諸家本草、能分寒温、辨性味、宗桂亦能辨知俟藥、故世人以日華子稱之、遂自以爲別號、天文八年、伴入明使僧天龍寺策彥而赴大明、明人以宗桂之診治有神察、呼稱意安、蓋取醫者意也之義也、梅崖書稱意之二大字以贈焉、同十六年、與使僧策彥再遊大明、于時獻藥於大明皇帝、著醫名於異域、而携方書歸本朝、爾後令名彌彰、自成一家、子孫世世以

意安、爲號、元龜三年十月二十日死、

〔醫事漫錄四編〕德本翁傳

○○○

德本翁、長田氏、號知足齋、德本蓋其諱也、三河州大濱村人、其先不詳所出、翁爲人恬澹、寡慾自甘、不欽慕勢利、周遊四方、去就任意、大永享祿間、遊乎甲斐州、以醫爲客于武田信虎、翁之爲醫也、超逸李朱、而幷驅秦張、峻劑毒藥、機宜不誤、攻擊瞑眩、不避世譏、是以富貴膏粱之家、往々多忌憚者、而却見允於山野樸質之民、故居處不厭僻陋、天文年中、去之信濃州、諏訪郡東堀村居焉、天正之亂、武田氏亡後、再還甲斐州、自構草廬、號曰茅菴、出則頸掛藥囊、斜跨牛背、逍遙自適、傌陵富貴、憫恤貧賤、雖偶應權豪之招、取藥價不過十八錢、蓋欲矯世醫之務赴勢利者也、寬永初、台廟不豫、百方無驗、官醫今大路氏勸翁之診治、因命召翁、翁時年百十有餘、乃掛囊跨牛、躡蹀而到于東都、一診便欲上峻劑、衆醫不肯、翁因詳辨其可否、台廟信而服之、數日奏効、賞賜尤厚、翁固辭不受、臨歸乞藥價數十錢於政府、於是翁聲名聞達四方、遐陬無幾復徙信濃州故居自養、寬永七年庚午春二月十四日卒、年百十有八、有男稱長田孫兵衞、嗣世、門人數十人、受其禁方書者僅二人、馬場德寬、今井德山其人云、（中略）

樂只齋和久田寅謹識

〔德本翁遺方序〕長田德本翁、獨明三才之理、能曉醫術之要、考法於古、驗術於今、能超唐乘、皆獨入扁張之神域、卓然別立一家言於大東、可不謂豪傑之士乎、其爲術、奇異傀僻、雖加攻擊、然西洋醫術、麻藥禾劑未闢之前、蚤既闢一大活眼、與中古五毒之方、以起沈痾廢疾者幾千人、于嗟乎亦奇哉、予祖父中村靜翁先生、伊豆下田之人也、嘗游甲斐、得德本遺方一篇於市川南屛、先生驗之於鄉里篤痾奇患、應手而起矣、後傳之塙篠田化齋先生、先生傳之予朋友門人常見籍焉、以奏奇効、各寫而傳之、顧翁之此方、峻劑毒藥、譬之於劒中有干將莫耶、分量診法不得其法、則一匙之差或有不可救者矣、故不敢傳於浮氣粗心之人、然竊恐傳播之廣、釜致謬誤、遂刻之於家塾、見者能明三才之理、達病機之變、精診熟察、以

用此方、則於生々之術、庶幾有得、軒岐不傳之秘者耶、

于時嘉永二年歲次己酉春二月中浣　平戶新田醫員　齋藤貴森玄識

〔閑窓瑣談三〕名醫德本の奇事

世に名高き甲斐の德本は、和漢古今に珍らしき恬澹の人なり、○中略大永享祿年間は、甲斐の州に遊び、醫道を以て、武田信虎の家に爲客、抑德本翁の醫術は、即功を專とし、其療治いさゝか烈しきに似たり、然ば病に依て、峻劑毒藥、機宜不誤、攻擊瞑眩、不避世譏、○中略是を以て、富貴なる輩は、俗諺の如く、古方家と恐怖れて信せず、却て山野樵賤の民に皆信せられ、殊に貧しきを憐みて、療養を信切にし、居所の遠きを厭はず、天文年中には、甲州を去て、信濃國諏訪郡東堀村に住し、天正の亂に、武田氏亡て後、再甲州に還り、自ら草廬を構、號て茅庵といふ、

〔皇國名醫傳前編下〕板坂氏

板坂宗頓、近江坂本人、以醫爲業、子宗德稱三位、〈或大歡、圓明軒、〉又爲人豪縱、而視疾入神、寛正三年、大內敎弘、在伊豫疾、將軍召之、廣撰良醫、宗德當選而往、時人榮之、子純順徙于京師、擢御醫、叙法印、子備後入道、子宗高通稱卜齋、幼入東福寺爲僧、武田晴信知而惜之、勸而還俗、承繼家業、宗高後遂仕武田氏、永祿戊辰秋晴信有病、宗高診曰、微恙似不足患、然數年後必發、發則不可爲、請早計之、晴信不可、果如其言、〈○板坂宗德、著家秘方、板坂約、閒書家傳小兒方、疑此同類、〉

〔本朝醫考中〕和氣氏○中略

利長　明重之子也、叙從五位下、任刑部少輔、剃髮號道三、實明重之門生也、然以精醫業、養己子以爲嫡子、和家之醫術再盛行、永正四年正月五日以病卒、○中略

吉田○中略

宗恂　宗恂者宗桂之二男也、號意安、又稱又玄子、繼父業、叙法眼位、醫名彰聞、且嗜經學、與藤斂夫友

養、曾仕豐臣秀次公、賜采地、家洛下、後被召奉謁家康公、常獻藥、甚沐恩渥、且於城州賜食邑五百石、一日異域獻珊瑚枝、時無識之者、家康公手摸其形、召諸醫問其名、衆醫不能辨之、宗恂曰、恐是珊瑚枝也、家康公益問其事實、宗恂詳答其所出及所以採之、家康公感之、即以所獻之珊瑚枝一個賜宗恂、凡每歲賜藥石及金銀衣服等、不可勝計也、家康公令宗恂修製紫雪、乃據和劑局方以調之、而後他醫亦効其製法、一日蠻舶貢薄石一尺餘、狀如側柏、熟視則似木賊柏葉相連綴者、家康公異之、以問諸醫、皆不知之、宗恂曰、蓋是栢枝瑪瑙花乎、考之本草果相似也、宗恂奉命、與諸醫隔歲輪直于江戶、其後常陪侍于駿府矣、慶長十五年四月十七日卒、年五十三、所著之書有素問講義、難經註疏、四冊醫經小學、十二冊纂類本草、二十冊名醫傳略、古今醫案、又曾作運氣諸論圖、及樞要圖、漏刻圖等、

〔本朝醫考 中〕道三

道三、氏曲直瀨、字一溪、自號雖知苦齋、其先世居洛陽、一溪以永正四年九月十八日生於洛陽、十歲入相國禪寺歲集軒、爲喝食、號等皓、讀東坡山谷等詩集、悉諳之、二十二歲而赴關東足利之學校、師事文伯、以學群書、享祿四年、始見導道、以窺方書之要旨、明醫術之奧義、諸方之可否、藥石之能毒、盡無不辨知焉、業既成、天文十四年歸洛陽、十五年遂通浮屠、謁光源院義輝公、寵遇殊渥、且細川勝元、三好修理、及松永霜臺等厚遇之、診治之功逐日益多、〇中略凡本朝中世之醫家、一號牟井家、一號道三家、到于今不乏其人矣、養安院正琳、壽命院德潤、施藥院全宗等亦此門生也、慶長十三年四月四日、依後陽成院之勅、以被叙法印位、

〔明良帶錄 世職〕典藥頭

道三〇今大路は、醫術を以、天地一般之理を悟りて、遠州の旅館にて、津波の興るを悟る、今切是也、拜領屋敷、常盤橋のうちに有、されば登城のために橋をかける、今の道三橋これなり、兩家に陰陽のヒあり、正月は屠蘇散、度障散、屠蘇白散、神明白散、膏藥を獻す、是は弘仁之天子へ差上たる法にして、

弘仁格式に出す、膏藥をとうやくと唱ふ、天子三日には御額へ點せらる、此屠蘇散を絳之袋に入て、五色之糸にて口を括り、長柄の銚子に渡す、〇下略

〔本朝醫考　中〕養安院

正琳字玉翁、山城州人也、自幼學醫術、師事一溪道三、一溪以其器不凡、授曲直瀨氏、且養玄朔之嫡女爲己子、以妻之、而傳醫術之樞要、天正十三年、見於豐臣秀吉公、仕秀次公、又曾謁家康公及秀忠公、文祿元年、正親町院弗豫、獻藥復本、因叙法印、同四年、中納言宇喜多秀家卿之內室、幷豐臣秀吉公之女患怪疾、諸醫治之不驗、正琳獻藥而立痊、秀吉公悅之、賜綿衣幷金銀、且秀家卿自朝鮮携來之書籍悉畀之、慶長五年、後陽成院弗豫、獻藥有效驗、叡感之餘、賜養安院之稱號、同十年、依家康公之命、赴江戶、蒙眷顧、同十三年、與道三麗菴施藥院、輪直于江城、而仕秀忠公、然有耽閑之癖、遂讓俸於嫡子正圓、以退居別莊、同十六年、四十七歲而沒、

〔本朝醫考　中〕玄朔

玄朔字道三、稱東井、又號延壽院、城州之產、而一溪之姪孫也、幼失父母、故一溪養而爲己子、及長而精醫術、天正十年春三月、正親町院弗豫、玄朔治之有効、因敍法眼、同十四年十二月轉法印、同十六年、豐臣秀吉公賜五百石采地於城州、慶長三年九月、後陽成院弗豫、諸醫措手、玄朔獻藥而立愈、叡感殊深、依賜黃金之花瓶、寬永五年十二月、奉秀忠公之嚴命、寄素絹、寬永八年十二月十日、於武州江戶卒、年八十三歲、葬淺草誓願寺、曾所選之方書數部、今行于世者若干、本邦近世之大醫家、多出自于此門、啓迪院法印玄冶、壽昌院法印玄琢等之類皆是也、

〔皇國名醫傳後編　上〕曲瀨翠竹院〇中略

正紹初稱玄朔、天正初奉勅受父稱道三、〇號東井　本姓某、正慶甥也、〇中略　正紹亦喜敎導生徒、出其門者名皆用玄字、末流別支總遍海內、至今醫名稱玄、猶浮圖曰釋、亦可以驗其盛也、

〔本朝醫考 中〕親純

親純者玄朔之子也、初稱兵部大輔、後陽成院御宇、文祿元年二月廿八日叙從五位下、任典藥助、且改曲直瀨、賜今大路稱號、于時年十六、剃髮號道三、諱玄鑑、字龜溪、慶長四年十二月廿八日叙法眼、同十三年四月轉法印、東福門難產殆危、百藥不應、衆醫術盡矣、玄鑑診脈獻藥、一貼而得安產、秀忠公大感之賜小刀、寬永三年、秀忠公入洛、玄鑑從台駕到京師、玄鑑罹病、同九月、崇源院病惱、（崇源院者、源家光公之母堂也、）告急於京師、秀忠公使玄朔赴江戶、玄鑑與疾以夜繼日、已到相州箱根山、病大發而遂沒于湯本、時年五十歲、葬湯本早雲寺、瓜瓞綿綿到于今、

〔堯恕法親王記〕寬文五年七月二十五日、今日辰刻、原田休伯法眼卒、此仁八年來、余ニ無他事出入之者也、殊醫術當世無匹儔、聞予年來藥令服用畢、

〔山城全州墓碑銘集大成 儒及醫部四〕養壽院法印山脇先生墓誌銘（在洛南深草里眞宗寺、）

先生、姓橘、氏山脇、諱玄心、字道作、相傳、其先河內楠氏之族、中世徙居江州山脊邑、因以爲氏云、○中略元和庚申、有詔診視中和皇后、進御藥、有奇効、官醫曲直瀨玄由薦之爲侍醫、以賜官祿、實先生二十有七歲也、間兩歲賜醫官、稍遷轉、寬永癸未、遂叙法印、明年勅賜院號曰養壽院、○中略寬文五年、適病頭疽、太上皇特令中使日問安否、珍果玉食賜賚稠疊、疾愈、勅許烏帽鳩杖、用侍殿上、蓋優老之渥恩也、紀府相公有病、遣使聘召、以求理療、太上皇不允曰、朕不可一日無道作、道作不在、朕心不安、幕府之賜祿俸也、例必往東武謝恩、亦有詔不允、坐食其俸也少其比、故宮車之遊豫近郊、先生必從以備緩急、而內每有宴賞、必召先生、必賜珍饌、太上皇嘗曰、貴耳賤目、今昔之通患也、假令東垣丹溪在乎今世、與道作並馳、朕未知其孰先也、諸醫之宜侍禁闈者、至瘍科眼科之微、必咨先生以決能否、其始拜闕也、先生亦必爲之先容、先生謹愼不泄、常念溫樹之誡、宮中之事未嘗向外而說、故聖眷之深、人鮮有得而知者、而其嘗施術之於世、起死回生、養老保壽之効、昭昭於人之耳目者、不可勝數、而其受業於門者六百餘人、而爲

官醫名於世者比々而在、嗚呼盛哉、〇中略

延寶七年歲次己未　　錦里木貞幹撰

〔紹述先生文集五記〕勅賜廣濟院號記〇中略

予所識東安岡部玄議、家世精醫、其先人法印益安、師事啓迪院法印玄治、祖述軒岐、辨明素難、尤精本草運氣之學、且至桐錄雷論張劉李朱諸家方書、莫不造其玄微、窺其梗槩焉、術愈精學愈博、遂升天聽、拜御醫、服事後水尾帝、及東福皇后、及後西院帝、今太上皇帝、進藥屢驗、眷注優渥、自列侯牧守諸達官貴人、下至市井草萊之賤、凡遇有疾、莫不延之以仰其治、及門受業者最夥、至於戶庭無所容屐、晩年爲本院侍醫、恩遇彌篤、嘗賜尙方御藥、晉階法印、元祿庚午正月十六日、勅賜號廣濟院、蓋取諸夫子博施於民而能濟衆之語也、未幾而歿、玄議亦克承箕裘、術業精詣、拜謁今上皇帝、太上皇帝、及本院、累階法眼、仍稱廣濟賜號、屬者光祿大夫風早藤公實種爲書廣濟院三大字賜焉、玄議不堪其喜、屬予求記、其先人之像讃、並叙賜號之榮、〇中略元祿八年乙亥冬十二月望日

〔明良洪範二十三〕井關玄說、老後ニハ病人ヲ三人ヨリ多クハ受取ラズ、眞醫ノ行ヒ也、隱居ノ後、元祿年中歿シト、誠ニ希代ノ名醫ナリ、

〔先哲叢談續編十二〕吉篁墩　名漢宦、字學生、初名坦、字學儒、號篁墩外史、通稱坦藏、吉田氏、自修爲吉、江戶人〇中略

篁墩、雖精通方技、素不欲爲醫、嘗被逐時、暫作治療、有國手名、其業大行、每歲所得謝貨二百餘金、家產不貲、

〔續近世叢語七〕小野壽軒業醫果收奇功、一婦娩難數日、衆醫技窮、壽軒用瓜蔕、一吐卽生、一兒丹毒垂斃、數醫坐守、壽軒後至、刺數所出血、皆獲安全、斯類極夥、〇註略

〔皇國名醫傳後編中〕山脇東洋有木元善

外國來醫於我

山脇尙德、字玄飛、一字子樹、號二東洋一本姓淸水、父東軒、受二業於山脇玄修一、尙德幼孤、〇中略先レ是官醫不レ療二娼妓一、尙德亦排二衆議一而爲レ之、躬至二其所一診視、諸如レ是類、務洗二滌固習一、變二世醫之耳目一、以激二發其志氣一、

〔近世公實嚴秘錄八〕望月三英法眼療治に付仁術の事

大御所樣〇德川吉宗御ヒに、望月三英と云醫師有レ之、殊之外療治功者にして、君の思召も他にことなりけるが、或年、狂言役者市川團十郎大病の節、いか成手筋にてや、望月の療治を乞ければ、三英、彼役者の方へ參られ候、日日見舞療治してやられけり、此事世上にていちく批判しければ、或日、殿中にて、橘壯仙院法眼隆庵老、望月に向ひて、異見し給ひけるは、其元樣は、承り候得ば、狂言芝居の役者の療治を被レ成遣一候由、將軍家の御脈をも伺ひ候者の、何共つゝしまずんば不レ可レ有所と存候、以來御用捨も可レ入所と申給ひければ、望月是をきかれて、いかにも拙者、此間市川團十郎を療治仕候、每日每日見廻遣し申候、尤御脈をも伺ひ候某に候へば、いつとても御用相仕廻候て、退出の節計見廻申候、然ばくるしかるまじき事にて候、夫醫は仁の術と申候得ば、道路に倒れイみ候者へも、脈を見て藥を與へ遣すわざなり、近世れきくの醫者衆、輕き者の方へ見廻候事を嫌ひ、富貴分限の人計を療治する樣に成行し事、殘念成人心、淺間敷事にて候と被レ申しゆゑ、壯仙院も無言にて退き給ひけり、去ればこそ、此三英、或時新橋の上に非人の子疱瘡を煩ひ居たりしを、通りかゝりて、是を見給ひ、駕籠より下りて、非人の脈を取りて藥をあたへられしとなり、此事人々かんじけるとなり、爰を以、仁術といはれし事、相違せざるか、大御所樣、御他界の以後、寄合醫師となられけるを、今年寶曆五年亥四月被二召出一、大納言樣御ヒ役被二仰付一けり、

〔朝野群載二十異國〕高麗牒

高麗國禮賓省牒二大日本國大宰府一

當省伏奉二聖旨一、訪二聞貴國有二能理療風疾醫人一、今因二商客王則貞廻歸一次、仰因二便通一牒、及於二王則貞處一說

示風疾緣由、請彼處選擇上等醫人、於來年早春發遣到來、理療風疾、若見功効、定不輕酬者、今先送花錦、及大綾中綾各一十段、麝香一十臍、分附王則貞齎持將去、知大宰府官員處、且充信儀到可收領者、牒具如前、當省所奉聖旨備錄在前、請貴府若有端的能療風疾好醫人、許容發送前來、仍收領匹段麝香者、謹牒、

己未年〇承曆三年十一月　日牒　少卿林　既木生

卿崔　卿鄭

〔師信卿記〕承曆四年閏八月五日甲子、今日陣定也、〈中略〉次官問經王則貞事、左大辨定申可遣醫人之趣、右衞門督定申不可遣由、左衞門督同左大辨、予定申云、件事旁依多疑、召上付送高麗國牒狀、宋朝商客王則貞被覆問了、但太宰府解云、彼國傳聞太宰府有良醫、可被渡送之由所牒示也者、而今不覆問其旨、頗不審也、抑高麗之於本朝也、歷代之間、久結盟約、中古以來、朝貢雖絕、猶無略心、是以若有可牒送者、被朝申牒、本朝報示、今當斯時、爲療病狀申請醫人云、其由緒蓋被裁許乎、若於可遣者、除上臈醫之外、可撰遣一兩歟、對向異土者可多心營之故也、且又可被召問雅忠朝臣、又申請之後漸歷居諸、彼病若平愈者、系渡遣何、仍今度太宰府送牒被問彼病瘉體并愈否、重隨申請可渡遣歟、兩箇之儀可隨勅定、又所送太宰府方物等納否之條、忽難定申、其故者、天慶年中、高麗國使下神秋連陳狀彼國王慇然被停朝貢之事者、以件方物可准朝貢者、忽乖商議、可難容納歟、然則被尋彼例可被量行歟、又彼國牒狀多有三通云々、今有一通、偏爲送太宰府牒狀歟、被尋如此例等、可被牒送歟、

〔本朝續文粹十一〕日本國大宰府牒高麗國禮賓省却廻方物等事

牒、得彼省牒偁、當省伏奉聖旨、訪聞貴國有能理療風疾醫人、今因商客王則貞廻歸次、仰因便通牒、及於王則貞處說示風疾緣由、請彼處選擇上等醫人、於來年早春發送到來理療風疾、〈中略〉抑牒狀之詞頗睽故事、改處分而曰聖旨、非蕃王可稱、宅遐陬而跨上邦、誠彝倫迴戰、況亦託商人之旅艇、寄殊俗之

單書、執圭之使不到、對丞之禮既虧、雙魚猶難達鳳池之月、扁鵲何得入雞林之雲、凡厥方物、皆從却廻、今以狀牒、牒到準狀、故牒、

承曆四年月日

〔十訓抄　二〕唐の后あしき瘡出き給て、其國の醫師力及ばざりければ、日本雅忠と云いみじきくすし有と傳聞給て、是を渡さるべき由、唐の帝より申送り給へりけるに、やりやらずの事、公卿の御さだめありけり、人々の申やう、こゝろ〳〵にて定りえず、帥民部卿經信卿とばかりまたれて參て、事の次第聞て、唐の后の死なん、日本に何かくるしとたゞ一こといはれたりければ、意見に付て渡さるまじきに定にけり、其返牒は匡房承りてぞ書れける、

雙魚難達鳳池之浪　扁鵲豈入雞林之雲

此句をば、和漢共にほめあへりけるとぞ、

昔反正天皇かくれ給て後、御弟の允恭天皇いまだ皇子におはしける時、久しく痼疾に沈み給へりけれ共、群臣强にすゝめ申によりて位に即給にけり、其後使を新羅へつかはして、彼國の醫師をむかへよせて御病をつくろはるゝに、程なく愈にけり、殊に賞し給て本國へ返しやられけり、其例聞及て、異國よりも申送りけるにや、

〔奇魂　一〕醫藥名義　附井醫風變化本道辨

古は方士と定たる者こそ無りけめ、神習の精術は有て、貴も賤も各自病を治ためり、後次々に漢籍の渡來つゝ、大寶の比より令の製りて、典藥内藥寮司に、頭、正、博士、師、侍醫、助、介、生等をおかれ、藥鍼、呪禁、按摩等の差、體療、少小、創腫、耳目、口齒等の科ありて、生等の書を讀も業を成も、日限年限有て、月每年每に、其功を試られ、或は經學(マナビナシエテ)不成就ども、療術に勝たるは、擧用られ拵えつゝ、諸國も是に准ふ法と成ても、猶醫とのみ定めたるは稀にて、國守たらん人にも、大臣たらん人にも、其道明

なれば任られにき、然ばかり漢學はしたれども、大方は法論の書のみにて、藥方の書は未渡ざりしかば、方術は猶此の古のを用られたりと見えたり、奈良宮の比より以來、今の京に至て、盛に漢風に成にたるより、方書も用つゝ、古方と漢方と二派に分れためり、後愈漢樣に化行まゝに、古のは漸忘行程に、靜ならざる世の打つゞきて、最後には公の方士等も京に住あへずて、國々へ避らるゝ程也ければ、往古よりの古方も漢法も、多くは知られず成にたり、其中に適其庶流の家と稱ふる、仲條、吉益、（古方を用て創、外科術に傾し、）半井、吉田、板坂、（和氣丹波兩氏の流なめり）抔ぞ、猶古の遺れるにて、當時までは自一定の療法は有つるを、三喜の東垣丹溪等の法を明より學び歸て、其教を受し人々、公に用られしより、普く其風の世に弘りつゝ、總て書の渡るまに〳〵、古林見宜は、李挺の醫學入門、林市之進は薛巳の十六種、饗庭東菴は內經、名古屋玄醫は傷寒論等に據りしより、今世の如成果て、古は更也、彼亂世の風さへ亡て、今は又紅毛抔云國の術さへ行れつゝ、古法は絕むばかりに成來し中に、主とにはあらねど、漢學の醫等も、奇方の奇藥のと云つゝ、さすがに古方は避がたき樣に見ゆ、其中に寬永の比、園部と云僧の古法を以て、萬病を治め、寶曆の頃、三宅意安と聞しは、殊に倭心したたかにて、藥と灸と古法を撰て書に著しき、凡近世に此人に勝りて功しきはあらざりけり、されど其論は更也、其法も漢方相駁りて、未古義を得ざりつれば、あはれ全き皇國風とも云がたし、天明より文化の間に、武藏に太田長丸、下總に森川士義と云人等有て、是も共に古意は得ざりつれども、長丸は雜病を治め、士義は疫を直す事を得てしに、長丸は老て國に死、士義は江戸に在てやや業の成べかりしを、早く死きときけり、惜べし、今世にさる志の人無にはあらねど、或は一科を得、或は一法を僅に辨へたるまでにて、全く備らずて、淺き我心はいはで、古方少ければ今人に通くは及しがたし抔云、又或は古書の名目を犯したる、僞書等を信用みて止み、或は學業はとまれかくまれ、醫術は活物に關る抔、口さかしく云て、古をたどらんともせず、或は好事者何某の方書

など集て、徒に談柄の料にし、或は古學を立て神ノ方はかしこむ者も、今はの極に至ては、猶漢方こそたのみ處あれ抔云て、かにかく漢の慕はしく、共に彼の奴となる事を免れず、熟き古義を得る者絶て無りしは、口をしく歎はしきわざなりけり、抑漢の古風も、尙書、周禮、春秋傳、太戴禮、史記、內經等を見るに、藥もあれど、病は多く神に祈り、或は變氣移精（此の禁厭の如）などし、或は針灸灌水などにて、萬病は治て、少は此の古に協て、漫に藥は飮ざりしを、六國より秦の亂にて、漢の高祖の叔孫通に禮を製させしばかり、嚴重き法も絕たる世なりしかば、古醫術抔は廢れりと見えて、同じ史記の中ながら、倉公傳よりは後世めきたる事多し、さる程に仲景の藥方を集て、傷寒論を著はししより、痛く療風の變もて行つゝ、唐宋元金明など、世の革るまに〳〵、各自私に理を論ひ、方を定て、いよゝます〳〵、拙く成たる也、其は術と云物は、凡ならぬ人より、凡ならぬ人にあらざれば傳がたく、書は庸人もよめば行はるゝ物故、扁鵲、倉公、華陀等の術は亡て、方書のみ多くなりつゝ、漫に藥のむわざと成たる也、此にても諸術をおきて、假初の病にも、草根木皮を用つゝ、言痛く論ふは、彼にて、さばかり拙く成にたる療風の、漸々に移來たる也けり、然れども猶今京の初つかたまでは、學問わざこそあれ、我醫道はさばかり漢風ならざりしを、つぎ〳〵に彼をのみ主と學びもて行つゝ、今世の如くは成にたり、然しつゝ、其治術も何も精工成來たらんには、病人も少く痼疾も愈べき理なるに、中々に代々をへて、古に劣つゝ、愈益病人の多く、病の愈さるゝのみかは、古無りし病さへ出くるは、いとも〳〵不審しく、怪しき事の極に非や、

〔千重之比登邊〕和方家

三宅意安　寶曆度ノ人、和方ヲ好ム、　延壽和方醫鑑二卷、灸焫鹽土傳一卷（醫鑑ハ中世以降諸家ノ奇方妙方ヲ輯錄シ、鹽土傳ハ俗間ニ所傳ノ灸法ヲ載セタリ、）ヲ著ス、

森養竹　元祿ノ度、採用國傳方三卷ヲ著ス、又近世諸家ノ奇方妙方ヲ載タリ、

森川宗圓〈道士〉　下總國古河人、本姓島本氏、文化ノ度和方ヲ以世ニシラル、後江戸ニ來テ、本材木町ニ住シ、門人數輩ヲ教養ス、

脇田厚齋〈號(一)信、〉　森川ニ就テ和方ヲ學ブ、〇後爲(二)備中松山侯ノ侍醫(一)タリ、師傳ヲ輯錄シテ醫言鑑〈和方十五六方ヲ載ス、其中ニハ一二取ルベキモノアルガ如シ、板本ナレドモ今甚少シ、〉一卷ヲ著ス、

太田見龍　武藏州〈豐島郡生田川村〉人、文化ノ頃和方ニ志シ、諸州ニ遊歷シテ方書ヲ求ム、上毛野國新田郡某村ニテ、一古家ノ和方書ヲ得テ、家ニ歸テ、其書ニ因テ醫治ヲナス、和方家ヲ以テ稱セラル、其書今神遺奇靈傳ト名ク、其家ニ傳フ、惜哉元書ノマヽナラズ、病證ヲ漢語ニ、藥名ヲ漢名ニ改メタリ、元書ハ若狹ノ八百美國ノ方ヲ傳ヘテ、假名書ナリシトゾ、

石山元司　奧州會津ノ人、江戸ニ到テ和方醫ヲ業トス、假名大同類聚方ト名ル所ノ一小冊ヲ藏ス、書中、オホナグスリ、スクネグスリ二方ニ、十七法ノ加減アリテ、萬病ニ應ズルコトナルガ、甚稚ナキモノ也、按ルニ、或人曰、假名大同類聚方ノ名ハ、後ニ私シタルモノニテ、元ノ名ハ元始書トアリキト云ヘリ、寬永七年ノ頃、此人下谷長者町ニ在シ時相見タリシニ、年六十有餘ノ老人ナリキ、

表圓順菴　奧州一關ノ人、文政度、出雲州ニ遊、國造千家清主君ニ謁シ、神庫ノ秘本大同類聚方ヲ得タリト云タ、諸州ニ賣テ自識シ、價ヲ求テ之ヲ寫シム、世ニ出雲本ト云中ノ一本ナリ、關東其書多ト云、著書兩三部アリ、今書名ヲ遺忘ス、

花野井有年　駿河國府中安西町ノ人、通稱昌齋、初メ漢蘭醫法ニ從事シ、後和醫方ニ志シ、世ニ稱セラル、嘉永中、醫方正傳二卷ヲ著ス、〈本邦醫道ノ傳來緒由ヲ辨ジタリ、〉巳ニ刻成ト雖、官許ヲ得ズトゾ、

〔本朝醫家古籍考〈附錄〉〕醫家雜說〈〇中略〉

竊ニ按ズルニ、和方ト稱スルモノハ、吾邦古昔ニ用ル處ノ方州ニシテ、マヽ諸所ニ傳フル也、〈〇中略〉

肥後人郡井大年、嘗テ予〈〇中川修亭、號(二)壺山(一)、〉ニ贈レル書中ニ曰、僕嘗テ和方一萬方ヲ輯ム、或ハ疑フ、少彥名

古方家

氏ノ還方有ンモ亦知ルベカラズ、〇中略四年前ニ、寡君ニ台命有テ、僕ヲシテ之ヲ錄上セシム、寡君又之ヲ江戶ニ獻ズ、江戶台命有テ、僕ニ白銀十挺ヲ賞賜スト云々、

〔千重之比登遊〕現在和方家

井上學　常陸州那賀郡人、今來江戶住濱町、以本邦醫道所知于世、其主トスル所、醫道ハ、元本邦上古大己貴少彥名二神ヨリ創リ、世界萬國ニ傳フ、萬國ノ醫道、皆二神ノ方法ニアラザルハナシ、故ニ漢蘭ノ醫方ヲ兼ルモ、亦二神ノ方法ニ反リトセズト云テ、和漢蘭ノ隔ナク撰用ユト云、

〔奇魂序〕余嘗與佐藤方定〇名民之助友善、故常知以有技能矣、余罹風眼疾患之甚、當此時、不能自有下術之間也、卜之遇地火明夷、因請託之治方定、方定以故不敢辭、內外藥餌、一以神方奏驗、終得大地晉明、嗚呼醫哉方定、嗚呼醫哉方定、此余幸甚、全係方定之奇魂妙手、治之無非其蒙二神之恩賴焉、其得如斯乎、其他中風勞瘵乳岩痿癖等諸症、世醫之所難者、得而療之矣、余所見而知者、治而無不愈、此其事實、顯然著明者也、余所聞而不見者、未遑枚擧焉、今見所著書可知其心術、余書於卷端所以有此擧也、

天保二年辛卯中秋望　　備中松山侍醫　厚齋脇田信親撰

〔杏林雜話〕土生義壽玄碩曰、後藤艮山〇香川修庵〇山脇東洋〇松原圭介〇吉益東洞各以古醫法鳴、當時稱爲五大家、而今言古醫法者、獨依吉益氏、無復言四家者、其故何邪、取仲景之方法、以驗之於今日之病者、實得而後言、無一浮言、此所以吉益氏獨顯、而四家不得與也、

〔先哲醫話上〕後藤艮山

近世古方之學、以名古屋玄醫並河天民爲翹楚、而未免金元陋習、至艮山先生豪然崛起、一洗從前弊風、其識見理療必當有迥異乎先輩者、世以爲好奇非矣、蓋吾醫術至一溪道三氏之門流碎殘極矣、是以、享元醫人復轉而泝古、此亦自然之勢也、拙軒曰、一部傷風約言、翁之本領在此、可謂善讀傷寒論者上、後來豪傑輩出、皆聞翁之風而興起者、斯爲吾道中興、先生

記二筆於經算二氣概一也、

(漫遊雜記上)後藤艮山幼而家貧、慨然歎曰、我爲儒乎、難上伊仁齋、我爲僧乎、難兄隱元、無已則醫乎、無有豪傑逸才之先著鞭者、乃謀其親舊、贄青錢壹貫文、執謁於名護屋玄醫、玄醫以其贄薄不合家規不見、艮山激憤墳廟、辭出門、嘆曰、玄醫鼠輩、不知人、乃自奮死力勤勉、遂爲古醫道之開祖矣、

(一本堂行餘醫言序)予在播州、幼受讀書、未知所向、(中略)十八負笈來京師、(中略)乃學醫於養菴後藤先生、先生初不肯教曰、恐子爲醫不得知、顧再三推辭、欲不爲醫、予強請教、一意學之三年、古今醫籍涉獵殆盡、而無當予心者、再取素問靈樞八十一難、始終縱橫誦讀數過、乃鄉書憤起曰、邪說哉、奚用是爲、若謂非歟、此則醫終不可爲則已、奚用是爲、滕々堂々聖賢之徒、反類異端邪說、修身治人、縱使變成殷伯昌歟、固非所望、何足希哉、丈取張機傷寒雜病論、反覆熟讀四三年、以爲古今醫人中之翹楚無復出其右者、大奇觀方、信之至矣、惜乎其論全出于素問、不免混乎陰陽者流、且有一二謬妄也、吁得非千載一大遺憾乎哉、況其下者邪、晉齊隋唐、葛洪、皇甫謐、褚澄、巢元方、孫思邈、王燾之徒、皆同意趣、宋元以下益隨議論無足取者、上下古今二千年、未嘗見一人一書可祖述憲章者、於是乎、創得發明一本宗旨、質之先生、先生曰、我亦久疑舊醫說、雖然此乃古今一大結構、非老子所及、故未決也、爾後講習討論、略得就緒、惟恐自我作古、人々所憚、雖然愚者一得、殆不可已、若因是得罪、我所不辭也、倘爲正學人所取、則幸甚矣、決非醫家者流所知也、乃爲吾黨小子、著行餘醫言若干卷、漸次刻梓板、貽諸子孫、以擬青箱、(中略)

一本堂主人香川修德識、

(東洞先生遺稿上)復田龍介書

孟夏辱賜書、審悉近狀、而知足下得消渴、頭痛發熱、咳嗽倚息、起居不安、瞑眩之與邪毒狀、一則以喜、一則以懼、爾後奈何、請詳示焉、來諭所云、鄙意有不安者焉、故聊述而請正、夫醫爲方技、固賤業也、雖然擧人安天下人民、以禮樂刑政、而其猶有所病、故周公置大醫職、使之掌養萬民疾者、是亦安民一端矣、而

其治疾有所由、夫道者有所由之謂也、故雖不敢比聖王之道而謂之道、不亦可乎、中葉以來與古異術、不佞一意從事仲景氏、洗晩近之穢、謂之起廢道、不亦可乎、不佞雖業醫、而亦王者之民也、故學先王之道、以修身齊家、〇下略

〔東洞先生行狀〕先生諱爲則、字公言、安藝人也、其先出清和帝、姓源氏、管領政事畠山政長之裔孫也、〇中略元文三年春三月、先生與父母女弟徒于京師、卜居於萬里街春日路南、唱古醫道、蓋年三十七矣、先生曰、我不能與吾家、今以醫隱、何汚本姓、復改吉益氏、是時業未行、弟子未進、遇盜亡貲財、貧困既窮、乃造偶人鬻而假食、先生友有郁尾氏者、仕于佐倉侯、松平左近將監侯時專天下政權、威震四方、郁尾氏有公事入京師、訪先生、憐其貧而老親在焉、薦先生於佐倉侯、侯欲召以爲侍醫、郁尾氏大喜、而急告先生、先生以書報曰、始以子爲知我者、今識子非知我者、吾雖貧而老親在、豈降吾志汚辱祖先乎、貧者士之常也、窮達者命也、假令術不行、天未喪斯道也、吾果餓死耶、窮則必有達、行道樂道、貧困何憂、辭而不仕、延享元年歲在甲子、先生年四十三、貧益甚、以雙親尙在、雖奴婢共具、不異於昔時、橐中常空、夕食絕朝糧、於是齋戒斷食七日、適詣少名彥廟、告于其神曰、爲則不敏、過志古醫道、不顧衆懼、推而行之、今也貧窮、命在旦夕、我道非而天罰以貧歟、爲則知其是而未知其非也、假令飢且死、不敢更轍矣、大明神吾邦醫祖也、請垂昭鑑、道非其道、速斷吾命、若推而行、則必害萬人、誅一夫救衆、固吾之所願也、告神而還焉、先生平日有所驩交之賈翁、適適其家、賈翁欣然奉金、謂先生曰、吾有餘金、以奉給于先生、先生愕然固辭曰、吾不知償之、豈受此金耶、賈翁勃然作色、膝行進曰、吾何望償乎、今奉此金、非爲先生、爲天下萬民也、先生感其言、拜而受金、家給得漸足焉、其後有一病者、先生往而診之、東洋山脇先生會、先生論其處方、東洋服其言、使病者服其藥、不日而治焉、東洋知其非常人、厚交爲親友、先生名所以益顯者、東洋揚之也、延享四年、先生年四十五、徙居於東洞院街、因號曰東洞、是時業已行、弟子大進焉、京師有閑齋先生者、時以唱古醫道鳴于世、先生與閑齋東洋交、讀傷寒論、閑齋爲年長、因以爲講主、先生數論其謬誤、閑齋

曰、東洞傳說多、不改其弊、終日不果、先生曰、吾讀傷寒論、若思久矣、今欲切磋得其旨、吾說若有誤、請教督之、爲則雖不敏、敢不奉教耶、今雖有所考、噤而不論、吾不能知我非、又不得聽人之是、讀書何益之有、閑齋不聽、自是之後先生不臨、終而磨絕焉、其後東洋欲復讀傷寒論、先生曰、前絕閑齋、而陰讀傷寒論、吾意不安也、不如與諸儒先生讀春秋左氏傳、傍談醫事、東洋爲大然、乃集諸儒先生讀春秋左氏傳、東洋至死不絕焉、寛延四年先生年五十、還長沙諸方以類聚之、名曰類聚方、於是方意著明、方極乃出焉、推功實審藥能、作藥徵三卷、門人鶴元逸有醫斷之著也、由是業大行、弟子愈益衆、略○中 安永癸巳歲秋九月二十二日、先生卒然目眩、略○中 以二十五日子而歿、略○中 享年七十二、略○中 哀子猷謹狀、

(醫斷)古方

方者眞古於仲景、而仲景爲傳方之人、非作方之人也、蓋身爲長沙太守、博集羣方、施之當時、以傳後世、而其書具存焉、故欲用古方者、先讀其書、用方可知、然後藥能可知也、未知方用、焉能知藥能乎、雖然未知藥能、則方用亦不可知也、況方意不可解者甚多矣、蓋雖仲景、亦或有不解者、雖則或有不解者、而昔人所傳既用有驗者、又奚容疑焉、降至千金外臺書、方劑不古者居多、其可取者、不過數方而已、徵多味者可疑矣、世有欲以數藥兼治數證者、自謂無不中也、亦唯暗投僥行也已、學者思諸、

(醫道二千年眼目編 十三 上)萬病一毒

東洞翁曰、萬病唯一毒、コレ二千年來、古今醫人ノ言ハザル所ニシテ、數千ノ醫書アリトイヘドモ、未ダ嘗テ載セザル所ノ言ナリ、然レドモソノ旨趣暗ニコレアリ、タヾ古今醫人ノコレヲ了知セザル所ナリ、コレソノ眼目、邪說ノ爲メニ塗リ塞ガレテ、纍々タルヲ以テノ故ナリ、夫萬病ノ生ズル、コレヲ唯一毒ノナス所ト云フハ、東洞翁始メテコレヲ據ムトイヘドモ、越人仲景モ、亦此意ナキニアラズ、然レドモコレヲ古今醫人ノ言ニ裁斷シテ、コレヲ唯一毒ト云フモノハ、天下古今ノマダ嘗テコレヲ聞カザル所ナリ、我ガ東洞翁、獨仲景沒後二千年ノ下ニ出デ、、仲景ノ方法ヲ執

ルコト、純一ニシテ無雜ナリ、然後コレヲ越人仲景ノ言ト術トニ徵シテ、萬病ハ唯一毒ト云ヘリ、於是天下ノ醫人ノミナラズ、萬人コレヲ疑ハザルモノナシ、コレ二千年來、沼々タル天下古今、陰陽家、仙家ノ醫ニ、惑ハサレタルヲ以テ、爰居ノ鐘鼓ニ驚ガ如シ、況ヤソレコレヲ分別差別スルモノアランヤ、皆其範圍ノ中ニアレバナリ、誰レカコレヲ分辨差別スルコトヲ得ンヤ、コレ今ノ醫流トナル所以ナリ、

〔醫道二千年眼目編十三下〕皇和、萬事ミナ中華ノ道ヲ奉ズルノ邦ナリ、彼聘使ノ往來スル、晉代六朝ヨリ多ク相ヒ通ズ、李唐ニ至ッテ聘使數々往來スルコトアリ、留學ノ者モ、亦マヽコレアリ、ココヲ以テ、先ヅ唐醫孫思邈ガ千金方ヲ傳ヘ、本草ハ重修本草ヲ先トス、太素、素問、並ニコレヲ醫院ノ學ニ立テヽ、醫經ト稱シ、大醫博士、典藥寮、施藥院ノ設アリ、後又趙宋朱明ノ方書ヲ傳ヘ醫生或ハ西渡シテ、コレヲ學ブ、遂ニ今ノ醫流トナレリ、豈ニソレ萬病一毒ノ方法業術、毫毛モコレヲ知ルモノアランヤ、中華斯業湮滅シテヨリ後、我ガ皇和ニ東渡スル所ノ醫方、ミナ今ノ醫流ノ外、別ニソノ派アルコトヲ聞カズ、我ガ邦別ニ醫方アルコトナシ、異方ノ醫術行ナハレテヨリ、今ニ至ルマデ千有餘年ノ間ダ、士君子ヨリ醫人ニ至ルマデ、毫毛モ醫術ノ分岐シタルコトヲ知ルモノアルコトナシ、況ヤ古疾醫ノ道アルコトヲ知ランヤ、近年豪傑ノ士、後藤先生父子、香川、山脇數氏起ルコトアレドモ、決シテ古疾醫ノ道ノ越人仲景ノ方法ニ存スルコトアルコトヲ知ラズ、唯云古方ト、自ラ稱シテ古方家ト云、

〔漫遊雜記上〕山東洋之於三承氣、奥村氏之於吐方、皆數十年枯髯嘔血之所得、今世粗工俗手、遽然試之、傷人者不尠矣、遂歸咎於古醫道、甚矣哉、其害道也、

〔漫遊雜記上〕長門村夫、家世傳小冊子、余〇永富鳳介偶宿其家、閲之、其書中有苦瓠穰吐食傷之方、余試之數人、悉有効、於是乎、無瓜蔕則代用之、爾後讀千金方、有苦瓠穰圓之方、可知我邦中古、講漢唐之古方、

書、其流風遺習、猶存於邊鄙也、

〔醫事漫鈔 三編〕東洞派醫行于西州、

東洞吉益翁之爲醫也、譏解傷寒論、以爲我的東西、不問病因何如、而但一味攻擊蕩滌、巴豆、甘遂、大黃、礦石、視爲平々之藥、以謂古之醫術如此而已、世之一知半解、不辨鍮錫之徒、從風而靡、輕弄快藥、以天人性命、曾不少恠也、以爲古之醫術如此而已、然下藥官以爲禁、故東洞派不行于關以東、而但行于西州、西州之人、專好攻擊、與東洞派意見相同、故東洞派但行于西州耳、余謂、東洞派乃矢醫、而西州之人卽溫補斯須也、徐東莊醫貫評云、熱旣入裏、離表已遠、驅出爲難、故就大便通泄其熱、從其近也、得汗而經熱從汗解、非汗爲害、而欲祛之也、便矢而府熱從矢出、非矢爲難而欲攻之也、醫不察此、專與糟粕爲敵、自始至終、但知消炮瀉下之法、求一便矢以畢其能事、天人生命、如是者曰矢醫、（中略）江戸鳴谷鈴木素行見知者、醫海蠡測之一、

〔瘍治茶談續編 附言〕家流ノ師傳ニ據テ、仲景ノ書ヲ讀ミテ、古方流ト稱スル者モ、竊ニ東垣丹溪ノ法ヲ處シ、素難ヲ廢トシテ後世家ト呼ブ者モ、却而手强ク攻擊スルコト、全ク道三翁、丹水翁、見宜氏友松子ヲハジメ、今代ニイタルマデ、醫家ノ俊哲續テ出、醫學ヲ一洗セシヨリ、治療ノ工者、窮谷無人ノ地ニイタリ、已ニ禽獸ニ及ブマデ、橫死ヲ救イ、天然ヲ終フコト有難キ事ナリ、

〔元史 二百三 方技列傳〕李杲、字明之、鎭人也、世以貲雄鄕里、杲幼歲好醫藥、時易人張元素以醫名燕趙間、杲捐千金從之學、不數年、盡傳其業、家旣富厚、無事於技、操有餘以自重、人不敢以醫名之、大夫士或病、其資性高謇、少所降屈、非危急之疾、不敢謁也、其學於傷寒癰疽眼目病爲尤長、北京人王善甫爲京兆酒官、病小便不利、目睛凸出、腹脹如鼓、膝以上堅硬欲裂、飮食且不下、甘淡滲泄之藥皆不效、杲謂衆醫曰、疾深矣、內經有之、膀胱者津液之府、必氣化乃出焉、今用滲泄之劑、而病益甚者、是氣不化也、啓玄子云、無陽者陰無以生、無陰者陽無以化、甘淡滲泄、皆陽藥、獨陽無陰、其欲化得乎、明日以羣陰

之劑投、不再服而愈、西臺掾蕭君瑞、二月中病、傷寒發熱、醫以白虎湯投之、病者面黑如墨、本證不復見、脈沈細、小便不禁、杲初不知用何藥、及診之曰、此立夏前誤用白虎湯之過、白虎湯大寒、非行經之藥、止能寒腑藏、不善用之、則傷寒本病隱曲於經絡之間、或更以大熱之藥救之、以苦陰邪、則他證必起、非所以救白虎也、有溫藥之升陽行經者、吾用之、有難者曰、白虎大寒、非大熱何以救、君之治奈何、杲曰、病隱於經絡間、陽不升、則經不行、經行而本證見矣、本證又何難焉、果如其言而愈、魏邦彥之妻、目翳暴生、從下而上、其色綠、腫痛不可忍、杲云、翳從下而上、病從陽明來也、綠非五色之正、殆肺與腎合而爲病邪、乃瀉肺腎之邪、而以入陽明之藥爲之使、既効矣、而他日病復作者三、其所從來之經與腎色各異、乃曰、諸脈皆屬於目、脈病則目從之、此必經絡不調、經不調、則目病未已也、問之果然、因如所論而治之、疾遂不作、馮叔獻之姪櫟、年十五六、病傷寒、目赤而頓渴、脈七八至、醫欲以承氣湯下之、已煮藥、而杲適從外來、馮告之故、杲切脈大駭曰、幾殺此兒、內經有言、在脈諸數爲熱、諸遲爲寒、今脈八九至、是熱極也、而會要大論云、病有脈從而病反者何也、脈之而從、按之不鼓、諸陽皆然、此傳而爲陰證矣、令持薑附來、吾當以熱因寒用法處之、藥未就、而病者爪甲變、頓服者八兩、汗尋出而愈、陝帥郭巨濟病偏枯、二指著足底不能伸、杲以長針刺骫中、深至骨而不知痛、出血一二升、其色如墨、又且謬刺之、如此者六七、服藥三月、病良已、裴擇之妻病寒熱、月事不至者數年、已喘嗽矣、醫者率以蛤蚧桂附之藥投之、杲曰不然、夫病陰爲陽所搏、溫劑太過、故無益而反害、投以寒血之藥、則經行矣、已而果然、杲之設施多類此、當時之人、皆以神醫目之、所著書今多傳於世云、

〔古今醫統〕歷世聖賢名醫姓氏　元

李杲　字明之、號東垣。(中略)爲醫家之宗主、

朱震亨　字彥脩、號丹溪。浙之義烏人、自幼好學、日記千言、業擧子道、入華山、拜許文懿公、一日公謂、以己疾久之、非精于醫者弗能起、子多敏穎、其游藝于醫而濟人乎、於是、丹溪復致力於醫方、既而悟曰、執古方以療今病、其勢雖全、必也參之以素難、活潑權衡、乃能濟世、遂出遊求師、渡浙走吳、歷南除建業、皆無所遇、及還武林、聞太無先生、往拜之、數謁弗得接、求見愈篤、先生始接之、以劉張李三家之書、爲之敷揚其旨、彥脩授敎、而醫益神、名益著、四方求療者輒輳于道、按證施方、錄爲醫案可考、又著格致餘論、發其秘云、

〔本朝醫談〕永祿以來出來初事の記に云、信長公御代丹溪流醫師翠竹院道三、此流を傳へて、あまねくひろめしなり、然ば永祿以前には、斯邦丹溪流の沙汰はなかりしなり、一溪師、初名導能、相國寺僧也、讀書の爲に、足利學校に來り、醫道に見て、醫を學び、遂に傳を窮て、京に歸す、

〔道三切紙鈔中〕七、當他兩例、ツヽミ紙ニ、當他之兩例トアリ當。流ト他。流トノ醫道ノ心得ノカハリヲ申ワケンタメ也、當流他流ノ替リヲ申サバ、無際限事ナレドモ、先第一ノ替ニハ、他流ニハ用古方也、當流ニハ不然也、所以然方ト曰フコトハ、漢ノ張中景ガ開山也、然レドモソレモ傷寒論計ニコソアレ、オホク方ハナキゾ、其後多クハ宋朝ニ方ガ出來シ、盛ニ行ハルト也、當流不用方故ヘ、方モ無キ其已前モ病ハアリタガ、其病ハ、古方ガナキト曰ヒテ、療治セザランカ也、故ニ其已前ヲ辨ジテ、當流ハ不拘方ニ也、是ガキラリト當他ノカハリ也、正傳凡集錄、借賢成方、重爲後學設繩墨耳、學者不可因執方法、以售今病、故又以丹溪活套、備錄于各條之後、欲使後學熱中之有權耳、此當他兩例トアルトモ、方ノコトデハナシ、此一通ハ、當流ノ建立也、他流ト曰テ、ドレヲ指テ、アイチニ中スコトデハナシ、他流ノ人來テ、當流ニ傳ヘモセズ、出處證據ハナキ也、然レドモ聞ツタヘタ分ヲ書載スル也、今時世上ニ中ヲ他流ト指也、

〔道老物語入〕永祿以來出來初之事

信長公御代之内〇中略

一丹溪流　醫師翠竹院道三、此流を關東に至て傳て、普く廣めし也、

〔日本醫道沿革考〕後陽成帝ノ朝ニ至リ、曲直瀬正慶トイフ者出テ、金ノ李東垣ノ方法、及ビ元ノ朱丹溪ノ方法ヲ長單遵奉シ、其名聲朝野ニ振ヒ、技術一世ヲ風靡ス、海内奉ジテ以テ師表トス、是ニ至ア、和氣丹波以下五典藥諸家ノ主張スル所ノ和劑局方、醫方大成等ノ說、遂ニ衰廢シ、金元ノ醫學盛ニ行ハル、〇中略

後西院天皇明暦萬治ノ間ニ至リ、林市之進、饗庭東庵等出テ、金ノ劉完素唱フル所ノ五運六氣ノ說ヲ奉ジ、又本朝古〓ノ醫式ニ本キ、素問、靈樞、難經等ヲ講明ス、東庵ノ門人味岡三伯ト云フ者アリ、亦師說ヲ奉ジ、盛ニ世ニ行ハル、三伯ノ門人井原道閱、淺井周伯、小川朔庵、岡本一抱、各々劉氏ノ學ヲ主張ス、是ニ於テ運氣五行ノ說、藏府經絡配當ノ論起ル、

〔和劑局方發揮諺解　叙〕夫形聲色脈者醫之法也、臨機應變者、醫之要也、丹溪以闢局方之學、爲專功、而有發揮之作矣、世醫蹈偏門者、於是乎改焉、實醫門百世之宗師也、學醫者不可不讀丹溪之書、然微旨奧義不易通曉矣、粵岡本一抱子先生、秉訓詁之筆、著述局方發揮諺解六卷、○中略先生之功不亦偉哉、

寶永五禩龍集戊子六月　　攝江醫生　白井元隆養眞子謹識

〔和劑局方發揮諺解　一〕此書ノ本ハ、宋朝ニ和劑局方ト云十卷ノ書アリテ、其書ニ謬誤ノ多アルニ因テ、元朱丹溪先生コノ發揮ヲ撰テ、彼局方ノ謬ヲ論辨スル者也、其和劑局方ト云書ハ、宋朝代々ノ帝王ガ、醫道ヲ重ゼリ、凡人民ノ退病救死、人生ヲ安ノ地ニ置コトハ、醫道ニ越ルコト無ヲ以ナリ、故ニ宋ノ開寶以來、諸醫家ノ方書ヲ校正重定シ、且京師ニ大醫局熟藥所ヲ設テ、衆民ノ疾苦ヲ救リ、局トハ官局トテ、官人ノ聚處ヲ云也、假令、輦車ノ官人聚處ヲ尙輦局ト云、御藥ノ官人聚所ヲ尙藥局ト云ノ類也、大醫局ト云ハ、古今有効名方ヲ調合シ置テ、其價ヲ定テ、萬民ニ施テ、貧苦ノ者ノ病疾ヲ救玉フ所ノ官局也、宋ノ神宗第十三ノ王子徽宗帝、就中醫道ヲ重ジテ、崇寧年中ニ、都ニ大醫局ヲ增テ、七ケ所ニ立テ、彌施藥ヲ廣メ、民病ヲ救リ、又收買藥材所（或辨見藥材所トモ謂ス）ヲ設テ、諸國ヨリ所出ノ藥種ノ眞僞ヲ辨見セリ、此ニ從テ、諸國ニモ皆藥局ヲ立テ、民病ヲ救コトヲ致セリ、其官局ニ於所施藥ノ次第ハ、前ニ如辨、種々ノ名方ヲ書集テ、其湯丸散ヲ常ニ調合シ置テ、若シ病者來テ藥ヲ求請バ、彼藥局ノ官人等、診脈聲色ノ候モ委セズ、只病者所語ノ病證ヲ聞テ、右ノ藥局ニ書集タル方書ニ引合テ、其方條ノ辭ニ合タル藥ヲ與賣也、今本朝ノ藥

西洋家

唐ニ八味丸、六味丸、敗毒散等ヲ合置テ、賣類ノ如シ、

〔先民傳 下 醫術〕杉本忠惠、蕃醫家流也、始就蕃人傳妙方、治療多効、爲當時重、寬文之初應徵拜侍醫、

〔皇國名醫傳後編 下〕桂川甫周

桂川國瑞、字公鑑、通稱甫周、（號月池）曾祖以外科仕幕府、（中略）洋學之興、國瑞尤有力焉、然至醫術則唯用之治瘍耳、門人有吉田某、專據其法爲內治、國瑞禁之曰、西洋萬里、風土既殊、人身氣體又自不同、治法藥物亦必與邦人異宜、不當以彼槪此、且本邦內治、方術既備、何必資諸西洋、徒標新異以駭俗觀聽、無爲也、某不從、國瑞逐剜其弟子籍、

〔皇國醫事沿革小史 後編 第六期〕桃園天皇御宇寶曆年中、卽紀元二千四百二十年代ヨリ、明治維新ノ際、卽紀元二千五百二十七年ニ至ル、（中略）

織田信長耶蘇敎ノ如何ナル宗敎ナルヤヲ知ラント欲シ、其敎僧、ウルガン、バテレン等ヲ京都ニ延キ、爲ニ四條坊門ニ一寺ヲ建テ、法敎ヲ講ゼシム、之ヲ南蠻寺ト號ス、（中略）是時ニ永祿十二年ナリトス、（中略）爾來、敎僧相踵デ來航シ、盛ニ法ヲ說キ、乃チ衆庶ヲ勸誘シテ、我門徒トナサントト謀リ、先ヅ醫術ヲ以テ、專ラ貧民ノ疾病ヲ施療シ、此恩ヲ賣リテ、人ヲ懷ケント欲シ、更ニ本國ヨリ數徒ノ醫ヲ善クスル者、ケリコリ、ヤリイス等ヲ招キ、又信長ニ請テ、地ヲ近江ノ伊吹山ニトシ方五十町ノ藥園ヲ拓キテ、本國ヨリ三千種ノ藥草ヲ移植シ、（今ノ伊吹艾ハ其遺種ト云）南蠻寺中ニ病室ヲ設ケ、講法ノ旁ラ、貧民施療ニ從事シ、財ヲ與ヘ、金ヲ投ジ、恩惠ノ術、百方至ラザルハナシ、於是信服敎ヲ奉ズル者無慮數萬人、其徒弟梅庵、告須蒙、善岡等、敎僧ノ傳ヲ受ケ、講法ト醫術トヲ以テ、大ニ宗徒ノ歸依敎法ノ弘通ヲ謀レリ、之レ實ニ西洋醫術傳來ノ始ナリ、

○按ズルニ、此事南蠻寺興廢記ニ在リ、而シテ同書ハ外科ノ條下ニ引ケリ、

〔淇園文集 序三〕蘭療方序

蓋距今四五十年前、世稱紅毛醫方者、只有其外科而已、及其學益開、世又傳其內科不一而足、而今世醫家者流、乃至以不識紅毛內科爲恥、此雖小技、要亦世風之一變也、然而紅毛內科、其術與世舊所有別開一道、而其論疾說由、殆類河漢、雖有一二可通、而其大本異指矣、則其言非以一端之可了也、其藥方十九我土所無、雖有書載其名、而其物實遠矣、則其物與北斗不可挹何異、廣川生自少業醫、求博聞見、嘗往瓊浦、適獲紅毛內科一書、大半施譯者、因更音請旁考補緝是務、久之譯完其所闕、棄議其可換用、因改命其書曰蘭療方、生以其嘗學予、請題一言、予固不識醫、已然思以爲、唯學貴聞見之博、則紅毛醫方安知其不可爲他山之石哉、則其內科之術、關乎今者醫家之幸也、○下略

〔醫範提綱凡言〕一槐園先生〇宇田川內科撰要ヲ世ニ公行シ、首メテ和蘭ノ內科ヲ唱フ、其他和蘭草木略、蘭畝俶載、蘭譯弁髦、西洋醫言等ノ書ヲ編述シ、遺稿ニ屬ス、榛齋先生夙ニ箕裘ヲ繼ギ、大ニ家風ヲ振フ、凡ソ內景ノ究理ヨリ、內科治法、局方製劑、本草藥品等ニ至ルマデ、數十部ノ書ヲ譯定シ、居恒同志ト質驗シ、療法ヲ折衷ス、先生每ニ門生ニ語テ曰ク、疾病ハ變ナリ、無病ハ常ナリ、遠西ノ醫ハ先ヅ內景ヲ明ラメ、天禀具有セル形器ノ官能ト、衆液ノ流動ト齊シク妙合スルニ由テ、健全無事ニシテ、性命ヲ保續スル所以ノ常ヲ知リ、此ヨリ推テ、各官能ヲ廢シ、流動ヲ誤リ、常機ヲ失テ、病患ヲ生ズル所以ノ變ヲ究ム、故ニ常ニ本キ、變ヲ察シテ、百病ノ原由ヲ知リ、病原明カニシテ、治法此ヨリ出ヅ、然レバ內景ハ療術ノ規矩方藥ノ準繩ニシテ、法ヲ建ルモ、論ヲ設ルモ、コレヨリ起ラズト云フコトナシ、○中略

文化二年二月既望　　門人　諏訪俊謹記

〔皇國醫事沿革小史後編第六期〕宇田川玄隨名ハ晉、字ハ明綱、槐園ト號ス、ハ江戶ノ人、津山藩醫ナリ、初メ玄澤ニ就テ蘭書ヲ學ビ、後良澤〇前野ノ門ニ入ル、性銳敏、能ク事ニ耐ユルヲ以テ、其業大ニ進ム、玄隨曾テ我邦ニ於テ、西洋ノ醫術ヲ唱フル者、大率外科者流ニ過ザルヲ慨ヒ、內科撰要十八卷ヲ著ハス、

津山侯特ニ其剞劂費ヲ賜ヒ、之ヲ世ニ公ニス、是ニ至テ、世人西洋亦タ内科ノ術アルコトヲ知ル、

○中略

先是文政六年(紀元二千四百八十三年)八月、獨逸國ノ人シイボルト、和蘭醫官トナリテ長崎ニ來ル、醫術頗ル精妙ト稱ス、當時笈ヲ負ヒ西游スル者、皆就キテ其學術ヲ受ク、文政十二年、(紀元二千四百八十九年)シイボルト、日本地圖刀劍等ノ雜品ヲ密ニ購贖シテ、本國ニ輸ルノ故ヲ以テ、和蘭ニ放歸シ、再來ヲ禁ゼリ、(後文久ノ頃再ビ横濱ニ來タレリ)然レドモ蘭醫陸續來航シテ、其跡ヲ絶タザルヲ以テ、爾來醫術ヲ學ブ者ハ、必ズ長崎ニ遊ンデ蘭人ノ傳ヲ受ク、

〔皇國醫事沿革小史(後編第六期)〕弘化嘉永ノ際(紀元二千五百十年代)ニ至リテ、和蘭學益々隆盛ノ域ニ入リ、加フルニ英國、佛國等ノ諸學漸次開闢ノ途ニ就ケリ、○中略洋醫ノ學精ニシテ術巧ナルヲ喜ビ、之ヲ信ズルモノ少ナカラズ、漸盛ノ勢アリ、妒媒之ヲ嫉ミ、官醫多紀安叔(樂眞院法印)辻元崧菴(爲春院法印)等ト相計リ、時ノ執政阿部正弘(伊勢守)ニ强請シテ、左ノ禁令ヲ布告シ、幕府ノ醫官ヲシテ、西洋醫術ヲ施ス事ヲ禁ゼシメタリ、時ニ嘉永二年(紀元二千五百八年)ナリトス、

一近來蘭學醫師追々相增、世上にても信用いたし候もの多有之哉に相聞候、右者風土も違候事に付、御醫師中者、蘭方相用候儀御制禁被仰出候間、得其意堅く可被相守候、

但し外科眼科等、外治相用候分は、蘭方參用致候ても不苦候、

己酉三月十五日　阿部伊勢守

一タビ此禁令ノ世ニ出ルヤ、諸藩亦之ニ倣フテ、和蘭内治ノ方ヲ禁ゼシヲ以テ、漢醫跋扈シ洋醫家特リ其箝制ヲ蒙ル、加之ナラズ、從來醫家著譯書ノ出版ハ、總テ天文方ノ許可ヲ受クル制ナリシモ、此年ニ至リ、更ニ醫學館(多紀氏ノ創設ニ係ル、漢醫講習所ナリ、後ク官ノ編ニ出ス、)ノ許ヲ受ケシム、是ニ於テ、洋醫家ノ弊ヲ受クルヤ益々大ナリ、嘉永三年(紀元二千五百九年)二月、林洞海蘭書ニ譯スル所ノワートル藥性

論ノ出版ヲ、醫學館ニ請フテ許サレズ、安政元年、（紀元二千五百十四年）仙臺ノ人大槻俊齋、銃創鎖言ヲ著シ、亦剞劂ノ允可ヲ得ズ、海防方江川太郎左衞門、今日ニ在テ其急務ナルヲ以テ、爲ニ周旋、官ノ許可ヲ豎テ刊行セリ、既ニ銃創鎖言ヲ上木セシニ因リ、洞海始テ官許ヲ得テ、藥性論ヲ世ニ公ニス、時ニ安政三年（紀元二千五百十六年）ナリ、當時蘭醫ノ禁、特ニ外科ヲ許スノ故ヲ以テ、蘭醫漸ク頭角ヲ出スヲ得タリ、○中畧

安政四年（紀元二千五百十七年）内旨ヲ醫官松本良順（後順ト改ム、佐藤泰然ノ長子ナリ、出テ、松本良甫ノ家ヲ嗣グ、）ニ傳ヘ、長崎ニ遣リテ醫學ヲ傳習セシム、同五年將軍家祥病アリ、衆醫治効ナク、病益々劇シ、因テ正篤等ノ議ヲ以テ、伊藤玄朴、竹内玄同ヲ擧テ侍醫トナシ、初テ西洋醫藥ヲ進メシム、是ヲ德川家西洋内科醫法ヲ採用セル始トス、

〔嘉永明治年間錄七〕安政五年七月三日、戸塚靜海、伊東玄朴等、奥醫師ヲ命ゼラル、松平薩摩守醫師戸塚靜海、松平肥前守醫師伊東玄朴、松平三河守醫師遠田澄菴、松平駿河守醫師青木春岱、　右西洋醫師、今般奥醫師被＿仰付＿、御宛行二百俵三人扶持被＿下＿之、公方樣御不例に依てなりと云、

〔德川禁令考十七官醫長〕安政五戊午年七月六日　和蘭醫師兼學ノ儀ニ付達

和蘭醫術之儀、先年被＿仰出＿之趣も有＿之候得共、當時席々萬國之所長を御採用被＿遊候折柄ニ付、御醫師中も、有志之者は、和蘭醫術兼學いたし候共不＿苦候、

七月

〔皇國醫事沿革小史後編第六期〕先＿是（○天保弘化）京師ニ小森鶴齋（和氣氏名ハ義啓、桃塢ト號ス、縫殿助兼信濃守タリ、）アリ、鶴齋ノ學ハ稻村三伯ニ出テ、和蘭ノ醫學ニ精シク、最モ内科ノ術ニ巧妙ナリ、屢々皇族槐門ノ召ニ應ズ、毎ニ奇効アリ、依テ正六位下ニ叙セラル、蓋シ貴族ノ洋方醫ヲ召スハ、實ニ鶴齋ヨリ始ル、

〔近世名醫傳二〕小森桃塢〈中略〉
天保壬寅春，皇女欽宮違和，有旨召桃塢診，其非典醫而召診，蓋異數云，明年敍從五位下，叙信濃守，是歲夏病卒，齡六十二，醫官錦小路丹波賴易歎曰，自傳蘭方來，其榮未有如先生者，蓋以洋方醫出入殿廷縉紳間，實以桃塢爲始，及文久元年，皇妹和宮降嫁將軍家茂，廷議特命洋方醫某扈從，同道之士相傳爲榮，皆曰，此亦桃塢開先之力也，其見追稱如此，

〔言志晩錄〕別存〈謹快因公遺言遺事及余少壯隨筆〉

公每餘暇，讀醫書，通達醫理，視下尋常醫人遠不及，獨與多紀桂山，杉本樗園懇，但不好蘭方，及病篤，爲親戚所強，招一蘭醫診視，竟不嘗其藥，不過慰族人耳，

〔日本敎育史資料四〈福井藩〉〕安政三丙辰年正月廿三日，左之通月番御家老山縣三郎兵衞書付相渡之，

御側御用人江

醫學之儀，從來漢法を以治療致來候得共，近來西洋醫學追々相開，必用有益之儀不少相見候間，以來御醫師之儀，漢蘭兼學致候樣被仰出候，依之當春御歸國之節，坪井信良被召連等ニ候間，一同兼學之儀ハ，同人江相談，厚致修行候樣被仰出候，但町醫師之儀も，本文同樣相心得，致修行候樣可被申渡候事，

〔日本敎育史資料六〈山口藩〉〕安政四年巳五月十五日達

先年以來，醫學御引立ノ御主意厚ク，好生館新規ニ御造建被仰付，御仕法被相立，令勤學候處，西洋學心掛之面々モ不少候處，近來ハ諸國トモ一統洋學盛ニ被相行候付テハ，漢蘭トモ令研究候ハバ，治療方別テ功驗モ可有之トノ事ニ候條，御醫師中，思召ノ旨ヲ奉ジ，洋學ヲ相學ビ，御主意ニ相協候樣心掛肝要ノ事ニ候，此段內意相達候事，　右ノ通，御醫師中ヘ沙汰被仰付候事，

折衷家

〔皇國名醫傳後編下〕多紀桂山

多紀元簡、字廉夫、通稱安長、（號桂山、又櫟窗、）元德子、受父學、記性絕倫、一覽終身不忘、（○中略）所著諸注、條疏衆說、斟酌精義、其錯辭隱義、參伍校照、可通通之、疑則闕之、深得箋釋之旨、先是、諸家服五行經絡之說、各有所論著、指歸不一、互相詆毀、大抵臆造之說勝、而訂詁之義微、元簡之書出、海內講醫籍者、識所率由、而前世蟲梗武斷之風始除矣、

〔皇國醫事沿革小史前編第五期〕本期ノ初ニ當テ、曲直瀨正慶李朱ヲ奉ジ、宋後ノ醫方ヲ取リ、五行運氣ヲ唱ヘ、溫補ヲ主トシタルニ、名護屋玄醫、後藤達ノ徒、復古ヲ唱ヘテ、專ラ古方ヲ主張シ、吉益爲則亦タ一毒說ヲ唱テ、其弊ヲ挽ントセシガ、（○中略）天明寬政ノ交（紀元二千四百五十年代）京師ニ福井韞、和田璞アリ、江都ニ多紀元德、元簡ノ徒アリテ、古今ヲ折衷シ、補瀉溫凉偏執スル所ナク、務テ從前ノ弊害ヲ一洗セントス、玆ニ至テ、此期中ノ醫道三變セリ、

〔近世名醫傳一〕桂川甫周（○中略）（下甫筑）　孫甫賢

甫賢、名國寧、字清遠、號桂嶼、甫筑長子、幼聰敏、祖父甫周愛之、常期成立、初從葛西因是受學、比成童、自誦讀講說、至書畫、皆如老成、常與大槻、宇田川、坪井諸名士、研鑽蘭學、蔚然與家學及甫筑歿、嗣家、尋擢侍醫、天保二年叙法眼、無幾兼外科教諭、嘗語人曰、醫術不必漢、不必洋、須就漢洋中擇取良方、以收實効、世之漢方家固執舊法、蘭方家競衒新術、互相軋轢、共不能臻精妙之域、洵爲通患也、人以爲至言、甫賢性喜文雅、酷有祖父之風、弘化元年歿、年四十六、

〔皇國醫事沿革小史後編第六期〕天保弘化ノ際、（紀元二千五百十年代）京師ニ、新宮涼亭、小石元瑞アリ、共ニ近畿醫家ノ泰斗タリ、（○中略）元瑞、父（○元俊、永富鳳介門人、）ノ志ヲ繼ギ、專ラ此學ニ精ヲ盡シ、別ニ一派ヲ爲シ、理ハ和蘭ニ考フルモ、方ハ漢蘭ヲ雜ヘ取リ、少シモ偏執スル所ナク、鍼灸ノ末技ニ至ルマデ、其適症ヲ考テ試用セリ、後チ一家言ヲ建テ、究理堂備用方府ヲ著ハス、其方府記聞ハ門人ノ輯錄ス

ル所ニ係ル、爾後其流派四方ニ傳ハリ、當時ノ漢醫者流其移リ易キヲ喜ビ、之ニ倣フ者多シ、之ヲ漢蘭折衷家ト稱ス、元瑞嘉永二年紀元二千五百九年六十六歲ニシテ歿ス、西洋內科術ヲ闢クノ功、元瑞其多キニ居ル、

〔政事要略九十五至要雜事〕又○醫疾令云、醫生既讀諸經、乃分業敎習、○略註學廿謂依職員令、醫生卌人、卽爲廿分二廿四人學體療、六人學創腫、六人學少小、四人學耳口齒也、以十二人學體療、謂、創體耳目等各別有生、卽除此外身體諸病皆悉主治、故總云體療也、三人學創腫、謂、創與腫字相通也、三人學少小、謂、六歲以上爲小、十八以上爲少也、言專治小少、異成人、故別云少小、二人學耳目口齒、各專其業、

〔唐六典十四太常寺〕大醫署

醫博士掌以醫術敎授諸生、習本草甲乙脈經、分而爲業、一曰體療、二曰瘡腫、三曰少小、四曰耳目口齒、五曰角法、

諸醫生既讀諸經、乃分業敎習、率二十人、以十一人學體療、三人學瘡腫、三人學少小、二人學耳目口齒、一人學角法、體療者七年成、少小及瘡腫五年、耳目口齒之疾幷角法二年成、

〔史記百五扁鵲傳〕扁鵲名聞天下、過邯鄲、聞貴婦人、卽爲帶下醫、過雒陽、聞周人愛老人、卽爲耳目痺醫、來入咸陽、聞秦人愛小兒、卽爲小兒醫、隨俗爲變、秦太醫令李醯自知伎不如扁鵲也、使人刺殺之、至今天下言脈者、由扁鵲也、

〔政事要略九十五至要雜事〕又○醫疾令云、醫針生、按摩呪禁生、專令習業、○下略

〔醫賸上〕醫科

醫之立科、歷代不同、周四科、疾醫、瘍醫、食醫、獸醫、見周禮、唐七科、體療、少小、耳目、口齒、角法、按摩、呪禁、見六典、宋設三科敎之、曰方脈科、針科、瘍科、見選擧志、又太醫局有丞、有敎授、有九科、見職官志、而九科無致、金十科、亦無致矣、元十三科、大方脈雜醫科、小方脈科、風科、產科、兼婦人雜病科、眼科、口齒兼咽喉科、正骨兼金鏃科、瘡腫科、鍼灸科、祝由科、見輟耕錄、案、得効方同、唯除祝由科、輟耕錄云、出聖濟總錄、今聖濟總錄無致可疑、續文獻通考、無風科、

婦人產科、爲一科、有傷寒科、按摩科、事物紺珠、古十三科、更有獸醫、又名牛醫、明十三科、大方脈科、傷寒科、小方脈科、婦人科、口齒科、咽喉科、外科、正骨科、痘疹科、眼科、針灸科、出明會典、按、鄭曉吾學編、十三科、曰大方脈、曰小方脈、曰婦人、曰瘡瘍、曰針灸、曰眼、曰口齒、曰接骨、曰傷寒、曰咽喉、曰金鏃、曰按摩、曰祝由、按摩以消息導引之法、除人八疾、祝由以呪禁祓除邪魅之爲厲者、二科今無傳、攷會典、凡十一科、乃除按摩祝由二科也、古今醫統、古十四科、更有脾胃科、李樓小仙雜錄、與吾學編同、無按摩科、以口齒咽喉爲一科、有風科養生科、淸十一科、曰大方脈、小方脈、傷寒科、婦人科、瘡瘍科鍼灸科、眼科、口齒科、咽喉科、正骨科、痘疹科、今痘疹歸小方脈、咽喉口齒共爲一科、現設九科、見淸會典、王子接十三科、古方選註、傷寒科、內科、女科、外科、幼科、痘疹科、眼科、咽喉科、折傷科、金鏃科、祝由科、符禁科、此十二科、欠針灸科、王棠知新錄、無金鏃、按摩、祝由、有痘科、痧科、分針與灸、爲二科、未知何據也、

〔雍州府志 六土產〕齒牙藥〇中略凡中華醫通治諸病、本朝人材力不足、故治大人病者稱本道、治婦人病者號血道醫、治小兒者稱小兒醫者、治齒牙者謂齒藥師、眼科號目醫者、治癰瘍人專稱外科、

〔京都御役所向大概覺書 六〕醫師儒者之事、附鷹峰御藥園幷御藥種獻上之事、〇中略

町醫師

一小川通リ一條下ル町
　小兒醫師　柳川靖泉〇中略

一禁裏より貳拾人扶持　御幸町二條上ル町
　婦人醫師　山科廣安〇中略

一室町柳之圖子
　針立　安藝大膳亮〇中略

一禁裏より三拾石　上京狩野圖子
　外科　藤木駿河守〇中略

一堺町二條上ル町
　口中醫師　山本恕軒〇中略

一小川象康町角　親康喜安○中略

目醫師

一堀川御池下ル町　堺海乘坊○中略

按摩

一堺町押小路上ル町　喜多村理且○下略

〔憲教類典四ノ十圖書館〕寶曆三癸酉年二月十二日

口中科、外科、針醫等之内、本道相兼候者も有之面は、代々家業之儀精出候樣可相心得候、

右之趣、寄合醫師之面々江可被相達候、

〔德川禁令考十七官醫員〕寛政八丙辰年十一月四日

家傳諸科之外猥ニ轉科難相成旨達　御目付江

御醫師中、各專門ニ致候諸科之儀、銘々其家之起創にて、自分として轉科者不相成儀勿論之儀ニ候、尤醫術相互ニ、諸科之儀轉々心懸無之而者難相成道理も可有之候得共、止處其家之專門を以て、御奉公をも仕、世上療治も廣致候儀、則あまねき御手當に候間、諸科之儀轉々心懸候迚、他科のみを專に致、家之科者いつとなく衰候樣成行候而者、御趣意にも背き候事ニ候、近來何も出精之趣ニ付而者、右之處彌以厚く相心得可申候、

右之通、御醫師中江可被達候、奥醫師江者達相濟候間、可被得其意候、

十一月

〔八水隨筆〕醫師に、内科外科あり、科はしなをわかつて、内外を別にして、療治するなり、しかれども内外元ひとつなり、互にしらずんばあるべからず、

〔政事要略九十五至要雜事〕又○醫疾令云、醫生既讀二諸經一、乃分業教習、○中略以二十二人一學二體療一、
○按ズルニ、醫疾令ニ體療トアルハ、卽チ所レ謂內科ニシテ、創腫、少小、耳目口齒以外ノ身體諸病ヲ治スルヲ謂フナリ、

〔倭訓栞前編保二十八〕ほんだう　朝野群載に、本道人以二本道一成レ業など見えたるは、本算道之官など見えたる如く、四道の類それ〳〵の本職をいへり、今もはら醫流に、痉科、女科、外科に對し、內科を本道といふは、薩戒記に、和氣丹波之一流、謂二之本道一と見え、康富記にも、本道の部に入らるゝといふ事も見えたり、

〔奇魂一〕醫藥名義幷醫風變化附本道辨
本道と云は、公にて立おかるゝ本醫の外に、權カリに用らるゝ醫を權道と云に並べ云時の名なるを、世に渾リツ身チを治る醫にかけて云は誤也、そを又本科、本治、本療抔云は愈非也、されば此の書は更也、漢籍に十三科抔立たれど、本道と云科なし、いはゆる本道は、體療又は內科と云ぞ正き、下割注に引ける、中原康富記に、所レ詮爲二權道之間一、御針不レ可レ苦云々、本道醫師中、當時無二針之名譽一云々と有にて悟べし、こは易きことながら、世に辨たる醫、をさ〳〵なかめれば、序に驚す物ぞ、抑中古より家を世々にし、又唐に擬ひて科を分ちしより拙く成けらし、醫道に科を分こと有べからず、

〔薩戒記部類二〕醫師　醫道ハ和氣氏丹波氏、是ヲ和丹兩家ト云フ、醫者ノ本道云々是也、當時半井典藥、千本典藥ナド稱レ之也、

〔康富記〕嘉吉二年十月廿五日壬子、是日禁裏樣○後花園御腫物平愈御候間、御付藥洗二落之一、御內藥モ今日マデ被レ聞二食一也云々、早々御本復天下大慶也、珍重候、醫師下鄕也、盆一砂金三十兩被レ下云々、御內藥者清阿、又典藥頭丹波賴豐朝臣等令二調進一者也、其外之本道醫師秀長朝臣、盛長朝臣、茂成朝臣、篤

忠朝臣、保成朝臣等、濟々雖有之、皆不參入候間、態勅喚、可參內之由、內々雖所望申、聊以不被召也、

〔續建殊錄〕一客某嘗患頭痛、既痛則吼、其發也語言不出、但手自打其首耳、家人不知其頭痛也、皆以爲狂矣、先生診之、腹大攣、恰如線引傀儡之狀也、蓋頭痛之甚、有如狂狀也、急與呉茱萸湯二帖盡之、疾卽愈、

〔續建殊錄附錄〕一男子患大頭痛、心下堅滿、按之痛、時時欲嘔、眼中赤眩、不能視物、舌上黑胎、不大便十餘日、不欲飲食、則與大柴胡湯、大便快通、諸症稍雖退、頭痛如舊、後兼用七寶丸全癒、

〔醫學天正記乾上〕氣

一吉田左兵衛內、食後上。氣。面赤頭痛、脈滑數、　降氣圓便莎加香　食後用也

〔建殊錄〕丸龜侯臣勝田九八郎女弟患癇癖、諸治無効、先生診之、體肉瞤動、上。氣。殊。甚。爲桂苓朮甘湯飲之、須臾坐尿二十四行、乃忽然起居、

〔漫遊雜記上〕有一貧婦、新婚後數月、病暈。眩。隔日衄血、咳嗽潮熱、其脈弦數、家人悉謂虛勢、余一診而曰、腹氣堅實、是決非虛勢也、審問其病因、平生嗜飲酒過多、比年來、爲舅姑制絕盃酒、故致氣火鬱蒸、迺與大黃黃連瀉心湯三十日而全愈、

〔和漢三才圖會十二口之用〕噦（一決反）吃逆、和名佐久利、（中略）按、今見噦人、乃叱曰、汝竊吃物矣、則止、是徼大驚之術也、或令出舌、假書字於舌上則止、是閉口鼻氣之術也、如有病根而噦者、件三術亦無効、大柢柹蔕散（柹蔕黑燒）以白湯下有効、如吸煙草爲噦者、急吃煎茶止、

〔醫學天正記乾上〕喘。息。

文祿二ノ初

一關白秀次公、依氣積上氣、伊豆之熱海御湯治、初六七日、相當而食進、御氣快然、頻浴過多ニ因テ、氣逆上而胸塞、痰喘息氣不能偃臥、時召予診脈、寸脈ハ緊實ニシテ尺脈虛、足冷至膝、心ヨリ以上ニ

氣アツテ下ハ實虛ト、喘息聲聞四隣、東垣加減瀉白散一貼ヲ與テ息少定厥止、二貼而平復、其方

桑一匁六七分　貴半味參各半匁　苓一分

〔漫遊雜記上〕又長門一鄕胥、病喘數年、身體枯燥、腹皮迫急、氣息奄奄、語言蹇澀、余調二仙散五分於齏汁進之、飲之一口、至吭不下、不吐、手足微冷、額上生汗、脈絕欲死、急與麝香末三分、徐徐得解、

〔醫學天正記乾下〕心痛

慶長二端午日

一大友一法師、患心痛、諸葯不効、一粒丸用一粒而定、又用一粒而愈、　唐王霜三分　朱一分漆ニテ丸メ加之、丸大如椒目、

〔續日本後紀二十仁明〕嘉祥三年三月癸卯、帝嘗縱容謂侍臣曰、朕年甫七齡、得腹結病也、八歲得臍下絞痛之病、尋患頭風、加元服後三年、始得胸病、其病之爲體也、初似心痛、稍如錐刺、終以增長如刀割、於是服七氣丸紫苑生薑等湯、初如有効、而後雖重劑、不曾効驗、冷泉聖皇憂之、勅曰、予昔亦得此病、衆方不効、欲服金液丹幷白石英、衆醫禁之不許、予猶強服、遂得疾愈、今聞所患、非草藥之可治、可服金液丹、

〔橘黃年譜下〕守山侯臣野口兵右衞門、罪ヲ得テ幽閉數月、志氣鬱々トシテ樂マズ、遂ニ胸痛ヲ發シ、背ニ徹シテ痛、夜眠ル能ハズ、腹濡弱少腹尤力ナク、任脈少シク拘急ス、脈沈微、大便難、尾臺榕堂大茈胡括蔞薤白白酒湯等ヲ與ヘ、十棗湯大陷胸丸ヲ以テ、之ヲ攻ルコト數十日、痛益劇シ、病者殆ンド疲ル、余〇淺田宗伯診シテ曰、病胸痺ニ屬スト雖、其人虛羸攻ムベキノ證ニアラズ、且淡飮胸膈ニ流注ス、宜溫藥ヲ與フベシ、枳縮二陳湯ヲ與ヘ、時々滾痰丸ヲ兼用シテ淡飮溫散シ、胸痛次第ニ減ジ、志氣大ニ復ス、因テ家ヲ携テ國ニ歸ル、

〔醫學天正記乾下〕吐血

天正四年春、山岡孫太郎殿、二十餘歲平素實滿無病、而一日食後忽面青、眩暈而吐逆、甚腹痛、一醫爲

霍亂而瀉之、即日吐黑血數椀、腹脹手不可近、又一醫作蟲毒、而金屑丸西大寺ノ藥ヲ與テ吐血、腹脹不止、三日之後予往而視之、腹大而呼吸迫迫、脈沈細而數、予曰、此乃非蟲、平日飲酒過多、乃炙煿ヲ過食シ、中焦ニ瘀血停滯而如此、又大便ニ下黑血、即犀角黃湯ニ陳桃ヲ加ヘ與之、二貼用テ忽咳逆連聲一日許、身熱汗出、脈微浮、二陳ニ柴連芩ヲ加ヘ、竹瀝ヲ入テ與之、二貼而咳逆止熱退、其後大便二日不通、潤腸丸三十粒用テ通ズ、潮熱往來五六日不止、小柴胡ニ芩連吐類ヲ加ヘ出入加減十餘日而全安、

〔醫學天正記乾〕吐血

一二十餘歲之男子、吐血久不已、夜身熱不能安臥、脈弦實五動、三黃湯地芎(各二錢)弓芐(各一錢中)葛(一錢)升此吐、(各中錢)煎服如文達升、

〔橘黃年譜下〕阿部聰德院隱居稲倉侯年六十餘、吐血ヲ患ヒ、數日止マズ、心中煩悶、夜間發熱安眠ヲ得ズ、時ニ左脇下痛ミ、微咳食進マズ、川村宗愼、戸塚靜春院之ヲ療ジテ自若タリ、因テ余ニ診ヲ乞フ、余先華蕊石末一味ヲ以清水ニ送下シ、次ニ黃連阿膠湯ヲ與フ、其夜安眠シ、明旦ニ至リテ吐血大ニ減ジ、二三日ヲ過テ全ク止ム、平素左脇下凝結アリテ、時々劇痛、左ニ側臥スレバ咳甚シ、乃柴胡疎肝湯加山巵子麥門多ヲ與フルコト數旬、脇下ノ凝結解シ、劇痛咳嗽全愈、

〔續建殊錄附錄〕一男子患久咳、吾吐血、爾後氣力大衰、短氣息迫、胸中悸而煩、腹攣急不能左臥、寢則汗出、下利日一二行、目上足跗生微腫、咳不止、飲食少減、羸瘦尤甚、則與黃耆建中湯、盜汗止、攣急漸緩、得左臥、不下利、微腫散、咳依然、更發用解毒散、經日諸症全退、

〔牛山活套中〕諸血(吐血、衄血、咳血、唾血、咯血、溺血、便血、腸血、齒血、)ヲ見ス者ハ、其脈多ハ芤大ナリ、沈細ナル者ハ治スベシ、洪大ナル者ハ、後必ズ治シ難キ也、一切ノ血症、多ハ熱ニ屬スルナレバ、其藥多ハ清涼ノ劑ヲ用テ治スベキナリ、

〔醫心方 六〕治肺病方第十三○中略

千金方、治肺虛寒乏氣、小腸拘急、腰痛羸瘠、(痩也ヤセ也)百病大建中湯方、大棗廿枚、干薑三兩、夕藥二兩、甘草三兩、桂心三兩、五味水八升、煮取三升、去滓、內粭八兩、煮三沸、分三服、

又之治肺、實則胸憑仰息泄氣除勢方、

枸杞根皮二升、白前三兩、石膏八兩、杏人三兩、橘皮五兩、白朮五兩、赤蜜七合、六味水七升、煮取二升、去滓下蜜煎兩三沸、分三服、

〔醫心方 十三〕治虛勞羸瘦方第二

病源論云、夫血氣者所以榮養其身也、虛勞之人、精髓萎竭、血氣虛弱、不能充盛肌膚、故羸瘦也、錄驗方

苟杞丸治勞傷虛損方、○下略

〔醫學天正記 坤〕虛勞

一五十餘之男子、痛後全不食、勞熱、晡每潮熱、口乾手心熱、脈結ナゾニ加莎宿朮案、

〔醫學天正記 乾上〕咳嗽

一長橋御局 勾當內侍 二十餘 久患勞咳、今又感冒、咳甚出、背臂冷如手、又不食、　桔梗湯　參蘇飲　去蘇加蘇子効、

〔醫學天正記 乾下〕肺癰

文祿丙申正月朔、玄朔、四十八歲 被還東海之邊、牢居、舊冬旅途街、付風還宅、而即入浴室、漬一身、除夜初更、俄寒戰發熱、唾多咳痰潰涕、右膏肓之傍拘急而痛、少時而又右ノ乳邊、隱痛而寒戰往來數時、脈浮數、按其證、心肺之氣耗減、而今感風寒、將成肺癰、　參蘇飲　姜棗二帖　二日、乳邊痛甚、痰唾帶血、同劑二貼、　三日、寒熱未止、　敗毒散ニ加陳杏二貼　惡寒止　發熱往來汗出、乳邊至脇下而痛甚、不能側臥、痰血出、　桔梗湯　桔貝各一匁　斤蔞慧各八分　枳桒巳箸各五分　甘節杏栢合各三分　入姜

加玄知銀、五日、汗多出心下痛同前、人足陷骨之上引痛、大便結、同劑加通虎柴、六日、汗出熱漸退、鼻中生瘡、桔梗湯本方加升陳、八日、熱退汗止、胸中之痛漸退、但側臥則痛、又勞心則心中痛、桔梗湯加參貴門斤玄、丞氣、背上右脾骨之邊有結核、灸其上ニ、而膿堅硬、而按之則出、今其近邊有結核、而重著、揉之則如白膠者出、十六味流氣飲、

〔醫學天正記 坤〕肺癰

一二十餘歲之男子、肺癰、吐膿血胸痛、二便澀、吉更湯吉貝斤芸桑蔓杏合苡密奴意甘、各等分加通虎妻入、

〔牛山活套 上〕癆瘵 附骨蒸

骨蒸勞瘵ノ症ニハ、獺肝ヲ煎ナ用、或ハ獺肉ヲ味噌汁ニテ煮テ、餌セタルモヨシ、是物ハ瘵虫ヲ治スルノ妙アル也、啓益常ニ用テ効ヲ得タルコト多シ、秘藏ノコト也、

〔金臺醫談 二〕一歌妓年十七、與一所歡情好最密、誓爲偕老之約矣、有一財主、不知其意、眷戀極切、挑之數矣、妓不敢貳、於是財主以厚貲償之、居之小梅村別莊、自是妓怏怏不樂、財主百方慰喩之、不敢適意、居三月遂疾、療藥治無効、換醫十有五人、皆言必死矣、因迓余秀〇數細診之、余視之、上衝心下悸、脈至浮數、熱煩咳嗽、形躰羸瘦、氣息惙惙、乃作苓桂五味甘草湯與之、六十餘日、熱煩咳嗽徐愈、月水過度、至十五餘日不止、於是製桂枝茯苓丸與之服、一日五六十丸、別不進煎藥、出入百日所而復舊、病痊後數日、作書辭主人、遂奔舊歡之家云、古人所謂、莫以今日寵、能忘舊日恩者、此妓有焉、

〔披壚錄 二〕水蠱樹

寛政間、洛豪族賈一婢、自云近江山村産、頗勤敏、得主家之意、居無幾、得瘵疾、醫以爲不治、與而歸家、主家殊惜、爲終當死、厥後數月而忽又還至、面貌怡和如常、家人且喜且訝、因叩其由、曰距奴居三里所有一樵翁、知治此病、就而乞藥服之、浹日大便見如蛔者、不久病瘥、得以有今日矣、主家語之醫和田氏、和

田氏遣門生厚禮就翁詢之、翁乃至屋後、指一灌木示之曰、惟此、併剉枝葉服之、無復他技能、木是水蠟樹云、按本草、虫白蠟殺瘵蟲、蓋偶相合者爾、

〔時還讀我書下〕勞瘵ニ脊際ヲ灸スルニ、イボタ蠟ト百草霜等分丸トナシ服セシムレバ殊ニ驗アリト、田邊藩ノ吉田玄倫ノ話ナリ、

〔時還讀我書下〕伊澤長安話ス、先年飛驒ニ傳屍ヲ治スル奇藥ヲ施スモノアリ、一醫其方ヲ懇請スレドモ與ヘザリシユヱ、山ニ入リテ藥ヲ製スルトキ、竊ニコレヲ伺シニ、乾人糞ヲ燒タルニコソアリケレ、此ヨリ彼醫其方ヲ浪語セシニ、其後ハ彼人施スニモ效ナカリシトゾ、乾人糞ノ瘵ヲ治スルコトハ古方ニモ見タリ、

〔時還讀我書上〕高井元春ハ、肺氣ヲ救ベシトテ、自ラ金片堆ト云フ方ヲ製シテ、一少女ヲ治シテ驗アリシト、隆仙ノ語リキ、其方ハ木香、茯苓、當歸、芍藥酒炒、肉桂、五味子、三稜、白朮、厚朴炒、陳皮、甘草、薄葉、遠志、訶子、右十四味ヲ水煎服スルナリ、

〔時還讀我書上〕儒生近藤大作トイフモノ、苦學ノタメニ勞憊シ、欬嗽、白沫、羸瘦、裏急等、諸證ヲアラハシ、タヾ脈氣ニ穩ナルトコロアルノミ、治ヲ原南陽ニ乞シニ、小柴胡湯ニ加附子茯苓ヲ處セリ、用ユルコト數十日ニシテ快復セリ、王德膚ノ固陽湯ヲ勞ヘ用ヒタルコトアレド、南陽ノ術マタ感服スルニ堪タリ、

〔紫芝園漫筆八〕岡崎士人河野通親者、好醫方、有二男一女、其長子病癆瘵而死、次子又疾、醫治不効、再再羸憊、河野謂醫東城子曰、吾兒疾篤、萬無生理、惟方書有取癆蟲方、而今人莫敢用之、予今欲爲吾兒行之、死者命也、予徒盡術而已、東城子曰、可也、河野乃用虞天民醫學正傳所載神授丸與服二日、下蟲形如穀蟲、人或以爲不死、然羸憊之甚、元氣不支、遂死、蓋晩也、無何少女又疾、時年十四、咳嗽累日不已、癆證粗具、河野試與神授丸二日下蟲、時冬寒甚、且調補以保元氣、明年二月、又用前方取蟲如法、數日

下蟲五六合、及小石如蕎麥大者十六枚、鐵椎擊之而不碎、蓋蟲所嚙骨節也、後用神脾之劑而愈、惜也向使二子者早服此方、則不死矣、東城子者岡崎侯侍醫也、子伯通記其事以告人云、

（橘黃年譜上）八丁堀代地藥舖藤屋覺兵衞次女、年十一、生質虛羸、時々暴熱ヲ發シ、搐搦シテ、昏冒セントス、余千金龍膽湯ヲ與テ熱解ス、後咳嗽盜汗出テ、羸瘦脈虛數、小便赤澀、飲食進マズ、乃聖惠人參散ヲ與テ漸ニ愈、主人頗ル醫ヲ解ス、怪テ余ガ治方ヲ用ユルヲ問、余答曰、楊氏直指曾氏並云、十五以下爲疳、二十歲以上其病爲癆、醫學入門云、疳者乾也、瘦瘁少血也、二十歲以下曰疳、二十歲以上曰癆、源一也、夫疳ト癆トハ同因ニシテ、其證亦相似タリ、故ニ疳ニ黃瘦靑脈、縈脊穗髮之症アレバ、癆ニ體黃爪靑、肚高毛聳ノ症アリ、疳ニ咬指揉眉之候アレバ、癆ニ拯鼻揩眼ノ候アリ、病疳ノ兒嗜炭吃泥伴笑多嗜ノ變態アレバ、患癆ノ人愛暗憎明、卒怒暴嗔、嗜好常性ヲ變ジ、火曆水脚、米黃泔瀉、悉ク疳ト符契ス、余故ニ疳ノ方ヲ以テ癆ヲ療シ、癆ノ法ヲ以テ疳ヲ治スルナリト、主人大ニ服ス、

（橘黃年譜下）一橋御守殿仕女阿豐能（内藤道有醫門女）年二十餘、外感後咳嗽、聲痙久シク愈エズ、羸瘦短氣、心志鬱塞、殆ンド三年ニ垂ントス、衆醫以癆療トス、余診シテ曰ク、病肺痿ニ屬ストイヘドモ、幸ニ經事斷ゼズ、脈細數ナラズ、或ハ救フベシ、因テ百合固金湯ヲ與ヘ、蛤蚧散ヲ兼用ス、數旬ニシテ咳止ミ、聲音響亮、氣宇常ニ復ス、

（醫學天正記乾上）嘔吐

文祿十一

一今上皇帝（和仁）冷食過多、而嘔噦嘈雜、虫衝上于心下而鳴、○安胃湯、人參丁香散

（積建殊錄）一婦人、患胃反九年於此、經衆醫未嘗些取其効、因迎先生（東洞吉益）診之、其腹攣急、上下相連、鞕吐然不渴也、食觸口不爽快、曰此心胸間有支飲故也、則與茯苓飲、服數日愈、

（醫學天正記坤）膈噎

一三十餘歲之男子、患膈、食則心中如刺、呑酸嘈雜子時吐、大便秘、脈遲右關緊、膈氣散、參令圭奴曲牙我京朮訶貴姜炮甘各一錢　朴木乒各五分　姜鹽少許入、亦二陳ニ加奴莎杏蔞木朴、出入加減、其間ニ爪蔞枳實丸、養胃丸交用、五十餘日痊、

〔漫遊雜記上〕又有一男子病噎、年紀五十餘、食飲一切不通、日飲醇酒三四盞、容姿枯燥、但坐吐白沫、精彩疊徹、夜夜不睡、余與三聖散、快吐數刻、吐後一日、食飲復常、晝間忽然而殞、

〔叢桂亭醫事小言四〕噎膈　反胃

反胃又翻胃トモ云、同義也、金匱ニ胃反ト出、猶轉胞胞轉、是ハ膈ト違テ食不下ニハ非ズ、食物得ト胃中ニ納リテヨリ出、朝ニ食シテ暮ニ吐ス、辭嚢トモ云モノ反胃ト同病ニテ、近頃此邊ノ醫多辭嚢ト呼、何故ニカ近來此病多、全胃ノ力乏、飲食不能消化、故ニ噯氣酸辛鼻ヲ衝キ嘈雜スルコト頻ニテ腹痛甚ク、吐セバ痛乍止、故ニ指ヲ以テ探吐ス、食物ヲ吐盡ノ後ニハ水ヲ吐ス、何水ノ出ルヤト思フ程多ク、其水モ吐盡セバ煤色ノ物、又海苔ノ如ヲ吐コトモ有、滑便ノ人モ有レドモ先秘閉ス、便ノ通ズルハ痛薄シ、大概朝飯前快ク、午食後ニ至テ腹痛シ、以上ノ語ル症ヲ作シ、晩間晡後ニ吐、丁字湯曼倩湯主之、其人飲食味不變、却貪食平日ニ異ナリ、此病寒疝ニ屬ス、臍傍ニ堅塊アリ、是ヲ按セバ五體ニヒヾキコタユ、數十日ヲ經タルハ、腹ノ津液ナク、筋バリテ常ニ鳴、或足蹈ニ微腫有、又腹面ニ一物浮出テムツクリト頭足有ガ如ク、按セバ手ゴタヘ無、ヂク〳〵ト鳴テ沒ス、不鳴ニ無ナルモ有、出沒無定所、非塊非絡脈凝結、此物ノ見ルヽハ大病ニテ、一快ヲ得モ又再發ス、甚不審ニ思フ時ニ、一狂人切腹スルヲ押留テケルニ、臍傍三寸許切タリ、是ヲ縫テ治タル後ニ胃反ヲ患、彼腹面ニ件ノ物浮出テ如小鼠、又蛇ナンドノ動ニ似タリ、按スレバタワイモ無ク沒スルニ、其疵口ノ痕ノ邊ニテ消ス、仍テ思ニ是必大腸ノ脂膜ノ切テ、腹ノホグレテ收ラザルナラント、是ヨリ意ヲ用テ胃反ノ人ヲ見ルニ、果シテ大腸ノ脂膜切ユルミ、定位ニ不收也、疝氣ニ蟠腹氣ト云有、萬

病回春ニ盤腸氣ニ作、是適當ノ文字ナレドモ杜撰ノ恐アリ、金匱寒疝篇ノ大建中湯ニ有頭足上下スト見ユ、即是ヲ云、最建中湯主之所也、此病ハ法則ヲ守バ什ニ七八ハ治ス、外臺ニ華佗ヲ引テ、胃反病朝食後吐心下堅如杯、往來寒熱、吐逆不下食、此爲寒癖所作ト有、千金翼ニ、癖癖作治痰飲、法曰、諸結積留飲、澼囊胸滿、飲食不消、灸通谷五十壯ト見ユ、寒疝トモ寒癖トモ云ベキ也、其源ハ瘀血凝結シテ形ヲ作タルナリ、此病人何ニテモ見アタル物ヲ貪食シ、食スレバ必腹痛ス、魚肉餅麵生冷堅實ノ類ヲ食セバ、別テ大痛シテ晩ニ至テ吐ス、故ニ嚴禁スベシ、仍日用ノ食物常法ヲ定ム、一日ニ陳倉米一合ヨリ二合半、粥又ヤワラカノ湯取ノ飯、是ヲ四度ニ分テ食セシム、飲物ノ多ヲ嫌ガ故ニ、藥モ一貼ニ限リ、湯水モ一合ヲ一日ノ分量トス、茶ハ別テ忌シ、、燒鹽、ヒシホ、梅干、燒味噌位ノコトニテ食セシム、厚味ノ物胃中ニ入レバ、不能消化ガ故ニ痛ムナレバ、淡薄ニテ消化シ易ヲ食シメ、自然ニ胃ノ力復スレバ、經日月而愈ユ、愈テ後モ禁食專一也、然ドモ此食忌ノコト容易ノ戒ニテハ守カヌル、腹痛モ吐モ合點ニテ貪食スルモノ也、此法ヲ守ル人ハ皆可治、不能守人ハ辭テ不與藥、病狀ハ旋覆花代赭石湯、附子粳米湯ニ似タレドモ、憂情、丁字、背ニ徹痛セバ、當歸湯、吐甚ニハ安中散、疝ト積トヲ參考シテ、桂枝加附子烏頭湯ニ香脂丸ヲ兼用スルモ、大小建中工象散モ用ユベシ、秘閉甚ニハ大黃甘草湯ニ加吳茱萸牡蠣ヲ用ユ、積聚門ニ睹ル赤丸モ、生漆ヲ酒ニテ用ユルモ、此筋ニ工夫シテ用ユベシ、人ノ手ヲ東タルヲ治ベシ、

〔醫心方 十三〕治諸疝方第二

新錄方、治諸疝方、桃白皮一升、以水三升、煮取一升、頓服之、又方、酒服蒲黃二方寸匕、日二、又方、桃桃人八十枚、去皮研、如泥酒下、

〔醫學天正記 乾 上〕積聚

一女積聚、〈德工、十歲、〉二氣積在臍左右、全不食、順氣湯〈回〉木香調氣散、貴朴〈各二匁〉莎奴烏青芎朮〈各一匁〉

木宿各半匁　桂三分　甘　用右煎汁則吐逆、以同劑爲丸用之効、

〔醫學天正記乾下〕疝氣

文祿三十一月

一民部卿法印、俄思寒戰慄、頭痛無汗、盧菴作傷寒、而十神湯ヲ與、翌日予診脈、左關弦實兩尺緊急、予曰、小腹筋急乎否乎、法印曰、臍兩傍筋引入陰筋、予曰、此必疝氣、惡寒止、發熱往來、頭痛尚未止、小柴胡　梔陳青芎ヲ加テ與之、翌日陰嚢腫大而痛、半井竹和軒、三和散ニ棟實ヲ加與之、三日發熱尚未止、法印又予ニ命ジテ葯ヲ服スベシト、又小柴ニ梔青芎貴之類ヲ加、二日而發熱退、陰嚢膿潰、外醫鐵針ヲ燒テ、潰爛處ニアテ、膏葯ヲ付、古キ木綿ヲヒロゲ蓋テ、日ニ二次易之、又未破處甚疼瘀、鹽ヲ炒熱シテ紙ニ裹ミ、ヌルカチノカンニシテ熨之、疼瘀退二十餘日而愈、熱漸退而後ハ、三和散ニ加減而用之、○中畧

腹痛

一藤堂少兵衛殿、心腹右傍、筋堅引痛不可堪、　安胃湯　青芎梹朴陳朮良我桂姜　痛止之後養生、加木甘參宿、

〔續建殊錄〕浪華島之內賈人伊丹屋某者、嘗患腹痛、腹中有一小塊、按之則痛劇、身體尫羸、面色青、大便難通、飲食如常、乃與大柴胡湯飲之歲餘、少差、於是病者徐怠慢、不服藥、既而經七八月、前證復發、塊倍于前日、顆如冬瓜、煩悸、喜怒劇則如狂、衆醫交療不差、復請治先生、再與以前方、兼用當歸芍藥散、服之月餘、一日大下異物、其形狀如海月、色灰白、形有似嚢、內空虛可以盛水漿、其餘或圓或長、或大或小、或有似紐者、或黃色如魚餒、或如敗肉、千形萬狀、不可枚擧、如此九日而後、舊痾頓除、

京師一女子、年九歲、有寒疾、求治先生、門生某診之、蒸蒸發熱、汗出而渴、先與五苓散、服湯渴稍減、然熱與汗尚如故、其舌或黃或黑、大便燥結、胸中煩悶、更與調胃承氣湯、服後下利數行、而煩倍加、食則吐、熱

登燒將軍救療、先生曰、調胃承氣湯非其治也、此爲桃仁承氣湯之證矣、服湯全復、

(漫遊雜記上)又有一女子、病鼓脹、腹皮光瑩射人、盡力推之、空洞無物、大小便不利、飲啖頗健、余鬭三聖散一錢於韮汁進、吐穢物數升、又以甘紫圓三分下之數十行、其明大便泄利、小便斷不下、腹脹減不足言、不日如故、經數旬而死、

(醫學天正記乾下)腰痛。

一持明院中納言、八十四常腰痛作、舁俄側腰脇痛、而引小腹不能轉側、脈沈細、通經湯 腎腰痛 立安散 茴仲延桂芹各一匁 木中匁 五貼而効、後用三和散十餘貼而平安、

(醫學天正記乾上)內傷。附飲食

慶長子四月十四日

一小笠原信濃守、年三十餘 常過飲酒、久瀉之後足底附腫、脈緩、補中湯 八解ニ加萬宿通外、

(醫學天正記坤)食傷。嘈○中

一今上皇帝後陽成御食傷、瀉利吐逆、藿香養胃湯倉三匁、朴守各二分、藿貴各一分、甘少 入姜棗、

(醫學天正記乾上)霍亂。

天正十六月

一陽光院殿、誠仁親王 患霍亂、前日飲酒過多、早晨吐逆悶亂、半井通仙軒御脈ヲ候フ、積證ト見テ、御脈ハ心肝ノ虛ニテ御座候ト申、諸臣不諾而退出、又盛方院淨勝法印御脈ヲ候フ、暑氣ト申テ即御藥進上、一日一夜進上、吐逆悶亂尙未止、予御脈ヲ診曰、暑氣許ニ非ズ、下地脾胃虛損、而又今飲酒過多ニ因テ霍亂也、酒毒ヲ消スル藥ニ非ンバ不愈ト、諸臣承諾、即御藥進上シテ、翌日平安、時予蒙法眼之號、再三辭スト雖ドモ、堅御口ニテ宜案頂戴、年廿四歲 御本復御祝事、御柄子澁谷伺候、一番養老、シテ與吉、二番班女、シテ宗及、三番東方朔、シテ勝右、四番吉野靜、シテ與吉、五番蝶、シテ

宗及、六番軒端ニシテ靜右、七番高砂ニシテ與吉、予見物ニ伺候、勅命ニテ大典侍殿局御縁ニ參候ス、

〔醫學天正記 坤〕霍亂

一卅餘歲之女子、霍亂、腹痛吐瀉、氣欲絕、脈伏便結、灸臍中十一壯、理中湯參朮姜甘各等分加良薑附腹痛止、臍下堅滿、脈弦、丁香脾積圓十粒宛、三次大便快利、疹悉退、

〔醫學天正記 乾上〕泄瀉

天正十五春

一毛利右馬頭輝元公、三十五歲、關白大相國秀吉公、爲島津征伐御動座、于時輝元在豐前之小倉、卧沈痾、瀉利下血不止、心下有堅積、左脚脛腫高骨痛、而行步不遂、予依殿下之命至小倉療之、歷十數日而足痛大半減、乘馬而經豐後入日向、予從之治之、島津向參之後被納御馬、輝元被歸安藝吉田、至季秋而平復、而予既歸洛、初ハ朮苓陳通已役乳近膝參甘之類、後ハ參朮苓甘霍朴半貴青芎膠歸之類、出入加減而平安、

〔漫遊雜記 上〕有兒五六歲、病天行痢、二日而發驚癇、直視攣急、身冷脈伏、醫將用三黃湯、余止之曰、癇以痢初頭發、其腹氣堅實、雖危不至死、今外症未解、而用三黃湯、則恐痢毒婉鬱而延數十日、數十日後、腹氣虛竭、痢再發則不可救、今日之政、唯須發散、乃以葛根湯發之、兼少用熊膽、經五日而痢愈、癇不再發、

〔續建殊錄 附錄〕一婦人年九十歲、患赤白痢、日七十行、舌上黑胎、身熱如灼、時時譫語、渴欲飲水、絕食數日、腹皮著脊、息則搖肩、從臍傍至心下、按之如石、動氣尤甚、與調胃承氣湯、數日諸症漸退、後腹痛、小便不利、清穀下利、手足微腫、疲勞尤甚、則與眞武湯、諸症全得瘥、

〔安齋隨筆 二〕痢病の藥

蕎麥粉、葛粉等分ニ合セ、水ニカキ交テ用ユ、早速シルシアリ、但實症ノ痢ニ用ユ、虛症ニハ不用、利噤ナドニハイムベシ

右二味ニ、砂糖ヲ等分ニ合セタルヨシ、右兩方高村傳菴傳、

（牛山方考上）一元祿四年五六月ノ間、久霖シテ士民悉ク暑濕ノ氣ニ感ジテ頭痛如裂、暑益爲ニ一方ヲ製ス、胃苓湯ニ柴胡黃芩ヲ加テ本トシ、熱甚ク大便秘セバ、黃連石羔ヲ加フ、大便泄スルニハ、白扁豆升麻ヲ加フ、腹痛ニハ本香砂仁ヲ加フ、喘渴ニハ葛根ヲ加フ、頭痛ニハ羌活川芎ヲ加フ、眼中黃ムニハ、茵蔯ヲ加テ用之、應手有効、津城三千戶及ビ國中ノ人、其靈方ノ應驗ヲ聞傳テ乞藥者滿門、每日此方ヲ修合シテ、人ニ與ル事以百數之、奇々妙々可秘々々、

（牛山方考上）一元祿六年六七月ノ間、大ニ旱シ、金流レ石鑠ル、八月ノ初ヨリ、俄ニ收斂淸肅ノ令行ハレ、暴風霖雨、白露忽霜ニ變ズ、國中ノ諸人一般ノ時疫ニ感ジ、其病狀、發熱惡寒、頭痛如裂、咳嗽シ、身體重ク、前冷テ如氷、或ハ瀉痢ヲ兼ネ、或ハ瘧ノ如、暑益治之ニ、黃連香薷飲ニ蒼朮ヲ加テ、百發百中ス、一醫問テ曰、元祿四年ノ夏、吾子一般ノ時疫ヲ治スルニ、胃苓湯ニ加減シテ應驗如神、今年前方ヲ用ルニ無効、或ハ藿香正氣散、小柴胡湯、淸暑益氣湯、白虎湯ノ加減ノ方ヲ用テ無効、吾子又治此症二四五貼ヲ不待シテ藥効ヲ見ル、何等ノ神方アッテ如是ナル、授予ニ吝カナルコトナクンバ、弟子ノ禮ヲ以拜之、予ガ曰、前歲一般ノ時疫ハ、濕溫ノ症也、今歲一般ノ時疫ハ、伏暑ノ症也、六七月天旱極熱ス、人皆暑邪ニ感ズ、然ニ八月俄ニ淸寒ノ令行レ、霜早ク降ル、故ニ新涼ノ氣皮毛ヲ宛シテ、暑邪出スルコトアタハズ、熱寒交々作リ、熱鬱シテ諸病ニ變ズ、是ヲ伏暑ノ症ト云、香薷ニアラズンバ除クコトアタワズ、故ニ黃連香薷飲ニ、蒼朮ヲ加テ應手有効、君夫退テ思之、謹勿膠柱調瑟刻舟求劍、

（導水瑣言）京都、六七年ヨリ、急劇ノ病流行シ、人ヲソコナウ事少カラズ、其症心腹脹痛シ、或胸中痛裂ガ如ク、腹擊急シ、呼吸短促、其狀全ク結胸トモ云フベシ、大抵形狀右ノ如クナルユヘ、時醫多ク大陷胸湯ヲ用ユ、予片岡元周モ亦手段ナケレバ、大陷胸湯ヲ用ユル者凡五六人、服藥ノ後暫時ハ病

勢ニルムヤウニ見ユレドモ、ヤガテ前ノ如ク盛ニナリ、其後ハ大陷胸ノ類ヲ用レドモ即時ニ吐出シ、次第ニ胸中ニ上冲シ、昏悶百苦シテ皆死ス、其迅速ナルコト、或三日或六七日ニ過ズ、京師ノ俗コレヲ三日坊ト名ク、予屢ソノ病ヲ診スルニ、其症結胸ニ似タレドモ、其脈結胸ノ脈ニ非ズ、皆浮虛或浮弱、或沈微沈細ニシテ力ナシ、因テ思フ、此症實ニ非ズシテ虛也、下劑ノ宜キ所ニ非ズ、全ク脚氣ノ一種ニテ、水毒急ニ胸中ニ上冲スル者也ト、

〔時還讀我書上〕文政庚辰年三春夏ノ際淫雨ヤマズ、ソレヨリ暑ヲ催ス頃マデ、乾霍亂ニ似テ心腹暴痛スル病人多シ、其證熱氣アリテ脈洪大、心下滿鞕、支痛スルコトモアリ、飲食下ラズ、大便秘結ス、因テ備急陷胸ナドニテ一下シテ、一旦ハヤヽ緩メドモ、却テ痛甚ク、熱候盛ニナリ、煩渴スルニ至ル、是ニ於テオモヘラク、此雨濕ノ氣、內ニ犯テ水毒ノ聚タルモノナラン、下スベキ證ナラズトシテ、増損理中丸料ニ蒼朮ヲ用テ白朮ニ代ヘ、水煎服セシメシニ、痛頓ニ減ジ不日ニ快復セリ、遂ニ十數人ヲ活シタリ、後ニ導水瑣言ヲ撿スルニ、京師ニ結胸證ニ似テ下劑ノ應ゼズ、外臺ノ桑白皮黑豆檳榔ノ方ニテ愈ル證行レシコトアリト云ヘリ、蓋一類ノ病ナリ、

〔天保集成絲綸錄百六〕天保八酉年四月

大目付江

時疫流行候節、此藥を用て其煩をのがるべし、

一時疫には、大つぶなる黑大豆をよくいりて壹合、甘草壹匁、水に而せんじ出し、時々呑でよし、右醫證に出ル、

一時疫には、茗荷の根と葉をつきくだき、汁をとり、多く呑でよし、右肘後備救方に出ル、

一時疫には、牛房をつきくだき、汁をしぼり、茶碗半分づゝ、二度飲て、其上茶の葉を一握ほど火にてよくあぶり、きいろになりたるとき、茶碗に水四盃入、二盃にせんじて一度飲て汗をかきて

よし、若し茶の葉なくば枝に而もよし、

右孫眞人食忌ニ出ル

一時疫に而、熱殊之外つよく、きちがいの如くさわぎてくるしむには、芭蕉の根をつきくだき、汁をしぼりて飲てよし、右肘後備急方ニ出ル、

一切の食物毒にあたり、又いろ〱の草木、きのこ、魚鳥獸など喰煩に用ひて、其死をのがるべし、

一切の食物の毒にあたり、くるしむには、いりたる、鹽をなめ、又はぬるき湯にかきたて飲てよし、

但、草木の葉を喰て、毒にあたりたるには、いよ〱よし、右農政全書に出ル、

一切の食物の毒にあたりて、苦しく腹脹痛には、苦參を水にて能せんじ、飲食を吐出してよし、

右同斷、

一切の食物にあたり、くるしむに、大麥の粉をこふばしくいりて、さゆにて度々飲てよし、右本草綱目に出ル、

一切の食物にあてられて、口鼻より血出で、もだへくるしむには、ねぎをきざみて、壹合水にてよくせんじ、ひやしおきて幾度も飲べし、血出やむまで用てよし、右衞生易簡に出ル、

一切の食物の毒にあたり煩に、大つぶなる黒大豆を水にてせんじ、幾度も用ひてよし、魚にあたりたるにはいよ〱よし、

一切の食物の毒にあたり煩に、赤小豆の黒燒を粉にして、はまぐりかひに一つ程づゝ、水にて用ゆべし、獸の毒にあたりたるには、いよ〱よし、右千金方に出ル、

一菌を喰あてられたるに、忍冬の莖葉とも生にてかみ、汁をのみてよし、右夷堅志に出ル、

右之藥方、凶年之節、邊土之者、雜食の毒にあたり、又凶年之後、必疫病流行の事あり、其爲に、簡便方を撰むべき旨、依被仰付、諸書之内より致吟味出也、

享保十八辛丑年十二月　望月三英

丹波正伯

右は、享保十八辛丑年、飢饉之後、時疫流行いたし候處、町奉行所江板行被仰付、御料所村々江も被下候寫、

右は、當時諸國村々疫病流行いたし候、又は輕きものども、雜食之毒に當り、相煩難儀いたし候趣相聞候、天明四辰年御藥法爲御救相觸候處、年久敷事故、村々に而致遺失候儀も可有之候ニ付、此度爲御救右之寫、猶又村々江領主地頭より可被相觸候、

右之通、可被相觸候、

四月

〔安政午秋〕頃病流行記〔一〕於出島千八百五十八年第七月十三日（當日本安政五年五月）

此兩三日中、出島市中とも、一時に下痢、且追々吐かゝり申候、右患病之者、既に昨十二日、一時に三十人相煩、將又亞墨利加蒸氣船ミシツヒーにおいても、右樣之腹病多人數御座候ニ付、右病原は究て流行のものと奉存候、右は他國にても頃日多分發り申候、

一隣國唐土にても、諸街市海岸には、コレラアジアテイス病名流行仕、右ニ付日々死失多人數御座候由、依之出島に罷在候歐邏巴人どもに付而は、右下痢殊の外變症仕、實眞のコレラ病に不相成樣、防方可仕候に御座候、右之換樣ニ而は、眞實相發可申、右病之害と相成候食物顯然に御座候、右食物類禁止仕、保養之手當示置申候、

第一、胡瓜、　第二、西瓜、　第三、李、杏子、桃、

右二品は、至極大事之下痢不ㇾ可ㇾ服物に御座候、第三品は於ㇾ日本ㇾ相用候樣之未熟之菓物、是は顯然害に相成申候、

一歐邏巴之諸國、其外國々において、右樣之病氣發候節は、右病之增長防候爲、其國民之右害に成候食料之儀告知せ、勿論賣買禁候事必用之儀に御座候、依之和蘭政府醫師たる役目に御座候、

且又日本人ニ付而者、左之通り養生法一統示方强而は難ㇾ申上儀に御座候、

第一、胡瓜、西瓜、未熟之杏子、李等相用候儀堅禁候事、

第二、人々裸に而、かならず夜氣に觸不ㇾ申樣心掛可ㇾ申、夜分决而衣類覆はず寢入申間敷事、

第三、日中暑氣にふれ、餘り心勞之仕事致間敷候事、

第四、諸情慾之行、殊に酒呑過候儀、もつとも害に相成候事、

第五、若し下痢相覺候はゞ、直樣療用之手當致し、猶豫いたす間敷候事、

右之通り申上候譯合に而、私共を襲候危敵たるコレラ病除去候、御賢慮可ㇾ被ㇾ爲ㇾ在儀に御座候、

和蘭海軍方第二醫官

於ㇾ日本窮理學館

ウエイエルボム、ヘフアン、

メードルフヲールト

〔梅園日記　二〕杉湯

續詞花集雜上云、大齋院御あしなやませ給をすぎの湯にてゆでさせ給べきよし申ければ、ゆでさせ給へど、しるしも見えざりければ、齋院宰相、

あしびきのやまひもやまず見ゆる哉しるしの杉とたれかいひけん　かへし齋院

しるしありとすぎにしかたはきくものをわがこのみわのやまぬなるべし、按ずるに、證類本

草に、唐本注云、杉材木水煮汁、浸捋脚氣、また本草圖經曰、杉材、醫師取其節煮汁、浸捋脚氣殊効、唐柳柳州纂救三死方云、元和十二年二月、得脚氣、夜半痞絶、脇有塊、大如石、且死、困塞不知人三日、家人號哭、榮陽鄭洵美、傳杉木湯、服半食頃、大下三次、氣通塊散、杉木節一大升、橘葉切一大升、北地無葉、可以皮代之、大腹檳榔七枚、合子碎之、童子小便三大升、共煮取一大升半、分兩服、若一服得快利、即停後服、(按に本草方にも柳氏方を載たり)亦本草衍義に、杉作屑、煮汁浸洗脚氣腫滿とあり、また續門葉集(雜上)云、大藏卿隆博、藥湯のために、杉の葉をこひ侍りける返事にそへ侍りける、法印公紹、

君がとふしるしとも又なりにけり杉のみたてる秋の山本、又按ずるに、藥湯のためにとあれば、これも脚氣ゆでん料にや、梶原性全の頓醫抄三巻(脚氣部)云、凡脚氣ノ人ハ、家ニモチフルトコロノ桶杓ナラビニ、板ジキマデモ杉ノ木ヲ用フ、又杉ノ葉杉ノ木、常ニ煎ジテ足ヲユデ、幷ニ腫タラン處ヲユデヨ、キハメテシルシアリ、濟生方ニハ、ユヅルコトヲ、イマシメタレドモ、ユデヽ愈タルシルシ、オホクミエタリとあり、杉木の桶の事は、續博物志に、脚弱病用杉木爲桶濯足といへり、

〔玉海〕治承五年三月六日壬午、泰茂來、又典藥頭定成來問余脚。氣。事、申云、暫不可加療治、只以行歩可。爲。治。云々、申間等有其理、

〔醫學天正記(乾下)〕脚氣

一菊亭右大臣晴季公、(年六十餘)右腿脚筋痛　健歩丸　鹿角霜(一分)百(二分)己蒼(各二分)糊丸鹽湯

或酒(一分)灸風市　三里　絶骨

〔五體身分集(下)〕從股至足分

脚病治方、此疾ノ形種々有ト云トモ最要ヲ取注ス、脚氣初テ發テ膝ハギ足カタ肘ヒイラギ痺脊カハレ、腰滿テ推ニ指入テクボムヲ、療方、草麻葉剋テ舂テ一升布袋ニ入テ、蒸テ温ニシテ痛ム所ニ當ヨ、腫ルニモ好シ、三度カヘヨ、若草麻葉ナクバ或薏苡草、或蒴藋根ニ糟一分合テ蒸テ宛ヨ、

〔延壽撮要〕沐浴〈中略〉

一ふさんとする時、あつきゆにてあしをあらふべし、つねにかくのごとくすれば、かつけのやまひなし、

〔内科秘錄 四〕脚氣

脚氣ハ初テ金匱要略ニ出ヅ、隋唐ニ至テ腫ノ有ル者ヲ濕脚氣ト爲シ、腫ノナキ者ヲ乾脚氣ト云テ二證ニ分ツ、夏秋ノ間ニ行ハル、疫氣病ニシテ、一ビ感ズルトキハ毎年之ヲ患ヒテ、宿疾ノヤウニナリ、内因病ニ似タレドモ實ハ外感ニシテ内因ニ非ズ、其人ノ資質脚氣ニ感ジ易ク、毎年脚氣行ハル、トキハ之ニ感ズルニテ、宿疾ノ再發スルニ非ズ、譬バ瘧疾ニ感ジ易キ者、年年瘧ヲ患フルガ如シ、千金方ニ風毒脚氣ト稱シ、外感ト爲シテ桂枝、麻黄、防風、羌活等ノ發表祛風ノ劑ヲ用ヒタルハ自然ノ發明ナリ、南宋以降多クハ腎虚ト爲シテ、漫ニ強陽滋陰ノ劑ヲ用ユルハ大ナル謬ナリ、金匱要略ニ脚病ヘ腎氣丸ヲ用ユ、腎氣丸ハ即腎藥ニシテ、且脚氣ハ身體痿弱シテ陰莖マデモ痿スルモノナレバ、此等ノコトニテ脚氣ヲ腎虚ト心得タル者ナルベシ、本邦嘉元ノ頃、梶原性全萬安方ヲ著シ、獨能ク古方ヲ守テ補劑ヲ用ヒズ、正德享保ノ際ニ至テ、山脇道作、望月三英等、初テ千金外臺ノ方法ヲ慣用シテ、疎利ヲ專務トシタルハ卓見ト謂ツベシ、

〔脚氣類方〕附言

近世有名浮苦病者、方言也、其症肢體黄腫、胸腹爲脹、治之以水葒鐵粉之劑、服者多愈、蓋田夫野人、多罹此疾、或云黄肝也、又有名母多足者、一名坂下、皆方言也、足脛爲腫、起居如常、甚者難歩履、今時屢見兩足粗大與疾偕老者、卽古所謂壅疾是也、又高野山中、冬月閭童子十五六歳者、多罹脚疾、初其感之、兩脚爲腫、行歩艱痛、坐臥則如忘、他無所苦、鍼與藥餌無効、唯當春暖之時、投脚田澤中、履踏泥濘、則其病必愈、或不愈者、動輙爲痼、終身爲跛云、率遭此疾者、悉瘦人、肥人蓋無之、予〈源養德〉謂皆是脚氣之類也、

〔導水瑣言序〕一士徇役于江戸、患兩脚浮腫、筋攣肉痺、衆皆以爲脚氣、治之無驗、來于京師請治、龍卿曰、此疝瘕也、卽爲四逆散、加呉茱萸牡蠣劉寄奴湯與之、未三旬病已、所以知非脚氣者、切其脈沈緊、心下痞硬、脇下逆滿、臍左有塊、而胸腹無動、氣息如常、故曰疝瘕、一婦浮腫脚弱、筋攣氣急、至夜氣自左脇衝胸、高煩悶不能寐、衆皆以爲脚氣、治之無驗、乃按其腹、心下拘急、胸下痞而有動、然心中不悸、身無所麻痺、卽爲大柴胡加龍骨牡蠣呉茱萸甘草湯與之、一劑而知、十劑而愈、○中略

文化二年九月　栲亭源之煕○村瀬撰

〔叢桂偶記二〕水腫

平安山脇東門先生寄書曰、得浪華林一烏治水腫方曰、地膚子大、大麥、小豆各中、右三味各別炒、合和調勻、更炒之、是一烏之奴、竊識而傳之也、余不知林一烏爲何人、後讀望鹿門又玄餘草、有林一烏傳曰、羽林山名氏、持節戍鎭播城、臨往令烏以醫藥從焉、到時城內逢于疫腫更興焉、一般流行、暴死者甚多、烏爲設一法、又立一方、斷禁米粟、偏食菽麥、以令疎泄敦阜、乃試施之、屢有收功、後好事者、或名爲脚氣腫滿云、然烏者惟稱腫、不用別名、烏來東都寓居于金龍山畔、其治驗藥餌自積爲書、名客中集、其書牢剗在世、半藏在家、未全備、乃活套也、其立方、禁秘枕中、不欲傳非人、故其書不載、或欲將三百金換其方者不敢肯、然今其不傳、後世恐屬烏有、可惜哉、

〔橘黄年譜下〕關宿侯臣由岐七郎脚氣ヲ患ヒ、遍身水腫麻痺、四肢ヨリ口吻ニ至リ、心下痞滿、噫逆ヲ發シ虛里動高ク、短氣小便不利、殆ンド衝心セントス、余○淺田宗伯靈砂一錢ヲ以、井華水ニ調シ送下ス、須臾ニシテ噫氣稍止、尋デ犀角旋覆花湯ヲ與フ、兩三日ヲ經テ、衝逆ノ勢挫ケ、洪腫故ノ如シ、因テ越婢加朮苓合唐侍中一方ヲ與ヘ、三聖丸ヲ兼用、四五日ニシテ小便快利、隨テ減ジ、危急ヲ免ル、

〔醫學天正記乾下〕便毒

一岡半兵衛、三十歳、便毒之處、腫痛上熱、赤口舌生瘡、喉中痰結、　清氣湯集驗　連翹飲　翹歸括地

約剤本門明通力丹解毒等分　甘、

(建殊錄)京師岩上賈人某者、患黴瘡、差後鼻梁壞陷、殆與所類等、先生東洞吉益爲七寶丸飲之、其鼻反、腫

脹三倍於平人、及盡二劑、則稍縮收、再見全鼻、

(橘黄年譜下)上野國新田郡木崎宿中島廣吉、黴毒ヲ患ヒ數年差エズ、咽喉糜爛、聲音啞シテ出デズ、

鼻梁骨立ス、都下ニ來テ藥ヲ諸醫ニ乞フ、寸効ナシ、余麥門冬湯加桔梗山豆根ヲ與ヘ、結毒紫金丹

ヲ兼用ス、數日ニシテ聲音寥亮、咽喉常ニ復ス、喜ンデ歸國ス、

(醫學天正記乾下)消渴。

一今上皇帝後陽成二十九歳、二作大渴、引飲十餘碗、大便滑、手時眩暈心悸、御脈微弦、　甘露湯　錢氏白朮散

加門栫、　參連小便赤濁、脈右尺有力、　清心湯　前剤ニ加升中柴中梔中淵小佰小、其間用安神

散成地黄丸二○中略

淋。

一鍋島信濃守、年三十歳、自少年患淋病、去發不時、須甚發而閉澀通而後痛甚引腰囊下、大便結、脈弦

實、　清源湯　八正散　不効　四物ニ加翹通梔地各中倍虎各小効、　灸關元五十壯　膀胱兪各五十壯

○中略

痔漏。

一升越美作守、二十歳、痔漏痛不可堪、咽乾大便結、全不食、脈弦數、　秦艽湯　秦艽防風湯　艽云斤

朮各一分中　澤六分　酒五分　虎陳各三分　桃三十ヶ今作二分　紅少　甘少中○略

癆瘵。

一大文字屋宗悟、四十歳、感冒發熱之後、時々潮熱、盗汗久不止、頭兩頰下腫高、又便毒之處腫高、脈弦

實面五勳、　通氣湯傳療柴胡連翹瞿二匁柴堯知酒芩炒各一匁半力湘地各一匁近五分半桂一分
〔醫學天正記乾下〕痛。風。
一二見大夫殿母、五十餘歳四肢痛痺、行歩不遂、虫衝上、脈沈濇、　通經湯　四物ニ加二已通爪膝紅桔
桃羌百朮梹木一、
〔橘黃年譜上〕天保十年
初夏十九日、本船町若松屋藤四郎橘爪香息ヲ診ヲ乞、其證歷。節。痛劇シク、煩熱妄語、飲食スル能ハズ、大
小便秘澀ス、醫或ハ傷。寒。トシ、或ハ傷。冷。毒。西洋病名トシ、錯治効ナシ、余千金犀角湯加二黃連一ヲ用、二三日
奇驗ヲ得タリ、爾後此方ヲ以、熱毒節ヲ治スルニ、驗アラザルコトナシ、
〔牛山方考中〕一痛風、氣虚ニ屬スル症、遍身走痛シテ晝ハ輕ク夜ハ重キ者、或ハ酒色過多シテ筋脈
空虚シ、風濕ニ中ラレテ、遍身手足走痛シテ如レ刺ニ、蒼朮、牛膝、陳皮、桃仁、葳靈仙、龍膽、茯苓、防已、羌活、
防風、白芷、甘草ヲ加テ奇効アリ、疎經活血湯ト名付ク、有痰ニハ、南星半夏ヲ加フ、氣虚ニハ、人參白
朮ヲ加テ奇効アリ、
〔醫學天正記乾上〕感。冒。
一柘植大炊助七年近二旬感冒發熱、熱退後咳痰、久不レ食、尿赤無レ汗、　寧肺湯　寶鑑ニ加減瀉白散
〔本朝醫談〕むかしの物語をよむに、風。の。心。地。といへる詞あり、是は諸病の因は、風寒なりとくすし
がいひたるが、世人にうつりて、凡病は、かぜより起るものと心得たるやうに見ゆれども、斯邦に
一種か。ぜ。といふ症あるなり、唐土人のいふ風とは異なり、其異なる事は、治療の異なるにて知べ
し、榮花物語、長德元年、關白殿御心地あしく、御風にもなどおぼして、朴などまゐらすれど、おこた
らせ給はず、加茂保憲女集、足引の病やむてふほゝの皮吹寄風はあらじとぞ思ふ、是はゝの木の
皮を用て、愈る病ありて、是を風といふなり、本草厚朴にいひ傳へたる、主治に拘はらず、これを用

て、斯邦の風といふ病はなほるなり、

〔本朝醫談〕夏月、ねびえといふ病唐土になし、故に治法をいへる醫書なしと聞けり、强ていはゞ、唐土人のいふ、暑病靜而得之の證なるべし、醫方聚要、一隅日、常嗜葛根先活解、與厚朴香薷散等、內傷生冷加乾姜縮砂之類、

〔時還讀我書上〕甲申七年〇文政三月、麻疹ヤヽ止ントスル頃ヨリ、時氣盛ニ行レ、一家少長トナク皆床ニ臥ニイタル、其證一應ノ感冒ヨリ熱氣强ク、初起ヨリ少陽ヲ兼ルモノ多シ、一二日ノ間ハ煩熱シ、胸脇ヨリ周身マデ疼痛セリ、輕ハ七八日、重ハ十數日、柴胡種類ニテ清涼シテ全治セリ、此亦先ダクテ浪華ニ行ルヽコト傳聞セシニ、間モナク都下ニモ及セリ、辛巳四年〇文政ノ春ノ疫ト相似テ稍重カリシ、

〔醫學天正記乾上〕傷風

慶長七年正月朔日

一德安內、七十餘傷風、寒熱戰慄、頭痛嘔吐有汗、脈浮緩、　解肌湯　桂枝湯ニ加陳半　寒熱退　冷汗眩暈、大便瀉難持、　加蒼朮參

〔醫學天正記坤〕傷風

一傷風、寒熱戰慄、頭痛嘔吐有汗、脈浮緩、　桂枝湯加貴守、寒熱退、冷汗出、眩暈、大便瀉、加參茋木、

〔醫學天正記乾上〕瘧疾

一陽光院殿、御年四旬五瘧疾三發、二日ニ一發、召予、依殿下之命在大坂、備前宰相公御內儀煩依テ也、故半井通仙軒御藥進上、服藥之後又三發、發日之朝、通仙截藥ヲ進上、色散藥也、服藥之後、半時許而心中悶々而精神如醉、一身斑紋出、吐血數碗、而經二時許而忽棄玉フ、通仙色ヲ變ジテ、山科藥ハ誰モ所持ナキヤト云、傍ノ人ノ曰、サタハ今朝ノ截藥砒霜ノ入タルナルベシ、惣別半井ノ家ニ瘧ノ截藥ノ秘傳ニ、砒霜ノ入タル丸藥アリ、是ハ粉藥也、丸藥無之故假ニ粉藥進上シテ如此、半

井流ヲ傳受シタル人語ラル、

〔春雨樓叢書三〕瘧

瘧をおこりと云は、時におこり、時に止むの俗語也、源氏若紫の卷には、わらはやみと云、もろこしにても、奴婢病と云、いやしき病なれば、大人は煩はぬ意也、續博物志に見えたり、又瘧。。。を愈す藥。。。を截藥。。。といへる。。。は、邪氣と正氣と出逢ふ道を、立切ると云意なるべし、

〔叢桂亭醫事小言二〕支體浮腫。。

一商人患疫、二三度下シテ愈ト云ヘドモ、餘邪二三度襲りて再復ス、後ニ戰汗シテ愈タレドモ、微邪ノコリテ餘熱サツハリトセズ、又柴胡加大黃ニテ漸ク治シタレドモ、日數延引シテケリ、食モナルニ至リテ、通身浮腫ス、他ニ苦ムコトナシ、身無微熱、行歩ニ力ノナキノミナリ、桂枝加苓朮湯ヲ與ヘ、二三日ニテ腫消シ、平復ス、

〔橘黃年譜下〕淺草司天臺伊藤鐵五郎、年三十、身發黃水氣アリ、煩渴甚シ、余茵蔯五苓散加黃連ヲ與ヘ、三聖丸ヲ兼用ス、數日ニシテ發黃消シ、水氣全ク去ル、

〔醫學天正記乾下〕黃疸。

慶長二七ノ五

一岡山中納言秀秋公、十八九歲酒疸一身黃、心下堅滿而痛、不飮食、渴甚、清心湯全當歸白朮散朮苓各三匁半二匁半西杏各二匁斤苓茵各一匁甘入姜、九日黃色少減、心中悸動、心遠脈遲、用養榮湯而效、

〔醫學天正記乾上〕中風。

天正十一年正月二日

一正親町院、俄中風、全不識人事、痰涎鋸聲、身溫、御脈浮緩、竹田定加法印傷寒申、半井通仙中風申、二

醫診候相違、于時予診之、而中風中、故通仙診候合被仰、先通仙御藥進上、一日一夜全不知人、通仙御藥調於、故予奉勅御藥進上、翌日四日始而識人事、漸々食進而平復、先蘇香圓進上、姜汁ニテトキタ、其後小續命湯二貼安、

(紫芝園漫筆八)中風卒倒、以白鴨頸血灌之極妙、有人但覺手指麻痺、日食白鴨子三歲乃愈、人家畜白鴨、常聞其鳴、亦可以防卒中云、鴨卽鶩、俗謂之家鳧、鴨子卽鴨卵也、食之者生熟任意皆可、

(享保集成絲綸錄三十九)享保二十卯年四月

覺

烏犀圓

右者、中風幷痰症等に用ひ候藥ニ而候、此度丹波正伯方ニ而調合致し、望之者江遣候筈藥目五匁ニ而代金百疋ニ而候、望之者は、築地飯田町前通り丹波正伯方江罷越相調可申候、

右之通、町中不殘入念可相觸候、以上、

四月

(醫學天正記乾上)卒。

慶長三年九月朔日

一今上皇帝(後陽成御年二十八歲)俄然而眩暈、食頃而甦、御脈沈細五動、左寸關有力、 順氣湯 八味順氣ニ加半夏、或用正氣天香湯、或二陳四君相合加莎宿、出入加減、二七日而未驗、自十五ノ朝竹田定加法印療之、自廿六日祥壽院瑞久法印療之、亦未效、自十月二日壺方院淨慶法眼療之、十一日夜半既絕人、諸醫指窮還、又仰予(今大路道三)治療之、先用眞珠丸、又麝香丸、次用蘇香圓、 御脈結濇、食不消、胸膈之間、御氣鬱滯、時々嘔噦、 調氣湯八解ニ加莎宿香入姜、 胸內煩悶加麥門節、間用砂安神丸、嘔噦未止、 安胃湯 大藿香散 蒼半朮各二匁 歸桔炒 參杞桂各一匁 甘姜棗、其間用養胃丸

小粒五十九、 嘔啘半退止、前劑用養胃丸、日三次、 嘔啘過半減、二陳ニ加連梔、並姜炒 或莎宿、或鷄蘂、或參朮、出入加減、其間用養胃丸、至十一月中旬平復、叙感之餘、賜白銀一千一兩、十二月二日

〔醫學天正記 乾下〕癇疾。

一今上皇帝、御年三十二歲 毎晨、心中鬱悶、如有物粘著、食後快然、而無人而獨居則精神沈困、 補心湯 實鑑沈香天麻湯、

〔醫學天正記 坤〕癲癇。

一廿歲之女子、去年九月產、而后在憂恐之事、今俄眩暈倒臥而不知人事、少時而甦、身冷唇青、脈沈伏如癇、沈香天麻湯、身冷鼻準甚冷、十五味用テ平復、

一大坂御局、十八九歲 癲發則手足無力、忽起欲走、心中如火燒、而手足冷、貴冷守星甕洞吉丹文各一戔甘三分 木辰各五分 姜入煎、加竹瀝姜汁監臥木辰、二味ノ末ヲ調服、

〔建殊錄〕山城淀藩士人山下平左衞門者、謁先生○吉益東洞 曰、有男生而五歲、痘而癇、癇日一發、或再發、虛尫羸憊、旦夕待斃、且其悶苦之狀、日甚一日矣、父母之情不忍坐視、願賴先生之術、幸一見起、雖死不悔、先生因爲診之、心下痞、按之濡、乃作大黃黃連湯飮之、百日所、痞去而癇弗復發、然而胸肋妨張、脇下支滿痘尙如故、又作小柴胡湯及三黃丸與之、時以大陷胸丸攻之、可半歲、一日乳母擁兒倚門、適有牽馬而過者、兒忽呼曰、牟麻、本邦甘美之味、總謂之牟麻、馬亦謂牟麻、國語相通、父母以爲過、願踊躍不自勝、因服前方數月、言語卒如常兒、

京師室街賈人升屋德右衞門家僕宇右衞門者、年二十有餘、積年患癇、一月一發、或再發、或不發、然間三月必發、先生診視之、胸腹微動、胸下支滿、有時上衝、乃作柴胡薑桂湯及滾淡丸飮之、時以梅肉散攻之、出入一歲所、不復發、

〔續建殊錄〕浪華伏見堀賈人平野屋某男、年十八、嘗患癇、發則鬱冒、默默微笑、懶與人應接、故引屏風垂

帳避人、蒙被而臥、方其時、大汗出大煩渴、飲渴水數十盃、小便赤稱之、先生診之、心下痞、腹中雷鳴、乃與半夏瀉心湯及紫圓、發則別服五苓散、大渴頓除、小便復常、續服半夏瀉心湯、久而頓減、七八年後忽慢停癥、

〔安齋隨筆 前編六〕一子癇(しかん)　懷妊の婦人、月數重りて、俄に氣絕し倒れ、眼を見開き、瞳子をつり上げ、齒をかみ舌を出し、手足を擧ひ動し、そりかへり、人事を知らず、癲癇やみの如くなるを子癇といふ、早く正眞の熊膽を濃く水にてときて口中へ入るべし、度々入れ、腹中へ納まれば、病しづまるなり、快くなるまで度々用ふべし、甚妙なり、予其效驗を直に見たる故、右の病する婦人の命を救はんと思ふ故、是れを記し置くなり、懷妊の婦人ある家には、かねて正眞の熊膽を求め蓄へ置くべし、急には得がたし、母に用ふる事なくても赤子に用ふる事あり、何も求め置くべきものなり、

〔建殊錄〕越中醫生某男、年三十所、發狂喚呼妄走、不避水火、醫生頗盡其術而救之、一無其効矣、於是聞先生之名、詳錄證候、要求治方、其略曰、胸膈煩悶、口舌乾燥、欲飲水無休時、先生乃爲石膏黃連甘草湯及滾痰丸雜之、服百有餘劑全復常、

〔金匱醫談 〕一禪僧年三十所、發狂、譫言妄實、自稱釋迦、自稱達磨、衆思癲癇、癇一月一發、或再發、發則苦楚呻吟、卒倒而不知人事、速則一時而蘇、遲則二時許而蘇矣、諸醫皆謂、令扁鵲百診、倉公千治、不可得治矣、其徒友有天龍師者、從余(○[illegible])學和歌、舊知余治不凡、强請治余、診之、心下煩悶、胸脅妨張、乃爲小陷胸湯飲之、又作前後七寶丸與之、一歲餘而狂全愈、癇不復發、今在永平寺中、而稱首座云、

〔建殊錄〕京師智恩街紙舖政右衛門者、病後怯悸、畏障戶之響、其所抵觸皆粘紙條防之、居常飲食無味、百事皆廢、然行步不妨、但遇橋梁、則乘輿猶不能過、百治無効、如此者凡三年、先生(○吉益東洞)診之、上氣殊甚、臍下拘滿、胸腹有動、心中不安、作桂苓朮甘湯及芎黃散、飲之數日、上逆稍減、又爲柴胡薑桂湯、飲之數月、諸證皆除、居二三日、家召蓋匠、政右衛門正立廡下、自指揮修葺、適有不如意、走而上屋就之、而不

知其蹈梯之易焉、久之自覺、語之家人、余聞之其家人云、

〔漫遊雜記　下〕有一男子、病氣疾、發則向壁而坐、食飲如常、大便五七日一行、傾語言動作、諸醫悉爲勞、余曰、是非勞、瘖癖也、以瓜蔕散、吐膠痰數升、後與蘆薈丸、毎日五分、毎月輪次、灸十三四五六七椎、數百壯、經三月、不復發、

〔醫學天正記　乾上〕中暑

一是菴、餘議二十暑熱、頭痛、發熱汗出衂血、尿瀉利煩燥、脈虛數、　清心湯　白虎ニ加朮芎　煩悶未止、夜熱甚、尿色少蒋、湯止大便溏、　補中益氣而熱退

〔醫學天正記　乾上〕中寒

一山田忠兵衞、壯男感增寒、足冷五六日不止、今濃瀉、　温中湯　五積ニ去奴〇中略

中濕

一深谷又右衞門、濕熱之證、及十一日大便溏、夜中讝言、目赤渴、脈弦實、　清心湯　大柴胡也　讝止熱未退、大便溏、　白虎ニ加參

〔本朝醫談〕東鑑建保二年二月己亥、將軍實朝源聊御病惱、諸人奔走、但無殊御事、去夜御淵醉餘氣歟、爰葉上僧正候御加持之處、聞此事、稱良藥自本寺召進茶一盞、而相副一卷書令獻之、所譽茶德之書也、淵醉の餘氣に良藥とて茶を進るを見れば、茶の酒毒を解する事知るべし、一卷の書といふは、即喫茶養生記也、茶の功能を擧たれども、元來醫家の書にあらざれば、もれたる主能もあり、大要をいへば茶は酒食の毒を解す物なり、酒食の毒のみならず、藥力をも解す、

〔醫學天正記　坤〕中毒

一壯男、中毒腹痛吐瀉、今止、胸中疼如刺、　和中湯回ノ方弓朮姜丹ニ陳貴大守令丹弓倉姜甘、

〔時還讀我書　上〕一商家ノ僕不良ノ事アリテ、鞭笞セラレ譴責ヲ蒙リシヲ深ク愧恥シテ、自盡セン

ト欲スレドモ術ナク、蜘蛛ヲトリテ烟草中ニイレ吸タリシニ、周身紫黑斑ヲ發シ、脹腫尤甚ク、前陰モ黑腫シテ恰モ馬陰ノ如ク、痛特ニ甚シ、予ヲ延テ診治セシム、其脈沈大ニシテ舌上黄胎アリ、不大便ニシテ飲食モ減少セリ、仍テ黄連解毒加犀角大黄ヲ與ヘシニ、五六日ニシテ斑減セリ、前陰ヘハ黑礬ヲ傅シメシニ、腫消シ痛モ去タリ、蜘蛛ハカヽル毒アルコトイマダ知ザリシ、

〔漫遊雜記上〕中河豚魚毒者、少覺慌惘、須直探吐、急服藍汁一盞、若人糞少許、若瓜蔕末一錢、須臾吐盡、則十治八九、

〔時還讀我書上〕森嶋保佑トイヘル女子ニテ産術ヲ業トスルモノ、先年鼠咬ヲ被リ、當時ハ何事ナク、凡五十日ヲ經テ、蜀椒ヲ喫シタルヨリ、乍發熱シ、咬處赤腫シ、二月ヨリ八月ニ至リ、遍身斑ヲ發シ、寒熱往來、遂ニ羸憊甚シク、一夕手足厥冷、氣息綿微、殆ド絶セントスルニ至ル、其父玄菴（醫ヲ津田玄仙ニ學ベリ）既ニ不治ヲ決シ、爲方ナク、看者ニ托シテ臥タリシガ、父子ノ情タヘガタク、蹶起テ診視セシニ、夜明ル頃、氣猶微續セリ、サラバトモカフモ神ニ祈ラントテ、神前ニ向ヒ、精誠ヲ凝シ、拜祈セシ時、一婢ノ貓ノ床ノ間ヘ糞セシヲ掃除セバヤト云聲ノ耳ニ入シカバ、フト心付テ暫ク其儘ニセヨト命ジ、拜畢テ急ニ本草ヲ撿スルニ、貓糞ノ鼠咬ヲ治スルコトアマタ載タレバ、是ナン神授ナラント、取收テ黑燒トナシ、麝香等分ニ合セテ丸トナシ、巳ノ刻ヨリ服セシメシニ、氣息ヤヽ勢ツキタ、申ノ刻許ニハ精神爽亮ナルニ至ル、續テ日ナラズ快復ヲ得タリ、此事奇ニ似タリトイヘドモ、其理ナシト云フベカラズ、且渠父子共ニ質直ナル人物ニテ、虚誕ナド構ベキモノナラネバ、其言マタ信トスルニ足レリ、

〔漫遊雜記下〕中蝮蛇及諸虫毒者、服雄黄、龍腦、麝香之類、爲可、嘗有一狂夫、性馴虫蛇、適遊叢祠傍、腕蝮蛇匹遊、攫取弄之、見咬左肘、須臾偃側、輿而歸、耳目口鼻悉飛黑血、舌上核起爲星點、毎點出血、急取鐵漿水二盞服、血不止、又與備急圓二分、下之數行、血不止、昏眩將死、於是末雞冠雄黄一錢、龍腦五分、以

白湯頓服、食頃血止、徐徐而復故、

〔俗説正誤夜光珠下〕金山の毒氣に中る説

すべて金銀銅山の坑の掘りやうにて、風の透ざるには、風ぬき穴を開けざれば、陰氣こもりて燈滅へ人斃るゝ事あり、これを俗に氣絶るといふ、これも亦右にいふ害の毒に同じ、又金銀銅山の烟瘴の氣に觸れ胃されて病む者の狀は、身の色黄ばみ、咳嗽いでゝ、痰粘く、漸々に憊れて、三つ輪ぐむやうに成るなり、此症に米の粉にてまろめたる團粉の鹽けなきを好む者は治せず、いまだ病せまらざるうちに、これを治する一方あり、解煙散といふ、(方ハ別に志るす)白湯に攪たて、日々に用て治すべし、

〔橘黄年譜上〕余一日喜多村氏ヲ訪ヒ、佐渡相川醫師瀧浪玄伯ニ會ス、其人ノ話ニ、金銀坑ニ入テ毒ニ中リタルモノヲ山氣ト名ク、其證肺痿虛勞ニ似テ諸藥効ナシ、唯薩州方言ギ。チ。ト稱スルモノ能コレヲ治ス、此品ヲ伍シテ製シタル煉藥ヲ救工丹(金銀ヲ掘ル者大工ト名ク、故ニ救工ト云、)ト稱ス、後佐渡門人山田某ヨリ、ギチ一塊ヲ贈ル、之ヲ有識ニ質スニ云、貝原花譜ニ土ヲ辨ズル條、ギチ一名カラウスツチ、筑前ニテカラムスヲ作ルニ、チバ土ノ代リニ用ユ、チバ土ハ黄堊ニ當レバ、ギチハ白堊ナラント云、

〔醫學天正記乾下〕虫。痛。

一則菴(姓男)虫痛、諸葯不効、　大風子(去油)爲丸用之、虫二條吐出而愈、

〔醫學天正記坤〕虫

一二十餘歲之男子、風勞、頭痛汗出、潮熱十餘日不退、盛芳院淨慶治之、至十日熱不退、熱來則頭痛汗出、心下衝上、予爲虫療之、先安蟲丸、次青共貴莎令守甘之類、用七八貼、而熱退汗止、虫定安、

〔療治夜話初編下〕治驗

八宮村久吉娘、十歳許リ、腹痛嘔吐ヲ患フルコト月餘、蚘ヲ吐スルコト數十條、食漸々減ジ、今ヤ絶粒トナル、腹痛益甚シ、診スルニ、腹中塊アリ、大サ椀ノ如シ、其塊物ヲ熟按スレバ、手ニ應ズル者アリ、恰カモ蚯蚓ノ如キ物アツテ、蠕動スルガ如キヲ覺ユ、是蚘無數腸胃ノ中ニアリテ塊ヲナス也、鷓鴣菜湯ヲ投ジ、鐵歩丸ヲ副用ス、爾後毎日蚘ヲ吐下スルコト數十條、遂ニ百餘條ニ至テ塊消シ痛ミ減ジ、食少シク進ム、形體羸瘦飢猿ノ如ク、面部足趺微浮腫ス、今ヤ虚ニ屬ス、然レドモ蚘未ダ盡ザルノ腹候ナリ、故ニ執シテ前方ヲ投ズルニ、毎日蚘ヲ吐下スルコト數十條、下蚘多ク吐蚘少ナシ、遂ニ又百餘條ニ至ル、爾後大便下利日ニ三四行、毎下腹痛ス、形體益羸瘦シ、面色痿黃シ、唇舌淡紅ニシテ、浮腫自若タリ、蚘ヲ吐下スルコト止ム、前後出ル處ノ蚘ヲ通計スルニ、二百五十餘頭ナリ、蚘ノ生々スルモ亦夥シキ哉、增損安蚘理中湯ニ轉ジ、椒梅丸ヲ副用ス、腹痛止ミ、下利減ジ、能ク食シ、周身浮腫加ハル、腹中虚脹シテ膨レ、蚘ノ腹候更ニ又アルコトナシ、是蚘蠱ナ虚脹トナルモノ也、香砂六君子湯加麥芽ニ轉ズ、爾後漸々腫消シ、下利止ミ、飲食常ニ復シ、形體モ亦肥ユ、久フシテ全功ヲ收ム、

〔秉芝園漫筆 八〕冷水解熱、勝於藥餌之力、故凡病有熱有火者、宜隨飲之、醫者多禁之非也、唯其水必當用新汲者、地中清氣無毒、若用熱湯、懸於中水、而冷者、則大寒有毒、

〔政事要略 九十五 至要雜事〕又醫疾令云、醫生既讀諸經、乃分業教習、〈中略〉三人學創腫、〈謂、創、與瘡字相通也、〉〈中略〉各專其業、

〔周禮註疏 一 天官冢宰〕瘍醫下士八人〈註、瘍創癰也、瘍音羊、創初良反、疏釋曰、案其職云、掌腫瘍潰瘍之等、故亦連類在此、〉

〈註、瘍創痍也、釋曰、案禮記上曲禮云、頭有創則沐、身有瘍則浴、案其職有腫瘍等四種之瘍、注、推則未必有膿也、故亦連類在此也、〉

〔嵩山文集 十五 序〕外科萬粹粗編序

古之瘍醫者、後世之外科也、趙宋之世、謂之瘍科、外科有內治、有外治、周禮云、瘍醫掌腫瘍潰瘍金瘍折瘍之祝藥劀殺之齊、此其外治也、又云、凡療瘍以五毒攻之、以五氣養之、以五藥療之、以五味節之、且以

酸辛鹹苦甘滑而養骨筋脈氣肉竅、凡有瘍者受其藥焉、此其內治也、素問曰、膏梁之變足生大疔、由是推之、陰陽不和之變、痰涎咳嗽之變、癥瘕諸蟲之變、酒色忿恚之變之類、皆足以生瘡瘍、不可枚擧也、是外科之書不可不多者也、

〔康富記〕嘉吉二年十月十七日甲辰、被語云、禁裏御腫物者癰也、腫物醫師久阿已下、一昨日十五日始拜見之、

〔醫學綱目十九疔瘡〕日本三藏傳疔瘡方、江子肉十粒、半夏一大顆、硏末附子半枚、羌螂一枚、各爲末、四味臭、(臨書也)相和、看瘡大小、以紙繩子圍瘡口、以藥泥上、又用絹帛貼傳時換新藥、以可爲度、此方活人甚多、

〔醫心方二十〕治服石癰疽發背方第廿二

千金方云、癰疽發背、皆由服五石寒食更生散所致、亦有單服鍾乳而發者、又有生平未服石而自發者、此是上世有服之者、其候稍多、

又云、養生者、小覺背上癢痒有異、卽取淨直水和作濕稔、作餠子、徑一寸半、厚二分、以鹿艾作炷灸、濕上灸之、一炷一易餠子若粟米、大時可灸、七餠若如楡莢大、灸七炷卽差、若至錢許大、日夜灸、不住乃差、

又云、恒冷水射之、漬冷石熨之、日夜勿止、待差住手、㕍氏論云、凡諸服草石散者、皆不可灸、身體令人喜發炎疽瘡也、若體有瘡不可溫治也、唯以水漬布沾之、燒李中人作膏、以摩瘡上、諸洗如故、薩侍郞云、若發瘡及腫、但服五香連翹湯等、(在小品治惡脈方)

又云、若腫有根堅如鐵石、帶赤色者、服湯、仍以小々艾炷當腫上灸、一兩炷爲佳、

〔喫茶養生記下〕瘡病

近年以來、此病發於水氣等雜熱也、非疔非癰、然人不識而多誤矣、但自冷氣水氣發故、大小瘡皆不負火、依此人皆疑爲惡瘡、尤愚也、灸則得火毒、卽腫增、火毒無能治者、大黃寒水寒石寒爲厄、依灸彌腫、依

寒彌增、可能可斷所、若瘡出則不問強軟、不知靑惡、牛膝根擣絞、以汁傳瘡、乾復傳則傍不腫、熟破無事濃汁出、付楸葉、惡毒之汁皆出、世人用車前草、尤非也、永忌之、服桑粥桑湯五香煎、若強須灸、依方可灸之、謂初見瘡時、蒜橫截、厚如錢厚、付瘡上、以艾堅押、如小豆大、灸蒜上、蒜焦可替、不破皮肉、爲秘方、及一百壯、即養火氣不答、必有驗、灸後付牛膝汁、幷可付楸葉、尙不可付車前草、付則傍腫、依不出惡汁故、日本多用車前草、不識藥性故也、可忌云云、又有芭蕉根、神効矣、竹[illegible]抄[illegible]也

〔牛山活套 下〕疔瘡

疔瘡ハ手足面部ニ生ズル者也、皆多ハ厚味ノ人ニ生ズル者也、殊外ナル急症也、先ヅ灸火ヲ用ベシ、痒キハ灸シテ痛ムニ至ル、痛ムハ灸シテ痒キニ至ルト云テ、灸ニ宜キ也、內藥ハ追疔奪命湯ニ加減シテ用ベシ、外ニハ蟾酥丹ヲ貼ヨ、又ハ疔ヌキト云、又ハ郡藥ト云藥ヲ敷クベシ、郡上大夫家ノ藥、五八霜　櫻木皮黑燒　熊膽　各等分ニ〆テ細末シ、猪ノ油ニテトキ、火ニアタヽメテ疔上ニ貼レバ汗出、其マヽ治スル也、其効如神、

〔本朝醫談〕朝鮮韓醫籍神應經序云、日本釋良心、以神應經來獻、竊傳其本國神醫和介氏、丹波氏治癰疽八穴法、これ文明五年の事なり、良心いふ、二百年前、兩名醫ありと、想に鎌倉將軍の頃に當るべし、誰なる事知べからず、神應經も彼國に絕たるを、本邦より渡してひろめしなり、良心法師の歌は、新續古今集に見ゆ、河上落葉といふ事を、淺川もみちふきこす木がらしに山もとくだるあけのそほ舟、作者部類、良心は左近將監秦久秋子と有、

〔黴瘡新書〕總論二十四事〇中略

七事曰、輕證〇中略者、宜用三稜鍼以取死血、刺之之法、當於死肉與平肉之際下鍼、不然則瘀血出少矣、又至其尤輕證者、取曲池與委中、宜間二三日若四五日刺之、不可日刺之也、如其重證者、非燒針則難收功矣、夫燒針之名、肇出於張仲景傷寒論、卽內經所謂燔鍼焠鍼之類、而主治風寒筋急攣引痺痛、或

癥塊結積、癰疽發背、癱瘓不仁等證、然後世此法不傳焉、惜哉、今余之所用者、頗與之異、其數十有三、而鋒長七寸五分、(卽用今之曲尺)尖如挺、其鋒員且銳、柄形六稜、長三寸、內一柄乃爲平頭鍼、(圖見後)凡製鍼、宜以柔鐵、必不可用銅鐵、其害不淺也、○中略

九峯曰、凡刺燒針、先以五斤炭火、按排大火盆中、除平頭針之外十二針、盡列於火上、緊火燒令通赤、然後周身壘圍中不留一處盡刺之、刺之之法、取一針刺一處、刺卒直反諸火上、又取次針刺之如前法、十二針刺卒、則再取反火上之針更刺之、不拘肉厚薄堅脆、經脈血氣多少、及禁針禁灸等輸穴、隨瘀血所在處而盡刺之、針痏其間、各相去如葱莖、凡所刺針孔、曾無有血流出者、又無有覺疼痛者也、燒針之法、須令一人向火扇之、手不可暫止、若炭火欲盡、則再加炭以扇之、針若不通赤、或遲寬而冷、則反損人、且不能去病也、謹之謹之、

〔察證辨治啓廸集 六瘡毒〕楊梅天疱瘡證治

楊梅瘡、或名綿花、近年以來極多、至今未息、世俗多用癘風之藥治之、但庸醫務速効、用輕粉丹麝等毒劑、幸而氣血實盛者、得愈無事、怯弱之人變生壞證、不知戒守、變成癘風、又輕粉多用、兼以麝香透入骨節、遂成風塊、經年痛痺膿爛、輕粉但量人虛實用之可也、

素無天疱楊梅綿花等瘡、近來盛行、閱諸方、皆無治法、惟丹溪通聖中、加減量人厚薄治療、得効雖遲、而病者、十無一瘥、世俗皆不遵用、惟口傳等授、不審虛實冷熱、遂以輕粉雄黃龍麝諸毒之劑攻之、殊不知此藥、(賦厚血實之人可庶幾、稟薄血少之人死期迫)也、

〔瘈狗傷考〕刺法第五

鋒針刺絡之術、用而奏奇功者多、余已有別論、此特抄記風犬一毒所用之一二、凡用鋒針者、如世所謂管鍼之法、管中容針、小露鋒頭、須銳意行之、心頭若有一點疑氣、則不得抵要處也、刺淺不及絡、則血不出、

凡怯弱者、鍼刺後多癲眩、宜令患者仰臥、是防癲之一策也、故刺委中之法、令側臥而後用針、則決無癲眩之患也、

凡刺絡、宜側鍼速而取之、鍼鋒刺絡則脫氣血難收、

刺尺中法

預設絹三疋用闊綿、長上五尺、闊一寸、縫如今婦人腰帶者爲佳、濯血器陶器佳也、須用白色者、便辨血色、酢五勺、爲眩暈者備之、而令患者端坐、將絹縛肘後、手伏高樹杖而用力、絡脈大張、乃眡血結處、加鍼、鍼鋒未拔、濁血迸飛、乃使人持陶器接受之、血出自二三勺至一二合、隨證各異、宜以血自收者爲度、若血量已足、或出鮮血者、須解肘後之縛、放杖力弛、則血乃止、用反鼻末少許撒鍼口上、紙若綿厭定之、而令安臥者可半時、宜避風露調養、若指頭妄按鍼口、絡脈動、則其口難閉、肉裏爲術瘡、凡濁血迸出時、有胸中懊憹如欲吐者、勿驚、是氣之開通也、若面色青黃將昏眩者、急依上法去縛絹、指頭徐按鍼口、別把綿漬酢、壓定鍼口、與患一飲、而令臥之密室則復、

〔本朝醫考 中〕外科

本朝瘍科凡有兩家、一稱高取、是本朝之所傳也、一稱南蠻流、出自西洋耶蘇之徒、專治癰疽疔癤瘰癧等諸瘡、

〔日本醫道沿革考〕兆村○今按ズルニ○中略天正慶長ノ間ニ至リ、播磨ノ鷹取秀次、古法ヲ傳ヘ得テ、外科綱選新明集ヲ著シ、當時世ニ著ル、是ヲ世ニ鷹取流ト云フ、其後漸々衰廢シ、同時吉益流、中條流等ノ金瘡醫有リト雖モ、皆式微振ハズ、

〔南蠻寺興廢記〕南蠻寺ハ、此群集ノ人ニハ耶モ構ハズ、洛中洛外ヘ人ヲ出シ、或ハ山野ノ辻堂、橋ノ下等ニ至ルマデ尋捜、非人乞食等ノ大病難病等ノ者召連レ來ラシメ、風呂ニ入レテ、五體ヲ清メ、衣服ヲ與ヘテ、コレヲ暖メ、療養シケル程ニ、昨日ノ乞食、今日ハ唐織ノ衣服ヲ身ニ纏ヒ、病モ自ラ

心ヨク快復セル類多シ、就中癩瘡等ノ難病、南蠻流ノ外療ヲ受ケ、數月ヲ歷ズシテ全快シ、誠ノ佛菩薩今世ニ出現シテ、救世濟度シ給フナリト、近國他國風說區々ナリ、故ニ諸國ノ大病難病ニ侵サレ、貧賤ニテ我力ニ叶ハザル者、或ハ諸醫ノ療養ニ治スルコト能ハザル者、貴賤共ニ南蠻寺ニ群集スルコト斜ナラザリケリ、コリヤリイス兩イルマン、悉ク是ヲ南蠻寺ニ留メテ、良醫ヲ施シ、醫療半ニ快復スル病人共ヲ率ヒ、是等ニ說テ曰ク、〇下略

〔蘭學事始上〕阿蘭陀船は御免有て、肥前平戶へ船を寄せぬ、異船御禁止になりし頃も、此國は、其黨類には非る次第ありて、引續き渡來を許され給へり、夫より三十三ヶ年目にて長崎出島の南蠻人を逐ひ拂はれて、其跡へ居を移せしよし、夫よりは年々長崎の津に船を來す事とは成りぬ、これは寬永十八年の事なるよし、其後其船に隨從し來る醫師に、亦彼の外治の療法を傳へし者も多しとなり、是を阿蘭陀流外科とは稱するなり、是れ固より、橫文字の書籍を讀て、習ひ覺し事にも非ず、只其手術を見習ひ、其醫法を聞、書留たる迄なり、最もこなたになき所の醫品多ければ代藥がちにてぞ、病者を取扱ひし事と知らる、

〔耶蘇天誅記前錄中〕耶蘇宗門制禁之大旨中

一元和寬永ノ年間トカヤ、京都ノ住人、外科ノ醫師慶友法師、吉利支丹ノ伴天連タリトイヘドモ、彼者外科ノ名人タルニ依テ、獄中ノ揚屋ニ差置カレ、禁中御病用アル時ハ、召出シテ治療セシム、又外科ノ術所望ノ者アレバ、其人ニ依リテ、重宗〇板倉是ヲ許シ、弟子トセシ故ニ、外療ノ傳ヲ受得タル者モ間有リシトカヤ、

〔蘭學事始上〕又古來、カスパル流といふ外科有り、これは寬永二十年、南部山田浦へ漂流ありし阿蘭陀船の人數の內、江戶へ召呼れたる中、カスパル某といふ外科あり、三四年留置れ、其療法を學せられし者もありしが、追々長崎へ御送りのよし、江戶並に長崎にても、正保の頃、此カス

バルより傳來の療方ありしを、詳なる事を知らすとも、後にカスパル流と唱ふる事と申す事にや、又別にカスパル姓の外科、渡來の事もありしか、此他長崎にて、吉。雄。流。など云へるは、其後渡來の蘭人より傳へ得たる療方も有て、吉雄流とも申せり、其諸家の傳書といふ者共を見るに、皆膏藥油藥の法のみにて、委しき事なし、斯の如き類にて、備らざる事のみなれども、其業は漢土の外科には大に勝り、又本邦の古へより傳りたる外治には大に勝れりといふべき歟、其中に、翁が見たる楢林家の金瘡の書と云ふものあり、其中に人身中にセイメンといへるものあり、これは生命にあづかる大切のものなりと記せり、今を以て見れば、是れセーニユーにして、神經と義譯せしものと思はる、わづかながら、これ程の事を聞書せしは、此書を始とすべし、

○下略

〔蘭學事始上〕一其頃〇寬永年間西流と云ふ、外科の一家出來たり、此家は其始南蠻船の通詞、西吉兵衛と云る者にて、彼國の醫術を傳へ、人に施せしが、其船の入津禁止せられて後、又阿蘭陀通詞となり、其國の醫術も傳り、此南蠻阿蘭陀兩流を相兼しとて、其兩流と唱へしを、世には西流と呼しよし、其頃は至て珍らしき事にて有ければ、專ら行はれ其名も高かりしゆへにや、後には官醫に召し出され、改名して、玄甫先生と申せしよし、其男宗春と申されしは、多病にて早世し給ひ、家絶えしとなり、是れ我祖甫仙翁の師家なり、其後召出されし、今の玄哲君の祖父、玄哲先生は、玄甫先生の姪の續なりとなり、右の玄甫先生初て西洋醫流を唱へられしより、公儀にも御用ひ遊されし事にて、阿蘭陀醫事御用に立し始なり、

〔皇國名醫傳後篇上〕西玄甫中略

玄甫善蕃語、爲和蘭大通事、雅好外科、師歸化番醫澤野忠庵、與忠惠交善、每相切劘、寬文中以事往江戶、見忠惠於殿上、退嘆曰、丈夫當如此、乃區々作蠻奴語而終身乎、移病辭職、徙于江戶、亡幾舉爲醫官、

進侍醫敍法眼、

〔先民傳 醫術下〕吉田安齋、字鉦豐、號自休、半田順庵之弟子也、順庵蓋本邑產、自幼篤志瘍醫、受業于澤野忠庵之門、慶元之間、遠入阿媽港、潤色其技、歸朝之後名聲大震、安齋壯歲、即師事半田氏、折肱斯道、盡得蘊奧、兼讀軒岐之書、與所傳者審同辨異、遂成一家之學、延請者無虛日、其回生起死不可枚擧、元祿甲戌終于家、

〔蘭學事始 上〕一又栗崎流といへるは、南蠻人の種子なりと、これは南蠻邪宗の徒、嚴禁となり、其船の渡海も御禁制となりたれども、以前は平戶長崎の地に、彼人々雜居し、妻を持ち子も有りしが、後々これをも吟味有て、蠻人の種子の分は、殘らず此地を放流せられしが、其中栗崎氏にて名はドウと云ふものは、彼地に成長しても、其宗には入らず、其國の醫事を學びしが、邪宗に入らざる譯を以て、歸朝を許され、召歸され長崎へ歸りし後、其術を以て、大に行れ、至て上手なりしが、人々栗崎流と稱せしよし、名のドウと云るは、蠻語露の事なるよし、後に文字を塡めて道有と認めしとぞ、今の官醫栗崎君の祖なるや、又別家の栗崎なるや、詳なる事は知らざるなり、吉田流檜林流など云るは、阿蘭陀通詞にて、彼方法を學び、一門戶を開きしなり、○下略

〔先民傳 醫術下〕栗崎正元、其先食土栗崎、地在肥後、父道喜生七歲、與乳母避仇于崎、居二年警覓之急矣、乳母遣道喜竊乘蕃舶遠走呂宋、年十四、留意於外科之術、努力八年、輒精其業、後思東歸、登賈船抵長崎、以良工見稱于國、仍姓栗崎氏、正元幼而雋悟、長益精研、道喜年已七十、口授以瘍醫要訣、正元乃取平日所聞于父者、集錄貽之子孫、正元術益熟、名益著、求療者輻輳于門、存濟甚多、慶安四年卒、子正家亦有名、

○中略

檜林豐重、善通蕃語、年甫十八、官擧爲荷蘭館小譯、乃寬文五年也、居二十一年、貞享乙丑累擢大譯、爲人溫順多能、頗精外科術、蓋從荷蘭之精斯術者傳焉、元祿戊寅年五十一、移病辭職、稱號桀久、以濟世

爲業、求治者必往、而不分貧賤、兄受、辭爲邪、故名重于當時、遠近之士從而受業者其如堵然、相稱曰楢林家流云、

（蘭學事始上）一桂川家の事は、今の代より五世の祖甫筑先生と申せしは、文廟〇德川家宣未だ藩邸におはせし時、召出されし御外科なり、其師家は、平戸侯〇松浦の醫師にて嵐山甫安と申たるよしなり、此甫安は、其侯より出島在館の阿蘭外科に御託し置れて、親しく學ばせ給ひしとなり、此御家は、平戸へ入津以來、彼國の事は、藥品有て御親しみ御自由なる事のよし、又其時代は今の如くにもなかりしにや、甫筑君其頃幼若にて、門人となり、師に附添て、出島へ時々參られしが、專ら嵐山の流法を傳へ給ひしとなり、阿蘭陀の外科は、ダンネルと、アルマンスといふ人ときけり、桂川もとは、大和の國の人にて、森島氏なりしが、嵐山の流を汲むといふ意にて、家名を桂川と改め給ふとなり、今の桂川君の御祖父甫三と申せしは、翁若かりし時、常に交厚かりし御人なりし故、此事語り給へるを、聞置き侍りぬ、これを世に桂川流と稱しぬる事なり、

（明良帶錄〇世編）桂川甫筑

外科の家にして、蘭學に達し、父箕裘を繼て、甫周は三國通覽之序を識し、六物新志、其外蘭學之書を著す、蘭學の名は人口に膾炙す、蘭品產物の會有り、外療家の秘訣を修す、六月十五日關帝の祭りに音樂を奏す、手付等有り、

（千重之比登遠）外療二家　長崎吉雄　紀州花岡瑞軒

（蘭學事始上）明和四五年の間なるべし、一とせ甲必丹は、ヤンカランス、外科はバブルといふもの來りし事あり、此カランスは、博學の人、バブルは外科巧者のよしなり、大通詞吉雄幸左衛門は、專ら此バブルを師としたりと、幸左衛門〇後耕牛、吉雄は外科に巧みなりとて、其名高く、西國中國筋の人、長崎へ下り、其門に入る者至て多し、此年も蘭人に附添來れり、翁〇杉田玄白夫等の事を傳へ聞し

ゆへ、直に幸左衞門が門に入り、其術を學べり、これによりて日々彼客屋へ通ひたり、一日右のパブル川原元伯といへる醫生の、舌疽を診ひて治療し、且刺絡の術を施せしを見たり、拐々手に入りたるものなりき、血の飛び出す程を預め考へ、之を受るの器を、餘程に引はなし置たるに、飛迸血てうど其内に入りたりき、是れ江戸にて刺絡せしの始なり、其頃、翁年若く、元氣は强し、滯留中は、怠慢なく客館へ往來せしに、幸左衞門、一珍書を出し示せり、これは去年初て持渡りし、ヘーステル人名のシュルゼイン外科治術といふ書なりと、我深く懇望して、境樽二十挺を以て、交易したりと語れり、

〔蘭學事始上〕一又年は忘れたり、一春かの幸左衞門、阿蘭陀附添にて參府せし頃、豐前中津邸にて、昌鹿公の御母君御座内にて、不慮に御脛を折傷し給ひし事あり、貴人の事なれば、大騷ぎにて彼是醫師を御招きの處、幸ひに吉雄幸左衞門出府居合候事ゆへ、直に御招きありて、御療治被仰付、御順快ありたり、此時前野良澤御手醫師の事ゆへ、懸合仰付られ、格別懇意となりたり、これ等蘭學の世に開くべき一といふべし、

〔皇國名醫傳後編下〕華岡隨賢子直平

華岡震、字伯行、通稱隨賢號青洲紀伊人、世業醫、震學于吉益氏、又從大和見水受外治、歷遊諸州、研磨其術、既歸鄕、內外合一活物窮理之說曰、方無古今、內外一理、泥古不可以通于今、略內不可以治於外、蘭醫密於理、而麤于法、漢醫精于法、而拘於跡、故我術考治於活物、出法於窮理、方劑不必局束於成規、而藥餌所不及、鍼灸治之、鍼灸所不及、腹背可刳、腸胃可湔、苟可以活人者、宜無不爲焉、於是用其意、製麻沸之方、號曰通仙散、値廢痼者、輒令先服之昏醉、然後下手、乳巖、骨疽、痔漏、瘰癧、癭瘤之類、衆不敢治者、皆劀刳洗湔、立刮去穢毒、從以膏湯、功績奇偉、稱爲華佗復出、

〔隨意錄四〕宋葉夢得、玉澗襍書云、華陀固神醫也、然范曄陳壽記其治疾、皆言、若發結於內、針藥所不

能及者、乃先令以酒服麻沸散、既醉無所覺、因刳割破腹背、抽割積聚、若在腸胃、則斷截湔洗、除去疾穢、既而縫合、傅以神膏、四五日創愈、一月之間皆平復、此決無之理、人之所以爲人者以形、而形之所以生者以氣也、陀之藥能使人醉無所覺、可以受其刳割、與能完養使毀者復合、則吾所不能知、然腹背腸胃既已破裂斷壞、則氣何由舍、安有如是而復生者乎、審陀能此、則凡受支解之刑者、皆可使生、王者之刑、亦無所復施矣云々、予謂、此論實是也、然史傳記事之文、間過飾辭以誤其實者、不唯此范曄陳壽也、

〔三國志魏二十九方技〕華陀、字元化、略中精於方藥、其療疾、合湯不過數種、略中若病結積在内、鍼藥所不能及、當須刳割者、便飲其麻沸散、須臾便如醉死、無所知、因破取病、若在腸中、便斷腸湔洗、縫腹膏摩、四五日差、不痛、人亦不自寤、一月之間卽平復矣、

〔日本醫道沿革考〕亮按ズルニ、略中古來我邦、外科書ノ完全ナル者ナク、其術亦隨テ世ニ明ナラズ、慶元以還、廣取、南蠻其他ノ諸流、稍ク世上ニ行ル、然レドモ或ハ古方殘缺ノ餘ニ出デ、或ハ洋醫ノ口傳手授ニ出デ、其術全體見ルニ足ル者ナシ、本邦此術ノ完全要領ヲ得ルハ、實ニ華岡青洲ニ至テ備ル、青洲、紀伊人、寛政享和ノ間、外科ヲ以テ天下ニ鳴ル、其術古今ヲ論ゼズ、倭洋ヲ問ハズ、術モ長アレバ之ヲ採リ、内外合一、活物窮理ノ説ヲ創ム、略中彼ノ麻睡劑ヲ以テ、乳巖、骨疽、痔瘻、癥瘕、癰瘤ノ類ヲ療スルガ如キハ、其發明中最モ卓絶ナル者ナリ、

〔息軒遺稿四〕館玄龍墓碑銘

北醫之精於瘍科者、曰館君玄龍、略中君幼而聰敏、年甫十四、學長沙氏之道於富山大野玄格、嶄然見頭角、年十九、欲游上國、益弘其道、而未得其方、有叔父祝髮居高野山者、曰本覺、與紀醫員華岡氏善、勸游其門、君大喜、治裝至高野、介其書執贄於華岡氏、當是之時、華岡氏之名噪於天下、從學者常數十百人、槩分内外、自外進内、未列内籍、不得親炙於先生、是以歷十年之久、有未得承聲欬者焉、而君一見進

内塾、昏願尤遲、日聞其内外合一、活物究理之説、見斷割刳剔洗浣縫合之術、退而思焉、進而質焉、黽勉淬厲忘寢與食、華岡氏每稱曰、起予者北洋子也、居八年、盡得其秘奥、戊寅秋、辭游於京師、歷訪諸名家、專講內科、明年二月東游江戶、亦如之、○中略晚年聲譽大起、沈痾奇疾求醫束手者、皆踰境輻湊於其門、君隨症施治、莫不立效、北人合口以稱曰、北洋先生今華陀也、

〔元治二年武鑑〕御外科 二百俵高 御番料百俵

坂本道景法眼　桂川甫周法眼　小堀祐眞法眼　村山伯元□　栗崎道有□

〔小右記〕治安三年九月十四日乙亥、從去夕頰腫、惡血之所致歟、相成朝臣、用蓮葉湯療治、又依夢想告、傳支子汁、宰相云、依賀事齋室被來、高野事延引者、以恒盛令占勘、云無祟、血氣相剋所奉致歟者、日者、蓮葉等湯頗温、以彼等洗頰熱氣發由有夢想、仍傳支子、亦冷蓮葉汁洗面、尤有其驗、　十五日丙子、僧等來、不相逢、面猶腫、療治、昨聊有減氣、　十六日丁丑余所勞面疵、似愈合、雖傳物藥、不傳肉合歟、可無瘢疵由、醫師幷人々所申也、日者以柳地地菘蓮葉等湯洗、而依夢想告、傳支子、又以蓮葉煮冷洗、而依面腫頗減、赤色亦宜冷治、已有其驗、依種々湯治熱發歟、

〔續古事談 五諸道〕後朱雀院瘡ヲヤミ給ケルニ、典藥頭相成ヨロシク成給ヘリ、水トヾムベキヨシ申ケルヲ、雅忠イマダ若カリケルガ、ミタテマツリテ、コノ御瘡イツ水トヾムベシトモミエズト申ケリ、其後、嵯峨ノ瀧殿ノ阿闍梨重源ト云モノハ、重秀ガ孫ナリ、ソレヲ召テミセ給ケレバ、雅忠ガ申ヤウニ申テマカリ出トテ、故資仲帥ノ五位藏人ナリケルニアヒテ、コノ御瘡イツ愈給ベシト云事ミエズ、雅忠心エタル醫師也、明日御胸ヤミ給バ、大事ナルベシト申ケリ、マコトニ御胸ヤミヲ失給ヒニケリ、カサヤム人胸ヤムハ、ヲハリノ事也トナム、

〔本朝醫談〕昔腫物の治法は、水をそゝぎかくるなり、其法は鷹取の書に詳なり、徒然草に雍疽をやむ者水に洗て樂とせんより、やまさらんにしかじ、是醫療の事にはあらねど療法にかよは

して見るべし、榮花物語、此時の事を載て云、いかにもむつかしうおぼしめし、御居立のありさまなど同じ事なり、日頃の過るまゝに茹水などいさせ給ひてよからんと申、いとさむき頃たへがたげに見えたまふ、

〔續本朝往生傳〕權大僧都覺運者洛陽人也、〇中略重癰疽發背、衆醫治之曰、已差、止水、重源闍梨〈道秀孫〉後到、見瘡以手扱所沃水見曰、此病未差、可待一時、到同未時遷化、念佛不亂、禪座而終、公家贈權僧正、

〔台記〕康治元年九月十八日丁未、召典藥大夫友光、令見癰瘡、明日可療治之由令申、侍從師盛癰瘡面及身多出來、醫方無術、件友光無程療治、實無疵云々、仍所召也、先日典藥頭重基朝臣、主計頭重忠朝臣等雖加療治、更以無驗、仍件兩人不召也、　十九日戊申、友光來、癰瘡付藥、〈巴豆合和他物〉今夜膿、左頸著也、先以刀摩瘡、令色赤著之甚痛、　廿二日辛亥、友光療所能膿、甚痛無術、　廿三日壬午、依友光申、今日初沐浴、付藥後初浴也、其後友光付藥、其色白、不知名、爲令早癒也、付之後無苦痛、神妙々々、浴後以桃柳鹽湯〈三物煎之〉洗之、付藥也、　廿八日丁巳、左頸〈友光曰瘡口也〉已癒、癰瘡削跡失了、又無疵、友光已末代藥師傑也、　十月十六日乙亥、胸腫癰瘡著藥、知光來著之、知光賜疋馬、依先々所著藥癰瘡平癒也、

〔皇國名醫傳前編中〕中原氏〇中略

中原友光、爲典藥少允、轉大屬、遷大允、藤原賴長患癰瘡、浸淫遍體、丹波重基、重忠治之無効、乃召友光、友光以巴豆等藥貼之、令膿潰、復以桃柳鹽湯洗之、隨貼末藥、旬日而愈、賴長謝之以馬、

〔玉海〕文治三年八月三日辛未、二位中將腫物、今日加針、侍醫和氣時成〈定成息〉候之、賜牛一頭、　十月十日丁丑、未剋許自院□告送云、自去夜御頸小腫物御坐、醫師奉付大黃云々、又定能卿告示同趣、仍假以院參中、時申斜也、以定能卿入見參口云、當時所付藥也□未分明云々、件卿語云、定成賴基貞宗等奉見、各申無口事之由、然而君御事以重療治可奉仕也、仍奉付大黃云々、而頗冷ル之由有仰、若是熱氣不嫌暈歟云々、

〔續古事談 五諸道〕醫師采女正盛親ガモトヘ、十七八計ナル女來テ、マヘノアナナシ、イカヾスベキト云ケレバ、コレヲミテ、チカラヲヨバズト云ケレバ、ナク〳〵カヘリニケリ、後ニ秀成ト云醫師コレヲキヽテ、ソノ女ヲヨビテ、針ノカタナニテ、カハヲサシキリタリケレバ、世ノツネノ人ノヤウニナリニケリ、希有ノ事ナリ、

〔後愚昧記〕應安四年二月晦日、申刻許、英職他界了、自去二十六日喉痺所勞出來、醫師宗俊(良俊入道子)致針治之間、於喉腫者聊雖得減、身體猶不被存命之條、不便之事也、年三十四歲也、

〔康富記〕嘉吉二年十月十七日甲辰、參清史亭、禁裏御不豫事、驚入之由申談、○中略有一盞、被語云、禁裏御腫物者壅也、腫物醫師久阿已下、一昨日十五日始拜見之、御療養難儀之由申之間、自管領留山方下鄕ト云醫師ヲ被召進之、御針ヲバ玉體ニ憚候間、如何可仕哉之由申、既下鄕欲退出之間、三條中納言、中御門中納言、中山中納言等談合アリテ、此事如何可然哉云々、清史同被參候云々、本朝針博士被置者、加樣時御用ノ爲也、何事々必不可進針之由可申哉、所詮爲權道之間、御針不可苦歟之由各評定被口、仍下鄕御針ヲタテマイラスト云々、本道之醫師中、當時無針之名譽可云道之零落歟、

〔醫學天正記 乾下〕諸瘡

一奴源右衛門、唐瘡一身ニ出テ、後左足膝ニ穴アツテ久不愈、黃汁出、先黃連ノ末ニ輕粉少加テ入之、數日而水多出、穴少開後、　黃丹　梹歎芎ノ末ヲ入テ卽愈、

〔幕朝故事談〕公方家

氷川明神は、紀州樣の氏神にて、惇廟田安樣皆御宮參被遊候、德廟龍飛後大乘院と云上方の古寺號を御買せ被成、御建立にて觸頭に被仰付、大乘院へ夜盜入候節、自分背を切られ、女房も手を負候を、西元晳と云外科にかゝり平愈いたし候處、三年程過、右盜賊牢舍いたし、段々致白狀候處、大乘院へ入候事申候に付、大乘院評定所へ引出され、御尋の處、左樣の義、一切覺不申候段申之、背を

ぬかせ候處果してきず有之候に付、盗賊對して御仕置片付、其事御代參の女中へ、大乘院より物語候處、上の御耳に入、痼をとり候儀、相尋候樣にと被仰付候て、とり候樣申候に付、御代になり、西元皆一時に被召出、四百俵被下、

〔漫遊雜記上〕乳岩不治、自古然、而和蘭書中有言曰、其初發如梅核之時、以快刀割之、後從金瘡之法治之、斯言有味、惜余未試之、書以告後人、

〔牛渚漫錄二〕人肉補人

陳藏器曰、人肉治羸疾、自是閭閻相效、割股以博孝名、在我邦亦有為利割股者、一富商患廣東瘡、鼻劇落無形、瘍醫割自己股肉以還其鼻、麻線縫之、封以膏、獲巨金、蓋以肉補肉、漢土亦有之、姑妄聽之云、大學士溫公言、征烏什時、有驍騎校腹中鉛刃、醫不能縫、適生俘數回婦、醫曰得之矣、擇一年壯肥白者、生刳腹皮、羃於創上、以匹帛纏束、竟獲無恙、創愈後渾合為一、痛痒亦如一、公謂非戰陣無此病、非戰陣亦無此醫、信然、晁亭詩話云、吾墜馬、腦髓迸流、神魂飛越、蒙古神醫丞以牛腦實之、即以生牛胃首、使異氣殺而不洩、三月而能起立、然記性頓減、前後如兩人、余惜不以人腦耳、

〔陸軍歷史五鐵砲鑄造〕鐵砲治療書出板之義申上候書付　江川太郎左衛門中略○

銃創療治之道未ダ其理ヲ究メザルヲ憂ヒ、大槻俊齋ヲシテ、銃創ノ療方ノ一冊ヲ編セシメ、銃創瑣言ト名ヅケ、自ラ〇江川太郎左衛門其序ヲ撰ブ、序略〇

〔醫心方十八〕治湯火燒灼方第一

病源論云、凡被燒者、初慎勿以冷物、及井下泥、及蜜淋搨之、其熱氣得冷、冷却深搏至骨、爛人筋也、所以人中火湯瘡後、喜孿縮者、良由此也、

〔松屋筆記七十一〕やけどの妙藥

湯火傷(ヤケド)には、木瓜の水を傳れば速に痛去りて平愈す、そは赤くなりたる胡瓜をきざみて、磁器に

金瘡科

貯れば、皮粗などは底に沈みて、上は清き水になれるを用る也、いく年ふとも氣味損することなし、其功能妙なり、また海膽の醬を傳るもよし、

〔松屋筆記 八十六〕焦爛治方

同〈○清暁雜記〉六卷廿三丁オに人被火燒皮肉焦爛出蟲如蛆者用杏仁爲末敷之卽愈、

〔拾芥抄 下末 養生〕治鼠咬方〈同方（藤原象賢抄藥方）云、麝香塗帛上貼咬處、〉

〔耳嚢 五〕鼠恩死の事 附鼠毒妙藥の事

西鄕市左衞門といへる人の母儀、鼠を飼ひて寵愛せしが、如何しけるや、彼鼠右母儀の指に喰付しが、殊の外痛みはれければ、市左衞門立寄て憎き事かな、畜類なればとて、日比の寵愛をもかへり見ず、かゝる愁をなせる事こそ、不屆なれとて、打擲なしければ逃失ぬ、其夜母儀の夢に、かの鼠來りて、右指へ白躑躅の花の干たるを付れば、立所に鼠毒を去て、愈るよしを述て、右白つゝじの花を、枕元におくと見て夢覺ぬ、驚きさめて枕元を見れば、有し鼠は死て、白つゝじの花をくわへ居ける故、右の花を指の痛に附しに、立所に腫もひきて、快くなりしとなり、

〔雲錦隨筆 四〕蜈蚣のさしたるには、活蝎を摺つくれば、痛み直ちに治す、又酒を熱く煎て疵をあらへば、忽ち熱氣さりて痛みを止む、

〔本朝醫考 中〕外科

本朝自古尙武、故戰場以先登爲士林之勤、依之每戰蒙創者多矣、故瘍醫雖兼治金瘡、又在士林專攻其術者巨多、號曰金瘡醫、吉益流中條流之類是也、以其術推廣之、兼治婦人產前產後之疾病、

〔通俗編 二十一 藝術〕金瘡醫　龍韜王翼篇、方士三人、主百藥以治金瘡、　晉書劉曜載記、使金瘡醫李永療之、按、今謂之外科、

〔伊呂波字類抄 人體〕瘡〈キズ、亦作創、爲刀所傷云金瘡、〉　瘕　疵　疪〈キズ、黑病也〉　傷　痏　痍　戢〈已上〉

同、瘢也、　痕キズトコロ　瘢　瘡　瘍已上同

〔下學集　上文體〕金瘡キンサウ

〔覆載萬安方一〕第二十四卷　金瘡門キンサウ　疵也并竹木車馬墜傷折等、

一金瘡血不止、　二金刃傷中筋骨、　三金瘡煩悶及發渴、　四金瘡中風水及痓、身不動也
名破傷風、又云破傷中風也、　五金瘡腸出ハラワタ　六毒箭所傷日本附子矢同此條也　七箭
鏃金刃入肉　八竹木刺傷肌肉不出　九治金瘡大散方可用方腸出　十傷折墜落高處
車馬　十一湯火瘡并灸瘡不瘥方

〔醫心方十八〕治金創方第五

病源論云、夫被金刃所傷、其創多變動、若按創邊、干急肌肉不生、青黃汁出、創邊寒清肉消臭敗、前出赤血、後出黑血、如熟爛者、及血出不止、白汗隨出、如是者多凶、若中絡脈、髀內陰股、天窻、負角、橫斷、腓腸、乳上乳下、及與鳩尾攢毛少腹尿從創出、氣如貧賤及陰出、諸創如是者多凶少愈、

〔安齋隨筆二〕金瘡藥方

金瘡名人近江國大膳亮家傳

人參二匁カツレヲ去　川骨五匁皮ヲ削去酒ニクヾキザミ　熟地黃三匁　川芎二匁　白芍藥二匁酒ニアツケ黑皮ヲ去
牡丹皮二匁外ノ皮ヲ削去　肉桂三匁酒ニツケ黑ノ所ヲ削去　甘草五匁上皮ヲ削去

右剉ミ合香色ニ燒リ、一包七分宛、如常煎ジ、手負ニ用ユ、メマヒヲ直シ、ソリケ不來、

〔瘍家須知六〕金瘡打撲の心得を說中略

また金瘡を洗に、むかしより火酒を用ることなれども、洗ときに劇痛堪がたきのみならず、暑月は、膿やすくして、大に可からず、それよりも、石灰を水に攪て、その澄清を以て洗かたが、血の止ことも速にして、痛も少く、且愈ることも早し、それは新汲水二三升に、石灰を兩手にて二掬許も投、攪

て後、澄清し、細絹にて濾て、直に用ふべし、必温るにおよばず、これを一外科には、秘傳の水藥といひて稱用しが、近來喎蘭醫の單の水を用ると聽て、それに效ことになりぬ、これ、予が思ふ旨と、符合せることにて、石灰の水藥に比ては、水を用るかた、大に利ることあるなれども、俗人は、金創を水にて洗といはば、必訝ていはん、洗ところの水が、創口より入て、破傷風にならんかと、これ決してなき理なれども、醫士にも、左か謬慮する輩のなきにあらねば、その嫌疑を懼るものは、この水藥を用ふべし、たゞかの火酒を用ひて、金創を洗て、空に患者を苦痛せしめ、且後害を爲こと多に比ては、其功尤優ることなり、故にその弊を救んが爲に、これらの説にも及べるなり、水療俗辨の中にも、此事を論じたれば、宜併考べし、さて深き創處は、小兒の玩具に用る竹にて造たる喞筩などを用て、創口へ彈射て洗も可、外科には、すぽいと、いひて、鍮銅にて製たる筒を用、これその洩血を、微も中に遺ときには、必膿潰ざれば、愈ることなきが故に、愼で之を洗去ることなり、もしかかる器もなきときには、よく其創脣を左右へ開て、旁人をして、土罐にて灌て、洗もまたよし、預白き棉布を、創の大さより、四五分許も長く裁て、それを、鷄子白に蘸おきて、さてよく洗たる後に、創脣を婦女子の衣裳の破裂を緝補るやうに、心を定て微も參差なく、齟齬ぬやうに牢合て、ありあふ椰子油、猪脂、または麻油やうの物を、脣口へのみ塗て、その兩方へ、この鷄子白に蘸たる布を亘て、その上より、また〳〵木綿を摺て、水と醋を等分に合たるに打濕て、創上に壓定、さて縛綿を施なり、木綿を縛には、始終創脣の齟齬ぬやうに、緊からず、緩からぬやうに、木綿の無益に重疊ぬやうに、徐々と微も浮氣ことなく、心を臍下に在て靜に縛了べし、

〔渡邊幸庵對話〕一昔血留などゝ申事稀也、血止草などを用ひて事濟けるが、秋は手疵負たるには、澀柿を嚙くだきて付たるがよし、血止となり、痛を去りて、早く疵を愈しける、今はいろ〳〵藥あり、然ども昔の澀柿の功程成を不見、澀柿は側にありても、血不止と云説あり、勘辨すべし、

〔宮川舍漫筆 四〕切疵奇藥
何草にても、三品一所に採て、其液を草の儘付る、卽時に愈る事妙なり、但しひな草一種は除て、其餘は何草にてもよろし、
右は、我等昔請せし折、大工の手傳、過て怪我せし處、この大工すぐ樣草三品一所に採、疵口へすり付候處、見る間に血とまり愈たり、此者いふ、我生れし田舍にては、切疵いかやうの深疵にても、この三品の草にて速かに愈るなり、何草にても宜しと、實に手輕の仕方故しるす、
右の外にも種々の名藥あれども、其場にて用ゆる事ならず、藥種調合のうへの藥なれば、是賣藥に類して、手重なれば略す、
〔雲萍雜志 三〕蘇鐵の葉の枯たるを黑燒にして、胡麻の油に和し、たくはへ置べし、金瘡切り疵にはいかほどのことにても、酒にて洗はずに愈ること妙なり、楠正成が家の法なりとて、左海大松屋のあるじ、予に傳へたり、予が友中根彌次郎といふもの、遺恨によりて切られし時、ふかさ四寸ばかりの疵口へ、この藥をつけて忽に全快せり、
〔本朝醫家古籍考〕金瘡療治抄
此書一卷寫本ニテ四天王寺文庫中ニアリ、相傳ヘテ楠公自筆ノ本也ト稱セリ、怪ムベキ樣ナレドモ奥書アリ、如左、〇中略
金瘡書ニ畠山氏之傳ト稱スル物(又吉益流トモ稱ス)世ニ多シ、何ノ時ニ成リタルヤ詳ナラザレドモ、何レ戰國ノ物ト見ユ、又上州富岡ト云ヘル所ニ、武田家(信玄ヲ稱ス)ノ金瘡書ト云フ物ヲ藏スル人アリ、甲櫃ノ中ヨリ取出シタリト云、此類モ又マヽアリ、又產前後金瘡ノ類ヲ血ノ道ノ七氣ト稱シタ、古クヨリ一家ノ事ト成リシ、其治方ヲ載セタル書マヽアリ、多クハ皆二三百年許ノモノナレドモ、猶古クヨリ傳ヘシモ有ベシ、

整骨科

〔時還讀我書下〕近日西洋ノ外醫シーボルト、巧手ノ名アリテ、京寓中、醫者病者來聚テ市ヲナセシニ、東都ヨリ歸途、關驛ニテ、甲必丹ノ失足墮損セシカバ、シーボルト服藥數貼術ヲ盡セシニ、効アラズ、再ビ京ニ入リテ、發足ノ期モ遲延シ、京醫ノ蘭ヲ唱フルモノ、日々環視スルノミニシテ、倶ニ技窮ゼシトコロ、青貝屋武右衞門トイヘル骨董アリテ、難波骨ツギ山口滿二ナルモノヲ伴ヒ來リテ、診察セシメシニ、渠一診シテ、コレシキノ輕患ニ、イカナレバ數日治功ナキ事ゾ、某ガ術ヲ行ヒタランニハ、三日ニシテ全癒ナサシメント、大言ヲ吐タリシカバ、サラバトテ、蘭人モ治ヲ乞シニ、果シテ其言ノ如ク、三日中ニシテ、脫然ト治癒セシメ、亟ニ崎嶴ニ還ルコトヲ得セシメタリ、〇中略滿二ノ技、外國人ノ眼ヲ驚セシ、實ニ愉快トイフベシ、此丙戌九年〇文政ノ春ノコトニテアリキ、

〔拏法圖解〕天神眞揚流　當流ノ祖ハ、磯又右衞門ト云フ、〇中略門人本間氏其宗ヲ得、其門ニ香川爲春トイフ者、其奧旨ヲ究メ、安政年間舊江戶麴町五丁目ニ住シ、特ニ接骨ノ妙ヲ得、

眼科

〔政事要略九十五至要雜事〕又〇醫疾令云、醫生既讀二諸經一、乃分レ業教習、〇中略二人學二耳目口齒一、各專二其業一、

〔異疾草紙〕ちかごろ、やまとのくになるおとこ、めのすこしみえぬことのありけるを、なげきゐたるほどに、かどよりおとこひとりいりきたり、あれはなにものぞといへば、我は目のやまひをつくろふくすしなりと云、いゑあるじさるべき神佛のたすけかとおもひて、よびいれつ、このおとこ、めをひきあけて、よく〳〵見て、針してよかるべしとて、針をたつ、いまはよくなりなむとていでゝいぬ、そのゝちは、いよ〳〵見えざりけり、ついにかためはつぶれはてにけり、

眼科諸流

〔本朝醫考中〕目醫

本朝目醫其家傳者多、特推二馬島良峯一以爲レ勝、馬島者尾州馬島藏南坊僧、遇二異人一傳二奇方一、四方患レ眼者、悉到二彼寺一求二療養一、今直呼稱二馬島一、城州良峯成就坊僧亦如レ此、其外佐々木、青木、須磨、穗積等、作二一家一者不レ爲レ不レ多矣、

〔雍州府志六土産〕眼目藥　眼科醫有數家、佐々木、青木、間島、須磨、穗積、祐乘坊、泉南界海乘坊等是也、各住京師、曾良峯源算上人製眼藥而救之、彼寺僧到今製之、凡僧徒之療眼疾者處々多、

〔一話一言六〕眼科

尾州に明眼院中嶋百石といふ寺あり、眼科馬島流を傳ふるもの、此門に入て方を受る事也、眼科の書に龍樹眼論といへるもの、あの方にても絶てなき書と見へたり、近頃明の保光道人の龍木論などいへる書も、これらによれるにや、馬島といへる文字も、疑らくは龍樹といへるによりて、馬鳴の字の體近きによりて、附會せるか、眼科の書は、袁學淵が眼科全書和刻あり明の末の王協約菴が眼科全書、京本眼科百効全書、銀海全書等也と、東都四谷目醫馬島玄仲尾州醫官の物語なり、

〔杏林叢話〕張貴孟二、寛僧、善醫、尤精眼科、朝鮮之役、二人爲我軍所俘、貴字甘子、號提山、豐太閤遣歸國、二寛改稱武林次庵、直取其本邑爲氏、明曆三年歿、其孫爲赤穗侯臣、死節、所謂武林唯七也、

〔杏林叢話〕筑前陶村醫生養朴、以眼科聞于西海、常盛水於盆、浮髮於其內、以燔針刺其髮、髮兩斷于左右、曰不如此、則不能刮眼中之筋膜、其子學之數年、其髮雖兩斷、水有微聲、父曰有聲者不可刮眼、其人不堪痛苦也、

〔元治二年武鑑〕御眼科二百俵高御番料百俵

土生玄昌法眼　渡邊雄伯

〔日本醫道沿革考〕亮按ズルニ、中略我邦古昔目醫ノ稱アリテ、是ヲ以テ專門ト爲スガ如シ、然レドモ中世以後全ク其傳ヲ絶シ、亦秘籍ノ傳ル者ナク、今ニ至リ其療法ノ如何ヲ知ル可カラズ、慶元以還、醫學興起スルニ隨テ、世上往々是術ヲ以テ業ト爲ス者アリト雖モ、皆是レ家傳口授ニ依リ、從來ノ局方ニ泥ミ、一モ取ルニ足ル者ナシ、蓋シ此術ノ世ニ明ナルハ、獨逸人西保爾多シーボルトヨリ傳ル者多シト云フ、西保爾多、文化中蘭人ト冒稱シ、長崎ニ來ル、頗ル良醫ノ名アリ、高良齋、



眼病施術圖（異疾草紙所載）

士生玄碩等之ニ從テ、專ラ眼科術ヲ修ム、文政ノ末年、西保爾多ノ獄起ル、二氏同僚二十三人ト逮捕セラレ、連坐獄ニ下ル、已ニシテ赦ニ遇ヒ、西保爾多國ニ歸ル、良齋業ヲ大坂ニ開キ、玄碩ハ江戸ニ開ク、東西共ニ名ヲ齊ウシ、門戸ノ盛ナル、一時其比ナシト云フ、是我邦眼科專門學ヲ以テ世ニ顯ルヽノ始ナリ、

〔靑囊瑣探 下〕眼疾

眼疾有眼科、而先哲既備、故各師、或爲一百六十證、或爲七十二證以論之、獨明傅仁字著審視瑤函、定爲一百有六證、而其所論、按候察法、覽形辨色、詳悉無遺、又鈎割針烙之治、藥劑補瀉之法、條斷森々、以餞其要、業斯道者、不可不讀者也、在本邦亦精其治術者、往々有焉、或針瞳子而出膿、或刺眼胞而放血、或浸銅器於鹽湯以熨眼內、或灸眼珠等之事最能工、其術有志之士、宜就而學焉、

〔醫學天正記 中〕眼目

一若君樣左之眼蓋赤、又黑白之門不分明、洗肝明目散、追弓赤芍蝉退文丹石羌芸荊荷羌蔓菊白蒺少決吉甘、各等分

〔牛山方考 中〕一雀目ノ症、とりめ廣天民ノ說ニ、肝不足、脾土有餘ノ候トス、是必ズ雀目ノ症、多ハ黃眼ニ變ズルヲ以ノ故也、世醫此說ニ本ヅキ、四物湯ニ平胃散ヲ合シテ用ユル者アリ、百ニ一驗モナシ、余〇香月按ズルニ、雀目ノ症或ハ胃虛弱ニシテ陽氣不升ノ候ナリ、故ニ大病ノ後、或ハ少壯ノ人色慾過度シ、必ズ此病ヲ發ス、沖和養胃湯主之、其効如神、和俗雀目ノ病ニ、鯽ノ子ヲ鹽辛ニシテ用テ必ズ有奇効、蓋鯽性ハ熱ニシテ、子ハ發生陽ノ氣ヲ含蓄スル故ニ、此物陽氣ヲ上升シテ、其効如神、可秘可秘、

〔橘黃年譜 下〕四谷園部左京室、姙娠數月、雀目ヲ患ヒ、醫之ヲ療ジテ愈エズ、余鷄肝丸ヲ與フ、一週ニシテ愈、後外感ヲ得、表邪解スルノ後、虛熱煩渴、咳嗽殆ド勞狀ヲ見ズ、余〇淺田宗伯人參當歸散加五味

子ヲ與ヘ、數旬ニシテ熱解シ、咳止ミ、精氣大ニ復シ、分娩常ノ如シ、

〔時還讀我書上〕青木侃齋ノ說ニ、鰻鱺ハヨク脾胃ノ運化ヲ健ニスルモノ也、眼病神水ノシマリアシク、瞳子ノ散ゼントスルヲ治スルニ、鰻鱺ヨリ善ナルハナシ、審視瑤函ニ、神水不足ハ啻ニ腎虛ノミナラズ、胃虛ヨリ來モノ多トイヘルハ、信ニ然リ、馬島流ノウナギ藥トテ、車前子一斤、使君子五兩、蕪荑人二兩、肉豆蔻三兩ヲ黑燒ニシテ丸トナシ、每夜臨臥ニ鰻ト同食セシムル方アリ、脾虛ノ眼病ニハ妙劑也、蕪荑ヲ去テ散藥トナシ、蒲燒ヘ糝シテ食ハシム、尤妙也、每小串二本ヅヽ、脾疳ニモ亦効アリ、車前子ノ濕熱ヲ除ヲモテ主トスル也、故ニ此一味ヲ用テモ佳也ト、

〔病間長語三〕諸生の業は、眼目に係れり、病夫幼より、時に眼を患ふることあり、眼目を治するを業とする醫家に謀りしに、眼睛を保つことあたはず、數ならずして、爽明せんと云り、その時は、いまだ先母の在りしが夙に起て、鹽を以て嗽ぎ、これを吐て、掬して眼を洗べしと訓玉へり、それより十有餘年、今日に至るまで、一日も洗眼せずと云ふことなし、眼を患ることも、前に減じたり、後この方を、本草鹽の附方にて、見たることあり、

〔明良洪範續篇十三〕松平伊豆守、眼ヲ煩ハレシ時、本覺ト云ル目醫師ノ、藥ヲ用ヒラレ、段々快氣ニテ最早登城ヲモ致サルベキ時ニ、本覺ニ申サルヽハ、我等眼病大方愈タリ、去ナガラ、此寒氣、外ヘ出候ヘバ、其儘淚出、又少シノ風ニモ、淚ヲ催シ候ト有ケレバ、本覺申ハ、夫ハ上ノ目ノヨク成候故、上目ハ常ニ淚グミ、寒暑ニモ、必淚洩レ候也、血氣ツヨキ故ニ、斯ノ如クニ候ト、追從心ニ申ケレドモ、萬事ハ一理也ト、豆州申サレ、扨醫ノ道ハ知ラズ候得ドモ、考フルニ、上ノ目ト云ハ淚モ出ズ、又乾モセヌガ上ノ眼タルベシ、淚ノ出ルハ、乾クヨリハ增ナルベシ、去ナガラ目ノ事ハ、格別ナリヤト申サレシカバ、本覺赤面シ、扨々御尤ト申シケル、

〔譚海九〕今時は、すべて技能の事も精密になりて、入眼、入鼻などいふ事を考へ出し、かたわなる人

も、療治を得れば、平常の人に異なる事なきやうにみゆる也、番町の御家人何がしの息女、片目あしかりしを、入眼せしかば、よき目よりはよくみなさる丶やうに成たり、但それしりて心をとめてみれば、人見のはたらかざるゆへ、入眼の事とはしらるれども、うちつけにしらぬ人の指向ひたるには、さらに入眼成とも見わけがたきほどなり、其のち、此息女かたわをかくして、媒介によりて、婚娶の事さだまり、縁付たりと云、又大門通に、馬具のあたひを請取に行たる歸路に、夜陰、盜賊にあひて切付られ、にぐるとて鼻を切落されぬ、にげ歸て、いそぎ入鼻の醫師を覓て、療治せしかば、木をきざみて、鼻の形になし、付そへたりしに、元來の鼻の色と少もたがふ事なく、寄特成る事に、人もあさみいひたり、但酒徒成故、沈醉におよぶときは、顏色あかく成にまたがつて、鼻の色ばかりかはらず、たしかに入鼻わかれて見えたりとぞ、

〔政事要略 九十五至要雜事〕又◯醫疾令云、醫生既讀諸經、◯中略 二人學耳目口齒、各專其業、

〔萬安方 二十九耳門〕論曰、腎氣通於耳、心寄竅於耳、氣竅相通、若寛闊然、音聲之來、雖遠必聞、若心腎氣虛、神失守、氣不宜通、内外窒塞、斯有聾聵之病、經所謂五藏不和、則九竅不通是也、

又曰、耳聾之證有二、一者有腎虛精脱而聾者、其候面色黒、二者經脈氣厥而聾者、其候耳中煇々焞々、或耳中氣滿是也、審而治之、

〔看聞日記〕應永廿三年四月廿六日、御所樣◯後小松此間御耳ホヽメキテ不聞、昌耆有御尋、龜ヲ水ニ洗テ、アヲノケテ、鏡ノ影ヲ令見之時、小便ヲスベシ、其シトヲ良藥ニ合テ、御耳ニ可入之由申、良藥獻之、仍宇治川之龜ヲ捕、如然鏡ヲ令見、則小便ヲ出ス、醫師如申也、最重事歟、

〔渡邊幸庵對話〕一石龜の小便、耳のきこへ不申に入候へば能候、此龜は龜甲有之にて候、此小便を取申候には、龜の口へ山椒を一二粒入候へば、其儘小便をいたし候、

〔牛山活套下〕小兒雜病

大人小兒共ニ耳聾ノ症ニ、鵜鶘ノ油ニ、磁石、麝香少許ヲ入テ、煉合テ錠子トナシテ、耳內ニ入テ、口中ニ生鐵少許ヲ含ムコト三五度ナレバ、其効如神、右ノ錠子ヲ綿ニ裹ミタルモ吉シ、右ノ方ハ本草綱目ノ鵜鶘ノ條ノ發明ニ見タリ、鵜鶘ノ脂日本ニナシ、中華ヨリ長崎ニ來ル、サレドモ甚稀也、河內國ニ鵜鶘アリト云人アレドモ、其實否ヲシラズ、此方耳聾ヲ治スルニ十ニシテ八九ヲ治ス、先師元釜老人此油ヲ蓄ヘテ、耳聾ヲ治スルノ名ヲ得、其後此油ヲ求得ズ、石龜ノ尿ヲ取テ麝香ヲ加ヘ、右ノ方ノ如シテ口中ニ鐵ヲ含スレバ其効如神、是亦一奇方也、可秘、

〔醫學天正記坤〕耳病

一三河守樣、御耳ノ內痛、膿出、今止晡時熱、頭痛汗出、小柴胡ニ加莎芎、

一一男、耳聾鳴手振、諸藥不効、清聽丸一劑而瘥、貴鹽水洗炒　赤令青守柴梢　汝彭蔓吉蝎去毒　菖蓮、各三分　生耳一分　酒粘丸、菉豆大、每服、一百二十丸、茶漬送下、

〔醫學天正記乾下〕耳

一松平三河守、十二歲、除侍從、耳中痛膿出、出止晡時潮熱、頭痛汗出、　淸肌湯　小柴胡ニ加莎芎、

〔牛山方考中〕一兩耳鳴、耳聾スル者ハ、酒ト厚味ト胃火ヲ動スガ故也、酒傷ニヨラバ、葛根、枳實、青皮、荊芥ヲ加フ、食滯ニヨラバ、木香、山査、酒製ノ大黃ヲ倍加ス、其効如神、經曰、頭痛、耳鳴、耳聾、腸胃所生也ト、信哉此言、

〔橘黃年譜上〕北新堀街後藤弘三郎妹於八百、年十六、幼ヨリ聤耳ノ患アリ、兩耳膿水淋漓、時トシテ臭氣近ヅクベカラズ、左耳之ガ爲聾ス、嫁期已ニ迫ルヲ以、衆醫ヲ迎テ之ヲ議ス、余曰、胎毒ノミ、緩攻シテ其毒ヲ盡スベシ、主人其言ヲ諾ス、因テ葛根湯、加芎黃ヲ與、五味鼹鼠丸ヲ兼用スルコト數月、膿水漸少ニ臭氣去リ、左耳近ク辨ズルヲ得タリ、無幾シテ地割役所樽三右衛ニ適ス、

〔牛山活套中〕鼻病

鼻痔ハ貼火也、實スル者ハ、防風通聖散ニ加減シテ用ヨ、虛弱ナル者ニハ、升麻葛根湯ニ當歸川芎連翹酒芩防風山梔子ヲ加ヘヨ、有効、外ヨリ燔針(ヤイバリ)ヲ用テ燒切ベシ、杏仁ノ皮尖(トガリ)ヲ去テソヾ泥トナシ、絹ニ包テ鼻中ニ入ヨ、有神効、

〔醫學天正記坤〕諸瘡

一女子、鼻中生瘡、右寸關之脈浮實五動、二八流氣去主、加汶洲竟桑門貴莎苛忍、

〔政事要略九十五至要雜事〕又典藥令云、醫生既讀諸經、乃分業教習、中略二人學耳目口齒、各專其業、

〔雍州府志六土産〕齒牙藥 丹波康賴之孫俊雅、任近江掾、其子俊通爲侍醫、敍從五位下、聽牛昇殿、自茲代々醫術爲業、任典藥頭爲施藥院使、二十五世孫賴元有數子、山城州人賀茂玄秦依與賴元爲親族、養其子傳醫術、是號兼康、治諸病、特得秘齒牙之術、自茲爲治口舌之醫、賴元嫡流絕、兼康孫子今連綿、然不稱賀茂氏、直以兼康爲號、仕公方家、近世避御諱稱金保、在京師者以兼康稱之、

〔皇國名醫傳後編下〕多紀永壽院

多紀元德、字仲明、通稱安元、號藍溪名醫康賴之裔、高祖元泰自別族爲金保氏、始以口科仕神祖、及父元孝、請改今姓、復內科、

〔人倫訓蒙圖彙二〕齒醫師 本朝にをゐて、青陽の初に齒堅の祝、是齒を養、長生をことぶくのはじめなり、金康をもつて齒醫の家とす、此家に屠蘇白散の法つたはりてあり、

〔本朝醫家古籍考〕兼康口科書 一卷

兼康ハ兼觀ノ四代前ニテ丹波家也、此書多ク世ニ傳フ、

〔玉海〕壽永二年閏十月十八日己卯、女醫博士邦基來取姬君幷中將等齒、 又主稅頭定長來之、見醫書等、下略

〔沙石集七〕齒取事
南都ニ、齒。取。唐。人。有キ、或在家ノ人ノ、慳貪ニシテ利潤ヲサキトシ、事ニフレテ、アキナヒ心ノミアリテ、得モアリケルガ、虫ノクヒタルハヲトラセントテ、唐人ガモトヘユキヌ、齒一ットルニハ錢二文ニサダメタルヲ、一文ニテトリテタベトイフ、少分ノ事ナレバ、タヾモトルベケレドモ、心ザマノニクサニ、フットー文ニテハトラジト云、ヤヽヒサシク論ズルホドニ、オホカタトラザリケレバ、サラバ三文ニテ齒二ットリ給ヘトテ、虫モクハヌヨニヨキハヲ、トリソヘテ、二ットラセテ、三文トラセツ、心ニハ利分トコソ思ケレドモ、キズナキハヲウシナヒヌル、大ナル損ナリ、是ハ申ニヲヨバズ、大ニオロカナル事、ヲコガマシキシワザナリ、

〔吾妻鏡十四〕建久五年九月廿六日癸丑、齒御勞事、爲被尋療法於京都醫師、態所被立飛脚也云云、
十月十七日戊戌、齒御療治事、頼基朝臣注申之、其上獻良藥等、藤九郎盛長傳進之、彼朝臣者參河國羽渭庄、爲關東御思所、令傾知者也、

〔花園院御記〕正和三年二月六日庚申、此日裏書依齒痛、召仲景朝臣令見、申云、只口熱也、非別事云々、全成朝臣所存、以同前、仍不及取齒之由、兩人申之、先年齒痛之時、不取齒者可惡之由、冬康朝臣令申、仍今度以兩人令治定、篤基朝臣依所勞不參、英成朝臣、長直朝臣療治、院御疱瘡之間不召之、

〔醫學天正記坤〕口唇
一新庄越前守、小性口中爛痛、淸胃湯六、此等分付藥、釜底黑、
一倉橋内匠舍弟、服輕粉而口中破損、砂金一兩水煎、而冷含之後、兵斤廿右末而傳、

〔醫事漫錄三編〕與大塚子裕
足下牙病快否、得無廢嘯歌乎、僕有治方、嘗獲于芙蓉禪師、蒺黎子丁子各一錢水煎、頻々含之、試之甚効、今記之以呈足下、綠州圖文稿卷之五

入齒

(守貞漫稿五生業)矢師
齒ヌキモ此一種也、大坂ノ松井喜三郎、江戸ハ長井兵助、玄水等最名アリ、喜三郎ト兵助ハ、人集メニ、高三方等ヲ積累テ、其上立テ大太刀ヲ拔キ、或ハ居合ノ學ビヲナシ、玄水ハ獨樂ヲマワシテ人ヲ集メ、齒磨粉及ビ齒藥ヲウリ、又齒療入齒モナス也、

(明良洪範四)家光公ハ、江戸ノ事、別シテ委敷知シ召ルレ共、何事モ上ヨリハ仰出サレズ、善惡共老臣ヨリ言上スレバ、其事ハ斯コソ聞居タレト、老臣ヨリモ委敷知シ召レケル、或時、山本源右衞門ト云江戸一番ノ強レ者有テ、御仕置ノ義ヲ申上シニ、其者ハ能キ男ニテ、向齒一枚欠テ、銀齒セシト仰セ有シニ、男振ハ仰セノ如ク能キ男ニ候、向齒ノ所ハ、如何存ジ申サズト申上ルニ、其者ノ事ハ、八年以前ヨリ存ジ居タレド、若氣ノ事故、直ルベキヤト思居タリト仰セラレテ、切腹仰付ラレタリ、後ニ見ルニ、仰セノ如ク、銀ノ入齒有シトナリ、

(市中取締書留十ノ四二十一)乍恐以書付奉願上候
一本石町三丁目林藏地借、入齒渡世金三郎奉申上候、(中略)
嘉永七寅年八月廿八日(署名及宛名略)

古事類苑

方技部十二

醫術三

〔政事要略 九十五 至要雜事〕又(○醫)疾令云、醫生既讀諸經、乃分業教習、(中略)三人學少小、(謂、六歳以上爲小、十八以上爲少也、言專治小少、因異成人、故云少小、)

〔醫心方 二十五〕小兒方例第一

小品方云、黃帝云、人年六歳以上爲小、十八以上爲少、廿以上爲壯、五十以上爲老也、其六歳以還者、經所不載、是以乳下嬰兒病難治者、皆無所承案也、中古有巫妨、立小兒顱顖經、以占夭壽、判疾病死生、世相傳有少小方焉、

今案、大素經云、小兒初生爲嬰、能咲爲孩兒、

〔通俗編 二十一 藝術〕大小方脈 內經、醫凡一十三科、第一曰大方脈、二曰小方脈、按、大方脈謂雜醫科、小方脈謂小兒科也、

〔叢桂亭醫事小言 五〕小兒

小兒醫ハ昔ヨリ啞科ト喚フルハ、病狀ヲ告ルコトナキ故也、今ハ專門アレバ、其經驗多キコトニナリ、予(南陽原)ガ覺タルヲ以テ、人ニ示サンコト思ヒモヨラネドモ、一二ヲ語ラン、夫小兒ニハ、疳ト云病ヲ常病トス、是ハ甘ヲ食テ發スル故ニ、疒ニ从テ疳ト云ハ、正字通ノ說也、本邦ニテハ、古ヨリ疳ヲ忌ナ、兒ノ初生ニハ、必カニ小紋ト云テ、積雪草葉ヲ染テ、產衣ニスルハ、疳ヲ除クノ緣ニヨル事、

東門隨筆ニ見エタリ、カニトト云コトハ疳ト云コト也、ニトントハ同字ニテ、ハネテヨメト云タメニ、ニヲントト書キタリ、○中略疳バ、ヲ、カニバ、ト云、カニ小紋ハ疳小紋也、○下略

〔備急千金要方 五上少小嬰孺方〕序例第一 五條、方二首、○中略

又○小品方曰、小兒病與大人不殊、惟用藥有多少爲異、其驚癇、客忤、解顱、不行等八九篇、合爲此卷、下痢等餘方、並散在諸篇、可披而得之、

〔察證辨治啓廸集 八小兒〕瘵兒醫難之說

小兒方序曰、古人云、寧望十丈夫、莫望一婦人、寧望十婦人、不望一小兒、何也、蓋小兒謂之啞科、疾痛不能言、精神猶未備、形聲音未正、脈理猶未全、所以難理者、語不能問其得病之由、脈不能診其必然之理、況臟腑虛實、更變易如反掌、主治者苟有毫髮之差、以致千里之謬、

〔萬安方 四十六小兒〕小兒八痢

八痢者有三說、茅先生曰、小兒生下至十歲、痢疾分八種、一赤痢、臟府積熱、二曰白痢、藏府積冷、三傷積痢、其糞内一半以土色、此本因乳食傷、四驚積痢、其糞夾青沸也、因驚客忤積至此、五脊瀝痢、時下五色不定、不喫乳、又名五花閉口痢、此五臟積毒、孔竅不開、六藥毒痢、所下如魚腦漿、本因患痢久而成、醫人下藥不對、故名藥毒積痢、七鎖口痢、都不下食、常引水喫、秋後脾虛、又名調灌瀉、凡治得痢又瀉、治得瀉又痢、此是大腸滑脾虛熱、又臟中有熱毒、積而成熱毒、八風毒痢、所下痢如青草汁、又或如赤小豆汁、時時自滴瀝、脾虛受風熱毒而成、此般痢、十中無一生惡候、

〔辨醫斷 上〕初誕

夫產娩誕育、乃造化自然之道、非人之所強爲也、故初生嬰孩、儻有積毒、自當逐之、逐毒之法、當隨兒之強弱、毒之淺深、旋量乃藥、消息與之、要不害其生氣而已、否者不必用藥可也、又吾邦習俗、有生下至二三日、尙禁與乳者、亦非良法也、何則兒之在母腹所資自養、實在母之血氣耳、一至分娩、已離母腹、弗資

乳哺、安由接生耶、但初生擾亂、神質未定之際、姑少待之爲得耳、倘或生子稟弱質薄、且遇大寒大熱之時、則尤當不可遲疑也、否則不任時氣酷烈、反致生氣頓衰、不可挽回者亦有矣、余在長崎時、季夏得一女子、生至二日、乳忽不下、余作鷓鴣菜湯、阻滯乳、煮甚白、卽灌之、因嘔粘涎極多、乳遂得下矣、後隔兩日忽又不下、且見神色頓衰、氣息無幾、因意此必非前日之由、乃稟氣怯弱、不任時氣蒸熱、傷元氣而成然也、遂濃煮獨參湯、乃絹裹作小包、仍蘸本汁、徐々絞入兒口、則時有涓滴落咽矣、如此半晌、始見舌有轉掉之狀、余於是乎、喜出望外、乃教乳母將乳就口微絞、則亦時自嚥矣、由是或乳或藥、遞用不綴、乃見神氣漸發、生色漸回、飮乳復如故、而獲甦矣、又有一婦、曾產二子矣、生後不出七朝、無故皆發病死、及孕第三子、余乃教之曰、見生一臘、勿與婦乳、必別尋無病婦人有孕者、則飮之、彼如其言、兒果獲全、爾來有生子不育、每用此法、活者甚衆、蓋新產之際、乳性悍烈、初生軟弱、不能運化、因發暴病、致夭折歟、又有一兒、生至七八日、大腑不通、因致滿氣、促乳不下、脈勢甚危劇、余因急取備急圓、酒解半粒、直灌之、大腑一通、諸症頓然、是以初生孩提、調理得法、自可保全者、若惟攻擊是務、其不速斃者鮮矣、可不愼哉、(受胎說見二附錄一)

〔醫學天正記 坤〕小兒

一御鍋樣、(四歲)胎疳、潮熱搔目鼻、眼中青弱角、鼻上有青紋、齒黑斷出、赤泡多、地骨皮散、六參此令守廿胡黃連丸、(方在二醫)

〔安齋隨筆 二〕クロモジノ木、皮ヲナリ、木ヲ剉ミ、煎服スレバ、積痞ヲ治ス、又小兒ノ疳疾、婦人頭痛ヲ治スト云、妙也ト云、用ヲ驗ヲ試ムベシ、

〔寬永系譜 宇多源氏 三百九十五〕吉田　宇多天皇十代の孫、佐々木吉田六郎嚴秀九代の後胤なり、

德春(略)○註 ― 宗林(略)○註 ― 宗忠 ― 淨林(略)○中 ― 周三(八十一歳にして死去)

宗忠 ― 宗桂(意安) ― 友佐

宗活

機庵と號す　法橋　天正十九年五月六日、洛陽に生る、十五歳より、施藥院宗伯、壽命院立安にしたがひて、醫術をまなぶ、みづからおもへらく、當世名醫、その人に乏しからず、しかれども小兒の醫となるものすくなし、こゝにをひて洛の妙心寺にゆき、庸山禪師にしたがひ、小兒の醫をまなびて、はなはだ勤たり、庸山小兒の醫術をもつて時に鳴、その學、渭竹よりあひつたふといふ、元和三年越後の少將光長、三歳のとき、疳痢をうれふ、諸醫をまねきこれを療すれども、數月にをよびてしるしあらず、ときに台德院殿○秀忠德川板倉伊賀守勝重に命じ、京洛の兒醫をして、これを治せしめたまふ、こゝにをひて、宗活その撰にあたり、越前にゆき、醫を獻する事數貼にして平復あり、○下略

〔山城全州墓碑銘集大成儒及醫部四〕仙壽院山科厚安墓誌銘在洛東眞如堂

君諱厚安、字元温、號南渊、藤原姓、山科氏、世幼科醫、○中略延享元年、君年十六、召診諸皇子、因親其才識、明年賜法橋位、與父同升諸朝、三年、皇太子○桃園登祚、父宗安告病辭職、勅君代父調進御藥、通賜父祿廿口糧、○中略皇太子踐祚、掌御藥如故、隨例給廩米百囊、九年上既長、大移倚藥于體療、因增賜十口糧、以賞阿保功、宿直診御如故、安永二年、上患痘、令君調進御藥、皇太后亦發痘、召君監視藥餌、七年掌長公主醫藥、明年今上入承大統、君專掌御藥、隨例給廩米百囊、君勞病不起、天明元年辛丑八月五日卒、距其生享保十四年己酉正月十五日、享年五十有三、○中略歴事四朝、奉事六宮、除病喪服外、夙夜在公、外朝內庭服其才能、是以爵祿日進、恩賜無算、今古醫官不登卅、掌御藥不踰卅、陞法印位者、以君爲初、不亦榮乎、○中略

天明二年壬寅秋八月五日　父執　張藩醫官勝惟寅誌銘

義子　御醫法橋悰安建石

〔中條流產科全書序〕夫婦人有經產也、事世是爲難厄矣、故自古醫有十三科、而大科爲其最、亦別設婦。

○人科、以別于其數、雖均之可任大科哉、其所以別之者、以有夫經產故也、蓋以、雖常產難澀日久、則母子驅命迫於旦夕、當是之時、有良醫、則一治而兩全矣、豈大科止救一人比哉、況又至若王氏線產、楚氏頓產之類、其無楽者、不能治也、是乃在十三科中、其任莫重焉、其功莫大焉、恭惟、本邦泰平之化盛行、殆乎二百年矣、武靈布、文露沈、百家衆技、林々然起、其中有中條氏存焉、以善治產難鳴、固非虛名也、今也其徒數十百人分處海內、而教其難者、指不勝屈、一日書肆酔墨齋袖一帙來、請予曰、吾書梓村山氏所撰中條產書小冊、大行于世、今復欲壽梓其後編增補、希公校正之、予於是喜其傳不朽、校正之家藏書、間亦傍加私論、以發揮之、蓋其爲書、不必依古人方論、皆書一家經驗、以鄙語、是以大方之家多不信也、雖然予屢試之極効、則是書有大補於濟世者可知已矣、是配之十三科中之書、又何疑之有、故今丞以序而還之云、

皇和寶暦改元年　　旭山戶田齋○津人撰誌

〔醫心方二十一〕婦人諸病所由第一

千金方云、論曰、夫婦人所以有別方者、以其血氣不調、胎任、產生、崩傷之異故也、所以婦人之病比之男子十倍難療、若四時節氣爲病虛實冷熱爲患者、與丈夫同也、唯懷胎任挾病者、避其毒藥耳、

又云、女人嗜欲多於丈夫、感病則倍於男子、加以慈戀愛憎嫉妬憂恚深著堅牢、情不自抑、所以爲病根深、療之難差、故傅母之徒亦不可不學、

小品方云、古時婦人病易治者、嫁晚、腎氣立、少病不甚有傷故也、今時嫁早、腎根未立而產、傷腎故也、是以今世少婦有病必難治也、早嫁早經產、雖无病者亦夭也、

〔志都の石屋下〕扨婦人ハ、十四五歳ニナルト、其ノ精ガ漸クニ熟成シテ、經水ノ通ズルコトハ、一體婦人ノ血ハ、本ヨリ胎兒ヲ養ヒ育ツルガ爲ニ、男子ニ比シテハ、自然ニ多ク生ズルデコザル、夫ユエニ孕マヌ時ハ、其餘リノ血ハ經水ト成テ瀉去リ、其餘ノ血ハ子宮ニ連ナリ有ル處ノ靜脈管カ

產科婦人科諸流

ラカエリ流レテ、常ニ身體ヲメグリ養フコトデゴザル、又女ノ胃ハ穢ガ多ク、ヨク食物ヲ消化シテ滓ガ少イジヤガ、凡テ女體ノ男子ト違フ處ハ、ミナ兒ヲ養フガタメノ故デゴザル、サテ婦人ノ療治ハ、男子ヨリモムツカシク、又ヤモメ女ノタグヒハ、別シテ仕ニクイ訣ガ有テ、夫ユヱ醫書ニ、寧醫十男子、莫醫一婦人、寧醫十婦人、莫醫一小兒トモ云ヒ、マタ療孀婦尼僧異妻妾トモ有ヌ、マタ其婦人ヨリ、小兒ハ一段ムツカシイコトデコザル、

〔千重之比登逸〕中世醫士

中條帶刀　豐臣秀吉公ノ臣、兵ヲ用ルノ暇、醫術ヲ好ミ、婦人科ヲ以テ稱セラル、本味一方ヲ定テ、一二味加減シテ諸症ヲ治ス、遂ニ一家ノ風ヲ起ス、

〔皇國名醫傳前編下〕安藝氏

安藝守定、其先出於安藝平氏、因氏焉、善女科、延文中、室町幕府室紀良子娠矣、療之擧男、是爲將軍義滿、因割其邑封之、又奏爲侍藥、嘉慶中、敍從四位上、任大膳亮、子孫繼業、宮中治產、皆屬于安藝氏、初守定詣春日祠、通夜有祈、時有一女子求治、守定爲施鍼與藥、女病頓除、喜而謝恩曰、妾猿澤之龍女也、荷君厚惠、無以爲報、妾有靈方、願以相贈、乃遺一卷去、明早視之、治產方也、旁留龍鱗三片、守定異之、試其方、莫不有驗、遂得女科之名云、子貞守刑部少輔、子守家、歷大膳亮刑部少輔、永享中、療幕府室重子產、效、乃賜作州弓削莊、子守宜、歷左京亮刑部少輔、子守貞、子貞德、並左京亮、子貞家、歷左京亮大膳亮、天文中削髮曰宗榮、子貞像、子貞種、並歷大膳亮左京亮、子貞俊、亦大膳亮、天正中、豐臣氏辟掌後宮醫藥、其孫道受、通稱好庵、從曲直瀨道三而學、承應中擢幕府、醫考、吉田宗桂孫長因、稱大膳亮、後敍宮內卿法印、專療婦人、不知與安藝氏同流邪、姑書俟考、

〔千重之比登逸〕產療三家　賀川子玄　蛭田　兼子玄隣

〔皇國名醫傳後編下〕賀川玄悅　蛭田玄仙

中古治創家有血顆七氣之稱、以產亦屬血併治之、吉益中條二氏、其最顯者也、吉益有半笑齋、中條有帶刀、而其術不詳、今世女醫穩婆、率稱中條流、或有支派存者、然多不過冒其名、實非有正傳、盡治產之術、至賀川玄悅蛭田克明、而備矣、

〔退閑雜記 十〕蛭田玄仙となんいふものは、棚倉領の產なり、產醫と稱す、予〈定信〇松平〉が領へもきたりければ、人して尋させけるが、言葉もつたなく、才もなく、學もなければ、かの產論などもてたゝくに、こたへつまびらかならず、たゞ臨月にあたれば、いつにても、產させぬるも、又は月をのばしぬる事も、予術の症なんどを委しぬるも、みなし覺たり、たゞ語りては、いひ盡しがたし、いまにても妊婦あらば、來てこそみすべしとのみいふ、予きゝて、かの輪人の輪けづるなり、喋々利口にまされる事遠かるべし、いかでいやしむべきとはいひける、又よくその事わきまへたるものが、きゝけるに、これはことに感じたり、かの產論に不及は、斷臍の術のみにして、その餘は大にかのものゝひらきし事多し、產させぬるは、產門より胞衣をきるを破水の術とす、忽ち產するなり、臨產はらいたみ、腰いたむは、自ら胞衣きりたさの餘りに、體をさま〴〵にするのみなり、こなたより胞衣をさけば、破水して忽產するに難なし、また血暈の症なんどは、いとたやすき事にいふなり、小腹のわきより動ありて、その動登れば、血暈す、一指もてその動をおさゆれば血暈なし、されば產して橫臥する事なんどの論にもいたらず、一指もて血暈をとゞむる事なれば、すべて深く論せず、太古の風ある醫なり、かの口いふ事あたはざれども、その不可をしるといひためるは、千言萬言費したるよりも遙にまさりぬるなり、いかでかうやうの醫をあなどるべき、

〔子玄子產論 序〕我先君東洋先生、猶吾技之頽壞、排闢世醫、以立古醫道矣、余〈東門〇山脇〉也少小與聞之、尙矣、既而聞城南一賀街賀川子玄翁者、善醫產之術、然其事奇險、難乎談議焉、亡幾先君逝矣、余小子、嬛嬛在疚、益恐斯道之墜廢、〈〇中略〉及此時、翁之名益顯、遂介以得見翁、爲人忠實任氣、初以鍼術爲業、大見

推用、會其鄉家有横產者、乘醫束手、主人謀之翁、翁有奇構救之、於焉慨然謂、大凡横逆產者、究非藥石之所治矣、乃淵慮沈思、發推明其術、而其業大成矣、概其術從古所無、而其所識發、亦拓開由來陋習、傚然睥睨古今、自以一家樹立也、實可謂曠古一人哉、而有貧窶孤寡之疾病、則必匍匐就事、尙且爲之施與、必救其急患、卽雖貴富輿載之招、有毫髮不容於其心、則亢眉不肯顧焉、又見華言巧飾之徒、則煮燎以弄之、亦詬厲以勦其趣操焉、以故人或稱之、爲狂爲癡、而能知之者、如子之慕慈母也、此蓋與世醫之壞々務味世路、衒售虛技者異、而名聲所以籍甚也、近者著其所持論、及治法藥方四卷、名曰子玄子產論、請序於余、余時應若狹侯之求赴小濱、診理旁午、不遑筆研、雖然以余與友盟加有啓沃之誼、不可以辭焉、因姑記其梗概、表白其操行與世醫決絕、而鴻業所以大成者、見此書者、擯棄自來之陋弊、蕩滌流浴之垢穢、取之左右、以期要於功實之上、則古醫道之崇、蓋亦可以裨益云、

時明和乙酉秋八月、東都醫官平安橘陶書于若狹之客館、

〔叢桂亭醫事小言 一〕醫學 ○中略

子玄子一タビ出デ、千古ノ惑ヲ解テ、天下始テ產乳ノ理ヲ知ルコトヲ得タリ、○中略 子玄子ハ、產論ニ小傳アリ、ソノ神奇ノ事ハ、今贅スルニ及バズ、其術ノ始ヲ語ラルヽヲ聞ニ、コノ時ヨリ此事ヲ考ツケテ、此術ハ始タリト、一々ニ奇異ナルコト、人意ノ表ニ出ヅ、只文字ノ無キ人故ニ、其事皆俗事ヨリ發スレドモ、暗ニ紅毛ノ說ニ符合スルハ、天ノ告ルニ、子玄子ヲ以テセル歟、其頃ハ、紅毛學今ノヤウニハ行ハレザル時ナリ、又常ニ語ラク、往時ハ寒窶ニテ、古銅鐵器ヲ買テ生トス、殆窮セリ、仍テ按摩ヲ取リ世ヲ渡ルニ、隣店ニ難產アリ、急ニ作意ニテ術ヲマウケテ救之、是ヲ斯道ノ始トス、四十餘歲ノ時ナリト、夫ヨリ十四五年ノ間ニ天下ニ名ヲ振ヒ、一家ノ祖ト仰ガレタリ、其時ヨリ、一貫町ニ住セル故ニ、又他ニ移ルベカラズトテ、其處ニ隱居ス、性任俠ナルコトハ、東門ノ序文ニ見ユ、極メテ世ノ物體ナルヲ惡ム、或時一富商ノ婦、產後血暈シテ、數名醫ヲ迎ルニ不甦、雪中

ニ子玄子ヲ延クニヨリ、常ニハ紫ノ被風ヲ著シ、ハナシ目貫ノ短刀ニテ、駕籠ニテ出ラレケルガ、其日ニハ、銀拵ノ太刀作、朱鞘ノ大小ヲ帶シ、草鞋ヲハキ、其門ニ至レバ、幾ツモ駕籠ヲナラベ、供モ大勢居タリ、ヤガテ玄關ニシリウタゲシ、高ク呼デ湯ヲ一ツ與ラレヨ、足ヲ洗タシ、上工ノ醫者ハ駕籠ニハ乘レドモ、治方ハ知ラズ、賀川玄悅ハ草鞋ニ乘リテ來レドモ、指ガ一本チヤツトサハレバ、立ドコロニ治スト、滿座ノ時節ノ並居トコロヲ、思フ儘ニ亢言スレドモ、一言ノ返答スルモノナシ、產室ニ人ヲ禁ジ術ヲ行ヒ、房ヨリ出デ、各御太儀、童ヲバ玄悅殺ジタゴザル、是カラハ各ノ手ニ宜キホドナルベシ、今ヨリ歸ント欲ス、夫トモ又、惡クシタラバ早ク迎ヲツカハサレヨト、玄關ノ眞中ニテ草鞋ヲハキ、傍若無人ナルコト、皆此類也、

(產論翼序)子啓岡本氏之子也、翁見其修業精苦、舉其術與產、不授其子而授子啓、令以嗣其學、而子啓乃取翁之書所未備與己之新得者、作論并圖翼之、而後翁之學無復餘蘊、而可不墜於後云、(中略)

安永乙未孟夏　　　　柴邦彥撰

(醫學天正記乾下)婦人雜病

一秦昌內、四十歲、久有血塊、今破、下多而昏、不知人、面青身冷、左脈伏、右脈如在、活血湯、芎歸參附、一時計而脈出、精神如素身溫、

(醫學天正記乾下)帶下。

慶長丑正ノ十一

一花房助兵衞殿內、四十餘、因脫榮衰乏、月水六七箇月不來、而不時白帶來、心下悸惕、脈結濇、　順氣湯　二陳ニ加參中、朮大、斤芎合中、升陳各小、入生姜神効、

(醫學天正記乾下)崩漏。

一元鑑母、四十三歲、崩漏大下氣欲絕、身冷脈伏、　十五味八物ニ、加蒼桔芷等分、沈木減半、

〔醫學天正記 坤〕血崩。。
一四十餘之女子、血塊、今俄破下多、昏而不知人、面青身冷、脈伏、活血湯、斤弓參附一時計而脈出、精神如素身溫、

〔醫學天正記 乾 下〕月經。。
一小倉作左衛門殿、壯婦妊娠至十八箇月而未產、腹堅大如七八箇月、隔遠路不能診脈、血塊疑似、心下苦悶、　順氣湯　丹溪　養胎方　斤芎人參陳朮莎各一匁　芷半匁　甘少　水煎、　調益元散一匁服、今加腹蘇各一匁、益元散作二分下之、服此藥而心悶快然、疑似未明、　上洛診脈、月水二十箇月不來、飮食二便如常、定非妊、　順氣湯回　通經調氣湯　斤芎消瀉便半　莎各一匁　沏陳牡各八分　滷滓柴各六分　紅半分　甘少　生姜、

〔金雞醫談 一〕一內室、年四十有餘、經水不下、十二年矣、通體豐腴、腰腹十圍、著牀不能轉輾、上衝耳鳴、有時頭痛、甚則如雖鑽矣、諸醫百療、不能奏驗、於是需治於余、診之臍下堅塊、大如盤、按之痛不可忍也、作大黃牡丹皮湯、雜進服之、五十有餘日、一夜腹大絞痛、手足逆冷、殆迫危急、家人周章、走使請迅來、余烟○秀龍往診、脈滑而有弦勢、腹部諸症、不殊前日、而唯覺堅塊如大於先矣、因告曰、不可驚矣、腹痛逆冷者、所謂瞑眩也、病治在近、而又作前方三貼與之、以備急圓攻之、瀉下數升、絞痛猶甚、攻之不止、然而明日午時、月水如瀉、中見黑物如柑子者、以刀破之、宿血殷然者也、余喜曰、病汝者是也、十年鬱畝、今日而頓盡、豈不亦愉快乎、又調前方與之、腹痛猶不治、月水更不止、下如柑子者、凡二百許、月水十二日而止、止則腹痛諸證、脫然掃地、十有餘年、而心思始爽、可謂起廢之効也、其子世寬者、從余受句讀、篤信余、而始終託余、不敢貳也、故奏其功如此矣、

〔醫學天正記 乾 下〕妊娠。。
一赤井豐後守內、妊娠歟、二ヶ月不信、心下積痛、　和中林胎動腹痛　當歸芍藥湯　歸二匁　芎澤各

一分斤虎苓各中分

〔醫學天正記 乾下〕產後

一若宮樣之御袋、後ニ准后產後血暈不止、小腹在塊而痛、脈浮數而有力、予、紅斤芎沒桃莪之類用、先黑藥ヲ用テ血暈止、續テ煎藥三四貼ニシテ瘀血下テ腹痛止、

〔牛山方考 中〕一產後蓐勞トナランﾄ欲シ不食シ、漸柴瘦スル者、倭俗血ノ道煩(ワヅラヒ)ト云、酒柴胡、酒芍藥、莎艸、砂仁各等分ヲ加ヘ、益母草ノ黑燒一倍、鹿兒(シヽノハラコ)黑燒半ヲ加テ、細末シテ煉蜜ニ和シ、煉藥トナシヲ服之、鹿兒ナキ時ハ、鹿頭ノ黑燒可ナリ、產後百病ヲ治ルコト如神、是予ガ家傳ノ方濟陰丹ト名付ク、熟地黃ヲ加ヘ、有効、心胸痞シ不食スル者ニハ加ヘズ、眩暈ニハ天麻陳皮ヲ加ヘ、不食ニハ石菖蒲ヲ加、氣弱キ者ニハ人參白朮ヲ加フ、

〔醫略抄〕治產難方

病源論云、產難者、凡有數種、或先漏胞去、血子燥、干燥、或子宮宿挾疾病、或觸犯禁忌、或產時未至、便卽驚動、穢露早下、子道干澁、婦力疲弱、皆令產難、凡腹痛腰未痛者未產、腹腰連痛者卽產也、

產經云、產難時、皆開門戶窗瓮瓶釜一切有蓋之類、大効、

〔子玄子產論 一〕或問男女之辨、余答曰、不知也、問、左男右女之說、曰、非是也、凡孕皆當任而居中、爲物所壓、則左右偏、其右者兒之頭居焉、左者兒之下身居焉、　妊娠禁伸脚而寢者、其意蓋恐其臥肆體、則產致橫產也、然撿漢人古醫籍、並亡是說、而雖本邦古名醫、亦未聞有此議、則知、此言徒出近時兒女之臆見者、而偶然傳承、遂成是陋習者耳、不然其言之害事理者、亦莫甚焉、何者凡孕胎、必當任而居中、而今屈脚而寢、則肚體必曲傀內縮、此爲其胎難居中央、且如本邦婦人、又加之以鎭帶束其上、是制其上而戾其下也、胎欲不攲斜、豈可得乎哉、故今孕婦之動致橫產者、率皆夫二者之胎禍、識者不可不力救辨正也、

〔子玄子產論　四〕產椅論　按、產椅論、宜叙儀害論後、

我邦近世婦人大產之後、必用產椅、椅制不一、而大抵皆伊面有横、左右有墻、而前小横板、及底面、皆可抽換、產婦已下胞衣、則椅中周圍先置疊被、板墻上亦皆覆以綿被、而後使婦人自起步就椅中、而其坐必令端然跪坐、始產七晝夜、又不許睡而俯首、於是代設看視相守達旦、少有偏側、叱令改之、一七日而始纔免此苦楚矣、而今俗上自天子后妃、下逮士庶妻妾、皆莫不甘受是嚴責、而幸免乎斯苦者、山野海濱樵婦漁姑之屬耳、而余考漢人醫治產後者、其將調法、或止言須臾上牀宜仰臥、不宜側臥、宜堅膝、未可伸足、高倚牀頭之類、而未嘗聞其有產椅之制也、又嘗求之本邦舊俗、雖書傳散佚不可詳考、而嘗閱空穗語、載某姬產後三日輙起、而人勸使之臥寢之事、則其書雖寓言、當時無產椅者可徵焉、意其蓋起於晩近苟且之制、久之漸潰、人不覺其害也、椅之害產後者、大抵有八、產後腹內大空、惡露游蓄、熱氣尤盛、一有起身、必動胃府之積聚、與熱氣相搏、因以跳動、移觸任脈、則雖健婦必發血暈、今將起就產椅、因必成此症、其害一也、新產所恐者、崩漏脫血、率由跪坐不臥、而急發此症、而產椅必當跪坐、其害二也、脫血急救、或可挽回、而坐產椅者、則四面墻板爲之扞格、難得施展、往々稽遲、致不可救、其害三也、虛羸尫弱之婦、產後嘗血大虛、强使跪坐、氣血留滯、筋脈不仁、其因爲痿躄者、往々有之、其害四也、新產防其睡俛首甚嚴、是勞力後、尙不使安神就寢也、欲血氣不耗消、豈可得乎、此必是他日血瘵不起之基矣、其害五也、不得安神就寢、則血氣散躁、必因致經脈留熱、惡露難下、其害六也、產婦必穀道挺出、今跪坐則難得斂去、瘀熱因流淫、決成脫肛痔漏、其害七也、一用產椅、則必用看守之人、令終夜忍睡而相視、則食藥之類、必易致不謹、其害八也、有此八害、而世不知議其可廢者何乎、曰因循而已、苟且而已、

〔叢桂偶記　二〕產婦側臥

本邦產婦禁側臥、特子玄子著產論、令乳婦去產帶安臥、余嘗遊其門親炙之、其臥者神心安靜得快睡、防暈除熱之良策也、其驗大勝於藥餌、而人皆憚之、頃讀一方書、曰高山血竭、治產後幷金瘡、立効渴、豈

臣秀文公方、並云、服湯後覺汗則解、去帶、側臥則妙、與產論說暗合也、

〔叢桂亭醫事小言 一〕醫學○中略

天地陰陽之道、生育ヲ以大ナリトス、故ニ產婦ノ治法ヲ知ルヲ專要トスベシ、孫思邈千金方ニ婦人科ヲ始メニ設ケタルハ此意ナリ、生育ノコトハ、天地自然ノ事ニテ病ニ非ズ、人事ノ入ベキコトニハ非ザレドモ、難產ニ至リテハ病ニテ、其法ヲ得ザレバ死ス、皆是養護宜シキヲ失シ、或ハ多欲ニテ、胎ヲ傷ニ成シ、或ハ執作度ヲ失ヒ、仆橫顚倒ナドニテ、橫產スルモ有リ、鳥獸ハ交ルニ時アリ、人ハ交ルニ無度、犬猫ノ類巳ニ胎ヲ受レバ、再ビ牡ヲ近カブケズ、其上卵生殼膜生ハ、四支ノ支ヘナキ故ニ、難產無シ、又多欲ナレバ、產後血熱多ク、血暈ナドシ、此血熱日ヲ經テ不解、或ハ風冷ナドニ侵サレテ、咳嗽ヲ加ヘ、終ニ勞瘵ノ狀ニ至ルモノヲ蓐勞ト名ケ、難治トス、其倒逆生ハ、自然ニ受胎ノ事ニテ、順產ニナスノ術ナシ、ネダヘリト云ハ、虛妄ノ說ナリ、是ハ產前腹候シテ、順逆ハ預メニ知ラルベキナリ、子玄子ノ腹候セラルヽヲ見タルニ、百中ナリ、胎ノ腹內ニアル形ヲ明ニ解スレバ、見ハブシノ無キハブ亀子玄子一タビ出デ千古ノ惑ヲ解テ、天下始テ產乳ノ理ヲ知ルコトヲ得タリ、人事ノ大要、是ヲ學ブニハ、產論幷翼ノ二書アリ、手術二十二アリテ、回生鉤胞ノ二術ニ至リテハ、筆墨ニ明ニスルコト不能、故ニ翼ニモ此二術ヲ載セザルハ、禁秘シタルノミニ非ズ、未熟ニテ人ヲ誤リ、害ヲナスコトヲ恐ル、此二術ヲシラズンバ、起死コトナラズ、

〔靜生庵產育全書外篇 一〕總論○中略

大凡、難產器械ヲ假テ分娩セシムルノ術、古今外國其說一ニシテ足ラズ、印度ニテハ、大寶積經、佛說入胎藏會第三十云、(唐三藏法師義淨譯)若彼胎子、於母身中、造諸惡業、幷墮人胎、由此因緣、將欲出時、手足橫亂、不能轉側、便於母腹、以取命終、時有智慧女人、或善醫者、以煖酥油、或榆皮汁、及餘滑物、塗其手上、卽以中指夾、帶刀子、利若鋒芒、內如糞廁、黑闇臭穢、可惡坑中、以利刀子、臠割兒身、片々抽出、又阿毘達磨俱舍

論世品云、(唐玄奘譯)其母或時、威儀飲食、執作過分、或由其子宿業、死于胎內、時有女人或諸醫者、妙通產法、以酥油胅末黎汁、(一切經音義云、胅式染切、胅末葵、滑草也、用之洗尸、甚滑澤也、)塗其手、執小利刀、內孔中、分解肢節、牽出於外、唐山ニ在テハ、金ノ張從正、儒門事親、收產傷胎門云、一婦人臨產、召村嫗數人侍焉、先產一臂出、嫗不測輕重、拽之、臂爲之斷、子死于腹、其母面青身冷、汗漐々不絕、時微喘嗚呼病家甘于死、忽有人曰、張戴人有奇見、試問之、戴人曰、命在須臾、鍼藥无及、急取秤鉤、續以壯繩、以膏塗其鉤、令其母分兩足向外偃坐、左右名一人、脚上立足、次以鉤其死胎、命一壯力婦、倒身、拽出死胎、清ノ吳道源女科切要難產門云、房中穩婆三箇、議論紛々、或欲早用鉤割以全母命、又云、因生產不順、每孕則鉤割、(中略)○由是觀之バ、理產ノ術、古今萬國悉ク鉤割ニ甘心シ、一モ母子雙全ノ治ヲ謀ラザルハ何ゾヤ、皇天幸ニ福ヲ降シテ、我個ヲ憐ミ、恍乎トシテ授與スルニ、是斯妙術ヲ以テシ玉フ、此實ニ萬國ノ未發ル所、千古ノ未傳ル所ナリ、冀クハ有志ノ士、此書ヲ玩索シ、及ビ門ニ造リテ業ヲ紹承ケ、ヨク精錬シ、ヨク講求シ、以テ世間難娩ノ婦ヲ救ヒ、子母雙全ヲ得セシメバ、予ニ於テ大幸焉ヨリ盛ンナルハナシ、聞、近來轂下ノ一二ノ子弟、受業未ダ熟セザルニ、私ニ門戶ヲ立ルアリ、其技若窮スルトキハ、却テ鐵鉤ヲ用フト、實ニ如此ナラバ、所謂鉤割ノ流ト、復何ゾ擇バン、學者醜婦ノ顰ニ倣フコト勿レ、

余ガ探頷術ノ至要タル、必先其支礙スル處ヲ索テ之ヲ脫シ、胎兒出路ノ順ヲ得セシム、コレ余ガ生平ニ注意スル所ニシテ、學者一ニ此ニ熟到セザルトキハ、假令鍛鍊ストイヘドモ、竟ニ其妙處ニ詣リ難シ、

〔產科發蒙 一〕胎子位置形狀論第一(中略)○

頃歲城南山下門外、笹井某妻、妊娠方期月、忽腹疼腰痛、於是人定速余治診、即便往、發劑飮之、而揩摩其腹、則蹲循之際、兒便產下而無啼聲、乳嫗抱起看時、亦無手足面目、唯囊乎微動、乃以爲怪物、將裹草蓐之、余細檢之、隔膜纔見兒頭面手足、謂曰此囊兒也、因就熟視之、胞衣在腹部、而其形楕、上至頷下、下

連臍下、而胞衣四邊、薄皮引出以包裹胎、視之如雲母屛中物、見在其內、屈臂握手、以魚腹印耳下、其形似邦俗取膂肓穴之狀、又蹈兩膝、而膝頭僅過乳上、膝外廉與髆內廉相齧、猶人登圊狀、臍帶則自左手與胞旁之間、蟠屈而出二寸許、斜至肩、余即執小刀割頷下膜、(男子也)則白膜縮綫、歸于胞四邊矣、急含少水以潠兒面、始搦聲啼叫、衆皆稱天幸焉、余取胞衣置于油單紙上、以攝視之、其形圓圓、徑六寸許、其外面即中央最厚、至邊而漸薄、高低出沒、皺文錯綜、其色紫紅綠黑混然相雜、而不甚濃、○下略

〔產科發蒙六〕騈胎一胞一順一逆圖○圖略

先出者正產、後出者逆生是也、

騈胎各胞雙順圖○圖略

胞之著於子宮裏、各異其所、夾此孕蓋交接二而并受胎者也、

〔叢桂亭醫事小言五〕產後諸病○中略

產後ニ水ヲ禁ズルコト古ノ習也、必ズ左ニ非ズ、賀川家ニテハ、胞衣ヲ下サヌ間ニ、水ニテ抽刀散ヲ飲セ、或ハ燈草ナドモ服セテ、而後ニ胞衣ヲ下ス也、サテ又一種胞衣下ラザルモノ有、是ハ至テ取懸シ、鉤胞術ニテ取ベシ、イロ〱不下トモ、婦人ニヨク飲込セテ安心サスレバ、夏ハ五七日、寒氣ノ時ハ廿日許ニハ腐爛シ、切々ニナリテ下ルモノナレドモ、產婦是ヲ苦勞シ氣ニカケテ、血暈ヲ發スル故、救命安心セシムルコト第一也、折衝飲ノ所主、平常ノ產婦ハ、小便通利スレバ、血熱ハ解ルナレバ、惡露ノ下リヤマントスル時ハ、巫神湯ニスベシ、胞衣ノ下ラヌワケハ、出產スルヤ、手纏シ早ク、臍帶ヲ强クシメル故ニ、胞衣帶ノ上ニナリ、下ヘ引ドモ下ラズ、又手ニテ强ク按シテモ、下リカヌルモノナリ、故是ト手間取タチニ、子宮口ヲ閉レバ、マス〱下リカヌル也、產シタル當產ニ、腹ヲ輕ク撫テ見レバ、胞衣中流ノ邊ニ、ムツタリト手ニアタルモノナリ、夫ヲ輕々ニ指頭ニテ少腹ヘ撫ナガラ、胞帶ヲ引ケバ、臍下マデサガル時ニ、少ノ間、乳婦ニ氣ヲヤスマセテ、血ノ藥ナ

分娩器械

ドヲ飲セ、イツニテモ取度時ニトレル樣ニシテ置故、一引ニテ下ル也、子宮ノ口ヲシメル後ハ、イカニ引トモ下ラヌモノニテ、強ク引トキハ、胞帶ヲ引切故ニ、マス〳〵手段ヲ失フ、第一ニ是ヲ心得テ引ベカラズ、鉤胞ノ術ナケレバ取ガタシ、賀川家ニ學ブベシトハ、此所ノ事也、

〔產科發蒙 六〕周○片倉元周向得英機黎(イギリス)國醫所編產科書、然以其文字絕異、固不可讀、特其所載、易難諸產圖、總十有五面、畫極精妙、最足觀矣、蓋其遇難產子難達、則必以器出之、雖其器製不能詳、此死中求活之一奇器也、因撮出圖式二道、以錄于此、巧智之士做之製造、臨事施之、則可謂回生之一助也、

〔醇生庵產育全書外篇 一〕總論○中略

產科捷經云、手術ニ要用ナル器械ハ、左ノ四種ニ過ズ、一曰擧木、二曰直鑷、曲鑷、三曰穿頭鉄、四曰鉤、其他爸牒盧技產科書、詞倫產科書、產科簡明等、亦皆ナ器械ノ說アリ、片倉元周產科發蒙ニ云、周向得英機黎國所編產科書、云蓋其遇難產子難達、則必以器出之、雖其器製不能詳、此死中求活之一奇器也ト、皇國天明中、賀川子玄子出テ、始テ鐵鉤ヲ製出シ、以テ難娩ヲ拯フ、其徒之ヲ稱シテ曠古一人トセリ、然ルニ、海外先哲既ニ昔日ヨリ如此ナルトキハ、鉤割ノ起ル所モ亦復久シキナリ、タヾ子玄爲人、宕落ニシテ、立言人ヲ驚スノミ、故ヲ以テ、天下靡然トシテ其奇ヲ喜ベリ、續テ片倉元周著產科發蒙奥劣齋先生著女科撮要女科隨筆等、桑原惟親著產科航大牧周西著產科指南ノ徒起リ、各其說其書アルガ故ニ海內理產ノ醫、悉ク其唾餘ヲ甜ンゼザルモノ无キニ至ル、又近世東奧ニ蛭田玄仙著產科新編ト云フモノ出テ、眞珠琢領、竹投篦ノ術ヲ唱ヘ、南總ニ立野龍貞著產科新論ト云フモノ出テ、包頭、生導、擢骨釵ノ三器ヲ造テ、倶ニ鐵鉤ノ害ヲ駁ストイヘドモ、隨テ其所爲ヲ檢スルニ、亦皆割裂ノ窠臼ヲ脫スルコト能ハズ、奥澤軒中安房人、著產科發明、管刀、束頭械、除腦械、大小鉤ノ數器ヲ造作スルニ至テハ、酷毒尤太甚シ、○下略

〔醇生庵產育全書內篇探領圖訣 一〕探領三器小引附圖式

三器ノ用タル、原一ニシテ名ヲ別ツベキノ理ナレ、然レドモ名ナキトキハ、恐クハ其器ヲ運用スルノ次第ヲ謬ラム、故ニ第一ヲ名ヅケテ探頷ト云、第二ヲ鏖龍ト云、第三ヲ賽珠ト云、○中略

門人長谷川誠之、予ニ語テ云、先生探頷歎器ノ精巧ハ、實ニ天人未發ノ奇術ニシテ、喙ヲ容ルベキナレ、然レドモ其兒頭挽出スルノ際、若クハ艱澁シテ腕力足ラザルトキハ、兩足婦尻ヲ撐テ、其力ヲ助ク、此法卑賤ニ在テハ頗ル便捷ナリト雖モ、若夫貴門ニ至テハ、或ハ嫌忌ナキコト不能、然ラバ乃チ何ノ術カ之ニ代ント、予コノ言ニ感テ、構思數日、遂ニ所得アリテ、一器ヲ製ス、名テ賽珠車ト云、隨テ之ヲ實地ニ試ルニ、ソノ術甚ダ便易ニシテ、且ツ穩ニ、況ンヤ出娩艱澁ナリト雖モ、醫ト鑷ト尫弱ナリト雖モ、此機ヲ用テ挽引スルトキハ、談笑シテ娩脫セシムベシ、○中略

產前後心得

〔簾中抄下〕さんの、ちいむ物なし、す、又わきのかある人をみず、見つればはれ物のいづるなり、あつくきすべからず、あたらしきわたをきせず、人のきたる物をきするよし、つねにすゞしくすべし、十歳よりさきには、むぎのこをくはせず、十五よりさきには、ひ水をのませず、おさなきものには、きびをくはせず、母の涙を子のめにおとしいるゝことなかれ、ちごには月をおよびしてさゝすることなかれ、みゝにかさいづ、

〔子玄子產論一〕妊娠禁食川鱗、亦是近來始有此陋習、竊釋其意、蓋恐流產而忌之也、夫偽產自由母氣不足與物傷其胎而有之、豈川鱗之所能爲乎、蓋余壯及今年六十有七歲、其間日治妊娠、遇有此輩、必强食之、力爲一世除之謬惑、而未嘗遇所害也、大抵一切禁忌、未嘗非庸惑之流也、 凡產前多房必產後病蓐勞、是爲妊娠之大戒矣、 凡妊娠當忌屢浴、則腠理開而風冷襲焉、凡妊婦之受冷者浴也、其他無所受邪、胎氣實於中也、

〔病家須知四〕產蓐之圖○圖略

被褥數枚を用て、重層て凸凹なからしめ、漸に昂なるやうにして、只肩の當處を少兩側より低し、其上に褥子を鋪、枕は軟なるものを用て、褥の下より、紐にてつりをかけて、轉ぬやうにすべし、枕は昂が宜ども、餘に昂は好からず、大要頭と脚との高低一尺餘を程とすべし、七日を過て少低し、二七日が程には、常の如にしたるが可、或は褥子にて、圖のごとくにこしらへたるもよし、下のかたへこけんかとおもはるゝものは、かねて別の褥子やうのものを用て、脚のかたへかひあてゝよし、圖はその狀を示ために、かくのごとくなれども、產婦の體は、これよりおちつくやうにすることゝこゝろうべし、

〔萬安方〈三十四婦人〉〕產後將護法〇中略

私〈〇梶原性全〉云、日本國風俗云、產後七日七夜不臥眠云々、此習久矣、凡男女產未產、若二三日夜不寢臥、則身心恍然、血氣錯亂、何況產勞之女、七日夜不睡臥、爭得安穩、是以、心思忙然、言語謬誤、醫師失治稱邪鬼、看婦者、用祈禱而後終天命、太可哀憐矣、千金聖惠外臺局方已下諸方、皆生產以後、須臾上床仰臥、〈不側臥〉立膝、〈不伸足〉未見一書一方而一日夜乃至七日夜不睡臥之說、風俗之邪說、世々輩習用、醫師何不改正之、局方產後將護法云、且纔得分免、切忌問是男是女、看血下多少、隨證服治血暈之藥、良久喫粥、服四順理中圓、蘇合圓、便令人以手從產婦心下按摩至臍腹、日々五七次、若有疾證、即隨證服藥粥、相間半時、頻々服餌、若疾急、則不認半時說、頻與諸藥、且產婦宜閉目而坐、背後倚物、左右看承、常令直立兩膝、雖時眠睡、頻令喚覺、過一伏時、方得上床、亦須立膝高搘床頭、厚鋪裀褥、直至百晬、常服當歸圓、當歸建中湯、四順理中圓、日各一兩服、以養藏氣補血脈、兩腨〈二七日也〉之後、方得肉食、〈二七日以後食云々肉鹿肉〉聖濟錄百六十卷云、生產三日之內、只食白粥、間服滑血和氣之劑藥、三日之後、時飮少醇酒、幷食軟飯、旬日以後、漸可食滋味、一月之內愼不可出房、縱步勿作女工之勞、又百日之內、愼無犯房室及諸飮食、又戒喜怒憂恚悲愁、恐致疾患、凡產婦一月之寢臥、常須覆衣被、縱暑月亦不得露身體、尤避風冷濕濕之氣、

若沐浴亦須出三月外、縱復不能、依此亦須六十日後、方可沐浴、

〔産論翼乾〕浴法

浴、産前後、皆我門所大禁、無輕視、妊娠中屢浴者、必多患水腫、或病癖疾、故妊婦九月已後宜禁浴、嘗見因浴致胎動、上逼心下、卒致危殆者、往々有之、是故雖乃暑天、亦切不可毎日浴、但午前後輕々浴之爲妙、如産後無他症者、經二三日後欲浴者、須以巾漬熱湯被拭去其汚穢、如稍重者若難産後者、此拭亦禁、如平穩之婦、過二七朔後、看其脈症平和、始許輕浴、爲可、而其浴又切不可用浴盆、而須用浴桶、多設其湯、頻浴之、余數見平穩産婦早浴、忽發熱、氣息短促、遂致危篤者甚多、不可不懼也、

〔婦事母録二編〕一産前婦に、食を強ること、世俗にてすることとなり、但婦の飢飽に隨ふべし、多年産婦を診するに、必腹部に食積あり、これその祓なり、頑愚の老婦を近くべからず、種々の害をなす、或人難冠木を産婦に服せしめ、不救をみたり、芋のからのたぐひ、古血を下すと號して、田舍に用ることあり、上氣によるべし、味噌汁をだに、汚血不下には用ふべからず、(中略)産事證驗

〔春甫樓叢書二〕産家の禁食

産婦は、總て産前より産後を謹むべし、越後にては、産すれば直に鹽鰤を與へ食しめて、よく血を治むとて、産後七日の内に、是のみ業として與ふ、若し與へざれば、必ず血の治る事遲し、越後の婦人、奧州の白河に嫁し來て、一女あり、此女産したる時、本國の土風を以て、遠方求之與ふ、忽に血崩して死す、又白河の隣郡に、棚倉と云處の婦人、産後七日の内、蕎麥を與ふ、血を治るには妙藥として果して宜しと云、江戸某の婦人、産後十餘日の外、蕎麥を食して、大に腹痛を發す、又松前の人、江戸に來り、産婦を見て、是れは早く青魚を與ふれば、惡血を去りて後患なしと云敎て食しむ、一時に過ずして死す、又貝原氏も産後に鯡鯖を食はする事を忌むと云、余試るに、果して血を崩して死す、

墮胎

〔本朝醫談〕臨產の時、產婦の側に、白米を設け置は、血暈おこる時かましめん爲なりと、本朝食鑑に見ゆ、生米は、血の道によし、產前後、手負、目のまふ時にくふべしと、本草歌に出づ、又豆にも、其能ありと見えて、備前老人物語に、手負て血の胴へ落て難儀ならんには、煎豆を食ふべし、忽しるしありといへり、民間に血暈に用ふる、薄墨藥といふあり、米の粉に藤こぶの黑燒を、薄墨色になるほど和合するなり、

〔北邊隨筆四〕墮胎
源順集に、男のひとの國にまかるほどに、子をおろしける女のもとに、たらちをのかへるほどをもしらずしていかですてゝしかりのかひ子ぞ、とあるをみれば、墮胎もふるくせし事なりけり、今も人しれず多くするなめり、いかなる心ぞや、

〔市中取締類集九ノ四十五〕天保十三寅年六月墮胎御禁止一件

越前守殿
墮胎致し候者、御仕置之儀ニ付、申上候書付、
鳥居甲斐守
町奉行

市中ニ而、女醫師と唱、妊身之者を、賴ニ應じ墮胎致し候もの、幷賴候もの、御仕置當、御尋ニ御座候處、元來人道ニ有之間敷所業ニ候得共、右之内ニは、難產等ニ而、其兒を殺、其母を助候と申儀は、產科之所主ニ而、無餘儀次第ニ付、强而論ずべき儀ニは無御座候得共、多くは、父母抔を忍び密通致し、不計懷妊致し候儀、顯候を厭ひ候より、仕成候儀ニ而、右等は、其身之不愼より懷妊致し候處、密通之儀可押隱爲メニ、其子を殺候儀ニ而、或は差而謂無之ニ、其身之勝手ニ泥ミ、夫婦相談之上、猥ニ墮胎爲致候ものも可有之哉ニ而、右樣之類、實ニ不仁之至ニ御座候間、以後何と歟御仕置無之

候而は不叶儀ニ付、先例相糺候得共、差當右ニ可引當例相見不申、文政八酉年、評定所一座江評議ニ被成、御下ゲ候火附盗賊改長井五右衛門相伺候、武州多摩郡小山村百姓重右衛門儀、女房てる妊身之由相聞し候處、一體養母之心底ニ不應、此もの存寄ニも不相叶候間、離縁可致と存居候間、出生有之候而は、離縁之邪魔ニ相成候迚、先妻之子供も有之、出產致候而は、厄介多ニ而家業も相成兼候旨申欺、賣藥商致し候ものより、藥買取相用、墮胎爲致候處、養母りた承、親子相談之上、及右始末候儀噂致し、迷惑之由、彼是六ヶ敷申聞、離居遣旨、てる申聞候砌、兼而離縁ニおよび度存候迚、何之挨拶も不致、同人家出致し候を幸ニ存、離縁致し、其上持參候品賣拂代金者、てる尋候入用ニ遣捨、其餘は所持致し候始末不埒ニ付、百日手鎖と相伺、評議之趣ニ而は、衣類等引留賣拂候段、如何ニ御座候、墮胎爲致候方、人道ニ有之間敷故を以、江戶拾里四方追放と申上、其通相濟候例有之、無餘儀筋も無之、殊ニ墮胎相頼候ものは、右例ニ見合、且頼を受、墮胎爲致候女醫師之儀、可引當先例無之候得共、則毒藥賣候趣意ニ而、御定書ニ、毒害致し人を殺候者、獄門幷毒藥賣候者、引廻し之上獄門と有之、尤引廻し之儀者、衆人江被示候御趣意迄ニ而、發而段取ニ拘候筋ニは有御座間敷、右は重々御仕置ニは候得共、御定所様共同刑ニ相當り候得ば、外ニ寄所も無之候間、右御定被引當、前書先例ニ基、墮胎相頼候者、幷價を取、頼ヲ受墮胎爲致候者も、江戶拾里四方追放ニ而相當可仕儀、尤格別不仁之取計致し候歟、又は無餘儀次第有之、墮胎致し候類も有之間敷とも難申、右等は其節吟味之始末ニ寄、輕重之差別も可有之候間、差極難申上儀ニ御座候得共、一ト通、猥ニ墮胎爲致候者は、凡前書之通ニ而相當可仕見込ニ而、取調申上候儀ニ御座候、併新規之儀ニ付、治定之儀は評定所一座江も一應評議ニ御下ゲ御座候方と奉存候、以上、

寅〇天保十三年八月　　遠山左衞門尉
　　　　　　　　　　　鳥居甲斐守

寅十一月廿四日

越前守殿御直　伊賀守 左衛門尉 播磨守 江御渡

男女密通、幷夫婦相談之上、猥ニ墮胎爲致候もの御仕置之儀、

一其身之勝手等を謀、猥ニ墮胎爲致候もの、男女共江戸拾里四方追放、

一右を存ながら、取計候醫師之類、江戸構、

右之通被相心得、尤其節之始末次第、輕重之儀は、事實相當之處、厚勘辨致し、御仕置申付候樣可被致候、

十一月　評定所一座江

〔市中取締類集九ノ四十五〕天保十三寅年六月 墮胎御禁止一件

寅七月六日

越前守殿江荒井甚之丞を以上ル、同十一月廿八日承付候樣、同人を以左衛門尉江御下承付致し返上、

市中女醫師之儀ニ付、奉伺候書付、

書面伺之通相心得、別紙申渡案之内、御掛紙之通、相直申渡候樣可仕旨被仰渡、奉承知候、

寅十一月廿八日　鳥居甲斐守

町奉行

市中ニ有之候女醫師と申もの、專ら墮胎之儀を生產と致し候儀、不仁之所業ニ付、以來急渡御禁止有之可然哉、尤是迄女醫師之名目に而押出、墮胎之方をのみ生產と致し候儀とも不相聞、一體難產等之砌、其兒を殺し、其母を助候時宜も有之、是又不得止より出候儀、嚴敷御禁止ニ相成候ハバ、却而非命之死を遂候もの多く可相成哉、全右ニ而男女淫奔野合之根本を斷チ候と申ニも有

產科雜載

之間敷哉、右等之趣得と勘辨仕可申上旨、御書取を以被仰渡、勘辨仕候處、市中女醫師之儀、中條流を申立ニ致し候上は、都而出產之手當、經水不順之療治向は、持前ニ候處、近來血道之療治致し候ものは無數、墮胎之儀を重モニ引受、妊身のもの共を、猥に逗留爲致、療治代飯料等、日數凡七日見積ニ而、金壹兩貳分位より、賴人之身元ニ寄候而ハ、手重ニ申成、過分之金高を申受候類も有之哉ニ御座候、尤難產等之節は、兒を殺、母を助ケ候業は、元來產科之預り候醫術ニ可有御座、右女醫師ニ限り候生產ニも無之候間、市中女醫師總而御禁止被仰出候共、難產之手當等ニ差支は有御座間敷、併墮胎之儀ニ不拘、血道之醫師正く致し候分は、不苦儀と奉存候、且又生質不慣之もの共、向後之覺悟も無之、及密會候は、人情之難止儀ニ付、墮胎之產業取潰し候迚、男女轉び合之根を斷チ候迄ニは行屆申間敷哉ニ候得共、何れニも仁術を表ニ致し、內實殘忍之所業ニ付、墮胎之儀をば、嚴敷御禁止可相成筋と奉存候、百姓共大勢子供有之候得ば、出生之子を產所ニ而、直ニ殺候國柄も有之、以來右體之儀無之樣明和度御觸之趣も有之、墮胎藏も、右同樣、不仁之至、以後急度相止、若相背候ものは、吟味仕候見込を以、別紙之通り市中江申渡候樣可仕哉ニ奉存候、依之御書取返上、此段奉伺候、以上、

七月

遠山左衞門尉

鳥居甲斐守

○按ズルニ、墮胎ノ事ハ、禮式部誕生祝下篇ニモアリ、參看スベシ、

〔漫遊雜記 上〕大原村一婦、嚴霜過洛下、顏色慘若有所苦者、倦坐道側、自擧一子、手裂洗拭、入其傍家乞冷水一盞、喫之而去、行路觀者訝異傳語、可見勞動形軀者無難產也、

〔春雨樓叢書 二十三〕產婦

小琉球の島の邊は、婦人皆產すれば、其產屋の邊りにて、一七日が間、晝夜火を焚ことなり、家富る

鍼科

者は、何百束焼るとて、薪を多く焼たるを手柄とす、貧しき者までも、皆夫々に焼なり、夜も白晝のごとし、其故に其家は格別暖氣にて、汗も出るほどの事なり、上方などの產婦も、只逆上する事のみを恐れる故、焼火をみる事などはこのます、況やそのごとく、晝夜夥敷焼て、火氣にせめられては、必す穩なる產婦にても逆上の憂起るべし、上方にては忌べき事を、彼地にては、返つて養生に成と思へり、むかしよりのならはしは、不思儀のものなり、元より遠國は、腹帶といふ事たへてなし、椅子の中にすはりて、横寢せすといふ事もなき事なり、產後は心よく横に臥て、氣血を納る事なり、遠土には醫者も取上婆々もなければども、皆安產して、難產は甚だ稀なり、〇中略又安藝の國嚴島など神地なる故、穢れを殊更忌なり、此島の女、產に臨む時は急に舟に乘て、藝州の地方に送り、嚴島にては、むかしより產する事なし、少し腹痛むや否や、舟に乘する事なり、輕き時は濱端にても安產するもあり、又船中にて產するもあり、產前に動する事、危きことなれども、格別の難產もなく、又產後の病ひも起らす、所々の風俗とて、おかしき事どもなり、

〔日本風土記〔二〕〕生育

生育、諺、其孕婦產月臨日、預選吉日、擇其方向於天井或後院僻靜處所、結蓋一小舍、名曰生衙、令孕婦居于舍內、候產、既生之後、水火飮食之類皆禁、

〔日本西敎史〔上〕〕日本國紀事〇中略

產室ニ在ル女子ヲ取扱フニモ、大ニ我國〇佛蘭西ト異ナル所アリ、我國ニテハ產婦ヲ休息セシメ、之レニ肉汁ヲ與フ、日本ニテハ殆ド與フル所ナシ、嫁シタル婦人ハ、歩ヲ擧ルニ堪エザル程幅廣キ帶ヲ用ユ、子ヲ孕ム時ハ、狹マキ帶ヲ用ユ、安產ノ爲メナリト云フ、子生ルレバ直チニ冷水ヲ以テ之ヲ洗ヒ、身體ヲシテ强カラシメ、且空氣ノ害ヲ塞グト云フ、

〔類聚名義抄〔八金〕〕鍼、針、箴、〔三正、音斟、ハリ、又去聲、俗云シム、ム、書鍼具、下規誠、和イシマシム、〕 鍼〔俗〕 鍼管〔ヘリツ、〕 鍼筒〔同上〕

〔倭訓栞前編十四〕はり　針をいふ、鍼も同じ、穿の轉也といへり、名義集に曲鉤を鍼して婆利といふとも見えたり、砭針をいふも、鈹針をいふも義同じ、

〔倭訓栞中編二十〕はりづゝ　和名抄に針管をよめり、長者鑑に、針筒藥袋とみえたり、こは醫人所用なり、

〔拜書斷上〕鍼灸

鍼專行古而廢于今、灸能用倭而布于漢、是豈時世方土之使然歟、但彼湯藥所不逮、非假二者之用、實有難以獲效者、安可廢棄乎、譬之武術、既有劍槍焉、復有弧矢銃砲等物、不可以缺一也、彼謂刺灸於拔本斷根爲難、則似亦不知所施矣、

〔黃帝內經靈樞一〕九鍼十二原第一〇中略

九鍼之名、各不同形、一曰鑱鍼、長一寸六分、二曰員鍼、長一寸六分、三曰鍉鍼、長三寸半、四曰鋒鍼、長一寸六分、五曰鈹鍼、長四寸、廣二分半、六曰員利鍼、長一寸六分、七曰毫鍼、長三寸六分、八曰長鍼、長七寸、九曰大鍼、長四寸、鑱鍼者、頭大末銳、去寫陽氣、員鍼者、鍼如卵形、揩摩分間、不得傷肌肉、以寫分氣、鍉鍼者、鋒如黍粟之銳、主按脈、勿陷以致其氣、鋒鍼者、刃三隅、以發痼疾、鈹鍼者、末如劍鋒、以取大膿、員利鍼者、大如氂、且員且銳、中身微大、以取暴氣、毫鍼者、尖如蚊虻喙、靜以徐往、微以久留之、而養以取痛痺、長鍼者、鋒利身薄、可以取遠痺、大鍼者、尖如梃、其鋒微員、以寫機關之水也、九鍼畢矣、

〔令集解七僧尼〕凡僧尼卜相吉凶、中略療病者皆還俗、其依佛法持呪救疾不在禁限、古記云、持呪、謂經之呪也、道術符禁、謂道士法也、今辛國連行是、湯藥謂醫方、及鍼救療湯藥皆是、又令醫鍼呪、針灸不合、

○按ズルニ、令集解ノ穴ノ說ニ依ルニ、古令ニハ依道術符禁湯藥救療トアリシナリ、故ニ古記ハ云々セリ

鍼科諸流

〔本朝醫考 中〕鍼醫

上池院民部卿法印紹胤之孫齋三、并意齋、近世以鍼醫鳴於世、其徒到今多矣、其外家傳者亦夥矣、

〔本朝醫考 中〕上池院。

其先出自源頼光五世之孫充角、充角號坂三郎、產于和州、其後家系斷絕、而後有九佛闘焉、

〔皇國名醫傳後編 上〕吉田意休

吉田意休、出雲人、世爲大社祠官、永祿初、意休往明國、學刺鍼於崔林杏氏、名琢居留七年、盡得其法、著刺鍼家鑑、授子意安、意安授子一貞、一貞居越前福井、其術大行、是爲吉田流。

〔療治之大概集〕三部書序 中略

延寶ノ際、杉山和一ト云フモノアリ、卓絶奇偉ノ人ナリ、勢州津ノ藩士、父ヲ杉山權右衛門ト云、幼ニシテ、江戸ニ來リ、鍼科ヲ山瀬琢一ニ學ブ、琢一ハ、其術ヲ京師ノ入江良明ニ學ブ、良明ハ、其父頼明ニ受タリ、頼明ハ、豐臣秀吉ノ醫官、岡田道保ニ受ク、中略 德川嚴有公、聞テ大城ニ召ス、偏テ常憲公ノ病ニ侍ス、功効アリ、一日、公欲スル所ヲ問フ、對曰ク、臣世ニ於テ希伴スル所ナシ、只願クハ、一目ヲ欲スルノミ、公聞テ之ヲ憐ミ、本所一ツ目ヲ賜ヒ、祿五百石ヲ給ス、後增シテ三百石ヲ賜フ、特命ヲ以テ、關東總撿校トナル、肆館ヲ建テ、鍼治講習所ト云フ、諸方ヨリ門人來聚リ、別ニ一派ヲ開ク、世ニ之ヲ杉山流ト云フ、著述三部アリ、一ヲ大概集ト曰フ、鍼ノ刺術病論ヲ說ク 二ヲ三要集ト曰フ、鍼ノ補瀉四經ノ理 十三ヲ節要集ト曰フ、先天後天脈論 是書、畢生ノ精力ヲ以テ、鍼法ノ秘薀ヲ發揮ス、

〔續近世畸人傳 二〕杉山撿校

杉山撿校は、遠江濱松の人なり、十歲にして瞽者となれり、元性豪爽にして凡ならず、眼は盲たりといへども、名を天下に成んことを欲し、十七歲の時鎌倉に至り、江島の岩屋に入て斷食し、祈ること三七日、丹誠比類なし、されば滿る夜の夢に、鍼と管とを得ると思ひて覺たるに、その物實に

掌中にあり、いとかたじけなく、諸侯よりの招に應じて、病を愈ことしば〱也、

〔運鍼三要集序〕愚稟偏僻、竊志鍼道、有日、故遊入江先生之足下、得聞命矣、先生之道、宗軒岐、故常謂、可見者内經也、於鍼法秘旨雖多、不過補瀉要穴、分虛實、用補瀉、宗井榮俞經合、可主要穴也、且有餘力則讀經穴、於是鍼道畢矣、迎機應變、可謂醫者意也乎、予嘉其幽言、作書而述大意、實爲門人初學發圓機之士、必以爲寶也焉、○中略愚按、○中略唐王燾失深意、而不取鍼也、依是後世愚人蔽耳目、何有此理哉、猶非謂鍼、總妄用之、則與食何無殺人之理也、然内經鍼殺人者、實有深意存、

〔皇國名醫傳後編〕上　三島元眞院　松岡意齋　菅沼周桂

安一、伊豆三島人、因氏焉、學和一業、爲幕府醫官、叙法印、賜號元眞院、初號一以醫工顯、和一安一繼之、鍼科建焉、實二者之業、門人有島浦和田一、○中略

松岡意齋、不詳何所人、慶元間居京師、以善鍼聞、始以金銀製鍼、取其溫柔也、其術以小槌打入膚肉、總形圖而置下、鍼不過數處、而無病不愈、是爲意齋流打鍼、僧澤菴江月亦入其門、其著者有森吉成、奥田某、名遺、意齋門人、加茂鋼官駿河、吉成通稱仲和、父宗鐵、父子俱事意齋、吉成尤稱良工、又精腹診、性高潔不屑仕、隱居以終、駿河仕幕府、是爲駿河流、○中略

菅沼長之、通稱周桂、攝津人、善使用鍉鍼、恒曰鍼鍼肌皮肉、害利而不傷氣血、我使足破從來鍼家之妄矣、因以鍼灸復古自任、世目長之術曰古方鍼、

〔皇國名醫傳後編〕上　垣本鍼源　○中略

垣本鍼源、平安人、精鍼術、善名明和中、常謂、一鍼足以愈萬病、其言曰、凡欲爲鍼治者、先要靜一其心、嚴春利害、毫不挾謀慢、灑然併我四肢百骸而忘之、然後按腹切脈、察病所在、隨證下鍼、故疾良已而未嘗耗元氣、唯鍼源得其妙、他人畢之、莫能及也、鍼源所用鍼有三、小塞次大鍼、次圭葉鍼最大、以取瘀血、多瘀血者、先與家方烟天散服之、然後用鍼、諸廢痼衆醫所棄者能瘳之、治驗見于其書、此略不載、女茂登

繼父業、

〔日本醫道沿革考〕亮、按ズルニ、○中略、明和中ニ至リ、垣本鍼源ナル者アリ、又刺絡ニ精シキヲ以テ、名ヲ京師ニ顯ス、○中略、恒ニ曰ク、鑱鍼ハ、皮肉ヲ刺ス、甚ダ利ニシテ、氣血ヲ傷ラズ、我技、從前鍼家ノ妄ヲ破ルニ足ルト、因テ鍼灸復古ヲ唱フ、世之ヲ目シテ古方鍼ト云フ、

〔杏林雜話〕淺井圖南、才氣敏慧、廣綜衆藝、畫竹最有風致、時宮崎筠圃、御園意濟、山科宗庵、亦以畫竹鳴、世稱平安四竹、御園意濟、一作常京師人、善醫最精鍼術、一日西本願寺主嬰兒、俄然啼泣不止、遍延衆醫、醫皆以爲病、投藥無效、意濟後至診曰、此兒無病、必有他故、乃脱襁褓視之、果有蟲、匝豚股間、急手捉去、啼泣頓止、一坐駭歎、

〔春雨樓叢書十二〕奇病并鍼術

廣瀨伯鱗は、放蕩にして、鍼術を業とし、予が方へも來りし事あり、口并兩手雙足に鍼をはさみ、一度に人に施す故、吉原町などにても、五鍼先生といへる由、彼もの、安藤霜臺の方へ來りし時、同人祐筆何某を見て、御身御不快なる哉と尋けるに、不快なりと答ふ、暫くありて、總身汗を流し、面色土の如く成りし、伯鱗是を見て、肩へ一鍼を下しければ、うんといふて氣絶せしを、足の爪先へ又一鍼下し、息を返し、夫より一兩日療治し、快氣しけるが、伯鱗敎示しけるは、御身、來年今頃用心し玉へ、又かゝる病氣あるべし、其時療治せば、命恙なしと語りしが、翌年にいたり、其身も忘れけるにや、霜臺の元を暇を乞ふて、神樂坂邊武家に勤けるが、果して翌年其頃同病にて病死しぬ、

〔元治元年武鑑〕御鍼科 二百俵高 御番料百俵　吉田秀貞　杉枝仙貞

〔療治之大概集〕三部書序○中略

鍼灸ノ法、世ニ行ルヽ、既ニ尙シ、素靈、甲乙、千金、外臺降リテ、銅人鍼灸圖、明堂鍼灸經、徐氏鍼灸書、資生經、神灸聚英神應經、十四經ノ類、其書枚擧スベカラズ、喩バ書籍ハ規矩ナリ、術ハ運用ナリ、精聰

鍼灸ノ人ニ非ザレバ、精妙ニ臻タル難シ、

(蒼瓏二)刺法

昔古鍼を用しさま、書亡たれば詳ならず、されど、はりと云名はいと古く物に見えて〇中略近古には、浪華の人江大元と云人、萬病刺に宜き由、刺血絡正誤と云に論ひ、都に在て、垣本鍼源と云し人、此術にて諸病を治し由、醫事叢録といふ書に詳也、近くは荻野氏、刺絡篇と云を作たり、さるを紅毛法の流行しより、皇國に初たり杯思人もあめるは過也、されど、蘭方の人導し、上世より有し事は知ずめり、中にも荻野氏は、紅毛の説と內經の趣と以て、鍼ばれて、文は高く刺ゆれども、斷は罷かりけん、據て右の書等は、旨篇き叙多くて經の趣し、其中に、鍼灸刺血絡正誤、鍼は斷けれども、誤紅毛人に從らず、其書は精く、千常實事にくよく用けらし、されど三輪區別、且書等の鐵紅毛の風論を撰て、長病の唯血よりとりと云て、黒血を瀉すみ主としし、蓋なる能としつ、且書撰な物せで、猿の撰法なよて、醫の古來鍼治せしと病なきれて、人な撰るはれた事多にたはり、す、鍼此術ば此大人に學けり、又北國の俗、古より、豆瘡と云病に血瀉する術を用る由、二神傳と云に記し、加賀國小松人、小藤數馬と云に逢て此事を問しに、答けらく、我里の東山中なる村々、又白山麓の里人は、家鍼有者なる多なすと云り、越前の俗、卒倒たる人あれば、其舌尖に針して、黒血を走せて、蘇す術を傳たる由、淺遊雜記にも記し、紀國の和佐氏、通矢と云物を射んとせしに、手つき健ならぬを、刺させて射しに、乍驗有て、終に其志を果しゝ由、又土佐國人は、風引たるに、肩より血を取る由或書に記せり、又橋氏軍法に、手足より砭て後、征と云り、なり鍼灸に、又馬等專ら刺も古傳也、

(黃帝內經素問五)刺要論第五十篇

黃帝問曰、願聞刺要、岐伯對曰、病有浮沈、刺有淺深、各至其理、無過其道、過之則內傷、不及則生外壅、壅則邪從之、淺深不得、反爲大賊、內動五藏、後生大病、

(玉海)安元二年七月三日丙午、召權侍醫憲康、令針齒下、

(看聞日記)嘉吉元年三月九日、備叅立針、脚氣爲養生、

(建內記)文安四年四月廿九日庚寅、滋野井宰相中將實益朝臣、四十四歲云々、午剋處逝了、彼系圖之

鍼科雜載

様、人々能不知候、父者公寛歟云々、○中略昨日又平生無相違、暮喰之後、足ノ裏メイラクトテ顛倒及、一両度、食物腹中ニタチアフトテ辛労、我ハ酔タリト人ハ思ベシナド云テ、ツヨク笑ケリ、醫師松井ノ少輔云々○中略取脈、稱中風、但無殊事云々、其後事之外ニ寢入タリ、又取脈之處、散々脈也、不可叶云々、竹田立針、○足足ノ針コタヘケリ、然而無正體之間、醫師退出、

〔譚海三〕今上御位の間は、鍼灸等用させ玉ふ事なし、玉體に刃物を當る事なりがたき故、御髭爪など長ずれば、女嬬齒にてくひ切て奉る事なり、

〔御當家令條三十一〕口上之覺

今度灸針之儀、依異說申觸候、被逢御食養之處、駿州に有之、田口是心と申者、持傳候書物に相見候、所望之者有之而、寫遣し候、自作に仕たる義に候はゞ、急度御仕置可被仰付候得共、右之譯立候故、當人御構無之候、然共向後、個様之珍數儀不申觸候様可申付候、若無據子細有之者、其所之奉行役人江申斷、可任差圖之旨、急度可申觸候、巳上、

元祿二年巳十月九日

灸科

〔倭名類聚抄三病〕灸　岐伯黃帝、善灸人疾患、

〔伊呂波字類抄也人事〕灸所ヤイトカ　〔同也人體〕灸ヤイトウ　〔同也辭字〕灸灼也

〔皇都午睡三編上〕江戸にては、○中略灸(やいと)を赤團子(あかだんご)、

〔玉勝間七〕やいとう

文覺法師が、正治二年に鎌倉の將軍頼家朝臣に返り事におくりたりし書にいはく、あつきやいとうをねんじてやけば、やまひいえ候也といへる言あり、君とある人の、臣のいさめをうけいるべきたとへにいへる語也、やいとうといへること、めづらしくおぼえて、かきいでゝおきつる也、

〔奇魂二〕灸法(ヤキヒワザ)

灸治

灸は、今字音にのみ云て、古名詳ならず、故、まづ考るに、延喜式、和名抄杯に、熟艾をやいはくさ、又やいくさ杯見、我陸奥の方言に、灸するを、やいひをやくと云、又其跡をやいとと云は、吾妻の大方の言也、是は焼鎌をやいかまと云如く、古やきひと云けむを、後には、音便にくづれて、やいひと云、是に用る草を、やいはくさ、やいくさ杯いひつらんと見ゆ、されば今やきひと云ぞ正しかる、文覺法師の消息、隨儒集等に、灸をやいとと云、今京あたりの人も然云は、共に訛なるべし、さて右の二書に、さる名あるからは、太古よりの術と見えて、軍防令にも、凡兵士毎火云々、紺布幕一口、著裏、銅盆、小釜、隨得三口云々、火鑽一具、熟艾一斤とある、熟艾は火鑽と並いへれば、其料かともおもはるれど、灸の料なるべし、○中略

近き寶暦の比なれど、三宅意安と云し人の、古より驗あり、かつ正く傳來たる方等を撰たる、灸焫壘土傳と云あり、又名家灸選と云に、二神より傳し由の方を、是彼載せるもあり、又中古の書、或は世間に傳はるが、漢にいたく異なりて、決く古方とおぼゆる多し、

〔春雨樓叢書 二〕異國の灸治

朝鮮の人、疾病なき時は、灸をするに及ずと云、一人として灸の瘢あるはなし、阿蘭陀にても、近來日本より傳へたり、唐人も十人が十人ながら、三里及風門などに灸瘢あるを見ず、此故を問へば、疾病なき故に、灸するに及ずと云、琉球人は、十人に九人は灸瘢あり、去かれども、日本人の如く、總身にはなし、只三里に多く見るなり、唐は都て灸の本なれども、日本の如く、宜しき事は傳へずと志るべし、

〔拾芥抄 下末 雜〕灸治寸法〔以量體一節、手中指自本節至下節許之、其間謂折寸、又五分折寸、其略折四、以其一爲其人一寸也、〕

〔攝養一得 上〕灸ノ四花ヲ點ズルニ、足ニテ定ベキ稈(ワラシベ)ヲ、女ハ腕ニ代ヘ用、是ハ葛可求ガ十藥神書ニ、婦女纏脚者非其生成、故以手取之ト云ヲ誤解シタルニヤ、纏脚トハ、宋ノ中葉ヨリ、貴女娼妓ノ類

ハ、幼ヨリ足ヲ纒ヒ、紮約シテ長育セシメザルヲ、貴人ノ體面トシテ、紮脚セザルヲ恥トス、中下ノ女ハ常ノ足ナリ、纒足ハ甚小ク、穴處ノ則ニナラヌ故、纒脚ノ者ト別チ云ヘリ、日本ノ女ハ、脚ヲ紮ザレバ、足ニテ取コト論ナシ、

〔重刊神應經序〕恭惟、我主上殿下之六年也、命禮曹中殿醫教、設鍼灸專門法、擇其精於術者為師、而資性明敏者為弟子、勸勵之法甚悉焉、適有日本釋良心、以神應經來獻、兼傳其本國神醫和介氏丹波氏治癰疽八穴法、其八穴雖未試用、神應經其傳授遠有所自、而所論折量補瀉法、皆古賢所未發者、其取穴又多有發起古人所未盡處、其所著穴皆撮其功要、而得効多者、文簡而事周、令人披閲晷刻間證與穴瞭然在目、聖上嘉歎、命以八穴法付於神應經之末、鋟梓廣布、且以永其傳焉、臣竊惟、醫療之方、藥餌鍼灸不可偏廢、但藥非本國所產者頗多、大槩皆求之中國、而又非盡出於中國也、轉々市易得之甚難、豈眞贋陳新之可擇、而貧窮下賤與遠方之人、亦未易遍及也、唯砭焫之方、無費財遠求之勞、採暴合和之難、一鍼一艾、備應無方、運於指掌、拼於談笑、貧富貴賤、遠近緩急、無適不宜、況於取効、常在藥力所不及致處、而其功用神妙、難以備述、庸醫不知、以為卑辱、至相誑病而不肯為、故世之病者、生死壽夭、率皆付之巫覡淫祀、豈不哀哉、聖上悉其然、乃設專門、登嚴勸督、適有假方之獻、不以珍奇可玩之異物、而以此救民濟世之神方、不期而至、孚我聖上仁民愛物之盛德、夫豈偶然哉、成化十年十一月二十一日、推忠定難翊戴純誠明亮經濟佐理功臣崇祿大夫西平君臣韓繼禧謹序、

成化九年癸巳孟冬、日本國畠山殿所使副官人信州隱士良心言、我國二百年前有兩名醫、一為和介氏、一為丹波氏、此二醫專治癰疽疔癤瘰癧等疾、定八處灸法、甚有神効、

八穴灸法

頭部二穴　諸瘡發于頭部、則耳尖上周廻用禾稈量之、（自左耳尖上起端、古旋經右耳尖上、還至起端處斷之、）以其稈當結喉下、至項後雙垂之、以患人手橫握其端、而切去之、（以其稈中央、當結喉下、兩端左右會于項後、雙垂之、以患人手橫握其兩端之末、而斷之、如針經一夫之）

按、其稈端當處、脊中骨上點之、瘡出左者、去中骨半寸灸左、出右者灸右、出左右者並灸左右、

手部二穴　瘡發于手部、則自肩上高骨端、肩髃穴至第三指頭爪甲端斷之、以其稈當結喉下、至項後雙垂之、如頭部法、

背腹部二穴自大椎下至尾骨端、爲背部、自天突穴下至陰毛際、爲腹部、兩腹水蜜遶背部、　瘡發于背或腹、則乳上周廻、自左乳頭上繞右乳頭周身還右乳頭上還至左乳部、遶腹背、以其稈當結喉下、至項後雙垂之、如頭部法、

足部二穴　瘡發于足部、則並立兩足、令相著、自左大拇指端至右大拇指端周廻、自左足大拇指頭、繞左足跟、至右足際、右旋頭、左右足跟、遶至右足跟部、遶左足跟、以其稈當結喉下、項後雙垂、如頭部法、

灸八穴、痛則灸到不痛、不痛則灸到痛、或五百壯、或七八百壯、大炷多灸尤妙、瘡疽始發、而灸則不潰、而自愈、已潰而灸、則生肌止痛、亦無再發、

〔異稱日本傳下四〕今按、成化明憲宗純皇帝年號、成化九年當日本後土御門院文明五年、此時能登國刺史畠山義統爲足利老也、良心信濃國人、釋氏而醫者也、爲畠山奉使也、○中略和介氏和氣氏也、介與氣音近、○中略丹波氏出自後漢靈帝、○中略凡兩家之傳誠有所由矣、昔神代大己貴命、少彥名命二神定療病之方、後世蒙其恩、兩家遡逃之并參考中華醫書、故其術尤精也、蓋如三藏之方八處灸法、皆神代遺法乎、

〔頓醫抄四十三〕所禁肝春酸三月木　心夏苦三月火　脾秋甘三月土　肺秋辛三月金　腎冬鹹三月水　心者陽、腎者陰、

一○○寸灸治、虛勞ニ最上ノ灸也、イカニ不食ナルモ、ヤガテ食事ノ氣デクル也、百會ヨリワラスビヲウシロエヲロシテ、龜尾ニ至リテ切ベシ、ソノワラスビヲ、喉ノ骨ニ、マン中ヲアテヽ、ウシロヘヲロシテ、スベノ端ヲ中骨ニアテヽ、點ヲナスベシ、サテ手ノ高々指ノ中ノキダミ一寸ヲ取テ、右ニテモ左ニテモ病ノアル方ニ、一寸ノ寸法ヲ横ニアテヽ、點ヲナス、是スナハチ一寸灸ノ有所ナリ、

左右ヲタ、キテ見レバ、ホタ〳〵ト鳴テ、ウツケタル樣ナル方ニ病アリト知テ灸スベシ、又我ト本ヨリ病ノアル方ヲ覺ルコトアラバ、其方ヲ灸スベシ、百會ヨリノワラスビ、ツヂニハウナジノクボキ處ヘヲシツクレドモ、此寸法ニハスグニ引ハリテ點ヲサスナリ、灸ノコシラヘ樣ハ、厚紙ノコグチ一寸ヲ袋ニシテ、艾ヲツキコミテ、タケモ一寸ニ切ナリ、彼灸點ノマハリニ、味噌ヲヌリテ、其中ヘ、灸艾炷ヲ入テ、火ヲ下スベキ也、又ナスビノカウノ物ヲ、二ツニ切テ、灸ノ入ホド、穴ヲエリアケテ、其中ヘ、灸艾炷ヲ入テ、スキアレバ、味噌ヲヌリテ、サテ火ヲ下ス也、スベニテ寸トル時ハ、男ナラバモツトイヲ解キ、髮ヲワケテ引クダスベシ、此灸ハ、ウツブシニテヤクナリ、灸艾ノスツトクヒ入マデ置也、

〔萬安方 五十七 諸灸〕脚足部○中略

三里、在膝下三寸骺外廉兩筋間、當舉足取之、秦承祖云、諸病皆治、食氣、水氣、蠱毒、痃癖、四肢腫滿、膝骺疼痛、目不明、華佗云、療五勞、羸瘦、七傷、虛乏、胸中瘀血、乳癰、外臺明堂云、人年三十已上、若不灸三里、令氣上衝目、所以三里下氣也、明堂同 灸三壯、針五分、明云、針八分、留十呼、瀉七吸、日灸七壯止百壯、素問注云、刺一寸、在膝下三寸骺骨外廉兩筋肉分間、指云、深則足扶陽脈不見、集云、按之太衝脈不動、執中云、手有三里、此亦曰三里、蓋足三里也、

〔徒然草 上〕四十以後の人、身に灸を加へて、三里をやかざれば、上氣の事あり、かならず灸すべし、

〔多聞院日記〕永祿十二年三月朔日、小舌ノ秘針アリ、左手ノ大指ヨリ四番目、小指ヨリ二番目ノユビノサキノ、彼ノスヂノ丸クマハリタル所ヲ、ソトハチヤブリテ、血ヲタラシテ吸ヘバ、ヤガテナヲル也ト、行賢坊得業ノ說、

〔貝原養生訓 八〕灸法 中略 灸に用る火は、水晶を天日にかゞやかし、艾を以下にうけて火を取べし、又燧を以、白石或水晶を打て火を出すべし、火を取て後、香油を燈に點じて、艾炷の火を

つくべし、或香油にて紙燭をともして、灸炷を先身につけ置て、云そくの火を付べし、松栢枳橘楡桑棗竹、此八木の火を忌べし、用ゆべからず、

〔伊呂波字類抄〕〔也植物〕艾〔ヤイクサ、ヨモギ、五月五日採也、〕　〔同〕〔也植物〕艾草〔鍼灸、醫作艾、〕

〔令義解〕〔五軍防〕凡兵士、備火、〈略〉〇中火鑽一具、熟艾一斤、

〔延喜式〕〔三十七典藥〕雜給料、〈略〉〇中熟艾一斤四兩、

〔本朝食鑑〕〔一火〕〔類〕艾火

集解、今艾灸者、頻々以手揉艾葉、去黑粉、令如綿、又上焙乾揉燃、作中豐兩頭尖、如大麥粒、其大小隨意而造之、此謂燃灸、又揉艾去黑粉細梗、如綿、敷紙上、或餘寒之、令細長、裹艾如筋著、此謂一竿、一竿有一錢者、有五分三二分者、隨意造之、凡之作一炷、長二三分許、脫紙取切艾、紙上焙乾用、此謂切灸、或綿封外紙、截作二三分許、艾之輕重亦可隨意用、〈略〉〇中予往歲授一異僧傳、五月五日採苧麻葉、用陽根叢茂者爲好、陰乾以手揉之如綿、燃之作大炷、而灸瘡腫初發處、至痛癒、耐而止、則不成膿而散、膿潰其毒淺易痊、予既試之一兩度、最有奇驗哉、凡艾葉亦五月五日采之陰乾者佳、今以江州膽吹山之艾爲勝、野之中原峯下、標地原之艾次之、其餘擇而可用之矣、

〔本朝世事談綺〕〔五人事〕團十郞艾

元祿のはじめ、神田鍛冶町箱根屋庄兵衞といふ者、箱根の温泉湯と稱して、切艾を製す、看板、あるひは、艾の印に、三つ角の紋を付る、これ市川團十郞といふ芝居役者の紋也、此切艾の製よろしとて、江戶中に流布す、是を倣ひ、所々に切艾の製あり、庄兵衞が印を模して、おの〳〵三角の紋を付て、三升屋兵庫、市川屋某何など、名をつけて、これを賣也、團十郞がはじめたるにはあらず、

〔本朝食鑑〕〔一火〕〔類〕艾火

集解、本邦灸艾火、治百病者、用麻油燈火、蠟燭火、或用水精珠及鐵圖火珠、向日寫景、以艾承之則得

漆灸

明火而灸、若倉卒遇難、則炭火及金石相擊取火用之亦可也、○中略其連紙艾炷、截口粘鹽水糊以灸穴、此稱藥灸、俗謂一炷當尋常之十炷、又有艾中摻合雄黃黃丹等藥物、而作連紙切灸、復稱藥灸、言一炷當數十炷、病根作膿血惡水而流去、令人永無病也、斯二灸俱灸痕紅腫成膿、而日久不瘥、壞潰作灸瘡難瘥、最是非定法、明堂經曰、下火點灸、欲令艾炷根下赤、煇廣三分、若不三分、孔穴不中、不合得經絡、火氣不遠達、李挺曰、惟頭面四肢差小耳、小兒則小麥雀屎大可也、然則藥灸不可漫用、若遇急症不拘大小、惟以回生起死為要、或若癰疽瘰癧痔瘻等病、用藥灸亦宜、又用蒜蒜末醬類、敷患處而灸其上亦有、又紙上敷末醬薑蒜類而灸其上、以引紙煩患處、俱是熨法、宜用大艾炷者也、近年一醫用合藥灸如漸穩燒頭、隔衣服而熨患處、衣服不燒能徹肌膚、此亦奇法也、○中略

附錄　志牟灸燒金志牟灸、或作針灸、八九十年以前世有用之者、近代棄而不用之、其法用銅鐵如筋箸、或如蓍子、而炭火燒過令通赤、別用厚紙數重、敷患處及經穴、隔紙輕々點之、雖其勢猛、不似灸之久、而救急之功最速、惟恐其勢烈、而人皆厭之不用乎、今醫家用銅鍼如小針、請鍼、炭火燒過令通赤、點著中取肉、此稱燒金、又遠熱過令熱、乘熱當患處、此稱燒金冷暖目牙齒、醫亦用之、

〔病家須知五〕痢病のこゝろえを說○中略

又痢病は尤灸に宜、臍の兩旁、臍の上下、および背脊、腰髎、何も灸してよし、又腹部の痛甚きところを、阿是灸にするもよし、臍中に鹽を塡て灸するもよし、それは坩の底に、錢大許の穴を穿て、裏面より紙を貼、穴に鹽を塡、底を火に溫て後、臍の上に安、艾肉にて灸するなり、巴豆皮大、呉茱萸ゴシユユ小を細末して、鹽に和て、灸するもよし、此藥を、味噌にて調和扁平にして、そのうへより灸するもよし、巴豆皮を去て、丁子、良薑、麝香などを加たるもよし、

〔贊育醫談二〕漆灸摘要序

夫ル漆灸ハ、漆ヲ灸穴ニ點ジテ、以ヲ易艾灼、故ニ漆灸ト稱ス、實ニ小兒諸疾ヲ療スル良法ナリ、此ハ甲斐德本翁ノ異人ニ授ル所ノ法ナリ、幸ニ予先人之ヲ家ニ傳ルコト久シ、湖東僧不動院翁ノ、

灸治療

治術療方灸法ヲ好ンデ、略之ヲ知ル、京師富仲達、捻潦六法ヲ唱へ、大人小兒ノ筋骨疼痛シ、癘風井ニ諸疾ヲ治ス、嘗富氏ニ從テ其治法ヲ聞ク、予亦其術ヲ與リ聞ク、増ガ秘藏スル所ノ法ト、予ガ家ニ傳ル所ト大概之ニ同ジ、中略○

三熊考純序

〔醫心方 一〕治病大體第一 中略○

大素經云、中略○北方者、天地所閉藏之域也、其地高陵、居風寒冰凍、其民樂野處而乳食、藏寒生病、其治宜灸焫、灸焫者從北方來、

〔藥徵 中〕艾

仲景之方中、芎歸膠艾湯用艾、而非君藥也、是以其所主治也、不可得而知矣、芎歸膠艾湯、主治漏下下血也、今從其成方而用之、

辨誤

名醫別錄曰、艾可以灸百病、後人不審其證之可灸與否、一概行之、故罹其害也、蓋不鮮矣、醫者見之、以爲不候寒熱之過也、不審可否、則固已失之矣、論寒熱亦未爲得也、灸者所以解結毒也、若夫毒著脊上、藥之不知、下之不及、則其所著而灸之、其毒轉而走腹、而後藥之爲達也、隨其可灸之證也、我不能同其寒熱、而未有逢其害焉、有灸而發熱、是毒動也、世醫以爲灸誤非也、余於若證、灸而不止、其毒之散也、其熱亦止、此卽所謂瞑眩而瘳者也、凡艾之爲用也、灸之與煎、其施雖異、而以其一物也、併爾言及焉、

〔醫心方 一〕治病大體第一 中略○

針灸經云、十歲小兒、七十老人、不得針、宜灸及甘藥、 醫門方云、大法、春夏宜發汗、 凡服湯藥發汗、中病便止、不必盡劑、 凡發汗、欲令手足周遍、漐々津液、通身一時潤益佳、但以不用流離如雨、急以粉摩塗身體、勿當風冷、

〔備急千金要方 五上 少小嬰孺方〕驚癇第三 中略○ 灸法

論曰、小兒新生無疾、愼不可逆針灸之、如逆針灸、則忍痛動、其五脈因喜成癎、河洛關中、土地多寒、兒喜病癎、其生兒三日多逆灸、以防之、又灸頰以防噤、有噤者舌下脈急、牙車筋急、其土地寒、皆決舌下去血、灸頰以防噤也、吳蜀地溫、無此疾也、古方既傳之、今人不詳南北之殊、便按方而用之、是以多害於小兒也、所以田舍小兒任其自然、皆得無有夭橫也、

〔瘈狗傷考〕瘈狗傷考附錄

毒蛇諸蟲咬

呪由失其傳、或僅見於民間、亦多不可信、凡諸蟲獸咬人、以灸爲至治、槃與瘈狗咬同法、諺曰、大可象小、孫眞人曰、治蛇毒灸毒上三七壯、無艾以火頭稱瘡孔大小爇之、陳文治瘍科選粹曰、諸毒蟲所傷、如南方灰裏鞭赤練等蛇能殺人、服藥固多妙方、不若灸之劾爲速、可謂能識之者、凡不問蛇虺蜈蚣蜂蠆鼠猫、一切皆灸之、多少將息行之、〇中略

鼠咬〇中略

蓋與瘈狗一般、而別無看法、其初見嚙之時、以井水若白花鞭躅煎汁洗之、令血出、灸牙處每七八壯、艾炷悉爲灰者爲妙、若根礎有餘燼、或不覺痛熱者、不在常數、須以燒盡艾形不遺、知苦熱者爲度、內服紫金丹二三分益佳、俗間洗傳方法極多、不可悉信也、

〔牛渚漫錄四〕傷損灸

貝原損軒格物餘話云、凡損傷於身體、閃挫於腰脚者、苟用艾火灸、則服藥不効、此言出乎醫書、自試誠然、余讀醫書、未詳其出典、然損軒篤實之士、必非杜撰、按俗忌浴後灸、而草津溫泉浴法、瘡家必用灸浴後又浴、常渴爲妙、乃知灸亦不可深拘也、

〔中右記〕元永三年〇保安元年七月廿二日、丑刻許、橫河阿闍梨寬澄差使者告送云、民部卿〇藤原宗通此亥刻許、於九條堂薨給畢者、〇中略今任權大納言、卅一而從去永久四年十月、飮水病付、此夏背灸治、去月廿

三四日、件背大癰、是灸治之路存歟由之處、醫師等見之大驚、是匪物也、早可射水者、從今月一日偏存二禁由、又灸治、而遂日大增不可堪也、新繪千萬、造丈六佛數十體、從院給六位功、彌以新請、衆日辭三實今夜逝矣以被異、

大治四年八月廿六日辛丑、今日院〈○鳥羽〉御灸治云々、典藥頭雅康朝臣奉仕者、〈御背西所、御腳二所、〉給御馬於雅康朝臣云々、

長承二年二月廿二日、在宇治之間、藏人兵部大輔資信送書云、施藥院使重忠奉仕上皇〈○鳥羽〉御灸治事、任先例、必可被物賞也、而超越長者典藥頭重基之條、宜可令計申給者、予□事云々、重忠奉仕御灸治、必可被行勸賞也、但重基道之長者、家之最光寶、超越顯其沙汰可候歟、下﨟必蒙賞時、上﨟共浴臨時恩、多有先例、早以此趣可令奏達給之狀、如件、

(保元物語 二)新院左大臣殿落給事

左府〈○藤原賴長〉ハ〈○中略〉東ノ門ヨリ御出有テ、北白河ヲサシテ落サセ給處ニ、イヅクヨリカ射タリケン、流矢一筋來テ、左大臣殿ノ御頸ノ骨ニ立、成隆是ヲ拔テ給タリケレ共、血ノハシル事、水ハジキヲ以テ水ヲハジクニ不異、然バ鐙ヲモ踏得ズ、手綱ヲモ取得給ハズシテ、眞倒ニ落給ヘバ、成隆朝臣モ落タケリ、式部大輔盛憲、左府ノ御頸ヲ膝ニカキノセ、袖ヲ御面ニ掩テ泣居タリ、藏人大夫經憲モ馳來テ、抱付奉ケレ共甲斐モナシ、延慶ハ桂ガ崎ノ方ヘ落行ケルガ、是ヲ見奉テ甲冑ヲ脫捨、盛憲ト共ニ小家ノ有ケルニカキ入レ進ラセテ、先疵ノ口ヲ灸シ奉ケレ共不叶、次第ニ弱リ給ヒケリ、

(玉海)安元三年〈○治承元年〉六月十日戊寅、午剋源中納言雅來、相具筑紫醫僧〈字大壽房〉是爲令灸予〈○藤原兼實〉疾也、年來諸醫加種々療治、或減或增、延今及大事、件醫僧近日人到施驗、仍僕爲之灸也、彼納言相知之故、所令尋也、三箇所指驗遂畢、是最害事也、事雖非穩便、試爲全身命、不顧世上之毀、而且是依彼納言

之勸也、〇中略今日胸腹兩所灸了、灸七草也、

〔高倉院嚴島御幸記〕八日、〇治承四年四月家のしやうをこなはる、〇中略かくて御やせもたゝならずなどきこえて、くすしども申すゝめて、御きうちなどぞきこえし、

〔源平盛衰記十五〕宇治合戰附賴政最後事

明春、心ハ猛ク思ヘドモ、手負ケレバ引退テ、平等院ノ門外、芝ノ上ニテ、物具ヌギ置、甲冑ニ立所ノ矢、六十三、大事ノ手ハ五所也、閑所ニ立寄テ、彼是灸治シ、頭ハカラゲ、弓打切杖ニツキ、平足駄著テ、〇中略奈良ノ方ヘゾ落行ケル、

〔玉海〕治承五年二月廿八日乙巳、傳聞邦綱二豎有煩、今日加灸治、〇百六十壯云々憲基治之、定成云、物體雖非大事、次第療治相違、病者身弱有其怖云々、

養和二年〇壽永元年八月八日丙午、召良藥頭定成、加灸治、十二箇所賜單重、瘧病之後不經程灸治、人以不甘心、然而依本病無術強所灸也、

〔今物語〕少輔入道〇寂蓮ときこえしうたよみあり、〇中略風の氣有て灸治しけるに、人のとぶらひて侍りける返事に、

年へたる風のかよひぢたづねずば逢が關をいかゞすへまし

〔吾妻鏡二十五〕承久三年六月十四日丁卯、武州〇北條泰時越河、〇宇治不相戰者、難敗官軍由相計、〇中略同時發矢、兼義、貞幸乘馬、於河中各中矢漂水、貞幸沈水底訖、欲終命、心中新念諏方將神、取腰刀切甲之上帶小具足、良久僅浮出淺瀨、爲水練郎從等被救訖、武州見之、手自加數箇所灸之間住正念、所相從之子息郎從等以上十七人沒水、

〔葉黃記〕寬元四年八月廿二日戊申、院〇後嵯峨御浴可爲廿六日云々、醫師勸賞祿間事、頻有沙汰、又內々有御尋先例、仍隨所見注進了、依御二禁及御灸例不分明也、但仁安二年閏七月、後白川院御二禁、雖

不レ及二御灸一、醫師等有二勘責一、件記右大注進了、有二御感一云々、醫師等料小袿飯被レ宛二人々一、兩日調進了、

〔増鏡 八 飛鳥川〕その夏〇文永十年春宮〇後宇多例にもおはしまさで、日ごろふれば、〇中略和氣丹波の藥師ども氏成春成、夜晝さぶらひて、御藥の事いろ／＼につかうまつれど、たゞおなじさまにのみおはす、いかなるべき御事にかと、いとあさましうて、上〇龜山もつとこの御方にわたらせ給ひて、見奉らせ給ふに、御目の中、大かた御身の色なども、ことの外に黄に見えければ、〇中略かばかりになりては、御灸(やいと)ならでは、まが／＼しき御事いでくべしと、をの／＼おどろきさはぐ、いまだ例なき事は、いかゞあるべきとさだめかねらる、位にてはたゞ一たびためしありけり、春宮にてはいまださる例なかりけれど、いかゞはせんとて、おぼじさだむ、七にならせ給へば、さらでだに心ぐるしき御ほどなるに、まめやかにいみじとおぼす、藥師と大夫定實の君、ひとりめし入て、又人もまいらず、御門の御前にて、五所ぞせさせたてまつらせ給ひける、御乳母ども、いとかなしと思ひて、いぶかしうすれど、おさ／＼ゆるさせ給はず、宮いとあつくむつかしうおほせど、大夫につといだかれたまひて、上の御手をとらへ、よろづになぐさめ聞えさせ給ふ、御けしきのあはれにかたじけなさを、おさなき御心におぼしまるにや、いとおとなしく念じ給ふ、かくてのち程なくをこたらせ給ひぬれば、めでたく御心おちゐ給ひぬ、

〔吉續記〕文永十年九月四日癸未、傳聞、春宮〇後宇多御黄疸氣御、仍被レ加二御灸一云々、

〔花園院御記〕文保三年〇元應元年九月廿二日、今日院〇後伏見有二御灸一、朕同灸、院御灸點、篤康奉二仕之一、朕仲成奉二仕之一、

〔看聞日記〕應永廿三年八月廿五日、大光明寺雛首座參、御所樣〇略、御腫痛之秘灸事被レ申、心智客、最秘灸口傳云々、予委細令二口傳一、別紙注レ之、　二十七日、雛首座參、御腫秘灸有二御沙汰一、首座灸治申、隨有二効驗一、秘灸云々、賜二御扇一、　廿八年二月十九日、我三里令二灸治一、嶋御方同灸レ之、椎野盃酌、聊被二張行一、

〔薩戒記〕永享五年四月四日丁亥、今日、招醫師、受灸治之驗、

〔近世人鏡錄四内藤〕本多作左衛門重次○中略　天正十三年、大君○家康患疔、自以爲不起、召老臣命後事、重次薦一良醫、大君不肯曰、刀圭已窮、復何加焉、重次艴然曰、崩醫雖良也、豈不無遺治、而輕決大事、與草木漸盡、則臣先塡溝壑、爲君作蘼蕪螻蟻、乃拂袂而出、大君遽使左右止之曰、予死也、則克竭殖力、置社稷乎泰山之安、是汝之職也、而徒欲殉死、豈不悖哉、重次曰、否主公如有不諱、世子弱、國又少、臣下假假、無有固志、於是鄰國乘釁侵擾、我必不能支、國竟爲墟也、是臣之所以欲自裁也、大君大悟、卽召醫、醫令攻之、重次助灼艾、不日而愈、重次於是喜可知也、

〔醫學天正記乾上〕暈

慶長三年九月朔日

今上○後陽成皇帝、御年二十八才、俄然而眩暈、食頃而甦、○中略　十月之末、予○曲直瀨道三奏上、欲灸膏肓、有詔攝家名家、見尋舊記、九條殿、二條殿、近衞殿御答、雖無舊記、以艾灸本復、醫師奏上之旨分明、可被灸治、一條殿、鷹司殿御答者、無舊記云々、故不能灸、

〔本朝醫談〕玉體を灸し奉る事、例少き事なり、

〔醫學天正記坤〕諸瘡

一今上皇帝○後陽成臍上左邊生癰、色赤而不疼不熱、御脈細弱、　二八流氣發損、外醫岩倉梅陰庵、大德寺玄首座兩人參內、左緣上隔障子、破紙作穴而視之、腫上ヲ灸、去ル慶長三年之秋、御腦之時、予欲灸治、依無舊例不能灸、頃中院入道也足軒、見舊記出而奏上、依其例灸腫上、自今已後、可有灸治之勅意也、內藥始終、二八流氣也、便結則用潤腸丸、三旬而全愈、

〔皇國名醫傳後編中〕香川修庵從子主善

香川修德、字太冲、以字稱、號修庵、又一本堂、姬路人、○中略　外科御醫久米元察、春初赴饗、腹痛俄作、吐瀉數次、翌

日京師醫工皆聚、温補鍼按無術不盡、而痛不少減、其子夜走謁修德、修德素與元察弗協、子哀求極切、遂許之、及診脈絶、四支微冷大汗流漓、面如塗漿、修德曰、病勢至此、藥事無益、是謂上注、勘藥也、治法有灸而已矣、能忍熱乎、元察曰、願子一診、死生唯命、乃使之起、灸撒旗（撒旗、修德所創穴名、在二脇下京門左邊動脈之空陷邊當于臍、故名、）六十壯、更臥之、灸中脘一百壯、而腹痛頓止、增至二百五十壯、明日左脈始生、益用灸、又一日夜右脈漸應、食欲少進、更灸上脘建里通谷等、漸次復平、修德曰、今後務在飮養、謹勿用俗醫不寒不熱之藥汁、以誤調理、再發毀敗、因謂元察曰、子是丈夫、不思嫌隙、以疾見託、幸得成功、吾亦有望于子、子豪上皇寵、疾家面頓上必覆問、子無所隱諱、詳言其狀、上識察灸治有功、萬一○○○○○○○蒙採乃用之、推及公卿、遐方小民傳聞放傚、則其益於世大矣、是區々之志、還願頼子賛之、元察許諾、

〔醫心方二〕針灸服藥吉凶日第七

針灸忌日　華佗法云、凡諸月朔晦、節氣上下弦望日、血忌反支日、皆不可針灸治久病滯疾、記在暦日、

又云、多至夏至歳旦、此前三日後二日、皆不可針灸及房室、殺人大忌、　又云、立春、春分、立夏、夏至、立秋、秋分、立多、多至、

右日忌不可針灸治病也、

〔黄帝鍼灸甲乙經五〕鍼灸禁忌第一上

黄帝問曰、四時之氣、各不同形、百病之起、皆有所生、灸刺之道、何者爲寳、岐伯對曰、四時之氣、各有所在、灸刺之道、氣穴爲寳、

故春刺絡脈諸滎大經分肉之間、甚者深取之、間者淺取之、

〔拾芥抄下末醫生〕人神

一日足大指　二日外踝　三日股内

四日腰左脇（十四椎左右背、左右二寸、）　五日口或頸（舌根右脇）　六日左右手（或足小指足大指）

七日內踝　八日腕　九日尻（足趺）
十日腰背　十一日鼻柱　十二日髮際
十三日牙齒　十四日胃管（脘）　十五日遍身
十六日胷（脇同或腹）　十七日氣衝（左股大衝）　十八日股內（或腹右胷肱內外）
十九日足（四支）　廿日內踝（或巨闕）　廿一日足小指（耳後）
廿二日足踝及胷目下（或胷目下、足外踝、）　廿三日肝及足（足外踝肝俞也）　廿四日手陽明（或脇腹胃腹腹）
廿五日足陽明（或足內踝上三）　廿六日胷　廿七日（胷陰內踝）
廿八日陰（脚內踝）　廿九日膝脛（氣衝）　卅日足趺（陰關元足上○中略）

時人神
子時足　丑時頭　寅時目　卯時顏耳　辰時口　午時脇　未時五臟　申時腹
戌時陰　亥時（股踝腰身）忌之

年人神（伏其年建有當年二月忌）
子年（六月、未、未腰、）　丑年（七月、申、申足、）　寅年（八月、酉、酉項、）　卯年（九月、戌、戌腹、）　辰年（十月、亥、亥腰、）　巳年（十一月、子、子背、）
午年（十二月、丑、丑肩、）　未年（正月、寅、寅頭、）　申年（二月、卯、卯喉、）　酉年（三月、辰、辰心、）　戌年（四月、巳、巳腹、）　亥年（五月、午、午陰、○中略）
右神所在不可灸針

〔萬安方（五十八避人神社）〕癰腫針灸不避年神事
博濟安衆方云、夫患一切癰腫、針灸並不得避忌年神等、只如人神在某處不得針灸、此亦妄言也、況身與神同體、身既有病、神亦何安、

〔貝原養生訓（八）〕灸法○中略　方術の書に、禁灸の日多し、其日、其穴を忌むと云道理分明ならず、內經に、鍼灸の事を多くいへども、禁鍼禁灸の日をあらはさず、鍼灸聚英に、人神尻神の說、後世術家の

言なり、素問靈樞にいはざる所、何ぞ信ずるに足んやといへり、又曰、諸の禁忌、たゞ四季の忌む所、素問に合ふに似たり、春は左の脇、夏は右の脇、秋は臍、冬は腰是也、聚英に所言かくの如し、まことに禁灸の日多き事信じがたし、今の人只血忌日と、男子は除の日、女子は破の日を忌む、是亦いまだ信ずべからずといへ共、しばらく俗說と時俗にしたがふのみ、凡術者の言途一に信じがたし、

〔本朝灸經〕今人灸治するに、とし日血忌を改め正すまでにて、人神の所在は擇ばず、醫師もおろそかにして語らず、昔人譏に背たるなり、

〔[illegible]中〕艾略○中辨誤

灸家言禁穴頗多、余○吉益東洞家不言之、一從靈樞、以結寄爲輪也、大凡灸不止一日、乃至五日、七日、以多日爲有効矣、一日暴之、十日寒之、我未見其能治者也、

〔皇國名醫傳後編上〕古林見宜古林見[illegible]

古林正溫、通精見宜、略○中正溫術綜諸科、不擇大小男女、喜用灸焫、亦時以毫鍼刺、衆會、或問灸有禁穴忌日然乎、正溫答曰、元日不可灸、眼睛不可灸、不知其他、

〔嬉遊笑覽忌入〕寶曆十三年、灸治を忌日とて、長崎にて試し人有しとて、賣歩者有しが、今も人々是を寫し、壁に張置て、何の年の人は何月何日を忌とて信用す、これ皆據なき浮說なり、其中に、巳の年の人は、忌日なく、年中よしとあるは、當時上樣巳の御年にわたらせ給へば、かやうに言出しものなりと或人いへり、

〔續古事談五諫言〕富家殿○藤原忠實灸治シ給ケルニ、重康申サク、日神モヽニアリ、ヤキ給ベカラズ、コノカミ、忠康申サク、內モヽ、外モヽ、コトナリ、醫書明堂圖ニ見エタリ、外モヽハヤカルベシ、玉篇切韻マコトニ、忠康ガ申ガゴトシ、コレニヨリテ、重康ヲメサズ、忠康ヤキタテマツル、兄弟中アシクシテ、フチニカヽル事アリケリ、忠康ハ、雅忠ガ實子ニハアラズ、上野守良基ガ子也、雅忠オサナクヨ

リ、子ニシテ、道ヲツタヘタルナリ、醫道ノ課試、忠康マデシタリ、其後スルヒトナシ、

〔台記〕仁平三年九月十八日甲辰、申剋參上、酉剋退廬、顯遠曰、主水正基康、神在腹之日、灸院〇鳥羽御腹、大失也、

〔山槐記〕治承三年十一月十四日戊辰、典藥頭定成朝臣來、腫物餘熱猶不散、開針口、今日冬至前三日之中也、憚針灸、然而聊開口、強不可及憚之由、定成所示也、

〔玉蘂〕元暦二年〇文治元年三月三十日癸丑、今日灸治三箇所加之、玉堂胷也巨穴中骨等也、玉堂巨穴等神在心之時可避之云々、但丹家〇丹波氏申云、不可避玉堂、膻中可避之云々、和氏〇和氣氏申云、紫宮玉堂等同可避云々、而三十七人三月神在心云々、仍日來不灸之、今日入四月節、依爲三月中、依用節分、今日灸之、抑月神事、丹家申無月神之由、和家申有之由、不審之處、余先年見千金秘髓、方有年月日神之由見之、仍所信和家說也、

建久二年六月廿九日丙午、此日依醫家吉日灸治一所、明日以後久無吉日、病責侵之故也、　十一月廿五日庚午、此日依吉日中宮奉指驗、今日依血忌明日可奉灸也、余指之、不召醫師也、　三年正月五日戊寅、定長語云、昨日諸醫相論之間無御灸、今日卒爾有御灸云々、余問云、昨日最上吉日也、雖爲血忌日於灸點者不可憚、仍昨日招驗者、今日令灸給宜歟、凡人之所用也、人君御事、今一重可用心、然而事已急事也、隨又去年最初御灸如此云々、然者於此條者不可有巨難也、而空過吉日、今日寅最惡日、招驗御令灸給之條、未得其意、寅日者非會入吉日、已出禁忌之日、加之戊寅者四絶日、於針灸者忌憚深、今日御灸太爲奇、但於急事者血忌人神所在之外不避之云々、爲其議者勿論也、若然者彌又昨日可被招灸點也、前後相違首尾錯亂、次第尤不審、定長云、昨日依血忌日灸點猶有憚之由、知康法師確執、他醫殊無申灸點止了云々、此事未曾聞也、血忌人神所在者、全非日之吉凶也、是各別事也、諸道之人滅亡我道、如獅子身中虫喩、末代之事可悲々々、雖無益事、存旨粗令定長服膺歟、

〔満済准后日記〕永享七年二月廿八日、今日灸治不可有子細之由申間、ヤウカウ灸治了、

〔拾芥抄 下末 灸治部〕五體不具穢事○中略

灸治穢者七日、居灸之人三日、但膿血出間不可参神社、是師説也

〔徒然草 下〕灸治あまた所になりぬれば、神事にけがれありといふ事、ちかく人のいひ出せるなり、格式等にも見えずとぞ、

〔燕石雑志 三〕字體○俗字解附 中略

艾巻談苑に、灸一灼を一壯といふは、壯年の人にあて、、幾灼と定めたれば、壯とはいへり、としよりたるもの、いとけなきものは、ほど〱につけて其數を減ずるなり、沈存中が筆談に見えたりといへり、愚按ずるに、この説非ならん、壯は焫と同音なり、正字通に、焫、舊註音壯、火焼熏烝也、今炊灸焫焫蒸謂之焫類、一説、陸田曰、醫用艾灸一灼、謂之壯、俗因作焫、焫類説非と見え、亦方書に、往々、灸幾焫に作るを見て、その義、壯年の壯を象るにあらざるをしるべし、壯焫ともに熏烝の義ならん歟、もし壯年の灸治に幾壯と唱ふるものならば、老人には幾艾といふべし、艾は老也、老人に幾艾といはざるをもて、灸一壯の壯は、壯年に當ていふにあらざる事を察すべきにや、亦按に、素問に、壯火少火の辨あり、しかれども灸灼の義にはあらず、

〔梅園日記 二〕灸數壯

杜落醫談云、灸一壯二壯といふは、壯人をもて準とする詞なりと、古人の注し侍るは、いかなる事ぞや、予是を考ふれば、炷壯字形の假たるより、いつしか寫し誤るのみ、按するに、通俗編 數目 云、後漢書注引華陀別傳、有灸此各七壯語、三餘贅筆、醫家用艾、一灼謂之一壯、沈存中言、以壯人爲法、其云若干壯、壯人當依此數、老幼羸弱量力減之、按此説未是、周禮考工記梟氏云、○中略 讀此則知、灼艾所云壯者、亦儀煙氣飾耳、○中略 と見えたり、此説新奇なりといへども、是なりとも定がたし、沈存中の説は、

夢溪筆談技藝に出たり、臆説には非ず、千金方灸例に、凡言壯數者、若丁壯遇病病根深篤者可倍多於方數、其人老小羸弱者可復減半とあるにもとづける也、

〔松屋筆記九十四〕灸瘡

灸治の時、豆煮を煮て、人にもくはせ、自分もくふを、俗に灸瘡といへり、豆煎は、灸穴より、血ほとばしる事あるをり、嚼て傳れば、忽に止といへり、

〔松屋筆記七十一〕灸治の時激血を治方幷灸治の時の豆煎

灸治する時、灸穴より血出で迸る事あり、これ人神のめぐりにあたれる也、いかなる藥を用ても不治、必死す、但干飯と黑豆を煎たるを嚼て傳れば忽愈、實に奇方也、古來より、灸瘡に、豆米煎を用るは、此用意なるべし、

〔嚴有院殿御實紀附錄上〕明暦二年十二月、御灸をなされし時、老臣等を御前にめし、種々の饗賜はり、いづれもさるべき物語して、御聽に備へよとありしに、たれも顋かたけて有りし時に、仰らるるは、神祖の御代このかた、諸家に用ひし所の旗馬印、さま〴〵なりと聞しめしぬ、其品いかゞなりや、豐後には、常に好で舊記をよむよしなれば、定ておぼえつらん、わづかなりとも聞え上よとのたまへば、豐後守、かしこまりて、多くも心得侍らねども、思ひ出し分を聞え上むとて、つぎ〴〵に誰はかく、某はいかになどと聞え上しに、遂に數十家に及びければ、公をはじめ奉り、近臣等みなその强記に感じける、傳役安藤備後守資俊、硯もちいで、一々に書記しける、物語はつる頃、御灸事も終らせられしと也、元延實錄

〔諸國圖會年中行事大成二二月上〕二日灸　今日及び八月二日、和俗の男女、點灸をなす、是を二日灸と云、其功他日に倍すと云へり、按ずるに、中華歲事記云、此日朱を以て、小兒の額に點ず、名付て天灸とす、以て疾を厭ふと云々、二日灸の事、此天灸より出たるならん歟、

〔皇都午睡三編上〕江戸にては、略○中按摩をもみ療治、

〔老の教〕導引はあしからず、心に任すべし、夜など寐たし、朝など寒きをもつとめて、あんまをせんより、暖にして、安寐するに如くはなし、

〔善庵隨筆一〕導引スルコトヲ、熊經ト云コトハ、莊子ニ、吹呴呼吸、吐故納新、熊經鳥申、爲壽而已矣、此導引之士、養形之人、彭祖壽考者之所好也、トアリテ、淮南子ニ、如鴻之好聲、熊之好經トイヘル如ク、熊ハ、經ヲ好モノユヘ、名ケシニテ、後漢書華陀傳ニ、古之仙者、爲導引之事、熊經鴟顧、引挽腰體、動諸關節、以求難老、注、熊經、若熊之攀枝自懸也トハ、誰モヨク知レルコトナレドモ、雲笈七籤ニ、漢時有道士君倩者、爲導引之術、作猿經鴟顧、引挽腰體、動諸關節、以求難老ト、猿經ノ字奇ナラズヤ、

〔三國志魏志二十九華佗傳〕華佗、字元化、略○中精方藥、其療疾、合湯不過數種、略○中廣陵吳普、彭城樊阿、皆從佗學、普依準佗治、多所全濟、佗語普曰、人體欲得勞動、但不當使極爾、動搖則穀氣得消、血脈流通、病不得生、譬猶戶樞不朽是也、是以古之僊者、爲導引之事、熊頸鴟顧、引輓腰體、動諸關節、以求難老、吾有一術、名五禽之戲、一曰虎、二曰鹿、三曰熊、四曰猨、五曰鳥、亦以除疾、並利蹏足、以當導引、體中不快、起作一禽之戲、沾濡汗出、因上著粉、身體輕便、腹中欲食、普施行之、年九十餘、耳目聰明、齒牙完堅、

〔備急千金要方二十七養性〕按摩法第四法二首

天竺國按摩、此是婆羅門法、

兩手相捉紐捩、如洗手法、
兩手淺相叉、翻覆向胸、
兩手相捉共按䏶、左右同、
兩手相重按䏶、徐々捩身、左右同、
以手如挽五石力弓、左右同、
作拳向前築、左右同、
如拓石法、左右同、
作拳却頓、此是開胸、左右同、
大坐斜身偏欹如排山、左右同、
兩手抱頭宛轉䏶上、此是抽脇、

兩手據地、縮身曲脊、向上三擧、　以手反搥背上、左右同、

大坐伸兩脚、卽以一脚向前虛掣、左右同、　兩手拒地廻顧、此是虎視法、左右同、

立地反拗身三擧、　兩手急相叉、以脚踏手中、左右同、

起立以脚前後虛踏、左右同、

大坐伸兩脚、用當相手勾所申脚著膝中、以手按之、左右同、

右十八勢、但是老人日別能依此三徧者、一月後百病除、行及奔馬、補益延年、能食眼明、輕健不復疲乏、

〔按腹圖解序〕我醫道も、又唐土より傳へしにこそ、しかれば導引按蹻の術も、同じく傳來しにや有ん、又は皇國にて發明せし人有しにもやあらん、三栗の中昔の頃、其術の世に行れし證は、榮花の物語に、腹とりの女といふこと見えたり、されど此物語も、七百歲餘、往古の事なれば、其技は、伊香保の沼のいかなりしや知るべからず、又彼邦にも、最上代には專ら行れしよしは、醫籍の親と崇る、內經といふ書に見えたり、されど彼處にも、いつしか廢れしとしられて、後世の醫籍には、絕て見えず、然るに我大御國よ、玉匣二百年よりこなた、誠に安國の安穩に、科戶の風の荒振、綿津見の波の騷動も絕果て、治たまひ編給へる御世の御陰に隱れて、天下の蒼生、尊も卑も、甚靜なる世を樂しむ、此御時を得て、萬の廢たるが興ざるもなく、千々の絕たるが繼れぬも將あらざめる程に、我醫道も又しかなり、是に因て、其道に精しき書も、技に委しき人も、其名聞ゆる野邊の萬林の木葉と世に乏しからず、誠に此道全備と謂べし、さるを樞實の獨此導引按蹻の術のみ、古衣うち捨て與木柱誰取立る人も無りしに、葦垣の近き年頃、內日指都の醫士、香河氏、賀川氏の二人、世に勝れて、我醫道を、石上古きに復せり、其醫論の餘波、此術に及せり、故世人、此二子を以て、此術再興祖と思へり、されど其著書をみれば、香河氏は療病の末助とし、賀川氏は養妊之本務とす、その旨意

甚艱難る而已ならず、共に岩淵の深理を極得しにあらねば、其末流を汲徒をや、又空蟬の世に、此技を業とする人、多くは盲人、寡婦、或は流落家、貧學醫生輩、此技を以て、糊口の資とするに過ず、是に因て、此術をするを、儀文手輕甚卑しめり、さる故、識見人は、此術をしも、恥且羞む事にはなゝにたり、

按摩治療

〔當本漫筆〕鬼貫が傳聞道引

鬼貫姓は、上島氏、俗稱は與總右衞門、梅花翁と號す、攝州伊丹の人なり、後大坂に家して、姓を平泉と更む、はじめ俳諧を維舟及宗因に學び、後一家をなす、鬼貫獨言、同句選等世に行はる、元文三年八月二日、七十八歳にして沒す、伊丹墨染寺に墓あり、浪花客中、或人の話に、鬼貫中ごろは行れざりしにや、ひところ和州郡山侯の足輕などつとめ、その後大坂にすみて、小兒の道引などして、かすかに世をわたりぬ、今なほ大坂に鬼貫道引とて、小兒の癒治に、足より上へも上る按摩の法のこれり、

〔甲子夜話六十二〕林曰、或人ノ談話ニ、故豆州松平信明朝臣臨終前ノ疾、腫氣ニテ、不通ニナリシトキ、一醫案腹シテ、小水ヲ通ズル秘術ヲ爲ス者アリト聞テ、其者ヲ呼デ案腹セシムレバ、果シテ通利アリ、ソノ翌日ニ、醫至リテ、又案ズルトキ、豆州云フ、今度我ガ疾ハ迚モ不治ト覺ヘタリ、モハヤ頻ニ案スルニ及ブマジ、併シコノ法ハ、平素未ダ知ラザル所ノ奇術ナリ、諸人ヲ救フベキ大切ノ術ナレバ、秘セズシテ、ソノ傳ヲ廣クスベシト、諄々曉諭セリトゾ、眞ニ老職得體ノ言ト謂ベシ、折ニ觸レ、何カノ事ドモ、思出デヽ、痛惜ニ堪ザル人ナリケリ、

按摩并吹笛

〔守貞漫稿五生業〕按摩

諸國盲人業之スル者多シ、或ハ盲目ニ非ルモノアリ、或ハ得意ノ招ニ應テ行クノミモアリ、或路上呼巡リテ應需ズルアリ、蓋三都諸國トモニ、振リ按摩ハ小笛ヲ吹ヲ標トス、振ハ得意ニ往々路

呪禁科

上ヲ巡リ、何家ニテモ需ニ應ズルヲ、諸買亦准之テ振賣ト云ニ同ジ、又京坂フリアンマハ夜陰ノミ巡リ、江戸ハ晝夜モ巡ル、又江戸ニハ笛ヲ用ヒズ、詞ニアンマハリノ療治ト呼逕モアリ、小兒ノ按摩ハ、或ハ上下揉テ二十四文ナンド呼プモアリ、江戸ハ普通上下揉四十八文也、又店ヲ開キテ客ヲ待チ、市街ヲ巡ラズ、足。力。ト號テ、手足ヲ以テ揉者ハ、上下揉百文也、京坂ニハ此足力按摩無之、又京坂從來普通上下揉者ハ價ヲ半ニス、因云、盲人ハ鍼治ヲ業ル、足力等ハ灸治ヲ業ル、又別ニ三都トモ灸。ス。エ。所。ト云者アリ、大略百灸以上千灸以上ヲ一廝トス、錢廿四文許也、

〔嬉遊笑覽 六上〕按摩とり、笛。を。ふ。く。事、太平業府に、河東夜行、按摩痃癖吹笳去、温飩蕎麪焚火行、是明和六の頃なり、この頃めづらしきことゝもいふにや、江戸は、其後、天明七年狂詩醫解に、按摩の笛を吹は、近ごろの事なりといへり、

〔秇苑日渉 一〕醫方之設、蓋起于地神氏之前、○中略在此方、風科、仍大方脈之所業、祝由是巫覡之爲已、別有按摩、○註略灸師、○註略及草家、○中略即今過。路。按。摩。或。搖。鈴。或。吹。笛。之類、類書纂要有虎撑、報若知、即鈴醫之所持也、

〔伊呂波字類抄 末人事〕禁。マウナフ　〔同 末疊字〕呪。術。呪師

〔倭訓栞 前編二十九〕ま。じ。な。ふ。　日本紀に厭をよめり、壓と同じ、おす也、又禁。厭。をまじとも、まじなひやむるともよみたり、日本紀に呪禁師見えたり、韓退之詩に、詛師毒口牙といへり、蒼頡篇に、伏合人心曰厭と見えたり、厭勝も禁術も同じ、素問に、移精變氣論あり、

○按ズルニ、康熙字典ニ、厭ハ於琰切、別ニ壓ニ作ルトアリ、

〔古史傳 十八〕禁厭法ハ、○註略古本に、麻自那比能々理と訓るに從ふべし、今本に禁厭をマウナヒヤムルノリとあり、古言梯に、禁厭にてマウナヒと訓り、前漢書高帝紀に、東埀以厭之、注に、禳也とあり、平春湖云、小右記に麻志奈比とあり、麻自奈比の麻自は、御門祭祝詞に麻自許利、大祓詞に蠱物（マジモノ）などある麻自と同言にて、那比は、卜那比（ウラナヒ）、商那比（アキナヒ）などの那比と同じ辭なり、蠱を麻自

〈と云べき由は、字鏡に、蠱、麻自物と有、是なり、〉さて此三詞の麻自、もと同言には有れど、かく活きて三になれる上にては、輕重と物との差別を成せり、其は、麻自那比は麻自那閉、〈令する也/なり〉麻自那布、麻自那波牟と活きて、輕く聞え、麻自許理は麻自許禮、麻自許流、麻自許良牟と活きて、重く聞ゆるが、麻自物は、吉にまれ、凶にまれ、其麻自に用ふ物を云なり、

〔通俗編〈二十一/技術〉〕祝由科　素問、往古恬澹、邪不能深入、故可移精祝由而已、今之世、祝由不能已也、王冰注、祝説病由、不勞鍼石、故曰祝由、按説文、𥛱字下云、祝𥛱也、乃卽祝由、後漢方術傳、趙炳善越方、注善禁呪也、蓋祝由術多行于南越、故又謂之越方、

〔醫の階 上〕まじなひは、上古には、大醫院の下屬に、禁厭師有、まじなひせし事也、故に醫書も、古書には、まじなひを載たり、摩針灸藥外療にても治せざれば、まじなひ祓除までも行ふものを、醫門の下に置給ふは、衆人民を救ひ備給ふ仁政の餘惠なり、詳に前の醫生に示す文を讀べし、

〔志都の石室 上〕サテ是ヨリ、巫祝ノ業ヲバ、次ニイタシテ、藥ヲ食スコトヲ專トシテ、其ニ片付テ居ル者モ、ダン〳〵出來テ、周代ニナリテハ、巫祝ハ巫祝、マタ醫ヲ爲ル者ハ醫ト、別ニ立テ、周禮ノ天官ナドヲ見レバ、醫師ト云モノガ有テ、是ハ掌醫之政令、聚毒藥以共醫事ト云ヒ、マタ疾醫ト云ガ有テ、コレハ掌養萬民之疾病ト記シ有ルトホリ、カヤウニ分ダツテ來タニ依テ、以前ノ如ク、巫彭巫咸ナドヤウニ、頭ニ巫字ヲ附テ云コトヲ止テ、カノ近クハ、春秋ノ左傳ナドニハ、醫ヲ業トイタシタル者ヲバ、皆頭ヘ醫字ヲソヘテ、醫緩醫和ナドヤウニ云コトヽ成タ物デゴザル、其ノチ隋ノ代ト成テ、古ヘハ醫モ巫祝モ、一物デ有タルコトノ、古實ニ依タ物ト見エテ、僧醫局ト申テ、醫ノツメ居ル、云ハヾ役所ヘ、呪禁博士ト云モノト、呪禁生ト云者トヲ置キ、尤モコレハ醫ノ次ヘ立テ、其呪禁博士トイフガ、呪禁生ト云ニ、呪禁祓除ナドノコトヲ數ヘテ、病人アル時ハ、醫ト共々ニ取掛ツタ物デゴザル、コレハ唐ノ六典ト申ス書ニ、具ニ見エマス、御國トテモ、右ノ通リ、二柱神ガ、醫藥

呪禁起原

ト禁厭トヲ御始アソバシタル、正シキ古傳說モアル程ノコトユヱ別シテノコト、其上御國ノ令ノ御制ハ、多ク唐代ノ制ヲ御用ヒナサレタル物ユヱ、此訣ガ符合ト云ヒ、カタ〳〵以テ直ニ典藥寮ト申テ、醫者方ノ詰居ラル、御役所ヘ、諸越ト同ヤウニ、呪禁博士呪禁生ト云ヲ御立アソバシ、コレハ醫疾令ノ御文面、マタソノ義解ノ言ニ依レバ、何ノコトモ無ク、呪文ヲヨミ、又ハ加持ヤウノ事ヲシテ、病邪ヲ去リ、マタ右ノ神代御紀ニ、鳥獸昆虫ノ災ヲ攘ハンガ爲ニ、其禁厭之法ヲ、大名持少彥命ノ御始ナサレタルトアル通リ、其ヲマジナフ業ヲ致シタ物デゴザル、

〔醫道二千年眼目編十三上〕萬病一毒〇中略

夫陰陽家ノ醫トハ何ゾ、春秋戰國ノ際ニ根ザシ、秦漢ニ枝葉ヲ生ジ、魏晉ニ花ヲ開キ、隋唐ニ實ヲ結ンデ成就セルモノナリ、コレヨリシテ、天下ノ醫者從ニ和緩及ビ淳于意、王叔和ガ流トナレリ、宋元明淸ノ醫ハ花ノ變化セルモノナリ、

〔頓醫抄三十四癩病〕一疥癩治方〇中略

凡病有六種、〇中略 第五魔病、第六鬼病、

右六種之中、魔鬼ノ二病ハ、以神呪治之、非法威力者不能治之、

〔日本書紀一神代〕一書曰、〇中略 大己貴命與少彥名命戮力一心、〇中略 又爲攘鳥獸昆虫之災異、則定其禁厭之法、

〔自娛集三〕醫林堂記〇中略

且考之本邦、神代少彥名命爲蒼生及畜產、定其療病之方、又欲攘鳥獸昆蟲之災異、則復定其禁厭之法、今其方藥及禁厭之法、雖不知照傳乎世、然我邦始制醫藥攘災異之祖神、又豈可不爲宗乎、此皆醫家之所當奉祀也、

〇按ズルニ、呪禁ノ事ハ、陰陽道上篇ニ詳ナリ、宜シク參看スベシ、

呪下醫術

〔源氏物語若紫五〕わらはやみに、わづらひ給て、よろづにまじなひ、かぢなどせさせ給へど、しるしなくて、あまたゝびをこり給ひければ、ある人、きた山になん、なにがしでらといふ所に、かしこきをこなひびと侍る、こぞの夏も、よにをこりて、人々まじなひわづらひしを、やがてとゞむるたぐひあまた侍き、しゝこらかしつる時は、うたて侍るを、とくこそ心みさせ給はめなど聞ゆれば、めしにつかはしたるに、おいかゞまりて、むろのとにもまかでずと申たれば、いかゞはせん、しのびてものせんとの給て、御ともに、むつまじき四五人ばかりして、まだ暁におはす、やゝふかういる所なりけり、

〔源氏物語賢木十〕そのころ、かんの君まかで給へり、わらはやみにひさしうなやみ給て、まじなひなども、心やすくせんとてなりけり、修法などはじめて、をこたり給ぬれば、〇下略

〔中宮御產部類記〕御產記 御誕生 [illegible]

元永二年五月廿八日癸酉、申時中宮〇鳥羽中宮藤原璋子令誕生皇子〇崇德給、從今曉頗有御氣色、〇中略宮主某岡奉仕御祓、典藥頭雅康朝臣、獻御產施呪術、

〔奇魂二〕開胎術カイタイジユツ附呪禁

皇國の療術は、外國に勝れたる中にも、此術等は、別てなんめり、素より是は病ならねど、平ならざる時は、中々に恐しき物なる故にや、古何はあれど、產には殊に禁厭を用けらし、

〔二中歷九呪術〕產婦易生呪

南无乾陀天與我句呪、如意成、吉、吉祇利々々々、祇羅針陀々祇羅鉢多悉婆婆呵、

朱書、華皮上燒作灰、和清水服之、即令懷子易生、聰明智惠、壽命長遠、不遭橫死、出乾陀羅尼經

難產時呪

耆利闍羅枝陀羅枝陀者利闍羅阿婆呵

痘科

今案、難産時、至心禮懺、誦一十遍、神驗不可言、常用百効、（出子母秘錄）

〔巫水園随筆（赤疹書辨考證所引）〕麻疹（ハシカ）の呪歌（マジナヒウタ）

麥どのはうまれながらにはしかしてさてそののちはわがこなりけり、四の句、或はかけての、ちはと云々、又はみえての後はと云々、此呪歌を貝多羅葉の面に書て、裏にはその人の年齢を書付てその葉もて身體を殘る所なく撫廻して、さて右の葉面なる、麥の字の上方に、灸三壯して後、川水にながし捨るなり、若貝多羅葉なき時は、柿の葉をもてこれに換、かくすれば、麻疹甚輕して、萬に一失なし、○下略

〔醫事漫録 二編〕蝦夷地にて、病者あるときは、イナヲにて、武者の形を造り、佩刀鍔、縁頭（ふちかしら）など飾りつけて、枕もとにおく、こは源判官義經の神靈なりとぞ云々、（東蝦夷夜話巻之中）

〔撈海一得 上〕今兒戲ニ蝦蟇ヲ捉テ罵殺シ、地ニ小坎ヲナシ、車前草ヲ襯キ、死蝦蟇ヲ安頓シ、上ニ又車前草ヲ被ヒ、畢テ、小兒圍繞環列シテ、祝テ曰、かいるどののおゑにやつた、おんばくどの、おんとむらいト、齊聲擊壤テ是ヲ呪ス、須臾ニシテ、死蝦蟇豚然跳躍ス、按、毛詩芣苢疏曰、韓詩云、芣苢曰車前草、郭璞曰、今ノ車前草、大葉長穗、江東呼蝦蟇衣、陸機草木疏云、車前草一名蝦蟇衣、○中略此ノおんばくこのを以ミレバ、應神仁德ノ前醫藥ナシト云ベカラズ、少彥名命始テ醫藥ヲ作ル、今歲除ニ五條ノ天神ニ詣テ、木ヲ授テ疫ヲ驅除ス、又丹波康賴ノ醫心方三十巻、今人間ニ不見トイヘドモ、日本ノ古方往々傳レリ、

〔先哲叢談續編 一〕戴曼公　名笠、字曼公、號荷鋤人、明杭州人、○中略曼公常謂、術同道廣、治不視方、濟人及物、內外本行、應機臨變、儒釋活路、方技又然、最長痘。科。云、（或云、近時有部）下傳曼公方書、雖述其説者、因以痘科爲一家、今未詳其所傳來者、附託曼公、粉飾欺人、世皆受其糟粕、不知高玄岱親受業於曼公、修緒遺事、遂不一書及此、甚可疑矣、

〔千重之比登遠〕池田瑞仙　痘。瘡。家。ト稱セラル（官醫ナリ）

〔杏林雜話〕戴曼公杭人、小學舉子業、遊黌舍、時雲林龔廷賢年八十餘、尚强健爲醫、曼公從之遊、盡傳其術、明亂棄儒冠、而隱禪、後歸我、在崎嶴、應吉川氏之請、往來於長防之間、其臣池田嵩山〈[illegible]七兵〉學書於曼公、曼公善書、其爲人、因謂曰、我有治痘祕方書、欲悉授子、子學之三年、必臻其妙、嵩山拜而受誨、遂大著於世、其書大旨謂類乎龔氏痘疹全幼錄云、

〔行書類纂稿下〕書戴曼公書牘後

不肯毀衣服、爲緇髮僧、高蹈東海、投君子國、氣節昂然、朱舜水之亞也、斯人也、固可崇矣、其筆蹟亦豈可不崇哉、赤羽子充傳其書牘、而寶之、非特愛玩翰墨之妙、而體遠家學之意也、自夫痘疹傳流于我邦、歷名醫輩出、未曾有能究其治術者也、而斯人歸化傳治痘術、爾來授受有人、則有功德乎赤子、宜祠而祭之、董子充治痘之術、受之於先考俊庵翁、俊庵翁受之於池田氏、池田氏之祖受之於斯人、斯人爲誰、朱明遺民、姓戴、名笠、字曼公、號天閒獨立、寓于黃檗山、其傳詳于康熙書畫譜云、

〔皇國名醫傳後編下〕池田瑞仙

池田獨美、字善卿、通稱瑞仙、〈號錦橋〉周防岩國人、世業痘科、曾祖正直從戴笠受治痘祕訣、作圖說藏于家、子孫傳以爲法、獨美幼孤、叔父詮庵撫而育之、及長兼孜大小諸科、以脊鬮外治行、而獨美志在痘、與家學、岩國痘術絕少、不足試術、舉出居安藝嚴島、會嚴島痘疫流行、獨美由圖說爲治、效應如響、始信其妙、悉棄從前所爲、專修家學、取古今痘書參之祕訣、所屬數年術大熟、値有大坂商爲兒求治者、獨美往診、時寄痘傳染、比屋夭閼、聞獨美名爭請、其良毒險夷順逆死生、獨美一目斷、皆如所言、世醫始疑、終則同然一辭服其精妙、於是乞治者執贄者、相繼門闌如市、至有贋造其圖說、以規牟利者、在大坂數歲徙京師、寬政中幕府辟至江戶、爲醫官、講痘書於躋壽館、醫官有痘科自獨美始、獨美性度簡宏、不修邊幅、然甚惜家法、非刺血誓神誠心祈求、不敢輕傳、而經其指授者、皆見能名於世、蓋痘術之方至獨美備矣、治効不遑枚舉、有一兒痘色紫黑、伏陷不起、口吻流血殆瀕死、獨美作正宗涼膈散、加麻黃穿山甲、與之三

日、服藥三十帖、遂生、率是類也、

錦橋著有痘科辨要、痘疹戒草、痘科鍵刪正、治驗錄、及遺稿等、

〔脊囊瑣探上〕池田痘疹書

余嘗著痘疹徵義、未上木、寬政初門人佐藤中節游京師、得痘疹唇舍口訣一本、此書係于黃檗山僧戴獨立（號曼公）所著、而門人池田正直筆記、曾孫瑞仙所撰次也、余讀之、診候精密、治法詳審、勝于余之撰遠矣、嗚呼門弟子謂曰、自今以往、欲精乎痘疹治法、舍余而宜從池田氏學焉、卽以余之草稿本、悉燒之矣、

〔朝野群載二十一雜文〕良藥寮勘申疱瘡治方事

傷寒後禁食

勿飲水（損心熟、當灸不能臥）、　大飽食（病後致死）

又勿食肥魚膩魚鱠生魚類、鯉鮪蝦蛆蜻蟛年魚鱸、令泄痢不復救、

又五辛食之、目精失不明、又諸生菜菓、（高上爲然鱸）

又生魚食之、勿酒飲、泄利難治、又油脂物難治、

又蒜與鱠合食、令人損、並與鱠合食、病後發、

又飲酒、陰陽後、病必死、食生菜、陰陽復病死、

病愈後、大忌大食、飲酒醉、飲水、（汗出无忌）

傷寒豌豆病治方

初發覺、欲作、則煮大黃五兩服之、

又青木香二兩、水三升、煮取一升頓服、

又取好蜜通身麻子瘡上、

又黃連三兩、以水二升煮、取八合服之、

又小豆粉、和鷄子白付之、

又取月汁水、和浴之、又婦人月布、拭小兒、

豌豆瘡滅瘢

以黃土末塗上　又鷹矢粉土干、和猪脂塗上、

又胡粉付上　又白殭末付之　又蜜付之

右依宣旨勘申

天平九年六月日　闕

〔類聚符宣抄三〕疱瘡事○中略

太政官符、東海東山北陸山陰山陽南海等道諸國司、令臥疫之日治身及禁食物等事條條、

一凡是疫病名赤斑瘡、初發之時、既似瘧疾、未出前臥床之苦、或三四日、或五六日、瘡出之間、亦經三四日、支體府藏大熱如燒、當是之時、欲飲冷水、（固忍莫飲）瘡又入欲愈、熱氣漸息、痢患更發、早不療治、遂成血痢、（痢發之間、或前或後、無有定時、）其共發之病亦有四種、或咳嗽、（志波不岐）或嘔逆、（多麻比）或吐血、或鼻血、此等之中、痢是最急、宜知此意、能勤救治、

一以綿巾并綿、能勤覆腰、必令溫和、勿使冷寒、

一鋪設既薄、無臥地上、唯於床上敷席、得臥息、

一粥饘并煎飯粟等汁、溫冷任意可用、好之、但莫食鮮魚宍及雜生菓菜、又不得飲水喫氷、固可戒愼、其及痢之時、能煮韮葱、可多食、若成赤白痢者、糯粉和八九沸、令煎溫飲再三、又糯糒粳糒、以湯饘漬之、若有不止者、用五六度、無有忌憚、（文[illegible]向令全）

一凡此病者、定惡飲食、必宜強喫、始從患發、灸火海松、并燒鹽屢含口中、若口舌爛、可用良之、

一病愈之後、雖經廿日、不得輒喫鮮魚宍生菓菜、并飲水及洗浴房室、強行步當風雨、若有過犯、霍亂必

發、更亦下痢、所謂勞發、（更發之病名曰勞發）食附、扁鵲豈得禁斷、二十日已後若欲喫魚宍、先能煎炙然後可食、但乾鰒堅魚等之類、煎否皆良、（乾脯亦好）但鮨及阿遲等魚者、雖有乾腊、不可食、（年魚者鮨亦不可喫）其蘇蜜幷□等不在禁例、

一凡欲治疫病、不可用丸散等藥、若有胸熱者、僅得人參湯、

以前四月已來、京及畿內悉臥疫病、多有死亡、明知諸國佰姓亦遭此患、仍條件狀、國傳送之、至宜寫取、卽差郡司主帳已上一人宛使、早達前所、無有留滯、其國司巡行部內、告示百姓、若無粥饘等料者、國量宜賑給官物、具狀申送、今便以官印印之、符到奉行、

正四位下行右大辨紀朝臣　　從六位下守右大史勳十一等壬生使主

天平九年六月廿六日（○又見拾芥抄、醫心方）

〔叢桂亭醫事小言 六〕麻疹

麻疹考曰、麻疹ノ我邦ニ流行セシ其始未詳、（和漢トモ往古ハナクテ、中古夷狄ヨリ傳染セシモノヽヤウニ云傳ヘタルハ、信ジガタシ、往古ハ温疫ノ內ニ混ジテ、ワカレザリシコトハ、既ニ痘瘡ノ下ニ辨ルガ如シ、漢土ノ方書ヲ按ズルニ、痘瘡ハ先ダチテ見ヘ、麻疹ハ後レテ見ユレドモ、麻疹モ痘瘡ニ混ジテ有シニヤト思ルヽ也、）正シク露顯セシハ、聖武天皇ノ天平九年（享和三年ヨリ千六十七年前）其後ハ一條院ノ長德四年（享和三年ヨリ八百六年）次ハ後一條院ノ萬壽二年（長德四年ヨリ二十八年）次ハ白河院ノ承曆元年（萬壽二年ヨリ五十三年）也、此コト天平九年ノ官符、及日本紀略、扶桑略記、百練抄、榮花物語等ニ見ヘタリ、○中略

又惱人乃背仁、此七字可ㇾ書之、麻子瘡之種我作云々、（太田草葊曰、此官符ノ病狀、麻疹ニシテ、痘瘡ニアラズ、特ニ惱人ノ背ニ書タル文字ニ、麻子瘡トイヘルハ、全ク麻疹ノコトナルベシ、弘賢曰、拾芥抄ニ療治疱瘡方ト標題シテ、此官符ヲ載ラレタルハ、古ハ麻疹モ疱瘡モ混ジテ有シナリ、乃醫心方ニ豌豆瘡ノ下ニ、此官符ヲ引タルニ據ラレシナルベシ、サテ天平九年ニ、新ノ知タ、官符ヲ下サレシヲ以テ考フレバ、猶サキ〳〵ヨリモ有シナルベシ、漢土ニテ麻疹ノ治方ヲ正シク著セシハ、趙宋ノ初ナリ、然バ則我邦麻疹ノ行ハルヽ、漢土ニ先ダツニ似タレドモ、恐ラクハ漢土ノ古モアリシナラン、傷寒論ノ麻疹、金匱要略ノ陽毒ナドヽイヘル症ノ內ニ、麻疹モ混ジケルモ知ルベカラズ、○下略）

〔安齋隨筆 後編 五〕一瘢痘　疱瘡は食傷或は風邪感冒等熱に乘じて發起するものなり、熱氣强け

れば發し盡し、熱弱ければ發し盡さずして內攻するなり、痘皮裏に在りて發起せず、或は發して後痘根紅色變じて白くなり、痘頂黑陷す、是熱弱の發熱緩なるものなり、溫劑を以て發熱を助けて痘毒を發表せしむべし、是等の症は臍帶、或は紫河車、或は人の爪、或は柳の蟲等を煎じ服さしむべし、或は酒を吞ましむべし、皆妙効あり、是經驗する所なり、近年庸醫一角（タンイル、俗にウンコウル、）を用ふる事を好むは誤なり、一角は毒を解するの神藥なり、食毒には奇なり、痘毒には却て惡し、凡解毒の藥性みな寒冷ならざるはなし、一角之性寒冷なり、其寒藥なる一角を服せしむるに因て熱勢醒て彌發起せず、勢脫して終に死に至るなり、烈しく發表すべし、右の如くなる症に調合の藥は其鑑し、右に記す處の臍帶已下の物を煎じて多く吞ましむべし、酒をも吞ましむべし、又彼の品々を一つに合せ煎じ用ふるも、藥勢彌强かるべし、酒は痘の良藥なり（食物、性燥なるをいむべし、）既に痘發起し盡さば、右の藥をば止むべし、酒も止むべし、甞て聞く或貧家の小兒痘發したれども、起張せずして死す、貧なれば棺作る事もならず、酒樽を求めて死骸を入れ、夜に入て葬せんと欲す、夕日の頃小兒蘇生して、樽中より母を呼びたりと、是酒氣に蒸れて痘發張したるなり、

（叢桂集記四）驅蟲散記

昔元和中、大猷公不豫、熱症甚盛、時侍醫以爲傷寒治療之、數日無效、醞熱加深、心神昏悶、胸腹痞塞、水穀不入、殆七日、氣息奄々、衆醫無如之何、天下諸侯憂之、台德公大驚之、召和氣瑞庵瑞壽、令診脈、以其歷世爲良醫也、瑞壽曰、是痘瘡將發、非傷寒也、藥治不適、致有如此、侍醫爭曰、是不必痘疾、瑞壽曰、我診三部脈候、爲痘不疑、諍論不已、公乃命瑞壽上藥、遂進家傳驅蟲散一貼、胸悶漸開、又進一貼、食氣始雖嘔、第二晚、至三更、痘甲悉出、遂日平復、公大賞之、增祿賜相州御厩、本郷二邑、自是醫名播甚于天下、遠振、清麻呂之舊名、新輝和氣氏之醫門、當時識者曰、嗚呼瑞庵造命之大功、難勝良將開邦之勳業、瑞庵余先考之師、故謹識焉、

〔東洞先生遺稿文下〕祭兒璿文

予既葬兒璿于惠日峯下莊嚴院、乃設薄奠而告之曰、嗚呼兒兮、維延享丁卯夏六月十三日、爾生于皇都東洞寓居、父母親戚歡娛罔疆、余乃謂汝母及親戚曰、之子之生、惟天賜也、生醫育醫死醫、念哉、念茲在茲、爲甘草黃連大黃湯與之、再周時、顏色憔悴視深、食曰、夫人古今異矣、恐不能乳、余曰、毒盡矣、奚不飮哉、且古人有言、曰人無於水鑑、當於民鑑、夫治法之戾古、千有餘年于茲、今欲試之於人、人權不服今天賜此兒、將使試之、天賜不受必有孽、盍與前方、至十五日夜半、唯下藥汁而無他物、余曰、毒既盡矣、乳之可也、乃復戒慈母曰、惟古今不異、此兒而有塊、則吾道熄矣、敬哉勿怠、自是後溲糞、則以毒藥利之、若是四歲口無擇食、壯健赫々、今年八月痢疾大行、爾亦罹患、初血痢八十餘行、因爲瀉心湯與之、次日六十餘行而血止、唯下穢物、不能食、唯飮砂糖水、五日痢減二十行、歠稀粥少許、次日又減二十行、飮食復常、冬十月六日爾發熱、八日戰慄惕搦、叫號失神一時所、余曰、兒無癇、必痘也、乃爲葛根湯與之、九日痘初出、色灰白、十一日出齊、痘陷下、不後溲一日、爲承氣劑與之不利、十二日痘變黑色、間如蛇皮狀、與承氣湯與之如故、十三日小溲亦不利、至戊少利、至寅後溲大利、痘黑變成赤、食進回漿、十四日午後貫膿、食進、咬牙不奄、五六七日自若、聲嗄嘶、痘凸出水流潰、十八日戌刻寒戰咬牙呼余、聲嗄難辨、微聽之則腹痛乞藥也、乃與熊膽而止、診腹中生塊、因作承氣大劑與之、二時所而大利、色如綠青、塊乃解、又氣急而喘、不徹、又合三劑與之、數吐白沫、氣急喘息乃奄、莫所復苦、至十九日申而沒、嗚呼兒兮、爾需乞藥、其聲在耳、今奚不答乎、仰視從柳、俛見器械、其物存、其人亡、心神恍惚身體解体、不知所歸也、始予之於痘、不別胎毒與天行、其論曰、生涯一發、非胎毒而何、比屋時患、非天行而何、今吾兒無胎毒也、汝若不死、我歸胎毒乎、歸天行乎、不可知也、余竊謂、天地之間有此毒而行、譬如草木、有花而實者、有花而不實者、有實而不花者、有實而枯者、亦不可知也、唯醫治疾治痘之道、在解毒耳、人甚何補、明之在汝、汝不死則我何以

明、我不刪、汝有功於醫矣、以加焉、使父起予、孝哉、始余謂人而無毒、何有痘患、二三子皆曰、然、信之者亦多、吾過矣、吾過矣、予爲汝之孝、汝安我之魂、爽祭之禮、適以有亡、吾何悲兮薄祚、汝何恨兮夭折、是皆命也夫、嗚呼兒兮尙饗、

〔斷毒論〕避痘〇中略

本邦豆之八丈島、信之御嶽、秋山、飛之白河、北越之妻有、紀之熊野、防之岩國、豫之露峯、土之別枝、肥之大村、天草、五島、奧之蝦夷、自古至今、皆能避痘之傳染、其避也、非關薔薇藥餌神符之所禳、唯莫使有其氣者入、界耳、若有一人感之者、則移居於山野、使昔日疾之者、供藥食、待其全愈而得歸正戶、若在他鄕之日流行、則遠遁去、以此毒之傳染、不翅驅近病者、雖衣食器財、出於其家者、亦必傳繼毒氣、故避之之嚴如此矣、就中信之御嶽、屬于中山道之傳驛、遇痘毒流行之時、有傳役則贖之、不得已則被網、而驅尋、蓋係路所謂網目遠風之意乎、其悚惕之狀可想矣、人目笑之、笑者智而被網者果愚乎、重百年之性命而取一日之嗤、孰與罹近惡毒之病而死非命焉、善哉、一郡一島、能一其心、戮力避天下周流之毒、以保其性命、不矜保其性命、至今賴避痘之惠、若無此鑑、則萬世眩惑於天行氣運之妄說、處之於人生必患之疾、而孰悅死痘之非命乎、實欲海內能避之、則生民之幸莫大焉、

〔辨醫斷〕(上)痘疹

痘疹一證、上古所無也、若或有此、古人豈置而弗語哉、何以言之、蓋我九國邊邑、有大村五島者、其俗自古畏痘疹若蛇蝎、然故有近邑或有是證、禁其行旅、不得入境、弗得已必被驗而許入焉、故其兩邑雖迄乎今、多不患痘、由是觀之、外有是氣、則內毒乃相感而出如、無是氣、毒亦未由而外發也歟、但當其不流行時、間有一二患之者、則是亦偶有所感而然耳、然若斯者、毒多不重、重則非感天行之氣、必不易于宣發矣、設以今有是證、遂謂必不可無于古者、蓋僻論也、何則彼大村五島非、叢爾一兩邑乎、猶且無是氣、則亦不患是證、而況於天下之大乎、又況於古今之遼邈乎、然則其說之不通也、從可知矣、

〔叢桂亭醫事小言 六〕麻疹○中略

麻疹流行スル時ニ、東岳公(中山備前守信敏ノ號也)ヨリ尋問タル答書ヲコヽニ載テ、治療ニハ、何モ六ケ敷事ナキヲ示ス、麻疹流行仕リ候ニ付、御手當ノ爲ニ委細申上ベキト、遙ニ仰下サル、不才寡聞ノヤツガレ、申ベキ所イカデ備ヘ玉フコトノ用ニ立ンコトハ、固ヨリナレドモ、イツモ下問ヲ好マセ玉ヒテ、博ク問ヒ求メ玉フコトナレバ、敢テ辭シ奉ンハ恐アリ、此地モ麻疹一般ニ行レテ、筆ヲ採ノ暇ナシ、其詳ナルコトハ、一時ニ記シ奉ルベキニ非ズ、夜半病家見舞テ歸リ、燈下ニアラ〳〵記シテ奉ル、抑ヤツガレ赤子ノ時ニ、麻ヲ患候由ニテ、當廿八年前ニ行レヌル麻疹ノ節ヨリ治療ヲ試ル所、殊ニ輕易ノ病ニテ、方書ニモ痘瘡ノ後ニ附載シテ、格別心ヤスク覺ヘ候、夫レ麻ト唱初タル名ハ、宋ノ時ノ方書ニ見ヘテ、宋以前ニハ無キ病ニモ有ン歟ナレドモ、醫方未ダ明白ナラザル時ニテ、委ク記セル典籍ナシ、痘瘡ハ隋ノ時ニ其名イデタレドモ、其藥方ハナシ、唐ノ孫思邈ノ千金方ニハ、傷寒ノ後豌豆瘡ヲ發スルヲ治スル、始テ藥方見ヘタリ、序熱ヲ傷寒ト見立候コトニテ、痘ノ病證猶イマダ明白ナラズ候ユヘ、是又宋ノ時ニ治法モクハシク出來ケル、麻疹ハ痘ヨリモ先ダチテ、古モアランナレドモ、常ノ瘡疥ト見ナシタルニモ之アルベキト覺ヘ侍ル、痘瘡ハ本朝ニ傳來モ、タシカニ史籍ニ載テ、委クハ先ニ著ス所ノ偶記ト申拙著ニ考ヲキ候、麻ハ天平九年ノ官符、醫心方傷寒後發豌豆ノ候ニ載候得共、是ハ痘瘡ニハアラデ、麻疹ノ官符ナラント存ゼラレ候、嘉暦年間ノ人ニテ、鹿苑院ニ奉仕シテケル、梶原性全ト云ヘル者ノ、万安方頓醫抄ト申二書ニ記セリ、外ニ和方書考ルモノナク、性全ヨリ以前イカヤウニ治療仕候ヤ、僕イマダ是ヲ見侍リヌルコトナシ、千金方ニ、仲景ノ傷寒論ヲ引テ、升麻湯ト云ヘル藥方ヲ載タリ、其證治曰、陽毒ノ爲レ病、面赤斑々如二錦文一、咽喉痛、唾二膿血一、五日可レ治、七日不レ可レ治トナリ、金匱要略ニ書載タレドモ、加二鼈甲一テ升麻鼈甲湯ト見ヘタリ、金鑑ニ此文ヲ註シテ曰、可レ知仲景不レ用二大熱大寒之藥一、此一證、今世俗所レ謂痧

證是也、非後人所命陰寒猛毒也ト見ユ、疹ト申ハ麻疹ノ一名ニテ候、左アレバ、後漢ノ時ハ、陽毒ト唱ヘ候モノ、麻疹ニモ有ベキ也、其病因ト仕リ候所ハ、諸ノ書ニ論說多ク候得共、如何ノワケニテ、數年ヲ隔テ行ル丶ヤ、數度ノ流行ヲノガレテ、極老ニ至テ患候モ有之ヤ、一生涯一度患候得バ、假令百歲ニ餘ル齡ヲタモツトモ再ビ患ルコトナク候ヤ、痘瘡ハ土地方偶ニ行レヌ所多ケレドモ、麻。疹。ハ。海。內。一。時。一。面。ニ。殘。ル。所。モ。ナ。ク。行。レ。候事、如何ナル毒ヲ畜ヘ、如何ナル歲運ニ乘ジテ行ル、ルヤ、人智ニテ計知ベカラズ、論辨ハ多ノ古名醫其理ヲ窮トイヘドモ、皆是紙上ノ空論ニテ、無益ニ似候、金匱ニ加鼈甲候ハ不面白、千金方ニ出タル方宜ク覺候ナリ、扨又宋ノ時ヨリ用ユル、升麻葛根湯ト申候方ハ、古代ノ風ヲ能組立候方ニテ、此一方ニテ事足ズ、後世イヨ〳〵方藥ヲ設ケ、治療マス〳〵運トイヘドモ、何モ此升麻葛根湯ヨリハ勝レズ、又仲景ノ古ヨリ升麻ヲ用ユルコトニテ、肘后方ニモ出セル、永徽年中南陽ヲ征シ候時ニ、行本共コト〳〵ク瘡ヲ發シテケルニ、虜瘡ト名ブケタ、升麻一味ヲ用タ、是ヲ治セシタメシモ御座候テ、如此一般ニ、發疹ノ者ニハ、升麻ヲ宜トセシコト、古時ニ徵シテ知ベシ。○中

毒忌ハ、貴地ニテハ甚シト承ル人ノ多ガ故ニ、多口スルニヤ、又高貴ノ後庭物忌多キ故ニ、自然ト人間ニ移ルコトアリ、醫師モ高貴ノ治療ヲ指上ルハ、一キハ念ヲ入テ、猶ナモロカラント思コト、品味モ禁忌スルヲ、人間傳ヘ聞テ、一面ニ毒ト思モアルベシ、抑貴人ニハ、大醫ナヲデハ、藥モ遣メラレヌモノ故ニ、大醫ノ中ナレヌル上ハト、金科玉條ニ比シ、遠ク國外ニ流傳シ、又手醫師ノ藥ヲ進ムルモ、是ゾ君ノ大事ト禁忌嚴重ニスル事、一家中ニ流布スルモ有ルラン、假令バ痘ニ山藥ヲ禁ジ粥ヲ禁ズ、芋ハイモノ唱ヲ忌ム、自然生ハ善ト云、粥ハ痘ツブレ爛テ柔カナランコトヲ嫌ヒ、又服ノシラカイニ成事ト云言葉ヲ忌ム、鍋湯ヅケハヨシト云ノ類多シ、貝ヲ忌モ、唱ヲ忌ナラン、進物ニモ熨斗ハ用ヒズ、故ニ鮑魚ハマス〳〵禁ズ、凡痘毒眼ニ入ヌレバ、眞珠ヲ用テ治ス、眞珠ハ

貝ヨリ出ルモノ也、故ニヤツガレハ、何ツモ石決明ヲ食セシムルニ害ナシ、依テ蛤ヲ食セシムルニ是モ害ナシ、此度ハ麻疹ハ前年ヨリ毒忌ヲヽク申觸スハ、先年ヨリハ、醫師ニ人物乏ク成タルニヤ、皆病因ニ隨セルナラン、ヤツガレガ家ニ患タルモノ二十人ニ近ク、今日マデ食セシメタル品ヲ、左ニ記シテマイラセ侍ル、〈略〇中〉

河鰻、先年流行ノ時、京都山脇道作法眼ヨリ、蒲燒ヲ食セシ人、三人卽死セルト承リタレバ、告シラセ申ト言贈ケル故ニ、禁ジケルニ、又此度モ死セル人アリト江戸ヨリ言觸ス、誰ト云ル人ナルヤ、タシカハ不知トイヘドモ、カヽル事ノ侍ルヲ忌ザル事ハ危ト禁ジテケル、此外シン菊ヲ喰セシ人卽死セリナンド申觸セドモ、信ジガタキ事也、此地方ニテ食物ノ爲ニ卽死セル事ハ、イマダ承及バズ候、虚説ナルラント存候、〈略〇中〉

房事禁ズベシ、吉原ノ娼婦、麻後三十餘日ニテ客ニ接シテ死セリト承ル、可恐事也、此地若キ夫妻ノ、其ニ麻疹シタルモ多キ内ニ、何レモ其愼嚴ナルヤ、其害ニ逢ヘル事ハ、未ダ承ワラズ候也、享和三年癸亥六月十二日、原玄與謹對、

〔麻疹流行記〕元祿四年辛未三月より夏ニ至リ、諸國ニ麻疹流行せし時、人民不養生をなし、又食毒にあたりて、愁ひを見る事其數を知らず、　靈元院法皇樣、勅詔に依て、名古屋玄醫翁、養生書を撰、普く日本國中に流布なして、諸人をすくふ、其書予が先祖に傳はり有るに依而、此度彫刻して、再び天下に披露せしむるものなり、　元祿四辛未年〈是より十七年目〉　寶永四丁亥年〈是より二十四ヶ年目〉　享保十五庚戌年〈是より二十四年目〉　寶暦二癸酉年〈是より二十四年目〉　安永五丙申年〈是より二十八年目〉　享和三癸亥年　六十餘州津々浦々ニ至ル迄、麻疹流行する事、前代未聞之事也、

京なはて　叶屋喜太郎板

〔時還讀我書上〕癸亥〈〇享和三年〉ノ麻疫ニ、先君子〈〇多喜安元〉禁忌一紙ヲ疏シ、刊印シテ衆ニ施シ玉ヘリ、予

○安政刊本是歳○文政六年ヤ、増補ヲナシ、マタコレヲ印施セリ、今左ニ録シテ後攷ニ備フ、一風寒ヲ避ルコト第一也、尤月ハ病間ナ風ノ通ルヤウニシテ、ムレヽルヲ恐レトス、一冷物冷水ヲ用ルコトモアレドモ、但ロルニ至ルアルベカラズ、二果類柿梨ハ悪シ、魚鳥類、酒、幷一切ノ酸味、辛味、鹹味、葷、油膩、炒タルモノ、餅類、大麥ドンハ宜、葉、砂糖少々ハ宜シ、甘キハ不宜、葷、以上食物禁忌五十日忌ベシ、重ハ百日モ忌也、一切不浄ノ物、幷悪キ臭ヲ嗅ベカラズ、○下略

〔麻疹流行記〕文久二年壬戌七月町觸写

麻疹當人飲食の毒、又は手當方不宜、死亡之者不少趣相聞候付、兼而覺悟いたし置可然儀を、別紙之趣心得之爲、右之通相渡候間、心得置候樣可致事、

右之通、御奉行所より被仰渡候間、夫々支配内不洩樣可被相觸事、

七月十四日

總町代

中

町中町代

一かるきはしかたりとも、必風にあたらぬやうに、能中に平臥して、温保第一の手當とす、去かしあまり熱蒸は甚よろしからず、殊に此節は晝は熱し、夜は涼しければ、晝は大ていあたゝまり、夜中朝迄は衣服夜具等增すべし、其内惡寒つよければ、晝も寒氣たゆる程は、暫時衣被輕むるも甚あしく、直に内攻すると心得べし、桂枝麻黄の入藥も、甚よろしからず、川芎白芷も斟酌すべし、

一疹の出るは都而よろしければ、先暫くあはて止むる事なかれ、されども血のかたまらず、溶解の樣に見ゆれば、總身の血の熱毒にて變じ、恐るべき重病なれば、其療養各別の事なり、

一飲食は、熱き物、冷き物とも、總じて悪しく、程克加減し、冷水は決而のむべからず、

一寒湯、葛湯は、至而よし、

食してあしきもの

一魚類鳥類は、かるき物たりとも、病發大ていかせる迄は、一切禁すべし、酒、餅類、飴類、豆腐、油氣の物、酢の物、とうがらしの類、辛き物、里芋、かぼちや、なた豆、茄子はしかかせて後皮さり煮てよし、ぬか漬はよろしからず、瓜の類、せんまい、わらび、ねぶか、わけぎの類、ぎやうじやびる、めんるい、あわぞうめん病中に麺もよし竹の子、木の子類、そら豆、圓豆、こんにやく、ぎんなん、柿はちやがきはよし桃、糟漬の物、

右之類、病後にても、當分之内禁す、

食してよろしきもの

一とう瓜、青瓜、白瓜、右は煮て食すればよし、長芋、じねんじよ、ゆり根、ごぼう、かぶら、蓮根、ふき、小豆、うど、ちしや、西瓜多分はよろしからず麩の類、こんぶ、ゆば、かんぴやう、かちぐり、くづ、ぶどう、九年母、みかん、きんかんよし、

かせてより後食してよろしき魚

はせ、こち、ます、かます、あはび、かれい、あいなめ、赤もどこ、しゞみ、かながしら、石もち、

右之類、少々づゝ食してよろし、

右之外、海魚總而青色黒色の魚類、大に害あり、川魚の類、一切禁すべし、

一酢の類、よろしからず、鹽物、干物の類よろしからず、

一麻疹疫癘流行ニ付、於國府宮、來ル廿日より廿四日迄五日之間、疫神祭御祈禱被仰付候間、可有其心得事、

七月

右之通、夫々支配内不洩様、可被相觸事、

七月十四日

總町代

町中町代中

〔痲疹流行記〕呉服町醫者高橋玄春印施の一紙

痲疹禁忌

風寒を避る事第一也、(暑月は以團な風の通る體にして、むせざるをよしとす、)冷物(冷水を用ゆる事もあれども、症によるゆゑに、妄にあたふべからず、)果類、(金柑はよし、)魚鳥類、醋并一切酸味(梅干もあしゝ、)辛味、鹹味、葷、油膩、炒物、餅類、麪、砂糖(少しづゝよろし、飴甘きに不宜、)蜜、以上食物禁忌、五十日いむべし、重症は百日も忌べし、一切不淨の物、并に惡き臭を嗅べからず、熱さめざるに、强て食を進むべからず、湯とも湯茶を多飲むべからず、嘔吐泄瀉を成す、黍豆炒米燈心を煎じて、湯茶の代りに用ゆべし、熱解して後、諸症平愈せば、廿日も過て湯に浴すべし、生水の湯はあしく、艾葉荊芥防風の三味を煎じ、其湯に浴すべし、髮并爪とり等、廿日あまり過て追々すべし、房事は百日愼むべし、

〔斷毒論上〕避痘

痘之非時氣疫癘也、已論於避痘之國、其死之非命也、亦不待言、雖然有避痘之國、而未聞有避痲之國、故無緣使人知避之而免矣、此毒之流行也、宛如風之偃草、殆似難免者矣、然(伯壽)本敢言、其所以必免之證一二、安永丙申(五年)之春、豆州加納村五右衛門女有妊、有故寓居于下田港、于時痲毒盛行、因恐毀其孕、遠去過蓮臺寺之溫泉、既而聞此境亦有患之者、又去避之下加茂、居旬餘而漸還于此、以故幸避、鄉鄰亦發矣、於是不得已去走長津呂、此地病者已休、因款留五月、而所在之毒氣稍々銷亡、竟得歸鄉而娩、其避痲也、如避寇然、又享和癸亥(三年)之春、本州(甲斐)高室源藏、美卿妻有娠、時痲毒暴行、漸逼近鄰、胎孕皆驚矣、擧家恐患之將及、(曾)爲之愿勸說痘痲之傳染、非天行時氣、避則必易免、美卿乃是之、使其妻携長女避之一室、逮季夏、聞父家西花輪村內藤氏之家此病已畢、往避之、至初冬歸家而產、以是母子三人得俱共免矣、同年東郡人、荻原市左衛門者、祇役於驛之藤石、鰍村于東郡、其傭夫皆壯

酒湯

年、而未病瘡者過半、因恐爲之患役、相共謀、貯糧食不出山中、遂免之者五十有三人矣、是皆避瘡之明證、於是乎、豈知非天行時令之邪也、門生問曰、倘如師之說、則痘瘡可避而免、雖然使病者在山野、如避痘之國、似有人情之不可忍者乎、對曰否、若誠欲避之、何必置之於山野耶、令患病之者侍今病者、戒約不近未病者而已、倘能毎痘之所在如是、則斷傳染之根源、竭海內之毒氣、何難之有、如痳毒則海內不常有、故不須別禦之、禦痘之從外國傳來、則瘡亦隨自斷矣、若能如是則不死於非命者、宇內其幾許乎、

〔叢桂亭醫事小言六〕痘瘡　結痂

酒湯ハ本邦何レノ時ヨリ行ルヽヤ、未考、唐土ノナキ所ナリ、役ノ行者ノ淨瑠璃ニ、酒湯ノ劍ノ事アリ、又虛談ナリ、十二朝ヲ一番湯ト云、十五朝ヲ二番湯ト云、此時ニ輕痘ハカケルコトノナル人モ有リ、必ズ日數ヲ以テ論ズベカラズ、全ク痘ノ輕重ニアリ、

〔疱瘡心得草〕酒湯の心得の事

四五日前より米のかし水を取置て、能ねさせ置、そのうわずみを湯に焚べし、湯に入るゝ事、重き痘は日數にかゝわるべからず、湯の內へ手拭をひたし、緊と搾りて、かせたる痘の跡をえかく〳〵と押へ、湯の氣をあつれば、かせの熱こゝろ能おさまるなり、必ずぬらしあらふべからず、かほは目の上下をよけ、眼の中へ湯の氣入ば、眼中をそこのふ事有、手足惣身まんべんに湯を引べし、背は輕くすべし、湯をかけ終れば、風に當つべからず、夫より又兩三日隔て二番湯を浴せしむべし、三番湯をすまして、常の湯に入るべし、

〔痘疹致要〕秘傳酒湯方

夫痘邪ハ、天地流行ノ疫毒也、タトヒ平日壯實ノ兒ト云トモ、其感ズル所ノ邪毒更ニ深ケレバ、沸騰スル所ノ胎毒又劇シ、況ヤ初蒸ニ一度規矩ヲ誤レバ、千悔萬懐四馬モ逐フ事能ズ、死生存亡十日ノ中ニ判ル、誠ニ悲傷ス可ノ甚也、醫トシテ此ヲ不思ハ人情ニアラズ、前說初蒸見點ニ先ジテ

熱氣ヲ解シ、瘟毒ヲ疎散シテ、部位ヲ減ズルノ藥方アリ、此萬全ノ法則也、然レドモ若此治療ニ後レテ危難ニ臨ルノ症、九死一生、命期旦夕ニ迫ル、藥力ノ及所ニ非ズ、此浴法ニ非ズンバ、再ビ生地ニ還ル事能ズ、此窮厄ノ際ノ儘記シ置者也、

水一斗　米糠二升　酒二合二勺　鹽廿三匁　赤小豆三粒　鼠屎三粒

右六味合シテ煮熟湯トシテ十七八歳位ノ男女此分量ヲ用ユ、一二歳或四五歳ノ兒ハ、水四五升成七八升、米糠酒鹽モ又隨テ減ズ可キ也、

〔蕉石雜志 五上〕痘瘡洗湯　小兒いまだ痘瘡せざるものに浴すべき藥湯桃枝一本フトサ竹ホドタケ一尺五寸桑枝一本尺五寸フトサ上ト同陳皮四匁綠豆三匁黑豆三匁枳殼四匁牛蒡子四匁紅花四匁右水三升入一升に煎じつめて小兒に浴すべし、究めて痘瘡かろし、痘の流行とき、度々浴すれば必効あり、

〇按ズルニ、是レ酒湯ニアラザレド、其事酒湯ト同一理ニ出ヅルモノナレバ、此ニ附記ス、

〔松屋筆記 七十九〕痘瘡のさゝ湯さゝゆ　吾妻鏡卅五の卷十三丁オに、寛元元年十月一日、若君御痘瘡中略と見ゆ、赤斑瘡、三の卷にさゝ湯の事をいへり、そこに據べし、

〔吾妻鏡 三十五〕仁治四年寛元元年〇九月十九日壬戌、若君二歳賴嗣御痘瘡、中略十月一日甲戌、若君御平復之間、今日午刻、御沐浴之儀、醫師賴行、廣長等朝臣賜祿、

〇按ズルニ、此沐浴ハ發病ヨリ十二三日目ニ當レバ、蓋シ痘瘡ノ酒湯ニ近シ、又建長八年九月一日ニ、將軍宗尊赤斑瘡ニ罹リ、同月十九日沐浴、同月十五日北條時賴同病ニ罹リ、二十九日ニ沐浴ノ事、共ニ吾妻鏡ニ見ユ、一ハ十九日目ニシテ、一ハ十五日目ニ當レリ、是等ハ何レモ酒湯ノ類ナラン、

〔本朝醫談〕又〈○百錬抄〉康元元年八月五日、天皇煩赤斑瘡、廿五日壬子、御沐浴、これは初より廿一日にあたれば、今のさゝ湯にはあるべからず、

○按ズルニ、酒湯ハ必シモ十五日目ニ限ルニアラズ、二十一日目ニ浴シタルモノモ、亦蓋シ酒湯ナラン、

〔皇國名醫傳後編上〕岡本啓廸院

岡本諸品、通稱玄冶、平安人、學醫於曲直瀨正慶、正慶擢爲諸長、〈○中略〉寬永六年猷廟〈○德川家光〉痘瘡期至、結痂、將行酒浴、公保母春日謂衆曰、酒浴之法在西土所未聞、廢之可矣、衆莫答焉、諸品進曰、西土所無、而本邦行之者固多、奚止酒浴、今闕而不行、是前古嘉例一旦廢絕而可乎哉、且西土自有其事、意君未知耳、乃探懷取一書、指而示之曰、請以解惑、因大言曰、是等事非俗流所知、況婦人乎、春日大慚、終行酒浴、

〔望月三英隨筆〈未考證所引〉〕疱瘡の小兒酒湯（サヽユ）を掛るといふ事は、獨日本の俗に極り候、唐にては決而無之俗習なり、儒醫之書籍に、決而沙汰無之なり、先年岡本玄作、大猷院様〈○德川家光〉御疱瘡の節、春日局被申候は、日本に酒湯（サヽユ）を掛る事、唐に無之事故、不及掛と申候由、玄作申候は、唐にて無之事を、日本にて致事夥敷有之候、酒湯に限り、古來より致付候儀を相止事、不得其意候、況重き天下取の御疱瘡に、初て酒湯を止と云事、醫者は不致候、素人にて御やめ被成候は、御勝手次第にて候得ども、是又醫者は合點不致候、醫者の合點せぬ事を、素人の分として、可致様無之候、其上醫書に無之と申は、唐之書物を、碌に見不申文盲の申事に而、不足取事に候、此御覽被成候へとて、懷中より唐本の醫書を被出、列座の御方々に見せ候而、讀て聞せられ、其上にて彌酒湯御掛被遊候由申之、殊に此節にて、御酒湯之疱瘡の祝儀に通例に成居申候、天下之御酒湯御やめ被成候と、日本世界皆酒湯仕廻ニ成可申、それにては、疱瘡病人、万一死間敷者死候而者、御仁政のあやに無之候、素人の分、殊

に女性の分として、不入言を御申、小しやく〳〵と大言を申され候、春日局あやまり被成候由、右唐本は全幼心鑑にても可有之、其外には證據に成候書、決而無之由、同時の醫師衆被申候由、〇下略

〔赤斑瘡辨考證三〕按に、望月三英は、安永の比の名醫なり、隨筆一卷あり、余(〇小山田與淸)その古寫本を家に藏す、痘瘡後のさゝ湯のこと、大猷院殿の御時、既に古例のよしなれば、むかしより有けんこと知べし、百錬抄に、後深草院康元元年八月五日、煩赤斑瘡、二十五日御沐浴のよしあるは、廿一日目に湯あみし給ひしなり、吾妻鏡にも、赤斑瘡後沐浴のことあり、されどさゝ湯といふ名、古書にはをさ〳〵みえず、今の世は、痘瘡の後のみ酒湯のことあれど、いにしへは赤斑瘡の後も有けんよし、百錬抄、吾妻鏡などによりておしはかられぬ、さて痘瘡麻疹ともに、結痂の後、湯あみせではあるまじきわざなれど、さゝ湯の作法などいふは、陰陽師巫覡などが仕出しにやあらん、さゝ湯といふも、新撰六帖、夫木抄などの歌に、里巫女が御湯立篠のさや〳〵に、ともよみて、もと湯立に篠を用る神態あるを、やがて痘後のゆあみにもいはひて、その神わざの作法などまねびしゆゑの名なるべし、さゝ湯に酒を加るは、酒の異名を左々といへば、篠湯を誤て、酒湯ぞと心得しゆゑのひがことなるべし、

〔天保集成絲綸錄七十九〕寬政十二申年九月

大目付江

大納言様(〇德川家慶)御酒湯被爲召候、爲御祝儀明十三日、溜詰御譜代大名、高家、雁之間詰、同嫡子、御奏者番、同嫡子、菊之間緣頰詰、諸番頭、諸物頭、布衣以上之御役人、御本丸江出仕、夫より西丸江可有登城候、尤服紗小袖麻上下可爲着用事、

但病氣幼少之面々者、月番老中出羽守宅江以使者御祝儀可申上事、

一右之外万石以上之面々者、月番老中出羽守宅江使者可差越事、

種痘

一在國在邑之面々は、飛札可差越事、

右之通、可被相觸候、

九月十二日

〔天保集成絲綸錄七十九〕文政三辰年二月

大目付江

右大將樣〇德川家慶御疱瘡被遊御酒湯被爲召候、爲御祝儀、公方樣〇德川家齊右大將樣江、

二種千疋宛　拾万石以上

一種千疋宛　五万石より九万九千石迄

一種宛　一万石より四万九千石迄

御臺樣御簾中樣江

一種千疋宛　拾万石以上

一種五百疋宛　五万石より九万九千石迄

一種宛　一万石より四万九千石迄

右之通、來ル廿三日可有獻上候、公方樣江之獻上物は、御本丸御玄關より、右大將樣江之獻上物は、西丸御玄關より、御臺樣江之進上物は、平川口御門番所迄、御簾中樣江之進上物は、坂下御門番所迄、朝六ツ時より五ツ時迄之內、以使者可差上候、在國在邑之面々は、當地之者を以差上之、其以後以使者御歎可申上候、

右之通、可被相觸候、

二月

〔醫賸中〕種痘

醫通云、種痘之說、始自江左、達於燕齊、近則遍行南北、詳究其源、云自玄女降乩之方、金鑑云、古有種痘一法、起自江右、達於京畿、究其所云源云、自宋眞宗時、峨眉山有神人、出爲丞相王旦之子、種痘而愈、遂傳於世、弋陽縣志云、貴長鄕五十三都人徐成吉五十五都人、得十全神痘法、以棉絮取痘漿之佳者、送人鼻內、及衣有數如異、往々靈驗、遠近皆聞、其風甚爲、方象瑛種痘小引云、江楚間、多種神痘、相傳、昔有道士、憫痘症殺人、鎖峨眉山四十九日、夢授某童子仙苗、翌日痘出、李仁山(歙州人、享保中來寓于崎館、)云、種痘之法、出自神授、前有徽商姓者、泛海至一山、遇天后顯靈、授以此法、按種痘之源、諸說紛紜如此、蓋其起自明季無疑矣、聞斯邦房州濱海一村、有自數百年前行種痘法、多用乾苗、乃先於彼土而知用此亦奇矣、夫痘之順逆、係于受毒之輕重、不由種與不種、然不種而逆、人必委之於天、種而逆、必悔種者、不若任其自然也、有人問痘可種否者、予則常以此爲答、

〔書那氏纏痘之記〕日本種痘の沿革

我邦には、誰人の創めしや、數百年前より、安房の國海邊の村落に、一種の種痘法行はれたり、其は天然痘の痂を採りて、人に種ゑしと言ふ、其後延享年間、支那蘇州(又は杭州といふ、詳ならず、)の李仁山と云へる人、長崎に來り、支那の種痘法を傳へたり、此法も天然痘の痂を粉末にして、鼻孔に吹き入るゝ者なり、次で寶暦二年、支那より醫宗金鑑といへる大部の醫書、我邦に傳はり、此書中に、精しく種痘の事を載せたれば、安永七年、其種痘篇を拔萃して、種痘心法と題し、出版して世に公にせしより、種痘の事は、これより漸次に世に行はるゝことゝなり、文化文政の頃より、天保安政年間に至りて、此法大に行はれ、種痘家を以て名を成せし者も少からず、肥前大村の人長與俊達、芳陵美伯、筑前秋月の人緒方春朔、常陸水戸の人本間玄調、上總佐貫の人井上宗端、木下川の庄屋次郎兵衞、武州忍の人河津隆碩、江戸の人桑田玄眞、及び桑田立齋等、孰れも皆種痘家を以て高名なりき、次に寛政五年西洋種痘法の我邦に入りしや、和蘭人某、役人高木氏の望に

依り、長崎に於て、此法を施せしを以て始めとす、支那の種痘法の傳はりしより後五十年に當れり、此法は天然痘の十分に膿を滿てる者を破りて、其膿を鍼に塗り、小兒の尺澤の靜脈に刺して、後綿を貼て、ヽ其上を布にて縛る者にして、善那氏の種痘法と異なる者なり、但し此法は、暫時にて中止せしが如くなりしも、二十年の後、江戸の醫師桑田玄眞、長崎に遊びて、西洋醫書を學び、ヘストルの種痘論を讀むに至りて、大に其講ずべきを知り、先づ自分の子に之を試みて、益々之を廣め、其子立齋も、亦此法を傳へしと言ふ、

〔種痘傳習錄〕問曰、種痘何レノ時ヨリ始マル、

答云、中土ハ宋眞宗ノ時、峨眉山神人、丞相王旦ノ兒ノ爲メニ、天行輕痘ノ痂ヲ採リ、鼻孔ニ架ク、此ヲ世界中種痘ノ嚆矢ト爲ス、于今八百六十餘年、(當六十六代一條帝寛弘中)在皇國種痘ノ法、中土ヨリ傳ヘ、口授心傳、明和四年丁亥、平安郡徵始テ種痘心法ヲ述シ、經驗スル所ヲ表出シ、其利益アルヲ稱セリ、

〔辨醫斷上〕痘疹

先是有一種痘科李仁山者、自唐而來崎焉、鎭臺命我二三生、受其種法、於是乎、始聞未出前豫看輕重、已出後辨其吉凶虛實等法、於形於色於脈於音、靡所不備、乃悟吾從前視痘之殆孟浪也、余因請鎭臺、令其試種、殆二十人、出痘之後、驗其輕重多寡、悉如李氏所豫言者、誠亦奇矣、且其種法、有水苗焉、種後必待七八日之間、乃有發熱而見點、見點而起脹貫一、而不如時痘矣、由是言之、非其挑毒之氣先感于外、而後毒從其內而出乎、又非其毒之循行六經、乃如熱病傳遍之熱、然後發出其外乎、嗚呼造化點運之機、豈欺啓者所能測窺哉、彼謂痘無補法之爲非、則觀前辨可推矣、故不復贅、

〔烈公行實〕天保十四年癸卯年四十四歲(○中略)公(○水戸齊昭)夙喜種痘術、以世俗拘泥舊習、執迷不悟、試之世子(卽今中納言慶篤)及諸公子、播其術於國中、獲牛痘法、益用心勸督、命醫官巡行分種、是後人民絕無

痘死者、恩澤沛然遍被於一國矣、

（ジエンナー種痘發明百年期紀念文集）種痘考〇中略

中川五郎治

モーニツケガ牛痘ヲ著セシヨリ前、松前ノ人中川五郎治、種痘ノ術ヲ露西亞ヨリ傳ヘ、文政七年、天保六年、天保十三年ノ惡痘流行ノ際ニ、嘗テ其術ヲ施シテ、爲ニ慘毒ヲ免レタルモノ多カリシト云フ、中川五郎治ハ、松前ニテ夷人ヲ使役スル部落ノ役人番人ト名クナリシガ、文化五年卯ノ歳、エトロフ島ニテ露西亞國ニ擄レ、彼國ヲホーツカ、イルコフカ等ニ在ルノ間、彼國官醫ノ種痘術ヲ施スヲ見テ、之ヲ我邦ニ傳ヘント欲シ、助手トナリテ接種法ヲ傳習シ、且牛痘種法ノ書二冊ヲ得テ、後我邦ニ歸レリ、其後松前侯ニ仕ヘ、名ヲ儀重郎ト改メ、七十餘歳ニシテ歿セリト云フ、

（蕃尻鉄對談錄ジエンナー種痘發明百年期紀念文集所引）嘉永元年戊申秋七月、先生モーニツケ氏ヲ指ス（蘭船來シ、牛痘苗ヲ齎シ來ル、其貯法三アリ、其一　象牙ヲ以テ、長サ一寸三分ノ針ヲ製シ、針頭ニ痘液ヲ粘著セシメ、之ヲ數枚束ネテ管ニ入レ、管ノ兩端口ヲ緊塞シテ、再鐵錫管二重ニ入レ、之ヲ又ブリツキ管ニ入レテ、管口ヲ固封シ、終ニ又木管ニ收メテ蓋閉シ、紙ニテ固封ス、其圖下ノ如シ、〇圖略　其二　硝子管ニシテ、一端ハ管トナリ、一端ハ殆ド筆鋒ノ如シ、其鋒尖ノ處ニ凝結セル痘膿些少ヲ充テシメ、管狀ヲナセル一端ハ鑞塞シ、筆鋒狀ナル一端ハゴルラクスヲ以テ塗封ス、此硝子管ヲ再ビブリツキ管ニ入レ、管口ヲ固封シ、之ヲ又木管ニ收メテ紙ニテ包裹シ、糊封スルコト前圖ノ如シ、其三　一寸餘方ノ硝子盤ニ痘膿ヲ塗著シ、此盤二枚ヲ合セ、ゴルラクスヲ以テ、四方ノ合際ヲ塗密シ、之ヲ膀胱ニテ包裹密封シ、之ヲ又箱ニ收メ紙ニテ外封ス、其圖下ノ如シ、〇圖略

（長崎奉行所記錄ジエンナー種痘發明百年期紀念文集所引）嘉永二年酉正月阿蘭陀通詞ニ

松平越前守領分越前國往古ヨリ難痘ニテ死去者多ク歎ケ鋪次第ニ付右救之爲メ西洋牛痘苗取寄方之儀同人家來願出候趣ヲ以テ書付二通阿部伊勢守殿御下ゲ渡シニ付右牛痘苗取寄方從江府申來候間唐紅毛之內何レヨリ可持渡哉兩通詞共相糺否可申出候依之越前守家來差出候書面相渡候間寫取可相返候

嘉永元年申十二月四日伊勢守殿荒川鈍太郎ヲ以御下ゲ二通

越前守樣御領分越前國之儀往古ヨリ難痘ニテ人命ヲ失ヒ候者多分ニ有之殊ニ天保之度申酉兩年凶荒之折柄痘病流行莫大之人別相減ジ人絶ニ相成候向モ不少既ニ農業耕種等ニ差支相成候ニ付樣々手當仕來候折柄五ケ年前御國中難痘流行仕小兒之死亡萬人餘ニ及ビ其內又々右樣痘瘡流行仕候ハヾ迚も以前之人別ニ相復候期モ無御座候半ト歎ケ鋪次第ニ付近年別テ痘瘡之治療厚ク可致工夫ト手醫師共エ御申付置被成候處近來西洋國ヨリ相傳リ候趣キニテ牛痘苗之儀清國ニテ追々相弘リ候由ニテ手醫師共ヨリ別紙之通牛痘苗御取寄被下候樣申出候依之奉願候ハ誠ニ奉恐入候得共相成可御儀ニモ御座候ハヾ右牛痘之苗御取寄御渡被下候樣其御筋エ何卒御聲掛リ被成下候樣奉願候右願之趣御聞濟被成下候ハヾ追々御國中之人別以前ニ相復農業向無差支可相成御仁惠之程難有仕合ニ奉存候尤牛痘苗之儀相心得候醫師之內何方エ成リ共罷出候心得ニ御座候間宜ク差圖被成下候樣奉願候此段御手前樣迄內々申上候樣御國許ヨリ被仰付越候間御序之節宜ク被仰上可被下候以上

松平越前守內

嘉永元年申十二月

中村八大夫

牛痘苗之儀近來西洋國ヨリ相傳候趣ニテ清國南海之邱熹ト申者道光十四年ニ引痘新法全書ト申候ニ其効驗等委細ニ有之嘉慶十年ニ清國廣東ニ初テ相傳リ候由右牛痘ト申者牛之乳上

ニ發シ候痘瘡樣之物ヲ剤、其膿ヲ取リ、人ニ種エ候得ハ、痘苗ヲ致消化、再ビ痘瘡ヲ相病不申、萬事萬全ニテ、爲痘瘡致死亡候者無御座、剰僅因顆六顆ニ限リ、一度種候得ハ、其人之痘膿ヲ取リ、追々相用心候故、永相傳リ、如何樣ニモ相弘物之由、醫書中ニ委細有之、右ハ膿汁之儀故、日數相立候ハバ變盛致シ易キ物ニ付、書方精密ニ不仕テハ、苗性相變候故、當テ論辨仕置候儀モ有之候、器物等ハ、追テ差上申度事存候、右牛痘苗之儀ハ、素ハ西洋國ヨリ相傳リ候由ニ候得共、海路遠ク御座候事故、年月ヲ經ルニ付、自然苗性變ジ、効能無御座候哉ニ相聞候間、可相成御儀ニ御座候ハヾ、廣東省邊ヨリ御取寄被成下候ハヾ、現功可有御座ト奉存候ニ付、此段申上候、以上、

〔日本教育史資料〈福井藩〉〕福井醫學所〈沿革〉中

除痘館記事　嘉永二年、國守慶永公、牛痘ノ貴重ニシテ且ツ鴻益アルヲ聞知シ、偶々和蘭國ヨリ長崎港ニ舶齎スルヲ以テ、醫師笠原良策ヲ派遣シ、牛痘苗ヲ採ラシメント欲ス、笠原氏其命ヲ奉ジテ、上途中ニ於テ、長崎港種痘役ヨリ越前國守ノ爲メニ、牛痘苗ヲ京都ニ送致スルニ逢ヒ、京都ニ在テ親見ニ接種ヲ試ミ、其功ヲ積ンデ、福井ニ歸リ復命ス、嘉永三年十月、福井下江戸町御預部役所ニ於テ、除痘館ヲ置キ、開館式アリ、官醫市醫一統臨席祝酒ヲ賜フ、

〔鍋島閑叟侯年譜〈ジエンナー種痘發明百年記念文獻所引〉〕嘉永二年八月、御側より外向へ左之通、

御年三十六　此節蘭人、牛痘之種持渡、長崎に於て引痘相成候趣相聞候に付、右種御取寄相成、御領内相廣り候樣、御内々思召を以て、大石良英出崎被仰出候末、彼地楢林宗建之子へ引痘相整へ、御城下迄越相成候ニ付、左ニ書載之人々へ、引痘方被仰付、右牛痘にて引痘相成候得ば、別に輕易之儀にて、別條無之ものゝ由に候處、自然妄之種へ方等相整、如何之儀致出來、人々疑惑を懷き候儀等有之候ては、御注意に不相叶候條、引痘方又は右懸り合被仰付候人々之外、妄之取計無之樣、乾度筋々相達相成候樣之事、　但し、牛痘種之儀、最前御内々、楢林宗建手筋を以て御注文之末、蘭

人持渡候其末、追々淳一郎樣外御引痘被成候樣被仰出、

〔牛痘辨論〕牛痘ノ我ガ日本ニ傳ハル未ダ久シカラズ、今ヲ距ル二十八年、即チ嘉永二己酉年西洋紀元一千八百四十九年ニ丁ル ニ在リ、明治七年十一月發兌ノ坪井氏醫事雜誌ニ曰ク、牛痘種法ノ本邦ニ行ハルヽヤ、既ニ二十五年○嘉永二年ナリ、是ヨリ先ニ、荷蘭來舶、痘苗ヲ齎シ來ルコト數回ナレドモ、其貯苗法ノ粗ナルガ爲メ、月日ヲ經ルコト久シキニ由テ、損敗スルガ爲カ、抑モ之ヲ種ル所ノ醫手拙ナルガ爲カ、能ク感染シテ眞痘ヲ發スル者ナシ、時醫之ヲ惜ム、蓋シ世上百事皆然リ、創業ノ難キ、其濫觴ニ於テ、古人ノ大ニ辛苦スル所察スベキナリ、故ノ鹿兒島侯齊彬○島津 茲ニ憾アリ、即チ厚ク荷蘭人ニ賂テ、始テ新鮮ノ痘苗ヲ求メ致サシメ、其侍醫ニ命ジテ、廣ク施行セシム、府下始テ之ヲ施ス者、戸塚靜海子ナリ、靜海ハ初メ藩侯ノ侍醫タリ、後幕府ニ仕ヘテ法印ニ叙セラル、後道隆春山ト稱ス、自後衆醫之レヲ受ケテ種痘スルモノ日ニ增シ、月ニ多シ、各藩モ亦タ之レヲ傳ヘ、大ニ行ハレテ、今日ニ至レリ、蓋シ其術タルヤ、難カヲズト雖ドモ、其苗ヲシテ、傳播永續セシムルニ於テハ、大ニ難キ所アリ、百折千挫スルモ、其志撓マズ、其氣屈セザル者ニアラザレバ、此術ヲ全フシ難シ、從來痘醫ト稱スル者多シト雖ドモ、一年間、一二月若クハ二三ケ月ニシテ絕苗スルニ至ル、而シテ此間能ク勉メテ倦マズ、施シテ怠ラザル者ハ、桑田立齋ナリ、越後新發田ノ產、深川萬年橋畔ニ住ム、自ラ誓テ、十萬兒ニ種痘セントス、不幸ニシテ、中年病ニ罹リ、半身不遂ニ宿志ヲ達スルコト能ハズ、然レドモ已ニ七萬ヲ過ルニ至レリ、病間手尙ホ種痘針ヲ放タズシテ遂ニ斃ル、而シテ能ク其志ヲ繼グ者ハ、即チ大野松齋ナリ、出羽秋田ノ產、淺草三間町ニ住ム、刻苦勉勵、暑寒ヲ冒シ、風雪ヲ衝テ、東西奔逐、爲ニ寢食ヲ廢スルコト數回、其志ノ厚キ、施スノ精キ、立齋ト相伯仲スルモノナリ、嗚呼此法一起二十七年、連綿不斷者ハ、此二子ノ力ニ依ル、余二子ニ於ケル、同窓ノ誼アリ、今一案ヲ擬シテ、以テ其篤志ヲ全フセントス、○下略

〔讀書雜錄庚戌初編九〕花題漫鈔

種痘　今本國暎咭唎、有善牛取乳者甚多、時即嘉慶元年、本國遇値天行、遭經瘟戶、紛々傳說、惟善牛取乳者不染天花、各聞爲異、適有醫生名咭嗜者、國內聲名昭著、頗稱濟世良醫、見遭天花之患不可勝數、常欲明達救濟之法、隨卽往視、果見搾牛乳者不染天花之奇、是以堅意細察、見牛發及發頭發傍之處、有小藍疱、形類如痘、細猜牛痘莫非能解散人痘之毒乎、隨卽想法、與人試種、或能滅却天花之說、亦是美事、於是與人種試、果經所種之人、隨種隨效、每自初種至第四日、始顯形影、及至八九日滿漿、至十四日、結痂全愈、後來相傳、至大西洋、呂宋國、呂咹喇嚟等國、依法栽種、男女大小數百餘萬、無一損傷、無一復出、此牛痘種、與天花痘種不同、天花之症能傳染於人、而牛痘之症非種不行、天花之症、定必發寒發熱、大小便結閉不通、或昏迷不醒、喉乾舌燥、唇焦亂語不等、雖用針藥法、亦不能保其無虞、但其牛痘種在於所種之處、只出一顆、如小指頭大、至寒熱各症不能相染、內中或有些微寒微熱、要服藥不服藥、與病亦無干碍、此法始爲牛出之種種於人、後轉人出之痘漿、可輪傳種於萬々人、其種法不論春夏秋冬、遇時皆合、不分男女大小、以其年紀幼少者爲佳、如種下四日其形發紅、至六日起一小疱、八日其疱略大、些須平不尖、中央一點硬的、週圍漿如淸水、根脚如有紅線圍纏、覺有些痒、至九日漿已滿足、若取痘漿種於別人、務以第九日爲度、恐後其漿漸漸乾、如是第十四日或至十八日、痂焦脫退、其人永無出痘矣、凡戒口不食猪肉鷄鴨鹹物及酒更佳、宜食粥飯鮮魚及瓜菜等物可也、暎咭唎國種痘奇書、

〔種痘傳習錄〕問曰、牛痘來歷何如、

答云、洋曆一千七百六十九年(當百十八代後櫻町帝明和七年庚寅、距今一百零六年、)獨逸ノ醫始テ牛痘ヲ取リ、人ニ傳フ事ヲ發明ス、此ヲ世界中牛痘豫防ノ濫觴トナス、其後千七百七十六年、英國ニ在テ、占弁(ジエンネル)氏年二十七、始テ悟ル、牛痘性人ヲ以テ人ニ傳フベシ、經驗スル二十餘年、千七百九十八年(當百十九代光格帝寬政十年)

戊午、距今七十八年、知命之日、著書廣宣流布シ、遂ニ天下萬國ノ人ヲシテ、此至善ノ術アルヲ知覺セシムルモノハ、占弁氏ノ苦心ノ偉功ニ由ル、○下略

〔德川禁令考文武醫術四十九〕安政四巳年三月

種痘心得候町醫名前可書出旨

蝦夷人共儀、疱瘡に而傷候者多候ニ付、種痘之御沙汰有之、右は是迄も少々は取行候得共、心得候もの少く、一體蝦夷地は、醫師甚稀之儀ニ付、全種痘のため、東西蝦夷地江三人宛、六人夏秋之內、別段被遣候ニ付、町醫之內、右醫術出精志のものは、早々南御番所江可願出候、勿論町々名主共相調、相當のものは名前書上可申候、

右之通從町御奉行所被仰渡候間、此旨町中不洩樣、早々可被相觸候

三月八日　　町年寄

役所

〔種痘辨疑跋〕痘之爲毒、根於先天、伏於命門、乘歲氣之運、觸冒而發、固與尋常胎毒瘡不同、至於其淺深輕重、不可得而豫知焉、必待其發爲疎爲密、爲紅爲淡、爲紫黑爲灰白、然後死生吉凶判矣、頃見洋醫者流所謂種痘者、下鍼不過八九痏、而出痘、或不滿於鍼痕之數焉、得以皮膚間僅々之出痘、而解散光天沈伏之巨毒耶、此猶內鑠之疾而求活於鍼砭、無此理也、苟遇歲氣大行之候、未有不再感者、乃或不再感、其發而爲驚爲癇、及爲種々雜症、有不可勝道者焉、又嘗譬之樣痘者、爛痘之膿、偶傳母之乳旁、發爲痘狀、眞與正痘無異、亦逐日貫漿收結、牛痘之發爲痘形、何以異於此乎、又猶疥癬瘡之傳染而發、但疥癬其毒淺、故傳染乃有蔓延不可禦者、若痘則其毒深、固非皮膚間之可得而發洩、故亦未有蔓延者、由此觀之、牛痘之非正痘、昭々如白黑、而洋醫者流往々危言以惑俗、而世之人不察、將滔々不可返焉、先考○池田瑞仙深患之、嘗撰種痘辨義一書、未竣而逝、遺命曰、必亟公之於世、庶幾足以喚醒世之惑者乎、不

背不揣檮昧、妄謹加之點鈔、付諸梨棗、併書其所嘗聞、以貽後云爾、

安政戊午五年二月　　不肯男　直溫謹跋

(梅里餘稿)牛痘辨惑小言

有一醫、種牛痘于某兒者、偶兒已感染天行痘、是以兩痘併發、兒遂不起、以致其父母之怨讟焉、因謂天行痘大抵以時流行、方其流行、且無施牛痘可也、可以免招若彼之怨讟、予謂不然、天行痘之與牛痘、其險易順逆、固判然異症、其併發者、亦不免危於單發天行痘、則方天行痘流行之時、當須務多行種法、庶幾全兒命於未危、若遇其併發者、以致招怨讟、罪固不在乎我、而由怨者不知耳、有比隣失火、主人不在、家往救、又恐救之不得、而後來却招救助不盡力之毀、寧待其火自滅而往救、而火不自滅時、束手傍看其焚燬可乎、

(春波樓筆記)吾日本、闔國近し、故に人痘の薄き事、此の一事にして知るべし、醫宗金鑑及西洋の書中に載する處、種痘の法あり、此の法を用ふる時は、死する事なく、面部に痕なく、難症なし、流行に傳染する時は、毒多き者は死す、然りと雖も生得、重毒ある者あり、必二たびす、種痘を以て其毒を滅す、滅せざれば流行に感じて必死症なり、又痘毒の生あり、痘をうへべからず、余司馬江漢が親族小兒あり、此の法を傳ふるに、更にうけがはず、如何と云ふに、病を求むるに近し、一時其の難をのがれん事を願ふと云ふべし、意に稱う、卽輕し、

(驗痘約論)小引

吾此邦域ニ於テ、痘ノ尚多ク行ハル、コトヲ知ル、痘瘡アル人民ノ夥シキニ因テ確然タリ、且今日ニ至リテモ、此輕易ナラザル病(傳染病、卽チ痘エピデミーヲ稱ス、)ノ長崎ニ行ハレテ、幾多ノ生靈ヲ殞ゼシムルヲ目撃ス、嗚呼哀哉、此ノ病ノ未ダ根ヲ斷タザル所以ハ他ナシ、之ヲ防制スベキ種痘ノ法アリト雖モ、尚俗ニ依テ、孤疑ヲナシ、無根ノ怖畏ヲ懷キ、之ヲ行ハザル者ノ多キニ因ル、此ノ怖

種痘所

心ヲ鎮定シ疑團ヲ解釋シ、如何樣ニ種痘スベキヤノ的應ノ術ヲ明カシ、且此手術ノ鴻益ヲ弘クセムガ爲ニ、吾意ヲ決シテ、此小冊ヲ刷工ニ附シテ、以テ世ニ公布ス、痘ノ紀載ヲ各條ニ派分シテ、詳ニセムコトハ吾ガ素志ニ非ズ、此略説ハ、唯日本ノ醫家ヲシテ力ヲ盡セテ、種痘ヲ勉强シ、且ツ謹愼シテ此術ヲ施サムコトヲ精思セシメンガ爲ノミ、

然レドモ此術ヲ公行シ、普ク世民ヲ濟救セムコト、豈唯醫家ノミニシテ、能ク之ヲ做シ得ムヤ、故ニ吾此事務ヲ以テ、有司ニ託シテ、其周旋ヲ希望ス、斯ク此術ヲ重ンズル、豈之ヲ無益ト謂ハムヤ、亦吾ガ要心ノミ、冀クハ各地方ノ官員及里保郷正、深ク此意ヲ體シテ、懇ニ毎家ノ慈父ニ諭告シ、各此篇説ヲ忽諸スルコト勿ラシメヨ、

日本ノ民庶、苟モ此術ノ傳播ニ頼テ、彼ノ猙獰險惡ナル劫病ヲ脱離シ、益蕃息スルニ至ラバ、則チ吾願方ニ足リ、吾勞空シカラズト謂フベキノミ、

西暦一千八百五十七年第十二月二十日

安政四年十一月五日　出島ニ於テ識ス

王國海軍第二等醫士

笨百(ポムペ)　方(フハン)　セ韃貨爾多(ノールデルフフールド)

〔嘉永明治年間錄九〕萬延元年七月十三日、種痘ヲ望ム者ハ、下谷種痘所ニ於テ療治ヲ受ベキノ達、

下谷和泉橋通リ種痘所の儀、先達て家業の者申合せ取建候處、此度相願ひ、右種痘所に於て、同業者集會致し、牛痘の種痘致し候間、世上望の者共は勝手次第罷越し、療治受候樣可致候、

右之趣、町中へ可觸知もの也、

〔町觸入〕申〇萬延元年八月廿七日町觸仕候

下谷和泉橋通種痘所之義、先達而家業之者共申合取建候處、此度相願、右種痘所において、同業之

者共集會致し、牛痘之種痘致し候間、世上望之者共は、勝手次第罷越、療治受候樣可致候、

右之通、町中江可被相觸候、

右之通、御書付出、當七月十日相觸候處、いまだ町中末々迄、御觸面之趣不行渡哉ニ相聞候間、早々町中家持借屋店借裏々迄、不洩樣可被相觸候、

但町々番屋々々江張出置可申候、

八月廿七日

〔嘉永明治年間錄十〕文久元年十月廿四日、種痘所ヲ改メテ、西洋道學所ト唱フ、

種痘の儀、以來西洋道學所、　右之通、唱替相成候間、向々へ寄々可被相達置候事、

〔皇國醫事沿革小史後編六期〕安政五年紀元二千五百十八年東都ニ於テ、伊東玄朴幕府ノ侍醫法印長春院ト號ス竹内玄同同侍醫法印渭川院ト號ス戸塚靜海同侍醫法印靜春院ト號ス林洞海同侍醫法眼坪井信良同侍醫法眼杉田玄端洋書調所教授職等、當時西洋醫術ヲ以テ門戸ヲ江戸ニ樹ツル者八十餘名、相謀テ一社ヲ神田於玉ケ池ニ設立シ、專ラ種痘術ヲ施ス、之ヲ種痘館ト稱ス、尋デ館舍祝融ノ災ニ罹リ、下谷和泉橋通ニ移ス、文久元年紀元二千五百二十一年ニ至テ、幕府其費ヲ助ケ大ニ規則ヲ改メ、教授職ヲ置テ學徒ヲ誘掖スル所トナシ、西洋醫學所ト改稱ス、時ニ大槻俊齋幕府醫官ノ校務ヲ督シ、坪井芳洲後爲春ト改ム島村鼎甫後鼎等ヲ教授職ト爲ス、俊齋沒シテ幕府緒方洪庵ヲ大坂ヨリ徵シ、侍醫法眼ニ任ジ、醫學所ノ頭取トス、洪庵沒シテ、侍醫法眼松本良順、其頭取及ビ教頭ヲ兼ネ、大ニ生徒ノ教育ニ力ヲ盡ス、生徒四方ヨリ麕集シ、乾然大學ノ體ヲ成ス、是ヲ東京大學醫學部ノ原始トス、

〔ジエンナー種痘發明百年期紀念文集〕種痘考○中略

大坂除痘館

嘉永二年、痘苗ノ京都日野鼎哉ノ許ニ著シタリトノ報アルヤ、大坂ノ緒方洪庵ハ、日野葛民ト

相謀リ、十月晦日、一小兒ヲ携ヘ上京シ、分苗ヲ乞ヒシニ、日野、笠原モ其志ノ篤ニ感ジテ、十一月七日、一小兒ヲ携ヘ、鼎哉同伴ニテ、下坂シテ之ヲ分苗セリ、是ヲ大坂種痘法ノ嚆矢トス、洪庵乃チ日野葛民、中耕介、山田金江、原左一郎、村井俊藏、内藤數馬、山本河内、各務相二、佐々木文中、緒方郁藏等ト謀リテ一社ヲ結ビ、金ヲ醵シテ種痘ノ普及ヲ圖ル、安政五年春四月廿四日ニ至リテ、官許ヲ得テ、公然種痘ヲ施行スルニ至レリ、江戸ノ種痘所ハ、万延元年七月ニ許サレタリ、故ニ種痘ノ官許ヲ得シハ大坂ヲ始トス、

京都有信堂

嘉永年間、楢林宗建、赤澤寛輔、吉田圖書、小石中藏、馬杉立輔、長柄春龍、熊谷貞恭、江馬榴園等ノ諸家、種痘ノ普及ニ盡力シ、富小路姉小路上ル町ニ有信堂ト云ヘルモノヲ創立シタリ、是ヲ京都種痘所ノ濫觴トス、

〔善那氏頌德之記〕日本種痘の沿革

嘉永二年の夏、肥前大村藩ヒ役、長與俊達氏は、長崎の通譯官西吉兵衞より、急使ヲ以テ、ドクトル、モーニッケ氏の痘苗芽出度發痘したる旨告げ來りしかば、實に轍鮒の水を得たる心地、悦び勇みて、尾本涼海(齢年八十許、今尙東京に在り、)に孫女(現在專齋君の妹)及び未痘の家僕を附け、卽夜長崎に遣はせり、漸くて日ならずして、尾本涼海は、首尾能く牛痘を種接し歸り來りければ、多年の宿望成就して、藩龍領下の珠は手に入りながら、國の制禁嚴重にして、直に植ゑ廣めん樣もなく、常例の如く、種痘山(時の人疱瘡を怖るゝことの甚しきにより、山林を區畫して、此處にて種痘し來れり、恰も避病所の如きもの、)を開きて、此所にて、種痘する事とは爲しぬ、然るに此道の開くべき運にや、九月の初旬より、松原(城下を距ること二里許)と言へる村に天然痘流行して、數人斃れにければ、村人驚き恐れ、危急の際に臨みては、平生の疑惑に拘はる暇もなく、牛痘の事を聞き傳へて、種痘を望む者多く、隨て植繼の便を得、且つ實地の經驗茲に現はれ、九月下旬に至りて、其評判喧傳して、松原近傍の村々より登山するに至りしといふ、下〇

略

〔拙堂文集一〕拙堂先生小傳〇中略

種痘之術、始入我邦、先生請其可以救幼兒、乃排衆毀、先天下、以學校之力開種痘館、大施其術、是以藩內之民、殆無嬰痘患者、此皆可以見其學適於實用矣、

〔日本教育史資料八舊府內藩〕學校〇中略

醫學　嘉永七甲寅七月、初テ醫學校ヲ興ス、是ヨリ先キ藩醫堀恕庵敬彦藩ニ建白シ醫學校ヲ興サントス、因テ私宅ヲ獻ジテ黌トシ、假ニ共和齋治館ト名ク、藩醫師規則、及ヒ階級等、寛政五年ニ定ムル所、此時ニ至テ釐改正スルトコロアリ、同年十一月、校舍地震ノ爲メニ顚覆、翌年再建、是ニ於テ更ニ學則ヲ制定シ、封內ノ醫師ニ八ノ日ヲ以テ集會、業ヲ種痘術ヲ此ニ行フ、慶應元年、館ヲ唐人町ニ移シ、改メテ稽全館ト名ク、其後藩ト共ニ廢絶ス、

古事類苑

方技部十三

醫術四

病因

〔萬葉集 五〕沈痾自哀文　山上憶良作〇中略

志怪記云、廣平前大守、北海徐玄方之女、年十八歲而死、其靈謂馮馬子曰、案我生錄、當壽八十餘歲、今爲妖鬼所枉殺、已經四年、此遇馮馬子、乃得更活、是也、內敎云、瞻浮洲人壽百二十歲、謹案、此數非必不得過此、故壽延經云、有比丘名曰難達、臨命終時、詣佛請壽、則延十八年、但善爲者天地相畢、其壽夭者、業報所招、隨其脩短而爲半也、未盈斯算而遄死去、故曰未半也、任徵君曰、病從口入、故君子節其飮食、由斯言之、人遇疾病、不必妖鬼、夫醫方諸家之廣說、飮食禁忌之厚訓、知易行難之鈍情、三者盈目滿耳、由來久矣、抱朴子曰、人但不知其當死之日、故不憂耳、若誠知羽翮可得延期者、必將爲之、以此而觀、乃知我病蓋斯飮食所招、而不能自治者乎、

〔醫心方 一〕諸病不治證第二

醫門方云、論曰、夫人有病皆起於藏府、生死之候乃見於容色、猶如影響報應、必不差違、

〔醫心方 一〕治病大體第一〇中略

大素經云、黃帝問於岐伯曰、醫之治病也、一病而治各不同皆愈何也、岐伯曰、地勢使然、故東方之域、天地之法始生也、魚鹽之地、濱海傍水、其民食魚而嗜鹹、魚者使人熱中、鹽者勝血、故其民皆黑色疎理、故其病爲癰瘍、其治宜砭石、砭石者亦從東方來、西方者、金玉之域、沙石之處也、天地之所收引也、其

民陵居而多風、水土剛強、其民不衣而褐薦、其民華食脂肥故邪、不能傷其形體、其病皆生於內、其治宜毒藥、毒藥從西方來、

〔頓醫抄癩病三十四〕一疥癩治方○中略

凡病有六種、第一次第不調、第二飲食不調、第三座禪不調、第四業病、第五魔病、第六鬼病、

右六種之中、魔、鬼ノ二病ハ、以神呪治之、非法威力者不能治之、座禪一病者、還依座禪治之、業病ハ、以罪障懺悔之力治之、四大不調、飲食不調者、醫師所治也、但除業病、是四大各有百一病、合成四百四病、此則莫不發五藏者、四大不調者、地水火風也、

〔本朝醫談〕又病因を、物の怪のやうにいへるは、佛學世に行はれて、釋氏鬼病の說の、世上に弘まりたるにあらず、總てまじなひ祈禱して、本復する症は、皆鬼病なり、其外は多く飲食より起る病なり、故に唐土の古人も、病因に鬼食をいへり、左傳醫和曰、非鬼非食、萬葉集に、病從口入、故君子節其飲食、人遇疾病、不必妖鬼といへるは、よく病因を說といふべし、物怪のくすり、女傳集に出づ、

〔頓醫抄諸氣十二〕夫人ハ天地陰陽ヲウケテ生ズ、蓋天ニ六氣アリ、故ニ人ニ三陰三陽アリテコレニ應ズ、地ニ五行アリ、人ニ五臟五府アリ、コレニ應ズ、コヽニ或ハ四百四病ト名ケ、或ハ萬病ト稱ス、其ウチ巢元方病源論ニハ、千八百ノ門ヲタテヽ、一門ノシタニ各衆病ヲアカセリ、シカリトイヘドモ、病萬差ニシテ、ナホツクスコトアタハズ、コヽニ陳言無擇ガ三因方ニ、三ノ因ヲタテ、萬病ヲオサムルニ、病トシテツキズト云コトナシ、其三因ト云ハ、一ニハ內因、二ニハ外因、三ニハ不內外因、コレナリ、內因ト云ハ、七氣ノ病ナリ、イハク、喜、怒、憂、思、悲、恐、驚ノ七ノ氣ハ內心ヨリ生ズル病ナルユヘニ、內因ト名ヅク、

〔太平記二十五〕宮方怨靈會六本杉事附醫師評定事

足利左兵衛督ノ北方相勞ル事有テ、和氣丹波ノ兩流ノ博士、本道、外科、一代ノ名醫數十人被招請

テ脈ヲ取セラルヽニ、或ハ御勞リ、風ヨリ起テ候ヘバ、風ヲ治スル藥ニハ、牛黃金虎丹、辰沙天麻圓ヲ合セテ御療治候ベシト申ス、或ハ諸病ハ氣ヨリ起ル事ニテ候ヘバ、氣ヲ收ル藥ニハ、餘山人降氣湯、神仙沈麝圓ヲ合セテマイリ候ベシト申、或ハ此御勞ハ、腹ノ御病ニテ候ヘバ、腹病ヲ治スル藥ニハ、金鎖正元丹、秘傳玉鎖圓ヲ合テ、御療治候ベシトゾ申ケル、斯ル處ニ施藥院師嗣成、少シ遅參シテ脈ヲ取進セケルガ、何ナル病トモ不辨、病多シトイヘ共、束テ四種ヲ不出、雖然混散ノ中ニ於テ致料簡ヲ付ケレ共、更ニ何レノ病トモ不見、心中ニ不審ヲ成處ニ、天狗共ノ仁和寺ノ六本杉ニテ評定シケル事ヲ、能ト思出シテ、是御懷姙ノ御脈ニテ候ケル、シカモ男子ニテ御渡候ベシトゾサヽヤキケル、

〔壺豆の石室〕素問ノ擧痛論ニ、百病生於氣、怒則氣上、恐則氣下、喜則氣緩、悲則氣消、思則氣結、驚則氣亂、寒則氣收、炅則氣泄、勞則氣耗トモ有ルガ如ク、諸病モ此ヨリ生ズルデゴザル、〇中略然レバコレ釋ヤンゴトナキ大事ノ處ユヱ、醫書ト云フ醫書ハ本ヨリノコト、諸道諸藝、何レモコヽヘ氣ヲタヽミ蓄ヘルコトヲナトシ、マヅ天竺デハ、釋迦ヨリモ達マヘヨリ學ビ來ツタル、婆羅門ノ修行モ治心ト云テ、心ヲコヽニ治ムルノ修行、マタ釋迦ノ修シタル處モ、コレニ外ナラズ、サレバ諸宗ノ安心モ、云モテ行ケバ、ミナ同ジ意ニ歸スルコトデゴザル、又諸越ノ神仙ノ道ヲ傳ヘタト云フ道家ノ靈ノ修行スル處モコレデ、皆コヽニ氣ガ聚マレバ無病ニナリ、無病ジヤニ依テ長壽ヲ保ツト云ノ義デ、此修行ヲ不老不死ノ術ナドヽ云タ物デゴザル、氣海ノ下ノ空處ヲ丹田ト云モ、其不老不死ノ丹藥ヲ蓄ヘタル田ト云フノ義ヲ以テ名ケタ物ジヤト見エルデゴザル、

〔萬安方十五下蟲門〕集書說

論、傳尸者須知三尸九虫可也、三尸者名在後論、九虫者蛔虫、寸白、胃虫、人皆可治之、其餘六虫有六代、

形在後、人若受一虫、此人死後、兄弟子孫、骨肉親屬、綿々相傳、以至滅族、凡疾始覺、精神不美、氣候不調、切須戒愼酒色、調節飮食、如或不然、委信邪師、或言鬼祟、以至不起、愼之戒之、

〔萬安方十五下虚勞門〕夫勞瘵一證、爲人之大患、凡受此病者、傳變不一、積年疰易、甚至滅門、可勝嘆哉、大抵合向言之曰傳尸、別而言之、曰骨蒸、殗殜、復連、尸疰、勞疰、蟲疰、毒疰、熱疰、冷疰、食疰、鬼疰是也、夫疰者注也、自上注下、病源無異、是謂之疰、又其變則有二十二種、或三十六種、或九十九種、又有所謂五尸者、曰蜚尸、遁尸、寒尸、喪尸、尸疰是也、其名不同、傳變尤不一、感此疰獲安者十無一二也、治法先須去根、次須攝養調治、亦有早灸膏肓及四花得愈者、若待其根深固蒂而治之、則無及矣、

〔皇國醫事沿革小史前編第五期〕後藤達（字有成、艮山ト號ス、京師ノ人、）別ニ一家言ヲ建テ、始メテ順氣說ヲ唱フ、曰、太平百年、風俗日遷、汰侈遊惰之民、嗜欲外訌、心氣內勞、是以腠裏悉結欝疝、內傷諸疾、因斯而起、振之之方、莫最于灸、濟急事屯、莫如熊膽、經滯血瘀、久滯深痼、宜浴溫泉以取活暢、血消虛乏、宜厚餌食以助溫養、外犯邪氣、則用藥爲主、百病生于一氣之留滯、故以順氣爲治療之綱要、又曰、凡欲學醫者、宜先察疱犧始于羲皇、栞發出于神農、知養精偏在穀肉、攻疾乃藉藥石、（宋後ノ醫風ハ、凡テ溫補ト唱ヘ、藥石ヲ以テ身體ヲ補益スル者ト云ヘリ、後藤翁ハ之ヲ駁セシナリ、）然後取法於靈素八十一難之正語、捨其空論雜說及文義難通者、涉獵張機（漢ノ張仲景、傷寒論ヲ著ハス、）葛洪（晉代ノ人、肘後備急方八卷ヲ著ス、）巢元方（隋代ノ人、諸病源候總論五十卷ヲ著ス、）孫思邈（唐代ノ人、千金方三十卷ヲ撰ス、）王燾（唐代ノ人、外臺秘要四十卷ヲ撰ス、）等諸書、不惑宋後諸家陰陽旺相府藏分配區々之辯、而能識百病生于一氣之留滯、則思過半矣ト、病因考ヲ著ハシ、順氣說ヲ主張ス、

〔醫事或問上〕一或問曰、後世の醫に聞ふに、病毒盡くは去らぬものなりといふ、當家にては、ことごとく去といへり、いかん、

答曰、病毒は生れて後、生じたるものゆゑ、毒藥にて取去らるゝものなり、其證據は、大病を療治して、快氣の後再びおこらず、又やはらかなる藥にて氣を補ひ、體を養ふといふ、醫者は、大毒の藥を

恐て用ざる故、毒の去る道理なし、然れども彼療治にて、病の治する事あり、是は實に治したるにあらず、自然と毒の靜りて、快氣したるなり、其證據には、又重ておこる、それゆゑ毒ことぐくは去らぬものといふなり、疾醫は盡く去る、それゆゑ重て發る事なし、

〔醫斷〕病因

後世以病因爲治本也、曰、不知之焉得治、予嘗學其道、恍惚不可分、譬如人難知之已、然非謂無之也、言知之者想像也、以想像爲治本、吾斯之未能信矣、故先生以見證爲治本、不拘因也、即仲景之法也、今擧一二而徵焉、中風頭痛、發熱汗出者、下利後、頭痛發熱汗出者、皆桂枝湯主之、傷寒寒熱往來、胸脇苦滿中風寒熱往來、胸脇苦滿、或嘔或腹痛、或熱入血室、有前證則皆小柴胡湯主之、傷寒大煩渴中熱大煩渴、皆白虎湯主之、是雖異其因、而方則同矣、可見仲景從證不拘因也、若不得止論之、則有二矣、飮食外邪是也、毒無入口者、不出飮食、宿留滯則爲毒、百病繫焉、諸證出焉、在心下爲痞、在腹爲脹、在胸爲冒、在頭爲痛、在目爲翳、在耳爲聾、在背爲拘急、在腰爲痿躄、在脛爲强直、在足爲脚氣、千變萬怪、不可名狀矣、邪雖自外來、其無毒者不入、假如天行疫氣、固有不病者、天非私、人非不居氣中、是無毒也、然則一也、故仲景隨毒所在而處方、由是觀之、雖曰無因亦可、是以吾黨不言因、恐眩因失治矣、後世論因、其言多端、不啻煩鬧、徒以惑人、不可從焉、

〔本朝醫談〕四百年前、人の引こもりし時、溫熱の病とも見えずと云ふ事あり、溫熱といふ事は、宋人よりいひ出して、丹溪に至て、其說大に行はる、唐土の古人は、萬病皆風寒より起ると心得たり、傷寒論も其意なり、されば病人十に七八溫熱の藥を用ふ、丹溪の發揮せし局方の藥も、宋の時初て作りしにもあらず、古人乳石を服する餘意なり、乳石は魏晉六朝より、唐まで流行して、服する人寒食冷飮して、其熱毒を解すに至る、其禍を蒙るもの少からず、こゝに於て、宋の諸老病の因は、風寒は少く、溫熱多しといふ說を立しなり、是說おこらざりせば、五石散の害、今の世までも傳るべ

し、斯邦にも、仁明帝、自ら五石を煉給ひし事あり、三條院金液丹をめしたり、其藥くひたる人は目をやむと、大鏡にみえたり、平相國の身火のやうになりたるも、已に富貴きはめつ、若くは欲にあかずして、乳石の劑を服せられし歟、夫唐土の州域は、南北甚廣し北土の病風寒によるなれば、熱藥よろしかるべけれど、南土の人は、風寒の病少く濕熱の因多し、これによりて、南北經驗の說出たり、大成論には、病門每に暑濕をもいひて、風寒の二因ばかりにかゝはらず、我邦は、唐土の南土に近く、人民卉服して、裘服せず、されば風寒の病少く、濕熱の病おほかるべきなり、(天文醫談、春の末より秋の末まで、熱氣なり、土はぶき出すはな出れば、風を引候やうに、こゝろへられ候、大にひが事に候、冬に候はゝせめてなり、又あつき物を好候ものも、煩によりて熱氣にも其分候、當世は、寒の者百人の内一二人もなく候、是は風寒濕の因をとらず、病は皆熱とせし說也、)

〔斷毒論天〕斷毒論序

昔日、吾門人山本寬之患血證、予屢視之、而觸其氣、喀然吐血、於是始悟凡百之病莫不傳染、時告諸吾徒、莫信之者、後門人倉士寬、又患血證、其妻與其父之妾、看護之、亦同吐血、至此始服予言之驗矣、予因語之曰、百病無傳染之理、則痘瘡黴疥何可傳染乎、痘瘡黴疥已有傳染之理、則凡百之病何不可傳染乎、是事理之最易知者、而世人不察耳、甲斐醫生橋本伯壽使其子力作、來從事予、且請序其所著斷毒論、予閱之、則能言百病傳染之理、與予所見暗合、而冥契可謂奇矣、其論百病屬諸外氣者、其言精矣、○中略要之伯壽在草澤之間、奮其獨見、而不倚他人之門牆、則是醫中之一偉人、所謂鐵中錚々、傭中佼々者也、黨同伐異、恒人之情、世之醫流、或競其言之異、群論而聚訟之、則此書爲之名山、傳之通邑大都、均是待後世之子雲耳、

文化辛未八年閏二月望　吉田儒員加賀大田元貞公幹撰

〔斷毒論上〕總論

經曰、夫二儀之內、惟人最靈、稟天地精英之氣、故與天地相參、蓋與天地相參之故、與天地一也、與天地

一也之故、能感天地之氣、能感天地之氣之故、又有感天地之邪毒、邪毒者何也、是又氣也、氣者何也、是陰陽也、陰陽沴亂、爲邪爲毒、毒者何也、體物而有形、邪者何也、因氣而無形、其邪也毒也、有區別焉、譬猶百花之異芬芳、百獸之殊能毒也、邪毒不一、有萬不同、故感而傷人、能成萬狀之疾、疾雖萬狀、其本二也、曰內因、曰外因、所謂外因者、傷寒、瘟疫疥之類、是也、內因者癆瘵狂癇勞極之屬是也、內因者陰陽內亂而感于外、外因者陰陽外亂而感于內、皆陰陽之沴氣、合湊而成疾、經所謂氣合有形者也、塞變化之父母、生殺之本始、不可不審察也、但外因中、若傷寒者、無形之邪、時行于冥冥之中、不可視、不可察、故曰非君子固密、則難避矣、若瘟疫癥疥者、有形之毒、可視、可察、是以雖常人易避矣、何者觸之則疾、不觸則不疾焉、

〔壽魂一〕病源論 井關名著

神ながら擧言せぬは古の習なれば、ましてかゝるわざは、何ともいはでやみなましと思へど、古書傳らざれば、識なきまゝに、漢籍をみれば、徒に穿鑿たる說のみ多くして、いと信がたくなん、さらばたゞに過んとすれば、習癖つきたるにか、其病源を論ぜねば、さすがにあかぬ心ちぞせらるゝ、故考るに、病源となる物三あり、一には神氣也、神氣と云は、大己貴命の御心より疫起り、本牟智和氣御子言問まさず、崇道天皇の靈より咳逆起り、倭建命、伊服山にて白猪に逢て御足腫たまひ、桓武天皇の石上神の祟にて病たまひ、神武天皇の御軍、熊野にて神毒氣にて昏瘁し類、國神の荒にて、其國人病む等、いとも畏は、仲哀天皇の、天照大神の勅を信まさずして崩給し類也、○中略二には自然成也、自然成とは、自事を犯にもあらず、物に傷るゝにも非、端なく惡事起り、其惡事の終には因と成て、其身にしては病となり、或は不祥子を生、或は子孫の血脈に傳て、種々の病となる類を云也、其ゆくりなく禍事の起れるは、准へむも畏こかれど、伊弉冉命の、火神を生ましゝに依て崩ましゝ類也、其惡事の因と成て不祥子の生るゝは、二神天之御柱を廻ます時、女言先立て、不良し

によりて、御子蛭子淡島を生まし、伊弉諾命、黃泉の穢を祓はんとて、禊ます時、御衣の穢よりは煩大人命、御身の穢よりは禍津日神、生まし丶類也、まして人代と成て、過又は穢なきこと能ざれば、其身其毒に慉めるのみならず、子孫に傳るも常の事にて、病あれば、子も其に同き病ある事、誰も見て知べき也、世にいはゆる、胎毒と云物是也、其體にあれば、驚風、疳、疱瘡、麻疹、蚘蟲、疝、積聚、留飮、盲、聾、瘡毒、痔、癇、勞瘵、亂心、癲癇、中風、癩など、形こそ異なれ、皆其毒の年へつ丶、長り老となるに隨て、種々に化也、猶其變ゆくさま多かれど、此に擧に暇あらず、中にも著きは勞瘵、中風、癩等ある家には、血脈に彌て、代々同產に絕ざる類也、三には、自身爲也、自身爲と云は、行あしくて、自病を造釀を云也、

〔筆のすさび 三〕一病源藥性之說　近日醫師に、病は一氣の留滯より生ずといふはさもあらん、魚は水に生じて水に養はれ、人は氣に生じて氣にやしなはるればなり、此說につゞきて萬病一毒といふ者あり、これは通じがたきにや、たとへば胎毒結毒は人にあり、魚毒菌毒は物にあり、風毒陰陽毒は氣にかゝる、これ皆毒とも云ふべし、打撲顚躓にてわづらひ、火傷水溺にて死に至り、刀劒の傷よりして命を殞し、過食にていたむは、抑何の毒なるか、米麥もと毒なけれども、多食より病をひき、梃刃もと毒なけれども、傷より患ふるなれば、毒といはんか、さらば河豚烏喙の類、其ものにたくはへし毒とは一にあらず、病を生ずるものをさして皆毒といはゞ、萬病一病といひても可なり、また藥に寒温なしと云ふ說ありて、試に水をあげて、汝が性いかにとゝはゞ、水こたへて冷といはん、沸湯にしてとはゞ、熱といはんなどいへり、今試みに酒を擧げてとはゞ、温といはんか、冷といはんか、大抵はやく人を驚かし、門戶をたてんとおもふ人は、必かゝることある者なり、獨儒者のみにあらず、さりとて其人愚昧なるにもあらず、亦信ずべきこともまゝあるべし、かゝる不稽の說ありとて、悉くもすつべからず、予香川氏の行餘醫言藥選などをよみて、その卓

譏に陷せしことも多けれども、また疎漏の說もあり、後藤吉益等の書は、いまだ讀まざれども佳說もあるべし、〇中略壯病は丙の字なりといふ說、暇耕錄に見えて妙なり、今ことごとく記せず、人は一氣の陽もて生存す、この陽常ならざれば病なり、强人さむくして振ふも、弱人の寒になやむも、皆陽氣の變にて、殊に寒熱といふは枝葉の論なり、療治にいたりて、或は温、或は凉、或は發散し、或は收斂するは、療治の手段にて、こゝにいふをまたず、

〔春波樓筆記〕余江漢曰く、人薄弱にしてつねに寒風にいたむものあり、全身を掩うて養ふ者益感ず、氣を强りて病内に入らず、歳中必病者少し、氣の充つる故なり、

〔技癢錄一〕神心內守

本藩平岡氏、世傳兵術、其祖八左衞門、術尤精神變、嘗語人曰、吾中年後、兵術益進、而無它可設、但不復得外感之病、蓋此心謹警守無少懈緩故然也、素問曰、恬惔虛無、眞氣從之、神心內守、病安從來、平岡氏之謂也、或曰、兵士進者、自有道機、蓋所謂進於技之類歟、

〔皇國醫事沿革小史後編第六期〕當時〇天保弘化又京師ニ廣瀨元恭アリ、大坂ニ緒方洪庵アリ、幷ニ洋學醫術ヲ以テ鳴ル、元恭ハ甲斐ノ人、京師ニ帷ヲ垂レ、大ニ究理學ヲ講ジ、徒ヲ聚メテ教授ス、我國物理學及ビ生理學ノ興ルヤ、元恭最モ力アリト云、元恭大ニ著書ニ富ム、乃チ理學提要、究理對問、人身究理、牛痘奇方、知生論、及ビ三物名義、地理誌、諸器圖解、礮術新書、解剖詳辨、病理正解、養生俗辨、外科瘤病、西洋馬術說等アリ、洪庵諱ハ章、字ハ公裁、備中ノ人、江戶ニ到リテ坪井信道ニ從學シ、傍ラ宇田川玄眞ニ就テ疑ヲ質ス、後又長崎ニ遊ビ、學成テ大坂ニ徙リ、始メテ業ヲ開ク、名聲籍甚、生徒雲集、治ヲ乞フ者門ニ塡ツ、弘化四年紀元二千五百七年病學通論ヲ譯述シテ、病因病證ヲ說ク、之ヲ病理學ノ首唱トス、又扶氏經驗遺訓ヲ譯シテ、大ニ醫學ノ功ヲ進ム、

〔先哲叢談後編五〕山脇東洋〇中略

東洋以寶曆甲戌歲、〈○四年〉請官解斬市者死屍觀其臟、作文祭之、明辨舊說著臟志、按觀臟之擧、宋有歐陽範五臟圖、元有王好古臟說考、於吾邦未曾有之者、或難之曰、醫爲仁術、豈死屍屠之觀其腑臟、毋專甚乎、診脈察症、投藥與劑、有資而得效、何必觀臟之爲、東洋笑曰、欲善其術不能講究不多端、斯擧蓋出不得已、不更與較、壬午〈○十二年〉歲再請官又觀臟、自是以後、越前半井伯玄有臟覽、長崎吉見南岡有五臟明辨、皆以東洋爲之嚆矢、長門瀧鶴臺作臟志序曰、相傳本藩昔年有獲姦賊於城中、侍醫請剖剜之、使畫工即圖焉、其圖秘而不出、曰此圖一出則醫籍盡廢、近竊覽之、如志所載、分毫不差矣、於是乎益知素靈難經明堂銅人等諸書、說五臟六腑者爲妄誕也、夫苟不明臟腑所位、關節所束、水穀所輸、氣血所運則安能得知癥結所在而治之乎、而上下千餘年、容欺不疑、執迷不返、衞生之道淪胥窮矣、豈非生民之不幸耶、君憫其如斯、奮然發志、撥千古聾蒙、揭濟世標準、以傳于其人於將來、其功大且遠矣哉、

森立之〈○中略〉

〔温知醫談 一〕醫學修業次序七則

解剖三　吾邦解剖ヲ創造スルヤ、寶曆中、醫官山脇東洋〈道作〉西京ニ於テ、寶曆四甲戌年閏二月七日、京兆尹酒井若州侯ニ請テ、死刑ノ罪人ノ屍ヲ獄中ニ解ク、其後明和庚寅〈○七年〉四月二十五日、又西京ノ郊外ニ於テ、荻野台洲門人古河醫官河口信任ヲシテコレヲ解シム、共ニ皆書ヲ作テ刊行ス、臟志〈山脇〉解屍編〈河口〉是ナリ、其後享和壬戌〈○二年〉初冬、荻野ノ門人中達若村ノ二氏、官ニ請テ解視ス、其他天明癸卯ノ、橘南溪解ク所、寛政丁巳〈○九年〉ノ、柚木太淳、同戊壬ノ、小石解ク所、皆成書アリ、爾後小森桃塢、文化壬申〈○九年〉文政辛巳〈○四年〉兩度解ク、亦圖說アリ、解臟圖譜ト名ク、文化文政ノ間、東京ニ在テ、毎冬月千住小塚原ニ於テ無宿人ノ刑屍ヲ其手ヨリ買得テ、社ヲ結テ解剖セシ事アリ、當時桂川ノ門派ニテ最盛ニ行ハレ、余モ此席ニ臨ミシ事數々ナリシ、西洋一千七百三十一年〈我ガ享保六年辛丑、淸ノ康熙六十年也、〉大醫學與般亞單(ヨハンアダム)〈姓〉闕兒武思(キュルムス)〈名〉ノ撰スル所ノ、打係(ターフ)縷亞那都米(ルアナトミー)ト云フ書ヲ以テ、解剖書ノ大成セル者トス、此書ヲ譯シテ、漢文ニ綴レルハ、杉田玄

白ノ解體新書ナリ、解剖譯書ハ此ヲ以テ嚆矢トナス、爾後今日ニ至テハ、譯書陸續イヨ〳〵精密ヲ究ム、今此等譯書ヲ以テ、素靈ノ奥義ヲ説解スルトキハ、皆燃犀ノミナラズ、殆ンド顯微鏡ノ徴ヲ顯ハスニ併シモノアリ、

此圖見武思ノ時享保六年辛丑ヨリ、僅ニ三十三年ヲ經テ、山脇東洋寶暦四年甲戌ノ臟志成リ、又二十年ヲ經テ杉田玄白安永三年甲午ノ解體新書刊行セリ、當時文運ノ駸々タル亦想像スベシトス、

〔解屍編序〕余家世以瘍醫仕本藩、祖父受術於紅夷、先父紹之、余不肖弱齡受過庭之訓不可得終也已、余嘗遊長崎、事栗崎道意翁、留學積年、翁善南蠻醫方、蓋其術不原素靈、不據診候、而望色察證、專以刳破瘍流膿、合傳膏行之、亦專門而特見活人之手段焉、因曾謂華元化之流乎、然至於觀表識疾之所在、洞見不惑之妙、則獨豈吾所能、我輩縣下、豈所企覺哉、夫升堂者自階、窮源者必遡、須先讀經籍習脈家言、乃讀素靈而及骨空本論諸篇、所述系脈絡會輸節皆深未易通曉、旁攻諸群書、異說紛然、不知所從、疑慮塞于胸中、會明和己丑冬、本藩受太政、入鎮京師、余得陪駕而入京師、既聞醫流之傑、特有台州荻先生者、乃投刺受業其家塾、先生爲人、溫厚能容、衆以該博宏才、余以宿疑扣、則應之影響猶遲、數年之疑一日瞭然也、偶論及解屍之事、問曰、按腹導筵之法、余家有傳、然未驗之屍、則膠古而不得師心亦不疑與其積疑也、不如屠而辨之、我且請戮餘之屍、荻先生曰、非謂莫爲、恐害於名教矣、若使戮餘之屍、其爲人一也、以人戮人、君子不爲也、然解一屍體、以有裨益治術於千萬人、則亦爲道之爲也、誰敢怪之、余曰不疑則已、疑而不爲不熟於道也、假負不仁之名、以斯道食斯祿、如或解惑、卽答恩之義也、且靈樞曰、其死也、可解剖而視之、古時尙爾、我何傷乎、遂因本藩請諸政府、君侯因知斯擧爲濟世之方也、准行之命、朝而下矣、明和庚寅夏四月廿五日、行刑於西郊、請獲首一級、無首體二屍、余手執刀解之、同學諸生、矢玄明、及某々與焉、荻先生莅焉傍觀寫之、隨解隨辨、逐置之卓上、而並觀考諸華說、則皆照諸夷圖、則近、始信夷圖眞而華說未盡、顧古之賢聖、體仁弱愛、不忍行刳剝、推理立論、以示後世、乃精微未盡、固其

所也、然論大綱、卒不能越範圍、適足以知治功之難測焉矣、今視内外系表裏無二、治外者必攻諸内、故治外較難于治内、滄溟李氏亦云、宜哉、古時醫師、兼通内外也、斯圖也、五綵分色、肉理洴血、毫亦不遺、觀者殆厭穢、蓋畫之異者耶、乃編爲一冊、命之曰解屍編、

明和辛卯仲冬　　古河　醫學　河口信任　撰

〔淇園文集後篇一〕解剖圖跋

明和八年辛卯冬十二月、京城有女子受刑者、大府醫官法眼橘陶、乞得其屍、率其子弟數十人之牢獄院、令解剖以觀其臟腑及子宮等狀、命畫工菅原誠意者、卽悉作之圖、傅彩爲一卷、藏之其家、以備醫事之稽攷、中島孫信、以其與橘陶交善、且好圖畫也、請命菅原誠意作之副本、又請橘法眼書題記其圖、亦以藏之其家、旣又請予作之跋尾、孫信之藏圖書固甚富矣、然而人惡知其家亦乃能藏斯圖者乎、安永甲午冬十二月朔日、皆川愿題、

〔蘭學事始上〕抑、頃は三月三日の夜と覺へたり、時の町奉行、曲淵甲斐守殿の家士、得能萬兵衛といふ男より、手紙もて知らせ越せしは、明日手醫師何某といへる者、千住骨ケ原にて、腑分いたせるよしなり、御望あらば、彼方へ罷り越れよかしと言文をこしたり、兼て同僚小杉玄適といふもの、其以前、京師の山脇東洋先生の門に遊び、彼地に在し時、先生の企にて、觀臟の事ありしに、此男に從ひ行て親しく視たるに、古人諸説皆空言にて、信じがたき事のみなり、上古は九臟と稱せり、今五臟六腑の目を分ちたるは、後人の杜撰なりなんどいへる事の話もありし、其時東洋先生臟志といふ著書をも出給ひたり、翁〇杉田玄白其書をも見し上の事なれば、よき折あらば、翁も自ら觀臟してよと思ひ居たりし、此時和蘭解剖の書も、初て手に入し事なれば、照し視て、何れか其實否を試むべしと、喜び一かたならぬ、幸の時至れりと、彼處へ罷る心にて、殊に飛揚せり、扨斯る幸を得し事を、獨り見るべき事にもあらず、朋友の内にも、家業に厚き同志の人々へは、知らせ遣はし、同

じく觀て、事業の端には相互になしたきものと思ひ量りて、先同僚中川淳庵を初、某誰と知らせ遣はせし中かに、良澤（前野）へも知らせ越したり、〇中略其翌朝とく支度整ひ、彼所に至りしに、良澤參り合、其餘の朋友も皆々參會し出迎たり、時に良澤、一つの蘭書を懷中より出し、披き示して曰く、これは是ターヘルアナトミアといふ、和蘭解剖の書なり、先年長崎へ行きたりし時、求め得て歸り、家藏せしものなりといふ、これを見れば、卽ち翁が此頃手に入りし蘭書と同書同版なり、是れ誠に奇遇なりとて、互に手をうちて感せり、〇中略これより各打連立て、骨ケ原の設け置し、觀臟の場へ至れり、扨腑分の事は、穢多の虎松といへるもの此事に功者のよしにて、兼て約し置しよし、此日も其者に刀を下さすべしと定めたるに、その日其者俄に病氣のよしにて、其祖父なりといふ老屠、齡九十歲なりと云る者、代りとして出たり、健なる老者なりき、彼奴は、若きより腑分けは度々手にかけ、數人を解たりと語りぬ、其日より前迄の腑分といへるは、穢多に任せ、彼が某所をさして肺なりと敎へ、これは腎なりと切り分け示せり、夫を行き視し人々、看過して歸り、我々は直に內景を見究めしなどいひしまでの事にてありしとなり、固より臟腑に、其名の書記してあるものならねば、屠者の指し示すを見て、落着せしことにて、其頃までのならひなるよしなり、其日も彼老屠が、彼れの此れのと指し示し、心肝膽胃の外に、其名なきものをさして、名は知らねども、已れ若きより數人を手にかけ、解き分けしに、何れの腹內を見ても、此處にかやうの物あり、かしこに此物ありと示し見せたり、圖によりて考れば、後に分明を得し、動血脈の二幹、又小腎などにてありたり、老屠又曰、只今まで腑分の度々、其醫師がたに品々をさし示したれども、誰一人某は何、此は何々なりと疑れ候御方もなかりしといへり、良澤相倶に携へ行し和蘭圖に照し合せ見しに、一としていさゝか違ふ事なき品々なり、古來醫經に說たる所の、肺の六葉兩耳、肝の左三葉右四葉などいへる分ちもなく、腸胃の位置形狀も、大に古說と異なり、官醫岡田養仙老藤本

立泉老などは、其ころまで、七八度も腑分し給ひし由なれども、皆千古の說と違ひしゆへ、毎度毎度疑惑して、不審開けず、其度々に、異狀と見しものを寫し置れ、つら〳〵思へば、華夷人物違ありやなど著述せられし書を見たる事もありしは、これが爲なるべし、扨其日の解剖事終り、とてもの事に骨骸の形をも見るべしと、刑場に野ざらしになりし骨共を拾ひとりて、かず〳〵見しに、舊說とは相違にして、只和蘭圖に差へる所なきに、皆驚嘆せるのみなり、

〔解體新書序■〕刻解體新書序

阿蘭之國精乎技術也、凡人之殫心力盡智巧而所爲者、宇宙無出于其右者也、故上自天文醫術、下至器械衣服、其精妙工緻、無不使觀者爽然生奇想焉、於是乎、舶厥琦貨互市乎四海、日月所照、霜露所落、皆無所不至焉、雖則造化之大、豈弗奇哉、我東方召彼者、于今數百年矣、其來賓我也、官構邸於崎陽而館之、爲置譯官、協辭達志、通欲成利、以歲三月謁官於東都獻方物也、由是我就譯家而學彼天文醫術者固爲不少焉、然彼之所傳書之與言、我耳目之所不慣、率不易曉解也、或好名高之徒曰、吾好蘭書、雖一二叩諸譯家、其終也徒以爲孟浪、不中道而廢者亦固不少焉、或從譯家而學其術、雖習之久、爲之熟臨書之與言、則胸若看邊者、復固爲不少焉、余生乎譯家、繼箕裘、自丱兮習於其事、左右取之、將逢其原、然至其事理之奧、彼精工而所進者、雖余不易窮詰也、先是中津官醫前君良澤者、問余乎崎陽、余視之、豪傑士也、其學之也、黽勉孜々、終暑不倦、余感其篤好、盡所蘊而傳焉、爾後出藍之器不啻焉、及其辭而歸乎東都、與一二同好士、益鑽厲不止云、余每與蘭人來乎東都、輒就館而謀、且引同好士僅於余宿留之際、對晤以爲常、歸則千里書致殷勤也、余乃謂、東都人物淵藪也、然都下之俗、固好浮華矜夸、多釣名牟利者也、今也余於前君雖舊相識、其他是行路也、然則徒申殷勤者、恐不允也、吾豈心慊之哉、漫不省者數年矣、今茲癸巳之春、復與蘭人來於東都、前君亦引同好士而問余、殷勤如故、中有都鄭官醫杉君玄白者、出其所著解體新書、示余且謂曰、翼也從良澤氏、遙辱承先生之餘教、乃就蘭書中、取其解

體之書、讀之、從而解、從而譯、遂得以成斯書也、不亦悅乎、伏願一得歷先生之電覽、而質其疑、則死且不朽、余受而讀之、詳悉明白、其事言校諸彼、無一差忒焉、乃感其篤好如斯、不覺泫然淚下、遂喟然廢書而歎曰、嗟乎至哉斯舉也、我東方從彼諸百年矣、其際學者何限、然學者不能成譯、譯者亦拙於文、是以未嘗有發理而能弘斯道乎世者也、今二君以豪傑之質、篤好之志、盡其心力智巧、而成斯事、由此以往、世醫之有志者、因以知保物之所生、臟腑百骸之所在、而施厥術、則上自王侯、下至黎庶、凡有生氣者、庶幾將不夭其天年也、且後之志斯者、自此而讀彼、則勤思過半矣、嗟乎至哉、二君之有功于斯也、實天下後世之德也、今而後、我東方之人、始知蘭人之精於醫、大有益乎人也、嗟乎至哉斯舉也、千古以來未有如二君者也、呼向者以爲釣名牟利者、吾過矣、吾過矣、二君上魅斯、二君再拜曰、是非我功也、誠先生之德也、敢請得先生之一言而辨譽貴、永以爲榮也、余謝曰、章也惰夫、幸以諸君之靈、爲曹丘生、於我得與斯盛舉也、深以慙恧、如以鄙辭形穢其側、章何敢、況斯書之行揭日月、則天下自知其貴重也、章何得而以先傾斯書乎、二君不可違、記余所以識二君之由以爲序、

安永二年癸巳之春三月

阿蘭譯官西肥　吉雄永章　撰

〔解體新書序〕凡例

一、斯書譯和蘭人與般亞單闕兒武思所著打係縷亞那都米者也、斯方二百年來、召和蘭人就受厥醫術者多矣、然僅一二學其療法、以爲糊口之資焉、豈至讀其書、修其業乎哉、蓋和蘭之國精乎技術、知巧之所及、無不致者矣、而遠有德乎四海者醫爲最焉、唯以其言語侏離、文字曲釘、作用異常、譬有善書良法、天下擧将而稱焉、我家世傳而業厥瘍醫也、復慕其邦書矣、余繼箕裘、自童丱習慣其事、因得寶其書也、然素罕覩之者、至乎其艱奥難解者、覺無由質訪焉、竊々焉似瞽師之索相者矣、於是乎、幡然別取漢土古今之醫籍而讀之、回復讀味茲年矣、尋究其療方論說、則穿鑿附會、牽强疎鹵、欲斬之謬昭欲匡之靈識、無可一以爲擴廓焉、芒々乎若部部之學步者矣、蓋蘭書之所難解者、不過十之七、

而漢說之所可采者、則不過十之一耳、遂又專精乎家學、而不問厥它也、迄乎近時余之術行、而疾人宗治日盛、重有概乎夫二者也、乃旁求獲一二知己焉、於是乎、稍々取其方書優柔厭飫、相諏相咨、玩偈居諸之際、正得以氷釋理順焉、而后嘗試諸事之與物、則左右取之能逢其原、章々乎明如觀火矣、因取解體之書、依其成說、解剖而視、則無一所失焉、臟府竅關骨髓脈絡、始得識其位置整列、豈不愉快乎、以是觀漢說、則其前者近于是、而後者不遠于非也、唯靈樞中、有解剖而視之語、則漢人古必有其法焉、後人不得其傳、徒信糟粕、而爲無稽之言、數千年來、竟不識其面目、豈不哀哉、按解體瘍科之要、不可不知焉、諸證之所在、外此而無可知焉、蘭人之致精巧、亦防乎斯、故欲能進于醫焉者、苟非淵源于此、則決弗能也、而我方之醫恬不之省者、果何心哉、宜矣、其不成刮骨之功也、余〇杉田玄白 故於蘭書之中、特拔是爲翻譯、範初學、塗轍一定、聰明以生、過此以往、生死肉骨之妙、庶可得而至焉、嗚乎余業之及于斯、實藉天之寵靈也、豈人力之所能致乎哉、天下之有心乎斯道者、則我竊自比郭隗矣、如以是受四方之譏、所不辭也、〇下略

〔蘭學事始下〕一通り譯書出來たれども、其頃は蘭說といふ事、少しにても聞及び聞知る人絕てなく、世に公にせし後は、漢說のみ主張する人は、其精粗を辨せず、これ胡說なりと、驚き怪みて見る人もなかるべしと思ひ、先づ解體約圖と云ものを開版して、世に示せり、是は俗間にいふ、報帖同樣のものにてありたり、此業江戸にて首唱し、二三年も過しころ、年々拜禮に參向する阿蘭陀便にて長崎にも聞傳へ、蘭學といふ事、江戸にて大に開けしといふこと、通は、忌み憎みしよし、左もあるべし、如何さま其ころまでは、彼家々は、通詞迄の事に詞譯する抔といふこともなかりし時節にて、冷めしなさむめしといひ、一部一篇エーンデールといふ語を、一のわかれ二の分れと和解し、通じ合ひて、事濟む樣なしと見へたり、尤醫說內景抔の事に至りては、誰一人知る人なき書なり、或る一譯て、ゲールといふものは、身體中にはなし、ガルの誤なるべし、ガルは卽ち體なりとり、但此前後よりして、翁が著、關東にて創業の一擧ありしにより、其根元たる西肥なも大にるいなり、

〔近世名醫傳一〕小石元俊 子元瑞

小石元俊、名道、字有素、號大愚、若狹人也、略。中元俊乃負笈京師、時杉田玄白以和蘭醫方鳴于當世、創譯解剖新書、初元俊講陰陽五行之舊說、不足株守、及讀解剖新書、乃歎曰、醫理之精密、莫若蘭人、以其得諸實驗也、有不明此學、則不足以主張吾說、於是介博士柴栗山、寄書玄白、往復討論、後玄白從小濱侯入京、則日詣其僑居、益究其說、既而喪妻、乃託子元瑞於外家、遂赴江戸、寓大槻玄澤家、與玄澤玄白及前野良澤等結交、講學兩餘、歸京試技、東洋嘗解剖刑屍著藏志一編、聞元俊所說有異同、遣弟子數十人論難、元俊隨闢辯析、又乞于官解觀刑屍以徵之、一々符合、東洋等皆感服、從此關西醫家敬信和蘭醫說之精云、

〔杏林雜話〕醫學所藏全骨、藝州醫星野良悅所造也、初藝州瘍醫田中道長者、目不識一丁、以手術精妙、大行于時、良悅伯母、患瘍下頷、衆醫束手、乃請道長、道長方療之、延病者於室隅、相與冒大布被、不使人觀其手法、一術即治、良悅心憤之、以爲若殆非知内景、不可下手、内景非觀解剖、不能極其詳、乃請藩得刑屍、觀解剖以檢之、然骨肉之際會經脈之連屬、仍不能分明、遂再購刑屍、往海濱、節々炙之、而後支分體解、始得其實、於是創意作全骨、居數年、杉田玄伯唱蘭學於江戸、乃携來徵之於元伯所著解體新書、毫無差謬、醫官堀本一甫、桂川甫周獻之於大府云、

〔日本教育史資料四福井藩〕福井醫學所略○中

解剖記事　文化二年十一月、處刑ノ者一名アリ、腑分觀臟ヲ許可ス、先例ヲ照シ、小山谷佛所ニ於テ執行ス、先例詳ナラズ、此時觀臟ノ第二回ナリ、執刀者等姓名詳ナラズ、文政十一年九月、處刑ノ者男女二名アリ、腑分觀臟ノ許可ヲ得テ、小山谷佛所ニ於テ執行ス、執刀者等詳ナラズ、　天保十年十月、處刑ノ者一名アリ、小山谷佛所ニ於テ觀臟ヲ執行ス、總管ハ山本正伯、半井仲庵、田代万貞、福井玄篤、學監ハ妻木陸児ナリ、其他醫師四名、主解四名、助刀十一名、書記四名ヲ命ズ、

〔近世名醫傳一〕各務文獻略○中

人體圖像

文獻之解視屍體也、乘夜拉妻間行赴葭洲刑場、收其棄屍、夫妻舁之而歸、陰置牀下、且剖且檢、日以爲常、葭洲在安治川下流、距市數里、白晝人尙憚經過、而文獻乃獨如此、聞者僉捲舌驚服焉、

〔醫賸 上〕解剖藏府

朱載堉律學新說云、岐伯曰、夫八尺之士、皮肉在此、外可度量切循而得之、其死可解剖而視之、蓋太古時、風俗淳朴、死則棄之於野、初無衣衾棺槨之葬、故使爲醫術者可得剖而視之、亦無所禁、後世聖人取諸太過之象、始製棺槨、由是之後、國有殘毀屍體之禁、無敢剖而視之者、以此推之、知彼醫經其來之遠、又奚止於三代而已、此說非也、趙與時賓退錄云、廣西戮歐希範及其黨、凡二日、剖五十有六腹、宜州推官靈簡、皆詳視之爲圖、以傳于世、王莽誅翟義之黨、使太醫尙方與巧屠共刳剝之、量度五藏、以竹筵導其脈、知所始終、云可以治病、然其說今不傳、又晁公武郡齋讀書志、載存眞圖一卷、皇朝楊介編、崇寧間、泗州刑賊於市、郡守李夷行遣醫并畫工往視、決膜摘膏肓、曲折圖之、盡得纖悉、介校以古書、無少異者、比歐希範五藏圖、過之遠矣、實有益醫家也、又聞見後錄載、無爲軍醫張濟能解人、而視其經絡、則無不精、因歲饑疫人相食、凡視一百七十人、以行針、無不立驗、按明程式、亦嘗解倭人、撿視藏府、詳見其醫彀中、近世斯邦醫家亦好剖解、驗以荷蘭內景書、頗極精微、然有益於外科、而無裨內科矣、

〔新撰姓氏錄 左京諸蕃 上〕和藥使主

出自吳國主照淵孫智聰也、欽明天皇御世、隨使大伴佐氐比古、持內外典藥書、明堂圖等百六十四卷、佛像一軀、伎樂調度一具等入朝、男善那使主、孝德天皇御世、依獻牛乳、賜姓和藥使主、奉度本方書一百卅卷、明堂圖一卷、藥臼一、及伎樂一具、今在大寺也、

○明堂圖ノ事ハ、醫學校及ビ醫書ノ條ニアリ、參看スベシ、

〔續古事談 一王道后宮〕典藥寮明堂圖ハ靈物也、雅康寮御時、本寮破レテ、ステヲキテ、ヨロヅノ人ミケ

リ、カヤウノ累代ノ寶物、今ハ一モノコル物ナシ、

〔備急千金要方 針灸二十九〕明堂三人圖第一 仰人十四門、伏人十門、側人六門、○中略

若依明堂正經、人是七尺六寸四分之身、今半之爲圖、人身長三尺八寸二分、其孔穴相去亦皆半之、以五分爲寸、其尺用夏家古尺、司馬六尺爲步、卽江淮吳越所用、八寸小尺是也、其十二經脈、五色作之、奇經八脈、以綠色爲之、三人孔穴、共六百五十穴、圖之於後、亦覩之、便令了耳、仰人、二百八十二穴、背人一百九十四穴、側人一百七十四穴、穴名共三百四十九、單穴四十八名、雙穴、三百一名、

〔玉海 六十三 藝文〕天聖鍼經

五年 天聖 十月壬辰、醫官院上所鑄腧穴銅人式二、詔一置醫官院、一置大相國寺仁濟殿、先是上以鍼砭之法傳述不同、命尚藥奉御王惟一、考明堂氣穴經絡之會、鑄銅人式、又纂集舊聞、訂正訛謬、爲銅人腧穴鍼灸圖經三卷、至是上之、摹印頒行

〔醫家先哲追慕會〕木骨考

藝州廣島町醫師星野良悅、醫學館へ罷出候義伺書、

藝州廣島町醫師　星野良悅

右良悅義、工夫にて人骨全形細工に仕候品持參仕、當時は當地に罷在候處、近々歸國仕候由、右細工、實に逼り、骨節纏關の樣子、一覽仕置候へば、有益の筋も可有之候につき、於醫學館、御醫師一同へ爲見申度事存候、然る處、右取立、當人不仕候ては出來兼候間、右細工物に差添、良悅義、醫學館へ罷出候て不苦候儀、此段奉伺上候、

十月　○寬政十二年

多紀永壽院 ○元悳

多紀永壽院差上候書面被成御下ゲ候に付、一覽仕候處、○中略 伺之通、醫學館へ差出候ても不苦旨被仰渡可然哉奉存候、私共評議仕候處、書面の通に御座候、則御下ゲ被成候書面返上仕候、以上、

十一月　矢部廣五郎

小長谷和泉守〇中略

以手紙得御意候、然者各務相二細工の人骨、明二十八日四ツ時過、相二御同道醫學館へ獻納可然と存候、依之此段得御意度、如此御座候、以上、

二月廿七日

依之中山へ相談、義兵衞へ懸合、夫々支度相調、持夫等、深川にて取扱、つり臺持にいたし、少仙に而は、麻上下、著用、供召連れ、私は平服にて罷越候、當朝原澤文仲も參り、差添可參故之義申聞候に付、懇意も有之候に付、召連罷越候上、學館俗事役へ對面申談候は、此度大坂より罷下り候、相二門人、爲組立、今日召連候外に、御當地に罷在候、右門人原澤文仲と申者、追々右木骨御組立等の義に付、爲御用召不苦候はゞ、右の者も、御座敷へ差出可申哉と聞合候處、差支無之旨に付、同人義も、十德著用、私被相通候處へ、兩人幷に同席差扣、右二箱幷被相添候御著書〇整骨新書此度の御小冊、共に右俗事役大野茂三郞と申仁へ差出、宜敷御取計被下度旨申し、委細承知の旨にて、早速講席と申廣き座敷へ持出し、直組立にいたし候樣申候に付、私付添候少仙組立、文仲手傳も致し、大體相濟候處にて、多紀氏御詰所へ、私被召出、面會にて御座候、其上にて、組立の處被致一覽、尙又右組立傳受置候樣、外御醫師中へ被申渡、右掛り一兩人被出、段々少仙より被傳受、其上にて、取仕舞まで被習受候、夫より相扣居候處、私共三人へ、晝支度被相出候、九半頃至、杉本法眼御出に付、此節御講席御用に相成、於別御座敷御傳申候、御醫師中、一兩人少仙差添被組立、尤私付添罷在相濟候處、杉本氏御出御見分、宜出來之旨、殊の外被致稱美候、其上にて、御當人内々私へ被申聞候は、今日無滯獻納相濟候段、向々へ可被成御屆、尤右爲手當、御金被下置候、御取調兼而有之候處、御金藏御渡日に無之候ては、辨兼候間、來月中旬迄は、相譯り申間敷、尤貴樣御呼出、御渡申事に候共、彼地より參候者、

心得にも可相成、內々御通達候旨御座候、右相濟、勝手次第引取可申筈に付、直樣退散、少仙同道此節正蔵となり改名爲致候に杉本多紀兩御氏へ、首尾能相濟、難有仕合と申趣意を以て、御禮廻り、御著書一部づつ、相二より差上度旨を以て差出置申候、當日御詰合の醫中、大勢被致一覽、皆々感心、先年星野良悅獻備の品とは大に勝り候樣、口々評判致され、誠に御本望御同慶の御事に御座候、〇中略

一一昨十一日、左の寫の通封狀到來、〇中略

御達中義有之候に付、明十二日五ッ時過、醫學館へ御出席可被成候、以上、

三月十一日　多紀安長

杉本忠温

大槻玄澤樣

依之昨朝內々正蔵召連、御同處へ罷出候處、杉本多紀兩御氏御列座被申渡候者、

其許門人、各務相二製作の木骨、醫學館へ獻納仕候につき、爲御手當、此金二十兩被下置候、此段可相達旨被申候、〇下略

〔令義解一職員〕典藥寮

醫師十人、掌療諸疾病及診候、

〔令義解一職員〕內藥司

侍醫四人、掌供奉診候、醫藥、謂、診者、候脈也、候者、候顏色也、此診候者、與醫師診候、其意少異也、

〔可觀一〕診候法

凡病狀を察んには、脈を候ふを主とすれば、誰も最精くせではならぬわざなるを、漢にて難經、脈經等に虛說を記たるを初として、名だゝる人々多けれど、各少の異こそあれ、大方は同義にて、寸、關、尺、三部、九候など云名を立て、天地人、五臟、六腑、陰陽、五行抔配當て、理深げには云めれど、誰もえ

詳にせざめり、此にても其訛を傳て、殊に脈學を主とする者は、深く泥て實事には愈疎くて、大方の醫は、護に病人の手を按て、知がほになしつゝ、過めれど、實には知難き物と思定て、是を明めんとする人を、却て愚なるが如にさへ云めるは、いともく〵歎はしきわざかな、抑精神を助て、渾身の活動をなす物は、氣と血と也、氣血同物にて、氣は血中に起り、血は氣裏に成て、各後れ先だゝず、起居ること、雲と雨との如く、軀を循環ときは、血其體にて、血の脈に流るゝこと、猶川の水有が如し、○中略若いさゝかも病有時は、其源異なりといへども、皆血に關らざるはなく、既に血に關れば、血卽病體となる也、其病體を候んとするには、其血の動靜と、其血の色とを見に如はなし、其血の動靜を候は脈也、其血色を相は舌唇也、血は形にして、脈舌は影也、形影相離ざる物なれば、其影を見て其體を知、是より還はなし、○中略さて舌唇は、喜怒の顏に形はるゝが如、腹臟の表なれば、腹内を穿見たらんよりは著かりなん、譬ば舌唇は肉の如、邪氣は火の如、其赤肉を一炙れば白く、二炙れば黄に、三炙れば黑くなるが如し、又痾疾は脊に著て蟠れるものなれば、其脊の方より腹へかけて、形のあらはるれば、病所在を知んには、其本なる脊を候に如はなし、我脊を相るわざを發明えて物するに、其益少からず、然か眼前其活人の相を徵として、活る病を治るわざにしあれば、さてこそ取もあへず神ながら自然なる術にて、皇國外國古今の學にも論にも及ばず、かばかり實事に捷逕はなけれ、熟く此義を得れば、我住庵の邊に生たる草木を採ても、萬病は治得べし、

〔壒嚢抄七〕七種ノ死脈トハ何ゾ　彈石脈　解索脈　雀啄脈　屋漏脈　蝦遊脈　魚翔脈　釜沸脈

是ヲ七種ノ惡脈ト云也、此等ノ死脈ヲバ、必ズ少シモ可心得事トナシ申メリ、爲我若シハ看病ノタメ可存知事ト云々、

〔黃帝內經靈樞九〕論疾診尺篇第七十四○中略

目赤色者、病在心、白在肺、青在肝、黃在脾、黑在腎、黃色不可名者、病在胸中、診目痛、赤脈從上下者太陽病、從下上者陽明病、從外走內者少陽病、診寒熱、赤脈上下至瞳子、見一脈一歲死、見一脈半一歲半死、見二脈二歲死、見二脈半二歲半死、見三脈三歲死、○下略

〔史記〕一百五扁鵲倉公列傳 扁鵲者、勃海郡鄭人也、姓秦氏、名越人、少時爲人舍長、舍客長桑君過、扁鵲獨奇之、常謹遇之、長桑君亦知扁鵲非常人也、出入十餘年、乃呼扁鵲私坐、間與語曰、我有禁方、年老欲傳與公、公毋泄、扁鵲曰敬諾、乃出其懷中藥予扁鵲、飮是以上池之水、三十日當知物矣、乃悉取其禁方書盡與扁鵲、忽然不見、殆非人也、扁鵲以其言飮藥三十日、視見垣一方人、以此視病、盡見五藏癥結、特以診脈爲名耳、爲醫或在齊、或在趙、在趙者名扁鵲、

〔傷寒論〕辨脈法第一

問曰、脈有陰陽、者何謂也、答曰、凡脈大浮數動滑、此名陽也、脈沈濇弱弦微、此名陰也、凡陰病見陽脈者生、陽病見陰脈者死、 問曰、脈有陽結陰結者、何以別之、答曰、其脈浮而數、能食、不大便者、此爲實、名曰陽結也、期十七日當劇、其脈沈而遲、不能食、身體重、大便反硬、名曰陰結也、期十四日當劇、

〔海人藻芥〕周明○周明國師 醫寺云、人ハ平生醫師ニ近付テ、脈ヲ取ラスベシ、平脈取覺ツレバ、違例ノ時脈又分明也、又病氣大事ナリトモ、日比令療治醫師ヲ左右ナク改之事然ベカラズ、但無雙ノ名醫師來ラバ可談合云々、○中略

應永廿七年庚子五月廿三日　　宣守在判

〔平陶稿三〕意足軒說

聽聲而知、視色而知、診脈而後知焉、是所以醫之有上中下三品也、今也診而知者鮮矣、況求之聲色之間哉、難矣醫乎、藤貞繼平居師扁倉之術者也、徵余名軒、余卒書意足二字贈焉、

〔醫斷〕脈候

人心之不同如其面也、脈亦然、古人以體肥瘦性緩急等爲之規則、然此說其大抵耳、豈得人人而同乎、醫謂人身之有脈、猶地之有經水也、知平生之脈、病脈稍可知也、而知其平生之脈者十之一二耳、是以、先生之敎、先證而不先脈、先腹而不先證也、扁鵲曰、越人之爲方也、不待切脈望色聽聲寫形、言病之所在、可以見已、且如留飮家脈、千狀萬形、或無或有、不可得而詳矣、夫脈之不足以證也、如此、然謂五動或五十動、候五藏之氣者、妄甚矣、如其浮沈遲數滑濇、僅可辨知耳、三指擧按之間、焉能辨所謂二十七脈者哉、世有隱其病使醫診其脈、以試之者、乃恥其不知之似拙、以意推度、言其髣髴、欲以中之、自欺之甚矣、醫其思諸、

〔一本堂行餘醫言一〕診候○中略　切脈○中略

凡論脈者、甚詳則失之鑿、甚略則失之疎、自古醫人之爲病論醫技也、其言脈太過細微、反可大疑、故吾門常謂、脈得大較爲佳、與其失于詳、寧失于略、古今二千年來、醫人之多、醫書之夥、不言脈者獨明戴思恭而已矣、其證治要訣一書、全篇無脈字、初大怪之、未得意旨、後沈思熟想之、乃知彼非不知脈者、但其方寸有疑于脈、以專事直據證狀爲治而足焉、不可以有疑者筆之于書也、宜乎戴也、雖然亦可謂失于疎矣、今陳脈大略以示梗槩、其餘可思而得之也、

〔叢桂亭醫事小言一〕脈論○中略

近來ノ流行ニテ、脈ナドノ事ニ骨ヲ折レバ、見識ノナキヤフニ成タルハ、古方家以來ノ弊ナルベシ、初學ノ輩ハ、精神ヲコラシテ、工夫ヲナスベシ、サレドモ脈バカリミテ、他候ニカマワヌ醫者アリ、夫レデモ知レルナラバ勿論ナレドモ、恐クハ知レカネルナラン、

〔形影夜話上〕此邦にて、艮山後藤氏、一見解を立て、內經を看破し、右の如き迂怪の說共を駁せんとする爲にや、一向に經絡は無用の物と覺悟せられしは、千古の卓識と稱すべし、其門人香川氏、これに繼ぎ起り、師業を唱へ、自己の見を加へ、一家を爲せり、又其に續ぎ、山脇君出給ひ、是等の事に

心付れしにや、自ら観臓して、従来の舊説を改め、古書によりて、九臓の目を唱へ、古今の大誤を正し給へるとて、蔵志を著し給へども、是又確實の所に至らず、聊か實に就て其本を明にすべしといふの端を發せられしといふまでなり、又吉益氏杯は、近時の豪傑なれども、基とすべき醫書なき故、纔に傷寒論一書に精力を盡されしか共、是も錯簡の書にて、的實の所少く、取る所多からずとて、己が心に徹せし方論ばかりを取り、語る所、脈などは用なきものなり、偏に腹候にありと、門人に教へられしよし、是已事を得ざるより出たるなるべし、愚老が家、世々醫を以て我君に仕ふる身なれば、逃れても逃れ得ざる業なり、殊に不好道にもあらず、故に幼きより和漢の醫書の端を窺ひ見しに、生得不才にして、何書を讀ても、是非を分たず、他人は能も解し得る事と、只我不才を恥、歳月を經しまでなり、春秋甫二十二歳の時、同僚小杉玄適といへる男、京師の遊學より歸り來り、彼の地にて、初て古方家といふ事を唱ふるの徒出づ、其中に、山脇東洋先生杯、專ら此事を主張し、自ら刑屍を解て、觀臓し、千古説所の臓象大に異なる事を知られたりと聞く、其頃、松原吉益杯いへる輩、相共に復古の業を興すのよし、其議論説を聞得て、彌々羨しきことなり、疾醫家にては、已に豪傑興りて、旌旗を關西に建たり、我其尾に附んは、口惜しく、幸に、瘍醫の家に生れし身なれば、是業を以て、一家を起すべしと、勃然と志は立たれど、何を目當、何を力に事を謀るべき事を辨へず、徒に思慮を勞するまでなりし、○中略 かくありて後、初て眞の醫理は、遠西阿蘭にあることを知りたり、夫醫術の本源は、人身平素の形體、内外の機會を精細に知り究るを以て、此道の大要となすと、かの國に立ればなり、凡そ病を療するに、此に精しからざれば、決て的中の治療はならざるの理なり、こゝに一二を擧て證す、少しく暴言に似たれ共、世上の醫者の、病家へ招れ、初に脈を診し、浮沈遲數の指下に應ずるは知れども、其動靜をなすものは、皮下に在て、何物なることを知らず、血共氣とも辨へず、只脈といふものなりと覺へたるものと見ゆるなり、餘りに淺猿し

き事ならずや、○中略總て、脈と稱するものは、血の通ふ管なり、其始を爲すは、心の臟にて、其心に連なる大管より、血を注き出して、諸部へ周流すること間斷なし、特り血の和不和を察するは、脈を切にして、其運動を候ふより著實なるはなし、東洞翁、胗脈をなすは、用なきものと教られしは、恐は疎漏の至りといふべき歟、○下略

〔和氣氏系圖〕瑞策(中略)平信長公、豐臣秀吉公、寵遇異他、又或時、有人診脈、雖無常病、有必死之脈云、人皆怪之、明日果死、号備、時人其妙工之妙矣、

〔薩戒記〕應永三十二年七月廿七日甲子、入道內相府三箇度令參內給、御惱之間可座相國寺、○中略或人云、吐氣令出來御、又御唼氣御座各御惡相之由醫師申云々、今日御脈六動云々、當時參入之醫師非本道輩、號壽阿彌自入道內相府被召進也、自去々年御惱之時、奉療治之者也、

〔滿濟准后日記〕永享二年四月八日、將軍(足利義教)御虛氣御脈在之歟由、醫師三位申入也、仍虛氣符事、花頂僧正相傳之由被聞食及也、可書進由、以三位被仰間、卽申遣了、彼僧正申樣、此符事、聊傍傳子細在之、雖然未書此符也、初可書進上條、尤其憚多端之由、再三辭申入也、不及披露、只可書進由加問答了、

〔碧山日錄〕長祿三年六月二十七日戊寅、使龍子詣號醫師板坂者求其救、又問松井大進子診脈曰、病候輕、於晴日莫爲意云、乃領前胡湯十五服、

〔蓮如上人御一生記〕六同(明應八年三月)七日ノ曉キ、御自脈ヲウカヾヒ玉ヒテノ玉ヒケルハ、アラ嬉シヤ違フ所アリ、往生ハチカヅキヌ、○中略醫師藤左衞門御脈ヲ伺ヒ奉ルニ、誠ニ胃ノ氣ノ御脈違フ所アリト申上シカバ、上人サゾト覺ヘタリト仰ラレキ、○下略

〔槐記續編〕享保十六年五月十日參候、滋井入道殿參ラレ、御前ニテ、拙ヘ仰ラレケルハ、醫書ニ、鉤脈ト云事アル由、脈狀病形イカヤウナルモノニヤト、拙答テ申シ上グ、弦鉤毛石ハ、四時ノ定脈ニシテ病脈ニ非ズ、鉤ハ夏ノ平脈ニシテ前曲リ、後直ク、帶鉤ヲトル如クトコソ申セト申シ上シニ、ソ

ノ帶鉤ノ形ガ、石帶ニイル事故也ト仰ラレシホドニ、內經已來、難經ノ鉤脈ノ處ノ諸註ヲソヘテ、書ヲ差上グ、

〔醫斷〕腹候

腹者有生之本、故百病根於此焉、是以診病必候其腹、外證次之、蓋有主腹狀焉者、有主外證焉者、因其所主、各殊治法、〔傷寒論〕曰、病應見於大表、仲景曰、隨證而治之、宜取古法而求其要矣、

〔一話一言〕腹診書

腹診書二卷、堀井元仙源直茂著、寬保二年壬戌の序あり、書開、延寶天和年間、京師ニ一隱醫アリ、是ニ習熟シテ、始テ腹診ノ號ヲナセリ、是其濫觴也ト、然モ其源ヲ推トキハ、醫家流ヨリ出テ、彼隱醫ニ至テ、其譽ヲ得タルヲ云々ト、予細川侯[illegible]、此書ヲ見タリ、

〔五雲子腹心法〕診腹之法、唐山久無其說、五雲子之於此術、豈宿有獨得、抑歸化之後、觀我醫之伎、就有發明乎、舊編、余獲之于養春後人雲悅、又獲之于兒醫人見元德、二本稍有異同、仍互參讎訂、以附于奇伎之後、庶足相輔而行、乙巳歲修禊日、三松齋記、

○按ズルニ、本書ノ首ニ、此書森養春院雲仙傳トアリ、雲仙ハ五雲子ノ名ナル歟、

〔皇國名醫傳後編下〕瀨丘長圭　多賀谷安貞

瀨丘珽、字長圭、江戶人、吉益爲則稱爲東方一人、珽察疾專用功腹診、常曰、腹候與外證相爲表裏、然外證多而易惑、腹候一而不爽、故腹候爲先、又曰、醫有三極、曰方極、證極、診極、診極謂腹診也、因名所著曰診極圖說、其法及治驗詳于書、珽術未及大行、中年卒、

多賀谷安貞、字頤庵、號鶴山、上野人、父安命善醫、安貞傳其術、尤精腹診、然不喜業醫、逢親朋有疾與貧困不能請醫、則爲療之、他有求治者皆辭、仕幕府爲銃隊與力、安貞晚得疾、自知不起、乃著腹診秘訣一卷、以遺後人、腹候之法、其起久矣、天正慶長間、竹田定加始唱之、松岡意齋、北山道長、著診腹法、堀井直茂、[illegible]

元仙、著腹診書、淺井惟寅、著診訣秘傳、又有內證診法、子正路所著、高村良務著腹診秘傳、等皆善道之、然概局臟腑配當左右分位、未免牽湊附會、如香川修德、吉益爲則、直卽硬輭弛張、及跳動拘急塊磊等狀、辨之虛實死生、法極簡捷、至斑益闡發其微旨、殆無餘蘊、後稻葉克、字文禮、著腹證奇覽、和久田寅、字意仲、著腹證奇覽翼、各有所論述、皆爲規云、蓋腹診於察病最爲切要、然西土不聞有是法、其臚脹腹滿及童稚傷食、乃按其腹求之、亦不過形色堅輭而已、他如癥瘕痞塊、僅病者自言其狀、從爲之治、其術已疎矣、我邦醫術卓越于西人、此亦一徵矣、

〔日本醫道沿革考〕亮村○今按ズルニ、○中略爲則○吉益ト時ヲ同シテ、江戶人瀨丘長圭ト云ル者アリ、頗ル腹診ノ學ニ精シ、○中略夫レ腹診ノ法タルヤ、仲景之ヲ言フコト切實ナリ、然レドモ晉隋唐宋以來、歷代ノ方書、之ヲ明言スル者ナシ、其ノ此ヲ四診外視スルヲ以テノ故カ、豈ニ闕典ニ非ズヤ、

〔一本堂行餘醫言一〕診候○中略　按腹
吾門以按腹爲六診○望形、問證、聞聲、切脈、按腹、視背、之要務、何則大槩按診腹部可以辨人之强弱也、

診料

〔皇國名醫傳後編上〕井上交泰院　曾孫俊貞
井上玄徹、號靈史、周防山口人、本姓田谷、出爲廣島井上氏嗣、從曲直瀨正紹受其術、○中略後水尾上皇、後西院上皇屢召候脈、玄徹勤業不避寒暑、又善敎育子弟、門人以千數、聲稱籍甚、列侯宗室無不延請、自古一診之報有以銀三千枚者、玄徹及井關常甫二人耳、常甫通稱玄悅、近江人、嚴廟時以名醫辟、叙法眼、

治方

〔尺素往來〕凡療病養生之術非一者歟、身上按摩、口中飮食、幷藥湯、針、灸、雖其品多、雜熱、小瘡對治之樣不如於蛭飼、中風、脚氣、療養之法莫勝於溫泉矣、

〔醫斷〕攻補
醫之於術也、攻而已、無有補矣、藥者一乎攻焉者也、攻擊疾病已、內經曰、攻病以毒藥、此古之法也、故曰

攻而已、精氣者、人之所以生也、可養以持焉、養持之者、穀肉果菜耳、內經曰、養精以穀肉果菜、不曰之補、而曰養、古之言也、蓋藥餌穀肉果菜乎、猶且難補之、而況藥乎、豈人力之所逮也哉、故曰無有補矣、後世並論攻補、較藥二之、專爲補氣之說、曰、病輕則攻之、重則補元氣、若强攻之、元氣渴死、夫藥者一乎攻焉、豈得能補之哉、元氣果可補、則人焉死、妄誕特甚矣、

(漫遊雜記 上)治療之道二端、曰持重、曰達機、所謂持重者、病深則治一、非迂遠而過日也、所謂達機者、證移則處方、非迷惑而轉方也、持重者常也、達機者變也、勿能達機而失於持重焉、勿務持重而怠於達機焉、

(杏林雜話)艮山(後藤)治疾、多用温泉熊膽艾灸、故人呼曰湯熊灸庵、門人香川修庵、亦喜艾灸、山脇東洋、專使石膏、一時嘲曰香艾山膏、此與西土嚴附子、陳石膏、張熟地之稱、殆相肖、

(杏林雜話)古林見宜療紀州熊野農夫水腫、服藥良久無效、乃加青芋於方中、又教爲朝夕食而食、蓋其人生於山中、常以其物爲常饌、及旅食浪華、嘗試諸藥、禁忌極嚴、故脾胃失度、藥力不能達、所以用方宜之旨也、

(漫遊雜記 上)艮山子嘗曰、百年以來游惰之人、腹裡結癖痼、余徵之都邑市朝之人、比々皆然、蓋太平日久、民庶蕃息、食飲虛耗、奢佚日甚、則知巧之民不免病氣鬱也、醫人施治之日、從這處下工夫、則大有裨益矣、

(金窗醫談 一)祇門日有稱原芸菴者、學非博、業非精、唯其爲人、瓌偉倜儻、大得聲譽、一富家之室女、患鬱證、使芸診之、芸曰、是氣滯也、治方宜用戲場散而可矣、不須與余藥也、父母問戲場散之義、芸曰、末也、丑也、且也、淨也、能治室女之氣滯、父母大笑、女亦微笑、芸指女曰、戲場散之効、一話而見室女莞爾也、況於用之乎、豈不治哉、父母從願焉、自是從伽芸賞、病解、月愈、

(醫事或問 上)一或問曰、先生は用る藥の數もなきに、半年も一年も、藥方をかへざる事いかん、

吐方
汗方
下方

答曰、是病を治する事の、手に入たる人にあらざれば、爲事かたし、病に名をつけて、病因を論ずるは、もと臆見ゆゑに、十日も、其藥方の効なき時は、心に疑ひおこりて、方をかゆるなり、扁鵲のごとき疾醫は、病毒を見定、此毒は、此藥にて治するといふ事に決定するゆゑ、たとひ藥の効なきとても、病の治する迄は、藥方をかへざるなり、其内に、自然と病毒の動時あり、動ときは、大に瞑眩して、病治するものなり、病治したるあとにて見れば、其藥方かはりては、治せぬ事知るゝなり、又其病に中るあたらざるをしらず、唯方をかへぬ事を自慢して、人を惑すものあり、是は無法者のする事なり、必惑べからず、是を糺さんと思はゞ、其病人の治しやうを問べし、

〔醫斷〕治法

治有四、汗、吐、下、和是也、其爲法也、隨毒所在、各異處方、用之瞑眩、其毒從去、是仲景之爲也、如其論中所載、初服微煩、復服汗出、如冒狀、及如醉狀、得吐、如蟲行皮中、或血如豚肝、尿如皂汁、吐濃瀉出之類、是皆得其肯綮然焉者也、尙書曰、若藥弗瞑眩、厥疾弗瘳、可觀仲景之術、三代遺法也、今履其轍、而嘗試之、果無有不然焉者也、於是乎吾知其不欺我矣、然世人畏瞑眩、如斧鉞、保疾病、如子孫、吁其何疾之除哉、甚矣其惑之也、

〔辨醫斷上〕治法

汗、吐、下、和、四法者、乃治疾之鈐鍵也、故量夫賊邪輕重上下表裏、所用得當、効誠若桴鼓應矣、然是皆治實邪之法、而非所以補益其眞元也、余在長崎治一人、積年腹痛、用倒倉法、良己一老者、亦有此患、私傳其法、自行之、隔宿亡、故忽亡矣、故經不云乎、不治其虛、安問其餘、蓋嘗竊觀仲景之治、其於正氣致慮者往々不少、顧粗鹵者弗察耳、哀哉、

〔弘簡錄二百四十六〕劉元素（張從正載記金中略）

張從正、字子和、睢州考城人、精於醫業、貫穿難素之學、起疾救死、多所取効、世傳黃帝岐伯所爲書、有

汗下吐三法、各有經絡脈理、亦有不當汗不當下不當吐者、汗與下吐之則死、惟從正用之最精、號張子和汗下吐法、妄庸淺術、習其方劑、不知察脈原病、往々殺人、此庸醫所以失其傳之過也、其所著見行于世、有六門二法之目、

(醫心方〔一〕)治病大體第一〇中略

又〇針灸經云大法、春宜吐、　凡諸病在胃中者宜吐之、凡服湯吐中病便止、不必盡劑、須吐者、瘧及傷寒、胃中滿及積濕乾嘔、又胃隔濕熱轉嗽、及肺癰吐膿等、並宜吐之、　凡宿食在胃管、當吐下之、　又云、諸四逆者不可吐之、凡諸虛羸者不可吐之、凡新產者不可吐之、凡脚氣上衝心者不宜吐之、凡病者惡寒而不欲近衣不可吐之、　又云、大法、秋宜下、凡服湯下中病便止、不可盡劑、　凡病發作汗多、急下之、凡病五日六日、腹滿不大便、急下之、　凡大下後六七日、不大便、煩不解、腹痛而滿、此有燥屎、所以然者、本有宿食、宜承氣湯下之、方在下　凡病者、小便不利、大便乍難乍易、時有微熱、噫胃不能臥、此有燥屎、故也、宜下之、　凡可下者、湯膠丸、臨下傷痛發熱、此寒也、當以溫藥下、其寒脈須下、　凡諸病、大便澀、諸傷寒腹滿、癥腹滿、鼓脹、水脹、大便不通須利、小便者、黄病水病淋病發汗後、不解腹滿、或痛宜下之、

(花園院御記)正中二年三月三日癸丑、今日、親王、〇中略有腹痛、　五月十六日乙丑、今日有醫師評定、長直、全成、寛忠、仲成等、各申議、前右府、覺圓僧正候御前、此醫正緣有識之故也、可進寫藥之由一同、又御灸事同申之、然而先下痢後可有灸之由治定了、

(叢桂亭醫事小言〔一〕)醫學〇中略

山脇東洋〇ノ門人ニ、永富鳳介ト云人出テ、赤馬關獨嘯庵ト號ス、京師ノ俚言ニ、人心ノ儘ニ任セズ、モトレル人ヲ廣ク指テ、臍性ト呼ブ、蓋其唱ノ同ジキヲ以テ、如此ハ號セリヤ、此人越前ニテ、奥村良筑ト云人ニ從テ、吐法ヲ受テ上京シ、東洋先生ニ語レバ、先生大ニ嘉シ、嫡子東門先生ヲ、遣ニ越前ヘ下シ、吐方ヲ學バシム、良筑教テ曰、吾子コノ可吐證候具セリト云ヨリ、徒ニ上京シテ、東洋先

生ニ其候ヲ告ゲ、又越前ニ下向シテ、吐藥ヲ試タリ、本邦ニテ、上古ハ知ラズ、吐流ハ、此良筑翁ヨリ創タリ、一代ノ內ニ一人モ藥ヲ乞モノ無ク、絕タルコト兩度アリト、サレドモ泰然トシテ、吐ヲ以テ名醫ト呼レル事、其人物ヲ思フベシ、

〔先哲醫話〕下田中適所
本朝八十九年前、越前有奧村良筑者、始闡吐方、而其門人永富鳳介著吐方考、荻野元凱、著吐方編、田中信藏著醫事談、皆紹述師說、所裨補不爲鮮矣、

〔漫遊雜記〕下余〇永富鳳介生於長門之西鄙、〇中略年甫十一、東遊於京師、〇中略年十七、奉家君之命、西歸於赤關、性狂狷不爲鄕曲容、去再遊於萩府、復學于周南先生、益有厭醫心、及歸開講肆講六經、有同僚安達某者、歸自京師、見余謂曰、子醫生而講儒業、無乃害於名分乎、余曰、余修醫方之書五年、徧參攻時師、知其無益於人之性命、故將厭棄之、某者笑曰、子徒知無益於人之醫、未知有益於人之醫也、余曰、有益於人之醫爲誰、曰有香川秀庵、山脇東洋者、皆在于輦轂之下、開門待四方之士久矣、子盍一見諸、余於是再東入於京師、有同僚栗山文仲者、先在于東洋先生之門下、引余見先生、先生容貌雄偉、神彩射人、睨余謂曰、漢唐以下數千年、中華無事論之日、剿據試擧、可以逞豪傑之爪牙、誰拘拘乎爲方技之徒、宜哉其無離倫之才、幸有長沙氏之書、雖其人不可知、周漢之遺術備存焉、和華古今之醫、莫有知其條理而施之術者、生民死于養榮益氣之說、非一日也、吾子豈冠漢高溲溺之餘、快於心乎、寧佐吾志闢二千年來之沈滯乎、唯子之所擇也、夫子貢貨殖、子路負米、何必講書授句而後爲士乎、學道志也、行醫業也、何相妨之有、其言未畢、余舌擧不下、汗流浹背、生涯之趣向始定焉、乃留學其塾中一年、與聞其道、傍視先生之決死生、摧沈痾、大異乎昔之所學、以爲古醫道之妙至矣盡矣、天下無不可治之病、其明年西歸於赤關、又遊於浪華、鄕曲之人來乞治者日數十人、待之以所聞於先生汗下之方、巴豆甘遂、輕粉烏頭、無所不至、或忽治忽發、或初快後危、或長服無益於病、或經久發其害、於是乎始知爲醫有開闔離合之

機與難易食亦有不可治之病矣然此時血氣之欲未定好貨好色學醫之志不純況然過日三年年二十一聞前越有奧邨翁者能吐方與山仲陶同往而見受其法翁方面大耳鬚髮如銀其爲人厚重不可移余留學六十日與翁討論數次臨將歸謂余曰吾子學東洋氏非一日其論非不高其旨非不遠而高論遠旨自非篤實則違施之多遺吾子自此以往歷事多年志業始習熟而已去歸於京師授所受奧村翁者於東洋先生再西歸於赤關而後汗吐下之三法始備焉余乃以三法試諸難治之病三年而後始知爲醫之難矣氣中遇時不利齎急具至一切絕飲博亡賴之交雖變浮沈固里爲醫之志始一矣嘗後又二三年能知不可治之病與可治之病所謂其不可治者非時醫之所謂不可治者也所謂其可治者非時醫之所謂可治者也而又深通所謂古醫道者非用汗吐下之古方之謂而在所以不得不用汗吐下之古方之謂矣年二十九因病離家漫遊調養西經肥筑東過藝備來復客于浪華其間診沈固滯廢之病無慮數千人嗚乎診病年多爲技年熟益知究理易應事難矣

〔吐方考〕汗吐下並行古之道也今能汗下不能吐其於能也不亦難乎今知可吐之病不知可汗下之病其於知也不亦危乎日本古方者之學與汗下之術數于四方十數年至于吐方難行不行夫汗吐下異途同歸學者冥會其機吐豈特難乎余幼見學洛東洋氏與越奧村氏有所學試之十年粗知其利病故聊述鄙見告同好之士云爾

張子和汗吐下齊行是說意欲奪病之嶮也夫病初發則輕重易治經久則重輕難治苟不知其條理而施之則雖曰汗吐下齊行雜糅此何學者取其果決之行而與眩其切迫之見矣

盛夏最多之害人不爲少羸弱之人雖無病宜謹其修養況吐下之方避其時可也雖然不得已則用之

用吐方之時既吐則須飲自渴飲則須吐吐之宜挨吐挨吐促其間也連日連夜虛竭元氣

紅夷俗能汗吐下其書曰病者在牀褥不宜吐是自初學之綱領

吐後三五日當調飲食省思慮不可罵不可酒不可內不可勞動

斷食

古曰、病在膈上者吐之、是用吐方之大表也、而其變不可勝數、沈研不久、經事不多、則難得而窮詰、○中略下工之醫、積思焦心三年、可爲中工、中工之資既成、構思不休、積久忘物、猶佝僂丈人於蜩、遽然逢其源、則汗吐下皆中肯綮、是上工也、上而難遇焉、余受汗吐下之方、試之於顛癇、勞瘵、喘息、鼓脹、膈噎之類數年、功不蓋科、技不允於人、雖然沈研感剋、忘思於榮辱、積年之久、經事之多、知死者不治者徐明、知死者不治者徐明、而治者不死者在于目中、始信古人之技、不在既病在未病矣、

〔漫遊雜記 上〕和蘭之醫、善汗吐下、寶曆壬午春、余西游到長崎、就譯師吉雄氏得聞彼醫法、其治術嶮劇纖巧、難遽用於邦人、然而至汗吐下之機用、則一々與吾古醫道符矣、夫中華聖人之邦、失其道一千年、特於蠻貊得之者、不亦異乎、且其國不禁解人屍、其民亦不屑屠腸絕筋之慘、是以人病死、其病源不明、則剜剔視之、以爲後圖者、數千年于今、其書彎然存焉、有志之士、考證玩索、可以奬助志業矣、

〔皇國醫事沿革小史 後編第六期〕杉田成卿(諱ハ信、梓里ト號ス)ハ、立卿ノ子ナリ、警敏ニシテ夙ニ家學ヲ傳ヘ、更ニ坪井信道ニ從フテ益々其學ヲ修ム、依テ和蘭ノ文法ニ精通シ、橫行ノ文章ニ巧ナリ、天保十二年(紀元二千五百一年)蠻譯局ノ譯員ニ擧ラレ、蘭米ノ圖書飜譯ノ命ヲ奉ジ、又海上砲術全書ヲ譯ス、後更ニ蕃書調所ノ敎授職トナリ、安政六年(紀元二千五百十九年)四十二歲ニシテ沒ス、成卿治聞博識、其學獨リ和蘭ニ止マラズ、嘗テ獨逸原書ニ就テ、濟生三方ヲ譯出シ、刺絡、阿片、吐劑ノ三方ヲ說ク、其書大ニ行ハレ、天下ノ醫家一本ヲ藏セザルモノナシト云、其他濟生備考、治痘眞訣、內醫手術、解剖刀式、砲術訓蒙等編著十餘種アリ、

〔皇國名醫傳 後編中〕惠美三白(子貞璞)

惠美三白、(號寧固)廣島人、仕本府、三白恒謂、百病生于停食、故其施治喜用吐方、得其妙、○中略嘗閱佛書、見其言、四百四種病以宿食爲根本、(淨心誡觀)又言、治病用斷食法、或三日或四五日、(南海寄歸傳)大悅、引以爲證、益唱其說曰、人謂色欲害身、不知飲食之欲害人、更有甚於色者、故其自奉淡泊、居常唯食麥飯裙帶菜、病

灌水

者問飯食何宜、亦擧二品而答、

〔盧塚談上〕斷食して服藥の事、釋迦如來の病を療る方也、七ケ日斷食にて藥を飲み、七ケ日後は、生死によらず藥を用ひずと、佛經に說給ふとかや、今世も律僧の正しき人は、長病なれば、七ケ日服藥し、八日目一日休藥して又服藥す、七日々々に一日づゝ休み藥用するよしを聞り、此斷食して服藥の方、藥治より萬病に最上の藥也、痢病、食傷、蟲症、霍亂、腹痛、積聚、嘔吐の類の病には、別して驗し多し、既に大七氣湯などは、絕食にして用ゆべしと古人も云り、予まゝ〳〵效驗を得たる事なり、疑ふべからず、然るを俗人は喰さへすれば、全快なるものと心得て、不食の病人に强てすゝむ、わけて婦人は無理無體に飯せしむ、これを介抱と思ふ、甚しきひが事ぞかし、又世俗は水を望む病人に、水をあたへざるが多し、これも食をすゝむるにひとし、食をすゝめ却てこれが爲に命を失ふもの少なからじ、卑賤の者には水ばかり飲みて、醫藥におよばず全快するもの多くあり、醫法の祖たる張仲景曰く、水を望む病にはあたふべしと、又却溫經に曰く、水をのぞむ病に水を飲すべしと說玉ふ、また新汲水は天然の白虎湯なり、藥にあつべしと本草に見へたり、是等の語を見て恐むべからざる事をさとし、少しもいとはず飲すべし、釋尊仲景の敎ある事を知らず、歎しき事也、是にかぎらず俗人の私智のならはしには實要をうしなひ、忌べき事を選て養生になると思ふの間違のみありて、害となる事多し、歎くに餘れり、

〔牛渚漫錄四〕減飲絕粒

荻野台州著減飲論、和田東郭治斷食、極節飲食、太田無擊曰、凡療膈噎反胃、量其人强弱虛實、當以絕粒爲先、各有所見、○中略扶桑間多狂病、有能伯奪其食之言、然則聖人亦有此法乎、

〔皇國名醫傳後編上〕古林見宜

古林正溫、通稱見宜、號三桂庵、又壽仙屋、播磨飾磨人、赤松氏別之裔、○中略正溫與福岡太俠知木、有舊、俟延而爲客、

筑士有患冷疾三年、夏天重裘、擁爐而坐、火氣熏面、狀如癡癇、正温視之曰、是伏熱也、治法用灌水、經所謂行水漬之和其中外者、昔徐嗣伯用之治房伯玉疾、冬天猶可、況夏時乎、速命設水、親戚私議曰、太冷之人入水、氣即絕矣、病者聽之、顫慄不肯進、正温叱曰、汝何怯、是小盤水、乃爾畏縮、他日臨陣豈能了事、可惜爾君以五百石粟養汝無用之徒、病者大怒、決起赴槽、灌頂可半時、問何如、病者曰温和、快不可言、吾不欲離水、正温曰可矣、乃出於槽、調以藥劑、二旬而愈、又博多鄭民病熱悶亂、正温亦灑水、自昏達旦而解、

〔黄帝内經素問七〕五常政大論第七十二篇○中略岐伯曰、西北之氣散而寒之、東南之氣收而温之、所謂同病異治也、故曰、氣寒氣涼、治以寒涼、行水漬之、氣温氣熱、治以温熱、强其内守、必同其氣、可使平也、假者反之、

〔史記一百五扁鵲倉公列傳〕太倉公者、齊太倉長臨菑人也、○中略菑川王病、召臣意診脈曰、蹷上爲重、頭痛身熱、使人煩懣、臣意卽以寒水拊其頭、刺足陽明脈左右各三所、病旋已、病得之沐髮未乾而臥、診如前、所以蹷頭熱至肩、

〔三國志魏二十九方技〕華佗字元化、○中略精方藥、其療疾、合湯不過數種、（中略）佗別傳曰、（中略）又有婦人、長病經年、世謂寒熱注病者、冬十一月中、佗令坐石槽中、平旦用寒水汲灌、云當滿百、始七八灌、會戰欲死、灌者懼欲止、佗令滿數、將至八十灌、熱氣乃蒸出、囂囂高二三尺、滿百灌、佗乃使然火温牀厚覆、良久汗洽出、著粉汗燥便愈、

〔榮花物語三十六根合〕うち○後冷泉の御心にきみのこと、なをおこたらせ給はねば、いかにとむづかしうおぼしめす、御いたちのありさまなど、おなじことなり、日ごろのすぐるまゝに、なをみづなどいさせ給てやよからんと申せば、そのさほうの御しつらひして、いたてまつる、いとさむきころ、たえがたげにみえさせ給、

〔續古事談五諸道〕後朱雀院カサヲヤミ給ケルニ、與藥頭相成、ヨロシク成給ヘリ、水トヤムベキヨシ申ケルヲ、雅忠、イマダワカヽリケルガ、ミタテマツリテ、コノ御病、イツ水トヤムベシトモミエズ

ト申ケリ、其後醍醐ノ瀧殿ノ阿闍梨重源ト云モノハ、重秀ガ孫ナリ、ソレヲ召テミセ給ケレバ、雅忠ガ申ヤウニ申タマカリイプトテ、故貫仲師ノ五位藏人ナリケルニアヒテ、コノ御瘡、イツ愈給ベシト云事ミエズ、雅忠心エタル醫師也、明日御瘡ヤミ給バ、大事ナルベシト申ケリ、マコトニ御瘡ヤミタウセ給ヒニケリ、カサヤム人、瘡ヤムハヲハリノ事也トナム、

○按ズルニ重瘡ニ水ヲ灌ギテ之ヲ治スル事ハ、外科治療法ニモアリ、

〔古事談 第三 行〕源大納言師忠卿室家者、修理大夫俊綱之女也、久臥病席、熱氣如湯、觀王授戒以香水灑之、其所點著隨手清冷也、更灑遍身、忽以平愈、

〔中右記〕大治二年四月廿六日、此十餘日、右臀下有堅根、遂行之間、有更發苦、召醫師成世、令見之處、其勢頗大、藏無恐、早以遂可射之由所申也、　五月七日、從今日堅根以柳洗、依成世申也、

〔皇國名醫傳後編 中〕奧村良筑

奧村良筑、號蘭山、越前府中人、○中略初事醫、子和、因以趣古道、極其變化、灌水治疾古人多用之、然至癲疹之灌浴、自古所未聞、良筑實發明之、是類甚多、生平足跡未嘗出鄉關、其術皆數十年仰思俯求之所獨得、

〔病家須知 二〕食物飲餐の心得を說○中略

產後の暈運に、冷水の奇効あること、聖濟心研にくはしく其說を記たれども、今此編婦人須知の卷にはゞこれを遺て、俗家に示べし、其外、熱病の危篤證に、灌水得効ある辨、痘疹、驚癇、及癇疾、癲癇、狂癇諸症、痳疾、諸血、又は猘狗傷てより、精神錯亂もの、或は頭熱甚久止ざる、或は暴寒氣を累て愈ず、或は久寒諸治効なき類、及瘧病初發、痳痺初起に、灌水、浴水、搨水及瀑布泉を用る差別、其佗の諸病に、冷水內服辨別など、予○平野重誠が多年の試驗は、皆治術のうへのことにて、醫も其人にあらざれば、實に說諭がたく、況俗家の理解し難ことのみ多ければ、此には具論せざるなり、

鍼灸

飼蛭

〔病家須知三〕痘瘡のこゝろえをとく○中略

痘瘡の序熱に、搐搦、上弔、不省人事にいたるものに、揩水術の一法を施には、冷水を手巾に浸て、兒の頭上を頻に灌洗、面部をもあらひ、その水、やゝぬるむときには、再冷ものに換て、灌ことと八九十遍にいたり、頭面の肌膚冷て、氷のごとくなるに至て止、もし醒覺こと遲ものは、冷水一盞を内服せしめて、治することあり、いづれも見はからひのあることと也、○中略痘瘡序熱、卒厥を發するものに、この術を活用して、其急を救、且起脹灌膿の期に至て、巨利を得ことあるは、予が發明、多年經驗の事にして、其必効あるものを認て施行こと、世人もやゝ知るものあれども、かの守杭刻舟之醫は、まゝ首肯せざることなれば、俗家は、唯其効あるを信じて用ふべし、

〔病家須知五〕黴毒の心得を說○中略

又最懼べきは癩病にて、古人の天刑病といひしも宜なり、然はあれども、其身體既に潰爛腐蝕たるものも、能灌水治法に委れば、偉功を奏ことあり、これ予○平野重誠が創意の歷驗にて、古人のいまだ言及ざることとなり、

〔醫斷〕鍼灸

鍼灸之用、一旦馳逐其病、非無驗也、唯除本斷根爲難而已、如痼毒、灸之則動、動而後攻之易治、故鍼灸亦爲一具、而不必專用、亦不拘經絡分數、毒之所在、灸之刺之、是已、

〔續視聽草初集六〕蛭飼考證

ちかき世の人、小き瘡をなやめるには、蛭をつけて、その瘡をすひとらすることをするを、西洋の醫書より得たるわざといへり、此事は、我國いにしへ人も、ひるかひといひて、せしことなるを、いつしか世に絕て、後には蛭かひといふ詞だに、知る人なくなれるからに、今はじめて、こと國のわざをならひ傳へて、する事とのみ思へり、此わざいにしへぶみに、はやくみえたりとおぼゆれど、

たゆきむのおこたりに、まるしもとめざりしかど、おろ〳〵かいつけおけるもあれば、其かぎりをまるすべし、こはもろこしの、隋のころにも、おもひよりてせしことにて、そのかみのくすしのふみにも見ゆと聞つれど、そはのちに考へていふべし、今はまづ、こゝにふるく見えたるところを記すのみなり、曾はらの夏蔭、

〔櫻園談筆下〕蛭をつけて血をとる事

今世に、蛭をつけて、惡血をとる療治あり、是を皆人、蘭法といふめれど、肥後の阿蘇あたりの山家にて、獸物の瘀血をとるにまかする事あり、こは醫にもよらず、たゞ山奧の民どもの、昔よりおのづから傳へ來りてするわざなれば、皇國の古法なるべし、

〔醫略抄〕治癰疽方

本草拾遺云、水蛭、人患癰疽毒腫、取十餘枚令啗、病處無不差者、今案、蛭心方云、以水蛭食去惡血、

〔倭名類聚抄十九蟲豸〕水蛭　本草云、水蛭、音質、和名比留、

〔伊呂波字類抄比動物〕蛭ヒル木蛭　水蛭同、在水中、

〔爲房卿記〕寛治四年五月廿六日庚寅、余煩二公、○中略令食蛭、○中略當日出仕不便、然而王事靡盬、以奉公爲、廿八日壬辰、典藥頭來臨、二公重以食蛭、

〔長秋記〕元永二年六月十四日、近日依堅根有蛭飼事、

〔中右記〕大治二年四月廿六日、此十餘日、右腰下有堅根、卅日、今日施藥院使重基、幷成世等來、見此堅根、令飼蛭五六十許了、五月九日、今日依醫師數、又飼蛭三十餘了、已及三箇度也、雖有減氣、減身力屈了、二十九日戊申○中略右腰下堅根平癒了、從去月二十六日、最後、以連柳洗之、四箇度飼蛭療治之間也、及一月、衰老之身神心屈了、

〔明月記〕寛喜二年五月十日辛丑、昨日猶有熱氣、仍當飼蛭、

温石

【朝野群載 雜文二十一】勘申

御蛭飡吉日

今月廿六日己卯　人神在胸中　來月十二日甲午　人神在左乳

右御蛭飡吉日、勘申如件、

康平四年四月廿四日　權醫博士和氣相秀

【運歩色葉集 遠】温石(ヲンジヤク)

【毛吹草】美濃　温石(ヲンジヤク)　出羽　温石(ヲンジヤク)

【大和本草 三金玉土石】温石

山東通志曰、出掖縣、色象青白、潤膩如玉、味甘無毒、可備藥物、日本ニ温石ト云物アリ、白クシテ少青シ、ヤハラカナリ、是山東通志ニシルセル中華ノ温石ト同物ナルベシ、冬ハ弓ノ弦折レ易シ、温石ノ末ヲ指ニツケ、弦ヲシゴクニ柔靭ナル事夏月ノ如シ、是温石ノ性熱ナル事可知、他石ノ末ヲ用レバ不然、温石焼テ鹽水ヲソヽギ、布ニ包ミ痛處ヲ熨スニ尤ヨシ、又腹中ノ積滯ヲ散ズ、焼テ温熱ヲトランタメニハ、他ノ堅石モ可也、サレドモ、温石ノヨキハシカラズ、本草綱目ニ温石ヲノセズ、然レドモ古磚ヲヤク事アリ、是亦温石ナリ、證類本草云、久患下部冷久痢腹傷下白膿、焼塼井温石熨、及坐之並差、但取堅石焼暖用之、非別有温石也、今按、諸本草ニ、日本所産ノ温石ヲ不載、

【紀伊續風土記 物産一 石】温石(天文本和名鈔云、温石温音如遷、康頼本草に滑石、和名御之也、久とあるはうけがたし、)延喜式諸國貢藥中に、紀伊國温石、一百二十斤とあり、今名草郡天野莊藤白峠の産上品なり、那賀郡小倉莊上三毛村の産下品なり、(一説に、温石に熨痢の用ありて服餌の方なし、本草和名に滑石出紀伊國とあるをみれば、温は滑の誤なるべしといへり、按ずるに、漢土にて温石といふは、一石の名にあらず、唐陳藏器本草拾遺に、久患下部冷久痢腸腹下白膿、焼塼井温石、熨及坐之、並差、但取堅石、焼暖用之、非別有温石也といへり、又本草和名に、温石今焼火熨人腰脚者也といへるも、拾遺の温石を引るなり、是に據てみれば、温は滑の誤といふ説可なるに似たり、然れども本國にて滑石の産する所いまだ詳ならず、温石は今に多く産して、式に載

すなし[illegible]名出とす、名增[illegible]字[illegible]類とするとき[illegible]、此石を温石と[illegible]し[illegible]、何[illegible]頃かきよべからず、又一說に式の温石に、此石火に燒き病を熨するに然あれば、給遣の温石の名を借りて、一名[illegible]名となし、ふし[illegible]ならんといへり、[illegible]

〔增訂豆州志稿 十七〕温石、熱海ヨリ出ヅルヲ最トス、自然ニ鹹味ヲ具ス、增、是レ溫泉中ノ加爾基幷達等凝結シテ石ニ化シタル也、之ヲ以テ腹痛、拘攣等ヲ熨シテ效アリ、

〔落窪物語 一〕北の方は、かの典藥の事により、起まして部屋の戸引き開けて見たまふに、うつぶしふして、いみじう泣く、いといたしや、などかくはの給ふぞといへば、胸のいたく侍ればと息の下にいふ、あないとをし、物の觸かとも、典藥のぬしくすしなり、かいさぐらせ給へといふに、頼なくにくし、何か風にこそ侍らめ、くすし入るべき心地しはべらずといへば、中略、御燒石あてさせ給はんやと聞ゆれば、よかなりとの給へば、あこぎ典藥にぬしをこそ今は頼み聞えめ、御燒石覺めて奉り給へ、皆人も寢靜まりてあこぎがいはんによもとらせじ、これにてこそ志のありなし見えはじめ給はめといへば、典藥うち笑ひて、さなり殘りの齡少くとも、一すぢに頼み給はゞつかうまつらん、いわ山をもと思へば、まして燒石はいとやすし、思ひにさし燒きてんといへば、同じくは疾くとせめられてぞ往にける、

〔運歩色葉集 多〕湯治

〔釋日本紀 十四 述義〕本予伊豫溫湯宮

伊豫國風土記曰、湯郡、大穴持命、見悔恥、宿奈毘古那命、欲活、而大分速見湯、自下樋持度來、以宿奈毘古奈命而漬浴者、暫間有活起居、然詠曰、眞暫寢哉、踐健跡處、今在湯中石上也、凡湯之貴奇、不神世時耳、於今世染疹痾萬生、爲除病存身要藥也、天皇等於湯幸行降坐五度也、以大帶日子天皇與大后八坂入姬命二軀爲一度也、以帶中日子天皇與大后息長帶姬命二軀爲一度也、以上宮聖德皇子爲一度、及侍高麗惠慈僧、葛城臣等也、于時立湯岡側碑文記云、法興六年十月、歳在丙辰、我法王大王與惠慈法師及葛城臣、逍遙夷與村、正觀神井、歎世之妙驗、欲叙意、聊作碑文一首、

○按ズルニ、各地温泉場ノ事ハ、地理部温泉篇ニ詳ナリ、今此ニハ只温泉浴法ノ濫觴ヲ示セル

ノミ、

〔出雲風土記下仁多郡〕三津鄉、郡家西南廿五里、大神大穴持命御子、阿遲須枳高日子命、御須髮八握于生、晝夜哭坐之辭不通、爾時、御祖命、御子乘船而、率巡八十島、宇良加志給鞆、猶不止哭之、大神夢願給、告御子之哭由、夢爾願坐、則夜夢見坐之、御子之辭通、則寤問給、爾時御津申、爾時何處然云問給、卽御祖前立去出坐而、石川度坂上至留申、是處也、爾時、其津水沼出而御身沐浴坐、故國造神吉事奏、參向朝廷時、其水沼出而用初也、依此、今產婦、彼村稻不食、若有食者、所生子不云也、

〔出雲風土記上意宇郡〕忌部神戶、郡家正西廿一里二百六十步、國造、神吉詞奏、參向朝廷時、御沐之忌里、故云忌部、卽川邊出湯、出湯所在、兼海陸、仍男女老少、或道路駱驛、或海中沚洲、日集成市、繽紛燕樂、一濯則形容端正、再浴則萬病悉除、自古至今、無不得驗、故俗人曰神湯也、

〔釋日本紀十四述義〕幸于津國有間溫湯（攝津國風土記曰、有馬郡又有鹽之原山、此近在鹽湯、此邊因以爲名、久牟知川、右因山爲名、山本名功地山、昔難波長柄豐前宮御宇天皇世、爲車駕幸湯泉、作行宮於湯泉之、于時採材木於久牟和山、其材木美麗、於是勅云、此山有功之山、因號功地山、俗人誤曰久牟知山、又曰、始得見鹽湯等云々、土人云、不知時世之號名、但知島大臣蘇我馬子時耳、）

〔朝野群載二十大宰府〕太政官符　大宰府

應聽往還某姓某丸向某國溫泉事

右得某人解偁、云々者、某宜奉勅依請者、府宜承知依宜施行、符到奉行、

辨　　史

年月日

〔古今著聞集二釋教〕行基菩薩もろ〳〵の病人をたすけんがために、有馬の溫泉にむかひ玉ふに、武庫山の中に、壹人の病者ふしたり、上人あはれみをたれて、とひ玉ふやう、汝なにゝよりてか、此山の中にふしたる、病者答ていはく、病身をたすけんために、溫泉へむかひ侍る、筋力絕盡て、前途達

しがたくして、山中にとゞまる、

〔空華日工集〕應安七年二月十五日、赴管領甲第、領問政事之要、余曰、凡政事當先賞而後罰、不為人憂、則可謂善政矣、仍乞湯醫之暇、入府亦乞□七七日為湯醫、往熱海宿山崖家、

〔皇國名醫傳後編中〕香川修庵見于上條

香川修德、字太冲、以字稱、〇中略於是厲志專精講求、累年著藥選行餘醫言等書、以推衍師說、醫道益闢、而於温泉及食餌治効最致詳、

〔漫遊雜記上〕香川氏曰、温泉不熱者無益于病者、可謂夏虫之見矣、豐州佐伯邸有泉曰水內、治痿脚不隨者有奇効、其泉頗冷、秋冬難浴、

〔温泉考〕近頃、京都の後藤左一の門人香川太冲のあらはすところの藥選といへる書を見侍りしに、その續編に温泉のことを論じて、温泉、硫黄にて沸くといふ說をうけがはず、稍若水の說を引ておもへらく、地中に水の筋あり、火の筋あり、その火の筋、水筋に出會へば、温泉となるといへり、その說是なることは是なり、しかれ共甚疎なり、まして是游子六の說を拾ひしものにして、若水はじめて唱へし說にはあらず、しかし天經或問には、近頃渡りし書なれば、若水は、萬一これを見ずして、偶その說の暗合せしもしれざれ共、太冲の游子六の說なることをしらずして、若水初て唱へられし說なりとおもへるは、深く考へざるあやまりなり、又太冲の說に、硫黄といふものは、温泉によつて生ずるものなり、硫黄はすなはち是温泉の發する滓なりといへるは、是又あやまりなり、右にいふごとく、温泉も地中の陽火にて涌き、硫黄も地中の陽火、土中の脂液を蒸しこらすものゆへに、硫黄と温泉とつれそふことはつれそふ理なれ共、必竟するところ、温泉は温泉、硫黄は硫黄、たとへば地中の火は母にして、温泉と硫黄は兄弟なるがごとし、故に硫黄温泉を生ずといへるは、もとより非なり、又温泉硫黄を生ずといへるもあやまりなり、それゆへ温泉ある所、硫

黄のなき所もあり、硫黄のある所、温泉のなき所もあり、又いづくにても、海底の泥おほくは硫黄の臭氣をなす、温泉の滓なりとはいわれぬことを知るべし、○中略扨温泉のあまり熱きはよろしからず、又ぬるきはもとよりよろしからず、たゞ温柔和煦なるをよしとす、香川太冲の說に、温泉は極熱のものをよしとす、極熱の熱勢、人の元氣を助け、元氣を滾動して、沈痾を起し、痼痛を發すといへるは、笑ふべきの甚しきなり、元氣を助け、元氣を滾動すといへる字を下す事の笑ふべきのみならず、いまだかつて元氣の字義をしらざればなり、しかし元氣の論は、あながちに此醫の主とする所にあらざる故に、その說のつまびらかなることはここに略す、温泉の能毒のわかるゝは、あつきとぬるきとによることにあらず、湯筋の差別によることなり、故に極熱の湯にも寒冷の性をそなへし温泉あるべし、煎湯は熱湯にても、石膏の煎湯は寒性なるがごとし、又さまで極熱にてなく共、外の物にそまず、たゞ純陽硫黄の氣ばかりを土中にて醸そゝぎて出來たる温泉ならば、その性温にしてよろしかるべし、故に温泉をゑらぶは、たゞ異氣に染むかそまぬかをとくと吟味し、自然天然うぶのまゝなる水筋の湯硫黄の氣ばかりにふれそゝぎて出來る湯のあつからずぬるからず、身にふれて、温柔和煦、既に浴して後、腹藏肌膚、表裏內外、煦々温暖の氣や、ゝしばしやまざる湯を、極上々の良湯とおもふべきなり、筑前の貝原篤信も、熱湯には浴すべからず、温なるをよしとすといへり、此ことはよしとすべし、

〔皇國名醫傳後編中〕山村通庵○中略

重高通稱右一郎、號通庵伊勢松阪人、重高以灼艾一門師說已備、已更欲試温泉之効、遍歷諸州、親驗其氣味主能、既曰、但馬城崎、上野草津、其功相敵、均爲天下第一湯、但路程悠遠、或有難往者、於是剏意製湯、方用潮水五斗硫黄六百錢糠一斗囊盛、先以潮水二斗煎糠、以糠赤色爲度、去滓內硫黄、浴日三、漸內潮水、冬月旬餘一改、夏月四五日傾去上水、更加新潮、用硫黄糠本量之半、無潮水則以鹽五升和水、

湯成而試、効功不異二泉、

〔尾張名所圖會〈附録六知多郡〉〕鹽湯治　同村〈野間〉〇大海音寺西北の方に當る海濱は、巖石多くありて、鹽氣の頃は遠近の諸人、此海濱に出で、潮水に浴し、しかしては又巖上に憩ひなど、終日に幾度も出沒する事、五日七日する時は、あらゆる諸病を治す、是を世に大野の鹽湯治といふ、かく暑月には、浴湯する群集夥しくて、數多の旅亭、家ごとに二百人三百人を宿し、他の溫泉も、かくまで諸人の輻湊するを聞ず、又中人以上は、旅館に此海潮を汲とらせ、再び湧して浴するもあり、しかれども、其効海中に身を浸せるには少し劣れりとぞ、又浴湯の暇には、此海中にて捕る所の鮮魚を飽までに食しつゝ、枯腸を潤し、虛羸を補ふも、又治療の一助なるよし、類此濱に溢れたるは、東浦、其外所々に浴するあれば、其繁昌推て知るべし、

〔嬉遊笑覽〈九上飮食〉〕風呂〈〇中略〉藥のためにする湯は、病者發汗せむとて湯に入ることあり、榮花物語、〈本雫〉も御風にやとて、ゆでさせ給ひて云々、此外の書にも見えたり、〈字類抄に、浴湯云々、奈由豆とあり、其ごとく入しむなといふ、〉庭訓に、五木八草湯治風呂、是は本草に見えたる藥湯なり、貞德文集霜月の文に、貴殿御望み桑風呂焚可申候、狂言記〈五〉、八瀨の釜風呂は、都がたの人わづらひ有もの、絶えず人侍り、極て効あり、黑木といふ物をふすべける火でに、釜ぶろをたつるに、生木を燒て、その氣をうくる、誠に人身に藥なるべし、

〔榮花物語〈十二玉村菊〉〕大將殿〈〇藤原賴通〉日比、御心ちなやましくおぼさる、御風などにやとて、御ゆゆでせさせ給、はをきこしめし、御讀經の僧ども、番かゝずつかうまつるべくの給はせ、〈〇下略〉

〔閑女時言一〕ゆゆで
榮花物語月宴に、九條殿なやましうおぼされて、御かせなどいひて、おほむゆゆでなどして、くすりきこしめして云々、此風のこゝちに、ゆゆでするといへるは、いかさまにするにか、醫法に

ある事にや、尋ぬべし、源氏物語などにはなき詞なり、狹衣に、雪やけに、あしもはれてなやましうおぼさるれば、ゆでつくろひなどして、あるきなどもし給はずと云々、これは足の痛に、湯でする事、今もする事なり、杉をせんじてする事もあるべし、

〔中右記〕天永三年十月二日、今日大宮右大臣殿御忌日也、仍於一條室被行講説、予依病、胸湯治之間不行向也、

〔玉海〕嘉應三年○承安元年二月十八日癸亥、醫師定成來問湯治事等、明日雖吉日、黃帝之死日也、是重忌之、來二十五日爲上吉日、然而及彼日者有懈怠之咎、仍自明日始水湯、至二十五日可始潮湯云々、

二十四日己巳、定成來、問湯治事、所勞之體、尙脚氣風病令然歟、試今一兩日可始水湯、自來月二三日之間可浴潮湯云々、

〔園太曆〕康永三年十月八日、予自今日浴潮湯、仰鳥養牧雜掌良衆法師令汲也、

〔法然上人行狀繪圖三十五〕三月二十六日、讚岐國鹽飽の地頭駿河權守高階保遠入道西忍が館につき給ひにけり、○中略上人○法然入御ありければ、この事なりけりと思ひあはせけり、藥湯をまふけ、美膳をとゝのへ、さま〴〵にもてなしたてまつる、

〔梅園日記二〕杉湯○中略

續門葉集雜上云、大藏卿隆博、藥湯のために、杉の葉をこひ侍りける返事にそへ侍りける、法印公紹、君がとふしるしとも又なりにけり杉のみたてる秋の山本、又按ずるに、藥湯のためにとあれば、これも脚氣ゆでん料にや、

〔續詞花和歌集雜十六〕大齋院○選子內親王御あしなやませ給を、すぎのゆにてゆでさせ給べきよし申ければ、ゆでさせ給へどしるしも見えざりければ、　齋院宰相

あしひきのやまひもやますみゆる哉しるしの杉とたれかいひけん

〔本朝醫談〕脚氣に、杉の洗藥は、蘇敬に初り、丹溪も用ひき、證によりて効なき事もあるべし、

〔簾中抄 下〕くこの湯あむる日

正月二日　二月三日　三月六日　四月四日　五月一日　六月二十一日　七月七日　八月八日　九月二十日　十月八日　十一月二十日　十二月三十日

このＨごとに、くこをゆに入てあむれば、色あはじよくなりて、おいにやまひせず、

〔年々隨筆 六〕又(別本)源氏物語をみれば、病に藥用る事はすくなくて、大形は祈願をのみしたるやうなり、今も田舍のものはかくの如し、鬼を尚べる風俗の弊なるべしと有、延喜式、政事要略などをみるに、むかしとても病には必醫藥をもはらにせし事なり、源氏物語をふとうちよみて、藥を用る事なしとはいひ難し、若菜に、いざや聞えまほしき事いと多かれど、またいとたゆげにおぼしためればとて、御ゆまゐれなどきこへあつかひ聞え給ふを云々、柏木の卷に、宮はさばかりひはつなる御さまにて、いとむくつけうならはぬ事のおそろしうおぼされけるに、御ゆなどもきこしめさず、身の心うき事を、かゝるにつけてもおぼしいれば、さばれ此ついでにも忘なばやとおぼすとある、御ゆは藥なり、これ卷々に多かり、そのかみは醫者のいのりにて病の癒し事なれば、鬼を尚べる弊風俗ともいひがたし、畢竟は醫といふもまじなひ也、醫といふ字の巫に從へるはまじなひなる故なり、丹波康賴の醫心方をみるに、多く千金方によりて、方ごとに呪文有、令にも典藥寮に、呪禁師、呪禁博士、呪禁生ありて、まじなひて病を療す、此呪禁は、唐書百官志にも有、皇國のみ鬼を尚ぶ弊風なるにはあらず、

〔醫心方 一〕服藥節度第三 〇中略

本草經云、治寒以熱藥、治熱以寒藥、飲食不消以吐下藥、鬼注蠱毒以毒藥、癰腫瘡瘤以瘡藥、風濕以風濕藥、各隨其所宜、　又云、病在胸膈以上者、先食後服藥、病在心腹以下、先服藥而後食、病在四支血脈

者、宜空腹而在旦、病在骨髓者、宜飽滿而在夜、

〔醫賸 中〕一週

今俗病之劇愈、藥之驗否皆預期以七日、謂之一週、按郎仁寶七修類藁云、天之所以爲天、不過二氣五行化生萬物、名曰七政、人之所以爲生亦不過陰陽五常之氣行於六脈、見之、名曰七情、天之道惟七、而氣至六日有餘、(氣盈朔虚推算時刻)則爲一候、故天道七日來復、人身之氣惟七、六日而行十二經、(一日行二經)有餘、故人之疾、至七日輕重判焉、

〔塵塚談 下〕斷食して服藥の事、釋迦如來の病を療る方也、七ヶ日斷食にて藥を飲み、七ヶ日後は生死によらず藥を用ひずと、佛經に說給ふとかや、今世も、律僧の正しき人は、長病なれば、七ヶ日服藥し、八日目一日休藥して、又服藥す、七日々々に一日づゝ休み、藥用するよしを聞り、此斷食して服藥の方、藥治より萬病に最上の藥なり、痢病食傷、蟲症、泄瀉、腹痛、積聚、嘔吐の類の病には、別して驗し多し、既に大七氣湯などは、絕食にして用ゆべしと古人も云へり、予(○小川顯道)しば〳〵効驗を得たる事なり、疑ふべからず、

〔醫心方 二〕針灸服藥吉凶日第七

服藥頌　新羅法師方云、凡服藥呪曰、

南无東方藥師瑠璃光佛、藥王藥上菩薩、耆婆醫王、雪山童子、惠施阿竭、以療者邪氣消除、善神扶助、五藏平和、六府調順、七十萬脈、自然通張、四體强健、壽命延長、行住座臥、諸天衞護、莎訶、(向東誦一遍乃服藥)

〔頓醫抄 五十 養性諸篇〕服藥法第十

藥ヲ服スル時ノ呪

南無東方藥師瑠璃光佛、藥王、藥上、耆婆醫王、雪山童子云々、東向テ一返誦テ、後藥ヲ服スベシ、

又云、凡藥ヲ服スルモノハ、必ズ意ヲ正シ、信ヲ深クシテ、疑ヲ成、他念ヲ成事勿レ、但其藥ノ口ニ入

ヲ、痛病ヲ消コトハ、沸湯ヲ氷雪ニ沃ガ如ト思フベシ、如此信ズル者ハ、其病立處ニ愈ズト云コトナシト云也、

〔醫心方二〕針灸服藥吉凶日第七

合服藥忌日 大清經云、正月亥、二月寅、三月巳、四月亥、一日五月亥、六月寅、七月巳、八月申、九月亥、十月寅、十一月巳、一日十二月申、 右日常不可和長生藥、

又云六絶日、正月辰、二月卯、三月寅、四月丑、五月子、六月亥、七月戌、八月酉、九月申、十月未、十一月午、十二月巳、 右日不可服藥治病

〔醫心方二曾記〕針灸服藥吉凶日第七

今案、凡甲子、丙子、戊子、壬子、丙午、庚午、壬午、甲戌、丙戌、壬戌、乙巳、丁巳、乙亥、丁丑、辛亥、己丑、辛丑、癸丑、癸卯、

今検件日避諸禁、合藥服藥針灸治病皆吉、但可避節氣月忌幷生年衰日等、

〔運歩色葉集地〕服病日、初六、中八、下四、九、六日、十八日、廿四、廿九、此日不服藥、

〔玉海〕養和二年元〇壽永正月一日壬申、例講師忠云、律師依爲寒家之內、不見儀不服藥、依長元元年經頼記也、

〔律疏職制〕凡造御膳、誤犯食禁者、典膳徒三年、謂造御膳、皆依食經、經有禁忌、不得輒造、若乾脯不得入黍米中、莧菜不得和鼈肉之類、有所犯者、典膳徒三年、

〔頓醫抄五十藥性禁忌〕服藥禁節十一

凡藥ヲ服クハ、諸ノ滑物、及油物、冷物、酢物ヲ不可食、 又云、猪鷄肉魚膾ヲ不可食、 又云、產婦穢事ヲ忌ベシ、 又云、石榴ヲ不可食、房室ヲ絶ヲ爲上、 又云、蕃荷ヲ不可食、藥ノ勢ヲ損ズ、 又云、鹿肉不可食、藥ヲ服スルニ不得力、鹿ハ恒ニ毒ヲ解ク草ヲ食、以此故ニ能諸藥ヲ制散ス、

〔傍廂後篇上〕徂徠ガ病中

荻生茂卿が病中に、松岡玄達成章といふくすしより、藥を贈る時の包紙に、調合〆進申芎藥湯、生姜一片煎如常、平生食物肝要事、唯許牛蒡與大根とかきたり、おもしろき詩なり、初句と結句とを代ふれば、いづれの病、何の藥にも用ひらるべき詩なり、

〔春雨樓叢書二〕產家の禁食

產婦は、總て產前より產後を謹むべし、○中略貝原氏も、產後に薯蕷を食はする事を忌むと云、余試るに、果して血を崩して死を致す、是れに因て考るに、薯蕷は本と山生の物にて、何ほどの堅き土の底までも深く入りて、每年新根を生じ、舊根は朽るも、百年を經て枯盡る事なし、其蔓も數丈を引て、水旱の難をいとはず、是れ本より性氣强き草故なり、是れを以て、山藥とて、癆瘵等の補益の效あり、其性氣强き者を、弱き腹中に食すれば、益なふして返て損する事まかり、其味淡く軟虛なるを以て與ふ、本が性分强き效ありて、返て血崩する理を考ふる人なし、必しも多く與ふる事なかれ、又朝鮮の婦人、長崎に來て產す、卽椎茸三斤を請ふ、是を日々產婦に與ふ、朝鮮の國風皆しかりと云、本國に在て、自由なれば、尙又五斤も與へたしと云、余嘗て云く、凡茸類は濕熱裏蒸して、無形より有形の物となる、故に濕物にて、病家尤忌むべき者なり、余隅州の霧島山に行て、椎の木を切て、茸を作る所に至て見るに、男女老弱の別なく、皆黴瘡を患ふ、皆傳染にあらず、山氣にて、自然に發すと云、山氣もあれども、朝夕の食物に、此茸を食す、是れ內に濕氣を貯ふ故に、此瘡を生ず、此山民に、其故を尋るに、茸の故にあらずと云、其朝鮮の婦人、此濕物を、產後に數斤を服するは、皆後患になるべし、越後の鱅の如し、是等は理外にて、理を以て論ずべからず、只土風のしからしむるは、數への及ぶ所にあらず、其毒に中りて死す、其毒に非ず、天命とす、肥前の島原の人、一日に三度河豚を食す、一度食せざれば、勢氣大に減じたりと云、しかれども此等は其毒を爲して、後患となる事は希なり、都下の人の如きは、日々過食して、日に疾病となる、天年の數を縮る事をしらず、此

人に限て、無益に日を送る、酒中の仙と云人には至らずとも、酒徳を頌で、酒毒に苦しめらる、事なかれ、

〔後奈良院宸記〕天文四年十月十三日辛丑、氏直御脈參、聊得減、紙代給之、

〔漫遊雜記上〕余(○永富鳳介)嘗問山東洋曰、吾事君三年、技不進何故、山子曰、吾子須多讀古書、與古人晤言、以蕩滌胸間之汚穢、余當時汎然聞之、未甚得其意、爾後十餘年周游海内、以試斯技、始知榮辱悲歎之心妨診候處療之機、因意先輩任醫橫逸、不屑世給者、蓋有故、今錄其三四焉、中古有縣士德本者、甲斐人也、常言使役劇之儕、未嘗謁人、頸掛一嚢、周流諸州、療病者、買藥取價、毎貼十八錢、台廟(○德川家康)有病、徵治得瘥、乃奉乞定價於政府而去、

〔明良洪範十七〕渡邊大隅守、江戸町奉行ノ時、醫師ト、ライ病人ノ論有、醫師云ニハ、金五兩ニテ、ライ病ノ療治ヲ請合タリ、直レ候ヘドモ、未ダ金子渡シ申サズト、ライ病人云ニハ、金五兩ニテ療治ハ頼ミ候ヘドモ、全快ノ上、金子渡スベキ約定ニ候、然ニ、ヨキ方ニハ相成候ヘドモ、未ダ全快ハ仕ラズ候ニ付、金子渡シ申サズト云、大隅守、其者ノ面體ヲ見ラル、ニ、腐レ爛レテハ有ラザレド、中々全快トハ見ヘザレバ、其方、未ダ全快ハ仕ラズトイヘド、醫者申ニハ、直シタリト云、然ラバ約定通リ、金子相渡スベシト云、ライ病人答テ、醫師直シタリト申トモ、又全快仕候ニモセヨ、久々病氣ニテ、家業モ相休ミ居リ候ヘバ、只今至テ困窮仕リ居リ候ニ付、金子ノ儀ハ、中々デキ申サズ候ト云、大隅守、久々煩ヒ、家業相休、困窮ニ及ビ、金子デキズト云ハ、至極尤ナレド、約定ノ事ナレバ、濟サザル時ハ、僞リニ成リ候ニ付、相濟ズ候間、其方、奉公仕ミ致シ、其給金ヲ以、醫師ノ藥禮追々ニ成トモ皆濟セ申ベシト云、ライ病人答テ、カ樣ナ病有ル者、誰カ抱ヘ申サント云、大隅守、醫師ニ向テ、其方此者ノ惡病ヲ直シ候ト申カラハ、金子ヲ受取ラズハ、承知ハスベカラジ、サレド困窮ニ及ビ、金子デキズト申ケレバ、其方、此者ノ請人ニ立、何方ヘ成リトモ、奉公ニ遣ハシ、其給金ヲ藥禮ノ代リニ、追

追ニ、其方受取申ベシト云、醫師答テ、カヽル輩ハ數面體ノ者、召仕フ人、何方ニモ有ベカラジト云、此時大隅守、醫師ヲハッタト白眼テ、其方、最初ハ、ライ病ヲ直シタリト云ヒ、今又カヽル輩ハ數面體ト云事、其意ヲ得ズ、直セシ者ナラバ、ケガラハ敷ハ見ヘザルベシ、ケガラハ敷見ユレバ、直セシニハ有ラザルベシ、其方心底ハ、病人、追々困窮ニ成ルヲ見テ、早ク金子ヲ取テ仕舞ント思ヒ、未ダ直シキラザルニ、直シタリトシテ、金子ヲ取ント思ヒシヨリ、カク奉行所ヘ訴ヘ出シナルベシ、醫師ヲ業トシナガラ醫師ノ本意ニ違ヘル不屆者メ、强ヒテ申立ルニ於テハ、急度申付方有ルゾト叱リテ、名主五人組ヘ預ケ歸サレケル、

〔拾芥抄 下末 養生〕養生方

久行傷筋　久立傷節　久聽傷聽　久視傷目　久語損氣　大驚傷魂　高枕勿唾　(大小便時勿嚼唾宿)

正勿向西　正勿向北　臥勿燈明　脫衣勿汗　冬可凍聰　亦可溫足　(春與秋則首足俱凍)　(好勿竭精觸若女膚)

晨勿歌嘯　眠勿大語　臥勿覆頭　臥勿開口　夜勿說夢　夜行鳴齒　大便勿呼　少便勿怒

不進陰物　猪與麋胎(ホンタイ)　鹿茸水銀　亦勿食蕨　勿食鼠殘　臥眠時不得歌詠

(凡旦起、恒言善事者、天自與福、冬凍腦溫足、春秋首足俱凍、此聖人之常法也、)

〔簾中抄 下〕養生　かくふるまへば、病なく命ながし、

人は、いたくやすらかなるべからず、つねに物をすべし、またいたくくるしくは思ふべからず、いづれもあし、つねにかゞみをみよ、たゞしかたちをあひすべからず、あつきをりにありきをして水にむかふべからず、おほきにあせにあへたらば、身にはうにをぬるべし、あせにぬれたらんきぬをばとくきかへよ、あしにあせあへたらば、水になさしいれそ、冬はあしをあたゝかにして、かしらをすゞしくすべし、春秋はかしらもともにすゞしくすべし、

〔醫心方 二十七〕大體第一

千金方云、夫養生也者、欲使習以性成、成自爲、而不習無利也、性既自善、内外百病皆悉不生、禍亂災害亦無由作、此其養生之大經也、善養性者、則治未病之病、其義也、故養性者不但餌藥喰霞、其在兼於百行、百行周備、雖絶藥餌、足以遐年、德行不充、縱玉酒金丹、未能延壽、故老子曰、善攝生者、陸行不畏虎兕、此則道德之祐也、豈假服餌而祈遐年哉、　文子云、太上養神、其次養形、神清意平、百節皆寧、養生之本也、肥肌膚充腹腸、供嗜欲、養生之末也、

〔醫心方 一〕服藥節度第三 中略

養生要集云、張仲景曰、人體平和、唯好自將養、勿妄服藥、藥勢偏有所助、則令人臟氣不平、易受外患、唯斷穀者可恒將藥耳、

〔政事要略 九十五 至要雜事〕隨身要驗方也 件方本朝所抄也、七巻云々、思邈論曰、人年卌以上、勿服爲藥、恒服補藥、　敬佛道諸天、上之主、治十歳百歳不爲十悪、此即永无爲病、中略　凡人无問有事无事、恒須日別一度、道人踏脊及四支頭項、若令熱踏、風氣時行不能著人、此大要妙不可具論、

〔延壽撮要〕上古の人は無爲無事にして、自然に養生の道に合す、中古にいたりて人の智慧盛にして、善悪をわかち、名利を事とし、衣服をかざり、酒色をこのみ、形神を勞す、故に天年をつくさずしてはやくほろぶ、黄帝の時さへかくのごとし、いはんや今の世をや、道に入といひて、あながち山林に入、世を離るのみにあらず、朝夕世俗にまじはりても、言行さへ道にかなひぬれば、すなはち道に入人なり、少壯の時より常に道をきかば、いかでか道にいたらざらむ、しかるに養生の道ひろく云ば千萬句約していへば惟これ三事のみ、養神氣、遠色慾、節飲食也、此事易簡なれども人これをきかず、もし聞人あれども且身に行ふことなし、少壯の時血氣盛實なるゆへに、酒色を恣にし身心を勞しても、たちまち病にいたらざるによて、壽算の損減するをしらず、中年の後漸お

ぼえて命をのべん事を求む、日暮て道をいそぐにことならず、人の壽をいふに、天元六十、地元六十、人元六十、三六百八十年の壽を生れ得るといへども、攝養道にたがひぬれば、日々月々に損減して天枉をいたす、精氣かたからざるものは天元の壽減ず、起居時あらず、喜怒常ならざる者は地元の壽減ず、飮食節あらざる者は人元の壽減ず、故に保養の道少より壯にいたり、壯より老にいたるまでかくべからず、聖人治未亂而不治已亂、治未病而不治已病云々、既に病となりて後は、よく醫療すといへども、全くいゆる事かたし、未病の時治療するを養生者といふべし、孫眞人云、人年四十以後、美藥當不離於身云々、誠に中年の後は、氣血をやしなふ藥常にもちふべし、但平補の藥食を用べし、峻補を用ふべからず、又强て補藥をこのむべからず、藥は邪をせめ、かたぶく所を平にする者也、生れづかざる氣力を藥にて生ずる事、風なきに波を起すなるべし、洞神眞經曰、養生以不損爲延年之術云々、補陽の劑を過し用れば、眞陰耗減して、瘡瘍淋渇の疾生ず、補陰の劑を過し用れば、胃の氣虚冷して飮食消しがたく、大小便たもちがかし、又衆病積聚起於虚云々、中下焦虚するによて、心腹滿悶する事あり、志かるに虫を殺し積を消す事、藥お用て重て中氣を耗損す、又すこし風寒の邪に感じて、發散の藥お服する事度々に及べば、腠理空疎にして、自汗盜汗出て、外邪いよ〱入やすし、又をもく邪に感せば、皮膚にある時はやく藥を服して汗を發すべきに、其時怠て病骨髓に入て後藥を求む、十に一も愈事なし、扁鵲桓公の故事思あはすべし、只邪の輕重をわかたん事を要とす、

〔貝原養生訓 一〕養生の術は、先己が身をそこなふ物を去べし、身をそこなふ物は、内慾と外邪となり、内慾とは、飮食の慾、好色の慾、睡の慾、言語をほしゐまゝにするの慾と、喜怒憂思悲恐驚の七情の慾を云、外邪とは、天の四氣なり、風寒暑濕を云、内慾をこらゑてすくなくし、外邪をおそれてふせぐ、是を以元氣をそこなはず、病なくして、天年を永くたもつべし、

〔夜船閑話〕或人曰く、城の白河の山裏に、巖居せる者あり、世人是を名けて白幽先生と云ふ、○中略予則ち禮を盡して、苦ろに病因を告げ、且ッ救ひを請ふ、少焉幽眼を開ひて熟々視て、徐々として告げて曰く、○中略夫觀は無觀を以て正觀とす、多觀の者を邪觀とす、向きに公多觀を以て、此重症を見る、今是を救ふに無觀を以てす、また可ならずや、公若し心炎意火を收めて、丹田及び足心の間におかば、胸膈自然に清涼にして、一點の計較思想なく、一滴の識浪情波なけん、是眞觀清淨觀なり、云ふ事なかれ、しばらく禪觀を抛下せんと、佛の言はく、心を足心におさめて、能く百一の病を治すと、阿含に酥を用るの法あり、心の勞疲を救ふ事尤妙なり、天台の摩訶止觀に、病因を論ずる事甚だ盡せり、治法を說く事も、亦甚だ精密なり、十二種の息あり、よく衆病を治す、臍輪を縁して豆子を見るの法あり、其大意心火を降下して、丹田及び足心に收るを以て至要とす、但病を治するのみにあらず、大ひに禪觀を助すく、蓋し繫縁諦眞の二止あり、諦眞は實相の圓觀、繫縁は心氣を臍輪氣海丹田の間に收め守るを以て第一とす、行者是を用るに大ひに利あり、古しへ永平の開祖師大宋に入て、如淨を天童に拜す、師一日密室に入て益を請ふ、淨曰く元子坐禪の時き、心を左の掌の上におくべしと、是即ち顗師の謂ゆる繫縁止の大略なり、顗師初め此の繫縁內觀の秘訣を敎へて、其家兄陳鍼が重痾を萬死の中に助け救ひたまふ事は、精しくは小止觀の中に說けり、また白雲和尙曰く、我つねに心をして腔子の中に充たしむ、徒を匡し衆を領し、賓を接し、機に應じ、及び小參普說七縱八横の間において、是を用ひてつくる事なし、老來殊に利益多き事を覺ふと、寔に貴ぶべし、是蓋し素問にみゆる、恬澹虛無なれば、眞氣是にしたがふ、精神內に守らば、病何れより來らむといふ語に本づき給ふ者ならむか、且ッ夫內に守るの要、元氣をして一身の中に充塞せしめ、三百六十の骨節、八萬四千の毛竅、一毫髮ばかりも欠缺の處なからしめん事を要す、これ生を養ふ至要なる事を知るべし、彭祖が曰く、和神導氣の法、當さに深く密室を鎖ざし、牀

を案じ、席を煖め、枕の高かさ二寸半、正身偃臥し瞑目して、心氣を胸膈の中に閉ざし、鴻毛を以て身上につけて、動かざる事三百息を經て、耳聞處なく、目見る處なく、斯の如くなる則は、寒暑も侵かす事能はず、蜂蠆も毒する事能はず、壽き三百六十歲、是眞人に近かしと、又蘇內翰が曰く、已に飢へて、方に食し、未だ飽ずして先止む、散歩逍遙して務めて腹をして空からしめ、腹の空なる時に當て、卽ち靜室に入り、端坐默然して出入の息を數へよ、一息よりかぞへて十に到り、十より數へて百に至り、百々數へ放ち、去て千に至りて、此身兀然として、此心寂然たる事、虛空と等し、斯のごとくなる事久ふして一息おのづから止まる、出でず入らざる時、此息八萬四千の毛竅の中より雲蒸し、霧起るが如く、無始刧來の諸病自ら除き、諸障自然に除滅する事を明悟せん、譬へば盲人の忽然として眼を開くが如けん、此時人に尋ねて、路頭を指す事を用ひず、只要す、尋常言語を省略して、爾ちの元氣を長養せん事を、是故に云ふ、目力を養ふ者は常に瞑し、耳根を養ふ者は常に飽き、心氣を養ふ者は常に默す、と、予が曰く、酥を用るの法得て聞ひつべしや、幽が曰く、行者定中四大調和せず、身心ともに勞疲する事を覺せば、心を起して應さに此想を成すべし、譬へば色香淸淨の輭蘇鴨卵の大ひさの如くなる者、頂上に頓在せんに、其氣味微妙にして、遍く頭顱の間をうるをし、浸々として潤下し來て、兩肩及び雙臂兩乳胸膈の間、肺肝腸胃脊梁臀骨次第に沾注し、將ち去る、此時に當て胸中の五積六聚疝癖、塊痛、心に隨て降下する事、水の下につくがごとく、歷々として聲あり、遍身を周流し、雙脚を溫潤し、足心に至て卽ち止む、行者再び應さに此觀を成すべし、彼の浸々として潤下する所の餘流積もり湛へて暖め蒸す事、恰も世の良醫の種々妙香の藥物を集め、是を煎湯して浴盤の中に盛り湛へて、我が臍輪已下を漬け蒸すが如し、此觀をなすとき、唯心所現の故に鼻根乍ち希有の香氣を聞き、身根俄かに妙好の輭觸を受く、身心調適なる事、二三十歲の時には遙かに勝れり、此時に當て積聚を消融し、腸胃を調和し、覺へず肌膚光澤

を生ず、若し其勤めて怠らずんば、何れの病か治せざらむ、何れの術かつまざらん、何れの仙か成せざる、何れの道か成せざる、其功驗の遲速は、行人の進修の精麁によるらくのみ、○下略

〔格物餘話〕古人之用藥治病、惟用一藥、或用二三味、品數不多、故治病專一有功、病去則捨藥不用、唯穀肉菜果保養之而已矣、是於養生之理爲得宜、夫藥物皆是偏勝之氣、雖參芪朮甘、無病則不可用、況其餘峻烈厲毒之物乎、後世用藥品數多、每至十五六味、攻補並用、寒溫兼施、故藥力不專、治病少效、少效則用藥日久、其偏勝之氣積久、而傷胃氣不少、不知不用藥之爲勝也、

〔政事要略 九十五 至要雜事〕服藥駐老驗記 菅家異記

竹田千繼者、山城國愛宕郡人也、寶龜初歲、十七入典藥寮爲醫生、讀本草經、至于枸杞駐老延齡之文、深以通信、將試其徵驗、乃買地二段、多種此藥、春夏服其葉、秋冬食其根、又常煮莖根、取汁釀酒而飮之、每有沐浴必用其水、如此七十餘年、未嘗解倦、顏色服[illegible]、猶如少年、齊衡二年、文德天皇忽患疲羸、衆醫供石決明酒、時侍臣或奏千繼服枸杞駐老之狀、天皇大驚、即時召見、問云、汝生年幾許、千繼奏云、天平寶字九年歲次庚子生、至今年九十七、天皇大悅、令侍臣驗視其形、鬢髮黑、肌膚肥澤、耳目聰明、齒牙无虧、天皇威服擢爲典藥允、即勅藥園多種枸杞、令千繼掌之、○中略寬平年中、有外從五位下春海貞吉、蓋是唐醫師也、又爲雅樂助、遂預五品、屢到余舍、屢語中懷、底裏披露、無有所隱、時余年四十有五、白髮滿頭、貞吉深有助憂之色、語曰、何不服枸杞、招此衰羸、余答云、枸杞駐老之驗、具在醫方、然而丘未達、不敢嘗之、乞略陳其方、貞吉答云、僕昔者年廿六、大同元年以由基所風俗儕勞爲左近衞、其後依醫人語、播植枸杞方一町之地、無有他種、水漿食飮必合此藥、盥洗沐浴常用其水、故今年一百十六歲、猶有少容、亦設其養生之法、事多不載、貞吉寬平九年夏訪問、親知疫病遺染注、假卒、時年百十九、又致仕大納言藤原多緒、服露蜂房、實吞槐子、年過八十、頭髮無白、不斷房室、寬平二年薨、時年八十四、近代有宮內卿十世王、二品長野親王之男也、臨老無齒不能喫、路菜、唯以漿飲

看病

送乾石決明丹、氣色服壯、鬢髮無白、延喜十六年夏薨、時年八十五、東宮學士大藏善行、舊是國子進士也、仕歷顯職、爵至四品、常服鐘乳丸、一日一丸、年滿九十、猶有壯容、耳目聰明、行步輕健、家蓄多婦、不斷房室、年八十有七、生一男兒、

〔續日本後紀 二十仁明〕嘉祥三年三月癸卯、帝〇仁明從少小聖體尫羸、然而負扆之年既登四十、求諸中古、應无甄儔、蓋由修善行仁、服食補養之力者歟、

〔先哲叢談後編 一〕江村專齋〇中略專齋自少壯務爲修養、齒過九十、視聽不衰、無異少壯時、後水尾上皇聞之、召見問修養之術、專齋奏曰、臣固無他術、平生唯持一些字耳、上皇問故、曰、喫食些、思慮些、養生亦些耳、上皇大感賞之、

〔紫芝園漫筆 八〕徂徠先生甚重生、自飲食居處、以至出入動止、賓客應接之事、苟可以傷生者斷弗爲也、然其所以病死者、乃以思慮過度也、蓋先生有志于功名、自少以著述爲事、年過六十、舊痾數發、而猶不能淸心靜養、遂致篤疾而死、謝在杭云、思慮之害人、甚與酒色、誠矣、

〔紫芝園漫筆 六〕余〇太宰春臺平日於都下有故、與俗人惡客對坐終日、或侍坐於諸侯貴人半日、則小腹痛引陰囊道不利、歸宿乃已、蓋氣病也、及遊秩父、跋履山川、旬有五日、日行五六十里、至一百里勞矣、然微恙不作、身體康健、有異於常、氣和也、是知人之氣不可鬱、而體以運動和也、世之逸居者、宜乎善病、古人謂宴安酖毒誠哉、

〔萬葉集 四〕太宰大監大伴宿禰百代等贈驛使歌〇中略以天平二年庚午夏六月、帥大伴卿忽生瘡脚疾、苦枕席、因此馳驛上奏、望請庶弟稻公、姪胡麻呂欲語遺言者、勅右兵庫助大伴宿禰稻公、治部少丞大伴宿禰胡麻呂兩人給驛發遣、令看卿病、而逕數旬幸得平復、于時稻公等以病既療、發府上京、於是大監大伴宿禰百代、少典山口忌寸若麻呂、及卿男家持等相送驛使、共到夷守驛家、聊飲悲別、乃作此歌〇歌略

〔續日本紀十二聖武〕天平九年十二月丙寅、是日、皇太夫人藤原氏〈○聖武生母宮子娘〉就皇后宮〈○安宿媛〉見僧正玄昉法師、天皇亦幸皇后宮、皇太夫人爲沈幽憂、久廢人事、自誕天皇、未曾相見、法師一看、惠然開晤、至是適與天皇相見、天下莫不慶賀、

〔大日本史后妃七十六〕文武夫人藤原皇后、諱宮子娘、〈○中略〉生聖武帝、〈○中略〉聖武帝即位、尊曰皇太夫人、〈○中略〉九年〈天平〉十二月、皇太夫人就皇后宮、見僧玄昉、聖武帝亦造焉、皇太夫人誕帝之後、久不與玄昉相見、沈憂廢事、是日一見、惠然開晤、遂與帝相見、天下莫不慶賀、

○按ズルニ續日本紀ノ書點ニ、自誕天皇未曾相見法師一看惠然開晤トアルヨリ、大日本史ハ是ニ據リテ右ノ如ク記セリ、サレドコハ誤ニシテ一看ハ看病ノ事ナリ、

〔釋氏要覽下瞻病〕瞻病制法〈僧祇律云、有比丘久病、佛因按行見、與洗浴、爲洗身及衣、臥床、又爲說法、佛問、汝曾看病否、答不曾、佛言、汝既不看、誰當看汝、乃制戒、自今後應看病比丘、若欲供養我者、當供養病人、〉

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶八歳五月丙子、勅、禪師法榮、立性清潔、持戒第一、甚能看病、由此請於邊地、令侍醫藥、太上天皇得驗多數、信重過人、不用他醫、及其閑水難留、竟與晏駕、丁丑、勅、奉爲先帝陛下屈請看病禪師一百二十六人者、宜免當戸課役、

〔日本後紀二十二嵯峨〕弘仁三年四月癸卯、勅、僧尼之制、事明令條、男女之別、非無禮法、〈○中略〉其病者可就寺治療、及請僧看病者、經僧綱若講師、聽其處分、

〔天台南山無動寺建立和尚傳〕文德天皇天安二年、西三條女御學重病、殆及死門、右大臣頻驗書信、丁寧被請和尚、慈覺大師曰、八幡田中、看病第一、結緣之內、師檀尤深、件閑下身代令度上人一深、懇祈念之力、當此急難、勵守本願、不辭彼請、一達利生之意、一背知恩之旨、早可參下矣、大師命難不覺一十二年參於彼殿、山々寺々名僧、有智有驗僧綱凡僧、滿堂溢席、側肩促膝、和尚不整衣裳、只著麁布、皆見裝備之崢嶸、各懷下劣之思、惟和尚謙下不上殿中、遙坐兩簷而誦呪、未幾呪縛其靈、彼此雷同、未知誰驗、

暫而擲出、自几帳上過、度於衆人之中、更飛到於和尚之前、壁踊昇降、高聲叫喚和尚、宜行可還本處、由、亦如飛還於帳裏、數刻之後、其聲漸下、所著靈氣陳屈伏之詞、種々雜語、不可勝計、大臣感激歡喜云、我師斯在、豈有何思哉、滿堂緇素瞿然皆瞻和尚、是則顯驗之最初也、

〔今昔物語十五〕伊勢國飯高郡老嫗往生語第五十一

今昔、伊勢ノ國飯高ノ郡□□ノ郷ニ一人ノ老タル嫗有ケリ、〇中略此ノ嫗忽ニ身ニ病ヲ受テ日來惱ミ煩ヒケル間、子孫ヲ初メトシテ、家ノ從者等皆此ヲ歎テ、飲食勸メ病ヲ扶ケントスルニ、嫗俄ニ起居ヌ、本著タリツル所ノ衣ハ自然ラ脫落ヌ、看病ノ者此レヲ恠ムデ見レバ、嫗右ノ手ニ一葉ノ蓮花ヲ持タリ、葩ノ廣サ七八寸許ニシテ、光リ鮮ヤカニ、色微妙クシテ香馥バシキ事无限シ、更ニ此ノ世ノ花ト不見エズ、看病ノ輩此レヲ見テ奇異也ト思テ、病者ニ問テ云ク、其ノ持給ヘル花ハ何コニ有ツル花ゾ、亦誰人ノ持來テ與ヘタルゾト、病者答テ云ク、此ノ花ハ輙ク人持來テ得サスル花ニモ非ズ、只我レヲ迎フル人ノ持來テ與ヘタル也ト、此レヲ聞ク看病ノ輩奇異也ト思テ貴ブ間、病者居乍ラ失ニケリ、

〔沙石集四下〕上人之女父之看病事

坂東ノ或山寺ノ別當、學生ニテ上人ナリケレバ、弟子門徒オホカリケレドモ、年タケテ後中風シテ病ノ床ニ臥シテ、身ハ合期セズナガラ、命ハナガラヘテ、年月ヲフルマヽニ、弟子共看病シツカレテ、イトコマヤカナラザルニ、イヅクヨリトモナク、女人一人出デ來、御看病申サン事イカニトイヘバ、弟子共シカルベシトテユルシツ、エモイハズチンゴロニ看病シケリ、イカナル人ゾト問ヘドモ、マドヒ者ニテ侍リ、人ニシラレマイラスベキ者ニテアラズトイフ、アマリニアリガタク看病シ、月日モ歴ニケレバ、コノ病人申ケルハ、佛法世法ノ恩ヲカブレル、弟子ダニモ打ステヽ、侍ニ、コレホドチンゴロニオハスル事、シカルベキ先世ノ契ニコソトマデ、アマリニアリガタク思

給ニ、イタクカクレ給コソイブセケレ、ソモ〳〵何ナル人ニテ御坐ルゾト、アナガチニ問ケレバ、誠ニ今ハ申侍ラン、コレハソノカミ思ガケヌ縁ニアハセ給テ、思ノ外ナル御事ノ候ケル某ト申者ノムスメニテ侍ナリ、ソレニハカクトモ知セ給ハネドモ、母ニテ侍シモノヽ、ナンヂハカヽル事ニテト、ツゲシラセタ後ハ、心バカリハ御女ト思ツヽ、アハレ見モマイラセ見ヘモマイラセバヤト、年来思ナガラ、カヽル御身ニハ、ヨロヅハヾカリ有テ、ムナシク年月ヲ、ヲクリ侍リツルニ、此御病ニ、御看病ノ人モワカレタ、コトカケタルヨシ、ツタヘ承テ、御孝養ニ心ヤスクアツカヒマイラセント、思タチテナン、マイリタ候ト、ナク〳〵カタリケレバ、マメヤカニ、志ノ程哀ニ覚テ、涙モカキアヘズ、シカルベキ親子ノチギリコソ哀ナレトテ、タガヒニナツカシク、ヘダテナキ事ニテ、ツイニ最後マデ看病シ、心ヤスクシタテハリニケリ、至孝ノ志コソアリガタクオボヘ侍レ、

〔新撰集記〕九御方夫、右近衞醫師和氣明治也、藥餌之道分別、術方之計無極、看。病。療。疾。之佛也、道針灸治之神也、知六腑五臓之脉、探四百四病之根源、順方治病、任術療疾、嫡徒合藥擣抹㕮咀之上手也、

〔細川家記〕十三忠興同九年〇慶長夏ニ至、御積痛（忠興）差重リ、御大切に御煩ニ付、忠利君を御家督に被成度實、御願之通被叙仰候、自是先御介病として、忠利君御暇賜リ、豐前へ御下向被成候、

〔德川禁令考〕十九疾病忌服享保二壬戌年七月廿九日

看病斷ノ儀ニ付達

看病斷之儀、父母妻子之外ハ、斷不相立候、乍然兄弟姉妹伯叔父母、其外近親之者、難見放體ニ而、外に可致看病者も無之族は、其節相達候上之儀たるべく候、

右之趣、寄々可被相達置候、

〔天保集成絲綸錄〕七十九寬政四子年七月

大目付江

疱瘡麻疹水痘病人、看病人、若君樣御座所江不罷出所、

一疱瘡病人は、見へ候日より三十五日過候はゞ、肥立次第罷出可相勤候、

一麻疹水痘病人は、三番湯掛り候はゞ、御番等可相勤候、

一疱瘡麻疹水痘之看病人は、三番湯掛り候はゞ、罷出御番等可相勤候、

但病家棟隔看病不致候はゞ不及遠慮、同棟之者看病不致候とも遠慮可仕候、○中略

右之通、向々江可被達候、

七月

〔諸例類纂 九〕文化二丑年

一筆啓上仕候、私曾祖父兵庫頭義、去月中旬ゟ持病之痰積發、其上時候相障、折々差塞、食事等通象候旨、追々申越候、老年之義にも御座候間、甚無覺束奉存候、可相成義御座候はゞ、出府仕、濱町下屋敷へ罷越、看病仕、療養手當等申付度奉願候、可然樣被成御差圖可被下候、依之捧愚札候、恐惶謹言、

十一月廿一日　大岡主膳正 書判

戸采女正樣　牧備前守樣　土大炊頭樣　青下野守樣 參人々御中

〔病家須知 一〕看病人の意得をとく○中略

第三等は、病勢既に進て、氣力衰耗、飮啖も減じ、坐臥に、人の扶を頼ものは、藥の力を待べきこと、固然なれども、看侍者の用意の可と否とにて、懸に隔のあることなり、醫者三分、看病七分と、諺には言習ども、看護をよく領知たる人は少にて、無には如ざるもの多、故如何となれば、食事にも與べき時あり、藥にも用べき度ありて、頻藥を服しめ、强て食を與ては、病者の腹力、それに耐がたく、藥も食も泥滯て、下降がたきが故に、皆適害とはなるとも、効あることはなきなり、○中略凡常に忍らるゝことも、病ありては、堪がたきものなれば、其氣候に應じ、病人の體に適やうにして、其側に在

醫書

看病人も爽快はどが、患者にも可ものなり、病人なればとて、頻温暖て、良ものと思は愚昧なることなり、とかくに其平素に背たるは、必害あり、貴賤貧富其分に従て、病者の處置は異とも、唯其身に習慣まゝなるを佳とす、近属或餅色にて、丐婦の、瘡兒の濃膿の背なるを負て、村里に食を乞たるを、一富豪之を視て、憐愍なることに思ひ、竈屋の旁に子舍のありしに入しめて、飯など與、醫を招て藥を服しめ、痘の收までは、此に居てとらせんとて、懇切なるを、丐婦も嬉てありしに、其夜中に、さしも善に膿たる痘、忽に沒て、苦悶に驚躁、醫を乞て診せしむれば、此醫師やゝ僞利たるものにやありけん、是は全塞風霜寒をも避ず、慣きたりしものが、卒に室中にて、密閉たるが故に、如斯變證も發たるならん、試に露地へ出おきてみるべしといひて、夜中に、戸外へ藁筵を延て、乞子の母子を出し居、さて試且てみれば、豆瘡再快發し、膿も十分に灌て、それより微の惱もなく收靨たりと聞り、是其常に背て、初の變證も發たるなれば、これらのことにても、病あればとて、蒼卒に其素習に異なるは宜からぬ理をも推知すべし、

〔本朝書籍目錄〕醫書

大同類聚方百卷安倍眞直、出雲廣貞等奉勅撰、　攝養要決廿卷物部廣泉撰　金蘭方五十卷菅原岑嗣奉勅、與出雲廣貞名醫撰　掌中方一卷輔仁撰　醫心方卅卷丹波康賴撰、　倭名本草大醫博士深根輔仁奉勅撰　難經開委一卷廣貞撰　集注大素卅卷小野藏根撰　養生抄七卷輔仁撰　養生秘抄一卷

〔本朝醫考下〕本朝醫書目錄

治術記	一卷	大村直福撰
攝養要決	二十卷	物部廣泉撰
金蘭方	五十卷	菅原岑嗣撰
藥經		和氣廣世撰

醫心方　三十卷　丹波康頼撰

集註大素經　三十卷　小野藏根撰

大同類聚方　百卷　安倍眞直 出雲廣貞 撰

難經開委　一卷　出雲廣貞撰

養生鈔　七卷　源輔仁撰

掌中方　一卷　同撰

倭名本草　同撰

萬安方　梶原性全撰

頓醫法　十卷　同撰

靈蘭集　細川勝元撰

愚按、右載之書冊、今纔存二二三部、嗚呼惜哉、聊擧其名於茲、以備他日考索之便耳、

〔擁壒集 醫書 下〕醫經類

素問經　大素經　難經　明堂經 以上四部　銅人經　資生經　華佗藏經　醫說　千金方　千金翼方　千金要方　外臺方　聖惠方　風科集驗方　和劑方　蘇沈良方　三因方　御藥院方　肘後方　經驗方　靈苑方　聖濟總錄　還歌方　萬金方　醫學全書　簡易方　易簡方　新刊同方　易簡糾繆方　醫方集成方　婦人大全良方　百一方　錢氏小兒方　得効方　頓醫抄　醫心方　傳濟方

〔日本國見在書目錄〕醫方家 千三百九卷 私略之 醫針 仙方 合藥

黃帝素問十六 全元起注　素問音訓幷音義五　素問改錯二　素女問十　黃帝甲乙經十二 玄晏先生撰　甲乙注四　甲乙義宗十　甲乙經私記二　黃帝八十一難經九 楊玄操撰　八十

一難音義一（楊玄操撰）　大清經十二（[illegible]撰）　大清二上下　大清諸草木方集要一　大清神丹經上
篇一　大清神丹經一　大清金液丹經一　藥圖三（[illegible]撰）　藥辨決一　藥方草本八十
卷　藥石一　仙藥方一　仙藥合方一　神仙服藥食方經一　五岳仙藥方一　五
岳芝藥方一　神藥方一　雜藥方一　神仙新藥方一　神仙入山服藥方一　桐君藥
錄二　半昌丸方面口雜藥方一　雜藥方（[illegible]）　雜藥方一（徐文伯撰）　雜藥方一（[illegible]撰）
雜單藥方一　採藥圖二　雜藥論一　雜藥方十八卷　雜藥圖二　新撰方一　神
仙服藥經一　老子神仙服藥經一　雜藥四　[illegible]法一　方集廿九（[illegible]撰）　雜[illegible]酒方八
作酒方一　五[illegible]酒方一　要方十二　集驗方十二（姚僧垣撰）　集驗方方決一　開元
廣濟方五卷（[illegible]撰）　葛氏肘後方十　葛氏肘後方三（陶弘景撰）　葛氏百方九　葛氏方九　胡
洽方三　張仲景方九　通玄方十　通玄十　新錄單要方五（[illegible]撰）　崔上人秘方一
徐太山隨手方一　張家方一　[illegible]要方十　新修諸要太清秘方十二　惟方四　老
子孔子枕中雜方一　大清治方八　千金方髓一（[illegible]撰）　千金方抄一　治癰疽方七
五金作方一　調氣道引方一　道引法圖一　新修大清秘經方十二　石流丹方一
治婦人方三　諸香方一　雜丸方一　朱沙丸方一　腎氣丸方一　雜療一　神仙
法方一　太一神丹精治方一　龍樹菩薩和香方一　經心錄方六　延年秘錄方四
餘石方一　養性方一（[illegible]撰）　生髮膏方一　枸杞煎方一　治消渴方一　治馬病方
一　治馬法六　治馬病書六　小品十二　耆婆伏苓散方一　癰疽論一　黃帝服
經決十二（[illegible]撰）　耆婆脈決十二（[illegible]注）　脈新音一（[illegible]撰）　新修本草廿卷（[illegible]撰）　神農本
草七（陶隱居撰）　本草音七（[illegible]撰）　雜注本草十（[illegible]注）　本草圖廿七　新修本草音義一（[illegible]撰）
本草音義三（[illegible]撰）　本草音義一（[illegible]撰）　本草夾注音一（[illegible]撰）　本草注音一（[illegible]撰）　注

本草表序一陶隱居撰　食療本草孟詵撰　老子敎人服藥循常住仙經一　神仙芝草圖一卷
仙草圖五　芝草圖二上下　黃帝鍼經九　鍼經音一楊玄操撰　類聚方經百廿　黃帝內經
明堂楊上善撰　明堂音義二楊玄操撰　食經三馬琬撰　食經一同撰　食經四崔禹錫撰　新撰食經七
食禁一　食注一徐注　集驗十二姚大夫撰　古今集驗五十甄立言撰　古今錄驗五十　龍樹
菩薩服經一　脚氣論一周禮撰集　產經十二德貞常撰　產經圖三　黃帝針灸經一　黃帝三
部灸經音義一李謙忠撰　玉遺針經一甄立言撰　刪繁論十謝玄泰　劉涓子十一龔慶宣撰　內經大素
册楊上撰　如意方十　攝養要決廿二　練皮癒一　病家雜書十九　丹決一　杏丹
方一　徐文伯一　染蘇方法一　赤松子試一　八史術一　八素八董遷注　老子道
精經一　五藏論一　病源論五十巢元方撰　素女經一　禁法九　靈奇奧秘術一陶隱居撰
龍樹菩薩印法一　龍樹菩薩馬鳴菩薩秘法一沙門菩提適　軒轅皇帝錄集十二　鬼名一
三五禁法八　三五神禁治病圖一　八史神圖
〔隋書經籍三十四〕黃帝素問九卷梁八卷　黃帝甲乙經十卷音一卷、梁十二卷　黃帝八十一難二卷梁有黃帝衆難經一卷呂
博望注、亡　黃帝鍼經九卷梁有黃帝鍼灸經十二卷、徐悅、龍銜素鍼、并孔穴蝦蟇圖三卷、雜鍼經四卷、程天祚鍼經六卷、灸經五卷、曹氏灸方七卷、秦承祖偃側雜鍼灸經三卷、
徐叔嚮鍼灸要鈔一卷　玉匱鍼經一卷　赤烏神鍼經一卷　岐伯經十卷　脈經十卷王叔和撰　脈
經二卷梁脈經十四卷、又脈生死要訣二卷、又脈經六卷、黃公興撰、脈經六卷、秦承祖撰、脈經十卷、康普思撰、亡、　黃帝流注脈經一卷梁有明堂流注六卷、亡、　明
堂孔穴五卷梁明堂孔穴二卷、新撰鍼灸穴一卷、亡、　明堂孔穴圖三卷　明堂孔穴圖三卷梁有偃側圖八卷、又偃側圖二卷、　神農
本草八卷梁有神農本草五卷、神農本草屬物二卷、神農明堂圖一卷、蔡邕本草七卷、華佗弟子吳普本草六卷、陶隱居本草十卷、隨費本草九卷、秦承祖本草六卷、王季璞本草經三卷、李譡之
本草經、談道術本草經鈔各一卷、宋大將軍參軍徐叔嚮本草病源合藥要鈔五卷、徐叔嚮等四家體療雜病本草要鈔十卷、王末鈔小兒用藥本草二卷、甘濬之癰疽耳眼本草要鈔九卷、陶弘景本草經
集注七卷、趙贊本草經一卷、本草經輕行、本草經利用各一卷、亡、○中略　神農本草經三卷　本草經四卷蔡英撰　藥目要用二卷　本
草經略一卷　本草二卷徐大山撰　本草經類用三卷　本草音義三卷姚最撰　本草音義七卷甄立言撰

本草集錄二卷（略〇中）小品方十二卷（陳延之撰 中略）扁鵲偃側鍼灸圖三卷　流注鍼經一卷　曹氏灸經一卷　偃側人經二卷（秦承祖撰 中略）龍樹菩薩藥方四卷　西域諸仙所說藥方二十三卷（目一卷、本二十卷）香山仙人藥方十卷　西錄波羅仙人方三卷　西域名醫所集要方四卷（本十二卷）波羅門諸仙藥方二十卷　婆羅門藥方五卷　耆婆所述仙人命論方二卷（目一卷、本三卷〇中略）龍樹菩薩和香法二卷（略〇下）

（日本後紀 十七 平城）大同三年五月甲申、先是詔衛門佐從五位下兼左大舍人助相摸介安倍朝臣眞直、外從五位下侍醫兼典藥助但馬權掾出雲連廣貞等、撰大同類聚方、其功既畢、乃於朝堂拜表曰、臣聞長桑妙術、必須扁艾之治、太一秘結、猶資鍼石之療、莫不藥力迪助、拯湲魂於阽厄、醫方所繪□遣命於斷□□□譯、一實典頌澄心願、禁復降懷醫家、汎觀攝生、乃詔右大臣、宜令侍醫出雲連廣貞等、依所出藥、撰集其方、□等奉宣修□□、各尋詳思、備所及、採較猶□、成一百卷、名曰大同類聚方、宜校始訖、謹以奉進、

（續日本後紀 四 仁明）承和二年九月丁亥、丹波國人右近衞醫師外從五位下大村直福吉、及其同族幷五人賜姓紀宿禰焉、武内宿禰之枝別也、福吉妙得療瘡之術、當時諸醫不得闘然、天皇（仁明〇）寵愛至、賜宅居、遂撰其口訣、令撰治瘡記、

（三代實錄 十七 清和）貞觀十二年三月三十日壬午、散位從五位上菅原朝臣峯嗣卒、峯嗣者、（略〇中）嘗奉勅與諸名醫共撰定金蘭方、又針灸之所加多方注之外、後進之備至今稱妙焉、

（一代要記 五 圓融）天元五年壬申、針博士丹波宿禰康賴撰醫心方三十卷、

（醫心方）刻醫心方序

醫心方卅卷、每卷首題從五位下行鍼博士兼丹波介丹波宿禰康賴撰、謹按、臣等遠祖康賴撰進是書、實爲圓融帝永觀二年十一月廿八日、家牒所記與本書延慶舊抄冊子本後記合可徵也、後在正親町

帝時、嘗出以賜典藥頭半井氏云、豈卽遠祖所進之本歟、抑別有抄本也、意者秘府所藏、人間莫得而窺焉、加之保平以還、兵燹相踵、是書在若存若亡之間者、蓋數百有餘年矣、寬政初載先大君文恭公方表章遺文、命臣等曾祖臣元悳、使以仁和王府所藏抄本謄寫儲之醫學、當時稱爲希覯、顧其爲書殘脫居半、學者仍憾不得窺其全豹焉、恭惟今大君、仁洽寰宇、孝存繼述、最深軫念醫藥、訪知今典藥頭半井氏有斯書全帙、乃命執政傳旨其家、俾送致之醫學、使臣等得繙閱之、旣而又命臣等使遂依原本摸刻、以布之海內、○中略安政元年十二月朔、侍醫尙藥醫學敎諭法印臣多紀元堅、侍醫醫學敎諭兼督務法眼臣多紀元昕頓首拜識、

〔醫略抄〕夫病源之候、其流不一、療治之方、其趣旁勿○勿恐分諸家傳論、先賢撰集、漢家本朝、斯彙蓋多、或卷軸旣繁、有煩披閱、或部帙相混、難支厄急、仍爲遣卒爾之疾類、聊抽諸方之簡要、□□□□□□抄不敢顧時俗之嘲、只爲省瞻覽之惑也、于時永保辛酉之年三月七日、侍醫丹波雅忠撰之、

〔玉海〕承安三年四月十五日丁丑、今日憲基呼前、仰醫書之事等、有千金秘髓方云書、令見之、憲基申未見由、此中有云、年月日神事、件事於月神者一切無之由、丹家之說所申也、而定成貞時等申有爲神之由、而今此書有月神、仍問憲基、頗有不審之氣、尤有興事也、

〔吾妻鏡二十二〕建保二年二月四日己亥、將軍家聊御病惱、諸人奔走、但無殊御事、是若去夜御淵醉餘氣歟、爰葉上僧正候御加持之處、聞此事、稱良藥、自本寺召進茶一盞、而相副一卷書令獻之、所譽茶德之書也、將軍家及御感悅云々、

〔喫茶養生記上〕入唐前權僧正法印大和尙位榮西錄

茶也養生之仙藥也、延齡之妙術也、山谷生之、其地神靈也、人倫採之、其人長命也、天竺唐土同貴重之、我朝日本曾嗜愛矣、古今奇特仙藥也、不可不摘乎、謂劫初人與天人同、今人漸下漸弱、四大五藏如朽、然者針灸並傷、湯治又不應乎、若如此治方者漸弱漸竭、不可不怕者歟、昔醫方不添削、而治今人斟酌

事者歟、伏惟天造萬像、造人以爲貴也、人保一期、守命以爲賢也、其保一期之源、在于養生、其示養生之術、可安五臟、五臟中、心臟爲主乎、建立心臟之方、喫茶是妙術也、厥心臟弱、則五臟皆生病、竺印土耆婆往而二千餘年、末世之血脈誰診乎、漢家神農隱而三千餘歲、近代之藥味詎理乎、然則無人于詢病相、徒患徒危也、有悞于請治方、空灸空損也、偸聞今世之醫術、則含藥而損心地、病與藥乖故也、帶灸而夭身命、脈與灸戰故也、不如訪大國之風、示近代治方乎、仍立二門、示末世病相、留贈後昆、共利群生矣、于時建保二〈甲戌〉戊春正月日謹敍、

〔萬安方一〕獻萬安方序

初〈臣曾祖〉高祖〈宗仲〉、世居平安、家醫、見推博洽、書籍靡遺五車、櫃中有梶原性全萬安方、傳以篤信、秘加鍵鐍、〈○中略〉侍醫〈臣瑞三長〉、有志古方、與〈臣〉相善、〈○中略〉既而〈臣長〉逢享、獨覽之、乃得發凌雲之奧、前年敕命、嘗寫進獻、因謀防朽蠹、特賜剪春羅紙五千張、於是與〈長〉等共俱校正、周歲而成、凡六十二卷、原闕二本、目次一本、總計五十九冊也、獨以經五百年、蠹蝕誤字、衍文錯簡、尚猶不尠、悉仍舊貫、不改一字、所以存古也、既以書獻焉、謹按性全者、不知何人、相傳云、以醫仕足利氏鹿苑公、〈義滿、○足利〉恒懸藥囊、時稱名醫、嘉曆之間著此書、鹿苑公嘉其志、爲記花押二、今見在此書中、性全博覽强識、自言所見方書凡貳百有餘部、二千有餘卷、亦皆漢魏唐宋經驗之方、及自所試効矣、不集載、嗚乎古方之損益、以今見之、亡彼存此、而其引用亦獨在此書、則可謂海內無雙古方書也、今也藏之秘府、則使彼性全之業再垂不朽、〈臣〉亦與願、繼先十襲之功、豈不幸哉、〈○中略〉

延享二年乙丑冬十二月　侍醫院法眼　岡本〈玄冶〉謹上

朱印

〔萬安方六十二〕右萬安方六十二卷

花園帝正和中、梶原性全所撰、博採群籍、搜抉秘錄、妙論當削不遺、枚舉所援據書今亡佚者數十家、尚

本邦經方之最者也、性全不詳何許人、自言、和氣末孫、而跋語中間、及建長圓覺寺等事、則知其居鎌倉也、或以鹿苑相公押字爲仕鹿苑相公、今推之年代、性全若在鹿苑時、則年當百十餘歲、此恐不爾也、蓋斯書當時秘而不出、人罕觀者、性全又有頓醫抄五十卷、竹田月海冒以此書名、是以世傳爲萬安方者、率皆頓醫抄耳、豈月海素此書而不得、渴仰之至、姑以此稱彼乎、閲野卜幽東見記、此書國初以前、收在建仁寺大統庵、啓廸院法印本○岡酬以白金十苞得之、此本卽舊出岡本氏、辛亥夏五家大人、從秘府而借命家弟及門人、繕寫之、周歲始完、爲架藏重寶矣、其第八卷、第十八卷、闕佚已久、無由補抄、殊可恨也、

寛政癸丑春正月二十有七日、丹波元簡書、

〔東見記 下〕梶原性全、日本醫師、萬安方五十冊作、鹿苑院義滿袖判在焉、建仁寺大統庵有此醫書、或時醫玄冶法印、買取銀十枚、性全又作頓醫抄、在江城公方御文庫、頓字ノ訓、ホトヲルト付ルモ此人也、

〔京華集〕靈蘭集叙 京兆源君請

古人曰、達則願爲良相、不達則願爲良醫、又曰、爲政之道與爲醫同、誠哉此論、惟我日本國管領公○細川政元爲政之暇、旁游於醫矣、務在活人而已、於是乎、古今醫書與方隱錄此秘未觀者、扶其華括其要、晝鈔夜纂、門分類聚、雜以倭字、便於觀覽、裒成一集、名曰靈蘭、蓋取神農室名也、命予爲叙、按本草、上藥爲君以應天、中藥爲臣以應人、下藥爲佐使以應地、而蘭者君藥也、殺蠱毒辟不祥、久服長年不老、以通神明、以至仲尼鼓琴乎魯、屈子紐佩乎楚、或山林或階庭惟德惟馨、蘭之爲靈、昭々矣哉、源公、德象三才、威被四海、其叙世系、侯王將相、其醫國家也、君臣佐使定社稷之安危、問民之疾苦、抑天下之所以爲天下、皆源公之力也、豈不盛乎、相與醫達與不達、不足論焉、於戲、蘭百草靈也、人萬物之靈也、神農榜室、源公名集、可併按焉、昔惠日雅禪師著禪本草、有謂曰、佛祖以此藥療一切衆生病、號大醫王、源公平日參禪學道、雖云唐裴相國、宋張無盡、不敢多讓也、然則靈蘭集與禪本草、相與表裏以行于世、所謂大醫王非源公而誰也耶、文明四年歲在壬辰臘吉日、横川景三、

〔淨心方序〕我邦以濟生業顯世者、唯和丹兩家而已矣、近世旁支横派、爭道而出、和家久少聞、其傳、丹家一脈亦幾如絶足矣、爰有梶原淨觀公、師承丹家、而居其右、其我邦秦越人乎、有萬安、頓醫兩方、萬安秘而弗傳、頓醫今行于世矣、厥後曰道全、亦英時士也、竊嫌我邦之鮮書、附始南遊、其業益大、其親改邪、自金匱傳、而有人曰延淳、淳浮屠氏也、韜晦以墮落於世、然而才德所豪矣、以加其奥焉、纂醫術集成于茲、而論於之才甚、則盡其歸餘土苴焉耳、我友中川公、以俊逸穎悟之質、依淳而學、自方論脈訣藥性鍼灸呪唄劑和之書、未有聞而不求、而覩不貫、箕裘不墜、嘖々追焉、公痛念近代醫家者流、學術盛于內、擧闊遺于外、韓氏肥瘠病否之説、不知而濟生无浮、惆然還方兩卷、目曰淨心、一病之下必有病證、有脈證、藏方必取自得其効者、諸必遠古方、私竊以措一辭焉、其遠而不作也、夫子之意乎、其精擇拔萃也、其便於易簡也、方必取得其効者也、此豈得非以是齊王頴危亦林之遺普乎哉、蓋此書作也、鼻祖淨觀公萬安方之標準也、(中略)寶德辛未仲秋日敬月叟序、

〔續本朝遠方例言〕一世ニ行ハル、梅花無盡藏ハ、其塗轍、後世家ノ書ノ如ク、十九方ハ、其簡略、古方家ノ書ノ如シ、獨リ此書繁ナラズ、簡ナラズシテ、其用藥ノ趣、西洋家ニ似タリ、(中略)

〔本朝醫談〕近古の醫書多しといへども、啓迪集より盛なるはなし、天正二年、叡覽天下流永久の旨を蒙る、他の醫書此盛擧ある事を聞かず、醫たるもの必讀むべし、是先帝の掟をかしこみ奉るなり、此書は月湖が全九集に本づきて作られしなり、

〔察證辨治啓迪集一〕啓迪集題辭(中略)本朝亦醫匠之名世者尤于國史、無世無之、就中丹家醫三位者、生而得醫健矣、然英聲、騰茂實、時々造詣于民庶中堂醫王書選、而得補瀉牽絲之脈路、奇哉、爰有當世之聞人、世爲京華人也、諱道三、字一溪、盛歳發憤遊方、不遠千里、觸于杖履于鞋、而直入野州足利、而涉獵五典三墳及丁林日之書、維時武州有導道練師者、中年從國信使而南遊、還脈閩國諸醫之門、而擇其尤深、其頤而歸、公于以師之學習、研

精草思、而究其蘊奧、雨往風還于野武二州之間、前後更十有八之葛裘而旋洛、伱徠、醫療有驗、活瀕九之病、予熟曰、公不緣藥樹、不詰藥師、洞視病人胸宇、而自然得於心、應於手、公之於醫、可謂勤矣、可謂勞、可謂成矣、公遂提醫家秘要、以撰編者八卷、目曰啓廸集、蓋本于旁求後彥啓廸後人之語者歟、後彥謂誰、決不外求、一溪其人也、事達禁中、以歷叡覽、華衰非榮榮莫榮焉、〇中略

天正萬年之二歲歲舍甲戌仲冬初吉

大明再渡專使前圖覺策耆拙叟周良書于北等持東方丈

〔延壽撮要〕此書者、僕在關左之日、信州下邑之者不知養生之道、不幸而致天横、故受憐之心最深、仍撿延壽之數、皓聚樞要之語、名之以延壽撮要、爲便見聞、以倭字書之、旋洛之後、此一卷忝歷叡覽、何幸加焉、伏希廣頒華夷、普授士民、人々長保仙壽、規祝不淺也、謹以記歲月云爾、

慶長己亥立夏之節　法印玄朔〇今大路

〔普救類方序〕頃日大君〇德川吉宗命云、彼天祿石渠之書者、以爲巨家之備矣、至若邊鄙窮巷乏醫藥者、小民之所患、而仁綱之所漏也、台意不能无遺感、是誠可忍乎、忍之可謂仁乎、於是辱命醫員林良適丹羽正伯、點撿官庫群籍、採羅捷方單方、撰其至要、品味亦四五許、方法不過八九、蓋患家蒼々蚩々之徒所易合和、而果夫有明效者也、錄以國字、日就月將、研編摩之志、顯纂述之功、樓分脈剖、繕寫甫畢、都爲漆策、時敕臣親顯披閱、參互索搜、則博而不繁、詳而有要、眞格物之通籍、黎元之秘錄也、目之曰普救類方、情狀實當矣、〇中略以述台旨之萬一、謹爲之序、〇中略

享保己酉〇十四年之五月　從五位下典藥頭式部大輔橘朝臣親顯謹識

〔有德院殿御實紀附錄十五〕醫書をも、常に御覽あり、聖惠方、和劑局方、東醫寶鑑、外臺秘要などは、常に御座右に置れて、御勘考あり、また醫員等著述せし書をも獻せしめて、御覽じ玉ひ、諸國僻境に堙沒したるをも購り求めて、あまた冊府に收めしめ玉へり、その頃遠國の貧民等がために、侍醫

に命じて醫急の奇方どもあまた書あつめられ、普救類方となづけて、世上に梓行せしめらる、

(杏林叢話)先考濟庵翁名維德、字子[illegible]、曰、本邦享元以還、長沙之學大闢、戶著家述、爲不讓漢土、然吉益爲則一切武斷、矯枉過直、其子猷務皇張之、亦不免蛇足、脊必篇帙博搜、一章動至數百言、而未能盡其蘊、後藤門人淺野徽、拾其唾餘、可謂狗尾續貂矣、內藤希哲條分縷析、頗多潛發、雖未免排削之習、亦妄除舊論、闕別選者也、中西惟忠、注釋顯明、期于實用、川越正淑、依樣胡盧、碎殘極矣、山田正珍博引旁證、一掃從前固陋之習、其長在博、其短亦在於嗜博也、至於桂山茝庭二氏、學術淵精、尤得解經之體、而學者漸向正路矣、

(青囊瑣探上)戒嘗生徒

京攝醫師、頗有才學者、業差行則擧其所經驗之診候治方六七、以國字厲文爲冊子、及使子弟謄寫之、以廣傳、而其書至治法之緊要、則曰、此治方非游吾門者則不授、此診候非口授則難傳、而秘惜不載、故讀之唯是見誇於其伎、而無益於治疾病矣、予料其意、未始有博施濟衆之心、而不過特欲示其書於人、集生徒以圖厚耳、實諸賣藥舖之欲售藥、列擧其奇效以煽惑衆、乞人之狂顚者、喧其志之卑賤、頗皆如此矣、夫素問有歛血及癥瘕靈蘭室等之語、雖然秘而不傳之謂也哉、且古今醫書、汗牛充棟、未見有於診候治法不入其門則不敎傳之事也、然則得不謂非賣藥舖之類哉、

(續古事談五醫道)典藥頭雅忠ガ夢ニ、七八歲バカリナル小童、裝束ニハシリ遊ブ云樣、先祖康賴ネンゴロニ祈シ心ザシニコタヘテ、文書ヲマモリテ、二三代アヒハナレヌニ、コノホド火事アランズルニ、ソ、シムベシトミタ、廿日バカリアリテ、家ヤケニケリ、サレドモ文書一卷モヤカズトゾ、昔ハ諸道ニカク守宮神タチソヒケレバ、シルシモ冥加モアリケルニコソ、

(本朝醫談)唐土の醫書、斯邦に入りしは、千金方を初とすと養生訓に見ゆ、今延喜式を見るに、千金方の行はれし事志るべし、醫條を初として、民間に流布する藥膏宿に灸する事、萬能膏の原方等、

皆千金方に出たり、

〔隨意錄七〕素問、靈樞、文尤淺陋、亦非兩漢文、蓋兩晉之間、陰陽醫之所作、疑葛洪之輩、設黃帝岐伯雷公等之名、以寓言焉者耳、

〔經籍問答〕東垣十書ハ、不殘東垣ノ作ニ御座候哉、如何、答曰、不然、東垣流道統ノ十書ト云心也、東垣ハ宋人、丹溪ハ元人、予先年明謝在杭家藏ノ元板小形本多紀桂山先生ヘ贈、先生格別珍玩本ナリ、

脈訣虛數人述　局方發揮丹溪　格致餘論丹溪　外科精義德之　脾胃論東垣　辨惑論東垣　此事難知東垣　蘭室秘藏東垣　湯液本艸海藏王進之　溯回集魏博王安道

本ハ活板有、古板、新板ノ三種ナリ、

〔四庫全書總目一百四醫家〕內外傷辨惑論三卷〇中略　金李杲撰、杲字明之、自號東垣老人、

〔東洞先生遺稿中〕復宗梅諄書

向辱賜書、卽當作答、于時俗事紛冗、失敬於左右、多罪多罪、今又賜書、驚以開緘、因知貴兄近狀無恙、多幸多幸、夫醫道難獲也、不可以言語而論、在默而知之爾、且夫生死者、人之大節也、生既成、變則死、我若昏惑生死乎、則不能爲其治也、苟欲不昏惑生死、在篤信死生有命之義、能審此二者而徵之於己、則獲焉、若有少未決於此、則難乎其成之也、醫道難獲、於是乎可知已、蓋傷寒論、雖云仲景之作、雖云疾醫之道、後人僞入居半矣、大倉公以降、天下滔々皆陰陽醫也、不知疾醫之道也、故其所僞入者失古意甚矣、名傷寒論、或以六經分篇、或一病之上、冠以六經之名、或幷病合病、或痙濕暍篇、陰陽易篇、霍亂篇、是皆非疾醫之言也、況於其辨脈平脈傷寒例乎、況於其辨不可發汗諸篇乎、此皆僞入不可取者也、今欲學疾醫乎、扁鵲所謂視病之所在、而診病應見于大表、能知萬病唯一毒已、今般辱賜貴國名產、謂味嘗之、敢不拜大惠、它俟嗣音、

〔醫斷〕仲景書

仲景書、有傷寒雜病論、金匱要略、玉函經、其論傷寒及雜病、甚詳悉焉、然如要略玉函僞撰已、先生辨之、故不贅也、雖傷寒雜病論獨出于仲景、然叔和撰次之、加以己說、方劑亦雜出、失本色者往往有之、且世遐時移、謬誤錯亂、非復叔和之舊、不可不擇也、後之註家、皆爲牽強附會、不可從也、故先生之敎、其理鑿者、其說迂者、一切不取之、所以求其本色也、學者宜審焉、

〔醫宗仲景考〕傷寒雜病論、金匱要略方論の二書は、其原本一にして、今存る傷寒論は、傷寒雜病論の雜病篇を佚せるもの、金匱要略方論は、その傷寒篇を佚せる物なるが、古今億兆の醫人、その方法に從事して、醫藥の經典と尊奉するに、其撰者を張機字仲景と傳へ來つれど、史籍にその傳なき事を誰も甚く遺憾に思へるに、此頃その人を考得たり、其はまづ晉書列傳なる葛洪字稚川の傳に、洪尤好神仙導養之法、從祖玄、吳時學道得仙、號曰葛仙公、以其煉丹秘術授弟子鄭隱、洪就隱學、悉得其法焉、後以師事南海太守上黨鮑玄、玄亦內學、逆占將來、見洪深重之、以女妻洪、洪傳玄業、兼綜練醫術、凡所著撰皆精覈是非、而才章富贍云々と見え、（葛稚川の號を抱朴子と稱へり、是をもして其著せる子書の、內篇外篇を抱朴子と名けたり、今この書中に其子書と稱するもの、即その抱朴子なり云へり、）下に其著撰の目を擧たる中に、金匱藥方百卷、附後要急方四卷とあり、（中略）然るに雜應卷に戴覇とあるを、附後方には仲景と有り、今此を考ふるに、雜應卷に華陀といふ姓名にて記せるを、附後方序には、元化と云ふ字を書たるに準へ思ふに、仲景といふも、戴覇と云へる人の字とこそ聞えたれ、（そは稚川翁の文にして、かく相違ある事は、殊に深く心を止めて考ふべき事なり、華陀が字を元化と云しことは、史傳に見えて、人のよく知れり、）また稚川翁の本傳に、金匱藥方とあるを、雜應卷また附後方序に玉函方とあり、然れば稚川翁の撰べる百卷の方書は、かく二名を稱し、また二名を合せて、金匱玉函方とも稱して、其金匱てふ名は、戴覇字仲景が方書の古名を用たると聞えたり、（そは雜應卷に、戴覇が金匱と云ひ、附後序には、仲景金匱とあるにて論なし、）斷て其方書は、全書今傳はらず、今存る金匱玉函要略といふ書は、其金匱玉函方を、晉末に出たる、王叔和が要略せる書なり、（そは其書の始に、晉太醫令王叔和集と有にて所知たり、王叔和は稚川翁より後の人なることを、下に委しく論ふを見べし、）然

るに其要略せる本すら、久しく湮沒して、世に知る人無りしを、再び世に顯れたるは、趙宋の世になむ有ける、

〔醫宗仲景考附錄〕或人告て云く、或人この仲景考を見て、此は近く出たる金匱要略輯義といふ書に既に論じ置たる事なるを、簡胤が始めて考へ出たる如く云るは、腹ぐろなる事なりとて誹れり、いかに其輯義を見たまひつやと言ふに、己大きに驚き、その書かつて見たること無ればこそ、年ごろ此事にも心を止めて、かく考へ定めつるを、思ひきや既に同じ心に考へ定たりつる人の有むとは、早く其書を求め讀てこそと答へて、やがて其書を求め得て讀見るに、余が考へとは甚く異なり、唯その綜槩の條に、仲景金匱玉函、晃其目之所錄、晉書葛洪傳云、洪著金匱藥方百卷、據肘後方及抱朴子、自云、所撰百卷、名曰玉函方、則二者必是一書、由之觀之、金匱玉函、原是葛洪、所命書、卽唐人尊宗仲景者、遂取而爲之標題、以珍秘不出之故、著錄失其目歟、林億金匱玉函經疏云、錄仲景有金匱錄、故以金匱玉函名、取寶而藏之義也、案仲景金匱、他書無其目、唯宋本及兪橋本、趙開美本、林序後有一小序云、仲景金匱錄云々、僅出于此、予每疑之、然宋本已載之、則此必唐末作要略者所撰、其文原于肘後方序及抱朴子、味其旨趣、汎濫不經、亦是道流之筆耳と云ふ說と、彼の小序の所に、徐本刪之爲是、と云ふ語の有のみにて、余が考へと、同日に語るべき論に非ず、〇中略殊にその要略せる時代を、唐末と云へるは、更に據なき說なり、彼小序は、稚川翁の文なれば、固より道流の筆なるに論なけれど、味其旨趣汎濫不經なりとて、徐鎔が本に刪れるを是と爲られしは、輯義の撰者も、いまだ醫藥の道の、玄家に出たる事をば悟り得られざるが故なれば、論ふかぎりに非ずかし、然は有れど、金匱傷寒論ありし以來、和漢古今に、千萬づの醫學者の中に、肘後方序、抱朴子などを取出て論へるは一人も有し事を聞ず、然るに今唯この輯義のみ、此識あるは、いと希しき事議にぞ有ける、

〔本朝醫談〕汪機著益母草の條に、唐より渡りたる濟陰方といふ文あり、濟陰方も、月湖の作なり、延寶八年の飜刻あり、往年田澤仲舒が、全九集を校せし時、予其書に序して、月湖は本邦の人にして、錢塘に流寓したるといひしを、あからさまに錢塘月湖とあれば、邦人なりといふは、うけがたしといふ人あり、予全九集の文章、唐山人にあらざる句法を示し、今又濟陰方の序と、治驗とを、茲に舉て、唐山人の文にあらざるをしらしむ、月湖元來邦人なれども、著述は唐土にて印刻なりし故、唐より渡りたる濟陰方と、一禪師のいはれしなるべし、足利の代禪徒の海外におもむきし者多し、月湖も其頃の人なれば、遠く明國に遊び、醫もて彼地に行はれしなり、

〔續日本紀二十〕天平寶字元年十一月癸未、勅曰、如聞頃年、諸國博士醫師、多非其才、託請得選、非唯損政、亦无益民、自今以後不得更然、其須講經生者、略○中醫生者大素、甲乙、脈經、本草、針生者素問、針經、明堂、脈決、略○中並應任用、被任之後、所給公廨一年之分、必應令送本受業師、

〔續日本紀考證七〕大素、唐書藝文志、黄帝内經大素三十卷、甲乙、醫疾令義解、甲乙經十二卷、唐志同、脈經、醫疾令義解、脈經二卷、唐志黄帝流注脈經一卷云々、本草、醫疾令義解、新修本草廿卷、續紀延曆六年五月紀云、典藥寮言、蘇敬注新修本草、與陶隱居集注本草相檢、增一百餘條、亦今採用草藥、既合敬說、請行用之、式部式、凡醫生皆讀蘇敬新修本草、唐志神農本草三卷、雷公集註神農本草四卷、陶弘景集注神農本草七卷、蘇敬新本草二十卷、目錄一卷、蘇敬新修本草二十一卷、

〔延喜式典藥三十七〕凡醫讀醫經者、大素經限四百六十日、新修本草三百十日、小品三百十日、明堂二百日、八十一難經六十日、其博士准大學博士、給酒食幷燈油賞錢、凡大素經准大經、新修本草准中經、小品、明堂、八十一難經並准小經、

〔寛永系譜三百九十一〕秦

壽秀略○中

┌宗巴略○中

同略○天正十二年の春、馬氏が注する所の素問經を講ず、これより以前、本朝にいまだ此書を講

刊行校訂

する人あらず、其席に陪する輩、數百人あり、〇下略

〔文敎溫故下〕印板〇中略

醫家にては、大永の醫書大全を始とす、其跋曰、吾邦以儒釋書鏤板者、往々有焉、然未曾及醫方、惠民之澤、人皆爲鮮、近世醫書大全、自大明來、固醫家至寶也、所憾其本稍少、欲見而未見者多矣、泉南阿佐井野宗瑞、捨財刊行、彼明本有三寫之誤、令就諸家考本方以正斤兩、雖一毫髪私不增損、蓋宗瑞之志不爲利而在救濟天下人、偉哉陰德之報、永及子孫矣、大永八年戊子七月吉日、幻雲壽桂誌とあり、此書の印本、今存する者少からず、

〔本朝醫考中〕阿佐井宗瑞

宗瑞泉南人也、氏阿佐井、曾嗜醫術、其志在濟人、於茲使剞劂氏刊明本之醫書大全、徧爲致世人熟覽之也、請跋於東山釋月舟、載在幻雲藁、

〔享保集成絲綸錄三十五〕享保十五戌年三月

一東醫寶鑑と申醫書二十五冊、先生板行被仰付候、此度直段引下ゲ、上本一部ニ付七拾八匁、次本一部ニ付六十匁ニ貸渡候筈候間、望之者は可相調候、此段町中江可觸知者也、

三月

〔御本日記續錄下〕增廣太平和局方、十二冊、

按ニ、享保十五年十二月、前典藥頭橘親顯ガ序ニ、自古昔齎來于本邦幾希矣云々、國家尙慮其事之未備、切存惠民之餘德、命臣親顯等加校訂之事云々、粤索搜日光久能神庫之秘本、乃官私之諸本、殆得十有餘部云々、輯校苟完、謹以奉進之、重使臣親顯爲之序云々ト云々、又參考局方、並諸家本進目次ニ、日光山神庫一部、久能山神庫一部、官庫一部、以上三部、增註和劑局方、朝鮮刻本也トミユ、其他マタ明初ノ刻本ヲ引ケリ、今大路家譜ニ、式部大輔親顯、享保八年八月、久能山の御宮

神庫に收藏せし和劑局方を、親題所持の本と校合を命せられ、御淸書之事なれば、帝鑑之間にて、壹人校合す、同十四年十二月、和劑局方の號を奉りしにより、守重云、和劑局方の號を奉りしと云は誤なり、時服三を賜ふと見ゆ、按生憲右衞門直房家譜ニ、享保十二年十二月八日、和劑局方之儀御尋之節、兵庫鑑醫師中渡宗頭之書物之總中上候トアリ、明主ノ此書ニ曉々シ玉フ所以ノモノイカレリト謂フベシ、再按ニ、其久能山神庫ニ在トコロノ御本ハ、究メテ神君ノ御前本ナルベキカ、其證ハ延壽和方彙函ニ八ノ字御方ヲ載セタ云、專治男婦氣血兩虛、精神短少、脾胃不足、傳曰、斯方者、和劑局方無比山藥圓也、按ニ諸虛不足門ニ、無比山藥圓十二味ヲノス、東照宮、平素服餌之、蓄藏於藥筒第八層之中、是以侍御宮人稱八之字藥、自是流傳以世人通號、八之字云々、此事、又讓錄駿府御文庫本書林羅要ノ下ニ出ス、考フベシ、是八之字御方、此書ヨリ出タルト云說モアレバ、此御本亦御撿閱ノ事有シナルベシ、予又書テ是ヲ前ノ駿府町奉行某ニ聞ケリ、久能神庫ニ神君御親筆御書入アル醫書アリ、又御製藥ノ御道具アリト、和方彙函ニモ、神君藥丸東照宮袖下ノ藥アリ、均シク是醫書御撿討ヨリ出デ、本草綱目ヲ江戶ヘ進ゼラレシノ類、讓錄ニ出ス、ミナ書敎ノ深仁ヨリ致ストコロ、異朝歷代醫書ヲ勅撰セラレシモ、其仁意モト相同シク、享保醫書ノ官刻モ、能神意ヲ繼述シ玉フト云フベキナリ、

〔醫範提綱〕題言

一榛齋先生嘗ニ遠西名醫著ス所ノ人身內景ノ書數部ヲ譯定シ、集メ成シテ全部三十卷トシ、遠西醫範ト名ク、其中ヨリ全身諸物ノ名、及ビ官能ノ綱領ヲ述ベ、別ニ一卷トシテ、篇首ニ冠シ、醫範提綱ト名ク、凡ソ門ニ入リ業ヲ受クル者ニハ、先始ニ提綱ヲ授テ、內景ノ梗概ヲ示シ、又其間ヲ起シ、疑ヲ請ヲ待テ、餘義ヲ演ベ、要旨ヲ發シ、諄々トシテ誨テ倦ズ、漸ク人身ノ機關ニ通ジテ、一切ノ方技術モ、皆此ヨリ出ルト云ノ大略ヲ覺ラシム、既ニ大義ニ通ズレバ、次第ニ誘導シテ、本篇醫範ノ精說ヲ講ジ、覺ニ天造ノ實際ヲ窺ヒ、精微ノ壺奧ニ遡リテ、治療ノ機柄ヲ握ラシム、俊〈宇田川榛齋門人諏訪俊〉峯ニ敎ヲ門下ニ受ケ、親ク其節ヲ聞キ、コレヲ刀圭ニ試ム、今ニシテ和蘭ノ醫

法ニ於テハ、少シモ疑ヒナキコトヲ得タリ、蓋シ其法皆實驗ノ事蹟ニ本ヒテ、毫モ矯誣ノ鑿說ナシ、故ニ其精詳ナルコト、造花ノ秘賾ヲ探リ、萬物ノ究理ニ渉ルト雖モ、實測一軌ニシテ、虛轍ヲ設ケザレバ、條理井然トシテ、望洋ノ惑ヒナク、簡易捷徑ニ說キ示スヲ以テ、見ルニ隨テ解シ、聞クニ隨テ曉リ、群類ニ觸テ意匠長ジ、舊圈ヲ脫シテ活眼ヲ開ク、是ヲ以テ、駑才俊ガ如キモ、思ヲ費サズ、力ヲ勞セズシテ、結構ノ徑庭ヲ窺ヒ、年月ノ久キヲ積ズシテ、頗ル此道ノ概略ニ通ズルコトヲ得タリ、〇下略

〔日本洋學年表〕弘化四年丁未、二五〇七、一八四七、緒方洪庵亦病學通論ヲ譯述シテ、病因病證ヲ說ク、病理書ノ始タリ、

醫神

〔和爾雅 二神祇〕醫師神 大己貴命 少彥名命

〔日本書紀 一神代〕一書曰、〇中略 夫大己貴命、與少彥名命、戮力一心、經營天下、復爲顯見蒼生及畜產、則定其療病之方、

〔日本書紀 九神功〕十三年二月甲子、是日皇太后宴太子於大殿、皇太后擧觴以壽于太子、因以歌曰、虛能彌企破、和餓彌企那羅儒、區之能伽彌、等虛豫珥伊麻輸、伊破多多須、周玖那彌伽未能、等豫保枳保枳茂苫陪之、訶武保枳保枳玖流保之、摩莬利虛辭彌企層、阿佐孺塢齊佐佐、

〔奇魂 一〕醫藥名義 井醫風變化附本道辨

記紀なる神功皇后の御歌に、〇中略 少名御神は、卽醫藥の祖神にませば、言痛く論ふまでもなく、藥神と詔給意にて、取もあへず醫藥と云言の明徵也、是を記傳には、酒の首長と云意也と云、釋紀には、奇神也、私記曰、奇異之義也云々、私記曰、少彥名神是造酒神也、今有其遺跡云といはれたれど、若然らば、式の酒司坏に此御神を祭玉ふべきに、他神を祭られたる物をや、總て何にまれ、其群黨あるうへならでは、首と云がたかるべし、又神等は皆奇なるに、此御神のみ奇と云べか

らず、酒は素より造玉ひためれど、其も藥中の一物にこそあれ、打任せて酒造神と爲奉るべき事かは、上件の說等の如にては、久志の神を殊更に歌出し玉ひしは徒事となりぬべし、是は專ら皇太子の御成長を祈給ふ頃なれば、御歌の意は、此酒は我酒に非ず、藥神の物し玉へる藥酒なれば、聞食て御恙なく、常磐に牽坐と禱ひて賀玉ふ也、されば尋常の酒もあれど、藥神の領玉ひて、藥とも成べき御酒ならでは、えあらぬわざ也、

〔嬰桂偶記二〕祭神農

靜居錄曰、八月朔、古人以此日爲天醫節、祭黃帝岐伯、本邦醫家以正月八日祭神農、蓋原于醫師如來結緣日〈藥師瑠璃光如來、一佛一神日來歸之、職師嘱、江文大明神、以八日爲緣日〉、可笑之甚也、大己貴命、少彥名命、爲本邦醫藥之鼻祖、而醫家不祀二神者、蓋由無道渕及今日者、惜俄其方法之亡、世傳大同類聚方抄本安部眞貞奉勅所撰云、近浪華木〈村蒹葭堂〉孔恭鐫行、內有神農方者、古云、盡信書不如無書、余於此篇亦云、

〔紹述先生文集記五〕先醫祠堂記〈○中略〉

昔吾先王之敎國也、祭祀有式、群事有官、不唯奉其先宗廟社稷、而釋奠之禮亦取之于唐氏、而先醫之祀闕焉、於是醫而欲報其先者、茫乎無所之、情之懷也、皆散而歸于醫王者近、儒者徒以非其鬼而斥之、不知不爲之區處、則必不能不歸于此焉、南森良意氏世醫也、家藏炎帝氏畫像、漢工所刻也、將控于官宇而奉之、且戰城東小野紀一小堂而安之、有權可以度者、有圖可以懷藥、蓋爲之兆也、吾想、凡天下之方劑爲生民之利者、不可勝言、非古有聖人者廣資衆智以貽其神術于後世、則其孰能與焉、然則推功于炎帝氏、而使天下爲醫知報本之所者、良意氏之仁也、今既爲之所矣、吾知人知所當求而柄祠之人不能不因而成之也、若夫觀堯唐壽懲之說而加之堯舜孔子道、則吾固知良意之不爲也、因記以附之云、

〔采恵漫錄下〕神農祭幷醫祖神

鍼灸

此邦の醫者、毎年冬至の日に當れば、神農祭と稱し、赤豆餅、赤豆飯、又は酒肴盛饌の具を調へ、親戚交友を集め、賀宴する事、常例となれり、

〔新猨樂記〕九御方夫、右近衞醫師和氣明治也、毒藥之道分別、術方之計無極、看病療疾之佛也、遣針灸治之神也、知六腑五臟之胗脈、探四百四病之根源、順方治病、任術療疾、擣簁合藥、搗抹㕮咀之上手也、不異於耆婆醫王、相同於神農鶣鵲、彼雪山童子之日日採草、蓬萊方士之年年拾藥、只聽名無益乎、

〔徒然草上〕人の才能は、文あきらかにして、聖の敎を知れるを第一とす、〇中略次に醫術を習ふべし、身をやしなひ、人をたすけ、忠孝のつとめも、醫にあらずは有べからず、

〔攝心本方一〕扁鵲六不治

驕恣不論於理一不治也、輕身重財二不治也、衣食不能適三不治也、陰陽並藏氣不定四不治也、形羸不能服藥五不治也、信巫不信醫六不治也、

〔技癡錄二〕貴者難療

貴者有疾尤爲難療、郭玉對和帝言有四難焉、見于後漢書、余謂、貴者難療、其由豈止四、衆人僂和而醫令不行、婦人執事而將息失度、藥則先適口而不要利病、方則專補益而忌疏瀉、並皆其所以爲難療也、且夫君上豐膝於深宮之中、氣血抑遏、無從疏通、寘身於溫柔之鄕、劉裏過寸、罔省節制、五鼎八珍餖飣于前、重幄密幃煖罨于後、無一不爲疾病之資矣、其既然矣、以是賢君擧醫知顧生之道者、以任之獻替、此謂之治未病也、

〔先哲叢談後編七〕金峩〇井上有病、家人進藥、金峩有難色不嘗、至病稍重、家人及子弟苦進之、金峩笑曰、漢世之人有言、曰有病不治、常得中醫、醫術之難古猶如此、況於後世乎、我病而不服藥、猶勝於得當今之上醫矣、

〔紫芝園漫筆二〕醫道難明、醫書難讀、素靈難經、先秦古書也、非知古文辭不能讀也、臟腑之玄奥、脈理之

精微、病情之難得、治法之多端、苟非致思不能入其肯綮、人命所懸、其豈可以小技輕之乎、世之業醫者、率不讀書、其能讀書者、多爲儒者流而不屑爲醫、噫夫世之無良醫、不亦宜乎、

〔醫塾策二〕醫在務本論〇中

夫肄醫者、初學素問靈樞三年、通其大義、臟腑經脈之微、運氣之機、病邪之因、鍼灸之法、盡于此焉、次學本草二年、辨性氣味補瀉溫涼、盡于此焉、次讀張長沙及劉張李朱之書二年、傷寒內傷雜病諸科盡于此焉、而更互紬繹、融會貫通、醫之大本可知矣、次閱友相會、表出古人醫案切於今病者、各書一紙、互問此證名狀奈何、此病治方奈何、默計熟察而詳對之、考其辨證處治與古人合否、以自求其所不至、日錄月鍛、如是一年、而後初可臨病家、歷經效驗、而卒得療術之蹊路、而後從來所講習所積思、自然奮發、泛應曲當、探賾鉤深、辨疑解紛、無所治而不適中、庶幾乎臻盧醫之群、譬如材木有餘大廈乃成、輜重足而三軍易從、其學未熟、懷其貪施、急求功效、假令偶中、君子之所恥也、不自修而治人、不揣稱而求祿、是謂其本亂而末治者否矣、易曰、公用射隼於高墉之上、獲之无不利、聖人曰、隼者禽也、弓矢者器也、射之者人也、君子藏器於身、待時而動、何不利之有、後世奔競之徒、今日見一二家方書、明日稱醫施藥、不爲渠見誤者幸而已、且夫將大有爲者、必伸於久屈之中、發於持滿之末、如良將之用兵、多類于是、王翦攻荊、堅壁而不肯戰、荊兵數挑終不出、日休士撫循之、久而一舉大破之、今學醫者厚積十年、可以稱醫矣、蓋氣質之性有利鈍、故成器有遲速、利者不得十年、鈍者或倍之、是故成器先後存乎性、廣濟衆病存乎精、爲天下所重存乎命、醫豈易道哉、

〔療治茶談三〕初學治療ノ才ヲ長ゼント思ハヾ、必ズ抄書ノ業ヲ務ベシ、抄書トハ、俗ニ云フヌキガキノ事ナリ、其法、先一小冊子ヲ作リ、方彙ノ如ク、各病名ノ部門ヲ分チ定メ、平日之ヲ座右ニ置キ、書見ノ毎度、要語奇方ニ遇ハヾ、俗書抄藥等ノ嫌ヒナク、少シモ治療ノ助ニナルベキ處ハ、悉ク彼ノ冊子ニ抄寫スベシ、疝氣ノ方ヲ得バ疝氣門ニ、頭痛ノ要語ニアハヾ頭痛門ニ書入ルベシ、而其出

書ハ、勿論紙ノ丁數ヲモ悉ク書記スベシ、譬ヘバ、氣鬲ハ口鼻中氣息也、東醫寶鑑雜病篇六十丁ト記スノ類是ナリ、是他日其全書ヲ見タキ時、搜索ニ便ゼンガタメナリ、其中要論ノ長文ナドハ、ヨキホドニ、上中下ノ文義ヲ通ズルマデニ、截割シテ記スベシ、而冊子ノ仕立ハ、隨分トテイネイニ裝修スベシ、裝修嚴ナル時ハ、之ヲ掌上ニアゲテ自宅ノ觀美トモナリ、之ヲ高閣ニ束テ、吾ガ心目ヲ悅シメ、自其業モ永ク廢レズ、作者ノ苦心モ永ク傳ル等ノ益アレバナリ、此抄書ノ業、精事久シキニ從テ冊子ノ卷數モ增スナリ、此冊子ヲ取テ、治療閒暇ノ會ニハ、必ズ亦之ヲ讀ベシ、又治療ノ間ダ難病奇證ニ臨ミ、若シ此ノ冊子中ニ於テ、思ヒ中リタル奇方要論アラバ、親シク之ヲ其病人ニ就テ試ミテ、効ヲ奏スル事三人以上ニ及ブ時ハ、是眞ノ經驗トイフ、此經驗ノ事ヲバ、又別ニ國字ニナリトモ、文ニナリトモ記シ置、之ヲ人ニモ傳ヘ、世ニモヒロメテ、人ノ治療ノ助トナスベシ、是ヲ眞ノ濟世ト云フ、凡ソ抄書ノ業ヲ、三年ガ間ダ怠慢ナク黽勉刻苦テ務ルトキハ、必ズ名手良醫ノ名譽ヲ得ン事、更ニ疑ナシ、其故ハ總テ日課ノ益ヲ得ル事、毎日十條ヅヽニシテモ、一年ノ益ヲ數ルニ三千六百條、三年ヲ通計スレバ、一萬八百條ナリ、一日ノ課業十條ヲ度トセンニハ、甚ダ輕キ事ニテ、讀書ニ耽ル者ハ、朝食ヲ終フル間ニモナルベキ事ナリ、然レドモ人ノ性ニ利鈍アリ、讀書ニ好不好アリ、其外飲食病災世應交義ノ爲ニ、ヨリドコロナク日ヲ空クスル事アリ、彼此ヲ平均テ、其半ヲ減ジ、毎日ノ詔益五箇條ヅヽト見テモ、三年ノ益スル所ヲ通計スルニ、五千四百條ナリ、スベテ和歌ニテモ、詩ニテモ、三千首以上ヲ記誦スルトキハ、必ズ其道ニ通達セラルト云フ、何ゾヒトリ醫事ノミ然ラザランヤ、予〇津田玄仙三十ノ頃ヨリ、此課業ヲ思ヒ立テヨリ以來、四十八ノ今年マデ、抄出ヲ怠ラズ、卷數既ニ百卷ニモ及ベリ、其ニツイテ、治療ノ手談モ、一年ニ一年ヨリモ大益ヲ得ル事、身ニ覺ヘ心ニ徹シテ知ラルヽナリ、

〔日本西教史上〕日本國紀事〇中略

牧師マルチニユス氏及ビ其他ノ著書家云ヘラク、日本ノ醫道ハ支那ニ出タリト、醫師ハ病者ニ問フコトナク、唯半時許診脈シテ、脈動ト病ノ經過ニ因テ病源ヲ判ス、此國ニハ藥室アルコトナシ、醫師ノ僕、小サキ藥籠ヲ持チ、之ニ從フ、藥籠ノ中ニハ、十二箇ノ抽斗アリテ、四十四ノ藥嚢ヲ容ル、各種ノ草木及ビ乾藥ヲ充實ス、醫師ハ此内ヨリ應用ノ物ヲ調合シ、之ヲ混交シ、病者ノ家ニテ之ヲ煎ズ、又熱病ニ小サキ鋭利ナル金針ヲ病者ノ皮膚ニ六ケ所モ刺入シ、之ヲ療治スルアリ、此法支那ニモアリ、又大病ニハ病者ノ皮膚二十箇所以上モ灸スルコトアリ、小ニシテ燃ヘ易キ乾艾ヲ丸メ、之ニ火ヲ點ズ、燃ヘ了テ灰トナリ、之ヲ除ク時ハ、其燒キシ所黑痕ノ生ズルヲ見ルナリ、

〔近世叢語二術〕下田大園堂醫謂曰、方技之士、與儒者異矣、身不顯者、以其術拙也、而以遇不遇自諉、可笑之甚、人之爲技豈有時乎哉、

古事類苑

方技部十四

藥方

藥ハ、草根、木皮、砂石、鳥蟲ノ類、及ビ是等ノ産物ヲ以テ製シタルモノニシテ、人ノ疾病ヲ療スルモノヽ總稱ナリ、神代ノ時、神產巢日之命ノ、蚶、蛤ヲ用ヰテ大穴牟遲神ヲ蘇生セシメ、又大穴牟遲神ノ、稻羽ノ白兎ニ、蒲黃ヲ以テ瘡創ヲ療スルコトヲ敎ヘシガ如キハ、我史上藥方ノ初見ト謂フベシ、

藥園ハ朝廷所用ノ藥種ヲ植ウル所ニシテ、王朝時代ニハ典藥寮ニ屬シ、藥園師、藥園生、藥戸等アリテ、後世ハ、京都ニ鷹峯御藥園ナルモノアリテ、此ヨリ朝廷所用ノ藥種ヲ進獻ス、德川幕府モ亦所々ニ藥園ヲ設ケ、本草家ヲシテ、廣ク藥性藥方ヲ研究セシメ、其業甚ダ盛大ナリキ、

牛乳ハ、古來主トシテ藥用ニ供セラレシモノニシテ、往時朝廷ニハ乳牛院アリテ、乳長上以下ノ職員ヲ置キタリ、又古クヨリ諸國貢蘇ノ事見ユ、蘇トハ酪ノ類ニシテ牛乳ヲ煎煉シテ製セシモノヽ名ナリ、乳牛ノ飼養ハ、中世一時中絶シタリシガ、德川幕府ニ至リテ再ビ之ヲ起シ、廣ク民間ノ用ニ供スルニ至レリ、

藥種ハ我國ニ生ズルモノヲ倭藥ト云フ、而シテ支那ヨリ舶載スルヲ唐藥ト云ヘリ、草藥中、後世最モ珍重セラレタルハ人參ニシテ、特ニ朝鮮ノ產ヲ貴ベリ、又廣東ヨリ舶載スルモノアリ、其價廉ナルヲ以テ多ク世ニ行ハル、又我國ニ產スルモノモアリテ、其產地ニ由リテ、吉

名稱

野人參、薩摩人參ナド稱セリ、藥種ハ往時諸國貢租ノ一ニシテ、朝廷ニテハ典藥寮ヲシテ、此ヲ丹膏丸散等ノ諸藥ニ製セシメ、以テ諸司ノ用ニ供シ、又疫癘流行ノ地方ニ賜ヒテ、濟世惠民ノ一端ト爲シタリ、德川時代ニモ亦賜藥ノ恩ヲ施シタル例アリ、凡ソ製藥ニハ丹、膏、丸、散、湯、煎等ノ別アリテ、種類極メテ多ク、其方劑ニハ家傳ト稱スルモノアリ、又寺院神社等ニモ特種ノ藥法ヲ傳ヘ、神佛ノ夢想ナド號シテ之ヲ製スル所甚ダ多カリキ、

本草ハ草木ヲ始メ、金石其他一切ノ庶物ヲ辨識シ、其藥性ヲ考ヘ、藥劑ノ製方ヲ研究スル學術ニシテ、德川時代ニ至リテ大ニ發達シ、醫術ノ進歩ヲ助ケシコト少カラズ、而シテ藥品會等ノ起レルモ亦此際ニ在リキ、

〔運歩色葉集 久〕藥(クスリ)　〔同 和〕倭藥

〔倭訓栞 前編 久入〕くすり　藥をいふ、草する也、藥の字、草に從ふも同じ、諸藥の內に、草尤多し、よて藥錄をも本草といひ傳へり、

〔箋注倭名類聚抄 四 藥酒〕藥　說文云、藥、治レ病草、素問藏氣法時論注云、藥謂二金玉、土石、草木、菜菓、蟲魚、鳥獸之類一、皆可三以祛レ邪養二正者一也、昌平本、下總本有二和名二字一、按、古謂レ酒爲二久志一、古事記神功皇后御歌、久志能加美、應神天皇御歌、許登那具之、惠久具之、皆是、久須久志通音、利是活語耳、以二藥與一レ酒其功用同、其名亦同也、廣本無二是條一、

〔奇魂 一〕醫藥名義 井醫藥變化 附本道辨

病を愈す動植をくすり(。。。)と云、原義は令和(ナグシ)の意也、其は神を和(ナゴ)し、人を和(ナゴ)め、風の和(ナギ)、波の和(ナギ)などの和にて、其詞の活用は、自のかたは、ながん、なぎ、なぐ、なげにて、體言になればなぎなり、物を然するかたは和(ナグ)さん、なぐし、なぐす、なぐせにて、體言になれば、なぐし也、名越祓と云も、こ、く(音通)、神を和し奉る也、夏越と云は俗說なり 拾遺集に、さばへなすあらぶる神もをしなべてけふはなごしのはらへなりけり、

とある頃にて、病を令和るをも、斷植にまれ、法術にまれ、何にても淀くなぐしといへりと見えたり、(中略)記紀(○註略)共に記せる應神天皇の御歌に、須々許理賀、邇美斯美岐邇、和禮惠比邇祁理、許登那具志、惠具志爾、和禮惠比爾祁理、(○註略)とある、この具志も、事和藥、咲藥と云意にて、事和藥咲藥なる藥酒に醉けりと詔玉へる也、

〔隨意錄 七〕藥石之義、宋貴文、覺屬閒評云、藥固無可疑者、石則砭石也、古者以石爲針云々、今謂、此說不可、然也、砭石者古制瘍疽之具、而與針不同歟、故古語多曰、痤疽砭石、左傳曰、季孫之愛我疾疢也、孟孫之惡我藥石也、美疢不如惡石、夫石猶生我、按此傳文、藥石非二物、藥石則藥石、而石之可以爲藥者多歟、後醫所用猶有滑石、膏礦石、礬石、石膏等、

〔運步色葉集 異〕藥方。

〔古事記 下允恭〕爾御調之大使、名云金波鎭漢紀武、此人深知藥方、故治差帝皇之御病、

〔古事記傳 三十九〕藥方は、久須理能美知と訓べし、(方は和那と訓べし)書紀神代卷に、定其療病之方、(此方をば、ミチとも訓れど、然は訓べくしもあらず、)さて知藥方とは、藥を用ひて、病を治むる術を知れるを云なり、(醫を藥師と云も是なり、)(漢國の醫書どもに、藥品を合せたる方を藥方と云とは異なり、)書紀天智卷に、百濟の人どもの中に、解藥と注したるあるに同じ、

〔古史傳 十八〕定其療病方、療字を、舊く倉佐牟と訓るも惡からねど、(其は續紀四の詔に、御病欲治、また廿九の詔に、御病平治賜比なども有ればなり、)久須々流と訓べし、舊訓を集めたる玉篇に、然る訓の有ればなり、(此は己に若き時に、下に注せる久須理の考を書て、其事を久須々流と訓まほしき由を、信友に語りしかば、彼に見出て、會證せたるなり、)然るは、まづ久須里と云語は、いさゝかも古語の樣を知たらむ者は、藥師の術、また藥の病を治むる事は、奇異なる故に、其物を久須理と云ひ、其を以て病を療す人を、藥師と云ならむとは、誰も思ひ寄ことながら、久須理は久須流てふ活語の體語になれるにて、本は貼傳ることの古言なるを、皇國にて、藥を用ふること、貼るより

始れる故に、其を名に負せたるにて、古は久須理とも、久須泥とも云けむと所念ゆ、今も物を指貼ることを、久須理貼るとも、許須理貼るとも云めり、また久須具流と云語も、體に指をすり付る狀など由有げなり、然るは、本草和名に、石斛者山精也、又石精也、出神仙服餌方和名須久奈比古乃久須禰、一名以波久須利とあり、和名抄にもかく有りて、石斛石草之名也、圖經云、五月生苗、莖似竹節、七月開花、十月結實と云へり、今は古きに依て、本草和名を引きつ、これ久須禰とも、久須利とも云る證なり、須久奈比古乃久須禰とは、少毘古那神の藥と云ことにて、諸藥この神の御靈に賴ざるは有まじき中に、此藥は、殊に用給へる故に、當昔よりかく名を負るならむ、以波久須理と云は、此草はも、石斛、山精、石精など、漢人も名けたる如く、岩に著て生る物なれば、久須理と云は、貼る義なる故に、かく名を負るか、岩に生て久須理に用ふる物なる故にいへるか、何れに見ても、久須理、久須禰、同言とは通えたり、

〔奇魂二〕藥方○中略

彼土○漢も、いと古は病あれば神に祈り、あるは移精變氣などいひて、此の禁厭の如きわざをし、はた內經などを見るに、主と鍼して、萬病を治て、藥のむわざはいと稀也けるを、漢の比、仲景などよりぞ、專ら藥を飮するわざと成にける、是に因て、後世、醫に方の出來し也、今此の人○日本人の假初の病にも藥するは、彼の風に化たる也、さて漢のは、其藥は、其經に入など虛言しつゝ、許多の品を配合めるは誤也、又一品一能もて配合法に拘らぬも偏也、神代にすら、さばかり法の有しにはあらずや、

初見

〔古事記上〕其八十神、各有欲婚稻羽之八上比賣之心、共行稻羽時、於大穴牟遲神負佩、爲從者率往、於是到氣多之前時、裸菟伏也、○中略於是大穴牟遲神敎告其菟、今急往此水門、以水洗汝身、卽取其水門之蒲黃、敷散而輾轉其上者、汝身如本膚必差、故爲如敎、其身如本也、

〔古事記傳十〕蒲黃、和名抄に、唐韻云、蒲草名、似藺、可以爲席也、和名加末、陶隱居本草注云、蒲黃蒲花

注令

上黃者也、和名加末乃波奈、(此黃は、花上の黃粉なるを、直に波奈と云るは、此方にては、別に黃粉の名は無くて、其をも花と云るなるべし、さて漢籍にも、蒲黃にら汁、血汁、瘀血とするには、本此神の靈に賴て、上代よりふかつたへしものなり、今人は、加を用賀瘀といへど、凡て類を塞ぐ云無し、今も蒲生など云地名などは蒲を以て、古をしるべし、○中略、)
如本也は、本之如爾爲佐と訓べし、此藥方の物に見えたる始なり、

〔古事記 上〕於是八上比賣答八十神言、吾者不聞汝等之言、將嫁大穴牟遲神、故爾八十神怒、欲殺大穴牟遲神、共議而、至伯伎國之手間山本云、赤猪在此山、故和禮(此二字以音)共追下者汝待取、若不待取者、必將殺汝云而、以火燒似猪大石而轉落、爾追下取時、即於其石所燒著而死、爾其御祖命哭患而、參上于天、請神產巢日之命時、乃遣𧏛貝比賣與蛤貝比賣、令作活、爾𧏛貝比賣岐佐宜(此三字以音)集而、蛤貝比賣持水而、塗母乳汁者、成麗壯夫(訓壯夫云袁等古)而出遊行、

〔古事記傳 十〕さて此の方は、まづ世間に常に萬の傷に、母の乳汁を塗て愈す方ある故に、(此法、上代にしはら爲しにとなるべし、)今蛤貝の水を、其如くに塗と云意なり、故知志汝登と訓べしとは云なり、うつぼ物語俊蔭卷に、紅葉の雫を乳ぶさとなめつゝありふるに云々とある登に同じ、(萬葉十四に、信濃なるちぐまの河のさゞれしもきみしふみてば多麻等比呂波牟、この等も同じ格なり、)そは、蚶貝の焦粉を、蛤の水以てときて、母乳汁を塗如くに塗しなり、さて字本岐佐と云名は、母貝の約りたるにて、(さるを字本岐の貝と云は、後の混雜なり、)今かく母乳汁の如く塗て、功をなせしに因て負へるなり、さて右の二貝比賣のこと、上に云る外に今一の考あり、そは直に介蟲を謂にはあらで、尋常の神にても有なむ、若然らば、蚶貝比賣蚶貝を、岐佐宜焦而蛤貝比賣蛤貝の水を持てと云ことなるを、神名にゆづりて、その用ひたる貝名をば、共に略けるなり、是るも一の文なるべし、さて然二の貝を用て功をなせしに因て、其貝の名を以、其神名にも稱しなるべし、

〔律疏 職制〕凡合和御藥、誤不如本方、及封題誤者、醫徒三年、(謂、合和御藥、須先處方、依方合和、不得差誤、若有錯誤、不如本方、謂分兩多少、不如方法)料理簡擇不精者杖六十、(料理、謂應熬削洗漬之類、簡擇、謂之類、合成、仍題封、其上注藥遣、驗冷熱之類、并寫本方、俱遣者誤不如本方、及封題誤等、但一事有誤者、醫御合徒三年、)

謂去惡留善、皆須精細之類、有不精者杖六十、未進御者、各減一等、謂應徒者從徒上減、應杖者從杖上減、是名各減一等、監當官司各減醫一等、謂依令合和御藥、中務少輔以上一人、共內藥正等監視、除醫以外、皆是監當官司、並於已進未進上各減醫罪一等、餘條未進御、及監當官司並准此、謂下條造御膳御幸舟船乘輿服御物、但應供奉之物未進御者、各隨輕重減一等、監當官司又各減一等、故云並准此、

〔政事要略 七十 糺彈雜事〕雜律云、醫爲人合藥、及題疏針刺誤不如本方、殺人者徒一年、其醫師爲人和合湯藥、其藥即有君臣分兩、題疏藥名、注冷熱遲駛、并針刺等、錯誤不如今古藥方及本草、以故殺人者、醫合徒一年、若殺親屬尊長、得罪輕於過失者、各依過失殺論、其故不如本方、殺傷人者、以故殺傷論、減一等、謂、故增減本方、不依舊注、殺傷人者、其尊卑長幼貴賤並依故殺傷本法、減一等、雖不傷人、笞卌、謂、不如本方、於人無損者、不論尊卑貴賤、同科笞卌、即賣藥不如本方、殺傷人者亦如之、謂、非的爲人療患、尋常賣藥、故不如本方、雖未損人、合笞卌、已有殺傷者、亦依故殺傷法、減一等、故亦如之、

〔法曹至要抄 上 罪科〕一醫違方事

雜律云、醫爲人合藥、及題疏針刺誤不如本方、殺人者徒一年、疏云、不如本方、於人無損者、不論尊卑貴賤同笞四十、詐僞律云、醫違方詐療病而取財物者以盜論、

按之、醫師爲人和合湯藥、其藥即有君臣分兩、題疏藥名、或注冷熱遲駛、并針刺等錯誤不如今古藥方及本草、以故殺人者、醫合徒一年也、又違背本方、詐療疾病、率情增損、以取財物者、計贓以盜論其罪、

〔律疏 賊盜〕凡以毒藥藥人、及賣者絞、即賣買而未用者近流、謂、以鴆毒、冶葛、烏頭、附子之類、堪以殺人者、將用藥人、及賣者知情、並合科絞、即賣買未用者、謂買毒藥擬將殺人、賣者知其本意而未用者近流、雖毒藥可以療病、買者將毒人、賣者不知情不坐、謂、雖毒藥可以療病、買者將以毒人、賣者不知毒人之情者、賣者不坐、若犯尊長者、各依謀殺及已殺法、知其施於卑幼、亦准謀殺已殺論、如其藥而不死者、並同謀殺已傷之法、魚肉有毒、曾經病人、餘者速禁之、違者杖九十、謂、曾經人食爲魚肉所病者、餘速即焚之、恐人更食須絕根本、故與人食并出賣令人病者徒一年、謂、知前人食已得病、故將更與人食、或將出賣、以故令人病者、以故致死者絞、即人自食致死者、從過失殺人法、謂、魚肉有餘不速焚之、雖不與人、其人自食、因即致死者、從過失殺人法、徵銅入死家、盜而食者不坐、謂、人盜竊而食以致死傷者、魚肉主不坐、仍科不速焚之罪、其有害心、故與尊長食、欲令死者、亦准謀殺論、施於卑賤至死、依故殺法、

〔御定書百箇條〕毒藥并似せ藥種賣御仕置之事

享保七年極
一毒藥賣候もの　引廻之上獄門
從前々之例
一似せ藥種賣候もの　同斷　死罪

〔御當家令條二十二〕天和貳年五月日

條々

一毒藥幷似せ藥種賣買之儀、堅制禁之、若於商賣仕者、可被行罪科、たとひ同類たりといふとも、訴人に出る輩者、急度御褒美可被下事、中略

右條々可相守此旨、若違犯之族於在之者、可被處嚴科者也、仍而下知如件、

天和二年五月日

〔譚海十四〕毒藥に類したる物數品有、皆彼國には商賣せず、病により用る事有時は、何の病に用るよし、一札を出し、藥種屋にて調濟、賣渡す事なり、

〔憲教類典四ノ十一〕明和四丁亥年閏九月十六日

松平右近將監殿
松平攝津守殿　御渡

大目付
御目付江

唐和明礬賣買之儀、江戸、京、大坂、堺四ヶ所會所におゐて、可令賣買旨、寶曆五亥年、同十辰年、右四ヶ所町中相觸候處、今以諸國出明礬、於國々賣買いたし、會所江不指出趣相聞候ニ付、自今以後、諸國出明礬之分、右四ヶ所之内、最寄之會所江差出、賣渡可申候、四ヶ所會所之外にて、諸國明礬之分賣買致間敷候、尤只今迄商人共貯置候明礬於有之候は、右會所江可賣渡候、若心得違於有之之者、咎可申付もの也、

右之通り、御料者御代官、私領者領主地頭より可觸知者也、

閏九月

右之通、可被相觸候、

明和五戊子年六月廿二日

松平右近少監殿
松平攝津守殿　御渡

大目付
御目付　江

此度於長崎、龍腦和製被仰付候間、持渡り同樣可致通用候、依之別紙名面之通於長崎表、唐和龍腦座相建、江戶京大坂三ヶ所取次を定、改め印形いたし可賣渡候、尤藥種、香具屋座賣龍腦買請、小賣いたし候義は、可爲勝手次第事、

右之趣、國々江可觸知者也、

子六月

〔大成令 六十七 藥種〕寶永元申年八月

一辰砂商賣之儀只今迄、朱と辰砂紛候而致商賣候故、朱之商賣を妨候間、向後藥種屋に而、辰砂商賣相止、前々之通、生之辰砂計賣可申候粉に致拵候辰砂は、彌以致商賣間鋪候、長崎に而は、朱辰砂ともに、不殘朱座江買取候間、自今以後、生之辰砂藥種屋に而賣候儀も、朱座より生之辰砂を買取、小賣は藥種屋に而も可仕候、且又只今迄、藥種屋に有之候粉にいたし拵候辰砂之分は、員數書付朱座江可差出候、但持合候生之辰砂も朱座江一通り改を請可申候、

右之通被仰出候間、可相守者也、

八月

〔西宮記臨時五〕諸院　藥園典藥別所

〔續日本後紀仁明八〕承和六年八月辛酉、以東鴻臚院二町、充典藥寮爲御藥園、

〔延喜式典藥三十七〕凡山城國地二町、在葛野郡十三條水谷下里、四至東限山、南限總山谷、西限半、北限辛河合、永爲殖供御地黃地、

〔令集解職員五〕典藥寮略○中

藥園師二人、謂、藥園師、令以時收採藥園也、生者以時種、仮種植之法耳、私醫疾令云、凡藥園、令師檢校、仍取藥生、教讀本草、辨識諸藥、并採種之法、隨近山澤、有藥草之處、採掘種之、所須人功、役丁戶、掌知藥性色目、謂、本草爲氣、味辛苦之類爲性、色名謂烏頭附子之類、古記云、問、藥性色目何、答、藥性、謂辛苦之類也、色謂白黑之類、目謂名也、如烏頭附子之類、古記問、御藥者何、答、種採藥園諸草、及教藥園生、藥園生六人、掌學識諸藥、使部廿人、直丁二人、略○下

〔延喜式式部十八〕凡藥園師乳師等限六年爲限、遷替之日責其解由、

〔唐六典太常寺十四〕太醫署

藥園師以時種蒔、收採諸藥、

京師置藥園一所、擇良田三頃、取庶人十六已上二十已下、充藥園生、業成補藥園師、略○下

〔延喜式式部十八〕凡藥生十人之中、五人取白丁、簡擇補之、五人用入色、

〔延喜式式部十八〕凡藥生等雖不奉試、而習合藥療治者、侍醫等共舉申省、任國醫師、

〔延喜式典藥三十七〕勸學田十八町略○中

五町大和國

右以其地子、充藥生等食、

〔令義解職員一〕典藥寮略○中　藥戶クスリベ

〔令集解職員五〕古記云、及釋云、別記云、藥戶七十五戶、經年一番役、卅七丁、乳戶五十戶、略○中右二色人

等爲品部、免調雜徭、

〔延喜式 典藥 三十七〕年料雜物

鍬廿五口 廿口藥園

〔雍州府志 土產 六〕今考之、倭藥有古有而今無之者、王不留行、鼈甲、牛酥之類是也、又有古無而今有之者、當歸、川芎、茯苓之類是也、斯外所々種之者不可勝而計之、且寬永年中、臨峯相攸置藥園、南北二箇所、使和氣氏幷丹波氏兩家醫生二人各守一方、

〔京都御役所向大概覺書 六〕醫師儒者之事附鷹峯御藥園幷御藥種獻上之事

御切米高渡り方ハ、二條御藏一件ニ有之、

一御藥園總屋敷 東西八十間 南北七十間 鷹峯住宅 御藥園預り 藤林道壽

内

六拾間四方、御藥種畑之分、　五十間ニ十五間ハ 中間十人居屋鋪、一人ニ付五間ニ十五間宛、　十間ニ十五間ハ、小頭一人居屋鋪、　二十間四方、自分拜領地、

右之外、總廻り竹藪に而有之候、

御藥獻上目錄

一當歸、三斤、　一芎藭、三斤、　一川芎、一斤、　一地黃、半斤、　一白朮、三斤、　一藿香、二斤、　一紫蘇、一斤、　一桔梗、一斤、　一山梔子、三斤、　一獨活、一斤、　一羌活、三斤、　一前胡、二斤、　一白芷、二斤、　一香木、三斤、　一黃精、三斤、　一大黃、三斤、　一天門冬、三斤、　一地楡、一斤、　一知母、二斤、　一三七、二斤、　一薏苡仁、一斤、　一萆薢、一斤、　一香附子、三斤、　一決明子、二斤、　一菁葙子、一斤、　一紫蘇子、一斤、　一白牽牛子、二斤、　一黑牽牛子、二斤、　一蓖麻子、二斤、　一馬兜鈴、一斤、　一苦參、二斤、　一玄參、一斤、　一香薷、一斤、　一白扁豆、二斤、　一萹蓄、半斤、　一茵蔯、一斤、　一澤蘭、一斤、　一菁蒿半

斤、一益母草、一斤、一菴䕡、一斤、一中膝、一斤、一商陸、一斤、一合歡、半斤、一茴香、半斤、一防風、半斤、一黄栢、半斤、一忍冬、半斤、一良姜、半斤、一青花、拾兩、一石菖蒲、十兩、一山藥十兩、一續隨子、半斤、一五味子、半斤、一枳殼、半斤、一何首、半斤、以上五十五味、都合七十六斤十兩、

右者、禁裏法泉寺御所江御進獻之御藥種、毎年極月中旬、日限差圖有之、所司代江被遣上候由、

〔江戸名所圖會十三〕御藥園　同所(○白山神社)の西南にあり、所謂白山御殿の舊地是なり、

〔府内備考四十小石川一〕御藥園

御藥園は、白山御殿の舊地なり、初寛永十五年戊寅、麻布、大塚の兩所に、御藥園をひらかれ、元祿の頃、大塚の御藥園は、麻布へうつされしが、其後又此處に移され、其あづかりは、麻布より引つゞきて、芥川小野寺なり、今は芥川岡田の兩人にてまもれり、芥川の御預地貳萬二千五百五十八坪、岡田の御預り二萬千六百四十二坪といふ、(江戸志)當御藥園二區に分れて、中間一條の往來あり、則南の方は岡田左門(利左衞門子孫なり)の御預りにて、御役宅その内にあり、又此内に、施藥院(養生所といふ)を建置る事は下に記す、北の方は、芥川小野寺御預なり、此御役宅は、小路を隔て、西の方にあり、案に、白山御殿を廢せられしは正德三年の事といへり、御藥園と成しは、それより後に始りしならむ、

〔府内備考五御曲輪内〕御藥園七ケ所

一は九段坂の傍に在り、當所は元御用屋敷にて、御役宅など建立せし地なりしが、寛政四年七月燒失の後、火除植物場と成り、同七年より御藥園と成れり、三ケ所は、一番町御堀端に並びあり、二ケ所は三番町に在り、以上五ケ所も、寛政四年火災の後、御普請奉行持火除植物場と成り、同き七年澀江長伯御預りの御藥園と成れり、一は蛙ケ原にあり、こは昔より火除の原にて、大的場となせし處なるを、最後に御藥園に定められしなり、寛政七年四月十九日、澀江長伯が御預りと成し

時、本多彈正大弼より、間宮筑前守、肥田十郎兵衛へ御渡の御書付、左之通り、

壹番町飯田町明地之内、御藥園に可相成場所、奥詰醫師澀江長伯江、一圓ニ御預被仰付、引請世話可仕旨申渡候之間、得其意可被談候、定居之者四人、身分之義は、是迄之通居置、勤方之義は、長伯得差圖可相勤旨申渡、幷植木屋共は、長伯差配可仕旨申渡候間、其段植木屋共江可被申渡候、尤是迄御勘定所持場ニ有之處、以來御普請奉行持場ニ相成候間、可被得其意候、

その後、御普請奉行の持も止て、長伯のみの御預りと成れり、寛政六年六月十七日より、蝦夷歸り人幸大夫磯吉といふ二人を、御堀端付の御藥園中に移されて、御扶助あり、又同所に於て、羅紗の機立等をもなさしめらるといふ、

〔府内備考 十三 續草〕澀江長伯御預り藥草植場二ケ所

一は福富町一丁目の東に在り、○中略 一は同所西福寺の前にあり、

〔嘉永二年武鑑〕園小石川御藥園奉行　燒火之間　同心十人

二百俵 白山御てん　岡田利左衛門　百俵二人フチ 白山御てん　芥川小野寺　父孫次郎見習、廿人フチ、岡田善十郎○中略

園目黑駒場御藥園預　御役料七人扶持　植村左平太　御藥ゑん内 御役料百俵　父左太郎見習　植村左太郎

〔大成令 六十 種 七〕享保七寅年四月

御留守居江　大久保淡路守支配

丹羽正伯

下總國千葉郡小一作倉野之內、瀧臺野三拾萬坪之場所內拾五萬坪之所江、和藥作らせ、御用之藥種相納、其外は被下候間、其助成を以、年々多く作らせ、世上江出候樣に可致候、殘る拾五萬坪は、桐山太右衛門に被下候間、諸事致差圖、是又和藥作らせ可申候、

但藥草作り候助力之爲、當分米穀等耕作仕候儀、勝手次第に可仕候、然共拾五萬坪之內、耕作仕

候場、二三萬坪には不可過候、此段みだりに無之樣、急度可相心得候、

〔憲教類典〈四ノ十一〉醫術〕寛政二庚戌年八月十六日

松平越中守殿　御渡
井伊兵部少輔殿

大目付
御目付　江

以來年々唐蠻より藥種御取寄有之、追々植殖被仰付、江戸京駿府長崎御藥園之外にも、諸國御代官之陣屋内江も、追而は藥種植殖し被仰付候、依之、藥種植殖し度存候者は、御藥園迄願出候はゞ、藥種苗被下、幷植方製之方も書付候而可相渡候、尤朝鮮種人參之苗等、願次第可被下候事、

一當時四ケ所御藥園ニ有之藥種も、多分之儀ニ付、藥種之名は、其御藥園江出而相尋可申候、藥種有之候而も、未繁茂不致分、又は追々願人有之被下可相成苗不足等之節は、追而繁茂之節に至可被下候事、

一向寄御代官所においては、當時植方致候義に付、追而相觸候迄は、先四ケ所御藥園江のみ可願事、

一領主に而も、領分之内、百姓持畑等江も爲植殖申度存候ものへは、可被下候、尤爲植置度等之願ニ而は被下間敷事、

〔明良帶錄〈世編〉〕澁江長伯　澁江長伯は本草家にて、普く藥性を辨たれば、和藥種植付之場所を拜借仰付られ、明地にて、土地相應之藥草を植て製法せり、諸採藥之御用をつとむ手附其外有て、折折見廻り手入等あり、

田村元雄　田村元雄は、和人參を製法せし家にて、小普請勤仕並にて、三十人扶持下さる、寶曆十

三年に仰付られ、朝鮮種人參の製法御用を勤む、綿羊を齎し來りて、和羅紗を製せり、今吹上之御庭にも織殿有て、出役等多し、

〔有德院殿御實紀附錄十五〕良喜(○林)も、少年より藥種の事うけたまはりしかば、より〳〵御前に召て、佐渡の石鐘乳、日光の人參の効驗を試しめ玉ひ、また花畠田安の藥苑、そのほか京都の藥園、紀州などにて產せし藥種の事をも、つかさどらしめ、(○下略)

〔烈公行實〕天保十四年癸卯、年四十四歲、(○中略)　是歲、弘道館中醫學館落成、公親作賛天堂記、言宜明大己貴少彥名二神之道、中國藥物自足、不必須海外諸物產之意、設藥園養牛場於館側、凡所製奇藥如酥酪、紫雪、紫金錠、千金錠等類甚多、

〔日本敎育史資料六(舊山口藩)〕一小病院、分析局、藥草園ハ、醫校中ニハ不斷事ニ御座候、尤小病院ト申候テモ、急ニ御詮議モ難被仰付御事ト奉存候、分析局藥草學ハ、開物成務ノ一大端ニシテ、後來御國益ニモ相成可申候、殊ニ外夷拒絕ノ時節柄、追々藥不如意ニ至リ候事ト奉存候、全體以我物足我用ノ義ハ、天理ノ當然ニ御座候、假令ヒ藥物渡リ來不申テモ、分析學相開候事ニ候得バ、製煉ノ諸術ニ熟達ノ上ハ、新藥モ出來可仕候、好生堂中ニ一局御設被仰付、此術巧者ノ輩可申立候間、御撰擧一途引受可被仰付候、諸生モ分析學研究ノ節、現術相試可申候、是迄百草園中ニ於テハ、分析場御小納戶管轄ニシテ、局所丈ケ好生堂へ御移轉引請被仰付候樣ニ奉存候、左候得バ、諸生中業間ニ、右之局エ罷出手傳、自然ニ熟達可仕候、藥草園ハ、是迄之處ニ被差置、同樣ニ被仰付度、御小納戶エモ其段可申出候間、政府ヨリ御申入可被下候、

一諸藥店之義ハ、藥種一事ニ就テハ、好生堂管轄ニ被仰付度、左候得バ、姦惡眩誣之所業モ少ク、藥品モ自然精撰可致候、第一ニハ於西洋諸國、軍事出張之節ハ、藥局之者、醫師ニ付添、藥物繰出シヨリ、百爾之事務ニ至ル迄、從事致居候、平日管轄被仰付置候ハヾ、不虞之節ハ、軍用之藥物卽時ニ相

辨輪送可相成、活然トモ御利用之御用ト奉存候、（活然トモ、未ダ然字アルヲ聞カズ、疑フラクハ當時活用ノ意ナラン、）

〔本草考彙 序〕本邦以醫業張門戶者、不乏其人、獨恨無治本草之學者也、享德公深憂之、寬政壬子秋、招中條佐藤先生於東都、居好生堂、以師授之、以石口求馬、横田新兵衛、佐藤九門爲監、小森清左衞門爲之吏、予與飯田忠林之徒、受業其門、先生爲人溫厚美須髯、循々然能誘人、其窮搜草木魚蟲、則南山之南、北山之北、無遠不臻、大開藥園於寰後、品列類聚、以辨眞僞、稽留二年而去矣、予毎有所聞見、隨筆隨錄、以備忽忘、爾來從事於斯學、殆四十年、收輯得數十卷、欲以答先公深仁之萬一也、○中略

時文政庚寅之春　六十八叟藥科玄陸識

〔大成令 五十七 雜種〕享保十三申年四月

甲州郡內領上吉田村　田邊伊豫

近年藥草之儀取扱仕、江戶江も往來候に付、輸入有之故、富士之麓諏訪之森より、遊境と申所迄、竪南北貳拾町横四町餘之芝間之內、竪拾町被下置候樣に相願候へども、右願之通には難成候、依之竪貳町横四町餘被下之候、

右之通可被申渡候、書面之通、芝間之內竪貳町横四町餘可被相渡候、

〔西宮記 臨時五〕諸院　乳牛院（典藥別所、在右近馬場西、有乳師預事、納山城外德書、大炊寮所、立味牛、供三宮乳、）

〔侍中群要 三〕日中行事　又關所（二所別）延喜十三年六月十九日、定乳分配文云、供御乳日別三升一合、但依宜皆散用云々者、○中略　乳牛院進乳、

〔延喜式 三十七 典藥寮〕凡供御乳、日別大三升一合五勺、其年料用度、絹三丈一尺、（帷廿一口料、別一尺、六寸、十三口料、別一尺四寸、）緋帛四丈二尺、裏料綠帛四丈二尺、（長各七尺、三幅、帳二四料、）調布二丈四尺、（長各六尺、二幅、帷二帳料、）橡東絁三匹、（典藥人三人、衣料、人三疋、）一曝布五端二丈五尺、（衣三丈、三丈六尺、褌七尺、一人料、[illegible]）生絲九兩、（[illegible]）陶鉢五口、平瓶壺

各二口、陶叩盆、由加、理、洗盤各一口、高案二脚、明櫃二合、中取案一脚、木蓋二枚、(並取乳料)槽一隻、(飼牛粥料)油一升、(十二月晦料)薪日別一百五十斤、(煮牛粥料)乳牛七頭秣料米大豆、各日一斗四升、(頭別二升)每月申省請受、

〔延喜式典藥三十七〕凡味原牧爲寮牛牧、其生犢牡牛、便充耕作藥園、並爲父牛、

凡味原牛牧死牛皮者、賣用寮修理料、但所賣得數、附年終帳申送之、

〔延喜式宮內三十一〕凡典藥寮味原牛牧帳一通、年終令進、其課欠乘并斃死及用遺等、省共勘知、

〔延喜式典藥三十七〕凡乳牛七頭、犢七頭年料、乾蒭四千四百卌四斤、(白田蒭二千三百卌二斤、野蒭五百斤、山城國進之、白田蒭一千六百二斤、丹波國進之、)

〔續日本紀八元正〕養老三年六月丙子、令(中略)典藥寮乳長上(中略)等始把笏焉、

〔類聚三代格五〕太政官符

應乳長上歷六年爲限事

右得宮內省解偁、典藥寮解偁、撿案內、難波長柄豐前宮御宇天皇(孝德)御世、大山上和藥使主福常、習取乳術、始授此職、自斯以降、子孫相承、世此居此任、至今不絕、而今終身在職、漸致懈怠、望請簡補氏中幹了者、以六箇年爲限者、大納言正三位兼行左近衞大將陸奧出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣、奉勅依請、

弘仁十一年二月廿七日

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應改乳長上爲乳師事

右被右大臣宣偁、奉勅、自今以後、宜改長上爲師、

天長二年四月四日(○又見類聚國史卷百七)

〔延喜式十八式部〕凡藥園師乳師等、歷六年爲限、遷替之日、責其解由、

〔令義解一職員〕典藥寮〇中略乳戶。

〔令集解五職員〕古記云、釋云、別記云、藥戶七十五戶、〇中略乳戶五十戶、從年一番役十丁、右二色人等爲品部、免調雜徭、

牛乳

〔續日本紀六元明〕和銅六年五月丁亥、始令山背國點乳牛戶五十戶、

〔春記〕長曆三年十月十四日辛未、今日始服生乳一盃、自今可持來之由、仰乳牛司正友已了、予已爲別當、仍不可懈怠也、自今日々可持來也、　十九日丙子、藏人之使藏人色光賴令申云、郡司等申云、件藏例負名之者藏等、先日乳牛院徵取已了、所奉切藏、是已無負名、適所在是高家莊中也、爲之如何、召預正友可問事由之狀、仰雜色了、

〔倭名類聚抄十一牛馬〕乳牛　唐韻牧令云、乳牛犢十頭、給丁一人牧飼、{乳牛名乾牛有子之名也、和名知字之、}

〔萬林本節用集女部〕乳牛

〔延喜式三十六主殿〕乳牛院油一升{十二月料}略

〔新撰姓氏錄左京諸蕃上〕和藥使主

出自吳國主照淵孫智聰也、〇中略男善那使主、孝德天皇御世、依獻牛乳、賜姓和藥使主、

〔春雨樓叢書二〕野牛乳

長崎の吉雄氏云く、野牛の雌を多く養ひ置き、其乳を取り、毎日茶碗の茶に少しづゝさし飲む、茶も甘くして甚だ美し、三十日も飲ば、淫事を忘れて、身體甚だ壯なり、是卽長壽を得るの法なり、阿蘭陀の人、壽をたもつの藥を、皆牛乳の類、淫道を忘る事を先とす、是れ尤なる事なり、

酪

〔享祿本類聚三代格十〕太政官符

應貢進閏例貢蘇事

右案太政官去承和十二年八月七日符偁、太政官去弘仁六年十一月十三日下民部省符偁、右大臣

宜、奉勅、諸國所貢之蘇、須十一月以前俾悉進之、若有物實不好、幷貢進違期者、國司科違勅罪、使者五位已上亦處同科、六位已下不論蔭贖決杖六十者、而頃年國司輕蔑憲章、或稽延乃貢、或調適太麁、所司漏却、只賖其罪、今擬據前、恐多陷者、大納言正三位兼行右近衛大將民部卿陸奥出羽按察使藤原朝臣良房宣、宜申明舊制、須下諸國、已往在寬、將來必罪者、而曾不愼遵、常致違闕、是則結罪彌重、不忍必行、國宰積習弃而不勤之〇之下恐有脫字致也、右大臣宣、奉勅、有法不行、還同無法、宜改前格更立新制、五位已上全奪位祿、六位已下折取公廨五分之一、〇又見三代實錄卷十一

貞觀七年三月二日

〔政事要略二十八年中行事〕貢蘇事

本草云、酪蘇微寒、補五藏、利大腸、主口瘡、注云、蘇出外國、亦從益州來、本是牛羊乳所爲作也、自有法、佛經亟稱乳成酪、〇酪下恐脫酪字成蘇、蘇成醒、成醒色黃自作餅、甚甘肥、亦時至江南、謹案蘇□酪作也、性猶與酪異、今通言、恐是陶之末達、然蘇、牛蘇勝於羊蘇、其牝牛復優於家牛、

又云、牛乳微寒、補虛羸、上渴下氣、注云、榛牛爲佳、不尸、所被飲竟者、謹案、水牛乳云、造石蜜須之言、作酪濃厚、味勝榛牛乳性、爭飲令人利、熱飲含于微似溫、馬乳、驢乳、羊乳、依多文无用不取之也、

右官史記云、文武天皇四年十月、遣使造蘇、

太政官符七道諸國司

蘇事

右自今以後、納籠進、不須檜杉等櫃、今以狀下符、

養老六年閏四月十七日

〔延喜式二十三民部〕諸國貢蘇番次

伊勢國十八壺十七口各大一升十一口各小一升　尾張國十五壺五口各大一升十口各小一升　參河國十四壺四口各大一升十口各小一升

遠江國十四壺（四口各大一升、十口各小一升）相模國十六壺（六口各大一升、十口各小一升）駿河國十二壺（四口各大一升、八口各小一升）伊豆國七壺（並小一升）甲斐國十壺（並小一升）

右八箇國爲第一番（丑未年）

伊賀國七壺（並小一升）武藏國廿壺（七口各大一升、十三口各小一升）安房國十壺（並小一升）上總國十七壺（七口各大一升、十口各小一升）下總國廿壺（八口各大一升、十二口各小一升）常陸國廿壺（十口各大一升、十口各小一升）

右六箇國爲第二番（寅申年）

近江國十八壺（七口各大一升、十一口各小一升）美濃國十七壺（七口各大一升、十口各小一升）信濃國十三壺（五口各大一升、八口各小一升）上野國十三壺（五口各大一升、八口各小一升）下野國十四壺（五口各大一升、九口各小一升）若狹國八壺（並小一升）越前國十五壺（六口各大一升、九口各小一升）加賀國十五壺（六口各大一升、九口各小一升）

右八箇國爲第三番（卯酉年）

能登國九壺（三口各大一升、六口各小一升）越中國十壺（四口各大一升、六口各小一升）越後國十一壺（四口各大一升、七口各小一升）丹波國十一壺（三口各大一升、八口各小一升）丹後國八壺（二口各大一升、六口各小一升）但馬國十一壺（三口各大一升、八口各小一升）因幡國十一壺（三口各大一升、八口各小一升）伯耆國十一壺（三口各大一升、八口各小一升）出雲國十一壺（三口各大一升、八口各小一升）石見國八壺（二口各大一升、六口各小一升）

右十箇國爲第四番（辰戌年）

太宰府七十壺（十五口各大一升、卅五口各大五合、廿口各小一升）

右爲第五番（巳亥年）

播磨國十五壺（六口各大一升、九口各小一升）美作國十一壺（三口各大一升、八口各小一升）備前國十壺（二口各大一升、八口各小一升）備中國十壺（二口各大一升、八口各小一升）備後國七壺（二口各大一升、五口各小一升）安藝國八壺（二口各大一升、六口各小一升）周防國六壺（並小一升）長門國八壺（並小一升）紀伊國七壺（二口各大一升、五口各小一升）淡路國十壺（四口各大一升、六口各小一升）阿波國十

醫

壺四口各大一升六口各小一升　讃岐國十三壺五口各大一升八口各小一升　伊豫國十二壺四口各大一升八口各小一升　土佐國十壺四口各大一升六口各小一升

右十四箇國爲第六番子午年

凡諸國貢蘇、各依番次、當年十一月以前進了、但出雲國十二月爲限、輪轉隨次、終而復始、其取得乳者、肥牛日大八合、瘦牛減半、作蘇之法、乳大一斗、煎得蘇大一升、但飼秣者、頭別日四把、

〔侍中群要八〕蘇甘栗使事

家大臣家大饗、內藏人奉仰、召仰出納、令調蘇甘栗等、在所蘇四壺、栗十六籠、各入折櫃一合、合二合也置土高坏、折櫃高坏、幷召內藏、小舍人一人、二人歟仕人二人相從之、藏人束帶、著麴塵袍向彼家、入立便所、中門召之家司大夫二人出對傳取蘇等還入、主人召勅使、敷座召之勸酒給祿、

〔牧憲類典四ノ十一藥種〕享保十七壬子年四月

岩手藤左衞門御代官所武州多摩郡押立村　平右衞門

日野小左衞門御代官所同國同郡中野村　源助

麟性院領同國同郡柏木村　彌兵衞

右三人之者、江戸內藤宿之末よど橋と申所に而、象洛幷白牛洛賣弘め候義、願之通申付候、試候處ニ、効能も有之、疱瘡、痲疹、癰疔、其外難腫之藥に候間、望之者は、右之所江參調可申候、

四月

右之通、武士方諸向江通達候樣に、大目附江被仰渡可被下候、以上、

四月　大岡越前守

稻生下野守

〔享保集成絲綸錄三十九〕元文二巳年四月

一象洞、白牛洞藥賣弘め候間、先達而相觸候通、淀橋之外、今度淺草御藏前旅籠町一町目藏地ニ於
て賣出候間、望之者可相調候、

四月

〔英年園白牛酪考序〕今茲春、正倫奉命視牧馬於房總之間、嘗聞、享保中台旨放養白牛于房英年園、既至其蕃而留焉、山谷之間蕃殖相從、往々成群、按夫獸乳作酪、牛羊馬駝皆可食、而可以充藥餌者、則必牛爽而牛又貴白者、而家牛又不如野牛之尤良也、其製爲酥爲醍醐、據中土人亦據竺典、而始知其方、醍醐內解毒、益于生民、其功莽一、詳見于本草彙言、醍醐〇徳川吉宗至仁愛物、夙夜生靈爲念、富庶敎養之外、又覺其夭札病瘼、凡藥物自域外來者、人參縮砂之類、皆徵其根苗種子、植之內地、以贍民用、且聞白牛酪益于人居多、購求天下、當時僅獲三頭、乃命放之於此、總而黃門悠然公請而度取二頭乳、以製醍醐、厥後日孳息、今正倫所見、至七十餘頭、其所食者、皆仙茅靈蓍、非如家牛仰廚下之餘者、而又無桔槃芷囿之制、起臥優遊、任性自然、其色澤々然若儒家畜、於是試獲其乳、得數斛、製以爲乾酪、明練潔白、恐篆竺產亦不多出其右也、既歸達是大君大賓、有命更藏廣製之、以普施民庶、以終德廟之大惠、恭惟大君仁明孝敬、百度皆紹述享保之政、今此命亦其一端也、〇中略

寛政四年壬子夏六月、從五位下石見守岩本正倫序、

〔文恭院殿御實紀附錄三〕享保の頃、はじめて白牛三頭を房州嶺岡に放たしめ玉ふ、其牛、年を追ひ蕃息して、七十頭に及べり、寛政の始、小納戸頭取岩本石見守正倫に命じ玉ひ、嶺岡に行て、牛乳を求めしめ、數石を得て、酪を製せしめらる、これは白牛酪を製せられし始なり、又桃井源寅に命じて、主治功能を撰ばしめられ、廣く生民を惠恤し玉ふ、近頃尾島主殿頭某に命せられ、其役を司らしめ、廣く衰老の者に施しあたへしめらる、享保の盛慮この御代に至りて遂行はしめ玉ひしは、いとかしこき御事なり、國字分類雜記

製藥所

〔皇國名醫傳後編下〕福井楓亭

福井輗、字大車、通稱柳介、一作立助、號楓亭、奈良人、○中略寛政初、幕府召至江戶、爲醫官、○中略四年特命內直、爲製藥所監、

〔日本教育史資料十九醫學〕四月○安政五年四日大和守殿御渡

蘭藥の儀、若差向御上りにも可相成哉に付、奧御有合、御製藥所に無之品は、町物買上等にては、何分御不都合に付、靜海、玄朴、其外畑中善良、桂川甫周等持藥の內、奧向取計にて御買上、御製藥所の御品に相備置候樣、可被取計候事、

人參製法所

〔皇國名醫傳後編中〕田村藍水○中略

登、字玄臺、通稱元雄、號藍水、江戶人、世業醫、父偁豐、通稱宗宣、好上古記傳之學、著書數種、登少以本草名、寶曆中幕府擧爲醫官、時新建製參所、命登掌其事、又往毛總野奧等州買參、初朝鮮國獻人參栽於幕府、凡三、皆弗殖、享保初對州侯又獻六根、德廟命擇地日光山下種之、數歲三移其地、始得生殖、乃募諸州民登種之、根株繁息及五百萬、登所製熟參、一擧得千有餘斤、民間不復苦貴藥難購矣、登釆藥經涉三十餘州、其於人參、甘蔗、白河附子、白牛酪、芒硝及火浣布、綿羊等、尤多所發明云、子善之昌臧、昌臧出嗣幕府醫官栗本氏、

〔天明大政錄二〕大目付江

朝鮮種人參之儀、享保年中御世話被遊、諸國にて出來、段々增長候ニ付、末々輕き者迄、病用之節、容易相用候爲、寶曆十三未年被仰出、神田紺屋町三丁目ニ、人參座相建、望之者江相渡候之處、此度人參座相定、以來者元飯田町中坂上人參製法所ニおゐて、相渡候筈に候、只今まで、武家は兼而印鑑遣し置、在町之分は名主家主印鑑を以、請取來候得共、諸人求め易きため、其儀相止、人參座之物は、製法所江代金持參候得ば、相渡候筈ニ候、且人參之儀は、次第被致增長、當時澤山ニ作出候ニ付、代

料之儀も、別紙之通申渡候、右人參望之者は、勝手次第製法所江請取ニ參り可申候、

丁未十一月

朝鮮種人參製法所ニ而、相渡候代料左之通、

上人參壹貫目ニ付、代銀七匁五分、　並人參壹貫目ニ付、代五匁、

割人參壹貫目ニ付、代銀四匁、　肉折人參壹貫目ニ付、代銀三匁、

細鬚人參壹貫目ニ付、代銀貳匁、

但並肉折鬚ハ、小半貫包迄相渡、割ハ五分包迄相渡筈ニ候、

右之通ニ候事

〔市中取締書留十ノ八十八〕

他國產人參之儀ニ付申上候書付

竹本主水正
竹田伊豆守

今般、朝鮮種人參賣弘騰シニ罷成候ニ付、向後賣捌之儀、吹上奉行より、藥種屋共相糺候處、當時問屋名目組合と相唱候儀、難相成候ニ付而は、諸品取引等、末海陸共取締相立不申候ニ付、斤數多相捌候儀、見越候而難申上候得共、御製法人參之儀は、厚御趣意、篤而難有存込罷在、殊ニ取扱馴候事故、夫々申合賣捌可申候得共、此後、他國產之人參、諸國江相廻り、直々賣買仕候而は、自ら御製法捌方ニ差障候之趣申出候段、撥りより申立候、右他國產人參之儀は、天保二卯年頃より、他國ニ多分作出し、故賣買候ニ付、御製法捌方ニ差障候間、奥州、雲州、其外作元御仕法相立候樣、其頃申上候得共、御沙汰無之、追々作出し、御製法之御趣意も薄く罷成候間、一ト先文化度之通、他國產人參不相混樣取捌、諸國迄御趣意相届候樣、町奉行所ニ而申渡有之候樣、同四巳年申上候處、同年町觸は有之候得共、賣買御差留と申ニも無之候事故、彌繁茂仕、自然御製法人參不捌ニ付、寬政二戌年以前

之通、諸國人參作賣買共被差止候歟、又は領内限、藥用之外、賣買不相成樣仕度、尤領内之藥用たり共、是迄作來候領分計、其餘賣買は勿論作立之儀、一切相成不申樣仕度段、天保五午年申上候處、不被及御沙汰候ニ付、追々不捌ニ而、御貯多ニ相成、色變等出來仕、御不益相見候處、去丑年中、多分賣捌出來仕、唐方渡之分も、彼地氣請も宜、追々賣捌相進候樣相成候處、此後、他國產人參、諸國江相廻候而は、自ら御製法之方不捌之基と奉存候、依之何卒天保五午年申上候通、改革御取調御座候樣仕度、此段申上候、以上、

四月

竹本主水正
竹田伊豆守

町奉行
遠山左衞門尉

寅〇天保十三年八月五日攝津守殿江黑澤正助を以上ル
御製法人參捌方之儀取調申上候書付

御製法人參捌方改革之儀ニ付、竹本主水正、竹田伊豆守申上候書面、被成御渡、勘辨仕、可申上旨被仰聞候、〇中略
舊冬問屋組合仲間等唱候儀停止被仰出候ニ付、是迄之振合ニ而は、品々差支可有御座、左候迚、主水正、伊豆守申上候通、奉行所より、人數取極、賣捌人等申付候而は、手狹ニ相成、終には〆賣致し候樣成行、諸品手廣ニ賣買可致旨之御趣意ニも相當不仕候間、勘辨仕候處、以來之儀は、定日を立、御拂之積ニ而、代金モ即日納之仕法ニ相成候ハヾ、身元糺等之懸念モ無之候間、御府內藥種屋は勿論、素人ニ而も、望之ものは、勝手次第御拂之儀爲相願、尤小前賣捌方紛敷儀無之ため、上中下共、懸目壹斤ニ付、直段何程、壹兩ニ付何程、百文ニ付何程と相認、見世先江張出置候ハヾ、

其日稼之者ニ至迄、手輕ク買取方出來、質買手當相成、御救之ため、御製法被仰付候御仁惠之御趣意も行屆可、然哉ニ付、右之趣を以、町觸可仕候哉、(中略)

右御尋ニ付、取調候趣、書面之通御座候、依之別紙町觸案相添、御下之書面壹通返上仕、此段申上候、以上、

七月　遠山左衛門尉

鳥居甲斐守

〔本朝世事談綺五人事〕人參功能

人參の功は、古より普く世にしるといへども、寬文延寶のころ、數原通玄といふ良醫、朝鮮人參の功能を考覈、大病の治しがたきを救ひ、衆人の命を助る事限しられず、其妙術世に鳴而後典藥頭に至、是より大功ある事を彌知る、その頃は、室町伊勢屋孫八方にてこれを求む、そのゝち堺屋七郎兵衛するが町において、人參座立ッ、それより今の座山形屋なり、

〔憲教類典四ノ十一種樹〕享保二乙卯年三月六日

石町三丁目長島屋源右衛門、唐人參座相立候樣子は、委細細井因幡守ヱ可承合候、

三月

右之通可被相觸候、

〔塵塚談上〕朝鮮人參座、寶曆明和の比迄下谷新し橋通りに開き、門構にして、門の正中に、朝鮮人參座といふ額をかけ、住居せしが、今は如何なりしや、斷絶もせしと思はる、寶曆の初の比か、浪人の類、御旗本の人參判鑑を、目方の多少により、金錢を出してもらひ受、人參座へ行、人參を請取、直に買請人有之、金錢をまうけし事あり、

〔半日閑話十八〕申元年閏三月廿二日

人參

一町奉行衆　塚越大藏少輔

唐人參座之儀、以來江戸長崎會所と相唱、長崎屋源右衞門江、右會所附御用達申付候積、此程御掛合およひ候處、御差支之筋無之旨御挨拶有之候付、右之趣、紀伊守殿江相伺候處、伺之通被仰渡候ニ付、其段源右衞門江爲申渡候、此段及御達候、

申閏三月

〔紫芝園漫筆七〕世間庸醫卒不能療疾、藥之未效、其人疲困則恐元氣難保、於是急用大劑人參湯與服、往往不知元氣不能敵疾補之無益、夫人參誠所謂反元氣於無何有之鄕者也、然不治見病而專補元氣、非所聞也、〇中略況今我東方、人參之價三倍黃金、亦不易多得之物也、豈可妄用以損人命、

〔醫事或問下〕一或問曰、今の名醫、朝鮮人參をもて氣を補ふといふ、しかるに氣に拘はらずして、療治し玉ふ事いかん、

答曰、元氣は、天地根元の氣にして、人の胎内にやどる時にうけ、造化の司所ゆへ、人力を以うけ變事あたはず、其氣虚する時は、死ぬるなり、其長短は天にまかすべし、此故に、天子諸侯たりといへども、心のまゝにならざるものなり、なんぞ草根木皮を以、氣を補助する事を得んや、古語曰、攻病以毒藥、養精以穀肉果菜とあり、いまだ藥をもて精を養ふといふ事を聞かず、仲景も、人參は心下の痞硬を治すといふて、つゐに氣を補ふといふ事なし、氣を補ふといふは、疾醫絶て遂に後世の人の説なり、唐の世迄もいはざる證據には、孫思邈が、千金方に、人參なき時は、茯苓をもてかふるといへり、此語あやまるといへども、人參は元氣を養ふとはいはざる事明なり、

〔松園漫筆三〕烏有いはく、人參を用ること、唐土にしては、和邦の生姜を用るがごとく、或は有、或は無、藥法の常なり、六君子湯も人參あり、小柴胡湯も人參あり、補中益氣湯も人參あり、參蘇飲も人參あり、日本の人參のつかひやうにてみれば、唐土のごとくせば、心やすき病人には、逆上などの

要あるべき事なり、人參の品數もいろ〳〵あり、何れが是なりや、老衞門曰、足下のいふごとく、漢土にては、藥方の常にて、生姜人參總を同じふす、和邦は、人參の價高貴なるを以て、人參を組藥方にても、大體は人參なしにこれを用ゆ、今人參の功とする所は、專ら暴に脫するの元氣を補ひ、又は虛勞の元氣を助るを以てす、然れども暴脫の元氣を回復し、諸虛の元氣を補ふのみにあらず、よく客邪を除、津液を調す、故に發散の藥方にまた多くこれを組、和漢つかひかたの同じからざる總は、價の貴不貴による物なり、生姜亦その功人參に劣るべからず、和邦生姜の澤山なるを以て、人參の如くたつとます、人常になれて、その功を思ふものなし、漢土は土地によつて生姜のなき所あり、北京のあたりは、大にその價貴く、人參生姜とならべ思ふ趣見えたり、

〔靑囊瑣探　上〕人參、生薑、

凡物價貴則人重之、價賤則輕之、世人嘗有病用人參、則秤之而正其毫釐者甚嚴也、而至用生薑幾片、則委之於庖手、不敢斟酌焉、假令其用一片、薑有乾濕、切有厚薄、而輕重每不等也、嘗聞奇效醫述曰、生薑三片爲引、約重二錢云々、然則一片重六分六釐餘也、若夫使生薑價如人參甚高、則世人必可正其權衡矣、噫醫病立藥方、預向論立陣法、雖生薑有時爲將、雖人參有時爲卒、世可以價賤而多輕視之乎、世醫亦偕然以此任病家、可以發一笑也、

〔たはれぐさ　上〕それがしわかき時、むさしにありしに、其頃までは、人參を用ふるくすしはなはだまれなり、もしも人參を用ふるくすしあれば、下手なりといへり、世の人人參の功あることを知らずとて、杉菴といへるくすし、つねにうれへとして語りき、そののち李士材、薛萬與などいへるもの、方書世に行はれ、けふ此頃にいたりては、かろき病にも人參を用ひざるくすしはすくなし、

〔辨醫斷　上〕人參

人參之說最爲妄矣、乃說曲者行、弗責有實、我國之生薑、亦幷貽笑於異邦識者歟、何也、夫人參補益之

功、古今方書所錄、倭漢名哲所驗、豈不歷歷可考哉、試以余(堀江減定)所略記者言之、余本生對州、自有知來目擊韓參。。不爲不多矣、參之大長及四五寸者、人含之則走必不喘、雖冒煙火亦不爲熏殺之、當暑月浸諸甌水、俄而其噴出泡沫、有如濁酪浡沸之狀焉、是皆稟氣之盛使若此歟、故以苦參煎煉成膏、每投氣虛將脫之證、即獲甦生者不可枚擧、對州有一祇園祠、每歲六月之望、設國樂以奉祀焉、其樂師、每舞凌厲奔疾之曲、不堪勞勩、打扮又熱、及舞畢而退、遂致氣昏暈絕者或有矣、故於樂室、豫備參膏、聽其急用、藥一入口、無不氣淸息定而立甦矣、又東都有權參局二、一則朝鮮所產者、即對之人往辦焉、一則漢舶所齎者、則長崎吏就領焉、先是有故將兩國產、各作熬膏以試驗之、漢乃大減、韓則仍如原量云、後予及長往住長崎、奔走斯業者又二十餘載、因視漢參極多、用而獲效者實弗寡矣、且以自服者言之、余二十五歲之秋、患痢甚篤、晝夜凡百餘度、藥粥不入、羸憊日甚、每當澀滯、强力久努、精神恍惚、氣息垂絕者屢矣、家人爲常備濃煎獨參湯、輙令我服、呷之不過三五口、便覺精神頓爽、努氣得力、膿垢亦易利矣、由是單煮及所加服參凡半斤許、痢止食進而自獲安、是歲仲冬、不幸又罹陰證傷寒矣、豈不前門拒虎後門進狼、厥證安得弗殆耶、故其處方雖不同、仍多服參如前疾、而又獲安後及三十八歲之夏、會因勞役得傷寒、亦陰證矣、病未數日、神昏食廢、惡候四出、家君憂甚、遂與一二醫謀於峻補方、重加人參、兼投獨參一貼二三錢者、日二劑、若是旬餘、神漸復、比再旬而食漸進、乃調理遂得痊、又有一嫗患水腫、百方罔效、付必死矣、余因特與同道者商榷云、究竟體老病亦虛、弗與峻補、何冀一生、遂用人參三錢、附子八分爲一劑、另以八味加參朮、並令濃煮送飲之、若是數劑、溲略多後、日多一日、腫亦隨而泮然矣、噫以是言之、漢參功効不亦宏大哉、雖然匪特此也、至若虛風客勞、產蓐、帶下、痢瘧癰瘍等證、雖有種々不同乎、但用正衰弗振者、隨所施而輙奏効、稱爲神草、不亦宜乎、且夫雖入古方之藥用、至後世益著者、非不夥、奚獨以參爲疑哉、不知某師有何識驗、敢謂今之所尙不復其古、而必欲用倭參耶、狂悖莫甚焉、

〔憲教類典 四ノ十一 藥種〕明和元甲申年閏十二月廿七日

松平攝津守殿御渡

御目付江

朝鮮種人參之義は、世上人參拂底故、末々輕きものは病用之節も、たやすく難相用、病氣不本復ニも多有之由ニ付、日本に而致出來候はゞ、萬民御救之事故、先々御代、朝鮮國江人參種被遊御所望、野州今市邊に而、御作らせ、其効能御ためし有之候處、全く朝鮮人參相替ず候ニ付、何卒澤山に作り出し、末々之者迄も行屆候樣、種々御世話被遊、其後陸奧國に而も、作り初め、段々致增長候ニ付、御製法被仰付、諸人爲御救、神田紺屋町江、屆之者共は相渡、幷別紙名前之者共、下賣被仰付、關八州、陸奧、信濃、東海道筋、京大坂迄賣弘め、右製法人參之義、所々に而ためし候處、至而効能宜候段、粗相聞候、先達而廣東人參、弘く通用有之候處、右品は、人參之効能は無之段決定いたし、商賣停止被仰付候、此度御製法人參之義は、國々在々病用爲御救、右下賣之者共江、賣弘申付、且又在方にては、紛敷人參も商賣致し候段相聞候間、紛敷無之ため、人參座より封印致し、下賣之者共江相渡、封之儘賣弘めさせ候間、其段觸知する者也、

右之通、國々在々江不洩樣、可被相觸候、

申閏十二月

神田紺屋町三丁目
江戸人參座
岡田治助

關八州幷東海道之内
本町四丁目
袴屋庄八（以下諸國賣下所姓名略）

明和八辛卯年正月四日

松平右近少監殿

水野出羽守殿御渡

大目付
御目付　江

江戸音羽町六丁目俗醫
谷治兵衛
今泉總右衛門

右之者共、上野下野信濃陸奥出羽國城下、幷宿場在々町々、其外迄も、朝鮮種人參相對直段を以、賣弘候旨、當八月中相觸候外ニ、此度伊豆駿河甲斐遠江三河佐渡國迄、前書之五ヶ國共、都合十一ヶ國、右同樣之賣弘方を以、藥店迄も、人參賣弘申渡候書面之國々江、江戸本町住居之人參下賣共、其外傳馬町組住居之藥種屋、幷南傳馬町伊勢町住居之下賣共よりは、人參賣渡間敷旨、追而是まで之通爲賣渡候節は、可及沙汰之段申渡候、右治兵衛、總右衛門、相對直段を以、人參賣弘め候筈に候間、其旨可相心得候、○中略

右之通可相觸候

(享保集成絲綸錄三十九)元文元辰年十一月

申渡之覺

朝鮮人參之莖葉

右者病用ニ付、人參服用致し度存候而も、調候儀難儀之者、右人參之くき葉服用致度願候ハヽ、被下之候間、病人之好身之ものに、家主成共名主成共壹人附添、下野守樣御番所江罷出可相願候、尤二度目よりは、壹人罷出頂戴致候樣可致候、曾而六ヶ敷事ニ而は無之候條、此旨町々江可被申聞候、以上、

〔桑韓唱和塤篪集八〕筆語〇中略

一問玄意 人參、本草、以上黨及貴國所產爲最、而其所說、苗狀各異、未知孰是、今敢奉問、其莖葉花實色澤形狀、及其地之寒暖、肥瘠高下陰陽向背、伏乞詳示、且令畫工圖苗狀一本、賜之幸甚、復補道 人參本草、以上黨所產者爲上品、而我國則以北道高與處所產者爲絕品、以全羅道卑濕處所產者爲賤品、北道人參、枝葉繁茂、與本草所畫上黨人參無異、全羅道人參則小異、以此言之、其優劣可知耳、至於橫畫、則唯畫師能之、卽今畫師病臥、故未副盛意耳、

〔廣參說〕嘗聞、濃州僧川生有言、曰廣參之始來、於長崎也、土人安川上田兩生問其名、答曰、是安窟草根、用補治血分之虛、有經驗、而兩生以其有參形、而效亦相似、俱多購得以貨於四方、大得其利、竟名曰廣。東人參、係醫用之有驗、爾來淸買之帶至、陸續不歇、以爲貨物、近有買之十善寺所寓程赤城等者、答曰、廣東人參之稱、假係貨鋪方言、在唐多有不通、至于醫家藥鋪等、唯有西洋人參或洋參之名耳、此宗原係西洋人年々帶至廣東之地、貿易分售各處云々、或曰、向有淸買及病篤乞參於官者、諸之曰、汝盍用所帶來之洋參、其人答言、洋參卽我地之三七也、雖非眞參、貴邦以爲參用、故多帶爲貨物耳、其事發覺、官有嚴禁、其後變裝號、復償來、至今其形似人參、肥短而重、皮有橫文、如沙參、有縱文者少、始渡者黃黑色、故肆人以其色彷彿芍藥、稱芍藥樣、或略呼芍參、今來者黃白色、不類芍藥、間有以他物造者、其根不直、又有形如節參細而不直者、肆人呼爲蘆頭、又有本根上連蘆頭者、又有形圓如珠參者、俱皆味甘而帶苦、全同人參味、其不苦者、不甘者、帶鹹者、帶蓋者、皆係僞造矣、若夫三七則有古渡、傳言天和壬戌所攜來、今則不來、故世人少有識之者、言之亦多疑不信、實所謂以所不睹而不信、若蟬不知雪者也、余所藏古渡三七之品、亦不一、而是其形似節參而不純苦、有細有粗、皆黃黑色、正符東璧言如老乾地黃、有節、味微甘而苦、頗似人參之味、中立言頗竹節參、味甘而苦、亦似參味、但色不同、參色黃白、而三七色

黃黑（一本云、竹節參亦彷彿三七、但形小耳、）之文、是所謂竹節三七者也、又有圓根如珠參者、皆與廣參同、是三七之形色味並不異於廣參者也、而李東璧唯言竹節三七與圓如白及者、張路玉言、三七廣產形如人參者是、有節者非、陳振先言、三七有數種、羊腸三七竹節三七謂之水三七、人參三七、（錦囊秘錄、本草從新、有此名、）蘿蔔三七、謂之廣三七、又云、旱三七、（集驗良方有此名、）據張陳二氏之說、則似言人參三七是廣產、竹節三七非其產、猶人參有竹節有直根、而其種自別、然東璧中立皆言有節者爲廣西之產、而古渡中亦有本根上連竹節者、則不當別爲二物矣、其陳氏言、三七有數種、亦唯以名之多爲言、非實有多品也、向有淸賈進大孩兒參二枚於官者、鑒藥家皆言廣參也、其長近尺、潤逼寸、是所以人參三七有蘿蔔三七之名也、古渡三七中、有粗大如節參者、恐當爲此等蘆頭耳、今也、緣遼參之價躍貴、寒素者無由可供藥用、故病家皆喜廣參之廉、舉世尙之、醫人亦循俗用之、非無其驗、故今以大行、以爲補藥、然此品原治血分之聖藥也、嘗聞門生某治肺癰日久、旣吐血塊升許、七日幾死者、及折傷流血如湧、三日不止、氣衰色變、諸藥无効者、皆用之有速効、其餘赤白痢疾、吐紅鼻洪產後血暈一應失血用之無不有効、而又兼有溫補之績、故今世醫權代用人參、亦奏其効、寒素者多得賴焉、然非御種眞韓人可比類也、而廣參治血兼補、卽是三七之効驗也、故諸本云、三七性溫、陳士鐸云、三七止血而兼補矣、是皆廣參之効驗、不異於三七者也、乃知淸賈所謂洋參、非眞參而三七也者、非虛言矣、而數十年來、齎至之廣參、其員幾巨萬、不可勝計焉、愚嘗疑、是必其地所蕃殖之草根、而決非遠境深谷之物也、於是詳其所出、李東壁云、三七生廣西南丹諸州番峒深山中、○下略

〔憲教類典四ノ十一 藥種〕寶曆十三癸未年八月廿日

一廣東人參商賣之義、向後堅停止ニ候間、此旨岐度可相守候、

右之通、可被相觸候、

八月

天明八戊申年正月廿二日

水野出羽守殿　御渡

松平玄蕃頭殿

大目付

御目付　江

廣東人參之義、先年賣買停止被仰出候處、此度御糺之上、病症ニ依り、其功能も可有之ニ付、下々まで容易に相用候ため、向後前々之通、賣買勝手次第に可致旨被仰出候、

右之通、可被相觸候、

正月

〔大成令〈六十七／醫療〉〕享保十九寅年五月

一町醫者吉田玄庵と申者、和人參製法致し、藥種問屋江相渡賣弘め候間、望之者江相調候樣ニ、町中江可觸知者也、

五月

〔松園漫筆〈三〉〕保塚人參は形狀蘿蔔の如し、竹節人參の鬚根なるよし、氣味うすし、吉野人參、竹節人參の二品、吉野、葛城、那智、貴船等の山々におほくありて、近代多用ゆ、味甚苦して、胃氣を養ふにはよろしからず、用るに堪たりとて、專ら用る諸醫あれども、我〈松園〉も數年もちひ試るに、元氣を補ふの功すくなし、積痞を推ひらくには功多し、其外人參といふもの四五品あれども、皆人參にあらざるものなれば、沙汰におよばず、然れば大切の病人、元氣を補ふの功惟朝鮮人參の外他なし、卑賤貧窮のものは、價の貴に力及ばず、見ながら死にいたるを待のみ、こゝに仁君、萬民撫育の御

藥種

憐み深く、窮民の力たらずして治すべき病の死にいたるを察し玉ひ、朝鮮國より人參の種及び苗を御取よせ、御手づから御園に御試あつて、其後は命を以て專らこれを作らせられ、次第に蕃茂し、今世上に御種人參とて自由に用るもの此なり、其氣味、朝鮮大人參よりは薄といへども、元來朝鮮の種なれば、他の人參に大に勝れり、老夫、數年これを用て、その効驗の著しきも見る、今卑賤貧窮のものまでも、その價の下料なるをもつて、心やすく疾を救ひ、忠臣は主君の命を助け、孝子は親の壽を益、誠に仁君の恩澤、萬民に潤ひ流、窮民を御憐みの御慈悲をおろそかに思ふべからざる事なり、

〔醫事或問　下〕本邦、吉野人參は、痞硬に用ひて効あり、故に、余〈○吉益爲則〉は、和參を用ひて、朝鮮參を用ひざるなり、昔は、和漢ともに人參味ひ苦しといふ、本草綱目にも、雷公桐君味ひ苦しといへり、日本にても、天暦帝の朝、源順の和名抄に、人參の和名、くまのゐとあり、熊膽の味ひ苦きゆへに、くまのゐと名付たるなり、然るに今の朝鮮人參は、味ひ甘く製したるなり、製せずして甘しといふは僞なり、用ゆべからず、本邦の人參、愼で必製すべからず、本味をそこなふ時は藥効なし、且又積氣氣虛などとはいひがたし、いかんとなれば、氣は形なきものなり、何にても其物あれば皆氣あり、人生て居る時は氣あり、死すれば其氣絶ゆ、是天地自然にして形なく、造化の司る所ゆへ、人の積べきものにあらず、

〔運歩色葉集　屋〕藥種

〔易林本節用集　也器財〕藥種〈ヤクシユ〉

〔尺素往來〕和丹兩家之醫師等、雖爲末代、其術新播効驗候哉、仍隨分秘藏之藥種共所現在者、人參、龍腦、麒麟竭、南木香、胡椒、縮砂、良姜、桂心、甘草、川芎、當歸、巴豆、大黄、雄黄、虎膽、辰砂、并煉密等少分進之候、皆新渡之濟物候、山藥、牛膝、牽牛子、香附子、紫蘇、荊芥、乾姜、厚朴、苦辛、茯苓、橘皮、白朮、地黄、鹿茸、石灰、硫

黄芩甘草等之和藥者、御所持之間不ㇾ及ㇾ獻ㇾ之、

〔撮壤集 下 飲食〕藥種類

龍腦　龍膽　樟腦　虎膽　麝香　丁子　胡椒　丁香皮　縮砂　檳榔子　橘皮　虎肉　當歸
高良薑　甘草　白花蛇　烏蛇　巴豆　薫陸香　大黄　烏頭　肉蓯蓉　川芎　南木香　蘇
合香油　人參　地黄　升麻　附子　麻黄　芍藥　大戟　巴戟　藿香　蓬莪朮　肉豆蔻　滑
石　蘆根　續斷　澤瀉　蒼耳　景天　千歲蘽　括樓　黄芩　秦艽　知
母　石斛　萆薢　鬱金　零陵香　[illegible]　半夏　連翹　白檀　雞舌香　乳香　呉茱萸　麒麟
血　白朮　天門冬　麥門冬　菟絲子　蛇牀子　牽牛子　防風　萆薢　薏苡　薄荷　車前子
苦參　牛膝　天南星　萹蓄　五味子　蒲黄　遠志　茴香　乾薑　桑根白　茯苓
茯神　厚朴　枳殼　枳實　安息香　雷丸　牛黄　蘇芳木　龍骨　阿膠　酥酪　麝臍　鹿茸
鼈甲　龜甲　荊芥穗　眞珠　川山甲　多賽子　射干　常山　蓽澄茄　續隨子　枸杞　甘
葛　甘松　硇砂　黄耆　砒霜　蘆薈　雄黄　菖蒲　芒硝　桃仁　蒼朮　辰砂　蜀椒　沙糖
蜜　防已　硫黄　訶梨勒　青木香　香附子　京三稜　大腹皮　山茱萸　大腹子　白芥子
肉桂　膃肭臍　蝟皮　[illegible]　元蠶蛾　桑寄生　石蓮肉

〔日本風土記 二〕九流○中

有良醫、亦知診脈、探病下藥、名曰甘葉里、治人病愈畢、其貧富厚薄酬之、但本國藥餌盡全、常服不効、且無甘草、每遣朝貢之使、務得大明藥餌、牛黄射香以爲至寶、若甘草百斤、値價三百金、本國醫人、得有中國藥料、爲上等良醫、名曰醫熟、

〔延喜式 四十三 典藥〕十二月四日、進年中藥料草藥、受典藥寮、

〔源氏物語 二 帚木〕この君もはやりかにて、いふやう、月比ふびやうおもきにたへかねて、ごくねちのさ

うやくをふくして、いとくさきによりてなんえたいめん給はらぬ、まのあたりならずとも、さるべからんざうじらはうけ給はらんと、〇下略

〔本朝醫談〕源氏物語、月頃ふびやうのおもければ、極熱の草藥を服と、大和本草、蒜、夏月食之、解暑毒、故といふは、うけがたし、本文は、草の性熱なる事をいふなり、蒜薤の類は、下利を治する物なり、されば、ふびやうははら下る事にて、腹病の文字也、古人病ありて、療養の爲に、これ等葷物を食する内、毒忌の日數あり、これを名けて蒜間薤間韮間などいふ、故に、歌にもよめり、源氏、さゝがにのふるまひしるき夕暮にひるますぐせといふがあやなき、逢事のよをしへだつる中ならばひるまも何かまばゆからまし、

〔延喜式典藥三十七〕諸司年料雜藥　齋宮寮五十三種

芒硝七兩四銖、防風一兩二分四銖、麻黃二兩三分四銖、蛇銜九兩一分、石膏一兩三分、芎藭七兩三分、大黃一斤四兩二分四銖、人參十兩、紫菀二兩二分、柴胡五兩、黃芩十一兩二分二銖、黃連一兩二銖、皂莢二分一銖、芍藥六兩、漏蘆六兩一分、連翹十五兩、白蘞十兩二分、蘆茹四兩一分、附子九斤十五兩、干薑七兩二分、猪膏六十四斤八兩、白朮七斤十兩二分、烏頭十四斤四兩、半夏二兩二分、桔梗九斤五兩二分、細辛七斤十四兩、呉茱萸一斤六兩、昌蒲二兩二分、伏苓二兩二分、蜀椒二斤二分、桃人二兩、枳實十二兩一分二銖、葶藶子二兩一分、杏人二兩三分二銖、厚朴二分二銖、支子百廿枚、升麻十一兩二銖、干藍二分、豉一合一勺、前胡二斤一分、白芷二斤一分、當歸四兩二分、蒴藋一斤一分、商陸四兩一分、茵草三斤五兩、黃耆四兩一分、牡丹四兩一分、地楡四兩一分、大戟五兩一分、玄參三兩三分、白頭公三兩一分、躑躅花九兩一分、菝葜一兩一分、〇中略

遣諸蕃使　唐使〇中略

草藥五十九種

芎藭、白朮、地楡、桔梗各八斤、獨活、前胡、升麻、夜干、栝樓、牛膝、伏苓、柴胡、烏頭、附子、天雄、商陸、蜀椒、黄芩、松脂、石斛、署預各六斤、大戟、防已、黄蘗、紫菀、苦參、昌蒲、各四斤、石龍芮、澤瀉、玄參、藁本、熟艾、漏盧、䕡茹、甘遂、蜷衡、鬼臼、干地黄、枳實、桑根白皮、丹參各二斤、杏人、五味子、菟絲子、亭歴子、蛇床子、半夏、蒲黄、麥門冬、假蘇各四斤、[illegible]胡麻一斗六升、桃人一石二斗、黄芩、麻黄各八斤、黄連、茵芋、呉茱萸、防風、橘皮各六斤、白歛四斤、[illegible]四合、[illegible]藁薦八枚、黒葛四斤、麻縄四了、朸四枝、

（延喜式三十七典藥）諸國進年料雜藥

畿内　山城國三十二種

王不留行十二斤、獨活十斤、白朮廿五斤、地楡、黄芩各十斤、牛膝、苦參各廿五斤、桔梗三十斤、香薷、夜干各十五斤、昌蒲三斤、枳實、漏盧、藁本各九斤、薺苨、茵草、小蘗各六斤、龍膽、通草各五斤、紫菀三斤、商陸八兩、芎藭四兩、厚朴十八斤、白歛二斤二兩、葛根、[illegible]二斤、鼠草三斤、桃人九升、杏人一斗八升、赤小豆四斗六升、蜀椒一斗二升、鼈甲一枚、白粟大一斗、

○按ズルニ、此他大和以下進ムル所ノ年料大抵同ジケレバ之ヲ略ス、

（日本書紀十九欽明）十四年六月、遣内臣闕名使於百濟、○中略別勅、○中略種々藥物可付送、

（羅山文集外十四國書）答朝鮮國狀[illegible]求請藥草根幷核實之事

夫物產不常、或古有而今無者、或古無而今有者、或古今皆有而中世無者、或中世有而古今皆無者、或土地宜與不宜者、或四方風氣異而爲有無者、中華既然、日本亦同、良醫之用藥、猶離婁之督繩、般之削墨、師曠之用六律、如何可缺哉、只恐杜衡亂細辛、蛇床亂蘼蕪、似而非者、往々不鮮、遂至有買老芋以爲茯神者、蓋良醫不可不愼也、昔聞、檳榔自海上來、戎王子自月氏至、中華植之以爲名稱、況張騫自大宛移來者豈有多品乎、夫醫者仁術也、於治病不可無備也、若云其藥治其病、則其藥之眞僞疑似之間不可不察也、蓋于採山、販于貿市、是故今所求者要其眞、而棄其僞、庶幾、貴國廣博愛之仁、播公共之惠、

ペシ、卽ツリガネニンジンノ根ヲ乾シタルモノナリ、今藥舖ニテ誤テセイチイト呼ブ、薺苨ノ音訛ナリ、然ドモ薺苨ハ別ニ一種アリ、混ズベカラズ、蘇頌ノ說ニ據レバ、沙參ニ南北ノ二品アリ、北沙參白實爲佳、南沙參輕虛爲下ト云フ、本經逢原モコレニ因ル、然ル時ハツリガネニンジンハ南沙參ナリ、時珍ノ說ニテハ、沙參ハ體輕鬆味淡而短ト言フ、本草原始ニモ、獨蘆無心黃白、內虛者眞也ト云フ、皆南沙參ノ形狀ナリ、今別ニ南沙參ノ舶來ナシ、多ク防風中ニ混雜シ來ル、

〔本草綱目啓蒙七山草〕丹參。　ニコタグサ延喜式

今新渡多シ、根ニ數枝アリ、枝ゴトニ長サ一寸餘、或ハ二三寸、徑一二分許、兩頭細クシテ連珠ノ如シ、外皮赤色黃丹ヲ塗ルガ如シ、內ハ紫褐色ニシテ白キ筋アリ、苗ヲ連タルモノ稀ニアリ、ソノ莖方ニシテ細ク枝葉對生ス、皆細毛アリ、葉ハ小樆ニシテ鋸齒アリ、和產詳ナラズ、

〔本草綱目啓蒙七山草〕甘草。　アマキ和名抄　アマクサ同上　大和和方書　カンザウ通名　一名主人種杏仙方　偷蜜珊瑚輟耕錄　大𠻳事物異名

甘草ニ同名アリ、茶薺甘藤モ甘草ト名ク、

舶來ニ數種アリ、南京ヲ上トシ、福州ヲ次トス、新渡ノ福州ハ、甚ダ大ニシテ緊實ナラズ、南京ハ皆細クシテ潤アリ、南京ノ中コシボト名ケテ、外皮縱ニ小皺紋アリ、緊實ナルヲ揀ビ用ユベシ、凡ソ甘草ハ根ノ大小ニ拘ラズ、外皮薄ク肉色深黃ナル者佳ナリ、根大ナリト雖ドモ、皮厚ク肉色淺ク輕虛ナルモノハ良ナラズ、ソノ朽テ黑色ヲ帶ビ或ハ蛀モノハ並ニ用ルニ堪ヘズ、本經逢原ニ中心黑者有毒勿用ト云、市人根ノ最細小ナル者ヲワラ手、或ハワラ甘草ト呼ブ、下品ノ稱ナリ、形歪斜ニシテ節アル處ヲ揀ビ出シ、剉寶ヲキリコミト云、櫃中ニテ折碎タルモノヲ折甘草ト云フ、朝鮮甘草ハ味過テ甜シ良ナラズ、紅毛甘草ハ甚大ナリ、味ハ美ナレドモ性劣ト云、○中略粉草ハ粉甘草トモ書シテ上品ノ稱ナリ、本草原始ニ據ルニ、卽汾草ノ誤、汾州ニ生ズルモノ佳ナ

レバナリ、今粗皮輕虚ナルモノ薄ク切レバ、皆碎ケテ細末トナルモノヲ以テ、粉草ト爲ハ非ナリ、

〔多識編 二芳草〕甘松香、今案加毛知久左、異名苦彌哆、醫林

〔和漢三才圖會 九十三芳草〕甘松香　苦彌哆 金光明經

本綱 甘温 出於外國、叢生山野、引蔓、葉細如茅草、根極繁密、可合諸香及褁衣、作湯浴令人身香、

按、甘松有蝦手甍手二種、以蝦手爲上、

〔重修本草綱目啓蒙 九芳草〕甘松香　一名麝男 綱目拾遺

略シタ甘松ト云、和産ナシ、漢渡ニ二品アリ、蝦様ノ甘松ト呼ブハ根ナリ、形長ク皺シタユガミナ、一顆ニ鬚多ク蝦形ノ如シ、此ヲ上品トシ、藥用ニ入ル、又叢甘松ト呼ハ、蘆頭ニ莖ノ本一寸許ヲ連ネテ切リタル様ハナシ、ソノ形叢ノ蘆頭ニ似テ香氣多シ、是ハ香囊ノ用ニ入ル、藥ニ入レズ、世人春ノヲミナメシヲ、和ノ甘松トスルハ誤リナリ、其草ハ一名カノコソウ、野ガンセウ、サクラガハ草トモ云、雌雄アリ、雄ノ方ハ草小シ、深山ニ多シ、雌ハ大ナリ、共ニ甘松ニ非ズ、敗醬ノ一種ナリ、

〔多識編 二芳草〕豆蔻、上品 別錄 異名草豆蔻、今案豆久、

〔和漢三才圖會 九十三芳草〕草果

本艸必讀云、草果仁生閩廣、八月采收、內子大粒成團、外殼堅厚皺、凡實入劑取子剉成、氣每熏人、

草果 辛温　消宿食、立除脹滿、辟山嵐瘴氣、治瘧母、止霍亂惡心、

按、本草以草蔻草果爲一物、而時珍辨所產及實之形狀異別之、本草彙箋同、必讀亦爲二物、甚詳焉、然花葉之形狀詳草豆蔻、不詳草果、似欠明矣、蓋其草本一物、而因土地實異者乎、實異故氣味亦有和烈之異、主治不同、最不可混用之、今舶來之草果有外皮厚皺、草豆蔻爲仁如無外皮、而各別也、二物性溫能散滯氣、消膈上痰、若明知身受寒邪、口食寒物、胃脘作疼、方可溫散、用之如鼓應桴、或濕痰鬱結成病者亦效、若熱鬱者不可用、

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕豆蔻　一名家孳典籍便覽　資蔻北戶錄、音ヲ借リタルナリ、　豆菽同上　豆叩赤水玄珠　草豆仁醫學正傳　草果一名百子堂輟耕錄

豆蔻ハ草豆蔻ノ略ナリ、草菓草豆蔻各別ナリ、集解ニ時珍形狀ヲ別ツハ可ナリ、混ジテ一條トナシ、目錄ニモ豆蔻卽草菓ト云者ハ非ナリ、本草蒙筌、本草彙言、本經逢原、本草原始、萬病回春、藥性歌皆二種ニ別ツ、共ニ和產ナシ、草豆蔻多クハ皮ヲ去リ仁バカリ渡ス、稀ニ皮アルモアリ、縮砂ノ氣味ニ似テ香薄シ、草菓ハ形長大ニシテ皮ニ線稜アリ、仁モ亦草豆蔻ヨリ大ニシテ臭氣アリ、增、草豆蔻能ク脾氣ヲ行ラシ、滯氣ヲ散ジ、嘔吐ヲ治シ、食ヲ消シ、脾ヲ健ニシ、痛ヲ治ス、凡ソ濕鬱病ヲナス者、コレヲ用テ神効アリ、草菓ハ疫癘瘴瘧ヲ治スルニ効アリ、然ルニ時珍ソノ草菓ニ豆蔻ノ異名アルヲ以テ、混同シテ一條トス、遂ニ後人草豆蔻ヲ廢シテ、惟草菓ヲ以テ、二物ヲ通用スルニ至ル、宜クコレヲ辨別スベシ、

〔多識編二芳草〕白。豆。蔻。、今案志呂豆久、異名多骨、

〔重修本草綱目啓蒙九芳草〕白豆蔻　シロヅク　一名宜州檨子輟耕錄　白砂仁藥性要略大全　殼蔻本經逢原　白豆仁遵生八牋　白叩仁千金方

和產ナシ、舶來唯一種ニシテ僞物ナシ、殼ヲ帶ル牽牛子ノ形ノ如シ、又數多クスヾナリニ成リタル全穗ヲ渡スコト稀ニアリ、コレヲ鈴檨トスヾヅ呼ブ、尋常ノモノハ皆一顆ヅヽハナル、此皮ヲ去レバ縮砂ノ形狀ニ同ジ、味モ縮砂ニ近ク、舌ニ透コト甚シ、是味太ダ辛キユヘナリ、氣モ縮砂ヨリ烈シ、

〔多識編二芳草〕縮。砂。蔤。、今案美加久志、

〔宜禁本草乾集中草〕縮砂　辛溫、主瀉痢腹中虛、消宿食、下氣止休息痢、能起酒香味、治姙女打觸胎動不安、炒末酒下、

〔和漢三才圖會九十三芳草〕縮砂蔤　只云縮砂、砂仁、〇中略

按縮砂、阿瞞陀市舶齎來之、東京者爲上、交趾者其蘊小爲劣、(又有名益智者、纔多而劣、)近年碎粒者來、名砂仁、最良、

倭縮砂　出於伊豆國、是乃針木之實也、形似桑椹、其皮𤎼面白色、實黑似牽牛子、用之充縮砂者甚非也、既爲草與木之異、故官令禁用之、

〔重修本草綱目啓蒙 九芳草〕縮砂蔤　ミカタシ古名　一名鳳味團頭(輟耕錄)　賽桂香(輟耕錄)　桂香(衞生方)　砂仁(附方、本草)

(蔤ハ根節ナリ、藥家ニ全キモノヲ縮砂ト云ヒ、バラバラニナリタルモノヲ砂仁ト云フハ誤ナリ、)

和産ナシ、略シテ縮砂ト云、舶來異物ナリ、藥肆ニ伊豆縮砂ト呼ブモノハ山薑(ハナシヤウガ)ノ實ナリ、用ユベカラズ、舶來ノ縮砂蜜、古渡ハ小ク、新渡ハ大ナリ、共ニ皮ニ刺アリ、山薑實ノ皮ニ異ナリ、子モ外黑ク內ハ白シ、香氣モ各別ナリ、廣東新語曰、曰縮砂者言其殼、曰蜜者言其仁、曰縮砂蜜者言其鮮者、曰砂仁者言其乾者也ト、是俗說用ユルニタラズ、

〔多識編 二芳草〕益智子、今案曾志志利、

〔重修本草綱目啓蒙 九芳草〕益智子　トシヽリ古名　一名英華庫(輟耕錄)　益志子(異國必要)

和産ナシ、此類皆南方ノ產ナリ、皆舶來ニシテ僞雜無シ、皆殼ヲ連ヌ、ソノ形皮ツキノ縮砂ヨリ瘦テ末尖ル、子ハ縮砂ヨリ大ニシテ氣味烈シ、色黑シテ肉白シ、

〔多識編 二芳草〕蓽茇、今案阿利加多、異名蓽撥、

〔宜禁本草 集中 草〕蓽撥　辛大溫、溫中下氣、散腹氣、消食、除胃冷陰疝痃癖冷痰嘔逆醋心霍亂、以調食

蓽茇

〔重修本草綱目啓蒙 九芳草〕蓽茇　一名椹𣏌(輟耕錄)　蛤蔞(本草原始)

和産ナシ、舶來ノモノ多シ、圓サ二三分、長サ一寸餘、石菖蒲(セキシヤウ)ノ穗ノ如ク、又椎(ハヒ)及赤楊(ハンノキ)ノ花ノ蕾ニ似タリ、細實密ニ綴リ、黃黑褐色、味辛シテ胡椒ノ氣アリ、胡椒ニ換用テ食味ヲタスク、廣州ヨリ出ス

ヲ薩摩蓽茇ト云、香味トモニ薄クシテ劣レリ、下品ナリ、今花戸ニ漢種ノ蓽茇ト云モノアリ、三白草ノ夏ニ至テ、葉白クナラザルモノナリ、花實モ三白草ニ異ナラズ、蓽茇ニ非ズ、

〔草木育種 下藥品〕防風。　是は藥に入なり、料理に用るぼうふうとは別なり、防風は享保年中、漢種渡今多し、山畑の野土厚き地に植べし、春種を蒔なり、又舊根を植るには二三月よし、竹にて穴を深くあけさし入て土を柔にすべし、尤畑を冬中に肥置べし、

〔本草辨疑 二〕芎藭。
中古漢ヨリ不渡シテ、甚高直ニシテ一兩價銀十六錢スルコトアリ、庸醫用ルコト不能シテ和ヲ用ユ、其比和芎ヲ捨テ漢芎ヲ貴ブトイヘドモ、易求ニ任テ主能ノ擇ビナク、自然ニ使覺テ、今ハ專ヲ和芎ヲ貴ンデ漢芎ヲ賤ンズ、本朝ノ俗、諸藥ノ擇ヲ不知、皆藥家ニ任テ求之、故ニ其主能ノ差別ナク、卑キ價ノ高下ヨリ初テ用之コト、誠ニ口惜キ哉、明者可嘆之、諸藥皆如斯ナル故ニ、世ニ誤リ用ルモノ多ク有之、

〔農業全書 十 藥種之類〕川芎
川芎も良藥なり、古は本朝にはなかりしを、寛永の比、長崎よりたねを傳へ來て、大和にて多く作る、其外諸所に作るは性よからず、

〔和漢三才圖會 九十三 芳草〕鬱金。○中略
按古者自暹羅多來、故今自廣東及南京福州少來、亦皆稱暹羅鬱金、又自琉球多來、其佳者名御物、色濃黃也、故紅帛下染可用、暹羅染椶紙等可用琉球、凡鬱金染黃色、加酸少許良、宜陰乾、如直見日則不鮮、既爲衣後亦不可中於日變色、

〔物類品隲 三 草〕延胡索。　和產所在ニアルモノ、花葉頗相似タリトイヘドモ、根ノ色白甚小ニシテ不堪用、漢種上品、享保中種ヲ傳フ、大葉小葉ノ二種アリ、俗牡丹葉延胡索ト云、葉形三叉ニシテ微ク

牡丹葉ニ似タリ、二月紫花ヲ開、地錦苗花ニ似タリ、根ノ形半夏ニ類シテ黄色ナリ、

〔和漢三才圖會 九十五 毒草〕藜蘆 中略 和名山宇波良、一云之之乃久比乃木、

本綱、藜蘆山谷處處有、初春生苗、葉似初出棕心、又似車前草、莖似葱白、青紫色、高五六寸、上有黑皮、裹莖似棕皮、有花、肉紅色、其根似馬腸根、長四五寸許、黄白色、據三二寸許、二三月采、根陰乾、生高山者爲佳、○中略

按藜蘆今多植庭園、愛其花、形狀全如上說、而根少異耳、性宜陰處、冬亦不凋、葉似車前草而厚、長布地生、三四月抽莖開花、肉紅色、或淡黄、或柿色、或外褐內白、或外紫內黄、或樺色、或外青內白者名吾須手、或淡紫者名出船、根鬚似烏芨、而中根多如鬚、故名蝦根、恐此藜蘆也、然自古以万年青爲和藜蘆、甚非也、

〔多識編 二 山草〕胡黄連今案異名割孤露澤、

〔大和本草 六 藥〕胡黄連 黄連ニ似タ大也、黄ナラズ味苦シ、蘆頭モ黄連ニ似タリ、中華ヨリ來ル、此草日本ニアリヤ未詳、千振トテ秋白花ヲ開キテ、葉細ニ味甚苦キ小草、山野ニアリ、又タウヤクト云、國俗是ヲ好ンデ用之、殺蟲消積、コレヲ胡黄連ト云非ナリ、或曰、倭方ニ胡黄連トカケルハ、皆センブリヲ用ユベシト云、

〔重修本草綱目啓蒙 八 山草〕胡黄連

和產ナシ、藥舖ニ舶來アリ、根ノ形チ地黄ニ似テ長サ二三寸、徑リ二三分許、外ハ黄白色ニシテ皺襞アリ、內ハ紫黑色ニシテ五ノ白點アリテ、梅花瓣ノ如ク並ベリ、本草原始ニ、肉黑有白點類梅花、外淡黄色ト云フ是ナリ、味苦シ、故ニ古ヨリセンブリ一名トウヤクニ充テ來レドモ誤ナリ、

〔重修本草綱目啓蒙 十 隰草〕續斷 ○中略

舶來ノ者ハ根皆大ナリ、是南續斷ナリ、其形チ略蓟根ニ似タルモアリ、故ニ本邦ニテ、蓟根ヲトリ

ヲ貢ル者アリ、然レドモ舶來ノ中ニ莖ヲ連ルモノアルヲ見ニ、方ニシテ、對生スル時ハ薊類ニ非ズ、和產詳ナラズ、藥ニ入ルヽニ川續斷ヲ良トス、集解弘景ノ說ニ、桑寄生ヲ俗ニ續斷トスルハ誤ナルコトヲ云フ、獨活寄生湯千金方ニハ寄生ヲ用ユ、古今錄驗ニハ續斷ヲ用ユ、卽桑寄生ノコトヲ續斷ト書シタルナリ、今人本條ノ續斷ヲ用ユル者ハ非ナリ、

〔物類品隲三草〕附子　其母ハ川烏頭ナリ、天雄、側子、漏藍子皆是ヨリ出ヅ、莖高三四尺、葉草烏頭ニ似テ深綠色ニシテ岐叉少シ、花大抵草烏頭ノゴトク淡紫色ナリ、松岡先生附子ヲトリカブトトシ、培養製法ヲ不知、故不堪用ト云ハ大ナル誤ナリ、楊天惠附子記、及東壁所說甚明ナリ、考フベシ、此物和產ナシ、漢種希ニアリ、

〔重修本草綱目啓蒙十八山草〕柴胡〇中略舶來ニ銀柴胡ト呼ブアリ、根ノ形肥大ニシテ皮皺バミ黃白色、切レバ内ニ黃紋アリ、コレハ柴胡ニ非ズ、卽李時珍根似桔梗沙參、白色而大、市人以僞充銀柴胡、殊無氣味、不可不辨ト云モノナリ、而シテ今痘科ニ用テ熱ヲ解ス、炮炙全書ニ、李念莪勞ト瘧證トヲ治スルノ說ヲ引ケリ、古方ニ銀柴胡ト云ハ、卽銀州銀縣ノ柴胡ニシテ、黑色ノモノヲ指ス、今ノ鎌倉柴胡ナリ、色ハ白キヲ云ニ非ズ、今ノ世ニ色ノ白キ者ヲ以テ銀柴胡ト爲モノハ、乃別ニ一種同名ナルモノニシテ、和產詳ナラズ、又今和俗銀柴胡ト呼モノアリ、別物ニシテ菜類ナリ、

〔皇國名醫傳後編上〕古林見宜古林見桃

古林正温、通稱見宜、〇中略福岡侯長政遺齎西洋藥品就訂良否、正温品第之、且告使者曰、近世蠻藥來益多種、人情好奇、爭而趨之、然殊方之物難明實多、千金之子坐不垂堂、是豈尊人所宜試乎哉、

〔外交志稿二十四〕九年甲辰〇正德二月、大和ノ人、桂川甫筑命ヲ奉ジテ和蘭貢使ト對話ス、甫筑幼ヨリ平戸ノ醫員嵐山甫安ニ從ヒ、長崎ニ居リ、常ニ蘭館ニ出入シテ、醫術及ビ言語ヲ習フ、十年

己巳、前篇ニ命ジテ、西洋藥品ヲ製煉セシム、〈桂川甫賢〉

〔尺素往來〕潤體圓者奇特良藥、神妙驗德、爲最上之由承候之間、和劑方、簡易方、千金方、百一方、直指方、積奇方、濟財總錄、醫方大成等、各伺考候之處、藥種大略同篇候、仍難和合之志候、牛黃幷白花蛇、依難得之未達本望候、蘇合圓、至寶丹、麝香圓、沈麝圓、牛黃圓、麝香丸、兎絲子圓、阿伽陀藥幷膏藥等者、當世人々火鑪袋之底、面々小藥器之中、必竊持之、以不得貯爲恥辱候、又瀉藥者威靈圓、金露圓、膏藥者太一膏、雲母膏、尤爲重寶云々、妙香圓者除霍亂之妙藥、鬼哭散者退瘧疾之靈方也、又腫物平愈者、五香連翹湯之故候、

〔撮壤集下飮食〕合藥類

蘇合香圓　潤體圓　至寶丹　靈寶丹　續命湯　羌活湯　延命丸　正氣散　嘉禾散　養脾湯　敗々湯　理中圓　建中湯　神積丹　治蟲圓　排風湯　香蘇散　瘡散子　青蒿丸　麝香丸　沈香圓　地仙丹　肥兒圓　怪々散　玄兎丹　三黃圓　金露圓　溫白丸　竹石湯　全湯　六一湯　集香湯　平胃散　勝紅圓　妙香圓　十補湯　七氣湯　腦麝圓　透頂香　五膈散　五噎散　解毒圓　三稜丸　白伏散　阿伽佗圓　人參順氣散　烏藥順氣散　八寶回春湯　西州續命湯　順氣木香湯　十全大補湯　五香連翹湯　七味連翹湯　人參黃耆散　人參養榮湯　錢氏白朮散　無比山藥圓　五痔保童圓　耆婆萬病圓　菟絲子圓　大全飮子　地黃煎丸　三五七散　訶梨勒丸　十膈氣散　益智湯〈智一作〉

〔延喜式〕〈三十七典藥〉臘月御藥

犀角丸六劑、芍藥丸三劑、溫白丸四劑、千金萬病丸一劑、升麻膏二劑、耆婆膏一劑、調仲丸一劑、芒消黑丸一劑、鼓丸一劑、供御漆案四脚、小韓櫃四合、中取案四脚、〈敷以漆案〉所須犀角一斤三兩二分、甘草七兩二分、巴豆十一兩一分三銖、桂心四兩、薰陸香一兩二分、楓香一兩二分、蜜小二斗五升七合、〈已上並受內藏寮〉

升麻十兩二分、黃芩一斤五兩、當歸七兩、防風六兩、麻黃六兩、人參八兩、黃蓍六兩、支子人九兩、干藍六兩、防葵四兩、黃連十兩、芍藥九兩三分、葶藶子九兩、杏仁十二兩、柴胡八兩、大黃二斤十五兩二分、烏頭十兩、紫菀二兩、吳茱萸二兩、昌蒲二兩、厚朴二兩、桔梗二兩、皂莢二兩、伏苓六兩、干薑二兩、蜀椒三兩、前胡二兩、麻子六兩、龍骨一兩二分、鼈甲四兩、䗪虫六十枚、枳實八兩、細辛三兩、芒硝一斤二兩、栝樓根一兩、龍膽一兩、苦參一兩、豉六兩二分、大戟二兩、莽草一兩、芎藭一兩、獨活一兩、虵銜七兩、附子一兩、生地黃五兩、薤白廿莖、白斂六兩二分、漏蘆四兩、連翹四兩、蒴藋八兩、松脂一兩二分、白薇二兩二分、青木香三兩、已上自藏庫行之、猪膏一斤十兩三分、酒酢各五升、油絁二丈、絁一丈、紗二丈、綿一斤、調布三丈、安藝木綿大四兩、紙卌張、陶椀三合、壺三合、盤三口、葉坏十合、洗盤三口、叩瓫二口、麻笥盤二口、水麻笥二口、杓二二柄、大笥二合、笵一柄、折櫃二合、炭二石五斗、砥一顆、長席四枚、長薦四枚、通用中宮井雜給藥、

右與元日御藥共造備、晦日奏進、其用途雜物、同在元日料內、但件御藥八日更受送於八省御齋會所、十四日返貢、〇中略

遣諸蕃使　唐使十一種

犀角丸、大戟丸各四劑、七氣丸、八味理仲丸、百毒散、度嶂散各十二劑、伏苓散十六劑、神明膏六劑、萬病膏、升麻膏各八劑、黃良膏四劑、所須藥種、各依本方、其用度雜物、簁六口料絹一丈二尺、裹油絁一丈三尺六寸五分、紙九十八張、木綿二斤十四兩、酢七斗七升、調布一端四尺、拭臼布二丈、陶壺廿三口、炭七斛九升、

〔雍州府志 六土產〕山城國平安城、八百年來不易之帝都、而繁華之地也、故至醫師之良、不乏其人、故諸家有救急之成藥、今擧其大概、

龍腦丸、〇中略 曾和泉國界和氣氏、有半井春蘭軒者、〇中略 一旦入中華、從熊宗立而學醫、歸朝時傳龍腦丸方、〇中略

快氣散幷紫調散　堂上山科家之所調合也
保童圓　堂上富小路家製之、豐心丹亦然、
屠蘇白散幷度嶂散　丹波氏祖康賴出自後漢靈帝末、略○中至其末裔醫術日々衰、纔領三十石之祿、是爲屠蘇料、每年臘月晦日製屠蘇白散幷度嶂散、獻禁裏院中、且捧官家而已也、舊記屠蘇之屠字加一點爲屠、忌尸之字而加點者乎、是本朝之故實也、近世醫家曲直瀨道三傳丹家之術、而大與家、
延齡丹略○中　天文年中、洛陽有曲直瀨道三者、略○中門人玄朔爲嫡傳醫術、玄朔相續仕公方家、號延壽院、自製延齡丹而救人、玄朔之末裔代々少年日醫東變與半井家之嫡子交爲典藥頭、遂稱和丹兩家、今世業醫術者多出自斯兩家之門、
蘇香圓略○中　賢士稱、以士字從十從一、而至十稱之謂也、其末裔連綿而仕公方家、曾製蘇香合圓傳家、救人之急、略○中
豐心丹　傳言、興正菩薩叡尊、住南都西大寺、於茲爲救諸人之疾苦、製斯藥以傳于世、故世稱西大寺藥、今省藥字、專稱西大寺、略○下
〔本朝醫談〕奇應丸は、永正の頃、東大寺の太鼓破れて張かへんとて見れば、ふるき皮のうらに藥方書付てあり、製して用るに、奇應ありければ、依て名づくと、雙桂集に見えたり、返魂丹は、儒門事親方妙功十一丸の變方也、金屑丸は、局方金液丹の變方なり、安神散は、導道師の製にて、妙香散の變方なり、延齡丹は、蘇合香圓の變方なりといふ說非なり、蘇合香圓本名吃力伽丸とて、木を用ひ、安息香合犀角等あり、元來梵醫の鬼病を治する藥なり、延齡丹はそれらの品なく、咽喉を利し、呼吸を通ずるを主とす、順氣の藥にして、導道師一溪翁受授相傳の方なりと、預藥集に見えたり、夫咽喉は、氣の路なり、氣は生の本なり、呼吸通順なれば、目明にして、耳きこえ、四肢百骸五臟六腑皆ととのふ、呼吸の本を知るものは、道心人心君火相火を語るべし、

〔塵塚談　上〕氣。付。といふ藥。の事、延享寛延寶暦の比迄は、卒倒或は垂死の時は、延齡丹を用ゆ、寶暦の末より熊膽を專用とし、延齡丹も用ゆ、寛政以來目藥の沃雪を用ゆ、熊膽をも用る事となれり、人身に古今の差別なければ、療病に今昔のひとしからざるべきはずはなし、醫道も時勢により定らざるは、疑ふべき事なり、又、紫圓、備急圓、滚痰丸、石膏、附子の類は、寛延寶暦の比迄は、恐れてむざと用ひざりし藥也、庸醫には法銘をも知らざりしもありしに、近比は右の攻擊の藥を、庸醫までも、陳皮甘草などを遣ふごとく用ふる事となれり、

〔青嚢瑣探　上〕上總州舌。疳。藥。

余壷年在藍溪先生塾中時、竊思吾長而爲人治疾、小恙則嵌甲、鷄眼、黑痣、雞眼子等、大患則傷寒、脚氣、痢疾之類、莫論而已、其他至于癇疾、癩病、鼓脹、偏枯、勞瘵、肺癰、舌疳、乳癌等之古今所難治者、亦欲得奇方妙藥以盡治之、是以求諸百家醫籍、或問諸友朋、後游城攝、探名家秘方試之、今且二十餘年、經驗不可枚擧也、然至于鼓脹、偏枯、勞瘵、肺癰、乳癌、舌疳、邦俗呼曰舌疽則取效僅々無幾、常以此爲憾焉、嗚呼此數證素係癈疾者歟、曩橋本四郞左者、抱病與吉田道見俱自上總州九十九里來、就余求治、渠云、隣郡有一老醫、妙起舌疳、然秘惜其方、不敢傳人、余頃請顧二子以重利傳其方、未落我手中、近吉田道見得此方來傳之、因錄後卷、宜以參看、

〔天保集成絲綸錄　八十〕寛政七卯年八月

町奉行江

町醫師　松本良甫

銀拾枚

右先達而藥。法。呈。上。候ニ付被下候間、其段可被申渡候、被下銀は、御納戸頭相談可被請取候、

寛政九巳年四月

町奉行江

銀拾枚　町醫師　佐藤元庵

右家傳之藥方、多紀永壽院江傳達候ニ付、被下候間、其段可被申渡候、被下銀は、御納戸頭相談可被受取候、

(倭名類聚抄十二)丹藥　大唐延年經云、九轉丹、(一名七轉丹、一名流珠丹、一名延年丹、一名寶珠丹、一名闕會丹、一名玄霜丹、一名綠雪丹、一名練宮丹、一名寶花丹、)紫靈丹、(一名品生丹、一名反魂丹、一名精月丹、一名神餘丹、一名太一丹、一名太品丹、一名滿神丹、)招魂丹、(一名金生丹、一名大陽丹、一名倒景丹、一名上景丹、)四神丹、(一名神靈丹、一名靈曜丹、一名靈玄丹、一名流雪丹、一名延靈丹、一名陰陽丹、一名神濱丹、)三景丹、(一名飛雪丹、一名玄要丹、一名綠神丹、一名赤精丹、一名紫微丹、)太一三使丹、(一名神雪丹、一名精神丹、一名雪青丹、一名太一丹、一名上仙丹、一名太一力神丹、)五靈丹、(一名昇靈丹、一名雲花丹、一名九華丹、一名力靈丹、一名丸鬼丹、)八石丹、(一名靈日丹、一名紫日丹、一名流尾丹、一名入綠丹、一名四時丹、一名飛霜生仙丹、)金膏丹、(一名昇雲丹、一名朝霞丹、一名綠錦丹、一名沖虛丹、一名玄靈丹、)金液丹、(一名玉流丹、一名靈花丹、一名靈景丹、一名神化丹、一名宣靈丹、一名不老不死丹、)王粉丹、(一名金紫丹、)紫遊丹、(一名少空丹、一名陵虛丹、一名輝華丹、一名華景丹、一名洞人丹、一名靈雲見日丹、)玄黄丹、(一名黄花丹、一名散華丹、一名紅景丹、一名静夷丹、)流珠丹、(一名鍾黄丹、一名紫流霞丹、一名紅霜相圓丹、一名太一中黄丹、一名太一虛丹、)紫雪丹、(一名少虛丹、一名靈陽丹、一名雲陰丹、)凌階積雪丹、(一名積霜白雪丹、一名玄霜綠雪丹、一名瑤化神爐丹、一名制霜散印丹、)白雪丹、(一名靈雪丹、)

(續日本後紀仁明二十)嘉祥三年三月癸卯、帝叡哲聰明、苞綜衆藝、(中略)留意醫術、盡諳方經、當時名醫不敢抗論、帝嘗從容謂侍臣曰、朕年甫七齡、得腹結病、八歲得臍下絞痛之病、尋患頭風、加元服後三年、始得胸病、其病之爲體也、初似心痛、稍如錐刺、經以增長如刀割、於是服七氣丸、紫苑生薑等湯、初如有効、而後還重劇、不肯効驗、冷然歎息、(中略)憂之、勅曰、予昔亦得此病、衆方不効、欲服金液丹幷白石英、衆醫禁之不許、予竊服遂得疾愈、今聞所患、非草藥之可治、可服金液丹、若詢諸俗醫等、必駁論不肯、宜喚海淡海子細論問、隨其言說服之、度奉勅旨服丹藥、果得効驗、衆爲救解、古發說自治之法、世絶良醫、倉卒之變、可投故也、今至晩節、熱發多變、救解有煩、世人未知朕躬之本病、上皇之勅旨、必謂妄服丹藥、救施自治而敗焉、宜記由來、令免此謗、遂詔實記而載之、

(大和名所圖會三添下郡)西大寺(中略)

膏藥

丸藥

豐心丹（坊中にことくあり、道宣律師もろこしより、豐心丹の方を傳へ來られしとぞ、一說に、島山の何がし、唐土より方を求め、秘方とせられしが、西大寺の大衆へ軍場にて心のにたらきあり、此賞として、豐心丹の方に、三百石をそへて寄附せられしと也、島山の記錄に見へたり、）

〔倭名類聚抄十二藥名〕膏藥　諸家方云、千瘡膏（治一切瘡、一名）澤蘭膏（令生髮長）　枕中膏　升麻膏（治丹瘡）　水銀膏　賊鼠膏　犀角膏　白芷膏　生髮膏　蓮子膏　五黃膏（治諸熱瘡）　耆波膏（治一切風毒）　丹參膏（令易產）　胡粉膏（治蝸瘡）　烏犀膏（治一切瘡）　雄黃膏（治瘑瘡）　附子膏（治白癜）　藍漆膏（治疥瘡）　商陸膏（治水瘡）　長髮膏（治落髮）　麝香膏（治惡瘡）　芎藭膏（治丁腫）　木蘭膏（治齆鼻）　當歸膏　射干膏（治喉痺）　黃芩膏　大黃膏（治熱瘡）　消石膏（治惡瘡）　甘草膏（治小兒惡瘡）　松脂膏（治惡瘡）　五味膏（治頭白禿）　麻子膏（治燒瘡）　槐皮膏（治浸瘡）

〔下學集下器財〕羊蹄膏（ヨウテイカウ）　膏藥（カウヤク）　竺傳膏（チクデンカウ）（此膏藥方者、自天竺傳來、故云爾、）

〔雍州府志六土產〕膏藥　凡本朝外科有兩流、一本朝所傳來也、一傳西洋耶蘇治療之法、治瘡瘍幷金瘡、是謂南蠻流、今以斯傳爲良、太乙膏、萬應膏、楊柳膏等所々賣之、

〔倭名類聚抄十二藥名〕丸藥　諸家方云、七氣丸（治七氣病、七氣者、寒熱之類、其狀各異、）決明丸（治目不明）　理中丸（治霍亂下痢）　乾薑丸　烏梅丸（治丁腫下痢）　當歸丸　犀角丸　七疝丸（治七疝病）　備急丸　消飲丸（治飲病、飲者、皆木過度所成病也、）紫菀丸　芒消丸（治水腫小便不利）　前胡丸　雞距丸（如雞距、面附目眦）　胡椒丸（治胸中冷氣）　桃人丸（治月水不通）　黃耆丸（治虛勞小便不利）　伏苓丸（治心昏多忘）　黃連丸（治赤目）　大黃丸　杏人丸（令耳目聰明）　二車丸（此藥載車常隨後、以名之）　昌蒲丸（治耳聾）　定志丸（治人志不定）　鎭心丸（治如狂心）　不胃丸（治腹中百病）　四神丸（治萬病、魏文帝後傳武帝）　九虫丸（治腹中九虫、虫各有名）　人參丸　龍骨丸（治長血）　駐車丸（治下痢）　厚朴丸（治下痢）　牽馬丸（病家常牽馬買之、故以名之）　防風丸　升麻丸（治咽喉腫）　橘皮丸（治口中爛瘡）　通明丸　甘草丸　葛根丸　千金丸　大棗丸　礬石丸　麝香丸　亭歷丸　消脹丸（治腳氣腹滿不飲食）　昆布丸（治瘤）　恒山丸（治瘧日發）　支子丸（治小兒下痢）　藥醫丸（一邑有此藥、不用醫、故以名之）　槐子丸（治五痔不止）　桂子丸（治痰嗽）　桑皮丸　玉壺丸（治痰病）　松脂丸（治二十年耳聾）　十水丸（治十水病）　平內丸（治心腹滿）　露宿丸（治寒熱之厲、服之露宿、故以名之）　白解丸（治萬病）　雄黃丸（治鬼病）　細辛丸（治百節疼痛）　朴消丸（治腹中瘕）　胡麻丸（補五內傷、益氣力）　遠志丸　腎氣丸（治腎氣不足）　溫泉丸（治一切病）　殺鬼丸（尺囊懸家四角、又朔望夜、牛於庭中燒之、則殺鬼、）入軍丸（可避五兵虎狼）　萬物丸

散藥

一名天靈丸一名神仙丸度世丸（王子喬服之三年飛行）

〔政事要略〕（九十五至要雜事）爲祓陰陽効驗貴之

吉備大臣私敎類聚云、可知醫方事、右丸料藥者、杏人（去心皮熬之）、亭歷子（熬）、芒消（白熬）、合大黃（先錯細擣）、蜀椒（汗）、遠心（去心皮）、桂心（去皮）、甘草（炙）、巴豆（去心皮熬之）、烏頭附子（皇炮）、鹿茸（炙）

〔日本風土記〕（四）醫用（略）○中

藥丸（寶六）

〔基熙公記〕延寶六年八月二日庚午、入夜無保麗出、令持參妙藥方、爲後代記之、

奇。應。丸。

人參一兩　沈香一兩　麝香六分　熊膽一匁五分　金箔十五枚

右細末シタ、熊膽水ニテトキ、總藥ヲ入レ丸ス、●此大キサニ金箔ヲ衣ニス、

此藥功　一錢　一大霍亂（中略則用之）　一產後チノミチ　先大槪是等也

〔倭名類聚抄〕（十二藥名）散藥　諸家方云、神仙散、飛雪散、菊花散、人參散、日月散、四時散、署預散　防風散（治風病）、干薑散　決明散（治目不明）、烏蔷散　蜀椒散　茶當散（切經上云）　熨火散（以絹囊盛之、以熨令燒）、胃（病）木蘭散　桂心散　葛荚散　細辛散　寒食散（服之寒飲寒臥、故以名之）　龍骨散　浮石散（治咳嗽）　小豆散（治赤痢）　慈石散　流膽散（治腸不止）　寒內散　商陸散（治白痢）　雞舌散（治胡臭）　牛膝散　赤耳散　蒲黃散（治下血）　豆醬散　敗醬散（治陰中痛）、伏苓散　健土散（治肝門出）　消石散（治大小便不通）　鉛丹散（治風癇）　五痔散（治五痔）　定志散　鹿角散（治陰不起）　胡麻散（治風病）　麻子散　枸杞散（益氣延年令人不老）　聰明散　別離散（治男夢見女女夢見男思慕）　十精散　益多散　委蕤散

秃瘡散　七顆散　柏葉散

〔多聞院日記〕天文十三年八月四日、新造屋壽心院御參籠之間、よひの間參踏申口御物語申、平。胃。散。は、最上ノ妙藥ナル由、向井殿被申間、我本三連など加ナ吞候由申ス時給候、此ノ藥ハ、日本ノ方也、

與性善薩ノ、醫師ニ談合シテ、不辨ノ客僧ナド朝腹ニテ乞食ニ出ル時、風ヲ不レ引飮食ヲ能クス、メ氣力虫等ニ可レ然タヤスキ藥何カアルベキト被二仰付一、此藥可レ然旨依二異見申ス一ニ、世ニ流布云々、

〔本朝醫談〕老談一言記、加藤清正の醫師いひし事あり、高麗陣の時に、水土にも習はず、正。氣。散。の方劑ましかるべしとて、其料を用意して渡りしが、按の如く、皆々煩ふ事ありしかば、不換金正氣散を服せしむるに、其驗なし、かの醫試に與ふべき藥ありとて、一人に先づ藥を與ふるに、立處に驗あり、並に於て其佗の者どもに與ふるに、ことごとく功あり、其方を問に香。蘇。散。なり、其故を問に、陣中にて氣鬱を發したる故なりといふ、それより他の大將の家中も、皆香蘇散にて病いやせる事を得たりと見ゆ、太平の世といへども、時を論る旅行はある事なれば、此心得あるべきなり、本藥を外感に用ふる事、知ざる醫なし、食傷にもよきなれば、○中略 諸病に加減して用ふるなり、

〔倭名類聚抄十二〕湯藥　諸家方云、皇子湯一名王子湯、治二下痢欲一レ死、　小豆湯　白石湯　大黃湯　破棺湯服レ之破棺蘇生　二皮湯用二桃李樹皮一　石榴湯治レ痢　杏人湯　犀角湯治二脚腫一　鯉魚湯　五香湯治二丁腫一　葵根湯治レ淋　大豆湯一云大豆藥、治二産後中風一、　走馬湯治二下痢一如二走馬一　大棗湯治二吐血一　厚外湯治二霍亂一　理中湯　麻黃湯　粱米湯　竹皮湯治二嘔血一　瘥瘡湯治二瘡未一レ發之前　服レ之卽聰、故以名レ之、　桂心湯　龍骨湯　靑龍湯　玄龍湯　白虎湯　伏苓湯　麻子湯　生薑湯　當歸湯　甘草湯　瞿麥湯治二胞衣不一レ出　救明湯治二上氣欲一レ死　遠命湯　還魂湯全死口噤者服レ之亡生　九盞湯煮藥之間加二九盞水一煮レ之、故以名レ之、　馬道湯治二下血一　三沸湯　五木湯煮二槐桃楸桑穀五木一、治二鬲氣一、

〔政事要略九十五至要雜事〕爲レ視二陰陽効驗一截レ之

。。湯料藥者、大黃叺咀以二清少水一、經二一宿一而令レ盡二其水一、然後諸藥所レ煮過レ半、復加二大黃一、但芒消煮了之後加而研耳、如レ是之類可レ知二其理一、但不レ可レ專レ業也、

〔倭名類聚抄十二〕煎藥　考聲切韻云、煎、煎眞音箭一　煮二藥汁一令レ稠也、諸家方云、枸杞煎　骨塡煎　蘇密煎　生薑煎　地黃煎　茱萸煎治二胃中一　杏人煎治二失レ聲不一レ出　百部煎治二咳嗽一　厚朴煎

〔延喜式 典藥 三十七〕地黃煎料

生地黃廿石、(十石加味、十石御料、)絹一疋二尺、漉煎絁六尺、壺𢃇絁六條、(別長一尺、廣九寸、)梳一合、𢃇絁一條、(長一尺、廣九寸、)釜口𢃇絁一疋半、絞地黃調布二端四丈、綿三屯、商布一段、由加𢃇調布三條、(別長四尺、二幅、)匱纏綱熟麻廿斤、(纏鐵、請受、)調布潔褁五條、(別六尺、)襌五條、(別六尺、)手巾一條、(長五尺、)燈油六升、酌煎匏三柄、沫籠二口、納汁由加六合、盛煎陶壺十六合、(受大五升已上、)受絞汁叩盆六口、盛煎陶𥫱一合、(加盖、)麻笥三口、杓三柄、紙十六張、(裹口料、)結固壺口木綿大一斤、薪二千四百斤、炭廿石、官人三人、侍醫四人、(已上官人、臨時增減、)史生二人、潔衣各絁一疋、綿二屯、藥生十人、駈使丁二人、各調布二丈七尺、(衣二丈、褌七尺、)

右件雜物、九月一日申省請受、但地黃有多少、所須料隨亦增減、其造煎之間、限十六日給酒食、〇中略

凡合藥所須麹料、小麥一石、(御藥料二斗、鍾乳料八斗、)蘇、乾黃本五十斤、料、糯米七斗、每年申省請受、〇中略

造供御藥料

胡麻二石、(搾油料、)豉一斗、(造藥料、)粟二斗、(煮藥料、)鹽三斗、(造鹽料、)調布帳一條、(長七尺、三幅、)明櫃一合、臼一口、(加杵、)薪七百廿斤、

右鹽已上、每年十二月中旬申省、但帳幷明櫃臼等並隨損請受、

〔三代實錄 四 淸和〕貞觀二年十二月二十九日甲戌、從五位下行內藥正大神朝臣虎主卒、〇中略虎主性好戲謔、最爲滑稽、與人言談、必以對事、嘗出自禁中、向作地黃煎之處、途逢友人、問云、向何處去、虎主答云、奉天皇命、向地黃處、此其類也、然處治多効、人皆要引、療病之工、廣泉沒後、虎主獨擅、太收肆價焉、

〔菅家文草 三 詩〕分良藥寄倉主簿

欲留霜白老、分寄地黃煎、若和盃中物、當爲飮酒仙、

〔本朝世事談綺 一 飮食〕地黃煎

古へ、宮上より、醫家に命じて、地黃煎を製せしむ、其法、穀芽末粉に、地黃の汁を合せ、これを煉て用

雜藥

ゆ、腸胃を潤し、氣血を益すの良糕なり、今は地黄の汁を用ひずといへども、此名を以す、京稻荷前にて專製之、江戸にては下り飴と稱す、

〔扶桑略記二十二宇多〕仁和五年八月己巳日、又相撲事、從栢原天皇桓武〇御代至今、代々天皇皆甚好之、貞觀以後寂然無音、今聖主不捨之、亦不樂乎、朕本自筋力微弱、而無可敵者、今亂國之主而莫不日致愚慮、每念萬機、寢膳不安、爾來玉莖不發、只如老人、依精神疲極、當有此事也、左丞相答云、有露蜂者、命宗繼調進、其後依彼詞服之、其驗實可言也、

〔雍州府志六土產〕齒牙藥〇中略　又一種有御坊藥、凡本朝京師邊有五三昧、主土葬及火葬之者、是稱御坊、此事始僧徒勤之、倭俗僧謂御坊、近世僧徒使葬場之土人爲之、故今雖束髮人、又稱御坊、傳言、此人有新死之者、則尋其病、若有積聚癥瘕入火不燒者、竊取其不燒之癖塊、再燒爲霜、授其有病者、是從治之法乎、凡御坊之於治療也、多此類乎、今專稱御坊藥師、又謂御坊藥、

〔昔物語〕一昔延寶天和六七十年以前、みいらといふ藥大きにはやり、歷々衆大名も呑む、下々も呑、癪氣痞に能く虛性を補ひ、脾胃を調へ、氣力を强くし、食傷其外諸病に能とて呑ざる人なし、方々の藥種屋にて賣、赤坂みいらとて、赤坂に大坂屋と云生藥屋、下直に賣、皆調て呑ける、代は長崎屋抔にて廿双三十双抔に賣、十五双計のも有、赤坂みいらは五双三双に賣る、何か藥種二三種に松脂にて煉たる樣なる藥なり、病氣にはきかず、又あたりもせず、何の益なき藥なり、七八年疎の外はやりて、段々止し、

藥性

〔運步色葉集屋〕藥性

〔政事要略七十糺彈雜事〕新修本草第一云、藥有君臣佐使、以相宜攝合和者、宜用一君二臣五佐、又可用一君三臣九佐、本說如此、　今案猶如立令制、若多君少臣、多臣少佐、則氣力不同故也、而撿仙俗諸方、亦不必皆備、養命之藥則多君、養性之藥則多臣、療病之藥則多佐、猶依本性所主、而兼復斟酌、詳用此者、益

書爲義、又恐上品君臣中復各有貴賤、譬如列國諸侯、並雖稱制、而猶歸宗周、臣佐之中亦當如此、所以門冬遠志別有君臣、甘草國老、大黃將軍、明其優劣、不皆同秩、自非農岐之徒、孰敢詮正、正應領略輕重、爲其分劑也、

〔神農本草經 序錄〕上藥一百二十種、爲君、主養命以應天、無毒、多服久服不傷人、欲輕身益氣不老延年者、本上經、　中藥一百二十種、爲臣、主養性以應人、無毒有毒、斟酌其宜、欲遏病補虛羸者、本中經、下藥一百二十五種、爲佐使、主治病以應地、多毒、不可久服、欲除寒熱邪氣、破積聚愈疾者、本下經、

藥有君臣佐使、以相宣攝合和、宜用一君二臣五佐、又可一君三臣九佐、　藥有陰陽配合、子母兄弟、根莖華實、草石骨肉、有單行者、有相須者、有相使者、有相畏者、有相惡者、有相反者、有相殺者、凡此七情、合和視之、當用相須相使者良、勿用相惡相反者、若有毒宜制、可用相畏相殺者、不爾勿合用也、

藥有酸鹹甘苦辛五味、又有寒熱溫涼四氣、及有毒無毒、陰乾暴乾、採治時月、生熟、土地所出、眞僞陳新、並各有法、　藥有宜丸者、宜散者、宜水煮者、宜酒漬者、宜膏煎者、亦有一物兼宜者、亦有不可入湯酒者、並隨藥性、不得違越、（中略）　治寒以熱藥、治熱以寒藥、飮食不消、以吐下藥、鬼注蠱毒、以毒藥、癰腫瘡瘤、以瘡藥、風濕以風濕藥、各隨其所宜、

〔萬安方 五十五 總論〕論君臣藥（中略）

藥性論乃以衆藥之和厚者定爲君、其次爲臣爲佐、有毒者多爲使、此謬論也、今則設若欲攻堅積、則巴豆輩豈得不爲君也、

〔遐三切紙〕四證四治劑味多寡（中略）

一藥味多寡之分別

明察藥性之緩急、而後辨病證變異、則用藥材、或多或寡、　多味則自八九種至十味、漸及十餘種、寡味、則自二三味至六七種、　制方之法、當流不倣東垣二十餘味之類、言未明藥性徹冒、而用藥多

調劑

味、則雜亂之患生而已、深意尙在口傳矣、
　于時元龜二辛未年季秋中澣
　　　　　　　　洛下　蘖知苦斥　盍靜叟　道三

〔道三切紙鈔下〕藥味多寡之分別一トハ二通メノ故也、總ジテ急病ノ食積、傷寒ナドハ、藥味寡ク使ゾ、多ケレバナレドモ、性ガ緩カニナル也、單行藥方ナルハ、能偏ニキク也、所詮此切紙ハ、藥味ヲ寡クセヨト曰心也、緩トハ、芎苓ノ類也、急トハ、肉圭、附子、烏豆、巴豆之類也、材ハ、劑ハコシラヘタ藥、此材ノミ木ノ材也、未製ノ藥也、劑ハ與製同ジ、コシラヘヤウ也、微肯ハ深遠幽ミノ也、患ハ病ミガ也、東垣ハ能藥性ヲ明メタ以來ノ人、不明藥性ノ多味ヲ好ムベカラズ、東垣ハ內傷ヲ專ニシタ故ニ、脾胃ヲ和センタメニ、多味ヲシタゾ、今モ其心持アラバ、東垣ニシタガフベキゾ、在口傳トハ、是モ又多ク使コトアリ、遠國ナドカラ、一齊デ取ニ來ルハ、チヤウ〳〵ト加減ナラヌ故ニ、多味ニシテ、偏ニナキヤウニシテ遣故也、

〔政事要略至要雜事九十五〕醫疾令云、典藥寮、毎歲量合傷寒、時氣、瘧、利、傷中、金創、諸雜藥、以擬療治、〈謂合者、和合雜藥也、傷寒者冬傷於寒、即病者也、時氣者時行之病、春時應暖而反寒、夏時應熱而反冷、秋時應涼而反熱、冬時應寒而反温、非其時有其氣、是以一歲之中、病无長少率相似者、此則時行之氣、一名疫癘、言陰陽之氣不和致其病、皆如役人、故曰疫癘也、瘧者夏日傷暑者、秋必病瘧也、利者下痢之病也、傷中者府藏有病者也、金創者、爲刃所傷、〉諸國准此、

〔周禮註疏一天官〕食醫、中士二人、註、食有和齊藥之類、疏、〈食醫、釋曰、案其職云、春多酸、夏多苦之等、皆須齊和與藥、故同鄭云、食有和齊藥之類、故在醫官之內也、〉

〔延喜式三十七典藥〕凡合藥所須麴料小麥一石、〈御藥料二斗、雜給料八斗、〉蒸乾黃芩五十斤料糯米七斗、毎年申省請受、

〔醫心方一〕合藥料理法第六
千金方云、凡搗藥法、燒香灑掃潔淨、勿得雜語、當使童子搗之、務令細熟、杵數可至千萬過、多爲佳、和合已訖、置於佛前案上、啓告十方三寶藥王藥尙耆婆菩薩兪附扁鵲、一心求請、冥願具述本心、即有神助、

八方生氣充溢四體當以四時王相日造所求皆得攘災滅惡病者得差死者更生 凡合腎氣署預及諸大五石大麝香丸金牙散大酒煎膏等合時勿令婦女小兒產婦喪孝痼疾六根不具之人及雞犬六畜等見之因其續命麻黃大黃等諸小湯不在禁限比來田野下里家因市得藥隨便市上雇人搗合非止衆見諸不如法至於石斛等諸難搗之藥費人功力作者悉盜棄之又爲塵埃穢氣皆入藥中羅篩粗惡隨風飄揚衆口嘗之衆鼻嗅之藥之精氣一切都盡與朽木不殊又復服餌不能如法服盡之後反加虛損遂謗醫者處方不効夫如此者非醫之咎宜熟思之 凡百藥皆不欲數數曬曝多見風日氣力即薄歇無用宜熟知之諸藥未即用者候天晴時於日一日曝之令火干以新瓦瓮貯之泥頭密封須用開取即急封之勿令中風濕經年亦如新也其丸散以瓷器貯蠟封之勿泄則卅年不壞諸杏人及子等藥瓦器貯則鼠不能得之 凡貯藥法皆去地四尺則土濕之氣不中之凡藥治擇熬炮訖然後秤之以依方不得生秤

〔唐六典十四太醫署〕太醫署

凡藥有陰陽配合子母兄弟根葉花實草石骨肉之異及有毒無毒陰乾曝乾採造時月皆分別焉

凡藥八百五十種三百六十神農本經一百八十二名醫別錄一百一十四新修本草新附一百九十四有名無用

皆辨其所出州土每歲貯納擇其良者而進焉

〔萬安方五十五論湯散圓〕論湯散圓

湯散圓各有所宜古方用湯最多用圓散者殊少煮散古方無用者唯近世人爲之大體欲達五臟四肢者莫如湯欲留膈胃中者莫如散久而後散者莫如圓又無毒者宜湯小毒者宜散大毒者須用圓又欲速用湯稍緩用散甚緩者用圓此大槩也近世用湯者全少應湯者全用煮散大率湯劑氣勢完壯力與圓散倍蓰煮散多者一啜不過三五錢極矣此功効力豈敵湯勢然既力大不宜有失消息用之要在良

工、雖可以定論拘也、

〔醫事或問 下〕一或問曰、仲景の治跡を見るに、一病一方なり、今煎湯に、丸散を雜へ用ゆる事、古とことなり、いかん、

答曰、異にあらず、傷寒論、金匱にも、大便通せざる時は、先調胃承氣湯をあたへ、大便通じて後、證に隨ふて、藥を用ひたる事あり、古になしといふべかず、

〔續古事談 五〕唐人ノ云ケル、ハカリニテ藥ハ合テ服スベキ也、反魂香ト云物アリ、死人ノタマシキヲカヘス香也、一銖モタガヒヌレバキタルコトナシ、カヽレバ、コト藥モ、ヨクハカリヲサムベキナリ、

〔太平記 二十五〕宮方怨靈會六本杉事附醫師評定事

四五日有テ後、足利左兵衛督〇直義ノ北方相勞ル事有テ、和氣丹波ノ兩流ノ博士、本道外科一代ノ名醫數十人、被招請テ脈ヲ取セラルヽニ、或ハ御勞リ風ヨリ起テ候ヘバ、風ヲ治スル藥ニハ、牛黃金虎丹、辰沙天麻圓ヲ合セテ、御療治候ベシト申ス、或ハ諸病ハ氣ヨリ起ル事ニテ候ヘバ、氣ヲ收ル藥ニハ、兪山人降氣湯、神仙沈麝圓ヲ合セテ、マイリ候ベシト申、或ハ此御勞ハ、腹ノ御病ニテ候ヘバ、腹病ヲ治スル藥ニハ金鎖正元丹、秘傳玉鎖圓ヲ合テ、御療治候ベシトゾ申ケル、斯ル處ニ、施藥院師嗣成、少シ遲參シテ、脈ヲ取進セケルガ、何ナル病トモ不辨、病多シトイヘ共、束テ四種ヲ不出、雖然混散ノ中ニ於テ、致料簡ヲケレ共、更ニ何レノ病共不見、心中ニ不審ヲ成處ニ、天狗共ノ仁和寺ノ六本杉ニテ評定シケル事ヲ、吃ト思出シテ、是御懷姙ノ御脈ニテ候ケル、シカモ男子ニテ御渡リ候ベシトゾサヽヤキケル、當座ニ聞ケル者共、アラ惡ノ嗣成ガ追從ヤ、女房ノ四十ニ餘テ、始テ懷姙スル事ヤ可有ト、口ヲ噤メヌ者ハ無リケリ、去程ニ、月日重、誠ニ只ナラズ成ニケレバ、ソゾロナル御勞リトテ、大藥ヲ合セシ醫師ハ、皆面目ヲ失テ、嗣成一人所領ヲ給リ、俸祿ニ預ルノミ

ナクズ、醫ヲ與藥調ニゾ中成サレケル〇下略

〔醫者談義二〕配劑大小之談義

其比に〇織田信長時天下に道三といふ名三人あり〇中略一人は曲直瀨一溪翁道三なり〇中略其名天下に聞えたり、今世上に用ゆる所の服藥の分量、水一杯半入て一杯、煎法常のごとしといふ法は、此道三より極れり、かるがゆへに、新流を當流といひ、古流を他流といふ、包形も、當流他流ともに昔は皆小包は香包にせしを、片臂躄菴の片手にてつゝまれしより、半井流は山形包なり、上包を鉤形に包に、右は短く、左は長くするは、出の字の形也、發散催生一切病を去出すに用ゆ、左短く、右長くするは、入の字の形なり、反胃、膈噎、不食、虫積等の病を治するに用ゆ〇中略凡藥に甘草の入は、峻なる藥味のふるには、和緩ならしめんがためなり、生姜の入は表達引用のためなり、棗の入は脾氣を助發するが爲なり、道三の製甘草、片生姜一粒棗といふは、甘草多ければ、和し過して餘藥のちからうとし、生姜多ければ逆上の害あり、棗多ければ、胸膈に滯て食することあればなり、藥の節やうも、麻豆のごとしとは、麻はあさだねなり、豆はあづきなり、藥のつぶの大きさ、麻だね小豆のふとさなり、粗からず細ならず、中庸の劑かげん、是當流の法なり、古流は細末を用ゆるなり、然るに此頃は、藥品の彩色を好で、角こしらへにするは、病家に衒ふなり〇中略道三の切紙に、一番に、水天目に一ツ半入て一ツに煎じ、二番は、一ツ入て半に煎ずとあり、此天目といふもの、むかし高麗の天目山にて燒し茶わんなり、是にも大小ありといへども、大やう、水八十目入を正とせり、八十目は明朝の半斤なり、明の一斤は百六十目なり、是を廣秤といひ、又大秤ともいふ、半斤を半秤といひ、小秤とも云ふ、故に水は半秤を用ゆ、天目に一杯は京升に二合入、京升一合に水滴上なるもの四十目入る、然れば天目に一杯半は、水目百二十目、京升に三合入なり〇中略然して當家の配劑の服量貮匁五分をかぎりとせり、是劑の四分の一、水廣秤の四分の三と配合す〇中略然るに近

年、清水燒の藥壺小く成て、やう／＼京升に一合入、是に準じて藥も少服になれば、病人の平愈もすくなし、

〔倭訓栞中編六〕くすりづゝみ　藥を包むには、古へより法あり、

〔日本風土記四〕醫用○中略

藥包骨宿里子米

〔道三切紙〕當流藥劑調進之法則

一小紙ナラベ配スルニ、我前膝ノ際ヨリ向ヘ次第ニ並ルナリ、萬物下ヨリ生ズル也、易爻モ下ヨリ書之、我左ヨリ右ヘナラベ重也、起精○起精恐起請假借ツギニナラヌ樣ニト云心也、假令七包之時ハ、前ニ四ツ、向ニ三ツ也、天輕地重象之、

一小包ツヽム時、打合シテ、我衣裳ノ打合ノ如ニツヽム也、左リ前ニナラヌヤウニト也

一煎藥之銘ハ、必裏紙ノ内書之、三字五字可然也、

一大裹之時、紙二枚ナレバ、内ノ面ニ銘ヲ書也、紙一枚ナレバ、左ノ端ヲ折返テ銘書ベシ、

一七包ノ時ハ、我前ノ方ニ四包、向ニ三包並ルナリ、左リノ方ヨリナラベ始候、十五包ハ、五包ヅヽ三トヲリ並ル也、以上准之、

一銘ヲバ、煎ジ樣ノトヲリヨリ一寸五分バカリサゲテ書ベシ、包數モ、銘ノハテヨリ、一寸五分バカリ間ヲ隔テ注之、

一煎樣ハ

一ツヽミニ、水天目一ツナガラ入、一ツニ煎ジワケテ、二フクニ、カスニ一ツ入ナガラニセンジ、

一フクニ、

一七歲ヨリ内ノ小兒ヘハ、劑包モコフクニ合ル也、

一包ニ、水天目一ツ入、七分ニセンジワケタ、二三ブクニ、カスニモ一ツ入、三分ニセンジ、一二フクニ、

一貴人ヘ合藥剤調進仕ニハ

一ツヽミニ、水天目一盃半入、一盃ニセンジワケタ、二度ニ御進上、カスセンジノ儀不可注之、

一至貴人ヘ剤藥奉進上ニハ

一ツヽミニ、水御天目ニ一盃半入、一盃ニセンジ、御試ヲナサレワケタ、二度ニ御進上、

一生姜、棗、竹葉、生橘葉、忍冬蕪ナド入候ハヾ、其理可注之、入ザルニハ、其沙汰ナシ、

一大高ノクタノ封ジハ、封ノ字ヲ書事通法ニテ候、雖產催生ノ藥、胞衣遲滯ノ合藥ナドニハ、緘ノ字ヲ可書、大便久秘結シ、或小便不通ノ療藥ニモ、緘ノ字尤可然候、

一合藥持テ出、或病者使者ニ相渡時ノ仕合、銘ヲ我前ヘ順ニナシ、左手ニ持テ、口上ヲ宣テ、右手ヘ進ニ取直渡之、トリナヲスト云名詮也、

一丹藥丸粒、或通治ノ散藥ナドハ、銘ヲ裹紙ノ上ニ書也、

其病者々々ノ療治ニ調進スル散藥ナドハ、裹紙ノ内ニ注之、

一阻遠路調進スル合藥ハ、大高上ヲ復ツヽミテ、封ノ上書ヲスベシ、

〔康富記〕嘉吉三年五月二日丙辰、入夜伴鴨權禰宜祐顯、向施藥院使丹波盛長朝臣宿所了、諸藥商賈之千駄櫃中間事爲談合也、藥賣者施藥院所相計也、仍下知狀可出之由領掌之、無子細者也、如令條者、諸國貢進之藥种、被收納施藥院典藥寮等者也、藥生事、同爲院使所成敗也、盛長朝臣語云、近來者絕了、我父祖之時、諸藥商賈之輩、下知狀書寫之者先例也云々、予案之、令第二典藥之下、稱採藥園諸草藥及敎藥園生云々、

[illegible]

下諸藥商買千駄櫃等中

右諸藥商買、爲本通物輕物等、如先例可致其沙汰、敢不可有違犯輩之由、施藥院使下知所候也、仍執達如件、

嘉吉三年四月廿九日　長久奉〇中略

此後、商買之輩、祐顯等來茅屋致其禮、不思寄沙汰也、予權爾宜令引合施藥院之禮也云々、

〔晴豐記〕天正六年十一月四日

地黃煎商買事、從往古十五人之外無之處、近年恣儀曲事次第也、如先規堅可申付旨可令下知典藥頭給之由者、依天氣言上如件、充房謹言、

天正六年四月五日　右少辨判

進上勸修寺中納言殿

就地黃煎商買事、先年被成綸旨候處、紛失之由候之條、重而被成綸旨候、然者諸國技賣等之儀、如先先堅被申付可被全朝役之由被仰出旨、座中江可被申付事肝要候也、

四月五日　判

典藥頭殿

〔天保集成絲綸錄八十一〕寬政十一未年四月

三奉行江

町家之見世に而、賣藥之渡世〇中略以來決而無用之事、

右之趣、夫々行屆候樣可被申付候、

四月

〔町觸二〕文政十三寅年九月朔日申渡

池之端淨圓寺門前市五郎店

町醫庭瀨

後見隆素

一癪之藥　一疝毒之藥　一人參奇應丸　一熊膽黑丸子　一(初編方)癪之藥　一婦人血之道之藥

右者先祖より、癪之藥、疝毒之藥相傳致、奇効も有之、且外より追々傳法之奇應丸、黑丸子、癪之藥、右五品之藥賣弘之儀、文政六未年中願出、其砌申渡置候處、猶又此度外より傳法之血之藥一品差加、以前之通、江戶町々幷武州在、相模上野下野上總下總江賣弘度義、相對之上、望之者江勝手次第可致旨、從町御奉行所被仰渡候間、此段相心得、組合不洩樣可申通候、

寅九月朔日

〔藥制六ノ二百〕御書付出候ニ付、取調濟上ル、

伊勢守殿

嘉永六丑年十一月十一日

町觸書

近年、賣藥之看板杯を、蘭字ニ而認候も相見候、以來蘭字は無用可致事、

右之通、天保十一子年中被仰渡候處、兎角今以市中諸看板等橫文字認差出候も有之由、不埒之至ニ付、早々取拂可申候、

右之趣、町中不洩樣可觸知もの也、

丑十一月

〔明良洪範續篇十三〕今大路道三、上京セラレシ時、大津邊ノ在家ニ、賣藥ノ札ヲ掛置タル見ルニ、ハタランノ藥ト書付有シ、供ノ者ドモ申ハ、此所ハ、往還ナル上ニ、京都ヘモ纔ノ所ナレバ、カタ〳〵加樣ナル文盲ノ片言ハ書マジキ事也ト笑ヒケルヲ、道三乘物ノ中ニテ聞、夫ハ汝等ガ申ス所片

言ナリ、其故ハ、ハクランノ藥ハ、ハクランヲ煩フ者ガ呑、霍亂ノ藥ハ霍亂ヲ煩フ者ガ用ユル事ゾト申ナレシトナリ、

〔先哲叢談後編二〕曰田長齋　名可久、號長齋、通稱五郎左衛門、本姓坂口氏、備前人、〇中略或勸長齋以祿仕、不答、勸之教授爲業、又不答、勸之煉藥而鬻於市、從之、自讀方書、製地黃丸益氣湯類、尤窮力於磨研蒸𤎅矣、人皆曰、斯人而煉斯藥、劑料必眞、脩治必精、買者頗衆、從是之後、衣食聊足云、

〔守貞漫稿五生業〕是齋賣　消暑ノ抹藥也、東海道草津驛ノ東ニ梅木村ト云アリ、其所ニ此藥舖五六戸アリ、一戸ヲ是齋ト云、其他定齋等ノ音近キヲ名トス、

蓋藥名和中散ヲ本トス、大坂市街ニ賣ル者ハ、住吉神社北天下茶屋某ノ家ニ製ス、夏日ノミ大坂ニ賣巡ル者歟夫、各一樣ノ褊袢ヲ著ス、地白木綿ニ濃鼠ノ棊器ノ形ニ似テ、五分許ノ小紋ヲ染タリ、　江戸ハ府内三戸アリ、是又夏月ノミ賣之、所荷藥筥ノ文字記號、筥朱漆青貝等ヲ以テシ、又擔之夫ハ、歩行ニ術アリテ、藥筥ノ鐶ヲ鳴シ、笠ヲ用ヒズ、又江戸ノ西大森村ニ和中散ノ店アリ、藥磨ノ車等ヲ設ケテ、前ノ天下茶屋ニ似タレドモ、夏月市中ニ賣巡ルコトヲセズ、　世事談曰、定齋藥ハ、大明ノ沈惟敬、本朝ニ來テ靈藥ヲ秀吉ニ獻ズ、玆ニ大坂藥種屋定齋ト云モノ、俳優ヲ好シ、秀吉申猿樂ヲ催ス時、召ニ應テ意ニ合ヒ、彼名方ヲ授ク、定齋業之トス、故ニ名トス、今京東洞院青木屋ハ定齋ノ裔也云々、然バ本名定齋也、

枇杷葉湯賣　是亦消暑ノ散藥也、京師烏丸ノ藥店ヲ本トス、三都皆稱之、又三都扮、蓋京坂ハ巡リ賣ヲ專トシ、江戸ハ橋上等ニ擔筥ヲ居テ息ヒ賣ヲ專トス、又大坂元舖天滿ニアリ、賣詞ニ曰、御存本家天滿難波橋朝田枇杷葉湯云々ト云、

〔都の手ぶり〕兩國橋

かたつかたに人あまたつどひたてる所あり、何ぞとよりてのぞけば、くろき筥ふたつならべ、こ

れにおほきなる太刀ふたつをかけ置きつ、わかき男の袴ひきあげて押ゆひたるが、たかあしだはきてついがさねのやうなる物、ふたつかさねたる上にのりて、この太刀をひきぬき、さま〲うちふりて、とみに鞘にをさめなどす、すさきと見えたる男、これもたすきひきゆひて、これはいますこしみじかき刀をぬきて、ぬしとうちむふまねをす、さてかの人のいへるは、かゝる太刀うちのわざは、たゞもろ人のめをよろこばしめんわざなり、まことあが家のいとなみは、藥ひさぐわざにこそあれとて、さゝやかなる紙つゝみふたつとうでゝ、此ひとつは足とらずといひて、家に傳へたるらうやくなり、あだはら、あくたのやまひ、あるは尻より口よりこくやまひ、肝やまひ、酒やまひ、いづれにもちうじても、とみにまるしあり、又こなたなるは、齒をみがく藥なり、このくすりむしかめばをいやし、口のうちのくさきかを除く、はをまろくせんことは、ことにすみやかなりなどいひつゝ、せにひとつをかの藥もてみがくに、十日の月の雲間をいづるがごと、てりかゞやきて見ゆ、みな人おのがまゝもとめつゝいぬ、

〔延喜式四十二左右京職〕東市司〇中略 藥廛

〔七十一番歌合〕六十番 藥うり

御藥なにか御用候、にんじん、かんざう、けいしん候、ぢんも候、

〔通俗編二十商賈〕藥店 宋謝直曲歌、焚龍落藥店、皆出其爲、汝又張籍詩、長安多病無生計、藥舖醫人亂。

賣藥

〔雍州府志六土產〕成藥店 俗藥品未經刻劑、謂本藥、近世藥店主、擇其偽精眞、法製而刻之、踰之、應需而賣之、元雖不及醫家之修治、又於草醫其得便、中華所謂見成藥是也、今所々有之、是稱成藥屋、又近世市中有稱虎屋藤屋者、製丸散之藥而賣之、庶人得其便、

〔春雨樓叢書十三〕貝原篤信

藥種問屋

尾陽の學齊、貝原篤信は、世人その名譽を知る、一世の編集諸書あり、○中略ある時尾州公へ、一萬金の拜借願をなす、此段役人衆より、公へ言上いたしける處、深き尊慮あつて、願の通拜借仰付らる、篤信右の一萬金を以、自國又は隣國の藥店にある處の贋藥を買ひ切て、船に積、波濤へ捨たり、是より藥店に贋藥なし、故に藥店の藥入替つて病者少しと、篤信の筆記に見へたり、實に難有聖醫の仁、後代醫道の龜鑑と云べし、

〔大成令六十七藥種〕寛文六午年九月

一江戸町藥屋共、私として座を定、藥種之內何ニよらず、一所江買取まめうり致候、又はにせ藥等有之由に候、向後堅く可為停止、總而藥種にかぎらず、何事にても座を定、まめうり致候もの有之候はゞ、兩町奉行所江可申達之旨、江戸町之年寄共に申渡候、其上藥種之問屋、幷藥屋共不殘評定所江召寄、藥種の內何によらず、一所江かい取商賣高直に仕候事、又はにせ藥種致候儀、自今以後為停止之旨、可存其趣候、自然右の旨趣相背もの有之ば、藥種仲ケ間たりといふとも、訴人に可出、若隱置他所より露顯申候はゞ可為曲事候由申附候事、

九月

〔大成令六十七藥種〕享保七寅年七月

覺

一此度和藥眞僞吟味之儀、藥種問屋共、幷桐山太右衛門問屋申付、伊勢町におゐて、改會所相建、都合問屋廿五人之者相改候筈に候、然所只今迄は、所々より出候和藥問屋之外、中買幷藥種屋共方に而も、直々に買請候由、自今は右廿五人之問屋共之外、脇々に而、山々より出候和藥直買不仕、廿五人之問屋共之內に而、勝手次第相調可申候、若相背、和藥直買仕候はゞ、急度曲事可申付候、只今迄和藥持來候者、向後は參次第、右會所江持參候樣に致差圖可遣候、若不埒之者も有之候はゞ、間

屋共より訴出候樣に申付候間、此旨急度可相守候、

右之趣於相背は、吟味之上可為曲事者也、

七月

享保十四酉年閏九月

覺

一藥種之儀、廿五人之藥種問屋之外は、上方表幷在方より出候藥種共に、直荷引請候儀停止に申付候處、大傳馬町組藥種屋拾九人之者共古來のごとく、唐藥和藥共に直荷物引請申度旨、其筋より段々相願、猶又此度願之趣も在之付而、大傳馬町組拾九人之者、向後京大坂堺〈幷〉在方より出候藥種、直荷引請候儀ニ申付候、此以後たとへ外之者相願出候共、大勢は難申付候、先達而相觸候通、直荷引請候事、堅停止候間、此段猶又急度可相心得候、

〔大坂請一覽之寫〕唐藥問屋藥種仲買

一唐藥問屋、貳百貳拾八人、內年行司五人、　一藥仲買、百貳拾九人、內年行司五人、

〔守貞漫稿四〕藥種問屋　享保七年、二十五人ニ定ム、是後ニ本町組ト云フモノニテ、廿六戸トナル、〈中略〉　江戸曾無砂糖店、藥店兼之、享和中大傳馬町ニ大坂屋勘兵衞、堺屋九左衞門ト二人業藥ヲ賣藥一種、是藥店ノ組トス、今ハ問屋僅餘、然ドモ藥問屋ヲ除ニス、〈今[illegible]〉〈問屋本町組廿五、傳馬町組二十、合四十五戸、中今ハ一二十餘戸、專ラ藥賣トナル、〉

〔政事要略九十五至要雜事〕又〈[illegible]令云〉五位以上病患者、速奏聞、遣醫爲療、仍量病給藥、〈[illegible]〉〈[illegible]〉致仕者亦準此、

〔令義解五軍防〕凡大將出征、〈中略〉其家在京者、每月一遣内舍人存問、若有疾病者、〈謂大將之父母妻子、有疾病也、〉給醫藥、

〔延喜式典藥三十七〕凡五位已上、有須草藥者、就寮請之、

〔續日本紀文武三〕慶雲元年十二月辛未、大宰府言、去秋大風拔樹傷年穀、是年夏伊賀伊豆二國疫、並給醫藥療之、

〔天保集成絲綸錄百六〕享和二戌年三月

御目付江

此節、一統風邪流行ニ付、御目見以下之者共江、御煎藥被下候、諸事明和六丑年之通相心得、可被取計候事、

但西丸御目付江も相通、西丸ニ而も、右之通被下候樣ニ可被取計候、

〔憲教類典四ノ十一藥種〕元文四己未年二月二日

兎腦催生丹

一切之難產ニ驗有之藥ニ付、栗本瑞見ニ調合被仰付候、妻娘姑など、今年懷妊ニ而拜領仕度面々、御目見以上之分可被下置候間、瑞見方迄承合頂戴可致候、調合御藥數多ニ付、一統ニハ不被下候間、懷妊ニ而有之面々計可相願候、

元文四己未年二月廿日

兎腦催生丹

御目見以上之者、姪從弟女等、御目見以下陪臣等江片付置候ものは、御目見以上之者願候はゞ、御藥可被下置候、先達而相達候通り、栗本瑞見方江可被相願候、

右之趣、隱岐守殿被仰渡候、尤瑞見方江被願候分、書付大岡右近方江も可被遣候、以上、

〔憲教類典四ノ十一藥種〕元文五庚申年正月廿八日

病瘡はやり候ニ付、陰陽二血丸可被下候間、布衣以上幷御目見以上之面々、望之者有之候ハヾ、河

野仙壽院、栗本瑞見方迄相願拜領可仕候、最勤候者は、於御城仙壽院瑞見江申達候樣可仕候、
但いまだ病痘不致子供大勢有之、餘慶にも拜領致度者は、子供何人と申義、兩人方江申達可相願候、
右之趣、向々江可被達置候、
正月

〔浚明院殿御實紀附錄三〕すべて御側ちかく給事する人々、病にて家にこもりたる時は、いく度も侍醫をつかはされ、病をとはせ玉ふ、御次の間に候する小納戸、もし、せきゝくさめなどすれば、かならず體中和せる所ありや、氣分よろしからずやなど委しく御尋あり、いさゝかも常ならぬこゝちなりなど申上れば、御藥など賜はりしかば、あまりに御心にかけ玉ふことの恐れおほければとて、後々は相たがひにかたりあはせて、せきくさめもなるべきほどは、聲を低し、聞えざるやうにせしといへり、

〔日本書紀二十二推古〕十九年五月五日、藥獵於兎田野、取鷄鳴時、集于藤原池上、以會明乃往之、粟田細目臣爲前部領、額田部比羅夫連爲後部領、

〔萬葉集十六〕乞食者詠二首
伊刀古、名兄乃君、居々而、物爾伊行跡波、韓國乃、虎云神乎、生取爾、八頭取持來、其皮乎、多多彌爾刺、八重疊、平群乃山爾、四月與、五月間爾、藥獵、仕流時爾、足引乃、此片山爾、二立、伊智比何本爾、梓弓、八多婆佐彌、比米加夫良、八多婆佐彌、宍待跡、吾居時爾、佐男鹿乃、來立來嘆久、頓爾、吾可死、王爾、吾仕牟、〇中略
右歌一首、爲鹿述痛作之也、

〔萬葉集略解十六〕推古紀十九年五月五日、兎田野に藥獵し給ふよしあれど、此歌によれば、其日に限らざるべし、

〔夫木和歌抄五月五日七〕家集夏歌　　　　　　　惠慶法師

くすりひのたもとにむすぶあやめ草たまつくりえにひけばなるべし

〔類聚名物考時令一〕藥日　くすり日

五月五日は、採藥の日なればかくいへり、河社に、契冲が、紀貫之集の歌を引て、こぞくすりび、いかにいへる事に歟といへるは、思ひ誤せし也、こぞくすりびは、是ぞ藥日のまるし也といへる也、またこは誤なるも知るべからず、

〔靈尻四十六〕荊楚歳時記に、五月五日、競て雜藥を採ると、夏小正には、此日、畜藥以止除毒氣ともいへり、凡百草を採て、擣てその汁をとりて、石灰に和して團とし、陰乾にしてかためおけば、萬の小疵、又は血留に妙なり、

〔月令廣義八夏〕事宜○中略

採藥、採芝胡、一作柴胡、稀薟草葉曝乾、四五月採白蘞根陰乾、槐實中子曝四十日乾、薏仁、黃葵花日乾、析蓂子、一名大薺、夏至取螻蛄、夜出者眞、即土狗、五六月取水蛭、即馬蟥、桃杏仁、蒼耳子、名菜耳、

〔政事要略五十九交替雜事〕藥疾令云、藥品施與藥年別支料、依藥所出、申太政官散下令隨時收採者、

〔萬安方五十五諸論說〕論採藥

古者、採草藥多用二八月、此殊未當、凡用花者、取花初敷時、採用葉者、取葉初長足時、採用實者、取實成實時、採皆不可限以時月緣土氣有早晚失時有愆、伏以如平地三月花者、深山中須四月花、白樂天遊大林寺詩云、人間四月芳菲盡、山寺桃花始盛開、蓋常理也、此地勢高下之不同也、如笙竹笋、有二月生者、有三四月生者、有五月方生者、謂之晚笙、稻有七月熟者、有八月九月熟者、有十月熟者、謂之晚稻、一物同一畦之間、自有早晚、此物性之不同也、嶺嶠微草凌冬不凋、并汾喬木望秋先隕、諸越則桃李冬實、朔漠則桃李夏榮、此地氣之不同也、同畝之稼、則糞溉者先芽、一丘之禾、則後種者晚實、此人力之不同也、豈可一切拘以定月哉、

〔和漢名數三醫家〕採藥根二時本草　二月早春八月秋也居家必用曰、春正月、秋九月爲佳、　陶弘景云、花實莖葉、各隨其成熟爾、

〔三代實錄十三〕貞觀八年九月廿二日甲子、是日、○中略從五位上行肥後守紀朝臣夏井配土佐國、○中略夏井天性聰敏、○中略又閑醫藥之道、配土佐之後、自行山澤、採藥合練以施民、民多得其驗、嘗有一人、中風被髮狂走、夏井與一匕散藥以令服之、此人立瘥、皆此之類也、

〔閑散餘錄上〕本草ヲ講究シテ、物產採藥ヲ事トスルコトハ、向井玄升靈蘭ト號ス先生ヨリ始ルトイフ、稻生若水ニ至テ尤盛ナリ、貝原篤信モ、本草ヲ好ミ、大和本草ヲ著ス、

〔平賀鳩溪實記三〕平賀源内儒學講釋の事
源内は、日々に門弟はふへ、名は高くなり、殊更採藥などに出るには、本草に委しき故、近國の醫師聞傳へて、二三百人も弟子付ければ、暫時金銀も出來、差支もなかりける、門弟中相談して、何卒先生を、當所に留置たき者也と工夫し、各申合せて、稽古所普請を取立んと相談一決しければ、○下略

〔東遊記下〕藥品、此地○蝦夷より出で、賣買するもの、熊膽膃肭臍ばかり也、藥草多けれども、漁利におほはれて採製するものなし、予がきゝたるもの四五品を左るす、附子上品也、竹節人參あり、先年江戸より採藥に來られし醫師、江差の島にて、三椏五葉のもの三四根を得て持歸りしといひ傳ふ、蝦夷人は、人參の事を、五葉草といへり、人參あること疑ひなし、

〔勢州採藥志〕文化元年甲子之秋七月廿一日、廿二日、勢州志州採藥可仕旨被仰渡、○中略小野蘭山

〔海外事類雜纂四〕植學觸語
植學及び採藥家に有用とする書籍器械の事
一花實解剖の圖說　一各國所產草木の名集　一藥圖　一花簡　一贈葉帖　一貼花鐵板　一

採藥師

コールンタング　一細刀　一細鉸　一細錐　一結鍬針　一顯微鏡

〔日本書紀欽明十九〕十五年二月、百濟略〇中別奉勅貢、略〇中採藥師施德潘量豐、固德丁有陀、

〔政事要略交替雜事五十九〕又條〇令義解國饒藥之處、置採藥師、令以時採取、其人功取當處隨近下配支者、

〔先哲叢談續編四〕阿部將翁略〇中

享保中往來江戶、專試物產種藝、台幕府博徵海內俊傑之士、有一技能者、各充其選、將翁以本草學被召、乃上言、甄別物類、採擇產殖之學、亦經濟之一端、而不可廢棄者也、官納其議、使之按驗、於是奉命採藥於安房、上總、伊豆、相模、駿河、遠江、三河、大和、河內、二丹、三越、信濃、上野、甲斐、飛驒、奧羽諸州、暨松前、蝦夷等諸島、深山幽谷人跡所未通、博搜弘索、不遺餘力、其所往訪必有獲焉、數年之間、其所齎得、草木八百五十八種、金石五十二品、吾邦古今未嘗聞見者也、而無苟益於世用者、雖珍希物不敢屑意、自謂、李瀕湖綱目、徒誇宏覽博聞、李正字原始空論附會陳言、其大者既若此、小者不待言、而況於目未視其物、脚未踏其地、詳辨效驗、悉言形狀者耶、余所表章之種類、未至於一千、皆獲之實地者也、頗異於西土諸家之聞文字矣、

〔憲教類典四ノ十一藥種〕享保十四己酉年九月

植村佐平治、藥草御用ニ付、武州兒玉郡河內村迄罷越候、右道筋に而、野山江入込、藥草致見分、但御料之內交り候私領、幷寺領社領之分、最寄之御代官所より相通し可申候、

一藥草籠　貳個

但引りうきう包差札狀箱

一うすべり、三拾枚、　一むしろ、百枚、　一とま、百枚、　一藥草見習之者五人　一其所之道筋案內之者、　一人足

是は其所之御用之品ニより、佐平治差圖次第に可差出候、差圖之外、人足差出申間敷候、最用意

として、無用之人足差出候義、幷御用之外馳走がましき儀一切無用候、

御代官所にて支配之内、手代一人附添、諸事御用可相辨候、私領方ニ而も、相應之役人壹人附添、諸事御用可相辨候、以上、

酉九月

〔諸國採藥記〕序夫諸國藥草見分之一條は、享保帝君有德院様、御仁德之御惠廣大ニ被爲遊、御側小笠原石見守様、松下千助様等、毎々上意被爲成候事あり、○中略今我朝文華盛に發て、何一ツとして不足事なきは、全神君の御放勳によれり、然に醫術においては、藥方奇術全立すといへども、効驗猶少し、是方書偏在して、疾病の不verify事は、偏に其藥品疎かなる故ならん事を被爲思召候所、當寒院様、此思召を被爲繼、藥草之達士稲保議に被命、我朝の田野山谷にいたる迄、採藥被仰付たり、○下略

松井敬編

本草

〔運歩色葉集〕ホ本草

〔大和本草〕一論本草書○中略

蜀韓保昇曰、藥有玉石草木蟲獸、而云本草者、爲諸藥中草類最多也、　宋掌禹錫曰、本草經三卷、神農所作、而不經見、漢書藝文志亦無錄焉、云々、前漢平帝紀、及ビ樓護傳ニ本草ノ名初テ見ユ、淮南子云、神農嘗百草之滋味、由是醫方興焉、　寇宗奭曰、漢書雖言本草、不能斷自何代而作、世本淮南子雖言神農嘗百草以和藥、亦無本草之名、惟帝王世紀云、黄帝使岐伯嘗味草木、定本草、造醫方以療衆疾、乃知本草之名自黄帝始、　陳藏器唐玄宗開元時人、撰本草拾遺、時珍曰、其所著述博極群書、精覈物類、訂繩謬誤、搜羅幽隱、自本草以來一人而已、又曰、歷代本草惟陳藏器辨物最精審、尤當信之、　歷代本草名目、載在本草綱目第一卷、

文獻通考曰、本草之名始見漢書平帝紀樓護傳、舊經止一卷、藥三百六十五種、陶隱居增名醫別錄、亦三百六十五種、因註釋爲七卷、唐顯慶中增一百四十四種、廣爲二十卷、謂之唐本草、蜀孟昶又嘗增益、謂之蜀本草、

〔神農本草經上〕重輯神農本草經序

夫醫之有本草、猶學者之有說文也、藥性之有良毒、猶篆文之有六書也、未有不辨藥性而能爲醫者、亦未有不知篆文而能爲字者也、余（森立之）從幼注意於本草學、日夜硏究、殆卅年矣、每歎近世以本草爲家者、大抵奉李氏綱目以爲圭臬、不知古本草之爲何物、則其弊有不可勝道者焉、余嘗竊欲復古本草之舊、仍取證類本草讀之、而始知綱目之杜撰妄改不足據矣、再校以新修本草、而又知證類之已經宋人刪改、不足信也、更以眞本千金方及皇國醫心方、太平御覽所引校之、而知蘇敬時校改亦復不少也、於是反覆校讎、而後白黑二文始得復陶氏之舊、白黑二文得復陶氏之舊、而後神農之經可因以窺其全豹焉、遂就中採墨白字、輯爲四卷、弦經名以本草者、蓋謂藥物以草爲本、故說文解字云、藥治病草也、呂氏春秋孟夏紀云、是月也、聚蓄百藥、高誘注、是月、陽氣極、百草成、故聚積也、百藥既是爲百草所成、則可見藥物以草爲本也明矣、其玉石鳥獸蟲魚屬、亦謂之藥、則六書轉注之義、本經計藥品、每係幾種、亦與此一例、本草釋云、藥之衆者莫過於草、故學多者言之本草、（惟宋時俗醫家千字文引）韓保昇云、按藥有玉石草木蟲獸、而直云本草者、爲諸藥中草類最衆也、（證類本草引）此說是也、（中略）

嘉永七年甲寅正月、福山森立之書於員山溫知藥室中、

〔海外事類雜纂四〕植學獨語　江戸宇田川搭菴著

植學は本草と同じからざる事

唐山にて、本草といふは、凡そ採て藥用とすべき者、水火土砂より、草木金石は勿論、牛溲馬勃敗鼓の皮に至まで載て遺すことなく、其物を辨識し、其等を品隲し、良毒を辨明する學問なり、然れど

本草家

も、藥物は草類最多きが故に、草を本とするといふ意にて、本草とは名けしものならん、西洋にて、普多尼阿といふは、此に植學と譯して、唯植物のみに限りて、効能の有無と、藥の用事と不用とに拘らず博く捜索し、辨識記載し、尚且植物之生々、長生開花結實するの理を論ず、左かれば植學と本草とは、逈に別の學問なり、

西洋にては、別に草木金石蟲魚の類物々なべて吟味する一種の學問ある事、略○中

西洋にも、アポターケルマンストとて、藥品のみ論じて、蘭山の本草學にあたる學問のある事、

西洋には、右三有學の外に、アポターケルマンストと唱ふる學問ありて、專ら藥物の効能と等の美惡修治製法など家とする一科あり、アポターケル、是に藥舖と譯して、藥舖の學問なり、然れどもゝと三有究理學の内にて、藥舖庸醫の爲になるべきことを拔萃せし者なるゆへ、醫家の一派ともいひ難し、是故に、蘭山の本草に稱とはあたらず、然れども蘭山の本草書と云もの、効能美惡修治製法をいふを家とするを見れば、姑くこれを本草學と思ひ玉へ、

〔醫範提綱 題言〕一和蘭ノ醫書ヲ譯シタ云ヘバ、略○中本草物產ノ書ニハ、凡ソ草木金石土壟ノ類ヨリ、禽獸蟲魚ニ至ルマデ、醫藥ニ供シタ効驗アルモノ、兼邦ノ生ズル所ヲ彙集シ、旁ク求メ、歷ク試ミタ、主治功能ヲ明ラメ、培養土宜ヲ詳ニシ、寫眞ノ圖畫ヲ銅版ニ鏤メ、形狀ヲ家セシム、或ハ藥品ノ西域ニアリテ、東方ニナク、彼ノ地ニ繁殖シタ、此土ニ培殖セザル類ハ、性質氣味功用ヲ考ヘ微シテ、活用スベキノ理ヲ明ニス、

〔日本書紀 二十七天智〕十年正月、是月、略○中以大山下授、略○中㶱日比子、贊波羅、金羅、金須、〔解藥〕鬼室集信、〔解藥〕以小山上授達率德頂上、〔解藥〕吉大尙、〔解藥〕

〔續日本紀 二十淳仁〕天平寶字七年五月戊申、大和上鑒眞物化、和上者揚州龍興寺之大德也、略○中又以諸藥物令名眞僞、和上一々以鼻別之、一無錯失、

〔本朝醫考　中〕宗桂

宗桂稱意安、以醫術大有聞、陳日華宋開寳年中撰諸家本草、能分寒溫、辨性味、宗桂亦能辨知倭藥、故世人以日華子稱之、遂自以爲別號、天文八年伴入明使僧天龍寺策彥而赴大明、明人以宗桂之診治有神察、呼稱意安、蓋取醫者意也之義也、梅崖書稱意之二大字以贈焉、同十六年與使僧策彥再遊大明、于時獻藥於大明皇帝、著醫名於異域、而携方書歸本朝、爾後令名彌彰、自成一家、子孫世々以意安爲號、元龜三年十月二十日死、

〔皇國名醫傳後編　上〕長澤道壽　中山三柳

長澤道壽、號雖庵、又丹陽坊、虛白山人、土佐人、受業於曲直瀨正紹、吉田宗恂、○中略中歲仕織田公、無幾辭去家京師、其學祖述素難、折衷李朱、尤致精於藥品、大坂堺市藥舖、至今稱藥之良者曰土佐用、

〔駿府政事錄　一〕慶長十六年九月二十二日、施藥院宗伯法印自京都下著、則被召御前、宗哲法印同有本草藥種之御雜談、

〔東照宮御實紀附錄　二十二〕醫藥本草の事なども、御心よせさせ玉へり、京都より施藥院宗伯まかりしに、常に御前にめして、與安法印等と、物產の事ども御尋問あり、又ある時、光明朱を求められしに、いづれも下品なれば、吉田意安宗恂が父は、明國へ渡海しつれば、意安父が持來りし朱を獻りしに、御心にかなひ、さすが名家なりかゝるものまで貯へたりと、御賞譽あり、この後は、海舶に、これを證として、購求せらる、又意安に、紫雪を製して奉らしむ、意安和劑局方に據りて、調して獻りしかば、是も御けしきにかなひ、此より衆醫、みなこの製に倣ひて作るとなり、ある時、南舶より、薄き石の一尺ばかりにして、側柏の如くなるを獻る、其形、木賊、柏葉の連なりしに似たれば、めづらしと思して、衆醫に問せ玉へども知者なし、意安、こは瑪瑙の花なるべしと御答せしが、後に、本草綱目を檢點せしに、果して申所の如くにて在しとぞ、

〔淇園文集七〕書東皐僧獨立批書本草綱目首〔一〕中
獨立曼公、人爲評其履歷、及見其書偈敍云、明浙江杭州府學秀才戴笠、以虜陷明庭、人心盡死、棄儒隱醫、久之、遂附交易賈舶歸化於我、會黃檗隱元禪師亦歸化而東、遂染薙爲僧、改名□□而從之、及偕東來、山城、開萬福寺以居、會隱元歿、遂代主其寺、然則人皆知其歸化闡教之浮屠也、而莫能□其忼慨激烈、獨爲東海一男子也、豈非其所遇合有幸與不幸哉、鈴鹿生家處獨立所貯本草一部、每卷有朱墨書批評、皆其讀也、蓋生家世業刀圭、其祖以曾爲師北山壽菴、壽以良醫治術、鳴於一世、壽乃傳其業於獨立、是故家得傳此書、又傳獨立得方學之傳、雲林、皆奇聞也、〔一〕中　于時明和己丑季冬朔日、

〔杏林雜話〕四月廬門曰、爲醫者宜通于本草、貝原篤信著大和本草、最有功於我、而羅殊方異域藥石、亦不可不識焉、

〔先民傳下醫術〕福山德順、爲人沈毅有識、從術部先生〇略受經、且究心于本草、先是本國無通本草者、唯讀草綱考究是書、作藥性集要、德順從而學之、乃得其傳、延寶中移業攝水、專倡其學、名著當代、弟子從議業者日多、而賀州之稻若水學之稱最、自此而後、世傳本草藥性、皆本於福山氏、

〔皇國名醫傳後編中〕稻生若水〇中略
本草之學以辨氣性爲主、西土雖其名、求其產、尚且不能無差失、我邦隔海萬里、因彼名以求我物、欲其不謬、抑亦難矣、故我之爲斯學、須先討究名物、然後及于氣性、古昔地有藥園之設、職有采藥之使、又命深江輔仁、撰本草和名、以布于世、好生之德可謂至矣、中世喪亂百度頽弛、醫學弗講、斯典亦廢矣、慶元草昧、神祖留心醫術、如吉田宗恂、辨瑾瑞栢枝翁嘉賓、稱爲異聞、當時諸醫於藥物氣性、各有撰著、然率不過因陳演舊、爲識藥之資、要隨草創、至肥前向井元升、筑前貝原篤信〔二〕註等、始對照彼我、親驗物產、既而稻生宣義者出、著庶物類纂一千卷、其徒承而精之、高者足以駕西土諸家而上之也矣、江戶又有阿部照任、特以此學顯、於是本草名物、遂爲一科矣、後道本草者、率祖稻生阿部二氏、

〔先哲叢談續編〕四阿部將翁○中略

將翁蓋以慶安三年庚寅生於奥州盛岡、寛文中、初到江戸、又到京及大坂、漫遊數年而還鄕、延寶中、嘗欲乘漕運貨物之船、再到大坂、南部八戸洋颶風大作、漂流海中殆七閱月、艱苦萬狀、不可殫言、柁裂桅碎、薪水皆盡、自分必死、無知所向、飄搖出沒、遂著阿馬港、其地近廣東、卽海外諸州商舶所輻湊也、土人憐之、傳送廣東、竟到兩浙間、後托之互市商舶、護送長崎、得還焉、　將翁在於杭州、始學醫術、專心本草、歸鄕之後益講習之、辨別物品、凡係藥餌者、精覈研究、莫不盡意、設有未詳之者、則到崎嶴質諸於淸客蘭人之有識者、不得其旨則不措、故其所講習、皆得之實驗矣、○下略

〔皇國名醫傳後編〕中阿部將翁○中略

阿部照任、通稱友之進、號將翁、南部人、少時乘漕船赴江戸、遇颶漂到淸國、止於福建十八年、得本草學歸居江戸、享保中、幕府求通知本草者、或薦照任、乃肆使采藥於東海北陸諸州、三至蝦夷、以勞賜俸及宅、更給地於城東、植養藥種、照任前後所得物品甚夥、至石藥尤多前人所未道者、其在甲州得黄芩以進、時舶載黄芩眞物絕少、先是照任弟子植村某、通稱信濃大掾奉幕府命赴長崎鑒定藥品、會寧波商齎黄芩數十萬斤、某排衆議辨斥其僞、幕府命却之、於是德廟○德川吉宗謂國產黄芩、延喜式所未載、而照任始得之、其功偉矣、且足以破西商之姦矣、乃命送之長崎、使淸客米來頻視之、來頻嘆異焉、公因厚賜照任、又得大附子於蝦夷、公皆種之藥園、朝鮮人參種法亦自照任發焉、淸商嘗獻貝母栽、公令諸醫徧視、莫有知者、乃摘三葉盛以竹筒、使人就問照任、曰、是爲貝母、郭璞所謂白華葉似韭者爲最上品、世所稀見也、嘗於相州雨降山世稱大山觀神庫、有一小石如玉、主僧傳爲祕寶、而不識其爲何、照任曰是鮓答也、以祈雨必有驗、主僧喜、時適大旱、卽取試之、俄而雷雨大起、及辨甲州金峯所出石英非水晶、其精鑒博識率是類也、時京師有遠藤元理、諳悉藥性、頗負時譽、著本草辨疑、論和漢諸藥精粗眞僞及古今有無、照任指謫其誤繆、玄理聞而大服、遂來執贄云、

〔杏林叢話〕松岡成章以精本草聞於京師、享保中辟要別藥品、時清商始齎空青至、有司私議曰、此物若非眞、則官不啻失利、吏亦從有罪、斡旋顧子之一言、請鑒之、成章曰諾、審視、大聲曰、是僞也、空青內必有水、一碎試之而可、有司錯愕、不知所爲、碎而示之、果乾涸無水矣、人皆服其精覈、官將留藥成章固辭曰、臣爲邦家審藥、請賜放歸、官不能奪、賞以金若干、成章卽以爲路費、追歸京師、封其餘還之於官府、

〔續近世畸人傳二〕松岡恕庵 附稻生若水

恕庵松岡氏、名は玄達、字は成章、怡顏齋と號す、垂加の神道を學びては埋鈴澗翁ともいふ、平安の人、其先は尾張名護屋に出づ、淺井圖南子いふ、恕庵先生は、もと本草者にあらず、儒家たれども、詩經の名物を閑しみ、稻生若水にしたがひて、本草を三遍見給ひしが、大方暗記して、同じ頃、後藤常之進などいへる、本草者あれど、其右に出たり、故に人まさりに本草をとひ、終に本業となりしかども、其志にあらずとぞ、博覽好古、儉素淳樸の人なること、人のしる處なり、今其異事なる二三條を擧ぐ、大きなる會を二つたて、一ッには漢の書、一ッには國書を讀られしほどのことなれども、火桶は深草のすやきを紙にてはり用ゐられし、中略

圖に云稻生若水、名は宣義、字は彰信、江戸の人なり、若水を通名とせしかども、頭は月代あり、まかも儒風を著し、腰刀を帶たれば、人皆あやしむ、或時台命ありて、詩經を講せし時、草木鳥獸の、事におよぶほどには、闕して獻す、其頃木下順庵も、力をあはせられけるとかや、すべて產物を見ること、別才ありて、他の及ぶ所にあらず、加賀の太守より、祿三百石を賜ふ、庶物類纂といふ書、千卷を撰み、原本副本ともに自筆にて書る、原書はいま官府にあり、副本は加賀に有よし、惜らくはいまだ五旬に滿ずして逝す、

〔杏林叢話〕田村藍水名登、字元雄、精于本草、而性饕餮、酒間每食諸毒蟲及蠑螈、又以灰和飯而喫、唯不吸煙耳、井上金峨詰其故、曰、煙草與蚰蜒反、故不用之、金峨笑曰、余寧捨蚰蜒而取煙草耳、

〔先哲叢談續編 十〕平賀鳩溪○中略

鳩溪不惑之後、以才名高於世、自侯伯貴人至文學方技之士、苟有志本草者、無不欲容交識面、列相館林侯武元、服其器宇、深優待之、嘗勸以方技登本草釋褐醫員、先是、阿部將翁、田村藍水、皆以本草學起自草莽、舉仕大府、賜俸二百苞、故事列醫員者、慶長而降以薙髮髡頭爲式、鳩溪不欲髡、且入仕籍、以藝術進者、其初所受無過此數、雖有偉器之士、非有加増、不能超至其上、姑從此、亦必能有所處置、鄭重喩之、鳩溪常謂、大丈夫不食祿千石、敢不可仕、故王侯蕃鎭、雖以賓師禮待之、其所給秩不論五百石、則辭謝不應、而今欲給贍衣食、柔心屈縮、孜々砣々乎干求祿仕、豈所欲哉、而侯猶眷顧之、又告曰、釋褐上仕、其勢與侯國異、累遷拔擢自徹俸起、至千石萬石、素存乎其任、我有盡力、請推考之、慇懃不已、鳩溪不敢謝、其恩旨、自負才氣、傲然謂人曰、二百苞家常茶飯、僅々小鳥餌耳、後著話本一卷、暗諷刺侯之不知人、以謂、巨魚不游涓流、大鳥不巣小木、

〔杏林雜話〕小野蘭山嘗爲本草啓蒙、年已七十餘、手寫稲若水庶物類纂六百卷、人稱爲今胡徵君、

〔半日閑話 三〕一文化七庚午年正月、小野蘭山翁年八十三にて沒す、机に寄てねぶるが如しと云、蘭山寛政十年戊午、京都にて召れ、同十一年己未七月廿八日、御納戸格にて、初而御目見、三拾人扶持被下之、

〔本草圖譜 叙〕吾友岩崎灌園、酷嗜結轍之學、又善寫生、所著有本草圖譜若干卷、頃者、薈草部一類、録諸梓板、請序於予、灌園刻意斯學殆三十年、平居植藥卉於庭、二千餘種、羅包拮錯、磁斗相接、灌園日逍遙其間、親加培漑、徧覽諦視、以察其根莖花實之形色、旬析榮悴之變態、超然有所得於中、輙援毫寫之、是以精覈詳審、分析毫芒、凡方土產殖之同異、深阻幽崖之殊品、以至海外絶國賈舶所賫、纖悉羅陳、不移足而得之几案間、其用力可謂勤矣、○中略　文政十一年晩秋望日、奉朝請醫官喜多村直撰、

〔杏林雜話〕青池芳滸名林宗、字子達、譯喝蘭書、著本草及地誌、皆漢籍所未載者、其詩云、神農經外分三殖、大禹

肅餘記八條、

〔政事要略至要雜事九十五〕又同令釋云、敎習本草、○中略博士菅家文謀說、

〔政事要略至要雜事九十五〕醫疾令分經受業條、釋云、本草初三卷、中七卷、今選十卷、神農乘飛車而問、本草名貴常試經也者、仍放府會記圖其形像、

〔續日本紀三十九〕延曆六年五月戊戌、典藥寮言、蘇敬注新修本草、與陶隱居集注本草相檢、增一百餘條、亦今採用草藥、旣合敬說、請行用之、許焉、

〔日本後紀八逸文〕延曆十八年二月乙未、贈正三位行民部卿兼造宮大夫美作備前國造和氣朝臣淸麻呂薨、○中略長子廣世起家補文章生、○中略大學會諸儒、講論陰陽書、新撰藥經、大素等、

〔倭名類聚抄序〕於是于倭名顯而不易、○中略適可決其疑者、辨色立成、楊氏漢語抄、大醫博士深江輔仁奉勅撰集新抄倭名本草、山州員外刺史田公望日本紀私記等也、然猶養老所傳楊說纔十部、延喜所撰藥種只一端、

〔本草和名卷首〕羅窽本草和名原本、不題作者名氏、開卷首頁、唯記新撰二字、考源能州和名類聚抄序曰、大醫博士深江輔仁奉勅撰集新抄和名本草、仁和寺書目曰、倭名本草、大醫博士深江輔仁奉勅撰、藤少納言書目曰、本草和名下一帖、而類聚抄引用書中、有新抄本草、新撰本草、和名本草、又有單稱本草者、其所稱和名、皆與是書合、則雖有數名、其實一書、俱指是書而言、其間有小小異同者、乃流傳之轉訛、不足畢論也、丹波丹州醫心方第一卷、載諸藥和名、亦全與是書符、○中略但輔仁未詳何朝人、或曰、醍醐帝時、爲大醫博士、延喜十八年撰掌中要方、[illegible]源順天曆永觀間之人也、而類聚序中已稱之、則其說似乎可據、然[illegible]昧於國史、不能纖得確證、博究其學者、必有攷稽攷云、元□(丹波)識

〔本朝食鑑自序〕本邦自古不乏醫師、不乏藥物、而迄今辨其性者希矣、有書而旣沒歟、有論而不傳歟、論

藥性者、宜歸之綱目、厥辨旦夕所用之飲食者誰哉、雖有食經、食忌、食治、食療、食性、食制、食醫、食物、膳饈、飲膳等書、而不協本邦人民之日用、能州源刺史集和名類聚、以及草木禽獸鱗介、而載崔禹錫食經、辨色立成、楊氏漢語、深江博士本草、田山州私記等書、以證之者多、但恨不覩其書、就中唐崔禹錫者、崔融之子、開元中中書舍人也、源刺史所載鯖鮭蕗骨蓬山葵之類、本邦古今所賞、而諸本草中未言、惜乎、禹錫食經今則亡矣、熊竑經籍志有崔氏食經十卷者卽是也乎、僕每謂、飲食者民物平素之大欲、死生存亡之職由、而飲水吹火穿土茹穀蔬炙禽魚、擇獸蟲、悉搜求其氣味主治、凡三十餘年、漸得大略、而分品類、會拾古言之餘荁、以附己志、輯成十二卷、目之曰本朝食鑑、○中略　元祿壬申菊月丹岳野必大、漫書于松竹窩、

〔大和本草 叙〕本邦邃古果有嘗百草而治疾病者耶、但聞其事矣、未見其緒也、果有作本草而辨物識性者耶、但聞其名矣、未見其書也、中葉已降其亦有斯之作在耶、惟恨窮鄕之生每遠於名山而未得聞也已、逮于近世乎、備命本草云者一二出焉、特專於飲膳食治而不徧於庶物、所以有事乎博洽者發歎焉之嘆也、吾老先生○貝原篤信嘗有喜斯學何也、自謂其爲稟也孱弱善病、欲保其天年則無他焉、知識品物之形狀、而雖別性味之良毒、以補之以攻之之方不可不自助也、乃自弱冠、把讀明李時珍本草綱目、及諸家本草、諸州府志、群書集類之中、凡有預此者、平昔無不旁達遠引以采錄之、積且成編、其舊聞與新得亦復不可捐也、遂合纂以爲大和本草十六卷、以詔于世、○中略

寶永戊子四月二十七日　門人鶴原綸謹題

〔大和本草 一〕論本草書

凡草木禽獸蟲魚金玉土石ヲ記セシ書、神農本草ヲ始トス、三百六十五種アリ、是ヲ本經トス、梁ノ陶弘景名醫別錄ヲ作リ、神農本經ヲ增補ス、又三百六十五種アリ、コレヨリ以來歷代ノ名醫、各有增益、諸家ノ本草多シテ、名品漸加レリ、明ノ李時珍、歷代本草ノ內ヲ撰輯シテ、自己ノ見聞ヲ加ヘ

廣之、本草綱目ヲ作リ、品物大ニ備ル、萬暦六年ニ成レリ、本朝ノ天正六年ニ當ル、所載品數凡一千八百九十二種アリ、

〔享保集成絲綸錄三十五〕享保十九寅年三月

此度、丹羽正伯、書物編集之儀ニ付、諸國之產物俗名幷ニ其形、其國々江承合申儀も可有之候間、正伯相尋候ハヽ、申聞候樣、御料は御代官、私領は其領主、且地頭、幷寺社領は其支配頭々より可被申渡候、以上、

三月

右向々江可被相觸候

〔本草綱目啓蒙序〕我邦在於蒼波浩蕩之外、方域已殊、風土隔絶、物產不同、或有彼有而我無者、或有我無而冒充彼某物者、或有我有而不識、爲彼某物者、蓋爲斯學者、乃難於彼土人耶、夫人之才力有所限、已殫精于醫經經方診候處療之術、又欲並識藥奇品所寄用物、盡厥之、自非逸群之資、該博其業、又耐不暇及于此、故醫工當醫日用要藥、僅識其主療、而且多不辨物品之眞贋良否、至其甚、則認鉛爲錫、亦或有焉、宜乎藥舖所售數、諸州所采選、一歸于市肆、縱令巧詐百般、甘受其傳、不加怪也、其亦可責嘆哉、是以我邦前輩有專以辨物產別爲一家者、乃辨性主療、付之于醫家、置而不講、如若水稻氏、最稱閎覽君子、著庶物類纂七百卷、厥後松岡氏受其學、亦有所闡發、著用藥須知若干卷、然稻氏過于浩博、松岡氏嫌于簡約、並不便於醫家焉、今蘭山翁出乎松岡氏之門、偏以李氏綱目爲宗、而汰稻氏之博、廣松岡氏之約、參之於群籍、取之于親驗目睹、得之乎沈思默想、歷涉數十年之久、殆極其精微偉大矣、啓蒙之書者、係其孫士德、與門人岡部生、筆記所聞於翁、而經其手訂、而翁平生之心力、全存焉于斯、凡歷代諸書所載異名、我邦所呼之稱、及朝鮮琉球諸州方言、羽毛鱗介根幹花葉之形色、春秋秀實之候、地產之異同、與夫市肆之眞贋良否、盡臚于各條之下、一千八百八十二種、疑者決之、謬者匡之、審辨細釋、鴻纖

無遺、抑謂、我邦本草之學、至于此集大成歟、洵醫家必用之偉寶也、〇中略　享和二年臘月之望、東都醫官督醫學事丹波元簡識、

〔本草圖譜序〕余蓋憂之、蚤嗜斯學、毎取群書關係於斯者、竊敢折衷衆說、各歸其當、搜採山野、移圃栽盆凡二千餘種、苗葉花實隨時寫生、乃至異境僻地之產、其所目擊、莫不悉圖之、如斯者二十餘年、積成若干卷、名曰本草圖譜、其爲圖抖擻精神、盡竭筆力、極之精巧、施之采色、自以謂無復所憾者、試開視之、雖兒童走卒、亦不待費口舌、而辨某爲某物也、或使世醫者易彼急於射利之心、而用之於此學、賁余此圖講而明之、名實不差、揀擇無失、主治適當、療病如意、〇中略　文政戊子冬至日、灌園岩崎常正、

〔皇國醫事沿革小史後編第六期〕玄眞〇宇多川又之ヲ憂ヒ、和蘭藥鏡ヲ著ハシ、又遠西醫方名物考ヲ撰ス、洋醫家益々其澤ヲ蒙ル、玄眞亦子ナシ、美濃ノ人江澤養樹ノ子某ヲ養テ嗣ト爲ス、卽チ榕庵名ハ榕ナリ、榕庵少フシテ物產學ヲ好ム、後チ植學啓源ノ著アリ、是レ我邦泰西ノ植物學アル初ニシテ、其著天保四年紀元二千四百九十三年ニ係ル、又百綱譜ヲ著ス、門人伊藤圭介泰西本草名疏ヲ作ル、先是天明ノ頃紀元二千四百五十年代舊譯官石井恒右衞門、白河侯ノ名ニ由リ、ドヽニユース植物學飜譯ノ擧アリ、惜ヒ哉其業半ニシテ死セリ、

〔物類品隲凡例〕一以藥物會友也、藍水田村先生、寶曆丁丑歲、會于東都湯島者、是爲其始矣、翌年戊寅、又會于神田、己卯歲、予〇平賀源內繼之而會于湯島、庚辰歲、社友松田氏會于市谷、壬午歲予又會于湯島、凡爲會五矣、其會主自具者爲主品、同好諸子所具者爲客品、不擇草木、鳥獸、魚介、昆蟲、金玉、土石、和漢蠻種、其主品則每會以百種爲限、如初二會主品、則固皆田村先生園庭中物、雖後三會主品、亦其半、則先生之所助具也、丁丑至庚辰四會主客品物不過七百數十種、壬午會則倫乃告海內同志者、凡三十餘國、所湊品物一千三百餘種、通向四會、物類會萃者凡二千餘種、夏夷異類於是爲大備矣、今擇於其中以編此書、凡品物重複者、及論當未核者、及常種凡類世人所能識者、皆略不載、〇中略

〔平賀鳩溪實記二〕平賀源内初て居所を求る事幷醫師兒島圖達が事、

讃岐平賀國倫士彝編

源内は標札を出し、儒醫の書籍ども會讀講釋の看板を出し、其上本草會を催したり、其頃は、神田佐久間町の醫學館の初りし時分ゆへ、醫學繁昌の時也、爰に中醫達に、兒島圖達といへる、本道醫師あり、源内が、本草會を聞て談數會也、今まで所々本草の會有といへども、會讀等にて書籍の沙汰計也、然るに此度平賀源内といへる者、藥草會取立しは幸なる哉、我等も年來藥草に苦んだり、出席して器量の程を試んと、同志の醫師十五六輩、各異草或は鳥獸の異るを持參して、案内し入來れば、源内は上座に客席を設け、門下の諸生左右に居幷び、和漢山海の異物を集め、衆議判をいたしけり、圖達は應對終つて、藥物を取出し衆議判に及ぶ所、大勢にて名を付られぬ異物は、いづれも、源内に委しく知り、和漢の名目、明らかに付て論定り、また源内が所持の物は、大勢あつまるといへども、一つとして知るものなし、數日の會、何にても、右の如くなりければ、圖達はじめ、江戸中に、本草家と稱する醫師源内に屈服せざるは一人もなく、是よりして、源内が名は高く成て、儒醫ともに信仰せり、圖達は、宿所へ歸り、成程源内は博物なり、中々及べきにあらずと云て、社中の者へも、兎角本草においては、平賀程なる者はなしと感心して、夫より心易く出會せり、源内は、此本草會を催せし故に、高名を取り、弟子抔も多くなりて、不自由なる事もなく、中華蠻國の名產共に驚れり、諸大名へも出入すれば、召抱べき沙汰あれど、仕官の存知寄なくして、御直參にも成たき心と、人々評判しける、夫よりして、藥種屋書物屋共、源内に近付て、和漢の藥種製法など、或は書籍新渡の直段付、日々寸暇なく、其間には、會讀講釋諸家へ出入ける故に、殊の外手廣になり、近國は扨置、中華までも名を揚しは、先本草が初めなりしと也、住居抔も手狹になれば、神田白壁町へ轉居して、鳩溪先生と號して、儒書醫書の釋義に光陰を送りける、

〔江戸繁昌記二篇〕藥品會

西洋人同、（狀如猿而能言人事、）朝鮮蚺蛇、（長四丈餘、廣三尺餘、）漢土玳瑁竹、（産文）飛州魚尾竹、武州蔓島頭、韃産塔達爾汗、金鶴、（城州産、色如黃金、）黃猫、（朝鮮産、大如犬、而毛色如金、）其他品物一時雲集、其數凡七千餘種、乃座而目之、指而辨之、非遭繁昌都內、焉得、非遭太平世、焉得、不亦一大奇會哉、要亦係會主厚志於其學之所致、然且不與彼書畫會同、其實者、思將欲用此藥彼病而然歟、何但此而已、七千藥物如能辨其主治、而本草者則本草、又不與彼藥駝師同、其樣也、儒病佛病無不藥焉、會主者誰、吾友春水福井氏、

〔觸留六ノ百八十二〕戌（○文久二年）四月九日

町奉行衆　　　　多紀永春院

來ル十九日、醫學館藥品會ニ付、前々之通、同心相詰可申旨、御申渡有之候樣いたし度存候、依之御達申候、以上、

戌四月

〔日本敎育史資料十九醫學〕藥品會之事

毎年四月、藥品會ト云コトアリ、館中（○醫學館）貯ルトコロノ藥品等ヲ、風入スルノ爲メ、設ケタルモノナレドモ、終ニハ衆庶ノ觀覽ニ供ルコトヽナル、此ニ至テ、館中貯ル所ノミナラズ、諸醫官競テ珍品奇物ヲ持寄ルコトヽナル、或ハ俗家ノ奇品ヲ所持スル者ハ、醫官ニ托シテ出品スル者アリ、本會ハ、二日間ニシテ、觀覽セントスル者ハ、必ズ切符ヲ要ス、此切符ハ賣捌スルコトナク、諸醫官ヨリ其知己ニ分ツモノ也、

〔日本敎育史資料四舊福井藩〕福井醫學所（○中略）

藥品會記事　文政二年六月、濟世館ニ於テ藥品會執行アリ、學監妻木榮輔ヲ監訂ニ命ジ、講師細

井玄篤ヲ會主トス、外ニ助手三名アリ、畢テ其總目錄一冊ヲ製シ、國守治好公ノ一覽ニ供ス、天保三年九月、第二回藥品會ヲ執行ス、監訂會主前ノ如ク、助手五名ヲ置ク、國守齊承公親ラ此會ニ臨マル、天保十三年八月、第三回藥品會ヲ執行ス、監訂ハ學監妻木敬齋、考訂ハ都講細井玄篤ニシテ、助手八名ヲ命ズ、國守第二子將五郎公此會ニ臨マル、〇中略維新前ニ至ル迄保續ス、

〔延喜式典藥三十七〕藥家儲物
銅藥斗一口、藥升一口、鐵臼十口、鐵杵十枚、藥匕五枚、藥刀六枚、漆中取案一脚、藥殿承塵幔絁幌一條、[illegible]、行事錦綵二幅一條、細布幌一條、並隨破損申省請替、

〔尺素往來〕藥盤、藥研、藥臼、藥鉄、藥匙、砂鉢、雷槌等、定御用意候歟、

〔下學集器財下〕藥籠 藥器

〔撮壤集家具中〕藥器 藥研

〔雍州府志器用七〕藥籠 以銅製之、今冠諸品物、然元出自盛藥器、故總號藥籠屋、

〔倭訓栞中編六久〕くすりばこ 御殿飾置に、藥箱入物有肉合、一合御梨地、一合蒔繪子、一合紅雪、一合紫雪と見え、河海抄殿の裝束、二階には藥子匣、其下階藥匣と見えたり、今醫家にいふは藥籠也、

〔源氏物語二十四胡蝶〕かうご、くすりのはこ、御すゞり、ゆするつき、かゝげのはこなどやうの物、うちうちきよらをつくし給へり、

〔玉海〕治承二年十月廿日己未、良通爲春日祭使發向、〇中略手振十二人、〇中略近衞允武國、〇中略紫褐色[illegible][illegible]、青木濃青、青單袴牢、背下襲、蘇芳打衵、青單衣、細花鳥尾延、藥壓巾、[illegible]

〔運歩色葉集〕藥籠

〔易林本節用集器財〕藥籠

〔本朝世事談綺正誤一〕印籠

笠澤筆塵三の卷曰、器物ノフカク打オホフ蓋ヲヤロウト云ハ、古藥籠印籠有リ、印籠ハ印判ヲ入レ、藥籠ハ藥ヲ入ル器也、藥ヲ風ニアタラスタメニ、蓋ヲフカクス、ソレニナゾラヘテ、フタノ深ク掛ル器ヲ皆藥籠ヤロウ蓋トス、ヤロウハ音ノ轉ゼル也、

〔安齋隨筆前編十一〕一印籠藥籠　二ツともに唐物也、大サ定らざれども、大概徑三寸五分許にて、重筥也、三重四重あり、飾ハ、堆朱、堆黑、螺鈿等種々あり、其形圓なるを藥籠と云、四方なるを印籠ト云、藥籠ハ藥入也、印籠ハ印と色を入もの也、今世も、右の二色此方へ渡りたるを傳へて、座席の飾、違棚などの置物にする也、此方にて、今世印籠と名付て、小キ重筥ノ兩傍に紐通しの管を作リ付て、緒を通して、腰に付るハ、彼右に云ふ所の印籠藥籠を小クしたるが如き者也、されば藥を入れるものを印籠と云ハ、名の唱へ違也、小キ物なれば、印ハ入られず、藥を入る物なれば、藥籠とこそ云べけれ、又筥の蓋に、ヤロウブタと云ふものあるハ、右の藥籠の蓋の如く、筥の身の端をうすくして、蓋の内へ呑み入るやうにしたるを云也、奇異雜談六册アリと云書あり、古版也、今ハ絶版す、室町殿の代の人の記したる書にて、明應文明天文の年號見へたり、其書に、古キ堂の天井に、女を磔ハツツケにかけ置たる物語の中に云、是を見ずんば有べからずとて藥籠より火打蠟燭を取り出し、火をともし、天井にのぼりて見れば、女人を磔にかけてをけり云々、此藥籠ハ、蠟燭を入たるなれば大なる物なるべし、腰に付たる由ハ見へず、旅僧なれば笈の中に入れ、具に藥籠を以て蠟燭筥にして、火打筥にも兼用しなるべし、

〔本朝世事談綺正誤一〕印籠

印籠は、元來、印判印肉を入具なり、今藥を入る、藥をたしむ物を藥籠と云、印籠の一種なるものなり、蓋を中にて合せ、風の入らぬやうにしたるなり、今箱に藥籠蓋といふは、この藥籠より起るこ

となり、今は藥籠印籠とりかへて用、

〔白石紳書一〕今の印籠は、魚袋に符を入れし遺制と然る歟、

〔嬉遊笑覽二服用〕印籠は、下學集に、印籠（印匣）と見え、林逸節用集に印籠（印判印肉）と見ゆ、同書に、藥籠も出たり、今堆朱などにて、四方なる重匣を、印幷印肉を入るゝ物といひ、同じやうにて形圓きを藥籠なりとす、いづれも唐物なれば、其實は知り難し、此二色、本邦にては、ちがひ棚の飾などに置、また腰に佩る印籠は、名のみにて、其用は藥入なれば、實は藥籠なり、安齋云、此物、もしは信長秀吉などの頃、軍中の用意に、鎧の上帶に付る爲に作り出せし物にてもあるべき歟などいへるはわろし、尺素往來に、丸藥等の事を云て、當世人々、火燧袋の底面に、小藥器之中、必賣持之、以不得貯爲恥辱候とあり、又藥器を連ねたる處に、印籠、食籠とあるは、印の箱也（今も古き印籠に、東山殿時代の蒔繪なりと云ものあり、東山時代この物なし、しんじがたきもの也、）安齋又云、室町殿の頃、殿中へ、刀に火打袋付て參ることとなし、老人病者などは、藥を入る爲に、御免を申て付候由、宗吾記に見えたり、今も御前へ、腰にさげ物して出る事は、制禁なり、

〔明良洪範二十三〕秀吉公、御能拜見仰セ付ラレ、登城セシ時、玄朔、弟子ヲ以テ、平日用ユル、印籠ノ藥ドモヲ、皆入替ヨト申付シ、弟子ニモ、此印籠コソ見苦シケレ、能印籠ノ有ニト云ナガラ、師命ノ如ク、丹藥ドモ詰替ケル、扨、御能拜見シ、御中入ノ節ニ、將軍家如何思召シケン、玄朔ガ印籠御覽有ベシ、近ク御取寄有レニ、用ヒ古セシ黑塗ノ印籠ナレバ、御笑ヒ有リ、内ヲ披カセラレシニ、名方ノ丹藥ドモ透ク詰置タ、藥氣鼻ヲ通シケレバ、器ハ麁相ナレドモ、藥ノタシナミコソ殊勝シケレ、誰モ斯コソ有ベケレ、玄朔ハ、名醫程有テ、御感ジ遊バサレ、其印籠ヲバ戻サレ、御前ヘ召サレ、御手ヅカラ、藥ノ字ノ御印籠ヲ給ハリケリ、玄朔ハ、存ジヨラザル仕合ニテ、家室ニモ傳ヘケリ、諸門人ニモ、カカル幸ヒニ逢事、偏ニ家業ノ事タシナミ厚キヨリ出タリ、御城ヘ召ルヽカラハ、諸事改ムベキ事ナリ、サレドモ隱居ノ身ナレバ、尤リ難ハ如何ト、藥ハ家業ノ事ナレバ、念ヲ入ベキ所ヲ思ヒ、詰替

シケリ、此度ノ首尾ハ、醫ノ冥利ニ叶ヒタリ、門弟末々迄モ、此嗜ノ心忘ルベカラズ迚戒メケル、

〔醫賸 中〕刀圭

陶氏本草序例云、刀圭者十分方寸匕之一、准梧桐子大、〇中略又按、千金太乙神明丹方後云、凡言刀圭者、以六粟爲一刀圭、一說云、三小豆爲一刀圭、〇下略

〔茅窻漫錄 中〕刀圭

醫者の用ふる藥匙を刀圭といふ事、和漢とも、詩文章に書く人多し、白樂天が挽茶の詩に、湯添勻水煎魚眼、末下刀圭攪麴塵と作り、蘇東坡が句に、促膝問道要、遂蒙分刀圭といひ、元の林坤が誠齋雜記に、出篋中刀圭藥、滌之悉化爲水と書たれど、其名義しれざりしに、王士禛が池北偶談、卷二刀圭字常用之、而未有確義、碧里雜存云、在京師買得古錯刀三枚、形似今之剃刀、其上一圈如圭璧之形、中一孔卽貫索之處、蓋服食家擧刀取藥、僅滿其上之圭、故謂之圭、言其少耳、泉布錯刀皆古錢名といへり、〇下略

〔皇國名醫傳後編 中〕後藤艮山〇中略

後藤達、〇中略惡庸醫任意作劑無定準、造皿匕三等、以正分量、世以爲法、

〔蒹葭堂雜錄 二〕清李勇卿名爲著す普救堂藥方三卷あり、其中に、計粒匙といへる匙の圖あり、匙の舌の所に二十箇の凹穴あり、一匙とりて丸藥をかぞへずして則二十粒あり、いかさま巧なるものなり、此は甚だ珍書にして、日本の俗用療治調寳記の類の書なり、就中此匙ばかり珍奇といふべし、

〔日本風土記 四〕醫用

藥刀骨宿里乞藥害　藥箱骨宿里白哥　藥碾藥鑢中略〇　藥確骨宿里哈確

〔醫心方 一〕藥斤兩升合法第七

本草經云、右秤、唯有銖兩、而無分名、今則以十黍爲一銖、六銖爲一分、四分爲一兩、十六兩爲一斤、(今案、范注方云、六十黍粟爲一分、)又云、凡方有云分等者、非分兩之分、謂諸藥斤兩多少皆同耳、又云、凡散藥有云刀圭者、十分方寸匕之一、準如梧子大也、方寸匕者、作匕正方一寸、(今案、醫心方云、正方一寸者、四方一寸、此作寸者、周時尺八寸、以此爲方寸匕、)又云、錢五匕者、今五銖錢邊五字者、(今案、醫心方云、五銖錢重五銖也、)又云、一撮者、四刀圭也、十撮爲一勺、十勺爲一合、(今案、千金方云、以六十黍粟爲一刀圭、方寸匕之二十黍爲一小豆、三小豆爲一梧子實、廿黍粟爲一簪頭、三簪頭爲一刀圭、二刀圭爲一錢匕、一錢匕爲一寸匕、五匕爲一勺、十勺爲一合、)又云、藥升方、作上徑一寸、下徑六分、深八分、又云、凡丸藥有云如細麻者、卽胡麻也、又以十六黍爲一大豆、如大麻者、卽大麻子、準三細麻也、如胡豆者、今青斑豆是也、以二大麻準之、如小豆者、今赤小豆也、粒有大小、以三大麻準之、如大豆者、以二小豆準之、如梧子者、以二大豆準之、一方寸匕散蜜和得如梧子十丸爲度、如彈丸及雞子黃者、以十梧子準之、(今案、方寸匕散爲丸、如梧子、得十六丸、如彈丸一枚、若雞子黃者、准四十丸、今以彈丸同雞子黃、此甚不等也、)

〔見聞談叢〕藥升

古へ方寸匕の類に、散藥を量る藥升あり、陶弘景曰、藥升方、作上徑一寸、下徑六分、深八分、內散藥勿按抑之、正爾微動令平調耳、今人分藥不復用之と、(今の人用すとあれば、陳より前、藥升ありとみゆれども、いづれの代に始まることと知れざるゆゑ、)(周尺を以て量るなり、)今周尺を以て量るに、(一說量者に云、周尺は今の七寸一分九厘六毫三絲有奇に當る、)上徑一寸は、今の七分一厘九毫六絲三忽、下徑六分は、今の四分三厘一毫七七八、深さ八分は、今の五分七厘五七零四に當り、一升今の三錢零々四六六九一五九餘なれば、(上徑の圓と、下徑の圓と、上下徑相乘の數を相併せて、百零一分五零一九九八三二四となる、これに深さを乘じ、三約して四九十四分七八三六七八五八四六千八百二十七分々以て除すれば、三錢零々四六六九一五九餘を得るなり、)蓋小くして他に用ふべからず、散藥の升たること疑なし、李時珍升積を算せず、藥升を以て古量となして註せしゆゑ、通じがたし、尚證類本草を考ふべし、

〔道三切紙抄上〕秤量ハ、秤ハ錙也、量ハ用也、廣秤(日宋一兩十文)半秤(日宋一兩五文)大方書ノ中ニ、一斤ト曰者、十六兩也、卽百六十文目也、半斤ト曰者、八兩也、卽八十文目也、一兩ト曰八十錢也、卽十文目也、又

四分トモ曰也、大分六朱ハ一分、凡二文目半分ト曰、一朱二分五リン、是ハ小分ノツモリ也、三分ト曰ハ七錢半也、二分ト曰ハ五錢也、卽半兩也、一分ト曰ハ二錢半也、一斤ト曰ヨリ已下ノ分両ハ、皆大分也、

〔羅山文集七十五國書〕醫方稱藥輕重則曰一字者、四分一錢之一也、一錢文皆有四字、則二分五釐爲一字、

〔譚海十四〕藥種は、目形四匁を一兩とす、四拾匁を一斤とす、砂糖、金米糖も是に同じ、茶は目形二百目を壹斤とす、羽州にては、蠟目形壹〆四百目を壹斤とす、

〔續視聽草七集五〕醫方分量衡　吉益爲則撰正

夫、古今度量衡、其說班々雜不一定、其起以黃鍾管也、古今一也、黃鍾管容千二百黍、然黍品有多種、且土地有肥瘠、年有豐凶、故黍不一、不一則所容因黍律舛、違則業亂、業亂則度量衡亂、天下無規矩準繩、無規矩、天下不治、宜哉正一黍一毫矣、如醫不然、唯知古今分量之大槪乃可矣、班固曰、黃鍾之重一龠、容一千二百黍、重十二銖、兩之爲二十四銖、爲兩、十六兩爲斤、三十斤爲鈞、而鈞爲石、是古書所謂五種也、而雜世々所校因有違、豈有米與黍之重違哉、然此一千二百黍、以今日本秤計之、有八分五釐、假令大而多不過一錢目、然則漢一兩者、本邦二錢目也明矣、或說、千二百黍、明秤三倍者也、則漢一兩者、今六錢目也、何有今黍三倍者也、明秤疑有本邦之秤違、故隨黍、而漢一兩爲二錢目也、且淮南子說苑爲粟、則黍無大異、可以知矣、秦半兩錢、前漢書曰、秦兼天下、銅質如周錢、文曰半兩、重十二銖、由是觀之、半兩無疑、然古半兩錢、集之正之、往々重本邦秤八分強、則漢一兩爲二錢目、可以知矣、尤雜其復半兩重有種々、非今作度量衡、只爲醫方分量、則大槪乃可矣、鄭也子律呂精義曰、分者初出千金方、是然、仲景方中有分、是後人攙入也、漢書曰、五權之制、漢無分錢之名、可以知矣、藥種重有三等、一曰石膏、與穀相等、二曰菓實、三曰草葉、

〔徒然草上〕唐の物は、藥の外はなくとも事かくまじ、書どもは此國におほくひろまりぬれば、かきもうつしてん、もろこし船のたやすからぬ道に、無用のものどものみとりつみて、所せくわたしもてくる、いとおろかなり、遠き物をたからとせず、又得がたき貨をたふとまずとも、文にも侍るとかや、

〔日本歳時記六四月〕刻み置たる藥種をも紙に包みながら、其口をひらき、日にあて、、晒すべし、きざまざる藥は、其まゝ日に干すべし、千金方にいはく、藥をさい〱日に干すことなかれ、藥力うすくなる故なり、當時用ひざる藥は、烈日にほし、新瓷器に入、土にて口を封じ、用る時開き出して、急に又封ずべし、年をふれども新しきがごとし、丸散の藥も、如此すべしとぞ、凡世の人、茶を壷に貯へよく保護すれども、藥をたもつ事をしらず、藥は尤人を養ひ病をいやす物なれば、貴重して收めたくはへ、氣味のぬけざるやうにして、性をたもつべし、口せばく、手の入ほどなる新瓶を多く作らせ、藥を入、わらをつかねて、口をよく封じ置くべし、如此すれば、久しく有ても、氣味うせず、是藥をたもつの良法なり、地黄、白芷、當歸、羌活、川芎、黄連、黄芪、甘草などは、時々晒ざれば、蟲くふ物なり、其餘はしば〱さらす事なかれ、氣味うすくなるゆへなり、

〔皇國名醫傳後編上〕福井楓亭
福井輗、字大車、通稱柳介、一作立助、號楓亭、奈良人、幼有志機、師名醫營壁伯、○中略寛政初、幕府召至江戸、爲醫官、讓管醫於躋壽館、四年特命內直、專製藥所監、是年卒、初輗之躬業、先召藥賈鼎商、誡之曰、藥者醫療本根、人命之所由係、必擇上品者、第二品以下謹勿持來、吾見其價賤或生惡心、用粗藥而不効、至誤人命、甚可畏也、若衣服反此、爽美麗者不許、留持來、學者之良智、令人不覺、恐損吾宿志焉、

〔隨意錄二〕明太祖嘗論兵曰、用兵猶用藥、藥能去疾、亦能致疾、苟無事而動兵、是猶妄以瞑眩之藥、毀遺無病之人、雖不殞身、亦損元氣、如今我清平之世、動兵之患則無有焉、庸醫誤藥治、以損人身、則多有焉、

〔隨意錄五〕醫家謂藥一劑以爲一貼、貼義問之衆醫、亦皆曰不知、按增韻、貼裨也、依附也、此言衆味相依以裨輔與、

〔先哲醫話上〕北山友松〇中略

余療南源、悅山、高泉、諸僧、皆用大劑、何者、西土人比之本邦、頗厚腸強胃、非輕品所敵、風土人物之異不可不知、西土醫診病、直記其藥按、以與病者、病者齎之於藥舖、以服之、故其品劑量適正、與邦醫輕劑射利者迥異、

古事類苑

方技部十五

疾病一

疾病トハ、身體ニ異狀ヲ生ズルノ名ニシテ、主トシテ疼痛苦惱ヲ感ズルヲ謂フ、故ニ亦イタミトモ、ナヤミトモ云フ、而シテクフ、ガト云フハ、疾病ノ惱ムベキヨリ出デシトモ云ヒ、或ハフ、ガト云ヘル蟲アリテ、人ノ心ヲ食フト云フ傳說ニ基ケリトモ云ヘリ、又中世以來、疾病ヲ歎嘆ト云フ事アルハ、死ヲナホルト云フノ類ニテ、原ト忌詞ニ出デタリト云フ、

疾病ノ數ハ甚ダ多クシテ、古來四百四病ナド、稱スレドモ、一箇ノ疾病ニ對シテ、其病症ノ經過ニヨリテ、一々別病名ヲ附シタルモノモ甚ダ多シ、大寶令ニハ、疾病ノ甚シキモノヲ舉ゲテ、殘疾、廢疾、篤疾ノ三種トナセリ、是レ口分田、及ビ兵役、調庸等ノ關係上ヨリ分類セシモノニシテ、古代ノ戸籍ニハ、詳ニ之ヲ載スルヲ見ル、

凡ソ人疾病ニ罹レバ、古來親戚知人之ヲ訪問シ、官吏ハ暇ヲ賜ヒ、醫藥ヲ給スル等ノ制モアリキ、而シテ又看病ハ、朝廷ニ在リテハ、概ネ多クハ僧尼ヲ以テ之ニ充テタリ、看病ノ事ハ、醫術篇ニ詳ナリ、サテ身體各部ノ病症ニ就キテ考フルニ、頭部ノ病ニハ頭風、頭痛等ノ名アリ、又胸ノ病ト云フコト多ク古書ニ見ユ、蓋シ肺病心臟病ノ類ナラン、而シテ肺病ハ、古來頗ル多カリシト見エテ、之ヲ古書ニ見ルコト甚ダ多ク、其種類ニ傳屍ナド云フモノアリテ、其病ノ遺傳ト傳染トニ出ヅルモノアルコトヲ示セリ、又腹ノ病、腰ノ病ト云フコトアリ、腹ノ病トハ、蓋シ痞癖、

癥瘕、其他胃腸ニ於ケル諸病ノ名ニシテ、今ノ謂ユル消化器病ノ事ナラン、又脚病ト云フコトアリ、是レ脚氣脚痛等ノ總稱ナルベシ、

又皮膚ニ發生スル疾病アリ、通常之ヲカサト云フ、又癰疽ノ如キ腫物類ヲモ、廣クカサト云ヘリ、其類甚ダ多シ、癰疽、丹毒瘡ノ如キハ、頗ル難治ノ病ニ屬シ、人面瘡ノ如キハ、奇疾ヲ以テ著ハル、又ニキミノ名ハ、後世ハ、單ニ面皰瘡ノミヲ稱スレドモ、中世ノ書史ニ見ル所ノニキミ即チ二禁ト書スルモノハ、多ク難治ニ屬スル瘡類ヲ指セルモノニシテ、之ニ因リテ死亡セシモノ、往々之レアルヲ見ル、

黴毒ノ起原及ビ傳來ニ就キテハ、古來未ダ確説ヲ得ズ、丹波康頼ノ醫心方ニハ、陰部ノ病ニ陰瘡、妬精瘡ナド稱スルモノ見ユレド、之ヲ黴毒トハ認ムベカラズ、梶原性全ノ頓醫抄ニ玉茎瘡病、玉門瘡病ナル病名ヲ載ス、蓋シ瘡病トハ、傳染病ノ義ニシテ、或ハ黴毒ナラントノ説アリ、而シテ永正年間流行セシ所ノ唐瘡、琉球瘡ナルモノ、其症候稍〻黴毒ノ一種ト認ムルコトヲ得ベシ、徳川幕府時代ニ至リテハ、通常黴毒ヲ唐瘡トモ單ニカサトモ云ヘリ、但シ當時ノ醫書ニハ、黴毒ヲ三別シテ楊梅瘡、下疳、便毒ト稱シタルモノヽ如シ、淋病ハ、古今其名ヲ同ジクシテ其實ヲ異ニスルモノアリ、即チ古ノ淋病ハ、シバユバリト稱シテ、小便ノ出ヅルコト數多ク、若シクハ快ク小便ヲ通ジ得ザル病症ノ總稱ナリ、而シテ後世ハ專ラ黴毒性ヨリ來ル濃淋ヲ淋病ト稱ス、又古ク石淋ト稱スルハ、小便ノ膀胱中ニ結石シタルモノニシテ、即チ今ノ膀胱結石ヲ謂フ、又痟渇ハ渇シテ水ヲ思ヒ、而シテ快ク小便シ得ザル病ヲ云ヒシガ、後世ニハ、專ラ婦人ノ黴毒性淋病ヲ痟渇ト稱スルニ至レリ、蓋シ痟渇ニハ、三痟ト云ヒテ、三種ノ痟渇アリ、而シテ其内ノ腎痟ハ、其徴候頗ル濃淋ニ類スル所アルニ因ルナラント云フ、

又一時ノ流行ニ出ヅル疾病モ甚ダ多シ、而シテ古昔ハ醫術未ダ開ケズ、隨テ流行病ノ如キ、

其性質ヲ詳ニスルヲ得ズ、之ヲ疫病卽チエヤミト稱シ、或ハ時疫卽チトキノケトモ稱シ、其病原ヲ惡神ノ祟ト爲シ、之ヲ攘フヲ以テ、豫防免疫ノ主ナル方法ト爲セリ、流行病ノ内、傷寒、痢病等ハ、其流行甚ダ多シ、痘瘡ハ古クハモガサ、又ハイモガサ等ト稱シ、或ハ其形狀ニヨリテ、豌豆瘡トモ呼ブ、赤疱瘡ハ、後世ノ麻疹卽チハシカニシテ、其病狀略ボ痘瘡ニ似タルヨリ此名アリ、而シテ後世ノ流行傳染病ニシテ、其病毒ノ劇甚ナルモノヲ虎烈剌病トス、虎烈剌病ハ、文政五年ニ流行セシモノヲ以テ始トシ、次ニ安政五年ニ非常ノ流行ヲ極メ、死者十數萬人ニ及ブ、而シテ文政度ニ在リテハ、醫師未ダ全ク其病性ヲ詳ニセズ、安政度ニ至リテハ、既ニ其病性ヲ知リシモ、豫防、消毒、治療ノ方法等、未ダ大ニ悉サヾル所アリテ、甚ダ慘狀ヲ極メタリ、而シテ第三回ノ流行ハ、文久二年ナリ、又百斯杜ハ、安政中、蝦夷ノ地方ニ流行セシコトヲ傳フルモノアレドモ、實否ハ未ダ詳ナラズ、

又人身ニハ之ニ寄生スル蟲アリト云ヒ、其種類ヲ九蟲又ハ三蟲ニ分チ、殊ニスバク蟲ノ事ニ就キテハ、古書之ヲ傳フルモノ甚ダ多シ、又人體ノ九竅ヨリ出血スルハ、皆一種ノ疾病ニシテ吐血、下血、衄血等其名甚ダ多シ、

癩病ハ古クヨリ遺傳ト傳染トヲ兼ヌル不治ノ難症ト稱セラレ、尤モ人ニ嫌惡セラル、故ニカタヰ又ハ天刑病ナドノ名アリ、又白癩ハ世ニ白山カタヰト稱ス、赤癩病ノ一種ト思意セラレ、大寶令ニハ之ヲ惡疾ト爲セリ、

又風病ト云フモノアリ、是レ單ニ感冒ノコトノミニ非ラズシテ、其他種々ノ慢性病ヲ包含セルモノヽ如シ、風病ノ類ニ、咳病、瘧病等アリ、瘧病ハ、卽チ後世ノオコリナリ、又古代ニハ風病ヲ一ニ中風ト云ヘリ、而シテ中風ニハ、別ニ身體不仁、若シクハ半身不隨、四支不屈伸等ノ徵候ヲ見ハスルモノアリテ、後世中風ト云フモノ是レナリ、此他寒暑濕氣等ノ毒ニ中リ、若シ

名稱

クハ飲食ノ毒、及ビ狗、鼠、其他動物ノ毒ニ中リテ疾病ト爲ルモノアリ、此他婦人ニハ、殊ニ長血、白血、乳癰、乳岩等ノ疾病アリ、小兒ニハ痞病、疳、驚風、百日咳等ノ疾病アリ、

〔伊呂波字類抄病也痾〕病（ヤマヒ、疾也、苦也、憂）　痾（亦作痾）　痊　疾　疸　疚　悩　瘁　痛　瘏　瘵　痱　疹
疢　疕　悼　癩　患　痡　瘧　癘（亦作癧）　瘍　瘀　瘼　瘉　瘵　屠　埛　梗　悶　痃　毒（已上）
同

〔續後拾遺和歌集雜十七〕やまふにわづらひけるが、すこしおこたりて侍ければ、（中略）

仁和寺二品法親王守覺

まよふべきやみをにあらではかなくもきりのたえまと思ひけるかな

〔倭訓栞前編也三十四〕やまひ　倭名鈔に疾病をいふ、止の義也といへり、齋宮忌詞にも、病をやすむといふと見えたり、續後拾遺集に、やまふにわづらひけるとも見え、今も西偏にやまふともいふ、まひ反み、まふ反む也、後撰集に、足びきのやまひはすともとよめり、

〔伊呂波字類抄伊病〕痿痺（イキヌハシ）

〔古事記中神武〕故天神御子、問獲其横刀之所由、高倉下答曰、己夢云、天照大神、高木神二柱神之命以、召建御雷神而詔、葦原中國者、伊多玖佐夜藝帝阿理祁理、（此十一字以音）我之御子等不平坐良志、（此二字以音）其葦原中國者、專汝所言向之國、故建御雷神可降、爾答曰、僕雖不降、專有平其國之横刀可降、

〔古事記傳十八〕不平は夜久佐美と訓べし、此言の意は未よくも得ざれども古言なるべし、書紀神代上卷に、須佐之男命の荒び坐る處に、日神擧體不平と見え、（私記には耶須加耳須と訓り）天武卷に、朕身不和と見ゆ、（是天皇の御病おもたまふを詔へる御言なり）今も荒神の氣に遠延腦坐ことを詔へるなれば、事の趣同じ、

〔日本書紀天武二十九〕朱鳥元年六月甲申、遣伊勢王及官人等於飛鳥寺、勅衆僧曰、近者朕身不和、願頼三寶之威、以身體欲得安和、是以僧正僧都及衆僧應誓願、則奉珍寶於三寶、

〔續日本紀十二聖武〕天平九年七月乙未，大赦天下，詔曰，比來緣有疫氣多發，祈祭神祇，猶未得可，而今右大臣（武智麻呂）身體有病，寢膳不穩，朕以惻隱，可大赦天下，救此病苦，自天平九年七月二十二日昧爽以前大辟罪已下咸赦除之，其犯八虐，私鑄錢，及強竊二盜，常赦所不免者，並不在赦限，

〔續日本紀十八孝謙〕天平勝寶三年十月壬申，詔曰，頃者太上天皇（聖武）枕席不安，由是七ヶ日間，屈請四十九賢僧於新藥師寺，依續命之法，設齋行之，仰願聖體平復寶壽長久，經云，救濟苦厄，離脫衆生各免病延年，是以依經大赦天下，但犯八虐故殺人，私鑄錢，強竊二盜，常赦所不免者，不在赦限，

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字四年四月丁亥，仁正皇太后遣使五大寺，每寺施雜藥二櫃蜜缶一口，以皇太后（光明子）寢膳乖和也，

〔上宮聖德法王帝說〕法興元世一年，歲次辛巳十二月，鬼前大后崩，明年正月廿二日，上宮法王枕病弗悆，干食王后仍以勞疾，並著於床，（中略）

右法隆寺金堂坐釋迦佛光後銘文如件，（今私云，是正面中尊釋迦佛云云、）

〔古京遺文〕藥師寺東塔檫銘

維清原宮馭宇天皇卽位八年庚辰之歲，建子之月，以中宮不悆，創此伽藍，而鋪金未遂，龍駕騰仙，（中略）

右刻在藥師寺東塔檫柱上，與東條琴台先生有檫銘釋，檫柱可言，按清原卽淸御原，當時文人厭冗長，刪御字者，

〔續日本紀十八孝謙〕天平勝寶四年正月己丑，是日，度僧九百五十人，尼五十人，爲太上天皇（聖武）不悆也，

〔續日本紀三十四光仁〕寶龜八年十二月壬寅，皇太子（桓武）不悆，遣使奉幣於五畿內諸社，

〔三代實錄三十二淸和〕元慶元年八月己巳，天皇聖體不豫，十一日己卯，延屈名僧於淸涼殿始修法，限七日訖，以天皇聖體乖豫，未幾平善也，

〔皇大神宮儀式帳〕亦種々乃事忌定給支、〇中略病乎慰止云、

〔延喜式五齋宮〕凡忌詞、内七言、佛稱中子、〇中略外七言、死稱奈保留、病稱夜須美、〇下略

〔運歩色葉集久〕歡樂

〔年々随筆二〕やまひを歡樂といふは、死喪を吉事といふごとく凶をさけていへる也、五六百年こなたの記錄どもに、常にみゆ、去年の秋、萩の花さかりに咲みちて、池水にうつろふがをかしきに、月さへをかしき比なりければ、稲山行敬清水良治などにせうそこしてまどゐしたり、酒いたうすゝみて、むらいもさりあへず、歌よむもあり、すゞろなる朗詠などしてもて興ずるほどに、亥の時もはやう過にけり、良治はかへりぬ、行敬も正明も酔ふしぬ、又の日はかしらいたくおきあがるべうもあらずくるしければ、昨宵歡樂生歡樂とかきて、良治がりやりつれば、昔日聖賢昧聖賢とかきそへて、やがておこせつ、聖賢とは酒の事也とぞ、

〔玉勝間一〕年始に病を歡樂といふ事

東鑑云、承元二年正月十一日云々、依將軍家御歡樂、延及今日、今の世にも、年のはじめには、病といふことをいみて、御歡樂といふならはしのこれり、

〔玉勝間十二〕としの始に病を歡樂といふ事

園大暦に、貞和二年正月八日の所に、予風氣相侵、仍歡樂之間、不及出座と見えたり、病を歡樂といへること、これよりさきの物にも見えしやうにおぼゆ、

〔蔭凉軒日錄〕寛正四年十二月五日、當寺〇相國寺都聞依歡樂而退之事、自方丈被申分被露之、

〔二水記〕永正十七年十一月十九日、早旦參當番、初雪、御盃如例、伯三位依歡樂不候、各沈酔、不可説也、

〔鈴川弓馬故實〕松本ハ生害させず、歡樂ニテ死去也、

〇按ズルニ、此等ノ文ニ據レバ、病ヲ歡樂ト云フ事、必シモ年始ニ限ラザルガ如シ、

〔運歩色葉集那〕惱

〔倭訓栞前編十九〕なやむ　日本紀に惱悩、又痛、又難、又單力を訓せり、悲病の義なるべし、新撰字鏡に疒もよめり、なやますともいふ、人にいふ也、ます反む也、神代紀に遍慍、又危困をよめり、

〔古今和歌集序〕をのゝ小町は、いにしへのそとをりひめの流なり、あはれなるやうにてつよからず、いはゞよきをうなのなやめる所あるににたり、

〔源氏物語〕御なやみにおどろきて、人々ちかうまゐりてしげうまがへば、われにもあらで、ぬりごめにおしいれられておはす、御ぞどももかくしもたる人のこゝちなども、いとむつかし、宮○中略はものをいとわびしとおぼしけるに御氣あがりて、なはなやましうせさせ給、

〔吾妻鏡二十七〕寛喜二年六月十八日、戊刻、修理亮平朝臣時氏逝去、年二十八、去四月自京都下向、不經幾日月、病惱、被致内外祈請、重加致醫療、然以失其驗、去嘉祿三年六月十八日、次男○北條時實卒、隔四箇年、今日又有此事、已兄弟御早世、悲傷之至無取喩、及寅刻、葬于大慈寺傍山麓云云、

〔倭名類聚抄二病〕痛　釋名云、痛伊太無、通也、通在膚脈中也、

〔箋注倭名類聚抄二〕昌平本、下總本無訓字、醫心方同訓、○中略所引文原書同、說文、痛病也、

〔倭訓栞前編三〕いたむ　疼痛をいふ、息をたむるの義成べし、神代紀に傷、又哀傷、又慘然をよみ、靈異記に疼をよみ、新撰字鏡に恢、又疴をよめり、

〔先代舊事本紀三天神本紀〕天神御祖詔授天璽瑞寶十種、謂瀛都鏡一、邊都鏡一、八握劔一、生玉一、死反玉一、足玉一、道反玉一、蛇比禮一、蜂比禮一、品物比禮一是也、天神御祖教詔曰、若有痛處者、令茲十寶、謂一二三四五六七八九十、而布瑠部由良由良止布瑠部、如此爲之者、死人反生矣、是則所謂布瑠之言本矣、

〔拾遺和歌集七物名〕つくみ　大伴黑主

疼

瘼

さく花におもひつくみのあぢきなき身にいたつきのいるもしらずて

〔倭訓栞前編伊三〕いたづき　物にいたづき聞えさせたまふなどいへり、煩勞の義也、痛竭の訓意成べし、よて日本紀に勞竭の文字を用ゐ、又不煩をいたづかずとよめり、

〔古京遺文〕藥師佛造像記

池邊大宮治天下天皇、大御身勞賜時、歲次丙午年、〇中略然當時崩賜造不堪者、小治田大宮治天下大王天皇、及東宮聖王、大命受賜、而歲次丁卯年仕奉、

右藥師佛像在法隆寺金堂、天平廿年法隆寺資財帳載之、記在光焰背、

〔倭名類聚抄三病〕疼　說文云、疼、徒冬反、訓比々良久、動痛也、

〔箋注倭名類聚抄二病〕昌平本、下總本無訓字、按、新撰字鏡同訓、醫心方、疼痺酸並亦同訓、古事記神武天皇御歌、久知比々久、卽是、今云字豆久、契冲曰、疼與響同語、〇中略原書無疼字、按、玄應音義云、疼又作𤺌痋、引說文云、痋動痛也、則知疼俗痋字、今本說文痋字注作動病也、非是、釋名、疼、痺也、氣疼々然煩也、

〔增補下學集上二支體〕疼ヒヽラク

〔倭名類聚抄三病〕瘼臥　日本紀私記云、瘼臥、和名字不江世利、瘼音其、

〔箋注倭名類聚抄二病〕瘼臥見景行四十年紀、按說文、瘼、病也、瘼臥猶言病臥、非病名也、下總本乎作字、那波本同、按、日本紀旁訓、釋日本紀、並作乎、伊呂波字類抄、亦瘼臥在乎部、則作字者、字形近似而誤也、古事記倏忽爲遠延、神武紀、瘁訓乎江奴、仁德紀被蛇毒、傍注私記云、乎呂千二平也左禮天、並可以證也、

〔伊呂波字類抄於病〕瘼臥ヲエフセリ

〔古事記中神武〕故神倭伊波禮毘古命、從其地廻幸、到熊野村之時、大熊髣出入卽失、爾神倭伊波禮毘

古命、倏忽爲遠延、及御軍皆遠延而伏、遠延二字以音、

〔古事記傳十八〕遠延は、書紀に瘁と書り、瘁字は、字書に病也とあり、又景行卷に、度信濃坂者、多得神氣以瘼臥、是をアエフシと訓り、仁德卷に、被逆害、而多死亡、欽明卷に、毒害などあり、又景行卷に、吉備穴濟神、及難波柏濟神、皆害心以放毒氣、令苦路人、と見え、倭建命の伊服岐山神に惑され賜ひしなど、皆同類の事なり、

〔日本書紀神武〕戊午年六月丁巳、至熊野荒坂津、○中略 時神吐毒氣、人物咸瘁、

〔日本書紀景行〕四十年是歲、○中略 於是日本武尊曰、蝦夷因皆咸伏其事、唯信濃國越國頗未從化、○中略 度信濃坂者、多得神氣以瘼臥、

〔倭名類聚抄三〕瘴　釋名云、瘴、障也、其氣在皮中、欲發揚、使人搔發而揚出也、

〔箋注倭名類聚抄三〕那波本脫與瘴同三字、○中略 原書發揚上有痒字、按說文無瘴有痒、云搔痒、禮記內則、疾不敢搔、玄應音義引作痒、不敢搔、知痒瘴古今字、蓋痒字俗變虫从疒作痒、或諸書無作瘴、與說文訓瘍也痒字不同、玉篇、痒瘍痒也、瘴同上、又作痒、見醫心方引小品方、

〔増補下學集上二〕瘴

〔伊呂波字類抄疾病〕恙ツヽガ　恙　懼病　恙蟲同

〔萬葉集六〕振鏡宜湯湯石恐石住吉乃荒人神、船舳爾牛吐賜、付賜將島之埼前、依賜將磯乃埼前、荒浪風爾不令遇、草管見身疾不有急、令變賜根、本國部爾、

〔萬葉集十三〕柿本人麻呂歌集歌曰

葦原水穗國者、神在隨事擧不爲國、雖然辭擧叙吾爲、言幸眞福座跡、恙無福座者、荒磯浪有毛見登、百重波千重浪敷言上爲吾、反歌略

〔倭訓栞前編十六〕つゝが　恙字をよめり、萬葉集には多くつゝみとよめり、又つゝまはずともは

たらけり、集又光仁紀にもつゝむ事なくと見えたり、恙は憂也とも病也ともいへば病憂のつゝましげなるよりいふ詞成べし、萬葉集に草づゝみ身疾あらずといへるは、上古の時草居露宿す、恙といふ虫ありて、よく人の心を食ふといへる説によれる成べし、

〔玉勝間十二〕つゝみなく又つゝがなくといふ言

萬葉に、つゝみなくといふ詞あるを、後世俗には、つゝがなくといへり、此言、から書に無恙といへると、こゝろばへ同じき故に、いにしへより、此字をあてたりと見えて、萬葉十三にも、恙無と書たり、これを今本には、つゝがなくと訓たれど後の言なり、かの集には、此言皆、つゝみなくといへれば、これも然訓べき也、さてから書に無恙といふ言は、憂也病也と注し、又風俗通に、恙噬蟲、能食人心、古者草居、多被此毒、故相問勞曰、無恙、といへるに依て、つゝがといふをも、虫名とこゝろえて、此言を件の説によりて解くは、いみじきひがことなり、漢籍の恙も、憂也病也といへるは、こともなく聞えたるを、虫の名とせる件の説は、いと信がたきを、まして皇國にて、つゝがなくといふは、かのつゝみなくの轉れる言にて、つゝがは、さらに虫の名にはあらず、たとひから書の恙は、まことに虫名にもあれ、それにはかゝはらぬこと也、無恙の字をあてたるは、たゞ相問ていふ心ばへの、よく似たる故のみにこそあれ、萬葉には、つゝむことなくとも、つゝまはずともいへるを以ても、虫の名にあらざるほどを志るべし、同集六に、草管見身疾不有とよめる、草といへるは、かのから書の草居云々の説によれるかと思ふ人もあめれど、然にはあらず、此草字は、莫を誤れるにて、これもつゝみなくなるをや、さてつゝみといふ言の意は、大祓後釋にいへれば、こゝにはもらしつ、

〔時還讀我書上〕越後新潟ノ邊ニ一種ノ病アリ、土人海ニ近キ河畔ニテ草茅ヲ刈トキ、身中忽ニ蟲ニ螫ルヽコトアリ、其蟲至テ細ク毛髮ノ如シ、螫ルヽ時ハ寒熱ヲ發シ、恰モ傷寒ノ如シ、土俗レヲ呼テツヽガト云フ、前年ハ不治ニ就モノ多カリシガ、近來ハ治方ヲ覺エテ死ヲ免ルヽ、者

多シ、其類ハ往剌中ヘ蛇骸ヲ加ヘ用ルコトナリト、菊池道庵ノ話ナリ、軒村世鉄云フ、此沙蝨ノ類ナラン、其發處ヲ刺血シタ愈ト聞タトゾ、又弟子速水草玄云フ、近頃ハ白砂糖ヲ囓タ傳ケ、又内服セシメタ必驗アリト、

〔小右記〕長和五年四月十二日乙酉、又云、攝政相府腫物有惱氣、

〔書言字考節用集五言辭〕癈(ナヘ)不遂、癈疾也、

〔源氏物語四夕顔〕めのと成(大貳)にて侍るもの、この五月のころほひより、おもくわづらひ侍しが、かしらそりいむことうけなどして、そのしるしにやよみがへりたりしを、このごろ又をこりて、よはくなん成にたる、

〔令義解二戸〕凡一目盲、兩耳聾、手无二指、足无三指、手足无大拇指、([illegible])禿瘡无髮、([illegible])久漏、([illegible])下重、([illegible])大癭瘇、([illegible])如此之類、皆爲殘疾、癡瘂、([illegible])侏儒、([illegible])腰背折、([illegible])一支廢、如此之類、皆爲癈疾、([illegible])惡疾、([illegible])癲狂、([illegible])二支廢、兩目盲、如此類、皆爲篤疾、

〔日本書紀十三允恭〕六年(反正)正月、雄朝津間稚子宿禰皇子謝曰、我不天、久離篤疾、不能歩行、且我既欲除病、獨非奏言、而密破身治病、猶勿差、由是先皇責之曰、汝雖患病、縱破身、不孝孰甚於茲矣、其長生之、遂不得繼業、亦我兄二天皇、愚我而輕之、群卿共所知、夫天下者大器也、帝位者鴻業也、且民之父母、斯則聖賢之職、豈下愚之任乎、更選賢王、宜立矣、寡人弗敢當、群臣再拜言、夫帝位不可以久曠、天命不可以謙距、今大王留時逆衆、不正號位、臣等恐百姓望絶也、願大王雖勞、猶即天皇位、雄朝津間稚子宿禰皇子曰、奉宗廟社稷重事也、寡人篤疾、不足以稱、猶辭而不聽、於是群臣皆固請曰、臣伏計之、大王奉皇祖宗

願最宜稱、雖天下万民皆以爲宜、願大王聽之、

〔續修東大寺正倉院文書四〕御野國味蜂間郡春部里太寶貳年戸籍

中政戸漢人意比止戸口廿（中略）

安倍弟古安（年廿七、下重、嫡、疾、）（中略）

上政戸六人部加利戸口卅（中略）

戸主孫石作部咋（年十七、篤、狂、癲疾、）

〔日本書紀三十持統〕四年正月壬辰、大赦天下、（中略）鰥寡孤獨篤癃（アツエヒト）不能自存者、賜稻、復除調役、

〔延喜式四十二左右京〕凡辨官及省臺下諸國符、及癃疾仕丁歸向本鄕等、各受取遞送、

〔段注說文解字七下疒〕癃、罷病也、（病、當作癃、罷者廢置之意、凡廢置不能事事曰罷癃、（中略）凡廢疾皆得謂之罷癃也、）从疒隆聲、

○按ズルニ、古クハ癃病ヲモ癃ト云ヘリ、

重病

〔增補下學集上二文體〕重病（ヂウビヤウ）

〔一話一言十七〕疾病

疾病（ヒナリ）トハヨホドワルキ也、疾革トハ所謂トリツメタルナリ、大病トハ所謂ナシオモリタルニテ、死ヲイフ也、禮記檀弓ニ、成子高寢疾、慶遺請曰、子之病革矣、如至乎大病則如之何、鄭注ニ、大病死也、諱之之辭、

〔源氏物語一桐壺〕いづれの御時にか、女御更衣あまたさぶらひ給けるなかに、いとやむごとなききはにはあらぬが、すぐれてときめき給ふありけり、（中略）いとあつしくなりゆき、もの心ぼそげにさとがちなるを、いよ〳〵あかずあはれなるものにおぼゝして、人のそしりをもえはゞからせたまはず、（下略）

〔日本書紀十四雄略〕二十三年八月丙子、天皇病彌甚、與百寮辭訣、握手歔欷、

長病

〔三代實錄四十一陽成〕元慶六年正月七日庚戌、宣制曰、云々、中略老人年百歲已上賜穀五石、九十已上三石、八十以上一石、孝子順孫、義夫節婦、表其門閭、終身勿事、鰥寡孤獨、篤疾重病、不能自存者、宜量賜物、

〔日本書紀十四雄略〕二十三年八月丙子、臣連伴造、毎日朝參、國司郡司、隨時朝集、何不罄竭心府、誡勅慇懃、義乃君臣、情兼父子、庶藉臣連智力、內外歡心、欲令普天之下永保安樂、不謂遘疾彌留、至於大漸、此乃人生常分、何足言及、

〔日本紀略十四嵯峨〕弘仁十四年四月庚子、帝御前殿、引今上淳和○詔曰、朕本諸公子也、始望不及於○於下恐有脫字太上天皇平城○曲垂寵愛、越登儲貳、遂遜位于朕躬、雖不肖、日愼一日、未幾而身嬰疹疾、彌留不瘳、爲萬機擁滯、今右大臣藤原朝臣園人奉迎神器、朕始有歸閑之志、太上天皇不允所請、

急病

〔本朝世紀〕天慶元年九月十四日戊午、又齋王御禊陪從、參議源是茂朝臣申送云、依煩瘧病、不可奉仕陪從之者、

〔台記〕久安四年正月七日丙寅、此間事畢、左大將實能云、舊例奏女樂、奏不必待三獻、臣有危急疾者、是故可早奏者、

持病

〔增補下學集上文辭〕持病

〔日本書紀三十持統〕九年六月壬辰、賞賜諸臣年八十以上及癃疾、各有差、

〔三代實錄十三淸和〕貞觀八年十二月十一日壬午、右大臣藤原朝臣良相重抗表言、臣不任沈痾、陳表謝益、天感未降、更賜敦實、心影相伐、精爽雲越、

〔三代實錄二十二淸和〕貞觀十四年八月二日庚子、參議正四位下源朝臣生卒○嵯峨皇子、大原全子、先是沈痾累月、落髮爲僧、是日卒云々、

〔三代實錄四十一陽成〕元慶六年正月廿八日辛未、太政大臣抗表曰、云々、伏願職封職田資人雜俸、並收先給之定給物、必除此選之新、病未愈、賜內舍人二人、左右近衞各四人爲隨身、先臣宿疾中發、醫療外

隨、難侍紫垣於直廬、何分霜仗於御巷、今各依初歸付官府、

〔玉海〕治承四年八月七日丁亥、今日湯治之後、持病更發、殆及獲麟、忽請僧(智詮)加持之間、頗落居、佛法効驗也、

〔明月記〕文暦二年正月四日戊戌、實基卿辭納言、尾張國等全非偽巾之詞、年來籠居、去秋出仕所存已顯歟、其上持病相發、常如絶入、非出仕之身、

〔柳營諸舊例的(入)〕同勤引込屆

文化二丑年十二月十一日

御屆

私儀、持病之疝積差發、腹痛水瀉仕候ニ付引込養生仕候、此段御屆申上候、以上、

寄合肝煎　近藤登助

十二月十一日

寄合肝煎　近藤登助

老病

〔源氏物語(五十四手習)〕中やどりをぞまうくべかりけるなどいひて、夜ふけておはしつきぬ、僧都はおやをあつかひ、むすめのあま君はこのしらぬ人(浮舟)をはぐゝみて、みないだきおろしつゝやすむ、おいの病のいつともなきが、くるしと思給べし、とほ道のなごりこそしばしわづらひ給ひけれ、やう〳〵よろしうなり給にければ、僧都はのぼり給ぬ、

虚病

〔增補下學集(上二支體)〕虚病(キヨビヤウ)

〔書言字考節用集(五肢體)〕作病(サクビヤウ又云虚病)

〔日本書紀(十四雄略)〕八年二月、遣身狹村主靑、檜隈民使博德、使於吳國、自天皇即位、至于是歲、新羅國背誕、苞苴不入於今八年、而大懼中國之心、修好於高麗、由是高麗王遣精兵一百人、守新羅、有頃高麗軍士一人取假歸國、時以新羅人爲典馬、(典馬此云于麻柯比)而顧謂之曰、汝國爲吾國所破非久矣、(一本云、汝國果成吾土非久矣、)其

與馬関之闘、患其眼、退而在後、逮逃入閣、殺其所騎、

(日本書紀皇極二十四)三年正月乙亥、以中臣鎌子連拜神祇伯、再三固辭不就、稱疾退居三島、

(台記)久安六年十二月七日己酉、還來、復命、承由、余稱疾不謁、貴長使皇后宮亮顯憲朝臣(季兼)傳云々、

(太平記七)新田義貞賜綸旨事

此中ニ一人智ノ賢ヲ撰候ヘ、令旨(○護良)ヲ申出テ進セ候ハント申テ、殘リ十人ヲバ留置、一人宮ノ御方ヘトテゾ參ケル、今ヤ〳〵ト相待處ニ、一日有テ令旨ヲ捧テ來レリ、開テ是ヲ見ニ、令旨ニハアラデ綸旨ノ文章ニ書レタリ、(○中略)綸旨ノ文章家ノ規矩ニ備フベキ綸言ナレバ、義貞不斜悦テ、其翌日ヨリ虚病シテ、急ギ本國ヘゾ被下ケル、

(源氏物語夕顔四)この五六日こゝにはべれど、ばうざのことを思たまへ、ふつかひはべるほどに、となりのこともえ聞侍らずなど、はしたなげにきこゆれば、にくしとこそおもひたれな、

(日本書紀天武二十九)八年十月是月、勅曰、凡諸僧尼者常住寺內以護三寶、然或及老、或患病、其永臥陜房、久苦老病者、進止不便、淨地亦穢、是以自今以後、各就親族及篤信者、而立一二舍屋于閑處、老者養身、病者服藥、

(古事談三僧行)此御室(○三條院皇子性信親王)世間ニ疾病蜂起之時者、私出御在所、只一人御棚菓子ナドヲ御懐中ニ令取入給テ、大路邊之病者ニ次第給之、其路ヲ通掃テ令過給ケレバ、病者立得減、皆以尋常云云、令還入御所之時ハ、敦王實天皇等多御共ニテ令入給之由、有奉見之人云々、

(太平記五)大塔宮熊野落事

宮(○護良親王)病者ノ伏タル所ヘ御入在テ御加持アリ、千手陀羅尼ヲ二三反高ラカニ被遊テ、御念珠ヲ押揉セ給ケレバ、病者自口走テ、様々ノ事ヲ云ケル、誠ニ明王ノ縛ニ被掛タル體ニテ、足手ヲ縮テ戰々、五體ニ汗ヲ流シテ、物怪則立去ヌレバ、病者忽ニ平愈ス、

〔教令類纂二集九十六〕享保十一丙午年二月二十四日
一倒死、病人、水死、其外異死、迷子等有レ之節、其所より訴出次第、年頃幷衣服等之品認メ、自今芝口町河岸ニ七日之内札ヲ建置候條、心あたり有レ之もの者、右札場江罷越、文言を見候而、親類由緒之者にて、病人或者死骸引取度と存候もの、又者怪敷儀も有レ之、吟味願度存候もの者、札建置候奉行所江可レ訴出候、
札文言
去ル幾日何方ニ、年頃何歳計、衣服者何を著し、
倒死
病人
水死有レ之候、心あたりのものは、誰方江早々可レ申出候、
異死
迷子
月日
二月二十四日

請假

〔本朝世紀〕天慶八年十二月七日己巳、權大輔藤原有聲朝臣申云、假依レ煩レ身病レ不レ可レ參、大輔大江維時朝臣、自昨日依レ治レ病、奉レ三箇日假文、少輔紀朝臣在昌申云、自レ議奏日後、痢病發動、不レ能參入、
〔台記〕久安三年五月十七日己卯、獻治病暇文、(使下家司、藏人所、外記局等也、藏人所者付出納、出納付藏人云々、外記局無人、仍向大外記師安家也云々、)雖レ無レ疾、爲レ最勝講間休息、所レ獻也、美濃、備前、周防、阿波不レ可レ宛レ封國之內也、(具民部式上)件等國、有レ余封、仍請レ改他國、其請文載レ依レ違式請改之由、今日滿二一百万一了、
請假三箇日

右爲治身病所請如件、

久安三年五月十七日　内大臣正二位藤原朝臣頼長

出納人所如此

請暇三箇日

牒、爲治身病所請如件以牒、

久安三年五月十七日　内大臣正二位藤原朝臣頼長牒

出外記如此

〔徳川禁令考十九病氣引込〕文久元辛酉年三月廿八日

病氣引込罷職ノ達

諸向ニテ中立候小普請ニ入候儀、御番方之面々ハ、病而十三ヶ月を限り相願候、十三ヶ月之分、一閏月も病氣保養候ハヾ、罷出相勤候儀罷成候病氣ニ而も、其程ニ定有之候樣ニ而者、無是非願之儀、申出候筋も可有之候間、頭支配方心得ニ而、十三ヶ月之外、五六ヶ月も保養候而、出勤罷成候樣子ニ候ハヾ、見合願差出候樣ニ、向後可被心得候事、

右之通、享保三年被仰出候處、近年右之月數より多く引込罷在候ものも有之、并内實者死候而小普請入相願病死届延引いたし候類有之哉にも粗相聞、如何之事ニ候、享保之度被仰出候者、實ニ病氣ニ而不得止事節之儀ニ有之、且又死去を押隱し、御宛行頂戴罷在候者、御後闇儀ニ而、先年御仕置被仰付候儀も有之、旁向後心得違無之樣可被致候、

右之趣、天保十二丑年相達置候處、兎角心得違之ものも有之哉ニ相聞、以之外之事ニ候、此以後布衣以上以下御役人御番方等、銘々定之月數より多く引込罷在、又者病死届等延引及び候もの有之ニ於てハ、急度御沙汰之品も可有之候條、違失無之樣可被心得候、

給醫藥

保護病者

右之通、向々江可被達候、

・三月

御書付留ヲ按ズルニ、前文ノ趣、慶應二年二月廿八日尙又再達アリ、今之ヲ略ス、

○按ズルニ、官吏請假ノ事ハ、政事部休假篇ニ在リ、

〔令義解八醫疾〕五位以上病患者、並奏聞、遣醫爲療、仍量病給藥、〈謂、疾病之家、申宮内省、事少則省直處分、事重者申太政官、官奏聞給、故公式令云、奏給醫藥、即畿內亦准在京、〉致仕者亦准此、

〔續日本紀十九〕天平勝寶八歳四月壬子、遣醫師禪師官人各一人於左右京四畿內、救療疹疾徒、

○按ズルニ、救療ノ事ハ、政治部賑給篇救恤篇等ニ詳ナリ、

〔令義解十獄〕凡獄囚有疾病者、主守申牒、〈謂、主守者、主當獄囚之物部也、〉判官以下親臨知實、給醫藥救療、病重者、脫去枷杻、仍聽家內一人入禁看侍、其有死者、亦即同檢、若有他故者、〈謂、非法殺死、及令自死之類、〉隨狀推科、

○按ズルニ、病囚取扱ノ事ハ、法律部禁囚篇ニ詳ナリ、

〔日本後紀十三桓武〕延曆二十四年七月壬辰、勅、如聞疫癘之時、民庶相憚、不通水火、存心救療、何有死亡、父子至親、猶忌無近、隣里疎族、更復何言、亡者衆多、事在於此、宜喩所司、務存勸勵、若不遵改、隨即科處、

〔類聚三代格十二〕太政官符

應禁斷京畿百性出棄病人事

右右大臣奏偁、念奮膺分、賢哲遺訓、重生愛命、貴賤無殊、今天下之人各有僕隷、平生之日既役其身、病患之時即出路邊、無人看養、遂致餓死、此之爲弊、不可勝言、伏望仰告京畿、早從停止、庶令路傍無夭枉之鬼、天下多修命之人者、被中納言從三位藤原朝臣縄主宣偁、奉勅、宜早下知令加禁制、如不遵改、猶致違犯者、五位以上注名申送、六位已下不論蔭贖、決杖一百、寮及職國、知而不糺、及條令坊長郡司隣保、相隱不告、並與同罪、自今以後、永加禁斷、仍牓示要路、分明告知、

弘仁四年六月一日○又見類聚國史、

〔類聚三代格〕十七太政官符

應收養在路飢病無由達鄕并不能自存百姓等事

右存恤之事、載在令條、國郡官司、理須遵行、而收養醫療、未聞其事、大納言正三位兼行左近衞大將陸奧出羽按察使藤原朝臣園人宣、奉勅、㖕育之道、理不可然、違法之吏、深合科責、宜更下知勤使醫養、勿令流宕民徒致夭命、其料量用正稅者、其年中所用正稅、大國五百束以下、上國四百束已下、中國二百束以下、下國一百束以下、仰國郡官司殷加訪察、若乖符旨、存活失所、爲他見告、依法科罪、夫專當國郡司名、及所存濟之人數、附朝集使、所用正稅附稅帳使、並作別帳、毎年言上、但不能自存之輩、一依令條行之、不得違法輙用正稅、

弘仁十一年五月四日

〔革雖本類聚三代格十七〕太政官符

應賞活疫病百姓者隨出身叙位階事

右得大宰府解偁、管九國三島、疫病氣方發、或擧家病臥、無人看養、或合門死絶、無葬斂者、被右大臣宣偁、奉勅、如聞、國國之間、疫病發時、則稱病移染、曾不往來、近親之間、猶有斯患、因茲水漿之資、不得適口、滋味之饌、不能從情、百姓夭折、無不由此、言念於此、深以矜歎、夫死生有命、修短定焉、仁壽不謝、德必有報、豈行仁徒、還罹凶咎、督察民之愚、遂致斯惑、於事商量、理不合然、宜仰府官、重加約束、勸令醫療、賑救勞効、其法、養活病者三十人以上、白丁人於內考白人色、並初位、毎十人加一階、初位至八位以上、毎二十人加一階、外考人內考者減年、若養過此法者、錄名言上、量其形迹、授以五位、但養二等以上親者、不在此限者、仍須委專當官、特加採訪、殷養訖、副具錄言上、至于仲秋、總從停止、

弘仁十三年三月二十六日

〔政事要略七十糺彈雜事〕出棄病人及小兒事、〇中略

貞觀九年三月七日、右少史大春日安永仰云、右少辨藤原朝臣千乘傳宣、右大臣宣、京中諸人、捨男兒於道路頭、遂爲犬烏見害斃、是卽職吏之不治、人民之不仁、宜撿非違使每見此事、召當條領并町長等、重加勘當、俾送居施藥院、准其狀必申官者、

〔延喜式二十三民部〕凡諸國往還百姓、在路困飢、病患無由達鄕者、專當國司一人巡看、附隨近村里、以正稅收養、得瘳之日、依法送達、若有死去者、斂埋便處、具顯貫屬姓名、牓示其上、有漏怠者、國郡司等隨事科處、其專當國司者、錄名申官、

〔延喜式四十一彈正〕凡京內百姓、出弃病人者、五位已上取名奏聞、六位以下不論蔭贖決杖一百、其職司知而不糺、及條令、坊長、隣保、相隱不告、並與同罪、

〔延喜式四十二左右京〕凡京中路邊病者孤子、仰九箇條令、其所見所遇、隨便必令取送施藥院及東西悲田院、

〔政事要略七十糺彈雜事〕應收養路頭爲病者事

右左大臣宣、奉勅、如聞頃者京中病者多臥路頭、無人收養、誰救其命、宜仰左右京職官人分預、率坊令等、每條巡撿、取置便所、及隨撿非違使看督等取送、同共收養者、兩職承知依宣行之、其食法、大男大女、日各米一升、鹽一勺、滓醬一合、小男小女、日各米六合、鹽五最、滓醬五勺、但米用以義倉料、鹽滓醬請大膳職、鋪設自掃部寮、衣服古幔請自大藏省、事緣濟民、不得疎略、

左中辨紀朝臣

延長八年二月十三日　左大史錦部宿禰

〔吾妻鏡五十〕文應二年〇弘長元年二月廿九日辛酉、此外嚴制數箇條也、〇中略

一可禁制棄病者孤子死屍於路邊事

〔隨意錄一〕謝肇淛云、雞鵝之種類、生無痘疹、不食鹽醋故也、近聞、其與中國互市、間亦學中國飲食、遂時

一有之、彼人即昇置深谷中、任其生死、絶跡不敢省視矣、我方五島及熊野、亦無疱瘡、偶有疾之者、則昇置山中、倩他郷人、使以養之、兄弟親戚亦不省視云、是非飲食之故也、蓋風土之所致也已、

〔東遊記 上〕蝦夷人、多くは病なし、たま〳〵病者あれば、家にすて置て、外に避く、醫藥なければ、病いよいよ重りて、必死す、よりて病を恐る、事甚しく、疱瘡といふもの昔しはなかりしが、近頃はたまたまにあり、是もすて置て避て、養生を加へず、必死す、疫癘も左の如し、これらはあしき風なるべし、死を恐る、事甚しいといへ共、死するまよけは常にわすれず、

〔塵芥抄 下喪服〕一弔喪問病、到山作所、遣三七日法事者、當日不參入內裏、

〔永正記 上〕一觸穢所勞禁忌事

疫病禁忌七十五日、過明也、是鬼神之所爲也、故甲丙之內禁斷已、弔喪問病者、上古者、三ヶ日忌之、延喜式以後當日之傳云々、

〔遷伊勢二所大神宮寶基本記〕伊勢太神宮神主、大小內人、祝部等、諸祭之日、僧尼、重服、奪情從公之輩、并輕服人、觸同宿任反、當日弔喪問疾等、六色禁忌者、宜科上祓云々、

〔日本書紀 二十三舒明〕息長足日廣額天皇、渟中倉太珠敷天皇孫、彥人大兄皇子之子也、〇中略卽天皇起臨之、詔曰、朕以寡薄、久勞大業、今曆運將終、以病不可諱、故汝本爲朕之心腹、愛寵之情、不可爲比、其國家大基、是非朕世、自本務之、汝雖肝稚、愼以言、乃當時侍之近習者悉知焉、〇中略當是時、思欲諮叔父及群卿等、然未有可導之時、於今非當耳、吾曾將訊叔父之病、向京而居豐浦寺、

〔日本書紀 二十七天智〕八年十月乙卯、天皇幸藤原內大臣家、〇鎌足親問所患、而憂悴極甚、乃詔曰、天道輔仁、何乃虛說、積善餘慶、猶是無徵、若有所須、便可以聞、對曰、臣既不敏、當復何言、但其葬事、宜用輕易、生則無務於軍國、死則何敢重難云云、時賢聞而歎曰、此之一言、竊比於往哲之善言矣、大樹將軍之辭賞、詎可同年而語哉、

〔日本書紀天武二十九〕十一年七月庚子、小錦中膳臣摩漏病、遣草壁皇子尊、高市皇子、而訊病、

〔三代實錄清和十三〕貞觀八年十二月八日己卯、右大臣正二位兼行左近衞大將藤原朝臣良相抗表、請解職言、○中略曰月上天降責、尪病常丞、去春殊劇、還第醫療、經旬涉月、未及能痊、中使頻臨、辭弗獲命、遂乃力疾挽巾、强入禁省、朝謁未幾、病更發動、彌留綿篤、命危如疊露、

〔小右記〕萬壽四年十一月廿四日庚申、無臨時祭試樂、依禪閤○藤原道長重惱給云々、行。幸。日御輿可供惣花輿事、注送左中辨許、中將依給宮素服著吉服、扈從行幸可難、自由、仍參謁關白、取氣色、被命云々、此事難示左右、若有障可申案内、○中略行幸日功德事、左右難申、赦令早被行事、更有何事乎、以早可爲善、抑後日被行万僧供、又被行賑給、如何、不比等大臣病時臨幸、只給度者九十人、被行非常赦令、鎌足大臣病時行幸給大職冠、任内大臣、其外無所見、且東三條院御病、又有行幸、只外師伊周被復本位之宜旨下之、大略此由等也、

〔台記〕久安三年八月三十日辛酉、傳聞、外祖母疾病、入夜向彼家問之、不能詳言、哀而有餘、　九月六日丁卯、入夜、向外祖母尼公家、問疾之病、余大哭、祖母亦哭、涙不落、俗人以之爲死相、未知所出、　頃之歸宅、　六年十二月十八日庚申、昨日奉書申禪閤○藤原忠實曰、成佐疾病、將明日就彼家問疾、弔師之疾、不可必請親、而先日禪閤仰曰、近日非我許者、不可輙往行、仍去十四日、可詣木寺事、亦請之、不許、是以此郎亦請、禪閤大怒不許、因之不行、

〔多聞院日記〕永祿十年七月五日、爲見。舞。宗五郎上了、明日下候由申、春辰腹氣減、珍重々々、宗介瘡減、見舞ニ來了、

〔義演准后日記〕慶長十三年三月九日、雨、大坂へ爲御見舞發足、○秀頼病伏見ヨリ乘船、三十日卯剋ニ著了、

〔備前老人物語〕一蒲生氏郷の病にふし給ひしに、利休と。ぶ。ら。ひ。たりけり、此人茶の湯の師なりしかば、ねどこへむかひ入れて對面あり、利休病のありさまをみて、御煩御養生半と見え候、第一に

は御年もわかく、文武の二道の御大將にて、日本におゐて、一人二人の御大名なれば、かれにつけこれにつけ、大切なる事ともに候、慮外ながら御保養おろかなるやふにぞんず、御油斷あるまじきに候といひしかば、氏郷、

かぎりあればふかねど花はちる物をむみじかき春の山風、とあり、利休涙をながし、殊勝千萬の御事かなといひて、まばしは物をもいはすして、さやうには候へどもといひながら、涙をおさへて、

ふるとみばつもらぬさきにはらへかし雪にはおれぬ青柳の枝、といひて、後物語一つ二つしてたち歸りけり、

〔大猷院殿御實紀三十一〕寛永十三年五月二十一日、仙臺中納言政宗卿のもとによぎらせらる、これ黄門當日大病によてなり、政宗卿も實にありがたく、かたじけなきことゝかしこみ、身のくるしさをもわすれ肩衣袴を著し右の手を、土井大炊頭利勝、左の手を、柳生但馬守宗矩にひかれ、酒井讃岐守忠勝は、後ろより腰を抱きて、御前にまいりければ、側近く立よらせ給ひて、中納言よ、病氣聞しよりは、一段よくて滿足せり、只今は、養生第一の時分ぞ、努々油斷すべからずと仰あり、さて家司等めせ、小十はなきかとの御諚により、片倉小十郎、石母田大膳、中島監物、佐々若狹はるかの次よりすゝみ出て、拜し奉れば、黄門の病、今こそ肝要なれ、汝等看侍怠るべからずとの玉音をたまはり、各拜謝して退く、その後は、政宗卿にむかはせ給ひ、しばし御密語あり、政宗卿もくるしげなる息の下にて、何ごとをか聞え上しかど、外に聞傳ふるものなし、さて返々自愛怠るまじ、頓て快復すべければ、その時は、城にまねき、日出度一ふくまいらせなん、何にもせよ用あらば、遠慮なく承はるべしと仰ありて、其座をたゝせ給ひ、はるか縁をへだて給ひて、越前々々とめしければ、越前守忠宗御前にかしこまる時に、中納言の病體聞しよりも、見て肝を消したり、中納言には

よき樣に言て力を添けれど、實はかゝる病體にて、とても本復の頼みあるべからず、汝が心中察し入たり、去かし中納言卒せられたりとも、家光かくてあれば、こゝろ安かるべしと宣せたまひて、還御なれば、忠宗感涙を流して拜送し、政宗は合掌して靡さへたてず、ふしおがみつるとぞ、

〔嚴有院殿御實紀附錄上〕松平式部大輔忠次が病あつきよしきかせたまひ、醫官奈須玄竹恒正をつかはされ、療養せしめられ、日ごとに玄竹めして、その病體を問せたまふに、忠次いさゝか粥などすゝるよし聞せらるれば、公にも御心ちよげに見えさせたまひ、ひたぶるに箸も下さずなど申す時は、殊の外御けしきよからぬ樣に見奉れば、忠次もこのよし承り、かしこさの餘り、强て飮膳をすゝめしとぞ、忠次閥閲の名門なるのみならず、公のいまだ儲副におはしませし時より、附そひ奉りしかば、諸老臣の中にも、とりわき親しみ思しめされし故、かく御憂念ありしものなるべし、史館日錄

〔文昭院殿御實紀一〕寶永六年二月四日、西城に高家、鴈間詰、奏者番出て伺ふ、けふ本城の奧に渡り給ひ、淨光院殿○家宣母御。病。をとはせ給ふ、

〔柳營秘鑑二〕病氣御尋幷御悔之上使奉書御香奠之次第

一御三家幷國持衆病氣大切之節、爲。御尋。上使被遣之、御三家へハ老中、國持へハ御奏者番被相越、老中病氣之節ハ、御小姓衆被遣之、何も品ニ〆賜物等有之、但國持之面々在國之時病氣大切之節御尋之奉書、宿次を以被下之、國持之外も、御三家之庶流抔も品ニ〆被下之事も有之、

〔文昭院殿御實紀七〕寶永七年閏八月二日、尾張黃門の病をとはせたまひ、御側水野肥前守忠位もて餌をおくらせたまふ、

〔嘉永明治年間錄五〕安政三年七月廿二日、下田奉行、物ヲ贈テ亞人コモトールノ病ヲ問フ、

此日御小人目付堀井鐵藏一人罷越、此方昨夕歸リ後、コモトールヘ不快の儀、奉行へ申聞候處、奉行

においても深く心配被致様子、訊問として今朝使者被差越候、定て順快には有之べく候へども、様子如何に候哉、亞人、態々御尋被下難有存候、少々快候へども、未だ全快にも無之候、此方、左候ハバ今日上陸相成間敷哉、折角療養差加、早々快復被致候様存候、藥用其外手當十分にも可有之候得ども、自然醫師等差支候儀も候ハヽ、可被申聞候、醫師なり共差遣し可申候、亞人、御懇篤の思召難有事に候、醫師ハ勿論醫師等、夫々船中に有之候間、先づ御斷申上候、此方、病態の訊問の趣意に、乍併少有合の菓物一箱持參候間、受納可致候、亞人、段々御配慮感佩仕候、宜く申上候樣、提督申聞候間、可然御挨拶可被下候、此方、奉行にも、此程より不快に候得ども、要用之儀有之、態々渡來に付可致面會旨、昨日申入候得ども、昨夜より別て病體不出來に候間、今日の面會相斷得と療養を加へ、從附にも夫々手當を快の上、猶折合能日面會可致候、〈以下略〉

〔嘉永明治年間錄 九〕萬延元年三月四日、幕府使ヲ以テ井伊掃部頭ノ病ヲ問フ、

井伊掃部頭へ人參十五匁　右ハ痛所爲御尋、上使を以て被遣之、

〔今昔物語 二十四〕大江匡衡妻赤染讀和歌語第五十一

今昔、大江匡衡ガ妻ハ、赤染ノ時望ト云ケル人ノ娘也、其ノ腹ニ擧周ヲバ產マセタル也、其ノ擧周勢長シテ文章ノ道ニ止事无カリケレバ、公ニ仕リテ遂ニ和泉守ニ成ニケリ、其國ニ下ケルニ、母ノ赤染ヲモ具シテ行タリケルニ、擧周不思懸身ニ病ヲ受テ、日來煩ケルニ、重ク成ニケレバ、母ノ赤染歎キ悲テ思ヒ遣ル方无カリケレバ、住吉明神ニ御幣ヲ令奉テ擧周ガ病ヲ祈ケルニ、其ノ御幣ノ串ニ書付テ奉タリケル、

カハラムトヲモフ命ハヲシカラデサテモワカレンホドゾカナシキ

ト、其ノ夜遂ニ愈ニケリ、

〔台記〕康治三年五月九日己未、召阿闍梨隆賢、爲少納言通憲疾、令修千手供、〈於二本房一修レ之〉是且爲、馬藥師、

親本復

且爲當世才士、余深傷之故也、但不可令人知之、不可告通憲之由、仰含闍梨了、余又滿千手陀羅尼二十一反、通憲自熊野路受此病、此闍梨年來熊野入功、仍殊所仰也、陰陽師安部泰親來、曰通憲疾病、余問曰、筮吉否、對曰、遇兌䷹之坤䷁、余占曰、不死、病必愈矣、非唯病之愈而已、又逢君之恩、而勿憂已、今所動四爻、仍以兌坤兩卦大意占之、就中逢君之恩、偏據坤卦之意、　十五日乙丑、通憲病愈、(昨日)千手供結願、七日滿之止、通憲愈之故也、召隆賢示感悦之由、

〔時慶卿記〕慶長十年五月十一日、時直ハ親王(仁○政)御方へ被召テ參、今度御煩中、御伽衆御振廻在之而、且予一枚ヅヽ給由也、女御殿ノ御里ニテノ儀也、予ハ後ニ女御殿見廻申候、龍山モ御出京ニテ、懸御目、藤咲出御詠アリ、予ニモ可申由候間申入、龍山、軒近き花橘の香をそへて五月にかゝる庭の藤なみ、トアリシニ、夏かけて軒ばの松に咲そふはむべなりけりな北の藤なみ、ト申候、

〔義演准后日記〕慶長十三年三月廿六日、一昨日大坂へ筭進上、彌秀頼公御本服云々、珍重々々、使侍從、　四月十日、昨日秀頼公ヨリ小袖二重拜領、禁裏幷諸家諸門、今度御不例ニ大坂へ見參、其御返禮也、

〔御湯殿の上の日記〕慶長十三年四月八日、ひでより、こんどのわづらひ、みかぐらなど色々御きも入ゆへ、ほんぶくにてかたじけなきとて、御禮にいちのかみのぼせらるゝ、ひでより大たか十でう、ゑろかね百まいしん上、御ふくろより、ちやうし百きん、ぢん百兩しん上、いちのかみ、もろはく三か、はくてう一折、みつかん一折しん上、女院の御所へも、女御の御かたへも、ひでより御ふくろより參らる、女院の御所へ御すそわけ、ちやうし十きん、ぢん、大たかまいらせらるゝ、八でう殿をはじめ、御所々々へも、大たか、ちやうしまいらせらるゝ、

〔憲敎類典〕(一ノ十八御不例)延享四丁卯年二月晦日

加賀守殿御渡

一大御所樣御床縁に付、爲御祝儀、松平加賀守罷詰、夏之間詰、明朔日御禮過、居殘り御祝儀申上、夫ゟ西丸江出仕、大御所樣、大納言樣江御祝儀可申上候、
一溜間詰嫡子ハ、不及其儀候、
一右之内在邑病氣幼少之面々ハ、使者等不及差越候、
一御三家紀伊宰相殿、尾張中將殿にも被居殘御祝儀被申上候事、
右之通、大目付江申渡候間、爲心得相達候、
　二月

〔撰要類集例的〕一御年始入太刀而獻上候之部
一文化五戊辰年十二月
　年始御太刀獻上伺
私儀病氣罷在、御目見未仕候得共、來年始御太刀目錄以使者獻上仕度、大納言樣江も同樣獻上仕度奉存候、家督後初而之儀ニ付、此段奉伺候、以上、
　十二月　寄合　水上縫部
　　　　　寄合　水上縫部

〔官中秘策二十三〕病後御禮之事
一快氣之節、御年寄江御案内申、自身罷越歷御目、御内意伺之、御用番江罷越歷御目、御禮之儀奉願候、或者心易御旗本衆ヲ以、年寄江御内意伺之、任御差圖ニ、嫡子ハ病後御禮之並承合、其通申上、其後御用番江申上ル、明幾日何時登城、病氣後之御禮可申上旨、御連名之御切紙來ル、御請使者を以申上ル、當日刻限より已前登城、月代ヲ剃、常服半袴、獻上箱肴先而留守居持參、御支配より上ル、目錄無之、御禮相濟退出、御老中初如例爲御禮參上、

頭病 頭風

〔德川禁令考疾病忌服十九〕文化五戊辰年六月
病後出勤之節御禮有無ノ儀ニ付達
一病氣百日内ニ而、其後忌中ニ相成、頰日數とも百日ニ及び候共、忌明出勤致し候ハヾ、御禮申上ニ不及候事、
一忌中前後共、病氣ニ而百日ニ及び候者、御禮可申上事、
一忌中ニ相成、忌明出勤無之病氣候ハヾ、忌明より之頰日數を以、御禮可申上事、
右之趣、爲心得相達置候事、
其二
病後御禮之儀、向後者頰百日内ニ而出勤致し候ハヾ、御目通者無之候共、御禮ニ不及候、頰百日ニ及候ハヾ、御禮可申上事、
右之通、寄々可被達置候事、
六月

〔倭名類聚抄病三〕頭風　魏志云、大祖苦頭風、
〔箋注倭名類聚抄病二〕三國志六十五卷、晉陳壽撰、宋裴松之注、原書王粲傳注、引典略云、大祖先苦頭風、此所引蓋是、按、病源候論頭面風候引養生方云、飽食仰臥、久成氣病頭風、又云、飽食沐髮作頭風、注文十三字、舊及山田本、昌平本、曲直瀨本、廣本皆無、獨下總本有之、今附存、按、類聚名義抄、伊呂波字類抄、亦有是二訓、
〔撮壤集疾病下〕頭風フウ
〔增補下學集支體上二〕頭フ風ウ
〔覆載萬安方四〕首風頭風也

頭痛

眩暈

論曰、內經云、新沐中風則爲首風、首風之狀、頭面多汗、惡風、當先風一日則病甚、頭痛不可以出內、至其風日則病少愈、夫諸陽之脈皆會於頭、若居處安靜、則邪無自而入、新沐之人、皮腠旣疎、腠發濡漬、不愼於風、風邪得乘之、故害於首而爲病、其證頭面多汗、惡風頭痛不可以出內者、以邪氣之害也、當先風一日則病甚、至其風日則少愈者、陽之氣以天地之疾風名之、風行陽化、頭者諸陽之會、與之相應也、

(五體身分集上)頭病分

首風治方云、頭風トハ、頭痛目クルメキ、面フルイ、風吹天クモル時ハ、額頭鼻痛トミヘタリ、

(續添要集病下)頭痛

(外科秘錄八)頭痛

頭痛、左カ右カ一方ニ限リテ痛ムヲ偏頭痛ト爲シ、百會天庭及ビ鼻梁骨ノ痛ムヲ正頭痛ト云フ、甚ク治シ難キモノナリ、多クハ痼疾ニナリ、氣候ノ寒暄ニ移リ、或ハ風雨ノ催ス前ニ發スルモノナリ、發スルコト潮ノ如ク、時ヲ期テ痛ミ、時ヲ期テ止ム、多ハ平旦ニ發シ、午後ニ至レバ止ムモノナリ、

(大猷院殿御實紀附錄一)廿に一二あまらせ給ふ頃眩暈をやませられ、名ある醫師ども日夜伺公して、御療事りけるに、少しきはやがせ給ひ、御食進ませられしかば、老臣等みな悦あへり、そのとき岡本玄冶、藥品をめして、食の進むは如何にと御尋なり、玄冶、命は食に在と申せば、何の病にも食すゝみ候へば、自然と癒るものにて、君の御病も日をへて御平快有べしと申す、公の仰に、そは汝が心得違なり、おほよそ人食足らざれば、形狀おとろへ、飽過れば脾胃をそこなふゆへに、足らず過ず程よく用ゆれば、一身を養ふゆへ、命は食に在とはいふなり、しかるをたゞおほくのみくらふをもてよしとおもふは、いとひが事なりとのたまひければ、玄冶感服して、只今の台命により、はじめて古語の深長なる理をわきまへ侍りぬとて、御前を退きしとなり、(名將名言記)

〔柳營諸舊例的 三〕文化三寅年三月廿五日

月代願　屋代阿波守

私儀、持病之積氣ニ而、塞强、相勝不ㇾ申候ニ付、中川專庵療治請申候處、此節逆上、眩暈强御座候間、月代仕候て可ㇾ然旨、專庵申聞候、依ㇾ之爲養生月代仕度奉ㇾ願候、以上、

三月廿五日　寄合　屋代阿波守

御附札　願之通、月代可ㇾ被ㇾ致候、

〔柳營諸舊例的 二〕文化三丙寅年九月十三日

隱居家督願　寄合　藤堂駒五郎

一隱居家督奉ㇾ願候覺〇中略

私儀、年來持病之疝積ニ而、難儀仕候處、近來度々差發、其上差塞逆上仕、眩暈强、別而相勝不ㇾ申、此上全快仕、出仕可ㇾ仕體無御座候、依ㇾ之私儀隱居被ㇾ仰付、養子惣領主馬江家督無相違被ㇾ下置候樣奉ㇾ願候、以上、

文化三寅年九月十三日　寄合　藤堂駒五郎印判

松平能登守殿〇以下人名略

〔柳營諸舊例的 三〕文化二丑年二月三日

月代願　寄合　長田三右衛門

私儀中症今以相勝不ㇾ申候ニ付、御番醫師成田宗筑藥服用仕罷在候處、此節逆上强御座候ニ付、月代仕候て可ㇾ然旨、宗筑申聞候間、依ㇾ之爲養生、月代仕度奉ㇾ願候、以上、

二月三日　寄合　長田三右衛門

御附札　願之通、月代可ㇾ被ㇾ致候、

失意

〔倭名類聚抄 一〕失意　日本紀私記云、失意、和名古々呂末止比

〔日本書紀 景行〕四十年、是歲、日本武尊、更還於尾張、○中略於是聞近江膽吹山有荒神、卽解劍置於宮簀媛家、而徒行之、○中略時山神之興雲零氷、○中略然凌霧強行、方僅得出、猶失意如醉、

〔三代實錄 五十〕仁和三年七月卅日辛丑、申時地大震動、○中略諸司倉屋及東西京廬舍、往々顚覆、壓殺者衆、或有失神頓死者、亥時亦震三度、五畿內七道諸國同日大震、官舍多損、海潮漲陸、溺死者不可勝計、

眼病

〔下學集 上 支體〕眩暈　目眩並同

〔源氏物語 十三 明石〕御めのなやみさへ、この比おもくならせ給て、ものごゝろぼそくおぼされければ、七月廿よ日のほどに、又かさねて京へかへり給ふべき宣旨くだる、

〔醫心方 五〕治目不明方第十三
病源論云、夫目者五藏六府陰陽精氣皆上注於目、若爲風邪所侵、則令目暗不明也、養生方云、恣欲傷魂、魂通於目、損肝則目暗、

〔大鏡 一 三條院〕つぎのみかど三條院のみかどと申き、○中略院にならせ給ひて、御目を御らんせざりしこそいといみじかりしか、ことに人の見たてまつるには、いさゝかかはらせ給ふ事おはしまさゞりければ、そらごとのやうにぞおはしましける、御まなこなどもいときよらにおはしますばかり、いかなるをりにか、ときどきは御らんずる時もありけり、みすのあみをの見ゆるなどもおほせられて、一品宮禎子內親王ののぼらせ給へりけるに、辨のめのとの御ともに候が、さしぐしを左にさゝれたりければ、あこよ、などさしはあしくさしたるぞとこそおほせられけれ、この宮を、ことのほかにかなしうしたてまつらせ給ひて、御ぐしのいとおかしげにおはしますを、さぐり申させ給ひては、かくうつくしうおはするみぐしをえ見奉らぬこそ心うけれ、くちおしけれと

て、はろ〳〵となかせ給ひけるこそあはれに侍れ、わたらせ給ふたびごとには、さるべき物を、かならず奉らせ給ふ、〇中略この御めのためにも、よろづにつくろひおはしましけれど、そのしるしある事もなきいといみじき事にて、もとより御風をもくおはしますに、くすしどもの、大小寒の水を御ぐしにいさせ給へと申ければ、こほりふたがりたる水をおほくかけさせ給ひけるに、いといみじくふるひわなゝかせ給ひて、御いろもたがひおはし給ひたりけるなん、いとあはれにかなしく、人々見まいらせ給けるとぞうけたまはりし、御やまひにより金液丹といふ薬をめしたりけるを、その薬くひたる人は、かく目をなんやむなど人は申しかど、まことには極算供奉の御もの、けにあらはれて申けるは、御くびにのりゐて、左右のはねを打おほひ申たるに、うちはぶきうごかすおりに、すこし御らんずるなりとこそいひ侍りけれ、

〔大鏡六内大臣道隆〕御目〇隆家のそこなはれ給ひにしこそ、いと〳〵あたらしかりしか、よろづにつくろはせ給ひしかども、やませ給ひて、御まじらひたえ給へるころ、大貳の闕いできて、人々のぞみのゝしりしに、唐人の目つくろふがあるなるに、見せんとおぼして、こゝろみにならばやと申給ひければ、三條院の御時にて、又いとをしくもやおぼしめしけん、ふたことゝなくならせ給ひてしぞかし、

〔榮花物語十二玉村菊〕この隆家の中なごん、月ごろめをいみじうわづらひ給て、よろづ治しつくさせ給へど、なをいとみぐるしうて、いまはことに御まじらひなどもし給はず、

〔台記〕仁平三年九月廿一日丁未、上卿左衛門督重通、當宮上也、又曰、上〇近衛目疾、近日殊增云々、　廿三日己酉、入夜參鳥羽宿所、禪閤遊御依下痢不能參院、禪閤仰曰、御惱無增減、昨日參入、法皇語曰、天子偶疾歟、去比關白申曰、上疾病將失明、志在遜讓、將讓雅仁親王之息童、件童時出家、爲仁和寺法親王覺法之弟子、朕不許之、關白奏請再三、朕答曰、既爲重事、不能獨決、將與入道議定焉、其後關白不奏此事、美福門院入內時、上稱疾在暗

宣謂之、仍女院不見、御使云々、院所疑者、關白欲以己力立幼主、擅政以專威權、是以勸進天子、以遜讓、恐敢不許、今上稱疾歟、關白結構如此、賊子卽世天下、府亂、嗚呼哀哉、〈已上二卷〉按此事關白狂歟、被重卽信者又誰仁親王、親王、如專政登令、關白執權乎、關白所案至巖々々〈已上二卷〉

〔今昔物語〕念佛者の中に、ひちゆいふけつと云僧有けり、或所に湯ぶろと云物をして、人々入けるに、此僧目をやむよしいひければ、目をひきずて入はくるしかるまじきよしを、人々いひければ、さらばとて目をゆひて、湯ぶろのありさまもしらぬもの、目は見えざりければ、風呂の前にわき戸のうちのありけるに、ふろと心えて、はだかにてか、へたる所もうちとけてゐにけり、

〔重寳記上〕僧に眼病ある事まれなり、禪宗などはわけてなきやう也、魚鳥の肉厚味の物を多く喰ざるがゆゑと見へたり、不如法の僧、一向宗の僧にはそこなふ者往々これあり、又力つよき者、己が分量に過て力業を事とし、大石などの重きを擧るもの、或は過分の重荷をつねに持ものは、盲となるもの多し、乘馬には盲馬になる事たへてなし、小荷駄馬は重荷を附る故歟、盲馬多し、是等にて推量るべし、

〔倭名類聚抄三形體〕目翳　病源論云、目翳〈於計反、和名比〉目膚眼精之上有物、如蠅翅是也、

〔箋注倭名類聚抄三形體〕醫心方同訓、按今俗亦有字流比、曾古比之稱、比隔物之名、氷調比、瑳調比古、亦與此同、新撰字鏡、眚目生翳也、万介、醫心方膚亦訓末計、〈中略〉原書目膚翳候、作膚翳者明眼睛上有物如蠅翅者、卽是醫心方引睛作精、卽是作是也、與此同、按說文、翳訓華蓋、轉爲凡蔽之稱、山田本精下有之字、那波本同、

〔醫心方五〕治目膚翳方第十六

病源論云、陰陽之氣、皆注於目、若風邪痰氣乘於府藏、府藏之氣虛實不調、故氣衝於目、久不散、變生膚翳、膚翳者、明眼精上有物、如蠅翅者是也、眼論云、若因時病後眼痛生白翳、此爲實翳也、若因病後生赤突、

者、此爲廣鄣也、

瞸

〔倭名類聚抄 三病〕瞸 文選風賦云、得目爲瞸、亡結反、師説、多々頁女、

〔箋注倭名類聚抄 二病〕按釋名、目皆傷赤曰瞸、瞸末也、創在目兩末也、是瞸可訓多々良女、説文蔑兜、目眵也、又云、眵、目傷皆也、一曰蔑兜也、又云䁾、目蔽垢也、讀若兜、是蔑兜卽蔑䁾、依之蔑兜可訓米久乏、不得訓多々良女、眵乃有米久曽多々良女兩義、不與釋名所云同、病源候論、有目赤爛皆候、千金方有治風眼爛皆方、皆可訓多々良女、按醫心方訓多々禮女、今本文選同、新撰字鏡、眵訓太々禮目、謂目爛傷也、

〔倭訓栞 中編十三〕たゝらめ　和名抄に瞸をよめり、今いふたゞれめのことなり、

雀目

〔倭名類聚抄 三病〕雀盲　病源論云、人至暮不見物、世謂之雀盲、俗云、度利女、謂如鳥雀瞑則無所見也、

〔箋注倭名類聚抄 二病〕原書雀目候、暮作瞑則二字、醫心方引作暮則、昌平本雀盲作雀目、標目同、下總本標目作雀盲、正文作雀目、雀目與原書合、然本草雀條、千金方及醫心方所引葛氏方新錄方耆婆方鍼驗方、皆有雀盲、原書謂如作言其如三字、醫心方引作言如、原書則無作便無、

〔伊呂波字類抄 止病疾〕雀盲 トリメ　雀目 同

〔醫心方 五〕治雀盲方第十五

病源論云、人有晝而精明、至暮則不見物、世謂之爲雀目、言如鳥雀无所見也、千金方治雀目術、至黃昏時、看雀宿處打驚之、雀起飛、乃呪曰、柴公我還、汝盲汝還、我明、如此三日、瞑三過爲之明眼也、葛氏方治雀盲方、以生雀頭血傅目、可比夕作之、

〔病名彙解 六〕雀目 シヤクモク　俗ニ云トリ目ナリ、酉刻ノ前ヨリ見ザルナリ、病源論ニ云、人晝ハ晴明ニシテ、瞑ニ至テ便チ物ヲ見ザル、コレヲ雀目ト云、言心ハ、鳥雀ノ瞑ニシテ、便見トコロナキガ如シ、

〔松屋筆記 六十一〕雪燒幷鷄目の病

高麗陣日記中卷 丁吉州より飛脚到來の節に、人夫雪燒ニアヒタ、手足不叶、或ハ鳥目ニナリ、役ニタヽズと見ゆ、今俗に雪燒といふも有、

〔倭名類聚抄三〕眩　釋名云、眩〈音縣、和名女久流女久比〉縣也、目所視動亂如縣物、搖々然不定也、

〔箋注倭名類聚抄二〕爾直湖本、下總本作昏眩、並與廣韻合、按醫心方訓女久流女久流、空物語、新撰字鏡、眩訓目女久留女久、〈中略〉今所引釋疾病文、今本作懸々、太平御覽引與此同、按說文、有縣無懸、知縣懸古今字、又按說文、眩目無常主也、

〔異疾草紙〕ちかごろ男ありけり、風病によりて、ひ。と。み。つねにゆ。る。ぎ。けり、嚴寒にはだかにてゐたる人のふるひわなゝくやうになむありける、

〔伊呂波字類抄疾病〕珠管〈目病也〉シノタマ、

〔醫心方五〕治目珠管方第十九

病源論云、目珠管者、風熱痰飲積於藏府、使肝藏血氣蘊積、衝發於眼、津液變生結聚、狀如珠管也、

〔醫名彙解六〕珠管〈シユクワン〉　又目珠管ト云フ、病源ニ云、目是五臟ノ精華、宗脈ノ聚ル所ナリ、モシ風熱痰飲臟腑ヲ漬セバ、肝ノ臟ヲシテ血氣蘊積シ、衝テ眼ニ發シ、津液變ジテ結聚ヲナシ、狀、珠管ノ如ナラシム、按ルニ、目中ヘ珠ノ管ノ如ナル肬肉ノ生ズル義ナルベシ、

〔諸病源候論二十八〕目珠管候

目是五臟六腑之精華、宗脈之所聚、肝之外候也、肝藏血、若府藏氣血調和、則目精彩明淨、若風熱痰飲漬於臟腑、使肝藏血氣蘊積、衝發於眼、津液變生結聚、狀如珠管、

〔倭名類聚抄三〕聹耳　病源論云、聹耳〈上音寧、和名美々太利、〉風熱耳生膿汁也、

〔箋注倭名類聚抄二〕醫心方同訓、按美々太利、耳垂之義、醫心方又亭耳、訓美々久曽、與聤耳混誤、〈中略〉諸病源候論五十卷、隋巢元方等撰、新唐書亦云、巢氏諸病源候論、現在書目錄載云、病源論、與此

同、原書聤耳候、作熱乘虛而入於其經、邪隨血氣至耳、熱氣聚則生膿汁、故謂之聤耳、醫心方引、作風熱乘虛入經、此所引字句少異、按說文、無聤字、古蓋用停字、風熱停滯耳中生膿也、

〔撮壌集 下病疾〕聤耳 町聹

〔醫心方 五〕治聤耳方第四

病源論云、耳者宗脈之所聚、腎氣之所通、足少陰腎之經也、勞傷血氣風熱、乘虛入經、其血氣至耳、熱氣聚則生膿汁、謂之聤耳也、葛氏方聤耳中痛膿血出方、釜月下灰吹滿耳令深入无苦、卽自丸出、

〔瘍科秘錄 八〕聤耳

聤耳ハ、俗ニ云フミヽダレノコトナリ、幼少ノ者ニ多ク、老大ノ者ニ少シ、病因ハ耳中ノ潰瘍ナリ、痘瘡麻疹等ヲ患ヘテ後、餘毒耳中ヘ入リテ聤耳ニナル者アリ、初發ハ耳中ノ痛ミ甚シク、惡發熱、頭痛等アリテ飮食モ進マズ、或ハ耳ノ前後マデモ微シク腫レ、頤ノ下ニ累々トシテ核ヲ結ビ、四五日ヲ經レバ、耳中ヨリ膿自ラ出デヽ痛ミ減ズルナリ、甚臭氣アリ、久フシテ臭水トナリ、常ニ淋漓トシテ止マズ、遂ニ聾トナル者多シ、或ハ耳中卒ニ疼痛スルコト刺ガ如ク、其人痛ミニ堪ガタク反覆顚倒シ、然ドモ膿水一滴モ出デズ、一兩日ニシテ自ラ愈ルモノアリ、俗ニカラミヽト云フ、此症ハ但腫レタルノミニテ膿ニナラズ、消散シタルナルベシ、聤耳ハ小患ナレドモ至テ治シ難キモノナリ、一旦治スルモ再發シテ長ク愈ザルモノ多シ、聤耳ニハ限ラズ、九竅ノ瘡瘍ハ、總テ治シ難キモノナリ、

〔醫心方 五〕治耳鳴方第二

病源論云、耳者宗脈之所聚、宗脈虛則風耶乘虛、隨脈入耳、與氣相擊、故爲耳鳴、千金方治、耳鳴如流水聲、不治久成聾、方生烏頭蒸、(附子一名也)削如棗核大、塞耳日一夜一易、不過三日愈、亦治癢及風聾、

〔塵塚物語 五〕赤松律師兵書之事

一耳鳴に鳴る事あり、子寅辰巳午申の時ならば吉事なり、丑卯未酉戌亥の時はあし、

〔增補下學集上二支體〕聾耳ミヽシヒ聾耳

〔倭名類聚抄三形體〕齆鼻　釋名云、鼻塞曰齆、〈音一送反、和名波奈比世、〉言久不通、遂至窒塞也、

〔箋注倭名類聚抄二形體〕山田本注首有音字、那波本同、新撰字鏡齆訓波奈志戸、醫心方齆訓文奈布佐加利、〇中略原書齆作齆、太平御覽引與此同、按玉篇齆烏貢切、鼻病也、廣韻鼻塞曰齆、玉篇鼽渠牛切、月令人多鼽嚏、廣韻同、二字其音異、然說文無齆有鼽云、病寒鼻窒也、知齆卽俗鼽字、有二音者、後世轉讀也、原書溪上有久也二字、

〔增補下學集上二支體〕齆鼻

〔伊呂波字類抄波疾病〕齆ハナフタグ

〔醫心方五〕治鼻塞涕出方第卅一
病源論云、夫津液涕唾得熱則乾燥、得冷則流溢、不能自收、肺氣通於鼻、其藏有冷、冷隨氣乘於鼻、故津液涕不能自收之、

〔醫心方二十五〕治小兒鼻塞方第五十八
病源論云、小兒風冷氣入於腦、停滯鼻間、則氣不宣和、結聚不通、故鼻塞也、

〔今昔物語二十八〕池尾禪珍内供鼻語第二十
今昔、池ノ尾ト云フ所ニ、禪珍内供ト云フ僧住ケリ、〇中略然テ此ノ内供ハ鼻ノ長カリケル五六寸許也ケレバ、頷ヨリモ下テナム見エケル、色ハ赤ク紫色ニシテ、大柑子ノ皮ノ樣ニシテツブ立テゾ脹タリケル、其レガ極ク痒カリケル事无限シ、然レバ提ニ湯ヲ熱ク涌シテ、折敷ヲ其ノ鼻通ル許ニ窟テ、火ノ氣ニ面ノ熱ク炮ラルレバ、其ノ折敷ノ穴ニ鼻ヲ指シ通シテ、其ノ提ニ指入レテ茹、吉ク茹テ引出タレバ、色ハ紫色ニ成タルヲ、喎樣ニ臥シテ鼻ノ下ニ物ヲカヒテ、人ヲ以テ蹈スレバ、

黒クツプ立タル穴毎ニ煙ノ樣ナル物出ヅ、其レヲ責テ踏メバ白キ小虫ノ穴毎ニ指出タルヲ、鑷子ヲ以テ拔ケバ、四分許ノ白キ虫ヲ穴毎ヨリゾ拔出ケル、其ノ跡ハ穴ニテ開テナム見エケル、其レヲ亦同ジ湯ニ指入レテサラメキ、湯ニ初ノ如ク茹レバ、鼻糸小サク萎ミ暖テ例ノ人ノ小キ鼻ニ成ヌ、亦二三日ニ成ヌレバ、痒クテ數延テ本ノ如クニ腫テ大キニ成ヌ、如此クニシツヽ腫タル日員ハ多クゾ有ケル、然レバ、物食ヒ粥ナド食フ時ニハ、弟子ノ法師ヲ以テ平ナル板ノ一尺許ナルガ、廣一寸許ナルヲ鼻ノ下ニ指入レテ向ヒ居テ、上樣ニ指上サセテ物食畢マデ居テ、食ヒ畢ツレバ打下シテ去ヌ、其レニ異人ヲ以テ持上サスル時ニハ、惡ク指上ケレバ六借クテ物モ不食成ヌ、然レバ此ノ法師ヲナム定メテ持上サセケル、其レニ其ノ法師心地惡クシテ不出來時ニ、内供朝粥食ケルニ、鼻持上ル人ノ无カリケレバ何カセム爲ルナト繚フ程ニ、〇中略童召將來ヌ、童鼻持上ノ木ヲ取テ直シク向ヒテ、吉キ程ニ高ク持上テ粥ヲ飮スレバ、内供此ノ童ハ極キ上手ニコソ有ケレ、例ノ法師ニハ增タリケリト云テ粥ヲ飮ル程ニ、童顏ヲ髙樣ニ向テ鼻ヲ高ク簸ル、其ノ時ニ童ノ手篩テ鼻持上ノ木動ヌレバ、鼻ヲ粥ノ鋺ニフタト打入ツレバ、粥ヲ内供ノ顏ニモ童ノ顏ニモ多ク懸ヌ、内供大キニ嗔テ紙ヲ取テ頭面ニ懸タル粥ヲ巾ツヽ、己ハ極カリケル心无シノ乞匃カナ、我ニ非ヌ止事无キ人ノ御鼻ヲモ持上ムニハ、此ヤセムト爲ル不覺ノ白者カナ、立テ己ト云テ追立ケレバ、童立テ隱レニ行テ、世ニ人ノ此ル鼻ツキ有ル人ノ御バコソハ外ニテハ鼻モ持上メ、嗚呼ノ事被仰ルヽ御房カナト云ケレバ、弟子共此レヲ聞テ外ニ逃去テゾ咲ケル、此レヲ思フニ實ニ何カナリケル鼻ニカ有ケム、糸奇異カリケル鼻也、〇下略

〔徒然草上〕唐橋中將といふ人の子に、行雅僧都とて、敎相の人の師する僧ありけり、氣の上る病ありて、年のやう〳〵たくる程に、鼻の中ふたがりて、息も出がたかりければ、さま〴〵につくろひけれど、煩はしく成て、目眉額なども腫まどひて、打おほひければ、物も見えず、二の舞の面のやう

に見えけるが、又おそろしく鬼の顏になりて、目は頂のかたにつき、顏の程鼻になりなどして、後は坊の内の人にも見えず、こもり居て、年久しく有て、病わづらはしく成て死にけり、かゝる病もある事にこそありけれ、

〔倭名類聚抄三〕齇鼻　野王案、皻〈側加反、和名阿加波奈、〉鼻上皰也、

〔箋注倭名類聚抄二〕按玉篇皻莊加切、齇壯加切、並屬鼻部、皻、砂色加切、屬皮部、其音不同、此以砂音注皻、恐誤、醫心方云、鼻皻和名加波奈、今俗呼石榴鼻、〈中略〉今本玉篇皮部云、皻鼻皰也、今作齇、鼻部云、齇鼻上皰也、與此所引合、依龍龕手鑑、皻齇同、

〔伊呂波字類抄〕〈仁病〉齇鼻〈アカハナ、鼻上皰也、〉　皻鼻〈同〉

〔増補下學集上二〕〈支體〉齇鼻〈鼻上皰也〉

〔倭訓栞〕〈中編九〉ざくろばな　酒齇鼻をいふ、石榴鼻の義、形色をもてよべり、

〔醫心方四〕治鼻齇方第十六

病源論云、此由飲酒熱勢衝面、而遇風冷之氣相搏所生也、故令鼻面間生皻、赤皰匝匝然者是也、〈和名安加〉

療治

〔病名彙解七〕鼻皻〈ビサ〉　俗ニ云ザクロバナ、酒ヲ飲人ニ多クハ生ズル故ニ、又酒齇鼻ト云リ、入門ニ云、鼻皻ハ準頭紅ナリ、甚シキトキハ紫黒、飲酒ニ因テ血熱肺ニ入リ、風寒ヲ被リ、鬱スルコト久シキトキハ、血凝濁シテ色赤ク、或ハ飲ザルモノハ、肺風血熱ナリ、

〔瘍科秘録五〕酒齇鼻

酒齇鼻、酒客ニ多キ病ユヱ名ヅク、又單ニ酒齇トモ云ヒ、又齇鼻トモ云フ、本邦ニテハザクロハナト稱ス、治シ難キモノナリ、初ハ準頭小瘡ヲ生ジテ赤ク、甚シキモノハ疙瘩トシテ兩顴マデモ蔓延シテ紫黒色ニ變ズ、鼻モ腫レテ一倍長大ニナリ、顏色ヲ變ズ、粉刺ヲ合病スルモノニテ、鼻ヲ擦

齆

ク撮ムトキハ、毛竅ヨリ粉ノ如キモノ出ルナリ、

〔伊呂波字類抄〈波病疾〉〕齆ハナシヒ

〔下學集〈上支體〉〕齆鼻

〔倭訓栞〈中編二十波〉〕はなしべ　新撰字鏡に齆鼻などをよめり、鼻病と見えたり、或は鼻流清涕なり、鼻淵ともいへり、齆は鼻痔なり、はなたけともいへり、

〔病名彙解〈七〉〕鼻齆　病源ニ云、邪氣太陰ノ經ニ乘ジ、其氣鼻ニ蘊積スルトキハ、津液壅塞シ、鼻宜調ナラズ、故ニ香臭ヲ知ラズシテ、齆トナルナリ、齆ハ、字書ニ、音甕、鼻塞ルヲ齆ト云ナリ、

〔病名彙解〈七〉〕鼻痔　入門ニ云、肺氣熱極日久シテ凝結濁結シテ瘜肉ヲナシ、棗ノ如ク鼻竅ヲ滯塞スルコト、甚シキモノハ又鼻齆ト名ク、按ズルニ、是俗ニ云ハナタケナルベシ、瘜肉ノコトニハアラジ、

〔病名彙解〈三〉〕瘜肉　俗ニ云ハナタケ也、入門ニ云、鼻痔日久シフシテ凝濁シテ瘜肉ヲナス、棗ノ如クニシテ鼻竅ヲ滯塞ス、甚シキモノハ又鼻齆ト名ブク

口病

〔日本書紀〈二神代〉〕海神乃集大小之魚逼問之、僉曰、不識、唯赤女〈赤女鯛魚名也〉比有口疾而不來、固召之、探其口者果得失鉤、

喎僻

〔倭名類聚抄〈三病〉〕喎僻　説文云、喎〈口蛙反、或作咼、和名久知由賀無〉口戾也、病源論云、喎僻則言語不正也、

〔箋注倭名類聚抄〈二病〉〕玉篇、咼喎同上、醫心方僻同訓、新撰字鏡、喎訓由加牟、靈異記喎斜同訓、所引口部文、原書戾下有不正二字、慧琳音義三引、並無不正二字、與此同、原書風口喎候云、風邪入於足陽明手太陽之經、遇寒則筋急引頰、故使口喎僻言語不正、曲直瀨本、喎上有口字、似是、

齞脣

〔倭名類聚抄〈三病〉〕齞脣　説文云、齞〈牛善反、文選云、齞脣、歷齒、阿比久知〉口張齒見也、

〔箋注倭名類聚抄〈二病〉〕齞脣見好色賦、曲直瀨本作阿比久知、那波本同、山田本、昌平本與舊同、按、阿以

瘖瘂

重舌

久知、重闕口之義、作阿比恐非、

〔倭名類聚抄　三〕瘖瘂　聲類云、瘖瘂〈瘖音、又二音、和名之多都岐〉舌不正也、

〔箋注倭名類聚抄　二〕按之多都岐、見源氏物語胡蝶巻、今昔物語、所引文、未知出典、按玉篇、謇、言不正、廣韻同、此舌蹇言字之誤、

〔倭名類聚抄　三〕重舌　病源論云、舌本血脈脹起、變生如舌之狀、謂之重舌也、

〔箋注倭名類聚抄　二〕原書作心脾有熱、熱氣隨脈衝於舌本、血脈脹起、變生如舌之狀、在舌本之下、謂之重舌、下總本無也字、醫心方同訓、按古之太、又見奇疾畫巻、蓋小舌之義、注文五字、書及山田本、昌平本、曲直瀨本伊勢廣本同、下總本有之、今附存、按伊呂波字類抄亦有是訓、

〔異疾草紙〕こじたといひて、したのねに、ちひさきしたのやうなるものかさなりて、おいいづることあり、やまひおもくなりぬれば、はらにはりえたりといへらん、のむと飲食をうけず、よもくなりぬれば、しぬるものなり、

〔醫心方　二十五〕治小兒重舌方第五十一

病源論云、小兒重舌者、心脾熱故也、其狀附舌下、如舌而短、故謂之重舌也、

〔瘍科秘錄　八〕重舌

重舌ハ俗ニ云フ、コロタナリ、大人ニ少ク小兒ニ多シ、舌下ヘ惡肉ヲ生ジ、尖起シテ舌端ノ如シ、長サ七八分ニ至ルモアリ、左右ヘ二片ニナリテ生ズルモアリ、或ハ數片ニナリ、舌本ヲ圍ミ、蓮花ノ形ニ出ルモノヲ蓮花舌ト云フ、何レモ一病ナリ、腫痛シテ舌モ木強ニナリ、言語飲食等モ不自由ニシテ、多ク涎ヲ流シ、頷下ニ核ヲ結ビ、大サ梅子ノ如クニシテ痛ミ、或ハ色ヲ變ジ、或ハ膿ヲ成スモアリ、幼少ニテ未ダ言ズ、痛所ヲ告ルコトノナラヌモノ、卒ニ乳ヲ喫ズ、但氣ムツカシク、涎ヲ多ク流シ、頷下ノ浸腫スルモノハ必重舌ナリ、

鵝口瘡

〔倭訓栞 中編十〕しだとぎ　鵝口瘡をいふ、舌に粢(シトギ)の如き物のいづるなり、小兒の疾也、

〔瘍科秘錄 八〕鵝口瘡

鵝口瘡ハ、俗ニシラシタト云フ、小兒初生ノ病ナリ、初發ハ舌上及ビ上腭(ウハアゴ)ニ斑々ト白點ヲ發シ、乳(チヽ)滓(カス)ニテモ付タルヤウニ見ユルモノナリ、二三日ノ内ニ、口舌及唇マデモ一圓ニ白ク、米粉ヲ敷タルヤウニナルモノナリ、舌腫痛シテ、不自由ニナルト見ヘテ、乳ヲ吸カネ、或ハ一向飲マヌモアリ、久シク愈ザルトキハ、啼叫シテ止マズ、遂ニ驚癇ヲ發スルコトモアレバ、忽略(ユルカセ)ニセズシテ、早ク愈スヲ專務トス、大人ノ鵝口瘡ハ、稍ク因ヲ異ニス、癰疽、温疫、痢病久シク愈ズ、及產後等ニテ虛脫シタル者ニ有リ、口舌腫痛シテ白點ヲ生ジ、眞白ニナリテ、米粉ヲ敷ガ如シ、飯食モ一向ニナラヌ様ニナリ、至極ノ虛候ニテ治シ難シ、白砂胎ト云フモ、此證ヲ指スナルベシ、但鵝口瘡ノミ惡候トナスニ非ズ、一體本病ガ大病ユヘ、治シ兼ルナリ、

〔病名彙解 二〕鵝口瘡(ガコウソウ)　俗ニ云小兒ノシタシトギナリ、又雪口トモ云リ、丹臺玉案ニ云、何ヲ以テカコレヲ名ヅケテ鵝口ト云、鵝口トハ、滿口皆白シテ、鵝ノ口中ニ似タルコトアリ、俗ニコレヲ雪口ト云、病源云、小兒初生、口裏ニ白屑起リ、スナハチ舌上ニ至テ瘡ヲ生ズ、鵝ノ口ノ裏ノ如シ、此胎アルトキ、穀氣ヲ受ルコト盛ニ、心脾ノ熱氣口ニ薰發スルニ因故ナリ、

〔叢殷堂雜錄 三〕小兒鵞口瘡をわづらひ、乳を飲かぬる時は、死に及ぶこと少からず、是には天南星を末にし、粘にねりて紙にのばし、足のうらの土ふまずに張べし、二時或は三時ばかりして乳を吸ふなり、

口臭

〔醫心方 五〕治口臭(クサキ)方第五十二

病源論云、口臭者、由五藏六府不調、氣上胸鬲、然府藏之氣臊腐、因蘊積胸鬲之間、而生於熱、衝發於口、故令口臭也、

（異疾草紙）宮こに女あり、みめかたちかみすがた、あるべかしかりければ、人ざうじにつかひけり、よそに見るおとこ、こゝろをつくしけれども、いまのかあまりくさくて、ちかづきよりぬれば、はなをふさぎてにげぬ、たゞうちゐたるにも、かたはらによる人は、くさくたえがたかりけり、

齒痛

（醫心方五）治牙齒痛方第六十六

病源論云、齒牙痛者、是牙齒相引痛、牙齒是骨之所終、髓之所養、若髓氣不足、陽明脈虛不能榮於牙齒、爲風冷所傷、故疼痛也、

（醫心方五）治風齒痛方第五十七

病源論云、手陽明之支入於齒、齒是骨之所終、髓之所養、若風冷客於經絡、傷於骨髓、冷氣入齒根、則痛也、

（異疾草紙）おとこありけり、もとよりくちのうちのは、みなゆるぎて、すこしもこわきものなどはかみわるにおよばず、なまじゐにおちぬくることはなくて、ものくふ時にさはりて、たえがたかりけり、

（多聞院日記）天文三年八月十日、本坊云、齒ヲ痛ニハ、毎朝念佛十遍申、タフウチ、堂ノ阿彌陀ニ回向スレバ、堅ク能ク成也、

（大猷院殿御實紀五十一）寬永十三年六月十六日、嘉定御祝儀規のごとし、御牙痛によて、その所にのぞみ給はず、

齒骨槽

（病名彙解七）齒骨槽、病源ニ云、齒骨槽ハ、是風冷齒齗ノ間ニ客トシテ、齒齗ヲシテ落サシメテ膿出、其齒搖動ス、語トキ風過ルノ聲アリ、世ニ齒骨槽ト云、此レ齒ノ間ヨリ膿聲ノモルヽコトナリ、

齒衂

（病名彙解六）齒衂、牙宣ノコトナリ、牙齒宣露シテ血ノ出ルコトナリ、風寒腎虛ノ二證アリ、

（牛山方考中）一齒齦黑ク腐爛シ、血ヲ出ス症アリ、或ハ熱病ノ後、或ハ消渴ノ病、寒冷ノ血藥ヲ服ス

齲齒

ルコト大過シ、虛陽上リ攻メ、濁氣不下者、舌齒齦ヨリ血ヲ出スニ、川芎黃連ヲ加テ奇効アリ、

〔倭名類聚抄 三病〕齲齒　釋名云、齲、〈俱禹反、齲齒、無之加女波、〉虫齧之齒缺朽也、

〔箋注倭名類聚抄 二病〕醫心方同訓、又訓牟之波、新撰字鏡、齲波也牟、又齒乃虫、拔、无之加女波、虫齧齒也、今俗省呼无之婆、○中略所引文原書同、說文、䶗齒蠹也、齲、䶗或从齒、

〔伊呂波字類抄 无病〕齲　ムシカメハ

〔增補下學集 上二 支體〕齲齒

〔源氏物語 十一〕御はのすこしくちて、くちのうちくろみて、ゑみ給へるかをりうつくしきは、女にてみたてまつらまほしうきよらなり、

〔醫心方 五〕治齲齒痛方第五十八

病源論云、手陽明之脈入於齒、足太陽脈有入於頰、遍於齒者、其經虛風氣客之、結搏齒間與血氣相蒸則斷腫熱氣加之、膿汁出而臭、侵食齒斷、謂之齲齒也、

〔金匱醫談 一〕古今稱齲齒爲蟲齒者大誤、是非蟲齒、蒸〈和訓蟲蒸相通〉齒也、熱蒸而爲痛也、決非蟲喰之、以其或齒有穴、誤爲蟲齒乎、未盡也、其有無穴而自外缺者、可以知其非蟲喰矣、余〈○烟秀龍〉近日發一奇術、其術、新製如小鎌者、鉤去齒肉間之惡血如綿絮者、去之則齒痛立治、而不再發、試之病者、百有餘人、無一不治者、實以余爲此術之權輿矣、

〔病名彙解 六〕齒蠹　俗ニ云ムシクヒバナリ、病源ニ云、齒蠹ハ、是蟲齒ヲクラヒ斷ニ至テ膿爛シ、汁臭シ、コレヲ齒蠹ト云、

〔病名彙解 五〕風齲　ムシクヒバナリ、又齲齒トモイヘリ、牙臼ノ如クニクイヌキタルヲ齲脫ト云リ、病源ニ云、膿汁出テ臭ク、齒斷ヲ侵食ス、コレヲ齲齒ト云、亦風齲ト云リ、齲ハ說文ニ齒蠹ナリ、

〔病名彙解 六〕齒蝕　是モムシクヒバナリ、其内前齒ヲ食フ虫トミヘタリ、病源ニ云、齒蝕ハ是齒ヲ

食ヒ、齒根ニ孔アリ、蟲ハ其間ニアツテ、亦齒ヲシテ疼痛セシム、一齒ヲ食ヒワタシテ、又度々餘ノ齒ヲ食フナリ、

〔砂石集七上〕齒取人之事

一南都ニ齒取唐人有リキ、或在家人ノ慳貪ニシテ利潤ヲ先トシ、事ニ觸テ商ヒ心ノミ有テ、得モ有ケルガ、蟲ノ食タルハヲ取セントテ、唐人ガ許ヘ行ヌ、齒一ツトルニハ錢二文ニ定タルヲ、一文ニテ取テ給ヘト云、少分ノ事ナレバ、唯モトルベクレドモ、心ザマノニクサニ、フツト一文ニテハ取ジト云、良久ク論ズル程ニ、大方取ザリケレバ、去バ三文ニテ二ツ取玉ヘトテ、虫モクハヌ、ロニ好キハヲ取添テ、二ツ取セテ、三文トラセツ、心ニハ利潤トコソ思ケメ、サレドモ疵ナキ齒ヲ失ヒヌル大ナル損也、是ハ申ニヲヨバヌ大ニ愚ナル事、嗚呼ガマシキシワザナリ、

〔倭名類聚抄三形體〕齲　説文云、齲〈音禹、和名无之波〉齒傷朽也、

〔箋注倭名類聚抄二形體〕齲〇中略 所引齒部文、

〔醫心方五〕治齒齲方第六十八

病源論云、齒者骨之所終、髓之所養、髓弱骨虛、風氣客之、則齒齲〈丘禹反、齒傷朽也、〉

〔倭名類聚抄三形體〕齵齒　唐韻云、齵〈五溝反、又音隅、和名於曾波〉齒重生也、

〔箋注倭名類聚抄二形體〕五溝與五鏤合、昌平本作五溝反、字異音同、昌平本隅作偶、按音隅與廣韻合、在平聲十虞、偶在去聲五十候、作隅似是、按於曾波、蓋壓齒之義、古事記、市邊王齒、如三枝押齒、坐、押齒即壓重之義也、今俗呼八重齒、〇中略 慧琳音義引作重生齒、兩却不端直也、玄應音義再引與此同、説文、齵、齒不正也、

〔伊呂波字類抄於人體〕齵齒〈オソハ、重生也、〉

〔撮壤集下人體〕齵齒〈オソハ、同名〉

咽喉病
哽咽

〔增補下學集 上二 支體〕齵齒(タツハ)

〔古事記 上 顯宗〕此天皇、求其父王市邊王之御骨時、在淡海國賤老媼參出白、○中略 亦以其御齒可知、御齒者、如三枝押齒坐也、

〔古事記傳 四十三〕押齒は、和名抄に、蒼頡篇云、齵齒重生也、齵齒於曾波とある是なり、冠辭考(おしてる)の條に此を引て、齵重なれる齒のおはせるを云とあり、如三枝とは、彼草の三莖の相對へる狀に重なれる御齒にぞありけむ、

〔倭名類聚抄 三 病〕哽咽 唐韻云、哽咽(綆悅二音、咽又作噎、和名無須)、食塞也、

〔箋注倭名類聚抄 二 病〕曲直瀨本綆作更、按綆與廣韻合、在上聲三十八梗、更在去聲四十三映及平聲十二庚、其韻不同、作更非、又按廣韻、噎烏結切在十六屑、悅弋雪切在十七薛、此以悅音噎恐誤、說文、噎飯窒也、咽嗌也、二字不同、按詩王風、中心如噎、毛傳、謂噎憂不能息也、說文、欭嚘也、嚘語未定貌、則知詩借噎爲欭、欭字後人變欠從口作咽、故廣韻云、噎又作咽、與咽喉字不同也、醫心方噎同訓、新撰字鏡噎亦同訓、○中略 廣韻云、哽々咽、又云、噎食塞、又作咽、疑源君合二字注引之、非唐韻原文、那波本正文作咽、注文作噎、恐非是、按說文、哽語爲舌所介也、以爲哽噎者轉注也、說文又云、噎飯窒也、孫氏蓋本之、

〔伊呂波字類抄 伊 人體〕氣噎(イキムツル、子臆之中欬事也、) 〔同 无 人體〕哽咽(ムス、亦作噎、) 噎同 噦(ムカツク)

〔增補下學集 上二 支體〕哽咽(ムセヤル、ムス、食塞也)

〔和漢三才圖會 十二 口之用〕噎(むせる、音謁) 和名無須、俗云無世留、哽咽、訓無世不噎(伊音反)、○中略

按、因內傷有生膈噎病者、凡噎于飯者本病也、噎于飲者每亦有之、或吃醋汁及茶湯時、傍有人、若發欲急相感則噎焉、乃祝曰、無嘗惜者則噎止、蓋此祝噎之遺風乎、又若噎胡椒山椒煙草等辣味者、急啜未醬汁則止、

失聲

〔萬葉集 二十〕爲防人情陳思作歌一首幷短歌
若草乃、都麻波等里都吉、平久、和禮波伊波々牟、好去而、早還來等、麻蘇泥毛知、奈美太乎能其比、牟
世比都々、言問須禮婆、（下略）

〔倭名類聚抄 三 形體〕失聲　食療經云、食熱膩物、勿飲冷酢漿、失聲嘶咽、（嘶音西、失聲、比古惠、嘶咽、古惠々久、）

〔箋注倭名類聚抄 二〕各本脫冷字、今依飲食部漿條重引增、醫心方引養生要集、其文與此全同、亦有冷字、養生要集失聲上有喜字、按千金方云、諸熱食鹹物後、不得飲冷酢漿水、喜失聲成尸咽、即是事、則此似脫喜字、又膩鹹字形相似、必有一誤、又按病源候論、尸咽者謂腹內尸蟲上食人喉咽、生瘡、其狀或痒或痛、如甘䘌之狀、千金方所云尸咽蓋是、諸方書亦不見嘶咽熟用者、此作嘶咽者誤、然養生要集亦作嘶咽、則源君所見食療經、必不作尸咽、說文、嘶散聲也、作嘶俗字、方言、嘶噎也、楚曰嘶、又云、嘶散也、東齊聲散曰嘶、秦晉聲變曰嘶、按嘶謂聲散、則宜訓志波賀留、其古惠々久、謂咽喉有聲、則謂嘶咽爲古惠々久矣、

〔增補下學集 上 支體 二〕失聲

〔源平盛衰記 十 三〕滿仲遣西宮殿（高明）事
西宮殿ハ、聊モ不知召タルヲ、被延失ン爲ニ、謀叛ノ衣ニ、式部卿宮ノ御舅ナレバトテ、讒申クルヲ、一條左大臣師尹、殊ニ申沙汰シテ、西宮左大臣ヲ流レタ、其所ニ歲替給タリケルガ、幾程モナク、聲ノ失ル病ヲシテ、一月餘リ煩テ失給ニケリ、

喉痺

〔倭名類聚抄 三 病〕喉痺　病源論云、喉痺（和名、乃無土比古比、）喉裏腫塞痺痛、水漿不得入是也、

〔箋注倭名類聚抄 二〕按痺從畀與之畀、必至切、在去聲六至、屬幫母、痺從尊卑之卑、便俾切、在上聲四紙、屬並母、其字所從音韻皆不同、不得以痺音痹、然諸書多譌痹作痺、源君從之、遂以痺音痹字也、按醫心方亦讀喉痺爲已比、（中略）下總本無是字、與原書合、說文、痹溼病也、

胸痛

〔撮壤集下病疾〕喉痺

〔醫心方五〕治喉痺方第七十

病源論云、喉痺者、喉裏腫塞痺痛、水漿不得入也、風毒客於喉間、氣結蘊積而生熱、故喉腫塞而痺痛、亦令人壯熱而塞、七八日不治則死、

〔瘍科秘錄八〕喉痺

喉痺ハ咽喉ノ痺ニテ、又喉痺ト云フ痺ハ麻痺スルノ義ニ非ズ、中藏經ニ痺者閉也トアリテ、咽喉閉塞スルノ謂ナリ、焦氏筆乘ニ、已ニ喉閉ト見ヘタリ、又乳蛾風トモ名ク、兩傍ノ腫ルヽヲ雙乳蛾風ト爲シ、一邊ノ腫ルヽヲ單乳蛾風ト云、和蘭陀ノ說ニ、懸壅ノ左右ニ巴旦杏腺ト云フモノ有リ、喉痺ハ此ノ處ノ腫ルヽナリト謂ヘリ、咽喉ハ飲食ノ道、呼吸ノ門ニテ、至極ノ要地ナリ、故ニ早ク救ハザレバ危篤ニ至ルコトアリ、此病ハ刺繡、臨摹、剞劂等ニテ、極メテ肩ヲ使ヒ、强テ腕ヲ勞スルモノニ多シ、

〔看聞日記〕應永廿五年九月六日、禁裏(稱光)御喉痺御惱、以外云々、面々仰天、然而體御取直云々、

〔妙法寺記〕永正八年、此年正月、浮世ニ口痺流行、人民死コト無限、然間彼口痺ノ鳥ヲ作リ送ル、一日病デ頓死ス、

〔醫心方六〕治胸痛方第一

病源論云、胸脇痛者、由膽與肝及腎之支脈虛、爲寒氣所乘故也、此三經之支脈、並循行胸脇、邪氣乘於胸脇、故傷其經脈、邪氣之與正氣交擊、故令胸脇相引而急痛也、

〔落窪物語三〕北の方は、かの典藥の事により、起まして部屋の戸引き開けて見たまふに、うつぶしふして、いみじく泣く、いといたしや、などかくはの給ふぞといへは、胸のいたく侍ればと息の下にいふ、あないとをし、物の積かとも典藥のぬしくすしなり、かいさぐらせ給へといふに、類なく

にくし、何か風にこそ侍らめ、くすし入るべき心地しはべらずといへば、さりとも胸はいとおそろしきものをといふ程に、典侍さわたれば、こちいませと呼び給へば、ふとよりたり、ことに胸やみ給ふあり、物のつみかともかいさぐり、乳などもまいらせ給へとて、やがて預けて立ちぬれば、くすしなり、御病もふとやめ奉りて、今宵よりはいかうにあい頼み給へとて、胸かいさぐりて手ふるれば、女おどろ〳〵しう泣きまどへど、言ひ制すべき人もなし、○下略

(小右記)長和五年三月六日庚戌、明日明後日可行手結之事、仰府生正方、其節件日に行之、今依日面宜、亀使不参、将中将許、遣達使、胸病發動、不可參期任、如今無故障者、

寛仁二年五月廿七日戊子、晩頭從河東洞小路西四條大路以南南行一町餘燒亡、未剋許、義光從大殿來云、御胸重發給、頭政及家子近習卿相等馳參、殿中不靜、少時頗復尋常、

(台記)久安二年十二月三日、今夜實長患胸病、一時而愈、

(內科秘錄)七心痛

心痛ハ、後世ニ至リ、胸腹諸處急痛スルノ總名ニナリ、脾ノ痛ムヲ脾心痛ト云ヒ、胃ノ痛ムヲ胃心痛ト云ヒ、腎ノ痛ムヲ腎心痛ト云フ、紛乎トシテ從フ所ヲ知ラズ、畢竟內景ヲ明辨セズ、外ヨリ臆想スルユヱ名ノミ多クナリテ、却テ人ヲ眩惑スルノミ、金匱ノ胸痺心痛ヲ熟讀玩味シ、且ツ後世諸家ノ說ヲ參考スルニ、心痛ハ心臟病ニシテ、卽チ眞ノ心痛ナリ、胃脘痛ハ胃病ニシテ、卽チ胃心痛蓋シ嘈雜ノ尤モ甚シキ者ナリ、胸痺ハ胸膈病ニシテ、卽チ諸筋諸膜ノ急痛スルナリ、此三證ヲ分別シテ療治スルトキハ、大ナル過ナカルベシ、

(增補下學集)上二疾病 打肩

(病名彙解)二 打肩 俗ニウチカタト云リ、肩胛ノ强急スル也、或ノ曰、邪ヲ以テ肩ヲウツトキハ、ココロヨキ故ニ打肩ト云リ、又其病肩ノ內ニ發スル故內肩ト云リ、世俗ニ肩ノミアルヤウニ思ハ

喘息

アヤマレリ、蓋疾ノ發スル定ル所ナシ、多クハ是脇腹ノ中ナリ、

〔辨症救急〕速打肩(ハヤウチカタ)、本邦尤多、但高貴家無有、負量勞力、脇動鬱結不散、令氣促迫、則一時氣逆血止、痰血與結氣併、上攻衝於心肺、卒倒氣絶至不救者多、惟急針膏肓、出血瀉氣、即活者間有之也、此證會不灸膏肓、覺氣塞肩背重者、卒致此患、以此爲候、按速急也、打、打破也、膏肓乃近肩處、故世俗以速打肩名之歟、

〔譚話浮世風呂前編上〕朝湯の光景

ヲイ番頭、目を廻した人があるぜエ、湯氣に上つた〳〵、(ばんとう)ナニ湯氣に上つた、夫は大變大變(ト、ゆばん大ぜいにて、ふろの中よりかつぎいだせば、いゝぜんのよい〳〵病人、ゆ氣にあがつてたはひなし、)誰だ〳〵、よい〳〵のぶた七だ、病人のくせに長湯をするからだ、水を吹かけろ、草履を顏へ載ろエ、ナニそりやア頭痛だア、刀豆と肩へ書が能い、それこそ早打肩だア、ぶた七ヤア引、ぶた七ヤ、アヽイドドドンチャン〳〵、玄やうだんじやアねへ、呼生ろ〳〵(ト、かほへ水をふいて、大さはぎになる、やう〳〵にぶた七はいきをかへす、)どうだ、ぶた七〳〵氣がついたか氣がついたか、

〔倭名類聚抄三〕喘息　唐韻云、歂(昌兗反、字亦作喘、阿倍岐、)口氣引貌也、

〔箋注倭名類聚抄二〕山田本作昌竟反、那波本同、按昌兗反、與廣韻喘字音合、在上聲二十八獮、兗在二十阮、其韻不同、作兗非是、昌平本、曲直瀨本作昌充反、亦譌、醫心方喘同訓、萬葉集笠朝臣金村角鹿津乘船歌云、海路爾出而阿倍寸管我榜行者即是、新撰字鏡古本訓阿波支、今俗呼以岐岐連、○中略所引文廣韻同、釋名、喘湍也、湍疾也、氣出入湍疾也、按說文、歂口氣引也、徐音市緣切、喘疾息也、徐音昌沇切、二字音義皆不同、廣韻、歂口氣引貌、市緣切、又昌兗切、喘喘息、說文曰、疾息也、昌兗切、雖其音或同、然義則異、阿倍岐者謂疾息、則宜用喘字、而集韻以喘歂二字云、喘息、說文曰、疾息也、昌兗切、遂以歂爲疾息字、然則阿倍岐用歂字、非無據、然宜引疾息之訓、引口氣引貌訓非是、

〔[illegible]集 [illegible]〕喘息(ゼンソク)

〔增補下學集 文上 言語 二〕喘息(ゼンソク) 喘口氣息引

〔日本書紀 皇極 二十四〕二年十一月丙子朔、于時古人大兄皇子喘息而來問、向何處、入鹿具說所由、

〔しりうこと〕點天大僧正小山田與清を呵す
さて京傳ある會席上にて、その方が盜說を咎めて、かの說は予が發明なるを、足下自說として唱へらるゝこと、はなはだ遺憾なりといひしとき、その方まざ〳〵しく大音に、予いかでか足下の說を竊はん、何ぞ證據ありやと、居丈高になつて說破したりしかば、京傳ははなはだ逆上せて、論議するうちに、持病の喘息大に發して、痰血を吐し、肩輿にたすけられて家に歸りしが、これより病みて起つことあたはず、つひに病床に憤死したりき、これ其方が氣死せしめたるなる事、人あまた知れることなり、京傳のことを予に訴へて、寃罪をあかしくれよと歎きし故、○下略

〔牛山活套 上〕痰飲
痰飲ノ病ハ明メ難シ、何ノ病ニモ痰ヲ挾マヌハ稀ナリ、其脈多ハ滑也、多ハ沈弦細ヲ兼ルナリ、

〔諸病源候總論 二十〕痰飲候
痰飲者、由氣脈閉塞、津液不通、水飲氣停在胸府、結而成痰、又其人素盛今瘦、水走腸間、漉々有聲、謂之痰飲、其爲病也、胸脇脹滿、水穀不消、結在腹內兩肋、水入腸胃、動作有聲、體重多唾、短氣好眠、胸背痛、甚則上氣欬逆、倚息短氣不能臥、其形如腫是也、脈偏弦爲痰、浮而滑爲飲、其湯熨針石、別有正方、補養宣導、今附於後、
養生方導引法云、左右側臥、不息十二通、治痰飲不消、右有飲病右側臥、左有飲病左側臥、又有不消氣、排之左右、各十有二息、治痰飲也、

〔蕉窓雜話 初編 上〕消痰

肺病

仙府一貴人ノ內相、四十一歲ナルガ、風邪ニ感冒シ、宿疾ノ痰飮ト、心氣病ト共ニ發動シ、時々寒熱往來シ、熱來レバ汗出、咳嗽、連頻吐痰ス、常ニ惡風シテ衣被ヲ重ヌ、時アツテ氣淪ミ、地中ヘ陷ルガ如キヲ覺エ、或ハ怔忡驚悸シ、又時アツテ悲哀落淚シ、又時アツテ夜中眠ラズ、偶眠レバ魘ス、又時アツテ手足顫振シ、時アツテ煩悶シ、時アツテ大汗シ、小便時ニ赤濁シ、時ニ淸利ス、大便時ニ秘結シ、時ニ快通シ、食相應ナレドモ、少キ時ハ常ノ半食ナリ、多キ時ハ常食ナリ、鹽味苦カラズ、病證時々不同アツテ定マラズ、舌上時ニ白胎トナリ、又ハ黒胎トナリ、又ハ淺黄胎トナリ、又ハ胎ナシ、モ亦不同アリ、脈モ熱來ル時ハ數脈トナル、又熱解スル時ハ遲脈トナル、亦不同アツテ一定セズ、腹中右ノ中脘ノ邊ニ一塊アリ、大サ小桃ノ如クニシテ核ナリ、時々出沒ス、諸名家虛勞トナシテ是ヲ治療スレドモ寸効ナク、荏苒トシテ痊ズ、擁床ニ平臥スルコト半年餘、予○今村玄站ニ治ヲ求ム、予診察スルニ、身體稍瘦セ、腹中攣弱、虛里ノ動穩カニシテ肌熱ナク脈緩ナリ、是亦心。氣。病。ナリ、一旬ニシテ治スベシ、卽チ移精變氣ノ法ヲ施シ、甘麥大棗湯ヲ呈シ、油煙丸ヲ副用ス、日ニ三分、三次ニ分テ白湯ニテ服サシメタルニ、爾後日々快活ヲ報ジ、一旬ニシテ全愈ス、沐浴シ、去爪シ、束髮シ、化裝シ出テ庭前ヲ步行ス、衆其奇功ヲ稱ス、此人臥床スルコトノ久シキ、汗スルコトノ多キニヤ、擁床ヲ去ルノ時ニ至テハ、疊及椽ノ坂モ皆朽タリ、

〔柳營諸舊例的〕三　文化四卯年十一月三日

步行願

寄合　安部織部

私儀、久々痰。積。ニ而氣分差塞相勝不申候ニ付、栗本瑞見藥服用仕、少々宛快方ニ御座候得共、今以出來不出來御座候間、爲養生步行仕候て可然旨、瑞見申聞候、依之一頰共方江步行仕度奉願候、

十一月三日

寄合　安部織部

〔醫心方〕六　治肺病方第十三

病源論云、肺氣盛爲氣、有餘則病、喘欬上氣、髆背痛汗出、尻陰股膝踹都館反足跟也脛足皆痛、是爲肺氣之實也、則宜

肺癰　肺痿　勞咳

寒之、肺氣不足、則少氣不能報息、耳聾嗌乾、是爲肺氣之虛也、則宜補之、

〔醫心方十五〕治肺癰方第十三

病源論云、肺癰者由風寒傷於肺、其氣結聚所成也、肺癰之狀、其欬胸內滿隱々痛而戰寒、又肺癰有膿而嘔者、不須治其嘔、膿止自愈、

〔醫心方十三〕治肺痿方第十五

病源論云、肺主氣、爲五藏上蓋、風邪傷於府藏、而血氣虛弱、又因勞役大汗出、或經大下而亡津液、津液竭絶、肺氣壅塞、不能宣通諸藏之氣、因成肺痿也、其病欬唾而嘔、乾沫而小便不利者難治、

〔增補下學集上〕勞瘵　虛勞

〔俚言集覽十三〕一勞瘵、勞瘵といふ病は、醫書に往々あり、勞咳と呼は、何の書に出しと問に、分明に答る醫師なきにや、類經が本草の欬多の條下に、療肺氣急熱、勞咳連々不絶とあるよし、丹水子が書に記るせり、

〔時還讀我書下〕勞欬ノ名、行餘醫言ニ甄權ヲ引タリ、先君子(元堅父)多紀ノ言ニ、證類本草ニ藥性論云、款冬花君主、療肺氣心促急熱乏、勞欬連連不絶トアリタ、勞ノ字上ニ接シタ欬連連トイヘルナリ、李時珍コレヲ引タ乏ノ字ヲ刪タルヲ、太沖ノ襲取タルナリ、勞欬ノ稱ハ嚴氏濟生方ヲ以テ始トナスベシトノ玉ヘリ、又外臺ニ治欬ノ呤法トアルヲ、太沖ハ欬嗆トイヘル病名トナセリ、其陋亦甚シ、(先輩ノ書ニマヽ欬嗽嗆々トイヘルコトアリ、陋ベキコトナリ)

〔雜病記聞三〕勞咳

勞咳ハ、本名勞瘵ト云ヒ、喘瘵トモ云ヒ、或ハ虛勞トモ云ヒ、癆瘵トモ云フ、勞咳トハ、俗ニ云ヒ習ハシ來ル名也、是勞トハ、此病段々勞レタ出ル病ナル故ニ勞ト云フ、又咳トハ、此病トナレバ、必咳嗽出ル故ニ咳ト云フナリ、瘵トハ、此病ニカヽレバ、必死シテ保ラル、ト云フ意ナリ、此病雜病中難

傳屍
骨蒸

一ノ大病ニテ、和漢古今醫者ノ治シ難シトスル所ナリ、就中此病ハ、老人愚人下賤ノ人等ニハ稀ニテ、年若キ人、富貴ノ人、才力智アル人ニ多シ、國ニ代ヘ家ニ代ヘ數百人ノ命ニ代ヘテモ救ヒタキト云人昔ヨリオホク、天下ノ父母ヲシテ歎カシムル第一ノ病ナリ、余此ニ理ヲ明メンコトヲ志シ、數年ノ間コレヲ思ヒ、コレヲ思フテ、纔ニ其道理ヲ得タルニ似タリ、然レドモ其理ヲ解スル程、猶更ニ治スベキノ藥ニ乏キヲ憂ルコト故ニ、別シテ其ノ病理ヲ詳ニ物語リテ、後世是ヲ治スベキノ方術アランコトヲ希而已、勞瘵ニ七種ノ別アリ、先コレヲ知ルベシ、七種トハ、一ニハ傳尸、二ツニ遺毒勞、三ツニ傳染勞、四ツニ癆勞、五ツニ風勞、六ツニ鬱勞、七ツニ腎虛勞也、其中ニ傳尸勞、遺毒勞ノ二勞ハ其脈症見ルレバ輕シト云ヘドモ必死ナリ、傳染勞ハ遠ク避ケテ免ルベシ、癆勞、風勞、鬱勞、腎虛勞、其ノ脈症見ルレドモ、輕ケレバ治スベシ、重ケレバ不治也、

〔內科秘錄六〕虛勞　勞瘵〈○中略〉

勞ハ傳染毒ナレドモ、瘟疫、病疾、黴瘡、疥癬ノ如ク、速ニ傳染スルモノニ非ズ、假令傳染スルモ、其毒內ニ伏シテ速ニ發セズ、按摩、鍼醫等ハ日夜病床ニ親炙スルユヘ、傳染スル者亦尠カラズ、醫者ノ診察スル間ハ須臾ノコトユヘ、決シテ傳染スルコトナシ、

〔陰德太平記三十二〕杉原忠興死去附妾貞順事

忠興其比ヨリ、癆氣ノ樣ニ、フラフラト煩ケルガ、同三年〈○元〉ノ春ニ至テ、中風發シテ、竟ニ卒去セラレニケリ、

〔伊呂波字類抄天病者〕傳屍病（テンシヒヤウ）〈老少男女皆有此病、漸瘦、子死之後、皆付親一人、故云傳屍、〉

〔醫心方十三〕治傳屍病方第十三

玄感傳屍方云、夫傳屍之病、爲盡室深大、較男夫多以袪癖及勞損爲根、女人乃因血氣或注爲本、然比見患者百有餘人、得狀不同、爲療亦異、形候既衆、名號又殊、所以然者、中華通曰傳屍、蜀土都名瘦病、江

左腸爲轉注、野俗謂之伏連、下則名爲殗殜、小兒乃曰無辜、因虚損得名、爲勞極、骨中熱者號爲骨蒸、欬嗽者稱曰肺痿、神鬼爲祟名之復連云々、

又云、論曰、大都男女傳屍之候、心胸滿悶、背髆煩疼、兩目精明、四支無力、雖知欲臥、睡常不著、脊膂急痛、膝脛酸疼、多臥少起、狀似佯病、每至旦起即精神好、欲似无病、從日午以後、即四體微熱、面好顏色、不喜見人、過常懷忿怒、纔不稱意、即欲嗔怒、行立腳弱、夜臥盜汗、夢與鬼交、或見先亡、或多驚悸、有時氣急、有時咳嗽、雖思想飲食、而不能多食、死在須臾、而精神尚好、兩脇虚脹、或時微痢、鼻口乾燥、恒多黏唾、有時唇赤、有時欲睡、漸就沈羸、猶如水涸、魚不覺其死矣、

〔傳屍病二十五方〕　袁寶

傳屍病二十五種各別注之

第一、總名天屍病ハ、身ヌルミタ、□鼻ヲ痛ク胸脇ヲドリタヘガタクタ、人ニ違立ラレタル樣ニテ不食、日々ニイタク痩タ死スル也、

第十二、卯七草ト云傳屍病アリ、病樣ハ臍又胃ヲドル事走馬ノ如シ、痛ヌレバヲドルフト、傷ノ人ノ胸ヲクル程ニヲドルナリ、ナキシハブキシ、ヤセカル、病也、小兒ハ七歳マデ付タ、十三歳ニ極メ死ズバ廿五年ハ一定死ル病也、灸所ハ十所アリ、前ニハ亞中穴ノ下骨ナキヲ灸ク、又亞中ノ穴乳ノフタ中左右二寸ヲ灸ケ、背ノ一骨左右一寸五分灸ケ、一骨ノ下三寸下タ左右一寸五分ヲ灸ク、又一骨ヨリ下タメノヲトタウベタフタツニ折タ寛ル中ヨリ左右一寸五分ヲヤク、是ハ定療章穴ト云也、一骨ト龜尾トヲタウベタ中ヲ折タ下四寸マシニ下リタ左右一寸五分灸ク、不平愈タビ〱灸ケ、愈ニウチスベシ常臂沙ニハコノ病ハシルナズ、

第十三、肯水鼠ト云傳屍病ハ腹ヲ宗トスルナリ、此ノ病樣ハムチサワギヲドリ、腹常ニイタタ、サムケ立タ常ニ心チ惡タ、瘦瘦シタヒト身ハレ、足脚ハレタ、死期ニハ腳ニ紫ノ色ニ成ナス、クノ

腹痛

チシル出ヅル、長病シテ死ナリ、定業也、

〔時還讀我書上〕一儒生語リシニ、嘗ニ京師ニ遊シトキ、一商家ノ子アリ、骨蒸ヲ病テ死セル翌日茶毗セントテ、鳥邊山ニ託セシニ、中夜彼處ノ者來テ、彼屍ハ其體日ヲ經タルトミヘタリ、如何ナル子細ゾトイヘリ、主人答ルニ實ヲ以テスレドモウケガハズ、仍テ醫師及親族ナド證ニタテ、コレヲ燒シメシニ、骨悉碎テ灰トナレリ、歸途勢州ニ過テ一醫ニ此事ヲ告シニ、渠モ亦イフ、某モ嘗テ骨蒸病人ヲ茶毗シテ其骨碎屑トナリシヲ見タリトイヘリ、骨蒸ハ髓熱ノ骨ヲ焚ヲ以テカクナルコトニヤト、

〔醫心方六〕治腹痛方第四

病源論云、腹痛者、由府藏虛、冷熱之氣、客於腸胃、募原之間、結聚不散、正氣與邪氣交爭相擊、故痛、其有冷氣、搏於陰經者、則腹痛而腸鳴、謂之寒中、葛氏方、治卒腹痛方書、舌上作風字、又方、搗桂下篩服三方寸匕、苦參亦佳、干薑亦佳、又方食鹽一大握多飮水送之當吐卽差、又方掘土作小坎、以水滿坎中、熟攪取汁飮之、又方令人騎其腹、溺臍中之、

〔小右記〕長和五年正月十二日丁巳、去夕主上〈條〉○三俄重惱御坐、從大納言御許被告送也、仍召驚取案內於資平、資平報云、非重惱、御勞御腹、今朝殊事不御坐、參內、未剋先參上殿上、

〔源氏物語三空蟬〕おもとは、こよひはうへにやさぶらひ給つるを、ひとひよりはらをやみて、いとわりなければ、しもに侍つるを、ひとすくな、りとてめし、かば、よべまうのぼりしかど、なをえたふまじくなんとうれふ、

〔落窪物語三〕今やくと夜更くるまで板のうへに居て、冬の夜なれば身もすくむ心ちす、そのころ腹そこなひたるうへに衣いとうすし、板のひえのぼりて、腹こぼくとなれば、翁あなさかな、ひえこそ過ぎにけれといふに、しひてごぼめきてひちくとなる、こはいかになるにかあらん

とうたがはし、

(明月記)天福二年八月廿八日甲午、咳病雖愈、腹病又不快、兩事相竝、雖辛苦、今日盡蒼鶴友、入夜腹病雖增、如例病、今日十餘度、服高良香聊蘇息、

(醫心方二十五)治小兒癖病方第七十二

病源論云、小兒胸鬲熱實、腹內有留飲、致令榮衞痞塞、府藏之氣不宣通、其病腹內結脹滿、或時發熱是也、

(諸病源候總論二十)留飲候

留飲者、由飲酒後飲水多、水氣停留於胸鬲之間、而不宣散、乃令人脇下痛、短氣而渴、皆其候也、

留飲宿食候

留飲宿食者、由飲酒後飲水多、水氣停留於脾胃之間、脾得濕氣、則不能消食、令人噫氣酸臭、腹脹滿吞酸、所以斷之留飲宿食也、

(病名彙解二)留飲 六飲ノ一ツナリ、入門ニ云、水、心下ニ停タ、胃冷ルコト、手掌ノ大サノゴトク、或ハ短氣ニシテ渇シ、四支歷節疼痛シ、脇痛ヲ缺盆ニ引、咳嗽ウタヽ甚シト云リ、

(內科秘錄十)脾疼。

脾痛ハ古ヘ心痛ニ混稱シ、胃心痛或ハ胃脘痛ト云タ、明辨無シ、聖惠方ニ初テ脾疼ト稱ス、香川太仲、此證ヲ留飲ト唱タヨリ、世俗共ニ雷同シテ貴賤ノ招牌ニモ留飲ト題シテ、今ハ通名ニナレリ、素問ニ食痺ト云ヒ、本事方ニ脾積ト云フモ皆此病ノコトナリ、然レドモ脾疼ト云フヲ正名ト爲ス、古人ノ所謂脾胃ハ胃ノ一臟ヲ指斥シタ、未ダ必シモ二臟ニ拘泥セズ、脾疼ハ即胃疼ナリ、

(病名彙解六)心痛 ムナノイタムコトナリ、或ハ脾疼トモ、又胃脘痛トモ云リ、正傳ニ云、夫胃ハ脾ノ府タリ、陽ハ陰ニ先ダツ、故ニ臟イマダ病ズシテ府先病ナリ、甚シフシテ脇下ニ至リ、刀割

癥瘕

ノ痛ノ如キモノ、已ニ逹テ臟ニ及ブナリ、古方ニ脾疼トナスモノ是ナリ、胃ノ上口ヲ名テ賁門ト云、心ト相連ル故ニ、經ニ所謂胃脘心ニ當テ痛ムト、今ノ俗呼テ心痛トスルモノハ、イマダ此義ニ達セザルノミ、纂要ニ云、眞心痛ハ其痛甚シ、手足靑シテ節ニ至リ、旦ニ發シテ夕ニ死ス、醫書大全ニ云、其種九アリ、一ニ曰蟲痛、二ニ曰疰痛、三ニ曰風痛、四ニ曰悸痛、五ニ曰食痛、六ニ曰飮痛、七ニ曰寒痛、八ニ曰熱痛、九ニ曰來去痛、名同カラズトイヘドモ、其實ハ皆外邪氣ニ感ジ、內生冷ニ傷ル、ニ由テ、痰飮ヲ結聚シテ、心胞ニ停テ經絡ヲ傷ル、重キトキハ心膈引痛ミ、輕キトキハ怔忡スルノミ、

〔倭名類聚抄 三 病〕癥瘕　蒼頡篇云、癥瘕〈徵遐二音、今案醫家書有魚瘕鼈瘕等、俗云、加女波良、此類也、〉腹中病也、

〔箋注倭名類聚抄 二 病〕曲直瀨本瘕作瘕、按音瘕與廣韻合、在去聲四十禡、瘕在平聲九麻、作瘕似非、按魚瘕蛇瘕、並見病源候論、云有人胃氣虛弱者、食生魚、因爲冷氣所搏、不能消之、結成魚瘕、揣之有形狀如魚是也、人有食蛇不消、因腹內生蛇瘕也、其病在腹、摸揣亦有蛇狀、謂蛇瘕也、又見醫心方所引新錄方、按、加女波良、鼈腹之義、病源候論有鼈瘕云、鼈瘕者謂腹中瘕結如鼈狀是也、〇中略　慧琳音義引云、瘕、腹中病也、按玉篇、癥、腹結病也、瘕、腹中病也、二字不連文、與慧琳所引同、源君連引恐誤、又按說文無癥有瘕、云女病也、病源候論癥候云、癥者由寒溫失節、致府藏之氣虛弱、而食飮不消、聚結在內、染漸生長塊段、盤牢不移動者是癥也、言其形狀可徵驗也、又瘕病候云、瘕病者由寒溫不適、飮食不消、與藏氣相搏、積在腹內、結塊瘕痛、隨氣移動是也、言其虛假不牢、故謂之爲瘕也、又癥瘕候云、癥瘕者、此由寒溫不調、飮食不化、與藏氣相搏結所生也、其病不動者直名爲癥、若病雖有結瘕、而可推移者、名爲癥瘕、是癥與瘕雖以動不動爲別、然是本一病、故古有瘕名、無癥名也、

〔增補下學集 上二 支體〕癥瘕〈腹中病也〉

〔醫心方 十〕治癥瘕方第六

病源論云、癥瘕者、皆由寒温不調、飲食不化、與藏氣相搏結所生也、其不動移者、其名爲癥、若病雖有結
瘕而可推移者、名爲瘕也、葛氏方云、癥瘕病者、心不移動、飲食痛者死、新錄方云、治一切病温白丸方、南
州刺史巨陵豐言、巨爲曹澤視事三年、自到任官以來、巨妻不便水土、有地下濕、遂得腹脹病、頃年已來、
頻遇醫師療治、於今不差、有一舍黃道士名杜勝、過巨州界採藥、巨遂呼道士至舍、説巨妻病狀、于時道
士即與巨藥方、用前方病無不得差、

（一本堂行餘醫言　二）癥瘕

始見金匱方論、次出神農本草、〈人參、丹參、雄黃、白頭翁、鼈甲、桃仁、亭歴、烏頭、蜀漆、巴豆、石膽、甲香、二十餘品、又見名醫別錄、〉爲病源候論、千金
方已下皆同、

（一本堂行餘醫言　三）癥〈和名□□〉又癥瘕積附痃癖　痞

癥者、謂腹裏塊物、可以手徵者也、即所謂積也、夫腹裏塊物之積以生也、固非一朝一夕之故也、日復一
日、月復一月、年復一年、稍稍而氣滯漸而積成、其初至微而至積累之久、則可按索撫直徵知也、今詳論
之、蓋癥之所結、不在臟腑腸胃之内、而悉在臟腑腸胃之外、〈中略〉〇
方今、太平百有餘歲、四海又安、万民豐饒、人々縱情過于嗜慾、形耽逸樂、心多勞苦、抖擻精神於百年之
蓄積、胸襟思慮於一生之活計、加之貪嗜于酒食、沈溺于房闈、元氣何得不衰乎、奔命哉、氣已衰、則運轉
自不得不遲緩、由滯結乃生焉、是故今時之人、不問貴賤貧富、莫不結癥與痃者、職此之由也、吾門諄々
專唱、癥痃者、直驗今日之人斷然也、

（叢桂亭醫事小言　三）積聚　奔豚　伏梁　虫積〈中略〉〇

癥ハ塊ヲ結ビタ處ニアルト云ホドニ徵ノ見ユル積也、瘕ハ形アリト見ユレドモ、假ノ形ニテ、散
ズル時モアルノ名也、塊ハ手ニアタリ、或ハ稜角有モノモアリ、按ジテ痛ムモ有、如何ニ按ジテモ
不痛モアリ、土ノカタマリタアルリツチタレト云ノ形ニ似タルニテ、塊トハ云、都癥ト聞ジモノ

積聚

ナリ、元來ノ字ヲ設タル如此ナレドモ、中世以來ノ醫書ニハ混雜シテ有、

〔瘍科秘錄 十〕石瘕

石瘕ハ靈樞ニ出ヅ、婦人癥瘕ノ一證ナリ、初發ハ大サ茄瓜ノ如ク、漸大ニナルニ及テハ、懷子ノ如ク、石硬ニシテ爪モ立ズ、微ク凹凸磊落アリ、日久キトキハ虚勞ニ變ジテ死ス、又鼓脹ニ變ジテ死ス、

〔醫心方 十〕治積聚方第一

病源論云、積聚者、由陰陽不和、府藏虚弱、受於風邪、搏於府藏之氣所爲也、府者陽也、藏者陰也、陽浮而動、陰沈而伏、積者陰氣五藏所生、始發不離其部、故上下有窮也、聚者陽氣六府所成、故無根本、上下無所留止、其痛無有常處、肝之積名曰肥氣、在左脇下、如覆坏、有頭足、令人發瘖瘧、心之積名曰伏梁、起臍上、如臂上至心下、脾之積名曰痞氣、在胃管、覆覆大如盤、令人四支不收、發黄疸、飲食不爲肌膚、肺之積名曰息賁、在右脇下、覆々大如坏、令人洒淅寒熱、腎之積、名曰賁㹠、發於少腹上至心下、若㹠賁之狀、上下無時、令人喘逆、骨萎少氣、醫門方云、辨曰肥氣者、肥盛也、言肥氣如覆坏突出、如肥盛之狀、伏梁者、言其大如臂狀、似屋舍梁棟也、故名伏梁、痞者滿也、言其氣滿痞結成積也、息者長也、奔者鬲也、言其氣漸長而逼於鬲、故曰息奔、病似伏豚、而上衝心者也、又有奔豚之氣、非積病也、名同而病異焉、

〔叢桂亭醫事小言 三〕積聚　奔豚　伏梁　虫積

五積六聚ト云ヨリ、病目種々ノ字ヲ冠セシメテ通用ス、疝積、氣積、食積、血積、肝積ノ如キハ、醫俗トナク唱ルヲ見ルニ、酒ヲ飲テ後腹痛スレバ酒積ト云ノ類ニテ、一向ニ心得アリテ云ニ非ズ、痰ヲ吐ズ、咳嗽スル人、胸下ナドヲ痛ムハ痰積ト云、又腰腹股脚ノ痛ヲ疝積ト云ヘドモ、是ニモ痰嗽ナドスレバ、ヤハリ痰積ト云、何ワケモナク何積ト云ヘバ、病者モ合點シテ、治療ヲ任ス、積ノ字ヲバ病ノ字ノ如クニ見ナシ、上ノ字ヲ要ニ取扱フ、可笑ノ甚キナレドモ、此病ニ限ラザレバ、今責ムル

ニ不足、積ハ物ノツモリタルヲ云ナレバ、自然ト出來ルヲ云、聚音モ凑ニナリタリケレドモ、セキニ取ナバクタ、又形ノアル積ノ名ナリ、聚ハ氣ノ聚リタルニテ、形ノアルニ非ズ、

〔倭名類聚抄 三病〕疝 釋名云、疝(音山、和名阿太波良、一云之良太美、)腹急痛也、

〔箋注倭名類聚抄 二病〕阿太波良、重象類聚醫心方同訓、又見病源論、(中略)原書心痛曰疝、疝詵也、氣詵詵然上而痛也、又云、陰腫曰隤、氣下隤也、又曰疝、亦言詵也、詵詵引小腹急痛也、說文疝腹痛也、

〔見聞發疑〕疝

釋名に云く、心痛曰疝と、これにて病名も古とたがへることをみるべし、

〔伊呂波字類抄 世病〕疝(セン、アタハラ、)

〔增補下學集 上二〕疝(疝氣也、)疝氣

〔病名彙解 七〕疝氣(俗ニ下。氣ト云リ、)

〔一本堂行餘醫言 三〕疝(疝音訕病名、)疝卽發又曰寒疝 陰疝 癲疝

疝者、寒氣之結聚、所爲痛者也、多在少腹、或上連胸脅、突然急痛、或四方走注爲痛、或自腹下升奔、衝心而痛、或下控陰囊爲痛、或引背脊、或牽脇肋、或兼小便、或秘大便、或不得前後、或大便忽瀉忽秘、或爲久瀉、或爲久秘、或控引睾丸入腹、則痛不可忍、或腹皮急、或腹筋急、或腰強筋急、如有形、或腹中雷鳴、裡急非必瀉、或腹中有塊如錐、或腰痛不可俛仰、

〔陰德太平記 四十八〕羽倉元陰戰死之事

三月二(元龜二年)十八日、已ニ打立ントスル所シモ、伊織助俄ニ疝。氣。發シテ、前後不覺ニ譫語ノミ也ケレバ、夜討ヲヤ延引スルト云ケレ共、カタ定儀シタル事、今更非可遲引トテ、羽倉孫兵衞元陰ヲ物頭トシテ、目加田采女丞、岡部右衞門、高尾右馬丞等五百餘人、小船十餘艘ニ取乘、米子ノ町へ打入ケリ、

〔塵尻 一〕一細川三斎、疝身を苦しみてよめる歌とて、人の語りし、
いかにして我住里をあらすらん消ての後は同じ枯野に

〔柳営諸旧例的 八〕同勤引込届
文化乙丑年正月朔日
御届　松平孫大夫
私儀、今晩ゟ持病之疝積、其上風気罷在候ニ付、年始登城難仕御座候、依之引込養生仕候、此段御届申上候、以上、
正月朔日　寄合肝煎　松平孫大夫

〔倭名類聚抄 三 病〕瘨　字書云、瘨(音悵、字亦作脹、波良不久流)腹満也、

〔箋注倭名類聚抄 二 病〕曲直瀬本悵作長、按廣韻、瘨知亮切、屬知母、悵丑亮切、屬徹母、雖並在去聲四十一漾、其音不同、長直良切、屬定母、在平聲十陽、音韻皆不同、疑悵是脹字之譌、瘨脹同音、按玉篇、脹字書亦作瘨、醫心方脹同訓、○中略　按成十年左傳、張如厠、注、張腹滿也、玉篇引左傳作脹如厠、然瘨脹並説文所無、皆俗張字、字書訓瘨爲腹滿者、蓋依左傳注也、又按左傳張如厠者、謂飽食腹滿、非病名、此宜引病源候論云腹脹者由陽氣外虚陰氣内積也語之下、總本正文作脹、注作瘨、按玉篇云、字書作瘨、則知正文作脹非是、

〔伊呂波字類抄 波 病〕瘨(ハラフクル、亦作脹、)

〔増補下學集 上二 支體〕瘨(ハラフクル、腹滿也)　脹滿(チヤウマン)

〔醫心方 六〕治心腹脹滿方第六
病源論云、心腹脹者、脾虚而邪氣容之、乘於心脾故也、葛氏方治卒苦心腹煩滿、又胷脅痛欲死方、○下略

〔三代實録 三十 陽成〕天皇諱貞明、先太上天皇之第一子也、母皇太后(高子)○贈太政大臣正一位藤原朝臣長

良之女也、后兄右大臣藤原朝臣基經初夢、后當臥庭中、若腹脹滿、頃之腹潰、氣昇屬天、即便成日、其後后以選入後庭、遂有身、

(榮花物語十五うたがひ)かの承香殿の女御うみのつきもすぎ給て、いとあやしくをとなければ、よろづにせさせ給へとおぼしあまりて、六月ばかりにうづまさにまいりて、御修法藥師經の不斷經などよませさせ給、よろづにせさせ給て七日もすぎぬれば、又のべて寺にいのらせ給へばにや、御けしきありてくるしうせさせ給へば、殿まづ心なく覺しさはぎてまつ内に、右近の内侍のもとに、御消息つかはしなどせさせ給へば、御まへにそうしなどして、いかに〳〵など御つかひ參り、女院よりいかに〳〵とおぼつかなくなどきこえさせ給ふに、この御てらのうちにては、いとふびんなる事にてこそあらめ、さりとて里にいでさせ給はんも、いとうしろめたき事など、この寺の別當なども申給ふ程に、たゞごとなりぬべき御けしきなれば、さはれつみは後に申おもはんとおぼして、まかせたてまつり給ふほどに、たゞ物もおぼえぬ水のみ、さゝとながれいづれば、いとあやしうよつかぬことに、人々みたてまつり思へど、さりともあるやうあらんとのみさはがせたまふに、水つきもせずいできて、御腹たゞまゐれにまゐれて、れいの人のはらよりも、むげにならせ給ぬ、こゝらの月比のらのけはひだにいでこで、水のかぎりにて御はらのへりぬれば、てらの僧どもあさましういひ思ひ、をとゞはなぬかやむと云らんやうに、あさましういみじきに、かひきなきいふことをせさせ給て、そらをあふぎて、ゆめさめたらん心ちしてゐさせ給へり、

喜多水腫鼓脹病也

(言繼卿記)天文十九年五月三日丁卯、一昨夕、右大將殿(二條晴良)於坂本穴太被薨云々、但儀無注進、從

(漫遊雜記上)鼓脹多得之於天、蓋受體之初、胎毒結爲癖、潛在腹裏、壯年後、勞動心志、修養失其宜、則因

病例

發爲鼓脹、故父子兄弟連發、亦往往有之、

〔増補下學集　上二　支體〕膈病

〔一本堂行餘醫言　十二〕噎〈烏結切、音䭇、又益悉切、音一、〉

噎者、食飮窒塞于咽嗌胸膈之間之謂也、說文云、飯窒也、是也、凡人有食入咽至膈之時、窒塞而不得前却、總稱曰噎、但在常人、則偶有之事、而非疾耳、若至五十以上、每飡多噎者、此乃爲病、卽古今醫家所謂膈○○○證是已、膈蓋古名、

靈樞云、膈〈出上膈篇、根結篇、本藏篇、邪氣藏府病形篇等、〉素問謂之隔、〈出陰陽別論、氣厥論、六元正紀大論等、〉又作鬲、〈見大奇論、氣厥論、六元正紀大論等、〉而推之則不通矣、何者、膈者、胸下腹上、前當鳩尾、後當八椎、橫著左右肋邊、有一層之張膜、胸與腹、猶樓上與樓下、以其遮隔胸腹之間、故謂之膈膜、其上際之地位、謂之膈、膈卽隔也、故唯云膈、猶單云胸云腹及云頭云脚之類也、皆指形體地位而言之、今指形體地位爲病名、則所不解也、故非謂膈噎、則不可爲病名、亦猶非謂胸痺腹痛、頭痛脚痺、則不可爲病名也、可見所以膈之一字而不通甚明也、舞習千載、訛以傳訛、無一人辨其非者、醫家之蒙昧無眼、此類每多、故今揭噎爲本條、在咽曰咽噎、在胸曰胸噎、在膈曰膈噎、以其證在膈之部位而噎者、十居八九、故以膈噎爲專稱也、自巢元方以來、又以噎與膈爲二證、立五膈五噎等名目、後世由是、益以派別支離、徒費懸空之臆辨、以噎爲咽嗌之事、膈爲胸膈之事、皆由不知名實字義之當否也、殊不知膈是形體、卽胸膈膈膜地位之名、噎是病狀、卽食飮窒塞之義、元自判然明白、非有可惑者、何致若斯蒙昧乎、此無他也、其源起於素靈、以膈之一字爲病名矣、況爲咽膈上下陰陽氣血之論、區々以寒熱爭辨乎、古今醫家之陋習、大槩皆同、不足深責焉、

〔叢桂亭醫事小言　四〕噎膈　反胃

噎膈ハ食ヲ下スコトナラヌ病ニテ噎トバカリモ膈ト計モ云、噎ハムセルコトニテ、戰國策ニ噎而後穿井、何及於急ト有、水ニテモ不飮バ不通也、抑老人ハ食物噎スルガ故ニ、杖端ニ鳩ノ飾ヲ作

ス、噎ハ不噎ノ鳥也、是ヲ噎材ト云、（嘉言）膈ハ胃膈ノ膈ナレドモ膈ト云宜ナンメリ、又素問ニ、膈中吞膈、霊枢ニ上膈膈洞下膈、脾膈ナド、見ヱ、噎ハ素霊ニハ不見、五噎五膈ト云ハ病源候論ニ出、（巣氏）（憂―食―勞―氣―思噎、膈恚―憂―寒―熱―氣）又羅天益衛生寶鑑ニ、十膈ヲ出セリ、此外食噎酒膈ノ類其名繁シ、膈隔隔噎ニ作ル、其義ナレ、又關格ト云アリ、格ハ吐逆シ、關ハ小便不利ノコト也ト雖ドモ、噎膈反胃關格ト倂稱ス、サテ噎膈ハ古昔ヨリ難治トス、故ニ幾ノ奇法良法ト雖治スルコト無シ、病因ノ論多端ナレドモ、胎毒飲血ニ屬ス、痩テ氣静ナル性急如烈火人ニ多、一體智巧人ニ勝レ、機會ヲ以テ位ニ居ル人ノ病也、器量温厚ノ人ハ病ズ、又讀書ノ人ニ少、賤者ノ人ニ多、其病状食物咽喉ニツカヘ、飲ドモ不下、其時ハ白沫ヲハ〳〵ト吐出、冷水ヲ飲テ通時モアレドモ、是ハ初起ノコト也、後ニハ强テ湯水ヲ飲バ鼻孔ヨリ出テ、終ニハ支タル食物ヲ吐出ス、稀粥モ通リ難ハ、將來ノ粥又麺類ニトロロヲカケ、又餅團子喉ニテ散ゼザル物ヲ食スベシ、夫モ通ズバ、キナコヲカケタ飯ヲ食スレバ、奇妙ニ通ル、此症下レバ必吐スルコト無、心神不變、外ニ苦惱ナシ、壯年ニテ病バ大半治スル也、丹水子ノ利膈湯或半夏瀉心湯及急湯ナド、又[illegible]巣一味煎服スルモヨシ、何故ニ喉ニツカヘタルカ、胸ニ下レバ又吐スルコト無ト云ヲ辨ルニ、喉ノ食道ノ左右ニ大絡有、其絡中ニ瘀血凝結シテ瘤ノ如クニナル故ニ、食道ヲセバメテ通用ヲ塞ギ、其所ヲ通過レバ胃中ニ納ル故、吐スルコトハ無也、通ルコトナラヌ故ニ、上ヘカヘルヨリ外無シ、是ハ吐ニハ非ズ、不下也、往時西京ニ橋本鍼源トカ云人、刺絡ヲ以行ル、膈ヲ治スルニ人迎ノ邊ニテ絡ノ怒脈シ、食道ヲ狭モノヲ索得テ、鋒鍼ヲ上ヘムケテ刺ス、黒血ヲ流ス、絶粒ノ人、立地ニ食スルコトヲ得タリ、經日又前症ヲ發ス、時ニ偏ノ絡ヲ刺ト、又得食、其鍼痕ノ所モ知難シ、一二度刺セバ鍼痕邪魔ニナリテ剌不能、終ニハ又不通ニナリ死トモ、其通時生ヲ萬一ニモ望ベシ、門人モ多見タレバ、其術ヲ傳タル人今尚有ンカ、或曰膈ヲ病ム人、一日面部ヲ撲ルニ豁快、日々ニ按摩シテ全快シタリト、是ハ喉咽ヲ挾俠絡ノ兩部ニ

浮タルヲ按摩シテ結滯通暢シタルナラン、病因有ニ思慮ヲハブキテ治タルコトヲ記、是モ絡脈順流シタルナラン、サテ其機アラバ早ク思慮ヲ省キ、日々灌水スベシ、庶幾クハ可治也、

〔時還讀我書下〕長安又話ス、本郷元町ニ一人アリ、膈ヲ患テ諸醫束手タリシニ、一日フト家人ノ、蝦ヲ焼ク臭ヲ聞テ、意コレヲ欲シ、取食セシニ、能納テ吐出セズ、仍テ飯ニ和シ喫スレバ、飯ヲ吐テ蝦ヲ吐セズ、然レドモ爾來消息シテ、蝦飯相和シテ遂ニ飯食ヲ吐セザルニ至リテ、漸々ニ快了セシヲ、横田宗春トイヘル醫ノ親ク見タリトゾ、始ハ伊勢蝦ニテアリケルヲ、後ハ車蝦モ納リシト、蝦ノ膈ヲ治スルニハアラザルベシ、其人ノ偶嗜トコロニ適セシニヤ、

〔陰德太平記四十八〕毛利元就朝臣逝去并鹿助被擒事

毛利陸奥守大江元就朝臣、膈疾ノ兆御坐ケルヲ、種々針石ノ術ヲ盡サレシカバ、漸ク快氣ヲ得サセ給フ、サレ共弱年ノ昔ヨリ、攻戰ヲ茶飯トシ給シ故、轅門ノ霜雪、馬背ノ風雨ニ身骸ヲ痛シメ、帷幄ノ計謀ニ心意ヲ安クセズ、飲食ヲ忘レ給シ事ナレバ、カヽル勞レノツモリニヤ、殊ノ外ニ老衰シ給ケルガ、元龜二年六月十二日ヨリ、聊心地惡クナラセ給、同十四日易簀テ、黄壚山ノ旅ニ赴キ給フ、誠ニ七十五歳也、

〔松隣夜話下〕同年〇天正四年冬ノ半ヨリ、謙信公御肉日追テ脱シ、鐵丸ノ如クナル物御胸ニ支ヘ、御食ヲ吐玉フ事多日也、其後ハ冷水ノ外飲食不被遊、雖然御衰ノ色露モ不見給、晝ハ巳ノ下剋ヨリ、遠侍ニ御出、諸士ニ御對面、申ノ剋ヲ總テ被為入、夜ハ戌ノ上剋ヨリ、子ノ剋マデ御出有テ、酒宴ヲ設ケサセ、諸士ヲ會シ、談笑自如トシテ御惱ノ色ナシ、就中十一月一日ヨリ、七組衆ヲ被召、越前口ヨリ江州濃州ヘ人數ヲ被出、都ヘ御進發有ベキコトノ御手配リ、晝夜十餘日ニ事畢リ、明年三月十五日、春日山ヲ御進發、五萬餘兵ノ着到也、

○按ズルニ、右ノ膈ノ病ナラン、

〔倭名類聚抄 三病〕噦噎 唐韻云、噦噎(上於越反、下乙結反、和名佐久利、)逆氣也、

〔箋注倭名類聚抄 三病〕按噦噎二字其義不同、下文詳證之、廣韻抄噦噎連文者誤、下總本無上於越之上字、昌平本作下於越反、山田本作上於越反下乙結反八字、曾在注首、那波本同、按廣韻噦於月切、又乙劣切、於越於月、字異音同、蓋源君依唐韻舉乙劣、從廣韻抄載於越也、則乙劣於越、並音噦字、非音噎字、傳寫者不知復出之故、或刪上字、或作下於越、或作下乙劣、皆誤、昌平本、曲直瀨本注噎作咽、噎咽同、見上條、醫心方噦咽訓新撰字鏡噦欬亦同訓佐久利、又見源氏物語總角卷、○中略 按廣韻、噦逆氣也、又云、噎食塞、二字其義不同、說文亦云、噦气啎也、噎飯窒也、玉篇略同、則噦可訓佐久利、噎可訓以比須、自是二事、唐韻亦必不噦噎連文、疑傳寫者涉注所引廣韻抄而衍噎字、遂增注首上字也、

〔增補下學集 上二 態藝〕噦噎(サクリ)同上

〔倭訓栞 前編十一 佐〕さくり 倭名抄に噦噎をよめり、本草の義成べし、嘔吐をたくりといふにひかへ見るべし、俗にしやくりといふ、しやは發語也、新撰字鏡に噦欬をよめり、拉鉢の聲也と注せり、源氏、狹衣、蜻蛉日記などに、さくりもよゝとなくといへり、撰集抄にしやくりもあへずなくといひ、今もしやくりあげてなくともいふめり、

〔內科秘錄 七〕吃逆 噦 噦逆 咒逆 餉

吃逆ハ古ヨリ胃ノ虛冷ヨリ起ルト論ジタル通リ、胃口ノ病ナリ、凡ソ諸病危篤スルトキハ、吃逆ヲ發スルモノナリ、就中痰及痢病ノ危篤ニ至ルトキハ、吃逆ノ出ルモノナリ、虛候ト爲ス、死期ニ近クナリタリト知ルベシ、

〔病名彙解 二〕噦(ヱツ) 乾嘔ノ甚シキヲイヘリ、噦ノ條下考ベシ、

噦逆(シヤクリ) カラヱヅキシコミ上ル也、嘔吐ノ類也、此ノゴトキノ類一病ニアラズ、嘔吐ノ中少ブヽノ異ニヨリテ調ノカハル也、

歐吐

〔玉海〕治承四年九月七日丙辰、早旦女院渡御御堂、爲訪余所煩給也、余依行步不通、不能出仕、仍所渡御也、女院還御之後、余歸宅、主稅頭定長來、余疾疑逆氣之病、持來病患論、其說余病作、仍注進其藥方等、〇中略八日丁巳、請佛嚴聖人受戒、自今日夕始念佛之故也、是恒例所作也、雖所勞殊重、此願不可退、仍枉所始也、凡今般之疾勝於先々、內心極弱非無其恐、入夜始所作、股膝不叶心、行步如不通、左右手健冷、又快難動、仍不能用念珠、只焚香知數遍、依聖人敎也、又曰威儀之中、行住坐皆以不可叶、仍偏以臥也、是又依疾重、聖人許之故也、凡今度念誦須延引、萬人制之、然而多年之病疾、餘命在旦暮、若不遂此行終命者、奈後悔何、仍强所始終也、自邦綱卿之許、已賜地了、可請取之由、示送者也、

〔倭名類聚抄三病〕歐吐　病源論云、胃氣逆則歐吐、（上於后反、字亦作嘔、倍止都久、又太萬比、）

〔箋注倭名類聚抄二病〕原書婦人雜病嘔吐候云、胃氣逆則嘔吐、按說文、歐吐也、吐寫也、是渾言歐吐、又說文哯字注、不歐而吐也、段玉裁曰、何喉作惡而吐者爲歐、不作惡爲哯、吐乃總稱、釋名、嘔傴也、將有所吐、脊曲傴也、曲直瀨本后作口、字異音同、廣韻、歐或作嘔、倍止都久、見竹取物語、類聚符宣抄載天平九年官符云、嘔逆多麻比、皇極紀反吐訓同、神代紀爲吐訓多久利須、醫心方嘔訓年加豆久、又訓多万比、嘔吐訓毛奈波須留、物走之義、

〔伊呂波字類抄部病者〕歐吐　ヘトツク

〔撮壤集下病疾〕歐吐（歐嘔同字）

〔增補下學集上二支體〕歐吐

〔倭訓栞前編二十七〕へど　反吐の意なり、日本紀には反吐をたまひと訓せり、竹取物語に靑へどをつきて、袖中抄に貫簣たまはりて、へどつかんといふと見え、和名抄に歐吐をへどつくとよめり、つくは衝の義也、平家物語に、黃水つくといふ語も見えたり、

〔和漢三才圖會十二支體〕嘔吐（へどつく）、歐吐　和名倍止都久、又云太萬比、　哯吐、和名豆々太美、俗云知阿末須、〇中略

猶心惡未平於藏、因嘔出之、曰嘔、字亦作嘔、歐歐有聲無物名乾嘔、如江立木且、有聲有物名嘔吐、凡嘔吐大痛色如青菜葉者死、

〔病名彙解 三〕嘔吐　凡嘔吐ハ胃虛ニ由ス、物アタヒ胃ニ入トソノマヽ吐カヘス也、其内物アルヲ吐トイヒ、物ナキヲ嘔ト云、又聲モアリ物モアルヲ嘔ト云說モアリ、

〔日本書紀 一神代〕一書曰、伊弉冉尊且生火神軻遇突智之時、悶熱懊惱、因爲吐、此化爲神、名曰金山彥、次小便、化爲神、名曰罔象女、次大便、化爲神、名曰埴山媛、

〔今昔物語 三十一〕人見醉酒販婦所行語第三十二

今昔、京ニ有ケル人、知タル人ノ許ニ行ケルニ、馬ヨリ下テ、其門ニ入ケル時ニ、其門ノ向也ケル舊キ門ノ閉タル人モ不通ヌニ、其門ノ下ニ販婦ノ女傍ニ賣ル物共入レタル平ナル桶ヲ置テ臥セリ、何ニシテ臥タルニカアラムト思テ、打寄テ見レバ、此女酒ニ醉タル也ケリ、此ク見置テ、其家ニ入テ暫ク有テ出テ、亦馬ニ乘ラムト爲ル時ニ、此販婦ノ女驚キ覺テ見レバ、驚クマヽニ物ヲ突ニ、其物共入レタル桶ニ突キ入レタリケリ、穴穢ナト思テ見ル程ニ、其桶ニ鮨鮎ノ有ケルニ突懸ケリ、販婦錯シツト思テ、怱テ手ヲ以テ其突懸タル物ヲ鮨鮎ニコソ韲タリケレ、此ヲ見ルニ、穢シト云ヘバ愚也ヤ、肝モ違ヒ心モ違フ許思エケレバ、馬ニ怱ギ乘テ其所ヲ逃去ニケリ、此ヲ思フニ、鮨鮎本ヨリ然樣タチタル物ナレバ、何ニトモ不見ジ、定テ其鮨鮎賣ニケムニ、人不食ヌ樣不有ジ、彼見ケル人、其後永ク鮨鮎ヲ不食ザリケリ、然樣ニ賣ラム鮨鮎ヲコソ不食ザラメ、我ガ許ニテ慥ニ見テ、鮨調セタルヲナヽ、ニクナム不食ザリケル、其レノミニモ非ズ、知ト知タル人ニモ此ノ事ヲ語テ、鮨鮎ナ不食ソトナム制シケル、亦物ナド食フ所ニテモ、鮨鮎ヲ見テハ物狂ハシキマデ、唾ヲ吐テナム立テ逃ケル、然レバ市町ニ賣ル物モ、販婦ノ賣ル物モ、極テ穢キ也、此ニ依テ少モ叶タラム人ハ、万ノ物ヲバ目ノ前ニシテ慥ニ調セタラムヲ可食キ也トナム語リ

食傷

霍亂

傳ヘタルトヤ、

〔内科秘錄 七〕食傷

食傷ハ又傷食トモ云フ、飲食ノ大害ヲ爲スコト特食傷ノ一證ノミナラズ、凡ソ鳥獸ノ肉、或ハ脂多キ魚、或ハ油製ノ食物等ヲ放食スル時ハ、癰疽疔瘡ヲ發シ、生冷ノ物ヲ食スル時ハ、疝瘕積聚ヲ發動シ、痛飲スル時ハ、痰飲或ハ卒中風ヲ發スルノ類枚擧ニ遑アラズ、金匱ニ槃飪之邪、從口入者宿食也ト云ヒ、古ヨリ病從口入、禍從口出ト云フノ類ハ此謂ナリ、

〔病名彙解 六〕傷食（シヤウシヨク）又食傷トモ云リ、俗ニ云ルショクダヽリ也、其症、胸膈痞塞、吐逆噫酸敗、卵臭ヲ噫シ、食ヲ畏レ、頭痛發熱惡寒シテ、病、傷寒ニ似タリ、但身痛マザルノミ、

〔倭名類聚抄 三病〕霍亂　漢書云、南越多霍亂之病矣、霍亂、俗云之利與利久智與利古久夜萬比、

〔箋注倭名類聚抄 二病〕原書嚴助傳云、閩越復興兵擊南越、南越守天子約、不敢擅發兵、而上書以聞、上多其義、大爲發興、遣兩將軍將兵誅閩越、淮南王安上書諫曰、今發兵行數千里、資衣糧入越地、輿轎而隃領、拕舟而入水、行數百千里、夾以深林叢竹、水道上下擊石、林中多蝮蛇猛獸、夏月暑時、歐泄霍亂之病、相隨屬也、曾未施兵接刃、死傷者必衆矣、此所引蓋節是文、然上書謂越地遐遠、所經險惡、加以暑月、暑月多歐泄霍亂、故死者必多、非謂南越之地多霍亂病也、而太平御覽引亦云、淮南王上書云、南越多霍亂之疾、與此同、疑修文殿御覽、謬節漢書文、源君李昉等襲其誤也、按病源候論云、霍亂者由人温涼不調、陰陽清濁二氣、有相干亂之時、其亂在於腸胃之間者、因遇飮食而變、發則心腹絞痛、其先心痛者先吐、先腹痛者先利、心腹並痛者則吐利俱發、挾風而實者、身發熱頭痛、體疼而復吐利、虛者但吐利、而心腹刺痛而已、又云、言其病揮霍之間、便致撩亂也、山田本霍作癨、按玉篇、癨、癨亂也、廣韻、癨、吐病、然伊呂波字類抄亦作霍、與諸本同、又與原書合、諸醫書亦不從疒、山田本病下有矣字、那波本同、下總本無注霍亂二字、按、古久謂吐下也、今有鄙人謂尿爲波利古久、放屁呼倍古久者、

〔伊呂波字類抄〕霍亂 シリヨリクチヨリコクヤマヒ　〔同疾病〕霍亂 クワクラン、

〔二中歴 十四病〕惡物　瘧類霍亂人

〔類聚名物考 病〕霍亂　しりよりくちよりこくやまひ 和名抄

是はもと病名にあらず、病者の狀態によりて名付しものにて、形を體とせしなり、揮霍撩亂とて、身を悶て手足を振まはすやうなる病狀をいへる詞なり、

〔異疾草紙〕霍亂といふ病あり、はらのうち苦痛さすがごとし、口より水をはき、尻より糞をもらす、悶絶顚倒して、まことにたえがたし、

〔醫心方 十一〕治霍亂方第一

病源論云、霍亂者、由人温涼不調、陰陽清濁二氣有相干亂之時、其亂在於腸胃之間者、因遇飮食而變發、則心腹絞痛、其有先心痛者則先吐、先腹痛者則先下利、心腹並痛者吐利俱發、挾風而實者身熱頭痛體疼、而復吐利、虛者但吐利、心腹刺痛而已、亦有飮酒食肉腥膾生冷過度、因居處不節、或露臥濕地、或當風取涼、而風冷之氣歸於三焦、傳於脾胃、脾胃得冷則不磨、不磨則水穀不消化、亦令清濁二氣相干、脾胃虛弱、便發吐利、水穀不消、則令心腹脹滿、皆成霍亂、霍亂有三名、一名胃反、言其胃氣虛逆、反吐飮食也、二名霍亂、言其病揮霍之間、便致撩亂也、三名走哺、言其哺食變逆者也、養生方云、七月食蜜、令人暴下發霍亂也、

〔叢桂亭醫事小言 三〕霍亂　中暑

霍亂ハ暍也ト云、暍ハ傷暑也、是ハ耕夫旅客ナド、炎天金ヲ鑠スホドノ大暑ニ力行シテ、眩暈暴絶レタ倒レナドスルノコトニテ、史記ニ禹扇暍ト見ユ、又淮南子ニ、武王蔭暍人于越下、左擁而右扇之ト云ナド皆傷暑ノコトナリ、霍亂ハ素問ニ出、病形ノ有樣ヲ以名付タリト諸書ニ見ユ、其形ハ腹痛甚ク、手足逆冷大汗出煩渇發熱、轉筋六脈細伏ス、是ハ老壯ノ別ナク、一晝夜ホドニ死生ノ有コ

腰痛

トニテ、俗ニ大霍亂トニ云、數剋苦メバ顏色痿、目上陷リ、半眼直視シテ遂ニ死ス、

〔小右記〕長德五年〇長保元年十一月十七日丙申、左府〇藤原道長自曉更俄惱給由、面々云々、午後參詣、依御物忌、以伊與守朝臣申入事由、今間頗宜、初惱體如霍亂云々、續參宮、御惱尚不快、女房云、此五六夜御寢如例者、秉燭退出、

〔醫心方六〕治卒腰痛方第七

病源論云、腎主腰、腎經虛損、風冷乘之、故腰痛也、又耶容於足大陰之絡、令人腰痛引小腹、不可以仰息、凡腰痛有五、一曰少陰、小陰腎也、十月萬物陽氣皆傷、是以腰痛、二曰風痺、風寒著腰、是以腰痛、三曰腎虛役用傷腎、是以腰痛、四曰槩腰、墮墜傷腰、是以腰痛、五曰寢臥、濕地是以腰痛、

〔今昔物語十五〕小松天皇御孫尼往生語第卅六

今昔、小松ノ天皇ノ御孫ニテ尼有ケリ、若クシテ□ト云フ人ニ嫁テ三人ノ子ヲ產セリ、其子共幼クシテ皆打次ギ失ニケリ、母此ヲ歎キ悲ムト云ヘドモ、甲斐无クシテ過ル間ニ、其ノ後幾ノ程ヲ不經ズシテ、亦其ノ夫失ニケリ、世ノ無常ナル事ヲ厭テ過ルニ、寡ニシテ人ニ近付ク事无カリケリ、而ル間念佛ニ道心發ニケレバ、遂ニ出家シテ尼ト成ヌ、其ノ後偏ニ彌陀ノ念佛ヲ唱ベテ更ニ餘思モ无シ、而ル間尼腰ニ病有テ起居ニ不叶ズ、然レバ醫師ニ問ニ、醫師ノ云ク、此レ身ノ瘦セ疲レタルニ依テ至ス所ノ病也、速ニ肉食ヲ可用シ、其ノ外ニ療治ニ不可叶ズト、尼醫師ノ言ヲ聞クト云ヘドモ、肉食ヲ用テ身ヲ助テ病ヲ愈サムト思フ心无クシテ、肉食スル事不能ズシテ、彌ヨ念佛ヲ唱ヘテ、極樂ニ往生セムト願フヨリ外ノ思ヒ无シ、而ルニ不療治ズト云ヘドモ、腰ノ病自然ニ愈テ、起居本ノ如クナリ、尼本ヨリ心柔儒ニシテ慈悲有リ、然レバ人ヲ哀ビ生類ヲ悲ブ事無限シ、而ル間尼年五十餘ニ成ル程ニ、忽身ニ少シノ病有テ惱ミ煩フ間、空中ニ微妙ノ音樂ノ音有リ、隣リ里ノ人此レヲ聞テ驚キ怪ブ間、尼傍ニ有ル人ニ告テ云ク、阿彌陀如來今來リ給テ、我

レテ迎ヘ給フ、我レ只今永ク此ノ土ヲ去ク、極樂ニ往生シナムトスト云テ、西ニ向テ失ニケリ、此レヲ見ル人涙ヲ流シテ悲ビ貴ビケリ、此ヲ聞ク人亦不貴ザルハ無カリケリ、此レ奇異ノ事也トテ、語リ傳フルヲ聞キ繼テ、此ク語リ傳ヘタルトヤ、

(小右記)長和五年正月六日辛亥、召使申、今日叙位議由、申剋許參內、陣座有饗、仍不着、諸卿〈左相府直廬、中宮御在所、〉諸卿會集出會云、相府不可、候參云々、早可始叙位議者、仍余率諸卿著陣座、大納言道綱卿稱瘧病、留相府直廬、〈下略〉

(台記)久安三年五月廿五日丁亥、御匣殿〈之〉買〈與日〉鄙、文書九合、〈法曹書二合、醫書二合、日本書五合、〉差筵二帖、〈一帖御前、一帖大內、〉御瘧發、被仰日、瘧疾、自一昨日大事、入夜見直不違誠、

(增鏡〈六おりゐる雲〉)明くる年は建長五年なり、正月十三日、御門〈後深草〉かうぶりし給ふ、御年十一、御諱久仁と申す、いとあてにおはしませど、あまりさゝやかにて、又御瘧などのあやしく渡らせ給ふぞ、口をしかりける、いはけなかりし御程は、なをいとあさましうおはしましけるを、閑院の內裏燒けけるまぎれより、うるはしくたゝせ給ひたりければ、內の燒けたるあさましさは何ならず、この御瘧のなをりたるよろこびをのみぞ、上下おぼしける、

(看聞日記)應永廿三年八月十九日、昌耆法眼參、自十四五日御所樣御瘧病、起居不叶、自夏比御不食之間、御憔悴無極、雖多御勞氣所發之由昌耆申、夏以來國阿療治中無効驗、此間高間良藥勾當局遣之、是も無其驗、此病共不相應之由昌耆申、御療治事被仰付了、

(倭名類聚抄〈三〉)陰顏 針灸經云、治陰顏方、〈顏音與頽同、一名下重、俗云曾比、〉令處頭下向陰囊縫、當頭所著處、灸其縫上七壯、卽有驗矣、

(箋注倭名類聚抄〈三〉)戶令、下重爲殘疾、義解、謂陰顏也、陰病顏腫、得陰卽發、卽大如升、沈重難行、故曰下重也、新撰字鏡癀國訓、谷川氏曰、疑是疝之義、万安方訓曾比布具利、今俗呼或偏、〈中略〉按千金方

癩病門、令雀頭下向著嚢縫、當陰頭、灸縫上七壯、卽消已驗、與此略同、山田本無陰嚢之陰字、與千金方合、似是、然陰嚢條引針灸經出是名、原書有陰字明矣、此無陰字非是、那波本七下有壯字、與千金方合、似是、按釋名、陰腫曰隤、氣下隤也、說文隤、下隊也、又云、穨禿貌、非此義、則全隤爲正字、作陰頹假借字也、

〔伊呂波字類抄 所人體〕陰頹ツヒ　㿗𤸷　下重巳上同

〔增補下學集 上二支體〕陰頹

〔令義解 二戶〕凡(中略)下重(謂陰頹也、陰核腫、得陰卽發、其大如升、沈重難行、故曰下重也、)(中略)如此之類、皆爲殘疾、

〔覆載萬安方 一〕一陰疝膀胱陰㿗(日本世俗曰疝紫病、書曰㿗病有四種、疝男子病也、疝氣卽通于男女、有七疝八疝也、)此四㿗、或云本藏氣、或云疝氣、或云腎氣、

〔瘍科秘錄 四〕腸㿗(○○)モ、㿗疝ノ一證ナリ、金匱ニハ陰狐疝ト云テ、蜘蛛散ヲ用フ、後世ノ方書ニハ、單ニ狐疝ト云リ、㿗ト云ヒ傳フレドモ、實ハ疝ニ非ズ、千金方ニハ巳ニ氣ガ附テ腸㿗ノ名ヲ立テタリ、和蘭ニテハ、ブレウクト稱シテ、尤能ク其因ヲ詳ニセリ、世醫ハ偏ニ疝ト心得、妄ニ鍼灸藥餌ヲ用フルコト捧腹スベキコトナリ、一體睪丸ハ腹ヨリ筋ノ出デヽ釣リ置クモノナリ、其筋ノ通ル孔大ニナルトキハ、腹墜下シテ、陰嚢ニ入リ、一度墜下スルト、癖ニナリテ、常ニ出ルヤウニナルナリ、小兒ノ夜啼、又百日咳ニテ努スルトキハ、必ズ腹㿗ニナルモノナリ、初テ出タル時ハ、痛小腹ニ引キ忍ブベカラザルホドノモノナリ、日ヲ經レバ孔モ熟路ニナルユエ、格別ニ堪ヤスシ、然レドモ邪魔ニナリテ、遠方ノ歩行ハナリ難シ、腸㿗輕クシテ常ニハ出ヌモノモ、遠方へ歩行スルカ、重キ物ヲ擔バ必ズ出ルナリ、患者ヲ仰臥ニシテ、陰嚢ヲ腹へ推込ムヤウニ揉ムトキハ、一時ニ聲ヲ成シテ入ルモノナリ、腸㿗ハ陰嚢ニ限ラズ、腿夾縫(ヱトコロ)へモ出ルナリ、若シ入兼ルトキハ、焮熱腫痛ヲ發シ、遂ニ膿潰シテ糞汁ノ瘡口ヨリ出ルヤウニナルモノアリ、恐ルベキコトナリ、一兒聲ヲ極メテ

人ヲ呼ブニ、陰嚢突起シテ大サ鵝卵ノ如クニナリ、痛ミ觸レ近クベカラズ、醫者兩三輩集リテ、急發ノ腸癰ナラントテ或疑決スルコト能ハズ、予診スルニ腸疝ユヱ、強ク揉ミ込ムニ、乍入テ常ニ復セリ、婦人ノ陰門ニ茄子ノ下ルト云フコトアリ、俗說保元ニ茄病ト名ク、大サ茄子ノ如ク、紫色ニテ茄子ニ彷彿タルモノナリ、是モ腸疝ト同病ニテ、産難ニテ努力セシ後ニ發ス、仰臥スルトキハ腹中ヘ入リテ、少シモ陰事等ヲ妨ゲズ、

〔病名彙解　三〕腸疝　陰疝ノ一病ナリ、房勞過度シ、腎ノ臟虛冷シテ、男根ハレ、カユキ證ナリ、

〔瘍科秘錄　四〕水疝　陰囊、囊癰、

疝ハ、素問ニ出デ、凡陰囊ノ大ニナル病ノ總名ナリ、水疝モ、其中ノ一證ニテ、蓄水陰囊ノ内ヘ注リ、日ヲ積ミ月ヲ累ヌルニ從ヒ、漸大ニシテ瓜ノ如ク、瓢ノ如クニナルモノナリ、全囊大ニナルモ偏囊大ニナルモアリ、大害モナケレドモ、起居歩行ニ便ナラズ、陰莖モ囊中ニ沒シテ、小便ヲスルニ不自由ナルモノナリ、甚大ナルモノニ至テハ、斗ノ如クニシテ、長ニ餘リ、皮モ瘡瘍トシテ堅硬ニ痿重クシテ引釣、其儘ニ置キ難ク、袋ニ入レ紐ヲ附ケ頸ニ懸テ置クモノアリ、俗多足ト云フ、偏墜或ハ兩脚腫タ色ヲ變ゼズ、痛痒モナク、終身ニ歩行ヲモ妨ゲズ、鍼灸藥餌寸驗ナク、生涯癒ザルモノアリ、是ハ水疝ト同因ナリ、香川太仲已ニ此說アリ、卓見ト謂フベシ、

〔病名彙解　三〕癲疝　疝氣ニテ陰丸ガ腫大ニナルコト也、俗ニソヘフグリト云リ、濕氣アル地ニ坐シ、或ハ石ノ上ニ坐シ冷ニアタリテ生ジ、又ハ胎病ニテ父ノ疝氣ヲ病子ハ、必ズ生ナガラ陰丸ガ大ナルモノ也、

〔理齋隨筆　二〕むかし七八十年以前に、東海道戸塚大陰嚢とて、名だかかりし乞食ありける、其後引續て予が長崎におもむきし寛政のころにも、岡崎驛にまたゝなる陰嚢の乞食ありて、旅人通行せる路傍に出て、陰嚢の上にたゝき鉦を置て、念佛申て錢をもらひ、世を渡るいとなみとせる者

あり、日暮て家にかへるには、彼のきんに紐をからげて結びあげ、肩に掛て戻ると、むかしの二代目なれと申たる有り、一とせ紅毛人江戸へ拜禮に來れる時、これを見て不便の事なり、水を取て愈しあたへんと、通事を以て申ければ、彼の乞食答へて、其の志の程は忝けれど、我は此陰囊の故を以て、今日錢を得て業に暮す也、今此陰囊人並になりては、却て飢渇に及べければ、此陰囊こそ我命の親なりとて、療治を受けずとかや、をかしき話也、

大陰莖

〔瘍科秘錄 四〕水疝 大陰莖 陽痿

陰莖太ク腫レテ瓜ノ如クニナリ、(包莖ノ者多ク之ヲ患フ)痛痒モセズ、但痿痺トシテ堅硬頑痺ルモノヲ赤林軒ニテ大陰莖ト名ク、是モ水疝ト同病ナリ、先年大陰莖ノ長サ尺許リノ者ノ觀物場ニ出シコトアリ、

足病

〔日本書紀 皇極二十四〕三年正月乙亥朔、以中臣鎌子連拜神祇伯、再三固辭不就、稱疾退居三島、于時輕皇子患脚不朝、中臣鎌子連曾善於輕皇子、故詣彼宮而將侍宿、

〔萬葉集 二〕同石川女郎更贈大伴田主中郎歌一首

吾聞之、耳爾好似、葦若末乃、足痛吾勢、勤多扶倍思、

右依中郎足疾贈此歌問訊也

〔日本後紀 嵯峨二十二〕弘仁三年九月丙子、況復時屬昇平、世返淳朴、或恩勵力、病斯懸車、頃來濕病彌積、衆踏眼精、兩脚強疼、行歩失便、内自省量、既知不可、在於物議、更亦何疑、若猶事慈愚、都迷止足、恐鼎不堪任、遂致覆餗、伏願辭罷官職、養疾私第、遙同葵藿、朝夕傾心、

〔空穗物語 菊の宴〕御がへりなし、大將のぬしいたくなげきて、はせにもうで給て、こほす事をかたうおほいなるぐはんをたて給て、七日ばかりこもり給て、ひごとに玄ゆきやうしつゝ、おもふ事なし給へらば、こがねのだうたてん、こむじきの御かたあらはしたてまつらむ、月に一どさうの

みあかし、いのらいあらんかぎりたてまつらんなど申給ていで給て、りうもむ、ひそ、たかまつはさるみたけまうでまのじてまうで給ふ、さるまゝに、さゝしきみちをあゆみもしり給はす、あゆみたまへば、御あしはれぬ、かくてもおぼす事のかたかるべきを心ぼそうおぼしつゝまうで給そ、ひおかるあめふりかみなりひらめきて、おちかゝりなんとする時に、右大將のぬし三條の北方頭中將よりも、あて宮にきこえさしてやみなんする事とおぼすに、なみだとゞまらす、おもはさる、それよりもかくきこえ給へり、

おもふことなすてふ神もいろふかきなみだながせばわたりとぞなる、ときこえ給へつゝあて宮み給て、物もの給はす、

(倭名類聚抄二)脚氣 醫家書有脚氣論、脚氣一云脚病、阿之乃介、

(箋注倭名類聚抄二)新唐書云、脚病論三卷、脚氣論一卷、蘇敬徐王等撰集、現在書目録云、脚氣論一卷、因國撰集、醫心方引蘇敬脚氣論、今皆無傳本、未知此所引何氏書、曲直瀨本醫家書有脚氣論七字、作病源論云、脚氣爲病、本因腎虚十二字、疑後人所改、河海抄所引與此同、病源候論、凡脚氣病、其狀自膝至脚、有不仁、或若痺、或淫々如蟲所緣、或脚指及膝脛洒々爾、或脚屈弱不能行、或微腫、或酷冷、或痛疼、或緩縱不隨、或攣急、或至困能飲食者、或有不能者、或見飲食而嘔吐、惡聞食臭、或有物如指、發於腨腸、逆上衝心氣上者、或擧體轉筋、或壯熱頭痛、或胸心忪悸、寢處不欲見明、或腹内苦痛而兼下者、或言語錯亂、有善忘誤者、或眼濁精神昏憒者、此皆病之證也、按脚病、見日本紀、空物語藏開下卷、權上卷、源氏物語若菜上卷、及本書廣本病名類耶角過饒阿之乃介、見空物語國讓下卷、藏開下卷、源氏物語夕霧卷、枕草子、

(伊呂波字類抄安人躰)脚氣 アシノケ、脚氣論、 脚病同 (同人躰)脚病 アシヤミ、

(撮壤集下病)脚氣 アシケ

〔倭訓栞前編阿二〕あしのけ　和名鈔に、脚病脚氣と見ゆ、あしのけのぼるといへるは、今の脚病衝逆をいふ、源氏物語、うつぼ物語などに、かくびやうといへるも、亦脚病の音なり、〇中略きや反かなり、よてかくびやうとも、かつけともよめり、後撰集に、

あしびきのやまひはすとも踏かよふ跡をば見ぬは苦しきものを

〔醫心方八〕脚氣所由第一

病源論云、凡脚氣病、皆由感風毒所致也、初得此病、多不即覺、或先無他疾而忽得之、或因衆病後得之、

蘇敬論云、夫脚氣爲病本因腎虚、多中肥溢肌膚虚者、無問男女、若瘦而勞苦、肌膚薄實、皮膚厚緊者、縦患亦無死憂、一差巳後又惡、久立冷濕地、多飲酒食麵、心情憂憤亦使發動、晉宋巳前名爲緩風、古來無脚氣名、後人以病從脚起初因腫滿、故名脚氣耳、

〔寶載萬安方一〕二十五卷

一　脚氣門　病源論十三卷出八證　　二　風毒脚氣

三　脚病腫滿左右脚或雙足腫謂之腫滿、　　四　脚氣心腹脹滿

五　脚氣衝心是頓死之大病、有脚氣之人預慎之、又急須治之、　　六　脚氣語言謇澀無快辯流言、謂之謇澀、

七　脚氣驚悸世俗云腎氣、此類也　　八　乾濕脚氣乾脚氣、痛而不腫也、四肢腫謂之濕脚氣也、

九　脚氣變成水腫　　十　脚氣大小便不通

十一　江東嶺南瘴毒脚氣　　十二　論脚氣冷熱不同

十三　論因脚氣續生諸病并灸法

〔喫茶養生記下〕脚氣病

此病發於夕之食飽滿、入夜而飽酒食爲厄、午後不飽食爲治方、是又服桑粥桑湯高良薑茶、奇特養生妙治也、新渡醫書云、患脚氣人晨飽食、午後勿飽食等云云、長齋人無脚氣、是此謂也、近頃人萬病稱脚

氣、尤愚也、可笑說、呼病名由不通病治、爲奇云云、

〔叢桂亭醫事小言〕脚氣

江戸ニ松井村庵ナル者脚氣論ヲ著シ、諸書ノ論ヲ輯メ評注シタルモノアリ、又源養德ナル者、脚氣辨方ヲ著シ廣ク脚氣ノ方ヲ輯メタリ、二書ニテ療治ノスムト云ニハ非ズ、此二人本邦ニテ脚氣ヲ唱ヘ始タルニ非ズ、脚氣ノ世ニ唱ル人ノ多キ故ニ、思付テ著述シタルナラン、脚氣ヲ說キ、初テ其治ニ妙ヲ得タリト云シハ、東洋先生ナリトゾ、サテ又脚氣ハ、公侯富貴人、常ニ膏粱ヲ食シテ身ヲ勞セヌニ作ルト云、是モ一因ニハアレドモ、又貧賤ノ人ニモアリ、必膏粱ノミデ作ルトカギルベカラズ、傷寒ノ後、或ハ熱氣、又ハ痢ノ後、產後ニモ作ル、又下痢ヲ患テ後ニ多ク作ル、骨疼ナリトテ治ヲ誤ルコトアリ、眼ヲ付テ見ルベシ、

〔雜病記聞三〕脚氣

脚氣ノ理ヲ考フルニ、七個條ノ他病ニ異ナルコトアリ、此異ナル所ニヨリテ、其理ヲ考ヘ明ラムベシ、七個條ト云フハ、脚氣ハ四五月ノ頃ヨリ發リテ、梅雨ノ頃最モ多ク、八九月迄ノ病ナリ、寒氣ノ時ハ發ユルコトナク、秋九月頃ニ至レバ、自ラ愈ユルモノナリ、是一ツナリ、脚氣ハ京都江戸ニ多クシテ他邦ニ病ムモノ稀ナリ、是二ツナリ、脚氣ハ脚ノミ先軟脚麻痺シテ、手臂面部腹背ニ異ナシ、是三ツナリ、脚氣ハ飲食モ常ノ如クニシテ減ズルコトナシ、是四ツナリ、脚氣ハ寒熱ナシ、是五ツナリ、脚氣ハ王公貴人ニ稀ニ、又屠夫下賤勞動ノ者ニ多ク、唯江戸ニテハ侯國ノ武士勤役ニ來リ居ルモノニ最多ク、格別身ヲ勞セザル商賈ニ在リ、京ニテモ商賈ノ手代或ハ終日坐シテ働カザル職人、又ハ他邦ヨリ來リ居ル書生等ニ甚多シ、是六ツナリ、脚氣ハ病ムトイヘドモ惱ム所ナク、無病ノ者ノ如クナルニ、一旦俄ニ衝心スルニ至テハ、必死ノ病ニシテ、鍼灸藥劑絶ヘテ効ナシ、是七ツナリ、二中

脚氣ノ京江戸ニ限リテ多キコトハ、是大都會ノ地ハ、人民甚ダ多ク、大小便ノ不淨ナルヨリ、厠下ノ腐穢ノ滿リニ至ルマデ甚ダ多ク、土中ニシユミ透リ居ルニ、人家モ甚多ク、土藏ナド相ナラビ、少シノ空地モ稀ニシテ、風ノ通リ日ノ照ラシ惡シキ故ニ、濕氣多キナリ、大坂ハ大都會ナリトイヘドモ、海濱ニテ、砂地ユヘニ、濕ヲ含ミ蓄ルコトナク、川筋モ多ク、汚濁日夜ニ流レ去テ海ニ入ル故ニ、土地ニ濕氣ナシ、雨後ナドニテモ、雨サヘ止ムトキハ、卽時ニ道路乾クニテモ知ルベシ、京ナドノ水サバケ惡シク、土地小石交リノ黑土ニテ、濕氣甚含ミ、蓄ヘ易ク、雨後ナドニテモ、急ニハ道路ノ乾キ難キニテモ知ルベシ、江戸モ全體ノ土地海泥ニテ、井ナドモ僅ニ數尺掘レバ水甚近ク、殊ニ水道蜘蛛網ノ如ク、人家ノ下ニ縱橫シテ、常ニ水ヲ蓄ヘ、大川アリトイヘドモ、大坂ナドノ川ニハ異ナリテ、海潮往來シテ、汚濁流レ去リ難シ、大小便ナドモ、軒下ノ溝ニ流シ捨ニテ、他邦ノ如ク、田畑近カラザレバ、農民是ヲ取ルコトナクシテ、皆人家ノ地中ニシユミ付居ル故ニ、其土其水皆甚肥テ、膏腴氣ノ多キ故ニ、下流ノ海中、淺草海苔ナドノ如キ、美味ノ海苔ヲモ生ズルナリ、京ナドモ土地ニ膏腴ノ氣多キコトハ、下流ノ東寺村九條村等ノ畑ヲ見ルニ、溝ノ水ヲ濺ギカケルノミニテモ、黑土ニ青黴ヲ生ジテ、芋、水菜、葱ノ類肥フトリテ、味ノ美ナルコト天下ニ冠タリ、

〔牛山活套上〕中濕

今時仕官ノ人、或商人モ東武ニ至リテ鬱氣シ、足膝痿輭ニシテ、面目虛浮シ、飮食不進者ヲ、俗ニ江戸煩ト云、是皆水土ニ服セザルノ類也、故鄕ニ歸ルトテ箱根山ヲ越レバ、多ハ其病不治シテ自ラ平服ス、牛山、嚮ニ官ニアル時、江戸ニテ西國ノ諸侯ノ屋敷ヲ見聞スルニ、何ノ所ニモ此病アラズト云コトナシ、多ハ不換金正氣散ヲ用テ宜、虛鬱ヲ挾ム者ハ必ズ死ス、濕ヲ治シテ不愈者ハ、必速ニ故鄕ニ歸ラシムベシ、箱根ヲ越レバ自ラ愈ル也、一奇事ノ病也、國牧ノ傳醫タラン者知ラズンバアルベカラズ、

〔研醫題我書上〕脚氣ハ六七十年以前ハ甚ダ少ク、偶患ル者アリト雖ハ篤志ノ生徒ナド執ヒノ醫ヘ紹介ヲ乞テ往診セシホドノコトナリシト老醫ノ話ナリ、シカルニ三四十年來ハ上王公ヨリ下小民ニ至ルマデ夏秋ノ際ハ殊ニ夥ク寒心スルモノ亦少カラズ、風會ノ移遷スルユヱナラン、但近年ハマタ前年ニ比セバ甚多カラザルニ似タリ、

〔脚氣提要上〕總論

文化甲子ノ夏天、恒陰ヨリモ大ニ熱ス、然ニ中暑ノ病稀ニシテ、更ニ秋ニ至リテモ、瘧痢ノ病亦少シ、八月ヨリ冬ニ至ルニ及ンデ、脚氣ノ病大ニ流行ス、是レ全ク暑濕ノ邪、既ニ脚ニ客トナリタルガ、寒冷ノ氣ニ觸ル、ニ至テ發スル者ニアラズヤ、是レ近來衆人親シク見知ル所ヲ以テ證スルノミ、然レドモ本閒病アツテ閒證ナシ、發スルニ因時ノ不同アリ、初學ノ徒偶一方ヲ處シテ、一病ヲ治スレバ、イツニテモ此方ニテ治スルト心得ルハ、所謂株ヲ守テ兎ヲ待ツノ類ヲマヌカレズ、兎角古人ノ規矩ヲトリテ、其ノ年々氣運ニ隨ヒ折衷シ、手段ノ工夫ヲナス時ハ、自ラ發明スルコト多ク、吾ガ言ノ謬ザルヲ知ルベシ、今世千金外臺ヲ唱フルモノアレドモ、實ニ的中ノ治ヲ施ス者ヲミズ、適々トシテ皆偶中ノミ、而シテ自ラコレヲ以テ得タリトシテ、殊ニ千金外臺ノ名ヲ汚ス、豈カナシカラザランヤ、

〔東門隨筆〕一脚氣ノ病ハ、唐王燾ガ外臺秘要ニ精ク見ヘタリ、二十五六年巳前マデハ、民間モ甚稀ニ醫人モ不心付故ニ脚氣病ヲ知タル者ナシ、予〈東門山脇〉ガ父此書ヲ鑑別シテ、脚氣ト云コトヲ說初シヨリ、世上ニ脚氣アルコトヲ知タリ、故ニ世俗ハ新病ノ出來タルト心得タル者多シ、醫人モ其理殊ニ疎カリシガ、年ヲ經タルユヘ、今時ハ少シハ療法モ覺ヘタレドモ、ハカバカシクモナシ、但此病俗間ニ濕脚氣溫脚氣ナド云トハ、大ニ相違シタリ、サレド濕脚氣ナドハ脚氣ノ一證ニテ、其輕キ時アルコトニテ、痺攣ヨリヲコレルコトナリ、全體脚氣卒發ノ二證アリ、卒ハ十ニ九ハ數

得ガタシ、此病初夏ノ比ヨリ初冬ノ頃マデ有モノニテ、其餘ハナシ、外臺秘要蘇長史論曰、凡脚氣病多以春末夏初發動、得之皆因熱蒸、情地憂憤、春發如輕、夏發更重、入秋小輕、至冬自歇、大約如此、亦此時有異於此候者ト云ヘリ、此格論ナリ、醫此病ニ疎キユヘ、晩冬初春ニモ衝心ノ病ニテ、浮腫サヘアレバ脚氣トオボヘ、療スルコトナリ、不穿鑿ナルコトナリ、金匱要略脚氣冲心ト云ニ、礬石散ヲ湯中ニ投ジ浸脚ノ法アリ、其他外臺ナドニモ、杉木湯ニテ觜脚ノ方アリ、甚快キモノナリ、千金方ニモ、脚氣論有テ竹瀝ヲ多用ヒタリ、サレド脚氣ハ外臺ニテ盡シタリ、其他古書ニモ、左傳成公六年、獻子曰、民愁則墊隘、於是乎有沈溺重膇之疾、ト云ルコトアリ、此土薄水淺ヨリ出タル病ナリト、此脚氣ニ類シタル者ナランカ、又呂子重己篇ニ、室大則多陰、室高則多陽、多陰則蹷、多陽則痿比蹷、ト云タルモ亦脚氣ナラン、又源氏物語、枕草子ナドニ、脚氣ノボルト云、又ウツボ物語カクビヤフナド云タルモ皆此病ナリ、此等ノ言ニテ見レバ、本邦ニモ古人ハ明辨シテ、療スルコトモ覺ヘ居タランニ、世ノ變遷ニツレ、カヤウノコトモ廢シタルト見ヘタリ、

〔脚氣鉤要序〕脚氣、晉宋以前名爲緩風、晉宋呼爲脚中、見王義之及羊欣書、至脚氣之稱、蓋始見梁武帝書、曰數朝脚氣轉動不得是也、唐人或謂之軟脚病、論其病因、孫王二家之言爲至備、而其最古而盡者、唯左氏爲然、曰沃饒而近鹽、土薄水淺、於是乎有沈溺重膇之疾、蓋此疾不於山岡起伏水泉湍急之境、而必於濱海衍沃水泉重濁之際、不於攻苦食淡之徒、而必於安坐玉食之人、唐人稱爲江南之疾、韓昌黎曰、是疾也江南之人常々有之、柳子厚之貶永州也、亦曰昏眊重膇意以爲常、孫子論脚氣曰、魏周之代無此疾、魏周皆在江北故也、太史公稱楚越之地宜海爲鹽、飯稻羹魚、地勢饒食、不待賈而足、以故皆窳說者曰、呰弱也、窳病也、羸弱而足病也、則江南之多脚氣、秦漢既然、而左氏之言於是乎蓋驗矣、其在我也、唯江戸稱最多此疾、而京攝次之、意者江戸地勢、大較與江南相類、而士民之衆、魚鹽之饒、百貨之富、蓋有過無不及也、此則地勢之偶相類、乃情狀之所以相同也歟、夫江戸既稱脚氣最多、則我輩爲人、

之司命者、不宜不講明之於平日也、是今村氏所以有瓠要之選也耶、〈中略〉

文久紀元歳次重光作噩夏五月朔　江戸侍醫法眼栄恵丹波元佶撰

〔日本後紀 十九 下略〕大同三年十二月甲子、東山道觀察使正四位下兼行右衛士督陸奥出羽按察使藤原朝臣緒嗣言、〈中略〉又臣雖無病、強勇如常、〈中略〉因彼奥郡庶民、出走數度、儀乘隙作梗、何以支擬、臣生年未幾、積病稍頻、復患脚氣、發動無期、此病在積、遂至殞命、若不許賜退、猶任其事、〈下略〉

〔拾遺集〕神樂歌者には奈良の都のふる歌よみときえらび奉りし時には、すこしくれ竹のよこもりて、竹木をたのむおりも侍りき、今は草の庵に難波の浦のあしのけにのみわづらひてこもり侍れば、すゞてかれ身の引人もなぎさにすてられおかれたらん心ちなんしける、か、るうちにもこのとしごろは、

まらけゆくかみには霜やおきな事ことのはもみなかれはてにけり

〔源氏物語 少女 十九〕わたり給はんとて、〈中略〉御ひたひがみのぬれまろがれたるひきつくろひ、〈中略〉むちみいみじうなやましきかな、やがてなをらぬさまにもなりなば、いとめやすかりぬべくこそ、おしあけみのぼりたる心ちすとをしくださせ給ふ、

〔源氏物語 總角 三十下〕春の比はひよりも、例もわづらひ侍る、みだりかくびやうといふもの所せくおこりわづらひ侍て、はか〳〵しくふみたつることも侍らず、月比にそへてしづみ侍りてなん、内などにも參らず、

〔落窪物語 三〕日のふるまひに、たふときまされば、末ざまには人々も上達部も參りこん中に、五の巻の捧物の日は、よろしき人より始め、消息を聞え給へりければ所いとせばげなり、捧物の事も兼て給ひければ、裝束や珠數やうの物は多くもて集りたるに、取りて奉らんとするほどに、右の大臣の御文大納言殿にあり、見たまへば、今日だにとぶらひに物せんと思ひつれども、脚の氣お

こりて、裝束する事の苦しければなん、これはまるしばかり捧げさせ給へとてなん、とあり、靑き瑠璃の壺に黄金の橘入れて、靑き袋に入れて五葉の枝につけたり、

〔吾妻鏡三十一〕嘉禎二年四月六日壬辰、巳剋前駿河守從五位下藤原朝臣季時法師法名行阿卒、去月廿七日以後病惱、時行與脚氣計會云云、

〔晃陽漫錄〕脚氣腫滿

近年流行する脚氣腫滿、我國の古にもありしにや、東鑑にあり、其文左の如し、

入道從四位下行遠江守平朝臣朝時卒、法名生西五十三、歛月腫脚氣瘇病等云々、

〔倭名類聚抄病三〕瘇　毛詩注云、腫足曰瘇、唐韻時種反、足病也、辨色立成云、於賣岡志、此間云古比、又云畀濕之地、其人多瘇、

〔箋注倭名類聚抄病二〕所引小雅巧言篇毛傳文、原書曰作爲、爾雅釋訓腫足爲瘇、毛氏蓋本之、山田本穴作種、那波本同、按時穴與廣韻合、時種與玉篇合、字異音同、然此引唐韻作穴爲是、廣韻、足病也、作足腫病、按謂人作退爲於米留、瘇足人不能疾進、故名於米阿之、或曰、重足之轉、古比見蜻蛉日記、今駿河俗呼古比波知、蓋古比阿之之譌、○中略所引巧言篇鄭箋文、原書作此人居下溼之地、故生微腫之疾、按說文、瘇、脛氣足腫、籀文从尣、病源候論、瘇病者自膝已下至踝及趾俱腫直是也、

〔春秋左傳二十六成公〕六年、韓獻子曰、如何、對曰、不可、郇瑕氏土薄水淺、其惡易覯、易覯則民愁、民愁則墊隘、於是乎有沈溺重膇之疾、不如新田土厚水深、居之不疾、有汾澮以流其惡、且民從敎、十世之利也、

〔醫心方八〕治足瘇方第十六

病源論云、瘇病者、自膝已下至踝及指俱腫直是也、皆由血氣虛弱而耶傷之、經絡否澀而成、亦言江東諸山縣人多病瘇云、彼土有草名瘇草、人行誤踐觸之、則令病瘇也、

〔倭名類聚抄病三〕轉筋　脚氣論云、轉筋、俗云古無良加倍利、一云加良須奈倍利、由脚弱所生也、

〔箋注倭名類聚抄病二〕山田本注首有俗云二字、那波本同、按古无良加倍利、見康中抄、腓轉之義、那波

轉筋

鶴膝風

本草作䉙、按疑鈔上文偶脱、類聚名義抄、伊呂波字類抄皆作女、曲直瀨本脱米字、亦非、今信濃俗呼加良須加倍利、或說乾筋轉之義、○中略 按病源候論、凡脚氣病、由感風毒所致、其狀或脚屈弱不能行、或身體轉筋、又轉筋候云、轉筋者、由榮衞氣虛風冷氣搏於筋故也、轉者謂其轉動也、又霍亂轉筋候云、霍亂而轉筋者、由冷氣入於筋故也、此引脚氣病論云、由脚弱所生可疑、

〔增補下學集 上二 疾病〕轉筋（由脚弱所生也）

〔二中歷 九 呪歷〕轉筋時呪　木瓜々々

今按、尤實木瓜者食事、以呼木瓜食療之御意、

〔喫茶養生記 上〕五脚氣病 ○中略

近頃人萬病稱脚氣、尤愚也、可笑哉、呼病名而不知病治、爲害云云、

已上五種病皆末世鬼魅之所致也、○中略 近年以來、五體身分病皆冷氣也、其上他疾相加、得其意治之皆有驗、今脚踵并脚氣、是又冷氣也、

〔類聚名物考 疾病 一〕鶴膝　くわくしつ　鶴膝風は足のやせ肉落て、鶴のはぎの如くなる病なり、

〔揚子方言 八〕凡羊裝細如鶴脛者、謂之鶴鄭、（今江東呼爲鈴釘）

〔諸病源候總論 四十八〕鶴節候

小兒稟生血氣不足、卽肌肉不充、肢體柴瘦、骨節皆露、如鶴之脚節也、

〔叢桂亭醫事小言 四〕鶴膝風 ○中略

鶴膝風ハ甚タ治シ難シ、廢人ニナルモノ多シ、早ク鍼シテ惡汁ヲ去ルベシ、又燒酒ニテ蒸ス、針ハ外科ノ上手ニ任スベシ、膝頭ヲ按ズレバ、惡汁ノ有ハ指下ニヒヾキテ自然ニ水勢アリ、鍼ハ膝內邊ヨリ入ルヽナリ、惡汁ヲ取リテモ歩行ナリカヌルモノ有レドモ、惡汁ヲ取ラズニ廢人ニナル故、惡汁ヲ取ヲ正法トス、萬一ニ全快ヲ望ムベシ、燒酒ニテ日々蒸ス、又濁酒未漉モロミへ生牛膝

根ヲ加ヘ、煮テ布ニ包ミテ日々蒸且服スベシ、

〔瘍科秘錄 三〕附骨疽○中略

又鶴膝風ト云フモノアリ、膝腫ヲ疼ミ、色ハ變ゼズ、寒熱交作、久シキ時ハ腿ト脚ト肉脫シテ細クナリ、膝ノミ愈大ニナリテ、鶴脚ノ如クナルナリ、腫タル處ヲ押テ見ルニ、軟ニシテ、何カアル樣ニ、手對ノアルモノナリ、鍼ヲ兩膝眼ヨリ刺ス時ハ、瘀水ノ出ルモアリ、稀膿ノ出ルモアリ、出テ後ハ腫消スレドモ、又漏ト成テ、朽骨ノ出ルコトアリ、此等ノ證ハ、各名ハ異ナレドモ、皆附骨疽ニ屬ス、流注ハ深ク膿モノ故、治シソコネル時ハ、附骨疽ニ成ルモノ多シ、鼻淵ヲ長ク患ヒテ、朽骨ノ大サ豆ノ如キモノヽ出シコトアリ、何腫瘍ニテモ、久シク愈ザル時ハ、皆附骨疽ニ變ズルナリ、

〔牛山活套 中〕鶴膝風

脚氣ノ變ジテ、必鶴膝風トナル多シ、或ハ傷寒暑濕ノ邪氣脚膝ニ滯リ、或ハ大病ノ後氣血虛弱足膝ノ氣虛弱ナルニ、風濕ノ邪虛ニ乘ジテ此症トナル者多シ、或ハ痛風久ク不愈、足膝力ラナク膝節腫痛シ、胻瘦テ鶴膝トナル類ノ者多シ、或ハ大人小兒共ニ、痢病ノ後ニ此症ヲ發スル者多シ、或ハ小兒癖疳久ク不愈、疲極ヲ此症トナル者多シ、ヨク〳〵其病因ヲ考テ治ヲ施スベシ、

鶴膝風ト見ヘテ、膝ノ曲腫痛、脛胻瘦テ柴ノ如ナルニ至テハ、先ヅ大防風湯ヲ用テ加減スベシ、方考大防風湯ノ條下ニ、加減委ク註スル也、多ハ効ヲ取ナリ、

〔病名彙解 四〕鶴節(カクセツ)　病源ニ云、小兒稟生血氣不足シ、卽チ肌肉肢體柴ノ如クニ瘦、骨節皆露レテ鶴ノ脚節ノ如クナルト也、

〔神皇正統記 後醍醐〕後二條の一の御子邦良の親王居給ふべきかと聞えしに、おぼしめす故ありて、此親王を太子にたて給ふ、彼一の御子おさなくましませば、御子の儀にて傳へさせ給べし、若邦良の親王早世の御事あらば、此御すゑ繼體たるべしとぞ志るしをかせまし〳〵ける、彼親王、

筋絡に而病ありて、あやうくおぼしめしける故なるべし、

〔療治談〕養生所へ甲戌〈文化十一年〉十一月十日來病人之事

本郷春木町三丁目嘉右衞門店

安五郎〈戌四十二歳〉

右之者、戌七月便毒を煩ひ、平愈の後に陰毛中へ、大豆程なる腫物出來、膏藥にて早速に愈たり、其後骨痛を發し、養生所へ願出、逗留罷在の所、十一月十五日、湯風呂屋の緣側にて、尻餅をつよくつきけるが、いさゝかのさはりもなく、入湯いたし、部屋へ歸りふせりけり、其夜小便に起立しに、頸骨がたくからくみしくとつよき音いたし、痛つよく眩暈し、それより起臥出來かね、おきあがると、頭がまへにたれ下るにより、頭杖を兩手にてつき、頭を抱へ起坐す、食事の時は横にふし、左を下にし喰なり、頸骨三つの內、中の節くじけし樣に覺ゆるよしを申聞る、十二月中旬に至り、痛むよく兩便常の如く、食事よく氣力もよし、頭の前へたれ下るの病ひのみになれり、醫經に、大椎骨の上の三節を頸骨とし、大椎より下を背骨とす、顯然たる理なり、此病人全く頸骨の離れしもの也、

〔嚴氏濟生方二〕歷節風

論曰、歷節風者、由血氣衰弱、爲風寒所侵、血氣凝澁、不得流通關節諸筋、無以滋養、眞邪相薄、所歷之節、悉皆疼痛、故謂歷節風也、痛甚則使人短氣、汗出、肢節不可屈伸、

〔內科秘錄四〕歷節風　白虎歷節風　痛風

歷節風ハ古名ニテ金匱要略ニ載ス、後世ニ至リ痛風ト通稱ス、丹溪ノ格致餘論ニ痛風ノ論アリ、然レバ痛風ハ元以降ノ名ナルベシ、素問痺論ニ所謂痛痺、行痺ハ蓋シ痛風ノ類ナリ、白虎歷節ハ外臺及三因方直指方等ニ出ヅ、其病狀白虎ニ咬ルヽヤウニ疼ムニ因テ名ヅケタルナリ、

其因、古ヨリ風寒濕ノ三氣ニ中リテ發スルヤウニ說キ來レドモ、凡ソ外感ノ諸病ハ、獵漁耕牧或ハ商旅等ニテ、風雨寒冷ヲ冒シテ後ニ病ムモノ故、臆度シテ三氣ニ屬シタル者ナルベシ、此邪必ラズ關節ニ著キ、又遊走スル所ニ由テ考ルニ、是モ亦一種ノ雜氣ニシテ、疸黃ノ肝膽ニ入リ、脚氣ノ筋ニ著ト同ジナルベシ、

〔牛山活套上〕痛風

痛風ハ、遍身骨節走注疼痛スル也、痛風ノ脈、多ハ浮濇ニシテ緊ヲ見シ、又ハ沈弦也、

〔病名彙解三〕痛風(ツウフウ)　遍身骨節走リ注テ疼痛スルナリ、皆氣血風濕痰火ノナス所ナリ、其ハナハダシキモノヲ白虎歷節風ト云リ、

〔叢桂亭醫事小言四〕痛風　鶴膝風

痛ムモノハ風濕ニ屬スコト古來ノ說也、故ニ痛風ハ治療ニ發散ノ意ヲ帶テ方組アル也、金匱ニ歷節トアリ、此病濕ニハ屬スレドモ瘀血ノアル人ノ疾也、手足共ニ痛アリ、

古事類苑

方技部十六

疾病二

(倭名類聚抄二)瘡　唐韻云、瘡(音倉、和名加佐)痍也、痍(音夷、和名岐須)瘡也、瘢(音盤、和名加佐乃阿止)瘡痕也、四聲字苑云、痕(戸恩反、和名上同、一云岐須阿止)故瘡處也、廣雅云、痂(音家、和名加佐布太)瘡上甲也、

(箋注倭名類聚抄二)按廣韻、瘡作十陽創、創在十一唐、此以倉音瘡恐誤、醫心方同誤、按瘡必有痛、如人之痛處、故名加佐、(中略)廣韻創、說文曰傷也、瘡上同、玉篇、瘡、瘡痍也、釋名、創、戕也、戕毀體使傷也、按瘡有瘡瘍瘡痍二義、景行紀云、天皇與大碓皇子於瘡、又瘡瘍死者、充盈於國、是瘡瘍故訓加佐、神武紀云、矢瘡痛甚、是瘡痍故訓岐須、類聚名義抄引兩訓之、非是、(中略)仁德紀同訓、(中略)廣韻、痍、瘡痍、按說文、創痍並訓傷、故孫氏瘡痍互訓也、釋名、痍、侈也、侈開皮膚爲創也、(中略)昌平本下總本作音夷、並與廣韻合、醫心方創瘢訓加佐乃阿止、(中略)廣韻同、按玉篇、瘢、瘡瘢也、孫氏蓋依之、說文、瘢、痍也、釋名、瘢、漫也、生漫故皮也、(中略)醫心方痕阿止、岐須、岐須阿止三訓並載、下總本岐須作岐須非、(中略)說文、痕、胝瘢也、玉篇、痕、瘢痕也、玄應音義引通俗文云、創瘢曰痕、即此義、釋名、痕、根也、急相根引也、(中略)廣雅釋詁、作痂、創也、按顏師古急就篇注云、痂、瘡上甲也、與此所引文合、南史劉邕傳、邕所至嗜食瘡痂、即是也、說文、痂、疥也、段玉裁曰、痂本謂疥、後人乃用爲瘡所蛻鱗、蓋痂此古義今義之不同也、

(倭名類聚抄三)膿　四聲字苑云、膿(音農、和名宇美、又云宇美之留)腫汁也、說文云、膿腫血也、

(箋注倭名類聚抄二)山田本訓作俗云、恐非、那波本作和名、曲直瀨本字无作字美、按上文膿腫、下文

瘨疹痛痒、所レ謂皆用語、非二體語一、此亦應レ同、作二字美一恐非、昌平本、下總本、無下注云字上、按、宇美之留、醫心方、靈異記、訓釋同、○中略 釋名、膿醲也、汁醲厚也、○中略 所レ引說文血部文、原書膿作レ𦞦、又有二膿字一、云俗𦞦从レ肉農聲、按玉篇、膿農同、故膿亦作レ𦞦、

〔伊呂波字類抄　宇病疾〕膿ウミシル、ウム、ウグタ、膿汁也、

〔増補下學集　上二支體〕膿ウミシル

〔伊呂波字類抄　加人體〕瘡カサ亦作レ創　初良　鮮同已上　瘢カサノアト、カサトコロ、　痕同カサト　痂カサアメ、瘡痂也、　瘍音羊　戈、又作レ疵、瘡同、匹鄙反、カレフカサ、瘡痂用也、

〔増補下學集　上二支體〕瘡カサ　瘢カサアト

〔壒嚢抄　三〕カサノ類

疕カサ　瘙カユシ　瘙同　瘤シイチ　附贅フスベ　𤺌モニカサ　瘨ウルム　疹ヒソ　皸アカヽリ　胗タザヒイ　胗同　黑子ハクソ、ハウクロ　痤ニキビ　疻カサフタ　瘢カタチ　疥癬ハタケ　眊目イラノメ　代指ツマハラシ　瘡除ヲニハタル　風瘡除カザホロシ

常ニ疼ヲヒヾニ用、是疹ノ字ヲ誤ル僻字也、又ハ胗ト書、說文ニ云、疼ハ徒冬反、疹之忍反、皮ノ外ニ小シ起ル病ト注ス、是ヒヾ成ルベシ、冬アル故ニ疼ヲモヒヾニ用ル歟、瘤ヲコブトヨム、人ノコブ也、又ハ疣ヲ用ユ、馬ノコブニハ脊瘡ト書ク、瘤ノ字ヲバ無レ痛腫ヲ謂レ瘤ト云ヘバ、コブシイチハ痛ナキ病ナレバ叶ヘルヨミ也、是等ノ字皆瘡ノ類ヒ也、

〔沙石集　三上〕忠言有レ感事

百喩經ニ云、昔ヲロカナル男有リ、人ノ聟ニナリテユキヌ、サマ〳〵ニモテナセドモ、ヨシバミテイト物モクハズ、飢テ覺ケルマヽニ、妻ガアカラサマニ立出タルヒマニ、米ヲ一ホウ打クヽミテ、クハントスルトコロニ、妻カヘリキタル、ハヅカシサニ面ウチアカヲメテキタリ、ホウノハレテ見へ給バ、イカニト問ヘドモ、物モイハズイヨ〳〵面アカミケレバ、ハ。レ。物。ノ大事ニテ、

物モイハヌニヤト思テ,又母ニツゲヘシレバ,來テアレハイカニ〳〵ト問ニ,イロ〳〵ハブカシテニ,ムカアカミタリ,國ノ者ミナアワマリテ,靈殿ノハレ物ノ大事ニオハスルアサマシキ事カナト語ヒケリ,イカナマニモ大事ノ物ニコソトテ,醫師ヲヨビテ見スレバ,ユヽシキ大事ノ物ナリ,急ギ療治スベシトテ大キナル火針ニテ,ホウヲヤキヤブル,朱ホロ〳〵トコボレテ,ハワガマレキ事カギリナル,

〔日本書紀二十敏達〕十四年三月丙戌,天皇思建任那,差坂田耳子王爲使,屬此之時,天皇與大連卒患於瘡,故不果遣,詔橘豐日皇子曰,不可違背考天皇勅,可勤修乎任那之政也,又發瘡死者充盈於國,其患瘡者言,身如被燒被打被摧,啼泣而死,老少竊相謂曰,是燒佛像之罪矣,　六月,馬子宿禰奏曰,臣之疾病至今未愈,不蒙三寶之力,難可救治,

〔萬葉集五〕太宰大監大伴宿禰百代等贈驛使歌二首幷序略以天平二年庚午夏六月,帥大伴卿忽生瘡脚,疾苦枕席,因此馳驛上奏,望請庶弟稻公姪胡麻呂,欲語遺言者,勅右兵庫助大伴宿禰稻公,治部少丞大伴宿禰胡麻呂兩人,給驛發遣,令省卿病,而逕數旬,幸得平復,于時稻公等以病既療,發府上京,於是大監大伴宿禰百代,少典山口忌寸若麻呂,及卿男家持等,相送驛使,共到夷守驛家,聊飲悲別,乃作此歌,

〔榮花物語入にっき〕花山院いみじうわづらはせ給ふ,いみじうあはれいかにときゝたてまつるほどに,御かさの熱せさせ給ふなりけり,

〔權記〕長保四年五月六日辛丑,花山院自觀音院還給,仍參候,會比叡辻供奉,右金吾同被候,召彈正宮,事訖入道納言,爲時眞人,正權朝臣等參候,正權針宮御腫物,膿汁一斗許出,各給疋絹,　六月十三日丁丑,丑剋許,惟弘來云,彈正宮薨給云々者,　十五日己卯,權天文博士奉平宿禰來示云,去九日,月犯心後星,是庶子可愼,其後不幾而彈正親王薨去給,中略年廿六,去年冬十月受病之後,數月惱煩,遂

以逝去給、

〔榮花物語七鳥邊野〕彈正宮(冷泉皇子爲尊親王)うちはへ御よありきのおそろしさを、よの人やすからずあひなき事なりと、さかしらに聞えさせつるに、ことしはおほかたいとさはがしう、いつぞやのこゝちして、みちおほぢのいみじきものどもおほかり、かゝるものどもをみすぐしつゝ、あさましかりつる御よありきのしるしにや、いみじうわづらはせ給てうせ給ぬ、このほどは新中納言、いづみ式部などにおぼしつきて、あさましきまでおはしましつる御心ばへを、世のうきものにおぼしつれど、うへ(〇九君)はあはれに覺しなげきて、四十九日の程にあまに成給ひぬ、(〇中略)かくて彈正宮うせさせ給ぬと云事、冷泉院はのきこしめして、世にうせじ、ようもとめばありなむものをとぞの給はせける、あはれなるおやの御有樣になん、

〔大日本史九十四皇子〕爲尊親王(〇冷泉皇子、中略)、長保四年六月、以疾薙髮、尋薨、(日本紀略、一代要記)年二十五、爲尊甚好色、通攝政伊尹女、(榮華物語)逢納爲妃、(榮華物語、大鏡)又與宮女和泉式部姦、毎夜微行荒淫、因感疾至不起、帝聞訃歎曰、若求速死、其豈無術邪、(榮華物語)

○按ズルニ、爲尊親王ノ病ハ、權記ニ據レバ腫物ナリ、然ルニ榮花物語ニハ、夜行シテ時疫ニ感ズルモノトス、大日本史ハ榮花物語ニ據リテ荒淫ニ因ルトス、少カ其文意ヲ誤解スルモノニ似タリ、

〔小右記〕寬仁二年三月十九日壬子、申剋許、內供自天台來、爲訪申老尼腫物、澄源師云、今日見瘡體、可難治歟、

萬壽二年七月廿六日丙午、日者播磨守泰通、左手大拇腫加給之、蛭喰未平云々、今日付醫相成云、昨罷問、日者忠明灰治已無其驗、不灸、可灸所今可灸者、　八月廿三日壬申、相成云、院御肩頸間有腫物、御身熱振給、御心地不覺者、非腫物氣歟、又云、前大僧正濟信、左肱腫物出、尤似可愼、生死在今明者、近

朱雀門不靜、怖畏無極、〈中略〉三年八月四日丁丑、阿闍梨文殿頒賜物由云々、仍以義光朝臣訪、依慎消息、

丁子巳豆等、從昨頗宜者、

〔古事談 三〕吾還巳蒙恩トテ、令涕泣給云々、御輔後只今被殿上之由、經長奏シケレバ、天氣快云々、天皇〈後朱雀〉其後不經幾程、令出腫物給テ、同月十九日崩給云々、

〔古事談 雜〕關白長女〈後冷泉女御〉兩手有瘡、一身不聊、雅忠申云、醫術雖及、須別佛力給云々、仍奉請觀王、修代新念、臨被平愈云々、〈中略〉

鳥羽院御時相撲節之時、右相撲人遠方疾、仍重仍非勤貫云々、翌日臨刻限參仕云、今日不能勇力云々、人々驚問子細之處、申云、自此夜俄ニ腫物出來、且可令御覽トテ、肩ヲ搔出タリケレバ、乳上ニ土器許紫色ニタル腫物出タリ、若痛シ無爲方云々、其時方大將巳下驚歎不少、相議云、事體巳非常、一乘寺僧正〈増誉〉隔後簾見物、方大將巳下相率向彼僧正被歎合之處、僧正云、非力之可及事、但若ヤト可申試三寶トテ、僧ロマヌカレケレバ、腫物カタハシヨリ端ナドノタブル、ヤウニ次第ニヘリテ立明常云々、左右手業存不可歎之由、以有驗給陰陽令伏式之由、後日風聞云々、

〔台記〕康治三年五月廿一日辛未、大威儀師寬救來、云々、即使問之、對曰、及瘡勝、見其反札、寬救手書也、思之當時未危急歟、繼乞寶形見之、遇臨䷒之復䷗〈二爻九〉余占曰、遇九二爻辭并正義會釋等推之、病雖重、依會釋陽將消也、正義、但宜有從有否乃無不利、以之推之、吉見疾意、加療治者可得驗、近代醫道雖卑、知病意然則生少□□□歟、又案臨卦辭曰、至八月凶云々、案正義、八月有三說、〈一說未、一說申、一說〉酉、正義案注、以建申爲義、會釋說建未爲義、然者六月、七月、八月、假可有凶歟、中據正義者七月、依會釋者六月、書寂不書十一翁儀〈又曰、此外有[illegible]事、可注〉〈又勘ト之中、隨有寫之〉中、使官少納言俊通問寬救、歸來曰、瘡上邪氣加、只今不覺、得常之時、可注申者、又曰、寬救申云、此瘡甚重、但非無所扶歟、巳與余占相同、　廿二日壬申、仲範許、有赤龍之水、乞之由、遣寬救之許、又召內匠頭丹波實康、〈[illegible]〉令見寬救、歸來云、必死、自今日後經十

餘日、與曾釋鼓同是瘡之類也、當時瘡身如橘、赤輪四五許寸、在右肩上云々、　廿三日癸酉、召醫師成世遣寛救亭、歸來云、吾疾病難救、不意、局為何益乎、不令見瘡、

〔太平記 一〕資朝俊基關東下向事附御告文事

相摸入道何カ苦シカルベキトテ、齋藤太郎左衞門利行ニ、讀進セサセラレケルニ、叡心不偶處、任天照覽、被遊タル處ヲ讀ケル時ニ、利行俄ニ眩餉タリケレバ、讀ハテズシテ退出ス、其日ヨリ喉下ニ惡瘡出テ、七日ノ中ニ血ヲ吐テ死ニケリ、

〔陰德太平記 六十七〕光秀弑信長卿事

天野(○光秀臣、源右衞門)後ニ立花左近ニ奉仕セシガ、頬ニ腫物ノ生ゼシヲ抜ントセシニ、漸々ニ肉出テ癒ザリケレバ、甚怒テ自裁シテ死スト云リ、又腫物平癒セズシテ死ス共云リ、

〔慶長見聞錄案紙 上〕慶長十年十月上旬ゟ、淸洲下野守殿(○忠吉)腫物御煩、其後腫氣、　十二月十日、下野守殿(忠吉)御煩危急、自辰刻午刻迄、偏如死人、御口中江御藥を入、午刻御蘇生、　十五日、下野守殿(忠吉)俄ニ減ス、扨追日平癒、

〔塵塚談 上〕品川驛三丁目、飴屋長次郎倅市太郎十三歳、最初醫者ども風濕と名付療治せしよし、雨脚腫物出來、膿水夥しく出、痛闘は勿論疊迄くさり、病床より毎日菌生ず、荒和布の莖の如くにして、黑くかたくして手にてはきれず、凡一ケ年程惱みて、天明元丑年夏病死す、死後背肉のこらず噴、骨計になる、手足はばら〳〵に離れ、膝もはなれ六ツになれり、腹のみぞ皮肉あり、頭は離れず、奇怪の病也、右長次郎隣家加賀屋武右衞門が妻物語、此婆々父は藤澤驛大坂屋勘左衞門、俳名梅舍が娘也、女には稀なる性質にして、空言をいふものにあらず、

〔理齋隨筆 三〕子供、くさかさ出來たるに、左の歌をかきて張をけば愈とぞ、

春の日の長に草もかりすてんとくかりつくせ庭の夏草

また黴瘡の瘡には、みかんのたねを黑燒にして、のりにませ付る、此藥のどけには酢を以、咽に吹入るべし、また産後の水氣あるにはとへらの木、石の手一束に切りて皮を煎じ飲べしと、いづれも手がろき事共にて、覺え居てよろしき事なれば書付る、

〔白石紳書 九〕小兒のくさの藥　かち栗を粉にして、はこべの汁に而つくる、

〔倭名類聚抄 三形體〕痤　唐韻云、痤（昨禾反、和名爾岐美）小腫也、

〔箋注倭名類聚抄 二形體〕醫心方同訓、按後朱雀帝患邇岐美、見榮花物語、關白師通公患邇岐美美、見續世繼、蓋上古書、按今俗呼邇岐美者面皰也、病源候論云、面皰者謂面上有風熱氣生皰、頭如米大、亦如穀大、白色、肘後方云、年少氣充、面生皰瘡、皆是也、不與源君所言邇岐美同、醫心方皰亦訓爾岐美、（中略）廣韻無小字、玉篇同、說文、痤小腫也、按素問生氣通天論、勞汗當風、寒薄爲皶、鬱乃痤、注、痤謂色赤瞋憤、內蘊血膿、形小而大、如酸棗、或如按豆、則知痤即痤瘡、源君分痤瘡爲二、非是、病源候論亦云、痤瘡腫始如梅李也、

〔伊呂波字類抄 仁病〕痤（ニキミ、二禁、腫、小瘡也）

〔年山紀聞 四〕二禁

舊記に二禁といふは、何にてもすべて瘡なり、

〔嬉遊笑覽 二〕あばたといふ、瘡瘢の名（中略）

古來腫物を二禁といふ、

〇按ズルニ、此說確カナラン、何トナレバ、後世ノ所謂ニキミハ、只顏面ニ生ズル小血疱ニシテ、更モ痛痒ナキヲ、中世ノ書ニ見ユルニキミハ、其病狀甚ダ重ク、生命ニ關ハルモノ多ケレバナリ、

〔榮花物語 三十六 根合〕内（後冷泉）の御にきみの事なをおこたらせ給はねば、いかにとむづかしう覺しめ

す、ついたちのありさまなどおなじ事也、日ごろのすぐるまゝに、なを水などいさせ給てやよからんと申せば、其さはふの御しつらひしてゐたてまつる、いとさむきころたえがたげにみえさせ給、

〔殿暦〕長治元年八月十日辛亥、依小二禁不參内、　十三日甲寅、依齋院（○白河皇女禧子内親王）御二禁、余（○藤原忠實）申刻許參彼院、

〔長秋記〕元永二年九月廿日、參梁園、（○輔仁親王）御二禁有增氣、　廿三日、參梁園、丹波重忠語云、宮御瘡與一昨日同事也、（○中略）宮御云、於瘡者不知增減、此兩三日辛苦甚、敢不可存命、

○按ズルニ、輔仁親王、元永二年九月二十八日薨ズ、

〔台記〕久安四年十月一日乙卯、欲參宮及內、依二禁發頭微止、此由觸外記、傳聞、依上達部不參無政、依二禁止拜諸神之處、

〔續世繼四波の上の盃〕三月三日、曲水宴といふこと、六條殿にて此殿（○師通）せさせ給ふときこえ侍りき、（○中略）四十にだにたらせ給はぬを、さかるべき御よはひなり、かぎりある御いのちと申しながら、御にきみの程、人の申し侍りしは、つねの御こと、申しながら、山の大衆のおどろ〳〵しく申しけるもむつかしく、世の中心よからぬつもりにやありけんとも申し侍りき、

〔葉黄記〕寬元四年八月五日辛卯、院御二禁、頗御增氣、仍有御灸、百壯、長忠朝臣奉灸、　廿二日戊申、依御二禁及御灸例不分明也、但仁安二年閏七月、後白河院御二禁雖不及御灸、醫師等有勸賞、件記右大注進了、有御感云々、醫師等料小椀飯被宛、人々兩日調進了、

〔玉海〕承安二年九月廿日丙戌、午時許參內、依御不豫事也、依御物忌候二間方、女房相逢云、去十七日未時許、有御浴殿事、其時始奉見付之、御腰上脊骨右方有御二禁、（其勢圍碁石纔小程也）仍召遣醫師等、（重長、定成、憲基、）此中憲基早參、（于時四刻許也）奉見之申云、今夜可奉付藍、（實擇大黄於藍奉付之、而君之御療治、輒不可及針灸、以大黄爲至極之治、仍申大黄之由、無可恐思）

癤　加太禰

食之後、今夜見中、可爲付瘡由、仰之、夜灸、白明日灸可爲付大黄、云々、其物之間、可事、押帖云々、入夜定成参入申云、瘡帖事不可然、摩大黄於瘡門、多可事、付之、不可及見、今夜之形勢、太以憚恐也云々、其後宣長参上、申状大略同、定成仍一向事、付大黄敷、止押帖之儀、云々、十八日、夕雅綱申、有小増之由、其中宣基申云、事付之人若令相替、無云々、果以然也、顯自親云々、其後不増不減、及于今日、余召寄宣基、定成等、相尋子細、各申云、瘡事不可御、自今有御灸云々、定成等云、鯉魚、石榴等、共以爲禁食、而宣基注申可好聞食之由、太以不覺也、仍注出本文、令見人々云々、宣胤之儀、嫌敦敷参、留余退出、

〔倭名類聚抄 三〕癤　病源論云、癤〈子結反、和名加太禰、今案俗云、〉血結聚所生也、

〔箋注倭名類聚抄 二〕山田本作骨子結反、那波本同、並與廣韻合、玉篇癤同上、按新撰字鏡、醫心方同訓賀太禰、蓋結核之義、結訓加多牟、見江次第、今俗呼禰夫止、〈○中略〉原書引養生方云、人汗入諸食中、食之作癤瘻、又云、五月勿食不成核果及桃棗、發癰癤也、與此所引不同、原書又云、癤者、由風温冷氣搏於血、結聚所生也、因疑瘻當作癤、蓋上亦有瘻文、然原書瘻候中引養生方、載癰癤、則瘻癤不甚異也、

〔伊呂波字類抄 加病疾〕癤〈カタネ〉

〔増補下學集 上二〕癤〈ネブト〉根太

〔倭訓栞 中編十八〕ねぶと　癤をいふ、根太の義也、古へはかたねといへり、今の俗便毒をよこねといふ也、出羽にては癤をにくもといへり、

〔濟生寶 上〕癤〈和名加太禰、俗云禰布止、俗名根太也、〉

按癤、血有餘而爲食毒、滯留多生臀尻腰脚、而其頭微尖様大似疔、而不發熱、小粒爲異、其類有數品、皆毒淺俗所名者、記于左、

臺癤　頭凡　闇癤　軟癤　夏癤　濕癤

押領使

〔中右記〕大治二年四月廿六日、此十餘日、右腰下有堅。根。遠行之間、有更發音、召醫師成世、令見之處、其熱頗大、雖無恐、早以蓮可射之由所申也、仍從今夕射蓮、此堅根出後、及十餘日也、　廿七日丙戌、終日射蓮、有小減氣、　卅日、今日施藥院使重基、幷成世等來、見此堅根、令飼蛭五六十許了、雖非大事、衰老之身、數日療治、身心屈了、以蓮當可沃之由所示也、　五月六日、今朝成世來、擣堅根之口、仍纒頭、　七日、從今日堅根以柳洗、依成世申也、〈略〉○中　施藥院使來、令見堅根、申云、明後日、今一度可喰蛭者、但有減氣者、　廿九日戊申、右腰下堅根平愈了、從去月廿六日更發、以蓮柳洗之、四ヶ度飼蛭療治之間也、及一月、衰老之身、神心屈了、

〔玉海〕嘉應二年七月六日甲申、憲基來針齒下、語云、主上御不豫、御堅。根。云々、但御平愈了云々、

〔吾妻鏡三十一〕嘉禎二年正月十七日乙亥、將軍家〈○藤原賴經〉依御疱瘡餘氣、御股御膝、腫物〈堅。押。領。使〉廿餘个處令出給、今日、女房石山局召良基朝臣、可為何樣御事哉之由被仰合、不可有殊御事云云、聊奉加療治、

疔瘡

〔倭名類聚抄三〕丁瘡　千金方云、治丁瘡方云、丁〈廣本丁作疔、未詳、〉

〔箋注倭名類聚抄二〕曲直瀨本無云下丁字、下總本作千金方云丁瘡六字、無治字及方云丁三字、按原書丁腫部、有治一切丁腫方、又有犯丁瘡方、又有魚臍丁瘡、無此所引文、云丁二字亦可疑、下總本單作丁瘡似是、又按病源候論云、初作時突起如丁蓋、故謂之丁瘡、丁古釘字、後俗從疒作疔、集韻疔、病創是也、然說文廣韻皆無載、故云未詳也、玉篇以疔為疒字籀文、未詳所據、

〔醫心方十六〕治丁創方第一

病源論云、丁創者、風邪毒氣搏於肌肉所生也、初如風疹、搔破青黃汁出、裏有赤黑脈、亦有全不令人知、忽以衣物觸、反手著、痛亦有肉突起、如魚眼赤黑久結、皆變爛成創、創下有深孔、如火針穿之狀、初作時、突起如過釘蓋、故謂之丁創、令人惡寒四支強痛、創便變焦黑色、腫大光起、根鞕強酸痛、皆其候也、在手

癰疽

足跟腫骨節間者最急、其餘處則可也、毒入腹則煩悶不佳、或如醉、如此者二三日便死也、

〔[illegible]萬安方 一二〕丁腫

又云、丁腫、亦云丁瘡、附譜撒所謂[illegible]、[illegible]、[illegible]、如[illegible]、

〔甲陽軍鑑 九上 品第二十七〕信州平澤大門鋪下等合戰之事

一武田晴信公天文十一年四月五月兩月、人數をやすめ、六月四日に、七千五百の人數を催て、信州諏訪郡へうち出、敵地悉放火せしめ、高島諏訪左馬助に志はつけ、門きにまで押つめ放火し、其次日は頼茂居館の小城へをしよせ、ねこやまで鐵炮へ兵城を出て戰はざる子細は、諏訪殿運の末にてやらん、頼茂うしろすの打越に、六月六日の夜より疔と云はれ物出來て、存命不定に極まる、に付て、大將なればたゝかふ事ならず、城持事樣々なり、

〔倭名類聚抄 三〕癰 釋名云、癰、[illegible] 氣壅結而不潰也、

〔箋注倭名類聚抄 三〕原書作癰壅也、氣壅否結裏而潰也、此不字恐衍、說文、癰腫也、按腫字下亦云、癰也、是凡腫謂之癰、是欲順腫結處、故特專癰名也、

〔伊呂波字類抄 與 病〕癰 ヨウ 〔同 阿 病〕癰 アク

〔倭名類聚抄 三〕疽 說文云、疽、[illegible] 久癰也、

〔箋注倭名類聚抄 三〕按病源候論、疽發無定處、隨其發處、名各不同、發背亦疽中之一、非諸疽一名發背也、略中原書广部、今本無久字、徐鍇本及後漢書注、玄應音義引皆有之、急就篇注亦云、癰之久者曰疽、今本蓋誤脫也、

〔下學集 上 病〕癰 ヨウ 疽 ソ

〔醫心方 十五〕說癰疽所由第一

劉涓子方云、九江黃父問於岐伯曰、余聞腸胃受穀、上焦出氣、以溫分肉、而養骨節、通腠理、中焦出氣、如

露上注於谿谷、而滲孫脈津液、和調變化、而赤爲血、血和則孫脈先滿、乃注絡脈、絡脈皆盈注、乃於經脈陰陽已張、因息乃行、行有經紀、周有道理、與天合同、不得休止、切而調之、從虛法去實寫、則不足疾、則氣留、去虛、補實則有餘、血氣已調、形神乃持、令已知血氣之平與不平、未知癰疽之所從生、成敗之時、死生之期、期有遠近、何以度之、可得聞乎、

〔漫遊雜記上〕和蘭人能審癰疽之別、癰爲易治、疽爲難治、今世人、以癰爲大甚危篤之病者、不知其分也、夫癰者濕、疽者乾、癰者張、疽者陷、癰者紅潤、疽者紫黑、余〈○永富鳳介〉受其法、徵之事實、果然無差矣、

〔瘍科秘錄六〕癰疽

少壯ノ者ニ少ク、老大ノ人ニ多キモ、老衰シテ氣血ノ循環不順ニナルユヘナリ、凡人歲五六十ニ至リ、羸瘦スベキ頃ニ、却テ肥胖ニナル者ハ、多クハ癰ヲ發ス、是モ氣血ノ壅滯スル故ナリ、胸腹ヘモ四肢ヘモ發シテ、處ハ一定セザレドモ、背脊ニ發スルモノ多シ、故ニ發背ノ名アリ、

〔古事談三僧行〕大御室〈○性信〉効驗事、大二條殿〈○藤原教通〉治曆之比、癰瘡發背、與藥頭雅忠云、癰種已及五寸、以爲死之病也、醫療不可及云々、親王修孔雀經法、修中平愈、依之被奉龍蹄二疋庄園二所〈尾張國篠田、阿波國篠原、〉

〔續本朝往生傳〕權中納言源顯基者、大納言俊賢卿之子也、〈中略〉常詠白樂天詩曰、古墓何世人、不知姓與名、化爲道傍土、年々春草生、亦曰、忠臣不仕二君、七々聖忌之後、忽以出家、男女引衣、恩愛妨行、不敢拘留、昇於楞嚴院、落飾入道、住大原山、好內外典籍、修念佛讀經、後受發背之病、良醫曰、可治、納言曰、萬病之中、正念不違癰疽也、不如此次早歸九泉、便止療治、唯修念佛、長以入滅、

〔本朝世紀〕久安五年正月廿八日辛亥、今夜、大法師忠春卒、〈中略〉權律師仲胤者、是仲春叔父也、去六日癰疽發背、不知其由、犯禁忌、雖加醫療無驗、忠春今年有夢想、有人告云、炎魔王有大法會、召汝可爲導師、果如其夢歟、人惜之、世悲之者也、

〔太平記三十三〕将軍御逝去事

同年〈○延文三年〉四月二十日、尊氏卿ノ背ニ癰瘡出テ、心地不例御座ケレバ、本道外科ノ醫師数ヲ尽シテ参集ル、倉公華陀ガ術ヲ尽シ、君臣佐使ノ薬ヲ施シ奉レ共更ニ無験、陰陽頭、有験ノ高僧集テ、鬼見太山府君星供、冥道供、薬師ノ十二神将ノ法、愛染明王、一字文殊不動慈救延命ノ法、種々ノ懇祈ヲ致セ共、病日ニ随テ重クナリ、時ヲ推テ憑少ク見ヘ給ヒシカバ、御所中ノ男女、気ヲ呑ミ、近習ノ従者、涙ヲ押ヘテ、日夜寝食ヲ忘タリ、聞リシ程ニ、身體次第ニ衰ヘテ、同二十九日寅刻、春秋五十四歳ニテ、遂ニ逝去シ給ケリ、

〔落穂集〕一同年〈○天正十三年〉三月、家康公御背に癰の御腫物御出来被成、既に御他界と他國に而は取沙汰仕る程之御様體なり、最初は餅太の少し大きなる物にて候處に、前島長十郎、佐原作十郎、河原喜太郎、三人の小姓衆に被仰付、大蛤之貝を以て、右之腫物を御はさませ被遊候故、一夜之中ニ御痛み強く腫成中に付、御家老中を始、御醫師衆拾人餘りも相談の上にて、藤屋長閑御療治申上候處に、唐人流の荒療治と御腹立被遊、御付薬を御洗ひ落させ被成候ニ付、本多作左衛門罷出、先我等を御手討に被成候後、此御薬御無用ニ可被成候、只今御他界被遊候而は他人までも無御座、御隣家の北條殿を始め、御持之國をねらひ可被申候は、必定也、御家中の面々も、御年若の殿におくれて力を落しばかり〳〵数合戦も得仕間敷候、左様ニ仕而は御跡の潰れ申外無御座候、我等儀は八十に及び、目は片目切潰され、指も三ツ切まげられ、脛にも手負候へば、足さへちんばに成候へば、世上の人々片輪と申片輪を、身ども壹人にてかゝげ候、今日迄は殿の御情にて御家中に而も人かま敷罷在候、只今にても御死去被遊候へば此作左衛門は即時に追死仕候外は無御座候、たとへ存命仕候とも、あれこそ家康公に仕はれたる本多作左衛門と云者の、何を楽しみに、命を惜み存命候哉と、諸人に後指をさゝれ候ては、生たる甲斐も無御座候、此ころ迄武田殿家中にて甘

利殿と申、諸人の尊敬に逢たる侍も、主人の家潰れ候へば、今程本多平八組に成り、松下一黨、白坂一黨の者共は、下野をへつらい被居候、信玄鋒さき盛の時は、甘利殿など如此あらんとは、夢にも思はざる事に候、是偏に勝頼の無分別故、長篠合戰より八年目家滅亡致し、歷々の侍さへ右之通りに罷成候、殿にも今度長閑が藥御附被成間敷と被仰候得ば、何れの道にも大將の無分別は同然にて候と、段々道理をくどき立、淚を流して被申上候へば、家康公御心得被遊、此上は其方申通御療治被遊べくと被仰出候故、長閑罷出、御藥を指上候、御灸をも雙六の筒の大サに致シ作左衛門自身三火迄すへて進上仕リ、御内藥をも被召上候處、其夜半に御腫物吹切、膿水夥敷出申候時、作左衛門髮を掴て嬉し泣になき申候、本多佐渡も同然之由、其後御腫物頓て御平愈の由也、

〇按ズルニ、家康ノ腫物ノ事、武德編年集成ニハ疔ト爲シ、岩淵夜話ニハ根太ノ如キモノト爲セリ、

〔筆のすさび三〕一奇病　此頃友人小寺清光がかける記事を見るに、其事奇なるに依りて左に志るす

文政五年夏、本邑箕後巷文助といふ者癰を患ふ、六月二十四日、癰潰れて二鰻魚あり、膿血に随ひて出づ、癰亦稍く愈ゆ、其子茂平異みてこれを語る、以て文助に問ふに、曰信なり、其長さ寸餘、尾ありて首なし、鱗鰭並に全し、蓋是嘗て此魚を好む、其砂礫多きを以て、皆其頭を去る、然れども已に食せざること數月、今出でゝ鮮且全きは何ぞや、予文助の言を聞き、益其異を嘆ず、夫熟して後これを食ひ、腐してこれを咽む、安ぞ鮮且全を得んや、人の腹中食を受くる所あり、また何ぞ背よりして出づるを得んや、稗官小說或は恠疾を載せて、未だ斯類の事あるを聞かず、是によりてこれを觀れば、世の奇恠非常を傳ふるもの概して妄誕とすることを得ず、文助少して我に備す、故に其事を詳にするを得たりといふ、備中笠岡小寺清光記す、

〔叢桂偶記 一〕吮疽

史記呉起傳曰、卒有病疽者、起爲吮之、卒母聞而哭之、人曰、子卒也、而將軍自吮其疽、何哭爲、母曰、非然也、往年呉公吮其父、其父戰不旋踵、遂死於敵、呉公今又吮其子、妾不知其死所矣、是以哭之、○中略 水戸城西飯富村、有一農夫貧且骨肉之累、年不登、於是計無所出、因鬻田宅質之、身爲富豪家奴、因罹一二疽、貴乃辭還、乎自問得治癰疽之妙、僞知奴生不、者、瞰嘻笑焉、無乞繼者、奴又泣、隣里偶有患疽者、其家貧無迎醫之費、因招奴、奴欣然遂招貼、貴然斷斷兮無他技、唯自吮其疽而已、其疽不日而愈、

熱瘡

〔醫心方 十七〕治熱瘡方第五

病源論云、諸陽氣在表、陽氣盛則表熱、因運動勞役、腠理則虚而開、爲風邪所客、風熱相搏、留於皮膚、則生瘡、初作瘭漿、黃汁出、風多則痒、熱多則痛、血氣乘之則多膿血、故名熱瘡之、

〔醍醐寺雜事記〕永平六年三月十三日、從東方光指來、塔婆人夫三百餘人、見醍醐寺塔心柱、○中略 余因患熱瘡腫痛不能食耳、

〔小右記〕萬壽二年八月廿八日丁丑、左兵衞督公信來、有熱物、法住寺僧都尋光曾有熱物、忠明云、其可冷、就中尋光僧都頗重者、大納言云、病人二人病極無事也者、

氣腫

〔書言字考節用集 五 肢體〕氣腫

〔病名彙解 六〕氣腫　病源ニ云、氣腫ハ其狀癰ノ如ク、頭ナフシタ虚腫シ、色變ゼズシテ皮上急痛シ、手纔ニ著レバ即痛ム、風邪氣搏タ生ズル所ナリ、

〔常山紀談 二〕信は長きのみ高からず、左の脚に氣腫有て、あゆむ時足をひく如く見得しとなり、

人面瘡

〔筆のすさび 四〕一人面瘡の話　仙臺の人怪病の圖、幷に記事左に載す、本文畧すといへども、今見るの見やすからんためにこれを圖せり、實王父月適先生○中略 嘗て余に語りて曰く、龜考亭君の曰く、城東村木町に一商あり、年二十五六、膝下に一腫を生ず、漸漸にして大に、瘡口泛く開き、膿口三兩處、其の位置略人面

に像る、瘡口時ありて澀痛し、痛つるに紫糖を以てすれば、其の痛み暫く退く、少選ありて再び痛むこと初のごとし、夫人面の瘡は固より妄誕に渉る、然るにかくのごとき症人面瘡と做すも亦可ならん乎、蓋瘍科諸編を歴稽するに、瘡名極めて繁し、究竟するに、其の症一因に係りて發する所の部分、及び瘡の形狀を以て、其の名を別つに過ぎざるのみ、人面瘡のごときも亦是なり、今茲に己卯中元仙臺の一商客、門人に介して曰く、或人遠くより來りて治を請く、年三十五を加ふ、始十四歳のときにありて、左の脛上に腫を生ず、潰れて後膿をながして不職、終に朽骨二三枚を出だす、四年を經て瘡口漸く收る、只全脛不消、歩履難し、故に温泉に浴し、或は委中の絡を刺し血を瀉す、咸應せず、醫者を轉換するも亦數人、荏苒として幾歳月、其腫却りて自ら增し、膝を圍み腿を襲がせ、然して再び膿管數處を生じ、復收まれば此に發し、前に比するに甚同じからず、只絶えて疼苦なく、今年に至りて瘡口一處に止る、即先に骨を出すの孔旁なり、瘡口脹起哆開し、あたかも口を開くの狀のごとし、周圍淡紅く脣のごとく、微しく其口に觸れば則血を噴る、亦痛疼なし、口上に二凹あり瘡痕相對じ、凹内に各皺紋あり、あたかも目を閉ぢ笑ひを含むの狀のごとし、眼の下に二の小孔あり、鼻の穴の下に向ふが如し、兩旁に又各痕あり、痕の邊に各堆起し、耳朶のごとく、其面楕圓、根膝蓋に基して、頭顱の狀をなす、且患ふる處僩々として動あり、呼吸のごとし、衣を掲げて一たび見れば、則言を欲する者に似たり、復約略人面を具するにあらず、强ひて人面をもつてこれを名づくるの類なり、而して脛の内廉腿股に逮り、腫大にして斗のごとく、青筋縱横遶絡、これを按ずるに緊ならず寬ならず、其の脈數にして力あり、飲食減せず、二便自可、斯症固よりこれを多骨疽に得たり、多骨疽の症、多くは遺毒に出づ、而して其の瘡勢斯のごとくに至るものあり、只口內汚腐、充塡緣なく、餌糖卽貝母も用をあつめ口をひらくの功を奏することあたはず、

文政己卯中元、桂川甫賢圖專記、

脫疽

〔病名彙解 一〕脫疽　手足ノ指ニ生ジ、甚シキトキハ節ヨリ脫ル也、〈中略〉正宗ニ云、脫疽ハ外腐テ內壞ル、是此レ平昔厚味膏粱熱酒ヲ膏啖シ、丹石補藥腎水ヲ消鑠シ、房勞過度シ、氣竭精傷ル、ニ因ル、多クハ手足ニ生ズ、手足ハ五臟ノ枝幹也、瘡ノ初ク生ズル形、粟米ノ如シ、頭便チ一點ノ黃泡其皮猶熟スル紅棗ノゴトク、黑氣浸漫シ、相傳テ五指ヲ過ク上脚面ニ至ル、其疼湯ニ潑キ火ニ燃ガ如シ、骨枯筋縮、其臭異香解シガタシ、擬其人ガ肉ニ在トキハ割、指ニアルトキハ切ト云、即此病也、又脫骨疽ト名ヅク、脫癰モ同證也、

附骨疽

〔瘍科秘錄 二〕附骨疽
附骨疽ハ、病源候論、千金方等ニ、附骨疽ト論ジタル通リ、其害骨ト肉トノ間ニアツテ、肉ヲ侵ス時ハ、骨朽テ外ニ發スル時ハ潰ヲナス、此病多クハ四肢ニ發シ、又胸脇ニモ發ス、背脊ニ發スルコト亦タ少シ、其初メ寒熱交作、骨痛ミルコト結毒ノ如ク、漫腫シテ色ヲ變ゼズ、或ハ變ズルモ殷ニ淡紫色ヲ成シ、遂ニ膿ヲ釀ス、內ノ潰ク腐ルモノナレバ、是非トモ二鍼モ三鍼モ刺サマレバスマヌ様ニナルモノナリ、膿出盡消シテ故ノ如クニナルモ、朽骨淋瀝ト出テ口ヲ斂メズ、是ヲ病源候論ニ骨疽瘻ト云ヘリ、

舌疽

〔瘍科秘錄 一〕舌疽
舌疽ノ名ハ、古書ニ載ル處ナシ、本邦ニテ唱ヘ始メタルコト、見ユ、隨分多キ病ナレドモ、其證候ヲ辨ニ云ヘルモノハ未ダ見アタラズ、證治要訣ニ、曾有舌上病瘡、久蝕成穴ト云ヒ、醫宗金鑑ニ、舌疳ト云フモノヲ載タ、百無一生ト斷リタルハ、思フニ舌疽ノコトナリ、其病失榮乳岩ト同因ニテ、翻花スル氣味アリ、重病大病ニテ、三十人ノモノナレバ二十九人マデハ死ヲ免レズ、又微毒ノ舌ニ發スルモノ、凝結留蝕シテ、其形狀舌疽ニヨク似タレドモ、治シ難シトセズ、香川太仲行餘醫言ニ載舌疽ヲ黴毒ト心得タルハ誤リナリ、舌疽ノ初メ、多クハ舌尖或ハ右偏或ハ左偏ニ發ス、或ハ舌

瘭疽

下或ハ舌心ニ發スルモアリ、固結スルコト豆ノ如ク、栗子ノ如ク、久キヲ經レバ瘡頭自ラ腐蝕シテ凹ニナレドモ、鹽醋辛辣及ビ熱飲モ一切染ルコトナシ、染ミザルハ至テ毒ノ深キ故ナリ、凡ソ口舌何程腐爛シテモ、飲食ノ染ル證ハ治シ易シトス、腐蝕日ニ深ク、固結月ニ蔓リ、舌ヲ轉動シ難ク、言語蹇澀シ、一年或ハ二年ニ至テ遂ニ舌缺ケ盡テ死スルナリ、始メハ痛ミモナケレドモ、腐蝕スルニ從ヒ痛ミモアリ、寒熱ヲモ發ス、コノ病少壯ノ人ニ少ク、多クハ五六十ノ頃ニ及デ患フルモノナリ、舌疽ヲ患フルモノハ、領下及ビ頸ニ核ヲ結ビ、疽ノ大ニナルニ從テ、核モ大ニナリ、或ハ潰ルコトアリ、潰ルトキハ其腐蝕シタル形狀舌疽ニ同ジ、同毒ナレバナリ、

〔救瘟袖暦〕一男子舌疽ヲ患フ、舌菌翻花者世ニ之ヲ舌疽ト云ハ、舌疽ノ名見處ナシ、舌瘡ト唱ベシ、寛政辛丑ノ頃ヨリ舌ノ右側ニ結核アリ、癸卯ノ秋ヨリ微ニ血ヲ出ス、丁巳十一月ノ頃ヨリ出血益多ク、十二月二十七日出血五升許、暈倒シ四肢厥脈絶ス、急ニ獨參湯ヲ進メテ人事ヲ省シ、又血七合許ヲ出シ再ビ昏絶ス、

〔青囊瑣探上〕上總州舌疳藥

余片倉元周童年在藍溪先生塾中時、竊思吾長而爲人治疾、小恙則嵌甲、瞖眼、黒痣、雞眼子等、大患則傷寒、脚、痢疾之類、莫論而已、其他至于癩疾、癲癇、鼓脹、偏枯、勞瘵、肺癰、舌疳、乳疳等之古今所難治者、亦欲得旁方妙藥以盡治之、是以求諸百家醫籍、或問諸友朋、後游城攝、探名家秘方試之、今且二十餘年、經驗不可枚擧也、然至于鼓脹偏枯勞瘵肺癰乳癌舌疳、邦俗呼曰舌疽、則取効僅僅無幾、常以此爲憾焉、嗚呼此數證素係廢疾者歟、曩橋本四郎左者抱病、與吉田道見俱自上總州九十九里來、就余求治、渠云、隣郡有一老醫妙起舌疳、然秘惜其方不敢傳人、余頃請頴二子以重利傳其方、未落我手中、近吉田道見得此方、來傳之、因錄後卷、宜以參看、

〔倭名類聚抄三〕瘭疽　集驗方云、瘭疽、瘭音標、俗云倍宇會、血氣否澀而所生也、

〔箋注倭名類聚抄二〕按病源候論瘭疽候云、此皆毒氣客於經絡、氣血否澀、毒變所生也、其文略同、按

病源候論瘭疽候又云、瘭疽之狀、肉生小黯點、小者如粟豆、大者如梅李、或赤或黑、乍青乍白、有實核、燥痛應心、或著身體、其著手指者似代指、又云發五臟俞節解相應通洞、瘭疽也、又齒間臭熱、血出不止、瘭疽也、又云、十指端忽然策々痛、入心不可忍、向明望之、見々黃赤、或黯々青黑、是瘭疽、是瘭疽、發無定處、今依原、偏發在手指耳、瘭疽非是也、

(伊呂波字類抄 へ病)瘭疽 ヘウソ

(下學集 上氣形)瘭疽 ヘウソ 病名也

(雲錦隨筆 四)瘭疽には、梅干を黑燒にし、飯にて付てよし、又海人草と昔と古き茶袋とを黑燒にして、飯に合せて付るもよし、又一年ばかりの干大根を煎じ、數囘指を漬てよし、又韮を粘飯にて練合せて付てもよし、

(瘍科秘錄 七)瘭疽

瘭疽ノ瘭ハ、熛ヲ本字トス、病源ニハ已ニ瘭ニ作レリ、史記扁鵲傳ニ、雷動熛至ト見ユ、熛ハ火ノ飛散ナリ、迅速ノ病ユヘ、瘭疽ト名ヅケタルナリ、本邦ニテハ指ニ限リテ發スルモノヽヤウニ云傳ヘタアレドモ、囘文胸背ヘモ赤發スルコトアリ、病源、千金、外臺等ノ論ヲ讀テ知ルベシ、然レドモ先ヅ指ニ發スルコト多ク、他ヘ發スルコトハ少シ、故ニ指ニ限ルヤウニ心得タルナルベシ、今ニテハ指病ノ總名トナレリ、

(梅園叢書 中)物の命をたつもまた助くる理ありといふ論略中

瘭疽といへる腫物の甚しきを、指をきりて療治する事あり、齒などのゆるぎいたむに、此齒をぬきてさる事あり、

(理齋隨筆 三)瘭疽の藥には、ふかんのたねを黑燒にして、のりにまぜて付る、此藥のどけには、管を以喉に吹入るべし、

代指

〔倭名類聚抄 三 瘡〕代指　集驗方云、代指、和名豆万波良米無毒、由筋骨中熱盛所生也、

〔箋注倭名類聚抄 二 瘡〕按、豆万波良米、爪孕之義、○中略 按外臺秘要引小品方云、代指無毒、正縁人筋骨中熱盛搏結故耳、與此所引文略同、

〔伊呂波字類抄 都 人體〕代指ツマハラミ

〔病名彙解 三〕代指ダイシ　指ノ頭ガ腫テ後ニ爪甲ノ脱落スル也、指瘭疽ハ色黒シ、代指ハ黒カラズ、準繩ニ云、代指ハ先腫焮熱シテ痛色黯カラズ、爪甲ノ邊結膿ス、ハゲシキモノハ爪皆脱落ス、此指疽ニ類ス、然ドモ甚ダ毒ナシ、故ニ色黯黒ナラズ、久キトイヘドモ人ヲコロサズ、

〔牛山方考 上〕一瘭疽ノ類、代指ノ類、或ハ脱疽トテ、手足ノ指ニ生ジ、其肉黒ク爛テ、漸々ニ腐肉ニナリテ、指切レ落ル症ニハ、黄芩、黄連、防風、連翹、金銀花ヲ加テ奇効アリ、

丹毒瘡

〔倭名類聚抄 三 瘡〕丹毒瘡　掌中要方云、丹、或本作疒丹未詳、要毒之氣、其色無常、

〔箋注倭名類聚抄 二 瘡〕按病源候論、丹者人身體忽然焮赤、如丹塗之狀、故謂之丹、是所以名丹也、从疒俗字耳、○中略 日本紀略、延喜十八年九月十七日、右衞門醫師深根輔仁撰掌中要方、今無傳本、按外臺秘要引肘後方云、丹者惡毒之氣、五色無常、掌中要方蓋本之、又醫略抄引產經云、夫丹者惡毒之氣、五色無常、其文與肘後方同、此其色蓋五色之誤、萬安方丹毒俗云知利氣、亦云毛衣草、亦云火、

〔伊呂波字類抄 太 病瘡〕丹毒瘡タンドクサウ、汁入口瘡死也、或本作丹字疒也、

〔醫心方 十七〕治丹毒瘡方第一

病源論云、夫丹者人身體也、忽然變赤、如丹塗之狀、故謂之丹也、或發手足、或發腹上、如手掌大、皆風熱惡毒所爲、重者亦是疽之類、不急治則痛、痛不可堪、久乃壞爛、去膿血數升、若發於節間、便斷人四支、毒入腹殺人、小兒得之最忌、

又云、白丹者初發癢痛微、虛腫如吹、癮々起、不痛不赤、而白色也、由挾風氣故然、

頭瘡

(頓醫萬安方一)丹毒
和語云火、又云赤、小兒方中、此萬安方四十七卷同可見、
(有林福田方十)丹毒
治熱遊丹赤腫ヲ方、此ハ身色赤レテ丹ノ色ノ如ナル是也、是ハ風熱ノ生ズル處也、
(叢桂亭醫事小言五)丹毒
丹毒ハ寒熱シ、甚煩悶シテ、腫身定ル處ナク丹タナル、或ハムラムラトナルヲ赤遊風ト云、其丹キ處、錢氏雲ノ樣ニナルヲ雲花類ト云、又寒ナク偏ニ大熱スルモアリ、三黄湯白虎湯又ハ犀角ヲ用ユルコトモアリ、又近國江州ノ大島某ノ、丹毒ヲハヤタテト名ヅケタ奇術ヲ施印ス、曰ハヤクサノ病症ハ、其相類ニアラハル、最初ニ左右ノ耳及頰ノ色、赤又赤黑クモナルアリ、夫ヨリ咽喉ニムクタ其相關ル也、或ハ腹痛スルモアリ、或ハ正氣ヲ失ヘルヤウナルモアリ、腹痛スルハ腹カタク、タトヘバ石ノ如ク、又腹ヤハラカニシテ、腹ニ熱アルモアリ、是ハ病ノ輕重ニヨルナリ、此病ハ腹ニ發シ甚急ナリ、尤腹病ニ異ニシテ、耳及頰ノ色ヲ見ルヲ丹毒第一ノ見立トスル也、
(倭名類聚抄三形體病類)疕　說文云、疕、[音比、和名之良久毛]頭瘍也、周禮注云、禿[土木反、和名加不呂]、頭瘡也、野王案無髮也、
(箋注倭名類聚抄二)按說文疕字下有乃字、恐非、類聚名義抄、伊呂波字類抄並無、[略]○[中略]所引广部文原書瘍作傷、按傷瘍古今字、段玉裁曰、頭字蓋衍、說文有疕云頭瘍、則瘍不專在頭、檀弓曰、居喪之禮、身有瘍則浴、鄭注周禮云、身傷曰瘍、以別於頭瘍曰疕也、[略]○[中略]醫心方同訓、萬安方禿髮訓志保加志良、白禿瘡訓之良久毛、[略]○[中略]所引文原書無載、按原書醫師職云、凡邦之有疾病者、有疕瘍者造焉、注疕、頭瘍、亦謂禿也、此所引蓋是、[略]○[中略]今本玉篇禿部同、
(增補下學集上二文辭)疕[頭瘡也]
(醫心方四)治頭面瘡方第十三

瘻
瘰癧

病源論云、内熱外虛、爲風濕所乘、濕熱相搏、故頭面身體皆生瘡、

〔續修東大寺正倉院文書十九〕桑内眞公解　申不參事
右眞公、頭出瘡彌大、施痛苦、此令見於人虫瘡止云、仍請藥師、比來之間治作、雖然未能瘥、因錄患狀、以解送、謹申、
寶龜三年三月廿三日

〔源平盛衰記四〕殿下御母立願事
承德二年六月廿一日ニ、關白殿師通○藤原本ノ御髮際ニ又惡瘡出キサセ給ヘリ、家ヲ御託宣有シカバ、今ハ一筋ニ後世ノ御營有ケルガ、同廿八日、大殿ニ先立給テ薨ジ給フ、御年三十八、○中略此御病ハ御髮際ニ出テ、惡瘡ニテ大ニ腫サセ給ヘリ、御看病ニ伺候シタル輩、立烏帽子ヲ著テ、前後ニ侍ケルガ、互ニ見ヌ程ニ大ニ高腫サセ給タレバ、入棺可葬葬送御有樣ニモ非、父ノ大殿是ヲ守御覽ジテ、御涙ニ咽バセ給ナガラ、御行水召レテ、春日大明神ヲ伏拜セ給テ、子息師通、山王ノ御咎トテ、世ヲ早シ候ヌ、イカニ春日明神ハ、思食捨サセ給ケルヤラン、但定業限アランハ命、今ハ力及侍ラズ、カヽル淺間敷有樣ニテ、恥隱ベキ樣ナシ、此後ノ氏人、氏人タルベキナラバ、此姿ヲ本ノ形ニ成給ヘ、最後ノ孝養仕ント、泣々口說給ケルコソ哀ナレ、

〔碧山日錄〕長祿四年三月二日己卯、歸自春公之第、中路過滿翁、曰、余發惡腫於頭、爲尋洛之良醫來云、又尋松井大信子、乃得遇也、診脈視色曰、是內熱所致、謂草腫之類也、服藥惟可云、又診余之脈曰、心腎寒冷、臟腑甚瘁、常服溫藥、可以自保養云、大聖住持以專僧告曰、明日乃上巳節也口聚而可賦偈頌、要公乃相從問醫下卿子、彼開室相接、視翁之腫曰、是節草也、殆非毒腫也、擣藥可以傳之、且期來日云、又之一來云、

〔倭名類聚抄三瘡〕瘻瘡　說文云、瘻瘡、鄙俗云路二音、頸腫也、

(箋注倭名類聚抄二)按右大臣俊家公患頸瘡、見榮花物語布引瀧卷、頸部瘡、新撰字鏡瘡訓止利久比、〈中〉原書广部云、瘰頸腫也、又云、瘻頸腫也、二字其訓不同、按病源候論載諸瘻、皆在頸、潰而成瘡、又瘰候云、瘰者初作與瘰核相似、而當頸下也、皮色不異、瘰瘰々然是也、外臺秘要引小品方云、瘰病喜當頸下、當中央不偏、州邊釋名、瘰、纍也、在頸纍喉也、並與說文訓頸瘤合、然則瘰者頸下腫疾、不與瘻病同、源君連瘰瘻二字訓頸腫者誤、

(伊呂波字類抄久病)瘰 頸腫、

(增補下學集上二)瘰瘡〈頸腫也〉

(醫心方十六)治頸瘰瘡方第廿四

病源論云、頸瘰瘡者、因强力入水、坐濕地、或新沐浴、汗入頸中、流在頸上之所生也、始發之時、在其頸項、恆有脈起、使人寒熱、其根在腎、

(醫心方十六)治瘰癧方第十三

病源論云、風邪毒氣客於肌肉、隨虛處而停結、爲瘰癧、或如梅李棗等核、大小兩三相連在皮間、而時發寒熱是也、久則變膿潰成瘻也、

(覆載萬安方一)瘰瘡　人身體生瘡、其瘡則痛痒、膿汁久不差、故名瘰瘡也、

瘰瘡　瘰癧久而自破、膿血不止、遂由復潰、無差期、是曰瘰瘡也、

瘰癧　身體熱實、必生瘰癧、其形作結核、在皮肉間、三兩箇相連累也、生頸項及腋下也、

(覆載萬安方二十一)瘰癧

聖惠方曰、瘰癧者、風熱毒氣、壅滯於胸膈之間、不得宣通、由傳於肝、肝主筋、故令筋蓄結而腫、多生於頸腋之間、浮於筋皮之中、有結核累々相連、大小無定、其初發之時、熱寒顯結、故令寒熱也、

(覆載萬安方二十二)瘻瘡〈潰爛成瘡不差也〉

久漏

論云、久瘡膿潰不止、故謂之瘻、内經陷脈爲瘻、惡連肉腠、即此病也、得之諸瘡不差、毒氣流注經絡、及針艾妄施、或用刀傷折、皆能傷脈、故脈陷而氣漏、是以頸領四肢及腰脊膂膕有所傷、皆致此病、惟肌肉實處、治之易愈、生於虚處則難平也、若遲留歳月、或爲漏骨疽及偏枯之病、蓋榮衞環周不息、脈有所陷不行、必内侵於骨髓而爲疽、血氣漏於一偏、久而虧涸亦成偏枯也、

〔一本堂行餘醫言 六下〕瘻郎豆切、音漏、

瘻即瘰癧也、古耑云瘻、又稱瘰癧、後世多不言瘻、唯稱瘰癧、但瘻者已潰之名、而瘰癧者未潰之稱、又呼其始小者爲結核、雖同一疾、所見異狀、故稱謂隨別、而究之其實則一也、只有久近大小、潰不潰之異耳、夫瘻之爲病也、頸邊始結核、或左或右、或左右俱生、上及耳後、下延缺盆、前至頤、後亘項、按之粒粒可知、其小者如大豆、如銀杏、大者如桃栗、大小圓扁縱横不齊、或二三或五六、或十餘顆、累々相連疊、歴々可斥數、〇下略

〔有林福田方 十〕瘰癧(ルイレキ)タヒコ。

論云、夫瘰癧ハ即九漏是也、多ク項腋ノ間ニアリ、累々トシテ大小定ナシ、發汗寒熱ヲナシ、膿水潰漏ツプレモリ、其根ハ臟腑ニアリ、必用方云、毒藥ヲ以テ點蝕シ、及ビ針刀ヲ以テ鎌割(ケンカツシ)キリサヒ、瘰癧ヲ勞シテ甚クナスコトヲ忌ムベシ、即ニ蝕バミ入ツレバ后ニ死セズト云物ナシ、蓋シ外醫既ニ慈悲少ナク、又利コト積日ニヲヒテス、特ニ宜戒之、

〔榮花物語 三十九布ひきのたき〕右大との〇中略かれさせ給事、月日にそへてまさるべし、右大殿年比る。といふ物ありけるが、亂給ていみじうわづらひ給ひてうせ給ぬ、

〔令義解 戸二〕凡〇中略久漏。謂、身處孔穴、膿汁潰漏、久而不止、故曰久漏也、漏或作瘻也、

〔續修東大寺正倉院文書 二十五〕大寶二年十一月、御野國山方郡戸籍、

中政戸他田赤人戸口廿三〇中略

附見

雁瘡

下中戸主壽人〈略〇中〉

戸主䟽廣麻呂〈年四十九、少丁、久疾、〉

〔一本堂行餘醫言〕〈六上〉便毒〈附魚口、橫痃、〉附下疳、便毒、臁瘡、楊梅瘡、結毒、伏鼠〈略〇中〉

伏鼠瘡

景岳全書引醫林集要云、又有結核在項腋兩乳傍、或兩股腿肉處、名曰伏鼠瘡、今考集要結核作瘰癧、而無二或字、在作凡、瘡門通治中備方、解毒生肌定痛散方後、則似亦不可明焉矣、所謂也、由憂介實易結核字、則似亦今時俗呼鼡見者也、當時所有灸瘡腫痛、或足指跌傷、有瘡瘍金創、打撲腫痛者、必在腿根近小腹之處、結核腫甚者、亦會熱痛、俗呼爲鼡見、又云橫見、又用背有灸瘡腫痛、則兩股下必生鼡核、結痛亦爾、小腹腿股合縫結生半横、王肯堂所謂腿生夾肢者、即是此也、〈出瘍醫證治準繩中、〉病源候論云、所謂鼡核、亦同、

〔瘍科秘錄〕〈三十〉雁瘡

雁瘡本邦ニテハ已ニスネクサト稱シ、多クハ脛ニ發スル瘡ユヱ、脛瘡ト名ケタルナリ、又雁ノ來ル頃ヨリ發シテ、雁ノ歸ル頃ニハ自カラ愈ルユヱ、雁瘡トモ雁來瘡トモ云フ、此病因ヲ考ルニ乃敗血ナリ、

〔牛山活套〕〈下〉雁瘡

雁瘡ハ、和俗ニハハヾキ瘡ト云ヒ、又雁瘡ト云、毎年八九月ヨリ發リテ、二三月ニ愈ルヲ以テ、雁ノ歸來ニ因テ名付ル也、愈カヌル者也、此瘡ヲ治セント思ハヾ、三年ホドカヽレバ根ヲ切ル者ナリ、

〔一本堂行餘醫言〕〈六下〉雁瘡〈附臁瘡、〉

雁瘡者、脛臁生瘡、多痒少痛、搔破出血汁、膿水淋漓、經年不愈、偶愈復發、不可根治也、或有乾燥皮厚皮肉紫黑者、此證頑固、數年不痊、陥成結毒者間有之、若用外敷藥速愈方、或浴冷泉〈如但州城崎、諸國多有冷泉是也、〉求速

疥

劾、則陷成暴水脹而死、若不急死、滯成結毒、與黴瘡結毒不異、又俗用故油紙或故破傘紙、圍裹脛外、此壁與敷輕粉藥大惡法、異而亦不得不惡、唯非在其始萌之時施法、則不可治也、已成頑瘡者常食發物魚鳥辣茄類、以排毒驅瘀、活致新血、擠出陳膿、候勢差減而後浴發瘡溫泉、(如但州城崎溫泉、攝津新湯者是也、)多日長洗、及四五回、則自然可得瘀去毒拔、終致全愈、慎勿性急謂不能治、而迷甘言貪速劾、以招大害也、間有上及膝上內外腿者、甚者下足趺至積爛、若夫肵瘡、

〔倭名類聚抄 三病〕疥癩　內典云、疥癩、(介賴二音、和名波太介、)

〔箋注倭名類聚抄 二病〕疥癩見法華經譬喩品及寶積經、按禮記月令、仲冬行春令、民多疥癘、說文、疥、搔也、釋名、疥、齘也、癢搔之齒類齘也、急就篇、痂疕疥癘癡聾盲、顏師古注、疥小蟲攻齧皮膚、漼錯如鱗介也、又疥有數種、有大疥、有馬疥、有水疥、有乾疥、有濕疥、其狀詳見病源候論、其乾疥者、但痒搔之、皮起作乾痂、則說文顏師古注所云、蓋乾疥之類、可訓波太介、新撰字鏡瘙疥也、訓波太介、萬安方疥訓波太介加佐、並卽是、癩卽俗癘字、見廣韻、訓惡疾、本書病類已載之、併疥癘二字訓波太介、非是、醫心方癩訓波多介、亦誤、昌平本介作戒、類聚名義抄同、並與廣韻合、

〔伊呂波字類抄 波病〕疥(ハタケカサ)　疥瘙(同)

〔增補下學集 上二支體〕疥癩(ハタケ)

〔豐後風土記 大分郡〕酒水(在郡西)

此水之源、出郡西柏野之磐中、指南下流、其色如酒、水味少酸焉、用療痂(ハタケ)癬(タク)、謂胖(ハ)太氣、

〔一本堂行餘醫言 六下〕疥(古拜切、音戒、)　附字辨

疥者痒疾也、故說文云、搔也、(韻會舉要、韻會小補、康熙字典等、俱引說文作瘙、按今說文作搔、三書恐誤、說文元有搔無瘙、)周禮天官疾醫、夏時有痒疥疾、後漢書鮮卑傳、蔡邕議、邊垂之患、手足之疥搔、中國之困、胷背之瘭疽、此皆手爬搔刮之意、而劉熙釋名云、疥齘也、癢搔之齒類齘也、可謂鑿矣、韻會舉要云、或作蚧、康熙字典云、類篇或作瘕、字彙云、𤷾同疥、

肥前瘡

正字通云、瘊與並俗疣字、今皆勿用、正字通引韻會傳其下云、韻會引入疣註、改作疣、瘊疣通作疣、集韻亦作疣、蓋瘊別作瘊、並非、以是爲瘊贅佳、蓋皆文字彙云、疣病又云禿疣、康熙字典云、同疵、面疵下云、玉篇瘊也、集韻禿也、一曰創也、正字通云、瘊有文科瓜三音、方俗異讀、具爲瘊創一也、面皆未見有似疣義、此由字書之不詳于醫事耳、附考諸醫書可自知也、

〔醫心方 十七〕治疣贅方第三

病源論云、疣有數種、有大疣、有馬疣、有水疣、有千疣、有瘟疣、多生手足、乃至遍體、大疣者作創有膿汁、破亦憧瘡是也、馬疣者、皮肉隱嶙起作根墟、搔之不知痛、此二種則重、水疣者作瘡這如瘊瘊、搔破有水出、此一種小輕、千疣者、但瘙搔之、皮起作下痛、瘟疣者起小創皮薄、常有汁出、並皆有虫、人往々以針頭挑得狀如水内瘊虫、此悉由皮膚受風邪熱氣所致也、九虫論云、蟯虫多作瘊疥、

〔長生療養方 一〕諸疣

世俗ニ云ハタケカサ、或云カユガサ、小疣也、服因物為太有神驗、

〔文德實錄 九〕天安元年六月壬午、中納言正三位源朝臣定上表曰、臣自去春末疥癬纏身、五月以來疑赤斑劇、寒熱間發、氣候衰弱、起居難堪、日夜苦辛、計其能升、當踰時月、

〔台記〕康治元年七月廿日甲戌、小兒疥瘡不復、依關實圓覺新也、雖末代、佛法靈驗殊勝也、

〔乳母のさうし〕九條殿のきたのまん所の御かほに、はたけといふもののいできて、見にくきほどにありし時、てんやくのかみ申けるは、たふそくれなるにそめて御のごひ紙は、御かほのはたけよくなり申よし申ければ、夫よりしてこゝかしこより御顏のごひ紙をらせらるゝなり、

〔病名彙解 三〕疥瘡　肥前瘡ノコトカ、古ヘヨリハタケト云訓アレドモイマダ的當セズ、瘡ハタムシノコト也、瘡疥ト云バ瘡モ疥モ濕熱ノ邪氣ナルユヘニ連綿シテ云ヘドモ病状ハ別ナリ、正宗ニ云、夫疥瘡ハ微芒ノ瘡也、コレヲ發シタル人ヲシテ搔ナ手間ナタザラシム、但其何ヲ以テ生ズ

ト云コトヲ知ズ、疥ガ曰、吾根アラズシテ生ジ、母ナフシテ成、乃チ陰陽ノ氣ヲ稟テ育シ、濕熱形ヲ化シテ常ニ王侯掌上ニ列ス、何ゾ士庶ノ身ヲ妨ゲン、

〔斷毒論　天〕疥源○中略

後世之疥者、古之所無、而從異域傳來、無亦異乎痘瘡癘之傳來耳、○中略願此毒之傳、蓋在于唐以降乎、縱彼邦自古而有之、於我日本無有焉、按和名抄（天暦中源順著）訓疥癬曰巴多却、瘡訓巴多、氣訓却、依是觀之、天暦時未有今之疥也者、肌膚疾蠢、總稱巴多却、今之疥者、通稱肥前瘡、肥前俗號曰小瘡、諱國名也、以其初起於肥前、故名肥前瘡、猶起於廣者名廣瘡、起於斯賴私者名斯賴私朴風、起於廣東者稱廣東瘡也、○中略是固非時氣風淫之所致、全因沴氣一種之傳染、故避則必免、不避則罹、

〔一話一言　二十八〕寬永年中肥前瘡

寬永年中に、人の身に瘡のいでき、其名をたれいふともなくひせん瘡といふ、見る人聞人、ひせんおこりたるといはぬ者なし、同じく寬永十四年に、西國肥前に吉利支丹といふ邪法の一揆おこり、武士うけたまはりて害之、これも後に思ひあはせける、人物部

〔塵塚談　下〕肥癬瘡は、野鄙の民間の瘡にして、速に傍人に傳染するなれば、貴賤ともに忌嫌ふの瘡なり、高貴奥向にては、婢女に少しにも濕瘡有時は、即日に宿元へ下る事ぞかし、故に貴族の家に此瘡有事なし、されど此瘡にて、手に箸を持事もならぬほどなやみしもの、或は年久しく煩ひし者は、極て無病息災にして、長壽なる者おほし、此瘡は身をそこなひ名を失ふ病にあらざれば、餘りに忌避るの瘡には有べからず、

〔瘍科秘錄　五〕疥癬内攻膿

疥癬ハ世ニヒゼンカサト稱シ、原ハ肥前ノ國ヨリ起タルモノユヱ名クルナリ、其因濕氣ヲ受テ發スルト云フ說ニテ、今ハ通ジテ濕瘡ト呼ブナリ、其毒傳染シ易シテ、一人患フレバ擧家盡患フ

ル二至ル、其實瘡瘍ナルモノハ、最少ク痒ク多クシテ治シ難ク、肥大ナルモノハ最多ク痛ミ甚シ、クレテ治シ難シトセズ、傳染浴場ナドニテ一旦治スレドモ病根盡キ難ク、春秋ニハ必ズ再發シ、ク生涯愈ザルモノ多シ、總則ノ大病ト云フニハ非ザレドモ、小兒ハ瘦骨立シテ面色萎黃ニナリ、癖ヲ併病スルモノナリ、又毒凝滯シテ總身ニ瀰ルモ腫痛ヲ發シ、膿血淋漓トシテ流レ、遂ニ疲勞シテ死スルモアリ、大人モ多ク發スルトキハ四肢不自由ニナリ、看病人ノ入ルコトアリ、一種頑癬ノ如クニ發シ、紫黑色ニナル者アリ、是ハ毒ノ尤深キナリ、刺シテ血ヲ去ルベシ、此病ノ恐ルベキハ內攻ナリ、內攻スルトキハ、急ニ衝心シテ死スルコト脚氣ノ衝心ト同ジ、

〔寶鶴隨筆 四〕疥瘡の內攻には、伊勢鰕を煮て食すべし、又乾たるを煎じのむもよし、

〔一話一言 二十三〕疥濕瘡

如來有巧呪經云、若疥濕瘡者、用蔓菁、細末酥和、火上煎之、呪千八遍、塗上卽愈、　今俗間に濕瘡といふもの、疥濕瘡なるべし、

〔倭名類聚抄 三〕癬　說文云、癬(息淺反、和名加佐)乾瘍也、

〔箋注倭名類聚抄 三〕醫心方癬訓多无之、眞安方癬俗云阿和比加佐、又云多虫、今俗呼多牟之、〔中略〕所引广部文、釋名、癬、徙也、浸淫移徙、處日廣也、病源候論云、癬病之狀、皮肉隱胗如錢大、漸々增長、或圓或斜、痒痛有匡郭、裏生虫、搔之有汁、按說文所釋、蓋乾癬也、病源候論云、乾癬但有匡郭、皮枯索、痒搔之白屑出是也、

〔增補下學集 上二文章〕癬

〔醫心方 十七〕治癬瘡方第二

病源論云、癬病之狀、皮肉上隱胗如錢文、漸々增長、或圓或斜、癢痛有匡郭、裏生虫、搔之有汁、此由風濕、邪氣客於腠理、復値寒濕、與血氣相搏、則血氣否澁、發此病、又九虫論云、蟯虫在人腸內、變化多端、發動

蚊觸

亦能爲癬、而癬內實有虫也、

〔一本堂行餘醫言 六下〕癬音鮮、息淺切、癬亦疥類、痒疾也、故古連稱疥癬、大槩有二種、一種瘡作圓文、如錢形、邊高中低、邊生細粟瘡、甚痒、搔之汁出、漸展、連生二三瘡、四五瘡、大者作斜形扁形、大小無定、粟瘡中間有細蟲、多生面頰肩項兩手、間有生腹背兩脚者、以其似錢形、故俗呼爲錢癬。。此證易治、一種瘡生陰股、始如粟粒、甚痒難堪、搔之汁出、或唯白屑起、漸延自陰毛中、及臍下少腹、至臍上、或自會陰左右、展兩臀、上腰下足、遍體無所不至、皮漸頑厚、色淡黑、殆如牛領皮、有至苦痒終夜不寐者、以其陰股特多甚痒、故俗謂之陰癬。。多著男子、婦人至稀、此證極難治療、○中略

附字辨

癬或作𤻲、音同癬、劉熙釋名云、癬徙也、浸淫移徙處日廣也、故靑徐謂癬爲徙也、此說亦攫乎鑿乎、从徙則可言、从鮮則不可言、史記越世家云、吳王伐齊、子胥諫曰、吳有越腹心之疾、齊與吳疥𤻲也、又省作痄、正字通云、俗作蘚者恐非也、玉篇云、蘚蟲名由音同爲此說耳、決不可用也、又康熙字典云、癦得案切音旦、癬病此亦不可取也、

〔倭訓栞 中編四 加〕かぶれ　漆瘡をうるしかぶれといふ、倭名抄に見え、職人歌合にも見えたり、氣觸の義也、又東鑑に蚊。觸。と見えたれば、もと蚊に觸て瘡疥を生ずるより名づけ初たるにやともいへり、或は疱をよめり、集韻に痒也と見えたり、

〔類聚名物考 疾病一〕かぶれ　臭。觸。欽　蚊觸明月記

これは俗言なり、明月記に蚊觸と書しは借字なり、さりながらも夏のほどなど、蚊に喰るれば、その所に小瘡の出來しは、かぶれたるに似たれば、さも推てはいふべけれども、もとこの詞は、その病のおこる所を思ふに、或は漆の臭氣にふれておこり、又は膏藥などにもみなその氣に觸てお

これらば、貝卿の重なるべしとの事も、やゝはやうよりいひしにやあらん、

〔明月記〕文暦二年〔嘉禎元年〕十月廿六日乙卯、雑熱更發、去廿一日肩邊腫二ヶ、腫紋如水痛、无他病氣、令見金瘡、不驚而他行了、其物漸氣減、其苦猶有、聞之云々、今朝又示合令見者、偏似漆瘡、雖无他違例、此病實發間中也、於今者此事無由、承伏、止療治令傷之、只肩背胸邊打散少々出也、猶惱不審、

漆瘡

〔倭名類聚抄 三〕漆瘡　病源論云、漆瘡〔漆字亦作柒、和名宇流之加不禮〕人見漆中其毒面腫是也、

〔箋注倭名類聚抄 二〕原書作、漆有毒、有人禀性畏漆、但見漆便中毒、毒面痒、然後胸臂脛腨皆悉瘙痒、面爲起腫、繞眼微赤、諸所痒處、以手搔之、隨手輦展、起赤瘖瘰、瘖瘰消已、生細粟瘡、此所引節文、醫心方引、中毒作中其毒、與此同、按説文、漆水出右扶風杜陵岐山、東入渭、一曰入洛、桼木汁、可以髹物、二字不同、後多借漆爲桼、

〔伊呂波字類抄 宇疾病〕漆瘡　ウルシカフレ

〔醫心方 十七〕治漆瘡方第十二

病源論云、漆有毒、人有禀性畏漆、但見漆便中其毒、喜面痒、然後胸臂脛腨皆悉瘙痒、面爲起腫、繞眼微赤、諸所痒處、以手搔之、隨手輦展、起赤瘖瘰、瘖瘰消已、生細粟瘡甚微、有中毒輕者、證候如此、其有重者、遍身作瘡、小者如麻豆、大者如棗杏、膿焮疼痛、摘破小定、任小瘥、有隨以更生、若火燒漆、其毒氣則厲、著人急重、亦有性自耐者、終日燒煑、竟不爲害、

浸淫瘡

〔倭名類聚抄 三〕浸淫瘡　病源論云、浸淫瘡〔浸淫二音、和名之美〕風熱發於肌膚也、

〔箋注倭名類聚抄 二〕醫心方浸淫瘡訓美豆久佐〔○中略〕原書風上有是心家有因字、病源候論又云、初生甚小、先痒後痛而成瘡、汁出浸潰肌肉、浸淫漸闊乃遍體、以其漸々增長、因名浸淫也、按浸淫本作侵淫、説文、侵漸進也、病源候論宋本及外臺秘要作侵淫瘡、侵淫漸進、淫字从水作浸、説文淫侵隨理也、司馬相如難蜀父老云、六合之内、八方之外、浸淫衍溢、蓋與水名浸字義省作浸、混同無別、

白癜

〔伊呂波字類抄志疾病〕浸淫瘡

〔增補下學集上二支體〕浸淫瘡

〔醫心方十七〕治浸淫瘡方第七

病源論云、浸淫瘡、是心家有風熱、發於肌膚、初生甚小、先癢後痛、而成瘡、汁出浸淫肌肉、浸淫漸闊、乃至遍體、其瘡若從口出流散四支者則輕、若從四支生、然後入口則重、以其漸々增長、因名浸淫瘡也、

〔倭名類聚抄三瘡〕白癜　病源論云、白癜、一云白電、之阝波太、入面及身頸皮肉色變白、亦不痛癢者也、

〔箋注倭名類聚抄二瘡〕白電之名、出廣本藥名類附子齊條、其他未見、醫心方白癜、和名之良波太、推古紀白癩亦同訓、按之良波太、卽白膚之義、大祓詞所謂白人是類也、今俗呼之路奈末豆、○中略原書無人字、身頸作頸項身體四字、痛癢作痒痛、醫心方引作痛癢、與此同、按玉篇、痒痛痒也、癢同上、

〔下學集上支體〕白癜

〔醫心方四〕治白癜方第十九

病源論云、面及頸項身體皮肉色變白、與肉色不同、亦不痛癢、謂之白癜、此亦風邪搏於皮膚、血氣不和所生也、和名之良波太

〔有林福田方十〕癜瘍

三神散、紫黑赤白ノ癜風、癧瘍ノ白ク䵟疾ヲ治ス、硫黃一分、白礬一分、生膩粉二錢、右同研テ紫茄子ノ汁ヲ取調テ少ヲ傳ベシ、仍茄子ヲ切テ藥ニ浥テ患處ヲ磨ルコト百十一ドバカリセヨ、日三ビ、私云、白癜風ノ病ハ毛髮ニ入レバ、毛髮モ皆白クナリテ、面モ髮ハ落ルコトナシ、白癩ハ毛髮ニ入レバ卽毛髮モ俱ニ落チ膚ヘモ白クシテ肌モ不仁シテ物モヲボヘズ、痛カラズ、此ヲ以テ異トスベシ、白山カタイト云ハ是ナリ、

〔延喜式入祝詞〕六月晦大祓十二月准之○中略

白子

國津罪 生膚斷、死膚斷、白人、胡久美、略下

〔大祓詞後釋上〕白人胡久美

後釋白人は和名抄に、白癩人面及身頸皮肉色變白云々者也、之良波太とある物の類、其外世に白子といふ物なとのたぐひをいふべし、中略かくて此類は共にきたなき物なる故に、穢を以て罪とするなり、かの推古天皇の御世に參來たりし、白斑人の面白なりしも、白人のたぐひなるを、そこに惡其異於人欲棄海中島とある如く、さる類はきたなきものにて、世の人も惡み、まして神はにくみきたなみ給ふなり、當紀履中卷に見えたる淡路島に坐ます伊弉諾神の、飼部の黥の疵み臭氣を惡み給ひし事なとをも思ふべし、さて穢によりて白人胡久美の類の直るにはあらざれども、穢の物を出して贖へば、その穢の淸まるなり、

〔異搜事紙〕しろことといふものあり、むさなきより、かみもまゆもみなしろく、めにくろまなこもなし、むかしよりいまにいたるまで、まゝよにいでくることあり、

〔和漢三才圖會十四外夷〕白子

按今往往有白子者、體悉白、僅頭髮淡赤色面貌額耳、有鼻子同白子者、予見之、豈謂醫說所論者近於理而必不足也、月水方行時受胎、及被日光照者後不少矣、然白子僅以一二計焉、畸異人原不可以理論也、

瘢風

〔倭名類聚抄二〕瘢風 病源論云、瘢風〈之良波太〉人頭及頸項腋下、自然斑點相連、不痛不癢、

〔箋注倭名類聚抄二〕醫心方、瘢瘍、和名奈末都波太、按奈末豆波太、蓋魚膚之義、○中略曲直瀨本瘢風作瘢風、原書作瘢瘍、按是瘢瘍瘢風之類、故名、從广傍字、原書頭下有邊字、項下有刺字、腋下有色微白而圓、亦有烏色者十字、不痛不癢作亦無痛癢、昌平本癢作痒、同、

〔伊呂波字類抄之疾病〕瘢風 シラハタ

〔下學集 上 支體〕歷瘍（ナマツ）癧書作二癧風一

〔增補下學集 上二 支體〕歷易（ナマツハダ）（ナマツ瘍）

〔醫心方 四〕治二癧瘍一方第十八

病源論云、人頸邊及胸前掖下、自然斑剝點相連、色微白而圓、亦有二烏色者一、無二痛痒一、謂二之癧瘍一也、此亦是風邪搏二於皮膚一、血氣不レ和所レ生也、和名奈末都波太

〔授觀萬安方 五〕癧瘍風 附白駁、白癜風、紫癜風、

論曰、癧瘍風之病、其狀斑駁、點點相連而圓、大槩似二白駁一而稍微也、皆由二風邪熱氣搏二於脾肺經一、流二散肌内一使二然也、

〔牛山活套 下〕癜風

癜風ハ和俗ナマヅト云、白癜風ハ治シ難シ、和俗ハ白癩ト云テ、天刑病ノ中ニスル也、汗斑（アセナマヅ）ハ治シヤスキ也、多ハ夏ノミ生ズル也、蜜陀僧ヲ酢ニテ解貼テ宜シ、又一奇方爐（ロタン）灰硫黄雄黄樟腦各等分酢ニテトキ貼ベシ、其効如レ神、

〔瘍科秘錄 五〕風癜

癜風ハ紫白ノ二證アリ、本邦ニテハナマヅト云フ、頑癬ノ類ニテ、至テ淺膚ノ毒ナリ、其痕圓暈ヲ成シ、苔蘚ノ蝕スルヤウニ漸々ニ蔓延スルナリ、痛ハ曾テナク、但痒ク、四時共ニ發スレドモ、夏月暑時ニ多シ、紫癜風ハ色黑ク、淡墨ニテ染タルヤウニ發スルユヱ、又黑癜風ト云フ、白癜風ハ白色クシテ、細ナル白屑ヲ起スモノナリ、紫白共ニ治シ易キモノナリ、一種身體白ク駁ニナリ、皮膚ノミナラズ深ク肉マデモ色ヲ變ジ、毛髮モ白クナリ、宛モ牛馬ノ斑文、草木ノ駁葉（イサハ）ノ如クナルモノアリ、之ヲ世ニ白癜風ト稱シ來レドモ、赤痣（アザ）ノ類ニテ癜風ニ非ズ、卽白駁風ナリ、又白癩ニテ癩ノ一證ナリト云フ説アレドモ、癩ニハ非ズ、少々ナレバ治スレドモ、開大（ヒロガリ）タルハ難治トス、

熱沸瘡

〔和漢三才圖會〕十人倫之用 癜風 白癜和名之良波太 紫癜和名奈末豆波太 汗斑

癜風有白紫二種、白癜面及身頸皮肉色變白、亦不痛癢者也、紫癜頸及胸前腋下自然斑點相連無痛癢、

萬病回春云、用附子硫黃、以生薑汁調勻先醉、擦布擦洗患處令淨、以前藥擦之、白黑癜風共愈、但白者難、

〔台記〕康治元年七月十日辛丑、自今日依熱瘡、仍不出仕、 十六日丁未、熱瘡漸癒、立千手觀音(三尺)、又自今日三七日、使全豐阿闍梨修愛染王供、 廿七日戊午、熱瘡付巴豆、翌日漸癒、經數日、 九月十九日庚申、友光來、熱瘡付藥(已上腫物)、今夜癰左頸著也、先以刀摩腫令色赤、著之藥、 廿二日辛亥、友光來、所癰腫著藥、無痛、 廿三日壬子、依友光申、今日初沐浴、付藥後初浴也、其後友光著藥、其色白、不知名、爲令早愈也、付之後無苦痛、師抄云々、浴後以純綿覆腫(二三日)洗之付藥也、今日公春時通等來仕湯殿、

〔新猿樂記〕十三娘者、中之醜陋也、醜陋不可見人、顏貌不可仕主、其貌體○中略 疥癬瘻具、

〔倭名類聚抄〕三病 熱瘡 四聲字苑云、瘡(音肉)熱時細瘡也、新撰方云、治夏月熱瘡(和名阿世毛、今案俗字宜作疿子、)

〔箋注倭名類聚抄〕二 按玉篇、疿、熱生小瘡、廣韻同、知此瘡即疿也○中略 醫心方載新錄方治夏月熱瘡方、此所引卽是、新錄方寄撰人未詳、現在書目錄有新錄單要方五卷、疑卽是、或是今無傳本、按病源候論云、盛夏之月、人膚腠開、易傷風熱、熱毒氣搏於皮膚、則生沸瘡、其狀如湯之沸、輕者而々如粟粒、重者熱汗浸漬成瘡、因以爲名、世呼爲沸子也、據之是瘡因如湯沸得名、又按說文、沸、滭沸濫泉、非此義、沸湯之沸、說文作瀿、云涫也、涫俗作滾、後人借沸爲瀿、瀿字遂廢、其疿字說文所無、俗字也、源君欲以俗字改古字乎、是山田本、昌平本有和名二字、山田本、曲直瀨本注沸下有字字、那波本同、曲直瀨本乎作字、

〔伊呂波字類抄〕阿病 熱沸瘡アセモ

癮胗

〔醫心方十七〕治夏熱沸爛瘡方第六

病源論云、盛夏之月、人膚湊開、易傷風熱、風熱毒氣搏於皮膚、則生沸創、其狀如湯之沸、輕者匝々如粟粒、重者熱汗浸漬成創、因以爲名、世呼爲沸子、

〔和漢三才圖會十人倫之用〕痱風〇中略

汗斑　夏月、汗滯腋下多生之、用密陀僧細末絹調搽之、加硫黄亦吉、

〔病名彙解一〕沸爛瘡　病源ニ云、盛夏ノ月、人ノ膚、腠開キ、風熱ニ傷ラレヤスシ、風熱毒氣皮膚ヲウツトキハ沸瘡ヲ生ズ、其狀湯ノ沸ガ如シ、輕キモノハ粟粒ノ如ク、重モノハ熱汗浸漬シテ瘡トナル、因テ以テ名トス、世ニ呼テ沸子トスルナリ、

〔病名彙解六〕痤痱　生氣通天論曰、汗出テ濕ヲ見バ、乃痤痱ヲ生ズ、類註ニ、汗マサニ出ルトキハ、玄府開ク、若シ濕氣ヲ見バ、必膚腠ニ留ル、甚シキモノハ痤ヲナシ、微ナルモノハ痱ヲナス、痤ハ小癤ナリ、痱ハ暑疹ナリ、馬玄臺ガ註ニ、濕邪凝結シテ遂ニ痤痱ヲナス、痤ハ痱ニ較レバ大ナリトス、其形癤ニ類ス、痱ハ痤ニ較レバ小ナリトス、則所謂風癮是ナリ、正宗ニ云、痤痱ハ密ナルコト撒粟ノ如ク、尖ルコト芒刺ノ如ク、痛痒常ナラズ、渾身草刺甚シキモノハ皮損シテ瘡ヲナスト云リ、按ズルニ、痤ハ小キチブトノ類、痱ハ風ホロセノ類ナルベシ、

〔倭名類聚抄三瘡〕癮胗　四聲字苑云、癮胗(隱軫二音、和名知々保呂、一云知々波久佐)皮外小起也、

〔箋注倭名類聚抄二瘡〕醫心方、隱胗訓知々保无、又訓保呂之、〇中略　按玉篇、癮疹皮外小起也、四聲字苑蓋依之、廣韻作癮胗、病源候論作隱軫、按隱軫、蓋疊韻字、後俗從肉從疒、遂與說文脣瘍之胗疹字混、

〔伊呂波字類抄知病瘡〕癮胗チヽホム、チヽハル

〔增補下學集上二支體〕癮胗(チヽホロ、チヽハクレ)皮外小起也

〔倭名類聚抄三瘡〕風癮胗　病源論云、風癮胗(和名加佐保路之)人皮膚虛、爲風寒所折則起也、

風疹附

〔箋注倭名類聚抄 二〕原書風𤻌胗作風瘙隱軫生瘡、則起下有隱胗二字、

〔增補下學集 上二〕風𤻌胗

〔倭訓栞 前編 二十八〕ほろし　倭名抄に、風𤻌胗をかさぼろしと訓せり、ほろしは疿子の轉音なり、遠碧軒記に、今俗通以痱熱瘡生細瘡曰痱子見えたり、

〔内科秘錄 四〕癮疹　風疹　風㾦

癮疹ハ外表ニ出ブ、和名アカザホロシト云フ、是モ麻氣ニ中リタルナリ、宿疾ノヤウニナリテ、二度モ三度モ之ヲ患ヒ、或ハ毎年其時節ニ至ルトキハ、必ラズ發スルモノアリ、蓋シ其實麻疹ノ邪ニ感ジ易キ者ニシテ、決シテ内因病ニアラズ、世醫或ハ徒ニ呼デ發斑ト爲スモノハ誤ナリ、

面皰

〔下學集 上二〕皶 鼻瘡之

〔增補下學集 上二〕面皰　皰瘡上同

〔醫心方 四〕治面皰瘡方第十四

病源論云、面皰者、謂面上有風熱氣生皰、或如米大、亦如穀大、白色者是也、又云、養生方云、醉不可露臥、令人面發瘡皰、和名爾支美

〔病名彙解 六〕皶　生氣通天論ニ、勞汗シテ風ニアタレバ、寒薄テ皶ヲナス、鬱スレバ乃チ痤ス、類註ニ云、形勞シテ汗出デ、坐臥風ニアタレバ、寒氣コレニ薄リ、液凝テ皶ヲナス、即粉刺ナリ、若鬱シテ稍大ナレバ乃チ小癤ヲナス、是ヲ名テ痤ト云、皶ハ支加切、中原雅音ニ云、酒皶鼻也、按ズルニ、是俗ニ云、ニキビノコト歟、又粉刺ト云リ、故ニ面ニ生ズルヲ皶皰トイヒ、鼻ニ生ズルヲ鼻皶ト云リ、

〔嬉遊笑覽 七〕にきび

おなかたはとみゆるものは、鼻はなゝりけり、さきのかた少したりて、色づきたる永禄本文、今按、和名云、皶鼻、野王案、皰面皰也、和名爾岐美、鼻上皰也、俗に石榴鼻といふこれなり、にきみは、同和名云、唐韻云、

白雲

痤、昨禾反、和名爾岐美、小腫也、つねに、にきびといふ物なり、赤くして、こまかに、つぶつぶと出る物なれど、丹黍(キビ)といふ義なるべし、源註拾遺

〔運歩色葉集志〕白雲頭病　白屑(シラクヅ)頭不病

〔節用集之〕白雲(シラクモ)

〔醫心方四〕治頭白禿方第七

病源論云、凡人有九虫、在腹内、値血氣虚則侵食、而蟯虫發動、最能生瘡、仍成疽癬癰疥之属、无所不爲、言白禿者、皆此虫所作、在頭上生瘡、有白痂甚癢、其上髮並禿落不生、故謂之白禿也、

〔牛山活套下〕胰瘡

胰瘡ハ、和俗シラクモト云フ、小兒ニ多キ症也、陰事ヲ知レバ、多クハ不治シテ愈ル也、

〔瘍科秘錄五〕白禿瘡

白禿瘡俗ニシラクモト稱ス、大人モ患フルコトアレドモ先小兒ニ多シ、頑癬ト同毒ニテ蔓延シテ面ニ出テ、或ハ父母ニ傳染スルトキハ、常ノ頑癬ニナルナリ、其瘡白屑ヲ起シ、瘡痂ヲ結ビ、痒シテ蟲ノ皮中ヲ行クガ如キヲ覺ヘ、瘡痂(カサブタ)ノ下ニ膿ヲ持チ、遂ニ毛髮禿落スルモノナリ、剃刀(カミソリ)ヲ當ルコト至テ宜シカラズ、髮ヲ剃レバ乍ニ蔓延シ、髮ヲ剃ズニ置ケバ格別ニ蔓延セズ、淺腐ノ毒ナレドモ、至極治シ難キモノナリ、

〔病名彙解一〕禿瘡(トクサウ)　俗ニ云シラクボノコトナリ、禿ハ、字書ニ無髮ナリトアリ、カブロトヨメリ、瘡ニテ髮ヌケカブロノヤウニナル故ナリ、从人上象禾、除錯ガ云、人ノ髮纖長ナラズシテ禾稼ノ若ナレバナリ、入門ニ云、禿瘡初テ起ル、白團斑剝シテ癬ノゴトク、上ニ白皮アリテ、久シキトキハ痂ヲナシ、遂ニ滿頭ニ至リ、瘡ヲ生ズ、中ニ膿孔細虫アリテ、裏ニ入テ痛マズ、微ク痒、久キヲ經テ瘥ズト云リ、是ハ白禿瘡ナリ、又赤禿瘡ト云ハ、蟲髮ヲ食ヒ、禿落シテ白痂ナク、汁アリテ、皮赤シテ痒ナ

リ、

〔倭名類聚抄 三〕鬼舐頭　病源論云、鬼舐頭〈師說以爲、下食所舐是〉人頭或如錢大、或如指大、髮不生也、

〔箋注倭名類聚抄 三〕曲直瀨本無注云字、山田本、昌平本無是字、按下食日、見口遊陰陽門、拾芥抄諸事吉凶部、掃林問答見藏下食、有下食時引、曾香暦日、下食時者避其時、不忌其日、沐髮種農本忌其時、江次第抄云、下食者鬼神之名、此日沐浴則鬼舐頭面髮落是也、但此注爲天狗下食所舐、謂下食日時沐浴、則天狗下來食舐之、令髮落也、口遊拾芥抄、簾中抄、並載下食日沐浴禁文、謂之以天狗下食也、江次第抄以下食爲鬼神名者似誤、今俗說蛞蝓舐頭、則髮落、蓋蛞蝓脚下自下白、與下食時聲近而誤也、〈中略〉原書作人有風邪在於頭、有偏虛處、則髮禿落、肌肉枯死、或如錢大、或如指大、髮不生、亦不痒、故謂之鬼舐頭、此所引節文、

〔江次第抄 一〕四方拜

謹下食　其日注曰、下食者鬼神之名、此日沐浴則鬼舐頭面髮落、故憚之、

〔有林福田方 十〕頭面七竅門

鬼舐頭　ケジキノナブリタル、此是レ風邪ノ作ス所也、亦傳ヤハラ、右末トシテ絲ニ和テ付之、

〔俗說正誤夜光珠 中〕髮のまるく禿るを蛞蝓に舐られたると云說

故なくして、頭のまるく禿るを、俗に蛞蝓の舐りたる痕といふは誤れり、これ蟲毒にあらず、皮膚に風熱の發りたる病にて、其名を鬼舐頭禿といふ、千金方に、鬼舐頭を治する方、猫兒屎を灰に燒て、臘豬脂に和て、傅くとあり、

〔瘍科秘錄 五〕腎囊風

腎囊風、和名ワインキンタムシト云フ、是モ頑癬ノ一種ナリ、至テ治シ難キモノナリ、初メハ陰囊ニ發スレドモ、漸蔓延シテ陰莖及兩股小腹ヲモ侵蝕スルコトアリ、圓暈ヲ成シテ微モ頑癬ニ異、

瘃

ナラズ、酒ヲ飲ミ或ハ臥シテ温マルトキハ大ニ痒ク、搔抓(カキムシル)トキハ又痛ヲ發シ、脂水ヲ流シ、遂ニ疙瘩頑麻ニナルナリ、或ハ春夏ノミ發シテ、秋冬ハ愈ルモノモアレドモ、先四時トモニ愈ザルモノ多シ、敷藥洗藥ナドニテ一旦愈レドモ、日ヲ經レバ再發ス、温泉ニ浴スレバ其年ハ愈レドモ、來年ニ至レバ必ズ再發シテ、終身愈カヌルモノナリ、

〔倭名類聚抄三〕瘃　漢書音義云、瘃、〈陟玉反、和名比美、辨色立成云、之毛久知、〉手足中寒作瘡也、

〔箋注倭名類聚抄二〕陟玉反、與玉篇廣韻合、昌平本作竹足反、字異音同、新撰字鏡、皸比彌、按器之罅坼謂之比、又謂之比々、皸、故人手之罅坼、亦云比美、醫心方凍瘡訓之毛久、之毛久知、蓋霜朽之義、今俗呼之毛也計、〇中略按應劭、孟康、韋昭、韓韋、劉闘宗、夏侯泳、包愷、蕭該、並有漢書音義、今皆無傳本、此所引未知何氏書、玄應音義云、瘃謂手足中寒作瘡者也、與此全同、蓋依漢書音義也、又按漢書趙充國傳、手足皸瘃、注引文穎曰、瘃寒瘡也、說文、瘃中寒腫覈、

〔太平記十七〕北國下向勢凍死事

同〈〇延元元年十二月〉十一日ニ、義貞朝臣七千餘騎ニテ、鹽津海津ニ著給フ、七里半ノ山中ヲバ、越前ノ守護尾張守高經、大勢ニテ差塞タリト聞ヘシカバ、是ヨリ道ヲ替テ、木目峠ヲゾ越給ヒケル、〇中略佐々木ノ一族ト、熊谷ト取籠テ討ントシケル間、相カヽリニ懸テ、皆差違ヘントシケレドモ、馬ハ雪ニ凍ヘテハタラカズ、兵ハ指ヲ墮シテ弓ヲ不控得、太刀ノツカヲモ拳(ニギリ)得ザリケル間、〇下略

〔北邊隨筆四〕雪墮指

史記匈奴傳云、會多大寒風雪、卒之墮指者十二三、於是冒頓佯敗走誘漢兵云々、こゝにても北越の雪中に日を經たりしもの、足くび腐れおちたるを、まのあたりみたりき、されどさる寒地になれたる人は、さる事もなく、かつその防もたくみなるべし、よそよりおもはむがごとくならば、ひと日もそこにはすむものあるまじき也、松前の人、京にのぼりゐたりしが、しはすの頃、かの國に

て、三四月ばかりの間もちなりといひし、されどかく暑寒順なる地にすめるをもよろこばぬ事、たゞわれひとりまかるにはあらじか、

〔東遊記　二〕寒氣指を落す
北國の人、餘りに寒氣をこらへ、雪を侵せば、血凍り、氣のめぐり絶えて、春に至り、少し暖氣を催す頃、足の指骨紫色に變じて、やがて腐り落る也、いかに療治を加れども、治しがたきものなり、余○も此病人を度々見たりしかども、やはり脫疽の種類なるべし、いかに寒氣甚しければとて、指の落る事やあらんと思ひすてゝ居たりしが、北地に數年遊びて、其まことなる事を知る、人のみならず、禽獸までも指の落る事あり、出羽國秋田領の内大島村の鷄、ひと年寒氣强かりし冬、庭に追放し置しに、其翌春に至り、鷄の足の指こと〳〵く腐り落ぬ、鷄の命は恙なくて今に存在す、されども、足の指なければ枝に栖事ならず、只庭にのみうづくまり居る也、是も奇珍の事といふべし、すべていかなる寒國といへども、指の落つるといふは足の指の事なり、手の指の落つるといふ事はあらず、

〔倭名類聚抄　三〕瘃　漢書注云、瘃(音觸、和名阿加々利、)手足坼裂也、

〔箋注倭名類聚抄　二〕阿加々利見萬葉集、○原書趙充國傳注引、文類、無手足二字、按說文、瘃足坼也、玉篇瘃足坼裂也、

〔塵添壒囊抄　三〕ヒビアカヾリトハ何ノ字ゾ、皸瘃ト書テアカヾリヒヾト讀也、本文ニ、凍風馬ハ皸瘃也ト云々、又皹ノ字ヲモヒヾトヨメバ、是モヤマヒニヤ皹(ヒヽ)トヨム字也、

〔有林福田方　十〕手足皸瘃(ヒヾ アカヾリ)
此ハ皮厚クレテ、ソヽロケテ面裂リ、痛クシテ瘡ノ如ナル者也、○右此ヲ取テ搗ヒヽノ上ニ塗テ乍ニ瘀リスベシ、三錫ニ不過シテ差ユ、又云、又灶ヲ以テ其上ヲ灸、三壯、

脣瘡

〔有林福田方十〕手足皸裂(アカヾリ)

百一方運奇方皆同五倍子、右末シテ麻油ニ調テ傅、又麥苗ヲ濃ク煎シテ、アツク時々霑アタヽカニシテ此ヲ洗ヒ漬ユナヨ、

〔倭名類聚抄三〕胗　唐韻云、胗、(音軫、和名久知比々、)脣瘡也、

〔箋注倭名類聚抄二〕廣韻、胗、說文曰脣瘍也、今本說文玉篇並同、作瘡恐誤、

〔增補下學集上二〕胗(クチビヽ)

眠瘡

〔倭訓栞前編十八〕とこづめ　眠瘡をいふ、床をつめしより發したる瘡なれば、床積の義なるべし、新六帖に、打絕てさのみふすゐ(い)の床づめぞかるもの亂れ朽やはてなん、

〔病名彙解六〕眠瘡(ミンソウ)　同破䐃(ハキン)　共ニ俗ニ云トコヅメナリ、回春虛勞門ニ、久ク臥テ眠瘡ヲ生ズト云リ、玉機直藏論ニ、脫肉破䐃ト云リ、類註ニ、脫肉トハ肌肉消シ盡ルナリ、破䐃トハ臥コト久ク、骨露レテ、筋肉敗ルナリ、䐃ハ䐃允切、筋肉結聚スルノ處ナリ、啓玄子ガ曰、肘膝ノ後肉塊ノ如クナル者ナリ、

〔時還讀我書上〕病人ハヤク床。瘡。ヲ生ズルモノ、多ハ不治ナルモノナレドモ、奧羽ナドニテハ病ノ難易ヲ問ズ、熱證ニハ必ズコレアリトキケリ、風土ノ異ナルユエナランカ、又或人ノ言ニ、床瘡ニハ何ニテモ紫色ノ物ヘ臥セシムルトキハ、必ズ潰爛スルニ至ラズトイヘリ、コレヲ試シニ驗アルヲ覺ユ、

疵點

〔倭名類聚抄三〕疵　晉書云、趙孟面有二二疵、(音疾移反、和名阿佐、)

〔箋注倭名類聚抄二〕所引文今本晉書無載、按隋唐經籍志、王隱、虞預、朱鳳、謝靈運、臧榮緒、干寶、蕭子雲、許敬宗、徐堅皆有晉書、此所引蓋是等書也、按蒙求、趙孟疵面注云、晉趙孟字長舒、爲尙書令史、善淸談、面有疵點、時人曰、諸事不決問疵面、是其事、徐子光補注亦云、舊注不載出典、說文、疵病也、廣韻、

疵黑痣、爲鍼射術所能治乎、其小疵也、山田本注首有音字、那波本同、醫心方同訓、

〔増補下學集上二〕疵

〔有林福田方十〕疵黶

皮中ニ紫ニ赤ク離セス、幾ゲナルヲ治ス、竹中水ノ馬ノ尿ノ如クナルヲ取テ洗之、如意方ニ出、又千金方云、以鍼ヲ以テ拭之、アブカラシムレバ、即消ス、不差、數々拭之即止、

〔醫科秘錄十〕黑痣

黑痣ハ俗ニアザト稱ス、是ハ先天ノ遺毒ヽ見ヘテ、生レナガラ發シタアルモノナリ、初ハ至テ微シク紋網タルホドノモノモ、日ヲ累ネ月ヲ積ムトキハ、漸蔓延シテ闊大ニナルモノ也、初生ノ見ハ得ト改テ、若シ黶ノアルモノハ、速ニ治法ヲ施スベシ、黶ニ赤黑ノ二證アリテ、赤黶ハ臙脂ヲ抹タルヤウニ赤ク發スルナリ、

〔病名彙解六〕黶瘤　俗ニ云アザノコト也、黶ハ字彙ニ云、音點、黑痕也、又云音掩、面ニ黑子アルナリ、

〔和漢三才圖會十人倫之用〕黶　和名阿佐

按、疵瘢黶面色深、治法與黶黑同、

〔東大寺正倉院文書十一〕神龜三年、山背國愛宕郡雲上里計帳、〇中

女出雲臣島刀自賣、年拾壹歲、　小女　左頰黶、〇中略

男倉麻呂、年拾肆歲、　右手黔杵。

〔宇治拾遺物語七〕これもむかし、天ぢくに身の色は五色にて、角のいろはしろきしか一ありけり、深山にのみすみて人にしられず、〇中略國の大王おほくの狩人をぐして、此の山をとりまきてすでにころさんとし給、〇中略鹿こしの前にひざまづきて申さく、我毛の色をおそるゝによりて、この山にふかくかくれすめり、しかるに大王いかにしてわが住所をばしり給へるぞや

黒子

と申に、大王の給、この輿のそばにある顏にあざのある男つげ申たるによりて來れるなり、かせぎみるに、顏にあざありて御輿の傍にゐたり、〇下略

〔異疾草紙〕ある女、かほにあざといふものありて、あさゆふこれをなげきけり、あざはうちまかせて、人の身にあるものなれども、閑所はくるしみなし、かほなどにつきぬれば、人にまじはり、はれなどふるまふことはかなふべくもなければ、まことにかたはなり、

〔倭名類聚抄 三 瘡〕黒子　漢書云、黒子、和名波々久曾、今中國呼黶子、黶音於覃反、吳楚俗謂之誌者識也、

〔箋注倭名類聚抄 二 瘡〕昌平本有和名二字、醫心方同訓、按新撰字鏡䵟、黳並訓波々久曾、愚管抄謂之波々久呂、今俗又謂呼保久呂、〇中略 那波本作於覃反、按廣韻黶在上聲五十琰、覃在四十七寑、覃平聲二十二覃字、其韻皆異、類聚名義抄作於簟反、爲是、簟在上聲五十一忝、與玉篇黶音烏忝切字異音同、山田本作烏忝反、亦恐忝字之譌、忝平聲二十五添字、其韻又不同、〇中略 所引高帝紀顏師古注文、原書呼上有通字、黶子上有爲字、曲直瀨本黶作黳、注同、按說文、黶中黑也、轉注爲黑子之名、說文新附云、黳姿也、古只作厭、笸也、厭笸轉注爲厭黶、後从面作黳、則黶黳二字不同、然慧琳音義引韻英云、黳身上黑子、集韻亦黳訓面黑子、蓋黶多在面者、故俗變黑從面、遂與黳字混也、

〔增補下學集 上二 支體〕黒子(ハヽクソ、ホクロ)　黶子(アンシ) 同上

〔倭訓栞 中編 二十 波〕はゝくそ　新撰字鏡に黳をよみ、和名抄に黒子をよめり、蠅糞の義なるべし、今ほくそといへり、唐韻に黶を面黒子也といへり、よて和名抄におもはゝくそと訓せり、

〔醫心方 四〕治黒子方第廿一

病源論云、黒志者、風邪搏血氣變化所生也、夫人血氣充盛、則皮膚潤悅、不生疵瑕、若虛損則黠志變生、若生面有之者、非藥可治也、面及身體生黑點、謂之黒志、亦名黒子、

〔瘍科秘錄 十〕黒子

黑子ハ俗ニホクロト云フ、多ク面部ニ發スルモノ也、相者ノ方ニ黑子ノ出タル位置ニテ、吉凶ヲトスル法アリ、漢ノ高祖ハ左ノ股ニ七十二ノ黑子アリタ、七十二數ヲ爲シ、黑子モ亦七十二數ニ從フ宿タリト史記ニ載タリ、サレバ黑子ニモ吉凶ノアルコト必定也、皮膚ニ墨ヲ點ジタル如ク平坦ニ出ルヲ常式トス、或ハ高ク突起シタ、疣目ノ如クニナルモノアリ、是ハ贅花スルコトアリ、婦人女子ノ眼モ目ノ下ニ出タルハ泣黑子也ト云タ、殊ニ朱ヲ點シ、灸ヲ灶タ黑花靑ニナルモノアリ、謹ベキコト也、

(和漢三才圖會十八相之用)黑子(ハハクロ) 黶(音) 黳(音) 和名波々久曾

按、黑子多生於足爲貴徵、漢高祖左股有七十二點、蓋黑子欲黑、生隱處者、多不佳、

集驗方云、石灰一兩、用桑灰淋汁、煎成膏、拭點瘢贅刺破點之立落、(一方木灰石灰等分、以水煉之、點上二三次、用水洗、一二日中自落)黶子、

(倭名類聚抄六)黶 俗ニ云ホクロノコト也、黑子ト同ク、

(松屋筆記五十)足下黑子

予(小山田與淸)左足のカヽト內黑瘤の下に黑子あり、未熟なる不幸を知らず、或人云、女子陰門の邊に黑子あるもの、必淫奔の相也といへり、さることにや、

(松屋筆記六十七)足底龜文雙黶

足の底に、龜甲の文及二ツ並たる黶あるは貴相也、皇明通紀三の卷(六十丁オ)に、文皇の足底龜文雙誌ありて、後貴よし見ゆ、余(小山田與淸)足底一黶あれど、貴且賤にして、雙黶の半減の福分を得ること能はざれば、且賤且貧、

(東大寺正倉院文書十一)神龜三年　山背國愛宕郡雲上里計帳

戶主出雲臣川內、年伍拾漆歲、　正丁　鼻於黑子

妻出雲臣眞土賣、年參拾陸歲、　丁妻　左中指黑子
男出雲臣秋守、年貳拾肆歲、　左掌黑子〈略○中〉
女出雲臣秋刀自賣、年拾漆歲、　少女　左腕黑子〈略○中〉
女出雲臣春刀自賣、年拾肆歲、　少女　上唇黑子
姑出雲臣比良賣、年陸拾玖歲、　耆女　鼻黑子
女出雲臣麻呂賣、年參拾漆歲、　丁女　右頰黑子
男少初位下出雲臣馬長、年參拾壹歲、　正丁　右掌黑子、位子、〈略○中〉
安麻呂、年肆拾肆歲、　口於黑子〈略○中〉
與富呂、年拾壹歲、　頤黑子〈略○中〉
須留賣、年貳拾玖歲、　鼻於黑子〈略○中〉
志多美賣、年拾陸歲、　右臂黑子
伊鼓賣、年玖歲、　右高頰黑子〈略○下〉

〔宇治拾遺物語 六〕いまはむかし、天竺に留志長者とて、世にたのもしき長者ありける、〈略○中〉心のくちおしくて、妻子にもまして從者にも物くはせきすることなし、〈略○中〉人はなれたる山の中の木のかげに、鳥獸もなき所にてひとり食ゐたり、〈略○中〉帝尺きと御覽じてけり、にくしとおぼしけるにや、留志長者が形に化し給て、我家におはしまして、〈略○中〉たから物どもをとり出してくばりとらせければ、みなみなよろこびてわけとりける程にぞ、まことの長者はかへりたる、〈略○中〉あれは變化の物ぞ、われこそよといへどもきゝ入るゝ人なし、〈略○中〉こしのほどにはゝくそといふもの、あとぞさぶらひし、それをしるしに御覽せよといふにあけてみれば、〈略○下〉

〔源平盛衰記 五〕一行流罪事

一行ハ玄宗皇帝ノ御加持ノ僧ニテ御座シケルガ、而モ天下第一ノ相人ニ御座ケル、皇帝ト楊貴妃ト、連理ノ御情深シテ、万機ノ政務モ廢給程也ケリ、一行常后二人ノ御中ヲ相スルニ、后ニハ御。臍ノ下ニハ黒子アリ、野邊ニシテ死シ給相也、帝ニハ御ウシロニ當ノ黒子アリ、思ニ死スル御相也ト申タリ、皇帝此事ヲ聞召テ、大方ノ相ハ正シク見ル共、爭カ臍ヲバ知ベキ、通道ノアレバコソ臍ノ下ノ黒子ヲバ知ラメトテ、可流罪之由被仰下ケル程ニ、公卿僉議有テ、一行ハ朝家ノ國師、佛法ノ先達也、就中相ニ於テハ天下第一也、昔ヲ聞テ五體ヲ知、面ヲ見テ心中ヲ相スルニ、敢テ違事ナシ、イカヾ可被流罪ト申ケレバ、且クアレ宥給タリケルニ、略○下

痏

(倭名類聚抄三)痏　漢書音義云、痏(音委、字亦作)以杖擊人、其皮膚起青黑也、

(箋注倭名類聚抄二)按、字從尤、蓋譌、色不鮮明、今俗謂器有字從美色、神代紀、貧鈎、此云于樓該膩、又呼水之不寒冷爲奴彼之、與此同語也、○中略　文選嵇康幽憤詩注引、作以杖毆擊人、剝其皮膚、起青黑無創瘢者謂痏、按漢書薛宣傳注文顏師古曰、以杖手毆擊人、剝其皮膚、腫起青黑、而無創瘢者、律謂疻痏、亦重音義之文、則疑本膚作皮膚爲是、上恐脫剝字、說文、痏、毆傷也、

(伊呂波字類抄宇病)痏　以杖擊人

(增補下學集上二)痏

面黒子

(倭名類聚抄三)黶　唐韻云、黶(於琰反、和名波々久曾)面黒子也、

(箋注倭名類聚抄二)新撰字鏡、黶、波々久曾、醫心方訓黶於毛久佐、○中略　廣韻同、按玉篇、黶面黒子也、廣雅、黶、黑也、並不同、唐韻所云似有誤、

(伊呂波字類抄波病)黶(ハヽクソ、面黒子也、黯黶同、又作)

(醫心方二十一)治婦人面上黒子方第三

病源論云、婦人面上黒子者、風邪搏血氣、變化所生、如宜方去黒子方、略○下

黒皯

〔倭名類聚抄三瘡〕皯　玉篇云、皯、古但反、俗云、閉路久佐、面黒氣也、

〔箋注倭名類聚抄二瘡〕山田本有俗云二字、那波本同、醫心方面皯䵳、和名於毛加爾、○中略今本皮部同、按說文、皯面黒氣也、顧氏蓋依之、病源候論面皯䵳候云、人面皮上或有如烏麻、或如雀卵上之色是也、

〔增補下學集上二文體〕皯面黒氣也

〔醫心方四〕治面皯䵳方第十五

病源論云、面皯䵳者、謂面皮上、或有如烏麻、或如雀卵上之色是也、此由風邪客於皮膚、痰飲漬於府藏、故變生皯䵳也、和名於毛加爾

〔醫心方二十一〕治婦人面上黒皯方第二

病源論云、婦人面上黒皯者、或藏府有痰飲、或皮膚受風邪、血氣不調、致生黒皯、若皮膚受風、外治則差、府藏有飲、內療方意、

〔病名彙解二〕皯䵳　雀斑ノコトナリ、俗ニソバカスト云リ、皯ハ字書ニ面ノ黒氣ナリ、皯別ニ䵳又䵳ニ作ルハ共ニ非ナリト云リ、

飼面

〔倭名類聚抄三瘡〕飼面　病源論云、飼面、和名加須毛、面皮上有滓是也、

〔箋注倭名類聚抄二瘡〕按、加須毛、蓋糟面也、醫心方云、飼面和名以呂古於毛天、今俗呼曾婆加須、○中略原書飼作䶻、醫心方引作飼、與此同、多紀氏桂山曰、脂液凝面、形如米粒、故曰飼面、今本病源候論作䶻面、恐誤、原書滓下有如米粒者四字、此節文、曲直瀨本、也作是、那波本作是也二字、

〔醫心方四〕治飼面方第十七

病源論云、飼面者、面皮上有滓如米粒者也、此由膚湊受於風耶、搏於津液、津液之氣、因虛作之也、亦言因傅胡粉而皮膚虛者、粉氣入湊理化生之也、和名以呂古於毛天

〔倭名類聚抄 三〕瘤 病源論云、瘤〈音留、和名古布〉皮肉急腫起、初如梅李、漸長大不痒不痛、又不堅強者也、

〔箋注倭名類聚抄 二〕山田本作力求反、那波本同、並與廣韻合、醫心方結核瘤之比留〈○中略〉原書肉下有中字、無如字、李下有大字、不痒不痛作不痛不痒、堅作結、按玉篇、瘤腫同上、曲直瀬本堅作緊、恐非、按瘤即下體所載疣也、素問靈樞病源候論等書、有瘤無疣、廣雅有疣無瘤、廣雅云、疣小腫也、玄應音義引三蒼云、瘤小腫也、二字同訓、又留尤同聲、則瘤疣其實似同、然說文瘤腫也、肬贅也、釋名、瘤流也、血流聚所生、瘤腫也、肬丘也、出皮上聚高、如地之有丘也、則二物各別、未知其詳、又按之比留、蓋謂惡核病、病源候論云、惡核者、肉裏忽有核、纍々如梅李、小如豆粒、皮肉燥痛、左右走、身中卒然而起是也、其狀與瘤稍似、故師者以瘤為之比留也、

〔[illegible]類集 下〕瘤

〔下學集 上 支體 二〕瘤

〔類聚名物考 病 二〕瘤 えひね

これは皮肉間の熱氣によりて、にはかに腫いだして、ちさき物の出來しが、やう〳〵大きくなりて、贅の如くにて、痛ますかたからす終に水ふくれなどいふの類ひなり、瘤も古布とよめども、ここにては急に出來て、またそのまゝ癒る事も有る故、贅と同じからず、明月記に之井子と書れしは、假名たがへり、又榮花物語にも有り、

〔醫心方 十六〕治瘤方第十五

病源論云、瘤者、皮肉中忽腫起、初如梅李、大漸長大、不痒不痛、又不結強、言瘤結不散、謂之爲瘤、不治、乃至塩大、則不復瘥、不能殺人、亦愼不可輒破之、

〔有林福田方 十〕癭瘤〈エイリウ〉

論云、多ク喜怒憂思ニ由テ氣凝リ、血滯テ成スル處ナリ、凡五癭者石癭、肉ー、筋ー、血ー、氣ー、是也、又

六瘤者、骨瘤、脂—、膿—、血—、石—、肉—、是也、凡治方云、五癭ヲバ決破(サクリヤブル)ルベカラズ、破バ則膿血崩潰シテ多ク枉夭ヲイダス、只脂瘤バカリハ、破ツテ脂ヲ去テ藥ヲ付レバ則愈、其外ノ五症ヲバ亦タヤスク決潰スベカラズ、愼之々々、

〔瘍科秘錄十〕癭瘤(氣癭 筋瘤 骨瘤 血瘤 肉瘤 紛瘤 脂瘤 胎瘤 髮瘤 蟲瘤 蚘蟲瘤)

癭ヲ陽證トシテ六腑ニ配當シ、瘤ヲ陰證トシテ五臟ニ配當ス、故ニ六癭五瘤ノ目アリ、是ハ五積六聚ノ類ト同論ニテ、強テ五臟六腑ニ配當シテ建タル名ニテ、五癭六瘤共ニ必ズ有ルニ非ズ、病源候論ニ癭ヲ破ルベシ、針スベシト云、瘤ヲ破ルベカラズト論ズ、サレバ陽證ノ者ハ治スベク、陰證ノ者ハ治ス可カラザルコトハ、古ヨリ已ニ其論アリ、然レドモ癭ニ陰證ニシテ治ス可カラザルモノアリ、瘤ニモ陽證ニシテ治スベキモノアリ、故ニ余(○本間玄調)ハ癭ト瘤トヲ論ゼズ、先ヅ陰陽ヲ辨ジテ、可治ト不可治トヲ決ス、

〔病名彙解七〕癭瘤(エイリウ)　古ヨリ和訓コ。プ。ト讀リ、然ドモ諸方書ニ、癭モ瘤モ共ニ潰テ瘡ノゴトクニナルト云リ、世俗ニコブト稱スルモノハ一生潰ヘズ、按ズルニ、五癭ノ内、石癭ト云モノ、俗ニ云コブナルベシ、石。癭。一ニ骨。癭。ト云リ、

〔和漢三才圖會十人倫之用〕瘤(コブ)(音留)　瘤、和名之比禰、俗云古布、　癭瘻、俗云路、　附贅、和名布須倍、俗云左加利瘤、

釋名云、瘤流也、流聚而流腫也、有五種(筋瘤、血瘤、肉瘤、氣瘤、骨瘤也、)

按、瘤皮肉腫起、初如梅李而肉色不變、漸長大不堅實、無痛痒、似痰核、不可針、血奔出於針穴不止則死、

。癭。瘻。　頸瘤也、博物志云、山居多癭、飲泉水之不流者也、

五雜組云、癭雖由山溪之水生、然多北方山鮮處亦有之、是亦有五種、而名同于瘤、

贅瘤〔こぶ〕　肝瘤也、贅附人常有贅物於中風結瘤、俗謂之贅瘤、其不痛、

〔宇治拾遺物語一〕これもいまはむかし、右のかほに、大なるこぶあるおきなありけり、大くら山へ行ぬ、雨風はしたなくて歸にをよばで、山の中に心にもあらずとまりぬ、又木こりもなかりけり、おそろしさすべきかたなし、木のうつぼの有けるにはひ入て、目もあはずかゞまりてゐたるほどに、はるかより人の聲おほくして、とゞめきくるをとす、いかにも山の中にたゞひとりゐたるに、人のけはひのしければ、すこしいき出る心ちしてみいだしければ、大かたやう／＼さま／＼なる物ども、あかき色には青き物をき、くろき色にはあかき物をき、たうさきにかき、大かた目一ある物あり、口なき物など、大かたいかにもいふべきにあらぬ物ども、百人ばかりひしめきあつまりて、火をてんのめのごとくにともして、我ゐたるうつぼ木のまへにゐまはりぬ、大かたいとゞ物おぼえず、むねとあるとみゆる鬼、よこ座にゐたり、うらうへに二ならびに居なみたる鬼かずをしらず、そのすがたおの／＼いひつくしがたし、酒まいらせあそぶありさま、この世の人のする定なり、たび／＼かはらけはじまりて、むねとの鬼、ことの外にゑひたるさまなり、すゑよりわかき鬼一人立て、折敷をかざして、なにといふにかくとぞせることをいひて、よこ座の鬼のまへにねりいでゝ、くどくめり、横座の鬼盃を左の手にもちて、ゑみこだれたるさま、たゞこの世の人のごとし、舞て入ぬ、次第に下よりまふ、あしくよくまふもあり、あさましとみるほどに、このよこ座にゐたる鬼のいふやう、こよひの御あそびこそ、いつにもすぐれたれ、たゞしさもめづらしからん、かなでをみばやなどいふに、この翁ものゝつきたりけるにや、また神佛の思はせ給けるにや、あはれはしりいでゝまはゞやとおもふを、一どはおもひかへしつ、それになにとなく鬼どもがうちあげたる拍子のよげにきこえければ、さもあれ、たゞはしりいでゝまひてん、死なばさてありなんと思とりて、木のうつぼより、ゑぼしは、はなにたれかけたる翁の、こしに、よきと

いふ木きるものさして、よこ座の鬼のゐたるまへ、におどり出たり、この鬼どもおどりあがりて、こはなにぞとさはぎあへり、おきなのびあがりかゞまりてまふべきかぎり、すぢりもぢりゑいこゑをいだして、一庭をはしりまはりまふ、よこ座の鬼よりはじめて、あつまりゐたる鬼ども、あざみ興ず、よこ座の鬼のいはく、おほくのとしごろこのあそびをしつれども、いまだかゝるものにこそあはざりつれ、いまよりこのおきな、かやうの御あそびにかならずまいれといふ、おきな申やう、さたにをよび候はず、まいり候べし、このたび、にはかにておさめの手もわすれ候にたり、かやうに御らむにかなひ候はゞ、しづかにつかうまつり候はんといふ、よこ座の鬼、いみじう申たり、かならずまいるべきなりといふ、奥の座の三番にゐたる鬼、この翁はかくは申候へども、まいらぬことも候はんずらん、おぼしゝしちをやとらるべく候らんといふ、よこ座の鬼、しかるべしといひて、なにをかとるべきと、おの〳〵いひさたするに、よこ座の鬼のいふやう、かのおきながつらにあるこ。ぶ。をやとるべき、こぶはふくのものなれば、それをやおしみおもふらんといふに、おきながいふやう、たゞ目はなをばめすとも、このこぶはゆるし給候はん、とし比もちて候ものを、ゆへなくめされ、すぢなきことに候なんといへば、よこ座の鬼、かうおしみ申物なり、たゞそれを取べしといへば、鬼よりて、さはとるぞとて、ねぢてひくに、大かたいたきことなし、さてかならずこのたびの御あそびにまいるべしとて、曉に鳥などなきぬれば、鬼どもかへりぬ、おきなかほをさぐるに、年來ありしこぶあとかたなく、かひのごひたるやうに、つや〳〵なかりければ、木こらんこともわすれて、いゑにかへりぬ、妻のうば、こはいかなりつることぞととへば、しか〳〵とかたる、あさましき事かなといふ、となりにあるおきな、左のかほに、大なるこ。ぶ。ありけるが、このおきなこぶのうせたるをみて、こはいかにしてこぶはうせ給たるぞ、いづこなる醫師のとり申たるぞ、我につたへ給へ、このこぶとらんといひければ、これはくすしのとりたる

にもあらず、しか〳〵の事ありて、鬼のとりたるなりといひければ、我その定にしてとらんとて、ことの次第をこまかにとひければ、をしへつ、このおきな、いふまゝにして、その木のうつぼに入てまちければ、まことにきくやうにして、鬼どもいできたり、ゐまはりて、酒のみあそびて、いづらおきなは、まいりたるかといひければ、このおきな、おそろしと思ひながら、ゆるぎ出たれば、鬼ども、こゝにおきなまいりて候と申せば、よこ座の鬼、こちまいれ、とくまへ、といへば、さきのおきなよりは、天骨もなく、おろ〳〵かなでたりければ、よこ座の鬼、このたびはわろく舞たり、かへすがへすわろし、そのとりたりししちのこぶ返したべといひければ、すゑつかたより、鬼いできて、しちのこぶかへしたぶぞとて、いまかた〳〵のかほになげつけたりければ、うらうへにこぶつきたるおきなにこそなりたりけれ、ものうらやみはすまじきことなりとか、

瘤

〔倭名類聚抄 三〕瘤　釋名云、瘤〈力救反、和名古布、〉肉憤起也、

〔箋注倭名類聚抄 二〕山田本無、又無瘤以四字、那波本同、新撰字鏡瘤字訓、不久留、〈○中略〉玉篇、瘤肉腫起也、則瘤腫之義、按說文無瘤字、古只用留字、

〔增補下學集 上二〕瘤

瘜肉

〔倭名類聚抄 三〕瘜肉　說文云、瘜〈音息、一云瘜肉、和名阿末之々、〉寄肉也、

〔箋注倭名類聚抄 二〕玉篇瘜又作𤺺、各本作作瘜、今依本書通例改、曲直瀨本無、又作𤺺三字、那波本同、醫心方息肉訓、阿末之々、按阿末之々、餘肉也、古久美見大鏡、訓其義未詳、〈○中略〉所引广部文、按廣韻、瘜惡肉、病源候論云、惡肉者、身裏忽有肉如小豆突出、細々長、乃如牛馬乳、亦如雞冠之狀、不痒不痛是也、又玉篇云、瘤瘜肉也者統言之也、

〔增補下學集 上二〕瘜肉〈アマシヽ〉

〔倭訓栞 中編八〕こくみ　一說に、白人をまらひとゝよみ、古久美の美を麗に改めて、新羅人高勾麗

附贅

の義といへり、犯己母罪犯己子罪等の事、我朝には聞えぬを、こゝに來り住る新羅人高麗人、此事ありしをもて延らしめたりといへり、

〔延喜式 八祝詞〕六月晦日大祓 十二月准之 〇中略 國津罪止入 生膚斷、死膚斷、白人、胡久美、〇下略

〔大祓詞後釋 上〕胡久美は、同書〇和名抄に、瘜、寄肉也、瘜肉和名阿萬之々、一云古久美、とある是なり、阿萬之々は贅肉なり、又其次に擧たる附贅懸中なども同じ類なり、かくて此類は共に、きたなき物なる故に、穢を以て罪とするなり、〇中略 考に、美字を麗と改めて新羅高麗の人とし、次の己母犯罪云々へ係て解きたるは、いみじきひがごとなり、まづ貞觀儀式には、故久彌と書れたる、此彌字をも共に麗の誤とはいひがたかるべし、そのうへ太神宮延暦儀式帳には、生秦斷、死膚斷、己母犯罪、己子犯罪、畜犯罪、白人古久彌、川入火燒罪乎、國都罪止定氐と、己母犯云々は別に上にあるを、かの説の如くにては、いかに解べきぞ、己母犯罪云々は、白人胡久美に關らざること明らけきをや、

〔醫心方 二十一〕治婦人陰中瘜肉方第十一

病源論云、陰內瘜肉由胞絡虛損、冷熱不調風邪客之、邪氣乘陰搏於血氣、變生瘜肉也、其狀如鼠乳、

〔倭名類聚抄 三〕附贅　莊子云、附贅懸疣、贅音制、俗云布須倍、

〔箋注倭名類聚抄 二〕所引太宗師篇及駢拇篇文、原書懸作縣、按說文、縣繫也、从系持県、轉注爲郡縣、俗縣挂字从心以別之、玉篇、縣今俗作懸是也、釋名、贅屬也、横生一肉屬著體也、段玉裁曰、大雅傳曰、贅屬也、謂贅爲綴之假借也、孟子屬其耆老、大傳作贅其耆老、公羊傳云、君若贅旒、史漢云贅壻、此爲聯屬之稱、莊子附贅縣疣、老子餘食贅行、此爲餘賸之稱、皆綴字之假借、說文、贅以物質錢、非此義也、醫心方贅萬安方誌、同訓、又按贅今俗呼古夫、

贅疣

〔伊呂波字類抄 不人體〕附贅 贅フスヘ、贅肉也、　贅同

〔增補下學集 上二氣形〕附贅

〔和漢三才圖會 十人倫之用〕附贅　瘤及耳之邊結瘤垂下、似婦乳者也、凡男附女家謂之贅壻、言不當出在妻家、猶人身之有疣贅、

〔新撰姓氏錄 左京皇別下〕吉田連
大春日朝臣同祖、觀松彥香殖稻天皇 謚孝昭 皇子天帶彥國押人命四世孫彥國葺命之後也、昔磯城瑞籬宮御宇 謚崇神 天皇御代、任那國奏曰、臣國東北有三巴汶地、上巴汶、中巴汶、下巴汶、地方三百里、土地人民亦富饒、與新羅國相爭、彼此不能攝治、兵戈相尋、民不聊生、臣請將軍令治此地、即爲貴國之部也、天皇大悅、勅群卿令奏應遣之人、卿等奏曰、彥國葺命孫鹽垂津彥命、頭上有贅三岐、如松樹、因號松樹君、其長五尺、力過衆人、性亦勇悍也、

〔續修東大寺正倉院文書 九〕神龜元年近江國志何郡計帳
戸主廣麻呂、年卅六、　正丁　頸分贅人右頰黑子、
母若子、年六十八、　耆女　頸贅、

〔日本靈異記 下〕智行並具禪師重得人身生國皇之子緣第三十九
尺善珠禪師者、俗姓跡連也、負母之姓、而爲跡氏也、幼時隨母居、住大和國山邊郡磯城嶋村、得度精勤修學、智行雙有、皇臣見敬、道俗所貴、弘法導人、以爲行業、是以天皇貴其行德、拜任僧正之、而彼禪師之頤右方有大黶也、(中略)
黶不須倍

〔倭名類聚抄 三〕贅疣　釋名云、贅疣(贅音之芮反、疣音尤、又作肬、)丘也、出皮上高、如地之有丘也、

〔箋注倭名類聚抄 二〕所引文、原書闕、按說文、肬贅也、廣雅、贅肬也、互相訓、贅肬並可訓布須倍、賦肬二

肬

字、乃可訓佐賀利布須倍、此所引釋名、宜移布須倍條、布須倍條所引莊子懸疣、宜移於此、又按、釋名
贅肬彙擧、似二物不同、盧文弨曰、經書多以肬贅並擧、小曰肬、大曰贅、

〔增補下學集 上二支體〕肬疣 二字義同

〔二中歷 十三十列〕不用物　閊仕疣

〔倭訓栞 前編二〕いぼ〳〵　物に疣の如きもの、多く著たるをいふ、西土の書に、丁搨とも疣瘩と
も見えたり、

〔類聚名物考 病病一〕いぼ
いぼといふ病は、そのかたち米粒の如く、飯粒の如くなればいふ、粒はつぼともつぶともいふ、揖
保といふ播磨國の郡名を、延喜式には小粒の字をよませたるにて志るべし、又いぼたといふ木
有り、女楨の類ひなるを、此實いぼに付ればいぼの落る故にいぼたといふ、たは落るなり、墮の字
の字音歟如何、

〔病名彙解 六〕肬ユウ　俗ニ云イボナリ、準繩ニ云、肬ハ肝膽少陽ノ經ニ屬ス、風熱血燥、或ハ恐テ肝火ヲ
動シ、或ハ汗ニ淫氣ヲ客トシテ致ストコロ、蓋シ肝熱水涸テ腎氣榮セズ、故ニ精亡テ筋攣スルナ
リ、宜ク地黄丸ヲ以テ腎水ヲ滋シ、以テ肝血ヲ生ズルヲ以テ善トス、モシ蛛絲ヲ用テ纏ヒ、蝦蟆ニ
蝕、艾灸ヲ著、多クハ潰ヲ致ス、大抵此症血燥結核ト相同ジ、經脈篇ニ、手ノ太陽ノ別虛スルトキハ
肬ヲ生ズ、小ナル者ハ指痂疥ノ如シ、註ニ贅也瘤也、大ナルトキハ肬トス、小ナルトキハ指間痂疥
ノ類トス、是ヲ以テ見トキハ、大肬ヲコブト云、小肬ヲイボト云ナルベシ、默同ジ、疣ニ作ルハ俗字
ナリ、

〔和漢三才圖會 十人倫之用〕肬 いぼ 音由　疣、同　和名以比保、○中略
釋名云、肬丘也、出皮上聚高如地之有丘也、

按、肬黒子共有二種、大如小豆、面肌色高起、一種如茄實、黑不起、並有毒、肬生數子也、以藥及灸治其母則易治、或用胡麻花頻擦之、或用生茄子肉擦亦佳、

〔東大寺正倉院文書十一〕神龜三年　山背國愛宕郡雲下里計帳

戸主上毛野君義長谷、年伍拾壹歲、　正丁　右頰黒子〇中略

女出雲臣島賣、年拾玖歲、　少女　右頰疣〇中略

出雲部志祁良賣、年陸拾壹歲、　老女　左目下疣〇中略

錦忌日賣、年參拾玖歲、　項疣

〔倭名類聚抄〕肬目　病源論云、肬目、今案肬字或作疣、和名以比保、又云以宇女、手足邊忽生如豆、色强於肉也、

〔箋注倭名類聚抄二〕廣韻、疣肬上同、按疣卽肬字、變肉從疒者、又說文、疣顫也、或从疒作疣、與此自別、新撰字鏡、肬訓伊比保、醫心方疣目訓以保、〇中略　原書豆下有或如結筋或五箇或十箇相連肌裏十四字、山田本無者字、既後本同、按聖濟總錄云、疣目或在頭面、或在手足、或布於四體、其狀如豆、如結筋、綴連數十、與鼠乳相類、病源候論云、鼠乳者、身面忽生肉、如鼠乳之狀、謂二書所言、如鼠乳之狀者、可訓以比保、以比保蓋飯粒之義、其狀似飯粒也、今俗急呼以保、肬目與鼠乳頗色强於肉、可訓以乎女、以乎女魚目之義、其狀似魚目也、今俗呼以乎乃女

〔伊呂波字類抄伊〕肬目イボ、疣作肬、

〔增補下學集上二〕疣目イボ

〔倭訓栞中編三〕うをのめ　疣目をいふ、魚目に似たり、

〔醫心方四〕治疣目方第廿二

病源論云、人手足邊忽生如豆、或如結筋、或五箇或十箇相連、肌裏粗强於肉、謂之疣目也、此是風邪搏於肌肉而變生也、

肉刺

黴毒

〔和漢三才圖會十人倫之用〕肬目　和名以乎女　俗云魚乃目
肬目　手足邊忽生如豆、能强於肉也、
凡肬目高起、形似肬而硬、頭細碎、蓋是肉刺之種類、故獨生不生子也、須灸之、
〔倭名類聚抄三形體〕肉刺　病源論云、肉刺、和名以乎乃美脚指間生肉如刺、由著靴小相揩而所生也、
〔箋注倭名類聚抄二形體〕谷川氏曰、乃以乃佐之轉、篇芒刺、須美墨也、刺字意也、○中略原書小上有急字、相上有指字、無所字、
〔有林福田方十〕肉刺
此ハ脚ノ指ノ間ニ肉ヲ生ヲ云也、薫陸香、硫黃、右等分ニ末シテ、上ニ付テ、焼ケ、又甘刀ヲ以テ割、刺ヲ去テ卽書墨ヲ以テ研コト數遍セヨ、
〔病家須知五〕黴毒の心得を說
黴毒、我邦の昔は、唐瘡といふ、異域より傳來するが故なり、中華にては廣東瘡と稱、その廣東と云は、南海の港津にて、此際の長崎の如き地なり、この廣東より毒を支那の國內に傳播たれば、其病の起る地名を以て病名とせるなり、その病を傳たる時代、和漢ともにあまり遠からず、僅三百年前後に過まじ、意に、此病の初は、全く番船より傳染たるにて、異國より航海たる船の、博多府內あたりに着たる頃にもあるべし、然を其毒の由來を遺失て、あらぬ病因を濫稱、治法も各殊にして一定せぬは、いと口惜なることなり、
〔一本堂行餘醫言六〕黴毒○中略
此邦日本○今時醫流及俗間、呼此證爲濕毒者、蓋本於王肯堂、見上且通呼是疾爲或濕或濕氣濕瘡者、皆非也、此證豈濕寒之所可生乎、意其說全自主張濕熱之說而來耶、夫如此則住在高山深谷河濱海涯霧露水濕之處者、槩皆可患此證、而反無病者、而居於通都大邑平康乾燥之地者多罹此苦、則可見是

疾全是欬血暴汁所蒸由決非因於濕也彰彰而明矣或謂二百年前此疾漸播海內患者頗稀故世人以爲楊梅瘡外屬大瘡惡之是以醫人阿諛謂淋者爲俗士易之耳本非有據而言之其後痹痛等書始上乘其說遂稱云

〔一本堂行餘醫言 六〕黴瘡。

黴瘡下疳便毒本是一證而非別疾或有下疳而發黴瘡者或有便毒而黴瘡發者或有止便毒者或有上黴瘡者或有二證三證會發者此由三證元是一病也蓋下疳者黴之發陰莖者也便毒者黴之發腹股合縫之間者也黴瘡者黴之發全身者也今使達醫判證得知明白黴瘡者發生頭面手足腹背或痛或痒或無痛痒膿汁有出有不出大小圓扁不等增減浸淫臭穢潰爛久遠毒深注或瘀結滯于一身之大關節骨骱脈絡經脈等處而令屈伸行坐不便瘂足痿躄遂爲癈痼慎勿用熏方嗅藥水銀輕粉外敷塗洗之法苟誤用之則伏爲結毒或發漏瘡狀多端名呼隨異而此病秘於古時而盛於後世拾考古籍唯有陰陽一名可疑然不可的知其病與今所患黴瘡全同否乎又且似專言下疳故姑標黴瘡以爲總綱焉其從今所患有前諸名中總舉於此

〔瘍科秘錄 二〕黴瘡

黴瘡ハ古ニ少ク後世ニ至テ初テ盛ナリ故ニ古醫經ニ其證ヲ載セズ素問金匱等ニ黴瘡ヲ論ズルニ似タル文アレドモ未ダ其當否ヲ知ラズ先哲已ニ其辨アリ何故ニ古ニ少ク今ニ多キ病ナルカヲ考フルニ其病ノ源ハ必ズ娼婦ヨリ生ズレバナリ娼婦ハ人ニ接スルコト頻繁ナルニヨリ陰戶陰中ニ淤濁シテ因テ黴瘡ヲ釀シ生ズ譬バ平地ニ水ヲ灌グニ一日ニ僅ニ一度位ニナハ毎日灌ギテモ水乾キ濕フコトナシ若一日ニ五度モ十度モ灌グ時ハ地常ニ濕テ苔蘚ヲ生ズルガ如シ既ニ其毒一度生ズル時ハ乍チ傳客ヘ傳ヘ其レヨリシテハ又妻妾ヘ傳ヘテ毒ヲ子孫ニ遺ス輾轉互ニ傳ヘテ遂ニ天下ニ蔓延スルニ至ルナリ古ハ娼樓モ少キ故黴毒モ少ク今ハ娼樓

ノ多キ故、黴瘡モ從テ多シ、是自然ノ勢ナリ、サレバ此病ヲ患ル者ハ、必ズ傳染ニテ自發スルコトナシ、平生純樸ニテ花街柳巷ニ決シテ遊ブコトノナキ者、及ビ老人小兒ノ患ルナドハ、如何ニモ自發ノ樣ナレドモ、コレ又必ズ傳染スル因緣有モノナリ、或ハソノ夫謹愨ナリトイヘドモ、ソノ妻外ヨリ黴瘡ノ氣ヲ受テ、夫ニ傳フルコトアリ、或ハ逆旅ノ寢衾ヨリモ傳ヘ、或ハ鑷工ノ剃刀ヨリ傳ヘ、甚ハ一時煙管ヲカリテ用モ、マタソノ毒ニ傳染スルコトアリ、小兒ノ患フルハ、黴婦ノ乳ヲ哺セシメテ受ルト、父母ノ遺毒トナリ、老人ト幼童ノモノトハ、黴氣ヲ內ニ畜ヘタル孀婦ナドニ姦通スルヨリ傳ルモノ多シ、十二三歲ノ童男童女ノ病ミタルモ、六七十歲ノ老翁老媼ノ患タルモ、痊治セリ、凡ソ黴毒ノ傳染不可思議ナルコト此ノ如クナレバ、丁寧反覆シテ因緣ヲ詳ニ問フベシ、

〔黴病新書　一〕黴瘡論

黴瘡之病、玆華人所論、昉自嶺南卑濕地、而蔓延四方、如本邦亦起從肥前州、而播布通國云、蓋此病稀於古時、而盛于後世、故其治法、亦詳於前而審于後、然而呼稱百出、濫名頗多、或隨形狀之近似者而名焉、或取始所起地而命焉、或因其所發之處而稱焉、或依字音假借會意、以擴其名呼矣、如其曰黴瘡、曰梅瘡、曰黃瘡、曰痔子、曰楊梅瘡、曰楊黴瘡、曰楊梅毒瘡、曰楊梅風、曰楊梅疳、曰綿花瘡、曰砂仁瘡、曰茱萸瘡、曰果子瘡、曰天泡瘡、曰濕陰瘡、曰妬精瘡、曰陰蝕瘡、曰廣瘡、曰廣東瘡、曰廣痘、曰廣豆、曰恥瘡、曰臊疳、曰濕毒、曰濕氣、曰陰疳、曰陰頭癰、曰陰頭瘡、曰蠟燭發、曰下疳、曰便毒、曰魚口、曰魚口瘡、曰橫痃、曰橫眼、曰疰痓、曰蛀梗、曰蛀疳瘡、曰蛀幹疳瘡、曰卷心蛀疳瘡、曰獨脚楊梅瘡、曰時瘡、曰血疝、曰血疳、曰外仙、曰結毒、曰氣毒、曰疾瘤、曰下疾瘤、曰路岐、曰瘡氣、曰瘡疾、曰露疾、曰騎馬癰、曰騎馬癰、曰騙馬墜之類、不暇枚擧、殆譯惑後人之耳目也、以余觀之、唯黴瘡、下疳、便毒、結毒之四名以蔽之矣、而此病近世尤盛、而貴賤男女罹之者十居其半、是誠和華一轍、蓋承平二百年之久、人々樂安佚、內則膏粱厭味、常滿口腹、遂

黴瘡

生瘡、獸鼻外剝、沈痼綿延、以發淫火一轉、成此病、遂傳之娼妓男娼、娼妓男娼之傳諸人也、不知其幾千百、或傳之妻妾、或傳之孫子、而其病之始發也、始則或起自鼠蹊、或結毒、若發陰毛、或傳或自遺淋、或自得疾、或久瞞隱、實恐動色、繫欲精溺内濁、漬毒内、或又瘡瘍發周身、遂波及齒陰、漸致淫漫、○下略

〔黴瘡約言　又〕總論

黴瘡亦謂瘡瘍、古昔無有焉、其初異域之沴氣、介接於人身、以成一種之異病、遂傳來于本邦、原非我地之毒氣故也、無自發者、其發無非邪淫之徒、由傳冒染矣、粤翻貴介能避之、未嘗有中其毒者也、按阿蘭陀兒部路貽書名所記、當後土御門帝明應三年甲寅、西洋斯兀私國名、一名意人、人、掠亞墨利加洲之境、因婦女於船中、擧衆犯之、於是彼染此病、然後蔓延于西洋、故名之曰斯兀私朴屈西洋呼黴瘡曰朴屈、又按方書、明弘治末年、起於廣東、因名之廣瘡、國、西洋傳此毒、歷數年之後、初起於廣東、名廣瘡者有以哉、○中略意此毒之行於本邦、亦從海外傳、初起於西陲、按皇國史曰、天文中、大友宗麟、與蠻船對、接與海外諸國、私通互市、西洋因傳天主教、散金銀惑愚民、西陲爭附、又曰、永祿十二年、是歲蠻船至長崎、先是外船往々至界府、及與之博多豐之府內、而長崎地形便泊、於是多歡焉、蓋是時傳之乎、方今長崎俗號朴屈斯兀私朴屈之略語也、又按、永祿天正之際黴瘡略○且方今俚俗曰唐瘡、

〔武德編年集成　五十一〕慶長十二年二月六日、尾張忠吉朝臣、江府ニ參着、然共イマダ其瘡形ナキユヘ、芝大久保加賀守忠常ガ宅ニ止宿セラル、去年黴瘡ヲ患ヒタマヒ、甚ダ危カリシガ、快復ニヨッテ參府ノ段、台德公御喜悅斜ナラズト云云、

〔醫心方　七〕治陰瘡方第一

病源論云、腎榮於陰器、腎氣虛不能制、津液則汗濕、虛則爲風邪所乘、邪客湊理、而正氣不泄、邪正相干、在皮膚、故痒、搔之則生瘡、○中略范汪方、治陰瘡方、取雄黃和蜜傅之、當日即差、

玉莖疾病治方
玉門疾病治方

千金方治陰生瘡方、地楡八兩、黃蘗八兩二味、以水一斗五升、煮取六升、去滓、適冷暖、用洗瘡日再、又云、
妬精瘡者、男子在陰頭節下、婦人在玉門內、並似甘瘡、

〔壒囊抄三〕アシデカキタル下繪ト書ルハ、何ナル繪ゾ、或人ノ云、アシデトハ文字ニテ繪ヲカク
ヲ云、
又或鈔物云、和泉式部無雙ノ好色也ケルニ、衰子ノ夜御歌アリケルニ、戀心ヲ合セラレケレバ、
瘡開ト云名ヲ式部取當テ、
筆モツヒユガミテ物ノカヽルヽハ是ヤ難波ノ惡筆(アシデ)ナルラン
トヨメリ、惡筆トハ字ニテ繪ヲナスト注セル物アリ、又葦手トモ書也、或ハ木節、或ハ雲ノハブ
レナドヲユガメルマヽニ、字ノ假令タルヲ以テ書ヲ、蘆ナドノ枯臥タルニソヘテ云也、

〔頓醫抄四十五〕玉莖疫病治方
黃蘗ヲ濃煎、鹽少入テ溫(ヌクメ)テ後、蘗粉一兩、唐墨ノ粉二分、白粉燒タル瓮口ノ中ニ居タル灰三分、是等
ヲヨタ〳〵カキ合テ、
又方　五倍子ヲ細末シテヒネリカケヨ、最上ノ藥也、
又方　楮ノ一葉ヲコク煎、大ナル竹ノ筒ニ入テ、玉莖ヲ指入テ、溫テ蒸洗ヘ、醒バ煎物ヲカヘ〳〵
ニ溫ヨ、筒ノ底ニ梅干三入ヨ、口傳也、三日五日七日ニ平愈スルマデ治セヨ、
又方　辛夷ヲ煎、鹽少入テ溫テ後、古キ梅干ノ鹽カラキヲ上ノ皮ノ實核トヲ去テ、實ノカギリヲ
取集テ鹽少入テ、唐墨ノ粉少入テ、唾ヲ吐入、能々ネヤシ合テ付ヨ、最上ノ秘藥也、○中略
玉門疫病治方
開疫病ト云ハ、先玉門ニ、水瘡ノ樣ニ瘡出テ、カユク發動シテ、抓ハ腫塞テタヾレ痛、蘗ト車前草ヲ
濃煎、薄鹽ヲ入テ、吉程ニ醒テ、ユデ洗テ後、チバ土ニテ開ノ形ヲ三四作テ水ヌラシテ後、上ニ紙ヲ

黴毒

一重フセテ、日ニ干テ堅クナリタルヲ、又蕨ヲスラシテ後同形ニ数多寄タ、熱灰ノ中ニ埋テ、アタタタニ焼タル時、玉門ノ中ニ取替々々可入、日々ニワコタルコトナカレ、黴瘡ノ治方也、○下略

〔本朝醫談〕下疳はむかしまら瘡病といふ、(瘡病は黴瘡に鄙語なるべし)の明醫抄洗くすり楡の葉を濃煎して、大なる竹筒に入て玉莖をさし入て洗ふ、さめば煎物をかへよ、筒の底に梅干二ツ入よ、(大和本草ニハ)

(黴瘡にくさふんじ、金るる黴瘡…黴瘡)

〔黴門隨筆〕黴瘡ハモト本朝ニハナカリシガ、明初(明ノ之初、足利將軍ノ比)唐人長崎ニ來リシ者、其毒ヲ妓女ニ傳ヘタルガ、今世上ニ廣リタルヨシ、故ニ初ハ此病ヲ唐瘡ト云タルトモ、サレド古キ和書ニ、黴瘡ノコト所々ニ見ヘタリ、當ハトモアレ、當時ハ此三都ハ勿論、其外都會繁決ノ地別シテ多タ、卑賤ノ者ニ取分多シ、最全ク賤妓ニ交ルユヘ也、賤妓ハ別シテ數人ニ交リ、毒氣除ク間ナキユヘナリ、右樣ノコトヨリシテ見ニ毒ヲ遺ス故、頭裏ニ塊瘤ヲ生ジ、種々病ヲ生ズ、小兒ノ下疳瘡ノ遺毒トイヘド、大人ノ疳瘡瘡ノ形狀ニ異ラズ、小兒故、其毒根淺ク、藏性ノ變ヲ得ズシテ理スルナリ、又痔漏鼠瘻ナド所ニヨリタ名ハ異ナレドモ、其形狀相同ジ、名ナヘ異ナレバ、病因別ノ樣ニ心得レドモ、理療ノ生意相同ジ、素ノ違ニテ變ノ向方輕重アル計ナリ、總テ此黴毒ヲ黴毒ト云ヘドモ、黴氣外感ノ因ニテハナシ、人必青樓妓館ニ登レバ、此毒ヲ感受スルニテモナシ、近世トアル上モナキ高貴ノ御方、黴毒アリタルコトアリ、經スルコトユヘ顯ニ云ガタシ、是ニテ知ベシ、畢竟妓ナドハ數十百人ニ交接スル者ユヘ、其身欝毒少クタモ、他人ノ毒ヲ感受シ、他人モ亦其者ニ交接シテ其毒ヲ受ルナリ、實ニ妓ハ黴毒ノ府ト云ベシ、假平生花柳ニ耽タレドモ、自分ニ毒ナケレバ感受セヌ人多シ、又感ズルコト有タモ、其毒感觸シタル計ニテ、内ヨリ發動スル者ナキユヘ、其毒淺シ、自分ニ所持シタランハ、ウタヘナル道理ニテ、始テ妓樓ニ登リテ始テ黴毒ヲ病ム人多シ、是ニテ知ベシ、但シ世ニ黴毒ト云モ、其因縁ナキニテモナシ、濕ノ地ニスム人ハ黴毒多ク、高燥ノ地ハ少シ、

凡高燥ハ舟ノ便利ナク、下濕ハ其便アルユヘ、自然ト都ヲナスモノナリ、都會ハ必妓樓有テ、人十ニ八九ハ折枝者多キユヘ、兎角此病多シ、其症或ハ痔、脫肛、下疳、淋疾、便毒、臟瘡、陰囊、小瘡、囊癰、骨疼、此等ノ病ハ皆下部ニテ濕ニ因スルト云ヘドモ、元來下濕ノ氣ガ、人ノ肌肉ニ染ンデ、久舍リ病シムルニ非ズ、持料ノ痰毒アルガ、下濕ノ地ニ住スル故、其氣ニ感ジテ內毒ノ發動スルナリ、外來ノモノト見ルユヘ、理療モ迂遠ニナリテ利ナキナリ、余〇山脇東門近年浪華ノ豪富鴻池氏ガ、黴毒ヲ病タルトキ診視シタルガ、此子元來京師ノ產ニテ、彼家ヘ養子トナレリ、浪華ノ西ニ鴻池新田ト云アリ、此子其所ニ住タリシニ、一二年シテ、下疳楊梅瘡病ミ咽喉腐爛シ、後ニハ鼻梁陷リタリ、元來其地新ニ築キタル地ユヘ、土淺水近シテ甚濕氣深ク、此所ニ住者十ニ七八ハ、一二年ヲ過ズシテ黴毒發スルナリ、其形狀異ナレドモ、多ク前段ニ云下部ノ病ナリ、外氣ノ因ナラバ一般ニモ病ベケレド、其中ニモ至テ壯實ナル者ニハ、間々病ヌ者アリ、是內毒ノ有無ニヨレバナリ、是ヲ以テ考レバ、濕ナリト思ヘルコト、餘義ナキコトナレドモ、貴賤ノ人生平高牀厚蓐ニ坐シ、寒溫意ニ適ジ、憂慮思慮モナキ人ノ、濕氣ヲ感ズベキ謂ナシ、江戸深川ハ海邊ニテ甚下濕ノ地、此所ニハ甚小瘡多シト也、因テ深川瘡トモ稱スルヨシ、是等ニテモ知タルコトナリ、

〔月海錄〕永正九年壬申、人民多有瘡、似浸淫瘡、是膿疱、癩花瘡之類、稀所見也、治之以浸淫瘡之藥云々、謂之唐瘡、琉球瘡、

〔妙法寺記〕永正十年、此年天下ニタウモト云フ、大ナル瘡出デ、平愈スルコト良久、其形譬ヘバ癩人ノ如シ、食ハ違者ナル人ノ樣ニス丶ムナリ、

〔新撰倭漢合圖〕後柏原永正十一年、唐瘡始云々、

〔赤斑瘡辨考證二〕按に、唐瘡は麻疹餘毒の發瘡の名にて、妙法寺記錄に、永正十年、麻疹(ハシカ)世間に流行して後、たうもといふ大なる瘡流行せしよし記したるものなり、所によりてタウガサとも

タウモともよび、永正十年より十一年まで流行せしなるべし、

〔東海道名所記 三〕かゝる者の果は、上下共によろしからず、親にかゝりは勘當せられ、後には盗人になり、主にかゝりは、おやかたをたをし、他國に走りて諸人に迷わくさせ、療治をかきいだして、これをふせがんとて輕粉大風子なんど、あらけなき藥をのみて、病毒うちに責ては筋ちぎれ、骨くじけて、いざり引つり、かなつんぼうになりつゝ、ながきうれひをまねくもあり、これは稀き人人の傾城ぐるひの事也、

〔病名彙解 五〕楊梅瘡 俗ニ云トウガサ也、又黄豆ノ如クナル故ニマメガサトモ云リ、天行瘟毒ニ感ジテ生ジ、又色慾過度シテ毒氣ヲ腎肝ノ二經ニ畜ヘテ、便毒トナリ下疳トナリ、後ニ此ノ瘡ヲ生ズルモアリ、又瘡ヲ生ジテ後毒下疳トナルモアリ、尤モ遊女ヨリ傳染スルコト多シ、淫穢ノ氣遊女ノ陰戸ニ畜ヘアルトキニ交レバ、直ニ男子ノ腎中ニ感ジテ傾也、遊女ハ經水ニ其毒タル淫穢ノ氣ヲ通ズル故ニ、多クハ病マヌ也、此瘡ノ状ガ楊梅子ノ如クナルニ因テ名ケリ、或ハ綿花ノ如クナル故ニ綿花瘡ト名ケ、或ハ黄豆ノ如クナル故ニ黄豆瘡ト名ケ、或ハ魚泡ノ如ナル故ニ天疱瘡ト名ケ、瘡肉ガ外ヘ翻リ出ル故ニ翻花瘡ト名ク、豆ノ如クニシテ面ニ生ズルヲ大風瘡ト云、

〔牛山活套 下〕楊梅瘡

楊梅ハ、モト下疳瘡ヲ傳染シタル人之ヲ恥テ、治スルコト遲滯シテ、一變シテ便毒トナリ、便毒一變シテ楊梅瘡トナル、京都、江戸、大坂等ノ都會ノ所ニ多キ病也、鄙野ノ地ニハアルコト少シ、京ニテハ濕氣ト云也、何レモ娼妓ニ交構シテ傳染スルノ病也、初發ニハ、荊防敗毒散、消風敗毒散、(回春本朝經驗)二十四味風流飲(回上)ニ加減シテ用ベシ、

楊梅瘡毒、日不愈者ハ、或ハ鼻爛レ、鼻柱朽落シ、口臭ク、唇缺ケ、或ハ額ノ拆目額中ニアツマリ、毒氣瘻ヲナシ、或ハ三焦ノ津乾キ遍身疼痛シ、或ハ骨ウヅキニナリ、或ハ眼ニ毒入リ、或ハ耳聾シ、種々

下疳

ニ變化スルニ因テ、其人終ニ癈人トナル者ナリ、之ニ因テ人之ヲ惡ミ嫌フコト、大風ニ類スル也、此等ノ類ニハ、回春ノ通仙五寶丹ヲ用ベシ、此方王范泉ガ廣東ヨリ傳來ル妙方也、此瘡中華ニモ古ハアルコトナシ、近世廣東ヨリ傳染スルニ因テ、廣東瘡ト名ヅクルト、痘疹全書〈寔了凡ノ作〉ニ見ヘタリ、和俗此瘡ヲ唐瘡ト云モ、廣東瘡ト云コトナルベシ、唐ト東ト音同キ故カ、此五寶丹ニモ家々ノ秘方多シ、何ノ方ニテモ、眞珠ノ眞ヲ用ヒザレバ其効ナシ、

〔叢桂亭醫事小言四〕下疳〈假毒　楊梅瘡〉

下疳ハ、古ノ無キ病ニテ、總名ヲ黴毒ト唱フ、至眞要大論ニ、陰中通瘍、隱曲不利、互引陰股、ト云モノ、幷ニ金匱ニ、少陰脈滑而數者、陰中生瘡、陰中蝕瘡爛者、狼牙湯洗之、ト有モノ、黴瘡ニ似タレドモ、必アタルヤ否ノコトハ、先輩ノ未決トコロ、又陰瘡ト云モノ、黴毒ニ適當ノ文字ナレドモ、是モ明辨ナシ、自發スル人モアレドモ、先ハ花柳ニ耽リテ、此病ニ傳染スル故ニ、都會ノ人又ハ行商旅客ニ多ク是ヲ病ム、〈中略〉○陰莖餘皮アリテ陰頭不露者ヲ、俗ニ皮カブリト云ハ、無事ナル時ニ宜キ程ニ餘皮ヲツマミ、睫毛倒生ヲ治スル樣ニ挾テ、腐藥ヲ以テ切レバ、有體ニナルモノ也、下疳ヲ患時ハ、此皮カブリハ、外皮腫ヲ増テ、陰頭ハ皮中ニ引込、イカホドノ瘡ニナリタルヤヲ見ルコトナラズ、膿汁ノ流出ヲ見ルバカリニナル、是ハ皮中ニ膿ヲ包ミ、蒸熱スル故ニ、別テ治シ惡ク、又陷蝕モ多タナル、又皮中ニ堅クフクレ、瘤ノ樣ニナルヲ、袋下疳ト云、口ヲ生ゼズ、日數ヲ經テモ、依然トスル有、婦人ハ、陰内ニ發スルコト不異レドモ、男子ニ比スレバ治シヤスシ、男女共ニ陰毛ノ左右、横骨ノトマリノ付根ニ結核スルヲ便毒ト云、俗ニコレヲ横根ト云、下疳ヲ病ナガラ、便毒ヲ併セ病モ有、又便毒バカリ病モ有、又下疳ノ療治ヲ誤テ、枯藥ヲ敷テ早ク治シタル故ニ、便毒ニナルモアリ、魚口便毒ト云ハ、形象ニテ名付タルナリ、便毒ノ破レ口小サク、奥ハ深ク、膿汁ノ發シ、思フ樣ニナキ故ニ、是ヲ割テ口ヲ廣クシテ治スル外科ノ手段トス、楊梅瘡ト云ハ、下疳ヲ病ム人、周身ヘ吹出

シテ、紅暈ニテ楊梅ニ似タリ、是モ形状ニテ名付シナリ、膿ヲナサズ、痛モ痒モ無モ有、下疳、便毒、楊梅瘡ト、三病ノ形状ハ異ナレドモ、其毒ハ一物也、之ヲ總稱ト云ト一言ニテ通用ス、

〔病名彙解 五〕下疳瘡　俗ニ云ヤマタノコトナリ、入門ニ、陰蝕瘡久シク潰爛シテ下疳トナルト云リ、シカレバ疳ノ虫ノ心ニテ疳ト云歟、下トハ下部陰處ノ心ナリ、準縄ニ云、陰處瘡痒、蝕ヲ成シ、披テ耳鳴、目痒ク、鼻塞ク、歯浮ビ、稍経白キ等ノ症アラバ腎臓風瘡トス、陰頭ニ生ズルヲ陰頭瘡トス、竅口ニ生ズルヲ下疳瘡トス、今俗陰莖ニ生ズルモノ皆下疳トスルナリ、

〔倭訓栞 中編二十八〕よこね　便毒をいふ、横根の義其形をいへり、

〔俚言集覽〕よこね　万病回春に騎馬癰、外科正宗に騎馬癰、醫便に魚口瘡、俗名便毒とあり、

〔松屋筆記 九十三〕よこねといふ瘡

病毒の股の付根の所へ腫出たるを横根といへり、常山紀談二条、瀧川一益、佐々成政等、信孝を擁佐て、秀吉と弓箭を取し事をいへる條注に、篠原助六とて、利家の近習の士、廿三に成しが、よこねを煩ひ、起臥も心に任せずと見ゆ、天明の比、或人、近江の竪絵師にてよめる狂歌に、

はれ出てそらにけすれの雲もなく山のよこねにうみぞ見えける

〔病名彙解 二〕便毒　俗ニ云、ヨコネナリ、按、外科正宗ニ横痃ト名ヅク、ナレバ、ヨコネト名ルコト故アリ、左ニアルヲ魚口トシ、右ニアルヲ便毒トス、左右ニ生ズルヲ騎馬癰ト云、又跨馬癰ノ間、イヌゴ處ニ生ジ、デイアキヲ騎馬癰トイヘリ、便毒ト云ハ、其便利セザル處ニ生ズル故名ケリ、指掌ニ曰、便毒ハ血疝ナリ、俗呼テ便毒トス、其便利セザル處ニ生ズルガ故ナリ、正宗ニ云、ソレ魚口便ハ左ヲ魚口トシ、右ヲ便毒トス、スベテ皆精血變結シテ、兩股合縫ノ間ニ生ジテ結腫スル是ナリ、近ク小腹ノ下、陰毛ノ傍ニ生ジテ結腫スルヲ名テ横痃ト云、又外疝ト名ク是也、是房ニ入テ精ヲ忍ビ、強固シテ洩サズ、或欲念已ニキザシテ停テ遂ズ、モツテ精血走動シ、凝滯結シテ腫ヲナスヨリ生ズル

淋病

コトナリ、入門ニ云、俗ニ便毒ト云、實ハ血疝ナリ、髀胯小腹ノ間ニ生ズ、乃チ厥陰肝經及ビ衝任督三脈ノ隧、乃チ精氣出入ノ路ナリ、

〔病名彙解二〕横痃(ヨコネ)　便毒ノ別名ナリ、前ニ見タリ、痃ハ、字書ニ、小腹下ノ病ト云リ、

〔本朝俗諺〕便毒を鷹取の書に、疽の類といふ説あり、今これを見るに、皮かたくしてたやすく潰がたきは、疽の類といふも可なり、鷹取の蛞の黑燒をつくる、是をつくれば、其わづらひが汗になつて出る、便毒によらず用べしといへり、(蛞ナメクジと訓、蛞蝓の事なり、字書に載て解すべからず、)

〔陰德太平記二十八〕陶全薑最後之事

入道ノ最後ノ式、荒々語ラセテ、扨ハ疑所ナキ入道也トテ、彼死骸ノ有所ニ行テ見レバ、陶ノ入道ノ屍ト思シキニ、股ニ十文字ニ破レタル疵ノ痕アリケリ、二宮、是ハ一年入道便毒ヲ煩ハレタリシガ、究テ剛氣ノ人ナリケル故、脇刺ヲ以テ十文字ニ切破リ、藥ヲ付テ保養セラレ、忽平愈シタリト聞ツルガ、其痕ニテゾ候ベキト云ケレバ、各サテハ首ト云死骸ト云、今ハ彌無疑入道也ケリトテ悅ビ勇事限ナシ、

〔病名彙解一〕遺毒(イドク)　小兒ニ生ズル瘡ナリ、外科正宗ニ云、遺毒ハ乃チ未生ノ前ニアリ、胞胎ニアツテ稟受ス、父母楊梅瘡ノ後、餘毒イマダ盡ザルノ精血孕成、故ニ既ニ生ズルノ後、熱湯ニテ洗浴シ、衣物ニ烘薰セラレ、外熱內毒ヲ觸動シテ、必ズ肌膚ノ表ニ發ス、先紅點ヲ出シ、次ニ爛斑ヲナス、甚シキモノハ口角、穀道、眼眶、鼻面ノ皮肉倶ニ壞、多クハ乳哺ヲ妨ゲ、啼叫安カラズトナリ、

〔漫遊雜記上〕黴毒受于母胎者、甚難治、假令一旦得痊、後必復發、爲人父母者、豈可不思諸交精之初乎、

〔倭名類聚抄三病〕淋病　聲類云、淋(音林、字亦作痳、之波由波利)小便數也、

〔箋注倭名類聚抄二病〕慧琳音義再引同、淋作痳、一引作痳、謂小便數而難出也、按說文、淋、淋々、山下水貌、痳、疝病、二字不同、蓋是病以小便淋々、名曰淋、故聲類云、淋、小便數也、後人從疒以別水淋々字、釋

名、淋懍也、小便難懍々然也、玉篇、淋、小便難也、廣韻、淋、淋病、[illegible]引聲類作痳、皆是也、[illegible]與[illegible]疝痛之
痳混、但諸醫書皆作淋、不從疒、又按之、猶由猶利、並散瀉之義、

〔伊呂波字類抄 [illegible]〕淋病 [illegible]

〔下學集 上 [illegible]〕淋病 小便數也

〔一本堂行餘醫言 十七〕淋[illegible]

淋卽後世所謂淋疾也、古時互相稱、後人專稱淋、夫淋之爲狀也、小便澀、莖中痛、滴出些少、頻頻起、或點滴瀝、或澀不得快出、或滿腹莖內及小腹時脹裏、欲去不去、欲止不止、或小便莖中澀痛、或小便不通、日夜數十度、多至百行、甚者難禁、晝夜至三百餘起、或有小便了少頃、需已盡、忽再出些少者、或小便閉澀、臍中覺滿、或急欲尿、及去意閉澀不通、或痛引小腹、或引臍、或常有餘瀝、或莖中痒、快然欲嚏、或先惡寒戰慄、而後小便始出、或小便前痛、尿出後微快、或小便出後、莖根莖中及馬口痛苦難忍、或痛引會陰前後、或咽澀痛部、時發止、或率然而發、或有宿病、又有小便前後無澀痛、唯日夜數十起者、又有小便了已畢、唯覺餘瀝裏急澀滯不快、復小解、則尿少出、如是者二三度、而纔快者、又有小便後至半時一時餘瀝淋淋不已者、或瀉似膏、便後自出、白如尿澱、或如鼻涕、或如米泔、或如膿涕、或如粉糊、或尿與精並出、混雜如糊、或至有出精汁及膿血者、或溺赤黃色、或赤如浸紅花汁、或赤黑似小豆煮汁、或尿血多者至升餘、或有出血塊者、或出如細沙石、或如米粒堅硬如有稜角、莖中似破、甚者痛楚令悶絕、種種證候、不可殫舉、大凡青年間多患之、老人亦間有之、唯鮮耳、婦人亦間、若夫石淋者、小便出如細沙石者、此非沙石、卽是溺澱凝固、細沙碎末、硬澀出者也、[illegible]而古人謂因服乳石太散、其石氣不散、結澀下焦、熱動所致者、尤無謂之甚也、其未服石散之前、曾已有石淋證、[illegible]況未世不服乳石之人、及此邦未嘗知服石之俊、往往有此證乎、不通何如是耶、此其非因服石、有是證固不須言焉、[illegible]○[illegible]靈素專所載、見靈樞、[illegible]素問云、有癃者、一日數十溲、此不足也、[illegible]又云、膀胱不利爲癃、不約爲遺溺、[illegible]

（五氣篇）又云、癃溺血、（氣厥論）又云、癃痔遺溺、（骨空論、刺瘧論、）

又稱閉癃、

出靈樞、（經脈篇）又云、遺溺閉癃、（同上）又云、實則閉癃、虛則遺溺、（本輸篇）神農本草、又稱癃閉、（滑石條）

癃癀、㿗癃、　癃閟

同上、（並見邪氣藏府病形篇、）（癃閟出素問六元正紀大論、五常政大論、）

至陰陽大論、始見淋字、

素問（六元正紀大論）云、小便黃赤甚則淋、又云、淋閟、（同上、又見保命集、及醫學綱目、○中略）

秦越人稱癃溲、

見八十一難、

張仲景始稱淋

見傷寒論云

〔瘍科秘錄八〕淋（淋疾）

淋ハ素問ニ出ヅ、六元正氣論ニ、小便黃赤甚則淋ト云、又其病淋トアリテ、淋モ又古名ナリ、世醫多クハ癃ヲ古名トシ、淋ヲ後世ノ名ト心得ナ居ルハ、夏蟲ノ見ト謂フベシ、此病ハ常ニ酒肉膏粱ニ飽モノニ多シ、病因ヲ考察スルニ、尿道中ヘ潰瘍ヲ生ジ、遂ニ糜爛テ、濃血ヲ出スナリ、

〔醫心方十二〕治諸淋方第四

病源論云、諸淋者、由腎虛而膀胱熱故也、其狀小便出少起數、小腹弦急痛、引於臍、

治石淋方第五

病源論云、石淋者、淋而出石也、腎主水、水結則化爲石、故腎容沙石、腎虛爲熱所乘、熱則成淋、其狀小便莖裏痛、尿不能卒出、痛引少腹、膀胱裏急、沙石從小便道出、甚者塞痛令悶絕、

治氣淋方第六

病源論云，氣淋者，腎虛膀胱熱，氣脹所爲也，其狀膀胱少腹皆滿，尿澁，常有餘瀝是也，

治勞淋方第七

病源論云，勞淋者，謂勞傷腎氣而生熱成淋也，腎氣通於陰，其狀尿留莖內，數起不出，引少腹痛，小便不利，勞倦卽發，

治膏淋方第八

病源論云，膏淋者，淋而其（本作有、又一）肥，狀似膏，故謂之膏淋，亦曰肉淋，此腎虛不能制其肥液，相與小便俱出也，

治血淋方第九

病源論云，血淋者，是熱之甚者，則尿血，謂之血淋，心主血，血行身通遍經絡循環府藏，勞熱甚者則散失，其常經，溢滲入胞，而成血淋也，

治熱淋方第十

病源論云，熱淋者，三焦有熱，氣搏於腎，流入於胞，而成淋也，其狀小便赤澁，亦有宿病淋，今得熱而發者，其熱則尿血，亦有小便後如豆汁，狀者，蓄作有時，

治寒淋方第十一

病源論云，寒淋者，其病狀先寒戰，然後尿是也，由腎氣虛弱，下焦受於冷氣，入胞，與正氣交爭，寒氣勝則戰寒而成淋，正氣勝，戰寒解，故得小便也，

〔覆載萬安方二十一〕諸淋候（[illegible]）　卒淋　冷淋　熱淋

氣淋　血淋　膏淋　石淋　勞淋

〔病名彙解二〕淋病　小便澁痛ナリ、五淋ノ別アリ、氣淋、血淋、石淋、膏淋、勞淋ナリ、各條ニ見ヘタリ、

石淋

淋症皆熱ニ屬ス、間冷ニ屬スルモアルナリ、俗ニ淋病心ナルヲ、シヤウカチト云ハ誤ナルベシ、少ク辨アリ、古ハ癃(リウ)ト云リ、癃ハ罷(ヤム)ナリ、

〔武德編年集成五十一〕慶長十年正月中旬、神君駿府迄御到着有、麻疾故、暫ク愛ニ御逗留ト云々、

〔武德編年集成五十三〕慶長十二年二月十三日、神君淋疾ヲウレイ玉フコトヲ、京畿ニヲキテ、御病惱殊ニヲモキヨシ謳歌セシメ、遠國雜說喧シキノキコヘアルユヘ、孟春三日ヨリ七日迄、營中猿樂ヲ催シ、商賣人等マデ、芝居ノ見物ヲ免許セラレ、今マタ勸進能ヲナサシメ玉フユヘ、此コト都鄙ニ沙汰シ、彼巷說俄ニ止ニ至ルト云々、

〔資勝卿記〕寛永六年五月七日、女院御所御使、中御門大納言、阿野中納言、烏帽子ニテ被參候、其樣子ハ主上〇後水尾切々御腫物指出申候、又今度御麻病故、通仙院ヘ被仰出候ヘバ、御養生可然由候、左樣ニ候ヘバ、御灸治ヲモ被遊度候ヘドモ、御在位ニテハ如何候之間、御讓位モ有度由被仰候、

〔下學集上支體〕石淋(セキリン)小便澁也

〔太平記四〕備後三郎高德事幷吳越軍事

吳王夫差俄ニ石淋ト云フ病ヲ受テ、身心鎮ニ惱亂シ、巫覡祈レ共無驗、醫師治スレ共不痊、露命已ニ危ク見ヘ給ヒケル、他國ヨリ名醫來テ申ケルハ、御病實ニ雖重、醫師ノ術及マジキニ非、石淋ノ味ヲ嘗テ、五味ノ樣ヲ知スル人アラバ、輙可奉療治トゾ申ケル、サラバ誰カ此石淋ヲ嘗テ、其味ヲシラスベキト問ニ、左右近臣相顧テ、是ヲ嘗ル人更ニナシ、勾踐是ヲ傳聞テ、泪ヲ押テ宣ク、我會稽ノ圍ニ逢シ時、已ニ被罰ベカリシヲ、命助置テ、天下ノ赦ヲ待事、偏ニ君王慈惠ノ厚恩也、我今是ヲ以テ不報其恩、何日ヲカ期セントテ、潛ニ石淋ヲ取テ是ヲ嘗テ、其味ヲ醫師ニ被知、醫師味ヲ聞テ加療治、吳王ノ病忽ニ平愈シテケリ、

〔五體身分集下〕閉閤病分

淋病ト云ハ、小便澁ク陰莖痛ミ、人ヲ小腹痛ム也、品類五種ニ分タリ、俗ニハ消渇ト云病是也、治方、生地黄絞リタル汁ヲ服ヨ、○中略

石淋ト云ハ、小便ニ石ヲマリ出ス、腰片腹ヘカヽリ疼シ、後リタ痛キ病也、治方、牛角灰酒ヲ温タ服ヨ、○中略諸ノ淋病治方一通ナリ、薏苡子黄蘗煎ジタルカミヲ飲ヨ、凡石子ヲ生ム病相ハ、男ハ左腰ト同閉ヒヌタ消渇ノ如ニシテ痛ム、女ハ石ノ腰ト關冷ル也、男石ヲ痛ハ膈ノ相云々、

淋疾ト云ハ小便不通也、此病タル急病也、療治急緊ニナラズ、治方、燒石蜜ニ入タ物ニ裹テ臍ノ下ニ當ヨ、煎薏苡仁ノ湯液ニテ煎飲後ニ粥ヲ食ヨ、

〔叢桂亭醫事小言三〕淋病

是ハ壯實ノ人ニ多シ、先ブ五淋ト云ヘ諸書ニ擧タル内ニ、石淋ハ小便ノ中ニ石ノ形ヲナシタル物通ズ、膏淋ハ膏ナルモノ也、大抵血淋ト合淋ス、病甚シク忍難ク塞熱モ有、或絶食ニタ致レルモ有、血淋ハ血ノ内ニ凝血凝タルモノ隙下シ、尿孔ヲ塞ギ、痛苦モ甚ダ數十日ヲ經、面色青、經月ニ至レバ、肩背自腰間ニ痛ヲ生ジ、呼吸迫シテ終黄胖病ニナリ、淋家ノ主治ニテハ治セヌモ有、

〔技癢録二〕誤食

世俗嘗食、專喜知淘去砂石、謂誤食之作砂石淋、殊除一日、家喪、病嚥困能下、嚥中所誤食砂石、殊不知砂石入腹、徹出穀道、鳥獸常食砂石可證、明如砂石淋、是其小便結聚于膀胱、以作砂石之狀、猶便器垽濁久々結作如石也、有人臥起席上、見砂石、試振衣襦從下落、々每旦常然、醫以爲汗所結成、乃與藥、更大發其汗、不日其證頓已、考醫說、人身無水、下滲爲尿、蒸上爲汗、本爲一物、是的證知砂石淋、非因誤食砂石也、以余言之、食之可懼、最在毛髮雜下食物、見毛髮、若誤食之、積多則恐作髮瘕、作髮癥、作髮痳、其他異病不可名狀、乃有因此物梗塞者、亦不可知已、有一瘍醫解死狗觀之、小腸中有髮摶結壞爛、蓋不幸偶滯、不得下免耳

膿淋

〔一本堂行餘醫言六上〕膿淋
膿淋、世總稱淋疾、非也、嘗視當時患濃淋者、皆是下疳瘡也、蓋下疳者、陰莖外面、生瘡而疳蝕、故人皆易知、膿淋者、陰莖竅中、生瘡潰爛、出膿及血、疼痛淋瀝、雖似淋疾、實非眞淋疾、故人不得知耳、其辨詳在癃條、且熱淋、捺摸竅內瘡爛處出來、則竅中自不得不刺痛、此其所以疼痛澁瀝、與眞淋疾不異也、方其溺道竅口、溜膿貼襯之時、或睡中若不虞裏、揭起襯去、而其陰頭粘著之處、破開爲創、因成下疳者、每多有之、又觀其溺道臭膿、堅爛陰莖馬口、遂成下疳者、比比皆然、可以見其同病益明矣、故吾門斷然以此爲竅內下疳者、爲是也、

〔時還讀我書下〕先哲論ノ言ニ、今ノ淋ハ多ハ黴毒ヨリ來リテ古ノ淋ト同ジカラズ、瘡瘍經驗全書ニ內注疳ト名ケテ、小柴胡加龍膽車前子ヲ用タリ、證治要訣ニ小便注、桿甘瘡トイヘルアリ、亦毒淋ナランカ、袖珍方ニ、蛀桿瘡一名下疳瘡トアリ、コレハシカト下疳ノコトナリ、

淋瀝

〔倭名類聚抄三病〕癃瀝　病源論云、癃瀝、(音隆、之太天由波利)小便滴瀝也、

〔箋注倭名類聚抄二病〕下總本注首有下字、醫心方淋瀝遺尿同訓、新撰字鏡、痳訓志太々留、所引文原書無載、恐源君誤引、按、癃瀝當作淋瀝、病源候論諸淋候云、腎虛則小便數、膀胱熱則水下澁、數而且澁、則淋瀝不宣、故謂之爲淋、

〔萬安方三十一〕婦人淋瀝(日本呼淋曰淸濁、醫俗之誤也、淸濁則內消飲水之名也、滑數喝乾曰淸濁、淋痛閉澁曰淋病也、)
夫婦人淋者、由腎虛向膀胱熱也、膀胱與腎爲表裏、但主於水行於脬者爲小便也、藏府不調爲邪所乘、腎虛則小便數、膀胱熱則小便澁、其狀小便疼痛、澁數淋瀝不宣、故謂之淋也、

〔醫心方十二〕治遺尿(奴予反)方第廿三
病源論云、遺尿者、此由膀胱虛冷、不能約(求俱反救也之言掘也)於水故也、范汪方治人遺尿方、○下略

〔筆のすさび三〕一大食會　いつのころか、備後福山に、大食會といふことをはじめしものあり、其

遺尿

社の人皆夭折せり、ひとり關三秀といふ醫者ありしが、これははやくさとりて、其社を辭して六十餘までいきたり、予が若き頃、三秀が甚だ小食なるを見て、其よしを問ひしに、其社中皆異病にて死し、おのれ减食してまぬかれしといふ、其後近村平野村に、またこの事はやりて、人多く異病をやみぬ、其社中に横右衞門といふ若者あり、精力も人にすぐれ、無病なりしが、ふと違胸す、それより衰げくなりて、つひに壁上に躍するを覺えず、發狂して死したり、食うてすぐに食傷はせざれども、つもり〱て不治の病となるなり、一日に五合の食は吾邦の通制なり、是にて飛脚をもつとめ、軍にもいづるなり、されば人々心得べき事にこそ、軍行には一升、戰の日は二升のかては、其時々の事にて常にあらず、

〔醫心方 十二〕治尿牀方第廿四

病源論云、人有於眠睡不覺尿出者、是其禀質陰氣偏盛、陽氣偏虛者、則膀胱腎氣俱冷、不能溫制於水、則小便多、或不禁而遺失也、

〔[illegible]萬寶方 一〕遺尿　ツバヘズレタ小兒下出、是云遺尿也、

尿牀　睡裏尿也、俗云シト、又云夜シト、

〔倭訓栞 中編 二十八〕よるばり　遺尿をいふ、夜のゆばりの義なるべし、よしとゝもいへり、夜尿の義なり、

〔病名彙解〕俗ニ云ヨバリナリ、病源ニ云、夫人眠睡ニ覺ヘズシテ尿出ルモノアリ、是其禀質陰氣ヒトヘニ盛ニ、陽氣ヒトヘニ虛スルモノナリ、夜臥トキハ陽氣衰伏シテ、陰ヲ制スルコトアタハズ、コノユヘニ陰氣獨リ發シテ、水下リテ禁ゼズ、故ニ眠睡シテ覺ズ尿出ルナリ、

〔叢桂亭醫事小言 五〕小兒尿床

尿床ハ、食物第一ニ、十三椎骨ノ左右ヲセマリテ五十壯バカリスヱ、神驗アリ、又鷄元四〇丹モ良シ、夫

消渇

ニテモヤマヌハ香龍散ナリ、其兒虚弱ナルニハ、平日、弄玉湯、加附子、或八味丸煎服スベシ、

〔漫遊雜記 下〕一小兒遺尿至十餘歳、與鷓鴣菜湯、下蟲、灸章門腰眼數千壯、全愈、又有一小兒、病形相似、治之如前法、不愈、後游藝州、受一方於惠美三白者、曰以白湯服華產鹽、日五分、約六十日、若八十日許、而全愈、服之十日若二十日、病存發者、其得効益全、余屢〇永富鳳介試之、或有効、

〔倭名類聚抄 三病〕痟瘍　病源論云、痟瘍今案四聲字苑云、痟瘍、俗云加知乃也萬比、消渇同、音與渇而不小便也、

〔箋注倭名類聚抄 二病〕昌平本無注作字、山田本作作云、那波本同、下總本作亦作二字、玉篇、痟、痟渇病也、慧琳音義引埤蒼、痟渇病也、釋名、消激、激渇也、腎氣不周於胷胃中、津潤消渇、故欲得水也、按說文、消、盡也、激、欲得飮也、渇、盡也、然則釋名作消激正字、漢書司馬相如傳、急就篇作消渇、諸醫書皆同、爲通借、俗从疒作痟、與酸痟字混、原書今本作消渇者渇不止小便多是也、外臺秘要引與此全同、按原書次此文云、由少服五石諸丸散、積經年歳、石勢結於腎中、使人下焦虚熱、及至年衰、血氣減少、不復能制於石、石勢獨盛、則腎爲之燥、故引水而不小便也、則作不小便爲是、今本作小便多者、恐係宋人改竄、又按今俗呼婦人淋病爲消渇者誤、

〔隨意錄 六〕周禮春官疾醫、春時有痟首疾、鄭註痟、酸削也、首疾、頭痛也、此痟與首疾、分以爲二疾、然文恐不是也、說文痠削頭痛也、野客叢書云、司馬相如消渇、則所謂消中之疾也、痟首消中、二疾既異、而其字亦自不同、後人往々不辨、指爲一疾、鮮有別之者、後漢李通、素有消疾、此正如相如渇疾也、予謂周禮痟首、只是頭痛之謂、而亦非消渇也與、

〔伊呂波字類抄 加人體〕痟瘍カナノヤマヒ、消渇二音、

〔下學集 上支體〕痟瘍カチノヤマヒ、渇而不小便也、

〔醫心方 十二〕治消渇方第一

病源論云、消渇者、渇而不小便是也、由少服五石諸丸散、積經年歳、石熱結於腎中、使人下焦虚熱、及至

年衰血氣減少、不復制於石、石熱獨盛、則腎爲之燥、腎燥、故引水而不小便也、其病變多、發癰疽、此坐熱氣、
留於經絡、經絡不利、血氣壅澀、故成癰膿、○中略

治渇利方第二

病源論云、渇利者、隨飲小便是也、由少時服乳石、石熱盛時、房室過度、致令腎氣虛耗、下焦生熱、熱則腎燥、
腎燥則渇、然腎虛、又不能傳制水液、故隨飲小便也、○中略

治内消方第三

病源論云、内消病者、不渇而小便多是也、由少服石、石熱結於腎内、熱之所作也、
小品方云、夫内消之爲病、皆熱中所作也、小便多於所飲、令人虛極短氣、内消者食物皆消作小便、去而
不渇也、覺之宜速治、○下略

〔俗說正誤夜光珠一〕氣淋を消渇といふ誤
淋病のかろきを俗に消渇氣といふは誤りなり、小便しげく行けども澁り滯りて少く、常に餘瀝
ありて盡きぬは、氣淋とて、五淋のうちの一つなり、さて又消渇といふは、津液の不足より發る病
にて、上中下の三消あり、上消は喉渇きて多く飲み、否そこねて食少く、二便つねのごとし、中消は
口乾きて多く飲み、よく食して痩せ、小便赤くして數し、下消は煩れ渇きて、多く飲み、耳焦れ、小便
濁りて膏のごとし、これ大概を述るす、醫家の病論に詳なり、見るべし、

〔有林福田方三〕消渇
論云、夫消渇者、水ヲ飲テ小便セザル是也、小便頻數ト雖ドモ、而膩ナクシテ油片ノ如クナル、此當
消渇ナリ、食モノヲ喫フコト多ケレドモ、甚渇カハカズシテ、小便ハ少クシテ油アルニ似タリ、數ゲ
キ者ハ先消中ナリ、渇ク水ヲ飲コト多ニアタワズ、但腿腫テ脚先ヅ痩セ、陰痿弱クシテ、小便數キ
者ハ消腎ナリ、○中略

痔

三消渴

消渴ハ渴コト多シテ、而小便ヲ利スル也、内消ハ熱中ニ依テ作ス所ナリ、小便飲スル物ヨリモ多ク、食物皆消テ小便トナレドモ、渴カワカズ、人ヲシテ虚極テ氣短カラシム、强中者、莖長クナリテ興盛ニシテ、交ザルニ精液自ト出ル也、是ヲ三消渴ト云ナリ、

〔病名彙解六〕消渴　俗ニ云カハキノ病ナリ、○中略中消ハ熱中焦脾胃ス、蓄テ穀ヲ消シ、善ク飢テ甚ダ渴セズ、小便赤ク數ニシテ大便硬シ、腎消ハ熱下焦腎分ニ伏シテ精竭、水ヲ引、自救ヒ、隨テ即チ溺下リ、小便混濁シテ膏淋ノ如ク然リ、腿膝枯細、面黒ク、耳焦レ、形痩也、按ルニ、世俗痳病ナシヤタカチト云ルハ、此病證アルガ故ニ云歟、

〔橘黄年譜上〕天保十二年十二月初二、樽正街豐匠宗助妻、診ヲ乞、其證消渴數日愈ヘズ、一醫認テ胃熱トシ、屢之ヲ下シ、消渴、舌上赤爛、齒齗マデ糜爛シ、飲食スルコト能ハズ、厥虚數渴、唇歷臭アリ、余以爲肺痿ノ一證ナリト、炙甘草湯ニ加桔梗ヲ與フ、病漸愈、嚴虞惇曰、醫之爲道、若君相之治國、大黃芒硝蕩滌蘊結、而元氣不固、奄然而已、此商鞅之治秦也、參朮、蓍苓、滋養營衛、而邪氣不除、壓然而斃、太叔治邦也、醫者以曾參相濟、而象孔明之治蜀、乃可以起晉侯之膏肓、療桓公之骨髓、醫タル者此語ヲ金針トスベシ、

〔倭名類聚抄病三〕痔　説文云、痔治里反、上聲之重、知乃夜萬比、後病也、四聲字苑云、痔、虫食下部病也、今案、俗云之利乃夜萬比、

〔箋注倭名類聚抄病二〕按、痔屬澄母、舌音定母之輕、此云重、未詳、所引广部文、下總本注末有是也二字、按依本書通例、是注似當在智乃夜万比之下、釋名、痔、食也、蟲食之也、與此義同、按病源候論、諸痔者謂牡痔、牝痔、脈痔、腸痔、血痔也、肛邊生鼠乳、出在外者、時々出膿血者牡痔也、肛邊生瘡而出、血者牝痔也、肛邊生瘡、痒而復痛出、血者脈痔也、肛邊腫核痛、發寒熱而出者腸痔也、因便而清血隨出者血痔也、又有酒痔、肛邊生瘡、亦有血出、又有氣痔、大便難而血出、肛亦出外、良久不肯入、諸痔皆由傷

風房室不愼、醉飽合陰陽、致勞擾血氣、而經脈流溢、滲漏腸間、衝發下部、巢氏所云、病狀病因如是、非
實有蟲而食之明矣、但其狀有如有蟲食之、故劉熙所説云爾、

〔伊呂波字類抄 志病疾〕痔 シノヤマヒ　〔同 那病疾〕痔 ナノヤマヒ

〔下學集 上支體〕痔 病疾也

〔醫心方 七〕治諸痔方第十五

病源論云、諸痔者、謂牡痔、牝痔、脈痔、腸痔、血痔也、牡痔、肛邊生、宍如鼠乳、時々出膿血、牝痔、肛邊腫生、創而血出、脈痔、肛邊生、創癢痛、腸痔、肛邊腫核痛發寒熱血出、血痔、因便而清血隨出、又有酒痔、肛邊生、創有血出、又氣痔、大便難而血出、肛亦出外、良久不肯入、諸痔皆由傷風、房室不愼、醉飽合陰陽、致勞擾血氣、而經脈流溢、滲漏腸間、衝發下部、痔久不瘥、變爲瘻也、

〔瘍科秘錄 一〕痔疾 痔漏 內痔 外痔 牡痔 脫肛 蟲痔 血痔

痔ハ、素問ニ出、莊子ニモ痔ト見ユ、說文ニ後病ト云リ、陳言ガ三因方ニ、痔如大澤中小山突出爲峙ト字義ヲ說タルハ大ニ明白シ、其病因ヲ考ルニ、肛門ハ乃チ腸ノ終末ナリ、腸ハ二重ノ膜ヲ合タル物ヲ以テノユヘ、常ニ飲食ニ飽タル人ハ、自然ト敗血ヲ生ジ、敗血下墜シテ肛門ニ行キ、二重ノ膜ノ間ニ滯リ、大便タビニ努責ユヘ、敗血マス〱此ニ流レ來テ消散スルコトナク、遂ニ痔トナルナリ、或ハ內ニ發シ、或ハ外ヘ發スルニヨリ、形狀ヲ異ニスル故、色々ノ名アレドモ、實ハ一病ナリ、古ハ單ニ痔ト稱セシヲ、隋ノ巢元方ニ至テ始テ五痔ヲ區別ス、孫思邈王燾モ亦其目ヲ踏襲ス、後世ニ及テ七痔或ハ二十四痔ノ目ヲ別ツニ至ル、多名ノ繁却テ人ヲ眩惑ス、陳若虛晚世ニ出ルト云トモ、五痔ノ目ダモ設ザルハ卓見ナリ、

〔叢桂亭醫事小言 三〕痔 下血

痔ハ肛門ノ病ニテ、素門ニ出、後世名稱甚多、酒客ニ多故、酒痔ノ名アリ、肛肉脫出スルヲ脫肛ト云、

寒氣ノ節ニ多シ、硬キ大便ヲ下ス時ニ、穢出ルコト癖ニナリテ、肛內ノ肉ユルミテ、ホツレテ、穢花痔ノ如ニ出ヅ、出レバ軟肉故、痛モ有レドモ、出ルホドノコトナレバ、腫モ催テ痛ムナリ、甚シキハ坐スルコトナラズ、側臥シテ百藥無効、日月ヲ經テ自然ニ汁ヲ流シ、腫消シテ愈ヲ待ニ至ルモ有、又輕キハ手入シテ納ル、又常ニ大便ノ毎ニ脫シテ、其度ニ押入ル人モ有、

〔永正記上〕一雜熱血氣者付。痔、鼻血等事、

雜熱令出膿汁者、不及內院之參宮、痔。。血氣、沐浴解除、參宮無憚、小痔。。血雖不沐浴、令解除參宮也、小血幷經血鼻血等、沐浴之後、神拜無憚、大血者忌也、瞽瘡血等及三滴者、可沐浴之故也、

〔教令類纂初集十六〕元祿十六癸未十二月十五日

一日光久能仙波御宮御名代相濟歸參御目見之節者、御名代之仰を承候時之通に而可罷出候、○中略

一脫。。肛、痔、痳病、膿血出、衣類ニ付候程に而は、御名代相勤不苦候、

附灸之膿血者多少よらす、不及行水、不苦候、○下略

〔柳營諸例的二〕文化二丑年三月七日　隱居家督願　寄合　大草織部○中略

私儀、年來持病之痔疾ニ而、難儀仕候處、近來痔。。漏之症ニ罷成、逆上仕、取分差塞、眩暈强、別而相勝不申、此上全快仕、出仕等可仕體無御座候、依之私儀隱居被仰付、養子摠領主膳江家督無相違被下置候樣、奉願候、以上、

文化二乙丑年三月七日　寄合　大草織部印判

松平能登守殿○以下人名略

〔塵塚談下〕痔疾の奇藥に、深川邊の方言にヒルコ玉といふ海虫あり、味噌汁にすこし計煮て喰べし、神効有よし、海中淺利貝のある砂地に深く穴して居る、品川邊方言に海脫肛(ウミダツコウ)といふあり、乾肉(ホシナ)

沙噀に似たりといふ、ヒルコダマの事にや、ヒヘコ玉は冬に至れば、わけて深く蟄居す、春末より暖になれば穴中を出るゆへに、淺利貝の中に交りて得る事これあるよし、物音すれば速に穴中に入るよし、鼴鼠のごとく早しといふ、ゆへに得がたし、漢名石蠖ならんか、博識者に尋べし、

〔耳囊四〕痔の神とて人の信仰可笑事

今戸[illegible]多町の後に痔の神とて石碑を尊崇して香華など備へ祈るに随ひて利益平癒を得て、今は聊の堂など建て參詣するもあり、予が許へ來る脇坂家の醫師秋山玄瑞語りけるは、玄瑞壯年の比療治せし、靈岸島邊酒屋の手代にて、多年痔疾を煩ひて、玄瑞も品々療治せしが、誠に難治の症にて、常に右病を煩ひ苦みて、我死しなば世の中の痔病の分は、請ひて救ふべしと、我身の苦しみにたへず常々申けるが、死せし後秀山智想居士といひし由、かゝる事もありぬと、かの玄瑞かたりしまゝ記しぬ、

〔東都古墳志中〕秋山自雲靈神縁起

秋山自雲靈神は、攝津國川邊郡小濱の産にして、多田備中朝臣滿仲の郎從藤原仲光の末裔秋岡氏、其父六左衞門なり、其子は吉兵衞、江戸深川岡田孫右衞門に奉公して、生質直にして、後に家を繼て岡田孫右衞門といふ、三十八の比より痔疾をやむ、醫療盡て死に臨むで曰、七年難病に苦しむ故に、諸佛神に誓て、後世此病を患ふるものを救ふべしといつて、延享元甲子九月二十一日死す、當寺に葬る、其後某痔疾に苦しむ事三年、自雲の言葉を思ひいだして、信願二月を過ずして平癒す、是より世上に流布す、中略

但十四年患へて三年必死の病苦をなす、寺僧の話に、攝州多田庄大鹿村の産、

今痔佛といへるも、寺中に別に靈神を安置して、傳稱の宮居ともいふべきやうすなり、されども人々靈神とはいはず、痔佛々々と稱す參詣多し、

脫肛

〔倭名類聚抄 三 病〕脫肛　病源論云、脫肛、古紅反、字亦作肛、和名之利以豆流夜萬比、肛門脫出也、久痢則大腸虛冷所爲也、

〔箋注倭名類聚抄 二 病〕曲直瀨本無注肛字、下總本作下、山田本作肛古紅反、那波本同、並與廣韻合、萬安方同訓、醫心方脫肛訓之利乃伊豆流、原書肛作肛、久上有多因二子、則作後、肛字說文玉篇不載、廣韻載闕義、按史記倉公傳肛門、集解、肛釭也、言其處似車釭、故曰釭門、卽廣腸之門、是知古作釭門、後從肉也、肛字說文又不載、玉篇、肛、下病也、廣韻引文字集略云、脫肛、下部病也、蓋肛肛者、肛門脫出之病、故曰脫肛、後又從疒作肛也、然則脫肛可用肛字、肛門不得用肛字也、

〔伊呂波字類抄 志 病者〕脫肛 シリイヅルヤマヒ

〔增補下學集 上二 文藝〕脫肛 ダツコウ シリノイヅルヤマヒ

古事類苑

方技部十七

疾病三

〔倭名類聚抄 二〕疫 説文云、疫〈音役、和名衣夜美、一云度岐乃介、〉民皆病也、

〔箋注倭名類聚抄 二〕崇神紀、敏達紀、欽明紀、疫氣皆訓衣夜美、按衣夜美、言民皆疾之、如役使民皆赴之、故云衣夜美、古事記崇神天皇條云、役病多起、役病即衣夜美也、役疫訓衣、與役疫字音同、然自是皇國古言、非以字音爲訓也、又度岐乃介、即時氣、時氣見病源候論、與疫癘病者相類、下文詳之、故云衣夜美、一云度岐乃介也、所引广部文、原書病作疾、釋名、疫役也、言有鬼行役也、病源候論疫癘病候云、其病與時氣温熱等病相類、皆由一歳之內、節氣不和、寒暑乖候、或有暴風疾雨、霧露不散、則民多疾疫、病無長少、率皆相似、如有鬼厲之氣、故云疫癘病、又按春應暖而寒、夏應熱而冷、秋應涼而熱、冬應寒而温、非其時而有其氣、是以一歳之中、病無長少、相似者、此則時行病也、冬時嚴寒、觸冒之者、乃爲傷卽病者爲傷寒、不卽病者、寒毒藏於肌骨中、至春變爲温病、夏變爲暑病、暑病者熱重於温也、皆見病源候論時行病部時氣病部熱病也、

〔伊呂波字類抄 止人事〕疫〈エヤミ、トキノケ〉 〔同 江人事〕疫〈エヤミ、民皆病也〉 〔同 也人事〕疫病〈ヤクビヤウ〉

〔類聚名義抄 七疒〕疫疫〈音役、和エヤミ、トキノケ、疫癘病、アヤム〉

〔易林本節用集 江言語〕疫癘〈エキレイ〉疫病〈エヤミ〉

〔古事記 中崇神〕此天皇之御世、役病〈エヤミ〉多起、人民死爲盡、〇下略

〔古事記傳二十三〕役病、役字、舊印本と延佳本とには疫と作り、其正字なり、されど眞福寺本及其餘の本どもにも皆役と作り、下文なる役氣も同じ、凡て此記の書ざまか丶る例多ければ、今は其に依つ、疫と作る本は、後にさかしらに改めつるものなるべし、和名抄に、疫、衣夜美、一云、度岐乃介、說文云、民皆病也とあり、また癘、俗云衣夜美、一云和眞波夜美とあり、そのかみ癘をも衣夜美とも云しなるべし、書紀にも、疫病、疫疾、疾疫、疫氣などみな延夜美と訓り、又延能夜麻比と訓る處あり、大殿祭に延久佐のみ云る處もあり、和名抄に、癘瘡、衣夜美久佐、さて然名くる意は、まづ役を延とも延陀知とも云を、延陀知は役立なり、なほ役の事は續島富段に云べし、疫病も、漢籍に民皆病也と云る如く、人毎に病が、彼役に差されて立に似たる故なるべし、師は疫を延と云は、もと字音なり、次の文に時氣とある即是なれば、此の疫病をも共にカミノイブキと訓べしと云れき、己も初に思へりしは、役をも疫をも共に延と云を思へば、もと字音を取れるなり、若しもとよりの古言ならむには、かく同音の字にて同音なるべきに非ずと思へりしを、後になほよく思へば、然には非ず、共に國の古言なり、まづ役は、おのづから字音と同じきなり、凡て此方の古言と漢字音と、おのづからに似たるも聞きも傳にはあることなり、然るに其をも悉く彼を取れるものと思ふに、中々に非なり、さて疫はかの役に似たるから云ことゝ上に云るが如し、疫字も役より出たりと見ゆ、釋名に疫役也と云へり、如此漢國にても役よりうつりて疫と云る、此はたゞ此方の意とおのづから合へるなり、彼方に效へるにはあらず、書紀欽明紀にも、國行疫氣、民致天殘、久而愈多、不能治療、敏達紀にも、是時國行疫疾、民死者衆、と云ことあり、

〔令義解八醫疾〕典藥寮、毎歲量合傷寒、時氣、瘧、利、傷中、金創、諸雜藥、以擬療治、謂(中略)時氣者、時行之病、春時應暖而反寒、夏時應熱而反冷、秋時應涼而反熱、冬時應寒而反溫、非其時有其氣、是以一歲之中、病无長少率相似者、此則時行之氣、一名疫癘、言陰陽之氣不和、致其病響如役人、故曰疫癘也、○中略諸國准此、

〔諸病源候總論九〕時氣病諸候　時氣候

時行病者、是春時應暖而反寒、夏時應熱而反冷、秋時應涼而反熱、冬時應寒而反溫、非其時而有其氣、是以一歲之中、病無長少、率相似者、此則時行之氣也、從春分後、其中無暴大寒、不氷雪、而人有壯熱爲病者、此則屬春時陽氣、發於冬時伏寒、變爲溫病也、從春分以後、至秋分節前、天有暴寒者、皆爲時行寒疫也、一名時行傷寒、

〔諸病源候總論四十六〕小兒雜病諸候　天行病發黃候

四時之間、忽有非節之氣傷人、謂之天行、大體似傷寒、亦頭痛壯熱、其熱入於脾胃、停滯則發黃也、脾與胃合、俱象土、其色黃、故候於肌肉、熱氣蘊積、其色蒸發於外、故發黃也、

〔醫賸 三十〕一雨秋燈鬼神論云、今夫時疫之家相傳染、人人以爲鬼神、信乎、曰斯則非鬼也、乃天行之氣也云々、懷仔之鬼、聰明無識、故然也、信有鬼乎、斯則非鬼也、人之初生必飲墨汁云々、

〔醫療紀聞 一〕時疫

時疫又疫癘トモ云ヒ、溫疫トモ云ヒ、溫病トモ云フ、流行熱病ノ事ナリ、此病其傷寒ニ似タレドモ、實ハ異ナリ、傷寒ハ常ニ天地ノ間ニアル正シキ寒氣ニ感ジタ病ムモノナリ、時疫ハ天地ノ陰陽不順ニ由リ、或ハ人身ニ入ラザル氣ヨリ天地ノ間ニタマリタル穢濁ノ惡氣ト成リ、世界ニ流行スルナリ、其流行スル時ニ住居スル人々、口鼻ヨリ呼吸ノ氣ニ交ジヘテ腹中ニ引入ル丶ユヘニ病ムナリ、譬ヘバ江河ニ穢濁ヲ流スニ、其濁ノ流レユク所ニ居ル魚、是ヲ吞テ死スルガ如シ、故ニ時疫ハ一國一鄕一村甚シキハ滿天下ヘモ及ブモノアリ、其境ニサヘ違ヘバ、東村ハ病ムモ、西村ハ一人モ病ザル事アリ、時疫大ニ流行スル時、急ニ遠キ國ニ避ケ逃ルレバ免ル丶コトモアルナリ、饑饉ナドノ後或ハ戰鬪ナドノ跡ナド、天地ノ氣甚ダ不順穢濁ニナレバ、必疫癘流行スルモノナリ、又輕キハ二三年目ナドニ諸國風邪行レテ、人々皆病ムコトアリ、是モ疫ノ類ニテ輕キナリ、又重ク明白ナルハ、痘瘡麻疹ノ類モ是疫ノ種類ナリ、故ニ急ニ遠ク避ケ逃ルレバ、不患シテ濟ムナリ、傷寒感冒ハ一身ノ腠理毛孔ヨリ入ル邪ナリ、時疫ノ類ハ口鼻ヨリ呼吸ニ從フテ腸臟ニ入ル邪ナリ、是故ニ傷寒感冒ハ太表皮膚ヨリ始リ、時疫ハ半表半裏ヨリ始ル、陽氣弱キ人ハ半表半裏ヨリ直ニ裏ニ迫リ入リ、陽氣實セル人ハ半表半裏ヨリ表ノ方ヘ押シ出サル、此理、吳又可著作ノ溫疫論ニ委ク論ゼリ、讀ベシ、時疫ハ流行穢濁ノ氣ナルガユヘニ、遠ク避レバ免ル丶コトモアルナリ、

〔俗說正誤夜光珠中〕時疫とは傷寒のこと、いふ説

時疫と傷寒は別の病なるを、一病の異名と心得たる人おほし、これは大成論に、傷寒の證固に、天疫流行して、一時に感ずる所の病、老少となく率相似れる者有とあるによりての謬りなり、是すなはち時疫にて、傷寒にはあらず、此別ちは傷寒論の二卷め、傷寒例第三に分明なり、時疫とは俗に疫病といふ時行病のことにて、いつにても時の不正の氣に感じて病むなり、其邪熱の表裏經絡にあづかる所は、大概傷寒に類するものなり、さて又傷寒は冬の中、寒氣に傷られて、其時に病むを、即病の正傷寒といふ、此うちに陰症陽症のわかちあり、又その寒毒肌膚に藏れて、春夏へもちこして病むを、不即病の傷寒といふ、此うちに春病むを溫病といひ、夏病むを熱病といふ、これいづれも陽症なり、さて此陽症の傷寒に、六經の傳變表症裏症半表半裏等の證ありて、其變すべて三百九十七法、仲景先生の傷寒論につまびらかなり又李東垣の論に別に勞役の傷寒を出せり、惣じて傷寒ほどの大病はなき故に、傷寒雜病とて、傷寒に對する時は、一切の病をことごとく雜病と云へり、

〔牛山活套上〕時疫　瘟疫　大頭瘟　蝦蟆瘟、百合病

時疫瘟疫ノ病ハ、疫癘ノ類ニシテ、一般ニ流行スル熱病ナリ、多ハ溫熱ノ邪ニ中リ、或ハ山嵐ノ瘴氣ニ感ズル也、〇中略

大頭瘟ノ症ハ、頭腫テ如レ斗、或ハ耳ノ根腫痛シ、頭ニ瘡ナドヲ被タルガ如ク、上カブキニ成テ大熱ヲ發スル也、其脈多ハ浮大ニシテ數ナリ、荊防敗毒散ニ、黄芩黄連牛房子ヲ加テ用テ發シ、或ハ牛房芩連湯ヲ用、共ニ神効アリ、

蝦蟆瘟ノ症ハ、兩ノ腮ヨリ耳ノ根ニカケテ、頰マデ腫テ、蝦蟆ノ狀ノ如ナリテ大熱發ス、今時ノ和俗コレヲ江戸挾箱ト云、治法多ハ大頭瘟ニ同ジ、荊防敗毒散ニ、牛房子黄連黄芩ヲ加テ用、又ハ牛房芩連湯モ宜シ、或ハ老人、或ハ血虛ノ人、或ハ冬月嚴寒ノ時、血澀テ熱發シ難キ類ハ五積散ニ、牛

疫付例

房子本連ヲ加タ用ベシ、神効アリ、此症右ノ藥方ノ類ヲ十貼計用レバ多ハ愈也、（中略）
傷寒百合病ト云症アリ、多ハ傷寒瘟疫ノ後、虛勞シタ餘熱不平、變ジタ此病トナル、其證寒ニ非ズ熱ニ非ズ、飲食セント欲シテ食セズ、行ント欲シテ不行、坐セント欲シテ不坐、藥ヲ服スレバ即吐シ、小便赤ク、鬼ヲ見ルガ如クナルヲ百合病ト名ク、柴胡百合湯ヲ用ベシ、其効如神、

〔牢獄秘錄〕牢死之者之事（中略）
一牢内之病氣とは、昔牢疫病也、是は數年人々をこの置故自然と人之身之臭氣こもりて、此臭氣を鼻に入れ候ゆへ、昔牢疫病に成ルト云、

〔牢獄秘錄〕牢内ニ而毒藥之噂之事
一牢内にて一ふくとて、毒藥を呑せ殺し候ハ、此もの存命に候得ハ、爲之外障りと成る故殺す由、世間一統之噂しなりといへ共、是ハ跡方もなき虛言にて、牢内に左樣成事決而無之、此毒藥有之といふ人ハ、實正知らぬもの、言初めしなりといへども、このそら言當時世間之人志らぬといふものなし、誠に毒藥有と思ひ居る事こそ愚成わざなり、また牢死するもの多きハ、數年來牢内にこもり居て、風も通らぬ處にて、或ハ熱病に死しても、その儘に捨置故、自然と人の息氣、牢内の板にも柱にもうつりてわるぐさく、此臭氣をかぎ候事ハ、牢内一同之事故、初牢の者ハこの臭氣に當りて、疫病と成、是を牢疫病といふ也、この疫病にとりつかれしもの、牢死之時ハ、牢屋敷にて一ふくもられしといふ也、是實說也疑ふべからず、

〔古事記中卷〕此天皇之御世、役病多起、人民死爲盡、爾天皇愁歎而、坐神牀之夜、大物主大神顯於御夢曰、是者我之御心、故以意富多多泥古而、令祭我御前者、神氣不起、國安平、是以驛使班于四方、求謂意富多多泥古人之時、於河内之美努村、見得其人貢進、（中略）於是天皇大歡以詔之、天下平、人民榮、即以意富多多泥古命、爲神主而、於御諸山拜祭意富美和之大神前、（中略）因此而役氣悉息、國家安平也、

〔日本書紀崇神五〕五年、國內多疾疫、民有死亡者、且大半矣、
十二年三月丁亥、詔、朕初承天位、獲保宗廟、明有所蔽、德不能綏、是以陰陽謬錯、寒暑失序、疫病多起、百姓蒙災、然今解罪改過、敦禮神祇、亦垂敎而綏荒俗、擧兵以討不服、是以官無廢事、無逸民、

〔日本書紀欽明十九〕十三年十月、百濟聖明王遣西部姬氏達率怒唎斯致契等、獻釋迦佛金銅像一軀、幡蓋若干、經論若干卷、〇中略 是日、天皇聞已歡喜踊躍、詔使者云、朕從昔以來、未曾得聞如是微妙之法、然朕不自決、乃歷問群臣曰、西蕃獻佛相貌端嚴、全未曾看、可禮以不、蘇我大臣稻目宿禰奏曰、西蕃諸國一皆禮之、豐秋日本豈獨背也、物部大連尾輿、中臣連鎌子同奏曰、我國家之王天下者、恒以天地社稷百八十神、春夏秋冬祭拜爲事、方今改拜蕃神、恐致國神之怒、天皇曰、宜付情願人稻目宿禰試令禮拜、大臣跪受而忻悅、安置小墾田家、懃修出世業爲因、淨捨向原家爲寺、於後國行疫氣、民致夭殘、久而愈多、不能治療、物部大連尾輿、中臣連鎌子同奏曰、昔日不須臣計、致斯病死、今不遠而復、必當有慶、宜早投棄、懃求後福、天皇曰依奏、有司乃以佛像、流棄難波堀江、復縱火於伽藍、燒燼更無餘、

〔日本書紀敏達二十〕十四年二月壬寅、蘇我大臣馬子宿禰、起塔於大野丘北、大會設齋、卽以達等所獲舍利、藏塔柱頭、　辛亥、蘇我大臣患疾、問於卜者、卜者對言、祟於父時所祭佛神之心也、大臣卽遣子弟、奏其占狀、詔曰、宜依卜者之言、祭祠父神、大臣奉詔禮拜石像、乞延壽命、是時國行疫疾、民死者衆、　三月丁巳朔、物部弓削守屋大連、與中臣勝海大夫奏曰、何故不肯用臣言、自考天皇及於陛下、疫疾流行、國民可絕、豈非專由蘇我臣之興行佛法歟、詔曰、灼然宜斷佛法、　丙戌、物部弓削守屋大連、自詣於寺、踞坐胡牀、斫倒其塔、縱火燔之、幷燒佛像與佛殿、旣而取所燒餘佛像、令棄難波堀江、

〔帝王編年記齊明九〕七年、是冬疫癘多發、百姓病死過半、

〔扶桑略記天智五〕元年冬月、天下大疾、夭亡之人稍及過半、時人以爲豐浦大臣〇蘇我馬子靈矣、

〔續日本紀文武一〕二年三月丁卯、越後國言疫、給藥救之、　四月壬辰、近江紀伊二國疫、給醫藥療之、　四

年十二月庚午、大倭國疫、賜醫藥救之、

(續日本紀二文武)大寶二年二月庚戌、越後國疫、遣醫藥療之、　六月癸卯、上野國疫、給藥救之、

(續日本紀三文武)大寶三年三月戊寅、信濃上野二國疫、給藥療之、　五月丙午、相模國疫、給藥救之、

慶雲元年三月甲寅、信濃國疫、給藥療之、　十二月辛未、是年夏、伊賀伊豆二國疫、並給醫藥療之、　二年十二月癸酉、是年諸國二十飢疫、並加醫藥賑恤之、　三年閏正月庚戌、京畿及紀伊、因幡、參河、駿河等國並疫、給醫藥療之、　乙丑、勅令祈祭神祇、由天下疫病也、　四月壬寅、河內、出雲、備前、安藝、淡路、讃岐、伊豫等國、飢疫、遣使賑恤之、　十二月己卯、是年天下諸國疫疾、百姓多死、始作土牛大儺、　四年正月(○正月二月脫)乙亥、以諸國疫、遣使大祓、　四月丙申、天下疫飢、詔加賑恤、但丹波、出雲、石見三國尤甚、奉幣帛於諸社、又令京畿及諸國寺讀經焉、

(續日本紀四元明)慶雲四年十二月戊辰、伊豫國疫、給藥療之、

和銅元年二月甲戌、讃岐國疫、給藥療之、　三月乙未、山背、備前二國疫、給藥療之、　七月丁酉、但馬、伯耆二國疫、給藥療之、　二年正月戊寅、下總國疫、給藥療之、　六月甲午、上總、越中二國疫、給藥療之、　辛亥、紀伊國疫、給藥療之、

(續日本紀五元明)和銅三年二月壬辰、信濃國疫、給藥救之、　四年五月辛亥、尾張國疫、給醫藥療之、　五年五月壬申、駿河國疫、給藥療之、

(續日本紀六元明)和銅六年二月丙辰、志摩國疫、給藥救之、　四月乙未、大倭國疫、給藥救之、

(續日本紀十一聖武)天平五年十二月辛酉、是年左右京及諸國飢疫者衆、並加賑貸、

(續日本紀十二聖武)天平七年八月乙未、勅曰、如聞、比日太宰府疫死者多、思欲救療疫氣、以濟民命、是以奉幣彼部神祇、爲民禱祈焉、又府大寺及別國諸寺、讀金剛般若經、仍遣使賑給疫民、并加湯藥、又其長門以還諸國守若介、專齋戒道饗祭祀、　九年六月甲辰朔、廢朝、以百官官人患疫也、　七月丁丑、賑給大

伎、伊豆、若狹三國飢疫百姓、　壬午、賑給伊賀、駿河、長門三國疫飢之民、

〔續日本紀十七孝謙〕天平十九年四月己未、紀伊國疫旱、賑給、

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字四年三月丁亥、伊勢、近江、美濃、若狹、伯耆、石見、播磨、備中、備後、安藝、周防、紀伊、淡路、讃岐、伊豫等一十五國疫、賑給之、　四月丁巳、志摩國疫、賑給之、　五月戊申、勅、如聞、頃者疾疫流行、黎元飢苦、宜天下高年、鰥寡孤獨、癈疾、及臥疫病者、量加賑恤、當道巡察使與國司、視問患苦、賑給、若巡察使已過之處者、國司專當賑給、務從恩旨、

〔續日本紀三十三光仁〕寶龜五年二月壬申、一七日讀經於天下諸國、攘疫氣也、　四月己卯、勅曰、如聞、天下諸國疾疫者衆、雖加醫療、猶未平復、朕君臨宇宙、子育黎元、興言念此、寤寐爲勞、其摩訶般若波羅蜜者、諸佛之母也、天子念之、則兵革災害不入國中、庶人念之、則疾疫癘鬼不入家內、思欲憑此慈悲救彼短折、宜告天下諸國、不論男女老少、起坐行步、咸令念誦摩訶般若波羅蜜、其文武百官、向朝赴曹道次之上、及公務之餘、常必念誦、庶使陰陽叶序、寒温調氣、國無疾疫之災、人遂天年之壽、普告遐邇、知朕意焉、

〔續日本紀三十六光仁〕寶龜十一年三月乙酉、駿河國飢疫、遣使賑給之、　五月乙亥、伊豆國疫飢、賑給之、

〔續日本紀四十桓武〕延曆十年五月乙丑、〈五日〉〇天皇以天下諸國頻苦旱疫、詔停節會、

〔類聚國史百七十三災異〕大同二年十二月戊寅、遣使賑給京中疫者、　三年正月己丑、遣使賑給京中疫病百姓、　甲午、遣使將醫藥治京中病人、　乙未、遣使埋斂京中骼骴、勅、頃者、疫癘方熾、死亡稍多、庶資惠力、救茲病苦、宜令諸大寺及畿內七道諸國、奉讀大般若經、又給京中病民米幷鹽豉等、　戊申、給右京遭疫者綿、　二月丙子、御大極殿、祈禱名神、爲天下疫氣方熾也、　三月癸未朔、令天下諸國七日之內共講仁王經、爲疫病也、　庚寅、內裏及諸司左右京職講說仁王經、爲濟疫病也、

〔日本後紀十七平城〕大同三年五月己丑、遣使療治左右京病民、　辛卯、詔曰、朕以寡昧、虔闡丕基、履薄如傷、黔首之隱是恤、馭奔若厲、紫宸之脊非寧、剋己思治、勵精施政、而仁無被物、誠未感天、自從君臨、晉徼斯

患、頃者天下諸國、飢饉累興、疫癘相尋、多致夭折、朕之不德、害及黎元、撫事責躬、甚爲厚顏、或恐政刑乖越、上爽靈心、推汗傾寄、下貽人瘼、此皆朕之過也、兆庶何辜、靜言念之、無忘鑒寐、詩不云乎、民亦勞止、汔可小康、其畿內七道、言上飢疫諸國者、今年之調、宜咸免除、仍國司親巡郷邑、賑贍貧救、兼令國分二寺、轉讀大般若經一七箇日、左右京亦宜遣使賑加撫卹、庶幾爲善有効、濟困窮於試罔、修德不虛、返遊魂於仿徨、務盡實惠、副朕意焉、

(日本後紀二十二)弘仁三年七月丁巳、詔曰、頃者疫旱並行、生民未安、靜言于此、情切納隍、但神明之道、轉禍爲福、庶憑祐助、除此災禍、宜奉幣於天下名神、　戊午、御大極殿、奉幣於伊勢太神宮、爲救疫旱也、

(類聚國史百七十三災異疾疫)弘仁九年九月壬辰、奉幣帛於伊勢太神宮、祈除疫疾也、

(古今著聞集二釋敎)嵯峨天皇御時、天下に大疫の間、死人道路にみちたりけり、これによりて、天皇みづから金字の心經をかゝせ給ひて、弘法大師にくやうせさせ奉られけり、其効驗ことばをもてのぶべからず、おくに大師記をかゝせ給へり、其御記にいはく、

于時弘仁九年春、天下大疫、爰帝皇自染黃金於筆端、握紺紙於爪掌、奉書寫般若心經一卷、予範講讀之撰、綴經旨之宗、未吐結願之詞、蘇生之族、于途行歩、夜變而日光赫赫、是非愚身戒德、金輪御信力所爲也、但詣神舍輩、奉誦此秘鍵、昔予陪靈鷲山說法之莚、親聞此深文、豈不達其義而已、　其時の御經、かの御記、嵯峨の大かくじにいまだ有となん、

(類聚國史百七十三災異疾疫)弘仁十四年二月癸丑、是月天下大疫、死亡不少、□海道尤甚、　三月癸亥、令百僧於東大寺行藥師法、以除疫疾也、　八月丁亥、近江國言、病人衆且飢、給穀二千斛以充疫料、

天長二年四月庚辰、詔曰、(中略)如聞、諸國往々疫癘不止、又太宰府言上、在肥後國阿蘇郡神靈池、還旱潔不增減、而無故涸渇二十餘丈者、去延曆年中、有此怪、當時卜之、旱疫皆符、前事不忘、取鑒今日、疑是政術有乖、或以不祥歟、昔聞文引過、消實地之異、宋景脩精、移妖星之變、乃知德必勝妖、善克除患、欲攘

莚殃、唯資法力、宜每寺齋戒以修仁祠、鰥寡孤獨、不能自存者、量加振贍、其臥病之徒、無人救養、多致死亡、凡國郡司爲民父母、棄而不顧、豈稱子育、宜一一到門、給穀與藥、令得存濟、又免除去弘仁十三四兩年調庸未進、宜告遐邇使知此意焉、　七年四月己巳、太宰管內、及陸奧出羽等國、疫癘流行、夭死稍多、令五畿內七道諸國、請精進僧廿已上、各於國分寺、三箇日轉讀金剛般若經、以除不祥、已事之間、殺生禁斷、

〔續日本後紀 一仁明〕天長十年三月丁未、延百口僧於大極殿、轉讀大般若經、以祈年穀、兼攘疫氣也、普告天下、禁斷殺生、限以三箇日、

〔續日本後紀 二仁明〕天長十年六月癸亥、是日爲聖體有間、使神祇伯正四位下大中臣朝臣淵魚、奉幣於賀茂大神、又令天下諸國、修理寺塔破壞者及神社、勅曰、如聞、諸國疫癘、夭亡者衆、自非修善、何以攘災、宜令諸國各請練行僧大國廿人、上國十七人、中國十四人、下國十人、三箇日內、晝轉金剛般若經、夜修藥師悔過、其布施者三寶穀十斛、僧三斛、以正稅充行、俾致精進、

〔續日本後紀 三仁明〕承和元年四月丙午、疫癘頻發、疾苦稍多、仍令京城諸寺、爲天神地祇轉讀大般若經一部、金剛般若經十万卷、以攘災氣也、

〔類聚國史 百七十三災異〕承和二年四月丁丑、勅曰、如聞、諸國疫癘流行、病苦者衆、其病從鬼神來、須以祈禱治之、又般若之力不可思議、宜令十五大寺轉讀大般若經、極夫沈病、兼防未然焉、　三年七月癸未、復勅曰、如聞、諸國疫癘間發、夭死者衆、夫銷災害招福祐者、唯般若冥助、名神嚴力而已、宜令五畿內七道諸國司轉讀般若、走幣名神、

〔續日本後紀 五仁明〕承和三年八月辛酉、延五十口禪僧於八省院、轉讀大般若經、以攘疫氣、諸司酤食、丙寅、八省院禪僧、轉經竟、布施布帛及度者各一人、天皇御紫宸殿、引禪僧中慧解者十人、令一一論義、亦施衲衣幷御被各有差、

〔類聚國史 百七十八 佛道〕承和四年六月壬子，勅，如聞，疫癘間發，疾苦者衆，天龍救未然，不如般若之力，宜令五畿內七道諸國，內行者廿口已下十口已上，於國分僧寺，始自七月八日三箇日，晝讀金剛般若，夜修藥師悔過，迄于事竟，禁斷殺生。

〔續日本後紀 八仁明〕承和六年閏正月丙午，勅，如聞，諸國疾疫，百姓夭折，宜令天下國分寺，限七ヶ日，轉讀般若，兼遣僧醫，隨宜治養，又令郡邑修奉祭祀疫神。

〔文德實錄 六〕齊衡元年二月戊辰，詔大和國修灌頂經法，以攘疫也。

〔三代實錄 五淸和〕貞觀三年八月十七日戊午，越前國百姓，頻罹飢饉特甚，長門國去年疫癘，死者尤多，並賑給之。

〔三代實錄 七淸和〕貞觀五年三月十五日丁丑，宜詔五畿七道諸國云，迺者，陰陽寮勘奏狀偁，據卜筮，今年可有天行之疫，豫脩其備，可防將來者，加以，春雨未通，水泉涸乏，恐民與業，忘農與食，夫饑饉者能仁无上之法，般若者大乘不二之典，宜仰諸國，以安居中，講說經王，自初到日，比及秋收，至心堅固，專念轉讀，庶幾增神威於自在，保寶祚於冥助，令民無疫癘之災，農功切有豐稔之實，凡功德之道，誠信爲本，仍須長官親自檢校，勵尤致虔，必期靈應，不得疎略。　四月三日乙未，先是，伯耆講師傳燈法師位僧實永奏，頃年來五穀不登，百姓窮弊，加之疫癘頻發，死亡者衆，實永奉爲國家，嘗憑佛力，精誠攸感，頗知靈驗，由是請每供料，圖畫一鋪三千佛，幷觀世音菩薩像及一切經，貯穀百斛，以資僧供，請安置國分寺，及付國司，其穀每年出擧，勿廢修明，詔許之。　五月廿日壬午，於神泉苑修御靈會，勅遣左近衞中將從四位下藤原朝臣基經，右近衞權中將從四位下兼行內藏頭藤原朝臣常行等，監會事，王公卿士，赴集共觀，靈座六前設施几筵，盛陳花果，恭敬薰修，延律師慧達爲講師，演說金光明經一部，般若心經六卷，命雅樂寮伶人作樂，以帝近侍兒童及良家稚子爲舞人，大唐高麗更出而舞，雜伎散樂競盡其能，此日宣旨開苑四門，聽都邑人出入縱觀，所謂御靈者，崇道天皇，伊豫親王，藤原夫人，及觀察使，橘逸勢，文室宮田

麻呂等是也、並坐事被誅、寃魂成厲、近代以來、疫病繁發、死亡甚衆、天下以爲、此災御靈之所生也、始自京畿、爰及外國、每至夏天秋節、修御靈會、往々不斷、或禮佛說經、或歌且舞、令里貫之子、靚粧馳射、膂力之士、袒裼相撲、騎射呈藝、走馬爭勝、倡優嫚戲、遞相誇競、聚而觀者、莫不塡咽、遐邇因循、漸成風俗、今玆春初、咳逆成疫、百姓多斃、朝廷爲祈、至是乃修此會、以賽宿禱也、

〔三代實錄清和九〕貞觀六年七月十一日乙未、加賀、出雲兩國疾疫、　十一月十二日乙未、勅、命五畿內幷山陽、南海兩道、預鎭謝疫癘、衆轉讀般若大乘、以神祇官奏言彼諸國可有天行也、

〔三代實錄清和十〕貞觀七年五月十三日癸巳、延僧四口於神泉苑、讀般若心經、又僧六口、七條大路行、分配朱雀道東西、朝夕二時、讀般若心經、夜令佐比寺僧惠照、修疫神祭、以防災疫、預仰左右京職、令東西九箇條男女、人別輸一錢、以充僧布施供養、欲令京邑人民賴功德免天行也、

〔三代實錄清和十二〕貞觀八年二月十四日庚申、神祇官奏言、肥後國阿蘇大神懷藏怒氣、由是可發疫癘憂隣境兵、勅國司潔齋、至誠奉幣、幷轉讀金剛般若經千卷、般若心經万卷、太宰府司於城山四王院、轉讀金剛般若經三千卷、般若心經三万卷、以奉謝神心、消伏兵疫、

〔三代實錄清和二十〕貞觀十三年十二月十四日乙卯、陰陽寮言、明年當有天○行○之○災、又古老言、今年衆木多華、昔有此異、天下大疫、勅令五畿七道諸國、頒幣境內諸神、於國分二寺、轉經禱冥助於佛神、銷凶札於未萌、

〔日本紀略一醍醐〕昌泰元年六月廿二日、依天下疾疫、遣宣命使於藤原夫人〇桓武夫人吉子墳墓、　七月八日丙子、依疾疫停諸國京上相撲人、

〔扶桑略記二十四醍醐〕延長六年四月廿八日、四五月間、疾疫最甚、五位已上多亡、　五月廿二日、臨時御讀經、請百僧紫宸殿、爲消除都下疾疫、轉讀大般若經、　七年三月、京畿諸國疫癘流行、死者盈路、宣旨云、左大臣宜奉勅、傳聞、眞言敎中、有除疫死法、宜令座主法橋上人位尊意早修其法、攘災疫者、謹依綸旨、

奉卅口伴僧、始自三月廿三日、於豐樂院七箇日、晝夜不斷、修不動法、七日之内疫氣已散、沈病之類率皆存命、賞賜度者各二人、已上傳

八年四月、件年春夏疫癘甚盛、

(扶桑略記二十四裏書)延長八年閏月廿一日甲寅、自今日七箇日、於豐樂院、有灌頂經御修法事、依疫癘也、　五月一日甲子、爲除疫癘、臨時奉幣伊勢太神宮并諸社、仍廢務、　同十七日庚辰、被修有供無遮臨時仁王會、仍廢務、是爲消除疫癘也、

(類聚符宣抄三)左弁官下綱所、

應分頭諸寺社、轉讀仁王般若經事

石淸水　權少僧都　僧十口　賀茂上　律師　僧十口　賀茂下　律師　僧十口

松尾　律師　僧十口　平野　權律師　僧十口　大原野　律師　僧十口

稻荷　權少僧都　僧十口　春日　權少僧都　僧十口　大和　律師　僧十口

住吉　權律師　僧十口　比叡　僧正　僧十口

西寺御靈堂　權律師　僧十口　上出雲御靈堂　僧　僧十口　祇園天神堂　僧　僧十口

右頃者、疾疫多發、死亡遍聞、轉讀般若之靈會、未有病惱之消除、右大臣宣、奉勅、宜仰綱所、令件僧等各率淨行僧十口、請彼寺社、始從今月廿四日辰二點、三箇日間、專竭精誠、轉讀件經、除衆黎元之病疾、發新年穀之豐稔、其料物石淸水、賀茂上下、松尾、平野、大原野、稻荷等社、西寺、御靈堂、上出雲等御靈堂、祇園天神堂料、請山城國、春日大和兩社料、請大和國、住吉社料、請攝津國、比叡社料、請近江國者、綱所承知、依宣行之、事在陵夷、不得疎略、

天德二年五月十七日　大史竹田宿禰

右大弁藤原朝臣

左弁官下綱所

應令七大東西延暦寺轉讀大般若經事

東大寺僧卅口　興福寺卅口　元興寺廿五口　大安寺廿五口

藥師寺卅口　西大寺十五口　法隆寺十五口　東寺廿口

西寺廿口　延暦寺六十口

右左大臣宣、奉勅、適者、病患頻發、死亡間聞、救濟之計、尤頼佛法、宜仰綱所、令件等寺々、始從今月九日巳二點、三箇日間、毎寺擇諸僧之中、智行兼備者、轉讀件經王、必致冥感、其供養料、七大寺用大和國正稅、延暦寺用近江國正稅、東西寺宛大炊寮米者、綱所承知、依宜行之、庶幾慧風急扇、霧露之病早除、妖氣自消、都鄙之憂無聞、事縁攘災、不可懈緩、但供養料米、各可運送之狀、仰彼寮國了、

天德四年四月三日　大史我孫宿禰

中弁藤原朝臣

〔扶桑略記 二十六 村上〕天德四年五月二日庚子、又天下疾疫、夭亡之輩甚繁、給官符諸國幷十五大寺等、讀經祈疫癘事、

〔日本紀略 四 村上〕天德四年六月十四日壬午、請百僧於南殿淸凉殿、令轉讀大般若經、爲除天下疾疫也、今日於仁壽殿、令大僧都寛空修不動供、爲息災也、　廿一日己丑、結願、

〔扶桑略記 二十六 村上〕天德五年〇應和元年四月廿三日乙卯、勅、聞天下患疫疾者巨多、宜給官符五畿七道諸國、奉幣轉經祈禱除災、又令七大寺、及有供諸寺同讀經、祈止疾疫事、

〔日本紀略 四 村上〕康保三年七月七日庚午、今日宜五畿七道、三箇日於諸國定額寺、轉讀般若經、禁斷殺生、又自來十日三箇日、於諸寺有讀經、七大寺、延暦寺、東西寺、御靈堂、上出雲寺、祇園等也、依天下疾疫也、

〔日本紀略一條〕正暦五年三月廿六日戊寅、今日詔、大赦天下、大辟以下常赦所不免者赦除、又免調庸、老人賜穀、用賑恤、依自冬猶異疾疫之患也、　四月十日辛卯、南殿建禮門朱雀門大祓、爲攘疾疫之難也、

〔本朝世紀〕正暦五年四月八日己丑、午後權大納言藤原伊周卿、參著左仗座、被定行臨時賑給使、是京中臥病之貧乏輩、被行也、道路病人連々不絶、　十九日庚子、右大臣依録目録被奏、仍退出、權中納言伊周卿、參議懷忠卿、被定臨時奉幣事、是疫病之御祈也、來廿七日可被立件使者、

〔本朝世紀〕正暦五年四月廿四日乙巳、今日左右京職長等被宣旨、京中路頭構借屋、覆莚席、出置病人、或乘空車、或令人運送藥王寺云々、然而死亡者多滿路頭、往還過客掩鼻過之、烏犬飽食、骸骨塞巷、廿七日戊申、今日伊勢太神宮諸社臨時奉幣日也、有行幸、是爲祈疾疫也、〇中略　諸社幣物、著左衞門陣外、並立、天皇還御之後、中納言伊周卿、著左仗座、被立石清水、賀茂上下、松尾、平野、稻荷、春日、大原野、大神、石上、大和、廣瀨、龍田、住吉、梅宮、吉田、天滿天神、又廣大和國大社一寺〇中略主、片岡、鴨、穴師、天香山、龍穴大和國大社、河内國枚岡恩智、八幡々々寶殿〇以下七字闕國夫人〇一字闕依羅、生田、長田、廣水、新屋等社々、以中臣氏人爲使、給宣命、同時被立使、使人自敷政門受宣命、一々退出、宣命文云、

天皇我詔旨止、掛畏支某太神乃廣前爾恐美恐美毛申賜倍止申久、今年与利遠近爾有疫病之聞利、仍可祓除此患之由、祈給之間、雖經日久天、而今外國京邊之間、病死之輩、道路相枕久利、門々戸々爾毛、夢育天病臥世利、聞食天、是則人主乃德薄爾天、人民毛有此患利止、驚恐之止、無限、夫人者國本也、若無人民八、依誰天加爲君止之、古帝主賢王毛、深所憐僞賜利、況朕加愚昧奈留、未知救措止、有今此疫癘之災天八、只神明之所應給奈利、非人力之所及止、憑仰支、所念行天奈、故是以、吉日良辰乎擇定天、官位姓名乎差使天、禮代乃御幣乎、奉持給布、掛畏支太神、此狀乎平久安久聞食天、如此之災患乎早攘却給比、已臥之輩乎八速令快復、未患之者乎八、使令免煩育、無事久、無故久、安穩泰平爾、護助

給天、天皇朝廷寶位無動久、常磐堅磐夜守日守爾、護幸へ奉給ひ、御體如意爾悅令有め給へと、恐み恐みも申賜へと申、

辭別天申賜へ久、月來天象乃怪頻以相示爾、天文陰陽等道々所勘申、咎徵多端天、誠と至宸襟無聊之、件變異妖恠等託可來毛爾不祥ヲ、未萌爾消却給へこと、只是天神乃廣助厚顧爾可依、又去二月乃比ヒ、禁中ニ兩度有放火之事リ、神明毛人間毛可驚、仍件放火之者ヲ、近へ七日、遠へ三月内ニ、可顯出キ由ヲ有令新申リ支、而于今無發露、皇威縱薄とも、神驗何遲むから、大神重天此狀ヲ聞食天、令天下知驗之揭焉、(久○此間恐有脫字)

正曆五年四月廿七日

【日本紀略 一九條】正曆五年四月廿四日乙巳、被下宣旨云、京中路頭病人甚多、宜令安置之、　廿五日丙午、於八省院東廊大祓、依疾疫被奉幣也、　廿七日戊申、奉幣伊勢以下諸社、爲救消疾疫也、天皇行幸八省院、　廿八日己酉、御讀經始、依疾疫也、　五月三日甲寅、奉遣山陵使、爲救疾病也、　十一日壬戌、給五畿七道諸國可修仁王會之官符、爲攘疾病也、

【本朝世紀】正曆五年五月七日戊午、又去二月以後、依疫癘病死之輩、不知幾千、雖有種々祈禱、似無其應、路頭死人伏體連々也、　十日辛酉、午後、權大納言藤原伊周卿、中納言同顯光卿、參著左仗座、被定以今月廿日可被遣伊勢、石淸水、賀茂下上、松尾、大神、祇園等社臨時奉幣使、是則爲被祈疫癘也、又此日、從太宰府言上解文四枚、其中一枚、去年中冬以後至于今日、疫癘已發、府中不靜、又以官國人民皆欲夭亡、而其災彌倍、病患未止、遠近路邊、死人滿塞、一枚、肥前守平朝臣經敏、去三月十三日卒去了者、一枚、前豐前守藤原朝臣經統、去正月九日遭喪者、(母喪而已)一枚、病患尤盛也、欲被止今年相撲人召進事者、　十一日壬戌、午後、中納言藤原顯光卿、權中納言源伊涉卿、參議藤原懷忠卿、參著左仗座、仰陣覽給五畿七道諸國可修仁王會官符八枚、於結政座請印、參議懷忠、少納言源朝臣伊頼、少外記多治羅

猜物〇本朝世紀左少史安倍茂忠、讀記宣旨了、其宣旨状云、畿内國々者、以來十五日、於有便所々、可修、至于遠國者、官符到來之後三日内可修、由是爲攘疫癘之災也、　十五日丙寅、又關白家被修百寺之誦經、是皆爲攘除疫癘也、神大佛殿讀演之講、諸司官人、緇素壯老、多以會集、各又手伍幣、讀此讀式、盡誠云、每手擎呪願、口々讀般若經、萬理運之災難定、有消除之冥助歟云々、其願文云々、　十六日丁卯、左京三條南油小路西有小井、水爲泉、深尋常不用、而或狂夫云、飲此水者、皆免疫癘云、仍都人士女、爭昔來汲、男女提桶、貴賤貯瓶、置偏忘病死之災、千万不知、妖言〇中略之異饑者也、近來公家被勤祈者、祭名山大川等、是又爲消疫癘之病患也、　廿日辛未、被奉諸社臨時幣帛使、中略月來之間、疫癘尤盛也、爰有種々浮説、專無止、時何神之祟歟云々、仍奉神明祟故者、所奉遣也、件疫癘蜜盛也、仍宜令云々、中略〇　廿四日乙亥、疾病不止、京中外國、病死彌盛云々、　廿六日丁丑、是日、依宣旨、諸司諸家修石塔、是依疫癘也、臨光明被行天下大赦事、同依疾疫事也、　六月四日甲申、權大納言藤原伊周卿、參著左仗座、今日被定行丹生貴布禰兩社祈雨事、幣使近來依疫癘病死之輩、以盛也、而又旱魃、仍所被奉遣也、　十日庚寅、去三月以後、京畿外國疫癘流行、病死無際、仍成恐奇夢閉門、或稱物怪不仕、如此之間、上下無節、　十三日癸巳、午後、權大納言藤原伊周卿參入、著左仗座、被奉遣丹生貴布禰兩社祈雨幣帛、并御馬等、子細、其宣命云々、中略〇　十四日甲午、被定臨時仁王會之事、中略件仁王會、是疫癘消盛、而病死不止、因之爲消除件災、可被修也、　十六日丙申、今日妖言、疫神可横行、都人士女、不可出行云々、

〔日本紀略一九一條〕正暦五年七月廿一日辛未、奉讀經、依疾疫祈也、　廿八日戊寅、自去四月至七月、京師死者過半、五位以上六十七人、　八月十日己丑、於大極殿以二百僧、轉讀大般若經、依疾病也、　廿一日庚子、奉幣諸社、依天變恠異旱疫病事等也、　十月十六日甲午、奉遣山陵使、爲攘病難也、　十二月廿五日壬寅、今年自正月至十二月、天下疫癘最盛、起自鎭西遍滿七道、

〔百練抄四一條〕正暦五年、自正月至十二月、天下疫死者尤盛、起自鎭西及京師、四五六七月之際殊盛、死

者過半、五位已上六十餘人也、道路多死骸、

〔扶桑略記 二十七〕正暦五年甲午、自正月至十二月、天下疫癘、起自鎭西、遍滿七道、五位以上七十餘人疫死、　六年、〇長德元年 今年夏比疫癘殊盛、納言以上薨者八人、古今未有云々、

〔日本紀略 十一〕長德元年四月廿七日癸卯、定諸國幷宇佐宮等、各書寫大般若經、六觀音像、可攘疾疫之災、

〔類聚符宣抄 三〕太政官符、五畿七道諸國司、

應每國圖寫供養陸觀音像大般若經一部事

右右大臣宣、奉勅、比年疫癘延蔓、病苦彌盛、京內上下之人、多歸泮渙、外國遠近之民、悉泥瘴煙、適存危命者、頻携藥石、而忘農桑、纔脫病惱者、鎭營斂葬、以闕貢賦、或比首而俱臥、誰致救療、或擧家而夭亡、誰敢收藏、況枯旱涉歲、五穀不登、人物共盡、蓋此時乎、災害之甚、往古未聞、夫觀音能救急難、尤可依怙、般若亦施感力、必攘災孽、仍普仰五畿七道諸國、每國圖寫供養、其料用正稅、若無正稅、用不動穀、且申聞用、且以宛行、不動正稅、共以用盡、申請所在官物、將以裁許、近國六七月中、圖寫供養、遠國八九月間、開講演說、供養之後、且注在狀、早以言上、實語勿疑、信力無違、口遣民庶、長期艾安者、諸國承知、依宣行之、符到奉行、

權左中弁源朝臣　　右大史坂上大宿禰

長德元年四月廿七日

〔百鍊抄 四〕長德元年四月六日、關白道隆依病出家、十一日薨、　五月八日、關白右大臣道兼薨、今日左大臣重信同薨歟、四五月之間疫疾殊盛、納言已上薨者八人、關白道隆、道兼、左大臣重信、大納言濟時、朝光、道賴、中納言保光伊涉等也、又四位五位侍臣、幷六十餘人、至于七月漸散、

〔日本紀略 十一〕長德元年七月廿三日丁卯、今年自四月至五月、疾疫殊盛、至七月頗散、納言以上薨者

八人、四位七人、五位五十四人、六位以下僧侶等不可勝計、但不及下人、

〔大鏡七太政大臣道長〕其とし〇長德元年の祭のまへより、よの中きはめてさはがしきに、またのとし、いとゞいみじくなりたりしぞかし、まづは大臣公卿おほくうせ給ひしに、まして四位五位のほどは、かずやはしりし、まづそのとしうせ給へる殿ばらの御かず、閑院大納言殿、三月廿八日、中關白殿、四月六日出家し給ひて、十日うせ給ひぬ、それはよのえにはおはしまさず、たゞおなじをりの、きしあはせたりし事なり、小一條左大將濟時卿は、四月廿三日うせ給ふ、六條左大臣殿重信、粟田右大臣殿道兼、桃園源中納言保光卿、この三人は、五月八日一度にうせ給ふ、山井大納言殿はみちよりと申し、六月十一日ぞかし、御年二十五にて又ありしかし、あがりてのよにもかく大臣公卿七八人、二三月のうちにかきはらひうせ給ふは、けうなりしわざなり、

〔榮花物語四見はての夢〕長德元年正月より、世中いとさわがしうなりたちぬれば、のこるべうもおもひたらぬ、いとあはれなり、〇中略ことしはまづしも人などは、いといみじうたゞこのごろのほどにうせはてぬらんとみゆ、四位五位などのなくなるをば、さらにもいはず、いまはかみにあがりぬべしなどいふ、いとおそろしきことかぎりなきに、三月ばかりになりぬれば、くわんぱくどの〇道隆の御なやみもいとたのもしげなくおはしますに、内によのほどまいらせ給て、かくてみだり心ちいたくあしくさぶらへば、このほどのまつりごとは、内大臣〇伊周をこなふべき宣旨くだるせ給へとそうせさせ給へば、げにさばかりくるしうし給はんほどは、などかはとおぼしめして、三月八日のせんじに、くわんはくやまひの間殿上をよび、百官執行とあるよしせんじくだりぬれば、内大臣殿よろづにまつりごち給、か〻るほどに、かんゐんの大なごん〇朝光よの中心ちわづらひて、三月廿日うせ給ひぬ、あはれにいみじきことなり、あすはしらず、いまはかうなめりとるべきとのばら、むねはしりおそろしうおぼさる〻に、くはんはくどの〻御心ちいとをもく、

四月六日出家せさせ給ふ、あはれにかなしきことに覺しまどふ、

〔百練抄 四 一條〕長保二年、今年疫死甚盛、始自鎭西到京師、

〔權記〕長保二年六月廿日乙丑、去夕左馬權助親扶朝臣卒去、今月所卒去、民部大夫國幹、前因幡守孝忠等也、近日疫癘漸以延蔓、此災年來連々無施、昔崇神天皇御宇、七年有疫、天下之人大半亡沒、于時天皇知其祟、忽以解謝、治取天下百餘年也、而今世路之人、皆云、代及像末〇像末恐衰末誤災是理運也、予思王法論不治、罰惡人不親近善人者、禍胎災孽、何處轉之哉、彼濟陰稃風、巴郡黃龍、皆出訛言、多爲妖孽、不然、閑最靜說自以相叶、後漢末衰災異重疊、後代之史當時之謠、以爲賞不當其功、罰不當其罪、又如今年夏招俊堂災、其後不幾、應天門壞、皆是怪異之極、有識者定應有所見、主上寬仁之君、天曆以後、好文賢皇也、方攘除剛、只遲叡慮所期澄清也、所應變者、漢文帝、唐太宗之舊跡也、今當斯時、災異蜂起、愚暗之人、不知理運之災、更水渦旱、難免忽迷、白日蒼天、難訴無答者也、

〔帝王編年記 十七 一條〕長保二年、自十一月疫死繁發、始自鎭西坂東迄到京師、　同三年七月以後、疫死漸止、

〔日本紀略 十 一條〕長保二年十二月、今年冬、疫死甚盛、自鎭西來京師、

〔權記〕長保三年三月廿八日庚子、此日千口僧、於大極殿轉讀新寫金剛壽命經、爲攘疫疾交死之怖依時定增壽命之誓也、予得分五卷之中、手自書寫一卷、

〔扶桑略記 二十七 一條〕長保三年辛丑、春月疫死甚盛、鎭西坂東、七道諸國、入京洛疫癘殊甚、仍三月十八日甲午、行幸大極殿、爲除疾疫、修大仁王會、　同廿八日、請千僧於大極殿、令讀壽命經、　五月九日京師諸人、於紫野行御靈會、道路死骸不知其數、天下男女夭亡過半、七月以後疾疫漸止、

〔日本紀略 十 一條〕長保三年三月十日壬午、於大極殿百座仁王講、仍天皇行幸八省院、依疾疫祈也、　十八日庚寅、仁王會竟、　廿八日庚子、於大極殿請千口僧、讀壽命經、依天下疾疫也、　四月十二日癸丑、

於南殿并建禮門朱雀門等、有大祓、依疾疫也、

〔權記〕長保三年五月十九日庚寅、今日左府被參内、候御共、諸卿被參會、被定申可攘除疾病之事、中納言本願仁王經御讀經事、行事大日僧等不具、祓僧綱驗者依請候陣外行事云々、次左大臣於陣召余令奏諸卿定申、紀伊守致時朝臣申請雜事三ヶ條、并可攘疫病事、又神祇官御祈事、召廿一社司、可令祈申、讀交由事令祈申、今月内可讀金由御幣有感者、奉幣諸社、并可被貢社司云々、於十二門可被轉讀大般若經事、先年已有其驗、早可被行云々、下知諸國、令顯造丈六十一面觀音、所令供養事、本願寺神、然則官符下知後六十日内、開眼供養、可令寫上其由下知諸國、永以違者、請文可令勘會云、又諸國郡國分二寺僧尼等、各施供養事、年中御願、國司監臨、僧可令勤行於御前、可致講演最勝王經事、同新給宮殿音願、亦可令講演於天王寺、令僧綱行僧廿口、三ヶ日間、可令轉讀仁王經事、各施供養、可用本國官物、大安寺七ヶ日可令講仁王般若經事、大安寺東院崇道天皇廟、可令轉讀千卷金剛般若經事、供養料、同可用本國官物、下知諸國、僧可令持齋六齋日殺生事、仰云、依定申可令勤行之、神祇官并廿一社御祈、并十二門御讀經日時、令擇申、又可定申僧名、依仰令陰陽寮擇申御祈日時、神祇官御祈、今月廿一日、讀經御祈、廿四日、奏之、又依召參陣座、執筆隨大臣仰、書御讀經僧名、

〔權記〕長保三年五月廿九日庚子、參左府、參内、十二門御讀經也、中納言晝間、左大臣奉、宰相中將、左大弁御事相、右中弁等、每門禮拜、為攘除疫氣、每門各差僧綱、率廿口限三ヶ日夜、轉讀大般若經也、其僧亦東面陽明門、前大僧正觀修、少僧都隆圓、待賢門僧正覺慶、權少僧都慶圓、郁芳門權僧正明豪、權律師明救、以上延曆寺、南面美福門權少僧都濟信、朱雀門院大僧都雅慶、權律師清壽、皇嘉門權律師覺緣、以上大寺、西面談天門權少僧都定澄、權律師平超、藻壁門權律師平僐、殷富門權律師明久、已上興福寺、北面安嘉門權大僧都勝算、法橋觀救、偉鑒門大僧都嚴久、權律師尋救、達智門權律師院源、以上延曆寺、每門率用廿

口僧也、

〔日本紀略 十一 一條〕長保三年五月廿九日庚子、於十二門有轉讀大般若經事、依疾疫也、　閏十二月廿九日丙申、始自去冬至于今年七月、天下疫死大盛、道路死骸不知其數、況於斂葬之輩、不知幾万人、

〔日本紀略 十二 三條〕長和四年三月廿七日丁未、天下咳病、又疫癘屢發、死者多矣、　五月十五日甲午、臨時仁王會、依天下疫疾也、　廿六日乙巳、詔大赦天下、依例〇例字衍天皇不豫、幷人間疾疫也、右少辨資業作詔書、　六月廿日戊辰、依疫神託宣、立神殿奉崇重也、　廿三日辛未、臨時仁王會、依疾疫也、

〔小右記〕長和四年六月十一日己未、近日疫死者不可計盡、路頭死骸連々不絶、五位已上及十餘人、亦病癘多有、其間自賤及貴歟、

〔類聚符宣抄 三〕左弁官下綱所

應令十五大寺延暦寺轉讀仁王般若經攘除災癘事

東大寺卅口　興福寺卅口　藥師寺卅口　元興寺廿五口　大安寺廿五口
西大寺十五口　法隆寺十五口　法華寺十五口　新藥師寺十五口　本元興寺十五口
招提寺十五口　東寺廿口　西寺廿口　四天王寺十五口　崇福寺十五口
延暦寺六十口

右權大納言源朝臣俊賢宣、奉勅、適者都鄙之間、疫癘滋蔓、致種々之祈禱、彌聞元々之死亡、欲賴仁王之威神、以助万民之危命、般若海中覓不死之良藥、實智山上傳長生之秘方、仍於件寺々、始從今月廿九日中二點、五箇日間、每寺擇智行兼備之僧、轉讀件經王、消攘彼疫癘、但其供料用本寺物者、綱所承知、依宣行之、事緣攘災、不得疎怠、

寛仁元年五月廿五日　少史酒人

少弁源朝臣

〔日本紀略 後一十三條〕寬仁元年六月十四日辛巳，於御殿以十五口僧，轉讀仁王經，三箇日，依天下疫病也，廿三日庚寅，公家爲除疾疫，書寫壽命經，以一千口僧，於大極殿，被供養轉讀之，又給度者一人。○[illegible]十四年四月廿二日癸卯，詔大赦天下，大辟以下罪無輕重，咸以赦除，但犯八虐，故殺謀殺，私鑄錢，强竊二盜，常赦所不免者不赦，又免調庸徭役，依彌災疾疫事也。治安元年正月廿八日甲辰，臨時仁王會，爲攘疫病也。二月廿五日庚午，依天下疾疫事，幣廿一社，內記中原師任奉宣命，但件宣命，當日大內記菅原忠貞所草也。三月七日壬午，於大極殿，請千僧，轉讀壽命經，依天下疾疫也，件經，公卿以下，諸司以上分配書之。

〔類聚符宣抄 三〕左弁官下 畿內

應分配諸社讀奉仁王般若經事

石清水	權大僧都慶命	僧六口	賀茂上	前權少僧都心譽	僧六口
賀茂下社	權少僧都實誓	僧六口	松尾	律師觀眞	僧六口
平野	律師定基	僧六口	稻荷	經尋	僧六口
春日	大僧都林懷	僧六口	大原野	懷壽	僧六口
大神	少僧都扶公	僧六口	住吉	清新	僧六口
梅宮	教圓	僧六口	吉田	永照	僧六口
祇園	權律師明尊	僧六口	北野	遍救	僧六口
比叡	權僧正院源	僧六口	西寺御靈堂	濟慶	僧六口

右去冬以來，疾疫競起，夭亡之者多有其聞，仍種々祈禱，一々勤修，三寶之冥助難及，一天之病患未降，夫夫仁王般若者，護國之城塹，除病之刀劒也，非仰五力之本誓，何得救万姓之危命，故，權中納言藤原朝臣能信宣，奉勅，宜仰綱所，令件僧等各率淨行僧六口，發遣社頭，始自今月廿六日午二點，三箇日間，

專勵精誠、講演件經者、綱所承知、依宜行之、事是攘災、不得疏簡、但其供案料、石淸水、住吉等、攝津國、賀茂下上、稻荷、祇園、比叡等社、近江國、松尾、平野、大原野、梅宮等社、丹波國、吉田、北野等社、西寺御靈堂、山城國、春日、大神等社、大和國、早可運送之狀、下知件等國々已了、

治安元年四月廿日　　右大史津守

少弁藤原朝臣

〔日本紀略後一條十三〕治安元年四月廿三日戊辰、奉幣廿一社、依祈雨幷消疾疫難也、　廿六日辛未、自今日三箇日、於石淸水以下十六社、轉讀仁王經、依除疾疫也、　六月十六日庚申、奉幣廿一社、依攘疾疫之難也、　廿七日辛未、從去春至此夏、疾疫死者甚多、　七月十日癸未、於大極殿臨時仁王會、爲消疾疫也、

〔類聚符宣抄三〕諸社御讀經

石淸水	權律師融碩	僧六口	賀茂上	權大僧都明尊	僧六口
賀茂下	權大僧都定基	僧六口	松尾	權律師經救	僧六口
平野	桓舜	僧六口	稻荷	眞範	僧六口
春日	前大僧都扶公	僧六口	大原野	道讚	僧六口
大神	權律師平能	僧六口	住吉	忠命	僧六口
梅宮	源泉	僧六口	吉田	眞圓	僧六口
祇園	權少僧都救圓	僧六口	北野	權少僧都遍救	僧六口
比叡	僧正慶命	僧六口	西寺御靈堂	濟慶	僧六口

長元三年三月廿三日

右中弁藤原朝臣賴任傳宣、右大臣宣、奉勅、適者疾疫旣發、須求攘除、農業漸催、將期豐稔、轉災禍者、無

先俾法生、病由赤在崇神明、仍先消病患於一天、欲充禳禍於万邦、故占靈社之例、敬謹諸國之敎、冀助之不疑、威靈豈其虛設、宜仰綱所令件僧等、各專淨行僧六口、讀靈社頭、始從來四月六日午剋三箇日間讀誦件經、綱所宜承知依宣行之、事是頻災、不得疎簡、但其供養料、石清水、住吉、大原野等、攝津國、賀茂下上、稻荷、比叡、近江國、松尾、平野、梅宮、丹波國、吉田、祇園、和泉國、北野、西寺御靈堂、河内國、春日、大神、大和國、早可運送之狀、下知件國々已了者、

長元三年三月廿三日　　　　左大史惟宗朝臣義賢奉

僧事、須於左仗仰右府、右府仰右中弁、頭經任、令召陰陽寮、并令進文書硯等、史等進文書硯、如例、右府令左中辨中將書僧名等、右中弁進日時勘文、右府加入定文日時文於筥、令右中弁奏之、弁先内覽關白殿、次奏之、次事下右府、右府給之於陣腋、下史義賢朝臣、義賢朝臣宣旨下綱所、又可運充供養料之由、同宣旨於國々、又可社頭房裝束之由、令仰使宣國々、讀經等云々、

(日本紀略後一條)長元三年五月十九日辛未、請千僧於大極殿、令讀壽命經、公卿以下、依宣旨調進經卷、以天台座主慶命爲講師、令祈消疾疫之災、　廿四日丙子、下知諸國、圖繪丈六觀音像、轉讀觀音經、爲消疾疫也、　六月廿日壬寅、於大極殿、有臨時仁王會、依疾疫并宇佐宮神馬虛實也、

(類聚符宣抄三)太政官符五畿内七道諸國司

應圖寫供養丈六觀世音菩薩像壹體、讀觀世音經佰卷事

右去春以來、疾疫盛發、病死者多、仍寄託内外、誠致祈禱、空經旬月、未聞休除、夫觀世音菩薩者、衆生依怙、施無畏、患病厄者、必被救護、遭急難者、乍得解脫、就中十一面觀世音、有頂上佛面除疫病之願、請觀世音經、有慶會離難救苦厄之敎、勞仰弘誓、豈無冥感乎、正二位行大納言兼民部卿中宮大夫藤原朝臣齊信宣、奉勅、宜下知五畿内七道諸國、圖寫件菩薩像并經卷、官符到後、擇定吉日良辰、專當於國分寺、讀當寺淨行僧十口、開讀供養矣、卽一七日間、轉讀件經、但所用之僧、有如不法之輩、尋訪他寺、僧

後員數、祈以件事、必期靈驗、又轉讀之間、殊致潔齋、斷絕葷腥、禁止屠割、其施供料、用正稅、若無正稅、用所在官物者、諸國宜承知、依宣行之、符到奉行、

造大安寺長官正四位下行右大弁兼內藏頭中宮亮源朝臣　從五位下行左大史惟宗朝臣

長元三年五月廿三日

〔春記〕長曆四年八月十六日戊戌、此兩三日、京中上下悉以病惱、男女房等不候內也、藏人只二人所候也、中略〇予〇藤原資房參關白殿〇藤原賴通殿下坐中納言〇賴通子通房二御方、彼納言從昨日病惱云々、是世間之病歟、中略〇命云、中納言從昨日病惱、非重惱、近來天下之上下人々、皆以病惱、但不經四五日云々、家中人皆病惱、不見來爲之如何、予申云、大內如之、　十七日己亥、參入關白殿、命云、家中上下皆悉病惱、無人駈仕、爲之如何、但件病、不及死亡、尤所悅思也者、

〔百練抄後朱雀四〕寬德元年疫疾尤盛、死骸滿道路、

〔扶桑略記後冷泉二十九〕永承七年壬辰正月廿六日癸酉、屈請千僧於大極殿、令轉讀觀音經、自去冬疾疫流行、改年已後彌以熾盛、仍爲除其災也、

〔百練抄後冷泉四〕永承七年五月廿九日、大安寺東寺新造神社行御靈會、依可止疫疾御示現也、世名曰祇園社、　八月廿五日、今年疫病流行天下、

〔扶桑略記後冷泉二十九〕永承七年六月十七日庚寅、屈千口僧於大極殿、轉讀金剛壽命經、蓋祈疾疫也、

〔扶桑略記後三條二十九〕延久三年正月十六日壬寅、屈千僧於太政官、被供養轉讀觀音經、祈時疫也、

〔扶桑略記白河三十〕承保二年十月十九日丁未、屈百僧於大極殿、三箇日轉讀大般若經、祈民庶頓滅也、

廿一日己酉、大赦天下、爲消同厄也、

〔中右記〕寬治八年〇嘉保元年六月三日、近曾兼禪已講入滅云々、薗城寺人老僧也、又故若狹守隆基女房老年七云々七十卒去云々、是故宇治大納言殿第三女也、民部卿幷左宰相中將能長籠居、去二日明法博士兼

左衛門尉中原範政奉宣、[illegible]凡夭亡者不可勝計、京中路頭河原之邊、近日死骸骨可謂大疫、

〔朝野群載二十一雜文〕天下不靜間事

禮記月令曰、孟春之月行秋令、則民大疫、又曰、季春之月行夏令、則民多疾疫、

今案、政令違節、民有疾疫歟、〈中略〉

議者曰、給稍見之疑也、師古曰、鬼神好曲園、故給稍爲疑府也、

正暦五年六月廿七日、祓疫神於船岡上、長保三年五月九日、祓疫神於紫野、京師衆庶行御靈會、件年々天下不靜、仍有此儀、御靈之會已叶本文、鬼神好曲園、神有所歸者不爲厲之故也、風聞紫野今宮久歴年序、宸及破損、加之下民之愚誤、伐樹木、獻早加修復、必有感應矣、

右民者國之寶、君之本也、治國之道不如遏夭、而近日以降、天下不靜、物故之者往々在焉、因准明文、可被計行所謂一人有慶、兆民賴之、仍大略注申如件、

天承二年閏四月八日　散位中原師元

〔百錬抄八高倉〕承安二年五月十二日、京中諸人、依風聞於六角堂因幡堂、爲免疫疾云々、

〔帝王編年記二十二安德〕養和元年、今年天下飢饉、道路餓死者充滿、以來未有如此也、

壽永元年、飢饉間、去年旱魃疫癘、餓死人在路頭、

〔方丈記〕又養和のころかとよ、ひさしくなりてたしかにもおぼえず、二年があひだ、世の中飢渇して、あさましきこと侍りき、〈中略〉明くる年は、たちなほるべきかと思ふ程に、あまつさへえやみうちそひて、まさるやうに跡方なし、世の人皆うゑ死にければ、日を經つゝ、窮りゆくさま、少水の魚のたとへに叶へり、果にはかさうちき、足ひきつゝみ、身よろしき姿したるもの、ひたすら家ごとに乞ひありく、かくわびしれたるものども、ありくかと見れば則倒れ伏しぬ、ついひぢのつら、路の頭にうゑ死ぬる類は數も知らず、取り捨るわざもなければ、くさき香、世界にみち〳〵て、變り

ゆくかたちありさま、目もあてられぬこと多かり、いはんや河原などには、馬車のゆきちがふ道だにもなし、

〔玉葉〕文治三年四月廿四日乙未、親經來仰、院〇後白河宣云、近日天下有病患、又兒女有謠言、尤可有御祈事云々、申云、尤可然候、於謠言者未承及候、病患粗有其聞、御祈尤可候、但用途事難叶、先日可被付功圖之由奏聞、此事未無御沙汰、依御定五六ヶ國相計雖催仰、敢無領狀之國、以別勅定可被仰下歟、抑近日可被召意見施德化之由有其聞、其事無私被行者、祈禱攘災不可過之者、

〔吾妻鏡二十八〕寛喜三年七月十六日、今月天下大飢饉、又二月以來、洛中城外疾疫流布、貴賤多以亡卒云々、

〔春日驗記八〕禪南院範雅僧都が養父大舍人入道といふものは、そのころ人にしられたる侍也、あるとし天下に疫病はやりて、家ごとにやみけるに、この入道が郎等男、ゆめに數多の武士この家にうちいらんとするに、先陣のともがら、うちをみいれて、かぶとをぬぎて拜していはく、此所には唯識論おはします、狼藉あるべからずとて、やがてみな退出しぬ、夢さめて後翌朝に、入道が家にきたりて此よしをかたる、そもそも唯識論とはなに物ぞやといふ、範雅おりふし在京して、かの家に同宿したりければ、このよしをつたへきゝて、くはしくその家をみるに、まろう人井の棚のおくより唯識論第九卷をもとめいだしてけり、此僧都つねに宿しければ、同朋どもなど取落けるにぞと、

〔融通念佛緣起畫詞下〕去正嘉のころ、疫癘おこりて人おほく病死にけり、其時武藏國與野鄉に一人の名主あり、年來念佛信心の人にて、世間の疫癘をのがれんがために、家うちの老少をすゝめて、明日より別時念佛をはじむべきにて、番帳を書て道場におきけり、その夜の夢に異形の者ども如霞むらがりて行けるが、此家の門のうちへいらんとしけるを、あるじ出むかひて云、是は家

中の男女心をひとつにして、別時念佛を始べきにて結番して、すでに彼番帳を佛前におきたり、亂入する事なかれといふ、こゝに疫神のいはく、汝がいふことまことにしかり、然ば番帳を披見すべしといふ、主すなはち是を見するに、疫神隨喜せる氣色にて、結衆の名字の下ごとに判形を加てけり、いはく、我一人の息女あり、他所にありといへども、彼名字を書て此念佛にいれんとおもふ、疫神これをゆるさずと見て夢さめぬ、其夜あけて番帳を見れば、實に名字の下ごとに判形あり、いろはの字を書調せるがごとし、其色燒驗をしたるに似たり、夢にたがへず家内の老少いさゝかもつゝがなきに、かの他所にある息女は、此病にて終にけり、此事其聞ありて、彼番帳をば將軍家へめされてけり、是例祇園部類眷屬等も、みな融通念佛の結衆にて御坐ば、彼異類異形と中も別のものにあらず、皆祇園部類眷屬どもなれば、元より此念佛衆に入たる疫神也、眞實に深志を致して、道場を莊嚴して番帳をくり、明日より別時念佛を始べき信心の誠、色にあらはれければ、行疫神も番帳に判形を加へ、隨喜して退にけり、

〔園太曆〕康永四年九月十九日、天下依有病事、被行御祈例、

文永元年七月上旬以來、疫病流行、　建治三年秋以來、天下病患流布、

〔看聞日記〕應永廿七年二月十八日、去年病惱本復、被果立願云々、抑去年炎旱飢饉之間、諸國貧人上洛、乞食充滿、餓死者不知數、路頭ニ臥云々、仍自公方被仰、諸大名、五條河原ニ立假屋、引施行、受食酔死者又千万云々、今春又疫病興盛、万人死去云々、天龍寺相國寺引施行、貧人群集云々、明盛法師自十一日發作病、以外大事也、不便々々、醫師總賢出同知識寮山臥、被祭、無得之由申、放自療被出道散云々、

〔多聞院日記〕天文三年二月三日、予歲十七□ニ學ヲ遂ク、釜口靈山院處中、三月ノ初、疫病煩ヒ、既ニ死ントス、歸寶院ヨリ爲祈禱大般若トモ轉讀寄散、并常童子[illegible]所下給、前後不覺、入夜クツ、

ニ赤童子仰云、汝ニ學文望ナラバ、一切經ノ御應ニオワセヨトノ玉、サテ前後ニ男女鬼形ヲ、カリキ、赤童子杖ヲ以テ打攘セヲルニ、彼鬼ドモ手ヲ合、ワビユト申キ、シカレバヲノレラ、向後此モノニ障ヲ不可成トアリシニ、無是非旨請ヲ申上、悉夕歸ト、タヾチニ見シニ、予伯父ノ坊主教弘阿闍梨モ長病煩ヒ、氣ツノ病ノ夢ニ、マノアタリ愚ガ所ヨリ異形ノモノ多夕去ト見ルト、其後本復了、

〔鹽尻 四十二〕正德四年甲午三月靈變して日月光なかりしが、四五月の比、肥前長崎港疫疾大に流行し、比屋病床に臥し死に至る者七千餘に及びし、六月官に請て組金を賜はりし九州四國中國の方も又疫氣一時に行れ、是に死する者甚多しと聞ゆ、六七月、難波京師に及び、染疫の家に苦しみ愁ふ、泉南尤甚しく、堺の商家死亡數千人なりし、京にて組を定め人形を作り、夜に入數十人金鼓にて疫を送る事喧びすしく、前代未聞の変なりし、關東も同じ樣にて、我府下中元の前後病に臥し、醫師藥匙をさしをく時なかりし、され共五三日にてやがて本復し、死亡する者は傳へ侍らず、勢江濃三の諸州東都も同じ疫に染ざるはなし、古へにいふ三日疫病とはかゝる類にや、

〔閑窻瑣談 下〕天行病
何物語とやらいふ書正德享保年間の實錄にて其時にふるせし寫本なりに、正德六年の夏熱を煩ふ病人多く、一ヶ月の中に、江武の町々にて死する者八萬餘人に及び、棺をこしらゆる家にても間に合ず、酒の空樽を求めて亡骸を寺院へ葬るに、墓地に埋むる所なければ、宗體に拘らず火葬ならでは不納といふ、依之茶毘所に送り火葬せんとすれば、棺桶の數限りもなく積かさねて、十日二十日の中には火をかける事ならず、其到來の順々に茶毘すれば、日數をはるかに經といふ、こゝにおゐて貧しき者の亡骸は如何ともすべきやうなく、町所の長たる人々も世話行屆かで、公廳へ訴へまうせしかば、夫々の御慈悲を賜り、寺院に仰せつけられて、葬がたき亡骸をば、回向の後、菰に包みて舟に乘

せ、ことごとく品川沖へ流し、水葬になさせられしといふ、按ずるに、正德六年は六月二十二日に改元あつて享保元年となれり、彼明曆三年の火災に、十萬八千人の燒亡は、當時質言傳へて怖るれど、享保元年の天行病に、數萬人の一時に死亡せしを、後に傳へて言ものなきは、火難と違ひて、書留しもの、鮮き故なるべし、

〔[illegible]民 四十五〕一享保元年丙申夏の初メ以來、諸國疫癘流行して、我尾府は南熱田海邊ことに比屋死亡する者有を以て數ふ、五月の末瘟病に臥者一千九十餘人と聞へし也、醫に命じ藥を施さしめましますとかや、

〔時還讀我書 上〕享保十八年癸丑十二月、飢饉ノ後、時疫流行セシニヨリ、官ヨリ望月三英、丹羽正伯ニ命ゼラレ、諸國時疫方ヲ集メ、又凶年ノ時ハ飢地ノ民、雜食シテ毒ニアタルヲ以テ、解食毒方便具ナルヲ撰バレシメテ、町奉行所ニテ上木ナサレシメ、都鄙ニ頒行セシメタマフ、其方ハ醫說ノ大豆甘草ノ方附錄方ノ貫衆湯ノ方ナド十一首ナリ、其後天明四年甲辰、諸國ニ時疫行ハルヽトキ、天保八年丁酉荒歉ノ後ニモ、再其方ヲ摺タシメラレタリ、國家仁惠ノ數至レリトイハザルベケンヤ、

〔救瘟補遺〕俗ニ冷疫ト云ル名目ヲ設ルコト、安永ノ初、長夏流行病アリテ、死亡甚ニ相續ケリ、其症種々異同アリトイヘド、ソノ始多惡風肌熱、水漿嘔吐、不食ニ終リ、煩渴譫語吐衄血ナドニテ、日ヲフルマヽニ沈重ニ至リ、醫皆手ヲ束ネタリ、一老醫寢ビエヨリ起リタルトテ、香蘇散并五積散ヲ投ジテ、嘔吐不食煩渴譫語ナドヨク除キ、救療尤多ク、遂ニ疫ヲ治スル一良法トセリ、人參、白朮、茯苓、◯工■、厚朴、干薑、甘草、附子、平■モ亦此ニ傚テ得ル處多カリシ、陳皮半夏ヲ加テ七寶湯ト名テ施モアリキ、其後ハ絶ニテ久ク用ヒザリキ、按ズルニ、ネビエト云病名ハ、我邦ノ通言ニテ、寢中ニ冷ニ感ゼシハ、腸胃中ニ含ルナルベシ、是故ニ寒熱瘟疫水濕ヲ以テ、ネビエノ症トセリ、皮表ニ在邪ト異ニシテ、月日ヲ經テ裏ニ傳ルトイヘド、イツマデモ

冷ヲ伏シテ熱ニ化スルコトナシ、中寒傷風ト大ニ異ニテ、チピエト云ル一症アルナリ、何ノ國ニモアルベキヲ、コレニ相當ノ議論名目ヲ見ズ、捜索スベシ、總テチピエトイヘバ、世間皆輕症トノミ思ヒ居レリ、然ルヲ寒冷ヨリ危篤ニ及ヲ發明セルハ卓見ト云ベシ、今ヲ以テ思ニ、安永ノチピエノ症ノ流行セルハ、瘟疫ノ一症ナルベク、チピエトノミハ云ガタカルベシ、尋常ノチピエハ、年年ニアレドモ、危篤ニ及ブコトナキニテ觀レバ、決定流行疫ノ裏中ヲ犯シテ、腸胃腸間ニ潜伏シテ、惡心不食水瀉赤白痢等ノ症ヲナスナルベシ、

〔蜘蛛の絲卷〕疫病

安永二年夏、疫病流行死亡多かりしゆゑ、官より寺院へ御尋ねありしに、疫病十九萬人、蓋し中人以上は、病者稀にして下賤に多かりしと、同三年の冬、嚴寒にて川々氷厚く通船なりがたく、諸品高價、同四年凶作、同五年麻疹流行、三十以上の人、貴賤となく病まざるはなし、

〔救瘟補暦〕溼温治驗

寶暦ノ末年、東都大疫アリ、其證自汗壯熱煩渴、小便頻數淋痛短少、大便或ハ秘シ或ハ溏ス、甚者ハ頭眩嘔逆譫語脈浮緩ナリ、類案ニ羅子ノ說ヲ引テ云、風溼ト名ヅク、傷寒ニアラズトアリテ、五苓散ヲ主トセリ、此說ニ從ヒ五苓散ヲ煎湯トナシ與ヘテ、人ヲ救フコト多シ、

〔救瘟補暦〕溫疫轉變ノ記

寶暦ノ末年ヨリ今寛政ニ至ルマデ三四十年來、江戸ノ病人ヲ見ルニ、正傷寒ハ稀ニテ、四時共ニ多クハ溫疫ナリ、溫度ハ戾氣ナレバ、正傷寒ノ第一種ナルノ比ニハアラズ、種々品々ナリ、此故ニ只一症ヲ知得タリトテ、盡セリトハ言ガタシ、予寶暦丑寅ノ頃二十四五歲ノ時ヨリ、專ラ治療ニ苦ミシガ、明和中マデ十二三年ノ後、時行一變シ、寛政ノ始ニ至テ又一變セリ、スベテ時ノ流行ヲヨク知得ズバ、測ラザル變ニ逢テ狼狽スルコト多カルベシ、予庸工ナリト雖モ、犬馬ノ齡幸ニ八

八ノ年ヲ積タ、是マデノ流行ヲ考ルニ、輕重トハイヘド、今ノ流行今ニ始ルニモ非ズ、四十年來ヨリ有キタリタレド、其治ヲ得ザルユヘ、徒ニ過シタルナリ、一般流行トイヘド、種々ノ病症イフトタモ變リオレリ、其内ニヤマダ誤治ナリトモ思ハズレタ沈重ニ至ルハ、見シラザル一種ノ症ナルベシ、願クハ予ガ志ヲ繼デ溫疫ノ精髓、吾輩ノ知ザルヲ治シ得ルコトアラバ、コレニ續テ救世ノ術ヲ弘メタマヘカシ、

〔時還讀我書上〕時疫ノ流行ハ其理ヲ推知スベカラザルコトアリ、寬政七年ノ三月初旬、大君小金原ニ狩シ玉ヒタリ、四五日ノ後ヨリ感冒行レタリ、其患者ノ衣袂ニ必ズ猪鹿ナドノ獸毛アリ、少キハ七八根多キハ掌ニ滿ルニ至ル、故ニ時人名ケテ御猪狩風ト云レトゾ、實ハ何ノ故ナルコトヲ審ニセザルナリ、又關田次兼ニ享和酉元年ノ臘月ヨリ壬戌二年ノ正月ニ及ビ、疫邪流行ス、荷蘭人ヨリ傳ヘシトモ、去年漂流セシアンボンナドヨリ染シトモ云ヘリ、京師ハ二月廿日頃ヨリ三月廿日頃マデ行ハレ、闔戸ミナ病ム微疫ナリ、其病人袂ノ中ニ必ズ細長キ毛アリ、或ハ一條或ハ二三條ヅヽナリ、近江膳所ノ國々皆シカリ、怪キコトナリ、蠻人ヨリ傳ヘシ故ニ、カヽル毛モ生ゼシヤト云ヘリ、直フニコレト同類ナランカ、彼ノ所謂羊毛瘟ハ身體ヘ羊毛ノ如キモノヽ生ズルニテ自ラ別病ナリ、

〔關田次兼一〕事實のとし、文年臘月より壬戌二年の正月におよび、長崎に疫邪流行す、予が門に遊ぶ人かしこに事ありて、一周年が間滯留せるも、病たるにつきて、いひこされしは、阿蘭陀人より傳へしとも、又去年漂流せしアンボン、その外蠻人より生せしともいふ、往年暹羅人渡來りしより、風邪流行せし例なりときこゆとなん、此邪氣長崎より九州を經て、つひに上方におよび、畿國一遍になり、京は二月の廿日餘りより三月廿日ころにおよび、每家每人病ぬものなし、近江わたりもおなじ頃とぞ、風邪に似たれども一種の疫氣ならんと、呉又可が溫疫論にて思ひ合せ

ぬ、療治も凡徽疫をもて、祟したるは速に効をえたりと見ゆ、さてあやしきは邪を病ものは、必袂のうちに毛ありといふ、それは腦毛の落たるならんと嘲る人もありしかど、予が近江の親族の者たちもとのうちに、薄赤きいろの毛を一すぢ見つけて、家の内のものどもの病るを、人毎に袂を見せしむるに、皆おなじ、あるひは二すぢ三筋にも及ぶが有しといひき、播磨尾張の國々よりいひこせしも同じ、いとあやしきことなり、予が家に病みしは、はやくてさる噂も聞ざりしかば、心もつかずいかゞ有けん、醫人より傳へしゆゑに、かゝる毛も生せしにや、必袂の中より操出せしも奇なり、定理をもては論じがたし、

〔時還讀我書上〕文化丙子夏秋ノ際、都下大ニ疫アリ、其症初起速ニ少陽ヲ犯テ、熱勢熾盛、二日ナラズシテ精神昏憒スルニ至ル、大抵大小柴胡黄連解毒ノ類ノ擬スベキモノ多ク、正陽明ヲナス者ハ少カリキ、老醫ノ話ヲ聽ニ、先年ハ陰症譫擾スル證多カリシト、先數論ノ傷寒ヲ治セラレシヲ觀ニ、亦多ク參附ヲ用タマヒシナリ、蓋コノ歳ヨリ以後ノ疫ハ、大略此種ノ證ニシテ陰證ハ至テ稀ナリ、風氣變遷ノ然ラシムルモノナランカ、

〔時還讀我書下〕天保庚寅〇元年四月ヨリ六七月ニ至ルマデ時疫アリ、患ル者甚多シ、其症多ハ初ヨリ惡寒ナク熱甚ク、脈緊數ニシテ、大便下利、舌上胎ナク水ヲ欲シ、劇キハ赤斑ヲ發シ、或ハ發黄、或ハ衂血大便血、或ハ齒齦出血スルモノアリ、清熱涼血ノ效ヲ得ルコト多カリシ、サレドモ不治ノ症亦少カラズ、舌胎ト熱候トハ甚相適セザリキ、且其熱ノ解シテ爽快ニ及ブニハ甚日ヲ引タリ、輕症ニテモ一月餘、重キハ二三月ヲ逾ルニ至レリ、邪熱血脈ニ沈漬セシ故ナルベシ、前件ニモ云ヘル如ク、近年ハ攻補温涼トモニ純一ニナシガタキ症多キコトハ、コレ等ニテモ知ルベキナリ、

〔寛天見聞記〕事の序に、先一年の飢饉の事を說ん、天保七年八月、諸國大風雨にて、其年五穀不熟にして、天下大飢饉とぞきこえける、されば諸色の價次第に上りて、同八年には、御藏前の相場は、百

錢百五十文ほど、錢百文に白米四合より貳合五勺迄に至りしかば、下賤の者難儀いふばかりなし、火附盗賊多くして、同八年正月廿八日の夜は、江戸中に火災九ヶ所ほど有て、日々物さわがしく、其うへ大疫流行して人多く死す、飢にくるしみ道路にたほれ死す者、昨日はこゝ、今日はかしこ、餓人といふ數を知ず、

〔天保雜成錄續編下〕天保八丙年四月

大目付江

時疫流行候節、此藥を用て其煩をのがるべし、

一時疫には大つぶなる黑大豆をよくいりて、壹合甘草壹匁水に爾、せんじ出し、時々呑てよし、右普濟方ニ出ル、

一時疫には蘘荷の根と葉をつきくだき、汁をとり多呑てよし、右肘後備急方ニ出ル、

一時疫には牛房をつきくだき、汁をしぼり、茶碗半分宛二度飲て、其上桑の葉を一握ほど火にてよくあぶり、きいろになりたる時、茶碗に水四盃入二盃にせんじて、一度飲て汗をかきてよし、若し桑の葉なくば枝にてもよし、右孫眞人食忌ニ出ル、

一時疫に溫熱殊之外つよく、きちがいのごとくさわぎてくるしむには、芭蕉の根をつきくだき、汁をしぼりて飲てよし、右肘後備急方ニ出ル、

一切の食物毒にあたり、又いろ〳〵の草木、きのこ、魚鳥獸など喰煩に用ひて其死をのがるべし、

一一切の食物の毒にあたりくるしむには、いりたる鹽をなめ、又はぬるき湯にかきたて飲てよし、

但草木の葉を喰て毒にあたりたるには、いよ〳〵よし、右農政全書ニ出ル、

一一切の食物の毒に當りてくるしく、腹脹痛には、苦參を水にて能せんじ、飲食を吐出してよし、

右同斷、

一一切の食物にあたりくるしむに、大麥の粉をこふばしくいりて、さゆに而度々飲てよし、右本草綱目ニ出ル、

一一切の食物にあてられて、口鼻より血出てもだへくるしむには、ねぎをきざみて、壹合水にてよくせんじ、ひやしおきて幾度も飲べし、血出やむまで用てよし、右衛生易簡ニ出ル、

一一切の食物の毒にあたり煩に、大つぶなる黑大豆を水にてせんじ、幾度も用ひてよし、魚にあたりたるにはいよ〳〵よし、

一一切の食物毒にあたり煩に、赤小豆の黑焼を粉にして、はまぐりかひに一ッ程ヅヽ水にて用ゆべし、獸の毒にあたりたるにはいよ〳〵よし、右千金方ニ出ル、

一菌を喰あてられたるに、忍多の莖葉とも生にてかみ、汁をのみてよし、右夷堅志ニ出ル、

右之藥方、凶年之節、邊土之者、雜食の毒にあたり、又凶年之後、必疫病流行の事あり、其爲に簡便方を撰むべき旨依被仰付、諸書之内より致吟味出也、

享保十八辛丑年十二月　　望月三英

丹羽正伯

右は享保十八辛丑年、飢饉之後、時疫流行いたし候處、町奉行所江板行被仰付、御料所村々江も被下候寫、

右は當時諸國村々疫病流行いたし、又は輕きものども、雜食之毒に當り、相煩難儀いたし候趣相聞候、天明四辰年御藥法爲御救相觸候處、年久敷事故、村々に而致遺失候儀も可有之候ニ付、此度爲御救右之寫、猶又村々江領主地頭より可被相觸候、

右之通可被仰觸候

四月

〔稿本年譜 上〕嘉永五年七月以還、鎮地土州都鄙。疫疾流行ス、門人黑岩誠道父尚謙、余〔家伯〕ヲ延ク、療セシム、野々村三内妻及子、一瀬藤之進妻及息、乾守右衛門幷男、富永源次郎妻及女、山中常太郎、北村平之進、篠賀源助及息貴太郎、佐々内藏太及妻、奥村篤右衛門及兒松井源藏息、國澤善之丞妻、南玄仲後室、島溝九一郎、林鐵三郎等、皆危篤ノ域ニ至リ、升陽散火湯加附子、眞武合生脈散、茯苓四逆湯、既濟湯、烏梅圓、呉茱萸湯等ニテ救治ス、福永儀助男、谷晃毛妻、森岡彌右衛門、祐鮮院僕青吉ノ如キハ、元氣衰敗シ遂ニ救スル能ハズ、此事土州侯ニ聞ヘ、留守居廣瀬源之進ヲ以テ其邸ニ出入スルコトヲ許サル。

余前年ノ疫ニ多ク石膏ヲ使用シテ効ヲ奏ス、當年ノ疫大抵附子ニ非レバ救フ能ハズ、疫氣運ニ屬スル論用スベカラズ、蓋仲師ノ技法眞古不易ヲ覺ユ、

〔釋日本紀 七〕備後國風土記曰、疫隅國社、昔北海坐志武塔神、南海神之女子乎、與波比爾坐爾、日暮、彼所蘇民將來二人在伎、兄蘇民將來甚貧窮、弟將來富饒、屋倉一百在伎、爰塔神借宿處、惜而不借、兄蘇民將來借奉、卽以粟柄爲座、以粟飯等饗奉、爰畢出坐後爾、經年率八柱子還來天詔久、我將來之爲報答、曰汝子孫其家爾在哉止問給、蘇民將來答申久、己女子與斯婦侍止申、卽詔久、以茅輪令着於腰上、隨詔令着、卽夜爾蘇民與女人二人乎置天、皆悉許呂志保呂保志天伎、卽詔久、吾者速須佐雄能神也、後世爾疫氣在者、汝蘇民將來之子孫止云天、以茅輪着腰上、詔隨詔令着、卽家在人者將免止詔伎、

〔老牛餘喘 上〕疫神社

此御社、古き村にはみな立給へり、然れども今は大かたいづこも小さき祠にて、いつの頃より祭りしとも尋ねおもふ人なし、こはよるき御社なり、類聚國史に、寶龜二年令天下諸國祭疫神とみ

ゆ、此御社には素戔鳴尊を祭るといひ傳へたり、これ古き傳へなり、（然れども素戔鳴尊とのみこゝろうべからず、下にいへるなむかへ見てしるべし、）此尊岩戸の前よりやらはれて、降り給ひし時、宿を道のべの神に乞給へども、やどし奉る家なくて、雨風いたく吹降といへども、暫くもやすらふ事を得ずして辛苦艱難つゝ降り給へり、此時に備後國に巨旦といひて（巨旦長者と譌傳へたり）富る者あり、宿を乞給へども、かしまゐらせず、其弟なる蘇民は（蘇民將來と譌傳へたり）貧しかれど、いたはり奉りてやどしければ、後に巨旦が家に疫神入てあらび、そみが家には入ざりし事など、備後風土記にみゆ、（此風土記の事は、竄言なりと云人もあれど、しからず、此書全くは傳はらで、引たる書によりて、後の人の竄入もみゆれど、事は實にて、今に國人舊跡な傳へて、素戔鳴尊を祭れる御社も近く立給へれば、誣ふべからず、委しくは備後略記前書にしるせり、）しかれば此尊、根の國に降り給ふとある根の國は、山陽山陰兩道をいふと、新居氏（新居白石先生といふ人）のいへるがごとし、古は山をねともいへり、富士のね、甲斐がねなどいと多し、されば此尊、備後を通りて、出雲へ降著給へり、くはしき事は備後略記の品治郡の條にいへり、さて此尊は疫をはらひ退け給ふ故、疫神社に祭るといふは、あらめなる說なり、書にも直ちに疫神また行疫神など・あれば、疫をなす神をいふなり、こは素戔鳴尊のわかくおはせし時、あらび給ひし名殘の靈を疫神と申なり、（しからばかの蘇民が家にて、疫神を防ぎ拂ひ給ひしは、いかにおのれ尊の靈をはらひ給ふ事いぶかしと、いふ人あるべけれど、其時ははや正しき神にておはせば、同じ尊の荒靈と別神になり給へれば、あしき神を拂ひ退け給ひしなり、こゝは大名貴命の、おのれ命の幸魂奇魂と問答し給へりしを見て知べし、尊き神の御上には、しかあることおほきぞかし、）是を祭るは、御社に鎭まりまして、あらび給はざらむ事を祈りて、みあへ奉るなり、古學する人は、世間の曲事はみな、枉津日命のみしわざにて、疫神と申も此神なりといへども、かたよりなる說なり、古より素戔鳴尊を申といへるはあらめなる事もあれど中々なほき傳なりかし、かくいへば、しからば素戔鳴尊は、邪神なるかどいふ人も有べけれど、そはおだやかに考ざるなり、今の世間にも邪神にはあらで、をり〳〵にはあらびます事あるにあらずや、そは邪神の見入にて、正しき神のみしわざにあらずといはむか、そも邪神見、入て來ら

ばいづこにも正しき神おはすなればなど邪神をばはせ給はぬにや、されば神の御うへの事は、かたづめてはいはれぬものなり、たゞ常には畏みて幸を祈り、あらび給ふ時はかしこみてまつり給はむ事を祈るべきなり、これ世の中にもまかする事にて、すなはちなほき御國のならひなりと知るべし、

〔延喜式三臨時祭〕宮城四隅疫神祭（若應祭京城四隅准此）

五色薄絁各一丈六尺（已上各四所料）倭文一丈六尺、木綿四斤八兩、麻八斤、庸布八段、鍬十六口、牛皮熊皮鹿皮猪皮各四張、米酒各四斗、稻十六束、鰒堅魚各十六斤、腊二斗、海藻雜海菜各十六斤、鹽二斗、盆四口、坏八口、匏四柄、槲十六把、薦四枚、藁四圍、楉棚四脚、（高各四尺、長三尺五寸）約一枚、

畿内堺十處疫神祭（山城與近江堺一、山城與丹波堺二、山城與攝津堺三、山城與河内堺四、山城與大和堺五、山城與伊賀堺六、大和與伊賀堺七、大和與紀伊堺八、和泉與紀伊堺九、攝津與播磨堺十）

〔今昔物語二十〕讃岐國女行冥途其魂還付他身語第十八

今昔、讃岐ノ國山田郡ニ一人ノ女有ケリ、姓ハ布敷ノ氏、此女忽ニ身ニ重キ病ヲ受タリ、而レバ直ク味ヲ備ヘテ門ノ左右ニ祭テ、疫神ヲ賂テ此ヲ饗ス、

〔閑田耕筆四〕疫鬼

洛北一乘寺村金福寺の住僧松宗語られけるは、先年備後國三好鳳源寺にて愚極和尚を招き開せり、愚極は見網派開板の智識にて有けり、則隨度あり、松宗壯年の頃にて此會座に連り、衆僧と倶に禪堂に入、結跏趺坐し居たり、衆僧も晝夜の勤行に勞れ、睡臭にふら〳〵と眠りぬ、然るに松宗不圖頭をもたげ見れば、簾たる帷幕を押上て、堂内を見とし〳〵する者有、無礙成奴かなと見留れば、八十計りの老人顏色青ざめ至極痩衰へ、白髮ふり亂し白髭たれたるは、世にいふ貧乏神ともいふべし、淺間敷樣にて誰にもの凄く覺ゆる程也、此者そろ〳〵と結界を越て堂内に入

らんとする氣色なれば、松宗物をもいはず、づか〳〵と走行て押出すに、彼者は是非に入らんとするを、力に任せて押出せば、拍子に連て皷と轉たる音して、其後は見へずなりぬ、靜に座に歸り又元の如く胡座せり、最怪しく思ひながら、人にも語らざりけるに、其夜村の者來りて咄す樣は、近在近郷に疫病流行し、村每に過半病死す、悉きは此寺に大法會のある故にや、此村に一人も病者なしと賞嘆せり、爰に於て松宗、扨も今日かやう〳〵の事有し、村里にも見ぬ怪しき者來れり、是や疫神といへるものかといふに、一座左にこそあらんと、いよ〳〵修行怠慢なかりしかば、衆僧三百餘人より下部に至る迄、村を限りさらに病患なかりけると也、○中略 是等皆疫鬼也、諸書にいふ所、我國中華倶に同說也、彼[illegible][illegible]乙の三字の靈符に恐れて、疫邪の鬼神、川を渡り得ざりしも同じきか、或は又洞家の祖師道元禪師、中華に傳法の頃、山中にして癘鬼に逢れし時一偈あり、左の如し、

無位眞人現面門　智惠愚痴通般若　靈光分明輝大千　神鬼何處著手脚

と示されたり、妙驗さらに疑ふべからず、今諸國此四句を門戶に貼し、或は右の三字の靈符を書して、疫癘を避るとするも故あるかな、

〔燕石雜志 三上〕鬼神餘論

世に疫鬼瘟鬼といふものあり、疫鬼は俗にいふ疫病神、瘟鬼は俗にいふ疱瘡神なり、和名鈔に、瘧鬼、邪鬼、窮鬼等を出せり、窮鬼の人の家にあるを耗といふ、世俗貧乏神といふは是なり、和名鈔に云、瘧鬼、蔡邕獨斷云、昔顓頊有三子亡去而爲疫鬼、其一者居江水、是爲瘧鬼、和名衣也美乃加美 或於邪鬼、日本紀云、邪鬼和名安之岐毛乃 窮鬼、遊仙窟云、窮鬼師說、伊岐須太萬 といへり、みなこれ大陽の毒にて、一時の氣運に乘じて流行す、顓頊の子亡去て疫鬼となるといふものは誕妄のみ、疫癘は冬より發りて春夏の間最も盛なり、その寒に傷らるゝもの、春夏大陽の毒に觸て誘引はる故に、和漢除夜に儺して

もて疫鬼を驅るといふ、我俗これを疫おとしといふ、後漢に災厄の厄とするものは誤れり、唐山には立春の日、土牛を造りて農事をすゝむ、天朝亦これに倣ふて、大寒の日夜半に、陰陽寮土牛童子の像を造りて門戸に立、延喜式に、土偶人十二枚(高各二尺)土牛十二頭と見えたり、その數一年十二ケ月を表する歟、土牛は青黄赤白黒なり、春夏秋冬東西南北の色に隨ひてこれを立るとなり、亦水鏡文武紀に、慶雲二年とまうしゝに、世の中こゝちおこりてわづらふ人おほかりしかば、追儺といふ事ははじまりしなりと見え、亦慶雲二年、天下疫癘盛にして、人民多く失しかば、土牛をつくり追儺といふ事始れりと、公事根元にも記されたり、吉田の疫塚これその餘波歟、節分の夜、吉田神祇官において、壇上に塚を築きこれを疫塚といへり、その塚、正月十九日に至りて解去るを溝祓といふ、亦この日、山城國八幡の社頭に疫神を祭る、亦この月十六日に、伊勢國度會郡山田の鄕に獅子頭の神事あり、亦三月十日、高尾の法華會これを安良比花といふ、やすらひ花と鼓うつなりと狂言の謠るは是なり、(今宮の祭、紫野の社にあり、)みな是疫神を驅の義にして、なごしの祓に至て止、なごしは夏越なり、七月に至て陽氣衰ふ故に、秋はこれを祓はず、王充が、鬼は大陽の毒なりといへりしはこの事ならん、かゝれば疫神も又形なし、但一時の氣運に隨て流行するとき、その形在がごとくも、陽實ふるに至りて、消然として迹なし、譬ば酒食の聚集するとき、忽然として蠅の聚るに似たり、人その酒飯をすて去れば、蠅も又隨て迹なきが如し、よりて小蠅聲邪神といへり、またかゝるに病劇しき時、人往々疫鬼を見ることありといふ、その說ところの形狀一定せず、みなこれ陽毒のなす所なり、然いかにとなれば、これを山氣の蒸て雲霧を起すに譬ふべし、山中の人その雲の起るを見れば朦朧たり、山下の人これを見れば別に奇峯を添るが如し、瘟疫の人に觸る熱邪内に蒸して、その毒外に發す、よりて患者その疫鬼を見る、これ山下にして雲氣を瞻望し、是を奇峯とするが如し、人その害に觸るゝときは亦隨て患む、故に唐王皇天部士を祀りて、陰

陽その時にたがはざらんことを請ひ、世俗春夏に祓禊してもて疫鬼を驅る、驅といへども盡ることなし、凡天下に疫癘の流行せし、漢にいたりてます〳〵盛なり、こゝをもて天仲景氏を生じて、永く疫鬼を驅しむ、

〔梅園日記二〕送疫鬼

日次紀事云、凡疫癘、春初多流行、○中略而唐土造紙船之類乎、按するに、紙船の事は、閩書風俗志云、正月上元十三四五日、各里造紙船、送瘟鬼、○中略東海談云、享保十八年七月上旬より、東都大に疫癘はやり、上下貴賤、みな此氣に中りて病す、十三日十四日の比は、大路の往來もたえ〴〵なり、是は醫書にいはゆる天行時疫といふ者歟、邑里ともに、藁にて疫神の形を造り、かね太鼓をならして、是を南海へ流しぬなどあり、これ今もなほするわざなり、

〔淺草小言一〕民間ニ疫病流行スルコトアレバ、疫病神ヲ送ルト稱シ、又疫病ヲ引ト號シテ、山伏ヲ先ニ立テ螺吹鳴シ物サハガシク、衆人コレニ從ヒ物ヲ驅ルガ如ク爲ルコトアリ、コレ古者方相氏爲儺ト云モノニ異ナラズ、サレバ其所爲ニ任ジテ可ナリ、又民間ニ富士講、大師講、又ハ金毘羅、或ハ稲荷ノ流行神ナドイヒテ、人々信仰スルコトナレド、是ハ少皞氏之衰、九黎亂德、民神雜糅、家爲巫史、民瀆齊盟、禍災荐臻、ト云國語モノニテ、甚不可ナリ、予嘗テ良父タリシトキ、富士講等ヲ禁ジタリシガ、今如何ナリシヤ知ラズ、

〔宮川舍漫筆三〕疫神

嘉永元申年の夏より秋に至り、疫病大に流行なりし處、爰に不思議の一話あり、淺草邊の老女名は失念或時物貰體の女と道連になりし處、彼女いふ、私事三四日何も給申さず、甚だ飢におよび申候、何共難儀候得ども一飯御振舞の程願といふ、老女答、夫は氣の毒なれども、折惡敷持合せ無之、去かし蕎麥位の貯はあるべし、そばおふるまい申べしとて、蕎麥二椀たべさせける、彼女大きによ

ろこび盃を述べ別れしが、猶に呼びかけ、如何がな御禮致すべしと存じ候へ共、差當り何も無之、右御禮には我等身分御帶申べし、我等儀者疫神に候、若疫病煩候はゞ早速餅を食し給へ、速に本復いたすべしと教へ別れけるよし、右は予が友松井子の噺なり、この噺と同譯の事あり、予實父若かりし時、石原町に播磨屋惣七とて、津輕侯の人足の口入なりしが、兩國より歸りがけ、一人の男寄り聲をかけ、いづれの方へ參られ候哉と問、惣七答て、我等は石原の方へ歸るものなりといへば、左候はゞ何卒私儀御同道下されかし、私儀は犬を嫌ひ候故、御召連下されといふ、それなれば我と一所に來れよと同道いたし、石原町入川の處にて右の男、深々ありがたくぞんじ候、私儀は此播磨屋敷へ參り候〈[illegible]〉、然中上候、私儀は疫神に候、御禮には疫病神入申さゞる致方を可申上候、月々三日に小豆の粥を焚候宅江は、私仲間一統過入申さず候間、是を御禮に申上候といひて、形は消失けるぞよしさなれ、其日より向後屋敷中無病と相成候よし、予が實父江播磨屋の直ばなしなり、右故予が方にても今に三日には小豆粥致し候、此儀に付ては我等方にても疫病神をのがれし奇談あり、○下略

(寶暦一得上)今やく病よけの守リトタ符ノ字ヲ門戸ニ貼ハ、廣韻曰、僵立、訟耳、注鄙兼耳也、又通俗ニ、同刀見名聻、一名法耳、五音集韻聻子救切、音蹴人死作鬼、鬼死作聻、丞書此貼門、則鬼遠千里、又西國代官ナドニ書シ。

(雲桂偶記二)畏疫

論語曰、郷人儺、朝服而立於阼階、孔安國曰、儺驅逐疫鬼、郊特牲曰、郷人禓、孔子朝服立于阼、存室神也、鄭玄曰、禓強鬼也、謂時儺索室毆疫、逐強鬼也、禓或爲獻、或爲儺、音曰、禓音傷、或作儺、周時既有毆疫之事、屠蘇辛盤之類、皆與於毆疫者、於門戸上揷桃梗之物、西土俗亦同、除日揷鰯魚頭尾於門戸、名曰、疫〈[illegible]〉紀貫之土佐日記載門戸揷鰯頭柊、蓋昔不必用鰯魚、隨寄例矣

新話曰、予聞閩中人不識蟛蜞、人有得一乾蟛蜞者、或病則掛之門、其病遂愈、沈存中曰、不但人不識、鬼亦不識也、本邦之鬼、亦不識鰐魚也、夢溪筆談曰、閩中無蟹、元豐中予在陝西、聞秦州人家、收得一乾蟹、土人怖其形狀、以爲怪物、每人家有病瘧者、則借去掛門戶上、往往遂差、不但人不識、鬼亦不識也、

〔半日閑話 三〕御尋に付清次書上之寫

本八丁堀貳丁目半兵衞店清次申上候、私義奇怪之義申觸、疫。病。除。之。札。差出候趣相聞江、被召出御尋御座候、私義ハ釣船渡世仕、相雇候者無之節は自分釣に罷出申候、當五月廿四日にも相雇候者無之候付、朝六ツ時分ゟ私壹人にて品川沖下夕之瀨と申所江船乘候に、きす百程も釣候ニ付、同日夕入ツ時分、兼々肴賣遣候南小田原丁肴屋鐵藏方へ遣可申と存、築地本鄕丁之前海波除內江船を留置、船掃除を致罷在候所、何方ゟ參候哉、見事之きすに候間、與候樣申もの有之候故、振向見候へば、面體は不見留、丈六尺餘、髮髭逆立栗梅のとろとんの樣にて、唐人の樣成衣類を著し、船の中程に、立罷在候に付、無症之樣に相成きす一ツ差出候處、請取給候上、怪敷體に而、私名前相尋候に付、清次と申候旨相答へ候得ば、自分は疫神に有之、我正直成もの故、家內幷親類に而釣舟清次と私名前書記置候ハヾ、其家江は參間敷旨申候に付、辱旨申候と覺、右之者何方江か參、正氣付、怪敷候に付、品々南本鄕丁河岸江船を漕付、相殘る肴は右鐵藏方江賣遣、船乘戾り、奇怪之義に付、右之趣妻子幷同店之者江相咄候處、同店藤八妻つなと申者、疫病相煩候に付、私名前認吳候樣申聞候得共、無餘儀に而其儀は難致旨申候得ば、同店之者釣舟清次と認め遣候に付、其通認遣候所、つなも快氣仕候故、右之義を同店幷近所之者及承、認吳候樣相賴候に付、無據認遣候得共、聊も禮物等請取候義は無御座候、尤私日々渡世に罷出候に付、所々ゟ認貰に參候而は、渡世の邪魔に相成候事故、當時は賴來候而も相斷認遣し不申候、御尋に付奉申上候、

寛政二年戌六月廿二日　本八丁堀貳丁目半兵衞店

河内守橋

御番所

傳文

疫神といひしやつ、ほどすぎての風説に、大童人にて、水中を游ぐ事魚のごとく、家根など飛こと鳥のごとく、同三年疫病猖獗段々のよし云傳ふ、

〔[illegible]民 四十五〕一疫癘流行の時は、其家にて初めて疫に臥し人の衣服を甑の上に置、蒸過すれば一家病まぬかる、

〔[illegible]民 四十六〕近世るうだといふ事を、疫病流行の時、身に着疫気を避とて、家に懸侍る、凡藍草物の臭気あるをるうだと云、此草香あしき故、阿蘭陀人るうだといふ、我國久しき呪にて門戸に悪病の類を懸け侍るも同じ意にや、凡蒜を以て疫気を禳ふ事、古事記に出、日本武尊足柄山の山神を厭し給ひし故事より起りしと云々、

○按ズルニ、疫神ノ事ハ、神祇部疫神祭條ニ在リ、参看スベシ、

〔倭名類聚抄 二〕瘧病 説文云、瘧(音虐、和名衣夜美、一云和良波夜美)、寒熱並作、二日一發之病也、

〔箋注倭名類聚抄 二〕原書字誤、按訓衣夜三、又左右兵衛府和良波夜美、見源氏物語若紫卷、其實方訓、於古利也美、又有和良波夜美、今俗呼於古利、伊勢氏貞丈曰、衣夜美一訓和良波夜美、疫亦訓衣夜美、一訓度岐乃介、蓋疫其病類、有寒熱、並是天行時令之病、一國皆患之、故疫訓為役病、若拆言之、疫訓衣夜美、時気、時気者為時気所感、故以為名、瘧病之名未詳、按世説注、俗傳行瘧鬼小、多不病巨人、夢溪筆談、載呉道子畫鍾馗、有唐人題記、其略曰、明皇病、一夕夢二鬼、一大一小、大者捉其小者喫之、夢覺病愈、太平御覽引續異傳、嘉興令呉季恭嘗武昌廟、辭還、乞斷瘧鬼、夢一人縛取一小

兒去、夢覺瘧即斷、又弘父患瘧、後至田舍瘧發、有數小兒持公首脚、公捉得一兒、化成黃鷁、縛以還家、比曉失鷁、瘧遂斷、千金方載治瘧符、其文中曰、瘧小兒、又曰、今有一瘧鬼小兒、則知瘧鬼爲小兒、故訓爲童病也、○中略 原書疒部云、瘧熱寒休作、按此並當作休、休字俗作体、其字與並相似、遂訛也、說文又有痎字、云、二日一發瘧也、此似二日上脫痎字、病亦當作瘧、又按太平御覽連引說文瘧痎、蓋修文殿御覽、彙舉瘧痎二字、源君李昉等、從彼引之、源君所見本脫瘧字、或後人傳寫誤脫也、按病源候論彙載瘧病候痎瘧候、並有日作、有間日作、釋名、瘧酷虐也、凡疾或寒或熱耳、而此疾先寒後熱、兩疾似酷虐者也、

〔伊呂波字類抄 和病者〕瘧病ワラハヤミ、亦エヤミ、 瘧ワラハヤミ 痁同、亦名二時發病、

〔倭名類聚抄 二鬼魅〕瘧鬼 蔡邕獨斷云、昔顓頊有三子、亡去而爲疫鬼、其一者居江水、是爲瘧鬼、和名衣也美乃加美、或於前

〔箋注倭名類聚抄 一神靈〕獨斷二卷、漢蔡邕撰、原書作疫神、帝顓頊有三子、生而亡去爲鬼、其一者居江水、是爲瘧鬼、其一者居若水、是爲魍魎、其一者居人宮室樞隅處、善驚小兒、按東京賦李善注、引漢舊儀曰、昔顓頊氏之有三子、亡而爲疫鬼、一居江水爲瘧鬼、其文與此所引獨斷略同、尾張本、下總本、加美作於遁、與類聚名義抄合、伊呂波字類抄作加美、與舊及山田本、昌平本、曲直瀨本合、廣本作和名衣也美乃加美或於遁、按、於遁鬼魅之類、加美、即神靈、瘧鬼謂使人病瘧之神、則可訓衣也美乃加美、訓於遁非是、蓋可謂鬼魅爲神、不得謂神爲鬼魅也、疫神見日本紀略、

〔伊呂波字類抄 江神祇〕瘧鬼エヤミノカミ、顓頊有三子、已去而爲疫鬼、其一者居江水、是爲瘧鬼、

〔倭訓栞 中編和 二十九〕わらはやみ　瘧疾也といへり、源氏にみゆ、齊宣二豎の事に本づける訓なるべしといへり、

〔理齋隨筆 五〕瘧をおこりと云は、時におこり、時に止むの俗語也、源氏若紫の巻には、わらはやみと

云、もろこしにても、瘧鬼病と云、いやしき病なれば、大人は煩はぬ由、博物志に見えたり、又瘧を落す術を截瘧といへるは、邪氣と正氣と出會ふ處を立切ると云意なるべし、

〔醫心方十四〕治瘧病方第十三

病源論云、夏日傷暑、秋必病瘧、瘧其人形瘦皮栗、以月一日發、當以十五日愈、設不愈、月盡解、(今案、[illegible])也、

〔一本堂行餘醫言二十二〕瘧字解

瘧古昔以爲虐疾、故字从疒虐、此由古人不達瘧之理、故云、爾、按釋名云、瘧酷虐也、凡疾或寒或熱耳、而此疾先寒後熱、兩疾似酷者也、俱發作故曰、以夏傷於暑而皮膚瘧也、瘧當與時定之數迭行、(醫學入門)李梴曰、瘧有凌虐之狀、病勢如凌虐人之狀、故名瘧、(醫學入門)徐文伯曰、瘧者殘虐之意也、從病從虐、故名曰瘧、(玉機微義)以上皆非也、大凡疾之寒熱、俱有者不可舉數、何獨止瘧哉、以此爲名、瘧則諸病皆可以稱瘧也耶、如張云、以傷暑爲瘧、其說亦偏、說云與時定之數迭行、尤爲無謂也、此邦近乎百五十年、稱自古所未嘗有之至治瘧無驗則、專藉符咒、由是瘧疾之行、處處多有病、内臟然實在與體數迭行也、張之妄說、不亦甚乎、如素之凌虐、非之雜虐俱狀文字上爲義、亦由不可知瘧之全體也、又素問作痎瘧、痎即瘧也、或一字、或二字、俱無異、故素問云、夏傷於暑、秋必病瘧、(生氣通天論)又云、夏傷於暑、秋必痎瘧、(陰陽應象大論)又云、夏傷於暑、秋爲痎瘧、(生氣通天論)可見或單言瘧、或連稱痎瘧、其實一瘧、無別如此也、後世何爲紛紛之說耶、蓋自說文云、痎二日一發瘧、而韻會亦承其說、夫二日一發瘧、即間日瘧也、間日瘧乃瘧疾之正面也、或日日發、或間二三日、發乃瘧之變態也、故謂二日一發瘧者、非說文誤也、二日一發、即間日瘧、乃瘧之正面、則此其痎即瘧、可以見也、瘧可惜說文不直曰痎即瘧也、爲可惜耳、痎、又作瘖、音同義同、原非有別、甲乙經、多作痎瘧、即痎瘧瘧也、而本草綱目云、老瘧亦作痎瘧、名瘧母、([illegible])、正字通、康熙字典、俱引此說者、以痎爲瘧也、(略)○(中略)說文云、有熱瘧、及正字通、康熙字典引方書有痎瘧、有一日二日至十日瘧、二日一發瘧曰痎、多日之瘧曰痁、三

書俱非也、特正字通引鄒敬肥書、瘧疾、瘧亦名痁、合瘧瘧痁爲一、此說極是、而正字通以此爲非者、反非也、

〔病名彙解二〕間日瘧(カンニチギヤク)俗ニ越瘧ヲコリノコトカ、病源ニ云、邪氣内五藏ニセマルトキハ、道トヲク氣フカシ、故ニ其行コト遲ク衝氣トトモニ出ルコトアタハズ、是ヲ以テ日ヘダテ、作ルト云リ、

〔小右記〕寛弘九年(○長和元年)六月八日甲辰、相府御心閒、遣江州、其返事云、昨今不發給、今晩度給御堂、緣瘧病之疑者、今日可有行啓、而來有其告、但今日當重愼日、仍不可候御共之由、以資平令申皇太后宮女房、

〔源氏物語五若紫〕わらはやみにわづらひ給て、よろづにまじなひかぢなどせさせ給へど、しるしなくて、あまたゝびおこり給ひければ、ある人きた山になん、なにがしでらといふ所に、かしこきおこなひびと侍る、こぞの夏もよにおこりて、人々まじなひ、わづらひしを、やがてとゞむるたぐひあまた侍き、

〔源氏物語十[illegible]〕わらはやみにひさしうなやみ給て、まじなひなども心やすくせんとてなりけり、修法などはじめて、おこたり給ぬれば、たれも〳〵うれしうおぼすに、れいのめづらしきひまなるをと、聞えかはし給ひて、わりなきさまにて、よな〳〵たいめし給ふ、

〔今昔物語十二〕神名睿實持經者語第卅五

或ル時ニハ心ヲ至シテ經ヲ誦スルニ、一部ヲ誦畢ル時ニ、努ニ白象來テ聖人ノ前ニ見ユ、經ヲ讀ム音甚ダ貴シ、聞ク人皆涙ヲ流ス、如此ク年來行ヒテ後ニハ、神明ニ移リ住ヌ、而ル間閑院ノ太政大臣ト申ス人御ケリ、名ヲバ公季ト申ス、九條殿(○師輔)ノ十二郎ノ御子也、母ハ延喜ノ天皇ノ御子ニ御ス、其ノ人其ノ時ニ若クシテ三位ノ中將ト聞エケルニ、其比瘧病ト云フ事ヲ重ク惱ミ給ヒ

ケレバ、所々ノ靈驗所ニ籠テ、止事无キ僧共ヲ以テ加持スト云ヘドモ、露其ノ驗无シ、然レバ此ノ睿實止事无キ法花ノ持者也ト聞エ有テ、其人ニ令祈ムト思テ、神明ニ行キ給フニ、例ヨリモ疾ク賀耶河ノ程ニテ其ノ氣付ヌ、神明ハ近ク成ニタレバ、此ヨリ可返キニ非ズトテ神明ニ御シ付ヌ、房ノ檐マデ車ヲ曳寄テ、先ヅ其ノ由ヲ云ヒ入サス、持經者ノ云ヒ出ス樣、極テ風ノ重ク候ヘバ、近來蒜ヲ食テナムト、而ルニ只聖人ヲ禮ミ奉ラム、只今ハ可返キ樣无ト有レバ、然ラバ入ラセ給ヘトテ、蔀ノ本ノ立タルヲ取去テ、新キ上筵ヲ敷テ可入給キ由ヲ申ス、三位ノ中將殿人ニ懸テ入テ臥給ヌ、持經者ハ水ヲ浴テ暫許有テゾ出來タルヲ見レバ、長高クシテ瘦セ枯レタリ、現ニ貴氣ナル事无限シ、持經者寄來テ云ク、風病ノ重ク候ヘバ、醫師ノ申スニ隨テ蒜ヲ食テ候ヘドモ、態ト渡ラセ給ヘレバ、何デカハトテ參候也、亦法花經ハ淨不淨ヲ可嫌給キニモ非ネバ、誦シ奉ラムニ何事候ハムト云テ、念珠ヲ押攤テ寄ル程ニ、糸憑モシク貴シ、三位ノ中將殿ノ臥給ヘル頭ニ、聖人ノ手ヲ人ニ給、膝ニ枕ヲセサセテ、壽量品ヲ打出シテ讀ム音、世ニハ然バカリ貴キ人モ有ケリト思テ、枕ヲ高クシテ聞クニ、貴ク哀ナル事无限シ、持經者目ヨリ淚ヲ落シテ泣々ク誦スルニ、其ノ淚病者ノ溫タル胸ニ氷ヤカニテ懸ルガ、其レヨリ氷エ弘ゴリテ打チ振ヒ廣々爲ル程ニ、壽量品三返許押シ返シ誦スルニ醒メ給ヌ、心地モ吉ク直リ給ヒヌレバ、返々ス禮テ、後ノ世マデノ契ヲ成シテ返給ヒヌ、其後發ル事无シ、

〔本朝世紀〕康治二年七月五日庚申、御本法勝寺、如昨日、先是宇治入道相國〇藤原忠實煩瘧病、被請天台座主僧正行玄、而自身不參、

久安七年〇仁平元年閏四月十七日丁亥、雨脚滂沱、今日來左大臣〇藤原賴長被煩瘧病、今日適得平愈、法眼靜經施驗德云々、

〔いざよひの日記〕やよひの末つかた、わかく〴〵しきわ。ら。は。や。み。にや、日ませにおこること二たび

になりぬ、あやしうおぼれば、二たび心ちまながら、三たびになるべきあかつきよりおきゐて、佛のおまへにて、こゝろを一にしてはくまきやうをよみつ、そのしるしにや、なごりもなくおちたる、

〔看聞日記〕應永廿三年九月廿日、予風氣又瘧、大略瘧病歟、以外令病惱、仰大教院大納言律師隆經〈隆經〉明日可傳法蓮胤云々、爲後記可有御助成之由申之間、純林一顆被送遣、〈十重〉之、長中籽豐爲堂、童子醫向云々、月見岡松茸新御所椎野以下取之、予依違例不參、珍膳喝食〈日野一品子息〉、禪門被相伴、寺長老弟子也、　廿四日、有地藏講、寄事於瘧、如例先齋食、次講讀式、地藏名號、侍臣唱之、瘧人椎野、齋藏主、女中以下人々也、瘧病又發、棒々雖落、無効驗、令計會、　廿四年九月五日、瘧病發日也、退藏僧有秘術之由申、令落之、有時汲井水、令〈カ〉香御符、以桃枝拂身、其効驗歟、今日落畢、

永享四年五月十一日、城受座頭參、平家語、此四五年不參、若宮瘧病未落、入夜猶發、計會也、

〔叢桂亭醫事小言　三〕瘧

府下八九年迄年々瘧多ク、寛政三四年、寒暑ノ分モナク、四季共ニ多ク、頭白以上赤子ニモ瘧アリ、赤子ハ思ノ外ニ困セズ、小兒モ總ジテ輕ク、中年以上ノ人ノウイ瘧ニハ或ハ絶穀食、衰弊シテ起居外候トモニ危篤ニナル人多ク見ユレドモ、必死ニ不至、病因考ニ、瘧病同因ト論ジテ有ア、トタト按ズルニ、病ハ裏ニ入ル故ニ死ニ至リ、瘧ハ表ニ病ム故死セズト見ユ、

〔松屋筆記　六十三〕瘧をおとす方

續博物志二七丁に、蛇蛻塞兩耳治瘧疾とあり。

〔醫心方　十八〕治鬼瘧方第十四

范汪方治鬼瘧、

丹書頭言、服九天書背言、抱九地書足言、履九江書背言、兩有高山、上有大樹、下有不流之水、中有神

虫三頭九尾、不食五穀、但食鬼、朝食三千、暮食三百、急々如律令、書符言上高山、望海水、天門亭長捕鬼、得便斬、勿問罪、急々如律令、

〔覆載萬安方 十〕鬼疰 (諸鬼中、此一種、偏可用呪術療歟、)

論曰、鬼疰者外邪之所乘也、人稟氣內虛、神守不固、則鬼邪投間而入、故恍惚、喜怒寒熱更作、若有所持而屢發屢止也、治法宜攘去之、而兼以祛邪安神之劑、

〔古事談 三僧行〕太政大臣信為中納言時、久煩鬼疰、已及數月、親王讀孔雀經、讀誦之中不敢發動、長以平愈、

〔古事談 三僧行〕僧正延昭童子久煩鬼疰、延昭中請施食與之、童子自縛言、我是神狐也、被責護法、不知爲方、自今以後永去云々、〇中略

〔增補下學集 上二〕風氣

〔病名彙解 二〕感冒

俗ニ云暖氣ノコト也、外邪ノ淺キモノ也、ソノ深キモノヲ傷風ト名ヅケ、其イヨ〳〵深シテ時行一般ナルモノヲ瘟疫ト名ヅク、

〔醫心方 三〕風病證候第一 〇中略

病源論云、中風者、風氣中於人也、風是四時之氣、分布八方、主長養万物、從其鄉來者、而人少死病、不從其鄉來者人多死病、其爲病也、藏於皮膚之間、內不得通、外不得泄、其入經脈、行於五臟者、各隨臟府而生病焉、

〔雜病記聞 一〕中風感冒

一古書ニ中風ト云ハ、風ヒキノコトニテ、後世ノ醫書ニハ、是ヲ感冒ト云、後世ノ醫書ニ中風ト云ハ、偏枯半身不遂ノ病ニテ、今俗ニモ是ヲ中風ト云、又ハ中氣トモ云、今論ズル處ハ、傷寒論ニ出ル

中風方書ナドニ出ル感冒ニテ、俗ニ云フ風ヒキ也、是傷寒ノ輕キニテ、最初ニ惡寒、發熱、頭痛、鼻塞出ルナド、人々知ル處ノ症ナリ、其理ハ皆傷寒ト同理ナリ、

〔内科秘錄　三〕天行中風

中風ハ外感ノ一證ニシテ、流行スルコト傷寒ト同ジ、故ニ張仲景傷寒中風ヲ併論セリ、又半身不遂ノ證ヲモ中風ト謂テ、二病ヲ一名ニテ、一書ノ中ニ擧タルハ可疑ニ似タレドモ、愚按ズルニ、後漢ノ時、風邪ノコトヲ中風ト謂ヒ、半身不遂ノ證ヲモ亦中風ト謂タルモノト見ヘテ、東觀漢記ニ曰、光武避正殿讀讖、坐廡下、淺露中風苦欬、是卽チ今ノ風邪ナリ、前漢書自敍傳曰、班伯遂面病中風、既至、以侍中光祿大夫養病、賞賜甚厚、數年未起、是卽チ半身不遂ノ中風ナリ、仲景世ニ通稱スル所ノ病名ヲ擧テ、別ニ新名ヲ設ケザルナルベシ、然レドモ二病一名ニテハ初學ノ者ハ惑ヒ易キユエ、吾門私カニ風邪ノ中風ヘハ、天行ノ二字ヲ冠シテ、半身不遂ノ中風ニ分ツ、此病ノ流行ハ、必ラズ關西ニ起テ關東ニ至ル、近世流行シタル阿七風、琉球風、榎法風、薩摩風ノ類、卽チ是ナリ、

〔玉勝間　八〕はなたり病

台記に日來患鼻垂疾、微身温、また依鼻垂不念珠、但今日無温氣也、また鼻垂後始念珠、[illegible]など見えたり、風を引きたるをいふと聞ゆ、

〔台記〕久安二年七月一日、早旦參宇治路間人告、自一昨日御風氣坐給者、卽急參、被仰云、今朝温氣散、及晴又温氣坐給、　三日、令平愈給、　四日、欲歸洛、今晚又有温氣、由被仰、因之留、申刻、一條殿此兩三日温氣坐給云々、　六日、依令平愈給歸洛、使諸一條殿御心地猶不快、　六年正月十四日壬辰、今年餘寒難耐、風病頻侵、雨息所參上之間、不能退私、身侍禁中闕、忘王事可謂不忠、是以相扶風病、然參八賓、

〔玉葉〕治承四年二月五日丁亥、基輔自内裏退出云、主上〈○高倉〉聊御風氣御云々、　十五日丁酉、晚頭參

內○中略 今上御所（但不見書）渡女房、御不豫事猶以不快、然而明日行幸、必可然之由叡慮一決了、萬人可延引之由雖計奏、更以無御承引云々、及亥剋退出了、　廿一日癸卯、此日有讓位事、

〔閑窻自語〕靈元院疫癘和歌事

享保八年病はやりて、人民多くうせぬ、靈元院の御うたあり、

風ふかば本來空のそらにふけ人にあたりてなんの疫癘

此御製を都鄙きゝつたへて、かきおくるし、まもりとせしに、やめるものははやく治し、やまざるものは大かたにのがれけりとぞ

〔一話一言十三〕風病流行

大久保酉山翁考、風病流行之事

享保十八年癸丑六月七月（七月十二日、風邪幷快癒り給別減少にし可相勤旨被仰渡候）

十五年目

延享四年丁卯九月十月（九月廿九日右同斷被仰渡候）

廿六年目

明和六年己丑十月（十月四日右同斷被仰渡候）

廿七年目

寬政七年乙卯三月四月（三月廿八日右同斷被仰渡候）

八年目

享保二年壬戌春

〔一話一言四十〕享保十八丑年六月十七日廻狀

一丑七月十日前後より、江戸町中、其後國々在々迄風邪はやり、同十八十九日比、風神送り、夥敷に

付、同廿日御觸有之、

〔武江年表　五〕延享四年十月上旬より、諸國風邪流行、

〔蜘蛛の絲卷追加〕風邪流行、

不圖思ひ出づる儘、むかしをよのびて記すは、寛政三四年の頃にやありけん、江戸中風邪流行して病ざる家なし、市中商人の家など戶さして、家內風邪に付相休申候と、札を張りたる、家所々に見えたり、殿中伺候の面々、供立減少、長髮不苦と云ふ令を出だす程なり、此比街歌に、そんれはおそろきお世話へと云ふ童謠はやりし故、此風邪をお世話風と云へり、其翌春、京傳作、草ざうしの新板に、（此頃は上下一冊紙數十枚なり）おせはと云ふはやり女郎、深川にありて、客床に入れば、團扇を以てあふぐ、客たちまち襟元ぞつとして風をひき熱に犯され、樣々の事をなす趣向なり、大に世に行はれ、予も幼年所持せり、是も六十年のむかしとなりぬ、

〔半日閑話　十二〕明和三年三月初つかたより疫風大に行はる、道中雲助幷火消屋敷抱之處、ことごとく死す、名付て雲助風と云、

〔天保集成絲綸錄　百六〕享和二戌年三月

一風邪流行に付、長髮に而罷出候儀、幷供減候而召連候儀不苦候、今日罷出居候もの、風邪之者は勝手次第罷歸候樣、伊豆守殿被仰渡候段、神保佐渡守申聞候、

享和二戌年三月

御目付江

此節病人多候付、御番衆其外に而も例と違、詰切身分弁當之面々は、此砌は御臺所給させ可申候、

但西丸も同斷

享和二戌年三月

御目付江

此節一統風邪流行ニ付、御目見以下之者共江御煎藥被下候、諸事明和六丑年之通相心得、可被取計候事、

但西丸御目付江も相通、西丸に而も、右之通被下候樣に、可被取計候、

〔隨意錄二〕予〇冢田虎質性無疾、十九憂痘之後、四十年于今、未嘗有一日寢疾矣、今茲壬戌〇享和二年三月、天行之風疾、都鄙戶々無有不罹焉者、西京大坂及諸國亦同焉云、於此門人或曰、先生得莫亦罹此風邪乎、予戲之曰、一言以蔽之、豈可有受邪乎、然而幸覺不疾、

〔松屋筆記十四〕ダンホ風幷お七風

文政四年正月十八日、南風いと烈しく、塵埃掠天、往來の人目を開くことあたはず、芝片門前に火事おこりけるが、二町あまり燒て止りぬ、此日江戶中の家々火事を恐れて、土藏に目塗りし、藏なき者は家財雜具を運びさまよひぬ、午の時ばかりに、芝片門前に火事ありといひさわぎ、未の時には尾張町、申の時には日本橋わたりまで、火きたれりとのゝしりあひしが、皆ねなしごとにて、片門前の火事のみにて事さだまりにき、同二月中旬より彌生のはじめに及まで、疫癘流行、十に八九はこの憂にかゝらざる家なし、ことし今樣の唄に、ダンホサン〳〵とはやすこと流行せり、越後國より起りて、檀方樣といふよし人々いへり、或ナンホサン〳〵ともはやしたり、太田南畝が號をはやしにせし也ともいへり、これより疫癘を名づけてダンホ風といへり、今より十八九年前、お七風といふも流行せり、そは八百お七といふ狂言をノゾキの口說に作りたりしを、世人いひける也、此頃執政青山野州、土井大炊頭主、大久保加州、水野羽州ダンホ風に犯されて出仕したまはず、阿部備中守主一人つゝがなくおはしませりとなん、これに政府命ありて出仕の官人長髮を許さる、

〔時還讀我書上〕文政辛巳四年〇ノ二月中旬ヨリ、都下感冒流行シ、闔家コト〳〵ク枕ニ就ニ至レリ、西國ニテハ去冬ヨリ行レテ、邪氣盛ニシテ久解セザルモノアリト、關東ハ其證初起ハ稍劇ク、加邁スベキ勢ナレドモ、〇中略然マヽ餘邪留連スル者アリ、動スレバ吐衂血ヲナスモノ多カリシ、蓋近年感冒ノ流行病者ノ夥キコト、是歳ノ如キハ曾テ見及ザルホドノコトナリキ、

〔天保集成絲綸録百六〕文政七申年三月

口達之覺

此節風邪流行に付、長髮に而罷出候儀、幷供廻り等も格外ニ減シ召連候而も不苦旨、無急度御目付江申渡、大目付江も、右之趣相達候樣、是又申渡候事、

〔救荒便覽〕天保三辰年春寒甚しく、三月鮫組大雪、十一月琉球人來聘、寒氣つよし雪も度々、前月より疫邪流行、こゝに至りて止、

〔東國小說五集〕安永以來のはやり風

今歲は秋のころに至りて、感冒必流行せんか、婦人小兒おしなべて寢々轉々と謠ふこと、是病臥の兆ならんといへり、果して八九月の頃に至りて、風邪感冒流行して、貴賤病臥せざるはなく、輕きは兩三日にしておこたるもありしかど、重きはその症、疫熱に變じたる、三四十日に至るもあり、或は庸醫に惑られて、よみぢ赴くもののもありけり、このときのえせ狂歌に、

はやり風無常の風もまじりけりねん〳〵ころり用心をせよ

かくて病むと、やむ程に、國の八州いへばさらなり、京攝の間まで、脫るゝものなかりしとぞ、童謠はいにしへより和漢の歷史に載せられて、應驗あらずといふもの稀なり、〇中略予が東西をおぼえしころより、大約五十年このかた、時々の感冒に世俗の名を負はせしもの少からず、まづ安永の中葉にはやりし風邪を、お駒風と名づけたり、こは城木屋お駒とかいふ淫婦

の事を旨として、作り設けたる淨瑠璃のいたく行はれたればなり、又安永の末にはやりし風邪を、お世話風と名づけたり、こは大きにお世話、茶でもあがれといふ戯語の流行せしによりてなり、又天明中にはやりし風邪を、谷風と名づけたり、こは谷風梶之助は、當時無雙の最手なりければ、これに勝るものあること稀なり、谷風嘗て傲言して、とてもかくても土俵の上にて、われを倒さんことは難かり、わが臥たるを見まくほりせば、風をひきたる時に來て見よかしといひしとぞ、この言世上に傳へ聞きて、人々話柄としたる折、件の風邪を谷風がいちはやくひき初めしとて、遂に其名を負せしなり、さればこの時四方山人、送風神狂詩あり、錄してもてこゝに證とす、

引達此風號谷風、國々疾咳響西東、惡寒發熱人無色、煎樣如常數有功、一片生姜和酒飮、半丁豆腐入湯空、送君四里四方外、千壽品川同屋中、

又文化元年にはやりし風邪をお七風と名づけたり、こは八百屋お七といふゑせ小うたの流行せしによりてなり、又文化五年の秋はやりし風邪を、ねんころ風と名づけたり、そのよしは、上にいへるが如し、又文政四年の春二月の比、いたく流行せし風邪を、だんほう風と名づけたり、こはこのときのはやり小うたに、だんほうさんや〳〵と謠ひしことのあればなり、かくて去年甲申の春二三月の頃はやりし風邪を薩摩風と名づけたり、こは西國よりはやり初めて、こゝまでうつり來つればならん、此うち谷風、お七風、ねんころ風、だんほう風は、はげしかりき、家々毎に五人三人枕をならべて、うち臥さぬはなかりけり、西は京攝に至り、東は安房上總、西南は、甲斐伊豆の海邊、北は信濃越後まで、なべて脫るゝものなかりしよし、その折々に友人の郵書にも聞えたり、だんほう風のはやりしとき、何ものかよみたりけん、

　みやこから乘せてくるまのだんは風ひくものもありおすものもあり

いとをかしきや、例の人の戯なるべし、かゝればこの風は京よりはやり來つるにこそ、この他、寛政

痰咳發して、療治術盡たるに、柊、南天、葉紫蘇葉の陰干を等分に合せ煎じ、湯茶のごとく頻に用れば必驗あり、或は天瓜の實を多く煎じつめて、ねり藥のやうになりたるを頻に用るもよし、されど初一年は奇効あり、次の年はさまでにあらず、三年目にはいと効うすし、四年目に至ては更に効なし、ヘチマの水を煎じつめて用るも、亦右のごとく、自然に効薄くなりて詮なし、唯柊、南天、紫蘇の三種の葉の陰干の煎湯に及ものなし、

〔三代實錄七淸和〕貞觀五年正月二十七日庚寅、賑給京師飢病尤甚者、自去冬末至于是月、京城及畿内畿外、多患咳逆、死者甚衆矣、

〔三代實錄十淸和〕貞觀七年四月五日乙卯、是日内裏幷諸司、綱所延名僧一人、受十齋戒、讀般若心經、修所讀經齋戒、各別修事、爲去年天下患咳逆病、今年内外疫氣有萌、故轉經攘之、

〔三代實錄二十一淸和〕貞觀十四年正月廿日辛卯、是日、京邑咳逆病發、死亡者衆、人間言、渤海客來、異土毒氣之令然焉、是日大祓於建禮門、以厭之、　三月七日丁丑、太政大臣〇患咳逆、去二月十五日、出自禁中直廬、在私第、是日賚穀五十萬、以充病療之費、

〔今昔物語二十七〕或所膳部見善雄伴大納言靈語第十一

今昔、□□ノ比天下ニ咳病盛リニ發テ、不病ヌ人无ク、上中下ノ人病臥タル比有ケリ、其レニ或ル所ニ膳部シケル男、家内ノ事共皆ナシ畢テケレバ、亥ノ時許ニ人皆靜マリテ後、家ヘ出ケルニ、門ニ赤キ表ノ衣ヲ着、冠シタル人ノ極ク氣高ク怖シ氣ナル指合タリ、見ルニ人ノ體ノ氣高ケレバ、誰トハ不知ネドモ、下臈ニハ非ザメリト思テ突居ルニ、此ノ人ノ云ク、汝ヂ我レヲバ知タリヤト、膳部不知奉ズト答フレバ、此ノ人亦云ク、我レハ此レ古ヘ此ノ國ニ有リシ、大納言伴ノ善雄ト云シ人也、伊豆ノ國ニ被配流テ早ク死ニキ、其レガ行疫流行神ト成テ有ル也、我レハ心ヨリ外ニ公ノ御爲ニ犯ヲ成シテ、重キ罪ヲ蒙レリキト云ヘドモ、公ニ仕ヘテ有シ間、我ガ國ノ恩多カリキ、此

レニ依テ今年天下ニ疾疫發テ、國々ノ人皆可病死カリツルヲ、我レ咳病ニ申行ツル也、然レバ世ニ咳病隙无キ也、我レ其ノ事ヲ云聞カセムトテ此ニ立タリツル也、汝ヂ不可怖ズト云テ、掻消ツ樣ニ失ニケリ、膳部此レヲ聞テ、恐々家ニ返テ語リ傳ヘタル也、其ノ後ヨリナム伴大納言ハ、行疫流行神ニテ有ケリトハ人知ケル、但シ世ニ人多カレドモ、何デ此ノ膳部ニシモ此ノ事ヲ告ケム、其モ樣コソハ有ラメ、此ナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔大鏡 六 内大臣道隆〕今の帝 一〇後一條 東宮さしつゞきむまれさせ給へりしかば、よをおぼしくづをれて、月ごろ御病もつかせ給ひて、寛弘七年正月廿九日うせさせ給へにしぞかし、御歳三十七とぞ承りし、かぎりの御病とても、いたうくるしがり給ふ事もなかりけり、御しはぶき病にやなどぞおぼしけるほどに、おもり給ひければ、修法せんとて僧めせど參もなきに、いかゞはせんとて、道雅の君を使にて、入道殿に申給ひにけり、

〔源氏物語 四 夕顔〕神事なる比は、いとふびんなることゝ、思ふ給へ、かしこまりてえまいらぬなり、此曉よりしはぶきやみにや侍らん、かしらいといたくてくるしく侍れば、いとむらいにて聞ゆることなどのたまふ、

〔小右記〕寛仁二年十二月四日壬辰、自去二日心神不宜、夜不寢、吉平占云、咳病餘氣之上風病發動者、

〔本朝世紀〕久安六年十月廿六日戊辰、近日咳病蜂起、貴賤上下、敢無免者、老者多以夭亡、民庶粗死亡、近年以來第一咳疫也、

〔本朝世紀〕久安六年十一月廿八日庚子、於法勝寺被行如法仁王會、上卿權大納言公敎卿、權中納言藤忠雅、參議同經宗朝臣、源雅通朝臣等參仕、右中辨光頼、右少史伴爲倚等行左方布施事、右少辨藤資長、左少史清原宗景等、行右方布施事、被祈謝天下咳疫事也、今日一院無御幸、依御咳也、凡近日上下諸人莫不嬰此病之者、禁中及院中已以無人云々、

〔台記〕天養元年十一月廿一日戊辰、雨下、臨暮晴、光房來云、今上御時、節會未出御、依幼少也、今度初可出御、〈御齡六〉左大臣稱疾在仁和寺、必可參者、對曰、依聞所惱得減、但身熱咳嗽、內辨可招喚、且又先例舍入之人、猶依咳病、兎內辨退出、〈 〉二年十月廿日壬辰、自今朝咳病、有溫氣、飮食背常、

〔明月記〕貞永二年〈○天福元年〉二月十七日壬辰、近日咳病、世俗稱夷病、去比夷狄入京、萬人販見云々、是極不吉徵也、

〔吾妻鏡 三十五〕寛元二年四月廿六日丙申、今度被行四角四堺鬼氣祭、是近日咳病溫氣流布、貴賤上下無免之間、將軍并公達以下御所惱也、而君有此御患云々、若君于今無御平減云々、

〔園太曆〕康永四年九月十九日
〈病事御祈事〉天下依有病事被行御祈例
　文永元年七月上旬以來咳病流布
　同月廿日、於內裏被始行五大虛空藏金輪法、依病事并彗星御祈也、

〔妙法寺記〕天文四年、難義ナル咳病ハヤリタ皆死申候、

〔鹽尻 五〕一見聞、天下庶人、三日疾の咳流布す、今時も一兩日人の病事有、三日疾といふべきかも、實永四年の多、富士山燒し比、三四日の咳病を煩しもの天下に多かりし、

傷風

〔病名彙解 六〕傷風〈シヤウフウ〉要訣ニ云、傷風、傷寒、俗ニ呼テ傷寒トス、陰陽ノ二氣皆ヨク營衞ヲ犯ス、故ニ陽氣太陽ヲ犯ストキハ傷風トナル、風ヲ畏テ汗アリ、陰氣太陽ヲ犯ストキハ傷寒トナル、寒ヲ畏テ汗ナシト也、

傷寒

〔撮壤集 下病患〕傷寒〈シヤウカン〉

〔醫心方 十四〕傷寒證候第二十三
病源論云、經云、春氣溫和、夏氣暑熱、秋氣清涼、冬氣氷寒、此則四時正氣之序、冬時嚴寒、万類深藏、君子

固密、則不傷於寒、夫觸冒者、乃爲傷於四時之氣、皆能爲病、而以傷寒毒者以其最爲殺厲之氣焉、卽病者爲傷寒、不卽病者、其寒毒藏肌骨中、至春變爲溫病、夏變爲暑病、暑病者熱重於溫也、是以辛苦人、春夏必有溫病者、皆由其冬時觸冒之所致、非時行之氣也、其時行者、是春時應溫而返寒、夏時應熱而返冷、秋時應涼而返熱、冬時應寒而返溫、非其時而有其氣、是以一歲之中病無長少多相似者、此則時行之氣也、

葛氏方云、傷寒、時行、溫疫、壹有三名、同一種耳、而源本小異、其冬月傷於暴寒、或疾行力作、汗出得風冷、至春夏發、名爲傷寒、其冬月不甚寒、多暖氣及西南風、使人骨節緩墮受邪、至春發、名爲時行、其年歲月中有厲氣、兼挾鬼毒相注、名爲溫疫、如此診候並相似、又貴勝雅言、總名傷寒、世俗同號時行、道術符刻言五溫、亦復以此致大歸、終是共途也、

〔牛山活套上〕傷寒

近時ノ俗ノ傷寒ト云ハ、多ハ瘟疫ノ病、時行ノ熱病ヲ指テ傷寒ト云ナリ、此症初發ノ時ハ、多ハ感冒ノ治療ニ同ジ、熱甚シク惡寒シ、頭痛裂ガ如ク、腰脊强痛スル者ニハ、九味羌活湯ヲ用ベシ、柴胡蒼朮ヲ加テ其効如神、十神湯ヲ用モ可ナリ、

〔叢桂亭醫事小言二〕傷寒

又寒ニ中リテ卽チ不病、春ニ至テ變クテ溫病トナリ、夏ニ至リテ變ジテ熱病トナルトアレドモ、然レドモ風寒ノヤブル所、最輕キモノヲ感冒トシ、引風ナリ、重キヲ傷寒トス、感冒ノ一證ハ至テ輕キモノニテナヘ、頭痛身痛、四支拘急、鼻塞聲重、咳嗽喘急、惡寒發熱シテ病ム、人身邪氣ヲ躱シテ容ベキ所ナシ、況ヤ冬時嚴寒ニ傷ラルヽハ輕キ事ニアラズ、夫レガ反テ藏伏シテ時ヲ過テ發センヤ、

〔叢桂亭醫事小言二〕傷寒

和漢一般ニ、歲事年頭ヨリ五節句ニ至マデノ儀式ハ、皆疫ヲ除クノ事也、叢桂偶記ニ詳ニセリ、返

ス返スモ仲景何ゾ其多キ疫ヲ置テ、少キ傷寒ヲ以テ論ヲ著センヤ、肘后方曰、傷寒、時行、温疫、三名同一種耳、而源本小異、又貴勝雅言總名傷寒、世俗因號爲時行ト見ユ、又小品方ニ、傷寒是雅士之辭、云天下瘟疫、是田間之號耳、又張果醫說、古今病名不同、篇曰、古人經方多雅奧、以痢爲滯下、以歷爲脚氣、以淋爲癃、以實爲秘、以天行爲傷寒、此言可以發千載聾瞶也トアレドモ、疫ト云モノ正名ニテ、其ノ外ノ名ハ醫家ニテ名付タル也、如何トナレバ正史ニ疫ト記ス、是ハ闕政ニ過失アレバ、天地ノ氣候其ノ正ヲ不得シテ、人民疫疾ヲ患ルニ至ル、人君ヲシテ其ノ過ヲ改メシメンガ爲ニ、史官正ク記スルノ故ニ疫ヲ正名トス、疫ノ字義ハ其ノ流行スルニアマネク、戸々ニ病テ徭役ニアタルガ如クナル故ニ、殳ニ从テ疫トハ云也トミヘタリ、是乃傳染ノ病也、

〔陰德太平記三十〕吉川元春石州發向事

晴久〈尼子〉○此由ヲ聞給テ、雲、石、作、幷ニ伯耆、備後ハ半國ノ勢、一萬五千餘騎ヲ帥テ發向セントシ給ヒ、先陣ノ本庄、牛尾、湯ナドハ、已ニ赤穴ニ著陣シケレバ、小笠原大ニ競、頓テ元春ヲ追立ントス、勇留リケル所ニ、晴久俄ニ傷寒ヲ煩ヒ、前後不覺也ケル故、醫療ノ術ヲ盡サレテ、石州發向ナドハ噯スル者モナカリケリ、

〔醫學天正記乾上〕傷寒

天正十七年四月

一八條殿〈六宮、御年八歲、式部卿親王〉感冒發熱、初通仙〈道三〉甕庵〈玄朔〉父子療養未効、竹田定加法印治之時、發斑出而熱尙甚、時盛芳院〈淨慶〉牧庵兩人談合シテ御藥進上、早朝ニ御藥進上、晡時惡寒、身冷脈絕、鼻氣冷、時諸醫技已盡、民部卿法印命予、病證次第分別、無用捨可申ト、予曰、見傷寒四逆之證也、但寒毒甚カラズ藥毒甚キ故也、　四逆湯ヲ可用、諸醫可然ト申、予藥箱ヲ携ヘテ、竹田甕庵祐乘上池ニ見セテ、民部法印御撿使ニテ、醫林集要ノ四卷ヲ披テ、茯苓四逆湯ヲ可與ト申、一人モ無用ト

熱病

被存候者可被申候ト、口ヲ堅メテ調合ス、民部法印自煎シテ與之、一服ニシテ御脈微顯、二服ニシテ脈全調、神氣面四肢温、翌日平安、其後御養生藥進上シテ、十餘日ニシテ本復、于時關白大相公秀吉公、御感之餘御馬被下、

〔醫學天正記 坤〕傷寒
一傷寒、寒熱頭痛汗出、四肢倦痎、脈弦數、九文ニ加可荊己芎、寒熱痛同前、四物ニ加沒桃膽己杜、七貼ニ而痛止、

〔增補下學集 上二 文體〕熱(ヤケレ)ノ病者

〔諸病源候總論 九〕熱病諸候 熱病候
熱病者、傷寒之類也、多傷於寒、至春變爲温病、夏變爲暑病、暑病者、熱重於温也、肝熱病者、小便先黃、腹痛多、臥身熱、熱爭則狂言、及驚脇滿痛、手足躁不安臥、庚辛甚、甲乙大汗、氣逆則庚辛死、心熱病者先不樂、數日乃熱、熱爭則卒心痛、煩冤善嘔、頭痛面赤無汗、至壬癸甚、丙丁大汗、氣逆則壬癸死、脾熱病者、先頭重頰痛、煩心欲嘔身熱、熱爭則腰痛腹滿泄、兩頷痛、甲乙甚、戊巳大汗、氣逆則甲乙死、肺熱病者、先淅然起、毛惡風、舌上黃身熱、熱爭則喘咳、痺走胸膺背、不得大息、頭重不堪、汗出而寒、丙丁甚、庚辛大汗、氣逆則丙丁死、○下略

〔病名彙解 三〕熱病(ネツビヤウ) 傷寒ノ類也、多寒ニヤブラレテ春ニ至テ變ジテ温トナリ、夏ニ至テ變ジテ熱病トナル、多寒ニ傷レ其マヽワブラフヲ傷寒ト云リ、其時行一般ナルモノヲ瘟疫ト云リ、熱病ハ傷寒温病ヨリモ重シト云リ、又暑病トモ云リ、

〔三代實錄 二十九 清和〕貞觀十八年十一月廿九日壬寅、是日天皇讓位於皇太子、○中略勅、右大臣從二位兼行左近衞大將藤原朝臣基經、保輔幼主、攝行天子之政、如忠仁公故事、詔曰、○中略朕以薄德、天日嗣承、忝之賜、日夜無間久慣毀、御坐、而君臨漸久、久年月改隨、○熱病頻發、御體疲弱、天之不堪、勤

朝敵、

〔源平盛衰記二十六〕入道〇平清盛得病附平家可亡夢事

二十八日〇治承五年二月ニ、入道重病ヲ受給タリトテ、六波羅京中物騷シ、馬車馳違、僧モ俗モ往還種々ノ祈禱ヲ被始、家々ノ醫師藥ヲ勸メケレ共、病付給ケル日ヨリシテ、湯水ヲダニモ喉ヘモ入給ハズ、身ノ中ノ燃焦ケル事ハ、火ニ入ガ如シ、臥給ヘル二三間ヘハ人近付ヨル事ナシ、餘ニアツタ難カリケレバ、悲叫ビ給トケル言トテハ、只アタ〳〵ト許也、此聲門外マデ響テヲビタヾシ、直事トモ不覺、貴モ賤モアハシツルゾヤナ見ツル事ヨ〳〵トゾ申ケル、今度モシ存命アラバ、如何ニ本意ナカリナント云者モ、内々ハ有ケルトカヤ、

〇按ズルニ、清盛ノ病ハ其何タルヲ詳ニセザレド、姑ク此ニ收ム、

〔清正記三〕一主計頭ハ至肥後國熊本歸城、從船中熱病をうれひ、煩はしく有けれども、家中之大小身共ニ振舞、かぶきを興行し、一興を催し、何れも侍共聞候へ今度秀頼公家康公御對面之儀を調、天下に名をあげ歸國し、能始終を勤し、某今病相究命之終此時也、十は十一可相果、虎藤丸を守立べしとあれば、何れも及愁歎、病氣次第々々に重く成り、六月廿三日にははや身もこがれくろくなられける、家老之者ども召寄、唯今病死す、

〔橘黄年譜上〕天保七年夏四月ヨリ日ニ雨降リ、或ハ天陰晴レズ、五月ニ至リ霖雨止時ナシ、菜蔬生ゼズ、七月十八日及八月朔日大風雨屋宇ヲ傷リ、草木ヲ倒シ、山川漲溢シテ民ノ愁苦少ナカラズ、其秋遂ニ不登ニテ、五穀及菜蔬價貴ク、翌八年丁酉ニ至リ、米價沸騰百錢ヲ以、米二合五勺ヲ得、銀拾五錢ヲ以、酒一升ヲ沽ニ至、因テ道路餓莩多シ、幕府佐久間街ニ貧院ヲ設ケ、普ク窮民ヲ救フ、其員凡貳萬餘人ト云、官縣令三名ニ命ジ、品川、板橋、千住、内藤新宿四驛ニ於テ、貧民ヲ救育セシム、翌春三月ヨリ貧民熱病行ハレ、四方ニ傳播ス、其人壞證多ク、胃實ニ屬スル者絶テ少也、世醫以穀食

不足ノ證トス、其時病人大抵大小柴胡ヨリ導赤各半、升陽散火、參胡芎蘇、參胡三白等ノ如キ錯雜ノ症ニ至リ、其甚ダ脱症ニナリテハ、增損理中〈結胸ノ脱症ニ用ユ〉眞武、茯苓、四逆、附子、粳米〈嘔逆者ヲ治ス〉ノ類ニテ救治ヲ得タリ、又參附ヲ與フル後、餘熱煩渴ヲ生ジ、竹葉石羔湯ニテ全治シタルモノ間有之、

○按ズルニ、流行熱病ノ事ハ疫病條ニモアリ、

〔增補下學集〕上二 文體 熱氣（ネツケ）

〔小右記〕長和五年四月廿九日壬寅、攝政〈○藤原道長〉温體卒例、差氣不輕、卿相密語云、可被慎歟、　卅日癸卯、從午剋許身熱、心神不宜、所疑者是風氣之所致歟、實平來、依忌穢氣猶不著座、通夜大煩、臨曉頗宜、

五月十一日甲寅、攝政坐佛前、請僧等參入堂、攝政命云、從去三月、頻飲漿水、就中近日晝夜多飲、口乾無力、但食不減、例醫師等云、熱氣歟、老體不服丹藥、年來豆汁大豆煎蘇密煎呵梨勒丸等不斷服之、此難歟、仍服冷物、服未發、從今日服藥、於客亭一度飲之、而三度入簾內、若飲水給歟、命云、今日飲水多減、然而太無力也、不讀經念誦、熱發者、不可無力、而顏色憔悴、身又如此、若猶極病歟者、何氣力、容顏頗瘦、惡氣揭焉、依御口乾、持香二果時々嘗之、又命云、服豆汁葛根等、服柿汁、定延法師云、柿者熱物不可服者、仍不服、此間被讀壽命經、不能具記、

寬仁二年閏四月十九日辛亥、巳剋許歸來云、乍立參入〈殿今日許〉相逢新中納言、〈能信〉御病體似熱氣、飲食不受給、夜部邪氣、託人不稱名、氣色似故二條相府靈、〈道兼〉御修法從七夜被始、四壇、

〔台記〕康治二年六月廿八日癸丑、女房有溫氣、

〔倭名類聚抄〕三 病類 皰瘡　唐韻云、皰、〈防教反、字亦作靤〉面瘡也、類聚國史云、仁壽二年皰瘡流行人民疫死、〈皰瘡、此間云裳瘡、〉

〔箋注倭名類聚抄〕二 醫心方皰亦訓爾岐美、〈中略〉○按廣韻、皰面生氣也、又云、靤面瘡、並防教切、二字似不同、然說文、皰面生氣也、無靤字、其實靤卽皰之俗字耳、又按謂面瘡者、前面獨生瘡、非毛加佐也、〈中略〉○原書異部云、仁壽三年二月、京師及畿外、多患皰瘡、死者甚多、文德實錄所載同、此所引、其文頗

異、恐源君所[illegible]括二年當作三年、蓋傳寫之誤、按肘後方、有治時行皰瘡方、病源候論時氣皰瘡候云、夫表虛裏實、熱毒內盛、則多發皰瘡、重者周匝遍身、其狀如火瘡、若根赤頭白者毒輕、若色紫黑則毒重、其瘡形如登豆、亦名登豆瘡、又有傷寒登豆瘡、熱病皰瘡、疫癘皰瘡、其候略同、其云發皰瘡者、謂先發面瘡、未滿周匝遍身者、爲皰瘡、後轉滿周匝遍身、亦爲皰瘡也、按續日本紀天平七年、自夏至冬、天下患豌豆瘡、俗曰裳瘡、九年春、疫瘡大發、延曆九年秋冬、京畿男女、年三十以下者悉發豌豆瘡、俗云裳瘡、源君不引之、舉仁壽三年紀者、延曆以前皆謂之豌豆瘡或疫瘡、未有皰瘡之名、至源君之時、世謂之皰瘡、而豌豆瘡之名廢、故不引天平延曆紀引仁壽紀也、日本紀略延喜十五年、天曆元年、天延二年、寬仁四年、正曆四年條、皆云皰瘡、不云豌豆瘡、知源君之時、豌豆瘡之名廢也、山田本、昌平本、此間作世間、昌平本毛加佐作裳瘡、那波本同、與續日本紀合、按毛加佐、蓋裳瘡之省也、患是瘡者、飲食外多禁忌、如喪居人、故謂爲喪瘡、今俗猶謂疱瘡爲伊毛、然則裳亦假借字、非有意義也、

〔類聚名義抄 七疒〕疱（[illegible]孝反、モカサ）　〔同 九皮〕皰（モカサ）　皷皰（俗）

〔伊呂波字類抄 伊病者〕皰瘡（イモカサ、モカサ）　〔同 毛病者〕皰瘡（モカサ、本作ノ疱）

〔倭訓栞 前編 三十三〕もがさ　疱をいふ、續日本紀に、豌豆瘡俗曰裳瘡と見えたり、今ノ疱瘡也と見ゆ、豌豆瘡も同じ、一村流行する、裳を曳下るが如し、よて名くるよし、大同類聚方に見えぬ、一說に痘家古へ戸を閉て出ず、父母の喪に居が如しよてもがさといふともいへり、又いもがさの略、今もいもと稱せり、忌の義、痘家もはら忌事多きをもてなり、東國にても、つかひともいへり、按するに、西土は魏朝に發り、我邦は神龜年中に始る、すべて其躬に生ずるの病に非ず、邪祟に抵觸し穢氣に侵され、此病をうくるなり、西土にも痘瘡使の名あり、疱神は疫鬼の如し、類聚國史にも、仁壽二年皰瘡流行人民疫死と見えたり、出羽の方言に、痘を疫といひ、疹を小疫ともいふよし、痘神の論を著すものあり、无稽とい

ふべし、主上御皰瘡の時は、山王の猿も必ず痘を病は一奇事也、後光明院崩御の時、坂本の猿かろき皰瘡したり、新帝御醫藥の時、山王の猿もがさ煩ひける、夜なんど調せさせて賜ふ、ほどなく猿は死けり、帝は復本あらせたまふ、古書に此事見えず、長崎人は出痘の時を赤うでといひ、貫膿の時を白うでといふ、痘の乾くを畠毛物といひ、やゝ濕るを田津物といふも、芋といふに據也、琉球山南の人は痘疹を患へず、我邦八丈島の如し、

〔玉勝間十四〕裳瘡

續紀に、天平七年、自夏至冬、天下患豌豆瘡(俗曰裳瘡)、夭死者多、これ皇國にて裳瘡のはじめか、されどこの記しざまは、はじめてとも聞えざるがごとし、また延曆九年にも、是年秋冬京畿男女年三十巳下者、悉發疫豆瘡(俗云裳瘡)、臥疾者多、其甚者死、天下諸國往々而在と見ゆ、疫字は豌を誤れるなるべし、此瘡の名、これより後の書には、皰瘡といへり、皰、疱同じことなり、今の世にも、はうさうといふ、又いもといふ、されば昔もがさといへるは、いもがさの省きか、

〔和漢三才圖會十人倫之用〕痘瘡(ハウサウ)　豆瘡、豌豆瘡、疱瘡、皰瘡、和名裳瘡(モガサ)、芋瘡(イモガサ)、訓上略乎、

疹、痘根、俗稱減茶(ヘシツ)、一名偏瘡(名義未知其據)、痘愈後痕微瘡也、

〔仁和寺御傳〕大御室性信(中略)○延久四年秋、東宮(白河)有御疱瘡事、玉顏之上有其痕、依令旨於本房修藥師法、修中有御夢想、有一高僧、衣裳染香云、自仁和寺藥師法壇場來、以香水灑御面、夢覺之後其痕如拭、

〔傾鼠漫筆二〕あばたといふ瘡痕の名(附いもといふ名義)

世俗の里言に、皰瘡の痕の治りあへぬを、あばたといふは、梵語よりや出けむ、無下に近ごろいひいでためれど、ふと浮屠氏などの呼そめたりしが、普く世間に弘まれるにもあるべし、かく思ひとらるゝ由は、翻譯名義鈔卷〻二地獄篇に、八寒冰地獄の名を明したる中に、一を頞浮陀(アブダ)(又頞部陀とあり)

と名づくと有て、註に、倶舎云、疱、案二對身分、皆悉生皰とある、アブタをアバタと呼ならへるにぞ有べき、〈注倶舎論卷十一地獄部に、頞部陀地獄、尼剌部陀地獄、頞部陀此云皰生、所有身形、猶如皰、尼剌部陀此云皰裂と見えて、こは異説なり、〉又この瘡をいもとも呼ふは、禁物の省呼なるべし、古來腫物を二禁といふも、相似たる事をおもふべし、但和訓栞にも、もがさ瘡をいふ、續日本紀に、豌豆瘡俗曰裳瘡と見えたり、今疱瘡也と見ゆ、豌豆瘡も同じ、一村流行する瘡を鬼下るが如し、よて名づくるよし、大同類聚方にみえぬ、一說に痘瘡家古へ戸を閉て出す、父母の實に居るが如し、よてもがさと云ふともいへり、又いもがさの時、今もいもと稱せり、忌の稱痘瘡家もはら忌事多くあるをもてなり、東國にて、もつかひともいへり云々〈以上和訓栞〉と見ゆるも、忌の義といへるは似たる如くなれど、諾ひ難く、もがさは必面瘡(モガサ)なるべし、〈雷は、崩也にみゆれども、只借字なる事明らかなるを、面字に就て面をたてたるは、面會なり、面瘡の義は雷にわろし、〉さるは、倭名抄卷三〈瘡類〉に、唐韻云、皰〈防教反〉面瘡也、類聚國史云、仁壽二年、皰瘡流行、人民疫死、〈皰瘡、云面瘡、〉とある面瘡の字面たしかなるべし、醫心篇に、病源論云、皰面〈和名毛加佐〉面皮上有瘡是也とあるをもおもひ合すべし、〈又同書に、皰瘡、和名毛加佐とあるも、同書にとすべきか、猶考ふべし、〉かゝれば、もがさは面瘡(モガサ)にて、あばたは、それが梵語の說、いもは禁物の省呼と定るべし、

〔松屋筆記 九十〕○松皮疱瘡(マツカハ)

俗に物の膚を松皮にたとへていふ事あり、松皮疱瘡などの類是なり、白氏長慶集二十一丁オ有木詩八首の其六に、彩翠色如柏、鱗皴皮似松とある鱗皴の字をマツカハと訓べし、

〔神遺方 下〕○倍陳以佐耶美○又○乃○彼○以○毛

入田病　乃紀伊豪乃牟自女奴久味於曾介豆支加味波支、〈一作○文〉之底、身以多味、乃支都紀加由久、保呂世阿可美不久連寸波母乃方、阿布止爾　波自御美　多知乃加波　紀太支寸　波万爾雅奈　食介良　倭良比乃御比　阿万支

能介以門差万之藥　七八日乃能智賀奴久美寸流古斗耶万差留母乃　乃世里　師乃禰　以多

智久佐　夜万久佐　耶麻非良々岐

○按ズルニ、神遺方ハ、僞書ノ稱アリ、今博覽ノ爲メ此ニ一節ヲ擧グ、

〔鵞峯文集十六記〕記疱瘡事

吾聞、醫家之言曰、疱瘡卽痘瘡也、其始末大底有六候、其初發熱而瘡出曰報痘、其次曰起脹、其次曰貫膿、其次曰收靨、其次曰落痂、其次曰還元、戊戌十一月十日之夕、春信氣宇不平而臥、翌日發熱、至十四日而瘡見、所謂報痘也、俗語曰ミツ足揃、十六日起脹、俗語曰水盛、十九日貫膿、俗語曰山揚、二十一日收靨、俗語曰カセ日待、二十四日將落痂、俗語曰ウツシ痂作、是日浴酒湯、此事雖不見中華方書、然本朝用之既久矣、蓋以其有便於落痂而氣宇增力而還元之速乎、又聞醫家之言曰、此病未詳其始起時、或曰漢張蒼到西域、始罹此疫而流傳於天下、或曰馬援征交趾患此瘡而後施及於中國、自宋錢乙以來、諸方書無不載之、無不論之、其藥劑不可枚擧也、誠是一生之大患、不隔貴賤貧富、不限男女長幼、而面貌姸媸之所定、死生壽夭之所分也、病之者不可不愼焉、治之者不可不盡心也、本朝上古不聞此患、然聖武天皇天平七年紀曰、天下患豌豆瘡、夭死者多矣、俗曰裳瘡、經年而不止、同九年紀曰、疾瘡大發、初自筑紫來、公卿以下天下沒死不可勝計、所謂公卿者左大臣藤武智麻呂、及其三弟參議房前、宇合、麻呂、幷中納言多治比縣守等也、或挾外戚之貴、顯威於當朝、或擧遣唐之撰、播名於異域者、不能免焉、其餘雲客大宅大國小野朝老、百濟郎虞、長田王、橘佐爲等亦物故、其外廷臣同罹此災、逮至歷朝務、百官既如此、況於群國之凡民乎、其謂之裳瘡者、瘡形似芋、故略其謂而言之、謂之豌豆瘡者、亦是以其相類也、今俗謂之豆者、其義一也、想夫登時此災初起、故病者不知所以愼之、醫者亦不能通其治方、故死亡者如此乎、其後鎌倉柳營遭此患、飮藥而愈、俊寬僧都之幼子以是夭亡、然則彼以貴權盡其治術、此以窮乏不得其良藥者乎、雖然非貴者得藥而必生、賤者不得藥而必死、縱有良藥、其病重而愼不足則招禍、縱不得藥者、其病輕而愼不怠則得福、斑

固所謂得中醫者是也、近年正保先帝當太平之時、踐九五之位、而不能駐、其晏駕、今歳太上女皇、以宥算之壯、而得國姑射之春、其爲至尊、豈不異、然有幸不幸之不同者、症有輕重乎、抑有中與不中乎、其所愼之有餘與不足乎、抑命乎、果天乎、○中略 近世有一種疾、自肥前國來、傳於諸國、人々不病之者鮮矣、然痘瘡自筑紫漸蔓於天下之謂乎、春信誕育以來、常飮法印元德藥、而至成長、故此度元德日來治之、其子野怡亦每日來診焉、春信亦自能愼焉、侍坐者亦不敢懈焉、六候移易無些滯礙、而漸及還元、平復既在近也、(中略)戊戌十一月二十五日

(痘瘡水鏡錄)第一階

初日二日三日、是ヲ序熱ト云、俗ニ云ホトホリ、凡痘瘡ノ患ニカヽル小兒多クハ、先頭痛、驚搐、吐乳、乾嘔、下利等種々ノ事有リ、初メハ風ヲ引タルニ似、熱强キハ甚傷寒ニ類シテ別レ難キモノ也、是ヲ知ルニハ、腹痛ムカ否ヲ問ベシ、微腹痛有ルモノハ極メテ痘ノ目當ナリ、○中略

第二階

四日五日、此時ヲ見點ト云、俗ニモノハナ見ユルト云、痘序熱三日スミテ、四日ノ朝、其大熱サメテ、諸症コト〳〵ク去リ、能食シテ口角、天庭、福堂ノ邊ニ大小等シカラズ、紅活珠顆ノ如ク、五七粒、或ハ二十粒三十粒見ヘテ、數ヘツベキモノハ大々吉也、○中略

第三階

五日六日、此時ヲ出齊ト云、俗ニ出ソロイト云、凡痘ハ先面部ヨリ出始リ、後ニ手足腹背ニ及ブ、足ノ裏ニ出終ラバ、出齊ト知ルベシ、總ジテ出齊モ起脹モ灌漿モ落痂モ皆面部ヨリ始リ、手足ハ一日モ二日モ遲キモノナリ、○中略

第四階

六日七日、此時ヲ起脹ト云、俗ニ云山アゲ也、痘日々成長シテ、豌豆ノ如ク、面部手足トモニ地腫强

ク、常ノ顏ニ一倍シ、食マス〳〵進ミ、微熱氣ヲ帶ビテ、六七分以上ハ眼胞塞リ、元氣サワヤカナル者ハ大吉也、六七日目ヨリ黃芪汁ニ轉ズベシ。○中略

第五階

七日八日、此時ヲ行漿ト云、俗ニ水モリト云、痘起脹サヘ十分ナレバ、漿ノ行ルコトモ手間イラヌモノナリ、其儘黃芪汁用ヒ居ルベシ。○中略

第六階

九日十日、此時ヲ灌濃ト云、俗ニ膿モリト云、痘ニ行リタル漿漸々ニ色變リ、始メハ白ク、後ニハ青黃色ニ成リ、顚開ク根紅ニ、食益進ミ、腫消ク、大便秘シ、眼開カザル者大吉也、黃芪汁ニテ内ヲ張リ居ルコトヨシ、淺リニユルムベカラズ、大切ノ場ナリ。○中略

第七階

十一日十二日、此時ヲ收靨ト云、又結痂トモ云、俗ニカセルト云、痘ニ皺ヨリ、見ヘキタナクナリ、膿先ブカヽリタル所ヨリ追々ニ結痂ニヲモムク者順也。○中略

第八階

十三日十四日、此時ヲ落痂ト云、俗ニフタ作ルト云、痘ノ皮黑赤ク、赤小豆ノ如クニシテ、堅ク厚ク成リ、段々ニ落チ、瘢始テ開キ、熱氣トント去リ盡シ、大小便常ノ如ク、食益進ムモノ大吉ナリ。○中略

第九階

十五日ニテ、痘ノコトハ終ルナリ、格別輕キ症ハザツト風爐ニ入ルベシ、大ニ元氣ヨクナルモノゾ、少シ重キハ十八日目、天氣晴朗ナルヲ見テ風爐ニ入ルベシ、浴後甚風氣ヲ恐ル、愼ムベシ、表裏トモイマダ實セザル時ナレバ、大ニ風ヒキ易シ。○下略

〔忠臣講釋七〕喜内住家之段

喜内、何の氣も付かず、同じ屋敷へ奉公ならば、先君判〇霊吾のお傍仕へもさせんず物、お家は没落、我は長病にて行歩叶はず、仲重太郎、何國に吟ひ居事やら、まだしも老の樂しみは、孫の太市、疱瘡も山上仕舞たれば、大役濟だ、出かしたな、見やれ賢い目元でないか、近侍の子達、疱瘡の中でも、鎮島やお山人形のぬかつた物は大嫌ひ、公平の人形の顏の赤いは出物の顏、勲功の兵に成兼ぬ利口者と、子々も孫に余念なき、ヲヽかはいそふに、したが今年は蓋がよいげな、よい時羨しい事仕やつたの、ほんにマアおりゑ樣、此樣な疱瘡子の有のに、毎晩々々よう日參なさんすのふ、又かいな、そんな事、わしや聞たうないと、ひや〳〵思ふ嫂に、言損ひの機嫌取、ドレぼん抱てやりましよか、伯母が着物もあつかじやぞや、ナア赤いはよいが、又とのないのにこまつたと、疱瘡の禁句、くろめ然、せひも納戸へ連て入、

〔續視聽草初集二〕疱瘡善惡輕重見相

一顏色至て白小兒は重し

是は血枯る色なり、肉太くとも正血にあらず、脫血也、これは水疱とて出るは安く、本臟結病むづかしく油斷せば危し、常に消毒の藥を用ゆべし、

一同色黑き小兒重し

是は血死色、疱瘡出兼べし、火疱とて小粒なり、皮ぞこに針をうへし如くにて、熱烈く、苦悶症也、常に解毒すべし、〇中略

一同青き色の小兒重し

是は血縮る色なり、山を上ゲ兼る內へ引形也、危し、常に病有小兒也、驚風虫等の用心すべし、

一同赤黑色又重し

黑き色同斷にて是も危し

一同紅黄色は輕し

此二色は血の順よき小兒なり、輕しと志るべし、冬春の比、ほうさき桃のごとく紅なるをいふ、

疱多く出るとも命にかゝわらず、都て術の多少は毒氣に有り、此二色は筋よき疱瘡なり、

〔疱瘡心得草〕見點三日間の吉凶の心得之事

見點のみへそめには、表裏の虚實を考へ、うかするてだて、かんじんなり、痘人の性として、風寒にて表をとづるもの有、裏の氣のよわきもの有、此外に毒氣をすかして發するも有、是等詳に辨べく、よき醫師を頼み、家内の介抱如在なく心得る事肝要なり、吉症と云とも、出浮くまでは大切也、風としたる物にさはられて、至て輕き疱瘡にても、出浮かすして變にあひ、又は折角出浮かけて引込もあり、かせ口より出浮がたきを大事とすべし、痘の始終は、全く發熱の時に辨へ志るべし、見點頭面より見へ、手足ともにばらりと出て、その色上へ白く根あかくして瘡に光り有て、手にて探れば、さわる度に熱さつはりと覺め、食事すゝみ、大便小便常の如きは吉症なり、頭面にあまた出るといへども、粒わかれて、肌の地あざやかなれば氣遣ひなし、もしは蚤の種のごとくなるもの、もしは其色白け、肌の色と同じ、やけどの樣なるもの、出るかと思へば隱れ、かくるゝかと思へば顯るゝもの、發熱一二日にして見點し、又は熱なくして見へて、熱出るものは、至て大切なり、始頬よりみゆるを吉とす、顋咽の下より見ゆるは必ず出物多し、兩の頬の痘粒分れて出るは吉症なり、いづれ兩の頬咸べつたりとして粒たち分れがたきものなり、兩の頬さへたち出れば、跡より多く出ぬものなり、惣じてよひ疱瘡は、むね腹にはなきものなり、又頭面に見へずして、手足或は腰尻のあたりより見ゆるものは、逆にしてよろしからず、又此時皮ひとへ内にありて出で浮かざるものは、甚だ六ヶ敷、是非に狂躁てむしやうになくものなり、介抱の人、隨分と心を用べし、見點三日を出そろひとす、足に出るを云ふ、輕きは足のうらになくても、三日になれば出揃と

すべし、疱瘡の三關にて、先二度の關所有て、出揃ふを上の關と云、灌水持てかせかゝるを後の關といふ、出でうきかぬるは五日六日の上の關を越へがたし、後の關は十日十一日にあり、乍去生れ子の一年にみたぬは、十五日の期を待ずして早くかせるゆへ、其症の重きものは、八日九日を三四才の十日十一日にあてゝ見るべし、俗に始終を十二日と心得て、神送りするは、疱瘡の吉凶を定むべし、吉症は是より藥用ゆべからず、又輕といへども餘病を挾むものは、其儘になし置べからず、良醫の指圖を持べきなり、

〔安齋隨筆二十九〕疱瘡血症　或小兒疱瘡發して吐血す、家人大に驚く、衆醫手を束ねて如何ともする事なし、一醫酒を飲ましむ、吐血止む、予が孫三人一度に疱瘡發鮮出づ、何事もなし、又或小兒疱瘡發して吐血す、是も何事もなし、按するに、熱に乘じて痘の毒血妄動して上下より溢れ出づるなり、其の本毒血なる故、血いづとも害ある事なし、人の驚き憂ふべき事なる故、是を記す、疑ふ事勿れ、

〔叢桂亭醫事小言六〕雜話

東羽ノ人、患痘者アレバ、生薑ヲ切テ作管、鼻孔ニ容レ、面起腫スルトキ、鼻カラスト傳聞ス、又薑ヲ煎服ス痘快發スト、方書中ニ此事ヲ載タリト影ノ如ニ暗記ス、今再ビ之ヲ閲セントスルニ、何書ナルコトヲ忘却ス、重テ詳ラン、

〔橘庵漫筆二編五〕蚘虫をしぼりて、其汁を疱瘡にて、目に星の入たるに用ゆるに、治せずと云事なし、予屢試みて効を得たり、乍併痘後五七十日過ては治せず、はやく入べし、人の臟腑に蟠程のいやしきもの、聾耳鼻手足さへなきむしながら、斯る功は一ツなり、人として無能にして勤めず、世を過すをや、

〔隨意錄五〕痘瘡之禁忌、有生人往來者、醫家未解其義、按陸游老學庵筆記云、都下買婢、謂未曾入人家、

者、爲一生人、喜其多淳謹也、此亦謂疾者未熟知之人也、

〔梅園日記 五〕疱瘡忌貝

本朝醫談二編に、類聚符宣抄の天平九年の太政官符を引て、廿日已後、若欲喫魚宍、先能煎炙、然後可食、但乾鰒堅魚等之類、煎否皆良云々、本文に乾鰒の事あり、世疱瘡に貝類を忌とて、のしあはびを用ひざるは妄なり、痘毒目に入たるに、のしを黑焼にしてさす事、醫療羅合に見えたりとあり、按ずるに、痘疹傳心錄の諸藥性、口訣に、淡菜、味甘鹹、氣微寒、和肺氣、養腎氣、　蛤蜊肉、性冷、煮食潤五臟、止消渴、開胃殊功、　牡蠣、味鹹寒、入腎經、消煩滿、化痰凝、固精止汗、　石決明、鹹平、入肝經、消障翳、點赤膜、また外消散、治陰囊腫亮、大黃、牡蠣(各五錢)　朴硝(各二錢)右爲末、取田螺洗淨、以水活過一夜、取水調前末、塗腫處、即愈、とあるを見ても、貝つ物いまぬを知べし、考ふるに、是は蘇沈良方の、治痘瘡無瘢の條に、瘡家(檢に、和阪伊賀子氏千之堂本、及び鮑氏知不足齋本僞に蒲に作れり、今楊氏六醴齋本に從へり、)不可食鷄鴨卵、食即時盲瞳子如卵色、其應如神、不可不戒也、　幻々新書の、痘疹受證面目門に、鷄雞鴨等卵、未有不損目者、蓋痘愈、宜數月不食、痘疹傳心錄に、戒恣食諸卵害目など見えて、くひて目しひとなるは、雞鴨等の卵なり、卵をふるくはカヒコといへり、(日本紀、風土記、萬葉集、遊仙窟、和名抄、類聚名義抄、字鏡集、平他字類抄、倭玉篇の卵、又日本靈異記の蠶、玉造小町壯衰書の鷄、類聚名義抄の殼、伊呂波字類抄、倭玉篇の蠶を皆カヒコとよめり、)さるを中昔より、かひともいひしかば、後には貝とあやまりたるにや、卵をカヒといひしは、忠見集に、すもりこも出にけるかと見る時はかひなき身さへうらやまれける、又能宣朝臣集に、物申につれなくのみ見ゆる女に、鳥の子をいつゝやるとてすにすめるみをわびつゝも鳥の子をいつかひ有と物をおもはむ、此外、後撰集、拾遺集、輔親卿集、蜻蛉日記、空穗物語、大和物語、古今六帖、源氏物語、保憲女集、金葉集、草根集等にあり、竹取物語のつばくらめのこやすがひも、燕卵なりと、河海に史記を引ていへり、近き頃のものには、攝津松鴎軒が廬記、貞德が油糟等に見えた

痘瘡

り、

〔續古事談〕五諸道　モガサト云病ハ、新羅國ヨリオコリタリ、筑紫ノ人ウヲカヒケル船、ハナレテ彼國ニツキテ、ソノ人ウツリヤミテキタレリケルトゾ、天平九年官符ニ、コノ病剰ニナラン時、ニラキヲ煮テ多クタクフベシトアリ、後ノ人カクシテシルシアリ、ソレヲ霍忠、熱氣ノホドタヒツメズ、熱氣サメテ後ナヲイムベシトイヒケリ、サレドクヒテオホクシルシアリトゾ、

〔塵袋抄十〕疱瘡トハモガサ也、順ガ和名ニハ皰瘡ト書ク、是亦疫癘也、本朝ニ疱瘡ヲ病初也、筑紫ノ者、魚ヲ賣リケル船、新羅國ニ逢テ、新羅國ニ著ク、其人移リ病ヲ歸リケルガ、次第五畿内ニ及ビ、帝都ニ流布シケル也、其時悉盡ヲ食テ平愈スル者多カリケレバ、明ル九年ノ官府ニ云、此病成剰時、悉盡ヲ斟ヂテ可多食云々、其後モ度々悉ヲ食者多ク驗シアリト云ヘリ、但霍忠ガ說ニハ、熱氣ノ間ニ可食、初熱醒テ後ハ可忌、然其熱醒テ食初ル人モ多ク直リケルト云々、又村上院御宇天曆五年辛亥、又京畿ニ大疫アリ、空也上人自カラ八尺ノ十一面ノ像ヲ刻ク、其法ヲ修テ、疫病卽止、是今六波羅密寺ノ本尊也、

〔叢桂偶記二〕痘瘡

痘瘡諸說、皆云、起於後漢時、而原于馬伏波征南陽行本虜瘡之事、而後漢書不記此事、當以出于肘居方爲證、肘後之書、雖經後人之手、猶爲古書、肘後方曰、比歲有病時行、仍發瘡頭面及身、須臾周匝、狀如火瘡、皆戴白漿、隨決隨生、不卽治、劇者多死、治得差後、瘡瘢紫黑、彌歲方滅、此惡毒之氣也、世人云、永徽四年、此瘡從西東流、遍於海中、煮葵菜、以蒜韲啖之、卽止、初患、急食之、少飯下菜亦得、以建武中於南陽擊虜所得、仍呼爲虜瘡、諸醫參詳作治、用之有效方、取好蜜通身上摩、亦可以蜜煎升麻、數余按、後世升麻葛根湯之所權輿也、多之、本邦痘瘡始天平七年乙亥時、醫不識其救法、公卿多斃於此病、嵯峨帝始有患痘之事、文德實錄曰、仁壽三年二月、京師及畿外、多患皰瘡、死者甚衆、天平九年及弘仁五年、有此瘡患、今年復不免此疾、

〔橘窓錄五〕我方痘瘡之患　聖武帝天平七年夏、初自筑紫來、大流行天下、

〔類聚符宣抄三〕疱瘡事

發年々

天平七年始發、然而甚微也、又云、天平九年云々、　延暦九年自天平八年至此年五十三年、　弘仁五年自延暦十年至此年廿五年、

仁壽三年自弘仁六年至此年卅八年、　元慶三年自仁壽四年至此年廿六年、　延喜十五年自元慶四年至此年卅六年、

天暦元年自延喜十六年至此年卅二年、　天延二年自天暦二年至此年廿七年、　正暦四年自天延三年至此年十九年、

寛仁四年自正暦五年至此年廿八年、　長元九年自寛仁五年至此年十六年、

〔續日本紀十二聖武〕天平七年八月丙午、大宰府言、管内諸國、疫瘡大發、百姓悉臥、今年之間、欲停貢調、許之、

閏十一月壬寅、是歳年頗不稔、自夏至冬、天下患豌豆瘡、俗曰裳瘡、夭死者多、　九年四月癸亥、大宰管内諸國、疫瘡時行、百姓多死、詔奉幣於部内諸社以祈禱焉、又賑恤貧疫之家、幷給湯藥療之、　六月甲辰朔、廢朝、以百官官人患疫也、　七月丁丑、賑給大倭、伊豆、若狹三國飢疫百姓、　壬午、賑給伊賀、駿河、長門三國疫飢之民、　十二月丙寅、是年春、疫瘡大發、初自筑紫來、經夏渉秋、公卿以下、天下百姓相繼没死、不可勝計、近代以來未之有也、

〔赤斑瘡辨考證一〕按に、疫瘡は、麻疹、疱瘡、水痘などの總名なり、疫は周禮春官占夢の條の注に、疫厲鬼也、劉熙釋名釋天部に、疫役也、言有鬼行疫也、說文に、疫民皆疾也、和名抄鬼魅類部に、蔡邕獨斷云、昔顓頊有三子、亡去而爲疫鬼、其一者居江水、是爲瘧鬼、和名衣也美乃加美、或於爾などみえて、時行病の名なり、こゝに疫瘡とあるは赤斑瘡の事をいひしなり、

〔賀茂保憲女家集〕この歌はあめのみかどの御時に、もがさといふものおこりて、やみける中に、かもうぢなるをんな、よろづの人におとれりけり、さる中に、たゞもがさをなむ、すぐれてやみける、かさのみにもあらず、おほくのやまひをぞしける、からうじてこの歌よりなん、よみがへりける、そのほど冬のはじめ、秋のをはりなりければ、草木もかせもやう〳〵かれもていくつ

れづれなるまゝに、めづらしきやまひなりとて、このかさのぞやみをかきおければ、やまひさるごとくによくなじ、みんひとゆゝしく、おもひぬべしとて、いさゝかいろにもいださず、〇中略もがさのさかりに、めをさへやみければ、まくらがみに、おもしろきもみぢをひとのおいためりければ、おもひあまりて、

くもりつゝ涙しぐるゝわがめにも猶もみぢばゝあかくみえけり

〔叢藝集 論一〕唐可學八〇中略

五醫道〇中略

昔者、聖武皇帝天平九年、天下疫疾流行、夏秋之間、參議藤原房前、及麻呂、左大臣武智麻呂、大宰帥宇合並薨、吁嗟哀哉、是時也醫道未精、致此夭札、愚竊歎之、是未嘗不嘆息矣、唐之醫道不可忽諸、

〔續日本紀 四十桓武〕延曆九年十二月辛酉、是年秋冬、京畿男女年三十已下者、悉發豌豆瘡、俗云裳瘡、臥病者多、其甚者死、天下諸國往々而在、

〔文德實錄 五〕仁壽三年二月庚寅、是月京師及畿外多患皰瘡、死者甚衆、天平九年及弘仁五年有此瘡患、今年復不免此疫也、　三月壬子、請名僧百口、於大極殿轉讀大般若經、限三日訖、攘災疫也、　丁巳、以穀倉院染藍、給京師患瘡者、　四月庚午、遣侍從從五位上島江王、神祇大副兼內藏頭從五位上中臣朝臣逸志等、向伊勢太神宮、請除災疫、　丙戌、詔曰、〇中略朕之不德、撫育乖方、憂惕之誠、罔知所濟、月令春夏、下寬大之令、頒德化之政、以順天意、以救災變、有司務修職任、欽奉時訓、罪疑從輕、賞疑從重、貴埋骨掩骼之仁、崇養老矜孤之德、其自今日昧爽以前、大辟以下、罪無輕重、未發覺、已發覺、未結正、已結正、繫囚見徒、咸皆赦除、但八虐、故殺、謀殺、私鑄錢、强竊二盜、常赦所不免者、不在赦例、令天下州郡、勿輸承和十年以往調庸未進、優復百姓、息當年傜十日、其疫病者、長吏親自巡視、便給醫藥、諸所賑贍、務令從速、庶展惻怛之旨、致感革於上玄、仁貸之風、謝凶札於中壤、

〔帝王編年記十三文德〕仁壽三年四月以後、疱瘡流行、人民疫死、故停賀茂祭、

〔文德實錄五〕仁壽三年五月庚子、詔十七箇寺、讀大般若經、限三日訖、攘災疫也、　壬寅、亦詔太宰府、於觀音彌勒兩寺幷四王院、香椎廟、管內國分寺、讀大般若經、　辛亥、詔美濃國、出穀二千一百斛、給患疱瘡者、　七月丁未、遣散位從五位上全世王、神祇大副從五位上中臣朝臣逸志、散位從五位下齋部宿禰伴主等、向伊勢太神宮、奉幣、謝災沴也、　九月辛丑、詔太宰府、出穀三万八千七百餘石、賑給管內患疱瘡者、

〔日本紀略一醍醐〕延喜十五年十月十六日癸卯、巳一點、於紫宸殿大庭、建禮門、朱雀門等三所、有大祓事、爲除疱瘡、又依仁壽三年、貞觀五年例也、又於仁壽殿、請智德名僧廿口、有御讀經事、戌剋於建禮門前、有鬼氣祭事、爲除疱瘡、日來主上不豫、民間疱瘡轉發、　廿六日癸丑、大赦天下、大辟以下悉赦除、犯八虐云々、常赦所不免者、不在此限、又延喜十年以往、調庸未進、在民身者咸從原免、又復天下百姓當年年怖、是依疱瘡流行之愁也、

〔扶桑略記二十三醍醐〕延喜十五年秋月、天下疱瘡、都鄙老少無一免者、

〔日本紀略一醍醐〕延喜十六年正月一日丙辰、止朝賀、依去年疱瘡之災也、　廿日、停內宴、依去年疱瘡也、

〔日本紀略三村上〕天曆元年六月、今月以後、疱瘡多發、人庶多斃、有童謠言、　八月十四日乙未、日來朱雀院中宮〇穩子、太政大臣〇忠平、左右大臣家、請名僧、或令轉讀大般若經、或令演說仁王經、依疱瘡事也、是日於建禮門前、修鬼氣祭、　十五日丙申、爲攘除疱瘡、於紫宸殿建禮門朱雀門三箇所、有大祓、去六月間、年卅以下男女煩小瘡、今月以後尤熾盛、其瘡爲體、或如粟、或如豆、去延喜十五年有此瘡、世俗號曰疱瘡云々、　十七日戊戌、請內印、是可攘除疱瘡、諸社奉幣、讀經官符給五畿七道諸國也、天皇上皇〇朱雀書共煩疱瘡給、　十九日庚子、賑給各〇各本白誤米百斛、鹽卅籠於東西京、是依疱瘡及赤痢事也、　九月五日丙辰、大赦、依疱瘡新也、　七日戊午、請名德僧百口於紫宸綾綺兩殿、限三箇日令轉讀仁王經、依

皰瘡之變也、

〔扶桑略記 二十五 村上〕天暦二年戊申、有皰瘡患、

〔日本紀略 六 圓融〕天延二年八月廿八日癸卯、於紫宸殿前庭建禮門朱雀門大祓、依天暦元年八月十五日例行之、是爲除皰瘡災也、　九月八日癸丑、奉幣伊勢以下十六社、依攘皰瘡災也、

〔帝王編年記 十七 圓融〕天延二年、八九月有疱瘡患、

〔百錬抄 四 圓融〕天延二年、今年天下有皰瘡之患、

〔扶桑略記 二十七 圓融〕天延二年、八九月間、有疱瘡疫、天下貴賤、夭亡者多矣、

〔榮花物語 二 花山〕ことし〈○天延二年〉はよの中にもがさといふものいできて、よもやまの人、上下やみのしるに、おほやけわたくし、いといみじきことゝおもへり、やむごとなき男女うせ給ふ、たぐひおほかりときこゆる中にも、前せつしやうどの〈○伊尹〉の前のせうしやう、〈○擧賢〉後せうしやう、〈○義孝〉おなじ日うちつゞきうせ給て、はゝきたのかた、あはれにいみじうおぼしなげくことを、よの中のあはれなることのためしには、いひのゝしりたり、

〔扶桑略記 二十七 一條〕正暦四年秋比、天下有皰瘡疫、

〔百錬抄 四 一條〕正暦四年、今年皰瘡流行、

〔本朝世紀〕正暦四年七月十七日癸卯、中納言藤原顯光卿參入、着左仗座、藏人召仰云、應有今年疱瘡之事、准天延□□之例、可有相撲召合并音樂之由等、召仰左右近衞府、　八月十一日丙寅、今日定考也、此度停止宴座、依左大臣薨也、午後内大臣參議藤原安親卿、着左仗座、被定臨時仁王會事、又此日被定、依先例疱瘡、南殿并建禮朱雀門等前、以廿一日可被行大祓事、　廿一日丙子、中納言源保光卿、參議藤原時光卿、參着左仗座、今日未一剋、依天變并疱瘡等事、於紫宸殿并建禮朱雀門三所、御祓之事、

〔日本紀略九一條〕正曆四年八月十一日丙寅、今日詔、大辟以下赦除、常赦所不免者不赦、又免調庸、復半佛、爲愼三合歲疱瘡之患也、　廿一日丙子、紫宸殿建禮門朱雀門大祓、依天變并疱瘡也、　廿八日癸未、仁王會、七八月間、有天台山有南門徒亂逆、又有疱瘡之患、

〔左經記〕寬仁四年三月廿一日壬申、近曾以來、上下之道俗男女年七八巳下者多病惱、稱裳瘡云々、或謂々有重惱云々、左大弁五男〈童〉今朝死去云々、

〔日本紀略十三後一條〕寬仁四年三月、此春人民患疱瘡、　四月廿二日癸卯、詔、大赦天下、大辟以下罪、無輕重悉以赦除、但犯八虐、故殺、謀殺、私鑄錢、强竊二盜、常赦所不免者、不赦、又免調庸傜役、依疱瘡疾疫事也、〇中略　今年自春患疱瘡、四月殊甚、

〔榮花物語十六もとのしづく〕はかなくとしもかへりぬ、〇寬仁四年　世中いまめかし、ことしはもがさといふ物おこりぬべしとて、つくしのかたにはふるきとしより、やみけりなどいふことききこゆれば、はじめやみけるよりのち、このとしごろになりにければ、はじめやまぬ人のみおほかりける世なれば、おほやけわたくしいとわりなく、おそろしき事におもひさわぎたり、〇中略　かくて、このもがさ京にきにたれば、やむ人々おほかり、〇中略　世の人たゞいまは、このもがさに事もおぼえぬさまなり、このもがさは、大貳〇惟憲　の御ともにつくしよりきたるとこそはいふめれ、あさましくさまざまにいみじうわづらひて、なくなるたぐひもおほかり、いみじうあはれなることおほかり、かゝるほどに、故式部きやうみや〇爲平　のよりさだのさひやうゑのかう、この三月廿よ日にけびいしべつたうかけ給つ、されどこの月ごろ心ちれいにもあらずおはしけるを、いかなるにかと發しわづらひて、この悦びもいまだ申給はざりけり、ゐん〇小一條　のにようご〇延子　うせ給にしのち、との〇顯光　のいとをしう心ぼそげにおはしければ、このはるほりかはどのにわたり給へれば、おとゞもすこし御けしきよくなりて、めやすかりつるに、かくなやみ給へば、いかに〳〵とおぼ

したり、うたてゆ丶しきころなれば、ほかへもやなどおぼせど、なほかくてすごし給ほどに、又もがささへねしてなやみ給へば、よもやまのくすしをあつめ、よるひるつくろはせ給へど、むげにあさましうたのみすくなき御ありさまなれば、べつたう亡し給つ丶くわんばくどの丶うへ〇頼通隆姫、具平親王女、のおほんをぢにおはすれば、よろづにとひきこえ給、ものなどおほくたてまつれさせ給、いみじきことゞもたび〳〵せさせ給へど、いとあべきほどにさへなりぬれば、あはれにふはそくおぼさる、六月九日ほうしになり給ぬ、

〔類聚符宣抄三〕詔、通賢群聖之道、玄徳動天、堯眉舜目之治、赤心加物、朕以庸昧、忝纂洪基、紫綱彌張、璽宸猶側之一面、刑獄無措、空慙周室之多年、每思賞罰之不明、唯懼咎徵之相示、頃者疱瘡作、災人庶無静、門戸多遭沈困之枕席、街巷間絶夭折之嫌懐、朕之薄徳、下民何辜、夫仁山者、無邪之圃也、而谷之林燃、貞恩波者、愈病之源也、上池之水譲術、宜施肆眚之仁恩、以消一天之災沴、今日昧爽以前、大辟以下、已發覺、未發覺、已結正、未結正、罪無輕重、悉以赦〇中略除、但犯八虐、故殺、謀殺、私鑄錢、强竊二盜、常赦所不免者、不在此限、又寛仁三年以往、調庸未進在民身者、咸從原免、又復天下百姓當年半倫、疾病者、長吏躬親巡検、特加優恤、令得安存、布告遐邇、明俾聞知、主者施行、

寛仁四年四月廿二日

〔日本紀略後一條十三〕万壽二年九月廿八日丁未、自夏及秋、天下患皰瘡、

〔扶桑略記後三條二十九〕延久四年七月六日、去六月以後、疱瘡流行、貴賤不免此厄、

〔仁和寺御傳〕大御室　性信〇中略

延久四壬子年月日、爲皇太子〇白河疱瘡御祈、修藥師法、有効驗、

〔水左記〕承保四年八月十六日癸巳、御前御心地同樣御座、後聞、今日公家依御體不豫并人民皰瘡事等、被行非常赦、上卿右衛門督、少内記江通國作詔文、大内記藤敦基、有故障不參仕者云々、　十七日

甲午、後聞、式部卿敦貫親王、日來煩疱瘡餘氣、薨逝、年卅九云々、　十九日丙申、後聞、公家依御體不豫幷人民疱瘡等、被奉幣廿二社、上卿右衞門督、少内記江通國、作宣命文、

〔榮花物語 四十 むらさき野〕そのとしもがさといふことおこりて、ことにわかき人などいみじうやむに、春宮〇實仁 おもくわづらはせ給て、應德二年十一月八日にうせさせ給ぬ、あさましくいみじう、ちかくはきこえぬことなりかし、

〔中右記〕寬治八年〇嘉保元年 正月十六日戊子、今夜子時許、陽明門院崩于鴨院、是依疱瘡也、御年八十二、　廿日壬辰、從去十一十二月、及此正月、世間有疱瘡聞、就中近日多夭命者云々、十七歲以下、小兒一人不殘歟、雖老者免先度者、復遇此病云々、　廿五日丁酉、從今日、於祇園寶前、有公家御祈、仁王講 僧三口 大般若御讀經、六口 是疱瘡御祈也、請僧等、仰本寺別當定秀被請也、藏人宗佐行事、不被仰公卿弁也、　十二月晦日、去年多天下自疱瘡、引及此春、

〔殿曆〕天仁二年四月十日甲申、昨日參院、次被仰云、もがさの料に、世人賀茂のみたらし河水をあむるよし人申者、仍予〇忠實 姬君中將に今日あむす、其儀先例湯をあむして、身をきよめて、次に件湯をあむして、頭をもあらはして、今日許きよまはらせてすへたり、

〔永昌記〕大治元年正月十七日癸未、今日依疱瘡、被行大赦、宗光草之、

〔本朝世紀〕康治二年五月六日壬戌、太上皇〇崇德 令煩疱瘡御云々、　十四日庚午、權中納言藤公敎卿參左仗、被行非常赦事、大內記藤令明草進詔書、依天下疱瘡流行事、幷臨時御祈也、御晝日畢、召中務丞平實重下給之、　十五日辛未、法皇〇鳥羽 御逆修結願也、又上皇御惱疱瘡之後、御邪氣相加、頗危急云々、　廿四日庚辰、自今夜主上〇近衞 有御疱瘡事、　廿五日辛巳、則見也、〇中略 無音樂幷插頭事、依疱瘡流行也、　廿七日癸未、主上御疱瘡、未令復尋常御、又待賢門院同令煩疱瘡給云々、　廿九日乙酉、於清涼殿、被行六十口御讀經、大般若 權大納言藤伊通卿參左仗、定日時幷僧名、右大弁源俊雅書定

文、依主上御疱瘡也、　六月廿四日己酉、三品雅仁親王室家夭亡、年二十八産後煩疱瘡之故云々、左相府養爲子、所配合親王也、

〔台記〕康治二年五月九日乙丑、北斗拜、四月分新院〇崇德御疱瘡、赤溫氣由承之、　十四日庚午、不他行、依疱瘡、遂公家御愼、有非常赦云々、　六月廿四日己酉、雅仁親王夫人薨、産後疱瘡、余哀傷、以不幸短命也、

〔百練抄八高倉〕安元元年三月五日、主上御疱瘡、近日流行天下、被行御祈等、此日有奇雲、天下可有驚事之由、泰親朝臣申上之、

〔顯廣王記〕安元三年〇治承元年二月廿四日甲子、依疱瘡天變、被立九社奉幣使了、伊勢顯廣王、中臣能隆、忌部友平、卜部雅業助業濟、八幡實綱卿、文官義實、賀茂家通卿、文官懷綱、松尾雅定卿、文官仲頼、平野實宗卿、文官清定、稻荷清通朝臣、春日周防守季能朝臣、日吉經家朝臣、祇園顯信朝臣、上卿大納言實房卿、右中弁經房朝臣、

〔玉海〕治承四年八月廿一日辛丑、早旦歸家、自今旦大將病惱、及巳剋疱瘡出遍身云々、仍召主稅頭定長女醫博士經基等令見之、共申疱瘡之由、〇中略云々、　廿六日丙午、大將疱瘡出調了、溫氣散了云々、爲悅不少、

〔吾妻鏡十二〕建久三年十二月廿三日辛酉、若公萬壽、此一兩日御不例、今日疱瘡出現給、此事都鄙殊盛、貴賤卑遍煩云云、

〔吾妻鏡十九〕承元二年二月三日癸卯、鶴岳宮御神樂如例、將軍家〇實朝依御疱瘡無御出、前大膳大夫廣元朝臣爲御使神拜、　十日庚戌、將軍家御疱瘡、頗令惱心神給、依之近國御家人等群參、　廿九日己巳、將軍家御平愈之間、有御沐浴、　三月三日壬申、鶴岳宮一切經會、將軍家依疱瘡御餘氣無御出、

五年〇建暦元年二月廿二日乙巳、將軍家御參鶴岳宮、朝光役御劍、去承元二年已來、依令憚御疱瘡之

跡、給、無御出、今日始有此儀、

〔百錬抄 十三 後堀河〕安貞元年（嘉祿三年十月廿日改元、依疱瘡也、）

○今按ズルニ、此ノ時ノ疱瘡、帝王編年記ニハ、赤疱瘡トアリ、

〔吾妻鏡 三十〕嘉禎元年十月廿八日丁巳、自去夜主上疱瘡御不豫、凡此事洛陽流布、諸人不免云云、十二月十八日丙午、將軍家（○藤原賴經）御不例事、御疱瘡有出現氣之由、良基朝臣申之、今夜又始行御祈禱等、及子刻平左衛門尉盛綱、爲武州御使參御所中云、每日可被修御招魂祭之由云云、仍先七箇夜可奉仕之旨、被仰國繼云云、

〔吾妻鏡 三十一〕嘉禎二年正月十七日乙亥、將軍家依御疱瘡餘氣、御股御膝腫物（被押傾使）廿餘箇處令出給、今日女房石山局、召良基朝臣、可爲何樣御事哉之由被仰合、不可有殊御事云云、聊奉加療治、

〔百錬抄 十五 後嵯峨〕寬元元年五月十九日甲午、奉幣南社（石賞）、被謝申行幸延引事、近日疱瘡滋蔓、小兒等有此事云々、

〔後愚昧記〕康安元年正月十八日、新院（○光嚴）御惱、爲御疱瘡由、醫師和氣廣成朝臣定申、　廿六日、新院御惱增氣、施藥院使篤永朝臣、以神針奉破瘡間、內攻云、

〔皇年代私記〕北朝康安元年（○南朝正平十六年）三月廿九日改元、依疾疫、疱瘡、天災、兵革等也、

文中三年、自正月至二月、疱瘡流行、

〔後深心院關白記〕永和三年十月廿一日丙寅、此兩三日、御不豫云々、篤直卿、賴顯、秉康、廣成等朝臣、應召御疱瘡序分歟之由、篤直申之云々、　十一月廿一日丙申、禁裏御疱瘡已御減之間、御湯可爲近日之由御沙汰、然而日次事、猶不決云々、

〔立川寺年代記〕享德元年壬申、此年京洛小兒イモヤミシテ多死、同北陸道癸酉（翌年）マデ小兒イモヤミシテ多死、

（皇年代私記）享德三年、天下疱瘡流行、
（親長卿記）文明三年七月廿一日、主上（後土御門）內々有御疱氣、大略流風疱瘡歟、
（妙法寺記）大永二年、此年小童瘡ヲヤム、又イナスリヲヤム、大概ハツル也、
天文六年、此歲童子共瘡ヲ致シ候事限ナシ、十九年、是春小童ドモ疱ヲヤミ候而、皆々死コト不及言說、下吉田計ニテ五十人許死申候、餘リノコトニ書付申候、
（時慶卿記）慶長十年十二月十二日、小捨煩由申、出物カト也、十四日、小捨疱瘡出、爲見廻、强飯小瓶遣候、疫癘ト沙汰ヲ治醫ニ遣候、十五日、小捨瘡出物能由申候、
（慶長日件錄二）慶長十一年正月一日庚午、嫡男鶴光丸、自昨日疱瘡、度々令見舞、仍全齋好庵等召遣、令診脈候、一藥被與、
（當代記三）慶長十二丁未、舊冬ヨリ大御所幼息長福主（○家康子賴宣）疱瘡煩、長福主疱瘡平愈之間、廿日（○正月）ニ酒湯浴給フ、
（相良家年代記）慶長十二丁未六月五日、夕立ニアラレフル、春夏ホウサウハヤル、惣テ諸病ニ人多死ヌ、
（義演准后日記）慶長十三年二月廿四日、秀賴公疱瘡御沙汰、御祈禱可申由、大藏卿局ヨリ文來、昨日日付也、辰刻來了、布施銀子卅枚進給之由也、養源院取次、未刻歟、重而大坂ヨリ銀子持來、辰刻歟、撫物ニ左近差遣了、普賢延命護摩、初夜開白、廿七日、普賢延命護摩、後夜日中兩座相續、天供同兩座、天明時分ニ修畢、大般若轉讀十四口、導師予、銀子三枚爲布施遣之、札幷百座卷數大坂ヘ進之、使大藏卿法橋、三月十三日、秀賴公御疱瘡驗、今日御湯被召之由、仍爲祈念大般若轉讀、經衆八口、松橋法印等導師予、御札持遣之、
（敎令類纂初集十六）慶安三庚寅年十月四日

疱瘡麻疹數いも遠慮之覺

一手前ニ抱置候孫子親類、疱瘡數いも相煩候ニ付、三度湯かけ候ハヽ御番に出し可申候、但屋敷之内を借り罷在候親類縁者、右之煩有之時、構を仕切居住候ハヽ不苦候、御番に出し可申候事、

一自分疱瘡相煩候ハヽ、相見へ候内ゟ七十五日過候ハヽ御番ニ可出事、

御目見之者、百日除候事、

一自身疹數いも相煩候ハヽ、見へ候日ゟ三十五日を過候ハヽ御番ニ出し可申事、

御目見之者ハ、七十五日除可申候事、

一疱瘡相煩候看病人、見へ候日ゟ五十日御目見不仕候ニ付、御供番、右之日數除申候事、

勿論當番之節、御目見不仕事、

一疹數いも相煩候看病人、見へ候日ゟ三十五日御目見不仕候ニ付而、御供番之節、御目見不仕候

慶安三庚寅年十一月四日

延寶八庚申年

疱瘡疹水痘遠慮之事

一疱瘡病人は、見へ候日ゟ三十五日過候て罷出、御目見可仕候、

一看病人は、三番湯掛罷出、御目見可仕候、

一病人相果候共忌明候而罷出、御目見可仕候、

一疹病人は三番湯かけ罷出、御目見可仕候、

一看病人、右同斷、

一病人相果候ハヽ、疱瘡同前、

一水痘疹同前

右者御側之面々計、外様之面々者御構無之、先日申通候、以上、

十一月廿八日

〔教令類纂初集十六〕正徳四甲午年十一月

覺

一疱瘡麻疹煩候者、死候時者、看病之斷ヲ申立、病人ニ付罷在候者は、病人死候日ゟ廿日過候迄者、御目通江罷出候儀差扣可申候、忌掛候者は、右日數の内ニ、忌明候ハヽ登城いたし、御番をも可相勤候、御目通江は、右之日數過候迄は差扣可申事、○中略

午十一月

右之通可被相心得候、以上、

〔幕朝故事談〕御側の時、松平肥後守疱瘡の時、御直の御指圖にて、村上養順被仰付、参候節不開門、依之村上乘込す、肥後守樣より說之事、

〔教令類纂二集四十〕元文五庚申年正月廿九日

板倉佐渡守殿御渡

疱瘡はやり候ニ付、陰陽二血丸可被下候間、布衣以上御目見以上之者、望之者有之候ハヽ、河野仙壽院栗本瑞見方迄相願、拜領可仕候、尤勤候者ハ、於御城仙壽院瑞見へ申達候共可仕候、

但未疱瘡不致子共大勢有之、餘計も拜領致し度ものは、子共何人と申候、兩人方へ申達可相願候、

右之趣、向々江可被相達置候、

正月

延享元甲子年正月廿一日

本多伊豫守殿御渡

疱瘡はやり候ニ付、陰陽二血丸可被下候間、御目見以上之面々望之者有之候ハヽ、元文五申年之通、粟本瑞見方迄相願、拜領可仕候、尤出合候者ハ、於御城瑞見へ申達、頂戴致し候共可仕候、

子正月

瑞見方ニ二血丸、願ニ出候節、書付持參候事、

御役名

何之誰

御番名何之誰組支配歟

何之誰

〔半日閑話十二〕明和八年辛卯春正月

去年多より疱瘡大ニ流行す、此春わきて甚し、小兒多く死す、

〔天保集成絲綸錄七十九〕文政三辰年二月

寺社奉行江

右大將樣〇德川家慶被遊御疱瘡候ニ付、御祈禱料として從右大將樣伊勢兩宮江白銀三十枚宛、內宮江御供料黃金壹枚、外宮江大神樂料黃金壹枚被遣候、春木大夫、山本大夫江可被相渡候、白銀黃金は西丸御納戶に而可被請取候、御札等差上候儀者、先格之通仕候樣可被達候、

二月

文政三辰年十月

寺社奉行江

栃伽院權僧正

觀理院權僧正
樹下日向

右大將樣御疱瘡御快然被遊候爲御祝儀、明廿七日御能被仰付候間、五ツ時御城江罷出見物仕候樣可被申渡候、

十月廿六日

送疱瘡神

〔親長卿記〕文明三年後八月六日、聊送疱瘡之暴神之由、赤尾公勘事之由、女曲舞之、不可說、見所々有囃物、毎日事也、七日、今日町送疱瘡之暴神、有囃物、室町殿御前、北小路殿御前等可渡之、或仁構棧敷招請之間、罷向了、見物不相應也、種々有囃物云々、

○疱瘡神ノ事ハ、神祇部神祇總載篇ニ在リ、

〔古事記傳十〕伯耆國人の云く、本國八橋郡東積村に、豊大明神と云あり、須佐之男命を祭ると云、同村に大森大明神と云あり、大穴持命を祭ると云り、件兩社の神主細谷大和と云、さてその豊大明神を、疱瘡の守神なりと云て、そのわたりの諸人あふぎ尊みて、小兒の疱瘡の輕からむことを祈る、まづ初に此願を立るときに、此社に詣て、竹皮の笠を一蓋借て歸て、家内に齋ひ置て、その兒疱瘡をことなくまをへぬれば、賽に同じさまの笠を今一蓋添て、初のと共に、かの社に返し納奉る、此笠どもはみな、神の御前に積置を、又後に新かくる者は、一蓋づゝ借て歸るなり、

諸國無痘

〔叢桂偶記二〕痘瘡○中略五雜組曰、韃靼種生無痘疹、以不食鹽醋故也、近聞其與中國互市、間亦學中國飲食、遂時一有之、彼人即舁置深谷中、任其生死、絶跡不敢省視矣、一云、不食猪肉故、嘗西域聞見錄曰、小兒亦出痘、輕而易過、百中或損一、亦從無回子麻面者、倘出痘者多、則遷於深山極塞之地、可免、克○原晶克扶、其症之發不在食餌、五島、八丈島、亦無此病、蓋其風土爲然、西肥鮮此患、人士未染者、不能遠離其地、含使命四方、或于役

江戶、畫足跡內、與彼蕃僑一般、故聞長崎及諸方痘瘡流行、則或往其地、觸其傳染、或行種痘法而歸、翁加里亞國亦無痘、行商諸異域者、先行種痘法而後航海、明和年間、遷八丈民於下野芳賀郡、居頃之而老壯患痘、寬政八年丙辰五月三日、常陸那珂湊、一船漂著、所乘十一人、問之、曰、伊豆三宅島舟也、去年七月廿二日、載流徙、送八丈島、十月還島、今年四月發島、遇西風、至于此、當日撿之告官、令吏賜糧食、內有八丈島民三人、曰八丈島自古無痘瘡、方今一般流行、驚于此病者日多一日、小民無智、以保一日之命、爲幸、奔走竄伏、壓山入谷、避之猶寇敵、耕稼漁樵、一時廢業、恐令公田赤地、村甲伍老、入山敎諭、以痘異未險、惟死之懼、所保結官綱、染絲既成、織女寡山、或臥枕、無紡績者、恐致稽遲、因報知之、具狀以聞、本島之例、不經八十八夜、則不能渡海、畫避風濤之災也、予靈不及待之、故託三宅島舟、解纜、果遇暴風、漂流于此、因問其詳、曰、寬政乙卯九月廿七日、八丈島船自伊豆歸、所乘三根村民於船中得病、十月三日開身發紅、不知何病、醫議曰、痘瘡也、本島從來無此病、今有此症、恐傳染外人、乃區壹里外、構小舍置之、終以不起、延及其家人隣側、先是天明年間、島內樫立村痘瘡流行、死者甚多、以故人心益不安、三根村外十里斷路禁往來、使樫立村往年患痘者役使之、島吏撫三根村看護之、死者不止、小民棄家携妻子、遷逃山中、無幾支村稻葉里發痘、島吏令病者悉送之本村防之、日後患者比々相屬、不能又送之、其死者多係老壯、如幼少者其病輕、三根村男女千四百餘口、竄山者二百餘人、罹患者千二百人、死者四百六十人、末吉樫立二村、與三根村隔山、故禁村民不得相交、寄食最多、樫立村有一人罹患者、遠遷之里外、往年死于痘者三百餘人、今年病者皆是幼童、以故死者少、樫立村男女九百餘口、患者百三人、死者二十九人、末吉村去年臘月一人得痘、併其未發痘之時、至其家者、遷之居里外、不得與村人相交會、人人欲棄家避山中、盡驗之、無幾可支數日、看仍敎諭就農桑漁樵、至今年正月、比屋患之、末吉村男女八百餘口、皆逃去山中、患者五十五人、死者十五人、大賀鄉預防之、禁村民與他村往來、審像季冬有一人發痘者、遠遷之三根村、鄉中畫怖、畫入山中、其得免痘死、亦不得免餓死、里正等招諭就畫業、無一人歸

麻疹

者、逃山中者得痊、又令遷之三根村、無幾患者相次、不暇悉遷之、男女千八百餘口、患者百二十六人、死者四十七人、中之郷不與痘村相通、嚴防之、至今年早春一人發痘、遷之里外、處草舍、敎郷中勤產業、又一人得痘、郷人謂不入山、則不能免與死于痘、寧死于餓、一時騷亂、皆入山中、不日山中發痘者多矣、仍有稍々歸家者、男女千餘口、患者四十人、死者十三人、小島令禁渡海、故無痘疾、小島民來寓三根村者二人、罹災死、青島往年地中出火、焼燬後八丈人遷居墾田、島人預防痘、雖然亦終不能免、男女百五十餘口、患者十九人、死者十三人、

〔橘庵漫筆 五〕痘瘡は本朝往古なかりしを、筑紫より流行來れりと傳紀に詳なり、これが論はまばらく國、いづれも當れり、壹せる故なり、然ども其の初筑紫より流行すといへども、壹岐の國、肥後の天草地續の處は、肥前の大村領などは、昔より疱瘡をしらず、然といへども、遠近伊勢參宮などするとき、他國に疱瘡流行する期に行合すれば、夫に感じて痘を病なり、左有ときは、同行の連これを恐れて、路傍に打捨行とき、病者旅宿を求保養するなり、類族合壁の者といへども、捨置事如斯し、殘忍なる樣なれど、誤て國に歸るときは、合壁より隣村に傳染し、蔓敷ときは國中に流行す、然れば容易痘根絕がたく、大にくるしむなり、予が類族、壹州の岡丸をす、故て目前見る處なり、是胎毒に依や、先天の欲火によるや、他國の水土に感せし者、國中に充るは何んぞや、其所に於て一國一郷痘を知らざるは何ぞや、謝氏の說も又宜なり、

〔運歩色葉集 波〕風豆瘡(ハシカ)

〔倭訓栞 中編十九 波〕はしか

麻疹をいひ、麥の芒刺をいふ、ともにいら〳〵として苛酷なる義也、下學集に稍をよめるは芒刺の意也、麻疹を稍疹ともいへり、羅浮子云、細粟如麻者呼爲麻也、國史には赤斑瘡とみゆ、

〔痘科辨要 七〕麻疹

麻疹、一名膚疹、一名糠疹、一名麩疹、一名麸疹、一名痳子、一名疹子、一名赤瘡、〈略〉○中痳、麻如麻、疹如沙、但大小不同耳、所謂痘疹、麻疹、痧疹、風疹、隱疹之屬、蓋指初出赤點、皆謂之疹、疹與痳古通用、

〔日本紀略十一〕長德四年七月二日戊午、今月天下衆庶煩疱瘡、世號之稻目瘡、又號赤疱瘡、

〔玉勝間四〕あかもがさ

日本紀略云、長德四年七月、天下衆庶煩疱瘡、世號之稻目瘡、〈略〉○中稻目瘡と名けたるは、蘇我稻目大臣の事を思ひてなるべし、書紀欽明御卷十三年に、十四年天皇與大連卒患於瘡云々、又發瘡死者充盈於國、其患瘡者言身如被燒被打被摧、啼泣而死、老少竊相謂曰、是燒佛像之罪矣とあるも、あかもがさにやありけむ、〈略〉○中赤もがさは、今の世にはしかといふ瘡也、

〔隨意錄五〕麻疹之患、則一條帝長德四年夏初、此瘡流行、國史稱之赤斑瘡、〈方言阿加毛加左〉西村玄周引數證云、赤斑瘡之爲麻疹也、不容疑矣、

〔赤斑瘡辨嗣要〕赤斑瘡異名

赤斑瘡〈類聚符宣抄、皇代記、宣胤卿記抄〉〈醫心方〉〈小右記、拾芥抄〉〈山槐記、萬安方〉〈扶桑略記、頓醫抄〉〈日本紀略、百錬抄、社寺、帝王編年記、闕、東寺、百錬抄〉

〈宣胤卿記、類聚大補任、歷代皇紀〉赤斑之瘡〈書言字考〉赤斑〈書言字考〉赤疱瘡〈扶桑略記、類聚抄、略、中右記、日本紀略、皇代記〉百

〈歷代皇紀、歷代皇紀、續史愚抄〉大疱瘡〈歷代皇紀〉赤瘡〈アカモガサ〉〈中右記〉赤疹〈萬安方、倭漢合運、永代新編倭漢合運圖〉赤裳瘡〈アカモガサ〉

〈左經記、妙法寺記、續左丞抄〉麻疹〈ハシカ〉〈醫學正傳、天〉麻豆瘡〈ハシカ〉〈萬安方、頓醫抄〉麻子瘡〈一代要記、拾芥抄〉疹〈ハシカ〉〈萬安方、廬山〉

〈文集、寶藏、類聚〉瘡疹〈ハシカ〉〈萬安方、醫學入門、萬安方、醫學天正記〉疹〈ハシカ〉瘡〈頓醫抄〉疹子〈萬安方〉細疹〈頓醫抄〉稻目〈イナメ〉

瘡〈モガサ〉〈日本紀略〉疹〈ハシカ〉〈日本紀略、義門記〉風豆瘡〈ハシカ〉〈醫學質要、實色集〉麸瘡〈ハシカ〉〈萬安方、頓醫抄〉膚瘡〈頓醫抄〉あかきかさ〈榮花物語〉

あかゞさ〈榮花物語〉あかもがさ〈榮花物語〉はしか〈日記、類聚抄、運歩色葉集、節用集、明應、多門院日記、後奈良院眞〉

記載賣

〔赤斑瘡辨翻要〕赤斑瘡誤名

世俗誤名者、誤以₂疱瘡之稱₁、爲₂麻疹之名₁也、

斑瘡〔[illegible]〕　疱〔[illegible]〕　疱瘡〔日本紀略 [illegible]〕　疱瘡〔[illegible] 日本紀略 山槐記 [illegible]〕

〔左經記 中右記 [illegible] 文德實錄 [illegible] 日本紀略 一代要記 [illegible] 皇年代記 [illegible]〕

〔[illegible] もがさ [illegible]〕

〔內科秘錄十三〕小兒麻疹

麻疹ハ吾郷黨戸〇本ヨリ遠起ルモノニ非ズ、麻疹ノ流行ハ古來ヨリ何時ニテモ南方ヨリ起リテ、漸次ニ北方ヘ及ブモノナリ、九州ヨリ中國ニ至リ、中國ヨリ京攝ニ至ルモノユヱ、前日ニ沙汰ノアリテ來ルモノナレバ、醫者ハ勿論素人ニテモ、一目シテ麻疹ナルコトヲ知ルベシ、決シテ吾郷黨ヨリ卒ニ起ルモノニ非ズ、凡ソ流行病ノ大ニ行ハルヽハ麻疹モ限ラズ、南方ニ起リテ北方ニ蔓延スルモノナリ、其七風、琉球風ノ類モ皆南方ヨリ北方ヘ行ハレタリ、特リ邪氣ノミニ非ズ、陽氣ノ起ルモ南ニ始テ北ニ至ルナリ、庭前ノ草木ヲ熟視スルニ、枝ノ出テ芽ノ生ズルモ、南ハ先ニシテ北ハ後ルヽナリ、

〔救瘟袖暦〕近來流行疫ノ病後ニ疹ヲ發セルハ、痘麻ノ如キ一種ノ疹ナルベシ、千金方ニ小兒十蒸八變シテ人トナルコトヲイヘリ、其狀痘序ノ如シト見ユ、是レ隋ヨリ唐ニ及テノコトナリ、ソレヨリ漸々ニ痘瘡世ニ行ハル、續テ麻疹世ニ出テ、水痘モ世ニ出タリ、此ヲ以テ見ルニ、痘麻ノ世ニ出ベキ根基ハ、上古ヨリ具足セルナルベシ、サテ今ノ小兒ニ變蒸アルコトナシ、チエホトリト謂スレド、變蒸ニ似タル者ヲ見ズ、思フニ痘麻世ニ出ベキ漸ニ變蒸アリ、痘麻世ニ出デ流行ノ疫氣ニ感ジテ、一生一次ニ胎毒ヲ發洩シ盡ス、故ニ變蒸ナキナルベシ、近來ノ疹疫モ亦一種ノ痘麻ノ

如キモノ世ニ出ベキ瀬ナラン、疱瘡ノ世ニ出ベキ根基ハ既ニ上古ニ具セリ、

〔斷毒論 天〕瘡源○中略

本邦天平延暦之疱毒、隔數十年、亦非天時之令邪之差、以一齊流行竭海内之人故也、方今瘡毒之行、傳染之勢、急於疱、然非其毒暴於唐山、非天時令邪異於唐山、是亦人事之所使也、何則疱者、嬰兒之患、瘡者多在壯年、故逆旅染病者、旬日行程、傳於千里之外、未過半歳、流布于海内、嘗竭其人而後能、又隔數年、傳來海外之毒氣、則復作海内之巨害、故史之所記、今之所覩、莫不必從西海流東海、是以其流行遲者十餘年、遲者數十年、其期如存如亡、若夫萬壽承暦之際、隔五十三年、亦非天時令邪之所使、幸不傳外國流行之毒也、以何證之、享和癸亥年○三之瘡毒、豆之八丈島獨免焉、是島以有流刑之徒、嚴禁舟楫之往來、是故不傳本邦之毒也、後世若傳之、則與萬壽承暦之際何以異邪、是卽所以謂傳染之疾在人事、而不因天時也、嗟備此毒行、絶世嗣、殞骨肉、夭札之夥、非天行疫疾之可比者也、雖然沴氣有形、一種之傳染、非難避疾、避則必免、不避則罹、

〔拾芥抄 下末〕療治疱瘡方 見天平官符、天平九年六月廿六日下諸國官符、○中略

傷人 乃 胄 仁 此七字可書之、疱子瘡之種我作云々、

〔類聚符宣抄 三〕太政官符、東海東山北陸山陰山陽南海等道諸國司、

合臥疫之日、治身及禁食物等事漆條、

一凡是疫病、名赤斑瘡、初發之時、既似瘧疾、未出前臥床之苦、或三四日、或五六日、瘡出之間、亦經三四日、支體府藏大熱如燒、當是之時、欲飮冷水、固忍莫飮、瘡又欲愈、熱氣漸息、痢患更發、早不療治、遂成血痢、痢發之間、或前或後、無有定時、其共發之病、亦有四種、或咳嗽、志波不岐、或嘔逆、多麻比、或吐血、或鼻血、此等之中、痢是最急、宜知此意、能勤救治、○中略

以前四月以來、京及畿内、悉臥疫病、多有死亡、明知諸國佰姓、亦遭此患、仍條件狀國傳送之、至宜寫取、

印差部司主帳已上一人、宛使、早速向所、無行留滯、其國司巡行部内、告示百姓、若無粥饘等料者、國量宜賑給官物、具狀申送、今便以官印印之、符到奉行、

正四位下行右大弁紀朝臣〇男人　　從六位下守右大史勳十一等壬生使主

天平九年六月廿六日、

〇按ズルニ、此宣符ノ病狀、麻疹ニシテ痘瘡ニアラザル由、太田原、及ビ歷代弘賢ノ說アリ、說ハ載セタ醫術篇三、痘科治療條ニ引ク豊姓亭醫事小言ニ在レバ、宜シク參看スベシ、

〔帝王編年記十七一條〕長德元年六七月、赤斑瘡上下老女煩之、

〔榮花物語五浦々のわかれ〕ことし〇長德元年れいのもがさにはあらで、いとあかきがさのこまかなる、いできて、おいたるわかき、上下わかず、これをやみのゝしりて、やがていたづらになるたぐひもあるべし、これをおほやけわたくし、いまのものなげきにして、まづ心なし、

〔日本紀略十一條〕長德四年十二月廿九日甲寅、今年天下自夏至冬疫瘡遍發、六七月間、京師男女死者甚多、下人不死、四位以下人妻最甚、謂之赤斑瘡、始自主上至于庶人、上下老少無免此瘡、只前信濃守佐伯公行不患、

〔扶桑略記二十七一條〕長德四年、是年自夏至冬、疫瘡遍發、六七月間、京師男女死者甚多、下人不死、四位已下人妻最甚、外國不死、世謂之赤斑瘡、始自天皇、至于庶人、貴賤老少、緇素男女、無一免此瘡者、但前信濃守公行獨不患之、

〔百練抄四一條〕長德四年、今年自夏至冬、斑瘡流行、死亡者多、古老未見知今年者、

〇麻疹考ニ云ク、日本紀略ニ疱瘡ヲ煩ト見エタルハ、麻疹ト疱瘡ノ差別ヲシラズシテ書シモノナリ、扶桑略記ニハ、赤斑瘡ト書シ、百練抄ニハ斑瘡ト書セリ

〔扶桑略記二十八後一條〕萬壽二年、自夏至秋季、有赤疱瘡、

〔左經記〕萬壽二年七月廿二日壬寅、始自今日、以五口僧於永香殿、五十ヶ日、被轉讀大般若經、余爲行事參入、事了退出、近來天下道俗男女、不論老少、皆赤裳瘡之由云々、仍所被行也、

〔小右記〕萬壽二年七月廿九日己酉、春宮大夫賴宗使左衞門尉顯輔訪、夜部父近事、藤宰相廣業來謝夜前不來之事、又云、從昨夜侍赤斑瘡序病、今日瘡出、仍止修法加持、　八月十二日辛酉、宰相兩度來、右兵衞佐來、兩人請謁、臨夜漏、主上惱御赤斑瘡云々、未及披露、御傍親卿相皆觸穢、　十三日壬戌、白米和布黄瓜等給悲田、先令問人數三十餘人、令申主、給物時多有未知之者、仍相計其程、令加給、以堂頭得命師、爲使、左中弁經賴消息云、主上自昨惱御赤斑瘡、瘡所々出御、御惱體不重者、世間觸穢交來、乙丙間未決定、大略乙歟、仍不能參內、　十四日癸亥、左頭中將公成近曾煩赤斑瘡云々、大虛言歟、近日重煩赤瘡云々、　廿九日戊寅、呼四位侍從經任、訪大納言齊信、新中納言長家、大納言報云、中納言室家重煩赤斑瘡、僅平癒、不經幾日、未及其期、七月產臥、赤瘡疾之以來、水漿不通、日夜爲邪氣被取入、不可敢存、悲歎之聞、今有此消息者、經任云、痢病只止、万死一生、

〔榮花物語二十五みねの月〕かくいふほどに、ことし〇萬壽二年はあかもがさといふものいできて、上中下わかず、やみのゝしるに、はじめのたびやまぬ人の、このたびやむなりけり、內〇後一條東宮〇後朱雀も中ぐう〇威子も、かんのとの〇嬉子などみなやませ給ふべき御としどもにておはしませば、いとおそろしう、いかに〳〵とおぼしめさる、〇中略よろづよりもかんのとの、このあかもがさいでさせ給て、いとくるしうおぼしめしたりとて、との〇道長にはのゝしりたちて、いみじくおぼしあはてさせ給、〇中略東宮〇後朱雀うちにはたゞけしきばかりにておこたらせ給てけり、このかんのとのは、この月などにこそはさおはしますべきに、いと〳〵おそろしき御ことなりとなげかせ給に、御もがさいとおほくいでさせ給て、たいらかにおはしませど、日ごろくるしうおはされて、いとたへがたけなる御けしきになりつれど、つごもりにはおこたらせ給ぬれば、よにうれしきことにおぼ

しよろこびたり、されどまだほどもなければ、御ゆなどもなし、〇中略中なごんどの〇長家のきたのかた〇斉信女も月ころだにもおはせざりければ、おりあしきかさをいかに〳〵と、大なごんどの〇斉信もおぼしなげき、中なごんもいかにとおぼしつるに、月ごろいみじうはそりやせ、ありし人にもあらぬ御ありさまをぞ、いかにおそろしくて、さま〴〵の御いのりをえつくさせ給める、かんのとの〻御かさかれさせ給つれど、御もの〻けのけしきのいとおそろしくて、まだ御ゆもなし、

〔松屋筆記十〕あめのみかど丼瘡ぞやみ

この榮花に、あかもがさといへるは、麻疹の事にて、今いふはしかなり、ぞやみは今俗に序病といひ、又葉がぞになりてなどもいへり、序の字音によれる詞也、

〔百錬抄五白河〕承暦元年、今年上自后宮大臣、下至庶人、皆煩赤斑瘡、親王公卿巳下逝去者多、權右中辨師賢一人免此難、

〔皇年代略記白河〕承暦元年丁巳、十一月十七日改元、依疱瘡旱魃也、

〔赤斑瘡辨考證上〕按に、いづれも承暦元年赤斑瘡流行の時の事にて、疱瘡と書るは、れいの通用なり、

〔扶桑略記三十白河〕承保四年八月六日癸未、今上第一皇子敦文親王薨、年僅四歲、上自一人、下至庶人、莫不患赤斑瘡矣、親王公卿五位巳上、逝去之者多矣、

〔榮花物語三十九布引の瀧〕としかはりぬれば、承保四年、〇承暦元年といふ、〇中略四五月ばかりより、あかもがさといふこと出きて、世の人やむなど聞ゆるに、六七月になりては、いみじうやみまさりて、のこるなくきこゆ、五十三年にいできたれば、おいたるわかきとなく、おやこもわかず、ひとたびにやみければ、おきたる人すくなくありける、六七十の人は、人のもとにもすくなければ、いといみじくなんありける、むかしなんか〻るもがさいできたりける、かんのとの〇殿のうせさせ給ひし

おりは、いとかくはあらざりけり、三百年ばかりになりたるになんかゝりける、秋ふかくなりては、よき人々やませ給、うち(〇白河)中ぐう(〇賢子)みやたちくわんばくどの、うへ(〇師實室麗子)大將殿(〇師通)などみなおなじほど、すこしうちすがひなどしていでさせ給へば、御いのりかずしらず、しきぶきやうみや(〇敦賢)うせさせ給ぬ、御むすめにおはしませば、齋宮(〇淳子)おりさせ給ぬ、八月に故右おほとの(〇頼宗)の御子、ほりかは中なごん(〇頼宗子能季)右京大夫みちいへ、ひやうゑのすけこれざね、藏人いへざねなくなりぬ、中なごんひやうゑのすけは、う・もなくなり給ぬ、あさましきよにぞ、たじまのかみたかふさ、とうぐう亮經重などなくなりぬ、民部卿(〇俊家)のきたのかた、たじまのかみのむすめ、たうぐう亮のきたのかたなど、おほかたあさましきころなり、すき／＼て、うち(〇白河)の一のみや(〇敦文)御もがさのなごりなはえおこたらせ給はで、八月六日つゐにうせさせ給ぬ、たれもたれもおぼしなげかせ給ことかぎりなし、うちにも、との(〇師實)にも、いふかたなくなげかせ給、大なごんどの(〇師通)などいかなる御こゝろのうちなりけん、

〔百練抄五白河〕承曆元年、今年上自后宮大臣、下至庶人、皆煩赤斑瘡、親王公卿已下逝去者多、權右中辨師賢一人免此難、敦賢敦文兩親王依疱瘡薨、

〔中右記〕寛治八年(〇嘉保元年)十二月晦日、去年冬天下自疱瘡引及此春、又今年秋冬赤疱瘡、可云凶年歟、仍改元、

〔皇年代略記堀河〕嘉保元年甲戌、十二ノ十五日壬午、改元、依疱瘡也、

〔赤斑瘡辨考證五〕按に、嘉保元年赤斑瘡流行せし時の事をいへるなり、

〔百練抄五鳥羽〕永久元年正月廿五日、近日赤斑瘡流布天下、

〔皇年代略記鳥羽〕永久元年癸巳、七月十三日辛卯改元、依天變兵革疾疫也、

〔赤斑瘡辨考證五〕按に、疾疫とあるは概名にて、永久元年赤疱瘡流行の事をいへるなり、

〔皇年代略記 安德〕大治元年丙午、正月廿二日戊子改元、依疱瘡也、

〔赤斑瘡辨考證 上〕按に、公卿補任にも疱瘡と書たれど、山槐記に赤斑瘡とあるによるべし、

〔台記〕康治二年六月廿九日甲寅、季成告送云、入道殿、去廿六日、廿八日、兩度依女房疱瘡出、午以後甚重、大略云、二歲令疾赤疱瘡給事有之如何、予云、少人多似此瘡者疑非、

〔百錬抄 十一 土御門〕建永元年 元久三年四月廿七日改元、依赤疱瘡也、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿三年 〇安貞元年 十一月廿三日戊戌、將軍家 〇賴經 赤斑出現給、仍今日重而無爲御祈等被行也、神馬被奉鶴岡宮、又於御所七座泰山府君祭被行之、晴賢泰貞重宗文元宣賢親貞道繼等奉仕之、凡自去月下旬之比、赤斑瘡流布、貴賤不免、上下皆令煩之、京都同前云云、今月八日、主上 〇後堀河 有御惱云云、　十二月五日庚戌、將軍家自卯刻御咳病之氣、赤斑瘡御減之間、今日可有御沐浴之由、兼日被定之處、依此事延引云云、　廿五日庚午、六波羅飛脚到來、持參改元詔書、去十日改嘉祿三年爲安貞元年云云、今年三合相當之上、赤斑瘡流布、人庶多以病死之間及此儀云云、

〔吾妻鏡 四十六〕建長八年 〇康元元年 九月一日戊子、將軍家 〇宗尊 御惱、赤斑瘡也、若宮別當僧正、參鶴岡宮寺、致御祈禱、此事當時流布、諸人不免之、爲祈禱、於諸堂被行百座仁王講、清左衞門尉滿定奉行之、　三日庚寅、又有御惱御祈等、松殿法印良基、左大臣法印嚴惠、各修藥師護摩、七座泰山府君、宣賢爲親晴長、廣資、以平、晴憲、晴宗、此外被行七座靈所祓、天曹地府、御當年星呪咀等祭、　十日丁酉、於相州第被轉讀大般若經云云、　十五日壬寅、相州 〇北條時賴 令惱赤斑瘡給、　十六日癸卯、及晚、相州御不例事、去六月廿六日、當御衰日、始令出仕給之間、今此御不例、可有其憤之由、陰陽道勘申之、仍被行泰山府君祭、又相州女子、有赤斑瘡、邪氣相交云云、　十九日丙午、申刻將軍家御沐浴、陰陽少允晴宗候御身固、陰陽醫師權侍醫長世賜祿、中御門少將公仲朝臣、取御衣五單、御劒金作等、又給御馬、式部太郎左衞門尉光政引之、於東屏中門之內、有此儀、今日武州嫡男 四歲 赤斑瘡煩云云、　廿五日壬子、相州御不

例平癒之間、始令洗手足給、 廿八日乙卯、越後守室、赤斑瘡所勞云云、 廿九日丙辰、相州御沐浴、十月二日己未、六波羅飛脚參著、去月廿七日、四宮(雅尊親王)薨御、又廿四日、前將軍三位中將家、御早世之由申云云、

〔百練抄 十七後深草〕康元元年八月廿七日乙酉、近日赤斑瘡流布、上下病惱、 九月五日壬辰、天皇令煩赤斑瘡御、 十七日甲辰、赤斑瘡御祈等繁多、 廿五日壬子、主上赤斑瘡御惱御落居之後、始御沐浴云云、同日、雅尊親王(後嵯峨皇子、御室、)薨(依赤疱瘡也)女 同日、三位中將頼嗣卿薨(依赤疱瘡也) 十月五日壬戌、改元、(改建長爲康元)權大納言良教卿以下參之、依赤斑瘡也、

〔疱瘡必用〕康永壬午流行、慶長元ヨリ三十二年目ナリ、園太暦云、康永四年九月十六日、因天下疫癘、左大史小槻清澄、奏進改元勘文等、古例三十餘云々、改元祈禱等の事、前例ニ合考ルニ、蓋麻疹ニ相違なし、南北兩朝已後、文明三年の流行迄、百三十年相隔、文明三ヨリ永正三年迄、三十六年目なり、永正三ヨリ天正十五年丁亥流行迄、八十二年目也、天正十五ヨリ元和二年丙辰流行迄、三十年目也、元和二ヨリ慶安二年己丑流行迄、二十四年目也、慶安二ヨリ元祿三庚午流行迄、四十一年目也、同四辛未二年相續流行ス、元祿四ヨリ寶永五年戊子流行迄、十八年目也、如此流行年數遠近あるものは、全く麻毒は世界萬國を周流して、本邦へ傳來する故なり、天時令邪のなす處に非ること明なり、

〔年代記殘篇〕嘉吉元年、天下麻疹流行、

〔筒井家記〕文明三年二月ヨリ赤疹多クハヤリ、人多ク死ス、

〔多門院日記〕文明十六年六月三日、自今春疱瘡幷瘢以外增、七八十歲之物ニ至マデ病之、於小兒不及言者也、極老者病氣大事也、他國多以令死去、於當國當所(大和國奈良)者、依瘢死去之物少シ、○下略

〔赤斑瘡辨考 二〕瘢に、瘢の字は、字書に麻疹の義なし、倭玉篇に瘢ナノックレル、また、ツシムヤ

マヒ、雜字記に、疹面广、ウルムク、又アワクツ、又フシムム、又アワイロなどよみたり、

〔本朝年代記〕文明三年、麻疹流行、

〔妙法寺記〕永正十年癸酉、此年麻疹世間ニ流行ス、大半ニ過タリ、

〔後奈良院宸記〕天文四年十月十一日、今日藤原氏直參、御脈、ハシカワ勞ニ、御藥進上、時經ニ、全體ニ好出云々、

〔醫學天正記乾上〕麻疹

天正六年夏

一竹門様、五三歳、患麻疹、初發熱甚而不止、半井驢庵療養、作傷寒而治之、三日之後一身斑紋出、但皮膚之下隱、而不發快、驢庵改加減快發之藥進上、尚未能出、發熱亦未退、依其御藥斟酌、予時竹田定加法印奉命加療養、經三五日、斑紋紫色、而遂不起發、熱不退、故又御藥斟酌ス、又盛方院淨勝法印奉命療養、二三日之後、忽吐血衄血太出、久不止、又大小便俱出血、諸醫技既盡、于時予卅歳之時、事、命御脈候、診脈畢ニ又吐血二碗許、氣既欲絶、先與至寶丹、然後　犀牡生芐芍參甘陳之類煎與之、二三日之後、吐血下血止、而皮膚之紫斑漸々退、十餘日而平復、

〔輝資卿記〕慶長十二年

御ひめはしかいで候よし候へ共、はや〱よく候べく候よし候まゝ、まんぞく申候、七十五日のあひだは、どくだちかんようにて候べく候、御ひらのたぐひ、きやうくわんなきやう、きかるべく候、いよ〱ゆだんなくせいに入られ候べく候、いづれも人をくだし候て、申參らせ候べく候、めでたく候べく候、

御ち

せうしやう參る

〔教令類纂初集十六〕延寶六戊午年二月十九日
今朝土井能登守殿被仰渡候者、麻疹病人只今迄三番湯掛候迄者、登城遠慮仕候得共、向後御役は相勤、御成之節は、助を立相勤、御目見無用ニ可仕之由被仰渡候、以上、

〔麻疹流行記〕元祿四年辛未三月ゟ、夏ニ至リ、諸國ニ麻疹流行せし時、人民不養生をなし、又食毒にあたりて煩ひを見る事、其數を知らず、
靈元院法皇模、勅詔に依て、名古屋玄醫翁、養生書を撰、普く日本國中に流布なして、諸人をすくふ、其書予が先祖に傳り有に依而、此度彫刻して、再び天下に披露せしむるものなり、
元祿四辛未年是より十七年目　寶永四丁亥年是より二十四ヶ年目　享保十五庚戌年是より廿四年目
寶曆二癸酉年是より十四年目　安永五丙申年是より廿八年目　享和三癸亥年
六拾餘州津々浦々ニ至迄、麻疹流行する事、前代未聞之事也、
京なはて　叶屋喜太郎板

〔牛山活套下〕補遺
寶永戊子年〇五ノ秋ヨリ冬ニ至リ、明ル己丑ノ歲ノ春マデ、日本六十餘州ヲシナメラ麻疹流行シテ、男女老少ヲ不問、一般ノ疫癘也、貴トナク賤トナク、此患ニテ死スル者多シ、予〇香月牛山京師ノ高倉ノ旅館ニアツテ、此病ヲ治スルコト五百三十餘人也、其内一人モ死スル者ナシ、皆之ヲ治スルノ醫、或ハ寒涼ヲ過シ、或ハ辛熱ヲ用ヒ、或ハ補藥ヲ用テ其害夥シ、予一方ヲ製ス、葛根連翹湯ト名ブク、葛根、連翹、升麻、白芍藥酒、柴胡酒、黃芩、當歸、桔梗、山査、蘇梗、山梔子、各等分、甘草減半、水煎シ服ス、紅點出ガタキ者ニハ、防風、牛蒡子ヲ加ヘ、瀉痢アル者ニハ、扁豆、砂仁、木通、車前子ヲ加ヘ、咳嗽甚キ者ニハ、桔梗、甘草ヲ倍シ、前胡、桑白皮ヲ加フ、熱甚キニハ、酒黃栢酒、黃連少許ヲ加ヘ、或ハ淡竹葉ヲ加ヘ、口甚渴スル者ニハ、麥門冬石羔ヲ加ヘ、血乾テ大便秘スルニハ、川芎、生地黃、紅花、大黃少許ヲ

加フ、此方ヲ用ユル二百數百中、奇々妙々、其効不可言也、

〔武江年表 四〕享保十五年冬より、翌年春にいたり、麻疹流行、(鳥うちへ、白牛圖をぬる、)

〔武江年表 五〕寶曆三年四月より九月に至り、麻疹流行人多く死す、

〔武江年表 六〕安永五年三月末より秋の始まで、麻疹流行人多く死す、

〔半日閑話 十三〕安永五年丙申四月、先節より麻疹流行す、

〔被令類纂 二十四 十一〕天明二寅年五月、大納言樣御麻疹被遊候ニ付、

一西丸へ爲伺御機嫌、明十九日五時前總出仕、夫より御本丸へも御容體御輕、恐悅之旨にて可有登城事、

一病氣幼少之面々者、御本丸月番之老中豐後守へ使者可差越事、

一在國在邑之面々者、飛札可差越事、

一在江戶隱居之面々よりは、御本丸月番之老中豐後守へ使者可差越事、

一在國在邑之隱居よりも、飛札可差越事、

一明十九日より御酒湯被爲召候迄者、每日豐後守迄使者可差越事、

右之通可被相觸候

五月十八日

〔年々隨筆 四〕ことし、(享和三年)はしかといふえやみおこりて、高きいやしきみなやみのゝしる、卯月ばかりよりの事にて、五月みなづき、家々おちずやみつゞけたり、この病は、生る限にたゞ一たびわづらふ事にて、二十年餘、物へだてゝおこる事也、さきの度には、おのれ(石原正明)もわづらひつるを、まだをさなきほどにて、はか〲しうおぼえねど、世にまらずくるしかりしとばかりは覺わすられず、それは安永五年の事也といへば、廿八年さきの事也、さやうにまれ〲にのみあるも

のなれば、くすしなども物なれずて、たど／＼しうのみあめり、さきの度にもはら療治せしは、此老しれて、物の用にたつは少く、此ごろむねと療治するは、さきの度はまた書生にて、その術をよくもおぼえず、されば藥もよくもあたらぬにやあらむ、人のおほくしぬめるは、せんかたなく悲しき事也、ふみ月のほどは、たゞ死にしにて、のべの烟も天雲とたなびくばかりなりし、世の常なきは今にはじめぬ事ながら、これはたゞわかくさかりなる人のかぎりわづらふ病なれば、いと悲しき事のみおほくて、世もかくて盡ぬるにやとおぼゆかし、おのれが親しきあたりにも、かなしき事どもおほかり、加藤讃岐守殿の北方うせ給ふ、その此たき物まいらせてつゝみ紙に、

　魂をかへす香のそれならで夜半の煙やおもかげに立

久留金之助殿の御そひ臥も、ふみ月ばかりよりわづらひて、葉月長月やう／＼よわりもてゆきて、神無月のはじめになむうせ給ひし、五七日は霜月十日ばかり也、金之助殿の母君、後の御いとなみし給ふをとぶらひきこえて、

　衣手のかはく世やなきかきくれし時雨は雪と日數ふれども、とよみてまゐらせづ、又先生壻○のをさない君、これはまだ二ッにてうつくしうつぶ／＼とこえて、此ころ何となき物語し、高やかに打わらひなどして、らうたき事かぎりなし、そのこはこれひとつにてさへあれば、よるひかる玉とこそもてかしづきしか、行末はおのれちからを盡して、箕裘ときこゆるわざも、すべて何事も點つかるまじく、うしろみたてむとおもひつるに、壯熱などいへば、心さわぎして、いかでこたみつゝがなくなどいのらぬ神も佛もなし、ゆゝしき御大事ぞなど、くすしどもの打かたぶけば、いとおそろしけれど、さりともことなる事あらじと、神佛をたけきものにおもひつるに、三日ばかりありて、たゞきえにきえ入たまへば、心地ほれ／＼として、おもひわくかたこそなかりしか、此時はあまりのかなしさに、歌などもいでこず、

〔重寶錄上〕享和三年癸亥四月より、江戸麻疹大に流行、貴賤多く是を患ふ、予が外孫内藤義一郎十三歳、吾家にて養ひけるが、五月十三日晩より頭痛發熱し、面部手足麻疹一面に出、少し重き麻疹と見えけり、其日近隣組屋敷、鐵砲稽古日に有けるに、見物に行き度よし望に付、よからぬ事とは思ひながら、病人の事、其意に任せ差遣しけり、自分にも玉數二十二丸放し、夕方歸る所、麻疹過半癒たり、家内の者大に驚き、土間といひ冷たるにより内攻と思ひ、我にも心痛せしが、氣分よく食事も常體、何事も平素に替らざれば、少しは安堵しけるが、翌日に癒ける故、心を痛めしが、如何ともせんすべもなく、其日を過しけり、十四日朝、全く癒ていさゝか障もなし、鐵砲自分も放ち、玉音を多く聞ゆる故に、氣を替へ、たゞ一日にして癒けり、〇中略義一郎荊妻兩人は、思ひ設けずして早速に全快せし也、頭書此度の麻疹病、四月廿一日より、七月朔日迄、他の病人百廿三人、親族家僕十九人、養生所病人の内十六人、都て百五十八人、内に孕婦九人あり、百五十八人、死せし者一人もなし、義一郎がごとき、一日に癒し者も、只一人なし、

〔時還讀我書上〕癸亥〇享和三年ノ三月初旬、萩野台州ヨリ先君子ヘ書ヲ贈タイヘラク、朝鮮地方ニテ麻疹大ニ行レ、藥物ヲ對州ヘ乞來ルノコレ、前月季傳聞セリ、此事虛誕ノヤウニモキコヘズ、往年ノ流行ノ時モ、朝鮮地方ヨリ對馬ニ至リ、長門ニ傳ヘ、夫ヨリ東西一般ニナリシト承リシト、癸亥ノ麻疹ハ、都下ハ四月中マデ病モノ猶少カリシガ、端午ノ日未牌ヨリ酉牌後ニ至ルマデ、白氣一道アリテ天ヲ亘リシガ、其後頃ニ多ク行レ、沿門皆病ニイタル、丙申〇安永五年ノ疫ノ前ニモカカルコトアリシト聞リト、錦城先生ノ話ナリ、

〔時還讀我書上〕文政癸未〇五年霜月ノ頃ヨリ、西關ニ麻疹流行ノ風聞アリシニ、都下モ臘月ノ末ニハ、芝邊ニテ患ルモノアリ、甲申〇六年正月初旬ヨリ漸々流行シテ、二月ニ至テハ滿城皆コレヲ病ミ、三月マデニテ止ニケリ、大抵ハ輕症ニシテ、藥セズシテ愈ル者、亦少ナカラズ、

〔時還讀我書 下〕乙未天保六年○臘月中旬ヨリ、都下風疹大ニ行ハル、其初寒熱甚ク、ソレヨリ周身赤癮ヲ發シ、恰麻疹ノ如ク、不食咽痛殆ド麻疹ニ似タリ、輕ハ一二日、重キモ四五日ニシテ快復セリ、俗呼デ三日ハシカ、又ハシカカゼト稱セリ、翌年正月中ハ最盛ニテ、貴賤モ患ザルハナク、三月中マデモ發スルモノアリ、安永己亥年○八ニモカヽルコトアリ、其時モ三日ハシカ、又オセワカゼナドト呼リト、老人ノ話ナリ、[illegible]ノ保嬰須知ニモ論セリ是疫ノ變ニハ、大抵輕ハ葉氏眞武湯ヲ用ヒ、熱稍甚キハ柴葛解肌湯ニテ大略ハ愈タリ、尤劇キニ石膏ヲ用タリ、桂麻ニテ邪氣、綿セシモノ、間コレヲ見タリ、

〔天保集成絲綸錄 七十九〕天保七申年十月

大目付江

内府樣○徳川家慶御麻疹被遊候ニ付、西丸江爲伺御機嫌、明廿二日總出仕、夫々御本丸江も御機嫌御輕、恐悅之旨に而可有登城候事、

一病氣幼少之面々者、月番之老中備後守江使者可差越候事、

一在國在邑之面々者、飛札可差越候事、

一在江戸隱居之面々よりは、月番之老中備後守江使者可差越候事、

一在國在邑之隱居よりも、飛札可差越候事、

一明廿二日ゟ御酒湯被爲召候迄者、毎日備後守迄使者可差越候事、

右之通可被相觸候

十月廿一日

天保七申年十一月

寺社奉行江

内府樣御麻疹御快然、御酒湯被為召候付、明十三日、山王江御名代以西丸御側衆御備物有之候間、可被得其意候、

十一月十二日

〔武江年表 十一〕文久二年六月、炎旱數旬に及べり、夏の半より麻疹世に行れ、七月の半に至りては猖獗甚し、良賤男女、この病痾に罹らざる家なし、此病凡節の輩に多く、（天保七年の麻疹にかゝらざる輩なり、）弱年の人には輕なり、凡男は輕く女は重し、それが中に、妊娠にして命を全ふせるもの甚少し、產後もこれに亞ぐ、後に聞けば二月の頃、西洋の船崎陽に泊してこの病を傳へ、次第に京大坂に弘り、三四月の頃より行れける由、江戸に舉りしは、小石川某寺の所化何がし二人、中國より江戸に來りし旅中に煩ひて、四月の頃、病中寺内へ入、同山の所化に傳染しけるが、夫より五月の末に至り、少しく行れ、六月の末よりは次第に熾にして、衆庶枕を並べて臥したり、文政天保の度にかはり、こたびは殊に劇して、良醫も既に藥餌を施す事あたはず、或は吐し、咳嗽を生じ、手足厥冷に及ぶ、烏犀角は内攻を防ぐの藥なれど、用ふる事度に過れば、逆上して正氣を失ふに至るとぞ、固より熱氣甚しく、狂を發して水を飲んとしては駈出し、河溝へ身を投じ、亦は井の中へ入て死るもありし、醫師は巧拙をいはずして、東西に奔走し、藥舖は貧福を擇ばずして、償ふに遑なく、高價を貪れるも多かるべし、しかるに醫生も藥舖も、又繼て同病に罹れるも尠からず、賣藥店招牌をかゝげて售ふもあれど、症分によりては應驗等しからざるもあるべし、七月より別て盛にして、命を失ふ者幾千人なりや量るべからず、三昧の寺院去る午年暴瀉病流行の時に倍して、忩劇を以て日を約し、茶毘の烟とはなしぬ、故に寺院は葬式を行ふにいとまなく、日本橋上には一日棺の渡る事、貳百に盈る日もありしとぞ、又七月の半よりは、暴瀉の病にまさりし急症やむ者多くこれあり、こは老少をいはず卽時發し、吐瀉苦しく、片時の間に取詰て、救療すべからず、死後總身赤くなる

もの多し、その中には麻疹の後、食養生懈りて再感せるもありしとか、又霍亂の類もありと聞り、(麻疹患家に一錢して、中風邪大の歸たるもあり、)錢湯風呂屋髪結床更に客なし、花街の娼妓各煩ひて、來客を迎へざる家多かりし、七月九日十日淺草寺千日詣參る人少く、十六日閻魔參又同じ、少年の走百病これなきが故なり、兩國橋畔の夜鋪、七月半は更に燈燭を點する事なく、納涼避暑の輩かつてなし、相州大山に登るもの又稀にして、道中より煩ひて歸りたるもありけり、八月の半より町々木戸に齋竹を立、軒に華燈の挑灯を釣り、鎭守神輿獅子頭をわたし、神樂所をまつらへて神をいさめ、この祟を攘ふといへり、後には次第に長じて、大なる事業を虫護し、伎踊造物を催して街頭をわたす、此風俗一般になり、又諸所の神社にも臨時の祭執行せしもこれあり、

〔麻疹流行記〕ことし文久二年壬戌、夏のはじめより京都大坂、麻疹流行せしが、漸尾張に傳播し、六月七月に至て、病勢熾に、府下病ざる者少し、今年の麻疹熱病疫癘のごとく、輕き者も病苦は甚しといふ、江戸其外諸國一般に傳播して、皆同じ症也とぞ、八月末に至て、漸く歇む、夏秋の際前後きく所を雜記する事右のごとし、

六月の末より七月に至て、家々の病人夥しく、醫者は晝夜を分たず、四方に奔走し(はやる醫者は夜中眠るひまなしと云)藥舗に藥を買ふ者、晝夜店に滿つ、(犀角、テリアカ、紫根湯の藥類等、おびたゞしく賣れたりといふ、)官より熱田の祠人に命じて、神前に祈禱を行ひ、府下の市人に、神符を頒ち賜ひ、各街に祭らしめらる、各街七日の間神湯を獻じ、夜は篝火を焼き、燈を張り、竹枝に燈をかけて、軒にたて、夜景爛々として、遠望星のごとし、然れども病者多きゆへ、この美觀を出て觀る者なしと云、

小兒はすべて輕し、十六七歳より三十歳前後の者、病苦殊に苦しく、死亡の者も多し、四十已上は又甚輕し、病ざる者も間あり、然れども大老の者に病む者もたま〳〵ありと云、

婦人懷妊中にて麻疹にかゝりたるは、多くは重症なり、子は多くは流産す、死亡の者も多し、或は

水痘

子癇たるごとくになりて生れ、母は命助るもあり、子生れ出る事なくして母死するもあり、産後の諸症[illegible]
なりとぞ、

〔傷寒論辨考證 一〕疾に、疫癘は、麻疹、痘瘡、水痘などの總名なり、

〔痘科辨要 七〕麻疹

夫世俗所謂水痘、以每歲並行、痘瘡三年、麻疹三七二十一年、率爲定期、然而其間有遲速傳染之異、是皆歲氣順逆所致、故未始必有定期也、寶曆壬申夏、洞國麻疹大行、時余○中略 壯年在鄕、初療數十人、余亦患之、疹後餘毒變病、重甚者、殆爲見叔、乃用蠡氏藥澤倶而全平復、又安永丙申、客于藝州嚴島、是歲肝國又大流布、於此益勉療之、者數百人、又享和癸亥、自春至秋、王公士庶、罹麻疹者、不可勝數、當時余在茲地、經療不下數千餘人、自壯至老、得親驗此疾者三焉、古人有言、三折肱、豈此之謂乎、因今溯崖古人之方、以爲治疹之的、登之於痘科之尾、其方論皆平生所躬試、而非捕風捉影之類、讀者察諸、

〔教令類纂 初集十六〕慶安三庚寅年十月四日

痘瘡麻疹致いも流行之覺 ○中略

一自身疹、痘いも相煩候はゞ、見へ候日より三十五日を過候はゞ、御番ニ出し可申事、○中略

一疹、痘いも相煩候看病人、見へ候日より三十五日御目見不仕候ニ付而、御供番之節御目見不仕候、

慶安三庚寅年十一月四日

〔教令類纂 初集十六〕正德四甲午年十一月

覺 ○中略

一水痘煩候者、死候時は、看病之斷を申立、病人ニ付罷在候者は、病人死候日より七日過候迄は、御目通江罷出候儀、遠慮可申候、忌掛候者は、右日數之內ニ忌明候へは、登城いたし、御番等も可相勤、

痢 赤痢白痢

候、
御目通江者、右之日數過候迄者、差扣可申事、
　午十一月
右之通可被相心得候、以上、
〔天保集成絲綸錄七十九〕寬政十二申年九月
　大目付江
西丸江、水痘病人向後不及差扣候間、寄々可被達候、
　九月

〔倭名類聚抄三病〕痢　釋名云、痢、(音利、久曾比里乃夜萬比)言出漏之利也、
〔箋注倭名類聚抄二〕按、久曾比里乃夜萬比、故糞病之義、久曾比流、見落窪物語、謂放爲比留者、與放屁之屁同語、新撰字鏡、疶、利病也、屁布利、原書作泄利、言其出漏泄而利也、按說文無痢字、古單用利字、故原書作泄利、顧君從俗寫耳、玉篇痢、瀉痢也、廣韻痢、病也、
〔倭名類聚抄三病〕痡　釋名云、痢赤白曰痡、(音帶、赤痢、知久曾、白痢、奈女)言滑而難出也、葛氏方云、重下、(音云之、利於毛)今所謂赤白痢也、言令下部疼重、故以名之、
〔箋注倭名類聚抄二〕昌平本下總本、赤痢上有和名二字、病源候論、有赤白痢、赤痢、血痢、白滯痢候、按知久曾、血糞、奈女、滑也、原書作下重而赤白曰痡、言屬膿而難也、玄應音義引作痢下重赤白曰痡、言屬膿而難差也、按痡膿音說文所無、當者滯俗字、現在書目錄云、葛氏方九卷、今無傳本、有葛洪肘後備急方八卷、所引文無載、外臺秘要引葛氏方云、此即赤白痢下也、令人下部疼重、故名重下、與此所引文略同、
〔伊呂波字類抄知病〕赤痢(チクソ)　〔同久病〕痢(クソヒル)　瀉(同)　〔同知病〕痡(赤白痢也)　〔同安病〕瘍

アレトマヲス、赤作レ痢、屎尻也、

〔撮壤集 下疾〕痢　赤痢

〔倭訓栞 中編 久〕くそひりのやまひ　赤痢をもくそ、白痢をなめ、重下をしりおもとよむ、後重也、

〔類聚名物考 疾病 二〕痢病

此病名につきて故よし有る事なり、内經にては腸澼といひしを、仲景は下痢といへり、是今の痢病にて有るべしといへども、符合せざる所あり、しからばその比まではあまり多からぬ病と見ゆ、漢の末比より世に多く有るやらん、療治藥方もさまざまあれども、寄がたき所あり、本朝には此病多く有りしやらん、昔てよく療治も仕覺えしと見られたり、道三の製せし九味和中湯其驗あり、または丹水翁の逆挽湯もよし、

〔時還讀我書 下〕梅雪 林氏 又語ス、其月ノ血痢ヲ湯州ニテシヤリト稱ス、慶長中明人郭安國トイフ醫、歸化セシコトアリ、シヤリノ名ハ安國ノイヒ出セシナリ、移病ニテアルベシ、安國ハ良工ニテ治驗モ存セリ、其子孫今　仕官セリトゾ、

〔永正記 上〕一赤痢病者

法家說者、月水可レ爲二同前一之由、勘二仲神宮之法一、血氣止、中二日之後可レ參宮一也、地體及同宿同火者也、

〔醫心方 十一〕治赤痢方第廿二

病源論云、腸胃虛弱、爲二風邪所一レ傷、則挾レ熱、熱乘二於血一、血流滲入レ腸、與レ痢相雜下、故爲二赤痢一、○中略

治二重下一方第卅一

葛氏方云、重下、此即今赤白滯下也、令二下部疼重一、故名二重下一、去二膿血一如二雞子白一、日夜數十行、

〔病名彙解 二〕痢病　俗ニ云シブリハラナリ、丹溪ノ曰、痢赤キハ血ニ屬ス、小腸ヨリ來ル、白キハ氣

ニ屬ス、大腸ヨリ來ル、蓋元禮ノ云、痢疾古ヘハ滯下ト名ク、氣滯テ積ヲナシ、積痢ヲナスヲ以テナリ、五色ヲ以テ五臟ニ屬ス、

〔牛山方考上〕一、疫痢トテ、一郷スベテ痢ヲ患ルコトアリ、和俗是ヲ腹疫痢トイフ、黄連陳倉米ヲ加テ、倉廩散ト名付、コレヲ用テ奇効アリ、噤口痢ニハ右連肉粳米ヲ加テ奇効アリ、痢後手足痛ムニハ、木瓜檳榔ヲ加テ甚効アリ、曾槃按ズルニ、世醫ノ倉廩散ヲ用ユル、只疫痢熱痢、或ハ多月ノ痢風濕ニ感ジテ發シ、或ハ噤口痢ノ類ヲ治スルコトヲ知テ、虛脫ノ痢、及ビ行度多キノ痢ニ用テ始アルコトヲ知ラズ、凡痢病ノ行度八九十度ヨリ百餘度ニ至テ、元氣虛脫スル者ニ、人參ヲ倍シ、コレヲ用ユベシ、諸ノ風藥ハ元氣ヲ升提スル故ニ、下陷ノ氣ヲ升シテ行度少シ減ジ、元氣自ラ生ズルナリ、必ズ赤白痢ヲ問ハズ、度數ノ多キ者ニハ是ヲ用ユベシ、奇々妙々、其効アゲテ言ヒ難シ、

〔叢桂亭醫事小言三〕痢　滯瀉

痢ハ古名ニ非ズ、滯下ト云ト有レドモ、左ニモ非ズ、素問ニ腸澼ト見ユ、難經ニ大瘕ト云モノ痢ナリト云、既ニ金匱ニ下利篇アリ、桃花湯、白頭翁湯ヲ見ルベシ、夫痢ノ字ハ、二便ノ下ルヲ利ト唱テアルヲ、後世疒ヲ加ヘタ、大便ノ下ル病ニ用ルコトニナリタケルト見タリ、腹ノ下ルノ名種々ニシテ、不驗純、裏急後重シテ赤白ノ物ヲ下スヲ痢トシ、熱多キハ舌上黄白、或ハ黑胎ニモナル、引渴モアリ、譫語喘逆自汗ナド有、是ヲ疫痢ト云、只サツト下ルヲ溏瀉ト云、如水ニ下ルヲ水瀉ト云、コトノ外過分ニ下ルヲ洞泄ト云、不斷ニ腹ノ惡イヲ腸滑トモ、又鶩溏トモ云、左傳ニ河魚腹疾ト云モ腹ノ下ル病ノ事也ト云、晩ニ及テ腹ノ冷タル樣ニ便心ヲ催シ、夜々下ルヲ五更瀉、或ハ脾腎瀉トモ云、是ハ虛損ノ人、或ハ老人ハ不治ニナル、古人モイヤガリシ也、其久シキハ腫ニ變ジテ、足ナドカラ腫ス故ニ、時々心ヲ付テ見ルベシ、舊說ニ赤ハ熱、白ハ寒ニ屬ストテ、痢病ニ寒熱ノ見分樣アリ、然レドモ赤白皆熱ナリ、サテ又白キバカリモ赤キバカリモ無シ、赤白雜下ス、

〔三代實錄 五十〕貞觀三年八月廿九日庚午、又患赤痢者衆、十歲已下男女兒、尤苦此病、死者衆矣、

〔小右記〕長和五年六月八日庚辰、資平云、諸國旱損殊甚、京有疫癘之聲、退宮之期可延引歟、是疑赦之氣色也者、或醫師云、右大臣〔○藤原顯光〕日來被悩赤痢、痢減平之間、從一昨日身熱悩苦云々、　廿八日庚子、大納言〔○藤原道綱〕病悩更無減者、又呼季事朝臣、問案内、爲赤痢病、去夜廿餘ヶ度云々、古無力也者、日次不宜、不能諸向之由相示之、　晦日壬寅、大納言所悩無減者、呼季事朝臣問案内云、無增減、赤痢數々者可被慎歟、明旦可被夢中存定歟也、今夕有致相逢之氣者、壬寅者問病見病重急之日也、仍致愼耳、

萬壽二年八月八日丁巳、資高來云、資平今日當七ヶ日、術氣漸消云々、心神無減、飲食不受、痢病發動、赤爲云々、諸人相問、此病日胸鼻血及赤白等痢相加云々、先年如此、　九日戊午、四位侍從經任、日來煩赤痢、昨平愈、復痢病重發云々、兩度尚發、今夕能宜者、　宰相云、參法興院、上達部會合、數是讀之、聞證住法成寺、可有思出事、猶不可居近邊、可避居北山邊長谷石藏普門寺邊歟、　廿一日庚午、宰相來云、資房病惱無極、去夜痢廿餘度、隨昏事相以慶成朝臣言送云、資房病惱不休、欲令服蒜、今日吉日、明日服藥不宜、爲之如何、答云、昨熱氣散、今日服蒜者可宜乎、問陰三陰陽師、隨占可服、多是時疫之所致也、皆悉過何如、　廿三日壬申、宰相云、資房病無宜、痢無減、令食蒜何、答云、發爲時不可擇重忌日歟、中蒜是非合食藥、有何事乎、宰相云、資房今日服蒜、似有驗、所勞無減者、　四年十一月廿一日丁巳、爲光云、資房以無力病痢無數、絶食已經、入夜中將從蔀門〔○藤原隆家〕來云、從時疫危急、無力殊甚、痢病無度、悉皆服物發動、不受醫療、左右多定、可謂特得行幸日之由、家子所談、

〔水左記〕承保四年八月九日丙戌、自去夜下痢、如瀉水、辛苦無極、今日殊無力、偃然臥、依痢疾去天平九年六月被下諸國官符云、及痢之時、煮蒜可多食者、見此文、欲服之處、雅忠朝臣誡云、雖見官符文、然氣悶不服始者、然數後有煩急者、仍予熱悶依、不服始、日來不服、而人々云、近日過此妖、有痢患之輩、雖就熱悶服始、或不服者皆服蒜患、痢已平愈、誠相叶官符文、其驗顯然也、只可服者、今朝重服之、

〔台記〕天養元年十月十七日甲午、巳剋詣上皇〇鳥羽御所、自晩病痢、〇痢原而作日、上皇詔命難背、仍扶病强參也、

〔古今著聞集〕十六興言利口 近頃よさたの知了房といふものありけり、能書にてなん侍ける、ある人古今を書うつしてたべとて、あつらへたりけるを、受取ながらおほかたかゝざりければ、主、まちかねて今はたゞかゝずともかへし給ふべしといひければ、知了房こたへけるは、誠にし比病痢をつかうまつりしに、紙おほく入候にしに、術つきてさりとてはとて、その古今の料紙をみなもちゐて候なりといひければ、ぬしいふばかりなくおぼえて、料紙こそさやうにもし給ひたらめ、本は候はん、それを返し給らんといへば、知了房其事に候、其本をも紙みそうづにみなつかうまつりて候をば、いかゞして候べきといへりけり、

〔吾妻鏡〕四十六 建長八年十一月三日庚寅、相州〇北條時賴令煩赤痢病給、

〔吾妻鏡〕四十九 正元二年〇文應元年八月七日壬寅、將軍家〇宗尊親王煩赤痢病御、仍爲相模太郎殿沙汰、被行如法泰山府君祭、爲親朝臣奉仕之、御使狩野四郎左衛門尉、

〔北條九代記〕下 正應二年八月、將軍家〇久明親王赤痢病危急、仍放生會無御出、武藏守長時爲御代官、舍弟義政并宗政供奉、行方、景賴、基政、時連、長泰參回廊、御惱平愈之後、良辨法師任權僧正、長世朝臣叙從四位上、

〔看聞日記〕應永廿七年五月廿二日、菊第新亞相息女〇五歳今朝死去云々、大納言も痢病再發無心元式云々、家門滅亡時節歟、言語道斷事也、神慮之外無取憑歟、

〔陰德太平記〕三十三 石州川上之松山落城事
爰ニ藝州佐藤ノ住人、福島三郎左衛門光貞トテ、數箇度ノ戰功ニ勇名ヲ顯シタル兵アリ、日和ノ城攻ラレシ時、赤痢ヲ煩ヲ死生ヲ不分ケル故、催促ニ不應ケリ、然ルヲ元就朝臣、如何思給ヒケン、

虎列剌

福島殿ハ頃日ナト、戯言ノ様ニ宣フルヲ聞傳ヘテ、諸人口號ニ、福島殿ハ頃日ナト云ケレバ、福島、惣ヘ吾虚病ヲ作テ軍ノ勝負ヲ窺息トゾ思給ラン、二心有ハ虚病ニモ勝リタ、義人志士ノ所恥也、一人ノ手ヲ以テ萬人ノ口ヲ拄難ケレバ、此群疑晴スベキ樣モナシ、所詮病平愈セバ、石州へ趁戰死セント思究メタ在シガ、今朝馳來リ物具イツヨリモ花ヤカニヨロヒナシテ、元就朝臣ノ面前へ出仕セレタバ、元就、病氣ハ本復シツルヤト宣タルニ、福島頓首シテ涙ヲ波瀾々々ト流シテ退出シタリシヲ覧給テ、福島ハ今日討死スベキ體ニ見ヘタリ、可惜兵ヲト宣ケルガ、果然トシテ三吉ガ備ヨリ六七町先立テ切岸ニ馳上リ、雲州佐藤ノ住人福島三郎左衞門光貞生年四十三、今日ノ先陣急トゾ名乘タル、

〔松隣夜話〕鄕今度松任へ謙信取詰玉ヒケル、其晩ヨリ疫。癘。ト云惡病、城內ニ時花、十人ニ七八人煩、其中二人三人ハ三日ヲ不過シテ無死ス、依之長男兵タリト云ヘドモ、防戰不叶所存シタ早々落城ス、是ヲ上方筋ニ於テ、散々沙汰申譯リ、謙信ノ働キ玉フ處ハ、諸人偏ミ敢スルコトヲ不得、唯人ニテアラズトゾ取沙汰アリ、

〔時還讀我書上〕文政壬午年〇五ノ秋末冬初、浪華ニ三。日。コ。ロ。リ。ト稱スル病流行セリ、初ハ鎮西ヨリ起リテ(九州ニハサノミ多カラズ、[illegible]ア行ザル處モアリシト)、中國ニ至リ(藝州ナド尤甚トイヘリ)、浪華ニ及ビシ、京師ニモ偶ハ病モノアリ、ト其實初起卒ニ惡寒シ、續テ吐瀉甚ク、或ハ胸腸へ迫リテ、急ナルハ日ヲ出ズ、緩ナルハ三日許ニシテ斃ルユヱ、カクハ名ケシト、浪華ニテハ甚多ク、沿門闔戶死亡スルモノアリトキケリ、遠水濱菅ニイヘル三日坊ノ類ナルベシトイヘリ、何レ霍亂ノ一種ニテモアルベキカ、百百濃陰ハ増損理中丸ノ證ナリトイヽ、違リタリ、ゲニモ然ルベシ、

〔皇國醫事沿革小史(續編六號)〕文政五年(紀元二千四百八十二年)八月、虎列剌病始メテ我日本ニ流行シ、先ヅ西國山陰山陽ノ兩道ニ發シ、傳播ノ速カナル僅カニ一日ヲ經テ、既ニ畿內ニ蔓延シ、病勢甚ダ猛

劇ニシテ、毎戸殆ンド其傷害ヲ蒙ラザルハナク、擧家一人モ餘サズシテ悉ク死亡シタルモノアリ、當時其病ノ何ニ屬スルヲ知ラズ、狼狽其措置ヲ失ス、桂川甫周、大槻玄澤、其證候ヲ考ヘ、斷ジテ其性亞細亞虎列剌ナリトセリ、時ニ長崎出島ノ和蘭製作所長ダヤンコツク、ブロンホフ、蘭醫ボウイールノ、虎列剌新治法ノ一小冊子ヲ、我政府ニ捧呈セリ、宇田川榕庵直ニ之ヲ邦語ニ譯述シテ、之ヲ世ニ頒ツ、名ケテ虎列剌沒爾爸斯說ト云、是ニ於テ世間始テ本病ノ治法據ル所アルヲ知ル、

〔橘黃年譜上〕此病〇霍亂今ヲ距ルコト三十七八年前〇文政中三日コロリト稱シテ、對州ヨリ京師ノ間ニ流行スト云、江戸ハ未ダ行ハル丶ヲ聞カズ、掛川老侯〔太田遠州〕曰、寛延年間大霍亂ト稱シテ江戸大ニ行ハレ、死亡夥ク、官水葬ノ令ヲ下シ、貧窮ノ民皆死體ヲ海中ニ棄ト云、未其出典ヲ詳カニセズ、醫人恭之ヲ論ズルモノナレ、西洋ニテハ一千八百二十一年〔文政辛巳、是歲六月、病流行ト云〕、東印度ニ始リ、四大洲ニ蔓延スルコト、勃僊爾ノ書ニ見ユ、明年壬午西舶始テ此書ヲ齎シ來リ、宇田川氏之ヲ譯シテ以異ニ備フト云、今也文運大ニ開ケ、成書陸續出ヅ、先上梓スルモノ、僂私鶴コレラ病論〔新宮涼閣、同義〕譯、〔大村英國譯〕虎狼痢治準〔緒方洪庵譯〕、疫毒預防說〔杉田玄端譯〕、天行病論〔[illegible]〕、霍亂治略〔[illegible]〕、其他一書起中門人九鬼秀達ヨリ贈ル、今其書名ヲ遺忘ス、最世上ニ早ク傳播スルモノハ、松本良順、蘭醫朋百〔[illegible]〕ニ口授スル處ノ手記トス、其說ニ云、七八月ノ間、治ヲ施スコト凡ソ一千八百餘人、救活極テ多ト、後長崎ノ商賈江都ニ來リ言、當年流行病朋百ノ療治ニテ一人モ治スルモノナシ、反テ潰科ノ醫ニテ治タリ、其方多ハ五苓散、生姜瀉心湯ト云、又高橋保岡元吉ノ話ニ、同藩金子誠之助、長崎留學中此病ニ罹リ、直ニ治療ヲ在館ノ蘭醫ニ托スルニ効ナクシテ死ス、同學ノ徒大ニ失望悔恨セリト、夫醫書治術ニ體驗ナケレバ、反テ人ヲ害ス、儒可以愛天下、醫可以利濟斯人、トハ是ヲ謂フナリ、

〔[illegible]須知〕古呂利考
按ニ古呂利は、萬病回春霍亂の一名虎狼病ト云より出たりと云、又西洋所謂虎列剌ノ轉語と云説あれども、皆附會信ずるに足らず、古呂利は、本邦鄙の俗語にて、卒倒の義を云て、古より早く病に稱し來ることなり、元正間記云、元祿十二年の頃、江戸にて古呂利と云病はやり、今月流行す、早く南天の實と梅干を煎じて呑ば、其病を受けず、左もなければ、ころりと傾ひて、古呂利と死すとて、江戸中、南天の實と梅干を煎じて飮しと云、此事申出せしは、神田須田町の八百屋總左衛門と云者、去年大坂より、多く梅干を仕込置し處、今年上方の梅干きれて一向に下らず、これに依て、我梅干を高直にして賣らんとて、かゝることを言出しけるに、遂に官に聞えて八丈島へ流されしと云、又古老の話に、昔古呂利にて、數万人死して葬ること能はず、官關て水葬の令を下すと云、關東實聞云、正德享保の年間の實錄を記せし書に、正德六年の夏、熱を煩ふ病人多く、一ケ月の中に、江戸町々にて死する者八万餘人に及び、棺をこしらへる家にても間に合はず、酒の空樽を求て、亡骸を寺院へ葬する、墓地埋む所なければ、宗體に拘らず、火葬ならでは不納と云、依て茶毘所々に火葬せんとすれば、棺桶の數過りもなく積重て、十日二十日の中には、火をかけることならず、其到來の順に茶毘すれば、日數をはるかに經ざれば爲すこと能はず、是に於て貧者の亡骸は如何ともすべきやうなく、町所の長なる人々も、俵菰行屆兼て、公廳へ訴へ申せしかば、夫々の御慈悲を賜はり、寺院に仰付られ、葬り難き亡骸は、回向の後、菰に包み、舟に乘せて、悉く品川の沖へ流し、水葬になさせられしと云、考ふるに、正德六年は、六月廿二日に改元ありて、享保元年となれり、彼の明曆三年の火災に十萬八千人の燒亡、當時猶言傳へて怖るれど、享保元年の天行病に、數萬人の一時の死亡せしは、後に傳て言者のなきは、火難と違ひて書留し事のなきにやと云々、又此疾正德年間鎭西に起りて、小兒の感冒最多く、漸次

流轉して尾州の地に及び、大人も遇感する者あり、人呼で早手と云、之を鳳凰の猝然として至るに比する也、爾後筑の前後年々行ると云こと、今時醫談、及筑人處取還斎の小兒暴瀉新考に詳に見えたり、其後甚く行はれしを文政壬午の秋とす、瘟疫論發揮云、壬午之秋、其初自朝鮮傳于吾西州、歷山陰、攻浪華、無論老少強弱、闔戶傳染、如破竹、死者日三四百人、好生緒言云、壬午癸未間、西州天行病、水瀉二三行而目陥鼻尖云々是なり、

〔壬午天行病說 序〕初多鬱大坂齋藤方策實曰、今玆〇文政五年八月、山陰、山陽二道、厲氣流行、至九月、延畿內、或闔戶傳染、甚至滅門、其症與尋常疫厲迥別、其初起、忽然腹痛如刺、已而嘔吐下痢齊起、渇飮不下咽、絕脈轉筋、四肢厥冷、顏面陥凹、直視天吊、惡候百出、重者三時許而斃、輕者亦不出三日、醫家見解不到、疑作霍亂、內妄投錯施、更加失措、其死者無以大數、業庶通一月計之、率不下數千人、

〔嘉永明治年間錄 七〕安政五年八月廿七日、暴瀉病流行ニ就キ、療治ノ方ヲ達ス、

此日暴瀉病療治觸達有之と雖ども、其療治方爰に洩る、暴瀉病七月下旬より天下普く流行、阿蘭陀國にてはコレラと云よし、兩三度も暴瀉すれば更に治し難し、故に是をコロリ病と通言する也、八月中、江戶中町屋計り病死人一万二千五百九十三人と云ふ、全流行始終七月廿日頃より九月十日頃迄、凡五十日の間、武家及寺院町方等人別書上に洩れし者共大概差加へ、凡三万人程の死亡と云、

〔印度霍亂說〕其暴症、卒然吐瀉如傾、或有一二日漸和而後吐瀉頓發者、吐之先吐其最後所食物、而後吐水液粘液及膽液、其色或黃或綠、味則若苦、若辛酸、如其量及度數、則多寡各不同、又或有乾嘔者、當此時也、暴瀉頻發、其液無含些少膽汁、唯稀粘之水液、恰如米麪汁、而上面浮白色雲翳、如其量、則每瀉一升、或二三升、至三五度而後、量漸減少、不幾半時若一二時、而五七行、或十餘行、或有及二三十行者、其脈則忽沈弱微細、而殆如欲絕者、或有異左右者、或有結代者、生力亦頓沈衰虛憊、手足

及顔面鼻舌厥冷、冷徹如氷、冷汗淋漓、其色蒼白、而皮膚失彈力、十指生皮皺、下肢痙攣轉筋、或有及腹者全身者、或有先轉筋痙攣者、腹痛而後發吐瀉者、而腹痛多是不甚、小便閉止、或淋瀝、或筋惕肉瞤、加之吃逆乾嘔、或聲音嗄嘶、呼吸不利、苦悶煩躁、顔色憔悴、眼上陷凹、半眼上竄、或手足變爲紫色、或見臭糞、或人事不省等、遂以至斃、而其經過則有一日或及數日者、若夫就治療者、則其症之稍輕易、而且當其病初、得服應症諸藥之宜、而療之者也、

(暴瀉流行記)此節流行之病症にて、死亡人多く、市中一統恐縮之餘り、中には新躍と唱、手踊之神輿或は獅子舞等、夜中町內持步行候趣、畢竟邪氣除候儀と、輕き者共心得違ニ而、右樣之所業致候儀とも難申、殊に新躍等致し候儀者格別、多人數集り候樣子にては、平日と違、此節柄火之用心者勿論、喧嘩口論等無之樣、當番中違無候に付、都而愼可罷在候、右體心得違有之間敷、全く風聞迄之儀と相聞へ候得共、御中陰中、其一心得違之者有之候にハ、當人者不及申ニ、町役人共迄急度可及沙汰候條、其旨町中不洩樣可觸知もの也、

午(○安政五年)九月

(續實年譜 上)是歲(○安政五年)六月、肥前長崎暴瀉病流行シ、西國ヲ經テ以テ京師ニ及ビ、七月下旬ニ至リ江戸ニ流轉ス、其病ニ傳染スル者霧ヲ射スルガ如ク、卽時昏倒シ、鼻尖リ、氣息微ニ上ル者、男女併セテ、武家二萬二千五百五十四人、町家壹萬八千六百八十人ト云、余家族門弟子幸ニ其病ヲ免ル、晝夜奔走人ヲ救濟ス、九月上旬ニ至リテ始テ病根絶ス、其治療ノ如キ、余治痙編及暴瀉須知ヲ著ス、故ニ爰ニ贅セズ、余友南園ノ詩ニ、寄網秋家滿四隣、城中讓育祝壯民、我家何幸黃花酒、不復聞喚少一人、實録ト云ベシ、

(嘉永明治年間錄 七)安政五年八月二日、將軍家病(○家定)中、八日將軍家定公薨(○中)卷說、御內實七月六日薨御と云ふ、其御病症くさ〴〵の風說あれ共、實は暴瀉病なりと、然れども

暴瀉病我國流行の最初故、醫師初め病症詳り難し、且流言を醸せし者ありて、ますく弄馬に鞭打が如く、虚說盛なりと雖ども、後日暴瀉病彌流行、是が爲に江戶死亡人二萬八千餘人に及ぶ、此時に至り、醫師熟考すれば、先の詳り難き病症は則暴瀉なりと、

〔頃痢流行記〕八月(安政五年)朔日より晦日まで、日々書上に相成候死人の員數、

朔日　百十二人　二日　百七人　三日　百五十五人　四日　百七十二人　五日　二百十七人　六日　三百五十人　七日　四百六人　八日　四百十五人　九日　五百六十五人　十日　五百五十九人　十一日　五百七人　十二日　五百七十九人　十三日　六百二十六人　十四日　五百八十八人　十五日　五百八人　十六日　六百二十二人　十七日　六百八十一人　十八日　五百六十一人　十九日　五百九十七人　二十日　四百六十九人　二十一日　三百九十二人　二十二日　三百六十三人　二十三日　三百七十人　二十四日　三百七十九人　二十五日　四百十四人　二十六日　三百九十七人　二十七日　四百十六人　二十八日　四百三十五人　二十九日　四百四十七人　晦日　三百三十三人

〆一万貳千四百九十貳人　程有之候由

此分全書上、此外に、人別なしの者數一万八千七百三十七人、

九月に至りては大きに減じ、三四日頃は五六十人に相成、夫よりははたと相止、通例に相成申候、

或院主の談話に曰く、八月一ヶ月に送體數凡一ヶ年分も來りし故、平日は飯焚門番老爺、又門前の無業人を雇ひ、大槪世話數成たりとも、事欠ことはなかりしが、此度は、石工定日雇も皆々懸りて間に合かね、井戶堀職人を賴みたるにて、漸く安堵をなしたりとなん、

〔頃痢流行記〕流行時疫　(異國名コレラ)

一薄羅紗又はうこん木綿、或はもんばの類にて、晝夜とも腹を二重ほどまき置べし、

一桶に湯をいれ、からしの粉を五勺計り其中に加へて、折々兩脚の三里の邊まで浸すべし、

一家の内に、何にても焼ものをなして、濕氣を除くべし、

一一切の寒類を多く食ふべからず

同　治法

一此病をうけたりと知らば、熱き茶の中へ、其茶の三分一焼酎を入れ、砂糖すこしを加へてのむべし、又座敷をたてこめて風にあたらぬやうになし、其上羅紗のきれ又はもんばに焼酎をつけて、惣身を殘る方なくこすりてよし、

但し手足又は腹などへよく意をつけ、ひえるところあらば、温鑵或は温石をあたゝめ、布につゝみ發汗せしほどの心持になるまで摩擦べし、

于時安政第五戊午年八月　　　　　　　　　　　　龍印

〔泰平年表四編二〕安政八年十月廿一日、流行之暴瀉病ニ而死亡候者、取置候寺院より届之儀に付、申上候書付御届、

先般流行之病症に而、死亡候者、格外多數之趣に相聞候間、去月中、右病に而死亡之者取置候分、身分幷男女に不拘、員數御府内寺院銘々より書出し候樣、諸宗觸頭共へ申達處、追而届出候に付、總人數取調候處、左之通御座候、身分幷男女に不拘、總人數二万八千四百二十一人、内士族九千九百廿三人、右は此程迄に、追々届出候分に而、いまだ届後に相成候分も可有之候得共、凡取調入御覽置申候、

〔武江年表十二〕文久二年七月の半よりは、暴瀉の病にまるりし急症やむ者多くこれあり、こは老少をいはず即時発し、吐瀉苦しく、片時の間に取詰て、救療すべからず、死後總身赤くなるもの多

し、

〔雁渡江 三〕暴瀉病

病名

先ヅ霍亂ト云ガ穏也、尋常ノ霍亂ノ、其邪中焦ニアリテ、吐瀉齊ク發スルノミ異也、尋常ナルハ腹痛アルニ、コレハ腹痛モセズ、腹痛スルモアレド、中ノ一ナリ、泄瀉數行ノ後、倏忽ノ間ニ、陽氣虛脫シ、寒氣上攻ス、

治法

參附トイヘド、回挽シガタキアリ、早ク用フレバヨシ、遲ケレバ激ス、半夏黄連ヲ組合セテヨロシキコトアリ、

病家心得

腹鳴水瀉アレバ、一行ニテモ衣被ヲ厚ク覆ヒ、炒鹽ニテ腹中ヲ熨シ、重キハ手足ヲ溫石ナドニテ溫メ、熱粥ヲ啜セシメ、微發熱微發汗スレバ、氣宇舒暢瀉從テ減ジ、吐ヲ發スルニ至ラズシテ愈ユ、若飲食動作、常ノ如キヲ以テ輕視スレバ、瞬息ノ間惡症蜂起、上工モ手ヲ束ヌルニ至ル、

以上、山田昌榮ノ説也、

〔醫說 三十五〕我尾府下に小兒暴瀉の症に懸り、急に死する者多し、故に丸蓋し諸醫大概手を束て治療の法なきかごとし、食厥氣厥の類示多は暴瀉に混じ、見分る事を誤るもの少からず、去年我府に來る朝鮮の醫官奇斗文に府下の醫某是を問、彼曰、此症溫熱を解するを專らとす、宜く寒冷の藥を以て療すべしと、我國專ら溫補する者と大に反せり、彼此病を慥に不知かと言しに、長崎より來り住せる醫者が曰、彼誤るべからず、水土に依て療治方等しからず、そは西國には暴瀉氣厥の症有事少也、其治方多くは寒冷を以てす、當國の水土を考ふるに、土氣甚薄く水氣濕安し、是に感

じて生ずる人なれば、脾胃の氣薄くして溫補し安き歟、產後脫血脫氣して暴死するもの、此國のみ多く聞ゆ、人氣を受る事薄く侍る故なるべし、此を以て寒冷の藥多く害ありて、溫補の治療相應するにや、されど京師浪速及び東都、今人參の大劑時めき侍る、是に依て又害をなす事多し、今日我人溫劑になれ、寒冷の藥を用ゆる事を恐るゝゆへ、あたらぬ事間々ありと見ゆといへり、

〔豐民　四十二〕小兒暴瀉し頓に死するもの多し、府下の庸醫はハヤタといふにや、諸藥驗なく見へし、然るに醫家必讀曰、

燮水散 治暑瀉如水一日霍冷汗出、尤甚者陰少不能、胃腹痛脹吐瀉、急病、　半夏 製一兩　良姜 二兩五分　乾姜 炮　內桂 各五兩　甘草 炙五兩　附子 炮五兩

右細末して、每服 四錢 水二鍾煎一鍾服云々、

〔時還讀我書 下〕鎮西諸州ニハ、夏月小兒ノ暴利多ク行ルトキケリ、筑前ハ其證最夥シ、余〈元堅多紀〉從遊ノ醫青木春岱ニ乞テ其證略ヲ錄セシム、今コヽニ揭出スト云フ、暴利ハ多ク六月頃ヨリ八九月頃マデアリ、就中中元後兩涼氣ヲ催ス時當最多シ、

〔播貫年譜 上〕天保八年七月十四日夜、麻布笄穴䑓下士坪田氏ノ兒生テ三歲、暴ニ發熱シ、翌十五日朝ニ至リ吐利益甚、往數、身熱燒ガ如ク、時ニ心下ニ搐キ、顏色青慘、眼閉テ開能ハズ、煩渴飲ヲ引、形體頓ル脫ス、余藥ニ認テ厥陰寒熱錯雜ノ證トシ、乾姜黃芩黃連人參湯ヲ與フ、無効而死ス、此證俗間稱シテ早手ト云、蓋迅速ニシテ死スルノ意ト云、後南溟問答ヲ讀ニ、西國ノ地此病尤多シ、名テ暴瀉病ト云、又大鶴活庵治痢軌範云、余以攻痢爲本、大凡無不治、人不知暴熱痢、故世醫往々誤治、當爲長大息也、余因悔、早ク大承氣湯ヲ與テ之ヲ下サヾルコトヲ、書シテ以後鑒トス、

尾陽村瀨白石曰、ハヤタノ病他邦ニ無處ニシテ、吾尾ノミニ限レリ、醫亦其名ヲ知ラズ、徒ニ呼デ急症トス、延享ノ頃加藤玄順、平安ヨリ來リ、治痢經驗ヲ著シ、文化年間大鶴活庵治痢軌範ヲ著ス

モ、其所以ヲ知ラズト說ケリ、森蘭齋ノ國說ニ至テハ其說詳ナレドモ、未盡ザルニ似テ痧病ニアラズ、吾邦風土一種ノ厲氣ニシテ、時氣ト食物トノ二ツニアリ、而後多クハ痢トナルモノ也、時氣ノミノ者ハ泄瀉シ、或ハ病ヲ發シ、食毒ノミノ者ハ霍亂ヲナス、故ニ未食物セズ、只乳哺ノミノ者ハ此症ヲ發セズ、嬰兒二三歲ヨリ八九歲マデ尤多、大人ニ稀也、此症ノ發スルヤ俄ニ大熱ヲ發シ、或ハ惡寒手足冷、或ハ發驚搐搦シ、天吊直視、咬牙噤急ヲ發シ、或ハ腹痛嘔吐、呵欠困悶シ、或ハ泄瀉シ、或ハ洞瀉シ、下痢惡臭也、其發スル時、發驚吐瀉一齊ニ來ルモノ、俗ニ三拍子揃フト云テ、不治ノ症トス、若三症具ルトモ、其勢緩ナルモノハ治セズト云ベカラズ、大熱下痢、驚ヲ挾ムモノ葛芩連、昏睡シテ不醒者ハ重症トス、劇ク下痢スルモ亦葛芩連ナリ、緩ナルハ葛根湯、加黃連、大下痢、脈沈微ニシテ昏睡ハ、利多キニ因ル也、桂枝人參湯、加黃連、或ハ黃連理中湯、手足厥冷シテ覺ザル者ハ附子、理中、或ハ四逆加人參湯也、

〔濟世一方序〕近聞備北蝦夷之地、罹手病百二病之害、夷類大減戶數、是全因不得其治術也、今夫有其治術、不傳之於人、徒使生類焉罹斯、是豈仁者之心哉、如彼稀症方、世間不乏其書、故爲翻譯此一篇、名以濟世一方、願傳自都府以至僻遠無醫之地、戶々兼傳習其方、以得免不虞之大禍矣、蓋雖有奇方、藥品乏、則不能施其術、雖有奇術、闕保醫之巧者、則亦不能以行其技、若塗油之一方、則不假醫家之力、雖使五尺之童行之、不誤其處置、則其術簡易、而其所及、博且大矣、其治術與源因、載在譯說、看官其諦焉、

安政三年丙辰臘月、仙臺府學蘭學局總裁小野寺精顧序、

〔濟世一方〕病性

百斯杜(ペスト)ハ暴性ニシテ甚危險ナル疾也、每々疾速ニ死亡ニ傾キ、其疾ノ性質ハ熱病樣ニシテ衰弱甚シク、生活力減損シ、敗血發斑等ノ如キ各部ノ諸傷症ヲ兼發ス、若其發斑他ノ諸傷症ト兼發スルトキハ、百斯杜ノ害シキ諸徵也、或ハ他ノ諸傷症各自ニ發顯スルカ、或ハ他病ニ兼發スル時ハ、

流行病

悪性ニシテ危険ノ疾患、蓋然是ニ因テ百斯杜ト名クルコト能ハズ、只百斯杜質ノ病ト稱ス、此疾元来亜細亜洲ヨリ由來シ、欧羅巴洲ニ蔓延シ、當今東方ニ傳染ス、其疾ヲ他ノ百斯杜質ノ疾ト分別スル爲ニ、東國百斯杜又剌反杜百斯杜ト稱ス、

〔日本紀略 村上〕天徳三年、今年人民頸腫、世號福來病、

〔日本紀略 後一條〕長元二年十月、自去月至今月、京中人病頸腫、世謂之福來病、

〔本朝醫談〕流行病は、種々の名をおはする物なり、日本紀略、天徳三年、人民頸腫、世號福來病、長元二年にも此事あり、ふくれやまひなるべし、(下略)

〔松屋筆記 三十七〕福來病

日本紀略天徳三年の條に、今年人民頸腫、世號福來病云々、同長元二年十月の條に、自去月至今月、京中人病頸腫、世謂之福來病云々、倭漢合運長元二年の段に、京人頸腫、世謂福來病云々、抄に、玉勝間三の巻に、頸のふくらかなるよりかくいひなせし成べしといへり、こは俗にいふ腹ふくれの金持などいふやうに心得たる說にて、ひがことも、福來はフクレの語にかり用し字にて、やがてフクレ病といふ事なり、福來病フクレヤマヒと訓べし、

〔台記〕久壽元年四月廿九日辛亥、自去廿一日、患長病惱[illegible]昨今有增、近日此病充滿京師、或稱中宮病、

〔百練抄 八 高倉〕承安元年十月廿三日、近日號羊病、貴賤上下俱病患、羊三頭在仙洞、人傳、承暦之比、有此事、件羊返却之、

〔百練抄 八 高倉〕治承三年六月廿日、近日天下上下病悩、號之銭病、

〔玉海〕元暦二年五月廿八日庚戌、自去廿三日、患頗有所勞、疥風病之由謂、其後增氣、若近日之病歟、世號之入道病云々、今日汗出云々、

(百錬抄十五後深草)寛元二年五月六日、主上御不豫、近日天下貴賤、雨三日病惱、一人不漏之、世以號內竹居、

(吾妻鏡三十五)寛元二年五月十八日丁巳、前大納言家并新將軍〇賴經賴嗣御不例、御心神殊違亂云云、此外、二位殿、三位殿、同令煩給、凡近日傳人有此病事、俗號之三日病云云、

(薩戒記)應永卅五年四月十八日頃日、天下疾疫、世俗稱三日病、凡無遺漏、古來未曾有云、

(保嬰須知附錄)嘗記、安永己亥年〇八年秋末至庚子春、有一種疫疾、其證大抵、初起頭痛發熱惡寒、翻發痧子、面或痒或否、或目赤或咽痛、或會厭腫痛、或頭面腫起、而六七日若十餘日、而乃痊、其脈浮數弦緊、壽域當先者發表、俗呼稱三日痧、故與消毒葛根湯、化斑湯之類、則疹沒而諸證隨安、蓋是春氣所致、其邪甚輕淺、顧其不藥、亦必自愈也、

天明甲辰〇四年春、都下人民、患頭痛壯熱、脈洪大數急、而嘔吐不止者尤多矣、其證候頗劇、殆有入裏之勢、然余治之、先與葛根加半夏湯、繼以小柴胡湯等、而取效者凡七八人、如其輕、或二三日、或四五日而止、歷十餘日、諸症漸平、

(武江年表四)享保十五年十一月、鍋かぶりといふ疾はやる、鼻より上腫くなる、

(救瘟袖暦)痧疫ノ事諮

寛保ノ頃、ナベカブリトイヘルハヤリ風有テ、死亡甚多カリキ、予八歳ノ時此病ニ罹レリ、快復ノ比ノ事ノミウスウス覺タリ、眉ヨリ上額後髮際に至ルマデ黑色ニナリテ、鍋ヲ冠リタル如シ、色深キモノハ多ハ救ヒガタシ、予モヤヽ正黑ニ近カリシヨシ、既ニ解スルノ後、其色ウスク殘リテ、其黑所ニ小疹出デ、少シ水泡有テ、カワケタリト覺タリ、其後似タルモノモナシ、今考ルニ寶暦明和ノ頃、水痘ノ類ノ水痘ニモアラズ、又一種ノ發疹一般ニ流行セシコトアリ、其發前全ク温疫ニテ未ダ疹ヲ發セズシテ救ハザル者ハ、醫モ疹序ナルヲ知ラズ、時疫トノミ思ヒテスマシタルコト

多シ、辛クシテ死ヲ免ルヽ時、總身ニ瘡ヲ發セリ、發セル後ハ事ナクシテ平安ナリ、此瘡發セネバ、多クハ救ガタシ、救得レバオソカレトカレ發瘡セザルハナシ、水痘ノ如ク少シ水泡アルモアリ、ナキモ有、人々ニシテ少ブ、差別有、小大顆粒トヽノフラザル瘡ニテ、サノミ傷害ニモアラザリシ、世ニ名ヅケテ疫痧トイヘリ、儕輩モ此類ノ毒深キモノカト思ハル、其以來一切見及バヌ時疫ナリ、此症ノ治方ハ全ク時疫ノ法ニテ、別ニ手段ノコトモナシ、予其頃ハワキテ議論ナリケレバ、的方モ定メカネタリ、時有テ經ニ傳テ陽症モ陰症モ現ハセリ、壹熱ノ内ニ發瘡スルハ皆ナ解シテ平安ナリ、升麻葛根湯ナド應ゼリ、スベテ葛根芩連ノ類ヨク應ズ、傳經ニ至レバ經ニ從テ治ヲナセリ、天明ノ頃ハ此症ハアラザレドモ、葛根葱白湯ナド諸症ニ通テ相當セリ、麻黄桂枝ノ症ナキユヘ、本方葛根湯ハ却テ功ヲナレガタシ、正傷寒ナラヌ溫疫ナル故ナルベシ、ソノ頃ノ脚氣腫衝心ニモ葛根葱白湯ナドニテ功ヲ成セリ、皆是時行ノ氣ニ感ジテ熱病ニモ脚氣腫ニモ變ズレバナリ、○下

〔今昔物語十一〕德道聖人始建長谷寺語第卅一

今昔、世ノ中ニ大水出タリケル時、近江ノ國高島ノ郡ノ南ニ大ナル木流テ出寄タリケリ、郷ノ人有テ、其木ノ端ヲ伐取タルニ、人ノ家燒ヌ、亦其家ヨリ始テ郷村ニ病發テ死ヌル病多カリ、是ニ依テ家々其祟ヲ令占ルニ、只此ノ木ノ故也ト占ヘバ、其後ハ世ノ人皆其木ノ傍ニ寄ル者一人モ无シ、然ル間ニ大和國葛木ノ下ノ郡ニ住ム人、自然ラ要事有テ彼ノ木ノ有ル郷ニ至ルニ、其人此ノ木ノ故ヲ聞テ、心ノ内ニ願ヲ發ケル樣、我レ此木ヲ以テ十一面觀世音ノ像ヲ造奉ラムト思フ、然レドモ此ノ木ノ輙ク我ガ本ノ栖カヘ可持亘キ便无ケレバ、本ノ郷ニ返ヌ、其後其人ノ爲ニ示ス事有テ、其人饗ヲ儲ケ人ヲ伴ヒテ、亦彼ノ木ノ所ニ行テ見ルニ、尙人乏テ徒ニ歸ナムト爲ル、試ニ繩ヲ付テ曳見ムト思テ曳ニ、輕ク曳ルレバ喜テ曳ニ、道行ク人力ヲ加ヘテ共ニ曳ク程ニ、大和

國葛木ノ下ノ郡ノ當麻ノ郷ニ曳付ツ、然レドモ心ノ内ノ願ヲ不遂シテ、其木ヲ久ク置タル間ニ其人死ヌ、然レバ此ノ木亦其所ニシテ徒ニ八十餘年ヲ經タリ、其程其郷ニ病發テ、首ヲ擧テ病ミ痛ム者多カリ、是ニ依テ亦此ノ木ノ故也ト云テ、郡司郷司等集テ云ク、故某ガ无由キ木ヲ他國ヨリ曳來テ、其ニ依テ病發レル也、然レバ其子宮丸ヲ召出テ勘責スト云ヘドモ、宮丸一人シテ此木ヲ難取棄シ、更ニ可爲キ様无レバ、思ヒ煩ヒテ、其郡ノ人ヲ催シ集メテ、此木ヲ敷ノ上郡ノ長谷川ノ邊ニ曳棄ツ、

〔時還讀我書〕丁亥十年文政ノ春、羽州庄内ニ一種ノ疫アリ、其證恰モ脫疽ノ如ク、足指黑腫シテ腐脫ス、或ハ一指或ハ二指三指ニ及ブ、必斫斷シテ全タリ、甚キハ踝骨上マデ及スモノアリキ、亦コレヲ斫テ死スルモノハ一人モナカリキト、又イカナルコトニカ、蒼蠅ヲ擦傅シテ効ヲ得タリシコトモアリト、其藩ノ大山侗甫ノ話ナリ、青腿牙疳ノ類ニモアルベキカ、

古事類苑

方技部十八

疾病四

〔醫心方 七〕治九虫方第十六

病源論云、九虫者、一曰伏虫、狀長四分、二曰蛔虫、長一尺、三曰白虫、長一寸、四曰肉虫、狀如爛李、五曰肺虫、狀如蠶、六曰胃虫、狀如蝦蟇、七曰弱虫、狀如瓜瓣、八曰赤虫、狀如生肉、九曰蟯虫、至細微、形如菜虫、此諸虫、依腸胃之間、若府藏氣實則不爲害、若虛則能侵食、隨其虫之動、而變成諸病、○中略

治三虫方第十七

病源論云、三虫者、長虫、赤虫、蟯虫也、皆是九虫之數也、長虫蛔虫也、長一尺、動則吐、清水出、心痛貫之則死、赤虫狀如生肉、動則腸鳴、蟯虫至細微、形如菜虫也、居胴腸間、多則爲痔、劇則爲癩、因人瘡處、以生諸癰疽癬瘻瘑疥齲虫、無所不爲、

〔一本堂行餘醫言 四〕蟲

夫蟲之生也、未有不皆因濕鬱幽滯而蒸熱也、蓋人之元氣、能運暢行、無少鬱滯、則蒸熱何因而生、蒸熱不生、則元氣清爽平快、固無病患、而今也元氣纔少、濕鬱幽滯、則蒸熱乃生、蒸熱已生、則諸患隨起、蟲亦生焉、但蟲者、熱之微亦不生、熱之甚亦不生、其熱之蒸々而鬱、而不通暢、則元氣壅遏、蟲於焉生、生則不蕩、在內而必出、在胃則吐出、在腸則下出、少者一二條、多者十餘條、甚者至數十條、有頻生而頻出者、有數日而生而出者、有日々生而日々出者、其證多端、不可窮盡、間有內生而不外出者、如此者、其害匪輕、

凡孩蟲者嗜甜蟲最爲多、其生也必直出、如小兒稟然童小兒元氣觸未十分强壯、故偏食則元氣專奔、命於胃中、而腸間元氣微衰、慢而鬱滯、已鬱滯而蒸熱、則蟲乃直生而下出矣、若水穀速入腸中、腸中充滿、則元氣專奔命於腸間、而胃中之氣微衰、慢而鬱滯、已鬱滯而蒸熱、則蟲乃隨生而吐出矣、腸胃上下、蟲之生出、其化機俱同、此止蟲之生出、而其後無何患害、略○中　如此者、或腹痛如剜、如撞、或胸痛脇痛、或乾嘔、或吐食吐痰、或惡心嘈雜、或吐酸水、或咽喉結氣、或頸乾噎、或目眩頭重、或腹鳴雷響、或背痛腰重、或腿股重痛、或冒眩、或凝痰、或放屁惡臭、或腹脹似鼓脹狀、或小腹冤熱、或兩脇脹悶、或背微惡寒、或蒸々微熱、或口湧清水、或頻吐蛔、或鼻間異臭、或喜睡飯喫他物、或偏嗜一物、或喫生米茶葉浮炭壁土、或喫焦土、〈[illegible]土狐、呼[illegible]〉、或喫手爪甲、種々證候、不可盡述、又有奇怪不可名狀、尋常至希、所不見聞之疾、多是蟲證、且此證與驚相爲影響、故俗醫呼小兒疾、多爲蟲證者、若非驚則必是蟲、而蟲亦間有之、其證或蒸々微熱、〈[illegible]〉、或多食多飲、〈[illegible]〉、或性急多怒、〈[illegible]〉、或無暗號哭、〈[illegible]〉、或食後慣倦、長座不立、〈[illegible]〉、或目眶赤爛、鼻下赤爛、眠後閉赤爛、〈[illegible]〉、或腹脹體瘦、〈[illegible]〉、等、是皆蟲者、咸同之蟲證者莽也、須審察詳辨、施設救療之方法、慎勿誤矣、

〔内科秘錄 九〕蟲病

蟲ハ人身中ニ生ズル所ノ蟲ニシテ、蚘。蟲。寸。白。蟲。蟯。蟲。ノ三種ヲ古ヨリ三蟲ト稱シ、和漢及ビ和蘭トモニ說キ、人々ノ常ニ知ル所ナリ、蚘蟲ハ最モ多ク、蟯蟲ハ之レニ次ギ、寸白蟲ハ希有ナリ、病源候論ニ九蟲ヲ辨ジ、千金方ニ五臟ノ蟲ヲ說キ、十藥神書ニ勞瘵ノ蟲ヲ載スルニ至ツテハ、牢ハ妄誕ニシテ實驗ノ事ニ非ズ、

〔病名彙解 二〕虫痛　心痛九種ノ一ツナリ、脣紅ニ、面ニ白筋生ジ、蟲ヲ生ジ、心胸痛ナ當ガタク、痛定レバ能食ス、飢ルトキハ沫ヲ嘔ス、

〔康富記〕寶德三年十二月十一日乙亥、外記三臈〈康純〉爲分配之處、兩三日虫。腹。更發、平臥候間、不及召

違候冒也、

〔蔭涼軒日録〕寛正三年八月六日、今晨依御虫氣無御出也、

〔倭名類聚抄〈病三〉〕蚘虫　唐韻云、蚘〈音回、與蛕同〉人腹中長虫也、病源論云、蚘虫〈今案、一名寸白、俗云加以、又云阿久太、〉飲白酒食生菓等所成也、

〔箋注倭名類聚抄〈病二〉〕下總本作音廻二字、山田本作音回、那波本同、按廻回、並與廣韻合、山田本注末有蛕蛔並同四字、那波本同、按玉篇蛕蚘蛔並同上、〈略〉○〈中〉廣韻同、虫作蟲、按說文、蛕人腹中長蟲也、孫氏蓋依之、又按虫卽蟲字之省、說見第八卷首子目下、〈略〉○〈中〉按病源候論有蚘蟲候云、長一尺、亦有長五六寸、又有寸白蟲候云、長一寸而色白、形小褊、並云九蟲之一蟲也、是蚘寸白二蟲不同、源君以寸白爲蚘蟲一名非是、按寸白見西宮記、榮花物語鳥邊野卷、今昔物語、今俗謂婦人疝病爲寸白者誤、醫心方蚘蟲訓加伊、新撰字鏡蛕訓加伊、蓋卽此、按加以當蚘字音之譌者、昌平本下總本無又云之云字、〈略〉○〈中〉所引文原書蚘蟲候不載、寸白蟲候云、或云飲白酒、以桑枝貫牛肉炙食、並生栗所成、此所引卽係是文也、按源君以寸白爲蚘蟲一名、故引寸白蟲候在於此非是、

〔伊呂波字類抄〈加病疾〉〕蛕〈カイ〉　〈唐韻云、人腹中長虫也、病源論云、寸白、又名アクタ、〉　寸白〈同〉　〔同〈須病疾〉〕寸白〈スハク〉

〔撮壤集〈下病〉〕寸白〈スンハク〉

〔增補下學集〈上二文〉〕蚘虫〈寸白名也〉

〔醫心方〈七〉〕治寸白方第十八

病源論云、寸白者、九虫內之一虫是也、長一寸而色白形小褊、因府藏虛弱而能發動、或云、飲白酒、以桑樹枝貫牛肉炙食、幷生栗所成、又云、食生魚後卽飲乳酪、亦令生之、

〔榮花物語〈七とりべ野〉〕かゝる程に、女院〈詮子〉ものせさせ給ひて、なやましう覺しめしたり、〈略〉○〈中〉殿〈道長〉いまはくすしにみせさせ給べきなり、いとおそろしきことも也と、度々聞えさせ給へど、くすし

に見すばかりにては、いきてかひあるべきにあらずと、こゝろづよくの給はせて見せさせ給はず、御ありさまをくすしにかたりきかすれば、すばくにおはしますなりとて、其かたのれうぢどもをつかうまつれば、まさるやうにもおはしまさず、ひごろになりぬればにや、よるなどあえさせ給へれば、たれもこゝろのどかにおもほしみたてまつる、

〔今昔物語二十四〕行典藥寮治病女語第七

今昔、典藥頭□ト云人有ケリ、道ニ付テ止事无キ醫師也ケレバ、公私ニ被用タル者ニテナム有ケル、而ル間七月七日、典藥頭ノ一家ノ醫師共并ニ次々ノ醫師共下部ニ至マデ、一人不漏寮ニ參リ集テ遊戯シケリ、廳屋ノ大ナル内ニ長筵ヲ敷滿テ、其ニ着並テ各一種ノ物酒ナドヲ出シテ遊ブ日也ケリ、其時ニ年五十許ノ女ノ无下ノ下衆ニモ非ヌガ、淺黄ナル襖單賤ノ跡著ナ、顏ハ青鈍ナル練衣ニ水ヲ裹タル樣ニテ、一身ユフ〳〵ト腫タル者、下衆ニ手ヲ被引テ廳ノ前ニ出來タル、頭ヨリ始メテ此ヲ見テ、彼レハ何ニゾ〳〵ト集テ問フニ、此腫女ノ云ク、己レ此腫テ五六年ニ成ヌ、其ヲ殿原ニ何カデ問申サムト思ヘドモ、片田舍ニ侍ル身ナレバ、其御セト申ナムニ可御キニモ非ナバ、何デ殿原ノ一所ニ御座集タラム時ニ見エ奉テ、各宣ム事ヲ承ラムト思フ也、纔々ニ見セ奉レバ、各心々ニ宣ヘバ、何ニ可付ニテカ有ラムト思エテ、暫々レクモ被治不待テ、其ニ今日此集給フト聞テ參タル也、然レバ此御覽ジテ可治カラム樣被仰ヨト云テ平ガリ臥ヌ、典藥頭ヨリ始テ此ヲ聞クニ、實キ女也、現ニ然ル事也ト思フ、頭ノ云ク、イデ主達被レ治シ給ヘ、此ハ寸白ニコソ有ヌレト云テ、中ニ美ト思フ醫師ヲ呼テ彼レ見ヨト云ヘバ、其醫師寄テ此ヲ見テ云ク、定テ寸白ニ候フメリト云フ、其ヲバ何ガ可治ト、醫師ノ云ク、拔クニ隨テ白キ麥ノ樣ナル物差出タリ、其ヲ取テ引ケバ綿々ト延レバ長ク出來ヌ、出ルニ隨テ廳ノ柱ニ卷ク、漸ク卷クニ隨テ此女顏ノ腫口テ色モ直リ持行ク、柱ニ七尋八尋許卷ク程ニ、出來畢テ殘リ出來ズ成ヌ、時ニ女ノ目鼻直リ

畢テ、例ノ人ノ色付ニ成ヌ、頭ヨリ始メテ若干ノ醫師共皆此ヲ見テ、此女ノ此來テ病ヲ治シツルヲ感ジ讃メ喤ル事无限、其後女ノ云ク、然テ次ニハ何ガ可治、醫師只薏苡湯ヲ以テ可茹キ也、今ハ其ヨリ外ノ治不可有ト云テ返シ遣テケリ、昔ハ此様ニ下﨟醫師共ノ中ニモ、新タニ此病ヲ治シ愈ス者共ナム有ケルトナム、語リ傳ヘタルトヤ、

〔今昔物語二十八〕寸白任信濃守解失語第卅九

今昔、腹中ニ寸白持タリケル女有ケリ、□□ノ□ト云ケル人ノ妻ニ成テ、懐妊シテ男子ヲ産テケリ、其ノ子ヲバ□□トゾ云ケル、漸ク長ニ成テ、冠ナドシテ後官得テ、遂ニ信濃ノ守ニ成ニケリ、始メテ其ノ國ニ下ケルニ、坂向ヘノ饗ヲ爲タリケレバ、守其ノ饗ニ着テ居タリケルニ、守ノ郎等モ多ク着タリ、國ノ者共モ多ク集タリケルニ、守饗ニ着テ見下スニ、守ノ前ノ机ヨリ始メテ畢ノ机ニ至マデ、胡桃一種ヲ以テ數ニ調ヘ成シテ悉ク盛タリ、守此レヲ見ルニ爲ム方无ク侘シク思テ、只我ガ身ヲ絞ル様ニス、然レバ思ヒ侘テ、守ノ云ク、何ナレバ此ノ饗ニ此ク胡桃ヲバ多ク盛タルゾ、此ハ何ナル事ゾト問ヘバ、國人ノ申テ云ク、此ノ國ニハ万ノ所ニ胡桃ノ木多ク候フ也、然レバ守ノ殿ノ御菜ニモ、御舘ノ上下ノ人ニモ、只此ノ胡桃ヲ万ニ備ヘ候フ也ト答フレバ、守彌ヨ爲ム方无ク侘シク思エテ、只身ヲ絞ル様ニス、然レバ欠□迯テ術无氣ニ思ヘル氣色ヲ、其ノ國ノ介ニテ有ケル者ノ、年老テ万ノ事知テ物思エケル有ケリ、此ノ守ノ氣色ヲ見テ怪ト思テ、思ヒ廻スニ、若此ノ守ハ寸白ノ人ニ成テ産タルガ、此ノ國ノ守ト成テ來タルニコソ有メレ、此ノ氣色見ルニ極ク心不得ズ、此レ試ムト思テ、舊酒ニ胡桃ヲ濃ク摺入レテ、提ニ入テ熱ク涌シテ、國ノ人ニ持セテ、此ノ介ハ盞ヲ折敷ニ居エテ、目ノ上ニ捧テ畏マリタル様シテ、守ノ御許ニ持參レリ、然レバ守、盞ヲ取タルニ、介提ヲ持上テ、守ノ持タル盞ニ酒ヲ入ルニ、酒ニ胡桃ヲ濃ク摺入タレバ、酒ノ色白クシテ濁タリ、守此レヲ見テ、糸心地惡氣ニ思テ、酒ヲ盞ニ一杯入レテ、此ノ酒ノ色ノ例ノ酒ニモ

不堪ズ、白ク調タルハ何ナル事ゾト問ヘバ、介答ヘテ云ク、此ノ國ニハ事ノ本トシテ守ノ下リ給フ、坂向ヘニ三年過タル古酒ニ胡桃ヲ濃ク摺入レテ、在廳ノ官人瓶子ヲ取テ、守ノ御前ニ參テ奉レバ、守其ノ酒ヲ食ス事定レル例也ト事々シク云フ、時ニ守此レヲ聞テ、氣色糸ヨ只替リニ替テ、篩フ事无限シ、然レドモ介ガ定リテ此レ食ス事也ト責レバ、守篩々フ盞ヲ引寄スルマヽニ、實ニハ寸白男更ニ不可堪ズト云テ、散ト水ニ成テ流レ失ニケリ、然レバ其ノ體モ无ク成ヌ、其ノ時ニ郎等共此ヲ見テ驚キ騒テ、此ハ何ナル事ゾト云テ怪ビ喤ル事无限シ、其ノ時ニ此ノ介ノ云ク、其コ達ハ此ノ事ヲ知リ不給ズヤ、此レハ寸白ノ人ニ成テ生レテ御タリケル也、胡桃ノ多ク積盛タルヲ見給テ、極ク難堪氣ニ思給ヒタリツル氣色ヲ見給ヘテ、己ハ聞置タル事ノ侍レバ、試ムト思給ヘテ、此ク仕タリツルニ、否堪給ズシテ解給ヒタル也ト云テ、皆館人ヲ具シテ國ヘ返ヌ、守ノ共ノ者共云フ甲斐无キ事ナレバ、皆京ニ返リ上ニケリ、此ノ由ヲ語ケレバ、守ノ妻子眷屬モ皆此レヲ聞テ、早ウ寸白ノ成タリケル人ニコソ有ケレトハ、其レヨリナム知ケル、此レヲ思フニ、寸白モ然ハ人ニ成テ生ル也ケリ、聞ク人ハ此レヲ聞テ咲ケリ、希有ノ事ナレバ、此ク語リ傳ヘタルトヤ、

〔愚管抄七〕すべて初より思ひくはだつる所、道理といふものを、つや〳〵われも人もまもらぬあひだに、たゞあたるにまたがひて、後をかへりみず、頭にす白などやむ人の、當時をこらぬ時、喉のかはけばとて、水などを飲てまばしあれば、その病をこりて死行にもをよぶ道理なり、

〔武徳編年集成九十〕元和二年三月廿七日、是日〈[illegible]〉片山與庵法師ヲ召テ、御藥ヲ一貼調合サセ、本多上野介是ヲ聞ク、御服用ノ處、皆吐セ玉フ、依テ台徳公ヘ命有シハ、御不例ノ始メヨリシテ、御命受ニ極ルコトヲ測リ玉ヒ、御藥御服用有ベカラズト雖ドモ、大樹殊ノ外御心ヲ傷テルヽコト上聽ニ及ル故、御本心默止ガタク、御服藥有シカバ、病ノ如、御胸中ニ納ラザレバ、最早無益ナル

由テ、是ヨリ御療養ニ及バレズ、御臥褥ヘモ婦子ヲ禁ゼラレ、近寄コトヲ得ズ、族類ノ寵臣本多佐渡守東武ニテ老衰ニ沈テ駿府ニ來ルコトアタハズト云、

或曰、台徳公、與庵法印宗哲ニ御療養ノ事ヲ誂シ玉フ處、與庵ガ曰、當正月廿一日夜、御痰涎御胸ニ塞ガリ、危キニ至ラセ玉フ故、御藥ヲ獻ジ、廿四日ニハ、聊御快驗、田中ヨリ還駕有シ後、御腹中ニ塊有テ、時々痛マセラル、是ヲ寸白蟲也トテ、日々萬病圓ヲ召上ラル、賤臣是ヲ歎ズ、萬病圓ハ大毒ノ劑也、御積塊ハ除ズシテ御元氣ヲ傷フベシト、諫言ヲ達ルト雖ドモ、御許容ナシト云、爰ニ於テ、昵近ノ醫ヲ召テ、彼丸藥數日御服用ト雖モ、微驗ナキ上ハ、是ヲ止テ用ヒラル丶事ナカレト諫言スベキ由、台徳公ノ命重シト云ヘドモ、曾テ凝滯ス、是ニ於テ、與庵ニ台命有ユヘ、神君ニ再ビ諫メ奉リケレバ、甚御旨ニ應ゼズ、信州諏訪ヘ謫セラル、元和四戊午四月十四日、台徳公與ガ數諫ヲナス忠志ヲ憐ンデ、謫ヨリ召還シ、舊地ヲ賜フ、

出血

〔醫心方五〕治九竅四支出血方第卅五

病源論云、九竅四支下血者、皆由大虛、府藏傷損、血脈空竭、因而喜怒失節、驚忿過度、暴氣逆溢、致令腠理開張、血脈流散也、故九竅出血、喘咳而上氣、其脈數、有熱不得臥者死也、

〔覆載萬安方一〕脫血　血枯

先唾血及吐血下血、謂之脫血、事證方、三因方、濟惠方等、九竅出血、謂之失血、又名血枯、亦月水不來也、

吐血

〔倭名類聚抄三〕嘔血　極要方云、嘔血、知久、嘔已見上文、一縷內傷、一縷積熱、有此病、

〔箋注倭名類聚抄二〕醫心方嘔血吐血並同訓、中略拯要方十卷、見現在書目錄、不著撰人名氏、醫心方引是書、或作極要方、或作拯要方、按作拯恐誤、今無傳本、下總本無矣字、那波本同、按病源候論、唾血者、由傷損肺也、唾上如紅縷者、此傷肺也、脇下痛唾鮮血者、此傷肝也、皆謂唾中有血者、病源候論又云、吐血者、皆由大虛損及飲酒勞損所致也、是可以訓知波久、

〔伊呂波字類抄〕加疾病　喀血

〔增補下學集上二疾〕喀血

〔醫心方三〕治吐血方第卌七
病源論云、夫吐血者、皆由大虛損及飲酒勞傷所致也、醫門方脈曰、凡諸吐血歐血人、若數上氣喘咳不得臥者、多死難療、

〔內科秘錄七〕吐血　嗽血　咯血　吐紅　欬血　痰血　內衄
吐血又嗽血トモ云フ、歷史ニハ嘔唾血ト書タアリ、其因肺ヨリ出ルト、胃ヨリ出ルトノ二證アリ、辨ニ之ヲ知ルベシ、胃血ハ卒ニ咽喉微痒、或ハ胸中微悶、又大便心ヲ催シ、更衣ノ途中ニテ暈倒シ、血ヲ吐クコト五六合、或ハ一升餘ニ及ビ、一度ニテ止ムコトモアレドモ再三吐クコトアリ、須臾ニシテ發熱汗出テ、脈浮弦ニナルナリ、胃血ニテハ多ク出デヽモ卽死スルコトナシ、然レドモ亡血シタル血證ノ貧弱ニナリ、面色萎黃、脣舌剝白、眩暈耳鳴、悸動短氣等ノ諸證並起リ、爪甲薄クナリテ潤澤ヲ失シ、兩脚ノ微腫スルモノナリ、肺血ハ過欬嗽ヲ起シ、胸中微悶シテ卒ニ血ヲ吐クコト一升餘ニ至リ、虛里煽動シテ短氣、鼻扇肩息、額上冷汗出、四肢厥冷シテ死ス、或ハ吐血少フシテ卒死ヲ免ルヽ者モ、後ニ必ズ虛勞ヲ患フルモノナリ、

〔斷毒論序〕昔日吾門人山本寬之患血證、予屢視之而歸、其氣噂然吐血、於是始悟、凡百之病、莫不傳染、時督諸吾徒、莫信之者、後門人倉士寬又患血證、其妻與其父之妻、看護之、亦同吐血、至此始服予言之驗矣、予因語之曰、百病無傳染之理、則痘麻黴瘡、何可傳染乎、痘麻黴瘡已有傳染之理、則凡百之病、何不可傳染乎、是事理之最易知者、而世人不察耳、〇中略
文化辛未閏二月望　　吉田醫員加賀大田元貞公幹撰

下血

〔三代實錄四清和〕貞觀二年八月五日壬午、中宮大夫從四位下藤原良仁卒、○中略性至孝、奄丁母憂、哀啼哭泣、歐血絶氣、經時乃蘇、不勝悲慟、服中病卒、時年四十二、

〔三代實錄十五清和〕貞觀十年二月十八日壬午、參議正四位下行右衞門督兼太皇太后宮大夫藤原朝臣良繩卒、○中略齊衡元年、○中略是年冬、父大津卒於任國、始聞父疾、卽欲奔赴、天皇○文德不聽、及得審問、嘔血氣絶、數刻乃蘇、

〔榮花物語七とりべ野〕八月○長保四年廿よ日にきけば、淑景舍女御○道隆女皇后定子妹うせ給ぬとのゝしる、あないみじ、こはいかなることにか、さることもよにあらじ、日比なやみ給とも聞えざりつる物をなど、おぼつかながる人々おほかるに、まことなりけり、御はなくちよりちあえさせ給て、たゞにはかにうせ給へる也といふ、あさましいみじとはよのつねなり、

〔康富記〕永享五年九月廿日、寅始剋、按察大納言○公保送使者云、法皇○後小松御惱危急之由有風聞、仍所馳參也者、仍予著布衣參入、按察大納言、日野中納言、○義資四辻宰相中將○季保醫師員能法眼○號三位法眼等祗候、人々談云、自去夜終剋、有御吐氣、令吐血三盥許御之後、未被取直御出于今不令見知人御、又無御分別是非之氣、者言語道斷也、員能參上候御脈、然而不被知食之、暫之左大臣殿令參給、拜見龍顏退出給、卯終剋予參御前拜見其御體、不可記盡、此後暫退出、辰始剋、按察大納言示送、今法皇御心地令取直御了、

〔多聞院日記〕天文十二年五月二日、社中集殿下人太郎ト云物、從去年吐血ト云病ヲ受テ、昨日死去了、彼仁、經欲嫁娶、師高人ニ面受タヨリ此病、禰宜主家誠以計略夫婦相離ヲ令別宿之處ニ、太郎ガ宿ヨリ、每度彼女房ノ家ノ上ヘ猛火カヨキ了、此事無隱閑、ヤガテ許可之、並一所ニ處、血ヲハキ、一身血ニ交レテ死了、

〔增補下學集上二支體〕下血ゲケツ

〔吾妻鏡二十九〕文暦二年(嘉禎元年)閏六月廿八日、今日、被定起請失之篇目、所謂鼻血出事、書起請文後病事、(但除本病)鵄烏矢懸事、為鼠被喰衣裳事、自身中令下血事、(但除用楊枝時、并月水及痔病)重軽服事、父子罪科出来事、飲食時咽事、(但被打背之程可定失)乗用馬斃事、已上九ヶ條、是於政道以無私為先、而論事有疑、決是非無端、故仰神道之冥慮、可被糺犯否云云、

〔醫學天正記乾下〕下血

一會津宰相氏郷、(蒲生忠三郎、年三十歳、)朝鮮征伐之時、於肥前名護屋患下血、諸醫技既盡、而採之宗叔治之而愈、予其時從朝鮮歸而上洛、故後之、翌年之秋、法眼正純語曰、氏郷ヘ養生薬進上スト、時予曰、名護屋ニテ所勞後、脈ヲバ不見、面色ヲ候フニ、終ニ不調、黄腫ニシテ項頸ノ傍、肉痩消シテ目下微浮腫、若腫脹、腹脹生セバ、必大事ナルベシ、薬進上ストモ分別アルベシト、其後十一月ニ、大閤秀吉公御成ヲ申、予其供奉時ニ、又顏色ヲ候フニ、腫満甚、其後腹脹増、十二月朔日、大閤殿下、民部法印ノ亭ニ座シ玉ヒテ、薬院予二人ヲ召シテ、氏郷所勞如何ト問玉フ、二人曰、終ニ不能診脈、薬ハ識カ與ト問玉フ、採ノ宗叔ノ薬ト申、左右ノ大納言家康、中納言利家二人ニ仰テ、諸醫ヲ召テ脈ヲ見セヨト、御上池院、竹田瑞庵、盛方院、祥壽院、一鷗、紹安、其外已上九人、氏郷ノ床下ニ至ル、家康利家左右ニ在テ、諸醫脈ヲ見テ退ク、同月五日、利家、家康朝、予一鷗トヲ召シテ、氏郷脈ノ様體ヲ問フ、予曰、十ハ九ツ大事也、今一ツカヽルハ年ノ若ト食ノアルト計也、飲食減、氣力衰タハ、十ハ廿モ大事ナルベシト申、利家曰、瑞ノ醫一人ブヽニ尋シニ、或ハ十ニ五ツ大事、或ハ十ニ七八ハ大事ト申ス、宗叔ヲ召シテ曰、玄朔ハ十ニ廿モ大事ナルベシト、瑞ノ醫ハ或ハ十ニ五六七八ト云、如何ニト、宗叔曰、十ハ一ツ六箇敷存ト申、其後利家予ニ對シテ曰、氏郷所勞彌々惡レ、宗叔ノ薬ヲ止ムベシ、今日ヨリ療治セヨト、予ガ曰、宗叔十死ト見テ放タラバ、五日三日薬ヲ與ヘテ可見申、不然バ斟酌ト申、宗叔ヲ召シテ其旨ヲ仰ラルヽニ、尚十ニ一ツハ如何ト申、故翌年文祿四年

正月末、止宗取藥也、次第ニ氣力衰食減ジテ、一鷄藥ヲ與ヘテ、十餘日ニシテ果シテ卒ス、

〔橘黄年譜下〕町奥力安藤源五左衞門、年五十許、往年大下。。血ヲ患、脱血後肛門脱出、納ル能ハズ、痛楚甚シ、福山一鷗醫之ヲ療ジテ痛去ルト雖、脱肛收ルヲ得ズ、厠ニ上レバ脱出益甚シク、下血淋漓、便後腸垢、及ビ稀汁ヲ下スコト一合餘、更衣後一時許苦楚云フベカラズ、漸蓐臥ヲ得、面色青慘、唇舌灰白、胸中動悸甚シク、腹虚滿、少シク勢動スレバ氣息短乏、口中乾燥、四肢微腫、脈虚數、消穀善飢ス、伊澤醫安之ヲ療スル數歳、依然トシテ復スルコト能ハズ、因物加減、及補益氣湯ヲ服スト云フ、余曰、下血過多、中焦氣虚ス、故ニ多年治スルヲ得ズ、古人云、血ヲ補フハ氣ヲ補フニ如ズト、宜ク先胃氣ヲ補タベシ、六君子湯加厚朴香附子砂姜ヲ與ヘ、鐵砂丸ヲ兼用ス、數日ニシテ下血止ミ動悸減ズ、

〔安齋隨筆前編十三〕一血留禁綿實　生綿、熟綿、白綿ともに、產婦手負等に固く禁ずるなり、血を引する物なり、此事を不知人、鎧の小手草摺臑當脛楯等の裏に、綿臙にて染たる布を用ふるは、軍事を知らざる故なり、金創ある人、綿臙衣を身に付くれば、血を吸出して血止る事なし、されば武具には固く綿臙を忌むべし、又綿臙を以て製したる器は虫生じて惡し、

〔倭名類聚抄三形體〕衄　說文云、衄女六反、和名波奈知、鼻出血也、

〔箋注倭名類聚抄二形體〕下總本衄作衂、那波本同、與玉篇合、按衂衄同音、醫心方同訓、波奈知見平治物語、中所引血部文、

〔段注說文解字五上〕衄、鼻出血也、素問曰、鼻衄、又假借爲挫衄字、於戰陳二敗衄、按謂小挫也、猶言挫衄字之假借也、謂肉不通暢之意也、从血丑聲、女六切、三部、

〔伊呂波字類抄波人體〕衂ハナチ

〔增補下學集上二支體〕衄

〔醫心方五〕治鼻衄方第卅六

病源論云、肺開竅於鼻、熱乘於肺、則氣亦熱也、血氣俱熱、血隨氣發出於鼻、爲鼻衄、醫門方云、上實下虛、其人必衄、衄者從春至夏爲大陽衄、從秋至冬爲陽明衄、小品方治鼻衄、血出數斗、(醫心方四)眩冒顛者、不知人方、

〔醫心方〕二十五　治小兒鼻衄方第五十七

病源論云、小兒經脈血氣有熱、喜令鼻衄也、

〔病名彙解〕二　衄血　ハナヂナリ、衄ハ、說文ニ鼻出血也トアリ、鼻ハ肺ニ通ズ、血上リ肺ニ溢ル、故ニ鼻ヨリシタヽ血出ルナリ、要訣ニ云、胃ヲ傷リテ衄ヲイダスヲ酒食衄ト名ク、鞭撲シテ衄ヲイダスヲ折傷衄、喜怒憂思ノ諸氣、諸血ヲ動カス、此ヲ以テ衄ヲイダスヲ五臟衄ト名ク、蠱ハ、字書ニ汚血ナリ、又鼻ニ出ル血ナリ、

〔古事談〕四　勇士　兵庫頭知定トイフ隨從アリケリ、產穢ニ入テ廿餘日ヲヘテ、八幡ノ御神樂ニ參勤シタカヘリ、事ナカリケレバ、又臨時祭ニ參タリケルニ、舞殿ニテ鼻。血。アエタリケレバ、恐ヲナシテマカリ出テ思樣、此產穢ノ外不淨ノ事ナシ、コノ崇リニヤト疑フ程ニ、知定ガムスメノ十歲バカリナルガ俄ニ氣色カハリテ、知定ヲヨビテイフヤウ、我ハ八幡ノ御使也、汝ヲ誡メムトテ來ル也、イカデ產穢ト號キナテ、大菩薩ノ寶前ヘハ參ルゾ、仍御勘當アル也、早ク御神樂ヲシテ謝當ヲユルベシ、汝ガ歌久シクキカズ、我愛スル所ロ也、早クウタフベシ、又萬歲ナラニタフベカラズ、大菩薩ニタヾ給物也トイフ、知定申樣、產穢ヲバイクヨ日バカリイムベキゾヤ、女子云ク、三十日イムベシ、ソレオトナニフタベケレドモ、一ニハ疑アルベシ、一ニハケガラハシ、オサナキモノハウタガヒナク、ケガラハシカラズ、コノ故ニ託宣スルナリトテサメニケリ、知定人々カタラヒテ、八幡ニ參テ御神樂ヲコナヒタリ、

〔吾妻鏡〕二十七　寬喜二年五月廿二日、將軍家(藤原賴經)御。鼻。血。出、是御咳病餘氣云云、　廿四日、御鼻血出事及度々、仍御祈、於御所被行七座泰山府君祭云云、　廿七日、修理亮(時氏)此間病惱、自今日未剋、

[illegible]　[illegible]

假增氣、武州鼓騷、數盛丹新云云、宮內兵衞尉安藤左近將監、同二郎、雜色兵衞尉等、爲御看病祗候、各敢不避其席云云、

〔雲萍雜志 三〕鷹人の塚といふことしらぬ古き歌の中山の入口にあり、鼻血の出るとき、この塚をいのるに、かならず驗あり、何の花にてもさゝげて、鼻より血の右よりいづれば、左の陰嚢を握り、左より出れば、右をにぎりて拜すれば、忽に愈るといへり、

〔倭訓栞 前編十 し〕しびり　衄血といへり、誤る義にや、麻。痺。をもいへり、しびり京へ上れといふ俗語あり、笑府に、俗云脚麻、脚麻上鼻頭、謂以柴芒貼鼻端卽止と見えたり、

〔俚言集覽 上〕痺京へ上れ、略○中　高野紀行、鶏はしや千年もなく〳〵脛ひねり、尾頭にしびりも京へ清水まゐり、京岡

〔嬉遊笑覽 八方術〕又治脚麻法、如患左足、以草貼左目上瞼、右亦如之、立止、又云、以紙貼鼻尖、これらも常に小兒などの、しびれ京へ上れとてすることなり、草のちりを額の正中に貼て、左右をいはざるは誤なるべし、不角が雙蝶輪十一痺れも、京へ上れ、いんのこ、祇園の犬の子は額に押すなれば、とり合せてかく作れり、又貫目には幾たる驢の重荷なり、まづしびれ琥珀同性、額に、塵を付るをいふなり、

〔倭名類聚抄 三〕腫　山海經云、胕、音符、一音府、今案俗所謂乳○腫○也○、字亦用此字、腫也、野王案、瘇之異、以字亦作腫、波留、身體數起虛滿也、

〔箋注倭名類聚抄 二〕那波本乳府曾府作乳腫曾腫、按乳府者、上文乳癰條、俗云知布是也、類聚名義抄有乳府曾府、伊呂波字類抄亦有曾府、作乳腫曾腫誤、略○中　所引文、原書無載、按原書西山經云、竹山有草、其名曰黃雚、浴之已疥、又可以已胕、郭璞注、治胕腫也、音符、蓋郭氏以治代已、胕下增腫字、以解已胕之義、源君所見本脫治字、故誤爲以腫也釋胕字、遂引之云、府腫也、又按府卽胕字、集韻、胕腫也、廣韻府腫也是也、然胕字說文所無、府字訓俛病、亦非此義、其訓腫之字、古用浮字、浮汎也、謂腫

爲浮者轉注也、後人譌變作胕作府、非說文俛病之府字、玉篇廣韻說訓腫字、訓俛病字、爲一者非是、略○中舊之勇誤毛勇、山田本、昌平本、那波本同、曲直瀨本亦誤毛甘、今依玉篇腫字音改、下總本波留上有佐云二字、醫心方腫同訓、略○中今本玉篇疒部不載瘇字、肉部有腫字、引說文云癰也、不載此所引文、按瘇即俗腫字、變肉从疒者、爾雅釋木注、瘇腫無枝條、釋文云、腫本或作瘇、是也、此从疒者、蓋源君從俗寫、恐非顧氏之舊、又有从疒從重作瘇字、即尰字、而瘇或省作種、見集韻、二字遂混同、釋名腫鍾也、寒熱氣所鍾聚也、

(伊呂波字類抄疾病)腫ハレ〈亦作瘇〉

(增補下學集上二支體)浮腫

(倭訓栞中編二十六む)むくみ　浮腫をいへり、蒸身の義にや、

(小右記)長和五年二月八日癸未、於南殿遣奉幣春日御社、御幣付皇后宮使佐通朝臣、奉幣使讀宣命、爲政以大外記文義朝臣令讀宣命云、開國事、一日以後無吉日、昨日供奉後定經通歟、雖然相扶必可參行者、令申氣心地極惱之上、終日歷行、右上兩足腫不能著靴之由、下、

(吾妻鏡十二)建久三年二月四日丁未、大夫尉廣元爲使節上洛、是自去年窮多之比、太上法皇御不豫、玉體令腫御云云、依此御事也、

(徒然草上)唐橋中將といふ人の子に、行雅僧都とて敎相の人の師する僧有けり、氣のあがる病ありて、年のやう〳〵たくる程に、鼻の中ふたがりて、いきも出がたかりければ、樣々につくろひけれど、煩らはしく成りて、目眉額なども腫まどひて、打おほひければ物も見えず、二の舞の面のやうに見えけるが、たゞおそろしく鬼のかほに成りて、目はいたゞきの方につき、額のほどはなに成などして、後は坊のうちの人にもみえずこもりゐて、年久しくありて、猶煩らはしく成りて死にけり、かゝる病もある事にこそ有けれ、

瘦病

〔塵塚談 下〕味噌直し草、又猫のピンザ、ラともいふ、江戸巣鴨村雑司ケ谷邊に多くあり、一兩年已前なるべし、堀田侯の乳母水腫病にて、田舍へ保養に行けるに、右の草を以ておほひとせし味噌汁を藥になるとも知ずして、數度給けり、右草が藥に成しにや、全快せしとなり、夫よりして、江戸の醫者水腫に奇効有と沙汰し、近比の流行藥となれり、官醫專ら用る事なり、

〔伊呂波字類抄 也病〕瘦ヤス　瘠ヤセタリ　臞亦作㿋　瘵已上同、瘦　挨

〔增補下學集 上二 支體〕瘦病(ヤセヤマヒ)　癯瘠(カリヤセ)

〔倭訓栞 前編三十四 也〕やつるゝ　憔悴をいふ、又羸字をよめり、瘦疲の義成べし、神代紀に、瘠疲をやつれとよめり、窶羸(ヤツレ)の義成べし、古今集に君忍の草にやつるゝ、古里ともよめり、

〔日本書紀 二 神代〕一曰、○中略 時彦火火出見尊、旣歸來、一遵神教、依而行之、其後火酢芹命、日以襤褸(ヤツレテ)而憂之曰、吾已貧矣、乃歸伏於弟、

癩病

〔倭名類聚抄 三 病〕癘　說文云、癘 音例、阿之岐衣美比、惡疾也、

〔箋注倭名類聚抄 二 病〕所引疒部文、昌平本、曲直瀬本、癘作㾐、按集字韻所見、蓋俗字、俗又或作癩、見毛詩正義、卽後世所謂癩病也、病源候論云、癩病是惡風入百脈、傷五臟、逆注骨髓、俱傷而發於外、使眉睫墮落、皮肉生瘡、筋爛節斷、語聲嘶破、

〔下學集 上 支體〕癩(ライヤマヒ)

〔增補下學集 上二 支體〕癩病(ライヤマヒ)

〔醫心方 三〕治中風癩病方第廿

病源論云、凡癩病、皆是惡風及犯觸忌害得之、初覺皮膚不仁、或淫々苦癢如虫行、或眼前見物如垂絲、或隱疹輒赤黑、治之、斷米穀肴鮭、專食胡麻松朮最善、然癩名不一、木癩、火癩、金癩、土癩、水癩、蟋蟀癩、雨癩、疥癩、蚼酒癩也、又有烏癩、白癩、論諸癩形狀、在本書、依繁不載、

〔覆載萬安方五〕大風癩病

論曰、癩者内經爲癘風、風者榮氣熱胕、其氣不淸、故使其鼻柱壞而色敗、皮膚瘍潰、其證不同、其始則乍寒乍熱、肢節理腠壅塞、血氣精髓耗竭、久而不治、令人癱瘓、汗不流泄、手足痠疼、面目習習奕奕、有癢開狀如虫行、身體偏痒、搔之成瘡、或身體錐刺不痛、青赤黃黑如腐木形、或痛無常處、流移非一處、或似繩縛、拘急不可俛仰、眼目浮腫、小便黃赤餘瀝、心神恍惚而善忘也、日月侵久、其風化生毒虫、虫齧變動、外先食氣血、肌膚不仁、甚則内食五藏、食肝則眉睫墮落、食肺則鼻柱崩壞、食脾則語聲散亂、食腎則耳鳴、雷鼓之音、食心則死、並是癩病并惡風與虫之爲害也、

〔覆載萬安方五〕惡風癩病也、

論曰、惡風者、謂五風厲氣所致也、風有青白赤黑黃之異、其毒中人五藏則生虫、虫亦有五種、虫生息滋蔓入於骨髓、五藏内傷、形貌外壞、故食肝則眉睫墮落、食肺則鼻柱倒塌、食脾則語聲變散、食腎則耳鳴如雷鼓之聲、心不受食、食心則爲不可治、是故謂之惡風、

〔頓醫抄三十四〕癩病

夫癩病ノ由來、五癩八風、或一百三十種ノ品有、或又先世ノ罪業ニヨリテ、佛神ノ冥罰有、或食物ニヨリ、或ハ四大不調ニヨル、應於善根ヲ修シ、懺悔ヲ致シテ、善ヲ修スベシ、凡此病ニヲイテ、種々ノ不同有、偏體異ナルコトナシトイエドモ、眉髮已ニ落チ、又偏體損壞セズトイヘドモ、眉髮落ルニ隨テ、或ハ諸處異ナラズ、四肢腰背等痛ム所アリ、手足十指脫落シ、疼痛事痛ムコトヲシラズ、其色青黃赤白黑ノ不同也、是血虫ト成テ、食虫ノ大ニナルニ隨テ廣ク厚ク食ム、皮肉强堅シ、灸スレドモ不熱、針スレドモ痛カラズ、又身ノ上ヨリ底ヘ食シ入、又底ヨリ上ヘ食出モ有、又上ニ異相ナシトイエドモ、底ヘ食ヲ能見ヘバ、皆通ノハゲニアラズ、譬ヘバ栗梨子等ノ上ハ虫クハザレドモ、底ヲ食ヘバ上ノ色變ズルガ如シ、又遍身村雲立テ瘡ニ似タリ、又處々白クナリ、星ノ如ク、又遍

身黑クヤウヤク朽身、又ヤセテ白赤日月ノ如シ、白ミワタリテ後フヽシム、又遍身小瘡出テ、次第ニ大ニナル、常ニカザホロシ出テ、常ニ丹瘤ノ如シ、又寒重キ處アリ、又灸所イエズ、諸ノ瘡癒ズ、又假ニ焼跡ノ如シ、滑水タリ、又馬ノ目ノ如シ、朽落シテ癒ス、漸ニ増アリ、又此病ヲ受ル人、眼白ク成、鼻厚ク大ニ成、爪落クダケテ損ズ、手足油ナク、或ハ面カシケ乾キ、又ハ或ハ肥タル松ニ似タリ、眉ノ毛落、如此多様ノ不同有トイエドモ、痛カラズ、五癩八風等種々ノ異體、併風血虫ノ所爲也、ソノ形本書等ニ委記ス、可見之、

〔蘐草小言 二〕白石東雅總論ニ、梵語ヲ取テ、此語トナセシトアル中ニ、癩疾ノ人ヲカハラモノトイフハ、迦摩羅也、譯シテ癩病トイフトミエタリ、アレド是ハ京師ノ乞食非人ハ皆鴨川ノ河原ニ居ル故ニ、人呼デカハラモノト云ルナルベシ、又アナパタト云ハ、阿那波陀也、譯シテ不生トイフトミエタリト、是モアナバタトハ穴端ナルベシ、葬穴ニ近キヲ云ナラン、是等恐クハ牽强ニ近カルベシ、先生ノ博洽ナルモ、三思ノ失アルニ似タルモノアルカ、

〔玉勝間 八〕癩病をかたゐといふこと

〔ある人のいはく、俗に癩病をかたゐといふは、寄大の字なり、癩病一名を寄大風といふ、證治要決に見えたりといへり、すべて此たぐひの説は、うちきくには、うべ〱しく聞ゆれども、よく思へばみなあたらぬこと也、いかにといふに、すべて俗語は書を考へて云出る物にはあらず、字音の言の多きも、おほくは佛ぶみの語にて、これむかしはうしの常にいふを聞なれたるより、うつれるものなり、佛語ならぬも近き書に多く見えて、聞なれたる言こそあれ、遠きからぶみに、いとまれに見えたる言などをば、世の人はいかにしてしりていひ出む、たま〱似たることを見つくれば、ゆくりなくそれより出たりと思ふは、ひがこと也、癩病人をかたゐといふは、乞兒より轉れる言也、そはいとことなるがごとくなれど、人をいやしめにくみて、かたゐといへることとあれば、

それより出たる也、すべて世の中の言は、直はさま〴〵にうつりきぬること多きぞかし、

〔松屋筆記 六十五〕オトラシヤ、カツタキ、ヤドウカ、

大和國にては、癩病の者をオトラシヤといへり、名義不詳、蓋御通有セラレロといふを約ていふ歟、奈良坂に住る癩人多く、奈良の町及在鄕に物乞ありくを施與せざる時、オトラシヤといひけんより名におへるにや、國京にても乞食に物與ざる時は、通ラフシヤイといへり、ポロ〳〵には（[illegible]）御無用といふこと、又通例也、國京にて癩人をカツタキといふは、乞兒をカタヰといふより、癩人が物乞ありくに似て名づけし也、されば、オトラシヤもカツタキも、乞與の詞に出たる名也、

〔瘍科秘錄 二〕癩

癩ハ素問ニ出ヅ、肘后方ニ始テ癩ト稱ス、後世ノ醫書多ク癩ノ字ヲ用ユ、癘癩通用スレドモ癘ヲ本字トス、禮月令ニ、仲冬行春令、民多疥癘ト云ヒ、韓非子外儲說ニ、厲憐王、史記豫讓傳ニ、漆身爲厲（厲ヲ癘ニ作ルハ後世ノ事ナリ、刺ヲ癩ニ作リ、癘ヲ癩ニ作スノ類ミナ同ジ、）共ニ癩ノ字ヲ用ユ、又惡疾大風大癘風等ノ名モ通用ス、天刑ト斷リタルハ醫學入門ナリ、其他ノ名多シト雖ドモ、枚擧スルニ暇アラズ、此病因ヲ、素問ヲ始ノ諸方書ノ內ニ、不正ノ風ヲ受テ病モノニ論ジテアレドモ、實ハ然ラズ、飮食ヲ愼マズ、獸ニ禽獸ノ肉及ビ叔鮪鰻鱧魚鯰等ヲ食シテ、自然ト敗血ヲ生ジ、諸瘡瘍ノ病因ト成ナリ、其內ニテ敗血凝滯スルコト劇シキモノハ、癩風ニ化スルナリ、自發スルモノハ此因ヨリ起レドモ、父母ノ血脈ヲ傳ヘテ患ルモノ多シ、或ハ血脈ノ正シキ家ニモ、血脈正シカラザルモノヲ娶テ、其子弟ノ癩風ヲ患フルコトアリ、此病萬病中ノ異證ニシテ、古ヨリ難治トス、其內ニモ陰證ト陽證トアリ、陰證ノモノハ身體ノ內、幾處モ痲木不仁シテ、口眼喎斜ニナリ、持タルモノヲ知ヘズ墮シ、草履ノヌケタルモ知ラズニ居ルコトアリ、或ハ骨節疼痛筋脈拘急シ、遂ニハ十指共ニ屈シテ伸ビザルモノアリ、或ハ先魚際合谷ノ肉脫シ削ギ去リタル樣ニナリ、久シタシテ總身羸瘦スルモノアリ、或ハ鼻

イ風ノ如キモノ幾處モ發シ色ヲ變ゼズ、其郭ノ内ハ痿痺レテ白屑ヲ起スモノアリ、何レモ不治ニ屬ス、陽證ノモノハ赤斑ヲ發スルコト、癜風ノ如キモ頑癬ノ如キモ楊梅瘡ノ如キモアリ、或ハ小疹ヲ發スルコト、蕁麻疹ノ如クニシテ、面目ノ腫ル、モアリ、或ハ赤ク腫起テ、瘣塊ヲ發スルモアリ、或ハ水泡ヲ發スルコト湯潑火燒ノ如ク、乍チ潰テ腐敗スルモアリ、是ハ最初ニ治療ヲ加フルトキハ、十ニ二三ヲ治スベシ、若シ毒盛ニ指脫落シテ、生薑ノ如クナルモノ、足心穿チ坑ヲ成スモノ、鼻梁ノ崩ル、モノ、鬚髮及ビ眉毛ノ脫落スルモノニ至テハ、神方妙術アリト雖ドモ、治スルコト能ハズ、又腹ニ塊癖ノアルモノ、氣血ノ運リ不順ニナリ、面色及ビ手足ノ色モ紫ニナリ、冬時嚴寒ノ頃ニ至レバ、氣血愈運ラズシテ紫黑色ヲ成スモノ、或ハ膝瘡ノ久シク愈ズシテ、總身マデ發スルモノ、或ハ鵝掌風ノ深クシテ、十指共ニ屬スルモノ、及ビ脫疽黴瘡ノ類ハ、其形狀殆ド癩ニ疑似スル者アレバ、誤テ混ズベカラズ、平人卒然トシテ口眼ノ喎斜スルコトアリ、(此症風病ハ喎斜セザル方ニアルナリ、故ニ麻痺シテ色ヲ變ジ不遂スルナリ、病ノナキ方ハ常ノ通リニ動リ、故ニ却テ喎斜スル樣ニ見ユルナリ、)此ハ乃チ中風ナリ、重キトキハ半身不遂スルガ常式ナレドモ、輕證ユヱ唯半面ノ不遂シタルナリ、是モ癩ニ似タレバ診法ヲ詳ニス可シ、癩ニハ必ズ死肌トテ、麻木不仁シテ寒熱痛痒ヲ知ザル處アリ、試ニ鍼ヲ五分モ一寸モ刺ニ、疼ヲ覺エザル處ノアルモノ、或ハ灼灸ルニ痛ヲ覺エザル處ノアル者ハ是死肌ナリ、後必ズ癩ヲ發ス、佗ノ瘡瘍ノ癩ニ似タルモノ、及ビ癩モ初起ニテ定メ難キモノハ、先鍼ヲ刺テ死肌アリヤ否ヤヲ試テ嫌疑ヲ決ス可シ、又眼中稜角ヲ生ジ、烏睛ノ微ニ赤色ニ變ジ、光ノアル樣ニナルモノハ、是又癩ノ一候ナリ、

〔元亨釋書十八尼女〕天平應眞皇太后光明子者、淡海公第二女也、聖武帝儲貳時、納爲妃、天平元年八月冊爲皇后、○中略聖武帝造國分寺東大寺、皆后之勸發也、又置悲田施藥二院、使天下饑恙、及東大寺成、后以謂大像大殿皆已備足、帝勵于外、我營于內、勝功盛德不可加也、且有託意、一夕閣裏空中有聲曰、后

奕詩也、妙觸宣明、浴室滌濯、其功不可言而已、后便喜乃建温室、令貴賤取浴、后又誓曰、我親去千人垢、君臣憚之、后壯志不可沮也、既而竟九百九十九人、最後有一人、偏體疥癩、臭氣充室、后難去垢、又自思、而言、今滿千數、豈避之哉、忍而拂背、病人言、我受惡病、患此瘡者久、適有良醫教曰、使人吸膿、必得除愈、而世上無深悲者、故我沈痾至于此、今后行無遮悲濟、又孔貪之、願后有意乎、后不得已吸瘡吐膿、自頂至踵皆遍、后語病人曰、我吮汝膿、慎勿語人、于時病人放大光明告曰、后去阿閦佛垢、又慎勿語人、后驚而視之、妙相端嚴、光耀馥郁、忽然不見、后驚喜無量、就其地構伽藍、號阿閦寺、

〔閑田次筆〕二光明皇后、貴賤をいはず千人に施浴し、御みづから垢穢を洗淨したまへりし其終に、癩疾のものいたりしを、なはいとはず、さき〳〵のごとくあつかひ給へりしかば、忽ち阿閦如來と現れましゝといふこと傳記に見え、今も奈良坂に阿閦寺の名ごりをとゞめ、癩疾のもの長屋を建て住り、彼故事によりてや、施浴の功德するよしの札も見ゆ、その奇瑞の虛實は論せず、凡善を修するも、功德を行ふも、その人の相應有べし、皇后の善は皇后の善あり、此后の御所爲はなはだしからずや、御女孝謙天皇の道鏡を寵したまひしも、此人もと禪持の僧にてありしより起り、畢竟閨門の法度正しからざるに基するなり、○下略

〔源平盛衰記〕四十四平家虜都入附癩人法師口說言并戒賢論師事其中ニ鳥羽ノ北、造道ノ南ノ末ニ、溝ヲ隔、白帶ニテ頸ヲカラゲ、紬ノキモノニ中ユイタ、朽杖ナド突タ、十餘人列ニ並居タリ、乞者ノ癩人法師共也、年闌タル癩人ノ、鼻聲ニテ語ヲ聞バ、人ノ情ヲ不知、法ヲ亂ルヲバ、恐キ者トテ不敵癩ト申タリ、去共此病人達ノ中ニモ、不敵タルモアリ、不敵ナラザルモアリ、又直人ノ中ニモ、善者モ不善者モコモ〴〵也、世ノ智人ノ辭也、此法師加樣ノ病ヲ受タル事、此七八年也、當初事ノ緣有テ、文章博士殿ニ候レ時、田舍侍ニ小文ヲ數ラレシヲ聞ベ、世ハ人ノ持ニアラズ、道理ノ持也ト云事ヲロマレキ、又清水寺ニ詣テ通夜シタリシ時、參堂ノ僧ノ

中ニ、法華經ヲ讀ニ縁識アリ、近付寄テ聽聞セシカバ、不信ノ故ニ三惡道ニ落ト讀レキ、此内外典ニ敎タル、二ノ事、耳ノ底ニ留テ明暮忘ズ、心ノ中ニタモタレテ候ゾ、前世ノ不信ノ故、道理ヲ不レ知ケル罪ノ報ニテ、此世マデ重ル病ヲ受テ候ヘ共、程々ニ隨ハ、道理ヲバ背カジト、不信ナラジト、深ク思執テ候ヘバ、心中ヲバ神モ佛モカヽミ給テ、本地垂跡ノ御誓誠ナラバ、來世ハ去共ト憑思テ候ゾ、賤其モ不レ及事ナレ共、思合ラル、此平家ノ殿原ノ、世ニハヤラセ給シ有樣ト、今日ノ事樣ト、申テモ〳〵淺增ク候○中略今ノ内大臣○平宗盛殿ノ有樣コソ、ハカナク無慙ナレ、其ニ取テモ、禁忌敷事ヲ承ゾトヨ、入道殿ノ世ニオハセシ時ヨリ、妹ノ建禮門院ニ親タヨリテ被儲ケル子ヲ、高倉院ノ御子ト云ナシテ、王位ニ卽申タリケルトカヤ、不レ及心ニモナキ有ケルヤラント覺エ候ゾ、去バコソ受禪ノ君トテ、内侍所ナンド申ス樣々ノ御守共ヲ、取加ラレテ御座ナガラ、不レ持シテカヽルヒシメキハ出來テ候ニコソ、此事ノ起タヾ不信ヨリナル事也、サレバ入道殿モ臨終淺增クシテ、惡道ニ墮給ケリ、今ワタナル、人々モ、生ナガラ畜道ニ墮ラレタリト覺ユト云、又並居タル長シキ乞者ガ云樣ハ、御房ノ宣フ樣ニ、人ト生テ仁義ヲ不レ顧、恥ヲ不レ知者ヲバ人癩ト云、聞エ給大臣殿ニ近ヅキヨリテ、見參ヲセバヤナ、恥ヲ不レ知人ニ御座ケルニコソ、御座ケレ、一門ノ殿原ハ、皆海ニ入給ケルト聞ユルニ、何トテ命ノ惜カルベキゾ、衰人癩ノ上﨟癩カナ、手綱ナキ我等ガ同僚ニヤ、但此間ノ御心ハ、恐ラクハ我等ニハ劣給ヘリ、イザ〳〵御房達、大臣殿ノ此前トヲリ給ハン時、車ヲ押テ縣鼓カタニ爪ヲヒズ、鶴當カブルニ齒カケズト、拍子テ舞踊ラント云、是ヲ聞ル餘人々云ケルハ哀也、ミメナマコソ禁忌シケレ共、心ノ至ハ恥シクモ語リタリトイヘバ、又傍ニ有ケル僧ノ云樣ハ、病ハ四大ノ不調ヨリモ發ル、又先業ノ報フ事モアリ、心ハ失ヌ事ナレバ、形ニヤ依ベキ、○中略去程ニ内大臣殿ノ車近ナルトテ、見物ノ上下色メキケレバ、武士共雲霞ノ樣ニ打圍テ、雜人ヲ拂ケレバ、口立ル乞者法師原モ、蜘蛛子ヲ散シテ失ニケル、

〔元亨釋書〈十三〉〕釋忍性、姓伴氏、和州城下郡人也、〈中略〉寛元初、就王設癩人齋、施食、授一日夜八關齋戒、寓言癩氏之諸也、奈良坂有癩者、手足攣屈、不行乞、以故數日不食之有矣、時性在西大寺、憫之、毎旦就宅、負癩置郭市、夕負歸宿舍、如此者數歲、隔日而往、風雨寒暑不缺、其癩者臨亡誓曰、我必又生此國、爲師役使、以報恩德、面留一瘡、爲其信耳、果性之徒中有瘡于顏者、善供給、人呼爲癩之後身、性嘗四天王寺、營建太子四院、〈施藥、悲田、敬田、療病、〉事志益盛、自此處々築療病悲田之院、其桑谷療病所二十年間、痊者四萬六千八百人、死者一萬四百五十人、已而器者、殆五之四也、

〔和州舊跡幽考〈三添上郡〉〕奈良坂癩人

いつの比よりにやありけん、癩人の住宅となれり、むかし此所に手足まとはれて、行歩もかなはざれば、物ごひもかなはず、日を經るといへども、物もくはざりける癩人あり、その比忍性律師は西大寺にぞ住おはしける、かゝる癩人を見給ひていとあはれがり、朝ごとにならの京のいはりにいたりて、癩人をうしろにおひ來り、市中にすへをき、暮ぬれば又をひてかれがいはりにをくりかへし、風雨寒暑にもをこたりなし、癩人臨終の時ちかひあり、我かならず又此世界にうまれて、師につかへて厚恩を報じ奉らん、顏に一瘡を殘してしるしとせんといひてぞをはりける、その後忍性律師につかへし人の中に、あながちにつかうまつるものあり、かほに一瘡あり、時の人癩者の後身とぞいへる、忍性律師の修營の伽藍八十三所、塔婆二十基、大藏經一十四藏、諸國の川橋一百八十九所、嘉元元年七月十二日をはりをとる、年八十七〈歲〉

〔武德安民記〈二十一〉〕國府大戰敵徒敗北之事

吉隆〈姓〇大〉ハ癩病ニテ、兩眼盲タレバ、兼テヨリ軍敗バヾ自殺セント、鎧ヲバ不著、〈下略〉

〔古老口實傳〕一癩病者、神宮四至内居住、幷往反禁制之、

〔伏見日記〈三〉〕癩坊

京師桂原病棄、及南部殺者猶有癩坊、（元明證日、今洛中有癩人、蓋官置癩坊以居之、）歳首、中元、歳晩三節、癩人相率來、坊市、各戸索米、不與則詈罵、此不獨此方、按吳震方嶺南雜記曰、潮州大麻瘋極多、官爲立麻風院、如養濟院之設、集在鳳凰山上、聚麻瘋者其中、給以口糧、有麻瘋頭治之、其名瘋胡、衣冠濟楚、頗能饒富、人家有吉凶之事、瘋人相率登門索食、少則詈罵、必先賂瘋胡、求片紙粘門、瘋人卽不敢肆、院中有井名鳳凰井、甘洌能愈疾、瘋者飲之卽能不覺、肌肉如常、若出院不飮此井卽仍發矣、入院游者、瘋頭特設淨食淨器以款之、其中男女長成自爲婚匹、生育如常人、瘋女飮此水、面目倍加紅潤光彩、設有登徒犯之、次日其女宿病已去、翩然出院、而登徒便染其毒、卽代其瘋、不數日眉鬚脫落、手足麻痺肢節潰爛而死矣、（癸辛雜識後集）引、閩中有所謂過癩者、蓋女子多有此疾、凡覺面色如纈、卽此證之見也、或男子不知而與合、男[illegible]、士人有[illegible]因往嘗因道中遇女子、[illegible]大風疾也、

（賤者考）伊勢物語にかたゐ翁とある類是なり、さるを今癩病者を、カツタヰといふより、此病者の事と心得るはひがごとなり、さる惡疾などの者、世に忌嫌はるゝより、ひとしく悲田院施藥院に入て乞食となりし故に、總名にていふなり、此病者のみの稱にあらず、或說に此惡疾を漢土にて害大風といふ、故に害大の意なりなどいへど、中々にわろし、さやうに物遠き名を昔はとり出ていふことはなかりし事なり、通假たるにこそあれ、そは偶中なりと、玉かつまにも辨あり、五雜俎に、癩病者に觸れて、大風起令眉鬢墮、何得壯士讓鼻梁、と作れる事など見ゆ、又或人この悲田院の事にて思ふに、前條にある夙といふも是類にて、もと宿疾の者などを疎みて、宿といひしにはあらぬかといへり、按ずるに、其あたる所はさもあるべけれど、宿の名義を宿疾の宿といふより出ると見るは、少し物遠く聞ゆ、されど其意は遠からじ、昔より此惡疾は忌み來れば、齋を他につたへざる爲に、郭外に出して別居せしめし例の殘りてにや、洛東の物吉といふ村は、癩病人のみ居る地にて、常は他にいでず、いさゝかの耕耘、又草履草鞋などを作る、正月のみ一度づゝ、洛中を巡

りて、物吉とよびて戶別に物を乞ふ、大戶小戶に應じて多少なれば錢を乞ふ、正月吉祥をいのるころに、さる者の來るを忌みて、遠く聲の聞ゆるより、家僕に施すべき米錢を出して、持出て我門戶に至らざるほどにはやく財與す、錢を乞はれなどすれば、門にいたりて惡罵する故に、さらぬやつに過分に錢あたふれば、一日の所得夥しとぞ、かくとは無けれど、他所他邦にも此類の群居する地は往々きこゆれば、同じ制度なりしなるべし、(京畿の粟田若宮邸、伊勢の北多度村の邊、紀國の三井寺村の邊、その他國にも多し、)

(塵塚談下)癩病、數千萬人の中に有事なし、愚老(二十四歲)若年の比、江戶出生の者に、只一人ありけり、其餘はみな他國の產也、今時乞食等に此病にて、異體のもの折ふし見れど、江戶產かつてなし、江戶を離るれば多く有よしなり、

(建殊錄)有一瞽者、備州人也、寓京師、與我舊善、瞽坐一日謁先生(○吉益東洞)曰、瞽者得懇儒、貫道戒師某禪師者、病腰腫、二便不通、衆醫皆以爲必死、辭還待斃、瞽得先生備急圓者而往矣、乃作散劑與之、比及瞽坐還、禪師僅存呼吸、卽出備急圓服之、下利數十行、腫痛減、未及十日全愈、於是其里中有患癩疾者、見其有奇效、謁瞽坐求之診治、瞽坐乃謝曰、京師有東洞先生者、良醫也、千里能察疾、無所不治、嚮所患禪師、固其藥也、今又爲汝謁之、其人亦懇托而退、瞽坐復來京師、則懇謁先生、詳告其證候、且懇其治、先生乃作七寶丸二劑贈之、其人服之、而全治矣、其明年來京師、謁先生、則已如未病者焉矣、

(近世物語三)貞婦感天威、

天保四年の頃、車力渡世善兵衞といふ者、數年癩病を患しに、次第に難症と成しを、妻千代深切なるものにて、厚意に看病せしかど、日を追て異態を顯しければ、善兵衞つく〴〵思ふやう、凡世上は花咲ば集り、花散れば離散する習ひなるに、我もとより薄命にて、漸く車力を以て其日を送りしさへ、妻の貧苦に迫るを心苦しく思ひしに、今斯人と交も成がたき惡疾を得しかど、更に意に懸る氣色もなく、益貞操を盡す事の不便さよ、是則貞女烈女といふものなるべし、か丶る貞節の

婦を苦しめ、如何に服藥療養なすとも、更に其効驗はあるまじ、我此家を立去り、如何にもして、世に隱れ住ならば、妻も一身の働にて、心安きかたも有ぬべしと思案を極め、或日妻千代に向ひ心中を明し、若し三ヶ年も音信なき時は、我死したりと思ひ定て、一身の片付も心次第になるべしと言放ちて立出るに、千代泣々止めけれども、耳にも入れざる體にて出行けり、かくて年月移り行、聞き改どし、風斗、善兵衛未だ存生のよし、仄に千代聞付て、さすがになつかしくもいたはしくて、何卒在所を尋ねばやとて、日夜をわかたず、あなたこなたと探索せしに、善兵衛はもとより非人の員に入、仲間の非人共へ袁て頼み置しは、もとかやう〳〵の婦人、我を尋來る形ち有とも、必かくと告具まじと、堅く口留めせしかば、かくぞと告るもの更になし、千代も餘りに尋かねて、氣力も今は疲れはて、見やせん角やせましと思煩ひしに、猶又或日所々探し、堀井戸邊に至りしに、一人の乞食、是も癩病にて、いと見苦しき體にて打臥たり、千代立寄尋問し、扨吾夫善兵衛といふ者、かやうの體にて乞丐してや有ならん、汝見聞せしことなきかと尋しに、乞丐答けるは、いかにもさる人有て、我等が仲間に入漂泊せられしに、先年既に死去せられしなりと、委細に語るものごし、何とやらん夫善兵衛に彷彿たりといへども、數年逢ざるうへ面も腐爛し、手足も腫て膿血を出し、目も當られぬ有樣は、さすがに我夫とも思はれず、去ども委敷善兵衛を知たるも不審なりと思極めて、そこは吾夫善兵衛なるべし、かく迄諸所を狂ひ歩行、よる晝思ひ焦る、妻の心を憐すや、いと難面の心やと、且恨み且嘆し、さま〳〵責問しかば、乞丐今は忍かね、我こそは善兵衛なれ、命つれなく今が今迄ながらへて、かゝる姿ながらに、再對面する事の恥かしさよ、是よりふつ〳〵思切、我を尋ぬる事なく、世の營を大切にすべし、我はかくて夕を待ぬ露命なり、必ず念に懸る事なかれといひけるを、妻はなく〳〵手を執て強て伴ひ、其節千代が住居、新材木町杉森稻荷新道に連歸り、いよ〳〵全精魂を砕き、醫療を盡し佛神に祈誓を懸け、夫の平愈を一心に祈

るといへども、所謂業病不治の症なれば、更に寸効もなかりけり、善兵衛貞婦の我我故かくまで困苦するを見るに忍びず、つら／＼思ふやう、迚も此悪疾にて終に死すべきなれば、一時も早く食を去りて、妻の苦患を救ひ度、餓死せば、困窮を脱がすべし、毒を呑て死せんには、礬石容易に得がたし、如何がはせんと案せしに、ふと思出せしは、鱶は毒魚にて、是を喰ものまゝ即死す、之かるに饑饉の口にせしを、枯杉木の枯葉を以て、鱶を丸のまゝ、煮てくらふ時は、十人が十人ながら必死すといへり、

按に、鱶と鶏草は至て食忌にて、鶏草の實を喰し河豚は必ず人を殺す、彼之饑饉の口とせし鶏草、鱶を煮る炎に觸る時は、其河豚必ず人を害す、是故に酒店抔にては、鶏草を口とせし炎を鍛く吟味して避はざるよしなり、枯杉の事恐くは傳聞の誤か、又はさる事も有るにや、合せ記し後鑒を竢つ、

是は我ための鴆毒砒霜なりとて、妻の他出を伺ひ、鱶の丸煮を調し、十分に食せしかば、忽頭眩して鼻口より血を吐事夥敷、嘔吐の聲隣間に聞へしかば、皆々驚き何事やらんと欠付しに、もとより覚悟の事なれば、戸口戸口は内より〆切、外より人の入る事叶はざるやうなしおけり、されど其苦痛の樣子聞に堪かね、板戸を蹴破り内に入て見るに、善兵衛は半死半生にて、只血を吐事流水の如くなりしかば、皆々介抱し妻を迎に行、立戻りて此體に驚き、さま／＼介抱せしに、命數未盡ざるにや、又は悪血を悉く吐出せし故にや、是より癩病漸々快復し、日まし月ましに肥肉上り、眉毛も生じ、全く常體の人と成しかば、夫婦の喜び大方ならず、其後又車力渡世して、倶に稼出し渡世替して、紙商賣を始め家業繁昌せしに、後五六年すぎて、隣の火災に遇事を患て、近在へ轉住し、閑居せしめるとかや、此話傳上知る者多かるべし、予は善兵衛の舊宅の同町、新材木町尾張屋佐助といふ材木屋方へ、奉公に來れるもの、委敷知りて語るを、自の員に備んため、且貧民にかゝる

貞實の有る事、感ずるに餘りあれば記しおきぬ、

〔令義解 二戸〕凡〈略〉中悪疾、〈謂白癩也、此病有虫食人五臟、或眉睫墮落、或鼻柱崩壞、或語聲嘶嗄、或支節解落也、亦能注染於傍人、故不可與人同牀也、癩或作癘也、〉

〔令義解 二戸〕凡弃妻、須有七出之狀、一無子、〈略〉中七悪疾、

〔本朝醫談〕白癩は令義解に惡疾の部に入る、今いふかたゐ也、治方口訣には、白山癩となづく、

〔重校萬安方 五〕白癩

論曰、白癩之候、語聲嘶嗄、目視不明、四肢頑痺、關節熱痛、如火燒灼、骨髓拘急、肉如刀劈、手足緩縱、身體癮疹、鼻生息肉、目生白珠、肉色斑白、故謂之白癩也、

〔日本書紀 二十二推古〕二十年、是歲自百濟國有化來者、其面身皆斑白、若有白癩者乎、惡其異於人、欲棄海中嶋、然其人曰、若惡臣之斑皮者、白斑牛馬不可畜於國中、亦臣有小才、能構山岳之形、其留臣而用、則爲國有利、何空之棄海嶋耶、於是聽其辭以不棄、仍令構須彌山形及呉橋於南庭、時人號其人曰路子工、亦名芝耆摩呂、

〔古今著聞集 七能書〕宇佐大宮司なにがしとかや、癩病をうけたる由聞えありて、一門の者ども改補せらるべきよし訴へ申ければ、大宮司はせのぼりて、醫師にみせられて、實否をさだめらるべきよし奏し侍ければ、和氣丹波のむねとあるともがらに御尋有けり、中原貞說もおなじく召に應じて、御尋に預りけり、各白らいといふ病のよしを奏しけり、療治すべきよしの御文奉るべきよし、仰下されければ、めん／＼に罷出て、參らすべき由申けるに、貞說申けるは、非重代の身にて一巻の文書のたくはへなし、知りて侍る程の事は、當座にて御尋へ申べしとて、則志るし申けり、もろ／＼の醫書ども皆悉く引のせて、ゆゝしく注申たりければ、叡感有て、申うくるに隨ひて和氣の姓を給はせけるを、後には讃岐正に成て、子孫いまにたえず、

〔宇治拾遺物語 九〕これもいまはむかし、智海法印有職のとき、清水寺へ百日まいりて、夜更て下向

黄疸

しけるに、はしの上に張圖數息、遂卽是瞑、自餘三數、遍顯定故といふ文を誦する僧あり、たうとき事かな、いかなる人の誦するならんと思ひて、ちかうよりてみれば白癩人なり、かたはらにゐて法文の事を云に、ちかひはと〴〵いひまはされけり、南北二京にこれほどの學生あらじ物をと思て、いづれの所に有てとひければ、此坂に候なりといひけり、後にたび〴〵尋けれど、たづねあはずしてやみにけり、もし化人にやありなんとおもひけり、

〔倭名類聚抄 三 病〕黄疸 病源論云、黄疸(音旦、和名岐波無夜萬比、一云黄病、)身體面目爪甲及小便盡黄之病也、

〔箋注倭名類聚抄 二 形體〕昌平本注首有疸字、下總本有下字、按說文、疸、黄病也、又醫心方引醫門方、黄病身體面目悉黄如橘、萬安方同、岐波无也万比、蓋黄字讀、肥也、體支讀支也、○中原書黄疸候、身上有令字、及字在爪甲上、外臺祕要、醫心方並引、及字在小便上、與此同、原書無之病也三字、

〔伊呂波字類抄 岐 病〕黄疸(キハムヤマイ)黄病 同

〔增補下學集 上二 氣形〕黄疸

〔醫心方 十〕治黄疸方第廿五

病源論云、黄疸之病、此由酒食過度、府藏不和、水穀相幷、積於脾胃、復爲風濕所搏、瘀結不散、熱氣鬱蒸、故食已如飢、令身體面目爪甲及小便盡黄、而欲安臥、若渇而疸者、其病難治、疸而不渇、其病可治、發於陰部、其人必嘔、發於陽部、其人振寒而發熱也、

〔叢桂亭醫事小言 四〕黄疸

古ヨリ五疸ト稱シテ五ツニ分ツト雖、其方藥ハ必五法ニ非ズ、五疸トモニ黄ヲ治ス方多シ、左スレバ五疸ニ分ルモノハ紙上ノ議ナリ、八疸或ハ三十六疸、其外種々ノ名稱アリ、今是ヲ治スルニ緩急二ツアリ、急發ノモノハ皆治シヤスク、緩發ハ多ク治シニクシ、殊更年高ノ人ハ、半ハ鬼簿ヲ免レズ、緩發トハ常ニ惡寒シテ臥床スルニ及バヌ位ニ從スコト累日、小便微黄、日ヲ經テ漸濃クナ

ル、サテ小便黄ニナルハ熱アルヤ、又ハ大黄ニテモ用ユレバ黄ニナレドモ、沫ハ白ク立モノ也、此證ノ小便ハ、桶ノ内ノ沸沫共ニ黄ニ見ユルモノ也、甚シキハ白紙ヲ染ムベシ、此病察色ニテ知ベシ、○中略

黄胖ト云モノ、方書ニ黄瘦ニ屬シテアリ、食勞疳ノコトヽモイヘリ、黄胖ハ俗語ナリトゾ、今民間ニ多ク、中人以上ニ稀ナル病ニテ、間ニハ貴人ニモ必無ト云ベカラズ、此黄胖ハ黄土ノ氣ニ感ジテ病ムト云、浮腫病或阿達ノ病ト呼、又ゼイフタトモ呼、方書甚多シ、是ヲ脚氣ニ屬シタル書モ有、偶記ニ詳ニ論ゼリ、識ベシ、爪甲反リテ薄ク、或縦ケテ不長、或ハ片々ニヘゲテ枯裂スルモノ其光澤無、

〔増鏡十あすか川〕春宮〈字○●●〉例にもおはしまさで日比ふれば、内のうへ〈山○●〉御胸つぶれて、御修法やなにやとさはがせ給、和氣丹波の藥師ども〈氏成〉、よるひるさぶらひて、御藥の事、色々につかうまつれど、たゞおなじさまにのみおはす、いかなるべき御事にかといとあさましうて、上〈山○●〉もつとこの御方にわたらせ給て、見たてまつらせ給に、御目の中おほかた御身の色なども、ことのほかに黄にみえければ、いとあやしうて、御そ子をめしよせて御らんせらる、紙をひたして見せらるゝに、いみじうこく出たる黄皮の色なり、いとあさましく、などかばかりの事をしり聞えざらむとて、御けしきあしければ、藥師どもいたうかしこまり色をうしなふ、かばかりになりては、御灸なくては、まが〳〵しき御事いでくべしと、その〳〵おどろきさはぐ、いまだ例なき事は、いかゞあるべきとさだめかねらる、位にてはたゞ一たびためしありけり、春宮にてはいまださる例なかりけれど、いかゞはせんとておぼしさだむ、七にならせたまへば、さらこだに心ぐるしき御ほどなるに、まめやかにいみじとおぼす、藥師と大夫〈貫注〉の君ひとりめし入て、又人もまいらず、御門〈山○●〉の御前にて、五所ぞせさせたてまつらせ給ける御乳母どもいとかなしと思て、いぶか

黄肝病

しうすれど、おさ〳〵ゆるさせ給はず、宇多院いとあつくむづかしうおぼせど、大夫につといだかれ給て、上〇[illegible]の御てをとらへ、よろづになぐさめ聞えさせ給ふ、御けしきのあはれにかたじけなさを、をさなき御心におぼししるにや、いとおとなしく念じ給ふ、

〔太平記三十〕慧源禅門逝去事

斯シ後ハ、高倉殿〇[illegible]ニ付順ヒ奉ル侍ノ一人モナシ、籠ノ如クナル屋形ノ荒テ久キニ、警固ノ武士ヲ被居、事ニ觸タル悲シ、耳ニ満テ心ヲ傷シメケレバ、今ハ浮世ノ中ニナガラヘテモ、ヨシヤ命モ何カハセント思フベキ、我身サヘ無用物ニ歎給ヒケルガ、無幾程、其年ノ観応三年壬辰二月二十六日、忽ニ死去シ給ヒケリ、俄ニ黄疸ト云病ニ被侵、無墓成セ給ケリト、外ニハ披露有ケレ共、実ニハ鴆毒ノ故ニ、逝去シ給ケリトゾ、サヽヤキケル、

〔療治茶談二〕黄肝病證治經驗

黄肝病ノ病名ヲ、黄胖トモ、フ。ク。病。トモ、ア。ヲ。バ。レ。トモ云、其證多クハ黄疸ニ似タリ、玉案ニ黄胖ノ證ハ其色白ヲ帯ビ、眼中黄ノ如ヲ以テ黄疸ト分ツ、王宇泰醫統モ赤玉案ノ説ノ如シ、コノ證初發ヨリ眼中黄ムモノ多クレテ、中々眼中ノ黄白デバカリハ、疸ト胖トノ區別ハナリガタキモノ也、コレニ因テ俗醫疸ヲ以テ胖ヲ治シ、胖ヲ以テ疸ヲ治シテ、夭死セシムルノ患アリ、是レ他ナシ、疸胖兩證ノ別レヲ知ラザルニヨレリ、今予〇津田玄仙ガ數年來經驗ノ要法アリ、因テ記シテ后用ニ備フ、第一嘈雜(割注：[illegible])、第二肚脹(割注：[illegible])、第三手足怠情(割注：[illegible])、第四好喫茶(割注：[illegible])、第五面色(割注：[illegible])、此五證ノ中、嘈雜喫茶手足怠情コノ三證アルトキハ、飲食ノ多少、寒熱ノ有無、脈ノ虚實ヲ問ハズ、決シテ黄胖トナシテ療治スベシ、余證具バ猶更ノコト、是レ脈ヲステヽ證ニ従フノ正鵠ニシテ、百發百中ノ妙決ナリ、

中風　中氣　卒中

〔撮壤集 下 時節〕中風

〔增補下學集 上二 態藝〕中風

〔病名彙解 二〕中風　中ハアタルト訓ズ、風ニアタル也、眞中風、卒中風、類中風ノ分チアリ、昔體氣虛弱ニシテ榮衞調ラズ、或ハ喜怒憂思悲驚恐、或ハ勞力ニ傷ラレ眞氣耗散シ、腠理密ナラザルニ因テ、風邪虛ニ乘ジテ入中風トナル也、臟ニアタリ、腑ニアタリ、血脈ニアタリ、氣虛血虛ノ同カラザルアリ、眞中風ハ、眞ニ風邪ニ中ナリ、類中風ハ、中火、中氣、中濕、中寒、中暑、食厥、勞傷、房勞、痰厥、血運、中惡、卒死等ノ症、皆中風ニ類スル者也、卒中風ハ、卒然トシテ暈倒シ、人事ヲシラザル也

〔病名彙解 二〕中氣　七情ノ氣ニ傷ルヽニ因テ病ヲナス、大方中風ト同ジ、風ト氣トノ差別アル也、

〔醫心方 三〕治中風四支不屈伸方第十五

病源論云、風四支拘攣不得屈申者、由體虛腠理開、風邪在於筋故也、○中略

治中風身體不仁方第十六

病源論云、風不仁者、由營氣虛衞氣實、風寒入於肌肉、使血氣行不宣流、其狀搔之如隔衣是也、

〔喫茶養生記 下〕中風手足不從心病

此病近年以來衆矣、又起於冷氣等、以針灸出血、湯治流汗、爲厄害、永却火急浴、只如常時、不厭風、不忌食物、漫漫服桑粥桑湯、漸漸平復無百一厄、若欲沐浴時、煎桑一桶可浴、三五日一度浴之、莫流汗、是第一妙治也、若湯氣入流汗、則必成不食病故也、冷氣、水氣、濕氣、此三種治方如斯、宜又加鬼病也、

〔覆載萬安方 二〕中風 半身不遂

論曰、脾胃爲水穀之海、水穀之精化爲氣血、氣血充盛、則身體滋榮、而風邪不能爲患、脾胃既弱、水穀虧耗、所以滋養者不足、血氣偏虛、又爲邪風所侵、此所以半身不隨、病苦悲傷不樂、惡聞人聲、少氣時汗出臂偏、不擧診其脈、寸口沈細是也、又寸口偏絕者、則偏不隨兩手俱絕、則不可治、

〔證治要方〕二中風角弓反張　和ニハソリトイフ

論曰、風角弓反張之狀、腰背反折、不能俛也、由風邪客於諸陽之經、邪正相搏、風氣勝則筋脈緊急、腰背反折、如弓之形也、

〔叢桂偶記〕一風

東洞先生曰、中風之病、來歷其名義、以爲中於風、則寒疾之症也、所謂中風者非寒疾、近代醫書雖有其說、寄未的確、蓋風非風邪之風也、爲氣病所之、其義稍通、心氣疾、氣血疾、充諸經內、而運動流行者皆可以爲風、所謂大塊噫氣、其名曰風、風者天地之氣也、故釋之以氣、雖言痲大風、其實氣病、可以見也、又有腸風、胃風、又有白癜風、紫癜風、此等之疾有風名者、皆氣血錯亂所致也、又小兒有急慢驚風、又狂病曰心風、曰風疾、唐書曰、風疾使高不可入仕、是狂僻狂不任官也、狂人稱風癲漢、又稱風子、又單用風字、以爲心疾、是皆謂心氣錯亂也、中風之病、一身氣血偏枯、軟弛、作種種形狀、是爲風所中也、西土又有相易術謂之風水、又名地理、宋儒言曰、有水以界之、無風以散之、出于有身體要、是謂地中有風乎、又爲其氣而已、佛書、地水火風謂之四大、四大假合爲幻體、四大各歸、其氣假氣歸于大、轉動歸于風、出于圓覺經、夫風在人身所轉動也、是亦謂氣也、又大之經曰、風動曰動、可見風者氣也、而醫書謂心氣氣血之變曰中、佛典是覺言乎、其說爲皆是唐人以爲時之語而譯之、可以證也、余按醫籍以風名病者甚多、然其實不過三義也、而名中風者有二證、傷寒論曰、中風是有傷寒輕症、卽風寒之風、於字義爲至當、中爲去聲、卽傷風也、如風破傷風、風濕等、皆風寒之風、總外因是爲一端、世之所謂中風者、其證半身不遂、口眼歪斜、東洞以氣字爲解者也、莊子曰、民溼寢則腰疾偏死、荀子曰、禹跳湯偏、尹子曰、禹之勞、十年不窺其家、手不生爪、脛不生毛、偏枯之病、步不相過、人曰禹步、鄭註尙書大傳曰、湯半身體枯、淮南子曰、偏枯之類、是卽世之所謂中風、而古典不言中風、夫中風者、傷風之名、而係外襲風邪、而偏枯者、原有癱瘓仙癖、血塊、飲毒、而思慮過度、或酒色耆慾之人、因寒暑飢飽內勞激發也、至其輕重緩急、順逆虛實、其候多

癎也、素靈無中風之目、而設風之證者往往有之、○中此稱中風者、父母病之、其子多病之、屬內因、所謂大麻風、癩風、大風等諸名、皆爲一義也、至如風狂、風癲、風病、風魔、則又別爲一義、

〔內科秘錄〕中風

中風、癲癇ハ、古ヨリ判然トシテ二病ニ分チタレドモ、實ハ一病ナルベシ、少壯ノ時ニ發スルトキハ、癇ノ諸證ヲ見ハシ、老衰ニ及デ發スルトキハ、中風ノ諸候ヲ發スルナリ、譬バ驚癇ハ一病ナレドモ、長幼ニ因テ其見證異同アレバ、小兒ニ在テハ驚風ト名ヅケ、大人ニ在テハ癲癇ト曰フガ如シ、故ニ初メ癇ノ諸證ヲ發シ、一旦差テ後再發スルトキハ、中風ノ諸證ヲ備フル者アリ、或ハ初中風ヲ患ヒ、一旦差テ後再發スルトキハ、癇ニナル者ナリ、又按ズルニ、驚風、癲癇、發狂、中風ノ四ノ者ハ蓋一病ナレドモ、長幼ニ從テ不同、小兒ノ癇ヲ患ヒテ半身不遂スルハ卽小兒ノ中風ナリ、大人ノ卒中風ハ卽大人ノ急驚風ナリ、古人中風、癇證ヲ分チ治法ヲ立ルト雖トモ、證候相混淆シ、藥方モ亦大同小異ノミ、今因病ノ一因ナルコト、彰然トシテ明ナリト雖ドモ、從來ノ舊染ナレバ、遽ニ改ルコト能ハズ、且因病各異同アリテ、治法モ亦各證ニ從テ同ジカラザレバ、舊說ニ從テ各門ヲ分ツノミ、

〔一本堂行餘醫言十八〕癲附方數條、附驚 癇 健忘 蹇

癲、卽今醫俗所謂中風之總稱也、或偏枯、或全癱、或多忘癡心、雖使不卒死者、總是癈人、故總稱之癲、夫癲之爲病、多必先爲卒倒、其卒發之狀也、忽然倒仆、委地昏憒、不省人事、如沈醉人、或牙關緊急、或痰涎壅塞、喘喉作嘐聲、如鼾聲、或口眼喎斜、手足癱瘓、或半身不遂、或頻頻大欠、或睡息必鼾、或遺尿失禁、輕者卽時醒覺、數過如故、雖不施治而自愈、重者乍醒乍寐、或大聲喚起病人之名字、或應或不應、一二日內略知人事、能食者漸漸多穩實、隨其輕重、以施保護之術、至重者叫喚不答、鼾睡如雷、氣喘痰潮、面赤如醉、遺尿汗沐、水漿不下、搐搦戴眼、髮直眼合、口開手撒則死、此卽癲之急證也、又有卒倒後、或稍醒、

反仰弛縱、只管大欠、失音不語、手足動搖、飲食略下、經四五日而死者、此急痺之稍緩者也、醫俗謂之卒。中。風、又曰卒中、並非也、素靈謂之擊仆、又曰仆擊、

(諸病源候總論一)風痱候

風痱之狀、身體無痛、四肢不收、神智不亂、一臂不隨者風痱也、時能言者可治、不能言者不可治、

(叢桂亭醫事小言二)中風

豫テ中風ヲ病セシ人ハ、常ニ能ク識ル、狂ヲ病ス人ハ一切ニ識ルコト不能、論隊スベカラズ、中風ノ偏シハ半身不遂シテ、肌ニ紙ノツキタ乾著シタル樣ニ覺ユ、甚シキハ麻木不仁ス、麻ト云ハ、シビルルコト、木ト云ハ覺ノ無キコト、不仁ト云ハ、梶原性全ノ頓醫抄ニ、人ハダナラズト譯セリ、人何ノワケモナクシビレルハ中風カ、又ハ脚氣ノ催シ也、又筋ヲ立テ痺レル、是ヲ死肌ト云、癩病ノ萌也、血色ヲ察スベシ、虫ノハフガ如クニテ搔テモ知レズ、又指ノ一二本屈ムルト、手ヲソヘネバ伸ビズ、痛モ痒モ無キハ中風ノ萌也、又肉脫シテ細ルハ癩モアリ、又脚氣ニモ手指ノ拘攣スルコトアリ、混ズベカラズ、

(源平盛衰記二十七)資永中風死事

九月〇養和元年廿日、城太郎資永ガ弟ニ、城次郎資茂ト云者アリ、改名シテ永茂ト云ケルガ、早馬ヲ六波羅ヘ立、平家ノ一門馳集タ、永茂ガ狀ヲ披タルニ云、去八月廿五日、除目ノ聞書、九月二日到來、謹デ披覽之處ニ、舍兄資永、當國ノ守ニ任ズ、朝恩ノ忝ニ依テ、明三日義仲追討ノ爲ニ、五千餘騎ノ軍士ヲ卒シテ、重テ信州ヘ進發セント出立ヌル夜ノ戌亥ノ刻ニ當テ、地動キ天響テ雲上ニ音在テ云、日本第一ノ大伽藍、金銅十六丈ノ大佛燒タル、平家ノ方人スル者アリヤト叫始テ、其聲通夜絕ズ、是ヲキク者身毛竪ズト云事ナシ、資永卽大。中。風シテ、病ニ臥シ、ウヂスクミテ、思フ狀ヲモ書盡カズ、舌張シテ思フ事ヲモ云盡カズ、明ル巳時ニ悶絕躃地シテ、周章死ニ失候畢ヌ、仍永茂兄ガ餘勢

引卒シテ、信濃ヘ越ントト欲シテ、軍兵ヲ催ストイヘドモ、資永任國ノ越後ハ、木曾押領ノ間、不及國務、北陸ノ諸國、木曾ニ恐テ一人モ不相隨トゾ申タル、此狀ニ驚テ、同二十八日、重テ左馬頭行盛、薩摩守忠度、大將軍トシテ數千騎ノ軍兵ヲ相具シテ北國ヘ發向ス、

〔康富記〕應永卅二年二月十六日丁巳、晨刻許下人云、小川宮(院第二御子、内裏御一腹御舍弟、近比勸修寺中納言經興卿亭ニ寄宿、件御所被納言家也、御事同宿、御座也、)今曉寅剋御之、頓死也云々、仰天驚歎、○中略仰被御病事、典藥醫師(賴三位、寶名員盛云々、)參入、依御脈令斷給、不知其實、又日來無御不豫事、或云御内損歟、或云大中風歟、又云閣食御毒歟、是兩三外無推量云云、御身色黑也云々、三位法師驚事、御灸三ヶ所(御頂上、兩御足、大椎上、)無其益云々、則人々相率參院、以季保卿申入之間、叡心惘然、東西不辨御式也云々、仍各退出、頃之或人曰、宮御方御脈出來之由風聞者、仍又驗多之處浮言也、

〔治憲公御年譜附錄一〕野芹

寬政九年の春、勝熙君、御不例御快氣御床退御祝之節被進之、

先達ての御病症、御輕症とは申ながら、類中風の御症にて、中々早速御全快は有之間敷、凡六七十日の御手間取にも可有之と、醫師共も申聞、大殿樣にも甚だ御苦心被遊、隨て我々共も痛心いたし候所、御療養被相叶候とは申ながら、以の外不日御順快、既に今日御床退も被成候事、御一己の御仕合は不及申、第一大殿樣御老心を被安候こと、我々どもまで大悅不過之事に御坐候、

〔御醫諸舊例的三〕文化二丑年二月三日

月代願

私儀、中症、今以相勝不申候ニ付、御香醫師成田宗筑藥服用仕罷在候處、此節逆上強御座候ニ付、月代仕候ハヾ可然と宗筑申聞候間、依之爲養生月代仕度奉願候、以上、

寄合　長田三右衞門

二月三日

寄合　長田三右衞門

御附札、蘭之通、月代可被致候、

よいよい病

〔俚言集覽 増補〕よいよい病 此は、近頃の俗語也、癩疾を云、

〔半日閑話 十〕一世俗にヨイヨイと云病有、俗に中風の樣になるを云、是も醫書にあり、東方百年來有此病、ぺりぺりと云よし、玄厚の說、〈内經靈樞痿病篇〉

風病

〔醫心方 三〕風病證候第一

黃帝大素經云、風者百病之長也、至其變化、爲他病也、無常方、〈[illegible]〉

素問經云、千病万病無病非風、

〔本朝醫談〕むかしの物語をよむに、風の心地といへる詞あり、是は諸病の因は、風邪なりとくすしがいひたるが、世人にうつりて、凡病は風より起るものと心得たるやうに見ゆれども、此邦に一種かぜといふ症あるなり、諸士人のいふ風とは異なり、其異なる事は、治療の異なるにて知べし、榮花物語、長德元年、關白殿御心地あしく、御風にもなどおぼして、朴なとまゐらすれど、おこたらせ給はず、加茂保憲女集、足曳の病やむにてふほゝの木の皮吹寄る風はあらじとぞ思ふ、是はほゝの木の皮を用て癒る病ありて、是を風といふなり、本草厚朴にいひ傳へたる主治に拘はらずこれを用て、斯邦の風といふ病はなほるなり、又病因を物の怪のやうにいへるは、佛學の世に行はれて、釋氏鬼病の說の世上に弘まりたるにあらず、總てまじなひ祈禱して本復する症は皆鬼病なり、其外は多く飲食より起る病なり、故に諸士の古人も病因に鬼食をいへり、〈左傳、晉知召、非鬼非食、〉

〔春秋左傳注疏 四十一 昭公〕元年、晉侯求醫於秦、秦伯使醫和視之、曰疾不可爲也、是謂近女室、疾如蠱、非鬼非食、惑以喪志、〈[illegible]〉淫生六疾、六氣曰陰陽風雨晦明也、分爲四時、序爲五節、過則爲菑、陰淫寒疾、陽淫熱疾、風淫末疾、雨淫腹

疾、晦淫惑疾、明淫心疾、女陽物而晦時、淫則生内熱惑蠱之疾、今君不節不時、能無及此乎、

〔奇魂一〕病源論 幷病名書

漢様にのみなりて、古の病名詳ならねど、猶古書に求て、有ん限は、此の風によむべきわざ也、さて古と今と名同くて病異なると、漢名にのみ唱て、古名を失たると、古と今と多し少しとあり古今名同く病異なるは、續紀 天平元年 に、詔曰、朕枕席不安、稍移晦朔云々、詔曰云々、加以元來風病[illegible]苦[illegible]云とみえ、後紀 大同四年 に、天皇自從去春、寢膳不安云々、詔曰云々、朕躬元來風病[illegible]苦[illegible]云々、榮華物語にも、なほこの殿は、ちいさくより、風おもくおはしますとて、かせの療治どもをせさせ給、此外多し等有を考ふれば、狀も定らず、常あつしくて、年青く痼疾と成れるを云にて、今俗にいふ癇とみえたり、今世にいふ風の病には非る也、

〔本朝醫談〕四百年前、人の引こもりし時、濕熱の病とも見えずと云ふ事あり、濕熱といふ事は、宋人よりいひ出して、丹溪に至て、其說大に行はる、唐土の古人は、萬病皆風寒より起ると心得たり、傷寒論も其意なり、されば病人十に七八濕熱の劑を用ふ、丹溪の發揮せし局方の藥も、宋の時初て作りしにもあらず、古人乳石を服する餘意なり、乳石は魏晉六朝より唐まで流行して、服する人寒食冷飲して其熱毒を解するに至る、其禍を蒙るもの少からず、こゝに於て宋の諸老病の因は、風寒は少く濕熱多しといふ說を立しなり、是說おこらざりせば、五石散の害、今の世までも傳るべし、斯邦にも仁明帝自ら五石を嫌給ひし事あり、三條院金液丹をめしたり、其藥くひたる人は、目をやむと大鏡にみえたり、平相國の身、火のやうになりたるも、已に富貴きはめつ、若くは欲にあかすして、乳石の劑を服せられし歟、夫唐土の州域は南北甚廣し、北土の病風寒によるなれば、熱藥によろしかるべけれど、南土の人は風寒の病少く濕熱の因多し、これによりて南北經驗の說出たり、大成論には病門每に暑濕をもいひて、風寒の二因ばかりに

か丶はらす、我邦は瘴土の南土に近く、人民卉服して衣服せす、されは風寒の病少く、温熱の病おほかるへきなり、（○天度霑暖、草の家より人家へ移らるゝも、大に異なり、又は熱、すゝはなつめて病れは、又風あへ一二人しはなくし、國に寒より熱の國へとらるゝ、其分域は寒熱とせし國人）

〔續日本紀三十六光仁〕天應元年四月辛卯、詔云、（中略）朕以寡薄、忝承寶位、受賜氐年久重奴、而留嘉政頻闕氐天下不得治成、加以元來風病爾苦都都身體不安、復年毛彌高成氐、餘命不幾、今所念久、此位波避天、暫間毛御體欲養止奈毛所念須、故是以皇太子止定賜留山部親王爾天下政波授賜布（中略）是日皇太子受禪即位、

〔日本後紀十七平城〕大同四年四月丙子朔、聖躬宮中、又遣使於京下諸寺、誦經、天皇自從去春、寢膳不安、遂禪位於皇太弟、（中略）詔曰、現神止大八洲所知倭根子天皇我詔旨止勅御命乎親王等王等臣等百官乃人等天下公民衆聞食止宣、朕躬劣弱氐、政業爾不耐己止、本自思畏利許止爾所思、久毛不息、加以朕躬元來風病爾苦都都、身體不安氐、經日累月氐、萬機缺滯奴、今所念久、此位波避天、一日片時毛御體欲養止奈毛所念、故是以皇太弟止定賜流某親王（中略）爾天下政波授賜布、諸衆此狀乎悟知天清直心乎以天毛此皇子乎輔導氐、天下百姓乎可令撫育止勅、天皇御命乎衆聞食止宣、皮賞（中略）天皇遂傳位、

〔榮花物語一月宴〕かゝるほどに、丸でうどの（○村上）御悩なやましうおぼされて、御かゆせなどいひて、おほんゆゆでなどして、くすりきこしめしてすぐさせ給ふ程に、まめやかにくるしうせさせ給へば、宮もさとにいでさせ給ぬ、

〔榮花物語二花山〕七月二〇本ノ年（○康保四年）、御すまひもちかくなれば、これをわか宮（○冷泉）一にみせばやとの給はすれど、おとゞ（○藤原實賴）すこしふさはぬさまにてすごさせ給に、たび〳〵おとゞ參らせ給へと、うちよりめしあれど、みだりかぜなど、さま〴〵の御さはりどもを申させたまひつゝ、まいらせ給はぬをすまひちかくなりて、せきりにまいらせたまへとあれば、まいりたまへれば、いとこまやかに

御物語有て、くらゐにつきてことし十六年になりぬ、

〔榮花物語三十二根合〕かゝる程に、いかゞ𛀁けん大將殿(○藤原敎通)日比御心ちなやましくおぼさる、御風などにやとて、御ゆゆでせさせ給、中略たゞいまはときこえさせ給ほどに、なを此殿は、ちいさくより、風おもくおはしますとて、風の治どもをせさせ給、

〔榮花物語二十三駒競〕たゞこの法花經に、結緣のこゝろざしのふかくてなん、このきぬは風病のおもさになさけなく𛀁あつめて侍るを、わかちたてまつるなりとの給はせて、くばらせ給へる僧達、いみじうかしこまりて申給、年比おほやけわたくしのさるべきをり參りつかうまつるに、此たびの御ふせの樣にめでたきことはなんまたみ給へざりつる、年ごろの風病ことはり申てまかりぬべかめりと申給ぞ、中にも〳〵このおびこそいみじき物にて侍べかめれなど、くち〳〵かひありて申給、

〔榮花物語三十一殿上花見〕またこのほどに、あさましうあはれなりつる事は、侍從大納言(○藤原行成)の同じ日よりあやしうれいならぬ、かせにやとて、朴をまいりゆゆでなどして、心見給ひけれど、いとくるしうのみおぼされければ、いかなるにかと覺し、殿のうちも、よろづに御いのりも、さはぎけるに、四日(○萬壽四年十二月)のよさり、とのゝ御まへのおはらせ給しをりにこそ、うせ給にけれ、

〔小右記〕長和五年二月廿四日己亥、資平云、攝政(○藤原道長)被勞風病、宇佐宮御幣神寶宣旨、可卜小臣之由、攝政有命、是被告御位事之使也、

長元四年正月廿七日乙亥、中納言云、參關白(○藤原賴通)第、以金吾將軍令申御風事、報命云、朝間頗宜、今聞其傷者、金吾密語云、偏非御風也、中將臨昏從高陽院來云、風病似宜、　七月二日丁未、春宮大夫被過、訪中將良久談話、中納言來、大藏省進正月七日節祿代草(絹五十疋代十五枚、綿四百屯代八枚、)件事都督弊報可恐云、家可被仰歟、從去夕西相有惱氣、似風病、但頭打額熱、時疫歟、終讀誦紙圖、示遣芳進師、從晩有減氣、

癲狂

（源氏物語蓬生）こゝもはやりかにていふやう、月比ふびやうおもきにたへかねて、ごくねつのさうやくをふくして、いとくさきによりなん、えたいめん給はらぬ、まのあたりならずとも、さるべからんざうじらは、うけ給はらんと、いとあはれにう〳〵しくいひ侍り、

（源氏物語若菜三十四）あるじの院は、けふのゆきにいとゞ御風くはゝりて、かきみだりなやましくおはさるれど、この宮の御こと聞えさだめつるぞ、こゝろやすくおぼしけり、

（源氏物語椎本四十六）三昧、けふはてぬらんと、いつしかと待聞え給、夕暮に、人まいりて、けさよりなやましうてなん、え参らぬ、風かとて、とかくつくろふとものする程になん、さるは例よりもたいめんこゝろもとなきを聞え給へり、

（病草紙）ちかごろ男ありけり、風病によりて、ひとみつねにゆるぎけり、厳寒に、はだかにてゐたる人のふるひわなゝくやうになむありける、

（倭名類聚抄三）癲狂　唐令云、癲狂酗酒、皆不得居侍衛之官、癲音天、狂訓太布流、和名毛乃久流比、本朝令義解云、癲發時臥地吐涎沫無所覺、狂或自欲走、或自高賢聖也、

（箋注倭名類聚抄二）按本朝選叙令云、凡癲狂酗酒、及父祖子孫被戮者、皆不得任侍衛之官、此所引唐令、蓋選擧令文、選擧令在唐令第十、見唐六典、又按説文無癲字、有瘨字、云病也、是當讀詩胡寧瘨我以旱之字、非此義、説文又有𤸷字、云跛也、是蹎僵字、漢書賈誼傳𤸷作蹶是也、癲疾以發時蹎仆於地得是名、宜作𤸷疾、而經典蹎僵字、借顚字爲之、故𤸷疾亦作顚疾、後俗从疒作癲、以別顚倒字、或省作瘨、廣雅玉篇並云、瘨狂也、玄應音義引聲類云、瘨風病也、是也、與毛詩説文訓病也瘨字自別、王念孫引説文解廣雅瘨字者誤、説文又云、狂、猘犬也、故其字從犬、人之失心、如狂犬之狀、故謂之狂、所謂轉注也、又按萬葉集大伴宿禰家持逸歟歌、謂山田史君麻呂曰多夫禮多流之許都、於吉奈、續日本紀、天平寶字元年詔詞、謀反人橘奈良麻呂、大伴古麻呂等、悪逆在奴久奈多夫禮麻度比、奇

明紀、狂心謂多不禮己々呂、陽狂訓伊川八利多不禮、與此狂訓太布流合、文選解嘲亦同訓、又謂狂
人爲毛乃久流比、見枕册子、東鑑元暦二年條、建久四年有物狂、谷川氏曰、當鬼狂之義、鬼訓毛乃、見
神宮類、中所引戸令義解文、原書癲下狂下並有者字、自欲作妄觸欲三字、自高下有賢字、並賢作
聖神、那波本仆作臥、與原書坊本及千金方合、然按病源候論風癲候云、其發則仆地吐涎沫、無所覺
是也、風狂病候云、發或欲走、或自高賢稱神聖是也、義解所釋蓋本之、義解古本亦作仆、則作臥者誤、
按癲者所謂顛癇、狂者失心風、韓非子解老篇云、心不能審得失之地、則謂之狂、南齊書五行志引洪
範五行傳云、失威儀之制、怠慢驕恣、謂之狂、素問腹中論云、石藥發瘨、芳草發狂、注、多喜曰瘨、多怒曰
狂、生氣通天論注云、狂謂狂走或妄攀登也、是癲狂二病不同、然病源候論婦人癲狂候云、皆由血氣
虚受風邪所爲、人稟陰陽之氣而生、風邪入幷於陰則爲癲、入幷陽則爲狂、則知二病所受因略同、故
爲一條也、

〔伊呂波字類抄毛病〕癲狂　狂人同

〔増補下學集上二〕癲狂

〔一本堂行餘醫言五〕癇音閑、癎同、　驚　癲　狂

癇者驚、癲、狂之總名、因所發尤衆廣也、夫癇之爲證也、或憂、或怒、或悲、或笑、或嫌忌對人見人、或好愛閑
居獨處、或喜靜處幽室、或鬱然無聊、絶無歡娛之意、或疑人議己短、或每事猜忌、思慮無窮、或過憂無
謂計、或鬱氣屢發、或怒過度以啼泣、或獨語自嘆笑、或氣沈心急如將陷、或恐世議、或慮衆評、或危心如
履薄冰臨深淵、或怯懼恐聞死喪刑殺傷損危厄之事、直卽冷汗出、或腋下與背汗出、或上氣衝逆、時又
驚愕、或恐登高山過缺岸渡板橋仰石門、或恐獨自出行、從人纔出行、或寢食如常、唯恐他出、終年不出
戶外、或聞金石之聲、瓦陶之破、奔川流風樹之鳴音、人語高鳴之稍大、直懷驚怖、惕然欲跳、或因肢冷、
冷汗出、或心無樂意、欲就死、或妄想如人將來捕之、欲走亡而竄匿、唯恐及之不遑逃避、或夜間耿耿、曾

不安、或偶睡則雜夢、服實靜、或然自高賢、或好潔惡穢、豐洗掃除、如何侍之水淫、如倪元鎮潔癖、或遠慮多想、孤疑猶豫、僕僕自每事再三思慮、拮据似是丁寧反覆、實是猶豫不決、或平常深憂不足憂之事、或既成之事、復重改作、至再至三、猶且數回不定、或過誤自咎、懊恨嗟嘆不已、或偶話言空、若有所失、或獨坐孤枕、想往料來、沈沈默默、悒悒無所放遣、似是證候千變百出、不可畢數、無處皆係鬱一鬱證中矣、

〔令義解二戶令〕凡[illegible]中略　癲狂（[illegible]）如此之類、皆爲篤疾、

〔令義解四選敍令〕凡癲狂酗酒（[illegible]）及父祖子孫、（[illegible]）被戮者、皆不得任侍衞之官、（[illegible]）

〔伊呂波字類抄太病〕癲狂（[illegible]）

〔醫心方三〕治中風癲病方第廿二

病源論云、五癲者、一陽癲、二陰癲、三風癲、四濕癲、五馬癲也、人有血氣少、則心虛而精神離散、魂魄妄行、因爲風邪所傷、邪入於陰、則爲癲疾、又人在胎時、其母卒大驚、精氣并居、令子發癲、其發則仆地吐涎沫、無所覺是也、

〔覆載萬安方三〕風癲（[illegible]）陰疾也

論曰、風癲之狀、發無常時、每發則仆地、吐涎沫、無所覺知、蓋由血氣皆虛、精神離散、魂魄失守、風邪入於陰經故也、又以胞胎之初、其母卒大驚、精氣并居、令子發癲、其證與風癲大率相似、

〔保嬰須知上〕癲疾（附癇）

癲之爲病、經論筋骨三者之別、或稱癲、或稱癇、或稱癲癇、至徐嗣伯謂、十歲以上爲癲、十歲以下爲癇、巢源或名風癲、又錄五癲之候、（陽癲、陰癲、風癲、濕癲、馬癲是也、）千金方亦錄之、若外臺秘要引古今錄驗之五癲、（馬癲、牛癲、[illegible]羊癲、雞癲是也、）惟與病源千金頗殊耳、其名證論說、雖似精審詳辨乎、至其治方、則支離煩瑣、無一可取者、況又

後世有癲風、癲眩、癲邪、狂癲、牛癲、鬼癲、及風癇、蛇癇、食癇、驚癇等之稱呼、則愈出愈繁、不堪其煩矣、且其治法、多以五癇象五畜、分五聲配之五藏、以立方處劑、然率皆不過以鎭神祛痰、紊然宗之而已、且夫癲之與癇、蓋是一病、豈有別乎、香川秀菴曰、但癇以病間猶發爲呼、癲以顚倒頽越成稱、此說特爲得焉、

〔瘋治茶談　八〕癇

近來都鄙ノ世醫、癇病ノ的證ニタラク、コトサラ疳肝ノ同音ニ迷イ、病名ヲ混ジテタヾカン症トノミ云フテ暴處劑ノ的中ナキハ、ヒフキヤウ世民ノ大患也、疾醫ノ多罪ナレバ、其病名ヲ正シ、其證候ヲツマビラカニシテ、治術ノ助ニセバヤト、マヅ癇病ノ名義始テ起ル所ヲ尋ント思フニ、古ヘヨリ、カラニモ癲ヤ癇ヤ狂ヤ癎ヤ、其名症ヲ混ジキタリ、且日本ニハ疳肝ノ音義ニ惑イ、一タビ左スレバ、大都ニヲチイルノヲソレアレバ、古人論ズルトコロト、今病トヲ論ジテ的證ヲイタシ、治術ノ標本ヲタヽ、藤本積山氏ト南溟氏ノ治驗余ガ經驗ノ妙方ヲ後ニ附ク、

癲病辨論

異ノ癲癇トナリテハ、ソノ證多端ナリ、アルイハ顚倒シテ水火ノワキマヘナク、アルイハヨダレヲ吐キ、奇異ナル聲ヲ發シテ泣クモノアリ、コレ古人ノ所謂五畜癇ノルイナリ、ソノホカ人ヲ見テ發シ、水ヲ見テ發シ、火ヲ見テ發スルアリ、後藤家ニ說ク通リ、癲ハ顚倒ノ義ナリ、癇ハ間ナリ、コノ症ノ起リクル間ハ氣性常ナラズ、簡略疎懸ニシテ人事ヲ知ラズ、又癲狂ト倂テイフコトアリ、古人モ癲狂ハ心ノ一臟ニ屬ストイヘリ、狂ハ亂氣ナリ、癇ヨリ狂ヲ發スルモアリ、イヅレ一度ニ混ジタ病ムモノマヽ、アルナリ、皆痰飮心竅ニ迷イテ發スレバ、人事ヲ知ラズ亂心ニナルベシ、又癇症ヨリ來ラズシテ、婦人瘀血ヨリ起ルモアリ、其所因一ナラズ、後藤家ニハトカク癲癇、狂ミナ氣ヨリ起ルトイヘドモ、恐クハ僻見ナラン、古人ノ論ンツマビラカナレバ、予ハ痰飮心竅ニ迷テ發ストス、サレバ一氣留滯ヨリ痰飮ヲ生ズルトイヘド、小兒ノ中九氣ノ沙汰ナキニ發スルハ何

ゾヤ、古人イフトウリ、胎内胎癖ノヨルトコロウタガフベカラズ、扨又ソノ風癇、驚癇、癲癇ハ固ヨリ、肝経ノ熱、肝臓ノ拘攣、痞病ノ痛、ソノ名症ノ区別ナク、唯カン症ト唱ヘタ、医者ノ通路ヲ開タハ、ヒキヤウナルコトナリ、マシタ京江戸大坂ノ人ハ、田舎ノ人ノ難気トチガイ、平生カラダヲ労セズシタ心気ヲ労シ、常ニ美食ニ厭飫シ、痰飲胸中ニ聚ミ、肺積ノ息賁、腎積ノ奔豚、癇癖ノ拘攣、ヲノヲノ発作ニシタガフタ、タノ痰飲心窩ヲフサギトシタ、四肢ヲ顫動シ人事ヲ知ラズアルイハ身コワバリソリウチカヤレ、癇病ヲ作モノ也、世ノ所謂癇症ニハアラズ、アルイハ富貴ニイロウノムスコ等朋友ヲ嫌イ、人ニアワズ一間ニ籠リ、アルイハ衣食ノスキキライ、座席ノキヨラカナルヲ好ミ、手足ヲムシヤクニアライキヨメ、或ハ刀剣ヲメイタフリマワシシタ、発狂ニ似、アルイハ手ヲモワタ襟袖ヲナゼナスリシ、アルイハ面目ヲ瞬動スルヲ、世人総ミナカン症トイヘドモ、此症豊豪家ニ所謂気。病多クシテ、マコトノ癇症ハ少ナレ、ナスレバコソ富貴家ノ児童等、襁褓ヨリ深窓ニ撫育セタレ、アラキ風ニモアタズ、出入ノ人ニ至マデ、ソノ児ノ機気ヲホメソヤスニヨリ、偏静ノ気日々ニ増長シ、年月ヲ追ルウチ、九気ノ結塞無量ノ鬱滞ヲ発スルヲ、世医皆カン症ト云ヘリ、ナレバ貧窮賤士ニ身ヲクルシム人ニハ餘リ見當ラズ、

〔病名彙解 二〕癇症　俗ニ云クワチカキ者、癲癇ト違クモ云リ、古今医統ニ云、大人ノヲ癲ト云、小児ノヲ癇ト云リ、丹渓纂要ニ云、内経ニ癲ヲ言テ癇ニ及バズ、諸書ニ癲癇ト言、或ハ癲狂、風癲、風癇ト言、諸名同ジカラズ、夫癲病ハ時ニ作リ時ニ止、其癲狂ノ心ヲ失シテ妄ニ作リ、久ヲ経テ愈ザル者ト本一類ニアラズト云リ、

〔沙石集 三 下〕癲狂人之利口事

或里ニ癲狂ノ病有ル男アリケリ、此病ハ火ノ過、水ノ過、人ノ多カル中ニシテ発ル、心ウキ病也、俗ハタフチト云ヘリ、或時大河ノ岸ニシテ、例ノ病オコリテ、河ヘオチ入ヌ、水ノ上ニウカビテ、ハル

カニ流行テ、河中ノ洲サキニ、ブシアゲヲレヌ、トバカリ有テ、ヨミガヘリテ、コハイカニシテ、カヽル所ニアルニカト思メグラス程ニ、例ノ病ニヨリテ、河ヘ落入ニケリ、アブナカリケル命カナト淺猿覺ニテ、獨言ニ死タレバコソ生タレ、生タラバ死ニナマシ、カシコクシテ死シテンケル、ケウニ死ヌラフニトゾイヒケル、マコトニ大河ノ淺疾タ、底深ケレバ息絶ズハ沈テ死ナマシ、息絶ヌレバウカブ事ニテコソ、角助ヌル事ヲ云ケルニコソ、惡キ利口ナリ、

〔醫心方 三〕治中風狂病方第廿三

病源論云、狂病者、由風邪入并於陽所為也、風邪入人血脈、使人陰陽二氣虛實不調、若一實一虛、則令血氣相并、氣并於陽、則為狂、發則欲走、或自高賢、稱神聖、是也、

〔覆載萬安方 三〕風狂モノクルヘレ陽病也

論曰、風狂之狀、始發則少臥不饑、自高自賢、自辯自貴、罵詈人之繁奇、周身彌環、晝夜不寐、一失其平、則有血并於陰、而氣并於陽者、有血并於陽、而氣并於陰者、陰陽二氣虛實不調、邪乘虛而入、并於陽、則發之、重陽、故其病妄笑好歌、妄行不休、甚則棄衣而走、登高而歌、或至數日不食、故曰狂也、又肝藏魂、則隨神往來、恐眞動中、有傷於魂、則為狂妄、是亦血氣俱虛、風邪乘之、陰陽相并也、陽病狂動、陰病癲絕也、

〔病名彙解 三〕癲狂　俗ニ云キチガイナリ、癲ト狂ト小ク異ナルコトアリ

〔三代實錄 十三 清和〕貞觀八年九月廿二日甲子、夏井者左京人、美濃守從四位下善岑之第三子也、○中略又聞醫藥之道、配土佐之後、自往山澤、採藥合錬以施民、民多得其驗、嘗有一人中風、發狂走、夏井與一匕散藥、以令服之、此人立瘥、皆此之類也、

〔源氏物語 十 賢木〕このたびのつかさめしにもゝれぬれど、いとしもおもひいれず、大將殿〈源氏〉かうしづかにておはするに、世ははかなきものと見えぬるを、ましてことわりとおぼしなして、つねにまいりかよひ給ひつゝ、がくもんをしあそびをもろともにし給ふ、いにしへもゝの

ぐるはしきまでいどみきこえ給ひしをおぼしいで、〈下略〉

〔吾妻鏡十三〕建久四年七月三日丁卯、小栗十郎重成郎従駈参、以梶原景時申云、重成今年為鹿島造營行事之處、自去比所勞太危急、見其體非直也事、頗可謂物狂歟、

〔老人雑話下〕黒田如水病重く、死前三十日許の間、諸臣を甚罵辱す、諸臣驚て云、病氣甚く、殊に亂心の體也、別に諫むべき人なしとて、其子筑前守に云ふ、筑前守如水の心に通せず、近づひて密に云ふは、諸臣畏れ愛ふ、少し寛くまたまへと、如水耳をよせよとて、小聲に云はれしは、是は汝がため也、亂心に非ずとぞ、諸臣にあかれて早く筑前守殿の代になれかしと思はせん爲なり、

〔公儀秘鑑三〕亂氣御仕置之事

元祿十丑閏二月相極候ハ、亂氣ニ而人を殺候者、本性之者とハ違候間、向後ハ牢舍申付候子次第、其儘永牢ニ而差置、其上若本性ニも成候ハヾ遠島ニも申付、可然品ニより下手人ニ成べき子細候ハヾ、其節伺有之筈ニ候處、自今以後ハ、亂氣ニ而人殺候共可爲下手人候、本性ニ而人を殺候も亂心ニ而殺候も、同然之御仕置ニ候間、可被存其旨候、

但元祿十丑閏二月相極り候以後今に至り永牢ニ而差置候者候ハヾ、是ハ其通可爲候、

享保二酉十一月五日

右ハ酉十一月五日、於羽目之間、河内守殿三奉行江御渡候、

〔文昭院殿御實紀一〕寶永六年二月十六日、またかゝるにけふ山にて、織田監物秀親、前田采女利昌公卿の館伴として朝とくまいりしが、采女利昌狂氣し、差添をぬきて監物秀親が後に突てそのまゝ、はしり出、心地例ならずとて、下部をよび乗物にのりてかへりたり、秀親は突れて聲たて、うめきゐたるを聞、人々はせ集りたれど、はや息も絶々なりければ、その家人に命じて護送せしめ、利昌がもとには大目付松平石見守乘邦、目付久留十左衞門正清、伊勢平八郎貞勤をつかはされ、利

幽憂

是は石川主殿頭義孝に召預らる、

〔公裁秘錄 三〕亂心ニ而永牢之事

五月三日
一揚屋ヘ入永牢　亂心

右庄五郎儀、預ケ押込可申親類無之由ニ候間、揚リ屋江差遣可被申候、

酒井隱岐守組
小普請　蜂屋庄五郎

享保十三申七月

右御書付、申七月廿二日、左近將監殿ゟ諏訪美濃守江御渡候、

〔半日閑話 十五〕一閏月(○文化十四年七月)十三日、松平甲斐守家來亂心致し、麻布長谷寺へ參り、庭内を荒せし故、門番を出し尋し所、惡口申、拔身にて追かけしゆへ、其儘右の次第を院主へ咄せしゆへ、門前の町家へ通じければ、町家ゟ大屋を初め十五六人、階子、鳶口等を持參り、押へんと致けれ共、先に拔身持居候故、進み兼しが、大や階子を持候て庭に押ふせし處、階子の子ゟ亂心者體出、刀にて大屋を突、即座に大屋死失せ、大屋の跡に居る者江も、拔身の先當り、是は少々手負けれ共、其内に漸々に取押へ、奉行所へ訴へせしと也、然るに翌日彼亂心者、生氣に相成、大きに悔みし由也、其咄を承るに、一體金錢金子にても詰りしや、十三日の晝、麻布の質屋江參り、金子調へしが、思ふ程出來不申、夫々の斷りにて、長谷寺の住持に面も賴み、申譯にても致さんとおもひ參りし所、住持逢不申ゆへ、猶更狂氣と相成し由也、懷中の金子三兩有之、翌日右之金子を出し、妻子方へ屆呉可申段賴みしよし也、寺之あつかひとなりしなり、

〔續日本紀 十二聖武〕天平九年十二月丙寅、是日、皇太夫人藤原氏(宮子、聖武母、)就皇后宮(○宮子妹、安宿媛、)見僧正玄昉法師、天皇亦幸皇后宮、皇太夫人爲沈幽憂久廢人事、(下略)

〔莊子 讓王 六〕堯以天下讓許由、許由不受、又讓於子州支父、子州支父曰、以我爲天子猶之可也、雖然我適有幽憂之病、方且治之、未暇治天下也、

幻覺

〔松亭反故籠上〕狂を發す

人の暴に狂を發することは、婦人女子に多くして、丈夫壯健の人にあることなし、如何にといふに、婦人女子はその心狹くして、聊のことに滯る、因て本心を失なふなり、任意山崩れ水涸くとも、氣を丹田に蓄めてもて心を正うする時は、何を種としてか狂を發せん、みな其人の愚癡なるより、勞すまじきことをも勞し、心を以て心を責む、故に動もすればこのことあり、然れども疾によりて狂人に類することあり、先年一の士人あり、何事の憂へかありけん、日々鬱々として樂まず、ただ一室に閉籠りて、物案じの體なるゆゑ、妻子もまたこれを憂へ、折にふれて諫めなどしつ、その保養を勸めけれど、敢てそれに從はず、閑室にのみありけるが、一時火桶に倚てあるに、その長八分ばかりの人忽然とあらはれて、火桶の縁を奔走す、這は不測と見る所に、また忽然とその長は始めの人と同じきが、馬に騎て弓矢を携え馳出て、頓て弓に矢番ひ、先なる者を射んとなす、先なる雄士大に懼れ、後を顧みつゝ、逃るといへど、猶火桶の圓き縁を旋轉々々と逃るのみ、騎馬なるものは是を射んとの勢ひは示せども、敢て弓を放もせず、猶火桶の縁を逃ること三四匝にして、いまだ果さず、士人大に怪みて、其處にある火箸を執り、かの騎馬の人の腦天を衝ば、應じて兩個とも滅失ぬ、當時眼中の疼みを覺え、これを觀るに、火箸もて騎馬の腦を衝しは、則わが眼を衝たるなり、猶その疼み甚しく、醫すれど更に愈ず、竟に片眼盲にけり、これ何の所謂にか、その元を知ることなし、後に或人これを辨じて、これ妖に似て妖にあらず、狂病の發したる也、倘その傍に人ありとも、敢てこれを見ることなし、たゞ其人の目睛に着る故に、その腦を衝とおもひて、還て己が眼を衝く、こゝをもて思ふべし、それ狂病を發するもの、多くは其處にある人の顏、或ひは鬼或ひは夜叉、その餘怖しき異形に見ゆる、こゝを以て大に怖れ、刃を揮つて害すに至るは、恐懼の甚しきに由なり、後これを聞てわが身ながら疑ふばかり駭くめり、これハ形あるをもてその人を害

し、實のごときは、その形なきをもて眼を害せり、○中略

按るに、人の精神よく丹田に修まるときは、怪しきを見ても懼れず、變に遇ても迷ふことなし、既に蘇老泉が詞にも、爲將之道當先治心、泰山崩於前、而色不變、麋鹿興於左右、而目不瞬、然後可以制利害、可以待敵云々と見えて、これ將帥に限るにあらず、されば一念不動とは、佛説にも見えたるなり、爰にそのむかし、或人の許に、下女一人を抱へたるが、這は近き頃、在所を出て、更に世間のことをしらず、所謂野馬出しと唱ふる者なり、故にこの家に出入すなる若者等、うち集ひて、或は偽り、あるひは欺き、常にこれを揶揄といへども、彼敢て心とせず、一時若者等いひ交し、彼を驚かしめて戯まんと、はや黄昏るゝときに及び、物求めに出るを幸ひ、路の傍樹立茂き所に隱れて、これを俟つ、下女は何心なく使にゆき、日も暮ぬと足を早めて、その所を通りかゝるに、豫て期したる事なれば、仕過るや否、わつといふて、啻だに駭く大聲を出し威したれども、さらに動せず、儼然として仕ければ、威したる者興を失なひ、家々後より歸り来て、その容を物がたり、肆の人に問するに、彼下女答へていへるやう、己在所を出るとき、天満宮の影像を母の與へて侍らひき、且教へていふ、この靈影を且暮に信する時は、いかなる悪魔も近付べからず、方一遁れがたき災の身に至らんとするときは、靈影これに換り給ふ、努怠らず信じてもて、無事を祈るべしとありければ、夫より以降、これを信じて晝夜肌を放すことなし、然ればいかならん事のありとも、馴僃るゝ心なしと、その人に語りしといふ、これ奇のやうなれど、爰に深き味ひあり、言辭を以て宣べ難し、凡そ佛道修行の人、鬼魅魍魎の愚ひ、及び天變地妖も强に恐るゝことの事きは、心に修する所あればなり、彼伊川先生が、風浪に遇て泰然とさらに懼るゝの色なきごときは、また甚高いかな、

〔奥州波奈志〕影の病。。。

北勇治と云し人、外よりかへりて、我ゐまのとをひらきてみれば、机におしかゝりて人有。誰ならん、わがるすにしもかくたてこめて、なれがはにふるまふはあやしきことゝ、しばし見ゐたるに、髮の結やう衣類帶にゐたるまで、我常に著し物にて、わがうしろかげをみしことはなけれど、寸分たがはじと思はれたり。餘りふしぎに思はるゝ故、おもてをみばやと、つか〳〵とあゆみよりしに、あなたをむきたるまゝにて、せうじの細く明たる所よりゑん先にはしり出しが、おひかけてせうじをひらきみしに、いづちか行けん、かたちみえず成たり。家内にそのよしをかたりしかど、母は物をもいはず、ひそめるていなりしが、それより勇治病氣つきて、其としの内に死たり。是迄三代其身のすがたをみてより病つきて死たり。これや、いはゆる影の病なるべし。祖父、父の此病にて死せしこと、母や家來はしるといへども、餘り忌みじきこと故、主にはかたらで有りし故、しらざりしも、勇治妻も又二歳の男子をいだきて、後家と成たり。只野家遠き親類の娘なりし。

〔宮の須佐美二〕小野淺之丞とて、平之丞の甥なりしとぞ、十七八歳ばかりのころ、隣の家より、猫の來りて、飼鳥を取る事度々なりしかば、にくきものかな、射殺しなんとおもひ居けるおり、向ふの築山の陰に、猫の戯遊ぶを見附て、あはやそれぞと神頭の矢をつがひ、ひそかにねらひよりて是を射に、あやまたず中りて、其儘たをれぬ。立寄て見れば、日頃のにはあらず、外のなり。あなあさまし、にくしと思へばこそ射つれ、これには罪もなきものをと、後悔すれどもかひなし。日暮しまゝ一間なる所にありしに、ひるまの猫の事心にかゝり、さるにてもよしなきことして、思ひがけぬあやまちしつ、心よく遊居しを射たる殘酷さよと、くれ〳〵と思ひなげき、夜も少しふくるころ、ふしまに入けれど、快も寐られざりければ、衾をかづきて、つく〳〵と思ひつゞけて居しほどに、ほのかに猫のなく聲すれば、ふしぎや、ひるまのなき聲にも似たる哉と思ひ、枕をあげて聞に、ひたなきになく、はては床の下に聲のするやうなれば、ふしぎさよとあやしく、心をつけて聞けば、

ふくるにつけてしきりになく、いかゞしてかゝるぞと障子の外に出てきけば、縁の下になく、おり立ておひぬればやみぬ、さてはなかりしなと思ひつゝ、立入てうら伏せば、又枕の下に聲す、夜一夜いもねず、明ければ止みぬ、さして怪しかりつるかなとおもひし、人に語るべくもあらねば、心一ツに思ふ□□□て聲すべきやうなし、若も生かへりたるにやと、何となく築山の邊を尋ね見、床の下の塵はらへと人を入て、何事もあらずやと問へば、蜘の網ならではなしと答ふ、とかくして夜になりて臥しければ、まへの如くひたなきになきしかば、目もあはずして明しぬ、晝ほどになれどもおきやらで、衾引かづき有けるを、人々心もとながりて問つらねしほど、やう〳〵日たけておきいでたれば、今日は晝になりても止ず、亭に出ても、おやの前に有ても、我居る床の下に聲たへず、暮れかゝる比よりは、我腹の中に鳴く、いよ〳〵うるさし、とやせんかくやと思へば、聲うらしきり鳴く、これよりしておのづから病人となりて、物喰事も得せざりしかば、日に〳〵かたちもおとろへゆき、人心地もなく一間にとぢこもり、腹をおさへてうづくまりてのみありける、こゝに伯父の何某聞ゆる勇士にて智謀ありしが、來りて云けるは、汝不慮の病をうけて、その儘ならば命終らん事程あらじ、然れども少年なりとも士たるものゝ、獸のたぐひに犯されて病死なんは、世の聞所、先祖の名をも汚さんことも口惜からずや、とても永かるまじき身をもつて、いさぎよくして憤りを忘れざる事を世にしらせば、少は恥を雪ぎなん、自はかり見よかしとありしかは、淺之丞うちうなづき、仰までもなく始より口惜く、いかにもなりなんと存ずれど、親達のなげき給はんは心ぐるしくて、今までのび候なり、此上はいよ〳〵思ひきわめ侍ふと云ければ、いしくも心得たり、親達にもかくと答へ知らせて、明日の夜來りて介錯しなん、おもひ殘す事なき樣よくしたゝめ置れよと約して歸りぬ、その夜になりしかば、宵過るころ伯父來り、湯あびさせ、衣服を改め、父母に見えて暇乞はせける、親の心推り知るべし、子一ツ計になりしかば、い

ざ時も至りぬ、只今思ひきはめよといひしかば、心得候ぬ、御はからひにて恥辱を雪ぎなん事、いみじう悦しくこそ、此上跡の見ぐるしからぬ樣に頼み奉ると式體して、白く淸げなる肌をぬぎ、刀を取てすでにおしたてんとする時に、伯父の云よふ、今しばらく待てよ、汝今死ぬるは蟲の腹に入て鳴するが爲に、いづらはされて恥しさにの事にあらずや、今はの時に夫ぞともきかずして鳴らんハ詮なし、今一度まさしく聞定て、其鳴にしたがひて刀をおし立よと有ければ、刀を持ながら聞に鳴せず、いかゞし候やらん、宵まであリつるが聞へず候はと云ければ、それは死に臨て心おくれて聞へぬなり、心をしづめてよく聞と、うちしきり聞へども聞へ申さずといふ、さらば今しばし待て、其わかちもなくて急ぎなんは、誠に犬死ぞかし、夜更るとも聞定ての事よとて、一夜帶居てしば〳〵聞ひしかども、腹に鳴のせぬよしなりければ、さらばとゞまれと、うちわらひてやみぬ、これよりして後絶て心にかゝる事もなかりけり、かしこかりけるはかり事哉と、時の人申せしとぞ、

〔北邊隨筆四〕盃中蛇

晉書云、樂廣字彥輔、常有親客、久闊不復來、廣問其故、答云、前在坐蒙賜酒、方欲飮、見盃中有蛇、意甚惡之、旣飮而疾、于時河南聽事壁上有角弓、漆畫作蛇、廣意盃中蛇卽角弓影也、復置酒於前處、謂客曰、盃中復有所見不、答曰、所見如初、廣乃告其所以、客豁然意解、沈痾頓愈、とあるに、いとよく似たる事あり、有馬良久といひしは、近世の名醫なり、あるやごとなき所に、物に汲おきたりし水を、夜陰にのませたまひしが、そのあしたかの水を御覽じけるに、あかく小さき虫、おほくわきてありしかば、たちまち御はらいたみて、たへがたうし給ひしに、良久丸劑をたてまつり、瀉してその虫のくだらんを試みさせ給へと申されしに、げに其言のごとく、赤くちひさき虫、いと多く出たりしを、御覽せさせたりければ、御はらすなはち愈ぬとぞ、そのたてまつられし丸劑、まことは赤き糸をき

ざみて、蛇にまじへてたてまつられけるとなん、かの壺中の蛇とは事たがひたれど、そのやまひのおこれるも癒たるも、かよひてぞおぼゆる、

〔倭訓栞前編三十三〕もの丶け　源氏に多くいへり、三代實錄に、物怪と見えたり、楞嚴經に、物怪之鬼といへり、邪祟をいふなり、

〔源氏物語九葵〕物のけ、いきすだまなどいふものおほく出來て、さま〲の名のりする中に、人にさらに移らず、たゞみづからの御身につとそひたるさまにて、ことにおどろ〲しうわづらはしきこゆることもなければ、(中略)もの丶けとても、わざとふるき御かたきときこゆるもなし、

〔續日本後紀八仁明〕承和六年七月甲申、延僧六十口於紫宸殿常寧殿、令轉讀大般若經、以禁中有物怪也、

〔江家次第七八月〕相撲召合　仁壽殿東庭相撲

承平三年、依南殿頻有物怪、御此殿、有音樂立合、

〔奇魂一〕病源論　佐藤方定

靈史に、先靈といひ、物語書に物氣、或は靈怪云、或は狐魅怪云も、皆神氣の類也、(物氣、神氣、共に同意なる由に、記傳にし說れたり、又万葉に、鬼字をものとよみたるにても明也、)

〔榮花物語一月宴〕御門(中略)冷泉、御もの丶け、いとおどろ〲しうおはしませば、さるべき殿上人殿ばら、たゆますよるひるさぶらひ給、(中略)はかなく月日もすぎて、ことかぎりあるにや、みかどおりさせ給とての丶しる、安和二年八月十三日なり、御門おりさせ給ぬれば、東宮(圓融)(中略)位につかせ給ぬ、

〔今昔物語十二〕神名睿實持經者語第卅五

然レバ此ノ持經者ノ貴キ思エ世ニ其ノ聞エ高ク成ヌ、而ル間圓融院ノ天皇、堀川ノ院ニシテ重

キ御惱有リ、樣々ノ御祈共多カリ、御邪氣ナレバ世ニ驗有リト聞ユル僧共ヲバ員ヲ盡シテ召シ集テ御加持有リ、然レドモ露ノ驗シ不御ナズ、或ル上達部ノ奏シ給ハク、神明ト云フ山寺ニ睿實ト云フ僧住ミタリ、年來法花經ヲ誦シテ他念无シ、彼レヲ召テ御祈有ラムニ何ニト、亦或ル上達部ノ宣ハク、彼レ道心深キ者ニテ心ニ任セテ翔ハヾ見苦キ事ヤ有ラムズラント、亦他ノ人ノ云ク、驗ダニ有ラバ何ナリトモ有ナムト被定テ、藏人□ヲ以テ召シニ遣ス、藏人宣旨ヲ奉テ神明ニ行テ、持經者ニ會テ宣旨ノ趣ヲ仰ス、持經者ノ云ク、異樣ノ身ニ候ヘバ參ラムニ憚リ有リト云ヘドモ、王地ニ居タリ乍ラ何デカ宣旨ヲ背ク事有ラム、然レバ可參キ也ト云テ出立テバ、藏人定テ一切ハ辭バムズラムト思フルニ、カク出立テバ心ノ内ニ喜ビ思テ同車ニテ參ル、藏人ハ後ノ方ニ乘レリ、而ルニ東ノ大宮ヲ下リニ遣セテ行クニ、土御門ノ馬出ニ疊一枚ヲ引廻シテ病人臥セリ、見レバ女也、髮ハ亂レテ異體ノ物ヲ腰ニ引纏テ有リ、世ノ中心地ヲ病ムト見タリ、持經者此レヲ見テ藏人ニ云ク、内裏ニハ只今睿實不參ズト云トモ、止事无キ僧達多候ヒ給ヘバ何事カ候ハム、此ノ病人ハ助クル人モ无カメリ、暫ク此レニ物令食テ夕方參ラム、且ツ參テ今參ル由ヲ奏シ給ヘト、藏人ノ云ク、此レ極テ不便ノ事也、宣旨ニ隨テ參リ給フラムニハ、此許ノ病者ヲ見テ逗留シ不可給ズト、持經者哀哉々々ト云テ、車ノ前ノ方ヨリ踊リ下ヌ、物ニ狂フ僧カナト思ヘドモ可抑キ事ニ非ネバ、車ヲ搔下シテ土御門ノ内ニ入テ、此ノ持經者ノ爲ル樣ヲ見立レバ、持經者然許穢氣ナル所ニ臥シタル穢シ氣ナル病人ニ、糸睦マレゲニ寄テ胸ヲ搜リ頭ヲ抑ヘテ病ヲ問フ、病人ノ云ク、日來世ノ中心地ヲ病ムヲカク出シテ棄置タル也ト、藏人事シモ我ガ父母ナドノ病マムヲ歎カムガ如ク歎キ悲テ云ク、物ハ不被食カ、何カ欲シキト、病人ノ云ク、飯ヲ魚ヲ以テ食テ癒ナム欲シキ、然レドモ令食ル人ノ无キ也ト、藏人此レヲ聞テ忽ニ下ニ着タル帷ヲ脱テ、童子ニ與ヘテ町ニ魚ヲ買ニ遣フ、亦知タル人ノ許ニ、飯一盛鍋一提ヲ乞ニ遣リツ、暫許有テ外居ニ飯一盛指

入ノ坏具シテ、提ニ湯ナド入レテ持來ヌ、亦魚買ニ遣ワル童モ干タル鯛ヲ買テ持來ヌ、其レヲ自ラ少サク挘テ、飯ヲ箸ヲ以テ含メツヽ、湯ヲ以テ令飲レバ、欲シト思ケレバ病人ニモ不似ズ糸吉ク食ツ、殘レルヲバ折櫃ニ入レテ、坏ノ有ルニ湯ハ入レテ枕上ニ取リ置テ、提ハ返シ遣リツ、其後ニ藥王品一品ヲ誦シテ令聞メケル、然テ後ニ藏人ノ許ニ來テ、今ハ然ハ參リ給ヘ參ラムト云テ、車ニ乘テ內裏ニ參タレバ、御前ニ召シツ、經ヲ誦シ給ヘト抑セ有レバ、一ノ卷ヨリ始テ法花經ヲ誦ス、其時ニ御邪氣顯テ御心地宜ク成セ給ヒヌ、然レバ卽チ僧綱ニ可被成キ定メ有リト云ヘドモ、持經者固ク辭シテ逃ル如クシテ罷出ニケリ、

〔台記〕康治二年五月十五日辛未、晚道ヽ物氣、巳剋東帝參新院、相公羽林云、瘧痛已平癒了、邪氣云々、

〔吾妻鏡 四十九〕正元二年(○文應元年)十一月廿七日庚寅、今日相州(政村)被頓寫一日經、是息女惱邪氣、依比企判官能員女子靈託、爲資彼苦患也、入夜有供養之儀、請若宮別當僧正爲唱導、說法最中件姬君惱亂、出舌舐脣、動身延足、偏似蛇身之令出現、爲聽聞靈氣來臨之由云云、僧正令加持之後、惘然而止、言如縱面復本云云、

〔武德編年集成 四十一〕天正十九年四月十三日、利家ノ女浮田秀家ノ室、妖怪ニ侵サレ惱亂ス、秀吉彼館ニ來臨、コレ老狐ノ所爲タル由ヲ聞玉ヒ、一簡ヲ稻荷ノ神官ニ投ゼラル、

備前宰相女共ニ附祟物之氣相見候、是角狐之所爲ニ候、爲何左樣見入候哉、曲事被思召候ヘ共、此度ハ可被成御免候、若相背此旨、無左右仕儀於有之ハ、日本國中年々狐狩可被仰付候、一天下ニ有之有情非情之類迄、不背御意候半哉、速ニ可除去候、委細吉田之神主可申渡候也、

四月十三日

爰ニ於テ、彼室ノ邪病忽チ平癒スト云、

〔牛山活套 中〕邪祟(ノ)。

本邦ニテハ、多ハ狐狸犬猫ノ類、婦人女子ニ妨ヲナシテ邪祟トナル、或ハ大病ノ後氣血虛乏ノ時、邪氣虛ニ乘ジテ入ル也、病者虛羸シ、邪氣肆ヲ朋死ス、早ク斷ク邪ヲ退クベシ、致祟ノ方ニハ、河佰ノ邪祟多シ、金銀花ノ煎湯ヲ用テ有神効、或ハ髮切ト云、婦人或ハ童男童女ノ髮ヲ、アタヽカナル風吹來ルト覺テ、結髮ヨリ髮ヲフツト落シタ、其跡鬪結テ鳥餠ナドヲ付タルヤウニ成テ、卒時ニ絕死ニ至リ、暫時アリテ甦リ、寒熱往來シ、傷寒ニ類スル病アリ、關東ノ鎌鼬ト云フ惡風ノ類也、小柴胡湯ニ陳湯ヲ合シ、遠志石菖蒲辰砂ヲ加ヘ用レバ有奇効、周防長門ニハ犬神ト云邪祟、土瓶ト云フ邪祟アフタ狐フキノ如クニ人ニ害ヲナス、此邪祟ハ甘松香ヲ火ニ燒キ鼻ヲ薰ズレバ、立處ニ其邪退ク也、犬神ト云ハ、犬ヲ殺シテ靈ヲコレタヘタルヲ云、南土ノ蠱毒ノ類ノ如キ者カ、土瓶ト云ハ、小蛇ヲ土瓶ノ中ニ蓄ヘ置云、此兩種ノ邪祟ハ、甘松香ニテ薰ズレバ、其邪立處ニ退ク也ト、周防國八代島ノ住醫、青木道說ト云者啓益ニ語リキ、啓益本草甘松香ノ條ヲ考ニ、邪祟ヲ退ルノ能アリ、啓益狐付ノ者ヲモ、此甘松香ニテ薰ズルニ其効如神、啓益又青木道說ニ、邪祟ニ金銀花ヲ用ルコトヲ傳フ、青木氏國ニ歸テ、犬神土瓶ノ邪祟ニ金銀花ヲ用ニ其効如神ト、書翰ヲ遣テ互ニ謝禮セシ也、邪祟ノ症ト見キハメタルトキハ、狐ツキニテモ、山猫ノツキタルニテモ、猫マタデモ、甘松香ヲ以テ薰ジ、金銀花ノ煎湯ヲ用ベシ、將又浮圖氏ニ命ジテ祈禱スベシ、世間ノ醫師ハ、多ハ丹溪ノ虛病痰病邪祟ニ似タルト云ノ論ヲ確守シテ、眞ノ邪祟病ヲ知ヌ輩アリ、故ニ此所ニ委ク辨ジ置也、

〔倭訓栞中編三十〕おほさき　上州甘樂郡の山中に、狐病のことを大さき疫病と稱するは、信濃佐久郡なども同事にて、もとは卑賤の山伏など、京都稻荷にてうけ來といふて、一二寸の紙に、狐の像を繪きたるもの、是を大さき使といふ、大さ鼠ほどの生類になり、病家につくなり、彼主の山伏祈らざれば、離るゝ事なし、此小獸後には多く蕃殖して、養ひに迷惑す、今富家にも傳りて有もあ

中暑

中暑注夏病

り、其家斷絶に及べば、其獸も失ぬ、めとはしといふ獸によく似たりともいへば、一類なるにや、四國の犬神も、形小狗の如く、鼠の大さなり、其主平人となりて、其種を除きても、其家に傳はるといふも亦同じ、

〔病名彙解〕二中寒　傷寒ニ比レバ尤モ甚キ證ナリ、寒毒ニ中ラルヽ也、

〔牛山活套〕上中暑　中暍　注夏病

暑邪ノ症ニ二ツ有、動テ得之謂中熱、或ハ中暍ト名ク、靜ニシテ得之謂中暑也、○中略

注夏病ト云ハ、春ノ末夏ノ初ヨリ頭痛シ、身ニ微熱アリテ手足ノ心熱アリ、形體倦怠シ、小便黄ミ、好テ晝寢ヲシテ、脚膝弱ニシテ行歩ニツカレ、面色萎黄ニシテ、形體羸瘦シ、飲食不進也、和俗之ヲ夏ヂケ、又ハ夏ヤセノ病ト云、

〔病名彙解〕二中暑幷中熱　夏炎天ノ暑氣ニアタリ煩コト也、常古ガ曰、靜ニシテコレヲ得ルヲ中暑トナシ、動テコレヲ得ルヲ中熱トス、

〔病名彙解〕二注夏病　人、五六月ノ時分、身體ダルク、アツクニタルシミ、心アシキナリ、俗ニナツヤセト云モノナリ、予和ガ曰、疰ノ作ルナリ、皆五月六月七月ノ時ナリ、午ハ少陰君火ノ位、未ハ濕土庚金伏火ノ地、申ハ少陽相火ノ分、故ニ疰、此三月ノ内ニ發リ、熱ヲナスナリ、故ニ疰ヲ病ノ人、其脈浮大ナリト云リ、玉案ニ云、注夏病ハ、春ノ末夏ノ初ニ遇テ、便、頭疼、脚軟コトヲ覺ヘ、神思困倦シ、飲食減少シ、四肢消瘦、軟弱ニシテ力乏ト云リ、

〔内科秘錄〕三中暑

中暑ハ宋元以降ノ名ナリ、古ハ暍ト謂ヘリ、今ハ一口ニ中暑霍亂ト併稱シテ、輕キ者ハ中暑、重キ者ハ霍亂ト心得テ、二病ナルコトヲ辨ゼズ、愚按ズルニ、人身夏月暑時ニ遭フトキハ、腠理自ラ開キ、汗モ多ク出デ、脾胃虛弱ニナリ、暑邪ニ中リ易ク、又飲食ニモ傷ラレ易シ、暑氣ニ中ル者ハ卽

中濕

中暑ニシテ、飮食ニ傷ラルヽ者ハ卽霍亂ナリ、其因判然トシテ兩途ナレドモ、病邪同ジク脾胃ニ入テ必ラズ吐瀉ヲ發シ、其病狀ノ略相似タル者ナレバ混ジ易シ、第一ニ病因ヲ探索シテ誤認スベカラズ、

〔牛山活套上〕中濕

中濕ノ症二ツ有、內ノ中濕也、外ノ中濕トハ、多ハ山嵐ノ瘴氣トテ、山谷ノ間ヨリ煙ノ如クニ蒸シ立ル氣アタリタル症ヲ云、或ハ雨濕ノ時ニ旅行シ、雨濕衣ヲトヲシ、遠路ニ水ヲ渉リ、或ハ久ク濕地ニ坐シ、或ハ濕鞋ヲハキテ遠ク行キ、或ハ汗出テ衣ノ裏ニ通リタルヲヌキカユレバ、其汗冷テ濕トナリテ此濕ニ感ズ、或ハ新ニ家ヲ造作シテ、其壁未乾ニ移リテ、其濕ニ感ズルノルイ也、其症頭重ク目眩キ、身體疼痛、手足酸軟麻木シ、腰膝腫痛シ、體重シテ如山、頭重シテ物ヲ被ルガ如ク、寒熱往來シ、其脈多ハ濡緩也、內ノ中濕トハ、生冷水菓濕麪厚味ヲ過食シ、醇酒過多ナレバ濕內ヲ傷リ、其症或ハ外濕ノ候ノ如シ、其濕脾ニ著テ、三焦ノ氣不運、小腸ノ疝氣出テ、偏墜シテ睪丸腫痛シテ、手足面色浮腫シ、目中黃ミ、小便赤黃或ハ澀濁スル、其脈多ハ濡緩ニ濇小ヲ兼、或ハ滑ヲ帶也、

〔病名彙解二〕中濕　濕地ニ坐臥シ、雨露霧雪ニヲカサレ、水ニ入川ヲ渡リテ、濕ニ中ルヲ外濕トイヘリ、生冷ノ物、瓜果麪類ヲ過食シ、酒茶ヲ多ク飮テ中ラルヽヲ內濕ト云リ、

〔萬安方十四〕瘴氣○中略

私○梶原性全云、凡山嵐瘴氣者、廣南山川土氣鬱煙鬱發所生也、今案、日本此瘴疾太少歟、故素問太素論云、今原廣南山川地形瘴氣所生之因、及春夏之交瘴氣所起之時、又云、廣南四闕之山、百川之流所趣、及秋草木不凋瘁、當多蟄虫不伏藏、寒熱之毒蘊積不散、霧露之氣易以傷害、岐伯云、南方其地下水土弱、霧露之所聚也、故瘴氣獨盛於廣南、然瘴氣所起、其名有二、孟夏之時瘴名芳草、而終於秋、孟冬之時

中毒

瘴名黃芭、而終於春云々、南國溫暖之地、可有瘴疾、故知天氣極熱大暑之歲、人多可有瘴氣、瘴與瘧尤難分別歟、只不問瘴與瘧、先可用局方正氣散、養胃湯、不換金正氣散等之發汗藥、隨證次第治、草豆蔻飲口治山嵐瘴毒氣、令不害人、

〔病名彙解 二〕中毒　砒霜、燒斑猫、其外河豚魚、蕈菌ノ類ナドノ食物ノ毒ニ中タルコトナリ、

〔日本書紀 三神武〕戊午年六月丁巳、至熊野荒坂津、亦名丹敷浦、因誅丹敷戶畔者、時神吐毒氣、人物咸瘁、由是皇軍不能復振、

〔日本書紀 七景行〕四十年、是歲、(中略)日本武尊進入信濃、是國也、山高谷幽、翠嶺萬重、人倚杖而難升、巖嶮磴紆、長峯數千、馬頓轡而不進、然日本武尊披烟凌霧、遙徑大山、既逮于峯而飢之、食於山中、山神令苦王、以化白鹿立於王前、王異之、以一箇蒜彈白鹿、則中眼而殺之、爰王忽失道、不知所出、時白狗自來、有導王之狀、隨狗而行之、得出美濃、吉備武彥自越出而遇之、先是、度信濃坂者、多得神氣以瘼臥、但從殺白鹿之後、踰是山者、嚼蒜塗人及牛馬、自不中神氣也、日本武尊更還於尾張、即娶尾張氏之女宮簀媛、而淹留踰月、於是聞近江膽吹山有荒神、即解劍置於宮簀媛家、而徒行之、至膽吹山、山神化大蛇當道、爰日本武尊不知主神化蛇之、謂是大蛇必荒神之使也、既得殺主神、其使者豈足求乎、因跨蛇猶行、時山神之興雲零氷、峯霧谷曀、無復可行之路、乃捷遑不知其所跋渉、然凌霧强行、方僅得出、猶失意如醉、因居山下之泉側、乃飲其水而醒之、故號其泉曰居醒泉也、日本武尊於是始有痛身、然稍起之還於尾張、(中略)逮于能褒野而痛甚之、則以所俘蝦夷等獻於神宮、因遣吉備武彥奏之於天皇曰、臣受命天朝、遠征東夷、則被神恩、賴皇威、而叛者伏罪、荒神自調、是以卷甲戢戈、愷悌還之、冀曷日曷時、復命天朝、然天命忽至、隙駟難停、是以獨臥曠野、無誰語之、豈惜身亡、唯愁不面、既而崩于能褒野、時年三十、

〔古事記 中景行〕於是詔、(中略)茲山神者徒手直取而、騰其山之時、白猪逢于山邊、其大如牛、爾爲言擧而詔、是化白猪者、其神之使者、雖今不殺、還時將殺而騰坐、於是零大氷雨、打惑倭建命、(此化白猪者、非其神之使者、當

又神之正身、因言擧見惑也、故還下坐之、到玉倉部之淸泉以息坐之時、御心稍寤、故號其淸泉謂居寤淸泉也、自其處發、到當藝〈□□〉野上之時、詔者、吾心恒念自虛翔行、然今吾足不得步、成當藝斯形、〈自當下三字以音〉故號其地謂當藝也、自其地差少幸行、因甚疲衝御杖稍步、故號其地謂杖衝坂也、

（日本後紀十三桓武）延曆二十四年十一月壬申、先是伊豆國掾正六位上山田宿禰豐濱奉使入京、至伊勢國榎撫朝明二驛之間、飯村求過、有人與之、更復强酒相飲、其後嘔吐、至伊賀國界、豐濱從者死、豐濱猶知毒酒、勤加療治、至京遂死、遣使左兵衞少志從六位下紀朝臣眞公勘之、无徵、

（古事談一王道后宮）寬德三年四月比、女長七尺餘、面長二尺餘、乘船著丹後國浦、船中有飯酒、嘗過之者、悉以病惱、仍不令著岸之間死去云々、

（今昔物語二十八）左大臣御讀經所僧醉茸死語第十七

今昔、御堂ノ左大臣ト申シテ枇杷殿ニ住セ給ヒケル時ニ、御讀經勤ケル僧有ケリ、名ヲバ□トナム云ケル、□ノ僧也、枇杷殿ノ南ニ有ケル小屋ヲ房トシテ居タリケルニ、秋比弟子ノ童ノ有テ、小一條ノ社ニ有ケル藤ノ木ニ、平茸多ク生タリケルヲ、師ノ取リ持來テ、此ル物ナム見付タルト云ケレバ、師來吉キ物持來タリト喜テ、忽ニ汁物ニ爲サセテ、弟子ノ僧童子ト三人相合テ吉ク食タクリ、其ノ後暫有テ三人乍ラ俄ニ頭ヲ立テ病迷フ、物ヲ突キ難堪ク迷ヒ轉テ、師ト童子ノ童トハ死ヌ、弟子ノ僧ハ死許病テ落居テ不死ズ成ヌ、即チ其ノ由ヲ左大臣殿聞セ給テ、哀ガリ歎カセ給フ事无限シ、貧カリツル僧ナレバ、何カヾスラムト押量ラセ給テ、葬ノ料ニ絹布米ナド多ク給ヒタリケレバ、外ニ有ル弟子童子ナド多ク來リ集テ、車ニ乘セテ葬テケリ、而ル間東大寺ニ有ル□ト云フ僧、同ク御讀經ニ候ヒケルニ、其レモ殿ノ邊近キ所ニ果僧ト同ジ房ニ宿シタリケルニ、其ノ同宿ノ僧ノ見ケレバ、口弟子ノ下法師ヲ呼テ私語テ物ヘ遣ツ、要事有テ物ヘ遣ニコソハ有ラメト見ル程ニ、即チ下法師返リ來ヌメリ、袖ニ物ヲ入レテ袖ヲ覆テ隱レテ持來タリ、最タ

ヲ見レバ平茸ヲ一楾ニ入レテ持来タル也ケリ、此ノ僧此ハ何ゾノ平茸ニカ有ラム、近来此ク奇異キ事有ル比、何ナル平茸ニカ有ラムト、怖シク見居タルニ、暫許有テ焼漬ニシテ持来又、□飯モ不合セデ、只此ノ平茸ノ限ヲ皆食ツ、同宿ノ僧此レヲ見テ、此ハ何ゾノ平茸ヲ俄ニ食ゾト問ヘバ、□ガ云ク、此レハ□ガ食テ死タル平茸ヲ取ニ遣ハシテ食也ト、同宿ノ僧此ハ何ニシ給フ事ゾ、物ニ狂ヒ給フカト云ヘバ、□欲ク侍レバト答ヘテ、何ニトモ不思タラデ食ヲ、同宿ノ僧制シ可敢クモ非ヌ程ナレバ、此ク見置マヽニ怱テ殿ニ参テ、亦極キ事出来候ヒナムトス、然々ノ事ナム候フト申サスレバ、殿此レヲ聞カセ給テ、奇異キ事カナヽド仰セ給フ程ニ、□御読經ノ時畢トテ参又、殿何ニ思テ此ル平茸ヲバ食ケルゾト問ハセ給ヘバ、□ガ申ク、□ガ葬料ヲ給ハリテ恥ヲ不見給ハズ成又ルガ、ウラヤマシク候也、□モ死候ヒナムニ、大路ニコソハ被棄候ハメ、然レバ□モ茸ヲ食テ死ニ候ナバ、□ガ様ニ葬料給ハリ候ヌベカメリト、思給ヘテ食ヒ候ヒツル也、其レニ不死ズ成リ候ヒヌレバト申シケレバ、殿物ニ狂フ僧カナト仰セ給ヒテナム咲ハセ給ヒケル、然レバ早ウ極キ毒茸ヲ食ヘドモ、不酔又事ニテ有ケルヲバ、人ヲ愕カサムトテ、此ク云居ル也ケリ、其ノ比ハ此ノ事ヲナム世ニ語テ咲ヒケル、然レバ茸ヲ食テ酔テ忽ニ死又ル人モ有リ、亦此ク不死又人モ有レバ、定メテ食フ様ノ有ルニコソハ有ラメトナム、語リ伝ヘタルトヤ、

比叡山横河僧酔茸誦經語第十九

今昔、比叡ノ山ノ横川ニ住ケル僧有ケリ、秋比房ノ法師山ニ行テ木伐ケルニ、平茸ノ有ケルヲ取テ持来タリケリ、僧共此レヲ見テ、此ハ平茸ニハ非ズナド云フ人モ有ケレドモ、亦人有テ此レハ正シキ平茸也ト云ケレバ、汁物ニシテ椙ノ油ノ有ケルヲ入レテ房主吉ク食テケリ、其ノ後暫許有テ頭ヲ立テ病ム、物ヲ突迷フ事无限シ、術无クテ法服ヲ取出テ、横川ノ中堂ニ誦經ニ行又、而ニ

□ト云フ僧ヲ以テ導師トシテ申シ上ナス、導師所リ持行タル學ニ、敎化ニ云ク、一乘ノ峯ニハ住給ヘドモ、六根五内ノ□ノ位ヲ習ヒ不給ザリケレバ、右ノ所ニ耳ヲ用ル間、身ノ病ト成リ給フ也ケリ、鷲ノ山ニ坐シマシアハンヲリヲ罪ナフ、モ豐リ給ヒナマシ、不知ヌ茸ト思ヘヌニ値リ迷ヒ給フ也ケリ、廻向大菩提ト云ケレバ、文節取ル僧共腹筋ヲ切テゾ咲ヒ喤ケル、僧ハ死許迷テ落居ケリトナム、語リ傳ヘタルトヤ、

尼共入山食茸舞語第廿八

今昔、京ニ有ケル木伐人共數北山ニ行タリケルニ、道ヲ踏違テ、何方ヘ可行シトモ不思エザリケレバ、四五人許山ノ中ニ居テ歎ケル程ニ、山奥ノ方ヨリ人數來ケレバ、怪ク何者ノ來ルニカ有ラムト思ケル程ニ、尼君共ノ四五人許極ク舞ヒ乙テ出來タリケレバ、木伐人共此レヲ見テ恐ヂ怖レテ、此ノ尼共ノ此ク舞ヒ乙テ來ルハ、定メテヨモ人ニハ非ジ、天狗ニヤ有ラム、亦鬼神ニヤ有ラムト思テ見居タルニ、此ノ舞フ尼共、此ノ木伐人共ヲ見付テ、只寄ニ寄來レバ、木伐人共極ク怖シトハ思ヒ乍ラ、尼共ノ寄來タルニ、此ハ何ナル尼君達ノ、此クハ舞ヒ乙テ、深キ山ノ奥ヨリハ出給タルゾト問ヒケレバ、尼共ノ云ク、己等ガ此ク舞ヒ乙テ來タルハ、其達定メテ恐レ思ラム、但シ我等ハ其々ニ有ル尼共也、花ヲ摘テ佛ニ奉ラムト思テ、朋ナヒテ入タリツルガ、道ヲ踏ミ違ヘテ、可出キ樣モ不思テ有ツル程ニ、茸ノ有ツルヲ見付テ、物ノ欲キマヽニ、此レヲ取テ食タラム、醉ヤセムズラムトハ思ヒ乍ラ、餓テ死ナムヨリハ去來此レ取テ食ムト思テ、其ヲ取テ燒テ食ツルニ、極ク甘カリツレバ、賢キ事也ト思テ食ツルヨリ、只此ク不心ズ被舞ル也、心ニモ糸怪シキ事カナト思ヘドモ、糸怪クナムト云ニ、木伐人共此レヲ聞テ奇異ク思フ事无限シ、然テ木□人共モ極タ物ノ欲カリケレバ、尼共食殘シテ取テ多ク持ケル、其ノ茸ヲ死ナムヨリハ去來此ノ茸乞テ食ムト思テ、乞テ食ケル後ヨリ、亦木伐人共モ不心ズ被舞ケリ、然レバ尼共モ木伐人共モ互ニ舞ツ

ブケテ咬ケル、然テ暫ク有ケレバ、酔ノ悟タルガ如クシテ、道モ不思テ各返ニケリ、其レヨリ後此ノ茸ヲバ舞茸ト云フ也ケリ、此レヲ思フニ極テ怪キ事也、近来モ其ノ舞茸有レドモ、此レヲ食フ人必ズ不舞ズ、此レ極テ不審キ事也トナム、語リ傳ヘタルトヤ、

〔叢桂偶記 二〕菌毒

山林幽僻之人、或食無名諸菌、中毒者多致死、余幼時、在江戸駒籠邸、先鋒隊卒三人入永樂園、見橘柱菜材生菌、把之烹食、明日一人出學射、持滿而發、箭飛二三尺而墮、自云咄咄怪事、又發其膝前、傍人皆笑、俄然仆倒、人皆以為風疾、舁而返舍、則前二人既病臥在床上、一人其中毒稍輕者、自云時所食之菌毒焉、請醫亂投備急犀角等諸藥、無寸效、一身黑腫、經二三日而死、一人稍輕者得活、周密癸辛雜識曰、嘉定乙亥歲、楊和王墳上、感慈庵僧德明、遊山得奇菌、歸作糜供、衆毒發、僧死者十餘人、德明亟嘗糞獲免、有日本僧定心者、寧死不汚、至膚理拆裂而死、至今楊氏庵中、尚藏日本度牒、其年有久安保安治承(原作豪號)等號、僧銜有法勢大和尚、威儀從儀、少屬少錄等稱、是蓋其國度僧萬人、定心姓平、日本國京東相州行香縣上守鄉光勝寺僧也、人中蕈毒、解諸毒、人皆識之、而不用之先鋒卒者、偶然之失可惜、余幼不及此事、毎想悵然、

〔醫心方 十八〕治鼠咬人方第卅四

醫門方療人、被鼠咬諸處皆腫、經年月不差、其咬處有赤脈者是也、

〔時還讀我書 上〕狗咬ノ再發ハ辨認シ難キコトアリ、曾テ一男子アリ、俄ニ腰痛シテ醫ニ乞シニ、桂枝湯加茯苓丸ヲ與テ痛ハ愈タレド、其夜藥食倶ニ口ニ入コトアタハズ、噎逆ニモアラズ、タヾ呼吸迫促シテ舌伸ルコトアタハズ、何物ニテモ口ニ近ケズ、診スルトキ、手掉テヤマズ、陰嚢モ縮小ニナリタリ、其後イヨ〳〵息迫甚シク、譫語ヲ發シ、三日ニシテ死タリ、諸治効ナク、何證ナルコトヲ認得ザリシガ、後ニコレヲ聞ニ、半年ホド前ニ瘋犬ニ踵邊ヲ咬マレシコトアリシガ、聊ノコトユ

中酒

ユクテスクタリト、其毒ノ復發ト見タリ、且人ノ精、其面ヘナツルカ、人ノ息カヽレバ、其厭嫌ク顫ヒタリシガ、此犬毒ノ明徵ナリト云シ人アリキ、

〔塵塚談 上〕天明二寅年九月十九日晝七時頃、藤澤驛領家町小鍛冶屋平左衛門下女はつ、我等寓居座敷緣にて、病犬に左の手二の腕一握り程喰とらる、たばこ二三服呑む程過て灸治せんとするに、右疵の所さらに見へず、きれいに愈たり、只喰取し廻りに針にて突しごとくに、あちこちに赤みあるのみ也、夫を見當に梅桃程の灸炷凡一時餘り致す所、一向熱痛なし、灸治半より夥しく水流れ出たり、右女はいよ恙もなし、すへる者も退屈してねかす所、暫く過、惡寒烈く瘧疾のごとし、其後每日灸治三四十日なしけり、天明七未年迄は無別條存在せり、其のちの事は知らず、

〔俗說正誤夜光珠〕蠱の毒に中る說

世上に、蠱の毒氣に中りて、人の損することゝ、度々ある事なり、心得べし、是地中の陰毒なり、久しく開かざる藏、また濕氣こもる所など、夏秋の比は、殊更に用心すべし、本草綱目に、夏月は陰氣下にあり、入るべからず、毒ありて人を殺すとあり、草木子等にも此事見えたり、近くは廣益俗說辨に經驗錄を引て、古井に毒あることを記せり、其法に同じければ、こゝに略す、又其毒に中りたる者は、急に引あげて、蘇香圓を用ゆべし、猶治法あり、

〔內科秘錄 十〕中酒

中酒ハ又傷酒トモ云フ、酩酊ヲ謂フニモ非ズ、宿酲ノコトニモ非ズ、又酒ニ中リテ腹痛吐瀉等ノ證ニモ非ズ、常ニ醉タルト迥ニ殊ナリ、昏睡シテ人事ヲ省セズ、呼ベドモ應ゼズ、搖カセドモ醒メズ、屈伸轉側ヲモセズ、飮食ヲモセズ、總身ノ知覺ヲ失シ、木偶土製ノ如クナリ、醫者ハ惟不省人事ノ處ヘノミ眼ヲ着ケ、誤テ卒中風ト爲シ、或ハ癇證ト爲スコトアリ、捧腹絶倒スベキコトナリ、又精神錯亂ニナリ、譫語妄言シテ親疎ヲ辨ゼズ、或ハ走リ或ハ罵リ、須臾モ安靜ナラズ、邪祟ノ如クニ

風土病

見ユル者アリ、皆翌日ニ至レバ霍然トシテ醒ム、或ハ重キ者モ二三日ヲ過グレバ必ズ解スモノナリ、

〔病名彙解六〕酒癖（シユヘキ）或ハ酒積トモ云リ、多ク酒ヲ飲、腹中ニ結聚シ塊トナリ、氣ニ隨テ上下スルヲ酒癖ト云リ、

〔病名彙解六〕酒害病（シユガイヤマヒ）此常ニ酒ヲ好テ飲人、酒ニ傷ラレ、惡心嘔逆シテ宿酒ヲ吐出シ、昏冒眩暈シ、頭痛シテ破ルガ如キ等ノ症也、

〔御用留〕北蝦夷地風土病之儀御評議

亥（文久三年）七月廿五日御小印

印大和守

調木川直之丞印

平山謙次郎

印鈴木嘗太郎

同栗本瀬兵衛

同三田喜六

山村惣三郎

松岡德次郎印

大槻宥之助同

蝦夷地掛

御藏方掛

印御勘定方

同御目付方

北蝦夷地之儀、元來異候之地に而、風土病相煩候ものも有之候處、場所に寄、醫師詰場所まで三四拾

量之程隔候向も有之、急變之節、療養難支候趣、殊に臆病之義、當時に相聞、膃臍由、既に山與佐輔義、於蝦夷地、右病相煩候節、燒酎にて片脳を解、隙なく惣身江摺込療治受、次第に平愈いたし候間、場所場所江御廻し相成候樣仕度旨申立候に付、蝦夷地之内シヲヨレ、トンナイ、久春内、タシュンコタン、東トンナイ、ワアーレコタンコタン江、片脳二斤ツヽ、都合拾四斤御買上、早々御廻し相成可然、尤代金之儀、產物掛江問合候處、一斤に付錢二貫七百五拾文之積、兵五郎書上候旨申越、不相當之儀も無御座候間、拾四斤分錢三拾八貫五百文、此金五兩二分、永百六拾壹文八分、蝦夷地御入用金之内ヲ以仕拂御買上取計候樣可仕哉、別紙相添、此段相伺申候、

〈時還讀我書上〉奧州平ノ民間ニ、ダ。ナ。ケ。ト云ヘル病アリ、產婦陰中ニ小齊或ハ努肉ヲ生ジ、痒痛甚シク、精神不爽ニイタルナリ、一老嫗アリ、コレヲ治ス、患處ニ灸モシタハ燒鐵ヲアテ、或ハ瀉血スルコトモアリ、醫ヲ乞ズシテ愈ユト、弟子阿部道順ノ話ナリ、

〈時還讀我書下〉佐渡ニ石ブ。ミ。トイヘル病アリ、人道路ヲ歩スルドキ、乍足下痛ヲナシ、初ハ堅結シテ後腐爛シ、其肉敗壞シ、日ヲ經テ漸々ニ平復ス、俗說ニ蹶須ノ原ノ害石、碎ケ散ジテ飛來ルヲ、誤踏ニヨリテ此名アリトイヘドモ、其石イカナル物トイフコトモ知ラズト、佐渡ノ門人菊池寬齋ノ話ナリ、

〈時還讀我書下〉津輕ニ、ブ。ナ。キ。ト云ヘル病アリ、其證、足脛微腫シ、一二日ニシテ心下ヘ支撐シ、遂ニ死ニ就ク、土人ハ別ニ一種ノ病ト思ヘドモ、脚氣衝心ニ異ナルコトナシト、彼藩ノ山上俊泰ノ言也、越前ニ、ハ。イ。ト稱スル病アリ、其證腹部ニ青筋アラハレ、面色青黯、或ハ浮腫シテ、遷延治セズ、土人鍼針ヲ以テ筋ヲ横ニ破リ、出血スレバ必愈トキケリ、痧病ノ類ナラントイヘリ、

〈時還讀我書下〉羽州新庄ニハ、マヽ、骨。節。ノ。擧。動。ゴ。ト。ニ。聲。ア。ル。モ。ノアリテ、其證或ハ肩或ハ膝ナド一二處ニカギル、清濕化痰湯ヲ用テ効アルコトモアリト、彼藩ノ鳥玄英話也、按ズルニ、十形三療

二日、嶺北李文卿病、兩膝臏屈伸有聲剝々然、或以骨鳴、醫人曰非也、骨不著焉能鳴、此筋濕也、濕則筋急、有獨緩者、緩者不鳴、急者鳴也、若用予之藥一捕一瀉、上下去其水、水去則自無聲矣、李文卿乃從其言、既而果然矣、ト此ニ載レバ、亦骨ノ鳴ニテハ非ザルベシ、

〔雲齋隨筆 四十三〕一奇病　相摸國にヒ゜ザ゜ヤ゜ラ゜ウ゜と云ふ病あり、予が領地かの國にある故、其事を聞けり、其病の初め、蟻の這、蟲の螫す如くレタと痛みて大に腫る、腫れていたむ、捨て置けば膝ふしばかり大くて、脛は甚だ細くなり、歩行する事ならず、鶴膝風に似たり、二三度も痛む者もあり、早くなほさゞれば癒えず、其地の土民に針治をし覺えたる者あり、藥治をし覺えたるものもあり、針を立つれば白き膿水出で、、癒ゆ、藥は赤牛子を黑炒と中炒と生と三品一つに粉にして熱湯にて用ひ、衣服厚く重ねて大に汗すれば癒ゆと、其土民の談なり、此藥は秘すると云ふ、按るに、外邪なるべし、赤牛子は瀉下するなり、汗にて發散す、汗下の二つにて治するは、これ外邪と見ゆ、鶴膝風とは別なるべし、他國には聞かぬ病なり、古代よりある病とみえて、其地に針方藥方を傳へたる者あるなり、水土によつて如斯病もあるなるべし、

〔東遊記 五〕七不思議

一鎌鼬(かまいたち)といふことあり、是は越後の國中に、いづれの所にも折節有る事也、老少男女の差別なく、面部又手足杯を、太刀にて切りたる如く、おのれと切るゝ事なり、疵の大小定らず、或は堅或は横にて、見事にきるゝなり、されど骨の切るゝことなし、又格別血の出るといふにもあらず、只寒熱強く發し、時疫傷寒の如し、其時其地の傳來にて、古き暦を黑燒にし、さゆにて用るに、數日の間に、平愈し、疵の跡も見えず、なほるといふ、此鎌鼬に出合ふ事、或は何方の堤、又はかしこの辻など、其所大抵は定りてあり、然れども何のわざといふことも知れず、此事越後にも限らず、奥州、出羽、佐渡などにもありといへば、北地陰寒の氣毒、人にあたるにやといふ、又或人の說には、鎌鼬にはあ

奇病

らず、かまへ太刀なり、此氣のするどなる事、太刀を構へて切る如くなるゆゑにいふと、是は辟說なりとぞ思はる、只深き理屈もなく、ひかしより言ひならはしたる名にてあるべし、廣大和本草などには、此漢名を考へ出せり、さる事にや、

〔和漢三才圖會三天象〕颶〇中略

蝦夷松前雖月嚴寒晴天有旋風、行人逢之者卒然倒仆、其頭面或手足五六寸許裂創、似鎌之鋒、太知、然無至死者、急用藁灰汁傅之即愈、奥州津輕地亦間有之、蓋極寒陰毒也、

〔閑田次筆一〕一種の風有て、俗にかまいたちといふは、かくのごとく甚しからねど、此類にあたるものは刃をもて裂たるごとく疵つく、はやく治せざれば死にも及ぶとなん、これは上方にてはなきことなりと思ひしに、今子のとし、予〇伴蒿蹊が相識人の下婢、はつかの庭の間にてゆゑなくうち倒れたり、さてさま〳〵に抱へたすけて、正氣に復して後見れば、頬のわたり刃もて切たるごとく疵付しとなん、即これなるべし、又是につきてある人の語に、下總國大鹿村の弘教寺の小僧、この風にあたりて傷みしに、古暦を黒にして付しかば、忽ち治したると也、暦を黒にして付るといふことは、予もかねて聞及びしが、これは現證なり、下總甲斐の邊にては、寛明り障子なども暦にて張る、かゝれば彼風いらずといへり、さて其わたりにては、風神太刀を持といふより、かまへだちと稱ふとかや、かまいたちと稱るは、此語をあやまれるにや、是は語に理あり、

〔兎園小說四集〕奇疾

享保十四年八月の頃、本所石原德山五郎兵衛中間八郎儀、に尻に犬の尾を生じ、五日の朝飯食し兼ねしことありき、摺鉢に食を入れ與ふれば、快く食す、夫より人相も大に變じ、全く犬の如し、夜中犬の聲を聞くときは、必飛び出だす、日ころ犬を殺し、祟と、皆人傳へ云ひき、

〔山亭雜記一下〕奇病の評

文政四年辛巳の夏、江戸牛込袋町代地なる町人友次郎が妹〈名梅〉へ十四歳奇病あり、この年五月、神田佐久間町の名主源太郎が、この事を官府に訴奉りしうたへぶみの寫しを見たり、今その實を傳ん爲に、俗文のまゝ謄錄す、かゝる事は風聞聽とて、その事實なれば、向寄の肝煎名主より町奉行所へうつたへまうす事なりとぞ、是もそのひとつなるべし、

牛込袋町代地金次郎店
友次郎妹
うめ巳十四歳

右友次郎儀者、當十七歳罷成り、時之物商賣致候者ニ而、店借名前ニ御座候得共、內實九歳之節ヨリ奉公致シ居、祖母妹うめ三人暮シにて、平生洗濯物等致シ、聊之賃錢を取、漸取續罷在候ものに御座候處、去辰八月中、うめ儀、下谷小島町藥店ニて松屋文助と申者、兼而懇意ニ致シ、無人之由申候間、右之者方へ預ヶ置候處、文助儀、同十月新右衞門町へ引越シ、うめ儀も連參候處、一體うめ儀、持病ニ癪有之候處、新右衞門町へ引越シ後も何となく氣分惡敷罷成り、入湯致シ候節、手足其外所々腫、色付候儀なども有之、奇病之樣子ニ而、文助儀、藥種渡世致候事故、藥用も致シ遣シ候得共、同樣ニ候間、去年十二月中、宿へ引取候處、其砌腹幷ニ足膝等痛候儀モ兩度有之而已ニて、追日全快致候ニ付、先月晦日、神田お玉が池御用達町人川村又七ト申者方へ奉公ニ差出シ候處、兩三日過候得バ、亦又氣分惡敷罷成リ、食事も給兼候樣子ニ付暇取、當月九日九ツ時過引取介抱致候處、身ノ內處々頻ニ痛候旨申之、甚苦ミ候間、痛ミ候處捺り遣シ候得者、乳之下皮肉之間ニ針有之、皮を貫キ先出候ニ付、爪ニ而引拔遣シ候得者、猶又同樣標々〈標ハ顋項といふが如し〉一本、膝より二本、小用之節陰門より三本、九日十日兩日ニ出、何レモ錆無之、絹縫針ニ有之、右之趣外科ニモ爲見候得共、場所惡敷候故療治致シ兼候段申之候間、致方なく其儘差置候得者、同十四日十五日頃より段々快方ニ罷成り、此節全快致候へ共、水落之邊ニ〈水落ハ鳩尾といふが如し〉針四五本殘り居候樣子ニて、同廿三日朝

同所より長サ二寸餘モ有之候木綿仕付針一本鍼候儘ニて出候段、うめ并ニ同人母さん申之候間、右ニ付何ぞ存當り候儀も無之候哉ト承糺候得者、うめ義、小島町ニ罷在候節、大助宅座敷并ニ二階等ヘ小便致シ候様子ニて、疊より床迄通シ濕有之候義、度々御座候ニ付、若もうめニハ無之哉と疑心を請候義も有之、且又新右衞門町ヘ引越候後、夜分うめ臥居候側を離れあるき、又ハ同人著團之下ヘ這入、都數小便致候義毎度之儀ニ相成、追々氣分暴敷罷成候段申之候、全く狐狸之所爲ニも可有之哉、專奇病之趣、此節近邊取沙汰仕候ニ付、取調此段申上候、

右最寄組合肝煎
神田佐久間町
名主　源太郎

〔譽濃餘話　四〕予〇中山三柳曾て豐前の國中津に在し時、ひとりの奇病を療す、二十四歳の男子、一兩年已來、夏の始つかたより、初穐の比まで、舌乾燥して、津液少く、舌上あれて鮫皮のごとし、今年六月、此病發る事例年よりも甚し、七月の初より、舌の上ことさらに乾燥して、舌上に一夜の間に毛を生ず、舌の上正中一筋、其色黒く、毛長き事二三分ばかりにして、其證驗といふことなし、上唇を衝て、其苦痛する事いはんかたなし、其外苦む事なし、かくのごとくなるもの二十餘箇日、諸醫に逢て、其病因をとひ、藥を服すれども、其驗もなく、又其病因を知者なし、予其頃は邦君の疾の急なる時にして、公所に在て、見るに暇なし、門人阿部氏によつて、其病因をとひ、且其治をもとむ、予曰、此病これ心火有餘の證なり、それ人の五內には毛を生ずる事なきものは、これ津液あつて乾く事なきがためなり、譬ば水の流るゝ所には草生ずる事なきがごとし、元氣めぐつて經絡の血流行するときは、津液乾く事なし、舌は心の主るところ、火有餘なるときは、心血乾て腠理のごとくなるによりて毛を生ず、譬ば池水涸て澤邊となれば、蘆葦おのづから生ずるの義に同じ、土あればこゝに

婦人病
月水不調

草生する成べし、水深く水流る、所には草の生する事なきがごとし、しかれば心火有餘、心血乾燥して、此症をなす成べし、心火を瀉して後、心血を増ときは、其病愈べし、阿部氏に命じて治せしむ、竹葉石膏湯に當歸、芎藭、麥門冬、黄連、連翹を加へて、これを服せしむ、朱砂安神丸を兼服す、二十餘貼にして、舌上の毛こと〴〵くぬけて、舌の乾燥太半を減す、後に逍遙散に、山梔子、麥門冬、酒製の芩連、連翹を加へ、數貼を服してその病愈たり、此病を以これを考れば、土あつて少く、水の潤澤ある所には草よく生じ、氣血のとゞまつて濕潤なる所に毛を生するの義と知べし、此醫按、予があらはすところの遊豐司命録に載たり、其義詳也、考へ見て志るべきなり、

〔生生堂治驗上〕一老婆有奇疾、毎見人面、情有欣實、更醫治之也、不可勝數、然無寸効、先生○中神琴溪診之、脈弦急心下滿、與之三聖散八分令吐、後與柴胡加龍骨牡蠣湯、自是不復發、時年七十許、

〔生生堂治驗上〕近江大津人某、來見先生○中神琴溪屏人竊言曰、小人有一女、年甫十六、既許嫁、然而有奇疾、其證非所嘗聞者也、蓋毎夜及丑昔、及家人熟睡竊起舞躍、其舞清妙閑雅、宛然似才妓最秀者、至寅尾而罷、遂以爲常、余聞窺之、夜夜輙異其曲、曲從變奇、不可名狀、明朝動止食飲無以異常、亦不自知其故、爲告之則愕然而怪、是不信也、不知是鬼所憑乎、若狐狸所惑耶、他若聞之、恐害其婚、是以爲之陰祝呪禱祀無不爲也、然不効、聞先生之門多奇疾、今來觀、先生應曰、此證蓋有之、即所謂狐惑病者、行診之果然、與之甘草瀉心湯、不數日而夜舞自止、遂嫁某氏而有子、

〔醫心方二十三〕治產後月水不調方第卅八

病源論云、產傷動血氣、虛損未復、而風邪冷熱之氣客於經絡、乍冷乍熱、冷則血結、熱則血消、故令血或多或少、乍在月前、或在月後、爲不調也、

〔覆載萬安方一〕通治、婦人血疾、經血暴下、暴下血、故名曰腦中、如山崩潰、謂之崩類也、此中婦人通用之總藥也、

〔五體身分集下〕開陰病分

長血
白血

婦人月水不調ト云ハ、或ハトクキタリ止ラズ、或遅ク来リ滞ルモ、治方、桂心酒ニ溶飲ヨ、

〔倭名類聚抄 三〕長血　小品方云、婦人長血、〈和名奈加知〉又有白血、

〔箋注倭名類聚抄 二〕小品方十二巻、陳延之撰、見隋書唐書、今無傳本、按長血白血之名、於諸醫書未見、蓋長血卽崩漏、白血卽帶下也、

〔伊呂波字類抄 奈疾病〕長血ナカチ　〔同 志疾病〕白血シラチ

〔五體身分集 下〕婦人陰病分〈本方ニ血ノ道ヲハ、胎中、脈、長血トテ三種ヲ擧リ、〉

婦人ノ長血ハ五木風ト云病也、先レ九種ノ下血ノ内也、治方、香墨燒鰹節ニ入テ服ヨ、酢ニ溶テモ毎日服ヨ、

〔婦科壽世錄 入〕帶下

帶下ハ素問ニ見ユ、金匱ニモ出テ、治法ヲ載セタリ、婦人良方云、人有帶脈、横於腰間、如束帶之狀、病生於此、故名爲帶、ト云フ說ナレドモ、張景岳ノヤウニ思フナリ、帶ハ滯ノ義ニテ、穢物淤滯シテ下ル意ナリ、痢ノコトヲモ滯下ト云フユヘ、水ヲ去テ洗滌セヌヤウニシタルモノナルベシ、後世ニ及テ、赤白ノ二症ヲ分フ、本邦ニテ、赤帶ヲナガチト云、白帶ヲシラチト云フ、至極ノ大病ニテ、先必死ト定メタルヨキ程ノ者ナリ、老媼ノミ患ヘテ壯婦ニ無シ、多クハ五六十歳ニテ發ス、稀ニ早ク發スル者モ、四十歳以上ナリ、壯婦ノ帶下ヲ患フルト云フハ、多クハ月信ノ不調ニテ、眞ノ帶下ニ非ズ、老媼ノ月信一旦斷テ后、經漏過下ルコト、月信ノ如ク、自分モ月信ノ誤リ復來リタルモノナランナドト心得テ居ルウチニ、期ヲ過レドモ止マズ、或多ク下リ、少腹絞痛シ、或崩漏シテ、一次ニ一升餘モ下リ、或ハ豬肝ノ如キ凝血ヲ下シ、血ノ濃モノハ紫黑色、薄キモノハ桃花色ニテ鮮紅ナラズ、多ク下リタル後ハ、下リ物減少スレドモ、又腹痛シテ大ニ崩下スルコト前日ノ如ク、幾度モ漏下スルコト、數月ヲ經レドモ止マズ、遂ニ白穢物ヲ下スニ至ル、纔ニ白穢物ノミ下ルモノモアレ

ドモ、赤白帶下スルモノ多シ、

〔內科秘錄十一〕婦人崩漏

崩漏ハ、又血崩トモ、崩中トモ謂フ、產後ニ血崩スルハ胞衣ノ分離シタル跡ハ、皮ヲ剝ギタルヤウニ赤肌ニナリ、血脈ノ破レタル處ヨリ出ル血ナリ、水ノ如クニ瀉下シテ、間モ眞赤ニナリ、一二升モ出タルヤウニ見ユルモノナリ、瘀血ノ爛肝ノ如クニ成リテ下ルハ、一旦子宮中ニ留滯シテ、時ヲ移レタルナリ、陣痛スルコト臨產ニ異ナラズ、卒ニ色ヲ變ジ、唇舌倒白ニナリ、脈沈微、四肢微冷、自汗如流、須臾ニシテ發熱シ、數日ヲ經テ熱解スルト雖ドモ、脈尙浮弦ニシテ、耳鳴眩暈、虛里悸動、人迎ノ脈ハ外ヨリ見ユルホドニ動キ、起居スル每ニ呼吸促迫シ、後ニハ爪甲薄クナリ、或ハ缺ケタ黃胖ノ如クニ變ズ、卽血虛黃胖ナリ、產後ニハ限ラズ、平人モ過血崩スルコトアリ、其正候ハ產後ニ發スル者ト同ジコトナリ、凡ソ亡血スル者ハ、諸症退キテモ兎角疎懶ニナリ、臥スコトヲ嗜ムモノナリ、或ハ遂ニ心氣病ニナルモアリ、

治法ハ賀川家ニ運鍼ノ術アリ、救急ニ備フベシ、西洋ニテ陰門一杯ニ綿絮ヲ螺旋リ入レテ止ルノ法アリ、

〔見聞漫錄〕弄痛

女科百効全書曰、十月未足、臨產腹痛、或止痛不定、名曰弄痛、と、弄痛とはよく名けたり、

〔產家談上〕孕婦臨月に至り、腹痛むやいなやあはて丶、穩婆を呼ぶべからず、頻りに腹はり痛甚くなり、分娩とおもふ比に呼ぶべし、穩婆を早く呼と、役にもたゝぬ事を云ちらし、彼是と差圖をなしたり、產婦をなでさすりすれば、產婦は今に生る丶事と心得、無理に生出さんとして、難產に變ずる事まゝあり、產は天地を大父母として生る丶事なれば、人力の及ぶ所にてなし、俗言の天道樣しだいに任すると、大安產疑なし、是天道をたうとみ、身を大事にするの術なり、變

婆は出胎ありて後に呼てくるしからず、生児をしばらく草席に置のみにて、いさゝか害なし、たゞ時候に相應し、嚴寒などは冷さぬやうに手當すべし、然るに貴人富家は、醫者と婆々のみをちからにして、臨月に至れば、穩婆を呼て附置もあり、產月の事なれば、少しの傷みは有べきに、早速に醫者は藥劑を用ひ、婆々はひたものひねりさすりして、却てこれが爲にそこなひやぶらるゝ者多し、田舍者貧賤の者は諸事無造作故に、自然と天理にかなひ安產也、又物種を土に植るに、萌芽至て柔なれども、堅き土を分け、砂石を除きて生ひぬ、此等を推て辨すべき事ぞかし、古人の病ありて治せざれば中醫を得るといへり、病ありてさへ醫藥を用ひざるをよしとす、況や產は病にあらず、醫者が藥を以て大便を下すやうに、藥にて生るゝものにてなし、必しも醫者婆々を力にすべからず、且生產をうむとはいふまじ、うまるゝ也、うむは人力の所爲なり、うまるゝは天地造化の妙にてうまるゝなり、鳥獸を見るべし、一產に五ッ六ッもつらね生るれども、難產なく支障もなし、是私智少しもなく、天の生々總の變の理に、自然とかなふがゆへに、無難なる也、却て人は私智の才覺にて、うまんとするによりて、天地生成の理にそむくが故に、難產有なり、此理をよく〳〵おもひめぐらすべし、穩婆を早く呼寄ざる事、愚老が考へなれど、試驗多ければ爰に記しぬ、

產後腹痛

〔倭名類聚抄 病三〕產後腹　新撰要方云、婦人產後腹痛、俗云之利波良取大豆二七枚呑之、

〔箋注倭名類聚抄 病二〕按、前後謂、万倍之利倍、又謂左岐乃知、万倍之利倍、目邊尻邊也、謂物之前邊後邊、又左岐乃知、謂時之先後、則產後腹痛、當云乃知波良、其云之利波良、倍爲之誤也、今俗呼阿止波良爲得、○中　新撰要方無攷、現在書目錄、有新撰方一卷、疑是、

乳病

〔牛山活套 下〕乳病

婦人ノ乳病ハ、多ハ肝經ノ鬱火ヨリ發スル也、乳汁不通ハ結核自成也、此結核久ク不消バ、結シテ

乳癰

乳癰トナル、初メ結核ヲナシテ寒熱ヲ發セバ、速カニ揉ヤワラゲテ散ズレバ、乳汁亦通ヂ結核自ラ消スル也、

〔牛山方考　中〕一乳房ノ内ニ、小石ノ如キ物アリテ痛ヲ乳核ト云也、或ハ久ク其核不去バ、必膿ヲナシ、乳岩トナル也、十六味ニ、青皮、連翹、酒柴胡、酒黄芩ヲ加テ奇効アリ、

〔病名彙解　一〕妬乳　コレ婦人ノ乳ニ癰疽ヲ發スルヲ、スベテ妬乳トイヘリ、其病因ハ品ナリ、

〔日本靈異記　下〕女人濫嫁、飢子乳故、得現報緣第十六

横江臣成負女、越前國加賀郡人也、天骨婬泆、濫嫁爲宗、未盈丁齡、死逝歷年、紀伊國名草郡能應里之人寂林法師、離之國家、經之他國、修法求道、而至加賀郡畝田村、逕年止住、奈良宮御宇大八島國白壁天皇世、寶龜元年庚戌冬十二月廿三日之夜夢見、從大和國鵤聖德王宮前之路、指東而行、其路如鏡、廣一町許、直如墨繩、邊木草立、林佇看之、於草中有大肥女、裸衣而踞、兩乳腫太如竈戸、垂自乳流膿、長跪以手押膝、視之病乳而言、痛乳乎、呻吟苦痛、林問汝何女、答我有越前國加賀郡大野郷畝田村之横江臣成人之母也、我齡丁時濫嫁邪婬、棄幼稚子、與壯夫倶寢逕之多日、而子乳飢、嗟子之中、成人甚飢、无由幼子飢乳之罪、故今受乳腫病之報、問何脱此罪、答成人知之、我罪免也、林自夢驚醒、竊心怪思、巡彼里覓、於是有人、答言當余是也、林述於夢狀、成人聞之言、我稚時離母不知、唯有我姉、能知事狀、問姉也、時答實如語、我等母公、面雪妹妙、爲男愛欲、濫嫁惜乳、不賜子乳、更諸子愁言、我不思怨、何慈母君受是苦罪、造佛寫經、贖母之罪、法事已訖、後夢告曰、今我罪免之矣、誠知母甘乳寔恩深、惜不哺育、返成殃罪、豈不令飲哉、

〔倭名類聚抄　三〕乳癰　四聲字苑云、疟（竹救反、與腫同、俗云知布、）婦人乳腫也、釋名云、乳癰曰妬、（今案、妬當作疟、見上文、）妬貯也、言氣貯積不通也、

〔箋注倭名類聚抄　二〕山田本作竹故反、那波本同、按當故與廣韻合、竹故與玉篇合、字異音同、知布見上、

集中抄、醫心方妬乳同訓、○中略 按玉篇、疕、乳癰也、廣韻、疕、乳病、並與此義同、○中略 按說文無疕字、釋名用妬字者、古字少、假借也、妬正作𡜑、从石作耳、源君蓋妬宜作疕者、混矣、○中略 原書妬也、作𥫗也、妬歳作據衍、按說文、妬嫉也、衛卒也、此作妬嫉、是、然左傳、取乳衣冠、服補之、注、補害也、周禮釋文、寶本作妒、又作𥫗、皆假借爲妬、原書不通下有至腫潰三字、按病源候論、有乳腫候、有乳癰候、有妬乳候、析言之、也、釋名因變字見作言之耳、

〔増補下學集上二〕乳癰婦人乳腫也

〔醫心方二十一〕治婦人妬乳方第四

病源論云、婦人妬乳者、由新產後兒未飲之、或飲不泄、或斷兒乳、捻其乳汁不盡、皆令乳汁蓄結、與血氣相搏、則壯熱大渴引飲、牢強掣痛、手不得近是也、初覺便以手助捋去其汁、幷令傍人助嗍引之、不爾成、創有膿、其熱勢盛、則結膿成癰、

〔醫心方二十一〕治婦人乳癰方第五

病源論云、婦人乳癰者、腫結皮薄以澤、是爲癰也、寒搏於血、則壅不通、而氣積不散、故結聚成癰、亦因乳汁蓄結、與血相搏、蘊積而成癰也、乳癰年幾已盡、治之多愈、年五十已上、愼不當治之、多死、乳癰久不瘥、因變爲瘻、養生方云、婦人熱食汗出、露乳傷風、喜發乳腫、名吹乳、因喜作癰、

〔有林福田方十〕乳癰　俗ニチヲウト云是也

論云、婦人ノ乳癰トハ、乳汁ノ蓄結ニ依テ、血氣蘊積而癰トナレリ、又婦人ノ妬乳トハ、乳癰トコトナラズ、又千金云、凡女人ノ乳癰ヲ患フルニ、年四十ヨリ内ハ治之多ハ愈ユ、年四十ヨリ以後ハ治之多ク死ス、治セザレバ自ラ天年ヲ終コトヲ得ベシト云ヘリ、直指方云、寒冷ヲ以テ是ヲ凍結スレバ、毒氣裏ニ入テ嘔吐スルコト尤甚シ、其證ハ胸膈妨礙スル是ナリ

〔[illegible]羽聚錄七〕乳癰

乳癰ハ、婦人ニカギリタル病ニテ、常ニモ鍼線ニテ肩ヲ使フトキハ、患フルコトアレドモ、多クハ產前產後ニ發スルモノナリ、產前ニ發スルヲ內吹ト名ケ、產後ニ發スルヲ外吹ト云フ、其因ヲ考フルニ、婦人姙娠シテ分娩ノ頃ニ近ヨルトキハ、自然ト血液乳房ヘ多ク聚リ、乳汁ヲ釀シ出サントスルノ勢アリ、然レドモ產前ニハ、乳汁ニ化シテ外ヘ出ルコト能ハズ、血液塞ニ凝滯シテ癰トナルナリ、

乳岩

〔瘍科秘錄 一〕乳岩

乳岩ハ至極ノ大病ニテ、古ヨリ難治トス、宋ノ竇漢卿ノ未破可療ト云タルハ無稽ノ言ナリ、外科正宗ニ、百人百死スト斷タルコソ、實ニ敎治療ヲ經タル上ノ言ニテ卓識ナリ、獨嘯菴漫遊雜記ニ、乳岩不治、自古然、而紅毛書中有言、曰其初發如梅核之時、以快刀割之、後從金瘡之法治之、斯言有味、然余未試之、當以待後世ト云リ、其法詳ニ傳ハラザレバ、誰モ其術ヲ行フモノナシ、後ニ我青洲老翁出テ、始テ麻沸湯ト云方ヲ組タテ、乳岩ヲ截テ療治スルコトヲ心匠セシハ、曠古ノ一人ト謂フ可シ、其病少壯ノ人ニハ少ク、多クハ五六十ノ間ニ發ス、是ハ老タル人ノミ患テ、若キモノ患ザルニ非ズ、若キトキヨリ萌レテ、歲月ヲ積ミ、五六十ノ頃ニ至テ發スルコトヽ見エタリ、獨リ婦人ノミ患ヒテ、男子ニハ絕テ無キ病ナリ、乳岩ニハ限ラズ、乳癰、乳瘻、乳癖ノ類、凡テ乳ノ病ハ、婦人ニ限ルコトナリ、其理ヲ考ルニ、婦人ハ乳汁ヲ釀ス爲ニ、乳ノ乳房ヘ運リ來ルコト、男子ヨリモ尤モ多シトス、血多キトキハ凝滯シテ敗血ヲナシ易シ、其敗血乳病ノ病因トナルナリ、

小兒病　哯吐

〔倭名類聚抄 三病〕哯吐　病源論云、哯吐、〈上音見、和名豆太美、〉小兒由哺乳冷熱不調所致也、

〔箋注倭名類聚抄 二病〕醫心方同訓、豆太美、又見源氏物語橫笛卷、按、豆太美、蓋知太万比之轉、吐乳之義、今俗云知阿万須是也、〈中略〉原書作小兒吐哯者由乳哺冷熱不調故也、按廣韻、哯、小兒歐乳也、當云小兒吐乳、說文、哯不歐而吐也、小兒之吐乳、不作嘔惡而吐、故云吐哯、又按諸醫書皆云吐哯、無云

哯吐者、此引作哯吐恐誤、

〔伊呂波字類抄人體〕哯吐ヲメク

〔醫心方二十五〕治小兒吐哯方第六十三

病源論云、小兒吐哯者、由乳哺冷熱不調故也、

〔病名彙解一〕吐哯　小兒乳ヲアマスコトナリ、字彙云、哯以淺切、音衍、小兒歐乳ナリ、五車韻瑞ニ、胡典切、此症ハ、乳哺ニ冷熱調ラザルニ因ルノ故ナリ、

〔源氏物語三十七横笛〕この君いたくなき給て、つだみなどし給へば、めのともおきさわぎ、うへもおほとなぶらちかくとりよせさせ給て、みゝばさみしてそゝくりつくろひて、いだきてゐたまへり、

〔醫心方二十五〕小兒變蒸第十四

病源論云、小兒變蒸者、以長血氣也、變者上氣、蒸者體熱、變蒸有輕重、其輕者、體熱而微驚、耳冷、髖亦冷、上脣頭白泡起如死魚目珠子、微汗出、其重者、體壯熱而脈亂、或汗或不汗、不欲食、食輒吐哯、无所苦也、變蒸之時、目白睛微赤、黑睛微白、亦无所苦、蒸畢自明了矣、先變五日、後蒸五日、爲十日之中、熱乃除、變蒸之時、不欲驚動、勿令傍邊多人、變蒸或早或晩、依時如法者少、初變之時、或熱甚者、或違日數不歇、審計日數、必是變蒸、服黑散發汗、熱不止者、服紫雙丸、小差便止、勿復服之、其變蒸之時、遇寒加之、則寒熱交爭、腹痛夭矯、啼不止、熨之則愈、變蒸與溫壯傷寒相似、若非變蒸、身熱耳熱髖亦熱、此乃爲他病、可爲餘治、審是變蒸、不得爲餘治也、其變蒸日數出病源論、

〔病名彙解一〕變蒸　俗ニ云小兒ノチヱボトリナリ、生レテ三十二日メニ一變シ、六十四日ニ二變シ、ソノ時ニ蒸シテ熱氣ガアルナリ、一變シテ後、智惠ガ前ニ一倍スルト云リ、入門ニハ、十變ノ後ニ、六十四日ヲ一大蒸トシ、又六十四日ヲ二大蒸トシ、合テ五百十二日ニテ變蒸ヲハルト云リ、又醫學綱目ニハ、十八變ニテ五百七十六日ト云リ、諸方書ヲ考ベシ、諸說繁多ナル故ニ、コレヲ略

セリ、

(醫心方二十五)治小兒口噤方第五十

(病源論)云、小兒中風口噤者、是風入頷項之筋故也、

(病名彙解七)臍風(并撮口)臍風ト撮口トニツニ分テ、二病ニ見タル說アリ、又臍ノ緒ヲ切トキ、臍ヨリ風ヲ引、臍ノ瘡トナリ、口中ニ泡ノ如クナルモノヲ生ジテ、口ヲ撮上タルヤウニシテ、乳ヲ飲ザル故ニ、臍風ヨリ撮口ノ證生ズレバ、一病トナシタル說モアリ、入門ニ云、撮口風ハ、面目黃赤タ、氣喘シテ啼聲出ズ、胎熱毒ヲ心脾ニ流ストキハ、舌強リ、唇靑ク、口ヲ撮、面ヲ聚メ、乳ヲ飲ニ妨グアリ、初生七日此ヲ患ルモノアラバ、急ニ兒ノ齒齦ヲ看ベシ、小泡アリ、粟米ノ狀ノ如シ、急ニ靑軟布ヲ以テ手指ヲフヽミ、溫水ニ蘸シ、輕々ニ擦破ル、即口ヲ開テ便安シ、服藥ヲ用ヒズ、臍風ハ臍ヲ斷ニ因テ後濕、乳、水、溫、風、冷、臍ニ入ルガタメニ、心脾ニ流テ致ス所ナリ、其症臍腫突テ腹脹滿スルナリ、壽世保元ニ云、臍風ハ多ク臍ヲ斷ニ因テ風濕ノタメニ乗ゼラレ、或ハ胎モト熱毒アルトキハ、兒胎ヲ下ルノ時、其臍ヲミレバ、必ズ硬直ナリ、定テ臍風アリ、必ズ臍ヨリ發ス、靑一道ヲ出シテ行テ肚ニ至ル、觸テ兩岔ヲ生ジ、行テ心ニ至ルモノハ必ズ死ス、撮口ハ、胎氣熱ヲ挾ミ、風邪臍ニ入、毒ヲ心脾ノ經ニ流ス、故ニ舌強リ、唇靑、口ヲ聚テ啼聲出ザラシムルナリ、(按ルニ、此等ノ說二病ニ分ツモノナリ、)醫統ニモ、亦二病トセリ、丹臺玉案ニ云、臍風撮口ハ總テ一病トス、イマダ臍風ニシテ撮口アラザルコトハアラジ、未撮口ニシテ臍風アラザルコトアラジト云リ、

(倭名類聚抄三)痞　醫療方云、痞(音鄙反、上聲重、[illegible])之小兒腹病也、唐韻云、腹內結病也、

(箋注倭名類聚抄二)醫心方同訓、○中略 昌平本下總本無腹字、恐非、按病源候論、有傷寒心否候云、否者心下滿也、○中略 廣韻病作痛、按玉篇、痞腹內結病、孫氏蓋依之作病爲是、然說文、痞痛也、似不得痛字爲誤、攷病源論候云、八否、否者塞也、言腑臟否塞不宣通也、其病腹內氣結脹滿、時々壯熱是也、其

魃病

名有八、故云八否、又八十一難云、脾之積名曰痞、楊玄操注、痞者否也、言否結成積也、釋名、痞否也、氣否結也、然則腹内結病之痞、古只作否、後人增疒作痞、遂與胸滿痞字混、於是廣韻改病爲痛也、其實胸痛之痞、形聲字、腹内結病之痞、原會意字、不同也、

(伊呂波字類抄病疾)痞ヒ、ハラ、腹結方云、小兒病也、東觀記、腹中結病也、　(同江病疾)痞ニカヘリ病也

(增補下學集上二支體)痞小兒病也

(醫心方二十五)治小兒痞病方第七十二

病源論云、小兒胸鬲熱實、腹内有留飲、致令榮衞痞塞、府藏之氣不宣通、其病腹内結脹滿、或時壯熱是也、○中略

產經云、治小兒痞、面黄羸瘦、丁奚不欲食、食不生肌膚、心中嗜々煩悶、發時寒熱五藏臚脹、腹中繞齊痛、

(牛山方考上)一痞氣ノ症、和俗ヲカヘノ症ト云タ、飲食不進、數日ノ後ハ形瘦虛勞ノ如キ症ニ行氣香蘇散ニ、木香砂仁ヲ加タ甚奇効アリ、

(内科秘錄十三)小兒魃病

魃病ハ病源候論ニ出ヅ、醫學綱目ニ魃病ニ作ル、蓋シ魃鬾通用ス、又𩲡病トモ云フ、ヲトミヤミトモ、又ヲトミブハリトモ云フ、常州ノ方言ニテハナレト云フ、魃ハ小鬼ノコトニテ、小兒黃瘦シテ小鬼ノ如クナリタル義ナリ、小兒ノ未ダ成長セズニ、其母早ク姙娠スルトキハ、乳汁不足ニナリ、小兒常ニ饑テ氣六箇敷ナリ、悲患啼泣スルモノヲ魃病ト名ク、即チ俗ニ云フチバナレノコトナリ、飲飯、糕粥、及ビ乳餅ト唱シテ、粢糕ノ合餅ヲ煉リタル物ニテ介抱スレドモ、脾胃ニ慣レヌモノヲ卒ニ食スルユヱ、脾胃ヲ傷リテ完穀下利ニナリ、後ニハ疳ニ變ジ、飲食ヲ貪リ、常ニ過食シテ穀下リ、遂ニ身體黃瘦シ、腹ノミ脹滿シテ青筋ヲ見シ、至極大病ニナルモノナリ、醫俗共ニ其病因ヲ察セズ、徒ニ蟲ト爲シテ、殺蟲ヲ與へ、或ニ灸ヲ灶ルハ大ナル心得違ナリ、此證ハ前ニモ云フ通

リ、脾胃ノ虚弱ヨリ起ル病ニテ、是迄哺餌ニテ養ヒタル小鳥ヲ、卒ニ毒餌ニシテ脾胃ヲ傷リタルニ同ジコトナレバ、藥餌鍼灸ノ治スル所ニアラズ、先ヅ乳母ヲ倩ヒ、或ハ乳アル人家ニ託スルヲ最第一ノ良策トス、然レドモ長ジタル小兒ハ人ヲ認識リテ、乳ニ就キ兼ルモノナレドモ、其儘手ヲ束ヌベカラズ、乳母晝ハ小兒ノ左右ニ侍シテ倶ニ遊戲シ、夜ハ寐添テ小兒ノ眠リ際ニ乳ヲ飲マシムルヤウニスルトキハ、自然ト慣染モノナリ、魃病ニテ吐瀉久シク止マズ、肉脱骨立シテ危篤ニ至リタル者ヲ、此手段ニテ囘春シタルコト擧テ算フベカラズ、

〔病名彙解五〕魃病(ヒヽヤウ)鬾病、又魃同。　俗ニ云、フ°ト°ミ°ブ°ハ°リ°ナリ、小兒、母ノ懷姙シテイル乳ヲノミテ、痿利ノ如ク病ナリ、又魃ハ小鬼ナリ、姙婦惡神ノ氣ニヲカサレ、小兒、其乳ヲノミテ病ナリ、魃、一ニハ魃ニ作ル、醫學綱目ニ云、小兒魃病ハ、母娠ルコトアリテ、兒ニ乳スレバ、病ルコトアリテ、痿利ノ如シ、他日マタ相繼テ腹大ニシテ、或ハ瘥或ハ發ル、他人相近クモ、亦能相繼、北人イマダ其病ヲシラズ、懷姙スルモノ、百勞鳥(モズ)ノ毛ヲトリ、コレヲ帶ビ、又其鳴枝ヲトリテ小兒ヲ鞭テ、速ニ語ラシム、聖惠方ニ、小兒生テ十餘月ノ後、再ビ又娠ルコトアレバ、兒ヲシテ精神爽カナラズ、身體萎瘁セシム、名テ魃病トス、無擇ガ千金論ニ、小兒魃病アルモノハ、是姙婦惡神ニ祟ラレ、其腹中ニ導キテ、兒ヲシテ病シムルナリ、魃モ亦小鬼ナリ、其證微ク下利シ、寒熱去來シ、毫毛鬢髮悅シカラザルモノ是ナリ、

〔増補下學集支體上二〕疳(カン)　病上同

〔病名彙解二〕疳(カン)　俗ニ云小兒カンノムシナリ、疳ハ甘ナリト註シテ、肉食肥甘ノ物ヲ食シ、病ヲ生ズル故也、又疳ハ乾也ト云説モアリ、虫ト云ハ疳症必ズ虫ヲ生スルコトアレバ也、大人ノ虚勞ト同ク〇中略

入門ニ云、疳ハ乾也、瘦瘁少血ナレバ也、五疳病五臟ニアヅカル、二十歲以下ヲ疳ト云、二十歲以上

ヲ痔ト云リ、蓋痔ノ種類尤モ多シ、

(醫心方七)治疳濕方第十四

病源論云、人有嗜甘味多、而動腸胃間諸虫、致令侵食府藏、此猶是䘌也、但虫因甘而動、故名之爲甘也、

(叢桂亭醫事小言三)小兒

夫小兒ニハ疳ト云病ヲ常病トス、是ハ甘ヲ食タ發スル故ニ、疒ニ从タ疳ト云ハ正字通ノ説也、本邦ニテハ古ヨリ疳ヲ患タ、兒ノ初生ニハ、必カン小紋ト云テ、積雪草葉ヲ染タ着衣ニスルハ、疳ヲ除タノ縁ニヨルコト東門隨筆ニ見エタリ、カント云コトハ、疳ト云コト也、○中略

疳

小兒ノ疳ハ、其形狀盡シガタシ、後漢ノ王符ガ潜夫論曰、嬰兒有常病、貴臣有常禍、父母有常失、人君有常過、嬰兒常病傷於飽也、貴臣常禍傷於寵也、哺乳多則生癇病、富貴盛而致驕疾、愛子而賊之、驕臣而滅之者非一也ト、古ヨリ小兒ニハ、飽シムルヲ以テ病ヲ致ス、癇ハ驚風ノ事ヲ云也、疳ハ甘ヲ食シテ病ムト云トモ、疳ノ字ハ古書ニ出タルハ、皆疳虫蝕瘡ノ事ニテ、今ノ五疳ノコトニアラズ、外臺方ニ疳病ノ方ヲノセタレドモ、今ノ疳病ノ事ニハアラズ、肛門ニ虫ヲ生ズルノコトヲ論ゼリ、又金匱ニ疳虫蝕齒ノ方アリ、註家多ク仲景ノ文ニ非ズト評ス、總テ今ノ疳ニハ非ズ、病源候論ニ始テ疳䘌ト稱ス、曰、人有嗜甘味多、而動腸胃間諸虫、致令侵食府藏、此猶是䘌也、凡食五味之物、皆入於胃、其氣隨其所喜之味、而歸之、脾與胃爲表裏、俱象土、其味甘、而甘味柔潤於脾胃、脾胃潤則氣緩、氣緩則虫動、虫動則侵食成疳䘌也、但虫因甘而動、故名之爲疳也ト云モノ、今ノ疳ノ病因ヲ論タルニ似タ、古ノ疳䘌ヲ生ズル病ヲ辨ズ、正字通ニ、小兒食甘物多生疳病、五疳ノ説且其病狀ヲ具論シ、以惡核食瘕積食之大効ト記スモノハ今ノ疳也、サテ五疳ト云モ、病源候論ニ出タリ、曰五疳、一是白疳、二是赤疳、三是蟯疳、四是疳䘌、五是黑疳トアリ、村上氏ノ慈幼密旨ト云書ニ、サリケニ數種ヲ出

セリ、其名チリケ、チリチリケ、紅チリケ、黄チリケ、波美チリケ、其論疳ヲナスニ非ズ、胎毒ヲ指ス、又梶原性全ノ頓醫抄ニ、塵氣ニ作ル、經穴彙解身柱ノ條ニ、諸ヲ引テ具論セリ、見ルベシ、今ノ疳ト云モノ、適當ノコトハ、宋錢仲陽ノ小兒直訣ニ、五藏ノ疳ヲ載テ論タルモノ詳也、古ハ疳トハ唱ヘザルコト、見ユルナリ、素靈ニ疳ノ字ナク、千金方ニモ疳ノ字ナシ、○中略食ヲ進ンデ腹ハ大タテ、外ノ處ハ痩ル、丁奚病ト云、氣厥論ニ大腸移熱於胃、善食而痩入〔按、皆字、甲乙作又、〕謂之食亦、胃移熱於膽、亦曰食亦、トアリ、小兒ノコトニハアラネドモ食亦ト云ベシヤ、

〔保嬰須知 下〕疳疾

小兒疳疾者、蓋古所謂傷飽哺露、丁奚鬾瘷等是也、其爲證也、毛髮焦稀、或生瘡痍、或髮作穗、或四肢沈重、身體苦熱、面黃頸大、頭小黃瘦、或吐嘔、腸鳴、眼目生翳、或白膜遮睛、或鼻下赤爛、揉鼻揮目、或顋脣赤色、又好咬指甲、或肚大青筋、四肢柴瘦、背脊胸脇骨立羸羸、或身熱作渴、時又腹痛、或吐涎嘔逆、乳食不化、或大便青黃如菜花色、或瀉下酸臭、下痢白膿、又有下赤白膿血者、外臺秘要謂之疳痢、又瀉下鮮血、或小便不調、時出白津、或小便渾濁、澄汰之則如米泔、或玉莖陰囊睾丸腫脹、或身發瘡疥、而不堪瘙痒、或兩腋生結核、不堪疼痛、或欬嗽寒熱、皮膚皺錯、至其變證則好喫桴炭生米、壁土瓜果酸鹹辛辣等之物、或自嚙爪、或好飲酒、或異嗜物、而反好苦味、又有饕食食巳仍不知飽足、又不生肌肉、肚腹脹大、大便數而多溼者、巢氏病源呼爲蠶疳、又涎淫流出、漬於頤下、謂之滑頤、又眼無障翳、而不見物、名曰雀盲、又晝時明、晚則不見物、謂之雀目、後世又稱鷄盲、其他赤爛生瘡、瘥後還發成疹、謂之胎赤、又有肛門糜爛、浸淫不愈者、後世謂之蝕瘡疳、古所謂疳䘌也、乎變之又變則有四五歲而智慧技巧、勝於大人、或能作字、讀老成人書者、余〇肯會之間以爲此亦疳之候、豈是深稱譽、又有四五歲而尙不能言、又不能起者、謂之語遲行遲、此乃由先天不足、亦有屬疳所因者、不可不審焉、以上證狀、雖有百端、是皆疳之候也、

〔病名彙解 二〕疳鼻　小兒疳病ノ種類ナリ、病源ニ云、鼻ノ下兩邊赤ク發スルトキ、微ク瘡アツテ痒

丁奚疳

是ナリ、又赤鼻ト名ケ、又齆鼻ト名ク、

(病名彙解 五)丁奚疳　丁ハ伶仃ノ義ニテ、危弱ノ心ナリ、奚ハ腹ノ大ナルコトナリ、入門ニ云、丁ハ手足ト項ト極テ小ニシテ伶仃ナリ、奚ハ腹大ナルナリ、甚シキモノハ尻高ク、肉削レ臍突デ、胸哭レテ胸陥リ、或ハ瘢痕ヲ生ク、変レテ生来ヲ害スルナリ、文選李陵詩盧氏詩ノ註ニ、伶仃ハ危弱ノ説トアリ、

(隨意録 五)小兒丁奚病名義未詳、西村玄周云、丁者丁附小也、奚説文云、大腹也、丁奚頭與手足極小、其腹獨大、故以名此證、

驚風

(保嬰萬安方 一)第四十一葉

一驚候　急病也、尤可驚之、小兒

二急慢驚風　急驚風、慢驚風、

三急驚風　怪熱之病也

四慢驚風　積熱之所致也

五天釣　天釣

六盤腸釣　小兒

(叢桂亭醫事小言 五)驚風　馬脾風

驚風纔度モ引ツケイタ發スルヲ慢驚風ト云テ難治トス、其因ハ胎毒ノ塊ト成テ、不時ニ奔騰スルモノニテ、ロノ驚風ノ成長スルマデ治セザルニ癲癇トナルアリ、隣ニナル氣味ニテ少シ熱有テモ引付ルアリ、是然服藥心下停畜中ニテ、甚シキハ驚風ヲ發ス、故ニ油斷スベカラズ、

(醫學天正記 乾)小兒

一驚風、毎月五日六日ノ比發、身熱搐搦、小柴胡湯去黄芩加入驚熱湯、便溺今漸止、頭眼腹不飲乳、　其功散因君ニ加黄連

(叢書隨筆 三)驚風の藥浮石一匁を削り、茶碗に水一盃半入て、一盃に煎じ用る妙なりと、鵜殿氏の話なり、いまだ試ざれども、手輕き藥なれば記るす、

〔松屋筆記九十三〕くつめきの病

小兒の咳病を俗にクツメキといへり、宇治拾遺物語十卷十六丁左藏人頓死語に、臺盤に額をあて、のどをくつ〳〵とくつめくやうにならせば云々とあり、痰咳にて、喉のクツ〳〵鳴病なれば、クツメキとはよべるなりけり、砂石集三上卷一丁右癲狂人之利口事條に、或里ニ、癲狂ノ病有ル男アリケリ、此病ハ、火ノ邊水ノ邊人ノ多カル中ニシテ發ル、心ウキ病也、俗ハクツチト云ヘリ云々とあるクツチも、近くかよひてきこゆ、蜻蛉をくつ〳〵ぼうし蜻蛉日記などいふも、其鳴始るをり、くつくつとくつめかして聲を立ればなるべし、

〔內科秘錄十三〕小兒頓嗽

頓嗽ハ又頓咳トモ云フ、我邦ニテハ百日咳ト稱ス、方言ニケイケイ、シヤブキト云ヒ、又シイレ、シヤブキト云フ、一種ノ外邪ニシテ、流行スルトキハ、瑤門合戶盡ク之ヲ患フルコトアリ、小兒初生ヨリ十歲前後ノ者ノミ之ヲ患ヒテ、大人ハ之ヲ患ヒズ、其邪必ズ肺ニ著コト、猶天行赤眼ノ邪ハ必ズ眼ニ著キ、馬脾風ノ邪ハ必ズ咽ニ著クガ如シ、初ハ風邪ノ如ク、咳嗽連聲頓頓トシテ止マズ、心下拘急シテ乳ヲ吐キ、食ヲ吐キ、終テ粘液ヲ吐キ、或ハ吐血スルモアリ、胃中ノ物ハ殘ラズ湧出シテ、殆ド悶絕セント欲ス、寒熱ナシト雖ドモ、乳食共ニ吐キ盡スユヱ、身體羸瘦シテ、初生ノ兒ハ終ニ死スルコトアリ、醫ニ奇方多シト雖ドモ寸効ヲ奏セズ、日數大約百日ヲ歷レバ自ラ愈ル者ナリ、因テ百日咳ノ名アリ、或ハ疳ニ變ジ、或ハ癇ヲ發スルモアリ、

〔叢桂亭醫事小言五〕疳

小兒咳嗽ニ、百日咳トモ又連聲咳トモ云、ケイケイシヤフキ又クツメキトモ云、百日バカリノ內煩フコト流行スルトキハ一面ニ病ム、咳ノ甚キトキハ乳モ食物ヲモ吐スル、風寒ニ冒スレバ、夜ノ間ニ別テ甚ク咳スル、連綿ト治セザル內ニ黃瘦シテ大病ニナルモノ、アリ、疳ノ候ヲアラハス、

[illegible]病　飲水病

不食病

ニ至ルモアリ、

〔松屋筆記 六十五〕百日咳嗽の妙藥

小兒クツメキといふ病にあへば、必百日許痰咳をくるしむ、如何なる醫藥新舊も驗なきものなり、これに南天竹の實に砂糖を加て煎服せしむれば、速に效あり、南天實多を經たる物尤よし、

小兒痰咳の藥

小兒痰咳の藥に、高麗人參胡桃を煎湯にし用れば妙なり、高麗人參は朝鮮人參なり、今は日光人參に代てよし、

〔喫茶養生記 下〕飲水病

此病起於冷氣、若服桑粥則三五日必有驗、永忌服藥、勿食灸、見病相加故他方無驗矣、以冷氣爲根源耳、服桑粥、無百之一不平復矣、(忌鍼灸服藥)

〔中右記〕寬治八年(嘉保元年)正月十日、此曉正四位上行修理權大夫兼備前守藤原朝臣師信卒去、(年五十四)○中略、是年來之飲水病云々、

〔按〕ズルニ、古ノ消渇ト稱スルモノ、一種ヲ飲水病トモ云ヒタルガ如シ、淋病ノ條ヲ參看スベシ、

〔喫茶養生記 下〕不食病

此病復起於冷氣、好浴洗汗、向火爲厄、夏冬同以涼身爲妙術、又服桑粥湯、漸漸平食、若欲急差、灸治湯治、彌増無平復矣、

〔沙石集 五末〕歌之故命失事

天德ノ御歌合ノ時、兼盛忠見、左右ニ番テケリ、初春ト云題ヲ給テ、忠見秀歌ヨミイダシタリト思テ、兼盛モイカデ是ホドノ、ウタヨムベキト思ヒケル、

コヒスチフ我ガ名ハマダキ立ニケリ人シレズコソオモヒソメシカ、サテ既ニ御前ニテ講ジタ判ゼラレケルニ、兼盛ガウタニ、

ツヽメドモ色ニ出ニケリ我ガコヒハモノヲヤ思フト人ノ問マデ、共ニ秀名歌ナリケレバ、小野宮殿、シバラク天氣ヲ伺ヒ給ケルニ、御門兼盛ガウタヲ、微音ニ兩三返御詠アリケリ、仍テ天氣左ニ有トテ、兼盛勝ニケリ、忠見心ウク覺テ、胸フタガリテ、其ヨリ不。食。ノ。病。付テ、タノミナキヨシ聞テ、兼盛訪ヒケレバ、別ノ病ニアラズ、御歌合ノ時、秀名歌ヨミ出テ覺ヘ侍シニ、トノヽ物ヤ思ト人ノ問マデニ、アハト思テ、アサマシク覺ヘシヨリ、ムチフサガリテカクオモリ侍トテ、ツキニ身マカリニケリ、執心コソロシナケレドモ、道ヲ執スル習ヒ、ゲニモト覺ヘテ哀ニ侍ナリ、共ニ名歌ニテ、拾遺ニ入テ侍ルニヤ、

〔古事談〈二臣節〉〕延命禪師壯年之時、常參籠清水寺之間、臨僧〈仲行入智者也、於法花經轉讀入万四千餘部ト云々〉見此女房發欲心、愁病ニ成巳及死門之間、弟子等成奇問云、此御病體非普通事、有令思給事歟、不被仰者自他無由事也云々、此時僧云、實ニハ自京被參御堂之女房、近馴タル物ヲ申バヤト思給シヨリ、コノ三ケ年成。不。食。病。今ハ巳蛇道ニ入ナムトスル心得事也、愛弟子一人向女房許示此由之處、不經時剋來臨病室、病者不剃頭經年月之間、髮巳如銀針、其貌不異鬼形、然而此女敢無怖畏之氣、年來奉憑之志不淺、雖何事候、爭事背命哉、如此御身タクワホレナセ不給之前、ナドカ不被仰哉云々、此時病僧被昇起、執念珠オシモミテ曰、ウレシク令來給タリ、八萬餘部轉讀法華最第一之文ヲマヘニタテマツル、俗ヲ令生給バ關白攝政ヲ令生給ヘ、女ヲ令生給バ女御后ヲ生給ヘ、僧ヲ令生給バ法務大僧正ヲ生給フベシト斷畢、即以命終云々、其後此女房寵愛于宇治殿〈賴通〇原〉之間、果奉生京極大殿四條宮覺圓座主云々、

〔東遊記〈五〉〕不食病

三河國巨海郡天野山長譽寺といふは、其昔は巍々然たる大伽藍なり、○中略此庵に住する尼、二十年來斷食の行をなして、奇妙の人なりと、其あたり評判して、參詣信仰の人群集す、余○橘南谿友瑞甫、其邊漫遊の折なりしかば、わざ〳〵と其地に至り、參詣して其容體を見る、顏色は少し青ざめたれど、總身の肉は中人よりは少し肥たるかたにて、言語は少しどもるやうなり、瑞甫怪しみ、其あたりに旅宿して、其やうすを聞くに、二十年來の斷食實事にはあらず、此尼十四五歳の頃より小食なりしが、十六七計にて同村に嫁しけれども、病身なりとて不縁し歸りて、其後は尼になりて、此庵に住り、段々少食に成り、後には一月に二三度ほど少し食すればよしといひ、其後は段々に不食して、數月の間に少し食することになりて、近き頃は絶えて食せざるやうに成れり、唯折々少しづゝ湯を呑計なり、かくの如く斷食なれども、身體格別につかるゝ事もなく、近き年も信州善光寺に參詣せし、數十日の旅行に、一飯も食せずして、歩行も相應にして、無難に歸庵せり、其心より強てつとめて斷食の行をするにもあらざれども、自然にかくの如くなれば、人皆不思議に思ひて信仰し、參詣することとなり、怪敷事を行て、人民を惑す人なりやとて、官よりも疑ひかゝりて、吟味の事もありしかど、唯病氣ゆゑのことなれば、嫌疑なしとて、そのまゝにあるなり、瑞甫あやしみて余に語れり、この病、昔の醫書には見えざる事なれども、近き年は世間に多き病なり、香川子○太冲も此病を論じて、敝家にては新に不食病と名付たり、余も數人を療せしかど、しかと手際よく食たることなし、婦人に多くあり、男子にも一兩人を見たり、婦人は人に嫁して出產にてもする事あれば、其一兩年は常の如く食して、數年の後はまた不食す、男子にても婦人にても、此病の中に何ぞ外の疫の傷寒、時疫、痢疾等の如き、死生にもかゝる程の大病を煩らひて、其癒かゝりの時には、必よく食するものなり、病後一年も過て、氣力常の如くに復すれば、又漸々に不食になるものなり、此病はじめは米穀を厭嫌ひ、かき餅、或は豆腐、或は香蕈等の如きものばかりを少

しづゝ食し、或は酒などばかりを呑居て、漸々に何も食せざるやうに成るものなり、怪しむに足らず、又一生菲食はよくしながら、養せざる人もあり、其外奇病怪症、天下の内には種々の事ありて、余も見及び聞及べり、

睡眠病

〔中右記〕長承二年九月二日、此晩權中納言從三位中宮權大夫藤忠宗薨、年卅七云々、年來睡眠病也、睡眠病人二人巳天亡、故按察中納言顯隆卿與此中納言也、尤可恐病也、

〔異疾草紙〕なま良家子なるおとこありけり、すこしもしづまれば、ゐながらねぶる、人のいかなることをせむもしるべくもなし、まらう人のとき、まことにみぐるしかりけり、これも病なるべし、

笑疾

〔閑田次筆三〕韓公時平笑疾あり、一時朝廷にして此疾發り、いかにともすべからず、其日の政事は菅公にゆだねて退きたまふとなん、不和にて權を爭はるゝ敵手にあひて如此は、さこそ止ことを得ざるなるべし、五雜俎に、陸子龍有笑疾、古今一人のみといへるも同じ、かなたにてもめづらしきなるべし、たゞし世に笑中風、哭中風といへるものありて、これ實におかしきにあらず、悲しきにあらず、内より催してせんかたなきなり、韓公も子龍も此甚しきもの歟、貴觀政合の因云、合匯要嗚翼呂部に、食二楓樹菌、笑不止とあり、是を治するに、人糞汁、或は土漿、或は大豆濃煮汁を飲ましむ、或人の話に、ゆるなるく笑にたへず、因て治するものあり、醫金匱の法のごとく大豆煮汁をあたへておさまれりとのち專ぬれて圓な食ぜしとかたりしとぞ、是も笑しく腦圓なるべし、

〔大鏡二太政大臣時平〕此左大臣、ものゝおかしさぞえねんせさせたまはざりける、わらひたゝせ給ひぬれば、すこぶる事もみだれけるが、北野によをまつりごたせ給ふあひだ、ひだうなる事おほせられければ、さすがにやむごとなくて、せちにし給ふ事をば、いかゞはおぼして、このおとゞのし給ふことなれば、ふびんなりとなげき給ひけるを、なにがしの史が、ことにも侍らず、をのれがかまへにて、かの御事をとゞめ侍らんと申ければ、いとあるまじき事、いかにしてかはなむとの給はせけるを、たゞ御覽せよとてざにつきてこときびしくさだめのゝしり給ふに、この史ふむば

腋臭

きみにふみはさみて、いらなくふるまひて、このおとゞにたてまつるとて、いとたかやかにならして侍りけるに、おとゞふみもえとらずしてわなゝきて、やがてわらひて、けふはすぢなし、右のおとゞにまかせ申とだにいひやり給はざりければ、それにこそすがはらのおとゞの心のまゝにまつりごち行ひけれ、

〔倭名類聚抄 二形體〕胡臭　病源論云、胡臭(和岐久曾)人腋下臭如葱豉之氣、又謂之狐臭、如狐狸之氣也、

〔箋注倭名類聚抄 二形體〕醫心方同引、按和岐久曾、腋臭之義、眞安方謂和岐乃加、今俗呼和岐賀、(○中略)原書作人腋下臭如葱豉之氣者、亦言如狐狸之氣者、故謂之狐臭、山田本下總本、腋作掖、那波本同、按[illegible]會、腋通作掖、下總本無上也字、那波本同、山田本無謂下之字、

〔伊呂波字類抄 和人體〕胡臭 ワキクソ

〔類聚名義抄 肉部下〕胡臭(ワキクサ)

〔增補下學集 上之二 人體〕胡臭

〔倭訓栞 中編二十九 和〕わきが　胡臭をいふ、腋下の臭き也、和名抄にはわきくそといへり、教坊記の慍羝も同じ、

〔醫心方 四〕治胡臭方第廿四

病源論云、人腋下臭如葱豉之氣者、亦言如狐狸之氣者、故謂之狐臭、此皆血氣不和蘊積故也、葛氏方云、人身體及腋下狀如狐狸氣、世謂之胡臭、治之方、正旦以小便洗腋下、

〔五體身分集 中〕肩背脇肘分

腋臭治方　此病天性ノ人ハ難治、人ノヲ移リタルハ易治ト云ヘリ、治方正月一日ノ朝、小便ニテ脇ノ下ヲ洗ヲ白砂ヲ付ヨ、每朝三日、

〔外科秘錄 入〕腋氣

苦蟾

體氣ハ又狐臭、胡氣、腋氣、腋臭、慍羝等ノ名アリ、俗ニワキガト云フ、身體ニ一種ノ惡氣アリテ、液下ヨリ發泄シ、常ニ汗ニ化シテ胃ヒ、鬱蒸シテ臭氣ヲ釀成スルナリ、故ニ夏月暑時ノ汗多キ頃ニ甚シク、冬時嚴寒ニ至テ汗出ザレバ、臭氣モ亦減ズルナリ、少壯ノ者ノミ患テ、小兒老人ニ絕テ無シ、蓋老人小兒ハ蒸氣ノ發泄スルコト少ク、少壯ノ者ハ蒸氣ノ發泄スルコト多キ故ナルベシ、敷藥ニテ一旦消スレドモ、數日ニシテ再發シ、根治スルコトナシ、老衰ニ至レバ、必ズ自ラ愈ルモノナリ、

〔病名彙解 五〕胡氣 俗ニ云ワキガナリ、或ハ體氣、或ハ狐臭、或ハ胡臭、或ハ慍羝、或ハ腋氣、並ニ同ジコトナリ、正宗ニ云、體氣一名ハ胡氣、此父母傳染スル所アルニ因テナリ、又胡胎ニシテ生ヲウクルモアリ、故ニ本來ノ氣質ヲ脫セズ、凡ソ腋下多ク棕紋散孔アツテ此氣味ヲ出スナリ、按ルニ、胡ハエビストト訓ス、胡人ハ其體タナシ、故ニ胡氣、胡臭ノ名アリ、

〔牛山方考 中〕一男婦ノ狐臭ニ、黃芩、黃連、大黃ヲ加テ與之外、銅ノスリ屑〈細工多シ〉ニ明礬ノ二味ヲ細布ニ包ミ、腋下ヲスル、此藥ヲ袖ニシテ頻ニスルベシ、十日不絕有奇効、効ヲ得トモ止ムルコトナカレ、服藥半年、擦藥半年ナル時ハ、多クハ其病根ヲ拔ク也、或ハ病深者一旦清快スルトモ、一二年ヲ經テ後再發スル者アリ、又此方ヲ用ベシ、其時ハ毎日自己ノ小便ヲ以、腋下ヲ洗ヒ、後水ニテ洗テスリ藥ヲ用ベシ、イカホド根深キ狐臭モ半年服藥スリ藥ヲ用ユレバ、二三ケ年ハ不能發起、啓益筑前ニ在シ時ニ、一婦容貌美色、然トイヘドモ狐臭アリテ不可近、婚姻三度、此病有ニ因テ離別ス、醫藥無効、自ラ廢人タルコトヲ知テ、暗室ニ居テ外ニ不出、父母悲之、予ガ治ノ奇ナルヲ聞テ治療ヲ求ム、内外此方ヲ用ユ、三ケ月ニシテ清快ス、半年ノ後、諸人其病ノ治シタル事ヲ聞テ、爭テ求婚、其父母其病根ノ盡ルヤ否ヲ不審未許、婚容貌ノ美色有ヲ以テ、隣人頻ニ求テ婚嫁シ、和平ニシテ樂テ有子、可祕々々、

〔倭名類聚抄 三〕苦蟾 辨色立成云、苦蟾〈[illegible]〉

〔箋注倭名類聚抄二〕按、西溪叢語云、今人不善乘船、謂之苦船、北人謂之苦車、苦音庫、又按肘後方所謂注船注車、宋俞文豹陽閑評所謂注船注[illegible]子即是、病源候論、有嬰子小兒注車船候云、無問男子女人、乘車船則心悶亂、頭痛吐逆、謂之注車注船、特由質性自然、非關宿挾病也、按、不奈夜毛比船病也、皇國醫家所謂除鉄、頭也毛反波乎乃曾久微、木集小序、開病爲也毛比、又歌詠醒爲左加也毛比、

〔伊呂波字類抄不病疾〕苦船　フナヤマヒ

〔增補下學集上二〕苦船　フナヤマヒ

〔病名彙解二〕注車并注船　注車ハノリモノニ酔フ、注船ハ船ニ酔フナリ、肘後方ニ、凡ソ人車船ニ登、煩悶頭痛シタ吐セント欲スル者、梓長卿、石長生、車前子、車下李根皮、各等分、擣タダキ、篩ニ牢合ホド入、衣帶又ハ頭上ニ繫クトキハ其患ヲ免ルト云リ、

〔梅園日記三〕酔船

苦車苦船の字、西溪叢語に出たり、（太平御覽九百[illegible]）不免外、肘後方、病源候論に、注車注船といひ、[illegible]異錄に、蛙船蛙[illegible]あり、（[illegible]）宋廣東新語、南越筆記に、船暈、また朱子偶記に、暈[illegible]とあり、通俗編に、苦船云々、集韻亦作[illegible]、按、即今所謂暈船と見えたり、また唐土にても酔船といへり、惠濟方に注船即俗名酔船、また洞冥[illegible]に、范鎮が誠字木蘭花の題注に、北人不善乘舟謂之苦船、南人謂之酔船、又謂疰船とあり、（[illegible]大吐、[illegible]死と[illegible]舟）（[illegible]方書に[illegible]り、[illegible]くべからざることなり、）

〔唐大和上東征傳〕天寶三載六月廿七日、發自崇福寺、至揚州新河乘舟下、至常州界狼山、風急浪高、旋轉三山、明日得風、至越州界三塔山、停住一月、得好風、發至暑風山、停住一月、十月十六日、晨朝大和上云、昨夜夢見三官人、一著緋、二著綠、於岸上拜別、知是國神相別也、疑是度必得渡海也、少時風起、指頂岸山發、東南見山、至日中、其山滅、知是蜃氣也、去岸漸遠、風急波峻、水黑如墨、沸浪一透、如上高山、怒濤

再至、假人深谷、人皆荒醉、但唱觀音、

〔土左日記〕六日（承平五年二月）かのふなゑひの淡路のしまのおほいこ、都近くなりぬといふを悦びて、舟底より頭をもたげて、かくぞいへる、○下略

〔夫木和歌抄〕二十三　ころ舟

太宰任にて下りたるに、ふなゑひおきて、もたひといふとまりにて、　太宰大貳高遠卿

ころふねにゑふ人ありときゝつるはもたひにとまるけにやあるらん

〔今昔物語〕二十八　頼光郎等共紫野見物語第二

今昔、攝津ノ守源頼光ノ朝臣ノ郎等ニテ有ケル平ノ貞道、平ノ季武、□□公時ト云フ三人ノ兵有ケリ、皆見目モ鑭々シク、手聞キ、魂太ク、思量有テ、愚ナル事无カリケリ、然レバ東ニテモ度々吉キ事共ヲシテ、人ニ被恐タル兵共也ケレバ、攝津ノ守モ此レ等ヲ止事无キ者ニシテ、後前ニ立テゾ仕ヒケル、而ル間、賀茂ノ祭ノ返サノ日、此ノ三人ノ兵云合セテ、何カデカ今日物ハ可見キト謀ケルニ、馬ニ乗リ次ギテ紫野へ行カムニ、極タ見苦カルベシ、歩ヨリ顔ヲ塞ギテ可行キニハ非ズ、物ハ極テ見マ欲シ、何カ可為キト歎ケルニ、一人ガ云ク、去来某大德ガ車ヲ借テ、其ニ乗テ見ムト、亦一人ガ云ク、不乗知ヌ車ニ乗テ、殿原ニ値ヒ奉テ引落シテ被蹴ヤ由无キ死ニヲヤセムズラムト、今一人ガ云ク、下簾ヲ垂テ、女車ノ様ニテ見ムハ何ニト、今二人ノ者、此ノ義吉カリナムト云テ、此ク云フ、大德ノ車既ニ借持來ヌ、下簾ヲ垂テ、此ノ三人ノ兵、賤ノ紺ノ水干袴ナドヲ著乍ラ乗テ、履物共ハ皆車ニ取入レテ、三人袖モ不出サズシテ乗ヌレバ、心憎キ女車ニ成ヌ、然テ紫野様へ遣セテ行ク程ニ、三人乍ラ未ダ車ニモ不乗ザリケル者共ニテ、物ノ蓋ニ物ヲ入テ振ラム様ニ、三人被振合テ、或ハ立板ニ頭ヲ打チ、或ハ己等ドチ頬ヲ打合セテ、仰様ニ倒レ、低シ様ニ低シ轉テ行クニ、

迯タ可逃キニ非ズ、但此タシタ行タ程ニ、三人乍ラ酔メレバ、路次ニ物突散シテ、烏帽子ヲモ落シタケリ、牛ノ一物ニテ早ク引ツヽ行ケバ、横ナハリタル者共ニテ、猛クナ不早メソ〳〵ト云行ケバ、聞タ道次ケタ行タ車共モ、様ナル者モ雑色共モ、此ヲ聞テ怪ビテ、此ノ女房車ノ何ナル人ノ乗タルニカ有ラム、東脇ノ鴫合タル様ニテ吉タ□タルハ、心モ不得ヌ事カナ、東人ノ娘共ノ物見ルニヤ有ラムト思ヘドモ、音気ハヒ大キニテ男音也、旋テ心不得ズゾ思ケル、此タ既ニ紫野ニ行着タ、車搦下シタ立タバ、餘リ疾タ行立タフレバ、事成ルヲ待ツ程ニ、此ノ者共車ニ酔ヒタル心地共ナレバ、極タ心地悪タ成タ、目暗タ、万ノ物逆様ニ見ユ、痛ク酔ニクレバ、三人乍ラ、尻ヲ逆様ニタ被入ニケリ、面ル間ニ事成タ物共渡ルヲ、見タル様ニ、殺人タル者共ナレバ、露不知デ止ヌ、事畢タ。車共懸ケ騒グ時ニナム目悟ノタ覧タリケル、心地ハ悪シ、殺人タ物ハ不見ズ成メレバ、腹立シタ極タタ思フ事无限キニ、亦返ラノ車儀バシ騒ムニ、我等ハ生タハ有ナムヤ、千人ノ軍ノ中ニ馬ヲ走ラセタ入ラム事ハ、常ニ習タル事ナレバ、不怖ズ、只貧窮気ナル牛飼童ノ奴独ニ身ヲ任セタ、此タ被行レタハ、何ノ益ノ可有キゾ、此ノ車ニタ亦返ラバ、我等ガ命ハ有ナムヤ、然レバ只背シ此タ有ラム、然タ大路ヲ滑シタ歩ヨリ可行キ也ト定メタ、人滑タ後、三人乍ラ車ヨリ下ヌレバ、車ハ返シ遣ツ、其ノ後皆□ヲ履テ烏帽子ヲ鼻ノ許ニ引入タ、扇ヲ以タ顔ヲ塞タゾ、摂津ノ守ノ一條ノ家ニハ返タリケル、季武ガ後ニ語リシ也、猛キ兵ト申セドモ、車ノ戦ハ不用ニ候ナリ、其ヨリ後懲トモ懲タ、車ノ當ニハ不寄ズ、然レバ心猛タ思量賢コキ者共ナレドモ、未ダ車ニ一度モ不乗ザリケル者共ニテ、此タ悲シウ酔死タリケル、鳴呼ノ事也トナム、語リ傳ヘタルトヤ、

〔太平記十八〕春宮還御事附一宮御息所事

松浦ハ、適我船ニ、此女房ノ乗ラセ給タル事、可然契ノ程哉ト無限悦テ、是マデゾ、今ハ皆船ニ乗レト、郎等眷屬百餘人捨物モ不取敢、皆此船ニ取乗テ、渺ノ湊ニゾ漕出シタル、武文、渚ニ歸來テ、其

御船被寄候へ、先ニ屋形ノ内ニ置進セツル上臈ヲ陸へ上進セント喚リケレ共、耳ニナ聞入ソトテ順風ニ帆ヲ上タレバ、船ハ次第ニ隔リヌ、又手繰スル海士ノ小舟ニ打乗テ、自櫓ヲ推ツヽ、何共シテ御舟ニ追著ントシケレ共、順風ヲ得タル大船ニ、押手ノ小舟非可追付、遙ノ沖ニ向テ、泉扇招キケルヲ、松浦ガ舟ニドツト笑聲ヲ聞テ、安カラヌ者哉、其儀ナラバ只今ノ程ニ、海底ノ龍神ト成テ、其船ヲバ遣マジキ者ヲト忿テ、腹十文字ニ掻切テ、蒼海ノ底ニゾ沈ケル、御息所ハ夜討ノ入タリツル宵ノ間ノ騒ヨリ、肝心モ御身ニ不副、只夢ノ浮橋浮沈ミ、淵瀬ヲタドル心地シテ、何ト成行事共知セ給ハズ、船ノ中ナル者共カ、アハレ大剛ノ者哉、主ノ女房ヲ人ニ奪ハレテ、腹ヲ切ツル哀サヨト沙汰スルヲ、武文ガ事ヤランドハ乍聞召、其方ヲダニ見遣セ給ハズ、只衣引被テ、屋形ノ内ニ泣沈マセ給フ、見ルモ恐ロシク、ムクツケ氣ナル髭男ノ、頬骨ナマリテ、色飽マデ黒キガ御傍ニ参テ、何ヲカサノミ、ムツガラセ給フゾ、面白キ道スガラ、名所共ヲ御覧ジテ、御心ヲモ慰マセ給候へ、左様ニテハ何ナル人モ、船ニハ酔物ニテ候ゾト、兎角慰メ申セ共、御顔ヲモ更ニ擡サセ給ハズ、只見ヲ一葦ニ餞セタ、巫ノ三峡ニ棹スランモ、是ニハ過ジト御心迷ヒテ、消入セ給ヌベケレバ、ムタツケ男モ舷ニ寄懸テ、是サヘアキレタル體ナリ、其夜ハ大物ノ浦ニ碇ヲ下シテ、世ヲ浦風ニ漂ヒ給フ、明レバ風能成ヌトテ、同泊リノ船共帆ヲ引梶ヲ取リ、己ガ様々漕行ケレバ、都ハ早跡ノ霞ニ隔リヌ、九國ニイツカ行著ンズランド、人ノ云ヲ聞召スニゾ、サテハ心ツクシニ行旅也ト、御心細キニ付テモ、北野天神荒人神ニ成セ給シ其古ヘノ御悲ミ、思召知セ給ハヾ、我ヲ都へ歸シ御座セト、御心ノ中ニ祈セ給、其日ノ暮程ニ、阿波ノ鳴戸ヲ通ル處ニ、俄ニ風替リ潮向フテ、此船更ニ不行遣、船人帆ヲ引テ、近邊ノ礒へ舟ヲ寄ントスレバ、渡ノ鹽合ニ大ナル穴ノ底モ見ヘヌガ出來テ、船ヲ海底ニ沈ントス、水主梶取周章テ、帆薦ナンドヲ投入々々、渦ニ巻セテ、其間ニ舟ヲ漕通サントスルニ、舟曾不去、渦巻クニ隨テ、波ト共ニ船ノ廻ル事、茶臼ヲ推ヨリモ尚速也、是ハ何様龍神ノ

財寶ニ目昏ヲレタリト覺ヘタリ、何ヲモ海ヘ入ヨトテ、弓箭太刀刀腹巻數ヲ盡シテ投入タレドモ、猶寒事尚不休、サテハ若色アル衣裳ニヤ目ヲ見入タルラントテ、御息所ノ御衣赤キ袴ヲ投入タレバ、白浪色變ジテ、紅葉ヲ浸セルガ如クナリ、是ニ猶寒キ少シ閑マリタレ共、船ハ猶本ノ所ニソ回居タル、角テ三日三夜ニ成ケレバ、船ノ中ノ人獨モ不起上、皆船底ニ醉臥テ、聲々ニ呼叫ブ事無限、御息所ハ、サラデダニ生ル御心地モナキ上ニ、此浪ノ騒ニナヲ御肝消テ、更ニ人心モ坐サズ、ヨシヤ憂目ヲ見ンヨリハ、何ナル淵瀬ニモ身ヲ沈メバヤトハ思召ツレ共、サスガニ今ヲ限ト叫ブ聲ヲ聞召セバ、千尋ノ底ノ水屑ト成、深キ罪ニ沈ナン後ノ世ヲダニ、誰カハ知テ訪ハント思召ス。○下略

〔松屋筆記七十七〕四百四病

千金方八十二の卷、調氣法に、凡百病不離五臟、其有八十一種、疾冷熱風氣計成四百四病、事須識其相類善以知之云々、

〔修行本起經下遊觀品二〕太子問曰、此爲何等、其宋[illegible]人[illegible]上僕答言、病人也、何如爲病、答言、人有四大、地水火風、火有百一病、展轉相鉤、四百四病、同時俱作、

〔金匱醫議一〕僕聞有言、賞病之善、莫善於四百四病矣、凡賞字閲今日離此病者十八九、患其病者、還十一二而已、可謂海內大病也、治術之方、豈有他乎、以周公爲人參、以孔子爲附子、以孟子爲大黃、以荀子爲芒硝、能診其國脈證、能候其民氣脈、以舜禹忠臣代君臣佐使、使民寫信之、則仁義禮智信之五臟、善調善護、若修陽病頓去、好曲陰證立愈、以爲無病之人也明矣、

〔本朝醫談〕古時なくて今ある病はうさう、はしか、かさ、まつ、此四種はみな海外より傳へ來たると聞けり、月令、暴疾疫於人、故不可與人同牀、今の梅瘡もこれに似たるなり、肥前瘡に二種あり、一は綱に出て水なし、[illegible]一は大つぶにて膿あり、是楊梅瘡の類なり、[illegible]鹿取か溫瘡付藥

は、猴の黒燒羊躑根等なり、つくる時風呂に入

〔奇魂一〕病源論并今病等

古は時氣、物氣抔云が多かりしを、今は少くて、中風、留飲、癖、今云鬱氣疝毒、狐憑キツネツキなど多類也、是は其凡を云也、

〔花月草紙〕さむきをきらふものは、寒さにさはらず、あつさいむものは、暑にあたらず、われこそすこやかにして違ざと行くとも、つかるゝことなしといふものは、おほくあじに病を生ず、われは目のあきらかなるにや、はるかなるものゝ、かすかなるものといへども、のがすことなしといふものは、かならず目にやまひを生ず、けふはかしらいたみ、きのふはむねのあたりふたがりぬと、日ごとにいふものは、大なるやまひうることまれなり、わかきをりよりくすりのみしことなし、やまひはいさゝかもしらずといふものは、とみに大なるやまひをうるといへば、やむごとなききときゝ、たまひて、げにもとてうなづきたまひしとか、

〔技癢錄二〕圓光反照

人疾篤、懷而飲食加倍、言色俱見象狀者、其死必近、係霸之間。聞。言如久霧中開霽見晴色也、言從舌官、助之濟客朱靈淹、朱簪名曰圓光反照、

編修總裁　從二位文學博士男爵　細川潤次郎
編修長　正七位文學博士　佐藤誠實
編修副長兼校訂長　正七位文學博士　松本愛重
編修　正七位　廣池千九郎
編修兼校訂　加藤才次郎
編修兼校訂　山本信哉
編修兼校訂　村尾節三
編修　從六位　佐伯有義
編修兼校訂　三浦千畝
校訂　竹島寛
校合員　坂倉廣胖
校合員　齋藤松太郎

編修顧問　正四位文學博士　本居豐穎

編修顧問　從五位文學博士　木村正辭

編修顧問兼校勘　從五位文學博士　井上頼圀

明治四十二年九月二十五日印刷
明治四十二年九月三十日發行



神宮司廳

（白石製本所　製本）

昭和六年十二月一日印刷
昭和六年十二月五日發行

（普及版古事類苑　全六十册）

發行者　後藤亮一

發行者　川俣馨一
東京市芝區金杉新濱町十二番地

印刷者　和田助一

發行所　東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社內
古事類苑刊行會
振替東京三一七〇〇番

發賣所　東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社
振替口座東京　一八九六〇番
　　　　　　　一一〇五四番
電話小石川　三三六九番

單式印刷株式會社印刷


EAST ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03058 7927